

東方先代録

パイマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

pixiv(id:242979)にて連載している作品をマルチ投稿したものです。pixivを閲覧出来ない方々からの希望により、こちらにも投稿しました。

本家の更新に合わせて、こちらも話を投稿していきますが、評価や意見などは不要です。メッセージはpixivの方へお願いします。

趣味と妄想だけの至らぬ作品ではありますが、多くの方に読んでいただき、嬉しく思います。

目次

其の一「博麗の巫女」	1
紅魔郷編	
其の二「紅霧異変」	31
其の三「吸血鬼異変」	52
其の四「不夜城」	83
其の五「紅魔郷」	111
幕間「紅魔先代録」	150
地霊殿編	
其の六「地霊殿」	184
其の七「旧地獄街道」	212
其の八「怪力乱神」	247
其の九「覚」	289
幕間「地霊先代録」	331
妖々夢編	
其の十「春雪異変」	360
其の十一「白玉楼」	386
其の十二「妖々夢」	417
其の十三「少女幻葬」	452
幕間「妖々先代録」	481
過去編	
其の十四「文花帖」	517
其の十五「天狗」	537
其の十六「犬走」	581

其の十七「風神少女」

幕間「文花先代録」

永夜抄編

其の十八「蓬萊人形」

其の十九「永遠亭」

其の二十「不死」

其の二十一「永夜抄」

其の二十二「難題」

其の二十三「生命遊戯」

其の二十四「永夜返し」

其の二十五「新難題」

幕間「永夜先代録」

萃夢想編

其の二十六「宴」

其の二十七「百万鬼夜行」

其の二十八「萃夢想」

其の二十九「鬼退治」

其の三十「六里霧中」

其の三十一「鬼神」

其の三十二「彗星」

其の三十三「萃鬼」

其の三十四「勝負」

其の三十五「幻想之月」

其の三十六「碎月」

其の三十七「決着」

151014641425138013361290124312041169112810871044

998 964 927 890 858 815 771 729 699 659 614

其の三十八「幻想郷」

幕間「萃夢先代録」

花映塚編

其の三十九「花映塚」

風神録編

其の四十「世界」

其の四十一「邪」

其の四十二「幻想入り」

其の四十三「境界」

其の四十四「東風谷早苗」

其の四十五「守矢」

其の四十六「開始」

其の四十七「神祭」

其の四十八「戦場」

其の四十九「乾」

其の五十「御神渡り」

其の五十一「奇跡」

其の五十二「風神録」

幕間「風神先代録」

真・地霊殿編

其の五十三「力」

其の五十四「地獄鴉」

其の五十五「八咫鳥」

其の五十六「熔解」

エンディング集

2303226322312182

21402091205220031969193518971860183117991773173717031670

1630

15931551

H a r d E n d 「八雲紫」
N o r m a l E n d 「古明地さとり」
E a s y E n d 「風見幽香」

237823552336

其の一 「博麗の巫女」

例えば、自分が漫画的やアニメ的とも言える非常識な幻想の世界へと転生したとしよう――。

現実ならばともかく、創作の世界においてそういった展開は割りとありふれたものだ。

異世界トリップ、あるいは転生物とでも類されるのか。

ネット小説の普及した昨今、一次創作や二次創作で扱われてきた大御所のジャンルだ。

自分の生きてきた世界の常識の通じない異世界に降り立った、様々な性格や性質の主人公達。

彼らあるいは彼女達がどうやってその世界で生きていくのか――その方向性がストーリーの基盤となるのだ。

ある者はその世界にはない現代の知識を活かして栄光や安寧を掴まんとし、『転生トラック』や『神様』といった存在から得た何らかの付加技能を持つ者はその能力を以って新たな人生を歩んでいく。

そこが二次創作の世界の中ならば、本来の物語に介入し、かつて画面越しに見ていた二次元のキャラクター達と関わり合うのも面白いかもしれない。

あるいは、知識として知る物語の危険性を考慮してひっそりと暮らすことを望む場合もあるだろう。

何をするのも自由だ。

例え異世界であつても、それは自分の人生の土台でしかないのだから。

さて、そんな『異世界トリップ転生』というジャンルの主人公として、ここに一人の元・彼あるいは彼女がいる。

転生した先は『東方Project』――妖怪が跋扈し、神が君臨し、魔法や霊能力が弾幕となつて飛び交う超常的な世界である。

物理法則などの常識的かつ現実的な限界など存在しない創作の世界に降り立った彼あるいは彼女は彼女。

君は現代知識を使った内政チートをしてもいいし、二次創作のキャ

ラ達相手にハーレム展開などを望んで関わってもいい。原作設定では大物だったボスキャラ相手に能力を使った俺TUEEEも面白いだろう。

現実では妄想にすぎなかったあらゆる事が、創作の世界では可能なのだ。

さて、では『何』を——？

「漫画の中でしか出来ない無茶苦茶な修行とかマジ憧れてました」

一日三十時間の鍛錬と感謝の正拳突き一万回ですね、分かります。



いつものように魔理沙が博麗神社の境内に降り立ち、この気だるい朝の時間帯には縁側でダラダラしているだけだろう。霊夢の元へ向かうと、そこにはいつもと違う光景が広がっていた。

一日の始まりなど苦痛でしかないとはかりにだるそうな様子で庭を眺めるいつもの霊夢はそこにはいなかった。

「雨が降るぜ」

「今日は一日快晴よ」

縁側の雑巾がけをしていた霊夢は、半ば呆然とした魔理沙の呟きに無然と返した。

「だからこそ異変だぜ。」

おい、霊夢。何か悪い物でも食ったのか？」

「巫女が神社の掃除をしてたらおかしいわけ？」

「お前が朝から生真面目に働いてるのがおかしいんだよ」

友人と自称し、腐れ縁と他称される霊夢とのやりとりで本調子を取り戻した魔理沙は普段どおりの悪戯っ子のような笑みを浮かべた。

「今日は一体何があるんだ？ 特別な事が起こるんだろう。じゃなきゃ、お前が朝からこんな気合い入れるわけないもんな」

「別に気合いなんて入れてないわよ。普通でしょ」

「普段はそのまま空にふわふわ浮いてくか、水みたいに地面に広がり
そんな力の抜き具合してるくせに何言ってるんだ」

「そこまで言うか」

半目で睨みつける霊夢だったが、そこからは怒気など感じられない
し迫力もない。

魔理沙の知る限り、この博麗霊夢は良く言えばマイペース、悪く言
えば無気力な少女だった。

小言やぼやきは漏らしても、怒りや苛立ちなどといった激しい感情
とは無縁に感じるのだ。

もつとも、そんな平坦な心のまま苛烈な攻撃行動を取ることが、ま
た別の意味で他の人間以上に恐怖を感じることもあるのだが。

そんな霊夢が自主的に何かを為そうということ自体が魔理沙に
とって驚きであり、新鮮であった。

「それで、ひよつとして今日は誰か客が来るのか？」

「あー……まあ、ね」

家の掃除をしたた理由に対してあたりをつけた魔理沙に対して、霊
夢は言葉を濁した。

これもまた珍しいことだった。しかも、目を逸らしてどこか恥ずか
しげな表情すら浮かべる姿など今まで一度も見ることがない。

魔理沙の好奇心は俄然刺激された。

「誰が来るんだ？」

「あー」

「私の知ってる奴か？」

「んー」

「誤魔化しても無駄だぜ。わたしの今日の予定はたった今決まったか
らな」

「……会ってくわけ？」

「お前の親友ってことで紹介してくれ」

面白半分からかい半分の笑顔を浮かべる魔理沙に対して、霊夢は諦
めたようにため息を吐いた。

「来るのは先代の博麗の巫女よ」

「おおつ、お前より前にここに住んでた人か！　まだ生きてたんだな、てつきり死んで代替わりしたのか思ってたぜ」

「殺しても死なないと思うわよ」

「はあ、霊夢がそう言うんなら相当強いんだろうな」

「博麗の秘術以上に純粋な武術に優れた人でね。今は人里で医療所を開いてるわ。ツボ治療とか整骨とか」

「なるほどー。しかし、お前に先代を敬う心があるとは驚きだぜ」

普段、境内の掃除をだるそうにこなしている姿くらいでしか巫女としての責務を見出せなかつた魔理沙は笑いながら言った。

それに対して、霊夢は気を悪くした風もなく、雑巾を絞る。

「そりゃ、母親くらい普通に敬うでしょうよ」

「……………は？」

魔理沙は霊夢と知り合ってから以来最大の衝撃を受けた。

◇

——話をしよう。

あれは今から三十六万……いや、一万四千年前だったか……。嘘である。

いや、小説の主人公とかこれくらいの年数は余裕で過ぎたりするけどね。私は無理。

このような切り出しのネタから察してくれたと思うが、私はごくありふれた『異世界トリップ転生』を経験した女だ。

名前は語らない。

かつては『博麗■■■■（なにがし）』と呼ばれていたが、博麗の巫女を今の代に継承して以来、その名前は『今の博麗』である霊夢の物だ。引退した今は『先代巫女』や『先代様』などと呼ばれている。

生前の名前は覚えていない。

転生とは言うが、生前の記憶に関してはかなり偏りがあるようなの

だ。

この幻想郷には不相応な現代知識から、自分が『転生した人間』という自覚はあるが、具体的な前世の記憶というものは酷く曖昧だった。

前世の自分がどういう人格を持った人間で、どういう立場にいたのか？

どのくらい生きて、どうやって死んだのか？

——何も、覚えていない。

それどころか、今は女の身ではあるが生前の性別さえ定かではないのだ。

自分の思考が男性的とも女性的とも言えない曖昧なものだと周囲と照らし合わせる限り自覚しているし、今のところどちらに対しても性的衝動を抱いたことがない。

そんな風に生きていたら、いつの間にか『巫女』などという神聖な地位に納まってしまったのだから人生とは面白いものだ。

だが、まあそんな特殊な立場にあつても私は別に不便を感じたことはない。

生前の自分などに興味はないし、かつて自分がどう生きていたかなど、今を生きている私にとってはどうでもいい『他人の話』だ。

転生とは、存外そんなものだろう。

しかし、『生前の人生の知識』が影響を及ぼさなくとも『生前の世界の知識』というものは今の私を形作るのに大きな影響を与えていた。

まず私は、今住んでいるこの世界が『東方Project』と呼ばれる創作物の中であることを知っている。

この作品はシューティングゲームが原作でありながら、二次創作が盛んであり、幅広いジャンルへと伸びていったことで有名だった。

かくいう私も生前はその二次創作から東方を知った口であり、肝心の原作はシューティングが苦手なこともあつて手をつけたことは無い。俗に言う『実は東方やったことないんですよ(笑)』な人間だったようだ。

ファンであるのは間違いない。東方の独特の世界観やキャラは大

好きだ。

原作に対する知識やこだわりはちよつとしたものであると自負できる。

とはいえ、私が実際に生きて暮らしている以上、この世界は現実のものであり筋書きの存在する物語の中ではない。

原作がシューティングゲームだからといって、十字キーとボタンで人間が動き、倒されても残機が存在するワケではないのだ。原作の知識が云々など些細な問題だろう。

むしろ、私にとって重要なのはこの世界が『妖怪や神の存在する超常的な世界』だという点だ。

この世界のことを理解した時、私は歓喜した。

生前の自分がどんな人間だったかは分からない。ただ、生前の知識が私にある強い欲求をもたらししていたのだ。

——修行したい。バカみたいな修行に挑戦してみたい。

ただそれだけの純粋な欲求だった。

そう考えた私に超人願望があつたことは否定できないが、それ以上に強くなる過程が重要だった。

バトル物の漫画の中で描かれていた数々の無茶な修行過程。

—— 一日三十時間という矛盾を孕んだ鍛錬を続ける。

—— 一万回の正拳突きと感謝の祈りを繰り返して最終的には一時間以内で終わらせるようにする。

—— 全身に体重より重いオモリをつけて生活する。

—— 特殊な呼吸法を会得する為に十分間息を吸い続けて、その後十分間吐き続ける。

その他、創作であるが故にインパクト重視や奇をてらつた修行法ばかりエトセトラエトセトラ。

現実によれば無駄どころの話ではない。強くなるどころか死ぬだけの修行すら当たり前だ。

そんな結果さえ伴わない無茶苦茶な修行——しかし、ここは現実で

はなく幻想の存在する超現実である。

私は、試してみたくて仕方がなかった。

『努力すれば報われる』という陳腐な理論を極限まで突き詰めてみたかったのだ。

別段目的があつたわけでもなく——将来起こる原作ストーリー上の異変への介入や強力な妖怪と戦つて俺TUEEEしたいなど——極論すれば『それ東方でやる必要ないですよね』というくらい単純に私は修行を始めた。

もちろん、苦痛と後悔を伴う内容であつたことは言うまでもない。辛く、苦しく、何度途中で辞めようと思つたか知れない。

しかし、私はやめなかつた。

何故なら始める前から『だつて修行つてそういうものじゃん』という、割とどうしようもない開き直り方をしていたからだつた。

私は修行を続けた。

死の間際で目覚める力が云々という理屈など珍しくない修行ばかりなので、死んでもいいやくらいの気持ちで続けた。

自分でも狂つていると思うが、そもそもそんな理屈でやめるくらいなら最初から挑戦しない。

その過程で、様々な相手との様々な戦いを繰り広げ、それに勝利し、出会い、別れ、それでも終わることなく——まあ、目的があつて修行しているわけじゃないから当然なのだが——自らを鍛え続けた。

鍛え続け、戦い続け、そして生き続けた結果……。

私はいつの間にか、幻想郷を管理する『博麗の巫女』の中でも歴代最強の巫女として人間と妖怪から一目置かれる存在となつていた。

……いやあ、人生つて本当に面白いもんですね。

もちろん、まだまだ修行続けるけどね。



「歴代最強かあ……どうにも信じられないぜ」

シヨックから立ち直った魔理沙は、布団を干す霊夢の背中を眺めながら、彼女自身から受けた先代巫女の説明を反芻していた。

「それってつまり、霊夢より強いってことだろ？」

「巫女の修行つけてもらってたけど、結局一回も勝てなかったからね」
「信じられないことだらけだぜ……」

霊夢はあっけらかんと答えるが、彼女の強さを十分に理解している魔理沙はその事実が信じられなかった。

魔法使いとして自分がまだまだ未熟であることを自覚しているが、そんな実力差に関係なく、この博麗霊夢という少女の天性の力は圧倒的に感じる。

雲のように何ものにも捉われない彼女が地に伏す姿など想像できない。

ついでに言えば、そんな霊夢が人の子であるという現実もまた信じられなかった。

「なんだか、今日は驚きの連続だぜ。長い付き合いとは言わないが、霊夢に母親がいたなんて初耳だ」

「血は繋がってないけどね。木の股から生まれてきたとも思ってたわけ？」

「お前から真つ当な出生を想像することなんて無理があるぜ」

「よし、そこになおれ」

「冗談だ。でも、本当に意外だったんだよ」

ギロリと睨みつける霊夢に対して魔理沙は肩をすくめる。

「だって、お前身内のことなんて全然話さないじゃないか。天涯孤独って顔して、一人でこの神社に住んでるからさ」

「天涯孤独だなんて一度も言ったことないでしょ」

「でも、育ての親がいたってこと隠してただろ？」

「隠してないわよ。言っていないだけ」

「言えよ。一月に一回、人里から様子を見に来るって結構な頻度じゃないか。」

わたしとお前が知り合ってまだそれほど経ってないけど、それでも

「一回も会わないなんておかしいぜ」

「タイムリングが悪かったただけでしょ。別に『この日は来るな』とか言ってもいいし」

「そうか？ いや、しかし……うん？ 待てよ」

特に変わった様子も無く平然と受け答えをする霊夢に対して、懽然とし始めた魔理沙だったが、ふと思いついた。

そして、確信を持って意地の悪い笑みを浮かべる。

「思い出したぜ。お前が今日みたいに二枚の布団を干していた日があつたことをな！」

「……それが、なんなのよ」

「その日、自分の物以外の布団を干す理由尋ねた私にお前は『かび臭くなるから』って答えた。その日、おふくろさんが来るのを隠したんだろう？」

「だったら何だっつーのよ」

「いや、母親が泊まりに来るのをわたしに知られるのが恥ずかしかったという理由だったら面白いなーと」

「ぐ……っ」

霊夢は不覚にも小さく呻いた。凶星である。

大した反応を期待していなかった魔理沙は、発見した親友の意外な一面に俄然色めき立った。

「ふふん、これで新しい話のタネが手に入ったぜ」

「からかいの、でしょ。あーもう、だからあんたには話したくなかったのよ」

「つれないこと言うなよ。こうなったら、今日はきっちり親御さんに挨拶させてもらうぜ」

「好きにすれば……」

霊夢はもはやなげやりに答えた。

「ところで、お前のおふくろさんってどういう人なんだ？」

妙に嬉しそうな笑顔で魔理沙が尋ねる。

霊夢という少女を知るが故に、彼女にここまで情を抱かせる相手がどういふ人物なのか純粹に気になるのだった。

「会えば分かると思うけど？」

「はぐらかすなよ。かーちゃんにお前が寂しがってたつて言っちゃうぞ」

「あーもー、メンドクサイ。もうすぐ本人に会えるわよ」

霊夢は説明を放棄した。

面倒だというのもある。しかし、それ以前に言葉のままの理由だった。

会った方が早いし、きつと言葉では足りない——あの人は、そんな独特の雰囲気を持つ女性だった。

それにいつも通りなら、そろそろ神社にやって来る時間なのだ。

霊夢はゆっくりと歩き出した。

自然とついてくる背後の魔理沙に顔を見られぬよう気をつける。

目ざとい彼女は自分の心境の変化に勘付くかもしれない。

嬉しくて浮かれているなどという、ほんの僅かに高揚する今の気持ち。

境内に出れば……ほら『期待した』通り、あの人がいる。

こつちを見て、いつものように優しく微笑を浮かべる。

そして、静かに名前を呼ぶ。

『霊夢』

自然と笑みを返しながら、こう応える。

「いらっしやい、母さん」

◇

私は今、数年前に出て行った博麗神社にやって来ている。

霊夢に——博麗の巫女の後継者であり、義理の娘である少女に会う為に訪れたのだ。

今日は一月に一度しかない親子のスキンシップタイムなのである。

子供の成長というのは早いものだと言うが、それは本当のことなのだろう。会うたびに霊夢は成長し、綺麗になっている。

いや、本当にね。親の鼻屑目ではなく。

修行狂いである私が唯一世間一般に誇れるものといったら、この自慢の一人娘くらいなのだ。

「いらつしやい、母さん」

そう言つて、可愛らしく微笑みながら出迎えてくれる我が娘マジ天使。

人里での噂や、他人との交流を見る限り誰に対しても平坦で素っ気無い対応の霊夢だが、私に対してはこう素直クールな感じなのよね。

原作の知識からしても『誰に対しても優しくも厳しくもない』つていう設定だったと思うし。

親子としては少し冷めた間柄のように感じるが、霊夢が相手だったら十分親しみのある関係だろう。

育ての親の特権です。誰にも譲りません。

「少し、背が伸びたかな」

私はお決まりの台詞を言う。

「母さん、それ会うたびに言つてない？」

「本当のことだ」

「あまり実感ないんだけどね」

私を見上げながら呟く霊夢の顔はどこか不満そうだ。

やっぱり子供の頃からの比較対象が私だからだろうか。

女にしてはうすらデカイ身長だからね、鍛えてるせいでガタイもいいし。

しかし、霊夢にはこんな大女にはなつて欲しくないから、順調に女の子らしく育つてくれて私としてはとても嬉しい。

霊夢は陰陽術などの技術方面に天性の才能があるので体など鍛える必要は無いのだ。

私のように『博麗の秘術』と称した撲殺術で返り血を浴びながら妖怪退治などしないで、もつと巫女らしく優雅に務めを果たしてもらいたい。

本当にね、私みたいに木とか岩とか鉄とか野獣とか妖怪とか両腕が傷だらけになるまで殴り続けるなんてやらないように！

霊夢の綺麗な手が、私のようにボロボロのゴツゴツになっちゃった

りしたらお母さん泣いちゃいます。

傷だらけで『酷い』というより『汚い』という表現が合いそうな手だしね。

私は全然気にしてないのだが、母親の手がこんなだなんて、霊夢に恥ずかしいと思われてないかだけが心配だ。

一応、見た目の若さだけは例の漫画的修行の一つで会得出来たジョジョの『波紋』を使ってるから保っているが、こんな疲れる息の仕方ずっと続けるつもりないし、実際もういい歳だしね。

こんなおばちゃんに張るほどの見栄もないでしょ。

処女だけである意味女捨てちゃってますから、私。この女として終わってる姿を反面教師にして、霊夢には若くてみずみずしい少女時代を満喫してもらいたい。

親に出来ないことを子に望んでしまうのも情けない限りだけだねえ……。

「母さん、今日も泊まっていくんでしょ？」

「ああ。霊夢さえ良ければ」

「もちろんよ」

親としての都合のいい錯覚でなければ、霊夢はどこか嬉しそうに答えた。

手土産として持ってきた私の荷物を自然な動作で受け取って運んでくれる。

なんとという優しい気遣い。娘マジサイコー。

楽園の素敵な巫女もとい私の素敵な娘は、いつも無愛想な母親が胸の内でこんなバカなテンションになっていることを知らないだろう。

他人の評価を聞く限り、私はあまり感情が表に出ないらしい。

苦しい修行に耐える日々を送っていたら、いつの間にか顔面まで岩のように固まってしまったのだ。

食い縛ることの多かった口から出る言葉は自然と少ないものになり、ふと気付けば娘に対してまでも言葉少なくなる私は本当にダメ親である。

「紹介するわ、母さん。『親友』の魔理沙よ」

そんな風に、表に出さずに自己嫌悪していると、霊夢に一人の少女を紹介された。

「ちよ、やめろよ霊夢っ。あ、は……はじめまして。霧雨魔理沙と、言います」

名前を聞くまでもなく私は理解していた。

東方Projectのもう一人の主人公であり、ゲームでの自機となる魔理沙である。肩書きは確か――。

「魔法使いか」

「あ、はい……そうです」

「ああ、別に畏まらなくていいよ」

「……はい」

本物の霧雨魔理沙である。私は内心で感動していた。

しかし、私の知る魔理沙というキャラクターと比べて随分としおらしい。もつと活発で男勝り、だけど内心は乙女っぽいというギャップ萌えがたまらん娘なのだが。

やはり初対面の年配相手には緊張や警戒を抱くものなのだろう。

魔理沙の『だぜ』口調を聞いてみたかったが、仕方ないね。

「元気の良い子は好きだ」

いずれは本来の魔理沙を私にも見せてもらえるよう、さりげなくアピールしてみたが、まあ上手く通じてはいないだろうな。

魔理沙と顔合わせは個人的に、霊夢にちゃんと友達が出来ていることは親的に喜ばしく思い、とりあえず私は満足した。

「霊夢、土間を借りるぞ」

「料理なら手伝うけど……」

「いや、いい。友達と待っていなさい」

霊夢の申し出を断り、私は持参した食材を持って台所へ向かった。

ふっ、なんかこれって結構親っぽい行動ではないだろうか。

俗に言う『お友達もウチで食べていきなさい』ってやつである。

ここは一つ、腕を振るうとしよう。

こんな風にはりきってしまうのは、私自身が霊夢に親らしいことをあまりしてあげられなかった自覚があるからだろう。

博麗の巫女という特殊な立場上、子供の頃からあの子には必要な技術を教え、鍛えるばかりで純粋な親子のふれあいをした記憶がほとんどない。

霊夢の性格や性質を知るが故に、馴れ合いも自粛していた。親としては少し距離を開けすぎだったのではないかと今は後悔しているほどだ。

加えて、プライベートな時間では飽きもせず修行をし続けるしかない能無しな私である。

気がつけば巫女の代は引き継がれ、巫女の責務から自由になったかと思えば別居し、更に距離を置く生活が始まった。

こうして月に一度様子を見るといいう建前でいろいろとお節介を焼きに行くのだが、割となんでもそつなくこなす霊夢を見るとあまり役に立っている実感が無い。

一緒に過ごするのが楽しくて、気がつけば一日が終わっているというのが毎度のパターンだ。

果たしてこんな日々がいつまで続くものか――。

年頃の娘を持つ、愛だけは一人前のダメ親が抱く身勝手な不安である。



先代巫女――霊夢と同じような巫女服を着た女性の高い背中が廊下の向こうへ消えると、魔理沙は緊張から開放された。

脱力と共に大きく息を吐き、そこでようやく自分からしくもなく緊張していたことを自覚する。

周りを見る余裕が出来たので霊夢の方を伺うと、予想通り意地の悪い笑みがそこに浮かんでいた。

「あたしが寂しがってたって言うんじやなかったっけ？」

「うるさいな、からかうなよー！」

魔理沙は自分のことを棚にあげて、照れ隠しに目を逸らした。

「ま、どういう人か分かったでしょ？」

「ああ、なんていうか……すごい人だな」

魔理沙の先代に対する印象は、まずその一言につきた。

美女と言っても差し支えない整った顔と身体つき。霊夢と同じ艶のある黒髪は、しかし彼女と違い腰まで届くほど長い。

霊夢の着る博麗神社の巫女服と似たデザインの紅白の服を着ていることもあり、なるほど霊夢の母親なのだとな納得させられるものがあった。

逆に血が繋がっていないという点が信じられないほどだ。

——だが、確かに霊夢とは違う独特の雰囲気を持つ人でもあった。

「育ての親って言ってたけど、随分若いな」

「でも、年齢は五十過ぎてるわよ」

「なにいつ!? ……おいおい、冗談がすぎるぜ」

「本当。『波紋』っていう特殊な呼吸法を使って日常的に肉体を活性化させてるって言ってたわ。それで老化が止まってるって」

「息の仕方一つで不老不死かよ!」

「不死ではないらしいけど、骨折治したり出血止めたりは出来るわ」

「まさか、霊夢までそのハモンってのが使えるのか?」

「それが絶対に教えてくれないのよね。波紋を使っていると食事も睡眠も必要無くなるから、便利だと思っただけど」

「……まるつきり仙人だぜ」

「呼吸っていうのは乱れるものだから、少しずつ歳は取っているらしいけどね。」

それに、あたしが大人になったら波紋をやめるって言ってたわ。子供より親が長生きしちゃいけないって」

不老不死は、人の夢だ。

力や富を手に入れた者が次に求めるのは大抵、栄光を掴み続ける為の『不滅』であり、昔日の偉人達の多くはその不老不死を求めてきた。

どれほどの鍛錬を積み重ねて得たものかは分からないが、あの女性はその手に入れ——そして子供への愛の為に容易く捨てる事が出来る人間なのだ。

「……本当に、すごい人だぜ」

魔理沙は、才能や力ではなく、その大きな器とそこに積み重ねたものに圧倒された。

「確かに、霊夢より強いかもな」

眩いた声には知らず、強大なものに対して戦慄するような畏怖が混ざっている。

美しい女性というくりならば、それこそ人間とは思えない美しさを持つ妖怪を見たこともある魔理沙だ。あまり印象的に感じることはない。

しかし、あの先代巫女の美しさは彼女独自のものだった。

均整の取れた身体は不相応に引き締まった筋肉が付き、更には無数の傷跡が走っていた。

特に両腕が酷い。裂傷や縫合の跡、指は節くれ立ち、骨折を何度も経験したのか少し歪んでいる。一度バラバラに切断してから繋ぎ直したかのような、傷に埋め尽くされた手だった。

本来、女性としての魅力に溢れていたであろうふくよかな身体に刻まれた鍛錬と負傷の跡。

醜いという印象を受け、女として憐れみを感じるのが普通だろう。

しかし——魔理沙は『綺麗だ』と、圧倒すらされた。

心に焼きつくような美しさを感じたのだ。

「あたしがあの人の一番好きな所って、手のよね」

魔理沙の内心を察したかのように、霊夢が言った。

「母さんの妖怪退治はね、博麗の秘宝である陰陽玉はもちろん符も針も使わないのよ。」

素手で妖怪ぶん殴るの。人間なんて簡単にボロボ布に出来る妖怪の牙や爪をあの上腕でへし折って砕くのよ。冗談みたいでしょ？

それに加えて、毎日束ねた青竹に何百回も貫手稽古、岩が抉れるまで突きの反復練習。皮がずる剥けて血が飛び散るわ、指は折れるわで、見てるこっちが痛いっていうの」

「それで、あんなにボロボロなのか」

「まだ小さかった子供の頃は、一緒に道を歩く時本当にたまにだけ手を繋いだわ。」

数えるくらいしかやったことはなかったけど、あの感触は今でも覚えてる。思ったとおり、石を握ってるみたいに硬くて、デコボコで、女の人の手とは思えなくて——でも、ずっと繋いでいたって思ってた」

視線の先に過去を浮かべた霊夢の横顔には、魔理沙も初めて見る表情が浮かんでいた。

知らなかった。この博麗霊夢という少女が、誰かをこんなにも誇るような顔をするなんて。

「あのボロボロの両手が、たくさんのモノを守って、繋ぎ止めて、掬い上げてきた」

霊夢は自分の手を目の前に掲げた。

傷一つ無い綺麗な手だ。

魔理沙が自分の手に目を落とせば、やはり同じような綺麗な肌が見える。

少女らしい小さな手。

そして、幼く未熟な手だと二人は感じていた。

「……霊夢にとって、あの人は憧れだってワケか？」

「まさか。あたしがそこまで生真面目に生きてるわけじゃないよ」

一転して、気楽に肩竦める友人の様子に、魔理沙は脱力した。

そうだった、こいつはこういう奴だった。

「ただ、まあ……あたしが尊敬する数少ない人って話よ。

なんていうか、根っこの部分で『敵わない』って感じるの。

自分があんまり人と親しくなることに向いてない性分だって自覚してるけど、そういうの含めて娘として受け入れられているっていうか……」

「ああ、なんとなく分かるぜ。

悪い意味じゃなくて、何もかも見透かされているような感じがあるんだよな」

「慣れない敬語使ってたけどねえ。まあ、あんたの素の性格くらい完全に見抜かれてるでしょうよ」

「うるさいな、こうなったらもう今から開き直ってやるぜ！」

「そーしなさい。あの人には見栄張るだけ無駄だから」

人に寄りかかる時のような、安心と信頼が語り合う二人の心に共通してあった。

霊夢は他人に対して素っ気無く、魔理沙は言動が捻くれている。

そんな二人にとって、言葉を重ねなくても黙って全てを受け入れてくれる存在というのは素晴らしいものだった。

すっかり普段どおりの調子を取り戻した魔理沙は、食事の準備が整うまで霊夢と談笑した。

◇

縁側の方で霊夢と魔理沙が何か話しているのが聞こえる。

「やっぱり魔理沙とは初対面の私が話題かしら？ 『お前のかーちゃんちよつと変だよなー』って感じの。」

もしくはスルーしてただの雑談かしら？ 超聞き耳立てたい。

しかし、そんな凶太い真似は出来ない小心者な私である。

ただ黙ってジャガイモの皮を剥く作業に集中することにした。この皮が途切れたら私死ぬ、って感じの意味の無い制約を付けた遊びを内心でやりながら。

料理の内容？ お母さんの手料理と言ったら一つしかない！

「——あら、今日は肉じゃがかしら」

ババアーンツ、という効果音が背後から聞こえた気がした。

嘘ですごめんなさい。BBAだなんてとんでもない。

神出鬼没で胡散臭いキャラ設定のある妖怪だが、実際に会ってみると原作の知識どおりでありながら全てが融和し、同時に許せてしまうほどのカリスマと美貌を持っている。

幻想郷の賢者『八雲紫』が、空中に開いたスキマと呼ばれる異次元の裂け目から私に笑いかけていた。

「……悪いな、紫。この料理は三人用なんだ」

「つれないわねえ。いつも通り、驚いてもくれないし」

ちよつとわざとらしく拗ねる仕草のゆかりんじゅうななさい可愛

い。

まあ、こんな舐めた思考がバレるとぶっ殺されてしまうのでポーカーフェイスに力入れてるだけなのよね。毎回普通に驚いてます。

だからこそ、反応がネタ台詞になってしまっているわけだから。

咄嗟に自分の言葉が出てこそ、こんな風に漫画の台詞とかにあやかっただけでその場を凌いでしまうのは私の癖だった。

緊迫すると自分で考えた台詞はダメで、漫画の台詞だけスラスラ出てくるって生前の自分がどういいう種類の人間だったのかなんとなく分かるね。よし、考えるのやめよう。

「包丁を使っている時は危ないから、普通に声を掛けてくれ」

「それじゃあ、面白くないじゃない？」

「私の反応を見てもつまらんだろう」

「そうね。本当に何故か、貴女は私のスキマの動きを察知出来ているようだし」

え、いやそれは普通に無理。完全に不意打ちされてます。

ただ東方の二次創作では『八雲紫Ⅱ突然登場する』みたいな描写が一般的なので、そういうものなんだと捉えてるだけです。

お風呂場とかでいきなり登場してパニック、とか同人誌ではわりと良くある展開なのでぶっちゃけ私も私生活では『あー、今この瞬間ゆかりんがこつち覗き見てそう』とか考えるようになってるだけなのだ。

それでも普通に驚くので、実際に本気でやめて欲しい。

面白がってわざとやりそうなキャラだと知っているから強くは言わないけど。

「それで、何か用か？」

「あら、用が無ければ貴女の傍にいちや駄目なのかしら？」

質問を質問で返すなあーっ！ と、言いたいところだが、こつちの問いかけを揚げ足取りや言葉遊びで誤魔化すのは紫の常套手段なので、付き合いの長い私は気にしなかった。

実際、傍にいられて迷惑なわけじゃ全然ないしね。

ゆかりんとお喋り出来るなら、水一杯で数時間は楽しめますよ。

「もちろん、構わないよ」

「……」

「もう一食分作ろうか。一緒に食べよう」

「……貴女ってば、本当に……」

あわよくば紫や霊夢達と一緒に食卓を囲む夢の展開を期待して提案した私だったが、何故か呆れたような反応を返された。

「嫌なのか？」

「いいえ、光栄ですわ。でも、それはまた後日。今はまだあの娘と顔を合わせる時ではありません」

事務的な口調で断られてしまった。

あの娘とは霊夢のことだろう。

私と紫の付き合いは霊夢を娘にする以前から続いており、当然霊夢を育て、博麗の巫女を継がせた期間にも彼女との繋がりは断たれていなかったが、こと霊夢に対して紫は干渉を貫いていた。

東方では博麗霊夢と八雲紫はセットのような扱いが多いが、意外にも今日に至るまで二人は顔を合わせてすらいない。

博麗の巫女としての修行や教育などは、至らない私に代わって陰ながらサポートしてくれたんだけどね。

私自身の能力は面白アホ修行の結果で得たものだから、博麗伝来の術とかはあまり関係ないのだ。

……っていうか、むしろ霊夢の方がその方面には優れている。私の『博麗に継承されし力（笑）』って感じ。

もちろん、今日まで戦いに生き残ってきたのは私自身の力によるものだが、だからといってあんな漫画の中だけで許される修行の数々を霊夢にやらせるつもりは絶対なかった。

私の反則技は駄目、正規に受け継がれるべき博麗の技は肝心の私になんちやって継承者——で、ある以上、紫の助力がなければ原作通りの『幻想郷の管理者にして最強の巫女』である今の霊夢はなかっただろう。

ある意味、私以上に霊夢の成長に貢献しているのだ。

その功績を考えれば、いい加減霊夢にちゃんと紹介してもいいと思

うんだけどなあ。

紫が霊夢の育ての親という設定の同人誌とか結構読んだ気がするのだが、原作では実際どうだったんだろう？ あるいは私が霊夢の傍にいる影響によるものなのか？ さすがに分からない。

まあ、東方って公式設定よりも二次創作の設定の方が広くまかり通っていることが多いからね。

第一、その世界に現在進行形で生きる私には些細なことだ。今日の前にある現実が真実。

私よりもはるかに頭のいい紫なのだから、相応の理由があるのだろう。

私は深く追求せずに『そうか』と短く頷いた。

——あれ？ 紫ってば今度は苦笑してる。

「まったく、貴女は淡泊というか素直というか」

「なんだ？」

「なんでもありません。

——貴女に勿体ぶった話し方は意味がないわね。会いにきた用件を済ませるわ」

「ふむ、聞こうか」

なんだかよく分からんが、一人で納得した紫は普段どおりの胡散臭い笑みを浮かべた。

胡散臭いとは言うが、美人が浮かべるとそれすらも妖しい魅力を用意してしまう。

なんとゆーか、いかにも八雲紫というキャラクターの底知れ無さを表していて、私はこの表情が結構好きだった。プロ絵師のイラストを見てる気分。しかも、生で無料でその一瞬だけしか見れないレアなのだ。

美人は三日で飽きるというが、嘘だね。ゆかりんのご尊顔なら一日中でも見ていたい。

しかし私以外の、他の人妖の知り合いからの評価は皆共通して『不気味』とか『警戒心を煽る』とかだった。

やっぱり、2828出来ちゃう私の方がおかしいのかしらん？

「近々、幻想郷で『異変』が起こるわ」

「『異変』？」

「言い換えれば、幻想郷規模で起こる異常現象のことよ。原因は不明ね」

原因不明なのに、異変が起こる時期まで分かっているというのはこれ如何に？

なんか紫もそれ以上話すことはせず、ドヤ顔でこちらの様子を伺っているが——これって私の記憶と知識を比べる限り、原作で言う『レミア・スカーレットの起こす紅霧異変』のことなんだろうか？

霊夢が博麗の巫女を継承してから大規模な事件は起きておらず、もちろん紅い霧が発生する異常気象も発生していない。

このことから『まだ原作ゲームの第一作目に当たる時期じゃないんだな』。これから起こるのかな？』と、日々ノンキに構えていたのだが、それがついに来たということなのだろうか。

仮に紅霧異変だったとして、ここから原作がシューティングたる所以の『弹幕ごっこ（スペルカード・ルール）』が普及するんだよね。

えー、それで二次創作とかの考察では、この異変で弹幕ごっこが広まって紅魔館も有名になったから、裏でなんか取引があったんじゃないかと考えられてて——。

「……出来レースという奴か」

「っ!？ ……さすがね、先代巫女」

紫の言葉の真意を探ってるうちにいろいろ思考が脱線していた私は我に返った。

なんか無意識に口走っていたようだ。

よく分からないが、紫が私を見て驚いていた。

「そのとおりよ、この『異変』は首謀者と既に取り引が済んでいる。

これを切欠にして、この幻想郷に新しいルールを敷く。人間と妖怪を守る為の制約であり、活かす為の刺激を呼ぶものよ」

紫は一変して分かりやすく説明してくれた。

やはり、これは原作ゲーム本編のスタートであり、霊夢が本格的に博麗の巫女として活動し出す始まりであるようだ。

——となると、私もいよいよ本格的に御役御免だな。

「これから起こる異変の解決に、もう私の力は使えないな」

だって私、シューティングの世界なのに能力が格ゲー仕様なんだから。

「本当に、貴女にはどこまで見透かされているのか分からないわね。

……ごめんなさい」

何故か申し訳なさそうに謝る紫。

え？ いや、普通に考えて弾幕ごっこで『真っ直ぐ行って右ストレートでぶつとばす』とかやる奴が関わっちゃ駄目でしょ。そんなの許されざるよ。

「——幻想郷は変わった。一つの時代が終わり、私達の戦争は終わった。

世の中には語り伝えられないものがある。伝えてはいけないことがある。紡いではいけない命がある」

とりあえず、なんか重くなった場の空気をほぐす為に某蛇の名台詞を言ってみる私。

うん、いい台詞だけど全然言うタイミングじゃないよね。っていうか、ノリで口走ったから自分でも意味分からん。

「そう……貴女は、もうそんなことまで覚悟していてくれたのね」
でも、紫には言葉の意味が通じたっぽい。

さすが妖怪の賢者パネエ。具体的にどういう風に言葉を受け止められたのか怖くて聞けないです。

「ありがとう、先代。新しいルールによって変わった幻想郷を、そこに生きる人間と妖怪を、どうか見届けて頂戴」

「ああ。私のやることは、何も変わらないさ」
なんかもう全部分かったふりして私は大仰に頷くしかなかった。

紫の真面目なお願いだから、よく分からなくても快く引き受ける以外選択肢はないけどね。

まー、人里とか見守るのは現役の頃から慣れた仕事だから全然オツケーだよ。

「ありがとう——」

私の返答に、紫は初めて見るような優しい笑顔を浮かべて一礼すると、そのまま静かにスキマを閉じて去って行った。

……そんなに感謝されるようなことだったかな？

話した内容を要約すれば『近々異変が起きる↓そこでスペルカード・ルールを普及させる↓今後は霊夢が主役↓私、お払い箱』ってことになる。

紫にとって役に立つどころか、今後私が幻想郷に何らかの貢献をするような機会さえなくなるんじゃないか？

うーん、分かん。

多分、紫の計り知れない頭脳には何らかの利益が導き出されていたんだろう。

紫の頭が良すぎると、私のお気楽な思考のせいで、会話が噛み合わないままなんとなく綺麗に纏まるというのは実は昔から結構あったのだ。

私は気を取り直し、料理を再開することにした。

はあ、しかし……いよいよ、霊夢や魔理沙がスペルカードを使うようになるのか。

出来れば、その彼女達全員の弾幕ごっこの場面を生で見たいものだ。

……ふと、今更ながら気付いた。

なんかさつきは普通に会話が成立していたが、私つてばスペルカード・ルールの説明どころか名前すら教えてもらってないよね？



博麗神社の先代巫女——多くの者は、彼女を歴代最強の巫女と評する。

しかし、八雲紫にとって彼女の評価は少し違った。

幻想郷の誕生から長い時間、代替わりし続ける多くの『博麗の巫女』を見てきたからこそ言える。

彼女は、歴代の中で最も捉えづらい巫女だ——と。

鍛えられた鋼のような外見とは裏腹に内面は純朴で、だが決して鈍くはない。

賢者と称される自分の姦計さえ無造作に見抜く。今回の異変とスperlカード・ルールの繋がりのように。

意味深げに話題を自分で切り出しておきながら、逆に自分が驚かされる始末だ。事前の情報など断片すら得られるはずなどないというのに。

彼女が一体どんな視点を持ってこの世界を見ているのか？

長い年月を生きたこの大妖怪でも分からない、数少ない事だった。

彼女は紫にとって常に未知の存在であり、不安の種であり、興味の対象であり——そして、自分を無条件で『好きだ』と言ってくれる、理解し難い相手だった。

だから紫は先代巫女を『最も捉えづらい巫女』だと考えている。

唯一掴んでいる確かなことは、彼女がさまざまな意味で自分の心を占める大きな存在だということだった。

今代の霊夢がそうであるように、博麗とは血によつて継承されていく名前ではない。

その時代、最も優れた資質を持つ少女が自然と選り出され、技を学び、地位を受け継ぐ。

それらの流れの中で、今の霊夢が最高の資質を持つ巫女ならば、先代はまさに『異質』であった。

紫がその少女を見出した時、彼女は既に独自の力を得ていた。

初めて彼女を見たのは——人里離れた山奥で、周囲に獣や妖怪の気配が蠢く中、無心で拳を振るい続ける姿だった。

気を整え、拝み、祈り、構えて、突く。

それを繰り返す。ただひたすら、半日以上も掛けて終えたかと思えば、眠り、起き、そして再び繰り返す。

傍から見れば狂人の所業。時間を持って余す妖怪とは違い、短い生しか持たない人間が無為とも思える事に命を費やす異常。しかし、その果てに——。

小さな好奇心が切欠で、余りある時間を理由として、いつの間にか

その姿に惹かれ、気がつけば紫は彼女の拳が一つの成果を掴み取るのを見届けていた。

音を置き去りにする拳。

誰にも知られることなく生まれた神域の技を見た瞬間、紫の心は決まっていた。

未だ不安定な幻想郷。しかし、彼女となら変えられる——！

『幻想郷は変わった——』

先代巫女の眩きを聞き、紫は彼女と出会ってからこれまでの記憶が鮮明に蘇るのを感じた。

何気なく眩かれたように思える言葉は、とても重く響いた。まるで老練な兵士の独白のように。

彼女と過ごした数十年の年月は、大妖怪『八雲紫』にとってはわずかな時間。

しかし、閃光のように眩しい日々だった。

『一つの時代が終わり、私達の戦争は終わった』
激動の時代。

まだ人間と妖怪のバランスも偏り、人が無差別に食い殺される傍らで、無抵抗の妖怪が囲まれて殲り殺される。

秘境の噂を聞きつけた、外の世界で未だ自らを支配者だと疑わぬ傲慢な妖怪が、侵略にやって来る。

それらを全て、二本の腕で叩き伏せた。

これまで人間の守護者として、ただ守る為に妖怪を封じる巫女ではない。幻想郷の管理者として、脅威を自ら踏み込んで駆逐する巫女——。

今、幻想郷の多くの者に知られている『博麗の巫女』という役割を、彼女は確立したのだ。

そして、彼女の言うとおり——彼女の戦争は終わった。

『世の中には語り伝えられないものがある』

最後の戦いが彼女の勝利によって終結した。

大陸を支配していた恐るべき吸血鬼の暴君が、自らの本拠地ごと幻想郷に転移して始めた侵略は、先代巫女が頭首を討つことで防がれ

た。

そして、安定し始めた幻想郷。

——だが、残されたのは平穏だけではない。

強大すぎる博麗の巫女の伝説。妖怪を超越した人間の力。

人間の偉大な可能性を見せ付けた彼女の存在は、同時に人ならざる者達を恐怖させた。

『伝えてはいけないことがある』

本来は在り得ない——在り得てはいけない、『人間が妖怪を支配する可能性』を彼女は示してしまった。

人間は、妖怪を恐れなければならない。

逆があつてはならないのだ。そんな摂理は自然には存在しないのだから。

紫の中に新たな不安が生まれ、二人の関係に小さな亀裂が走ろうとした時、まるで図つたかのように彼女は言った。

博麗の巫女の継承者を見つけた、と。

『紡いではいけない命がある』

新たな不安は生まれてすぐに解消した。まるで答えが最初から用意されていたかのように。

彼女は『先代』となり、博麗の巫女は今の霊夢となった。

霊夢もまた先代とは違った方面での天才であり、何者にも縛られない特有の能力を持ち、その平等な精神はある面で先代以上に幻想郷の管理者として適していた。

何もかも、あつらえたかのように当てはまった。

彼女は神社を去り、人里へ紛れるように住みつき、その力をほとんど振るわなくなった。唯一つ、人々の生活を見守ることだけは変わらず続けた。

霊夢に継承されたものは正当な博麗伝来の陰陽術であり、先代が生み出した数々の技は一つとして伝えられることはなかった。彼女自身も、それを頑なに拒んだからだ。

紫の中には、もはやわずかな懸念すら残らなかった。

そして、彼女もまた何も語らなかつた。

「そう……貴女は、もうそんなことまで覚悟していてくれたのね」
紫は今、初めて彼女の真意を言葉として聞き、胸が詰まる思いだった。

彼女はこちらの言葉を何も聞かず、それでも全てを見抜いているかのように、ただ答えだけを示した。

目の前の人間は、自分がずっと昔から夢見て、長い間想い続けた結果に生まれたこの理想郷を、同じくらい愛してくれているのだ。

彼女の決断を、献身などという陳腐な言葉に収めるつもりはない。

彼女が第一線を退いた今でも修行を続けていることは知っている。出会った時から一貫して自らを高めることを目的としているのだ。

そんな彼女が自分の力を忌むはずはなく、霊夢に力を継承させないのは決して自己犠牲などという偽善の為ではない。

彼女は、ただ自然に愛している。

この幻想郷を、そこに住む人々——霊夢はもちろん、人里の者達、知己の妖怪や妖精達、そしてこの八雲紫を含む全てを。

あらゆる真意を隠し、相手を貶める為に笑う自分の顔を好きだと言ってくれた。

「ありがとう、先代」

許されるものならば、その時紫は涙を流していただろう。

だが、許されはしない。自らが許さない。

彼女を、新しい幻想郷のルールから弾き出したのは私。

彼女の積み上げてきたものを塗り潰し、その上に平穩を築き上げようとしているのは私。

黒幕は、私。

(でも、それでも貴女が、こんな腹に闇を抱え込んだ妖怪を好きだと言ってくれるから……)

紫は、神よりも深く彼女に感謝した。

「ありがとう——■■■■」

貴女が私を含めた幻想郷の全てを愛するように、私も貴女を愛して

いる。



「美味しい！ これ美味いぜ、さすが霊夢のお母さんだぜ！」

フフフ、こんなに喜んでくれるとは、腕を奮った甲斐があったというものだ。

なんか料理が完了して食卓を囲んでみれば、いつの間にか魔理沙が随分とフランクに接してくれるようになったし。

いいのよ？ そんな無理して『お母さん』とか言わなくても。『おばさん』とかでいいのよ？ っていうか、魔理沙にそう呼ばれるのも結構萌えるのよ？

「……うん、やっぱり美味しい」

こちらは静かに味わってくれている霊夢。

その満足そうな微笑みを見るだけで、お母さんの胸はいっぱいです。いいのよ？ もっとおかわりしていいのよ？

「いいものだな」

私は感慨深げに呟いた。

もちろん、表面上は涼しげな顔だが内心はヘヴン状態だ。

あの霊夢と魔理沙の二人と、一つ屋根の下で食卓を囲んでいるのだ。テンション上がらない方がどうかしてる。

っていうか、こんなに充実してていいのか私の人生。

山奥で誰にも見られたくないような半ばギャグの域に達しているぶつとび修行をしていたはずが、いつの間にか紫と出会い、博麗の巫女の座に招かれ、あの博麗神社に住まわせてもらって、霊夢を義理の娘にして、今日は魔理沙と知り合った。

なんとという勝ち組な私。

これまでなんかいろいろ死線とかも潜って来たけど、そういうのどうでもよくなる。

もうね、言うわ。この勢いで言っちゃうわ。

紫は私の嫁。

魔理沙は私の嫁。

いや、もう東方のキャラは皆、私の嫁でいいんじゃないかな？
もちろん、霊夢は私の娘。

——幻想郷の全てよ、愛してるぜ！

紅魔郷編

其の二「紅霧異変」

一つ、妖怪が異変を起こし易くする。

一つ、人間が異変を解決し易くする。

一つ、完全な実力主義を否定する。

一つ、美しさと思念に優る物は無し。

八雲紫が発案し、博麗の巫女が施行した『スペルカード・ルール』は結局のところ、このたった四つの理念に集約される。

これらの理念に反することなく細かな規制や勝敗の基準を決め、実際に耐え得るものとした決闘方法が『弹幕ごっこ』なのだ。

紫は幻想郷におけるこの新たなルールの草案を、繋がりを持たない博麗霊夢に送った。

交わす言葉は無い。

理念だけを書き記し、後は空白となっている紙を強力な結界の術式で包んで神社に放り込んだ。紙は妖怪同士の契約書と同じ物を使っている。

紫は、霊夢がただそれだけでこちらの真意を理解すると確信していた。

彼女は幻想郷を管理する博麗の巫女であり、紫の結界を解くだけの力があり、そしてこのお膳立てから意図を感じ取る鋭い感性の持ち主だからだ。

先代巫女の陰で、霊夢の成長を見守ってきた紫にはそれがよく分かっていた。

もちろん、いかに博麗の巫女が提唱するルールとはいえ、幻想郷中に住む人間や妖怪がそれに絶対的に従うはずはない。

このルールは、ある程度力のある妖怪の為に使われるものだから、言葉を解さない木っ端妖怪は数に入れない。ただ、力と知を備える者が必ずしも良識まで持ち合わせているとは限らないのだ。

己の力に自負があるからこそ、敷かれるルールに反発する者もまた

存在する。

弱者たる人間を見下すのは強者たる妖怪の常だ。

巫女とはいえ人間。スペルカード・ルールを受け入れる者は、せいぜい三分の一程度か——ならば、残りの三分の一はこの妖怪が補完しよう。

八雲紫はスキマ妖怪。境界を操る程度の能力。

紫は人や妖怪、妖精など幻想郷の住人の意識を操作し、常識の境界を曖昧にした。

この新しいルールへの違和感や反発心を緩め、自然なものだと認識出来るようにしたのだ。

『腕力があれば強い』という当たり前の認識のように『弾幕ごっこに勝てば強い』と、そういった価値観に意識を慣らす。

いかに大妖怪といえど、それは大変な仕事だった。

幻想郷は、狭くも広い。場所によっては生と死、天国と地獄のような世界の境すら存在する。

それら全てを越え、可能な限り多くの者達の意識に干渉した。

だからこそ、三分の一が限界だった。加えて、自分と同等の強大な存在相手にはどこまで効果があるか分からない。永続的に行うことも無理だ。

なんとも労力に見合わない成果だ、と紫は脂汗を流しながら苦笑する。

しかし、決心はいささかも揺るがない。

何事も最初が肝心なのだ。

これで幻想郷の三分の二は、新しいルールを常識として受け入れやすくなった。

手の届かない最後の三分の一は、周囲の流れが動かしてくれる。

強大な妖怪といえど、所詮は『個』だ。『群』が動けば、『個』も動かざる得ない。

強者が持つ拘りや品格は、『群』が構成する周囲の背景や認識があつてこそ意味を成すものなのだから。

——後は、実践あるのみだ。

消費した莫大な労力とそれによる疲労をおくびにも出さず、八雲紫は幻想郷の空から優雅に眼下を見下ろしていた。

博麗神社から飛び立つ二人の少女の姿がある。

一つは紅白。一つは黒白。

ある場所を中心に広がり、人里を覆って神社にまで及び始めた紅い霧を異変と捉え、その解決に乗り出したのだ。

博麗霊夢はこれが初めての大規模な異変解決となる。

彼女がスペルカード・ルールに則ってこの異変を解決して見せれば、それが常識として多くの人妖に固着するだろう。

一度根ざしてしまえば、あとは大きくなるのを待つばかり。

ルールが浸透さえすれば、この異変の結末はどう転ぼうと構わないが——まあ、彼女の母と共に成長を見届けたよしみもあり、おまけで無事解決を信じてあげよう。

霧雨魔理沙に関しては、当初完全に無視していた。

まさか博麗の巫女以外にも異変解決に興味を持つ者がいるとは思わず、イレギュラーな障害かとわずかに身構えはしたが、結局はそのまましたいようにさせておいた。

実のところ紫がそう判断したのは、先代巫女が彼女の存在を推したのが大きい。

紫は魔法使いとして凡庸な魔理沙の存在に何ら興味は抱かなかつたが、後に考えてみればそんな弱い人間だからこそ新しいルールに加すべきなのだ、先代の意図を解釈した。

今は、脆弱な人間である魔理沙の行動が、このルールの上でどんな結果を残すのか少し興味深い。

とにかく、賽は投げられた。

先代の築き上げた土台の上に新たなルールを敷き、その上を今代の巫女が飛んでいく。

幻想郷が、新しい歴史を刻み始めた瞬間だった。

「……まあ、思ったよりもあの娘がのんきだったのは誤算ね」
異変が始まって幾日か過ぎ、ようやく動き出した霊夢のマイペースを呆れながら、紫はため息と共に少しだけ疲れを表した。



霧のせいで肌寒い中、診療所の前を掃除していたら上空を見覚えのある二つの気配が通り過ぎて行くのが分かった。

どうやら霊夢と魔理沙が異変解決に乗り出したらしい。

ちなみにこの『気配』って便宜上呼んでる奴。感知できるようになった当初は『これがへ気』って奴か……』と感動したのだが、実際には何なのか未だに分からん。なにそれこわい。

「——先代。今日も診療所は開いているのですか？」

異変も今日で終わりか？ いや、でも実際シューティング的な意味での霊夢の強さってどれくらいなん？ プレイヤーに依存するわけじゃないよね。

いろいろメタ視点で悩んでいると、不意に声を掛けられた。紅い霧が広まって以来、外出する人はめっきり減ってしまったので、こうして気軽に診療所へやって来れる人は限られている。

振り返れば、人里の守護者とも言えるグラマー女教師……いや、上白沢慧音がいた。

「ああ。先生は見回りかな？」

「もう不用意に外へ出る者はいないでしょうが、念の為に」

異変が始まって以来、慧音は里の人間を案じて自主的に見回りを行っていた。

さすが二次創作でもぶれない良識人である。

「ご苦労様」

「いえ。先代も、この霧の中で診療所を開いたままにしていただけで、とても助かります」

「仕事は無いに等しいがな」

「皆、不安になっている。こんな時に、いざとなったら駆け込める場所

があるのは心強いものですよ。さすが、先代です」

年長者の言動をしている印象がある慧音なので、私も『先生』なんて呼んでいるが、礼儀正しい彼女は敬うべき相手にはしっかりと敬語を使う。

確か、公式小説ではあの妹紅に対して敬語使ってたしね。

そして、これがまた謎なんだが……私は慧音に敬われているらしい。

何故に？ 慧音って半獣だから年齢的には私より全然年上だと思うんだが。

「体調を崩した者は？」

「今はまだ大丈夫です。見回る限り、寒さで少々風邪気味の子供が数人程度ですね」

「魔力で出来た霧だ。中てられて具合を悪くする危険性もある。今しばらく、注意してくれ」

「分かりました。しかし、今しばらくというのは？」

「もうじき異変は解決する。霊夢と魔理沙が動いた」

私は心労が溜まっているかもしれない慧音を安心させる為にそう告げた。

まあ、一直線に元凶の紅魔館へ向かうのは無理だろうけどね。原作でもいろいろ迷走してたし。

あの『こんなに月も紅いから』って台詞を見る限り、解決は早くても夜中になりそうだ。

「博麗の巫女は分かりますが、魔法使いでしたか……彼女も？」

慧音は魔理沙という名前に対して疑わしげな表情を浮かべた。

うーむ、これは紫にも言えることなんだが、なんか魔理沙に対して皆反応が悪いのよね。

後ろ盾というかネームバリューがないことによる差なんだろうか？

紫なんかはあからさまに魔理沙を異変に関わらせないようにしていたし、私が慌てて口を挟まなければ主人公が一人減ってしまうところだった。

そういうメタな意味抜きでも、やっぱり霊夢単身で紅魔館に突っ込ませるのは心配だ。

生前の知識から来る単なる思い込みかもしれないが、やっぱり霊夢と魔理沙はコンビだからこそ心強いつて感じがするんだよね。

「不安かな？」

「霧雨の名前は有名です。真つ当な家柄に生まれながら、人としての道を外れたというのが、どうも……」

慧音は魔理沙に対してあまりいい感情は抱いていないようだった。

魔理沙は大手道具屋である実家から飛び出して、魔法使いになったという経歴がある。

家出して、魔法使いなどという人の道から外れた存在を目指す理由は原作や公式設定でも明らかにされていない。

しかし、普通に考えれば、彼女は何一つ不自由なく過ごせたはずの人生を若くして捨てたのだ。貧しさに不自由する人も、この幻想郷では少なくないというのに。

うーん……慧音は生い立ちもあるから、いろいろ複雑に思うこともあるんだろうなあ。

しかし、魔理沙の今後を思えば、ここはなんとかフォローを入れておきたい。

何かいいこと言っておこう！

「——善でも、悪でも、最後まで貫き通せた信念に偽りなどは何一つない」

ブラボーな名言が自然と口から飛び出した。

うん、そうだね。善悪とかあんま関係ないね。

一応、選択の善し悪しを決めるよりもやり通すことが重要じゃね、というニュアンスを含めてみたんだが……微妙か？

でも慧音はそんな言葉の意味は良く分からんがとにかくすごい自信に圧倒されたっばかった。驚いたような顔で私を見ている。

「……確かに、貴女の言うとおりです」

「すまない、説教臭くなってしまった」

「いいえ！ 素晴らしい言葉でした。私も身に染みる思いです。」

私は知らず、半人半獣である自分の身を卑屈に感じていたようです。だから、きつと魔理沙という少女を妬んでしまっていた。

貴女の言うとおり、私は自分の選んだ生き方を偽りにしてしまうところだった。貴女のおかげで、改めて自らの信念を確認出来ました」
そ、そうですか。なんか感動してくれたみたいで恐縮です。

けど別に、慧音の生き方に関してどうこう口を挟んだつもりはなかったんだが……いや、何かいい意味で受け取ってくれたみたいだから余計なことは言わないでおこう。

考え無しな発言の後の対処法を、長年の経験で理解している情けない私だった。

「貴女の信じる二人ならば、私達にも信じる事が出来る。この異変の解決を待つことにします」

「ああ。だが、あの子は結構のんきだからな。多分、解決は夜になるだろう」

「ふふっ、それは母親としての意見ですか？」

さりげなく解決する目処を教えてみたら、微笑ましい顔をされてしまった。

霊夢がのんきってのは否定しないけどね。でも、実際は異変の元凶を探る為に片っ端から因縁吹っ掛けてるせいっていう。

まあ、どちらにしろ異変解決は確定であり、その点に関して私は原作知識云々を抜きにしても信じている。

だって親ですもの。子供のことは信じなくちゃね。

さーて、慧音と別れた後は、今日も誰も来ない診療所の中で一人自主トレする時間が始まるお……。

脳内BGMにロッキーでも流して腕立て伏せしてますか。一万回くらい。



霊夢と魔理沙の視界の先に、紅の館が現れ始めた。

周囲の紅い霧は、まるでその館に塗りたいくらいたくられた血が蒸発して漂っ

ているかのように、そこを中心に発生していた。

異変解決に乗り出してから、どうにも行き当たりばったりを繰り返して来たがようやく核心に迫ってきたようだ。

「見た目通りの『紅魔館』か。あんな派手な館がこれまで大して目にも付かなかつたなんて、どうにも釈然としない話だぜ」

「何かの結界かもしれないわね。吸血鬼異変以来、あそこは封じられてたのかもしれないわ」

「吸血鬼？　なんだ、あそこには吸血鬼が住んでるのか？」

「たぶん、そいつが今回の元凶ね」

「訳知り顔の霊夢に反して、魔理沙にとっては初耳の情報ばかりだった。」

どうにも面白くない、と頬を膨らませる。

魔法使いを目指して人里離れた森に引き籠もり、日々の努力がある程度の成果を生み出すまで外の出来事には無頓着だったのだ。

昔の出来事に関して、魔理沙は人伝の話すら満足に知らない。

「あたしが拾われる前の話よ。吸血鬼が外の世界から館ごと攻め込んで来たって」

不満そうな魔理沙を横目でチラリと確認し、霊夢は隣に並行して飛び続けながら、誰に聞かせるともなく呟いた。

「今回みたいなスペルカード・ルールなんて敷かれていない時代に、純粹な武力で幻想郷を侵略しに来た。それを迎え撃ったのが当時の博麗の巫女と幻想郷で一番強いっていう妖怪」

「妖怪の方は分かんが、巫女の方は霊夢のおふるさんか？」

「そう聞いてるわね」

「なるほど。んで、お決まりに退治されましたっけ？」

「そ、お決まりに。妖怪は退治されるものよ」

「確かに、あの人なら吸血鬼も素手でぶん殴りそうだ」

「実際その通りらしいけど、これに関しては『妖怪の方が異変を解決した』って話で伝わってるからね。周りにはそれで合わせておきなさいよ」

「身内に当人がいると、機密情報も知りたい放題だな。羨ましいぜ」

真実が規制されているのだということをもなんとなく理解しながら、魔理沙は軽口でその場を濁した。

実際、細かい事情に興味はなかった。

これから解決に向かう異変の背景について知っておくことは、モチベーションに多少の影響がある程度の意味しかないのだ。

魔理沙はシンプルな行動原理が好きだった。

「しかし、そうになると霊夢にとっちゃ因縁のある相手ってわけか」

「加えてアンタは部外者ってことになるわね」

「野次馬根性上等だぜ。わたしは好きにやらせてもらう！」

「どうぞ、ご自由に」

紅魔館の異様な姿は既にハッキリと目に映っている。

二人は最後の軽口を済ませると、自然の判断でそれぞれ二つのルートに別れた。

霊夢はそのまま真正面の正門へ向かい、魔理沙は迂回するように敷地内へと潜入していく。

以心伝心などという結構な代物ではない。単なる自分勝手である。

「——来たか」

霊夢は、正門の前で自分を待ち構える妖怪がいることに気付いた。

その館の門番にふさわしい、紅の髪を持つ女だ。

霊夢の勘と経験が告げる。自分の母と同じ、武人特有の隙のない立ち方だ。木っ端妖怪と侮れる相手ではない。

「門番かしら？」

「その通り」

「ネズミ一匹くらいは通す門番？」

「ただのネズミなら、中ですぐに駆除されるわ」

挑発染みた軽口は、予想通り全く通用しない。

霊夢は敵と相対しながら、自らの警戒と集中を高めた。

相手は油断のならない実力者だ。ならば、まずは見極めなければならぬ。

ここに至るまでの道中で試験的に妖怪や妖精と遭遇戦を行ってみたが、いずれもスペルカード・ルールを当然のものとして受け入れて

いた。だからそれに応えて勝負をした。

目の前の妖怪も同じようにルールに従うのなら問題はない。

しかし、従わないのならば——力づくでも従わせなければならぬ。それが新たなルールを提唱し、管理する博麗の巫女たる自分の最も優先される仕事だ。

そして、先代巫女から受け継がれなかった、今代の自分だけに課せられた新しい仕事なのだ。

「今回の異変の首謀者は、この館の主だ」

相手がゆつくりと、数枚のカードを懐から取り出す。

「私は門番の紅美鈴。お嬢様の元まで行きたければ、私を倒してからにするのね」

スペルカードだ。まずは懸念が一つ消えた。

「話が早くて助かるわ」

霊夢は二つの意味を含ませて呟き、不敵に笑った。

さて、第二の懸念は相手の実力だ。

全身を緊張させながら、くつろいだ様子で霊夢は精神を研ぎ澄ませている。ていく。

ルールに守られているとはいえ、妖怪との戦闘を前にして百戦錬磨の如く戦闘態勢を取ってみせる少女の姿に、美鈴は戦慄と歓喜を感じた。

「博麗の巫女……代が替わろうと、やはり只者じゃない」

「ふん、先代との因縁は健在のようね」

「私は吸血鬼異変での数少ない『生き残り』だ。お前の母は強かった！」

「あっそ。あたしはあたしだから変な期待されても困るんだけど……」

獣が牙を剥く行為と同じ意味を持つ笑みを浮かべる美鈴に対して、霊夢は興味無さ気に頭を掻く。

しかし、その目は完全に戦闘用のそれへと切り替わっていた。

何ものにも縛られない能力を持つ博麗霊夢とて人間だ。誰にでも、ささやかながらこだわるものがある。

例えば、卵焼きには醤油が一番ってこと。

例えば、体を洗う時は右腕からってこと。

例えば——尊敬する母のこと。

「あの人が強いんだから、あたしも強いのは当たり前でしょ？」

次の瞬間、激発するように霊夢は美鈴の放った弾幕の最中へと突っ込んで行った。



一方の魔理沙は、紅魔館への不法侵入を容易く成功させていた。

正面口を避け、適当な裏口から入って飛び回ってみれば、いつの間にか巨大な本棚が無数に並ぶ図書館らしき場所へと辿り着いた。

どう見ても首謀者が待ち構える館の最奥とは思えないが、これはこれで魔理沙の知的好奇心を刺激する光景だった。

後でさっくり貰っていいこ、と邪な考えを交えながら、ここまでの道中を思い出す。

「吸血鬼の館っていうからどんな化け物が出てくるかと思ったら、随分拍子抜けだな」

ここが侵入者を許している場所とは到底思えない。

それでいて、館の中で遭遇する敵は使用人らしきメイド服の妖精ばかりだった。

吸血鬼といえば、強力な僕を従える妖怪の大将。自惚れるわけではないが、なんとも肩透かしな出迎えだ。

「狼男やゾンビくらいは出てくると思ったらんだが……」

「そういうのは以前の異変で全滅したわ」

「うおっと!？」

不意を突かれ、魔理沙は咄嗟にミニ八卦炉を声のした方向へ向けた。

「あらあら、小さなネズミかと思ったら物騒な牙も持っているようね」

「狼男もゾンビもないが、魔女はいたようだぜ」

この広大な図書館の中心にフワフワと浮いている病弱そうな少女。

魔理沙は咄嗟に彼女が魔法使いであると見抜いた。

同族を知る共感性（シンパシー）とでも言うのか。この図書館の主で間違いはないだろう。

そして、この魔法使いが自分より数段優れた技術と数倍の年季を持つ『本物』であることも確信した。

「ここは悪魔の住む館。悪魔を友人にするのは魔女と決まっているわね」

「わたしは霧雨魔理沙。異変解決に参上したぜ」

「パチユリー・ノーレッジ。巫女なら間に合っているわ。アナタはせいぜい見習い魔法使いか、コソ泥といったところね」

「正当な評価をありがとうよ。吠え面かかせるぜ」

強者の余裕を見せるパチユリーに対して、魔理沙は臆しもせずニスペルカードを突きつけた。

パチユリーは、そのスペルカード宣言に応じなかった。

「……アナタは博麗の巫女ではない。相手がそのルールに乗らなければ無力なただの弱い人間」

冷たい視線が魔理沙を射抜く。

完全な格下の存在を見る瞳。足元で喚く虫けら相手に、その言葉を理解する意義など感じられないと突き放すような視線だった。

「ああ、その通りだ。わたしは『普通の魔法使い』さ」

しかし、魔理沙は折れない。

「だけど……まあ、推されちゃったからな。ちよつとくらい自信過剰になっても仕方ないぜ」

自分が場違いなことは理解している。

選ばれた地位も、血統も持たない。経験すら不足した未熟な魔法使い。

強力な人外の存在には歯牙にも掛けられない霧雨魔理沙という単なる人間だ。

だが、ただ一人。そんな自分に期待した人がいた。

無力な人間ではなく、この異変を解決する力と資格を持つ魔法使いとして『戦いに行け』と背を押してくれた人がいた。

「なんてったって、あの先代巫女様のお墨付きなんだから。うぬぼれちゃうだろ、お前みたいなもやし魔法使い程度楽勝だってな！」

「……あの巫女が、ですって?」

挑発染みた魔理沙の言葉が、氷の魔法の視線をついに動かした。

その瞳は『敵』を見ている。

魔理沙の突き出したスペルカードを捉えていた。

「面白いわね。少しアナタに興味が湧いたわ」

「余裕ぶった言い回しはいらなげ。勝負するんだな?」

「落ち着きのない奴ね。本物の魔法使いというものを、教授してあげるわ」

「大きなお世話だぜ！」

パチュリーがスペルカード・ルールに乗った。

その手に持つカードの種類は多彩だ。彼女の操る多属性の魔法がスペルに反映されているのだ。

手数の差がそのまま魔法使いとしての実力の差を示していた。

それでも尚、怯む様子のない魔理沙の視界に、しかし別の人影が突如現れる。

「パチュリー様」

「あら、咲夜。何故ここへ来たの?」

メイド服の美しい従者。

彼女もまた明らかに只者ではなく、実力者としての静かな威圧を放っている。

さすがの魔理沙も少しだけ顔を引き攣らせた。

「なんだよ、援軍か?」

「いまさらビビるんじゃないわよ。さっきの啖呵はどうしたの? 少し気張りなさい」

何故か、敵の魔法に逃げ腰を叱咤される有様である。

「……それで、咲夜。レミイの護衛はどうしたの?」

「不要とのことです。お嬢様は先ほど、自ら館の外へ出られました。博麗の巫女の下へ向かったようです」

「黒幕は拠点の奥で優雅に待ち構えているもの、といった御高説を異

変の前に承ったような気がしたけど?」

「何せ、気まぐれな方ですので」

咲夜はそれこそ優雅に肩を竦めて見せた。

小さくため息を吐き、パチュリーはこの落ち着いた従者と落ち着きのない主の差に呆れた。

「ま、因縁という点ではレミイが一番だから、こだわるのも分かるけれど……」

「おーい、結局どうするんだー?」

「ああ、忘れてたわ」

「そろそろ帰ったら? 私も仕事あるし」

ふてぶてしく告げる魔女と従者の対応に、軋むような音を立てて青筋が立つ。

「……よし、分かったぜ。お前らまとめて叩き落してやる!」

「威勢の良さが戻ったわね。大変結構」

「パチュリー様、私は——」

「二番手よ。そういうルールだしね」

「かしこまりました」

パチュリーと咲夜のやりとりなど聞くこともなく、怒りで怖いものなしとなった魔理沙は先制の弾幕を発射した。

彼女は、やはりまだ未熟で、若かった。

勇気の数値さえ理解していない。

しかし、パチュリーはそうやって真っ直ぐに進むひたむきさが嫌いではなかった。



霊符「夢想封印」——。

七つの光弾が美鈴の最後の弾幕を掻き消し、そのまま押し流していった。

圧倒的な霊力の奔流に呑まれた美鈴は、激戦の果てに力尽きて地面へと落下していく。

それを追うように、霊夢は一呼吸だけ置いて地面へと降下した。激戦。それは間違いない。

しかし、結果から見れば死力を尽くしたのは一方だけだった。

「なるほど……強いっ」

大の字に寝転がったまま、立ち上がることもない美鈴は降り立った霊夢を素直に賞賛した。

完敗だった。

ルールの上での決闘とはいえ、妖怪である彼女は人間である霊夢に圧倒されたのだ。

「はあっ……あの巫女と、血は繋がっていないと聞いているけど……」

「そうよ。でも、あの人の背中を見て育った」

見下ろす霊夢の瞳には、冷たくも焼け付くような苛烈な意志が宿っていた。

それを覗き見て、美鈴の口から笑い声が漏れる。

畏怖と愉悦。矛盾した感情を含んだ苦笑だった。

「ははっ、やっぱり親子ね。まだ若いのに、『いいセンス』だわ」

「いい、センス……?」

霊夢は美鈴の言葉と、そこに含まれる真意をしばらく吟味していたが、やがて自分なりの解釈を得たのかあるいは興味を無くしたのか、本来の目的の為に歩を進めた。

「私を退治しないの?」

その無造作な背中に、美鈴は思わず声を掛けていた。

「退治なら、もうしたでしょ?」

「そういう意味じゃなくて……」

「そういう意味なのよ。これからの戦いは、そういう新しい意味を持つ」

そこで言葉を区切り、霊夢はついでに思い出したかのように振り返った。

母さ……と、口走ろうとして飲み込む。仕事モードなのに、油断した。どうでもいいところで失敗、反省。

改めて言い直す。

「先代ほどじゃないけど、あんたの体捌きは中々のもんだったわ」
「それはどーも。でも、それこそこれからの戦いには古い意味しか残らないものなんですよ……?」

「弾幕の美しさも見事だった。——いいセンスね」

「……」

しばしの沈黙が続き、やがて霊夢が歩き去る背後で大きな笑い声が響いた。

疲労も手伝って徐々に途切れ始める美鈴の笑い声を背に、霊夢はついに紅魔館の正面口を前にする。

まずは、敵中への第一歩に成功といったところか。

殴り込みはシンプルな方がいい。このまま直進し、奥で踏ん反り返っている黒幕をぶっ飛ばす。

霊夢は普段通りのまま、神社の障子を開けるように、敵の本拠地のドアを開こうとして——唐突に、勘が意識を別方向へ引っ張った。

「上か」

何の理由もなしに飛ぶ。

すっかり日も暮れ、夜の闇に染まった空へと躍り出ると、紅い満月が霊夢を出迎えた。

そして、その光を浴びて浮かぶ小さな異形の影が一つ。

「——やっぱり、人間って素晴らしいわね」

幼い悪魔が、満月によって肥大化した闇の波動を纏って、そこにいた。

「……ふーん」

見た目は幼い少女でありながら、禍々しい存在感と押し潰されそうな圧迫感を放つその魔の存在を、霊夢は興味なさ気に観察した。

コウモリのような翼。不敵に笑う口から垣間見える牙。無意識に魅了の魔力を放つ両眼。

その少女は吸血鬼だった。しかも特別に強力な部類の。

直感に頼るまでもなく、霊夢は判断した。

こいつが、紅魔館の主。

こいつが、この異変の元凶だ。

「それで、何か御用かしら？ 博麗の巫女」

「そうそう、迷惑なの。あんたが」

「短絡ね。しかも、理由が分からない」

「この期に及んで白を切るほど小物には見えない。」

「目の前の黒幕は、単に言葉遊びを楽しんでいるのだ。」

「とにかく、ここから出ていってくれる？」

「ここは、私の城よ？ 出ていくのはあなただわ」

小馬鹿にするような嘲笑が返ってくる。

わざわざ霊夢を見下ろすような少し高い位置に浮かんでいるのは、おそらく彼女の心を表すがままなのだろう。

挑発的な黒幕の言動に対して、しかし霊夢は早くも飽き始めていた。

気だるげに、さもどうでもいいと言わんばかりに肩を竦め、小さなため息と共に告げる。

「——この世から出てって欲しいのよ」

人間から吸血鬼への宣戦布告は、軽い響きを持って突きつけられた。

その無造作な言葉に、吸血鬼はわずかばかりの間見た目相応に可愛らしい呆けた顔を見せ、次の瞬間爆笑した。

哄笑が響き渡る。

少女特有の甲高い笑い声が、まるでおぞましい怪物の咆哮のように夜の空気を震わせる。ゲラゲラ、ゲラゲラと。

人ならざる者であることを、人間の深層心理へ恐怖と共に改めて刻み込むような声だった。

「面白い。本当に面白いわ、アナタ」

「こっちは退屈よ。強い妖怪ってのはどいつももったいぶりすぎだわ」

「ハハッ、そう言わないで頂戴な。こちらとしても、アナタと顔を合わせるのは色々と複雑な心境なんだから」

「だから、もったいぶるなって言ってるでしょ？」

霊夢は初めて、わずかな苛立ちを見せながら吐き捨てた。

「母さんに敵わないから、娘のあたしにやつ当たりしたいだけでしようが」

「……っ！」

吸血鬼の顔から笑みが消える。

優雅さと貫禄を取り繕った仮面が砕け、その下から無残なまでの本心があらわになった。

凶暴な殺意が表情を塗り潰す。

「……それは一体、どういう根拠から？」

「勘よ」

「………盛り上がりも何もないわね」

今度は脱力。

完全にペースを掴み損ねた黒幕は、不敵を通り越して鈍いとも取れるのんきな巫女を睨み付けた。

「そうね、回りくどい話はやめましょう。私はあんたを——博麗の巫女を打ち負かしたい」

「殺したい、じゃないの？」

「ルールの上で決闘することには同意しているわ。それに、私は別に博麗の巫女が憎いわけじゃない」

「負けず嫌い？」

「身も蓋もない言い方ね。でも、結構。その解釈で構わない」

「言い訳がしたいなら、前口上として聞いてあげるわよ」

「……ほんっと、いい性格してるわね。このクソ人間！」

鼻でもほじらんばかりに投げやりな態度の霊夢に対して、引き攣った笑みを浮かべて悪態を吐く。

しかし、すぐに諦めたように力を抜いた。

ある意味で、この人間には敵わない。そう思ってしまったのだ。

時と場所、状況は違えど、それは彼女が過去同じように、別の博麗の巫女に対して抱いた気持ちと同じものだった。

「人間って奴は、本当に……」

「で、あたしに何か言いたいことでもあるの？」

「——ええ、あるわよ」

自らのスペルカードを掲げながら、吸血鬼は語る。

「この紅魔館の主『スカーレット』は、かつて起こした異変の時に打ち倒された。先代の博麗の巫女——アナタの母親に」

当主の名前を他人事のように語る姿にいぶかしげな表情を浮かべる霊夢を見下ろし、真実を告げる。

「かつて紅魔館の領主であった、この『レミリア・スカーレット』の父は——！」

レミリアは、もう笑ってはいなかった。

幼い吸血鬼の娘の瞳には怒りが宿っていた。

「あー、ようするに親の仇討ちってわけ？」

ここに至っても尚、普段通りのペースを崩さない霊夢の言葉に——
レミリアは、首を振る。

「……違う」

瞳に浮かぶ怒りは、言葉にまで滲んでいく。

「それも違うー！」

しかし、その怒りは誰に向けるものでもなく。

「父は……っ」

胸の内から湧き上がる怒りの感情を押しさえ込む必要など無いのに、
レミリアは苦しげに呻くことしか出来ない。

最初から、その怒りのぶつける場所など存在しないかのように。

「あの、男は……！」

もがき、苦しみ、喘いだ末に、何かを吐き出すようにレミリアは絶叫した。

「——この私が殺すはずだったんだ！」

幼い悪魔の慟哭が、紅い満月の浮かぶ夜空に響き渡る。

そして、行き場を失った虚しい激情が弾幕となって霊夢に襲い掛かった。



「霊夢の霊圧が……消えた……？」

いや、やめろ私。シャレにならない。

不意にニュータイプの如く脳裏に走った閃きに対して口走ってしまつた台詞を、慌てて振り払う。

私に霊夢のような直感スキルはないから気にすることはないと思うけどね。

この時間帯、紅魔館での戦いはもう決着がついているかもしれないが、不吉なことを言つても私自身が不安になるだけだ。つていうか、普通に不謹慎。

いらぬ事を考えないように、私は左手の指先に意識を集中させた。

現在、逆立ちの真つ最中。

腕立て一万回を終えた後に、大して広くない診療所内でやれる鍛錬をやり尽くして、仕上げに右手で逆立ち一時間。今は左手で三十分過ぎたくらいだろうか。

もちろん、漫画でよくやつてるみたいに人差し指一本で体重を支えるやつである。

なんかもう当たり前にこういうこと出来るようになってるけど、修行始めの非力だった頃思い出すと感慨深くなるよねえ。

こんな風に、かれこれ両手合わせて一時間以上どうでもいいことに頭を回している私。

体力的に辛く感じはするのだが、こういう体を動かさず維持するタイプの鍛錬の最中は考え込む癖がついてしまつていた。

慣れのせいだろうか。肉体的にはキツイのに、意識が暇をするとうか——考え込んで、気が付いたらすごい時間が過ぎてたとか結構ある。

以前、森の中で瞑想してたら、次に目を覚ました時体に成長した蔦が巻きついててワロタ。

人里戻って日付聞いたら、五日も経つてたとかアホかと。

音沙汰無くて心配してた霊夢に初めて殴られました。

あー、あの時の霊夢の顔は怒ってたのになんか泣きそうにも見え
て、すごいシヨックだったなあ。あれは深く反省した。

……しかし、さつきから頭に浮かぶのは霊夢のことばっかりだな。
やっぱり心配なんだね。もちろん、魔理沙のことも考えてるけど。
これから先、こうやってやきもきすることが増えるんだろうか？

原作の知識からして、今回の異変を発端に次から次へと新しい異変
が起こって、その解決に霊夢は必ず乗り出すことになるんだよね。
役割的にはしょうがないんだろうけど……。

ううっ、いかんいかん。ネガティブに考えるな。
物事はもつといい方向に想像するんだ。

まー、親の鼻肩目抜きにしてもうちの霊夢は天才ですから？
シューターの言うのとルナティックなレベルだと想定出来るわけだ。
レミリアに勝った後って、原作だと確か紅魔館との交流が始まるん
だよな。

魔理沙が図書館に入り込むようになったり、レミリアが霊夢の所へ
通うようになったり。

あれ？ そうなると、ひよつとして私も紅魔館のメンバーと顔合わ
せる機会とか出来るんじゃないか？

特にレミリアに関しては神社でばったり会う可能性もある。

なんてこった……そのまま一緒に食事とか、あまつさえ紅魔館への
招待まで、自然な流れで持っていけそうじゃないか。

こ、これは今から入念な計画を練ることが必要か……！

例えば、遭遇率を上げる為に、月一回の神社訪問を月二回に増やす
のはどうだ。

霊夢が心配で様子を見に行く機会を増やしたとか……駄目だ、もし
霊夢にウザがられたら立ち直れない。

いや、そもそもレミリアに関して、私は非常に重要なことを思い出
した。

……レミリアのお父様、灰にしたの私やん？

其の三 「吸血鬼異変」

欠けることのない満月が夜空に浮かんでいた。

月の満ち欠けは妖怪の力にも影響を及ぼす。真円を描く時、月の光はそれを浴びる妖怪の力を最も増幅させるのだ。

そういう点で言うのなら、今夜はいい月夜だった。

しかし――。

「最悪の夜ね」

紫は珍しく悪態を吐いた。

おおよそ考える限り、最悪の条件の揃った夜だった。

満月は妖怪の力を増大させる。

それはもちろん紫自身も含まれる話だったが、月の力を味方につけることに特化した種族もいるのだ。

――吸血鬼。

満月の夜には恐るべき怪物へと変貌する妖怪が、よりにもよって今夜幻想郷を侵略しようとしているのだ。

紅魔館のスカレット伯爵――その名前は大陸の支配者として、妖怪の棲む闇の世界で轟いていた。

人口が増え、近代化によつて技術の進歩した外の世界。もはや人間の天下とも言えるそこで、スカレットは社会の陰に潜み、繁栄を続けていた。

彼は暴君として有名だった。

中世時代の陰惨な背景を、彼の周囲だけは保っているかのようになり、人も妖怪も区別なく殺し、喰らい、犯し、そして無造作に捨てていった。

そんなおぞましい化け物が、この幻想郷へ自らの本拠地ごと転移して来たのだ。

明らかな侵略行為だった。既に、館の転移した周辺に棲む妖精は戮り殺され、妖怪は配下に加えられたと聞く。

今はその夜。最悪の化け物に最悪の力を与えてしまう最悪の月が昇る中、紫は彼らの侵略行為を止める為に敵中へ赴かなければならな

いのだった。

「本当、最悪だわ。そうは思わない?」

無数の僕を従えているであろう吸血鬼の根城に対して、向かうのは八雲紫というスキマ妖怪一匹。

そして、そのお供に巫女が一人付き添っていた。

「ああ」

気分直しに軽口を交わしてみようと思った相手は、博麗の巫女。

幻想郷史上最悪の侵略者を相手取る状況にして、自らの式神さえ同伴させなかった紫が、共に戦うことを許した人間だった。

「……敵は多いな、紫」

夜の森を抜け、あらわになった紅の館を前にして巫女は呟く。

聳え立つ巨大な紅魔館からは、その色が本当に血によって染められているのかと錯覚するほどに濃厚な瘴気と魔力が渦巻いている。

視界に映らなくとも、内部に蠢く無数の魔物の存在が手に取るように分かった。

そして何より、閉ざされた門の外にさえも既に多くの妖怪達がひしめいている。

館の敷地に入ることさえ許されない格下ばかりだが、それらは全て幻想郷に住み、ほんのわずかな時間で紅魔館に従えられてしまった哀れな妖怪達だった。

恐るべきカリスマ性と屈服させる為の暴力――。

今夜一晩、奴らを自由にさせれば配下の妖怪の数は倍以上に増えるだろう。

この最悪の条件が揃った夜に、勝負を仕掛けなければならない理由はそこにあった。

幻想郷は微妙な均衡によって成り立っているのだ。外の世界のように、人も資源も豊富にあるわけではない。

たった一つの軍隊で、人間を含む脆弱な者達は蹂躪され、生態系は崩れ、結果この秘境は崩壊してしまう。

正しく今夜は、決戦の夜だった。

「……いや、大したことはないか」

そんな今や瀬戸際に立つ身でありながら、傍らの人間が小さく笑うのを紫は視界の隅に捉えた。

横を向けば、巫女もまた紫の顔を見ている。交わした互いの視線に、焦燥や絶望感といったものは全く無い。

紫は自らが大妖怪であるという自負から余裕を崩さず、しかし巫女は脆弱な人間でありながら微笑さえ浮かべている。

「今夜は、私とお前で二人掛かりだからな」

だから、なんでもない事なのだ——と、百を超えるだろう敵を前にして巫女は不敵に笑った。

「——ええ、まったくその通りね」

彼女の絶対の自信に釣られて、紫も笑う。

この決戦の夜に、彼女を連れてやって来た理由がそこにあった。

人間と妖怪。越えられない境界を持つ二人の間には、奇妙な信頼関係があった。

歩みを再開する。

巨大な館とそこにひしめく妖怪の群れを前にして、無造作とも言える足取りで二人は進む。

眼前で異形の存在達の上げる咆哮は、単なるそよ風のように吹き抜けるだけだった。

恐れも怯みもない。

弱者の群れに向かって、たった二人の強者が歩く。

「……訂正しましょう」

紫は空を仰いで、のんきに呟いた。

「今夜は、なかなかいい夜になりそうだわ」



なんか超強い大陸の支配者で『小学生の考えた無敵絶対ロボ』を小指でなぎ倒し、食うという悪逆非道の極地の存在が幻想郷を侵略しに来るらしいのでゆかりんに今夜死ぬ覚悟をして来いと言われました。

具体的には、紅魔館に住むスカーレット家と呼ばれる有名な吸血鬼

達が攻めて来たらしい。

これが原作の過去に当たる、俗に言う『吸血鬼異変』であるのは間違いないようだ。

つまり紅魔館の当主であるレミリア・スカーレットが、とうとう幻想郷へやって来たのだ。

私は紫の誘いに二つ返事で了承した。

——いや、分かっているよ？　これがレミリアとの親睦目的ではなく、侵略行為を止める為の戦闘になるってことくらいは。

ここで吸血鬼が紫に退治されて異変解決つてのが原作での正史なので、紅魔館との全面戦争になるのは避けられないだろう。

結末が分かっているから安心していうのんきな話でもなく、私は純粋に紫の力になりたくてお供したのだった。

もちろん、好奇心もある。

つええ奴と戦ってみてえ、なんてサイヤ的な欲求があるわけではないが、紅魔館のメンバーと顔合わせくらいしてみたいとは思うんだよね。

あと、紫がガチな雰囲気なので心配というのもある。

彼女の身を案じるなどというおこがましいものではなく、今のところ単なる侵略者扱いである紅魔館に対して問答無用で『美しく残酷に往ね！』とかしないか心配なのだ。

そんなことになったらタイムパラドックスで歴史が変わってしまうのであるスネーク。

しかし、油断してたわけじゃないけど思ったよりも物騒な感じだ。

いかにもラスボスの拠点って感じの紅魔館の前には既に大量の雑魚妖怪が待ち構えている。

ちなみに何故雑魚と判別出来るかと言うと、そいつら全員人型じゃないから。

おぞましい造形の奴らばかりだが、逆にこの世界だとそれが小物臭いという法則みたいなものがあるようだ。

そーゆーわけなので、割と余裕を持って、私は紫にカツコよさをアピールしながら共に敵地へと進んでいった。

……出来れば『俺とお前でダブルライダーだからな』って言いかけたけど、紫にはネタ通じないしね。

「さて……伯爵様は余興がお望みのようですけれど、付き合う義理はありませんわね」

とりあえず、門の前で一戦か？ と、思ったら、不意に傍らの紫が意味深げに呟いた。

そして、次の瞬間笑顔のまま物凄い殺気を放ち始めた。

なにこれこわい。

『常人が受けたら気絶するほどの殺気』って描写があるけど、あれって本当だったんだね。

ゆかりんを中心に突風でも吹いてんじやねって感じに肌にビリビり来る。

正直、私も竦みそうになってしまったが、殺気以上に凄んで見せる紫の横顔がカッコいいやら怖いやらで、魅入ってしまった。

やべえ、ゆかりん美しすぎ。

なんとという魔性の美貌。イラストタグを当てはめるなら『勝てる気がしない』だ。

じつと見てたら不審に思われるので、横目でチラツチラツと伺ってたら、いつの間にか殺気は止んでいた。

そして、門の前の有象無象もいつの間にか消えていた。

蜘蛛の子を散らすように逃げたようだ。いや、無理もないけどね。

「あらあら、幻想郷の妖怪も懦弱になったものね。だからこそ、余所者にいいように使われるのでしょうけど」

誰もいなくなった門前に向けて嘲笑を浮かべ、私に対してはお茶目にウインクしてくれるゆかりん。かわゆい。

殺気にビビらなかつたのを褒めてくれてるっぽい。

いや、その……ごめんなさい。『美しい……ハッ！』って感じに、ゆかりんに見とれてたら終わってたただけです。

なんか気まずい内心を、いかにも戦いに備えていますって真面目な表情で隠して、私達は先へ進んだ。

しかし、誰もいなくなつたかと思つた門前に人影が一つ残つてい

る。

「少しは骨のある門番もいるようね」

「……」

巨大な槍を携え、あの殺気を受けながらも臆すことなくこちらを睨みつける紅の髪の少女が一人。

これは……間違いない。

彼女は紅美鈴だ。

すごい、昔からちゃんど紅魔館の門番やってたんだなあ。

美鈴に関しては公式設定が少なく、その正体や経歴に関してはほとんど二次創作の予想や想像ばかりなんだよね。

そんな彼女の過去を、現実として生で確認出来たことに私は密かに感動していた。

うわあ、なんかすごい嬉しい。こんなの生前の世界では絶対に知れないことだよなあ……。

「紅魔館の門番、紅美鈴。ここを通りたければ、私を倒して行け」

一人盛り上がる私を尻目に、美鈴は静かに槍を構えた。

あー、槍使うんだ。

中国拳法の達人ってイメージがあったから、いかにも西洋製っぽい槍を構える姿に違和感を覚える。

でも、美鈴の弾幕抜きの実力ってどういものなのかさすがに知らないしね。勝手な思い込みだったのだろうか？

いずれにせよ、今の問題は美鈴との戦闘である。

ハッキリ言って、有利はこちらにある。

私とて長年の修行と、博麗の巫女として実戦を積み重ねてきた経験がある。曖昧な表現や不要な謙遜を抜きにして断言しよう。

今の美鈴より、私の方が強い。

もちろん紫が相手ならば言うまでもない。

なので、勝負する分には問題ないが……。

「身の程を弁えなさい」

紫に任せるのだけは駄目だつて！……もう、美しく残酷にこの世から去らせようとする気満々なんだもん。

私は紫を手で制すると、任せてくれと言わんばかりに見つめた。紫は特に迷うこともなく、小さく肩を竦めて矛先を収めてくれた。ありがとう。その調子で、当主のレミリアに会っても問答無用でぶっ殺すのとか自重してくださいと嬉しそうです。

「私が相手をしよう」

「……舐めるな、人間め！」

まー、すげえ強い妖怪相手に覚悟決めてたら、代わりに人間が割り込んできたんだから、そりゃ舐められてると思うよね。

激昂しつつ素早く踏み込んで突き出された槍を、私は紙一重で回避した。

見えるぞ……私にも敵が見える！

そんな冗談抜きにして、美鈴の攻撃が見えまくる。

別に攻撃が遅いわけじゃない。ただパターンが単調なのだ。

なんていうか、槍が武器というより制限にしかなくてないよね。両手塞がってるから、突くくらいしか出来てない。蹴りも間合いの関係で届かない。

格闘で戦った方が単純に手数でも今よりは有利だと思うな。

とりあず、不用意な横薙ぎをしゃがんでかわしつつ水面蹴り。

「足元がお留守だぞ」

「ぐっ、くそ……っ!!」

戦闘中に言ってみたかった台詞ベスト3をさりげなく口にして内心浮かれる私。

かろうじて転倒を堪えた美鈴は、追撃の私の突きを避ける為に懐へ潜り込もうとする。

ナイス判断。でも、はい投げ。どーん！

「がはっ!?!」

「そこまでだ」

背中から地面に叩きつけられ、呻く美鈴の首筋に手刀を突きつけて決着とした。

美鈴は菌を食いしばって私を睨みつけている。

意気込みやよし！ しかし相手がひよっこではなあ！ ——と、中

の人繋がりで、ちよつとアドバイスしてみることにする。

「……普段から槍を使っているわけではないな。慣れない武器は単なる枷にしかならない。どんな達人も行動を単純化される」

そんな餓狼伝で語られてたような受け売りをしたり顔で言っちゃう私。

「そもそもお前に武器は向いていない。攻撃を懐に入ってかわす癖がある。どちらかというと至近距離での格闘戦向きだ」

「く……っ」

「——だが、踏み込みからの体捌きは見事だった。いいセンスだ」

調子に乗って、ドヤ顔で随分語ってしまった。しかもどっかで聞いたような語り口で。

しかし、内容は適当に言ったわけではなく、実際に美鈴の動きを見て解析した結果だ。

美鈴に門番を任せた奴は、彼女の本来の戦い方を理解してないようだね。雑兵として、とりあえず武器持たせて立たせとけて具合か？

よく見ると、美鈴の格好は酷く粗末だ。髪もボサボサで汚れてるし、東方キヤラお決まりの帽子も無い。

うーん、意外と過去には下っ端扱いだったのか。

昔のおぜうさまって美鈴のことあまり優遇してなかったのかな？

どこかで扱いが変わるの？

紅魔館って全体的に優雅なイメージがあるから、部下を奴隷みたいな扱いするのって想像出来ん。

そんな風にいろいろ悩んでいると、苦しげに呻いていた美鈴が、震える手で私の腕を握っていた。

「いい——センス……？」

最後にそう呟き、美鈴は気絶した。最後ちよつと嬉しそうな顔してたよな気がする。

このアドバイスを基に、より強くなってくれるといいな。二次創作で結構あった『実は強い美鈴』って好きなんだよね。

戦闘民族ではないが、将来美鈴と組み手とかやってみたいなーとささやかな期待を持ちつつ、私は門へ向かう。

それに続く紫が『貴女も甘いわねえ』と楽しそうに笑っていた。今更になつて、偉そうに語つてた自分が恥ずかしつ。

喋つてる時は脳内ボイスがスネークになつていたが、現実には渋い声に変わるとかないしね。完全に自分に酔つてました。

本格的な戦闘を前に、全然関係ないトコで心理的ダメージを受けている私だった。

あ、門が勝手に開いた。



侵入者を拒むかと思われた巨大な鉄の門が左右に開いていく。

潔いのか、それとも中に招き入れることも余興の一種と捉えているのか。紫にはどちらでもいいことだった。

自らを絶対的な強者と驕る敵を内側から引き裂くのは存外容易なことだ。

倒れた門番を無視し、紫は巫女と共に敷地内へと歩みを進める。

それにしても——と、紫は先ほどのやりとりを思い出して苦笑した。

最悪の侵略者相手の決戦に赴いた場所で、まさかあんなにのんきなやりとりがあるとは思わなかった。

博麗の巫女でありながら敵対した妖怪を退治せず、諭し、将来に期待すらしている。

言葉の通り、彼女が甘いだけなどと思うつもりはない。

ただ、この巫女は変わり者なのだ。

紫自身がよく分かっていることだった。なにせ、この謀略に染まった大妖怪を相手に純粋な好意を向ける人間なのだから。

(まあ、あの妖怪はまだ若い。邪な気も持たず、捨て置いて問題ないでしょう)

身なりを見る限り、あの門番妖怪は敵の中でも虐げられ、ごんざいな扱いだったようだ。どちらかというと、幻想郷(こちら)側の妖怪なのだろう。

わずかな懸念を消し、通り過ぎたところで紫は意識をこれからの事へと切り替えた。

整えられた芝生や花壇、月明かりで煌めく噴水などが彩る敷地内はその権威を象徴するかのように壮健なものだった。

しかし、ここはやはり悪魔の館である。

紅魔館の正面口前には、あれこそがスカレットの本来の配下であろう兵士達が編隊を組んで待ち構えていた。

一見すると人間の兵士のようにも見えるが、それらの瞳に生命の色はなく、服の隙間からは隠しきれぬ死臭が溢れ出ている。

（グールか――）

吸血鬼に血を吸われ、死ぬことで下僕となった動く屍達だった。

本来ならば、グールとは吸血鬼の食事の後に残る残飯のようなものであり、無秩序に徘徊して生者を襲うのが性質だ。

それらのおぼろげな意思を統率し、兵隊として纏め上げる支配力は、なるほど大したものだろう。肉体の崩壊を抑える為に防腐も施されているらしい。

しかし、死臭を抑える為に薔薇の香水まで擦り込んでいるらしいその処置は、運用の為に利点などではない。おそらく単なる見栄えの為にだ。

徹底的に、しかし不必要に死体を弄り回す。あのグール達の主は、死者の尊厳など糞以下にしか考えていないらしい。

紫の平静な表情の下で、敵に対する苛立ちの種が、一つ増えた。

加えて、中世を思わせる古風な館の前に並ぶそれらは、皆例外なく近代兵器と防具によって武装している。

「やはり、外の世界の技術を持ち込んだようね……」

文明が古い時代のまま残された幻想郷では在り得ない銃器の数々を眺め、紫は頭を悩ませた。

敵の戦力に問題を感じているわけではない。戦いの後の、あれらの処分に頭を悩ませているのだ。

あんな高度な武器を一つでも幻想郷に残すわけにはいかない。

高い技術力と好奇心を持つ河童などに流れようものなら、あつとい

う間に量産されて、文明のバランスを崩してしまう。しかも悪意がないから性質が悪い。

誰の目に触れることもなく処分してしまうのが一番なのだ。

「全く、次から次へと問題を持ち込んでくれますわね」

敵の一群を一通り眺め、紫は小さなため息を吐いた。

——逆に言えば、八雲紫にとって眼前の敵はその程度で済ませられる脅威でしかなかった。

整然と並んだ敵の編隊の端へ、無造作に手をかざす。それをそのまま、撫でるように横へ滑らせる。

ただそれだけで、敵は死滅した。

かざした手のひらが通り過ぎるだけで、その先に立つグール達は糸の切れた人形のようにバタバタと折り重なり、倒れていく。

戦闘は無かった。

片手の無造作な一振り、満を持して待ち構えていた紅魔館の戦力は全滅した。

「文字通りの動く屍。生と死の曖昧な存在は、境界も綻び切っているから容易いものだけわ」

そう嘲笑する。

境界を操る能力の前では、彼らは人間よりも脆弱な存在だった。

死んでいるのに動いている矛盾。既に生と死の境界が曖昧となっている存在を本来の死へと軽く後押しする程度、緩んだ紐を解くより簡単なことだ。

最初の宣言通り、敵の余興や思惑といったものなど一切無視して眼前の敵を文字通り一掃した紫は、慌てて湧き出してくる新たな敵勢に注意を切り替えた。

グールが全滅し、別の種類の兵隊が姿を現す。

傍らで戦闘の音が響き、視線をやれば、吸血鬼の下僕としてはありきたりな人狼が博麗の巫女に襲い掛かっていた。

人間を軽く超越した速さで迫るそれらを、しかし巫女は容易く叩き伏せる。

牙を剥き出しに突進して来た所を、上から殴りつければ地面に叩き

つけられた頭が破裂し、死角からの一撃をかわして空高く殴り上げ、怯んだ相手の首を捻り折る。

やれやれどつちが人間離れしているのか、と半ば呆れながらも、敵の一方を任せる信頼を抱きながら紫は別の獲物を探した。

肉を破壊する音を聞き流しながら周囲を伺えば、空中に飛翔する人影を複数見つける。

（魔法使い一人、これはなかなかの技量を持つようね。そして……吸血鬼が複数。あらあら、同族まで配下に行っているのね）

紫は半ば感心し、半ば呆れた。

敵の吸血鬼達は、いずれも意識を支配されたグールもどきではない。自立した意思を持ちながら、この館の主に従っているのだった。

吸血鬼は、その強大な力に比例した自尊心を持つ妖怪である。弱者を見下す側であり、他者に遜るような存在ではない。

それらすらも従えるスカーレット伯爵とは、よほどのカリスマと、それ以上の暴力という権威を持つ吸血鬼なのだ。

配下の吸血鬼達には隠しきれない『抑圧された恐怖』が透けて見える。

暴君と呼ばれる理由の一端を再確認しながら、紫は彼らに混じってこちらを見据える魔法使いの方に集中した。

見た目はまだ幼く、薄紫色の長い髪と病的なほど白い肌を持つ儂い印象の少女だ。

しかし、その実力は今のところ最も警戒に値するものだと紫は判断している。

吸血鬼の仲間として、魔女の存在は違和感が無い。

——だが、紫はあの魔法使いの澱んだ瞳に囚われの気配を感じ取った。

（喉と口内——おそらく舌ね、魔法術式の紋様を確認。声を制限しているのかしら？）

人体に刻むような代物ではないでしょうに。例えあれを解除出来ても後遺症が残るわね……）

あの魔法使いは、どうやら仲間でありながら対等の存在としては扱

われていないらしい。
身綺麗にされてはいるが、それもおそらく当主の趣味なだけだろう。

呪文を唱える為に発声を制限され、ただ魔法を使う道具として仕組まれている。

アクセサリーかと思った首輪の装飾も、それを踏まえれば意味の違った物と捉えられた。

紫の中の苛立ちが、また一つ増える。敵の当主を殺す理由として。それをおくびにも出さず静かに飛翔し、紫は襲い掛かる敵を迎え撃った。



ゆかりん無双はつじまってるよー。

これまで何度も思い知ってたけど改めてゆかりん強すぎワロタ。

もうね、なにあれ？ 完全武装の軍隊相手に、遠巻きに手を一振りするだけで全滅とかチートってレベルじゃない。絶対効くザラキかあれは。

私なんかバカ正直に殴りかかった途端、即死させられるってことですね。わかります。

しかし、幻想郷に住んでたから忘れがちだったけど、外の世界って普通に近代文明が発達してるんだよね。

マシンガン持った敵の群れが並んでるの見た時はちよつと焦った。さすがに私も銃で撃たれたら死んじゃう。

人外の存在相手に銃って効かないどころか逆に死亡フラグ的なイメージがあるけど、人間相手なら普通に有効だしね。

私も銃弾はかわせそうにないし、再生力に定評のある妖怪と違って頭や心臓に穴が開いたら普通に死にます。

まー、そんな意外な強敵も文字通り一掃されてしまったわけだが。続いて現れた敵の第二波相手に、紫は空中で優雅に渡り合っている。

サーベルとかレイピアとか、いかにも貴族チックな武装の吸血鬼複数相手に立ち回り、魔法使いの後方支援射撃をスキマで無効化し、放たれる弾幕は手数でも負けていない。

やべえ、あそこだけ戦いが別次元。

けど、一つ有利なことに、敵はどうも弾幕を使えないみたいだ。

要は魔力や霊力を無数の弾丸状に形成して撃ち出す技術なんだが、そういう発想自体がないのか、肉弾戦か魔法、吸血鬼の能力を使った使い魔の遠距離攻撃くらいしかしてこない。

もちろんそれらも脅威なのだが、紫の弾幕も未来に行くスペルカード用の物でなくガチの殺傷力ありだしね。攻撃量は圧倒的だ。

そんな凄まじい空中戦の下では、私が地味に吸血鬼に定番の狼男をダース単位で吹っ飛ばしている。

千切っては投げ、千切っては投げ……面倒になったので、途中から千切るだけにした。

こいつらも強いっちゃ強い。

動きの速さは人間の比じゃないし、普通の剣じや刃も通らないくらい頑丈だ。爪は鋭く、何回か軽く切られている。おまけに生命力も高い。

だから、一撃に霊力込めて即死させてるんだけども。

あと、速いと言っても天狗ほどじゃない。

あいつら種族とかで差はあるけど、実力上位には音速出す奴までいるからねえ。

そんな天狗との戦闘経験もある私にとっては大した敵でもなかった。

天狗の場合、一度動き出すと目で追えない上に移動時の衝撃波だけで吹っ飛ばされることもあるから、まともに戦うと手に負えないのよね。危うく死にそうになった。減速しない砲弾相手にしてるみたいなもの。

そんな奴らに比べれば、まだ生物的な範疇の動きをするこいつらは楽な部類だ。跳んでくる着ぐるみを殴り殺すだけの簡単なお仕事です。

せつかく助っ人について来たのに紫の担当する敵との戦力差がすごい。

……っっていうか、あの凄腕の魔法使いはどう見てもパチュリーだよ。ね。

思っていたよりもずっと病弱に見える少女だ。今もゲロ吐きそうな顔で呪文唱え続けてるし。

美鈴のことといい、今の紅魔館はちよつと酷くないかね。労働基準法とかどうなっているのか小一時間ばかり問い詰めたい。

そんな風にいるろ集中力を乱しまくりながら、襲い掛かる敵を単なる肉塊としてロツキーばりに黙々叩きまくっていたら、不意に拍手の音が響き渡った。

その音に視線を走らせれば、拍手をしている奴は紅魔館の一際高い時計台の頂点に佇んでいた。

なん……だど……??

私は戦慄した。

全く予想だに出来なかった。まさか、この状況で横合いから『なかなか楽しませていただきましたよ皆さん』ってな具合に拍手しながら登場する恥ずかしい奴がいたとは。

中二病という生前の知識を持つ私としては寒気がするやら笑えてくるやら。

でも、他の皆は普通に緊迫してるっぽいので私も黙って見守っておく。なんかボス登場っぽいし。

「素晴らしい。負け犬どもの逃げ込んだ辺境と侮っていたが、なかなか楽しませてくれる」

台詞も含めて、なんかもう文字通りと言う他ない奴だった。強い吸血鬼であるのは分かる。

ロマンスグレーを形にしたような老紳士で、カイゼル髭にモノクルと抑えるべき点をきっちり抑えた吸血鬼の真骨頂的な姿だ。

しかし、逆に言うなら『ふーん、君って吸血鬼なんだね』と納得する以外にない捻りの無さだった。

何より、我が物顔で紅魔館の頂点に佇んでる姿が個人的に違和感あ

りまくりだ。

そのポジションって普通レミリア辺りが当てはまるんじゃないの？

「しかも、我ら人外の宴に人間まで迷い込むとは。面白い。実に、面白い」

大切なことなので二回言いました。

なんか私は目をつけられたらしい。

「なるほど、君がこの地の人間の守護者である博麗の巫女か。

それほどの力を持ちながら、生娘とはなんともそそる。見た目も悪くは無い。どうだろう、我が虜とならないかね？」

しかも、性的な意味で目をつけられたらしい。

うーん、そういう性的衝動って私自身無縁だから、その認識に対して何か嫌悪感を感じるということはないが——まあ、端的に返答するなら『死ぬ』って感じかな？

「その美しき生、無駄に縮めることはあるまい。

私の虜となれば、このような秘境から連れ出し、味わったことも無い栄華と快楽を見せてあげよう」

既に、奴にとって私は命を握られている存在らしい。

そうか、了解した。

どうにも相手は大物っぽい、紫に負担かけすぎてちよつと立場がなかったところだ。

私は未だ残る周囲の敵を無視すると、遙か眼上に佇むその吸血鬼に向けて無造作に歩みを進めた。

「それでいい、私の足元に跪きなさい。生き永らえるには、賢い選択——」

「——長生きだけを願うなら、人は獣と変わりなし」

自信満々のドヤ顔相手に、私は知る人ぞ知る名台詞を叩きつける。

「ただ一筋の美しき道、駆け抜けるから人と言う」

静まり返った空間で、私の声だけが朗々と響き渡った。

「二つ無き身を惜しまずに、我が身は進む仁のため。たった三文字の不退転——それが心の花である」

動揺してわずかに目を見開いた敵を睨み据え、私は最後まで言い切った。

……やばい、カッコいい。この台詞考えた人カッコいい。あと、爽快感半端ない。

副次効果でボス戦への覚悟も完了してしまった私は、かつてない戦意を滾らせて跳躍した。

一つ跳びで紅魔館の屋根まで到達する。

「……くっ!? 私に楯突くか、愚か者が！ 支配されるべき家畜の分際で驕っているようだな！」

「その腐った認識、全て貴様に返す！」

何故か先ほどの余裕綽々の態度から変わってちよつと焦りだしてるエセ紳士。何今更ビビってんのこいつ。

まー、ラスボスのレミアアの前哨戦って感じだが、ここは一つこの勘違いバカを成敗して一株上げておきますか。

っていうか、さっきの台詞で紫を含めた周囲からの注目度がめっちゃ上がってるのでそれくらいやって見せないと期待外れと思われるまいそう。

今更だけど、目の前の吸血鬼も決して弱くないよね。性格アレだけど、むしろ強い部類だよな。

でも、もう引つ込みはつかん。

紫、私にやらせてくれ。ここらで、お遊びはいい加減にしろってとこを見せてやりたい。

……って、これヤムチャの死亡フラグやんけ。



我に返った紫は、自分が僅かな間とはいえ彼女の言葉に圧倒されていたことを自覚した。

(あれが、彼女の真価――)

怪異の踊る夜の闇を切り裂き、眼前の悪意に対して一切の妥協もなく己の正当な怒りを突きつける者。

化け物を打ち倒す人間とは、ああいう存在なのだ。

放たれた言葉は、もはや言霊にまで昇華されて周囲の人外達に脅威を与えた。それは紫すら例外ではない。

味方でありながら畏怖せざるを得ない。妖怪として生きる以上避けられないサガだった。

(やはり、私にとって彼女は——いえ、今は戦闘に集中しないと)

そして、人間と吸血鬼が戦闘を開始した瞬間、周囲も思い出したかのように闘争の空気を取り戻した。

先ほどまで戦っていた敵に加えて、地上の人狼達も紫に襲い掛かって来る。

(拙い。まさか、こんな戦いの形になるとは……)

紫はわずかに焦っていた。

それは相対する敵戦力が増したことにではない。そんなものは些細なことだ。

問題は、あの男——紅魔館の『当主』スカーレット伯爵が登場し、よりによって巫女の方を相手取って戦い始めてしまったということ。

当初、伯爵が出てきたら自らが決着をつける予定だった。

あの男は言動の通り、欲深く、傲慢で、驕り高ぶった強者の典型だったが、それに見合うだけの実力を兼ね備えている。

特に状況が悪い。満月の下での吸血鬼の不死性は凄まじいものがある。

先ほどから戦い続けている配下の吸血鬼達を見ても、その厄介さが実感出来た。

腕や足はもちろん、頭を吹き飛ばされても再生してしまう。奴らの生命力は月の光に直結しているかのようだ。

自らの身を省みずに魔力を酷使し続ける魔法使いの猛攻もあり、紫は持久戦を強いられていた。

その間にも眼下では二人の激戦が続いていく。

人狼すら即死させる巫女の拳を受け、その箇所を抉り取られるほどの攻撃に晒されながら、しかし伯爵は余裕の笑みすら浮かべて再生させてしまう。

吸血鬼の腕力を使った大振りな反撃は、恐るべき速さと威力ではあるが、冷静に受け流す巫女にはかすらせる程度。だが、逆に彼女は一撃でも受ければ死ぬのだ。

そして、吸血鬼の力は何も純粋な腕力だけではない。

全身を蝙蝠の群れに変えて翻弄し、四方から囲い込んで少しずつ削り取るように彼女を傷つけていく。

背後へと再び集まり実体化すると、その死角から素早く不意を打つ。背中を浅く切り裂かれ、鮮血が飛び散る。

巫女は怯んだ様子を見せない。

的確に反撃し、相手の顔面を砕き、臓腑を抉り——しかし、全てが徒勞であるかのように元に戻ってしまう。

魔の存在に対して有効な、靈力を纏った打撃が効かない。

満月が、強力な吸血鬼の不死性を更に増幅させていた。あの様子では銀の武器などといった吸血鬼特有の弱点すら効果は見込めない。

可能性があるものといえば、やはり完全な陽の力である日の光。しかし、夜明けはまだ遠い。

あるいは、妖怪の持つ属性や性質を無視出来る反則的な能力。

(境界操作——しかし、あれほど明確に不死の属性が固着した存在相手には干渉も難しい)

だからこそ、本来の戦いの形としては逆の位置に持つて行きたかったのだ。

一対一に集中出来れば、あの化け物が驕る間に一瞬で死滅させられたかもしれないのに。

紫の心にまた、わずかな苛立ちが積み重なる。

——苛立つ？ しかし……何に？

現状打開の為に絶え間なく巡り続けていた紫の思考に一瞬空白が生まれた。

私は何に苛立っていた？ この焦燥はどこから来るものだ？ 懸

念？ 何の？ このまま戦いが進めばどう不都合があるというのだ？

(……彼女が、死んでしまうかもしれない)

そんな考えがよぎり、紫は自分自身を疑った。

(今、何を考えた？ 何を心配した？ 彼女が死ぬと、どうだと——)
紫の自覚のない苦悩。

その間隙を、当然のように敵は見逃さなかった。

飛来する火炎の魔法を察知し、咄嗟に回避する。しかし、僅かな思考の空白は紫の判断力を鈍らせ、かわした先に吸血鬼のサーベルが突き出された。

魔剣と思われる漆黒の刃が紫の胸に深く潜り込む。

そして、その剣先が背中から——出てこない。

刃は肉に食い込むことなく、直前に発生したスキマの中へと消えていた。

そのまま腕も、肩も。

「——随分と、久しく感じるけれど」

スキマが閉じる。

腕を根元から異次元の裂け目に食い千切られた吸血鬼は甲高い悲鳴を上げた。

その傷は再生しない。

「やはり思い悩むということがあるのね、私も」

苦痛に喘ぐ吸血鬼の残った手足を、無造作に開いたスキマが更に飲み込んだ。

「慣れない気分なの。この気持ちを、貴方達で発散させていただきませわ」

頭のついた肉塊となった敵を最後に一際巨大なスキマが飲み込み、完全に消滅したのを確認して、紫は残りの敵勢に意識を切り替えた。残された者達は、得体の知れない恐怖に竦んでいる。あの魔法使いさえ、淀んだ瞳に怯えを映して。

自分は今どんな顔をしているだろう？

きつと笑っている。彼女が好きだと言った、真意を隠す隠者の微笑み。

紫は余分な思考を排除するべく、目の前の戦いに集中した。

集中、しようとして——無意識に、もう一度だけ眼下を一瞥した。

視界には、使い魔である巨大な黒犬の顎に半身を捉えられた巫女の姿があった。



すげー。死亡フラグの力すげー。

今の私は、普通にピンチだった。

並の敵なら百回は死んでる攻撃を加えているのだが、敵は百回とも生き返っている。

吸血鬼の再生力を舐めていた。

一応、切り札というか、より攻撃力の高い技は持っているが『通じない』のではなく『通じても元に戻る』のでは意味がない。

これはいかん、と思いつつも、まさか紫に助けを求めるわけにもいかない。

「さあ、死になさい」

最初の動揺もどこへやら、すっかり余裕を取り戻した……えーと、名前分かん『紳士』でいいや。

とにかく、そいつに徐々に押されつつあった。

吸血鬼が強いのは当たり前なのだ。だから、逆に何か吸血鬼特有の弱点を突かなければ勝機がない。

といつても、弱点突くってどんな具合に？

さつきから霊力込めて人体急所ぶち抜きまくっているが全然効果ないし、十字架もにんにくも持ってない。そもそもそういうオーソドックスな奴は効きそうな雰囲気ではない。

このままではいずれ致命傷を——って、言ってる傍から食らった!?

「ぐ……があっ！」

「はははっ、良い感触だ」

体の一部を使い魔に変えて攻撃するという方法を失念していた。

無数の蝙蝠に変身して変則的に動くのを目で追いつぎた。その隙を突いて、巨大な黒犬に変身した奴の一部が私の肩に喰らい付いたのだ。

肩ってというか、もう右半身丸々飲み込まれてるな。利き手が使えないから振りほどけない。

噛まれたというより、プレス機に押し潰されたかのような重い衝撃が半身を圧迫する。

牙が肉に食い込み、骨が軋む。

痛い。超痛い。でも痛がつてるような猶予はない。

このままでは骨が砕かれ、そのまま体を両断されてしまう。体が軋む音って本当に聞こえるんだね。

「絶望と後悔の下で果てるがいい」

恍惚とした笑みを浮かべながら、敵は私に囁いた。

だが、断る！

致命傷を受けてしまったが、その衝撃と痛みが私に一つの打開策を閃かせていた。

さつきから吸血鬼の弱点を必死で探していたが、なんてことはない。

——在るじゃあないか、吸血鬼に効くとびっきりの攻撃手段が！

呼吸のリズムを変える。

習得したのはごく最近。単純に体を鍛える方法ではないので、随分てこずったがなんとか形に出来た。

独特の呼吸を行うことで、体内にエネルギーの波を作り出し、それを循環させる！

『グギャアアアアアアッ!!』

「な、何……っ!?!」

私の体に食い付いていた使い魔が断末魔を上げて、弾き飛ばされるように離れた。

その口は内側から溶け始めている。

溶ける端から気化して灰となる有様を眺め、敵は動揺していた。

まー、いきなり不死身の肉体を溶かすなんて真似されたらビビるよね。

ワケ分からんって表情。

そりゃそうだ、他の漫画の技なんだから。

今の私の体に流れるエネルギーの波は、太陽の光の波と同じ。
スタンドバトルの方が有名すぎて、少々忘れられがちな感のある能力だが、こいつは元々対吸血鬼用の技なのだ。

というわけで、この土壇場で敵に対する有効な攻撃手段を発見した。

肩からの出血は夥しいが、それを堪えて呼吸を整える。循環する力を拳に宿し、私は一気に反撃に移った。

吸血鬼に有効な攻撃とは？

——『波紋』を練りながら、物理で殴ればいいっ！

「ギツ……イヒイイイイ、イイ、ツ!!?」

スカーレット伯爵は、自分の悲鳴というものを初めて聞いた。

脆弱なはずの人間の放った拳が、頬を重く抉る。

ただそれだけならば、つい先程までと同じように回復する。そのはずだった。

だが、実際に感じたのは傷の治る感覚ではなく、灼熱。

一撃を受けた箇所肉を焼くような熱が宿り、しかもそれは治まることもなくむしろ全身に伝播していく。

「な……っ、なんだこれはあ!?!」

肉体を切り裂かれるのとも骨を砕かれるのとも違う、耐え難い激痛が神経を直撃した。

それはハッキリと生命の危機を感じる痛みだった。

この痛み。この熱。

「た、太陽だとお……っ!?!」

吸血鬼に死を与える光と熱を、彼は思い出していた。

目の前の人間は、太陽の力を拳に乗せて殴っている。

「バカな……バカなあ!!」

スカーレット伯爵は混乱した。

絶対的優位にあつた自分が追い込まれている事実と、それを為すがただの人間である真実と、唐突に眼前に突き付けられた『自らの死』という現実——全てを信じる事が出来なかった。

彼の積み上げた長年の歴史とその栄華が、それらを拒絶した。

自らが暴君であるという自負があつた。

奪う側の存在なのだ。逆では決してない。そういう『運命』だ。そう信じていた。

しかし、傲慢のツケは今まさに現実となつて清算されようとしていた。

目にも止まらぬ神速の拳撃が、みぞおちに叩き込まれる。

スカーレット伯爵の体は木の葉のように容易く吹き飛んだ。

足場になっていた屋根から弾き出され、宙に放り出される。

地面に叩きつけられる前の浮遊感を感じている余裕はなかった。

下腹から潜り込んだあの熱と痛みが体内を蹂躪していた。

溶解し、気化し、煙を上げて灰となり始める自らの体を見て、スカー

レット伯爵は再び悲鳴を上げた。

地面に叩きつけられる。

背骨が折れたが、そんなものは重要ではなかった。

彼の不死身の体は、か弱い人間の女が放つたたった二発の鉄拳によつて死滅しようとしていた。

「はっ、はっ、はあ……ああああ!!」

もはや呼吸すらままならない。肺が焼けて朽ちていく感覚を感じる。

自らの権威の象徴である紅魔館を見上げれば、死に行く彼にとどめを刺すべく、博麗の巫女が屋根から跳躍する瞬間だった。

拳を握り、一直線に落下してくる。

その姿に死の影を捉え、スカーレットは心の底から恐怖した。

恥も外聞もなかった。自らの品格を打ち捨て、彼はただ生き残る為にあらゆる手段を模索し、手でまさぐった。

そして、普段は単なる装飾品として腰の後ろにぶら下げていた物を引き抜いた。

美しい装飾と刻印が施されたりボルバー式の45口径拳銃——人間が使う玩具だと笑っていたそれを、必死の思いで標的に向ける。

引き金を引き、銃火と共に弾丸が発射された。

銃弾が当たれば、人間であるなら必ず死ぬ。

響き渡る銃声と重い反動に手応えを感じ、彼は思わず安堵の笑みを浮かべた。

そして、次の瞬間視界に映る光景に笑みは消えた。

額を狙った銃撃。その額の前で、巫女は握っていなかったはずの左手で拳を作り、掲げていた。

ゆっくりと、握り込まれていた左手が解かれていく。

その手のひらから、本来彼女の頭部を貫くはずだった弾頭が力を失って虚しく落ちていった。

「あ——」

スカーレット伯爵は今際の際に何かを言いかけ、しかし結局何一つ口にするには許されず、落下の速度を乗せた渾身の一撃が彼の心臓を貫いた。



……こう見えて、結構疲れまんねん。

なんか懐かしい台詞が出た。

しかし、実際のところ私は全身を、唐突な疲労感というか脱力感に襲われていた。

原因は言うまでもないか。噛み付かれた右半身に全身全霊の力を込めて、あげく落下分の運動エネルギーまで乗せた拳を打ち込んだせいだ。

出血とかやばい。腕は上がらないし、骨もたぶんヒビか、砕けてる箇所もあるんじゃないかな？

波紋の呼吸をкаろうじて続けているので、なんとか自己治癒力を高めてダメージを抑えているが、元々そこまで回復に使える能力じゃないんだよね。

精神的な面でも、集中力を極限まで使ったからもう限界。

っていうかアレだね。私、とうとう銃弾を素手で掴んじゃったね。銃弾って音速とか出てなかったっけ？　今の私、天狗捕まえられるんじゃない？

これは新たな覚醒に自信を持てばいいのか、ドン引きすればいいのか。ぶっちゃけ自分でもワケ分からん。逆に混乱するわ。

痛いし、だるい。とにかく、今の私を感じているのはそれだけだった。

満身創痍という奴だが、現状を一段落させることは出来たので多少は力を抜いてもかまわんでしょ。

例の紳士は、私の目の前でくたばりかけていた。

「カ……ッ！……カハッ……ヒッ……」

ありつたけの波紋を流し込んで、心臓を破壊した。

これで生きてたら、もうこいつは吸血鬼じゃなくて究極生物って呼んでやるつもりだったが、なんとか効いたようだ。

大穴の開いた胸を中心に全身が溶け始め、煙を上げて灰になっていく。

それでも再生力があるせいですぐに滅びないのか、のた打ち回って口をパクパクさせている。

うーん、こういう苦しんでる姿を見て悦に浸る趣味なんてないんだけどね。

でも、残りの波紋を搾り出してとどめを刺してやる余裕もない。

途切れ途切れの呼吸を整えながら、私はただ佇むしかなかった。

朦朧とし始めた意識の中で、思い出したように周囲の様子を伺う。

紫の方は……こちらでも決着がついたらしい。

あの激しい空中戦は終わり、夜空は静寂を取り戻していた。

地上に降りた紫が、私の視線に気付き、優しく微笑みながらこちらに歩み寄ってくる。スマイル素敵、癒されます。

あれだけいた敵はいつの間にか消えていた。地面に転がるのは動かぬ死体ばかり。

まさか、紫がやったん？　やっぱり大妖怪マジパネエ。

肝心のパチユリーは……よかった、生きてる。地面に蹲ってゲホゲホ言ってるけど、とりあえず生きてるよ。

あー……あと、他に気にすることは、なんだろう？ レミリアか。フランはどうだ？ この時代だとまだ地下かな？

……っていうか、何なんだろうね。

あんだだけ紅魔館の見知らぬ住人ぶつ殺しておいて、事前に知ってたキャラだけ生かすようにするって私は何様なんだよ。

偽善どころの話じゃないよ。都合のいい思い入れを優先しただけじゃないの？

くそっ、なんか普段考えないことがどんどん浮かんでくる……。

傷のせいかな？ 脳に回る血が少ないから血圧下がってネガティブになってるのかな？

頭の中がぼんやりして、思考に歯止めが利かない。っていうか何処に向かっているんだ私の思考は。

——ふと、視線を戻せば吸血鬼は完全に灰になっていた。

だからなんだ。何も感じない。

これがレミリアだったらどうする？ また違う感想が浮かぶんだろ。同じ初対面の吸血鬼なのに。

ホント、何様だよ……もう死ねよ、私。

「■■■■」

博麗の巫女となって以来、もう呼ぶ者も少ない私の名前が呼ばれた。

焦点定まらなくなり始めた視線を向ければ、いつの間にか傍らに紫が寄り添っている。

「ゆかり……」

「もう、休みなさい」

たぶん、傷に障るからそう言ってくれているのだろう。

だが、私はその言葉を都合のいいように受け取ることにした。

今はもう、何も考えたくない。

寝ます。寝て起きれば、たぶん回復してます。いろいろと。

タガが外れるように、上から順番に体が支えを失い、最後に両足に

込めていた力が抜けていく。

体が崩れ落ちると共に、意識がかすれて消えていくのを妙にはつきりと感じながら、私は朦朧とする五感でこちらに駆け込んできた小さな人影を捉えた。

レミリアだった。

吸血鬼の成れの果てである灰を手に取り、何か叫んでいる。

よく聞こえない。駄目だ。もう気絶し――。

……えっ、お父様ってどゆこと？



崩れ落ちる巫女の体を、紫は咄嗟に受け止めていた。

傷つき、血塗れの体が触れ合って服を汚す。

大陸の支配者である吸血鬼を素手で消滅させた恐るべき人間は、何の抵抗もなく大妖怪の腕に収まった。

――この妖怪の天敵を、殺すなら今のうちだ。

脳裏に浮かんだ考えを自覚し、紫は思わず吹き出しそうになった。

何を今更。倒れ込む彼女を抱き止めた時は、そんなこと思いつきもしなかつたくせに。

「もう少し、軽くて華奢な方が好みね」

気絶した巫女に、聞こえない軽口を叩く。

倒れる寸前の彼女を見ていたから知っている。意外と儂い女性だったのだと。

傷のせいなのかは分からないが、ボロボロの姿で振り返った彼女の眼はどこか自分に縋り付くような弱さがあった。

錯覚かもしれない。

でも今は、そう感じたからこそ素直に手を差し伸べることが出来た。

腕の中で、まだ心臓が動いていることを確認すると、気付かぬ内に安堵して、紫は改めて周囲の状況を確認した。

侵略者との決戦は、無事幻想郷の勝利で終わった。

戦闘の規模は拡大せず、今夜の戦いの詳細は大々的に知られることもない。完璧とも言える勝利条件を満たしていた。

敷地内に転がるのは死体ばかり。

他に、本来の体積の半分以下にまで『削り取られた』吸血鬼達が転がっているが、いずれも行動不能か虫の息だ。

夜明けを待てばそれらも消滅するが、紫は念を押しして、彼らの心臓付近にスキマを発生させ、そこから白木の杭を無造作に打ち込んだ。

断末魔の声すら上げられず、全ての吸血鬼が灰となって消滅した。わずかに残っていた人狼などは、姿を眩ましている。

当主が死んだことで、この館から逃げ出したのか。

追って殺すまでもない。野に還り、獣として生きて行くのなら、この幻想郷は歓迎しよう。

彼らが幻想郷を受け入れるのなら、幻想郷もまた彼らを受け入れる。例え、元侵略者であっても。

それはそれは優しくも残酷な場所なのだ。

「後は……」

唯一生存した魔法使いを一瞥する。

戦いが終了して精根尽き果てたのか、地面に蹲り、喘ぐように荒い呼吸を繰り返していた。

紫は弱りきったその姿に手を掲げ、しかしすぐに思い直して降ろした。

殺さないでおこう。

あの少女が囚われの身であったことは間違いない。戦う意志や意義がもはや存在しない以上、目の敵にする必要もないだろう。

何よりも、この紅魔館の住人が幾らか生き残ってくれていた方が、今後が楽になる。

紫は勝利者であり、戦後のことを憂う責任も持たねばならなかった。事後処理が必要なのだ。

なんとも世知辛い話だため息を吐きながらも、まずは負傷した巫女を連れ立って紫は今宵の戦場を去ることにした。

「お父様っ!?!」

不意に、幼い少女の声が響いた。

館から飛び出してきた、新たな吸血鬼の気配を感じ取って、紫は咄嗟に身構えた。

まだ生き残りがいたか。しかも、それは血縁らしい。

紫は、スカーレット伯爵に二人の娘が居たことを思い出した。

少々面倒なことになった、と。警戒しながら当主の遺灰に駆け寄る幼い吸血鬼を見下ろす。

一見して、伯爵の血を引くだけのことはある強力な吸血鬼だと分かったが、敵意はないようだった。

だが、父親が滅ぼされたのだから仇討ちに考えが至るのは、まず自然な流れのはずだ。

「……どうして」

吸血鬼の少女は、かつて父であった灰を両手で掬い上げ、その指の間から零れる虚しい感覚に呆然と呟いた。

その姿に、紫は違和感を感じる。

声にまるで悲しみの色を感じない。

信じられない、といった呟きは『誰が父を殺したのか?』ではなく、もっと純粹な『どうして死んでいるのか?』といった根本的な疑問を孕んでいるように聞こえた。

紫はその娘を注意深く観察した。

そして、すぐに納得した。

娘の細い首に、装飾品を模して嵌められた首輪——それで全てを察することが出来た。

肉親を失ったにしても、あまりに足りない支配者の娘としての覇気。虐げられた者が纏う、特有の諦念。

つまり、紅魔館の当主とは噂どおりの暴君であったという話だ。

それこそ、自らの身内に対してさえ。

「……どうして、今更」

——殺されているの？

物言わぬ灰に対する呟きは、勝手に死んだことを弱弱しくも責めてすらいるようだった。

この娘は敵ではない。
既に心が折れている。

紫は、目の前の小さな存在から完全に興味を失っていた。
傷ついた巫女の体を両手で優しく抱き上げ、治療出来る場所へ運ぶ
為にスキマを開く。

「——ああ、そうですわ」

立ち去る前に、ふと思い出したかのように振り返った。

「死んだ当主の代わりを立てておいて下さいな。」

どれほど住人が残っているかは知りませんが、相続は貴女でも、も
う一人でも、どちらでもご自由に」

聞こえているのかも分からない吸血鬼の少女に向けて、淡々と要求
だけを告げた。

反応を期待せず、再び背を向ける。

「後日、今後の事についてのお話の為、伺いに参りますわ」

それだけ言い捨てると、紫はスキマの中へ消えて行った。

彼女の頭の中には今後の懸念事項のみが浮かび、その解決方法を思
案し、整理させていく。

やるべきことは山積みだ。

しかし、まずは巫女を治療するところから始めよう。彼女が目覚
ました時、枕元で献身的に看護する姿を見せたら、さてどんな反
応をするだろうか？

今夜はなかなか働いた。いろいろ頭を悩ませて、少々気疲れもし
た。

だから今は、こんな風にちよつとくらい思考を遊ばせても構わない
だろう。

悪戯つぽく微笑みながら、紫は紅魔館を立ち去った。

——滅んだ者と残された者。彼らと彼女らの因縁や禍根。そして
未来。

戦いの跡に置き去りにされたものは多く、しかし今の紫にとってそ
れらは思考を割くほど重要なことではなかった。

其の四「不夜城」

「弾幕とは、幻想郷特有のものであると私は考えているわ」

パチュリーという言葉に、魔理沙は首を傾げた。

「弾幕って外の世界には無いのか？」

「存在しないわね。」

考えてもみなさい。あれほどの物量の魔力弾を形成し、それらの動きを精密に統制して束ねることが個人の力量や容量で可能かどうか？

「でも、私は普通に出来てるぜ」

「未熟だけどね」

「余計なお世話だぜ」

拗ねたように口を尖らせながら、そのまま魔理沙は手元に置かれた紅茶を飲み干した。

上質なハーブの香りと味が頭の回転を早めてくれる。

気分を切り替え、魔理沙は再びペンを取った。

「よし、続けてくれ」

「熱心な生徒を持って幸せだわ」

皮肉半分に告げて、パチュリーは魔理沙の傍らに佇む咲夜へ目配せした。彼女が集中しているうちに、事を済ませろというのだ。

心得たとばかりに、咲夜は包帯を巻く作業を静かに再開した。

「続けましょう。」

魔法を行使する為の魔力にせよ、東洋の術に用いられる靈力にせよ、個人の保有量には限界があるわ。

個人差はあっても、これは弾幕という物量を生み出すにはあまりに足りない。では、何故弾幕という現象を発現させることが出来るのか？

「ふーむ……内的要素（オド）以外に外的要素（マナ）を使ってるからか？」

「あらあら、基礎的な知識はしっかり抑えているようね。大変結構」

「……出会ってからそうだけど、お前ずっと上から目線だな」

「その通りよ。魔法使いとしても、実年齢の上でもね。私はもう人間じゃない、『魔法使い』という名前の妖怪なのよ」

「じゃあ、私は何なんだよ?」

「普通（ニンゲン）の魔法使いでしょ」

むう、と魔理沙は再び口を尖らせる。

これほど歳相応の少女とは思わなかった。仮にも魔法使いという人の道を外れた存在に手を掛けながら、この人間らしい素直さ、少女らしい純粹さは珍しくもある。

パチュリーは悟られぬよう、小さく苦笑した。

「とりあえず、アナタの考えは核心を突いているわ。」

外の世界の常識から否定された非常識。つまり『幻想』を結界によって隔離し、残存させた場所がこの幻想郷よ。

言い換えれば『温室』なのよ。花の咲かない環境から守られた場所なの。だから、冬には咲かない花も咲き続ける。

『人間は空を飛べない』というのが外の世界の常識だけれど、その常識に否定された非常識がこの世界に流れ込んだ結果、私達は空を飛べるようになった。

弾幕とは、それらの要素が噛み合わさって可能になるこの世界特有の現象なのよ」

「回りくどい説明が過ぎるぜ。」

つまり、外の世界で否定された『何か』が幻想郷には豊富に残っているから、個人の力量以上の大規模な魔法や術を弾幕として使えるってことだろ?」

「……大変よく出来ました。」

ごめんなさい。本ばかり読んで誰かに物を教えることなんてなかったから、つい余分になってしまったわ」

「ああ、ノリノリで語ってたぜ」

「パチュリー様は普段から図書館に籠もりきりで、あまり人と話したこともないのよ。だから、はしゃいでしまっているの」

「咲夜、余計なこと言わない。治療は終わったの?」

「はい。完了致しました」

治療用の薬や包帯などの片づけまで、すっかり終えて傍らに静かに佇むメイドを魔理沙は居心地悪そうに見上げた。

施された治療の跡がどうにもむず痒い。

もちろん、それらは完璧な仕上がりがりだったが、精神的に受け入れづらかった。

「……なあ、なんで侵入者に対してこんなに親切なんだ？」

怪我の治療して、魔法や弾幕の技術を教えて、おまけにお茶とお菓子まで出すなんてどうかしてるぜ」

「敗者に拒否権は無いわ」

「だからっ、勝負に負けた私に親切にする理由なんてないだろうって話！」

魔理沙は堪えきれずに食って掛かった。

あれだけ大見得切っておきながら、パチユリーに弾幕ごっこで敗北し、続く咲夜にまで完膚なきまでに負かされたのだ。

不法侵入者にふさわしい処罰があるものと覚悟していただけに、現在の待遇は拍子抜けすると同時にどうにも納得のいかないモヤモヤした気分を残していた。

「霧雨魔理沙」

「魔理沙でいいぜ」

「では、魔理沙」

咲夜が空のティーカップにポットを近づける。

「おかわりはいかが？」

「……いただくぜ」

魔理沙は観念するように頭を垂れた。

そんな少女の百面相を眺める魔法使いとメイドの顔は、愉快そのものといった具合に微笑んでいる。

もちろん、それを相手に見破られるほど迂闊でもなかった。

「では、講義の締めよ。」

魔法という点に絞る限り、弾幕をより高度に操るには、自分自身ではなく周囲に意識を向けなさい。マナを効率的に運用し、行使する魔法に付加するの。

アナタは人間なのだから、妖怪のように生来の能力や性質による、特殊かつ膨大な弾幕を生み出す力技は出来ない。咲夜のような異能者でもないしね。

だけど、何も不利なことはないわ。このスペルカード・ルールにおける強さとは、幻想郷という世界に漂う様々な要素をいかに上手く運用するかにかかっているのだから」

「そうすれば、お前やそのメイドにも勝てるんだな？」

「それはアナタ次第よ」

答えを自分自身に委ねるパチュリーの瞳をじつと覗き込み、やがて自分なりの納得を得たのか、魔理沙は手帳にメモを書き込む作業へ没頭した。

「なんだかんだ言って、熱心に話を聞いたわね」

パチュリーの独り言を目ざとく聞き取った魔理沙が顔を上げる。

「結果を掴む為に必要なことだからな。楽しんで勝つには、コツを掴むことが一番だぜ」

「あ、そう」

「悪ぶった笑顔が全然さまになっていない。

パチュリーは魔理沙の言葉を、そのまま素直に受け止めるつもりはなかった。

努力を否定するような言動だったが、それがこの霧雨魔理沙という少女に最も当てはまっているというところを見抜いていたのだ。

パチュリー自身の七曜の魔法を織り交ぜた多属性の弾幕。

咲夜の時間停止という特殊能力を組み込んだ機械的にして変則的な弾幕。

弾幕とは、そのひととなりを表すものなのだろう。

そして、魔理沙の弾幕は愚直なまでの一直線だった。

敗北したとはいえ、未熟な魔法使いが本家の魔法使い相手に善戦し、傷と疲労が癒えぬまま戦闘者としても有能な咲夜と戦い抜いた。

付け焼刃の魔法と並の人間の精神力などで出来る芸当ではない。

確かに知識も経験も不足している。

しかし、それが魔理沙の置かれていた環境での限界だったのだ。

パチュリーは豊富な魔道書に囲まれた、自らの根城である地下図書館を見回し、これらが全て自分の努力で得たものではなく結果的に与えられたものなのだということを改めて理解した。

単なる道具屋の娘でしかなかった普通の人間が、苦心の末に手に入れた魔道書というにはあまりにお粗末な本の内容を、理解し、反復し、身に刻み込んで昇華する。

その果てに得たものが、霧雨魔理沙の魔法なのだ。

故に、彼女の魔法はあそこまで未熟で、愚直で、それでもなお相手に届いた。

「ただ一筋の美しき道、駆け抜けるから人と言う……か」

魔理沙は不思議そうな顔で、遠い目をしたパチュリーを見上げた。

「なんだそりや、何かの本の一節か？」

「いえ、これは私達の生き方を変えた人間の言葉よ」

魔理沙を一瞥し、そこに別の人間の面影を重ね見て、懐かしむように笑う。

「……アナタを推した先代巫女の見解は、正しかったようね」



圧倒的魔力に物を言わせた膨大な弾幕が夜空を埋め尽くす。

しかし、その赤い光の奔流の中を紅白の巫女はすり抜けるように飛んでいた。

「クソツ、空気かコイツは……っ!？」

夜の貴族にあるまじき悪態がレミリアの口から突いて出る。無理もないことだった。

霊夢の動きは弾幕だけではない、空気の流れや魔力の流れ、周囲のあらゆる要素を読み取っているかのように無駄が無い。

荒れ狂う弾幕という名の濁流の中へ、あえて身を預けるようにして流されていく。

全ての弾は、彼女の傍を掠めるばかりで一度も直撃しない。宙を舞う木の葉を捉えることが出来ないように。

カードに定められた弾幕を撃ち尽くし、無傷の霊夢を残したままレミリアの攻撃は終了した。

「スペルカード・ブレイク、ね」

淡々と告げる霊夢に対して、レミリアは呻くことしか出来ない。

何一つ言い訳のしようもなく、彼女は人間に圧倒されていた。

——こんなルールの上でなければ。

——吸血鬼の能力を使って襲い掛かれれば。

そんな仮定を考えている時点で負けているのだと、自分自身を罵倒しながらレミリアはただ霊夢を睨みつけることしか出来ない。

所持するスペルカードは、まだ奥の手が残っている。

しかし、目の前の人間を倒せるというビジョンをどうしても思い浮かべることが出来なかった。

「……強い」

そう呟き、認めるといふ行為は、強者としての自負を持つレミリアにとって酷く苦痛を伴うことであるはずだった。

霊夢はそんなレミリアの様子を眺め、やがて小さなため息と共に応える。

「あんたが弱いのだよ」

嘲ることもなく、ただ淡々と。

それ故に、レミリアの自尊心を抉り取る言葉だった。

「何だと……っ」

「あんた、わたしに勝てると思ってないでしょう」

霊夢の指摘に、レミリアは湧き上がる怒りも忘れて目を見開いた。

「そもそも最初の言動からおかしかったわ。『人間は素晴らしい？ その人間を食料にする吸血鬼が何言ってるの』」

「……私は、父を倒した人間に敬意を払っているだけだ」

「つまり、父親が勝てなかった人間に自分が勝てるはずがないって考えてるわけでしょう？」

それのどこが悪い、と聞き返そうとして、レミリアは無意識に口を噤んでいた。

——悪いのだ。

「あんたは吸血鬼でありながら、人間であるあたしに敵わないと無意識に思ってる」

悪いに決まっている。

「あんた、全然血の匂いがしないわ。最後に血を吸ったのいつよ？もう人間の血を吸えなくなってるんじゃないの？」

この異変を起こせるほど強大な妖怪のくせに、そういった妖怪特有の傲慢さや覇気を感じない。あんたは、『なんとなく』怖くない」

人間に敵わないと諦めた妖怪なんて何処にいる。

そんなものは妖怪とは呼ばない。

別の何かだ。

「妖怪っていうのはね、人間を襲うものなのよ。襲われれば、食われる。そういう恐ろしい存在なの」

霊夢の言葉は、同じ人間が口するものとは思えない暴論だった。

「人間なんて、妖怪から見ればちっぽけなもんでしょ？」

「お前は……自分が何を言っているのか、分かっているのか？」

「間違ったことは言っていないわ。間違ってるのはあんたの考え方よ」

レミリアは目の前の人間に恐怖を覚えた。

それは、自分の父が人間に——当時の博麗の巫女に——滅ぼされた瞬間に抱いたものとは、また別の恐怖だった。

「少なくとも人間は妖怪が恐ろしいものだ、決して敵わないものだと信じている。」

なのに、あんたは自分自身を信じていない。そういう自尊心やうぬぼれのない妖怪が、人間に恐怖を与える存在としての力を十分に振るえるわけがないでしょう？」

奇妙なことに、この妖怪退治を生業とした巫女は妖怪にその力の在り方を説いているのだった。

妖怪は人間が恐怖するに足る存在でなければならぬ。

何故なら、そう考えた人間の幻想によって構成された存在だからだ。

自らが恐怖されるに足らない存在だと考えた妖怪は、ただ弱っていきしかない。

「……だが、私の父は、その傲慢さ故に滅ぼされた」

レミリアは霊夢の言葉を理解しながらも、記憶に刻まれた鮮烈な光景を思い出して、頷くことが出来ずにいた。

絶対に歯向かうことなど出来ないと思っていた、強大な存在であった父の姿を思い出す。

あらゆる暴虐を働き、他者から奪い、殺し、黜った。その対象は自分とその妹にさえ及んだ。

逆らうことなど出来なかった。

力の差もあったが、親であるという絶対的な関係がレミリアから反逆の意思を奪っていた。

「確かに、父は強かった。恐ろしかった。強者としての栄華を極め……その果てに、お前の母に完膚なきまでに滅ぼされたんだ！」

いずれ父をこの手で殺す——そんな言葉は虚勢以外の何ものでもなかった。

例え今でも、そう思える。

『いずれ』『いつか』『きつと』 それらの日が来ることはないだろうと、他でもないレミリアが心の奥底で認めてしまっていた。

そしてある日、唐突に父は死んだ。

目の前の光景が信じられなかった。

弱者を踏み潰し、這い蹲る姿を見て愉快そうに笑っていた父が、逆に地に這い蹲り無様にのた打ち回る姿だった。

駆け寄り、成れの果てである灰を掴み上げて、その虚しいまでの軽さに愕然とした。

「人間が、妖怪に敵わないだど？」

レミリアは、その目に焼き付けられたのだ。

絶対者であった父を地に這い蹲らせ、苦しみ悶えて滅び行く様をただ静かに見据える人間の姿を。

「だったら、お前達は一体何だ？」

驕り高ぶった恐るべき吸血鬼の哄笑を、血塗れになりながらも貫き通した拳によって、断末魔の悲鳴へと変えてみせた人間の可能性を。

「お前達のような存在がいる限り……自分が強いなどと、どの面下げ

「と言えるものかア!？」

レミリアは知らず、涙を流していた。

あの日以来、心の底に溜め込んでいた激情が溢れ出しそうだった。それは自らを滅ぼされる側の存在なのだと言わしめてしまった妖怪としての悔しさなのか、虚しさなのか。

彼女自身にも分からなかった。

魂の慟哭を聞き届けた霊夢は、しかし普段通りの平坦な表情のまま告げる。

「甘ったれたこと言ってるんじゃないわよ」

霊夢の叱責するような視線を受け、レミリアは呆然と顔を上げた。

「人間は不死身にはなれないし、体を蝙蝠や犬の使い魔に変えることも出来ない。夜の闇は味方なんかじゃない。病や寿命さえ牙を剥く」
いつの間にか霊夢はレミリアの眼前にまで来ていた。

思わず後退りしそうになる胸倉を掴まれ、引き寄せられる。

「それで、あんたは今言った内の幾つ当て嵌まる？」

ねえ、甘ったれないでよ吸血鬼。そんな弱音聞いたら、か弱い人間様が憤死しちゃうわ。あんたがこれまで糧にした人間に言ってみなさいよ」

「……どうすれば、いいっていうの？」

弱弱しく尋ねるレミリアに、霊夢は決まっているとばかりに笑ってみせた。

「笑えばいい。高みから見下ろして、その与えられた力を振りかざして、傲慢に笑い続けなさい。灰になるその瞬間まで」

襲い来るあらゆる理不尽に対して、生き抜く決意を刻み込んだ人間の凄惨な笑みだった。

叱咤されているのか、激励されているのか、それとも最後の笑顔は改めて敵わない相手なのだとどめを刺されているのか。

レミリアは、もう何がなんだか分からない気分だったが、ただ一つ心に決めたことがあった。

いや、最初から決まっていたのだ。

その為に、あの八雲紫との裏取引に応じ、異変を起こした。

自分自身が望んで、今この場で博麗の巫女と対峙している。

「さあ、続きを始めましょう」

霊夢が先んじて、それを促した。

まだスペルカードは残っている。

この異変はまだ終わらず、元凶である妖怪も退治されていないのだ。

「レミリア・スカーレット、あんたを退治してやるわ」

「……本当に、博麗の巫女というのは、ぶれないのか最初からズレているのか分からないわね」

「あんたが前提からして間違っていたから修正してやっただけよ。

好き好んで悪さをしたのなら、好き好んで退治されなさいな。めでたしめでたし、それで終わりよ妖怪」

「詰まるところ、さっきの言葉は情けない私へのお節介というわけか？」

「その通りよ。人間に励まされるなんて、前代未聞に情けない奴よね」
霊夢の挑発に対して、レミリアは笑った。

最初に対面した時のように、ゲラゲラと、甲高く下品に驕り高ぶった笑い方をしてみせた。

「どうだろう？ 少し虚勢も混じったが、様になっているだろうか。

もう随分久しく……いや、きつとあの父の下で抑圧されていた頃からずっと出来なかった笑い方だ。

空元気も元気という言葉もあるが、なるほど。存外気分は——。

「……悪くない」

牙を剥き、レミリアは吸血鬼らしく愉悦に歪んだ笑みを浮かべていた。

闘争の空気が戻ってくる。

紅い月が身体に力を満たしていくのを感じる。

夜の闇が禍々しい雰囲気を纏い、怪異の中心に相応しい空間をそこに構築していた。

「こんなにも紅いから」

レミリアのラストスペルが切られる。

「本気で殺すわよ」

二人の緊張が高まり、この異変における最後の弾幕ごっこが開始されようとしていた。

◇

うー、レミリアレミリア。

今、紅魔館を求めて全力疾走している私は、博麗神社に以前勤めていたごく一般的な先代巫女。

強いて違うところをあげるとすれば、昔レミリアの父親を心臓ぶち抜いて目の前で灰にしたってことかナー。

名前は特になし。

そんなわけで、異変解決に向かった娘がとぼつちりで報復される前に土下座でも何でもしようとして、紅魔館へやってきたのだ。

ふと見ると門前に美しい門番が佇んでいた。

ウホッ！ いい紅美鈴……。

「あ、貴女は……！」

「久しぶりだな、美鈴」

「……名前を、覚えててくれたんですね」

えっ……そりやまあ、東方では知名度高いから忘れるわけじゃないですし。

何故か美鈴は私の言葉に驚き、そして少し嬉しそうに微笑んだ。頬もちよつと赤い。やだ、可愛いんですけど。

……いや、ちよつと待て。

おかしい。なんだ、このむず痒い空間は？

レミリアとの確執を思い出した私は、正直思考がぶつ壊れるほど焦って診療所を飛び出したのだが、久しぶりに対峙した美鈴のこの対応は全くの予想外だった。

具体的に言っていると、もっと険悪な対面になると予想していた。

当時、事情があつたとはいえ紅魔館の当主を滅ぼした私が、この場所ですぐ歓迎される存在なはずがない。

おまけにあの後、紅魔館はしばらくの間、おおやけにならないようにと紫自身の手で結界に封じられ、今日に至るまでここへ来ることも出来なかったのだ。

数日間眠り続けてたら、目を覚ました時には当人同士で話し合いとかもう全部終わってたからね。

私は事の顛末を紫から話で聞いたただけで、それから今まで紅魔館のメンバーとは顔も合わせていない。

「すまないが、通してもらえるか？」

とりあえず、門前払いされるほど嫌われていないのはありがたい。

私は端的に要求を切り出した。

「……博麗の巫女は、もう引退したと聞きましたけど」

「異変に関わることはない」

「それでは？」

「様子を見るだけだ。あとは、状況で決める」

なんだか曖昧な説明しか出来ないが、実際に紅魔館がどんな状況なのか分からないうちは私も判断のしようがなかった。

過去の確執抜きにして、レミリアと霊夢が異変解決の為に弾幕ごっこをしているだけなら、本当に様子見だけで終わらせるつもりだ。

父親のことに関しては、異変が解決してから、後日改めてここへ伺いに来ればいい。

ただ、私のことで霊夢達が揉めてしまうようなら、その場に出て行って土下座なりケジメ取るなりやらせてもらわなくっちゃいけないのだ。

親の因果の報いを子に受けさせるなんて、あっちゃいけないことだからね。

美鈴はしばらくの間、黙って考えに耽っていた。

やがて、決断したかのように私を真っ直ぐに見据えた。

「……申し訳ありませんが、お通しすることは出来ません」

うつ……やはり、というか当然とも言える判断だった。

さて、どうしたものか？

「私は門番です。ここを通りたければ、私を倒して行って下さい」

思案し始めた私に、美鈴はそんな意外なことを言ってきた。つまり、通ってたかったら実力で通れってこと？

それは、マズイ。

昔とは状況が違う。今回はスペルカード・ルールを基盤とした異変なのだ。実力といっても、拳で押し通るわけにはいかない。

それに、なんてったって……。

「すまない。私は、弾幕を使うことは出来ない」

私は美鈴に告白した。

ごめん、何を隠そう私ってば弾幕を出せないんです。あと、何故か空も飛ばません。

新しいルールの上で、私が御役御免となった理由はまさにこの通り、実にシンプルなものだったのだ。

いや、本当に心苦しいのだが……あつ、美鈴がなんか苦々しげな表情で俯いてる。

ひよつとして、失望されちゃったかな？

アワワ、違うんじゃないよー！

ちよつと待って、確かに弾幕は無理だけど飛び道具がないってわけじゃないから！

弾幕みたいに、力を大量に分散させて放つことが出来ないってだけ。ちゃんと手からなんか光る奴とか出せるから。ただ分散出来ない分、威力が半端じゃないから弾幕に使えないの！

あとね、空飛ばないって言うけど、代わりに水の上走ったり、空中蹴って方向変えたり加速したり、代用する方法はちゃんとあるんだからね!?

内心焦って言い訳しまくる私を尻目に、美鈴は気持ちを切り替えるように一呼吸して、改めて顔を上げた。

「いえ、弾幕は必要ありません。どうか、その拳で押し通って下さい」
そう告げると、美鈴は静かに構えを取った。

弾幕ではない。拳法の構えだ。

美鈴の纏う空気は、臨戦態勢に入ったそれだった。
彼女は本気なのだ。

「……それでいいのか？」

「ルール違反であることは理解しています。処罰があるのなら、後で受けます」

真剣な表情から本気を感じ取り、私は思わず黙り込んだ。

うーむ、何故美鈴がそこまでやる気なのか私には分からない。

別に門前払いしてくれてもいいのだ。今のルールに適應出来ない私が悪いのだから。

「ですから、どうか……今の私と一戦して下さい」

しかし、理由は分からずとも、美鈴が私と戦いたがっていることは良く分かった。

「時間を掛けるつもりはない」

「はい……」

実のところ、私も美鈴とは一度組み手をしてみたいと、初めて会った時から思っていた。

だから、この状況は望むところだったりする。

ただ悠長に楽しんでいる時間がないのが現状だ。門の先で何が起こっているのか分からない。

よって、私は美鈴の気持ちを汲むことも含めて、全力で行くことにした。

「一撃だ」

構えと共に、ハッキリと断言する。

……断言するほど自信家じゃないんだけど、つい気が昂ぶって本当に一撃で倒した人の名台詞が出てしまった。

これで戦いが長引いたら超力ツコ悪い。

初撃を外したり、いなされたり、逆に先制取られたりしたら、もうホント目が当てられないんじゃないかな。

なんだか自分で自分を追い込んでしまったような気がする。こ、こうなったらやるしかねえ。

ま、一言で言う……『本気にさせたな』

主に自分自身のせいだ。

美鈴と私。既に互いの間合いに入った状態で、構えを取ったまま拮

抗した。

先に手を出したら負ける、って緊迫感だが、事前に言ってしまった以上私から仕掛けるしかない。

ここは、もうシンプルに行こう。小細工抜きだ。

右ストレートでぶっ飛ばす。まっすぐ行ってぶっ飛ばす。

右ストレートでぶっ飛ばす。まっすぐ行って――。

ぶっ飛ばした。

「がはあっ!?!」

最短距離を最速で踏み抜いて、最大の力で拳を打ち込んだ。

ドガンツという人体が出せるはずの無い物凄い音が響き渡る。

下腹に直撃を受けた美鈴が、空気と胃液を吐き出して後ろに吹き飛んだ。

美鈴は私が攻撃に移る瞬間まで、わずかな間も気を抜かなかったが、それでも私の一撃は相手に反応する猶予を与えなかった。

まあ、そういう攻撃だしね。

単純な肉体鍛錬以外で、一番最初に始めた修行である一万回の正拳突き。それを飽きもせず今日まで続けた成果が、これである。

私の、全力の一撃だ。

「う……げえ……っ」

踏ん張りながらも大きく後退する形となった美鈴は、そのまま腹を押さえて震えながら蹲ってしまった。

私は彼女の身を案じることをしなかった。

むしろ逆だ。

驚きで、それどころではなかったのだ。

美鈴ってば……耐えちゃったよ。

本当に正真正銘、全力で打ち込んだ一撃だったんだけど。

もちろん、妖怪にダメージを与える霊力を込めた拳ではないし、持てる奥義を尽くした一撃ってわけでもない。

しかし、全力で踏み込んで、全力で打ち込んだ。

背骨を砕いて、拳が反対側から飛び出したんじゃないかってくらい凄い手応えだったんだが、美鈴は全身でそのダメージを抑え込んだの

だ。

「は……っ、はは……やっぱり、貴女は強いっ」

外傷はないものの、涎と汗をだらだら垂らしながら、美鈴は引き攣った笑みを浮かべている。

「本当に、一撃……でしたね」

「しかし、耐えた」

「やせ我慢、です。反撃どころか、防御すら出来なかった。もう動けません。やっぱり、私はまだまだ……」

「美鈴」

青褪めた顔で自虐的なことを呟きかけるのを遮る。

真剣勝負の後の慰めっていうのは嫌いだ。

だから、私は思ったままのことを口にした。

「門番が門を守り切れたのなら、それを誇るべきだ」

呆気にとられる美鈴に、背後を指す。

私の一撃に耐え切れず、吹っ飛ばされた美鈴は、しかし門に激突する寸前で踏み止まっていた。

今もなお、ふらつく足取りでありながら、門に寄りかかることなく、かろうじて立っている。

無意識なのかもしれないが、私はこの結果を賞賛されるべきものと素直に感じていた。

「強くなったな、美鈴」

「あ……」

肩に手を乗せて、感慨深く呟いた。

本当にね、昔初めて会った時をつい昨日のように思い出せるよ。

いろいろ調子に乗ってあしらったり、アドバイスしたりしたけど、その後成長した結果が今の美鈴なのだ。

私自身、あの時から今までずっと絶えず修行を続けた自負がある。

その成果の一つを、美鈴は受け止めてみせた。

ホント、強くなったよね。

あー、くそっ。今回ばかりは弾幕ごっこのルールが惜しく思える。

こんな当てたもん勝ちの身も蓋もない勝負ではなく、もう一度ちゃんとした形で美鈴と戦ってみたかった。

好戦的なことを言うつもりはないが、拳を交えることが美鈴と一番深く触れ合える方法だと思うんだよね。

まさか『殴り愛』という概念を理解する日が来るとは思わなかったな。

「ありがとうございます……っ」

ダメージが抜け切らないのか、美鈴は震える声でそう言った。

少し目に涙が溜まつているようにも見える。

……やべ、思ったよりも腹に残るような一発だったか？

非常に後ろめたい気持ちになってしまったが、今は先を急がなければならぬ。

後日お詫びをすることを誓いながら、私は改めて門を潜った。

さて、意識を切り替えよう。

ここへ足を踏み入れるのは二度目。

一度目は死地に入るかの如く物騒な状況だったわけだが、今回もこの先で何が起こっているか分からない。

私は気を引き締めて、激しい戦闘の音が響く紅魔館へと向かった。



——生まれてこのかた、明日の寝床と糧すら知れぬ、野良犬のような生き様だった。

——粗末な首輪で縛られ、残飯を与えられて生き長らえるようになっても、その本質は変わらない。

——誰にも、見向きもされない、ただの畜生だった。

——あの日までは。

あまりに唐突な彼女との再会は、美鈴にとって大きな驚愕を与え、そしてすぐ後に告げられた言葉は震えるような喜びを抱かせた。

初めて出会った時は敵として名乗り、そして歯牙にも掛けられな

かった未熟な自分を、彼女は鮮明に覚えていてくれたのだ。

かつて与えられた言葉を、美鈴は片時も忘れたことはない。今の自分が持つ力と自信は、あの時の言葉を元に培われたものだからだ。

一方的にこだわり続けていた。そう思い込んでいた。

いずれ再び彼女の前に立った時、改めて自分の名を名乗ろうと決意していた美鈴にとって、自分が既に一角の存在として心に残っていたことを知った時の感動は溢れんばかりのものだった。

だからこそ、再会の喜びを一人噛み締める以上に、行動を起こすことを選んだのだ。

あの日と同じように、敵として立ち塞がることを。

『一撃だ』

眼前に立つ先代巫女が、宣告する。

それはあまりに強烈な一言だった。

驕りなど無く、誇張でもない。彼女がそう言い切るのならば、現実になってしまいうだろう。言葉そのものに絶対的な力があつた。

二の撃は無い。本当に一撃で決まってしまう。

拳を交える前から、美鈴は自らの敗北を察してしまっていた。

自分自身への情けなさに、笑いさえ込み上げてくる。

敗北を認められないほど意固地なつもりはない。

だが、実際に戦いもせず、言葉だけで思い知ってしまうなど。これでは何の為に彼女に縋って、願いを聞き届けてもらったのか分からない。

これが、彼女と戦う最後のチャンスなのだ。

新しいルールが主流となった幻想郷において、自ら役割を下りた先代巫女。

未だ圧倒的な強さを誇りながら、彼女が博麗の巫女として異変を解決することは、もう無い。

妖怪が人を襲い、人がその妖怪を退治する。そんな人と妖怪の関係から、彼女は離れてしまうのだ。

だからその前に、ただ一度だけでいい。

戦いたかった。

(ただ再会を喜び、触れ合うなら、もつと穏やかなやり方がある。けど……)

初めて出会ったあの日から、今日が繋がっていることを証明する為に。

(私は、貴女の期待通りに強くなれたのか)

歯を食い縛り、萎えかける戦意を奮い起こして、全身の筋肉を叱咤した。

彼女に勝てないのは分かった。だけど、まだあの人の目に今の自分がどう映っているのかを確かめていない。

二人の間で、空気が張り詰め、気迫が拮抗する。

美鈴はただそうしているだけで、全身から汗と共に体力が消耗されていくのを感じた。今、こうしているだけで精一杯だった。

そして、結局何も出来ぬまま、拮抗は崩れた。

「がはあっ!？」

いつ攻撃されてもおかしくない、と。

そう覚悟を決めていた美鈴は、そんな前準備が何の意味もないことを思い知った。

目を離れたつもりも気を逸らしたつもりもない。

だが、まさに『気が付いたら』としか表現の出来ないタイミングで、美鈴は体の中心に凄まじい衝撃が叩き込まれるのを感じた。

全てが手遅れだった。

反撃も防御も、何の反応も出来ずに後方へ吹き飛ばされた。

何も知覚出来ず、何も理解出来ない。刻み込まれたダメージの深刻さだけは本能が理解していた。体中の機能が滅茶苦茶に混乱していた。

しかし、ただ一つ。『このまま終わることは出来ない』と、自分の中の全てが叫んでいるのがハッキリと聞こえた。

戦いの為に備えていた全ての力を両脚に回す。

背中から突き破って出てきそうなほどの衝撃を、体の中へ押し込めて、歯を食い縛り足を踏ん張った。

戦闘の上で意味や利点のある行為ではなかった。ただ無意識に、美

鈴自身が己の意地を押し通した結果だった。

そして、衝撃が全身を激痛と共に隈なく駆け巡り、消えた時、既に勝負は決していた。

「は……っ、はは……やっぱり、貴女は強い」

笑うしかない。

本当に一撃で決着がついてしまった。

何一つ、相手に示すことなく。美鈴の望んだ戦いは終わった。

失意に沈む中、巫女は告げる。

『門番が門を守り切れたのなら、それを誇るべきだ』

そうして指し示す先には、確かに守り抜いた物があった。

意識してやったわけではない。何も分からず、ただがむしやらに意地を通した結果の偶然だった。

『強くなったな、美鈴』

それでも、彼女がくれた言葉は、あの日から何よりも望み続けたものだった。

気が付けば、堪えていたものが涙となって目から溢れていた。

——野良犬のような生き様だった。

——誰にも、見向きもされなかった。

——あの日、貴女に出会って、生まれて初めて認められた。

時間にすれば、まさに一瞬だった勝負の後。

紅魔館の方へと走り去っていく巫女の背中を美鈴は見送っていた。

「強くなった……か」

彼女に言われた言葉を反芻する。

疑問に思ってしまうことはある。結局、勝負は一方的。自分は手も足も出なかったのだから。

ただ、他でもない彼女がそう言うのなら。

「……ま、とりあえず昔よりはマシになったって思おうかな」

顔を上げ、美鈴は普段の陽気な笑顔を思い出したかのように浮かべた。

体に刻み込まれたダメージと鈍痛は消えていないが、不思議と心は晴れやかになっていた。

なんとも現金な心だな、と自分自身に苦笑する。

「本当、現金な娘ねえ」

「うわあ!？」

不意に背後から声をかけられ、美鈴は痛みも忘れて飛び上がった。

慌てて身構えれば、そこには先代巫女とはまた別の意味で当時のまま心に残り続ける存在がいた。

「八雲紫!」

「あら、名前を知っていてくれて光栄だわ」

紫は、かつて出会った時と同じような胡散臭い笑みを浮かべていた。

「……何の用だ？」

「実は、そこを通していただきたくて」

「断る。消えろ」

「冷たいわあ、先代巫女とは対応が違うのではなくて？」

「やはり、盗み見ていたか」

美鈴は敵意を持って、紫を睨み付けた。

幻想郷のルールを破ったことは棚に上げ、酷く不快な気持ちだった。大切なものを汚された気分だ。

目の前の大妖怪が、自分など相手にならない程強大な存在だと理解していながら、それでも怒りを抑えられない。

対する紫の態度は、一貫して飄々としたものだった。

「そう怖い顔をしないで下さいな。先程のは冗談よ。紅魔館に用はありませんわ」

「……それで？」

「特に何も。ただ、事の顛末を見届けに来ただけです」

真意を隠す微笑。

美鈴はその顔に強い嫌悪感を抱いたが、思わせぶりな相手の言動を迫及するような真似はしなかった。

黙って門の前に立ち、侵入を阻むように紫と対峙する。

「貴女は、中で何が起きているか知っています?」

「私の仕事は門番だ」

紫の翻弄に惑わされず、ただハッキリと自らの意思だけを告げる。「門を守ることを任された。私は、その責務を果たす」

誇りを持って、美鈴は言い切った。

紫は、ただわずかに笑みを深くするだけでそれに応える。

門前で直立不動となっている美鈴と、スキマから上半身を乗り出してニヤニヤとそれを見守る紫。奇妙な光景だった。

嫌がらせ以外の何物でもない紫の行為に対して、美鈴は鉄の意志を持って無視を決め込む。

「いやあ、本当に強くなったわね」

「当たり前だけど、アンタに言われても全然嬉しくない」

しかし、さすがにその言葉には死ぬほど嫌そうな顔で反論した。それを聞いて、紫は愉快そうに笑った。

——認められたのも、褒められたのも、あの日が生まれて初めてのことだった。

——だからきつと、紅美鈴という妖怪はあの日本当に生まれたのだ。

——そして、あの日から小さな願いも一つ、心の奥に生まれた。

——それが叶うことはないだろう。叶えようと思う日は遠いだろう。

——少なくとも、貴女が人間である限り、生きている間にそれが許されることはないはずだ。

——ただ、もし。長い年月の果てに誰も彼もが貴女を忘れ、妖怪である自分だけがこの記憶を残す日が来たのなら。

——一度だけでいい。許して欲しい。

——貴女を、母と呼ぶことを。



先代巫女が紅魔館に辿り着いた時間より、少し遡る。

最初に、異変に気が付いたのはパチュリーだった。

読んでいた本から、不意に顔を上げると険しい表情で虚空を睨み付けた。

普通の人間が持たない、魔法使いだけの独特の感性が図書館の外で起こった変化を感じ取ったのだ。

初めて見る高度な魔道書に悪戦苦闘していた魔理沙が、次に顔を上げた。

「……なんだ？」

説明しようのない異様な感覚が、魔理沙を襲っていた。

寒気や怖気に近い。酷く気持ち悪い何か、遠く離れた場所で蠢いているのを臍気に感じる。

「……本当に危険な悪魔や邪神といったものの気配は、本や呪文を通してそれらと関わりやすい魔法使いが最も敏感に感じ取れるものよ」「何の話だ？」

「それに近いものが、この紅魔館の地下に存在する。」

どうやら、外で行われている戦いに刺激されたようね。封印が破られたわ」

「だから、何の話だよ？」

食って掛かる魔理沙を無視して、パチュリーは読みかけの本にしおりを挟むと、席を立った。

眼鏡を外し、平積みしていた本の中から強力な魔道書だと一目で分かる物を抜き出す。

それらの作業はゆったりとしたものだったが、淡々と淀みなく、手早く進められた。

「パチュリー様、『妹様』が……」

「分かっているわ、咲夜」

ティーセットを片付けに図書館を出て行ったはずの咲夜が唐突に姿を現し、パチュリーに伴われて、再び出て行くこうとする。

完全に取り残される形になった魔理沙は、慌ててそれについていった。

「どこへ行くんだよ?」

「外よ」

「何の為に?」

「命が惜しければ、ここに残っていないさい」

「会話しようぜ!」

飛行によつて素早く移動し始めた二人に食って掛かりながら、魔理沙は追従した。

パチュリィは魔理沙のその判断に対して特に何かを言うこともなく、一瞥だけくると、先へ進むことに集中した。

地下の薄暗い通路を抜ける途中で、爆発による振動が遠くから響くのを聞き取る。

「封印が破られたつて言ったな? この音は、誰だか知らんが『そいつ』が暴れてるんじゃないのか?」

「……暴れているだけならまだマシね。これは地上へ出ようとしているわ」

答えるパチュリィの様子は変わらず淡々としたものだったが、声色は何処か焦りを含んでいるように魔理沙には感じられた。

命が惜しければ、という彼女の言葉も大げさなものではないのかもしれない。

しかし、今更引き返して図書館に籠もっているなどという選択肢はなかった。

最も機敏に動ける咲夜を先頭にして、三人は階段を上がり、館の正面口から外へと躍り出た。

月の光と弾幕の瞬きが出迎える。

夜空には無数の弾幕と、その中で飛び回る霊夢とレミリアの姿があった。

傍から見ても、自分では手の出せないレベルの激戦だと実感した魔理沙が半ば呆然と呟く。

「こっちは宴もたけなわつてどこか」

「のんきに見ている猶予はないわよ。レミィ達に、妹様のことを知らせなくちゃいけないわ」

「咲夜、答えてくれ。お前らの言う『妹様』って誰のことだ？」

パチュリー相手では埒が明かないと判断した魔理沙は、咲夜に矛先を向けた。

「……その呼び名の通り、お嬢様の妹であるフランドール様のことよ」

「じゃあ、吸血鬼か」

「アレが真つ当な吸血鬼と呼べるのならね」

言葉を選ぶ咲夜に反して、パチュリーが端的に冷たく呟いた。

その様子から新たな疑問を抱いた魔理沙が更に質問を重ねようとした時、爆音が起こった。

今度は遠くではない。

紅魔館の一角が吹き飛び、崩落して煙を巻き上げる。

それを起こした者の正体を見極めようと目を凝らす魔理沙の真剣な横顔を一瞥し、パチュリーは諦めたかのように唐突に説明を始めた。

「これから現れる吸血鬼、フランドールとは確実にスペルカード・ルルを抜きにした戦闘になるわ。」

おそらくアナタに矛先が向くことはないだろうから、自分から目立ったり関わるような真似は控えておきなさい」

「忠告ありがとうよ。だが、状況次第だぜ」

「危険なのは力だけじゃない。彼女は正気ではないのよ」

「身内に随分な言い方だな」

妖怪相手に良識を持つことを前提とするのも随分な考えね、と内心呆れながらパチュリーは小さくため息を吐いた。

「あの娘は、生まれてからずっと。実の父親から虐待しか受けていないわ」

凍りつく魔理沙に、パチュリーは淡々と告げた。

「そんな育てられ方をした子供が、正気でいられるわけがないでしょう?」

爆発の後の静寂を切り裂くように、煙の中から一筋の赤い閃光が飛び出した。

破壊の力を持つそれは、弾幕ごっこを中止して、空中で対峙してい

た霊夢とレミリアの中間を薙いで過ぎる。

「何よ?」

「まさか……!」

決戦の乱入者に気付いた二人は、それぞれ別の反応をした。

ここが敵地であることを十分に理解している霊夢は、新たな敵の登場に対して動揺など欠片も見せずに備える。

レミリアは現れた気配が酷く見覚えのあるものと気付いて、表情を強張らせた。

五つの視線が状況を見定める中、煙の中から小さな人影が夜空へと浮かび上がってくる。

「ウフフ……アハハ……」

最初に聞こえたのは、幼い少女の無邪気な笑い声だった。

鈴の音が鳴るような小さな笑い声は、しかし徐々に大きくなり、リズムは狂い、最後には鐘をかき鳴らすような不協和音となって夜の闇に不気味に響き渡る。

少女の声だった。だが、決して正気を感じられない声だった。

「フラン……」

「ずるいよお、お姉さま。どうして一人でやっちゃうの?」

煙の中から少女が姿を現す。

レミリアと瓜二つの顔。しかし、それ以外は酷く歪に違っている。

姉と呼びながら髪の色素は同じではなく、背中に生えた羽は似るところか枯れ枝のように非生物的な形だ。

吸血鬼という種族として括ることすら難しい、二人の違い。

「フラン、部屋に戻りなさい」

「わたし、知ってるよ。だって、お姉様と変な妖怪が話し合ってるのこっさり聞いちゃったもん。そいつが博麗の巫女なんでしょ?」

向けられる狂気的笑みと、それに伴う敵意と殺気に対して霊夢は静かに身構えた。

「そいつの母親が、お父様を殺しちゃったんだよね?」

如何なる状況にも対応出来るよう、霊夢は防御用の結界を密かに準備した。

弾幕を抜きにした本当の実戦になるものと想定しての備えだ。

新たに現れたこの吸血鬼が、スperlカード・ルールを解し、従うだけの理性を持つているとは全く思えなかった。

「お父様がわたし『で』遊んでくれなくなったのも、そいつらのせいなんだ。

許せないよ。わたし、ずっと地下で待ってたのに。お父様が待っていろって言うから待ってたのに。一生そこにいろって言うから待ってたのに！」

「霊夢、下がって！」

おそらく本人にしか分からない激情が膨れ上がり、フランドールはそれを叩きつける場所を探してギョロギョロと忙しなく目玉を動かしている。

レミリアは思わず、霊夢の身を案じて叫んでいた。

「お姉様あ」

「フラ……ッ」

「そいつ壊すの、わたしにやらせて？」

限界だ。来る。

ただ冷静に状況と周囲の流れを読み取っていた霊夢は、自分を標的とした殺意が爆発する瞬間を正確に察知した。

隠し持っていた札を素早く周囲に撒き、それらを支点にして二重の結界を張り巡らせる。

霊夢の読みは正確無比だった。

防御用の結界が完成した瞬間、フランドールの右腕がようやく霊夢の方へ向けられたところだった。

広げた手のひらがゆっくりと握り締められる。

「ぎゅっとしてえ」

レミリアが悲鳴のように何かを叫び、結界の内側にいるはずの霊夢は根拠もなく己の死を予感した。

「ドカーン」

フランドールの右手が握られると同時に、結界の内側で霊夢の肉体が爆ぜた。

血と肉が飛び散り、障壁を中から汚す。
それを行ったフランドール以外の視線が凍りついたように見つめる中、霊夢は墜ちた。

其の五「紅魔郷」

五人の中で、その光景に最も衝撃を受けたのは魔理沙だった。霊夢がやられた。

墜ちた。

「霊夢っ！」

地面に墜落した霊夢の体にしがみ付き、懸命に呼びかけた。

誰かに敗北し、傷を負って、ましてや死に迫いやられる様など欠片も想像出来なかった親友が、鮮血に染まって倒れている。

出血の酷さで全身が赤く見え、一体どこに傷を負ったのか一目では分からない程だ。

同時に、魔理沙も冷静に霊夢の状態を見られないほど混乱していた。

「大丈夫。脈はあるし、気を失っているだけね」

いつの間にか傍らにしゃがみこんだ咲夜が、魔理沙に代わって冷静に霊夢の腕を取り、状態を調べていた。

二人の居た位置も、ランドール の傍ではなく、距離を取ったパチュリーの近くへと移動していた。

時間停止能力を使って、少しでも安全な場所に移動させたのだ。

「傷は左腕ね。肉が抉れているけど、骨まで達してはいないわ」

「致命傷じゃ……」

「ないわね。そもそも、あの高所からの落下で首の骨を折る危険性の方が高かったわ。無意識なのか、飛んで速度を軽減したようね」

「あの土壇場で、なんとまあ」

更に状態と状況を解析する咲夜に対して、パチュリーが他人事のように感心していた。

咲夜による止血と、パチュリーによる治癒魔法の施術が行われている間に、魔理沙はランドールの方へ視線を走らせた。

霊夢の安否が判明したからといって、あの元凶がいる限り安心できる状況ではない。

次に何処へ矛先を向けるか分からない狂気の吸血鬼は、意外にもそ

の場を動くことなく、呆けた表情で自らの右手を見つめていた。

「んー？」

「……フラン」

一人首を傾げるフランドールに対して、レミリアが慎重に声を掛ける。

「んむう……？」

「部屋に戻りなさい。いい？ 彼女は……」

「おつかしいなあ」

「フラン？ 聞いているの？」

「うーんと、ねえ」

そつと傍らにまで近寄ったレミリアを一瞥すると、おもむろに右手を差し出した。

「え？」

「ドカーン」

握り締める。

次の瞬間、レミリアの呆けた顔が赤い霧となって吹き飛んだ。

首から上を綺麗に失ったレミリアの体は、一瞬グラリと傾き、しかし落下を始める寸前で持ち直した。

砕け散った頭部は、吸血鬼特有の不死性によってすぐさま再生した。

「アハハッ、上手くいった！ やっぱりちゃんと壊れるんだあ」

「フ……フラン、何をするの!？」

頭を完全に復元しながらも、レミリアの顔は青褪めていた。

今のはただ破壊されただけだった。しかし、フランドールの能力は物理的な威力だけでなく、吸血鬼の再生能力も含めて肉体を破壊することが出来る。

そうなれば、再生そのものが出来ない。

「うんっ、さつきはちよっと狙いを外しちやっただね。よし、今度はしっかりと狙うよお」

「フラン、やめろと言っているのよー！」

フランドールの標的は変わっていなかった。

倒れた霊夢と、その周囲に集まった魔理沙達に視線を移したフランドールを、レミリアが止めようと腕を掴む。

視線が掴まれた一点に注がれ、やがて酷く剣呑な色に染まってレミリアに向けられた。

「お姉様……邪魔」

腕を振り払う、などという生易しい対応ではなかった。

刃のように鋭い爪を伸ばし、それで実の姉の体を切り裂こうと深く薙ぎ払う。

レミリアはその一撃を片腕で受けながらも、フランドールに呼びかけた。

「やめなさい、あの人間を殺すことは許さない！」

「あれれっ、どうして？　ねえ、お姉様。お父様って殺されたんでしょ？」

「あの男は、死んで当然だった！」

「当然？　なんで？」

「アンタ、アイツに何をされたか忘れたの!？」

「覚えてるよお、お父様は色んなことをしてくれたよ？　うん、そうだよ。お父様なんだよっ」

「何を……っ」

「お父様なんだから、『家族』なんだよ！」

レミリアは、言いかけていた言葉と共に息を呑んだ。

こちら覗き見るフランドールの瞳が、あまりに純粹過ぎて、逆に狂気という一色に染まりきってしまったのかと思った。

『『家族』を殺されたら、怒るものなんですよ？　お姉さまが、そう教えてくれたじゃない」

言った。その通りだ。

本当に昔の話だ。母を失った時のことをフランドールに話し、そこで家族について教えた。

家族を傷つけられ、殺されたのなら、怒っていい。怒るものなのだ。

「母を……殺したのはっ、あの男だろうが！」

フランドールのあまりに純粹で無垢な疑問に耐え切れず、レミリア

は吐き出すように叫んだ。

「でも、わたしお母様って知らないもの」

再び、言葉を失った。

母はフランドールを生んだ直後に殺された。妹は母の愛情はおろか、顔すら知らないのだ。

「お母様を知っているのは、先に生まれたお姉様だけだもの」

「あ……………」

「わたしが知っているのは、お父様だけだもの」

フランドールの言葉の一つ一つが刃となつてレミリアの心を突き刺した。

何かに抵抗しようとしていた全身の力が、不意に抜けていく。

拘束が緩んだ瞬間、フランドールは躊躇わずに、レミリアの顔面を殴り飛ばした。

吹き飛ばされていく先へ、追撃の魔力弾を連続で叩き込む。

弾幕ごつこの為の見栄えや量を重視したものではなく、力を収束させて殺傷力を向上させた弾丸が、レミリアの体を引き裂いた。

「お姉様が、わたしに教えたんでしょ？ 何でも知ってるお姉様がさあー！」

狂気の笑みがいつの間にか憤怒の形相へと変貌していた。引き攣つたままの口元が、無理矢理笑みの形に歪めている。

まるで実の姉を恨みきっているかのように苛烈な攻撃がレミリアへ襲い掛かった。

爆発と共に血飛沫と肉片が空中で飛び散り、再生する端から新たな攻撃が肉体を破壊した。

一方的な戦いだっただけ。

しかし、どれだけ攻撃を加えても、フランドールの怒りは無尽蔵であるかのように治まらない。

「…………レミリアは、なんで反撃しないんだ？」

状況を見定めていた魔理沙は思わず呟いていた。

霊夢の治癒に集中しながら、パチュリーが答える。

「反撃しないのではないわ。出来ないのよ」

「フランドールの方が能力は上ってことか？」

「確かに、彼女の能力は破壊に特化しているわ。あの能力の前には防御の意味がない。」

でも、反撃出来ない理由は、レミイ個人の事情よ。妹であるフランドールに対して、強い負い目があるの」

自分が死にそうになっても抵抗出来ないほどの負い目なのか？

魔理沙は視線でそう訴えた。

疲れたようなため息が返ってくる。呆れて出たものではない。何かを嘆くような声色で、パチュリーは説明した。

「あの娘は父親に虐待されていたと言ったわね。」

レミイは逆よ。フランドールが虐待されている一方で、姉であるレミイは虐待されるどころか、スカーレット家の長女として最高の保護と教育を受けていた」

「……なんだと？」

「差別したのよ、あの父親がわざと。虐げられる妹の目の前で、姉を優遇したの。」

それ以外のことを、レミイには強要しなかったわ。妹の虐待に堪りかねて、姉が手助けしたり、慰めようとすることも止めなかった。ただ、眺めて楽しんでいたのよ」

語りながら、パチュリーは無意識に自らの喉元に触れていた。

忌々しい感触が過去の記憶と共に蘇ってくる。

既に滅んだあの男の呪いが、未だこの紅魔館全体を覆っているような錯覚を覚えた。いや、錯覚などではない。

「親として接することのないあの男に代わって、レミイはフランドールに何度も語りかけたらしいわ。自分の愛も道徳も説いた。」

でも、それを素直に受け止められるはずがない。姉は父親に優しくされ、記憶にない母親さえ知っている。そういう境遇に、あの男は二人を置いたのよ」

「クソヤロウ……ッ！」

「まさにその通り。そして、だからこそあの男は報いを受けた。でも、今はもうそんなことどうでもいい話だわ。」

レミイは、フランドールに反撃出来ない。罪悪感と後ろめたさがあるから。あのまま攻撃を受け止め続けるしかない。

そしてフランドールも、もう唯一の肉親である彼女の言葉さえ聞き入れることは出来ないでしょうね」

パチュリーはやるせなさに力なく首を振り、魔理沙は血が滲まんばかりに拳を握り締めた。

沈黙する二人を一瞥し、咲夜が立ち上がる。

「咲夜、行くのね？」

「……私は、全てが終わった後の紅魔館に拾われた身です。

事情は分かりました。しかし、この身はレミリアお嬢様に捧げたもの。過去未来関係なく、あの方を守る為の刃と成るものです」

忠義を映した瞳で小さく微笑むと、咲夜はレミリアとフランドールの戦いに割って入るべく飛翔した。

「わたしは……どうすればいい？」

縋るように尋ねる魔理沙に対して、パチュリーは何も言うことが出来なかった。

アナタには関係のない話だわ、と。本来ならそう断言してやるべきだろう。人間である彼女には、ここは既に死地だ。

しかし、それを告げることは出来なかった。

魔理沙と同じように、パチュリー自身もこの状況で何かに縋りたかった。

あまりに悲しく、不毛な諍いを続ける姉妹の間に割って入る何者かを期待せずにはいられなかった。

「私は……」

「とりあえず、腕の治療に専念してもらえる？」

苦悩する二人の間に、第三者の声が割り込んだ。

「霊夢！ 大丈夫なのか？」

「頭がガンガンするわ」

魔理沙の腕の中で目を覚ました霊夢は、自分の片腕の状態を無視して、顔を顰めながらぼやいた。

「そつちじゃないだろ!? おい、左腕が挟られてるんだぞ。痛くない

「のかよ？」

「痛いわよ。もう滅茶苦茶痛いわ」

「当たり前だろ、見てるだけでも痛いぜ」

「でも、身内でもっと痛そうな人見てるし」

普段通りの口調で誤魔化されそうだったが、霊夢は額に脂汗を滲ませ、両目を充血させていた。

耐え難い程の激痛が走っていることは間違いない。

それを、への字に結んだ口の中で歯を食い縛って耐えているのだ。

「なるほど、母さんの仏頂面はこうやって出来たのね」

痛みからの現実逃避かと思えるほど明後日の方向へ霊夢は頷いていた。

仏頂面っていうか凜々しい顔だと思うけど。美人なんだからもつと笑えばいいと思うな。いや、それは霊夢も同じか。

そこまで意味のない思考を巡らせて、魔理沙は自分が未だ混乱から抜けていないことを自覚した。

上半身を起こした霊夢を、パチュリーは冷静に観察する。

「腕を治して、どうしようというの？ 妹様と戦うつもり？」

「あいつが能力であたしを殺せなかったのは、狙いが外れたからじゃない。あたしにはそういう能力と技があるのよ」

防御を無視する破壊能力。その発動を受けた霊夢が死を予感した瞬間に使った技が、被害を腕一本に抑えたのだ。

「あの能力を、あたしなら無効化できる。あとは、攻撃の為に両腕を使える状態にする必要があるわ」

「両腕が使えれば、どうなるの？」

「月夜の吸血鬼を殺しきるには、片腕だと辛いのよ」

何うようなパチュリーの視線を、いつそ冷徹とも言えるほど真っ直ぐに見返して、霊夢は躊躇なく答えた。

幻想郷の管理者である博麗の巫女の責務。

迷いなどなかった。

「妹様を、滅ぼすつもりなのね」

「なあ、霊夢。アイツは……」

「そりゃあ、何か事情はあるでしょうよ」

霊夢は継るような魔理沙の言葉を、容赦なく遮った。

「妖怪の命は、人間のそれより長い縄と同じだわ。」

捻れ、絡めば、解くのは容易ではない。時間が経つほど結び目は固くなる。ゆつくりと、緩めてやることも出来るでしょうけど」

二人の瞳を交互に睨みつける。

「他人のあたしが最善と思える方法は、根元から断ち切ることね」

そう言いきる霊夢の顔つきは、特に普段の彼女を知る魔理沙にとつて酷く恐ろしげに映った。

己に課せられた責務を果たす為には、神であろうと鬼であろうと斬り捨てる無情の巫女がそこにいた。

それから霊夢は黙り込み、パチュリーをじっと見据えた。

自分の意思は伝えた。止めたければ、治療を放棄すればいい。そう言っているのだ。

そうすれば、霊夢は何も出来ないだろう。いや、違う。怪我を抱えたままフランドールに挑み、どちらかが死ぬのだ。

パチュリーは、目の前に突き付けられた選択肢のいずれも選びたくはなかった。

では、最良の選択とは何なのか？

孤独なフランドールの心に語りかける為の理路整然とした言葉の数々が浮かび上がってくるが、そんなものは単なる文字と音でしかないと分かっていた。

誰かが、彼女の傷ついた心に踏み込まなければならぬのだ。例えば、それが心の傷を開き、踏み荒らす行為であったとしても。

でも、今ここにはその『誰か』がない。

人の心に踏み込む『権利』などというものが存在するのなら、それを最も持つはずの両親は死に、唯一残った姉は罪悪感から動くことが出来ない。

レミリアはフランドールへ何かを訴えかけることなど出来ないだろう。責め立てられることを自らへの罰だと信じているのだから。

誰もいない。今のフランドールの傍には、本当に誰もいないのだ。

霊夢の選択は、いつそ正しいのではないか——自分の中の理性がそう囁き、パチュリィは臍を噛んだ。

誰か……。

「わたしが行くぜ」

今度は二人分の視線が、魔理沙に集中した。

「何処へ？ 何しに？」

「フランドールの所へ、時間稼ぎにな」

霊夢の無感情な視線に屈することなく、魔理沙は笑った。

「どつちにしろ、霊夢の腕はすぐには治らないだろ？」

レミリアを庇いながら戦ってる咲夜だけじゃ、もうもたない。時間稼ぎくらい、人間のわたしにも出来るぜ」

「玩具にされて、お終いよ」

「上等。子供は遊ぶもんだぜ。せいぜい時間を忘れるほど遊んでやるや」

魔理沙の笑みは、自分では気付いていないが引き攣っている。

怯えに負けて心に躊躇いが生まれる前に、魔理沙は背を向けて戦場へと飛び出して行った。

パチュリィは思わずそれを呼び止めようとしたが、結局口を噤み、一呼吸置いて霊夢の治療に集中し始めた。

「急ぎなさい」

霊夢が急かす。

それは彼女自身が、理由の分からない焦りを僅かに抱き始めたからだ。だった。



咲夜の決死の援護や呼びかけにも反応せず、レミリアは押し黙ったままフランドールの怒りの矛先となり続けていた。

何かを口にすればそれが都合のいい言い訳としか響かず、抵抗すればそれが妹への追い討ちになるのだと思ひ込んでいた。

しかし、延々と姉に怒りをぶつけ続けるフランドールは、むしろ時

間が経つほどに激し、狂気に歪みきった顔からは笑みなどとうに消え失せている。

互いが互いを無意識のうちに傷つけ、煽り、そして追い詰めていた。

「ああああああ、あゝ！ うざったいなあ!!」

腕から銀のナイフを生やしたフランドールは、もう片方の手で頭を掻き毟った。

複雑に絡み合う姉妹の心境を尻目に、激しさを増す戦場の中で咲夜はただ一人迷いを見せず、冷静で的確に立ち回っていた。

飛び交う魔力弾や直接攻撃の中を、時間停止の能力を駆使して飛び回る。

月夜の吸血鬼に対しては決定的となる攻撃手段を持たないが、レミアを庇いながら状況を拮抗させ続けていた。

「消えろおおおっ!!」

苛立ちがピークに達したフランドールが喚き散らす。

冷静さを失った相手ほど御しやすいものはないと咲夜は判断していたが、その基準が人間であることを失念していた。

フランドールの手から炎が立ち昇り、巨大な剣を形作るように一直線に伸びた。

それを勢いよく薙ぎ払う。

周囲を巻き込む為の大振りな攻撃に対して、咲夜は冷静に時間を停止させて、巻き添えを食らう位置にいるレミアを抱えて死角へ移動する。

そして、能力を解除した瞬間、凄まじい激痛と灼熱感が体内を駆け巡った。

「か……っ!?!」

声が出ない。喉と肺が焼ける。

フランドールの炎の剣は、想像を絶する高熱によって周囲の空気を焼き尽くしていた。人間を蒸し殺せるほどの熱を、咲夜は肺に取り込んでしまったのだ。

二度目の呼吸が出来ない。両目が酷く痛む。一瞬で意識が朦朧とし、咲夜は落下した。

「咲夜、しつかりしなさい！」

咄嗟にレミリアが抱えて地面との激突を阻止したが、その腕の中で咲夜は気絶していた。

フランドールが炎の剣を振りかぶるのが見えた。

例え自分が攻撃を耐えられても、人間である咲夜は死んでしまう。

レミリアの心に初めて攻撃への恐怖が湧き、咲夜を失うことへの強い抵抗感がついに体を突き動かす。

自らの魔力で槍を形成し、無意識にそれをフランドールへ向かって叩き込もうとした瞬間、横合いから星を模った無数の弾幕が二人の間を流れていった。

「……わぁ」

色とりどりの星が流れていく様を見て、フランドールの瞳から一瞬だけ狂気が消え失せた。無垢な子供の感嘆が漏れる。

周囲に放った弾幕の残滓を纏いながら、魔理沙が颯爽と二人の間に割って入った。

「今の星はアナタ？ とつても綺麗ね」

「お褒めに預かり光荣だぜ、お嬢さん。わたしと遊んでくれたら、もつと見せてやるぜ？」

「遊ぶ？ 人間って脆いわ。どうやって遊べっていうの？」

「教えてやるぜ。今日始まったばかり、流行の最先端をいく遊びだ」

魔理沙はこれみよがしにスペルカードを掲げ、弾幕を放った。

多彩な弾幕は、殺傷力こそ微小なもの、圧倒的物量でフランドールを包み込んでいく。

「あはっ、綺麗」

嬉々として弾幕を全身に浴びるフランドールが、スペルカード・ルールを全く理解していないのは明白だった。

だが、好奇心だけは引くことが出来たようだ。

魔理沙は内心で予定通りに事が運んでいることにほくそ笑み、同時に自分は何をやっているんだと後悔に涙した。

人食い猛獣の前で、ラツパを吹きながら気を引いているような気分だった。

「こーんな感じかな？」

興に乗ったフランドールが、魔理沙を真似るように弾幕を放つ。それは美しさや規則性を排した、単なる殺傷力に特化した物量攻撃に過ぎなかった。

迫り来る死の雨を、魔理沙は必死に掻い潜る。

「くそっ、何が世界の要素を上手く運用する、だ!？」

膨大な魔力量に物を言わせた力技に対して、悪態が吐いて出た。

奇跡のような回避を続けながら、それが同じ賽の目を出し続けるような幸運でしかないと自覚した魔理沙は、正面对決以外の道をすぐさま模索する。

「おい、遊びの内容を変更しないか!? 室内でチェスとかおすすめだぜ!」

「あはははっ、いかにもお姉様が好きそうな遊びね! わたし、嫌いだなあ!」

「藪蛇かつ。おい、聞けよ! わたしは、お前と話がしたいんだ!」

「わたしもだよ。わたしも、誰かとお話したいよお!」

生と死が目まぐるしく行き交う中、魔理沙はかろうじてフランドールを一瞥することが出来た。

さつきまで笑い声が聞こえたはずだ。

なのに、視界に映る彼女の顔は能面のように表情は消え失せている。

「でもさ……」

つい先程まで無邪気にはしゃぐ子供を相手にしていたと思ったのに、気が付けば世の中の全てに絶望した亡者がそこにいる。

「だあれも、わたしを見て話してくれないっ!」

絶叫と共に、フランドールから殺意を纏った無数の弾幕が溢れ出した。

体を滑り込ませる僅かな隙間すらない。ただ圧倒的な死の壁が迫って来ていた。

「マスタースパーク!」

回避出来ないと判断した魔理沙はミニ八卦炉を構えて、発射した。

直線の軌道でありながら、広範囲に渡って放たれた極大の魔力波がフランドールの弾幕を飲み込んだ。

しかし、標的を貫通して破壊する為に高密度に生成された殺傷用弾幕は、その魔力波にもかき消されずに魔理沙へ向けて殺到する。

——そんなの、ありかよ!?

魔理沙は悪態すら言葉に出来ず、無言のまま死に飲み込まれようとしていた。

と——、地上からまばゆい光が広がり、それは轟音を伴って津波のようにフランドールの弾幕を押し流した。

「な、なんだあ!？」

自身のマスタースパークに似た強大な力の奔流が過ぎていくのを目の当たりにして、魔理沙は混乱した。

自分が助かったことや、自分に味方が現れたこと以上に驚いたのは、それが全く未知の一撃だったことだ。

魔力でも霊力でもない。マスタースパーク以上の、ただ膨大なエネルギーとしか感知出来ないものだった。

その場にいる全ての者の視線が、攻撃の放たれた地上の一点に集中する。

そこにいたのは、たった一人の人間だった。

「霊夢の、おふくろさん……う？」

魔理沙は呆然として、両手を上下逆さに合わせて前に突き出した奇妙な構えの先代巫女を見つめた。

驚きと同時に、ある種の納得があった。

この混乱し、激化する戦況の中へ乱入する者として、これ以上なく適役ではないかと思ってしまった。

先程の攻撃を放ったと思われる構えを解き、彼女が真っ直ぐに見据える先には、同じように地上を見下ろすフランドールがいた。

「……あはっ」

フランドールの顔が歪む。笑みの形でありながら怒りに染められ、縋りつくように瞳が揺れ、それらが混ざり合った狂気の表情に。

「見つけた」

右腕を、ゆつくりと先代巫女へ差し出す。

「みいつけたあ」

レミリアがそれを凝視した。

警告を口にしようとして、先代巫女に対する複雑な感情が喉を詰まらせる。

「お前を壊せば、何かが変わるんだ。きつと。たぶん。ぜったい」

根拠のない確信に縋るように告げ、右手を開く。

それに対し、先代巫女はただ自然体で佇むだけだった。

「きゅつとして」

防御も回避も不可能な破壊の手が、彼女の命を握る。

能力が、発動する。

その寸前。

「ドカ——ッ!!?」

衝撃。

爆音と共に、フランドールは地面に叩き落された。

遅れて、傍観していた全員に驚愕が走り抜ける。

地が震え、砂煙が舞い上がり、ようやく何らかの攻撃が先手を打つ

て行われたのだと理解した。

「……今、何をしたんだ?」

放心状態のまま呟いた魔理沙の言葉が、フランドールを含む全員の心境を代弁していた。

ただ一人。それを為した先代巫女本人だけは、何も変わらず、無造作に佇んでいる。

隕石が落ちたかのような落下の跡から、フランドールが立ち上がった。

「ぐっ、うう……っ」

そのゆつくりとした仕草は余裕によるものではなく、全く逆の混乱と動揺に支配されていたからだだった。

浮かび上がっていた狂気の形相は、未知への驚愕と警戒に歪んでいる。

「……お前、なんかあつー!」

再び右腕を突き出す。

今度は何かを感じる猶予など持たなかった。ただ目の前の敵を破壊することだけに集中していた。

そんなフランドールの激しい殺意を嘲笑うかのように、再び衝撃が彼女を吹き飛ばした。

誰も攻撃を察知できない。

『気が付いたら』としか言いようのない間隔で、凄まじい力で殴り飛ばされたかのような轟音が響き、フランドールが倒れた光景を見て、ようやく認識出来る。

今度は紅魔館の壁に激突して、崩落した瓦礫に埋められていた。

知覚出来ない攻撃の一方で、先代巫女もいつの間にか右手を前に差し出していた。

拳を握っていない為、単純な打撃ではない。おそらく。

そこに至る過程や動作が全く感知出来なかった。

しかし、何がしか行われたであろう一連の動きが、フランドールを襲った攻撃と連動しているのは確かだった。

だが、明確に分かるのはそれだけだ。

先代が『気が付いたら』攻撃を繰り返しており、フランドールが『気が付いたら』その直撃を受けて吹き飛んでいる。

全ての者が、目の前の現象に追いつけないのだ。

「原理は、分からないけれど……」

パチュリーが汗を滲ませながら、掠れた声で呟いた。

「彼女の——先代巫女の攻撃は、妹様にも知覚出来ない速さで行われ、しかもその速さで確実に先手を取っている。能力の発動より先へ割り込める」

まさに必勝の方法だ、と。それを聞く誰もが戦慄した。

再び先代が全く実体の掴めない『攻撃態勢』へ戻ると同時に、瓦礫の中で人影が蠢いた。

二つ。

三つ。

四つ。

人影が増える。

「まずい、フランが分身したわ!」

レミリアは思わず叫んでいた。

四人に分身したフランドール達は、そのいずれもが幻影などという曖昧なものではなく、確固として存在している。

恐るべき力を宿したまま、四人の同一吸血鬼はあつという間に展開して先代巫女を取り囲んだ。

『あはははっ、今度こそ壊れちゃえ!』

四人分の狂気が共鳴し合って不協和音となる。

ありとあらゆるものを破壊する能力を宿した右手が四本。逃れようのない位置で同時に差し出された。

それを見る者全てが、窮地に対して各々の判断のまま動き出そうとする。

そして。だが、やはり——誰よりも先んじて動いたのは先代巫女の手だった。

相対するフランドールが一瞬だけ認識できた。

——祈るように合掌し、右手を下ろす。

ただそれだけの動作を極限まで自然に、無駄なく、静かに、そして早く行う。

その一連の動作に連動して、彼女の全身に纏う力も向かうべき標的へと流れて行き、そして炸裂した。

他者に捉えられるのは、最後の結果のみだった。

四人のフランドールが、真上からの衝撃によつてほぼ同時に押し潰された。

「……は?」

「マジかよ……」

状況を凝視していたレミリアと魔理沙が呆けたように眩き、幾分か冷静な霊夢とパチュリーは言葉もない。

彼女達が見たものは、やはりフランドールが叩き潰された瞬間だけだった。

そして、だからこそ全員が己の目を疑い、一瞬だけ映った物を錯覚

だと感じてしまったのだ。

攻撃が放たれた瞬間、先代巫女の背後に四本の腕を振り下ろす巨大な観音像が見えたような気がした。

「……おい、霊夢」

四人から一人に戻り、地面に仰向けに倒れたまま、もはやピクリとも動かないフランドールを十分に観察してから、魔理沙は霊夢の下へ戻った。

「お前の言ってた、アイツの能力を無効化出来る技って、まさか……」

「そんなわけがないでしょーが」

先代巫女に震える指を向け、自分にまで畏怖するような視線を向ける魔理沙を霊夢が呆れたように否定した。

もちろん、一番呆れているのは魔理沙に対してではなく、あの特んでもない自身の母親に対してだった。

「アレはあたしも初めて見るわ」

「他にもなんか見たことあるのかよ……」

いつの間にか、動かせるほどに回復した左腕の調子確かめる。もはやそれを振るう機会はなくなったのだが。

戦いは終了した。

しかし、まだ状況が終息したわけではない。

未だにハッキリとしない、おそらく攻撃の構えであったものを解いた先代巫女は、倒れたフランドールに向かってゆっくりと歩き出した。

霊夢がそれを追うように近づいて行く。この状況を先代巫女に委ねるつもりなのか、あるいはその判断を見定めようというのか。

魔理沙とパチュリーが顔を見合わせ、無言で続く。

今回の異変を異常な方向へと暴走させた元凶であるフランドールの下へ、全てが集結しようとしていた。

◇

紅魔館へ向かったら、娘とその友人達がガチの殺し合いをしていた

でござるの巻。

えっ、私？ これは私のせいなの？ 責任とって首括るしかないの？

紅魔館の空中ではフランちゃん——いや、さすがに実際に対面していないし馴れ馴れしいか——フランドールとそれ以外の全員が戦っている。

魔理沙が空中戦を繰り広げる様を、気絶した咲夜を抱えたレミリアが険しい表情で見守り、離れた地上には怪我をした霊夢とそれを治療するパチュリーがいた。

霊夢の怪我に関しては、目にした瞬間ホントに肝が冷えた。幸い、大事はなさそうだが。

そして、おそらく全ての被害の元凶であるフランドールは、最高にハイって感じで暴れまくっている。

あれって弾幕ごっこじゃないよね。制圧射撃だよね。なんとという修羅場。

発端がどういうものなのかは分からないが、この諍いに私の過去の所業が関わっていることは間違いない気がする。

よしっ、まずは二人の戦闘に割り込んでジャンピング土下座するところから始めようか！

そんな感じにテンパった状態で駆け出そうとした時、フランドールが絶叫と共に一際凶悪な弾幕を放った。

「だあれも、わたしを見て話してくれないっ！」

その悲痛な叫びが、理由も分からず私の胸を抉った。

……なんで子供にあんな顔させてるんだ？

若干混乱気味だった頭が一瞬で冷えた。

しかし、悠長に思考に没頭する暇はない。放たれた弾幕はマスタースパークでさえかき消すことが出来ず、殺意の雨となって魔理沙に襲い掛かる。

冷えたはずの頭がまた焦りで沸騰した。

ボム無効で残機根こそぎ持つてくとかルール違反でしょう!?

魔理沙を跡形もなく消し飛ばそうと迫る弾幕に対して、私は慌てて

自身の攻撃を割り込ませた。

上下に合わせて突き出した両手の先から、マスタースパークばりの光の奔流が放出され、横合いから弾幕を一気に飲み込んだ。

あぶねえ……ギリギリだったわ。

思わず奥の手の一つを使ってしまった。これって実戦で使ったことあんまりないんだよね。

まあ、構えから分かるようにこの技の大本はあのアレのリスクトである。

収束した力を一気に解き放つ高火力広範囲の遠距離攻撃。マスタースパークなども含めて類似の技が多いし、本家の技名は恐れ多くて名乗れないので、私は便宜上『博麗波(はくれいは)』と呼んでいる。……いや、恥ずかしいから絶対口に出しては呼ばんけどね。

それにこの技は高威力なのだが体力の消耗には微妙に釣り合いが取れていないのと、破壊力が大きすぎて弾幕には危険なので使い勝手は悪いのだ。

だから実戦であまり使わない。

しかし、それでも私の奥の手には変わらないのだ。何故なら、この技は浪漫だから。

「みいつけたあ」

攻撃の後、さてどうしたものかとフランドールの出方を伺っていたら、やはりというか私を見て完全に友好的じゃない笑みを浮かべた。うん、嬉しそうな笑顔だけど、どう見ても獲物を見つけた野獣って感じの笑みだね。

「お前を壊せば、何かが変わるんだ。きっと。たぶん。ぜったい」

やはり父親を殺したことを恨まれているのか、と考えていた私は、その言葉を聞いて疑念を抱いた。

なんだ？ 私に殺意を抱いているというのは分かるが、親の仇討ちに燃えるといった感じではない。

どちらかという声には覇気すらなく、何かに縋りつくような弱弱しさが見えるのだ。

これは、私の罪悪感が生む都合のいい錯覚なのか？

分からん。

分からん、けど……ごめんよ、フランドール。私はお前に殺されてやるわけにはいかない。

ケジメはつける。報いも死後、必ず受ける。ちょうど、この世界には閻魔様もいるしね。

——でも。今の私はまだ、霊夢の母親なんだな。

死ぬわけにはいかないんだ！

「ぎゅっとして」

フランドールの右腕が私に向けられる。

彼女の持つ『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』は一度捉えられれば、防御が通じず、回避も出来ないチートぶりだ。

発動されれば、私にその死を逃れる術はない。

よって、ここでもう一つの奥の手を使う。

その構えである、両手を胸の前で合わせた合掌の形へ静かに持つていく。

「ドカ——ッ!!?」

フランドールの声が私の放った一撃に飲み込まれてかき消えた。

苦節数十年。あの祈りと正拳突きの日々が実を結んだ果てに完成したのが、この不可避の一撃だった。

美鈴の時もそうだったが、身も蓋もない話、妖怪を人間が倒すのに確実な方法は『行動される前に倒す』という先手必勝に限る。

吸血鬼を殺すには、棺桶で眠っている間に心臓に杭を打ち込むのが一番有効であるように。様々な能力を持つ強力な妖怪相手では、如何に相手の手段を封じて攻撃するかが重要なのだ。

そこで、コレ。

あの会長の修行によって得た、極限まで突き詰めた動作のスピードとスムーズな力の流れによって、相手に感知も予測もさせない攻撃である。

今のところ、実戦で一番効果を上げている技だ。

ちなみに、この辺の理屈を忘れて強い妖怪とガチで殺り合ったりすると、吸血鬼異変時の私のようになってしまうので注意。

いや、当時はその場の空気やテンションに乗せられて、つい……。そんな風に、色々と余計なことも考えてしまったが、もはや『体に染み付いた』としか表現出来ない程自然に繰り出される私の攻撃は、悉くフランドールから先手を奪っていた。

滅ぼすつもりはないが、威力を抑えることも難しい技なので、紅魔館の壁まで吹っ飛ばしてしまった。

そこで、今度はフランドールが四人に分身する。原作の例のスペカになる奴だな。

なるほど、これで標的は四つに増えた。

四人を同時に倒さない限り、一人でも能力を発動出来れば私は即死する。なんとも理不尽な話だ。

——なので、四人同時に潰す。

振り下ろした右手に連動して、四つの衝撃波がフランドール達を押し潰した。

これにて、戦闘終了。

さすがに吸血鬼でもしばらくは動けまい。

今の技はもちろん会長の『百式観音』だが、実は最後に『もどき』が付く。

何故なら、私は会長みたいに千手観音を具現化させて行使することが出来ないからだ。あれって本当に像がぶん殴ってるらしいね。

あの世界の『念』って、単なる人体から発するエネルギーというより、ある種の『法則』みたいなんだよね。

だから、さすがに修行などで再現は難しいし、この辺は『波紋』が使えるのに『幽波紋』が使えないのと同じ理由なのだ。

そもそも、私は自分の使っている『力』がどういうものなのか、実はあんまり理解していない。

紫に博麗の巫女としての修行を見てもらった時は、それを『霊力』と呼んでいたが、さっきの離れた敵を殴る際の衝撃波とか『博麗波』で放出する光波とか、また違った種類の力っぽい。

『波紋』なんて、そのまんま別種の人体エネルギーだしね。

まー、私としては『肉体の延長として使える力』とだけ理解出来れ

ば、呼び方や捉え方なんて別にどうでもいい話だ。

魔力だろうが霊力だろうがストレッチパワーだろうが、使えるならなんでもいいんです。

漫画によって呼び方違うだけで、みんな大体同じものだし。

とにかく、これ以上問題が大きくならない内に戦闘を終わらせた私は、改めてフランドールと話をするべく、彼女の下へ歩み寄った。

まずは真意を確認しなければならぬ。

私を恨んでいるのか？ 私をどうしたいのか？ これから先、どうするのか？

私が応えられることもあれば、拒否せざるを得ないこともあるだろう。

いずれにしろ、一筋縄ではいかないだろうなあと頭を悩ませながら近づくと、不意に横からレミリアが割って入ってきた。

決然とした表情の中、僅かな怯えを含んだ瞳をこちらに向けて、倒れたフランドールを庇うように仁王立ちする。

……えっ、なにその反応傷つくんですけど。

「先代巫女——。色々複雑な思いもあるけれど、最終的にアナタには助けられたと感じている。感謝しているわ」

そう告げられた私は、内心混乱してシエーの状態だった。

父親を殺されて恨んでいると思っていた相手に、何故かいきなり感謝していると言われてしまった。

分らん。全然、状況が分からなくなってきた。

ゆ、ゆかりん近くにいないの？ 誰か私に説明して！

「でも……どうか、フランまで殺さないで。今回の件は、全て私に責任がある」

あげく命乞いまでされて、私は混乱の極みにいた。

殺すとかなにそれこわい。

やんない。やんないから、むしろこつちから頭下げるのでまず一から話し合うというのはいかがでしょうか？

下は足から上は顔面まで、動揺のあまり硬直して動けない私は、懇願するレミリアを前にただじつと佇むことしか出来なかった。

周りのフォローを期待するも、霊夢とか皆が事の成り行きを見守ろうとしているだけだし。

あの、ホント誰か分かりやすく説明してくださいお願いします。

「……別に、いいじゃない。殺してよ」

正直、私には収集のつけられない状況へ、更に爆弾が投下された。仰向けに倒れのまま、とんでもないことを言い出したフランドールに對して、レミリアが目を剥く。

「何を言っているの、フラン!?!」

「その人は巫女で、妖怪を退治する役割を持つんでしょ。」

だったら、異変を長引かせて、博麗の巫女を殺そうとしたわたしを退治するのが自然じゃない」

「アナタ……最初から」

「どっちでもよかったんだよ。ソイツを殺しても、他の誰かを殺しても、誰も殺せなくても。何がどう変わるかなんて、全然分からなかったんだから」

フランドールは地面に投げ出した四肢のように、全てを放棄した投げやりな様子で言い捨てた。

やっぱり、私には彼女達の事情や気持ち分からない。

ただ、多分だけ……彼女は、すごく疲れていたんじゃないかと思う。

「お父様が、普通じゃなかったことくらい分かってる」

どうやら、あの男は彼女達にとっていい親ではなかったらしい。

私は一つ理解出来た。

だからといって、私が父親を奪ったことで今の状況へ陥っていることは変わらないし、家族で幸せに暮らす未来の可能性を失ったのも間違いない。

それが二人にとって良かったのか悪かったのかは、私には永遠に理解出来ないだろう。

「でも、どうしようもないよ。わたしにはお父様しかいなかった。それともう、いなくなっちゃんだから」

フランドールは笑っていた。

狂気など感じられない。ただ弱った子供が浮かべる、置き去りにされた後のような力のない笑みを。

「わたしの傍には、もう誰もいない」

私は悟りきったようなその言葉に、思わず拳を握り締めた。

「ち、違う……フラン、私……っ」

「誰も……」

必死に語りかけようとするレミリアが、まるでそこにいないかのようには振舞う。

私は、心の底から湧き上がる熱い感情のままフランドールに歩み寄った。

「わたしがいなくなっただって、誰も悲しまないんだからさあ」

——はいっ、我慢の限界キタコレ！

なあにを言っちゃってるんですか、この子はア!?

私はフランドールの胸倉を掴み上げると、驚きに見開いた眼を真っ直ぐに睨み付けた。

「甘ったれた事言っでんじゃあねーぞッ！ このクソガキがッ！ もう一ペン、同じ事をぬかしやがったら、テメーをぶん殴るッ！」

……やった。

やってしまった。

ああっ、思わず湧き上がった感情のままに怒鳴ってしまった。しかも興奮してたから、他人の台詞で怒ってるあたりが救えない。

おまけに、考えるより先に叫んでたから支離滅裂。ぶん殴るって、もうさつき殴ってるじゃないか私のバカ。

でも……子供がさ、『死んでもいい』とか『誰も悲しまない』とか言っちゃ駄目だって。

もう泣きそうな表情で心配してる傍らのレミリアにもっと眼を向けなさい。実の姉でしょ。

いきなり怒鳴りつけたことを棚に上げてしまうが、そこだけは私もハッキリと怒ってるよ。

自分だけで悲しいことや苦しいことを処理しちゃって、一人で死ぬ結論を出すことは絶対に許されないことだからね。

だが、それ以上に私が怒りを抱いているのは、この子にこんなことを言わせてしまう事情全てだった。

っていうか、親！ 親何してんだよテメー、一番気付くべき立場にいるんだろが。子供にこんな顔させてんじゃねーよ！ こんなこと言わせてんじゃねーよ！

私もうブチギレですよ。出て来いよ、一度ぶっ飛ばしてやるよ！

具体的には心臓素手でぶち抜いてーもうやってるじゃねえかああーっ！ あのクソ紳士、もっと苦しめとけばよかった!!

いや、待て。

興奮してる場合か。落ち着け、私。

親が何してたかなんて今更もうどうでもいいんだ。

今、重要なのはフランドールのことなんだ。私が怒りの発散場所を探したところで何の意味もない。

「あ……う」

私の剣幕に、フランドールは呆けたようにこちらを見返すだけだった。

上手く言葉が出てこない。

それは私の方も同じだ。次の言葉が出てこない。

このまま説教すればいいのか、慰めればいいのか。

どちらも違う気がする。他人事への自己満足か同情をそれぞれ言葉に摩り替えただけのような気がする。

私はこの子の親ではない。赤の他人だ。種族さえ違う。

しかし、私はこの子を叱った。

傍に誰もいないと、蹲って嘆くこの子を怒鳴って無理矢理こちらへ顔を向けさせた。

ここまで踏み込んだのだ。今更後退ることなんて出来ない。

「自分が死んでも、誰も悲しまないなんて……絶対に言うんじやない」
結局、私がかろうじて口に出来たのは、そんな当たり前のことだった。

他にも、いろいろ語るべきことがあるのかもしれない。

私の知らない事情も踏まえて話し合って、そこにレミリアも加えて

しかし、今何よりも必要なのはフランドールを真つ直ぐに見据えて、語りかけること。それ自体なのだ。私は考えていた。

互いに、ただ見つめ合うだけのまま、しばらく沈黙が過ぎる。

「……………あの」

フランドールが、消え入りそうな声で言葉を紡いだ。

また、しばらくの間沈黙が続く。

私は辛抱強く待った。

「ごめん……………なさい……………」

「……………何がだ？」

「もう……………死ぬなんて、言いません……………」

フランドールは、本当に掠れそうな小さな声で、それでも叱られたことに対して謝った。

叱られたことを受け入れ、しっかりと謝ったのだ。

私は内心で安堵した。

私なんか気が揉む必要も無く、この娘はちゃんと自分で正しい答えを導き出した。

だったら、叱った私がすることは決まっている。

「よく出来た。偉いぞ、フラン」

私は自然とこの子をそう呼び、そつと頭を撫でていた。

「お前が死んだら、悲しむ人がいるよ」

君の姉であるレミリアや、今は違いかもしれないがいずれきつとそうなる紅魔館の皆。そして私も含めて。

フランは撫でられるまま、呆然と私を見上げていたが、やがてその瞳に涙を溜めると、私の胸に顔を埋めて大声で泣き出した。

おー、よしよし。

間違ったことをしたら、叱られて、謝って、そのことを褒められる。親の教育と愛は、与えられて当然のものなんだ。

それをフランに与える奴がこれまでいなくて、これからも現れないのなら……………オーケー、分かった。

私がやる。

残りの人生全て賭けてでも、やる。私がこの子の心に踏み込んだ一歩は、きつとそれくらい重いものだと自覚したのだった。

……とここでさっきから背骨がギシギシ言ってるんだが？

抱きつくのはいいいけど、吸血鬼の腕力を考慮してもらえると嬉しいなっついてででででっ!?



それは、フランドールが過ごした495年間の無情な時間に投げ込まれた波紋だった。

目の前の人間に怒鳴られた時、彼女が最初に感じたのは純粹な驚きであり、すぐに様々な疑問がそれに代わった。

怒鳴られるという経験は、実は初めてのことだった。

父親は自分を見る時いつも残酷な愉悦を顔に浮かべていたし、姉は何かを必死に伝えようとする一方で自分に怯えていたような気がする。

フランドールは、生まれて初めて本気で怒られたのだ。

不思議な気持ちだった。

殴ると言われたのに、それは先程の戦いで巫女自身がしたことや父親が笑いながら自分にするような行為とは全く違うものに思えた。

娘を傷つけられたからかとも思った。家族を傷つけければ、怒るものだからだ。

でも、それも違う気がする。

何故、この人はこんなにも真っ直ぐにわたしの眼を見るんだろう？

この人の視線と言葉には『恨み』だとか『嫌悪』だとか、人を『侮辱』するようなものは何も感じられない。

本気になって、自分を怒っている。

そうしてくれている。

空っぽだったフランドールの胸に、熱いものがこみ上げてきた。

こんなにも強く、大きな感情が自分の中の一体何処に隠れていたのか不思議だった。

自分を見つめる強い視線に急き立てられるように、フランドールは言葉を探した。何か言わなければいけない気がする。

口にするべき言葉を探しながら、その欠片さえ見つけられない、これまでの自分の空虚な時間に愕然とした。

これまで何も感じていなかった495年間の時間に対して悲しみすら抱いた。

本当に、何もないのか？

こんな時、どんな言葉を返せばいいのかさえ分からない。そんな中身のない日々を自分は送ってきたのか？

必死に考えた末に、フランドールが思い出したのは姉であるレミリアに教えられたことだった。

家族を——大切な人を傷つけられれば、怒る。

死んでもいい、と。自分自身を傷つけようとした行為が、目の前の人間を怒らせたのだ。

だから、この人は本気で怒ってくれたのだ。

家族でもなんでもないはずなのに。

「ごめん……なさい……」

自然と、言うべき言葉が口から出ていた。

同時に本当の家族である姉のことを想っていた。

何故、彼女がいつも自分に語りかけることに必死になっていたのか、今になって理解出来たような気がする。

「もう……死ぬなんて、言いません……っ」

そうして謝るフランドールの頭を、優しい手のひらが撫でてくれた。

——よく出来た。

——偉いぞ。

目の前の人はそう言って褒めてくれた。ただ数言、謝っただけなのに。

父親が面白半分で自分を責め立て、殴られ、存在しない怒られる理由を理解できないまま媚びるように謝った時とは違う。

自分の為に本気で怒ってくれた人に対して、間違っていたことを理

解して謝り、そのことを褒められた。

初めての経験だった。

胸の奥に溜まり続け、焼けてしまうのではないかと思うほど熱くなった感情の渦。もう堪え切れなかった。

周囲の物事に流されるまま、投げ出していた全身に強い力が戻るのを感じる。

強すぎるそれらの衝動を、自分ではどうにも出来ず、目の前の人間に縋りつくように抱きついた。

両目から溢れ出そうとする熱を堪える為に、その人の胸に顔を埋めた。

全身で感じられる相手の暖かな体温と、背中に回された包み込むような腕の感触が、感情を押さえるところか最後の枷を外した。

もう我慢出来ない。

我慢なんかしなくていい。

フランドールは生まれて初めて、今確かにそこにいる誰かの腕の中で――泣いた。



「責任を取って、私がフランの母になろう」

「却下ですわ」

一世一代の私の決意は、笑顔の紫にあっさり切り捨てられた。

え、駄目なの？　いろいろと自分のやつちやつたことも含めて考えた結論なんすけど……。

周りの皆の視線も驚きだとか呆れの色ばかりで、私自身と俯いてもじもじしているフラン以外なんか浮いてる状況だった。

うむ、唐突すぎたか。恥ずい。

「とりあえず、貴女は少し黙っていてくださいな。

もう十分、場を混乱させましたけれど、これ以上話をややこしくしないで頂戴」

この場を仕切る者として、紫が呆れたように言った。

その後、唐突に登場した紫は、面識のある者や初対面の者それぞれの反応を無視して、自分の立場などを改めて明かし、今回の異変やその終息に関して話し合うことを提案したのだ。

正直、事態の收拾に全く目処のついていなかった私がそれに賛同し、なし崩しに全員が紅魔館の客間に集まることになった。

紅魔館で発言力のある者として美鈴まで参加しているが、唯一咲夜だけが負傷の為別室で安静にしている。

先程まで敵同士だったり、暴走してしまったり、突然出てきた初対面の大妖怪だったりで、なんとも混沌とした状況で顔を合わせているが、とりあえず皆この場に納まっていた。

「さて、ではまず今回の異変に関して」

幻想郷の代表者とも言える紫が、改めて話を切り出した。

「レミリア・スカーレット。博麗の巫女との決闘に対して、敗北を認め、紅い霧を消しますか?」

「ええ。私の負けだわ」

「よろしい。では、今回の異変はこれにて解決」

なんかもうお役所仕事としか言いようのない、事務的な流れであったり一つの問題が決着する。

まあ、出来レースであった事情を知っている者としては、むしろ納得出来る話だけだね。

釈然としない顔をしている魔理沙と、何故か紫を警戒しまくっている霊夢には堪えてもらうしかない。

「さて、次はスペルカード・ルールを破った者への罰。まずは紅美鈴」

「えっ、あれってスルーしないんですか!?!」

「レミリア、当主として下す処罰は?」

「一週間、館中の便所掃除」

「では、この問題もこれで解決」

「ええええええっ!?!」

美鈴への罰も超スピードで決着。投げやりすぎてちよつと不憫。

「では、最後にフランドール・スカーレットについて」

今回の一番の問題点が挙げられた。

ルールを無視したこともそうだが、博麗の巫女である霊夢を殺そうとしたことが事態を拗れさせている。

博麗の巫女とは、今回のスペルカード・ルールを提唱したように、幻想郷の秩序の管理者なのだ。

そして、それ以上に幻想郷を包む大結界の要となる役職でもある。その巫女を殺そうとすることは、この幻想郷そのものを脅かすことに他ならない、と——実はかなり大事だったりする。

まあ、私と霊夢がそうであるように他人でも代替わりは可能なので、そのまま結界の破壊に繋がるわけではないし、そもそも私が現役の際は死にかけることも珍しくなかった。主に修行のせいとかで。

要は、博麗の巫女はこの地の存亡に関わる重要な役割であり、それ故に幻想郷の妖怪は巫女を重視し、最終的には従わざるを得なくなる。

妖怪による異変の発生は、絶対者である博麗の巫女が介入することですでに解決に繋がる。言ってみれば既に完結した流れなのだ。

理不尽に思えるかもしれないが、幻想郷はそういった物事の循環で成り立っている。

その前提を、幻想郷に住む者でありながら破壊しようとしたことが、フランの罪となっているのだろう。

結論としては、この事実を隠蔽するか……たぶん紫なら何らかの処罰を見せしめとして与えるのが普通だ。

さすがに、封印とか滅ぼすとかはしらないと思う。

でも、私が外の知識と常識を持つ人間だからこそ考えるのかもしれないが、ここに温情を挟む余地があってもいいのではないだろうか。フランには事情があったのだ。

それを考慮することは、別に筋違いではないだろう。

——さて、では具体的にどう意見するか？

それで冒頭の話に戻るわけだが、私がフランの親代わりになって、責任を持って今後の矯正や教育に努めていくって提案はあえなく却下された。

何故だ。

いろいろ説明が足りなかったかもしれないが、いい考えだと思ったのに。

やっぱり、実の姉であるレミリアから引き離すという点がマズイのかなあ。

心情的にも、血の繋がりと私より遥かに長い年月妹を思ってきた彼女を蔑ろにするのは確かによろしくない。

となると……レミリアも一緒に娘にするという案でどうだろうか？
お母さんって呼んでくれるかしら？

いや、紅魔館の当主の親に人間が納まるってのは問題か？ 部下と
かもいるし。

「……なら、紅魔館の住人全てが娘になるというのはどうだ？」

「どうだ、じゃありません」

神妙な表情で思い付きを言葉にして呟いたら、紫に頭を殴られた。
痛い。

「さつきからおふくろさんの様子がおかしいぜ」

「あー、あたしもあんなの初めて見たわ」

「顔を合わせるの二度目だけど、意外な面を見たわね」

「結構、魅力的な提案かも……」

「美鈴、自重しなさい」

周りからはなんか色々好きに言われてしまっている。

フランは黙ったままだけど、こちらをチラチラ伺って、時折恥ずかしそうに俯いてるし。かわいい。

紫は頭痛を堪えるように、額に軽く手を当てると、気を取り直して
周囲を見回した。

「それではフランドール・スカーレットへの処罰について。

当主であり肉親であるレミリア・スカーレットに一任します。今後の彼女の管理とその責任についても同じ。今回の異変の間起こった事態については、隠蔽するという方向で。

これでよろしいかしら、レミリア？」

「……随分と、甘い処置ね」

「二度目はありませんわ――」。

それに、その先代巫女には何か考慮することがあるようですし、厳罰を下してこれ以上厄介な案を挙げられても疲れます」

ジト眼で私を見るゆかりん。『困ります』ではなく『疲れます』の辺り、私に呆れてるのが分かる。

すんまそん。でも、その優しさに感謝。

「貴女も、本当に自分の立場を理解しているのかしらね？」

軽率な発言は控えなさい。考えなしの言動より先に、自分が周りにどう思われているのかを理解しなさいな」

紫に少し真面目に怒られた。

分かってますって、私は紫が思うほど鈍い人間じゃない。

フランを娘にするなんて発言がどれだけ常識はずれでおかしなことなのか十分に理解している。

その上で、なのだ。

フランの今後を担う覚悟も無しに、彼女を叱ったり、抱き締めたりしたわけじゃない。

『子供を正しい未来へ導く』『自分の意思を持って未来を選ぶようにする』両方やらなくちゃいけないのが、母親のつらいところだな。覚悟はいいか？ 私は出来てる——。

「……全然理解してないって顔ね」

自分でも確固たる決意を持った表情を浮かべていたと思うのだが、何故か紫にはダメ出しされた。

えっ、これでも駄目なの？

「だから、もつと自分の周りに気を配りなさい。もう霊夢に睨まれるのはうんざりよ、私」

「気安く呼ぶんじゃないわよ、妖怪」

呆れを通り越して脱力している紫に対して、何故か険悪な様子で霊夢。

あれ？ 紫の素性に加えて、霊夢には彼女が私と同じ育ての親みたいなものだと言明はしたはずなんだが。

急に親しくなられても親として妬ましくなるが、なんで逆にそこまです嫌ってるの？

妖怪という点を除いても必要以上に紫に敵意を持つ霊夢と、その娘からたまに向けられる何かの抗議の視線の理由が分からず、私は気まぐげに黙り込むしかなかった。

結局、紫の言う通りなのか？

わ、分からん……。



「——なんとも、騒がしい夜だったわね」

全ての者が在るべき場所に戻り、部屋にレミリアと二人きりになると、パチュリーは窓の外を眺めながら呟いた。

夜が明けようとしている。

「フランは？」

「眠ったわ。地下の破られた封印は修復していないけれど」

「ええ、それは明日からでかまわない」

不安定な精神に制御しきれない強大な力を持つフランドルが暴れるのを防ぐ為に、封印を施していたのはパチュリーだった。

もうその必要がない、とはさすがに言えない。

あの娘は、あまりに長い時間傷つきすぎた。気が狂ってしまうほどに。

495年間分の痛みが、たった一夜で全て癒えるはずはない。彼女から奪われた分と同じだけの、穏やかな長い時間が必要なのだ。

しかし、それでも。

今夜だけはかまわないだろう。

きつと今夜だけは、あの娘は悪い夢を見ない。

「……495年間、私は一体何をしてきたのかしらね？」

この場に親友だけしかいないことを確認して、レミリアは自嘲の呟きを漏らした。

今夜、多くのことが変わった。

この紅魔館に巣食った父の呪いを、少しでも振り払う為に今回の異変を起こした結果、最良とも思える現状を手に入れた。

だが、それは果たして誰の手によるものか。

長い年月を掛けて、自ら振りほどくどころか縛られ続けるしかなかった、自分と妹の呪縛を打ち砕いたのは皮肉にも人間だった。

レミリアは己の無力さと情けなさを噛み締めていた。

「アナタもまた、親を失った子供だったということよ」

親友を気遣い、あえて素っ気無くパチュリーは告げた。

「無力な子供だったから許されるとでも？」

「子供は親から離れ、大人になるってこと」

「ふん、私より年下のくせに随分と語るわね」

「積み重ねた年月が心の成長を伴うとは限らない。妹様の495年間
が、その成長に何も貢献しなかったようにね」

レミリアの剣呑な視線を受け流し、自分の語った内容に対して思い直したように首を振る。

「いえ、少し違うわね。」

少なくとも、アナタから受けた言葉によってあの娘は何かを学んでいた。そうでなければ、きつと先代巫女の言葉にも応えることは出来なかったでしょう」

「なによそれ……慰めているつもり？」

「事実よ」

パチュリーの淡々とした口調からは冷たさを感じたが、むしろそれが下手な慰めの意味を持たせず、真実としてレミリアの心に浸透した。

レミリアは自嘲を止め、これまでの出来事や今夜起こったことを一つ一つ整理していった。

恐ろしかった父。

傷つけられた妹。

抑圧された日々。

そこからの突然の開放。

そして今夜、唐突に与えられた自由の中で呆然と佇むしかなかった自分に、強引にもたらされた変化。

「甘ったれるな、か……」

博麗の巫女に叩きつけられた、容赦の無い言葉がいつまでも胸に残る。

「親子揃って、吸血鬼に厳しい奴らね」

そう呟いて不貞腐れる親友の横顔を一瞥し、パチュリーは思わず苦笑した。

◇

紅魔館での話し合いが終わり、紫から今回介入したことへの軽い小言や美鈴との再会の約束なども受けて、私は霊夢と魔理沙の三人で帰路についていた。

お互い住む場所は違うが、その場で解散することなく自然と三人で夜明け間近の道を歩いている。

私を挟む形で三人が並んで歩き、隣の魔理沙は今夜の戦いの興奮が残っているのか、色々と積極的に私に話し掛けてくる。

やれ、あの光線はなんだの、背中に観音様が見えただの——え、それマジ？

とにかく、そんないい意味で騒がしい魔理沙に反して、霊夢の方はずっと黙りっぱなしだった。

紅魔館で話し合ってる間も、必要最低限しか話していないような気がする。

更に加えるなら、私に対して全然話し掛けてくれてない。

どうということなの……。

なんで、娘に無視されてるの？　こんなに霊夢を怒らせるようなこととしたっけ？

話を聞きながら、内心青褪めてチラチラ隣を伺っていると、それに気付いた魔理沙がなにやら『任せておけ』と言わんばかりの笑顔で頷いた。

「おい、霊夢。お前も何か話せよ。一月に一回しか会えない人なんだから。拗ねて黙り込むなよ」

「は？　別に拗ねてないし」

拗ねてる……のか？ 不機嫌なのは確実に分かるけど。

霊夢は冷め切った視線で一瞥したが、魔理沙はそれに全く怯まず、むしろ愉快そうに笑った。

「安心しろよ。お前のおふくろさんは、お前を愛してるぜ」

「なんだか分からんが、その通りだ」

とりあえず、魔理沙の言葉に便乗して真摯な気持ちで打ち明けたが、霊夢の反応は頭痛を堪えるような仕草だった。

なによその紫みたいないな反応。

今回の私は完全に間抜け扱いされている。それでも真面目に考えてるのに……。

「わたしも無敵の巫女って感じてたけど、意外と普通に落ち込むみたいだぜ？ あんまりその人いじめるなよな」

それだけ言うと、魔理沙は突然箒に跨って、去り際に『またな！』と手を振って飛んで行ってしまった。

その後ろ姿を、霊夢は睨んで見送っていた。

なんか、余計に状況を引つ掻き回されて置いてかれた気分。

とりあえず、私達も帰ろうか、と霊夢を促した。

二人だけになった道。

喋る者がいなくなったせいで、沈黙が続く。

うーむ、話題が見つからない。

そういえば、霊夢の腕の傷の具合はどうだろう？ 一応、包帯を巻いているが、パチュリーの話ではもう動かせるらしい。

肉を抉るほどの重傷だったという話だ。

霊夢には公式チート技があるから大丈夫だと思ってたんだが、不測の事態なんて幾らでも起こるものだと痛感した。

博麗の巫女というのは、幻想郷のルールに守られる存在であると同時に、それを守らせる為に違反への實力を行使しなければいけない役割なんだな。

危険なことは、これから幾らでも起こり、霊夢は自らそこへ飛び込まなければいけない。

心配なのは当然だけどね。危険な目に遭うことが、そのまま霊夢の

不幸へ繋がるわけではないということも理解している。

博麗の巫女という務めに抵抗を感じているのなら無理はさせないんだが、霊夢自身が望んでいるし、天職でもあるしなあ。

結局、私が勝手にやきもきしているだけの独りよがりなのかしらん？

「……母さん」

いろいろと悩む私だったが、不意に霊夢が声を掛けてきた。

なんだかんだ言っても、霊夢が私を蔑ろにすることはない。

ささやかなことだけど、ちよつと嬉しい。

「あたしって、母さんに怒られたことあったかしら？」

んー？　なんだか唐突な話題だね。

そういえば、私ってば霊夢を怒鳴ったりした記憶ないかな。

基本、教えたことは一を知って十を理解する要領の良さがあるし、人としての倫理観もしっかり持っている。

まあ、妖怪には対応がちよつと苛烈なところがたまにキズって程度だね。

そんな感じに答えると、霊夢はなにやら難しい顔で考え込み始めた。

「……母さんが、あたしに対して本気で怒るのって、どんなこと？」

あらら、それはまた返答しづらい質問だ。

正直な話、霊夢が私を本気で怒らせるというのは想像出来ない。

例えば、人里で虐殺行為を働くとか、フランのように自分を粗末にするとかか？

どれも霊夢では在り得ないと断言出来ることばかりだ。

そういう確固たる信頼があった。

その上で、霊夢の質問にあえて答えるとするなら。そうだねえ――

「怒る、というのは違うかもしれない。ただ、私が絶対に受け入れられないことはある」

「それは？」

別に特別なことじゃないんだけどね。

「私より、不幸になることだよ」

親の望みとしては、こんなもんです。

傷ついても、命の危険にさらされても、それが霊夢自身の選んだことなら仕方ない。

私はただ、親として勝手に心配して、邪魔にならない範囲で手助けしてあげただけだ。

霊夢が出した答えや、掴み取った結果によって、幸せだと感じてるのならそれでいいのだ。

「……そっか」

ちゃんとした質問の答えになっていないような気がしたが、霊夢は何か納得したかのように小さく頷いた。

ふむ、なんだか晴れやかな表情になったようで大変結構。

霊夢に嫌われたままとか、私の心労がマツハだからね。

……って、あら？

いつの間にか霊夢が私の手を握っている。

やだ、ツンの後にこのさりげないデレ……我が娘つてば、マジ侮れん！

内心へヴン状態になりながら、私は繋いだ手を握り返した。

霊夢と私。二人並んで手を繋ぎ、人里が見える位置まで歩く。

朝日が顔を出し始めた。

日の光に照らされる風景は、紅い霧が消え、久しぶりに幻想郷本来のものとしての姿を現していく。

それを眺めながら、私は今回の異変が解決したことを実感した。

幕間「紅魔先代録」

【紅美鈴の後日談と前日談】

生まれ変わるような気分とは今のようなことを言うのだろうか。

この紅魔館自体もそうだが、何より私自身があの日を境に大きく変わったような気がする。

私、紅美鈴はもう以前までの私ではない。

与えられたねぐらと餌を何の疑問も持たずに受け入れ、使い潰されることに反抗の意思すら持たない狗ではない。

ただ一つ。あの人に認められたという自負がある限り、私は二度と誰かに屈服することはないだろう。

もし、かつての狗に戻れば、それは私を認めてくれたあの人を貶めることになる。

そんなことは何人であろうと許せない。

私は私自身の意思で生きる。

そしていつか、もう一度あの人の前に立った時、恥じることなく名を名乗れるまで強くなるのだ。

先日、八雲紫が紅魔館にやって来た。

この幻想郷と呼ばれる地へ侵略行為を行った紅魔館の当主は制裁されたが、娘のレミリア嬢が次の当主へ成り代わり、今後の扱いについて話し合いに来たらしい。

私のような一介の門番には関係のない話だ。

いや……もう、この紅魔館自体に関わることもないだろう。

私は今夜にでもここから出て行くつもりだ。

以前の当主にすら忠誠心はなく、日々の糧を得る為に働いていた。だが、私はもうその日の食事と眠る場所だけで満足出来ない。

強くなりたいのだ。そして、この世界を知り、成長し、いずれあの人の前に立つのに相応しい存在になりたい。

当主を失い、多くの部下もいなくなったこの館はこれから慌しく、また逆に寂れもしていくだろう。

そのことにわずかな同情は湧くが、それ以上の情を抱くほど恩義があるわけでもない。

あの異変での僅かな生き残りには悪いが、私がこの門を守るのも今日までだ。

さて、ここを出たら何処へ行こうか？

ここは幻想郷。私にとって、全く未踏の地だ。不安はあるが、それ以上に興味深くもある。

この館へ辿り着いたのは当てのない放浪の末にだったが、今回は修行という明確な目的を持った旅をするのも面白いかもしれない。

……少し邪な考えが浮かんた。

散々こき使われたのだ、去り際に少しくらい餞別を頂いていってもいいのではないだろうか。

警備をする者が激減したとはいえ、館内の調度品などはかさばるからよろしくない。

ここは一つ、地下図書館にでも忍び込み、売れそうな書物を幾つか失敬していこう。

あそこを利用するのは陰気な魔法使いが一人だけ。

大した物でもなし、良心にも優しい餞別だ。

昨日の内に紅魔館を出るつもりだったが、何故か今も私はここにいらる。

それというのも、昨夜図書館に忍び込んだところ、例の魔法使いと鉢合わせしたからだ。

見つかったというのなら話は単純なのだが、彼女は血を吐いて死にかけていた。

予想外の出来事に、私は大慌てだった。

これならまだ、盗人を警戒して待ち構えていたという方が驚かない。

ワケが分からなかったが、内臓などではなく、喉か口内あたりに怪我を負い、出血していることまで調べた。

傷の度合いはともかく、血が喉に詰まって酸欠を起こしていたの

で、慌てて血を吸い出したり、呼吸が安定するように寝かしつけたりと、気が付けば治療と看護に専念して夜が明けていた。

目を覚ました魔法使いに掠れた声で礼を言われたが、非常に複雑な気分である。

あれから数日経った。今も私は紅魔館にいる。

魔法使いのパチュリー・ノーレッジは、あの時自身に掛けられた声を抑制する刻印を解除しようとしていたらしい。

私には専門的なことはさっぱりだが、無理矢理解除しようとした結果、喉と舌に大きなダメージを残すことになったとか。

舌はともかく喉はまずいだろう。呼吸すら辛そうだ。

パチュリーは治癒魔法を使えばすぐに回復する、もう自分の魔法を抑制する者もないと自信を持って言っていたが……喉と舌にダメージを抱えて、満足に声も出せない現状で魔法など使えるのだろうか？

魔法使いつて呪文を唱えているイメージがあるのだが、今も筆談でやりとりをしているというのを理解して言っているんだだろうか？

その辺りのことを尋ねてみたら、ベッドに潜り込んでシーツを頭まで被った。

どうするか考えてなかったんかい。

仕方がないので、私が引き続き治療することにした。

館の周囲を探索すると、薬草が群生しているのを見かけたので、採取して煎じる。

かなり昔の話だが、私の生まれ故郷で見たことのある薬草だ。

となると、幻想郷とは紅魔館のあった大陸ではなく、私の故郷である海を渡った東方か、それに近い場所にもあるのだろうか。

いずれにせよ、私の知識が活かせるのなら生活もしやすい。なかなか住み心地の良い場所のようだ。

煎じた薬草は死ぬほど苦いようだが、涙目のパチュリーの口に無理矢理含ませ、咀嚼して吐かせる。これを繰り返す。

元々、外傷に使う薬草なのだから味が酷いのは仕方ない。

口の中が麻痺して苦味しか感じないとか泣き言言ってるが知ったことか。甘ったれるな、もやし魔法使い。

更に数日が経った。何故かまだ私は紅魔館にいる。

もやしが中々飯を食わない。

味覚が麻痺して苦いだけだとか言っただけあって拗ねているようだが、栄養も取らずに傷の治りが早くなるわけがない。

八雲紫との話し合いがどんな決着を迎えたのかは分からないが、ある日から紅魔館は周囲に结界を張られ、あの妖怪に管理される場所となった。

いつまでこれが続くのか知らないが、管理というだけあって食料などはしつかり届けてくれている。

米が手に入ったので、野菜と薬草を混ぜ込んでドロドロになるまで煮たお粥を作った。

これならパチュリーも食べやすいだろう。全く、世話の焼けるもやしだ。

何、今度は熱くて食べられない？ 頭からかぶせるぞ。

そんな偉そうな顔で「ふーふーしろ」とか、私はお前のお母さんか。

……冷ましてあげるから、自分で食べるくらいはしなさい！

今更だが、何故私は未だにこの紅魔館に残っているのだろうか？

人間の使用人は当主の魅了が解けて出て行くか、精神に異常をきたして死ぬかして、残された僅かな数の妖精メイド達に混じりながら掃除をしつつ自問する。

あの死にかけもやしとの遭遇から今日まで、流されるままに居ついでしまった。

あれは厄日だったのか？

彼女の看護もあるが、取り仕切る者のいなくなった館内では妖精メイド達もほぼ烏合の衆と化しており、全然仕事をしていないのでそっちもやる羽目になった。

一応、私も生活している場所なので率先して仕事をしていたら、い

つの間にかメイド長みたいな扱いになっていた。

なんかどんどんどツボに嵌っているような気がする。

私には仕事以外にもやるべきことがあるのに……。

あの人に指導されたことを反復し、格闘に関することを我流だが学び始めているのだ。

元々、私は妖怪として生まれたての頃に自身の弱さを補う為、地元
に伝わる人間の拳法を見様見真似で身に付けていた。

人間の技術だと馬鹿には出来ないもので、これのおかげで当時の私
は弱肉強食の世界で生き残っていたようなものだ。

まあ、結局中途半端につけた力のせいで強い妖怪に追い回され、彷徨った果てがこの場所だったのだが。

紅魔館に拾われてからは、せいぜい『人間の芸を身に付けた妖怪』という物珍しさ程度の見方しかされていなかったが、あの人はそんな私の力を見抜き、鍛えるべき価値のあるものと見出してくれたのだらう。

気まぐれだったのかもしれないが、あの時与えてくれた言葉が今の私の大きな指針となっている。

この拳法は、今や私の誇りだ。

そうそう、門番以外の仕事が増えて、最近面倒事ばかりだが、一ついいことがあった。

日々の仕事の傍ら、拳法の鍛錬も欠かさず行っていると、たまにそれを見ていたパチュリーが図書館から東洋の武術指南書を幾つか探し出してくれた。

それによつて、我流だった拳法をより深く極めることが出来るようになったのは僥倖だ。

あのもやし魔法使いの世話をして恩を売った甲斐があった。

代わりに、もつと美味しいもの食わせるとか、薬草を煎じた薬茶じゃなくてハーブの紅茶が飲みたいとか、わがままが増えてしまったが、正直今回のことに関しては感謝の方が大きいので渋々従うことにする。

大陸の料理か……食べたことすらないよ。当時口にした物はパ

ンとか野菜片のスープとか、粗末なのばかりだったし。そっちの料理本も探してもらおうかな。

とりあえず、あの怪我以来喘息を患うようになったので喉に良い薬茶は定期的に飲んでもらう。滅茶苦茶苦いだろうけど。

はいはい、泣き言は聞きませんよ？ パチュリー様。

一年が経った。

新しい当主のレミリア嬢は部屋に閉じこもったまま、食事も取らずに出てこないらしい。

父親を失ったのだから当然か？

とはいえ、真つ当な親への情が原因とは思えない。なにか複雑な心境があるのだろう。

私では下つ端時代からレミリア嬢と接点がないし、意外にも前当主の頃から交友関係があったパチュリー様が話し掛けても大した反応は得られないようだ。

聞けば、妹のフランドール・スカーレットも地下に引き籠もり、しかもこちらは精神を病んでいることから必要に応じて封印処置すら施されているらしい。

先行き不安な姉妹だ。

まあ、あんな父親がいたら当然か。パチュリー様から前当主に受けた仕打ちをたまに聞くが、反吐が出る輩だったようだ。

紅魔館の仕事は、一応順調に回るようになってきている。私の指示に従う要領の良さも出来てきた。

しかし、私はここで働く者を統括する役割を担っているだけであつて、権威を持ち、支配する存在ではない。

権力者のいない紅魔館は、単なる集団生活場所以上の意味を持たない。

当主があんな調子ではこの館も、もう長くはないだろう。

随分と長居してしまつたが、やはり近くにここを出て行く方がいいのか。

……しかし、私は思い出していました。

恩義などないと言ったが、レミリア嬢のことを考えていて、つい最近気付いたことがある。

この『紅美鈴』という名前は、紅魔館へ来てから付けられたものだ。名前もない妖怪が門番という閑職に放り込まれてしばらくして、当時のレミリア嬢が戯れに私に付けたのがこの名前だ。

門番は紅魔館に訪れる者が見る最初の住人。名前もないなど格好がつかない——とかなんとか。貴族特有の気取ったガキだと思ったものだ。

今考えてみれば、あれは当時父親に抑圧されていた彼女の憂さ晴らし程度のものであったのだろう。

だが、今はこの名前に深く感謝している。

あの人と初めて会った時に、私は名乗ることが出来たのだから。

そして、いずれ再会した時に改めて名乗る為の名前を持っているということも感謝すべきことだ。

私自身が持つ、何物にも代え難い財産だと言えるだろう。

なるほど。ならばこれは、私が持つレミリア・スカーレットへの恩義だ。

向こうが私をどう思っているかは知らないが、これでこちらには紅魔館に残る理由が出来た。

別段、ここを出る理由も大きなものではない。

パチュリー様のことも気になるし、今しばらくこの館に残って働いてみるのもいいのではないか……な？ どうだろう？

冷静に考えると問題が未だ山積みであることを思い出した。軽率だったかなあ。

とりあえず、恩義に応える為に、引き籠もったレミリアお嬢様を部屋から引きずり出すことから始めましょうかね。

ある日、紅魔館に人間の少女が迷い込んできた。

この場所には結界があるので、そこへ意図せずとも入り込んだこの少女が何らかの異能者であることは明白だ。

原因は分からないが衰弱しきっていたので、数日間なし崩しに世話

をしていたが、レミリアお嬢様がこの少女から何かを見出したらし
く、紅魔館のメイドとして教育することになってしまった。

落ち着いたら人里にでも送り届けようと思っていたのだが、いいの
だろうか？

吸血鬼や魔法使いの住む館に人間かあ……本来なら気が進まない
ことだが、妙な期待を抱いてしまう私がいる。

この紅魔館と、何より私自身を劇的に変えたのもまた人間であつた
からだ。

この娘が紅魔館に一体どんな変化をもたらすのか、考えずにはいら
れない。

名前は、お嬢様の命名で『十六夜咲夜』に決まった。

異変を起こす日が決まった。

陥落と再生の時から十数年が経ち、ついに紅魔館の結界が解かれる
日が来たのだ。

レミリアお嬢様と八雲紫の間ではなにやら裏取引があつたようだ
が、私には気にするほど重要な話ではない。

異変解決にここへやって来るだろう『博麗の巫女』への興味だけが
あつた。

残念ながら、あの人は数年前に博麗の巫女を引退し、現役を退いた
と聞く。

加えて、今回の異変を機に幻想郷に新しい決闘のルールが加わるら
しく、かつてのような生死をかけた戦いは起こせなくなるらしい。

スペルカード・ルールというものも中々よく出来た内容だと思
うが、これまでの鍛錬が直接実を結ぶことのない戦いが主となるのは、
あの人の引退も含めて無念極まりない。

しかし、だからといって腐っているわけにはいかないだろう。

私はそんな軟弱な意志であの人を目指したわけではない。

これまで培ったものを活かし、この新しいルールの上でも力を付け
てやろうではないか。

その上で、やって来る博麗の巫女と正面から戦うのだ。

……ということ、なし崩しに始まり、気が付けば随分と長い間居ついてしまった館の管理者としての地位を降りて、一介の門番に戻ることにした。

レミリアお嬢様や咲夜を始めとして、意外なほど周囲の反対にあつたが、パチユリー様に頼み込んで強引に意見を押し込んでもらうことに成功する。

私のこだわりを理解しているパチユリー様相手だと、やはり話が早い。

ただ、パチユリー様自身も本心では賛同していないようだ。

やれやれ、まだ昔の召使い感覚が抜けませんか？ と、茶化してみたら不機嫌になったらしく、飲んでいた紅茶をぶっかけられ、代わりに薬茶を用意して来いと言われた。

……何故に？

なんだか周囲の予想外の反応に遭いながらも、私はかつて立っていた場所へと戻って来た。

今回の異変でやって来る次代の博麗の巫女は、あの人の娘として育てられた後継者らしい。

当然、その実力は高いのだろう。

あの人本人ではないが、その教えを受けた巫女相手に全力で戦うことも私にとつては大いに意義のあることだ。

正直な話、妬みがないとは言えない。

私があの人に望んだものを、その娘は全て手に入れているのだ。

しかし、こんな邪念を挟んでいては勝てるものも勝てず、ましてや私自身納得のいく戦いが出来るはずもない。

異変開始まで残された時間を、自らの肉体と精神の鍛錬に費やすとしよう。

妖怪と違い、人間は限られた短い時間を生き、誰かに自らの意志を引き継ぎ、そして死んで消えていく。

願わくば、限られた時間を持つ人間であるあの人と、生きている間に今一度立会い、あの日からの成果と共にこの名前を改めて示せますよう。

それが叶うのならば、この紅美鈴。名も無き妖怪として生まれた生涯で、一番の喜びである――。



【十六夜咲夜の知らないこと】

紅魔館の主要な住人達は、皆いずれも年季の入った人外ばかりである。

なので、妖精メイドも含めてこの館で最も若輩者である十六夜咲夜は、紅魔館が歩んできた歴史の内でも知らないことも多い。

例えば、常々疑問に思っていることが幾つか――。

「今日、久しぶりに昔の夢を見ちやいましたよ。やっぱり、この間の異変で先代様に会ったからですかね？」

「色々なことの切欠になった人間だからね。それより、結局あの巫女のこととはそう呼ぶことにしたの？」

「ええ、やっぱり私にとつて敬意を払うべき相手ですんで」
午後のティータイム。

美鈴とパチュリーという、咲夜にとっては珍しい組み合わせの二人が談笑している。

咲夜はそんな二人の為に花茶を用意しながら、彼女達の接点を思索していた。

片や紅魔館の門番として外での勤務。片や地下図書館で司書まがいの管理を行いながら日常的に引き籠もっている。

普通に過ごしていれば、顔を合わせる機会も少ないだろう二人だ。

しかし実際は、その少ない機会に出会えば美鈴はやけにパチュリーに気安く接し、パチュリーは『捨食の魔法』によって食事の必要がなくなつた身でありながら、時間が合えばこうして美鈴と卓を共にする。

一体、二人はどういう仲なんだろう？

咲夜の知らないことの一つだった。

「パチュリー様、花茶が入りました」

「ありがとう、咲夜」

「あ、咲夜さん。私は紅茶でお願いしますね。あんな苦いの飲めたものじゃなくなって」

「分かっているわ」

咲夜は美鈴の要望に自然と従った。

メイド長と門番。地位としては後者が下だが、咲夜は美鈴を敬っていた。

自分自身も子供の頃は大概世話になったが、美鈴は紅魔館が混迷の時期にあつた時、中心となって精力的に働いていたと聞く。

パチュリーとの仲もこの辺りの時期から始まっているのだろう。

時として、当主のレミリアとすら対等に話し合う姿を見たこともある。

紅茶を置くと、美鈴は茶菓子と共にそれを楽しんだ。

こうした素直な反応も、つつい世話を焼いてしまう気になる理由なのだろう。

「昔といえ、このお茶も美鈴が飲ませたのが始まりなのよね」

ティーカップではなく湯飲みに入った濃い色のお茶を飲みながら、パチュリーが懐かしむように微笑した。

これもまた普段感情を表に出さないパチュリーには珍しい、特定の親しい相手にだけ見せる反応だった。

「今や、病み付きですか？」

「好き好んで飲むものではないわね。癖のようなものよ」

「ちゃんとした薬も手に入るようになったんですから、そんな自家製の薬茶を無理に飲む必要もないんですけどね」

美鈴の意見に、咲夜は内心で同意した。

パチュリーに用意したお茶は、紅魔館の付近から採取した薬草を煎じて作った薬用茶だ。

レシピは美鈴の手製であり、一度咲夜も飲んでみたが信じられないほど苦かった。香りもキツイ。とても楽しむ為に飲むものではない。

薬効の方も怪しいものであり、代わる物として人里で売っている専用の薬を色々購入してみたが、パチュリーはどれも長く飲むことはな

かった。

「別に、無理に飲んでいるわけでもないわね」

そう言って、結局定期的に何食わぬ顔で薬茶を飲み続けるのは、咲夜にとつても見慣れた反応だった。

パチュリーのそのこだわりがどんな理由から来るのか？

咲夜の知らないことの一つだった。

「メイド長、お客様です」

妖精メイドの一人が入ってきて、用件を伝えた。

「誰かしら？」

「博麗の先代巫女様です。門番長と再会の約束をしたから来た、と」

「ええっ、来てくれたの!?!」

傍らで聞いていた美鈴が勢いよく立ち上がった。

「あつ、行く！ 今行きます、私が出迎えます！」

残りの紅茶を味わうことも無く飲み干すと、慌しく飛び出している。

呆気にとられる咲夜と妖精メイドとは反して、パチュリーは普段通りの落ち着いた仕草でお茶を一口飲んだ。

「先代巫女への対応は、まずは美鈴に任せておきなさい。色々と思入れもある相手だから。下がっていいわよ」

「あ、はい。失礼します」

「それと、咲夜」

「はい」

「夕暮れ時にはレミイも起きるだろうから、それまで先代にはここに滞在してもらいましょう。」

適当な頃合を見て、彼女を図書館へ案内して頂戴。私も少し、話してみたい相手だわ。粗相の無いようにね」

「かしこまりました」

淀みなく受け答え、仕事に戻りながらも咲夜の疑問は尽きない。

咲夜は吸血鬼異変や紅霧異変において戦った、先代巫女を知らない。

確かに敬意を払うべき相手であるのは分かる。

彼女のおかげで今の紅魔館があり、そしてつい先日自らの主やその妹様にとつて大きな変化をもたらしたことも伝え聞いている。しかしいづれも、直接その場に居合わせていない咲夜には先代巫女という人物がどんな人間なのか分からない。

紅魔館に住む者は、皆何かしら先代巫女に対して感じている。

当主は一目置いており、思慮深い魔法使いが興味を抱き、長年仕えてきた門番が最も信奉する人間。

一体どんな人なんだろう？

咲夜の知らないことの一つだった。

紅魔館のメイド長十六夜咲夜が、自分の住むこの場所について知らないことは、意外と多い。



【偉大なる我が師】

「見事なものだな」

「ありがとうございます」

庭園を見回して呟いた先代の言葉に、美鈴は頬が緩むのを抑えられなかった。

芝生や庭木の整備はメイド達がやっているが、花壇の花々は美鈴が昔から少しずつ趣味で育てていた物で、今も手入れは欠かしていない。

見学の為、紅魔館の庭を歩く先代の後ろから付き従うように続く美鈴は、この時間を宝石のように貴重に感じていた。

前を歩く先代の姿を眺める。

背筋はピンと伸び、美しい姿勢だ。

足運びは武人らしく隙が無い。そういった点に気付けるようになった自分が少し誇らしく思える。

歩調に合わせて揺れる長い黒髪は、自分の見慣れた赤毛と違って新鮮だ。

穏やかな陽気の下、先代は別段急ぐことも無くゆつくりと歩いてい

るが、何処かピリツと引き締まった雰囲気を纏っている。

ただ、歩いている姿を眺めているだけなのに、何故こんなにもたくさんのことを想うのだろうか？

美鈴は、出来ればこうして二人で歩き続けていたいと思った。

この人と同じ物を見て、聞いて、時すら共有する――。

(そういうえば昔、紅魔館を出て、修行の旅に行こうと思ってたことがあったつけ……)

今朝見た夢から、そんなことを思い出す。

もし、あの時ここを出ていたらどんな未来が待っていただろうか。

現状に不満があるわけではない。ただ、そんな他愛も無いことを自然と夢想する。

この人と一緒に旅に出ていたら？

脈絡の無い考えが飽きることなく浮かんだ。

理由はきつと、願いつけていたこの人との再会を果たせたからだ。

一つのことを満たされると次を考えてしまう。なんとも欲深い。

でも、止めることはできない。

今、すぐ目の前にある先代の背中。美鈴は無意識に手を伸ばそうとしていた。

(もう一度、手合わせ出来ないかな?)

そう考え、すぐに我に返って己の度し難さに頭を振った。

その希望は、異変の時に完全に叶ったはずなのだ。

あの時自分が全力ではなかったなどと愚かな言い訳をするつもりはない。

自分は先代の一撃の下に屈した。それが全てであり結果だ。そして、十分に報われた。

――『しかし』『それでも』

そんな言葉が出てくるのをどうしても止められず、美鈴は悶々としていた。

こうしてただ散歩するだけの穏やかな時間もいい。

しかし、やはり美鈴にとって、先代と『武』によって語り合うことは特別な絆の在り方だった。

初めて出会った時のように。

穏やかな視線よりも、強い意志を宿したあの瞳を。

柔らかな物腰よりも、次の瞬間叩き伏せられていそうな戦いに備えた構えを。

美鈴は先代と並ぶことよりも、対峙することを望んでいた。

「美鈴」

再び我に返った美鈴は、いつの間にか先代が振り返り、自分を静かに見据えているのに気付いた。

鋭い視線が、自分の勝手な妄想を見抜いているかのようで、知らず全身が緊張する。

先代は厳しさを含んだ引き締まった表情を浮かべ、おもむろに告げた。

「蹴ってみろ」

「え？」

戸惑う美鈴を無視して、静かに身構える。

そして有無を言わせぬ様子で、もう一度促した。

「蹴るんだ」

美鈴には先代の意図を察することが出来ない。

ただ、その端的な言葉に含まれた厳しさは理解することが出来た。

ひよっとして、ついさっきまで考えていた自分勝手な欲求を彼女は汲んでくれているのか？

自分でも都合がいいと思う解釈に、淡い喜びを感じながら美鈴も構えを取る。

一呼吸置いて、鋭い蹴りを繰り出した。

実戦を想定し、容赦なく頭を狙った。

しかし、浅い。

先代は軽く上半身を逸らすだけでかわしてしまう。

構えを解き、改めて先代と顔を合わせると、そこには美鈴を戒めるような鋭い眼光があった。

「なんだそれは？ 見世物か？」

「あ……その」

「気合いを入れる。精神を集中するんだ」

厳しい言葉に、美鈴は己を恥じた。

先代の目に、あの蹴りは腑抜けたものと映ったのだ。

あの時、蹴りを放つ直前まで考えていたことを思い出せば、それも当たり前だった。実戦を想定していたが、精神が緩みきっていた。

やはり先代は自分の考えを見抜き、それに応える為、今まさに指導してくれている。だが、自分がそれに応えなかったのだ。

美鈴は不甲斐ない自身への怒りと共に気合を入れ直した。

構え、対峙する。

今度は気など抜かない。

深く踏み込み、呼気と共に空気を切り裂くような鋭い蹴りを放った。

これもまた、かわされる。純粹な技量の上での結果だ。

しかし、構えを解いた先代の瞳は変わらず厳しさが宿っていた。

「気合いを、入れる。怒りではない」

一語一句噛み砕き、同時に叱りつけるように告げる。

何もかも見抜かれているのだと、美鈴は感じた。

未熟な自分への怒りが攻撃に表れていたのだ。

美鈴は深呼吸を一つすると、心を鎮め、同時に精神を戦いにおけるそれへと切り替えて、今度こそ完全な状態で備えた。

穏やかな日差しの下、花々に囲まれた庭で、そこだけが戦場であるかのように空気が張り詰める。

静寂を裂いて、蹴りが放たれた。

二度目までの蹴りとは明らかに違う。

それが並の武術家相手ならば一撃の下に命さえ刈り取ったであろう、必殺の蹴りだった。

先代も、先の二回とは違い、体捌きだけではかわしきれず、手で蹴りの軌道を逸らすことで回避に成功する。

全力の一撃を放った後の残心を経て、構えを解いた美鈴に、先代は厳しかった表情を和らげた。

「そうだ。何か感じたか？」

「えっと、そうですね……」

先程までの緊迫した空気が霧散し、唐突に尋ねられたことへの答えを出そうと考え込む美鈴の額が軽く叩かれる。

驚く美鈴の瞳を、先代は射抜くように覗き込んだ。

「考えるな、感じる」

短いその言葉が、美鈴の心に大きく響いた。

それはまさに至言だった。

直接の師は無く、武術を学ぶ為に多くの指南書に目を通したが、それらに書かれていた膨大な文章が、今のたった一言に凝縮されているような気がした。

体を鍛えられたわけでも、技術を教えられたわけでもない。

しかし、真理を与えられたような気がした。

「月を指差すことと同じようなものだ。指に集中するな、その先に意識を向けろ」

「……はいっー!」

「よろしい」

これまで我流で拳法を磨いてきた美鈴にとって、誰かに指導を受けるとするのは初めての経験だった。

しかも、師事した相手が長年敬愛する人物なのだ。

美鈴は浮かれそうになる内心を隠し、礼を尽くすように頭を深く下げた。

途端、無防備な後頭部を叩かれて、慌てて頭を上げる。

「敵から目を離すな。挨拶の時もだ」

先代は、師としては厳しい人なのだと実感した。

それを武術を心得た者としては、むしろ心地よいと感じながらも、忠告に従い隙を見せぬよう、再び礼をする。

頭を上げて、改めて先代の顔を見ると、そこには笑顔があった。

「そうだ。それでいい」

満足そうに頷いて、微笑む。

美鈴が初めて見る優しい表情だった。

「——はいっ、ありがとうございます!」

感動と喜びを抑えきれず、美鈴もまた溢れんばかりの笑顔を浮かべた。



【パチュリー・ノーレッジの憂鬱】

しかし、こうして見るとますます捉えづらい人物だとパチュリーは思った。

先代巫女はテーブルを挟んだ向かいで本を読んでいる。

咲夜は丁度良い頃合で彼女をここへ招待した。

とはいえ、ここは蔵書の数だけが自慢の図書館。歓迎出来るほど充実した設備も無い。与えられる物はやはり本ぐらいなのだ。

意外、と言つては失礼かもしれないが、先代は学のある人間だった。

人里には子供に学問を教える寺子屋というものもあるらしいが、老若合わせた全体の識字率はそれほど高くはなく、本を扱っている店も少ない。

しかし、先代は専門書の多いこの図書館の本数冊を難なく読み終え、現在読んでいる本に至っては外洋書だった。

彼女からの要望で揃えた紙とペンを傍らに置き、本を読みながら時折そこへ文字を書き込むところからして、単純に本を読むのではなく外来語の勉強も兼ねているらしい。

それでも、内容がある程度理解しているのは驚くべきことだ。

「……本を」

「ん？」

「よく、読むのかしら？」

「そうしたいが、あまり機会がなくてな」

互いに普段から言葉少ない為か、何処か妙な間をおいた会話の仕方だったが、気にはならなかった。

パチュリーは返答の意味を、人里で手に入る本の数の限界なのだと悟った。

「もし、よければ。この本を貸し出してもいいわ」

「……魔理沙がよく借りていくんじゃないのか？」

「あら、知っているの？」

「そんな気がしていた」

掴みどころがないが、同時に侮れない人物だとパチュリーは思った。

まるで難解な魔道書のような相手だ、と。独自の観点で興味を抱く。

静寂に満ちた広大な図書館に、ページを捲る音と思い出したように数言交わす二人の声だけが響く。

ここでは、緩やかに時間が過ぎていた。

「噂の先代巫女様。意外と本の虫なのでしょうか？」

おもむろに三人目の声が聞こえ、パチュリーは嫌な予感を感じながら本から顔を上げた。

奥の部屋で蔵書管理名簿の整理を命じていたはずの、自分の使い魔が何食わぬ顔でそこにいた。

「小悪魔、呼んではいけないわよ」

「いえいえ、随分と長いこと読書に集中しておられるようなので、喉が渴かれたかと」

小悪魔という名前のまま、パチュリーの使い魔として活動する悪魔の少女は、了解も得ぬまま勝手に入れた紅茶をテーブルの上に差し出した。

「お茶が必要ななら咲夜に頼むわ」

「先代巫女様へのお近づきの印ですよ。ささつ、冷めないうちにどうぞで？」

人懐っこそうに見えて、その笑顔には裏があることを十分に理解しているパチュリーは、カップに手を付けることなく探查魔法を走らせる。

なるほど、内容物は普通の紅茶だ。

ただし、先代の前に置かれた物からは異物が感知された。おそらく何らかの薬だ。

小悪魔の悪意を察し、戒めるように睨み付けるが、彼女の興味は先

代の反応のみに向いているようだった。

これは彼女の悪癖であり性質でもある。

悪魔とは、人を挑発し、誘い、最後には破滅させることに快楽を抱く危険な種族なのだ。

「手を付けられないで、何か入っているわ」

「ああ」

言われるまでも無く、既に何か感じていたのか、先代はカップをそのまま押し返した。

「あらあ、お気に召しませんでした？」

小悪魔が挑発するようにあからさまに尋ねた。

その行為に、大した意味などないのだろう。

相手が怒るのか、警戒するのか、万が一にでも誤って飲んでしまうのか――。

紅魔館の住人の多くが一目置く目の前の人間がどのような反応をするのか、猛獣を観察するような気持ちで相対しているに違いない。

だから小悪魔を表に出したくなかったのだ、と。自分でも持て余すこの使い魔の扱いにパチュリーは頭を悩ませた。

とりあえず、さっさと奥へ下がらせ、先代には謝罪が必要だろうと口を開きかける。

それより先に、先代が小悪魔に微笑みかけた。

「もう一度、入れ直してくれ」

「……え？」

小悪魔は呆けたように目を見開いた。

「喉が渴いているんだ」

「……………はい」

先代の言葉の真意を探ろうと、小悪魔はしばらく引き攣った表情で考え込んでいたが、やがて諦めたかのようにカップを下げた。

パチュリーは謝罪を取り下げることにした。

なるほど、先代の方が一枚上手だ。小悪魔では対等な相手にもならないだろう。

得体の知れない異物を混ぜ込んだ飲み物を出した相手に対して、た

だ度胸だけでもう一度お茶の用意を頼んだわけではない。

先代の態度は自然なままであり、小悪魔に対して警戒心どころか気安さすら持っていた。

小悪魔自身も、自らの悪意が歯牙にも掛けられていないと悟ったのだろう。悔しげな表情を隠して去っていく。

自分とは違って知恵や魔法での駆け引きで与えたわけではない、ただ自然体のままの先代に小悪魔が感じた敗北感を察して、パチュリーは内心で苦笑した。

やがて、再び出されたお茶を今度は純粹に楽しみつつ、日が暮れるまで読書が続いていると、起床したレミリアがやって来た。

吸血鬼にとっては、今からが朝なのだ。

「よく来てくれたわね、先代。遅くなつて申し訳ない」

「いや、こちらこそ時間帯を合わせずにすまない」

「私にとっては朝食だけれど、丁度良い時間だから食事でもご一緒にいかがかしら？」

「ご馳走になろう。人間用の食事なら」

「ふふっ、もちろんよ」

パチュリーはこういったやりとりからも、先代の不思議な人柄を感じ取ることが出来た。

レミリアは吸血鬼だ。人間の血を取り入れた食事を採っている。

それを理解し、同じ人間でありながら、目の前の妖怪をあるがままに受け入れる自然体がこの先代巫女には備わっていた。

これは、普通の人間にはない感性だろう。

別れと再会の言葉を交わし、図書館を去っていく背中をパチュリーと小悪魔の二人は見送った。

「……なんなんですか、あの人は？」

扉が閉まった後、小悪魔は愛想のいい笑顔を消して懽然とした表情を浮かべた。

彼女の主であるパチュリーには、それが弱音なのだと察することが出来た。

あの先代巫女がどういう人間なのか、測りかねているのだ。

「悪魔にも友好的な人間」

「……パチュリー様、楽しんでますね？」

「ええ」

——だって、困ってるアナタを見るの初めてだから。

言葉の後半は胸に仕舞っておいた。

小悪魔はますます不機嫌になり、口を尖らせる。

他人を翻弄するのは好きだが、翻弄されるのは苦手なのだった。

「本当に、何であんなに無防備なんですか？ 二回目の紅茶だって全然警戒しなかつたですし。」

悪魔ですよ、私？ そりゃあ、下位の小物ですがね……フツ、葉盛った相手にもう一回お茶頼みます？」

「アナタの本質を見抜いていたのか、その上で気にしなかつたのか……。彼女の心理を理解出来ない時点で駆け引きはアナタの負けね」
「実力に裏づけされた自信って奴でしょうか……。結局、二杯目の紅茶も効果なかつたし」

「待ちなさい。アナタ、あれにも何か仕組んだの？」

「ええ、カップの方に細工を。」

でもおかしいんですよ。女性には絶対効く呪いを掛けたのに、脈拍正常、発汗も無し。少しくらいムラムラきてもいいはずなんですけどね」

「そういう呪いね……。アナタって本当に性質が悪いわ」

結局何事もなかつたが、結果が違えばとんでもない大問題に発展していたかもしれない。

パチュリーは本の角で小悪魔の頭に制裁を加えた。

「イタタ……しかし、一体どういう精神してるんでしょ？ あの人。性欲ないんですか？」

「知らないわよ。50年以上純潔を貫いている本物の巫女なのだし、精神も人間を越えた高みにまで至っているのではないかしら？」

「……えっ!? 処女なんですか、あの人！ でも、今の博麗の巫女が娘だって……！」

「血は繋がっていないらしいわよ」

小悪魔はポカンと呆けたように口を開けていたが、しばらくして怖気の走るような笑みに変わっていった。

不吉としか言いようのない、瘴気のような雰囲気立ち昇らせ、あげく『グゲゲゲ！』と完全に人間の域から外れた笑い声を漏らし始める。

まさに悪魔そのものといった様相に、パチュリーは全力で嫌な予感を感じ取った。

「実に、素晴らしい！ なんなんですか、その完璧な聖女はっ！

男性経験なし、心身共に屈強、一児の母、しかし若く美しい。あの傷だらけの体も個人的にグーです！

非常にそりますね！ 私、悪魔の端くれとして燃えてきました！

あらゆる手段を用いて、あの巫女を陥落してみせますよ!!」

「みせなくていいわよ」

パチュリーの力ないツツコミなど完全に無視して、小悪魔は奇怪な哄笑を上げながら、内心燃え上がっていた。

厄介なこと——にはならないかもしれない。

結局、先代巫女が小悪魔より一枚上手であるのは間違いないのだ。

問題は、このテンションの高い使い魔を使役しなければいけない喘息気味の病弱魔法使いの方だった。

パチュリーは憂鬱そうにため息を吐いた。



【スカーレット姉妹の新世界】

「ずっいるい！ どうしてお姉様ばかり!？」

レミアアの予想通り、遅れて起床したフランドールは説明を受けた後、部屋のドアを蹴破ってやって来た。

その顔は怒りで真っ赤になっていたが、狂気の顔を知るレミアアにとっては可愛いものとは映らなかった。

涼しげな顔で剣幕を受け流す。

「仕方ないでしょう、アナタが起きなかったのだから」

「無理矢理にでも起こしてよ！ あの人が来てたなら、絶対起きたのに！」

フランドールは、既に帰宅したと報告を受けた先代巫女のことを指して憤慨した。

確かに、あの異変以来フランドールは先代巫女を強く慕っている。無理にでも起こしてやるべきだったかもしれない。

ただ、レミアアとしては眠りを妨げたくないと考えていたのだ。

フランドールは、最近よく眠る。

かつて、悪夢に叩き起こされて、狂ったように泣き叫ぶ声が地下室から漏れ聞こえていた頃のことを思えば、こうして安寧の眠りに就けることが酷く貴重に思えるのだ。

「先代なら、また今度夜に時間を合わせて来ると約束してくれたわ」

「うう、でも『また今度』なんででしょう？」

納得がいかないといった表情でレミアアを睨みつける。

しかし、不満を抱えてはいるものの、フランドールはその自らの感情をしっかりと抑え込んでいた。

まだまだ幼い子供の域を出ないが、それでも彼女は自制心を備え始めているのだ。

495年間の停滞から大きく躍進する妹の成長を、レミアアは内心で喜んでいた。

「……そういえば、先代からアナタへプレゼントを預かってたわね」

最初から予定していたことを、レミアアはさも今思い出したと言わんばかりに切り出した。

途端にフランドールの眼が輝く。

「えっ、なにになに!?!」

「これ。手作りらしいわよ」

レミアアが差し出した袋をひったくるように受け取り、興奮を抑えながら慎重に中身を取り出す。

熊のぬいぐるみだった。

表面の布地こそ頑丈な物を使っているが、小柄で可愛らしく、器用にボタンと紐で顔も作ってある。

「わあっ！ かわいいっ！」

「壊すんじゃないわよ？」

感動のあまり、抱き締めた腕の中で哀れにもひしゃげるぬいぐるみを指して、レミリアが忠告した。

フランドールが慌てて腕から力を抜く。

「伝言も預かってるわ。『大切に扱いなさい。もし、壊したら叱りに行くぞ』ですって」

「……うん、大切にする」

フランドールは一瞬不安そうな表情を浮かべたが、すぐに花が咲いたような明るい笑みを浮かべた。

伝言に含まれた真意をこの娘は理解出来ただろうか？

あるいは、理解出来るようになるのは、まだもう少し成長してからになるのだろうか？

レミリアは他愛も無く夢想し、同時に配慮をしてくれた先代巫女に改めて感謝した。

フランドールはまだ精神的に幼い。あの異変の日に、改めて吸血鬼として生まれたと言ってもいいくらいだ。

過ちを犯すこともあるだろう。

自らの大切な物を、自らの手で破壊してしまうこともあるかもしれない。

あのぬいぐるみは、そんなフランドールに与えられた最初の課題なのではないかとレミリアは考えていた。

だからこそ、先代はその後のことも考えて、あの伝言を残したのだろう。

先を見越した慧眼に、レミリアは頭が上がりない思いだった。

(敵わないわね、本当に……)

自分はフランドールの姉だ。これから、改めてその立場を自覚し、相応しく振舞っていかうと思う。

しかし、どう頑張っても母になることは出来ない。

今、妹にとって一番それに近い場所にいるのは、他でもない彼女なのだった。

「ねえ、お姉様」

「何かしら？」

レミリアは内心に抱いていた憂いの感情を悟られぬよう、何食わぬ顔で応えた。

「博麗の小母様と、一緒に食事したんでしょ？　どんなことを話したの？」

「別に、他愛も無い話よ」

レミリアは偽ることなく答えた。

ありきたりな返答の仕方かもしれないが、本当に特筆すべきことのない平穏な食事会だった。

先代巫女にとっては珍しいらしい西洋の料理に関する感想や、時折この紅魔館に関する質問。普段どんな風に過ごしているのか？　好きな食べ物は何？　趣味は何？――。

まるで知り合ったばかりの者同士が、親睦を深めるような何気ない会話だった。

ごく自然にそんなやりとりと食事を楽しんでいて、自分達の立場を思い出したのは食後のお茶を飲み終えた後のことだった。

人間と吸血鬼。

巫女と妖怪。

父を殺した者と父を殺された者。

救った者と救われた者。

二人を分ける壁は、それこそ幾らでもあるというのに、レミリアはそれを自覚するまで目の前の人間と隔たり一つ感じずに談笑していたのだった。

「本当に、なんでもない話をしていたわ」

そしてそれが、どれだけ特別なことなのか後になって実感していた。

あの巫女からは、自分に対する嫌悪感や忌避感というものを全く感じられなかった。まるで最初から気安い相手であるように接してくる。

博麗霊夢と同じだ。彼女もまた、恐るべき吸血鬼相手に怯みもせ

ず、ただあるがまま妖怪としての在り方を受け入れていた。

やはり親子だということか。

ただ唯一の違いは、その対応が苛烈であるか穏やかであるかだけなのだ。

物思いに耽るレミリアに反して、フランドールは『ふうん』と素直に納得していた。

「……ところで、フラン。先代のことは、その呼び方でいいのかしら？」

フランドールが彼女を『小母様』と呼ぶことを、若干予想外だと思いながらレミリアは尋ねた。

あれだけ慕う相手なのだから——『お母様』と。そう呼ぶのではないかと思っていた。

もちろん、実際にそう呼ぶのを聞けば、自身が酷く複雑な心境となることは間違いない。

レミリアにとって母とは記憶に残る人物であり、その人以外を母と呼ぶことも認識することも無い。

しかし、血の繋がった妹にとって、レミリアの記憶の人物は見知らぬ他人であり、何の親しみも無い存在に違いないのだ。

代わりにフランドールにとって今その位置にいるのは、愛を持って自分を叱り、褒めてくれたあの巫女だった。

だから、フランドールが母として慕うのも無理ない、と。例えそれが姉妹の間で致命的な差異となったとしても、レミリアには納得せざるを得ないことだった。

「うん、いいの」

レミリアの苦悩を分かっているかのように、フランドールは少し寂しげに、それでも笑って答えた。

「だって、あの人を『お母様』って呼んだら、きつとお姉様が困るでしょう？」

「フラン……」

妹の健気な答えに、レミリアは胸の詰まる思いだった。

思わず溢れそうになる涙を堪え、誤魔化すように外へ視線を移す。

夜空が見えた。

幻想郷の夜は、星がとても美しい。

当たり前のように在る毎夜の光景を、今改めて見ているような新鮮さを感じた。

「……ねえ、フラン。先代巫女が博麗神社へ訪れる日が、月に一回あるらしいわ」

——その日の夜に、二人で神社へ遊びに行ってみましようか？

何気なく提案し、その直後に部屋の中で少女の甲高い歓声が響き渡る。

レミリアとフランドール。二人の行く先には、新しい世界が広がっていた。



【今日の先代】

診療所を早めに閉めると、名残惜しげなじつちゃんばつちゃんに別れを告げて、私はお出かけの準備を始めた。

フフフ、ごめんね。足腰の悪い老人達にひっぱりダコな私だが、今回ばかりは私事優先なのだ。

以前の異変で美鈴と再会の約束をしていた私は今日、紅魔館にお邪魔する予定だった。

手土産の入った袋を携えて、一度通った道を急ぐ。

気分は高揚していた。

紅魔館といったら、幻想郷の有名スポットの一つ。

特に生前の記憶を持つ私にとって、東方の舞台の一つを訪れるというのは観光名所を巡るような気分なのだ。聖地巡礼と言い換えてもいい。

異変の時は見学どころか、状況が緊迫していたので、とてもではないが楽しめなかったが今回は違う。

異変なんて厄介事無しで訪れることが出来るのだ。

うん、平和って最高！

逸る気持ちを抑えながら、私は紅魔館への道をひた走った。スキップはさすがに浮かれすぎなので自重して、十傑集走りで。

約束があるとはいえ、アポ無しの訪問で果たして良かったのかなつと門の前まで来てようやく気付いたが、そんな不安を吹き飛ばすような歓迎を受けた。

代理門番らしい妖精に取り次ぎを頼むと、すぐに美鈴が走ってきて、すごくいい笑顔で迎え入れてくれた。

しかも、自ら庭を案内してくれるとか。まさに渡りに船。

っていうか、美鈴のガイドで紅魔館見学出来るって、どんな観光ツアーですかこれは？

某ネズミランドを巡り歩くようなテンションの高さを、自重という鉄仮面に隠して、一步一步踏み締めるように敷地を歩く。

行き先を指示して、あとは奥ゆかしく後ろをついて来る美鈴に従者の理想像を見ながら、私は美しい庭園に足を踏み入れた。

一言で言うと、やばい。

どういう評価だと思うかもしれないけど、それくらいの感動が私の胸に湧き上がってきた。

幻想郷は建築物など和風なので、西洋風の庭作りが新鮮に映るというのもあるかもしれない。

それに加えて、芸術的な彩の数々。

なんなのあの噴水。生前の知識があるので、それが噴水だと理解は出来るが、造形のレベルとか違いすぎる。文化遺産にするべき代物。

手入れの行き届いた芝生や庭木。その背景として映る荘厳な紅魔館。

視界に映る光景を絵にして額縁に飾っておくだけで一つの芸術品となるような美しさだった。

続けて案内された先にあった花壇の花々は、なんと美鈴が昔から世話をしている物らしい。

すげー、美鈴すげー。

私なんて、農作物くらいしか育てた経験ないよ？ 近所の農家手

伝って、大根とか芋とかね。全部食い物。

完全に別世界を歩いているような気分だった。

感動と同時に意味もなく緊張して、表情も引き締まってしまふ。

歩き方一つとっても、ここでは無様な振る舞いは許されないんじゃないだろうかと勝手に思い込んでいた。

美鈴を連れて、ゆっくりと庭園を歩いていく。

天気も良く、穏やかな空気の中で無意味な緊張も自然と抜けていった。

ああ、いいなあ。このまま美鈴と歩き続けるだけでも、私なら多分丸一日時間を潰せるだろう。

そんな風に気が緩み始めたからだろうか？

……魔が差した。

私を敬う美鈴の態度と、そのよく似合った中華風の衣装を見ていて、不意に思いついたことだ。

美鈴がこの『ネタ』を絶対に知らないだろうという確信も後押しした。

——自重しろ、私。

——でも、やってみたい。

短い葛藤の末、結局私は自分の欲望に従った。

「蹴ってみろ」

「えっ？」

「蹴るんだ」

やっちったあーっ！

某カンフー映画の有名シーンを真似て、真剣な表情でイミフなことを言い出す私。

当然、美鈴は戸惑うが、それでも言われるままに従ってくれた。

ごめんね。ホントごめんね。

でも駄目、心は美鈴の師父になりきった私はもう止まらない。

前世の私がどういう人間だったのかは知らないが、 magari なりにも武を嗜む私にとってあのシチュは憧れなのだ。

いきなりワケの分からんことを言われて動揺している美鈴を叱咤

し、指導っぽいことをしてみる。

うおっ!?! 最後の蹴りはちよつとやばかった……調子に乗った罰か?

とにかく、ここまで予定通りに話を運んだ私は、満を持してあの名言を放った。

「Don't Think. Feel (考えるな、感じる)」
……ふう。

これがやりたかっただけだろ、というツツコミを自分自身に入れながら、私は真面目な表情の下で奇妙な満足感を味わっていた。

ああ、真面目に受け止めてくれた美鈴の笑顔が眩しい……。

続いて、私は図書館へ案内された。

案内役の咲夜に説明してもらったけど、レミリアがまだ就寝中なので、図書館で待っていて欲しいという話だ。

これは私の失敗だった。

そうだよ、吸血鬼なんだから活動時間は普通夜だよ。

東方の漫画などでは話の都合上、レミリアが日中に活動することが当たり前だったので勘違いしていたようだ。

まあ、私としては紅魔館で過ごせるなら暇を潰すどころか、楽しむことすら出来るので全然問題ない。

しかも、過ごす場所は紅魔館の図書館で、なんとパチュリー自身が迎え入れてくれたのだ。

美鈴の時も感じたけど、これは一体どんな豪華ツアーなのかと。なにこれ、お金払わなくていいの?

図書館なので当然することと言えば読書なのだが、本棚が整然と並び館内はこれもまた趣があり、本を読むにはうってつけのとても静かで心が落ち着く空間だった。

パチュリーに魔法で検索してもらって、何冊か選んだ本を読む。

日本の本なので、文字が分からずに四苦八苦することもなかった。

調子に乗った私は、今度は外洋書を手に取ってみる。

こちらはさすがにスムーズに読み進めるのは難しいが、勉強がてら

に挑戦してみた。

生前の記憶に外国語の知識があったおかげで読む為の取っ掛かりは出来たが、さすがに辞書一冊分の知識なんかは持っていない。

でも、つい自覚し忘れてしまうが、この生前の知識って幻想郷住人の平均学力を省みるとすごいチートだよ。義務教育は偉大だ。

読書と勉強すら新鮮に感じて、時間を忘れて満喫していると、不意に小悪魔が現れた。

初対面の私にも分かる、何かを含むような愛想笑いを浮かべ、これまた何か意味ありげな言葉と仕草でお茶を勧めてくる。

だいたい悪い方向に当たりを付けてみれば、案の定それは何か仕組まれているらしかった。

全然悪びれもしない小悪魔の不遜な態度を見て、私は密かに感動していた。

ほほう、実物の小悪魔ってこういう性格なのかー。

いや、原作での『小悪魔』というキャラはシューティングの敵として登場するだけで、個人の設定など皆無なのだ。

よって、その性格や容姿などのキャラクタライズは全て二次創作であり、明確に設定が決まっているわけではない。

描く者によって千差万別の姿があり、私自身の記憶でも色々なタイプの小悪魔が存在していた。

生前の世界では決して分からない、小悪魔という存在の明確な姿が今私の目の前にあるのだ。

それは感動の一つもしようというものである。

もちろん、私に対して行われたことが悪意に基づくものであり、どうやら名前に恥じない悪魔的な性格だというのは理解出来た。

しかし、私はそんな小悪魔もむしろウエルカムである！

人間を遊ぶ黒い性格の残酷系小悪魔など、私は生前既に通過しているッ！ 同人誌的な意味で。

入れ直しを要求し、ジョルノばりにグイイツと飲み干してみせた。

なんか口をつけた瞬間に呪術的なものを感知して一瞬ビビッたけど、効いてないっばいから別にいいや。

その後は更にレミリアとの夕食会に招待されるなど、恐縮するくらい至れり尽くせりな歓迎だった。

燭台に照らされたテーブルの上には豪勢な西洋料理がズラリと並び、向かいにはレミリアが座っているという、私にとって全く未知の光景がそこにあった。

なんかもう、しつこいけど、これって大金払っても叶わない夢のような状況だよな。

料理はすごく美味しいし、普段は和食なのでとても新鮮に感じる。レミリアとは、有名人にするようなノリで質問を交えて談笑した。我ながら少し態度が気安すぎるのではないかと思うが、正直なんらかの理由で敵対関係になっていないのなら、基本仲良くしたいのが私の本音だ。

私には生前の記憶がある影響で、どうしてもこの幻想郷という世界を外から見た視点を持ってしまう。

この世界が歩む未来の一つを『物語』として知っているから、ここに住む人妖と触れ合いたいし、仲良くなりたいと思ってしまうのだ。

……実は初対面の相手に馴れ馴れしいと思われてないか、毎回不安なんだよね。

食事を終え、心身共に満足した私は、最後にフランへのおみやげを渡した。

フランは未だ眠っているらしい。

あの娘とも会いたかったけど、時間帯を間違えた私の自業自得なので仕方ないね。

プレゼントは手作りの熊のぬいぐるみである。

実は私、裁縫が趣味だったりする。

というのも、未知のものと遭遇した場合、何かと生前の記憶や知識に頼りがちな私が唯一予備知識なしで手を付けたのがこの裁縫なのだ。

ただ単に、私の前世では裁縫の経験や知識がなかっただけなのだ。

が、本当の意味で初めての経験だった私は針に糸を通すのも苦戦し、手探りで作業しては失敗した。

こうした悪戦苦闘の連続で得た技術は、私にとって非常に思い入れのあるものとなり、気が付けば趣味と化していた。

霊夢が子供の頃は、服を繕うのが日課にもなっていたしね。

人里の古本屋で外国の裁縫の教科書を偶然見つけた私は、今回のプレゼントを思いついたのだった。

頑丈な布地を使ったからちよつと表面がザラザラしているが、これなら多少振り回しても千切れたりはいしないだろう。

しかし、実のところ。ちよつと小賢しい考えだが、フランが近い将来このぬいぐるみを壊してしまうだろうことは予想の範囲内であった。

私が『創作された物語』を豊富に知っているからかもしれないが、力の制御が上手くいかない人物が自らの大切な物を壊してしまう悲劇というのは、割とありふれた話である。

そうでなくても、フランのような幼い子供が自らを戒める方法を身につけるには、一度失敗を経験した方がいい。

その時に得る深い後悔が、精神的成長を促す切欠となるだろう。

可哀想な気もするが、何事も経験だ。転ばなければ、立ち上がり方も踏ん張り方も分からない。

親って、結構色々計算して子供を教育するもんなのよね。

だからこそフォローの伝言も残しておいて、あとはレミリアに委ねることにした。

フランを除いた、紅魔館の主要な人物に見送られるという贅沢な別れを済ませ、私は帰路に就く。

気が付けば、もう夜か。

楽しい時間は、あつという間に感じるな。

幻想郷の美しい星空を眺めながら、私は今日一日を振り返り、自然と笑みが浮かぶような満足感を味わっていた。

地霊殿編

其の六「地霊殿」

風見幽香は最強の妖怪であると自負していた。

数多くの妖怪が生息するこの幻想郷において、自らの最強を証明することは容易なことではない。

当然、他にも存在する強力な妖怪達は幽香のその自信を驕りや自惚れであると捉えている。彼女達もまた同じような自負を抱えているからだ。

しかし、妖怪の強みというものはそうした自尊心や強烈な個性にある。

人間の恐怖によって形作られる妖怪とは、自身の持つエゴをそのまま力へと変えるのだ。

そうした例は人間にも多く、歴史上の偉人の多くは自らへの過大なまでの自信によって大きな行動力や決断力を得ていた。

もちろん、彼らの結末の多くがその自負心によって判断を誤り、悲劇的な終わりを遂げている。

人間も妖怪も変わりはない。驕りや自惚れは、自分自身以外の力を侮り、いずれ破滅を招く。

妖怪の強さとは同時に弱みにも繋がるのだ。

風見幽香もまた例外ではない。

その日、幽香は一人の人間と出会った。

「――これはまた、珍しい迷い子ね」

辺り一面を向日葵に囲まれた『太陽の畑』と呼ばれる場所は、幽香にとって自らの領土も同然だった。

時折、妖精や霊の類が迷い込み、遊び回るが、それらは彼女にとって花に誘われた虫程度の認識でしかない。

この場所に侵入を図る者は、幽香が認めなければ、悪意や意図があるとなかろうと全て害虫だった。

向日葵の群れが丁度途切れる畑の端で、巨大な異形の妖怪が倒れ伏

していた。

頭部を跡形も無く吹き飛ばされ、既に絶命したその傍には紅白の巫女服を着た女が一人佇んでいる。

「貴女が噂の博麗の巫女かしら？」

その妖怪がどれほどの強さかは分からない。しかし、少なくとも巫女は無傷であった。

人間の身でありながら、妖怪を一方的に打ち倒す者の正体に幽香はそう当たりを付けた。

圧倒的強さによって幻想郷の妖怪を素手で滅ぼす人間の守護者にして妖怪の天敵。歴代最強の博麗。

それらの噂を幽香は以前より耳にし、興味を持つと同時に不快感を感じていた。

「ここが何処だか、理解していないのでしようね」

幽香は微笑みながら、ゆっくりと巫女に歩み寄った。

その表情に反して放たれる威圧的な様は、野獣が牙を剥き、爪を突き立てながら獲物ににじり寄るも同然の姿である。

「人間の分際で、はやし立てられてのぼせたのかしら？」

目の前の巫女の存在は、風見幽香の根幹にある強烈な自負心に相反するものである。

幽香にとつて人間とは、無造作に塗り取られる雑草のような存在でなければならなかった。

「殺されても、文句は言えないわねえ」

幽香の静かな死刑宣告に対して、巫女は無言を貫いていた。

これまで偶然迷い込んだ人間や、妖怪退治という身の程を違えた人間を何度も相手にしてきている。いずれも、幽香の気まぐれによってその生死は決定していた。

例外なく共通することは、全員が幽香の殺意に触れるだけで平伏し、無様に命乞いを繰り返すことだった。

しかし、目の前の巫女はこれまでとは違う。

恐れはもちろん、動揺すら見せず、身構えることもしない。

その静かな様子がまた、幽香を苛立たせた。

「…………ふんっ」

幽香はそれ以上言葉を重ねなかった。

まずは足か腕を吹き飛ばそう、と。相手をただ殺すのではなく、その不遜な態度の元になる精神から折ることに決めた。

無くなつた四肢を見て、取り返しをつかない後悔に泣き喚くが正しい。

敵かとも言える、ゆつくりとした動作で幽香の片手が持ち上がった。

そして次の瞬間、意識が一瞬飛んだ。

腕が上がりきる前に、幽香の頭部が轟音と共に弾き飛ばされていた。

首から上が無くなるような衝撃に襲われ、幽香は為す術も無く、そのまま体ごと後方へ吹き飛び、地面に叩き付けられて転がった。

「あ…………？」

何がなんだか分からなかった。

視界が赤く染まり、口の中に広がる熱と苦味が全て自分の血によるものだど理解するのにはばらくの間が必要だった。

「な、何を…………っ」

ダメージを自覚するより先に立ち上がろうとして、混濁する意識がそれを阻む。

再び無様に地面に這う形になり、ようやく自分の陥った状況を察すると、耐え難い怒りと羞恥心が湧き上がった。

何かをされた。

何かは分からない。

ただ、その何かにやられた。

—— たつた一撃で！

「ふざけ、け…………ぐえ?」

胸の内で燃え上がる激情を原動力としても、幽香は上半身を起こすことすら許されなかった。

口の中で異物を噛んだ。地面だ。自分は今、土を舐めている。

途端に、全身の血液が沸騰するような怒りが湧き上がるが、それで

も立てない。

完全に無防備な状態で、強烈な一撃を頭部に受けたのだ。

幽香は底知れぬ憎悪をもって、自分を地面に伏させた相手である巫女を睨み上げた。

巫女は、最初に対峙した時と同じ姿勢のまま無造作に佇んでいる。一体、どうやってあの状態から自分を昏倒させるような威力と速さの攻撃を繰り出したというのか？

当然の疑問は、巫女が自分を見下ろしているという状況を理解するだけで消え失せた。

体の内側が焼け付きそうな屈辱と殺意は、しかし虚しく空回りをするだけで、混濁した意識を戻すことや体を動かすことに繋がらない。

やがて、わずかな間幽香を見つめていた巫女は、そのまま背を向けた。

幽香にとどめを刺すこともなく、足早に去って行く。

「ま……て……い……」

幽香は継るように、その背中へ呼びかけていた。

立ち上がることも出来ない今の彼女は、傍らに横たわる名も知らぬ妖怪の死体と同等だった。

「待ちなさい……っ!!」

必死の声は、届いていないのか無視されているのか、巫女の足を止めることない。

やがて太陽の焔には地面を這う妖怪が一匹と死体が一体残されるだけになった。

巫女の立ち去った先を睨みつけていた幽香の視界が歪み、滲んだ。

「待ちな、さいよ……! ちくしょう……まてえ……クソツッ! 畜生っ!!」

幽香は自分が涙を流していることも気付かず、何も出来ない己の無力さを呪いながら地面を殴り続けた。

——油断したんだ。

——本気を出した私なら、この程度で倒れない。

喉下まで出掛かった言葉を、幽香は菌を食い縛ってかろうじて飲み込んだ。

こんな『言い訳』を考えた時点で、既に己の度し難さに吐き気を覚えていたが、もし口にしてしまったら風見幽香を支えているものが根元から折れていただろう。

その日まで、風見幽香にとって己の自負心は強みであり力の源であった。

幽香は今日、完膚なきまでに敗北した。

しかし、その敗北を受け入れることは出来なかった。もし受け入れてしまうようなら、風見幽香という妖怪は終わりだ。それが彼女の持つ力のパラドックスであった。

以来、風見幽香は苦しみ続けることになる。

彼女の心に残った敗北感と屈辱を自らの手で拭い去る、その日まで。



人里では妖怪が暴れることは禁じられている。

しかし逆に言えば、それさえ守れば、妖怪も人里を訪れることが許されていた。

風見幽香は、時折人里に現れる。

理由は、単なる散策であったり、買い物であったり。強大にして危険な大妖怪だと知れ渡ってはいるが、その実、分別を持った紳士的な人柄であった。

ただ一つの例外として、彼女が里の診療所へ向かう場合は、住人達も警戒して近づかないようにしなければならなかった。

その時の彼女が明確な理由を持っているのか、気まぐれなのかは誰にも分からないが、少なくともそこへ向かう時、風見幽香の目的は一つに限られるからだ。

彼女は、現役を退いた今も先代の博麗の巫女を強く敵視していた。

「――では、先代。少なくとも一週間以内には戻られるということ、

皆に伝えておきます」

「ああ。そう長くはかからないだろう」

幽香が診療所の近くにまで来ると、その入り口の前には目的の人物と共に邪魔な人物が話し込んでいた。

先代巫女と上白沢慧音だ。

いずれも人里の守護者として訪れる妖怪達への強い抑止力となっていたが、幽香にとってはそういう面は何ら意味を持たなかった。

幽香の目的は単純に、先代巫女と戦うこと。そして、慧音はそうなる過程での邪魔者程度の認識だった。

少し面倒だ、と慧音の存在を鬱陶しく思いながら、それを柔らかな物腰と優雅な微笑で隠して二人に歩み寄る。

「あら、先代は今日はお出かけの予定かしら？」

「むっ、風見幽香！」

「幽香か、久しぶりだな」

幽香の笑顔の下にあるものを見抜き、警戒をあらわにする慧音と、それとは対照的に自然体のまま小さく笑みすら浮かべる先代。

何度顔を合わせても変わらない。先代のこの友好的な態度は、幽香にとって不愉快そのものだった。

自身の敵意が空回りしているような空しさを感じさせる。まだ慧音の対応の方が心地よかった。

出鼻を挫かれたような悔しさを内心に押し隠し、先代に明確な敵意と殺意を向けて笑いかける。

「ええ、久しぶりね。今日は、用があつて来たの」

「そうか。すまない、今日は私も外せない用事があるんだ。しばらく、診療所も留守にする必要がある」

「あらそう。で？ それが私の用を蔑ろにすることと何か関係があるかしら？」

「貴様……っ」

あからさまな幽香の態度に、傍らの慧音の方が激していた。

しかし、そんなことは幽香にとって気にもならない。

慧音ではなく、目の前の人間が心動かされなければ何の意味もない

のだ。

「幽香の用とは、私と戦うことか？」

「いいえ、殺し合うことが目的ね。どちらかが死ぬまで、決着と認めるつもりはないわ」

「幽香。何度も言っているが、私はお前と戦うつもりは無い」

「こちらは何度も、こう返しているわ。『私には関係ない』」

先代巫女に敗北して以来、幽香は幾度も戦いを挑んでいた。

相手の同意など望んではいない。

ただ一つ、不意打ちによる一方的な勝負の決着を拒む以外のあらゆる方法で戦いを仕掛けていた。

一度は周囲の人間を巻き込んで、この人里を戦場にしかけたこともある。

慧音や八雲紫など多数の妨害に遭うことで、自分の望む決闘とするには分が悪すぎると悟り、それ以来人里で襲い掛かるような真似はしていないが。

いずれにせよ、幽香の敵意と殺意は徹底したものであり、それは華麗の巫女が代替わりしてからも続いている。

「例の紅い霧の異変、だったかしら？ 新しい決闘のルールが広まったらしいわね」

「スペルカード・ルールだ。お前の望む命を賭けた私闘は、このルールに背いている」

「そのようね」

慧音の言葉に、幽香は同意するように頷いてみせた。

しかし、内心がそれと全く正反対であることは誰の目にも明らかだ。

その意思が、幽香を今日ここへ来させた理由でもあった。

「強さよりも美しさを競う。強い妖怪ほど優雅であれ、という考えには賛同するわ。」

季節が変わるように、この幻想郷の変化を私も受け入れましょう。新しい形の決闘を楽しむのも悪くはない」

「ならば……」

「でもね、貴女だけは駄目よ」

慧音を無視し、無言のまま自分の話に聞き入る先代を睨みつける。いつもそうだ。初めて出会った時から変わらない。

静かで揺るがない姿が、あの日の屈辱を思い起こさせる。

「貴女との決着を、そんな戯れで終わらせるわけにはいかない」

幽香は当時から変わらぬ先代巫女への憎悪と同時に、時を経た今わずかな感謝を抱いていた。

短い時間で衰え、死んでいく人間の身でありながら、よくぞ今まで揺らぐことなく在り続けていてくれた、と。

だからこそ同時に、決着にこだわる、ある種の焦りがあった。

今回の新しいルールに、先代は従うだろう。

現役を退いた彼女に、更に戦いの場から遠ざかる理由を与えてしま

う。

そして今回の変化が、幽香に改めて時の流れを自覚させた。

このまま、ただ無為に時が過ぎれば、人間である彼女には逃れようのない変化が訪れる。

老い、衰え、そして死ぬ――。

その後に残されるのは、もはや決して拭うことの出来ない『敗北』という事実を刻まれ、『最強』という空しい幻想を抱えた妖怪が一匹だけだ。

「決着を付けましょう。今、すぐに」

「……それは出来ない」

「場所は別にここでもなくてもいいわ。ただ、もうのらりくらりと避け続けることは許さない」

幽香は差していた日傘を畳んだ。

それは戦闘態勢に入ったことを示している。

大妖怪の本気を感じ取り、慧音が険しい表情で身構えた。

「乱心したか、風見幽香!」

「いいえ、私は冷静よ半獣」

こう考えている。『先代巫女は戦いを拒み、私が仕掛ければ逃げるだろう』――それでは意味がないわね。

これまでも、こいつはようやく戦いに巻き込めたと思ったら、防戦や回避に全力を尽くして、自ら挑むことはしなかった。

そんなものは勝負とは言えないし、その終わりも決着とは認められない。じゃあ、どうやってその気にさせましょうか？ 適当にその辺へ一発撃ち込んでみる？」

幽香が日傘の先を無造作に真横へ向けると、慧音が今にも飛び掛からんばかりに身を乗り出した。

悪戯が成功した子供のようにな、幽香は笑った。

「……でも、そもいかないわね。

その半獣の妨害なんて大した問題ではないけれど、戦う意思を持った貴女相手に矛先を逸らすことはあまりに愚行だわ」

幽香は敗北した時の、一瞬にして圧倒的な決着を心に刻み込んでいた。

未だに受け入れ難い事実であるし、屈辱に塗れた記憶だが、それ故に彼女は二度と油断することはなかった。

目の前の敵とは全力で戦わなければならない。

そして、まずは敵となるように仕向けなければならない。

「となると、やっぱり力押ししかないわねえ。

貴女が拒もうが関係ないわ、先代。私は貴女に戦いを仕掛ける。逃げて、追いかける。貴女が反撃をするまで一方的に攻撃する。

貴女の決意や精神力が並々ならないことは知っているわよ？ でも、ここは人里。周りの人間はどうかしら？」

二人の一触即発の雰囲気を感じ取り、とうに人の気配のなくなった周囲を指して幽香は笑った。

「私は貴女だけを狙い続けるけれど、その攻撃が外れたら何処かへ当たるかもしれない。攻撃の余波が何かを壊すかもしれない。誰かを傷つけるかも——。

私か貴女の力が尽きるまでそれは続けるつもりだけれど、周りの人間は何処まで付き合えるかしらね？」

その半獣や、他の助けが来るまで待つ？ でも私は諦めないわよ。貴女が居るといっただけで、そこは私が戦いを仕掛けるのに十分な理由

となる」

駄目押しのように、幽香は凄まじい殺気を放つことで自らの真意を示した。

肌がひりつくようなそれを、先代は不動のまま受け止めていたが、傍らの慧音は冷や汗を止められなかった。普通の人間ならば腰を抜かしているだろう。

幽香が本気で戦闘態勢に入れば、こんなものが周囲に撒き散らされるのだ。

「私は貴女だけが目的。」

案外、今の博麗や八雲紫は無用な被害を抑える為に、貴女を差し出すかもね。例えそうでなくても、貴女は存在するだけで周囲にとって厄種となる。

人間が同じ人間を受け入れるのはね、利益があるからよ。実益面でも精神面でもいいわ。受け入れても良い益があるから、友好的になる。せめて無害である必要がある。

でも、人間なんか糞にも思っていない大妖怪に追い回される者なんて、例えば元が巫女だろうが人間の守護者だろうが、そうなった今は拒絶の対象でしかないわよね？」

「貴様は……！」

「人間は自らを脅かすものを常に追い立てる。妖怪のように、貴女もそうなるわ。」

ねえ、その半獣もそう思うでしょ？ 貴女なら身体の半分には、これこそ身に染みて理解出来ているのではなくて？」

「貴様という奴はあつ！」

幽香の挑発に、慧音は激昂した。

我を忘れて飛び掛らんとし、幽香は笑顔を持って受け入れる。

しかし、それを止める者が在った。

慧音の眼前に腕を差し出して、先代が制止を掛けていた。

その顔に激しい感情の色はなく、ただ瞳に静かな決意が宿っている。

横顔を見た慧音が息を呑んで、昂ぶらせていた感情さえ冷えてしま

う程強い意志でありながら、それは幽香の望んだものでは決してなかった。

「……もしもそうだったら、私は急いで逃げよう」

叫ぶわけでも、力を込めるわけでもなく、囁くように言葉が紡がれる。

「そしてまた、ほとぼりがさめたら」

穏やかさと静かさの中には、呑み込まれそうな程の覚悟があった。

「静かに、寄り添うよ」

先代が言い切ったその後には、ただ沈黙だけが残った。

その場の誰も、何も言うことは出来ない。慧音も幽香も口を噤んで聞き入っていた。

慧音は戦う寸前にまで緊張させていた全身から力を抜き、呆けたように佇むだけだった。

先代の出した答えが、熱いうなりとなって胸の奥で渦巻いている。

この人にとって、人間を守るといふ行為は責務や義理などではない。ただ単純に、多くの人と共に生きることの一部なのだ。慧音の心には理解と感動があった。

そして幽香は、一瞬呆気にとられた後すぐ思い出したかのように先代を睨みつけたが、真つ直ぐに見つめ返されることで全てが徒労になると察した。

「……………分かったわ」

しばらくの間を置き、幽香は大きなため息を吐いて、力を抜いた。もう、この場で自分の目的を達することは出来ないだろう。

彼女の答えはそう納得させてしまうだけの意志が込められていた。目の前の敵を打ち倒す——ただそれだけの単純な方法を、最後の一线に至るまで避けようとする。それはもはや、逃げではなく決断だ。

先代巫女は決死の覚悟を持って選んだ。

完全なる決意を持って、幽香の目的を絶ったのだ。

「今回は退くわ。でも、いずれ必ず決着はつける。今度は逃がさない」

先代の目の前にまで迫ると、幽香は念を押すように断言した。

「自覚を忘れないことね、先代。貴女の言動は周囲に大きな影響を与

える。自分の為した事に責任を持ちなさい」

自分を含めた大妖怪を退治した最強の巫女であるという周囲の認識があることを、幽香は遠回しに先代へ言い含めた。

敵意に満ちて睨み付けていた視線を和らげると、唐突に何も無い手の平から一本の白い花を咲かせる。

根もないそれは不思議と瑞々しい美しさに溢れていた。

そつと、先代の髪に挿す。

「これは饞別」

少なくとも見た目だけは慈愛と優しさに満ちた笑顔を浮かべる。

手が離れる際に、艶やかな指先が先代の頬を撫でていった。

「今日の外せない用事とやら、せいぜい頑張ってらっしゃい」

意味深げにしか感じられない言葉と笑みを残して、幽香は去って行った。

◇

ヤンデレゆうかりんに狙われて夜も眠れない！

……いや、デレとか欠片もないんですけどね。

私が幽香と初めて出会ったのは、まだ現役の巫女としてブイブイわせてた（死語）頃の話だ。

当時、人里の子供を攫って食う妖怪が現れ、私はそいつを退治する為に動いていた。

何とか新たな犠牲者を出す前に発見は出来たのだが、予想外なことに妖怪の間では私の噂が広まっており、そいつは私を警戒していきなり逃げの一手を打ったのだ。

攫った子供を囚にして一目散に逃げ出すそいつに対し、一手遅れてしまった私がようやく追い詰めた頃には、随分な距離を逃げられていた。

一撃で頭を吹き飛ばして、一呼吸置いた後にふと気付く。

眼前に広がる向日葵畑。

私は、自分が意図せずして太陽の畑（ゆうかりんランド）に踏み込

んでしまったのだと理解した。

案の定、侵入者である私の前に現れる大妖怪・風見幽香。

初の対面に感動する間もなく、一瞬で察する。

——私を殺す気満々じゃないですか！ やだー！

もうね、殺気とかやばい。こちらを見る目が養豚場にいる豚を見るくらい冷め切ってる。『明日の朝にはお肉屋さんになぶ運命なのね』って感じ。

まあ、二次創作でも最強とドS扱いに定評のある幽香なのである程度予感があった。

それでも『実はドS（親切）かもしれない』という淡い望みに賭けて、黙って様子を伺っていたのだが、ダメ押し of 殺気と台詞を頂きました。

うん、分かってたけど、幽香の私への認識って虫けら程度だね！

戦闘がもはや避けられないと悟った私は、返答する間すら惜しんで最大限に集中した。

様子見とかは一切無し。

だって、幽香が無茶苦茶強いというのは東方ではほぼ常識だからね。

油断も妥協も完全に意識から排除して、最初からクライマックスの一撃を先手でぶち込んだ。

この先制攻撃が功を奏し、人間相手だと油断していた幽香の隙につけ込む形でクリーンヒット。体ごと顔面を吹き飛ばした。

……やばい、やりすぎた。

いや、結果としては妥当ではある。

先の妖怪を即死させたものよりも更に威力を振り絞った不可避の一撃を無防備な顔面に叩き込んで、それでもダメー止まりな時点で幽香の妖怪として半端じゃない強さが伺えるし、結果的に彼女を殺さず行動不能に出来た。

でも……これって、完全に友好フラグぶち折れたよね？

だって開幕ぶっパで顔を殴り飛ばしちゃったもん。

しかも、形としてはこちらが先に手を出してしまっている。

最初に出会った状況が悪かっただけで、私としては友好的に行きたいのが本音だ。しかし、その出鼻は完全に挫かれてしまった。

後悔してももはや後の祭りで、倒れたままこちらを見上げる幽香の瞳には殺意と憎悪が漲っていた。

うん、これはもう絶対許してもらえんね。

水に流して友達になろうよ、とかほざきながら手を差し出したなら、そのまま小指をへし折られるレベル。

気まずすぎて居た堪れなくなった私は、その場から無言で立ち去ったのだった。

それからである、私と幽香の関係が始まったのは。

あの一撃を敗北と捉えた幽香は執拗に私に勝負を挑むようになり、私はそれを避ける為に全力を尽くすこととなった。

幽香との戦いを避ける理由としては、冗談抜きで殺し合いになるしかない強さと容赦の無さもあるが、それ以上に初対面時の対応に対する罪悪感が私の心にあった。

命が掛かっていたとはいえ、不意打ち気味に全力で相手の顔殴り飛ばすとかイカンよなーと、反省しているのである。

でもその辺のことを素直に謝ったら、幽香が更にブチギレると予想出来るので何も言えない。

結果、私は幽香の要求から逃げ続けるしかなかった。

今回もそうだ。

数日前から予定していた『紫からの頼まれ事』があったのだが、当然幽香はそれを無視する。

しかも、なにやら思うところがあるらしく今回は完全に本気モード。ストーキング宣言まで出る始末である。

だからといって、幽香と戦うなどという選択肢など端からない私は、追い詰められた末、無意識に口走っていた。

「もしもそうになったら、私は急いで逃げよう。」

そしてまた、ほとぼりがさめたら——静かに寄り添うよ」

人に傷つけられ、追い立てられて悩み抜きながらも、安易に引き金を引くことを拒み続けた英雄の言葉である。

やべえ、かつこよすぎる。こんな逃げ腰の状況で言っているいい台詞じゃないって！

しかし、私の本心だけは籠もりまくっていた。

この偉大な名台詞を介したおかげで、幽香はようやく折れてくれた。

ああ、よかった。今回はかりは幽香の本気がビリビリ伝わってきたので、行くところまで行くしかないかと内心焦っていたのだ。

まだ何か含むところはあるようだが、一変して穏やかな物腰になった幽香は、餞別の花を渡して去って行った。

普通の花じゃないっばいけど、綺麗だな。

ううむ……っというか、花の贈り物なんて私貰うの初めてなんですけど。しかも去り際に顔撫でていくし。

ちよつとドキツとしちやつたでしょうが。

さすが幽香、見事な不意打ちだ。

「先代……」

髪に挿された花に、なんだか妙に気を取られてしまっていると、黙り込んでいた傍らの慧音が私をじっと見つめていた。

あ、あれ？　なんでそんな泣きそうな顔してるの？

「わたし……私は……っ」

「慧音？」

「……あつ、いえ！　その……すみません。なんだか、胸が詰まってしまっ……」

我に返った慧音は、気まずげに押し黙って、俯いてしまった。わずかに鼻を吸る音が聞こえる。

よく分からないが、さっきの幽香とのやりとりで私の対応に至らないところがあつたのだろうか？

慧音の表情は何かを堪えるような、切なそうな眼をしていた。

「……貴女の本心は、確かに受け取りました。先代、どうかご無事でお戻りください」

顔を上げた時には、もう普段の凛とした顔に戻っていた慧音の気遣いに、とりあえず頷いておく。

なんだか夫を送り出す妻のような深い敬愛の念を感じながら、私は慧音に見送られて人里を後にしたのだった。

ふーむ、しかし出だしから思わぬ障害にぶつかってしまったぞ。

今回の用件を引き受けた時から、何かしら厄介事の予感を感じていたのだが、この分だと先にも波乱の展開が待ち受けていそうだ。

鬼が出るか、蛇が出るか。

少なくとも、鬼が待っているのは間違いない。

紫が相談を持ちかけてきたのは数日前のことだった。

彼女は私に、『地霊殿』へ行つて来て欲しいと頼んだのだ。



幻想郷の境。誰も見たことのない八雲紫の屋敷はそこに在った。

「よろしかったのですか？ 紫様」

藍はのんびりと庭先を眺める主に向かって、控え目に尋ねた。

質問の意味は理解しているはずだが、紫は縁側から見える景色を楽しんでだけで何も答えない。

仕方なく藍は言葉が続けた。

「先代巫女を地霊殿へ向かわせたことです」

「あそこは地上の妖怪にとつて不可侵領域。だから、人間である先代に使いを頼んだのよ」

「使い、とは。先代に渡した、地霊殿の主に宛てた書状ですか」

「内容を知りたい？ 新しい幻想郷のルールのことよ。」

地底世界には、スペルカード・ルールがまだ伝わっていないから、地霊殿の主にその普及を行うよう頼んだの」

至極真つ当な答えが返ってきて、藍は顔を顰めた。

八雲紫の式神となつて長いが、主人の考えは全く計り知れない。

表の理由を出せば、必ず裏の理由もついてくる。そういう性格の御仁なのだ。口にした答えを鵜呑みにするわけにはいかなかった。

考え込む藍の様子を横目で伺い、紫は愉快そうに微笑んだ。

「お利口な私の式神さん。今度は一体どんな深読みをしているのかし

ら？」

「……貴女の性格がそうさせるのでしょうか？ 一体どれだけの付き合いだと思っっているのですか」

「相手を翻弄するには裏を突くのが一番よねえ。何かあるように見せかけて、何も無い。あるいはその逆」

「今回の件に、含むものはない、と？」

「あつたとして、それが何か問題かしら？ 貴女の懸念を言ってみなさいな」

神妙な表情の藍に反して、紫はこの問答を楽しんでいる様子だった。

藍は諦めたようにため息を一つ吐くと、思っただまを言葉にした。

「以前から思っていたことですが、あの先代巫女に対して少々入れ込みすぎではないかと」

「彼女が特別なのは本当よ」

「博麗の巫女としての多大な実績や、異質な力を持つことは、この際置いてきましよう。

紫様はあの巫女を、御自身の心の何処か特別な所へ置いているのではないですか？

八雲紫の名の下に送り出された使者が、地霊殿の主にどのように捉えられるのか理解しておられるのでしょうか」

『さとり』は、なかなか厄介な相手よ。ただのお使いにしても、信頼出来る者に任せたいわ」

「あの巫女が、貴女にとって急所になると愚考します」

藍は思い切って核心に切り込んだ。

「他の力ある者に、例えわずかでも御自身の実体を掴ませてはいけません」

藍は己の主の得体の知れなさに時折恐怖することがあつた。

だが、それでいいのだ。

幻想郷という一つの世界を管理する地位に立つ者として、恐怖は使い勝手のいい力になる。

恐るべき能力を持ち、知識に富み、そしてそれらの底を見せない。

敵に決して真意を悟らせない実体の無さが、八雲紫の真の強みだった。

「あの巫女は、貴女に破滅を呼び込む切欠になりかねない存在です」

藍の真剣な眼差しを紫は黙って受け止めていたが、やがて軽薄に笑いかけた。

「藍ってば嫉妬してるの？」

「ああ、もうっ！ そうやってまたはぐらかす！」

もはや何度繰り返したか分からないやり取りを経て、藍はうんざりしながら頭を掻いた。

思い起こせば、紫が博麗の巫女として、山奥で修行をしていたという得体の知れない少女を連れてきたところから藍の苦悩は始まっていた。

人間の身でありながら恐るべき力と、何よりその異質な才能を持つ少女に対する紫の扱いが妙に甘いことを薄々と感じてはいた。

歴代の博麗で最強の巫女となり、現役を退いた今もなお高い影響力を持つ先代巫女の実態がハッキリとしないのは、紫自身が追求しないからだ。

何処で、いつ生まれた？ 両親は？ 能力の詳細は？

他にも多くの疑念が残っているのに、紫はそれらを見送ってきた。

藍には主がそう判断する理由が分からない。

それが不安に繋がる。

あらゆる障害を排除し、複雑な問題を解決してきた偉大なる己が主は、そこまで甘くも愚かでもないはずなのだ。

「——藍。貴女はやっぱり、物事を複雑に見過ぎね」

紫は藍の眉間に寄った皺を、ツンとつついた。

「何もかも計算し尽していればいいというものではないわ。たまには適当にやっつて、曖昧になりなさい。あとはその時の流れというものが物事を決めてくれるわ」

「……それが紫様の持つ真理ですか？」

「だいたいそんな感じ、ね。」

ねえ、藍。貴女が頭を悩ませていることは、私が先代に対して感じ

ていたことと似てるわ。

でも、私はもう彼女を複雑に捉えるのはやめたの。それが傍から見
て、特別扱いに見えるのなら、それは捉え方の自由というものよ。私
には関係の無いこと」

「では、今回の地霊殿への使いの件。裏の意味は何もないのですね？」
なんだかいつものようにはぐらかされたような気がしたが、せめて
それだけはハッキリさせておこうと藍は再度尋ねた。

「地底世界との取り決めを守り、地上とは何かと毛色の違う地底へ向
かわせる使者として最も妥当な者だと判断したわ」

それは嘘偽りなく、紫の本音だった。

地底に住むのは、ほとんどが封じられた妖怪達だ。

彼らは封じられるに足る理由がある種族ばかりで、簡単に言えば同
じ妖怪であつても危険な者達だった。

生来の能力や性質が他者と相容れずに忌み嫌われた者もいるし、考
えや本能が世の理から外れたおぞましい者もいる。

そんな危険な場所の最大の抑止力となっている存在そのものが、
『鬼』という更に強大な妖怪なのだ。

鬼は独自の価値観を持ち、それを押し通す力と、嘘を許さぬ頑なさ
を持つ種族だ。紫であつても相手取るのは容易ではない。

紫自身に鬼の友人がいるが、友情とは対等な関係でなければ築けな
い。

ただの個人ならばともかく、何らかの立場を伴った交渉事において
対等な存在というのは避けるべき相手だった。

地底世界とは紫自身であつても何が身に降りかかるか分からない
魔窟なのだ。

そんな場所に送り込む者として、先代巫女はまさに適任だった。

彼女は敵対する者に容赦はしないし、実力も十分すぎるほど備えて
いる。

それでいて、純粹であり残酷さを持たない。例え敵であつても、相
手を貶めようなどと思いつきもしない性格だ。

紫の考える地底世界で起こり得る最悪の問題とは、発生したそれが

拡大して地上にまで及ぶことだったが、先代ならば後を引くような対応は決してしないだろう。

想定されるあらゆる事態への対処においても信頼出来る相手だった。

自分以上に適しているかもしれないと思うほどだ。

なるほど。確かにこの考えからすれば、先代は特別扱いなのかもしれない。

外の世界には『国家に真の友人はいない』という言葉があるが、紫の先代への無意識な信頼が藍には立場を越えた過剰なものと映るのだろう。

——じゃあ、やっぱり嫉妬なんじゃない。と、紫は藍に悟られぬよう内心で笑った。

「そうですか、分かりました。ならば、私から言うことは何もありません」

「……それと、やっぱり興味が少し」

あまり納得のいつていない顔で頷く藍に付け加えて、紫は悪戯っぽく笑った。

管理者としての立場を継承し、新たなルールの提唱により完全に第一線から退いたはずの先代巫女。

本人も先見者としての地位に重きをおいて、娘である現博麗の巫女や素質を見出した魔法使いを後押しする姿勢を取っている。

——にも拘わらず、先の異変ではいつの間にか戦いの場に立っていた。

紫の考える、物事の流れというものが自然と彼女を事態の中心に運んだかのように。

彼女には、無自覚にそういった力や性質が備わっているのかもしれない。

「決して悪い事にはならないという信頼はある。けれど、彼女がどんな出来事を起こすのかは私にも予想出来ない」

八雲紫にとって、先代巫女とは神の手すら離れた賽の目と同じ。

何が出るかは……さて、お立会い。

◇

ドー・レミアファー・ソーラーシードー・ドーシーラーソーファーム
レードー♪

べいべえく、つてちゃんと言語の歌詞があったと思うけど、忘れたからこの辺のサビだけ繰り返しまくる私。

生前の知識にある歌なのに覚えてるのがおぼろげって適当だな、前世の私よ。

私は初めてのお使いにちよつと浮き足立っていた。

紫からの頼み事という時点で珍しいことだからね。

なんか紫って頭もいいから何でも事前で解決しちゃうイメージなので、こういうちよつとしたことでも頼られてるって感じが嬉しい。

何かを頼まれること自体は昔から結構あったけど、妖怪退治とか侵略者迎撃とか物騒なことばかりだったからね。

今回は、地上の妖怪が立ち入れない地底へ重要な手紙を届けるという内容だから、私がヘマをしなければ戦いとか面倒なことにはならないはずなのだ。

まあ、地底世界が物騒な場所っていうのは予想がついてるし、実際に紫からも注意は受けてるけどね。

原作の東方地霊殿では、シューティング要素が強いのでそこまで危険な雰囲気は感じられなかったが、実際はどういう場所なのか行ってみなければ分からないだろう。

要素だけ見れば、死体とか疫病とか色々ヤバそうな単語が飛び交ってるんだよなあ。

しかし、私自身は怖さよりも好奇心の方が勝って、ちよつとワクワクしている。

地上の妖怪や人間が誰も入れない場所に行けるっていうのは、普通なら有り得ない機会なわけだしね。

紅魔館の時もそうだけど、原作ゲームの舞台となった場所っていう

のは個人的に思い入れも強いから尚更だ。

地底世界へ続く穴があるという妖怪の山の麓まで歩いて向かう。

走ればかなり時間を短縮出来るが、私は鼻歌交じりにゆつくり歩くことにしていた。

遠出をするというのも実は結構久しぶりだ。

ちよつとした旅のつもりで、幻想郷の風景を楽しもう。

僅かな不安と多大な期待が足取りを軽くしていた。

そして、人里を出てから幾らか時間が過ぎたところで、霧の湖が見えてきた。

霧の湖っていうくらいだから、どちらかというところと霧が見えてきたと言った方がいいか。

この湖は妖怪の山の麓にあるので、目的の穴にも近づいてきたということだ。

穴自体は妖精などが迷い込まないよう結界が張られているし、場所はここから更に迂回しなければいけないらしい。

位置的に紅魔館には寄れないルートだな。ちよつと残念。

さて、空が飛べない以上、ここから湖に沿うように歩いていくのが普通なのだが……。

問題はないッ 15メートルまでなら!!!

……もちろん、別に急いでるわけじゃないから、湖を走って横断して時間短縮なんてしなくていい。

ちなみに私も昔試してみたことあったが、脚力だけでも15メートル程度なら本当に行けるね、アレ。

さすがに走りはしないが、折角なので修行の一環として私は波紋を使った方法でこのまま湖を渡ることにした。

波紋の呼吸によって、足元の水を弾いて水面に立つ。それを維持しつつ、歩く。

基本的な波紋の運用だが、これが結構難しかったりする。

だからといって、足場に出来るほどの水場が人里にはほとんどない為、意外とやりにくい修行なのだ。

有力者の屋敷なら庭に池とかあるけど、阿求の家とかにお邪魔して

『小一時間ばかり池の上に立たせて下さい』とか頼めるわけないもんね。

井戸の中？ 私は貞子か。

足の触れる水面が波打って、文字通りの波紋を作る。

点々と続くそれを足跡代わりに、私は霧に包まれた湖の上を進んでいった。

うーん、水の上と霧の中にいるせいかな、ちよつと肌寒くなってきたような――。

「そこで止まれ！」

不意に頭上から警告が響き、私は素直に足を止めた。

気のせいではなく、全身を襲う寒さがハッキリと増していく。

単なる気温の低下じゃないな。冷気を発するものが近くにあるのだ。

「あたいの許可なく湖に踏み込んだわね！ ここを通りたかったら、

あたいと勝負しろ！」

当然ながら霧の湖は誰の領土でもない。

いちやもんとしか思えないことを言われながら、しかしその声は敵意を含むというより元気いっぱいといった微笑ましいものだった。

霧の中でも姿が分かるほど、声の主が近づいて来る。

予想通り、それは氷の妖精チルノだった。

「……妖精か」

冷静を装いながら、内心はムツヒョーって感じに奇声を上げて喜んでいる私。

うわー、実はチルノに会うのって初めてなんだよね。

なんという感動。遊園地でマスコットキャラと対面したに等しい。

「そういうあんたは人間……なの？ えっ、人間って水の上を歩けるの？」

「空を飛ぶ人間もいるんだから、不思議じゃないだろう」

「……それもそうね！」

あつさり納得するチルノ。

すごいちよろい。そして素直で可愛い。

……でも、自分で言つといてなんだけど、確かに空飛ぶ人間がいるんだから水の上歩いてても大したことじゃないよね。

改めて幻想郷ってすげー。

「あたいはチルノ。ここを通りたかったら、弹幕ごっこで勝負しなさい！」

すっかり自己紹介してくれたのが微笑ましいが、ちよつとまずい展開になってきてしまった。

私は弾幕が撃てないのだ。

だからといって、チルノの要求を受け入れずにここを通してもらうことは難しい気がする。

さーて、どうしたものか？

「湖の近くを通る全員に、そうやって喧嘩を売っているのか？」

とりあえず、少し話して様子を見ることにする。

「喧嘩じゃないわ！ これは修行よ、あたいは強くなりたいの！」

「チルノはもう十分強いだろう」

妖精の中では、ね。

「ふふん、よく分かってるわね。大した奴だね、あんだ」

「ありがとう。通つていいか？」

「ダメ！ あたいよりもっと強い奴がいるんだ。そいつより強くなるために、あたいはたくさん弹幕ごっこがしたいの！」

チルノが自分より強いと認める相手——。

それはもちろん幾らでもいるだろうけど、私には心当たりがあった。

そもそもチルノが原作で登場したのって、東方紅魔郷からだよね。

つまり、この間あった紅霧異変がそれであって……。

「……そういえば、あんだ。この間、あたいが負けた紅白の巫女に格好とか似てるわね」

やっぱりかー！

このチルノは霊夢と交戦済みだったらしい。しかも完敗してるっほい。

となると、これからチルノがどういう行動を取るのか簡単に予想出

来る。

案の定、難しい表情からだんだんと怒った顔つきになって、いきなりスペルカードを取り出した。

「ちようどいいわ、あんたであいつを倒す予行練習してやるっ！ さあ、カードを出しなさい！」

これは本格的に困ったことになったぞ。

出せと言われても、私はスペルカード自体持ってないし。

弾幕ごっこって互いの同意がなかったら成立しないよね？ このまま全力疾走で逃げてしまえばいいのかな？

遠距離攻撃の類を弾幕と言いつつ張って勝負する方法も取れないことはないが、威力がヤバすぎるから絶対駄目。

妖精が死んでも復活する性質を持っていることは知っているし、この世界で生きる以上何度も目の当たりにしたこともあるが、好んで受け入れられるものじゃないしね。

あと、私。今、手荷物があるんだよね。

中身は遠出の為の水筒とかお弁当とか、書状も入ってる。湖の上じゃ手放せないから、その点でも勝負はしたくないなあ。

そんな風にいろいろ悩んで黙り込んでしまった私に対して、チルノは苛立ったかのように叫んだ。

「どうしたの、あたいが怖い？ 勝負するつもりがないなら、負けを認める？ 弱っちい奴倒しても意味ないしね！」

ほう……。

チルノは挑発のつもりだろうが、残念ながら私には通用しない。

何故なら、負けを認めて話が済むなら喜んで認めさせてもらうからだ！

フッフ、私を侮っていたようだな。私はもう博麗の巫女でも何でもないから、別に個人的な勝敗にはこだわらないのだ。

弾幕ごっこ出来ないんだから、そもそも勝負以前の問題だしね。

ここは一つ、チルノに勘弁してもらって——。

『羽虫も同然の妖精が、随分と粋がっているものね。雑魚は雑魚らしく身の程を弁えなさい』

「な、なにをー!?!」

……………え?

い、いや!・違うって、今のは私が言ったんじゃないし!

「あたいは虫じゃない!」

『なら、身の程知らずの馬鹿って呼んであげるわ。弱いのはあなたの方でしょう?』

惨めな敗者が強者の周りをうろつかないで頂戴。とても鬱陶しいわ。早く巢に帰りなさいな』

「よくも、バカっていったなー!」

この声は……私のすぐ傍、耳元辺りから聞こえる。

あつ、髪に挿した白い花からだ!

「幽香か!?!」

『言ったわよねえ、自覚を持ちなさいって。』

何をやっているの? 一体、あんなゴミに何を好き勝手やらせているの、貴女は。さっさと黙らせなさい』

顔を真っ赤にして怒っているチルノとは対照的に、花を介して聞こえる幽香の声からは地獄から響くような静かな怒りが感じられた。

ちよつ、やめて! 耳元でそんな声出されたら背筋冷たくなるから!

「スペルカード・ルールを破るつもりはない」

『ふん、そんなことだろうと思ったわ。だけど、どんな理由であれ、貴女には勝負を投げることなんて許さない。』

その場凌ぎとはいえ、たかが妖精相手に負けを認めるなんて許される立場だと思っているの? そこまで認識が甘いのなら、今から改めて貴女を殺しに行つてあげましょうか?』

いや、許されないうって……何故にアナタ様の許可が必要になつてくるのでしょうか?

そんな風にもちろん尋ねられない私は、苛立たしげな幽香の言葉に黙り込むしかなかった。

実際、じゃあどうしろつていうのよ?

私、弾幕は出せないし空も飛べないんだよ?

『勝負を受けなさい。飛行と弾幕に関しては、私がこの花を媒介にして能力を与えるわ』

えっ、マジっすか!?

まさかのゆうかりん支援キャラ化!

思わぬ提案に驚いている間に、勝手に体が空中へと浮き上がって二度目の驚愕が走り抜けた。

と、飛べる! 私は……この空を飛べる! って光の巨人になったみたいな感想。

でも本当に感動。

私ってば、空飛んじやってますよ!

「おい、本気か!」

『あらあら、貴女の驚く声なんて初めて聞いたわ。戯れの提案だったけれど、面白くなってきたわね』

「やっとやる気になったのね? なんかムカつく奴がついてるみたいだから、一緒にとっちめてやるわ!」

少し冷静になってみれば、飛んずるといふか幽香の力で浮いているだけというかなり不安定な状態だ。

加えて、相対するチルノは幽香の挑発で必要以上にやる気に満ちている。

『さあ、あの調子に乗った妖精を墜としなさい。もちろん、万が一にでも負けたら殺すわ』

通信機的な花を介しての言葉なのに、物凄く冷たさを感じる声で囁いてくる幽香。

あのお……アナタ、一応私の支援キャラ的位置にいるんですよね? 予想もしていなかった弾幕ごっこによる勝負。

もちろん、私には初めての体験だ。

本来なら、生死を賭けたものではない遊びに近い感覚の決闘方法だが、私に限っては敗北は死に繋がるらしい。

……あら? これって、意外と厳しい状況なのではないかしらん? 私は久しぶりに内心で冷や汗が流れるのを感じていた。

そんな私の緊迫感を感じ取って、幽香は気遣っているのか更に追

込んでいるのか分からないことを言ってきた。

『そんなに気を張る必要もないでしょう。私のサポートが心配なのかしら?』

「大丈夫だ、問題ない」

——って、偶然だろうけどゆうかりんが絶妙な台詞言ってくるものだから、つい反射的に答えちゃったじゃないですか！

やだーっ!!

其の七「旧地獄街道」

弾幕って速度遅いし、必ず通れる隙間があるから、実戦で鍛えた動体視力と身体能力があればかわすのも余裕じゃね？

——そんな風に考えていた時期が、自分にもありました。

結論。弾幕は遊びじゃねえんだよ！

そんな本気の叫びが聞こえてきそうな、圧倒的物量の弾が私の眼前に迫って来ていた。

確かに弾幕の速度は遅い。

スローモーションとまではいかないが、目で追えないような攻撃に晒された経験がある私にとっては十分すぎるほど対応が可能な速さだ。

しかし、問題は回避する時間的余裕ではなく場所的余裕を潰すことを目的とした物量だった。

速く精密な『点』の攻撃ではなく、遅く大味な『面』の射撃。

どれだけ高速で動いても、その動く先にさえ待ち構える無数の氷の弾丸が結果的に回避の余地を尽く潰している

初めて経験したけど、弾幕ってここまで圧倒的なものなのか……。

原作のシューティング画面を見てみると『二次元だからここまで難しそうだけど、上下に逃げられる二次元なら結構楽勝さ、こんなの』と舐めていたが、そんな甘いものじゃなかった。

某艦長も大満足の弾幕だ。

っていうか、これってチルノの弾幕として有名なイージー仕様の奴じゃないよね。

どう見ても正面安置とか無いし、弾幕の密度からしても難易度数段上がってるっぽい。

どうやら、霊夢に敗北した経験は彼女を強くしたようだ。

うむ。チルノは口だけではなく、しっかりと向上心を持っているな。偉いぞ。

……問題は、そんな高難易度弾幕に晒されているのが、私という初心者シューターだという点なのだが。

加えて、もう目前にまで迫った弾幕に対して別の問題が一つ。

「幽香、移動できないぞ」

今の私は確かに空中に浮いている状態だが、そこから動くことが出来なかった。

それにこれって本当に飛んでるって言えるの？　なんか私自身が飛行しているって感覚ないんですけど。

『飛行能力は付与されているはずよ。さっさと飛んで移動しなさい』
「どうやるんだ？」

『貴女は歩き方を人に教わったわけじゃないでしょう。自力で感覚を掴みなさい』

「無理だ。分からない」

『だったら死になさい』

スパルタ教育ってレベルじゃねーぞ！

獅子は我が子を谷へ云々と言うが、幽香の場合は相手を思いやる気持ちなど欠片もなく普通に谷へ蹴落とすだけだった。

体で覚えればいいじゃない。出来なければ死ぬばいいじゃない、という極端すぎる教導方針だが、むしろ教導するつもりすらないよね？

結局、私は満足に身動きすら出来ない状態で弾幕に晒されることになった。

いや、本当にどうしろってーの!?

「幽香、ボムだ」

『却下よ。最初の弾幕くらいかわしてみせなさい』

「ならせめて、飛行の仕方を教えろ！」

『だから、感覚だと言っているでしょう。貴女はいちいち足に動けと念じながら歩いているの？　イメージで飛びなさい。』

というか、貴女。今浮いている状態もこちらで操作しているからよ。貴女自身の意思では浮遊すら出来ないわ。早くなんとかしなさい』

「それはこっちの台詞だ、クソッ！」

『あははっ、貴女の悪態を聞くのって新鮮ね。いいわ、ゾクゾクしちやう。ほら、もう目の前よっ。』

私の必死の懇願も幽香を悦ばせる効果しかなかった。

なんというサデイスト。ドS（親切）設定なんてなかったんや！

しかし、嘆いても目の前の弾幕が消えるわけではない。

浮いた状態で足場も安定せず、その場を動けない私は咄嗟に首を捻って顔面に直撃コースだった氷の弾丸を回避した。

うおおおおっ！ 明らかに方法が間違っているけど気合避けええええー！

関節の可動限界まで体を動かして次々と飛来する弾幕をすり抜けていく強制グレイズ。

とにかく、移動が出来ないので体を傾けたり角度を変えたりして無理矢理に弾の当たる箇所を外していく。

なんとかその無茶な回避を成功させた。

この辺りは『面』の攻撃の特性に救われた結果だ。

あらかじめ決められた軌道を維持して、その数を揃えることで制圧することを目的としている為、標的である私を正確に狙い撃つ弾がなかった。

体の中心などを一点に狙われていたら、移動出来ない私は当たるしかなかっただろう。

『お見事。でも、第二波が来るみたいよ』

一息つく間はあるが、本当にそれだけしか余裕はなく、幽香の警告通りチルノから新たな弾幕が放たれていた。

次も同じようにその場に留まったまま回避できる保証などない。

このまま弾幕の密度が上がればいずれ命中せざるを得なくなるだろう。

いや、既に自機狙いの誘導弾くさい不規則な軌道の弾が何発か放たれている。

なんとか移動だけでも出来るようにならないと。

……でも、さつきから頑張ってるのに進むことも退くことも出来ないんですけど！

っていうか、イメージで飛べってどういうことやねん!? 空の飛べない人間にどういいうイメージ抱けっつーの！

漫画の知識にあるキャラの飛行する姿などを思い浮かべてみるが、それも効果はなかった。

悪戦苦闘している間に、再び弾幕が迫って来る。

フフフツ、見えることが逆に恐怖だろうってやかましいわ。

ええいつ、もういいわい！ 飛行にこだわりの止め！

私は幽香の言うイメージとやらを放棄すると、別の方法に切り替えることにした。

とりあえず現状は浮遊状態にあり、その不安定な状態のせいで思うように動けないのだ。

これが地面に立っている状態なら、まだ走るなり跳ぶなりして移動が出来る。むしろ、そっちの方がマシだっただろう。

ならば、今の状態でどうしたらいいかというところ――。

『また力技ね』

瞬発力に物を言わせ、空中を蹴って加速した私を冷やかすように幽香が言った。

仕方ないじゃない、これ以外空中での移動手段がないんだから。

しかし、なんとか移動自体は出来たが、これは結構力加減が難しいな。

弾幕の特性はさつき確認したとおりなので、ただ単に早く動けば回避出来るというものではない。

移動する場所を選び、その上で距離や速さも計算しなければ、勢い余って自分から弾雨の中に突っ込むことにもなりかねない。

弾幕の隙間を縫うように、小刻みに加速と急停止を繰り返す。

ぐおおつ、なんだこりゃ!? 無茶苦茶面倒臭いぞ！

危ういところで弾に当たりそうな場合には例の気合避けて対処しているが、弾幕のレベルが上がったら更に精密な動きを要求されるだろう。

そうになったら、この動きでは対応しきれないかもしれない。

結局、追い詰められていることに代わりはないようだ。

これはもう短期決戦で行くしかないね。

「一気に決める。幽香、弾幕を放つ準備をしてくれ」

『そつちも能力自体はもう与えているわよ。撃てないの?』

「自分の感覚でやったら、私自身の技しか使えそうにない。それではチルノを殺してしまう」

『それでいいじゃない。妖精の命なんて空気よりも軽いものよ』

「幽香、怒るぞ?」

『あら、それは面白そうね。』

まあいいわ。一応、サポートを約束したものね。接近して、標的に片手を向けなさい。それを合図にこつちで弾幕を発射するわ』

ホンマ、ゆうかりんのDSさ加減は肝を冷やすでえ……。

何故に支援してくれる相手なのにここまで苦労しなければいけないのか分からないが、とりあえず幽香の協力を取り付けた私は弾幕を避けながら機を待った。

「く……っ! ヘンテコな避け方する奴ね!」

ごもつともな悪態を吐くチルノは、スペルカードの使用を終え、次の弾幕の準備に掛かる。

時間としてはわずかなものだが、私にとってその間隙は十分すぎた。

一瞬でチルノの眼前にまで移動する。

まあ、こういうのは得意な接近戦の分野だしね。

目を見開いて驚くチルノに対して、右手を突きつけた。

頼む、幽香!

『死ぬ』

——って、おいイイツ!! 何呟いてんのお前え!?

全力で嫌な予感が走ったが、もはや後の祭り。

私の手のひらからは、次の瞬間極太の光線が発射されていた。

どう見てもマスタースパーク並です。本当にありがとうございました。

「この馬鹿!」

『誰が馬鹿よ、この馬鹿。ちゃんと弾幕用に威力は調整してあるわ』

凄まじい光の奔流が収まった後には、チルノがちゃんと原型を留めていた。

幽香の言うとおおり、あのレベルの光線にしては相当殺傷力を抑えてあるようだ。

しかし、弾幕として使う攻撃である以上威力は少なからずあり、マスパ並の砲撃からして相対的にそっちの方も強力だったらしい。

光線に飲み込まれたチルノは気絶したらしく、煙を上げながら墜ちていった。

慌てて空中を蹴り、落下するチルノに追いついて体を掴む。

……って、やば！ このままだと頭から湖に突っ込む。

地面よりは安全だが、一張羅がずぶ濡れになるし、手荷物は忘れずに片手に持つてるんだよ。

「幽香ー」

『前々から思っていたけど、貴女って気安く名前呼ぶわね。むかつくわ』

どおおうでもいいわああーっ！！

のんきな幽香の対応に、完全に翻弄されている私。

今更体勢を持ち直して制動を掛けても着水することは間違いない。

『世話の焼ける奴ね』

服は乾かせばいいけど、書状は文字が滲んでやばいな。私の代筆でいいかな？ と、現実逃避し始めた私に幽香のため息交じりの呟きが聞こえた。

途端に、落下速度が激減する。

頭から落下していた私は、水面から鼻先数センチ離れた地点でなんとか停止した。

た、助かったあ……。

『勝ちはしたけれど、なんとも情けない姿ね。普段の不愉快なくらい落ち着いた物腰はどうしたの？ あの程度の相手に焦りすぎよ』

いや、焦りの原因のほとんどはお前さんなんですけど。

反撃が怖いのでツツコミを内心に留め、私は随分と久しぶりに疲れたようなため息を吐いた。

とりあえず、幽香の言うとおおり弾幕は私の勝ちって認めていいのかな？

まあ、当事者のチルノが気絶しているので、ここを通るのに必要だった弾幕ごっこもこれ以上する必要がなくなっただけは確かなわけだが。

姿勢を立て直して、波紋で水面に立つと、私はチルノを抱えたまま湖を渡った。

ところで、幽香さんや。

もう今更だけど、私が攻撃として想定していたのはノーマルショットのような軽いものであって、いきなりボムぶっぱするとかちよつとやりすぎじゃない？

あの時は、本当にチルノが消し飛んでしまったのかと肝が冷えたからね。

『あの程度のものがボムなわけじゃないでしょう。通常弾よ』

えっ、マジっすか!?

言葉を選んでさりげなく尋ねた私への返答は『今のはメラゾーマではない。メラだ』という大魔王的発言を素で返すようなものだった。

ゆうかりん、マジ大妖怪。

つまりなに？ あんな極太ビームがポンポン撃ててしまうわけですか。

『効果範囲を重視して設定したもののよ。射線上の弾幕を消すことが出来るけれど、その分少々の溜めが要るわ』

なるほど、あのノーマルショットにも弱点が無いわけではないな。

多分、連射に間隔が少し空く点と、どんな弾幕ごっこでもクソゲーになるという点だ。

……いや、待てや。

相手の弾幕を消せるんなら、わざわざ接近する必要もなかったんじゃない？ その場で狙い撃てばいいでしょ！

『私が貴女を甘やかす必要もないでしょうっ。』

幽香は心底不思議そうな声で問い返してきた。

言葉の後に『馬鹿なの？ 死ぬの？』って付きそうなくらいの嘲笑が透けて見えた。

今まで敵意を挟んで対峙することばかりだったから気付かな

かったが、幽香つて味方になるとこんなに疲れる相手だったんだね！
やったー！

でも、私そういう性癖ないから『我々の業界ではご褒美です』とか
開き直れないじゃないですか！ やだー！

……いや、もうホント疲れたわ。

「う……ん？ あれ、あた……？」

そんなやりとりの間に腕の中でチルノが目を覚ましたようだ。

丁度いいタイミングで湖も渡りきり、私はぼーっとしたままのチル
ノを地面に立たせてやった。

「……あつ！ あんた?! え、なんで?!」

ほどなくして我に返り、私と向かい合う状況に混乱するチルノ。

うーむ。さて、どう説明したものか。

弾幕ごっこは私の勝ちな流れなんだが、この辺オブラートに包ま
ないとシヨックを受けると思うんだよね。

引き分けとか負けでいいとか言うのと、幽香がまたなんか口挟みそう
だし――。

『おめでとう、負け犬さん。お前は目の前の人間に負けたのよ』

悩む私をいつそ清々しいほどスルーしてあっさり言っちゃうドS。

「あた……負けたの?」

『あらあら、現実が受け入れられないかしら? 身の程も弁えずに随
分と贅沢な感傷に浸っているのねえ。元から負け犬のお前がシヨツ
クを受けることなんてあったかしら』

幽香の言葉責めというか完全に言葉の暴力に対して、チルノは顔を
青褪めさせながら涙ぐんだ。

私の考えるオブラートとか欠片も考慮していない。

うん、ホントね。お前、いい加減ちよつと黙れ。

さすがにマジで怒ってしまう。

「幽香、少し黙れ」

『心地良い怒気だわ、先代。……それで、貴女ならどうするかしら?』

勝負の結果は覆らない。その妖精は敗者よ。勝者である貴女が、一
体どんな言葉を与えられるというの?』

まあ、それを言われたらこっちも黙るしかないんですけどね。

幽香の言い方もキツかったが、チルノにとっては目の前の現実こそが何よりも自身を打ちのめすのだろう。

歯を食い縛り、鼻水を啜りながらチルノは私を見上げた。

その顔つきは、睨みつけるというより継りつくような弱さが見え隠れしている。

「……がんばったんだもん。あたい、強くなる為に……たくさんがんばったんだ！ あの巫女に負けた時よりも、強くなったんだ！」

「ああ。強かった」

「なのに、なんでお前に負けちゃうんだよっ!？」

チルノの慟哭が周囲に響いた。

その声高くも弱々しい嘆きに対して、意外にも幽香は何も言い返さない。

私自身も、チルノの今感じている痛みや挫折感を拭い去る言葉など何も思いつかなかった。

幽香の言うとおりになら、勝者が敗者に掛ける言葉など存在しないのだろう。

しかし、だからといって今のチルノを放っておくことなど出来ない。

それは彼女が東方のキャラだからどうこうではなく、今の苦しみ悩む姿に酷く身近なものを感じたからだ。

……仕方ない。ここは一つ、偉大なる先人が残したとおきおきの激励の言葉を送るとしますか。

「努力する者が、必ず報われるとは限らない」

私の言葉に、俯いていたチルノは顔を上げた。

「しかし、成功した者は皆すべからく努力している！」

私は実感を持って、そう断言した。

これは某会長の超名言である。自分で口にしといてなんだけど、すごい身に染みてます。

実際、私は修行時代に何度も挫折しかかった時、この言葉に何度も立ち上がらせてもらっている。

今でこそ修行の成果を身につけて、最強の巫女だの何だの言われているが、修行の当初は当然のように能力的には一般人の範疇でしかなかった。

ここが幻想の許された世界だと理解はしているが、私自身がそういった領域に到達出来るかは完全に自分次第であり、当初は日々の努力に空しさを感じことも多かったのだ。

正拳突きとか百回するだけで疲れるのに、一万回やり遂げた上に最終的には一時間で終わらせるなんて常識的に考えて無理に決まっている。

一向に成果を出さない修行の中で、苦痛や疲労よりも私を追い込んだのは、そういった諦めだった。

そんな時に、私をいつでも奮い立たせてくれたこの言葉は、私が持つ前世の記憶の中で一番の宝だったと言えるだろう。

だから、チルノ！

お前も諦めんなよ！ もっと、熱くなれよおおお！

そんな感じに、なんか他の人も混じった状態で真っ直ぐに見据えると、涙を堪えるのも忘れて呆然としていたチルノがおもむろに口を開いた。

「……努力すれば、あたかももっと強くなれる？」

「ああ、なれるさ」

「いつか、あなたにも勝って、最強になれる？」

「なれるかどうかはお前次第だ」

『無理に決まっているでしょう』

幽香さん、水差さないでくれますか？

大人しいと思ったら全然相変わらずな幽香の反応に、内心冷や汗が流れる。

しかし、自重自体はしてくれているようで、彼女の囁きはチルノには聞こえないくらい小さなものだった。

ふっ、どうやら幽香もあの名言には何か感じ入るようなものがあったようだな。

……んなわけないか。

「じゃあ……じゃあさー！」

チルノは躊躇いがちに私の服を掴んだ。

涙の跡は残り、鼻水も垂れてしまっているが、それでも先程までの弱々しい表情から一変して、やる気と期待に満ちた笑顔を浮かべている。

うんうん、やはりチルノはこういう元気で勢いのある姿の方が似合っているな。

私は微笑みながら、何か言いたそうなチルノに先を促した。

「あんたが、あたいのお師匠になつてよ！」

……それは予想外だったわ。



『えっ、お師匠つてあの巫女のおかあさんだったの？　じゃあ、強いあいつを育てた人つてことだよね！　やっぱりあたいの目に狂いはなかったわ！』

『だからな、チルノ。私の強さは弾幕ごっこにはあまり役に立たなくて……』

『まずはあの巫女よりも強くなりたいわ！　お師匠、おねがいします！』

『……困ったな』

先代巫女と妖精のやりとりを聞きながら、幽香は退屈そうに小さなため息を吐いた。

なんとも面白みのない会話だ。

あの先代が多少なりともうろたえる様子は少しばかり愉快だが。

いや、面白くないと感じるのは何も二人の会話に対してだけではない。

幽香は、先代の語った言葉に自らが何かを感じ入っていたことを認めざるを得なかった。

加えてなんとも気に入らないことに、わずかにでもあの妖精に共感を持ってしまったことも。

——努力する者が、必ず報われるとは限らない。しかし、成功した者は皆すべからず努力している！

この言葉。昔の自分だったのなら、鼻で笑っただろう。

努力などといったものは、多くを持たざる者として生まれた、それこそ人間のような弱者が吐く戯言だ。真の強者とは、既に力を得ている。それが自分だ、と。

その自負こそが風見幽香の強さの証だった。

しかし、その証はある日あっさりとは砕け散った。

幽香の価値観は根底から覆され、別の存在だと思っていた弱者の立場を身に染みて理解したのだ。

屈辱だった。

数年はまともな眠れない日々が続いた。

無力感に、自分自身や周囲の物を破壊することを繰り返した。

そして、弱い自分を許せず、先代と何よりも己への殺意を原動力にして足掻いた。

とにかく自分の能力を高める為に、体にあえて無茶苦茶な負担を掛けたまま他の妖怪と戦ったり、力を酷使して限界を底上げしようとした。

その行為が『努力』と呼ばれるものだと自覚した時は、無性に恥ずかしくなつて一日中ベッドで唸っていたものだ。

今でも当時を思い出すと苦々しい感情が顔に出る。

そして、なんとも忌々しいことに、そんな自分の『努力』が、たった今倒すべき先代巫女にこれ以上ないほど力強く認められてしまったのだった。

あの言葉を聞いた時、幽香の胸中に渦巻く感情は実に複雑極まりなかった。

喜び？ ——まさか。そんなものを感じたら自分を殺したくなる。

怒り？ ——人間に認められたのが気に入らないなどと、そんなことで怒りを感じるほど小物ではない。

ではなんだ、虚しさか？ ——それこそありえない。言葉で表現されるのは気に入らないが、自分の積み重ねたものは確かに力となつ

た。

結局、ワケの分からない感情が幽香の中に残ることになった。

あの妖精に対する冷やかしも、思うように口が回らず、苛立たしげに黙り込むしかない。

会話の内容や先代の対応、そして流れを伺う限り彼女の用事にあの妖精が同行することになりそうだった。

これがトラブルの元にもなれば、こちらとしては面白いのだが――さて？

しばらくは『向こう』でも面白いことはなさそうだと思い、幽香はテーブルに置かれたティーセットに紅茶を用意した。

幽香は今、自身の住処である太陽の畑の自宅に居た。

入り口の扉を開ければそれっきりの、一部屋のみの小さな家だが造りや内装は充実している。

様々な花に彩られた室内は、四季の魅力がその小さな空間に満ちていた。

家具は少ないが、人間のような生活環境を必要としない幽香にとっては眠る為のベッドと一息つく為の椅子、テーブル、その他小物が数点あれば十分だ。

食事でさえ、戯れ以外に摂る必要はないのだ。

「……そうか、食事ね」

他愛もない思考の中で、不意に思いついた。

幽香は妖怪として、当然のように人間を食べた経験がある。

妖怪としての食欲を満たす効率のいい食材だとは思うが、それにかかる手間や強力な妖怪としての自負が食人に対する欲求を抑えている。

知性のない矮小な妖怪達が、本能のままに必死で獲物を追い回し、浅ましく貪り食う様を無様な姿だと軽蔑さえしていた。

――しかし、もしその対象があのだら先代巫女だったとしたらどうだろう？

「あはっ」

想像した途端、言い知れぬ痺れるような快感を味わった。

先代巫女に対して抱いていた、多くの感情が絡み合った複雑な思いの中に一つ、重要なパーツが当て嵌まったような気がした。なるほど、これも一つの答えか。と、納得する。

勝負自体が成立しない現状で、勝った後のことを考えるなど愚かだと想像することさえ放棄していた。

せいぜい、敗北した先代巫女を踏み躪る様を戯れに思い浮かべる程度だ。

そこに具体的で明確な方法が浮かんできた。

勝者と敗者。幽香はそう捉えていたが、現実的な結果としてそれは結局生き残る者と死ぬ者に別れる可能性が大きい。

ましてや先代巫女は人間だ。どれだけ強かろうが、深く傷つけば死ぬ。

そうして彼女を殺した時、自分の中に残るのは爽快感だけだろうか？

違うはずだ。

最強を自負していた自分の精神を根底から破壊した相手に対して、ただ死をもって全てを終わらせたなどと思えるはずがない。

気に喰わない話だが、かつての自分を破壊したのが彼女ならば、今の自分を形作ったのもまた彼女なのだ。

きっと、言い知れぬ喪失感を伴うに違いない。

だからこそ——あの巫女を殺した後で、喰う。

「いいわね。素敵よ」

幽香は心の底から愉快そうに笑った。

夢想して悦に浸るなど自分でも度し難い無様さだと戒めるが、一つの答えを得た喜びはなかなか抑えきれない。

そうか。

そういう考えもありか。

——彼女を殺した後で血の一滴すら残さず取り込み、永遠に自分のものとする。

風見幽香の中で、未だ整理しきれない先代巫女との複雑な因縁。

望んで止まないその決着を終えた先に続く道の一つが、見つかった

ような気がした。



「ねえ、お師匠。さっきのお弁当すっごくおいしかった！ あの卵焼きっていうの、また食べたい！」

「また今度な」

腕に纏わりつくチルノに苦笑しながら歩を進める。

結局、私は流されるままにチルノを伴って妖怪の山の麓までやって来てしまっていた。

途中で休憩を挟み、一緒にお弁当も食べた。

食事が終わって腹が膨れたら、チルノも飽きて湖へ戻るかと思っただが、なんか逆にテンションが上がっただけのような気がする。

いや、すごくいい笑顔で美味い美味いと食べてくれたのは、こっちとしても本当に嬉しかったんだけどね。

霊夢は子供の頃から聞き分けが良く、大人しい子だったので、こういう元気いっぱいな反応は新鮮だ。

思わず『お前、私の娘になれ』と地獄兄弟ならぬ地獄親子を作ってしまったそうだった。

知らぬ間に私自身も浮かれ、気が付けばこんな所まで来てしまったが、地底世界に通じる大穴を見つけた時点で我に返った。

「ここか……」

「うわっ、でつかい穴。こんな所あったっけ？」

『なるほど、結界が視えるわね。力の弱い者は、認識すら阻害されるわ』

事前に紫から聞いていた通り、穴自体に侵入者を拒む結界があることを私自身の感覚でも見つけた。

近づく者を灰にする、なんて物騒な代物ではないが、これは相当な妖怪でも通ることは出来ないだろう。

ちなみに、才能のない私ではこんな結界、解除はもちろん張ることも出来ない。

霊夢ならイケるってレベルだわ。

『しかし、これは人間でも通れないでしょう。そういう区別を付けた性質を持つ結界ではないようよ?』

「ああ、許可証のようなものが要る」

『その妖精はどうするのかしら?』

幽香が試すように聞いてきた。

私自身は、紫から届ける書状と一緒に特別製の符を貰っており、これがあれば結界を素通り出来ると聞いている。

しかし、この符が持っている人間にしか効果がないのか、それともある程度融通が効くのかまでは実際に通ってみないと分からない。

さらに加えて、私と一緒にチルノも通れるとして、地底世界へ行つていいものかが問題だった。

いや、問題は単純に私の考え次第なのだ。

地底への規制対象になっていないのは妖怪だけであって、妖精の扱いに関しては人間同様定められていない。

それに、原作では地底にもゾンビフェアリーという、ゾンビの振りした妖精がいたしね。

幽香もその辺の規制の曖昧さを理解し、その上で私がどう判断するのか試しているのだった。多分、笑いながら。

「……チルノ。これから行くのは地底世界という、とても危険な場所だ。弾幕ごっこもまだ普及していない。妖怪が普通に襲い掛かってくるかもしれない所なんだ」

「わかった、気をつける!」

「いや、それでも付いて来るのかどうかを聞きたいんだが……」

「よくわかんないけど、お師匠が行くならあたしも一緒に行く!」

なんかもう眩しいくらいの笑顔で言われました。

ああ、予想はしてたけど軽く決意してくれるなあ。

だからといって、チルノの決意自体が軽いとは思わないんだけどね。

この娘は強くなることにはこの上なく真剣だし、一途だ。

頭が悪いというより純粋な性質だから、理屈を捏ねるだけでは納得

してくれないだろう。

正直な話、この場で昏倒させでもしない限り止められないと思うし、そこまでするくらいなら別にいいんじゃないかね？　と思う私もいる。考えてみれば、地底は危険と言ったがどういう具合に危険なのか私自身も分からないんだしね。

こういうのを保険にはしたくないんだが、最悪の場合でも妖精のチルノは地上で復活することが出来る。

ここは、強く言うこともないか。

「……よし。なら、チルノ。私の手を握れ。」

私と一緒に進めば、この穴の結界を通れるかもしれない。だが、もし通れなかったらそのまま湖へ帰るんだ。いいな？」

「わかったー！」

チルノは何故か嬉しそうに私の手を握った。

なんかスキップしそうな足取りで私の手を引いていく。

「えへへっ、お師匠の手ってゴツゴツだね」

「ああ、悪いな」

「ううん。あたい、お師匠の手って好き！」

やべ、なにこの良い子。

純粹な笑顔に癒されていて、ふと気付けば穴なんかとつくに通り越して薄暗い地下空洞まで足を踏み入れていた。

緊張感もクソもないが、あっさりと通れてしまったなあ。

まあ、いいか。

私はやたらと機嫌のいいチルノを伴って、地底世界への道のりを進んでいった。

繋いだ手がチルノの体温でどんどん冷えていくが、波紋の呼吸で細胞を活性化させ、皮膚と血流の活動を保つツ！　燃え尽きるほど、ヒートオ！

そんな感じで気合いを入れながら、チルノと繋いだ手を維持し続けた。

実際には、気化冷凍法を食らったかの如く、思うように波紋が手に伝わらないので半ば以上根性である。

だけど私は手を離さない。

ふっ、限界を越えるべき時は今さ。明日って今さ！

広大で薄暗い洞窟を、二人で肩を並べて進んでいく。

光源は壁に付着した謎の光る苔や彷徨う怨霊、あとチルノが羽を光らせてランタンのような役割を果たしてくれた。すげえ、それって光るの？

チルノ自身が周囲の様子に驚いたり、私に話し掛けたりと、性格的な意味でも明るいので、この陰気な場所で随分と足取りが軽い。

予想よりもはるかに気楽な歩みとなったが、ある程度進んだ所で私は妖怪の気配を察知した。

うむ、相変わらずこの『気配』って具体的になのか分からんが、このルートで出てくる妖怪って心当たりあるね。

「お師匠、どうしたの？」

「土蜘蛛だ」

「……こいつは驚いたねえ」

暗闇で見えない洞窟の天井から、スルスルと細い糸を伸ばして逆さまの状態で降りて来たのは妖怪の土蜘蛛。黒谷ヤマメだった。

ポニーテールの金髪が可愛い少女の容姿をしているが、所有する能力が『病気（主に感染症）を操る程度の能力』と、かなりシヤレになってない凶悪さである。

正直、何でもありで戦ったら私も勝ち目ないんじゃないかと思う妖怪だ。

接近を察知した私をなんか警戒してるっぽいし、ここは黙って通り過ぎてた方がよかったかなと今更後悔。

「あたしが近づくのを察知した上に、正体まで見抜くとは大した人間だ。」

迷い込んだとは思えない。一体、どうしたの？ 地底に殴り込みにもかけに来たかい？」

好戦的な性格らしいヤマメ。

うーむ、自己紹介でもと思ったが、用事もあるし、今回は下手に聞わずに行こうかな。

「幻想郷を管理する八雲紫からの使いで来た。地霊殿へ行きたい」

「八雲紫ね。地上では偉い妖怪なのかもしれないけど、ここは地底だ。その名前は通じないよ、気をつけな。」

それと、地霊殿はこのまま進んで橋を渡った先の旧都を通り抜けた、そのまた先に建っているさ。旧都に着けば、その住人は皆場所を知ってるから適当に聞きなよ」

「ありがとう。助かるよ」

「……その低い物腰はなんとかした方がいいかもね。」

あんたが只者じゃないことは分かるけど、そんな敵意の欠片もない状態で旧都に入ったら、真っ先に獲物にされちゃうからさ」

なるべく相手を不快にしないように気遣った私の言動に、何故かヤマメはつまらなさそうな顔をして、そのままさつさと天井へと消えてしまった。

この対応が駄目って、じゃあ一体どうしろっての？

出会った住人にガン飛ばして喧嘩腰に物を尋ねろってのか？

なにそれこわい。旧都って映画に出てくるスラム街みたいな感じなの？

疑問を残しつつも、とりあえず穏便に事を済ませた私は再び先へ進むことにした。

「……ねえ、お師匠」

ん？ チルノってばどうしたの？

なんか納得のいかなさそうな表情してるんだが……。

そういえば、さつきから幽香も黙り込んでるな。

「どうした？」

「……なんでもない」

心なし手を握る力が強くなったことに首を傾げながらも、私は進んだ。

やがて、ヤマメの言ったとおりに橋が見えてくる。

そして予想通りここにも妖怪の気配。

原作通りなら、ここには地上と地底を繋ぐ穴の番人である水橋パルスイがいるはずだ。

二次創作では『妬ましい』とか『嫉妬』などのキーワードが主に扱われていたが、実際のところ行き来する者を見守る守護神的な立場らしいので、心配はいらないだろう。多分。

「人間が、こんな場所にまで何の用かしら？」

橋を渡ろうというところで、声を掛けられた。

いつの間にか橋の真ん中に現れたパルスイがこちらを睨みつけている。

「悪いことは言わないわ、地上へ戻りなさい」

「すまないが、そうはいかない。こちらも使者として来たんだ」

『すまないが』？ やつぱり、帰った方がいいわ。貴女ではここから先へ進むのは危険よ」

パルスイは私を値踏みするように一瞥すると、やはりヤマメの時のように何かつまらなさそうに吐き捨てた。

何故に……？

私の対応ってそんなに駄目なのかな。余計なトラブルを起こしたくないだけなんだけど。

私がおかやらかしたら、紫に迷惑が掛かるわけだしね。

「やい、お前！」

そんな風に悩んでたら何故かチルノがパルスイに怒鳴りかかっていた。

「さっきの奴もそうだけど、お師匠をそんな眼で見るな！ 許さないよ！」

一方の私は呆気に取られていた。

分かん……なんでチルノは怒っているんだ？

別に私が侮辱されたわけでも、失礼な対応されたわけでもないぞ。私の疑問に答えたのは、それまで沈黙を通していた幽香だった。

『あの妖怪どもは、腰の低い貴女を見下していたのよ』

無茶苦茶不機嫌そうな声色でそれだけ言うと、再び黙り込む。

見下してたって、妖怪の人間に対する認識って普通はそんなもんでしょ。初対面の幽香もそうだったじゃない。

結局、疑問は晴れずに、私はよく分からないままにパルスイへ掴み

かかりそうなチルノを抑えた。

「お師匠もなんか言っちゃよ！」

「よせ、問題を起こすつもりはない」

私達のやりとりを黙って見ていたパルスィは、呆れたようにため息を吐いた。

「妖精にそこまで慕われているなんて、妬ましい奴ね。こんな所に連れてくるんじゃないわよ」

「……返す言葉もない」

「その腰の低さも頂けないわ。実力はあるようだから、それに相応しい態度を取りなさい。」

いい？ この先にある旧都は地上を追われた妖怪達の楽園よ。

彼らは自分達の立場を不遇のものだと悲観などしていい。ただ単に、地上が合わなくなったから地底に潜ったの。

彼らには彼らの価値観がある。基本的に喧嘩には喧嘩で解決するような暴力バカの巣窟で、仕切っているのもそんな奴よ」

……どうやら、地底というのは某世紀末のような世界らしい。

暴力はいいぞお！ ってやつですか？ 途端に不安になってきたんですけど。

「ほら、そこで腰が引けるのがいけないのよ。絡まれたくなかったら、もっと傲慢そうに振舞いなさい。妖怪のように」

「人間なんだが……」

「ただの人間なら、筆られて食われて道端のゴミになるのがオチよ。後は、好きにいなさい」

言うだけ言うと、パルスィは緑色の光と共に消え去った。

通れってことかな？ 痛い目に遭いたけりゃ勝手にしろって投げやりにも見えたが。

とにかく、私としてはここで引き返す選択肢などないので、去ったパルスィに尚も不機嫌をあらわにするチルノを連れて橋を渡った。

日の光が届かない地底なのに、行き先には幾つもの光が見て取れる。

あそこが、問題の旧都か――。

◆
生物の気配すらなかった洞窟を抜けた先にある旧都は、一変して活気に溢れていた。

古い時代の物とはいえ、どれも住む者のいる木造の家が建ち並び、それらを繋ぐようにぶら下がる無数の行灯が街を隈なく照らし出している。

その街道の下を、多くの妖怪達が行き交っていた。

地上の人里では見たこともない店の数々。屋台も多い。まるでお祭りのようだった。

聞こえるのは笑い声ばかりではない。罵声や物の壊れる音、喧嘩がそこら中で起こっているらしい。

ただ、騒がしく、熱かった。

ここには無法と隣り合わせのような、ドタバタとした活気が満ち溢れていた。

しかし、そんなにぎやかな旧都に足を踏み入れても、チルノはちつとも機嫌が良くならなかった。

本来ならば、好奇心の赴くままに辺りを散策していただろう。

思うままに、未踏の地に感動を抱いていただろう。

チルノも、最初に旧都の入り口を見た時は確かにそういったものを感じていた。

それらを帳消しにしてしまったのが、周囲の妖怪達の視線だった。街道を進む中、すれ違う者達は皆例外なく隣を歩く人間を見る。

そして嗤うのだ。

驚き、珍しさ、好奇——それらの色を移した後、彼らの瞳は必ず嘲りに塗り変わる。

チルノにはそれが酷く不愉快に感じられた。

あの白い花から聞こえる意地悪な妖怪の声の方がまだマシだった。

自分を馬鹿にして、いろいろと難しいことを喋って混乱させようとする嫌な奴だが、一つだけ良いところがある。

それは自分と同じ相手を強いと認めていることだ。

本当は、大声で叫んでやりたかった。

道の真ん中で、全員に聞こえるように『この人間は、本当はとても強いんだ。あたいに勝ったスゴイ奴なんだ!』と。

堪えるように俯き、黙り込んで歩いていると、不意に睨みつけていた足元が暗くなった。

「——おいおい、こいつは一体どんな冗談だあ？　人間が妖精連れて、この地獄の往来を歩いてやがるぜえ」

見上げると、まずは鼻の曲がるような刺激臭がしてチルノはうげつと顔を歪ませた。

二人の行き先を立ちふさがるように、巨体の妖怪が三体も佇んでいたが、その威圧感よりも口から漏れ出す酒気がチルノには気に入らなかった。

そして、こいつらもこれまでの妖怪と同じような眼をしていた。

「……どいてくれないか？　この先の地霊殿に用があるんだ」

臆した様子もなく、しかし高圧的でもない静かな物腰で対応する先代巫女に対して、彼らが応えたのは嘲笑だった。

「どんな馬鹿かと思ったら、あの忌々しい『さとり』の住む館に自分から向かうほどかよ！　死にに來たんなら話ははええや、ここで俺らに食われてつちまいな！」

「人間の女の肉なんざ、随分食ってねえ！　しかも新鮮だ！」

「おう、なんか言ってみな？　おもしれえ命乞いの仕方だったら、腕一本くらいで済ませてやれるかもしれねえぜ」

その見た目に相応しいおぞましい物言いに対して、チルノは純粹に怒りを表し、先代は涼しげな表情のまま言った。

「怪我をさせたくない」

一瞬の間を置き、今度は周囲の傍観者も巻き込んで爆笑が起こった。

完全に侮られていた。

そんな反応に、先代は思案するように周囲を見回していたが、傍らで肩を震わせるチルノの様子に気付いた時には遅かった。

「わ・ら・う・なあーっ!!」

愛らしい少女の外見からは想像も出来ないような裂帛の怒号と共に、一瞬にして巨大な氷塊を生み出し、眼前の妖怪一体に叩きつける。岩石のようなそれを抱いて吹っ飛び、近くの店に突っ込んで盛大な音を立てた。

周囲が静まり返り、次に噓し立てるような歓声と罵声が沸き上がる。

揉め事の前兆だった。

「こ、このガキイ！ 何しやがる!？」

「うるさいっ！ よくもお師匠をバカにしたな!? バカって言う奴がバカなんだから、バカにする奴もバカなのよ！ このバーカ!!」

仲間の妖怪が凄むのに対して怯えもせず、考え付く限りの罵りの言葉を叩きつける。

チルノの怒りは限界を超えていた。

呆気にとられる先代を尻目に、一人周囲のギャラリーさえも敵に回す覚悟で啖呵を切る。

「どいつもこいつも聞きなさいよ！ お師匠はなあ、あたいに勝ったすごい人間なんだ！ お師匠をバカにした眼で見られると、あたいの方が腹が立つちゃうんだよ！」

両腕から氷の剣を生み出し、完全な戦闘態勢で身構えた。

弾幕ごっこではない。真剣な戦いに臨む覚悟をチルノは決めた。

目の前の奴らを絶対に許せなかったのだ。

「チンケな妖精が、粋がつてるんじゃないねえ！」

仲間の妖怪の一人がチルノに襲い掛かった。

頭に二本の小さな角がある。格下ではあるが、その種族は『鬼』だった。

妖精であるチルノには荷が重い相手だ。

しかし、チルノは怯まない。

例え相手がどんな種族でどんな実力を備えているのか知っていたとしても、退きはしなかっただろう。

それほど戦意に満ちていた。

事態の急転に、我に返った先代が慌てて動こうとして、それより早く髪に挿した花から花びらが散った。

明らかにおかしな比率で、大量の花びらが舞い出し、風もないのにチルノの傍へと流れて収束する。

『妖精。確かチルノって言ったわね』

集まった花びらが形を成し、それは腕となってチルノを吹き飛ばそうとした敵の拳を受け止めていた。

『本当に身の程知らずだわ。よくも不相応に吼えたものね』

花びらが形作ったものは人型だった。

緑色の髪を優雅に揺らし、倍以上の体格差がある鬼の拳を微動だにせずに止めている。

『……褒めてあげるわよ、この馬鹿』

風見幽香は牙を剥くように笑った。

「な、なんだてめ……っ」

『チンケな妖怪が粹がるんじゃないわよ』

ピクリとも動かせない自身の腕に戦慄しつつも強がる鬼に対し、嘲笑を返すと同時に、空いた片手を突きつけた。

次の瞬間、凄まじい閃光が炸裂して巨体を吹き飛ばした。

チルノがやったことの焼き回しのようだが、影響は比べるまでもない。

上半身を黒焦げにした鬼は、周囲のギャラリーを巻き込んで家屋に突っ込み、その上で建物自体を崩落させてしまった。

これにはさすがに静まり返った。

幽香が並の妖怪ではないことが理解出来たのだ。

「なによ、余計なことすんな！」

『ふんっ、本当に口だけはでかい奴ね』

突っかかるチルノに対して、幽香は相変わらず冷笑混じりに対応する。

そして、先代に視線を移すと、おもむろに片手を突き付けた。

鬼を吹き飛ばした破壊の光が宿る。

『貴女は本当に、何度言わせるのかしら？ 自覚を持ってと言ったでしょう。この場で殺してやりたいわ』

「幽香……」

『でも、その前に貴女には責任を取ってもらわないとね。』

チルノの言うとおりなのよ。貴女が舐められると、その貴女に負けた私達にとって耐え難い屈辱になるの。本当に腹立たしい限りだけれど——お前は、私に勝った人間なのよ』

幽香は、その時初めて自らの口に出して敗北を認めた。

殺意でも憎悪でもない。幽香と、そしてチルノの強い視線を受けて、先代は息を呑んだ。

そして、何かを悟ったように顔付きが変わる。

『そう、それでいい』

先代から放たれ始めた、肌がひりつくような気迫を感じ取り、幽香は満足そうに微笑んだ。

場違いなほど優しい笑顔だった。

差し出していた手の先から、幽香の体を形作っていた花びらの集合体が分解され、消滅していく。

『弾幕のボム用として設定した分身だから、あまり長い時間継続は出来ないわね。後は任せるわ』

「……引っ掻き回すだけして丸投げか。本当に、お前は味方になると疲れるな」

『今回ばかりは自業自得よ』

珍しく呆れたような対応をする先代を愉快そうに笑いながら、幽香は再び花を介した向こう側へと戻っていった。

強力な妖怪が消え去り、妖精と人間だけが残されたのを見た妖怪達は再び騒ぎ始めたが、それは何か押し殺したものだだった。

明らかに様子が違うのだ。

先代巫女の放つ威圧感、一変して周囲を圧倒していた。

「な、なめやが……ッ！」

「チルノと幽香」

絡んできた妖怪の内、最後に残った一体へ向けて真っ直ぐに睨み返

す。

パキパキと指の骨を鳴らし、溢れんばかりの戦意を見せ付けた。

「二人の文句は私に言え」

怒鳴りもせず、厳かに告げられた言葉に相手は完全に飲み込まれてしまった。

これが本当に、先程まで吹けば飛びそうに見えた弱腰の人間なのか？

今はまるでこの巫女の周囲だけが重くなつたかのような重圧感を感じる。しかもそれは無尽蔵に広がり、より重くなっているような錯覚さえあつた。

挑発染みた言葉にも、誰も反応出来ない。力を持った言葉だつた。騒ぎの中心となつた人間をこのまま逃がすわけにはいかない。

しかし、戦いもせずに敵わないとこの場の誰もが実感してしまつた。

先代自身から手当たり次第に殴りかかるはずもなく、奇妙な拮抗状態のまま沈黙が続く。

そこへ、不意に下駄の音が響いた。

取り囲んでいた人垣ならぬ妖垣が割れる。

途端に、先代巫女の放つのもものと勝るとも劣らぬ威圧感が場に満ちた。

「——いい啖呵切つてくれるじゃないか。こいつは、面白い人間が舞い込んできたもんだ」

現れたのはまたも『鬼』だつた。しかも女だ。

しかし、先程のような格下の雑魚ではない。

額に赤い立派な一本角。美しさの中に鍛え抜かれた力強さを宿した身体と、鋭い眼光を伴った顔付き。

長身の先代をしてわずかに見上げなければならぬほどの、もはや巨体とも表現出来る大柄な体格だ。

威風堂々を形にしたかのようなその姿は、まさに本物の鬼としての底知れぬ迫力を伴っていた。

重苦しく沈黙していた周囲が途端に色めき立つ。

この旧都においても有名な存在らしい。

圧倒的な重圧に、勝気なチルノも硬直して動けず、ただ先代だけが対峙してなお動揺を見せていなかった。少なくとも表向きは。

『……これはどうやら大物のお出ましのようね』

この場にはいない幽香さえも、その声色から緊張を隠せない。

「鬼だ」

『オニですって？　そういう種族なの？』

「ほほう、ますます面白いね。地上の人間でありながら、忘れ去られたはずの鬼を覚えているのか」

断言する先代に対して、鬼自身は愉快そうに笑った。

「改めて名乗ろう。私は山の四天王の一人、力の勇儀。星熊勇儀だ。お前さんの言うとおり鬼さ。」

まあ、山とはいっても昔の話。今ではこの旧都の元締めみたいなモンをやっている。暴力で起こった問題は、暴力で解決するのがこの流儀さ」

おもむろに巨大な盃を取り出すと、重量感のあるそれを片手の指先で回す。

そして、もう片方の手に下げている酒瓶から中身をなみなみと注ぎ始めた。

自身の言う問題とやらの中心で、なんとも大胆にして余裕の仕草だったが、誰にも邪魔の出来ないような貫禄に満ちた光景だった。

「さて、では珍しい人間よい。」

お前さん達はここで騒ぎを起こした。ここは旧地獄街道、喧嘩は華だ。締め上げるほど悪いことじゃあない。だが、騒ぎの収まりはつけないといけないねえ」

鬼の言葉は、不思議と聞く者の心を支配するような力に満ちていた。

これがかつて妖怪の山を牛耳っていた独特のカリスマなのか。

完全に勇儀の独壇場である。

誰もが黙り込み、この恐るべき旧都の実力者の判断を固唾を呑んで見守っていた。

「お前さんが何者なのか、何が目的なのかは知ったことじゃない。どんな理由があるろうが、暴れる奴には暴れて迎えるのが礼儀でね。勝負しようじゃないか、人間！」

満ちた盃を掲げ、そう宣言すると同時に周囲から割れんばかりの喝采が巻き起こった。

喧嘩はこの華——まさにその言葉通りだった。

先程までとはまた違った熱気に、チルノは身構えたまま、それでも不安そうに先代を見上げる。

不動のままそこに佇む姿に、少しだけ安心出来た。

「勝負の方法は人間の側に任せる。それが鬼の流儀だ。何でもいいよ？ さあ、かかってきな」

『……その盃は何のつもりかしら？』

沈黙を貫く先代に代わって、花越しに幽香が尋ねた。

自信に満ちた笑みが答えとなって返ってくる。

「なあに、こいつは私自身への勝負さ。どんな勝負方法であれ、この盃の酒を一滴でも落とせば、その時点で私の負けだ」

『なるほどね』

幽香は納得した様子だった。

納得した上で声色に不機嫌を通り越して嘲りを滲ませ、嗤った。

『さっきの雑魚どもと同じだわ。どいつもこいつも、地底の妖怪ってのは私を不愉快にさせてくれるわね』

「……何？」

『こいつを舐めすぎよ、この大馬鹿ども』

幽香は、勇儀だけではなく周囲の、あるいはこの地底に来て以来出会った妖怪達全てに対して言い放った。

その言葉の意味を理解する者が現れるより早く、先代が動いた。

誰も感知出来ない。

爆音と共に、勇儀の顔面が吹き飛んだ。

掲げていた盃は粉々に砕け散り、破片と酒を撒き散らして、勇儀自身はきりもみしながら後方へ飛んでいく。

多くの妖怪を巻き込み、絡み合っただけで街道を転がった。

地面を抉り、妖怪達の悲鳴が盛大に舞い上がった土煙の中へ消える。

見えた者は一人もおらず、何が起こったのか理解出来たのは攻撃した本人と幽香だけだった。

先代の不可避の一撃が、かつての幽香のようにその驕りごと鬼を殴り飛ばしたのだ。

静まり返り、次に周囲は恐れ戦いた。

あの鬼の勇儀が、人間によって地に伏した。

砕けた盃が転がり、酒が地面を濡らしている。

敗北——そう、あの勇儀が言った通りなら、これは決着だった。

鬼との勝負は、たった一撃で決まってしまったのだ。

「……はっ、ははは。あっはははははははははははははははは!!」

土煙の中から、勇儀の笑い声が響いた。

怒りや悔しさを滲ませたものではない。

本当に、快活とも言える清々しさを含んだ笑い声だった。

『気分がいいかしら？　ちなみに私は最悪だったわ』

「なるほど、お前さんもコイツを食らった側だったのか。そりゃあ、私の対応が気に入らないわけだ」

ゆっくりと、立ち上がった勇儀が再び元の位置へ歩み戻る。

無防備なところへ直撃を受けた頬には打撃の跡が残り、皮はズル剥け、弾けて抉れた赤い肉が見える。口と鼻からはダラダラと大量の血を流していた。

ダメージは確実に刻まれている。

しかし、足取りは確かで、ふらついた様子もなかった。

「いや、気持ちのいい一発をありがとうよ。目が覚めた。寝惚けていたのは私の方だったらしい」

『……オニというのは確かに強力な部類の妖怪のようね』

「効いた効いた、間違いない！　本当は頭もグラグラするんだが、不甲斐ない自分に腹が立ってそれどころじゃあないんだ」

同じ一撃を受けて昏倒した身である幽香は苦々しげに呟くが、勇儀もまた内心は表面上ほど単純ではなかった。

苦笑しながら、地面に散らばった盃の破片を踏み砕く。

それは自分の慢心を戒める意味を持っていた。

口元の血を拭い、鬼に痛恨の一撃を与えながらも油断など微塵も見せない先代を真っ直ぐに見据える。

「人間よ、恥を忍んで頼む。勝負を仕切り直させてくれ。」

この力の勇儀、全身全霊を以ってお前と戦いたい！ 久しく忘れていた鬼退治、挑戦してみちゃあくれないか!？」

前代未聞の申し出に、周りのざわめきは最高潮に達した。

伝説の鬼に挑む人間――。

その光景がはるか昔に置き去られて以来、一体どれほどの月日が経っただろうか。

今、それが唐突に蘇ろうとしている。

それも昔とは違う。何人もの人間が策略と武器を用いて行ってきた所業を、たった一人の巫女が素手で挑もうとしているのだ。

「その言葉、宣戦布告と判断する！」

恐るべき鬼の誘いに対して、その人間は一切怯むことなく応えた。

「当方に迎撃の用意あり！」

叩けば死ぬ。刺せば死ぬ。時が経てば死んでしまう。

そんな脆弱であるはずの人間が、裂帛の気迫を込めて拳を握り、鬼相手に身構える。

その様は、これまで先代を見てきた地底の妖怪達の曇っていた瞳を見開かせるのに十分な姿だった。

完璧な戦闘態勢を整えた先代に対して、勇儀は堪えきれぬ喜びを露わにした。

恐れ怯まれることには慣れていたが、こうまで勇ましく向かい合う輩は実に久しぶりだった。

かつて、人間と戦い合うことで築いていた特有の絆。

過去のそれよりも更に特別な、新しい何かを感じ取り、抑えきれぬ興奮が全身に力を漲らせる。

「ありがたいっ！ 人間よ、勝ち負けに関係なく、勝負の後には名前を教えてくれ！ その名をこの身に刻み、私は朽ち果てる最期の瞬間ま

でお前を忘れないだろう!!」

勇儀は失ったと思っていた何かを取り戻し、心が満たされるような
歡喜に轟と吼えた。

◇

えー、なんかいろいろあつたんですけど、結論だけ言うと東方の世
界で最強扱いされている鬼とガチンコすることになりました。

あれれー、おつかしーぞー？

どうしてこうなった？

どうしてこうなった!?

重要なことなので二回叫んだ。っていうか嘆いた。

幽香とチルノの意思をようやく察して、一念発起。

もう舐められまいと、周りの妖怪に『北斗の文句は俺に言え!』つ
て感じに啖呵切ったら鬼が出てきたでござるの巻。

内心鼻水垂らして呆然としていたら、鬼の勇儀さんがおもむろに酒
を注ぎ始めたので、これが噂のハンデかーとちよつと安心していた
ら、ふと気付いた。

……あ、隙だらけ。

——サ☆スー☆クオリティーツ!!

強敵相手には先手必勝の鉄則を忘れずに、全力全開の百式観音をぶ
ち込んだ。

これを食らって付け狙われる羽目になった幽香が見ているのも無
視しての暴挙である。

でも、実際に遠慮してる余裕なんてない相手だし。

いろいろな妖怪を相手取って戦ってきたが、鬼っていうのは本当に
半端じゃないというのが対峙するだけで理解出来た。

普段の私なら、へりくだりはしないが、まず戦闘を避けることを念
頭に対応するような相手だろう。

しかし、今の私にはそれは出来なかった。

チルノの想いと、幽香の言葉を無視することなんて私には到底出来

ることではなかったのだ。

なるほど、責任か……。

自覚がないというか、正直今でもそういう実感とかはないんだが、私の言動が周りに影響を与えるという色んな人からの忠告を少しは理解出来たと思う。

誰かに勝つっていうことは、とても重いことなんだな。

私個人の勝敗にはもうこだわらないと以前言ったが、それは撤回しなければならぬだろう。

私へのリベンジに執着する幽香や、憧れと師事する心を持つチルノなど、多くの想いを寄せてくれる人達まで軽んじることになるんだ。

それは確かに許されないことなのだ。

少なくとも、私自身が許さない。

そんな感じに、今の私はちよいとばかりマジの戦闘モードに切り替わった状態なのだ。

すまん、紫。事が済んだら代わりに頭下げとくから勘弁してくれい。

仏に会っては仏を斬り、鬼に会っては鬼を斬る！

……そんな覚悟だったんだが、マジで鬼を斬ることになるとは思わなんだ。

それでまあ、先制攻撃は見事なくらい成功したんだが、ある程度予想してた通りに勇儀はそのままダウンなどしなかった。

いや、むしろこれって状況悪化してね？

盃落としたんだから、不意打ちに文句は言われても、そのままなし崩しに負けで終了かと思っただが、恥を忍んでまで再戦を要求されると思わなかった。

なんつーか、私の一撃のせいで勇儀にこだわりみたいなものを持たせてしまったっばい。

いや、あの……勘違いされてたら申し訳ないんですが、あれは私の超全力です。

鬼とガチンコとか無理だから、先制攻撃を全力でかましたのであつて、挨拶代わりの一発とか余裕かましたワケじゃないんで。

これは幽香にも言えることなんだけどね。

しかし、幽香自身もそうであつたように、そんな解説は何の意味もないんだろうな。

ハンデも隙も油断も無くして、ただ漲るような力と戦意だけが残つた最強の鬼と対峙する羽目になつた私。

泣きたいし、逃げたい。

でも、そういうわけにもいかんのよねえ……チルノも幽香も見てるんだから。

仕方ないので、萎えそうな戦意を自ら奮い起こす。

「その言葉、宣戦布告と判断する！ 当方に迎撃の用意あり！」
くじけそうな時はこいつに限るぜ。

記憶にある、ありつたけの勇気の籠もつた言葉をかき集めて、おそらく私の生涯で最大最強となる敵に立ち向かう力とする。

震えるぞハートツッ！

殺気ではなく勇気を持って戦うんじゃ！

えーと後は、オラすげえわくわくしてきたぞ！ ……いや、これは違うな。

とにかく——。

覚悟完了。



旧都の奥。中心にある灼熱地獄跡の真上に建てられた地霊殿の一室にて、古明地さとりはその『声』を聞いた。

「これは、旧都の端から……？」

ここからは離れた場所だつた。

第三の目を集中させても、心の声を聞き取れるような距離ではない。

しかし、その言葉ははつきりと聞こえた。

大きな心の声だつた。それは比例するだけの想いの強さを示して

いる。

それほどの強い意志でありながら、喜怒哀楽のどの激しい感情も含まれてはいない。

ただ、身震いするような強固な意志に束ねられていた。

——覚悟完了。

決死でありながら命を捨てるような投げやりなものではなく、揺るがぬ信念が宿った言葉だ。

こんな強い心を出す者が、果たしてこの地底に存在したのだろうか？

あの鬼でさえ、人間を見限って地上を去った諦念を心の何処かに残しているというのに。

「……来訪者、かしらね」

何か非常に面倒なことが起こっているような気がする。

さとりはため息を一つ吐き、足元で寝転がっていた黒猫と天井に留まった鴉に告げた。

「お燐、お空。少し出かけてくるわ」

出不精で重くなった腰を上げ、地霊殿の主は部屋から歩み出た。

行き先は一路、旧都で一番の騒動の下へ——。

其の八「怪力乱神」

鬼と人。

激闘の開幕は、やはり先代巫女の一撃からだった。

回避はおろか、防御の余地すらない。

勇儀は気が付いた瞬間には、首がもげるような衝撃によって意識を飛ばされそうになった。

盃片手に隙も油断もあつた最初とは違う。

完全に戦闘態勢だつた。

だからこそ、初撃では身体ごと吹き飛ばされた一撃に今回は足を踏ん張って耐え抜くことが出来たが、逆にそこまで備えながらまともに喰らつてしまった。

——気持ちのいい一発なんて、見栄張るんじゃないかった！

朦朧とする意識の中で、少し前の自分に悪態を吐く。

為す術も無い現状に、これがどれ程エゲツナイ攻撃なのか身に染みて実感した。

相手の初動に全く追いつけず、それでいて芯に残るような重さの一撃なのだ。

なんて理不尽だ、と鬼である自分の身を棚に上げて考えてしまう。

しかし、何も掴めなかつたわけでもない。

勇儀は先代が両手を合わせた合掌を行ったのをかろうじて捉えていた。

その動作に何の意味があるのかまでは分からないが、それがこの攻撃の予備動作だというのは理解出来た。

理解出来ただけで対応は全く出来ないのだが、この不可避の一撃がそれを挟まなければ成立しないれっきとした一連の動作なのだとかつただけで十分だつた。

見出した光明。そこから伸びる綱で遠のく意識を引き上げ、崩れそうな体勢を無理矢理戻す。

「まだまだあー！」

自分への叱責と強がり半々に織り交ぜた雄叫びを上げ、勇儀は突

撃した。

筋肉を硬直させ、丸太のような太い両腕で顔面を防御し、被弾覚悟で強引に間合いを詰める。

予備動作が存在するのなら、攻撃の間隙も必ず存在する。

あと一発は被弾することを覚悟の上で、そこへ自身を割り込ませるつもりだった。

そして、先代からの二撃目が放たれる。

やはり一瞬の間に行われる祈りの動作。

次の瞬間、勇儀の全身を覆い尽くさんばかりの無数の衝撃が走り抜けた。

「ぐっ……連撃か！」

一つの動作に一撃のみと無意識に捉えていたのは単なる甘さであつた。

見えない拳が弾雨となって勇儀を圧倒した。

怒涛の如く押し寄せる重い衝撃に、渾身の力で耐えるが、鬼の胆力を以つてしても踏ん張つた足ごとジリジリと押し返される。

なんという――。

なんという人間だ、あいつはっ！

勇儀は歯を食い縛りながら、そのまま口の端が釣り上がるのを抑え切れなかつた。

胸の中ではち切れんばかりの歓喜が渦巻いていた。

短い生しか持たない人の身でありながら、一体どれ程濃密な鍛錬の果てにこれほどの力と技術を手に入れたというのか。

それを思うだけで尊敬の念が湧いて止まない。

そして、それを真正面からぶつけ合える自身の幸運に感謝した。

だからこそ、耐える。何が何でも耐え抜く。そうでなければ、彼女の積み重ねた時間に申し訳が立たない。

皮肉なことに、先代の洗練され抜いた力と技であつたからこそ、対する勇儀は自身の意地と相手への敬意によってこの猛攻に耐え抜くことが出来たのだつた。

嵐のような打撃が止む。

凄まじい攻撃だった。

合掌の予備動作は一度きりだったが、そこに何十発もの連撃が込められているとは予想していなかった。やはり、常識を超えた技だ。

しかし、一撃に力を収束させたものに比べれば、連撃ではどうしても攻撃の重みが無くなる。

それでもなお圧倒的な破壊力を秘めていたが、本気で防御に回った鬼の肉体を砕くことは出来なかった。

防御に成功しながらも、それよって完全に足の止まってしまった現状。

予想通り、次の攻撃までの間隙は確かに存在していたが、それは本当に短い間隔だ。間合いを詰めるには足りない。

未だ遠い標的までの距離を睨み、勇儀は両腕の防御を開いた。

「■■■■■■ーッ!!!」

地底全体を震わせるような、鬼の咆哮が響き渡った。

攻撃に晒されながら腹の中に溜め込んでいた力を、声と共に一気に開放する。

放たれた咆哮は、ただそれだけで形を持った力となり、弾幕となって津波のように先代へと襲い掛かった。

雄叫び一つさえ攻撃手段となる鬼の規格外さに不意を突かれ、逃げ場は無し、飲み込まれば即死の状況へ一瞬にして追い込まれる。

先代は咄嗟に迎撃を選択した。

「波ああーッ!!!」

鬼の咆哮を、裂帛の気合いで迎え撃つ。

両手を上下逆さにして前に突き出す独特の構えを取って放たれた『博麗波』が、勇儀の弾幕と真正面から激突した。

幽香の放ったものと勝るとも劣らない極大高密度の光線が弾幕を飲み込み、そのまま勇儀自身さえも光の奔流の中に巻き込む。

弾幕ごっこ用の威力を調節した物ではない。恐るべき破壊力と殺傷力を秘めた閃光だ。

しかし、勇儀はあろうことかその光の中を構わず突き進んだ。

「これではヌルイなあ!」

勇儀の肉体はまさに鋼鉄だった。

単なるエネルギーの放出では皮膚を焼く程度のダメージしか与えられない。

先程までの一撃や連撃こそが、異常なまでに収束され、研ぎ澄まされていったのだ。

あれほどの一点集中でなければ、鬼の肉体を貫けない。

押し寄せる破壊の光を物ともせず、ついに拳の間合いへ先代を捉えた勇儀は、鬱憤を晴らすかのように初撃にして渾身の拳を見舞った。砲弾に等しいそれが、軌道上の標的を粉碎するべく唸りを上げて迫る。

鮮血が飛び散った。

傷つけたのは、しかし皮一枚。

盛大な空振りだった。勇儀の一撃は、先代の手のひらの皮を削り取った程度で、そのまま巧みに軌道を逸らされたのだ。

「これを受け流すか!? 当たれば、人間の肉体なんぞ粉微塵にする自信くらいはあるんだがねえ!」

驚愕と称賛を交えて、勇儀は獰猛に笑った。

対して先代は、必殺とも言える鬼の間合いに立ちながらも全く変わらぬ静かな物腰のまま備えている。

「激流を制するは静水……」

聖人が悟りを語るように、厳かに告げる。

「激しい流れにはあえて身を任せるってか。しかし、その力の抜けた拳で鬼の身体を貫けるかな!」

相手の意図など解さず、ただ腕力で殴り、脚力で突っ込む。

鬼の戦闘方法は至って単純であり、それ故に極まっていた。

生来備わった力こそが、最も強大な武器であり鬼の真価なのだ。

勇儀の剛力が容赦なく先代に襲い掛かる。

間合いの開いていた時こそ一方的な先代の攻勢だったが、至近距離での格闘戦となった途端立場は逆転した。

当たれば一撃で致命傷となる攻撃を、先代が文字通り身を削りながら逸らし、かわす。

言葉の通り、激流となった勇儀の猛攻を冷静に制していく先代の柔らかな身のこなし。

結果的に勇儀の攻撃は全て空振りである。

しかし、その拳圧は周囲のチルノや傍観者達を一発ごとに圧迫し、拳打が放たれる度に先代の体の表面を削り取った。

もちろん、一方的な展開が通るほどのこの戦いは尋常なものではなかった。

間合いを詰めてきた勇儀に対し、今度は先代が更に踏み込む。

もはや密着状態とも言える位置で、わずかな隙間から脇腹に拳を叩き込んだ。

予想外の轟音と衝撃が体内で響き、勇儀は思わず呻いた。

拳に十分な勢いを乗せられない数寸の間で、体重移動と関節の捻りによって力を収束させた打撃がありつたけの霊力と共に打ち込まれたのだ。

拳そのものが身体を貫いて背中を突き破ってもおかしくない破壊力――。

「……つまだあ！ これもヌルイ!!」

だが、それでも鬼の肉体には致命傷とならない。

反撃に移るべく、大きく体を後ろに逸らす。

そこで勇儀は己の失敗を悟った。

間合いを開いてしまった。しかも自分から。

気付いた時には遅い。

案の定、勇儀がその一動作を行う間に先代は祈りを済ませていた。

至近距離で不可避の一撃が放たれる。

間一髪、頭を守ることに成功した両腕に衝撃が走り、今度ばかりは踏ん張ることも出来ずに勇儀は吹き飛ばされた。

地面を削り、なんとか制動を掛ける。

追撃は無い。

余裕があるからなのか、あるいは無いからなのか。

勇儀は考えても仕方の無いことを考える自分に苦笑した。

戦闘の音が止まり、沈黙が辺りに満ちる。

一度目の攻防が終わった。二人の位置は、最初に対峙した時のような状態に戻っている。

周囲の熱狂は上がり続けていた。

しかし、実際に歓声は無く、誰もが拳を握って固唾を呑むしかない。それほどの緊迫感を、二人の闘争は生み出していた。

「堪らないねえ、お前さんは……」

状況は決して一方に有利ではない。

本来ならば人間と鬼という二つの種族の間に存在する圧倒的な差を、目の前の巫女は想像を絶する鍛錬と経験によって埋めている。

生来の力への自負を持ち、それを力の源とする妖怪には決して為し得ない人間特有の強みを、彼女は極限まで備えているのだ。

その事実がまた、勇儀には堪らなく嬉しかった。

「昔は、お前さんのような人間がたくさんいたよ。その中でも極めつきだ」

勇儀は素直な称賛を口にすると同時に過去を懐かしんでいた。

先代は応じず、無言のままおもむろに履いていた足袋を脱ぎ捨てる。

素足となった状態にどんな意味があるのか、勇儀には分からない。しかし、きつと何か戦いに備えた油断ならない意味があるのだろう。

そう当たりをつけて、ますます愉快になった。

「地底に攫つちまおうかな？　なあ……」

鬼特有の欲求に任せて獰猛に笑う様を前に、先代が身構えて応える。

「——言葉は無粋。押し通れ！」

戒めるような一喝が勇儀の緩んだ緊張感を叩き起こした。

その言葉に我に返った勇儀は、いつの間にか腑抜けていた自身を叱責し、改めて目の前の恐ろしくも愛おしい人間と向き合った。

何を無駄なことを考えていたのだ？　今この瞬間を一秒でも無駄にしたくないのに。

「応っ!!」

もはや余計なことは考えまい。

旧都の管理を任された責務、仁義、過去の栄光、全てが終わった後のこと——何もかも投げ捨てる。

一体どれくらいぶりだろうか？

勇儀はただ一匹の鬼として、目の前の人間との戦いに没頭することを決めた。

◇

鬼強すぎワロタ。

鬼のように強い、っていう表現の意味が身に染みて分かります。

紫のようなチート能力によるものではなく、幽香のような妖怪特有の怖さを備えた精神的な手強さでもない。

ただ単純に強い。

滅茶苦茶力が強くてアホほど頑丈な、ぶっちゃけるとカンストしたステータスを前面に出したスーパーゴリ押しタイプだった。

こっちの攻撃は渾身のものしか防御を抜けず、逆に向こうは即死確定の攻撃をバンバンかましてくる。

守りに入ろうものならそのまま粉々にされてしまうので、なんとか受け流してはいるが、攻撃の余波だけで体が切り刻まれていく有様だ。

比喩ではなく、本当にこの人の拳って砲弾並なんですけど……。

掠った部分が削り取られていくし、腕の表面に卸し金でも付いてるんじゃないの？

このままでは卸される大根みたいに少しずつ身体を削られてその内無くなっちゃうような不安さもある。

直撃は一切受けていないのに、私は既に血塗れだった。

まあ、派手な見た目ほどダメージは深刻でもないんだけどね。でも痛ひ……。

当たったらどうなってしまうのか考えたくもない。

私は偉大なる先人の教えを言葉にして自分に言い聞かせながら、激

流と向かい合っていた。

加えて鬼の耐久力も尋常ではなく、百式観音の連撃さえ耐えて接近されてしまった。

やっぱり『もどき』じゃ駄目かあ。

百式観音・九十九乃掌（つくもものて）のような弾幕を張ればさすがに近づけないだろうが、あの技は念の観音像が必要だから特性を持たない私は無理なんだよね。

おまけに、かめは……じゃない『博麗波』を受けながら突進してくるし。

二つ名に『伝説のスーパーなんか』って付くんじゃないの、この鬼。

近距離戦では普通の打撃に切り替えたが、どれだけ霊力を込めてもイマイチ効果が出ない。

特に密着状態でのリバーブローとか渾身だったんだけどな。さすが鬼だけに肝臓は丈夫なのねってやかましいわ。

あれが駄目なら、もうカウンターでも狙うしかないぞ。

飛んで来る大砲の弾に付いた小さな標的を狙うようなカウンターをね。

……うん、無理！

あと、なんだ雄叫び一つで弾幕出せるって。しかもすげえ強力な奴。

攻撃力、防御力共に凶悪。飛び道具も半端じゃない。

なんとかもう一度距離を空けて対峙する状態に戻せたが、当初予定していた間合いを取っての攻勢は不可能だと悟った。

あの身体能力相手に肉弾戦かあ……今更だけど、私人間なのよ？

マジで気が重い。

緊張感で吐きそうだ。

けど、まあ……吐いた唾は飲めんわなあ。

内心で苦笑しながら、更なる激戦に備えて足袋を脱ぎ捨てる。

これは言葉を借りるなら『グローブを外した』ってところか。

「――言葉は無粋」

なんか勇儀が私を攫っちゃう宣言しちやってますが変な意味じゃないよね？

とりあえず、返答代わりというか自分を奮い立たせる意味が大半な台詞を口にする。

「押し通れ！」

「応っ!!」

やべ、カツコつけすぎた。

空元気も元気というか、私自身も大分精神的に立ち直せたが、勇儀の方も私の啖呵を受けて物凄い気迫に満ちていた。

なんかもう気合だけで吹っ飛ばされっっちゃいそう。

ええい、弱気になるな！

事前に覚悟は完了しているのだ。

とりあえず、現状で必要な要素は純粹な戦闘力だ。

鬼の身体能力は、当然のように人間の比じゃない。

どれだけ力を集中させても、私では地力が足りないのだ。

今のままでは勇儀の攻撃を凌ぎ切れないし、その防御を抜くことも出来ない。

だったら、地力そのものを引き上げるしかない。

自分の能力を一時的に限界以上にまで引き出す、というのは実は結構よくある技だ。

体内門を開放するとか、自身の秘孔を突くとか、肉体のリミッターを外すといった内容の技は数多い。

そして、私もそういった技を持っている。

今、そいつを使うのだ。

これは正真正銘、私の最大の切り札だ。

こういった限界を一時的に超える技に定番である、使った後の反動というのももちろん存在する。

筋肉痛程度ならまだしも、下手すると肉裂けたり骨折れたりするし。

あと、使用中は身体能力激上がりするから、血行も良くなって鼻血とか血涙とか耳血まで出まくりです。

……自分で言っていて、すげえやべえ技だと自覚した。
これ使って戦闘が長引いたことないから分らないけど、ずっと使
い続けてたら最終的に私の体破裂するんじゃないの？

なにそれこわい。自分の技なのに。

でも、このまま戦っても勝ち目ないしね。やるしかない。

チルノと幽香の為に、負けることを視野に入れて戦うなんて無様
な真似は出来ないな。

この技を使って生き延びた奴はいねえ！　とか、いらぬフラグを
立てつつ深呼吸一つ。

まあ、実際に敵以外でこれ見せたの霊夢くらいだしね。

漫画の中で類似の技はいろいろあるし、呼び方も様々だが、私は敢
えてこう叫ぼう。

いくぞ——界・王・拳んんツ!!!



ドクンツ、という心臓の鼓動が先代の身体を飛び越えて勇儀にも聞
こえたような気がした。

彼女を中心に空気が震え、波打つ。

「何……？」

明らかな変貌だった。

身構えた先代から放たれる『力』としか表現出来ないものが増大し、

周囲を圧迫した。

対峙する勇儀はもちろん、戦いの場から一步退いた傍観者達にすら
戦慄が走る。

目に見える変化も彼女の身には起こっていた。

全身から吹き出さんばかりの霊力が表面化し、蒸気のように立ち昇
る。

増大した力が血管を伝って体内で荒れ狂っていた。

目は充血し、血管が破裂して鼻血が流れ出す。

「……おいおい、本当にお前さんは人間かい？」

前代未聞なことに、鬼の額には冷や汗が滲んでいた。

目の前の人間から感じ取れる、漲る力と圧迫感と同族のそれさえ凌駕する。

半ば呆然としていた勇儀は、自らが敵に圧倒された隙の代償を払わされることとなった。

何かを砕くような音が響く。

先代が文字通り地面を蹴り砕いて突進した音なのだとして理解する前に、彼女は勇儀の眼前に到達していた。

「お——」

何かを言いかけ、結局何も言う暇はなかった。

狙い澄ました正拳突きが勇儀の身体の中心を捉える。

衝撃が内臓を攪拌して背中から突き抜けた。

「ぎゃー!!」

勇儀が吹き飛び、慌てて避けたギャラリーの間を抜けて近くの家屋に激突した。

崩落を始めるそこへ先代の追撃が間髪入れずに迫る。

起き上がろうとした勇儀の下腹に肩から突っ込むと、そのまま一気に体を押し込んだ。

あろうことか、壁を貫通して家の中へ突き進み、そのまま反対側の壁から抜けて出た。

遅れて背後の建物が崩壊する。

——なんだ、あれは？

——人間？ いや、違う。あれは……。

——鬼だろう。

周囲の妖怪達は戦慄と恐怖に呆然と佇むことしか出来なかった。

唯一、チルノだけが二人の戦闘を追ってすぐさま駆け出す。

それに慌てて他の者が続いた。

完全に崩れ落ちた建物を貫通して、反対側の街道からは既に戦闘の音が絶え間なく続いていた。

タツクルからマウントポジションを取った先代が、圧倒的優位な体

勢で勇儀の顔面に拳を振り下ろしている。

勇儀は拳と地面に挟まれ、頭部を小刻みにバウンドさせながら、滅多打ちにされていた。

およそ肉体が上げるようなものではない重く鈍い音が鳴り止むことなく続く。

もちろん、勇儀も一方的にやられているわけではない。

勢いの乗せられない不利な状態から、鬼の腕力に物を言わせて拳を振り上げる。

文字通り頭に血が昇り、活性化した血流によって鼻血を吹き出しながらも、先代は氷のように冷静にそれを避けた。

反撃の拳はこめかみを削り取るだけに留まり、逆に振り下ろされた一撃がカウンターとなつて勇儀の顔面に突き刺さる。

頭蓋骨の奥にまで衝撃が届くのが分かった。

単純な腕力と全身の瞬発力、込められた霊力さえ先程までの先代とは圧倒的に違う。鬼の肉体に深刻なダメージを刻み込む程に。

(一気に力が上がった。真つ当な方法じゃないだろうね)

ぐちゃぐちゃに掻き回された意識の中で、どこか冷静に勇儀は推察した。

(こうして密着していると異常に熱い。血流の勢いが肌で感じられる。あの血も、全部体に無理をさせている結果か……)

先代の体内から沸き上がる限界を超えた力を感じ取った勇儀が、次の瞬間思ったこと。

それは戦いを始めて以来尽きることの無い歓喜と、かつてない興奮だった。

感じていた痛みが理性という枷と共に消し飛ぶ。

勇儀は考えることを放棄した。

ただ、目の前の恐るべき人間から放たれる全てを感じ取り、そして捻じ伏せたいとだけ思った。

「うっ、おおお……！」

完全に捕らえられていた体勢からがむしやらに足掻く。

背筋に力を込め、一気に解放して体を跳ね上げると、意図せず不意

を突かれる形となった先代が勇儀の上から弾き飛ばされた。

自由を取り戻した勇儀は、顔面を覆う流血を拭う間も惜しんですぐさま立ち上がった。

余分なことをしている暇は無い。

こいつ相手に、そんな余裕はないのだ。

勇儀は自身のダメージからそう痛感しながらも、何処か楽しくて仕方なかった。

ふらつく足で大地を踏み締め、視線を走らせた先で、既に拳が迫っていた。

間一髪、それを避ける。

受けて耐えられるとは思わない。

この人間の拳は、もうその領域を超えている。

反撃する。

空気を切り裂く拳。

なんてことはない。単なる空振りだ。

一瞬の硬直を突いて、反撃への反撃。

受けざるを得ない。

重すぎる打撃。軋む。

殴り返す。

殴り返される。

次は蹴り。

拳にこだわる。

殴る。

受け。

掴み。

流し。

撃。

打。

打――。

「すげえ……」

傍観する者達の心境を代表して、誰かが呟いた。

空気と大地を震わせる凄まじい攻防が繰り広げられている。
人間と鬼。

比べることすらおこがましい二つの種族が、互いに全く退くことなく打ち合っているのだ。

一撃が即死となる鬼の攻撃を受け流し続ける人間に対し、洗練された一撃を身に受けながらも耐え抜く鬼。

いずれも尋常ではない強さだった。

息継ぎも無く、このまま永遠に続くことすら錯覚するような攻防は、しかし当然のように衰えを見せる。

幾層にも重ねられた両者の痛みと疲労。

汗と血の混じった物が体温で蒸発して湯気となる。

常軌を逸した緊張の連鎖の途中で、全く当然のこととして勇儀の集中力がほんの僅かにほつれた。

隙を逃さず先代の蹴りが唸る。

勇儀は首を狙うそれを腕で守った。

骨の軋む衝撃。

しかし、それで終わらなかった。

防御した腕が不意に引っ張られる。

何事かと視線を走らせれば、手の指が先代の足の指によって絡め取られていた。

そのまま蹴り脚を戻す勢いで、掴んだ腕を捻り上げ、体勢を崩す。勇儀は背中から地面に激突した。

先代は、足の指で投げ技を行ったのだ。

「拙……っ」

再び先代を見上げる体勢になってしまった状況に、全力で悪寒が走る。

どれだけ警戒しても不利な状況へ追い込まれてしまう。妖怪相手に戦い抜いてきた人間が持つ巧みさと言う他ない。

先代が両手を合わせるのが見えた。

渾身の振り下ろしが来る。しかも、放たれば回避することは絶対に出来ない。

勇儀は咄嗟に地面を殴りつけると、その反動で強引に体を宙へ跳ばした。

まさに刹那の遅れで、倒れていた場所を不可避の衝撃が抉り取った。

攻撃力の倍増した一撃は、もはや鬼のそれと同等だ。

地面が激震し、ギャラリィが悲鳴を上げる。

しかし、かわした。

地に足を戻し、逆に相手は攻撃を終えたばかり。二発目はすぐには来ない。

「ツシャアアアアッ!!」

勇儀は絶好の機会を逃さず、裂帛の気合いと共に戦いに幕を下ろす。渾身の一撃を繰り出した。

鬼の拳が唸る。

それに対して先代は、佇んでいた。

祈ってはいない。

ただ、全てを推し量るように勇儀を見据えていた。

——畏か！

直感的に勇儀は悟る。

しかし、もう出した拳は止められない。

何も考えず、加速させるしかない。

当たれば首から上を血煙に変えてしまうであろう剛拳が、先代の眼前にまで迫る。

拳と頬が触れ合った瞬間、動いた。

高速の拳打に合わせて首を捻り、直撃を避けながらその腕を掴み取る。

同時に跳び付きの要領で両脚が地から離れ、片方を勇儀の後頭部に引っ掛けた。

そして残された脚は、顎目掛けて掬い上げるように膝蹴りとして繰り出される。

全ての動作が、一瞬の内に淀みなく行われた。

腕を捕らえられ、両脚が虎の顎のように挟み込もうと迫る瞬間、勇

儀は総毛立つほどの死を予感した。

左脚で後頭部を押さえつけ、右脚の膝が顎をかち上げて、砕く。鈍く凄惨な音が響いた。

崩れ落ちる勇儀の首を支点にして上を取り、そのまま捕らえた右腕を捻り上げて容赦なく肩まで破壊する。

地に伏した頭部から夥しい血が流れ、地面を赤く染めた。

怒涛の如く続いた死闘が止まる。

決着の形となったその壮絶な光景に、誰もが言葉を忘れた。

この世界を知る者など一人としていない、先代の繰り出した技。

その名を『虎王（こおう）』と言う。

即ち、それが極まったこの形こそ――。

虎王 完了。



それは、よく語られるように『むかしむかしのおはなし』だった。

まだ鬼が外の世界にいた頃の、よくある鬼退治の逸話。

人間が知恵を絞って、恐ろしい怪力を持つ鬼を討ち取ろうとするお話。

「……騙したのか」

肩口に走った刀傷の痛みと熱さを感じながら、勇儀は呆然とその人間を見上げていた。

そうして呆けていたのは本当にわずかな間で、今の状況を他に解釈しようがないと悟ると共に怒りが湧き上がった。

「騙したのかっ!!」

勇儀は怒りに震えて立ち上がった。

心地よい酩酊は消え失せ、傍らにあった酒瓶を忌々しげに踏み潰す。

つい先程まで、それは鬼と人間の絆の証として在った物だ。

今はもう、何の価値もない。

いや、この酒に何かの価値を見出していたのは鬼だけだったのだ。

「糞っ！ この霊刀でも駄目か！」

「構うこたあねえ、手負いだ！ 何度でも斬れ！ 斬つちまえ!!」

「首を獲れ！ 鬼の首は手柄だぞ！」

茂みの中から隠れ潜んでいた鎧姿の武者達が次々と現れる。

勇儀は自分の寝込みを狙った人間——見知った顔の、歳若い青年を睨みつけた。

今、この場にいるのは自分と青年の二人だけのはずだった。

二人で愉快に酒盛りをして、そして眠りに就き、痛みに目を覚ませばこの状況だ。

最初から何もかも謀られたことだったのだ。

「どうしてだ……?」

「どうしても糞もねえ」

勇儀は怒りと共にわずかな困惑を交えた視線を向けていたが、睨み返す青年の瞳は憎しみだけが映っていた。

「鬼退治だ。ずっとそうしてきただろうが」

「……確かに、お前さんは私を退治しようとは何度も挑んで来た。

だが、今夜は違うだろう？」

命を賭けて決闘をして、酒を酌み交わし、朝になれば別れ、そしてまた挑みに来る。騙し討ちなんてくだらない真似をするんじゃないやあな
い！」

「くだらない？ くだらないってのは何だ、てめえの勘違いのことか？ 俺がてめえと好き好んで酒を飲み交わしていたってえのか!？」

ドス黒い感情が、睨みつける青年の瞳の奥で暗く燃えている。

それを見た勇儀は己の怒りが萎えて消えていくのを感じた。

盃を交わす時に浮かべていた青年の笑みが、途端に形を崩して記憶から消えていく。

「……本当に、最初から私を貶める為だけに酒を飲んでいただけのかい?」

「ああ、そうだ。何度繰り返しただろうな。腹に入ったもんは、その日の朝に全部吐き出したよ」

「そこまで……」

「憎いさ。てめえが憎くて仕方ねえってんだ！ この鬼がっ！ てめえは俺のおつ母を目の前で喰いやがったんだぞ!!」

「だったら、その憎しみを隠すんじゃない！ なんで私にそのままぶつけないんだ!？」

憎んでも憎みきれないってんなら、出された盃なんぞ跳ね除けて、この腹に刀を突き立てりやよかっただろうが!」

それは永遠に交差することのない、二つの種族の価値観の違いだった。

勇儀が許せないのは、目の前の青年が自分自身にさえ嘘をついて、憎しみを隠したまま笑っていたことだけだった。

親を食い殺したこの鬼を許せなどと思いはしない。

ただ、自分自身を騙してまで憎い仇と盃を交わして欲しくはなかった。

「へっ、真つ当にやり合って鬼と勝てるもんかい。俺はてめえが殺せるなら、どんな屈辱にも耐えてやるのよ!」

「ああ、殺されてもよかった。お前になら殺されてもよかったんだ!

お前が真つ当にこの身に一太刀でも入れられたなら、首を持っていかれようが、その後で死体に小便をかけられようが構わなかったんだ!!」

鬼は人間が好きだった。

人間は自分達の暴虐を恐れ、憎み、傷つき弱った心を奮い立たせて決死の戦いに乗り出す。

そうして挑んで来た人間の多くは、その圧倒的な力の差に力尽きるが、それらの無念を背負って更に強くなった後に続く者が鬼を退治してのけるのだ。

かくして、悪しき鬼は討たれ、正当な憎しみは果たされる。

首を獲られ、それを戦利品として扱われても文句などない。

それほどの偉業を成し遂げたからだ。

それが人と鬼の絆だった。

少なくとも、勇儀にとつては。

「誰が鬼の望むことなんかしてやるもんかい」

青年は憎しみに濁りきった瞳で勇儀を睨み、再び刀を構えた。周りの武者達は鬼の真正面に立つような愚かな真似はせず、彼を囲にして隙を伺っている。

何もかもが勇儀の癩に障った。

「騙し討ちが嫌いだってんなら、幾らでもやってやらあ！ 吐きそうな反吐を堪えて、馬鹿笑いするてめえの前で盃を空けたのもその為だ！ てめえと飲んだ酒は一滴たりとも美味えなんて思わなかったぜ！！」

「……っ、馬鹿野郎がああああああつ！！」

勇儀は腹の底から叫んだ。

それは怒号のようでもあり、慟哭のようでもあった。

それからどうなったのかは、よく覚えていない。

結果的に今、自分は生きている。

仲間の鬼が助けてくれたのかもしれないし、自力でなんとかしたのかもしれない。

がむしやらで何も覚えていなかった。

いや、思い出すのがあまりにも億劫に感じるだけだ。

人と鬼の関係は、いつの間にか終わった。

正義の旗の下に力を合わせて立ち向かう人間の姿はなくなり、鬼の弱みを突く為に自らさえ騙しながら近寄って寝首を斬り落とす。

人間で言うところの『知恵を絞った勇氣ある者』が鬼を狩るようになった。

一体いつから、二つの種族の間にあった『絆』が変化してしまったのかは誰にも分からない。

少なくとも勇儀にとっては、今ではもう覚えていない『その日』のことだった。

あの青年の遺体を自分の手で埋めたことだけは覚えている。

そして、幾年も過ぎた。

この幻想郷へ移り住み、更に地底へと潜っても、何処か退屈な日々が続いた。

心の底に根付いた諦念が、ほんの少しずつ鬼の力を奪っていくのを

感じながら、盃を片手にのんきに遊んで暮らしていた。

ふと、考える時がある。

——いつまでこんな時が続く？

終わりはないのか。

人間を見限った時点で。あるいは人間が鬼を見限った時点で、本当はもう全部終わっているのではないか。

ならば、こうして生きている自分は何だ？

一体、どうすればよかったんだ？

自問する内に、自然と浮かぶ答えはいつも一つだった。

死んでおきやあよかったのさ。

。あの日、まだこの首をくれてやれると思っていた人間がいた時代で



激痛の中で勇儀は目を覚ました。

束の間、意識を失っていたらしい。

戦いの中で気絶するなど、本当に随分と久しぶりのことだった。

しかし、懐かしむ気など頭の片隅にさえなかった。

脱力した全身に、意識は戻っても力は戻らない。それほど打ちのめされていた。加えて、完全に押さえ込まれている。

勇儀はすぐ傍にいる先代を意識した。

追い詰められた状況で、敵である彼女を憎んだり疎ましく思う気持ちには全く湧かなかつた。

言葉に出来ない程疲労した体の中で、ただ必死に訴えかけた。

——すまないっ。

——すぐに起きる。

——まだ駄目になっちゃいない。

——まだまだ、愉しめるさ。私の身体は。なあっ！

「お……おっ、おあ嗚呼あああああああああああっ!!!」

もはや雄叫びですらない。悲鳴のような絶叫を上げて、勇儀は死に掛けていた肉体を叩き起こした。

身体が軋みを上げる。無視した。

後頭部に体重を乗せられ、右肩は破壊されて関節が完全に極まっていたが、どうでもよかつた。

決して軽くはない先代を担ぎ上げるように、そのまま立ち上がった。

声こそ上げないが、頭上から驚愕の様子が伝わってくる。

——そうか、驚いてくれるか。

——私は、まだお前を脅かす鬼で在れるのか。

勇儀は嬉しくなった。

痛みも疲労も、ここに来て気にする意味を失った。

動かないはずの右腕を、自らの筋力で自らの骨を砕く勢いで無理矢理に振り回す。

ここに至って限界を超えるほどに発揮された鬼の怪力が、破壊された右腕一本で先代を投げ飛ばした。

近くにあつた屋台へ激突する。

木製のそれが粉々に砕けて、盛大な音を立てた。

チルノの悲痛な声。

逆に熱を帯びる住人達の歓声。

勝負が決着したものと考えていた彼らは、不屈の鬼を声高に称えた。

しかし、当の勇儀にとってそれすらどうでもいいことだった。

最強と称えられる鬼は、今まさに満身創痍の状態で佇むことしか出来ていないのだ。

この姿を省みて、一体どんな称賛を受けろというのか。

いや、もちろん恥など感じてはいない。

むしろ誇りだ。

たった一人の人間にだけ認めてもらいたい。自分が立ち上がったことを。

他の称賛など全くの無価値だった。

おもむろに、勇儀は口の中に溜まっていた血反吐を吐き出した。

「……我ながら、恐ろしい技を喰らったもんだ」

地面には血と一緒に白い物が幾つも散らばっていた。自分の歯だ。

人間を骨ごと喰らい、時には武器にもなる鬼の歯が、無残にも転がっている。

折れたのではなく、顎を蹴り上げられ、噛み合った歯が衝撃で粉々に砕けたのだった。

「こっちは動かないねえ……」

勇儀は自分の右腕を見下ろして苦笑した。

肩の骨を砕かれた上で、無理矢理に動かした腕は完全に死んでいった。

もはや筋肉がピクピクと痙攣するだけで拳を握ることすら出来ない。

「ああ、ちくしょう……っ」

悪態ではない呟きが漏れた。むしろ自分自身に向けた言葉だった。

あれだけ完膚なきまでにやられたのに、必死こいて立ち上がってしまった。

まったく自分は往生際の悪い奴だ。

倒れた時点で、勝敗を決めても良かった。

十分な結果のはずだ。

どんな敵もこの拳で葬ってきた。どんな名刀にも斬り落とせず、どんな槍にも貫けなかった。その自慢の右腕を、あの人間は素手で潰したのだ。

本来ならば、そこで勝負はあつたはずだ。『人の身でありながら、天晴れ見事！』と称賛し、素直に負けを認めてしかるべきだった。

人と鬼の差が在る。

鬼が譲って、ようやく平等なのだ。

そうして、ようやく人間を『友』として扱えるのだ。

しかし、駄目だ。

もう駄目だ。そう思ってしまった。

この度し難い馬鹿は、極限の戦いの中で実感してしまったのだ。どれだけ望んでも得られないと思っていた、人間の身でありながら鬼と対等になるまで鍛え上げた猛者と今立ち会っているのだ、と。

大昔から、鬼が人間との間に築いてきた殺伐とした関係。かけがえのない友情。

勇儀は、先代に対してこれ以上ない程の『絆』を感じていた。

——だから、もう駄目だ。

——もう妥協なんて出来ない。

——私はいつと、行くところまで行ってみたい！

心の底から待ち望む勇儀に応えるように、瓦礫の中からゆっくりと先代が立ち上がった。

ダメージを引き摺った、おぼつかない足取りで、それでも勇儀の下へ歩み寄る。

全ての力を出し尽くしていたのは勇儀だけではなかった。

先代もまた限界を超えていた。

鬼の猛攻に晒され続けていた全身は無数に傷跡が走り、巫女装束の白い部分を真っ赤に染め抜いている。

口と鼻から出血し、血涙さえ汗と共に流れ落ちていた。

呼吸は荒く、何よりも先程まで圧倒されるほどに感じていた力のうねりをほとんど感じ取れない。

やはり、あの人外の戦闘力は肉体の限界を超えて発揮されていたものなのだ。

それが終わった今、技の反動が彼女から根こそぎ余力を奪っていた。

それでも、その眼だけは強い意志の光を全く陰らせていない。

勇儀は再び自分と向かい合ってくれた彼女に深い感謝と愛おしきを感じた。

三度目の対峙。

しかし、状況は既に終息しつつある。

いずれも満身創痍だが、鬼と人間の身ではそれぞれの深みが違う。勇儀は左腕一本でも人間を捻り殺せる。しかし、先代は力尽きかけ

ていた。

チルノの必死の声援が続く。

妖怪達の囃し立てるような歓声と、わずかに混ざる嘲りと罵り声がそれを掻き消した。

どちらも微動だにしない先代には届いているのか分からない。

ただ、勇儀は聞こえるそれらに煩わしきを感じていた。

今この瞬間に横槍を入れるものがあるなら、それはただの声であっても無粋に思えた。

「へへへっ、勝負はつきやしたね勇儀さん」

周囲の熱に浮かされ、最初に先代達に絡んだ妖怪の残りが擦り寄ってきた。

「ありやあ、もう死にかけてさあ。後始末は一つ、俺に任せて……」

勇儀は無言で裏拳を叩き込み、その妖怪をはるか彼方へ吹き飛ばした。

耳障りな戯言を最後まで許す余裕は、今の勇儀にはなかった。

戦闘で昂ぶった怒気と殺気が混じり合い、騒ぎ立てていた周囲を一睨みで圧倒する。

「ごちやごちやうるせえ……邪魔する奴は、はらわた全部掴み出すぞ!!」

その一喝で、浮かれていた周囲は黙り込んだ。

周りの持ち上げる『決着』など無意味だった。

状況の不利有利を語るなど不毛にも程がある。

目の前の脆弱なはずの人間は、鬼と対等に渡り合うという前代未聞の所業を既に為しているのだ。

安易な予想や、それによる油断など許されるはずがないことは勇儀自身が身に染みて理解していた。

「……こいつは真正正銘、私のとっておきだ」

残された全身の力を左拳に集中させ、握り込む。

「人間相手に本気で使うのは、お前さんが最初で最後さ」

切り札などとし惜しみするような性格ではない。

ただ、全身全霊を賭けた一撃とするには最も相応しい技だと勇儀は

考えたのだ。

拳を構えるだけで周囲が圧迫される。

本当の決着は、この一撃でつく——。

全ての者がそう無意識に確信するほどの力が、勇儀の左拳に収束されていった。

傍から見る者には無意味な抵抗としか思えない先代の構えを、一切の油断無く睨み据える。

「四天王奥義——」

星熊勇儀の最大最強の攻撃が、解き放たれた。

「三・歩・必・殺!!!」

◇

……本気でシヤレになってないわあ。

木片の下敷きになって、私は軽く絶望していた。

勇儀マジ強い。

もう正直、茶化して言う余裕すらない。

鬼つてのは、東方の世界における裏ボスみたいなもんだね。人間が挑むこと自体間違ってますよ。

まあ、その間違ったことを私は全力でやってしまっているわけだが。

しかし、本当に勝ち目が見当たらなかった。

持ち得る限りの技術と力を結集させて勝負を仕掛けたが、結果はこの通りだ。

まさか『虎王』まで耐えられるとは思わなかった。

あの技は練習相手が必要だから、実戦の中で命を賭けて必死に習得したつてのに……。

いや、妖怪相手なのだから対人戦闘術に絶対の自信などなかったが、それでもこれまでの経験上、強力な妖怪ほど人型を取り、それらに有効な技術として通じていたんだけどねえ。

妖怪の中でも更に別格ってことか。

っていうか、あれで立たれたらマジでこれからどうすればいいのかわからないんですけど。

物凄い手応えだったし、全てが噛み合った完全な技だったはずだ。多少の被弾覚悟だった勇儀の一撃も完璧にいなして腕を取れたし……いや、本当に完璧だったのに余波だけで顎の骨に罅入ったけど。被弾覚悟って、当たってたらそのまま死んでたかもしれないギリギリの状況だった。

勇儀だって、限界を超えてまで耐え抜いたことは分かる。

しかし、一体何が彼女をあそこまで支えているんだろうか？

鬼のプライドって奴か、それとも別の何かか。

分かんないが、きつと人間の私には考えもつかないこだわりがあるんだろうな。

ああ、いかん。精神面でも圧されそうだ。

私は弱気になる自身を叱咤し、木片を掻き分けて立ち上がった。

ぐぬぬっ……予想以上に消耗が激しいぜ。

全身の痛みすら鈍く感じるほどに、脱力感が凄い。

やっぱり、能力を底上げした反動か。体の中のあらゆるエネルギーを一気に出し尽くした感じだ。口とか鼻とか目とかから本当に出てますね、分かります。

更に萎えかける戦意を、体と共になんとか叩き起こして、おぼつかない足取りで勇儀の下へ戻る。

まだ戦いは終わっちゃいない。

ちよつと朦朧としてきた意識に、チルノの必死な声が聞こえた。

いかん、何て言ってるのか聞き取れん。相当ヤバイな、今の私。でも、声援だということは分かる。

ちよつと力が湧いてきた。錯覚だろうけど。

幽香は戦闘が始まってから、ずっと黙ってたままだ。

ここで不甲斐ない私を言葉責めでもしてくれたら、またもうちよつとだけ力が湧きそうな気がするんだけどね。

……いや、私はMじゃないよ？

仲間の言葉なら、何でも頑張れちゃうって意味だよ？

しかし、幽香は何も言わない。

まあ、私に対して激励するなんて絶対にやりそうにないしね。

私の打ちのめされた姿を見下ろして、鼻で笑っている姿を容易に想像出来てしまい、思わず内心で苦笑した。

あ、なんか今ので更にちよつと力が戻った感じ。

我ながら単純な精神構造だが、勇儀と再び向かい合った時には心身共にいくらか持ち直していた。

「……………いつは真正正銘、私のとっておきだ」

ここへ来て、必殺技ですか。ハハツ、ワロス。

更に追い込まれた状況で引き攣った笑いが浮かびそうになるが、それすら惜しんで意識を集中する。

意味があるのか分からないが、諦めを無視して身構えた。

勝機などほとんど残されていないだろう。

だが、あえて狙うとするならカウンターだ。

私自身の体力はもう限界を超えているし、決死の覚悟とか皆の想いとかそういうの掻き集めても一撃を繰り出すのが精一杯だろう。

それでも鬼の肉体に致命傷を刻み込むには全く足りない。

最大の攻撃の瞬間こそ、最も無防備になる……………はず。多分。漫画とかのセオリー通りなら。勇儀の存在がセオリーかどうかは知らんけど。

とにかく、その一瞬に賭けるしかなかった。

いや、弱気になるな私！ あとは勇気で補えばいい!!

「四天王奥義——」

補うにも限度があるでしょうと言わんばかりに厳しい現実が眼前で牙を剥いていた。

奥義とか言い出したし……………。

っていうか、もしかしなくてもこれって『三步必殺』じゃねえか！

原作の弾幕という形でしか見たことなかったが、あの鬼畜スペルがガチの拳で繰り出されるってどんな威力なのか想像を絶するものだ。

元々なかったが、これで防御や回避といった選択肢は消えた。

受け止めればそのまま粉々になっちゃうか、避ければ余波でスタズ

タになつちやうかのどつちかだな。どつちにしろ死ぬ。

まさに死中に活路を見出すべき状況。

勇儀を中心に放たれる圧迫感を受け流しながら、私は最大に集中した。

「三・步・必・殺!!!」

来た。

死ぬほど怖いけど目を逸らすな。本当に死ぬから。

その技の名前の如く、三歩分の動きがこの技の肝となるはずだ。

意識を集中して、見極めろ——!

まずは一歩目。

地響きを伴う尋常ではない足踏みだ。なるほど、最初の一步は標的を間合いに捉える為の単純な踏み込みか。

……んで、その一步で勇儀がもう目の前に居る件について。

なんじゃそりゃ。

全然見えなかった。多分、この一瞬の踏み込みに限ったことだろうが、天狗並の速さだぞ!?

おまけに身のこなしが極限まで洗練されているのか、音や気配でさえ捉え切れなかった。

驚愕する間に二歩目。

高く振り上げた足を、大地に叩きつける。

それは移動の為ではなく、むしろ攻撃に近かった。

いや、実際に攻撃だった。

大地に向けての一撃は衝撃波を生み出し、それが地中を走って私の足元で爆発したのだ。

土砂を巻き上げるような破壊を伴うものではない。しかし、だからこそ衝撃は直に私の足を襲った。

くそつ、足を潰された!

痺れるなんてレベルじゃない。内側を走り抜けた衝撃が骨を砕き、筋肉を引き裂きやがった。

二歩目で標的の動きを封じるってわけか!

いや、これは逃げるだけではなく反撃すら封じられている。

この足では十分な踏み込みや体重移動が出来ないし、拳にも力が乗せられない。

つつーか、この怪我だけで深刻なダメージなんですけど！

驚愕に焦燥が加わり、一気に追い込まれた私の眼前で最後の一步が踏み込まれようとしていた。

こいつが三步目。

動けなくなった標的に全身全霊を込めた一撃を打ち込む為、勇儀の足が大地を踏み締めた。

あ、勇儀の動きがゆつくりになった。

もちろん、それは本当に動きが遅くなったわけではなく、死に瀕した私の集中力が限界を超えた結果だった。

何度か経験がある。私は今、死ぬ一歩手前って状況なわけだ。

ほら、走馬灯が見えるし。

あらやだ、霊夢が子供の頃だわ。なつかしー。

……って、そんな悠長に見ている場合かああーっ！

なんとかしないと。直撃を受けたら痛みを感じる間もなく、文字通りこの世から消し飛んでしまう！

私は全身の動かせる箇所を総動員して決死の行動を試みた。

足が全く動かない。崩れ落ちないように支えるだけで精一杯だ。

踏み込みも出来ずに、勇儀の一撃からカウンターを取れるわけがない。一手遅れているのだ。

拳を繰り出す。

遅い。

加速しろ。

なんでもいい。体の中に残るありったけをこの腕一本に収束させろ。

動かせるのは上半身のみ。

筋力だけでは駄目だ。霊力。関節の捻り。鬼の肉体を貫く為に理想的な力の流れ。加速。回転。

——抉り込めえ！

◆
幽香は湧き上がる感情を抑えきれず、テーブルの上を薙ぎ払った。ガシヤンツと盛大な音を立てて、ティーセットが落ちた。

中身を盛大にぶちまけ、破片と共に床を広がる。

「……本っ当に、どこまで私をイラつかせれば気が済むのかしら、あの馬鹿はっ」

震える手を握り込んで拳を作る。

そうして抑え込まないと、胸の内の激情が表に溢れ出てしまいそうだった。

今、目の前に人間かあるいは妖怪が現れたのなら、幽香は一切の躊躇いもなくそいつを痛めつけて殺していただろう。

無性に暴れ回りたい気分だった。

強大な妖怪としての自負と品位が、荒れ狂う暴虐をかるじて抑えていた。

先代巫女の戦う姿が脳裏に焼きついて消えない。

「クソッ！ オニだかなんだか知らないけど、何勝手に戦ってるのよ。私とは避けてたくせに！」

悪態を吐き、その内容を聞き返してみればまるで嫉妬しているようにも捉えられると理解して、幽香はますます苛立った。

複雑極まりない内心が、幽香自身の表情にも表れている。

引き攣ったような笑みを浮かべながら、怒りを堪えて歯を食いしばっているのだ。

嬉しくはあった。

自分の言った通りに、先代はいかなる相手であつても己の強さを証明し続けたのだ。

悔しくもあった。

そういう状況に陥ったからとはいえ、自分を差し置いて現れた妖怪と死闘を繰り広げているのだ。先を越された気分だ。

苛立ちも当然あった。

何故、ここまで人間相手にやきもきしなければならぬのか。自分

の抱く感情を一つ理解すると、そこからまた別の感情が湧いてどんどんワケが分からなくなっていく。

そして、何よりも昂ぶって仕方が無かった。

「あいつ、まだあんな力を隠してたなんて……！」

未だまともに戦ったことすらないのだから、知らないのも当然だった。

花を介して見る先代と鬼の戦いは、幽香をして戦慄せざるを得ないほど激しいものだった。

互いの死力を尽くす、まさに死闘。

強い、と認めるしかない。

どちらも自分にとって脅威となる程の強さであったことが、幽香を不愉快にさせた。

しかし、それ以上に見せつけられた。

力と技を駆使して戦う二人の様が、幽香の魂を大きく奮わせたのだ。

気が付けば、花から送られる映像を言葉も忘れて凝視し、最後の激突の瞬間に唐突にそれは途切れたのだった。

先代の繰り出した拳が、先に敵に当たった……ように見えた。

ハッキリとは分からない。

決着は見届けることが出来なかった。

いや、見る必要など無い。

散々見せてもらった。先代巫女の力の真髄を。

彼女は勝つたに違いない。

あの横から搔つ攫うように彼女との戦いを持っていった、力ばかりが強い愚かな妖怪を滅ぼし、普段通り憎らしいほど涼しげな顔で地上に戻って来るのだ。

こつちも何食わぬ顔で出迎えてやろう。

焦ることはない。

ゆっくりと機を待ち、今回の傷が癒えた頃に改めて迎えに行つてやればいいのだ。

「疼かせてくれるわねえ、先代……！」

今度こそ邪魔者の存在しない、この私と二人きりの殺し合いの場所まで――。



三步必殺が放たれた次の瞬間、先代の身体が宙を舞っていた。力なく地面に叩きつけられ、転がってようやく止まる。

「お師匠!!」

チルノの悲痛な声が響く。

二つの拳が交差し、一方が弾け飛んだ。

決着だ。

やはり人間が鬼に敵うはずがなかったのだ。

地底の妖怪達は、自らの祭り上げる最強の存在に対して喝采を上げ

――すぐに違和感を感じて眉を顰めた。

何故、あの人間は両手足を投げ出して倒れているのだ？

星熊勇儀が奥義と呼ぶものをまともに喰らいながら、脆弱な人間が原型を留めているなど有り得ない。

全員が、ようやく勝者であるはずの勇儀の方へ視線を走らせた。

勇儀は拳を突き出したまま立っていた。

その胸に、背中まで貫かれた大きな穴が空いていた。

「……天晴れ見事、ってか」

勇儀は愉快そうに笑い、そして血を吐いて仰向けに倒れた。

辺りが騒然となる。

では、勝負の結果は――？

「お師匠、しっかりして！ 大丈夫?!」

「……ああ」

ボロボロのような有様となった先代は、体の小さなチルノに支えられてようやく、しかしそれでも自らの足で立ち上がった。

鬼は倒れ、人間は生き残っている。

勝敗は明らかだった。

地底の妖怪達は誰もが受け入れることが出来ない。

しかし、認めざるを得ない。

あの最後の一瞬を制したのは、地上からやって来た一人の巫女だった。

「うう……つ、よがっただあ〜！ よかったよお……！」

チルノは血塗れの服に構わず顔を押し付け、安堵の涙を流した。勝って欲しいとは思っていた。

その後で、この人がどれだけ強いのか周りに自慢してやろうと思っていた。

しかし、戦いが終わった今はそんなこと思いつきもしない。ただ安心していた。

押し付けた顔から感じる相手の体温が嬉しかった。

「……チルノ、勇儀の所まで連れて行ってくれ」

様々な意味を含む周囲の視線が交差する中、先代はチルノに支えられて、倒れた勇儀の下へと歩み寄った。

死闘の敗者に相応しいボロボロの姿で、それでも勇儀は満足そうに微笑んでいた。

「まいったよ。負けだ。私の完敗さ」

「そうか」

「じゃあ、鬼退治の仕上げを頼むよ」

勇儀は清々しそうに言った。

「鬼の首を獲れ」

「……なに？」

「お前さんなら、この首をくれてやってもいいってんだ」

その提案に、当事者達を尻目に周囲の方が大きく動揺した。

この旧都を仕切る絶大な存在として長年君臨し続けていた星熊勇儀が、今この瞬間己の命を差し出しているのだ。

あまりに唐突な終わりだった。

彼女を恐れ、敬っていた多くの妖怪達が肯定も否定も出来ない心境で、ただ固唾を呑んだ。

「……断る」

先代は疲れた仕草で首を振った。

その返答に、勇儀は更に言い募る。

「すまん、見栄張った。」

くれて『やってもいい』じゃない。お前さんにこの首をくれて『やりたい』んだ。

きつちり私を退治してくれ。力の勇儀はここでお終いだ。死ぬには十分すぎるほど、いい喧嘩だった」

勇儀の顔に、敗者特有の諦めや卑屈さは全く浮かんでいない。

彼女は本心からそう言っていた。

心の底から満ち足りていたのだ。

長い年月生き長らえた命。終わらせ時は、今まさにここだ。

勇儀は安らかに目を閉ざした。

「……………断る」

そして長い沈黙の後に、先代が出した答えはやはりそれだった。疲れ果てた体で、それでもはつきりとした意思を込めて告げる。

返答を聞き入れ、勇儀は大きいため息を吐いた。

「そうかい。残念だ」

落胆の声ではなかった。

もちろん内心はまったくその通りだったが、負けた身を弁えたのだ。

敗者が勝者に何かを叶えてもらおうなどおこがましい話だ。

先代の判断に文句をつけられるはずもなかった。

ただ、この最高の瞬間を逃して生き長らえた自分の残りの生が一体どんな意味を持つのか、考えるのが少し億劫になっただけだ。

より一層疲れ果てたように覇気を失った勇儀を先代は黙って見下ろしていた。

「……………いずれ、私の娘がお前の前に現れる」

しばらく何かを考え込んでいたが、おもむろに勇儀へ語りかけた。「博麗の巫女として、この地底で起こる騒動を解決しにやって来る。

そして、きつとお前と勝負することになるよ。あの子に退治される楽しみを、それまでとっておくといひ」

「……………強いのかい？」

「とても。自慢の娘だ」

そう言つて、先代はにつこりと笑つた。

思い返せば初めて見る相手の笑顔だ。

こんな顔も出来るのか、と勇儀は思わず見惚れていた。

「やれやれ……来年のことを話せば、鬼が笑うもんだ。」

何も決まつていない先のことをこれみよがしに語るのは、私も嫌いだったんだがね。だって嘘みたいなものだからさ。

……でも、不思議なことにお前さんが言うのと、本当にそうなるように思えちまうよ。きつと、嘘じゃないんだらうなあ……」

「ああ。嘘じゃない」

先代はチルノから離れ、苦勞して勇儀の傍にしゃがみ込むと、彼女にだけ聞こえる小声で最後に告げた。

「——だ」

「え？」

「私の名前。今では地上で知っている者も少ない」

勇儀の意識は朦朧とし始めていたが、その名前だけはしっかりと聞き取り、記憶に刻み込んだ。

最初に宣言した通り、自分はこれを死ぬまで忘れることはないだろう。

先代を見上げ、嬉しそうに微笑み返す。

「そいつは、いい自慢になりそうだ……」

そして、勇儀は眠るように気を失った。

次に目を覚ます時が、少しばかり楽しみになっていた。

◇

束の間、気を失っていたらしい。

私は目を開けた。

目覚めることが出来たということは、私は死んでいないってことだ。

……いや、油断出来ないか。この世界って普通にあの世とがある

し。

とりあえず、気絶する前より酷くなつた全身の激痛が生きている証だと思おう。

うぐぐつ、マジで痛いっす……泣きそう。

こうしてのんきに痛がつていられるということは、どんな形であれ勇儀との勝負はついたということだろう。

あの一瞬の交差で、もし私が負けていたのなら文字通りこの世に存在していないはずだしね。

「お師匠、しつかりして！ 大丈夫!？」

駆け寄ってきたチルノに支えてもらつて、なんとか立ち上がる。

全然足に力が入らない。

これ、治つてもちやんと歩けるようになるのかなあ？

不安を押し込んで、私は改めて状況を見定めた。

私、ボロボロ。これは言うまでもない。

チルノは泣いている。ごめんねえ、私が不甲斐ないばかりに不安にさせてしまったようだ。

それと、視界の片隅でハラリと白い花びらが舞うのを見て、髪に手を当てた。

あ、幽香の花が散つてる。

……まあ、あれだけの激戦を繰り広げたんだから、髪に挿した花とか普通に散つてもおかしくないんだが。

いかん、意外とシヨックだわ。折角、幽香から貰った物だったのに。

場違いな気持ちの沈み具合の中で、ようやく本題となる勇儀の方を見やる。

絶対に倒せないと思つていた恐るべき鬼は、大の字になって倒れていた。

私の勝ち、つてことでもいいのかな？

全然実感が湧かないが、それは周りの妖怪達も同じようで、私と勇儀を困惑した視線で交互に見ている。

私はチルノに頼み、勇儀の下まで連れて行つてもらつた。

倒れた勇儀の胸には拳大の穴が空いていた。

これは私がやった……んだよな？ 正直、あの時はがむしやらだつたのでハッキリと覚えていない。

予想外というのが本音だ。

鬼の肉体をここまで完璧に破壊することなんて、少なくともあの時の私は不可能だと考えていた。

勇儀の攻撃より先に当たったのは日々の正拳突き修行の賜物だとして、カウンターがそこまで効果を発揮したのか？

それだけとは思えない。

あの時繰り出した一撃は、踏み込みの出来ない状態で止むを得ずに上半身のバネのみで放ったものだ。

言うなれば、刀を使わない『牙突・零式』だ。

技名を叫ぶなら『ガトチュ・エロスタアム（巻き舌の発音で）』だ。……まあ、その辺は冗談として、刀を使ってないので牙突と呼ぶのも微妙な感じかもしれない。

実際には上半身のバネと、少しでも拳に貫通力を持たせる為に各種関節の捻りを極限まで加えた変則的なコークスクリューブローとも言えるものだった。

とにかくありったけの力を収束させ、小宇宙（コスモ）を燃え上がらせて放った渾身の一撃だったが、さすがにこの破壊力は予想以上だ。

よく見れば、胸の穴は螺旋状に服と肉を巻き込んで体内を抉っている。

打ち込まれた力が回転しながら貫いた跡だ。

純粹に拳の捻りだけでこうなるとは思えない。拳に込めた霊力まで回転してたつていうのか？ つつか目に見えない霊力が回転するってどういうこと？

ふーむ、予想以上の破壊力といい、これはひよつとして『黄金の回転』ってやつなのだろうか？

……うん、その辺を追求する為にも新しい修行をやってみたいな。

死ぬ思いをした戦いの後で、もう次の修行を考えてしまうあたり私も相当アレな人間だった。

とりあえず、今はまだ生きている勇儀に意識を向ける。
うっ、今更朦朧としてきた。

血が足りないよー……。

「まいったよ。負けだ。私の完敗さ」

勇儀が自らそう認めることで、ようやく勝敗がはっきりと決まった。

そうか。私の勝ちか……。

安心するよりも先に呆然とするんですけど。

なんか一気に疲れと痛みが襲ってきたわ。

しかし、次に勇儀の口にした言葉で、そんなのんきな気持ちも吹き飛んだ。

いや、首を獲れって……私はそこまで徹底的に退治するつもりなんて当然ない。

むしろ、あの星熊勇儀と本気の喧嘩をやらかした現状を今更になって疑問に思うほどだ。

こんな行くところまで行っちゃうとは、当初全然予想していなかった。

断る私に対して、しかし勇儀は更に頼み込んできた。

私には鬼の価値観や、その眼で捉えている世界がどんなものなのかは分からない。

ただ、勇儀の頼みは真剣であり、本気のものだというのは痛いほど分かった。

……ええ、どうすればいいの？

正直に言うと、私は勇儀を殺したくはない。

それは原作の未来がどうこうといったくだらないものではなく、この幻想郷の人妖全てに対する想いと、拳を交えてそれが更に強くなったことからだ。

本気で死にそうな目にあっただが、私は勇儀との戦いから禍根を一切残さなかった。

グチャグチャのボロボロでもうウンザリな状態だが、戦いが終わった今、ちよつとした清々しさすら感じていた。

勇儀自身が言ったように、私にとってもこれは『気持ちのいい喧嘩』だったのだ。

いや、全然余裕つてわけじゃないけどね。もう一回やろうって言われたら今度こそ逃げます。

でも、まあとりあえず。

勇儀には悪いが私の答えは変わらない。

何より私は勝ったのだ。

勝者が敗者の言葉に揺らいじゃったら示しがつかないってね。ここはハッキリと断らせてもらいます。

その代わり、なんか落ち込んだっぽく見える勇儀にはフォローも忘れない。

近い将来起こるだろう、地霊殿の異変をそれとなく仄めかしておく。

霊夢や魔理沙なら、勇儀にとつてもいい勝負相手になると思うんだよね。

その頃には地底でもスペルカード・ルールが普及しているだろうから、私みたいに死ぬ一歩手前まで無理をする必要も無し。ずっと健全な決闘が出来るはずだ。やったね。すごいね。

……くそっ！ 私ももう少し後に地底へ来てればよかったんだ！

何故に私だけこんな極限状態に追い込まれにやならんの……。

「不思議なことにお前さんが言うのと、本当にそうなるように思えちゃうよ。きつと、嘘じゃないんだろうなあ……」

そりゃまあ、ある意味確定した未来の出来事ですから。

原作がどうこうなどと言う訳もいかず、私は誤魔化すついでに自分の名前を覚えておいた。

勝負が決まったら教えるって約束だったしね。

話を終え、全ての決着を果たすと、眠りに就いた勇儀から視線を外して空を仰いだ。

ああ、地底だから空ないわ。

駄目だ。いい加減意識を保つのが限界に来てる。

でも、ここでぶっ倒れたらその後どうなるんだろ？

旧都の元締めである勇儀を殴り倒しちやっただから、他の妖怪に報復されるとか……私はともかく、チルノが巻き添えを食らうのはマズイ。

うう、どうしたものか……。

「これはまた、随分と派手に暴れたものね」

気を抜いたら止まってしまいそうな思考回路を必死で回して悩む私に、天恵とも言える声が聞こえてきた。

現れたのは、地霊殿の主である古明地さとりだった。

メイン読心キター！ これで、勝つる……！

——冷静に考えたら、私の知識ってこつちにバレたらヤバイものばっかりじゃね？



「これはまた、随分と派手に暴れたものね」

さとりがその場に現れると同時に、畏怖と忌避の念が辺りに飛び交った。

なんとということはない。

さとりにとつて、そんな反応は日常茶飯事のことだ。

冷静に周囲の妖怪達の思考を読み取りながら、断片的な情報を繋ぎ合わせ、それとこの場の状態を分析して、正確な状況と経緯を理解する。

「……人間が、あの星熊勇儀を？」

さとりをしても動揺を隠せない事実が浮き彫りになった。

地上からやって来た巫女がたった一人で鬼と渡り合い、拳句の果てに勝ってしまったというものだ。

破壊された家屋や地面に広がる夥しい量の血痕を見れば、特大の戦闘があったことは納得出来たが、その結果は全くの予想外だった。

件の巫女に視線を移す。

満身創痍としか言いようのない有様だった。

自身の力で立つことも出来ず、傍らの妖精に支えられてかろうじて

立っている。

弱りきったその姿からは勝者の威厳など全く感じなかったが、更にその傍に倒れた勇儀の姿を見れば、嫌でも納得せざるを得なかった。この人間は鬼との死闘を制したのだ。

これは思った以上の厄介事だ、と。さとりは警戒心をあらわにした。

鬼を打ち倒すような相手に、真つ当な戦い方では勝ち目などない。そもそもが戦う状況などに持ち込まれないよう、慎重に対応する必要があつた。

「貴女が地上からやって来たという巫女ですか」

こちらを睨みつける妖精の単純な警戒と疑念の心は無視して、第三の眼を問題の巫女に向ける。

深いダメージを受けていることは間違いないようだ。

疲労で朦朧とした意識は酷く読み取りにくい。

「私は地霊殿の主をしています、古明地さとりです」

まずは自分から名乗る。

相手がそれに対してどう応じるかは知らないが、その時思い浮かべた名前を読み取り、それを切り口にして心を暴く。

それがさとりの交渉事における常套手段だった。

心を読み取れば脅すことも容易く、話の流れを主導することが出来る。

さとりが地底の妖怪たちに忌み嫌われる理由だった。

(さとり……………この娘が……………)

今にも途切れそうだが、目の前の人間の思考が見え始めた。

さて、では貴女の今考えていることは――。

(……………いいか、みんな。『小五』と『ロリ』では単なる犯罪だが、二つ合わされば『悟り』となる)

「……………はあ?」

目を疑ったと言えいいのか、耳を疑ったと表現すればいいのか。とにかく、さとりは思わず間の抜けた声を上げるしかなかった。

(でも、実際は『悟り』じゃなくて『覚』って書くのが正しいらしい

よ。っていうか、さとりん……)

「さと……っ、ええ？」

(……ふつくしい)

不意に心の声が途切れる。

全く予想だにしない心の内を見て混乱の極みにあつたさとりは、相手が気絶して思考が止まったのだと理解するのが一瞬遅れてしまった。

完全に力を失った体をチルノだけでは支えきれず、さとりに向かつて倒れ込む。

さとりは小さな悲鳴と共にその長身の下敷きになった。

「お、お師匠!? コラ、お前さっさとお師匠からどけ！」

「……それはこっちの台詞よ」

押し掛かる重さと、むせるような血臭に今更ながら巫女の状態の深刻さを察して、さとりはため息を吐いた。

厄介な問題だらけだ。

この人間を死なせるわけにはいかないだろう。

怪我以外の理由からも、ここに放置はしておけない。

旧都で最大の實力者を倒してしまったこの人間は、一体何が目的でこんな所までやって来たのか。

そもそも、この人間は一体何者なのか。

「美しいって、なにそれ……」

第三の眼で読み解いた、偽りや修辭の入り込む余地のない心の言葉を思い出して、さとりはわずかに顔を赤くした。

こいつは一体何を思つて、あんなことを考えたのか。

目下、あらゆる厄介事を中心にいる人間だったが、そこだけはちよつとだけ興味を抱いた。

……ところで、一番謎だった『ロリ』とは何のことだろうか？

其の九「覚」

古明地さとりは常々自らの境遇を不遇のものだと考えていた。不相応だと言い換えてもいい。

地霊殿の主としてかつて地獄の一部であった灼熱地獄の管理を行っているが、だからといってこの地位が崇め奉られているわけではない。

こんなものは単なる交換条件だ。

この地底世界に住む代わりに与えられた、いわば支払うべき家賃のようなものだ。

それなのに、まるでこの場所の権力者のように認識されている。それだけでも不本意であるのに加えて、いつの間にか地底世界の代表者のような役割まで与えられていた。

確かに、実質旧都を取り締まっている星熊勇儀は交渉事や政（まつりごと）には向かない性分だ。

結果的に、地上との繋がりには地霊殿に向かい、その管理者である自分が矢面に立たされる形になってしまった。

いつの間にか『地底世界に渡りをつけるには古明地さとり』というような形式が出来上がってしまった。

冗談ではなかった。

自分にはそんな権威も力も無いというのが、さとりの自分自身への評価だ。

そもそも気付いて欲しい。

確かに自分の持つ『心を読む程度の能力』とは忌み嫌われるおぞましい力だろう。

実際に、この力によって地底に封じられる程の理由を持つ恐ろしい妖怪達を抑制し、秩序らしきものを形成出来ている。

しかし、この能力が『支配する為の力』として機能しているかという、実はそんなことはない。

そもそも心が読めるからどうだというのだ？

この能力自体には敵を打ち倒せるような打撃力など皆無だ。

相手の心を暴き、トラウマや弱みを抉り出したところで、次の瞬間ショックで即死するようなことが起こるわけもない。

そういった苦手とする力や技を読み取って再現することで戦いの力とすることは出来るが、それとて絶大な威力を發揮するようなものではないのだ。

さとり自身の純粋な戦闘力は、妖怪の中でもせいぜい中堅所といった程度だろう。

本当の『支配する為の力』というのは、その腕力一つでどんな妖怪も恐れ戦くくらい絶大なもの——例えば、鬼の勇儀などがそうなのである。

では、何故この古明地さとりが、曲がりなりにもこの地底世界の支配者の如き印象を持たれているのか？

先程の挙げたとおりである。

古明地さとりは、その能力ゆえに忌み嫌われ、恐れられているからだ。

別に、この能力が心底恐ろしくて震えながら従うしかない、といったものではなく。関わるのも近づくのも嫌になる程忌避されている為なのだ。

言うなれば、受身の服従なのである。

結果的に違いはないかもしれない。

しかし、さとり自身はいつもその辺りのことを周りへ声高に強調したかった。

違うのだ。

印象と実際の差は、致命的なまでの違いとなっているのだ。

さとりはその過程の違いの果てに得た、今の不相応な地位を内心でうんざりするほど疎んでいた。

自分は権力者ではない。

そんな野心もカリスマもない。

例えば、一勢力として戦乱の中に放り込まれたとして、それを率いるだけの能力と度量と統率力が自分に備わっているとは到底思えないのだ。

そんなものはそれこそ鬼に任せておけば良い。
だというのに――。

「だから、私は地底の管理者でも何でもないので……」
さとりは紙に書かれた文面に対して、意味もないのにぼやかずには
いられなかった。

差出人は自他共に認める地上の実力者にして管理者である八雲紫。
書かれた内容は、要約するなら地上で施行された新しい決闘ルール
を地底でも普及して欲しいというものだ。

言うのは簡単だが、実際に行うのは大仕事である。
旧都の妖怪達は自由奔放だ。

暴力には暴力で解決するという極めてシンプルなルールで統制さ
れ、それ以外の複雑な理で抑制することが不可能になったからこそ地
上を追われたのだ。

そんな奴らに今更新しいルールを敷くなど、考えるだけで厄介な話
だった。

さとりに権力や権威があるのなら話は簡単だった。
絶大な力をもって、精神的にも物理的にも捻じ伏せ、従わせればい
い。

しかし、実際のさとりにはそんな力などない。

これこそがまさに、さとりの苦悩する他者の認識と実際の違いから
表れる弊害だった。

――どいつもこいつも、私のことを勘違いしている。

旧都へ出向く前に感じた厄介事の予感、ある意味的中していたの
だ。

書状を几帳面に畳み直してテーブルの上に置くと、さとりは疲れた
ようなため息を吐いた。

「お師匠の方がすごい！」
「さとり様の方がすごい！」

横から頭の痛くなるような会話が聞こえて、さとりはうんざりしな
がら視線を移した。

傍目には二人の幼い少女が言い争っている、見る者によっては微笑

ましい光景がそこにあった。

一方は、何の間違いか巫女と共に地上からやって来た氷の妖精チルノ。

そしてもう一方は、最近人化することを覚える程度に力と知恵を付けた地獄鳥のお空。さとりのペットである。

体格も実力もそう大差ない二人は、今まさに取っ組み合いでもやらんばかりの勢いで相手に噛み付いていた。

「お師匠はついさつき、もんのすごく強い奴と戦って勝っちゃったんだぞ！」

周りの奴らが皆ビビっちゃうくらい強い奴だったけど、お師匠が一発でぶっ飛ばしちやって、しかも自分から頭を下げて負けを認めちゃったんだもんね！」

嘘である。いずれもギリギリの死闘で、だからこそ今その巫女は安静にして眠っているのだ。

「勇儀さんのことならわたしだって知ってるよ！ 確かに強いけど、でもそんな勇儀さんもさとり様には全然逆らえないんだよ！ つまり、さとり様の方がずっと強いってこと！」

嘘である。勇儀はさとりのことを『面白くない奴だ』と捉えているから自然と付き合いも無く、避けるようになっただけなのだ。

「だいたい、勝負に勝ったってあんなボロボロになっただけなのだよ？ やっぱり人間は駄目だね、全然大したことない！」

「お前のご主人さまだって、あんな小さくてひよろひよろした体ですっごく弱そうじゃん！」

「なにをー!?!」

「なんだよー!?!」

あの妖精とお空を会わせたのは失敗だった。さとりはヒートアップする会話を聞きながら後悔した。

件の巫女は治療を施した後で別室で安静にさせているが、その間チルノはずっと騒ぎっぱなしだった。

彼女からしたら得体が知れないどころか敵の可能性も高い地霊殿の者達を強く警戒しているのが、さとりには読み取ることが出来た。

実際、巫女が目覚めた後の話の流れでは、事態がどう転ぶかは分からない。

しかし、今は怒ったり泣いたりするチルノの暴走が煩わしく、自分は巫女の本格的な治療の必要性もあったので、相手としてお空を宛がったのだ。

治療を終え、戻って来てみれば、二人はいつの間にか意気投合していた。

いや、子供のじゃれ合いにも似た言い合いをしている光景が、意気投合と判断出来るかはともかく。

とりあえず、喧嘩するほど気安い仲にはなったらしい。

「二人とも、喧嘩はやめなさい」

「うっさい、あたいに命令すんな！」

「さとり様に失礼な口きくな！」

一言口を挟めば、それを切欠にこれである。

さとりは頭痛を堪えるように額を抑えた。

随分と馴染んでしまった仕草だ。この地位についてから頭を悩ませることが多い。

そんな喧騒の中、部屋のドアに設けたペット用の出入り口から一匹の子猫が入ってくる。

別室に待機させていたさとりのペットだった。

「——そう、分かったわ」

まだ妖怪化すらしていない純粋な動物であるその子猫の思考を読み取り、ようやく現状から抜け出せることに安堵する。

「チルノ、と言ったわね」

「なにさ、気安く呼ぶな」

「あの巫女が目を覚ましたそうよ」

食って掛かるチルノを無視して告げると、それは絶大な効果を発揮した。

「ホント!? お、お願い！ お師匠の所へ連れてって！」

安堵と不安の入り混じった必死な表情。心の中も同じであり、裏表のないチルノがさとりは少しだけ気に入った。

優しく微笑みながら頷く。

「ええ、ついて来なさい」

「さとり様、わたしは？」

「お空も来たければ来なさい。」

ただし、彼女は怪我人よ。それも重傷。喧嘩するようなら追い出すわ」

お空に対してよりもチルノへの抑制として釘を刺し、さとりは二人を伴って部屋を出た。

この地霊殿には使用人というものが存在しない。

ある程度力と知恵を持った妖怪のペット達が主軸となって、管理や他のペットの世話を行っているが、専門の部署や人員があるわけではないのだ。

さとりはこの屋敷の主でありながら、家事などの必要な物事を自らこなさなければならなかった。

それを苦に思ったことはない。

ただ、やはり自分は誰かの上に立つ権力者の器ではないのだとしみじみ思うのだった。

ペットの鳴き声しかない廊下を、背後の幼い二人の話し声を伴って進む。

お空以外に人語を扱えるペットはもう一匹いるが、最も古参で最も信頼するそのペットはさとりの使いとして現在は出払っている。

「ハイよ」

幾つかある部屋の一つの前で止まると、さとりは声も掛けずにドアを開いた。

どうせ中の様子など、そこから聞こえる心で筒抜けだ。

起きたばかりで状況を把握していない、ノイズと意味のない単語が交差する巫女の思考を読み取っていた。

「お師匠！」

「チルノ……」

ドアを開けると同時に、チルノが飛び込んだ。

上半身を起こした包帯だらけの巫女の元へ、目に涙を溜めながら駆

け寄る。

今にも抱きつかんばかりの勢いだったが、怪我を案じてそれを堪えるチルノの意外な繊細さに、さとりはまた少しだけ短絡的だと思っていた彼女への評価を改めた。

基本的に自らの娯楽優先で、他者への悪意は無いが配慮も無い妖精には珍しく、相手を案じる気持ちというものを持っている。

それだけあの巫女が慕われているということなのだろう。

巫女の手を縫りつくように握るチルノの姿には、お空も気持ちを察したらしく黙って見守っていた。

この子も、根元はとても素直で優しい子なのだ。

「おはようございます、地上から来た巫女。私のことは覚えていますか？」

「……さとり」

チルノが落ち着くのを見計らって、さとりは歩み寄った。

一応名乗ってはいしたが、その直後に巫女が気絶した為、どこまで事態を把握しているのか調べる必要があった。

もちろん、わざわざ話を聞く必要は無い。

そもそも、こちらとしては相互理解など求めてはいない。

旧都で起こった厄介事を、その中心人物の一人である彼女の処遇と共にどうやって上手く納めるかがさとりにとって一番の懸念事項だった。

とりあえず、当初の予定通り目の前の人間の心を読み解き、話の流れの主導をこちらで握って――。

「……え？」

さとりは以前と同じように、思考を読み取るうちにその中から不可解なモノを見つけ出していた。

『「原作と同じだ」とは……一体どういうことですか？」

思わず呟いた疑問に対して、巫女はこれといった反応を表に出さない。

しかし、その内心では第三の眼でハッキリと見えるほどに青褪めているのがさとりには分かった。



……。

「それじゃあ、お空。私はこの人と大切な話があるから」

「そいつが変なことしたら言ってくさいね。わたし、すぐに駆けつけますからー！」

「お師匠がそんなことするわけないでしょ！」

……。

「やい、お前。お師匠に変なことしたら許さないよ。あたいはまだ信用したわけじゃないからね」

「さとり様がそんなことするわけないでしょ！」

「はいはい、もういいから出て行きなさい。話が出来ないわ」

……。

「さて、人払いはしました。誰かが聞き耳を立てていても私の能力なら分かります。」

……あと、そうやって何も考えないようにしているのが私の能力への対策のようですが、考えないように考えている時点で既に物を考えているという矛盾をどう思いますか？」

……はっ!? そういえば、それってどういう意味なんだ？

私は今、何も考えないようにしていたが、何も考えないって行動を既に考えてしているわけであって、考えるという行為自体が考え……。

ううっ、『考える』って言葉がゲシュタルト崩壊してきた。か、考えるとは一体？ ウゴゴゴ……。

「嘘です。本当にさつきまで貴女の思考を読めませんでしたよ。」

心を無にするというんですか？ 本当にそうだった状態でした。恐ろしい人ですね、仙人か何かですか。なので揺さぶりをかけました」

そして、私は見事にさとり到手玉に取られていた。

まあ、最初からこういった交渉事で勝ち目なんてあるとは思ってな

かったけど、本当に抵抗する気すら失くすなあ。

そもそも抵抗するっていうのもおかしい話だ。

あの勇儀との死闘で力尽きて、気絶した私がこうして治療を受けた上にベッドの上で目を覚ますことが出来たのも全部さとりのおかげらしい。

感謝こそすれ、さとりに対して警戒する心構えなど必要ないはずだ。

こうして安静にした状態であっても、戦闘時の緊張感が抜けた今では無茶苦茶辛く感じるのだ。

放置されていたら、あのまま死んでいたかもしれない。それでなくても、周囲の妖怪からいい雰囲気は感じなかったしね。

受けたダメージは私自身が思った以上に重いらしい。

っていうか、節々に痛みを感じる上半身はともかく、一番重傷のはずの両足が重く感じるだけで痛みどころか感覚すらないって結構ヤバイと思うんだが。

気絶する前に感じた不安がぶり返してきた。

「ああ、素人目に見ても両足は酷い状態でした。

それに治療と言っても、あいにくとこの地底に人間はいません。なのでペットの動物に施すものを応用した、一般的な治療以上のことは出来ませんので、早急に地上へ戻って、専門の方に診てもらった方がいいですよ」

そして、そんな私の不安を見抜いているくせにスバリと言っちゃやうドSなさとりん。

「誰がさとりんですか」

「ああ!? そうだよ、自分で言ってるんでなんで心が読まれてるって忘れちゃうかなあ。」

「こりや迂闊なことは考えられん。
「……どうやら、気絶する前に聞いた心の声は錯覚ではなかったようですね。」

まあ、第三の眼にそんなものは存在しないので、分かっているはいましたけれど。貴女は見た目と違って随分賑やかな人みたいですね」

好きでこんな仏頂面になったわけじゃないんだけどねー。

本当はもつとにつこり笑って、調子よくお喋り出来る、明るなお母さんって感じになりたかったのだが。

いやあ、当時霊夢を拾うまでは自分が母親になるなんて想像もしなかったから仕方ないっちゃ仕方ないか。

それまでは完全に女としての将来性を捨てて、修行にのめり込んでいたし。

あ、そういえば霊夢は今何してるかな？

「また思考が飛びますね。しかも子煩悩。」

しかし、霊夢……博麗霊夢ですか。当代の博麗の巫女であり、貴女はその先代にして義理の母親。

今回、貴女は八雲紫の使いとして地霊殿の主——つまり私に書状を持って来た。その道中に旧都で揉め事に巻き込まれ、結果的に鬼と決闘をすることになり、更にはそれを制した」

さとりが前回のあらすじを簡単に説明してくれた。って、前回ってなんやねん。

いや、ちよつと待て。

そもそも私はその辺りの事情を、まだ一言も話していない。

もちろん、さとりは心を読むが、そうさせない為に私はさつきまで心を読まれないよう努力していたのだ。さとりの能力は『考えていること』は読めるが『過去の記憶』までは読めないはずだ。

そして、さとりが言うならそれは成功していたはずなのだ。

なのに、何故……？

「何故って、貴女が心を読まれるとマズイという結論に至るまでに、自分で記憶を整理しながら状況判断に勤しんでいたからですよ。その間に全部読ませてもらいました」

わーたーしーのーアーホー！

「あまり自分を責めないでください。大きな思いを伴う考え程、心の声も大きくなるんですから。非常にうるさいです」

あ、すいません。

つい普通に謝っちゃう私。

しかし、こうなるとちよつとマズイぞ。

私の思考をどこまで読んで、さとりは一体どこまで状況を把握しているのか……。

「では、状況整理の続きをしましょうか。」

まず貴女の目的である書状ですが、こちらは既に頂きました。あのチルノという妖精が預かっていた手荷物の中から、勝手ですが拝借させていただきましたよ。

私が一番懸念していた、旧都での騒ぎの真相もこれで把握しました。規模は桁違いでしたが、こういった揉め事は旧都では日常茶飯事です。勝負として決着もしていますし、これ以上こじれることはないでしょう」

さとりはベッド脇のテーブルにお茶の用意をしながら、淡々と説明してくれた。

超話が早い。心を読む能力ってこういう時便利だよね。

うーむ、とりあえず私とさとり。お互いの一番気にしていたことは、これで解決したわけだ。

私は紫のお使いを済ませ、あとは帰るだけ。……この状態で帰れるかは分かんないが。

さとりが心配していたのは、あの旧都ぶつちぎり大決戦の詳細であつて、これも当事者である私と勇儀の間で全部決着はついているから問題はない。

いや、ぶつ壊した建物とか色々問題は残っているような気がするが、その辺は『ロスじゃ日常茶飯事だぜ！』って感じで気にしないらしい。

地底、マジ世紀末。

しかし、その上で私が気にしている新しい懸念が――。

「貴女が前世の記憶を持つ、いわゆる転生した人間であるという点です」

……やっぱり、バレていたか。

「前世の記憶や転生といったものは、さして珍しいものではありません。」

そもそもここは旧地獄。死んだ後に現れるモノが集う場所です。貴女の魂がかつて何処にあり、どういった過程で今の場所に宿っているかなど正直興味はありません」

「さとのり半分の瞼を閉じた両目が向けられ、それとは裏腹に私の心の底までハッキリと見通しているようだった。

いや、実際に見通しているのだ。

「しかし、貴女の持つ前世の知識は非常に興味深い。

貴女が今も扱い悩んでいる情報——『東方Project』という単語を中心とした様々な事項と、その繋がりも既に私はおぼろげに理解出来ています」

やっぱりか……。

私の持つ知識は、この幻想郷という世界の根本に関わるものだ。

正直、私なんか扱うには荷が重過ぎると感じる。

きつとこの世界に住む誰も知る必要はないし、知らないに越したことはないはずと封印してきた。

だが現状、それらの情報をさとりから隠し通すことは出来ず、一体何処までが許容範囲なのかと、在りもしない定規で必死に自分の持つ知識の重要さを測っていた。

その過程を、さとりはしっかりと読み取っていたらしい。

私に向けられた第三の眼とさとり自身の瞳が、責め立てているように見えるのは錯覚だろうか……。

「ええ、錯覚ですよ。私は別に貴女自身に対して何か思うところはありません」

……あつるえー？

「そもそも貴女が気に病んでいるのは『この世界が東方Projectという創作物である』という自身の知識に対してでしょう。

貴女は幻想郷とそこに住む人妖が『げえむ』なる創作上の存在だという知識を持っている。それがこの世界の住人の存在を軽いものと貶めているような気がしてならない、と考えているのでしょうか」

うん、その通りです。

だってねえ、いきなり『実は君達架空の存在なんだよね。本に出て

くる登場人物みたいなもん。こっちはそれを読む側。君らのやつてること全部シナリオ通りプゲラW』とかやられたら、誰でもいい気はしないでしょ？

「最後の『プゲラ』の意味が分かりませんが、まあ言いたいことは分かります。

私も他人事ではないようですしね。『東方地霊殿』ですか？ 近い将来、この地霊殿で起こる騒動が決定しているというのは、予言よりも厄介な話です」

あー、その辺もやっぱり読まれてるかー。

さとりととの対面で動揺した時や、ついさつき見た子供のような容姿の霊鳥路空から色々考えちゃったもんね。

しかし、あの無邪気で幼い女の子が、核の力を取り込んでスーパーパワーアップしちゃうわけか。

なんか複雑だなあ……。

「それは私も同感です。

身内にそんなことが起こるなんて、今でも信じられませんし、未だ幻想郷に現れてもない事件の首謀者を警戒することも出来ません。

だけど、それらは運命よりも確実に起こるだろうことが、これまでの実績により証明されています。きつと、この世界の存在と同じように、それらの出来事も起こるのでしよう」

……いや、でもどうだろう？

こうして私の知識を読み取ってさとりまでが知った時点で、もう『原作の物語』とは違っているのだ。

さとりは将来起こり得る出来事に今から備えることが出来るし、そもそもこの世界に筋書きが存在しないことは数十年を生きた私が実感と共に確信している。

既に流れは破綻していると言っている。

「まさにそれです。

貴女はこの世界が自身の生きる現実であることを十分に理解している。

単なる知識として把握しているだけであって、ここを創作物の上に

成り立つ舞台だなどと思つてはいない。

結局、貴女が自分の知識に翻弄されて勝手に罪悪感や後ろめたさを感じているだけです。貴女は私達と同じ、この世界に生きる存在の一つです。悩む必要などありません」

さどりのハッキリとした物言いが、むしろ私にとって大きな救いとなった。

そうだよ。ご飯を食べて、眠つて、人と出会つて、話して、痛い思いをしたり楽しいことを経験したり——私は、ここで生きている。それは絶対に間違いのないことなんだ。

私の持つ知識は役立てたり使つたりしていたものであつて、決して囚われるものではない。

「その通りです。ですからいちいち気に病むのはやめてください。非常に煩わしいので」

ありがとう。その冷たい言葉すら、今の私にはツンデレに勝手に解釈出来るよ。

ちなみにツンデレというのは……。

「いや、そんな単語の詳細なんて聞きたくないですから。普段ツンツンで……? いや、私のどこがですか!」

うむ、外の世界の知識はまだ早すぎたらしい。

日本人は未来に生きてるつて言われてるくらいだしね。

しかし、こうして私の懸念が取るに足らないものだということが、幻想郷の代表としてさとり自身の口から聞けたワケだが……。

でも、本当に気にならない?

単なる妄言ならともかく、自分達が人間の考えた創作物の中の登場人物だということがある程度の実証と共に突きつけられてるわけだよ?

なんつーか、哲学的になるけどアイデンティティというものに疑問を抱いたりはしないかな?

いや、自分で言つてこの辺は私にもよく分らないんだけど。

「私にもよく分かりませんが、ただそんなに深刻に考えるほどのことではないと思いますよ。」

そもそも貴女自身で言っていて気付きませんか？ 妖怪という存在自体が、人間の考え出した幻想の中のものでしょうか」

えっ、そういう解釈でいいの!?

確かに、外の世界での妖怪とは『昔の人間が遭遇した、当時の認識では不可解だった出来事を定義付けたもの』として扱われている。

かつては神が行っていたとされる、雨や風は気温による大気の変化だし、地震は地下の岩盤のずれが動くことで起こるものだ。

怪我や病気は妖怪によって引き起こされるものではない。

今では科学的に説明されたものが、昔は妖怪として扱われていた。これが外の世界の認識だろう。

しかし、それでは私がこの幻想郷で遭遇してきた数々の妖怪達は一切何だというのか？

彼らあるいは彼女達は実際に存在し、伝承通りの能力や現象を伴って活動している。

私にとって妖怪とは現実に存在するものであり、人間が創作した云々という辺りは、結局本当に実在する妖怪を言い伝えた末に今は科学的に解釈して幻想に貶めているのではないかと思っていたのだ。

—— 実は存在していないが、人間によって創作された。

—— 実は存在しているが、人間による創作とされた。

一体、どっちが正しいのだろうか？

「鶏が先か卵が先か、という奴ですね。永遠に答えの出ない問題です。妖怪の起源も同じことですよ。私達は確かに存在しますが、現実的とは対極に在る幻想的な存在だということもまた事実です。

どちらが正しいかなど、確かめる術はありません。むしろその曖昧さこそが、私達妖怪を妖怪たらしめているのではないかと私は思います」

う、うーん。難しい話になってきた。

水木先生呼んで来た方がよくね？

とりあえず、自分達が人間の創作で生まれた可能性があったとしても、妖怪はそういうものだから気にしないってことでいいのかな？

「自分達の根源を真剣に考えるなんて、そもそも人間くらいのもので

すよ。

そんな思考の行き着く先は、結局自己解釈による自己満足か自滅くらしいものだというのに」

どっちにしろ、自分の中だけで全部話が終わっちゃうってことね。最後になんとも手厳しい言葉を付け加えて、さとりは私の悩みを綺麗さっぱりまとめてくれた。

頭の悪い私ではなんとなく納得することしか出来なかったが、まあその『なんとなく』で十分なんだろうな。

結論としては、私の勝手な考えすぎつてところに落ち着いたわけだし。

あー、なんかさっぱりしたー！

相変わらず体の調子は最悪だが、胸の内は爽快感に満ちていた。

いや、これはもしかしたら生まれて以来一番の爽やかな気分かもしれない。

私が前世の知識を自覚してからずっと、他人には明かせないと思つて封印してきた部分を、たった今さとりに全部打ち明けたのだ。

その上で、何も問題がないと諭されたのだから、この人生数十年分の苦悩が一気に解決したと言つてもいい。

そこまで大げさにするほど悩んでいたわけじゃないが、それでも今回さとりに出会わなければ一生抱えていたかもしれない荷物を降ろせたような気分だ。

なんつーか、スゲーツ爽やかな気分だぜ。新しいパンツをはいたばかりの正月元旦の朝のよーによオーツ。

改めて、さとりには礼を言わなければならない。

単純に私を助けてくれたことも含めて、本当にありがとう。

「ありがとう」

「……いちいち声に出さなくてもいいですよ」

「言葉にすると重みも違うさ」

私がそう言うと、さとりは何故か黙り込んでしまった。

ありや？ 何か気に障る言い方だったかな。

いや、待て。さとりは私の考えていることが分かるんだから、何か

無意識に不快なことを考えていたのかもしれない。

さっきの礼は何の混じりつけもなしに純粹な感謝の気持ちを言葉にしただけだから、余計な思考は挟んでいないと思うんだが……つて、あら？ さとりの顔がちよつと赤く――。

「ああ、もうっ。なんでもありませんから、それ以上私のことについて考えないで下さい。恥ずかしいんですよ」

恥ずかしい？

何故だ。

「……また一つ、貴女という人間が分かりました。意外と鈍いですね」
なんですと!?



妖怪の山の麓に空いた大穴から、一匹の黒猫が飛び出して来た。

それだけならば別に珍しい光景ではないだろう。

しかし、その大穴は地底世界へと繋がる出入り口だった。

その『内側』から出てくるものなど、本来ならば在りはしないのだ。

穴の先にあるのは忌むべき妖怪達が封じられた世界であり、そこから現れ出たというのならこの猫もまた――。

「へえ、ここが地上かあ」

二本の尾を持つ化け猫は、外に出ると同時に少女の姿へと変化した。

視界には新鮮な光景が広がっている。

岩や苔ばかりの地底とは違う、地上は緑豊かな生命に溢れた世界だった。

木々のざわめき、水のせせらぎ、小鳥のさえずり――なんとも、静かなことだ。

「馬鹿みたいに喧しい旧都とは大違いだね」

化け猫は喧騒溢れる薄汚い地元を思い出し、何故だか早くも懐かしさを感じてしまった。

地上に対して物珍しき半分の興味を抱いていたが、実際に上がってみてつくづく実感した。

ここはどうにも肌に合わない。
穏やかすぎるのだ。

路地裏の何処かでもいつも罵声と怒号が飛び交う旧都と比べると、この世界には肌のひりつくような『熱さ』が足りない。

「なんていうか、ヌルイんだにやー」

目の前の光景をどこか嘲笑するように冗談めかして呟いて、化け猫は肩を竦めた。

気分を切り替える。

観光目的でわざわざ地底から這い上がってきたわけではないのだ。

敬愛する主から与えられた仕事を遂行する為に、緩んでいた気を引き締めた。

与えられた地図を取り出して、向かうべき場所を確認する。

全く未知の土地だったが、不安や緊張などまるでない。

ここは地底に比べれば、庭先のように穏やかで安全に思えた。

「さて、博麗神社って所は……」

「博麗に何か御用かしら、子猫ちゃん？」

不意に掛けられた声に、全身が総毛立った。

気を引き締めていたはずだ。

それなのに、文字通りの不意打ちだった。

威嚇や牽制すらも忘れて、一気に固くなった全身を必死で声の方へ動かす。

そこに立っていたのは、風見幽香という名の大妖怪だった。

「……あ、あのー？」

「名乗りなさい」

「火焰猫燐です」

優しく告げられた幽香の催促に、絶対的な強制力を感じながら燐は即答した。

強制力とは即ち、相手の意向に背いた瞬間襲い掛かるだろう死の予感だった。

燐は先程の自身の見解を訂正した。

地上とは、実は思った以上に恐ろしい場所なのか？

それとも、自分は運悪くこの地上で一番おっかない妖怪にいきなり出会ってしまったのか？

「そ……それでお姉さん、あたいに何か用なのかい？」

「貴女、その穴から出て来たわね。地底の妖怪なのかしら？」

「そうだけど……ちゃんと許可証を持って出て来たんだよ。地底で一番偉いご主人様の命令でさ」

燐は恐る恐る、結界を通る為の許可証として機能する符を取り出した。

この符は地底から地上へ出る場合にしか機能しない。

地上から再び地底へ戻る為には、地上の管理者から新たな許可を得る必要があった。

つまり、勝手な理由で地上へ出ることは出来ないし、一度出れば戻ること出来ないのだ。

「ね？ あたいは仕事で来てるのさ。遊びだとか、迷い込んだとかじゃなくて……」

「仕事の内容は？」

有無を言わせぬように、幽香が畳み掛けた。

さすがにその質問には燐も即答は出来ずに息を呑む。

目の前の妖怪が自分よりも強く、恐ろしくて何より残酷であることを燐は直感していたが、彼女の主への忠誠心は高かった。

「……い、言えないよ」

「貴女、色々と余分な物が多すぎるわ」

幽香は笑顔を維持したまま、氷のような声で告げた。

「耳。尻尾。手。足。眼」

「あ……う……っ」

「その半分くらいでも、十分生きていけるでしょう？」

無造作に手を掲げると、幽香がゆっくりと歩み寄った。

その手が届けば、触れた箇所が無造作に耖り取られるに違いない。わずか数歩分の距離が、自分に与えられた猶予なのだ。燐は悟つ

た。

幽香の要求に応えることは出来ない。

立ち向かうことも出来ない。

そして、逃げることも出来なかった。

残された道が、恐怖と苦痛にただひたすら耐え抜くことだけだといふことを理解した燐は目に涙を溜めながらも、必死で口を閉ざした。

「やめなさい、風見幽香」

幽香の歩みが止まった。

天の助けとも思える声に、燐は慌ててその方向を見た。

この絶対的窮地から救い出してくれる希望の光。

「その猫は貴女の客ではありませんわ。私のよ」

「八雲紫……」

光などなかった。

新たに現れたのは、地上で一番おっかないと思っていた妖怪と並ぶような化け物だった。

一体どんな力が働いているのか。空間に裂け目を作り出し、地底でもまず感じられない程の瘴気が溢れるそこから歩み出てくる。

風見幽香と八雲紫。

燐にとつて別次元の存在とも言える二体の大妖怪が、左右に佇んで無言の敵意をぶつけ合っている。

何故、自分がこんな目に……？

足掻くことすら出来ない窮地で、燐はひたすら己の不運を嘆くしかなかった。

「どういう意味かしら？ この猫が貴女の客とは」

「そのままの意味ですわ。貴女は部外者ということね、幽香」

「気安く呼ばないで頂戴」

「あら、先代は呼んでもいいのに？」

「……殺すわよ」

「陳腐な文句を使わないでくださいな、大妖怪さん」

この澄み切った晴天の下で、何故進んで地獄を作ろうとするのか燐には理解出来なかった。

二人はまるでお互いの性質が反発し合うように、相手への牽制を繰り返している。

「使いに出した子飼いの巫女が戻らないから、大慌てで貴重な手がかりを確保しに来た、といったところかしら？」

「彼女は私の大切な友人よ。貴女と違って、興味本位で接しているわけではありませんの」

「ふんっ、よくもそこまで開き直れるわね。妖怪として、何処か外れるんじゃない？」

「羨ましい？ でも駄目。貴女では彼女にそこまで近づけない。良くて手強い敵といった程度の認識よ」

「……何がそこまで誇らしいのか分からないけれど、そんな大切な巫女が今どんな状態なのかアンタは理解しているのかしらね？」

「あらあら、興味深い発言が出ましたわね。そもそも貴女は何故ここにいるのかしら？」

「さあねえ。事情を知らない部外者のアンタには関係ないわね」

「事情なら聞いたことがありますわ。最強を自称していた大妖怪が、自分を負かした巫女の尻を追い掛け回しているという関係のことね」

「あ？」

「ん？」

牽制というより完全に喧嘩腰の二人の間に挟まれて、その場にいるだけで寿命を削り取られていくような錯覚を隣は感じていた。

いや、果たして錯覚と言い切れるものなのか。

息苦しくて、今にも本当に心臓が止まりそうだ。

「……このままでは平行線ですわね」

「私からアンタに渡す情報は無い」

「結構。程度の差はあれど、お互いに情報不足ですわ。ここは一つ、当初の目的を果たしましょうか」

「そうね。いい加減、次の段階へ進みたいわ」

紫と幽香は、互いに矛先を納めて不毛な争いを止めた。

その代わりに、実りある行為の対象として、二人同時に哀れな化け猫へと標的を定めたのだった。

「さて、それじゃあお待ちせ」

「話してもらいましょうか？　いろいろと……ね」

燐は、地上における知識として一番重要なことを、その日記憶に刻み込んだ。

——地上の妖怪の中で、日傘を差した奴は最悪なのしかない！

◇

——えへへ……おめえ……やさしいなア。

——ミノルみたいだよ……。

「こうして、潮は初めて嘘を吐いたのです。『ブランコをこいだ日』おしまい」

「うう……ぐすつ。ひつく……！」

さとりん、マジ泣きである。

「……すみません。創作された物語とはいえ、同族の話をこうまで見事に描かれると、どうにも感情移入が……ぐす」

いや、確かに名作だと思うけどね。

あの後、さとりとの話題は自然と私の持つ前世の知識の中身へと移っていった。

むしろ当面の問題がなくなったさとりとしては、原作や未来がどうこうと言うよりも、全く未知の領域にある世界の話の方が俄然興味を惹かれるらしい。

前世の私が生きていた世界が、この幻想郷の外の世界と同一とは思えないのだが、現代知識として共通する部分は非常に多いだろう。

私はさとりに尋ねられるまま、それらを答えていった。

外の世界の人間はどんな風に過ごしているのか？　から始まり、説明の中で出てくるこの世界では馴染みのない単語を解説して、そこからまた新しい疑問が——。

用意されたお茶とお菓子を間に挟みながら話しているうちに、私が無意識に思い浮かべたことをさとりは読み取った。

——私のような覚妖怪を題材にしたお話が、外の世界にはあるので

すか？

人間と妖怪の絆を描いた、個人的に聖書とも言える超傑作漫画である。

その時の私の心境。テンション急上昇。

尋ねたな？

尋ねてしまったな？

私に好きなものを語らせると長いぜ！

まあ、実際は口下手だからむしろ会話自体が長続きしないのだが、心を読み取ってそのまま話出来るさと相手なら別である。

私はまず漫画の説明から初めて、その作品の全体的な解説、漫画の中の世界観を知ってもらう為に幾つかのエピソードを簡単に話した後、最後に質問の対象であったお話を語って聞かせた。

その結果、さとりは感極まって現在鼻を吸っている有様である。

ふっ、何故か心に満ちる達成感。

ドヤア……。

「別に貴女の考えた物語ではないでしょう。イラストと来るので、やめてください。表情に出ない分余計にむかつきます」

あ、はい。すみません。

ちよつと充血した眼のさとりに睨まれて、尤もなことを言われてしまふ。

「しかし、確かに非常に面白いお話でした。こんなに感動したのは久しぶりです。

地底には文学や芸術といった娯楽が極端に少ないですからね。お酒と喧嘩だけで毎日が楽しめる妖怪ばかりですから」

確かに。旧都を通して感じた地底の印象と、さとりの物静かな人柄はどうにも相性がよろしくないような気がする。

基本的に出会った相手に『ヒヤッハー！ 首捻り切って玩具にしてやるぜー！』で即対応な奴らを束ねる存在とは思えない。

暴力的な雰囲気を全然感じないし、理知的で大人しい人格者だ。

「それが妖怪にとって褒め言葉かは分かりませんが、理解してくれて嬉しいですよ。

私自身も旧都の空気が肌に合うとは思っていません。だからこそ、あまり近づかないようにしてましますね。楽しめることは少ないですが、この地霊殿で静かに過ごしている方が好きです。

そういった意味で、貴女の持つ知識と出会えたことは幸運だったと思います。娯楽として申し分ない。特にその『漫画』というのが素晴らしい。文章ではなく絵を主体にした臨場感のある物語の運びは、見ている飽きません」

えっ、見ていて……？

さどりの心を読む能力って、私の思い浮かべた映像まで見ることも出来るの？

「この辺りの感覚は、おそらく私自身にしか理解出来ないものだと思いますが、だいたいその通りです。」

今の私の読心は、貴女の説明してくれた外の世界の『アニメ』というものにとっても近い状態で機能しています。

心の声を聞くだけではなく、視覚的に思い浮かべたイメージも同時に見る事が可能ですよ」

おー、すげえ！

いや、語っているうちに『ぜび、この漫画そのものを読んでもらいたいなあ』と考えたのだが、既に叶っていたんだな。

私の拙い語りでは、お話の魅力や臨場感を十分に伝えられていたか不安だったが、そんな心配はなかったわけだ。

「ふっふっ、貴女の語りもなかなかのものでしたけどね。」

実際に口にする分には言葉足らずで拙いものですが、心の中では感情を込めて必死に語っているのが聞こえました」

なんかそれってすごい恥ずかしい気がするんですけど……。

熱く語った後に、冷静になって思い返すと随分はしゃいでいたような気がする。

まあ、こんな趣味で語り合える相手って今までいなかったからなあ。

私自身にとっても、さどりとのお出会いはこれまでの人生で一番の幸運だったと思うよ。

ありがとう。

「……そうやって、たまに恥ずかしいこと考えるのやめてもらえませんか？」

はっはっはっ、この照れ屋さんめ！

さとりからは鈍いと評された私だが、こうしてしつかりと会話が成立するのなら相手の機微だって人並みには分かるのだ。

先程からの会話で反応を見る限り、さとりは好意的な対応に弱いようだな。

好意的な対応で何故に動揺する必要があるのかは分からんが、私自身は別段意識してそういったことを考えているわけではない。

ごく自然な受け答えなので、責められても困るのだ。

恥ずかしがるさとりんを見て、楽しむ気持ちはありますけどね！

「自分の心を読む相手なんて、普通は気味の悪いものでしょう？」

貴女の原作とやらの知識にもあるように、この能力が他の妖怪からも忌み嫌われる要因なんですよ」

うーん、心の中を覗かれて困ると思うことはあるけど、忌み嫌うほどかと言われると別にそうでもないけどね。

でも、これはきつと私に限った話なのだろう。

例えば年頃の男なんか、こうして美少女なさとりと面と向かえば、そりゃ無意識に性的な考えを思いついてしまうこともあるわけだ。

実際、私の知識にもオブラートに包めば『萌え』と表現出来る欲望の対象として描かれたさとの創作物も存在する。

そんな欲望を読み取られれば、当然恥ずかしい。

いや、恥ずかしいなんてまだまだ温い反応なんだろうな。

「そういうことです。」

加えて読まれるのは一方的で、相手には私が心を読み取って何を考えているかは分からないんですからね。馬鹿にされている、見下されていると思ひ込む反応が大半ですよ」

だよね。コミュニケーションってのは実に難しいもんだ。

「他人事のように語りますね……その能天気さがあるから私と会話な

んか出来るんでしようけど。

貴女の心は雄と雌、いずれの属性にも傾いていない。非常に中立的な均衡を保っています。おそらく前世が何らかの影響を及ぼしているのでしょうか……」

例えば、前世の私が男だったとして、互いに違う性別が相殺し合っているってことなのかな？

この辺は私も自分事なので何度か考えたことがあるが、考えても答えは出ないし、あまり意味もないので長続きしない疑問だった。

とりあえず、性的な眼でさとりを見てどんな反応されてしまうのか戦々恐々することがないという安心感はあるわけだ。

「……まあ、私としても気を使わなくていいから、それでありがたいんですけどね。」

ちなみに性別は心の声にも影響してくるんですが。貴女のその中性的な声は、高くもなく低くもなく響くので、落ち着いていて結構好きですよ」

ろつとお！ なかなかストレートな言い方をしてくれるな。

うん、まあ……そのお、ね。

好きとか嫌いとか最初に言い出したのは誰なのって話になるわけだが……。

「照れ屋さんですね」

ニヤリといった感じの笑みを浮かべながら、流し目を送ってくるさとりん。

ううむ……さつきの意趣返しを喰らってしまった感じ。

恥ずかしさのあまり頭がのぼせるような気分だ。

……あれ？ っていうか本当にクラクラしてきた。

「これは……」

急に体を起こしているのもダルくなつて、ベッドに横になった私の額にさとりの手がそつと乗せられた。

小さい手だなあ。それに冷たい。

でも、知ってる？

手が冷たい人って心が温かいんだってさ。

じゃあ、修行のしすぎで手が岩みたいになっている私の心はどんなもんなのかと。

「こんな状態で、よくそんなに色々なことを考えられますね。

……とにかく、酷い熱です。傷が熱を持ち始めたのかもしれない。調子に乗って少し話しすぎてしまいましたね」

確かに、考えてみたら私ってば重傷なんだよね。

鬼と死闘を繰り広げて半死半生だったのに、応急処置だけしてちよつと眠った程度で状態が良くなるわけがない。

つつーか、むしろ悪化しますか？

それに私ってばリミッター解除技使ったんだよな。あれの反動が本格的に体に来たか。

さとりとの会話が楽しすぎて、自分のことなのに全然意識が行かなかった。

「一応、光栄なこととして受け止めておきますよ。

貴女が目覚める前に、私のペット……ああ、説明する必要もありませんか。お燐を地上へ使いに出しました。多分、今日中には迎えが来ます」

い……いつもすまないねえ……。

「それは言わない約束でしょう、おとつつあん——って、このやりとりにどんな意味があるんですか？

私が外の世界の知識に疎いからって、わざと心を読ませてからかうのはやめてください。そんな余裕があるなら、迎えが来るまで臨終しないように気をつけてくださいよ」

な、何気にエグイこと行ってくれるねえ。

でも実際、勇儀との戦いではマジで死を覚悟したことだし、そんな戦闘を終えた身で油断も出来ないか。

じゃあ、少しでも体力を温存する為に寝ます。

そのままぼっくりいっちなまいそんな不安はあるが、なんかまた意識が朦朧としてきたしね。

不安だから、ぼくが眠るまで手を握っててよママン。

「いっせすよ。はっ」

……………マジで？

冗談のつもりだったのに、さとりはあつさりと私の手を握ってくれた。

「冗談のつもりでも、不安なのは本心だったでしょう？」

う、うむ……。

心読めるから誤魔化しだって効かないよね。

なんだかそれが恥ずかしいような、ありがたいような。複雑な気持ちだ。

傷のせいかわ気なのは確かなんだけど、こういう弱音ってあまり吐いたことないんだよね。

付き合いの長い紫相手にだってほとんど言っていない。

さとりとのお話が馴染みすぎて、つい気安くなってしまっているよ
うだ。

「別に構いませんよ、手を握るくらい」

素っ気無い言い方が、むしろ心地よい。

それじゃ、ちよつとお言葉に甘えさせてもらおうかな。

おやすみ。

ありがとう——。



「本当に、能天気ね」

眠りに就いた先代を見下ろして、さとりは呆れたように呟いた。

彼女の心を初めて覗き込もうとした時、その内側が想像を絶するものであると覚悟していた。

そして、実際にある意味それは当たっていた。

恐るべき鬼。しかもその中でも特に極めつけの大物を相手に戦い抜き、挙句勝ってしまった人間は、本当に外見からは想像出来ないほど純朴で能天気だったのだ。

特異な前世の知識以上に、その事実がさとりを一番驚かせた。

今もこうして、忌み嫌われた妖怪に手を握られて、得体の知れない

場所で、死にそんな傷を負いながらとても安らかな寝顔を晒している。

無警戒な心は好ましい。

特殊な生まれのおかげなのか、覺妖怪相手にあそこまで好意的な思考を見せてくれることも嬉しいと思う。

しかし、さとりにとって先代巫女は単純に人柄だけで対応を決めかねる相手だった。

まずはその戦闘力。

恐ろしく感じると同時に心強いとも思える。

あの星熊勇儀に打ち勝った力だ。敵ならば恐ろしいが、味方ならば実に頼もしい。

次に保持する知識。

未来予知に近いこの世界の知識に加えて、外の世界に関する様々な情報は実に有益だ。

力と知。

この二つを味方にするのが出来れば、心強いことこの上ない。

さとりは自身のこのような考えを邪なものだと自覚していた。

もちろん、別に大それたことを企んでいるわけではない。そんな野心はさとりには存在しない。

ちよつとした打算だ。

彼女が友人になってくれれば、自分に足りないものを補ってくれる。

先代に対して自分が好意を持っているのは間違いないが、そこにはこういった部分も含まれるというだけなのだ。

「ま、話した内容に嘘はないものね」

無自覚に卑屈な微笑を浮かべながら、言い訳のように呟く。

彼女に聞かせてもらった外の世界の物語は、本当に感動したし、また聞かせてもらいたいと思う。

それを語る彼女の声も好きだ。

さとりの偽らざる本心だった。

そこに加えて、更に自分の益となる要素を兼ね備えているのだ。

そんな彼女と友好関係を結びたいと思うのは、別段おかしいことも不合理なこともない。実に単純な結論ではないだろうか。

幸い、相手も同じように好意を抱いてくれている。

お互いに不利益なことなど何もない関係だ。

相手の心が分かる為に、こんな風にどうあっても交流の中で打算が働いてしまう自分に軽い嫌気は差すが、それもまた慣れた感覚だった。

この能力とは生まれてからずっと付き合ってきたのだし、これからもそうだろう。

妖怪としての性質である以上、自分自身で否定することなど出来ない。

これが嫌われ者の妖怪『古明地さとり』の生き方なのだ。

「悪いようにはしませんよ、ねえ？」

さとりは先代の火照った寝顔をそっと撫で付けた。

眠りが深いことを確認すると、握られた手を優しく解く。

友好関係を求める以上、彼女の看護はきっちり行うつもりだった。

まずは熱冷ましの氷嚢と薬が必要だと思って、部屋を出た。

ついでに、別室に押し込んだチルノとお空がまた化学変化でも起こして騒ぎになっていないかも気になる。

色々と考えを巡らせながら、こうして悩むことが妙に楽しいことに気付いた。

身内や仕事などで頭を悩ませることは多かったが、そんな時の不安感とは全く正反対だった。

さて、これは久方ぶりに触れたあの明るくて軽い心のせいかな？

そうして新鮮な気持ちで廊下を歩く途中で、聞き慣れた心の声が慌てた様子で近づいてくるのを察知した。

「お燐？」

近づく者の正体を察した瞬間に、曲がり角から黒猫が飛び出してきた。

燐の猫の姿だ。

「お使いは済ませたのかしら。随分と早かった——っ」

毛並みは荒れ、思考は混乱気味で、いかにも全力疾走をしたといった様子。の燐を労わりながら、より深く心を読んださとりは、その段階で凍りついた。

燐の心の声は、地霊殿への緊急警報に等しかった。

——八雲紫と風見幽香。地上からやって来たとんでもない妖怪二人が、現在地霊殿の入り口前で星熊勇儀と睨み合っている。



「遠路遙々、よく来たねえ。地上との行き来に関する取り決めは、この際置いておこうじゃないか。歓迎するよ」

勇儀は豪快に笑いながら、二人の来訪者を出迎えた。

「取り決めに破るつもりはありませんわ。古明地さとりからの召喚状を頂いたので、地上の管理者として特例を通させていただきます。隣の妖怪は知りませんけれど」

紫は柔らかな物腰で応対した。

「地上も地底も、許可も不許可も私には知ったことじゃないわ。ここに来た理由はシンプルよ」

幽香は牙を剥いて、障害となる可能性のあるもの全てを威嚇した。地霊殿の入り口前で、幻想郷全てを含めてもトップクラスに位置する妖怪達が対峙している。

三人ともが笑顔でありながら、踏み入る者全てに死を予感させるような空間を形成していた。

地霊殿は旧都の中心に位置しているが、もはや周囲には妖怪や生物などあらゆるものが存在しない。

誰もが本能的に危機を感じて逃げ出したのだ。

「この屋敷に先代巫女がいることは知っているわ。出しなさい」

「ほほう、出したらどうするんだい？」

「お前に話す必要があるかしら」

「ははっ、こいつは豪気だなあ」

殺気を剥き出しにする幽香に対して、勇儀は大らかに応じた。

しかし、山の如き不動の態度は、彼女の要求を言外に拒絶することを表している。

「その状態で、私とまともに渡り合えると思っっているの?」

傷だらけの勇儀自身を指して、脅すように告げる。

勇儀と先代の戦いを見ていた幽香には、それらのダメージがどれ程深刻なのかよく分かっていた。

腫れ上がった顔とボロボロの歯。体中に包帯を巻いた大雑把な治療では隠し切れない傷の数々に、肩を砕かれた右腕では盃を持つことすら出来ない。

最後の瞬間だけは幽香も見届けていないが、胸に開けられた穴は当然癒えてなどいなかった。

先代巫女との戦いに敗北した勇儀には致命的なダメージと疲労が残されている。

「ああ、最高の状態さ。この傷は■■■■との絆だ。今の私なら限界なほど軽く突破出来るよ。試してみるかい?」

勇儀は強がりでも何でもなく、完全に本心から自信を持って答えた。

愚かしい虚勢だと捉えながらも、あの戦いを知るからこそ否定しきれずに舌打ちして黙り込む幽香の一方で、紫が勇儀の口にした名前に反応する。

「何故、貴女が先代の名前を知っているのかしら?」

「おっと、そうだった。これを知っている奴は少ないらしいね。」

こいつは勿体無いことをしちまった。タダで聞かせてやれるほど、安い貰い物じゃないんだ」

「貰い物……? 彼女が、貴女に直接名乗ったというの?」

「ふふふ、いいねえ。お前さん、さっきの飾った物言いよりもずっと魅力的だよ」

無意識に内心の苛立ちが、紫の口調に表れていた。

威圧的な幽香のそれとはまた違った紫の静かな殺意を肌で感じながら、勇儀は嬉しそうに微笑む。

三者の間に張り詰めた空気は、今やピークを迎えようとしていた。

考えられる限り最悪の組み合わせで、周囲を巻き込む程の死闘が始まろうとしている。

「そこまでにしてもらえませんか。騒動だらけの地底でも、今日はおういっばいですよ」

地霊殿の扉が開き、一触即発の状況へ声が割り込んだ。

さとりだった。

傍らには闘争の空気に緊張した面持ちのお空と、幽香を見て驚いた顔をするチルノを連れ立っている。

さとりが未だ互いの敵意に構え合う三人へ歩み寄るより早く、チルノが駆け出した。

「ねえ、あんた幽香でしょ」

「……ええ、直接会うのは初めてね」

一度、ボム用の分身を作り出してチルノの前に現れたが、二人は今改めて顔を合わせていた。

お互いに先代巫女という人間を接点にして知り合った程度の間柄だ。

幽香は妖精を見下しているし、チルノは目の前の妖怪を意地悪な奴だと思っている。

しかし、そんな二人はしばらく視線を交わすと、不意に小さく笑い合った。

「先代とそこの鬼との戦い、最後まで見届けたでしょうね？」

「うんっ、お師匠が勝ったよー」

「当然だわ」

「……手厳しいねえ」

二人のやりとりに、毒気を抜かれたように勇儀が苦笑を浮かべた。それに続いて、紫も普段の冷静さを取り戻す。

最も話の通じる地霊殿の主が出てきたことで、理性的な思考が働き始めていた。

読心を避ける為に自身の境界を弄り、何食わぬ顔で話を切り出す。

「お久しぶりですわ、古明地さとり。こうして顔を合わせるの、本来は在り得ないことですけど」

「地上と地底の間に結界を張る際に立ち会って以来ですか。また面倒なものを寄越してくれましたね」

「それは先代に持たせた書状のことでしょうか？ それとも先代そのもの？」

「両方ですよ。」

しかし、貴女自身が出てくるとは予想外でした。博麗の巫女に彼女の迎えを頼むつもりだったのですが」

「先代の容態が少々油断のならないものと聞きましたので」

——それは後から知ったことでしょうに。

平然と答える紫の繕った笑顔に対する悪態を、さとりは胸の内にだけ留めた。

怯える燐の心から読み取ったが、情報を得る為に随分と脅してくれようだ。

しかも、肝心の博麗の巫女へは伝えていないらしい。

紫は独自にこの場へ駆けつけたことになる。

「入れ込んでいるようですね」

「ええ、古い知己ですので」

「先代巫女は現在、地霊殿の一室で安静にして眠っています。」

容態に関しては、少々悪化の傾向が見られますね。早々に地上へ戻して、本格的に治療を施した方がいいでしょう」

「……重傷なのですか？」

「一度、目は覚ましました。会話もしましたが、しっかりと受け答えも出来ています。」

しかし、やはり傷が深いですね。特に両足は危険だと思いますよ。まあ、鬼の奥義を受けたらしいので無理ありませんが」

話をしながら紫の様子が不穏なものへと変わりつつあるのを察知すると、さとりはさりげなくその矛先を勇儀へ向けた。

紫自身は無自覚だろうが、殺気に近いものが溢れている。

戦闘に向かないさとりにはあまり心地の良いものではない。

お空などはさとりの陰に隠れて震えている。

ついでに、傍らで不安そうな顔のチルノと分かりやすい殺気と敵意

をばら撒く幽香の存在もプレッシャーだった。

「人間相手に奥義とは、戯れにしてはやりすぎですね」

「お前さんがあの巫女とどういう関係なのかは知らないが……やめてくれないかねえ、あいつを小さく見るような物言いは」

紫の皮肉を受けて、勇儀は大らかな対応の中で初めて怒りを表した。

「私が死力を尽くすのに相応しい人間だったよ。」

盃片手に遊び半分の勝負なんかじゃない。全てを出し切った上で、私は負けたんだ。どんな結果が残ろうと、後悔なんかしない」

「勝手な物言いですわ。鬼の理屈に人間を付き合わせる必要などあつて?」

「ないさ。だから鬼は人間を見限ったし、人間に見限られた。」

だがな、あいつはそんな鬼の身勝手な理屈に全力で応えてくれた。私を責められるのは、あいつだけだ。お前さんに何か言われる筋合いはないね」

さとりは勇儀が戦う気になっているのを読み取って内心慌てた。

冷徹で理性的な紫と、大抵の物事には寛容な勇儀が、互いにここまですりの人間に入れ込んでいるとは思わなかった。

さどりの誤算だ。

「喧嘩なら後でやりなさいよ」

地霊殿そのものを崩壊させかねない戦闘の勃発を抑えたのは、意外にもその可能性の一角を担う幽香だった。

さつきから一触即発の連続だ。酷いレベルで拮抗が保たれている。「話をややこしくするんじゃないわ。あの馬鹿をさつきと連れて帰ればいいのよ」

用いた言葉は乱暴だったが、幽香は先代のことを案じている様子だった。

一人だけ妙にすつきりとした顔をしている。

しかし、眼に映るその姿の他に心の声も聞いていたさとりは内心で冷や汗を流した。

これは、なんとも——歪んだ好意だ。

それとも妖怪らしいと納得すべき部分なのか。

どちらにしろ、この風見幽香という妖怪も相当に彼女に入れ込んでいるな、と辟易した。

自宅の玄関先でこんな恐ろしい光景が展開されている理由が、たった一人の人間を中心にしたものなのだ。

「……そうね。こんな睨み合いは不毛ですわ」

「そうかい」

再び笑顔の仮面を付け直す紫を一瞥して、勇儀は興味を失ったかのように視線を逸らした。

スキマを開いて先代の眠る部屋との空間を繋げる。

紫はさとりの許可を得る間もなく、先代をベッドごとこの場へと移動させた。

「んっ……紫、か？」

「おはよう。簡単なお使いだったはずなのに、随分と寄り道をしたようね」

さとりが『うちのベッド……』と呟いていたが、紫は無視して目を覚ました先代に微笑みかけた。

地霊殿の外で眠りが覚め、周りを紫を始めとして様々な知り合いに囲まれている状況だ。

先代は珍しく動揺して、目を白黒させていた。

「迎えが来たんですよ。ここでお別れになるようです」

「……そうか」

さとりの言葉に、状況を把握した先代は名残惜しそうに呟いた。

「え……さとり様、こいつら帰っちゃうんですか？」

さとりが頷くのを見て、お空は少し躊躇った後、先代の傍に寄り添うチルノへ駆け寄った。

「やい、妖精！」

「何よ？」

「次来た時には、今度こそさとり様がすごいってことを教えてやるー！」「へんっ、その時にはあたいはお師匠に鍛えられて、あんたのご主人さまよりも強くなってるもんね！」

「じゃあ、わたしも強くなってさとり様を守る！」

よく分からない売り言葉に買い言葉を交わして睨み合う二人だったが、しばしの沈黙の後でおもむろに力強く抱き合った。

傍から見れば経緯が全く分からないが、とにかく固い友情が結ばれたらしい。

「あつはつはつ、いいもん見せてもらったよ。」

こつちも、名残惜しむのは程々にして、気持ち良く別れを済ますとしようかい」

微笑ましそうに見守る先代の下へ、勇儀が近くに停めてあつた荷車を持ち出して近づいた。

「それは？」

「お前さんにくれてやる餞別だよ。」

折角、鬼退治をやつてのけたんだ。首がいらないってんなら、せめて金銀財宝くらいは持って帰らなきゃあな？」

ニヤリと笑つて、勇儀は荷車の中身を見せた。

覗き込んだ全員の眼が見開かれる。

金銀財宝という表現は全く大げさではなかった。

上質な金や銀で出来た眩しい光沢を放つ延べ棒に装飾品の数々。人間ならば一財産は軽い。

またそれ以上に、妖怪の価値観でも高価だと分かる秘宝や由緒ある刀などの武器。史実で失われたとされる神具の類まで無造作に転がっている。

「家から適当に見繕つて来た私財だ。まあ、地上でなら何かしら価値はあるだろう」

「……これを先代に全て渡すつもりですか？」

「全部欲しいならね。好きなもん持ってけ！」

あつけらかんと言い放つ勇儀に対して、紫は頭痛を感じた。

外の世界の技術と同じくらい、幻想郷に持ち込まれると困る代物ばかりだ。

特に神具の類は、その名の通り神掛かった力や効果を宿しているの
で、一個人が気安く持つていいものではない。然るべき場所に封印や

保管されるべき物だ。

だからといって、鬼の申し出に横から口を出せば、また話が拗れると分かっているのです。紫は苦々しげに黙るしかなかった。

紫の心配をよそに、一通り物を眺めた先代は小さく首を横に振った。

「なんだい、気に入らなかったかい？」

「いや……」

たった一つでも人生など軽く変えてしまえる秘宝の数々を前にしながら、それをあつさり拒絶する。

「欲しい物は……もう、持っているからな」

先代は何もかも満ち足りているように、笑って答えた。

見る者の胸が詰まるような笑顔だった。

その答えに勇儀は心の底から感服し、紫は穏やかに微笑み、幽香は自身の感情を誤魔化すように鼻を鳴らす。

——ただ一人。先代が今何を考えているのか分かるさとりだけは、呆れたようにため息を吐いた。

「はいはい、うしとらうしとら」

小声で呟き、無造作に先代の頭を小突く。

呆気にとられる周囲を尻目に、先代は一変して照れくさそうに笑い返した。

二人だけにしか分からない以心伝心がそこにあつた。

「格好つけずに、ケジメだと思って貰っておきなさい。勇儀さん、これなんかどうです？」

「……ん？ あ、ああ。そいつは大分昔に妖怪の山を訪れた仙人の爺さんに貰ったもんだよ。『食べても無くならないおむすび』だ。でも、そんなもんで……」

「ほ、欲しいー！」

説明を聞いた先代が目の色を変えて食い付いた。

予想を超えた反応に、さとり以外の全員が驚く。

「こ、こんなもんでいいのかい？」

「これがいい」

「ううん……そうか。まあ、欲しいってんなら何でもいいがね」

竹皮の包みに入ったおむすびを受け取り、そこで力尽きたようにベッドへ倒れ込む。

息が荒くなっているのは熱のせいだけではなく、興奮しているからでもあった。

先代がここまで物に執着する様など見たことがない。

紫は釈然としないものを感じながら包みを胸に抱いたままの先代を見下ろし、次に疑念を含んだ視線をさとりに向けた。

二人の間に違和感を感じる。

何なのだ、あの気安さは？

考えていることが分かるからといって、本質や内面まで読み取れるはずはない。

何かがあつたに違いなかった。

その『何か』を切欠に、先代は本来踏み込ませないはずの領域までさとり心許したのだ。

疑念は警戒へと変わって、古明地さとりという妖怪への評価を改めることになった。

思った以上に油断のならない相手なのかもしれない。

一体何に対する油断なのか理解出来ないまま、紫は無意識にそう考えていた。

「それでは別れも済ませましたし、もう地上へ向かわれた方がいいでしょう」

さとりは淡白にそう告げた。

厄介払いのつもりはないが、それに近い考えはあった。

三人の敵意や警戒が、またいつ臨界点に達するかも分からないのだ。

さとり自身も先代との別れを惜しむ気持ちはあつたが、引き摺るほど重いものではない。

「気が向いたら、また来てください。トラブル無しなら歓迎しますよ」

ベッドに横たわる先代へ、軽い調子で声を掛ける。

強く望みはしない。一期一会を楽しむ程度で丁度良い。そう思っ

ていた。

「また来るよ」

先代もまた、そんなさとりの態度が嬉しくて、気軽に約束した。無意識に伸ばした手をさとりが受け止め、一度固く握り合った後で、最後まで触れ合っていた人差し指が名残惜しげに離れる。

それが本当に別れの挨拶となった。

紫が地上へと直接繋がるスキマを作り出し、その中へ先代が静かに運び込まれ、次にチルノ、幽香と入っていく。

最後になった紫は、スキマに足を踏み入れた状態で一度だけ振り向いた。

しかし、すぐに視線を前に戻すと、そのままスキマの向こうへと消えて行った。

スキマそのものも消失し、地霊殿の前にはさとり達だけが残された。

「うにゅ……行っちゃった」

「友達になったのね、あの妖精と」

「……うん。さとり様、また会えるかなあ？」

「さあ、難しいんじゃないかしら？」

「おいおい、つれないこと言うんじゃないよ」

寂しげなお空に対して身も蓋もない応え方をするさとりだったが、傍らの勇儀が豪快に笑いながら首を振った。

「また会えるさ。間違いない、あいつは嘘を吐かない奴だからね」

「……そうかもしれないね」

普段のさとりならば勇儀の根拠のない言葉に同調などしなかっただろうが、彼女の心を読むことで思わず納得してしまった。なるほど、先代自身がそう言ったのか。

確かに近い将来、再び地上からの来訪者が現れるだろう。

この地霊殿で起こる騒動と共に。

「この子が核の力を、ねえ……」

「ん、なに？ さとり様」

「いいえ、なんでもないわ。さあ、中に入りましょう」

勇儀さんも、少し休んで行つてはいかがですか？　まだ随分と怪我が辛いようですから」

「ははっ、やっぱり分かっちゃうかい。いや、本当にあいつは強かったよ」

「知つてますよ」

「お前さんもあいつに随分と気を許されていたねえ。意外だよ。」

うん、こりやあ以前言つちまった『面白くない奴』って言葉を取り消さなきゃいけないな。悪かった」

「別に気にしなくても構いませんが……お詫びですか？　そこまで考へなくていいですよ」

「遠慮なんざ要らないってことも、その眼で分かるだろう。旧都のことで何か気になることがあるなら、相談に乗るよ」

「そうですか？　それじゃあ、中で少し話しましょうか——」

地霊殿へ勇儀を招きながら、さとりは一人静かに安堵していた。

一時はどうなることかと思つたが、旧都の騒動から始まり、今まで続いた問題がようやく片付いた。

自分の手元に残された結果はなかなか悪くない。

先代巫女という一人の友人を得て、それが単純な友情以外にも多くの利益をもたらしてくれた。

こうして、勇儀の協力を得られる切欠となつたのもそうだ。

八雲紫に押し付けられた難題も、これで随分やりやすくなる。

いずれ地霊殿で起こる異変も知ることが出来たように、今後も彼女という友人は多くの手助けを自分にしてくれるだろう。

そういった打算を含んだ期待もあれば、純粋にまた会つて話をしたいという気持ちもある。

——本当に、良い友人を得られたものだわ。

——まあ、彼女自身は随分と苦労しそうな境遇にいるようだけれど。

さとりは先代と出会えた縁に感謝しながらも、他人事のように同情した。

ただ一つだけ、気になることがあった。
最後の別れ際。

振り返った紫の視線の先にあつたのは、まず間違いなく自分。
心を読むことに慣れたさとりには、それが出来ない紫の心情を上手
く察することが出来ない。

だからあの一瞬に感じた、薄ら寒い感覚を気のせいだと思ってい
た。

あの時、古明地さとりを見る八雲紫の瞳に浮かんでいた感情は――
|。

幕間 「地霊先代録」

【鬼どもの宴】

「これが最初に貰った一撃。未だに痕が消えない。

油断してたとはいえ、全然見えなかつたねえ。あれは何を喰らつたんだろう？ とにかく脳天まで響いたな」

「おおっ」

「そして……ほれがきをうひにやつたほきのあひよ。

砕けた歯がまだ生え揃ってない。関節技の一種みただつたけど、とんでもない威力だった。足がこう、虎の顎みたいに襲い掛かつてきてね。右肩も砕かれて、最近ようやく盃持てる程度には回復出来た」

「す、すげー」

「そして、最後がこいつ！ 見ろ、この胸の傷を。喰らった時は背中までぶち抜かれてたよ。

いやあ、あの時は本当に死ぬと思ったね。しかも、こっちの奥義を真正面から迎え撃って、そいつを破つたつてんだ。そりゃ負けを認めるしかないだろう？」

「いいな……いいなあー！」

旧都。木材に囲まれた建築途中の建物の傍で、鬼が二匹酒盛りをしていた。

服を捲くり上げ、生々しい傷跡を見せ付けながら誇らしげに語るのは星熊勇儀。

それを見て、瞳を輝かせて見入っているのもう一匹の鬼、伊吹萃香だった。

「あと、もう治っちまったけど体中に痣やら何やら。

とにかくもうボッコボコに殴りまくりやがって、しかもそれが滅茶苦茶効くんだ。どっちが鬼だつてんだよ、ホントに」

勇儀は自身が先代巫女と戦った時のことを、事細かに萃香へと語って聞かせていた。

言葉とは裏腹に、その顔は喜色満面である。

負け勝負を語る身でありながら、まるで自慢話をするかのように誇

らしげだった。

そして、それを聞く萃香もまた目を輝かせ、ワクワクと胸を弾ませている。

「わたしの留守中にそんな人間が地底に来てたなんて……クソツ、暇つぶしなんて思いつくんじゃなかった!」

「確か、天界まで霧になって昇ってたんだけか?」

地上との取り決めを無視してまで、刺激を求めて行ってみたんだろう。何か面白いことあったかい?」

「全っ然。死ぬほどつまらない場所だったし、天人つてのも死ぬほどつまらない奴らだった」

だからって、引き籠もってたアンタが何でそんな楽しい目に遭ってんのさー! と、萃香はやつ当たり気味に食って掛かる。

地上への期待が肩透かしに終わり、戻って来て見れば何やら楽しい祭りの後。

理不尽を嘆くのも無理ならぬことだった。

半日ほど前——鬼のねぐらである地底へと戻って来た萃香は、ボロボロの勇儀が同じくボロボロの旧都の修理に勤しんでいるのを見て、好奇心を大いに刺激された。

そもそも強大な妖怪である鬼が重傷を負うという事態が既に大それたことである。

何かがあった。

しかも、特大の何かが。

そう確信した萃香は、勇儀の手伝いをしがてらに地底で起こった鬼と人間の前代未聞の死闘を聞いたのである。

「それにしても……嘘みたいに楽しい話を語りやがって、ちくしょー」「嘘じゃあないさ」

「鬼なんだからそれくらい分かるよ。だから、余計に悔しいってんでしようが!」

ああっ、わたしもその人間と勝負してみたかった。せめて、どんな奴なのか一目見てみたかったな——もお——!」

幼い容姿に合った駄々っ子のような癩癩を起こし、それを酒と共に

飲み下す。

一方で、勇儀はあの時の勝負を思い出すだけで満たされる至福の気持ちと、萃香の反応を見て感じる優越感と共に、優雅に盃を呷った。「体ん中、まだズタズタのクセにまた旨そうに飲みやがって……」

「いやあ、旨い旨い。この焼けるような痛みもまた、あの勝負の余熱みたいなものだ。幾らでも名残りを楽しめる。酒の肴には最高つてもんさね」

「こっちは自棄酒だい！」

萃香はすっかり拗ねた様子だったが、それでも好奇心は消せないのか、勇儀に話の続きをせびった。

「——それで、その人間ってのはどんな奴だった？」

「女。若く見えるが、娘がいるらしい。そっちは地上で巫女をやっている、本人は先代って話だ。」

鬼のように強いくせに、綺麗な顔をしている。だが、顔付きに甘さはない。武人特有の鋭さがあった。

背丈は女にしてはデカイが、鍛え込まれた身体つきと合っている。長くて艶のある黒髪が美しかった。鍛錬の跡が刻み込まれている、傷だらけの両腕。寡黙。代わりに何よりも雄弁な拳……」

心地よい酩酊も手伝い、勇儀はまるで焦がれるようにその巫女を熱く饒舌に語った。

鬼が人間のことを想って、ここまで感慨深く語ることなど久しく無かった。

昔は仲間の鬼が手強い人間に挑まれた時、あるいはそんな人間に討伐された時、喜びと悲しみを分け合うように宴の中で語り尽くしたものだ。

本当に、もう随分と昔の話だった。

だからこそ、勇儀がその戦いの中で感じた多くのものを少しでも共感してみたいと。萃香も目を瞑って自分の中に先代巫女の姿を思い描いた。

「いいなあ」

萃香はしんみりと呟いた。

「そういう奴、最高……」

「あれは、良い女だぞ。攫つちまいたかったよ」

「で、手酷くふられた結果がこれなわけだ」

「本当になあ……差し出した首も突っ返されちまったし。だつてのに、こうして生き長らえる理由まで持たせられちまったんだから。手強い相手だよ」

「勇儀にそこまで言わせるたあね。」

「やっぱり、一回直に会ってみたい。んで、実際に人間の身でどれだけやれるもんなのか腕試ししてみたいな」

「お前は鬼の『格』にこだわってるところがあるからな。話だけじゃあ、納得はいかないかい？」

「いや、だからこそよ。」

鬼は強い。他の妖怪や人間とは格が違う。鬼にとつての勝負つてのは、相手に勝ちを譲れるか譲れないかってことだと思ってる。

だからこそ、俄然興味が惹かれるじゃないか。そんな鬼を同等の位置まで引き摺り下ろして、本当の真剣勝負に持ち込んだ上に勝つてみせた人間に！」

先程までの純粹な憧れと喜びに緩んだ顔つきから一変して、萃香は凜猛に笑った。

話は話。実際に自身が体験するものとはまた違う。

伊吹萃香が先代巫女と出会った時の対応が、この酒盛りでの語らひとは全く違った苛烈で凄惨なものとなることは明白だった。

それが鬼の性分なのである。

勇儀には萃香の意気込みがよく分かった。

同じ鬼なのだから、自分も立場が逆ならきつと同じように思っただろう。

「と、いうわけで。わたし、ちよつと地上へ行ってくる」

「はっはっはっ、駄目だ」

「サツと手を挙げて別れの挨拶をする萃香の頭を勇儀が鷲掴みにした。」

「は、離せこんにやろー！ そんな話聞かされて我慢出来るか、わたし

もそいつと勝負するんだい！」

「これ以上地上との取り決めに疎かにしちまったら、地底の汚券に關わるだろうが。しばらく自粛しな」

「天界に行ったことならバレてないって！」

「地上では新しい決闘のルールが敷かれたらしい。この地底でも適応され始めている。せめて、そいつを覚えるまではお前を外に出すわけにはいかないね」

「ええっ!? それじゃあ、何処でやってもその人間と真剣勝負が出来ないじゃあないか！」

「どうしてもやりたいってんなら、あいつと親しくなって個人的に交渉するところまで持つて行くんだねえ。」

とにかく、ルールも知らないお前を地上にやったら無駄な混乱を起こしちまう。それじゃあ、あの巫女に私の面目が立たないってものだ。だから駄目」

その説明に、萃香はぐつと口を引き結んで文句を堪えた。

そういつた義理は人間相手に通し、鬼として重んじる流儀として捉えられている。

敗北した身である勇儀の潔さに泥を塗る行為など、同じ鬼である萃香には出来ないのだった。

「……分かった。その新しいルールって奴をまず覚えるよ。」

親しくなれたって、鬼が人間と分かり合うのに戦い以外あるかってんだ。まずは一発喧嘩してみなきゃあ始まらない。

ルールの上での決闘を申し込んで、そいつとの理解と交流を深めた後で、改めて真剣勝負を頼み込む。これでいいだろう？ さあ、さつさと教えてくれ。時間が勿体無い」

「ああ、あとな。あいつ、私と戦ったから重傷だぞ。人間なんだから完治にはまだ時間が掛かるだろうよ」

「て、てめっ……分かってて、わたしに話したな!? 自分だけ最高の条件で喧嘩して、挙句それを自慢するだけってどんだけ調子に乗ってんだ!!」

「ぎゃはははっ! いやあ、もう誰かに自慢したくって自慢したくっ

て……本当にいいタイミングで戻って来てくれたよ、お前さん！」

「お前、酔うと性格悪くなるの直せよ！ だから、わたし以外の飲み友達がいらないんだっ！」

「私だつてこれまで自重してたんだよ？ ただ、今回ばかりは本当に浮かれちまつてねえ。あーあ、楽しかったなああの喧嘩は」

「ぐぐぐ……っ！ せ、せめてその人間の名前を教えてよ！」

「ああ、名乗りは決闘の華だものなあ……」

「そう。それくらい、いいだろう？」

「はは、断る」

「死ねコラア！」

見た目の体格的には倍以上も差がある勇儀を萃香の怒りの鉄拳が吹き飛ばした。

建設途中だった建物が巻き込まれて再び倒壊する。

「勿体ないから教えてやれないねえ。私だつて死ぬ思いして聞き出せたんだ、お前もそうすることだな！」

周囲から旧都の住人達の悲鳴が上がる中、勇儀は血を吐きながら尚も笑つて応じた。

「わたしだつてきつちり喧嘩して自分で聞き出したいよ！ それを邪魔してんのはお前でしょーが！」

「おうっ！ あいつへの大事な義理立てだ。傷ついたあいつとその娘の居る地上へ騒動の種を出すわけにはいかん」

「一人で心底満足しやがって、ずるいんだよこのヤロー！ だったら、お前ぶつ飛ばしてから地上へ出るっ!!」

「よっしゃ、来い！ 今の私は絶好調だ、やれるもんならやってみろ！」

「やらいでか！」

盛大な音と衝撃が旧都の中心から響き渡り、地底を揺るがした。

鬼の四天王同士の激突が始まる。

喧嘩は旧都の華。それに偽りなく、この日一際大きな華が地底に咲いた。

その後の被害の甚大さと事後処理の大変さに、さとりが卒倒しそう

になるのは、少し後の話――。



【博麗神社の人妖模様】

魔理沙が博麗神社に辿り着くと、勝手知ったる玄関には所狭しと靴が並べてあった。

奥の方から騒がしい声も聞こえる。

こりやあ大所帯だな、と苦笑しながら一声掛けて中へ入った。

「おお、こいつはまさに人外魔境だぜ」

寝室の襖を開けると、大して広くもない空間に人間と妖怪がひしめいている。

呆れ顔の霊夢と部屋の隅に正座して待機している咲夜。

美鈴は門番の仕事を放り出してまでやって来たらしい。

まだ日も昇っている時間だというのに、スカートト姉妹が慣れない畳の上に座っていた。

そして、それらの喧騒の中心にいるのは、布団の中で上半身を起こした先代巫女だった。

「これ、皆お見舞いか？」

「暇つぶしなんじゃないの？」

霊夢が投げやりに答えた。

むっとした表情でフランドールが食って掛かる。

「違うもん、お見舞いだもん！」

小母様が大怪我をしたって聞いて、急いで来たんだから！」

「吸血鬼が巫女の見舞いに来るってどうなのよ？」

「先代には借りがあるからね。」

そうでなくても、うちには怪我の件を知って大騒ぎしたのが二人もいるわ」

「あはは……いや、あの八雲紫が伝えに来るなんてよほどのことかと思ひまして」

レミリアの皮肉に美鈴は苦笑いを浮かべた。

先代巫女が重傷を負ったことは人里にも広く伝えられているが、その詳細まで知る者はほとんどいない。

また、知る者も断片的な情報のみしか持っていないかった。

先代に与えられた八雲紫からの頼み事や、封じられた地底のことを大々的に広めない為である。

つまり、紅魔館の当主とその妹を中心とした彼女達は、大した事情も知らぬまま先代の下へ駆けつけたのであった。

「人望って言えばいいのかねえ……」

怪我人の先代を気遣いながらも傍にくつついて離れようとしないうらんどーるに、その様子を微笑ましげに見守る姉。更にそれを見守る従者達、と。

場所的な意味以外にも入り込む隙間の無さそうな状況を眺めて、魔理沙は頬を掻いた。

右手に下げた袋が所在無さげに揺れている。

「魔理沙も見舞いに来てくれたのか？」

何処か嬉しそうにも見える微笑を浮かべる先代に、魔理沙は頷いた。

普段の巫女装束ではなく、白い寝巻きとその下に巻かれた包帯のせいで随分と違った印象だ。

「ああ、わたしは霊夢から聞いたんだが……こいつ酷いんだぜ？ 買出しの片手間におふくろさんが怪我したって、さらつと言ってくれちゃってさ」

「別に言い広めるような内容じゃないでしょ」

「もうちよつと詳しく話させての。思ったよりも酷そうな怪我じゃないか」

「大分落ち着いたよ」

「絶対安静だけだね。ねっ、母さん？」

「はいはい」

釘を刺すようにジロリと睨む霊夢に対して、先代は肩を竦めて頷いた。

微笑ましい光景に見えるが、その裏には念を押さねばならないほど

重い怪我であったという事実が存在する。

霊夢の対応は、そのまま心配に繋がっているのだ。

枕元にあった、濡れた手拭いと水の入った桶を手にとると、霊夢は魔理沙を伴って台所へと向かった。

「熱があったのか？」

「寝てる間は熱と汗が酷くて、うなされてたわ。今は、確かに大分落ち着いてるのよ」

「まだまだ油断ならないってことか」

「この程度で死ぬような人じゃないけどね」

霊夢は素っ気無く応じたが、魔理沙はその背中を眺めながら暖かな笑みが浮かぶのを止められなかった。

そうして落ち着くまで、彼女は母親を案じてずっと看護を続けていたのだろう。

人里で買出しの時に会ったと言ったが、あの時手早く会話を切り上げられてしまった理由も今はつきりと分かった。

博麗霊夢という少女には、こんな健気な部分が隠されていたのだ。

魔理沙は密かに感動を抱かずにはいられなかった。

「レミリア達はケーキを持ってきたんだけど、あんたはどんなお見舞い品を持ってきてくれたの？」

「果物を適当に。あまり重いもん食えない状態かと思ってさ」

「そうね。ありがたいわ」

二人で台所に並ぶと、息の合った調子で作業を分担しながら、持ってきたリングゴやみかんの皮を剥いて皿に盛り付けていく。

「おふくろさんのこと、やっぱり冬の間はここで世話するのか？」

「診療所では一人暮らしたしね。近所の手助けにも限界はあるし、ましてや雪が降ったりするとね」

「怪我人なだけに危ないってか。あの人にそんな心配要らないってイメージあるんだけどな」

「母さんだって人間だもの。治療は済んでたとはいえ、あのスキマ妖怪がここへ運び込んだのを見た時はさすがに焦ったわ」

「……悪い。不謹慎だった」

「別にいいわよ」

魔理沙の謝罪に、霊夢は普段通りと変わらず素っ気無く返した。こいつのこういうところが、親友をやっている上でありがたい部分だな、と魔理沙は思った。

時として冷たく、薄情にも感じてしまう淡泊な反応が妙に頼もしくも感じるのだ。

霊夢に任せておけば、あの人のことは大丈夫だろう。

「それに、母さんが重傷を負ったって知られると、人里だと色々危ないのよ」

急が上がった不穏な話題に、魔理沙は眉を顰めた。

「危ないって……何だ？ おふくろさんの命を狙ってる奴らでもいるのか？」

「いるのよね、それが。現役時代に色々恨みを買ったらしくて」

「人里まで襲ってくる妖怪なんているのかよ？」

「妖怪もそうだけど、人間もいるのよ。母さんに昔叩きのめされた奴ら。当然、悪党ばかりだけど」

「おいおい……人里の守護者を私怨で襲うってか。世も末、馬鹿の極みだぜ、そいつら」

「昔は妖怪の被害も多くて、しかも内容が直接的で、人里も何かと不穏でゴタゴタしてたらしいわ。それらの問題を片っ端から解決していったのが母さん。当然、慕われると同時に恨まれもするってわけ」
「妖怪退治の次は世直しかよ。すごいぜ、おふくろさん。どう思うよ？ 現役の博麗の巫女様」

「あたし向きの仕事じゃないわ」

「ああ、まあな。被害者も被疑者も両方シバいて終わりだもんな」

「まあね」

「いや、そこは否定しろよ」

軽口を交わしながらも、手早く準備を完了させた。

お互いが持つ皿の中身を、示し合わせたわけでもないのに同時につまみ食いして、何食わぬ顔で部屋へと運ぶ。

「紅魔館にはスキマ妖怪が母さんのことを知らせたらしいけど、案外

「アイツもそういう状況を案じていたのかもしれないわね」

「大物の吸血鬼が居座ってれば、ビビッてちよつかい掛ける人間なんていないってか」

「少し冷静になれば、何かと強力な妖怪に因縁がある先代巫女に手を出そうなんて考える馬鹿は人間にも妖怪にもいないでしょ」

「そういうえば、おふくろさんって人気あるよな。主に強い妖怪に」

「昨日はどういう経緯で知り合ったのか、湖に住んでる氷精が見舞いに来たわ。チルノっていう名前の」

「それって、お前が異変の時に倒したやたらと強い妖精じゃないか？」

「いや、覚えてないけど」

「覚えとけよ……」

「まあ、とにかく手ぶらだったそいつには氷を作らせてからとつとと帰らせて」

「帰らすなよ……」一応、見舞いだろ」

「あと、風見幽香とかいう妖怪から預かったってお見舞いの品を置いていったわ」

「おおつ、そいつなら知ってるぜ。太陽の畑にいるっていう大妖怪だ。

うわあ……あんな奴とも知り合ってたのかよ、おふくろさん」

「花のない草が生えた鉢植えだったわ」

「嫌がらせかよ……怪我悪化するぞ」

「でも、引っこ抜いたら根の部分が薬になる薬草だったわ」

「なんだよもー分かりづらいよ！ どんだけ捻くれてるんだよ、そいつ。むしろ、どんな関係なんだよ」

魔理沙は投げやりに呟いた。

好奇心と同時に脱力感も伴うような話だ。

とにかく、たった一人の人間の怪我がここまで周囲に影響を及ぼすものなのかと感心してしまうことだけは確かだった。

そこまで会話して、魔理沙はふと気付いた。

「大妖怪っていえば、八雲紫は見舞いに来てないのか？ なんか付き合いが深そうだったけど」

「んー、母さんを運び込んだ時はすぐに追い出したし、その後は何も音

沙汰がないわね」

「追い出したって……紅魔館で顔合わせた時も思ったけど、お前あいつ嫌いなのか？」

その質問に、霊夢は珍しく露骨な嫌悪を顔に表した。

「あんな胡散臭い奴、好きになれるわけないでしょうが」

「まあ、不気味ではあったけど、おふくろさんとは親しそだったぜ。それから、一緒に霊夢を教育してたって……」

「魔理沙。虫唾が走るからそれ以上言わないで頂戴」

突然、霊夢から本気の怒気を感じ取り、魔理沙は続く言葉と共に息を呑んだ。

どうやら地雷を踏んだらしい。

単なる相性の違い以上の溝を、霊夢はあの八雲紫に対して作っているらしかった。

「勘なんだけどね、ハッキリと分かるのよ」

虚空を睨みつける霊夢の視線の先には、おそらく八雲紫が映っているのだろう。

「あの妖怪とは考えが合いそうにないわ。特に、母さんに関わることに対してはね」

霊夢は吐き捨てるように断言した。



【森近霖之助の追想】

人妖と共に喧騒が去り、夜も更けた頃に遅れて博麗神社を訪れたのは一人の男だった。

見知った顔であることを確認すると、霊夢が意外そうな表情で迎え入れる。

「……霖之助さんって、あの店から外に出られたのね」

「僕があこの店の中でしか生きられない生態だとも思っていたのかい？」

「とんでもない出不精だとは思ってたわ」

もつともな指摘に、霖之助は黙り込むことしか出来なかった。歓迎など期待していないし、霊夢の性格はよく知っている。慣れ親しんだ仕草で霖之助は肩を竦めた。

「お見舞いに遅れたのは謝るよ。騒がしい時には来たくなくてね」「来てくれただけでも、相手が霖之助さんならどれだけありがたいことなのかよく分かるわ」

「……そこまで僕は薄情に思えるかい？」

「淡白には見える。さ、上がって。きつと、母さんも待つてたわ」

「どうかな？ 彼女も僕に負けず劣らず淡白な女性（ひと）さ」

霖之助は先代巫女とは古い付き合いだった。

かつての彼女と現在の彼女の両方を知るからこそ、霊夢にそう答える。

彼女がまだ現役の博麗の巫女だった頃、霖之助は友人というより相棒といった立場にいた。

今の霊夢が着ている物もそうだが、博麗の巫女装束を作ったのは霖之助であり、当時の妖怪退治で負傷と衣服の破損が絶えない先代を世話していたこともあった。

今日もまた、ボロボロになった巫女装束の代わりを持参している。

決して浅い付き合いではなかったが、彼女が巫女を引退してからは、会う理由が無いというだけで長い間顔を合わせていない。

薄情、淡白というのなら、それは両者の性分のせいなのだろう。

もちろん、相手のことをどうでもいいと思っているわけではなく、昔から続く奇妙な信頼関係のせいだった。

便りが無いのが良い便り、を素で信じているのである。

やはり二人の性分なのだった。

「やあ、お見舞いに来たよ」

「……霖か。よく来たな」

「その名で呼ばれるのも久しぶりだ。相変わらずだね」

部屋に通された霖之助は、先代の意外そうな顔と懐かしい呼び名に思わず苦笑した。

気安い呼ばれ方だが、それを許す程度に親しみを感じている。

二人の間に積み重ねられたものを知らない霊夢は少々慥然としていた。

「そう言えばあたし、二人が会って話してるの見たことないわ」「そうだったかい？」

霖之助は手荷物を置いて、自身も先代の傍らに座り込んだ。

二人の並んだ光景が酷く馴染んで見える。

「君は霊夢に昔の事を語って聞かせたりはしないのかな」

「博麗の巫女だった頃に世話になったことは話したさ。だから、あの子にもお前を頼るように言った」

「霊夢がウチに来るようになった切欠はそれか……」

「世話になつていろいろだな？」

「君、霊夢の所業を分かつてて言つてないかい？」

「いい子だろう」

「君の娘だよ。間違いなく」

二人の会話を聞き、霊夢はなんだかむず痒いような、違和感と自然さを同時に感じているような形容し難い気分になつていた。

程度の差はあれど、自分が敬意を払う相手という点で二人は共通している。

そんな二人が自分のことについて話し、子供扱いしているというのは、話題の本人としては複雑な心境だ。

加えて、母が男と親しげに話しているという状況がなんとも落ち着かない気持ちにさせていた。

そんな関係に至るまでの経緯が霊夢には想像すら出来ないことも、それに拍車を掛けている。

そもそも『霖』などと他人をあだ名で呼ぶところなど初めて聞いた。

一体、母は何を思つて彼をそう呼ぶに至り、そこにどんな思いを込めているのだろうか。

考えれば考えるほど持て余してしまう。

二人と一緒に空間にいと、妙に居心地が悪かった。

普段は超然とした霊夢だが、それは父親を知らない少女だからこそ
の苦悩だった。

「霊夢、少し席を外してくれないか？」

そんな霊夢の心を見抜いたかのように、先代が告げる。

霖之助が荷物の中から診療器具を取り出し出していた。

「……霖之助さんって、医者だったの？」

「いや、単なる道具屋の店主さ。」

ただ、うちで扱っている結界の外から来る品の中には医療に関する物もあってね。古い医学書を読むうちに自然とそういう知識が身についたんだ」

「私が現役の際は、その知識を元に治療を受けていた」

不意打ちで衝撃の真実が明らかになり、霊夢は目を丸くした。

当時の妖怪退治では死にそうな目に遭ったことも多かったと聞いている。

そうして傷ついた母を救っていた命の恩人が、実は霖之助だったのだ。

世話になっていたとは聞いていたが、そこまで深く関わっていたのかと、感謝よりも驚愕が勝った。

「しかし、何で君は素直に本職の世話にならないのかね。知識だけの

素人みたいなものだよ、僕は」

「だが、もう慣れたものだろう」

「おかげさまでね」

唾然とする霊夢を尻目に、霖之助の前で先代はごく自然に寝巻きを脱いだ。

「ちよ……っ、母さん!？」

「ん？ ああ、別に見ていて面白いものでもないぞ」

「体を冷やすだろうから、暖かいお茶でも用意しておいてくれるかい？ 出来れば僕の分もあるとありがたいね」

今、この場で動揺しているのは霊夢だけだった。

霖之助は先代の素肌を見ても何ら変わった様子はないし、先代はこの状況を自然なものとして受け入れている。

完全に自分だけ蚊帳の外にいるんだな、と霊夢は実感した。
疲れたようなため息が漏れる。

「……霖之助さん。母さんに妙な真似したら、タダじゃおかないからね」
「そういう色気のある関係になる可能性があったなら、とつくの昔になっっているよ」

淡泊に応じる霖之助に対して、むしろ霊夢自身の方が自分の言葉に恥ずかしさを感じて頬を赤くしてしまった。

二人の視線から逃げるように部屋を出る。

残された霖之助と先代は、やはりなんら変わらぬ様子で淡々と診る者と診られる者として事務的な応答のみを交わした。

古傷に混じる、新しい傷とその治療の痕を診察していく。

「怪我をした理由は、やっぱり戦闘かい？ 君にここまで深手を負わせる相手が、まだいたとはね」

「鬼だ」

「鬼？ 御伽噺の中でしか出てこないはずだが」

「ああ。実在した」

先代はあつさりと真実を話した。

二人にはそういうことが許されるだけの付き合いがあった。

霖之助は責めるといふより呆れた口調で言った。

「無茶をする。そういうところも、昔と変わっていないな」

「止むを得ない事情があった」

「ああ、だから変わっていないと言ったんだ。現役を退いた身で、よくよく問題に巻き込まれる」

「……昔から、そうだったか？」

「自覚ないのかい？」

「……」

「君は、何かと騒動の中心にいるような気がするよ」

「こんなやりとりを、昔もやったような気がする。」

霖之助は懐かしさと同時に哀愁も感じていた。

人間が昔を懐かしむのは、老いた時だけだ。

霖之助は人間と妖怪のハーフであり、桁違いに長い寿命を持っている。常に若く、常に年老いた身なのだ。

先代巫女にとって、自分が現役だった頃の記憶は既に遠い過去のものとして頭の片隅に置かれているのだろう。

霊夢という娘を得て、戦いから退いた身となって新たな生活を得ている。

変わらないのは、そんな変化し続ける世界を見る霖之助の方だった。

「――診察終了だ」

しばしの沈黙の後、霖之助は道具を片付けながら厳かに告げた。

その通り、声には隠し切れない厳しさがあつた。

「傷はどうだった？」

「酷いものさ。完治は丁度冬が過ぎたあたりになるだろう。まあ、君の場合回復の度合いを一般的な範疇では測れないがね」

「足は？」

先代の具体的な質問に、霖之助は一瞬息を呑んだ。

「……やはり、察していたかい？」

「自分の体だ。よく分かっているさ」

それで、お前の見立ては？ と、先代は霖之助の内心の動揺を無視するように尋ねた。

これではどつちがショックを受けているのか分からないな、と少し呆れながらも、決意を固めてハッキリと告げる。

「もう、動かすことは出来ないだろう」

静寂に包まれた部屋の中で、その宣告が染み渡るように響いた。

「腰までなら大丈夫だが、膝や足首が全く動かせていない。多分、傷が治っても動かないと思う。」

杖などの補助を得てバランスを取り、腰や股関節の動く箇所を上手く使えば、歩く程度なら出来る。

だが、自力で足が動かせない以上立ち上がることさえ難しいし、激しい運動や戦うなんてことは不可能だ。

治療は、少なくとも僕にはお手上げだよ。それこそ、神掛かった腕の名医にでもかからない限り、望みは無いね」

霖之助は淀みなく説明した。

躊躇いや同情は挟まなかった。

そういつた感慨とは無縁の性分でもあつたが、それ以上に付き合いの長い目の前の人物に下手な氣遣いなど無用であることを十分に理解していた。

今、まさにそれが証明されている。

自身に降りかかった悲劇的な真実に対して、先代は『そうか』と一つ頷くだけで全ての感想を済ませていた。

「……治す見込みでもあるのかい？」

「ん？ いや、特にないが」

「君は精神的に強いのか鈍いのか、どっちなんだろうね」

「何だ、急に失礼な奴だな」

先代は慚然とした表情で霖之助を軽く睨んでいた。

その様子や仕草に普段と何ら変わったところなど見られない。

もはやほぼ確定した自分の両足の不能を受け入れ、しかし動揺など欠片も感じていないように見えるのだ。

霖之助がそんな先代に対して思うことは、言葉にした通りのものだった。

女性が脆い存在だとは思わないが、心身共に性別はもちろん人間という枠組みを超越した屈強さを備えている気がする。

彼女の持つ不屈さは一体何処から来ているのだろうか？

それは昔から霖之助が疑問に思い、呆れ、感嘆し続けている事柄だった。

いずれにせよ、彼女が自分の想像など及びもしない程強い人間であることに違いはない。

こんな時に、少しでも弱みを見せる儂さを持った女性だったなら、男である自分の抱く感情も変わっていたのだろうか、と他愛もない想像が浮かんだ。

それこそ、靈夢に言ったように二人の関係が変わる切欠となつたらう。

しかし、そうはならなかった。

先代は、本当に呆れるほど昔のままだった。

妙な安心感を抱いた霖之助は、その想いを自覚して一人苦笑を浮かべた。

「……本当に何なんだ？」

「いや、すまない。本当に、なんというか昔のまま……男らしい有様だと思っただけ」

嫌味ではないが意地の悪い言い方に、先代はにっこりと笑って返した。

「褒め言葉だ」

霖之助は珍しく声を上げて笑った。

本当に、相も変らぬ男らしさだと思った。



【今日の先代】

風邪をひいた時とか、むしろワクワクすることない？

お母さんとかに手厚く看病されちゃったり、学校休んじやったり。挙句、普段食べないような物食べられちゃったりして。

自分が病人だからってチャホヤされるのがたまらんわけですよ。

ねー？ あるある！

……いや、修行で死に掛けた時とか別に誰も看護してくれないし、自業自得だから当たり前だって話だからね。そんな経験全然ありませんけど、私。

手当てを受けたことは何度もあるが、その後は大抵自力で治しちゃうしね。若さの力だった。

はい、生前の記憶からそんなことがあるらしいって語ってみただけです……。

……が、しかし！

今の私は違う。

リアルタイムでそんな体験をしているのだ。

地底から運び出され、それでもう何度目かになる紫の住処で緊急治療を受けた私は、その後博麗神社で世話を受けることになった。

考えてみれば、暦の上ではもう冬の入りだ。

冷え込んだり、雪が降つたりと、健康な時でも何かと苦勞の多い冬をこんな重傷の状態で越せるわけがない。

診療所に放置されたら最悪凍死体で見つかるかもしれない危機を察して、紫は霊夢に世話をしてもらおうと言つたのだつた。

申し訳なさもあるが、それ以上に私はありがたかつた。

どの道、冬になったら診療所も基本閉店状態になるのは毎年のことだしね。

私の治療はツボやマッサージによるものだから、薄着や裸の状態で診察する。文明の利器である暖房器具が充実してない診療所では、冬場はちと辛い。

そんなわけで家に誰も立ち寄ることのないこの期間、私は博麗神社で霊夢の看護を受けながら生活しているのだが……。

——母さん、水飲む？

——母さん、体拭くわね。

——母さん、何か欲しい物ある？

なにこれ。

霊夢、甲斐甲斐しすぎじゃね？

つていうか、私の娘いい子すぎじゃね？

むしろ、天使じゃね？

当初は熱で毎夜ウンウンうなされるような重体だったにも関わらず、目を覚ましてしている間はそんなことばかり考えている私である。余裕持ちすぎ。

でも、本当に嬉しいやらありがたいやらで内心ではテンション上がりがまくっていたのだ。

普段の霊夢が冷たいだなんて欠片も思つたことはないけれど、まさかここまで健気なところがあつたなんてお母さん初めて知りましたよ。

可能な限り自重したが、体を拭いてもらつたり、最初のうちはご飯まで食べさせてもらつたりと、仕方ないとはいえ随分と甘えてしまつた。

でも、実際にすごく嬉しい。

しかも、お見舞いまでたくさん来てくれた。

なんというか、外は寒いのに本当に暖かい感じがする。

加えて、夜には意外な人物まで来てくれた。

「やあ、お見舞いに来たよ」

霖ちゃんじゃなあーい。

ちなみにこの『霖ちゃん』という発音は『勘弁してよ、工藤ちゃあーん』みたいな、おっさんがおっさんを気安く呼ぶような感じで。

まあ、要はこの森近霖之助とは昔私が現役だった頃に仕事の相棒として色々手助けしてくれた間柄なのだ。

出合いは結構古く、霖之助が大手道具屋の霧雨店に勤めて修行中の身だった頃にはもう顔を合わせている。

そのまま付き合いは長く続き、お互い妙に気安い関係となった。

仮にも性別的に男と女でありながら、ちよつと淡泊すぎじゃないかと思ったり、周りに思われたりもしているが、私達の距離感は特に変わることもなく今日まで続いている。

やっぱりこれも前世が影響しているんだろうか。まるで同性の友達のような感覚になるんだよね。

もしくは『コンビ』という呼び方でもしっくりくる。

昔は人里も今ほど治安が良くなかったから、お節介で色々と事件に首を突っ込んだもんだ。

妖怪退治ほど単純な問題ではないので、基本脳筋な私に代わって頭脳労働をやってくれたのが霖之助だった。

映画のデコボココンビみたいなノリだったなああの時は。もちろん、私が面白黒人役で。

その他にも、修行や妖怪退治で大怪我した時なんかは、よく治療をしてもらった。

もちろん人里などにも医者はおり、彼らが怪しげな祈祷師などではなく、れっきとした技術を持った専門家であることは理解していたが、個人的に任せられるだけの安心感が違うのだ。

霖之助が持つ技術や知識は現代のそれであり、前世の影響を受ける

私にはどうしてもそっちの方が頼れるものと感じ取れてしまうのである。

この辺、神や仏よりも科学を信仰する現代人の感性なんだなあ実感する。

現役を引退してからはそんな世話にも随分となっていなかったが、今回大怪我をして、見舞いがてらに自然と診療してもらおう流れとなった。

それで、まあ大体予想はついてたけど――。

「もう、動かすことは出来ないだろう」

案の定、私の両足はもう駄目らしい。

熱がひき、意識もはつきりしてくれば、自分の体の状態くらい把握出来る。

足が全然動かないのだ。

下半身不随という程ではないが、太ももから下が動かないし、感覚もほとんど無い。

霖之助の言うとおおり、これは傷が治っても歩くだけで精一杯になるだろう。

「……治す見込みでもあるのかい？」

「ん？ いや、特にないが」

「君は精神的に強いのか鈍いのか、どっちなんだろうね」

急に失礼な奴だなあ、もう。

正直な話、シヨックはもちろんある。

自分の足が動かなくなったのだ。悲しくないわけがない。

ただ、だからといって絶望のあまり両手で顔を覆ってシクシク泣き伏せるほどかというのと、そこまででもないのだ。

まず冷静に考えて、私の身体能力が激落ちしたからといって、今のところそこまで困るわけではない。

これが現役の巫女時代だったら、さすがに仕事に支障が出まくるのでかなり深刻な話になるのだが、私はもう元巫女。仕事も里の診療所勤めだしね。

日常生活に多少の不便は出るだろうが、それもやっぱり『多少』で

済む話だ。

あと、治す見込みは無いといったが、可能性自体が無いわけではない。

なんせ、ここは非常識のまかり通る幻想郷。素敵パワーが降り注いだり、あるいは自分から発生したりして『すごいね、人体』って具合に治つちやうかもしれない。

まあ、その辺はちよつと希望的観測すぎると自分でも思うけど。でもゼロじゃないしね。希望があるだけで全然余裕が違う。

あと、霖之助が言ってくれたけど『名医』つてのにも一応心当たりあるんだよね。

でも、どうかなあ……今の段階じゃ接点すら無いし、知識でしか知らないから実際にどんな人物なのか把握出来ない。

小さな可能性の一つとして、頭の片隅に置いておこう。

そして、これが何よりの理由なのだが——私は、こんな逆境でも挫けない人達をたくさん知っている。

だからこそ、私自身もそれを倣って自分を奮い立たせることが出来るのだ。

そう、漫画の中のキャラ達は、足が動かなくどころか、下半身不随になったり盲目になったり腕がぶつちぎれちゃったりしても、不屈の心で立ち上がってきた。

私もそれを見習って、強く在らねばならないと思うのだ。

——でも、それって架空の話だよ？ と、冷静になれば当然の疑問も湧く。

しかし、今の私は違う。

地底でさとりとこの世界について話した私は、知識では創作物だと認識していた東方の世界が確固たる現実として存在することを改めて実感した。

だからこそ思うのだ。

他の漫画やアニメの世界が、何処かで現実として存在する可能性だって否定出来ない、と。

物語の中の凄惨な状況や圧倒的不利な窮地を乗り越えた。そして、

それを見て私の憧れた者達が、確かに存在して生き抜いている可能性——それを思うだけで、心が燃え上がる。

後ろ向きな考えなんて吹っ飛んで、どんな不利な状況にだって負けられないという気持ち湧いてくる。

飛行機があれだけ高く飛べるのは、凄まじいばかりの空気の抵抗があるからなのだ！……って、この名言を言ったキャラも実際に生きてそれを証明してみせていると思うと俄然重みが増してくるね。

そんなわけで、私は強がりでも何でも無い、平常通りの態度で霖之助の質問に答えることが出来た。

むしろ逆に燃え上がってるかもしれない。

動かなくなった足を補うのではなく、それをバネにして更に超えてしまうような修行を始めよう。

となると、やっぱり新しい修行は地底でヒントを掴んだ『黄金の回転』に関する事かな。

あれを扱う主人公の一人も下半身不随のハンデを背負って、そこから更に成長しているし。

とりあえず、しばらくは単純に怪我の影響で動くことも厳しいので、安静にしながら物を回転させる練習と外の景色とかから『黄金の長方形』を見つけ出す修行から始めるとしよう。

……やべ、新しい修行への挑戦とか久しぶりだからちよつとワクワクしてきた。

重傷なのに前向きすぎだろ、私。

命を賭けた戦いで大怪我をして痛い目に遭おうが、色んな人に心配されて幸せな気分になろうが、結局私という人間の根っこは変わらないのだと実感した。

やれやれ、我ながら全く度し難いね。

でも、それが私だからね。

貫いてみせましょう、最期まで。

——ところで、お見舞いの品々を確認していて、一つ思い出したことがある。

幽香って私との真剣勝負にかなりこだわってたよね。

今回のお見舞い品も『早く怪我治して殺し合おうぜ』みたいな意図がモリモリ含まれてるような気がするんだ。

私の足が動かないって知ったら、どんな反応するんだろう？

うん……超考えたくねー。

きつと怒りまくるよ。問答無用で殺しに来るかもしれない。

実はこの新しい修行の成果が、私の今後の生死に深く関わってくるんじゃないだろうか。

とりあえず足の治療に関しては、どんなに可能性が小さくても全部試すだけ試してみた方がいいのかもしれない。



【生者必滅の理】

「——そう。大事が無くて何よりだわ」

「パチエも来ればよかったのに」

「そこまであの巫女に入れ込んでいるわけではないわ」

「どちらかと言えば、あの魔法使いの方に、かしら？」

「邪推ね」

軽く睨みつけるパチュリーの視線を受けて、レミリアは楽しそうに笑った。

咲夜と小悪魔。互いの従者を傍らに控えさせて、二人は図書館の一角で親友同士の語らいを交わしていた。

「それに、私は行かない方がよかったですでしょう。余計なものまでついて来ることになるし」

「あららあ、それって私のことですかあ？」

小悪魔が嫌らしい笑顔を浮かべながらわざとらしく惚けた。

「その糞みたいな性格の悪魔、今度は先代を狙っているのかしら？」

「ええ、少し前までは妹様にちよっかいを掛けていたわね」

「でもその先代様に救済されちゃったじゃないですか。お嬢様にも度々ボッコボコにされてますし、もう妹様には何もしませんよお」

レミリアの鋭い視線を受けても、小悪魔はヘラヘラと笑っている。

仕方のないことだった。これが悪魔というものの性分であり性質なのだ。

なんとも頭を悩ませる存在だったが、パチュリーの補佐として有能であることに変わりはない。

実益と実害のバランスを見る限り、この紅魔館に置いていても良いという結論に至るのだった。

あるいは、そこまで計算しているのかもしれない。

いずれにせよ、レミリアにとってこの小悪魔という存在は苦手な相手であった。

「それで、その妹様はもうお休みですか？」

「……昨日はあまり眠れなかったみたいだしね。先代に会って、安心したようだわ」

「妹様ってば、可愛らしくなりましたねえ。なんというか、ウフフって感じですね。以前とはまた違った意味で魅力的ですよ」

「お嬢様、やはりこいつは滅ぼしておいた方がいいのでは？」

意味深げな視線をチラチラと送る小悪魔の挑発に乗りそうになる咲夜をレミリアが制する。

最近の小悪魔は絶好調だった。

もちろん、それは周りにとって悪い意味しか持たない。

先代巫女という新たな獲物に執念を燃やす小悪魔は、仕事に置いて更なる有能さを発揮しているが、同時にこうした日常でばら撒く悪意も増している。

久方ぶりの親友との談話だったが、しばらくは従者を伴わずにひっそりとやった方がいいかと。レミリアは紅魔館の主でありながら、妙に肩身の狭い思いをしていた。

今回も早めに切り上げてしまおうと、レミリアはティーカップの身を一息で飲み干した。

その時、勢いよく図書館のドアが開かれた。

「……フラン？」

「おねえ……さま……っ」

寝巻き姿のフランドールが、何故か泣きながら佇んでいた。

何かを堪えるように、片腕には先代から貰ったぬいぐるみをきつく握り締め、肩を震わせている。

レミリアは慌てて様子のおかしい妹の下へと駆け寄った。

「どうしたの？ 何か怖い夢でも見たのかしら？」

「ちが……違うのっ。眠ろうとしたの……でも、小母様を……思い出して」

「先代を？ 今日、お見舞いに行っただでしょう。怪我は酷かったけれど、何も心配することはないわ。冬を越える頃には治るわよ」

動揺しているフランドールに、ゆっくりと言い聞かせるようにレミリアは話しかけた。

何も大げさに慰めようとしているわけではない。

語って聞かせた内容は、全て真実だ。

しかし、フランドールは否定するように首を振った。

「分かってる……でも、分からないの。」

あの時は、小母様と会って、すごく安心出来たのに……一人になったら、なんだかすごく悲しくなって……っ。分からない、どうしてなの？ お姉さま……！」

フランドールの話は全く要領を得ないものだった。

しかし、レミリアには妹の抱く感情に共感するものがあつた。

なんとなくだが、フランドールの抱える悲しみの正体を理解出来たのだ。

その気持ちを、レミリア自身も経験している。

「そう……私には分かるわ。多分、アナタの感じている不安を、私は知っている」

「どうすればいいの？ なんだかすごく悲しくて、涙が止まらないの。どうすれば、これを止められるの？」

「それを理屈で止めることは出来ないわ。どうすることも出来ない。

些細な切欠で、急に頭の中を過ぎるの。そして、どうしようもなく悲しくなるのよ。」

眠りなさい、フラン。今夜は私が傍にいてあげる。眠って、目が覚

めれば、きつと何が悲しかったのかも忘れてしまえるわ」

そう言い聞かせながら、レミリアはフランドールをしっかりと抱き締めた。

自分の中の理解出来ない感情のうねりを覆い隠すように、フランドールも姉に縋りついた。

そんな二人の様子を伺う者の中で、不可解な表情を浮かべているのは咲夜だけだった。

パチュリーはフランドールの動揺を憂いを帯びた瞳で見つめ、小悪魔は相変わらぬ笑顔で、しかし何処か微笑まじげなものを見るような視線を向けている。

「咲夜、今夜はフランと眠るわ。寝室の用意はしなくていいわよ」

「あ、はい……」

思わず生返事をしてしまった咲夜を咎めることもなく、レミリアはフランに付き添って図書館を出て行った。

残された咲夜は、やはり分からないといった疑問の表情でパチュリーを見た。

「妹様は、一体どうなされたのでしょうか？ お嬢様は何か分かっておいでのようにしたが」

「咲夜さんにはきつと分からないことですよ」

「お前には聞いてないわ」

訳知り顔で告げた小悪魔を睨みつける。

パチュリーは二人を制するように軽く手を上げ、咲夜を見つめた。

「小悪魔の言葉もある意味当たっているわ。アナタには理解することは難しいでしょう」

「パチュリー様まで……」

「仕方の無いことなのよ。当人か、レミィに任せておきなさい。

それと、今日は美鈴の所へ行かないようにしなさい。彼女も泣いているかもしれないわ」

「……それは、妹様と同じ理由なのでしょうか？」

「きつとね」

——では、パチュリー様は？

そう尋ねることは、咲夜には出来なかった。

一体、何があんなにも悲しかったのだろうか？

咲夜にはフランドールの涙の理由が、どれだけ考えても分からなかった。

今、この場で自分だけが理解出来ない状況を省みて、なんとなくだがそこに種族の違いが関わってくることだけは察することが出来た。

人ならざる者が涙を流す理由など、人には到底理解出来ないものなのかもしれない――。

妖々夢編

其の十「春雪異変」

人が生きる上で、死というものに触れ、その実体を知るのは避けられないことだ。

博麗霊夢が、それを知るに至った切欠はどんなものだっただろうか。

道端で動物の屍を見た時か。

母に連れられて、人里の葬式に顔を出した時か。

本人も覚えてはいない。

幼い子供の頃に経験した、そんなささやかな切欠だった。

——あれが、死ぬということ。

記憶にもおぼろげなその時に、霊夢が感じたものは漠然とした『理解』だけだった。

なるほど。あれが死か。

でも、それが何だ？

霊夢はただその現象をあるがままに受け止め、そこから繋がるはずの感情をその時は何も抱かなかった。

いずれ自分に降りかかる死への恐怖も、命が失われたことへの悲しみも無い。

人は死ぬ。

ただ、そうとだけ理解した。

博麗霊夢という人間の持つ、何ものにも囚われない特性が、彼女に死への感慨を何も抱かせなかった。

死ぬことは恐ろしいことではないし、悲しいことでもない。

もし、自分自身に絶対に避けられないその瞬間が訪れたとしても、自分はあるがままに受け入れるだろう。

そう考えて、霊夢はその時直面した死という現実の前を通り過ぎた。

そして、幾らかの月日が過ぎて、霊夢は改めて死と向かい合った。

ある日の夜、霊夢は唐突に眠りから覚めた。

別に何も特別ではない一日を過ごし、いつものように母の隣で寝床に就いた。

何故その日だったのかは分からない。

ただ、霊夢が死というものを理解してから過ごした日々の中で、その日その瞬間に何の脈絡も無く脳裏に浮かんだのだ。

目を覚ました時、時間は当然のように夜中だった。

博麗神社の周囲からわずかに聞こえる虫の声、風の音。自然の中にある夜の静寂。

暗闇の中で開いた視界には、入り込むわずかな月明かりに照らされた天井しか映らない。

霊夢は、急に孤独を感じた。

襲い掛かってきた、と表現した方が正しいかもしれない。

夜の静寂と闇が、まるで物理的な圧迫感を伴って全身に押し掛かるような感覚。

自分は今、独りだ。

何の根拠も無くそう感じた。

ワケが分からず、不可解だった。

霊夢はその時、無自覚に小さな体を萎縮させていた。年相応の子供のように。

無意識に体を傾け、隣で眠っている母を捜した。

捜すまでもない。そこに母は眠っていた。

いつもと同じように、一緒に床に就いたのだ。何処かへ出かけるわけもない。当然のことだった。

しかし、母親の眠る姿を見て霊夢が感じたものは安心感などではなく、逆の不安だった。

武術を極める母は、眠る時も姿勢正しく、息遣いは整っていて寝息も静かだ。

まるでこの静寂の中に溶け込んでしまっているような静かな呼吸。動かない寝相。

掛け布団に隠され、呼吸による胸の動きさえ分からない。

霊夢は自身の動悸が激しくなるのを感じた。
横たわって動かない母を見ると、不安がどんどん大きくなる。
溜まらず体を起こして、母の布団に手を掛けた。

「……かあさん」

小さく呼び掛けたが、母は目を覚まさない。

冷静に考えれば当然のことだった。霊夢の声はあまりに小さく、本当に囁くようなものだったのだ。

得体の知れない感覚に全身を強張らせていた霊夢にとって、それが精一杯の呼び掛けだった。

その声に母は応えない。

耳を澄ませば寝息は聞こえるし、胸に手を当てれば動いていることが確認出来ただろう。

しかし、霊夢は応えてくれない母の様子を見て、一気に不安を膨れ上がらせた。

胸の中で大きくなったそれは肺を圧迫し、息苦しくなって、体から自由を奪った。

霊夢がその時感じていたものは、間違いなく恐怖だった。

「かあさん、起きて」

——お願いだから。

霊夢は知らず祈り、必死で声を絞り出していた。

やはり小さな声だったが、眠っていても周囲の気配に敏感な母は、それを察知して目を覚ました。

「……ん？ 霊夢か、どうした？」

目を軽く擦りながら、体を起こす。

動いている。

生きている。

あまりにもあつさりとしたその事実を確認すると、霊夢は安心すると同時に呆然とした。

全身で感じていた得体の知れない恐怖は嘘のように消え去ったが、代わりに必死で堪えていたものが涙となって溢れ出した。

理由など分からない。

もう、何も分からない。

ただ、頭の中は無茶苦茶で、様々な感情だけが激しく渦巻いていた。目を覚ました途端に、嗚咽を堪えて泣き出した霊夢を、母は慌てて抱き締めた。

「どうした？ 何か怖い夢でも見たのか？」

霊夢は腕の中で首を振った。

それが否定なのか、それともただむずがっているだけなのか、本人にも分からなかった。

自分で自分の考えていること、感じていることが分からない。

霊夢にとって初めての経験だった。

だからこそ、どうすることも出来なかった。

ただ、縋るように母にしがみ付く手に力を込めた。

「よっよっ……」

何も説明することが出来ない霊夢に対して、母は全身で抱擁するように体を抱き寄せ、しゃくり上げる小さな背中を優しく叩いた。

言葉を交わさなくても霊夢の中にある不安の正体が分かっているように、そうしているだけで少しずつ心が落ち着いていた。

——今、自分は母を困らせている。

わずかに戻った理性が、子供らしからぬ働きをして霊夢自身を責め立てた。

母に説明しなければならぬ。

自分が何故こんな夜中に起き出して泣いていたのか。意味などない愚かな理由を話して、そして謝らなければならない。

そう考えているのに、霊夢の中では理性よりも感情が上回っていた。

もう過ぎ去ったはずの恐怖の余韻から必死で逃れるように、母に抱きついたまま何も話すことが出来なかった。

「今日は一緒に寝ようか」

霊夢の自責の念を拭い去るように、母の優しい声が耳元で聞こえた。

抱き締められたまま布団の中に引き込まれ、母の体温と一つになっ

て包まれる。

この上ない安心感に包まれていた。

しかし同時に、それだけしても心の奥底に消えない感情が残っていた。

どんなに体を温めてもらっても、体の中に小さく冷たい何か根付いてしまっている。

怖かった。

霊夢は初めて『死』というものに恐怖を感じていた。

こうして抱き締められている安心感も、いつかは消える。

人はいずれ死に、その中の一つとして目の前の母も死んで自分の前からいなくなってしまう。

それはどうしようもない現実だった。

どれだけ足掻いても、泣き喚いても覆しようが無い、いずれ来る現実なのだど理解出来てしまった。

そして、理解するだけで受け止めることなど出来なかった。

幼い心から溢れた感情が、霊夢の体を支配してあらゆる制御を奪っていた。

霊夢はその日一晩中、母の体にしがみ付いて泣くことしか出来なかった。

やがて、泣き疲れた幼子の心に訪れた眠りが慈悲深く幕を下ろした。

次の日。目を覚ました霊夢は、自分が母に抱きついて眠っていることを自覚すると、途端に恥ずかしさを覚えて跳ね起きた。

同じように起きた母が珍しくからかうような笑みを浮かべているのを見て、顔を真っ赤にしながら部屋を飛び出す。

冷たい水で顔を洗い、気まずい朝の挨拶をして、ご飯を食べて——そして、いつものように当たり前の日常が過ぎていく。

あの時感じた激しい感情のうねりは、今ではただ単に記憶として残るだけで、実感を持たないおぼろげなものとしてしか思い出せない。

月日は過ぎ、霊夢は子供から少女へと成長した。

あれ以来、霊夢が泣いたことは一度として無い。

今日も博麗神社で一人目を覚まし、巫女としての日常をこなし、そして一人で眠りに就く。

もう悲しいとも怖いとも感じなかった。

——だけど、あの夜感じたものと理解したものは、決して逃れられない、いずれ訪れる現実なのだ。



「……寒っ」

季節は冬を過ぎ、暦の上では既に春に入っている筈の時期である。

それにもかかわらず、吹き荒ぶ寒風と境内に未だ溶けずに残る白模様が季節の移り変わりを全く感じさせなかった。

これで晴れ間でも見えていれば、まだ暖かなものを感じられたのだが、霊夢が見上げた先にあるのは寒々しい曇り空だった。

「やっぱり、異変よね」

霊夢は諦めたように現実を受け入れた。

前々からそうではないかと予感はしていたし、それを裏付けるこの異常気象も把握していた。

今年は春の訪れが遅いのだろうと自分を納得させるのもそろそろ限界だ。

寒さのせいで積極的に動く気を失っていたが、今度はその寒さが動かざるを得ない危機感を煽っている。

「さすがにずっとこの寒さが続くと拙いしね」

今日まで寒い寒いとぼやくだけだった姿が嘘だったかのように、霊夢はしっかりとした足取りで部屋へ向かった。

異変を予感しながら、日々それを無視して何もしてこなかったわけではない。

火鉢の前でだらしなく暖を取りながらも、一切気を抜かず力を入れて書き上げた何十枚もの霊符。

清水で磨き上げた退魔針。

そして、博麗の秘宝として伝わる『陰陽玉』二つ。

博麗の巫女が異変解決に赴く為の完全武装を備えた霊夢は、刺すような冷たい空気の中、境内へと歩み出た。

「――さて、とりあえず何処へ向かいますようか」

当然ながら、霊夢にはこの異変解決のアテどころか原因さえ分からない。

生来より授かったありがたい巫女の勘なるものに従って、流されるままに飛んでいくくらいしか考えがなかった。

しかし、そんなぼんやりとした先行きとはまた別に頭に浮かんだ場所がある。

「ちよつと、人里行ってみようかな？」

煮え切らない自分の判断に言い訳するように一人呟く。

異変解決の為の行動ではなかった。

この長引く寒さの中、不意に人里へ戻った母親の様子が気になったのだ。

先代の足がもう動かないのだと霊夢が知ったのは、既に一月も前の話だ。

看護する傍ら、ずっと傷が治れば全て元通りなのだと思っていた。

日を追う毎にそれは不安へと変わり、包帯が取れてもまともに立ち上がれない母を見て確信してしまった。

シヨックを受けたし、落ち込みもした。

心配ももちろんしていたが、結局足の不自由以外に怪我の後遺症も無く、先代は杖をつきながら、危うげな足取りではあったが人里へ自力で帰ってみせた。

あれから幾日か過ぎ、人里での母の暮らしを無意味に案じることも減っていったが、忘れたわけではない。

一月。そう、あれから一月だ。

本来ならば、神社へ様子を見に来て、一晩泊まっていく決まりなのだ。

じゃあ、動けない母に代わって娘が人里へ赴いても、なんらおかしな理屈ではない。

霊夢は自らの正当性に納得すると、一つ頷いて進路を人里へと向け

た。

「霊夢っ！」

空へと上がり、寒風をモロに受けて顔を顰めていると、不意に声が掛かった。

魔理沙が物凄い速さでこちらへと迫って来ていた。

そのままぶつかるとは思えないかと思える程の勢いで霊夢に近づき、急停止する。

明らかに何かに焦っている様子だった。

「霊夢！ い、いいか……落ち着いて、聞いてくれ」

「あんたが落ち着きなさいよ」

「バカヤロウ、茶化してる場合か!？」

どっちなんだ。

落ち着けと言いなながらも取り乱す魔理沙自身とは対照的に、霊夢はただ静かに呆れていた。

この異変に関係する話かな、と軽い期待を抱きながら黙って話の先を促す。

「とにかく、大変なんだ。わたしと一緒に人里へ来てくれ」

「今から向かおうとしたところだけど……何かあったの？ この寒さの原因がそこにあるわけ？」

「違う！ いいか、本当に落ち着いて聞いてくれよ……」

魔理沙は逆に自分を落ち着かせるように深呼吸を一つ挟んで、ハッキリと告げた。

「お前のおふくろさんが亡くなった」



「……博麗霊夢か。よく来てくれたな」

診療所へと入った二人を出迎えたのは、暗い顔をした慧音だった。

霊夢も魔理沙も、慧音に対しては顔見知り程度の認識であって友人ではない。

霊夢に至っては、母である先代巫女が彼女と同じ人里の有力者とし

て交友があつたからこそ知り合つたのだ。

慧音に促され、霊夢は奥の私室へと入っていった。

本来ならば、先代が寝食を過ごす生活の為の場所。

そこに、霊夢の母は居た。

「今朝だ。先代の足が不自由だから、診療所が開く前に一度顔を出すのが日課だった」

霊夢はしっかりとした足取りで、布団の上に横たわる先代の傍へ歩み寄った。

魔理沙から報告を受けて、人里へ向かい、そして実際にこうして事態に直面しても、霊夢は言われた通り落ち着いていた。

「何者かが侵入した形跡は無い。この部屋も、診療所の方も荒らされてなどいかなかった。だから原因は分からない」

腰を下ろし、そつと首筋に手を添えた。

冷たかった。体温など無い。

呼吸も、鼓動も感じられない。

そのの意味することは一つだった。

「……何度、呼び掛けても起きなかった。眠っていると思つたのに」
それこそ死人のような声で、慧音は事の詳細を伝えた。

その話は霊夢の耳に入っていたが、頭の中に残ることはなかった。
首から手を離し、そのまま胸の上に持つて行く。

軽く体を揺らしてみた。

何の反応も返って来ない。

「……母さん」

無意識に呼び掛けていた。かつて子供だった頃のように。
しかし、違う。

今はもう子供ではないのだ。

霊夢は自分の行動が何の意味もない愚かなのだと自覚すると、再び口にしようとしていた骸への呼び掛けを噛み殺して、立ち上がった。

「れ、霊夢……」

魔理沙は声を掛けたが、そこに意味のある言葉を持たせることが出

来なかった。

何を話せばいいのか分からないし、これからどうすればいいのかも分からない。

そんな魔理沙を無視して、霊夢は慧音に歩み寄った。

「これからどうするの?」

「どう……とは?」

「死体の処理よ。どうするの?」

霊夢の無造作な物言いに、慧音は焼け付くような怒りを覚えた。

咄嗟に睨み付け、殴りつけようと手を上げて——自分を見つめる霊夢の瞳に一瞬で圧倒された。

静かに、鬼気迫るものがそこに宿っていた。

「里の住人よりも先に、魔理沙を通じてあたしにまで知らせたんでしょ? これからどうするつもりなのよ」

「それは……私が、この事実を隠す。私の、能力を使って……この診療所ごと……」

真実を見抜くような瞳に脅され、慧音は途切れ途切れになりながらも白状した。

上白沢慧音には『歴史を食べる程度の能力』があり、それによって先代の死を周囲から隠蔽しようという考えだった。

先代巫女は現役を引退してなお大きな影響力を持つ人物だ。

その唐突な死を一時的にでも隠しておこうという考え方は、常識的な範囲として理解出来る。

しかし、そうして隠蔽した後は何を以って今回の件を解決とするのか。

慧音の能力は特定の場所、人物、事象に対しての認識を操作するものであって、『食べる』と形容されていてもそれ自体に干渉出来る力ではない。

人間の死そのものを無かったことには出来ないのだ。

そして、一体何時まで隠し続けるつもりなのか。

そういった具体的な先の話を慧音はしなかったし、霊夢もあえて聞き出さなかった。

ただ、そのまま黙り込む慧音の青褪めた顔をしばらくの間見つめていた。

「……そう、分かったわ」

その瞳で一体どんな真実を捉えたのか、霊夢は一人納得すると、慧音の横をすり抜けて出口へと向かった。

慌てて魔理沙が追いかける。

「おい、何処へ行くんだよ!？」

「霧の湖へ。ちよつと確かめに行ってくるわ」

「確かめに、つて……何を!? つていうか、おふくろさん置いてく気かよー!」

「ついて来なくていいわよ」

「だから、ちよつと待……つ」

「霊夢!」

追い継る魔理沙を無視して、診療所を出ようと扉に手を掛けた霊夢を慧音が呼び止めた。

振り返れば、追い詰められたような悲壮な表情を浮かべた慧音が見つめている。

何かを訴えるような眼だった。

霊夢にはその『何か』がなんとなく理解出来ていたが、その上で無視した。

「何?」

「お前は……知っていたのか? 私が……つ」

「あんたは隠し事には向かない性格だわ」

霊夢は慧音の持つ能力を皮肉るように小さく笑った。

半ば以上は勘だったが、慧音の様子に最初から違和感を感じてもいた。

霊夢が上白沢慧音という半獣に関して知っていることは、先代巫女を慕っているという点くらいだ。

しかし、そのただ一つハッキリとした点がこの場では違和感を生んでいた。

原因も分からず、慕っていた人間が唐突に死んでいるのを見つけた

という彼女が、何故あそこまで理性的に行動出来るというのか。深く悲しんでいることは分かる。

しかし、混乱はしていなかった。

状況を把握しきれず、困惑した様子の魔理沙を尻目に、二人は黙って見つめ合った。

「……お前は、母親の足のことに関して何も感じなかったのか？」

慧音は嘆くように尋ねた。

「あの人は、この里の守護者であり気高い武人でもあった。私の知る限り最も高潔な人物だ。

一体、どれほどの鍛錬の果てにあれだけの力と技を身に着けるに至ったのか……。本当に、敬意を抱かずにはいられない」

「ええ、知ってるわ。だから尊敬している」

「だったら……分かるだろう？」

あの人は、もう満足に歩くことも出来ないんだ。診療所へ様子を見に行くと、いつも椅子に座っている。そこから立ち上がることさえ億劫そうだ。外を出歩いて、何も無い所で足をもつれさせて転ぶのを何度も見たんだ！」

慧音は唇を震わせ、眼を充血させて、慟哭するように叫んでいた。

その涙は一体どんな感情から来るものなんだ、と。霊夢は冷静に見つめていた。

「——だから、何？」

霊夢の返答は、慧音の熱くなった心に冷水を浴びせるようだった。

「その姿を見て、あんたは憐れだとしても感じたのかしら？」

以前とは見る影も無い姿に、眼を背けたくなつたの？

あの人の足の怪我が何かとても理不尽なもので、本来なら起こっていいはずが無い、修正されるべき歴史だとしても考えたのかしら？」

霊夢の淡々とした言葉の一つ一つが深く突き刺さり、慧音は別の意味で顔を青褪めさせた。

視線を上げることが出来ず、罪人のように頭を垂れ、口元を押さええて震えている。

母親に対して犯した許されない罪を、その娘に見咎められてしまっ

た。得体の知れない罪悪感が慧音を責め立てていた。

「あと五十年もすれば、あたしだって真つ直ぐに歩けなくなるわよ。歳を取って衰えていくのは、人間だったら当たり前のことでしょう。母さんだって、それを理解しているわ」

それだけ告げると、霊夢は改めて踵を返し、診療所を出て行った。終始、口調は淡々としていて決して慧音を責めるようなものではなかったが、彼女自身には最後の言葉がまるで吐き捨てられたかのように重く響いていた。

立ち去る霊夢の背中に、もはや何も語りかけることが出来ない。

二人のやりとりの意味が分からず、困惑し通しだった魔理沙も、やがて意を決して霊夢の後を追って出て行った。

そして、慧音だけがその場に残された。

まるで取り残された子供のように、独りでそこに佇んでいた。



「なあ、霊夢。こうなったら一つだけでいい、答えてもらおうぜ」

人里を離れ、霊夢の後を追従しながら、その行き先が確かに事前に言った通り霧の湖へ向かうものだと確認すると、魔理沙は隣へ並行して尋ねた。

何気なく訪れた人里で突きつけられた先代巫女の死から始まり、今まで。全く状況を理解出来ない流れだった。

その中でかろうじて形となった結論を口にする。

「おふくろさんは死んでいない。そうだな？」

「いいえ、死んでいたわ。心臓も動いてなかったし、体温も感じなかった」

「じゃあ、どうして!？」

「でも違和感があったのは確かよ。体が冷たすぎた」

混乱して取り乱しそうになる魔理沙を、霊夢の冷静な声が引き止めた。

「……それは一体どういう意味なんだ？」

「そのままよ。死んで体温を失ったというには、体が冷えすぎてたわ。まるで氷みたいだった」

「そうか、それで……!」

「ええ。……でも、違うわね」

「いつの間にか周囲が霧に満たされていた。」

地上を満足に見ることも出来ないが、おそらく湖の上空へ辿り着いたのだ。

二人は同時に進むのを止めた。

冷え切った空の空気を更に凍て付かせるような何か、前方で冷気を発している。

「あなたにはあんな真似は出来ないわ、チルノ」

初めて会った時とは比べ物にならない、周囲一帯を支配するほどの力を纏った氷の妖精がそこにいた。

春が訪れない今回の異変を、チルノは完全に味方に付けていた。

元々、自分自身で冷気を発生させる能力を備えていたが、既に冷え切った世界がそれを更に助長している。

その顔付きも初見の印象を拭い去るかのように、子供らしい明るさを失って、鋭く研ぎ澄まされていた。

「……やっぱり来たわね、霊夢」

「あなたに気安く呼ばれるほど仲良かったかしら?」

「お前なんか大っ嫌いさ」

「そうよね。ま、話が早く済みそうじゃなかったわ」

霊夢は自らの前に立ち塞がる障害に対して、どこまでも冷静だった。

チルノの影響で、もはや痛みを感じる程冷え切った周囲の空気に対して、慌てて備える魔理沙を尻目に霊夢は既に事を済ませている。

周囲を浮遊する二個の陰陽玉が、それだけで簡易結界となつて冷気を遮断していた。

「先代巫女を——」

霊夢は『母』という呼び名を使わなかった。

その認識の切り替えがどんな意味を持つのか、傍で聞く魔理沙には

気になって仕方が無かった。

「氷付けにしたのは、あんたじゃないわね。あれはそんな単純な代物じゃなかったわ。出て来なさいよ。近くにいますんでしょ？」

「話がややこしくなってきたわねえ」

「断定する霊夢の言葉に応じる者があつた。」

チルノの傍に、ゆっくりと現れる。

途端に、冬の嵐が二つになったかのように冷風が吹き荒れた。

魔法の障壁と防寒具を通して刺すように伝わるその寒さに、魔理沙が盛大に顔を顰める。

「あの人間の遺体を冷凍保存して、私の仕事はお終いじゃあなかったの？」

それは白い妖怪だった。

チルノが自ら冷気を発するのならば、その妖怪は周囲の寒気を操る能力を持っているらしい。

唐突に襲い掛かってきた、凍えるような空気の渦の中で、霊夢は相手を正確に分析していた。

「冬に関わる妖怪のようね。冷気そのものを操れるなら、四季を通して目立たないわけがないわ」

「ご名答。私は冬の妖怪『レティ・ホワイトロック』よ」

「先代巫女を凍らせたのはあんたね？」

「それも当たり。でも、勘違いしないで欲しいわ。私はこの妖精とだって初対面。取引をして、既に死んでいたあの人間の肉体を保存する為に力を使ったのよ」

「知ってるわ。あれは単純に冷やして凍らせたといったものじゃない。表面に霜さえ浮いてなかったしね。肉体を凍結させて『停止』させているような——少なくともその妖精には出来ない、複雑な芸当よ」

霊夢の淡々とした説明にレティはわずかに眼を見開いたが、一番驚いていたのは傍らの魔理沙だった。

こいつは、それだけのことを冷静に分析していたのか？

自分の母親が、死んで横たわっている目の前で、動揺すら見せずに

「恐ろしいわね、博麗の巫女というのは」

レテイの呟きに、魔理沙はギクリとした。

霊夢に対して一瞬抱いた疑念を、見抜かれたのかと思った。

「それで……あの状態から人間を解放しろというのならお断りよ。」

この妖精との契約で、報酬として夏の間は快適な住み場所を提供してもらおうことになっているの。反故にはしたくないわ」

「このまま冬が続けば、夏の準備なんて必要ないんじゃないかしら？」

「ああ、それは素晴らしいわね。でも駄目だわ。季節は移り変わるものよ」

レテイが微笑むと、暴虐のように荒れ狂っていた風がピタリと止んだ。

「秋が終わらなければ冬は来ない。冬が終わらなければ、春が始まり、再び冬が訪れることもない。」

月日は流れ、四季は変わるもの。それは仕方の無いこと。自然の理なのよ。誰にも止める権利など無いわ。そうでしょう？」

それまで沈黙を貫いていたチルノの肩に、レテイはそつと手を乗せた。

チルノは拒絶するようにその手を振り払った。

「何が言いたんだよ!？」

「アナタには分かるはず。いいえ、分からなければいけないわ。チルノ、アナタも妖精ならば自然の理を理解しなさい」

「気安くあたいの名前を呼ぶな！ 余計なことを言うな！ けーやくでしょ、あたいとこの約束でしょ!？」

チルノは駄々っ子のように喚き散らした。

しかし、幼子の癩癩と言うにはあまりにも凶悪な力がそこに備わってしまっている。

より密度を増した冷気を受け、レテイは困ったように微笑んで、視線を霊夢へと移した。

「……ごめんなさい。ご覧の通り、私にはもうどうすることも出来ないわ」

「別にいいわよ、元々こつちの問題だし。っていうか、あんたも妖怪なら妖精相手にそこまで親身になる必要ないんじゃない?」

「人間のクセに随分とドライな性格をしているわね。もうちよつと暖かみを持ちなさい」

「冬の妖怪が一体どんな皮肉よ、それ」

霊夢のしかめっ面を見て苦笑すると、レティはチルノの拒絶に従うように、そつとその場から離れた。

そして、霊夢とチルノが真正面から対峙する形となる。

敵意を剥き出しにするチルノに対して、霊夢は微動だにせず応じていた。

「まあ、色々あるみたいだけど、とりあえず手がかりはあんたの方つてことで決定ね。洗いざらい吐いてもらいましようか?」

「うるさいっ、お前なんかやつつけてやる!」

「やつつけて、それから? ……なんて、聞いても無駄でしょうね。何より無意味だわ。あんたにあたしは倒せないんだから」

「倒せる! あたいはお前より強いんだ! お前よりずっと、ずっと強くなるんだ! お師匠が……ずっとあたいを鍛えてくれるんだから!!」

スペルカードが掲げられ、決闘が始まった。

やはり、初めて出会った時と今のチルノは何もかもが違う。

以前は直接戦うことのなかった魔理沙の眼にも、はつきりと実力が向上していることが分かった。

激しい弾幕が寒々しい空を更に凍りつかせるように広がり、霊夢を覆い尽くす。

しかし、それに相対する霊夢もまた桁違いの実力だった。

無数の氷弾を次々とすり抜けて行く。

相変わらず、傍で見ているも全く当たる気がしないな。と、魔理沙は安心感や頼もしさと同時に諦めすら抱いていた。

「すごいわねー、あの巫女」

「ああ」

何故か隣で一緒になって観戦しているレティを神妙な顔で一瞥す

る。

「……ところでお前って、この春が来ない異変の原因じゃないのか？

冬の妖怪らしいし、ちよつと白状してみろよ」

「くろまく〜」

「レティは小さく舌を出して悪戯っぽく笑った。



紅魔館では、主が直々に自らの従者の出立を見送っていた。

自前のナイフに、美鈴から貰ったマフラー、パチュリーから授かった射撃補佐用の星型魔具、フランドールの激励、そして主の見送り――。

紅魔館総出の厚意をありがたいと深く思う反面、何処か気恥ずかしくなつて、赤くなる頬を隠すようにマフラーを口元まで引き上げた。

「では、お嬢様。行つてまいります」

「パチュリーから座標の方は聞いたわね？　そこへ向かいなさい。敵は打ち倒し、味方は率いて、この異変の元凶を断つよ」

「かしこまりました」

咲夜の向かう先に在るものを見通しているかのようなレミリアの言葉。

しかし、深く追求はせず、忠実なる従者はただ応える為に飛び立つた。

案じることなどしていないが、それでも咲夜の背中をしばらく見送ると、レミリアはパチュリーの待つバルコニーへと戻った。

「暖房の燃料が無くなる前に帰って来て欲しいわね」

「寒いのならわざわざ外へ出なくてもいいでしょう？」

「寒くはないわ。魔法使つてるし」

「さつさと図書館に戻りなさい。寒気は喘息の敵でしょ」

「最近、小悪魔のテンションが上がり過ぎてて近くにいと疲れるのよ。先代と悪魔の契約をするんだって、張り切っちゃって……」

「本当に腐つてるわね、あの汚物」

疲れたようなため息を吐くパチュリーの向かいで、レミリアが苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

先代巫女の足が不自由になったという事実は、彼女との関わりが深いこの紅魔館にも大きな影響を与えている。

レミリアのように沈んだ気分になる程度ならば軽いもので、美鈴はそれを知って以来何処か仕事に身が入っていないし、フランドールはどう見ても空元気を必死に出して見せている。

小悪魔に至ってはパチュリーの話のまま。仕事を与えておかなければ、こつそり抜け出して先代に悪魔の囁きという奴を仕掛けに行く気満々だった。

先代を見舞いに行った時には、全員に何処か楽観があった。

酷い怪我だ。でも、生きている。

その事実だけが嬉しく、全ての疑念をただそれだけで拭い去ってしまった。

人間と妖怪は違う。

あの先代さえ例外ではないのだ。

最も重要なその事実を、あの時はレミリアまで忘れていた。

人間は時と共に栄え、そして衰えていく存在だ。

それを彼女達が理解するにも、やはり時間が必要なのだろう。

レミリアが特に美鈴とフランドールを、ただ静かに見守ろうと決めていた時に、今回の異変が起こった。

そして、それとはまた別の事件も、レミリアは察知していた。

「スカーレット家の血筋に代々伝わる『運命を操る程度の能力』だったわね。使用されるのを見るのは、今回が初めてだわ。アナタの父は、この能力で紅魔館を栄えさせたと聞くけど」

『操る』というのは、あの男が大げさに吹いていたのよ。運命というものがあるまで容易く動かせるわけじゃないじゃない」

レミリアは忌々しげに吐き捨てた。

それが父親に対するものなのか、この受け継いだ能力そのものに対するものなのかは分からない。

「命一つで一本の糸。ならば、この世に存在する運命という名の糸は、

それこそ無数に存在し、複雑に絡み合っているわ。

例えば、一つの運命を最後まで見たとして、その途中で幾つもの別の糸が絡み、捻れ、果たして辿っていた糸はこれで正しいものか——」「未来は変えるどころか、見通すことすら難しいということね」「全く以って複雑怪奇。これなら破壊に特化しているとはいえ、壊すことで運命に干渉出来るフランの能力の方がよっぽど『操る』と言えるかもね」

「でも、今回の異変からアナタは何かを読み取ったんでしよう?」

レミリアは迷いなく頷いた。

「ええ、先代の運命が見えたわ。今回の異変に何かしらの形で関わっている」

「咲夜に向かわせたけど、ソコに居るのなら関わるといふより、もう中心にいろんじやない?」

「いえ、それは少し違うわ。異変そのものと先代に降りかかった出来事は、また別のものに見えた。とにかく、二つの出来事が並んで起こっているのよ。あそこで」

その眼に映る運命の糸を辿って、レミリアは雲に覆われた空を見上げた。

幻想郷の『春』を司る成分のようなものが、雲を越えた先へと吸い込まれるように消えていくのが視える。

そして、糸もまた同じように——。

「それが例え死であっても、再びこの世に舞い戻り、歩み始めるといふのなら、それもまた運命の一部として続いていく。決して途切れはしない」

レミリアは、未だ途切れることなく続く先代の運命をハッキリと見ていた。



弾幕ごっこは霊夢の勝利で終わった。

チルノは善戦したと言えるだろう。

もし、自分があの場にいたら危なかったと思う時が、魔理沙には何度かあった。

しかし、それすらも霊夢は何の問題にもしていない。
敵無しだ。今日の霊夢は勘が冴えまくっていると感じた。

墜落していくチルノを追って、真つ先にレティが駆けつけた。

「……やっぱりあんた、その妖精に入れ込んでるんじゃないの?」

「健気だとは思うわ。その辺のところ、アナタは考慮してくれないのかしら?」

「妖怪に人情を求められてもねえ」

優しく抱き止めたチルノを庇うような姿勢を取るレティに対して、
霊夢は興味なさげに頭を掻いた。

相変わらず異変となると無慈悲なやつちやなー、とジト目で睨みながら魔理沙が隣に並ぶ。

決着はついた。

勝者から敗者への権利が行使される時間だった。

「それじゃあ、答えてもらいましようか。あんたを唆したのは誰?」

霊夢はそれこそ凍るような声で核心に切り込んだ。

あれだけ先代巫女を慕っていたチルノが、その死に加担するような真似をするとは思えない。

何者かが、チルノに何かを吹き込んだのだ。

その『何』を全て知る必要があった。

「あたいは、騙されてなんかいない……っ!」

「じゃあ、あんたは望んで先代巫女を殺したっていうの?」

「ふざけんなっ! お師匠を殺したりなんかするもんか! お師匠は死んだりなんかしない、いつか目を覚ますんだ! あの足だって、いつかちゃんと治るんだ!!」

——やはり、そこか。

霊夢はもちろん、魔理沙も納得する答えが返ってきた。

先代の死は、怨恨や利害に関わるものではないと漠然と感じていたが、それはたった今はつきりとした。

「つまり、先代巫女はいつかあの状態から目を覚まして、足も治る。そ

う言いたいよね」

「そうだよー」

「そんなわけないでしょう。あんたら妖精とは違うのよ。人間が生きていられるのは一度きり。一回休み、リセットしてコンティニューなんか出来ないわ」

「そんなこと……そんなことあるもんか！ お師匠は、ずっと一緒に……っ！」

「目を覚ましなさいよ、クソガキ」

湧き上がる怒りを無理矢理押し殺した結果そうなってしまったかのような、重い呟きと共に霊夢が退魔の札を振り上げた。

咄嗟にレティが手を差し出して制止する。

「待って！ 落ち着いて、私も知っていることを話すわ」

「……話しなさい」

「今、幻想郷に起こっている春が訪れない異変。これの原因を追いなさい。それが、アナタの疑問への答えになるはずよ」

「ここで答えることは出来ないの？」

「私にも、あの人間に関することで分かっていることは少ないわ。

ただ、あそこには私達の他にも強力な妖怪がいた。そいつが、あの人間から魂を抜き取って殺したのよ。私は、その後の処理を任されただけ」

「魂を……確かね？」

「そうとしか見えなかったわ。外傷を何も与えず、眠らせるように死に至らしめた。恐ろしい妖怪だったわ」

新たに明かされた事実に対して、魔理沙は息を呑んで、黙りこむ霊夢の横顔を見守った。

きつと、彼女には自分が見えていないものが見えているはずだ。

自分には、今の話から改めて先代が殺されたのだとしか理解出来なかった。

事がそれほど単純なら、これはただの悲劇で終わる。

だから、どうか――。

「異変の原因を追え、というのは？」

「この異変は冬を何者かが長引かせているのではなく、春に移り変わる為に必要な幻想郷の『成分』を何者かが奪っているのよ。そして、その春が奪われ、消えて行く場所が……」

レティは空の一角を指差した。

魔理沙にはその先にあるものが単なる空にしか見えない。

しかし、霊夢は違った。

僅かに眼を見開き、傍らの魔理沙にも分からない程度の微笑を浮かべる。

「魂か……なるほどね」

用は済んだとばかりに、霊夢はもはや脇目もふらず、レティの指差した方向へと飛び出した。

普段と逆だなこりや、とぼやきながら、自発的に行動するはずの魔理沙が流されるように後を追う形になる。

残されたレティは、ため息を吐いて腕の中のチルノを見下ろした。

「よしよし……」

「やめろ！ あんたなんか……あんたなんかっ」

「そうね。ごめんなさい」

言葉が形にならないまま、首を振って拒絶するチルノに困ったように笑いかける。

悔し涙を流して歪んだその顔を隠すように、レティはそつと手で覆った。

一方、霊夢に追いついた魔理沙は並行しながら再び事態の進行を尋ねる。

「どうなんだ？ 何が分かった？ あいつの指差した先には何があるんだ？」

「一度言ったけど、ついて来なくていいわよ。ここから先は、本当にヤバイわ」

「今思い出したんだけどさ、そもそもわたしが人里に来たのは今回の異変解決の為なんだよ。ほら、これ」

魔理沙は懐から小さなビンを取り出して、ガラス越しにそれを見せた。

桜の花びらが一枚収まっている。

しかし、霊夢は一瞥するだけでそれが単なる花びらではないことを見抜いていた。

「現世（うつしよ）の物じゃないわね。何処にあった花びらよ？」

「……こいつの正体が分かるまで、わたしは丸一日研究したんだぜ。あつさり見抜きすぎだろ」

「空から降ってきたの？」

「ああ、近くに桜なんてなかったのにな。多分、こいつがレティって奴の言ってた『春』なんじゃないか？」

「きつとね。正しければ、これから行く先に山ほど降ってるわ」

「何処なんだ？」

「冥界」

告げられた言葉に、魔理沙はギョツと眼を見開いた。

幻想郷には幽霊や亡霊が存在する。

それらは本来、現世を彷徨い、漂うようなものではなく、行くべき場所や留まるべき場所があるのだ。

そのうちの一つが冥界であった。

魔理沙も話には聞いたことがあった。

死人が居るべき場所だ。生きた人間が行っていい場所ではない。

薄ら寒いものが背筋を走り、ゴクリと生唾を飲み込むと、それでも意を決して尋ねた。

「そこに、おふくろさんの魂もあるってわけか？」

魔理沙は自身の考え出した結論が、単なる楽観ではないことを祈った。

「そうよ。外傷を作らずに相手を殺す方法なんて、毒でも呪いでも複数あるわ。」

「だけど、その妖怪は魂を奪ったと言っていた。生きた人間から靈魂を抜き取るのって、まともな手段じゃ無理なのよ。そもそも魂の抜けた体を保存する理由も分からないわ」

「チルノはいつか目覚めるって言ってたから……」

「多分、戻せるんでしょうね。奪った魂を、体に」

「よっしや、話が単純になってきたぜ！ わたし好みだ！」

魔理沙は思わず歓声を上げた。

これまでどうすればいいのか分からず、ただ霊夢の後について行くだけだったが、今まさに道が見えた気分だ。

しかも、一転して前向きな方向へ指し示された道が。

「手強い敵がいそうだけどね」

霊夢は冷静に付け加えた。

「足が不自由になったとはいえ、最強の博麗と謳われた巫女を傷一つつけずに無力化出来る妖怪がどれだけいると思う？ その妖怪に対して、油断していたと考えるのが普通ね」

先代巫女が油断する——心を許す相手。しかも、強力な妖怪でありながら。

そんな者は数が限られている。

霊夢の顔付きは、見出した希望に対して緩むどころか、鋭さを増していた。

その緊迫感に影響されるように、傍らの魔理沙も新たな不安を抱き始めていた。

母親の死に直面しても一切心動かされたように見え、冷徹なまで行動したからこそ、今ここで希望を見出せた。

しかし、その希望を見出した先に在ってもなお霊夢の心は動いているように見えない。

淡々と動き、淡々とこなしていく。

冥界へと向かう理由は二つあったが、そのどちらが今の霊夢を動かしているのか、魔理沙には分からなかった。

——なあ、霊夢。お前は今、おふくろさんを助けに行こうとしているんだよな？

——それとも、ただ博麗の巫女として異変を解決しに向かっているのか？

魔理沙には、それを尋ねることなど出来なかった。

やがて雲を抜け、その先には冥界へと通じる強大な結界が見え始めていた。

この世のものではない桜の花びらが辺り一面に飛び、渦巻いてい
る。

まるでそこへ集う、多くの思惑まで飲み込むように――。

其の十一 「白玉楼」

診療所の中で、慧音は椅子に腰掛けて俯いていた。

まるでこの世の中から、たった一人取り残されたかのような有様だった。

入り口の戸が開く音が聞こえ、慧音は憔悴した顔を上げた。

「お前達は……」

チルノとレテイ。慧音にとっては初対面の妖精と妖怪がそこにいた。

「ここは、先代巫女の診療所で合っているかしら？」

「ああ……そうか、お前達が『あの妖怪』が言っていた協力者か」

「ええ、先代巫女の遺体を保存した者よ。名前はレテイ。こっちはチルノ」

愛想よく微笑むレテイに対して、慧音はさして興味を示さず、チルノに至っては口をへの字に結んだ頑なな表情のまま一言も話さない。

チルノは黙って診療所の奥へと進んでいった。

「博麗の巫女が、あの子に会いに来たわ。弾幕ごっこをして、負けた。いろいろ言われもしたわね」

チルノの行動を止めようかどうか迷う慧音に対して、レテイが簡潔に事情を説明する。

「それで、無性に先代巫女に会いたくなったらしくてね」

「……そうか」

その言葉に、慧音はチルノを止める気を完全に失っていた。

あの人に無性に会いたい——それは慧音も同じだった。

声を聞きたかった。

今回のことに関して、全てを告白し、許しを乞いたかった。

あるいは、叱責を受けても構わなかった。

今はただ、あの人の言葉を聞きたい。

その意思を知りたい。

しかし、それを拒んだのは他の誰でもない。自分自身なのだ。

「……お師匠」

横たわる先代を見下ろし、チルノは小さく名前を呼んだ。

当然のように、魂を抜かれた先代は物言わぬ抜け殻として、ただ静かにそこに在るだけだ。

チルノの胸の内から不安と恐怖が湧き上がり、視界が滲んで、鼻の奥がツンと痛くなった。

歯を食い縛り、必死でそれを堪える。

溢れてしまえば、もう抑えが効かないと思った。

ずっと自分に言い聞かせていた、先代が目を覚まして足も治って、そして何もかも元通りになってずっと一緒にいられるという夢想が消え失せ、眼を背け続けていた現実と摩り替わってしまうのが怖かった。

本当は、チルノも理解していた。

先代の足が動かないと知った時、時間と共に少しずつ動かなくなっていく人間——その死という終着点が、自分との別れになると察していたのだ。

今、目の前に横たわっているものがその現実なのではないのか。

「違う……ちがうも、ん……っ！」

チルノは必死に否定しようとしたが、涙はどんどん溢れて止まらなかつた。

部屋から聞こえる嗚咽に、レテイは眼を伏せ、慧音は再び顔を俯かせる。

特に慧音にはチルノの気持ち痛みほどよく分かった。

診療所の中は静かだった。

外からは人々の生活の音が不自然なほど聞こえない。

レテイ達がここへ来れたということは、慧音自身が今この時まで診療所の歴史を隠していなかったからだ。茫然自失としていた。

それなのに、他にも客の一人も訪れないというのはおかしいのではないか？

慧音はふと疑問に思い、何気なく診療所の入り口を見つめた。

ちょうどその時だった。

診療所に人が寄り付かない原因が顔を出した。

「あら、その様子だと事はもう済んでいるようね」

「……風見幽香」

見知らぬ妖怪を無視し、暗い表情の慧音を一瞥すると、幽香は嘲笑を浮かべた。

「結局、貴女はあの妖怪の誘いを受けたのね」

「ああ……」

「そして、後悔している」

「……ああ」

見透かすような視線と馬鹿にするような笑みを受けて、慧音は力なく頷くことしか出来なかった。

先代巫女に関する今回の件。

自分は関わることを選び、同じく誘いを受けたはずの幽香は拒否した。

その根元にある感情の善し悪しは別として、先代巫女への執着は幽香の方が強いはずなのに。

二人にはそういう立場の違いがあった。

そしてその結果、慧音は敵意さえ抱いていた幽香に対して逆に負い目を感じるほどの後悔に苛まれている。

「私が、間違っていたよ……」

慧音は懺悔するように幽香に呟いた。

当然のようにそれは鼻で笑われる。

しかし、それ以上何か責め立てられることもなかった。

「幽香……?」

「チルノもいるのね。あらあら、なんて顔してんのよ?」

奥から出て来た、涙と鼻水でぐちゃぐちゃのチルノの顔を見て、幽香は苦笑した。

普段のチルノならば、馬鹿にされていると単純に怒っていただろうが、今はただ縫りつくものを見つけたかのように幽香に向かって駆け出した。

「うわああああん！ 幽香あーっ！」

「あら、もう。泣き虫ね」

幽香は微笑みながら駆け寄るチルノに対して両手を広げて迎え入れ、そして、そのまま足を引つ掛けて床に投げ捨てた。

「うげっ!？」

「甘ったれちや駄目よ、このハナタレ」

うふふ、と笑う幽香を慧音とレティが絶句して見つめた。

「な、なにすんだよ!？」

「そういう優しい抱擁はあなたのお師匠様にやってもらいなさいな。

あつ、そうね。ごめんなさい。そのお師匠様を凍り漬けにしちゃったのは、他でもないあなた自身だったわね」

「うっ……ごめんなさい」

「私に謝ってどうすんのよ。そもそも、何を後悔しているの？　これが望みだったんでしよう」

「だ、だって……」

幽香の容赦の無い問い掛けに対して、チルノは上手く言葉に出来ず、言い淀んだ。

後悔しているのは確かだった。

自分のやったことが間違ったことなのだと、なんとなく分かってしまったのだ。

しかし、ではどうすればよかったのか？　など、その正しい答えも出ない。

それを知っているかもしれない幽香を継るように見上げる。

「お前は、何故あの妖怪の誘いを断ったんだ?」

慧音もまた同じように幽香に尋ねていた。

幽香は思案するように視線を彷徨わせ——別に答えに悩んだのではなく、少しはぐらかしてからかかってやろうか迷っただけだが——小さく笑うと、仕方なしに答えた。

「今回の切欠になった先代の怪我の件、私も何も思わなかったわけではないわ。

あいつが人間であることは十分理解していた。いずれ私の望む戦いが出来なくなる程に衰えてしまう。足が不自由になったことで、その懸念が具体的な形として表れてしまった」

幽香は、まさに慧音とチルノの抱いていた不安の原因を言い当てていた。

人間が死に至る過程。

不安が現実となって現れた形を、二人は見せ付けられ、そして怖くなつたのだ。

「私達妖怪と人間は違う。あいつも例外ではなく、簡単に何かを失い、それが取り返しのつかないことになってしまう」

「……ああ。だが、それを取り戻せるのだと、あの妖怪は私達に言った」

「そうね。実際に、それは可能なんですよ。あの胡散臭い奴の姦計なのだから。」

「だけど、私はそれを良しとしない。何故なら、そんな欠けたパーツを埋め合わせて生き永らえることが可能になってしまったら、もう先代は人間ではなくなるからよ」

幽香は笑みを浮かべながらも、真剣な目つきで慧音とチルノを交互に見つめた。

「脆弱で壊れやすく、寿命も短い人間。そんな儂い存在でありながら、先代巫女は強さの極みと言える領域にまで己を鍛え上げた。」

私には人間の幸福など理解できないし興味もないけれど、もっと利口で有意義な生き方もあったでしょう。それを一体何を考えて、短い人生の大半を使い潰してまであんなに力を求めたのか——」

呆れたように肩を竦め、ため息を吐く。

「本当に、その馬鹿げた姿勢には私も……ほんの少しだけ敬意を払うわ」

幽香は『ほんの少し』という部分を強調しながらも、ハッキリとそう言った。

風見幽香という妖怪の傲慢さ、不遜さを最も知る慧音は、その発言に驚いていた。

先代巫女に対して、敵意と殺意しか抱いていないと思っていた彼女が、僅かとはいえそんな感情を持っているなど全くの予想外だった。「様々な意味で限りのある生の中で手に入れた人間の強さ。昔の私な

ら鼻で笑ったでしょうけど、今なら認めてやれるわ。

だからこそ、私はあいつにこだわる。脆弱な人間の分際で私に土をつけたからこそ、その屈辱はこの心に刻み込むほど深いものとなった。

先代巫女は人間でなければならぬ。あいつの強さはそこから来ている。例え足を失おうが、あいつにとつてそれは人生の過程の一つにしか過ぎないでしょう。更にその先を目指すはずよ」

「……お前の口から、あの人への信頼の言葉が出てくるとはな」

「あら、意外かしら？　でも、認めもしない相手を敵だとは思わないわ。

それに、勘違いしないで欲しいわね。私はお前達とは違って、あいつに馴れ合いの感情を抱いたことは一度もない。

私が今一番気にかけているのはね、先代の力が最も高まる時期を見極めること。精神論だけでは避けられない肉体的なピークと月日の積み重ねで得る経験や技術が合わさった最盛期に、最高のタイミングで横合いから殴りかかりたいのよ」

そう断言して、獰猛な笑みを浮かべる幽香の全くブレない姿勢を見つめ、慧音はそれこそある種の敬意を抱いた。

彼女の先代に対する態度は変わっていないのに、不思議と今は嫌悪感を感じない。

先代への信頼と理解という点において、少なくとも今の自分よりも上に居るのだと恥じる気持ちだった。

「……難しい話は、よく分かんなかったけど」

幽香の話の意味を、必死に考えていたチルノはおもむろに俯いていた顔を上げた。

「足が動かなくなっただけとも合わせて、お師匠は生きてるんだ。だから、あたい達が邪魔しちや駄目なんだ」

チルノは未だ消えない悲しみの涙を残したまま、それでも自分自身に言い聞かせるようにハッキリと言葉にした。

もうその瞳に苦悩はなかった。

「お馬鹿ちゃんにしては、よく理解出来たわね」

幽香は何処か満足そうに微笑んだ。

結局、人間と人間ではない者の違い、種族の差による別れとその悲しみは解決出来ないものとして残った。

しかし、それらは残された者の心の中で決着を付けるしかないのだ。去り行く者を巻き込むことは出来ない。

短い命を生き抜く人間の尊さに、妖怪などが手を加えてはいけない。

チルノは漠然とそれを理解し、受け入れたのだ、と。傍で聞いていた慧音は胸を打たれた。

幽香はハンカチを取り出すと、チルノの顔を拭ってやった。

「えへへっ、ありがとう」

「もう、あんな見苦しい顔はしないことね。ただでさえ弱っちいのにもっと情けなく見えるわ」

「うんっ。ねえ、いろいろ難しいこと言ってたけど、つまり幽香もお師匠のことが大好きだっということなんだよね？」

「うふふ」

幽香は優しく微笑むと、チルノの体を掴み、再び床に投げた。

「いてえ!!? なにすんのさー!!」

「全然理解していない上に寝ぼけたことを抜かすからよ、この馬鹿」

一変して幽香に突つかかるチルノの喧騒が静かだった診療所を満たす。

もう先程までの重苦しい雰囲気はなくなっていた。

チルノほど単純に物事を整理出来ない慧音も、ただ自責の念だけが残っていた表情をわずかに綻ばせている。

「そういえば、ここに来る前に博麗の巫女が飛んで行くのを見たわ」

両腕をぶんぶん回すチルノの突進を、頭を押さええて止めながら、幽香が何気なく言った。

「ああ、きっと先代の魂がある冥界へ向かったんだろう」

「今回の異変の原因もそこにあるよね。ついでにそれも解決してくれるとありがたいわね」

「ついで、か。お前は、先代の魂が戻ってくると信じているんだな」

「信じるとか、そういう表現はして欲しくないんだけど……まあ、あいつのことだからあつさりど帰ってくるでしょうよ。貴女達の考えなんて簡単に抜け出してね」

「ああ、そうだな……きつとそうだ」

慧音は納得し、何か憑き物が落ちたかのように清々しい笑みを浮かべた。

「……ところで、私って完全に部外者みたいだから、もう帰っていいかしら？」

「あんた誰？」

「レティ・ホワイトロックと言います。単なる冬の妖怪なので、そんな無意味に殺気飛ばすのやめてもらえないかしら」

「ああ、先代を凍結させる役目の妖怪ね。いいわ、ここに残りなさい」

「いや、話聞いている？ 帰りたいんだけど……」

「ええ、却下よ。どうせ、すぐに先代の体を元に戻してもらおうことになるわ。そのままここにいなさい」

「……帰りたい」



冥界の白玉楼。

その大きな屋敷は、更に広大な敷地の一角に建っていた。

庭先からは一本の桜の木が見える。

並の大きさではない。もはや巨木とも呼べる、化け物染みた桜だった。

実際に、その桜は現世には在り得ざるもの。この冥界に生きた存在は、植物も含めて一つも存在しないのだから。

その桜を覆うように張り巡らされた結界が、封じられるべき物であることを示していた。

「七分咲き、といったところかしらね」

花見というにはあまりに異様な桜を縁側で眺め、白玉楼の主である西行寺幽々子は状況の進行を確認した。

傍らには、屋敷の庭師であり幽々子の従者でもある魂魄妖夢が控えている。

たった二人の主従が、この広大な屋敷の住人だった。

「地上からは順調に『春』を回収しています。もうじき、あの桜も満開になるでしょう」

「結構よ。地上からの妨害は？ 『春』を奪った影響が、そろそろ色濃く出始めているはずだわ」

「今のところはありません」

「今のところは、ね」

「例え妨害が現れたとしても、何も問題はありません」

絶対の自信を持って断言する妖夢に対して、幽々子は曖昧に微笑むだけで応えた。

この生真面目な少女は、物事に対して真剣に向き合いすぎるくらいがある。

少々危ういと感じていた。

彼女の自信は実力に裏づけされたものというよりも、己の責任感で支えているような部分が大きい。

あの桜を咲かせることを、絶対遵守の命令であるかのように遂行しようとしている。

幽々子自身に、そこまで重いこだわりはなかった。

花の美しさに、そんな重苦しいものを纏わせるなど無粋な話だ。

あの桜に花が満ちるところを見てみたい。そして、その先に在る物を——ただそれだけの純粹な好奇心から動いたのだ。

「ええ、そうね。任せるわ、妖夢」

「はいっ」

しかし、幽々子は結局それだけを言葉にして伝えた。

意気込む自らの従者を愛おしいと感じる。悪い言い方をすれば、その未熟さ故の必死な姿勢を見て愉しんでいた。

もちろん、嘲るような気持ちは欠片もない。

これも愛情の内よね、と勝手に納得して、幽々子はのんきに微笑んだ。

「そういえば、あの巫女はまだあそこにいるのかしら？」

ふと、つい先日この白玉楼の居候となった一人の亡霊を幽々子は思い出した。

「はい。あの桜の前で、座禅を組んだまま全く動きません」

わずかに警戒をあらわにしながら、妖夢は答えた。

突如として現れ、素性も分からないままこの屋敷の住人となって、今後自分が世話をしなければならぬかもしれない相手だというだけでも気に入らない。

加えてその行動まで不可解だった。

「何かに集中していることは分かりますが、一体何を考えているのか全く理解出来ません。怪しすぎます」

「ここら、最後のは貴女の勝手な思い込みでしょう？」

「しかし、いくら幽々子様の御友人の頼みとはいえ、得体の知れない者をこの大事な時期に迎え入れるなど危険です。今回の件の要である、あの桜に執着する様も見ていて怪しい」

「彼女は何か知っているのかしらねえ……いえ、そんなはずはないか」

幽々子は軽く首を振って、その懸念を打ち消した。

「どんな形であれ、彼女は一度死んで亡霊となった身。生前のことなど覚えていないはず」

「この自分と同じように。」

「実害がない以上は、好きにさせておきましょう。生前にどんな力を持っていたかは分からないけれど、亡霊となったばかりの身では巫女の力もほとんど使えないでしょうしね」

「例え肉体を失ったとしても、あの身のこなしは只者ではないと思いますが……」

「ならば、なおのことよ。武人であるのなら、霊体であることは一番の枷であるはず。それとも、妖夢はあの巫女に敵わないと思っっているのかしら？」

「まさか！ 如何なる相手であっても、我が剣は断つてみせます！」

幽々子のあからさまな話の誘導に、妖夢はあっさりとはぐらかされてしまった。

二人の会話は、だいたいいつもこんな流れである。
その時、妖夢と幽々子は同時に異変を感じ取った。

「……侵入者です」

「そのようね。妨害の登場だわ」

「まさか、いきなり結界を破って来るとは思いませんでした」

「厄介な相手になりそうね」

幽々子は頷き、妖夢の対応に任せるまま頷いた。

春が奪われるという出来事は地上にとつて異変であり、そういった出来事には博麗の巫女が解決に乗り出すと聞いている。

幻想郷の管理者であるという巫女の実力は、どうやら本物であるらしかった。

「行つて参ります」

「いつてらつしやい。幻想郷の新しいルールを忘れては駄目よ」

「はい」

内心の『妖夢にはまだ荷の重い相手かもしれない』という考えを表に出さず、幽々子は笑顔で見送った。

妖夢自身はまるで討伐に乗り出す刺客のような威容だったが、幽々子には気楽さがあつた。

「こんな感じでもいいのよね、紫？」

「ええ、貴女の思うように楽しめばいいわ。異変とはそういうものよ」

背後の虚空に投げ掛けた質問に、次元の裂け目が発生して答えた。

スキマから上半身だけを乗り出した紫が、立ち去った妖夢に代わつて幽々子の傍らに並ぶ。

「しかし、冥界のお姫様はやることがいちいち豪勢ね。単なる花見の為に、幻想郷中を巻き込んで春を略奪しようというんだもの」

「あら、たった一晩の慎ましいお花見をするだけよ。次の日には元に戻っているわ」

「慎ましい、ねえ。そもそもあの化け物桜で花見を楽しもうと思うこと自体が、何処か飛んでいるわ」

幻想郷の管理者と亡霊の姫。

その他愛ない会話は、他者が聞けばそれこそ別次元の話だった。

幽々子はふと言葉を区切り、じつと紫を見つめた。

「……ねえ、紫。これは本当にただ花を咲かせるだけで終わらせられる話なのかしら？」

その問いを受けて走った動揺を、紫はかろうじて内心に抑え込むことに成功した。

「あら、貴女はそういうつもりなのでしょう？ それとも、他にも何か企んでいるの？」

「そうかもしれないわね。ただ、いずれにせよ……なんだか、あの桜を満開にするのは、してはいけないことなんじゃないかと思って」

「何故、そう思うのかしら？」

「……あの巫女よ」

幽々子の口から出る言葉は、紫をどんどん落ち着かない気分にならせていった。

今回の異変は、幽々子の興味本位によるものはずだ。

単なる花見以外の目的があるにしても、あの桜に関する最も重要な秘密を知り得ているはずはない。

しかし、ひよつとして彼女は自分の隠している様々な事柄を、本当は全部見抜いてしまっているのではないか？

本来ならば考えもしない、根拠のない不安が湧いてくる。

紫は普段通りではない、どこか不安定に揺らいでいる今の自分を自覚した。

「不思議な人間ね。貴女がこだわる気持ちも、なんとなく分かる気がするわ」

「……彼女が、何か言っていたのかしら？」

「いいえ。……あら、なんて顔しているのよ」

自分の顔を見て笑う幽々子の反応に対して、咄嗟に両手で表情の動きを探る。

「不安そうな表情だったわ。珍しいわね、そんな可愛い反応をするなんて」

「からかわないで頂戴……」

「ふふ、親友としてちよつと妬げちゃうわ。」

そうね、それで貴女の御執心の巫女さんなんだけど、何も話しては
いないわ。それも当然よね、亡霊となって生前の記憶なんて失ってい
るんだから」

「ええ、そうね」

「でも、だからこそ不思議だったわ。

ここが何処で、私が何者なのかも聞かなかった。辺りを見回して、
あの桜に眼を留めると、そのまま何も言わずに座り込んでずっと何か
に集中している」

「そう……」

「あの桜のこと、自分のすべきことを、何もかも見抜いているような
……そんな不思議な巫女だと思ったわ」

幽々子の話を聞き、紫は複雑な気持ちを抱きながら眼を閉じた。

自らが為したことへの疑念と後悔。

——間違っていたのか？

そんな自問を、あえて心の隅へ押し込んだ。

いずれにせよ、答えはこの異変の決着と共に、もうじき出るはずな
のだ。

「ねえ、紫。貴女が連れてきたあの亡霊は、一体誰なのかしら？」

何も言わずに此処へ住まわせてくれと、貴女は頼んできたわね。貴
女の頼みならいつまでも預かってあげるけれど、理由くらいは知っ
ておきたいわ」

「……そうね」

ここから見える巨大な桜——『西行妖』と、向かい合ってその根元
に座る巫女の背中に紫の意識は移っていた。

様々な感情と考えが湧いて、入り混じっている。

焦がれるような気持ちと共に、顔向け出来ないような後ろめたさが
紫の心を占めていた。

「ここを訪れる博麗の巫女が、きつと教えてくれるわ」

自らもまた多くの疑念への答えを望むように、そう曖昧に答えた。



「……なあ、霊夢。わたしには結界のことはよく分からないんだけどさ、あの世とこの世を隔てた物をぶっ壊すのは絶対にマズインじゃあないかと思うんだ」

空に穴が開く——その奇妙な表現が当て嵌まるような光景が魔理沙の目の前にあった。

霊夢の後について飛び続けていた先に、魔法の障壁にも似た術式を感じ取り、これが現世と冥界を隔てる境界なのかと感慨を抱く間すら無く、霊夢がそれを破壊してしまったのだ。

「仕方ないでしょう。生きた人間が冥界まで行くには、その境界を曖昧にしないといけないのよ」

「そりゃ分かるけどさあ……せめて、帰る時にはちゃんと直して帰ろうぜ。死人が地上に迷い出ちまう」

「自分がいるべき場所くらい分かるでしょ」

霊夢は気にした様子も無く、あの世の境界を踏み切った。

冥界へと続く道。上へと昇っていく道筋のはずなのにまるで地底へ潜るように闇が深く広がっている。

地上で感じていた寒さとはまた違う、背筋をなぞられるような薄ら寒さを魔理沙は感じた。

当たり前のように感じていた『生きる者の気配』

ここでは、それらが存在しない違和感をハッキリと捉えられる。

ここは別世界だ。

そう実感する魔理沙の視線の先に、まさにそれを確定付けるように空には在り得ない長く巨大な石段が姿を現した。

「天国に繋がる階段か？」

「階段を登るだけで極楽に行けるなら、死者も苦労しないでしょうね。冥界は正確には『靈魂が一時的に留まる場所』であって、天国や地獄の類ではないわ」

「じゃあ、この先に閻魔様が待ち構えているわけじゃないんだな。安心したぜ」

「あたしもこの先は知らないけれど、少なくともこの異変の首謀者は

待ち構えているでしょうよ」

胸の内に根付く怖気を誤魔化すように、霊夢と軽口を交わしながら進んでいく。

全く怯んだ様子を見せない、普段通りののんきな姿を見て、魔理沙は頼もしさを感じていた。

同時に、こいつは怖いものがないのかという呆れも湧いてくる。

それこそ、母親の死さえ――。

いや、今更何を考えているんだ。辺りの警戒に集中しろ。と、魔理沙は自分に言い聞かせた。

霊夢に対して一体何をそんなに不安に感じているのか、自分でも分からなかった。

そんな苦悩を強制的に打ち切るように、石段に沿って飛んでいた二人の前に立ち塞がる者が現れた。

「そこで生まれ、人間。ここから先にある白玉楼は死者しか歓迎しない」

刀を抜き放ち、朗々と響き渡る声で妖夢が宣告する。

「お前達の持つなけなしの春を置いて、とつとと失せなさい」

「こいつはいいぜ。誰だか知らんが、分かりやすい敵が出てきやがった」

「本当にありがたいわね。情報を絞れるだけ絞って、あとは叩きのめせば障害排除も出来て丁度いいわ」

並の人間ならばすぐみ上がるような鋭い剣気を放つ妖夢に対して、しかし相對する二人は並の人間など比べ物にならない程太い肝を持っていた。

あまり気の長い方ではない妖夢の額に青筋が浮かぶ。

「ふざけた奴らだ。決闘のルールなどなければ、直に斬り捨ててやるのに」

「あら、冥界にもちゃんとスペルカード・ルールは伝わってるのね。感心感心」

「例え真剣勝負でなくとも、私の太刀筋は鈍りはしない。さあ、どつちから倒されたい?」

妖夢の挑発に、意気揚々とカードを取り出そうとした魔理沙を制して霊夢が進み出た。

「なんだ、お前がやるのか？」

「あんたじゃ時間が掛かりすぎるわ」

「実力不足って言わないのは、お前の優しさなのかね」

「卑屈にならなくていいわよ。勝機はあると思うけど、この際勝ち負けは関係ない。ああいう生真面目な奴って、決着がついても後々しつこいのよね」

霊夢は初対面の印象と勘で勝手に判断していたが、それは的を射ていた。

主に尽くす忠義の侍——少なくとも、妖夢の目指す心構えはそうであつたし、己の責務を重く受け止めている。

何人たりともここを通すつもりはなかった。

如何なる相手にも喰らい付く覚悟があつた。

その執着が酷く面倒だと、霊夢は判断したのだ。

「やるなら手早く、とことんやらないとね」

何気なく呟く霊夢の横顔を見て、魔理沙は寒気を感じた。

チルノとの決闘でも見た、異変に乗り出した時の博麗の巫女としての顔だ。

そこには一切の容赦も慈悲も存在しない。

露骨な殺気や敵意などは抱かないが、だからこそ淡々とした恐ろしきがある。

弾幕ごつこを腕比べと捉えている魔理沙とは違い、今の霊夢にとって戦いは『作業』の一部に過ぎなかった。

「じゃあ、始めましょうか。名乗った方がいい？　あたしは博麗霊夢。

異変解決にやって来た、博麗の巫女よ」

「巫女……お前『も』か」

その言葉を聞き、霊夢の瞳が僅かに揺れた。

「……ああ、そう。やっぱり。分かったわ、勝負の後に改めて聞き出しましょう」

「何を勝手に納得しているのか知らないが、勝ったつもりで話を進め

ないことね。

私は白玉楼の庭師、半人半霊の魂魄妖夢！ 妖怪が鍛えたこの楼観剣に斬れぬものなど、あんまり無い！」

言うや否や、手に持つ刀で虚空を薙ぎ払った。

弧を描く太刀筋から発射された変則的な弾幕が霊夢に襲い掛かる。

本来、弾幕ごっこは殺傷を目的としたものではない調整された力で行われている筈だが、妖夢の弾幕は実際の威力はともかく、込められた剣気によって威圧されるような鋭さを備えていた。

相対すれば、直撃が死に繋がるような錯覚に囚われ、思わず足も竦んでしまう。

しかし、今回の相手は博麗霊夢だった。

あらゆる重圧に囚われない霊夢は、迫り来る弾幕を宙を舞う木の葉のように、ゆるやかに淀み無くかわしていく。

自らの放った弾幕がまだ第一波でしかないと自覚しながらも、一連の動作を見た妖夢に戦慄が走った。

只者ではない。

緊張により張り詰めた精神が更なる攻勢を訴えかける。

妖夢は容赦なく弾幕を畳み掛けた。

自らが誇る名刀を振るうたび、速度に緩急を付け、縦横無尽に弾幕が乱れ飛ぶ。

覆い尽くすような物量の一方で、正確無比に狙い定めた一太刀が放たれる。

以前の紅霧異変で戦ったレミリアとはまた違い、単なる暴虐の嵐ではなく、技術によって洗練された弾幕だった。

しかし、それでも――。

「本当に、今日の霊夢は勘が冴えてるな……」

何処か自身にも余裕があったチルノの時とは違う。敵対しているわけでもないのに魔理沙は戦慄を感じていた。

あの妖夢という奴は強敵だ。

少なくとも、自分にとっては勝てるかどうか分からない相手だと、この弾幕を見て悟った。

だというのに、今の霊夢にとってはそれすらも敵ではないらしい。踊るような、といった表現が相応しいキレのある動きで、霊夢は弾幕をすり抜けていった。

加えて、意図してのことなのか全く反撃をしていない。

「く……っ！ 貴様、舐めているのか!?!」

一枚目のスペルカードを撃ち終わり、結局当てるどころか反撃すらされなかった事実怒りを抱いた妖夢が激昂した。

冷めた視線で霊夢が応える。

「いや、いい攻撃だったんじゃない?」

他人事のように語る姿が、妖夢の神経を更に逆撫でする。

「ところで、自慢するだけあっていい剣ね」

「……どういう意味だ?」

「あなたの強さって『剣術』なの? それともその『剣』なの?」

あからさまだがあまりにも遠慮の無い挑発に、魔理沙は思わずあちやーと手で顔を覆った。

神経に障るどころか深く切り込むような台詞だ。

案の定、妖夢の瞳に殺気が漲った。

頭に昇った血が、一気に理性の枷までぶつちぎったような凄惨な形相だ。

「貴様ああー!!」

怒号と共に、湧き上がる激情を形にしたかのような弾幕が霊夢に押し寄せた。

それをまた氷のように冷静に捌いていく。

「……そういうことか」

魔理沙は霊夢の狙いを読み、冷や汗を流しながら呟いた。

——あいつ、心を折りにいってやがる。

霊夢の『手早く、とことん』という言葉の意味は、相手に完全な敗北を刻み込むということだったのだ。

勝敗の後に、追い継ぎする気概すら残さないよう徹底的に打ちのめすつもりなのだった。

残酷さなど攻撃的な意思は含んでいないだろうが、そこには恐ろし

いほどの無慈悲さがあつた。

何故そこまで障害の排除に徹底し、それを急ぐのか。

異変解決の為の、それが博麗の巫女としてごく普通の姿勢なのか。

それとも、他に何か理由があるのか――。

いずれにせよ、この勝負は無残な結果を残すことになってしまいうだらう。

腕の立つ奴ほど実力差には敏感だ。

弱いからこそ形振り構わず突っかかっていく単純な自分とは違う。

霊夢は相手にスペルカードを最後の一枚まで使わせるつもりなどない。

自分が負けることを確信してしまった勝負を、一体何処まで続けられるというのか。

相手が悪すぎる。

徐々に必死さが見え始めた妖夢の表情を読み取り、魔理沙は同情した。



スキマ越しに観戦していた紫は、小さくため息を吐いた。

「貴女のところの従者、負けてしまいそうだわ」

「あら、そう」

視線を桜の方へ向けたまま、幽々子が微笑んで返す。

「冷たい反応ね」

「妖夢は今回が初めての実戦なのよ。稽古は人一倍していると思うけれど、相手がいなかったからね。ここには幽霊しかいないし、人の形を持った亡霊は私だけだったもの」

「負けることもいい経験になるってこと？」

「勝つてもいい経験になると思ったけれど、そう上手くはいかないわよねえ」

答える幽々子はのんきな態度だったが、彼女なりの思いやりがあるらしい。

主従というよりは母と娘といった関係だと見て、紫は微笑ましく感じると同時に脳裏を掠めた二人の巫女の間接を想い、再び憂鬱な気分になった。

もう何度繰り返したか分からない。視線を桜の前の巫女の背中に向ける。

自分の娘が近づいて来ていることを、彼女は知り得ているのだろうか？

もちろん、分かるはずがないし、娘のことだって覚えているはずがないのだ。

しかし、彼女に底知れぬ部分があることは紫も分かっていた。

自らの迷いも加わり、今すぐにも彼女に駆け寄って話をしたい気持ちと彼女に瞳を覗き込まれることへの恐れがせめぎ合っている。

「……貴女の従者が突破された時は、まず私が彼女達を迎えるわ」

紫は苦悩から逃げるように、そう提案した。

幽々子が不思議そうな顔で見つめる。

「あら、紫はどちらかという異変を解決する側だと思っていたわ」

「私はどちらでもないわ。ただ、今回は博麗の巫女の方と少し話す必要があるからよ」

「こちらとしては助かるから別にいいけど……」

「じゃあ、ちよつと行ってくるわね」

顔を背け、スキマの中に身を沈めていく。

ふと、動きを止め、幽々子の方を見ぬまま独白するように告げた。

「どんな結果になるかは分からないけど、今回の件が終わったら少し話を聞いて欲しいわ」

返答を聞かず、紫はそのままスキマを閉じた。

今回の件というのが異変のことなのか、話とは一体何に関するものなのか、何一つとして明確にしなかったが、幽々子はただ笑顔のまま友人の頼みを聞き入れていた。

従者も親友もいなくなった屋敷から離れ、無数の花びらが舞う西行妖の下へと静かに近寄る。

根元で座禅を組み、ずっと動かないままの巫女の傍らに佇んだ。

見上げるような巨木と向かい合い、全く微動だにしない姿はまるでこの妖怪桜を警戒し、見張っているかのようだった。

そつと顔を覗き込むが、その眼は閉ざされ、幽々子の存在にも気を留めていない。

視線を移し、杖を鳴らして騒ぎ立てる西行妖を見上げると、物言わず不動である巨木の印象が一体どちらに相応しいのか分からなくなつた。

「この桜とタメを張るなんて、大した貫禄ね」

苦笑しながら、返事を期待せずに呟く。

「貴女は何者？ 何を考え、何を想つて今ここに居るのかしら？」

幽々子は自身の問い掛けが、誰に向けているのか曖昧なものだと自覚していた。

視線は西行妖の根元に向けたまま、応える者のいない言葉が続けていく。

「私は生前の記憶も無いまま、随分と長いことこの白玉楼に留まつてきた。

穏やかで何の疑問もない日々だけれど、時折空虚に感じることもあるの。私には存在することに執着する為の根っこが無い。亡霊なのだから、当たり前かしらね」

自問と自答によつて完結した独白を、それでも誰かが答えてくれることを何処かで期待しながら紡ぐ。

西行妖の根元。その奥に眠るものへ向けていた視線を、自分と同じ亡霊へと向けた。

「貴女も、私と同じ気持ちなのかしら？」

何気ないその問いに対して、巫女は唐突に口を開いた。

「我、生きずして死すこと無し。

理想の器、満つらざるとも屈せず。

これ、後悔と共に死すこと無し——」

謳いあげるような言葉が朗々と響き渡り、それを聞いた幽々子は目を見開いた。

かつてない衝撃が、胸を打っていた。

空虚など、とんでもない。

死して亡霊となったはずの目の前の巫女から放たれたものは、紛れもない生きた言葉であり力ある言霊だったのだ。

幽々子は震え、知らず涙を流していた。

この涙が一体どんな感情から溢れたものなのか、自分にも分からない。

亡霊となって初めてかもしれない、心が揺れ動く感覚を味わっていた。

冥界において決して聞くことの出来ない、生き足搔く者の尊さを感じさせる言葉に感動を抱いていた。

肉体を失い、その魂を冥府へ導かれたとしても、彼女は未だ死者ではない。

彼女の心は、まだ終わってはいないのだ。

「……そう」

涙を拭い、再び西行妖を見上げる。

「貴女は、私とは違うのね。まだ亡霊になるべきではない。為すべきこと、還るべき場所があるんだわ……」

一人、納得するように呟く。

具体的なことは何一つ分からなかったが、紫が苦悩し、迷っていることを幽々子はぼんやりと理解していた。

その原因がこの巫女にあることも。

そして今、やはりただ直感的なものだったが、紫の持つ迷いへの答えをハッキリと見出ししていた。

——この巫女を、ここへ連れて来たことは間違いよ。紫。

異変の解決と共に、紫自身の言う『結果』とやらがすぐそこまで迫っている。

幽々子はそう確信した。

◇

私は今、混乱の中にいた。

雑念を払い、自らの内なる部分を探り出す為に、こうして座禅を組んで集中しているが、未だに大した効果は得られない。

——分からない。

——思い出せない。

「どれだけ自問自答を繰り返しても、私の記憶はおぼろげで、そこからハッキリとしたものを掴み取ることが出来なかった。

焦燥が募る。

私は、思い出さなければならぬ。

このまま忘れたままではいけない、と。それだけはハッキリと分かる。

分かっているのに思い出せない。

思考は堂々巡りを続ける。

大切なことのはずなのに。

駄目だ、思い出せない……。

——診療所で紫に魂みたいなものをつまみ取られた辺りまでしか思い出せんっ！

そして、気が付いたら白玉楼にいる件について。

分からん。

もう、全然状況が分からん。

本当に、混乱しすぎて『ありのまま今起こったことを話すぜ』って口走りそうになっちゃったよ。自重したけど。

まず、切欠となった紫の行動の理由が分からないし、その後私がこの冥界は白玉楼に居候することになった過程も分かりません。

ホント誰か教えて欲しい。

目を覚ましたらいきなり西行寺幽々子が現れて、文字通り花が咲くような微笑みと共に『これから一緒に住むのよ。よろしくね、お仲間さん』って歓迎の言葉っぽいものを掛けられたのだ。

状況を全く理解出来ない私は返事も忘れて、内心でシエーとなっていた。

お仲間さんって、つまり今の私は同じ亡霊ってこと？
やっぱりあの時私は紫に殺されちゃったの？

次々と湧き上がる疑問とショックで頭の中がグチャグチャになってきたので、ほとんど夢遊病者のようにフラフラと外に出た。

幽々子とは因縁のある桜の木を見つけて、ふと思い立ち、その近くに座って状況整理の為に普段やっている瞑想を始めた。

これってかなり便利なんだよね。

最初に始めた頃はただ単に形から入っただけだったが、この姿勢が一番集中力が高まるし、何回も繰り返している内に自分の中の力の流れみたいなものを感じ取ったり、コントロールするのに最適な状態だと分かったのだ。

体調や呼吸を整えるのにすごく重宝している。

そんなわけで、混乱している自分を落ち着かせる為に座禅を組んで動揺を鎮めつつ、記憶を整理してみたりしたのだが――。

うん、駄目だ。

疑問は山ほど湧くのに何も答えが出ない。

私が覚えている限り、朝早くに紫がやってきて、朝食を誘ったところまではハッキリしているのだ。

その後、私が背を向けた時に紫が何か――多分、境界操作――を行っただのを察知した途端、意識が朦朧として、消えた。

あの時、後ろに引つ張られるような感覚があつて、一瞬私の視界に私自身の後ろ姿が見えたんだよね。

錯覚かと思っていたが、あれって顧みるに幽体離脱みたいな状態だったんだろうな。

だったら、私が幽々子の言う『お仲間さん』――つまり亡霊になつてしまったという状況も説明がつく。

……いや、説明がついたとしても、全然受け入れたくない事実だけだね。

そもそも、紫に攻撃されたっていか殺されたという事実が信じられない。

私、何か紫の殺人動機になるようなことしたかなあ……？

正直、殺されたこと自体よりも、その辺の理由の方が超気になる。あれか？ やっぱり以前地底で暴れたことが後々になって大問題になってしまったとかか？

それで事件の発端である私に制裁、と……何気に在り得そうで怖い。

うわあ……本当にそれが理由だったらどうしよう？

謝って済む問題じゃないよね。

何とかさとりで連絡が取れば、とりなしてもらえるかも。でもどうやって？ ああつ、もう！ 助けて、さとりん！

ただ、制裁にしても、私の魂を抜いた後、亡霊になってここに住むっていう展開がよく分からないだよな。

うーん、とにかく紫と一度会って話し合った方がいいな。詳しい事情を説明してもらおう必要もあるし。

そして、実際問題としてこれから私はどうなるのか、という点だ。多分、地上では私の死亡事件として大騒ぎになっていることだろう。

怪我が治り、人里での暮らしに戻ってからの生活は何かと不便な点が増えた。

まあ、霖之助のお墨付きで杖を使えば歩けるようになると言われてはいるが、当然そうなるまでには慣れがいる。

しばらくはまともに立つことも出来ないから診察の時は座りっぱなしだったし、訓練の為に外を積極的に出歩くようにしていたが、これがまた何度も転んでしまうのだ。

もちろん、こんなものは若い頃のアホ修行の日々に比べたら全く苦でもないんだけど、そんな私を見守ってくれる慧音達に気を遣わせてしまうのが、なんとも心苦しかった。

本当に最初の頃、転んでも上手く起き上がれずにもがいていたら、見かねたのか慧音が肩を貸してくれた。

さすがにちよっと恥ずかしかったので『失敗しちゃった。てへぺろ』って誤魔化そうかと思っただけ、なんか慧音がマジ泣きしそうな顔だったので自粛した。

いやー、そこまで心配されてたとは思わなかったわ。

それ以来、診療所が開く前に異常が無いか様子を見に来てもらえるし、本当に慧音には気を遣わせっぱなしだった。

だからこそ、こんな状況になって更に心労を掛けることになってしまふのがたまらなく申し訳ないと思う。

あと、毎朝来てくれるってことは、必然的に私の死体第一発見者になっちゃうってことじゃない。二重の意味で申し訳ないわ。

それに霊夢がこれ知ったらどう思うだろうなあ。
きつと悲しませちゃうよ。

もちろん、この幻想郷では冥界さえ行き来できる場所だから、原作で幽々子と交流があったように、死んでこれつきりということにはならない。

しかし、それが一体何の慰めになるというんだろう。

私は霊夢の母親なのだから、霊夢より先に死ぬのは当たり前だ。

だけど、それはあの子の成長を放って、無責任に何処かへ行ってしまうという意味では決して無い。

あの子が大人になるのを見送った後で、親としての役割を終えてから逝くことこそが私の望む大往生ってやつなのだ。

亡霊となって存在し続けることが人生の一部だなんて思えない。

亡霊は亡霊。死んだ後の存在だ。

生きて、それから死ぬのだ。

私は、まだ生きなきゃいけない。

——よって、ここまで考えて出た今後の行動方針は『紫と話し合つて、可能ならば生き返る』というなかなかぶっ飛んだ結論だった。

しかし、ここは幻想郷。死人が生き返るくらい意外とアリなんじゃないかと思ってしまう。

すごいね、幻想。

とりあえず、私自身のことに関してはそういった結論で落ち着いたわけだが、ここで次なる問題に移る。

私自身のことではなく、たった今私がいる状況に関することだ。

目の前で、多分『西行妖』っていう名前だと思う馬鹿でかい桜の木

が、もう七分咲きくらいになっている件について。

地上にいた頃も、暦では春に入っているはずなのにやけに寒いから予想はしてたが……これって『東方妖々夢』だね、どう見ても。

春になっても咲かない妖怪桜を満開にしようという幽々子の思いつきから始まったこの異変は、幻想郷の春の成分を奪うことで冬を長引かせ、その結果霊夢達が解決に動くという流れのはずだ。

つまり、近々この白玉楼に霊夢が来るということになる。

それ自体は私にとってむしろ好都合なんだけど、同時にタイムリミットも迫りつつあった。

——この桜の木には秘密が隠されているのだ。

幽々子がこの桜を咲かせようとした切欠に、古い書物からこの桜の木の下に何者かが封印されていること、西行妖が咲かないのはその封印のせいであることを知ったというのがある。

つまり、幽々子はこの桜を咲かせ、その結果封印を解こうとしているのだ。

そして、ここから重要かつ前世の記憶を持つ私だからこそ知ることだが——封印されている何者か、とは実は幽々子自身の遺体なのである。

元々、この桜は咲く度に人を死に誘う凶悪な妖怪桜だったのだが、その影響で同じ人を殺す為の能力を得てしまった生前の幽々子は嘆き悲しみ、桜の木の下で自害した。

そして再び転生して苦しまないよう、肉体を鍵としてこの木を封印したのだ。

西行寺幽々子と西行妖には、そんな関係と過去があったのである。

故に、この桜の木は決して満開にしてはいけないし、原作では異変解決が結果的にそれを防ぐこととなった。

——と、ここまでが私のゲームの知識。

そして今、私の目の前では現在進行形で西行妖の封印が解けつつある。

原作通りの流れ、と言いたいが、正直それだけで安心出来るほど私は楽観的ではない。

何かの間違いで霊夢達が間に合わず、西行妖が満開になるという事態が在り得ないわけではないのだ。

その『何かの間違い』が十分に起こり得るのが現実ってやつである。何より、こうして直に西行妖という奴と対面してみてもハッキリと実感したことがある。

——こいつは……ヤバイ！

なんかもう、全然具体的に表現出来てないけど、本当にヤバイとしか言えないくらいヤバイと感じる。

人を死に誘うという話も決して大げさではないようだ。

私が今、亡霊の状態だから分かるのかもしれないが、桃色の花びらが舞う美しい全容とは裏腹に、放たれる雰囲気は瘴気にも似た重苦しさと禍々しさに満ちている。

こんな物は生きた人間が楽しむのはもちろん、見ていいものではない。

崖の下や底の見えない穴を覗き込む時、落ちれば死ぬと分かっているのに吸い込まれそうな気分になる時がある。

それを何倍にも強くした衝動を、この桜を見ていると感じるのだ。

この桜は生きる者を殺す。

私は無条件にそう確信した。

幽々子のことを抜きにしても、こんな化け物の封印を解くわけには絶対にいかない。

そう決意し、私は木の根元に陣取って座禅を組んだまま、微動だにしていないのだ。

……それ以外に出来ることがない、とも言うけどね。

肉体を失ってしまったせいかな、どうにも体の動きに違和感を感じる。

足の不自由はなくなつたが、まるで肉体の方へ置いてきてしまったかのようにあらゆる技が使えそうにないのだ。

まあ、私の技といったらガチンコの格闘術だったり、自分でもどんなパワーを使っているのか分からない他の漫画の技ばかりだから、ある意味納得出来るんだけどね。

実際に、さつきから試しているがこの状態では波紋も練れないよう
だ。

何より私は博麗の巫女としては才能がなかったので、封印や結界と
いった方面の技術には非常に疎いのだ。

例えば私が生前と変わらない力を発揮出来たとしても、封印の解かれ
そうな西行妖に対して出来ることといったら、蹴り倒すか切り倒すか
殴り折るか——どっちにしろ、ぶち壊す以外手段がないじゃねーか。

体内の力の動きをいろいろ試したみたところ、霊力だけは運用出来
るようなので、とにかく瞑想に瞑想を重ねてその力を溜め込み、何か
役立ちそうな場面で解放する瞬間を見極める程度のことしか出来な
かった。

こんな無力な状態で、化け物桜と向かい合うなんて正直怖い。

だからといって、眼を離すのもやっぱり怖い。地上が時期的に春に
近づいているせいか、それに比例するように西行妖の咲く早さが上
がっているように思えるし、不規則なタイマーが付いた時限爆弾を見
ているような気分だ。

結果、私は白玉楼で目を覚ましてからずっと、こうして西行妖と睨
み合うかのように座り続けているのだった。

れ、霊夢ーっ！ 早く来てくれえー！！ と内心ではクリリンばりに
叫んでいる私。

そんな風に誰にも分からないところでテンパっていると、緊迫した
状況を理解しているのかいないのか、幽々子がのんびりとした仕草で
傍にやって来た。

ううつ、真実を語って異変を止めてもらいたいという気持ち湧い
てくるが、自分の遺体を見たら亡霊って消滅するらしいからなあ
……。

余計なことを口走らないように固く口を閉ざし、西行妖の方に意識
を集中させる。

「貴女は何者？ 何を考え、何を想って今ここに居るのかしら？」

しがない巫女です。この異変を無事に乗り切り、家に帰って娘を抱
き締めたいです。

あとは、貴女とお近づきになりたいです。

今はそんな状況じゃないけど、ゆゆ様とお茶でも飲みながらのんびり話とかしてみたいね。

「私は生前の記憶も無いまま、随分と長いことこの白玉楼に留まってきた。」

穏やかで何の疑問もない日々だけれど、時折空虚に感じることもあるの。私には存在することに執着する為の根っこが無い。亡霊なのだから、当たり前かしらね」

幽々子から感じられる気配は、どこか儂げなものだと私は感じた。何故、彼女は初対面も同然な私にそんなことを語るのだろう。

私は自分が亡霊であることを受け入れてはいないし、そうなった境遇も幽々子とは違う。

彼女にはそれこそ悲劇的な経緯があつて、長い年月亡霊として在り続けていたのだ。

私ができることに関して、知ったようなふりや憶測で何かを語るわけにはいかないし、出来るとも思わない。

ただ、幽々子が西行妖の封印を解こうと思つた根本的な動機。無意識のうちに生前の自分を求め、今の自分を変えてその空虚を埋めたいという欲求があつたのではないかと私は思った。

「貴女も、私と同じ気持ちなのかしら？」

何気なく尋ねられたそれに、私はもちろん否定を表したい。

私にはまだ生きる理由があるんだからね。亡霊になるにはまだ早い。

その辺の決意の固さを、幽々子にも知ってもらおうと——そして、あわよくば紫と話す時にフォローしてもらつちやおうと思ひ、私は偉大なる名言に肖らせてもらうことにした。

「我、生きずして死すこと無し。」

理想の器、満つらざるとも屈せず。

これ、後悔と共に死すこと無し——」

……自分で口にして、自分の心にまで響くわあ。

単純にかっこいいだけではない。あらゆる決意の詰まった言葉だ。

決死の行動への覚悟を表す言葉でもあり、生きることへの足掻きとも取れる。私にとっては後者の方が大きい。

幽々子に聞かせる為の台詞だったが、毎度のことながら私自身も影響を受けて、なんか覚悟完了してしまったようだ。

先程までの弱気は失せ、徐々に圧力を増す西行妖の威容に対して、私は改めて向かい合った。

霊夢はきつと来る。

そして、決戦の時は近い。

私は臆することなく、ただ静かに待つ。

——霊夢の勇気が幻想郷を救うと信じて！

……………間違ったことは言っていないつもりだが、なんか投げやりっぽいな。これ。

其の十二「妖々夢」

最近になって私は霊夢に博麗の巫女としての修行をつけるようになった。

霊夢はまだ十歳にもなっていない子供である。

本来ならばまだまだ遊びたい盛り of 自由奔放に育つべき時期だ。

親として、これがあまりに急いだ教育であることは自覚している。

私は、きつと間違っているのだろう。

しかし、そうせざるを得ない理由があった。

——霊夢は、子供なのになんか既に枯れていた。

日中にやるのが縁側で日向ぼっこことかどうなの？ お母さん悲しくなります。

放つといたら半日くらい飽きもせずぼーっと庭を眺めてたり、たまに動いたと思ったら自分でお茶を用意して一層腰を据え始めたり。

うんうん、勝手に自分でお茶を入れることが出来るようになってるなんて、うちの子はなんて自立心が高いんですよ。

高すぎて涙出てくるくらい。『おかあさんおかしちようだい』とか『のどかわいたー』とか、子供らしいおねだりの言葉を一度も聞いたことないわ。

どんだけ達観してんのよ、うちの子は。

人生を謳歌し尽くしたご老体じゃないんだからさ……。

いや、家事手伝いとかこの歳で十分すぎるほど家のことで働いてくれてますけどね。

でも本来なら働くのではなく遊ぶのが仕事の年頃のはずだからね？

無為に景色を眺めているわけではなく、庭先で私が掃除をする姿とか修行している姿とか、あとは家の中だと裁縫や料理する姿など。何かと私の仕草や行動を目で追っているようだが、でもそれって別に珍しくも無い日常的で退屈な光景だよな。

毎回疑問に思っ『面白いのか？』って聞いてみると『面白い』と決まって返ってくる。

まあ、感性なんて人それぞれだから私がどうこう言うつもりはないけど……でも、もうちよつと子供らしく活発になりなさい！

——とはいえ、霊夢がこうなってしまった原因は半分くらい親である私自身にもあるのだ。

博麗の巫女として人里離れた神社に住み、しかも立地の理由から訪れる人も少ない。

必然的に子供に必要な同年代の友達など、遊ぶ為の環境が絶望的な状況に陥ってしまっている。

私もこの身一つなので、日常的な家事や修行、博麗の巫女としての仕事も結構頻繁にあつて、あまり十分に構ってやっているとは言い難い。

大抵戦闘になる仕事の成果はもちろん、時には生死にも関わるので修行を怠るわけにはいかないし、その仕事自体も与えられた責務上疎かには出来ない。

……あれ、なんか言つてて私つてば『仕事ばかりで子供が愛情に飢えるタイプのビジネスママ』みたいに思えてきた。

ご、ごめんね！ 聞き分けが良い子だからつて、それに甘えてばかりの駄目ママでごめんね霊夢……っ!!

こういう風に己を振り返つて発作的に自責の念に苛まれる現象が、最近割りと頻発する私。

しかし、言い訳するつもりは毛頭ないけれど、残り半分の原因はそんな聞き分けの良さが半端ない霊夢自身にもあった。

これはもう霊夢の特性と割り切るしかないのだが、とにかく人間関係や物事にこだわらないのだ。

普通なら、構つてくれない親にわがままも言うだろうし、自分の置かれていた環境に不満も持つだろう。

私も可能な限り霊夢を連れて人里など『自分以外の人間が生活している環境』を見せて回っているのです、そこにある活気や営みの素晴らしさを知ってはいるはずなのだ。

それと比べて、自分が今寂しい状況にいることも分かつてはいるだろう。

でも、霊夢の場合はそれを理解した上で『別にいいか』くらいにか思っていないようなのである。

実際に、以前その辺のことを尋ねてみたらそのまま『別に気にしない』って答えが返ってきたし……。

それを不憫、と感じるのは私の身勝手な思い込みなのだろう。

知らないからそう感じるのなら確かに不幸だが、霊夢は知った上で自分の性分に合った答えを出したのだ。

人里の子供達とも少ない機会で何度か交流させたが、どうにも他の子より精神的にも一步先んじており、かつ集団での馴れ合いを自然と避ける傾向にある。

子供特有の馴れ馴れしきを持たないというか……決して冷たいわけではなく、面倒見もいいんだけどね。でも同年代なのにそう対応出来てしまうのは、やっぱり距離があるからだろう。

本当の友達というのは、対等な関係でしか成立しないものだからね。

そんなワケで、霊夢にとって今の環境は苦ではなく、むしろ合っているというのが本人の口からも答えられていた。

一般的な子供の範疇で霊夢を測ること自体が間違っているのかもしれない。

不必要に気を遣うことは、身勝手でお仕着せがましい行為となるだろう。

……でも。だからといって、それに甘んじて何もしないのは親失格である！

と、いうわけで。

少々早い気がしたが、私は霊夢に博麗の巫女としての修行を始めることにしたのであった。

遊びの代わりに勉強を教えるようなものだから、果たしてこれが健全な子供への教育なのか不安になるが、それでも子供のまま仙人にでもなりそうな日々を過ごす霊夢を放っておくよりはマシだろう。

実は霊夢と交流する切欠が増えて私も密かに嬉しかったりするしね。

こういう理由がないと霊夢と触れ合えない私マジへたれママ。だって、鬱陶しいとか思われたら嫌だし……。

そ、それはともかく！——こうして、二人だけの博麗神社で暮らす日々に変化が訪れたのだった。

今日の修行は室内で行っている。

符術に使う霊符を作成する練習だ。要は、お札に筆で文字を書く、習字みたいなものである。

当然ながら、霊夢はまだ未成熟な子供なので、肉体の鍛錬や術の習得などをさせるつもりはない。

こういった道具の準備や手入れ、一般教育の延長のような座学の他に、軽い準備運動などを教えて体を動かすようなことから始めている。

ちゃんと段階を踏んで鍛えていかないかね。

まあ、前世の知識を自覚した当初から漫画のバカ修行始めてた私が言っても説得力無いけど……。

でもね、霊夢。両手を血塗れにしながらやってる貫手稽古見て『あたしもそれやってみたい』とか、お母さん死んでも許しませんよ？

今更ながら教育に悪いと気付いたので、体が傷つく系の修行は人目を忍ぶようにしている。

霊夢には私と違った正統派の巫女になつてもらいたいね。

私の代では全然使ってもらえてない陰陽玉が泣いてるだろうし。

親の勝手な期待かな、という不安は霊夢を教え始めて、その呑み込みの早さを確認してから杞憂に終わった。

今もそうだ。最近教えたばかりの漢字をサラサラと淀みなく紙に書いていく。

その傍では、針仕事をしながら私が見守っていた。

うーむ、とても子供とは思えない達筆さだ。

まあ、あれだね。薄々気付いてたけど、私の霊夢は他の子供と比べて才能でも一歩先行ってますから。出来る子だったのは分かっただけだね。

そういう意味では、人里住んでなくてよかったわー。うちの子の器

量と出来の良さ見たら、他のお母さんとかに私が嫉妬されちゃうわー。ホント困るとこだったわー。うふふ。

……つていうか霊夢、私より字綺麗じゃね？

私の方が負けてね？

や、やばいな。あとで私もこっそり練習しよう。

横目でチラチラ見て密かに決心もしつつ、表では何食わぬ顔でチクチク霊夢の服を繕っていく。

子供の成長って早いからね。

外の世界と違って普段着がゆったりした和服だから、こうした大きな調整もそれほど難しくはないのが救いかな。

趣味となつている裁縫だが、実はあんまり上手くない。

昔と比べると大分慣れてきたと思うのだが、まだまだ経験を積まなきゃ駄目だね。

裁縫の出来自体は悪くないのだが、あくまで平均的な範疇だし、よく指も刺す。

全然痛くないし血も出ないけど。修行の積み重ねで手の皮も厚くなってるから、針で刺したくらい怪我にすら入らないのだ。こういう時には便利。

「ねえ、かあさん」

穏やかな静けさの中に霊夢の声が響く。

ほいほい、何か分からないところあったかな？

「ん？」

クソ無愛想な声が出る私。

娘に対してもつと愛想よくしようよ。

自然体でいるとこんな感じになつてしまうから困る。まあ、今更だけど。

「かあさんのやつている修行って、あたしには教えてくれないのよね」
「ああ、必要ない」

何故か霊夢は私の修行に興味を持っているようだったが、私の返答はいつも変わらない。

こう答える度に、霊夢は表情には表さずに残念そうな雰囲気を出す

が、それでも私の決意は固かった。

駄目です。適正とか必要性以前の問題として、個人的にあんなこと
霊夢に真似させたくありません。

「ハモンっていうのは？ 呼吸するだけでしょ。いろいろ便利そうだし」

「駄目だ。教えない」

「ケチ」

「ケチで結構」

珍しく拗ねたような顔をする霊夢の反応が子供っぽくて内心ほっこりしてしまうが、表情には出さない。

鋼鉄の精神力で拒んだ。

波紋の修行方法だって、下手したら窒息死するような危険なものなのだ。

私のやっている無茶修行全てに言えることだが、いずれも成果どころか命すら保証出来ない。言うなれば、向こう側の見えない崖へ身を投げるような危険と不確定さだらけの挑戦なので、誰かに教える責任なんてとても持てないのだ。

だから、霊夢も含めて他の誰にも教えるつもりはない。

それに、波紋に関してはその便利さから、逆にいろいろと思うところも出来たしね。

丁度いいから霊夢に言っておこうか。

「霊夢が大人になったら、私も波紋を使うのを止めるよ」

「……どうして？」

私の宣言に、霊夢が眼を丸くして驚いた。

「波紋を使っていると歳を取りにくくなる。使えば使うほど慣れて、
どんどん老化が遅れてしまうからな」

「若いままっつてことですよ？ それって良いことなんじゃないの？」

「良いことばかりじゃない」

肉体を酷使する修行を続ける分には、若さを維持できるっていうのは利点なんだけどねえ。

そんなこと続けてたら、いずれ霊夢が私よりも歳食っちゃうなんて

ことになりかねない。

万が一にでも、霊夢の方が寿命で先に、なんて……それはちよつと御免だなあ。

「……あたしのせい？」

具体的に答えなかった私だが、勘か何かで察したのか霊夢が俯きながら、そう呟いた。

あれ？ まあ、霊夢が理由なのは確かだけど、それで落ち込む必要が何処にあるんだろう？

「やっている修行の数や時間も減ったし、便利なハモンも使わないって……それ、全部あたしがいるせいじゃない？」

おおう、これは予想外な反応だった。

つまり、霊夢はこれまで見てきた私の生活や行動の変化を、自分が原因となって妨げているものと捉えてしまったわけだ。

まさか霊夢がそんなことを気に病んでいるとは知らず、その発言に私はしばし呆然としてしまった。

「あたしがいるから、かあさんのやりたいことをたくさん我慢させちゃってるんじゃないかな」

「……霊夢。筆を置きなさい」

すっかり手が止まってしまった霊夢にそう言って、私も裁縫道具を置き、立ち上がった。

霊夢の傍に歩み寄り、座り込む。

「霊夢。博麗の巫女としての仕事を、将来やってみたいと思うか？」

やらなきやいけない、ではなく。自分がそうしたいから、巫女になる——そう思ってるか？」

私の唐突な質問に、霊夢は少し混乱したようだったが、その聡明さを発揮してすぐに決意の籠もった真剣な眼で見つめ返してきた。

「うん。あたしはかあさんと同じ仕事をしてみたい」

「……そうか。じゃあ、お前の気になっていることは、何も問題ない」

私は霊夢の返事に満足感を覚え、自然と笑みを浮かべていた。

本当にね、私には勿体無さすぎるくらい出来た娘ですよ。

血は繋がってないけど、この子の母親になれるよう導いてくれた運

命とか神とかあるいは他の何に対してもいいから、とにかく感謝するしかない。

「私の今やりたいことは、お前に博麗の巫女としての役割を託すことだよ」

「たくす?」

「ああ。昔とは違う。今はもう、修行よりもそつちをやりたいんだ」

「……でも、それはあたしの為になることであって、かあさんの為にはならないんじゃない?」

うちの子マジで頭良すぎじゃね?」

普通、この歳でここまで大人相手に配慮出来ますか?」

感動のあまり勢いのまま抱きついてしまいそうになったが、それを必死で自粛して霊夢の肩にそつと手を置いた。

我慢我慢。ここは親としてビシツと決めるところだ。

さあ、頑張れ。普段ならあまり動かさない口と舌。喋りすぎて痙攣するなよ。

「いいや、お前の為に何かをするっていうことは、私の為にもなるんだよ。親というのは、そういうものなんだ」

「……分からない」

「お前も大人になれば分かる。人はいつか死ぬんだ。いろんな方法で先延ばしをしても、結局は終わりが来る。

私の鍛えた力や術なんて、死ねば何も残らない。修行の意味なんて無くなる。でも、私はお前に出会えたから、お前に託すことが出来るんだ」

「……何を?」

「言葉にするのは難しい。でも、私が死んでも霊夢は私が教えたいろいろなことを覚えていてくれるだろう?」

「うん。忘れるわけないわ」

「ありがとう。それが何かを託すということだ」

滅多に見せない力強い仕草で頷いてくれる霊夢に、本当に心の底から感謝しながらそつと頭を撫でた。

「誰かに何かを託して逝けるのなら、それはとても幸せなことなんだ」

確かに、私が変わった原因は霊夢に違いない。

霊夢という娘が出来なければ、私もこういう考え方を持たなかっただろう。

でも、それは果たして幸福なことか？

修行や戦いの果てに限界を迎えて前のめりに死ぬか、あるいは限界を越えて人間以上の何者かになって長々と生き続けるか。

そういう『もしも』を考えることは全く意味のないことなのだろう。そうなった時の自分と今の自分は、その価値観さえ違っているだろうから。

でも少なくとも——『今』を知った私にはその『もしも』の人生が幸福だとはとても思えない。

私は霊夢の母親となった。

そして、幸運なことに母親として生きる上での最高の幸せを手に出れたのだ。

「だから、お前の為に生きることが私にとって幸せなことなんだよ」
良き母親であろうとすることは、私にとって手探りばかりの不安で困難なことだ。

霊夢に無駄な負担や押し付けをしてしまうのが怖い。

でも、この子に私という人間の一片を託す以上、期待をしないというのは親として間違ったことだよな。

「霊夢。立派な博麗の巫女になりなさい」

「……うん、頑張る」

私の期待に、霊夢はしっかりと応えてくれた。



「スペルカード・ブレイク、ね」

淡々と告げる霊夢の顔を、妖夢は間近で見上げていた。
全身から嫌な汗が噴き出している。

肉体的な疲労はそれほどないはずなのに、今にも集中の糸が切れそうだった。

——私は、こいつに……。

続く言葉を必死で否定する。

認めるわけにはいかなかった。まだ勝負は始まって半ばにも達していないのだ。

使ったスペルカードはこれで三枚。

まだまだ余力は残っている。

しかし——。

「まだやる気？」

全ての弾幕をかわし切り、無造作に妖夢の眼前まで距離を詰めた霊夢は息一つ乱していなかった。

「当たり前、前だ……っ！」

「虚勢は無駄よ。あんたの眼も顔も、何もかもが答えになってる」

凍りつくような視線が、心の奥まで見透かしているような錯覚に囚われる。

いや、本当に錯覚か？

この巫女は、自分の中にある怯えと諦めを完全に看破してしまったているのではないか。

そんなはずはない。何故ならそんな感情は自分の中に存在しないからだ。

妖夢は必死で己の心を支えていた。

現実を直視すれば容易くへし折れてしまいそうなほどにぐらついた心を。

「……お前、なんかにつ。私の……鍛錬し続けた、時間が……！」

目の前の巫女は紛れもない人間だった。

そのあまりに短い生をあっという間に消費してしまう脆い種族のはずだった。

積み重ねた時間の量も密度も、自分とは違う。絶対に違う。

妖夢はそう決め付けて、継り付くことでかろうじてこの場に立っていた。

「ごんな……ルールに縛られた決闘なんかじゃなければ……っ！」

妖夢は無意識に口走り、そこに正当性があることをわずかに信じな

がら、残りの全てを言い訳染みた己の言葉への疑念と後悔で埋め尽くしていた。

霊夢は何も応えなかった。

ただ冷ややかに見下ろしていた。

「その剣から弾幕を出しているんでしようっ?」

霊夢は妖夢の構える刀を指して言った。

「振ってみれば?」

自身が妖夢の刀の間合いにいることを自覚しつつ、無造作に提案した。

「弾幕ごっこの範疇よね、それって」

「……っ! うわあああああああーっ!!」

その一言で、妖夢の追い詰められていた精神は限界を迎えた。

当初の洗練された剣気や殺気は乱れに乱れ、半ば錯乱気味に霊夢へ向けて刀を一閃させる。

心を乱されながらも、技術に裏つけされたその一太刀は人間を両断する程の鋭さを持っていた。

加えて、名刀である『楼観剣』の鋭利な刃は生半可な結界ごと対象を断ち斬る。

刹那の剣閃が瞬いた。

「……あ……あ」

「それで——」

妖夢の渾身の一太刀は、霊夢の手の中に納まる形で止められていた。

単純な防御ではない。妖夢の太刀筋を見切り、片手による変則的な真剣白羽取りによって対応したのだ。

結界用の札二枚で挟み込むように刀身を掴み、その威力を完全に殺している。

「まだやる気?」

先程と何も変わらない言葉の繰り返しを受け、妖夢の心は折れた。全身から戦意と力が消え失せる。

「やりすぎだぜ」

勝負がついたものと判断した魔理沙が開口一番に言った。

現れた時に漲っていたあるゆるものを失い、力無く俯くだけの今の妖夢を一瞥して、顔を顰めている。

霊夢はスペルカードを全てブレイクするわけでも、武器を握る腕を切り落とすわけでもなく、確実に手早くそして深く敵に敗北を刻み込んだのだ。

無慈悲な勝者は、そんな非難を肩を竦めるだけで流した。

「それじゃあ、尋問といきましょうか。出来れば正直に答えて欲しいわ」

「そりゃあ、正直に答えるしかないぜ」

脅迫や拷問よりも確実に残酷な方法だな、と魔理沙は思った。

心の底から負けたと悟った相手に抵抗できる精神力など残ってはいないのだ。

「あんたの主とその目的は？」

「……白玉楼の主である西行寺幽々子様。目的は……西行妖という妖怪桜を、幻想郷の『春』を使って咲かせること……」

妖夢は小声でボソボソと答えた。

「何故咲かせるの？ その進具合は？」

「あそこには何者かが封じられている……。西行妖に施された封印は、満開になることで解かれる。だから、幽々様様がそうしたいと……満開まで必要な『春』はあと少し……」

「なんだよ、ただのお姫様の娯楽か」

「異変なんてそんなもんでしょ。それで——」

霊夢の瞳に剣呑なものが僅かに宿る。

「その白玉楼とやらに、あんた達以外の人間の魂が一つ、新しく入って来なかったかしら？」

「先代巫女なら亡霊となつて白玉楼に住むことになったわ」

聞き覚えのある声が、霊夢の質問に答えた。

不意打ちに対して、咄嗟に霊夢と魔理沙が身構える前で妖夢の姿がスキマに飲み込まれて掻き消える。

おそらく邪魔にならないよう別の場所へ移動させられたのだ。

そんな能力を行使出来る妖怪は、一人しかいない。

「やっぱり、あんたが犯人だったってわけね。スキマ妖怪」

出会った当初から感じていた嫌悪と敵意は、もはや殺意となって霊夢の体から立ち昇っている。

先代巫女との関わりで互いに相容れぬと考えていた存在。

それが、今や証明されたのだ。

空間が裂け、そこから八雲紫が霊夢達の前に姿を現した。

「話をしましょう、博麗の巫女」

「あんたとの相互理解はもう無理だと思うけどね」

言葉こそ交わすものの、もはや紫を異変の一部と判断しているとか思えないほどの警戒態勢を取る霊夢。

しかし、逆に紫はその様子に話し合いの余地を感じ取った。

本当に自分をただ退治するだけの妖怪だと断じているなら、問答無用で攻撃をしてくるはずだ。

会話をするなど非効率的だった。

無意識にそうしてまでも確認したいことが霊夢にはあるのだろう。

「私が貴女の母親に行ったことの意味と理由を話しましょう」

その言葉に、霊夢の戦意が僅かに薄れた。

紫は傍らの魔理沙へ一度視線を移す。

「霧雨魔理沙。貴女には少しこの場から退席してもらおうわ」

「なんだよ、わたしは蚊帳の外か？」

「先代が推し、自らも力を示した。貴女には異変解決に関わる資格がある。けれど、この話に関われる立場ではないわ」

「へえ、そうかい。そうやって上から目線で何もかも判断してるんじゃないぜ」

魔理沙は紫への不快感と不信感をあらわにして、霊夢と並ぶように戦闘態勢を整えた。

例えどんな大層な理由があつたとしても、先代の魂を奪った目の前の妖怪の行動を容認するつもりはなかった。

悪意をもって行われたことではないのは分かる。

しかし、親友の母親を、親しい間柄につけ込んで陥れるなど、魔理

沙の価値観では絶対に許されることではなかった。

何様のつもりだ？

これは誰々の為だとか、正しいことなのだとしたり顔で語るつもりか？

魔理沙が動く理由は感情だった。気に食わないから、まずはぶつ飛ばしてから話なら聞いてやろうと思った。

その時、あらぬ方向から放たれた弾幕が魔理沙を襲った。

「——見下ろせるんだよ。この方は『妖怪』で、お前達は『人間』なのだから」

魔理沙を攻撃したのは紫の式神である藍だった。

慌てて回避する魔理沙を追い立てるように、更に弾幕を浴びせ掛ける。

「クソツ、邪魔すんなよ！」

「お前がいては話の場が乱れる。あとで異変解決になら参加させてやるから、大人しく下がるんだな」

「お前の許可なんか聞いてないぜ！」

霊夢達との距離が離れ、それが藍による誘導であると分かっていたが、魔理沙にはどうすることも出来なかった。

自分の相手はこの狐妖怪らしい。

こいつを倒さなければ、紫に物申すことすら出来ないし、何よりもこいつ自身も気に入らなかった。

「自惚れるなよ、格下が」

「お手本みたいな格上様の台詞をありがとうよ。反骨心でパワーアップ出来たぜ」

藍の視線は弱者に対する嘲りと憐れみを同居させたものだったが、そんなものは慣れている。

魔理沙は不敵な笑みを浮かべて勝負に挑んだ。



「それで、先代巫女の魂はこの先にあるのね？」

「母——とは呼ばないのかしら?」

周囲の全てを無視して、博麗霊夢と八雲紫は対峙していた。

既に霊夢は戦意を消している。

しかし、表情や視線、声色に至るまで互いに友好的なものは何も含まない。

まるで敵対であった。

幻想郷を管理する立場にある二つの種族の代表が。

本来ならば、在ってはならないことだった。

「先代巫女——を、亡霊にして五体満足のまま存続させる。不具合のある肉体は捨てる。あんたはそう判断したってわけね」

紫の軽口に応じず、霊夢は答えを聞くまでもないまま断言するように自らの予想を口にした。

「……いいえ。彼女を亡霊にしたのは一時的な処置よ」

霊夢の頑なな態度を無感情に眺め、やがて紫は事の真相を語り始めた。

「彼女の足は、今の段階ではどうあっても治すことが出来ない。

しかし、将来的に不可能なわけではない。様々な方法を模索し、いざれ見つけ出す。幸い、協力者には事欠かないしね」

紫の口調は普段の装ったものではなく、限りなく素を出したものだだった。

語る内容に偽りは無い。

先代巫女は多くの人妖に慕われている。

紫が協力者の候補として、今回の件に関わった慧音やチルノ達のことを含め、紅魔館など多くの有力者達を挙げているのは間違いなかった。

「その方法の目処が立つまで、先代には亡霊となってこの冥界に住んでもらう。肉体は保存する。それが私の出した結論よ」

言葉にすればあまりに簡潔な理屈だった。

そして、霊夢はその話を嘘だとは感じなかった。勘がそう告げている。

だが同時に、その話を語る紫の声には一切の感情が込められていな

いことも察していた。

「この話からは八雲紫の動機が見えてこない。

「あんたの能力でも治せないの?」

「私の能力が作用するのは概念的な部分が大きいわ。人間の肉体に対して微妙な操作は出来ない。」

先代の足の不能は酷く複雑なものよ。傷自体は既に完治している。神経や骨格の異常を修正する為の既存には無い精密な技術を探すか開発しなければならぬ」

「それは随分と、気の長い話ね」

「人間にとっては、ね。けれど、亡霊となれば時間は関係ないわ」

「なるほど。亡霊の状態ならば、変な表現だけど生きている時とあまり変わらない。意思疎通も出来るし、触れ合うことも出来る。生前の感覚で過ごしながら、いずれ来る復活の時に備えられる」

「その通りよ」

「理解したわ」

「結構。では、貴女の答えを聞かせて」

互いに感情を見せず、淡々と門答を交わした末に紫はそう促した。

霊夢はわずかな思案の間すら見せずに即答する。

「先代巫女の魂を返してもらおうわ。そして異変も解決する。邪魔をするなら、あんたを倒す」

簡潔に、しかし有無を言わさぬ決意を込めた言葉に対して、紫はただ静かに眼を伏せた。

「ここまでのやりとりを全て無視し、最初からこうなることを予想してたのだった。」

人間と妖怪。

価値観か、それとも思想か。いずれにせよ、二つの種族の間で決して交わらない差異がここに表れていた。

そのことに関する議論が無意味であることを紫は知っている。

はるか昔から、人間と妖怪の間で幾度もすれ違ってきたものだからだ。

「……貴女はまともに立ち上がれない自分の母親を見て何も感じな

かったの？」

聞き覚えのある質問に霊夢は鼻で笑った。

「どいつもこいつも同じことしか言わないのね。あの人が自分の身に降りかかった出来事を不幸だと嘆いてたわけでもないでしょう」

「貴女達人間は自らの生に様々な感情を託し、自らの概念で縛り上げる。

亡霊として過ごすことの何が気に入らないの？ 貴方達のこだわる人間としての生と死とは何？ 不自由な体を抱えて、平均寿命の範疇で死ぬことが出来れば人間らしい生き方だと認められるのかしら？」

「違うわ」

霊夢は断言した。

揺るがない心が反映された力強い声だった。

「誰かに何かを託して死んでいくこと。託されたそれを受け取って生きること。それを紡いでいくことが、人間らしい生き方よ。

あの人は、子が親より早く死んではいけないと言っていた。あの人はあたしよりも先に死ぬと決めていた。そして、あたしはあの人が託された人間なのよ」

紫の顔を覆っていた仮面に僅かな罅が入る。

そこからは霊夢に対する負の感情が見え隠れしていた。

瞳に剣呑な色が浮かび上がり、それを誤魔化すように口元を扇子で隠した。

「やはり、貴女は先代にとっての枷ね」

事実を責めるように告げる。

「貴女は知らないでしょう。」

かつての彼女は自らを鍛えることにひたむきだった。無茶で無謀な修練を繰り返して、その極みに至ってもなお先を見ていた。

でも、貴女が現れたことで変わってしまったわ。貴女が存在が彼女を『母親』という枷に当て嵌め、果ての無い先を見据えていた彼女に終着点を与えてしまったのよ」

——先代巫女は、お前の為に死ぬのだ。

紫の言葉には、そういった意味が込められていた。

根拠の無い言い掛かりや、感情から来る無知な叱責ではない。

確かな事実だった。

それは霊夢自身も認めていた。

何よりも、霊夢がその母から直接伝えられたことだからだ。

そして、だからこそ——霊夢は何一つ揺らぐことなどなかった。

「確かに、あたしは知らない。あんたと共にいた長い年月の中のあの人を知らない。でも……」

霊夢は紫の瞳を見つめ返した。

怒りや苛立ちなどは感じない。

しかし、何よりも強い視線に射抜かれて、紫は思わず息を呑んだ。

「あんたは、ただ一日だってあの人の娘として共にいたことはないでしょう。」

あの人に育てられたことも、教えられたことも、授けられたことも

——全部、娘であるあたしだけが知っている」

霊夢は前を見据えたまま、ゆっくりと進んだ。

それに対して、紫は全く動くことが出来なかった。

全身が硬直し、喉は引き攣っている。

「あたしに託し、そして死んでいくと決めてくれた。だから、あたしはあの人を最期まで人間として生かす」

目の前にまで迫った霊夢に対して何も出来ない紫の横を、そのまま通り過ぎる。

戦闘は無く、反論も無かった。

紫は霊夢の言動に、あらゆる意味で抵抗する意思を失っていた。

それだけの力と意志が、霊夢の言葉にはあったのだ。

霊夢は振り返らず、そのまま石段の先にある白玉楼とそこで待ち受けるものへと向けて飛翔した。

「……待って、霊夢！」

対峙して以来初めて自分の名前を呼ぶ紫の声に引き止められ、霊夢は背を向けたまま動きを止めた。

「何よ……」

「一つだけ答えて頂戴。貴女は先代を……母親がいなくなった時の悲しみや喪失感を受け入れられるの？ それに抗おうという気持ちだが、少しでも湧いてこない？ 同じ死ぬ人間だから受け入れられるなんて、そんな理屈ではないでしょう？」

「それって一つじゃないわね。まあ、答えは一つで済むけど」

「茶化さないで。教えなさい」

「嫌よ」

肩越しに振り返ると、表情にこそ表れていないが随分と弱々しく感じる紫を見下ろして、小さく舌を出した。

「あんたなんか教えてやんない」

あとはもう振り返らず、継るような視線を振り切って一気に石段の先へ向けて飛んだ。

紫は追って来ない。

呆気ないとは思わなかった。

なんとなくだが、紫が自分の前に現れたのは妨害の為などではなく、ただ何かを確認する為に問いに来たのだと思った。

背後に遠ざかる気配から追い継る声すらなく、霊夢は紫の存在を頭の片隅に仕舞った。

先代巫女の所在と異変の発生源。今回の物事の終着点へと近づくと共に、集中力が高まっていく。

遠くから聞こえる弾幕ごっこの戦闘音と、そこにいるだろう魔理沙の安否が気に掛かったが、石段の頂上が見えると同時に完全に思考を切り替えていた。

視界が開ける。

石段を越えると、広大な敷地が広がり、まず目に付いたのは白玉楼と呼ばれる大きな屋敷と巨大な桜の木だった。

そのうちの後者に視点を移し、木自体から感じる膨大な妖気と寒気のする感覚に一つの確信を得る。

「あれが西行妖ね……」

巨大なその全貌を把握するべく、一通り視線を走らせていた霊夢は、根元を見下ろした時点でわずかに眼を見開いた。

見覚えのある姿があった。

半日も経っていないのに、酷く懐かしく感じる。

母の背中だった。

こちらの視線に気付き、向こうも立ち上がって振り返る。

見た目では生身の人間と変わらないように見えるが、巫女である霊夢にはその姿が霊体であると理解出来ていた。紫の言葉とも合致する。

しかし、母が自らの両足でしっかりと立ち上がる様を見た霊夢は一瞬その理屈を忘れて、全く別の考えを抱いていた。

もし、このまま――。

すぐさま我に返り、浮かんだ雑念を振り払う。

「同じ紅白の巫女。生前の彼女と縁のある人間かしら？」

霊夢の中の僅かな動揺を見抜いたかのようなタイミングで、西行寺幽々子は姿を現した。

妖しげな桃色に満ちた西行妖を背景に、死の気配を纏う美しい亡霊が浮かぶ光景はまさに幻想そのものだった。

その不思議な魅力の中にある危うさを見抜き、心を囚われることなく霊夢は身構えた。

「あの人はまだ死んではない。魂を返してもらおうわ」

「あら、貴女は異変を解決にしに来たのではないのね？ だったら結構。連れて帰っても構わないわよ」

「もちろん、この異変も解決するわ。集めた春も一緒に返してもらおうわよ」

「家族と仕事、どっちを優先するつもりなのかしら？」

「答える必要は無いわね。最終的にどっちも完遂するんだから」

「そう。あの巫女は貴女の家族だったのね」

「……む」

幽々子は先代巫女の素性を全くと言っていいほど知らない。

何気ない軽口の応酬の中で、上手く敵に情報を引き出されてしまった。

これから戦うことになる敵に自らの情報を与えてしまうことは、少

なくとも有利には働かないはずだ。

霊夢は思わずへの字に結んで口を噤んだ。

「姉……いえ、母親ね。うん、よく似ているわ」

「……それはどーも」

「少し話してきてはいかが？ 私はここで待っているから」

「時間稼ぎに付き合うつもりはないわ」

「あらあら、冷たい娘さんねえ」

「……亡霊が生前の記憶を失うことくらい知っているわよ」

「うふふ。さすがは博麗の巫女、一筋縄ではいかないわ」

どつちがだ、と霊夢は内心で悪態を吐いた。

この程度の挑発で心を乱されるほど激情家ではない。

しかし、目の前の敵に対してやり辛さと手強さを感じていた。

先程戦った従者とはまさに格が違う。さすがはその主といったところか。

まるで底が見えない。柔らかな物腰の中に得体の知れない圧力が込められている。

八雲紫と同じタイプの強大な存在だった。

ただ、迷いを抱えていた紫と比べて、こちらは目的を達成する為の揺ぎ無い意志で動いている。

「ま、要はシンプルに行けってことよね」

あらゆる懸念をあっさりと棚上げして、霊夢は意識を戦闘へと切り替えた。

シンプルに実力行使だ。

脅威を前にした躊躇いや怯みなど、彼女には無縁だった。

「妖夢が勝てないわけだわ。肉親の亡霊を前にして、心の乱れ一つも無し。お見事。『御立派』な博麗の巫女よ」

菩薩のような笑みで抉り込むような挑発の言葉を吐く。

対する霊夢は、むしろわずかながら喜色を浮かべて笑った。

「ありがとう。これ以上無い賛辞だわ」



——避けられない！

魔理沙は自らが追い込まれたことを悟った。

その物量もさることながら、計算し尽くされた弾幕だった。

ただ闇雲に逃げ道を塞ぐのではなく、迷路のように入り組んだ回避ルートを作り出し、袋小路に追い込む。

魔理沙はまさに藍の手のひらの上で踊らされていた。

そして、ついに一発の弾が下腹に命中する。

「ぎ……っ!？」

激痛が神経を伝って脳天まで走り抜け、飛び出そうになった絶叫を必死に噛み殺した。

全身が硬直し、あらゆる自由が一瞬奪われる。言葉さえ発することが出来ない。

弾が腹を貫通して、内臓を潰された——そう錯覚した。

絶望的な気持ちで視線を下に向けると、当たった箇所には傷はもちろん服さえ破れていない。

「な……んだ、これ……?」

「安心しろ、物理的な破壊力は無いに等しい。死ぬほど痛いだろうがな」

ただ単純に痛みだけで意識すら朦朧とする中、魔理沙はかろうじて藍の声を聞き取っていた。

「スペルカード・ルールにおいて、意図的な殺傷は禁止されている。

お前がどれほどの妖怪達と渡り合ってきたのかは知らないが、それらは皆お前を殺さないように気を付けていたんだ。脆弱な人間が死なない程度に弾幕の威力や量を調整していた。

同情するよ。コツを掴まないと、手加減が難しいからな。調整の精度に不安がある場合は、ルール違反の危険性を考慮して、よりレベルを下げなければならない。

まったく、お前達人間の相手をするのは、壊れ物のように繊細な配慮をしなければならぬ厄介なのだ」

完全に見下した藍の台詞を、魔理沙は痛みに耐え忍びながら聞くし

かなかった。

例えば口が利ける状態であっても、反論など出来なかっただろう。

藍の語る内容は事実だったからだ。

スペルカード・ルールの下で人間と妖怪が戦った場合、その勝敗がどんな結果であつても、そこにあるのは『弱い者はルールに守られる』という不変の事実だ。

それこそがこのルールに求められる機能で間違いないのだが、一部の強者がそこに嘲笑を向けるのも仕方の無いことだった。

藍は、まさにその一部に属している妖怪だった。

「貴様の得た勝利がどれほど気を遣われたものだったのか、今一度顧みろ」

「……へっ、お前なら遠慮はしないってか？」

未だ腹の奥で疼く鈍痛を堪えながら、魔理沙はかろうじて笑つて返して見せた。

「安心しろ、と言っただろう。殺しはせんよ。」

私の弾幕は殺傷力を極力削つてあるが、痛みを与えることに特化した性質だ。外傷は無いが、はらわたを抉り取られたような痛みだろうか？」

それが、自らの主の提唱したルールを早期に研究し、考え出した効率的な手段の一つだった。

痛みはダメージとして最も分かりやすく、標的を損傷させる危険も無い為弾幕のレベル自体を下げる必要が無い。

ルールに守られるべき弱者に配慮したからこそ、凶悪な難易度の弾幕を実現したのだ。

「この痛みは、実際に腹を抉られた時の痛みと同じだったのか？」

「身の安全は保証してやるが、何発も受けければ精神がもたんど。ショック死する前に降参しておけ。まだ、この異変解決に参加したいんだろう？」

何処までも目線は上から下へ。

魔理沙の行動が全て自らの許可によつて左右されていると、藍は考えていた。

今、矮小な人間の心は屈辱に塗れているだろうが、それは当然なのだと思っただ。

自然の摂理だ。

人間は、妖怪に劣るのだから。

「なるほどなあ……」

押し殺したような声で魔理沙が呟く。

「つまり、わたしの根性が続く限りはお前へのチャレンジOKってことだ……っ！」

ようやく体がある程度の自由を取り戻し、改めて敵を見据える為に顔を上げた時、脂汗をダラダラと流しながらもそこには不敵な笑みが最初と変わらず浮かんでいた。

見下していた藍の眼がわずかに細められる。

「聞いていたのか？ お前達人間は過度の痛みだけでも十分に死ぬる種族だろう」

「ああ、聞いていたぜ。心が折れない限り挑み放題ってんだろ？」

わたしは物覚えが悪いからな。弾幕の攻略方法を体で覚えろってのは、実にわたし好みだぜ。気を遣ってくれて、ありがとうよ」

「……そうか」

藍は淡々と頷いた。

再び掲げられたスペルカードは、魔理沙が取得に失敗したつい先程の物だ。

「なら勝手に死ね」

情け容赦なく弾幕が放たれた。

初見ではないとはいえ、弾幕のパターンは把握し切っていない。加えて、最初に通った回避ルートは罠だった。また新しい道を模索しなければ、このスペルを攻略することは出来ない。

一度回避に失敗した弾幕を避け、更にその先にある未踏の領域を飛び越えることなど果たして出来るのか——？

「わたしの残機は無限だぜええっ!!」

胸に巢食う疑念と弱気を無視して、魔理沙は雄叫びを上げながら飛翔した。

迫り来る弾丸の一つ一つに恐怖を感じる。

当たれば、またあのおぞましい激痛を味わうことになるのだ。

事前に知っていれば我慢出来るような生半可なものではなかった。むしろ、知っているからこそ足が竦み、動きが鈍る。

しかし、魔理沙は止まらなかつた。

痛みへの恐怖を凌駕するだけの意志や目的があつたわけではない。

ただ、何の変哲も無い意地だけがあつた。

未だに引き摺る痛みと、直撃への恐怖が、明らかに最初の時よりも魔理沙の動きを鈍らせている。

元々が過剰気味の加速力を持て余していた魔理沙の機動は、徐々に精密な弾幕の包囲に追い詰められ、やがて焦りが集中力に綻びを生んで致命的な瞬間を作り出した。

移動した先。待ち構えていたかのように、複数の弾が迫る。

その一発の軌道上には、魔理沙の頭があつた。

——頭は、マズイよな。

己の失敗を悟り、恐怖や絶望より先にそんな他人事のような思考が走つた。

一体どんな痛みが襲い掛かるのか、もはや想像すら出来ない。

弾丸はそのまま魔理沙の右目に迫り、そして——。

『時よ、止まれ』

気が付くと、魔理沙は弾幕の範囲から抜け出して、藍の背後を取つていた。

正確には、何者かに抱えられて全く別の場所に移動していた。

全てが唐突で、魔理沙の知覚の範囲外で行われた出来事だった。

「……えい!？」

記憶が飛んだような感覚に陥る。

魔理沙は慌てて、自分を抱える腕の主を見上げた。

「さ、咲夜!？」

魔理沙を弾幕の中から救い出したのは、いつの間にか現れた十六夜

咲夜だった。

驚くと同時に、現状への全ての疑問に答えが出た。

あの瞬間、咲夜は自らの能力によって時間を止めて乱入し、魔理沙を抱えて場を離脱したのだ。

赤いマフラーをなびかせ、咲夜は腕の中の魔理沙を一瞥した。

「最初に謝っておくわ。ごめんなさい、魔理沙」

「あ……いや、何言ってるんだぜ？ 助けられたのはわたしなんだから……」

「この勝負はアナタの負けよ」

咲夜の言葉に魔理沙は眼を丸くした。

一方の藍は、乱入者に対して警戒を怠っていなかったが、その相手が単なる無知ではないらしいことを察して小さく鼻を鳴らす。

「理解した上での行動なら、とやかくは言うまい。」

事前に宣言したならばともかく、スペルカードを発動した段階での他者の乱入は反則だ。霧雨魔理沙、この勝負はお前の負けということになる」

「げっ、マジかよ……!」

「しかし、その紅魔館のメイドには感謝しておくんだな。『不慮の事故』という奴から救われたんだ」

「私のことを知っているとはね」

「我が主は全てを知っている」

藍と咲夜。二つの冷たい視線が、静かにぶつかり合っていた。

お互いが、向かい合う相手に対して奇妙なシンパシーを感じている。

しかし、それは決して友好的なものではなく、同族嫌悪にも近い敵意と殺意だった。

自らの主へ向ける尊崇の念が、二人の従者の間で反発し合うのだ。「丁度いい時に勝負の区切りが付いた。私はここで退かせてもらう」

「あ、待てよ！ まだわたしは諦めちゃいないぜ！」

「私の仕事は済んだ。もう、お前如きを相手にする必要も無い」

血気盛んな魔理沙に対して、一貫して冷ややかに見下した対応を続ける。

そんな藍を、咲夜は射抜くように見据えていた。

「分かるわ。主の命令が絶対ということね」

「そういうことだ」

「とても、よく分かるわ。きつと、無念極まりないのでしょね。そんな主の命令を完遂出来ない時の気持ちというのは」

「……ああ、きつと。もし次に会う時があるのなら、試してみるといいだろう」

「是非、そうさせてもらおうわ」

一触即発の雰囲気静かに醸し出しながら、しかしお互いに冷静なまま咲夜と藍は相手を見送った。

藍がその場を去り、残されたのは不満げな表情の魔理沙と、一変して警戒を解いた咲夜だった。

「クソツッ！ 言いたいだけ行って行きやがって！」

「落ち着きなさい。あんな奴にこだわることはないわ」

「いいや、こだわるぜ！ あいつに何一つ通用しないまま勝負が終わっちまったんだからな！」

魔理沙はもがくように咲夜の腕から抜け出すと、背中を向けてしばらく悪態を吐いていた。

咲夜は黙ってそれを見守った。

「……悪い。助けてもらったのに、なんか当たるようなこと言っちゃまって」

「いいのよ、悔しいのは分かるわ。でも、上手く感情をコントロールしないと、さっきの奴には勝てないわよ」

「なんだよ、さっきの弾幕（ごうく）を見てたのか？」

「最後の部分だけ少し。」

恐れを殺すことは難しいでしょうけれど、せめて闇雲に挑むことだけはやめなさい。不必要な戦闘もね。退くと言うのなら、今は行かせれば良かったのよ」

「そんなこと……出来ないぜ」

魔理沙は俯き、唇を噛み締めた。

「霊夢も、一緒に来てただけけどさ。あいつだけ特別扱いだったよ。わたしは邪魔だから、さっきの奴が相手をしてたんだ。」

多分、霊夢はもうこの先にある異変の原因まで辿り着いてる。わたしは敵の手下にあしらわれて、拳句やる事は済んだから放り出されたってわけだ」

「……あの博麗の巫女は、私から見ても異常よ。魔理沙が弱いわけではないわ」

「へへっ、フォローありがとうよ。」

霊夢が別格だつてことくらい、わたしも分かっている。だから、どんな勝負からだって逃げるわけにはいかないんだ。凡人のわたしじゃあ、一度立ち止まったらあいつと肩を並べられないからな」

咲夜は不思議に思っていた。

自分の気持ちを吐露する魔理沙の顔には、霊夢に対する羨望の色こそあっても嫉妬などの負の感情が見られない。

何故、そこまで純粹にあの巫女との対等な関係を望むのだろう？

湧いた疑問はそのまま言葉となった。

「何故、彼女と対等になりがたるの？」

「知ってるか？ 本当の友達つてのは対等な関係じゃなきゃなれないらしいぜ」

笑顔で恥ずかしいことを言つてのける魔理沙に対して、咲夜は呆れたように苦笑を浮かべた。

魔法使いらしからぬ純粹な少女だと思っていたが、ここまで夢見がちで乙女な考え方をするとは思わなかった。

そして、それと相反するように頑なで強い。

魔理沙の持つ愚直なまでの意地は、全く正反対な性格の咲夜を何処か惹きつけていた。

「あの巫女の何処にそんな好かれる要素があるのか分からないわ。博麗の巫女には、人に好かれる性質でも備わるのかしらね」

「どっちかというと、放っておけない性質だろ。しかも、親子揃ってさ」

「先代巫女のこと？ 今回の異変に何か関わっているのかしら」

「道中で話すぜ。とりあえず、先に進もう。咲夜も今回の異変を解決しに来たんだらう？」

「ええ。途中で足取りが途切れていて、騒霊だの春の妖精だのと無駄に戦って時間を潰したけどね」

「ああ、霊夢が結界を壊したから来れたのか」

二人して石段の上を目指す。

疲労と痛みで安定しない魔理沙の飛び方に気付くと、咲夜はさりげなく寄り添って肩を貸した。

「悪いな、何から何まで」

「いいのよ。……とところで、魔理沙」

「何だよ？」

「アナタ、少し臭うわよ」

「……う」

「この臭いは……」

「そ……その、悪い。実は、さっきの弾幕ごっこで一発貫つた時にさ……ずっと寒かったし、当たった時の痛みが強烈すぎて……」

「まさか」

「……少し、チビっちゃった」

「ええと……」

「何も言うな！ わたしだって乙女だぜ！ 傷つくぜ!!」

言われたとおり、咲夜はそのまま口を噤んだ。

余計気まづくなったような気がした。



その戦いは、息を呑むような美しさに溢れていた。

蝶を模した幽々子の弾幕は、文字通り空を舞うように飛び交い、淡い光の尾を引いて空中に独特のアートを築き上げている。

幽々子自身から発せられる霊的な力が扇の形となって背後に広がり、一枚の絵画のように完成された光景となっていた。

儂い美しさを印象付けるその弾幕の凶悪な実態が、そこへ残酷さを付け加える。

輝く蝶の一羽一羽が、当たった対象の生命力を限界まで吸い取るといふ性質を備えていた。

そして、圧倒的密度の弾幕の中を巫女が舞う。

強者が競い合う弾幕ごっこは、まさに人智を超えた幻想的な美しさに満ちている。

しかし、実際に戦う当事者達にとってはそんな曖昧な感慨など抱けるものではない。

スペルカードの内容を撃ち切り、優雅に微笑む幽々子の額には一筋の汗が流れていた。

「なんとまあ……本当に恐ろしい相手ね、博麗の巫女というのは」

内心の戦慄を表に出さないのは、上に立つ者としての威厳ゆえにある。

普段如何に気の抜けた人柄をしても、彼女には忠実な従者に仰がれているという自覚と責任があった。

しかし、それらを以ってしても目の前の現実には揺らぎそうになる。

ここまで繰り出された数枚のスペルカードを、霊夢は全て無傷で避け切っていた。

「綺麗な弾幕だわ。その見た目に反して、威力の方はえげつないわね」

巫女服の裾がボロボロに朽ちているのを一瞥して、霊夢は動揺した様子もなく淡々と呟いた。

幽々子の弾幕に触れた部分だ。

これが生身に当たった場合など考えたくも無い。

そう思いながらも、一切の恐怖や萎縮をしない静水のような心構えが霊夢には備わっていた。

「妖夢があれだけ打ちのめされるはずだわ。私の心も折れちゃいそう」

「ああ、あいつ元気？」

「どの面下げてそんなこと言えるのかしら？ 貴女って信じられない

くらい残酷か凶太い性格ね。

あの娘はスキマで送られた座敷で座り込んだまま動かないわ。傷一つないのに、もうしばらくはまともに戦うことが出来ないでしょうね」

「柔い奴ね」

「貴女が豪胆すぎるのよ。お母様の教育の賜物かしら？」

「その通り」

迫り来る弾幕の中でも平坦なままだった表情が、その時だけ僅かに綻んだ。

何処か誇らしげな微笑を見て、幽々子はこの二人の巫女の間にある深い絆を感じ取った。

完璧にも思えるこの博麗の巫女を揺るがすのならば、やはり母親の存在から攻める必要がある。

しかし、同時にそれが下策であるとも分かっていた。

彼女は母の存在を強みにしか感じていない。

例えば、今この場であの亡霊を操るなり消滅させるなりしても、目の前の巫女はそれを切欠に更なる別種の強さに目覚めるような気がしてならなかった。

元から強大な存在が持つ底の知れなさとはまた違う。

予想も付かない方向へ成長——進化するような未知数の力を秘めた、幽々子の会ったことのない『強い人間』だった。

「正攻法では倒せる気がしないけれど」

——それ以外の方法も無粋ね。

敗北の兆しを見ても、なお折れぬ。

優雅な仕草で次のスペルを発生させる幽々子の姿は、冥界の姫として恥じぬ威厳に満ち溢れていた。

それに対する霊夢もまた、幻想郷を管理する役割を担う者として、全ての障害を貫く鋭さが極まっている。

直線。曲線。高速。遅速。

入り乱れる蝶の舞を、霊夢は縦横無尽に飛び抜けた。

周囲を浮遊する二個の陰陽玉から放たれた弾幕は、あろうことか射

線を捻じ曲げて標的に飛来する。

正確無比な追尾弾だ。

威力は低いけど、どんな位置にいても狙い撃たれ、しかも避けられないほど正確な精度に、幽々子は感嘆した。

逆に自分の弾幕は、命中するビジョンが全く浮かばない。

焦りを見せぬよう、常に浮かべていた笑みがついに引き攣つたものへと変わりつつあったその時――。

霊夢の背後で凄まじい発光が起こった。

勘が全力で危険を告げる。

それは予期せぬ不意打ちだった。霊夢と、何より幽々子自身でさえ。

霊夢が丁度その時背にしていたのは、西行妖だった。

既に綻びかけていた封印から溢れた『死に誘う力』が、弾幕となつて辺り一面へ無作為にばら撒かれたのだ。

意志を持たぬ桜の木が放ったそれは、ただ命を奪う津波となつて霊夢に襲い掛かった。

――背後からの不意打ち。

――既に認識している敵から意識を逸らすことへの躊躇。

それらが、霊夢の神掛かった回避にわずかな遅れを生じさせた。避けられない。

霊夢は悟り、肩越しに迫り来る死を見つめる。

それをただあるがままに受け入れるつもりは、ない。

「――霊夢っ!!」

霊夢自身の足掻きよりも早く、そこに力ある声が割り込んだ。

地上から放たれた無数の光弾が、霊夢に降りかかる全ての弾幕を打ち消した。

放射線状に一齐に放たれたそれは、弾幕というより散弾と表現した方が正しい。

二人同時に射線の元へ意識を向け、視界に捉えた霊夢と幽々子は驚愕に眼を見開いた。

上空に拳を突き出した構えのまま、真つ直ぐに霊夢を見据える先代

巫女の姿があった。

亡霊が自らの娘の名前を呼んだのだ。

「……あらら。これ本当？」

その日一番の驚きに、幽々子は呆けたように笑うことしか出来なかった。

動揺していたのは霊夢も同じだったが、意識の建て直しは遥かに早かった。

先代の姿を見た瞬間。

自分が母に名前を呼ばれた瞬間。

霊夢の中で驚愕を凌駕して、体を突き動かす強い使命感が湧き上がっていた。

幽々子の隙を逃さず、一気に接近してスペルを発動する。

「夢符『二重結界』！」

前面に展開された二層の霊符の布陣から成る結界が、幽々子を吹き飛ばした。

強固な防御を攻撃に転じたその一撃は絶大な威力を發揮し、幽々子自身に大ダメージを与えると同時に背後に展開されていた霊力の扇を霧散させた。

「ちよつと、納得いかないけれど……勝負あり、かしらねえ……」

酷い虚脱感を抱え、落ちるままに任せながら、幽々子は諦めたように笑った。

いずれも乱入による反則負けだが、意図せぬこととはいえ幽々子の所有物扱いである西行妖の暴走が先だ。

弾幕ごつこの結果は、霊夢の勝利で締められた。

しかし、異変がまだ解決していないことを霊夢は察していた。

墜落する幽々子の姿が、その途中で掻き消える。

西行妖の封印が解けかかっている影響だった。

霊夢は幽々子と西行妖の間にある因果関係を知らない。

ただ、自然と警戒の対象は西行妖の方へと移っていた。

勘が告げているのだ――。

「こいつを封じないと、本当の異変解決にはならないようね」

物言わぬ桜の木を相手に、もはやスペルカード・ルールなど意味を成さない。

しかし、純粋な妖魔調伏に関しては博麗の巫女こそが専門家であった。

満開ではないとはいえ、既に籬の外れかけた封印を押しつけて放たれる西行妖の力は、奇しくも弾幕の形を取って周囲に拡散した。

幽々子の弾幕に似た、生命を吸い取る力。

だが弾幕用に調整などされていない、それら一つ一つがもはや完全な死を与える恐るべき塊となって無数にばら撒かれ始めている。

一発でも当たれば即死するしかない状況の中で、霊夢はやはり一切ブレることなく冷静に対処した。

陰陽玉二つを前面に出し、それを支点に強力な結界を形成する。

博麗の秘宝である陰陽玉は、巫女の霊力を増幅させ、様々な形に変える不思議な特性を持っていた。

それに加え、二つ合わせることで効果は更に倍増する。

歴代の博麗の中で最高の資質を持つ霊夢が、この秘宝の力を借りて結界を展開すれば、それは如何なるものにも貫けないほど強固な壁となった。

その結界で死の奔流を乗り切り、解けかかった封印に更なる封印を重ね掛けする。

霊夢はそういった流れを想定していた。

この段階で、下にいる先代巫女の存在は思考から切り離している。

配慮している余裕は無いし、何よりも無意味だ。

生きる者には脅威となるこの力が亡霊に与える影響は未知数であり、全くの無害である可能性もある。

結局戦うことのなかった八雲紫が万全の状態で近くに居る以上、先代を見捨てることも在り得ない。

それらの要素を計算し尽し、無駄な感情による判断のブレさえ排除した今の霊夢は、まさに完璧な博麗の巫女として機能していた。

四方八方へ無差別に放たれた西行妖の死の弾幕が迫る。

恐怖は無く、躊躇いも無かった。

霊夢はただ、自らの使命を遂行することだけを考えていた。ただ、それだけを。

「――守れ！」
咄嗟に。

迫り来る脅威がもはや眼前にまで達した時、霊夢は陰陽玉の一つを動かしていた。

霊夢の手元から離れた陰陽玉が先代の下へと飛翔し、その前に立ち塞がって死の奔流から守る為の結界を形成する。

全てが、霊夢の博麗の巫女としての思考の外で行われたことだった。

無意識、とは少し違うような気がする。

感情に流されるほど、愚かでもない。

霊夢は自身の突発的な行動に驚くこともなく、何処かのんきに納得していた。

「うん、これは……まあ仕方ないことよね」

むしろ当然かもしれない。

そう考え直すほど、奇妙な満足感が湧いていた。

西行妖の弾幕が結界に接触し、その凄まじい圧力に対して、陰陽玉一つとなって弱体化した結界が悲鳴を上げる。

しかし、霊夢は自らが判断を誤ったという後悔など微塵も抱かず、不敵に笑ってこの苦境に挑む決意を固めていた。

そこに在ったのは博麗の巫女としての責務ではなく、博麗霊夢としての意志であった。

其の十三 「少女幻葬」

——失敗した！

迫りくる西行妖の死の弾幕とせめぎ合う霊夢の結界に守られながら、私は自分自身を罵った。

くそっ、なんてこった！

私が霊夢の足手まといになってるじゃないか。

霊夢と幽々子の弾幕ごっこが始まり、その圧倒的にして幻想的な光景に眼を奪われていた私は、しばらくして活性化し始めた西行妖に氣付いた。

状況を見る限り、弾幕ごっこは霊夢優勢で進んでいたみたいなのに、全く嫌なタイミングで横槍を入れてくれるもんだ。

……いや、やっぱりアレかな。

霊夢がスペルカードを順調にクリアしていくのを見て『やったか!』とか内心で叫んでたのが駄目だったのかな？

こえー。フラグこえー。

冗談はともかく、不穏な空気に気付いた私は体内で練り上げた霊力を拳に集中させて、状況を見守っていた。

そして案の定、いきなり西行妖から放たれた無差別な弾幕が霊夢を不意打とうとした瞬間に、私も行動を起こしたのだ。

実のところ、これまで霊力って拳に込めて使ってたから、遠距離攻撃が出来るのか不安があったのだが、なんとかイメージ通りに放つことが出来た。

突き出した拳から発射された霊力の散弾が、西行妖の弾幕を一気に掻き消す。

漠然とした力のコントロールでは、ぶっつけ本番でこうも上手くはいかなかっただろう。

偉大なる先駆者様に感謝だ。

やっぱり、霊力で飛び道具っていったらコレだよな。

ありがとう、師範。私も貴女のような老い方をしたいもんです。

まあ、相変わらず威力が弾幕仕様じゃないのでスペカとしては使えそうに無いけどね。

っていうか、この技って近距離で真価を發揮するから、むしろ肉弾戦の切り札が増えただけじゃね？

相変わらず習得する技の内容に偏りがありすぎる。

……うん、なんだかんだ言っつてこの技も今後鍛えていくつもりですけどね。

とりあえず、溜めていた霊力の大半を消費したこの援護が功を奏し、霊夢を無事守り切ることが出来た。

弾幕ごつこの邪魔をするつもりはない。

むしろ、その邪魔を遮ったつもりだ。

この異変に決着を付けるのは霊夢、お前だよ。

頑張れ、霊夢。お前がナンバーワンだ。

私は最後まで見守っているぞ！

「霊夢っ!!」

そんな万感の想いを込めて名前を呼ぶ。

一瞬驚いた様子の霊夢だったが、すぐに自らの責務を遂行した。

幽々子に肉薄し、ボムによって吹き飛ばす。

その一撃によって、弾幕ごつこは決着した。

——— あるいは、霊夢が異変解決の為に戦う姿って私今初めて見るんだよね。

弾幕を避ける一連の動きから、最期の一撃まで、見事な戦い方だった。

博麗の巫女として修行を付けていた当時から今までをハッキリと覚えている私としては、実に感慨深い。

強くなった。

そして、成長したなあ……霊夢。

しかし、そんな感動を抱いていられたのも僅かな間だった。

忘れていたが、西行妖が活性化し始めているのだ。

完全ではないにしろ、集められた『春』によって桜は八部咲きほどもで開花しており、それに伴って妖気とも瘴気とも取れる不気味な力

が溢れ出している。

私が一時的に掻き消した弾幕の比ではない、圧倒的物量の死が一気に撒き散らされた。

その大部分は空中に飛散し、結果として霊夢が標的となってしまうているが、地上に向けても少なからず降り注いでいる。

当然、私は直撃コース。

弾幕ごっこなどというルールに沿ったものではなく、ただ埋め尽くすだけの死の弾幕に対して、私は亡霊となった身で果たして何処まで避けられるのかと身構え――。

そして今、私は霊夢に庇われている。

陰陽玉の一つを私の方へ飛ばし、霊夢は残りの一つで結界を張って弾幕から身を守っていた。

しかし、地上と空中では襲い掛かる弾幕の量も密度も違う。

同じ陰陽玉を基点にした結界であっても、霊夢のそれは津波のような力の奔流に飲まれて今にも砕けそうになっていた。

失敗した。

何をやっているんだ、私は。

霊夢の手助けをしようとして、結果的に足を引つ張っているだけじゃないか！

と……とにかく、なんとかしなくっちゃ！

畜生、肉体さえあれば。この状況なら、もう躊躇いもせず西行妖をぶち折ってでも止めてやるのに……！

けど、無いものねだりをしても意味がない。

なんとか今ある材料で状況を打破しないと。悠長に悔やんでいる時間も勿体無いのだ。

とはいえ、亡霊である今の状態でまともに扱える力など、事前に散々確認したから霊力以外に無いことは分かっている。

その霊力も、あの散弾をぶつ放した時に予想以上に消耗してしまった。

残った力でもう一度あの技を使っても、私自身も西行妖の力に飲ま

れようとしている現状では一時凌ぎにしかならないだろう。

何か……この搾りカスみたいな霊力を増幅する手段が必要だ。

——陰陽玉。

今も私の眼前で結界を形成して守ってくれている博麗の秘宝を一瞥する。

やっぱり、こいつが鍵か？

でも、これって二個揃って更に効果が倍増するんだよな。

果たして一個でどれだけの効果が見込めるものか。

……いや、分かつてる。

既に打開策は考えてあるんだ。

ただ、あまりに不確定要素や障害が多すぎるんだ。

——陰陽玉に霊力を込め、それを更に『黄金の回転』で回して『無限に続く力』を乗せて打ち出す。

肉体と共にあらゆる技を失ってしまった私だが、この『黄金の回転』だけは一種の力の法則として効果を発揮出来るはずだ。

しかし、ここに最大の障害にして問題がある。

未だに放射され続ける西行妖の死の弾幕を防いでいる結界を、一時的に解除しなければ陰陽玉は使えない。それが可能なタイミングが訪れるのか分からない不確定さはまだいいとして……。

私は『黄金の回転』——即ち『黄金長方形の軌跡』で回転させることが未だ出来ないのだ。

地底で勇儀と戦った際に偶然掴んだこの回転の技術は、しかし改めて修行してみると酷く難航した。

この回転の基準となる『黄金長方形』とは自然や生命に秘められたスケールであり、まずそれを深い観察で以って見つけ出さなくては行けない。

世界遺産となる程の美術品を作った芸術家達だけが知ることの出来た形だ。

私には、どうしてもそれを見つげ出すことが出来なかった。

あるいは、原作のように瀬戸際に追い込まれた時のような集中力や感覚が必要なかもしれない。

そして、これが更に致命的な障害なのだが——ここは『冥界』であつて、『黄金長方形』を秘めた自然や生命が存在しない、死んだ世界なのだ。

周囲の庭木や、目の前の巨大な桜の木さえ、現世に在らざるもの。そこに生命は込められていない。

拳句の果てに、私自身でさえ亡霊。

……駄目だ。

改めて考えてみると、やっぱりこの策は詰んでる。

そもそも、この『黄金長方形』は現世のものであつても、全てに宿つているわけではない。

あくまで秘められたものなのだ。人間の肉体に宿すにも訓練が必要だつたみたいだし。

畜生、せめて可能性が欲しかった。

この冥界で、何でもいいから生きた存在が——。

いや、待て。

在つたぞ。

この冥界にも生命が在つた。

しかも、根拠無しに『黄金長方形』を宿していると確信出来る存在が在つた。

これなら見つけ出せるかもしれない。

だって、私はあの子を十年以上見てきたのだから。

試してみる価値はある。

いや、きつと出来る。『黄金の回転』が出来るはずだ——私の自慢の娘である霊夢を見ながら回転させればっ！



「マスタースパーク！」

八卦炉から放たれた閃光が、弾幕を飲み込む。

しかし、西行妖の放つ力は弾幕ごっこ用のボムで相殺し切れる程脆弱なものではなかった。

魔理沙の砲撃が通り抜けた後には、変わらず飛来する無数の死の光弾があった。

「またかよ!？」

以前も経験した己の力不足に対して悪態を吐く。

これが人間である自分の限界だということなのか。

人外の力を前にすれば、ルールに守られた決闘の為に備えた力や技術では容易く捻じ伏せられてしまう。このひ弱な地力こそが自分の全てなのか。

一瞬回避を忘れ、迫り来る弾幕を睨み付けることしか出来なかった魔理沙を救ったのは、能力を発動させた咲夜だった。

瞬き一つ分の間に、過程を飛ばして結果だけが発現する。

魔理沙を守るように配置されたナイフを模した弾幕が、時間停止の解除と共に一齐に発射された。

出力では勝るマスタースパークでも打ち消すことの出来なかった西行妖の力を、複数の弾幕を同時に当てることで次々に対消滅させていく。

「迂闊よ、魔理沙」

「悪い。助かったぜ」

当たれば怪我や痛みではなく、確実に即死する恐るべき弾幕は西行妖を中心に放射線状に発生している。

近づくほど密度が高くなるのだ。

不用意に突進した魔理沙を、咲夜は上空へと引き上げた。

「あれは当たれば根性で耐えられるような代物じゃないわよ。慎重に行きなさい」

戒めるように告げながら、魔理沙の眼前に手に持ったナイフを突きつける。

咲夜の自慢のコレクションの一つであるそれは、刀身の部分が無残にも朽ちさせてボロボロになっていた。

スペルカード・ルールを無視するのならば、弾幕を切り払うことで接近出来ないものかと試してみた結果がこれだった。

あの光弾は死の力を内包している。

現世の物を全て侵蝕し、殺してしまうのだ。

人間である咲夜と魔理沙には一発でも致命傷となる脅威だった。

「そうもいくかよ。あそこには霊夢がいるんだぜ」

しかし、それは今まさにその死の弾幕に飲み込まれようとしている霊夢も同じことだ。

西行妖の最も近くに居る霊夢は、もはや津波と化した光の奔流に囲まれ、結界によってかろうじて持ちこたえているにすぎない状態だった。

「とにかく、一瞬でいいんだ。この弾幕を消して、霊夢を動けるようにしてやらなきゃ」

「無茶をすれば、まずはアナタが死ぬわよ?」

「わたし達だけじゃ手詰まりなのは変わりないだろ。あの妖怪桜を封印出来そうな能力を持った霊夢が、今一番近くにいるんだぜ」

感情的に叫びながらも、その言葉にある程度の理屈が伴っていることを咲夜は感心した。

こういうところが、霧雨魔理沙という少女の非凡なところだな、と思う。

ただ友人の為に感情を先走らせるだけではなく、状況を打開する為に冷静であろうと努力出来るのだ。

「……でも、実際にどうするつもり? スペルカードのボムではあの弾幕を消すことなど出来ないわ」

「さつきやつてた咲夜のボムでも駄目か? どういう仕組みなんだ?」

「パチュリー様から頂いた、このサポート用魔具によって形成した魔力のナイフを、時間停止で多重展開して一斉に発射したのよ。」

展開できるナイフの量、威力共にあれが限界だわ。とても、弾幕の中へ切り込める程の制圧力を出せないわね。かといって、物理的なナイフでは歯が立たない」

「なるほど、大体予想通りの理屈で安心したぜ」

咲夜の説明に、魔理沙はむしろ笑みを浮かべて頷いた。

「咲夜、お前の能力って多分自分が触れている物なら時間を止めた世

界の中でも動かせると思うんだが……どうだ？」

咲夜は思わず眼を見開いて、魔理沙を見つめた。

「例えば、私を能力の影響から外すことも出来るんじゃないか？」
すぐには答えることが出来なかった。

あまりに唐突に、自分の持つ能力の特性を見抜かれたからだった。他者から発動自体を悟られることがない咲夜の能力は、強力であると同時に実体を掴ませない秘匿性にも優れている。

時間を止めるという漠然とした効果だけが認識されるだけで、その止まった世界を体験出来ない以上、継続時間や範囲など具体的な性能を酷く把握しにくい。

その一端を、魔理沙は正確に分析してみせたのだ。

「……ええ。私に触れている物は任意で時間停止を解除することが出来るわ」

咲夜はかろうじて平静を装いながら、魔理沙の質問を肯定してみせた。

もし、これが魔理沙ではなく見知らぬ他人であったなら、最大限の警戒とあるいは口封じの為の行動を起こしていたかもしれない。

この能力は咲夜の生命線だった。

戦闘者である咲夜にとって、自身の能力を暴かれることは強い危機感を抱かせるものなのだ。

そんな咲夜の内心を知ってか知らずか、魔理沙は満足そうな笑顔を浮かべた。

「よっしゃー！ いいぜ、これで一発逆転の策が出来る」

「でも、どうして私の能力を理解出来たの？ アナタに見せたのは、以前の異変の時に弾幕ごっこで数回程度でしょう？」

「お前のスペルカードを攻略する為に研究しまくったからに決まっているだろ」

魔理沙はあつけらかんと言いつつ切った。

確かに実戦の中にこそ多くのヒントがあった。

時間停止の中で咲夜が動けるのなら、身に着けている衣服や投げているナイフはどうなのか？

標的が止まっているのなら、何故そのまま攻撃しないのか？

それらの要素を、魔理沙は見逃すことなく記憶し、日々の中で分析し続け、その結果真実を導き出したのだ。

あまりに単純で、そして明確な答えだった。

咲夜はあの日、弾幕ごっこで怪我を負いながらも、敵であったパチューリから講義を受け、必死に何かを書き記していた魔理沙の姿を思い出した。

あの姿を、魔理沙はきつと毎日のように続けているのだろう。

咲夜の中にあつたわずかな警戒心が消え失せ、自然と微笑みが浮かんでいった。

「何笑ってるんだよ？」

「いえ……ただアナタを尊敬しているの」

「な、なんだそりゃ？」

唐突な物言いに、魔理沙は頬を赤くした。

しかし、切羽詰った現状をすぐさま思い出すと、咳払い一つして咲夜に顔を向け直した。

「よしっ。それじゃあ、わたしの策を教えるぜ。咲夜の協力が必要な

作戦だ。だから――」

「ええ、力を貸すわ」

皆まで聞くまでも無かった。

咲夜は無条件で魔理沙の提案を呑んだ。

今、この時をもって霧雨魔理沙を自分と対等の存在だと、彼女は認めただった。



そして、事態は動いた。

軋む結界の限界が近づくと共に、ただジリジリと死の淵へ追い込まれていた霊夢は、唐突に気配を感じ取った。

大局的な、今の苦境を切り崩す大きな流れの変化の気配である。

もはや天啓の領域にまで達した勘によるものだった。

「靈夢はその予感を疑う余地も持たない。」

「靈夢ー！」

飛び込んできた親友の声を聞き取り、奇妙な安堵を感じて、自然と苦笑が浮かんだ。

「いつくぜええーっ!!」

魔理沙の掛け声の意味を、靈夢は全く誤解しなかった。来るべき瞬間に備え、結界の解除とこの場から動き出す為に身構える。

そして、その数秒後に現状を文字通り打破する為の一撃が飛来した。

いや、正確には一撃ではない。

異なる二方向から同時に放たれた二発のマスタースパークが、十字砲火となって靈夢の眼前まで迫っていた西行妖の弾幕を一気に飲み込んだのだ。

その交差点で相乗的に威力を向上させた砲撃は、死の弾幕を完全に相殺して打ち消した。

これが魔理沙の策だった。

咲夜の時間停止による一斉攻撃を、自らのマスタースパークによって行ったのだ。

一発目を撃った直後に時を止め、別方向から二発目を放ち、時を動かす。

それが二回分のボムの同時使用を可能にしていた。

更に、そこへ加えて咲夜自身もあっていただけの弾幕を叩き込んでいく。

視界を覆い尽くさんばかりだった弾幕が一瞬完全に消え失せ、靈夢の眼前に道が開けた。

その瞬間が訪れることを、半ば確信していた靈夢は勝機を逃さずに動いた。

一気に西行妖の本体まで接近し、陰陽玉を中心に残された全ての符を展開して封印結界を生成する。

再び力を発揮する猶予など持たせなかった。

その力の発生源ごと封じ込める。

元々在った封印に更に重ね掛けする形で霊夢の結界が西行妖を拘束し始め、それに抵抗する力がぶつかり合って火花を散らした。

軋みを上げる音と共に、再び拮抗する状況。

しかし、今は霊夢の攻勢に移った拮抗だ。

押し切れれば、霊夢の勝ちだった。

「……ちっ、今一步足りないか」

そこで霊夢は初めて悪態を吐いた。

自身の力も含めて、持ち得る全てを総動員した勢いに対して、しかし西行妖は足掻き続ける。

霊夢は冷静だった。

だからこそ、現状が拙いことを理解出来た。

これ以上、押し込む力を上げることは出来ない。

このまま拮抗が続いてしまえば、たった一人の人間の力と長年封印されてきた妖怪桜の無尽蔵にも近い力のどちらが競り勝つのか目に見えている。

何か、あと一押しが必要だった。

この状況を一気に崩してしまえるような、更なる力の後押しが――

「霊夢っ！」

瀬戸際で、もう一度あの声が聞こえた。

「かあさ……っ」

「受け取れえ!!」

咄嗟に視線を走らせた先。

地上への弾幕も同時に消えた瞬間、そこにいた先代巫女もまた行動を起こしていた。

彼女は霊夢以外にも陰陽玉を操る資格のある、かつての博麗の巫女だった。

張られていた結界を解除し、残された霊力を全て陰陽玉に注ぎ込む。

そして、そこに『黄金の回転』を加えた。

自らの視界に捉えた博麗霊夢という生命の中に隠されている『黄金長方形』のスケールを見つけ出し、そこから描き出される無限のうずまきの軌道に沿って正確に陰陽玉を回転させる。

知識の無い霊夢にとって、その現象は人智を越えた在り得ないものに映った。

陰陽玉の回転に合わせて、定められた霊力が加速度的に増幅していくのだけがハッキリと感じられた。

それを中心に台風でも発生しているかのような力の流れが荒れ狂う。

それこそ無限とも思える力の塊となった陰陽玉を、先代は霊夢に向けて蹴り飛ばした。

正確には霊夢の眼前。ぶつかり合う西行妖と霊夢の力の交差点に、無限の力を定められた陰陽玉が飛び込んだ。

拮抗は一瞬で崩れ去った。

回転する陰陽玉は、自らに定められた力とぶつかり合う二種類の力の全てを巻き込んで、それらを一点に束ねながら螺旋状に西行妖の中心へと一気に潜り込んだ。

霊夢の知識や優れた感性を以ってしても、今日の前で起こっている現象が理解出来ない。

しかし、現状に対する判断だけは誤らなかつた。

回転する陰陽玉と自身の持つ陰陽玉の二つを並列させ、それを基点に西行妖へ封印を打ち込む。

もはや抵抗は無意味だ。

「散るがいいわ、死の桜！」

裂帛の気合いと共に、霊夢の形成した封印結界が西行妖を完全に封じ込めたのだった。

——ここに、幻想郷の『春』を奪った冥界の異変は終息した。



桜の花びらが、より一層多く舞い散っている。

これらが全てこの世ではなく、目の前の妖怪桜から咲いたものと分かつてはいるが、この幻想的な光景だけは素直に美しいと思えた。

もう、西行妖から死の気配は全く感じない。

それはつまり、霊夢が解けかかったこの木の封印を再び成功させたということだ。

花はまだ多く枝に宿っているが、これらもおそらくはその内完全に散ることだろう。

西行妖は再び咲かない桜の木に戻り、地上には遅れた春が訪れる。

これにて異変は解決、ということだな。

先ほどの激戦が嘘のように静まり返った中で、私は気の抜けた心境でぼんやりと西行妖を見上げていた。

「——母さん」

そんな私の下へ、霊夢がゆっくりと降りてくる。

服が一部ボロボロになっているが、外傷は見当たらない。

それを確認して思わずホツとしてしまう私は、何処まで行っても過保護な親なのかもしれないな。

霊夢を一人前の博麗の巫女として認め、地位を譲ったにも関わらず、ずっとこんな調子なのだ。

でも、仕方がないよね。

私は霊夢のお母さんなんだもの。

「見事な手並みだった」

「え……」

考えてみれば、霊夢が異変を解決する現場に立ち会ったのって今回が初めてなんだよね。

以前の紅霧異変は有耶無耶の内に解決しちゃったし。

予想以上の戦いや予想外のトラブル。そんな問題が立て続けに起こる中で、霊夢は見事今回の異変を解決したのだ。

私はそれがとても誇らしく思えた。

胸を張って言えるよ。

これが私の自慢の娘ですってね。

「立派になったな、霊夢」

色々な言葉が浮かぶのに、それらは上手く形にならず、結局私は万感の想いを込めて一言。

そして、あとは微笑み掛けることしか出来なかった。

これで私の今の気持ちが少しでも伝わっただろうか？

霊夢は何処か呆然と私の言葉を聞きながら、じっと見つめていた。

………うん、何故か会話が続かん。

冷静に考えてみれば、今の状況は霊夢にとって疑問だらけのはずだ。

多分、霊夢は地上で私が死んでいることを知っただろうし、その私が亡霊になってこんな所にいる理由なんか分からないだろう。

安心してくれ、霊夢。

私にも全然分からん！

だから、色々尋ねられても答えようがないんだけど、かと言ってこの沈黙が何を意味するのも分からなかった。

なんだろう？ ひよつとして、心配したのに何食わぬ顔で亡霊やっているから呆れてたりするんだろうか？

眼が覚めてからこっち、とりあえず霊夢との合流を待っていたが、こうして事態が収まった後にこれからどうすればいいのか全然考えてなかったな。

うーん、どうしましょ？

いつの間にか幽々子もいなくなってるけど、もう私帰っていい？

いや、もちろん霊夢と一緒に地上の我が家へね。

帰ってどうにかなるとも思わんけど、とにかく慌しい展開とそれに伴う混乱の連続で疲れてるから、一息入れたい。

それが駄目なら、せめて誰か事情を知る奴がこの場に来て説明をしてくれ——と、そんな私の切実な願いが届いたのだろうか。

見詰め合う私と霊夢の傍に、突然スキマが発生した。

「異変解決、御見事でしたわ。博麗の巫女」

現れたのは紫と、眠っている幽々子を抱えた藍だった。

会って話したいと思っていた本人の登場に、私は視線を移したが、当の紫はまるで私を避けるように霊夢の方だけを見ていた。

なにこれ、傷つくんですけど……。

やっぱり、私がおか紫を怒らせるようなことしちゃったの？

内心真つ青になっっている私を尻目に、紫と霊夢は相変わらず嫌悪感丸出しの様子でほとんど睨み合うように対峙している。

「……次は、あんたの番よ」

「ええ、分かっていますわ」

「元に戻す、って受け取っていいのよね？」

「ええ。早く先代を地上へ連れて行きなさい」

なんか話を通じ合っている二人。

あつるえー？ ひよつとして事情分かってないのって私だけ？

「紫……」

「やはり、記憶が残っているのね。本当、貴女のごことは私にも掴みきれないわ」

思わず呟いた私に対して、紫は何故か苦笑を浮かべた。

しかし、その笑みが少し悲しげに見えたのは私の気のせいだろうか？

色々聞きたいことがあったのだが、今の紫は何か弱々しく感じて、あまり強く問い掛けることが出来ない。

なんだか何を言っても紫を責めてしまうように思えて、私は口を噤んだまま、ただじっと見つめ続けた。

「……ごめんなさい。全て、元に戻すわ。」

後日、改めて貴女の下へ伺いましょう。その時に貴女の処断も受け入れるわ」

心から申し訳無さそうに紫は謝った。

これはつまり、紫が私に手を掛けたことは制裁だとか負の感情によるものじゃなかったということなのだろうか。

やっぱり私にはイマイチ状況を理解出来ないが、まず何より『処断』って辺りが不穏で気に掛かった。

少なくとも、今の私には紫を処断するつもりなんてないぞ。

っていうか、その言葉に反応して背後の藍が物凄い目付きで私を睨んでくるから逆にこっちが怖いわ。

「でも、今は……本当にごめんなさい。貴女に合わせる顔が無いの」
そう言つて、最後に深く頭を下げると、紫は私の視線を振り切るように背を向けて歩き去つて行つた。

幽々子を抱えた藍がそれに続く。

向かう先からして、私達と一緒に地上へ帰るのではなく、白玉楼へ留まるつもりらしい。

私は、それを追うことが出来なかった。

紫がそれを望んでいるような気がしたからだ。

……あと、去り際に殺気滲ませて一睨みしてきた藍がやっぱり怖かったからだ。

昔から薄々感じてたけど、私つて藍に嫌われてるよね。

結局、私は何一つ紫に答えてもらえず、取り残されてしまった。

うーん、でもとりあえず霊夢に地上へ連れて行けつて言つてたし、このまま帰つて良しと受け取ればいいのか。

「帰りましょう、母さん」

私の疑問に答えるように、霊夢が言った。

「診療所に戻れば、母さんは生き返ることが出来るわ」

「……どういうことだ？」

「母さんが一体何処まで覚えているのかは分からないけど、詳しい事情はあのスキマ妖怪がまた話すと思う。」

とにかく、今の母さんは亡霊だけどまだ死んではないの。ちゃんと元の体に戻ることが出来るのよ。そう話をつけたから」

霊夢の簡潔な説明を受けて、私は拍子抜けしながらも納得するしかなかった。

まあ、これが嘘や誤魔化しとは思えないしね。

悩んでいたことがあっさり解決してしまった肩透かしの気分はあるが、一番望んでいた現世への復帰が可能になったのだから、ここは素直に喜んでおくべきだろう。

これで、霊夢を置いて逝く心配もなくなったわけだ。

霊夢の言う事情とやらを、また後日紫から聞く必要はあるが、とりあえず私は一つ頷くと、内心を表す笑みを浮かべた。

「分かった。それじゃあ、帰るか。霊夢」

「うん……」

そう促し、私は歩き出そうとした。

しかし、肝心の霊夢が付いてこない。

不思議に思つて再び振り返ると、霊夢は何か思い詰めたような表情で足元を見つめていた。

「霊夢、どうした？」

私の問い掛けにも、霊夢はしばらく応えなかった。

下唇を噛み締め、視線を数回左右に彷徨わせて、やがて意を決したように顔を上げる。

私を見つめるその瞳には、何故か悲壮な決意が垣間見えた。

「……ねえ、母さん。あたし、これから母さんを怒らせるようなことを話すわ」

突然、そんなことを言い出す霊夢に私は酷く動揺した。

「だから、ちゃんとあたしを怒つてね」

怒らせる、と来たか。

これはまた、あまり気持ちのいい話の切り出し方ではない。

ひよつとして、私はこれから娘に罵倒されたりしちゃうんだろうか

？ と、少々被害妄想気味な予想が頭を過ぎって、慌ててそれを振り払う。

いやいや、違つて。

多分、霊夢が言いたいことはそういうことじゃない……はず。

嫌な汗が吹き出し、内心ドキドキしながら、霊夢の言葉の続きを待つ。

「——あたしは、母さんよりも先に死にたい」

予想外の一言に、私の頭の中は真っ白になった。

「母さんは、あたしが大人になったら波紋を止めるって言ったけど、そ

んなこと気にせずに使いつけて欲しい。

あたしが母さんの死に目を看取るなんて、嫌よ。凄く怖い。耐えられない。息をしていない母さんを見ると、体の中が凍ったみたいに冷たくなるの」

血を吐き出すように語る霊夢の声は、少しずつ震え始めていた。

霊夢のこんな姿は初めて見る。

しかし、それを気遣う余裕が私にも無いのだ。

ただ、今まで一度も聞いたことがない霊夢の心の底からの告白が衝撃的過ぎて、呆然と佇むことしか出来なかった。

「母さんがいなくなつた後、一人で生きるなんて……辛い。考えられない。」

なんだか自分を繋ぎ止めていたものが切れて、何処かへ飛んでいきそうな気がする。きつと今までの自分じゃなくなる。

だから、そうなる前にあたしは死んでおきたい。不慮の事故でも妖怪退治の失敗でも、何でもいいわ。なんなら、母さんに殺されても――

――

パンツという乾いた音が、静寂の中で強く響いた。

いつの間にか霊夢は話すのを止め、顔を背けている。

いや、違う。

私が止めさせたのだ。

霊夢の頬を力一杯叩いて、それ以上喋らせなかった。

その時私は、紛れもない霊夢に対する強い怒りで無意識に動いていた。

「あ……」

我に返った私は、間の抜けた声を漏らすしかなかった。

手のひらには、霊夢を殴った感触がハッキリと残っている。

それが私の視線を、頬を赤く腫らした霊夢の顔から逸らすことを許さなかった。

……ああ。

なんて……こと、をつ。

私は……この子に、なんてことをしたんだ！

「すまな……っ」

湧き上がる後悔と罪悪感が衝動的に謝罪を口走らせようとして、しかし私は咄嗟にそれを噛み殺した。

馬鹿が、謝ってどうする……!?

何故私は霊夢を殴ったんだ。

単なる気の迷いなんかじゃない、ちゃんとした意味があつたからだろう!

子供を正す為に叱ったことを、その子供に謝罪する親が何処にいる?

この子の為を想って怒ったのなら、例え後悔に押し潰されようとも最後まで貫き通せ。

出来ないなら、私は霊夢の母親失格だ。今後、名乗る資格なんて無い。

私は自分自身を叱責すると、意を決して口を開いた。

「に、どと……二度と、そんな馬鹿なことを言うんじゃないっ!」

上手く喋るどころか、声を出すことさえ難しかった。喉が引き攣つて、舌が回らなかつた。

しかしそれでも必死に、厳しさを表に出して、私はハッキリと霊夢を叱り付けた。

考えてみれば、それは私と霊夢にとって初めての経験だった。

この子が私を怒らせたことも、それを叱ったことも。

——この子を、殴ってしまったことも。

「……………ごめんなさい」

霊夢は俯いたまま、力無くそう答えたが、すぐに顔を上げて真っ直ぐに私の瞳を見つめ返した。

その顔は、後悔と苦悩に塗れている。

そしてきつと、私も同じ表情をしているはずだ。

私達のいずれも望んでいないのに、こうしてお互いに苦しみながら叱り、叱られている。

傍から見れば、奇妙に思える光景なのかもしれない。

しかし、今の私にとって周囲のことなどどうでも良かった。

ただ、目の前にいる霊夢の存在だけが心を占めていた。

「ごめんなさい、母さん……っ」

自然と溢れた涙を堪え、鼻を吸りながら、掠れた声で——それでも霊夢は改めて私の顔を見ながら謝った。

霊夢はきつと、先ほど口走ったことの全てを悔いているに違いない。

昔から聡明な子だった。

私の教えたことを、一つも間違えることなく理解出来た娘なんだ。だけど、さつきまでの霊夢の話が、嘘や一時の気の迷いなどとは私には思えなかった。

きつと、あれもまた霊夢の本音に違いない。

私を——母親を失う恐怖を、普通の子供と同じようにこの子も抱いていたのだ。

どうしようもない衝動に突き動かされて、私は霊夢を強く抱き締めていた。

この行為に、大した意味や尊さなど有りはしないのだろう。

何故なら、私は霊夢の気持ちを痛いほど理解しながら、それに応えてやる事が出来ないからだ。

霊夢の恐怖や悲しみを消してやりたい。

この子が望まないことを、絶対にやりたくない。

そう思っているのに……それでも、やっぱり私は母親だから。

この子の為に、いつか私は死ぬ人間だから——。

「母さんの気持ち、ちゃんと分かってる……」

「ああ。私も、お前の気持ちは分かってる」

「なのに、変ね。分かっているのに、間違ったことを望んじやうの」

「間違っていない。私も、お前の為なら何でもしてやりたいさ」

「駄目よ、母さん」

「ああ、そうだな。駄目だな」

私にも、霊夢にも、どうすることも出来なかった。

ただ、こうして心も体も一つになることを願うように強く抱き合うしかなかった。

そんなこと、それこそ叶いはしないというのに。

「将来のこととか、これまで考えたことも無いし……今でも想像出来ない。」

いつか誰かと結婚して、子供を作るかもしれない可能性なんて、全然実感が湧かないわ」

私の胸に顔を埋めたまま、霊夢は独白するように語る。

「でも、あたし……いつか、母さんみたいな母親になりたい」

——ああ。きつとなれるさ。私よりも、ずっといい母親になれる。

あとはもう、言葉にはならなかった。

私も霊夢も何も言えずに、ただ時間と心が許す限り抱き合っていた。

周りを、桜の花びらが物悲しく散っていく。

それは命の終わりを連想させる。

しかし、私はそれに囚われるつもりはなかった。

私にはまだ時間がある。

いずれ別れの時は来るが、それでも今はまだこの子と共に生きる為の時間が残されている。

腕の中で霊夢の存在を感じながら、私は亡霊となって以来初めて心の底から生き返ることを望んでいた。

心の何処かで自分の死を諦めと共に受け入れていた時とは違う。

——霊夢を、早く元の体で抱き締めてやりたい。

ただ、そう強く望んでいた。



美しい光景だ、と咲夜は思った。

しかし、心の何処かであの親子を素直に祝福出来ない気持ちがあるのは、多分わずかな『ひがみ』があるからだろう。

自分には、どうあってもあの光景を作り出すことが出来ないのだから。

「放っておいたら、ずっとあのまま抱き合っていそうね。適当なところ」

ろで声を掛けましょうか」

「やめとけよ、無粋だぜ」

霊夢と先代の姿を遠巻きに眺めながら呟いた咲夜に対して、背後の木の幹に背を預けて座り込んでいた魔理沙が言った。

こちらは西行妖とは違う、白玉楼の広大な庭に幾本も植えられた普通の桜だ。

咲夜は未だ立ち上がることの出来ない魔理沙へ視線を移した。

「もう大丈夫？」

「意識はハッキリしてきた。でも、なんか体を動かすのがダルいな……」

「無茶をするからよ」

魔理沙が疲労している原因は、単純な魔力の枯渇だった。

八卦炉はそれ自体が力を持つのではなく、魔理沙の魔力を燃焼させて火力を発揮する魔法具だ。

霊夢を援護する為に最大出力のマスタースパークを連発したこと、一時的に魔力量の限界を超えて消耗したせいだった。

朦朧とする意識の中、魔理沙は全てを託した霊夢が見事異変を解決する瞬間を見届けた。

大きな満足感と共に、ほんの少しだが不満も残った。

今回の異変は、なんだか色んな意味で自分は脇役だったような気がする。

「本当に、声を掛けなくていいの？ アナタは陰の功労者でしょうに」

魔理沙の活躍を知る証人として、咲夜は気遣っていた。

その向けられる想いに、ありがたさと同じくらいの気恥ずかしさを感じて、魔理沙は傍らに置いてあった帽子を被り直した。

「今度神社に行った時、散々恩にさせてやるさ」

「……魔理沙って健気よね」

「なっ!? なんだよ、さつきからおかしいぜ!」

「大声上げちゃ駄目よ。眩暈を起こすかもしれないわ」

「じゃあ、恥ずかしいこと言わない馬鹿!」

頬を赤くしながら、逃げるように咲夜から顔を背ける。

自然と、視界に霊夢達の姿を映すことになった。
母と娘。

二人の姿を見ていると、酷く切ない気持ちになった。
望んでも絶対に得られないものを見ていることほど悲しいものは無い。

咲夜の方に視線を戻すことも出来ず、魔理沙は帽子のつばで視界を隠すように深く下げた。

あの光景は、自分には少し眩しすぎる。

「……霊夢はさあ」

傍らには咲夜しか聞く者はいない。

それを理解しながら、別に誰かに聞かせることを意識するわけでもなく、魔理沙は独白した。

「物事とか人間関係とか、とにかく色々なことに執着しない性格なんだ。
だ。

考えてみるよ？ あんな辺鄙な人気の無い神社に、一人で住んでるんだぜ。大した趣味は持ってないし、オシヤレだつてしたこともない。
い。

吾唯足るを知る、つて言つたつけ。だからって、いくらなんでも無欲すぎだろ。たまに冗談なのか本気なのか分からない言い方で、賽銭を要求するくらいでさ。

着の身着のままを素で行く奴なんだ。ホント、お前は仙人か妖怪かって話だよ」

茶化すように話しながら、ふと声が強く焦がれるような羨望を滲ませる。

「だけど、あいつは本当に大切なものを最初から持つてる」

その一言に、魔理沙の胸の内が全て込められているような気がした。

母親を持つ霊夢が、羨ましかったのだ。

ただ黙って話を聞いていた咲夜は、魔理沙の抱く霊夢への羨望の気持ちに共感出来た。

咲夜は魔理沙が実家から勘当されていることを知らない。

しかし、自分のことは分かっている。咲夜は両親の顔も覚えていない。

同じ孤独な人間として。そして、それでも今は仲間を持つ者として、咲夜は魔理沙に親近感を感じた。

「……そうね」

同意を返しながら、自然と笑みが浮かぶ。

「しかも、アナタという親友まで持っているんですものね」

優しく微笑みながら魔理沙に視線を送ると、より一層深く帽子を被ってそれから逃れる仕草が映った。

あからさまな見えないふり聞こえないふりだったが、咲夜には魔理沙が恥ずかしがっているのがよく分かった。

もう少しからかってみたい衝動に駆られながらも、それを堪えて視線を外す。

口元が緩むのだけは止められなかったが。

「ズルイ奴だわ、霊夢って」

「……ああ、全くだぜ」

霊夢を遠巻きに眺める咲夜と魔理沙。

三人の間で、今一つの壁が消えていた。

咲夜は初めて霊夢の名前を呼び、それが思いの他容易く行えたことに奇妙な満足感を覚えた。

「私達は、先に帰っちゃいましょうか」

魔理沙の下へ歩み寄り、手を差し出す。

「……そうだな。気が済んだら、あの二人も勝手に帰ってくるだろう」

悪戯っぽく笑い、魔理沙はその手をしっかりと握り返した。

咲夜の力を借りて立ち上がり、二人並んで飛び立つ。

異変の終結した白玉楼と、再び封印された西行妖を背に、魔理沙と

咲夜は静かに去っていった。

「ねえ、魔理沙。帰りに紅魔館へ寄っていかない？」

「なんだ、おもてなしでもしてくれるのか？」

「それもあるわね。体が冷えたでしょうから、温かい紅茶とお菓子でもいかが？」

「おっ、いいね。それじゃあ、お邪魔するぜ。ついでに、パチュリーから本も借りたいしな」

「それと、お風呂と代えのショーツも貸すわ」

「……あー、うー、そのお……」

「もちろん、こっそりね」

「た、助かるぜ。本当……」

「二人だけの秘密ね。ふふっ、素敵だわ」

「素敵か？」

「ええ、こういう女の子同士の秘密の共有って初めてだから。憧れな
いかしら？」

「いやあ、シチュエーションにもよるぜ」

魔理沙の神妙な一言に、咲夜は思わず声を上げて笑ってしまった。



白玉楼には異変の跡が残されていた。

本来、冥界に居るべきではない者達が全て去ったしばらく後に、
幽々子は目を覚ました。

博麗の巫女との弾幕ごっこに負けて、西行妖が光を放ったところか
ら先の記憶が無い。

自分の目的は達成されたのかという疑問は湧いたが、庭先を見たと
ころで全てを悟った。

西行妖から放たれていた脈動するような気配は既に完全に停止し、
残滓のような桜の花びらが舞い散っていた。

異変は解決されたのだ。

「なんだか、疲れちゃったわあ」

今回の異変に関して、半ば娯楽のつもりで動いていたが、それでも
全てが徒労に終わった結果には無念を感じずにはいられない。

加えて、多くの出来事に何度も心を動かされた。

特に、あの二人の巫女は――。

亡霊である自分には、それこそ閃光のように眩しい人間達だった。

彼女たちが残した影響は大きい。

既に半分以上の花が散った西行妖をぼんやりと眺めていた幽々子は、庭の片隅へ視線を移した。

先ほどからずっと、絶え間なく風切り音が続いている。

妖夢が素振りをする音だった。

一時も休む間もなく、珠のような汗を流しながら鬼気迫る表情で続いている。

あの博麗の巫女との戦いで、何を見て何を悟ったものか。

妖夢が鍛錬をする風景は、この白玉楼において日常的なものだったが、明らかに普段と様子が違った。

強くなることにひたむきな意志を宿した顔ではない。

何かに追い詰められ、逃げる為に没頭するような引き攣った顔だった。

幽々子の知る限り、少なくとも今の妖夢は自らの剣から逃げている。

その手に握る物が、常日頃身に付けている二刀では無く、ただの木剣であることがそれを明確に示していた。

「二人で乗り越えるのは難しいかしらね……」

あまりに愚直で不器用な妖夢の姿を見つめ、幽々子は苦笑を浮かべた。

愚直さもまた美点であると思う。

しかし、妖夢が成長する切欠を喜ぶ一方で、そこから進む為の手助けもしたいと考えていた。

甘やかすのは宜しくない。だが、苦しむ姿を見たいわけではないのだ。

「ねえ、紫。冥界の入り口の結界なんだけど、しばらくあのままにして置いて貰えないかしら？ 地上に幾つか用事が出来そうだから」

個人的興味からも、今一度あの二人の巫女と会ってみたいという気持ちがあり、幽々子は同じ縁側の隣に座る親友に頼み込んだ。

返答は無い。

紫は、やはり同じようにぼんやりと舞い散る桜を眺めていた。

しかし、その光景に憂いを感じていた幽々子とは違い、紫の視界には現実の光景など映ってはいない。

「心此処にあらず、ね」

「聞こえているわよ。結界の件でしょ」

「それって聞こえているだけよね。耳に入った言葉を頭で処理して口から出しているだけ」

「……会話の仕方として、何か間違っているかしら?」

「全てが終わったなら『話』をしたいと言ったのは貴女でしょう?」

幽々子は言葉の微妙なニュアンスの違いを強調して、紫に指摘した。

「親友だから、そう持ち掛けられたのだと思っただけだよね」

「……そうね。ごめんなさい」

紫は素直に謝り、ようやく取り繕うことを止めた。

弱々しく見える横顔を眺め、幽々子は満足気に頷く。

今更誤魔化さなくてもいい。

事情など何一つ話してくれなかったし、分かりもしないが、紫が酷く落ち込んでいることだけはハッキリと分かった。

そして、そんな彼女を助けたいという素直な気持ちだけがあつた。

「紫?」

彼女がこちらを見るまで、幽々子は辛抱強く待った。

「貴女が一番気にしていることを、話してくれないかしら?」

紫はその言葉に一瞥を向け、すぐに恥じるように視線を逸らした。

それでも、意を決したように口を開いた。

「彼女を亡霊にしたのは、肉体の治療を待つ為だと私は言ったわ。確かに、そう考えたの」

紫はただ、自らの心の内を吐露するように話すだけだった。

彼女というのが、おそらく先代巫女のことであろうと推測し、治療がどうこうという部分は説明不足で話が見えてこない。

しかし、幽々子は口を挟まなかった。

親友の望むまま、ただ聞いていた。

「でも、多分違うわ。私は治療など、本当はどうでもいいと思ってい

た。

彼女の足が治ったとして、それからどうするの？ 十年、二十年と経てばまた歩けなくなるわ。その時、私は彼女にどんな『治療』を施せばいいの？」

紫は、酷く疲れたような仕草でため息一つ分の間を置いた。

「幽々子のように、人間の枠組みから外れて、妖怪である私の傍にずっと居て欲しいと思っていた……かもしれない」

「……無理よ」

「ええ、無理よ。分かっている。分かっていた、はずだったの。」

だって、全部霊夢の言うとおりでないんだもの。彼女が生き抜く姿に魅せられたのよ。対等でいたいと思っていたの。都合の良い慰めの相手として傍に置こうなんて、そんな馬鹿げたことを思っていたわけじゃないわ」

言葉の最後は、まるで怒鳴っているようだった。

何に対する怒りなのか、紫自身にも分かっていない。

理解出来ず、制御も出来ない感情のうねりがあつた。おそらく妖怪として普通に生きたならば、一生抱くことの無い情動が。

「人間と妖怪の共存するこの幻想郷が残酷であることなんて、他ならない私自身が語っていたのにね……」

紫は自嘲の笑みを浮かべた。

人間と妖怪が、何かの間違いで心通わせたお話。

その結末は、いつだって悲劇だった。

何かの間違いで起こった出来事は、やはり間違いそのものだったのだ。

妖怪に恋をした人間。その逆。人間の子供を拾い、情を移した妖怪。親が妖怪であることを知った人間——形の違いはあれど、結局は『別れ』で終わる多くの結末を、紫は何度も見届けてきた。

時には干渉し、彼らや彼女らに真理を諭した。

その全てが、今は薄っぺらく思える。

現実を見つめ、理解していた。

しかし、自らが対面したことはなかった。

人間が死ぬという当たり前の現実を、八雲紫は初めて怖いと感じたのだ。

「……ごめんなさい。もう答えは出ているのよ。ただ、私が納得して終わるだけの話なの。今更、幽々子に言っても仕方の無いことなんだから」

「そうね。私には話の全貌もよく分からないし、適当な言葉も思い浮かばないわ。でも——」

幽々子は手を伸ばして、紫の手を取った。

「仕方の無いこと、納得するしかないことなら……別に我慢する必要も無いんじゃないかしら」

握り合った手をじっと見つめていた紫は、やがて目の奥から感じる熱の意味を理解した。

「そうね」

無意識に堪えていたものの正体がようやく分かった。

分かった途端、もうどうしようもなくなっていた。

幽々子から顔を背け、逆に手には力を込めて握り返す。

「幽々子。私、少し泣くわ」

そして、紫は人間が一生に一度は流すものと同じ涙を流した。

幕間「妖々先代録」

【上白沢慧音の葛藤】

八雲紫からの依頼で出掛けていたあの人が、人里に戻ってきて数日が経った。

私、上白沢慧音は普段通りの生活を営んでいる。
少なくとも表向きは。

事前に博麗霊夢からあの人の容態について聞き及んでいたはずだが、未だに私の中には動揺が残っているらしい。

今もこうして、あの人が杖を突きながら不自然な足取りで歩いてた姿を思い出すだけで、汗が滲んで鼓動が早くなる。

この感情は何なのだろうか？

不安と焦燥が入り混じっているような、初めての感覚だ。

得体の知れない衝動が、苛立ちとなって矛先を探している。

八雲紫――。

あの妖怪を目の敵にしたところで、何の解決にもならないし、理不尽であることは自覚している。

しかし、決して見当違いではないはずだ。

あいつが、あの人に用事など頼まなければ――そう恨めしく思わずにはいられない。

普段からあの人の傍に容易く佇む奴に対する個人的な負の感情もそれを手伝っていた。

私は奴が気に入らないのだ。

今日、衝撃的な光景を目にした。

外を出歩いていた時のことだ。

なんとということはない、ただ買い物とちよつとした用事を済ませようと家を出た。

ただそれだけの、何の変哲も無い外出だった。

途中であの人を見かけた。

人里に戻ってきて以来、怪我の後遺症で何かと不便だろうと気にか

けていたから、用事があるなら手伝おうと、なければ少し一緒に歩こうと……そう思つて声を掛けようとした。

私の目の前で、あの人は転んだ。

蹟く物など何も無い人里の往来で、だ。

たまたに隣を歩く時。道で偶然出会つた時。横から見ても、向かい合つても、凜とした姿勢と静かな足運びが美しいといつも思つていた。

それが、今はもう見る影も無い。

足をもつれさせて転んだあの人は、杖に手を伸ばし、不自然な姿勢で立ち上がりうとして、当然のように再び倒れ込んだ。

明らかにおかしい。あんな姿勢で立ち上がれるわけがない。

そんなこと、理屈でなくても分かるはずだ。

バランスを取つて立ち上がることなど子供でも出来る。

なのに、しない。

出来ない。

あの人には、もう正しく立ち上がることさえ出来ないのだ。

私はその光景に衝撃を受けて、しばらくの間呆然としていた。

何処か、それを現実として受け入れたくないと思つていたのかもしれない。

周りの人間も同じだったのだろうか。

あの人はその場でもがくように、立ち上がり、また倒れる行為を繰り返していた。

我に返つた私は慌てて駆け寄つた。

走りながら、何故だか涙が溢れ出た。

理由は分からない。あの人に対する憐れみでないことは確かだ。

肩を貸したあの人は、土で汚れた格好で何でもないことのように礼を言った。

その姿に、不自由を抱える者の卑屈さなど欠片もなかった。いつものような凜然とした態度だった。

だがその言葉を聞く余裕が、私の方になかったのだ。

ただ必死に、胸の奥で荒れ狂う激情が涙となつて目から溢れるのを

堪えていた。

——まただ。

また、あの感覚が襲ってくる。

分からない。しかし、確実に大きくなっていく。

不安と焦燥——いや、そうか。

これは、恐怖だ。

私は……怖いのだ。

あの人は人間。私は妖怪。

種族の違いは理解していたはずだった。

しかし、それを現実として受け入れることが、どうやら私には全く出来ていなかったらしい。

あの人が大怪我を負ったと聞いた時は、すでに治療が終わり、一命を取り留めた後だった。

私はもちろん心配し、不安に思い、あの人をそんな状態に陥らせたあらゆる要因を思い浮かべて意味のない憤慨を抱いた。

そしてその後、あの人が怪我の後遺症で足に不自由を残してしまつたと聞いた時は、思った以上に元気な姿で帰ってくる前日だった。

私はもちろん世の不条理を嘆き、今後のあの人の生活の変化を手助けしようとして固く決意した。

いずれも、私の認識を甘くする要因があった。

あの人が生きて、無事帰ってくるという事実だけを受け入れて、先のことを楽観していた。

心の何処かで、私は直面した現実から逃避していたのかもしれない。

だが、希薄な現実感はやや消え去った。

あの人が傷つき、衰えた姿が目には焼きついて離れない。

人間の守護者として。また高潔な武人として。常に揺ぎ無く在ったあの人は、しかしやはり人間だったのだ。

例え怪我が原因でなくても、人間が時と共に衰え、歩くことも立ち上がることもさえまもなくなくなるのは、ごく自然なことだろう。

何もおかしいなことはない。
だが――。

ああ、そうだ。認めよう。私はその自然の理が、今や何よりも恐ろしい。

あの人は人間。私は妖怪。

お互いに従うべき、縛られる理が違うということを嫌というほど理解し、そしてそれがとてつもなく恐ろしいのだと私は自覚した。

考えたくない。

言葉にして表現することさえしたくない。

だがしかし、避けられない。

――あの人は、私よりも先に死ぬ。

先送りにし、忘れ、誤魔化し、あらゆる方法で遠ざけていた結論が今日の前に突きつけられていた。

もう目を逸らすことは出来ない。

あの人の動かなくなった足を見るたびに、私は思い出さなければならなくなつたのだ。

自覚して以来、怖くて眠れない夜が続いた。

まるで幼子のようだ。情けないと自嘲する。だけど夜、一人で布団に入るとどうしても体の震えが止まらないのだ。

真夜中の静寂が孤独感を煽る。

朝、目を覚ませば自分が一人だけ取り残されているのではないのかと根拠も無く不安になる。

一日経つごとに、あの人の死が、あの人との別れが迫っているような気がして、恐怖が重なっていく。

いつか訪れる結末。

避けようもない現実なのだど理解しているだけに、私自身にはどうしようもなかった。

心の整理がつかぬまま、寝不足でろくに働かない頭を抱えて、ただ不安を消す為に朝早くあの人の様子を伺いに診療所へ足を運んだ。

当たり前のように出迎えてくれるあの人の声を聞いて、ようやく心が落ち着く。

何気ない挨拶をして——あの人がまだ生きていることを確認して——かりそめの安堵を得る。

そして夜が来て、また怯える。

私は、あと何度これを繰り返すのだろうか。

あと何度……繰り返すことが出来るのだろうか。

あの人は人間。私は妖怪。

いずれ、あの人は私の前からいなくなる。

私は、それが何よりも怖い。

今日、八雲紫が来た。



【人里の悲喜交々】

人里の夜の闇は深い。

外の世界とは違い、道に街灯や深夜営業の店など存在しないのだから、光源は月か星の明かり程度のもだった。

その深い闇の中へ、好んで出て歩く者などいない。

人を遠ざける闇には必然的に静寂が満ち、そうした空間には人ならざる者が潜む。

だから、夜は人が出歩かない——。

何処から先に始まったものか、夜の闇の深さと静けさはそうやって形作られていた。

その闇の中を、月明かりすら避けて動く者があった。

三人の男だ。

いずれも間違いなく人間である。

しかし、この闇の中に迷い出てしまった間抜けか憐れのどちらでもない人種だった。

彼らは気配を殺し、足音を消すことに長けていた。

この夜の闇を味方につけることの出来る者達だった。

夜に活動する妖怪達の目すら欺くように、彼らは静かに目的の場所

へと向かつて行く。

人目を忍んでどんなやましい行いを目的として動いているのか。彼らの着いた先は、あろうことか単なる人里の診療所だった。

ただ、そこが先代巫女の営む店であるということ以外は、全く何の変哲も無い場所だ。

——彼らの目的は、先代巫女そのものだった。彼女を『暗殺』する為に来たのだ。

三人の足が止まる。

顔を見合わせるが言葉は交わさない。

しかし、互いの瞳には僅かに困惑の色が映っていた。

予想外の出来事にぶつかった。

本来なら、ほとんどの人間が眠りに就く深夜の時間帯にも関わらず、診療所には明かりが点っていたのだ。

事前に下調べは済んでいた。この時間帯、先代巫女は他の住人と同じように就寝しているはずである。

それがどんな不運か、今日に限って起きている。

三人共が、どうするべきか迷っているようだった。

目標である先代巫女が、現在足に不自由を抱えているのは変わりがない。就寝中を狙ったのは、更に慎重を期すためだ。

このまま目的を実行するか、大事を取って今夜は退くか。さて――

「動くな」

思案している間に、彼らの選択肢は全て消え失せた。

「お前達の仕事は失敗に終わった。退くな。進むな。一切の行動を許さない」

三人の男の前に、たった一人で立ち塞がった門番妖怪はただ静かに威圧した。

夜の闇に映える赤い髪である。

しかし、彼らは声を掛けられるその瞬間まで美鈴の接近に気付かなかった。

自分達をはるかに凌ぐ、人外の域にまで達した完璧な陰行だ。

そこから感じられる実力差を理解出来ないほど、彼らも未熟ではない。

だからこそ、彼らはすぐさま撤退を選び——己の危機感が全く足りていないことを次の瞬間実感した。

「阿呆」

文字通り、瞬く間だった。

三対一の状況で、戦っても勝てないと理解していたが、逃走すら不可能だったことまで考えが至らなかった。

一呼吸の間に美鈴が三人の元へ接近し、二呼吸を終える前に全員を叩き伏せていた。

自分達がどんなタイミングでどんな攻撃を受けたのかすら理解出来ないうまま、地面に倒れる。

「ば、馬鹿な……！」

「馬鹿はお前達だ。幾ら掴まされたのか知らないが、金銭の報酬で地獄を渡ろうとするなど」

男の呻き声に、美鈴は氷のように冷たく応じた。

彼女は妖怪でありながら鍛錬を積み重ねた稀有な存在である。しかも、その鍛えた期間の長さや密度は人間の比ではない。

人間であり、並の鍛え方と並の修羅場を潜った程度の相手など、彼女にとって塵に等しいものだった。

「お前達のような者が、あの人の身を脅かすことなど方に一つも在り得ない」

「まあ、それでも目障りではあるわけよ」

「いやー、すっかり驚くほど興味が湧かない人達ですねー。これで先代様への私怨の一つも混じってれば、まだ笑えるんですが。身なりからして、完全にその道の仕事人ですよ」

「ふーん。よく分からないけど、こんな変なことを仕事にしてる人間もいるんだね」

美鈴に続いて闇の中から現れたのは、パチュリー、小悪魔、フランドールだった。

面識の無い男達にとっては、地獄に迷い込んだ光景にしか思えな

かった。

一体、何の間違いで前触れも無くこんな死地へ踏み込んでしまったのか。

自身の常識を容易く超えた状況に、彼らは言葉を失った。

「確かに、暗殺者というのも今の人里で果たして需要のある仕事なのか疑問が残るわね」

パチュリーがさして興味も無さそうに呟くと、更に現れた新しい人物が答えた。

「二昔前までは、人里の治安も今ほど安定していなかったんだ。

霧雨店が台頭し、互助会を築いて人里の店をまとめるまでは、水面下での競争や真つ当ではない手法の商業などで随分と荒れていた。彼らはそんな時代の裏で生きていた住人だよ」

慧音だった。

吸血鬼、魔女——妖怪達と並びながら男達を見下ろす彼女の瞳には、わずかに痛ましいものが浮かんでいるが、それ以上に冷たさがあった。

「そして、その不毛の争いを終わらせる切欠となったのが、当時霧雨店の店主と交流のあった先代巫女だ。

あの人の体の不自由を知り、かつての恨みを持つ者が差し向けたのだろう。今でもあの人は、人里の不正に対する抑止力になっているからな」

紅魔館の者達と違和感無く並ぶ人里の守護者の姿に何を察したのか、あるいは誤解したのか。

慧音を見上げる男の顔が嫌悪で歪む。

「所詮は獣の血を混ぜた半人か……!」

侮蔑するように吐き捨てる。

それに対して、慧音はわずかに眉を動かすだけの反応に留めた。「なるほど。アナタが一部の人間にどのように認識されているか、理解出来るわね」

「ごいつら、完全に自分を柵に上げてますよね。パチュリー様、一人残して後は殺していいですか？」

「やめてくれ。先代を狙ったことは私も許せないが、だからこそその人の周りに余計なものを残したくない」

普段の穏やかな気質からは想像も出来ないような提案をする美鈴に、慧音が言った。

美鈴が肩を竦めてあつさり引き下がる。

こだわるつもりはなかった。目の前の人間達は、美鈴にとってその程度の認識でしかない。

入れ替わるように、フランドールとパチュリーが男達に近づいた。

「よかったね、アナタ達はここでは殺さないよ。でも、次に小母様を狙ったら許さないからね？」

フランドールはにっこりと笑って、三人の暗殺者達一人一人の顔を覗き込んだ。

無邪気そのものといった表情からは、しかし闇の稼業に浸って長い彼らを心の底から恐怖させるほどのおぞましが放たれていた。

意識と関係なく、全身から汗を吹き出し、ガタガタと体を震わせる男達の様子を確認して、パチュリーが仕上げに掛かる。

「恐怖を刻み込んだようね。結構。それを忘れないようにしておくことね、アナタ達の命を守る為の安全弁になるわ」

今回のような愚かな行為に出ることが今度は死に直結することを警告し、パチュリーは男達の額に指をかざした。

一言の呪文すら必要ない。

ただその仕草だけで魔法が発動し、途端に男達の瞳から理性と知性が消え失せる。

茫然自失といった様子に陥った彼らは、のろのろと体を起こして、そのまま意思の感じられない足取りで夜の闇へと消えて行った。

「今のは？」

慧音が若干不安そうに尋ねる。

「軽い呪いよ。妹様が植え付けた恐怖の感情を利用して、少し心を壊させてもらったわ。一週間ほどは白痴状態ね」

「野垂れ死になんてことには……」

「安心しなさい、完全に思考を奪ったわけではないわ。彼らはおぼろ

げな記憶のまま、帰巢本能のように雇い主の所へ戻ったのよ。

その後は自発的に動くことも出来ないでしょうけどね。雇った暗殺者が戻って来たことで、その誰かさんは計画の失敗を悟るし、警告とも受け取る。やましい事を隠す為に、彼らを匿う必要も出てくる。穏便な対処よ」

「……そうだな。十分だ」

——雇い主が、証拠隠滅と彼らを世話する手間を省く為に殺す可能性もある。

しかし、パチユリーはその可能性を、目の前の善良な半人半獣に話すつもりはなかった。

余計な心労を負わせる必要は無いという考えもあったが、それ以上にあの暗殺者達にそこまで配慮をする気がなかったからだ。

死ぬのなら、死ねばいい。

パチユリーにとって、自分自身や身の回りの者に害を為す存在など、その程度の認識だった。

当然のことだ。

「しかし、本当にいいタイミングで先代の見舞いに来てくれたな。

吸血鬼が夜に活動するからとはいえ、まさかこうも綺麗に奴らの活動時間と訪問時間が一致するとは」

完全に暗殺者達の姿が見えなくなると、慧音が重苦しい雰囲気振り払うように気軽に言った。

「実は、日時を指定したのはレミリアお嬢様なんですよ。ひよつとしたら、今夜の事を見抜いた上で言ったのかも」

「あー、あの胡散臭い能力ですか。予知とか予言って、なんか信じられないんですよ。しかも『運命(笑)』とか。単なる偶然じゃないですか?」

「……アンタ、悪魔なのにそういうこと言っちゃう?」

「いや、悪魔の予言とかって大抵でまかせか自作自演ですから。あと、やっぱり運命は自分で切り開くものでしょう!」

「うわー、小悪魔が言うといい台詞が台無しだー」

和氣藹々とした四人のやりとりを眺めて、慧音は苦笑を浮かべた。

人里を守る者として、外部の勢力は当然ながら警戒の対象である。最近異変を起こした紅魔館は、その代表たるもののはずだった。しかし、実際に出会ってみれば、彼女達は先代巫女を慕い、彼女を狙った不穏な人間に対しても無闇な殺生を行うことなく穏便に済ませてみせた。

先ほど、あの男達が自分に向けた敵意を思い出し、慧音は複雑な感情を抱いた。

人間に嫌悪され、拒絶され、受け入れられ。

同じように妖怪から受け入れられ、拒絶され、嫌悪もされる。

かつては人間で、今は妖怪。後天的に半人半獣の妖怪となったことで、常に自分は二つの種族の間で翻弄されてきた。

これからも、こうして迷うことは多くあるのだろう。

どちらかに傾いてしまえば、少なくとも苦悩の一つはなくなるのかもしれない。

「……馬鹿な。答えは、ずっと昔に出ているだろう」

慧音は自分に言い聞かせるように呟いた。

脳裏には、かつて見たものと同じ先代巫女の背中が映っている。

——しかし、あの人がいなくなった後はどうだ？

不意に、解決したはずの疑念が再び浮かび上がった。

理解し、後悔し、納得したはずの事柄だ。

それなのに、未だに心の何処かに残っている。

結局、自分に出来るのは理屈を理解することだけで、受け入れることなど出来ないのだろうか。

いずれまた同じ過ちを繰り返すかもしれない。そんな弱い性根と器の小ささこそが自分の全てなのだろうか。

慧音は揺らぎ続ける決心を抱えた自分に嫌悪しながらも、縋るように診療所の明かりを見つめた。

その視線に何を察したのか、フランドールが顔を覗き込んでくる。

「えーと……けーね先生？」

「あ、うん。先生……か。私をそう呼ぶのか？」

「うん、小母様からけーねは『先生だ』って聞いたもん」

フランドールは自信満々に微笑んだ。

その笑顔に、寺子屋で教えている人間の子供達の顔が重なる。

長い年月狂気を抱え、今でも外出には制限が掛けられているというこの悪魔の妹は、しかし慧音の見る限り何処までも純粹で無垢な少女にしか思えなかった。

先ほど暗殺者達を恐怖させた吸血鬼としての威圧感も薄れてしまふフランドールの純真さに、慧音は自然と微笑み返していた。

「けーね先生も、よかったら一緒に小母様の所へ行かない？」

「私も、か？　しかし……何故だ？」

「うーん。よく分からないけど、会いたそうな顔してたから」

「……そうか」

純粹な心の目こそ、建前や取り繕った外面に惑わされずに本心を見抜くのだろうか。

慧音はフランドールの指摘を抵抗無く受け入れた。

「そうかもしれないな」

「じゃあ、一緒に行こうよ。小母様と仲良しなんでしょ？」

「ああ……多分。そうだと良いが」

「あれ、自信ないの？」

フランドールの言葉は遠慮が無く、慧音の不安を的確に突いていた。

少し前の出来事を思い出す。

心の底から敬愛していたはずの先代を、擬似的にはいえ死に至らしめることに関わった自分の愚かさを思い出す。

「……どうかな？　不安になってしまいうくらい、あの人に悪いことをしてしまったんだ」

何を言っている、自業自得だろうが。

慧音は心の中で自虐の言葉を吐き捨てた。

あの日、先代が目を覚ました時。涙が出るほどの喜びと安堵を感じながら、それ以上の後悔と懺悔の気持ちを抱いていた。

もちろん、その場で謝罪し、先代もまたそれを何でもないことのように許したが、未だに慧音の中で後を引いている。

きつとこれは、あの人と向き合う上で一生引き摺る負い目なのだろう。

「大丈夫！」

暗い表情で俯く慧音を見つめ、フレンドールは言った。

「小母様は、悪いことをしたらちゃん大怒つてくれる人だもの」

その短く、当たり前前の言葉を受けて、慧音は意表を突かれたような表情を浮かべた。

「それからね、反省して謝ったら、ちゃんと褒めてくれるの」

フレンドールの裏表の無い言葉は、慧音の心を熱く奮わせた。

目の前を覆っていた、憶測や理屈、それらから来る不安といった靄のようなものが消え失せ、視界が開けた気分だった。

自分は、いつだって迷っている。

しかし、いつだってその時の答えを出してきたのだ。

これまで積み重ねてきたその事実には、慧音は今気付いたのだった。

「……ありがとう」

慧音は吸血鬼の少女に深い感謝を抱き、それを素直に口にした。

フレンドールがにっこりと微笑む。

「話は、纏まったようですね」

「いやあ、いい話ですねえ。でも、私の前ではこういう話はやめて欲しいですねえ。鳥肌立ちますから」

「小悪魔。私の世話は美鈴だけでいいから、やっぱり館に戻りなさい。っていうか帰れ」

傍で見守っていた美鈴達も加わり、慧音とフレンドールは一緒に歩き出した。

夜の闇は深い。

しかし、彼女達の向かう先では、診療所の明かりが照らす入り口の前で、訪問の遅れている彼女達を心配して待っている先代巫女の姿があった。



【霧雨魔理沙の挑戦】

「スペルカード・ブレイク、だぜ。どうだ！」

「ど、どうだって……そんなボロボロの姿で胸張られても」

「うるさいぜー」

弾幕ごっこに見事勝利を収めた魔理沙は、地面に墜落した橙を見下ろしていた。

ゼエゼエと肩で息をしながら、勝者の笑みというよりも引き攣って口の端が釣り上がっているだけの表情を浮かべている。

お互いに弾幕のダメージを刻みながら、呆れたように見上げる橙の方がむしろ余裕があった。

傍から見れば、勝敗が分かりにくい構図だ。

「わたしの勝利には間違いないぜ。文句はないだろ!？」

「いや、そりゃあ無いけど……。とりあえず、降りてきなよ。その怪我を治療しなくちゃ」

「……おう」

魔理沙はフラフラと力無く地面に降り立った。

マヨヒガの屋敷の中に駆け込んだ橙が医療品を片手に戻って来ると、縁側に座り込んだ魔理沙が礼を言った。

「ありがたいんだが……。いいのか？ お前、妖怪だろ？」

「そうだけど、あんたはわたしに勝ったじゃない。勝ったんだから、負けた奴は従わなきゃ駄目でしょ」

「弱ってるんだから、食っちゃまえばいいじゃないか。」

「お前以外にも何匹かの妖怪と決闘したけどさ、中には勝負の結果を無視して襲ってくる奴もいたぜ」

それを時には撃退し、時には逃げ延びた魔理沙には、しっかりと敗北を認める橙が珍しく映った。

スペルカード・ルールに直接的な強制力がないとはいえ、それを破ることでどんな末路が待っているのかも想像できない思慮の浅さが弱い妖怪にはある。

その点を踏まえれば、橙は実力はともかく妖怪として一段上の存在だった。

「へんつ、わたしをその辺の野良妖怪と一緒にしちや困るね。そんな狡い真似なんか絶対にやらないよ」

一見して幼い少女の外見と雰囲気を持つこの化け猫には、しっかりとした信念やこだわりがあるらしい。

治療を受けながら、魔理沙はバツの悪そうに頭を掻いた。

元々、最初に弾幕ごっこを仕掛けたのは魔理沙の方だった。

しかも、相手が悪さをしていたとか大きな理由があつてのことではない。

この如何にも人間の住む気配からかけ離れた屋敷がたまたま目に付き、そこにいた化け猫と出会ったことで始まったのだ。

威勢良く勝負を挑んだ魔理沙に対して、橙もまた堂々と応じた為に疑念など抱かなかつたが、形からすればただ単に魔理沙が喧嘩を売つたに過ぎない状況だった。

「なんというか……すまん。お前からしたら災難な話だよな」

「ああつ、妖怪相手に同情してるなあ？　そういう反応って逆に傷つくし、腹立つよ。人間のクセに！」

謝罪に対して、橙はむしろ不快そうに睨み返してきた。

「本当は妖怪が勝って当たり前なんだからね！　わたしは未熟だから負けちゃったけど、妖怪は人間よりも強いものなの！」

だから、人間は理不尽に襲われても仕方がないし、妖怪は退治されても仕方ない——そう教わったよ。人間が妖怪に気を遣うなんて逆だよ。妖怪は恐れられなきゃいけないんだから」

「……そいつはなんとも、英才教育を受けてるもんだな」

自分には理解出来ない人外の価値観に、曖昧な笑みを浮かべる。

妖怪とは、より強い力を持つに従って弱い者への意識に差をつけるらしい。特に人間に対するそれは顕著だった。

脳裏に、あの八雲紫に従っていた狐の妖怪の姿が浮かび上がる。

まさに格上の相手だった。

自分は徹底的に見下されていた。

橙の語る妖怪の価値観にピタリと当て嵌まる構図が、今の自分とあの狐妖怪との関係であり、奴にとって自分は有象無象の人間と同等で

しかないのだ。

それを自覚することで、魔理沙の中で燻っていた何かが再び熱を持ち始めた。

今回のような『出会った妖怪と片っ端から弾幕ごっこをする』という武者修行染みた行動を起こさせる切欠となった、あの日以来胸の奥に根付く熱い『何か』だった。

「言っとくけど、わたしに勝ったからって勘違いしちゃ駄目だよ？」

本物の妖怪っていうのは、もつともおーつと強いものなんだからね。それこそ、わたしのご主人様みたいだね」

「身に染みて分かってるよ」

「へえ、じゃああなたはそういう妖怪に負けたことあるんだ？」

「ああ、文字通り歯牙にもかけられなかったって奴さ。ボロ負けだよ」
「それでいて、まだわたしみたいな他の妖怪に喧嘩を売ってくるんだから、懲りないっていうか、人間らしくないっていうか」

「人間らしいから、意地になるんだぜ。強くなって、いずれあいつを見返してやる」

「……やっぱり人間らしくないよ」

橙は呆れたようにため息を吐いた。

目の前の人間の存在は、彼女の教わった内容に反している。

人間は妖怪を恐れなければならない——その常識に、魔理沙は真っ向から反逆しているのだ。

こういう奴もいるんだな、と物珍しき半分に魔理沙の横顔を眺めながら、橙は最後の包帯を巻き終えた。

「はい、これで治療完了」

「おお、助かったぜ。本当に悪いな」

「だから、良いって。負けたわたしが悪いんだしね。魔理沙はこのまま、他の妖怪と勝負を続けるの？」

「そうだなー。そろそろ体力も限界だし、帰るとするかな」

橙は自然と魔理沙の名前を呼び、魔理沙もまたそれを当たり前のように受け入れた。

お互いに自覚はない。

しかし、弾幕ごっこという勝負とその結果を通すことで、人間と妖怪としての第一印象を互いに改めていた。

「気をつけてね」

橙は自分が人間の身を案じる言葉を使ったことに違和感を感じなかった。

「おう。また今度勝負しようぜ。あと、お前のご主人様って奴ともやってみたいな」

「次は負けないし、あんたなんか藍様に勝てるなんて絶対はないからね」

「ははっ、そいつは楽しみ——」

負けず嫌いな性格は、似たような魔理沙自身にも共感出来た。

幼い見た目ではどうしても感じてしまう微笑ましさに笑いかけ、しかしそれは途中で止まる。

橙の背後に現れた別の妖怪の存在に気付いたのだ。

魔理沙は、その姿を見て完全に意識が移っていた。

「なんだ、何者かと思えばお前か」

「お前……」

九本の尾を優雅になびかせ、魔性の美貌を持つ狐の妖怪は魔理沙の前に降り立った。

最初の頃と全く同じ、冷ややかな視線が見下ろしている。

単純な身長の違いの意味が、そこに込められていた。

「藍様——」

振り返った橙の顔が満面の笑みに輝く。

どうやら、彼女のご主人様とはこの『藍』と呼ばれる妖怪だったらしい。

奇妙なめぐり合わせに苦笑を浮かべようとして、魔理沙は失敗した。

あまりに唐突に果たされた再会が、複雑な感情と思考の混乱を起こしている。

苦々しげに睨み付ける魔理沙の存在を完全に無視し、藍は駆け寄る橙に優しく微笑みかけた。

「橙、良い子にしていたかい？」

「はいっ！ 今日マヨヒガのお掃除をしていました！」

「うん、ちゃんと与えられた仕事をこなしているようだね。偉いぞ。

ここは普段は使わないが、使う時にはいつも重要な用件の時なんだ。しつかりと管理しなさい」

「はい、分かっています！」

「よろしい。では、次にその人間のことだが……」

話を变えながらも、その話題の対象である魔理沙には一瞥すらくれずに藍は笑顔のまま橙の頬に手を添えた。

「そいつと勝負をしたね。結果はどうだった？」

橙は気まずげに目を逸らすことしか出来なかった。

しかし、聡い藍にとつてその反応は答えも同然である。

「負けたな」

「……はい。ごめんなさい」

力無く項垂れる橙に対して、藍は表情を引き締めた。

言葉にはしない叱責の気配がハッキリと表れている。

藍は、黙り込んだ橙の頬を強く叩いた。

思わず口を出そうとした魔理沙だったが、藍の厳しくはあるが決して罵るようなものではない真剣な目付きを見て、ぐっと堪えた。

きつと、これは部外者が口を挟んでいいものではないのだ。

そう自然と理解出来た。

冥界で、霊夢と先代巫女が向き合っていた時の光景が思い出されたのだ。

「橙。お前は私の式神、ひいては八雲紫の式の式なのだ。その自覚と自負を忘れないようにしなさい」

「はい……ごめんなさい、藍様」

「謝るな。弱い態度は癖になる。ただ、自分の中で誓いなさい。もう負けることなどないように、強く在るんだ」

「わかりました」

目に涙を溜めながらも、最後は真っ直ぐに藍の顔を見返して、橙は答えた。

藍は満足気に頷き、再び笑みを浮かべる。

魔理沙が抱いていた印象を崩すような、藍の意外な一面を見てしまった。

厳格であり優しくもある。

おそらく身内にだけしか向けられない、真摯な態度だ。

人間である自分には絶対に向けられることはないものだな、と納得しながらも魔理沙は藍への悪印象を改めていた。

「ムカつくだけの奴だと思ってたんだけどな……」

「ああ、まだいたのか人間。とつとと消えろ」

あ、やっぱムカつくだけだわ。

魔理沙は額に青筋を浮かべて睨み付けた。

「わたしは霧雨魔理沙っていう名前なんだぜ？」

「そんなことは記憶しているが」

「じゃあ、名前呼べよ。それと、名乗ったんだからお前も名乗り返すのが礼儀だろ」

魔理沙は二人の会話から『藍』という名前を聞き取っていたが、同時にそれを絶対に口にしないでおこうと決めていた。

藍本人から直接名乗らせて、初めてこちらから名前を呼んでやるつもりだった。

単なる意地でしかない決意だったが、それは固かった。

そんな魔理沙の決意を鼻で笑うかのように、藍は全く変わらない冷やかな視線で応える。

「お前など、名乗るに値しない」

ただ淡々と事実だけを断言するような返答だった。

藍が魔理沙の名前を、単なる記号として記憶しているだけなのは明確だ。

「へっ、相変わらずの格上様な台詞だな。いつか、絶対にわたしの存在を認めさせてやるぜ。具体的にはお前に勝って、な」

「不可能だ」

彼女にとって、魔理沙だけが例外ではなく、全ての人間が対等には値しない存在だった。

「お前達人間の力が、時として妖怪のそれを上回ることは認めよう。中には博麗の巫女のような例外も存在する。」

しかし、人間という種そのものが私にとって記憶することすら値しないのだ。どれ程の力と栄華を手にしようと、百年も経てば自身を含む全てを失い、同じだけの時を経て私の記憶から消えていく。

そんなことの繰り返しだ。お前達、人間という短い存在は。私を脅かすことも、揺るがすことも無い。ただ、時と共に過ぎ去っていく儂い存在なのだ。そしてお前は、そんな中で特に脆弱でちっぽけな存在ではない」

自分にとつて、魔理沙が如何に無価値で興味を抱かないものなのかを、静かに丁寧に——そして何の感慨も無く藍は語って聞かせた。

「せいぜい、そうやってわたしのことを雑魚だつて侮つておくんだな」「雑魚？ それは敵対する者への認識だ。お前など、せいぜい煩わしい羽虫程度さ」

冷笑を浮かべる藍に対して、しかし魔理沙は我が意を得たりとばかりに不敵な笑みで応えた。

「いいねえ……少なくとも眼にも留めない石ころじゃなく、視界に映る羽虫程度には認識を改めてくれたわけだ。橙に勝った成果かな？」

決闘を経て通じ合った橙を出すことは魔理沙にとつても抵抗のある行為だったが、その挑発は初めて藍に効果を発揮した。

僅かに。本当に僅かに、藍の顔に不快の色が浮かぶ。

目元を細め、敵意を滲ませて魔理沙を見下ろす。

そのまま、まさに虫を払うように彼女が力を振るえば、魔理沙は抵抗する術も無く吹き飛ばされるだろう。

しかし、そうなった結果がどちらにとつて敗北であり勝利であるのか、藍と魔理沙は互いに自然と理解し合っていた。

「……口だけは減らない人間だ」

結局、藍は静かにそれだけ言葉を返した。

あとは何も語らず、魔理沙を無視するように背を向けて立ち去る。

二人のやりとりを見守っていた橙が、躊躇いがちに魔理沙の方を見ながらも、慌ててそれに続いた。

魔理沙は、遠ざかるその背中をじつと睨み付けていた。
遠く、高い存在だ。

「今はこうして見上げるしかない。
しかし、待っている。」

「いずれは――。」

「お前の名前を呼ぶぜ。そして、わたしの名前を呼ばせるぜ」
絶対に。

己の意志を確かめるように、魔理沙は呟いた。

「……って言っても、今のままじゃ厳しいか。」

ああ、やっぱり独学じゃ限界があるのかな。でも、パチュリーにこれ以上教わるっていうのもなあ」

師事する相手として適切な魔法使いの先達がいることを理解しながら、それでも悩んでしまうのは余裕などではなく、単なる小さな意地だった。

「なんか、譲られてるっていうか、見守られてるっていうか……居心地悪いんだよな。もつと、互いに利益が絡んだドライな関係で師事できる相手が欲しいぜ。いないかな？」

しかし、その意地こそが魔理沙の不屈の闘志を支える根っこである。

彼女は未だ未熟であり、若かった。

それこそが強みであることさえ、自覚していない。



【魂魄妖夢の迷走】

妖夢が人里を訪れるのは、これが初めてではなかった。

とはいえ、何年も前から定期的に訪れているわけでもない。

妖夢の住む冥界は、結界によって地上と隔絶されている。

同じ幻想郷にあっても、更にそこから生者の住む場所と死者の留まる場所に分けられ、長年隔てられてきたのだ。

その結界が、最近になって破壊された。

言うまでも無く、今や『春雪異変』と呼ばれている異変の時である。

あの時、霊夢の破壊した冥界の結界は、今も有耶無耶の中で修復されぬまま、冥界と地上の境界を曖昧にしている。

主人である幽々子が、妖夢にその冥界の出入り口を通って地上へのおつかいを頼むようになったのは、その異変が終結してしばらくのことだった。

名目は、様々である。

基本的には文字通りの『おつかい』だ。主に人里の店を訪れ、菓子や書物などの嗜好品の類を買いに行かせる。

そのあまり必要性の感じられない命令が、何よりも自分自身の為のものであると妖夢は最近理解し始めていた。

妖夢はあの異変以来——正確には、霊夢に決定的な敗北感を味わって以来、何処か様子がおかしかった。

庭師としての仕事をこなし、稽古も毎日続けている。しかし、いずれも身に入っているという気がしない。

自分の中の歯車のようなものが止まったままだと、そんな漠然とした違和感を抱えたまま日々を過ごしていた。

その捉えようのない違和感は、少しずつ表にも出始めている。

今日も、おつかいを済ませて人里を歩く妖夢の顔は俯き加減で、何処か暗かった。

「……あれ？　ここ、端っこの方だ」

ふと我に返った妖夢は、自分が人里の外れを歩いていることに気が付いた。

何をやっているんだ私は、と。半ば無意識に歩いていた自分を戒める。

そもそも、多くの店は人里の中心に集中している。

一体、何をどうすればこんな主だったルートから外れた場所まで来れるのか。

——いや、理解はしていた。

幽々子から買い物を命じられる店は、いつも違う。

無作為に選んでいるのではないかと思うほど、常に違う場所で違う物を買ってくるように頼まれた。

まるで、人里の中を広く歩かせることが目的であるかのように。そんな予想がつくようになったのは何回目の『おつかい』の時だったか。

人里の住人や、店の店員と触れ合い、地上の多くの情報を自然と得る内に妖夢は自分が無意識に避けようとしている事柄があることをいつしか自覚していった。

この人里には、先代博麗の巫女が勤める診療所が存在する。

先代——すなわち、あの霊夢の母親である。

そして、霊夢は度々人里を訪れ、その母親に会っていくことがあるらしい。

それを知って以来、妖夢はわざわざ遠回りをしてでも診療所のある場所を避け、息を潜めるように人里を去るようになった。

理由は明白だ。

会いたくなかった。あの博麗霊夢とその縁者に。

「腑抜けすぎだ……私」

妖夢は自嘲のため息を吐いた。

何度も自問したが、いつも答えは一つ。

要は、霊夢に会うのが怖いのだ。

もはや彼女とは敵対関係ではないが、一度経験した完全な敗北が妖夢の霊夢に対する感情に深い闇を落としていた。

屈辱や、それによる反骨心すら存在しない。ただ絶望感と、二度と相対したくない恐怖だけがあった。

今、霊夢と会えば、表向きは単なる知人としての会話程度なら成り立つかもしれない。

しかし、内側では自分は常に彼女に無条件で降伏しているような状態になる。

格上の相手に、犬が仰向けになって腹を晒すような有様になってしまふ。

そんな惨めな気持ちは御免だった。

これまでの日々で培ってきた力と信念が、その自覚と自負が、妖夢の心を完全な負け犬へ墮とすことを許さなかった。

霊夢に敵わないと悟ったからこそ、何度もその事実を突き付けられるのに耐えられなかったのだ。

初めて経験した実戦の結果は、鍛え上げた己の力による使命の達成に燃えていた若き剣士を、単なる臆病者へと変えてしまっていた。

「……………このまま、逃げ続けるのか？」

帰路を進む足はすっかり止まり、妖夢は何度繰り返したか分からない自問を呟いた。

そして、いつも同じ答えで決まる。

——挑んでも、勝てる訳が無い。

手も足も出なかった。

自分勝手な言い訳に縋りつき、それさえも粉碎された。

妖夢は、もう一度ため息を吐くと、歩みを再開した。

このまま白玉楼へ帰り、屋敷の中の仕事をこなし、意味のあるかも分からない日々の鍛錬を繰り返し、そして——あと何度眠れぬ夜を過ごすのだろうか？

妖夢は唇を噛み締めた。小さく切れ、血が流れた。

こうして苦悶し続ける妖夢の姿を見ていた幽々子は、何らかの変化を期待して彼女に地上へのおつかいを命じていたのだ。

新しい出会いや、未知との遭遇。何でもいい。

そして今日、ようやくその期待は応えられた。

それは、人里を出てすぐのことだった。

交通が混乱するので、人里内での飛行は禁止されている。

人気の無くなった所で妖夢は白玉楼へ向かって飛ぼうとした。

しかし、その時近づいて来る獣臭に気が付いた。

加えて、血の臭い。

それらを放ちながら歩み寄って来る者が、単なる獣ではなくボロボロの外套を頭から被った大柄な男であることが妖夢に強い警戒心を抱かせた。

まず間違いなく妖怪だ。

しかも、こいつは人か動物か、何らかの生物を大量に殺している。鼻を突く生臭さに、妖夢は不穏な空気が混ざっているのを敏感に感じ取った。

「……止まれ」

相手の事情は知らない。このまま何事も無く自分を通り過ぎるのかもしれない。

しかし、男の進む先には人里があった。

妖夢は立ち塞がり、腰の刀に手を掛けながら声を発していた。

「ここから先は人里だ。血の臭いを纏って、あそこへ入るつもりか？」

男は答えない。

ただ、顔を覆う外套の影の中で人間離れた異様な眼光が二つ輝いた。

妖夢は咄嗟に横に跳んだ。

一瞬遅れて、つい先ほどまで妖夢の居た場所を男の爪が引き裂いた。

外套から伸びる男の腕は体毛に覆われ、爪は刃のように鋭く、長い。

「スペルカード・ルールはどうした!？」

叫びながら、妖夢は自分が悠長なことを口走っていると後悔した。

奴は戦いを仕掛けてきた。

どんな形にせよ、それを迎撃しなければならぬ。

妖夢は刀に手を掛けたまま、敵となった男を観察した。

意表を突くほどに素早い身のこなしによって、外套が捲れ上がり、

男の全貌があらわになる。

その腕と同じように、全身に体毛を生やした体は大きく、筋肉が盛り上がっている。

肝心の顔は、人間の物ではなかった。

突き出した鼻面と、ズラリと並ぶ牙は犬か狼のそれである。

男の正体は人狼だった。

「……」

かろうじて言葉らしきものが口から漏れる。しかし、それは獣の唸り声混じりだ。

その眼球に知性の色は感じられない。

「ハクレイ……ミコ……ッ!!」

「何、博麗……!?!」

漲る殺意の乗せられた言葉は、妖夢にとって意外なものだった。彼女は知らない。

この人狼の指す博麗の巫女が、当代の霊夢ではなく、彼の仕える主を滅ぼした先代の博麗であることを――。

かつて在った理性を長い年月で磨り減らした後に残った、ただ一つの妄執に突き動かされ、彼は幻想郷を彷徨っていた。

一体何処で耳にしたものか。先代巫女の負傷を知り、僅かな知性が導くままに此処へやって来た。

そして今、人狼は立ち塞がる障害の一つとして妖夢に狙いを定めていた。

人外の瞬発力により、再び襲い掛かる。

「速い……っー!」

二度目の実戦は、霊夢の時とはまた勝手が違っていた。

理性の無い人狼はスペルカード・ルールなど完全に無視して、単なる暴力を行使して来る。

それは命を賭けた戦いだった。

もちろん、その事実には怯むような妖夢ではない。

彼女は何かを殺める為に作り出された刀という武器を使いこなす鍛錬を続けてきたのだ。

妖夢は、技術など何もない獣そのものである敵の動きを冷静に見極めて、斬りかかろうとした。

しかし、刀を抜けない。

正確には、刀を抜く決意が出来なかった。

――斬る。

敵の攻撃を回避し、見事な足捌きで隙だらけの背後まで回り込む。

――今だ、斬る。

敵が振り返ろうとする。

刀が抜けない。

——何している。斬れ。早く。躊躇わず。斬れ。斬る。斬れ。斬って。

敵が完全に振り返った。

再び繰り出された爪の一撃を、慌ててかわす。

先ほどよりも僅かに反応が遅れていた。

——斬って……本当に斬れるのか？

戦闘が始まって以来、無視し続けていた疑念が大きくなり始めていた。

どうしても、自分が敵を斬るイメージを浮かべることが出来ないのだ。

抜き放った刀が、敵の装甲に等しい分厚い筋肉と体毛に遮られ、次の瞬間反撃を受けて自分の方が殺されるイメージばかりが鮮明に脳裏に浮かび上がる。

敵に攻撃が通じないのだという、根拠の無い不安が消えなかった。それを否定する材料を必死に探そうとして、肯定する要素ばかりが目につく。

妖夢が今、腰に挿している刀は受け継いだ二振りの名刀ではない。ナマクラとまでは言わないが、無銘の刀に過ぎなかった。

霊夢に言われたあからさま挑発の言葉さえ心に残り、剣の力に頼ることを半ば意地になって拒んでいた結果がこれだった。

そして、今ではその刀が妖夢の不安を後押ししている。

こんな刀で、こんな腕前で、本当にあの敵を斬れると思っているのか——？

際限なく膨れ上がる不安と疑念は、妖夢の動きからも精彩さを失わせていった。

高い身体能力に頼ったデタラメな人狼の連続攻撃に、妖夢は徐々に対応し切れなくなっていく。

ついに、敵の爪が妖夢の頬を浅く裂いた。

視界に自分の血が飛び散るのが映る。

次の一撃は、きつと首に届くだろう。そう意味もなく確信した。刀は、抜けない。

斬れない。

勝てない。

死ぬ。

「嫌……」

追い詰められた妖夢の中で、何かが外れた。

それは異変の日より溜め込んできた不安や屈辱などの鬱屈した感情を解き放つ枷だったのかもしれない。

妖夢はソレを解き放った。

「やあああああああああああああああああつ!!!」

絶叫と共に、刀を抜く。

剣の才能の有無を問うならば、妖夢は確実に天性の才を備えていた。

窮地に追い詰められた時、彼女の中に眠る潜在能力が無意識の内に発揮されたのだ。

その瞬間に至るまでの葛藤や苦悩を一切合財纏めて切り払うように、妖夢の放った剣撃は文字通り一閃となつて敵の腕を切断した。

妖夢の手に凄まじい手応えが伝わり、決して斬れないと思い込んでいた人狼の太い腕が枯れ木のように宙を舞う。

切断面から吹き出す血が妖夢の顔を汚し、遅れて敵の甲高い悲鳴が響き渡った。

「……斬れる」

視界に映る光景を半ば呆然と見つめ、妖夢はようやく現実を受け入れた。

「私は、コイツを斬れる!」

返す刀がもう片方の腕を斬り飛ばす。

もはや疑いようもなかった。

目の前の人狼は、妖夢にとって敵ではない。

剣閃が幾筋も瞬いた。

いっそ鬪り殺しではないかと思えるほど、眼前の敵を妖夢は徹底的に切り刻んだ。

三回目で既に絶命していた人狼は、四肢をバラバラになるまで切断

された後、最期には慈悲を思い出したかのように首を刎ねられて、ようやく地面に倒れた。

いや、落ちたと表現した方が正しいかもしれない。

血と人体に似たパーツが地面に散らばっていた。

「はっ……はっ……」

疲労ではなく興奮で息を荒げ、妖夢は刀を構えたまま、しばらく自分の生み出した惨状を見下ろしていた。

斬ることだけに意識を奪われ、返り血すらまともに避けられなかった妖夢は未熟である。

しかし、如何なる形とはいえ二回目の実戦は間違いなく勝利に終わった。

誰も覆すことのない事実であった。

「はっ……ははっ……は、ははははははっ」

上気した顔に、引き攣ったような笑みが浮かぶ。

妖夢の心の中では様々な感情が入り乱れ、それは正も負も交えて混沌としていたが、中でもただ一つ大きな思いが際立っていた。

それは、達成感だった。

「なんだ、私……勝てるんだ……」

噛み締めるように呟くと、その実感が全身に染み渡って安堵となった。

霊夢に敗北して以来、ずっと感じていた苦惱が綺麗さっぱり無くなっていた。

勝手に、自分は勝てないのだと思い込んでいた。

このまま一生負け犬のままなのだ。

しかし、それらは錯覚だった。

実際に刀を抜いてみればなんとということはない、あっさりと判明した事実だった。

「勝ち負けなんて、戦ってみるまで分からない。悩む必要なんてない。余分なことは考えなくていい。相手が強いのか、私が強いかなんて――」

がらりと変わった、確信と自信に満ちた口調で虚空に向けて断言す

る。

「斬れば、分かる」

その日、白玉楼に帰った妖夢は気配を殺して屋敷を移動し、血塗れの体と服を幽々子の目に付かせずに処理することに成功した。

何食わぬ顔で、改めて帰宅を装い、普段と同じように仕事と日課に取り掛かった。

幽々子は、そんな妖夢の様子から彼女の中でこれまでとは違う決定的な何かが変わったのだと根拠もなく確信した。

一抹の不安と共に――。



【今日の先代】

――話は聞かせてもらった。幻想郷は滅亡する！

な、なんだってー!? って感じに一人ノリツツコミ。

いや、でも紫から今回の異変の経緯やら発端やら理由やら、ついでに紫自身の懺悔まで聞いた私の出来る反応はそれくらいのものであった。

まず『春雪異変』と呼ばれるようになった冥界の異変だが、これは聞くまでもなく原作通り幽々子主催のものであったので特に思うところはない。

まあ、強いて言えば『うちの霊夢すげー』ってところか。

異変解決に乗り出して最短距離を最速で突っ切り、弾幕ごっこまでパーフェクトに勝ち抜いて私の目の前で幽々子まで打ち負かしたのだ。

あとの活躍は、わざわざ語られるまでもないよね。

ビデオカメラ持ってたら確実に録画してるレベルだった。

そして、肝心の私自身に関する事件。

ずっと疑問だった紫が私の魂を引き抜いて亡霊にしまった理由なのだが――。

悲痛な覚悟をみたいなものを決めた表情で謝罪された私は、どうすればいいのかわからなかった。

具体的に言うと、紫を責める理由なんぞ見当たらん。

確かに不意打ち喰らったり、その結果魂抜かれるという擬似的な殺人行為をやられてしまった事実と思うところがないわけではないが、それら全ては悪意によるものではないと分かったのだ。

聞けば、不自由になった私の足の治療の為って言うじゃない。

まー、あれだね。外の世界にもあった、治療方法が確立するまで冷凍睡眠で待つ、みたいな処置と同じなわけだ。

もちろん、それで次に眼が覚めた時自分の知っている人間がいないくらい時間が流れてたーみたいなおチと同じような可能性があったことにはちよつと冷や汗が出てしまうが。

それでも、紫は私の身を案じて行動を起こしてくれたのだ。

何らかの制裁や、実は長年隠していた悪意によるものかもしれないという、最悪の予想が外れた私にとって、紫の告白は歓迎すべきものだった。

だから、気にしてないよーって軽い感じに許したつもりだったんだが……。

駄目だね。

去り際の紫の表情を見る限り、紫自身がすごい気にしてるっぽい。

うーん、気遣いとかじゃなくて私の本心なんだけどなあ。

素直に受け止めてくれないだろうか？

紫以外にも、慧音やらチルノやら。今回の件に関わったらしい人達から謝罪をされ、それを私は受け入れ、話し合ったり一緒に食事をしたりして、少しずつ和解していった。

諍いしてるわけじゃないから、こちらとしては和解もクソもないんだけどね。

あっ、あと生き返った時にはもういなかったけど幽香も来てたらしい。

この足だとお礼に行くのも一苦労だから、一筆したためてチルノに手紙を頼んだら、受け取ったその場で読んだ直後に目の前で燃やされ

たらしい。

チルノは笑顔でそう報告してくれた。

私も笑顔で応えた。

二人で思うことは一つ！

——ちやんと読むんだ。

ゆうかりんマジツンデレ。

そんな感じに日々が過ぎ、気が付けば今回の件とは関係のないフラッシュ達紅魔館のメンバーまで再度お見舞いに来てくれるし、期せずして生き返った私の快気祝いみたいになっていた。

もちろん、私が一度死んで亡霊になったことは、事件の関係者以外に知られていない。

だから、残す問題は未だに自責の念があるらしい紫との関係なんだよね。

言葉を幾ら重ねても、彼女には上手く伝わらないだろう。

私も上手い言葉なんて思い浮かばない。

よって、私はあの日の朝に紫とやり損ねていたことの続きをすることにしたのだった。

「……それで、今朝はこいつが居るわけね」

「ああ、朝食に誘った」

「……お邪魔しているわ」

本来なら私一人用の食卓を霊夢と紫の二人を加えて、三人で囲んでいる。

少しばかり狭いが、なんとかあったな。

考えてみれば、こうして紫と同じ食卓を囲むのは初めてのことだ。

紫も相変わらず私に負い目を感じているせいか、食事にもちよつと強引に誘ったらあっさりOKしてくれた。

霊夢と紫の仲も変わらずだが、心なしか以前よりも親しく見える。気のせいかしらん？

あの異変で何かあったと思うだが……まあ、その辺の推測は後回しでいいな。

「何故、貴女が人里の診療所にいるのかしら？　神社はどうしたの？」
「食事が済んだらちゃんに戻るわよ。慧音と交代でたまに母さんの様子を見に来てるの」

「あの異変以来、随分と変わった印象を受けるわね。どんな切欠があったのかしら？」

「あの時言わなかった？　あんたには教えてやらない」

こうした軽口の応酬も相変わらずだ。

しかし、やっぱり以前よりも険のようなものが取れている気がする。

もちろん、良いことなただけどね。

さあ、とりあえず朝食にしよう。

同じ釜の飯を食べば、紫も私に対する変なわだかまりもなくなるって！

「この食事は、先代が作ったのかしら？」

いただきますの合掌をした後で、箸を手にしたまま尋ねてきた紫に私は頷いて応えた。

実際は霊夢も手伝ってくれてるんだけどね。基本は私が作りました。

手料理を食べてもらう、というのも仲直りをする上で大きな意味を持つからね。

うん、味も良好。

この大根の煮物なんて味が染みてる染みてる。

「……生きているというのは、体にものをいれていくということなんだな」

ふと、私はそんなことを呟いていた。

食事をじっくりと味わっていたせいかな。ゴローちゃん的な名言をつい口走ってしまった。

でも、この言葉って真理だなあとしみじみ感じるよねえ。

——と、そんな風に感動しながら食べていると、霊夢と紫がこちらを注目しているのに気が付いた。

「……そうね。生きるというのは、そんな当たり前のことなのよね」

そして、何やら納得したような穏やかな笑みを浮かべる紫。
このパターン久しぶりじゃね？

私の何気なく呟いた言葉から、一体どんな意味を見出したのか、紫は先ほどまで私との間に作っていた距離をいつの間にか無くしていた。

なんつーか、こう精神的なバリエーみたいなものがなくなったように感じる。完全に感覚だけ。

私が見つめ返す先で、紫は同じように大根を一口齧ると、ゆっくりと咀嚼して味わった。

……美人は食事の仕方一つとっても様になるなあ。

「美味しいわ」

「ありがとう」

紫の微笑みに、作った本人である私は微笑みで応えた。

うんっ。なんか分からんが、とにかく私の考えは合っていたらしい。

一緒に美味しいものを食べれば、心も豊かになって和解も容易いのだ。

私達は笑顔で食事を続けた。

「このお味噌汁も絶品ね」

「あ、それ作ったのあたし」

紫の言葉に霊夢が何気なく答え——そして、食事が停止した。

「……ごめんなさい。よく味わったら、これちよっと味が濃いわ」

一変して、紫は口元を押しさえながらお椀を置いた。

霊夢の眉が僅かに跳ね上がる。

「あ、そう。ごめんね、年寄りの薄い味付けに出来なくて」

「気にしなくていいのよ。貴女が未熟なのは知ってるから」

「食べ終わったらとっとと帰ってね。食器が片付かないから」

「あら、食後の一服くらいは許して欲しいわ。先代は足が不自由なのだから、後片付けの方は貴女にお任せするわね」

あれれー？　なんか静かながらも穏やかな食事風景が急に殺伐とし始めたぞー？

本来の調子を取り戻したかと思つた途端に霊夢との関係も戻ってしまう紫。

異変を経て、二人の仲が少しは改善したかと思つたが別にそんなことはなかったぜ！

とりあえずこの状況、普段なら私は口も挟めずに見守るしかないが、食事中となつたら話は別だ。

私が一睨みすると、子供の頃一緒に暮らしていた霊夢は視線の意味を察して、慌てて黙り込んだ。

紫に対しては、最初に霊夢の料理にケチを付けて喧嘩を仕掛けた元凶なので、厳しくいく。

食事中のマナーには、私はうるさいのだ。

「えっ？ あつ、先代ちよつと待って……。わ、悪かつたわ、悪ノリが過ぎてててつ、痛い痛い！」

私の表情に真剣さを感じ取つたか、慌てて取り繕う紫の腕を捻り上げる。

即ち、アームロックの形だ。

この怒りの表現を見れば分かるとおおり、私の食事に対して払う敬意はゴローちゃんに感化されてのものである。

「モノを食べる時はな、誰にも邪魔されず、自由で。なんというか、救われてなきやあ駄目なんだ……」

「母さんって食事中に話すのはいいんだけど、悪ふざけするのは許せない性質らしいのよね」

「そ、それを先に言いなさい！ ごめつ、許して頂戴！ 悪かつたら、もうしないからつ。イタタタ……!?!」

ふと、途中で思いついた私は、しばらくアームロックで紫を痛がらせておいた。

この制裁を以つて、紫の気にしていた異変の時のことも清算としておこう。

うん、我ながら筋を通した良い考えだ。

結局、この後更に涙目の紫がお詫びの為、一つだけ言うことを聞くという約束も取り付けて、今回の件は完全に終了となった。

ま、もちろん無茶な要求なんかするつもりはないけどね。

そうだな……こんな機会でも無い限り、紫の力を借りることなんて出来ないし、今度地底世界へ訪問する為にスキマを使わせてもらおうとしよう。

さとりにも会いたいしね。

お空と仲良くなったみたいだし、チルノも連れて行こうかな？

「……ねえ、『さとり』って誰？ 地底とか、あたし知らないんだけど」

「……詳しくは後で話すわ。簡単に言うと、先代と特別親しくなった地底の大物妖怪よ」

「……へえ」

今後の予定を考える私の耳に、何やらこつそり話している霊夢と紫の会話の内容は入って来なかった。

やっぱり、意外と二人って仲良しなんじゃない？

過去編

其の十四「文花帖」

「――天下泰平」

快晴の空から地上を見下ろしながら、射命丸文は呟いた。

「――堯風舜雨」

その気になれば幻想郷を一日で飛び回れる翼を持った、鴉天狗の中でも一等の『速さ』を持った彼女であったが、今は風の流れに身を委ねるように空を泳いでいる。

荒れた風も無く、地上もまた穏やかに時間が流れていく。

言葉のまま、平穩無事な日常がそこに在った。

「……つまらーん」

しかしあいにくと、彼女にはその平和を謳歌する素直な性根などないのだった。

気だるげな仕草で髪をかき上げ、眼下の景色をむしろ苦々しげに睨み付けている。

「あの『春雪異変』以降、全然話題が無いわねえ……ああ、私は何でこんな不毛なことしてるんだろう？」

嘆きながら、ガツクリと項垂れる。

――幻想郷に春が訪れなくなるという前代未聞の異変が起こって、既に一月近くが経過していた。

妖怪の山に住む鴉天狗達は、此度の異変をこぞって記事として持ち上げ、各々の見解や勝手な脚色を加えた新聞を作って広く配った。

文の『文々。新聞』は、それらの中でも持ち前の俊足で素早く掻き集めた情報によって紙面を彩り、その正確性もあって特に人気が高かった。

まさに特ダネだったのだ。

しかし、異変が解決してからは平和そのもの。

あのインパクトを超える記事など、早々見つかるはずもなかった。

新聞のネタは足で探すのモットーである文だが、こうして餌を求め

る野良犬のように幻想郷をあてもなく彷徨う自らの姿に虚しさと情けなさを感じ始めていた。

今日も今日とて、風の吹くまま気の向くまま。

もちろん、そんな気楽な気分ではない。

気が付けば、文は霧の湖の近くまでやって来ていた。

「あれ、文。こんな所で何してるの？」

きよとんとした表情で声を掛けてきたのはチルノだった。

彼女の接近は分かりやすい。周囲の気温が冷たくなるからだ。

この騒がしい氷精との遭遇を半ば期待してここを訪れた文は、使い慣れた表情を取り繕って振り返った。

「おやつ、チルノさんじゃあないですか！ 奇遇ですねえ」

チルノとの出会いに対する素直な喜びを表した笑顔を浮かべる。

少なくとも表面上は。

妖怪の中でも強力な部類に入る天狗という部族は『強い者には下に出て、弱い者には強気に出る』という性質がある。

いかに規格外の力を持つといっても、妖精であるチルノを文がどのように捉えているかは明白だった。

丁寧な言葉遣いは、相手を乗せる為の手段に過ぎない。

時として突飛な行動を起こすチルノの存在は、文にとって新聞を彩るネタの源なのだ。

表向きだけでも親身になっておきたいという打算があった。

「文はまた取材をしてるの？」

「ええ、これがお仕事ですからね」

「あー、でも今日は前みたいに『いんたびゅー』って奴には応えられないよ。あたい、今日は用事があるからね」

「あやや、それは残念です」

文は大げさに肩を落として見せた。

件の『春雪異変』において、寒さに関係する者としてチルノへの取材を行っていた。

当然、異変の首謀者は全く別にいるし、文もその時点で異変の全貌は掴んでいたが、紙面を彩る要素としておまけのつもりで取り入れた

のだ。

単純な妖精をおだて、持ち上げ、思ったとおりに動かすことなど処世術に長けた文には容易いことだった。

今回もまた、元々期待などしていなかった取材を断られたことなどすぐさま忘れ、むしろチルノの言う『用事』とやらの興味を引かれている。もちろん、表には出さずに。

「ところで、チルノさんの用事とは一体？」

「人里にね、お師匠に会いに行くんだ！」

「ほほう、お師匠ですか」

聞き慣れぬキーワードにネタの匂いを感じ取りながらも、文は穏やかな物腰を崩さなかった。

しかし、内心はガッツポーズを取っている。

最低でも暇つぶしになる、いい話題が飛び込んできたと喜んでいった。

「チルノさんのお師匠とは、一体どういうことでしょうか？」

「お師匠はお師匠だよ」

「ははっ、そうですか。まあ、何か習っているということですね」

察しの悪い妖精相手の会話に内心では辟易しながらも、効率的に情報を引き出そうと穏やかに先を促す。

人里に会いに行くということは、相手は人間なのだろう。

妖精に『お師匠』と呼ばれる人間が何者なのか、想像すら付かなかったが、あまり大きな話題にはなりそうにないな、と文はわずかに落胆した。

人間と妖精。如何にもスケールの小さな組み合わせだ。

これではあの異変を超えるようなインパクトは難しいだろう。

内容によつては、このまま適当に雑談を交わして別の場所へ移動したほうがいいのか、と。わずかな間に文はそこまで思考を廻らせた。

「それで、お師匠さんの名前は何と申すんですか？」

「……あれ？　そういえば、あたのお師匠の名前知らないなあ」

「ただ馬鹿なんですか。これだから妖精は疲れるんですよ。」

内心で毒づく。

「皆からは『先代』って呼ばれてるからね」

「なるほど、人里で『先代』というと、博麗の先代巫女で——」

言葉の途中で、文は盛大に吹き出した。

「うわっ、きたな!?!」

「せせせせ先代巫女おお?! チルノさんの師匠が、あの先代巫女ですかあ!?!」

動揺もあらわに、文はチルノに掴みかかった。

「ちよっ……どういうことですか!?! いつの間に、あの人と接点なんて持ったんです!?!」

「わわっ、落ち着いてよ。『せってん』って何?」

「何処で知り合ったのか、ってことですよ! チルノさんが先代巫女と師弟関係とか、そんなの初耳なんですけど!?!」

「えーとね、初めて会ったのは……冬になる前にお師匠と地底に行ったのね。そこであたいのお師匠になってもらったの」

「ち、地底……」

最初の余裕は今や完全に崩れ去り、文はチルノから語られる衝撃の事実の数々に翻弄されていた。

地底が封印された妖怪達の世界であることは、一部の妖怪達しか知らないことだ。

長年立ち入りの禁じられてきたそこへ、人間と妖精が訪れたということ自体が大事件であるというのに、その人間が様々な意味で有名な先代巫女だというのだ

異変に匹敵するほどの特ダネだった。

そんなものが、あまりに身近な所に転がっていた事実には半ば呆然としながらも、文はすぐさま我に返った。

このチャンスを逃すわけにはいかない。

咳払い一つ。意識を平静に切り替える。

「あ、あー……チルノさん。どうでしょう? 私もチルノさんと一緒に人里へ行ってもいいですかね?」

「え? ああ、うん。別にいいけど。文もお師匠に会いたいの?」

「ええ。先代巫女といったら、妖怪の間では非常に有名な方なんですよ。知りませんでした?」

「お師匠がすごく強いのは知ってるけど……」

「そうなんです。すごく強いから有名なんですよ。私達天狗の中でも話題の人なんです」

「そうなんだ。さすが、あたいの師匠ね。鬼だけじゃなくて、天狗よりもさいきよーってことね!」

「……いいいいい今、『鬼』って言いましたあああーっ!?」

「うわっ!? もう、さつきからなんなのさ……?」

文は動揺と共にかつて無い興奮に包まれた。

軽いネタ探しから始まったチルノとの雑談が、次から次へと特ダネを生んでいく。

新聞を作る為のささやかな情報源として築いてきた、気まぐれと戯れでしかなかったチルノとの交流を維持してきたことを深く感謝した。

逸る気持ちを押さえ、チルノとの同行をあつさりとしぎつけた文は内心で力強く拳を振り上げていた。

気分は有頂天となっている文は、この行動がどのような結果を生むのか、まだ知らない。



「——と、いうわけで。私も先代様のお宅にお邪魔させていただいたわけですよ」

そう言つて、射命丸はにっこりと私に笑いかけた。

なんとというか、非常に分かりやすい営業スマイルつてやつだな。何故か揉み手擦り手してるし。

相手に取り入る為に本心を隠し、しかもそれがあからさますぎて逆に慇懃無礼とすら感じる物腰だった。

うーん、ここしばらく会話するどころか何故か遭遇する機会すらなかったけど、天狗って人間に対して大体こんな感じの対応なんだよ

ね。

見下している点は力のある妖怪として共通しているが、表向きだけでも親身に付き合うように取り繕っているというか。

相手によっては不快に感じたり不安を煽られるかもしれない。

私？ 私の場合は——全然オツケーです！

まあ、強い妖怪全般に言えることなんだけど、大抵は人型をとって、しかも文字通り人間離れした美しい容姿を持つ少女がほとんどだから、そういう態度や対応もなんか許せちゃうんだよね。

いやー、美人って得だわ。何でも様になる。

この射命丸文もそうだった。

いや、代表的と言ってもいい。

私の知る限り、二次創作でもそういうキャラだったイメージが強い。原作はともかく。

そして、実際に会ってみてもそのイメージは正確だった。

射命丸と最後に会ったのは、思い起こせばもう大分昔のことだったという新聞のネタとして、『これまでの代とは違う風変わりな博麗の巫女』という新聞のネタとして、面白半分に接してきたものだ。

あからさまな打算越しとはいいえ、妖怪の知り合いの中では比較的穏便な関係かな。

その分、心の距離みたいなものは離れてるんだけどね。

射命丸だけでなく、天狗という種族全体に対してだが、かなり私と距離を置かれていると感じる。

その原因は、多分私が昔妖怪の山に行った時の出来事だろう。

——当時の事情や経緯を省いて簡単に言うと、天狗のボスをぶっ飛ばした。

射命丸とはその時に一度戦ってるし、あの出来事以降妖怪の間に私の顔も広く知られるようになったから、まず間違いない。

だから、私ってばたまに見る天狗の新聞とかに話題として上がることにほとんど無いんだよね。

ついこの間もそうだけど、異変のこととかは号外で広く取り上げられるのに……ちよつと寂しい。

だからこそ、こうして射命丸が私の診療所を訪れたことは少なからず驚きだった。

「何か用か？」

「あやや、そんなに怖い顔しないで下さい。怯えてしまいます。おお、こわいこわい」

「ごめんよ、この仏頂面ってデフォオなの。」

最近、この表情に慣れた相手が多かったから、射命丸のこの反応も久しぶりだった。

やっぱり私って、無意識に相手を威圧しちゃう風貌してるんだよなあ。

……しかし、射命丸はそれに対して何故に勝ち誇った顔でニヤツつて感じの不敵な笑みを浮かべているのだろうか？

「そう警戒しないで下さい、私は何も怪しいことなんて企んでませんから。」

ただね、ちよつと興味深いだけなんです。いつの間に『そんな足』になつてしまったのか、そこに至る経緯が気になりましたね。いやあ、実に良い新聞のネタになりそうじゃあないですか」

ああ、私の動かなくなった足のことか！

なんか今更な感じがするけど、そういえばこの足の事情って知ってる人少ないんだよね。ご近所さんとか、私が怪我をしたと漠然と把握しているだけで深くは聞いてこないし。

引退した博麗の巫女の動向なんて興味も無いだろうと思つてたから気にしなかつたけど、天狗の新聞にも私の足のこととか全然載つてなかつたしね。

射命丸が今になって、この足のことを知り、しかも取材に来るなんて予想外だった。

あと、興味を抱くのは分かるけど、何故にそんな悪意を滲ませまくった笑顔を浮かべるの？

警戒するつもりはまるでないが、その表情がむしろ相手を煽っているような気がする。

そんな悪女顔すら、元が射命丸だとすごい絵になるんだけどね。

うーん、東方キャラの百面相はいつまで見ても飽きないなあ。

さつきも言ったとおり、射命丸と会うのは数年ぶり。しかも、こうしてしっかりと顔を合わせるのは初めてだ。

私は新鮮な気持ちで、相手の一挙一動に注目していた。

無意識に、普段よりも更に口数が少なくなる。

「あれ、黙り込みましたね。気を悪くしましたかあ？」

すみませんねえ、真実を知りたがるのは新聞記者としての性みみたいなものでして——」

「相手が弱っているとすると、随分強気ですわね。天狗」

声も綺麗だし、滑舌もいいなあと全然関係の無い点に意識を持っていかれている私に代わって、不意に声が割り込んだ。

スキマから突如現れた紫だった。

「あやや、八雲紫じきじきにお出ましますか。相変わらず、すごい入れ込みようですねえ。今日は、そんな種族を越えたお二人の関係も是非詳しく取材させていただきたいものです！」

「本来、妖怪は歳を経るほど品格を増すものですけれど、貴女は逆ね。先々代の頃と比べて随分と品の無い食い付きようですわ」

「博麗の巫女など、人間の側に設けられた単なる官職——その領域を逸脱したのは貴女達じゃありませんか。路傍の石なら、私だって興味を持ちませんよ」

「その石に盛大に躓いたものねえ。もう一度痛い目を見る前に、退いておきなさい」

「だからこそ、今強気になるんじゃないですか。ねえ、先代様？ 羽虫が鬱陶しいなら払ってしまえばいいのですよ。今の貴女に出来るものなら、ね？」

なんか妙に胃が痛くなるような敵意と悪意が入り混じった二人のやりとりを聞いていた私は、唐突に話を振られて内心混乱した。

あ、ごめん。聞いてた。話聞いてたよ？

……でも、正直表現が暗喩的すぎて会話の内容がイマイチ理解出来ない。とりあえず、紫と射命丸がお互いを歓迎していないってのは分かる

が、私にはその理由が分からなかった。

うーん、どうも私が二人の不仲の原因になつてるっぽいし、ここはとりなしておいた方がいいかな。

「射命丸が、私の足のことについて聞きたいのなら別に構わない」

「おつ、さすがは先代様！ 話が分かりますね」

「先代」

紫の戒めるような視線に対して、しかし私は首を振った。

私に気を遣ってくれてるのは分かるが、そこまで拒絶するようなことじゃないだろう。

射命丸も退きそうにないしね。このままグクシヤクして、ただ時間だけが過ぎていくなんて不毛だ。

なんてたつて、今日の私には用事があるんだから。

射命丸を連れて来たチルノが、今もこうして会話に加われず、手持ち無沙汰になっているじゃないか。

「ただ、今日は私もチルノと出掛ける予定がある」

「ははあ、チルノさんと今日会われたのはそういう用事があるからなんですかね？」

「そうだ」

「なるほどなるほど。ならば後日……と、言いたいところですが、どうせならば私もそのお出掛けに一緒に一緒させていただいてよろしいですか？」

言葉遣いや物腰は丁寧だが、何処か有無を言わせぬ押し強さがある射命丸の提案に対して、紫はそつと口元を扇で隠した。

あつ、あれは相当イラついてるな。

感情的になりそうな時、紫はいつもあの癖を出すんだよね。

また静かながらも緊迫感のある舌戦が始まる前に、私は頷いてみせた。

「構わない」

「おおっ！ いいんですかあ、さすが先代様！ 懐が広い!!」

何故かオーバリアクションで喜んでみせる射命丸。

そこまで嬉しがることかな？

私としては、別に一緒に来たいっていうなら好きにしろって話なんだけどね。

別に何か重要な仕事をしに行くわけでもなく、むしろプライベートなお出掛けだから何も背負うもんじゃないしね。

ただ、今回の外出に協力してくれる紫の同意も必要だった。

「紫、いいだろう?」

「……そうね。まあ、別に構わないでしょう」

紫はわずかな間思案したかと思うと、あっさりとした承してくれた。

……何故か、悪い微笑みだった。

「ねー、お師匠。話終わった? あたい、早く行きたい!」

チルノが急かすように袖を引っ張る。

そーだね。正直、何故にここまで緊迫感のあるやりとりが展開されてしまったのか謎だが、私としても早く出掛けたい。

なんせ、今回のように紫の協力がなければ気軽に行けない所なんだからな。

「それじゃあ、紫。頼む」

「ええ、分かったわ。『約束』を果たしましょう」

そう言うのと、紫はゲートとなるスキマを広げた。

これが目的地へと繋がっているのだ。

『『向こう』に事前に連絡は送ってあるわ。ここに入って、出ればすぐに目的地よ』

「ほほう、スキマを使った移動手段ですか。随分遠い場所なんですね」

射命丸が珍しげにスキマを眺め、さりげなく写真を撮っていた。

そういえば、今回完全に移動手段として使っちゃってるけど、本来の紫の能力つてもっと強大で恐れ多いものなんだよね。

なんだろう、今更だけどすごい勿体無いことしてるような気がして来た。

「先代様とチルノさんの共通の用事って、一体何なんですか?」

「行けば分かりますわ」

射命丸の問い掛けに、紫は普段の胡散臭い笑みで答えていた。

そんなに勿体ぶるような話じゃないんだけどね。

チルノと手を繋ぎ、スキマへと足を踏み入れながら私が代わりに答える。

「友人に会いに行く」

「あたいはライバルに会いに行くのさー！」

「あやや、それは何とも興味深い」

さりげなく射命丸もチルノの空いた手と繋ぎながらついて来た。

おお、この二人って意外と仲良しなのか。

いいねえ、やっぱり彼女もチルノの純真さには素直に好意を抱いてしまうつてことなのかな。

周囲に無数の目玉が浮いている不気味なスキマの空間はすぐに終わり、私達は数歩で外へ出ることが出来た。

そこは既に地上とは違う別世界だった。

「……………あれ？　ここって」

傍らで射命丸が何やら呟いているが、あいにくと私はスキマを出た先で待っていた人物に気を取られてしまっていた。

いやー、『ここ』に来るのも数ヶ月ぶりになってしまったな。

でも、約束した通りにまた来ましたよん。

「久しぶりだねえ、先代。よく来てくれた！」

私達を出迎えてくれたのは、相変わらず豪胆で快活な鬼の勇儀。

「ふん、よく来たな妖精！」

「おう、待たせたなバカカラス！」

早くも見る者を和ませるやりとりをチルノと交わすちっちゃなお空。

そして――。

「いらっしやい。……相変わらず賑やかな思考ですね。再会が嬉しいのは分かりましたから、聞き慣れない単語を連発するのはやめて下さい」

心の友と書いて「しんゆう」と読む、さとりんだ。

久しぶりー！ 私の心を読めば分かると思うけど、本心で本当にまた会いたかったよ！

「分かっていますよ、恥ずかしいですね」

数ヶ月ぶりの再会だつてのにその冷めた反応……たまらんね。

じんわりと滲む喜びを噛み締めながら、私はここ地霊殿への来訪を
実感したのだった。

「今回は特にトラブルも起こりそうにないですが——」

不意に、さとりはジト目になって私の隣へ視線を移した。

え、何？

……ああ、そうか。紹介するのが遅れていた。私とチルノ以外にも
いるんだつた。

紹介しなきゃね。彼女は射命丸文と言つて……。

「射命丸文さんですね。ようこそいらつしやいました。地霊殿の主、
古明地さとりです」

あれ？ 何で射命丸つてばそんなに顔を青褪めさせてダラダラと
汗流しまくつてんの？

無言のまま固まって動かない射命丸を不思議そうに眺める私を尻
目に、さとりは何やら訳知り顔で彼女に微笑みかけていた。

「——ええ、そうです。貴女は八雲紫に嵌められました。

先代巫女が倒した鬼というのは、今そこにいる星熊勇儀さんです
よ。

その時のお話を聞きたいんですけどね？ ああ、遠慮なさらずに。も
うとつくにスキマは閉じています。さあ、どうぞ。中へお入りくださ
い。皆さん、ご一緒に——」



——どうしてこうなつた？

当初の予定とは全く違う展開に、文は内心で嘆いていた。

最初にチルノから先代巫女の情報を得た時、チャンスだと思つた。
多くの意味でのチャンスだ。

現役時代にはあらゆる妖怪を震え上がらせ、それまで人間の守護者
程度でしかなかった立場を、幻想郷のパワーバランスの一角にまで引
き上げた先代博麗の巫女。

その実力の高さは文自身も目の当たりにしていたが、当時から十数年を経て、未だに成長を続けていたとは驚きだった。

人間が鬼に勝つ。

一体、どんな冗談だというのだ？

しかし、チルノの言葉に嘘は感じなかった。

妖精という単純であり、同時に純粹でもある彼女であるからこそ、そんな奇妙な説得力があったのだ。

先代巫女が禁忌とされる地底へ向かい、鬼と戦って勝った——おそらく随分と省略されている内容だろうが、この結果だけ聞いてもとんでもないスクープだ。

是非とも、事細かに話を聞きたい！

そんな逸る気持ちとは裏腹に、内心には躊躇する気持ちもあった。

今回のことに限らず、人間でありながらあらゆる規格を凌駕する先代巫女は鴉天狗にとって絶好の取材対象だった。これは現役時代から変わらない。

それでいて、彼女の存在が天狗の新聞に滅多に載らないことには理由がある。

実に単純な理由だ。

天狗が自分より格上の存在——例えば鬼——を忌避するように、先代巫女を恐れるからである。

かつて、先代巫女が妖怪の山へ乗り込んできた時に起こった事件。

それを境に、博麗の巫女に対する妖怪達の意識は一変した。

彼女は畏怖の対象となったのだ。

文が今回の取材を躊躇する理由も、まさにそれだった。

正直言つて、怖い。

単純な実力もさることながら、どれだけ話術を駆使しても読み取れない表情や感情の変化が個人的に苦手でもあった。

こちらを警戒したり嫌悪するのならば、まだ理解出来る。

しかし、先代は全く逆に、文に対して友好的であり無警戒だった。

初対面の時から既に、奇妙なほど自分に気を許していたような気がする。

全く理解出来ない。だからこそ、不気味だった。

言葉少ない中で、いつの間にか自分の心を見透かされているような不安さえ抱かされる。

文はここ十数年間、意図的に人里を訪れることを避けてさえた。

——要するに、ビビッていた。

しかし、そんな懸念も、何とかチルノから事の詳細を聞き出そうと苦心した末に、思わぬ答えを得ることで解決した。

先代巫女は、その鬼との戦闘で負傷し、現在足に不自由を抱えているというのだ。

その情報を聞き出した時、文は表情に出さずに歓喜した。

先代の不幸を喜んだ。それは間違いなく文にとっては幸運だったからだ。

あの無敵の先代巫女が負傷——！

それだけでもネタになるが、加えて先代の力が大きく衰えたという事実が文の抱えていた躊躇いを完全に消し去った。

まともに動けなくなつた先代など、恐れるに足りない。

文にとって、先代が他の人間達と同じ格下の存在となつた瞬間だった。

聞けば、彼女がそれほどの傷を負つたのはもう数ヶ月も前の話であり、今日に至るまで天狗の間では噂すら流れなかつたことを省みるに、里ぐるみで大規模な情報規制を行っていたのだろう。

その人望。相変わらず、純粋な戦闘力以外にも恐ろしいものを持つ巫女だ。

しかし、どれだけ上手く隠しても限界はある。

今がまさにそれだ。

そして、一転した前向きな気持ちでチルノを急かし、人里へと向かい、先代の住む診療所へと足を踏み入れた。

中にいた先代が、杖を突いて少々不自然な体勢で立っているのを見て、内心でガツポーズ。確かに弱体化していた相手が、もはや格好の獲物にしか見えなくなっていた。

人間如きの顔色を伺っていたこれまでの鬱憤を晴らすように、あえ

て慇懃無礼な態度で接した。

久しぶりに対峙した先代は、負傷を抱えながらも、相変わらず掴みどころが無く、こちらの態度にも気を悪くした様子を見せない。

肩透かしを食らいながらも、途中から割り込んできた八雲紫に意識を切り替える。

これは予想していたことだった。

先代巫女に八雲紫が入れ込んでいることは、公には出来ないネタとして以前から掴んでいる。

しかし、今ならば恐れるものなどない。

八雲紫もまた強力な妖怪だったが、こいつには幻想郷の管理者としての複雑なしがらみや立場がある。

単純な力の権化である先代巫女より、遥かに御しやすい相手だった。

この際、この強大な妖怪と人間のスキャンダルも思う存分調べてしまおう、と。文は紫から発せられる敵意を受けて、なおも愉悦に浸っていた。

聞けば、先代は今日は出掛ける用事があるという。

逃がすものか、と今日一日はずっと喰らい付いて行くつもりで同行を申し出た。

当然、そんな自分を敵視する八雲紫には十分に注意を払い、途中で道を外されないよう、しっかりとチルノと手を繋ぎ、いざ足を踏み入れ――。

「縁つてのは面白いもんだ。友人との再会に、まさか旧知の妖怪まで付いてくるなんてなあ」

「はは……ど、どうも。ご無沙汰しております」

現在。文は地霊殿のバルコニーで勇儀と向かい合って座っていた。

一体何の間違いか、二人きりという状況だった。

チルノはお空と外に飛び出し、先代はさとり連れられて地霊殿の奥へと行ってしまった。

特に後者に関しては――おそらく読心を用いてのものだろうが――言葉のやりとりすらなく自然といなくなってしまったので、その真

相と全く接点の分からない二人の関係を探る為に是非付いて行きかけたが……。

当然、そんなことが目の前の鬼を相手にして許されるはずもない。文は文字通り釘付けにされているかのように、この場にいるのだった。

「そう畏まるんじゃないよ。顔に覚えは無いが、見る限りなかなか年季の入った天狗のようだね。強いんだろう？」

「と、とんでもない！ 私なんて無駄に長生きしてるだけですよ！」

「ふーん……そうかねえ」

顔を合わせて以来、萎縮しっぱなしで焦りっぱなしの文を見つめながら、勇儀は面白そうに笑っていた。

文自身としては、居心地悪いことこの上ない。

勇儀の言うとおり、直接の面識は無いが、星熊勇儀といえば妖怪の山が鬼の支配下にあった時でも名高かった妖怪だ。

鬼が強いから天狗は従う——そんな単純な原理をまさに体言しているのがこの鬼だった。

「あ、あのお……星熊様？」

ただ時計のように時間が過ぎていくことを待つことに集中していた文だったが、どうしても堪えきれずに口を開いた。

予想外の事態とはいえ、折角普段ならば入ることすら出来ない地底世界まで来たのだ。

記者としての性根が、恐怖心を凌駕した。

「おおっ、なんだい？ あと、私のことは勇儀で構わないよ」

勇儀は何故か嬉しそうに、愛嬌のある笑顔を浮かべた。

その表情にさえ無駄な圧迫感を感じながら、文は引き攣った笑みを返す。

「で、では勇儀……さん。先代巫女と勝負をして、そのお………負けた、というのは本当ですか？」

「その話か！ いやあ、その通り。負けた負けた！ 完敗だったさ!!」
機嫌を損ね、最悪の場合八つ当たりで吹っ飛ばされるんじゃないかという過剰な不安を笑い飛ばすように、勇儀は肯定した。

「この話、お得意の瓦版って奴で地上に広めるのかい？」

「いいいいいいえっ！ 滅相も無い、ただちよつとだけ気になっただけなんですう！ 黙れというのなら、墓まで持って行きますんで。はい！」

「ああ、いや。そういう意味じゃないんだ。むしろ、どんどん話してくれ。」

鬼を破った人間のお話。一番新しい御伽噺だ。是非、地上の人間や妖怪に知ってもらいたいねえ」

ま、いろいろと取り決めもあるから難しいかもしれんがね、と。勇儀は快活に笑いながら、盃を煽った。

そこには勝負に負けた悔しさや怒りなど微塵も感じられない。

改めて、鬼という種族の考え方が理解出来ないものだと内心で呆れながらも、文はとりあえず一つの問題が解決したことには安堵した。

まずは命あつてのモノダネ。最悪、口封じすら在り得るかと震えていた体から一気に力が抜ける。

どうやら、いろいろと考えすぎだつたらしい。

「宜しければ、当時のお話などを……」

「構わんよ。先代は今日一日泊まると言っていたからな、お前もそうなんだろう？ 酒でも交わしながら、じっくり話してやるよ」

「ははっ……お手柔らかに」

「天狗だつて酒豪で有名だろう。情けないこと言うんじゃあない。

よし！ 秘蔵の酒を飲ませてやろう。同族にしか奢ったことはいぞ？ ふふっ、楽しみになってきたな」

——鬼の酒！

文は思わず頬を緩めていた。

こんな機会でもなければ、飲むことなど決して叶わない。

この辺り、やはり彼女も勇儀の言うとおりの天狗である。酒は大好きだった。

おそらく夜の酒盛りは、今と同じように気の休まらない、相手の顔色を伺う時間になるだろうが、それでもその中にちよつとした楽しみを見出すことが出来た。

勇儀もまた、地上と分かれて以来出会うことの無かったかつての仲間との酒盛りに気分が高揚していた。

互いの持つ言葉を夜にまで取って置くように、自然と会話は止まり、二人して地霊殿の空を見上げる。

地底でありながら『空』と表現出来る広大な空間では、幼い妖怪と妖精が弾幕ごっこを繰り返していた。

覚えたてのスペルカードをお空が展開し、それを慣れた様子でチルノが避けていく。

やはり一日の長があるのか、チルノの方が優勢だった。

しかし、今の二人の間にはそんな勝負の優劣など関係はなく、ただ楽しみ、競い合う純粋な意欲だけが顔に浮かんでいる。

それを眺める勇儀の脳裏には、数ヶ月前の生涯最高の死闘が鮮明に浮かんでいた。

思い起こせば楽しみと喜びしか湧いてこない。

後悔も悔しさも無い。

——ただ、今日再会した先代を見て事実を一つ知った。

「……射命丸」

「は、はい？」

「先代の足だが……あれは、もう動かないのか？」

勇儀は上空の賑やかな弾幕ごっこを楽しみながら——少なくとも表情はするように笑って見せながら、静かに尋ねた。

「ええ、聞く限りでは。治す目処もないそうです」

「……そうかい」

それっきり、勇儀は黙り込んでしまった。

その横顔から、彼女の真意を掴むことは出来ない。

長く歳を経た文には、勇儀の思うことを幾らか察することなら出来た。いずれも確信の無い憶測だ。

しかし、当然のようにそれを言葉にすることは出来なかった。

余計なことを口にするのが怖いというのが大半だったが、残りの僅かな心の部分では、無粋であると思っていた。

鬼にとって、人間との闘争が如何に神聖であるか——理解は出来な

いが、知ってはいる。

文は、勇儀と先代が戦った時のことを詳しく知りたいとますます思った。

「どころでな」

「はい？」

座った時に差し出されまま、全く手をつけていなかった勇儀の酒を一口含み、その美味さに内心感動していた文に、おもむろに尋ねた。

「お前さんと先代って友人なのか？」

「……え？」

「いや、どういう関係なんだろうと思ってね。少なくとも、今回同行を許すくらい気の知れた仲間なんだろう？　天狗が人間と縁を持つつても珍しいと思つてねえ」

「……え。えー……ええー」

文は意味不明の声を繰り返すことしか出来なくなった。

忘れていた焦燥が一気にぶり返してくる。

勇儀の質問に対する答えは一つだった。

——違います。友人どころか友好的ですらありません。先代の弱みにつけ込んで無理矢理同行した挙句、その弱みについて事細かに新聞にしようと思つてました。

心の中で自分の状況を整理し、文は滝のような汗を流しながら青褪めた。

まともに答えれば、最悪死ぬ。

義理人情に重きを置く鬼の逆鱗に触れ、スペルカード・ルールとか知つたこつちやねえとばかりに素手で殴り飛ばされる。

文は何の根拠も無く確信した。

誤魔化さなければ。

しかし、嘘は言えない。

何故なら、鬼は嘘が嫌いだからだ。

でまかせだとバレれば、やはり結末は同じになる。

そして、先代巫女当人がいる以上、でまかせはあっさりバレるものと覚悟すべきだった。

返答しない自分を勇儀が不信に思う前に何かを適切な答え方を思いつかなければ、と高速で思考を巡らせ――。

「――友人ではないです」

「ほう……？」

「ただ、付き合いは古いです。なんせ、彼女を子供の頃から知ってますから」

文は口早にそう答えた。

言葉はぼかしたが、決して嘘ではなかった。

「先代の子供の頃？」

勇儀は純粹に驚いたらしく、眼を丸くした。

自分を打ち破る程に鍛え抜いた人間の原点――。

「興味深いね」

堪えきれぬ愉悦に、口の端が持ち上がる。

思わぬ話題だった。

是が比にでも聞いてみたい。

「その話、聞かせちゃくれないか？」

「ええ、構いませんよ」

気の良い笑顔を取り繕いながら、文は何とか危機を乗り越えたことに胸を撫で下ろした。

意外なことに、半ば苦し紛れで出した話題に対する勇儀の食い付きは良い。

このまま話を続けて、うやむやにしておこう。

「私が初めて彼女と会ったのは妖怪の山でした――」

その話を記憶の中から思い出すのは、大して難しいことではなかった。

妖怪にとって、数十年前の出来事など『昔』とすら呼べない。

だからこそ、過去の出来事を事細かに覚えていることも多くは無いのだが、少なくとも文にとってあの日の記憶は鮮明だった。

まさか、あの子供がああなるなんて――と。そう何度も思い返しては、驚かずにはいられなかったのだから。

其の十五「天狗」

——五十年以上前の話だ。

具体的には、鴉天狗達の実益と趣味を兼ねた広報活動が『瓦版』ではなく紙を用いた『新聞』へと呼び名を変え、妖怪の山だけでなく人里にも広まり始めた時期だった。

博麗大結界によって現世から隔離され、完全な秘境となった幻想郷にも、外の世界の近代文明が少しずつ入り込み始めた時期。

鴉天狗達の間で『写真機』なる文明の利器が認識され始めた時期。その後訪れる激動の時代の前触れとも言える、小さな変化がさまざまなように起こっていた時期だった。

その日、射命丸文は妖怪の山をグルリと一回りするのように飛んでいた。

彼女の日課だった。

それも数百年前からずっと続けている、年季の入った日課だ。

日によって、それは散策であったり、単なる気分転換の空中遊泳だったりする。特に、何か明確な一つの目的を持って続けているわけではない。

しかし、あえて一貫した意味を挙げるとするならば、その行動にはいつも『期待』があった。

昨日とは違う、日々に変化を求める期待だ。

日常に吹き込む新しい風——文は常にそれを求めている。それこそ、鴉天狗として生を受けて以来長年に渡って。

妖怪の山という縄張りを固守し、自らの築いた社会制度を遵守して、これを侵すものを排他的に扱う——そんな天狗の世界に在って、他からの影響や変化を望む彼女は相当な変わり者であった。

彼女だけが妙に熱を上げる新聞に関して——近い将来、写真機の普及によりちよつとしたブームにもなるのだが——他の鴉天狗達ならばさしても情熱を傾けず、事務的且つ片手間の作業なのだ。

それでいて、射命丸文という妖怪自体は実のところ、天狗の長とも

肩を並べる年季を誇る長寿の天狗である。

——長い年月を重ねて生きながらも、その性格や風格に一向に重みを持たせない奇妙な天狗。

——一箇所に留まることを知らない風のような妖怪。

天狗の仲間内や、他の妖怪達から挙げられる彼女の評価は、おおむねそうだったものだった。

「……ああー、何か面白いこと転がってないかしらねえ」

そんな周囲の評価とは裏腹に、実際に文が常日頃考えているのは、たった今力無く呟いた言葉以上のものではなかった。

もはや飽きるほど眺めた空からの光景。

季節によって彩りが変わり行く様を風流と思う感性はもちろん持っているが、日々のゆっくりとしたそれを楽しむほど気長な性格でもない。

暇潰し以上の意味はなく、文は昨日眺めた山の光景を記憶から引っぱり出し、その間違い探しをするように眼下を見下ろしていた。

「妖怪の山に侵入者とか、逆に脱走者とか出ないかなつと……」

物騒なことを口走る。

実際に起こったとしても、そういった事件に対応するのは鴉天狗の仕事ではないので、気楽な口調だった。対岸の火事は眺めるに限る。

そして、本当にそんなことが起こるほど、ここでの生活は刺激的ではないと自覚していた。

今日もまた、大した変化も無く一日が終わるのだろう。

昼の飯時が近づいていることを考えながら、文は何処か諦めを感じていた。

「——ん？」

ふと、見慣れた風景に異物が映った。

木々の間に紛れるように存在する小さな違和感。

文は僅かな期待を膨らませてそこへ降り立ち、しかしすぐに落胆した。

「なんだ、人間か……」

人間の子供だった。

年の頃は十にも届かないだろう、幼い少女だ。

粗末な服に身を包み、呆けたように虚空を見つめている。

空から降り立った鴉天狗の文にも何ら反応を示すことなく、心ここに在らずの状態で、この妖怪の山奥深くに座り込んでいた。

虚ろな瞳には意思の光など感じられない。

珍しいといえれば珍しいものだった。

親が傍にいる様子もなく、この文字通り妖怪が住む山に、小さな小さな子供がどうやって来たものか？

当然の疑問を、しかし文は気にも留めなかった。

「大方口減らしてしようね。目新しいものでもないか」

適当な予想をつけ、文は目の前の無力な子供に対する興味を完全に失った。

文が独り言を呟いた声に反応して、子供はぼんやりと視線を移したが、逆に文の方は既にそちらを見てもいなかった。

—— 獣か妖怪が始末をつけるでしょう。

納得し、文は再び飛び立った。

置き去りにされた幼い少女のその後のことも、その心の内も、一切興味など無く、文はその日の日課を終えた。

大空へと羽ばたき、舞い上がる鴉天狗の後ろ姿を、その子供はずっと見上げていた。

次の日である。

文は昨日、あの子供と出会った場所へ向かって全力で飛んでいた。

「もつと早く気付くべきだった……！」

前日のちよつとした発見のことを忘れ、一晩ぐっすり眠った後、朝食を摂っている最中に文は唐突に思いついたのだ。

—— 何故、あの子供はあんな場所にいたのか？

昨日その場で一度は思いついた疑問を、親が捨てたのだろうと適当に予想して切り捨てていた文だったが、改めて考えてみれば大きな違和感があった。

子供が自分の足であんな場所まで来れないことは分かる。

しかし、大人ならばあそこまでいけるといえるのか？

文の住む天狗の集落からそれほど遠くないあの場所は、妖怪の山でも奥にあたる。

獣や野良妖怪が棲み、周囲を白狼天狗が哨戒するあんな所まで、ただの人間がどうやって子供を運んだというのだ。

もちろん、文には分からない。

分からないからこそ興味をそそられる。

「お願いだから、生きてて頂戴よっ」

やはり前日、自分自身で納得してしまった『獣か妖怪が始末をつける』という状況に対して、今度は焦りを抱きながら文は急いだ。

もちろん、そうした子供の身を案じる思考の元になっているのは、単なる興味以外の何物でもないから、そこに焦りはあっても心配など微塵も抱いていないのだが。

しかし、少なくとも文にとって『興味』というのは重要だった。

家から飛び出して、あつという間に昨日の場所まで辿り着く。

そこに子供はいなかった。

文は冷静に観察し、周囲に血の匂いや痕が無いことを確認すると、すぐさま搜索の為に駆け出した。

残された足跡を発見し、同時にあの子供が自らこの場を移動したことに僅かな驚きを得る。

茫然自失としていたあの時の状態を、親に捨てられた絶望から来るものと思っていたが、違うのだろうか？

いずれにせよ、この妖怪の山で一晩過ごした上で、なおも心折れずに自ら動き出せる意思を持つとは、あの年頃の人間の子供とは思えない。

得体の知れなさが増すと同時に、興味もまた深まった。

顔をニヤつかせながら、足跡を追う。

子供の足では下山はもちろん、長い距離を進むことも出来ないだろうという文の予想は当たった。

少し離れた場所に流れる小川の傍に、子供の姿を見つけたのだ。

「……あの子供、自分で川を探したの？」

子供は小川の水で口をゆすぎ、顔を洗っていた。

何の変哲も無い営みの様子の中で、しかし文はその異常性を正確に理解していた。

川を見つけたこと自体は偶然かもしれない。

だが、少なくともあの様子を見る限り、子供は自ら川を探したのだ。自分が、生きる為に必要なのだと判断して。

水源を探し出すことが、生き残る為に必要な行為だと大人ならば誰でも理解出来る。

しかし、あの子供はどう見ても親の庇護無しには生きられないほど幼い。

生きる為の知識はもちろん、常識的な知識さえ十分に持ち得ているはずがないのだ。

——やっぱり、あの子供はおかしい。

明らかに普通の人間の子供には感じられない異常性を目の当たりにして、文は確信した。

その上で、浮かび上がる笑みを止められなかった。

「これは……とんだ拾い物かもしれないわね」

退屈な日々にも弱々しくも新しい風が吹き込むのを、文は感じた。



——天狗じゃ！ 天狗の仕業じゃ！

我に返った私は、混乱する頭でそんなアホなことを叫んでいた。

現在、絶賛混乱中の私。

いや、本当にワケ分からん。なんで私ってばこんな山奥にいるの？

こんな小さな子供の、しかも女の子の体になっちゃって。

……いや、待て。

何故そこに違和感を感じるんだ？

この体が私の物ではないということが確信出来るとして、じゃあ本当の私の体がどういうものなのか全然思い浮かばない。

そもそも現状に至る直前の状況が全然思い出せなかった。

えーと、ちよつと待つて。

気が付いたらいきなり見知らぬ場所で目を覚まして、拳子供の体だったって状況は『異世界トリップ転生』という二次創作物のジャンルにありがちな展開なんだが……。

異世界——じゃあ、元々私がいいた世界って何処？

転生——じゃあ、元々の私ってどんな人間？

だんだんとハッキリしてきた頭の中にある知識を漁る限り、私に近代社会の情報と常識があることは理解出来たが、その社会でどういった立場にいたどういう人間なのが全然思いつけなかった。

今の体に違和感を感じるのは確かだが、以前何歳でどんな体格で、そもそも性別は本当に男だったのかすら確信が持てない。

いや、今の状況に至るまでの数十分前の出来事すらおぼろげでハッキリと思いつけないのだ。

本当に冗談抜きで『気が付いたら此処にいた』という状況だった。

放り出された、と表現してもいい。

こんな状況で混乱しない方がどうかしている。

何もかも曖昧な中で、しかしただ一つ、鮮明に脳裏に刻まれた光景だけが私の意識を現実繋ぎ止めていた。

それは、私の持つ知識と照らし合わせても『在り得ないもの』として存在する光景。

空高く飛び上がる美しい天狗の少女の背中だった。

その光景が数分前のことなのか、数時間前のことなのかは分からない。

茫然自失としていたらしい私が我に返った時、彼女の姿はもう何処にもなかった。

次々と自覚し始める状況の異常さや自分の知識と比べてのあらゆる違和感に思考がグチャグチャと掻き乱れる中、ただ一つあの光景だけが鮮明に思い出せた。

多分、今私がワケの分からない現状に陥って未だ幾らかまともに頭が回るのは、その記憶があるからだろう。

現状の深刻さを理解することに湧き上がる絶望感を他所に押し

けて、私の心の中を占めるのは飛び立つ『彼女』の背中と翼が空に映えたあの光景に対する感動だった。

それは現実逃避なのかもしれない。

しかし確かに、あれは現実を忘れてしまうような幻想的な美しさに満ちていた。

……冷静に考えてみると、幻想的っていうか本当に幻想そのものだよね。

頭に乗っけてる小さい帽子みたいなのもって、よくある天狗が付ける奴じゃん。翼も鴉みたいに黒いし。天狗って妖怪じゃないですか。

しかも、後姿だけとはいえあれはどう見ても美しい少女の姿。生足眩しいです。見え……ない！

妖怪が少女化って、まるで『東方Project』だな。

この状況が本当に『異世界トリップ転生』なのだとしたら、その可能性も大いにあるわけだけどね。

——うん、大分落ち着いてきたぞ。

最初にパニックにならず、色々冷静に考えをめぐらせることが出来たおかげか、私は落ち着いて周囲を見回す余裕が出来ていた。

とりあえず、今は現状を受け入れ、そこから問題点を割り出して対応する必要があるだろう。

今の私は無力な女の子であり、この人気の無い山奥らしき場所はどう考えても私にとって安全な場所ではない。

むしろ、あの天狗の存在を見る限り、ここには妖怪が存在して、しかもそれらが私に対して友好的である可能性はほとんど無いと言ってよかった。

うーん、こんな時参考になるのは私の知識にある先駆者の皆様の行動だな。

こういった状況に陥った二次創作の主人公達は、各々が生きる為の適切な行動を取っている。

よくあるパターンとして、転生する前にやけにフレンドリーな神様とか天使とかから特典とかいって何かしら役立つ能力が与えられたりするものだが……私はどうなんだろう？

やはりどれだけ思い出そうとしても、前世の自分はもちろん、今より前の状況が思い出せない。

私をここへ導いた何らかの存在がいたとして、それに対して欠片も記憶がないのだ。

いや、そもそもそんな存在がいるのか？

なんか、宗教が語る死後の世界観みたいに現実味が湧かないな。

別にいいや。どちらにせよ能力云々は希望的観測だし、今の私には分からない。

物語とは違って、偶然保護してくれる人物に出会えるようなご都合展開も期待出来ないし、やっぱりここは基本的なサバイバル知識に従って行動するしかないだろう。

まずは水源の確保だ。

川とか見つけられればいいんだけど……まあ、とりあえず行動あるのみか。

私はその場から立ち上がり、初めて自分の足で今の自分の重みを感じ取った。

軽いか重いのか分からないなあ……。

不安はやはり隠せないが、何処か開き直った気分です。歩を踏み出す。

正直、投げやりな気持ちがないわけではない。

生きる為の行動とはいえ、客観的に顧みても子供の私がこの山で生き延びる可能性は低い。それこそ妖怪はもちろん、野生の獣にでも襲われようものなら一巻の終わりって状況だ。

そうなったらそうなたで、死ぬしかない。そんな諦めもあった。この場で座り込んでいた方が結果的に楽に終われるのかもしれない。

しかし、それでも——やれるだけやって、抵抗できるものなら抵抗してみようという決意もいつの間にか私の中で固まっていた。

この前向きな考えの元になってるのは、やはりあの時の『感動』なのだろう。

出来れば、死にたくは無いです。

生きて、私はもう一度あの幻想的な光景を——翼を広げて飛び立つ少女の美しい背中を見てみたいと思っていたのだ。その為の行動を、私は起こし始めた。



変な人間の子供を発見した日から、文の生活に変化が加わった。

子供がああ川辺を生活の拠点に決めたらいいことを見届けると、文は姿を現して直接干渉することをせず、こつそりと様子を見守るようになったのである。

子供を保護しようという考えは毛頭無かった。

それどころか、姿を見せるつもりもなく、適当な木の上に陣取って、見つからないように注意しながら見世物よろしく眼下を眺めている。

その方が面白そうだったから。

それだけである。

今のところ、文があの子供を気に掛ける理由に、ちよつとした興味と期待以上のものはなかった。

「意を決して山を降りる——」

歳不相応の賢さを持つ子供だ。

一番在り得る結末としては、その聡明な頭で今の状況を把握し、少しでも生き残る可能性の高い方法を選び、下山を試みて——夜中に獣か妖怪に食われるか、運が良くて哨戒天狗に見つかるオチだ。

それが一番手早くつまらない終わり方だな、と文は考えていた。

「予想を裏切ってくれるのは、こちらとしても嬉しいんだけどねえ」

しかし、例の子供はありきたりな選択をしなかった。

辿り着いた川辺を拠点にして、本格的に生活を始めたのだ。

親が恋しいと思っても仕方の無い年頃でありながら、孤独など感じていないかのように一人で生きる道を選んだのだ。

良い意味で予想を裏切られた文は内心で嬉々としていたが、同時に当初から抱いてたあの子供への疑念も大きくなっていった。

本当に、アレは一体何者なのだ？

もはやただの人間の子供でないことは確かだ。

それを決定付けたのが、生活の中で始めた奇妙な行動だった。

寝床や食料の確保を慣れない様子で日々少しずつ進める傍ら、食事や睡眠を除いた時間で子供はなんと鍛錬を始めたのだ。

最初、文はそれが鍛錬であると分からなかった。

突然息が切れるまで走り回ったかと思えば、両手を地面について何度も曲げ伸ばしを繰り返す。他にも何らかの反復作業を汗だくになりながら行う姿は、文の眼には気狂いの所業にしか映らなかった。

しかし、冷静に観察してみれば、それらが剣の素振りと同じ鍛錬の為の行動であると察することが出来た。

あの子供は、体を鍛えているのだ。

それを理解した時、その突拍子も無い結論に文は思わず吹き出していた。

——面白い！ その発想は無かった！

妖怪の山に一人で放り出され、明日をも知れぬ身となりながら、生きる為に選んだ行動が自らを鍛えることとは恐れ入る。

確かに、現状を打破するのに最も効果的なのは『力を持つこと』だ。

自分の命を脅かす脅威を跳ね除ける為の解決策として全てに共通するのが『力による対抗』であるから、あの子供の判断はまさに真理とも言える。

しかし、だからといっていきなり自分を鍛え始めるか？

あれは本当に気狂いか、頭の中の大切な部品が何個か外れてるな、と文はしばらく笑い声を堪えるのに苦労した。

——だけど、面白い。興味深い。そして、私にとってはそれが一番重要ね。

あの子供に対する不可解さはますます深まったが、それに比例して興味も増していった。

しばらくは眼が離せそうに無い。

観察を始めて数日。すっかり特等席として定着した木の枝に腰を下ろした状態で、木の実を齧りながら、川の魚を素手で獲ろうと悪戦苦闘する子供の様子を眺める。

「熊じゃあるまいし、獲れるわけないっての」

その滑稽な姿をニヤニヤと笑いながら眺めつつ、文はここ数日で判明したあの子供の情報を整理していた。

まず、その行動力と意志の強さ、聡明さは大人顔負けのものだったが、何処かチグハグな印象も受けた。

食料となる山の幸を知っている知識量にはもはや驚かないが、それが酷く偏っているのだ。

摂りやすい山菜を無視して木の上の果物を苦勞して取ろうとしたり、魚は狙うのに虫には手をつけない。

しかし、原始的な道具を用いた火の起こし方など、大人でも知る者の少ない高度な技術を理解している。

「ほーんと、観察するほど分からなくなるわ」

文の呟きは、呆れると同時に隠せぬ期待も含んでいた。

見ている飽きないというのは重要なことだ。

相変わらず子供は鍛錬を日々続けている。

食料も思うように集まらず、一日生き延びることに不安が付き纏っているだろうに、一体どんな目的意識を持ってあんなことを続けているのか――。

だが、少なくとも多少の運はあるらしい。

現在、季節は秋の入りである。

これから山には多くの実りが生まれるだろう。あの子供の穴だらけの知識でもとりあえず生きるだけの食料は確保出来そうだ。

それに、あの子供だけの力ではない。

どうも散策する先であっさり食料が見つかりすぎる。

文はそこから僅かな神気を感じ取り、これが豊穡の神の力によるものだと察した。

――はて、秋の神とはそこまで有象無象の人間に対して慈悲深いものだったか？

もしそうならば、飢饉や口減らしで子供を捨てる親など存在しないだろうに。

まさか、あの子供が秋の神に対する信仰心を持っているわけもない

はずだ。

また一つ謎が増えた。

「この謎、いずれ解き明かす為に今は上手いこと生き残って頂戴よ？」
やがて日が暮れ始め、文は帰宅するべく立ち上がった。

鍛錬に集中する子供には見えない方向からこつそり近づき、食べていた木の実を幾つか落としておく。

これで、この木の実が食べられるものだと知るだろう。

そういえば家に魚の干物が余っていた。明日はそれを持ってきてやろう。

何、手間は掛からない。

手間ではない程度のことならやってもいい。

後は、あの子自身の力と運に任せ、生き延びることを願おう。

無責任な願いと勝手な期待を抱きながら、文は飛び立った。

帰り際、ついでとばかりに周囲に妖気をばら撒いておく。

これで下手な獣は怯えて近づくまい。弱い妖怪も同じだ。ちよつと手強い妖怪だったら……さて、そこは運試し。

文の新しい日課はこうして終わるのだった。



二次創作の知識のおかげで『異世界トリップ』のパターンに関して十分把握出来ていると思うていたが、こうして実際に身を置いてみると、勝手の違いに四苦八苦するハメになった。

ああいう作品の主人公ってすごいよね。場合によっては、超古代とか完全なアウエーに放り出されることもあるのに、しっかり順応してるんだもん。

私なんて、普通のサバイバル生活だけでも精一杯ですよ。

とりあえず、こういった場合に活用される前世の記憶なのだが、私が今一番その偉大さを噛み締めているのは『教育番組で学んだ知識』だった。

夏休みの朝とか、特にやることも無いからぼんやり見てた某教育

チャンネルの内容ね。

いや、前世の私が夏休み経験してたかどうかすら思い出せんけど。子供向けに発信されているあれらの番組の中で分かりやすく説明されていた山の知識、ちよつとした自然の素材を使った工作、キャンプの為のノウハウなど——現状では物凄い役に立っていた。

子供向けなので分かりやすく、実践しやすい。

番組の趣旨としては現代の子供達の興味を自然へ向ける為なのだろうが、今こうして私の生存を助けることに貢献してくれているのだから悔れない。

生前の私がどういう人間だったのかは分からないが、普通に暮らしている上で専門的なサバイバル技術なんて身につける機会はずいだろう。

それでも意外と生きていけるあたり、本当に子供の頃の教育って重要だよな。

私も将来、子供を持ったらしつかり物事を教えてあげようっと。

……うん、まあちよつと現実逃避クサイな。まずは今を生き残らないと。

なんとか、ここ数日上手く生き残っているとはいえ、私のこの厳しい自然での自給自足生活は始まったばかり。

前途多難なんてもんじゃない。毎日が死と隣り合わせだ。

この際、獣や妖怪に襲われて死ぬ可能性は置いておくとして、今後起こり得る様々な事態に備えなければならぬ。

まず、ちよつとした幸運なのだが今の時期はどうも秋の始まり辺りらしい。

日中は少し暑い、日が沈めばかなり涼しくなって気温的には快適だ。

私にも分かりやすい山の幸がよく見つかるのは、食料確保の上でもありがたい。

妖怪がいるってことはやっぱり神様もいるのかな？

秋で実りの神様って言ったなら、以前ふと考えた『東方Project』でいうところの『秋穰子』が思い浮かぶ。その姉の静葉も。

現状の幸運に対して、他に相手もないので私は暫定的に彼女達へ感謝を捧げておくことにした。

ありがたやありがたや。このまま、どうぞ恵みをお与え下さい……神頼みに縋って生きるつもりはないけど。

ただ、同時に問題が起こる日も近いだろう。

具体的にはすぐに冬がやって来るといふ事態である。

例えば今が夏だった場合『暑くて死ぬ』というのは多少大げさな表現になるが、『寒くて死ぬ』というのは結構シャレにならない話なのだ。

誰が着せたのかすら覚えてないが、今の私の装備は粗末な服一枚。これではマジで凍死してしまう。

早急になんとか備えを用意しなければいけないだろう。

あと、確保出来る食料の量も冬に入って激減することを考えれば、今のままでは良くない。

知識があるとはいえ、私のそれはまだまだ不十分だ。

もつとより多く、細かく、食べられる物の知識を蓄えなければいけない。

この問題に関して、当初解決は絶望的だと思っていた。

何せ、この場には私以外の人間がいない。知識を得る為の手段がないのだ。

最悪、命を賭けて実際に口にしながら食べられる物の判別をしなければならぬか、と思っていたのだが——ここで最大の幸運が降って湧いた。

——どうやら、私にはピッコロさんがついているらしい！

いや、マジで。

気が付いたら傍に食べられる木の実とか、魚の干物とか、人の手の入った物が落ちていたりすることがあるのだ。

明らかに誰かが助けてくれている。

しかも、この状況を顧みる限り人間ではない。

私の注意力が不十分なのもあるだろうけど、こちらに気付かれず、人の入ってこれない妖怪のいる山奥で手助けしてくれる存在なんて、

妖怪そのもの以外に考えられないからだ。

最初、私の脳裏にはあの天狗の姿が思い浮かんだ。

もちろん、さすがにそれは都合良すぎると思うけどね。

しかし、姿が見えないのだから、想像するだけなら自由だ。

私は自分のイメージを好きに置き換えて、知らない誰かさんに感謝した。

冷静に考えて、ただ食料を与えるだけで接触してこないその誰かが私を純粹に助けようと思っっているわけではないことは分かる。

からかわれているのか、ひよつとして観察でもされているのか——それは分からないが、とにかく助かっていることだけは確かなのだ。

うん、やっぱピッコロさんのイメージで固まっちゃうわ。

もうこの際都合の良いように捉えよう。誰も文句言わないし。

そんな『私以外の誰かが私を見守ってくれている』という認識が、この孤立した状況で心を支えてくれる一因にもなっていた。

最初はどうなることかと思っただが、意外と私も物語の主人公達のように運に恵まれているのかもしれないな。

そんな運にも助けられている私だが、最も全体的な話として『これからどうするのか?』という漠然とした問題が残っている。

要は行動の方針だ。

もちろん生き残ることが第一だが、このまま日々に対応していくだけでは、多分何処かで立ち行かなくなるはずなのだ。

完全に無視している外敵への対処なんて全く無く、もし遭遇した場合には諦めるしかない。

下山することの危険性は十分理解出来るのでやらなかったが、いずれここを去ることも考えないといけないだろう。

一生をここで過ごすつもりはさすがに無いからね。

現在、私の生存を支えている運の要素もいつ尽きるか分からない。それらを踏まえた上で、最も重要な『生き残った上で自分は何をしたいのか?』という要素も絡めて考え抜いた結果出した結論がこれである。

——修行したい。バカみたいな修行に挑戦してみたい。

本当にバカだった。

そんなセルフツツコミさえ出てくる。

でも、仕方ない。これが今の私の原動力になっているのだ。

何事も力を蓄えることから始めるオリ主無双系の主人公の皆さんに倣っている部分もあるが、何よりも私をその気にさせたのは、やはりこの世界で初めて見たあの幻想的な光景だった。

私の持つ常識的な知識で測れない、現実を超越した存在。

空を飛ぶという、分かりやすくも最も強烈な幻想の力。

私は、それに強く憧れたのだった。

シンプルに心境を表現するなら『物理法則も何もあつたもんじゃねえな』って感じ。

折角の異世界だ、ここだけで出来ることをやり遂げたいと思った。

具体的には——私も空飛びたい！ 素手で岩砕きたい！ 『10012……10013……つ』とかありえない数の腕立て伏せとかしてみたい!!

記憶は無いが断言出来る。私は、きつと前世で『かめはめ波を練習したことがある』と！

……と、そんな感じで方針は決まった。

自分でも前向きなのか現実逃避してるのか、もしくはただ単に実はどっかイカレてるだけなのか分からないが、とにかくそういう大きな目的が固まったのだった。

まあ、この身一つで出来ることは限られるし、そう間違った方針でもないような気もする。

どんな行動にせよ、現状ではやはり『可能性への賭け』となるだろう。

安全などとは程遠い環境だ。どうせ命を賭けた生活なら、保身のあの日常では絶対に出来ない修行に使いたい。

そんなワケで、私は日々生き残る為の活動の傍ら——いや、それ以外の時間全てを『漫画的な修行』に使い始めたのだった。

……とはいえ、決意だけではどうにもならないことはある。
今の私は子供だ。体力は当然低く、頑丈でもない。

死ぬ気で修行するつもりではあったが、本当に死ぬことは肉体の限界が許さなかった。

全力で走れば息が切れて、ゲロを吐いて蹲る。

目標を定めずに腕立て伏せをすれば、その内筋肉が重みに耐えられなくなつて倒れ込む。

そういった限界は、毎回私の想定より遥かに早く訪れた。

修行の当初に掲げたジャックぼりの『一日三十時間の矛盾したトレーニング』なんて夢のまた夢だった。

いや、ジャック当人も本当に三十時間もトレーニング出来たわけじゃないけど。あくまで意気込みだというのは分かっている。

しかし、その意気込みさえ届かない。

私は肉体的にはもちろん、精神的にも限界が低いことを痛感していた。

どれだけ『死ぬ気』を決めていても、やはり私は人間だ。本当に死にたくはない。

つらいことや苦しいことは嫌だ。楽でいたい。

そんな欲求が、心の何処かに根付いて取れないのだ。

だから、修行にも限界を感じてしまう。

本当に肉体の限界だけで修行が止まるような、突き抜けた行動が今の私には出来ない。

私はただの修行がしたいのではなく、漫画の修行がしたいのだ。

それにはまず、この常識の範疇にある精神的な限界を超える必要があるのだった。

私は悩んだ。

色々悩み抜いた結果、ここはやはり現実を超える為に現実ではない人の考えに倣うことにした。

——死ぬことを決意しろ……！ 道はそこから開かれる……！

やだ、銀さんマジイケメン……

私は今自覚の無い女の体だが、この人なら抱かれてもいいとマジで

考える程の男の台詞である。あと、これを実践した森田も同等。

ふふ……架空の世界のキャラとはいえ、やっぱり偉大な人の言葉ってのは影響力半端ないな。

普通なら漫画の中の台詞に感化されて、実践するなんてまともじゃない。

しかし、架空というなら、妖怪の存在する世界に放り出された今の私も相当現実離れしている。

この世界に『可能性』を見た。

私は漫画のキャラのようなことを『真似したい』わけじゃない。そんなミーハーなんてレベルじゃねえのだ。

私は漫画のキャラに『なりたい』のだ。

俺が……漫画だ！ イミフ。

よって、私は——死ぬことにした。



更に日が経ち、秋も本格的に深まってきたある日のことだった。

相変わらず日々の生活と修行に悪戦苦闘するあの子供の観察を楽しみ、未だ飽きは来ないがそろそろ慣れが出始めた頃。

文はその日、変化を見て取った。

子供が川の上流へと向かい始めたのだ。

「あら、ついに動き始めたかしら？」

このまま住み着くとは思えないし、それでは面白くない。

そんな勝手な期待に、まるで子供が応えてくれたかのような気になって文は機嫌が良くなった。

上流ということは山の上を目指している。少なくとも下山するつもりはないらしい。

さて、では一体どんな行動を見せてくれるのか？ と、見つからないように死角となる真上を飛びながらのんびりと見守っていく。

徐々に傾斜のきつくなる地面を踏み締め、子供は黙々と先へ進んでいった。

川は流れが強くなり、周りの地形が崩れて段丘が目立ち始めた。やがて、子供はようやく足を止めた。

目的地であるようだが、何か目立った目印のような物は見えない。川に沿って歩いてきたが、その川の周辺は既に崖になっていた。

——さて、ここで何を？

次に何をするつもりなのか、ワクワクしながら眺めていた文は、子供がゆっくりと崖の下を覗き込む仕草を見て、さすがに眉を顰めた。どうやら高さを確認しているらしい。

確認するまでもないだろう。奈落の底までとはいわないが、十分な高さだ。落ちれば、確実に死ぬ。

子供は何度も下を覗き込んでいた。

迷っているようにも見えない。

迷う？ 何を？

「まさか……」

文は嫌な予感がした。

考えられるかぎり、最悪の結末が脳裏に過ぎる。

最悪の結末とは、あの子供の死などではなく、今日までの全てが何もかも無駄になって失望感と虚しさに襲われることだった。

嫌な緊張感を抱える文を尻目に、子供はゆっくりと後退り、近くにあった木に思い切り頭をぶつけたかと思うと——それが合図であったかのように一気に崖から飛び出した。

「あの馬鹿……っ！」

文は思わず悪態を吐いて、飛び出していった。

あの子供に対して案じる気持ちではなく、罵る気持ちがあった。

——無駄にしゃがって。今日までの何もかもを無駄にしゃがって……！

天狗随一の速さをもって、落下する子供を捕まえようと飛翔する。しかし、手よりもいち早く眼がその子供を捉えた時、文は思わず足を止めていた。

子供は崖を落ちていく。

だが、ただ落ちていくだけではない。

崖から突き出た岩や枯れかけた木に手足を引っかけ、時に叩きつけ、その度に傷を負いながらも確実に落下速度を減退させつつ、落ちていた。

偶然引つかかっているわけではない。自らの意思で体を動かし、生き残る為に足掻いている。

自ら崖に飛び込んでおきながら、一体どういうつもりで行動なのか文には全く理解出来なかったが、その常軌を逸した行動と決断力に半ば呆然としていた。

そのわずかな間に、落下は終わる。

随分と減速したが、それでも子供は背中から地面に叩きつけられた。

我に返り、文は慌ててその場に駆け寄った。

当たり前だが酷い有様だった。

落下の途中で岩などに叩きつけた腕は両方とも折れている。それも手首から指に至るまで満遍なくだ。

足は比較的無事だが、最低でも捻挫、あるいは見た目で分からないだけで、やはり折れているかもしれない。

体中が岩や木に引っかけ傷だらけだった。

「……でも、生きてる」

文は無意識に安堵のため息を吐いていた。

四肢を犠牲にして、頭や内臓など体の中心はしっかり守ったらしい。

計算してやってのけたのなら、あの状況で大した冷静さと意志の強さだ。

やはり、この子供は只者ではない。

ただ、やっぱり何処か狂っているか、あるいは本格的な馬鹿なのかもしれない。

どういった切欠で今回の行動を起こしたのか、まるで理解出来ない文は呆れ果てた。

さすがに今回は『興味』では済ませられない。

「と、とにかく治療しないと……」

生き残ったとはいえ、子供は気を失い、傷も深い。放置すれば、このまま死んでしまうだろう。

それこそ全てが無駄になってしまう。

そんなことは御免だった。

「とはいえ、集落の方に連れていくわけにはいかないし、私には治療の知識も経験も十分でない」

状況を整理していく。

文は長い歳を経た天狗だが、生来の強大さゆえに深手を負った経験というものがほとんどない。

むしろそういった事態を避けられるように賢く立ち回ってきた。

長年の経験から多少の医療知識はあるが、死にかけて人間の子供に施すには不安が残るのだった。

となると、他の者の助力を仰ぐしかない。

医療知識そのものに長ける必要は無いが、少なくとも外傷に対して適切な治療が行えて、何よりもこの子供のことを秘密に出来る者だ。

他の天狗——最悪、自分より立場が上の天狗に見つかれば、ゴリ押しも出来ない。よって、下級の天狗が望ましい。

それらに当て嵌まり、文の知己にいる者は——。

「ぐ……ぐうう……つ、気が進まないけど仕方ないわね……！」

苦渋の色を浮かべ、文は飛び立った。

時間は掛けられない。

文字通り風のように飛び、あっという間に目的の場所へ辿り着く。

「権！」

文の予想通り、今日は哨戒の仕事も無く、下級天狗の共同住宅で犬走権は体を休めていた。

仲間の白狼天狗と将棋に興じていたようだが、着地の風圧で基盤ごと駒を吹き飛ばした事など気にも留めずに文は名指しで呼びつける。

「——何か御用で？」

今まさに王手を掛けようとして、次の瞬間眼前から基盤が吹き飛んだことなどに全く動じず、ゆつくりと立ち上がった。

周囲の仲間達は突然現れた名高き——悪名がほとんどだが——射命丸文と、その巻き起こした被害に慌てふためいているが、権自身は淡々と応じていた。

怒っているわけでも苛立っているわけでもない。

これが犬走権という白狼天狗の素なのだった。

そして、文がこの部下を苦手とする原因でもあった。

「ついて来い」

相変わらず鉄のような不動の対応に、実は毎回圧されていることを内心に隠し、文は簡潔に告げた。

理由も教えずに、勤務時間外にある者を呼びつける。

その態度は横暴そのものである。

上下関係を強く意識する天狗の社会において、こういった上司の威圧的な言動は文に限らず往々にしてあった。

「御意」

しかし、権は僅かな躊躇も無くそれに応じ、従った。

もちろん、下つ端天狗は皆、上司に逆らったり不満を表すことの愚かさを十分に理解している。ただ、権の場合は内心も言動そのままなのだ。

無口なこともあり、真面目で実直な性格だと評価されていた。

もともと、文の場合はその実直さを『過ぎた』ものだと感じ取り、そこから苦手意識を抱いているのだが。

それでいて、長年の奇妙な巡り合せによって、この権が文に最も近い部下として扱われている。

今回の唐突な命令に関しても『また文のくだらない思いつきに、真面目な権が付き合わされている』と周囲は捉えるだけなのだ。

文としては非常に不本意だが、結果的にそう捉えられた方が都合が良いのだから、権を使うことを選んだのだった。

——こいつは絶対に私のことを嫌っているだろうけど、私情は絶対に見せないし、挟まずに服従するからね。

文は権が『自分を嫌っていること』と『自分に絶対従うこと』だけは確信していた。

本来ならば、なるべく関わりたくない相手だが今回ばかりは他に適任がない。

文は権をつれて、すぐさま元の場所へ戻った。

文のスピードについてくる為に、全力を振り絞って飛んできたにも関わらず、その疲労をおくびにも出さない権に内心で舌打ちしながら倒れたままの子供を見せる。

「この人間の子供を診て」

「……申し訳ありません。我々哨戒天狗の怠慢です。

速やかに処分し、然る後に私自身も責任を取らせていただきます。如何様にもなさってください」

「そーゆー意味で『見て』って言ったんじゃないわよ、怪我を診ろって言ったの！

あと、あんたの『責任を取る』って腹切るとかそういうのばかりでしょうが！ 毎回言ってるけど要らないから、そういう行き過ぎたの！」

相変わらずのやり辛さを感じながら、文はそれを誤魔化すように怒鳴り散らした。

命令を受けた権が、初めて僅かな難色を示す。

「しかし、この子供は明らかに妖怪の山への不法侵入者です。何より、天狗の領域に近づきすぎています」

「そうね。だから何？」

文はこの子供の詳細を全く教えなかった。

ただ、言葉と態度を強めた。

権はしばらく沈黙し、やがて『分かりました』と一つだけ頷いた。それを受けて、文は内心で安堵した。

一番の気がかりは、このクソ真面目な奴が上司である自分ではなく、更なる上司である大天狗の意向や自らの任命された仕事そのものに従うことだった。

もしそうなった場合、この場は権威ではなく実力による『力づく』となるが——正直、敵にはしたくない。

権は自らの信念に殉じる性格だった。

元々、この子供に関わったのは興味からだ。そこに命懸けとかシャレにならないものを含みたくない。

いかに楽しく、賢く、上手く生きるかが心情である文にとって、椀のそういうところが苦手であり嫌いなものだった。

「何か道具とか要る？」

「いえ、結構です。元々、我ら哨戒天狗は仕事で負傷した際、十分な治療をその場で行えません。最低限の物と、周囲の物で代用します」

何気に聞かされた下っ端の苦労話にウンザリしながら、周囲の木の枝や蔦、薬草、僅かばかりの自前の薬や布を使つて的確に処置を施していく様子を眺める。

意外なほど手早く、あっさりとそれは完了した。

死線に立つ者としての年季が違う。やはり任せて正解だった、と文はそこだけは認めた。

「これでもう大丈夫なの？」

「子供の体力ではまだ危険ですが、とりあえずは保ちます。つれて帰りますか？」

「いや、置いてく」

「……分かりました。他の者が近づかないように、気を付けておきます」

「その千里眼の能力で見守れたとしても、あんたの立場で何が出来るってのよ。余計は気は回さなくていいわ」

文の皮肉に対して、椀は『お気遣いありがとうございます』と深い礼で返した。

その頭を苦虫を噛み潰したような表情で見下ろす。

皮肉や冗談すら通じない。こういうところもまた、文の嫌う部分だった。

なんだか非常に疲れてしまった。

最初は痛みのせいとか苦悶の表情を浮かべていた子供が、今は比較的安らかな寝顔を浮かべているのを一瞥して、文は気が抜けたかのようなため息を吐いたのだった。

◇

やはり、私は誰かに見守られているらしい。

激痛によつて覚醒し、気絶する前の状況を顧みて自分自身の惨状を想像しながら眼を開けた私の視界に入ったのは、意外にも治療の跡だった。

折れた腕には添え木がされ、包帯まで巻かれている。口の中が苦いのは、何か薬を飲まされたからだろうか。

私は崖から落ちて生き残った。

そして、その後で誰かに助けられたのだ。

誰かが私を見守ってくれていたことは知っていた。

しかし、もちろんこの結果を期待して身を投げたわけではない。

やはりこれも降つて湧いた幸運なのだ。

見も知らぬ誰かに対する感謝の念がどんどん重なっていく。

一体誰なのか知りたいものだが、今のままではそれは無意味だ。

今の私ではその人に報いることなど出来ないのだから。

だから、私はただ深い感謝を忘れずにだけいることにした。

——それにしても、体中が痛い。まあ、当たり前だけど無茶が過ぎたか。

崖から身を投げるなんて、自殺行為以外の何ものでもないが、これを『修行』と言っちゃえるのが漫画の凄いところだ。

私の今回の行動に対するイメージは、もちろん自殺などではなく某グラップラーがやっていたアドレナリン・コントロールである。

死に際の集中力によつて周囲がスローに見えたりするアレだ。

正直、そのまま落下死の結末で終わる可能性大の賭けだったのだが、どうやら上手くいったらしい。

必死だったからハッキリと覚えてないが、落下している間が随分と長く、生き残る為に色々足掻いた行動を自覚出来ている。

まあ、それでも十分に鍛えられていた彼と違って、全然未熟な今の私がやった結果がこの無様な姿なわけだが。

それでも生き残っただけ、十分な成果だった。

何よりも、今回の実行に踏み切った原因であり、一番の目的だった精神的な限界の突破に成功している。

具体的に言うと、私は『キレた』

怒ったという意味ではなく、頭の中のリミッターみたいなものがプツンと切れてしまった感覚がある。

気のせいや思い込みではない。

一度、死を経験することによって、悪い意味での保身が無くなったのだ。

何故そんなことが断言出来るかというと、驚くほど無茶な行動への抵抗感が無くなってるから。

だって、ほら――。

私、今立ち上がろうとしてるし。

足が折れてるかもしれない。折れてないとしても、無茶苦茶痛い。絶対怪我が悪化する。

そう理解出来ているのに、横になっている時間が勿体無くて、立ち上がろうとしてしまう。

立ち上がって、修行を続けようという気になっている。

躊躇いは無い。

むしろ、この状態だからこそ修行をしまくれれば『スゴいね、人体』って感じに逆に怪我が治るはずだ、と信じてしまっている。

だって、アライJrもやってたし。

やれるはずだ、私にも！ 多分！ 分からんけど、とにかくやってみよう！ 後のこととか知らんツ！！

アドレナリン開放が止まっていけないのか、ボロボロの状態でありながら、私の気分だけはこの上なく高揚していた。

とりあえず、元居た川辺まで戻ろう。

戻ったら修行だ。

いや、走って戻りながらシャドーボクシングしてみよう。

さすがに両腕は折れてるみたいだから腕立ては無理として……待て、無理と決まったわけじゃない。試してみよう。ひよつとしたらやってる間に骨がくつつくかもしれない。根拠なんてないけど。

怪我が悪化して、苦しみ悶えながら死ぬ危険性もあるが——その時は死のう。前のめりに。

最初の決意の通り、私はその日一度死んだ。

そして、本当の意味で新しい私に生まれ変わったのだ。



ある日の夜、文は同僚の姫海棠はたと共に人里の居酒屋で飲んでいた。

既に秋が過ぎ、冬の入りとなった時期である。

夜の寒さも厳しくなってきたが、今夜はそれに加えて雨も降っている。

文字通り刺すように冷たいこの雨に濡れば、いかに天狗といえども体を壊す。

この店の暖簾を潜った途端に降ってきたのは丁度良かったのか、あるいは間が悪かったのか。そろそろ店仕舞いという頃合でありながら、文とはたてはダラダラと酒を交わしていた。

「視線が厳しくなってきたわねえ」

何度目かの追加注文で、熱燗を置いていった際の店主の表情を思い出し、文は意地悪く笑った。

元々、人間の店に妖怪が訪れること自体が歓迎されるものではない。

ここ最近、外の世界の変化からか妖怪の活動が活発化——いや、凶暴化している傾向にある。

変化が見え始めたのは最近だが、始まりは博麗大結界によって幻想郷が完全に外界と隔てられてからではないかと文は睨んでいた。

下級の妖怪達は何かに苛立つように人を襲い、殺し、食らい、そして退治されていった。

天狗は比較的人間に近い種族だが、もちろん友好的とはいかない。

何より天狗は人間を見下しているし、それは文自身がまさに体験していた。

今も周りの人間の露骨な忌避の反応を受けて、それを楽しんでいる。

「まあ、毎度のことだけど。なんで、あんたは落ち合う場所に人里の居酒屋ばかり選ぶのかしら？」

「こっちの方が落ち着くのよ」

からかうような文の質問に、はたては憚然としながら答えた。

立場はもちろん、年代の上でも文が対等に口をきける数少ない相手が彼女だった。

だからこそ、この悪友の奇妙な誘いも受けるのだ。

「確かにおつまみの味はこっちの方が良いけどね。でも、お酒に関しては手前の店の方が上じゃない？」

「天狗の店は店員も天狗だから嫌なのよ」

「天狗の集落なんだから当たり前でしょ。何が落ち着かないつてのよ、別に上司と飲むわけでもなし」

天狗は酒好きの種族なので、居酒屋だけが唯一の娯楽施設として集落に存在する。

小さな規模の中にあっても、十分な需要があるのだ。

しかし、はたてはそれらの店を避けていた。

「だって、ああいう店って注文する時、頼むよりも命令する形になるじゃない？」

「まあ、働いているのは下っ端の天狗ばかりだしねえ」

「他人に命令するのって、なんか怖いし……」

ブフツ、と軽く吹き出し、文ははたてと他の客に睨まれた。

「ホント、あんたって意気地が無いわね」

「上司に逆らえない小心者が抜かすな！　そういうのは横暴つていうのよ。何で皆抵抗がないのか、理解に苦しむわ」

「世渡り上手って言って欲しいわね。あんたもそんなだから、鴉天狗の間で爪弾きにされんのよ」

「は、はあっ？　あたし別に仲間外れにされてないし！　一人の方が気楽で好きなだけだし！」

「んで、友達は私しかない、と」

「あんたもそうでしょっ」

「いやあ、私の場合は広く浅い付き合いがモットーだから。あと、純粹に妬まれたり嫌われてるだけ」

「立場と実力を笠に着て、いろいろと勝手してるからでしょっが……」
口喧嘩や言い合いのようにも聞こえるが、これが二人の間で交わされるじゃれ合いなのだった。

見た目こそ人間離れして美しいが、力もまた人間がとても及ばない天狗同士のじゃれ合いである。

万が一本当の喧嘩にでもなったら、客や店員はもちろん店そのものが崩壊する。

だからこそ、二人は人里のどの店でも歓迎されていなかった。

人と人ならざる者の間にある溝は深い。

「でも、ちよつと真面目な話、今度は人里以外で飲まない？　なんなら私の家でもいいから」

「なんで？　何か避ける理由あるの？」

「あんたは相変わらず鴉天狗の癖に山以外の事情に疎いわね。」

最近、人里もいろいろきな臭いのよ。辛気臭いとも言っけど——ここに来る前に、子供買わないかって声掛けられたわ」

「……何それ。未だに天狗攫いとか伝わってるわけ？」

「どうも最近、裏で人身売買が横行しているらしいわね。妖怪や飢饉の被害で親を亡くす子供が増えたから」

「なるほどね。酒が不味くなるわ」

はたてはうんざりとした表情で、酒気を帯びたため息を吐き出した。

二人の会話は声を潜めてのものではない。当然、周囲にも聞こえている。

長雨以外の理由でより一層辛気臭く、また重くなった気がする店内の空気を払うように、はたては話題を変えた。

「子供っていえば、あんた秋の始めから……何かこそそやってるん
でしょ」

流星にこの内容は伏せて話した。

言葉の意味を察した文が、僅かに凄みを込めてはたてを睨み付ける。

「……どっから知ったの？」

「誰からも聞いてないし、誰にも話してないわよ」

言葉で答える代わりに、はたてはお猪口に手を添えて静かに念じた。

その小さな水面に、はたて自身が映り込む。

しかし、それは純粹に映ったものではない。はたての背中が映ったものであり、角度的に在り得ないものだった。

背後の客の視界を、酒の水面に反映させているのだ。

「ただ、自分で見ただけ」

「本当に嫌らしい能力ね。そんなのに頼ってばかりいるから、積極的に外へ出たくならないのよ」

他人の視界を別の物に映す——はたての能力はそうだったものだった。

はたても同じ鴉天狗として報道を仕事としている。しかし、その情報源は文とは違い、足で集めるのではなく、この能力によるものだった。

だから、彼女は仕事でも極力外に出ない。

結果、文とは別の理由で同僚達の間から浮いていた。

「この能力もねえ、もうちょっと上手く使いこなせたらいいんだけど。他人の視界以外に対象を変えられないか、いろいろ試してるのよ」

「それで、その試している最中に偶然覗いたっていうの？」

「本当に偶然だからね？　だから、余計なことを周りに洩らしてないでしょ」

「ふーん……まあ、いいけど」

あの子供を気に掛け始めた切欠は単純な興味からだったが、今や明確な目的として将来ネタになるだろうとかなり期待していた。

文としては、当然そのネタを独占したい気持ちがある。

しかし、バレてしまつては仕方が無い。

気が進まないが、文は渋々はたてにあの奇妙な子供について白状し

た。

「——なるほどね。てつきり、鞍馬天狗の真似事でも始めたのかと思つたわ」

「人間を弟子に取つたつていうアレ？ 人間の間で勝手に伝わった法螺でしょ」

「まあ、どつちでもいいわよ。あんたが鬼畜なことには変わりないから」

「どこが？」

「適当に手助けして、後は放置してる点が。」

今もその子は山の中で冷たい雨に打たれてるかもしれないんですよ？ 世話するなら何で最後まできつちりやらないのよ」

「あんたのその人間に対する配慮は、優しさじゃなく卑屈さから来るもので——」

責めるようなはたての言葉に対して、文が毎度の如く嫌味を混ぜた反論をしてやろうと言いかけたところで、不意に店の戸が開いた。

変わらず降り続ける激しい雨音と共に、ずぶ濡れの外套が店の中へ入り込んでくる。

軒先で脱ぎもせず、床を水浸しにするその客に対して店主が文句を言おうと歩み寄り、外套の陰から覗き見えた鋭い眼光に思わず立ち止まった。

「……ん、権？」

全身をすっぽり覆う外套は顔の部分だけが僅かにあらわになっており、そこから見える見慣れた白髪と眼つきから判断して、文は名前を呟いた。

肯定するように、小さく頷いて、権が二人の座る席へ歩み寄る。

ボタボタと派手に水が滴り落ちるが、周囲の抗議の視線など気にも留めない。

「お探しておりました」

「なんか用？ あんたがいると酒が不味くなるんだけど」

露骨な態度を取る文を戒めるようなはたての視線が向けられるが、無視する。

椛は黙ってはたての方を一瞥し、しばし思案した後、外套で隠すように文だけに懐を見せた。

その腕に、あの子供を抱いていた。

「――！」

「酷い熱です。放っておけば、そのうち死にます」

椛は簡潔に事実だけを告げた。

抱えられた子供は、熱で顔を赤くし、大量の汗を掻いていた。

呼吸は乱れているが、同時に弱々しい。今にも止まりそうだ。

切羽詰った様子を見て取り、文もまた顔色を変えた。

「治療は!?」

「無理です。他の仲間がいるので私の住処には連れていきません。薬も備えがありません」

「はたて、さっきの話を聞いたんだから協力してもらおうよ!」

「えっ? えっ? な、何が……?」

突然のことに面食らうはたてを無理矢理引き連れ、多目の代金を店主に放り渡して、文は外へ飛び出した。

雨が酷いが、濡れる前に風の結界を生み出し、はたてと椛を含んだ周囲を包み込む。

「何? ワケわかんないんだけど! どっか行くの!?!」

「あんたの家に行くわ、風邪薬の一つや二つくらいあるでしょ!」

「あるけど……ええっ、あんたの『風』を使って行くの!?!」

「椛、上手く私の風に乗れ! 遅れるなよ!」

「承知」

文の操る風が、夜の雨を引き裂く。

はたての家まで一直線に伸びる風の道。

その風を翼に受け、三天狗は一気に加速した。

「何であたしの家なのよ!?! あんたの能力って周りへの影響が凄いだから、もし余波で家がどっか壊れたら……!」

「上手く調整するわよ! あんたの家を選んだのは、集落の外れにあるから。あの子供を他の天狗に見られたら厄介なの!」

「べ、別に住処まで孤立してるわけじゃないんだからね! 勘違いし

「ないでよね！」

「どうでもいいわー！」

雨や風の音にも負けない、騒がしいやりとりを交わしながらも、あつという間に三人は山まで辿り着いていた。

はたての家に駆け込み、状況も十分に理解出来ないまま、家主が寝床を提供して、慌てて薬を探し出す。

この場合、はたては完全に巻き込まれた形になるが、その流れに逆らえない辺り彼女の気質が表れていた。

人の良さや気の弱さなどの性格が原因ではなく、苦労人としての性質なのだった。

全身の汗を拭い、代わりの寝巻きを与えて、薬を飲ませる。

「——やれるだけのことは、やったかしらね」

やがて、ほんの少し寝顔が安らかになり始めたのを見て、文はほつと一息吐いた。

額の汗を拭ってやる権の意外な甲斐甲斐しさを一瞥し、この中で一番疲れた様子のはたてに視線を移す。

「助かったわ、はたて」

「ごっちは疲れたわ。なんで関係ないあたしが一番疲れてんのよ」

「いや、本当に感謝してるから。備蓄の薬が充実してるのも、ありがたかったわね」

「うん、まあ病気で寝込んだ時とか誰も看病してくれないから、自力で治さないと駄目だし」

「……そ、そうなんだ」

——今度、見舞いくらいは行ってやろう。

文は内心で涙しつつ、そう決意した。

「権も災難だったわね、上司の勝手な行動に振り回されて」
「いえ」

権は生真面目に、しかし余計なことを付け加えずに言葉短く応じた。

それで自分に気を遣っているつもりか、と理不尽な理由で機嫌を損

ねつつ、文は視線を子供の寝顔に落とす。

——死ななくて良かった。

文は素直に安堵していた。

——ここで死なれば、何もかもが無駄になってしまう。それでは面白くないのだ。

「……ねえ、文。店での話の続きなんだけど」

寝顔を見つめる文の横顔から内心を読み取ろうとしていたはたては、不意に話を切り出した。

「何の話？」

「その子供の世話のこと」

「容態が安定したら、目を覚ます前に元の場所に戻すわよ」

「いや、もうあんたのやり方には口は挟まないけど——文が仕事以外のことにうつつを抜かしてるって話は、結構広まってるのよ」

文は思わずはたてを見つめた。

「……そんなに目立ってた？」

「外出の頻度が多い上に、長いからね。定期総会とかにも全然出席してないじゃない」

「仕事は、怠ってないはずだけど……」

「仕事以外に熱意が向いてるのがあからさまに分かるからよ。これ以上目をつけられる前に、少し距離を取ったほうがいいんじゃない？」

はたての忠告に、文はほんの僅かな間だけ葛藤した。

そして、すぐに葛藤の余地など無いことを悟った。

元々が興味本位で始めたことではないか。必要以上に入れ込む意味などないと常に理解しているからこそ、この子供を放置して観察していたのだ。

軽い興味のせいで、社会での立場を少しでも危うくするつもりがない。

文は納得するように一つ頷いた。

「そうね。しばらく、この子に関わるのは控えるわ」

「……ちよつとでも、寂しかったりする？」

はたては自身の忠告に対して申し訳なきように尋ねた。

「……………はあ？」

間抜けを見るような表情で、文がはたてを見た。

「何言ってるの？」

「んー……あんたって、自分の本心には疎いところあるから」

曖昧に答える代わりに、はたては視線を文の手元に向けた。

それを追って視界を下げた文は、自分の手と、しっかりと繋がれた子供の手を見つけた。

はたての言いたいことを察して、呆れたようなため息が漏れる。

「あー、はいはい。下世話な上に誤解ありがとう。」

意外としっかり掴まれてるのよね。無理矢理解いて目を覚まされても困るだけよ」

「いや、あんた自身が手を繋いでるのに気付かなかったことの方が気になるんだけどね」

今度こそ、文は何も言えずに沈黙した。

ニヤリと笑うはたてを無視し、意味も無く椀を睨み付ける。

椀は相変わらず生真面目な表情で、姿勢を正して座っていた。

その顔がほんの少し笑って見えるのは、文の単なる被害妄想に違いなかった。

◇

あー……油断した。

冬が始まり、山での生活も徐々に厳しくなり始めた折である。

懸念していた冬の状況に対して、予想通りの厳しさながら予想以上では決してなかったことに少々樂觀していたのかもしれない。

日々の食糧確保などの備えや修行など、結構順調にいていたので、危機感が薄れていたのだ。

一度やってみたかったんだけど、滝に打たれるっていうのはこの季節さすがにヤバかったか……。

体のだるさと熱さを自覚した時には、もうほとんど動くことが出来なかった。

毎日の修行で生傷には慣れ、むしろ耐性すら出来てきたんじゃないかとか思っていたが、病気は想定外だった。

私は成す術も無く倒れ、そのまま死を待つ身となった。恐怖や保身と共に忘れていたが、案外人間っていうのは死にやすいものなのだ。

もう目覚めることは出来ないか——と、半ば覚悟して瞼を閉じ、しかし私は再び瞼を開けることが出来た。

またも私を見守る誰かに助けられたらしい。

目覚めた時には、いつもの川辺に横になっていたが、明らかに周囲の様子が違う。

不十分な知識と技術で作った屋根と壁だけの住処はしつかりと補強され、拳句私の周りには幾つもの見慣れない物資が置いてあった。

薬らしき粉末の入った筒に、大量の干し肉。おまけに狼の毛皮で作ったらしい毛布まで。

これが施しであることは間違いない。

……やべ、感動で泣きそう。

九死に一生を得たこともあつてか、未だ顔も知らない誰かに対する感謝の念が極まる。

なんつーか、たとえ相手が妖怪であつても言わざるを得ない。

——人情が熱いぜ！

いや、本当にね。つくづく自分がここに生きているのが一人の力じゃないんだと痛感しますよ。

この誰かがいなかったら私は何度も死んでるね。

無事この冬を乗り切ったら——いや、いずれ修行を成功させて力をつけたら、絶対にこの誰かを捜して恩返ししよう。

私はそう固く誓った。

……それにしても、今回施してもらった助力の数々。

形のあるそれらを眺めていると、じんわりと暖かいものを感じるのだが、それ以上のものが形は無くとも私の手の中に残っていた。

形がないのだから、ハッキリとした根拠は無い。

しかし、感覚的にだが何故か確かに残っている。

熱にうなされている間、ずっと手を握ってくれていた誰かがいたことを。

きつと、その人が最初からずっと私を見守ってくれていた誰かに違いない。

やはり根拠も無く私はそう確信していた。

錯覚なんかじゃない。

一際大きな暖かさの残る手のひらを、強く握り締める。その熱を生逃がさないように。

——何故か涙が出た。冬なのに冷たくはない、熱い涙が。



妖怪の山で交わった、奇妙な天狗と人間の子供の縁が少々疎遠になつてしばし月日が流れた。

幾度か季節が移り変わったが、日々の修行に切磋琢磨する人間と、長い人生観を持つ天狗には具体的な年数など気に掛けられる事柄ではない。

とにかく、数年——子供が少女へと成長するのに十分な時間が経つた。

その間、文もあの子供と全く関わりを断っていたわけではない。

周囲に不審に思われない程度に間隔を空け、観察に出掛けていた。

あれ以来なし崩しに巻き込んだはたてと椀にも強制的に協力させ、子供の様子を伺わせている。

奇しくも冬を乗り越え、日々の生活に手馴れ始め、修行という単調な作業に没頭し始めたあの子供の日常は少々面白味の無いものへと変わった。

毎日が自らを追い込み、鍛えることの繰り返しである。

さすがに変わり映えのしないそれを眺めて楽しむほど文は気の長い方ではない。

観察の間を空け、日々の様子よりも修行の成果を見て楽しむ——そういう方向へ変えていった。

当初の予想通り、あの子供は只者ではない自身の頭角を現し始めた。

——ある日、朽ちかけた大木に延々と拳を打ちつけた結果、ついにそれをへし折った。

——ある日、身の丈ほどもある大岩を背負って山を登った。

——ある日、偶然発見した洞穴を住処にしようとして、中で眠っていた大熊を死闘の末素手で打ち倒した。

如何に日々を異常な密度の鍛錬に費やしているとはいえ、驚異的な速度で子供は——いや、もはや少女は人間としての限界を一つずつ超えていった。

——もしか、こいつはいずれ天狗さえ脅かす強大な存在となるのでは——？

そう冗談交じりに考えてしまうほどの成長だった。

それらを文は我が事のように喜んだ。

事実、その将来性に目をつけていた文にとって、独占出来る特ダネがどんどん話題性を膨らませていく様が嬉しくて仕方がなかった。

もはや水を与えずとも勝手に大きくなる果実が、納得のいくまで熟すのを見守るだけである。

待つことさえ至福に感じる時を、文は過ごしていた。

いずれ彼女は山を降りるだろうか？

もはや山の獣や野良妖怪程度なら敵ではなくなった彼女が、不穏さを増しつつある人里を訪れてどんな行動を取るのか、非常に興味深い。

あるいは、彼女がまだ動かないというのなら、そろそろこちらから姿を現しても面白いかもしれない。

想像を膨らませる材料は尽きなかった。

——そして、ある日。

当代博麗の巫女の死去により、天狗の集落が少しばかり慌しかった期間がようやく過ぎた頃である。

これまで以上に長い間隔を置いて、文は久しぶりにあの少女の様子を伺いに向かった。

今回は手土産に饅頭の入った包みを持っている。

博麗の巫女が亡くなり、さて妖怪の賢者や人里の動向はどうなるかと見守り、そこから今後の方針を決めて、ようやく天狗の集落でも巫女の死が悼まれた。その形ばかりの葬式で出された物である。

この饅頭を切欠に、いよいよ彼女の前に姿を現そうか？ それとも饅頭だけ置いて見つけた時の反応を伺おうか？ と、楽しみながら迷っていた。

そして、いつもの川辺に近づいた時。

「——なにっ!?!」

文は瞬時に地上へ降り立ち、気配を殺した。

妖気を感じた。

それも生半可な妖怪ではない。

威圧するような強大さは感じないが、恐ろしく不気味でおぞましい感覚を、長年の経験で捉えていた。

方向は、間違いなくあの少女の住処である。

自分の実力でも一蹴出来る相手ではないと悟ると、文はそつと身を隠して様子を伺った。

「あれは……八雲紫」

考えられる中で最悪の妖怪が、あの少女の前に佇んでいた。



この世界へ転生して数年。

今更になって知りました——ここ、本当に『東方Project』の世界だったんかい！

私は目の前に佇む八雲紫を眺めながら、驚愕の事実には呆然としていた。

いや、いきなり空間が裂けてこの人が現れた時はビビるやら、ゲムキヤラの登場に感動するやら……ワケ分からなくなつて大したり

アクションが出来なかった。

なんか紫にはその対応を『落ち着いているわね。さすがだわ』とか褒められちゃうし。

とにかく、いきなり現れたことにも驚いたが、いきなり振られた提案にも度肝を抜かれた。

——私を博麗の巫女にしたいらしい。

何、その超展開!?

日々の修行に没頭していたある日、突然このお誘いである。

マジでいきなりすぎだろ……こういうのは、普通転生直後に済ませるものじゃないの？

もう大分山での生活や修行の日々に慣れてしまったというのに、いきなり原作介入の発生である。

博麗の巫女とか、東方でも重要ポジションじゃないですか。

い、いかん……動揺して上手く頭が回らない。

「貴女の力は、このまま放っておくことが出来ませんわ。強制はしないけれど、どうかこの話を受けてくれないかしら?」

意外なほど熱烈な八雲紫の誘いに、思わず勢いでOKを出してしまっただって、東方でも有名なキャラが積極的に誘ってくれてるんだよ?

断るとか至難の業だし、そこまでの理由もないよね。

あと、生で見るゆかりんマジ麗しい。

男だったらホイホイ言うこと聞いちやうね。

まあ、そんな彼女を前にしても性的興奮とかしないのは、私の体が女だからなのか、何か他に理由があるのか。

とにかく、この誘い。私には断る理由がなかった。

「分かった。受けよう」

私は簡潔に返答した。

この山での生活も苦ではなくなってきたが、更なる修行の為に博麗の巫女として技術を学ぶのも悪くない。

上手くすれば、これまでの修行では一向に掴めなかった『気』とか『オーラ』とかいった力を取得出来るかもしれないしね。目指せ、かめ

はめ波!

私の返答に八雲紫はにつこり笑って——美しい……ハッ! ——移動の為のスキマを開いた。

「では、早速山を下りましょう。持っていく物があるのなら、今のうちに取っておきなさい」

言われて、私は住処である洞穴から大切な物だけを持ち出した。

まだ少し中身が残っている薬の入った筒。愛用の毛布。それから、もう着れなくなったけど病気になった時に着せられてた寝巻き、と。

全て子供の頃私を助けてくれた恩人から与えられた物だ。

あの誰かとは結局会うことが出来なかった。

今でも見守ってくれていることは、時折見つける痕跡で分かるんだけどな。

恩は必ず返す——その気持ちは変わらないが、山にいる間にせめて顔くらいは知っておきたかった。

それだけが、私の心残りだ。

両手に私物を持ち、八雲紫の前に戻った私は、スキマに入る前にもう一度振り返った。

住処の洞穴には、実はそれほど愛着はない。

ただ、この数年間生活した場所そのもの、この山そのものに言いようのない思い入れを抱いていた。

——私はここで生まれ、ここで死に、そしてここで生きた。

きつと、ここが私の生まれた『家』なのだ。

そしてそんな私を助け、生かしてくれた誰かは、きつと私にとって——。

「……行こう」

「ええ、行きましょう」

八雲紫に促され、私はスキマに足を踏み入れた。

地面から足が離れ、住んでいた場所を後にする。

私は一つの終わりを悟った。

多分、私は永遠に機会を失ってしまったのだろう。

もしあの山で、いずれ私を助けてくれた誰かに出会っていたのなら

ら、きつとその時は素直に言えたはずだ。

でも、きつともう二度と言えない。

山を下りて、大人に成長した後の私はその誰かに会ったとしても、大人として対応してしまうはずだから。

——私はここで生まれ、ここで死に、そしてここで生きた。

——ここが私にとって『家』であるならば、そんな私の成長を見守ってくれていた誰かは、きつと。

「いつてきます……『お母さん』」



会話は聞こえなかったが、八雲紫と少女の間で何かしらのやりとりがあった。

どうやら戦いになるような物騒な用事でないことだと察し、安堵している間に少女は八雲紫に連れられて、その場から去ってしまった。手も口も出す暇はなかった。

いや、聡い文にはそんな無茶な真似など出来るはずもなかった。

行き先が何処かは分からないが、きつとこの山を下りたのだろう——そう悟った。

あの少女は、ついに文の前からいなくなったのだ。

「……ああ、結局無駄骨かあ……」

妖怪の賢者相手では分が悪い。

そう理解できても、文は脱力せずにはいられなかった。

あの少女とまた別の形で再会することは出来るだろうが、その時には今日まで培った関係は全て白紙の状態だ。

特ダネの独占なんてもつてのほか。相手はこっちの顔さえ知らないのだから。

——こんなことなら、さっさと姿を現して、助けてやった恩でも売つとけば良かった。

嘆き、悔いても仕方がない。

それでも内心で悪態を吐くことをやめられず、徐々に湧いてきた苛立ちの発散場所を探した。

よし、椀に八つ当たりして——いや、奴の場合馬鹿正直にそれを受け止めて、また腹でも切りかねないからやめよう。はたてと自棄酒でも飲むか……。

長く生きた分、理不尽を受けた際の精神的対応も慣れたものである。

明日には気分を切り替え、また新しいことに挑む為、文はその場に立ち上がった。

「……あら？ そんなに緊張してたのかしら」

ふと気付き、手のひらを見れば、そこは汗でびっしりと濡れていた。

それだけではなく、きつく握り締めたせいで指の跡までついている。

八雲紫と少女のやりとりを見守る間、ずっと拳に力を入れていた状態だったらしい。

片手に握っていた饅頭の包みなど無残な有様と化していた。

無駄になったそれを投げ捨てて、指についた餡子を拭い取った。

危うく見つかるところだった、と。無自覚に感情を昂ぶらせていた自分を珍しく思う。

その理由にまで、何故か考えは至らなかつた。

「あー……んー……ああー……」

立ち上がったが、何故かしばらくその場を動く気にはなれず、意味も無く声を上げていた。

いや、今自分がやりたいことは実は分かっている。

ただ意味がないのだということも分かっているのだ。

「はーあ……」

声に出して、大きなため息を吐いてみる。

全く気が晴れない。

モヤモヤとしたものが胸の中に残っている。

それを吐き出したかった。

きつと何も解決しないが、とにかく叫び出したい気分だった。

「……………くそっ」

理性で感情を押さえ込む長年の癖が働き、文は結局小さな悪態一つしか吐くことが出来なかった。

自分の苛立ちが収まらない理由を、彼女はいつまでも理解することが出来なかった。

その日、人里に一度だけ風が吹いた。

まるで意思を持っているかのような強大な風が人里の端から端まで一陣駆け抜け、その通り道では砂はもちろん石まで巻き上げられ、家の屋根が剥がれて、子供が飛ばされるほどだった。

風が強い日でもなく、ただ一度だけの不可解な突風の正体を多くの者達は、こう察した。

——天狗の仕業だ。

——山の天狗様が怒っておられるのだ。

人々は恐れ戦いたが、果たしてそれが真実であるかは定かではない。

射命丸文が、博麗の巫女となったあの子供と再会するのは、実はそう遠くない未来であった。

其の十六「犬走」

『新たなる博麗の巫女、着任』

ここ一年余り不在であった博麗神社に、ついに新しい巫女が誕生した。

博麗の巫女は通常、先代の巫女が後継者を選ぶ形式を取っているが、今回は死去した先代巫女に代わって八雲紫が直接選定したという。

歳若いながらも、幻想郷の賢者から見初められた才能は如何なるものか？

今後の活躍に注目が集まる――。

『歴代博麗でも劣る才能?!』

本来ならば、妖怪と人間、それぞれの代表である八雲と博麗が分担して管理するはずである博麗大結界。

幻想郷を支える要ともいえるこの結界に携わることも、博麗の巫女として重要な仕事だが、なんと新しい巫女はこの役割を担っていないらしい。

これは新しい管理体制の試行なのか、あるいは別の理由があつてのことなのか。

真相は定かではないが、これまで一定の信頼を持って行われてきた幻想郷の管理体制に波紋を投げかける事態には間違いない。

独自に入手した情報によれば、当代の巫女は博麗の秘術に関する修行が滞っていると聞く。

今回の事態に関しては、巫女自身の才能の有無が影響しているのではないか？

一抹の不安を残す形となった――。

『博麗の巫女の活躍、是か非か』

博麗の巫女の中でも異彩を放つ当代の巫女。

本分である結界の技術に関してはお粗末なものだが、こと妖怪退治

においては活躍を続けている。

しかし、自らの領分を越えた活動が良い結果を生むとは限らない。人里の守護に留まらず、小規模な集落や妖怪の生息する領域にまで足を伸ばして力を振るう彼女の活動が、いささか度を越しているのではないかという声もある。

加えて、人里では治安維持を名目として、人間同士の諍いにまで介入する始末。

自警団の活動を無視したこの越権行為とも言うべき行動は、果たして同じ人間の中でどのように受け止められているのだろうか。

当代の博麗の巫女がこれらの活動に精力的なのは、単なる意欲や義務感によるものか。あるいは、力を持つ者故の自惚れか。

自らを弁えない行動は、危険な兆候である。
歴代の巫女の中でも類を見ない彼女の特異な行動は、今後どのような影響を生み出すのだろうか――。

――『文々。新聞』より一部抜粋。



妖怪の山を監視する哨戒天狗は数あれど、その中で最も優れた者は誰かと問われれば、皆一様に『犬走権』の名前を挙げる。

それはまず彼女の能力が一因となる。

権の持つ『千里先まで見通す程度の能力』は即ち千里眼であり、それによって広大で、起伏に富み、木々などの死角の多い妖怪の山を隅々まで見張れるのだ。

侵入者や外敵を察知し、それらに素早く対応可能な戦闘力の高さも一目置かれていた。

天狗社会の中において、白狼天狗は地位こそ低い、個人の能力までそれに比例するわけではない。

特殊な技や力こそ持たないが、実地で鍛え上げられた権の剣術と戦闘法は、生死を賭けた戦闘において恐るべき殺傷力を誇った。

しかし、何よりも彼女を哨戒天狗として最優とし、外敵からすれば恐れられる一番の理由となつているのは、その任務への姿勢だった。権は自らの任務に殉じる覚悟があった。

そこに意義があるのならば、容易く自らの命を使い捨てること出来る、捨て身の強さがあつた。

同じ種族であつても、格下は見下すことが普通である天狗の中で、格差に関係なくこの犬走権という天狗を一目置く理由がそれなのだ。地位が高くなるほど身に着ける『保身』というものを、権は全く持っていない。

必要であると悟れば、その瞬間に死ぬ覚悟を決めることが出来る。それこそ犬死することすら厭わない。

だからこそ、上司である鴉天狗さえ彼女を一兵として信頼し、同時に忌避している部分があるのだった。

権は『狗』に過ぎない。しかし、手を噛まれるには少々危険な飼いだつた。

——その日、天狗の集落に近づく存在に最初に気付いたのもやはり権だった。

山の麓から登ってくる人間の女を視界に捉えると、権はすぐさまその場に駆けつけた。

彼女の眼に距離など関係ない。既に、その姿を明確に捉えている。若い女だった。

幼さの残る顔立ちに見えるが、長身で、体格から鍛えられているのが分かる。

紅白の巫女服を着込んだ格好からしても、彼女が単なる旅人や人里からの行商人などではないことは明白だ。

長い黒髪を一つに束ねて適当に結び、手荷物一つ持っていない身軽な格好だった。

何よりも、擦り切れてボロボロになった裾から見える両手は傷に埋め尽くされている。それは明らかに鍛錬の痕だと権には分かった。

妖怪の山を登るこの女は、間違いなく『戦える人間』である。

確信し、より警戒を強めながら権は立ち塞がるように女の前に降り

立った。

「——ここから先は天狗の集落。何者か？」

哨戒天狗への支給品である何の変哲も無い剣と盾を携え、厳格に問いかける。

人間の中にも妖怪にとって無視出来ない地位の者もいる。

目の前の巫女らしき者が敵であると決まったわけではなかった。

「博麗の巫女」

相手は言葉短く答えた。

権は口数の多い方ではないが、名乗った相手も同じような性分であるらしい。

奇妙なシンパシーと、向かい合って改めて見つめた相手の顔に何故か懐かしさを感じながら、権はそれらを全く表情に出さずに応答を続けた。

博麗の巫女——事前に考慮したとおり、目の前の人間は門前払い出来る地位の者ではない。

「その巫女が何用か？」

「人に化ける妖怪を捜している。この山に逃げ込んだと聞いた」

「何の為に捜す？」

「人里で子供を一人、攫った」

権は相手の事情を把握した。

博麗の巫女といえば、人里の守護者となる立場の者である。

最も大きな人間の集落である人里を守る為、そこで悪さを働いた妖怪を退治することが主な役割とされていた。

五年程前に先代の博麗の巫女が死去し、その一年後には新たな巫女がこの任に就いたと聞き及んでいるが、それが目の前のまだ歳若い少女なのだろう。

「子供の母親に頼まれたので、その子を救い出し、妖怪を退治する為に追っている」

権は天狗社会でも末端の存在だが、鴉天狗の新聞を読んで当代博麗の巫女のことを知り得ていた。

いわく——先代までの巫女に比べていささか『領分』を飛び抜けて

いる、と。

それは、歴代博麗の巫女の中でも特に優れた力の強さを指す以外に、与えられた巫女としての任を行き過ぎて活躍していることも指していた。

今回の件もそうである。

たかが一匹の妖怪を追って妖怪の山へ踏み込み、更に天狗の集落にまで接触しようという行為は、これまでの博麗の巫女の中で誰も行ったことがない。

明確な取り決めは無いが、天狗と人間は互いの生活圏を不可侵としており、時として天狗が個人の興味で人里を訪れることはあるが、種族としての力差関係からして逆は決して無かった。

それは博麗の巫女であっても、同じ人間である以上変わらないものだ。

「……去れ。ここから先は天狗の領域だ」

巫女の応答をわずかに吟味し、権はハッキリと告げた。

「天狗の邪魔をするつもりはない。その妖怪を捜したいだけだ」
「去れ」

権は頑なに、ただ短く繰り返した。

相手がそうであるように、権の方にもこの対応に至る事情が幾つかあった。

巫女の追う妖怪は、確かに天狗とは何も関係の無い存在である。

あるいはあらかじめこうなることを見越して、妖怪の山へ逃げ込んだのかもしれない。だとしたら、人に化けて里から子供を攫うことも含めて中々狡猾な妖怪だ。

他の天狗はどう捉えるか分からないが、権個人としては攫われた子供やその母親がいささか不憫であるとも感じる。

しかし、それらの事情全てを無視出来る程に、権にとって自らの任務は絶対であった。

天狗の領域に許可無く立ち入る者を見張り、時としてこれを排除する――。

山に逃げ込んだ妖怪がこれに当て嵌まるのかどうかは分からない。

妖怪の山は広く、天狗の領域から離れた場所に潜んでいるのかもしれないし、あるいは権以外の者が哨戒を怠った隙を突いて入り込んでいるのかもしれない。

幾らか、考慮出来る余地はあるだろう。

「お前の事情は関係ない。諦めろ」

ただ今、確実に断言出来ることは自分が侵入者を捉え、これ以上の侵入を許さないということだった。

どれだけこちらの事情の説明を重ねても、その判断が相手にとって理不尽であることに変わりはない。それを覆すつもりも毛頭無い。

だから、権はただ結論だけしか告げなかった。

それが最終通告であるように、権は己の剣に手を掛けた。

権の頑なな応答に対して、巫女は不動のまま沈黙を貫いた。

互いの視線が交差する。

敵対するかもしれない相手の全貌を油断無く観察しながら、不意に

権は先ほどから覚えていた懐かしさの正体を知った。

——人間の少女。

——鍛錬によって傷ついた身体。

——あれから経った月日は、丁度今日で五年だ。

「そうか……あの時の」

権の記憶の中にある子供の姿と、目の前の巫女の姿が一致し、知らず囁くような声で呟いていた。

その呟きが聞こえたわけではないだろうが、巫女がゆっくりと動きを見せた。

立ち去る仕草ではなく、両手足を戦いに備えた構えへと持っていない。

「ならば、押し通る」

巫女がハッキリと告げた。

「ならば、斬る」

権もまた一切の躊躇無く断言し、剣を抜き放つと同時に、開戦となる雄叫びを一つ上げた。

◇

妖怪の山か。何もかも懐かしい……。

そんな感じに遠い眼で見上げているが、あれからまだ五年くらいしか経ってないのよね。

それなのに、こうも懐かしく感じるのはこの山を下りて以来、今日まで一度もこの山へ近づかなかったからだだろう。

実に五年ぶりに、私はかつて修行し、生き抜いた故郷とも言える場所へと戻ってきたのだった。

いやあ、しかしまさかこの山が東方で有名なスポットである『妖怪の山』だったとはなあ。

当然、それを知ることが出来たのは山を下りて、ある程度この世界の知識を学んだ後だった。

幼少期の自分がどれだけヤバイ状況にいたのか理解して青くなつたものだ。

最初に遭遇した妖怪が天狗だったのも、これで納得である。妖怪の山っていえば、東方では天狗のテリトリーとなっている場所だからね。

っていうか、ゲームでは有名な『射命丸文』や『姫海棠はたて』、『犬走椀』が住む場所なんだよね。

子供の頃に彼女達に会えなかったのは、果たして運が悪かったのか、それとも良かったのか……。

山を下って、博麗の巫女としての修行をしながら人里などへ赴き、幻想郷の世情を知る中で分かったことだが———どうにも、人間と妖怪の仲は宜しくないらしい。

まあ、種族的に当たり前なんだけど、東方ってこういった人妖の關係が穏やかな印象があるから意外だった。

てつきり、美少女な妖怪と人間がキャツキャツウフフって感じに戯れてる世界かと思っただが、普通に人食いとかあるし、スペルカード・ルールが未だ成立していないせいか、妖怪退治は互いに命懸けだ。

私もこれまで博麗の巫女として何度も妖怪退治を行っているが、相

手は全て殺している。

そうしなければこつちがやられるくらいシビアな戦いだからだ。

この殺伐とした世界では、果たして原作キャラ達と出会ったところで友好的に話し合いが出来るかも怪しい。

今のところ、東方のキャラって紫含めても三人くらいしか出会ってないけどね。

博麗の巫女として、修行や知識を学ぶ為に色々世話になっているその紫だが、そんな友好的な関係の彼女に対しても、時折畏怖を感じることがある。

スキマの能力を使っているのを見る時なんかは特に、だな。

大妖怪の能力だけあって、その行使自体が人間である私には本能的に恐ろしく感じられるのだ。

うーん、やっぱりゲームと現実は違うんだなあ。

東方って設定では結構エグイの多いし。本当は怖い幻想郷ってやつか。

……しかし、そんな恐ろしさを実感しながらも、ゆかりんの美しさにはついつい毎回目を奪われてしまう私は危機感が足りない人間なのかもしれない。

だって紫ってばマジ美人なんだもん！

原作キャラに対するミーハーな感情も手伝っているのかもしれないが、妖怪としての禍々しささえ魅力の一つとして受け入れてしまおう。

無警戒すぎて、最初の頃は呆れられながらいろいろ忠告されたものだが、今ではもう諦めたのか紫も何も言ってこない。

えへへ、ごめんなさい。でも、やっぱり折角なんだから、知識として一方的に知っているだけとはいえ、原作の有名なキャラとは友好的にお近づきになりたいじゃない？

まあ、それでも五年も博麗の巫女として過ごせば、この幻想郷の常識というものも身に染み付く。

この意外と殺伐とした世界に揉まれ、色々痛い目にも遭って、私は多くのことを学んだのだ。

そうして、修行を続けながら、博麗の巫女としての職務も精力的にこなしていった、ある日のことである。

——人里で子供が一人、妖怪に攫われた。

これが事件でも何でもなく、周囲が普通に受け入れてしまう出来事であるあたり、さすがの私も嫌になる殺伐とした世界観だが、もちろんそれを私自身が甘受するつもりはない。

さすがに人里の内部で直接騒ぎを起こすようなバカな真似をする妖怪は——以前はたまに居たが、私が徹底的に駆逐したので——いない。

人間に化けて紛れ込み、騒ぎになる前に逃走したらしい。

目的はやはり人食いか。攫って逃げた先でゆっくりと食べるつもりだろう。

幸い、私が人里を訪れたタイミングで起こった事件なので時間的な猶予はあるが、逃げた先が厄介だった。

妖怪の山なのだ。

さつきも言ったが、ここは天狗のテリトリーがある。

具体的には天狗の哨戒が山の一部を見張っており、基本的に人間は入り込めないようになっていた。

それは博麗の巫女である私も例外ではないらしい。迂闊に侵入すれば迎撃されると、紫から事前に忠告を受けている。

意外と博麗の巫女って立場低いのよね。これは霊夢じゃないからだろうか。

その名の通り『妖怪の山』であって、人間の為の場所ではないのだ。そして、肝心の紫はタイミングの悪いことに現在冬場の長い眠りに就いたところであり、その間の管理を任されている藍は基本的に私の職務に干渉してこない。

つつーか、あれはどう見ても嫌われている。

なんか、私への対応が事務的を通り越して冷たいんだもん。

紫が冬眠するこの時期以外、積極的に顔を合わせようとしななし。

結構シヨックです……。

話が逸れたが、とにかく私の立場や権力などが全く通用しない場所

へ、その妖怪は逃げ込んだことになるのだった。

さて、どうするか？ と私は少しばかり悩んだが、周囲も事情を察して絶望する中、泣き崩れた子供の母親を見て、すぐに考えは決まった。

『分かった。すぐに助けに向かう』

私は端的に告げ、母親の肩を叩いた。

彼女も含め、周囲の住人が呆気に取られる中、私は妖怪の山に向けて走り出した。

猶予はあるが余裕は無い。急がなければ、子供が食われてしまう。冷静に考えなくても、今回の件にはこれまで経験したことのない数々の障害が存在していたが、私は迷うことなく行動していた。

攫われた子供は母親との二人暮らしで、父親は病で随分昔に死んだらしい。

母親は一人で子供を育て、その為に働き通しだったようだ。

少しやつれた顔と、ボロボロの両手を私は見た。

何の根拠もないが、その両手の傷が私自身の両手のそれよりもずっと価値のある、重いものなのだと思った。

私がこうして、妖怪の山への殴り込みにも等しい行動を取っている理由がそこにあるのかは、実のところ自分自身にも分からない。

ただ、私は見て、思った。

それだけだ。

——親子、か。

なんとなく、自分の出生というものに考えを巡らせながら、私は妖怪の山に足を踏み入れていた。

どの辺りからが天狗のテリトリーとなるのかは分からない。

出来れば揉め事は起こしたくないが、子供を攫った妖怪を捜し出すには、風潰しにするか、この山に住む者に協力してもらおう必要がある。どちらにしろ、天狗との接触は避けられないだろうと思っていた。そして、案の定である。

「——ここから先は天狗の集落。何者か？」

現れた白狼天狗らしき妖怪を見て、私は全身に緊張を走らせた。

剣と盾で武装し、隙のない物腰で鋭くこちらを睨み付ける。
油断のならない相手だ。

でも、それは別に重要なことじゃない。

これ……ひよつとして『犬走権』じゃね!?

私にはその疑問の方が超重要だった。

うーむ、権は原作で言うところのモブキャラなので、明確な立ち絵が存在しないからはつきりと断言は出来ないが、それでも各所の特徴が私の知識のそれと一致する。

やべ、緊張してきた。原作キャラとの遭遇的な意味で。

とりあえず、修行で培ったポーカーフエイスという名の仏頂面で内心の動揺を隠しながら自己紹介し、交渉に入る。

いや、交渉というほど私の弁は達者ではないけど。

むしろ、普段は誰も訪れない神社に一人で住んでいるせいで、コミュニケーションのレベルで口下手である。

侵入者である私に対して厳しい態度を取る権が相手ということもあり、会話というより、言葉のドツチボールみたいな感じで言葉を交わした。

「去れ」

はい、ごめんなさい。帰ります。

思わずそう言つて、回れ右をしてしまいそうな、静かな凄みのある声色で拒絶されてしまった。

ある程度予想していたが、やはり一筋縄ではいかないようだ。

「お前の事情は関係ない。諦めろ」

駄目押しの言葉を貰い、交渉が完全に決裂したことを悟った私は、内心で諦めたようにため息を一つ吐いた。

もちろん、その諦めとは、これ以上進むことに対してではなく、交渉によって許可を得ようということに対してである。

あーあ、私もうちよつと頭が良くて、口の回る人間だったら、穏便に話が進んだのかもしれないのに。

博麗の巫女になって、実は何度も実感していることなのだが、私は全く不器用な人間である。

不器用っていうか、脳筋っていうか。

こんなんだから、修行の日々でも博麗の秘術がほとんど身につかず、肉弾戦の為の技ばかり鍛えられていくのだ。

そんな自分に呆れながらも、今は出来ることがそれだけであることを自覚し、私は静かに拳を構えた。

「ならば、押し通る」

言葉で通れぬなら、拳で通る。

権の上げた雄叫びが、戦闘の始まりを告げた。

……今更だけど、これって後から問題になったりしない？
紫に死ぬほど怒られるかもしれないね。



権の使う剣の特徴は『分厚く、切れ味が鈍い』という点が挙げられる。

形状こそ片刃やその反り具合が日本刀に似ているが、刀身の幅は大陸の青龍刀に近く、重さと厚みは西洋の両手剣に近い。

これは、有事の際には尖兵として働く役目も背負っている哨戒天狗である権自身が、十分な手入れの行えない長期かつ不定期な出動に耐え得るよう『頑強さ』を重視して鍛冶屋に注文した結果生まれた代物であった。

その重量級の武器を右手に。左手には半球状の小型の盾を携えた姿が、権の基本的な戦闘スタイルだ。

これもやはり、和風の格好に反して武士というよりも騎士に近いものである。

扱う剣術も我流。

一から完全な叩き上げの実戦派であった。

獣の如く地を蹴り、権が標的との距離を詰める。

剣を抜き放っておきながら、それを振るえない巫女の懷まで踏み込んだ権は眼前に掲げた盾をそのまま突き出した。

不意を突かれ、なおかつ盾という広い面の打撃を避けきれず、咄嗟

に両腕を交差させて受け止める。

重く、硬い衝撃に耐え切れずに巫女の体がよろめいた。

その一瞬の隙を逃さず、今度こそ白刃が閃いた。

さすがに相手が特別な立場にある巫女であることを考慮してか、狙いは首などの致命的な部位ではない。

しかし、敵対した者に対する容赦も無かった。

狙った先は顔である。正確には眼を潰そうと、躊躇なく剣を一閃させていた。

反射的に顔を逸らした巫女の頬を剣先が浅く薙いでいく。

わずかな鮮血が飛び散り、返す刀が執拗に襲い掛かる寸前。巫女の掌打が盾を叩き、今度は杖が衝撃を受けて後方へ吹き飛んだ。

いや、自ら後ろへ跳ぶことで体勢を崩すことなく衝撃を緩和したのだ。

再び対峙する状況。

杖は内心で僅かに感嘆していた。

相手を人間風情と侮るような迂闊さなど、杖の性格上皆無であったが、一瞬で勝負を決める当初の予定を覆された事実には違いなかった。

相手によれば軽口や挑発の一つでも口にするような状況だが、そこは杖である。無言のまま、目の前の巫女に対する警戒を強めた。

対する巫女もまた、失明しそうになった状況に尻込みする様子など欠片も見せず、頬から流れる血を指で拭うと、それを軽く一舐めして構え直した。

そこにはある種の不敵さがあった。

言葉にせず、杖は歳不相応な巫女の胆力に感嘆した。

息の詰まるような緊張感の中で、互いに叫び合うような熱狂などは存在しない。冷たい敵意だけがぶつかり合っている。

おもむろに巫女が動いた。

両手の袖から何枚もの霊符が連なった細長い巻物のような物を取り出すと、込められた霊力に操られてそれらが巫女の両腕に巻き付いた。

指先から手首辺りまでを符で覆われた両手を構え、巫女が楯に向けて駆け出す。

妖怪である楯に勝るとも劣らない瞬発力で間合いまで踏み込んでみせたが、拳よりもリーチの長い剣を持つ楯の方が先手を取った。

横薙ぎの一閃。

しかし、その一撃をあるうことか巫女は片手で受け止めた。

蹴りや手刀を受ける時のように、無造作に手のひらで、である。

十分な重さと鋭さを兼ね備えた楯の剣撃だったが、金属音と火花と共に、刀身が巫女の手のひらに弾かれた。

——結界か!?

両手を覆うあの札がその機能を果たしているのだろう、とすぐさまあたりをつけた。

結界という技術の常道を知る者ならば、あまりに変則的な使い方であると動揺するところだったが、楯はそういった雑念を挟まなかった。

更に二撃、三撃と、剣を振り下ろす度に両手で弾かれる。

『生身で受けることの出来ない殺傷力』という剣の有利な点を抑えられ、代わりに肉弾戦による手数多さと回転の早さが楯を押し始めた。

繰り出される打撃の嵐を盾で受け止め、反撃の刃は素手で弾き飛ばされる。

傍から見れば奇怪な戦闘であった。

性質の異なる戦闘スタイルが、強引に噛み合っているかのように攻防が激しく繰り返されている。

「——はっー!」

巫女が鋭い呼気を吐いた。

それまでの連撃とは違う、力を集約させた正拳突きが繰り出される。

拳を霊符で覆い、貫通力を備えたこの一撃をこれまでのように盾で受け止めることは出来ない。

「迂闊な!」

しかし、権はその渾身の一撃を『未熟』と切り捨てた。勝機という物を全く見極めていない、と。

恐るべき威力を秘めた一撃を、しかし権はあっさりを受け流した。文字通り、丸みを帯びた半円球の形状を持つ盾の表面を滑らせるようにして拳の軌道を逸らしたのだ。

渾身の一撃であるが故に、巫女はそこで致命的な隙を晒すことになつてしまった。

盾で横薙ぎに叩きつける。がら空きだった脇腹に衝撃が突き刺さり、骨の折れる音が鈍く響いた。

巫女の顔が歪み、食い縛った歯から呻き声が漏れる。

追撃として突き出された剣先は、今度はもはや迷いなく命を刈り取りに来ていた。

喉元目掛けて放たれたそれを間一髪避け、首筋を浅く切り裂かれながらも、巫女はかろうじてその場から大きく後退する。

二度目の対峙。

しかし、今度は一瞬の間だった。

体勢を立て直す暇など与えず、権がすぐさま追い継ぐ。

権はもはや敵を狩る猟犬となつていた。



権T U E E E E !!

これはもう権じゃなくて『M O ・ M I ・ J I』だろ！

自分が油断出来るような大層な立場でないことは自覚している。

犬走権という相手を事前に知識で知っていたからといって、それが『原作ではゲーム道中の中ボス扱いだった』と侮るような気持ちなどあるはずがない。

そう思っていた——が、実際に窮地に陥ってみれば、私は想定外の事態に大きく動揺してしまつていた。

足りないのは『危機感』だったか……！

博麗の巫女として働くようになって、多くの妖怪をこの拳で葬って

きたが、それらが本当の意味での実戦の経験ではなかったのだと痛感した。

これまでは敵に対して、全力で動き、全力で攻撃を叩き込めばそれで全て勝負はついていた。

しかし、今回の戦いは違う。

権は、これまで戦った妖怪とはまさに格の違う相手だった。

戦い方一つとっても、こちらの意表や不意を突く巧みさがあった。剣で来るかと思ったら、いきなりシールドバツシュかましてくるし、体勢を崩してから追撃をかわせたのは運が良かったとしか言いようがない。

しかも、全然容赦無いし。

躊躇無く眼を狙ってきた攻撃をかわした後には背筋に冷たいものが走ったわ。

これが本当に命を賭けた実戦に対して感じる恐怖ってやつなのか……。

ブルース・リーを真似た仕草は余裕をかましてやったのではなく、本気でビビってしまったので、私の知る強い人の行動に肖ってなんとか動揺を誤魔化そうとしただけだった。

つっ—か、これまで特に何か考えて戦ったことないから、こういう追い詰められた状況でどういう行動が最適なのか全然分からん。

圧倒的な経験不足だ。

とりあえず、剣に対抗する為に両手を防御用の札で覆って即席のナックルガードを作り出す。もしくは『手甲』と言う方が機能としては近いかもしれない。

博麗結界術のちよつとした応用だ——と、カッコつけて言いたいところだが、正直これは本来の結界のランクダウン版である。

本来なら、もつと広範囲に防壁を作ったり、相手の動きを封じたりするもののだが、私には博麗の秘術に関しては全く才能が無いようなので、これが精一杯なのだった。

まあ、これで防御力は結構上がったと思うけど、事前準備に隙が大きいし、操れるようになった霊力を拳に集めて直接強化する方が早く

て強力だと思うな。

今度からその方向で修行しよう。

剣を素手で受け止められるようになって、なんとか五分か少々有利になったかと思つた私だが、それがまた新しい隙を生む結果になつてしまつた。

両手が使える分、単純に手数で押せるようになってきたので、思い切つて踏み込んだ一撃を繰り出した。

連撃では盾を破れないみたいだから貫通力のある一撃を——という判断だつたが、それは多分あまりに浅はかだつたのだろう。

椀はあっさりと渾身の拳を受け流し、手痛い反撃を受ける形となつてしまつた。

手痛いつていうか……超痛い。なんかボキツツて音がした。

ふつ、修行で毎度のように指とかの骨が折れる経験をしていなければ、きつと悲鳴を上げていただろうぜ。

内心、ドヤ顔しながら脂汗流しまくっているイメージ。

やせ我慢しているだけであつて、痛みを感じていないわけではないのだ。

ううっ……マジで痛い。

あと、ここからどう戦えばいいのか分からん。

現在進行形で私は追い詰められていた。

私が脇腹の痛みに意識を取られている隙を正確に見抜き、椀は息もつかせぬ怒涛の追撃を仕掛けてきたのだ。

下手に反撃すれば今度こそ致命的な隙を晒してしまいそうな気がして、私は防戦一方のまま攻撃を凌ぐことしか出来なかつた。

あと、脇腹の激痛が要所要所で動きに制限を掛けてくる。

正直、動きたくない。腹を押さえてしばらく蹲っていたい気分だ。

私は今、確実に追い込まれている。

しかし、私にはこの状況で取るべき行動が分からない。

くっそお……私はこれまで何をやってきたんだ？

ただ妖怪をぶん殴っていただけの実戦経験なんてクソの役にも立ちやしない。

血の滲む修行で身に着けた技があっても、それを使うべき機会を見極められないのでは意味がないのだ。

ど……どうしょ？

考えろ。経験云々は、今更どうしようもない。

冷静になれ。

今、必要な行動は何か？

それは権とにかく一撃でも当てることだ。

それには、あの盾をどうにかしなければならぬ。

まず剣の間合いを避けて踏み込み、私の距離である拳の間合いまで詰める——ここまでではなんとか行けるだろう。

しかし、そこで繰り出す攻撃が問題だ。

軽い攻撃では盾で受け止められる。

だが、踏み込んで力を収束させた一撃を出しても、予備動作を読まれて先ほどのように受け流されるのがオチだ。

受け止めることも受け流すことも出来ない、権の先読みさえかわせるような攻撃手段が必要だった。

確実なのは、今の私の奥の手とも言える『百式観音』を放つことだ。

単純な鍛錬以外では一番最初に始めた漫画の修行で身に付け、現在も欠かさず磨き続けている技であり、こいつの威力と初動の捉えづらさならば、さすがの権も捌ききれまい。

——が、しかし。

そんな隠された奥の手の存在を見抜いているかのように、権は激しい攻勢を止めない。

『祈り、突く』という一連の動作が必要なこの技は、繰り出すまでにどううしても一瞬の間が要る。

権の攻撃はその一瞬の間さえ与えてくれないのだ。

マジで権強い。

強いっつーか、巧いっつーか、あるいは甘さが無いっつーか。

とにかく、戦鬪の流れは完全に権が掌握していた。

っていうか、防御が鉄壁すぎだろ。

盾で受け流すとか、某心眼の琉球に伝わる剣法かよ！

……あれ？

ちよつと待てよ。

あの漫画のバトルの内容、参考に出来るんじゃない？



眼は口ほどに物を言う。

権は劣勢に立たされていている巫女が何かの光明を見出したのを正確に読み取っていた。

——何かを仕掛けるつもりだ。

——迂闊な、分かりやすすぎるぞ。

警戒を強め、ついでに内心で無意識に叱責を飛ばしたことに遅れて気付いた。

——敵に対して私は何を言っているんだ？

自分自身に呆れながら、そんな心の微妙な揺れさえ太刀筋には全く現れていない。

権の攻撃は変わらず正確で、冷徹だった。

しかし、その鋭く重い斬撃を、巫女はとりあえず全て凌いでいる。戦いの構成や運び方こそ経験不足の為未熟だが、技の一つ一つが異常なまでに完成されていた。

なんともチグハグな印象だ。

人間の身で一体どんな鍛錬を重ねた末に身に着けたものか。地力は完全に巫女が上回っていた。

その巫女が、状況を打破する為に権には持ち得ない切り札を切る。振り下ろされた剣の横腹に手を添え、軌道を逸らして権の懐へ踏み込んだ。

間合いを潰し、踏み込んで拳を打ち出すことも剣を振るうことも出来ない。

しかし、権は既に互いの体の間に盾を割り込ませていた。

急所である顔を覆うように守る。

攻撃手段の限られる状態で、この防御を貫く為にどんな一撃を放つ

つもりなのか。

視線を落とし、相手の足の動きから盾越しに次の行動を見極めようとしていた樫は、次の瞬間凄まじい衝撃に襲われた。

「……っ!?!」

巫女の足はそこから一步も動いていない。

しかし、攻撃は来た。

軽量化の為に木の骨組みで構成されているとはいえ、表面に鉄板を貼った盾を貫通して、巫女の拳が樫の顔面を殴り飛ばした。

——間合いの無い状態で、上半身の動きだけでこれだけの打撃を繰り出したのか!?

意識ごと首から上を吹き飛ばされそうになりながら、樫は驚愕した。

純粹に鍛えられた上半身のバネ以外に、関節の捻りや僅かな距離で拳に力を乗せる動きなど。全て一朝一夕で出来るような技術ではない。

それは明らかに、こういった状況を想定して編み出された『技』だった。

基本的な戦いの機微さえロクに読めない素人でありながら、まるで百戦錬磨の戦士のような発想を垣間見せる。

やはり、この人間はチグハグだ。

単なるまぐれなのか、実は底知れぬ力を隠しているのか。いずれにせよ……。

——強い!

たった一撃で勝負は決した。

朦朧とする意識のまま背中から倒れ込み——しかし、その寸前で踏み留まった。

「……ッガルアアアアアアアアアッ!」

体勢を無理矢理立て直して、雄叫びと共に文字通り牙を剥いた。

ほぼ密着状態だった巫女は避けきれず、拳を突き出したままだった右腕を引く間もなく、野獣の如く喰いつかれた。

姿形こそ人型であれ、その本質は間違いなく獣である樫の牙が深々

それを改めて確信し、何故か権にとってはそれが救いのように感じられた。

「……おまえ」

視界がぼやけているせいか。

目の前の少女の顔が、五年前に見た幼い子供の顔と何度も入れ替わる。

弱々しく、あどけなく、すぐにも死んでしまいそうだった幼子の顔。

あれから五年。

たったの五年だ。

変わるものか、ここまで――。

「強くなったなあ……」

権は自分でも気付かないほど小さく笑って、それから意識を手放した。

◇

ガトチュ・エロスタアイムツ!!

技名を叫ぶならそんな感じの一撃が見事成功した。

本来ならば刀で行うはずの攻撃を、正拳突きに置き換えて放った零距离の一撃は、盾を貫通して権にクリーンヒットしたのだった。

本当の技名は『牙突・零式』

技の原理が打撃技にも応用出来そうだし、何よりカッチョイイから修行して身に着けた技だ。

漫画のシチュエーションに倣って使ってみたが、なんかビックリするほど上手く決まったな。

そうか、こういう状況で使えばいい技なのか。勉強になった。

技を習得して活用するまでの流れが完全に逆のような気もするが、とりあえず結果オーライである。修行してて良かった!

考えてみれば、東方だって元ネタはゲームだ。バトル漫画の展開や理屈も決して馬鹿には出来ない。今後も参考にしていこう。

まさに一発逆転。

ここまで全ての攻撃を防がれていた為か、右手に伝わる確かな手応えに思わず内心でガッツポーズをしそうになる。

——やったか!?

それがフラグとか抜きにしても、実戦においてあまりに迂闊な隙である、私は次の瞬間理解した。

文字通り、痛いほど。

勝負が決したものと勘違いした私の油断を突いて、棍が逆襲した。意識を失いかけていた両目がギリリと光り、それを見て『拙い』と思った瞬間には右腕に牙が突き刺さっていた。

痛ってええええつ、噛まれたああああーっ!!

痛みに耐性はあったつもりだが、さすがにこれは初体験だった。

深々と突き刺さった牙も単純に痛い、何よりも棍に噛まれたこと、しかもシヤレにならないような力が込められていることに恐怖を覚えた。

——こいつ、食い千切るつもりか!

背筋に冷たいものが奔る。

脳裏に浮かんだ凄惨なイメージと、それを現実にしてしまいそうな右腕の激痛が恐怖を倍化させた。

や、やべえ! 悠長にしてたら骨が砕ける……っ!

溢れそうになる悲鳴を食い縛って堪え、折れそうになる精神を無理矢理奮い立たせる。

ここで私が『逃げ』の選択をしなかったのは、一重に前世の知識のおかげだった。

普通ならば、腕を庇う為にガムシヤラに棍に攻撃を仕掛け、なんとか隙を突いて状況を脱しようとするだろう。

その『退く方向に向かう逃げ腰の行動』が、結局は致命傷を生むのだ。

生存本能にはなかなか逆らえない。

実戦で、こういった窮地での咄嗟の判断を行った経験の無い私では、なおのことだ。

しかし、この窮地において私の脳裏にはあるイメージが連想され、

鮮明に思い浮かんでいた。

——まるでアーロン戦の時のルフィみたいな状況だな。

どこか現状を他人事のように捉えている、危機感の欠如したこの無意識の発想が逆に私を救った。

——つてことは、ここで逃げたら逆にやられる！

漫画の中での展開を、絶大な信頼性によって確信した私は、脳裏に思い描く主人公の行動を真似るまま、捨て身の攻勢に移った。

右腕の傷が開くのも構わず、そのまま腕をくれてやるくらいの覚悟で力を振り絞り、前へ押し込む。

激痛と恐怖、そして後先を忘れる為に獣のような雄叫びを上げながら、棍の頭を地面に叩きつけた。

後頭部を打ちつける鈍い音と衝撃が私自身の腕にまで伝わり、確かな手応えと共に牙の拘束が緩む。

ここで腕を引き抜くような選択肢は、もはや頭の中には無かった。追撃を仕掛ける。

空いた左拳を握り締め、鳩尾に打ち込んだ。

力の抜けた腹筋は柔らかい肉の感触を拳に伝え、それが今度こそ大きなダメージを与えたのだと確信させる。

「ぐ……っ」

完全に力を失った棍の口から、今度こそ腕を引き抜いた。

抵抗は無い。

これで本当に勝負は決したのだ。

……牙から引き抜く時、ズボツと非現実的なくらいデカイ音が聞こえた時は別の意味で背筋に悪寒が走りそうになった。

自分が負った傷なのに、なんかもうゾツとする。

明らかに一般的な傷跡じゃないし。

痛いのももちろんだけど、それ以上に怖い。見たくない。キモイ。喰いつかれた痕は穴として残り、腕は血塗れとなっていたが、とりあえず拳を握り込める程度には動くようだ。

見た目的には全く安心出来ないが、とりあえず気持ちを落ち着ける要素ではある。

大きくため息を吐くと、焦点の定まっていない椀と眼が合った。

「おまえ……」

意識がある限り襲い掛かってきそうな怖さがあるが、やはり先ほどの一撃が決定的だったのは間違いないらしい。

椀はただ弱々しく言葉を発するだけだ。

何故かそれを聞き取ろうと、私は耳を澄ませていた。

「強くなったなあ……」

——椀は、そのまま気絶した。

私は先ほどまでの凶暴さが嘘のように消え失せた寝顔を見つめ、聞き取った言葉を反芻していた。

強くなった……か。

単純な称賛の言葉だが、不可解な部分もある。

過去形ということは、椀は私が強くなかった時期を知っているということなのだろうか。

私には、過去に椀と会った記憶は無い。

妖怪の山で目覚めた時よりも更に昔の記憶にその出会いの経験があるというのなら、今の私には確かめる術は無いが。

あるいは、幼少の頃に何度も助けてくれた恩人が実は椀だというのだろうか？

分からない。

心当たりは幾つかあるが、どれもハッキリとはしない。

ただ、不思議な気持ちだけが沸々と湧き上がっていた。

椀に褒められたこと、認められたことが、私には何故かちよつとだけ嬉しかったのだ。

うーん……何なんだろうね、この気持ち。

自然とニヤついてしまうというか……確かに大好きなゲームのキャラが相手だけど、なんかそれを抜きにして純粹に嬉しい。

元々誰かに認めてもらう為にやってたわけじゃないけど、修行頑張った甲斐があったなあと考えてしまうね。うへへっ。

……まあ、右腕の痛みがシャレにならんくらい酷くなってきたから、すぐに冷静になるんですけどね。

これやったの、目の前の可愛いわんこちゃんな二次創作のイメージがあつた彼女です。

そんな相手にちよつと褒められたくらいでニヤニヤしちゃうとか、チヨロすぎだろ私……。

もちろん、痛い目に遭つたからつて棍のことを嫌うはずもないですけどね。

殺し合いやつておきながら、今回のことを切欠にお近づきになろうという打算さえ浮かぶ。

前世の知識による補正すげえ。

この知識が私の判断を結果的に良いものとしてくれているのか、悪いものとしているのか未だ分からないが……まあ、大丈夫だ。後悔だけは無いし！

棍に対して身構えていた体勢をようやく解くと、私は右腕の処置に取り掛かつた。

脇腹も痛いけど、こつちの方が深刻だ。

正直、すぐにお医者さん呼んで欲しいけど、今から人里に戻るわけにもいかない。

私は両手を覆っている物と同じような長い札の束を取り出すと、それに靈力を込めて傷に巻きついた。

右腕を覆つた札が強く傷口を縛りつける。

凄く痛いけど、我慢だ。失血するよりはマシだし。

本来ならば、こういった靈符は敵を拘束する為の捕縛結界用である。

しかし、やはり私にそういった術の適性は無く、通じるのはせいぜいが妖精や弱小妖怪程度だった。

とはいえ、札自体の拘束力はなかなか強いので、こうやって傷口を抑えたり、骨折を固定する為に活用している。ばい菌も入らないから便利。

……逆を言えば、私の術はこういったことくらいにしか活用出来ないって話なんだけどね。

だから殴る蹴るがメインな戦い方なのだ。

当然、巫女の役割の一つである博麗大結界の管理なんかは紫に丸投げしてしまっている。

時々思うんだけどさ、紫……………私を博麗の巫女に選んだのって失敗じゃね？

そんなネガティブな意見が毎度の如く浮かんでくるが、だからといって私の方から弱音なんて吐ける資格は無い。

せめて出来ることは全力で頑張ろうと、妖怪退治や人里の治安維持に励むようにしているのである。

そんなわけで、妖怪の山に入って早々死闘を演じてしまった私だが、ここで退くような選択肢は持っていない。

なんとしても攫われた子供を取り戻すつもりだった。

妖怪の山は広く、先は長いが、なんとかして天狗とはこれ以上衝突しないよう気をつけて、子供を見つけ出さないと――。

「いたぞ、侵入者だ！」

……………はい？

「樫がやられているぞ！」

「馬鹿な、あいつがか!？」

「油断するな、囲め！ 警告は要らん！ 確実に殺すんだ!!」

呆気に取られる私を尻目に、突如現れた樫と同じような格好をした者達が三人、周囲を取り囲んだ。

既に剣を抜いて、完全な敵意と殺意を私に向けている。

えーと……………樫さんの同僚の方々ですか？

……………えっ、なんで？

この状況での弁明がどう頑張っても通じないことを悟りながら、別の疑念が頭の中を飛び交っていた。

何故にこのタイミングで応援が駆けつけるんだ!?

おかしいって！ だって、樫が仲間を呼ぶ暇なんて、あの戦闘の中であったはずが……………!

—— 『樫の上げた雄叫びが、戦闘の始まりを告げた』

あ……………あああああああつ！ あの時かあぁーっ!!?

あれは戦いに備えた雄叫びじゃなく、仲間を呼ぶための遠吠えだつ

たのか！

ちよっ……待って！

ずるいって、だってどう見ても一対一の決闘の前だったじゃん！
そういう仕込みアリなの!?

「殺せっ！」

予想外の事態に、半ばパニック状態のまま棒立ちするしかなかった私に向かって、新たな三人の哨戒天狗達は問答無用に襲い掛かってきた。

状況が一気に悪い方向へと飛躍し、拡大しつつある。

——何が始まるんです？

——第一次妖怪の山大戦だ！

いや、マジでそんなことになったら収集つかねーぞ。

どうすんだ、オイイイー！ツ!?



「おっほほ！ こういう展開か、いや結構結構。面白くなってきたわ」
「変な笑い方しないですよ。あんた、今すっごく嫌な面してるわ……」

哨戒天狗と博麗の巫女の衝突を、離れた木の上から眺めている二つの影があつた。

射命丸文と姫海棠はたてであつた。

明らかに体重を支えられるはずのない細長い木の枝の先端に、足一本だけ乗せ、もう片方の足を組んだ奇妙な体勢で空中に『座つて』いる。

風を操る文にとって、地面も空中も足場としては大差なかった。

椀ほどではないが、文とはたても視力は人間の比では無いほどに優れ、現場の声や音は風に運ばせることで離れたこの場所でも正確に聞き取っている。

やっていることは野次馬そのものだが、用いられる能力の高度さにはたては内心呆れていた。

射命丸文の持つ『風を操る程度の能力』は、この通り応用の効く幅

があり、なおかつ純粹に強力だ。

天狗の中にはもちろん『かまいたちを発生させる程度の能力』や『竜巻を起こす程度の能力』など、風に関わる能力を持つ者も多い。

上位の天狗ならば、その威力も災害並にまで跳ね上がる。

しかし、風そのものを全て操る能力を持っているのは文だけだった。

まるで風神だ。

立場こそ鴉天狗の一端に納まっているが、妖怪としての年季も天魔に迫ると聞く。

だからこそ、文は天狗の間でも上下関係無く名が知れているのだった。

恐ろしい妖怪なのだ。

「いやいや、これが笑わずにいられますか！

あのクソ真面目な番犬ちゃんが人間如きに負けてんのよ？ 普段の無駄な威圧感は張子だったのかって話よ。あーおかしっ！」

——それを踏まえた上で、己の実力に自覚があるのかないのか微妙な同僚の小物臭い言動を、はたては生暖かい眼で眺めていた。

天狗の中でも人間寄りの良識を持つはたてにとって、文の嘲りはいささかどうかと思うものだったが、聞き慣れる程度には付き合いが長かった。

戒めても、調子に乗って軽口を返してくるだけと見越し、話題を変えろ。

「人間如きっていうけど、あの博麗の巫女も相当やるわよ？ あんたも随分前から目に掛けてたじゃない」

「ああ、まあ確かに。人間にしては、ね。

私の期待通り、いい感じに力をつけてくれたわ。やっぱり博麗の巫女としての立場だけじゃ、話題にする際の『いんぱくと』ってヤツが足りないからね」

文の浮かべる満足そうな笑みは、嘲笑の域を出なかった。

はたてはその表情や仕草を注意深く観察し、言動が本心そのものであると悟ると、呆れたようにため息を吐いた。

まったくもって——捻くれている。

「五年前に世話した子供が、博麗の巫女になったのよねえ……」

犬走椋を下し、今も三人の敵を前にしながら一步も退かず対峙し続ける少女の姿を遠目に見つめ、はたては文に聞こえるように呟いた。

「何か他に思うところ無いわけ？」

「つまり『立派になったなあ』とか感慨深く言わせたいわけね、私に」

文は小馬鹿にするような笑みを浮かべた。

「文があの子を気に掛けてたのは確かでしょ？」

当代の博麗の巫女について新聞に載せてたのなんて、あんたくらいのものだったわよ。あんたの言う『人間如き』の活動を、大した話題性も無いのに取り上げてさ」

「こういう時の為の下積みが決まってるでしょうが。」

そう、全ては予測され得る事態の為！ これまで散々持ち上げて、煽った成果がここに生きてくるのよ。私の期待通り、彼女は騒動を起こしに来てくれたわ。

八雲紫に横から搔つ攫われた時は随分と落胆したものだけど、こういう形で恩を返しにきてくれるとは思わなかったわ。いやはや、何事も面白そうなことにはチョツカイを出しておくものね。

博麗の巫女、ついに暴走！ 妖怪の山に殴り込みをかけた、無謀な行為の結末はっ?! ——今回の新聞の見出しはこれで決まりね！」

「……可愛さ余ってなんとやら、って感じなのかしら」

嬉々として思い浮かんだ文句を手帳に書き込む文に気付かれぬよう、はたては自分なりの解釈を呟いた。

文の言葉は人間である博麗の巫女を見下し、嘲った、何処までも悪辣なものに聞こえる。

事実、彼女自身はそういう意図で言っているのだろう。

この態度が同族の下つ端にも向くから、悪名が蔓延るのだ。

文の性根が捻じ曲がっていることなど、はたても十分に知っている。

それを理解した上で、はたてはまた別の視点で文を捉えていた。

文自身はその見解を誤解であり、間の抜けた勘違いだと思ってい

る。

しかし、少なくともはたては自分の見立てを疑わず、信じていた。だからこそ、友人でいられるのだろう。

——あの子が八雲紫に連れ去られた後の文の様子を知っている。

——あの子が新しい博麗の巫女として選ばれたのだという情報を、文が一番に手に入れたことを知っている。

——人間であつても妖怪であつても、誰かに好意を向ける素直さなど欠片も持っていないことを知っている。

——少なくともあの子に対する興味という点においては、今も変わっていないことを知っている。

いずれの要素も、多分に好意的な解釈をしているという自覚はあるが、はたてはそれを理由に考えを改めるつもりはなかった。

傲慢で嫌味だが、決して下種や外道にはなれない——それが射命丸文という天狗だった。

「それで、文はこれからどう動くつもりなわけ？　このままデバガメしてんの？」

「んー、まあ放つといっても人数が動員されれば、騒ぎはそのうち収まるわね」

文は少し考え込み、やがて何かを思いついたのかニヤリと笑った。

はたてが表現するところの『すごく嫌な面』であった。

「うん、折角だし。ちよつとチョツカイ掛けてくるわ」

何が折角なのか。おそらく悪意による思いつき以外の何物でもないだろうことを察して、はたてはうんざりするような表情を浮かべた。

——そんなんだから、友達いないのよ。

口にしたら、きつと自分のことを棚に上げていると言ひ返されるの
で言わない。

はたては黙って、妙に腹の立つ笑い声を上げながら飛び立つ文の姿を見送った。

五年前に唐突に別れることになってしまった、人間の少女と妖怪との再会だ。

取材の為に何度か博麗神社を訪れているようだから、顔合わせという意味ではこれは初めてではない。

しかし、取材の時の文はあくまで記者としての心構えを崩さない。私的な会話を挟んだ本当の意味での交流はこれが初めてとなるはずだ。

もちろん、それが感動的なものになるとは到底思えない。

あれから精神的にも成長しただろうあの子供が、文と言葉を交わし、その人となりを理解した際に果たしてどんな感情を抱くのだろうか？

本来ならば、文は人間からも同族からも嫌われるような奴だが——さて？

あの人間も、子供の頃から相当な変わり者だった。

不安よりも期待があった。

きつと、面白いことになるはず。多分。だったらいいな。

「ま、どうにでもなるでしょうよ。深刻になるだけ無駄だわ、あんたは自覚している以上に小心者なんだからさ」

遠目に見える文に対して意地悪く笑い、はたては最後まで見届けることなく背を向けた。

今は自分もやっておくべきことがある。

自身のことに対してはものぐさな引き籠もり気味の鴉天狗は、無駄にお節介な性格と苦勞人としての性質を知らず發揮して、行動を開始した。

天狗の集落へとすぐさま戻り、普段は滅多に訪れない下っ端天狗達の集まる場所へとはたては向かった。

椀の千里眼ほどでは無いにせよ、哨戒天狗の中には何かを搜索、探索することに適した能力を持つ者が多い。

上司の立場でありながら異様に緊張する内心を、努力して作った不遜な表情で隠し、はたてはその日初めて下っ端の天狗達を顎で扱った。

——あんた達に至急捜してもらいたい妖怪がいるわ。言つとくけ

ど、拒否権はないわよ。

内心では嫌な顔してるんだろー、私のことウザイって思ってるんだろー、と勝手に想像して落ち込みながらも不慣れな命令口調を続ける。

——人里から子供を攫った妖怪を捜して頂戴。この山の何処かに、獲物を連れて隠れているはずよ。可能な限り急いで、この場の全員で手分けして探さない。

拒否出来ないことを知りつつ、非番の者にまで命じる自分の行動が理不尽であると自覚しているからこそ余計に心が痛む。

きつと、捜しに出掛けた先で私の陰口言い合うちに決まってる。

勝手にその様を想像して、心だけでなくお腹まで痛くなってきた。

気分も悪い。

吐きそう。

それを堪え、決死の覚悟で声を出す。

——さっさと行きなさい！ 時間が掛かるようなら……分かってるわね？

子供が妖怪に殺されてしまったら手遅れだ。

そうなる前に見つける必要がある。

そう、必要なことなのだ。

だから脅して急かせるのだ。

その為に嫌な奴と思われても仕方ないのだ。

全て丸く収めることが出来るなら、ちよつと嫌われる程度なんでもない。

必死に自分を奮い立たせ、はたては強い態度を貫き通した。

命令を受けた下っ端天狗達がすぐさま飛び立つ。

——去り際、その内の一人が小さく舌打ちするのを、はたては見てしまった。

誰もいなくなった後で、耐え切れずにゲロ吐いた。

其の十七 「風神少女」

私は、この世界が『ゲーム』ではなく『現実』であると、改めて実感していた。

目の前に在るのは道筋の定められた『ストーリー』や『展開』、あるいは『お約束』などといったものではない。れっきとした現実なのだ。

物語を盛り上げる為の理不尽な展開など無く、道理が通れば、その先には不変の結果しか存在しないのだ。

——つまり、何が言いたいかというと『百式観音』無双状態だった。いや、理屈は分かるよ？

この技は動作の無駄を限りなく省き、相手に感知されない程『静かな攻撃』である点がミソなのだ。

何かしらの前動作や溜めが必要な必殺技とは正反対に位置する技だ。

まさに私の切り札であり、だからこそ権との戦いでは出し惜しみしていた。

まあ、その結果。使うべき機を逃して、結局追い詰められてしまったのだから、私の判断ミスとしか言いようがない。

切り札だからこそ、いざという時のために温存するという考え方が間違っていたのだ。

だから、駆けつけた三人の哨戒天狗との戦闘に入った時には、その反省を活かして最初から全力を出すことに決めた。

三対一という、単純に数の上で不利な状況だ。

とにかく数を減らす為に素早く倒さなければならぬと考え、形振り構わずに初撃から切り札を切った。

——そしたら、三発で勝負が決まった件について。

繰り出した百式観音に、何も対抗出来ず、敵は順番に吹き飛んでいった。

最初の一人が初見の技に対応出来なかったのは当然として。

攻撃の正体を掴めず、いきなり吹き飛んだ仲間の様子に驚愕する二

人目の横っ面へ二発目が直撃。

さすがに三人目は間隔を置いたので対応しようとして行動を起こしたが、距離を取ろうと空を飛んだ瞬間に三発目の衝撃波で打ち落とされた。

この間、わずか三秒ツツ!!

……いや、マジでそれぐらい瞬殺だった。

追い詰められていた為、とにかく敵を倒すことに集中していた私も、この結果には逆に呆然としてしまうくらいだ。

敵が雑魚だった、などと根拠の無い評価を下すつもりはない。

むしろ、椀と同じ仕事に就く仲間なのだから、戦闘に関しては同じプロフェッショナルなはずだ。

それがまともにも戦うこともなく、倒されてしまったのだ。

強すぎだろ、この技……。

自分で習得しておきながら驚く。つつーかむしろドン引きである。

修行自体に重きを置いていたので、技の性能にはそれほど関心がなかったが、ここまで優秀だとは思わなかった。いや、凶悪と表現した方がいいか。

こういう切り札的な技って、多用するとすぐに対抗策を使われてしまうのが漫画のお約束だが、現実の前にはそんなフラグなんて何の意味も無いね。

発動できれば対抗どころか、反応すら許さない。

苦戦必至の戦闘を全部省略だ。

相手に感知出来ない攻撃を、真っ先にぶつ放す。格闘ゲームで言う『開幕ぶっぱ』という奴だが、どうやらこれはかなり有効な戦法らしい。

人間であり、戦闘経験も乏しい私が妖怪とガチンコしたら不利なのは、椀との戦闘で実感したから『相手の実力を封じて勝つ』というのは身に染みて分かる理屈だ。

というか、これは対妖怪戦の鉄則だな。

覚えておこう。

とにかく、予想外の結果になったが、これはむしろ良い方向へ転ん

だ結果だ。

私の目的はあくまで『攫われた子供の救出』であり、戦闘は極力避けるか、時間を掛けないようにしたい。

無駄な消耗も御免だ。

他にも天狗の応援が駆けつけないとも限らないので、これ幸いといばかりに私はさっさとこの場から離れることにした。

その時。

「これなるは天狗の領域、無断で立ち入るとは不届き千万！」

「うお——ツ!？」

突如、横殴りの突風に吹き飛ばされた。

いや、風と言うより、もうほとんど衝撃波のレベルである圧力に、体ごと木に叩きつけられる。

明らかにまともな風じゃない。直前までほとんど無風状態だったのに！

打ちつけた背中も痛い、その衝撃が伝わって右腕の傷がズキンズキン言ってるのを内心涙目で堪えながら、私は風の吹いた方向へ視線を走らせた。

「おや？・・・おやおや、これは何たることでしょう。侵入者の正体が、博麗の巫女様であったとは！」

やべえ。想像する限り、最悪の事態になってしまった。

上空から私を見下ろして驚いているのは射命丸文だった。

手には先ほどの風を起こした時に使ったと思われる天狗の扇。首からは、何気に私も幻想郷で初めて見る文明の利器であるカメラを下げている。

この格好からイメージ出来るように、鴉天狗である射命丸は記者みたいな役職に就いている。

権みたいに侵入者と戦うような仕事はしてないと思うんだが、だからといって見逃してくれそうにはないな。この反応からして。

・・・妙に大げさなりアクションに見えるけど、気のせい？

「いけませんねえ、巫女様。理由は存じませんが、哨戒天狗の者らまで手に掛けたその蛮行、大いに問題となりますよお？」

理由は存じませんが、の辺りのアクセントを妙に強めた言い方だ。その強調がどういう意味を持つのかは分からないが、この台詞自体が私を威圧しているものだというのは分かる。

射命丸は嫌らしい笑みを浮かべながら、私の弁明を待つように見下ろしていた。

いや、悪いのは勝手に入り込んだ私なんだから『嫌らしい』とか思っちゃ駄目ですよ。

彼女からすれば、私が権を含む仲間の天狗をボコって、勝手に自分の領域に入り込もうとしている不愉快な状況なワケだ。

そりゃ、良い感情を持つはずがない。嫌味の一つも言いたくなるだろう。

「……すまない」

私は頭を下げた謝罪した。

射命丸とはここで初めて会ったわけではない。

博麗の巫女として就任したすぐ後に、彼女は神社へ取材に来た。

実はその時の出会いが、私にとって東方キャラとの二回目の邂逅だったりする。

最初に出会った紫の次に会う可能性が高いはずの八雲藍とは、博麗の巫女としての修行や職務に慣れ始めた頃によく顔を合わせたのだ。

それに反して、射命丸は私が博麗の巫女になって、それが人里に発表された数日後には神社へやって来ている。

同じ人間同士でも情報が十分に広まっていない時期だったというのに、一体どうやって掴んだものか、謎だった。

情報早すぎだろ。

ひよつとして、私って意外と注目されてる？　なんて冗談半分に自嘲れた考えが浮かんだ程だ。

もちろん、そんな筈もなく、むしろ取材されて射命丸が記事にしてくれたはずなのに、未だに人里以外の集落とかでは私の認知度は余りよろしくないくらいである。

まあ、その辺は博麗の巫女自体が、ゲームみたいに絶大な存在じゃ

ないこともあると思うけどね。

それに肝心の私が記事になった新聞を、私自身はこれまで一度も見ることがない。

紫なら新聞を見ているかと思って、たまにそれとなく尋ねてみるが、毎回はぐらかされるし……何て書かれてるのか微妙に気になります。

とにかく、私と射命丸は知り合いだった。

ただ、本当に『知り合い』なだけであって、悲しいことに親しい間柄では全然無い。

むしろ、取材の受け答え以外に雑談や世間話などのまともな会話すら交えたことがない。

ほとんど一方的に写真を撮って、質問というより確認のように何かを尋ねて、それに私が答えたらサヨナラって感じで毎回足早に去ってしまっている。

私としては、もちろん積極的に仲良くなっていきたい相手ではあるのだが、実際の仲は『他人よりマシ』って程度なのだ。

当然、気心知れた者同士の馴れ合いなど不可能であるから、私はただ真摯に頭を下げることしか出来なかった。

心情的にはもちろん、実力的にも射命丸とは対立したくない。

「謝罪の言葉が薄く感じますねえ。私の大切な部下を、無残な姿で地面に転がしてくれたのは貴女なのでしよう?」

射命丸の指す先には、気絶した椀の姿だった。

やっぱり、二次設定通り椀は射命丸にとって大切な位置にいるキャラなのね。

ううっ……相手の怒りが正当すぎて何も言えない。

このまま怒って『ここから出てけ』と言われたら、どうしよう?

素直に退くことは出来ないが、非は私の方にある。

開き直って、こっちの要求を無理矢理通すことなんて出来ない。

私はもう一度『すまない』と謝ると、おこがましさを自覚しながらも決意を固めて射命丸を見上げた。

「貴女の力を借りたい。頼む、助けてくれ」

「……はあ？」

先ほどまでの見下すような笑みが消え、射命丸は呆けたような声を上げた。

まあ、当然か。

私としても恥知らずな話だとは思いますが、何より今は時間が無いのだ。

子供が手遅れになる前に何とかしたい。

天狗の中でも大物である射命丸が相手ならば、話がどつちに転がっても事態は大きく進展する。

話が拗れれば問題は一気に膨れ上がるが、逆に協力を得られれば一気に好転するのだ。

「他の天狗に話を通して欲しい。こちらの問題が片付いたら、そちらの望む処罰は必ず受ける。償いもする」

私の要求に対して、射命丸は何やら複雑そうな表情を浮かべて黙り込んでしまった。

その胸中でどんなことを思い、考えているかは分からない。

やっぱし……呆れてるかな？

それでも何とか受け入れて欲しい。

一笑されることなく、考えに入れてくれている時点で僥倖ではあるんだけどね。

やがて、考えが纏まったのか、射命丸は再び笑顔を浮かべた。

——やはり、そこに浮かぶのは何か悪いことを企んでいるような印象を受ける、嫌らしい笑みだった。

「よろしい！ そちらに何かしら事情があることは分かりました。恥を忍んだ、その意を汲んであげましょう！

ただし——私も立場上、ただで人間如きの要求を受け入れるわけにはいきませぬ。その実力をもって、己の意を通してみせなさい。

噂に聞こえし博麗の巫女の力、果たして天狗を従えるに足るか否か？ この身で試させていただきましょう。

さあ、手加減してあげるから本気で掛かってきなさい！」

なるほど。結局、射命丸との対決自体は避けられないってことです

ね。分かります。

……私って、毎回このオチばかりじゃないですか！ やだー！



博麗の巫女が助けを求めた時、文は一瞬言葉に詰まった。

元より、彼女の事情は把握しているし、ここに至るまでの経緯もしっかり見ている。

チョツカイを掛けたのは、戯れと気まぐれ、そして愉悦交じりの悪意からだった。

言い分など最初から聞くつもりはない。適当にからかうだけのつもりだった。

しかし、文はその時一瞬とはいえ考えてしまった。

——ちよつと待て、考えるって何をよ？

自問し、文は我に返った。

何に対して悩んだのかは自分でも分からない。

ただ確かに、自分は迷った。

目の前の少女の助けを乞う声を聞いて、一瞬とはいえ葛藤した。

——駄目ね。やっぱり、この巫女相手だと調子が狂うわ。

自分自身にも分からない不可解な思考と、それに対する疑念を頭の隅に無理矢理押し込める。

まともに相手をするな。当初の予定通り、目の前の人間で軽く遊んでやればいい。どうせ、こいつは新聞のネタだ。

そう気を取り直して、文はすぐさま笑顔の仮面を嵌め直した。

相手の頼みを聞き入れるように見せかけ、戦う状況へと話を持っていく。

「噂に聞こえし博麗の巫女の力、果たして天狗を従えるに足るか否か？ この身で試させていただきましょう」

適当な建前で飾った言い方だが、文の真意からも余り外れた内容ではなかった。

あの無力だった子供が成長し、大きく力をつけたことは知ってい

る。

何より、文は先ほどの戦闘までしつかりと見ていたのだ。

あの椀との勝負——いや、命を賭けた戦闘を制しただけでも大したものだ。

その実力の限界を見たいという興味が、文の胸には湧いていた。

また、同時にそれを捻じ伏せてやろうとも考えていた。

椀相手に勝ったとはいえ、辛勝であったことを含めれば、次に始まった三対一の戦いでは苦戦か、あるいは敗北も在り得ると予想していた。

しかし、実際は一方的な巫女の勝利。

下つ端天狗とはいえ、三人を瞬殺である。

さすがにあれは予想外だった。

正直、傍で見ていた文でさえ、あの時の攻撃の正体は見極められなかった。

あの人間に関わって、驚いたことや意表を突かれたことは幾つもある。

だが、今回のそれは悪い意味であった。

——調子に乗られても困るのよねえ。

他の妖怪ならばいざ知らず、天狗相手に人間如きが格上などと、一部であっても在ってはならない道理なのだ。

このまま放置しても、いずれ身の程を知ることになるだろうが、それを待つ理由もない。

文は扇を仕舞うと、その場に降り立って巫女と同じ地に足をつけた。

最初の一撃のように、上空から風による攻撃を行えば一方的に勝ることも容易い。

しかし、それは文のプライドが許さなかった。

あの正体を掴めない攻撃に対して、自分が一瞬『脅威を感じたこと』を否定するように。

目の前の取るに足らない人間に対して、よもや『警戒している』などという事実を笑い飛ばすように。

文は、強者としての自負と余裕を持って、博麗の巫女と対峙したのだった。

「さあ、手加減してあげるから本気で掛かってきなさい！」

無造作に、戦闘開始の合図を告げる。

目の前の巫女は、構えもせずに佇んでいる。

この体勢から瞬く間に三人を打ち倒したのだから、当然油断は出来ない。

油断は出来ない——が、文はあえて油断した。

全身をリラックスさせて、あまつさえ両手はカメラを持ち上げてみせた。

最初の宣言の通り、文は自分から攻撃を仕掛けるような無粋な真似はせず——。

次の瞬間、予備動作を全く悟らせずに放たれた一撃が、文の頭部目掛けて飛来した。

そして、それは虚しく空を切った。

◇

「なん……だと……？」

思わずバトル漫画では有名な『戦闘時の驚愕の台詞』を口走ってしまっていた。

でも、これネタじゃなくて本気で度肝抜かれた状態なんですけど。

——『百式観音』が、かわされた。

実戦で学んだ先手必勝の鉄則に倣い、今回も初撃から全力全開の一撃を放ったのだが、あろうことか文はそれを回避してしまったのだ。

オイ………どうということだ、切り札がいきなり効かないって分かっちゃったぞ！

このまま戦闘続けろってか、なんやその無理ゲー！

半ば錯乱気味の内心を抑えきれず、私は目を見開いて、目の前の現実に冷や汗を流した。

この技を実戦で使ったのは、もちろんさつきが初めてではない。

切り札として温存はしていたが、実際の威力などを試す為に何度か使ってみたりした。

その結果、いずれも例外なく一撃で敵を葬っている。

少なくとも、回避はもちろん相手に反応さえ許さず、一撃の下に戦いを終わらせることが出来た。

参考にした漫画に描かれていた通り、この技はそういう性質と威力を持っているのだ。

だからこそ、私も切り札としていたわけなのだが。

まさか、それをかわされるとは……。

「どうしました、呆けてしまつて。ひよつとして、先ほどの一撃が全力でしたか？」

ほんの僅かだけ掠っていたらしい、軽く火傷したような頬の痕を撫でて、文が余裕たつぷりに笑っていた。

慌てて構えを取るが、正直これが単なるブラフだと見抜かれているか不安で仕方が無い。

相手の台詞の通り、さっきの攻撃こそがこれ以上無い私の全力だったのだ。

本来、攻撃の動作を悟られずに行う百式観音は、事前の構えを必要としない。

こうして構えを取っている時点で、最大の切り札を使えないと公言しているようなものなのだ。

もちろん、あの技はまだ何度でも使える。

拳だけでなく衝撃波みたいなのも発生させて射程を延ばしているが、別にそれでMP的なものを大量に消費しているわけじゃないしね。

ただ、もう一度使つても、かわされてしまうのでは意味がないのだ。つつか、二度目ともなれば初見以上に見切られやすいだろうしね。

だからといって、あれ以上の技が今の私には無いのも事実だ。

戦闘開始早々だが、私は正直お手上げ状態だった。

「なかなか鋭い攻撃でしたが、天狗を捉えるにはまだまだ速さが足り

ませんね」

早くも不利な状況となつてしまつたが、当然のように戦いは始まつたばかりだ。

お返しとばかりに文が攻撃の構えを見せる。

と、言つても両手は未だにカメラを保持したままで、軽く前屈みになつただけの状態だ。

視線はこちらを捉えているので、おそらく何かしらの攻撃をするつもりなのは分かる。

射命丸文といえば、ゲームの設定でもスピードを強調されていた強力な天狗だ。

彼女の攻撃に反応出来るかどうかは戦闘の鍵になる。

遠距離から弾幕とかで蜂の巣にされるようなら本当にどうしようもないが、接近戦を挑むつもりならまだまだ勝機を失つちやいない。

多分、状況から判断して『蹴り』が来るだろうと予測し、私は最大限に集中した。

次の瞬間、凄まじい衝撃に顔面を横殴りにされて、私は地面に叩きつけられた。

文字通り『衝撃』だった。

その衝撃の正体は何なのか、食らう直前の肉眼では全く捉えられなかった。

半ば飛びかけていた意識のまま、咄嗟に地面を転がって距離を取りながら立ち上がり、文の持ち上げられた右脚を見てようやくそれが、やはり『蹴り』であつたと確認出来た。

……うん、まあアレだね。

油断とか気の緩みとか、隙になりそうなことは全然やってないはずなんだけど、何事にも限界つてあるよね。

どうしようもない状況、とでも言おうか。

とにかく集中すれば、最低でも攻撃の残像くらいは捉えられると思つてたんだが――。

全っ然、反応出来ねえーっ！！



——な……なんか、かわせたあ……！

驚愕に引き攣った顔が、相手には不敵な笑みに見えていることを文は願った。

弱みを見せるわけにはいかない。

あの一瞬、本気で『死を感じた』などと。

全くの無動作で放たれた一撃。

おそらく拳を使ったと思われる——それさえハッキリとしない——攻撃を文が回避出来たのは、一重に彼女自身の能力のおかげだった。

射命丸文だからこそ対応出来たのであり、他の者があの不可避の攻撃にどう対処すればいいのかは、文自身見当もつかない。

事前に、博麗の巫女が持つ得体の知れない攻撃を知っていたことが大きく影響した。

文自身は否定していたが、それによって目の前の人間を『脅威』として『警戒』していたことが、油断や慢心を無意識に薄れさせていたのだ。

力と歳を重ねた強大な妖怪には自然と根付く自尊心以上に、自覚の無い小心な性根が彼女を救った。

そして、文は武術家ではない。

気配察知や動きの先読みなどといった技術は持たず、純粹に優れた感覚のみで敵を捉えている。

そこに加えて、保有する能力の応用から『風の動き』を察知することが出来た。より正確には『空気の動き』だ。

触覚による感知ではない。

理屈ではなく、能力によつて感じ取れるのだ。第六の感覚と言つても良かった。

その感性が、肉眼や予測でさえ追いつかない巫女の微細な動きを察知していた。

巫女の動きに合わせて周囲の空気がほんの僅かに乱れ、それを無意

識に集中していた文は敏感に感じ取り、心の中に消えずに残っていた警戒心が反射的に体を動かした。

結果、文は博麗の巫女が放つ不可避の一撃を避け得たのである。

「なかなか鋭い攻撃でしたが、天狗を捉えるにはまだまだ速さが足りませんね」

ほとんど偶然の産物である結果を、そうと悟らせぬよう余裕を持った台詞を吐く。

本当は予想外の緊張に、鼓動が早まっていた。

しかし同時に、天狗である自分を脅かす人間の存在に強い怒りも湧いていた。

——昔はあんなに弱っちかったくせに。

確かに将来を見込んでいたが、対等な存在だとまでは認めていない。

まして、自分をわずかでも脅かす存在になるなどと。

あの時、あの子供は庇護される立場だったのだ。

たった五年でその関係が変わるはずなど無い。

文は、あの子供が自分の下を離れてから過ごした五年間を完全に否定した。

——調子に乗るなよ、小娘。年季の違いを教えてやる！

天狗としてのプライドをもって、文は巫女に襲い掛かった。

真正面から相手の目の前まで踏み込み、薙ぎ払うような蹴りを放った。

何の策も無い、単純な攻撃だった。

しかし、とにかく速い。

巫女は成す術も無く蹴り飛ばされた。

回避はもちろん、防御すら間に合っていない。

文は右脚に感じる十分な手応えに、内心の緊張を緩ませた。

蹴り足を伸ばした片足立ちの状態のまま、立ち上がった巫女に向けてシャッターを切る。

「いい表情です。取り繕った顔なんて要りませんよ、私が素の表情を引き出してあげます！」

その強い意志を現すような鉄面皮が崩れ、驚愕をあらわにする巫女を見て、ようやく余裕が戻ってくる。

自分と相手の力の差を再確認し、互いの関係が何も変わっていないことを確信した。

私の上、お前が下だ。

カメラから両手を離さず、文は再び蹴り技を繰り出した。

いや、技という程のものではない。

無造作に薙ぎ払うか、突き出す、といった大雑把な動きだ。

しかし、それらがまるで鞭のようにしなり、鋭さと重さを備えて連続で襲い掛かってくる。

巫女は防御を固めて耐えることしか出来なかった。

蹴り足のスピードが速すぎて捉えられないのだ。

回避はもちろん、払い落とすことも押さえ込むことも出来ない。

天狗の速さに剛力まで備わっていないことが幸いした。でなければ、防御する腕ごと体の骨をへし折られてお終いだっただろう。

両腕で頭を覆うように守っていると、隙間を通すように、正面から直蹴りが鳩尾に叩き込まれた。

空気と胃液を吐瀉しながら、体が背後に吹き飛ぶ。

骨を砕く程の威力は無いが、それでも人外の脚力は常軌を逸していた。

「ハァイ。顔を上げて、こっちを見てー？」

腹を押さえて蹲る巫女に近づきつつ、文が挑発を繰り返す。

俯いていた顔を僅かに上げた時、巫女の瞳に鋭い眼光が宿っていた。

ギリギリまで引き付け、素早く踏み込んで正拳突きを放った。

鍛え抜かれた鉄拳が、しかし音を立てて空を切る。

「おお、こわいこわい」

文は既に背後にまで回り込んでいた。

一瞬、驚愕で目を見開きながらも、巫女は咄嗟に竜巻のような後ろ回し蹴りを繰り出した。

それを文の回し蹴りが迎撃する。

生身同士とは思えぬ激突音が響いた。

威力は互角。

一方が人間であることを考えれば、驚くべき結果だ。

だが、これが勝負である以上そんな称賛は互いに何の意味も持たない。

文は片足で器用にバランスを取りながら、ぶつかり合った足を、太ももとふくらはぎの間に挟んで押さえ込んだ。

相手の動きを封じたのを良いことに、その体勢のままカメラを近づける。

「笑って笑って〜?」

文は完全に普段の調子を取り戻していた。

人間からも天狗からも悪名高く知られる、性根の悪さと実力の高さを大いに発揮し始めたのだ。

カシヤツと更に一枚。

ファインダーに映る巫女の顔は、鋭くこちらを睨み付けている。

しかし、そこには苛立ちや怒りといったものは含まれていない。ただ戦闘者としての厳しさがあった。

押さえ込む文の足をへし折ろうと、拳が振り下ろされた。

当然のように、文はすぐさま足を解放して距離を取る。

一呼吸も置かず、地に蹴り、速すぎるヒット&アウェイが実行された。

迫り来る文の姿を、今回はかろうじて捉えていた。

接近する標的に向けて、合わせるように拳を突き出す。

まともに攻撃しては当たらないと悟った巫女は、カウンターを狙っていたのだ。

「読み読みです」

「——ッ!?!」

渾身のカウンターは、これまでと同じ結果に終わった。

攻撃かと思われた文の突進は、そのまま巫女の傍らを通り過ぎるだけの軌道だった。

カウンターを行う動作を見て、それから行動を変えたのだ。恐るべ

き反応速度だった。

拳は虚しく空振りし、攻撃を振り抜いた無防備な巫女の体を遅れて衝撃波が叩いた。

風を纏った超高速の移動が、ただそれだけで凄まじい余波を発生させたのだ。

巫女の体が、文字通り風に舞う木の葉のように吹き飛び、地面に叩きつけられた。

優雅にUターンをして、ボロボロになった彼女を文が笑って見下ろす。

「はい、それでは記念にもう一枚」

カシヤツとシヤツターが切られた。

全身に痣を浮かべ、額と右腕から血を流しながらも立ち上がる巫女の姿が、フィルムに焼き付けられる。

戦況は、もはや明らかに一方に傾きつつあった。

「力の差を自覚しましたか？」

椀との戦闘の負傷が痛むのか、巫女は脇腹を押さえながら荒い呼吸を繰り返すだけだった。

もはや万策尽きたか、と文はほくそ笑む。

決着はついたようなものだ。

「私が手加減していたことは、十分に理解しているでしょう？」

これが人間と天狗の差です。博麗の巫女とはいえ、貴女の力が届く領域などこの程度なのですよ。

さあ、理解出来たのなら帰りなさい。自分の領域、人間の領域へ戻り、今後は領分というものを弁えながら活動するのですね」

文は言葉では諭すように、しかし表情は全く嘲るような笑みを浮かべて語りかけた。

内心では、この話に込めた本気が半分。残り半分は、今後もうこういった騒動を『適度に』起こして欲しいと考えている。

根底にある天狗社会の基盤を壊すことなく、新しい風や刺激が欲しい。

天狗の中では珍しい、止めることの出来ない探究心と好奇心を持ち

ながら、同時に帰属する社会の崩壊までは望むことの出来ない小心な性根を摺り合わせた結果の答えだった。

しかし、既に自分の中で勝負を終わらせてしまっている文の心境とは裏腹に、巫女の瞳からは戦意が全く消えていなかった。

呼吸を鎮めるように、一度だけゆっくりと息を吸い、吐き。

そして、その場に正座をした。

「……何の真似ですかあ？」

意図を理解出来ず、文は訝しげな表情を浮かべた。

居直ったか？　とも思ったが、様子がおかしい。

腰を下ろしながらも、巫女の顔付きは未だ戦闘中のそのまま、鋭く標的を睨み据えている。

正座の仕方も膝を閉じず、僅かに開き、立ち上がりやすいように尻の下で足の親指を重ねていない。居合道で行われる正座の仕方だった。

詰まる所、目の前の巫女はまだ何らかの方法で戦うつもりなのだった。

「罨ですか。見え見えですね」

文は凶星を突くように嘲笑した。

実に分かりやすい。

座り込んだ時点で、待ちの構えなのだと言簡単理解出来る。いや、それしか手段が無いのだ。

先ほどの戦闘で、人間が天狗の動きについて来れないことは完全に証明された。

一見して、攻撃体勢とは思えない正座の状態を晒すことで、逆に攻撃を誘い、それに何かしらの罨を仕掛ける——こんなところだろう。

最も重要な『何かしらの罨』の部分を、文は深く考察はしなかった。

ただ、あれこれ予測するのが面倒になっただけだ。

「さて、この場から風を起こして吹き飛ばしてしまいませんか？　それとも空を飛んで真上からでも強襲する？」

文はニヤニヤと笑いながら、その作戦の粗を突いた。

今言った方法を実行すれば、巫女は成す術無く打ち倒されてしまう

だろう。

結局、追い詰められた敵の悪あがきなのだ。

文が真剣な思考を放棄してしまうのも仕方ないことだった。油断ではなく、余裕だった。

しかし、同時に口にした手段を自分が取れないことも自覚している。

己の自負心と、既に決着が就いたと確信している勝負に対して、ほんの僅かでも疑念や警戒を抱くような弱い考え方など持つてはいない。

そんな考えを持つことを、自分自身が許さないのだ。

強大な妖怪が持つ——特に天狗という種族にはより顕著な——特有の力のパラドックスだった。

「……いいえ、真正面から蹴り抜いて、人里まで吹き飛ばしてあげましょう！」

文は言葉の通り、真正面から巫女に最後の攻撃を仕掛けた。

あるいは、これは目の前の人間の小賢しい駆け引きに引つ掛かったことになるのかもしれない。

しかし、そんな些細なことは本当の勝敗には関係の無いことだとすぐに証明される。

確信を持って、文は最速の蹴りを巫女の横っ面目掛けて薙ぎ払った。

◇

あの白く美しいおみ足に踏まれたと思う奴は多いんだろうなあ、と襲い掛かる強烈な蹴りの嵐を受けながら現実逃避。

我々の業界ではご褒美です！ とか茶化す余裕も無い。つつーか、そんな性癖も無いしね。

食らってみれば分かる、そのシャレにならない威力の高さが。

あの柔らかかそうな肉付きに反して、まるで鋼鉄の鞭でぶっ叩かれてくるかのような衝撃と痛みだった。

特に負傷した右腕は防御する度に千切れそうな激痛ですマジで。

——分かったことだけど、射命丸強すぎワロタ。

だいたい戦力比として、かろうじて勝てた椀がナツパだとするなら射命丸はベジータだと想定していた私は正しかった。

文字通り手も足も出ない。

明確な差は、やはりスピードだった。

相手の攻撃は全く捉えられず、こちらの攻撃は掠りもしない。

これで射命丸の方は本気じゃないっていうんだから、勝負にすらなっていないのは私でも理解出来た。

かろうじて戦いになっているのは、相手がこっちの土俵で戦ってくれているからだ。

カウンターを狙った時に気付いたが、射命丸が本気で動けば、その移動手段だけで私なんかゴミみたいに吹っ飛ばされてしまう。

何アレ、ソニックブーム？

真面目に攻撃なんかしなくても、ああやって近くを行ったり来たりするだけで相手をボロクズに出来るんじゃないやね？

加えてあの時全身を襲った衝撃で、負傷が悪化したらしい。

右腕は激痛を通り越して徐々に痛みが引いている。つまり、感覚が無くなってきている。

代わりに折れた肋骨の痛みが酷くなってきて、とうとう呼吸まで障害し始めた。一呼吸の度にズキズキ痛んで、疲労しているのに思いつきり息を吸うことさえ出来ない。

しかし、椀との戦闘で負った傷と疲労など、追い詰められている現状の要因としてはほとんど意味がない。

完全な実力差だった。

どうしよう……正直、ここまで来ると笑うしかないんですけど。

「これが人間と天狗の差です。博麗の巫女とはいえ、貴女の力が届く領域などこの程度なのですよ。」

さあ、理解出来たのなら帰りなさい。自分の領域、人間の領域へ戻り、今後は領分というものを弁えながら活動するのですね」

もう射命丸の言葉に全面的に同意して、土下座しながらすごすご

帰ってしまいたい欲求に駆られる。

未だに博麗の巫女としての使命感やあの母親との約束が私の中の戦意を支えていたが、目の前の圧倒的な現実がそれ以上の圧力となって私に諦めを覚えさせていた。

戦力差は圧倒的だ。

まともな戦ったら、百回勝負したところで一度の間違いも無く私が百回負けるだろう。

——『だが』『しかし』

私は納得のいく理屈に対して、そう考えてしまうのだった。難儀な話である。自分事だけど。

この諦めの悪さは何処から来るのだろうか。

我ながら度し難く、理解し辛い。

ただ、戦う力を残しながら諦めを受け入れることが、私にはどうしても出来なかった。

この考えが、使命感や他人への情などを根底としたものでないことだけは分かっている。

多分、私の根っこの部分に出来上がってしまったているのだ。

——この妖怪の山で生き抜いた日々が、前のめりで死ぬことを望んでいる。

幸運と偶然によって命を拾い続けた日々だった。

あの無茶苦茶な子供時代を過ごしたからこそ、理屈で悟る諦めを受け入れることなど出来なかった。

無理。

無謀。

限界。

全て、あの日々の中で何度も越えていることじゃないか。

状況や状態、現状のあらゆるものを無視して私は決意した。

腹は括っている。かつて、この妖怪の山で一度死のうとしたあの時、既にだ。

へへっ、死ぬ気の覚悟って持つてるとこういう時は楽でいいね。

「罨ですか。見え見えですね」

忠告に逆らって取った私の行動に対して、射命丸はズバリ言い当ててきた。

まあ、分かりやすいよね。

私がある場で正座をしたのは、もちろん相手の攻撃を誘い込む為だった。

攻撃はもちろん、動きさえ追いつけない射命丸に対しては、もはや待ちの戦法を取って向こうから近寄ってもらうしか手段が無い。

それで何故『正座』なのか、というところ——実はそこまで高度な駆け引きは考えてなかったりする。

いや、さつき『笑うしかない』って言ったのは誇張抜きで本音だったし。

今の私には起死回生の策や新たな力の覚醒など望めるはずも無かった。

だからこそ、私は結局偉大なる先人に倣う方法しか残されていないなかったのだ。

待ちの戦法とは言っても、カウンターが成立しないことは先ほどの戦闘で実感した。

射命丸の攻撃に対してカウンターを合わせても、その動きに対してさえ先んじて反応されてしまうのだ。

そもそも実際の速さから反応速度まで差がありすぎる。

相手が接近を始めてから動かないと私の方は間に合わないが、射命丸は私が動いてから判断しても十分間に合う。

攻撃を中断して、こちらの攻撃の軌道を避けつつすれ違うだけで回避成功だ。おまけに本気を出した移動なら、その余波だけで逆にこっちがダメージを負う始末。

——相手の攻撃に対応するカウンターでは当たらない。

——相手の攻撃を受けながら、あるいは受けた直後に反撃しなければならぬ。

つまり直撃前提。

うん、これ考えた奴バカじゃねーの。自分だけ。

しかし、これくらいしなければ射命丸の動きを捉えられないのは十

分に実感したことだった。

攻撃する瞬間の隙を見極める、とか悠長なことは言ってもらえない。攻撃している間の無防備な状態を、文字通り『捕らえる』という、掴みから関節技への流れしか勝機はない。

もちろん、これは理屈の上での可能性であって、実際に行うのは至難の業だ。

やはり射命丸の速さが問題になってくる。

戦闘開始からここに至るまで、私の動体視力は彼女の動きに全く追従出来ず、今もそれは変わらない。

ただ、何度も攻撃に晒されることである程度の慣れを体が覚えていた。

彼女の攻撃は速いが、それは単調な速さだ。リズムが一定なのである。

これは完全に私を見縊っているからだろう。こちらが反応出来ないからこそ、攻撃に変化をつけることをしないのだ。

この不確定な攻撃のタイミングを計り、それを勘で補正して何とか見切るしかない。

正座の姿勢を取ったのも、その瞬間に自分の体をどのように動かせばいいのか、漫画で描かれていてイメージがしやすいからだった。

攻撃手段を限定し、自らも背水の陣での防御、ギリギリでの返し技——強烈な印象のあるシーンだ。あんな風に私も出来ればいいんだけど。

あの漫画と違うのは、眼では見切れないという点だ。

当然、分の悪い賭けだった。

この追い詰められた状況で、破れかぶれになっても仕方の無い勝機の薄さだった。

しかし、私にはたった一つ、誰よりも優れていることがある。

——分の悪い賭けは嫌いじゃない。

それは私の心には、多くの先人様のカツチョイイ雄姿が刻まれているということだ！

この逆境……逆に燃えるっ！

燃え上がれ、俺のコスモ!!

追い詰められた状況に反して、むしろ極限まで高まる自身の集
力。

「真正面から蹴り抜いて、人里まで吹き飛ばしてあげましょう！」
来た。ここまでは予想通り。

さすがに何も考えず漫画を真似するだけで正座したのではない。
ある程度駆け引きもあった。

射命丸が実力を発揮し、少しでも戦法を使えば、私を瞬殺出来るこ
とは実感済みだ。

それをしない理由は、現実として証明され続けている互いの実力差
など様々な揺ぎ無い事実から来る、余裕や遊び心によるものだろう。

彼女は格下を相手に遊んでいるに過ぎない。

こちらが何をやっても勝てないと考えているのだから、分かりやす
い誘いに対しても真正面から臨むと、私は読んでいた。

そして、それは的中した。

射命丸が動く。

正確には動く前動作。そこまでなら私の眼でも捉えられる。

相変わらずカメラを両手に持っている。これまでと同じように蹴
りで来るのだ。ここも予想通り。

速さはどうか？ 先ほどまでの攻撃より、蹴り足の速度が上がって
いても下がっていてもタイミングがズれる。確認のしようはない。

狙う箇所は何処か？ 頭だ。正座した私と立っている射命丸の高
低差からして、そこが一番蹴りやすい。そう誘導した。真正直にそこ
を狙うよう祈るしかない。

眼で見て反応しては間に合わない。

視覚はあくまで補助。体で覚えた感覚だけで、動くタイミングを計
る。

研ぎ澄ますべき感覚があるとすれば触覚の方だ。蹴りが当たった
瞬間を肌で感じ取って、少しは反応出来るかもしれない。

無茶な理屈。しかし、今の私はそれに対する疑念を挟まない。

頭の中で出来上がっている一連の流れをただ忠実に行うことしか

考えない。

視界に映る射命丸の姿が消えた。

来る。

今。

——ここだっ!!



蹴り足を振り抜いた瞬間、鈍い音と衝撃が響き渡った。異様な手応えだった。

右脚のつま先が相手の頬にメリ込む感触までハッキリと分かったが、次の瞬間足全体に震えるような衝撃が走った。

文は一瞬、何が起こったのか分からなかった。

我に返った時、自分が地面に伏していることによく気付いた。

まさか、攻撃をしくじったのか。

蹴りの勢いのまま、転んでしまったのかと思った。

違和感のある右脚に視線を移す。

膝の関節部分から真横にへし折られていた。

「——は？」

文は呆けたようにそれを眺めて、ゆっくりと自分の置かれている状況を理解した。

確かに蹴りは当たったのだろう。頬に赤い痕を残し、口から盛大に血を流す巫女の顔があった。

しかし、文の蹴りを受けて吹き飛ばはずの意識は鋭い眼光と共に瞳の中に残っている。

巫女は文の蹴り足を掴んで、彼女を組み伏せていた。

蹴りが直撃する瞬間、右手で足首を掴み取り、左手を膝に添えて、そのままへし折ったのだ。

「あ……」

破壊された関節から脳へと、ようやく痛みが伝わった。

「あ……が、あつ、ああああ……っ！」

押し寄せる激痛が、あつさりと文の理性と思考を飲み込んだ。

脂汗が噴き出し、言葉は形を成さず、ただ意味の分からない悲鳴を途切れ途切れに漏らすことしか出来なかった。

歯を食い縛ることも出来ず、まるでこの激痛を吐き出せば少しでも楽になると信じているかのように、開いた口を下に向けて文は喘いだ。

完全に予想だにしていなかった。

既に自分の中で勝負を終わらせていた文には、現状を正確に理解することすら出来ない。

反撃はもちろん、抵抗さえしない文に対して、巫女は間髪入れず追撃を仕掛けた。

あつという間にマウントポジションを取り、絶対的優位な体勢を確保して、拳を振り上げる。

状況は完全に逆転した。

巫女が拳を頭に向けて打ち出すだけで、勝負は決まる。

いや、彼女の攻撃力ならば命を奪うことすら出来るのだ。

「あ……へあ……っ？」

涙と涎を垂れ流した文も、僅かに残った理性と冷静な思考によってようやく現状を把握した。

把握しただけで理解は出来なかった。

どうしてこうなった？ という疑問で頭は埋め尽くされている。

戦いを終わらせる為に攻撃した次の瞬間に激痛に襲われ、そこから我に返ってみれば自身の生命の危機なのだ。

混乱と恐怖だけが胸の内に溢れ返っていた。

「……」

「え……いや……その……」

拳を振り上げ、トドメを刺す寸前のまま止まった巫女の意図が読めず、動揺は更に増していった。

……どうした？

そのまま振り下ろして殺すつもりじゃないのか？

あるいは、今自分を殺すと拙いと考えているのかもしれない。

博麗の巫女にも立場がある。天狗という種族との対立を考慮しているのかなんとか。糞、痛い。推測することすら億劫だ。分からない。しかし、チャンスだった。

汗が止まらず、心臓が早鐘を打つ。それに合わせて疼く膝が堪らなく痛かった。

全ての疑念を棚上げにして、文は今この状況を如何にして切り抜けるかに思考を集中させた。

打破ではない。

足を折られ、あと一手で死ぬという追い詰められた状況で、逆襲を考えるような不屈の心を文は持つていなかった。

小心な性根が、ただ生き残る為に最善の選択を迫る。

——どうする、何て言えばいい？

全ての動きを封じられた自分が、今可能なのは唯一話すことだけだ。

最後の一撃を躊躇する巫女の心境を、上手く有利な方向へ傾ける為の言葉が必要だった。

一言か二言。それで結果が決まると文は考えていた。

考えに考え抜いた結果——。

——な……何て言えば、上手くいくの？

この土壇場で、何も気の利いた台詞を思いつけなかった。

「お……」

完全に萎縮してしまった文は、引き攣った笑いを浮かべながら、それでも何とか声を絞り出した。

「御見事……です」

そんな間の抜けた贅辞だけが、ポツリとこぼれた。

終わった、と文は内心で全てを諦めた。

現実から逃避する勇気さえなく、恐る恐る巫女の顔をもう一度見上げる。

驚いたような、呆けたような表情がそこに浮かんでいた。

如何なる苦境であっても鋭さを失わなかった眼光は消え失せ、子供

のように目を丸くした巫女がじつと文を見つめている。

それに釣られて文自身も呆けてしまった。

奇妙な空気が、二人の間に流れた。

張り詰めた闘争の気配は、いつの間にか存在しない。

巫女がゆっくりと拳を解き、体を持ち上げた。

一転二転する状況に思考が追いつかず、自由を取り戻しながらも文は呆然と巫女を見上げることしか出来なかった。

完全に戦意を失った巫女は、文の言葉を吟味するようにしばしの間を置いた後、ゆっくりと口を開いた。

「ありがとう」

一度も見たことの無いような柔らかい微笑を浮かべる彼女に、文は全てを忘れて見惚れていた。

◇

呆然とした射命丸を置いて、私は妖怪の山を更に進んでいた。

負傷した彼女を置いていくのは心苦しいが、敵対関係なんだから今更な話か。

なんとというか、私の通った後つて死屍累々だな。一人も殺してないけど。

決して意図してやってるわけじゃないんだけどね。

行き当たりばったりな状況のせいですよ。

こうして窮地を脱し、冷静になつてみれば先ほどまでの状況が、今更現実感を持って脳裏に浮かび上がる。

果たしてあれを勝負と言っているいいものかは分からないが、とりあえず私は勝負に勝ったと言えるだろう。

あそこで倒れることなく、目的の為に行動を続けることが出来るのだ。

相手の油断など、様々な要因に助けられた結果とはいえ、決着には違いない。

もしも——はない。

餓狼伝でも言われてたしね。

しかし、あの刹那の勝負を制したことは、正直自分でも信じられない

イメージ通りではなく、それ以上の結果だった。

本来ならば蹴りをまともに食らうつもりだったが、あの攻撃が当たる一瞬、私は反応出来たのだ。

錯覚かもしれないが、つま先が頬に触れた感触を感じ取り、それに合わせて首を捻って威力を殺した。

そうでなければ、今こうして立ち上がり、歩くことすら出来ていなかっただろう。

顎を碎かれ、最悪反撃すら出来ずに気絶していたかもしれない。

今も頬は真っ赤に腫れ上がり、口の中は折れた歯で盛大に切つてズタズタだ。つか、さつきから血反吐が止まらない。

戦闘の緊張が抜けたせい、右腕と脇腹の痛みがより酷くなってきた。

正直、腕の出血のせいか意識も朦朧としている。

ダメージは深く、疲労も大きい。

かつてない実戦を連続で経験した結果か――。

そんな目的もまだ半ばにして限界に近い状態だが、不思議と気分は晴れやかだった。

射命丸文という強敵に勝った達成感や爽快感、ではない。

と、思う。

近い気はするが、やっぱりちよつと違うな。

私の胸には、あの時言われた言葉がいつまでも残っていた。

『御見事……です』

自分でも啞然とするくらい作戦が上手くいき、咄嗟に追撃を仕掛けながらも、我に返って停止した私に、彼女はそう言った。

全力で拳を振り下ろす冷徹さは無く、手加減したり、無傷のまま解放した結果反撃を受ける不安もあって、次にどう行動するべきか迷っていた。

そんな軽い混乱状態だった私の心に、その言葉は奇妙なほど浸透し

ていった。

あれが苦し紛れの台詞だというのは、さすがの私にも分かる。射命丸からすれば追い詰められた状況なのだ。

何とか今の状態から逃れる為に無理矢理口に出した、そんな意味の籠もらない言葉だったのだろう。

しかし、何故だろう？

あの時、私は確かに嬉しかった。

権に褒められた時と同じような暖かい感じを覚えた。

いや、あれよりももつと強く感じたかもしれない。

思わず顔がニヤけてしまう程に。

……なんでだろう？ 射命丸の方がキャラとしては有名で思い入れも強いから？

だからって、たつた一言で落ちるとか、やっぱり私チヨロすぎじゃね？

なんだろうーなあ……自分でも意外というか、よく分からん。

得体の知れない感情を持って余しながらも、思い出す度に顔がニヤけてしまうのを止められない。

体は疲労しているはずなのに、足取りは妙に軽く、私は先へと進んでいった。

さて、進むとはいっても忘れてはいけない。私の目的は攫われた子供を捜すことなのだ。明確な目的地は存在しない。

そういえば、勝負に勝ったら文に手助けしてもらおう約束だったんだよね。今更思い出した。

でも、勝負の結果とはいえ、自分で足をへし折った相手に『約束どおり協力してね。ほら、早く立ちなよ』とか流石に言えないし……。

残りの体力は厳しいが、このまま山を手当たり次第に探索するか、誰か協力者を捜すか。

これらの中から現実的な手段は、さて――？

「止まれ、博麗の巫女よ」

考えに没頭していたせいもあるが、やはり疲労が影響しているらしい。

私はそいつらの接近に気付くことが出来なかった。

「集落を守る哨戒天狗を墜とし、それなりの地位に在る射命丸文を下したお前の行為は、もはや無視できぬ大きな問題となった」

白狼天狗の柁や鴉天狗の射命丸とも違う、大仰な格好をした天狗五人が前に立ち塞がっている。

全員が只者ではないことは一目で分かった。

今の私の心境を正確に表現出来る比喻があつたのは、ちよつとした幸運だな。うん。

「ついて来い。我らが天狗の長、天魔様がお前に直接会われるそうだ」

——崖の上からメタルクウラの大群が現れた時の絶望感。

もう、どーにでもなあれっ！



——ほう。

博麗の巫女を前にした天魔は、内心で感嘆を洩らした。

歴代の巫女達は全て知り得ていたが、その中でも自分と実際に顔を合わせた者は少ない。

大抵は、天魔の方が下界の情報として一方的に知り得ており、妖怪の感覚ではごく短い時間で代替わりしてしまう。

よって、博麗の巫女個人に対する印象は酷く薄かった。

しかし、今こうして向かい合う歴代の中でも珍しい巫女は、天魔の認識を変えてしまう程の印象強さを持っていた。

まず、こうして天狗の長である自分と対等に向かい合うこと自体、驚きだった。

上下関係が力を持つ天狗社会の性質もあるだろうが、同じ天狗でさえ、その長と一つの部屋で向かい合う状況では萎縮してしまう。

その点、この巫女は並の天狗以上に肝が据わっていた。

加えて、彼女にとっては敵に囲まれたに等しいこの状況で、全く恐れ怯まない様子にも感心を抱く。

哨戒天狗の報告から始まり、射命丸文が接触したことで天魔の耳に

届く事態となり、拳句その射命丸を倒してしまったという事実が話を大きくした。

博麗の巫女が如何なる目的で妖怪の山を訪れたのかはまだ分からないが、起こした行動自体が既に問題となっているのだ。

使いに出した天狗達に従うまま、こうして集落まで大人しくついて来たことから戦力差は十分に理解しているだろう。

今、天魔と博麗の巫女は二人だけで対面しているが、それは天魔自身が戯れに興味を抱いたからに過ぎない。

部屋の外はもちろん、天魔の屋敷の周辺には既に天狗兵の精鋭達が配置されている。

どうあっても、巫女にとっては絶望的な状況のはずだった。

それを理解した上で、既にボロボロの状態にもかかわらず怯えた仕草一つ見せない彼女の姿に、天魔は感心させられたのだった。

「噂に違わぬ剛の者よ……」

小さな眩きだったが、それは天狗の長から人間に対する最大の称賛だった。

当代の巫女が、歴代の博麗でも頭一つ飛び抜けていることは聞き及んでいる。

それは複数の意味を持っていたが、天魔はそれらの情報を今実感として、改めて理解していた。

「しかし、此度の件。少々、己の領分を越えすぎたな」

天魔は声色を変え、巫女を睨み据えた。

明らかな威嚇であった。

しかも、それを行うのが天狗の中でも随一の実力者であれば、発揮される効果は倍増する。

物理的な力を持つているのかと錯覚するほどの圧力が、周囲一帯を吹き抜けた。

襖越しに待機していた天狗達の方が萎縮してしまうような威圧感だった。

巫女は僅かに表情を険しくさせた。

それだけだった。

「……おぬしも退けぬか」

なんとという意志の強さか。

天魔は表情と言葉に出さず、感嘆するばかりだった。

「この場でおぬしを処断することは容易い。天狗の領域を侵し、同胞を墜としたのだ。名分もある。」

しかし、我らには互いに立場がある。今日まで築いてきた互いの種族の関係を崩さぬよう、極端な決断は出来ぬのだ。それはおぬしも分かっているだろう」

それでも、退けないのだろう。

巫女の一貫して頑なな視線を受けていれば、理解出来ることだった。

博麗の巫女という重要な任を任せられた人間だ。物の道理が分からないはずはない。

彼女は、全てを踏まえた上で己の意志を通そうとしているのだろう。

若かった。

そして、それ故に好ましかった。

子供に対する親が抱くように、天魔は目の前の人間のひたむきさに愛おしさすら感じていた。

しかし、天魔には立場があつた。

安易な個人的な判断を、その自覚が許さなかった。

「ここは退け。人里へ戻れ。」

此度の問題、不問には出来ぬがこちらも幾らか譲歩しよう。それが今の関係を保つ、適当な落とし所だ」

天魔は口調厳しくも、意外なほど優しい言葉で、巫女を諭した。

他の天狗達は不満を持つだろうが、これが一番穏便な処置だと判断した。

理屈の分からぬ、感情で動く馬鹿とも思えない。

巫女もこれで引き下がるだろう。

天魔は、未だ頑なな表情を変えない巫女が乱れた心の内を処理するまで待つ為に、そっと瞑目した。

——ここで一つの大きな相違があるとすれば、それはお互いの持つ『前提』だった。

すぐ傍に、凄まじい脅威が突如出現したことを感じ取り、天魔は思わず眼を見開いた。

「何……っ!?!」

視線の先には、現れたのではなく、依然変わりなく佇み続ける博麗の巫女だけが在った。

姿形が変貌したわけでもなく、何か行動を起こしたわけでもない。ただ、彼女から感じられる印象だけが完全に塗り変わっていた。

若く、未熟な博麗の巫女。

人間の中では飛び抜けた猛者。

一目置くに値する存在。

それら全ての称賛に至る為の『前提』が、今や完全に崩れ去っていた。

——違う。こやつは……っ。

天魔の論すような言葉には、全て余裕があった。

自身が強者であり、目の前の人間は弱者である。

自身が与え、目の前の人間は受ける。

導き、導かれる。

その全ての前提となる認識が、ようやく間違いだと悟った。

——『敵』か!

気付いた時には遅かった。

巫女の肉体から瞬間的に力が噴き出し、異様なまでに赤く充血した眼がギラリと光る。

粛々と続く天魔の話の間。一切を意に介さず、己の内側で力を練り上げ、束ねていた渾身の一撃を巫女は解き放った。

◇

天狗の長である天魔様。

対面した時には、なるほどさすがの威圧感だと驚嘆した。

ゲームでは登場していない設定だけの存在だから印象薄かったけど、これは確かに射命丸文の上司なのだと思えざる得ない。

だって、なんつーかその姿形を固有名詞で例えるなら『男塾三号生 筆頭・大豪院邪鬼先輩』って感じだったからだ。もしくは世紀末覇者 拳王。

ホント、凄いよ威圧感——物理的にも。

東方キャラの原則に沿って大人な美女を僅かに期待していたのだが、実際は男。しかも座っているのを見上げるような巨体だった。

マジで対比的に、私では北斗の拳の一般キャラとラオウ様くらいの差。

この人が天狗の長って、マジで説得力ありすぎるわ。

射命丸とは別の意味で格上の相手だと悟ってしまった。

いや、戦うことを前提に分析すること自体間違っているのだろうが、状況的に仕方がなかった。

私をここに連れて来た天狗の皆さんは、全員無言ながら殺気を飛ばしてくるし、初めて訪れた天狗の集落では感動する余裕も失う程敵意の視線に晒されていた。

ここは私にとって完全に敵中だ。

もちろん、万が一この天狗相手に戦闘にでもなったら勝ち目どころか生き残る可能性すら皆無だと分かる。

だからといって、穏便な結末はどう考えても周囲が許さないだろう。

そして、私の本来の目的もこのままでは絶対に達成出来ない。

天狗の長が直接会うというので、そこでの話し合いに一抹の望みを賭けてはみたが——この有様である。

うん、詰んだわ。

さすがに確信する。

天狗側が譲歩する理由なんて欠片も無いけど、私を指先一つでこの世から消し飛ばす理由と実力は十分過ぎるほどある。

おまけに、いよいよ本格的に意識が朦朧とし始めていた。

視界はぼやけ、耳もよく聞こえない。傷の痛みだけがハッキリとし

ていて、むしろそれが全ての感覚を鈍らせていた。

こんな状態でまともに戦えるはずがない。

ましてや、この相手じゃあ尚更だ。勝負にすらならないだろう。

——じゃあ、諦めるのか？

否、である。

頼もしいのかアホらしいのか分からないが、こんな状況に至っても私の中に根付く何かを諦めを否定し続けていた。

あるいはこれは意地なのかもしれない。

仮にとはいえ、私はあの射命丸文に勝った。

そして、認められた。

その事実が、私に一つの自覚と自負を刻み込んでいた。

——こんな所で、あっさりと倒れてたまるか。

例えば設定上は上司だろうが、原作では出番の無いモブなんかになんか負けてられるかってんだ。

なんか自分でも無茶苦茶なこと考えてるなど何処かで自覚しながらも、その意地を支えに、私は最後の力を振り絞った。

向かい合った天魔が何か厳かに喋り、凄まじい威圧感をぶつけて来るが、意識を集中して耐え抜く。

感覚が鈍っていることが幸いした。

体の痛みが萎えそうな意識を叩き起こしてくれる。

どうせ、まともには戦えないんだ。

天狗の長というくらいだから、普通に戦ってもラスボス染みた能力や技を持っているに決まっている。

でも、残念でした。こちとら、もう真面目に戦り合うつもりはありません。

一発だけ。

開幕ぶつぱに、今残された己の全てを賭ける！

後はどうなろうと知るか。不発だろうが、かわされようが、あるいは効果が無かろうが、結果は変わらない。

だったら、今この瞬間に……ありつたけをつ！！

うおっしやああああ！ リミッター解除おお！ ——気持ちだけ。

そんな感じに気持ちだけは際限無く高めていたら、ドクンツと心臓が異様な鼓動を立てたような気がした。

『何……っ!?!』

気付かれたか。ええい、南無三!

限界を超えた(感じのする)私は、かつてない程の力を込めた『百式観音』を天魔に向けて放った。

渾身の一撃が当たったか否か。

それすらも確認できぬまま、私は前のめりに倒れて、気を失ったのだった。



「如何なされました!?!」

大天狗を先頭として、謁見の間へと雪崩れ込んだ者達が見たものは絶句するような光景だった。

明らかに戦闘のそれと分かる轟音と衝撃が屋敷全体を揺るがしたのだ。

当然、何かしら戦いの跡が刻まれていると予想していた。

右腕があらぬ方向に曲がった状態で、倒れ伏した博麗の巫女。それを見た時、誰もが『やはりか』と思った。

この人間は制裁を受けるだけの問題を起こしたのだ。

長は話し合いを望んでいたが、結局言葉では終わらなかつたのだらう、と納得した。

しかし、もう一つの光景には誰もが眼を疑った。

巫女と相對する位置に、同じように気を失った天魔の姿があつたのだ。

その巨体は壁に深くめり込み、胴体には拳の痕がくつきりと刻まれている。

この状況を正確に理解できぬ程、駆けつけた天狗の精銳達は愚かではなかつた。

到底信じられる事実ではない。

しかし、紛れも無く現実だった。
天狗の長が、人間に敗れたのだ。

「……こ、殺せ」

いち早く我に返った大天狗は、かろうじて言葉を搾り出した。

「そやつを……博麗の巫女を、早く殺せ！ 息の根を止めろっ！ 屍は千に刻んで、川に流してしまえ！ 決して残すな!!」

鬼気迫る表情だった。

まるで巫女の存在そのものを否定するように叫んでいた。

命令を受け、慌てて周囲の兵士達が動き出す。

倒れたままピクリとも動かない巫女を取り囲み、太刀を抜き放った。

「殺せえ!!」

大天狗が悲鳴のように叫び、それに部下が応えるより早く、カシヤツという聞き慣れない音が室内に響いた。

全員が、音の方向へと視線を集中させた。

「——スクープ」

視線の先。開いた窓の淵に腰掛ける者が在った。

カメラを片手に構え、背中には何故か人間の子供を背負っている。

子供は自分達を睨みつける天狗の迫力に萎縮し、顔をおぶられた背中に埋めた。

「意味知ってます？ この外の世界の言葉」

「姫海棠はたて！」

名前を呼ばれたことに満足し、はたては微笑した。

「大天狗様に名前を覚えていただいているとは、なんとも恐悦至極」

「……貴様、何の真似だ？」

「あら、このカラクリのこと知りませんか？ カメラと言って——」

「フィルムをこちらに寄越せ！」

はたての軽口を無視して、大天狗は強く命じた。

状況が不穏な方向へと傾きつつあることを感じ取った部下の天狗達が、標的をはたてに変えて刀を構える。

天狗としての常識を持つ者ならば、これが如何に危険な状況かを理

解出来ているはずだった。

天狗の長の屋敷で、直属の部下である大天狗の敵意を向けられ、実際にこうして兵士に囲まれているのだ。

次の瞬間、この場が処刑場へと変化してもおかしくない。

天狗社会に生きる者として、それを十分に理解しながら、はたては涼しい顔で窓から降り立った。

本来、天魔の屋敷への立ち入りは権威のある者以外許可が必要である。はたてはもちろんそれを知っていた。

「不敬が過ぎるぞ、姫海棠はたて！」

「な……何をやってんのよ、はたて!？」

大天狗以外にも、はたての蛮行を咎める声があった。

はたての降り立ったすぐ隣の窓から、文が顔を覗かせている。

その傍らには、足を負傷した彼女を支えるように権が連れ添っていた。

彼女自身も巫女にやられた傷が残っているが、その負担をおくびにも出していない。

「じゃ、射命丸文! 貴様まで……っ!」

睨みつける大天狗の顔に、隠しきれない焦りが浮かび上がった。

はたてと文。二人の名前を知っていた理由は至極明快だ。

天狗の中で、彼女達の存在が目につくからである。

それは文のような評判から来る理由もあるが——何よりも一匹の妖怪としての実力へと向けられる注目だった。

彼女達自身にどれほど自覚があるものか。

少なくとも、大天狗にとつて現状は単なる下つ端天狗の乱心などと楽観出来ないものとなっていた。

「はへ!? あ……いいいい、いや違います! 何か誤解されていますよ、大天狗様!？」

頭がおかしくなったとしか思えない友人の行動に気を取られていたところで、今度は上司から睨みつけられ、文はますます顔を青くした。

巫女に負けた後しばらくして、権と人間の子供を伴ったはたてが駆

けっけ、文を治療していた。

人間にやられた無様な姿で何を言われるものかと警戒しまくっていた文を尻目に、はたては集落へと向かい、そのまま迷いも無く天魔の屋敷へと飛んだ。

子供の方とはもかく、権の方は何か事情を聞いているのか黙ってはたてについて行く。

自然と、支えられる文もついて行く形となり、だんだんと嫌な予感がしてきたところで、先ほどのはたての狂った言動である。

視界には、殺気立つ大天狗に、倒れ伏した博麗の巫女と、同じく気を失った天狗の長——脳の処理容量を超えるような光景だった。

挙句、ワケの分からない内に事態に巻き込まれようとしている。

文の混乱はピークに達していた。

「博麗の巫女の目的は、この子供です」

纏まらない言い訳を口走る文とは対照的に、はたては奇妙なほど落ち着き払って話を始めた。

「里から妖怪によつて攫われた子供を助ける為に、山へと侵入したのです。最初に対応した犬走権が、本人から聞いています」

話を振られた権が、肯定するように黙って頷いた。

こちらも天狗の権威を前にして全く動揺していない。

そんな二人に挟まれた文の当たり前の反応が、逆に奇妙なことのように思ってしまう光景だった。

「つい先ほど、子供を救出したところです。問題を起こした妖怪は捕らえてあります」

「……だから、何じゃ？ そのまま巫女と共に里へ返せとでも申すつもりか」

はたての真意を知り、心を落ち着けた大天狗は一変して本来の威厳を取り戻した。

天魔に次ぐ存在として恥じぬ、強烈な威圧感をはたて達に襲い掛かる。

並の天狗ならば、へたり込んでしまっても不思議ではない。

それだけの積み重ねられた権威と地力があつた。

「ならぬ。ここに至る事情など知らぬわ、問題は今よ。巫女は殺す。その餓鬼も殺す。何も残さぬ」

大天狗の殺気に中てられて、背中の子供が一層縮こまった。

それでも気を失っていないのは、はたてが守るように気を放っていないからだった。

状況の拙さを理解している文でさえ萎縮してしまう中、当事者のはたては堂々とした不敵な態度で、笑みを崩さなかった。

下つ端天狗にすら命令出来ない胆の小さな姿は影もなく、文にはむしろ普段よりも活き活きとしているようにさえ見える。

友人の意外すぎる一面を垣間見て、文は驚くよりも先に恐怖していた。

「なんだ、こんなに危ない奴だったのか？」

「消せませんよ」

「何？」

「目撃者を皆殺しにしようが、記録を一つ残らず抹消しようが、事実が消せません。」

天狗の長たる天魔様が、人間に過ぎない博麗の巫女に打ち倒された事実。どうにも申し開きは出来ません」

「黙れっ！ 不敬を働いた罪を罰するだけのこと、この巫女は天魔様の厚意を足蹴にしたのじゃ！」

「事情など知らぬ、のでは？ 今日の前にある現実を、どう言い繕っても誤魔化せるものですか。」

天魔様に戦う意思は無かったので。不意を突かれたので。備えていなかったのです。相手の巫女が悪いので——だから、人間如きに倒されてしまいました。そう言い訳しましょうか？」

「き、貴様も……死ぬるかっ!？」

はたての信じられない程不遜な物言いに、大天狗の顔が怒りで赤く染まった。

権を除く、全ての天狗が一樣に眼を剥いてしまうような言動だった。

「このように、どれだけ取り繕おうとも事実を世間に知られれば天狗

の権威は地に落ちます。

もはや避けられない、妖怪の山を支配する『絶対の権威』への綻び。小さく治めるか、より大きく拗らせるか。選んでいただきたいですね」

これ見よがしにカメラを掲げ、はたては選択を迫った。

事実を知る巫女を生かせば、今回の出来事は外にも知られる。だが、博麗の巫女である以上幻想郷全体の乱れは望むまい。天狗を勢力の一端として正確に理解する八雲紫も、背後にいるのだ。

今回の件を知られるにしても、話は小さく治まるかもしれない。

しかし、より確実な方法として巫女を殺すのならば、自らこの事実を世間へばら撒くとはたては脅しているのだった。

天狗が自らの長の敗北を、自ら認め、自ら公表する——最悪の事態になることは明白だった。

「貴様も、同じ天狗であろうに……っ！」

大天狗は理解し難いものを見るように、はたてを睨み付けた。

「手塩にかけた子供は、血が繋がっていないなくても可愛いものですよ」意味深げな答えに、事情を知らない者達が訝しげな表情を浮かべる。

一方で、はたてが何を口走ろうとしているのか鋭く察した文は慌てた。

「ちよつと、待……っ」

「この巫女は、かつて私達が育てていました」

「何じゃと!？」

大天狗を中心に、周囲から驚愕の声が上がった。

元凶となった人間を、育てたのがよりにもよって天狗なのだ。

天狗の中での様々な常識を覆し、尚且つ禁忌に触れた真実に、かつてない動揺が駆け抜ける。

平然とした表情を浮かべるのは、はたてと椛。

もはや顔色が死人のそれになっているのは、文だった。

「最初に妖怪の山でこの子を見つけたのは文で、彼女を中心に私達は、博麗の巫女となるまでの数年間密かに育てていたので」

「ちよつ、ちよつ、ちよおおつとお!?　そこで私を持ち出す!?　あんな、何の恨みがあんの——」

「やはり、貴様もかあ!　射命丸文あつ!!」
「ひいつ!」

憎しみの視線を移され、もはや言い逃れの出来ない状況に陥ったことを悟った文は絶望に涙を浮かべた。

——終わった……天狗としての生活、全部終わった!

脳裏には、最悪の光景しか浮かばない。

集落からの追放。もしくは、このまま処刑である。

しかし、文の考えとは裏腹に、執行者である大天狗は内心で不安を抱えていた。

はたてと並び、射命丸文までが敵に回ることは、彼にとっても最悪の事態だったのだ。

「い……犬走、その二人を捕らえよ!」

文自身が意図せぬまま拮抗してしまつた状況を崩すべく、苦し紛れに大天狗は権へと命令を放つた。

この場で彼女だけが、脅威として認識されていない。

一介の哨戒天狗ならば、大天狗の権威には絶対に逆らえないはず。何より、白狼天狗は大天狗に敬意を払う者達ばかりだった。

「——お断りいたします」

静かに返された言葉に、またもや周囲が絶句した。

傍らのはたてと一度だけ視線を交わし、権はそれまで支えていた文の体をそつと離れた。

顔を近づけ、真つ直ぐに眼を見つめながら、文にだけ聞こえるように囁く。

「必ずお守りします」

「……は?　え、何?　誰を?」

文が、その言葉の真意を確かめる前に、権は大天狗達と相対するように一步踏み出していた。

視界の先にいる者は、全員権にとって格上の相手ばかり。従うべき上司しかいない。

それらに向けて、権は躊躇なく抜刀した。

「貴様まで……」

前代未聞の出来事に、もはや大天狗は言葉も無い。

「命令も聞けぬ駄犬風情が……っ。剣を構えて何とする？ 畜生の剣

如き、例え一太刀でも我が首に届くとも思うてか!？」

吹き飛ばされそうな殺気がぶつけられた。

しかし、所詮は殺気である。

腹の据わった者には何の影響も無い。

既に権は覚悟を決めていた。

今日、ここで死ぬ覚悟を。

「――ならば、腕一本か」

「何？」

「あるいは、指一本か」

「む……っ」

「命を賭けた一太刀にて、御身の一部を貰い受けます。お試しあれ」

正気とは思えぬ程頑なな決意を宿した眼光が、大天狗を射抜く。

「う……むう……っ」

一瞬、大天狗は気圧されていた。

手を噛まれるには、あまりに危険な犬であると悟ったのだった。

下つ端天狗一人が、大天狗を含む全員と拮抗するという恐るべき状

況の中で、もはや半ば思考を放棄していた文は肩を叩かれた。

我に返った文の視界に映ったのは、この状況の元凶たるはたてだっ

た。

目の前の友人だと思っていた何者かに対して、かつてない怒りと殺

意が漲る。

「あ、あんたはあ……っ」

「まあ、こうしてどう頑張っても逃げ場の無い状況へと嵌ってしまった

たわけなんだけどね」

はたては他人事のように告げた。

「文、あんたはどうする？」

「死ね！ とりあえず、あんた死ね！」

「このままだと確実に死ぬわね。あんたと一緒に」

「そうしたのは、あんた自身でしょうが！」

「そうね。でも、これは『あんたの為』よ」

「ど……っ！」

——どの口が言うかああーっ！！

腹の底から怒鳴り散らしたかったが、怒りが大きすぎて詰まってしまったのか、文は口をパクパクと動かすことしか出来なかった。

同じ追い詰められた状況にいるとは思えないほど、落ち着き払った様子ではたては微笑んだ。

そこには優しさが含まれているとすら感じた。

「あたしはここまで事実しか話してないわよ。」

あの子を見つけたのも、育てたのもあんた。あたしと権は、自分の意思でそれに協力した。後悔なんて、何一つしてない」

話が繋がってない、と遮ろうとして、文は言葉に詰まった。

はたては場違いなほど穏やかな笑顔を浮かべていた。

「あの子を含めた、この場の全員が助かる方法。文なら、もう思いついてるはずよね？」

「いや……それは、無理……っ」

「逃げ場は無いわよ」

「う……む……」

「何故、問答無用で殺されないのか。自分の立場と実力は弁えてるんでしよう？ あと必要なのは腹を括ることね」

「上司を、脅せと……！」

「大丈夫よ」

苦悩する文を、はたては優しく諭した。

「地獄に堕ちるのも一緒だから」

「あんた一人で堕ちろおおおーっ！！」

文の絶叫が、緊迫する空気を無理矢理ぶち壊した。

全員の視線が集中する中、涙を流しながら笑い狂うという奇怪な姿で、天を指差す。

注目の意味だった。

「ごーも、皆様！ 清く正しい射命丸です！」
やけくそ気味に声を張り上げる。

「この博麗の巫女は、私が育てたっ!!!」



最後の台詞を一語一句間違えずに言い終え、文は先代の過去にまつわる話を締め括った。

あれから果たしてどうなったのか？

現在が全てを物語っている。

話を聞き終え、もはや堪えきれぬとばかりに、勇儀が吹き出した。

どうやら鬼様は、この昔話をお気に召したらしい。

文は上手くいったことへの安堵と共に、何故か妙な気恥ずかしさを

感じて、誤魔化すように笑った。

その日。地霊殿からは、これまで聞いたことのないほど愉快そうな鬼の笑い声が、盛大に響いたという――。

幕間 「文花先代録」

【射命丸文の再会】

ほんの一月ほど前まで無人だった博麗神社に、今は一人の巫女の姿があった。

死去した先代巫女に成り代わって、この神社に住むことになった当代の巫女だ。

境内の掃除をしている。

箒で石畳の上を掃く様は酷く拙く見えた。

掃く傍から塵が散っているのだ。集め方も効率的ではない。

その慣れない様子を上空から見下ろしながら、文は苦笑した。

慣れないのは当たり前だ。あの子を本来育てる親は無く、掃除の仕方はもちろん家事を教わることもなく、代わりにしていたことが生きる為の努力と命懸けの鍛錬ばかりだったのだから。

今更、人並みの生活の中に放り込まれたからといって、早々慣れるものではない。

あの子が育ったのは妖怪の――。

「――つと、要らん考えを挟んだわ」

つまらない回想に没頭する前に、文は軽く頭を振って雑念を払った。

過去に思いを馳せる為に新しい博麗の巫女を――かつて妖怪の山から八雲紫によって連れ去られた子供の、現在の姿を見に来たわけではない。

文は両手で箱のような物を抱えていた。

河童に作らせた『写真機』であった。

外の世界で使われているカメラの存在は大分前から知っていたが、それと同じような機能を持つ物がついに完成したのは、ごく最近のことだ。

文はそれを真っ先に手に入れ、今日初めて使う為にやって来たのだった。

この写真機を手に入れる前に、新しい博麗の巫女就任の情報を得ら

れたのは僥倖だった。

写真を用いた最初の新聞の記事にするには相応しい。

「偉大なる布石の第一弾ってところね」

今のところ、天狗社会において博麗の巫女の扱いは軽い。

より大きな、人間社会の動きを察知する為の一端として注目されている程度であった。

巫女個人の詳細や動向など、ほとんどの者が気にも留めない。

必然的に、彼女らを扱う記事などこれまでなかった。

その先駆けとなる――。

文は、自らの行動が偉大なる一歩であると確信していた。

「あんたに費やした数年の労力……無駄にするつもりはないわよ。きつちり取り立てさせてもらいましょう」

――自分は、あの子供が成長していく姿を知っている。

かつて、何処にでもいるか弱い人間の子供に過ぎなかったあの子が、予想を超えた成長を遂げていく姿をこの目で見ているのだ。

たった一人で山に置き去りにされていた、何処の誰とも知らない餓鬼が、今や博麗の巫女という立場に収まっている。

天狗を含む多くの力ある妖怪達は、博麗の巫女を単なる人間として侮っているだろう。

だが、その過去を知るからこそ、文だけは未来に大きな期待を抱くことが出来るのだ。

あの子供は、ここでは終わらない。

まだまだ先へ進み続ける。

知っているのは自分だけだ。あの巫女が持つ無限の可能性を。

未だ未知数なその可能性が巡る道を、余すところ無く捉え、記し、そして示してみせる――。

「あんたは私の『特ダネ』よ」

ニヤリと悪どい笑みを浮かべ、文は静かに神社の境内に降り立った。

巫女は背中を向けていて気付かない。

文は振り返らせようと口を開き、そこでほんのわずかに躊躇った。

——なんて声を掛ける？

そんな、どうでもいいことを悩んだ。

何とでも声を掛ければいい。適当に呼べばいいのだ。

どうせ、初対面なのだから。

相手にとつては。

彼女は妖怪の山で援助していた者が自分だと知らないし、それを今告げたところで何の意味も無い。そんなつもりもない。

実際、言葉を交わすことは自分だって初めてになるのだ。

何を悩む必要があるというのか。

文は自分自身に呆れるように頭を振ると、気分を切り替えるように友好的な笑顔を取り繕った。

「——もし、その博麗の巫女様」

数年間姿を現すことなく見守り続け、ようやく直接意思を疎通させる為に発することの出来た言葉は、そんなありきたりな切り出しだった。

「誰だ？」

巫女が振り返る。

彼女の瞳が自分を捉えるのが分かった。

目と目が合う。

初めて、お互いがお互いを認識し合う。

文は自分の胸の中に得体の知れない衝動が僅かに湧き上がるのを感じ、それを誤魔化すように素早く写真機を構えた。

ファインダー越しに見る博麗の巫女の姿は、何ということはない、単なる被写体としか感じられなかった。

カシャツとシャッターを押す。

呆気にとられる巫女を内心で愉快に思いながら、文はゆっくりと写真機を下ろした。

「初めまして。私、妖怪の山の鴉天狗。清く正しい射命丸文と申します」

社交辞令としての挨拶が、あの子へ第二声となった。

その時には、文はもう目の前の人間を『あの子』ではなく『巫女』と

して捉えていた。

この認識の違いがどんな意味を持つのか。

それは文自身にすら自覚出来ないことだった。



【過去を思へど】

——と、こんな感じに私は射命丸と初めて顔を合わせたのだ。

思えば、何がなんだか分からん内に博麗の巫女になってから初めて役得だと感じた出来事だな。

妖怪の山で修行してた頃の私なんて、彼女にとっては有象無象の人間の一人でしかなかっただろうから、取材を切欠に出会うこともなかったはずだ。

「話を聞く限り『有象無象の取材対象』ぐらいにしか、ランクアップをしていないみたいですけどね」

さすがは身も蓋もない指摘に定評のあるさとりである。ご尤も。

何度も顔を合わせ、妖怪の山の一件では拳まで交えた、決して浅くは無い関係の私と射命丸だが、それらの出来事が友好的な方向へ全く向いていないという点が実に悲しい限りだった。

むしろ、あの一件以来互いの距離が逆に開いてしまったような気がする。

あれ以降、取材の頻度が少なくなっていたしね。

思い起こせば、妖怪の山で起こった様々な出来事が、私だけでなく周囲の物事の大きな転機だった。

世紀末覇者天魔様を見事殴り飛ばせたらしい私が、目を覚ました時にまず直面したのはゆかりんの怒りだった。

冷静に考えれば、そりや当然である。

事情や理由を省いて、私が実際に起こした行動といたら、簡潔にまとめると『天狗社会にカチコミかけた』に等しい。

幻想郷の勢力図の一角を担う種族に対して、人間の代表が行ったこの蛮行を、彼女が見咎めるのは当然のことだった。

結果、私は瀕死の状態から回復した直後に死ぬほど説教された。

一歩間違えれば、私の粛清はもちろん、幻想郷全体に余計な騒動を起こす危険があったらしい。

その辺の情勢に疎い私には、よく分からないながらも深く反省して頭を下げるしかなかった。

ただ、これらの起こってしまった出来事を単に揉み消すのではなく、折角なので利用してしまおうというのが最終的な紫の考えだった。

一通り怒った後、次に紫の浮かべた表情は様々な意図を含む妖しげな微笑だった。

まさに傾国の美女のような艶かしさと美しさ。

如何なる姦計がその頭脳で廻らされているのか、当然のように分からない私は『美しい……ハッ!』と単に見とれているだけのアホだった。

とにかく、紫はこの件を上手く利用してなんか幻想郷の勢力図を動かしたららしい。

具体的には、博麗の巫女の地位が向上したようだ。

なんか、それ以来妖怪の間で私が一目置かれるようになったし、妖怪退治に出掛ければ時折『お、お前があのお博麗の!』とか大物っぽい反応をしてくれるようになった。

「今の博麗の巫女の地位を築いたのは、貴女だったというわけですね」
うーん、さよりの評価は嬉しいが、私としては上手く状況をコントロールした紫のおかげだと思っただけ。

当時の私は、本当に物事を細かく考えていなかった。

紫が色々と説明してくれたが、毎度の如く分かった振りして頷くだけで、内心は混乱したまま。

怪我を治して人里に訪れた時に、いつの間にもやら助かっていたあの子供と母親の二人から礼を言われ、ようやく実感したのだ。

ああ、私は間違っていないかったんだな——と。

逆に言えば、その一点以外において私は蚊帳の外みたいなものだった。

ホント、これが若さかかっていうか、ただの脳筋だったよね。昔は。……今がどうか？　って言われたら、何も反論出来ないけど。

「なるほど。貴女の勘違いされる性質は、筋金入りだったということですか」

さとりが何やら納得したかのように頷いた。

勘違い——何のことだろう？

首を傾げる私の様子を見て、さとりは小さく笑っていた。

「気にしなくていいですよ。貴女はきつと、そのままの方が状況を自然と良い方向へ進められるのでしょ」

「……どういう意味だ？」

「お湯、かけますよ」

私の疑問を誤魔化すように、さとりはお湯で背中を洗い流してくれた。

うーん、さっぱり。

さとりの意味ありげな言葉に対する疑問も一緒に流れてしまう。

風呂は命の洗濯って本当だね。

地霊殿を訪れて早々、さとりに頼んだ甲斐があった。

いや、頼んだというか考えてたことを読心で察してもらった結果、こうして厚意に甘えているんだけどね。

ここは地霊殿の浴場。

私はここで、旧地獄産の温泉に入らせてもらっているのだ。

「さあ、湯船に戻りましょう。掴まってください」

「すまない」

さすがに風呂場に杖を持ち込むわけにもいかず、足が動かないので、必然的にさとりの補助を受けることになる私。

東方要介護ってやつだ。微妙に意味が違うけど。

さつきも、さとりに体を洗ってもらっていたところだったしね。

普段の生活では、ここまでやってくれる人なんていない。

一人暮らしをしているという理由もあるんだが、何よりこの歳になつてお風呂を手伝ってもらうとか恥ずかしくて誰にも頼めないって話だよね。迷惑だろうし。

「あら、その迷惑を、私になら掛けてもよかったということでしょうか？」

意地悪く尋ねるさとりん。

うっ……ごめん。

甘えている、という自覚はある。

ただ、なんというか……さとりんにはこういうことを頼めちゃう気安さを感じているんだよね。

他の人と比べて、遠慮を感じないというか。

いや、もちろん悪い意味じゃないのよ？

「ええ、分かっていますよ。光栄なことだと受け取っておきます」

上手く言葉に出来ない私の内心を見透かしているかのように——能力的に、まさにその通りなのだろうが——さとりは表情を和らげた。

こういうところが、遠慮をしなくていいと思えてしまう部分なんだろうな。

私の内心は常に見抜かれているわけだし、それを考慮した上でさり自身も遠慮なく意見や欲求をぶつけてくる。

こちらの望んでいることを正確に理解し、それを拒絶しようと思つたら、素直にそう対応する。

さとりがそうすると分かっているからこそ、私の方も変な遠慮を抱く必要が無いのだ。

それが気安さに繋がっているのだろう。

身近な友達みたいな関係だな。実にありがたい存在だ。

「別にお風呂を貸す程度、そこまでありがたいがたがる必要もないですよ」

さとりに支えられて、溺れることなく湯船に浸かる。

いやー、でも実際ありがたいって。

こんなこと娘の霊夢や、何かと世話を焼いてくれる慧音にだって頼めないことだもんね。

ちなみに今の状況。もちろん、さとりも一緒にお風呂に入っている。

まだ子供だった霊夢と一緒に風呂に入っていた頃が続いて、これは

東方キャラとの記念すべき特殊イベント第二弾だ！

はー、マジで極楽。

「そういうミーハーな考えは、この世界で何十年も生きているのに消えないんですね」

「……すまない。不快な考えか？」

「いいえ、興味深いです。貴女の昔話を聞いてから、より一層ね」

さとりは意味深げに笑った。

風呂に入れてもらう傍ら、さとりに話を振られたので、何気なく始めた昔語りだったが、それが何か彼女の琴線に触れたのだろうか。

ずっと熱心に話を聞いていた。

「貴女にとつては何でもない話かもしれませんが、視点を変えれば色々気付くこともあるんですよ」

ええ、そうかな？

確かに、何かとトラブルの絶えない現役時代だったが『振り向かないことさ！』と、今なら笑って済ませられるもんだけどね。

あー、でも昔を思い出していたら、改めて当時の気持ちや決意も蘇ってきた。

特に、妖怪の山で助けてもらったあの恩人——私は未だにあのひと再会することさえ出来ていないのだ。

あれ以来、山に向かう機会は何度かあったが、結局それらしい人や妖怪と会うことはなかったなあ。たまに会う天狗からはあからさまに避けられてるし。

「……例えば、そういう点ですね」

ん、何か言った？

「貴女の主観は意外と死角が多いという話です」

なんのこっちゃ？

わざとぼかすように答えるさとりに対して、私は首を傾げることしか出来なかった。



【古明地さとり の 考察】

先代巫女は、この幻想郷における過去や未来の出来事を『物語』として知っている。

それはこの世界で、ただ一人、彼女にのみ許された特有の視点によるものだ。

モニター越しの——あるいは第四の壁と呼ばれるものを通して描かれた『物語』を見ることが出来る視点だ。

彼女は異変の当事者達などの主観では分からない、多くの真実を捉えている。

——しかし。

ならば、当然のこととして彼女自身の主観では分からない死角もまた存在するだろう。

彼女もまた、この世界に生きる一人の人間にしか過ぎない故に。

その死角に隠された真実を捉えることが出来る視点を持つ者——それは古明地さとりであった。

——さて、相変わらず彼女の話は退屈しませんね。

先代と共に湯船に浸かり、リラックスした状態でさとりは他愛もなく思考に没頭した。

さとりには、このノンビリとくつろげる時間が随分と贅沢に思える。

元々、風呂でゆっくりするという習慣がない生活だ。

生来の能力というのは厄介なもので、この読心の力があるからこそ他人との接触を避けるが、かといって心の声が全く聞こえないという状況も、それはそれで落ち着かない。

この読心の能力を本当に不要だと思っているのなら、自分自身の手で封じてしまえばいいのだ。

自分はそれをしないのではなく、出来ないのだと、さとりは自覚していた。

だからこそ、一人で湯船に浸かる入浴の時間をさとりはあまり長く使わなかった。

悪いとは言わないが、憩いの時間として特に好むわけでもない。ただ義務的に体を洗淨する時間としか捉えていなかった。それが今は違う。

文字通り気心の知れた先代が傍らで、気の抜けた思考を取りとめもなく洩らす心の声を聞きながら、さとりはこの時間を楽しんでいた。

——元々、何も考えずにいるよりも、何か考えている方が好きですからね。

地霊殿に籠もる生活スタイル故か、あるいは能力の影響なのか、自分はそのような性分なのだった。

仕事ではなく、ただ気まぐれにさとりは思考を廻らせ、遊んだ。

——考えてみれば、先代は自身でも自覚出来ていない謎も多いんですよね。

自然と頭に浮かぶのは、隣にいる奇妙な人間のことである。

彼女の過去について、今回の話を聞くことで幾つか判明した。

主に博麗の巫女になるまでの子供時代と、巫女になって最初の大事件を聞くことが出来たが、一括りの感想としては『波乱万丈』としか表現しようがない。

地上の情勢には疎いが、話を聞く限り彼女が幻想郷の歴史を一つ動かしたようなものではないか。

初めて地底を訪れた時、伝説とされる鬼退治をやつてのけたように。

この人間が生きた数十年の軌跡の中で、一体どれ程の偉業を無自覚に達成したのか、興味はあるが呆れる気持ちも半々あった。

あるいは、この人間はそういう星の下に生まれついたのかもしれない。

しかし、そんな大事の陰に隠れそうになる様々な謎が、さとりには妙に気になっていた。

——結局、彼女の出生については何も分かりませんでしたね。

ある意味、先代巫女に関する最大の謎が、全く何も分からないまま残った。

前世の自分自身に関する記憶が無いことは聞いている。

それ自体は珍しいものではない。輪廻転生において、前世の記憶を完全に残す者などいないのだ。

しかし、彼女の転生は明らかに異質だった。

少なくとも、幻想郷の外にある世界は、彼女の前世にある世界と同じではないはずだ。

では、何処か？

異世界？

ならば、この幻想郷が創作物として表現されている世界とは一体――？

明確な答えは無い。根拠のない推測や推察、あるいは妄想とか言えないようなことしか思い浮かばない。

さとりは意味のない思考を続けた。

――前世に関しては知りようがない。しかし、この世界の人間として生まれたことならば、少なくとも『現実が起こった出来事』の筈。確実に言えることは、先代巫女がこの世界で生まれた血肉を持つ人間であるということだ。

で、あるのならば。彼女は当然のように赤子であった時期があり、それ以前には何処ぞの女の腹に宿っていたはずである。

つまり、父と母が存在する。

それらが未だ生きているのか、あるいは死んでいるのかまでは分からない――ひよつとしたら、幻想郷ではなく外の世界にいるのかもしれない。

また細かい謎が出てきた。

さとりは、考えれば考えるほど浮かび上がってくる数々の疑問を棚上げて、思考を先へ進めた。

今は、より大きな謎について考えたい。

――物心つく時期というものがありますから、ある程度は仕方ありませんが……それでも不自然ですね。

話を聞く限り、先代の最も古い記憶は妖怪の山で我に返った時からだ。

そこに至るまでの過程を全く覚えていないらしい。

彼女の記憶を、思い浮かべるイメージと共に辿っていたさとりは、少なくともそれに偽りが無いことを理解していた。

だからこそ、納得がいかなかった。

何故、記憶の有る無しについて、ここまで明確な境目があるのだろうか？

十に満たない歳とはいえ、ある程度周囲の分別がくだらう子供の時分に、両親の存在や育った周囲の環境をおぼろげにすら覚えていないのは、本当に偶然なのか？

あるいは——故意なのか？

推察にも満たない妄想の域で、さとりはその可能性にも辿り着いていた。

誰かが、何かの目的で、何らかの手段を用いて、この先代巫女という特殊な人間を生み出したのか——。

——……本当に妄想の域ですね。

根拠が無い上に、何一つ具体的ですらない自分の考えに、さとりは我が事ながら失笑した。

今更ながら、この思考が単なる遊びなのだと自覚する。

先代巫女には多くの謎がある。

それらは謎のまま、今は解き明かすことは出来ないが、一つだけハッキリと分かることがあった。

ある意味、最大にして最後の疑問に対する答えが、とっくに出ているのだ。

つまり、この先代巫女にまつわる多くの謎を全て解き明かした結果どうなるか、だ。

「……別にどうもしませんね」

「ん？」

「ああ、いえ。何でもありません。独り言です」

実際に言葉にして呟いたことで、さとりは改めて納得した。

結局、今が全てなのだ。

お湯の熱が頭に回り始め、思考に没頭することが少し億劫になってきたこともあって、さとりはあっさりとそこまでの考えを放棄した。

「そろそろあがりませんか？」

「む。そうだな」

「足の感覚はどうでしょう？」

「上半身は熱いのに、腰から下が何も感じないから、何か表現しにくいな」

「お湯の中の浮遊感すら感じないせいですね」

大して期待はしていなかったが、温泉の効能は先代の傷に何の影響も与えなかったらしい。

先代は純粹に風呂に入るつもりだったようだが、僅かでも回復の見込みがあることを考えていたさとりは落胆した。

とはいえ、ある程度の樂觀もある。

先代の心を読む限り、彼女は自分の足の治療をまだ完全に諦めてはいないようだし、その為の可能性も具体的に思い浮かべている。

さとりは、彼女の考えている可能性に後を任せることにした。

先に湯船からあがり、さとりは先代の体を支えた。

「……ところで、貴女の本名なんですけど」

さとりからすれば風呂に浸かっていた時の思考の続きだったが、先代にとっては何の脈絡もない切り出しで尋ねた。

「前世の名前は覚えていないんですよね」

「ん？ ああ、そうだな」

「では、勇儀さんにも名乗った『今の本名』の方は、誰につけられたんですか？」

先代は淀みなく答えた。

「紫だ」

母でも、父でもない。

ここに至っても、彼女の出生に繋がる僅かなヒントすら存在しない。

「そうですか」

自分で尋ねておきながら、さとりはそれ以上の追求をすることなく、ただ頷くだけだった。



【ある鴉天狗の酩酊】

チルノとお空のスペルカード戦は、結局経験を積んだチルノが有利のまま勝利して終了した。

その後、二人の間でちよつとした言い争いはあったが、傍から見ればじゃれ合いにしか見えない。

険悪な諍いではなく、純粹な勝負だったのだ。

勇儀と文が年長者として二人をなだめ、自然と室内での酒盛りへと移っていった。

「勝ったからっていい気になるなよ、チルノ〜！」

「へへん、修行して出直して来い！」

飽きもせず、お空とチルノは言い合いを続けている。

飽きるどころか、互いに楽しんでるのだろう。二人の表情は笑顔だ。

加えて頬が赤く、心なし呂律が回っておらず、酒に酔ったような症状を見せているのは、傍らで飲む勇儀と文の酒気にあてられたせいなのかもしれない。

まるで自分の家のように、勝手に勇儀が用意したつまみを食べていた二人の動きも、徐々に鈍り始めていた。

「お酒、飲ませてないですよね？」

文は勇儀に尋ねた。

「一滴もね。まあ、妖精や力の弱い妖怪には匂いだけでもキツイ酒だからなあ」

「その内勝手に潰れちやいそうですわね」

「いいさ、寝かせとけ。慣れない決闘で疲れてるだろう」

空になった碗に、更に酒を注ぎながら勇儀は笑った。

水晶瓶に入った琥珀色の酒は、飲み慣れた日本の物ではなく、異国の酒だ。

もちろんそれ以外にも舌に馴染んだ日本酒など、数種類の酒がテーブルの上には並べられていた。

いずれも共通するのは鬼の勇儀が秘蔵としている、とっておきの酒だということだった。

普通の人間が飲めば、天にも昇る心地良さと共に意識は闇へ真逆さま。一口で酔い潰れてしまうだろう。

高級などという言葉だけでは表現しきれない代物だ。

実際、文は勇儀と同じ酒の席にいることに半分緊張しながらも、残り半分の意識は目の前に並べられた幻の名酒の数々に惹きつけられていた。

先代巫女の昔話を切欠に、地上のことなど色々話したが、その合間に少しでもこれらの酒を味わおうと、勇儀の様子を伺いながら貪欲に瓶へ手を伸ばしていた。

ともかく、酒は旨かった。

酔いも回ってきたのか、勇儀に対する緊張も幾分和らいでいる。

それでも、酔った勢いで何かとんでもない失態や失言をしてしまわないか一抹の不安が付き纏い、酔いを自制していた。

「オチが痛快すぎて笑って済ませてしまったが——」

瓶の一本が空になると、勇儀は魔法のように次の酒を取り出し、惜しげもなく封を切った。

「妖怪の山での騒動、結局上手い具合に落ち着いたのかい？ あの件に関わったっていう、仲間の天狗二人や人間の子供はどうなったんだ？」

「ああ、先代巫女の件ですか。ええ……その、大丈夫です。表立ったお咎めはありませんでした」

空の碗に酒を注がれ、それを当たり前のように受けながら、一瞬遅れて文は我に返った。

……何、自然と鬼に酌をさせているんだ？

内心青褪めながら勇儀の様子を伺ったが、当人はそれこそ何も気にしていない様子で、文の返答に耳を傾けていた。

「人間の子供は、巫女と一緒に八雲紫が迎えに来て、無事人里に届けました。今も息災です。」

巫女の起こした騒動に関しては、事情を全て把握した八雲紫が後日

集落を訪れ、それで……その、話し合いを」

さすがに、天狗の上層部と八雲紫の間で交わされた話の内容には言葉が濁した。

文自身もその内容を直接聞き及んではない。

しかし、上司から受けたその後の指示や説明、独自に入手した情報などから、ある程度の概要は掴んでいる。

もちろん、それらに自ら関わって、藪をつつくような真似はしていない。

自らの保身の為に、守るべき境界線を見極めようとした結果だった。

結局、妖怪の山で起きた騒動自体は外部に洩れることなく終わった。

人間が天狗の長を負かしたという事実は、ごく一部の関係者以外、同じ天狗の間でさえ知られていない。

しかし、あの日確実に何かが大きく変わった。

あの件以来、天狗達は博麗の巫女に対する認識を改めた。

そして、年月を経て、巫女の活躍が増していく毎に彼女への評価は上がり続けている。

今や、あの巫女一人だけではなく、その周囲の人間、妖怪——ひいては幻想郷全体の常識さえも変化していた。

昔に比べ、人間と妖怪の関係は若干変わっている。

それが良いことなのか悪いことなのかは、それぞれの種族や見方によつて違うだろう。

ただ、少なくとも平穏ではある。

当時、天狗社会から抹殺されることさえ覚悟した文には、そう素直に思えるのだった。

「そうか……。まあ、結果が良ければ全てよし、さ。詳しい話は、私が聞くことじゃないだろうね」

穏やかに笑いながら、文が言いよんだ部分に勇儀はあえて触れなかった。

その気遣いに内心安堵し、鬼って無神経な種族だと思ってたけど違

うんだな、と文はふてぶてしく考えていた。

しかし、目の前の鬼にとつて、話に聞いたただけの天狗や人間の子供が無事だった結果が『良いこと』だと思われているのが不思議だった。鬼とは、そこまで情の深い妖怪だったのだろうか。

「しかし、天狗といえは身内への意識が強い種族だ」

大昔とはいえ、妖怪の山において天狗の上にいる勇儀は、その種族の特性を正確に理解していた。

「お前さんも、その件で随分顔が知られただろう？」

「それは、もう。しばらくは上司の視線がキツかったですね」

ひよつとして自分は心配されているのか？ と、背筋を寒くしながら文は表情だけ苦笑してみせた。

恐れ多い、などという気持ちではない。

ただ単に居心地が悪いだけだった。

「ただ、天魔様から厳命があつたらしく、上からの処罰や私刑は全く受けませんでした。他の二人も同様です」

「ふふ、そうか。それは良かった。犬走権という天狗は、立場上厳しいはずだからな」

「はあ……まあ、そうですね」

意味深げな勇儀の視線を受けて、文は戸惑いながら曖昧な返事を返した。

何が言いたいのだろうか？

確かに権は下っ端の立場ゆえ、当時は一番命が危うかった。

眼の届かない所で、私的な制裁を受けていないかと、はたてが随分心配していたのを思い出す。

ひよつとして、自分に『権が心配だった』と言わせたいのだろうか？

「考えすぎるな。お前さんは、そのままでもいいさ。それも面白い」

思考を読まれたかのような勇儀の指摘を受けて、文は一瞬凍りついた。

誤魔化すように笑い、無意識に酒に手を伸ばす。

喉が渴いた。純粹な美酒への欲求だけでなく、酔いたいという気持

ちが強くなっていた。

「早太郎もな、天狗の長なんて堅苦しい立場になるまでは、手前勝手に風や雲のように自由に生きていた、気持ちの良い奴なんだ。」

昔は喧嘩っ早い奴でな、色んな妖怪相手に勝ったり負けたり。多分、先代に負けた時だつて、大して気にしていなかったんじゃないかね。むしろ、久しぶりに清々しい気分だっただろうさ」

「あの……ひよつとして『ハヤタロウ』というのは、天魔様のことですか？」

「ああ、そうだ。なんだ、あいつ部下に本名教えてないのか。本当に堅苦しくなっちゃったねえ。」

天狗は鬼を必要以上に恐れ敬うようだが、一匹の妖怪だった頃のあいつは、気に入らなけりや鬼とだつて喧嘩するくらい向こう見ずだつたぞ。まあ、それを仲間に勇猛さと見られた結果が、現在の立場つてことかな」

難儀な奴だなあ、と大笑いする勇儀を尻目に、文はますます酔いたくなっていた。

酒の味が分からなくなるような話だ。

無駄に重かった。一介の鴉天狗が聞いていいような内容ではない。

「だが、まあ……そんな建前や装飾も他者と関わる為の機微か」

勇儀はらしくもなく、そんな繊細なことを口にしていた。

嘘を嫌い、潔白や単純明快さを美德とする鬼には珍しい言葉だつた。

「鬼というのは、他の妖怪よりも少しばかり生き方が頑ななだけさ。私は、たまたま変わる切欠があっただけだ」

文のささやかな疑問を、またもや正確に見抜いて勇儀は答えた。

ひよつとして、目の前の鬼は心を読む力でもあるのか。

酔いが冷静な判断力を奪う。

「互いに心を許しあつて酒を飲み交わすと、なんとなく相手の気持ち分かるのさ。」

自分が旨いと思つた酒を、相手も旨いと思う。そこから次の気持ちに分かつてくる。理屈じゃない、心だ。納得がいかないなら、長年恐

れてきた鬼の持つ不思議な力、とでも思ってくれりやあいがね？」
表情を強張らせる文を見て、勇儀は意地悪く笑った。

文はいやいやなんともかんとも、もごもごと答えるしかなかった。
逃げるように酒を注いだ。もう、それが勇儀の酒だと遠慮すること
さえ忘れていた。

「――嘘は嫌いだ。心を偽ることは、何よりも気に入らない。昔は、そ
れだけだった」

勇儀は独白したが、それは文のことを暗に責めているような口調で
はなかった。

ただ、懐かしむような響きだけが声に含まれていた。

「だが、今は……少し分かる。世の中は変わっていくものだ。妖怪も、
人も」

「……それは、当たり前のことです」

文は無意識に応えていた。

酔っているせいか、曖昧になり始めた意識はそれを失言だと捉えな
かった。

勇儀もその言葉を自然に受け止め、微笑んでいた。

「そうだな。当たり前のことだ。その変化についていけなかったこと
が、鬼の限界だったんだろう」

「今は……今の貴女は、違いますか？」

「どうだろうなあ。多分、根っこは何も変わっちゃいないだろう。

ただ、昔と何も変わっていないと断言するには、あの喧嘩は激し
すぎて、楽しすぎた」

「先代巫女との決闘ですね」

「うん。あれはなあ……本当に良い喧嘩だったんだ。人間とな、初め
で全力で殴り合ったんだ。気持ちぶつけ合ったんだ」

長い年月を生きたはずの鬼は、まるで子供のように、憧憬の眼差し
で語っていた。

「変わった人間を受け入れられず、地底に潜ったはずの私の前に、また
人間は来てくれたんだ」

「……彼女は、普通の人間とは違いますよ」

まさか、先代巫女との出会いを『運命』だとか『導き』だとか、そんな夢を見るような感覚で捉えているのか、と。文は不安を感じた。その疑念を払拭するように勇儀は苦笑した。

「ああ、いや。それは分かっている。」

あの頃よりも、人間は更に変わった。地上は、もう鬼が気ままに生きていけるような場所じゃないんだろう」

勇儀は断言したが、そこに地底で長年根付いていた諦念の色は、もうなかった。

「ただな、その地上で育った人間が、様々な事情や巡り会わせで私の前に現れ、闘い、勝った。」

その事実を思い返すたびに、どうにも面白くて可笑しな気分になるんだ。これまで頑なに悩んでいたことが、急に馬鹿馬鹿しいものに見えるえちまってるね」

鬼の意識改革。その過程や切欠は、実のところ結構なスクープなのではないだろうか、と文は思った。

しかし、思っただけで、それをネタとして書き記すことがすぐに億劫になっていた。

酔いのせいもあるが、勇儀の話が理屈を抜きにした感情や気分によるものでしかないと理解したからだだった。

鬼つてのはこれだから……と、文は内心で呆れていた。

ついさっきまで、その内心が勇儀に見抜かれていたことなど危機感ごと忘れている。

話の間を置いて勇儀が意味深げに文の瞳を覗き込み、苦笑した理由さえ分かっている。いや、酔いが回っているのだった。

「世の中酸いも甘いもあるように、心に嘘と真があることも、また世の理なんだろう」

「そうして世の中回っていくものですよ」

「確かに鬼には生き辛い世の中だ。だが、まあ……それも悪くない。そう思えるようになった。先代のような人間や、お前のような妖怪がいるのなら」

不意に話題に挙げられ、文は思わず呆けたように目を丸くした。

「……私ですか？」

「そう、お前。面白い」

「えっと……何故です？」

「嘘つきだから」

「……………ええと、私、何か勇儀さんに失言を？」

「いや、そういう意味での嘘じゃない。無礼だとか不快だとか思ってたわけじゃない」

心地よい酩酊が一瞬で吐き気へと変わって今にも口から漏らしそうな文に対して、勇儀は苦笑しながら慌てて告げた。

「心を偽る、という意味さ。無意識な嘘だ。安心しろ、さっきも言ったように、そういう機微も悪くないと私は思ってる」

「……すみません、意味が分かりません」

「うん、まあ無自覚なんだろうな。お前さんの話でもあったが、友達ははたてって奴が一番よく分かってるじゃないかね」

「はあ……」

「私もそいつの意見に賛成だ。お前さんは、きつと性根が捻れすぎてるんだ。自分で自分の本心が分からないくらい」

そう、あまりにも良い笑顔で言われたので、文は表情に隠す必要も無く、内心に不快感などは湧かなかつた

ただ、不可解さだけが残った。

昔から事あるごとに受けてきたはたての言動に対する疑念が、今更になって蘇ってくる。

友人と同じことを勇儀は口にしてしているのだ。

「勇儀さんには、はたてが何を考えていたか分かるんですか？」

「多分、同じ考えだと思うよ」

面白そうにニヤニヤ笑う勇儀を見て、文は僅かに疎外感と反発を覚えた。

それが表情に出ていることを教えず、勇儀は『それじゃあ、聞くが』と続けた。

「お前さん、先代のことを今はどう思ってるんだ？」

唐突な質問に、文は一瞬思考が止まった。

「友人ではない、と最初にお前さんは言ったな。うん、今ならそれは本当だと私は思う。でも、他人でもない。これも本当だ。」

じゃあ、実際に先代に対してお前さん自身がどう思い、どう捉えているのか分かるかい？ 自分自身の心のことだ。好きか嫌いか、憎いか愛しいか……」

答えを促されながら、文は上手く回らない頭で考えた。

どう返答することが、目の前の鬼の機嫌を損ねないか？ ——最初に同じような質問をされた時は、そこを重点に考えていたはずだった。

しかし、何故か今はそうして悩むことが酷く面倒に思えていた。

きつと酔いのせいだ。

考えなしに何かを口走ろうとしてしまう自分を、理性というもう一人の自分が必死に抑えようとしている。

そうして考え悩むこと自体まで億劫になり始めていた。

その間に、文は無意識に碗の中の酒を飲み干していた。

「多分、お前さんが私に語った昔話には色々と省いた部分もあるんだろう。それも含めて、一度自分の気持ちを見つめ直しちゃどうだ？」

まだ子供だった先代を見た時の第一印象。成長していく姿。再会した時に感じたこと。喧嘩を仕掛けようと思った動機。足をへし折られた時の心境。全てが終わった後に残った気持ち——」

やめろ、混乱する。

鬼相手に悪態を吐きそうになるのを、文はかろうじて堪えた。

もし、目の前の相手がはたてだったなら、軽口で話をかき混ぜて有耶無耶のままに終わらせただろう。

しかし、今回は相手が悪い。

文は意味も無く窮地に追い詰められたような心境になりながら、空の碗に視線を落として考え込んでいた。あるいは、何も考えまいと努力していた。

勇儀も黙り、いつの間にか誰も喋る者がいなくなっていた。

騒がしかったチルノとお空はテーブルに突っ伏して眠りこけてい

る。

視界の端に映る二人に、文は気付いてすらいなかった。ただ、沈黙の中で答えを待つ勇儀の存在感だけが異様に重く押し掛かっていた。

「……………私は」

無意識に口が開く。

そこから先に続く言葉がどんなものか、文自身にさえ把握出来ていない。

しかし、それが発せられるより先に、扉の開く音が響いた。

「あら、二人とも眠ってしまいましたか」

「おう、さとりか。すまないな、飲ませてはいないんだが」

寝巻きらしき服に着替えた、さとりと先代巫女だった。

文は一瞬助かったと思い、しかしすぐに考えを改めた。

「分かっています。絡んでいたのは、可哀想な天狗さんの方のようですよすね」

「ははっ、やっぱり少し意地が悪かったかね」

「混乱しているようですよ」

さとりと勇儀のやりとりは一見意味不明だったが、すぐに文は察した。

さとりには、心を読む能力があるのだ。

もちろん文も既に知っている事実だったが、それが急に拙いことのように思えてしまった。

咄嗟に、話題に挙がっていた先代巫女の方へと視線を向ける。

先代は文を見ていた。

ただ単に、酔った文に気が向いただけかもしれないが、文自身にはこうして先代に見られていることが酷く重大な事態に感じられた。

ワケも分からず羞恥と焦燥が湧き上がり、無言で視線を逸らす。

地霊殿を訪れて以来、古明地さとりと共に一体何処で何をしていたのだろう。

酒を飲む前にはあつたはずの、記者として聞き出すべき内容や個人的な好奇心は、いつの間にか消えていた。

テーブルに並べられた酒の中から、これまでに飲み比べて一番キツイと思つた物を手に取つた。

何も喋りたくないし、何も考えたくない。

自分の碗に酒をなみなみと注ぎ、気付いた勇儀が止めようとする仕事を無視して、文はそれを一気に煽つた。

本来ならば、飲むのを惜しむほどの美酒だったが――。

とにかく、今は酔えることが肝心だとその時の文は思っていた。

◇

【人と妖の消えぬ縁】

地霊殿での一泊。

とはいっても、太陽の昇らない地底では、地上に住む私の感覚ではイマイチ一晚過ぎたのだという実感が湧かない。

とにかく、夜は明けたらしい。

昨晩は、風呂上りに何故か地霊殿に馴染んでいる勇儀も加えて、さんと三人で夕食を囲んだ。お酒もちよつと飲んだ。

勇儀に勧められて、私も乗り気だったからつい飲んでしまったが、実のところ私は普段お酒を飲まなかつたりする。

若い頃に飲んで、あまりお酒に強くないと自覚したことも理由だが、今では何よりも波紋の呼吸法が乱れるから避けているのだ。

それでも勇儀と盃酌み交わすなんて超記念イベントを避けるなんて出来ないから、つい飲んでしまったが。

でも、冷静に考えると東方の世界でお酒飲めないって結構致命的じゃないかしら？

異変解決後の宴会って、東方ではもはや様式美にすらなっているからね。

それに参加出来ない私は、周囲とのコミュニケーションで一步遅れている気がする。

うーん、勇儀とはもつと仲良くなりたいたいから、やっぱりある程度酒が飲めるようになった方がいいかなあ。

ちなみに、霊夢は原作通り、私よりも遙かにお酒に強い。

でも、それは人伝に聞いたのであって、実際に私の前では何故かお酒を一度も飲んだことがないんだよね。

別に私は飲酒を叱りやしないんだけど……。

むしろ、いずれ霊夢が成人したと認めた日には一緒にお酒を飲みたいと思っっているくらいだ。

その頃には波紋とか気にしなくていいから、きつと気兼ねなく酔い潰れるまで飲めるだろう。

酔い潰れるといえ、折角一緒にやって来たチルノがお空と共に眠ってしまったのは予想外だった。

傍らで既に飲んでいた勇儀と射命丸の酒気に中てられたらしい。

結局、次の日まで目を覚ますことはなかった。

そして、意外というか、私が風呂から上がってすぐに射命丸まで酔い潰れて眠ってしまったのだ。

勇儀が言うには『馬鹿な飲み方をした』とのことらしい。

確かに私が見た時は、なんか凄い勢いで碗を叩ってたけど。鬼の酒が旨すぎたのか。

納得していると、勇儀とさとりは何故か苦笑していた。

射命丸もチルノ達と同じで朝まで目を覚まさず、私は勇儀とさとの三人で雑談を交えながら食事と酒を夜遅くまで楽しんでいた。

そして、朝。

太陽が見えないけど多分、朝。夕飯を食べていないチルノとお空が加わり、少し豪勢な朝食を、今度は皆で食べた。

低血圧なのか、それとも二日酔いなのか、前日のテンションの高さが嘘のように静かな射命丸の様子だけが少し気になった。

そうして午前を過ごし、現在である。

「そろそろ時間ですか」

私の内心を読み取ったさとりが、紫が迎えに来る時刻を指して呟いた。

地上へ戻る時間が近づいている。

私達は自然と地霊殿の玄関前に集まり、思い思いの相手と雑談を交

わしていた。

チルノはやつぱりお空と、射命丸は意外なことに勇儀と、親しそうに話している。

「楽しかったですか？」

「ああ」

さどりの問いに、私が答えた言葉は短かったが、心を読めばウザイほど気持ちちは伝わるだろう。

「伝わります。まるで子供ですね」

サーセン。ホント、昨日は寝るのを惜しむくらいはしゃいだよ。

また、機会があれば寄りたいね。

「再会は約束されているわけですから、別れを惜しむ気も湧きませんね」

いずれ訪れる『東方地霊殿』のことを指しているのだろう。

さどりは素っ気無い反応だったが——私には分かっているよ、このツンデレさんめ！

「やつぱり、貴女とは適度に距離と間隔を置いた方が良いでしょう。疲れません」

ため息を吐き、さどりが肩を竦めると同時にシャッター音とフラッシュが瞬いた。

思わず二人して視線をやれば、案の定そこにはカメラを構えた射命丸が立っていた。

「あやや、お二人があまりにも仲睦まじいので思わず写してしまいました」

「多分、八雲紫の検閲に引っかけますよ」

見慣れた意地の悪い笑顔を浮かべる射命丸だったが、機先を制するようになさどりが告げると、余裕の表情はあっさりと崩れた。

さすがさどりんだ、なんともないぜ！

まあ、多分私とさどりのことを新聞に載せようと思ったんだろかね。

弁が達者で、例えば私だったら色々と言ひ包められてしまうだろうが、さすがに心を読むさどりでは相手が悪い。

さとりが言うとおおり、紫にも迷惑がかかるので、地霊殿のことを新聞に載せるのは私も止めてもらいたかった。

「先代も快くは思っていないようですよ。止めないと、今度は腕を折られるかもしれないですね」

「そ、それは勘弁して欲しいですね……」

ちよつ、そんなことまで考えてないって！

意地の悪い笑みではこちらも負けてないさとりが告げた内容に、射命丸が怯えた視線を私に向けた。

ああ、もうつ。こんなことなら、昔の話なんてさとりにするんじやなかった。

「冗談です。貴女はともかく、先代は当時のことを既に気にしてなどいませんよ」

私だけでなく射命丸の心も読んでいるのか、さとりが意味深げに付け加えた。

これってフォロー、なのか？

まあ、私がああの時の騒動や戦闘を気にしていないというのは本当だけれどね。

逆に言うと、射命丸は今ままでずっと気にしてたってことなのかな？

……いや、当然だよな。あの時、私つてば彼女に何したよ。

つつーか、不問になったし、後日正式に謝りに行ったけど、天狗全体に対して喧嘩売るような真似してたんだよね。

うーん……今更ながら天狗と関係が疎遠になって当然だと思えた。

やっぱ、射命丸からも嫌われてるんだろな。

当たり前か……。

改めて理解し、気分が沈む。

「……まあ、とにかく新聞は控えてください。個人的に写す分にはとやかく言いません。お好きにどうぞ」

射命丸と私を交互に眺めた後でさとりはため息混じりに告げた。

苦笑いを浮かべて頷く射命丸の前に、チルノとお空が割り込んでくる。

「なにこれ？」

「これは『かめら』って言うのよ。ねえ、文。コイツ、写してやってよ！」

「あやや、分かりました。じゃあ、折角なんで二人一緒に写しましよ
う」

若い二人の強引さを、むしろ待っていたかのように射命丸は嬉々と
して応じた。

ふう、良かった。

なんか、ちよつと射命丸と顔合わせ辛かったからね。

それなのに、何故か安堵と同時に物足りなさを感じていた私の所
へ、今度は勇儀が歩み寄ってくる。

「ふふつ、面白いもんだな。あんなからくり、見たことも聞いたことも
なかった」

「時代の変化に対応した妖怪です。貴女達鬼が天狗の上にいる時代
は、確かに終わったのですよ」

「こら、人の哀愁の気持ちまで読むんじゃない。そういうところが無
神経だぞ」

「これは失礼」

諫めながらも、勇儀は笑い、さとりは軽く肩を竦めるだけだった。

この二人も、実は意外と仲が良いんだよね。

「先代、今度はお前さんの娘に会う方が先かもしれないな」

以前、決闘の後で私が告げたことを指して、勇儀が言った。

事情を知るさとりはともかく、勇儀は無条件で私の言ったことを信
じてくれているんだね。

「ああ、そうかもしれない」

「だが、私はまたお前さんとも会いたい。約束してくれないか？」

「約束しよう。私も勇儀とまた酒が飲みたい」

「ありがとう。望外の喜びだ、と——」

嬉しそうに笑いながら何かを言いかけ、そこで勇儀は言葉に詰まっ
ていた。

なんだろう？ 『と』？ 続きは何？

笑顔は一変して、何か苦々しいものを飲み込むような表情になり、同時に言いかけた言葉も呑み込んでしまったかのように、勇儀は口を固く閉ざしてしまった。

思わずさとりの方を見るが、彼女は私の疑念には応えず、拒否するように目を伏せるだけである。

「……どうした？」

私は、堪らず勇儀に問いかけていた。

これまでの快活な印象とは一変して、酷く話し辛そうに視線を彷徨わせ、やがてようやく顔を上げる。

勇儀らしくない、苦悩の表情がそこに浮かんでいた。

「なあ、先代」

勇儀は躊躇い続けるように、言葉に間隔を空け、なんとか声を絞り出そうとしていた。

「お前の、足を潰したのは、私だ」

罪人が罪を告白するような声だった。

「私と戦ったことを……その、後悔しちやあいないか？」

そう尋ねて、恐る恐る伺うように視線を向ける。

初めて見る、鬼の勇儀の姿だった。

そうか。

そういうことだったのか。

つまり、勇儀は私の怪我について罪悪感を抱いているんだろう。

そんな勇儀の反応に対する私の感想は——超！ 意外ツ！ だった。

ごめん、そんな相手への気遣いとか勇儀の人柄からは想像も出来ませんでした。

いや、悪い意味じゃないけどね！ ……悪い意味にしか捉えられないかもしれないが。

でも、勇儀が戦いの傷に負い目を感じるとか思わなかったからさ。なんつーか、生粋の戦士って印象だったから。

自惚れでなければ、私との死闘を誇りに思ってくれていたはずである。

そして、私の方はというと……まあ、さすがに後悔の一つもしていないかという断言は出来ず、もう一度あんな戦いをしたいかという
と正直遠慮したい。

ただ、あの戦いの後で感じた清々しさは、今でもハッキリと覚えている。

勇儀の問いに、答える言葉は決まっているのだ。

——とはいえ、深刻そうな表情の勇儀に対して、ただ単にそれを告げるだけでは十分に想いは伝わらないかもしれない。

よつて、ここは偉大なる先人にまたもや肖ることにした。

古来より、互いに全力でぶつかり合った者同士が友情を結ぶことは王道の展開なのだよ！

「——『強敵』と書いて『友』と読む」

「え……？」

「勇儀。お前もまさしく強敵（とも）だった」

台詞を言い切った私は、きつと凄く良い笑顔だっただろう。

この名台詞を言えた——我が生涯に一片の悔いなし！！

そんな、今にも天に昇りそうな私の心境を、ただ一人だけ正確に理解しているさとりが傍らでジト眼で見っていた。

「友、か……」

勇儀が噛み締めるように呟く。

「どうだい、良い台詞だろう。内心でドヤ顔の私。」

「ありがとう、友よ」

そして、勇儀はようやく苦悩のない快活な笑みを再び浮かべてくれた。

まあ、台詞は肖ってるけど、込めた気持ちは私の本心だからね。受け取ってちょうだい。

「さて、そろそろ別れの時間です」

友情フォーエバーって感じの雰囲気味わっていた私に、懐中時計を見ながらさとりが告げた。

紫は時間に正確だから、相手をからかう時などわざとでない限り、時間通りに迎えに来るだろう。

丁度、写真を撮り終えたらしい、チルノもやって来る。

射命丸も歩み寄り、いよいよ地底から去る時間が近づいた。

さとりと勇儀とは十分に別れの言葉を済ませている。

しかし、ここで私はふと気付いた。

地底の住人だけじゃない。地上に戻ったら、必然的に別れることになる相手ももう一人いる。

射命丸だ。

今回、彼女は私と地底との関わりを取材する為に近づいたのであって、特に用事がなければこれまでと同じように関係は疎遠になっていくだろう。

それは——なんだか、とても寂しいような気がした。

折角、こうして諍い無しで真つ当に向き合える機会に恵まれたのに。

ここで射命丸との関係は終わってしまうのだろうか。

自分でもよく分からない気持ちが湧いてくる。

子供の頃を思い出していたからだろうか。あの時射命丸とぶつかり合い、その後で告げられたささやかな言葉が、妙に鮮明に脳裏に蘇っていた。あの時感じた気持ちと共に。

あれから、私と彼女との距離は何も変わっていない。

この関係のまま、これからも過ごしていくのかと思うと、何故かそれが酷く寒々しいものに感じられた。

「ところで、射命丸さん。お別れ前に提案なのですが」

周りに悟られないように、内心の複雑な想いを押さえ込んでいた私は、不意にさとりが切り出した話に耳を傾けた。

……って、ちょっと待って。

さとりに、私の悩みって筒抜けなんじゃね？

「もう一枚、写真を撮りましょう。何、これも個人的なものですよ——」

言いながら、さとりは私を一瞥して意味深げに笑った。



【天狗達のあれからとこれから】

はたての家へ文が訪れることは普段からあまり無いが、逆はよくあった。

それが、長年続いている二人の縁である。一概に『友情』や『親愛』と表現出来ない点が、この二人の難しいところであった。

とにかく、はたては酒瓶を片手にいつものように文の家を訪れた。来訪を告げ、返ってきた返答はぞんざいに招き入れるような内容だった。

—— 仕事中か。

ただそれだけで、はたては状況を察した。

きつと、新聞作成の作業に集中して上の空なのだろう。

勝手知ったる家の中へ、はたては遠慮なく足を踏み入れた。

案の定、文は作業用の机に座って、今回の新聞の編集作業を行っていた。

「いつものお酒、持ってきたから」

一体いつから根を下ろしているものか。多分、今日一日は動かないだろうな、という予想を立てて、はたては酒瓶を適当な棚に置いた。

文が暇な時は、持ち寄った酒と適当なツマミでダラダラと朝まで飲み明かすのが自然な流れだった。

どちらかというと暇潰しに近いそれよりも、当然新聞に対する熱意の方が上回る。

今日は酒だけ置いて帰ろうか、と思っていたはたてに対して、しかし意外にも文は作業の手を止めて振り返った。

「そういえば、そのお酒って例の酒屋から貰ってるのよね？」

「えっ……ああ、うん。そうよ」

意外な反応に驚きながらも、はたては答えた。

「あの時の子供が酒屋を経営し始めてから、定期的に今日まで。長く続くわね」

「あはは、そうね。懐かしいわ」

思わぬ話題を振ってきた文の様子を更に意外に思いながらも、急激

に呼び起こされる当時の記憶を辿って、はたては懐古の表情を浮かべた。

色褪せるにはまだまだ早すぎる。ここ百年の間で一番の出来事だった。

はたて個人にとつても、天狗という種族全体にとつてもそうだ。

しかし、思い返してみれば不思議と、文との間では挙がることのない話題だった。

当時の博麗の巫女が、子供を捜して天狗の集落に近づいたのが全ての始まり。

立ち塞がる天狗を打ち倒し、拳句天狗の長まで殴り飛ばしてしまった、知られざる先代巫女の武勇伝。その第一弾だ。

そして、おそらく姫海棠はたてにとつて一世一代の大立ち回りをやらかした事件だった。

「いくら恩返しって言ったつてさ、義理深すぎなのよね。前々から遠慮はしてるんだけど、あの子つてば譲らなくて」

結局、騒動の中心にいた巫女に代わって、攫われた子供を助けたのは何を隠そうこのはたてだった。

当時の情勢を顧みれば、天狗が人間を助けるなど信じ難い出来事だった。

巫女が天狗の集落で起こした事件が公にはされていない一方で、この出来事は当時の人里に大きな衝撃を与えた。

周囲の人間が不審を拭いきれぬ中、再会した母と子の涙ながらの謝礼を、はたては酷く戸惑いながらも受け止めていたものだ。

あの時の縁は、月日の経った今もこうして続いている。

「恩返し、ねえ」

照れくさそうなのはたてを眺めながら、文は気付かれないように苦笑した。

この社交能力が不足した娘には、種族の壁を抜きにしたって相手の心など欠片も察せまい。

あの時の子供は、今や立派な成人男性だ。

自力で酒屋を立ち上げ、苦難の子供時代を乗り越えて成功を掴み

取った男の原動力となったもの——それが目の前の鈍感な天狗にあるのだと、何よりも本人が理解出来ていないのだった。

未だに結婚して子供を作らない酒屋の店主のことは、人里でちょっとした話題となっている。

つまり、そういうことだ。

「こんな自覚のないアホに心を持ってかれたままなんて、難儀な人生だわ」

「え、何か言った？」

「いいえ、なんにも」

文は素知らぬ顔で視線を逸らした。

「文が珍しい話題振ってくれたついでなんだけどさ、ちよつと聞いてよお」

酒も入っていないのに、はたては本格的に居座って話し始めた。

これは失敗だったか、と半ば後悔しながらも、止まってしまった筆を進める気にもならず、文は椅子に背をもたれ掛けた。

「あの事件からしばらくしてさ、椀がやたらと大天狗にこき使われるようになったじゃない？」

『様』を付けなさい、『様』を」

文は呆れたようにはたての言動を嗜めた。

下つ端天狗に無理な命令をしたり苛めたりするのを止める時のような、普段の二人の関係とは全く逆だった。

あの日、天魔の屋敷ではたてがある意味大暴れするのを目の当たりにして以来、文は友人の意外なこの一面を畏怖していた。別の言い方をすると引いていた。

下つ端天狗に命令することを尻込みし、人間相手に奇妙なほど心配りを見せる肝の小さい彼女が、しかし上に立つ者に対しての態度は不遜そのものだった。

特に、当時直接対峙した大天狗に対しては、呼び方一つで分かるようにあからさまである。

ある時、大天狗に対する認識をはたてに尋ねた時など『頑固ジジイ』の一言で切り捨てたほどであった。

「いい、はたて。下っ端だろうと、他の天狗の前で大天狗様を呼び捨てなんて、ましてや『ジジイ』扱いなんて絶対するんじゃないわよ」

「文の前でしかないわよ」

自分の立場と身の程を弁えている点だけが救いである。

背筋が冷たくなるので、自分の前でも言つて欲しくないが。

文はこれが自分への嫌がらせなのだと思っていた。

「それでさ、あのジジイよ。あの時からやたらと権を顎で使うようになったじゃない。目の敵にしてるのミエミエなのよ」

「まあ、立場も低いし、あの時実際に刀向けたのは権だけだったしね」
「だからって、やり方が陰湿じゃない。私の友達を、さあ。ホント許せないわ！」

はたては『私の友達』の部分を無意識に強調していた。

あの事件以来、はたては権との交流を深めている。

苦手な下っ端天狗の中で、唯一例外といつていい親密さであった。

——とはいえ、傍から見ると文からすれば、どうにもはたての一方的な好意にしか思えない。しかも、年季の入った社交性不足から空回り気味だ。

寡黙な権が、テンパったはたての挙動不審な言動を黙って受け止めている形で、二人の交流は成立していた。

はたてはそれを友情と自称し、文は一方通行の想いと捉えている。

真相は、権の鉄面皮の奥にだけ存在するのだった。

とにかく、はたては権を可愛がっていた。

「その愚痴なら、前々から何度も聞いてるけど……」

「違うのよ、それだけじゃないのよ！ この前権と話してたらね、あの偏屈な頑固ジジイから今度は剣の鍛錬をやらされるようになったって言うのよー！」

「……それ本当？」

意外な情報に、文は思わず身を乗り出していた。

「大天狗様が権を弟子に取ったってこと？」

「そうみたいね」

だとすれば、それは一介の哨戒天狗に対して破格の扱いだと言え

た。

大天狗が持つものは、地位と権力だけではない。

彼は、かつて優れた武芸者として、天狗だけに留まらず力ある妖怪の間で広く名を馳せていた。

その彼に剣術を教えられるということは、仮にも剣士としてまさに栄転である。

これは新たなスクープか、と文ははたての話に聞き入った。

「ホントにさ、とんでもないわよね。あのエロジジイ」

はたてはバツサリと、この重要な事柄を切り捨てた。

「最初はあるだけ敵意向けておいてさ。まあ、椀が真面目に仕事をこなすのを見て考えを改めたのは分かったけどね、手のひら返しすぎ。ジジイのツンデレとかマジキショイわ！ ホントにもー……あれ、文どうしたの？」

「いや、もう……どうでもいいわ。あんたの相手がたまに凄く疲れるわ」

酷く脱力した様子で頭を抱える文を見て、はたては首を傾げていた。

こいつ、もう無敵なんじゃないかな。

文は畏怖と感心を通り越して、心底うんざりした。

放っておけば、更にこの話を続けられてしまうだろうと判断し、椅子を回して半ば強引に背を向ける。

再び机に向かい合うことで、暗に『さっさと帰れ』と告げていた。

「あの時のことって言えばさあ——」

気分が乗ってきたのか、尚も昔話を続けようとするはたてを無視して、文は地底で撮った写真を吟味していた。

今回の新聞は当然、地底で得たネタを載せている。

やはり幾つかは八雲紫の検閲に引っかかって止められたが、当初の予定だった先代巫女と鬼の戦いについては当人達から許可を得ていた。

これだけでも一大スクープになるだろう。

後ろでのんきに話しているはたてが悔しがる様を思い浮かべ、文は

密かにほくそ笑んだ。

「あの先代巫女も、元を正せば文と私達が育てたのよねえ」

それは、タイミングが良かったのか悪かったのか。

文が手元の写真を一枚捲った瞬間に、はたての何気ない言葉が被さった。

神の悪戯としか思えないタイミングだった。

「あ」

理由も分からず動揺が走り、思わず手元からその写真が離れてしまふ。

まるで導かれるように、それははたての足元へ滑り落ちた。

「これって——」

写真を摘み上げたはたてに、慌てて制止の言葉を掛けようとして、文は言いよどんだ。

一体、自分が何を止めるつもりなのか、一瞬分からなかったからだった。

——それを見るな、と言いたかったのか。

——何も言うな、と告げたかったのか。

迷う間に、写真を見たはたての表情が笑顔へと変わっていった。

文には底意地の悪い笑みにしか映らなかった。

「なるほど」

頷くはたてに対して、こいつは絶対に何も理解していない、と文は確信していた。

「なあるほど。そういうこと」

大量の苦虫を噛み潰して何度も咀嚼しているような表情を浮かべる文を見つめて、一人納得したように頷く。

文は、随分と昔に死にかけた子供を連れてはたての家に駆け込んだ時のことを、何故か今になって鮮明に思い出していた。

例えば、あの時こそが全ての発端であり切欠だったのかもしれない。

何に対するものか。

多分、先代巫女を——あの人間の子供を中心とした、様々な事象や

思惑に対する始まりだったのだ。

「今夜は、久しぶりに昔話を肴にして飲みましようか？」

写真を突きつけて笑うはたての言葉には有無を言わせぬ力があつた。

その写真に写っている人物は二人。

地霊殿からの帰り際になって、半ば強引に撮らされた射命丸文と先代巫女のツーショットだった。

なんとも憎らしいことに——何故憎らしいのか文自身分からないが——写真の先代は、珍しく笑顔を浮かべていた。

かつて、いやあの時。文が一度だけ見たような笑顔を。

文は酒盛りの中で、きつと勇儀と同じように尋ねてくるだろうはたての問い掛けに対する逃げの返答を、今から必死で考えていた。

例え酔っていないなくても、自分が何と答えてしまいか分かったものではない。

それは間違いなく致命的な失言になる、と半ば確信していた。

——私に何も訊くな！

文は内心、意地になってそう叫び続けたのだった。

後日、『文々。新聞』は予定通り発行された。

鬼と人間との激突。

驚愕の事実、人と妖怪を沸かせ、また先代巫女の偉大なる伝説に新たな一ページを加えることになった。

先代巫女と星熊勇儀を写した写真が紙面を飾り、それが強い信憑性を新聞に持たせる一方で、天狗社会では一時期問題となって上層部を騒がせ、そして——。

地底で撮られた複数の写真の内、個人的なものとして文の手元に残った物。

はたてにとつて、長く文をからかうネタになるだろう例の写真を含めたそれらがどのように処分されたのか。

それは射命丸文当人しか知り得るところではない。



【我が良き友よ】

先代達が地底を立ち去った、そのすぐ後のこと――。

さとり達は既に地霊殿の中へ戻っていったが、勇儀は一人その場に残っていた。

スキマは閉じられ、先代達の去った後には何も残っていない。

ただ一人佇んでいた勇儀は、虚空に向けて呟いた。

「――どうだ？ あれが、私を負かした人間さ」

『ああ、見た。聞いた。感じた』

心の底から誇るような言葉に、応える者があった。

しかし、姿は見えない。

周囲の空気そのものが喋っているかのように、声は何もない場所から響いていた。

「良い女だろう」

『良い女だ』

勇儀は、声の主が今自分と同じものを心の中で反芻しているだろうと思った。

――『強敵』と書いて『友』と読む。

――勇儀。お前もまさしく強敵（とも）だった。

深く、染み渡るように、その言葉は勇儀の胸の内へと吸い込まれていった。

自分は、この言葉と、この気持ちを生涯忘れず、誇りとして生きていくだろう。

勇儀の浮かべる笑みは、どこまでも清々しいものだった。

『鬼相手に、あんなことを言っただけのける奴がいるなんてなあ』

虚空からの声は、実体を持たないながらも、強く羨望するような色が滲み出していた。

誰を羨ましく思っているかは言うまでもない。

『おい、勇儀。お前ずるいぞ。本っ当に、ずるいぞ』

「羨ましいか。でも、やらん。この言葉は、私だけのものだ」

『うるせえ、馬鹿。炒り豆ぶつけんぞ』

「わははっ、愉快愉快」

酔うと性格が悪くなる、と評される勇儀だが、素面である今でも意地の悪さは相当だった。

声の響きから感じられる苛立ちを、むしろ心地よさ気に受け止める。

『ちつくしよお、あの時の勝負に勝ってれば、こんな姿隠してこそこそしなくてすんだのに……』

「負けたんだから、しばらくは私の言うとおりに大人しくしてろ。あいつの足を見ただろう？」

『そりやそーだけどさあ、じゃあいつまで待ってって話だよ』

「いづれ、あいつの娘が地底にやって来る。長くてもそれまでさ」

『長くても、ってことは、それ以前に何かあるってのかい？』

「うん、まあな。勘なんだが」

そう言いながら、勇儀は奇妙な確信を抱いていた。

人間にとって、足二本はあまりに大きな不自由だ。

しかし、彼女ならば。あの先代巫女ならば、この程度で終わりはしない。

当初は自分勝手な期待と楽観だと感じていた考えを、今の勇儀は無条件で信じていた。

何よりも、先代自身の言葉が信じさせてくれた。

「安心しろ、きつとすぐにお前さんも大暴れ出来るはずさ」

『へん、鬼なら嘘を吐くなよ』

「ああ、嘘じゃない」

不確定な未来の事柄を語るのには、嘘と同じに思えて嫌いなはずだった。

今も具体的な先の出来事など、断片さえ思い浮かんでいないが――

「嘘じゃないさ、きつと。まあ待ってなよ、萃香」

しかし、勇儀は笑って言った。

永夜抄編

其の十八「蓬萊人形」

一目で裕福であることが分かる身なりの男が歩いていた。

この身分では珍しいことに徒歩である。

男は人里でも有数の大商店の主だった。里の中とはいえ、専属の車夫を置いて一人で出歩いて良い立場ではない。

加えて、黒よりも白の割合が多い髪と髭、顔に刻まれた皺を見る限り高齢でもあった。

しかし、足取りは衰えを感じさせないほどしっかりとしている。態度も堂々としたものだった。物盗りなど全く恐れていない。

男の身なりを見ればどう想像しても高価な物しか連想できない風呂敷包みを片手にぶら下げ、無造作に歩みを進めている。

やがて、男は目的の場所へと辿り着いた。

富豪の男がわざわざ徒歩で訪れた場所は、人里の診療所——何もかもがチグハグすぎて、むしろ納得してしまえそうな場所だった。

普段ならば年寄りや患者で賑わっているはずのそこは、閉ざされた戸に『休業中』の札が掛かっていた。

男はしばらくその札を見つめ、やがておもむろに引き戸を開けた。この診療所は一人の女が経営している。

従業員も彼女一人だけだ。

当然、診療所の主人が出掛けて休業しているのならば、今ここに留守番はいない。それでいて、鍵は元々付いていないのだ。

留守中の立ち入りを禁止する看板なども表には出していない。驚くべきことに『休業中に訪れた患者は主人が戻るまで好きに居座って良い』というのが、この診療所の方針だった。

男は文字通り勝手知ったる診療所の中へと足を踏み入れた。

「誰ぞ、おるか?」

男の目的はこの診療所の主に会うことだった。

半ば期待せず、中へ声を掛ける。

「——おや、これは霧雨の御主人」

意外なことに声が返ってきた。

しかし、それは女の声ではなく男のものだった。

「なんだ、霖之助じゃねえか。珍しいな」

年相応な厳しい口調が、急に気安いものとなった。

「それはこちらの台詞ですよ」

男は——大手道具店『霧雨屋』の主人である霧雨は、診療所の一角を憚然として見つめた。

椅子と机が並べられたそこに腰を下ろし、さも自分の家であるかのようにお茶を飲んでいるのは香霖堂を営む森近霖之助だった。

お互いに、この診療所の主とは知り合いである。

しかし、霧雨は立場から、霖之助は出不精な性格から、こうして外で顔を合わせるのは珍しい。

おまけに出くわす場所がこの診療所であるなど、約三年ぶりのことだった。

——逆に言えば、三年ほど前に二人はここで顔を合わせたことがある。

丁度、この診療所が出来た時——主である先代の博麗の巫女が引退した日のことだった。

「暇そうだな、先代はやはり不在か」

「ええ、出掛けています。表の札を見ただでしょうか?」

「お前も見ただろ。何寛いでるんだ、お茶が飲みたいなら人気のカフェとやらにでも行け」

霧雨の皮肉に、霖之助は軽く肩を竦めるだけで応えた。

見た目こそ若者と老人だが、二人のやりとりは同年代の気安いそれである。

霧雨、霖之助、そして先代巫女の三人は、その三年前より更に古くからの付き合いだった。

半妖である霖之助は、見た目通りの年齢ではないのだ。

主が不在であることを知りながら、霧雨もまた遠慮なしに隣の椅子へ腰掛けた。

どっこいしょ、と無意識に声が出て、遅れてそれに気付く。

思わず視線を動かせば、傍らの霖之助が苦笑していた。

「歳は取りたくないな。ここまで歩いてきたただけだつてのに、妙に疲れやがる」

霧雨はバツの悪そうに言い訳を呟いた。

「どうぞ、一息入れてください」

「茶を飲みに来たワケじゃねえ。まったく、この主も相変わらずだな。盗人に仕事の後の一休みでもさせるつもりか？」

「本人は盗まれるほど大層な物は無いと言ってますがね」

「ふん、あの先代巫女の家には盗みに入る馬鹿もいるはずねえか……だからって、留守中に来る客まで歓迎すんなってんだ」

「不定期に休みを挟んでしまうことを気にしていましたからね」

「気を遣いすぎだ、あの馬鹿。診療所の経営だけに専念できるほど、あいつの立場は軽くねえくらい誰だつて分かってるさ」

二人は、もう一人の旧知の仲間を思い浮かべ、その彼女について語った。

「今日は彼女の見舞いですか？」

「ふん、珍しい洋菓子が手に入ったから持ってきただけだ」

霧雨は放るように手荷物を机の上に置いた。

先代巫女が両足を負傷したのは冬に入る前だ。

既に季節が一つ過ぎてしまっている。見舞いと言うには遅すぎた。「あいつの足が動かなくなつたと知れた時は随分騒がれたもんだが、

いい加減周りも落ち着いただろう」

「それで、今更様子を見に来たわけですか」

「お前はどうかんだ？」

「彼女の杖を新調したので持つてきました。使い具合を聞いておきたいので、待つてます」

「大した気の回しようだ」

「霧雨の御主人には負けますよ」

確かに今更の話だった。

怪我をした当時には見舞いにも来ず、霖之助も博麗神社を訪れた時

以外先代に会ってはいない。以前の杖は先代自身が調達しにきたのだ。

旧知の仲でありながら、他人から見れば薄情とも取れる対応かもしれない。

しかし、二人は——先代を含めた三人は互いのことを十分に理解していた。

「まあ、あいつ相手に周りが幾ら気を揉んだって仕方ねえぜ。あれは強い女だ」

「昔から、そうでしたからね」

「ああ、こつちの気なんて知りもしねえ。

今だってそうだ。足が不自由だったのに何処へ出かけてやがるんだ？ しかも最近外出が増えてるらしいじゃねえか」

「……さて、僕も今日はその辺りを聞いておこうと思ってきましたよ」

何だかんだと言いながら、霧雨が先代の行動を詳しく把握していることに内心苦笑する。

もちろん口には決して出さない。

出せばややこしくなることを経験で知っているのだ。

霖之助は若い頃の彼を知っていた。

捻くれた若者から若さが抜け落ちた今では、偏屈な老人となっている。

「里の人間から少し聞いた話では、人里から一人で出ていくのを見たとか」

「なにに……？ あの馬鹿、自分がどういう状態か分かってんのか。怪我を抜きにしても、もう現役じゃねえんだぞ」

「確かに不自由を抱えて気軽に出歩けるほど安全ではないですが、彼女の場合はまだ力も衰えてませんよ」

「知ってるよ。少し前の新聞を見た。鬼退治だと？ 本っ当に、あの向こう見ずの馬鹿が。昔から何も変わっちゃいねえ！」

「こちらが幾ら気を揉んでも仕方ない、でしょう？」

「ああ、そうだ。そうだよ。気にしちゃいねえ、好きにしろってんだ。この歳まであいつに付き合えるか」

霧雨は投げやりに首を振った。

そのぼやきを涼しげに聞き流す霖之助。

話題の中心でありながら、この場にはいない先代。

それは数十年前にもあった、彼らにとって懐かしいやりとりだった。

「じゃあ、俺はもう行くぜ。あいつに会ったら、宜しくと伝えておいてくれ」

思い出をタネにまだまだ続けられそうな会話をあっさり切り上げると、霧雨は腰を上げた。

この辺りの淡白さが、三人を結びつける共通点なのかもしれない。しかし、霖之助は彼が人一倍情に厚いことを知っていた。

「伝えておきますが……相変わらず彼女は騒動の中心ですから、受身ではいつまで経っても会えませんよ」

「ああ？　俺が何時あいつと会いたいってえ？」

「さて——」

惚ける霖之助を一睨みすると、鼻を鳴らして背を向ける。

その背中へ、さも今思い出したかのように一言付け加えた。

「そういえば、『魔理沙』は元氣そうでしたよ」

霧雨の足が止まる。

「……はっ！　そりゃあ、一体何処の誰だ？」

霖之助は惚けた表情のまま、肩越しに睨みつける霧雨の視線を受け流した。

『『真理沙』っていう名前の娘ならいるがな、あの子は死んだよ。昔な』

それだけ言い切り、霧雨は来た時よりも少々荒い歩調で診療所を出ていった。

再び一人となった霖之助はため息を吐いた。

「親子だなあ……」

魔法使いになる為に家を出た娘と、それを勘当した父。

離れ離れになった二人の接点となっている霖之助だけが知っているお互いの言動を顧みて、しみじみと呟いた。

血は争えぬ。

親と子はどこまでも似ている。

まったく、どっちも本当に素直じゃない性格だ。

血縁を持たない霖之助にとって、二人の関係はなんとも面倒で不思議に映るのだった。

それは彼の知る、もう一つの親子と比べているせいもあるかもしれない。なかった。



紅魔館の地下図書館には、実のところ主がない。

そこに居ついているパチュリーが使い魔と共に司書の真似事を行っているが、それとて彼女に課せられた業務というわけではなかった。

パチュリーにとってこの図書館は自身の趣味と実益に応え得る場所であったが、決して望んで得たものではなかったのだ。

かつて、この紅魔館に囚われていた頃に、適切なものとして配置された駒でしかなかった。

だから、なのかもしれない。

——求めよ、さらば与えられん。

この場所を本当に必要とする者の来訪を、特に抵抗することなくパチュリーは受け入れていた。

「これと……これっ！ よし、今日はこれだけ借りていくぜ。死ぬまでな」

ただ、その来訪者にモラルやマナーの欠落している点が頭痛の種だった。

「……魔理沙。私も正式な司書ではないし、そもそもこの図書館の貸し出しシステムだって形式的な真似事のようなものだけだわ」

異変以来、定期的に訪れるようになった未熟な魔法使いに対して、パチュリーはうんざりしながら言った。

「だから強くは言わない。でも、だからこそ強情になる必要も無いでしょう。」

持ち出す本を私に見せて、アナタは貸し出し帳簿に記入するだけでいいのよ？ それだけで、その本の貸し出しは正式なものになるわ。さあ、ペンを取りなさい」

「断るー」

「何でそこまで力強いのよ……」

パチュリーには魔理沙のこだわりが全く理解出来なかった。

毎度、門番の美鈴に弾幕ごっこを仕掛け、勝てば図書館を訪れては勝手に本を持ち出していく。負けた場合は——勝てるまで繰り返す。

これがお互いに険悪な、あるいは敵対する関係ならば分かる。

交渉が成立しないのならば、力による強奪に走るのも当然なのだ。……やられる方は堪ったものではないが。

しかし、パチュリーは自分が魔理沙とそれなりに良好な関係を築けていると思っていた。

馴れ合いと呼べるほど親身な間柄ではないが、当然互いに敵意は無く、魔理沙も図書館を訪れた際には必ず魔法使いの先達としてパチュリーから教えを乞う。

パチュリーもそれを拒むことはなかった。

魔理沙は学び、パチュリーは教えた。

互いに明言こそしなかったが、二人は魔法使いとして師弟も同然の関係だった。

だからこそ、パチュリーは毎回不可解に思うのだ。

——何故、わざわざ奪うような形で本を持ち出すのか？

「この図書館には、今のアナタの手に負えないレベルの魔法書も多い。成長の為に自主性が必要なことは認めるけれど、あまり魔法というものゝを舐めないでおきなさい」

「おいおい、お前さんはわたしのおふくろか？　そこまで世話をしてもらう義理はないぜ」

「私にとって世話という程の内容ではないと言っているのよ。」

持ち出す本を一度私が目を通すだけでいい。私の把握するアナタの実力に見合っているのかどうか判断し、忠告する。その方が効率的でしょう」

「だから、それが『お世話』なんだよ。

わたしが痛い目見ようが、それは選んだわたしの自業自得だろ？」

パチュリーには、関係のない話じゃないか」

魔理沙の言い様に、パチュリーはわずかな苛立ちを覚えた。

「……その関係のない私に、知識をせびるアナタは一体何なのかしら？」

その苛立ちの理由が、先ほどの言動の何処にあるのかまで考えが至らず、無意識に口を開いていた。

皮肉混じりの問い掛けに対して、しかし魔理沙は気を悪くした風もなく答える。

「身の程知らずな普通の魔法使いさ。嫌なら、別に教えてくれなくつたっていいぜ？」

「以前よりも多少知識と力をつけたからって調子に乗っているの？」

「いいや、わたしが今でもお前の足元にだって及ばないのは分かっている」

「だったら——」

「でも、それってお前がわたしに親切にする理由になるか？」

「なんですって？」

「格下が足掻いてるだけなんだから、黙って見下ろしてればいいだろ。助ける利益なんてないはずだ。

わたしがパチュリーにものを尋ねるのは一番早く答えが得られるからだ。別に拒んでくれたっていい。私はいつだって駄目元で頼んでるんだからな」

魔理沙の釈明を聞き、パチュリーの苛立ちはますます強まっていった。

「だったら……これからはアナタを本を狙う盗人として歓迎しましょうか？　手荒くね」

「おっ、いいねえ。さっそく今から勝負といくか？」

脅すような気迫を滲ませるパチュリーに対して、魔理沙はむしろ嬉々としてスペルカードを取り出した。

相手の剣呑な空気を物ともしていない。

敵意は無く、しかし同時に仮にも知己である相手に対して遠慮や躊躇も抱いてはいない様子だった。

その変わらない態度を見て、パチュリーは沸々と湧き上がっていた激情が急速に萎えていくのを感じた。

「……………それを持って、とつとと失せなさい」

椅子から浮かしかけていた腰を脱力するように落とし、投げやりに手を振る。

「なんだよ、私は決闘上等だぜ？」

「消えろ。殺すわよ」

殺気を込めて睨みつけると、さすがの魔理沙も肩を竦めて素直に従った。

自分と相手との実力差を弁えているのだ。

やはり、自惚れから来る態度ではない。

だからこそパチュリーには、魔理沙の頑なとも言える考えやこだわりが全く理解出来なかった。

何故、素直に自分を――。

「――魔理沙」

「ん？」

図書館のドアに手を掛けた魔理沙の背中へ、無造作に問い掛ける。

「右眼、どうしたの？」

パチュリーは、魔理沙が図書館を訪れてからずっと気になっていたことを尋ねた。

彼女の右眼は包帯で覆われていた。

一見すると負傷か病気を患ったように見えるが、パチュリーはその包帯の下から滲み出る瘴気を正確に感じ取っていた。

魔理沙自身から聞くまでもなく、包帯の下の状態が分かっている。

ただ、魔理沙自身はここを訪れた時からずっと、右眼に異常など無いかのように振舞っていたし、何一つ語ろうとしなかったのだ。

自分の右眼が今どんな状態に陥っているのか分からないほど、魔法使いとして無知な彼女ではないはずなのに。

「別になんでもないぜ」

素直に答えて欲しい——無意識にそう願っていたパチュリーの内心を嘲笑うかのように、魔理沙は笑顔でそう答えた。

じゃあな、と気楽な挨拶を残して魔理沙は図書館を出ていった。残されたパチュリーは、しばらく閉ざされたドアを見つめていた。

「小悪魔、何を笑っているの」

足音と気配を消して背後にまで近づいていた小悪魔の存在を、パチュリーは振り返りもせずに看破した。

「あらら、八つ当たりですかあ？」

「随分楽しんだようね。次に魔理沙が来た時は普通に通しなさい。話の続きは私自身がつけるわ」

パチュリーはいつもの軽口に応じなかった。

端的に核心だけを突いてくる。

小悪魔は先ほどまでの二人のやりとりに聞き耳を立て、次に魔理沙が訪れた際には『主の意を汲んだ』と解釈して弾幕ごっこで迎え撃つつもりだったのだ。話を面白くする為だけに。

それらの思惑全てを見抜き、パチュリーは隙無く釘を刺したのだった。

「さすがは恐るべき我が麗しの魔女」

小悪魔は敬服するように深々と頭を下げた。

しかし、影に隠れたその表情は笑みに歪んでいる。

「——しかし、それは余裕の無い恐ろしさです。

いけませんね、パチュリー様。魔法使いの言動が感情に左右されてはいけません。私のような悪魔を含めて、アナタを呑み込もうとする異界の口は何処にでもあることをお忘れなく」

小悪魔は魔道に関わる者へ常に掛けられる忠告を告げた。

「……そうね。ありがとう」

「いえいえ」

彼女の種族を顧みれば意外とも言える優しさを受け、パチュリーは素直に反省と謝罪を口にした。

しばらくの間、普段とは違う、二人の主従として互いを想い合う沈黙が流れた。

「魔理沙のことだけど」

パチュリーが本題を切り出した。

「どうやら、私以外の魔法使いに師事し始めたようね」

魔理沙自身からは何も聞き出していないにも関わらず、パチュリーは半ば確信である推測を導き出していた。

それを聞く小悪魔からも否定の声は出ない。

「実力は少なくとも魔理沙さん以上。上限の方は——分かりませんね、最悪パチュリー様と同等かそれ以上かも」

「中級以上の強力な魔道書を所持しているのは確かね。」

魔理沙は少々卑下しているけれど、彼女自身の素質は決して悪くないわ。魔法使いとしての適正はある」

「呪いへの抵抗力もそれなりにあるはずですね。それなのに、あの右眼ですから」

パチュリーも小悪魔も、魔理沙の右眼が何らかの呪いを受けたのだと見抜いていた。

その症状自体は珍しいものではない。ことに魔法使いという種族に関しては。

それ自体が力を持つ書物である魔道書とは、その力に比例するだけの危険性も孕んでいる。

血のインクで書かれた文字や人皮で構成されたページとカバーとといった、おぞましい造りの本まであるのだ。

強力な魔道書ともなれば、普通の人間など読むだけで発狂してしまう。

パチュリーが、魔理沙の持ち出す本の検閲を勧めたのもその為だった。

「魔理沙さんの右眼は、自身の力量に釣り合わない魔道書を無理に読み解いてしまった影響で間違いないでしょう」

「問題なのは、魔理沙の実力を理解しながら、不相应な魔道書を読ませた相手ね」

パチュリーの密かな敵意は、姿形も分からないもう一人の魔法使いに対して向けられていた。

その様子を眺め、小悪魔は再び忠告を発しようとして——止めた。そういつた結論に至る過程が既に間違いなのだ。

魔理沙自身も言っていたではないか——関係の無い話だ。利益などないはずだ、と。

別に魔理沙が師事を願ったわけでもないのに、安全を考慮し、気遣う。

そういつた気遣いや思い入れは、普通の人間としてならば美徳なのかもしれない。

しかし、闇の理を律する魔法使いとしてはどうか？

過ぎた人間性は魔法使いという『妖怪』であるパチュリー・ノーレッジにとって致命的な弱みである。

小悪魔はそこまで理解していた。

理解しながら、忠告を止めた。

なんとということはない。

その方が面白そうだから、だった。



霊夢は神社の境内で恐るべき大妖怪と対峙していた。

張り詰めた空気は戦闘時のそれである。

相手は八雲紫だった。

スペルカード・ルール下ではない純粋な戦闘では、この幻想郷でもトップクラスの強敵だ。

「——こんなことしてるから、うちの神社には一般人の参杯客が寄り付かないのよね」

「こら、気を逸らさない」

緊迫感のない、普段通りの霊夢を紫が諫めた。

戦闘態勢で対峙する二人は、しかし敵意を持って戦っているわけではない。

紫の叱責を受けながらも、今の状況に疑問を抱いていた霊夢は頭を掻きながら改めて尋ねた。

「なんで、急に稽古つけるなんて言ってきたの？」

既に数時間経った現状で浮かんだ疑問は、酷く今更なものだった。

「こつちにも一日の予定ってもんがあるんだから、いきなり襲い掛かってきて欲しくないんだけど」

「相変わらずのんきな心構えねえ」

憎まれ口を叩く霊夢に対して、紫は飄々と受け流す。

傍から見る限り、二人の関係はお世辞にも友好的とは言いがたい。

実際に、霊夢と紫はある異変において互いが決して相容れぬ存在であることを理解し合っていた。

種族的にも、立場的にも——そして一人の人間を間に挟んだ関係的にも。

しかし、皮肉なことにその一件が、ただ反目するだけだった相手と心を通わせる切欠にもなっていた。

以来、博麗霊夢と八雲紫の微妙な均衡を保った新しい関係は続いている。

「霊夢、貴女の強さは認めるわ」

紫は真摯な口調で言った。

「このスペルカード・ルール上において、貴女の強さは既に比類なきものとなっている。」

冥界での異変では、未知数の相手に対して一切退くことなく勝ち進んだ。そして先程、私のとっておきのスペルまで破ってみせた」

襲い掛かる、という霊夢の言葉は決して比喩表現ではなかった。

数刻前に神社を訪れた紫は、唐突に霊夢に対して弾幕ごつこの決闘を仕掛けてきたのだ。

あの西行寺幽々子のそれと比較しても遜色のない、恐ろしく緻密で濃密な弾幕が次々と放たれ、しかし霊夢はそれらを全て突破した。

最後に使われたスペルカードは、もはや弾幕の結界と表現出来るような凶悪な代物だったが、それさえも霊夢を墜とすには至らなかった。

「異変を解決する博麗の巫女としては、頼もしい限りね」

「別にあんたに褒められても嬉しくないんだけど」

「私も褒めて楽しいとは思わないわ。社交辞令よ、黙って流しときなさい」

口の減らなさは霊夢も紫もどっこいだった。

お互いの嫌味を涼しげな顔で聞き流しつつ話を進めていく。

「しかし、幻想郷は一つのルールで縛られるほど単純ではない。

貴女は既に歴代の巫女の中でも最高の才能を示してみせているけれど、正直幻想郷の管理者としてはどれだけ完璧さを追求しても、しすぎるということはないわ」

「もつと力を付けろってこと?」

「貴女はまだ若い。『力』という括りの中には様々な形が存在する。例えば、巫女ならば神様の力を借りる方法なんかもあるわね」

「ふーん……」

霊夢はやる気の無さそうな反応を示しつつ、小さく屈伸した。

そして次の瞬間、一気に紫との間合いを詰めた。

いつの間にか両手に符を携え、その指で素早く印を結ぶ。

結界崩しの作用を持つ術を展開し、それを紫に向けて叩きつけた。

何も無いはずの二人の間で、激突音と火花が弾ける。

「ダメダメ、話を聞いていたの? そんな単純な方法ではこの結界は抜けないわね」

紫は自らの眼前に見えない障壁を張り巡らせていた。

弾幕ごっこでこそ紫に勝利した霊夢だったが、純粹な結界の技術においては一步及ばない。

博麗の技を、先代を通じて霊夢に教えたのは紫なのだ。

「この結界は、ある特定の神性を持った力だけ素通りする。

分かるわね? 神降しによってその力を操るのよ。この修行をこなせたら、今日はもう退散しましょう」

「面倒くさいわね」

悪態を吐きながらも、霊夢は冷静に一度距離を取った。

軽口は叩くが、しっかりとこちらの指導に従っている。

紫は相手にそれと悟られぬよう口元を隠しつつ、満足そうに微笑んだ。

「——靈夢、貴女には天性の才がある。そして未恐ろしいことに、その才を磨く努力もしている」

賞賛と畏怖の混ざった声でハッキリと告げた。

「貴女は博麗の巫女として、十分過ぎるほど力を持っているわ。己の役割も全うしている」

「……」

「だから、そこから先は私が個人で望んでいること」

「分かっているわよ。あたしも望んで先を目指してるわ」

「結構。ならば、私達は利害が一致しているわね」

二人の脳裏に浮かぶのは、一人の同じ人間だった。

「冥界では随分な口を利いてくれたのだから、自らの行動で証明し続けなさい」

「うるさいわね、やってやるわよ。何よりも自分自身の為にな」

「力をつけるだけではなく、それを正しく用いて課せられた責務を果たすこと」

「言われるまでもないわ」

——立派な博麗の巫女になりなさい。

——私達の戦争は終わった。

靈夢と紫。二人の心には、それぞれ違う言葉が刻み込まれていた。

靈夢には母が。

紫には友が。

共通する一人の人間が、互いの心を大きく占め、それ故に互いに決して相容れぬと悟ってしまっている。

しかし、同時にそれが二人に奇妙なシンパシーをもたらしてもいるのだった。

「母親を越えてみせなさい、靈夢」

「あなたに比較されるまでもないわ、紫」

二人は示し合わせたわけでもなく、自然と不敵な笑みを浮かべ合った。

「——それで、修行の続きなんだけど」

「ええ、早くこの結界を崩してみなさい。試行錯誤するのね」

「まあ、神降しをするのはいいいんだけどね……正直あんたに導かれた答えで満足するのも気に入らないわ。やっぱ、このままいく」

「え……？」

「さっきのでコツは掴んだから」

何でもないことのように告げると、霊夢は無造作に歩み寄り、おもむろに結界へ両手を突っ込んだ。

隙間へ滑り込むように、障壁の向こうへ両手が通り抜ける。

「ここを……こう」

鍵を外すような気安さで、結界は崩壊した。

半ば呆然としていた紫は、霊夢の流れるような行動に反応が遅れ、続いてあっさりと手首を掴まれる。

「そして、こうっ」

霊夢はそのまま紫の腕を引き寄せ、関節を捻って押さえ込んだ。

「えっ……あ、痛い。これなんか覚えあ痛たたただだ……っ！」

「神様の力借りるよりも確実だわ。さすが母さん」

霊夢が紫に極めている関節技は、かつて先代が仕掛けたアームロツクだった。

母の技を、娘が受け継いだのである。

「そういう修行じゃないわよ、この馬鹿！」

涙目になった紫が素の悲鳴を上げていた。



——『気の遠くなるような時間を過ごす』という表現さえ当て嵌めることの出来ない、永遠の時間を生きる為に一番楽な方法は何だろうか？

——必要なのは、自分と同じ時間の流れを持つ場所だ。

——自分の時間が止まっているのなら、出来る限り物事の変化が遅い場所が最適だろう。

——何も変わらず。誰も訪れず。何処とも繋がらず。

——それを『生きている』と言えるのかは分からないけれど。

迷いの竹林という場所に住むことは、時流から取り残されることに等しい。

その名の通り、周囲に群生するのは竹ばかりで何処を向いても同じに見える。

竹の成長が早い為、景色の変化は頻繁に起こっているが、所詮竹は竹だ。それ以外の植物に変化するはずもない。

景色そのものは何十年経とうが変わりようがないのだ。

確実に迷う地形と、そこに生息する妖怪化した獣のことが広く知れ渡って既に長く、迷い込む人間などもはやほとんどいない。

天候や季節の変化だけが、正常に時が動いていることだけを自覚させてくれる。

外からは誰も訪れず、内からは何の変化も起こらない。

そこはさながら、秘境である幻想郷の内にある更なる隠れ里のようだった。

ここに住むということとは、植物のように何の感動も無い日々を繰り返すことに等しいのだ。

逆に言えば、ここに住む者はそんな生活を望んで暮らしていた。

彼女もそんな一人だった。

竹林の間を少女が歩いている。

その姿は異質である。

醜く、異形であるわけではない。むしろ美しい少女であった。歳若く、瑞々しさの残る人間だ。

だからこそ、人が踏み入れれば確実に迷い、野垂れ死ぬより早く獣に食い殺されるであろうこの場所において異質な存在であった。

目印も無く、一日で景色が変化してしまう竹林を、勝手知ったる庭のように気楽に歩いていく。

その少女にとっては何の変哲も無い日常なのかもしれない。

しかし、その日迷いの竹林には珍しく変化があった。

不意に少女の足が止まる。

視線があらぬ一点を見つめていた。

「……人間？」

思わず呟いていた。

緑色に塗れた景色の中で、紅白の色がポツンと浮いている。

そのすぐ傍には小さな青い色もあった。

「それと……妖精か？」

巫女服を着た女と、何故かその傍に付き添う青い妖精。

奇妙な組み合わせの二人が、この竹林を歩いていた。

少女にとつてはちよつとした驚きだった。

過ぎした年月すら忘れるほど変化の無いこの場所で、久しぶりに時間の流れを感じさせる存在と出会ったのだ。

自分以外の人間と最後に出会ったのは、一年前か十年前か、あるいは更に――。

「ただの間抜けな迷い人には思えないけど……」

服装や妖精を連れている点から見ても、女の方は一般的な人間とは思えない。

しかし、ここは例え人外であっても迷うような場所である。

ひよつとしたら妖精の方が狡猾で、人間を陥れようとしている可能性もあった。

ため息一つを吐き、少女は二人の下へ歩み寄っていった。

何処かを目指しているのか、それとも単に彷徨っているのか、どんな進んでいく女と妖精の後を追いかける形で近づく。

「――人間か」

唐突に女の方が振り返り、少女は思わずその場で凍りついた。

こちらに背を向ける形になっていたはずだ。

しかし、女は何の脈絡もなく自分の接近に気づき、しかも妖怪や獣ではなく人間であることまで見抜いていた。

互いに足を止め、対峙する。

「……そうだよ、私はずっとここに住んでいる人間」

内心の動揺を抑えながら答える。

妖精の方は、ようやく気付いてこちらを見ていた。

「あつ、なんだお前！ あたい達に何の用だ!？」

「それはこっちの台詞よ。こんな場所に足を踏み入れる馬鹿者がまだいたんだね」

「なにをー！ バカとはなんだ、バカとは！ このバーカ！」

「やれやれ……。あんたの方は人間みたいだけれど、その妖精に案内役が務まるとは思っちゃいないでしょうね？」

迷いの竹林では妖精さえ迷う。

その為、この場所へ近寄らないのは人間だけではなく、妖精も同じだった。

久しく見ていなかった妖精という者が、相も変わらず騒がしく頭も悪いという事実を確認すると、少女は傍らの巫女服の女の方へ話を振った。

妖精相手では話が進まないのだ。

「この場所を『迷いの竹林』なんて大層な名までつけて恐れていたのは、あんた達人間だろう。それとも、その理由さえ忘れるほど外では時間が経ってしまったのかい？」

「いや、この場所の危険性は知っている」

女は迷いなく答えた。

少し低い声色で、不思議と心地良く耳に残る響きだった。

「だったら、早く出ていくんだね。……とはいっても、一度入り込んだら、あんたらじゃ出るのも難しいか」

「目的があつて来た。まだここを出るわけにはいかない」

「……あーあ、こりや本当に大馬鹿者だわ」

僅かに湧き上がった苛立ちを誤魔化すように、少女は呆れた口調でわざとらしくぼやいた。

「こらっ、お師匠をバカつて言うなー！」

「いいや、身の程知らずの大馬鹿だ。」

よく見れば、あんた足が不自由なんじゃないか。ただの遠出だって無茶なのに、この竹林に入り込むなんて危機感が足りないどころじゃないよ」

その女が只者ではないことは、最初の対応から分かった。

よく観察してみれば、特徴的な巫女服に隠れて最初は分からなかったが、随分と鍛え込まれた体つきをしている。

しかし、その要素を差し引いて、杖で体を支えながら立っている姿が彼女を『弱者である』と印象付けていた。

傍らの妖精との関係がイマイチ分からないが、正直護衛として見るにはいささか頼りない。

威勢の良さだけは一人前に騒ぎ立てる妖精を無視して、少女は脅すように女を睨みつけた。

「早くここを出るんだ。出口までは私が案内する」

「……ありがとう」

女は素直に礼を言った。

深々と頭を下げられる。

別の意味で動揺してしまうような、本当に素直な謝礼の気持ちは表れていた。

久しぶりに人と接し、友好的な言葉を掛けられた少女の頬が知らず知らず紅潮する。

「だが、すまない。どうしても目的を果たしたいんだ」

穏やかな口調だったが、返答は意外と頑ななものだった。

少女はわずかに高まっていた鼓動を落ち着ける為に深呼吸し、改めて相手を見つめる。

「分かったよ」

それまで無造作にポケットへ突っ込んでいた両手を抜く。

「私の忠告を聞かない奴は、よくいる。身の程知らずの愚か者をどうしても助けてやりたいなんて思うほど、私は善人じゃない」

「お師匠、下がって」

「でも、あんたは良い人間だ」

「——こいつ、戦う気だ！」

妖精が庇うように前に躍り出て、迎撃の為にスペルカードを素早く取り出した。

しかし、少女はそれには応じず、右手から炎を発生させる。

炎を纏った右腕を横に薙ぎ払うと、強烈な熱風が巻き起こり、立ち

塞がった妖精の体を吹き飛ばした。

「うあつちち！ お前、ひきよーだぞー！」

「スペルカード・ルールなら知ってるよ。だけど、この竹林に棲む奴らは本能しかない獣ばかりだ。お前じゃ、その人間を守れない」

障害となる妖精がいなくなり、無防備になった女に向けて、一気に駆け出す。

「悪いけど、無理矢理にでも外へ連れ出すわ。文句なら、ここを出てから聞いてやる！」

その行為に悪意はなかった。

半端な護衛と、いざという時思うように逃げることさえ出来ない不自由を抱えた人間。いずれも、この場所を歩くには危険だと判断した。

組み伏せるか、最悪気絶させてでもここから出してやらなければならぬ——。

それは、自ら望んで世捨て人となった少女の中に、今も変わらず在り続ける人としての優しさだった。



私がこの幻想郷で生きて齢五十年以上——正確な年齢は忘れちゃった。

歳を取るとこれだから……って、ボ、ボボ、ボケちゃうわっ！

いや、正直五十年って結構長いよ？

小説の主人公とか百年千年は当たり前。中には元人間なのに万単位で生きちゃう人もいるけどね。

まあ、とにかく。

そんなすつかり幻想郷の住人な私だが、当然のようにこの世界の隅々まで歩き回った経験があるわけではない。

生前の知識によって、幻想郷の有名なスポット情報だけならば全て網羅しているが、博麗の巫女時代は自らの職務もあり、人里以外の所へ行く機会はそうそう無かった。

なので、幻想郷で行ったことのない場所というのは意外と多かりする。

迷いの竹林もその一つだった。

人里でも、入り込めばまず戻って来れない危険地帯として昔から知られている。

当然普通の人はその場所を避け、かつての妖怪の山騷動のように必要に迫られて足を踏み入れるという事態も起こらなかった。

そんな場所へ、私は前々から訪れる予定を立てていた。

目的はこの動かなくなつた足に関わることである。

遠出になるので、ある程度自由に動けるまで体を慣らす必要があったが、最近ようやく杖を使った移動が苦ではなくなってきたところだ。

これならば、十分に歩き回れるだろう。

そして、今日。私は迷いの竹林に向かって出発したのだった。

——もちろん、慧音を含む周囲の皆には内緒である。

心配されたり止められるおそれがあるのももちろん理由だが、もっと根本的な話として『何故、そこへ行くのか?』と尋ねられた時に答える術がないのだ。

あそこは人が寄り付かない場所であり、その奥に何が隠されているのかなど『今は』誰も知らない。

答えようがない以上、こっそり動くしかなかったのだった。

診療所を休業にして、誰にも知られぬよう静かに人里を後にする。

旅と言うほど遠くはないが、道連れのない、寂しさと不安が一抹残る出発だった。

スペルカード・ルールが普及したとはいえ、一人歩きが安全なわけでもないんだよね。

しかし、小休止を挟みながら先を進んでいくと、思わぬ出会いが私を待っていた。

「——お師匠！　こんな所で何してるの?」

つい先日、地霊殿にも一緒に行ったチルノだった。

地霊殿に誘った切欠もそうなんだけど、あの春雪異変以来チルノと

よく会うんだよね。

これが偶然ではなく、チルノ自身が意図的に私の元へやって来ているということはなんとなく気付いていた。

そして、チルノの言動には殊更私の足や体を気遣うものが多い。

つまり、チルノは私のことを心配して、気に掛けてくれているのだった。

……何この天使。いや、妖精だけど。

今回も、チルノこそ湖を離れて何をしに来たのかと尋ねたら『なんとなくお師匠のことが気になって飛び回ってた!』と笑顔で答えてくれた。

うおっ、まぶし……!!

その笑顔から放たれる光がフェイスフラッシュの如く周囲を浄化したような気がした。

やべ、ひよつとして今の笑顔で私の足治ったんじゃね? むしろ寿命が十年くらい延びたんじゃね?

思わずそんなアホなことを本気で思ってしまうほどの感動だった。

今からでも遅くない。ねえ、霊夢。妹が欲しくないかい?

「ちよつと行きたい所があつてな」

「でも、お師匠の足じゃあ疲れるし、危ないよ……。よしっ! あたいが一緒について行つてあげる!」

「チルノは何か用事があるんじゃないのか?」

「うん、お師匠の手助けをすることよ! サイキョーのあたいがいれば、お師匠も安全だからバッチリね!」

こうして思わぬ旅の道連れが出来たのだった。

マジで良い子すぎだろ……。チルノだったら竹林に行く理由を深く聞かれないだろうとか、無意識に打算を割り出してた自分が恥ずかしいです。

まあ、とにかく——こうして私の歩みは明るく賑やかなものとなった。

チルノと談笑しながら歩くだけで、なんだか妙に足取りも軽く感じる。動かない足が苦にならない。

ところで、今更なんだがチルノは私を『お師匠』と呼ぶ。

初めて出会った時以来、ずっと私に師事してくれているようなのだが、実のところ私はチルノに何かしらの修行をつけたことはない。

普通に考えて、チルノに指が折れるまで貫手稽古とかさせるわけないしね。

かといって、弾幕に関しては専門外なのでアドバイスすら難しい。

結果、私は『修行』と称してチルノに簡単な体操や運動の仕方、ちよつとしたお勉強、時には子供の遊びなどを教えているのだった。

傍から見たら完全に遊んでいるだけに見えるだろうが、まさにその通りだ！

……お互いに不満はないので、別にいいデシヨ。

それでいて、チルノってばいつの間にか妙に弾幕ごっこが強くなったりしてるんだよね。

何故だろう？ 私との遊び……もとい修行で強くなったわけではないと思うのだが。

不思議だが、とりあえず今回のような護衛としては心強く思う要素だった。

そうこうしている内に、私達は迷いの竹林に辿り着いた。

「……お師匠、ここってあたいも迷ったことあるよ。危ないから入るのやめようよ」

やはりというか、チルノは気の進まない様子だった。

ここで中に立ち入る理由を尋ねず、純粹に私の身を案じてくれるのが良い子の証。

私は安心させるように笑う。

「いざとなったら飛んで脱出すればいい」

「……なるほど！ お師匠ってば天才ね！」

あと、いざとなったら博麗波で薙ぎ払ってでも脱出する決意も固めておく。

私だけならともかく、チルノまで遭難させるわけにはいかないからね！

竹林の住人にとっては迷惑しかないと考えながら、私とチルノ

は先へと進んだ。

そう、『先』へ。

——ここで白状しよう。目的地は明確に定めているが、それが『何処』にあるのか私は知らない！

迷いの竹林にあるのは間違いないのである。

しかし、その漠然とした位置だけで、正確に何処をどう通って向かうのか、ルートを全く知らないのだった。

半ば遭難覚悟だったのだ。脱出の決意だけは固めていた理由を、これで見せてくれたと思う。

なんか無謀と言えるほど行き当たりばったりな感じだが、全く当てが無いわけではなかった。

私にはこの幻想郷を網羅した知識がある。

幻想郷で生きて五十年。未だに出会ったことはない。

しかし、私の知識通りなら……いるはずだ。

ここに『彼女』が……！

「——人間か」

「……そうだよ、私はずっとここに住んでいる人間」

も　こ　た　ん　I　N　し　た　お　！

待ち望んだキャラとの邂逅に、私は内心で叫んでいた。

近づいてくる気配——相変わらず便利だけど不気味なぐらい概要が分からない感覚——を察知した私が半ば確信しながら呟けば、それに応えるように少女が一人現れた。

長い白銀の髪と、それに映える真っ赤なもんぺ。体格は予想よりもずっと小柄だ。っていうか若い。

毎度のことで恐縮だが、名乗られるまでもなく相手の正体は分かっている。

この迷いの竹林に住む蓬莱人『藤原妹紅』だった。

「あつ、なんだお前！　あたい達に何の用だ!？」

「それはごっちの台詞よ。こんな場所に足を踏み入れる馬鹿者がまだいたんだね」

チルノと妹紅が言い争いを始めてしまったのは予想外だが、彼女の

登場は私の予定通りだった。

私の考える『当て』とはこれなのだ。

目的地に辿り着く手段として、他にも何人かこの場所で遭遇する可能性を考慮したキャラはいたが、妹紅ならその中でも一番の当たりだ。

「目的があつて来た」

チルノとの言い合いの後、話を振られた私は早速用件を切り出そうとした。

しかし、返ってきた反応はあまり色好いものではなかった。

「早くここを出るんだ。出口までは私が案内する」

有無を言わさぬ視線が向けられる。

妹紅の協力が得られないのなら、私も目的を果たせない。

だが、そのことはとりあえず置いておいて、私はこうして向かい合うことで直に感じられる彼女の人柄に密かに感動していた。

——良い人すぎる。

妹紅の言うことは全てもつともな話なのだ。

足が不自由なクセして、人里から遠路遙々危険な場所へやって来た馬鹿。

こんな場所に住んでいるということは、望んで他人との関わりを避けているのだろうと察することが出来る。

そんな彼女が、相手にするのも面倒くさいだろうに、見知らぬ他人である私の身をここまで案じてくれているのだ。

これを優しさと言わずになんと言おうか。

「……ありがとう」

私は妹紅の善意に深く感謝した。

チルノといい、今回の私って人選に恵まれてない？

もう、このまま妹紅の好意に甘えて竹林の外まで案内してもらいながら、途中で雑談して交流を深めるのもアリじゃないかと考えてしまおう。

……だがしかし、そうもいかないだろう。

「だが、すまない。どうしても目的を果たしたいんだ」

心苦しく思いながらも、私はハッキリと意思を告げた。

それに対して、妹紅の反応はやはり何処までも善人のそれだった。

「悪いけど、無理矢理にでも外へ連れ出すわ。文句なら、ここを出てから聞いてやる！」

立ち塞がろうとしたチルノを跳ね除け、妹紅が迫る。

その瞳に敵意は無い。

彼女が善意によって動いていることが、私にはよく分かった。

理屈や良識を無視し、理不尽な行動を取っているのは私の方だ。

退こうとしない私の頑なさが悪いのだ。

それを自覚しながら、しかし私はやはり退くことなど出来なかった。

くそっ、こんなことで妹紅と争うなんて馬鹿馬鹿しいにも程があるけど……！

ここは退けない！ 戦うしかない——！

「お師匠！」

「チルノ、手を出すな！」

不死身の蓬莱人を相手に、決して望まない戦闘が始まった。

動かぬ足を抱えて、果たして私は妹紅に勝てるのか……っ!?

「ちよいさ！」

「お……！」

おそらく私を組み伏せようとしたのだろう、伸ばされた妹紅の手を体を傾けて横に避けつつ、手首を掴み取る。

もう片方の手は持っていた杖を手放して肩を掴んだ。

足に力が入らないので横にかわした勢いそのまま倒れこみそうになったが、掴んだ妹紅の体を軸にして、遠心力を利用しつつ位置を入れ替えた。

ダンスのターンのようにクルリと回って妹紅の背後に回りつつ、掴んでいた腕を背中へ捻るように持っていく。

「あ……え……っ?」

一連の流れの中で、自らの体の動きさえ把握出来ず、混乱する妹紅を尻目に私は最後の仕上げとして、前へ倒れ込んだ。

下敷きになった妹紅がうつ伏せに倒れ、上になった私は捻った腕を体重で押さえる形になる。

動きは封じた。

これぞ博麗奥義『夢想封印・関節』だ。

「痛——っ!? 痛たたただだっ、痛い!・痛いっ—!」

勝った! (原作ゲームの) 第三部、完ツ!!

「おお、さすがお師匠つてばサイキョーね! どうだ、思い知ったかひきよー者!」

「だ、誰が卑怯者だ!? 誰の為にこんなことしてると……痛い、痛いよ馬鹿! 離してよ! もうっ、なんで私がこんな目に遭うのよー!」

とうとう涙声になってしまった妹紅の悲鳴を聞き、我に返った私は慌てて彼女の上から体をどかした。

チルノに支えてもらいながら立ち上がり、腕を押さえて涙目で睨んでくる妹紅と再び対峙する。

うん、なんつーか不可抗力つーか、これでも怪我しないように考えた方法なんだけど——。

「もういいわよ、好きにすれば? 人が折角心配して忠告してたのに……勝手に迷って死ねばいいでしょ!」

……すみません。

ホント、なんていうか……すみませんでした。

さながら本気で怒った先生に説教を受ける生徒の構図。

なじるような妹紅の言葉を受けて、本気でへこんでしまう。

終始妹紅の言い分が正当だった分、言い訳など出来るはずもない。

「すまない」

「知らない。あっちいけ」

「……ごめん」

完全にへそを曲げてしまった妹紅に対して、私は何度も頭を下げるしかなかった。

ちなみに、何か言いたそうなチルノは口を塞いで、暴れないように

体を押さえている。

私を擁護しようとしてくれているんだろうが、非は私にあるから、何も言わなくていいんだ。

しばらくの間、私は妹紅が落ち着くまで謝罪を繰り返すしかなかった。

——でも、あれだね。さつきまでは固い口調だったけど、素の妹紅って結構女の子っぽい口調なのね。

そんな内心の浮かれ具合がわずかに伝わってしまったのか、妹紅にキツと睨まれてしまった。

ヒツ……ご、ごめんなさい。

「……………それで？」

しばしの気まずい沈黙の後、おもむろに妹紅が口を開いた。

「そこまでして果たしたい、あんたの目的って何なの？」

ここに至って、それでもまだ私のことに関心を持ってくれる妹紅は本当にお人よしである。

先程の自分が行ったこと全てが蛮行としか思えない。

素直に組み伏せられても構わないから、話し合いに終始すべきだったか……。

「——医者よー！」

罪悪感に沈んで反応の遅れた私に代わり、手を離して自由になったチルノが胸を張って答えていた。

チルノには竹林に入ってからからの道中で、今回の目的について簡単に説明している。

簡単というのは、つまり詳細をぼかして話してあるのだ。

「足を治す医者を探してるのよー！」

「……医者を探してるだつて？ 何考えてるのよ、こんな場所に医者なんているはずないでしょう」

「ふふん、とぼけても無駄よ。あたいのお師匠は何でもお見通しなんだからね！ ここにはお師匠の足を治せる医者がいるはずなのよ！」

まあ、正確には薬師だけだね。

二次創作では万能ドクターになってることが多かったから、実際に

はどうかまだ分からないけど。

それに、チルノはいつの間にか足が治ると信じきっているが、私としては可能性は半々か、それ以下だと思っている。

とにかく、可能性を求めて来たのだ。

「先程のことは、本当に深く謝罪する。だから、力を貸して欲しい」「私の？」

「ああ、案内が必要だ」

私の唐突な頼み事に、妹紅は訝しげな表情を浮かべていた。当然だろう。

彼女は私を知らないのだ。

だけど、私は彼女を知っている。

この場所を知っている。

そして、ここから更に隠された場所と、そこに住む者達を知っている。

「案内って……何処へよ？」

神妙な問い掛けに対して、私は答えた。

「永遠亭だ」

其の十九「永遠亭」

——最初の300年は人間に嫌われて身を隠していた。それを『人生』と呼んでいいものか分からないが、死を失った人生が如何なるものか、身に染みて理解出来た時間だった。

知り合った人達は、当たり前のように自分より早く死んでいく。死に別れ、出会い、また死に別れ——。

そもそも死に目を看取るまで傍に居られることの方が稀だった。

大抵は、年老いることのない自分の異常性が、時の流れの中で川底に埋まった石のように緩やかに浮き上がる。

そして拒絶される。

当たり前前のことだった。自分の周りに居るのは、誰もが死ぬ人間なのだ。

死なない人間に関わった者達は、皆大抵不幸になった。

老いて死んでいく自身と若く死なない相手を比べて、妬み、焦がれる妄執に囚われた者もいた。

得体の知れないモノの仲間として一括りにされ、共に住む場所を追われることもあった。

その結果、自分に向けられる恨み辛みを抱えたまま死なせてしまったことも多い。

冥福を祈る資格さえ、自分には無いのかもしれない。

死なずに生き続けるということは、ただそれだけで周りに迷惑をかけるのだと悟り、身を隠すようになった。

——その次の300年は世を恨み、妖怪を退治することでそれを晴らしていた。

生きとし生ける者達は、皆必ず死んでいく。人間だけではなく、動物も、虫も。

ただ妖怪はその限りではなかった。

死なない自分と同じ、刀でも矢でも斃れない存在達。

ならば、自分もまた妖怪と同じか——。

浮かんだ考えに激しい怒りが湧き上がり、それは恨みとなって妖怪

達に向けられた。

表向きは、人間を襲って食らう者達を退治することで、人間の為の善行を積み、それが自分なりの人間との繋がりなのだと思っていた。思い込もうとしていた。

ただ、本当は——自らの境遇への恨み辛みが世の中へ広がり、それが矛先を求めて、ただ妖怪相手に落ち着いただけの話だった。

——次の300年は死んだも同然の日々だった。

誰かの仇討ちを誓った者。何かを妬んだ果てに狂った者。生来そういう悪意を滾らせる者。

激しい感情の果てに力尽きて死ぬ者達は、まだ幸いである。

そこに『死』という終わりが在るのだから。

どれだけ繰り返し返しただろう。妖怪との殺し合いで感じる、生きるか死ぬかの瀬戸際の思いさえ磨耗して無くなり始めていた。

生きる？ 死ぬ？

そんなものは自分には存在しない。

終わりさえない。

妖怪退治の果てに殺されることと、ただその場に座り続けて餓死することの違いさえ分からなくなった時、自分は既に疲れ果てていた。

——そして次の300年で、この幻想郷へ辿り着いた。

ここで様々な出来事が起こったが、ただ一つだけ不可解なことがある。

生きる意志は磨耗し、心底疲れ果てて足を止めていた自分を、この場所まで辿り着かせたものは一体何なのだろう？

希望や執着などといったものは、そこに至る年月でとつくに擦り切れて無くなっていたはずなのに——。

三界の狂人は狂せることを知らず

四生の盲者は盲なることを識らず

生まれ生まれ生まれ生まれて生のはじめに暗く

死に死に死に死んで死の終わりに冥し

この世の迷える人々は、自らが迷っていることを知らない。

何故、何度も生まれ変わり、そして死んでいくのかを分らない。人間が自分自身に対して驚くほど無知であること——それはきつと事実なのだろう。

輪廻転生から外されながらもこうして千年以上過ごしてきて、何かを悟れたためしが無い。

誰かが、あるいは誰もが『人間は過ちを繰り返す』と悟ったように語る。

本当に悟っているのならば、その繰り返しの何処かで歯止めを利かせるはずなのに。

人は無知であるまま、繰り返す。

ならば、自分もまだ人間のままなのかもしれない、と心が僅かに揺れる。

それが嬉しいことなのか、悲しいことなのか。長く生きすぎた自分にはもう分らない。

ただ、この終わりの無い人生の中で、気が付けば何度も同じことを繰り返している。

恨み辛みも、悲しみも後悔も、嫌というほど経験した。

期待すれば、いずれ必ず失望し、最後には絶望した。

もううんざりだと、何度も思った。

苦しみに繋がる全てに対して、関わらなければ良いのだと心底思い知った。

だけど、ほら。

気が付けば、また。

——立ち止まり、時の流れにさえ置き去りにされて、結果この世で独りになることを恐れている。

気が付けば、誰かに縋りつく為に必死で再び歩き出している。

諦めは訪れず、迷いが蘇り、同じことの繰り返し。

その理由さえ、自分は知らないのだ。



「現役を退いた博麗の巫女『先代』と、普段は霧の湖に住んでいる氷の妖精『チルノ』ね」

「あんたはもこたん」

「妹紅よ！ 藤原妹紅！ もこたんって呼ぶな！」

妹紅とチルノが騒がしく言い争う傍らで、先代は手荷物である風呂敷を広げていた。

各々が手ごろな石の上に腰を下ろし、それを中心に囲んでいる。

時刻はお昼時。先代とチルノはここに至るまで歩き詰めだったこともあり、自己紹介や事情説明などの交流を兼ねた休憩をとるようになったのだった。

妖怪化した獣が生息し、竹に囲まれて死角も多く、のんきに休めるほど安全な場所ではなかったが、三人の内誰一人として気を張っていない。

自分や妖精はともかく、こいつはどうなんだ？ と妹紅が一番得体の知れない先代へ自然と視線を移していた。

「博麗の巫女っていうのは、少し聞いたことがあるわ。尤も、すぐにこの竹林に住むようになって、外の情報はあまり聞かなくなっただけ」
「お師匠はね、サイキョーのハクレイって呼ばれてるんだよ。なんてたって、あたいに勝ったんだからねっ」

「……ま、只者じゃないっていうのは分かったわ」

ツッコむのも面倒だとばかりに、妹紅は聞き流した。

目の前の人間が強いという点だけは、身に染みて納得出来る話だった。

「一番新しい博麗の巫女の情報は、スペルカード・ルールに関することね。」

今じゃあ幻想郷の管理者だっけ？ そんな立場なら、普通じゃ入ってこない情報も手に入れられるってわけね」

「ああ。永遠亭の情報も、そういった伝手から聞いた」

「なるほど。あの八意永琳が医者だったっていうのは、私も初耳だわ」
妹紅は先代から、彼女達が迷いの竹林を訪れた事情を簡単に聞き及

んでいた。

閉じ籠るようにしてこの場所に長く住み着いていた為か、外からの情報が入ってこない代わりに内からも情報が出ていかない、隔絶した状況であると思ひ込んでいた。

しかし、実際は違うらしい。

自分だけが関わっていると思っていた永遠亭という場所に関してはもちろん、そこに住む者の情報まで先代は知っていたのだ。

中には自分さえ知らない情報もあった。

八意永琳という人物の背景がその一つだ。

「妹紅は永琳について何も知らないのか？」

「あー、うん。名前と、あとは実際に会って感じた人となりくらい。どんな仕事をしたかなんて知らなかったわ」

妹紅は言葉を濁しながら答えた。

先代が永遠亭を中心とした何処までの情報を掴んでいるのかが分からなかった。

あそこの住人と自分との人間関係は、出来れば知られたくない部分が多い。

その繋がりが、自分自身の情報にも及ぶかもしれないからだ。

不明瞭な部分は下手に触れずにいたかった。

元々口数が少ないのか、先代は余計なことは話さず、逆に尋ねたりもしなかった。

他人との交流をあまり深めたくない妹紅にとって、それはむしろありがたいことだった。

——あるいは、彼女が自分の正体を知っているのかどうか、明白にしたくなかっただけなのかもしれない。

「お師匠、お弁当って手作り？」

「いや、元々は一人で食べるつもりだったからな。おむすびだ」

「ひよっとして、前食べさせてくれたヤツ？」

「ああ」

「そっかー。ま、いいや。あれ、食べると元気が出てくるし！」

チルノが妖精でなければ、親子同然としか見えないようなやりとり

に、妹紅は自然と口元を綻ばせていた。

人と話すのも久しぶりだ。

ましてや、こんな暖かな団欒を見たのは随分と昔に思える。

世捨て人を気取っても、結局自分は飢えているのだな、と。自身の中で急速に蘇り始めた人間的な感性に、妹紅は自嘲していた。

「――食べるか？」

目の前におにぎりを突き出され、妹紅は我に返った。

「え？」

「お昼、食べてないんだろう？」

「あ……ああ。でも、いいよ」

「遠慮すんな、妹紅も食べなさいよ！」

「何であんたが自分の物みたいに勧めるのよ。もう食べてるし……」

いいよ、二人で食べな。元々一人分の弁当なんだろう。ほら、二つしか入っていないじゃないか」

おにぎりを包んでいた竹皮には、もう一つも残っていなかった。

しかし、先代とチルノは顔を見合わせて悪戯っぽく笑った。

「へへん、そう思うでしょー？」

妹紅におにぎりを半ば強引に持たせると、先代は空の包みを一度閉ざして、すぐに紐を解いた。

すると驚くべきことに、再び包みを開いた時には新しいおにぎりが二つ、そこに並んでいたのだ。

妹紅は驚きに眼を見開き、自分の持つおにぎりとお包みの中のそれを何度も見比べた。

その様子がおかしいのか、大笑いするチルノと、妹紅の見る前で新しいおにぎりをこれ見よがしに食べてみせる先代。

「すごいでしょう？ お師匠の宝物なのよ」

「見ての通り、食べても減らないおむすびだ。美味しいぞ」

呆気にとられながらも、先代に促されるまま妹紅も口に含んでみる。

ほんのりと暖かく、柔らかい米の感触が口全体に広がった。

改めて考えてみれば、握ったばかりの物のように米が暖かさと柔ら

かさを保っている時点で普通のおにぎりではない。

狐につままれたような気分だったが、ただ一つハッキリと『美味い』とだけ思った。

チルノの言うとおり、本当に元氣まで出てくるような気がする。

「鬼が仙人からもらった物を、更に私が鬼から譲ってもらったんだ」「……あんだ、本当に何者よ?」

信じられない単語が、次々と何でもないことのように口から飛び出す目の前の人間を、妹紅は改めて凝視していた。

呆然と眩きながらも、口は米の感触を味わっている。

本当に美味かった。

単純に味だけの話ではなく、暖かい米など久しぶりに味わっていた。

いや、そもそも食事さえも。

おにぎりを一つ食べた直後なのに、腹が空腹を訴えるように鳴った。

「もう一つ食べるか?」

「いや、さすがにそれは……」

「足りないんだろう。食べてないのは、お昼だけじゃないのか?」

「まあ、その……三日ほど、何も」

妹紅は思わず白状していた。

別に食うに困っていたわけではない。むしろ困ることなどなかったから、食わなかったのだ。

しかし、妹紅は詳しい事情を説明する気にならず、口を噤んだ。

探るように視線を二人に向ければ、ほとんど睨むような眼つきでこちらを見ていた。

「食え」

問答無用の迫力で、先代がおにぎりを突き出してくる。

「そうだ、食え! ご飯はちゃんと食べないといけないんだぞ!」

誰から教わったものか、妖精らしからぬ内容の言葉を添えて、チルノもおかわりとして取っていたおにぎりを差し出していった。

断れる雰囲気ではない。

そして、断る気もなくなってしまった。

「ああ、その……いただき、ます」

恐縮しながらも、顔には自然と笑みが浮かんでくる。

訳も無く嬉しかった。

おにぎりを受け取った妹紅は、もう遠慮せずにそれを口にしました。

美味かった。

飢えが満たされていくのを感じた。

それはただ単に空腹に関することだけではなく――。

「慌てて食べるな。ほら、水だ」

「よっぽど腹減ってたんだな」

水筒を受け取りながらも、妹紅は飯をかきこむのを止めなかった。

腹が久しぶりの栄養を欲した為ばかりではない。食べることに集

中しなければ、どうしても二人を見てしまう。

妹紅にはそれが恥ずかしく、そして何故か涙が出そうなほど苦しい

のだった。

◇

本来なら知られるはずのない永遠亭の情報が私に知られている。

この怪現象は、八雲紫の仕業に間違いはないっ！

おのれ、ゆかりん！ ゆゝるゝさゝんゝっっ!!

――ごめん、紫。他に情報源の捏造として適切な人物が思い浮かば

なかったよ。

本人の知らない間に黒幕に仕立て上げられてしまった紫に対して、

内心土下座する私。

妹紅や永遠亭の存在は、本来は永夜異変によって露見するものである。

もちろん未だその異変は起きておらず、本来知り得るはずのない情報を私が知っている理由として、一番適切な博麗の巫女としての立場とそれに関わる紫の存在を使ったのだ。

細かく指摘されたらあっさりボロが出そうなカバーストーリーな

ので、口数が少ないのをいいことに、あえて大雑把に妹紅には説明した。

結果的に、思ったよりも突っ込んだ質問をしない妹紅自身にも助けられ、永遠亭への案内の話などは納得してもらえたようだ。

博麗の巫女という立場だけで説得力も得られたようで、紫のことで説明しなくてもよかったのもありがたい。

……でも、同じように説明することになるだろう永琳などには、きつと紫に責任を被せることになっちゃうんだろうな。

まあ、そういう暗躍する印象と立場が定着してしまったせいもあるのだが、今回はそれを心苦しくも私が利用する形になってしまった。

尤も、後々紫と永琳辺りが話し合って、互いの辻褄を合わせるようなことを始めてしまったら、あつさり矛盾に気付かれてしまう危険性もあるが――。

その時は仕方ない。最後の奥の手も考えてある。

……どちらにしろ、嘘を吐くっていうのは変わらないけど。

まさかゲームや二次創作で知りました、とか言えないよ。

うう……っ、仕方ないとはいえ、罪悪感とストレスが溜まっちゃうなあ。

こんなことを話せるのはさとりしかいない。

今度、また地霊殿に遊びに行こう。無理なら紫に頼んで会話だけでもさせてもらおう。

こうして嘘を吐いてまでこぎ着けた永遠亭行きである。

結果がどうなるかは分からないが、少なくとも永琳に診てもらうまでは何とか話を持っていききたい。

紫まで巻き込んで強行してしまったことに疑問を抱かないわけじゃない。やりすぎかとも思う。

しかし、私は春雪異変の時に紫達が起こした行動とその動機を忘れてはいない。

私の足は自業自得だ。今更後悔は無い。

ただ、やれるだけの手を尽くすまでは、治療を諦めてはいけないのだ。

私は改めて決意を固めていた。

事情を妹紅に説明してからは、まずお昼ごはんを兼ねた休憩をとることにした。

当初は一人旅になると思っていたので、手を抜いておかずは持つてこなかったが、代わりに勇儀から貰ったあのおむすびを持つてきていた。

幾ら食べても無くならない超便利な仙人の食べ物である。

ちなみに私の宝物。

いや、むしろこれは家宝にしよう。私が死んだ後には、遺産として霊夢に相続するのだ。

純粹に美味しい、『うしおとら』で出てきた物と同じ物を食べているような気がして、その思い入れが更に味を上げている。

あと不思議なことに、食べると気力や体力が充実するんだよね。

ひよっとしたらMP回復的な効果も隠されているのかもしれない。以前食べさせてあげたこともあるチルノと、今回は妹紅にも分けて食べる。

妹紅が意外とひもじい思いをしていた事実には驚いたが、丁度いいことにこっちは減らないおむすびだ。腹いっぱいになるまで食わせてやろう。お米食べる！

涙が出るほど美味かったらしい妹紅と食後の談笑をして、その流れで自然と永遠亭への案内もしてもらえることになっていた。

嬉しい話だが、妹紅と仲良くなれたことがもつと嬉しい。

やっぱり人間、物を食うっていうことは重要だな。

同じ釜の飯を食べば、もう仲間なのだ。

「もうそろそろ着くよ」

妹紅の案内の下、今度はしつかりとした進路を取って竹林を歩いていた私達は、目的地が近いことを告げられた。

「最初に言っておくけど、私は永遠亭の奴らとは友好的な関係じゃないわ。中まで付き添うつもりはないし、要求に関して口添えも出来ない」

妹紅の事前の注意に対して、私は素直に頷いて返す。

ま、さすがにそこまで期待は出来ない。

二次創作によつては、妹紅と永遠亭の関係が意外と良好なパターンも結構あるのだが、そうそう上手く話は進まないということだろう。元から永琳には私が交渉するつもりである。

……といつても、普通に頭下げて頼み込むくらいしか思いつかないけど。

月の頭脳とまで呼ばれる最強の知能派相手に、駆け引きとかやるだけ無駄だしね。

せいぜい、先程の説明のボロだけ出さないように気をつけましょう。

そうして考えながら歩みを進めていると、不意に近づいてくる気配を一つ察知した。

「妹紅、何か近づいてくるぞ」

「……分かった。永遠亭付近は獣も近づかない。知ってる奴かもしれない」

「でも、敵かもしれないでしょ。お師匠は下がってて」

「お前も下がってるんだよ」

「なによ、弱つちいクセに！ あたいの前に出るな！」

「お前よりは強いわ！」

既に定番となりつつある二人のやりとりが始まってしまった。

敵でないことを祈りながら、私は気配のする方向を睨む。

一応、護身用の手段は用意してあるからね。

「――あーらら、これマジ？」

竹林の向こうから現れた人物は、何故かこちらを見て驚いていた。私の腰ほどしかない、チルノとどっこいな小柄な身長。垂れ下がった兔の耳。

何かの作業中なのか、鉈や縄といった道具を持っている。

私の知識にある妖怪だった。

思わず名前を呟きそうになるのを堪える。

「ああ、よかった。てめだったのか。まだ話が通じる相手だわ」
妹紅が安堵のため息を洩らした。

現れたのは『因幡てゐ』だった。

永遠亭に住んでいるが、元々はこの竹林に棲んでいた妖怪鬼である。

妹紅にとっては永遠亭の住人との関係も薄い、比較的友好的な相手だった。

つつーか、二人って知り合いなのね。確か原作では明確な繋がりは示されてなかったはずだから、ちよつと意外。

「妹紅、そいつら何？」

「見ての通り人間と妖精よ。永遠亭に用があるらしくて、竹林の外から来たつてさ」

「……永遠亭に？ 本当にそいつらが永遠亭のことを言ったの？」

「ああ、人間の方は博麗の巫女の先代らしくてね。情報はその伝手から——」

「いや、ちよつと待つて。事情はともかく……拙いわ。よりによつて外の人間を連れてくるなんて」

気安い態度で話す妹紅だったが、一方のてゐは何故かどんどん深刻そうな表情へと変わっていった。

幼い見た目からは想像も出来ない重い雰囲気漂っている。

私は言い知れぬ不安を感じ始めていた。

予想していた因幡てゐというキャラクターの反応とあまりに違いくすぎる。

なんというか、彼女つてこんなに真面目に考え込むような性格だったか？

それとも——そうせざるを得ないほど、今の状況が拙いとも言うのか？

「とりあえず、そいつら連れてここから離れて……いや、無理かあ。いくら鈴仙がドンクサイつて言ってもねえ、緊急事態だし……」

こめかみを押さえ、独り言をぶつぶつと呟いている。

その様子には妹紅も違和感を抱いているのか、訝しげな表情を浮かべた。

「ちよつと。どうしたのよ、てゐ？」

「あー……妹紅。それとあんたら」

てるは諦めたようにため息を吐くと、私達全員を見据えて言った。
「とりあえず話し合いは無理だから。なんとかここは凌いでね」

悪戯っぽく笑おうとして失敗したような苦い表情を、てるが浮かべる。

「何を——っ」

話を終えた瞬間、竹林の隙間から数発の光弾が降り注いでいた。

気配は全く察知出来なかった。

完全な不意打ちである。

そして、これは明らかに弾幕用に威力を抑えた攻撃ではない。

——回避は不可能だった。



「何を——っ」

てるの言葉の意味を察するより早く、妹紅は迫り来る複数の弾丸を捉えた。

彼女には見覚えのある攻撃だった。

それ故に動揺は他の二人よりも小さく、代わりに胸の内で悪態を吐いた。

「やめろ、鈴仙！」

空中から滲み出るように鈴仙・優曇華院・イナバは姿を現した。

しかし、その瞳は既に冷徹なまでの覚悟で固まっている。

戦闘者として切り替わった時の彼女の眼つきだった。

放たれた弾丸は当然のように止まらない。

その全てが殺傷を目的とした物だと悟ると、妹紅は咄嗟に射線上へ体を滑り込ませた。

躊躇している暇は無かった。

両手を広げ、自らが盾となって先代とチルノを庇う。

やはり前に出ていて正解だった、と場違いな安堵を感じる。

同時に不安と後悔も感じていた。

二人を守ることに對するものではない。その結果、自分が攻撃を受け、おそらく死んでしまうだろうことに對してだった。

——私が『死んだ後』で、こいつらはどんな眼で私を見るんだろう？

それだけが唯一気に掛かった。

刹那の葛藤を解消するように、飛来した弾丸が妹紅の体に着弾した。

妹紅は頭部と共に意識を吹き飛ばされ、そして死んだ。

「あ……」

先代が眼を見開き、チルノの口から意味の無い言葉が洩れる。

実体を持たない光の弾丸は、貫通力こそ無かったものの、着弾と同時に炸裂することで殺傷力を高めるタイプだった。

妹紅の肉体の各所が弾け飛び、血と肉片が宙に散らばる。

誰が見ても確実に絶命する瞬間だった。

力なく倒れ込む妹紅の体を、先代が咄嗟に受け止めていた。

チルノは一連の出来事を眼で追い、そして遅れてやって来た現実感に歯を食い縛った。

「も……こ……うっ！」

呻くように名前を呼ぶ。

それが意味の無い行為だと痛いほど分かっている。

チルノは知っているのだ。

人が死ぬということの意味を。

「鈴仙、警告も無しってのはちよつと酷いんじゃない？」

「酷くないわ、むしろ失敗よ。あつちに当たっても意味ないじゃない」
襲撃者である鈴仙は、てると言葉を交わしながら地面に降り立った。

それを見るチルノには、はつきり言つて事情や状況などまるで分からない。

あのてるという兎も敵なのか？

あの鈴仙という奴は本当は妹紅ではなく自分達を狙っていたのか？

分からない、が。次に起こす行動は決定していた。

あいつは、妹紅を殺したのだ。

「お前……！」

妖精らしからぬ激情がチルノの口から溢れ出していた。

「妹紅を、殺したなあっ!!」

瞬時に氷塊を生み出し、鈴仙に向けて発射する。

弾幕ごっこそのそれではなく、明らかな敵意と殺意を形にした攻撃だった。

先端が鋭利に尖ったミサイルのような氷塊が、高速で鈴仙とてゐる目掛けて襲い掛かる。

「ちよおつと!? あたしや無関係だってばー!」

「あんた、裏切る気!? っていうか、何よこいつ! 本当に妖精なの!?!」

てゐるは素早く攻撃を回避し、鈴仙は動揺しながらも回避と迎撃を同時に行っていた。

銃の形を模して突き出した指先から、先程の光の弾丸を連続で放ち、飛来する氷のミサイルを撃ち落としながら、同時にチルノ自身も狙い撃つ。

チルノは氷の盾を生み出すことでそれらを防御した。

盾に当たった瞬間、爆発するはずの弾丸は一瞬で凍りつき、全ての運動を停止する。

「嘘?」

「殺すなよ……! 人を、殺すなよ!」

激しい敵意を漲らせながら、同時にチルノは何かの痛みを堪えるように眼に涙を溜めていた。

食い縛った歯から、搾り出すように言葉が洩れる。

「人間はなあ、死んじやうんだ! 死ぬっていうのは、とつても辛くて、苦しくて……我慢出来ないことなんだよ! バカア!!」

自分の今の感情を表現することが、チルノには上手く出来なかった。

言葉を知らない頭の悪さが心底嫌になった。

ただ、一度経験したことがある最悪の気分を、今再び味わっていることだけは分かった。

「元はと言えば、お前らがここまで侵入してくるから……!」

「あ、鈴仙。アレやばいかも」

てゐるが指差す先は、チルノではなく傍らの先代の方だった。

妹紅を抱えたまま一步も動いていない。

杖を手放していた。これでは動けないのも当然だ。

しかし、代わりに空いた手の中には別の物が握られていた。

「……チルノの言うとおりだな」

白と黒が交わった球体。

手のひらで覆えるほどの小型の『陰陽玉』だった。

それが僅かな霊力を纏って高速で回転している。

今はただそれだけだったが、鈴仙の瞳には全く違う光景が映っていた。

「なに、あれ……波長が滅茶苦茶に……!」

回転の速度が上がると同時に、纏っていた霊力が爆発的に膨れ上がった。

「私も、我慢出来そうにないっ」

普段の先代を知る者ならば意外に感じるほどの、激情を押し殺した声だった。

先代は明確に狙いを定めて、鈴仙を攻撃した。

回転する陰陽玉を投げつける。

人の手で投げられた物とは思えないほどの速度と力を伴って、弾丸と化した陰陽玉が飛来した。

チルノの時と同様、鈴仙は咄嗟に銃撃で撃ち落とそうとする。

しかし、放たれた光弾は陰陽玉に接触した瞬間、その螺旋状の回転に巻き込まれるようにして掻き消えてしまった。

「な……っ!」

僅かさえ勢いは衰えず、陰陽玉が鈴仙の肩に直撃する。

凄まじい衝撃が当たった一点から全身に伝播し、体がきりもみしなから宙を舞った。

並び立つ竹にぶつかり、跳ね返されて地面に落下する。
鈴仙は立ち上がれなかった。

激突のダメージではない。最初に陰陽玉に当たった時受けた衝撃が、指先に至るまで身体機能を麻痺させていた。

こんなことが在り得るのか？

衝撃を受けた一点が損傷するのではなく、威力が異常なまでに分散して体中に行き渡っている。

結果、傷を負うことはなかったが、完全に体の自由を奪われてしまった。

必死の思いで顔を上げれば、まるでそれ自体が意思を持つかのよう
に、先代の掲げた手の中へ舞い戻る陰陽玉が見えた。

これで再攻撃が可能になった。

チルノの戦意も消えていない。

「クソ……ッ、ここから先は、絶対に……!!」

「あんたら、ちよつと待ってくんない？ おかげで話し合いの猶予は
出来たみたいだからさ」

緊迫する状況の中へ、場違いなほど軽い調子でてるが割って入って
いた。

「お前、何言ってるんだ!?!」

「怒んなよ、妖精。そっちの人間さんの冷静さを見習いなって」

「……チルノ」

「駄目だ！ あたいは絶対許せない……っ!」

完全に頭に血が昇っているチルノには、既に周りの状況が眼に入っ
ていなかった。

自分の背後で起こっている現象さえ。

「——妹紅」

てるは諦めたように頭を掻いた。

「あんたからも何か言ってるくんない?」

「……………え?」

てるの言葉の意味が分からず、チルノは思わず呆けてしまった。
無言でてるが後ろを見るように促す。

チルノは後ろを振り返った。

「……怒ってくれてありがとうよ、チルノ」

そう言つて、妹紅が苦笑していた。

チルノは何度も瞬きして、それが夢や幻ではないことを確かめた。

「妹紅……？」

「うん、そうだよ。私だ」

妹紅は少し恥ずかしそうに頷いた。

信じられないことに、彼女は生き返つたのだ。

鈴仙の銃撃を受けて吹き飛んだ箇所は現在進行形で再生している。

その再生は奇妙なものだった。

無くなった肉片の代わりに傷口から炎が燃え上がり、それが少しずつ形を整えながら実体化することで新しい肉体となっているのだ。

やがて全ての炎が消えた時、そこには傷一つ無い妹紅の姿があった。

「私はさ、死なないんだ」

支えられていた先代の腕から離れ、立ち上がる。

妹紅は服の埃を払う仕草をしながら、実のところただ単に先代とチルノから必死に目を逸らそうとしていた。

「蓬莱の薬っていう物を飲んで、不老不死になったのよ」

心の準備をするように深呼吸を一つ挟み、意を決して二人に顔を向ける。

意識が途切れたのは数瞬だ。死から蘇り始めた時、先代とチルノが自分の為に怒るのが見えた。

それが本当に嬉しかった。

それで十分だと思った。

だから、蘇つた自分を見た二人がどんな反応をしようが構わないと、潔く諦めがついた。

「ごめんね。私は、まともな人間じゃないんだ」

妹紅は困つたように笑い、後はただ静かに二人の言葉を待った。

しばらくの間、沈黙が続く。

「……よかった」

チルノの眩きあまりにも弱々しく、小さなものだったので、妹紅は一瞬幻聴かと本気で思った。

「よかったあ……。妹紅、生き返ったのかあ」

「……え？」

「よかったあ……。っ！」

チルノは全身から力が抜け落ちるように、その場にへたり込んでしまった。

眼からは涙が溢れている。ただ、それは心の底からの安堵によるものだった。

チルノは泣きながら笑っていた。

「ああ……。よかった」

そして、先代は噛み締めるように呟いていた。

こちらにも隠し切れない安堵が僅かに表情に出ている。

「あの……。その……。ええ？」

ある意味最も想定してなかった事態に、妹紅はただひたすら混乱していた。

悪いことではない。

自分にとって、決して悪いことではないが——どうすればいいのか、全く分からなかった。

「よかった……。妹紅、生きててよかった！」

「あ、うん。よかった……。かな？」

「よかったに決まってるよ、バカ！」

「……。あんた、バカって言いすぎ」

「バカしか言えないわよ、バカア！」

とりあえず、泣いているチルノの傍に慌てて歩み寄れば、そのまま抱きつかれた。

何が何だか分からないまま、こうしてもう一度変わらない会話を交わせることが酷く嬉しく思える。

視界の片隅に映る、見守るような先代の瞳がむず痒かった。

そんな三者三様を楽しむように眺め、ニヤニヤと笑いながら歩み寄ってくる。

鈴仙は未だに動けなかった。

「とりあえずさあ、お話し合いしましょう?」

てゐるは自分の背後を指差しながら提案した。

その方向は、永遠亭があると思われる方向だった。

◇

少し真面目な話をしよう。

私は目の前で人が死ぬのを見たことがあるし、知り合いが死ぬという経験もしたことがある。

でも、私の目の前で死ぬのは妖怪退治をしていた時に出会った被害者ばかりだったし、親しい人間は皆寿命や病気で亡くなっていた。

——つい先程まで会話し、笑い合っていた仲間が目の前で殺される瞬間に立ち会った経験はただの一度も無い。

妹紅が目の前で頭を砕かれて死んだ時、正直胸が冷えた。

状況が不意打ちだったこともあるが、その瞬間私の脳裏からは『妹紅が蓬萊人である』という知識は消え失せていた。

腕の中に倒れ込んでくる妹紅の死体の重みが、支えきれないほど押し掛かっていた。

五十年以上生き、生死の掛かった戦いを何度も越えて、人並み以上に経験を積んでいると自負していたが、それでも心が対処しきれない事態というのはあるものだ。

知識にあるとおり、妹紅が復活した瞬間に感じた深い安堵を思い出し、私はしみじみと実感していた。

とりあえず、永遠亭の近くで起こった一連の出来事に関する一番の感想はこうだ。

——よかったああ〜！ 妹紅が蓬萊人で、本っ当によかったああ……っ！！

くっそ……安心しすぎて涙が出そうだよ。

妹紅が殺された時には、本当に一瞬我を失いそうになった。

必ず復活すると事前に知っていなければ、私もチルノのように鈴仙

を全力で攻撃していたかもしれない。

それくらいショックな光景だったのだ。

実際、理屈だけでは激情を抑えられず、陰陽玉で攻撃までしてしまった。

本来は護身用に用意してた物だったんだが――。

ちなみにこの小型陰陽玉は霖之助が作ってくれたレプリカである。足が動かなくなって機動力の無くなった私の為に、遠距離攻撃用の武器としてプレゼントしてもらったものだ。

袖に隠せるほど小さいのに、本家の陰陽玉と同様、博麗の力を増幅する機能を持ち、私の意思一つで自在に動かせる。

……が、しかし。

もちろん、なんちやって博麗な私に使いこなせる代物ではない。

単純に霊力を込めて、それを『黄金の回転』によつて増幅させてぶつけるくらいの方法でしか活用出来ないのだ。

つまり『回してぶん投げる』というワンパターンの使い道しかない。物を投げる――なんという原始的な攻撃手段。

私、文明人から退化してね？ いやいや、回転は『技術』だッ！

しかし、なかなか効果的ではある。鈴仙相手に実践してみせたとおりだ。

回転といつても、元ネタであるジャイロのように様々な効果を発揮出来るわけではなく、私では増幅した力を集中して打ち込むか、分散させて放つかの二通りしか出来ない。

鈴仙にぶつけたのは分散タイプ。怪我をさせずに無力化してみせた。

衝撃が広がるので、一瞬なら弾幕も広範囲でかき消せるのだ。

とはいえ、この回転は不完全らしく、冥界で霊夢を見ながら回した時のような凄まじい力は今のところ発揮出来ない。

この技術に関しては、まだまだ要修行といったところか。精進、精進。

――さて、そんな騒動を経て、現在私達は念願の永遠亭に辿り着いていた。

ここまでの道中で、説明を求めると鈴仙に事情はある程度話してある。

妹紅相手にも話した内容なので、詳細は省略っと。

鈴仙は終始警戒を解かなかったが、てゐの方が意外にも永琳との対面を取り持ってくれたのだった。

『いくらなんでも、最初から殺す気で仕掛けるなんてこっちの対応ミスだもんねえ。』

ま、これで鈴仙のことは勘弁してやってちよーだいよ。妹紅以外の奴が永遠亭を訪れるなんて、正直不穏な可能性以外考えられなかったからさ』

飄々とした態度で、てゐは私達にそう伝えた。

まあ、確かに本来なら在り得ない来訪なわけだが……それでもそこまで警戒することかね？

妖怪の山とは違って、排他的なイメージは無いのだが。

原作の異変では、永遠亭のことが知られた後で結構友好的に人里などとも交流し始めていたはずなのだ。

……私がおか見落としているのかしら？

鈴仙との間には不穏が残ってしまったが、兎にも角にも本来の目的である永琳との対面は無事完遂したのだった。

そして、今。

私の目の前には八意永琳がいる。

「初めまして。私が八意永琳です」

丁寧な自己紹介の挨拶だった。

しかし、必要以上に深く頭は下げない。

私にはそれがこちらを警戒しているからだと分かった。

「貴女が先代の博麗の巫女ですね。武勇は常々伺っております」

「竹林の外の出来事を知っているのか？」

「ええ、常に探っております」

妹紅とは違う。外部情報を収集して、明らかに『外から入り込むモノに備えているぞ』という警告染みた意図を感じる。

うーん、壁を感じるなあ。

永琳の待つ部屋へ通されたのは、私一人だけだった。

妹紅は永遠亭に入らず、チルノはてゐるが細かい事情を聞くという名目で別の場所へ連れ出している。

上手い具合に互いの位置を分散させられてしまった形だ。

多分、姿の見えない鈴仙は、本当に不可視状態になって私達を見張っているのだろう。

ここに来た目的は全部話したはずなのだが――。

「あまり、畏まらないでくれないか」

とりあえず、永琳に敬語をやめてもらう。

年長者という意味では、私よりも遥か格上の存在なのだ。

敬語とか、こっちの方が恐れ多いっつーの。

「私はただ、治療を受けたいからここへ来たんだ。私の方がお願いをする立場だ」

「……そう、分かったわ」

永琳は納得したように頷いてくれた。

もちろん、形だけ。

表情には全く出ていないが、なんか更に警戒する気配が強まったように思える。

な、何故だ……状況が悪化しているような気がしてならない。

私の言動で、何かおかしな部分あったか？

「障害を負ってしまった足を診察し、可能ならば治療して欲しいとの話だったわね？」

「そうだ」

「治せる保証は無いわよ」

「ああ、分かっている」

「そう――では、まず診察から入りましょう」

話自体はなんとかスムーズに進んでくれた。ありがたい。

けど、まあ予想はしてたけど、永琳相手だと妹紅みたいに簡単には友好状態になれないみたいね。

恋愛ゲームだったら攻略難易度高そう。

それにしても、診察を始めるというが……本当にここでやるの？

なんかどう見ても私室って感じで、診察する為の設備が全然無い。私も診療所なんて経営しているから、畑違いとはいえ、ある程度の内装は分かっているつもりだ。

机の上に何かのメモが散らばっているし、部屋には私物と思われる本棚まである。

私が座る椅子なんか、別の場所からわざわざ持って来た物だ。本当にここ、患者を招く為の部屋なのか？

「診察に入る前に、幾つか質問させてもらおうわね」

内心疑問だらけな私を尻目に、永琳は静かに言った。

「——どうして私が医者だなんて思ったの？」

それは、全く予想していない問い掛けだった。

「私は医者ではないわ」

「……だが、薬を」

「確かに、個人的に薬物の調合や研究を行ってはいる。

だけど、それを商売にしたことはない。薬師をしていると周囲に宣伝した覚えはないし、実際に誰かを治療したことなんて一度もないわ」

「……」

『『永遠亭に来れば治療を受けられる』——そもそも、その発想は何処から来たの？』

内心、絶句である。

表面上はポーカーフェイスを装いながら、内側では物凄い勢いで冷や汗が流れ始めていた。いや、本当にこっちの動揺は見抜かれていないのか？

私はようやく自分の大失敗を悟ったのだった。

そもそも前提からして間違っていたのだ。

永遠亭が医療に関係する場所なのだと、無意識に思い込んでいた。——永遠亭の存在が知られたのは異変の後。そして、人里で薬売りをはじめたのも、異変の後からだ！

つまり、異変より前の永遠亭が何を営んでいたのか何も確定していない。

いや、そもそも永遠亭は商売なんてしていないっ。

や、やばい……これじゃあ『患者として来た』とか言ってた私なんて、永琳から見れば不審者そのものじゃないか！

「……貴女が薬に関わっているという情報を」

「そこで、何故これまで治せなかった足の治療がここでは可能なのだと思えるのか、根拠が分からないわね。」

仮に貴女がそう思えるだけの、私が見つけた技術の情報を得ていたとしましょう。そこまでの情報が一体何処から伝わったのか？ これも疑問ね」

「博麗の巫女だった私には特別な伝手が——」

「八雲紫のことね。幻想郷の管理者である妖怪のことは、十分に下調べしているわ。」

彼女の実力を踏まえた上で、私は自身が完璧だと思える隠蔽をこの永遠亭全体に施していた。

八雲紫は、この永遠亭の存在すら知らないはず。……そう、『はず』ね。私の能力と想定を遥かに上回るほど、八雲紫という妖怪が強力だったということかしら？」

……う、うえへへ。あのお、永琳さん。どうやったら許してもらえるんでしょうか？

逃げ道など無い、理路整然とした質問と解答の流れに、私は既に心が折れてしまっていた。

完全に詰みの段階。これがチェスや将棋だったら、放心状態で失禁するしかないレベルである。

最後の疑問符も完全に言葉だけで、自分の力を上回る者などいるはずがないという自負が込められている。

実際に、東方でも最強キャラの一角である永琳を紫と比較して、そこまで実力差など無いのだと私自身が認めてしまっているのだ。

ここで『は？ 紫の方が絶対つええしwwソースは私』なんて言えるほど、思い込むことは出来なかった。

月の頭脳を騙しきるなんて、土台無理な話だったんだよっ！

「これは私の推察だけど、貴女が治療目的で来たという点は本当だと

思うわ」

動揺一つ見せない鉄壁の態度——と、見せかけて内部は崩壊しかかっている私に対して、永琳は射抜くようだった視線を外して少し力を抜いた。

「でも、この永遠亭にはやんごとなき御方が隠れ住んでおられる。

貴女だったら、これも知っているかもしれないわね？ 私はその御方の従者であり、守る為に常々気を掛けていた」

再び、永琳が私を見つめた。

その瞳には、今度は明確な敵意が含まれていた。

「そうして守り通していたはずの情報を、貴女が何故か持っている——貴女自身の事情は関係なく、ただその事実だけが私の一番の気がかりなのよ。

——さあ、正直に話して頂戴。貴女は、この永遠亭のことを、誰から知ったの？」

それはおそらく、永琳の最後の問い掛けだった。

ここで嘘を吐けば、あるいはそれが嘘だと見抜かれれば、最悪この場で戦闘になるだろう。

そんな確信が私にはあった。

もう駆け引きは終わりだ。永琳に嘘や誤魔化しは通じないのだと痛感した。

あとは、ただ白状するしか道はない。

……というか、もう私の精神的ダメージは限界なので、洗いざらいゲロしてしまいたい気分である。

頭のいい永琳なら、私の話す内容も自分なりに解釈して受け入れてくれるんじゃないかな、とも思う。

——しかし、私にはもう一つの確信もあった。

永琳はさとりとは違う。真摯に全てを打ち明ければ、警戒を解いてくれるなんて甘さが、きっと彼女には無い。

永琳自身の言うとおり、ここまで警戒するのは己の姫——蓬萊山輝夜——を守る為なのだ。

原作では、輝夜の為に同郷である月からの使者を皆殺しにしたほど

の人物である。

最悪の場合、不穏分子として私を始末する理由の決定打になってしまう可能性があった。

バカ正直に真実は話せない。

しかし、嘘も吐けない。

この追い詰められた状況で、私が出せる切り札は——たった一枚だけある。

「……この幻想郷には、地上の他に地底世界がある。知っているか？」

最後の手段。奥の手だ。

嘘は吐かない。

全て話そう——。

「……ええ。詳細までは掴めなかったけれど、地上を追われた妖怪が棲むらしいわね」

「八雲紫の管理下には無い場所。そこを支配する地霊殿の主……彼女は永遠亭を知っている」

本来なら知られるはずのない永遠亭の情報が私に知られている。

この怪現象は、古明地さとりの仕業に間違いないっ！

おのれ、さとりん！ ゆゑるゝさんゝっっ!!

「なんですって?」

「古明地さとりという覚妖怪だ。彼女は、心を読む能力を持っている」

嘘は言っていない。

さとりは地底世界の偉い妖怪で、心を読む程度の能力を持っているのだ。

「まさか、その能力によって、私にも気付かれず永遠亭の情報を?」

「分からない。しかし、彼女がこの場所だけじゃない、八意永琳や蓬莱山輝夜の情報まで事細かに掴んでいるのは事実だ」

嘘は言っていない。

さとりには、私が原作ゲームの内容を話したから、登場キャラについてでも把握しているのだ。

「そう、やはり輝夜のことまで……」

「私は以前、地霊殿を訪れたことがある。そこで、さとりと個人的な交

友を持ったんだ」

嘘は言っていない。

そう、私はひとつも嘘なんて言っていないのだ！

——だって、聞かれなかったからね。

なんか自分で自分を殴りたい気分になった……醜い、醜いよ私！

「……その話を実証するものは何も無い。貴女の証言だけだわ」

「そうだな」

「しかし、嘘を吐いているようには思えない。

古明地さと、ね。……いいわ、覚えておきましょう」

永琳が思案に沈んでいた時間は、ほんの僅かなものだった。

それでも、その頭脳は物凄い速さで情報を分析し、様々な結論を導き出したのだろう。

結果、さとりんは永琳の中で警戒すべき相手となってしまうようだ。

しかし、これでなんとか穏便に話を纏めることが出来た。

ふう……助かったぜ、さと。さすがは心の友よ！

………さとりに会いたい。会って、死ぬほど謝りたい。その後で、なんとか口裏合わせてもらいたい。

「とりあえず、話はここまでにしましょう」

もう私死ねばいいんじゃないかな？ と、やらかしちまった感に苛まれていると、一変して穏やかな雰囲気になった永琳が微笑んだ。

何処まで本心か分からないけれど、その美しい笑顔に癒されます。

「では、改めて診察を始めるわ」

「……いいの？」

「貴女が治療を受ける為に来たのは信じる、と言ったでしょう。

随分昔だけど、人を診た経験はあるわ。もう医者ではないけれど、ここまでやって来た患者を無碍には出来ないわね」

「ありがとう」

「まだ何も期待しないでね。貴女の足を治せるかは、診てみないと分からないわ」

そう言いながらも、診察に取り掛かる永琳の顔付きは、とても真摯

なものだった。



——先代巫女との門答から数刻。

奇妙な訪問者達が永遠亭を去った後、永琳は自らの私室で一人考えに耽っていた。

鈴仙達にはしばらく部屋へ近づかないように言っている。

先代巫女から得られた情報は、不用意に伝えるべきではない。無用な警戒を招く。

しかし、そんな永琳の部屋へ無断で入ってくる者がいた。

「なかなか面白そうな話が転がり込んできたわね？」

「……姫」

永琳の悩みの中心である輝夜だった。

「二人だけよ。気安く話しましょう？」

「……輝夜。これは危惧すべき事態よ」

「そうね。この家に客人が来るなんて、わくわくするわ」

「てゐるの時は状況が違うわよ」

「うん。だから、わくわく」

子供のようにあどけない顔で笑う輝夜を眺め、永琳はため息を吐いた。

こちらの話をまともに取り合っていない。

訪問者達への興味の方が勝ってしまったている。

それは、かつてこの竹林に棲む因幡てゐが、月の追っ手から逃れる為に隠遁していた自分達の下へ現れた時と似ていた。

「あの氷の妖精の方はまだいい。だけど、博麗の先代巫女——彼女に關しては楽観視出来ないわ」

「結局、足は治らないって伝えたのよね？」

「立場から見ても、幻想郷の有力者との繋がりが多すぎる。

彼女に知られている内容は、最悪その繋がりがあある妖怪全てに知られていると考えるべきね」

「本当に治らないのかしら？ 足を丸ごと失くした患者を再生させたこともあったじゃない」

「……情報漏洩の原因が不明瞭すぎる。私達の情報が、何処まで隠し通せているのか分からなくなったわ。」

「この秘境に、月からの監視が届いている可能性も否定しきれない。そもそも、情報源となった古明地さとりという妖怪も——」

「ねえ、なんで嘘を伝えたの？」

あくまでマイペースに話を続ける輝夜に対して、永琳は諦めたように肩を落とした。

「……治療が不可能なのは事実よ。ここは月とは違う」

「永琳でもどうにもならないの？」

「私が何故、薬物に絞った研究を続けているのか——それは幻想郷で行える医学の限界だからよ。」

医療関係の技術や設備も含めて、文明レベルが低すぎるわ。ここにはレントゲンさえ無い。彼女の足は、刃物一本ではとても手がつけられない複雑な状態なのよ」

「そう……残念ね」

輝夜は偽り無く、そう思った。

「彼女が五体満足なら、きつと面白いことを起こしてくれそうなのに」
「危険な相手よ」

「やっぱり、永琳も『強い』と思ったのね」

「予想される身体能力が馬鹿げてるわ。先走った鈴仙の件が、穩便に済んだのは僥倖ね。」

戦闘記録を聞く限り、色々と力も隠し持っていそうだわ。話し合いで終わらなければ、最終的にどうなっていたか……」

「わお、永琳にしては意外なほど高評価ね」

「敵として考えるならば、ね。危惧する理由の一つよ」

「そう？ でも——」

今回の出来事を切欠に、永琳と輝夜は各々これから先のことを考えていた。

しかし、それぞれが焦点としている部分は全く違う。

永琳は、永遠亭に降りかかる今後の危険性を憂い、密かに対策を練っている。

「そんな人間が、あの妹紅の傍にいるなんて。やっぱり、とつてもわくわくするわ」

そして輝夜は、長く停滞していた周囲の世界が動き始めることを期待した。

「ちなみに永琳から見ても、あの先代巫女ってどんな印象だった？」

「一個人としてなら、非常に魅力的よ。肉体的な意味で」

「……それって、性的な意味で？」

「いいえ。肉体的な意味で」

「……」

「一度、本格的に身体を調べさせてもらえないかしらねえ」



『黄金長方形の軌跡』で回転させる。そこに『無限に続く力』が生まれる。これが『黄金の回転』だ」

「……それ、誰から教わったの？」

ツエペリ一族です。

完全に受け売りである私の説明に対して、てるは畏怖するような表情を浮かべていた。

「どういう発想すれば、そんな理論が思いつくんだか……しかも、なんかスゴイ説得力を感じるし」

「本当に、何者なのよあんたは……」

てるだけではなく、聞き耳を立てていたらしい妹紅まで冷や汗を流していた。

安心してくれ、正直私もこの理論を見た時は衝撃的だった。

やはり先人達は偉大である。

彼らの残した理論や思想、それらを表す名言は、常に私の心に刻ま

れているのだ。

だから、いつでも私は自分自身に言い聞かせている——『敬意を払えッ!』と。

「しかし、勿体無いねえ。話を聞く限り、相当高名な武人だったのに、もうその実力を発揮出来ないってんだから」

てるの何気ない呟きに、妹紅は表情を曇らせ、伺うように自分の傍らへ視線を向けた。

そこには、永遠亭を出て以来ずっと暗い表情のチルノがいる。

正確には、私が永琳の診察を終えて、その結果を聞いた時からだった。

——私の足は、永琳では治すことが出来ない。

それは、少なくとも私にとつて、もう絶対治らないと告げられたのと同じだった。

正直、前世の知識を総動員しても、永琳以上の医者は思い浮かばない。

永琳に出来ないというのなら、多分もう誰にも治せないのだろう。

それを聞いた時、気落ちしなかったといえは嘘になるが、事前にある程度覚悟していた内容ではあった。

「失うことから始まるものもある」

「ほお、大した心構えだねえ」

だからこそ、この台詞は強がりでもなんでもなく、私の本心である。

正気にては大業ならず。修行道はシングルイなり——ってね。

まあ、実際思い返せば狂った修行ばかりやってたけど。

当時は死ぬことさえ覚悟してやっていたのだ。今更足が一生動かないと決まっただくらいで騒いではられない。

永遠亭へは可能性を求めて来たのだ。

無理ならスッパリ諦め、意識を切り替える。

そう覚悟してきた。

——ただ、誤算があるとするなら、私以上にチルノが治ることを期待していたという点か。

「チルノも、当人を置いていつまでも落ち込んでるんじゃないよ」

「……だって」

妹紅の呼びかけにも反応が鈍い。

ううむ、下手に『足を治しにきた』とか説明しない方がよかったかなあ。

私の足のことを、チルノは随分と気にしていたみたいだし、治療の可能性を知った時の喜びようは半端なかった。

さて、何と言って励ましたものかと悩んでいると、妹紅がため息を一つ吐いて、おもむろにチルノを抱え上げた。

「うわっ!? な……なにさ、妹紅!」

驚くチルノを軽々と肩車してみせる。

「人間なあ、歳を食えば足腰立たなくなるもんなの。生きる者の、自然の流れなのよ」

「それは……分かってるけど」

「本当に? 妖精だから実感ないんじゃないの?」

「違う! あたいは、ちゃんと分かってるんだ! ちゃんと教えてもらったんだからっ!」

「ははっ、そうか。チルノは賢いな。じゃあ、私が改めて言う必要もないよね」

「……うん。分かってる」

「お前は優しい子だよ。元気出せ。その方が、きっと先代も嬉しい」

「……分かった。頑張って、元気出す」

「おう、笑え笑え」

そして、お互いに意味もなく笑い声を上げ始めた二人を、私とてゐは見つめていた。

ふっ、青臭い光景だぜ。

だが、それがいい!

内心、ほっこりな私である。

「いやあ、本当面白いわ。あの妹紅がねえ」

傍らのてゐも悪戯っぽく笑いながら、二人のやりとりを見て楽しんでいる様子だった。

「ところで、てゐ。なんであんたが二人の帰りの案内なんて買って出

たのよ？」

先頭を歩く妹紅が、振り返って尋ねた。

永遠亭から出た私達が向かっているのは、迷いの竹林の出口ではなく、妹紅の住処である。

そこで妹紅と別れた後、てゐが出口まで案内してくれることになっていた。

「丁度あなたの家に用事があったし、妹紅も二人を届けてから家に帰る手間が省けるでしょ？」

「あなたのその親切心が謎だと言っててるんだけど」

「あらやだ、善良な兔ちゃんに向かって酷い言い草。あたしや幸運の素兎だよ？ 人間大好きー！」

「先代、帰り道気をつけてね」

「ひどっ!？」

悪友のような関係の妹紅とてゐだった。

てゐも妹紅に用事があるって言ってたし、二人が仲良いなんて本当に意外だなあ。

こうして本来なら知り得ない関係を知れたことも含めて、永遠亭を訪れてよかったと思える。

足は治らなかつたが、収穫は十分すぎるほどあつたな。

「ああ、ここよ。私の家」

奇妙な満足感を抱きながら歩いていくと、やがて妹紅の住処へと辿り着いた。

竹林が途切れ、不自然に開けた空間に出る。

その範囲だけ竹が生えないように、地面が掘り返されて土がむき出しになっていた。

そして、その中心に建つ一軒家。

……いや、一軒……『家』？

「うわっ、ボロっちい」

チルノが遠慮無しに一言で表現してしまった。

本当にお粗末なボロ屋である。

内装がどうなっているのか、見たいような見たくないような、不安

を煽る姿だった。

「いいのよ、雨露が凌げれば」

しかし、家主の妹紅は特に気にした風もなく、チルノを肩から降ろしている。

強がりでもなんでもなく、本当に無頓着な様子だった。

「自分が死なないからって、衛生管理が適当すぎるんだよねーこいつ」
私とチルノに対して、てゐが呆れたように説明してくれた。

そういえば、妹紅ってば三日くらい何も食べてなかったんだよな。
衣食住の内、二つが人間の基準レベル満たしてないって、適当にも程があるぞ。

……あれ、なんか子供時代の私も似たような生活してね？

「食事に関してもさあ、放つといったら本当に霞で飢えを凌ぎかねないもん」

「だって、この辺に筍くらいしかないから、自給自足なんて無理じゃない」

「だから、あたしが配給してやってんだけどねー。今回の用事もそれ」
そう言っつて、てゐは背負っていた大きな風呂敷を揺らして見せた。

何かと思ったら、全部妹紅への食料だったのか。

「余計なお世話だけど……まあ、世話は世話だし、ありがたく受けてるわ」

「これだよ。可愛くないよねー」

「妹紅。お昼にも言ったけど、ご飯はちゃんと食べないと駄目なんだぞー」

「妖精にまで言われてやんの」

「う、うるさいな。……これからは気をつけるわよ」

「おお、すげつ。妹紅に反省させるとは、やるね妖精ちゃん。よかったら、これからもちよくちよく指導してやってよ」

「しどー？ それって、あたいがお師匠に色々教えてもらってること
でいいの？」

「そうそう、一から人としての生き方を学び直した方がいいってね」

「……そりゃ皮肉か？」

睨みつける妹紅から逃げるように、てるは笑いながら私の背中へと隠れた。

二人の小気味よいやりとりを聞きながら、彼女の提案が割と真面目な話なのではないかと考える。

本当に、見れば見るほど妹紅の生活環境は酷い。

折角知り合ったのだ。永遠亭の用事が済んだからといって、このまま別れるのは寂しいと思っていた。

これからも妹紅との交流を続ける為に、これは良い切欠になるのではないだろうか？

そうと決まれば、私は早速妹紅に話し掛けた。

「妹紅さえ良ければ、生活の改善に協力したい」

「えっ……それはつまり、また来るってこと？」

「ああ。迷惑か？」

「いや、そんなことは……ない、け……どっ」

嫌がられてはいない反応だ。

ただ、躊躇つてもいるらしい。

押すべきか引くべきか、判断が難しかった。

「ここらで、生活に何か変化を加えた方がいいと思うけど？」

その背を押すように、てるが口を挟む。

「今のところ、妹紅の生活目標ってき、うちの姫様と勝負して勝つことじゃん？」

それをずーっと果たせないまま、毎日の繰り返しでしょ。ここら

で、目標達成の為に新しいことを取り入れた方がいいと思うけどね」

てるの言う『うちの姫様』とは、輝夜のことだろう。

やっぱり、この二人って原作通りいがみ合う関係なのね。

「幸い、あんたの傍には引退した武人様がいる。何か学べる機会かもよっ。」

「……口が回るなあ、お前」

「褒めんなよ、照れるぜ」

「褒めてない。……感謝するけど」

ボソッと呟いた最後の一言だけ私には聞こえなかったが、てるは二

ヤニヤと笑っていた。

咳払い一つして、妹紅が改めて私の顔を見上げる。

決心は固まったようだ。

「あーっと……その、迷惑じゃなかったら、また会いに来てくれない？」

「喜んで」

「あたかも遊びに来る！」

私とチルノの迷いのない返答に、妹紅は照れくさそうに笑った。

「ははっ……あ、ありがと。」

てゐの話じゃないけどさ、先代もよかつたら私に少し稽古つけてよ。私、よく勝負している奴がいるんだけど、今のところ勝てたためしがない

「分かった。力を貸そう」

「おおっ、つまり妹紅もお師匠の弟子になるのね!? あたい知ってるわ、これであたいは兄弟子になるのよ！」

早くも先輩風を吹かし始めたチルノの様子を微笑ましく感じながら、私はこれからのことを考えていた。

なかなか楽しみが増えたぞ。

まあ、弟子というのも大げさだが、チルノとは少し違う、本格的なトレーニングっぽいことも教えよう。

もちろん、私のやっていた修行の再現なんてことまではしないけどね。

「そうか、チルノが兄弟子ねえ……それじゃあ、私は簡単な『黄金の回転』とかいうのから教えてもらおうかな？」

妹紅はそう言っつて、気楽そうに笑った。

——うん？ ちよつと待ちたまえ。

「妹紅……今、何て言った？」

「へ？ いやあ、だからさっき説明してた『黄金の回転』っていうのから教えてもらおうかなあつて」

落ち着け、私。

これはちよつとしたすれ違い。認識の違いだ。

冷静に聞き流せ。

「……妹紅、あれは君には少し難しい」

「ええ、そうかな？ 物を回転させるだけでしよう。なんか嘘くさい理屈よね、多分本当は先代の能力か何かで……」

——なっ！ 何を言うだア——ッ！！ ゆるさんッ！！

「……妹紅！ 『敬意を払えッ！』」

「え!？」

突如叫んだ私の迫力に、その場の全員が呆気に取られていた。

しかし、私は止まらない。

止まろうとも思わない。

私は今、確実に怒っているのだ！

「ご、ごめん……何か拙いこと言ったかな？ 私……」

「予定変更だ、妹紅。私はお前を徹底的に鍛え直す！」

怯える妹紅に対して、私は有無を言わせず告げた。

私は今、怒っているが、妹紅を嫌悪しているわけではない。

ただ、こんな私にも譲れない信念や自論があり、妹紅の言葉はその一線にしつかりと触れてしまったのだ。

私は、自分がこれまでやってきた修行がとんでもないものだとは自覚している。

理屈の通っていない、精神論さえ超えたアホな発想の修行ばかりだ。

それが漫画の修行なのだから当然だ。

その馬鹿さ加減を自覚した上でやっていたのだから、そんな自分の行為が認められなくても構わない、と。常に覚悟していた。

私を笑うのは良いのだ。

だが、しかし——この修行自体を、嘲笑ったり、軽く見たりすることは絶対に許早苗!!

偉大なる先人達が編み出し、そして完遂した修行の数々に対して敬意を払わなければならない！

先程の『黄金の回転』だってそうだ。

一朝一夕で身に付く技術ではない。ましてや、理論を説明されただけで出来る気になるなんて、心構えがなっちゃいないっ。

……よし、分かった。

妹紅、君にこれらの修行の偉大さを理解してもらうには、やはり実際にやってみるしかないだろう。

当初の生温いトレーニング計画を変更しよう。

考えてみれば『輝夜に勝ちたい』という妹紅の願いは、原作から繋がる重要な事柄だ。

これもまた、軽く扱うわけにはいかないネ！

「安心しろ、妹紅。私の修行をこなせば、お前は必ず宿敵に勝てる！」

「あの……本当に、拙いこと言ったなら取り消すから……」

うん、そうだね！ プロテインだね！

「早速、明日から修行開始だ。明日の朝、またここへ来るぞ。案内は大丈夫だ、もう妹紅の気配は覚えた。生活環境の改善も任せておけ。同時に行う」

「行うって……いや、あんた足が不自由なの忘れてない!？」

いいから、トレーニングだっ！

「何も問題ないな。では、明日また会おう。帰るぞ、チルノ！」

「お、おうっ！」

自分でも驚くくらい多弁に捲くし立てると、困惑する妹紅を置いて、私は踵を返した。

案内役であるてるものことも忘れて、燃え上がる決意のまま進んでいく。

普段なら、状況を省みて落ち着く頃合だが、今回ばかりは私も止まらない。

——冷静に考えると、妹紅と輝夜の勝負なんて普通は弾幕ごっこでやるものだろう。

でも、そんなの関係ねえ！

私が教えられることは弾幕戦ではなく肉弾戦だが、それでいいのだ。

健全な肉体には健全な精神が宿るもの。

元気があれば……っつーか精神力があれば何でも出来る！

ソースは私と、あと少年漫画の主人公とかね！

さあつ、明日からハクレイ・ブート・キャンプの始まりだあ!!



「……私、怒らせるようなこと言っちゃったのかなあ？」

「いや、あれはテンション上がってるだけでしょ」

妹紅は先代達が歩き去った方向を呆然と眺めていた。

嵐の後に残り残された気分だった。

それまでの人物像が崩れ去るような先代の変貌に対して、完全に立ち竦んでしまっている。

一方で、傍らのもてゐは相変わらず楽しげに笑っていた。

「多分、あの人間の拘ってる部分に触れちゃったんだよ。ああなると面倒だよー？」

「どうなっちゃうんだろ、私……」

「面白いことになっちゃうんじゃない？」

ま、丁度いいでしょ。これくらい強引な方が、あんた相手ならスムーズに物事が運んで都合がいいってもんよ」

「無責任なこと言うわね」

「でも実際さ、これって良い巡り合わせだと思ふのよね」

背負っていた荷物をその場に下ろしながら、てゐは珍しく神妙な表情を浮かべた。

「あたしが竹林に罫を仕掛けてるのは知ってるよね？」

「ああ、あの悪戯の。何回か酷い目に遭ったわ」

「まあ、趣味な部分もあるけど、半分以上実益なのよ。

あたしと永遠亭の間には契約があつてさ、向こうの要求が『人間を寄せ付けなくしろ』って内容なの」

「……初耳なだけけど」

「あんたは例外だしねー」。

とにかく、外から迷い込んでくる人間を足止めする為に、軽い罨を幾つか仕掛けてるってわけ」

ちなみに、奥に行くほど妖獣用のキツイ奴だから気をつけてねん。と、シヤレにならないことを付け加える。

「当然、罨は減るから定期的に仕掛け直してる。丁度、今日妹紅達と出会った時にその作業をしたのよ」

「そりゃ、ご苦労なことだ」

「わかんないかな？ あの人間と妖精はさ、罨が一番減る時間にタイミング良く竹林に足を踏み入れ、あんたに出会ったってわけ。しかも永遠亭に用事まで携えて」

「……それは」

「偶然かねえ？ だとしたら、面白い話じゃん」

心底愉快そうに笑いながら、荷物を降ろしたてゐるは軽やかに駆け出した。

先に行ってしまった先代達を追う為である。

「そんな二人が、永遠亭に近づける例外である妹紅と出会った——っていう巡り合わせ」

話の続きが気になり、思わず呼び止めようとしたところで、てゐが不意に足を止めた。

振り返ったてゐは、見慣れた悪戯っぽい笑みではなく、柔らかな微笑を携えて言った。

「いろいろ悩んで、構えちやうのも分かるけどさ。」

とりあえず、今はあの二人に付き合ってみなよ。難しいこと考えないでね。

気楽に構えてなって。あんたは、まだまだあたしよりも年下なんだからさ。人生長いよお〜？」

「てゐは……私の味方なの？」

「世捨て人気取つてると対人スキル錆びついちやうよ。人生で巡り会うのは敵と味方だけじゃないっしょ？」

ニシシツといつもの笑顔を見せると、今度こそてゐは走り去っていった。

残された妹紅は、騒がしい三人が去った先と、足元の荷物を眺め、自宅であるボロ屋を振り返って、最後に空を見上げた。

あまり意味のない行為だった。

空は赤くなり始めている。

一日が終わろうとしていた。

昨日の夜は、今日がこんなにも騒がしくなるとは全く予想していなかった。

「……明日、どうなるんだろう？」

明日、何が起こるのかも全く予想出来ない。

ただ今日とはまた違う一日が約束されていることは確かだった。

其の二十「不死」

「……おねえちゃん、だいじょうぶ？」

少年は恐る恐る目の前の人物に問い掛けた。

いや、そもそもそれは『人』なのか？

近くに自分の住む村があるとはいえ、ここは林の中である。

獣か、悪くすれば妖怪が出るかもしれない場所だった。

その木の根元に一人、彼女は背を預けて座り込んでいた。

頭から被るように羽織った外套はボロボロで、その下から見える顔も汚れきっている。

汚れているのは見た目だけではない。その瞳も、まるで泥が入り込んでしまったかのように濁りきっていた。

とても生きた人間とは思えない。まるで墓穴から這い出た亡者のようだ。

しかし、姿形は少なくとも人のそれであった。

しかも、女だ。見たこともない、白く長い髪が隙間から覗き見える。

彼女の顔が、汚れてもなお美しかったので、少年は思わず声を掛けていたのだった。

「まいご、なの……？」

話すどころか見向きもしないその女を、心配していたのは少年だけではなかった。

同じくらしいの年頃の少女が、少年の陰に隠れながらも伺うように視線を向けていた。

「もうそろそろ、日がくれるよ？」

「夜になったら、妖怪が出るかもしれないんだぜ」

少女と少年は、得体の知れない人物に対して純粹に案じる気持ちで言っていた。

二人の子供に、女はしばらく濁った瞳を向けていたが、やがて興味を失ったかのように瞼を閉ざした。

終始、一言も話さなかった。

「……どうしよう?」

少女が少年に尋ねる。

子供の手には余る状況だった。

ただ、彼女を放っておけないという点だけは二人で共通していた。

その時、唐突に近くの茂みが揺れた。

何かの動く気配に、危機感や不安を抱く暇も無く、そこから黒い影が飛び出して来る。

獣だった。

幼い二人には、それがどんな種類の獣なのか理解出来なかったが、とにかく牙と爪を持ち——そして、血に飢えた獣だった。

「——ッ!!」

最も容易い獲物として、呆然としている子供二人に狙いを定め、獣が咆哮と共に襲い掛かる。

当然のように、抵抗する手段も余裕も無かった。

肉を裂く音と共に鮮血が飛び散る。

「う……ああ……っ!?!」

少女は言葉を失い、少年もかろうじて呻き声を洩らすことしか出来なかった。

獣の牙は首元に突き刺さっていた。

ただし、それは二人ではなく、先程まで座り込んでいたはずの女の首にであった。

女の口元から泡立った血が溢れ出す。

しかし、彼女の表情は初めて見た時のまま、何の感慨も抱いていないかのように変わらない。

そして、ゆっくりと首に喰らいついていた獣が力を失っていく。

いつの間に取り出した物か、女の突き出した小刀が獣の腹を貫通していた。

獣が二人に襲いかかった瞬間、女はその進路上に割り込み、相討ちになったのだ。

絶命した獣が地面に倒れ込むと同時に、女もまたその場に崩れ落ちた。

「おねえちゃん！」

少年が慌てて駆け寄る。涙を流して震えながらも、少女がそれに続いた。

倒れた女は流れ出す血で真っ赤だった。

子供の眼にも、それが決して助からない傷なのだと理解出来た。

「……」

女は何かを言おうと口を開いたが、まるでそれが面倒に感じたかのように、ため息を吐いて瞼を閉じた。

そして、女の呼吸が止まった。

「そんなあ……っ」

少女が弱々しく呻く。

少年は己の無力感に歯を食い縛っていた。

——しかし、次の変化はすぐに起こった。

女の首に刻まれた傷が、いきなり燃え始めたのだ。

驚き、悲鳴を上げる二人を尻目に、得体の知れない炎は傷全体を覆うように燃え上がり——そして、それが消えた時には傷も消えていた。痕さえ残っていない。

傷が消えた女は、当たり前のように眼を開いた。

「……なんだ、まだいたのか？」

獣に襲われた時よりも遥かに大きな衝撃を味わっていた少年と少女は、初めてその女の声を聞いた。

思ったよりも、ずっと若い女の声だった。

ボロボロの見た目と雰囲気では分かりづらいが、あるいはまだ少女と呼べるような年齢なのかもしれない。

しかし、当然のように二人にはそんな事実はまだ気が回らなかった。

死人が生き返るといふ現象を前にして、抱き合うように震えるしかない。

「早く住んでいる場所へ帰れ」

生き返った女の対応は、何処までも気だるげだった。

濁った瞳は、つい先程命を懸けて助けた二人に向けていない。

あるいは、先程の行動が単なる反射的なものでしかなかったのではないかと思えるほど、周囲に関心を抱いてはいなかった。

立ち上がり、座っていた木の根元に腰を降ろすと、再びそのまま眼を瞑って黙り込んでしまった。

放っておけば、そのまま飢えて朽ち果てるまでそこに座り続けているのかもしれない。

しばらくの間、沈黙が流れた。

死んでも生き返るような者が人間であるはずがない。

すぐ傍には獣の死体が転がり、流れ出す血の臭いがいよいよ強くなり始めた。

大人であっても、こんな場面に遭遇すれば逃げ帰るしかない状況だ。家に帰り、この時のことが悪い夢であったのだと自分に言い聞かせるくらいしか出来ない。

やがて、少年と少女が動き出す気配を感じて、女は僅かに瞳を開いた。

立ち去る二人の無事な姿を確認するつもりだった。

「あの……っ」

「……あ？」

しかし、視界に映ったのは、こちらへ一歩近づいた二人の姿だった。

二人して顔面蒼白になりながらも、じつと自分を見つめている。

「ありがとう……」

どちらが先に言ったものか分からない言葉を受けて、やがて彼女は助けた礼を言われているのだとようやくよく理解した。



迷いの竹林では、ここ数日の間で日課となった光景があった。

朝、妹紅は匂いで目覚める。

湯気に混ざった味噌の匂い。

焼いた塩の匂い。

——ご飯の匂い。

「……朝か」

眼を開き、誰にとも無く呟いた。

少し前までは考えられない、贅沢な目覚ましを味わいながら寢床から起き上がる。

これまで使っていた薄汚れた煎餅布団ではない。新調した寢心地の良い布団である。

同じく新たに持ち込まれた水瓶で口をゆすぐと、妹紅は外へ出た。

数日前から改築を進めているとはいえ、未だ住処はボロ屋のままである。一部屋限りの造りで、料理をする為の土間も無いのだ。

料理はいつも外で行っていた。

「おはよう」

家から顔を出せば、早朝にもかかわらず既に朝食の準備に取り掛かって二人が見える。

以前と比べると様々な部分が変わった朝の風景だが、一番の変化はこの二人がいることだな、と妹紅は思った。

「おはようございます、妹紅」

「おはよう、妹紅」

慧音と先代が挨拶を返した。

火を石で囲んだ簡易的なかまどを使い、魚を焼きながら、味噌汁を作っている。米は例のおにぎりである。

二人の息も合ったもので、動きに支えが必要な先代を慧音が上手く補助していた。

——何度見ても、不思議な光景だな。

平穏な朝を五感で感じながら、妹紅は苦笑を浮かべずにはいらられなかった。

偶然の出会いから先代と交流を持ち、ちよつとした切欠で再会の約束をした。

当然のようにその約束が次の日に果たされ、何故かそこに慧音が加わり、いつの間にかこんな日常が始まっている。

未だ戸惑いは抜けないが、それでも——悪くはない。むしろ、楽しい。

「おっはよーきーん。恵まれない子供に、幸運の素兎からお慈悲の時間だよ」

「……おはよう、てゐ」

そんな日常の中へ、当たり前前のようにてゐるが加わった。

妹紅は口元を引き攣らせながらも、大人しく挨拶を返す。

今のところ、妹紅の生活環境改善に最も貢献しているのが彼女なのだった。

食料や資材の補給を始め、何処で身に着けたものか家の改築まで、てゐるが中心となつて行っているのだ。

何故彼女がここまで協力的なのかは未だに分からない。

分からない、が。そのことに悩んでいる自分を見て楽しんでいるよ
うなので、妹紅は悩むのをやめた。

今日は調理器具を持って来たらしい。背負っていた風呂敷を広げると、金属音を立てて中身が転がり出る。

「……いつも思うけど、こんな物何処から調達してるの？ このヤカ
ンなんて見たこともないわ」

「んー？ それほど元手は掛かっちゃいないよ。捨ててあつたの拾つ
て修理したり、磨いたり。そのヤカンは無縁塚で拾った奴かな。多
分、外の世界のだよ」

注ぎ口の部分に蓋がある奇妙な形のヤカンを、妹紅はしげしげと眺
めていた。

今、慧音が使っている包丁もてゐるが調達してきた物だ。

穴が空いていて不良品かと思つたが、これがきゆうりなどを切る時
にくつつかなくて便利——らしい。何故か先代が説明してくれた。

先代と慧音の二人の傍で妹紅が心ばかりの手伝いを行い、てゐるが冷
やかしをしている間に、最後の一人であるチルノがやって来る。

「お師匠！ 慧音！ 妹紅！ 兎！ おっはよー！」

「おはよう、チルノ」

「おはよう。元気がいいな」

「おはようさん。すっかりここまでの道を覚えたみたいね」

「つつか、あたしや未だに兎かい。名前覚えなよ、馬鹿」

「誰がバカよ！」

「こちら、喧嘩するんじゃない。すぐ朝食にするぞ」

「はい」

「へいへい……」

「てゐ。返事は『はい』だ。それと、一回で良い」

「……はい。あと、せんせー。あたしも一応あんたより年上なんだけど、妹紅が敬語で、何でこっちは子供に接するみたいな感じなの？」

「気にするな。単なる印象と職業柄の対応だ」

「あたしや悪ガキの生徒つてか。まー、否定しないけどー」

かつては一人だった場所に、人妖入り乱れた五人が揃い、食卓を囲む。

これが、最近の日常的な光景だった。



『——なるほど。事情は分かりました、明日から私も同行します』

あの日、迷いの竹林から帰った私が慧音に事の次第を洗いざらい話した後の一言である。

異論など挟めるはずもなかった。慧音マジ鶴の一声。

永遠亭でのトラブルもあり、帰宅が随分遅くなってしまったせいもあるのだろうが、診療所に帰った私を出迎えた慧音は怒っていた。

うん……何故に慧音が私の帰宅を待っているのかは、この際置いておこう。

その後、遅くなった子供を叱るおかんの如きお説教を食らった身としては、もう疑問も抱けない。

いい歳して『夜道は危ないから、早めに帰宅してください！』とか怒られる私って一体……。

いや、慧音の年齢と比べれば全然不自然でもないんだけどね。

とにかく、内緒で出掛けたのが裏目に出たのか、随分と心配させた慧音に言い訳している内に、向かった場所やそこで起こったことなどを全て話してしまっていた。

そして、冒頭の台詞である。

危ないからやめろ、と止められなかったただけ幸いか。

まあ、妹紅が命の恩人だって話もしたし、私自身の気持ちも含めて説得したおかげかな。

今更なのだが、意外なことにこの段階で慧音と妹紅は交流が無いらしい。

つまり、私に同行して顔を合わせるのが初対面なのだ。

二次設定の影響が強いにせよ、やはり妹紅の理解者として慧音のイメージが強い私としては、二人の邂逅的な意味でも再び迷いの竹林を訪れる約束は譲れなかった。

『そこまで徹底して存在を隠蔽したがる永遠亭とやら——少々不穏な気配を感じます。』

今の貴女では、絶対の安全など保証出来ません。可能な限り、私も協力しましょう』

結局、寺子屋が休みの日など、慧音の都合が許す限り協力してくれることになった。

外の世界とは違って義務教育ではなく、元々授業も不定期だから今のところ時間の余裕はあるらしいのだが、なんか慧音の時間を奪ってしまってるみたいで心苦しい。

本人はむしろ進んで私の力になろうとしてくれるから、遠慮はない方が良いと分かってるんだけどね。

どちらかという私への心配で同行を申し出てくれた慧音だったが、妹紅との対面はとりあえず無難に行われた。

まあ、付き合いが浅いせいと、妹紅の素性を知ったせいか、自然と言葉遣いが敬語になったのは仕方ない。

もうちよつと気安い仲になって欲しいと個人的には思うけどね。その辺は、今後の付き合いの中でおぼちゃんがいる取り持ったろ。なっ、この人ええ人やろお？

そんな感じに、当初の目的を忘れかける私。

もう完全にお見合いを勧める親戚のおばさんばりのノリである。とりあえず、こういった流れで『私が妹紅を鍛える』という話は、新

たに慧音を加え、チルノと、あと何故かてゐも付き合ってくれるらしく、この五人が集まって始まったのだった。

——さて、それではいよいよ本題に入ろう。ハクレイ・ブート・キャンプの始まりである！

よしつ、まずはトレーニングの前に重要なことから始めようか。

「食うんだ」

修行初日。つまり、慧音が妹紅と初対面の挨拶をして、話がひと段落ついたお昼時である。

私は持参したお弁当を広げて、妹紅に問答無用で促した。

「……これ、全部？」

「そうだ」

「いや、美味しそうだけど……こんなに？」

「食うんだ」

私の返答は烈海王並の一点張りだった。

並べられた料理は、どれも私が朝早くからせつせと作った品々である。

チルノ達と一緒に食べる分もあるが、それでも相当な量だった。

フッフ、久しぶりに腕を振るったぜ。

「やったー！ お師匠の料理だー！」

「先代の手料理ですか……久しぶりかも」

「いやあ、悪いね。あたしまで与っちゃって。お、美味しいね」

戸惑う妹紅の一方で、他の三人は嬉々として食事を始めていた。

さあ、たんとお食べなさい。

いいのよ？ 遠慮しなくていいのよ？

料理好きってほどではないのだが、親しい人に食べて喜んでもらうのは大好きな私である。

最近自覚した世話好きな自分にビックリ。歳食ったせいかな？
昔はこんなじゃなかったと思うけど。

「妹紅も、食べるといい」

「ああ、うん。そりゃあ、ありがたく頂くけどさ。……稽古つけてもらうはずなのに、なんで食事まで世話してもらってるんだらう？」

妹紅は苦笑しながら、料理に箸をつけ始めた。

……ふむ、味の方は良好な様子。

丁度いいので、食事を挟みながら私は今回のトレーニング計画を皆に話すことにした。

「稽古の話だが、まずは基礎体力をつけることが必要だ」

「体力をつける？」

「そうだ。妹紅、君ははっきり言って貧弱だ」

「ぐ……っ！」

「ぶふっ！」

「てゐ、笑うな！」

うん、ちよつとハッキリ言い過ぎたかも。

ごめんね、オブラートに包んだ言い方出来なくて。私、言語機能が少々ガタついてるの。

ただ、私の告げた内容は紛れも無く事実だった。

歳を取らない蓬萊人の特性故か、妹紅は若い。

……というか、若すぎるのである。

おそらく蓬萊の薬を飲んだ当時の年齢のまま固定されているせいなのだろうが、幼さを残した体格のまま成長が止まっている。

これは単純な身体能力の面でも不利な状態である。

実年齢が幾らであろうが、身体的に小柄な少女のままである妹紅は体力が標準以下なのだった。

生来の体格や、女性であることも影響している。私みたいに長身な方が珍しいんだからね。

これが、何か不思議な蓬萊パワーとかで体格に左右されない力を発揮出来るならよかったのだが、先日組み伏せた時の抵抗を顧みる限り、外見通りの筋力しかないようだ。

逆に、勝負相手である輝夜の方は天井投げられるほど力があるんだよね。

天井投げるってどんな馬力だよ。

「何らかの術で炎を扱えるようだが、その技能を抜きにすれば、妹紅の戦闘力は一気に低下する」

「……まあ、確かに。この力が便利すぎて、普通の戦い方なんて知らないわね」

手のひらに火を灯しながら、妹紅が神妙に頷いた。

意外でも何でもないんだけど、原作ゲームでEXボスだからといって、戦闘力が高いと保証されたわけじゃないよね。不死身だけで、妹紅は人間だし。

ちなみに『妹紅貧弱説』は、その原作の考察でも予想されてたわけだが。主に、リザレクションしまくる打たれ弱さのせいだ。

とにかく、稽古云々以前の問題として、まずは妹紅に人並み以上の体力をつけてもらう必要があった。

よって——まず食え！　そして動け！　結果起こる超回復ツツ！！
私としては、そういった流れを想定しているのである。

『飯食って体動かせ』とか、ただ単に健康的な生活してるだけだが、妹紅の場合その基準にすら届いてなかったからね。

「でも、体力作りっていうのは意味がないかも……」

妹紅が申し訳なさそうな表情で呟いた。

何か事情があるらしい——が、問題ない。妹紅の懸念は大体予想がついている。

「二度、蘇生するごとに状態がリセットされるからか？」

「——っ!?　ど、どうしてそれを……!」

私の指摘に、妹紅は眼を見開いて驚いた。

どうやら凶星のようである。

こういう時、前世の知識はありがたい。

蘇生能力という奴は、意外と多くの漫画などで扱われているが、同じ蘇生現象でもどういった作用が働いてそれが起こってるのかで色々体への影響が変わってくる。

例えば、異常な再生力で結果的に不死身となっているのなら、それは生命活動の延長上にある能力である。単純に体を鍛えれば効果は出るだろう。

しかし、蓬莱人の場合は魂を起点とした蘇生を行うのだ。

死亡した肉体は抜け殻となつてすぐに消滅する。つまり、蘇生の度

に妹紅は新しい肉体を得ることになるのだ。

リセットというのは、この時以前の肉体が刻んだ鍛錬の成果もまた同時に失われてしまうことを意味するのである。

確定ではなく予想だったが、妹紅の反応を見る限り、この考察は当たっていらしい。

「……本当、あんたは底が知れなすぎて怖くなるよ。」

けど、分かっているなら話は早い。どれだけ体を鍛えようが、一度死ねば全部台無しだ。以前の貧弱な私に逆戻りってわけ。単純な体力作りなんて無意味なのよ」

「では、妹紅。貴女はどのような稽古を先代に望んだのですか？」

慧音が横から疑問を挟んだ。

「記憶なら引き継げるからね、技の一つや二つでも習おうかと思ったのよ。やり方さえ教えてもらえば、後は適当に……」
はっはっはっ、『コツだけ教えてくれ』とか典型的な墮落の発想だな。

あと、不死身だからって自分が死ぬのを踏まえて考えると、まずその前提が許せん。

その軟弱な思考に、アイアンクロー！

「あい!? 痛だだだだだっ!!」

「妹紅、修行を舐めるな」

私は笑顔で指に力を入れた。怒りも込められている。

妹紅……体を鍛える時はな、言い訳をせず、愚直に……なんていうか、救われてなきやあ駄目なんだ。

「駄目だなー、妹紅は。あたいが、いいことを教えてあげるよ」

アイアンクローから開放されて涙目な妹紅に、チルノが胸を張って言った。

「努力する者が、必ず報われるとは限らない。しかし、成功した者は皆すべからず努力している!」

チルノの口から飛び出した、彼女らしからぬ信念の言葉に、その場の全員が一様に驚いていた。

私も驚いていた。

なんて……なんてカッコいい台詞なんだっ！

何度聞いても良い。誰から聞いても良い。俺によし、お前によし、の名台詞である。さすが会長。

私も修行時代の気持ちに蘇ってくるようだ。

「これは、あたいがお師匠に教えてもらった言葉よ」

「先代……さすがです。真理を突いたお言葉、感動しました！ 今度、寺子屋で生徒達にも教えようと思います！」

「へー、いいこと言うねえ。今のはあたしもちよつとドキツとしちやつたよ」

慧音の尊敬の念が溢れ出しそうな輝く瞳と、てるの感服するような笑みが向けられて、実際心苦しい。

いや、違うんすよ……私も君達と全く同じ感動を感じてたんですよ。

毎度のことながら、本当のことを言えず、私は二人の視線に耐えながら黙るしかなかった。

そして妹紅は、この台詞を噛み締めるように、自分自身でもう一度呟いていた。

「……努力、か」

その何気ない一言に、どんな感情が込められているかは分からない。

人によっては陳腐に感じるかもしれない理論だ。

しかし、これを信じれる者こそ――。

「あしたのために」

「えっ？」

私は自然と、もう一つのボクシング漫画の名言を口にしていった。

これも素晴らしい言葉だ。

っていうか、私も修行の初期では具体的にどんなことをすればいいのか分からず、この後に続くジャブの練習方法で拳を磨いていたものだ。

「あしたのために、だ。妹紅」

「明日の……為に」

でも、灰になるまで燃え尽きちゃ駄目だからね。
妹紅の場合、この表現が比喻にならないから困る。

「——分かった。私も、頑張ってみるよ。修行、お願いします」
決意を固めた妹紅に対して、私もまた力強く頷いて返したのだった。

フッフ、自分以外に修行を課すなんて霊夢以来だ。

その霊夢に関しても、内容は紫任せだから、私自身の指導はほとんど初めてと言っている。

もちろん、かつて私が実践したものは上級者向けっていうか馬鹿向けだ。

しかし、力と技の数だけ修行がある！

単純な体力作りだって、やり方は幾らでもあるのだ。

ゆで理論並の理不尽な根拠による修行から、科学的根拠のあるトレーニングまで。初心者の妹紅には後者をやらせてもらう。

かつて脳内で私を導いてくれたコーチ達の立場に、私が立つ——やべ、テンション上がってきた。

よし、ついて来い妹紅！

◆
ここから先は脳内BGM『Eye Of The Tiger』でいくぞ——！

「オラオラ、走れ走れい」

「ぐう……っ！ て、てる……おまつ、後で覚えて……ろ！」

「はい、こつち気にする余裕あるみたいねー。もう一周追加ねー」
てるの宣告に、妹紅は内心青褪めた。

逆に顔は上気して赤くなっている。ずっと走り通しだからだ。
体力作りの初歩として、先代はまずランニングを命じていた。

「っっーか、妹紅さあ。この程度で息あがってるとか。もう駄目だわ、体力なさすぎ」

「……っ！」

「あれだね、見た目だけ若くて中身は老人だよ。」

これまでの不摂生が祟りまくってるし、日常的にしてる運動っていったら思いついた時に竹林歩くだけだし。そりゃ姫にも勝てんわ。教養でも負けてんでしょ？」

「……っ!!」

「長年健康に気を遣ってきたあたしから言わせてもらおうとさあ……終わってるよ、もこたんの身体。」

「そうだね、不老不死なんだから健康とかどうでもいいよね。あ、適当に流して走っていいよ？ 辛そうな演技さえすれば、騙されてあげるから」

「……っうるせえええ!! もこたん言うな!」

「はい、まだまだ体力残ってるねー。もう一周ねー」

限界まで走らせる為にあえて煽るてゐるだが、どう見てもそれを楽しんでいる様子だった。

当然、妹紅も気付いているが、前を走るてゐるは余裕の表情で、必死に追い縋つても全く距離が縮まらない。

怒りと悔しさを燃料に、歯を食い縛りながら走る。

しかし、悲しいかな地力の差は早々埋まらない。

結局そのまま、妹紅が力尽きて倒れ込むまでランニングは続いたのだった。

「痛たたただだ……っ!!」

「堪えろ」

「死んじやう! 死んじやうつてば!」

「安心しろ、これで死ぬ奴はいない。多分」

「た、多分……ってえええええ!? い、痛いよおっ!」

涙目になつて悲鳴を上げる妹紅に対して、いつそ無慈悲とも思えるほど先代は背を押す力を緩めなかった。

座った状態で限界まで開脚する『股割り』である。

「そんなに痛いかなあ? あたい、簡単に出来るよ」

「個人差があるというからな。私もチルノやてゐるようには無理だ」

「それにしたって、妹紅は関節固すぎじゃないかな。もういつそ、一気にやったら?」

「それでは靱帯を損傷してしまう」

喚く妹紅の周りでは、各々が真似をするように座り込んで開脚をしていた。

慧音はほぼ完全に左右に足が開いている。

そして、それ以上に足が開ききり、尚且つ胸と顎が地面につく状態にまでいつているのがチルノとてゐだった。

比較して、妹紅のそれは錆びついた音が聞こえてきそうなほど柔軟さが足りていない。

「関節の柔らかさは、怪我を防ぐ上でも重要だ。柔軟であるほど良い」

「こ、これで怪我しちゃうよ! 一気にやっちゃ駄目なんですよ!」

「大丈夫だ、限界は私が見極める。痛いのは最初だけだ」

「ひぎい!」

普段通りの鉄面皮のせいもあるのだが、淡々と体重を掛ける先代に對して、妹紅は真剣に恐怖を抱いた。

ちなみに、不自由が無かった頃の先代は、両足を左右の段差に引っかけ、地面に接地していない状態で開脚していたと慧音が語っている。

予想以上に体の固い妹紅の為に、この運動は段階を踏んで行われた。

その為、しばらくは竹林の中から少女の悲鳴が絶えることはなかったという。

「——ところで、声だけ聞いてるとエロくね?」

「エロいって何?」

「てゐ、チルノに妙な話を振るな」

慧音の頭突きを受けて、てゐは笑いながら舌を出した。

そんな平和な三人のやりとりを、妹紅が涙目で睨んでいた。

「ね……ねえ、まだ必要なの? もう、薪は十分あると、思うん、だけで……っ」

息を荒げながら妹紅は傍らの先代に尋ねた。
既に山のような薪が背後には積まれている。

妹紅が斧で割った薪を、先代がその様子を見守りながら丁寧に荒縄で縛って纏めていた。

「ご飯、何合炊くつもり、だつてのよ……う。」

当初は、これまでの苛烈なトレーニングと比べて、単なる薪割りと高を括っていた妹紅だったが、今や既に疲労困憊の状態である。

息も切れ切れに、懇願するような視線を向ける。

「つていうか、これだけあるならばらくは薪いらぬ——」

「これは今日一日分だ。風呂を沸かすのに使つて、残りは人里で売る」
あつさりと返ってきた返答に、妹紅は絶句した。

風呂というのは、無縁塚から取つてきた金属製の円筒——先代が言うには『ドラム缶』——のことだろうか？ 今、慧音達が水をせつせと溜めている。

いや、本当はそんなことはどうでもよかつた。

妹紅にとつて気になるのは、まだこの薪割りが続き、しかも明日もやるということだつた。

「いやあ、それにしても先代の修行つて実用性高いよね」

妹紅がしごかれる様を見るのがすっかり娯楽になつてしまつたてゐるが、何気なく呟いた。

チルノはもちろぬ、先代の行うことに一切疑問を持たない慧音も『そうなのか？』と首を傾げる。

「薪割りつて生活に必要な仕事だけど、全身の筋肉を使うから、自然と体が鍛えられちゃうのよ。」

特に背筋が鍛えられるから、腕力の底上げにも繋がる。殴る時の拳の威力も上がるんじゃないかな」

「なるほど。ただ漠然と体を鍛えるわけではなく、当初の目的である『勝負に勝つ為の稽古』にしっかりと繋がっているわけだな。さすが、先代だ」

「慧音つてばそればかりだねー。ま、確かにさすがって感じだけど。
昔から何代も続いている巫女つていうから、もつと古風なやり方する

のかと思っただけど、ビックリするくらい理詰めじゃない」

「とにかく、お師匠はサイキョーってことね？」

「……あー、うん。あんたら、先代に関してはレベル同じだわ」
てゐは呆れたようにため息を吐いた。

「——で、今日の修行はこれをつまめること？」

「そうだ」

先代が頷き、妹紅が指差す籠の蓋に手を掛けた。

中からは騒がしい鳴き声が聞こえる。

鶏の声だった。

「なんていうか……ちよつと簡単過ぎない？」

「そう思うなら、やってみるといい」

先代が片手で器用に一匹の鶏を取り出す。

掴む部分にコツがあるのか、籠の中での騒ぎようからは打って変わって大人しい。

これをつまえるなど、やはり簡単な話ではないか——。

妹紅は拍子抜けしながらも、先代が鶏を地面に下ろすのを見計らつて、腰を落とした。

「あ……っ!?!」

本当に『あつ』と言う間だった。

伸ばした手を逃れるように、鶏が走り出す。

「このっ、待てー!」

慌てて妹紅がそれを追いかけるが、つまえることはもちろん、思うように追いつくことさえ出来ない。

徐々に必死になり始めた妹紅は、自分がつまえられない理由にまで頭が回らなかつた。

「上手いね」

鶏が遠くへ逃げないように周囲を囲んだ手製の柵にもたれながら、てゐが笑った。

「へたくそだと思うけど」

「妹紅じゃないよ。この修行の内容」

疑問を浮かべるチルノの一方で、慧音が納得するように頷いていた。

「妹紅が鶏を捕まえられないのは、自然と中腰の体勢になっているからだな」

「その通り。低い位置を走る鶏を捕まえる為に、知らずに腰を落とすてる。」

あんな体勢じゃ速く動けないし、足腰にも負担が掛かる。ま、それが目的の修行みたいだけどねー」

「放し飼いしている鶏を選んで買ってきたのも、その為か」

「ホント、よく次から次へと思いつくよね。しかも、年季入ってる。」

本当に先代って、他に誰かを鍛えたことって無いの？ 今の博麗の巫女って、娘なんですよ？」

「霊夢に関しては、主に代々伝わる博麗の術を教えていたらしい。あの自身の武術は、ほとんど伝えられていない」

「ふーん。意外と、人に物を教える才能もあるのかもね」

「教える才能……か」

「寺子屋を道場にでもする気？」

「ま……まだ何も言っていないだろう！」

狼狽する慧音を片手間であしらいながら、決死の飛び掛かりが外れ地面に激突する妹紅を、てゐは眺めて楽しんでいた。

「うあー、きもちいー」

「すげえアホ面」

「うるさいー、なんとでもいえー」

脱力の極みにある妹紅の反応を、てゐは苦笑しながら見ていた。

その日の修行が終わり、風呂で汗を流して、慧音が夕食の準備を始めている間に先代が妹紅の体にマッサージを施す。

ここまですが一日の流れだった。

普段は診療所で振るっている技術を使い、次の日に疲労が残らないよう、入念に筋肉をほぐしていく。

妹紅はこの時間が一番好きだった。

厳しい修行の締めとして、一日の苦勞が報われるほどの安らぎを感じるのだ。

「気持ちよさそう……いいなあ、あたかもやって欲しい」

「チルノは疲れが溜まっていないからな。整骨もやる意味はないだろう」

「ちえっ。あたかも妹紅と同じ修行しようかな？」

「妖精って体鍛えられるの？」

先代が指圧を行っている傍らで、チルノとてゐるが他愛も無いやりとりを交わしている。

眠気にも似た、半ば夢見心地の中で、妹紅は周囲の穏やかな騒がしさを聞いていた。

強張っていた体から、疲労と共に余計な力が抜けていく。

周囲には、自分以外の誰かがいる雑多な音。

居心地が良い。

ここは、本当に自分の家なのか？

少し前まで、想像もしなかった生活がここにあり、自分はそれを味わっている。

「――先代、妹紅。夕食の準備が出来ました。そろそろ切り上げてください」

「わーいつ、ご飯だ！」

「今日のおかずって、修行で使ってた鶏絞めた奴だよ。これも狩りの一種かしら？」

「よし、終わりだ。食事にしよう、妹紅」

チルノを先頭として、全員が外へ出ていく。

天気の良い日は、外で火を囲みながら食事をする。

天気の悪い日は、少々手狭な家の中で、肩を寄せ合いながら食事をする。

妹紅は、そのどちらも気に入っていた。

「――うん、今行くよ」

先代の呼びかけに応える。

ただそれだけのやりとりなのに、暖かなものが心の中に生まれる。

それはずっと昔に味わったことがあるような、最近まで忘れていた何かの感覚だった。

その何かが具体的にどんなものなのかまでは、まだ思い出せない。しかし、この生活を続けていけば、いずれ――。

食後の休息を終えると、談笑が自然なところで切り上げられ、別れの時が近づく。

てゐは永遠亭へ。

チルノは霧の湖へ。

慧音が先代に付き添い、人里へと帰っていく。

最後に全員が交わすのは、当たり前のように『また明日』の挨拶である。

一人になった妹紅は、先代から教わった柔軟体操をしてから床に入る。

疲れからか、眠気はすぐに訪れ、ぐっすりと眠る――そして、彼女達と再会する明日がやって来るのだ。

人の踏み込まぬ迷いの竹林の中では、日常となった光景があった。

もし、何も知らない者がそれを見たら何と思うだろう。

あるいは、彼女達の事情を知った時、予想外の答えに驚くかもしれない。

――苦痛と疲労を乗り越えて、自らを鍛えている。

――目標を打ち負かす為に、歯を食い縛って耐えている。

そんな修練を行う光景でありながら、誰もがそんな悲壮さや痛々しさを感ぜない。

少なくとも、その光景の中心にいる妹紅は汗を流し、息を乱し、そして健やかに笑っていた。

朝の始まりと共に挨拶を交わし、食卓を囲み、激励と叱責を受けながら走り、笑い合い、再会を約束して分かれる。

その光景は、間違いなく人生という日々を生き抜く――明日に向かう人間の日常だった。



人里には上白沢慧音が個人で運営する寺子屋がある。

一人で掛け持ちをするので、生徒の数は少ない。

全員が貧しい家の出身であつた。中には捨て子だった者もあり、寺子屋の一部は彼らの宿舎としても使われていた。

幻想郷の文明が外の世界と比べて古いものとはいつても、実務教育の重要さは定着している。

裕福な者達は、自分の子供に各々の家で必要な事を学ばせていた。そういつた余裕のない貧しい者達に、慧音は修学の間を提供しているのである。

しかしその為、当然のように学費を納められない者が大半だつた。寺子屋の運営にも資金が必要である。

その資金を提供し、いわゆる『スポンサー』となっているのが――霧雨屋であつた。

「――慧音、いるか？」

朝早く、霧雨は寺子屋を訪れていた。

生徒達はまだ訪れていない。住み込みの子供達もまだ寝ている時間である。

しかし、慧音は既に身支度を整えていた。

「これは、霧雨の御主人。おはようございます」

「おう。悪いな、朝早くに」

「いえ、お気遣いなく。どうぞ、上がって下さい。粗茶ぐらいしか出せませんが」

慧音は早朝の訪問にも快く対応した。

それは決して、霧雨が寺子屋の出資者だからという理由だけではない。

彼個人の人柄に好感を持つが故である。

加えて、二人の交友はこの寺子屋が作られた時からずっと続いていた。

「今日は、どういつたご用のおもむきで？」

「ああ、うむ。まあ……そうだな」

湯飲みに口をつけながら、霧雨は切り出しの言葉を探すように口ごもった。

慧音にとつては、意外に感じる様子である。

衰えたとはいえ、昔から豪胆で単純明快さを好む御仁だった。

何かを躊躇う様子など、余り見たことがない。

「……先代のことですか？」

慧音は心当たりがある点を、思い切って口にした。

霧雨が口に含んでいたお茶で軽くむせる。

「ま、まあ、それよ」

「なるほど。最近の遠出のことですか」

歳を経て老練となった外見には似合わない慌てぶりを見て、慧音は苦笑を堪えていた。

「以前から外出の頻度が多かったが、最近はそれに加えて帰りが遅い。しかも、人里から出て、向かった先は迷いの竹林だって話まで聞くじゃねえか。それで……気になってな」

「お気持ちは分かります。」

私も不安に思い、先代から事情を聞き出して、時折それに同行するようになりました」

「うむ……まあ、お前さんが付き添っているという話も聞いたからな。安全面に関しちや心配してねえよ」

「先代が出掛ける理由に関しては——私よりも、先代本人に尋ねられた方が良いのでは？ 今なら、診療所にいるはずです」

「そうか。今日も、行くつもりなのか？」

「ええ、私も同行します」

慧音に促されながらも、霧雨は曖昧に頷くだけだった。今の答えだけで自分を納得させようとしているようだ。

やはり、普段の彼を知る者にとっては違和感のある態度だった。

先代に直接問うことをせず、慧音に対しても煮え切らない応答ばかりだ。

本来の彼は竹を割ったような明快な性格である。

気になったことは本人に直接問い、納得がいけば笑って軽口を返し、いかなければ怒鳴って問い質す——少々捻くれた男だった。それを面倒に思う者も多いが、慧音にとってはそんな不器用な部分こそがこの男の美德だと感じている。

少なくとも、彼と先代の付き合いはそれが許されるだけの親しさと長さがあつたはずだ。

慧音には、彼が今更何故二の足を踏むのか分からなかった。

「……先日な、その先代が俺の所へ来たんだよ」

慧音の言葉にし辛い疑念を感じ取り、霧雨の方から切り出した。

不器用ではあるが決して鈍い男ではない。相手の機微を読み取ることが出来る洞察力があつた。それが商人として成功した理由の一つでもある。

「以前、留守だつた時に送つた菓子と詫びに来たらしい。律儀な奴だ」

「先代は出来た御方です」

「肝心なところで鈍いくせにな。久しぶりに顔を合わせたけど、昔と変わらねえ。本当に、昔のまま色褪せない……美しいままだった」

霧雨の最後の『美しい』という言葉に込められた想いは、真に迫つていた。

その言葉に、慧音は言い知れぬ不安を覚えた。

同じ好感を持つ人物に対する評価は嬉しい。

しかし、今は目の前の男から聞いても良い言葉なのだろうか——
？

「あの……御主人、もしや——」

「俺はな、若い頃あいつに惚れてたんだよ」

努めて軽く口にしてはいたが、そこに込められた本気を感じ取って、慧音は言葉が詰まった。

「いや、今でも……どうかな？ 分からん」

「あのっ、それは……！」

「ははっ、分かつてる。安心しろ、妙なことを考えちやいねえよ」

酷く気まずそうな慧音の様子から内心を察して、霧雨は笑い飛ばし

た。

彼女の懸念する内容は十分に分かっていた。

昔と今は違う。

霧雨は今や大商店の主人である。もちろん、ずっと以前に結婚もしている。

勘当してしまったが、血の繋がった娘がいて、しかも彼女は先代やその娘と交友があるのだ。人里にも時折訪れる。

誰もが会おうと思えば会える位置にあり、言葉を交わせる距離にいるのだ。

霧雨の告白は、それら全ての人間の間接関係を変えてしまうほどの意味を持つていた。

「……失礼ですが、奥方を亡くされて何年経ちましたでしょうか？」

腫れ物に触れるように、慧音は細心の注意を払って質問した。

霧雨の妻は若くして病死している。

本当に若かった。当時、既に齢四十に手が届こうとしていた霧雨とは歳の差のある結婚だった。

何故、霧雨がその歳まで妻を迎えなかったのか当時の周囲には謎だったが——そうなのか？　つまり、そういうことなのか？

慧音は自身の悪い予想を止められなかった。

「下世話なこと考えんなよ？　俺は女房を愛していたから結婚したし、今でも愛している」

霧雨は睨みつけるように見返すと、ハッキリと断言した。

その反応に慧音は驚いていた。

大抵の男は自分の気持ちを言葉にするのが苦手だ。とりわけそれが、自分の妻に対するものである場合は。

彼の不器用な真つ直ぐさは、こういった時に良い面として表れる。

慧音は素直に安堵した。

「お前が不安に思っていることは分かる。

だがな、絶対にそんなことは起こらない。そんな恥知らずな真似をするくらいなら、その前に頭を丸めて出家でもしてやらあ」

「……しかし、今でも先代に対して思うところはある、と」

慧音はもはや恐れず、ハッキリと疑念を言葉にした。

答えが返ってくるのに、少しの時間が必要だった。

「最後に見た三年前と同じ——あいつは俺の記憶にあるまま、若く美しい姿だった。」

だが、不自由な足を杖で支えた姿だった。長い付き合いだが、あんな姿は初めて見たよ。あいつも人間なんだと実感した」

先代の変わらない姿が、彼女自身の鍛錬の成果によるものだとも、もちろん知っている。

現役時代の彼女は、毎日のように傷を負い、血を流し、そして何事も無いかのように前へ前へと突き進んでいた。

「俺は、いつもあいつを眩しいものとして見ていた」

実力や立場という意味だけではなく、何処か人間の領域を超越した存在のように捉えていた。

かつての自分に恋慕があったことは自覚しているが、同時にそれが尊敬や憧れから来るものであり、決して叶わないと無意識に信じてもいたのだ。

「俺はあいつよりも先に死ぬ、と。昔は何の疑問も持たずに信じきっていた。」

だから、期待を抱くと共に何処か諦めもあった。あいつは、俺のよくな普通の人間とは違う。もっと、何かに選ばれた特別な道を行く人間だ、ってな」

自分の言葉に、霧雨は苦笑を浮かべた。

「だが先日、直接あいつに会って、その時の俺は無意識にこんなことを考えていたよ。」

——そんな足じゃあ、診療所を運営するどころか、一人で暮らすことにも不便が出るだろう。だから俺の所へ客として転がり込めば良い。

そして、残りの人生をゆつくり過ごせ。それくらい俺が世話してやる。昔の馴染みだ。巫女としての功績もある。誰も不自然に思わないし、文句も言わねえさ——」

「……その話は、そのまま捉えなくて宜しいんですね？」

「ああ、気の迷いだ。実際には何も言わなかったし、これからも言い出すつもりはない。あいつも迷惑なだけだろう。」

しかし、思ったことは事実なんだ。例え動揺して無意識に考えたことにせよ、俺はあいつに対して今更昔の感情を思い出しちまった」

あいつと顔を合わせ辛い理由はそれき、と。おかしそうに笑おうとしたが、慧音が見る限りそれは失敗していた。

霧雨の顔には自嘲とも後悔ともつかない、苦々しい笑みが浮かんでいる。

「……人間つてのは、歳を食うごとに弱くなつていくもんだな」

霧雨は、己の実感を疲れたため息と共に吐き出した。

「女房への想いは変わらないんだ。それを裏切るくらいならくたばった方がマシだ。」

それなのに、そんな決意とは別の所で違う想いが湧いてくる。それを当たり前のように押さえ込む内に疑問も生まれる。「俺は本当に裏切っていないのか？」——それを切欠に、また心が揺らぐ」

「半獣である私ではハッキリと言えませんが、それもまた人として生きる故かと」

「かもしれないねえ……。常々思うが、人間と妖怪の一番の違いはその死生観じゃあねえか。」

歳を経るごとに、自らの衰えを実感する時が多くなる。一人で歩くことが辛いと思う度に、誰かに縋りつきたいほどの不安を感じるんだ。

人生という道端で、ただ一人力尽きて倒れたまま動けなくなっていくことが、堪らなく怖くなる。

そんな時に、それでもなお自分の足だけで歩こうと思えるのが、あの先代だ。だが、大抵の人間はそこまで強く在り続けることは出来ない」

慧音には、霧雨の語る内容が痛いほど理解出来た。

春雪異変の時に自らの犯した過ちが、脳裏に蘇っている。

「俺と、先代と、霖之助——昔、三人でつるんでいた時は、こんな時間がずっと続けばいいと思っていた。」

だが、月日つてのは無情なほど移り変わっていくんだな。歳を経て、体と一緒に心も老いていく。決意は衰え、意志は弱くなっていく。まったく、ままならねえ」

「……」

「人間つてのは、本当ままならねえもんさ……」



——あれから十年。

妹紅が二人の子供と出会って、それだけの時間が経っていた。

あの日子供だった二人は、少年から逞しい青年へ、少女から美しい女へと成長していた。

その成長を、妹紅は今日まで間近で見守り続けていた。

「何、それは本当か!？」

そんな二人から告げられた内容に、妹紅は驚くと同時に心の底から喜んだ。

「はい。俺達、結婚することになりました」

青年の顔は赤くなっている。

子供の頃と同じように、傍らに付き添う女の顔はそれ以上に赤い。

しかし、二人とも笑顔だった。

妹紅まで浮かぶ笑みを止められなかった。

「そうかあ……いや、それは本当にめでたいわね」

妹紅の本心からの祝福だった。

二人と出会ってから十年。子供だった二人は妹紅と並んでも同年代にしか見えないほど成長した。夫婦となるのに不自然ではない年齢である。

客観的に見ても、それは幸福な結婚だった。

親などに強要されたわけではない、二人とも互いに想い合った上での結婚である。

小さな村だったが、その中でも二人の家はお互いに比較的裕福であ

り、それでいて名家というほど堅苦しくはない。

日々不自由なく暮らし、穏やかに過ごせる、恵まれた環境だった。ただ、唯一の気がかりは女の体が弱いことだが――。

「これまで以上に、二人で支え合わなきゃ駄目よ?」

「はい。こいつは、これからもずっと俺が守りますよ」

「わ、私も……頑張りますっ」

十年間ずっと二人を見守っていた妹紅には、それが要らぬ心配だと分かっていた。

子供の頃のまま、少年は少女を守り、少女は少年を支えている。夫婦となっても、それは変わらないだろう。

妹紅は月日の流れをしみじみと感じていた。

「それで、婚姻の式なんですけど……」

「うん? ああ、気にしないで」

途端に苦々しい表情となった二人に対して、妹紅は努めて気楽に笑ってみせた。

「私が顔を出すわけにはいかないでしょう。折角の祝いの場が白けちゃう」

何処からともなくこの地へ迷い込んだ妹紅が、二人と出会って十年。

二人にとつて、昔の姿のまま歳を取らない妹紅は、命の恩人であり、頼りになる姉であり、今や同じ目線になった友人でもあった。

しかし、他の村人にとっては違う。

得体が知れず、十年経つても歳を取らない彼女がまともな人間として見られるはずもなかった。

明確な拒絶や排斥は行われていない。

だがそれは、妹紅自身が自らの立場を弁えて、二人以外の人間に積極的に関わらずにいたからでもあった。

村には妹紅の存在は知られている。しかし、決して受け入れられてはいないのだ。

「すみません。せめて、報告は一番にしてください」

「一番祝って欲しいのは、妹紅さんなのに……」

二人の気遣いが、妹紅には何よりも嬉しかった。だからこそ、気に病んで欲しくない。

自分が祝福するように、二人の周囲の人間にも素直に祝福して欲しい。

それが何よりも嬉しいことなのだと思っていた。

「いいさ。私は人気の無くなった夜中にでも、こっそり顔を出させてもらおうよ。……いや、待てよ?」

「え、どうしました?」

「……あー、ごめん。よく考えたら、式後の夜とか無粋だね。こりや失敬。気が回らなかつたわ」

「——っ! も、妹紅さん!」

「え……あ、ああつ! そういうことか……って、ちよつと! 何言ってるんですか!」

下世話な配慮をわざと口にした妹紅に対して、顔を真っ赤にしながら二人が食って掛かる。

じゃれ合うようなやりとりを交わしながら、妹紅は自らも幸せを噛み締めていた。

今の彼女にとって、時の流れは何処までも優しく、暖かかった。

——あれから二十年。

「すみません、妹紅さん。コソコソとした真似をさせて……」

「気にしないでよ。無理に見舞いに来た私が悪いんだからさ」

横になった女に、妹紅は優しく笑いかけた。

体の弱い女は、風邪で体調を崩して寝込んでいた。

両親も高齢である。十分な看病は出来ないだろうと心配になり、妹紅がこっそりと家までやって来たのだった。

「私がこんなだから、あの人にも苦勞を掛けっぱなしで」

「それを、あいつが辛いと一言でも言ったかい? 私だって、何一つ苦には感じちやいないよ」

女の夫である青年は、薬を買いに人里まで出掛けていた。

小さな村である。体の弱い女房の為に、彼は度々遠出をして薬を買いに行っていたのだ。

家を出る時と帰ってきた時。青年は必ず笑顔だった。

「……覚えてる？ 私とあんた達が初めて会った日を。」

得体の知れない私を前にして、あんたを庇いながら、私に対しても気を掛けてくれた。そういう良い漢なんだよ、あんたの夫は」

「はい……」

妹紅の言葉に、女は躊躇いがちに頷いた。

「どうしたの？」

その瞳に涙が溜まっていることに気付いた妹紅が、案じるように尋ねた。

「私……不安だったんです。私と結婚したことが、あの人にとって負担でしかなかったんじゃないかって……っ」

「そんなこと……」

「ごめんなさい。でも……不安は妹紅さんを見る度にも感じていました。」

貴女は私と違って体も弱くない。ずっと綺麗で、優しいまま……あの人が本当に好きだったのは、貴女だったんじゃないかって……っ！」

「……」

「本当にごめんなさい。私は、醜くて、酷い女なんです……っ！」

「……そんなこと、ないよ」

優しく微笑み、妹紅はそっと女の手を握った。

体だけではなく、心まで弱っていることが、痛いほど理解出来ていた。

そんな彼女に掛けられる言葉が、自分には無いことを無力感と共に実感していた。

「ごめんなさい……っ」

「謝らなくていいんだ。大丈夫、すぐに元気になるさ」

妹紅は、半ば願うように告げた。

家の玄関が開く音が聞こえ、すぐに騒がしい声が近づいてきた。

「たっだいまー！ 遅くなっちゃったぜ、待たせたな！ あれ、妹紅さ

ん来てたんですか？ ……って、お前何泣いてんだ。寂しかったのか？」

どこかかと足音を立てて無遠慮に襖を開いた青年の顔を二人で眺め、しばし呆気にとられた後、思わず吹き出していた。

先程までの重苦しい空気は、既にそこには無い。

病める時も、健やかなる時も――。

かつて子供だった二人は大人になり、様々な苦難を味わっている。しかし、それらは乗り越えるものだった。

妹紅は、彼らの傍らで静かに見守り続けていた。

――あれから三十年。

「……そうか。もう、大分悪いのか」

「ええ、こここのところずっと寝たきりで」

久しぶりに顔を合わせる青年は、疲れからか酷く老け込んで見えた。

もはや実際の年齢も青年という程若くはない。体も衰え始めた、初老の男だった。

親も既に死別している。

年月は過ぎ、人間は年老い、それに合わせて体の弱い彼の妻はいよいよ体調を崩すことが多くなった。

「とりあえず、人里に行つて買ってきた薬があるけど……」

「わざわざ届けて下さつて、いつもありがとうございます」

しかし、もう薬でどうこう出来る話ではないのでしよう。私も家内も、歳を取りました」

話の中で、疲れようなため息が混ざつた。

妹紅は十年前の彼の姿を思い出し、その弱々しい仕草に違和感を覚えた。

しかし、それが自分の考え違いなのだとかの何処かでは正確に理解している。

もう、十年も経つたのだ。

普通の人間が、普通に老いる時間なのだ。

不老不死である妹紅は、積み重なる年月の無情を感じていた。

「……この家も、静かになったな」

老朽化もあるかもしれない、寂れたように見える部屋を見回し、思わず眩く。

結局、二人の間に子供は出来なかった。

女の体が、子を身籠ることに耐えられないと悟ったのだ。

男は氣遣い、家族は増えぬまま、両親を亡くして、この家の住人は二人だけとなった。

この家を訪れるのに、昔ほど人目を気にしなくてもよくなったという事実が、妹紅には妙に寂しかった。

「薬は置いてく。他にも何か必要なことがあったら、いつでも言つて頂戴」

老いた二人に対して、自分はいつまでも変わらぬままである。

この違いが互いの関係にどんな影響を及ぼすのか、妹紅は長年の経験から理解していた。

きつと、二人にとつても気分の良いものではないだろう——そう考え、昔ほど頻繁に訪れることもなくなつた。

二人を想う気持ちは変わらない。

だからこそ、自分の気持ちを優先して、結果負担を強いるような状況にはしたくなかつた。

「あの、妹紅さん……っ！」

立ち去ろうとする妹紅の手を、男が掴んでいた。

驚いて振り返った先で、見上げる男の瞳を見てしまった。

「どうぞ、また……また来て下さい。お願いします」

「う、うん。もちろんさ」

もはや懇願にも近い男の言葉に、妹紅は頷くことしか出来なかつた。

向けられた焦がれるような視線と、手を掴む意外なほどの力強さが、妙に不安を煽つた。

——あれから四十年。

結局、女の容態が良くなることはなかった。

年齢と共に体は衰え、それに合わせて体調も悪化していく。

もはや寢床から出ることすら出来ない。自力で食事も出来ないし、小便にすら行けないのだ。

誰かの世話がなくては、もはや生きていけない。

その誰かである彼女の夫も、長年の看病疲れから更に老け込んでしまった。

彼までも倒れてしまわないか、ギリギリのところを保っているような状態だ。

そんな年月の重みの中で、ただ一人自分だけが平然としていることに妹紅は耐えられなかった。

しかし、眼を背けるわけにはいかない。

ここで立ち去れば、後には死んでいく老人が二人残されるだけである。

妹紅は二人の為に、最期まで何かをしてやりたかった。

その『何か』が、一体どうすることで最良の方法となるのか、全く分からなかったが——。

歳を取る人間と取らない人間。三人の関係が、いずれこうなることは分かっていたことだ。

だが、分かっていたからといって何が出来ただろう？

四十年前は遠い未来だと思っていた現実が、今日の前に立っている。

妹紅はそれと向き合うしかなかった。

「何か、欲しい物はあるかい？」

「……何も」

久しぶりに顔を合わせた妹紅と女の会話は、たったそれだけで終わってしまった。

もはや彼女は、女と表現出来るほど若くはない。

歳は五十を超えた。病のせいも、それよりも更に老いて見える。

髪は白くなり、皺は増え、昔の面影は何処にもない。

甘く匂い立つような若さと美しさは、既に遠い昔に去った。

死人のような色の皮と骨だけになり、寝たきりの布団からはわずかに尿の臭いが漂う、くたびれた老女がいるだけである。

その枕元に座る妹紅は、四十年前のまま、若く美しい姿なのだ。

今の彼女にとって、自分の存在は忌々しいものでしかないだろうと、妹紅は自覚していた。

そのことを罵られ、当り散らされても構わない。自分が居た堪れないというだけで、不自由な彼女を見捨てることは出来ない。

ただ、自分の存在そのものが彼女の負担になることだけが辛い。

妹紅は余計な口を利かず、ただ彼女を世話することだけに懸命になった。

「……妹紅さん」

不意に、老女が口を開いた。

「貴女が、もっと嫌な人なら良かった」

「……え？」

悪意を込めた声色ではなかった。

ただ、どうにもならない悲しみだけが籠もっていた。

「貴女が自らの若さや美しさを誇り、年老いた私を見下すような人であつたなら、良かった」

「そんなこと……」

「でも、貴女は優しい女性だった。四十年経っても、心貧しくなく、健やかなままだった」

妹紅は戸惑っていた。

自分に向けられる言葉は、罵るような内容ではない。それは嬉しいことだ。

しかし、ならば何故彼女は涙を流しているのか？

「あの人が……愛するのも仕方がない」

あの人——夫のことを言っているのだった。

妹紅は息が止まりそうな衝撃を味わっていた。

全く予想していなかったと言えば、嘘になる。

ここ十年の間で少しずつ積み重ねていた悪い予感が、今決定的な形となつて告げられたのだつた。

「……分かつています。あの人は疲れていました。私のせいです」
「違う！　そ……そんなことは……っ」

——もう二人には近づかない方が良いのではないか。

——老いた二人の視界に入るだけで、彼らの穏やかな余生を乱してしまうのではないか。

妹紅は以前からそう考え始め、しかしそれでも、少しでも役に立つのなら、望まれるのなら——と。そう思つてここへ通い続けていた。

妹紅の来訪を何よりも望んでいたのは、彼女の夫だつた。

疲れ果てた彼の瞳が、自分を見る時だけ焦がれるように光を取り戻すことを、気に掛けていた。

「私は老いました」

「……違う」

「貴女は美しいまま」

「あいつは、そんな男じゃない……っ」

「ただの見知らぬ若い女ならば、そうであつたかもしれません。」

しかし、相手は貴女です。記憶にあるまま、美しく、優しく——形崩れぬ憧れであるままの女性なのです。

こうして姿形だけでなく、心まで醜く衰え、貴女に嫉妬するような、変わり果てた私から心が離れても仕方ないことなのです」

「そんな……そんなことがっ！」

それ以上は言葉にならなかつた。

自分自身を消してしまいたいほど疎ましく感じ、妹紅は衝動的に立ち上がった。

「四十年前。本当は、あの人は貴女のことか——」

その告白を全て聞くことに耐えられず、妹紅は逃げるようにそこから走り去つていった。

いや、間違いなく逃げたのだつた。

逃げられはしないと分かっていたのに。

——そして、あの始まりから終わりの日。

家が、燃えていた。

村の騒ぎに気付き、妹紅が密かに駆けつけた時、あの二人の住む家は既に全体が炎で包まれていた。

もはや何処から出火したのかも分からないほど炎は勢いを増し、夜空を赤く照らしている。

四十年来の見慣れた家が変わり果てていく様を前に、妹紅は呆然と佇んでいた。

周囲には火事を聞きつけて村人達が集まっていたが、彼らに見つかることなど、もはや思慮の外である。

「……二人は？」

妹紅は誰にともなく尋ねた。

周囲の者達は、野次馬よろしく騒ぐだけである。

火がいつ着いたものか分からないが、もはや手を出せる状況でないのだった。

「おい、ここに住んでいる二人はどうしたっ!？」

妹紅は手近な者に掴みかかっていた。

鬼気迫る表情に、相手は妹紅が一体何者なのかも知らぬまま、慌てて答える。

「い……家から出て来た奴はいない。多分、まだ中だ」

「——っ、うわああああああつ!!」

次の瞬間、妹紅は絶叫を上げながら燃え盛る家の中へと突っ込んでいた。

背後から制止する声が聞こえるが、意にも介さない。

呼吸すらままならない熱風を掻き分け、崩れ落ちる家の破片をかわして、がむしやらに走り抜ける。

二人の居場所は分からなかったが、家の間取りは完璧に理解していた。

四十年通った家なのだ。例え周囲が炎の壁に囲まれていようと、正確に内部を把握出来る。

妹紅は一目散に、老女の眠る部屋へと駆けつけた。

半分燃え尽きた襖を蹴り開ければ、果たしてそこに二人はいた。

周囲の炎などまるで存在していないかのようになり、布団に横たわる老女の傍で年老いた男が座っている。

「無事だったか！」

妹紅はこの時、心の底から神の慈悲に感謝を捧げた。

「早く逃げるぞ！」

「……死にました」

そして、告げられた言葉に全てが崩れ去った。

「家内は、もう死んでいます」

「……………え？」

「私が殺しました」

男が何を言っているのか、妹紅には全く理解出来なかった。

あまりの衝撃に、心が全てを拒絶してしまっただけのようだ。

周囲の音は消え失せ、熱は感じなくなってしまった。

「本当は自ら命を絶ちたかったようですが、もうそれだけの力も残っていなかったのです、私が毒を用意したのです」

「……………あ……………え？」

「家に火を放ったのも私です」

そう言つて、ようやく男は顔を妹紅に向けた。

炎に照り返されていることだけが理由ではなく、老いた男の瞳は力強く輝いていた。

それは、一つの決意を宿した眼だった。

「最後に家内と話をしたのです。」

これまでのこと。これからのこと。そして、貴女のことを――」

男は、この窮地に場違いなほど穏やかな笑みを浮かべた。

「子供の頃、私は貴女に淡い想いを抱いていました。それが、年老いた今蘇っております。私は……貴女が愛しかった」

妹紅は何も答えることが出来なかった。

ただ弱々しく首を振り、怯えるように後退ることしか出来なかった。

「しかし、妻を愛する気持ちも決して失ってはいない。老いた私には、この揺れ動く心を再び固めることが、どうしても出来ませんでした。

だから私は、そんな気持ちも含めて、心の内を全て家内に話し、また彼女の心の内も全て打ち明けてもらいました」

「その……その結果が、これだっていうの……？」

「私は、もうこれ以上彼女を裏切りたくはありません。衰えた心の迷いを止めることは、もはや私自身がどう思っても不可能なのです。だから——」

言葉の続きを口にせず、男は小さく笑うと、一度だけ眠るように横たわる老女の髪を手で梳いた。

かつて彼女を娶った時と同じ、愛おしさに溢れる仕草だった。

「家が崩れます。早くお逃げ下さい——いや」

男が懐から小刀を取り出すのを見て、妹紅は我に返った。

「要らぬ、お世話でしたね」

「よせ——っ!!」

叫びながら手を伸ばした妹紅を遮るように、目の前で燃え盛る屋根の一部が崩落した。

炎の向こうで、男が己の首に刃を突き立てるのが見えた。

妹紅は血を吐くように絶叫した。

その声は崩れ始めた家の音と、勢いを増す炎の音に飲み込まれていく。

それでもなお、断末魔のように叫び声は尽きることなく響いていた。

死んでいった二人と同じように、彼女もまた一度絶命するまで延々と——。

——生まれ生まれ生まれ生まれ生のはじめに暗く。

結局、火事が収まったのは明け方であった。

「ひでえ火事だったな」

「他の家に飛び火しなかっただけ幸いだ。死人は二人……いや、あのワケの分からねえ娘を入れれば、三人か」

真つ黒に焼け残った家の残骸の中を、村人達が手分けして掻き分けていた。

死体を見つけ、せめて吊つてやろうという考えである。

その時、折り重なった木片の隙間から炎が溢れ出し、周囲の村人は息を呑んだ。

「残り火か!？」

「危ねえぞ、離れる。なあに、もう燃えるもんはねえんだ。すぐに消え——」

村人達の言葉が途切れた。

目の前の信じ難い光景に呆気に取られたからである。

炎は木片からあがっているのではない。その下に埋もれていた死体から立ち昇っている。

眼を剥いた彼らの視線は、炎に包まれた死体がゆっくりと起き上がる様に注がれ続けていた。そうして、収まり始めた炎の下から、生きた人間の皮膚があらわになった時——ようやく悲鳴が上がった。

「……化け物だ……っ！」

誰かが、そう言葉を洩らした。

死体が炎に包まれ、それが消えた後には生きた人間が残る。

この世の理に真つ向から逆らう現象が、そこで起こっていた。

炎によって死から蘇った人間——妹紅は、恐れ怯む周囲の者達に——瞥もくれず虚空を見つめていた。

いや、淀んだ瞳には本当は何も映っていない。

未だ心の方は死んだままだであるかのようにだった。

「ひ、人か……？」

「馬鹿言え、生き返った死体が人間なわけあるか！ 物の怪だ！」

「武器だ……何でもいいから武器持って来い！」

「おい、あの炎でも死なねえ化け物だぞ！ 何が出来るってんだ!？」

村人たちは各々が凶器となる農具を持って妹紅を取り囲んだが、誰も恐れて竦んでいた。

相手は死なずの者だ。

下手に手を出して、暴れ始めたらそれこそ多くの人死にが出るかもしれない。

そして妹紅は、やはり周囲の騒ぎに関して、何一つ意識を向けようとはしなかった。

やがて、周囲の村人達の中から一人の老人が歩み出てきた。

丁度、死んだ二人と同じくらい歳の老いた男である。

「……そういえば四十年前前、年若いぬ女がおったなあ」

独り言のように呟いた老人の声を聞き、妹紅は初めて意識を現実に戻した。

「この家に、火を放ったのはお前さんかね？」

妹紅は何も答えなかった。

心の底から否定することが出来なかった為でもある。

「……まあ、良い。お前は死なぬ人間だ。何をしようと、わしら普通の人間に勝ち目は無い」

「……」

「ただ、もし何もする気が無いのなら、大人しくこの村から出て行ってくれんか？ 必要ならば、このわしの命くらいくれてやろう。頼む」

老人の懇願に、周囲の村人達は息を呑んで状況を見守った。

妹紅は老人を一瞥し、次に燃え尽きた家の残骸を眺め、最後に足元へ視線を落とした。

「……人間が近づかない場所って、ある？」

感情の抜け落ちた、それこそ死人そのもののような声で妹紅は尋ねていた。

「少し行った所に竹林がある。人が入れれば必ず迷い、妖怪となった獣が棲む危険な場所じゃ。人は恐れて、誰も足を踏み入れぬ」

「……そう。ありがとう」

形だけの礼を言い、妹紅は示された方向へゆっくりと歩き始めた。進路にいる村人達が、慌てて道を譲る。

死なない人間への恐れはもちろんあった。

しかし新たに、生き返りながらも滲み出る雰囲気や仕草全てが死人

のままである妹紅の姿を、不気味に感じたからでもあった。何か目的があるわけでもなく、何かに呼び寄せられるわけでもなく――あるいは何かから逃げる為に歩き続けているようにも見えた。「あれが人であるというのなら、なんと無残な有様か……」のろのろと、亡者の歩みのまま去っていく妹紅の背中を眺め、老人は憐れむように呟いていた。

◆
——死に死に死んで死の終わりに冥し。

目覚めは最悪だった。

それが今見た夢のせいなのか、それともその夢が現実と地続きになっっているという事実への忌避感に由来するのかは分からない。

布団から起き上がった妹紅は、あらゆる感情というものが抜け落ちた表情のまま視線を動かした。

しばらくの間、自分が一体何を探しているのか分からなかった。

徐々に思考が巡り始め、ようやく何を探しているのか自覚した。現実感だ。

先程まで見ていたものが夢であるという、確たる証拠だ。

それはすぐに見つかった。

自分の寝ている布団だ。何年も前の物ではない、昨日干したばかりの暖かい布団。

夜の暗闇の中でぼんやりと見える家の内装は、少し前と比べると驚くほど整っている。日々の改装の成果だった。

妹紅はのろのろと布団から抜け出した。

喉が渴いているわけでもないのに、水瓶の中を覗き込む。

汲んだばかりの澄んだ水が入っている。

外へ出ると、まだ月が上にあった。

夜明けは遠い。

家の周りをゆつくりと歩いた。

毎朝、先代達が料理をする台と調理器具が片付けられている。

昨夜、火を起こした場所には黒ずんだ跡が残っている。

薪割りに使う斧。

組み立て式の柵。

風呂に使うドラム缶。

全部、そこにある。

つい数時間前まで使われ、そしてこれからも使われていく物だ。

妹紅の今の生活の一部となっている物だ。

騒がしく、暖かな日常が在ることの証なのだ。

——だが、これらがいずれ朽ち果てるのに100年も掛からない。

妹紅は薄ら寒い不安と恐怖に襲われて、無意識に夜空を見上げていた。

月はまだそこにある。

夜明けはまだ遠い。

……遠すぎる。

早く朝が来ることを、妹紅は切実に願った。

しかし同時に、明日が来るのが酷く恐ろしかった。

——最初の300年は人間に嫌われて身を隠していた。

——その次の300年は世を恨み、妖怪を退治することでそれを晴らしていた。

——次の300年は死んだも同然の日々だった。

——そして次の300年で、この幻想郷へ辿り着いた。

巡り。廻り。回り。

出会い。別れ。出会い。別れ。

得ては失い。失っては得て。

満たされた腹もいずれ減る。

暖められた手もいずれ冷える。

また食えばよい。

また包んでもらえばよい。

だが、この繰り返しは何処で終わる？

其の二十一 「永夜抄」

——珍しいものを見つけた。

見慣れた竹林の中に、見慣れないものを見つけて、てゐは思わずそう考えていた。

それが思い違いであると、すぐに気付く。

僅かな好奇心は、盛大な厄介事の気配によって掻き消されていた。

この妖精すら滅多に立ち入らない竹林の中で、人間が一人座り込んでいるのだ。

一瞬、見なかった振りをしよかなという考えが脳裏を掠め、しかしすぐに自分が永遠亭の住人と交わした契約の内容を思い出した。

人間を寄せ付けないことだ。

目の前の人間が、生きているのか死んでいるのか確認する必要がある。

やはり、無視は出来ない。

「……生きてたら返事してねー」

面倒臭そうな表情で、独り言のように問い掛けを口にしながら、てゐは一歩歩み寄った。

「死んでたら返事しないでね」

そこに座り込んで数日は経っているらしい。

汚れ、傷つき、虫が体を這っている。

俯いていて顔は見えない。そもそも、ピクリとも動かなかった。

「生きてるけど、死に掛けてるんだったら——」

——それが一番面倒臭い状態だなあ。

てゐは本音を胸の内だけで吐いた。

目の前まで近づいても、その人間は反応すらしない。

全く生きた気配を感じさせないせいで妙に実感が無かったが、間近で見るとその人間の性別が女であることをようやく確信出来た。

汚れてくすんだ長い髪は、洗えば白銀に輝くのかも知れないが、今は力尽きる寸前の老婆のようにしか見えない。

実際の年齢はどうなのか。てゐは顎を掴んで、俯いた顔を持ち上げ

た。

「……………これは……………また」

——面倒なものを見つけた。

長い年月の中で、世の中の酸いも甘いも見てきたてゐるには珍しく表情を歪めた。

予想の内、最悪のものが当たってしまった。

あるいは、それ以上のものだ。

この期に及んでも、まだてゐるを、いや周囲の何ものも見ようとしていない虚ろな瞳。

生気を失った、などという生易しい話ではない。

「お前、なんて顔してんのよ……………」

——こいつは、自分がこの世に生きて存在することに何の価値も見出していないのだ。

◇

——妹紅よ。よくぞ、厳しい修行に耐え抜いた。

この一月余りを鍛錬に費やしたことで、基礎は徐々に形作られつつある。

では、いよいよおぬしに我が奥義を授けようっ！

毎日通っているわけではないが、ほぼ日課となりつつある妹紅との修行。

これまで単純な体力作りや、少し力がついてきた頃には拳の握り方、基本的な構え方など、本当に基礎中の基礎を行ってきた。

妹紅自身、迷いの竹林で暮らす以上特にこれといってやるべきこともなく、一日を純粋な鍛錬に費やすことが出来たので、かなりの密度で鍛えられただろう。

よって、今日はいよいよ具体的な戦闘技能の習得に入ろうと思ったわけだ。

そして、そこで浮上する新たな問題点。

——何を教えればいいの？

今更かよ！　と思うかもしれないが、実はこれが意外と難問だったりする。一応、数日前から悩んではいたんだけどね。

もちろん、私の習得している技の幾つから、使えそうな物をチョイスして教えるというのが普通に思いつく。

しかし、冷静に考えてみると、私の持つ技には様々な問題があるのだ。

まず、習得するまで長期間掛かる。

元々私は『漫画のような修行』をすることが目的であり、その結果で『漫画のような技』を身に着けただけなので仕方ないのだが、いずれも一朝一夕で使える技ではない。

感謝の正拳突きとか、まず『何に感謝するのか？』という点を妹紅は理解出来ないだろう。

そもそも基本的な技として正拳突きはつい先日教えたばかりだ。まずはこの型を完全に体に覚えさせる為の反復練習が先である。

波紋法はどうだ？　肺の空気を出し尽くせば一応すぐに使えるかもしれないけど……小指突っ込むの私がやるの？　無理。普通に攻撃になりそう。

何よりも、不老不死の妹紅には時間はたっぷりあるが、そこまで長々と修行をしてから輝夜に挑むのかというと、やはり違うだろう。

一度死んだらリセット、という条件も修練を積み重ねて会得するタイプの技には不向きだ。

そうなると、やはり最初に妹紅が提案していた『黄金長方形の回転』など、法則を利用したパワーアップが望ましいのかもしれないが……これも正直習得が難しい。

っていうか、単純な鍛錬が無い分、不可能に近い。

いや、私も『妹紅、お前はこれから「できるわけがない」という台詞を……四回だけ言っているいい』という流れを一度やってみたかったのだが、これ私が楽しいだけで絶対結果は出ないと思う。

では、どうするか——？

私の出した答えは、これだった。

「精神の集中の仕方？」

「そうだ」

既に五人で囲むことがお馴染みとなった朝の食卓。

今日の新しい修行内容を一言で表した私の言葉を、てゐが反芻した。

「そりやなんとも……基本的だねえ」

「だが、重要なことだ」

何処となく肩透かしを食らったようになってゐの苦笑に対して、私は真剣な表情で返した。

……実はもつともなツツコミすぎて、半分くらい表情を取り繕ってるのは内緒ね。

「あたしはてつきり、最強と名高い先代巫女の技の一つでも伝授するもんかと思つてたんだけどね」

本当にてゐの言葉がもつともすぎて、私としては内心で恐縮するしかない。

期待してたのにごめん。

でも、真面目に考えると今の妹紅が早く強くなるにはこれが一番なのよ。

「——ふむ。いや、しかし古来より精神集中は武術鍛錬の極意として重視されてきたものだ。」

いわゆる『無我の境地』や『明鏡止水』と呼ばれる精神の在り方は、武術を極めた結果得られる状態だと言われている」

慧音のフォローが完璧すぎてヤバイ。

そう！ そうなんです。それが言いたかつたんです！

ここぞとばかりに便乗しちゃう私。

「単純な鍛錬や技の修練を続けていく上で必ず生まれる、未熟な至らぬ部分。それらを埋めるのは精神の在り方だ」

そうドヤ顔で語る私のこの絶大な自信が何処から来ているのかというと、多くの格闘漫画からであった。

もはや王道とも言える『キャラの更なるパワーアップ』には欠かせない精神修行の数々である。

「一見ド派手な技を習得して『最強じゃね?』と思わせておきながら、実は極々基本的な部分が未熟なので達人には敵わない——といった展開はよく見られるものだ。」

「形や流れは違えど、そういった精神的な修行を経て『今まで見えなかったものが見えるぜ』みたいに全体的な力が底上げされるというのは王道の一つだ。」

「そんな物語中盤あたりにやるはずの内容を、先取りしてやっちゃおうというのが私の考えなのである。」

「本来ならば、肉体の鍛錬の後に行うもの。しかし、妹紅ならば心の在り方を鍛える方が効果的だろう」

「ま、確かにそれなら死んでリセットも関係ないしね」

「技や力に眩むことなく、本当に重要なことを鍛える……さすがです、先代」

「な、なんか知らないけど、お師匠がすげーってこと?」

「チルノ、あたしの魚やるからちよっと黙ってて」

「マジで!? やったー!」

妹紅に修行をつけ始めてからこっち、私への敬服度上昇が半端無い慧音。それっぽいことを言う機会が増えたからか? 向けられる尊敬の念が痛え。

てるとチルノの和むやりとりを視界の端に収めつつ、私は最も重要な妹紅の反応を確認した。

「こんな感じの修行内容を予定しているんだけど、どうでしょう?」

「地味だけどかなり効果的だと思うのよ。」

「……」

「……妹紅?」

「えっ!? あ、ああ……うん。き、聞いてたよ」

「肝心の妹紅は上の空だった。」

「妹紅。貴女自身のことなのですから、気を逸らしてはいけませんよ」

「ごめん。ちよっと、考え事しちゃってさ……」

慧音の説教に対しても、妹紅は何処か力無く応じている。

ふーむ。数日前から気になってたけど、最近の妹紅ってちょっと様子がおかしいな。

修行中では凄く集中しているようなのであまり深刻に捉えなかつたが、修行以外の時間では上の空になることが多いような気がする。何か気がかりなことでもあるのだろうか？

今思えば、修行に集中するのも余計なことを考えないようにしているだけだったのかもしれない。

「何か、あつたのか？」

具体的な内容が思い浮かばず、私は曖昧に尋ねていた。

「いや、何でもないよ……本当。」

それで、具体的にはどんな修行をするの？ 精神鍛錬って言っても

全然想像出来ないんだけど」

妹紅は笑いながら、少々口早に捲くし立ててきた。

うん、なんつーか……物凄く分かりやすい誤魔化し方なんだけど。慧音も訝しげな表情だし、てゐは何か諦めたように小さく肩を竦めている。ご飯に没頭しているチルノだけが気付いていない。

しかし、この場で深く聞くことも出来ず、私は妹紅の逸らした話題に答えることにした。

まあ、本当に何でもないことかもしれないし、いざとなったら相談してくるでしょう。

なんせ私達は、映画のストーリーに出来そうなくらい、深い絆で結ばれること間違い無しな修行の日々を共に送っている仲だからね。

『『穿心』という心構えがある』

皆が耳を傾ける中、私は厳かに語り始めた。

「――己の心を細くせよ。川は板を破壊できぬ。水滴のみが板に穴を穿つ」

漫画の中で鍛えられた精神の在り方を表現する方法は色々ある。『明鏡止水』とか『水の心を持って』とか。

しかし、意外とそれらに大きな違いは無い。

肉体で表現する技とは違い、精神の在り方なんてものは具体的な形など見えないのだから、言葉で表現する場合突き詰めると大抵同じ所

に落ち着くものなのだ。

それぞれの漫画のファンに非難されることを覚悟して、大雑把にそれらの要点を纏めると結局『雑念を捨てて集中しろ』という点に収束される。

多くの漫画は、ここに至る精神の在り方を様々な言葉で表現しているが、私が個人的に一番理解しやすく、具体的に捉えられるものが、この『穿心』の心構えだった。

……まあ、原典であるうしおとららが特に大好きっていうのが一番の理由なんだけれども。

「……よく、分らないよ」

「今はそれで良い」

当たり前といえは当たり前前な感想を口にする妹紅に対して、私は意味あり気に頷いた。

内心では、何が『それで良い』のか自分でも全然分かってない状態である。

妹紅以外の皆も、私の言葉に対して考え込むような反応で、イマイチ要領が掴めていない様子だった。

うん、まあ……そうだね。それが普通の反応だね。

言葉で聞いただけで『水……？　そうか、見えた！』とか覚醒出来るはずがない。

今更ながら、この修行内容の困難さが身に染みて分かってきた。

そもそも最初から『鍛錬を経て到達する境地』って説明しているんだから、それを先取りしようって考え自体が無理があつたのかもしれない。

元ネタの漫画さえ知らない妹紅に、いきなりこんな言葉だけ伝えても理解出来るわけないよねえ……。

でも、とりあえず他にいい案も浮かばないし、やれるだけやってみましょう！

「具体的な修行の内容はこれまでとそれほど変わらない。基本的な格闘用の技を追加で教える程度だ」

「ふむ……まっ、何か考え有りってことか」

フオローありがとう、てゐ。

でも、すまん。実はあんまり考えてない。

「現在進行形で頭を悩ませながらも表面上は平然を装い、途中だった食事を済ませる。」

あ、そうそう。

「そういえば大切なことを確認するのを忘れていた。」

「妹紅。蓬萊山輝夜との勝負は、いつ行うつもりなんだ？」

「修行完了の具体的な期日を、私は尋ねた。」

「当初は知識で知るだけであり、今に至っても実際の面識は無い輝夜
の存在に関しては、ちゃんと事前にそれとなく質問して妹紅から聞き
出している。」

「もちろん、当たり障りの無いことしか話してもらってないので、妹
紅と輝夜の過去の確執などは本来は私が知るはずのない情報だ。扱
いには気をつけなければならない。」

「また永琳の時みたい緊張を味わうなんて御免だからね。」

「とりあえず、私を含めたこの場の全員が『輝夜は妹紅の勝負相手で
あり、これまで何度も戦って負けている』という内容だけは把握して
いた。」

「以前勝負したのがいつなのかは知らないが、少なくともここ一月の
間は修行だけの日々である。」

「別に互いに期日を示し合わせているわけではないと思うのだが、妹
紅が具体的にいつ頃勝負を仕掛けるつもりなのか知っておく必要が
あった。」

「それによつて、修行で目指す目標も変わってくるわけだしね。」

「そ……それは……っ」

「しかし、妹紅は何故かそんな当たり前の質問に対して返答を躊躇っ
ているようだった。」

「どうした？」

「まだ……決めて、ない」

「そうか。しかし、期日は決めておいた方がいい」

「ただ漠然と鍛えるよりも、目標があった方が断然はかどるからね。」

それに今でこそこうして五人揃うのが当たり前になっているが、慧音には寺子屋の仕事もあるし、私も最近私情で診療所を休業しすぎなので、そろそろ復帰しなければならぬ。

あと、これは私だけが知る予定だけど、今後色んな異変が幻想郷で立て続けに起こるはずだしね。

この迷いの竹林が舞台となる『永夜異変』も控えているのだ。いつなにかまでは分からないけど。

私もこの日常に楽しさを感じているが、ずっと同じ日々が続くことはないのだ。

まあ、その変化が生きる上で必要なことなんだけどね。

「……分かってるわよ。その……いずれ、勝負するわ。いずれ……」

そう答える妹紅は、顔を俯かせ、声も弱々しいものだった。

——本当に、どうしたんだ？

具体的には分からないが、何か迷いを抱いているような気がする。

別に答えを先延ばしにすることが絶対に悪いことではないが——うむ、ここは一つ偉大なる名言に肖って、妹紅の背中を押しておくとするか！

『いずれ』とは、いつの話だ？ 明日か？」

「……えっ？」

「妹紅、明日とはいっつの明日だ？」

呆気にとられる妹紅に対して、私は敢えて厳しい口調で告げた。

すまん。しかし、ちよつと厳しい言い方になるが、決断に迷った時はこの言葉が一番効くはずだ。

「明日とは、今だ」

ねーちゃん、あしたっていまさッ！

私自身も五十年生きる上で様々な迷いにぶつかった時、何度も最後の一押しをしてくれた言葉である。

いや、本当。偉大なる先人の言葉には助けられまくりますよ。

ありきたりだけど、やらずに後悔するよりやって後悔した方がいいってね。

妹紅と過ごす日々が嫌なわけではもちろん無いが、だからこそ妹紅

にはより充実した時間を過ごしてもらいたい。

負け続けていた輝夜に勝つことが、その第一歩になるのならば、その一歩を踏み出すことを恐れて欲しくないのだ。

「だから——」

「……うるさい！」

……え？

「いずれって言ったらいずれだ！ 明日は今日じゃない！ 先のことなんて、話さないでよっ！」

妹紅は立ち上がり、絶叫していた。

両目に涙を溜め、肩を震わせている。

怒りと苛立ち、そしてそれ以上の悲しみがそこに宿っていた。

「妹紅、どうしたのですか？ 先代はただ——」

「言わないで……っ」

慌ててフオローに入ろうとする慧音を遮り、妹紅は呆気にとられる私達全員を泣きながら見回した。

「私に、今の日常を持つてきてくれた貴女達が……先のことなんて、言わないで……！」

それは訴えというよりも懇願に近い言葉だった。

誰もが突然の事態に混乱し、ただ黙って見つめるしかない状況から逃げるように、妹紅は背を向けて駆け出した。

竹林の中へと後ろ姿が消えていく。

私は、もちろん両足のこともあるが……追えなかった。

「妹紅！」

「待つてよ、チルノ。悪いけどあんたは追っっちゃ駄目」

「てゐ、邪魔すんな！」

「いいから、ここはせんせーに任せときなつて。いいよね、慧音？」

この場で誰よりも冷静なてゐるが、場の重い空気を和ませるように軽い口調で言った。

「私が？」

「あたしの考える限り、この中じやあんたが一番適任だわ」

「……分かった。すみません、先代。行ってきます」

妹紅を追って駆け出す慧音を、無言で見送る。

うん、いつてらっしやい。

キヲツケテ……。

……どおーしてこおーなった!?

私は内心、頭を抱えた。

どう見ても、私の言動が妹紅を傷つけた結果だった。

な、何が……何が悪かったんだ!?

やっぱり、口調が厳しすぎたのか？ それとも分かっていることを

イチイチ説教臭く言ったのがいけなかったのか!?

「先代。あんたが気に病む必要は無いよ」

さすがにこの苦悩は鉄面皮にも表情として浮かんでいたらしい。

私の様子を察したてゐるが笑いながら言ってくれ。

しかし、そのフォローに素直に頷くことなど出来ない。

私は状況を把握しているらしいに、答えを求めるように視線を

向けた。

『明日とは今』——いい言葉だと思うよ。迷いと後悔ばかりな人生

で、前に進む為に必要なものを教えてくれる」

皮肉ではなく、てゐるは本心からそう思っている様子で頷いた。

「正しい言葉だ。でも……妹紅には、ちよつと厳しい言葉だと思うの

よ。『前に進め』って話はね」

眩きながら、てゐるは小さく笑った。

普段の悪戯っぽい笑顔ではない。

初めて見る。しかし、間違いなくてゐるの本心の一片を表していると

分かる、素直な笑みだった。

「もちろん、それは妹紅の弱さのせいなんだけどさ。

でも、仕方ないでしょ。あいつは、妖怪でも神様でもない。ただ偶

然不死身になっちゃった、元は人間の娘なんだからさ……」

てゐるの笑みには一抹の悲しみが含まれていた。



一月の間妹紅の住処まで通ったとはいえ、やはりこの竹林は立ち入る者を迷わせる構造になっている。

すぐに追ったことが功を奏し、慧音はかろうじて妹紅の姿を捉えることが出来た。

慧音から背を向け、項垂れている。

全速力でも追いつけなかったことや、自分とは違い少しも息があがっていない妹紅の様子を比べて、慧音は『修行の成果が出ているな』と場違いな感想を抱いていた。

「……妹紅」

てゐは自分が一番適任だと言ったが、果たしてそうなのか自信が持てなかった。

今も掛けるべき最適な言葉が思い浮かばず、伺うように名前を呼ぶことしか出来ない。

「ごめん、慧音」

応える妹紅の声色は、意外にもハッキリとしたものだった。

「いや、違うな。謝るなら、先代にか。ははっ、ちゃんと謝らなきゃね」
つい先程、感情をあらわにして嘆いていた様子は今は欠片も見えない。

先代を避けるような素振りも見せない。

しかし、慧音にはそれが内心に押さえ込んだ動揺を上手く隠しているようにしか見えなかった。

どれだけ声色に明るさを持たせても、妹紅は未だに振り返ってその顔を見せてくれないのだ。

このままでは、きっと妹紅は胸の内をずっと明かしてはくれないだろう。

「——明日が来るのが、怖くなりましたか？」

意を決して、慧音は核心に切り込んだ。

背を向けたまま、妹紅が息を呑むのが分かる。

「先程、妹紅が取り乱したのは、未来に待つ恐怖に思い至ったからではないですか？」

具体的な質問は何一つしていない。

しかし、慧音は奇妙な確信を持って妹紅の心情を察していた。

それは慧音自身が酷く共感を抱く内容だったからだ。

躊躇無く告げながら、そこに厳しさではなく、妹紅を気遣うような優しさを含んでいるのもその為だった。

「……ああ、そうだよ」

妹紅は力の抜けた声で肯定した。

「先代達に会うまで、毎日が同じだった。こんな日が来るなんて、想像もしてなかった。

先代達に会ってから、一日がいつも違っていった。次の日、何が起るのか楽しみで仕方なかった」

「今は、違いますか？」

「ああ、怖い。私は、一日が終わるのが怖い。明日が来るのが怖い」

妹紅は日々の辛い修行の中に確かな喜びと幸福を覚えていた。

輝夜を打倒する為の力を蓄えていくこと自体がそれほど嬉しかったわけではない。

周囲の暖かな者達に支えられながら、彼女達と目標をひとつひとつ達成していく——その達成感が、妹紅にとって生きる実感を与えてくれる喜びだったのだ。

しかし、今はその達成感が、生の実感が、正確にはその後に訪れる一息の間が——。

言い知れぬ虚無感を覚える。

一つの達成感の後で、一つの終わりを感ずる。

—— 一步一步、この日常の終わりに近づいていくことが怖い。

慧音には妹紅の告白が身に染みる思いだった。

かつて、先代との間にいずれ訪れる結末を想像して恐怖していた記憶が蘇る。

夢に見たことが現実と繋がっているという事実には、何度も寒気を覚えてきた。

いつそ夢のままであるならば——目覚めの朝など訪れなければ、と。繰り返し考えたのだ。

そして、その思いは今でも完全に消せてはいない。

あるいは、その時が来るまで決して消えないのかもしれない。

「……しかし、それでも」

妹紅と、同時に自分自身へ言い聞かせるように慧音は首を振った。迷いは消せない。

しかし、答えは得ている。

「時の流れを止めることは出来ません。

人の輪廻を遮ることは、許されません」

心の痛みを堪えながら、慧音は静かに答えを伝えた。

「妹紅、貴女の気持ちは痛いほど分かります。

私の身は半獣。先代と同じ生は歩めない体です。いずれ、私もあの人と共に過ごす日常を失うでしょう」

「……」

「その恐怖にどうしても耐えられず、私は一度過ちを犯しました。その罪を経ても、未だ苦悩は消えません。

しかし、分かったこともあります。別れがあるからこそ、出会いもあつた。日々の移り変わりが、私と先代を巡り合わせてくれた。

妹紅、貴女が大切に思ってくれている私達との日々も、『明日』が訪れたからこそ得られたものはずです。

失うからこそ尊い一日がある。その価値に、どうか気付いてください。例え今の日常を失ったとしても、そのことを忘れずに抱いて生き

れば——」

「違う」

諭すような慧音の言葉を、妹紅の震える声が遮った。

「慧音に私の気持ちは分からない」

「え……？」

「貴女と私の立場は違う！」

妹紅は振り返った。

やはり、その顔は涙で濡れたままだった。

そもそも最初から、彼女は取り繕うことすら出来ていなかったのかもしれない。

「——だって、慧音は死ねるじゃないか!!」

妹紅の血を吐くような絶叫に、慧音は続くはずの言葉を詰まらせてしまった。

「慧音の言うことも、先代の言ったことも……何よりも正しい。正しいって、分かってるんだ」

「も、妹紅……」

「でも、それは生きて死ぬる者だから言える正しさなんだ！

私は死ねない……終わりが無い。自分の人生を全うすることなんて出来ない。例え答えを得ても、その正しさを永遠に証明し続けることなんて出来ない！

どんなに固く決意しても、どんなに心が満たされても、私にはその先が残されてるんだ！ 終われないんだよ！」

妹紅は縋りつくように慧音の肩を掴んだ。

鬼気迫る表情でありながら、その力はあまりにも弱々しい。

「私が考えているのは、先代との別れだけじゃない。

慧音も、てるも、チルノだって、時間の差はあってもいずれ命を全うして消えていく……」

私だけが……私だけが違う！ 私だけがいずれ取り残される！

別れと出会い、得ては失うことを私は永遠に繰り返すんだ!!」

食い縛った歯から嗚咽を洩らしながら、妹紅は額を慧音の胸に押し付けた。

そうしなければ、堪えられないのだ。

慧音は青褪め、何も言うことが出来なかった。

人間である先代と比較して、自分は取り残される側だと思っていた。

妹紅もまた同じ悲しみを味わっているのだろう、と。

しかし、その根本が間違っていた。

失った悲しみを糧にしてその後の生を全うする——彼女にはそれすら許されないのだ。

慧音には、妹紅が堪えているものの全てを、測りきることなど到底出来なかった。

何一つ掛ける言葉が見当たらず、震える手で妹紅の肩に触れる。

「明日が来るのが怖い……。」

何よりも、掛け替えのない今が、百年後にはただの記憶になっているのが怖い。二百年後には思い出すことが出来なくなっているかもしれないのが、怖い。

今みたいな穏やかな日常を、昔何度も経験しているはずなんだ。その度に、生きる希望つて奴を持ち直していたんだ。そうして今日まで生きて来れたんだ。

でも、私はもう千年以上前のことなんか臆気にしか覚えていない……っ！」

嘆くような悲しみの中には苛立ちと怒りも混ざっていた。

それが何を対象としている感情なのかは、妹紅自身も分かっていない。

妹紅は扱いきれない激情を、ただ闇雲に吐き出していた。

「千年だ……千年だぞっ!? 言葉じゃ伝わらないか? これがどれだけ長いことなのか、想像がつくか!」

「……」

「長すぎる……千年は、人間の私には長すぎるよ。それなのに、ましてや永遠なんて……そんなあ」

それが永遠の命を得た蓬萊人の本心。

声を枯らすほどに叫び、心の内を吐き出した後に残ったものは、ただの人間の少女が洩らす弱々しい嗚咽だけだった。

「ねえ、死なないですよ……いなくならないですよ……」

妹紅は顔を上げ、懇願するような視線で慧音に訴えた。

「お願いっ……お願いします……! いなくならないでください! お願いします!!」

「妹紅……っ」

錯乱する妹紅を、慧音は抑えるように強く抱き締めた。

そうして、ただ彼女が落ち着くのを待つことしか出来なかった。他にどうすることも、出来なかったのだ。



「そう。つまらないわね」

てゐるの報告を聞いた輝夜は落胆するように肩を落とした。

その仕草さえ優雅である。

脇息に肘を寄せ、両足を揃えて畳の上に軽く伸ばしている。肩を落とす仕草の際にやや首が傾いでいるが、そこに何とも言えない色気が漂っていた。

気だるげな様子は、ここしばらくの間永琳からの指示で私室での謹慎を続けているせいである。

こうしててゐるが外の様子——密かに見張らせている妹紅達の様子——を、定期的に聞く以外に刺激が無いのだった。

「つまらない、ねえ？ 妹紅が聞いたら憤死しちやいそう」

「ああ、違うわ。妹紅が悩んでいる内容に対してじゃないのよ。先代巫女の新しい修行のこと」

てゐるは、今日の朝食の場で起こった出来事を詳細に説明していた。輝夜からはただありのままを話すように言われているので、今朝の出来事の中で妹紅が何を思い、苦悩していたのか、てゐる自身の見解は含まれていない。

しかし、輝夜とてゐるの予想はおそらく一致していた。

先代達と妹紅が出会うより以前に、てゐるに妹紅の世話をするよう頼んだのは他ならぬ輝夜だからである。

「先代巫女って、代々伝わる巫女の秘術とはまた違う独自の技をたくさん持っているらしいじゃない。

私としては、そういう分かりやすい技を妹紅に教えてくれたら面白いなって思ってたんだけど……なんか地味なところに落ち着いちやったわねえ」

「素人の勝手な思い込みだったみたいだね。でも、実際こつちの方が妹紅にとって効果的なのかも」

「そうね。本当、余計なお世話してくれるわ」

輝夜は悩ましげに額を押さえた。

「余計っすか……」

てゐるは微かな笑みを浮かべたまま、表情を変えない。

輝夜に、妹紅の日々の様子を話す時、彼女はいつもこの表情だった。どんな内容を話していても、それに対して輝夜がどんな反応を見せても、てゐるは自身の考えていることや思っていることを悟らせなかった。

「そう、余計。精神鍛錬なんて、妹紅にとって悪影響でしかないわ」「今朝のことだったら、先代も悪気があって妹紅を追い詰めたわけじゃないんだけどね」

「だからこそ、よ。無自覚でも追い詰めてしまうものなの。」

だって、どうしようもないじゃない。いずれ死ぬ人間と、永遠に生きる人間の違いなんて」

「蓬莱人には通らんもんかね、生きる者の道理ってやつは」

「通らないわね。そもそも価値観さえ違うわ。永遠の命を得た時点で、世界の見方を変えなければならぬ。」

老いることもなく死ぬこともないとすれば、即ちそれは生きていないということと同義だわ。

それなのに、妹紅は未だに『生きて死ぬ人間』のまま周りを捉えている。その相違が妹紅の心を磨耗させていつていつていうのに、今更弱った精神を鍛え直すなんて苦しみを延ばす行為でしかないわ」

てゐるから聞いた先代の言動に対して、輝夜は苛立ちすら感じているようだった。

その意見に対して、てゐるは何も言わず、何も表情に表さず、ただ軽く鼻の頭を搔く仕草をしただけだった。

同意か反対か。てゐるの反応を見ようとしていた輝夜は、やがてつまらなさそうに肩を竦めた。

「……妹紅は必要も無いのに死んでは生き返ってを繰り返している。体ではなく、心の話よ。」

いつまでも人間だった頃の生き方に縋りついている。これが地上の穢れというやつなのかしらね。余分なしがらみがああ娘の足を引っ張り続けているのよ」

「まあ、妹紅の生き方が不憫だつてのは同意するよ。」

姫様は妹紅が完全に世捨て人になれば楽になれるって考えてるわけ？」

「世の中との付き合い方を見直しなさいって思ってるわね。周りは『生きて死ぬモノ』ばかり。どれもこれも私達とは違うモノよ。」

同じ目線で見て、同じ価値観で話し、同じ考えで心を通わせれば、いずれ必ず破綻してしまうのよ。その度に心が傷ついて、力尽きて……いい加減、妹紅も気付くべきだわ」

「世情に関わらず、心を石のように静めたまま過ごさせてこと？」

「そうしなかった結果、妹紅の心は何度も限界を迎えている。違うかしら？」

「うんにゃ。ただ、姫様自身も自分の周りに変化を望んでるじゃない。先代の行動に興味を抱いてたし」

「そうね。停滞した水はすぐに腐るわ。襖を開いて、部屋の中に風を吹き込みたい気分にもなる——」

輝夜は座ったまま、手元に置いていた木の枝を握った。

枝の先に鮮やかな宝玉が色とりどり付いた不思議な木の枝である。それを軽く振ると、閉ざされていた襖が音も無く左右に開いた。

開いた先は永遠亭の中庭に繋がっている。

外は夜である。

心地よい夜風が、二人の間を吹き抜けていった。

「でも、私が欲しいのは嵐ではないわ。かすかに吹いては止む、ささやかな微風。それ以上は余計よ」

てゐはやはり何も答えなかった。

微かな笑みのまま、黙って輝夜の語りを聞いている。

「……あんたって、つまんないわよね」

気品のある笑みを崩し、幼い少女のように口先を尖らせながら輝夜がぼやいた。

自分の語りに対して、てゐの何らかの反応を期待していたのだった。

同意でも反発でも良い。

しかし、てゐは呆けるように再び鼻の頭を搔くだけだった。

「あんたが最初に妹紅を見つけてきてからこつち、ずっと監視と世話を頼んでたのに、何も思うところないわけ？」

「いや、最初に姫様が言ったじゃない。長生きした妖怪とはいえ、あたしもいずれ死ぬ存在だしね。蓬莱人の道理に関しては、同じ立場同士が一番通じ合うんじゃないかな」

「だから何も言うことないっていうの？ あんた、ちよつと薄情じゃない？」

「姫様も結構ムラがあるよね。結局、今の妹紅の生き方を否定しているのか肯定しているのか、どっちなの？」

「んなもん決まってるでしょう。否定よ、否定！」

輝夜は断言し、続いて気を取り直すように笑みを浮かべた。

それは美しくも悪辣さを含む表情であった。

「最初は新しく力をつけた妹紅との勝負を純粹に楽しもうと思ったけれど、予想外に面倒なことをしてくれたわ。

話を聞く限り、既に妹紅は自分を追い詰め始めている。つまらない結末を繰り返す前に、ここは一つ勝負を仕掛ける頃合ね」

「……と、いうと？」

「時期的にも丁度いいのよ。永琳が大仰な準備を始めているみたい。

内容を軽く聞いたけど、また随分と大事を近々起こすつもりよね。その時を狙って、妹紅に勝負を仕掛ける」

「いや、お師匠様がそれだけのことをするって、どう考えても姫様の為を思っただけでしょうが」

「そうね。だから有効利用させてもらおうわ」

「駄目だ、このバカ姫」

てゐの呆れたような呟きも聞いていないかのように、輝夜は夜空を見上げて、同じ空の下にいる妹紅に意識を向けていた。

「——今この時が永遠に続いて欲しいと、願ったでしょうよ」

輝夜は妹紅の苦悩と願いを完全に見抜いていた。

「でも、無理。命は尽きて生まれるもの。世界は変わり廻るもの」

こうして言葉にしなくとも、周囲の生きとし生けるもの全てが繰り返し伝えてくるだろう。

「蓬莱人は輪廻しない。妹紅、貴女の繰り返す迷いを断ち切ってあげる。私との勝負が、貴女の決断の時よ」

その勝負が決して逃れられないものであると、輝夜の瞳は語っていた。

残酷なまでに、選択を迫る意思がそこに宿っていた。

そして、輝夜の言葉通り、その夜はやって来た。

偽りの月が発端となった異変の始まり。

奇しくも、妹紅が望んだ『明けない夜』の始まりであった――。



「待たせたわね、霊夢。準備は完了したわ」

「準備、ねえ……」

スキマから式神を伴って現れた紫を見つめ、続いて霊夢は空を見上げた。

夜空には満月が浮かんでいる。

人間にとって、それは何の変哲もない夜だった。

しかし、妖怪にとっては異変の夜であるらしい。

「あの月が偽物？」

「人間である貴女には実感が無いでしょう。でも、月の影響を受ける妖怪の中では気付く者もいるはずよ」

就寝中の霊夢が、突然神社にやって来た紫に叩き起こされたのは数刻前のことだった。

手短に事情を説明され、その重大さも念を押されたが、未だに霊夢は具体的な危機感を抱けなかった。

むしろ、その『偽物の月』に対して紫が取った対処法の方が大事のように感じている。

『夜のままだ時間を止める』って方が、よっぽど異変だと思うけど」

「多分、貴女の想像とは違うわよ。『時間を止める』ことと『夜を止める』ということは意味と性質が異なるわ。」

この世の理に干渉する為に必要なものは『力』よりも『知』よ。強さよりも理解が重要な。優れた術師や、例えば貴女にも可能だと思わうわ」

逆にこればかりは先代には無理ね、と笑う紫を霊夢は複雑そうに睨んだ。

紫の言う『準備』とは、偽物の月を維持したまま夜を止める方法のことだった。

手段自体もそうだが、実際に行ってしまう紫自身もとんでもない。スキマの向こうで如何なる術式や儀式をこなしてきたのか知らないが、紫は涼しげな表情で神社へ舞い戻り、更に偽物の月に関する異変の解決にまで乗り出そうとしている。

普段は傍観する立場にいる妖怪の本気を、霊夢は初めて感じ取っていた。

「このまま夜が続けば、月の魔力が幻想郷中の妖怪に影響を与えてしまう。もちろん、その前にこの永夜の術式を解除するつもりだわ。

だけど、あの偽物の月は私の意思では消えない。これは私が夜を止めていることに匹敵するほどの、恐るべき所業よ。それを行った何者かが、この幻想郷に潜んでいる」

「要は紫レベルの化け物が野放しになっているってことね」

「その通り。例えば夜を止めてでも、あの偽物の月を辿って『敵』を見つけないではならない。制限時間付きでね」

「面倒な話だわ」

紫の語る内容は、かつてないほど深刻なものである。

しかし、それを聞く霊夢は背伸びをしてのんきに体を解し、語る紫の顔には普段通りの胡散臭い笑みが絶やされていない。

博麗の巫女と妖怪の賢者。

幻想郷を代表する実力者二人の余裕が、そこには在った。

「それじゃあ、藍。いつてくるわね。念の為、永夜の術式からは眼を離さないでお願い頂戴」

「——恐れながら、紫様。具申致します」

霊夢と共に神社を発とうとする紫の背中へ、それまでただ黙って付

き従っていた藍がおもむろに声を掛けた。

「此度の異変は異例の大事態。実力者の同行が必須かと」

「……ふむ。何が言いたいのかしら？」

紫はわざと惚けた様子で尋ねた。

傍らでは紫と藍、それぞれの意図を鋭く察して、霊夢がうんざりしたような表情を浮かべている。

「人間などではなく、私をお供に——」

「つまり、貴女は霊夢よりも異変解決に貢献出来る、と？」

「そのように考えております」

「霊夢の弾幕ごっこにおける実力を知った上で『自分の方が優れている』と、本気でそう思っているわけね？」

「紫様が私に施された式を利用してくだされば、可能性は十分……加えて、私の忠誠がお役に立つかと」

式神の力は、その術を施した主が命じることで真価を発揮する。

単独ではなくコンビを組む場合、意見を違える場合さえある霊夢ではなく、紫の道具として忠実な自身の方が有効である——と。藍は進言しているのだった。

紫は面白そうに笑った。

ただしそれは、加虐心と残酷な愉悦を含んだ妖怪としての黒い笑みだった。

「なるほど。それは一考の余地があるわね」

「では……」

「一考したわ。結論を伝えるわね。藍——」

紫は亀裂のような笑みを形作った口で、藍の耳元に囁いた。

「いつてくるわ。留守番をお願いね」

答えを聞いた藍は、一度眼を伏せ、それから深々と頭を下げた。

「……お気をつけて」

紫の身を深く案じる気持ちが進められた言葉だった。

少なくとも、藍の言動には一切の動揺が表れていなかった。

紫は満足そうに微笑むと、改めて背を向けて神社を発つ。

それを追うように霊夢が飛翔し——気になって肩越しに振り返っ

たことをすぐに後悔した。

再びうんざりとした気分が蘇る。

「あんた、自分の式神からかうのやめなさいよ」

「あら？ からかってなんかいないわ。これは愛よ、愛情表現の一つ」

「あたしのいない所でやれ。あいつ完全に殺す気で睨んでたわよ」

つい先程、自分に向けられていた藍の視線を思い出して、霊夢は疲れたようにため息を吐いた。

鉄のように冷たい瞳の中に、殺意と嫉妬が隠されていた。

その眼光を受けて恐怖や身の危険を欠片も感じていないのは、さすが霊夢である。

紫は愉快そうに声をあげて笑った。

「藍も懲りないわね、親子で博麗の巫女を目の敵にするなんて」

「はあ？ まさか母さんにも同じようなことしてんの？」

「ひよつとして、昔のことを根に持っていたのかしら。嫉妬深いのよね、うちの可愛い狐は。まあ、それもこれも私が尊敬されすぎちゃってるのが悪いんだけど」

「そうね、あんたが悪いわ。あたしと母さんの前から消えてくれれば万事解決ね」

相も変わらぬ軽口を交わし、人間と妖怪のタッグが異変の夜を飛んでいく。

傍らに霊夢の存在を感じながら、紫は奇妙な懐かしさを感じていた。

かつて、こうして隣に己の式神ではなく、人間を伴って異変の解決に乗り出したことがあった。

関係は違えど、あの時と同じ信頼感を胸に抱いている。

「――敵は強大ね、霊夢」

紫は思い起こした記憶をなぞるように言葉を紡いだ。

訝しげな表情で見つめる霊夢に笑いかけ、脳裏には彼女の母親を思い浮かべる。

「いえ、大したことはないわね。今夜は、私と貴女で二人掛かりなんですもの」

当代の博麗の巫女と妖怪の賢者。
異例のコンビが、偽物の月を辿って『敵』を目指していた。



「準備はいいかしら、妖夢？」

「いつでも行けます」

腰に二刀を差した妖夢が静かに答えた。

準備といっても物の備えのことではない。これから向かう先に在るものに対する心の備えである。

妖夢の顔付きは、既に戦いの前のそれへと変わっていた。

「貴女が月を斬るくらいのことが出れば、こんな異変すぐに解決するのになえ」

「申し訳ありません、未だ至らぬ身であります。月の代わりに、敵は必ず斬ります」

「……冗談よ。ルールを守って、楽しく戦いましょう」

「はっ」

真剣のように鋭い妖夢の雰囲気を少しでも和ませようと語りかけた幽々子の意図に反して、返ってきた反応は実に剣呑なものだった。

昔の妖夢だったらもつと可愛げのある反応を見せてくれたのに、と幽々子は僅かに唇を尖らせた。

春雪異変を境にして、それ以前と以降の妖夢は明らかに変わっている。

初の実戦とその敗北を経て、何かを掴んだのか。

あるいは未熟さや甘さといったものを失ったのかもしれない。

今の妖夢に漲っているものが、これまで無かった何らかの自信や確信にも見えるが――。

普段の生活の中でも、何処か剣呑な気配を纏うようになった妖夢を、幽々子は密かに案じていた。

「そうそう、ついさつき紫から連絡があったわ。」

立場を考えれば当たり前前だけど、彼女も今宵の歪な月に気付いたよ

うね。博麗の巫女と共に異変解決へ乗り出しているわ」

「博麗……霊夢、ですか」

妖夢の瞳が僅かに揺れた。

自分が初めて戦い、そして完膚なきまでに敗北した相手の名前を反芻する。

その口元には、意外なことに僅かな笑みが形作られていた。

しかし、当然のようにそこに含まれるものが好意的な感情なはずがない。

幽々子は、妖夢の笑みが牙を剥く行為と同じ意味であることを見抜いていた。

「言うまでもないけれど、今回彼女達は目的を同じとする味方よ」

「はい。理解しております」

妖夢は目を伏せ、口元の僅かな笑みを消した。

それが渋々とした反応であると気付き、幽々子は扇で隠しながら小さくため息を吐いた。

——博麗霊夢との出会いが、悪い方向へ転んじやったかしら？

冥界という閉鎖された世界しか知らない妖夢にとって、外部からの刺激は成長の良い切欠になると前向きに捉えていたが、事態は様々な意味で幽々子の予想を超えていた。

霊夢が与えた衝撃と影響は、それまでの妖夢の世界観を度が過ぎるほどに破壊したのだ。

そうして失意の底にいた妖夢が再び立ち上がったことは、一種の成長なのかもしれないが、最近になって幽々子はそれが必ずしも良い意味だけではないと察し始めていた。

一体何が切欠になったものか。最近の妖夢が振るう剣は鋭さが増している。

ただし、眼前に想定する標的を斬る為の純粋な剣技としての鋭さのみが。

「貴女が剣を学び始めたのは、ただ物を斬る為ではなかったでしょうに……」

「何か？」

「いいえ、なんでも。まあ、妖夢はまだまだこれからよね？」

「はあ、未熟なのは自覚していますが……」

幽々子の言葉を誤解して受け取った妖夢は、曖昧に頷いた。

子供を見守る親のように、幽々子は微笑む。

色々と懸念も多いが、前向きに考えよう。

例え迷走であつても、それが前に進んでいることに変わりはない。

成長の一環だ。

たった一つの出会いが、妖夢をここまで変えた。

此度の異変では、さてどんな出会いがあるか？ どんな経験が妖夢を変えるのか？

「行きましよう、妖夢」

「参りましよう、幽々子様」

主従二人。互いに思うことは違えど、ある意味この異変の中で最も解決への義務感を抱いていないことだけは共通していた。

文字通り、違う世界の住人なのだ。

半人半霊の庭師は主が定めた敵を斬る為に。

亡霊の姫はそんな従者を見守る為に。

死者の世界から、偽りの月が昇る生者の世界へと二人は降りていった。



「これが喘息の薬です。携帯用の容器ですから、あまり量が入っていませんよ。大切に使うてください。体調が悪くなったら、すぐに咲夜さんに言ってくださいね。」

それと、これは私が冬に使っているマフラーです。ちよつと長くて不恰好ですが、喉をこれでしっかり守るように。それから——」

「分かった！ 分かったから……もうやめて頂戴、美鈴」

美鈴が矢継ぎ早に告げるのを、パチュリーは慌てて遮った。

背後の小悪魔がどんな表情でこのやりとりを眺めているのか、容易く想像出来たからだ。

普段のパチユリーならば、こんな母親が子供に対してするような扱いはプライドに懸けて断固拒否するのだが、悪気は無く善意であり、何より相手が悪かった。

かつて美鈴の世話を受けていた身としては、彼女の献身はどうにも拒み辛いのだった。

何より、美鈴の気遣いが決して嫌ではないと自分が感じてしまっている。

「パチエ、準備は出来たかしら？」

「ええ、十分過ぎるほどね」

同じく外出の準備を整えた咲夜を伴ってレミリアが現れると、パチユリーはややうんざりとした表情で迎えた。

背後でニヤニヤと嫌らしく笑う小悪魔は、意識して視界から外している。

「結構。まあ、パチエの知識と咲夜の実力があれば並大抵のことは大丈夫でしょうけど、今夜は何やら複雑な物事が動いているわ。一応、気をつけてね」

「問題ないわ。——けど、本当に私が出向いてよかったの？」

「何よ、やっぱり面倒？」

「いいえ、親友のお願いですもの」

咲夜は主の命令で。パチユリーは親友の頼みで。それぞれが、今夜の異変の解決に向かおうとしていた。

レミリアは月の影響を最も受ける妖怪である。

最初に昇った偽りの月に気付き、その後始まった時間の流れの異常と、結果起こり得る幻想郷への影響まで、全て把握していた。

止まった夜を動かし、本物の月を取り戻さなければならぬ——。珍しく、道楽などではなく真つ当な義務感によって彼女は自発的に

動いたのだった。

「でも、私はレミィ自身が動くものと思っていたわ。

偽りとはいえ月の異変。吸血鬼としての力も漲っているでしょう」

「最初は私もそう考えたんだけどね」

レミリアは苦笑を浮かべた。

それは誰にでもない、自分自身に向けたものである。

「気付いたのよ。姉妹なんだもの、フランだって私と同じような状態のはずだわ。」

あの子を地下に閉じ込めて、私一人だけ外で好きなように暴れ回って発散するなんて、不公平だと思わない?」

「これまでは満月の度に封印を強めて閉じ込めてきてたクセに」

パチユリーは、わざと意地悪く過去を蒸し返した。

もちろん、その指摘がレミリアにとって悪い意味で受け取られないと理解してのことである。

彼女とその妹の関係は、もうかつてのように劣悪ではないのだ。

「だからこそ、よ。フランはあの頃とは違うわ。」

こうして今も、地下から暴れる音が聞こえない。あの子は我慢している。気が昂ぶるままに暴れることを良しとせず、狂気を押さえ込んで、一人耐えている」

「健気ね」

「そうよ、健気で可愛らしい私の妹よ。」

あの子の成長のことを考えれば、こうして我慢することを覚えさせる為に、何もせず見守るのが一番かもしれない」

自分で口にした正論を、レミリアは景気良く笑い飛ばした。

「——が、しかし! そんなことは知ったこっちゃあないわね、私は甘やかすわ!」

今夜は一晚中付きつきりでフランと遊んであげる。パチエと咲夜は、地下室ごと紅魔館が吹っ飛ぶ前に何としても異変を解決しなさい」

レミリアの言う『遊び』の内容が、壮絶なものであることは分かりきったことである。

それでいて、何処にも昔のような悲壮な響きを感じない。

フランドール・スカーレットは変わったのだ。姉や、周囲の者との関係さえ。

「責任重大ね」

「かしこまりました。お任せ下さい、お嬢様」

パチュリーが呆れたように笑い、咲夜は見事な一礼をして応えてみせる。

誰もレミリアの判断に異を唱えなかった。

傍らで聞いていた美鈴も、小悪魔も、この場の誰もが笑っていた。レミリアの頼みとも命令とも取れない言葉に背を押され、咲夜とパチュリーの珍しいコンビが異変解決に向かう。

「——ああ、それとパチエ」

「何かしら？」

「今夜、異変の解決に出向くことはアタタにとっても大きな意味を持つことになりそうよ」

「……？」

紅魔館を発とうとするパチュリーの背中に、レミリアが意味深げな言葉を掛けていた。

パチュリーは訝しげな表情を浮かべていたが、それ以上何も言わず笑みを湛えるだけの親友が言葉の真意を明かすつもりなど無いのだと察して、肩を竦めた。

おそらく、この夜を進めば分かることなのだろう。

彼女の言う『運命』とやらの導きによって——。

「さて、と」

そうして従者と親友を送り出したレミリアは、後ろを振り返った。

二人が見えなくなるまで手を振っている美鈴を一瞥し、早々に図書館へ戻ろうとした小悪魔の肩を掴む。

「それじゃあ、行こうかしら」

「あれ、何ですこの手は？ 私、これから仕事があるんで離して欲しいんですけど？」

「美鈴、お前も付き合うわよね？」

「もちろんですよ。私も今夜の月で、少なからず力が滾っていますからね。朝までお付き合いします」

「あれれー？ 無視ですかー？」

「小悪魔、お前も来い」

「トイレなら一人で行ってくださいよ」

「ツーカーが主従だけだと思うなよ。パチエがお前に具体的な仕事を何も言いつけなかったのは、お前を好きに使って良いという意味なんだ」

「実は、私には図書館を離れられない魔術的な制約が……」

「以前、先代様の所行こうとしてましたよね?」

「美鈴さんって、空気読めてないところありますよね?」

「読む相手選んでるだけですから」

「……結構言いますね」

「当たり前だ、こいつは昔私を部屋から引きずり出したことがあるんだぞ」

口論なのか単なる軽口なのか分からない応酬をしながら、いつの間にか三人は地下のフランドールの部屋の前までやって来ていた。

小悪魔はほとんど引き摺られるような形で同行している。

それでも抵抗らしい抵抗をしなかったのは、諦めているのか最初から受け入れていたのか。

何か邪な意図があるのかもしれない、と。レミリアは今更ながら彼女を連れて来たことを急に後悔した。

しかし、放っておいて、こいつが安穩としながら地下の出来事を楽しんでいられるのも気に入らない。

当事者として巻き込んでしまえば、少しはいい気味だろうとレミリアは考えていた。

「……静かですね」

部屋の扉の前で呟いた美鈴の言葉の意味を、レミリアは正確に理解した。

昔ならば、中で暴れるフランドールの叫び声や音が聞こえていただろう。

今は、まるで息を潜めているかのように物音一つしない。

あの小さな妹が、薄暗い部屋の中で一人耐えている姿を想像して、レミリアは胸が騒ぐのを感じた。

居ても立ってもいられず、勢いよく扉を開け放つ。

「こんばんわ、フラン。いい子にしてたかしら?」

努めて明るい声を出す。

部屋の中を確認したレミリアは、内心では驚いていた。破壊どころか、部屋の調度品が何一つ乱れてはいない。

周囲の物に当り散らした跡くらいは多少あるだろうという想定は、完全に外れていた。

フランドールの自制心は、そこまで強固だったのだ。

妹への称賛と感動すら抱きながら、その姿を探すと、ベッドの上で膝を抱え込んで座っているのを見つけた。

訪問者に対して、ゆつくりと顔を上げる。

「フラ——!?!」

改めて声を掛けようとして、その瞳を見たレミリアは一気に嫌な予感を感じ取った。

狂気に満ちた眼光が、こちらを射抜いている。

「よけなさいー!」

背後の美鈴と小悪魔へ、咄嗟に警告を発する。

レミリアはフランドールの様子から、何かが爆発する寸前の印象を受け、そしてそれは正しかった。

何の脈絡も無くフランドールが片手を突き出し、その手のひらから弾幕を放ったのだ。

溜め込んでいた魔力が溢れ出したかのように、精密性は無く、暴走染みたでたらめな軌道と火力で、光弾が三人のいた場所に殺到する。

扉ごと、地下室の入り口を盛大に吹き飛ばした。

「あ……っ! わ、わたし……!?!」

地下に反響する爆音を聞き、ようやくフランドールが我に返る。

自分の起こした破壊の跡を見つめ、遅れて無意識の行動を自覚した。

一瞬総毛立つような、自分自身への不安と恐怖を感じながらも、爆煙の中からレミリアと美鈴の無事な姿を見つけ出して安堵する。

しかし——。

「お嬢様、無事ですか!?!」

「ええ、無傷よ。そっちは?」

「間一髪避けました。危なかったですねー……ところで、小悪魔さんは？ 同じタイミングで動いたので、避けれたと思いますが」

「……小悪魔？」

煙が晴れ始め、駆け寄ろうとしていたフランドールは目の前の光景に愕然とした。

「あ……ああ……っ」

「い、妹様……」

足を止めて立ち竦んだフランドールと、蹲った状態から顔を上げた小悪魔の眼が合った。

小悪魔は右手で左手を押さえていた。

その手首から先が、無い。

「ああ、手……手がっ。わた、私の……！ 痛い……っ!？」

青褪めた顔で、小悪魔は悲鳴を上げた。

その悲痛な光景に耐えられず、しかし眼を背けることも出来ずに、フランドールは恐怖に凍りついていた。

目の前の事態は、自分が起こしてしまったものなのだ。

「こ、小悪魔……!？」

「ひいいい……っ！ 私の手があ!？」

「ごめ……ごめんなさいっ、わたし……!？」

取り返しのつかないことをしてしまった絶望感と、身を切るような罪悪感がフランドールを支配していた。

謝って済むような問題ではない。

自分は、決して小悪魔には許されない。

そう自覚出来るだけの良識と理性を持っていたことが、フランドールをより深く追い詰めていた。

「どうして……どうして、こんなことを……？ 酷い、妹様……どうしてえ!？」

小悪魔の悲痛な訴えが、何よりもフランドールを責め立てた。

顔を両手で覆い、恐怖に引き攣った頬を押さえる。涙が溢れ、歯の根が鳴るのを止められなかった。

どうしていいか、まるで分からなかった。

ただ命に代えてでも償わなくてはいけないと思い、それでも許されるはずがないと絶望し、ガタガタと震えながらレミリアと美鈴の方へ視線を向けた。

「……………おい」

「あああああつ、痛い！　痛いですう、妹様あ！　死んじやいますうう
〜！」

「……………小悪魔さん」

「見てつ、見てください美鈴さん！　これを妹様がやったんです！
レミリアお嬢様、アナタの妹がやらかしましたよコレ！　私のお手え
がああ……………」

『——ぶっ殺すぞ』

レミリアと美鈴は異口同音で小悪魔に冷たく告げた。

「手え——が、あります」

それまで苦痛に歪んでいた顔をあっさりと朗らかな笑みに変えて、
小悪魔は袖の中に隠していた左の手首から先を出した。

ポカンとした表情で呆気に取られるフランドールの目の前で、フラ
フラと無傷の左手を振ってみせる。

「如何でしたでしょうか、妹様？　小悪魔の小粋なマジック・ショーで
す。ほら、他にもこうやって親指が離れていくように見えるマジック
とか……………」

「左手の指折りましょう」

「右手も折れ。指全部折れ」

怒りと殺意を静かに漲らせながら、美鈴とレミリアが小悪魔ににじ
り寄った。

未だに状況を把握出来ないフランドールの眼には、本気の涙が浮か
んでいる。彼女が、目の前で起こった事態にどれほど恐怖したのか想
像に難くない。

誰かを傷つけ、何かを壊すことに恐れを抱き始めた、まだ心幼い繊
細な少女なのだ。

悪ふざけにしては、明らかにやりすぎだった。

しかし、小悪魔は落ち着き払って二人を一瞥するだけに留める。

「外野はちよつと黙っていてください、これから大切なことを話しますので」

向けられる殺意の視線など物ともせず、小悪魔は優しく微笑みながら、フランドールに歩み寄った。

「——恐ろしかったですか？ 妹様」

言い含めるようなその声色は、聖母のような優しさに満ちている。

「……うん、怖かった。小悪魔が、無事でよかった……」

「ふふつ、ありがとうございます。妹様は優しいですね。」

申し訳ありません、私も冗談が過ぎました。しかし、今回は冗談で済みましたが……例えば、本当に誰かを傷つけてしまうこともありま
す」

「……わたし、怖いよ。ずっと我慢してたのに、何も分からなくって、気が付いたら攻撃してて……」

「ええ、妹様がわざとやったわけではないことは分かりますよ。よく、今まで我慢しました。」

そして、今回感じた恐ろしさを忘れてはいけません。力を振るった結果起こり得る光景の一つが、あれなのです。

あの時感じたものを忘れず、糧にして、どうすることが一番良いのか、自分で考えるのです。ただ恐れるだけではいけませんよ？」

「うん……分かった。小悪魔、ごめんなさい」

「いいんですよ、妹様。よく一人で我慢していましたね。偉いですよ」
小悪魔がフランドールを優しく抱き締めると、やがて押し殺したような嗚咽が漏れ始めた。

レミリアと美鈴の二人は、いつの間にか怒りを忘れ、ただ黙ってその光景を見つめていた。

その優しくも美しい——欺瞞に満ちた光景を、怒る代わりに心底呆れ果てながら。

「……本っ当汚いな、あのクズ」

「妹様を玩んだ拳句、綺麗に話を締めちやうっていうのがもうね……」
「結果的にフランの成長に貢献してるっていう点が余計に始末に負えん」

「横から口を挟めませんね」

「つていうか、このままだとフランがあいつに遠慮して思いつきり遊べないだろう」

「小悪魔さんを抜きにしてやるしかないですね。そこまで計算尽くですか……性質悪っ！」

背中を向けた小悪魔の顔が密かに嫌らしい笑みで歪んでいることを半ば確信して、レミリアと美鈴は齒軋りしながら耐えるしかなかった。

一方、紅魔館を発った咲夜とパチュリーは――。

「……今更だけど、小悪魔を置いてきたのは失敗だったかもしれないわ」

「私も、この先に待つ異変よりも紅魔館の方が気掛かりになってきましたわ」

二人にとって、今夜一番の懸念は前よりも後ろに存在していた。



魔法の森には二人の魔法使いが住む。

一人は普通の魔法使いである霧雨魔理沙。

もう一人は――。

「……どうしたの？」

「いや、何でもないぜ」

テーブルを挟んだ向かいから聞こえた問い掛けに、魔理沙は本に視線を落としたまま素っ気無く答えた。

しきりに包帯に覆われていない方の眼を擦っている。

「左眼も良く見えなくなってきたのかしら？」

「……ああ、霞んできた。でも、大丈夫だ。文字の方はむしろハッキリ見えるようになってきた」

普通の人間が傍から見れば、それは奇妙な光景に映っただろう。

テーブルを挟んだ二人の少女が、片方は裁縫を行い、片方は読書に

励んでいる。

二人とも歳若い少女である。

部屋の内装は小奇麗に整頓されており、下品でない程度に飾られている。テーブルにはティーセットと茶菓子。そして、少女趣味らしい人形が棚の上や窓際に幾つも置かれていた。

絵本に描かれるようなファンシーな光景である。

ただし、その人形の何体かがひとりでに動き回り、部屋の内外を掃除する様は現実離れしたファンタジーであった。

そして、魔理沙が熱心に読み解こうとしている本のページには文字が一つも書かれていない。

「しかし、何て本なんだこれは……気のせいかな、昨日見えたものと書いてあることが違って見えるぜ」

「そういう魔道書なのよ。それ一冊に何百冊分もの文章が含まれているわ」

「読む度に違う内容になるなんて、読みたいページ探すのが大変だな」「本来なら、読みたい部分を任意に呼び出せるのよ。この未熟者」

「悪かったな、魔法使いもどきで……」

無関心そうな様子でありながら、何かと自分を弄ってくる向かいの人物に対して、魔理沙は口を尖らせた。

しかし、本当の悪感情は抱いていない。

この突き放したある種の冷たさを、むしろ気に入っていた。

それでいて、言動に無意識なお節介さが垣間見えるギャップを面白くも思っている。

今もそうだ。

彼女が甲斐甲斐しく繕っている物は、つばの部分をも木の枝に引っ掛けて破いてしまった魔理沙の帽子だった。

「しかし、文字が見えるようになったのはいいが、何て書いてあるのかがるつきり分からないぜ」

「段階が違うわ。その魔道書の文字が見えるようになることがまず一歩目。

二歩目で本の力を押さえ込むこと。無作為な情報の放出を抑えて、

アナタのレベルに見合ったページを出せるようにならなければならぬ。

「読み解くのはそれからね」

「気の長い話だ」

「あまり悠長にはしてられないわよ。このままのペースだと、左眼の視力を失う方が先だわ」

さらりと告げられた残酷な事実を、魔理沙は無言で受け止めた。

それは事前に聞かされていた危険性だからだ。

そして、それは既に覚悟して受け入れたことだった。

「魔道書自体の魔力がアナタの視覚を蝕み始めている。

その影響で、アナタは肉眼では不可能な霊的な要素が見えるようになっていくわけだけど、その『魔法使い特有の視覚』を早くモノにしないと、ただ失明するだけで終わるわ」

「逆に周囲のマナを気配ではなく視覚的に捉えるようになれば、魔法使いとしてレベルアップ出来る……って話だったよな？」

「基礎中の基礎のレベルだけだね。インクの文字で書かれた初歩的な本以上の、呪紋や文章に含まれた暗号なども読み解けるようになるでしょう。理論上は」

「『見えるようになることが、まず前提。そこから先は探求と理解』だろ？ 最初の授業で聞いたぜ」

「アナタの師匠は、こんな基本的なことも教えてくれなかったのかしらね？」

「師匠じゃないぜ。わたしが知識不足で聞くことさえ思いつかなかったただけだ。……パチュリーのことを悪く言うのはやめてくれよ」

「これは失礼」

実際に笑い声は出さないが、相手が苦笑する気配を感じ取って、魔理沙は唇を噛みながら本を読むことに集中した。

相手の反応が恥ずかしくなかったわけではない。

考えているのはパチュリーのことだった。

彼女が自分に、その『基礎中の基礎』を教えてくれなかった理由は分かっている。

自分がそのレベルにさえ達していないほど未熟だからだ。

己の身の程を無視して、強引に無理を通した結果、こうして失明するか否かの綱渡りをしている。

それが分かっていたから、安全性を確かめながら段階をゆつくり踏んでいくことを彼女は選んだのだ。

パチユリーは冷静で、聡明で、そして何よりも優しかった。

魔理沙にはそれが悔しかったのだ。

それは魔法使いとしての矜持ではなく、若さから来るただの意地だった。

「今日はここまでね」

唐突に、魔理沙の意に反して本が閉じられた。

魔理沙自身は何もしていない。

呆気にとられる前で、本がひとりでにテーブルを滑り、向かいの相手の手に収まる。

魔理沙が文句を言う暇も与えず、そのままページが開かないように、カバーの上からベルトを巻いてしまった。

「なんだよ、まだわたしは大丈夫だぜ」

改めて本以外に視界を向けてみれば、テーブル越しの相手の顔さえ滲んでよく見えないことに気付いたが、魔理沙は強がって言った。

「精神面での理由よ。集中力を乱したわね？」

「う……………」

「魔法使いならば感情的になるなど教えたでしょう。」

……まあ、アナタにそれが無理であることは、ここ一月の間で理解したけれど」

呆れたように呟きながら、奪った本の代わりに帽子を放り投げる。

見事なコントロールで、クルクルと回転しながら帽子は魔理沙の頭に乗った。

縫合の跡さえ分らないほど、帽子の傷は綺麗に修復されていた。

「あ、ありがと……………」

僅かに頬を赤くしながら魔理沙が小声で礼を言う。

その反応を無視して、眼前に手のひらが突き出された。

親指と小指だけ折られている。

「魔理沙、何本に見える？」

「あ？ えー……二本だ」

ほとんど目の前にも関わらず、魔理沙は僅かに眼を凝らしてから答えた。

「じゃあ、指から伸びる『糸』は何本見える？」

「三……いや、二本だ！」

「三本よ。一本はわざと魔力を薄めて見えにくくしたわ」

ここで言う『糸』とは、物理的な物ではない魔力で構成された物のことだった。

この魔法使いが得意とする魔法の一つで、この魔力の糸によって周囲の人形を操っているらしい。

魔理沙は、勉強について親に咎められた子供のような表情を一瞬浮かべた。

「では、見える二本の糸はどの指から伸びている？」

ただ単に勘で答えている可能性も考慮して、更に質問が重ねられる。

「中指と……親指？」

「正解。引つ掛からなかったわね」

僅かに愉悦を含んだ声を聞いて、魔理沙は複雑そうに笑った。

普段は自分に対して無関心で無愛想な言動を取りながら、時折見せるこうした悪戯っぽい彼女の言動には、思わず調子を狂わされてしまう。

目の前の少女と出会って、まだ二ヶ月ほどだが、魔理沙はその性格や人物像をイマイチ把握しきれていなかった。

同じ本当の意味での『魔法使い』でありながら、パチユリーとはまた違った部分のある相手だった。

「——さて、出掛けましょうか」

例えば、こうした唐突なアクティブさ。

伺うものではなく、もはや決定事項のように告げられた内容に対して、魔理沙は面食らった。

「で、出掛けるって……何処へだ？ 何しに？ っていうか、もう夜だぜ？」

ケープを羽織って、首に赤いリボンを巻き、粛々と準備を整える様子は魔理沙の都合など全く気にしていない。

人形が勝手にテーブルの上を片付け始め、周囲の動きに流されるように、魔理沙は慌てて立ち上がった。

「魔理沙、アナタは今夜の月に違和感を感じないかしら？」

「月？ 何のことだ？ また何かのテストか？」

「まあ、それに近いけれど……人間には分からないのかしらね。まあ、いいわ」

「会話しようぜ？ 魔法使いってのは一人で勝手に納得するからいけないぜ」

「魔法使いっていうのは、そういうものよ。自身の知識を他者に理解させる仕事ではないわ」

「冷たい奴だなあ……それで、本当に何の目的で出掛けるんだ？ なんか、自然とわたしも同行する流れになってるけど」

「人手が足りていたら、アナタみたいな未熟者なんか絶対に連れ出さないわよ。」

しかし、ある意味都合が宜しい。さつきも言ったけど、今のままのペースではアナタの眼に關して間に合わないかもしれない。

よって、実地で叩き上げようと思ったのよ。相応に危険もあるけど」

「ふむ……」

質問した相手が、明確な返答をするつもりがないのだと悟ると、魔理沙は自力で推測を始めた。

思考を回すことに集中する魔理沙の様子を、横目で眺めながらも彼女は悠長に待つことはしない。

いつの間にか準備を終え、玄關のドアに手を掛けたところで魔理沙はおもむろに口を開いた。

「——戦いに行くんだな？」

ドアを開いた。

月の光などほとんど地に届かない、鬱蒼とした森の中で、その洋館の周囲だけが不思議な力で切り取られたかのように開けていた。

地底の穴から見上げるように、頭上に浮かぶ夜空と月が見える。

普段から化け物茸の胞子が漂う森の中だが、今夜は月の力を受けて、眼に見えないはずの魔力の粒子までが淡い光となって周囲を漂っているように映った。

いや、錯覚ではなく本当に見えるようになったのかもしれない、と。自分の見える世界が変質していく実感を魔理沙は僅かな恐怖と共に感じていた。

改めて、先んじて玄関から外へ踏み出した彼女を見つめる。

「付いて来るかしら？　魔理沙」

「ああ、望むところだぜ——アリス」

振り返ったアリスは、妖しく笑いながら魔理沙を永い夜へと誘った。



人と人ならざる者同士が手を取り合い、それぞれがそれぞれの過程を経て、己に課せられた使命と己自身の意味によって異変解決に向かう。

各々の事情と目的は違えど、向かうべき先は同じ。

拮抗し得る力を持った四組の進路が、迷いの竹林という一点で交わろうとしていた。

——初めて出会う者。

——再会する者。

——戦う者。

——心通わす者。

行く先に待つ波乱は、もはや避けられぬ必然である。

そして、偽りの月と永夜の下、混迷する事態の最中にいるのは一人の蓬萊人だった。

千年以上続いた繰り返しの時の中で、果たしてこのような流れは

あつただろうか？

永遠の命を得て以来、延々と続いてきた迷い。自問。苦惱——。
己の抱える難題の答えが出ようとしている。

——妹紅は、その時が今夜であることをまだ知らない。

其の二十二「難題」

「……軽いわね」

「ああ、軽すぎるよ。こいつ」

永琳の眩きを耳聡く聞き取ったてゐるは、相槌を返した。

診察台代わりの机の上には、ボロボロの少女が横たえられている。

てゐるが竹林の中で行き倒れていたところを連れて帰ってきた少女だった。

「何日あそこで座り込んでたんだか……」

少女は極度に衰弱し、死にかけていた。

異様に体が軽く感じたのは、彼女が餓死する寸前の状態にまで陥っているからだろう。

しかし、てゐるはそれ以外にも、何か致命的なものがこの少女の中から抜け落ちてしまったかのような軽さを感じていた。

竹林からこの永遠亭まで、てゐるが担ぎ、迎えた永琳に事情を説明し、こうして治療の為に運び込むまでの間、周囲の変化に対して僅かな反応すら示さない様子が、それをより印象付けている。

少女はまだ息をしていた。

僅かに息を吸い、吐く。

ただそれを繰り返すだけだった。

治療といつても、このような状態の人間にどんな治療が出来るというのか、素人のてゐるには見当もつかずに永琳の様子を伺うしかない。

「——騒がしいわね」

不意に部屋の戸が開いて、輝夜が顔を出した。

物事の変化が少ない永遠亭の中で起こる出来事に、彼女は敏感だった。

「あら、人間を招き入れるなんて珍し、い……っ！」

横たわる少女の姿を見た途端、輝夜は顔色を変えた。

てゐるの知る限り、常に優雅で『姫』という呼称がこれ以上無く相応しい彼女が、初めて見るような動揺を表に出している。

「……ひよつとして、知り合い？」

輝夜と、同じように黙り込んだ永琳の反応に、てるは適当なあたりをつけた。

その問い掛けを無視し、二人は視線を交わす。

「……永琳、この娘は」

「ええ、間違いありません。蓬萊の薬の効果を受けています」

「じゃあ、あの時の……」

「それ以外に人間がああ薬を手に入れる機会はないでしょう。この顔、私は見覚えがありませんが」

「おぼろげだけど、彼らの中にこの娘の肉親がいたような……」

「ああ、あの五人ですか。そうすると、少々厄介な身の上かもしれませんね」

二人は、姫と従者としての会話を交わしていた。

その内容は、てるにとつてまるで把握出来ないものだったが、輝夜の口調からは戸惑いを、永琳の口調からは冷徹さを感じ取った。

いずれにせよ、目の前の少女の治療を目的としてこの場へ連れ込んでいるにとつて、あまり都合の良い気配ではない。

「話し合いいいんだけどさ、この子今にも死にそうなんだけど？」

てるは遠回りに治療を催促するように声を掛けた。

しかし、永琳は反応せず、輝夜の返答を待つように視線を向けたままである。

「……いいわ。お願い、永琳」

しばしの思案の後、輝夜は意を決するように永琳へ告げた。

何かを含む僅かな間を空け、永琳はようやく横たわる少女へ視線を向ける。

懐から、小刀を一本だけ取り出した。

「てる、離れてなさい」

そんな物一本で何をするのか、と。てるが口にしようとした疑問を事前に遮り、永琳はおもむろに刃を少女の首元に押し当てる。

そのまま、音も無く横へ滑らせた。

その一連の動作があまりにも自然だったので、てるは一瞬永琳が何をやったのか理解出来なかった。

人間の肉体を熟知している無駄のない動きで、僅かな抵抗も無く刃が首の中に滑り込み、動脈を切断して反対側から抜ける。

元々その部分が開くように出来ていたのかと錯覚するほど鋭利な切り口から、大量の血が流れ出す。

カツと眼を見開いたてゐる前で、成す術なく少女は呼吸を止めた。

「……何を」

「見ていなさい」

意識して動揺を押し殺したてゐるに有無を言わず、永琳は淡々と小刀の血を拭いながら少女の死体を見つめた。

変化はすぐに起こった。

突然、少女の死体が燃え上がったのだ。

二人が何かをした様子は無い。つまり、目の前の死体が勝手に発火現象を起こしたことになる。

不可解さは他にもあった。すぐ傍で様子を見守るてゐ自身には、その炎から全く熱を感じられなかったのだ。横たわる机は、燃え移るどころか焦げてすらいない。

激しい燃焼は、発火の時と同じように唐突に鎮火した。

そして、その炎が消えた後には、切り裂かれた首の傷どころか、餓死寸前のやつれた肉体さえ消え去った、瑞々しい美しさを保った少女が横たわっていた。

「……つまり、お姫様やお師匠様と同じ種類の人間ってこと？」

「私達は人間ではなく、月人。そして、この娘は正確には元人間であり、今や蓬莱人となった存在よ」

てゐのおおまかな括りを、永琳が細かく訂正した。

そこにどんな意味があるかまでは、てゐにも分からない。

ただ、彼女達が——特に永琳が、地上に住む人間という種族を下に見ていることは、長年の付き合いから察していた。

永琳の胸の内を探ることに面倒を感じていたてゐは、彼女の言葉に反応せず、黙ったまま復活した少女の覚醒を見守った。

今にも止まりそうだった呼吸が、実際に一度止まったことで力強さを取り戻すという現象に、生命の理を真つ向から否定するおぞましさ

を感じる。

そして、肉体の回復に影響されてか、そう間を置かずに少女の意識も回復した。

ゆっくりと、瞼が開かれる。

「……………」

錆びついた音が聞こえてきそうな、緩慢な視線の動きと共に、口からは掠れた声が僅かに漏れた。

死体が目を覚ましたら、こんな反応をするのではないか？

てるは、動き出した目の前の少女から、未だに生きる者の活力を感じられなかった。

「う……………」

「おはよう」

言葉の形にならない、単なる呻き声を洩らす少女に対して、微笑みかけたのは輝夜だった。

「あ……………あええ……………」

「誰だか分からない？ 私の顔、覚えていない？」

少女が僅かに意識のある反応らしきものを見せる。

「私は、今思い出したわ。もう千年以上前の話よね」

絵画のような形の良い笑顔の仮面を付けたまま、輝夜は少女に語りかけた。

「ごめんなさい、貴女の名前を知らないの。だから、私から名乗るわね」

「……………」

もはや明確な意思を持って、少女の瞳は輝夜の顔を見上げている。急速に焦点が定まり、それに合わせて一つの感情が蘇りつつあった。

「——私の名前は『蓬萊山輝夜』よ。藤原の娘」

「あ、あ、嗚呼あああああああああああ、あ、っ!!!」

死体が蘇生した——。

臓物ごと吐き出すような絶叫を聞き、そこに至って、てるはようやくそう実感した。

輝夜の正体を認識した少女は、その瞬間心と体を爆発させるように動き出していた。

起き上がり様、渾身の力を込めて輝夜の顔面を殴り飛ばす。骨の碎ける音が聞こえた。

しかし、それは輝夜のものではない。逆に殴りつけた少女の拳の骨が折れたのだ。

小柄な少女の脆い肉体は、身の丈に合わない理性を超えた殺意に突き動かされていた。

倒れ込む輝夜の上に馬乗りになり、何本かの指が捻じ曲がった拳を無理矢理握って、何度も叩きつける。

血が飛び散った。

輝夜が口から出すものよりも、折れた骨が皮を突き破った少女の拳から出るものの方が多かった。

しかし、少女は狂ったような叫び声を上げながら、拳を振り下ろすのを止めない。

輝夜は全く抵抗をしなかった。

何故か、永琳さえもこの状況に対して何一つ行動を起こそうとしなかった。まるで意味の無いものとして、冷ややかに見つめ続けている。

少女の上げる獣のような叫び声と、肉を叩き、骨が碎ける音。血が床に付着する音。ただそれだけが延々と続く。

てゐは、一步退いた場所から、その光景を見つめていた。

普通ならば狂気を感じ、おぞましさに震えるような光景に、痛ましげな視線を向けるだけだった。

「これが、蓬萊人だったの……っ？」

少女は、延々と輝夜を殴り続けている。

輝夜は、延々と殴られ続けている。

永琳は、延々とそれをただ見つめている。

蓬萊人である輝夜は死なず、同じ肉体を持つ少女もまた力尽きることはない。

三人の内、誰かが意思を持って止めない限り、この光景は続くのだ。

延々と――。

「……なんて、有様だよ」

この三人の関係の始まりを、てゐは知らない。

しかし、少なくとも三人に終わりが無いことを、てゐは思い知った。



――誘導されている。

紫と霊夢は、互いに言葉は交わさずとも同じ懸念を抱いていた。

月の異変の元凶に繋がる軌跡を辿って、迷いの竹林へ入った瞬間に感じたことだった。

尤も、それを承知の上で足を踏み入れたのだ。

この竹林全体が、強固で緻密な結界の迷宮によって覆われていることは、外側から見ただけで分かった。結界の専門家である二人には造作もない。

この場所が単なる通過地点ならば、結界を無視して上空を通り抜ける選択肢もあっただろう。

しかし、二人はやはり同じように、異変の元凶がこの竹林の中にあることを察知していた。

結界を崩すことも可能ではあるが、時間が掛かりすぎる。

紫は一瞬だけ思索し、霊夢の方は全く迷うことなく、結界への侵入を決めたのだった。

「この結界の術式、初めて見るわ」

「私は覚えがあるわね。首謀者の正体が掴めてきたわ」

霊夢に先頭を譲り、紫がそれに続く形で二人は進んでいた。

周囲の景色は、どれだけ進んでも全く同じに見える。

実際、術中に嵌れば永遠に同じ場所を巡り続けるのだろう。視覚的にだけではなく、結界によって他の感覚も狂わされていた。

しかし、前を進む霊夢に迷いはない。

確実に異変の元凶へと近づいているのだと、紫も疑いはしない。

安全策を取って結界の破壊を選択せず、踏破することを選んだ理由

の一つがそこにある。

博麗の巫女の類稀なる『勘』の正確さを、自他共に認めていた。

——幻惑や感覚妨害の類の術は、霊夢には通用しない。

本人に気付かれぬよう、紫は満足気な微笑を浮かべた。

「……近いわね」

「そう？　なら、そうでしょうね」

根拠のない霊夢の断言を、もはや紫は僅かも疑わない。

優雅な仕草の内側で、如何なる事態に直面しようとも動じないよう戦闘態勢を整えておく。

この結界一つを取っても、『敵』の技量は侮れないものだと分かる。そして更に、紫は個人的な知識から『敵』の正体を半ば確信していた。

「霊夢、これから相手にするのは月の——！」

「むっ」

言葉を遮るように、二人は同時に接近する複数の気配を捉えた。直前まで何も感じ取れなかったのは、おそらく結界の作用なのだろう。

しかし、ならば何故唐突に気配が現れたのか？

まるでこの一帯だけが、結界の穴であるかのように術の作用を受けていない。

「……嵌められたわ」

思い浮かんだ疑念からすぐさま解答を導き出し、己の失敗を自覚して紫は苦々しく呟いた。

接近する気配が、遂に視認出来る位置までやって来る。

気配は六つ。

それぞれ別の方向から二つずつ、ほとんど同じタイミングで霊夢達の前に現れた。

「れ、霊夢!?!」

「……霊夢?!」

魔理沙とアリスは、同じ人物を見つめていた。

「やはり、この空間は意図して作られた迷路だったようですね」

「ええ。まんまと誘導されたわね」

咲夜の言葉に相槌を打ちながらも、パチユリーの視線は魔理沙とその傍らにいる見知らぬ魔法使いに向けられていた。

「ほら、妖夢。迷ってなかったでしょう？ 紫がいるっていうことは、この方向で正解だったのよ」

「はあ、そうでしょうか？ 何やら複雑そうな状況ですが」

のんきに喜ぶ幽々子とは違い、周囲の者全てを警戒しながら、妖夢は油断無く刀の柄に手を添えていた。

「この状況が、仕組まれてたつていうの？」

「おそらく。誘導されていると分かっているのにそれに乗ったのに、更に上を行かれたわ」

異変解決の為に行動を始めた者達が、皆一様にこの場へ集まった。

これが単なる偶然ではなく、仕組まれたことなのだど何人かは理解していた。

そして、紫は更にその先を予想している。

だからこそ、苦い敗北感を味わっていた。

異変の首謀者を決して侮ってなどいかなかったが——最初の一手を敵に譲ってしまったのだ。

「……『全員』知らない顔ね」

じつと霊夢を見つめていたアリスは、やがて視線を周囲の他の者全員に走らせ、魔理沙にだけ聞こえるように囁いた。

パチユリーから僅かに敵対の気配を感じ取る。警戒を高める。

「敵か、味方か……どっちなの？」

アリスにとって、見知らぬ相手は全て対応を決めかねる相手だ。

それはパチユリーがアリスに、咲夜が紫に、あるいは妖夢が——互いが互いに見知らぬ相手を警戒することと同じだった。

探るような視線が複雑に絡み合い、張り詰めた拮抗状態を自然と生み出している。

誰もが初動を躊躇う中、アリスに問われた魔理沙が顔を上げた。

その瞳に宿った、分かりやすい決意の色を見て取り、誰もが状況が動くことを予感した。

「動くよと撃つ！」

魔理沙はミニ八卦炉を構え、攻撃の矛先を定めていた——霊夢に向けて。

「……何のつもり？」

「間違えた。撃つと動くだ。今すぐ動く」

「どういう誤解をしているのか知らないけど、あたしは異変を解決しにここまで来たのよ」

「そうかい。私はいつも通り、迷惑な妖怪を退治しにきたただけだぜ」

魔理沙の言い分を聞き、霊夢は後ろを振り返った。

胡散臭い妖怪がそこにいることを確認し、うんざりしたため息を吐く。

「こいつは迷惑な妖怪だけど、今回の異変の元凶じゃないわよ」

「どうかな？ そいつの能力なら、夜と昼の境界を弄ったり出来るんだらう」

「確かに、夜を止めているのはあたし達。でも、今はそれどころじゃないのよ」

「なんだ、お前も共犯だったのか？」

「……魔理沙、わざと言ってるの？」

霊夢は僅かに凄みを持たせた声色で尋ねた。

こちらの言い分を無視して、この状況を曲解するほど察しが悪いとは思えない。悪ノリしているだけでもない。そんな人間ではない。と。霊夢は魔理沙のことを評価していた。

だからこそ、霊夢には不可解だった。

魔理沙が自分に向ける戦いの意志は、嘘偽り無く、また同時に決して退くことがないものだど勘で分かってしまうのだ。

「身の潔白を証明したかったら、わたしに勝ってみろよ！」

「あんだ、その眼はどうしたの？」

血気盛んな魔理沙の様子を無視して、霊夢は冷静にその真意を見抜こうとしていた。

それはあまりに冷静すぎる対応だった。

魔理沙は苛立ったように歯噛みした。

「うるさいぜ！ 勝負だ、霊夢!!」

「まあ、いいわ。とにかく敵ね」

片眼を覆う包帯を筆取り、魔理沙が弾幕を放つ。流されるように、アリスがその行動に追従した。

「何なのよ……？」

珍しく戸惑った表情を浮かべながら霊夢が反射的に回避行動に移る。

霊夢との等間隔を維持しながら、紫は魔理沙を中心に動き出した周囲の状況を見回した。

同じ異変解決を目的としているであろう者達の内、二人が戦いを始めてしまった。

これが現状をどう変えていくのか、ハッキリとは分からない。

しかし、予想は出来る。

そして、紫の浮かべる予想は常に悪い方向へと向かっていた。

「……本当、まんまとしてやられたわ」

胸の内に渦巻く感情を隠すように、紫は口元を扇で覆った。



『――侵入者二名が戦闘を開始しました。内容は、例のスペルカードによるものようです』

「ええ、見えているわ」

鈴仙からリアルタイムで送られてくる映像を確認しながら、永琳は通信に応えた。

いずれも、幻想郷には存在しない高度な機器を使用したものである。

周囲に投影された画面には、さすがの彼女も初めて見る弾幕ごっこの実物が映し出されていた。

交差する鮮やかな弾幕の物量に圧倒されるが、同時に殺傷や破壊といった威力がそれらに込められていないことも実感出来た。

『あんな感じではないんですね……』

「いざ戦うとなったらね。郷に入れば郷に従いましょう、不必要なト
ラブルは避けたいしね」

『はい。分かりました』

応える鈴仙の声色に僅かな安堵が混じっている点に、永琳は触れな
かった。

この幻想郷で行われる決闘の方法を知り、それが予想していたもの
よりも遥かに安全であると知って、安心していただろう。

鈴仙は、この弾幕が実弾で行われる戦闘を知っている。その恐怖
も。

だからといって、気を抜かれては困るのだが――。

『でも、師匠の言うとおりにになりましたね』

苦言を言うべきか否か。下手をすれば萎縮してしまうかもしれない。
い。

意外と扱い辛い弟子に頭を悩ませる師の心境を知ってか知らずか、
鈴仙は尊敬の念を込めて呟いた。

『あいつら、勝手に争い始めましたよ』

「予想の範囲内だわ。この幻想郷は、そういう所なのよ。

軍隊にいた貴女には実感がないでしょうけど、この地には統率され
た組織的行動を取れる者がほとんどいないわ」

『でも、今回みたいな異変が起こった時、解決する役職の者はいるんで
すよね？』

「そう、個人でね。それを支援する組織は、やはり存在しない。博麗の
巫女はただ単体でのみ存在する。

また妖怪というものも、個体が強力であるが故に個人主義者が多
く、徒党を組んだとしても自負心の強さから自らの地位をその集団の
頂点に置きたがるわ」

『では、あいつらがこの場に集まった目的は全く同じではなく……』
「それぞれが、それぞれの理由で同じような行動をした結果顔を合わ
せた、といったところね。

お互いの思惑が僅かに違っているのだから、こうして実際にかち合
えば何処かで摩擦が起きると踏んでいたわ。少なくとも、互いに協力

し、連携し合うという発想は生まれない」

『さすがです、師匠！』

「お世辞はいいから、戦況を見守っていないさかい。

出だしはまずまずだけど、和解して協力し合うという展開が一番厄介だわ」

鈴仙に下した命令を最後に、永琳は一旦通信を切った。

実力的に考えれば、鈴仙ではあの場にいる一部の人妖相手に勝ち目は無いと分かっている。

しかし、隠密行動において彼女の能力は八雲紫にさえ通じる面があるだろう。

とりあえず、事前に用意していた策の進展は順調だった。

このまま互いの戦力を潰し合ってくれば言うことはない。

しかし、全ての物事が順調というわけではなかった。

「てると輝夜ね……」

いつの間にか永遠亭から姿を消した二人を思い浮かべる。

二人の動向に関して、全く把握出来ていないわけではない。

てるに関して、時折思いもよらぬ行動を取ることで予想という点では厳しいが、そもそも彼女の存在に対して永琳はそれほど重きを置いていなかった。

永遠亭が動くという重要な事態に、手を貸してくれるならばありがたいが、そこまでの義務は彼女に課せられていないのだ。

永琳は、てるの動向を一旦頭の片隅に仕舞った。

輝夜に関しては逆である。

長年の付き合いから、彼女の動向は高い確率で予想出来る。

しかし、彼女には万が一の間違いさえ起こってはならないのだ。

「少し、予定を変える必要があるそうね」

輝夜の向かった場所は、ほぼ確実に予想する通りのはずだ。

永琳は静かに行動を開始した。

◇

——こんなに平和でいいのかしらん？

私の住む診療所の内部は安置の如く平穏な空気に満たされていた。普段ならば一人で座る小さなちやぶ台を、今夜はプラス二名で囲んでいる。

私の下へ相談にやって来た慧音と、こっちは何故やって来たのか理由不明だがその笑顔一つで何でも許せちゃうチルノだった。

慧音はチルノに簡単な漢字を教えている。

そんなチルノのぱーふえくと国語教室を眺めながら、私はのんびりとお茶を啜っていた。

やべえ……至福だわ。

どんなテレビ番組よりも素晴らしいものを、私は視聴しているのだ。

本当、こんなに平和を謳歌していいのかしら？

だって——今夜って、異変起こってるじゃん。

私は窓から夜空を見上げた。

夜中に眼が覚めてから今まで、随分時間が経ったと思うが、相変わらず月はそこにある。

時計がないから正確な時間までは分からないが、そろそろ空が白みを帯びてもいい頃合のはずなのに、一向に夜が明ける気配がない。

この状況を、私は異変として知っていた。

まさに今夜は『永夜異変』の真っ最中なのだ。

実は慧音が相談に来たのも、この事態に気付いたからなんだよね。

「解決には、まだ掛かりそうですね」

私の視線に気付いた慧音が、同じように窓の外を見ながら呟いた。

今夜の異変に真っ先に気付いたのは、実際には慧音だったりする。

月に違和感を感じ、夜分訪れることに恐縮しながらも私を起こして、そこでようやく私自身も異変に思い至ったのだ。

慧音が起こしてくれなかったら、多分そのまんま寝て過ごしてただろうね。元旦を寝て過ごすかの如く。

「ああ。しかし、いざれ解決するだろう」

私は相槌を返した。

まあ、半ば確信してますけどね。

そんな私の迷いの無い返答を聞き、慧音は安心するような笑みを浮かべた。

「正直、今回の異変の規模にはどうしても不安が拭えないのですが……貴女の動じない姿を見ると、私まで安心してしまいます」

「霊夢達を、信じているからな」

——主に数の暴力を。

なんてたって、今回の異変には霊夢はもちろん、そのパートナーに紫。他のメンバーもそうそうたるものなのだ。異変解決は確実だった。

なんとというフルボッコ。タグを付けるなら『勝てる気がしない』だな。

逃げて！ 永遠亭、逃げて！ と言いたくなる。

「やはり、貴女に相談して正解でした。私だけでは、勝手に独走して余計な問題を増やすだけだったでしょう」

「人里を能力で隠そうとした判断は、決して間違つたものではない」「いえ、霊夢達が上空を通り過ぎたのを見た時、貴女の判断の正しさを確信しました。」

もし、あの場で人里が隠されていれば、彼女達はそれに気づき、余計な警戒を抱かせてしまつていたはずです。まるで先を読んでいたかのような慧眼、恐れ入りました」

うん、毎度のことだけど……すまん。先を読んでいたんだ。原作のネタバレ的な意味で。

当然、そんな事情を説明など出来ないから、私は何もかも分かつたようなすまし顔で、慧音の尊敬の視線から感じる後ろめたさから必死に眼を背けていた。

ホント、最近の慧音の尊敬値上昇率がヤバイわ。

私の言動を良い方向に捉えすぎる。

私だって人間なんだから、間違ふことや迷ふことだってあるのよ？

例えば……今まさにそうなんだよね。

「そういうえば、妹紅は大丈夫かなあ？」

奇しくも、不意に漏れたチルノの呟きが私の内心を見抜いたかのよう
うに、抱いていた不安を具体的な言葉にして表していた。

「妹紅か……」

「やはり、先代も気になりますか？」

チルノ自身は、特に何か意図しての呟きではなかっただろう。

幻想郷規模の異変を思い浮かべ、同じ明けぬ夜を過ごしている妹
紅を単純に気遣って出た言葉だ。

しかし、私と慧音はまた違った懸念を抱いていた。

——あの日、朝食の時に見せた妹紅の狼狽ぶりを、私は忘れてはい
ない。

そして、ずっと話してくれないが、あの後を追った慧音はより詳し
い事情を知っているはずだった。

「あれから妹紅の様子は変わりませんが、まず間違いなく無理を隠し
ていると思います」

慧音の話は、不安を煽るものでしかなかった。

こんな時、私の持つ前世の知識が決して万能ではないのだと実感す
る。

私には、あの時何故妹紅があそこまで心を乱したのか、全く見当が
つかないのだ。

何度思い返しても、あの時の私の発言に妹紅の心に障るようなもの
があつたとは思えない。

それが分からないまま、妹紅の事情に迂闊に踏み込むことも出来
ず、結局あの日以来当たり障りの無い日々を過ごしてしまった。

結果、起こってしまった異変の夜に、こうして悶々と過ごすしか
ないのだ。

うーん、不安だ……。

原作通りなら、永夜異変自体には妹紅が関わる要素なんて無いのだ
が……それが希望的観測以外の何物でもないということくらい分
かっている。

妹紅は舞台となる竹林にいるのだ。

何がどう転がって事態に巻き込まれるか、分かったものではない。

常に事態は変わっていくもの——それが現実なのだから。

「妹紅の様子を見に行く、というのは無理か？」

「先代自身が、ですか？」

危険です。妖怪の類もそうですが、夜中に迷いの竹林へ踏み入るなど、正気ではありません」

ずっと考えていた案は、あっさりとは慧音に却下された。
ですよー。

そもそも行ってどうするのだ、って話なのだ。

実際に、妹紅の身に何か起こっているわけでも無し。会ったところで、何をすればいいのかも分からない。

このまま大人しく異変が解決するのを待つのがベストなのかなあ……。

「——夜分恐れ入りますよっと」

話すことも無くなった私達の間、診療所の入り口の方から聞き覚えのある声が届いた。

こつちの返事を待たずに遠慮なしに戸を開け、私室であるここまに入ってくる。

「てゐー」

「やつ、どもども。全員揃ってるのね、こりやあ都合がいいわ」

私達全員の顔を見回して、てゐは普段通りの悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「こんな夜更けにどうした？ 一人なのか？」

慧音の能力こそ使っていないが、異変を察知して以来人里には厳戒態勢が敷かれている。

月の異常に影響された妖怪が、何か間違いを起こさないとも限らない。念の為の処置だ。

そんな中をどうやってここまでやって来たのか？ そもそも何故この診療所を知ってるのか？

疑問は色々あるが、慧音が最初に口にしたのは彼女らしい、夜分に出歩いてゐるを心配してのものだった。

それを理解してか、てゐの笑みが優しいものになる。

「夜明けを待つほど悠長じゃないんでね。なんせ、このままだと夜明け自体が来ないわけだし」

「異変だと分かっていたのか？　ならば、尚更……」

「その異変の中心が、うちのなのよ」

「何!？」

てゐの発言に、さすがの慧音も顔色を変えた。

私自身も別の意味で動揺している。

何故、てゐはそのことを関係のない私達に教えに来たのか……？

「ひよつとして、妹紅が危ないの?」

「……よお、チルノ。時々、あんたが本当に最強なんじゃないかと思うよ」

おそろくこの場の誰よりも事態を把握していないはずのチルノの問い掛けに対して、てゐは尊敬の念を隠さずに言った。

「どうやら、意図せずチルノは核心を突いていたらしい。」

「そうだよ、妹紅が危ない。異変は、正直あまり関係ないんだ」

「だが、妹紅が危険なんだな?」

「うん。だから、手助けして欲しいんだ」

「分かった。行こう」

慧音が確認し、私が他の二人を代弁するように答える。

そこに迷いはなかった。

私達全員を見つめて、てゐは満足そうに笑った。

「助かるよ。妹紅の抱えている問題は、正直あたしには荷が重いんだ。

情けない話だけど、あたしじゃ答えを教えてやれないし、ヒントも

やれない。だからさ、頼むよ——」

てゐは頭を下げた。

そこに嘘や偽りが無いことは、疑いようもなかった。

「行こう!」

チルノの力強い言葉に、私と慧音は無言で頷き合う。

大丈夫だ、任せておけ。

具体的に、何をどうすればいいのか分からんが、とにかく任せておけ!

安請け合いではない。ただ、先程まで悩んでいたことが嘘のように、私の中で『やってやろうじやないか』という意欲が湧いてきている。

だって、てるが頭を下げてまで手助けを頼んでいるんだもん。

彼女が『因幡てる』という好きなゲームのキャラだから、好意的になるのではない。

一ヶ月間、共に暮らして、心を通わせた仲間の頼みだから応えたいと思うのだ。

そして、それは妹紅も同じことだ。

未だに、あの時妹紅を怒らせ、苦しませてしまった原因は分かっている。いない。

あるいは、同じような事態を起こしてしまうかもしれない。

そのことに不安がないわけではないが、それが行動を尻込みする理由にはならないのだ。

何も出来ないかもしれないし、私が余計なことをしない方がいい状況にぶつかるかもしれないが――。

妹紅が危険だというのなら。

何かに追い詰められているというのなら。

まずは、傍に行くよ。

待ってろ、妹紅。今、行くぞ――！



「……おかしいな」

夜空に浮かぶ月を見上げ、妹紅は訝しげに呟いた。

「夜が明けようとしていない?」

感じていた違和感を言葉にしてみると、それは確信となつて固まつた。

いつものように先代達と別れ、日課となつた軽い柔軟運動をしてから寢床に入った。

そして、目覚めたのがついさつきだ。

普段ならば、朝食の匂いで目が覚める。自然と、朝日の昇る時間帯に起きるのだ。

しかし、今日。妹紅は朝日が昇らぬ内に目覚めていた。単なる偶然かもしれない。

少し早めに起きてしまつて、今はまだ夜明け前の時間なのかもしれない。

そんな考えが最初に浮かんだが、まるで真夜中のように夜空の中心で爛々と輝き続ける月を見上げて、違和感確信へと変わった。

——あの月は沈まない。

——そして、きつとこのままでは朝日は昇らない。

「……うっ」

脳裏に、一瞬考えが過ぎつた。

不意の思いつきだった。自分でも、何故こんな考えを抱いたのかわからない。

しかし、それは間違いなく妹紅にとって覚えのあるもので、酷い息苦しさを覚えて胸を押さえつけた。

「今——明日が来ないことに、安心したでしょう？」

「誰だ!？」

心の隙間に滑り込むように聞こえた声に対して、妹紅は咄嗟にそう問い掛けていた。

ここしばらくの間、自分の住処を訪れた者は先代や慧音達以外にいない。

だから、それらの内誰のものでもない声を聞いて、得体の知れなさを感じてしまったのだ。

「誰だ、とは随分な質問ね」

その声は、嫌というほど聞き覚えがあるはずのものなのに、妹紅は一瞬誰なのか思い浮かばなかったのだ。

「輝夜……!？」

「一ヶ月ぶりくらいかしら？」

本当に、随分な対応よね。私の声を忘れちゃったの？ たった一月程度、私達にとっては瞬きする間の時間だつていうのに」

やはり、今夜は普段とは違うことが起こっている。

輝夜と出会う時は、常に自ら赴く立場だった。

そんな妹紅の下へ、今夜は輝夜が自ら訪れたのだ。

てゐはもちろん、取り巻きの兎達や、如何なる時も傍に仕えるはずの永琳さえ伴っていない。一人でここまでやって来ていた。

「どうしてここが？」

「貴女の住処はてゐから聞いているわ。と、いうか。貴女の様子は定期的に報告を受けている。てゐはね、私の命令で貴女の様子を探っていたのよ」

意地悪く笑いながら輝夜が告げた内容に、妹紅は表情を強張らせた。

内心ではショックを受けていた。

てゐには、先代達と出会う前からずっと世話になっている。

彼女の言動から来る胡散臭さを警戒してはいたが、本当は内心で感謝の念を抱き続けていたのだ。

裏切られた、などとは思わない。

永遠亭に住むてゐの立場から考えて、この可能性を考慮していなかったといえれば嘘になる。

しかし、予想よりも遥かに自分が傷ついていることに、妹紅は驚いていた。

「……何故、ここに？」

おそらくこの内心は見透かされているだろうが、妹紅は虚勢を張って輝夜を睨みつけた。

「それを貴女が聞く？ 本当、一体どうしちゃったのよ？ 一ヶ月つてそんなに長かったかしら、私はとても退屈していたのに」

「何、言ってるんだ」

「それとも、そんなに楽しかった？」

輝夜は袖で口元を隠して、クスクスと上品に笑った。

それがまた、無意味に妹紅の神経を逆撫でた。

「あの人間達と暮らした、僅かな時間が」

「黙れ！」

妹紅は激昂した。

湧き上がる怒りの原因が、輝夜の言動の何処にあるのか自覚していた。

輝夜は『僅かな時間』と言ったのだ。

「別にね、待ってもよかったのよ？ 私と貴女の勝負は、別に義務ではないし、何か決まり事を作ったわけでもない。

私は退屈な日常の刺激になるし、貴女は晴らしたい恨み辛みがあるでしょう。お互いの要望が噛み合った時に、気が済むまでやり合えばいい。そうしてきたし、これからもそうでしょう」

だからね、と。慈しみさえ感じさせる声色で喋る。

「二月だろうが、一年だろうが、私は待っても構わない。貴女の過ごした日常は、どうせ百年も経てば崩れて消える程度の時間よ」

「黙れえ!!」

堪えきれず、妹紅は駆け出した。

しかし、堪え切れなかった感情は、先程まで沸々と湧いていた『怒り』ではなかった。

輝夜の告げる内容が全て事実であると理解してしまった途端に背筋を走り抜けた冷たさ――。

素早く間合いを詰めた妹紅は、全力で輝夜の顔面を殴りつけた。

それは、間違いなく『恐怖』に突き動かされた行動だった。

成す術も無く、輝夜は鼻血を噴き出しながら倒れ込んだ。

「痛たた……っ、反応出来なかったわ」

殴られた箇所を押さえながら、今度は輝夜が動揺をあらわにする。予想外に鋭い一撃だった。

輝夜の記憶する限り、一月前の妹紅とはまるで別人だ。

間合いを詰める動きは単純に速く、低姿勢で疾走する様を捉えるのは、素人の輝夜では容易ではない。

拳を突き出す一連の動きは、まるで武術家のように堂に入っている。

収束された威力が脳髓の奥まで突き刺さり、ふらつく足で輝夜はなんとか立ち上がった。

「しゅ、修行の成果は出ているようね？」

「ごちやぶごちやうるさいんだよ。勝負したいって言うなら、今からでもやってやる！」

「いや、本当。頑張ったわよね、初めて会った時はまともに殴ることも出来なかつたっていうのに……あ、手の方は大丈夫かしら？」

妹紅は輝夜の挑発を無視して、再度突進した。

腰を落とし、右の拳を目標目掛けて真っ直ぐに突き出す。

先代に教わって以来、毎日繰り返し返した正拳突き型の型だった。

日々の鍛錬は裏切ることなく効果を発揮した。

鳩尾に拳が叩き込まれ、呻き声と共に体をくの字に折り曲げた輝夜へ、間髪入れず追撃を放つ。

妹紅の左拳が弧を描いて、輝夜の顎先を掠めた。

「は……外……れ？」

吐き気を堪えながら、不敵に笑おうとした輝夜は落下の浮遊感を感じた。

足元を見れば、自分の意思に反して膝が折れ曲がり、体が地面に崩れ落ちていた。

立ち上がれない。

歯を食い縛って両足に力を込めようと、腰から下が神経を切断されてしまったかのように全く言うことを聞かなかつた。

「不死身だからって、弱点が無いわけじゃないんだよ」

油断無く間合いを取り、構えを解かぬまま、妹紅は先代からの教えを反芻した。

「蓬莱人だつて頭で考えて動いてるんだ。急所だつて、人間と同じさ」
——顎に衝撃を与え、脳を揺らして一時的に半身の自由を奪った。

輝夜は、妹紅の仕掛けた攻撃の正体をようやく察した。

人体を医学的に理解しているからこそ可能な技だ。

今更ながら、妹紅を教え、鍛えていた先代巫女に対して畏怖を抱く。

「まるで永琳みたいな奴ね……」

「回復まで時間稼ぎはさせない。これ以上痛い目を見たくなかつたら、さっさと降参しろ」

油断するな。隙を見せるな。詰めを誤るな。

先代の教えに、妹紅は忠実に従っていた。

妹紅は再び正拳突きを構えを取った。

今度の標的は動かない。狙おうと思えば、更に威力を溜めた一撃を、今度は全身のあらゆる急所へ叩き込むことが出来る。

それは死の可能性すら秘めた一撃だった。

しかし、輝夜は降参の意思どころか、追い詰められた様子すら見せずに、今度こそ不敵な笑みを浮かべていた。

「降参って……何？」

「……なんだと？」

「いや、不思議なことを聞くなあって思ってたね。この状況に、一体何の意味があるの？」

——虚勢か？

妹紅は訝しげな表情を浮かべた。

「やればいいじゃない？」

一言で、妹紅の顔色が青褪めた。

「遠慮なんてしなくていいわ。『殺す気』で攻撃すればいいでしょう？ 降参を促すとか、何を悠長なことを言っているの。本当に、たった一月で随分と忘れてしまったようね」

日々の鍛錬は、間違いなく妹紅の力となって効果を表していた。

それによって、油断していた輝夜を一瞬で追い詰め、今まさにその命を奪う瞬間までやって来て——その無意味さに気付く。

「回復を待つのも面倒だし、殴られたところが痛いし——やらないなら、自分でやるわ」

妹紅が止める間もなく、輝夜は自らの握力で自身の喉を握り潰した。

肉が抉れ、血が噴水のように噴き出す。

それで、輝夜は死んだ。

力無く倒れ込む輝夜を、妹紅は呆然と見つめていた。

じわじわと、忘れていた恐怖と不安が蘇るのを感じた。

それは輝夜が死んだことに対してではない。

——輝夜が生き返ることに對してだった。

「ふりだしに戻る、ってね」

月光のような淡い光に包まれたかと思うと、次の瞬間には無傷の輝夜がその場で立ち上がった。いた。

自ら抉った首の傷も、妹紅の刻んだダメージも、その新しい肉体には存在しない。

「驚くほどのことじゃないでしょう、貴女にだって出来るわ。これが蓬萊人の『力』なんだもの」

「……何度でも」

「永琳なんか、もつと凄いわよ。いちいち手なんか使わなくても、自力で心臓を止めちやったり出来るんですって」

「何度でもやってやるわ、輝夜！」

「いいわよう？　気の済むまでやりましょう。」

折角修行したんだから、その成果を發揮したいわよね。だから、能力の使用は無し。

スperlカード・ルールも面白そうだけど、今夜は無粋よね。やめましょう。完全な肉弾戦のみで勝負するっていうことで——」

まるで最初から予定していたかのように勝負の内容を決めていく輝夜の言葉もろくに聞けず、妹紅はただ自分自身と戦っていた。

気を抜けば、折れてしまう。押し潰されてしまう。

この勝負を通じて、輝夜が自分に思い知らせたいことを、既に察し始めてしまったのだ。

彼女の語る内容に——偽りようもない現実に——屈するわけにはいかなかった。

何故、そう思うのかは自分でも分からない。

分からないからこそ、今にも限界がやって来そうだった。

「ああ、そうそう。大切なことを決めるのを忘れていたわ」

今思いついた、と言わんばかりにわざとらしく輝夜は尋ねた。

「この勝負、何を以って決着としましょうか？」

——決着など無い。

——蓬萊人の戦いに、終わりなど存在しない。

妹紅は理解していた。

理解していたからこそ、何も答えずに、ただ目の前の敵に襲い掛かった。

鍛えられた足腰と、学んだ技術による足運びは、輝夜に反応する間も与えず間合いを詰めることを成功させる。

放たれた拳打を、格闘に関して素人である彼女は回避出来ないだろう。

一方的な勝負が始まる。

——しかし、この勝負が終わることはあるのか？

その自問から、妹紅は必死で眼を逸らしていた。

この一月の間で、何かが変わったと実感していた。

先代に教えられ、慧音と心を通わせ、チルノとてゐるを含む周りの者達に支えられて暮らした。

その日々が、人としての暖かみを取り戻させてくれた。

——しかし、この日常はいつか終わる。

何故なら自分は蓬萊人だから。

そして、人間も妖怪も妖精も、皆いずれ死ぬ存在だから。

「輝夜——」

『心』『技』『体』——貴女はたった一月で、体を鍛え上げ、技を磨いた。御見事よ」

妹紅は無意識に怨敵の名前を叫んでいた。

こんな状況で、望んでなどいないのに、名を呼ばずにはいられなかった。

眼を逸らし続けていた絶望的な現実を前にして、心が折れぬようにする為に。

激しい感情を燃やして、支える力とする為に。

千年以上に抱いた、全ての始まりである感情と、その元凶にしか、継りつくことが出来なかったのだ。

「では、さて——心の方は如何？」

「輝夜あああああつ!!」

妹紅は絶叫した。

この勝負を終わらせてくれ、と。誰かに助けを求めながら――。



輝夜と少女の一方的な殴り合いは、長く続いた。

具体的には半日以上、日が沈むまで続いていた。

しかも、まだ終わっていない。

てゐるは当初の衝撃もすつかり薄れ、今や呆れ果てるばかりだった。

もはや部屋は猟奇殺人の現場のような有様になっている。そこら中が血塗れだ。

そんな凄惨な光景を、眉一つ動かさず眺め続ける永琳に畏怖を抱くが、それ以上に半日以上殴り殴られ続けている二人には頭痛すらしてくる。

無抵抗のまま殴られ続ける輝夜の肉体は、当然のように限界を迎えていた。

ひ弱な少女の力とはいえ、己の拳を壊す程の勢いで殴られ続け、既に何度も死んでいる。

死因は様々だ。打ち所が悪かったり、吐いた血が喉に詰まって窒息したり――。

そして、その度に蘇っていた。

無傷の状態に戻った輝夜を、少女は再び殴りつけ始める。殺し、生き返り、殺し。

その繰り返し。もはや単なる作業だった。

対する少女も、限界が近い。

両手の拳は完全に潰れ、骨と肉で出来た鈍器と化していた。

体力もとつくに尽きている。

一方的に殴りつける側でありながら、汗と涎をダラダラと垂らし、ヒューヒューと擦り切れた喉で不規則な呼吸を繰り返していた。

それでも、殴るのを止めない。

自分の意思で止めることが出来ないかのように、ノロノロと腕を上げ、力無く振り下ろし、輝夜の顔を自分の血で汚すことを繰り返して

いた。

やがて、本当の限界が訪れた。

体力はもちろん、ついに精神力でもどうにもならない限界に達した少女の体は、力を失って仰向けに倒れ込んだ。

人を殴り続けた結果衰弱し、死に掛けるという異常な状態の中、混濁した瞳だけが力を失わずに虚空を睨み付けている。

湧き上がる激情は、未だ止まってははいない。

「……永琳」

それまで無言だった輝夜が、己の従者に短く告げた。

ただそれだけで意図を察したらしい。永琳は、一度少女の命を奪った小刀を再び取り出すと、それを手元に放った。

「使いなさい。意味は分かるわね」

力尽きた少女に教える。

蓬莱人が持つ力の『使い方』だ。

少女は憎悪に満ちた視線で永琳を睨み、輝夜を睨み、そして最後に小刀へ視線を向けた。

決意し、何かを握るといふ機能をほとんど失った手でそれを掴もうと手を伸ばし——寸前で、てゐるが小刀を取り上げた。

「……よこせ」

「嫌だよ」

脅すように告げられたが、てゐるは飄々とした態度で小刀を懐に隠してしまった。

少女の憎悪と殺意が、新たな標的としててゐに向けられる。

「じゃあ、それで私を刺せ！」

「嫌だよ。ああ、あと舌とか噛むなよ」

てゐの警告を聞き取り、少女は素早く舌を出してそれを自らの歯で噛み千切ろうとした。

一瞬早く、口の中にてゐの指が滑り込み、舌を掴んで、口が閉じるのを阻止する。

「痛……っ！ だから、やめなさいっていうのに！」

少女の噛む力は、体力の低下もあって弱々しかったが、それでもて

るの手からは血が滲み始めていた。

少女は噛むのを止めようとしなない。

「命を道具みたいに使うな、本当に取り返しがつかないことになっちゃうわよ」

てゐるは顔を顰めながらも、落ち着いた口調で話しかけた。

少女が顎の力を抜く。あるいは、噛み続けるだけの体力も残っていなかったのかもしれない。

指を口から引き抜きながら、それでもまだ警戒は解かずにてゐはじつと少女の眼を見つめた。

「お前は……妖怪だ」

恨みがましい声で少女は呟く。

「ああ、そうだよ。あたしや妖怪だよ。それが何か？」

「妖怪なんだ……っ」

「だから何さ？　妖怪だったら、あんたにとって何か不都合があんの？」

「妖怪なんか、殺してやる……！　私に近づくな……っ!!」

「妖怪ってだけでそんなに憎いかい？　昔、何かあったのかね？」

「うるさいっ！　お前は妖怪だ！　妖怪なんだ！」

少女の言葉は要領を得ていなかった。

てゐるに対して、ただ『妖怪だ』と主張するだけで、一向に話が進展していない。

敵意と殺意をぶつけられていることは分かる。しかし、そこに至る恨み辛みの根っことなる理由をどうしても感じ取ることが出来なかった。

ひたすらに『妖怪であることは害悪だ』と言わんばかりに、同じ言葉を繰り返し続ける少女を見て、てゐはおぼろげながら察し始めていた。

「……そうかい、妖怪が憎いか。じゃあ、しょうがない。恨め恨め、あたしや痛くも痒くもないね」

ことさら悪どく笑ってみせる。

てゐるには、少女の敵意が張りぼての物だと分かっていた。

妖怪だから憎いのではない。

憎しみの対象に妖怪しか選べなかったのだ。

憎んでいなければ耐えられないのだ。

例え体は蘇っても、何かの激しい感情を支えにしなければ、途端に心は斃れてしまう——目の前の少女は、それを避ける為に、闇雲に拳を振り上げ、最も扱いやすい憎しみを糧に燃やしているのだ。

輝夜に殴りかかったのも、無駄と分かっただけで続けていたのも、それが理由なのではないか。

そうしなければ、立ってられないのだ。

「どうしたい、黙り込んで？ もっと喚いてみなって、なかなか面白いから」

不意に口を閉ざした少女に対して、てゐはニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべた。

枯れ果てていたはずの少女の瞳に、涙が溜まり始める。

悔しさなどの、負の感情から来る涙ではなかった。

少女もまた、てゐの言葉から彼女の優しい気遣いを察したのだ。

「……騙されときなよ、馬鹿」

てゐは諦めたようにため息を吐いた。

少女は弱々しく嗚咽を洩らし始めた。

「頭が良すぎるし、察しが良すぎる。何より、優しすぎる。もつと、周りに責任擦り付けて恨んじまえばいいのに」

「無理だよ。そんなこと出来ないよ」

「しがらみなんて捨てちゃえ。周りのことなんか気にすんな」

「嫌だ。出来ない……っ」

「なあ、周りを気遣う余裕なんてあんたにはないじゃないか。自分のことだけ考えてればいいさ」

「出来ない！ 私は……人間、なんだ」

少女は声を絞り出した。

それが何よりの本音なのだ、てゐは感じた。

「そうか。難儀だなあ」

「……助けて」

「難しいこと頼むなあ」

「……………たすけて」

継るように眩き、少女は力尽きて眼を閉じた。

死んではいけない、気を失ったただけだ。

しかし、いずれ眼を覚ますだろう。そして、揺らぎような無い残酷な現実が、この不死になって『しまった』小さな少女を慈悲無く迎えるのだ。

「本当、難しいこと言ってくれるなあ…………」

他人事のように眩きながら、鼻の頭を軽く搔きつつてゐるは立ち上がった。

眠っている少女を背負う。

てゐる体格は少女よりも更に小さかったが、不安に思うほど軽い体重を担ぐことは簡単だった。

「——何処へ行くの？」

そのまま無言で立ち去ろうとするてゐるを、仰向けのままの輝夜が虚空を見つめながら尋ねた。

振り返らずに答える。

「あんたら二人から離れた所」

輝夜と永琳、二人の蓬莱人を指して言う。

具体的には、竹林にある隠れ家の一つへ向かうつもりだった。有事に備えて、そういった場所を幾つか用意してあるのだ。

そこへ連れて行って、気の済むまで眠らせ、起きれば体を拭いて、腹一杯飯を食わせる——その程度の予定しか考えていなかった。

この複雑な人生を歩んできたであろう少女に対して、してやれることはそれくらいしか思いつかなかった。

捻った案など何も思い浮かばない。

しかし、人が生きるということに捻りなど必要ないだろうという開き直った考えもあった。

「その娘が味わっている苦しみがどんなものなのか、貴女には実感出来ないでしょう」

輝夜の声色は僅かに苛立ちを含むものだった。

「貴女の行動は、その苦しみを先延ばしするものでしかないわ」

「人間として生きようとするのが苦しみか」

「そうよ。苦しみよ」

「そうかい。そりゃ、ますます難儀だ」

もう一度、鼻の頭を搔く。

「この娘を含めた、あんたら三人を見ていて連想したものがある」

「へえ、それは何？」

「輪だよ。あんたら三人を繋いだ輪っかだ。」

三人で世界が完結してる。同じ場所でぐるぐる回って、繰り返してる。多分、それは死ぬまで終わらないんだろう。そして、あんたら三人とも死なないときたもんだ」

「それが蓬莱人よ」

「その輪の中へ、この娘を加えるわけにはいかない。そう思ったのさ」「いずれ破綻する輪の中へ、その娘を入れてやるのが正しいと思っているの？」

「さあて……」

輝夜の問い掛けは、罪を責めるような口調だった。

てゐは答えず、歩みを再開する。

永琳は終始無言だった。少女のことなど他人事に過ぎないのだから。

それ故に、輝夜の言葉は厳しくはあっても決して冷たいものではない、と。てゐは感じた。

一体何が理由なのかは分からないが、輝夜は輝夜なりにこの少女のことを考えている。

「難しいなあ……」

どんな判断が正しく、どんな行動が良い結果を生むのか、今はまだ分からない。

長い年月を生きたてゐにとっても、同じ蓬莱人として生きる輝夜の言の方が正しいのでは無いかという迷いがある。

——しかし、彼女は自分に『助けて』と乞うたのだ。

「こいつは、難題だ」

てゐるは答えの出ない問題を抱えることになった。

其の二十三 「生命遊戯」

偽りの月を天に。終わらない夜は、まだ続いていった。

八意永琳の作り出した竹林の結界の中で、弾幕ごっここの光が瞬く。紆余曲折の末に、異変解決の為に集ったはずの人妖の中で二人の間が争っているのだった。

切欠は永琳の策謀によるものだったが、この決闘は何よりも本人が望んだことだった。

魔理沙は、自らの持つ全てを賭けて霊夢との決闘に挑んでいた。

「——スペルカード・ブレイク」

魔理沙が放った最初のスペルを全てかわしきり、霊夢は厳かに告げた。

その揺ぎ無い姿を、魔理沙は歯を食い縛りながら睨みつける。

これまで何度も見てきたはずだった。

これまで何度も実感してきたはずだった。

あの不動の存在を、ほんの少し揺るがすことすら——出来る気がしない。

「やめましょう」

「……は？ 何言ってるんだ？」

まるで弾幕ごっこなど最初から始まっていなかったとでも言うように、霊夢は唐突に戦闘態勢を解いた。

「あたしはここに異変の解決に来たのよ。魔理沙と戦う為じゃないわ」

「……へへんっ、あいにくそんな言葉だけじゃ私は信じないぜ。」

この夜を止めている黒幕が本当に他にいるっていうのなら、話は簡単だ。お前を倒した後で、わたしがそいつも倒してやるぜ」

「うん、まあ。魔理沙の言い分は、もういいわ。あんたがあたしと戦いたいっていうのは分かった。でもさ——」

気を引き締めたままの魔理沙に対して、霊夢は既に緊張感を失っていた。

「このまま続けても無意味でしょう」

決闘の理由ではなく、決闘を続けることについて、霊夢はそう断言した。

「……一枚目のスペルカードをクリアした程度で、何を見切った気になってるんだ？ わたしはまだ切り札も奥の手も出してないぜ！」
「どれだけ弾幕を撃つても同じことよ。あんたの弾はあたしには当たらない。狙いが全然定まってないわ」

霊夢の指摘を受けて、魔理沙は悔しげに黙り込むしかなかった。
凶星だった。

精密に狙いをつけることが目的ではない弾幕ならば誤魔化せると思ったが、霊夢は魔理沙の状態を鋭く見抜いていたのだ。

魔理沙の視力は極度に低下していた。
今の距離では霊夢の顔はおろか、全身像すらハッキリと見えない。
弾幕ごっこの中で、高速で移動する霊夢の位置を捉えるなど到底不可能だった。

闇雲に弾幕をばら撒くしかなかった魔理沙に勝機など欠片も無いことを、霊夢と、何より魔理沙本人が最初のスペルカードで悟ってしまっていた。

「暇な時なら、幾らでも付き合っただけだね」

霊夢は無造作に背を向けた。

「今は、博麗の巫女としての仕事があるから」

「……待てよ」

「異変解決を優先するわ。その眼、早めに何とかした方がいいわよ」

「待てよ！」

「じゃあね」

霊夢の背中に向けて、魔理沙は手に持ったミニ八卦炉を突きつけた。
た。

しかし、霊夢は振り返らない。

魔理沙が撃たないと分かっているのか、あるいは背を向けたままであっても回避出来ると思っっているのか。その両方であるのかもしれない。なかつた。

いずれにせよ、霊夢は自らの責務を優先し、魔理沙の存在を歯牙に

も掛けていない。

八卦炉を握る魔理沙の手が小刻みに震えた。

怒りか、悔しさか。湧き上がる激情を堪えるように歯を食い縛っていると、既に滲んだように不鮮明な視界が涙で更に歪み始めた。

この場を去ろうとする霊夢に対して、魔理沙には成す術などなかった。

「待て……待てよ、霊夢っ!!」

絶叫する魔理沙の声を尻目に、霊夢は既に異変の元凶へ意識を移している。

相手の誘導にまんまと引っ掛かってしまったが、『敵』には確実に近づいている。

近い——と、霊夢の勘は告げていた。

霊夢にとつての『敵』は、この先にいる異変の首謀者だけである。己を突き動かす博麗の巫女としての義務感に従い、霊夢は前進しようとした。

「——待ちなさい」

不意に、第三者の声が霊夢を止めた。

「何よ?」

時間を止めて接近したらしい。いつの間にか咲夜は霊夢の背後を取っていた。

首筋に添えられたナイフの刃に一切の脅威を感じず、霊夢は面倒臭そうに肩越しに振り返った。

「魔理沙との決闘は、まだ終わっていないわ」

「結果の見た勝負を続けろって言うの?」

「ならば、結果を見てから去りなさい」

「今回の異変解決には制限時間があるから、無駄な時間は使いたくないんだけど」

「無駄ではないわ。それに、異変に関しては私も解決に協力するから、分担すればいい」

咲夜は周囲の人妖を素早く見回した。

ほとんどの者が霊夢と魔理沙の動向を観察している。

魔理沙のサポートに回ろうとしたアリスさえ、遮るように対峙したパチュリーを警戒して迂闊に動こうとしない。

パチュリーもまたアリスを警戒しているが、さすがに魔理沙のように勝負を仕掛けるような短慮ではなかった。

八雲紫が幻想郷の管理者として異変解決を望んでいることは分かるし、冥界の二人組は咲夜にとって馴染みのない相手だが、少なくとも敵でないことは察していた。

今、この場に明確な敵対関係は存在しない。

ただ勝負を望む者がいるだけなのだ。

「……分からないわね」

咲夜と同じ考えに、霊夢もまた至っている。

だからこそ、余計に不可解な気持ちで呟いた。

異変とは無関係な魔理沙との私的な決闘について、横から口を挟む咲夜の意図が理解出来ないのだ。

「何故、魔理沙と勝負させたがるの？ 何故、魔理沙は勝負したがるの？」

魔理沙に敵意が無いことは分かっている。

珍しく眉を顰めて問う霊夢に対し、咲夜は僅かに苛立った声色で答えた。

「……私が教えても仕方が無いでしょう」

咲夜の脳裏には、以前冥界で霊夢について語る魔理沙の健気な姿が蘇っていた。

あの時の言葉は自分だけが聞いたものだ。他の誰も彼女の本心を知らない。

もちろん、霊夢も聞いていない。いや、聞かれないからこそ、あそこで魔理沙は語ったのだ。

しかし、咲夜は理不尽だと自覚しながらも、霊夢が魔理沙の想いを全く察していないことに苛立ちを覚えていた。

一体、彼女がどんな想いでアナタとの勝負に執着しているのか――
|。

「分かるうと思う気があるのなら、魔理沙と勝負しなさい」

咲夜は突きつけていたナイフを仕舞った。

言葉の中に含まれた意味をしばらく考えていた霊夢は、やがて諦めたようにため息を吐くと、もう一度振り返った。

ぐるりと一周して再び魔理沙と向き合えば、彼女自身も予想外だったのだろう、咲夜の乱入に目を丸くしたまま固まった姿があった。

「魔理沙。最初に言っておくけど……」

「な、なんだよ?」

自分に向けられた視線から霊夢の戦意を感じ取り、それを恐れるというよりも、意識を向けられたことに魔理沙は驚いていた。

博麗の巫女としての義務感を押さえ、霊夢は魔理沙との勝負を優先したのだ。

自分自身でもあまり納得はしていないのであろう。

据わった眼つきで魔理沙を睨み、霊夢はスペルカードを取り出した。

「今のままのあんたじゃ絶対に勝ち目は無いわよ。」

少しでも勝つ気があるなら、新しい力に目覚めるとか何とかしなさい。出来ないなら、可及的速やかに負けを認めること!」

霊夢は魔理沙との弾幕ごっこを再開した。

「面倒なことをしてくださいましたわね」

「八雲紫……」

言葉とは裏腹に微笑を浮かべる紫を、咲夜は氷のような視線で一瞥した。

魔理沙のことを思っただけで霊夢に意見していた感情的な部分を心の奥底へ消し去る。

代わりに、紫に対して表れたのは戦闘者としての冷徹な部分だった。

咲夜は紫のことを敵とは思っていない。

しかし、味方とも思っていないかった

「貴女は今夜の異変を解決に来たのではなくて?」

「その通りよ」

「物事は効率的に進める性格だと思っていましたわ。」

貴女が霧雨魔理沙の友人だというのなら、この場合は彼女を説得し、霊夢の邪魔をさせないようにする方が正しいでしょう。

魔理沙は霊夢には勝てない。意味の無い勝負ですわ。これではただ単に霊夢を足止めしているだけね。いえ、足を引っ張っていると云った方が良いかしら」

「二つ勘違いしているわ。私は異変解決に来たけれど、それはアナタの為にではない」

紫はあえて挑発するような言葉を選んで使っていたが、咲夜は眉一つ動かさなかった。

「私の主の命令と願いを受けて、異変の解決にやって来たのよ。アナタの都合や、ましてや損得など知ったことではないわ」

「あらあら、都合だなんて……私はただ効率的に物事を運びましょうと提案しています」

「その効率とはアナタの利になるだけのこと。

私は私の都合で動いている。魔理沙もそうでしょう。もう一度言うけれど『アナタの都合など知ったことではない』のよ」

「理屈が通じないのかしら？」

「信用の問題よ」

咲夜は紫に対して、好意も嫌悪も抱いていない。

それ故に、目の前の妖怪に対する心構えには常に気を許すことなど出来ない警戒があった。

いざという時に敵対することを躊躇わない。逆に突如敵対されても動揺しない。心の隅でそういう可能性を考慮しておく。

相手にナイフを突き立てる必要がある状況になれば一切の淀みなく、また確実に実行出来るよう備えていた。

そこには信頼関係など僅かに挟む余地すらない。

胡散臭い微笑を浮かべながら効率と理屈を口にする紫に対して、咲夜は目的を同じとした仲間意識など全く抱けなかった。

「今は刃を向けないだけ。アナタには背中を預ける気にはならないわ」

「……難しいわね、信頼というものは」

——先代がいない時に、つくづく感じるわ。

紫は言葉の後半を変わらない微笑の中に隠した。

先代巫女が如何に例外であったかを実感している。

人間と妖怪。互いの認識として、咲夜の方が正常なのだ。

目の前の人間は妖怪に対して実に真つ当な感性を持ち、冷静だから

こそ八雲紫という妖怪の言動に対して最善の判断を下している。

実際に様々な思惑を隠した微笑みの仮面の下にあるモノを警戒し

ているのだ。

それは正しい。

利口な人間だ。

ならば、こんな自分の笑顔を好きだと言ってくれる先代は、馬鹿な

人間なのだろう。

だからこそ、無性に愛しい。

「——では結構。信頼の代わりに打算で協力し合いましょう」

紫は意識を切り替えるように、それまでの話題を打ち切った。

謝罪は口にしらない。咲夜も、紫の提案を『何を今更』といった表情

で黙って聞いている。

結局、これがこの場の妥協点であり自分の限界なのだろう、と。紫

は内心で苦笑した。

「あの二人は好きにやらせればいいでしょう。どうせ、決着にそう時

間は掛からない」

ろくに弾幕ごっここの様子も見ずに断言する紫だったが、咲夜はそれ

に反論しなかった。無視したと言ってもよかった。

「魔法使いの方は睨み合って動きそうにありませんわね」

「相手の魔法使いの正体は分からないわ。しかし、パチュリー様が警

戒するのならば油断のならない相手なのでしよう」

「そうね、私もあの魔法使いに関しては判断する材料が少なすぎます。

お相手は彼女に任せましょう」

異変解決の為の人員が一人ずつ抜けていく現状に対して、紫は特に

落胆を感じてはいなかった。

そもそも当初の予定では霊夢だけが共に戦うパートナーであり、突

然現れた他の者達に対しては最悪敵になる可能性こそあれ、味方の戦力として勘定などしていなかったのだ。

情報が無い為に全く動向が予想出来ないイレギュラーを、結果的にパチュリーが足止めしている状況をプラスにすら考えていた。

「となると、ここは幽々子達に任せられた方が得策かしらね」

「あららく、私達をご指名かしら？」

いつの間にか傍で話を聞いていた幽々子と妖夢に視線を移す。

紫にとって、二人はこの状況でも確実に味方と思える存在だった。少なくとも知己であり、信頼がある。

現状からあぶれた者同士、紫と咲夜が組んで異変の解決に向かうよりも、主従の関係が完成されている幽々子と妖夢のコンビの方がはるかに戦力として期待出来るだろう。

紫は目配せし、それを受けた咲夜は小さく頷いた。

「異変の元凶は任せるわ。私は援護をする」

そう言うなり、咲夜は背を向けて三人から離れていった。

勝手な行動を妖夢は不快に感じていたが、同じく咲夜のことを知らない幽々子はむしろ満足していた。

下手な連携は互いの足を引っ張りかねない。共通の目的を達成する為に、単独で自由に行動するのが最良の選択であるのは間違いないかった。

「周囲を覆う結界を崩すわ」

紫はすぐ傍の空間をなぞるように指を走らせた。

そこからパツクリと割れるように空間の裂け目が発生する。

「このスキマは目的地まで繋がっているの？」

「残念ながら、そこまで都合よくは出来ないわ。非常に強固で緻密な結界ね。」

とはいえ、その術式を乱すことは出来た。このスキマを通り抜ければ、この迷宮化した結界の影響からは逃れられるはずよ」

「そこからは自力で異変の元凶を探せということね」

「おそろく『敵』は近いわ」

「分かったわ。行くわよ、妖夢」

「はっ」

紫の推測を、幽々子は疑わなかった。

妖夢を伴ってスキマへと消えた幽々子の背中をしばらく見送り、紫自身は霊夢と魔理沙の戦いへと視線を戻す。

二人の決着を待って、再び霊夢と共に異変の解決へ向かうつもりだった。

どうせ、そう長くは掛からない。決着などすぐだ——紫はそう確信していた。

何故か、咲夜のように自分一人で行動を起こそうという発想はなかった。



時間を操るということは空間を操るということと同じ——咲夜の能力はそのように解釈されている。

実際のところ、自分の能力が如何なるものなのか咲夜自身さえ把握しきっていなかった。

ただ、当たり前のように時間を止め、空間に干渉することが出来た。だから、自分の見る世界はきつと他人とは違うのだろう。

この竹林に踏み込んだ瞬間に、結界の作用を見抜くことが出来た。そして、今もまた周囲にあった違和感に気付いている。

「この辺りね」

霊夢達とも紫達からも離れた空中で静止し、咲夜は眼を閉じた。

自分の中で常に時を刻んでいる懐中時計の針を止めるイメージを思い浮かべる。

眼を開いた瞬間、そのイメージは現実となっていた。

咲夜だけが認識できる世界が展開され、そして事を終えた瞬間に時間が動き出す。

「うあ……っ!?!」

唐突に何も無い空間から悲鳴が上がった。

紙に絵の具が滲むように、波長を操作して隠れていた鈴仙が姿を現

す。

その肩にはナイフが刺さっている。

予想外の衝撃と痛みにも、鈴仙は無理矢理自身の能力を解除させられたのだった。

「そんな、馬鹿な……！」

完全に自分の姿を視界に捉えた咲夜を、鈴仙は驚愕の表情で見つめ返した。

接近してきた彼女の行動を見て、おそらく自分が隠れていることを見抜かれているのだろうと予想はしていた。

しかし、まさか正確な位置を把握して攻撃まで当ててくるとは思わなかった。

波長をズラすことによって姿を消した自分を、人間が肉眼で捉えることなど出来る筈がないのだ。

何よりも、そこに至るプロセスが全く理解出来ない。

鈴仙の視点からすれば、気が付いたら攻撃を受けていた不可解な状況なのだ。

「直接攻撃してしまっただけ……まあ、アナタもスペルカード宣言もせずにこそこそと隠れていたんだから、自業自得ってことで堪えて頂戴」

既に鈴仙を敵とみなした咲夜は冷徹に告げた。

「さて、アナタは異変の首謀者またはその関係者ということに宜しいわね？」

「……私の存在を見抜いたくらいでいい気にならないことね。地上に這いつくばって生きるだけの、穢き民のくせに」

「はい、どうも。敵対の意思を確認。それじゃあ、ナイフとカードのどっちがお好み？ 私はどちらでも構わないわよ」

「人間が、舐めるな！」

鈴仙がスペルカードを取り出すのを確認して、咲夜はナイフを納めた。

しかし、互いの戦意は殺し合いさながらに昂ぶっている。熱く、静かに。

同じ弾幕ごっこに興じる霊夢や魔理沙達とは違う部分が二人にはあった。

「なるほど。アナタと私は似ているようね」

——弾幕ごっこを非致死性の攻撃を使った『戦闘』の延長として捉えている。

咲夜にとつて、スペルカード・ルールとは手段の一つに過ぎなかった。

ただ冷静に、正確に作業をこなすことに集中する。

そこに雑念は挟まない。恐怖や焦り、怒り、また逆に楽しんだり、気持ちを高揚させることもない。

弾幕ごっこに挑む咲夜の精神状態は、常に戦闘者としてのそれであつた。

たつた今、霊夢との『勝負』に挑んでいる魔理沙とは、そこに至る理由も意気込みも違う。

逆に、今日の前にいる『敵』に対して咲夜は自分と近いものを感じ取っていた。

鈴仙もまた、咲夜との弾幕ごっこを『勝負』ではなく『戦闘』として捉えているのだ。

「結構なことね。やはり、敵対する者とはこうではなくては」

「たつた一度、私の姿を見抜いたからつて余裕ぶらないことね。

さつきは正体を誤魔化す為に貴女の眼を狂わせていただけ。今度は月の兎である私の眼を見て、貴女自身が狂うがいいわー！」

「生憎、私が見ている世界はとつくに秒針が狂っている。どうぞ、私の世界を御覧なさい。アナタの時間も私のもの——」



自分以外に存在する二人目の魔法使いを見つけて、アリスは思案していた。

相手は、あの未熟な魔理沙とは違う。

独自の系統を持ち、それを極めた、完成された魔法使いだと分かつ

た。

ならば、下手に出ることも逆に格下に見ることも失礼に当たるだろう。

「——初めまして」

結局のところ、アリスはパチュリーへの第一声をそんなありきたりな挨拶で終えた。

「……初めまして。パチュリー・ノーレッジよ」

「私はアリス・マーガトロイド」

「では『アリス』と。宜しいかしら？」

「結構よ。こちらは『パチュリー』と呼んでも」

「構わないわ」

周囲では戦闘の音が続いている。

霊夢と魔理沙の弾幕ごっこは色とりどりの閃光を伴い、咲夜はいつの間にか現れた得体の知れない兎の妖怪らしき相手に戦いを始めていた。

幽々子と妖夢の二人は姿を消し、この場の状況全てを見守るように紫が微笑んでいる。

それらの周囲の状況を全て外に追いやり、二人の魔法使いは各々の世界を展開していた。

アリスとパチュリーは、未開の魔道書を読み解く時のような慎重さと冷静さを意識して、互いを分析し合っていた。

「質問なのだけど、アナタは私の『敵』ではないのよね？」

言葉に含むものはなく、アリスは純粹に今抱えている唯一の疑問を晴らそうとした。

元々は月の異変を察知して、それを解決に来たのである。

偶然遭遇した目の前の魔法使いに興味はあったが、何よりも優先するべきは状況の理解だった。

知らない相手が多すぎる。友好関係を築くかどうかは後にして、とにかく今は敵と味方の把握だけしておきたかった。

「……それはアナ次第ね」

その質問に対して、パチュリーは返答を濁す。

二人の間に不穏な空気が漂い始めた。

「どういう意味かしら？」

「魔理沙に魔法を指導していたのはアナタね」

「ああ、なるほど。つまり、私が魔理沙の正式な師であるアナタを蔑ろにしてしまったと」

「……違うわ。私は魔理沙の師ではない」

「……？ 分からないわね。何が言いたいのかしら？」

パチュリーが僅かに顔を俯かせ、アリスが眉を顰める。

動揺を見せた時点で、自分が今不利な状況にいるのだとパチュリーは自覚していた。

魔法使いには精神の平静さが求められる。小悪魔にも忠告されたことだ。感情に左右されるような『人間臭さ』は、魔法使いとしてあつてはならない。

しかし、パチュリーは目の前のもう一人の魔法使いに対して、複雑な感情を抱かずにはいられなかった。

魔理沙は彼女と共に、この場へ現れたのだ。

「魔理沙とアナタは、どういう関係なの？」

パチュリーの質問の意味を図りかね、アリスは訝しむ表情を濃くした。

その質問は、本当に今の状況で必要なものなのか？

そんな疑問を押さえ、無駄なトラブルを起こさぬよう、素直に答える。

「数ヶ月前に出会った関係よ。彼女は魔法使いとして未熟であり、出会った私に知識を乞うた。だから授けた。それだけ」

「見返りは何？」

「特に無いわ。彼女は私が求めるほどのものを持っていないから。」

まあ、私自身は住処である魔法の森に籠もりがちだったから、外の情報などを色々話してもらった程度ね」

「何故、代価を求めないの？」

「……逆に質問していいかしら？ 現在の状況とそぐわない話題になりつつあるような気がするのだけど、そこまで重要な内容なの？」

堪えきれずに問い返したアリスは、更に表情を強張らせるパチュリーを見て、内心で混乱した。

向けられる視線は、もはや敵意すら混じりつつある。しかし、その理由が全く分からない。

ここまでの話の流れの何処に相手の不快や敵意を煽る要素があったのか、アリスには見当もつかなかった。

自分と同レベルか、あるいはそれ以上とも想定していた紫の魔女は、まるで人間のように苛立ちの感情を眼に見えるまで表している。

「……何故、魔理沙にあんな危険な方法を教えたの？」

弾幕ごっこの様子に視線を送るパチュリーに釣られて、アリスも一瞥を向けた。

傍から見ても狙いが荒いと分かる弾幕を、魔理沙は我武者羅に撃ち続けている。

視力の低下が動きに悪影響を及ぼしていることは、事情を知る者なら誰にでも分かった。

今は魔理沙が攻勢に回っているが、もし霊夢が弾幕を放つ側になった場合、今の状態の魔理沙ではそれを回避しきることなど出来ないだろう。

そして、安全性が高いとはいえ、弾幕ごっこは負傷や死の危険性さえ孕んでいるのだ。

「アナタの教え方は、『あの子』のレベルに合っていないのよ」

「それを『彼女』が望んだのだから、仕方がないでしょう」

二人の言葉と声色には、明確な温度差が含まれていた。

「不相応であることを理解していたのなら、魔理沙に諭してやるべきだったわ」

「本格的にアナタの思考が理解出来なくなってきたわ。本人が望んだことを、何故私が止める必要があるの」

「このままでは、魔理沙は何も得ることが出来ず、ただ失明するだけよ」

「リスクは事前に説明したわ。それを踏まえた上で本人が望んだことよ」

アリスはパチュリーと視線を合わせた。パチュリーの瞳孔が僅かに収縮した。

攻撃の意思の前触れだ。アリスは冷静に察知しつつ、一気に言った。

「魔理沙の身を気遣えと言うのなら、そうするだけのメリットが私には無いわ」

パチュリーの瞳が明確な敵意に染まった。

呪文や動作も無しに、パチュリーの周囲に魔力が収束する。ただそれだけの単純な魔力弾ではなく、炎の属性まで付加された火球の魔法だった。

高速の魔法制御に内心で舌を巻きながらも、しかしアリスの方が一手早かった。

パチュリーが魔法を完成させた時点で、アリスは武装した自身の人形数体で取り囲んでいた。各々が持つ武器の切っ先は、喉元に突きつけられている。

勝負は一瞬でついていた。

「……勘違いしないで欲しいわ」

攻撃の動作でないことを示すように、ゆつくりと手のひらを見せながらパチュリーは懐からカードを一枚取り出した。

「幻想郷のルールはこれよ」

スペルカードを掲げ、淡々と告げる。

それが苦し紛れのブラフであり、尚且つ相手に見抜かれていることは、他ならぬパチュリー自身が自覚していた。

あの瞬間、自分は死んでいた。

スペルカード・ルールではない実戦を想定して、しかも先に動いたのは自分である。

後手に回りながら初手を制したアリスの完勝だった。

魔法使いでありながら湧き上がる感情によって心を乱し、平静さを欠いた自分が敗北したのも当然のことだと分かっている。

しかし、それでもパチュリーは認めることが出来なかった。

——何を？

勝負に負けたこと。

話の正当性が相手にあること。

魔理沙が自分の教え以外を求めたこと。

その全ての中心に、目の前のアリス・マーガトロイドという魔法使いが存在するという事実。

「どうやら、私は嫌われているようね」

不可解な点が多いが、結局その結論に落ち着いたアリスは諦めたように肩を竦めた。

人形を下がらせ、初めての試みとなる弾幕ごっこに備える。

パチュリーに対しては何も思うところなどなかったが、相手が向ける敵意を無抵抗で受けるほどお人よしでもない。

感情ではなく、冷たい理性を以って、アリスは敵対する者の排除を決めた。

「……今更な質問なのだけど、アリス。アナタは一体何者なの？」

「さて、実はそのこの所が私も一番気になっているのよ」

意味深げな返答に対して、パチュリーは興味を抱かない。

魔法使い達は、お互いを不可解な存在として処理した。

あとに残されたものは衝突のみ。対峙する二人は、目の前の相手を否定する為にそれぞれ行動を開始した。



「てゐ、どうした？」

何処までも続く竹林を貫くように飛んでいた慧音は、先頭を進むてゐが急停止したのに合わせて、その場に留まった。

すぐ隣にはチルノが同じように浮かんでおり、その間に挟まれた先代の体を二人掛かりで支えている。

夜の闇が、ただでさえ迷いやすい竹林の中を自然の迷路へと変えていた。

全く変化しない風景は、ひよつとして自分達が前に進んですらいないのではないかと錯覚させる。

土地勘のあるてゐるが導くままに進んでいたが、その先導が立ち止まったことに慧音は僅かな不安を抱いた。

「まさか、迷つたのか？」

「いや、そうじゃないんだけどね」

てゐるは何かを思案するように少しの間を置き、それから振り返つた。

相も変わらない飄々とした笑顔が浮かんでいる。

「あたしが案内出来るのは、ここまでかなって」

「何？ おい、それは困るぞ。どうやって妹紅の元まで向かえばいいんだ？」

「ああ、それは大丈夫。まず間違いなく現場は妹紅の住処でしょう。

距離的には、もう大分近いわ。せんせー達も何度も通つてる場所だし、ちゃんと辿り着けるようにあたしがありつただけの幸運をあげるよ」

「幸運って……」

「とにかく、真っ直ぐ進めば絶対に辿り着けるから。ま、あたしの能力だと思つて頂戴」

「ああ、お前がそう言うなら信じるが……そんなことより、お前は どうするんだ？」

何の保証もないてゐるの話に関して、一切の疑問を持たない慧音にてゐるは苦笑した。

三人の顔をさりげなく見渡せば、誰もが質問の答えを待つように真っ直ぐに自分を見ている。

彼女達にとつて一番の気がかりは、本当に妹紅の所へ辿り着けるかどうかなどではなく、てゐるのこれからの行く末なのだ。

半ば呆れるような気持ちと共に妙な気恥ずかしさを感じながら、軽く鼻の頭を掻きつつ答える。

「生憎、あたしには仕事があつてね」

「仕事？」

「永遠亭との契約に関すること、とだけ言つておこうか。とにかく、妹紅のことはあんたらに任せたよ」

「そうか……」

ほとんど事情を話さないでゐるの結論だけを聞き、慧音は黙り込んだ。

普段から寡黙な先代は当然だが、意外なことにてゐるの発言に関してチルノさえ何も言わない。

助けを求めておきながら、妹紅の問題を全て他人に丸投げしているのだ。何らかの叱責や罵倒があるものと予想していたてゐるは、逆に肩透かしを食らっていた。

そして、慧音が一言だけ付け加える。

「お前のしようとしていることはよく分からないが……気をつけるんだぞ、てゐ」

ただ真つ直ぐに、案じるような真摯な言葉だった。

何も答えず、ただ笑いながらてゐは小さく頷く。

鼻の頭を掻いた。

それ以上何も言葉を交わさずに地上へと降りていったてゐを見送ると、慧音は改めて前を見据え、妹紅の待つ暗闇の先へと進んでいった。

「——本当、これくらいしか出来ないけどさ。渡せるだけの『幸運』を持って行ってよ、あの娘にも」

地上から、てゐるは慧音達の後姿を見送っていた。

耳を塞ぐように片手を添え、聞こえてくる音声に集中する。

垂れ下がった兎のような耳には、外からは見えないように小さな機械が挟まっていた。

永遠亭からこつそり失敬してきた、得体の知れない機械だ。こんな物を永遠亭の住人が一体どうやって手に入れたのか、もしくは作ったのか、てゐも知らない。

しかし、これの持つ機能は理解していた。

同じような機械を持つ者と距離を離しながらも会話出来る。あるいは、声を一方的に聞くだけでも出来る代物だった。

そして、つい先程から気になる会話が、この機械から聞こえていた。「侵入者の内、二人一組が結界から抜けた……か」

機械を通じて離れた位置の状況を探っていたてゐるは、声の主である鈴仙の言葉を反復した。

鈴仙が報告を送った相手は永琳だろう。
てゐるは、その通信を横から傍受した形になる。

「お師匠様が迎撃してくれば楽なんだけど」
眩きながら、それが単なる希望的観測であることをてゐるは自覚していた。

永琳の最優先目的は、何と云ってもまず輝夜だ。
今回の異変も、その輝夜の安全を思つて起こしたものだつた。
追われる身である輝夜の存在を月の使者から隠す為に、月そのものを秘術によつて隠してしまつたのだ。

長年この地に隠遁しておきながら、何故今更になつて発見の不安を抱いたのか謎ではあるが、いずれにせよ永琳は輝夜の為なら安全策としてこんなとんでもない所業をあつさりとやってのけてしまう。

結果、幻想郷の有力者を敵に回すことさえ厭わない。
ならば、今の永琳にとつて最優先で排除すべき『敵』とは、未だ遠い侵入者達ではなく——今まさに輝夜と対峙している妹紅だ。

「契約を反故には出来ないしなあ」

妹紅の抱える問題を解決するにあたつて、因縁の相手である輝夜との対峙は避けられない。そこに余計な横槍は入れてもらいたくない。しかし、てゐるには永琳の邪魔をすることも出来なかつた。

もちろん、そこには実力的な差やその後を憂慮した理由もある。
だからこそ、先代達を先に行かせたのだ。

「結局、丸投げにや変わらんね……」
てゐるは自嘲の笑みを洩らした。

さつき、慧音やチルノが自分の答えを聞いて、その無責任さを責め立ててもそれは誤解でもなんでもなかつた。
むしろ、そうしてくれた方が楽だつた。

だが、彼女達は何処までもお人好しで、優しかつたのだ。
てゐるが妹紅のことを頼もうと思つた切欠の通り——。

「今のあたしに出来ることは、これくらいか」

本心の笑みの上に、仮面の笑みを被せて、てゐるは竹林の奥を睨みつけた。

淡い光が二つ、暗闇の中から浮かび上がった。

てゐるには、それが亡霊が全身に纏うように放つ霊的な光であると分かっていた。

結界を抜けた侵入者——異変解決の為に進む西行寺幽々子と魂魄妖夢が、偶然にもこの場へと現れたのだった。

「あら、兎を発見したわ」

「こちらを待ち構えていたようです。異変の関係者である可能性が高いですね」

二人もまたてゐるの存在に気付き、興味を示した。

距離を取って対峙する。

「この永い夜の時間に己を昂ぶらせること無く、落ち着き払っている。なかなか老練な妖怪兎のようね」

「こんな可愛らしい兎ちゃんを年寄り扱いとは、やってくれるねえ」

「何か目的があつて私達を待ち構えていたのでしょうか。貴女は今宵の異変の関係者かしら？」

「あたしは、ただの健康マニアの小兎さんよ」

「あらそう？　じゃあ、そこを通してもらえないかしら。何かを守ろうとしている兎さん」

飄々とした言動の中で、自分が足止めをしようとしていることを幽々子に見抜かれたてゐるは内心で冷や汗を流した。

相手はなかなかの難敵だった。

言葉を交わすのは幽々子のみであり、妖夢の方は傍らでてゐる隙を伺いながら刀を構えている。

無言の圧力を放つ妖夢に対して『あ、こいつ話を聞かないタイプだ』といった感想を抱きながら、しかし相手にする上で厄介なのは幽々子の方だとてゐるは感じていた。

自分のペースを持った相手というのは苦手だった。得意の口八丁で翻弄することが難しいからだ。

更に戦闘の実力はもちろん、単純に数の上でも不利な状況だった。

「……ま、とにかく少しあたしと遊んでいってよ」

話を長引かせることが無意味であることを悟ったてゐるは、素早く意識を切り替えてスペルカードを取り出した。

相手が自分を単なる障害として排除しようとしたら、戦力差から見ても抗う術は無い。

しかし、弾幕ごっこを持ち込めば、少なくとも勝負にはなる。勝てるとは到底思えなかったが。

「思い切りがいいわね。この先に、よっぽど重要なものがあるのかしら?」

幽々子はてゐの弾幕ごっこに応じた。

てゐの思惑通りではあったが、しかし彼女が柔らかな微笑の奥で状況を何処まで見通しているのかは分からなかった。

永琳や輝夜から時折感じるものと同じ大物の気配を幽々子からも感じながら、同時に純粋な敵意をぶつけてくる抜き身のような妖夢に神経をすり減らす。

——こりゃあ、キツイ戦いになりそうだ。

勝つ気は毛頭ないし、時間稼ぎが目的だ。

しかし、こんな奴らと長々と戦っていたくなどない。

うんざりするようなため息を吐き出し、それでもてゐるは二人の敵を迎え撃とうとした。

「ちよおつと待ったあ!」

てゐの弾幕が戦端を切り開こうとした瞬間、朗々とした声が割り込んだ。

「あ、バカ!」

「誰がバカよ!」

「間違えた、チルノ!」

唐突に現れたチルノに対しても、てゐは憎まれ口を忘れなかった。

「あんた、何やってんのよ? 先代と慧音は?」

「先に行ったわ。妹紅のことは、お師匠とけーねに任せておけば大丈夫よ!」

「だから、何であんただけこつちに戻ってきてんのよ!」

「そんなの決まってるじゃない、助太刀よ！」

当然だとばかりに、チルノは胸を張って答えた。

てゐは眼を剥いてチルノを見やり、続いて律儀にも二人のやりとりが終わるのを待っている幽々子と妖夢を見た。

妖夢は無然とした表情だったが、幽々子の方はチルノの乱入を明らかに楽しんでる様子だった。

顔を顰めながら、チルノの方へ向き直る。

「……なんで、助太刀しようなんて思ったわけ？」

「ふふん、あたいの眼は誤魔化せないわ。てゐが何かを隠していたことなんて、お見通しなのよ」

「ああ、それはバカにしては大したもんだ。慧音も察してたみたいだけれどね。だけど、戻ってくる理由にはならんでしようが」

「なんで？」

「なんでって……あんたは妹紅を助ける為に竹林まで来たんでしょ！

一番大事な目的を忘れるなんての！」

「忘れてないわ。妹紅の所には、お師匠とけーねが行ったから大丈夫なのよ。お師匠はあたいよりも最強だし、けーねは頭がいいしね」

慧音の『頭がいい』はともかく、先代への『最強』という評価がよく分からないが、とにかくチルノにとってそれらは絶大の信頼に至る理由らしい。

今更ながら、不可解ですらある妖精の思考回路に、てゐは頭を痛めた。

「だったら、そこにあんたも加わればいいでしょう……」。

あたしがここに一人で残った意味を少しは察しなさいよ。あたしは、『妹紅を』助けて欲しいんだよ！」

理屈を挟まないチルノの言葉が、きつと何よりも妹紅の心に響く——自分には出来ないことだ、と。てゐは考えていた。

長い付き合いの中で、結局妹紅には大したことをしてやれなかった。

ここに至って、自分以外の誰かに可能性を託すしかなかった。

少しでもその可能性を上げる為に、自分出来る無理はこれくらい

だと思っていたのだ。

てゐるの聲は、チルノを半ば責めるような響きを持っていた。

しかし、当のチルノはその言葉に対して不思議そうに問い返す。

「じゃあ、あんたは誰が助けるのよ？」

てゐるは今度こそ、完全に意表を突かれて眼を丸くした。

「……はあ？」

「よく分からないけど、ここであいつらと一人で戦おうとしてたんでしょ？」

妹紅が危ないのは分かったけど、あんただって危ないところだったんじゃない。

あたいは友達は見捨てないよ。妹紅はお師匠達が助ける、てゐはあたいが助ける——『ぶんたんさぎよう』って奴よ。あたいは、習ったんだからね！」

言い切り、自らの言動に絶対の自信と正当性を抱きながら、チルノは腕を組んでふんぞり返った。

——いつの間にあたしとあんたは友達になったんだ？

——っていうか、あんた一人であの二人と同等なのか？

てゐは何事か言い返してやろうとしたが、普段のように上手く口が回らなかった。

悔しいが、認めるしかない。

てゐるは、チルノの勢いに完全に呑まれていた。

「ホント……あんたは、また相変わらず……」

「何よ？」

「『最強』だわ……」

結局、てゐるは諦めたようにそれだけ口にした。

口元には苦笑にも似た、奇妙な笑みが自然と浮かんでいた。

「当たり前よ！　ようやくあんたもあたいの力を認めたようね。

あいつらが何者かは知らないけど、最強のあたいが加わったからには何の問題もないわ。安心して見てなさい！」

「ああ、まったくクソ安心だよ。怖いもんなんて何もないさ」

「その通りよ！」

自信満々に笑うチルノの隣に立ちながら、てゐるは改めて敵を見上げた。

「うふふつ。いいわねえ、友情つて。そうだ、いいこと考えたわ。妖夢、貴女も友達を作りなさい」

「幽々子様、今は戯れている暇などないので……」

「じゃあ、この異変が解決したら友達を作りなさい。きっと、貴女の為になるわ」

「……考えておきます」

意外と無理難題を与えられたのかもしれない——と思いつつ、妖夢は意識を眼下の敵に向けた。

「……チルノ」

「何？」

「さっきの『怖いものなんてない』つて言葉はさ……嘘じゃないよ。本当なんだ」

「うん……？ 分かってるわよ、今更。変な奴ね」

「頼もしい友人を持つて、あたしや幸せだよ……つと！」

幽々子が微笑みながら、妖夢が鋭い眼光を放ちながら、襲い掛かる。てゐるとチルノは、互いに全く恐れ怯むことのない意思でそれらを迎え撃った——。



——どれぐらい戦っただろう？

辺りは相変わらず夜の闇に包まれていた。そこを偽りの月の光が照らし出している。

延々と変わらない光景だった。

時間の感覚などあったものではない。まるで時が進んでいない気さえする。

それが錯覚だと自分に言い聞かせながら、妹紅は胸の内から湧き上がった僅かな安堵感を戒めた。

——輝夜の言うとおりで。私は、夜が明けないことに安心してい

る。

それはいけないことだ、在ってはならないことだ——と。考えながらも同時に疑問を抱く。

——何がいけないというのだ？

時間が止まってくれるのなら、終わることはない。始まることもない。繰り返すこともないのだ。

混沌とした自身の心の内から眼を逸らすように、妹紅は立ち上がった。

「そうやって、同じことの繰り返しね。まるで貴女の生き様そのものだわ」

地面を這っていた妹紅が震える足で立つ様を見下ろし、輝夜は憐れむように呟いた。

輝夜と妹紅の戦いは、当初の状況から変化していた。

全く無傷の輝夜と、痣と血に塗れた顔で息を切らしながらろうじて立ち上がる妹紅。

その構図が戦況の優劣を明確に表している。

「もう十分傷ついたでしょう」

当然の結果だった。

蓬萊人である二人にとって、戦闘の負傷や疲労は全く問題にはならない。

死にさえ意味は無いのだ。

一度絶命してしまえば、それまでの状態はリセットされ、完全な形で蘇る。

その過程でどんなことが起ころうとも、行き着く結果が同じならば、次に起こることも同じだ。

蘇生し、振り出しに戻る。

厳しい修行を乗り越えた妹紅は、そこで得た力を使って輝夜を幾度も追い詰めた。

追い詰めた果てに、終わることなく再び始まる戦いを延々と続けていた。

「もう疲れ果てたでしょう」

蘇るたびに負傷は消えて体力も回復する輝夜に反し、妹紅はただひたすら消耗し続けていた。

戦いが長引くほど、妹紅は不利になる。

優勢であるはずの妹紅の方が疲れ、衰えていく——あまりに不毛な戦いだっただ。

「何故楽になろうとしないの？」

やがて、輝夜の反撃が妹紅を捉え始めた。

技も何もない拙い攻撃は、しかし体力を消耗して動きの鈍った妹紅にはかわしきれなかった。

殴り飛ばされ、地面に叩きつけられた。

血を吐き、骨が軋む。か細い腕からは想像も出来ないような怪力だ。

完全に形勢は逆転し、妹紅は何度も倒れ伏し——その度に立ち上がった、全身を磨り減らすように弱っていった。

「降参なんて……絶対に、するつもりはないね……っ」

「それもあるけれど、そうじゃあないわ」

妹紅は構えをとった。もはや両腕を持ち上げることすら辛かった。

輝夜が無造作に歩いて間合いを詰めることにも対応出来ない。自ら踏み込む体力すら、もう無いのだ。

十分に近づいた瞬間を見計らって、妹紅は拳を繰り出した。

未だ鋭さは無くなっていない。しかし、当初より確実に衰え、鈍っていた。

待ちに徹して攻撃するしかない妹紅のパターンを読み切っていた輝夜は、その一撃を難なくかわして、逆に攻撃を叩き込んだ。

拳打でも手刀でもない。ただ単に腕を薙ぎ払うだけの素人染みた攻撃である。

しかし、咄嗟に受け止めた妹紅の腕が嫌な音を立てて折れ、体ごと弾き飛ばされていた。

「があ……かつ、あ、あああ……っ！」

「ほら、また」

腕を押さえて悲鳴を必死に噛み殺す妹紅を、輝夜は見下ろした。

「また身を守った。それは無意識なの？ 体に染み付いた技なのかしら？ だとしたら、それは不幸以外の何物でもないわね」

歩み寄り、拳を振り上げて、頭部目掛けて全力で振り下ろす。

一瞬早く我に返った妹紅が慌ててその場から転がると、拳の突き刺さった地面が轟音を立ててへこんだ。

もし、まともに食らっていたら頭蓋骨ごと粉々に砕かれていただろう。

「……頭を砕かれて、死んでいれば楽だったのに」

再び立ち上がった妹紅を見つめて、輝夜は言った。

「一度蘇生すれば、その負傷と疲労という枷からも開放される。また全力で戦える」

「……そして、以前の貧弱な体に戻った私は、お前に延々と嬲り殺され続けるって？」

「そうかもね——でも」

滝のような汗を流しながら、妹紅は肩で息をし続けていた。

眼の焦点まで定まらなくなりつつある。

全ての限界が近かった。

「あんた、『それ』をいつまで続けられると思っているの？」

輝夜は問い掛けは妹紅のこれまでの行動を指していた。

「いずれ力尽きた時に、同じ結果が待っているわ。いい加減諦めなさい」

「……嫌だ」

「認めるのが嫌なら、私がハッキリと言ってあげるわ。

貴女が先代達と過ごした時間は——全く、何の意味も無かった。結果に何の変化も与えられなかった。

むしろ、そこまでの過程を悪化させたわ。貴女が今、こうして苦しんでいるのは彼女達と過ごした日々のせいよ。その時間で手にしたモノが、貴女の苦しみを長引かせている」

「違うー！」

「違わないわ、妹紅。もう、いい加減世界の見方を変えなさい。定命の者とまともに向き合うことをやめるのよ。」

今の貴女が執着しているものを、縋りついているものを、捨てなさい。今は確かに手の中にあるかもしれないけど『それ』はいずれ崩れて消えるものなの」

「嫌だっ！」

「いい加減——眼を覚ませと、言ってるのよ!!」

輝夜が初めて怒りの感情をあらわにした。

戦いを始めて以来、どれだけ妹紅の攻撃を受けようとも余裕を崩さなかつた輝夜が、苛立ちと何かの焦燥に顔を歪ませながら駆け出す。迎え撃つた妹紅の拳を顔面で受け、弱体化しきつたその威力を意にも介さず、体ごと突っ込んだ。

妹紅を押し倒し、両手で首を掴む。

「千年以上、飽きもせず何度も何度も何度も……っ！　どれだけ繰り返せば思い知るの!?!」

凄まじい力で首を締められ、妹紅は全く呼吸が出来なかつた。

窒息死——いや、上がり続ける握力は首の骨をへし折り、握り潰さるばかりだった。

痛みも消え去り、朦朧とする意識の中で、妹紅は無意識に体を動かしていた。

組み伏せられた時の対処方法は、修行の中で既に先代から教わっていたのだ。

残された力を振り絞り、輝夜の片腕を掴んで、関節の脆い箇所から一気に捻り折る。

「ぐ……っ！　このっ、馬鹿が!」

片腕を失つた輝夜は、苛立ち紛れに残つた腕で妹紅を持ち上げ、力任せに投げ飛ばした。

受身を取ることで落下の衝撃を最小限に殺し、妹紅は地面を転がった。

予想外の反撃に驚きながらも、ますます湧き上がる苛立ちと焦りに任せて、輝夜は自身の喉笛を引き千切る。

自ら命を絶ち、すぐさま蘇生し、折られた腕が元に戻っていることを確認すると、改めて倒れたままの妹紅を睨みつけた。

もはや立ち上がるうとすらしていない、満身創痍の状態だ。しかし、生きているのは確実だった。

ギリギリの所で踏ん張り、妹紅は生きることにはしがみ付いている。ただ苦痛だけを伴う延命に。

「また足掻いたわね。本当に厄介だわ、ここまで執着するなんて……」

輝夜の抱く苛立ちの対象は、もはや妹紅ではなかった。

彼女をここまで変えてしまった相手に矛先を変えている。

今の妹紅に関わった人物は幾人かいるが、特にその中の一人を強く脳裏に思い描いた。

そして、一体如何なる因果の導きか——輝夜の視界に、その人物は現れたのだった。

「妹紅っ！」

二人の戦いの場へ、凜とした声が割り込んだ。

その声に反応して、倒れ伏した妹紅の体が僅かに震える。しかし、もがくだけで立ち上がることが出来ない。

代わりに輝夜が、その声の主に向けてゆっくりと振り返った。

慧音に支えられ、この場に駆けつけた一人の巫女の姿が視界に捉えられた。

「先代巫女……っ！」

輝夜は憎しみすら込めて、先代巫女を睨みつけた。

◇

——妹紅が危ないから助けて欲しい。

てゐにそう告げられてから、とにかく現場に急行することだけを考えていた。

具体的に、妹紅が今どういう状況に追い詰められているのか、私はてゐから説明を受けていない。

しかし、半ば予想はしていた。

そして、その予想の中していたことを、竹林を抜けた先に広がる光景から確信したのだった。

無傷で佇む輝夜に、ボロボロの姿で倒れ伏している妹紅。
どう見ても二人が戦った後だった。

「妹紅っ！」

思わず叫んでしまう。

慧音の腕を振り払って駆け寄ろうとして、そのまま地面に倒れ込む。

間抜けなことに、その瞬間私は自分の足が使い物にならないことを忘れていた。

い、痛い……モロに顔面打った。

慧音が『先代!?!』と焦ったように心配してくれるが……ごめん、恥ずかしいからちよつとこっち見ないで。

鼻血を拭いながら、痛みと羞恥心を堪えて這うように妹紅の方向へ向き直る。

私の呼びかけを受けて、妹紅は僅かに身じろぎをすることで反応を見せるが、立ち上がるうとしない。

いや、出来ないのか？ それくらい叩きのめされてしまったのか？

「しっかりしろ、妹紅！」

慧音が私の体を起こそうとしてくれるが、私は立ち上がることも妹紅に呼びかけることを優先した。

本当は、直接妹紅を助け起こしたい。

足がどうこうなんて関係ない、這ってでも妹紅の所へ行きたかった。

だが、それは出来ない。

この勝負に、横槍を入れることは出来ないのだ。

妹紅はこの時の為に私達と修行したのだから。

「立っんだ……い！」

不十分だったのか？

私が鍛えただけでは、輝夜には通じなかったのか？ —— 自責と後

悔の念が浮かぶ。

一ヶ月で、教えられるだけのことは教えた。

純粹な戦闘の為の技術の他に、輝夜が不死者であることを考慮した

戦法や、想定される状況の対処法も、私が持つ一番の強みである漫画の知識を総動員して練ったのだ。

不死身というのは決して無敵という意味ではない。

付け入る隙は必ずある。っていうか、バトル漫画とかではその辺の攻略法はかなり豊富だ。

勝ち目はある。『人間』は『不死者』には絶対に負けない。私はそう信じている。

だから、勝てるはずなんだ。

頑張れ、妹紅！ まだ勝負は終わっちゃいないぞ！

「立て！ 立つんだ、妹紅っ!!」

地面を叩きながら、私は声を張り上げ続けた。

滅多に出さない大声で叫ぶ私を見て、傍らの慧音は驚いたような顔をしている。

確かに普段の私のキャラじゃないが、この状況ではそんなことも言っていられない。

今の私の気分は、リングサイドのセコンドだった。具体的には段平のおっさんと同じ心境だ。

傷ついた妹紅に、酷な叱責と響くかもしれない。

しかし、私は妹紅と一緒に苦しい修行の日々を過ごした仲間なのだ。

あの日々が何の為にあったのか——それはこの勝負に勝つ為なのだ。

妹紅を奮い立たせる為、私は無意識に漫画の台詞に肖っていた。

苦しい時、倒れた時、この台詞を聞けば立ち上がれる！ という私自身の経験も踏まえた、偉大なる先人の応援だ。

こいつを受けて、立ち上がってくれ妹紅！

「立て、妹紅！」

もがくように妹紅の手足が動いた。

まるで立つ為の取っ掛かりを探しているように、指で地面を掻き筆り、つま先で踏ん張ろうとする。しかし、上手くいかない。

もどかしかった。駆け寄って、助け起こしてやりたかった。

でもやっぱり、それは出来ないのだ。

傍らの慧音の気遣いも眼に入らず、私自身も地面を這ったまま、歯を食い縛って立ち上がるとうとする妹紅の姿を見守っていた。

そんな私と妹紅の様子を、意外にも輝夜は邪魔することなく眺めている。

「——貴女の言葉は不思議ね、先代巫女」

視線は妹紅に向けたまま、輝夜が小さく呟くのが聞こえた。

「なんというか、説明出来ない『力』があるわ。別に言葉自体は何の変哲も無い、捻った表現でもないのに、ただ『立て』と言われるだけで立ち上がりたくなってしまう。

形の無い言葉なのに、本当に体を支え、押し上げてくれるような錯覚さえ感じる。傍らで聞いているだけの私までそう感じるのだから、与えられている妹紅は尚更ね。

追い詰められた彼女には、この上ない支えとなるでしょう。ひよつとして、貴女には言霊を操る能力でもあるのかしら……？」

えっ……そうなの？

突然そんなことを言われても、私にはよく分からない。ただ必死だったのだ。

私の言葉が特別だと言うのなら、それは私自身に能力があるのではなくて、この言葉自体に宿っている力なのではないだろうか。

私が尊敬する偉大な漫画の先人達は、これらの言葉で時に自分を、時に他人を奮い立たせてきたのだ。

そして、それを物語として見る者に衝撃と感動を与えてきた。

私はその力を借りているにすぎない。

私にとって重要なのは、その力が妹紅の支えになってくれているというだけだ。

輝夜の言うとおり、私の呼びかけが妹紅の立ち上がる力になっているというのなら、私は例え声が枯れても——。

「妹紅が貴女を慕う理由が分かるわ」

妹紅から視線を外し、輝夜は体ごと向き直って私を見た。

その瞳には、私への完全な敵意が宿っていた。

「貴女の……あんたのやっていることが、どれだけ無責任なことなのかっ！ その無自覚さに反吐が出るわ!!」



響き渡る罵声と、輝夜の憤怒に歪んだ顔を前に、慧音は呆気に取られていた。

蓬萊の力によって無傷の状態で佇む輝夜は、まさに傾国の美女として恥じぬ優美さを備えている。

実際に倒れた妹紅の姿がなければ、戦いなどの野蛮な行為とは無縁の存在だという印象を受けるだろう。

この美しい姫が、ここまで明確な負の感情をあらわにするなどあまりに意外だった。

それは先代も同じらしく、ぶつけられた敵意の大きさに息を呑んでいた。

これまで如何なる巨大な敵にも決して退くことのなかった先代は、儂さすら感じる美姫の怒りに気圧されているのだった。

「私が、無責任……だど？」

「ええ、そうよ」

問い掛ける先代の声は戸惑いに満ちていた。

傍らの慧音は、初めて見る先代の狼狽した様子に、言い知れぬ不安を感じた。

「いずれ死んで消える人間が、死なないあの娘に——妹紅に何かを残そうとすること自体が無責任な行為なのだと、貴女は自覚していない」

深く斬りつけるような声で、輝夜は断言した。

「貴女は妹紅に様々なものを残そうとした。力と技を授け、人としての温もりで包み、孤独だったあの娘を自分達の輪の中に入れた——」

「……そのの、何処が悪いと言うんだ？」

黙って輝夜の話を書く先代に代わり、堪えきれずに慧音が憤然と反論した。

未だに立ち上がることの出来ない妹紅を指し、輝夜が答える。

「それら全てが、今もこうして妹紅を追い込んでいるからよ！」

彼女がこうして傷つきながら地面でもがいている理由は分かる？
下手に身を守らず、致命傷を受けていれば、無傷の状態で蘇生することが出来た。

それを必死に避けようと足掻いた結果が、あの有様よ。妹紅は修行で得た力を——貴女達と過ごした日々の証を失うのが怖くて、苦痛に耐えながら現状にしがみ付いている」

「ふざけるな！　そもそも、妹紅を傷つけているのはお前だろうが！」
「これは私と妹紅の勝負なのだから、当然でしょう？」

これまでも私達は幾度もこうした勝負を繰り返してきた。勝敗や生死に意味の無い戦いを。

そんな蓬萊人にとっては戯れのような戦いが、何故今回に限ってこんなに苦しみを伴っているの？　妹紅があそこで、疲れ果てた体と傷の痛みを抱えて耐え続けている理由は何よ!?　あんた達が余計なことをしたからでしょう！」

「……馬鹿なっ！」

輝夜の叱責を、慧音は理不尽な言い掛かりだと切り捨てようとした。

彼女が妹紅にとってどれほど因縁のある相手なのかは知らないが、この一月あまりの間を共に過ごした自分達の関係を否定する資格など無い。

妹紅に接した誰もが、あの日々の中で純粹に想い合っていた。仲間だった。

あの日々が間違いであったなど、言えるはずがない。

——しかし。

慧音の脳裏には、輝夜の言葉に呼び起こされるように、無力な自分の腕の中で泣き震える妹紅の弱りきった姿が浮かんでいた。

手にした暖かな日々を失うことに怯えていた彼女。

輝夜は、妹紅が今苦しんでいるのは先代達が与えたモノのせいだと言った。

ならば、あの時妹紅が嘆いていた原因は――。

「先代巫女、貴女はどれくらい生きるのかしら？」

人間なのだから、あと五十年も生きればいい方よね。

でも、妹紅は永遠に生きる。百年でも千年でもない、終わりのない時間よ。人間に限らず、定命の者に果たして想像がつくかしら？」

問い掛けておきながら、先代と慧音の二人には返答を許さない厳しさが含まれていた。

二人に限らず、いずれ死んでいく者ならば誰であっても答えを聞くつもりはない。信じるだけの説得力が無い。

蓬萊人とそれ以外の存在を差別する強い意識がそこにあった。

「貴女達が妹紅と過ごした時間に、悪意があったなんて私も思わないわ。きつと善意と、好意と、何より正しさがあったのでしよう。」

でもね、その価値観が既に違うのよ。貴女達はその正しさを残して、安らかに死んでいける。別れの悲しみがあっても、平等に訪れる死という終わりが納得させてくれる」

「……」

「――じゃあ、残された妹紅はどうすればいいの？ 貴女達から与えられた言葉や記憶だけを頼りに、永遠の孤独を過ごしていけると思う？」

「それは……っ」

「出来ないわよ。だって、妹紅はこれまでの時間の中で何度もそれを繰り返したんだもの」

慧音は、もはや何も反論することが出来なかった。

妹紅と同じ蓬萊人である輝夜と、輝夜の言うとおりにずれ妹紅を残して去っていく自分自身――立場の違いを嫌というほど思い知らされていた。

助けを求めるように傍らの先代を伺うと、厳しい表情のまま黙り込む横顔が映り、慧音は絶望を感じた。

「先代……さつきも言ったわよね、貴女の言葉には不思議な力があるって」

輝夜は改めて矛先を先代に向けた。

「貴女は自身の価値観の中で正しいと思う行いをしたのでしよう。

でも、そこで本当に妹紅のことを考慮して発言した？ 貴女が生を全うした後で、残された妹紅がどう生きるのか。貴女の残した言葉が、どれだけ相手の心に影響するのか。どれだけ生き方を縛るのか――」

「……先代」

「貴女の言動にはとても大きな影響力がある。事実、それによって妹紅を変えた。

別れと出会いを繰り返して、ようやく自分と周囲の世界との違いを悟り始めた妹紅を、生きた人間に戻した。

その結果、再び失うことへの恐怖を思い出して、妹紅は苦しんでいる。その苦しみを、当事者である貴女は僅か数十年程度の生きている間しか和らげることが出来ない」

「先代、お願いです。何か言ってください」

「どうなの？ 貴女は、妹紅の為に生き続けることが出来る？ 蓬萊の薬を用意したら、それを飲める？ 妹紅に掛けた言葉の責任を取ることが出来る？」

「あの女に、これ以上言わせないで下さい……っ」

「さつき、貴女は妹紅に『立て』と言ったわね。その後、どうするつもりだったの？ 残りの永遠の時間を独りで立ち続けろというの？」

——それが無責任だというのよ、貴女の言葉は！ 正しさだけを前面に押し出して、言った後のことを考えない！ 自分の言葉が、どれだけ相手を変えてしまったのか自覚しない！」

輝夜は怒りと嫌悪を込めて罵った。

それに対して、先代はただ唇を噛み締めて沈黙を貫いていた。

真つ直ぐに輝夜を見つめている。

しかし、それは決して睨みつけるようなものではなく、一方的な罵倒に対して不快感や反感を抱いた表情ではなかった。

先代は、ただ黙って耐えていた。

まるで輝夜の叱責を正当なものであると、罰を受け入れるように。

「……先代、何故ですか？」

傍らの慧音も歯を食い縛って耐えていた。

彼女こそ、誰よりも輝夜の言葉に反感を抱いて、今すぐにも食って掛かりたい衝動を堪えていた。

それをしない理由は一つだった。

叱責を受けている当の先代が、全く否定や反論をしないからだ。

「何故、何も言ってくれないんですか!？」

慧音は縋るように訴えた。

悔しさと体が震え、涙が滲んでいた。

先代の行動を否定する輝夜の言葉は、同時に慧音の心も打ちのめしていた。

妹紅だけではない。慧音もまた、先代の言葉と行動に救われてきたのだ。

それが間違ったことなのだと責められ——そして、それに対して何も言い返さない先代の姿が、慧音には何よりもショックだった。

「何とか言っして下さい！ 先代——!!」

妹紅は倒れ伏したまま、意識があるのかどうかも分からない。

輝夜は自らの敵意によって射殺するように先代を睨みつけている。

そして、先代は口を閉ざしたまま、その視線に耐え続けるだけだ。

血を吐くように叫んだ慧音の懇願に応える者は、この場には誰一人としていなかった。

其の二十四「永夜返し」

『何とか言っして下さい！ 先代——!!』

私に懇願する慧音の声が聞こえる。

しかし、私は一言も口にする事が出来なかった。

輝夜の叱責に対して、全く反論出来なかったのだ。

私の言動は無責任だと彼女は言う。

——そうなのかもしれない。

何故なら、私が妹紅に告げた助言、与えた修練は、全て他人からの借り物だからだ。

私が尊敬する偉大な先人達に倣って、私は行動した。

それが妹紅の為になると思ったからだ。

事実、私は今でも私が肖った先人達の名言や行動理念は正しいものであると信じている。それらが他人を変える力があると思っている。

そして、私の信じており、それらは力発揮し——その結果、妹紅を苦しめているのかもしれないのだ。

私は、私の正しさを追及するあまり、それ以外のことに考えを巡らせていかなかったのではないか。

輝夜の言うとおり、私自身の言動が周囲に与える影響を軽視しすぎているのではないか。

彼女が感じたように、本当に私の言葉に力が、いや肖ってきた言葉や行動に特別な影響力があるのなら——。

——私は、あまりに無自覚にそれを使っていたのではないか。
永遠の命なんて、私には想像もつかない。

百年や千年といった長い時間を思い浮かべても、何処かで『その時間にも果てがある』と考えてしまっているのだろう。

道を知っていることと、実際に歩くことは違う。

何より、私は死ぬことを決めてしまった人間だ。

娘の、霊夢の為に親として死ぬことを決意し、そこに後悔もなく、信念として持つてしまった人間なのだ。

私は、妹紅と一緒に生きてやることは出来ない。

輝夜は『ここに蓬莱の薬があつたら飲めるのか?』と尋ねたが――
それは、出来ないんだ。

いずれ死んでいなくなる人間なのに、私は妹紅のその後の人生を大きく変えてしまおうとしていたんだ。

無自覚に。それをただ良かれと思って……。

残された妹紅が、同じように私の残した言葉を引き摺ってどんな風に生きるのか想像もせずに。

そして、それは慧音にも言えることじゃないのか?

以前の春雪異変で彼女の取った行動を、私は今更ながら思い返していた。

輝夜の言うとおりだ……。

「……私には、何も言う資格は無い」

縫るような慧音の視線から眼を逸らし、私は呻くしかなかった。



『……私には、何も言う資格は無い』

先代の呻くような返答は、慧音にとって死刑宣告にも似た絶望感を与えた。

彼女にとつて、全ての選択肢が閉ざされたに等しい。

震えながら逃げるように視線を移せば、倒れたままの妹紅が見えた。

そして、揺ぎ無く佇む輝夜。

誰も言葉は無く、ただこの場の状況だけが全てを物語っていた。

輝夜と妹紅の勝負は、妹紅の敗北に終わった。

今日この日まで行ってきた先代の鍛錬は無駄に終わり、慧音達が妹紅と心を通わせたと思っていた日々は否定されたのだ。

慧音はもう一度先代を見た。

倒れ伏した妹紅を凝視しながら、しかし体はその場に縛り付けられてしまったかのように動かない。

輝夜の言葉と視線が、先代を完全に押さえ込んでいるのだ。

——駄目か。

慧音は力無く頭を垂れた。

輝夜の叱責を全て受け入れたわけではないし、彼女の言葉が正しいとは思わない。

何よりも悔しい。妹紅が自分や先代、そしてチルノやてると過ごした時間を切り捨てようとする輝夜の考え方を、到底認められはしない。

声高く反論してやりたかった。

しかし、輝夜の指摘した否定の出来ない現実が目の前にある。

妹紅が傷つき、苦しんでいる理由の一端は確かに自分達にあるのだ。

そして、その現実に対して自分はあまりに無力だと慧音は感じていた。

あの日、妹紅が自身の抱く不安と恐怖を嘆いた時、何一つ答えてやる事が出来なかった。

もし、この場にいたのが先代ならばきつと——そう考えて、無力な自分を責めつつも、一抹の希望を先代に託していた。

その先代が、今自分と同じように何も言えずにいる。

——今日までの全て、ここでお終いか。

先代に覆せない状況を、自分がどうこう出来るはずもない。

ならば、つまりそういうことなのだろう。

輝夜の言葉は正しく、そして同じ立場である妹紅にとっても正しいことなのだ——。

「……………違う」

誰もが押し黙った静寂の中、不意に漏れた一言が明瞭に響いた。

「何が違うのかしら？ ——上白沢慧音」

否定の言葉を口にした慧音に対して、視線が集まる。

輝夜の警戒を含んだ視線と、意表を突かれた先代の視線を受けながら、慧音はゆっくりと顔を上げた。

その瞳には迷いを振り切る為の確固たる決意が宿っていた。

「資格など……………必要ない。先代、貴女はもつと妹紅に語りかけるべき

だ」

慧音は先代を真つ直ぐに見据えて言った。

それまで敬うべき目上の相手としか接していなかった先代に対して初めて掛ける、叱るような言葉だった。

「貴女が妹紅に話した時、教えた時、如何なる考えがあつたのかは私には分からない。」

しかし、それが深慮であれ、浅慮であれ、抱いた想いに偽りが無いのなら——俯く必要はない。今一度、顔を上げて妹紅に言葉を掛けてやってください」

「慧音……」

「自らのエゴを貫くことを優先するということね」

嘲る輝夜に対し、慧音は一步も退くことなく向かい合つた。

「蓬萊山輝夜、お前は私達と比べれば妹紅にずっと近い立場なのだろう。」

私達と違い、お前はずっと妹紅の傍に出来る。見守り、話し掛けることが出来る。」

しかし、それでも——それは他人の言葉だ。私達と同じ、妹紅の本当の心を代弁することなど出来ない」

「あのボロボロの姿を見て、まだ何か弁論の余地があるとでも？」

「ああ、あるさ。」

生きることは、苦しみだ。永遠の命だろうが何だろうが、人の時間は平等に刻まれていく。心が何かを感じることに百年も千年も必要ない。」

周りにいる誰かの言葉や、行動で、一分一秒の間に感じるんだ。何かを与えられてほのかに暖かみを感じることもあれば、何かを失って凍えそうなこともある」

「だったら、私の言うとおり……」

「他人との繋がりを断つたお前には分かるまい！」

慧音の迫力に、輝夜は息を呑んだ。

初めて他人に気圧されていた。

「私は不老不死ではない。しかし、それでも人より長く生きるだろう。」

先代が亡くなられた後、何十年……いや、何百年か。いずれ訪れる別れを、私はもう十分に思い知った」

春雪異変の時の記憶が蘇る。

あれ以来、未だに見る先代との死別とその後の時間を描いた夢は、いずれ訪れる現実につながっているのだと分かかってしまった。

それが悲しく、不安で、何より恐ろしかった。

その点において、慧音は妹紅と共感出来ると思っていた。だからこそ、あの時何も言えなかったのだ。

慧音は傍らの先代を見つめた。

普段の尊敬と共に仰ぎ見るような敬意は含まれていなかった。

その瞳は弱気になった先代を叱るように厳しく、強く輝いている。

「しかし、貴女との出会いを後悔したことなど一度もない」

悲しみと喜びを同居させたような微笑みを浮かべる。

儂くもあり、頑なでもあり、胸の締め付けられるような笑顔だった。

「好きなんだ、貴女が」

慧音は言った。

敬語ではなく、対等な、同じ目線に立つ者の言葉だった。

「貴女の言葉は心を震わせ、行動は偉大な結果を残す——だが、何よりもそれらから伝わる貴女の気持ち、私は嬉しいんだ」

——貴女は、誰かと向き合う時いつでも本気だった。

慧音は一度眼を閉じ、最後の躊躇いを振り払うように再び開いた。

視線は真っ直ぐに、倒れたままの妹紅へ向けられている。

「お前の『気持ち』を聞かせてくれ、妹紅。

私達には、どんな選択がお前に一番良い結果を与えてくれるかなんて分からない。

何が正しく、間違っているのか、答えはわからない。

ただ、お前から離れるようなことはしたくない。傷つけることを恐れて、赤の他人と同じ距離にいるようなことは嫌なんだ。

だって、私達がお前と言葉を交わし、同じ時間を過ごし、一緒にいたのは——皆、お前が好きだからやっていたんだ。立場や種族は違って、仲間だし、友達なんだ」

静寂が漂った。

慧音の告白に、横から口を挟む者は何処にもいない。

地に顔を伏せた妹紅の様子は分からなかった。輝夜は慧音を何か信じられないものを見るような眼で見つめたままである。

そして、やはり黙ったまま言葉を聞いていた先代は、自分を見る慧音の真っ直ぐな視線を受けて我に返った。

「……さあ、先代。いつまでそんな情けない顔をしているのですか？
すっかりしなさい。貴女は、もう言葉を尽くしましたか？ 今の妹紅に、掛ける言葉はもうないのですか？」

慧音の叱責は、先代の決意を促した。

「……肘を脇の下から離さぬ心構えで、やや内角を狙い、えぐり込む様に打つべし」

倒れた妹紅へ、修行の延長であるように指導の声を飛ばした。

「まだ、勝負は終わっていないぞ。拳を握れるのなら、立て！ 妹紅！」

「あんた達はまだ勝手なことを……っ！」

苛立たしげに叫ぼうとした輝夜は、視界の片隅で変化を捉えた。

もはやもがくこともなく、横たわったまま動かなかった妹紅が、ゆっくりと起き上がったのだ。

輝夜達の言い合いに何一つ反応を見せなかった為、既に気絶しているものと思っていたが——今まさに眼を覚ましたのか、あるいはここまでの会話を聞いていたのか、いずれにせよ妹紅は再び立ち上がったのだ。

それは壮絶な決意と覚悟を必要とする行為であるはずだった。
絶えることのない苦痛と疲労が全身を蝕み、それをこの場で拭い去ることは出来ない。

立ち上がったところで、目の前にあるのは勝敗はもちろん終わりすらない戦いが待っただけなのだ。

「……どうして」

しかし、妹紅は立ち上がった。

輝夜は理解出来なかった。

「あしたのために……」

「……え？」

「あしたのために、その一だったっけ……」

拳の握り方、殴り方……最初に教えてもらったな。攻撃の突破口を開くため、或いは敵の出足を止める為、小刻みに打つ事……」

満身創痍の状態で立ち上がった妹紅は、ぶつぶつと呟きながら、脳裏に思い描いた修行の光景を反芻するように拳を構えた。

両腕を持ち上げ、脇を締める。

片腕の骨を輝夜に折られていたが、関節を動かすことに支障はなかった。激痛は無視した。

「覚えてるんだ……」

視線は輝夜を油断なく捉えたまま、妹紅は先代に言った。

「あんたの教えてくれたことは、全部覚えてるんだ」

疲れ果てた体を少しでも回復させるように、呼吸を整える。

呆気にとられている輝夜の一挙一動を、今一度冷静に観察する。

残された体力と負傷の影響下で、どんな戦い方が出来るのか脳内で思索する。

——油断するな。

——隙を見せるな。

——詰めを誤るな。

全て、先代に教わったことだった。

「先代や、慧音、チルノとて……皆で過ごした一ヶ月間を、私は全部覚えてるんだ！」

妹紅は力強く言い放った。

それは目の前の輝夜に対してでもあり、周囲の全てに声高に主張するような叫びだった。

その瞳に、消えかけていた闘志が炎となって蘇っていた。

「……それが、あんたの答え？」

輝夜は鼻で笑おうとして、失敗した。

笑みを形作ろうとした口元は歪み、混沌とした内心を表すような激情が浮き彫りとなって、壮絶な表情となっている。

「千年以上繰り返して、結局『そこ』に戻ってくるわけ!？」

「……輝夜、知ってるか? 『明日って、今』——らしい」

「うるさい、黙れ!」

「これも知ってるか? 『努力する者が、必ず報われるとは限らない。しかし、成功した者は皆すべからく努力している』——ってさ。いい言葉だよね」

「眼を覚ましなさい、あんたは触りのいい言葉とその場の雰囲気で誤魔化されているだけよ!」

「それからさ、まだまだあるんだ……色んなこと、教えてもらったんだ」

「黙れと、言っているのよっ!」

何かに堪えきれなくなったかのように、輝夜がその場から飛び出した。

負傷も体力も全快した状態で妹紅に襲い掛かる輝夜は、しかしただ一つ冷静さを完全に欠いていた。

圧倒的有利な状況への油断と、それと矛盾するように内心で感じている苛立ちと焦りが、我武者羅に体を突き動かしている。

何の技も駆け引きもなく、真正面から突っ込んでくる輝夜を前にして、妹紅と、それを見守る先代が同時に口を開いた。

示し合わせたように同じ言葉が発せられる。

「——口の心を細くせよ」

戦いの最中で、先代の囁くような呟きが、何故か妹紅の耳にははつきりと聞こえた。

「川は板を破壊できぬ」

勝負の最中で、この瞬間まで思い出すことすらなかった先代の教えが、今は自然と口から出てくる。

「水滴のみが板に穴を穿つ」

そして、二人の言葉が完全に一致した瞬間、妹紅の中で閃きが起こった。

先代が『穿心』という心構えとして教えたこの言葉の意味を、今日に至るまで妹紅は理解出来ていなかった。

今もまだ、理屈として何か分かったわけではない。

しかし、先代と共に言葉を反芻し終えた瞬間、妹紅の脳裏に何の脈絡もなく浮かぶものがあった。

それは紙だった。

ただの真っ白な紙がイメージとして浮かび、それが先端から捻れ、細くなつていく様が浮かんだのだ。

何故紙を連想し、それが細くなつていく様をイメージとして捉えることが出来たのか、妹紅自身にも分からない。

先代から教えを受けて以来、ずっと何も分からないままだったはずなのに、頭の何処からこんなものが思い浮かんできたのか不思議だった。

まるで頭の中へ外部から流れ込んできたかのような、唐突な閃きだ。

しかし、妹紅は自らのイメージに何の疑問も抱かなかつた。

ただ、それを忠実に受け入れた。

細くなつていく紙。

それに倣うように、自らの意識もまた細く――。

「水滴のみが、板に……」

妹紅は拳を突き出した。

肘を脇の下から離さぬ心構えで、やや内角を狙い、えぐり込むように打ち込んだ。

負傷し、疲弊したその一撃は、全盛時のそれとは見る影もなく衰えており――輝夜の顔面を寸分違わず捉えて、脳を貫くような衝撃を与えた。

「……っ!? ……っ!」

予想外の反撃を受け、声もなく吹き飛ばされた輝夜が地面を転がる。

一方の妹紅は、起死回生の一撃を決めたことに何の感慨も持たず、ただ静かに言葉を続けた。

「穴を、穿つ」



——やべえ。

そんな声にならない言葉が漏れる内心とは裏腹に、魔理沙の顔は抑えきれない笑みを浮かべていた。

霊夢との弾幕ごっこを始めてからこつち、常に集中状態を維持してきた影響で、体力的も精神的にも疲労していたが、今や全く苦にはならなかった。

むしろ逆だ。

——本当に新しい何かに目覚めちゃったのか、わたし？

逆境を乗り越えた先にある爽快感を、魔理沙は感じていた。

眼前に迫っていた弾幕が魔理沙の傍をすり抜けるように、過ぎて消える。

霊夢のスペルカードを一枚、完全に攻略したのだった。

「スペルカード・ブレイク、だぜ。霊夢」

「……そうね。一本取られたわ」

明らかに疲労の色を滲ませながらも、その顔は決闘開始時よりも遥かに活き活きとしている魔理沙を霊夢はじつと見つめていた。

その視線に、魔理沙は大きな満足感を覚える。

——それでいい、わたしを見るんだ。

——もう、わたしを無視なんてさせないぜ。

額から流れる汗が頬を伝わる。

博麗の巫女のスペルカードという高難易度の弾幕を切り抜け、束の間緊張状態から開放された筋肉がピクリと痙攣した。

息一つ乱さない霊夢に対して、魔理沙が多大な消耗を強いられていることは彼女自身も自覚している。

しかし、気分は最高に良かった。絶好調だ。

「見えるぜ、霊夢。眼が覚めたって奴だよ」

今や、魔理沙の視界は完全に開かれていた。

魔道書の呪いを乗り越え、本来の機能に加えて、文字通り人間を超えた特性を手に入れたのだ。

それはアリスが課題としていた『魔法使い特有の視点』だった。「弾幕ごっこ」の時、お前が見ていたのはこんな世界だったのか？」

三次元的に飛来する弾幕は、光の雨に等しい。主観で見るそれらはあまりに圧倒的で、回避の為の正しいルートはおろか、時として自らの位置さえ見失ってしまうような空間だった。その中で、これまでの魔理沙は必死に足掻くことしか出来なかったのだ。

しかし、今は違う。

魔法使いとして一つ上の段階に覚醒した魔理沙は、新しい視点を手に入れていた。

魔力だけに留まらず、周囲にある霊的な力を漠然と肌で感じるだけではなく、視覚的にも捉えている。

前を向いていながら、背後の魔力の動きさえ『見える』という矛盾じみた感覚を捉えていた。そして、それはもちろん錯覚ではない。

魔理沙の視野は拡大し、眼前のものを見るのではなく、遥か上の視点から自分自身さえ客観的に見下ろすような、空間把握能力に目覚めていた。

「一歩、お前に近づけたような気がするぜ……霊夢」

魔理沙は確かな手応えを感じ、不敵な笑みを浮かべた。

もちろん、そこに余裕は無い。当然のように油断など存在しない。

状況が好転したとはいえ、未だ霊夢は底の知れない強敵である。彼女の最初のスペルカードを上手く捌けただけにすぎない。

しかし、魔理沙の闘志はかつてない程燃え上がっていた。

自分を真っ直ぐに見据える霊夢の視線が——自分の存在を敵として認める眼光が、酷く嬉しかった。

「勝負はこれからだろ？ 霊夢！」

「……そうね。まだまだこれからよ」

霊夢は応じ、二枚目のスペルカードを切った。

二人の弾幕ごっこは決着することなく、予想外の方向へ火が着き始めている。

その様子を、紫はただ静かに見守っていた。

異変解決の為のタイムリミットは刻一刻と刻まれている。状況は当初の予定よりも遅々として進んでいない。

今のところ、この場から脱した幽々子と妖夢のコンビだけが唯一まともに動いている。

咲夜と鈴仙、パチュリーとアリスの戦いはそれぞれ離れた場所で続いており、肝心の博麗の巫女は目の前にある光景の通りだ。

魔理沙の奮闘は、紫にとって予想外だった。

「素晴らしい。人間の美点ね……」

恐れと諦めを殺し、ひたむきに勝利へ向けて飛翔する少女の姿を、紫は素直に称賛した。

初めて霧雨魔理沙という人間を見た時から、彼女への評価は常に上がり続けている。

全ての切欠は先代の推薦からだったが、なるほど確かに、彼女に認められるだけの存在のようだ。

この八雲紫も認めよう。

しかし――。

「ああ、悲しいかな。貴女は『普通の人間』でありすぎる」

紫は憐れみと失望を混ぜ合わせたような声を、ため息と共に洩らした。

「無理なのよ、霧雨魔理沙」

同じ人間でありながら、博麗霊夢と霧雨魔理沙の間に存在する決定的な違いを、紫は見抜いていた。

——『人間が空を飛ぶ』ということの非現実感を、魔理沙は本当の意味で理解していない。

妖怪や妖精は空を飛ぶ――。

それは、人外の存在だからだ。何も疑問を挟む余地は無い。

しかし、本来ならば地に足をつけた生き物である人間が空を飛ぶということとは、自然の理に逆らう異常なのだ。

純粋に空を飛べる人間など『存在しない』

大地から離れた法則の中で、自在に動けるような力は無いのだ。

例えば、同じ人間の枠に入る十六夜咲夜は、種族こそ人間のカタゴ

リーだが、その身に宿した異能は空間にも関わるものである。彼女の感覚の一部は既に人外の領域なのだ。

魔理沙は空を飛ぶ時、必ず箒に跨って飛ぶ。そうしなければ安定して飛べないという理由からだが、何故飛べないのかという疑問を本人は深く考えたことがない。

紫から見れば、その理由は簡単だった。

箒という搭乗物を基点にしておかなければ、普通の人間の感性しか持たない魔理沙は空を飛べないのだ。地上との違いから、必ず何処かの認識が狂ってしまう。

それはあの先代巫女でさえ例外ではない。規格外の力を持つが、彼女は何処までも人間である。

故に、本当の意味で『空を飛べる純粋な人間』という存在は紫の知る限り、例外としてただ一人しかいないのだった。

——それが『空を飛ぶ程度の能力』を持つ博麗霊夢である。

人間が空を飛ぶ——その本当の意味と、それが示す特異性を、正確に理解する者は少ない。

紫は改めて確信した。

魔理沙は、霊夢には勝てない。

「貴女では無理なのよ……」

未だ終わりの見えない決闘の様子から、紫は瞼を伏せることでそつと眼を逸らした。

二人の弾幕ごっこがどれほど苛烈に見えようと、変えようもない結果が紫には見えてしまっているのだった。

永い夜の異変は続いている。

しかし、紫に焦りは全くなかった。

目の前の光景から感じる意外性は本当に僅かなものであり、何の問題もなく決闘を終えた霊夢を伴って異変の元凶へ向かう予定を、既に脳内で組んでいる。

紫はその時が来るのを、ただ静かに待っていた。

そんな彼女の想定を本当の意味で狂わせることがあるとするならば、それはこの場ではない別の場所で起こっている出来事だった。

魔理沙の予想外の覚醒は、確かに周囲の意表を突き、霊夢と紫の意識を彼女に向けさせた。

故に、誰もが気付かなかった。

異変の夜。この迷いの竹林の一角で、全く関係のない者達の作り出す状況が、異変自体にも大きく関わり始めているということに――。

◇

――あ、ありのまま今起こったことを話すぞ。

輝夜の指摘がもつとも過ぎて、黙り込んだまま何の役にも立たない置物になっていくしかなかった私は、慧音に『好き』と言われた挙句、多分出会って以来初めての説教を受けた。

それを切欠に一念発起し、とにかく何でもいから妹紅に言葉を伝えようと、我武者羅に叫んでいたら、いつの間にか妹紅が逆転していた……。

何を言っているのか分からないと思うが……って、そんな言い回しはどうでもいいんじゃない！ 混乱してるな、私。

私は半ば信じられない気持ちで、目の前の光景を見ていた。

妹紅が負けていいだなんて、もちろん思っていない。

しかし、勝負はほとんど決したはずだった。

無限に再生する輝夜に対して、一度もリザレクション出来ない立場の妹紅は圧倒的に不利な状況だったはずだ。

それが、今や完全に逆転している。

不可解な状況が、輝夜と妹紅を中心に展開されていた。

「馬鹿な……どんな手品よ!？」

欠けた歯を食い縛り、流れる鼻血を拭いもせず、輝夜は襲い掛かった。

それを迎え撃つ妹紅は、一見して何の変化もない。

満身創痍の体で、尽きかけた体力を搾り出しながら、フラフラと動くだけである。

しかし、戦況は一変していた。

「この……っ！」

荒々しく腕を薙ぎ払う輝夜の攻撃を、妹紅は回避した。

ゆっくりとした動きである。いや、元々もう素早く動くことが出来ないのだ。

まるでフラついてバランスを崩したかのような動きで、しかし結果的に紙一重で攻撃をかわしている。

それを『運良く』などとは、私も、傍らで見ている慧音も、何より対峙する輝夜自身も思わないだろう。

もう何度も同じことを繰り返しているのだ。これは偶然じゃない。——妹紅は輝夜の動きを完全に見切り、そして最小限の動きでかわしている。

「何が……何が変わったってどういうの!？」

「心を細く——」

「ぶつぶつと……そんなワケの分からない言葉に、何の意味があるっていうのよ!」

応えるように、輝夜の我武者羅な猛攻の隙間へ妹紅の反撃が滑り込んだ。

私の教えた正拳突きだ……!!

当時教えたまま、愚直なまでにそれをなぞった真っ直ぐな拳が、急に直撃する。

私の眼から見ても、その正拳突きは拳速や威力の衰えたものだった。疲労や負傷の影響が色濃く出ている。

しかし、発揮された破壊力は絶大だった。

拳速の遅さを最短距離の軌道を進むことで補い、衰えた威力を理想的な筋肉の緩急で収束して、逆に相手の筋肉の緊張が緩んだ箇所を正確に狙ったかのように打ち抜く。

曲がりなりに『百式観音』を習得した私から見ても、見とれてしまふような完璧な正拳だった。

予想を遥かに超えるダメージを受けて、輝夜が悶絶する。

追撃は無い。

いや、妹紅には畳み掛けるだけの体力がもう残されていないのだ。

そして、そんな死に体の妹紅が、今や完全な脅威として蘇っている。不利を悟るように、後退りながら輝夜は妹紅を睨み付けていた。

……いや、本当にどうなってるの？ 妹紅ってば完全に覚醒してるんですけど。

とても信じられないが、ひよつとしてこれは私の言葉が切欠になったのだろうか？

「信じられない、妹紅が完全に息を吹き返している……」

傍らの慧音の言葉に無言で同意する。

「先代、やはり貴女は素晴らしい」

いやいや、本当!? まさかでしょ!

確かに、先程の慧音の叱責を受けて、私は眼が覚める思いだった。

自分の立場や生き方に対する苦悩を棚に上げてでも、今まさに追い詰められている妹紅を黙って見ているだけなんて、絶対駄目だと思っ

た。ここで尻込みするようなら、それこそ私は妹紅の存在を軽く見ていることになる。

以前、冥界で娘の霊夢にそうしたように、弟子であり仲間である妹紅を本気で想う心のまま行動しようとした。

想いや力を言葉にどれだけ込められるのか分からないが、とにかくありつたけの心を込めて叫んだのだ。

偉大な先人の名台詞を使うことに躊躇いはなかった。

これらの言葉は、確かな影響力を持って多くの人々に伝えられたものなのだ。そこに込められた真理が、少しでも妹紅の力になってくれるのなら——そう考えて、伝えた。

そして、この結果である。

いや、最高の結果なんだけど……マジで輝夜の言うとおり、私の能力って『言霊を操る程度の能力』なの？

その辺りの真偽はともかく、私の言葉が妹紅の力になったのなら、これ以上幸いなことはない。

痛々しい姿の妹紅を、更に戦いに駆り立てるような声援を送ることを、私はもう躊躇わなかった。

……いや、本音を言うと、もう妹紅には痛い目に遭って欲しくないけど、その気持ちは押さえ込んだ。出来るもんなら、私の体を貸してやりてえ……っ！

しかし、今は——！

「勝て、妹紅。お前は勝つんだ！」

「あいよ……師匠」

腫れ上がった顔で、妹紅はニヤリと不敵な笑いを私に送った。

苛立った輝夜が、私と妹紅に悪態をぶつけながら再び襲い掛かる。

しかし、私はもう動揺しない。

そして、妹紅もまた押し負けない。

勢いを増し、同時に動きの粗さも増えた輝夜の攻撃を冷静に捌き、

妹紅は的確に反撃を繰り返していった。

本当に凄いな。今の妹紅には私でも攻撃を当てられる自信が無い。

根拠は無いが、なんかそんな雰囲気があるのだ。

ついさつき、思わず『穿心』の心構えを口にしていたが、本当に明

鏡止水とかそういういった極地に至ったのか？

いずれにせよ、妹紅は一気に強くなった。

もはや勝負は先程とは真逆の意味で圧倒的だ。

あとは、不死身の輝夜相手にどういった決着をつけるかだが——！?

「どうしました、先代？」

唐突に頭上を見上げた私の視線を、慧音も釣られるように追った。

そして、その先で私が気配を捉えたものと同じ、最悪の存在を見つ

けた。

ジャーンッ！ ジャーンッ！ といった警鐘めいた音が私の脳内

に流れる。

予想出来得る限りで、最も厄介な横槍の登場だ。

「八意永琳——！」

「ヤゴコロ……あれが、蓬莱山輝夜の従者ですか!？」

思わず『ゲエッ！ えーりん!』と叫びそうになってしまう。

私の視線の先には、上空で矢をつがえた弓を妹紅に向ける永琳の姿があった。

◆
——気付かれたか。

永琳は自身に向けられた視線を敏感に察知し、先代達に補足されたことを理解した。

直前まで気配を殺して状況の把握に努めていたが、いざ行動を起こそうとした時に生まれた僅かな気配の乱れを目敏く見つけられたらしい。

妹紅を不意打ちする策は、これで瓦解した。

やはり、あの博麗の先代巫女は油断のならない相手だった——そう考えながらも、内心では悪態一つ吐かない。

既に矢はつがえられた。あとは放つだけなのだ。

永琳は一切の迷いや躊躇無く、狙いを妹紅へ定めていた。

輝夜が妹紅との勝負に拘っているのは知っている。きつと、この横槍は彼女にとって非常に不本意なものとなるだろう。

それを理解しながらも、永琳は輝夜の安全性を優先することを選んだ。

蓬莱人にとって、肉体の損傷は問題にならない。

しかし、精神の傷は違う。

二人の勝負とやりとりを見聞きしていた永琳は、今の妹紅が輝夜にとって大きな負担であり脅威であると判断した。

——妹紅の生き方や考え方は、輝夜とは決定的に違う。

——その言動に乱されぬよう。愛しい姫よ、心安らかに。

永琳は祈りながら弓を引き絞った。

「永琳——！」

標的に集中していた永琳は、本能的に脅威を感じ取って、視線を先代達の方へ向けた。

「手を、出すなあ——！」

先代の両足が完全に機能していない事実を、診察することで知っていた永琳には僅かだが油断があった。

彼女は空を飛ぶどころか立つことすら出来ない。

しかし、その先代が高速回転する陰陽玉を投げ放ったのを見て、ようやく警戒を怠った自身の失策を自覚した。

咄嗟に狙いを変えて、飛来する陰陽玉へ矢を放った。

細腕からは想像も出来ない、鎧すら貫通する剛弓の一撃は、しかし玉の回転に巻き込まれてあっさりと粉碎された。逆に玉の速度や威力は全く衰えない。

鈴仙から事前に報告は受けていたが、ここでも永琳の予想を先代は上回っていた。

成す術なく、永琳は直撃を受けた。

肩に当たった陰陽玉の回転が衝撃と共に拡散し、全身を駆け巡る。

指先に至るまで肉体の自由が奪われ、弓が手から零れ落ちる。

空中に留まることも出来ずに、永琳の体が落下を始めた。

そこまでの流れの中で、しかし永琳は一切動揺することなく冷静に観察していた。全てを。

——不可解な衝撃の伝播。殺傷力はほぼ皆無。代わりに全身の筋肉の麻痺。各部、反応無し。行動不能。

——心停止。リザレクション、開始。

瞬時に肉体の回復が不可能であることを悟ると、永琳は全身の内でも唯一動いている内臓へ意識を集中した。

指一本動かすことなく、意思によって自身の心臓の動きを止める。

更に筋肉を操作し、そのまま心臓を内側へ圧迫して自壊させてしまった。

心臓の鼓動や各種内臓の活動など、本来は人間の意思の外にある肉体の動きだ。

常人には到底不可能な肉体への精密な干渉を、しかし永琳は可能と
していた。

恐るべき速さで判断を決し、行動に移した永琳は、落下を始めた瞬間に絶命していた。

そして、すぐさま蘇生が始まる。

落下しながら死滅した肉体が光を放ち、地面に叩きつけられる直前

に消滅した。

古い肉体から開放された魂は、場所を最初にいた位置に戻して新しい肉体と共に復活する。

先代と慧音が見開いて驚愕する中、状況を巻き戻すように、全く変わりのない永琳の姿が空中に現れていた。

「なんと……あれが、蓬莱人の力だというのか！」

「戻れ、陰陽玉！」

一連の流れは、瞬く間の出来事である。

攻撃に対して、防御でも回避でもない、文字通り生死を超越した反応と対処を見せる永琳に対して、二人は戦慄した。

未だ回転の力を失っていない陰陽玉に命じる先代だったが、それが動き出すより早く、永琳が動いた。

片手で陰陽玉を掴み取る。

手のひらで瞬時に展開した結界によって陰陽玉を包み込み、その力を殺そうと圧縮を掛ける。

不完全な黄金の回転の力では、その圧力に抗うことは出来なかった。

永琳の手の中で玉の回転が停止する。

「興味深い力と道具ね」

永琳は一抹の興味を手の中の物に抱き、それでも僅かな躊躇いもなく腕に力を込めた。

単純な握力ではなく、結界の出力が上がって、あつという間に陰陽玉を圧壊させてしまった。

バラバラの破片を無造作に投げ捨て、再び視線を妹紅へと向ける。ほんの一瞬の攻防は、幸いなことに勝負に集中する輝夜と妹紅には

気付かれていない。

弓と矢は失ったが、攻撃手段は幾らでもある。輝夜は怒るだろうが、直接勝負に乱入してもいい。

対処し終えた先代達からは既に意識を切り離して、永琳は冷静に思考を巡らせた。

その思考が、再度中断させられる。

「こつちだ——」

またもや先代の動きを察知し、視線を向けた永琳は、その瞬間初めて動揺をあらわにした。

「永琳ッ!!」

「何……!?!」

氷のように冷静だった心が、驚愕によって乱される。

裂帛の気合いを発しながら、奇妙な構えを取った先代を中心に、凄まじい力が渦巻き始めていた。

両手を腰の横で向き合わせ、その間に霊力でも魔力でもない、不可思議な力を集中させている。

その力は眩い光の球となつて、先代の手の中に集まり続けていた。得体の知れない技だった。しかし、永琳にとつて最も不可解だったのは、その一点に収束していく『力』の大きさだった。

量も質も、人間が持つ限界を軽く超えている。

しかも更に増大し、その上昇率は異常としか言いようのないものだった。

永琳は先代に対して、かつてない驚愕と戦慄を感じていた。

先代の両手の中で脈動するように瞬く光球は、もはや台風のように荒れ狂い、周囲にまで影響を及ぼしている。

夜の闇を手のひらから溢れ出した閃光が引き裂き、竹林を荒々しい風が薙ぎ払う。

生み出した自分自身さえ吹き飛ばされそうな暴走染みた力を、両足の不自由な先代は慧音に支えられることよって押さえ込んでいた。その圧倒的な力の塊が、今まさに放たれようとしている。

先代の視線に射抜かれた永琳は、不死の身でありながら感じていた——動くことすら出来ない恐怖を。

「——怪物め」

「波あああああああ——っ!!」

両手を前に突き出し、先代は極限にまで高められた力を閃光と共に解き放った。

◇

例えば、持っているダイナマイトに誤って火をつけてしまったとして、どうする？

——どうする？

まあ、まずビビると思う。パニックになると思う。

今、まさにそんな心境だった。

……ど、どうしよう？

登場した永琳が、案の定輝夜を援護する為に弓を構えているのを見た私は、慌ててそれを止めようと行動を起こしていた。

とはいっても、空も飛べず、今はまともに立つことすら出来ない私
が持つ遠距離攻撃の手段など限られている。

君に決めた！ と、ばかりに袖から陰陽玉を取り出し、黄金の回転
によって強化してから投げ放った。

回転の種類は拡散型だ。

永琳も同じ不死身であることを考えると、鈴仙にも使った無力化する
方法が適していると判断したのだ。

まあ、そうでなくても貴重な東方キャラであり、何より一度は診察
で世話になった永琳を殺そうとか傷つけようとか思えるはずもない。

どうか大人しくしてて頂戴、と願いながら陰陽玉を投げつける。

咄嗟に放たれた矢を弾き飛ばして、狙い通りその一撃は永琳を捉え
た。

——問題は、その後である。

全身の自由を奪われたはずの永琳が、落下する途中で光を放ち、そ
れが収まった時には当たり前のように元の場所に浮かんでいたのだ。

何が起こったのか分からず、呆然とする私と慧音。

いや、あの様子からして多分リザレクションをしたんだと思うが
……どうやって!? まさかあの非殺傷攻撃で絶命したわけではある
まい。

じゃあ、自分で命を絶った？ 指一本動かせない状態だったのに？
自力で心臓止めたとも言っくんかい！ 何処のスタンド使いだ!!

これまで出会ったどんな強敵とも違う、得体の知れない強さを感じ取って、私は戦慄した。

「なんというっ……あれが、蓬莱人の力だというのか!」

力——まさにそうなのかもしれない。蓬莱人にとって『命』とはただの『能力』でしかないのか。

こえー。なんかこえー。

単純な強さ云々ではなく、私は人として永琳から恐怖を感じていた。

妖怪とはまた違う、人間との明確な相違を彼女から感じる。同じ蓬莱人なのに、妹紅とはまた別の存在みたいだ。

とにかく、非殺傷なんて甘い攻撃は通じないと分かった。

慌てて陰陽玉に戻るよう命じたが、私の手に戻るより早く、永琳の手に捕らえられてしまう。

小さな箱状の結界に包み込まれた陰陽玉は、そのまま握り潰されて永琳の手の中で砕け散ってしまった。

——お……陰陽玉ああー!?!

殉職した相棒を見て、爆発するクリリンを見た悟空のように内心で悲鳴を上げる私。

折角、霖ちゃんに作ってもらったのに……っというか、二回しか使ってぬえー!

攻撃手段を失くした私からは既に視線を離し、永琳は再び妹紅に狙いを定めている。

シヨックを受けている場合じゃない。なんとかしないと……っ!

しかし、陰陽玉を失くした今、空中の永琳まで届くレンジを持つ技はかなり限られる。

衝撃波を飛ばすタイプの百式観音は、本来ならばあそこまで届く。ただ、足を負傷して以来一部の技が影響を受けて思うように使えなくなっているのだ。

格闘技では意外と重要な体重移動などが出来ない為か、あるいは四肢を巡る気の流れが狂った為か——いずれにせよ、百式観音の威力と射程は著しく低下している。とても永琳までは届かない。

他の手段としては、冥界で会得した霊光弾もといシヨットガン。だが、これも拡散することを考えれば遠距離攻撃としてはイマイチだ。

ならば、残された手段はただ一つ——！

「慧音、手を貸してくれ」

「は、はい。しかし、一体何を……？」

慧音に支えられて立ち上がった私は、両手を腰だめに構えて力を集中させた。

久しぶりにやるぜ、博麗波！

実はこの技を使う時、いつも心の中で『かーめーはーめー』と呟いているのは内緒だ。気のせいかな、それやった方が威力が上がるのよね。

もちろん、これを直撃させて永琳を葬ろうなんて考えてはいない。

しかし、永琳が強敵であることは十分に理解している。

生半可な攻撃では通用しない。これが防がれるか、あるいは回避されれば、次のチャンスはもう無いだろう。

嘘か真か『原作最強キャラ』の評価は伊達ではないのだ。

ただの博麗波では不安が残る。

私は更に威力を高める為と、やってる本人としては一番楽しいんだけど客観的に見ると弱点でしかないこの溜め時間を短縮する為に、収束した力に黄金の回転を加えた。

回転の対象が物体ではないが、こういったエネルギーにも黄金の回転が作用することは、初めて使った勇儀戦の時に実証済みだ。

不完全でいい、博麗波のエネルギーを増幅する！

——そしたら、なんか予想以上のパワーアップが起こった件について。

「ぐ……おおおおっ！」

「せ、先代！ 大丈夫なのですか!？」

すまん、慧音——全っ然、大丈夫じゃない！

空気を送り込みすぎた風船のように、両手の中で膨らむ力の塊を私は必死の思いで抑えていた。

はつきり言うと、暴走寸前である。

「いやいや、確かに増幅させようと思ったけど、これは増えすぎだろう！
やばいよ、これ不完全な回転じゃないよ。よりによって、このタイミングで完璧な黄金長方形の軌跡で回転が成功しちゃってるよ。」

特に意識したわけではないが、黄金長方形を妹紅の体から見つけて回転させたら、それがドンピシャで当て嵌まったらしい。

この回転に成功したのは、これまでで二度。

一度目は不利な状態で放った一撃を鬼の肉体を貫くまでに高め、二度目は巨大な妖怪桜の力を押さえ込んで封印してみせた。

いずれも、私が本調子ではない状態でも絶大な効果を発揮している。

そして、三度目の今はただでさえ馬鹿でかいエネルギーを放出する技に対して、更なる増幅を狙って使ったのだ。

その結果、得られる効果は推して知るべし、である。

手の中に台風でも出来たんじゃねーのってくらい、高められた力は荒れ狂っている。

それなのに、まだ増幅は止まらない。

風船の例えは正解である。このままでは確実に破裂する！

押さえ込むことが限界であることを悟った私は、早々にコイツを解放することに決めた。

狙いは永琳——じゃねえ！　こんな物騒なモンぶつけられるか、さすがに消し飛ぶわ！

他の標的は……ええいつ、アレでいいや！

新たな狙いを定めた私は、予想され得る反動の凄まじさに備えて、すぐ傍の慧音に呼び掛けた。

「慧音、私を支えていてくれ！」

「——っ、は……はい！　私が貴女を支えます！　任せてください！」
私の頼みを受けて、慧音が抱き締めるように腕に力を込めた。

……何故か、顔を赤くして若干興奮気味である。いや、踏ん張る為に力んでいるんだから当然か。

あまり関係のないことを考えている余裕は無い。

もう限界だ。力を解き放つ。

狙いは——あの永琳が作り出した偽物の月だ！

いくぞっ！ はーくーれーいー……。

「波あああああああー……っ!!」

野沢雅子の脳内ボイスで叫びながら、私は増大した力を両手から一気に放出する。

やはり予想を超える規模の光の奔流が溢れ出し、夜の闇を引き裂きながら、偽りの月に向けて一直線に飛んでいった。

そして、その結果は——！

……。

……………。

……………うん、まあその、あれだ。

こういう場合、本来驚くべきは敵である。

永琳あたりが『大した奴だ……』とか『やはり天才』とか戦慄と共に称賛の言葉を呟く流れだろう。

もちろん、永琳は私の博麗波が起こした状況に驚いている。

しかし、私には自信があった。

多分、やった張本人である私自身が誰よりも一番驚いている、と。

——今ので、本当に月が消し飛んでいた。

なにこれこわい。



「……何なのですか、あれは？」

「さあて、なんでしょうねえ？」

妖夢と幽々子は同じ物を見上げていた。

停滞した夜の空を縦に割り、月まで一直線に届く光の柱である。

地上は竹林の何処かから放たれた力の奔流は、束の間周囲を照らし出し、徐々に消えていった。

後に残ったものは、何の変哲も無い『普段通りの夜空』である。

「偽りの月が……消えた」

その恐るべき破壊力は、この異変の元凶である偽物の月を完全に消し飛ばしていた。

「あの月は作られた物——大きさも質量も持たない幻想の存在よ。

しかし、それを破壊したあの光は、ある意味宇宙まで届く光線よりも恐ろしいことを成し遂げたわね。何の術式も法則も無く、ただ強引に『掻き消した』」

内心の戦慄を分かりやすく表情に出す妖夢とは違い、幽々子は微笑を浮かべたままである。

しかし、自身の見た光景の意味を妖夢よりも正確に理解しているからこそ、隠した内心の動揺は彼女以上のものだった。

一体、何者があんなことをやってのけたのか——？

「まっ、心当たりというほどじゃないけど、自然と一人思い浮かんじやうのよねえ……」

「何のことですか？」

妖夢の疑問を、曖昧に笑って誤魔化する。

「行ってみれば分かるわ。あの光の根元へ向かいましょう。疑問とその答え——きつと今回の異変の全てがそこに集まっているはずよ」

「分かりました。お供します」

納得のいつていない妖夢を伴って、幽々子はその場に飛び立った。

——あとに残されたものは、地面に転がったチルノとてゐの二人だけだった。

ブスブスと全身から煙を上げ、二人は揃って仰向けで夜空を見上げていた。

弾幕ごっここの敗者の姿である。

「……行っちゃったみたいね」

「か……紙一重ってヤツだったわ」

「おー、難しい言葉知ってんね。使い方も間違ってる。でも、どー見ても紙一重の決着じゃねーわ。完全敗北でしょ、コレ」

てゐは鼻から抜けるような笑い声を洩らした。

冥界の姫と剣士を相手取った弾幕ごっこは、妖怪兔と妖精の即席タッグの敗北によって決着がついていた。

別に意外でも何でもない。当然の結果である。

この結果を予想していなかったのは、唯一チルノだけであった。とはいえ、てゐにとつては本来の目的である時間稼ぎが十分に成功しているのです、勝負としては勝ったも同然だった。

妹紅達がいる場所で何が起こったのかまでは分からないが、きっと何か一つの決着がついたのだろう。

あの光を見て、てゐは根拠も無くそう感じていた。

永琳の作り出した幻想の月は消え、再び姿を現す様子もない。

竹林は本来の静けさを取り戻している。

長年この場所に住んでいるからこそ分かる、いつも通りの夜の気配が戻ってきていることをてゐは感覚で理解していた。

「上手いことやってくれたみたいね、先代と慧音は……」

「く……っ、こんな所で寝ている場合じゃないわ！」

疲労と負傷をおして、チルノが立ち上がった。

「あの『よーむ』って奴、あたいのことを『妖精如き』とか言いやがって！ 許せないわ、リベンジマツチよ！」

「タフだねえ、あんた」

最近随分口が回るようになったチルノの負けん気に感心しながら、てゐは脱力したように寝転がったまま見上げていた。

妖怪とはいえ、弾幕は当たれば痛いし、かわし続けても疲れる。

妖夢の刀を使った弾幕は命の危険を感じる程の殺傷力が秘められており、幽々子の弾幕は生命力を吸い取る性質を持っていた。

自分の仕事を終えた達成感も手伝い、てゐはどうにも起き上がる気にはなれなかった。

その目の前に、小さな手が差し出される。

「いくわよ、てゐー！」

「……………はいはい、分かったよ。相棒」

自分とは違って全く衰えた様子のない、元気に溢れるチルノの笑顔を見つめ、てゐは諦めたように苦笑した。

差し出された手を握り、体を起こして、服についた埃を払う。

「まあ、具体的に何が起こったのか見届ける義務もあるかねえ」

おそらく特に考え無しであろうチルノに代わって理由をつけながら、てゐるは幽々子達と同じ方向へ向かおうとした。

そこで、ふと気付いてしまった。

「……ああ、しまった」

「どうしたの？」

片手で顔を覆い、小さく舌打ちをする。

疑問顔のチルノから眼を逸らして、鼻の頭を軽く掻きながらてゐるは律儀に答えていた。

「あなたの差し出した手。何の疑問も持たずに、自然に握ってたわ」

「その何が駄目なのよ？」

「駄目っていうかさ……ほら、あたしや捻くれてるからね」

「そんなの知ってるわよ」

「だからさ、『不覚だなあ』ってね」

「……変なの」

何故か落ち込んだ様子のでゐを見て、チルノは理解出来ないといった表情を浮かべた。



「師匠——!?!」

竹林の一角から光線が放たれるのを見た鈴仙は、思わずそう叫んでいた。

あらゆる方向へ視線を逸らした姿は隙だらけだったが、あえて咲夜はそのチャンスを見送った。

未だ弾幕ごっこの決着はついていない。一進一退の攻防だったのだ。

しかし、もう勝ちにこだわる必要はないだろう。

この状況——いや、もっと大局的な異変そのものの状況が変化したのだと、咲夜は冷静に察していた。

『師匠』というのは、アナタよりも今回の異変に深く関わる者、あるいは首謀者そのものかしらね？」

聞き取った単語を使って探りを入れる咲夜に対して、鈴仙は鋭く睨み返すことで答えた。

先程までの勝負の中で何度も交わした、敵意に満ちた瞳である。ただ、今はそこに焦りが加わっていた。

どうやら鈴仙は何らかの能力か手段で咲夜よりも詳しく状況の変化を知り、そしてその内容は彼女にとって不利なものであったらしい。

それはつまり、咲夜にとって都合のいい流れであるはずだった。

「……勝負は預けるわ」

「敵を前にして逃げを打つほど悪い状況になったようね？」

「調子に乗らないことね。その『時に干渉する能力』は、穢れた人間如きが持つていいようなものではない。お前は殺す。いずれ殺す」

咲夜の挑発に殺気で応えながらも、判断は冷静沈着に下す。

見覚えのある波長の乱れによって状況が掴めなくなった永琳と輝夜の元へ向かうことを優先した。

背後からの不意打ちを警戒しつつ、鈴仙は現場へ向かうべく背を向けた。

「待ちなさい」

「邪魔をするな！」

思わず声を掛けた咲夜に、振り返り様ナイフを投げ放つ。

弾幕ごっこに用いるものではない、無駄なく効率的な殺傷を目的とした攻撃だ。

咄嗟に咲夜は飛来するナイフを掴み取った。

時を止めるまでもない。投げるのも投げられるのも、ナイフの扱いに関しては手馴れたものである。

「……ナイフ、返して欲しかっただけなんだけど」

咲夜のナイフを肩に刺したまま、一瞬の内に姿を消してしまった鈴仙の姿を探して視線を左右に走らせる。

おそらくこの場を離れたのだろう。

もう見つけることは出来ない事を悟り、咲夜は小さくため息を吐いた。

握ったままのナイフを顔の前まで持ち上げる。

「ふむ」

咲夜が普段使っているナイフとはまた違うタイプの物だった。

本来の用途は投擲を目的としていない、いわゆる『コンバットナイフ』と呼ばれる代物だ。

銀製で装飾も施されている咲夜愛用の物とは異なった、無骨な武器だった。

「こういうのも悪くないわね。いい趣味してるわ」

対峙して以来、鈴仙に感じていた奇妙な共感がまた一つ増えた。

親しみなど欠片もないが、何故か再会を望む気持ちを胸に残しながら、咲夜もまた周囲へと意識を切り替えた。

異変の夜を切り裂いたあの閃光は、この竹林で争うほとんどの者達の関心を惹いたらしい。

パチュリーとアリスも、同じように弾幕ごっこを中止している。

霊夢は紫と合流していた。

そして、魔理沙は――。



「あれは、母さんね」

「そうね、間違いないわ」

示し合わせたように、霊夢と紫の意見は一致していた。

天を貫く一条の光線は、二人にとって見慣れたものであるからだ。

一度眼に焼き付けたものを忘れるはずがない――子として目指し、友として背を預けた、偉大なあの人の力なのだから。

「最近こそ何かやっているとと思ったら、まさかこんな所にいるなんてね」

紫は額を軽く抑えながらため息を吐いた。

数十年来の付き合いだ、あの人間はいつだって悩みの種であり、不安の種であり、心配の種でもあるのだ。

霊夢の方は、呆れこそしていないが、光の消えた夜空を見上げなが

ら考え込んでいた。

「……母さんは、今夜の異変が起こることを知っていた？」

「まさか——とは、言い切れないのよねえ。彼女の場合。」

いずれにせよ、予想もしない方法で異変の解決は成ってしまった。とにかく先代の下へ向かわなくては。今回の異変の首謀者も、ひよつとしたらそこにいるのかもしれないわ」

「母さんのことだから、もう殴り倒してるんじゃない？」

「……否定する材料を頂戴」

「さすがよね。赤い霧の時もそうだったけど、また母さんに先を越されちゃったわ。あたしももつと頑張らないと」

素の性格からはとても想像出来ないような、向上心に溢れる霊夢の発言を聞いて、紫は眼を丸くした。

この小生意気なグータラ巫女に、こんなひたむきな一面があったのか、と。一瞬感動しそうになったが、しかしすぐに間違いを悟る。

「……先代と貴女は違うんだから、目指す場所を間違っちゃ駄目よ」

もはや博麗の巫女の秘術がどうかなど関係ない。力づくがここに極まった今回の異変の解決方法を顧みて、紫は内心で戦々恐々としながら言った。

偽りの月を消し飛ばした先代巫女の力の全貌は、長年の付き合いである紫自身にも計り知れないのだ。

その忠告に対して、霊夢は不満そうに頬を膨らました。

「なんであんたにまで母さんと同じようなことを言われないといけないのよ……」

まあ、いいわ。とにかく母さんの所へ行きましょう。多分、アレを見た奴らが同じように集まるはずよ」

「そうね。先代から事情を聞き、今宵の異変を完全な形で終わらせましょう」

どちらが相手を促すわけでもなく、霊夢と紫は向かうべき場所へ共に飛翔した。

二人の姿が遠ざかっていく。

当たり前のように去っていく二人のあとに残されたものは、決着し

た弾幕ごつこと地面に這い蹲るその敗者だけだった。
うつ伏せに倒れたまま、魔理沙は震える手で地面の草を握り締め
た。

「ま……てよ……っ」

精も根も尽き果てたボロボロの体に鞭打ち、必死の思いで顔を上げ
る。

一度も振り返ることなく去っていく霊夢の姿が見えた。

敗者を顧みない、当たり前前の勝者の背中があった。

「どうして……どうしてなんだよっ！」

悔しさに任せて、握っていた草を引き抜き、地面に叩きつける。

何の意味もない。虚しさだけが残った。

魔理沙の視界が、溢れる涙で滲んだ。

「手が届くなんて、思っちゃいなかったんだ。それでも……っ！」

——わたしなりに、体を張ったんだ。危険を冒して、賭けに出た。

そして賭けに勝った。

——そのはずなのに！

「わたしには、お前の影さえ踏めないっていうのか……霊夢！」

——こちらに意識を向ける価値さえ、視線を向ける意味さえ、無い
というのか。

魔理沙はただ、自身の全てを賭けた結果得た敗北感だけを噛み締め
ていた。

霊夢への恨み辛みが生まれたわけではない。

しかし同時に、彼女が異変の解決を優先したこと、その中心に現れ
た母親に関心が向いていたことなどの、行動の理由や理屈で自身を納
得させることも出来なかった。

——霊夢は圧倒的だった。

——彼女は、負け犬の自分を置いて行ってしまった。

ただ、それだけが魔理沙にとっての真実だった。

「お前との距離が赤の他人と同じだなんて、わたしは嫌なのに……っ
！」

遠く離れていく霊夢の背中を、魔理沙はただ泣きながら眺めること

しか出来なかった。



先代巫女と八意永琳の攻防。

その結果放たれた月をも貫く黄金の閃光は、奇しくも迷いの竹林に集っていた多くの人妖の視線を釘付けにした。

ただ二人——輝夜と妹紅だけは、そんな周囲の喧騒に全く関心を抱かず、心乱されず、目の前の相手を打倒することだけに集中していた。自分があらぬ方向から矢で狙われていたことなど、気付きもせず妹紅は迎え撃つ。

自らの従者が危うく破壊の光に飲み込まれる寸前であったことなど、気にもせず輝夜は駆け出す。

「——ッ！」

「——ッ！」

爆発するような轟音と共に先代の博麗波が放たれた瞬間、光に照らされた輝夜と妹紅の影が交差していた。

人外の腕力を振り絞って繰り出された輝夜の拳が、紙一重でかわした妹紅のこめかみと髪の一部を削り取る。

耳元で唸る豪腕。飛び散る鮮血。

妹紅は恐れもせずに更に踏み込んだ。

一呼吸遅れて繰り出された妹紅の拳は、筋肉の強張りもなく、握りは緩い。

だが、その手の中には打撃の真理が握られていた。

輝夜の一撃から被せるように腕を交差させ、弧を描いて襲い掛かる。

極限の脱力から一転して生み出される一瞬の『力み』が、凄まじい破壊力となって輝夜の頭部に炸裂した。

細く束ねられた衝撃は、まさに板を穿つが如く対象を貫く。

首から上を吹き飛ばされるような衝撃に襲われ、輝夜は成す術もなく地面を転がった。

一転、二転し、やがて大の字に倒れて動かなくなった。
束の間、夜の闇を照らしていた光も消えてなくなる。

輝夜は立ち上がらず、妹紅はその場に佇み、迷いの竹林を終わりを表すような静寂が満ちていた。

「……どうした、輝夜。立ち上がらないのか？」

一向に動き出す気配を見せない輝夜に、妹紅は静かに問い掛けた。
凄まじい手応えだった。妹紅の拳には、まだ輝夜を殴り抜いた感触が残っている。

しかし、どれ程強力な一撃であろうと、蓬莱人である輝夜には決定打とはなり得ない。

いくらでも復活出来るのだ。

「この勝負に終わりなんてないんだろう？」

「……分かつてるくせに、何でそこまでやる気満々のよ」

虚空を見上げたまま、輝夜は呆れたように呟いた。

打撲の痕が腫れ上がって思うように動かせない表情に苦戦しながらも、妹紅はなんとか笑みを形作ってみせた。

「別に、腹を括っただけさ。あんたが負けを認めるまで、何度でも拳骨を叩き込んでやる」

——例え、永遠であっても。

肉体の限界を無視して、妹紅は断言した。

その瞳に迷いは、もはや無い。

理屈も何もなく、ただ言ったことを実行し、そして完遂することを信じきっていた。

「……その『答え』を、何年証明し続けられると思う？」

妹紅の無謀な考えに対して、否定も反発もせず、輝夜はただ静かに問い掛けた。

「誰かが傍に居れば孤独は感じず、残された言葉は支えとなり、思い出は生きる希望となるでしょうよ。」

——でも、そうやって手を変え品を変え、なんとか心の均衡を保ちながら生き永らえて……どれくらい耐えられると思う？ 千年？

万年？ ……永遠は、無理でしょう」

そう問い掛ける輝夜の声には、これまでと違って挑発や否定の意味は含まれず、ただ老い果てたような疲労の色が滲んでいた。

その言葉は真理である。

人の心は、時と共に磨耗する。

歳を経て、心は老いていく。

決意は衰え、意志は弱くなっていく。

魂に永遠の時間が残されているのならば、それは決して避けられない心の寿命であり、限界なのだった。

「この穢れた地上では、『永遠』に耐えられるものなど存在しないのよ」

「……そうね」

妹紅は素直に頷いた。

その意外な反応に輝夜は思わず体を起こし、そして見た。

「とりあえず、てるより年上になるくらいまでは頑張れると思うわ」

妹紅はちよつとだけ困ったように眉を顰めて、それでも笑っていた。

しばらくの間、輝夜は呆然とその顔を眺め、やがて何もかもが馬鹿馬鹿しくなって再び地面に倒れ込んだ。

氣負いから来る全身の緊張が抜けていく。

リラックスというよりも、何かを諦めて脱力していくような感覚だった。

「……負けよ」

「え？」

ボソツと呟いた輝夜の言葉を聞いて、妹紅は耳を疑った。

「私の負けよ。もう、好きにすればいいわ。あー、もう……知らない」

最後は拗ねたようにそう言い捨てて、輝夜は思考を放棄するように眼を瞑った。

視界が閉じる前に見えたのは、優しい光で夜の闇を照らす、本物の丸い月だった。

輝夜は眠ることにした。

妹紅との勝負で受けた傷が痛んでとても眠れる状態ではなかったが、それを消そうとは思わなかった。

内心で悪態を吐きながら、痛みを堪えて頑なに眼を瞑り続けた。まるで意地になっっているように見える輝夜の様子をしばらく眺めていた妹紅は、空中から降りてくる永琳の姿に気付いた。

横たわる輝夜のすぐ傍に降り立つ。

永琳と妹紅が交わしたのは視線のみだった。

言葉は無く、永琳はすぐに輝夜の容態を診ることに意識を移してしまふ。

これまでも、そしてこれからも永遠に輝夜の傍に寄り添い続ける従者の姿――。

一人取り残される寂しさを感じていた妹紅は、不意に何か気付いたかのように振り返った。

「みんな……」

見知った顔が四人分、近づいてくるのが見えた。

一方が肩を貸して寄り添い支え、あるいは二つの肩を並べて空を飛び、四人が妹紅の下へ集まってくる。

今、一番会いたいと思っていた、大切な仲間達だった。

妹紅は彼女達を笑顔で迎えた。

――夜が明ける。

多くの者達の想い、疑問、答え、新たな問題――全てを棚上げにして、何も関わることなく時間は過ぎ、昨日は明日へと移り、月と太陽は流転する。

ここに、永い夜の異変は終結したのだった。

其の二十五「新難題」

妹紅は何の切欠も無く、眼を覚ました。

いつも嗅ぐ朝食の美味しそうな匂いや、外で先代や慧音が調理をする物音、あるいは人の気配——それらの何一つも感じることなく、ただ自然と眼を覚ました。

開いた瞼の先には、薄暗い世界があった。

朝日は差していない。しかし、夜の闇というほど深い暗がりではない。

現実感の無い世界。

——これは、夢なのか？

妹紅は考えた。

夢なのだろう。そう、納得した。

何故ならば、起き上がったって周囲を見回した妹紅の視界に入ってきたものは、眠りに就く前に見た光景とは似ても似つかないものだったからだ。

そこは、間違いなく妹紅の家だった。

ただ、周囲の全てが朽ちかけていた。

一部が腐り落ちて穴だらけになった壁や天井。

畳は荒れ果て、玄関近くに置かれた水瓶は割れている。そこら中が埃まみれだ。

妹紅が上半身を起こした拍子に、掛け布団がボロボロと崩れた。

その布団の切れ端を摘み上げてみると、手の中で脆くも千切れてしまふ。

十年や二十年程度でなるような風化具合ではない。

それでいて、妹紅自身の体や服装は真新しいままなのだ。

家の外が朝なのか夜のままなのか、それさえ分からない。物音はもちろん、動くものの気配すら感じなかった。

まるで、自分以外に誰もいなくなってしまうたかのような世界だ。たった一晩で。

酷く現実感がない。

ならば、これは夢だ。

夢の中で、自分は眼が覚めたのだ。

妹紅は湧き上がる不安と孤独感の傍らで、理性的な判断を下した。

——でも、この『夢』が何の根拠も無い空想であるわけではない。

夢であると思っていた世界に小さな違和感を感じ始め、妹紅は自分の手に視線を落とした。

乾いたように朽ち果てた周囲と、瑞々しいまま生きる自分の肉体。

滅びゆく世界に取り残されるような感覚を感じた。

これは、本当に夢のまままで終わる光景なのか。

永遠に生きる蓬莱人が、いずれ時の果てで見ることになる光景なのではないか——。

妹紅は、今一度周囲を見回してみた。

眠りに就く前の記憶にある見慣れた自分の家は、内装をそのまま百年以上の時間が磨り潰してしまったかのように朽ちている。

——これは、本当に夢なのか？

——あるいは、ただ記憶が抜け落ちているだけで、本当は既に何百年もの時が経っていて、我に返っただけではないのか？

不意に浮かんだそんな考えさえ、頭の中で現実味を帯びてきていた。

ただ一つ、確かなことは——これが『夢』であったとしても、いずれ『現実』となる光景だということだ。

妹紅はしばらくの間、ただぼうつと玄関の戸を眺めていた。

ボロボロの戸は、それでもしつかりと閉ざされ、隙間から月明かりや朝日が差すこともない。

あれを開ければ、曖昧な全てがハッキリするだろう。

「……うん。そうか」

妹紅は、おもむろに頷いた。

何かに納得していた。

それがこの世界に関することや、自分の未来に関することや、あるいは他のことや。

分からなかったが、少なくとも不安は無かった。

妹紅は立ち上がった。

ボロボロの布団が足元で跡形も無く崩れて消え去ったことには、もう気を留めなかった。

軽く伸びをして、それから毎朝の習慣となった軽い体操をする。

屈伸などで手足の関節を解した。

両足を左右に開いて、胸を地面につける股割りもすつかり出来るようになった。

教えられたことは、ちゃんと体が覚えているのだ。

妹紅は嬉しくなつて、小さく笑った。

体操を終えると、いつものように外へ出ることにした。

閉ざされた戸へ歩み寄る。

——この戸を開いた先に、進むべき道がある。

この曖昧な世界が夢だというのならば、この先には本当の目覚めと現実があるだろう。

もし、これが現実だというのならば、親しい人達が誰もいなくなつた世界が広がっているだろう。

二つの違いは『いずれ訪れる世界』であるか『既に目の前に在る世界』であるかだけだ。

その事実を、妹紅はもう恐れなかった。

妹紅は笑つて戸を開いた。

◇

私が見上げた先では魔理沙とチルノが弾幕ごっこを繰り広げていた。

ここ、永遠亭では異変の解決を経て、多くの人妖が集まっている。

——何故か？ つて私に聞くな。もう、流れとしか言えません。

私自身もようやく全ての事態を把握出来た……かな？ といった感じなのである。

今夜……つていうか、もう昨夜か。ちゃんと夜が終わつて日が昇つたし。とにかく、いろいろなことが迷いの竹林で起こつたのだ。

妹紅と輝夜の勝負に集中していて忘れていたが、迷いの竹林は後に『永夜異変』と呼ばれる異変の主舞台であり、異変解決に乗り出した霊夢他数名の人妖の戦いの真っ只中だったのだ。

四つの自機チームが総出であったった異変解決だが、連携の不備を永琳に突かれ、互いに潰し合う状況だったらしい。

それでも紫の想定ではある程度戦況は進展していたらしいが、そのタイミングで起こったのが、私の『博麗波による月落とし』である。それによって、異変のそもそもの原因である偽りの月は消滅。

皆が真面目にシューティングゲームやっている傍らでバグコードが飛んできたような強制エンディングが始まったわけである。

……なんや、このクソゲー！

いや、やらかしちやったのは私なんだけどね。

こうして異変解決。めでたしめでたし、とは――。

「母さん、聞いてるの？　ちゃんと反省してよ」

いかんわなあ……。

「すまない、霊夢」

「何を謝ってるのか、言ってみて」

「お前の博麗の巫女としての仕事を邪魔してしまった」

「違う。重要なのはそこじゃない」

私は今、永遠亭の中庭に面する縁側に腰を降ろしながら、すぐ隣の霊夢のお説教を聞いていた。

反対側の隣には慧音が座っている。

こちらにも、私を夜中に連れ出したとして霊夢の説教の相手に含まれていた。

しかし、娘に心配をさせてしまったとしおらしくなる――それが顔面に表れているかどうかはともかく――私とは違って、慧音はなんか穏やかに微笑んですらいた。

うーむ、慧音ってば竹林での一件以来雰囲気変わったよね。

具体的には言い表せないが、私への対応というか視線というか……見守られているような、包容力を感じる。

「慧音、何笑ってるのよ？」

「いや、すまない。私も反省している。」

しかし、後悔はしていない。私達の判断と行動は、必要なものだったのだ。先代も同じ気持ちだろう」

「……なんで、あんたが母さんの気持ちを代弁すんのよ」

まるで論すような慧音の反論に対して、霊夢は拗ねるように小さく吐き捨てるだけだった。

あらら？ 意外とあっさり引き下がるのね。

納得はしていないようだが、霊夢が私以外の相手にここまで大人しいのは初めてかもしれない。

誰に対しても遠慮を知らず、平等にズケズケと物を言うので、非を認めながらも反論する慧音にもっと何か言うと思ったのだが……。

「まあ、いいわ。結果論だけど、全部上手く納まったわけだし」

霊夢は自分を納得させるように言った。

「母さん」

「なんだ？」

「心配したから」

「……すまない」

私は霊夢の本当に言いたいことをようやく理解して、今度こそ心の底から謝罪した。

すみません。反省します。でも、霊夢に心配されて嬉しい。

駄目な馬鹿親である。

「ところで、異変はもう解決したはずだろう」

話題を切り替え、私は霊夢に確認するように空を見上げた。

夜の闇が晴れ、世界が急速に正常な時間を取り戻して、今や空には太陽が昇っている。

幸いなことに、今日は雲ひとつ無い快晴だ。

いい一日になりそうである。

しかし、そんな永遠亭の空では魔理沙とチルノの弾幕が激しく交差し合っていた。

「何故、魔理沙はチルノと弾幕ごっこをしているんだ？」

私は純粹な疑問をぶつけた。

言葉の通り、この弾幕ごっこが始まったのは、魔理沙がチルノに勝負を挑んだのが切欠である。

チルノ自身が大きくして疑問も持たずに勢いでその勝負を受けたことから、ついつい口を挟めなかったが、異変が終わった後で弾幕ごっこをする理由が分からなかった。

まあ、弾幕ごっこは本来は遊びのようなものである。

暇つぶしとか練習の為と言われたら、それまでかもしれない。

実際、今の状況は誰もが手持ち無沙汰でいる。

広い永遠亭の中庭で、多くの人間や妖怪が自然とグループを作って、各々好きに過ごしていた。いや、暇を潰していた。

病弱なパチュリーと、それを世話する咲夜は少し離れた縁側に座っている。

幽々子は妖夢を従えて、白玉楼以外の見慣れない庭を見て楽しんでいるようだ。

魔理沙とチルノの弾幕ごっこを眺めているのは、アリスとてみである。

何気に初めて見たアリスだ。しかし、初対面なのは私以外の誰もが同じらしく、てみもアリスも一人で空を見上げており、互いを意識しているようではない。

そして、そんな全体の様子をまるで見張るように鈴仙が眺めている。

雑多で奇妙な空間である。

——何故、この場に誰もが留まっているのか？

その理由は、唯一この場を離れて永琳と話しに行ってしまった紫にあった。

幻想郷の管理者として、何やら重要な話し合いをするらしい。

その話し合いの結論がどうなるのか——博麗の巫女として霊夢が残ることは当然で、私も気になるから残り、釣られて慧音、チルノ、てみ……と、なんだかどんどん引き摺られるように全員がこの場に残ったのである。

あと、重傷だった妹紅が永遠亭に運び込まれたままっていうのも、

私を含めた仲間全員が気になっている。

最初に言ったとおり、この状況は『流れ』としか言いようが無かった。

そんな状況の中で、いつの間にか魔理沙はチルノと弾幕ごっこを始めたのだ。

「……あたしにも、魔理沙の考えは分からないわ」

私の口にした疑問に、霊夢は大分時間を置いてから答えた。

「ねえ、母さん。あたし、今回の異変で魔理沙と戦ったのよ」

「ああ、そう聞いている」

「あたしには魔理沙が勝負を仕掛けてきた理由が分からないの。母さんには分かる？」

「ふむ……」

理由も何も、そこに至る過程や状況を聞く限り、私には『青春だなあ』としか感じようがなかった。

魔理沙が霊夢に敵意を持っているわけなんて無いし、二人が不仲であるなんて想像も出来ない。

そして、友情とは穏やかなだけでなく、時としてぶつかり合うこともある激しい感情のことを言うのだ。

根拠は少年漫画。

私は本気で魔理沙の考えが分からないらしい霊夢に、なるべく分かりやすく伝えようと考えを巡らせ、やがて一つの名言が頭に浮かんだ。

「——友情とは成長の遅い植物である」

「母さん？」

「それが友情という名の花を咲かすまでは、幾度かの試練、困難の打撃を受けて堪えねばならない」

ぶつかり合う友情を描いた漫画を締める名言である。

真顔で言うには少し恥ずかしい言葉だが……いやっ！ 恥ずかしがっちゃいけない！ これは素晴らしい言葉なんだ！

ほら、霊夢なんて凄い真面目な顔して聞いているし。

尊敬していいのよ？ 私じゃなくて、ゆでたまご先生を。

「友情という名の、花……」

「霊夢。お前が魔理沙を友達だと思っているのなら、お前自身が考えて答えを出さなければいけない」

「……難しいわ」

「それでも、私は答えを教えられないし、教えたところで意味の無い答えだ」

私は霊夢の頭を撫でながら、優しく諭した。

「……うん、分かった。頑張ってみるわ」

霊夢は躊躇いながらも、素直に頷いてくれた。

きつと悩んでいるのだろう。その立場上、同年代の友達に恵まれな
いこの子が、初めて直面した問題なのかもしれない。

しかし、私は霊夢の悩みを良い機会に恵まれたのだと思っていた。
ぶつかり合うことで生まれる苦悩と、それを乗り越えた先にある更
なる理解。友情。

いずれも私が若い頃には得られなかったものだ。

友人である紫との関係がそれに近いかもしれないが、種族的な違い
もあってか、互いに深く踏み込むことはなく、対立やいがみ合いに
よって友情を育んだことはない。

勇儀とは、最初の激突が激しすぎて、一般的な友情の形成とは違う
気がするしね。

若くて初々しい霊夢と魔理沙の関係が、年長者の視点から見てい
ると、非常に微笑ましく、また力強く感じるのだった。

うーん、本当に青春やね。

ところで、友人の紫で思い出したが、永琳との話し合いはもうそろ
そろ終わる頃だろうか？

あの二人の会話なんて、私みたいな凡人の脳みそでは想像すら出来
ないが、きつとなんかすごいレベルの内容なのだろう。

まあ、紫に任せておけば何も問題ないと分かっているんだけどね。

きつと、上手い具合に話を纏めてくれるでしょう。

大丈夫だ、問題ない。



八雲紫と八意永琳。二人の会談はスムーズに進んだ。

片や『妖怪の賢者』 片や『月の頭脳』と称えられる、それぞれの種族でも代表的な賢者達である。

ただ知識があるというだけではなく、本当の意味での聡明さを持つ二人だった。

一つの言葉を交わせば、それで十の意味を悟る。

今回の異変とその解決に至る経緯、状況、互いの事情を驚くべき早さで互いに理解し終えた時点で、二人の間には相手の実力を評価する奇妙な信頼と、同時に警戒が生まれていた。

「——なるほど。此度の異変は、全て『貴女の姫』を想つての行動だったというわけですね」

「ええ、責任は全て私にあるわ。

彼女には安住の地が必要よ。そして、それにはこの幻想郷が適している。今回の侘びも含めて、代価は全て私が払いましょう」

「やめましょう。貴女ほどの賢者を相手に、そんな低俗な取引は無駄もいいところですよ。

腹の探り合いはキリがない。何より面倒ね。ただ単純に、お互いのこれからのことについて建設的な話し合いを所望いたします」

「そうね。助かるわ」

文字通り人間離れをした美しさと、隠し切れない知性を身に宿した女達である。

口から流れ出る言葉は、音色のように美しく、積み重ねた年月の重みを持って耳に残る。

一般人の第三者がいれば、二人の会話を神々の声のように聞いてただろう。

感情や我欲といったものを一切排した賢者達の会合は、一つの結論の下に静かに纏まろうとしていた。

「詰まるどころ、今回の全ての発端は」

「ええ。つまり——『古明地さとり』ということになりますわね」

そういうことになった。

「八意永琳、貴女ほどの賢者が此度の急ぎすぎた異変を起こしたのは、先代巫女の唐突な来訪と不可解な言動が不安を煽ったから」

「ええ。そして、その言動の元となった情報源が――」

「古明地さとり」

「そういう話だったわね。少なくとも、先代から聞く限りは」

紫は憂鬱そうにため息を吐いた。

「……その反応を見る限り、この妖怪は重く見るべき相手のようね」

「立場だけ見るならば、古明地さとりは私と同格の相手ですわ。私は地上の管理者、彼女は地底の管理者です」

「同格……やはり、軽く見れる相手ではないようね」

「彼女が本当に関わっているのなら、此度の先代の行動もあるいは――」

「誘導、もしくは扇動された可能性もある、と?」

先を読んだ永琳の問い掛けに、紫は答えなかった。

それは同時に否定もしていないことになる。

古明地さとりという妖怪の行動とその真意を、測りかねているのだった。

それを察した永琳もまた事態を深刻に捉え始めていた。

紫以上に、永琳はさとりという妖怪を測る情報を持っていない。

そして、自分が実力者であると認めた八雲紫が、こうまで頭を悩ませている相手なのだ。

得体は知れず、ただ不安と警戒だけが姿も知らぬ古明地さとりに対して募っていった。

「――敵なの?」

永琳は自分が答えを急ぎすぎていることを自覚しながら、それでも問わずにはいられなかった。

「分かりません」

「その妖怪が、仮に私達月人の情報を全て手に入れているとして、更にそれが月にも流れている可能性はあるかしら?」

「地底の妖怪が月と繋がっていることは、まず在り得ないでしょう。」

地上との取り決めもありますし、そう簡単に情報が得られるとは考えられない。しかし、『万が一』の可能性も含めた上で、その問いに答えよというのならば——」

「断言は出来ないということね」

「彼女の能力がどれほどのものなのか、私も正確なところは把握していませんわ」

紫は不安を拭い去ることが出来なかった。

初めてさとりと出会った時の印象のままならば、彼女もここまで警戒心を煽られることなどなかっただろう。

人にも妖怪にも忌み嫌われる能力を持っている。しかし、それは決して脅威ではない——そう思っていた。

地底の厄介な妖怪達の管理の為に彼女を利用しようと考えたし、事実そうしていたはずだった。

しかし、今は違う。

先代巫女とさとりが接触してから、全ての違和感は始まった。

その実力において紫が絶大な信頼を寄せる先代巫女から、さとりは驚くほどの短期間で心を開かれていたのだ。

具体的にどんな経緯を経たのか知り得ない点も、紫が不審に思う理由だった。

最悪の事態として、さとりが何らかの方法で先代を意図的に籠絡してしまったのではないかという予想がいつの間にか浮かんでいた。

そして、それは今回の異変で永琳から聞き出した情報を元にして、少しずつ現実味を帯び始めている。

最悪の事態は、更なる最悪への想像に発展していった。

「彼女の能力は、ひよっとしたら地底にいなながら幻想郷全土に伸びるほど手が長いのかもしれない」

「最悪の考えの一つね。しかし、樂觀すべきではない」

二人の賢者の意見は、そこで一致した。

いずれも絶対を守り抜くべき一線を持つ者同士である。常に最悪に備えなければならぬ。

この瞬間、二人にとって『古明地さとり』という妖怪は、最悪の事

態として警戒すべき対象となつたのだつた。

しばらくの間、二人は黙つて自身の思考に没頭していた。しかし、ここで会話を終わらせるわけにはいかない。

古明地さとりに関する話題が予想以上に大きく、重くなつてしまつたが、それらは単なる可能性と予測の問題でしかないのだ。

話し合うべきことはまだあつた。

少なくとも、紫にとってはこれからが本題だつた。

「——ところで、話は変わりますが」

「情報交換は終わりということね。次は交渉かしら？」

「ふふふ、話が早くて助かりますわ」

紫は愉快そうに笑つた。

分かつていたが、八意永琳は聡い相手である。

もちろん、それは警戒すべき相手であるという意味でもあるが、先程の話題が古明地さとりに関するものだった影響か、不思議と頼もしさも感じてしまつていた。

少なくとも、永琳は自分と悩みを共有する同格の相手である。

紫の笑顔に釣られるように苦笑しながら、永琳は話を先読みして続けた。

「今回、私が先走つて起こした異変が貴女に対する『貸し』であることは理解しているわ。何が望みなのか？」

「本当に、話が早い」

紫は、一瞬迷うように目を伏せた。

しかし、すぐに開き直つたかのように顔を上げた。

「貴女には、先代巫女の足を治してもらいます」

その返答に、永琳は僅かに眼を見開いていた。

意外、といった内心を表していた。

八雲紫と話をしていて、先代巫女との関係は想像も交えて大体は把握している。この答え自体を予想していなかつたわけではない。

しかし、この返答は予想外であつた。

「……それは不可能だと話したはずよ」

永琳は先代巫女が永遠亭を訪れた経緯を話す内で、そのこともはつ

きりと答えていた。

「正確には『必要な器具や薬品が幻想郷には無いから、不可能』——」

紫は笑みを変えずに訂正した。

「貴女は『技術』に関しては問題として挙げなかった」

「何が言いたいのかしら？」

「質問の仕方を変えましょう——貴女が治療に必要な物と物とを全て用意すれば、先代巫女の足の治療は可能かしら？」

一瞬、永琳の脳裏に様々な考えが過ぎった。

目の前の妖怪は、この世界の管理者である。

例えば、外の世界からその技術の一端を持ち込むことも可能だろう。

しかし、そのような例外的な行為は、言うなれば職権濫用である。

先代巫女は、その名の通り博麗の巫女という責務から外れた人間である。彼女を必要以上に擁護する意味は無い。

八雲紫の私的な理由以外は、である。

もちろん、幻想郷を管理することが職務ではなく彼女個人によるものである以上、守るべき義務や規則などといったものは課せられていないが——。

「具体的に説明してもらいましょう」

永琳は紫の真意を図った。

返答によっては、彼女への評価と信用を幾らか下げることになるだろう。

「この幻想郷には、高度な科学や文明が無い代わりに『幻想』が残っていますわ」

紫は、やはり得体の知れない微笑を崩さずに答えた。

「外の世界で失われた魔法や錬金術、神秘的な薬効を持つ草や花、肉体を傷つけるだけではない霊的な加護を持つ刃物——」

「確かに使えるかもしれないわね。でも、それらをどうやって集めるというの？」

「協力者を募ります。『先代巫女を助けたい』と、そう呼び掛けて、応える者から手を借りますよ」

「そこまで都合よく集まるものかしら」
「さて、それは呼んでみてのお立会い」

おどけて言ってみせる紫の仕草には、絶対の自信が透けて見えていた。

それは紫自身の人望なのか、あるいは先代巫女の方なのか。

僅かな間だけ黙考し、やがて永琳は一つだけ尋ねた。

「何故、あの巫女をそこまでして助けようとするの？」

「そうですね。『私の方』の理由としては、彼女がこの幻想郷の為にしてくれたことへ少しでも報いたいということ」

その深遠な心の内を探る為に、じつと紫の顔を見つめていた永琳は彼女の笑顔が形を変えずに意味を変えたのを察した。

「そして、そんな私を含めた多くの人妖の総意によるものですわ」

そう答える紫の笑顔は、純粹に誇らしげなものだった。



永遠亭の一角にある部屋で、妹紅は横になっていた。

つい先程眼を覚ましたばかりである。

あの夜の決闘を終えた直後、限界を迎えた妹紅はそのまま気絶してしまっただ。

時間の感覚は曖昧だが、外の明るさを見る限り気を失っていた時間は短くはないだろう。

全身に施された治療の跡と、見慣れない上等な寝具を確認して、自分が永遠亭に助けられたのだと理解した。

素直に感謝は出来ない。しかし、恩義を感じないほど憎み抜いている相手ではない。

輝夜との勝負を経て、妹紅の心境は少なからず変化していたのだった。

意識の覚醒と同時に、徐々にハッキリと感じるようになった全身の疲労と痛み。それを理由にして、妹紅は横になったまま動かなかった。

実際は、考えていた。

つい先程まで眠りの中にあつて見ていた夢である。

内容をはつきりとは覚えていない。

ただ、それを思い出そうとすると胸を締め付けられるような感覚が湧いてきた。

その感覚は『悲しみ』とも『切なさ』とも表現出来るような気がする。つまり、どちらとも判別出来ない、複雑な感覚だった。

とても寂しい夢を見ていたようだ。

早く夢から覚めたいような、逆に覚めずにずっと夢であつて欲しいような、そんな内容だった。

それ以上具体的な内容を思い出すことは出来ないだろうし、思い出しても意味は無いだろうと分かっている。

それでも、妹紅は夢について没頭した。

「おはよう」

鈴の鳴るような美しい声が聞こえ、妹紅は今更ながら枕元に座る人物に気が付いた。

輝夜だった。

全身に刻まれた疲労と痛みのせいで、彼女の存在に驚くことも億劫に感じていた妹紅とは違い、こちらは無傷である。服や髪すら整えられていた。

つい昨夜の出来事でありながら、妹紅と繰り広げた文字通りの死闘の名残りどころか余韻すら感じない。

あの勝負は自分にとって大きな意味を持つものだったが、目の前の優雅な姫君にとっては違ったのかもしれない。

そして、これが彼女の永遠の生き方なのだろう。

妹紅は納得し、小さなため息を吐いた。

「……おはよう」

「あら、案外素直ね。私を見て、食って掛かるものかと思っただけれど」

「あんたにぶつきたいものは、あの時に全部出し切ったよ」

「そう、よかったわね」

「ああ、よかったよ」

「嫌味よ」

「分かってる。いい気味だ、負け犬」

ふふん、と笑う妹紅の顔を冷たく見下ろし、輝夜は布団の上に手を乗せて体重を掛けた。

「痛だただだっ!?!」

押さえられたのは輝夜に折られた方の腕である。

妹紅はたまらず悲鳴を上げた。

「痛いよ、馬鹿!」

「腕の骨がくつついたか調べたのよ」

それは嘘ではなかったが、その行為に悪意があったことは白々しく隠して言った。

「いくら蓬莱人の傷の治りが早いからといって、貴女は満身創痍の状態だったのよ。」

治療した永琳も言っていたけど、完治するまでに時間が掛かるわ。本当なら一月は布団の中。しばらくは痛みや体の不調が続くらしいわよ」

「生きていられるだけ儲けもんだよ」

「それは定命の者が言う言葉よ」

輝夜は咎めるように言った。

「一度蘇生すれば、そんな面倒も残らないでしょうに」

輝夜の言葉は、理屈や効率といったもので形作られていた。

妹紅ほどではないが、あの決闘の最後に少なからず傷を負った輝夜が今は無傷の状態にいるという二人の違いは、そこから生まれている。

敗者でありながら輝夜は普段の優雅な姿を取り戻し、勝者でありながら妹紅は傷だらけのまま敵の情けを受けて横たわっているのだ。

しかし、妹紅は小さく首を振った。

「……いいんだ。面倒なんて感じちやいない。この痛みも、傷も、このままでもいい」

かつては呪った自分の体に、今は愛おしさを感じているような笑みを浮かべていた。

輝夜はその笑顔から眼を背けるように、ため息で誤魔化しながら眼を伏せた。

「そう。私には、理解出来ないわ」

「そうかい。まあ、別にいいよ。私の生き方だ」

「千年後も、同じように答えられると思う？」

「分からない」

「分かるわ。千年は、人も妖怪も消えてしまっただけの時間なもの」

「そうかもしれない」

「その時になって、心底思い知ったあんたが、私に大口叩いたことを撤回して泣きついてきても、私は許してやらない」

「そうね。じゃあ、その時になるまで、待ってて」

「……いいわ」

「うん……」

そこで会話が途切れた。

不自然なことではない。元々、親しく話すような間柄ではないのだ。

しかし、互いに憎み合っているような険悪な仲でもない。

妹紅にとって、輝夜は複雑な感情を抱く相手であった。

千年以上前ならば、単なる憎しみの対象だったかもしれない。自分が蓬萊人となる様々な切欠となった人物でもある。理不尽な逆恨みもあつた。

ただ、長い時間の流れが妹紅の心を変え、昨夜の決闘が大きな転機となった。

理不尽な逆恨みといったが、そう自覚出来るようになったのも心境の変化ゆえにである。

蓬萊の薬を飲んだ——それが誰のせいでもない、自らの選択だったのだと受け入れるようになったのだ。

そして、では。

——輝夜は、自分のことをどう思っているのだろうか？

妹紅は、今更になってそのことが気になりだしていた。

思えば、輝夜は常に受身の対応をしていた。

ぶつけられる憎しみや敵意、その結果の殺し合いを、ただ笑いながら受け止めていたのである。

向けられる嘲笑は、これまで妹紅の怒りを煽るだけだったが、今はその真意が酷く気になっていた。

輝夜に問い掛けたい。

自分を嫌っているのか？ 面倒に思っているのか？ あるいは憐れんでいるのか？

気になりながらも、実際に問い掛けることが、妹紅には出来なかった。

「……永遠亭には、先代巫女達が残っているわ」

唐突にそれを告げ、輝夜は立ち上がった。

「いつの間にか所帯が増えているし、正直邪魔なのよね。動けるようになったら、さっさとあれ連れて出ていきなさいよ」

文字通りそう言い捨てて、輝夜は足早に部屋から出ていった。

残された妹紅は、しばらく閉ざされた襖を眺めていたが、やがて視線を天井に向けて、そつと眼を閉じた。

少し前まで、眼を覚ました時に迎える朝が不安だった。

しかし、今は眠ることを怖いとは思わない。

やがて意識が闇に飲まれ、眠りの先で夢が迎えていた。

その夢が先程見たものの続きなのかどうかは、まだ分からない。



部屋を出た輝夜は、廊下の途中で永琳に会った。

妹紅の治療を終えた後、今回起こした異変について幻想郷の管理者である妖怪と話し合いをしていたはずである。

輝夜はその内容に関して、永琳に全て丸投げしていた。

もちろん、この聡明な従者がこの一件を適切に処理してくれるという信頼がある。そして、同時に面倒なことは全て任せてしまおうという気持ちもあった。

「そつちの話し合いは無事終わったみたいね」

「ええ」

長年連れ添った以心伝心により、輝夜は何の問題も起こらなかったことを確認した。

話し合いの詳細を知ろうとは思わない。

永琳の判断に全幅の信頼を寄せているからだ。

興味もなかった。

「そちらは？」

「妹紅が眼を覚ましたわ」

「そう」

相槌を打ち、永琳は黙って先を促した。

以心伝心というのならば、永琳は輝夜以上に相手の気持ちを察することが出来る。

例えばそれが意味の無いものであっても、永琳はいつでも輝夜の言葉に耳を傾けてくれた。

そして、輝夜もまた自らの胸の内を曝け出すのは永琳が相手の時だけであった。

「……ねえ、永琳」

「何かしら？」

「私が地上に降りてから世話になったお爺様とお婆様がいたでしょう」

「ええ、いたわね」

「名前が、思い出せないのよ。ねえ、何だっけ……名前」

「讚岐造（さぬきのみやつこ）ではなかったかしら」

「そうよね。お爺様の名前は、それよね。じゃあ、お婆様は？」

「……さあ、分からないわ」

「だって、記録に残っていないものね」

輝夜は自嘲の笑みを浮かべて呟いた。

麗しい姫の相貌には、酷く似合わない卑屈な表情だった。

「覚えてないのよ、私。育ててもらった二人の名前を、忘れてるの。」

お爺様の名前だって、竹取物語という書物の中にあっただから『思い出した』のよ。そこに無いお婆様の名前なんて、もう一文字も覚え

てないってわけ。なのに、感謝の気持ちだけは抱いてるの。

ねえ、これって酷く滑稽じゃない？ 千年以上も前の恩人への気持ちを失くしてないって言えば聞こえはいいけど、肝心の相手の名前すら覚えてないのよ。馬鹿じゃないの？」

「……それは地上の穢れのせいよ。生命だけではなく、記憶もまた時間と共に塗り潰され、失われていくから」

穢れが生き物に寿命を与え、寿命を短くした。生死の入れ替わりが激しい世界の影響が、記憶すらも磨耗させていく——それが穢れの無い世界に住んでいた月人の考えだ。

永琳は冷静にその答えを示したが、当の輝夜はそれを取り合わなかった。

「なんだっけ……？ 名前、思い出せないの。顔も、もうはつきりと思いつけない。おかしいな……ちよっと前まで普通に思い出せてたはずなのに……でも、ちよっと前っていつだっけ？ 本当に、ちゃんと二人の顔を思い浮かべることが出来たのかな……」

輝夜は美しい髪が根元から千切れそうなほど強く、ガリガリと頭を搔いた。

無意識な苛立ちを表しているその行動を、永琳がそっと諫める。

「姫。心安らかに」

「考えられないでしょ？ 大切なことなのに……」

「輝夜」

「思い出せないのよっ！」

錯乱しそうになる輝夜を、永琳は強く抱き締めた。

自分自身に向けていた苛立ちを代わりにぶつけるように、輝夜は永琳に力の限りしがみ付いた。

「……ろくでもないことだけ思い出したわ。

私は、もう懲りたのよ。大切な人のことを、永遠に覚えてなんていられないって悟った時、懲りたの……」

「ええ、知っているわ」

「ごめんなさい、永琳……」

「謝る必要なんて無いわ」

「私、妹紅のことが羨ましいって、思ってた……っ」

あとはもう言葉にならなかった。

腕の中で静かに泣き始めた輝夜の嗚咽を、他の誰にも聞かせないように、永琳は抱く力を強めた。

「知っている。だから、謝る必要なんて、無いのよ」

何処までも優しく囁き、そしていつまでも輝夜を抱き締め続けた。た。

彼女が望むだけ——例え永遠にでも、そうしているつもりだった。



「お師匠の足が治るの!?!」

全員の視線を集め、満を持して語った紫の話に、チルノが一番純粋な反応を返した。

他の面子も、各々驚きの反応を見せている。

その中には、先代本人すら含まれていた。

衝撃を受けていないのは、発言した紫、先代と親交のない永琳と鈴仙、そしてアリスだけである。

「……そりゃあ、めでたいけど。どうやって?」

チルノの傍らに立ったてゐが探るように尋ねた。

その反応を、永琳は表に出さずに意外に感じていた。

一見して何気ない問い掛けだが、その真意は疑うことを知らず単純に喜ぶチルノを案じてのことである。

ぬか喜びにならないよう、気を遣っているのだ。

「こちらの八意永琳が治療してくれることになりましたわ」

別段断るつもりもなかったが、既に決定事項のように答える紫を永琳は軽く睨み付けた。

二人の間でどんな取り引きがあったのか知らない者達を代表して、霊夢が口を開く。

「そいつって、今回の異変の首謀者じゃなかったの?」

「既に和解したわ。詳細が聞きたければ、後日話してあげる」

「いいわ、面倒臭い。それよりも、信用出来るのかってことよ」

「治療に関しては、師匠が一回断ったって聞いてるしね」

霊夢の疑問から繋ぐように、てるが以前永遠亭へ案内した時のことを話した。

当時のことをようやく思い出したチルノが、喜色一面だった表情を曇らせる。

「彼女の話では、あの時治療が不可能だと判断したのは、技術的な問題ではなく、治療を行う環境や設備が不足していたからだそうですわ」「どういう意味だ？」

医療に関しては門外漢の慧音が曖昧に尋ねた。

「手術の為に必要な設備、場所、薬品——これらが幻想郷には存在しない。正確には、技術に見合うレベルの物が無い、という話ですわ」

「つまり、それらが在れば先代の足は治せるということね。アテはあるの？」

「それは、貴女方次第ですわ。パチュリー・ノーレッジ」

「……なるほど。わざわざ私達の前でその話を切り出したワケはそういうことね」

パチュリーを含め、察しのいい者は紫の言わんとしていることを理解し始めていた。

と、いうよりも、分かっているのはチルノと先代本人だけであつた。

もつとも、先代の方は表情が変わらないので、誰もが察しているものと当たり前のように流しているのだが。

「つまり、うちのお師匠様があんたのお師匠様を治してあげるから、その為に協力しろってこと」

「……よくわかんないけどわかった！ あたい、協力する！ お師匠の足が治るなら、なんでもするよっ!!」

てるにフォローされたチルノの力強い声が、永遠亭に一際大きく響いた。

誰もが、その妖精の真っ直ぐな言葉に視線を向ける。

思慮の浅い発言だと蔑む者は一人もいなかった。

むしろ、永琳に対して大なり小なり何らかの疑念や警戒を抱いていた者達は、チルノの言葉に心を動かされていた。

最初に、霊夢が鼻から抜けるような笑みを洩らした。

「――手術の為の場所が必要って言ってたけど、あたしの結界が何か役に立つ?」

「無菌室と同じようなものが作れるのならね」

「なにそれ? まあ、よく分かんないけどやれるんじゃない。無理なら、やれるようになればいいし」

霊夢が普段通りのマイペースな返答をすると、他の者が次々と続いた。

「手術の過程を説明してもらえれば、ある程度は要望に応えられると思うわ。魔法は万物に通じる技術。こつちには知識の宝庫もあるしね」

「パチュリー様、よろしいのですか?」

「咲夜は協力を反対かしら?」

「いいえ。先代様には借りがございます」

「私も同意見よ。きつと、レミイも反対しないでしょうしね」

「ならば、私も言うことはございません。上手くいけば、きつと妹様も喜ばれるでしょう」

「美鈴もね」

「私は、どちらかというところ紫の頼みとして聞き入れましようかね」

「ありがとう、幽々子」

「いいのよ。私も五体満足になった先代に興味があるわ。妖夢も構わないわね?」

「主である幽々子様の意向に従うだけです」

「貴女の意見も言っているのよ? 協力の形としては、貴女が先代の庭師から譲り受けた刀剣の類を提供することになるだろうから」

「あれらが、何か役に立ちますか?」

「確か『持ち手の斬りたい物だけが斬れる短刀』とかがあったわよね。ああいうのは、使えるわ」

「はあ、あんな物が役に立つのなら。……ただ、一つだけ尋ねてもよろ

しいですか?」

「何かしら?」

「あの偽りの月を落としたのは、先代巫女様なんですよね?」

「ええ。それがどうかしたかしら?」

「……いえ。ただ、知っておきたかったです」

「ふむ——」

「ね、ねえ! あたいは何か手伝えることない!」

「あら、氷精さん。うーん、そうねえ……そういえば、貴女は風見幽香と親しかったわね」

「うん! 幽香はあたいの友達だよ、いじわるだけど」

「ふふふつ、ならばその友達に助けしてくれるよう頼んでもらえないかしら? まあ、彼女のことだから何だかんだ文句を言っただけを貸してくれるでしょうけど」

「わかった! 幽香に話してみる!」

「お願いね。きつと、私が頼むよりもずっと素直に伝えてくれるわ」

あつという間に話が纏まりつつあった。

その様を眺めていた永琳は、僅かに眼を見開いている。

素直に驚いていた。

永琳自身の策謀とはいえ、一時期は解決すべき異変を前にして、互いの主張や立場の違いから争いを始めた者達である。

人間と妖怪という種族の違いはもちろん、様々なこだわりや考え方の相違があり、しかもそれを譲らない頑なさや皆一様に強い。

しかし、今はたった一人の人間の為に全員の意味が一つに纏まろうとしている。

永琳は、思わず先代を見つめた。

人妖が話し合う輪の中心に、彼女は立っている。

初めて会った時から、どうにも量りきれない何かを持っていると感じていたが、こうして見ると、また更に分からなくなる。

百年も生きていない人の身でありながら、そこに積み重ねられたものが酷く濃密で重厚なのだ。永琳は実感した。

「……あの妹紅が懐くわけね」

「師匠？」

「なんでもないわ。これから忙しくなりそうよ、うどんげ」

他人事のように、永琳はぼやいた。

一方、永琳と鈴仙以外にも話の輪から外れた二人がいた。

魔理沙とアリスである。

アリスからすれば、先代巫女とは交流どころか面識すらない相手である。

積極的に関わる義理は無く、水を差す必要性も感じない。

加えて、未だにパチュリーの真意を察しきれず、余計な摩擦を起さぬよう一步退いていた方が良いとも思っている。

ただ冷静に事の成り行きを眺めるだけであった。

代わりに、騒ぎの中心を何処か切なげな瞳で見つめる、傍らの魔理沙へ尋ねた。

「……アナタは参加しないの？」

「わたしじゃ、きつと力になれないぜ」

「そうね。へっぽこ魔法使いだもの」

今のところ、弾幕を含む直接的な効果の魔法しか使えない魔理沙を揶揄して言った。

アリス自身が魔理沙に言い聞かせたように、彼女はまだまだ魔法使いとして最初の段階を踏んだ程度のレベルなのだ。

しかし、普段とは違って、魔理沙はその言葉に食って掛かるような真似はしなかった。

まるで聞いていないかのように、同じ場所を見つめているだけである。

それだけで、魔理沙の様子がおかしいことは分かる。

こんな時の気遣いとして、言葉を掛けるのかそつとしておくのか——アリスは後者であった。優しさよりも冷たさに近かったが。

「……『母親』だもんね」

魔理沙の動かない視線の先にいるのは、霊夢だった。

魔理沙の中に新しく生まれた力と自信を、既に持っていたものだけで無造作に薙ぎ倒して去っていった、昨夜の彼女の姿が脳裏に蘇る。

歯牙にも掛けられなかった。

霊夢にとつて、自分との戦いの優先順位などその程度のものであったのだと、思い知った。

誰が悪いわけでもない。

強いて言うなら、弱い自分が悪い。

あの時、霊夢にとつて自分は敵ではなかったのだ。

いや、あるいは何者でもなかったのかもしれない。

何処からとも無く飛んできた石を、軽く避けた程度なのだ。

石が飛んできた理由などどうでもいい。落ちた石が何処に転がっていったかなど気にはしない。

そんな霊夢が、視線の先では周りの者達と積極的に言葉を交わしている。

それが、先代巫女の——母親の為になることだからだ。

「お前の心をそこまで動かせる相手なんて、その人くらいしかないんだよな」

チルノとの弾幕ごっこで、少なからず発散できたはずの複雑な気持ちだが、また湧き上がってくる。

自分が今、『悔しい』と感じているのだと分かった。

「わたしは、まだお前にとつて『他人』か……」

魔理沙は、知らぬうちに唇を噛み締めていた。



——『柵から牡丹餅』つてことわざは、こういう状況のことを言うんだろうか？

なんか、私の足治るっぽいよ。

やったね、先代ちゃん！ 出来る修行が増えるよ！

いや、突然のことで混乱気味なのは分かるが、足が治ると知って次に考えることがそれってどうなの私？

改めて、自分の思考パターンの少なさに呆れた。

足に不自由を抱えてから実は結構な時間が経っているが、そんな中

でも結局私の根っこの部分は何も変わっていないなかったらしい。

「準備が出来次第、手術を行うわ。それまで、貴女には入院という形で永遠亭に居てもらおうわね」

あれよあれよという間に話が進み、全てが纏まる頃には私は永遠亭の一角らしい部屋を宛がわれていた。

入院ということは、ここは私の病室にあたるのだろうか、完全に和室なので違和感ありまくりである。

いや、人里の診療所もこんな感じだけどね。

香霖堂などからベッドを購入して、現代風の内装にした私の診療所の方が、この幻想郷では珍しいのだ。

しかし、まさかとは思うが、手術する場所までこんな和室とかじゃないだろうか？

違和感以前に、衛生面で不安になってしまっただが……。

「入院と言うが、どれくらいかかるんだ？」

「おそらく手術は数日後ね。協力者を今一度集めて、私が手術に必要とする物や、それを各々がどういった形で提供出来るのか、など話し合うわ。そこで手間取らなければ、その分早く終わるわよ」

慧音や霊夢達は、既に永遠亭から出て、それぞれが帰るべき場所へ帰っている。

っていうか、もう夜だしね。

後日、また来ることになるようだ。

私だけが、移動の負担を考えて最初からこの永遠亭に残る形になったのである。

「もちろん、その間に退屈はさせないから安心して頂戴。治療をするのなら、万全を期すためにみっちりと検査をさせてもらおうわ」

永琳はニヤリ、といった音が聞こえそうな笑みを浮かべて言った。

やだ……なんか寒気がしたんですけど。

具体的には貞操の危機っぽいものを感じたぞ。

女に生まれて以来、初めて感じる類のものだわ。

二次創作のマッドサイエンティストな永琳のイメージからも来ているのかもしれない。永琳は媚薬とか○○○の生える薬とか作って

るイメージ。

……って、こんなこと考えてるなんて、万が一にでも永琳に知られたらぶっ殺されるな。

「お手柔らかに頼む」

私は内心の動揺を悟られぬよう、何食わぬ顔で言った。

永琳も先程の意味ありげな笑顔は、ただ単に悪戯っ気を出しただけのものらしい。

力を抜くようなため息を吐いて、今度は逆に困ったような表情を浮かべていた。

「……結局、貴女が最初に言ったとおりになったわね」

「何がだ？」

「私が医者だ、と。貴女は言ったわ。そう考えて、ここへやって来た。

そして、今まさにそうなりつつある。貴女という患者を持ち、その治療を行うことになったわ。妙な話ね」

「迷惑だったか？」

考えてみれば、永琳は異変を起こした代償として私を治療するのである。

本人にとっては不本意なものかと思ひ、私は気まづくなった。

うむ……冷静に考えてみれば、紫もなんで貴重な永琳への借りを私なんかの為に使うのかね。

いや、もちろん凄じ嬉しいし、ありがたいことなただけど。

「さて、ね。いずれにせよ、不思議なものよ。

今回に限らず、永遠亭は医療機関としてこの幻想郷に貢献することで居住権を得ることになったわ。まあ、そこまで堅苦しくはないけれど、医療を足がかりにして外と繋がりを得る——」

つまり、原作通りの展開になったということだろう。

これからは、人里とも交流が始まるのだ。

これは実用的な面でも非常に嬉しい。医療ってのは、人が生きる上で重要な要素だからね。

最初にここを訪れた時はどうなるものかと思ったが、納まる所に納まったということかな。

「貴女の中では、納まる所に納まった、当然の結果なのかもしれないわね」

私は思わず思考を停止させていた。

永琳の方へ伺うように視線を向けてみれば、永琳も私の方を探るように見ている。

探るといふより、射抜くような視線だった。

最初に会った時に向けられた、あの眼である。

……もうね、アレじゃね。実は永琳の本当の能力って心を読む程度なんじゃね？

「貴女には未来を見通す能力でもあるのかしら？」

それはむしろ貴女です、と私は内心で呟いた。

「偶然だ」

「本当に？ 在るべき場所に在るべき物が、貴女には分かるんじゃないかしら？」

「……」

「あるいは、正しい結果を導き出す能力とか？」

——何、その全知全能程度の能力。

あまりにぶっ飛んだ話に、私は言葉を失っていた。

やっぱり、天才の思考というものは凡人の私には分からない。

何故、永琳はそこまで私を過大評価するのだろうか？

そんな評価は、そっくりそのまま永琳にお渡ししたい。

私なんか、現在進行形で永琳の言動に玩ばれてる真つ最中なんだから。

「何故、そう思う？」

アホな私は、結局そんな身も蓋もない愚直な質問を返した。

「……ごめんなさい」

そして、何故か謝る永琳。

分からん。

天才の話は言葉が足りなさ過ぎて、分からんって……。

「半分は期待だったわ」

眼を伏せたまま、永琳はため息を吐くように話し始めた。

「貴女には底の見えない部分がある。

私が期待したというのは、そういった部分よ。知るはずの無いことを知っている貴女が、私の疑問に答えてくれるかもしれない、という期待」

「……貴女にも分からないことがあるのか？」

「ええ、あるわ」

意外だった。

しかし、確かに今の永琳の顔には苦悩の色が浮かんでいる。

先程のやりとりでもそうだが、何でも知っているというのはむしろ永琳の方なんじゃないかと思っていた。

そんな彼女でも、誰かに教えて欲しいと思うことがあるのだ。

原作の設定では、嘘か真か億の単位で生き続けている賢者である。知識も経験も私に比べれば桁違いであろう彼女が、一体何を悩んでいるというのか——？

「月とは違い、この地上は穢れに満ちている」

永琳が言っているのは、月人から見た地上の認識だった。

「私が地上を穢れていると思うのは、何もかもが不完全だからよ。

長い歴史の中で、大昔は完全だった地上の全てが、今や不完全なものばかりになってしまった。生物の寿命も、人の観念も、社会も、月と比べて全てが不完全。

一貫した正しきは無く、物事は時間と共に容易く形を変え、価値は変動し、かつて意味のあった物がいずれ無意味に成り果てる」

「……」

「完璧なものなど何処にも存在しない」

永琳が疲れきった声でそう言った。

「そんな不完全な物事の中から不完全な選択をしたところで、満足のいく答えが得られるはずもないわ。常に後悔が付き纏う」

「……後悔をしているのか？」

「私は地上で生きてきた長い年月の中で、無数の問題に直面し、その都度最適の答えを選んできた。それらの決断全てが正しかったのだという自信がある。でも……」

——答えを出した後、いつだって後悔してきた。

私には、永琳が喋んだ言葉の続きが分かった。

これまでの話の中で、永琳の苦悩が漠然とだが見えてきている。

しかし、具体的な形は未だに分からない。

彼女は後悔していると言った。

それは、何に対する後悔なのだろうか？

私には分からないし、分かったところできつと彼女の期待には応えられないだろう。

先程も言ったとおり、私は何もかも知っているわけではないし、何もかも正しい事柄を選べるわけではない。

仮に全てそうだとしても、私の告げる言葉は永琳にとって意味の無いものだろう。

それは永琳自身も、もうとつくに理解しているはずのことだ。

それでも、言わずにはいられない——。

私は胸を締め付けられるような気持ちだった。

永琳は縋るような瞳で、私を見つめた。

初めて見る、月の賢者の弱った姿だった。

「私と輝夜も、貴女と妹紅のように——」

言いかけて、永琳は途中で口を固く噤んだ。

それ以上言うことを自分に禁じるような、断ち切るような沈黙だった。

「いえ……なんでもないわ」

「そうか」

私のそんな何の捻りもない馬鹿のような相槌で、その話は終わってしまった。

永琳がおそらく、気の遠くなるような年月の中で抱き続けてきた苦悩や葛藤を、解決することはもちろん助言も、最後まで聞き届けることさえ出来なかった。

そして、もう二度と彼女は私に語ろうとはしないだろう。

そんな気がした。

あの夜、私は輝夜に間違っているのだと否定された。

今も、心の何処かでそれは正しいのだと思っってしまったている自分がある。

あの時言い返したのは、相手の正しさを否定するのではなく、別の正しさを主張して、問題を曖昧にしただけのような気もする。

そんな埒の明かないことを、心の片隅ですつと悩んでいた。

しかし、永琳の話聞いて、私には少しだけ新しいことが見えるようになっていた。

多分、あの時輝夜は妹紅と同じくらい必死だったのだろう。

自分の答えに絶対の自信なんてなかったのだろう。

そして、永琳もきつと同じなのだ。

生きているのなら、多分皆同じ所で悩むのだ。

だから、つまり……永遠の命を持つ蓬萊人と言っても、妹紅だけが特別なんだというわけじゃなくて――。

永琳も輝夜も、生きているんだな。

その時間があまりに長すぎるから、悩みも大きくなっていくんだ。

一人では、抱えきれないくらいに。

「貴女の足は、治してみせるわ」

「ああ、頼む」

誤魔化すような永琳の言葉だったが、それでも私は信頼を持って頷いていた。



幻想郷の夜が明けなくなった異変、通称『永夜異変』が無事解決されて幾日後――。

人里には、異変の後で少しの変化が訪れていた。

迷いの竹林の中に『永遠亭』という薬屋が開業したのである。

薬は、置き薬と買い薬に別れ、いずれも定期的に人里へ、使いの妖怪鬼が売りに来る。

当初は、それらの効能に疑いを抱く者も多かったが、先代巫女のお墨付きがあることを知ると、やがて誰もが信頼を置くようになった。

実際に、それらの薬は良く効くものと評判が高い。

当の先代巫女が診療所を営んでいるが、物品である薬にはまた別の利点がある。

互いの領分を侵すことなく、これらは人里で重宝されていった。

そして、永遠亭は基本的に薬を提供しているが、直接訪れれば医者代わりとして診察もしてくれるという話も広まっていた。

もちろん、永遠亭の存在する迷いの竹林が危険であることは周知のことである。

しかし、それでも薬などでは治しきれない病を抱えた者が、永遠亭の助けを求めて訪れようとする。

その理由の一つは、あの先代巫女の足を完治させたという実績によるものである。

また、永遠亭の出現と共に、危険なだけだった迷いの竹林にも変化が起こっていた。

竹林から永遠亭までの道のりを、案内する者が現れたのである。

彼女の名前は、藤原妹紅と言った。

ずっと昔から迷いの竹林に住んでいるという正体不明の履歴と、妖怪など軽く追いついてしまえる実力を持つ彼女は、上白沢慧音の口利きで人里と繋がりを持つようになっていった。

急病などで用事がある時、彼女に頼めば、確かかつ安全に永遠亭へと導いてくれる。

彼女もまた、当初は人々から不審と警戒を抱かれていた。

それを解消したのは、慧音や先代を始めとする者達の言葉と、何よりも彼女自身の人柄だった。

病人を確実に永遠亭へ届ける実直な仕事ぶりと、そこに至るまでの道筋で同行者を気遣う優しさが、自然と信頼を勝ち取っていったのだ。

永遠亭から帰ってきた者達は、病気が治ったこと以外にも、妹紅と接したことを明るく周りに語る。

道案内の途中、お昼時などに休憩を挟むと、彼女はおにぎりの包みを取り出して、それを同行者に振舞うのだ。

遠慮をすると、彼女はにっこりと笑って、こう言う。

『食え。ご飯はちゃんと食べないといけない……らしいぞ』

藤原妹紅という少女の人柄の良さを表した話である。

また、道案内の間、彼女は自分自身のことに関しては終始寡黙だが、相手の話はよく聞いてくれるという。特に、家庭の話などは喜んで聞き手に回ってくれるようだ。

興が乗ると、彼女は身を守る為の護身術や、健康の為の軽い運動などを教えてくれるらしい。

しかし、それらを何処で身に着けたかまでは教えてくれない。

藤原妹紅には謎が多い。

危険な迷いの竹林に住んでいたことに加え、その長い年月に不釣合いな若々しい容姿。永遠亭との関係や、個人の背景。

答えたくないのであれば、無理に聞き出そうとも思わない———そうするだけの信用が、既に彼女にはある。

それでも、思わず尋ねてしまった人に対して、彼女は決まってこう答えるのだという。

『そうね、私はただの健康マニアの焼き鳥屋さんよ』

手のひらに不思議な力で小さな火を灯して答えるそれは、嘘か真か。

悪戯っぽく笑う彼女の表情に毒気を抜かれて、誰もがそれ以上は踏み込まない。

彼女が、何故最近になって人と関わるようになったのかは分からない。

ただ、彼女は今日も人を案内している。

きつと、明日も———。

幕間「永夜先代録」

【永遠亭での一幕】

『先代巫女、完全復活っ！』

文々。新聞の第一面には、大きな文字でそう書かれていた。先代巫女の足を治療する為の手術が成功して、わずか三日後のことである。

記事の内容は具体的な容態や治療の経緯を書いたものではない、憶測混じりのものだったが、永遠亭の一室に両足でしっかりと立つ先代の写真が載っている。

それがこの新聞に大きな信憑性とインパクトを持たせていた。

「一体、いつの間にかこんな写真を撮ったのかしら？」

新聞を読みながら、永琳は呆れたように呟いた。

アングルからして、明らかに盗撮されたものだ。

その行為の犯罪性は置いておくとして、迷いの竹林にある永遠亭へ、鈴仙達にも気付かれず潜入して事を済ませた手際には素直に感嘆せざるを得ない。

人里へ出掛けていたてゐるが、意味ありげにこの新聞を買ってきた理由を、永琳はようやく理解した。

「悔れないわね、幻想郷って」

異変を経て、先代巫女の治療を切欠に、永遠亭は医療面で外との交流を持つとうと決めたのだ。

それまでは、この竹林の奥で文字通り止まった時間の中を生きてきた。

蓬莱人にとって、穏やかに過ごすことが出来れば場所が何処であろうと関係ないと思っていたが――。

「面白いかもしれないわね」

「どうした？」

「いえ、何でもないわ」

微笑混じりの永琳の呟きを、先代が耳聴く聞き取っていた。

彼女に気付かれないよう、新聞をそっと畳んで襖の陰に仕舞う。

永琳は、改めて縁側から中庭に立つ先代を見つめた。

手術三日目にして、すっかり回復した彼女の姿がそこにある。

術後の傷の経過を見守る必要も無い。

先代の足の不能は完治し、その手術の痕もまた無くなっていた。

「足に痛みはあるかしら？」

「いや、ない。違和感は少し」

「それは感覚的なものね。長期間、足を使っていなかったことによる弊害よ」

永琳が手術の時に切り開いた足の傷は、三日の内に治っていた。

当然ながら、それは先代自身の自然治癒によるものではない。

手術の為に提供された様々な技術や道具の内、外傷に使われた薬草が効果を発揮した結果だった。

縫合の必要すらなく、切り開かれた足の傷を塞いでしまった。まさに神秘的としか言いようのない薬草だった。

これによって、通常ならば必要な入院期間もなく、先代は今日すでに退院の日を迎えたのである。

自身の体の調子を確かめる為に、先代は中庭に出ていた。

この中庭に出るまで、確かめるようにじつくりと地面を踏み締め、素足のまま外に出て軽く屈伸などを繰り返していた。

「下半身の筋肉の衰えは、驚くほど少なかったわ」

言葉とは裏腹に、永琳は淡々と告げた。

「半年以上足を動かしていなかったとは思えないくらいね。」

手術の時に使った薬品が細胞を活性化させたことも影響しているでしょうけど、それでも異常よ。マッサージの刺激程度で保てる状態ではないわ」

「それは波紋による効果だ」

『波紋』——例の特殊な呼吸法というものね」
「そうだ」

手術前の問診の中で、永琳は先代の持つ肉体に作用する技術の幾つかを聞き及んでいた。

その中でも、興味を最も惹いたのが『波紋法』だ。

特殊な呼吸方法によつて、血中にエネルギーを集め、それを体内に循環させる。

エネルギーは細胞を活性化させ、骨折程度ならば自然治癒させてしまふという。

神経の通わなくなった足にも、変わらず流れ続けていたそのエネルギーが動かない筋肉の劣化を防いでいたのだ。

肉体を活性化させる、という効果自体はそう珍しいものではない。しかし、それを呼吸の仕方一つで行つてしまふという点が素晴らしい。

外的要因は何一つなく、先代は自らの肉体を操作するだけで、この神秘的なパワーを生み出しているのだ。

どういった発想で、こんな技術を編み出したのか。

知れば知るほど、この先代巫女——興味深い。人物としての底が見えない。

永琳は無遠慮な視線を曖昧な微笑で隠しながら、先代の行動を観察し続けた。

両足を交互に伸ばす軽い体操を終えた先代は、段階を一つ上げて、下半身を行使した。

左足をゆつくりと持ち上げていく。

膝は曲げない。ピンツと伸ばしたまま、額に足が触れるくらい上げる。

片足立ちの体勢である。

しかし、地面に着いた右足と持ち上げた左足が一本の線で繋がるような直線を描いている点が尋常ではない。

胴体も、可能な限り後ろに倒さず、持ち上げた左足と胸がくつつくような位置を維持している。

本来ならば、重心がズレて倒れこんでもおかしくない。

それを先代はやっているのである。

凄まじい安定感がある。

体は一切ぶれていない。

しばらくの間、その体勢でいた後、先代は足を交代させて同じよう

にやった。

「……素晴らしい柔軟性と剛性ね」

両足が地面に着いたのを見計らって、永琳は先代の肉体を褒めた。本心だった。

生半可な鍛え方ではない。

あの足で蹴り上げれば、相手の顎を吹き飛ばし、逆に振り下ろせば見事な踵落としが脳天を砕くだろう。その気になれば、肩越しに背後の敵を蹴ることまで出来るかもしれない。

また一つ、先代巫女の力の一端を見たような気がした。

「だが、やはり少し衰えているような気がする」

空間を斬るような鋭い蹴りを両足で交互に繰り出しながら、先代は眩いた。

彼女がそう言うのなら、事実そうなのだろう。

決して謙遜や見栄などではない。

「しばらくは、リハビリだな」

「……なら、今ここで少しやってみましょうか？」

先代の独り言に、思わぬ答えが返ってきた。

僅かに眼を見開いて振り返れば、縁側から庭に降り立った永琳が静かに歩み寄ってくる。

「貴女が相手をするのか？」

驚きながらも先代は、永琳の言葉と行動の意味を正確に受け取っていた。

「ええ。これでも体術には多少の覚えがあるわ」

「何故、そこまでしてくれるんだ？」

「一つは医者としてのアフターケア。もう一つは、個人的な興味からね」

永遠亭の中庭の一角で、先代と永琳は対峙していた。

一見すると、ただ向かい合って立っているだけのようだが、その立ち位置には既に意味があった。

庭の装飾である池や植木からは離れ、石畳と砂利の敷かれた比較的平坦な場所を陣取っている。

人間二人が十分動き回れるような——例えば、十分『取っ組み合える』だけのスペースが確保されていた。

「……いいのか?」

「それは私を侮つての台詞?」

「いや……」

「私も折角治した患者を出戻りさせるつもりはないわ。

こちらは貴女の動きに合わせて対応するから、好きに打ち込んできなさい」

聞き方によつては、挑発とも取れる台詞である。

しかし、先代相手には無意味なものだった。

「分かった。では、何を合図に始める?」

先代が尋ねた。

「もう始まつているわ」

永琳は答えた。

その顔から、既に微笑は消えている。

瞬間、先代は踏み込んでいた。

一切躊躇がなく、また遠慮のない踏み込みである。

つい数日前まで全く動かなかつたはずの両足を存分に使い、体重移動によつてたつぷりと速度と重さの乗った正拳突きを繰り返す。

一連の動きに、永琳は表情に出さず驚愕していた。

先代の攻撃の鋭さもあるが、そこに手加減や油断が全く存在していないことに驚いたのである。

自分の唐突な申し出に対して、ある程度は戸惑いがあるものと予想していた。

実際、それはあつたのだろう。

しかし、いざ戦いが始まれば、先代は完全に意識を切り替えていた。相手の未知数の実力に対して、油断はおろか様子見すらしようとしていない。

最初から真剣である。彼女に甘さは一切なかった。

逆に、予想を外された永琳の方が意表を突かれた形になっていた。

「さすが——」

永琳は感嘆しながらも、飛来する鉄拳に対応した。両手のひらで正拳突きを受ける。

防御手段として見るならば、それは失敗、あるいは未熟であった。一撃を受け止めるのに両手を使ってしまつては、すぐに繰り出せるもう一方の突きに対処出来ない。

しかし、永琳の両手が先代の突きを捉えた次の瞬間、先代の体そのものが宙を舞っていた。

眼を疑うような光景だった。

攻撃をしたのは先代である。しかも、しつかりと大地を踏み締めた安定感のある突きだった。

それが、まるで自分から跳んだかのように体を宙に投げ出されていたのだ。

しかも、腕力によつて無理矢理両足を地面から引っこ抜いたような強引さは一切無い。

自らの突きの勢いに引つ張られるかのように、捉えられた腕を支点にして投げられていた。

突然の事態に対して、しかし先代は冷静に対処した。

投げ出された空中で体勢を立て直し、地面に到達する時には、既に両足で着地出来る状態にまでバランスを取り戻している。

そのまますぐに反撃に移れるほどであった。

しかし、そうはしない。

永琳は投げの途中で手を離していた。そのおかげで、体勢を立て直せたのだ。

腕を掴んだまま、姿勢制御を妨害しつつ地面に叩きつけようとしていたなら、また結果は違つていただろう。

永琳は手を抜いたのだ。

それはもちろん、彼女自身が戦う前に言った通りのことをしたまでだ。

しかし、不可解さは残った。

先代は構えたまま、自分を投げ飛ばした永琳の技の秘密を探った。

「——なんだあれ!？」

場違いな声が響いた。

いつの間にか、チルノが永遠亭の中庭に足を踏み入れていた。

正式な患者である先代とは違い、当然招かれざる客である。

すぐ傍には鈴仙が立っている。

先代を見舞う為に強引に永遠亭へ入ってきたチルノを侵入者と決め付け、ついさつきまで追いかけてここをしていたのだ。

そして、二人は中庭で先代と永琳が組み合う瞬間に立ち会ったのだった。

「ねえ、今のどうやったの!？」

突然の外野の登場にも、当の二人は無反応である。ただ、目の前の相手だけに集中している。

チルノは、傍らの鈴仙に思わず問い掛けていた。

「……あ、あれは師匠の技よ!」

チルノと同様、一瞬の攻防に眼を取られていた鈴仙は慌てて答えた。

「だから、どうやったらあんなこと出来るの?」

「え、えーと……お師匠様の技は、計り知れないのよ!」

つまり、鈴仙にも分からないのだった。

彼女は元月の軍人である。格闘に関する知識や技術は身に着けていたが、一連の攻防はそれらのどれとも合致しない。

永琳の投げ技の正体はもちろん、先代の放った打撃技も捉えきれなかった。

実際には、ただの正拳突きなのだが、極められたそれは一般的な格闘の見識しか持たない鈴仙の眼には、あまりに異質に映る。

眼にも止まらない打撃と、詳細の掴めない投げ技。

ここに至るまでのやりとりを全て有耶無耶にして、チルノと鈴仙は揃って目の前の光景に息を呑んでいた。

「ありやあ、『合気』ってやつだな」

「うわっ、ビックリした!」

二人の間に割り込むように、ぬうつとてゐるが顔を出した。

「合理的な体の運用や体捌きを使って、相手の力と争わずに相手の攻

撃を無力化するって理屈の武道だ。

無駄な力を使わずに相手を御する技だからね、死ぬたんびに肉体の状態が初期化される蓬莱人にも相性が良いってんで、師匠が唯一鍛え続けてた体術だよ。

多分、極めようなんて思っちゃいないだろうけど、なんせ時間だけは無限にあるんだ。年単位でブランクを挟んだにしても、総合的にどれだけ修練を重ねたのか想像も出来ないね」

慌てる二人の反応を無視して、てるは訳知り顔で長々と説明した。

「短い人生の内のほとんどを費やして、信念を持って鍛え上げた先代巫女。師匠は反して、膨大な時間を湯水のように使いながら片手間で鍛えた技だ。

先代が病み上がりってのもあるし、師匠はまともに合気の技を使うのも久しぶりときた。

判断材料がありすぎて、こりやどつちが勝つか分からんねえ……」
「……いきなり出てきて、勝手に説明して、しかも何でそんなに満足気なの？」

鈴仙は戸惑いながら尋ねた。

「いや、チルノをフォローしようと思って追っかけたら、解説が必要そうな状況だったからさ」

「まあ、助かったと言えば助かったけど……あんた、本当に何でも知ってるわね」

「これでも長生きしてるからねー」

「あたい、知ってるわ！ てあつてば、解説キャラだったのね！」

「うるさいよ。っていうか、何処でそんな単語知ったんだよ」

「お師匠」

「……侮れんわあ、あの巫女」

「もう、いいから黙って見守りましょう。

師匠も本気でやり合うつもりじゃないだろうけど、物騒なことになつたら止めないと……」

鈴仙が生真面目に状況を見守り、チルノはまた別の意味で緊張しつつ、一方のてるは何処か気楽に中庭の光景を眺めていた。

三人の沈黙を測ったかのように、先代と永琳は動き出した。

先代が低い蹴りを繰り出した。

永琳の足元を狙った、鋭いローキックである。

さすがにこの蹴りを投げることは出来ない。受けるか、避けるか、だ。

自分を投げた技の詳細を掴めていない為、攻撃の種類を瞬時に変えたのである。

永琳は僅か半歩下がらただけで避けた。

地面を滑るような移動だった。

離れた分だけ先代が間合いを詰める。

しかし、それを待っていたかのように永琳自身も踏み込みを合わせる。

一瞬で、お互いの距離がゼロになった。

永琳はこの状態を狙っていた。

対する先代は、しかし内心を全く表情に出さない為、分からない。

永琳が先代の手首を取った。

攻撃へのカウンターではないが、結局は先程の攻防と同じ流れである。

。またもや、得体の知れない原理によって先代の体が投げ飛ばされる。

「ぐ……っ!?!」

手のひらに電流が走ったかのような衝撃を受けて、永琳の手は弾かれるように先代の体から離れていた。

意表を突かれた精神的な理由以外に、何故か物理的にも肉体が硬直して、隙が生まれた。

そこへ差し込むように、先代の拳が飛ぶ。

永琳は全身を独楽のように回転させることで、その拳打をかわす。避けるにとしては、無駄のある動きだった。

遠心力を利用した、何かの反撃が来る。

先代は確信に近い予想をした。

裏拳か、回し蹴りか。

——髪！

三つ編みにした長い銀髪が、鞭のようにしななって先代の顔面に襲い掛かった。

髪とはいえ、束ねてあるし、そこに勢いがある。

両目をしたたか打たれ、一時的に視界が塞がれた。

偶然ではない。狙って行われた攻撃だった。

永琳が首を捻って髪先端を加速させたのだ。

その攻撃を追うようにして、間髪入れずに、今度こそ裏拳が繰り出される。

しかし、視界を塞がれながらも、先代はその一撃をあつさりとは片手で受け止めていた。

打撃技においては、永琳の技術が未熟であり、また単純に腕力も劣っていたことが幸いした。

永琳の拳を受け止めたまま、先代は僅かに涙の滲んだ瞳をゆつくりと瞬いた。

「意表を突かれたよ」

「こちらもよ。あの、痺れるような感覚は何？」

永琳は先代の手首を掴んだ時の感触を尋ねた。

錯覚ではなく、本当に電気が走ったかのように手が痺れ、実際に筋肉の動きさえ阻害したのだ。

「あれは波紋だ」

「また波紋？ 奥の深い技術ね」

「くつつく性質の波紋とはじく性質の波紋がある。また、触れた瞬間や殴る瞬間に相手に波紋を強く流し込めば、痺れさせることも出来る」

「もし、更に強く流し込んだら？」

「肉体を溶かすことも可能だ」

「それは恐ろしいわね」

互いに顔をつき合わせたまま、淡々と言葉を交わしていたが、少なくとも永琳は内心で戦慄していた。

波紋は全身に巡らせることが出来る。

つまり、先代の体に触れただけで、その影響を受けるのだ。
無敵か？

いや、違う。

現に、最初に投げた時や、今拳が触れている部分から、あの痺れるような感覚は感じない。

波紋には強弱があり、そのエネルギーを呼吸で生み出している以上、瞬間的な力は出ないはずだ。

手首を掴まれることを予測し、あらかじめそこへ波紋を集中させていた結果だろう。

永琳は冷静に、そう分析した。

「まだ続けるか？」

「もつと足を使ってみて」

ここまで緊迫した戦いをしながら、当初の目的を忘れていない論理的な思考は、さすが月の賢者だった。

対戦相手の奇妙なりクエストに応えるように、先代が蹴りを放つ。間合いを詰めて向き合った二人の間には、大した空間は開いていない。

しかし、永琳の顎目掛けて、真下から突き上げるような蹴りが繰り出されていた。

あの関節の柔軟性と筋肉の剛性を十分に活かして、足を小さく畳んだ状態で、僅かな体の隙間に差し込んできたのだ。

アップパーカットのようなコンパクトな蹴り上げが、危ういところで後ろに下った永琳の顎先を掠めていった。

更に、そこで終わらない。

一旦頂点に達した蹴りが、今度は脳天に向けて踵から落ちてくる。斧のように鋭く、重い踵落としだった。

永琳はそれを受け止めようとせず、離れた間合いを再度詰めるようにタツクルを仕掛けた。

足を振り上げていた先代は、片足立ちでそれを受ける形になる。

当然のように、踏み堪えることは出来なかった。

技も出掛けで潰され、地面に背中から倒れ込む。

荒々しさを増してきた戦いに、外野であった鈴仙とチルノが思わず声を上げる。

永琳は踵落としを潰した際に掴んだ足を、そのまま捻り上げようとした。

関節を狙った寝技である。決まれば、そこでまず勝負がつく。

先代は残ったもう片方の足で蹴りつけ、それを防ごうとした。

しかし、地面に倒れこみ、体は密着して、片足まで取られた状態である。

如何に先代の強力な蹴り技とはいえ、どうとでも防御出来る状況だった。

永琳は片腕を強引に盾にして、蹴りの衝撃に耐えた。

そして、叩きつけられる力を受け止めた次の瞬間、今度は引つ張られる力を受けて、永琳の体は成す術もなく先代から引き剥がされていた。

何事かと、引く力の発生源を視線で探れば、そこには防御した手の指を絡め取った、先代の足の指があった。

足で行われる投げ技。

先代自身も寝転がった不安定な姿勢だが、元々脚力は腕力の比ではない。

抗うことの出来ない永琳は空中で半回転し、地面に背中から叩きつけられた。

思わず跳び出そうとしていた鈴仙とチルノは、その奇妙な一連の動きに眼を奪われていた。

倒れた先代をpushさえ込もうとした永琳が、その体勢のまま、同じように仰向けに転がされたのである。

格闘戦の常道というものを知る鈴仙には、信じ難い逆転劇だった。知識の無いチルノは、代わりに今の技を一度地底で見ている。

師匠の取った不覚に鈴仙は焦り、勝機を見たチルノは眼を輝かせる。

その時、おもむろにているが大きく手を叩いた。

「はい、しゅーりょー！　そこまで！　一本！　引き分け！」

「……どっちよ？」

緊迫した空気の中に響いた、てゐの間の抜けた台詞に対して、永琳は力の抜けような笑みを漏らした。

てゐの言葉が、熱くなり始めた二人の戦いに良い意味で水を差した。

先代と永琳。仰向けに倒れたまま、その体から闘争心という熱が引いていく。

緊張感もまた、同時に抜けていった。

「ここまでようだ」

「そうね。もう十分でしょう」

「十分すぎる」

「ごめんなさいね。少し興味が先走ったわ」

「恐ろしい人だ」

「……ふふっ、あれだけの技を極めながら『そういう感想』も言ってしまう貴女の方が、私は怖いわ」

最初から勝負のつもりではなかったが、それでも二人は互いを称えながら立ち上がった。

お世辞ではない。少なくとも、永琳は本音だった。

永琳は相変わらず表情から読み取れない先代の内心に、畏怖を抱いていた。

一度、実際に戦ってみて分かった。

その測り切れない戦闘力は、もちろん脅威だ。

しかし、本当に警戒すべきは彼女自身の人柄や性格である。

あの八雲紫と対峙した時も脅威を肌で感じたものだが、同時に付ける隙があるとも考えていた。

力を持つ者特有の自負や驕りは消せないものだ。特に妖怪は、それ自体が妖怪としての力や格を生み出すのだから尚更だった。

だが、目の前の人間は違う。

油断や驕りは欠片も無い。

先代が自分を『恐ろしい』と評したのは、おそらく本心からだろう。あれだけの力と技を持ちながら、彼女は自身の感じる恐怖を誤魔化

すことなく、受け入れることが出来るのだ。

だからこそ、怖い。

逆に蓬莱人というアドバンテージを持つ自分の方が、その隙に付け入れられてしまいそうだと永琳は感じた。

八雲紫などよりも、よっぽどやり辛い相手だ。

「足の調子はどうだったかしら？」

「やはり、少し違和感があるが、かなり感覚を取り戻せたと思う」

「そう。それは良かったわ」

永琳は医者としての意識に切り替えて、努めて穏やかに話しかけた。

鈴仙を含めた三人が近くにすることは、中庭に踏み込んだ瞬間から気付いている。

少し離れた位置に立っている三人が、医者が患者に話しかけている内容に配慮して歩み寄ってこないことを確認すると、永琳は声を囁く程度にまで落とす。

「退院前に、少し話しておくことがあるわ」

「……何か問題が？」

先代が真剣な表情を浮かべた。

「足の傷は完治した。感覚の方も、その調子ならすぐに取り戻せるでしょう。それは保証するわ」

「――」

「問題は、貴女の肉体そのものよ」

永琳は手術に掛かる前、徹底的に調べ上げた先代の身体に関する情報を脳裏に浮かべながら話し始めた。

「貴女自身から聞いた、無茶な鍛錬による酷使と、五十を超える実年齢による劣化——これらは当然のように、肉体への負担として刻まれているわ。」

その負担がマイナスの形として現れていないのは、ひとえに波紋による細胞の活性化と強化、そして補助が効果を発揮し続けている結果でしょう。

私には波紋のメカニズムまでは分からないわ。ただ、貴女の力が人

間の限界を超えているのは、ちゃんとした原因があつてのことなのよ。都合の良い精神論などではないわ」

「ああ、分かっている。私はどう足掻いても人間だ」

「波紋は貴女の肉体を常に癒し、補いつけている。」

——いい？　ここが重要よ。貴女が呼吸によって波紋のエネルギーを無限に生み出せるなら、それが続く限り問題は起こらないわ
言い聞かせるように声を力を込めて、永琳は真っ直ぐに告げた。

「ただし、もしその『波紋』が止まってしまった場合は——」

「……どうなる？」

永琳は、すぐには答えなかった。

その沈黙が、具体的な言葉だけでは伝わらない『危機感』を直に伝えていた。

「肉体の老化が始まることは、まず間違いないわ」

全ては予測でしかない考えの中から、一番確実なものを最初に答えた。

「かといって、そのまま単純に肉体が老いていくだけでは終わらないでしょう。」

波紋によって止められていた分、単純に歳を取って老衰するなんて都合の良い話ではないわ。

細胞が、一気に死滅していく。その過程で、必ず何かしらの問題が発生するはずよ。先程も言ったように、貴女は人間の限界を超えている。つまり、それだけ肉体を酷使してきたということなのだから」

「具体的には、どんな問題が起きる可能性がある？」

先代は、自分自身の未来について恐れずに尋ねた。

深呼吸を一つ挟み、永琳は答えた。

「——波紋を止めて一年以内に、貴女は重度の身体障害か病気を発症する可能性が高いわ」

既に先代が重病に冒された患者であるかのように、永琳は厳かに宣告した。

それに対して、先代はしばらくの間沈黙だけを反応として返した。
ショックを受けているのだろうか？

目の前の人間が、そんな柔な性格だとは今更思わない。しかし、深刻な話には違いない。

永琳は先代の様子を探りながら、同時に周囲にも気を配っていた。離れた位置に居る鈴仙達三人以外、誰もいない。

あの新聞の天狗のように、何者かがこの話を聞いていないかを警戒していた。

それは医者としてなのか、あるいは別の理由があるのか、自分自身でも分からなかったが——永琳は先代が望む限り、この事実を誰にも話すまいと決めていた。

「そうか」

やがて、先代は短く言葉を返した。

「分かった」

それだけ答えた。

あとは何も言わない。

あまりにも短く、淡泊な応答だったので、永琳は思わず口を出していた。

「貴女は、いずれ自ら波紋を止めると言っていたわね？」

「ああ」

「本気なの？」

「本気だ」

「その不老の技術を極めるつもりはないの？」

永琳は純粹な疑問を抱いていた。

ここまで深刻な話をしてきたが、これらの問題に対する解決策が無いわけではない。

むしろ彼女だからこそ、普通の人間と比べて多くの道が残されている。

人間から仙人へと生まれ変わる方法もある。

先代の持つ友好関係からすれば、今回のように知己の力を借りて、妖怪化など人間以外の者になってしまうことも容易に実現出来るだろう。

人間という器に縛られたままだからこそ、ここまで歪な問題が生ま

れてしまうのであり、そこから抜け出すだけで様々な事柄が解決するのだ。

しかし、彼女はそれを頑なに拒んでいる。

永琳には、先代の拘りが理解出来なかった。

「私は人間として死ぬつもりだ」

「何故？」

先代は、そこで初めて穏やかな笑みを浮かべた。

「私は霊夢の母親だからな。親として、最後の仕事を果たしたい」

「親としての仕事とは？」

「人が生まれて、いずれ死ぬと教えることだ」

「――」

「あの子がいずれ、子供を生んで、親になった時に知っておかなければならないことだ」

「――」

「人間が、これまでずっと繰り返してきたことなんだよ」

言い聞かせるような先代の静かな声に、今度は永琳が沈黙を返す番だった。

――短い命を散らし、親から子へと紡いでいく。

地上で生きる者達が繰り返し返す生と死の営みを、永琳も十分に理解していた。

ただ、それを仕組みとして理解はしても、それ自体に感動や尊さといったものを感じることは一度も無かった。

月人として、穢れに犯され、不完全さを抱えた生命の終わりに不憫さを僅かに感じる程度だった。

しかし今、改めて考えさせられている。

底知れぬ人物であると警戒し、一目置いていた先代巫女。

何の気の迷いか、長い間誰にも明かすことの無かった自らの弱みを、一部とはいえ見せてしまった相手である。

そんな彼女が、他の人間と同じように、親を語り、子供を語り、そして死を語る――。

当たり前の母親としての姿が、そこに在った。

——親。子供。母。娘。

——そうか。

永琳は唐突に思い出した。

——私は、月も地上も含め、誰よりも長く生きながら。

——まだ一度も、母になったことはないのだ。

奇妙な納得が、永琳の胸にあつた疑問という穴にスツポリと嵌つた。

先代の答えに『そういうものなのか』という、理屈を抜きにした納得だけを素直に感じていた。

「……ならば、医者としてこれ以上言うことはないわね」

「ああ。忠告ありがとう」

「ただの義務と義理よ」

「義理か」

「そう、義理。貴女には、少しばかりお世話になったからね」

その言葉の真意は、異変に関してではなく、以前先代に吐き出した愚痴のような告白についてだったが、永琳は必要以上に説明しようと思わなかった。

おそらく意味を誤解しているだろう、先代が小さく頷くのを見て、内心で苦笑する。

あの時のことは、今では不覚に思っている。

自分はもちろん、輝夜も、長い年月を後悔だけしながら過ごしてきたわけではないのだ。

永遠の生き方に対する答えは、誰かに教えられるものではない。

与えられた答えなど、脆いものだ。長い時間があっさり引き剥がしてしまう。

今回の一件で妹紅は迷いながら自ら答えを出した。

それを見て、自分と輝夜は迷った。

しかし、まだまだ続く永遠の時間の中で、状況が逆になることはある。そして、それは繰り返されるだろう。

生きていれば、迷うのは当然なのだ。

その迷いの最中で、つい目の前に現れた人間に自分は弱音を溢して

しまった。

これを何と表現していいのか分からない。

今は義理と言ったが、貸しかもしれない。あるいは弱味か。

いずれにせよ、目の前の人間に抱く感情を、随分と複雑なものにしてくれたものだった。

「貴女が望むなら、先程話した内容は誰にも教えないでおくわ」

「そうしてくれると助かる」

結局、こんな風に打算混じりの気遣いをしてしまう自分と、そんな自分に素直な好意を示す先代を比べて、永琳は少しだけ憂鬱な気分になるのだった。

それを誤魔化す為に、しばらくの間永琳は先代と他愛もない雑談を交わした。

——一方、話し込む二人を見ていた鈴仙は、てゐを促してその場を離れていた。

永遠亭の人間以外と、あそこまでじっくり話し合う師匠の姿は初めて見る。

これまでまともな人間など訪れたことのない場所なので、当然と言えば当然だったが、鈴仙は複雑な気分だった。

「……あの異変以来、なんだか周りがどんどん複雑になっていってる気がする」

「鈴仙って、人間嫌いっていうより引き籠もりだよな。変化を嫌ってるってゆーか」

「うっさい。人間なんて、穢らわしくて、面倒臭いだけじゃない」
てゐの皮肉に返しながら、鈴仙は無意識に片腕を押さえていた。

押さえた手のひらの下には、未だに完治していない傷が残っている。

あの異変の夜に、咲夜から受けた傷だった。

「気に入らない……」

鈴仙は誰にもなく悪態を吐いた。

「——あれ？　っていうか、あの妖精はどうしたのよ？」

いつの間にか姿を消してしまったチルノの存在に気付く。

「やばっ！ ひよつとして永遠亭の中に潜り込んだんじゃ……!?!」

「いや、あいつ先代巫女のことになると素直だしさ。師匠との話が終わるまで大人しくしてろーって言ったたら、分かったけどヒマーって返ってきて、勝手に歩き回られても困るから——」

「え、何？ 上手くここから帰したの？」

「同じく暇してるはずの姫様の部屋を紹介した」

「アホかー!」

鈴仙は絶叫して、輝夜のいる部屋へと走り出した。

「あの異変以来、姫様が部屋に籠もり気味なの知ってんでしょーが!」

「うん、だからいい気分転換になると思ってさ」

「あのバカ妖精が無礼なこととして機嫌損ねるに決まってるでしょ!」

「ああつ、もう! さっさと摘み出さないと!」

「結構上手くやっているとと思うけどなー」

「何を根拠にそんな——!」

言いかけた鈴仙は、輝夜の部屋の近くまで来たところで不意に声を掛けられた。

障子越しに聞こえる、輝夜自身の声だった。

『鈴仙、そこにいる?』

「は、はい! そこに妖精が来てませんか!?!」

『ああ、今日の前にいるわよ』

障子戸は閉ざされている。

許可なく開けることは出来ない為、中の様子は見えないが、チルノが同じ部屋にいるらしかった。

鈴仙は青褪めた。

「すぐに追い出します!」

『いや、いいわよ。代わりにお茶持ってきてくれないかしら?』

「……はい?」

『お茶。あと、お菓子もね』

『あたい、甘い奴がいい!』

チルノが遠慮なくリクエストした。

『甘い奴ね』

苦笑混じりの輝夜の声が続けて聞こえて、鈴仙は一瞬呆気に取られていた。

輝夜の様子は、明らかに機嫌が良さそうに感じる。

恐れ多くも蓬萊山輝夜は永遠亭の主であり、鈴仙にとって上司の更
に上司といった立場だった。

立場を抜きにしても、眩暈のするような美貌や生まれ持った高貴さ
など、一兵卒に過ぎない自分との違いを明確に感じる。

特にここ数日は物憂げな様子で、普段より増して近寄り難かった。
その雰囲気、今は一変している。

初対面であるはずのチルノが、この短時間で一体どうやって彼女に
取り入ったのか、鈴仙には想像も出来なかった。

「だから言ったでしょ」

「……あの妖精、何者なのよ?」

「さあ、蓬萊人に好かれる体質でもしてるんじゃない?」

鈴仙の神妙な問い掛けに対して、てゐは悪戯っぽく笑いながら答え
た。



【妖怪の山での彼是】

永琳を含む関係者全員に礼を言った後、先代は永遠亭を発った。

迷いの竹林を抜け、香霖堂に立ち寄り、田畑、集落、森を駆け抜け
た。

能力のある者は空を飛び、一般の人間でも馬などを使う距離を、ひ
たすら走って移動している。

しかし、その表情に、疲れたものは無い。

むしろ動く足に合わせて、全身の調子が良くなってさえいる。

ここに至って、先代巫女は完全な復活を遂げていた。

そのまま幻想郷中を走り回りそうな勢いだった先代は、やがてゆっ
くりと走るペースを落としていった。

向かう先には、妖怪の山の麓が近づいてきている。

人里に帰るには、どう考えても遠回りをしなければならぬルートにある場所だ。

先代は、あえてこの場所へ寄ったのだった。

麓付近で完全に走るのを止め、あとはゆつくりと歩いて山道を登っていく。

先代は、周囲の風景を見渡して、分からないほど小さな憧憬の笑みを浮かべていた。

この道は、かつて歩いた道である。

人里で騒ぎを起こした妖怪を追って、妖怪の山に踏み込んだ時に進んだ道と同じだった。

あの時の記憶にある風景と、今の風景は全く変わっていないように思える。

つまり、このまま進めば、あの時と同じようなことが起こるはずだった。

「——そこでお止まり下さい」

そう、声を掛けられ、先代は素直にその場で立ち止まった。

「ここから先は天狗の集落。何用でしょうか？ 先代巫女様」

あの時と同じ、天狗の領域に近づいた先代の目の前に降り立ったのは、哨戒天狗の犬走権だった。

数十年経っても、妖怪である彼女の姿形は変わらない。

同じ盾と剣を帯び、同じように厳格な面構えで侵入者と対峙している。

ただ一つ違うのは、当時から現在に至るまでの間で、先代巫女——正確には博麗の巫女——の権威が天狗の社会にも広まっているという点だった。

権は初対面の頃とは違い、先代に対して十分な敬意を払いながら対応した。

「……敬語を、やめてくれないか」

「そういうわけには参りません」

何処か懇願するような先代に対して、権はハッキリと言った。

こういつた頑なな部分は、相手がどんな立場であつても変わらなかつた。

「それで、何用でしょうか？」

先代は、困つたように笑つた。

「用は、無いんだ」

「どういう意味でしょうか？」

「貴女に会う為に来たんだ」

権は沈黙した。

その瞳は、珍しく意表を突かれた動揺で揺れていた。

珍しいといえれば先代の方も、普段の凜とした佇まいを崩し、何処か落ち着かない様子で権の顔色を伺っている。

「その……実は、足を怪我していて」

「……知っています」

「だが、もう治つた。見ての通り、元気だ」

「よかつたです」

「ああ。それで、その……それだけだ」

先代の話は、そこで終わってしまった。

本当に、用件はそれだけらしい。

ただ、自分の回復を伝える為だけにやってきたのだ。

しかも、例えば天魔や大天狗のような天狗社会で立場のある者にはなく、下っ端である権に直接会つて伝える為だけに。

何も言わずにじつと見つめる権の反応を悪い意味で受け取つたのか、先代は気まずそうに俯いた。

「……すまない。邪魔した」

逃げるように踵を返す。

「――待て」

権が、それを呼び止めていた。

敬語ではなくなっている。

まるで、初めて会つた頃のようにだった。

「これを持っていけ」

振り返つた先代の胸に突きつけるように、小さな袋を差し出した。

使い込まれているが、ボロではない。

口の部分を結んだ紐だけが新しく、妙に浮いている。

先代は、その場で中身を見た。

「……木の実か？」

「この山で採れた物だ。栄養価に優れている。美味くはないが」

椀の口ぶりからして、普段から口にしてしている物らしい。

中身の木の実は数種類あり、幾つかは先代にも見覚えのあるものだった。

かつて、妖怪の山で修行していた頃に食べたことのあるものだ。

懐かしい感覚に、先代は思わず笑みを浮かべていた。

「私が渡せる見舞いの品は、それくらいだ」

椀は変わらない仏頂面のまま、意外なことを言った。

袋の中にぎっしりと詰まった木の実の量や種類。わざわざそれらしく見せる為に紐を新調した袋といい、これがある程度手間を掛けて準備された物なのだと分かる。

椀は基本的に人里には訪れないし、哨戒任務を疎かにすることもない。

先代と出会う機会は、限りなく少なかった。

それでも、彼女はこれを用意していたのだ。

椀の事情を何処まで察したものか、先代は穏やかな笑みを向けた。

「ありがとう」

ほとんどの者に見せたことのない、女性らしい朗らかで優しい笑顔だった。

「体を労われよ」

「ああ」

「じゃあ」

「うん。その……」

「……また」

「ああ、また。また……今度」

何処までも不器用な二人の、再会を願う言葉だった。

今度こそ、先代は立ち去る為に背を向けた。

侵入者に対応して仕事を果たしたはずの椀だが、すぐに哨戒には戻らずに、その場に留まったまま先代の背中を見送っていた。

二人の別れは、しめやかに行われた。

——と。

そんな二人の元へ猛スピードで飛んでくる、別の天狗の姿があった。

「ああああーっ！っ！ ちよつと待って、待って！ 待ってえ!!」

慌しく降り立った天狗の正体は、姫海棠はたてだった。

よほど急いで来たらしい。息があがっていた。

顔も紅潮しているが、それはただ体調だけの問題ではないらしい。

はたては興奮——というよりも緊張を必死で隠すように、殊更明るい笑顔を先代に向けた。

「久しぶりね、元気してた?」

戸惑った様子先代が何か言い返す前に、捲くし立てるように言葉を続ける。

「いやあー、文の新聞であんたが復帰したっていうの知ってさー！ 永遠亭ね、あたしもお見舞い行こうかなーって思ってたのよ？ でもね、別に尻込みしたってわけじゃないんだけど、異変のあった直後じゃない？ 天狗のあたしが顔出して話がややこしくなったらこまるかなあって思ってた。別に知らない場所に気後れしたってわけじゃないんだけどね。ちよつと躊躇ったっていうか、色々複雑に考えすぎちゃってねー。別に今更顔合わせるのが不安だったってわけじゃないけど、実際あれ以来ずっと会ってないからどーかなー？ って思っちゃってね。でも、結局すぐに退院出来たみたいじゃない？ だからね、別にあんたのことがどうでもいいからお見舞いに行かなかつたなんてことはないからっ、絶対!!」

喋れば喋るほど混乱していくようだったが、はたては勢いだけで言い切った。

先代も、とりあえず彼女が必死に本心を伝えようとしている気概だけは感じ取れたので、ただ黙って頷いていた。

そのまま間髪入れずに、はたては背中に隠して持っていた——はみ

出て見えてた——花束を突きつけた。

「それで、これがお見舞いの品ね！ 本当は今日にでも持つていこうと思つてただけど、元氣みたいだから復帰祝いつてことで！」

「あ……ありがとう」

「うんっ、よし！ ごめんね、ありきたりな物で。いやあ、変に凝つた物を渡しても困るかなーって思つてね。うん、そういうわけだから！」

はたては何よりも自分を納得させるように、やたらと頷きながら意味もなく笑つた。

先程から、一度も先代の眼を見ていない。

顔は既に真っ赤になつて、あがつた息は落ち着くどころかますます荒くなつているようだった。

花束を受け取つた先代は、戸惑いながらも口を開いた。

「あ……」

「うん、何？」

「貴女の名前を覚えてくれないか？」

「――」

その一言で、はたての全てが停止した。

声も、思考も、あと呼吸も。

「初対面だったと、思うんだが……」

先代は何うように尋ねた。

はたては答えることが出来なかった。

正確には、何の反応も返すことが出来なかった。

全身が硬直し、ぷつぷつと汗が浮き出ている。

吐き気を堪えているように青褪めたはたての顔色を察して、権がそつと近寄つた。

「彼女の方は、はたてさんと今日まで面識がありません」

権ははたてにだけ聞こえる声で、ここまでの勘違いを訂正した。

「――姫海棠はたて、デス」

はたては抑揚のない声で、かろうじてそれだけ答えた。

「そうか。わざわざありがとう、姫海棠さん」

「……彼女は『はたて』でいい、と言っている」

椀が泣けるほど素晴らしいフオローを入れた。

「じゃあ、はたて。ありがとう。花は家に飾るよ」

「イエイエ、ドウイタシマシテ」

「じゃあ、改めて。また」

「体二氣フツケテネ」

奇跡的に受け答えの出来たはたては、壊れた人形のように去っていく先代へ手を振り続けた。

未だに戸惑いが抜けないのだろう。先代は去り際、何度も振り返ってはたてを見ていた。

その度に、はたては心にダメージを負った。

やがて、先代の姿が見えなくなるまで遠ざかると、はたては全てから開放されたかのようにその場で吐いた。

——そうして、先代が立ち去って、すぐのことである。

膝を抱えて座り込んだはたてと、彼女の吐瀉物を始末する椀。

二人の前に降り立ったのは、射命丸文だった。

「ぎゃっはははは!! 初対面って……初対面ってあーた!」

文は下品に爆笑していた。

一連のやりとりを、全て遠巻きに見ていたらしい。

「ねえ、どんな気持ち? 親代わりに育てたはずの相手が自分の顔さえ知らなかった時って、どんな気持ち?」

文ははたての周りで軽快にステップしながら、嫌らしく耳元で囁いた。

面白半分に煽っているが、残り半分は憂さ晴らしである。

かつて、先代巫女がこの山で起こした事件と、そこで自分を巻き込んで暴れまわったはたての所業を、未だに根に持っているのだった。

文にとって、あの時の一連の出来事は過去のことであり、忘れた内容である。

それを現在に至るまで、事あるごとに思い出させようとするはたての言動が、故意にせよ無意識にせよ、気に入らなかった。

「あなたのしつこい思い入れも、当人からすればこんなモンって話よ。あれから何年経ったと思ってるの？ 妖怪の山での事件自体だつて、先代当人からすればもう昔の話でしょ。人間と妖怪じゃ、時間の感覚が違うのよ」

「……うるさい」

「本当に今更だわ。今回の切欠がなかったら、初対面すら済ませずに十年、二十年と経って、気が付けばあっちが死んでいなくなつたのよ」

「うるさいわね、そうはならなかつたでしょ！ 確かに実際に会うのは初めてだつて忘れてたけど、これでちゃんと顔見知りになつたでしょーがっ！」

「そうねー、恥かいた分の意味があつたかは分からないけどー」

「あつたわよ、十分っ！ 名前で呼んでもらえたし！」

「それに何の意味があるのか私には分からないけど……まあ、よかつたじゃない？ 今回のお見舞いの花束は無駄にならなくて。」

先代が怪我したつて知つた時から、定期的に買つては枯らせて、買つては枯らせて——ねえ、家の花瓶随分増えたけど、これからどうすんの？ あれ、もう捨てるの？」

はたての家を訪れる度に思つていたことまでネタにして、文は徹底的にからかつた。

しかし、ひたすら耐え忍んでいたはたてが、その一言でギラリと眼光を輝かせる。

目の前のうざい得意顔を打ち砕く為に、反撃を繰り出した。

「——あーあ、そおーねえー。よかつたら、あんたが使つてよ。この間買つてた花、勿体無いでしょ？」

それまでの浮かれた気分が吹き飛び、文は途端に顔色を変えた。

「永遠亭に潜入したのよねー、新聞の写真撮る為に。いや、ホントあんたつてば行動力あるわー、あたしも見習いたいわー。」

あれれ、でもおっかーしーぞー？ あんた、その時持つつた花を、どうして持つて帰つてきてんの？ つつか、なんで花なんか持つて取材に行つてんの？」

「あ、あんた……なんでそれ知って……!?!」

「いや、あたしはただあんたが珍しく花を買ってるの見たから、そのこと覚えてただけだけど」

「ぐっ!? カマかけか、はたてのクセに小癩な——!」

「はい、自爆確定! なによ、この根性曲がり! あんたこそ、あの子のこと心配して真っ先にお見舞いに行こうとしてたんじゃない?!」
「昔から、その思い込みの激しい勘違いをなんとかしなさいよ! あれは礼儀としての手土産よ、永遠亭に対するね! 結局使わなかったけど!」

「出たよ、出ましたよ! あんたこそ、その素直になれない性根をなんとかしなさいよ! さっさとあの子を追っかけて、退院祝いの一言でも良いから掛けてきなさい!」

「いやー、本当にあんたって人の話聞かないわよねー! バカじゃないの!?!」

「あの子の足が治るって話、あたしはあんたの新聞で初めて知ったのよ。他の鴉天狗も知らなかったし。どんだけ早耳なの、あんた!」

散々口ではあーだこーだ言いながら、あの子に対してだけ行動があらさまなのよ! あんたの言動の不一致には、前々から見ててイライラしてたわ!」

「別に私が記者として優秀すぎるってだけですしー」

「いいから、さっさとあの子に会ってこい!」

「アーアー、聞こえませーん! 何も聞こえませーん!」

「このへそ曲がりっ!」

延々と続く文とはたての言い争いの傍らで、椀は山の麓を見つめた。

千里眼で確認すると、先代はとっくに妖怪の山を去った後だった。

椀は二人に気付かれないように、小さくため息を吐いた。



【紅魔館の交々】

「――先代が来ているの?」

小悪魔から報告を受けたパチュリーは、読んでいた本から顔を上げた。

「はい。門前で美鈴さんと話してますよ」

「そう。無事、回復出来たようね」

「時間の都合が良ければ、パチュリー様にお礼を言いたいんですけど?」

「律儀ね」

パチュリーは苦笑を浮かべた。

礼を言われるほどではない、というのが本音だった。

確かに、先代の足を治療する折に協力はしたが、それも微々たるものだと思っている。

むしろ、ほんの少しだが先代に対して後ろめたさを感じていた。

先代が足に障害を抱えた当初、パチュリーはそのことについて方々から相談を受けていた。

事情を知った美鈴やフランドールからはもちろん、霊夢や魔理沙、果てはあの八雲紫までがここへ訪れ、同じような質問をしていく。

――魔法を使って、先代の足を治せないか?

その度に思案を繰り返したが、結局無理だと分かった。

ただ『先代を再び歩けるようにする』というだけであれば、可能だった。

ただし、それをすれば先代は人間の枠組みから外れることになるだろう。

人間というカテゴリーの明確な境界などパチュリーにも判断出来ないが、動かなくなつた足の代わりに『別の何か』を嵌め込む方法が、果たして治療と呼べるのか断言も出来なかった。

結局、提案だけをして、それを聞いた者達は皆首を横に振つたのだ。先代そのものを人間から別のものへ変質させる方法に関しては、聞くまでもない。

あの時、パチュリーは無力だった。

そんな自分に代わって奇跡を起こしたのが、八意永琳の技術だ。

自分はただ、その為に必要な物の一部を用意したに過ぎない。

「一応、気にしなくていいと伝えておいて頂戴」

パチュリーは言外に、先代との面会を断った。

「会わないんですか？」

「今は『来客中』だしね」

「——分かりました。」

先代はレミリア様達が起きている夜にまた来ると仰ってましたし、その時にでも気が向いたら、どうぞ」

「ええ」

「それでは、先代に伝えてきます」

「ああ、小悪魔」

「はい？」

「新しい仕事をあげるから、さっさと戻ってきなさいね」

「……チツ」

小悪魔はいい笑顔を浮かべたまま、パチュリーにだけかろうじて聞こえるような舌打ちをした。

もちろん、わざとである。

既に与えていた仕事を全て終わらせるほど有能な使い魔だが、その理由が『早く終わらせて先代にちよっかいを出す為』ということ、パチュリーは見抜いていた。

「それでは——ごゆっくり」

含みある言い方をして、小悪魔は図書館を出ていった。

相変わらず抜け目のない使い魔に半分だけ感心しながら、残り半分をため息にして吐き出した。

扉が閉まり、周囲に誰もいなくなったのを確認して、背後の本棚に声を掛ける。

「出てきなさい、魔理沙」

「……バレてたか」

風呂敷を背負った魔理沙が、バツの悪そうな笑みを浮かべて姿を現した。

「こそ泥みたいな真似はやめなさい。強盗みたいな真似も、だけど」

「美鈴には気づかれなかったんだけどな」

「先代がいたからよ。あるいは、分かっただけで通したか」

パチュリーは断言した。

美鈴の門番としての腕を欠片も疑っていない。

「眼、治ったみたいね」

しおりを挟んで本を閉じ、座っていた椅子から立ち上がって、パチュリーは魔理沙と面と向かい合った。

外に出るところか動くことすら億劫そうな普段の様子とは違っていた。

真っ直ぐに見つめるパチュリーの視線を受けて、逆に魔理沙の方が珍しく物怖じしてしまう。

「ああ。パチュリーには、この眼の秘密が全部分かってたんだな」

「ええ、魔法使いだもの」

「自分の未熟さを痛感するぜ」

「謙虚さは美德、卑屈さは悪徳よ。どっちも魔理沙には似合わないけど」

「……毎回、言い方がキツイぜ」

魔理沙は困ったように笑うだけだった。

普段なら、減らず口の一つも返しているはずである。

パチュリーが違和感を感じている間に、魔理沙は持ってきた風呂敷包みを机の上に広げた。

少々乱暴な手つきだったが、中に入っていた本はきっちりと大きさを揃えて積み上げられていた。

「見覚えのある本ね？」

パチュリーは、その本が全てこの図書館にあった物だと記憶していた。

「借りてた本、返すぜ」

「死ぬまで借りるんじゃないの？」

「泥棒はいけないことだぜ」

「どの口が言うんだか」

本の中身を確認しながら、パチュリーはさりげなく尋ねた。

「何かあったの？」

「……別に。心境の変化さ」

「霊夢に負けたらしいわね」

魔理沙は思わず、ぐうつと奇妙な唸り声を上げていた。

「……見てたのかよ」

「聞いたのよ。それで、心境の変化っていうのは、まさか負け犬根性のことじゃないわよね？」

パチュリーは容赦なく問い詰めた。

その挑発に魔理沙は激することもなく、即答もしなかった。

「霊夢は……天才だよ。しかも、誰かの為に努力まで出来る奴だから、手に負えないや」

弱々しい、虚勢の笑みを浮かべながら、かろうじてそれだけ答える。

それは分かりづらいが、間違いなく魔理沙の弱音だった。

「まっ、だからって負けっぱなしは気に入らないけどな！」

魔理沙は殊更明るく振舞ってみせた。

勘繰るまでもない。精一杯の強がりなのだと分かった。

本人も、それを自覚しているだろう。

魔理沙は、パチュリーが身を案じるほどの無茶をした。

それも全て、霊夢に勝つ為だったのだ。

そして、その努力と賭けは、あの異変の戦いで全て無駄に終わった。

今、魔理沙が感じている無念を、パチュリーは察してやる事が出来ない。

それは、自分が魔法使いだからだ。

魔の道理を知り、操る為に人心を棄て、あらゆる物事に対して常に平静の心で応じなければならぬ。

一つの問題や戦いに、全ての力を使い果たすなど浅はかだ。

魔法使いにとつての全力とは、常に幾らかの余力を残したものを指す。

全身全霊を懸けて何かに挑み、万が一失敗した後のことを考慮しないのは愚かなことなのだ。

だから、魔理沙は魔法使いとして未熟だった。

だから、パチュリーは魔理沙の気持ちを分かってやる事が出来なかった。

「——魔法使いでは、博麗の巫女には勝てないでしょうね」

パチュリーは言った。

それに対して、さすがに何かを言い返そうとした魔理沙を遮って、更に続けた。

「でも、あの霊夢に勝てなければ、魔理沙は魔法使いになれないでしょうね」

霊夢に勝ちたい、という強い執着心——それを失くさなければ、魔理沙は人心を棄却した本当の魔法使いにはなれない。

その結論を察したわけではないだろうが、魔理沙は納得のいかない表情を浮かべた。

「……分からないな。何が言いたいんだ？ ひよつとして、私は励まされてるのか？」

「さあね。私にも自分が何を言いたいのか分からないわ」
「おいっ」

「とりあえず、私が確実に言えることを言ってみただけよ」
「なんだよ、つまりさっきのはアドバイスってことなのか？」

だとしたら、やっぱり分かりづらいぜ。もうちよつと、わたしに必要そうな内容を要点だけ教えてくれよ」

「無理よ。私にはアナタの考えがさっぱり理解出来ないんだから」
パチュリーは疲れたように、再び椅子にもたれ掛かった。

「何故、あの博麗霊夢にそこまでこだわるのか？ その為に無茶をすめるのか？ 真面目に魔法使いになるつもりはあるのか？ 私に何を求めているのか？ そもそも、何故私はアナタと出会ってしまったのか？ ——分からないことだらけよ」

「……最後の奴、何気に酷くないか？」

「うるさい。アナタといると、調子が狂うのよ。私は、分からないことが嫌いよ」

「——」
「もつと、私に分かる理屈で行動しなさい。感情を理由にされても、私

には何も察せないのよ。この脳筋。馬鹿。死ね」

「……やっぱ、ひでえ」

話している内に、自分でも支離滅裂になって、最後にはもうヤケクソになったらしい。

パチュリーの罵倒を受けて、魔理沙はガツクリと肩を落とした。

霊夢との勝負の結果について、色々と引き摺るものがあつたが、それらがどうでもよくなるくらい更に落ち込んでいた。

——ここは、弱音を吐いたわたしに対して、激励なり叱責なりくれる場面じゃないか？

そう打算して、ここへやって来たわけでも話をしたわけでもないが、魔理沙は内心で愚痴らずにはいられなかった。

いや、もう自分のやるべきことは分かっているんだ。諦めるという選択肢は無い。

だが、しかし。もつと、こう……あつてもいいだろう？ 友達なんだから。友達……だよな？

悩む内に、魔理沙はますます気持ち沈んでいった。

二人して黙り込み、気まずい沈黙が落ちる。

どちらも、モヤモヤとした気分だった。

互いに相手に何かを言いたいのに、言えない。

言つたところで、このまま話が噛み合うとは思えなかった。

かといって、このまま別れることも出来ない。

追い討ちをかけられて弱りきつた魔理沙は自らの行動に迷い、逆にパチュリーは半ば意地になって椅子の上からもう動かないと決めている。

二人の間に流れていく時間だけが無情であり、また同時にいずれ訪れる救いでもあつた。

「——あのまま『暗くなったから帰る』って言える時間になるまで、二人して延々待つつもりなんですかねえ？」

「気になるんだつたら、フオローを入れてきたらどうかしら？」

「大丈夫。時間が解決してくれます」

「時間は万能ね」

二人のいるテーブルから離れ、本棚の陰に隠れる位置にある別の読書用のテーブル。

そこに、図書館を出ていったはずの小悪魔と、本を読むアリスの姿があった。

小悪魔は、出ていったと見せかけて、素早く図書館に戻り、魔理沙とパチュリーのやりとりを逐一盗み見ていたのだ。

一方のアリスは、最初から客としてこの図書館に居座っていた。パチュリーの言っていた『来客中』とは、本来ならばアリスのことである。

「しかし、パチュリー様つてば完全にアリスさんのこと忘れてますね」
「別に、私はただの図書館の利用客でしょう。気にしてもらうほどのことではないわ」

「それはそうですが、仮にも同じレベルの魔法使いが自分の図書館を使っている、その動向を気にしないというのは危機管理の面で少々疎かではないかと」

「ふむ、一理あるわね。彼女は優秀な魔法使いだと思うけど、そういうたアンバランスな欠点が、たまに見えるわ」

「ソフフ、さすがに鋭い」

小悪魔は愉快そうに同意した。

「しかし、それが『いい』んですよ。私は欠点とは思いませんよー？」
「そうかしら？」

「ええ、ええ。そうなんです。」

魔理沙さんは魔法使いとして未熟ですが、パチュリー様は人間として未熟なんです。そこが、いいんです。私は、そんなお二人とも大好きなんです」

「悪魔的な感想ね」

「ええ、悪魔なんです。完璧な魔法使いであるアリスさんには分かりません」

「買い被りね。私も、決して完璧ではないわ」

アリスは本に視線を落としたまま、含みのある解答をした。

「ほう、そうなんですか」

「そうなのよ」

「でも、不思議ですね。その『完璧ではない』理由や事情を、私は知りたいと思わないし、興味も湧かないんです」

「そう。よかつたわ」

「ええ。残念です」

二人は上辺だけの会話をそこで打ち切り、それきりお互いへの興味を完全に失っていた。

「では、改めて用事を済ませてきます」

「ええ。いつてらっしゃい」

形だけの挨拶を交わす。

そこで不意に、アリスは先程から気になっていたことを、ついとばかりに小悪魔へ尋ねた。

「——そういえば、その左手はどうしたの？」

上手く形は取り繕っているけど、機能はしていないでしょう。手首から先に、何か大きな霊的なダメージを受けたようだけど」

「ソッフ、やっぱり気付かれちゃいましたか。妹様や、パチュリー様はちゃんと騙せたんですけどね。」

まあ、これはアレです。名誉の勲章って奴です。宜しければ、このことは黙って下さいね。どうせ、あと数日で完全に治りますし、私は妹様のこと本当に好きですから」

「そう。正直、半分くらい何を言っているのか分からないけど、黙ってろと言うのなら別に話す理由もないわ」

「ありがとうございます。アナタのそういう隙の無いところが、可愛げがなくて嫌いなんですよ」

「褒めてくれてありがとうございます」

小悪魔とアリスは、一度も眼を合わせずに、今度こそ別れた。



【人里での交差】

人里の診療所の中は、未だ休業状態であるにも関わらず騒がしかった。

今日、先代巫女が治療を終えて帰ってくる。

その前に、慧音が訪れて掃除をしているのだった。

当然、先代自身には許可を貰ってある。

長く掛かると予想されていた永遠亭への入院期間は、実際のところかなり短くなった。

普段から先代自身が掃除もしている。

足が不自由になつて以来隅々まで手が届かなくなつたとはいえ、半日もあれば慧音一人でも全て終わらせることが出来た。

「慧音、戻ったよー」

「おお、妹紅。ちょうど、掃除も終わったところだ」

買出しに行っていた妹紅が診療所へ戻ってきた。

当初は掃除を手伝う予定だったが、お祝いに食事の準備もしようという提案が出て、急遽食材の買出し役に回つたのだ。

「……やばい、なんか光って見える」

「いや、つついっ気合いが入ってしまったな」

隅々までピカピカに——そういう表現がまさに相応しい、清掃後の室内を見渡して、妹紅がため息を吐いた。

正直、やりすぎではないかと思う。

しかし、当の慧音は得意そうな顔だったので、黙っていた。

「食材は、ちゃんと買えたか？」

「うん、全部揃ってたわ。これで予定通りの料理が作れそうね」

「では、早速取り掛かろう。先代も、夕方前には帰ってくるはずだ」

「ああ、実はそのことなんだけどね——」

妹紅が戸を潜つて中に入ると、彼女だけではなく、更に二人、診療所に足を踏み入れる者があつた。

一人は勝手知つたる家であるかのように遠慮なく、もう一人は中の様子を伺いながらおそおすと入ってくる。

「お邪魔するわ」

「お、お邪魔します。いや、本当。話を聞く限りお邪魔みたいで……す

みません」

「むっ、風見幽香か。それと――」

「魂魄妖夢と申します」

普段通り余裕と貫禄の態度を見せる幽香と、反して恐縮した様子の妖夢だった。

慧音は幽香にのみ面識があり、妹紅は二人とも面識がない。

顔を合わせるには、奇妙な組み合わせだった。

「妖怪の方とは知り合いか。ええとね、二人とも診療所に用があつて、先代とも知り合いみたいだったから入ってもらつたのよ」

「そうか。今はまだいないが、先代はもうすぐ帰ってくるだろう。よければ、ここで待つか？」

「いいえ、遠慮しておくわ」

「あの、私も……すみません。用というほどではないですし、先代様とは顔を合わせた程度の関係で……」

態度の違いはあれど、二人は似たような事情であるらしかった。

先代に明確な用事というほどではないが、診療所の近くに寄る程度の理由がある。

慧音と妹紅は思わず顔を見合わせた。

「――ふむ。まあ、無理に引き止めはしないが。」

幽香の方は、本当にいいのか？ おそらく、先代の方はお前に礼を言いたいはずだ」

先代の足を治療する折に募った協力者の中に、幽香がいたことを慧音は知っていた。

彼女の提供した薬草は大いに役に立ったと聞く。

慧音の問い掛けに対して、幽香は鼻で軽く笑って答えた。

「私が先代に貸しを作つたと、そう念を押す為にわざわざ来たと思つてるの？」

「いや、欠片も思わん。むしろ、礼を言われたらお前は嫌がるだろうな」

「……言うようになったわね」

「言うようになったのだ」

慧音は不敵な笑みで答えた。

以前人里で会った時とは違う。余裕の無い一触即発の状況にはならなかった。

幽香は改めて、真っ直ぐに慧音を見据えた。

慧音と会って以来、初めてのことだった。

「これ、お祝いの品よ。先代に渡しておいて頂戴」

差し出した手のひらから、パラパラと数個の種が落ちてきて、慧音は慌ててそれを受け取った。

最初から手の中にあつた物ではない。

幽香の能力によって生み出された、不可思議な種だ。

「これは？」

「花の種よ。植えるなら鉢植えがおすすめね。室内に飾りなさい」

「どんな花なんだ？」

「素朴な見た目よ。ただ、その香りは心を落ち着かせる効果がある。診療所の飾りに、ちょうどいいんじゃない？」

素っ気無く答えて、これで本当に用は済んだとばかりに幽香は踵を返した。

玄関へ向かう途中、手持ち無沙汰だった妖夢も自然と促して連れていく。

「あの……っ」

「行くわよ。貴女の用事も、ここには無いわ」

勝手に決め付ける幽香に、しかし妖夢は抵抗しなかった。

最後に一度、慧音達に一礼をして、診療所を出ていく。

静かだが、まるで嵐のように去っていった幽香の後ろ姿を、事情の把握しきれしていない妹紅が呆然と眺めていた。

「なんか、呑まれたわね……あの幽香って妖怪の空気に」

「うむ。相変わらず、ただならぬ奴だ」

「やっぱり、大物の妖怪なの？　なんか、無害そうだったからついつい連れて来ちゃったけど」

「フラワーマスター風見幽香といえば、古参にして強力な大妖怪だ。分別はあるが、人間に対して決して友好的な相手ではない」

「うわー、やっぱり。そんな妖怪と師匠が、一体どういう関係なの？」
妹紅は、あの異変以来先代巫女のことを師匠と呼ぶようになっていた。

「幽香は、先代と一度勝負をして負けている。それで、もう一度戦いたいらしい。しかも、殺し合いが望みだ」

「予想以上に殺伐!?!」

「先代の方は、幽香を友人だと思っているらしいが」

「……前々から思ってたけど、師匠は大物だわ」

「そうだろう？ 私も同感だ!」

「いや、微妙に褒めてないからね」

慧音もちよつとズレてるよなー、と思いながら、それをおくびにも出さない妹紅だった。

「——けど、結局あの妖怪が何を思っただけで診療所の前まで来てたのか、その理由は分からなかったわね」

「それを言うなら、あの妖夢という娘もな」

二人は揃って首を傾げた。

——診療所から出た後、少し歩いた所で幽香は足を止めていた。
釣られて歩いていたら妖夢も立ち止まる。

「私は帰るわ。貴女は?」

「あ、はい。私も帰ります」

「そう。さようなら」

あつさりとした別れの挨拶だった。

二人はついさつき、顔を合わせたばかりである。

妹紅が偶然二人同時に声を掛けただけで、知り合いどころか初対面同士だった。

ただ『先代巫女の診療所の前まで寄った』という、奇妙な共通点があるだけだった。

「……貴女が、あの場所に来たのはどういう理由からですか?」

ここで別れても、何ら不自然ではない。

しかし、妖夢は思わず幽香に問い掛けていた。

ゆつくりと、日傘を差した背中が振り返る。

それだけの動作の中に、ゾクリと背筋が冷たくなるような雰囲気を妖夢は感じ取った。

「地上から伸びる一本の光の柱が、月を破壊した——」

その言葉に、妖夢は息を呑んだ。

此度の異変のことである。

この異変は『夜の明けない異変』とされ、幻想郷中に知られていた。一部の関係者以外は、あの異変が本当は『偽物の月が昇った異変』であると知らない。

そして、その偽物の月を消滅させたのが、先代巫女であるという事実も——。

「どうやら、貴女は当事者の一人のようね」

妖夢の反応から正確に真意を読み取り、幽香は愉快そうに笑った。

美しいが、やはりゾツとするような怖い笑みだった。

「貴女は——」

「分かるわ。何故なら、あの光はあいつの力だから。私が、あいつの力を見違えるはずがないから」

先取りするように、幽香は疑問に答えてみせた。

「月を落とすほどの、あの力に惹かれて、無意識にここへ足が向いていた——違う?」

「……ええ、そうです」

「貴女とは、何か通じるものがあると思ったわ」

「私の本当の目的は、先代様ではありません」

「それも分かっている。そうでなければ、こんなに仲良くお喋りは出来ないもの」

「もし、目的が先代様だとしたら、どうしていましたか?」

幽香は答えなかった。

ただ、挑むような妖夢の態度に対して、僅かに笑みを濃くしただけだった。

互いに眼は逸らさない。視線と共に、殺気に近いものがやりとりされている。

しかし、すぐに幽香の方から緊張が抜けた。

「——でも、そうではなかった」

「はい。私の目的は、博麗霊夢です」

「なるほど、先代の娘ね。私は、そっちには興味は無いわ」

「それと、先代様の力にも純粋に惹かれました。目指すべき理想です」

「貴女の相手は、どうやら月を落とすよりも難しいようね」

「はい。しかし、いずれ——」

——私も月を落としてやろう。

——私も月を斬ってやろう。

二人は自然と、同じ種類の笑みを浮かべていた。

獰猛な笑みである。

しかし、二人の間で奇妙に通じるもののある笑みだった。

あるいは、違う獲物を狙って出会った獅子と狼が、ふつとお互いを認め合って浮かべるような——獣の表情だった。

「貴女の健闘を祈っているわ」

「健闘も、祈りも要りません」

「奇遇ね。私もよ」

「では」

「ええ」

「もう二度と会わないでしょう」

「改めて、さようなら」

二匹の獣は互いに背を向け、それぞれの獲物を目指して歩いていった。

◇

【我が家への帰還】

……してえ。試合してえ。

そんなこと考えてたら永琳と戦うことになったでござるの巻。

すみません、調子に乗りました。

いくら完全復活にテンション上がってたからといって、リハビリ第

一回目が永琳とガチンコとかレベル高すぎるわ！

もちろん、永琳の方も配慮してかなり手を抜いてくれたようだが、それでも手強さを感じる相手だった。

長いこと色んな相手と戦ってきたが、さすがに合気道使ってくる相手は初めてだわ。

私も、妖怪相手が多かったので力を受け流す技術に長けていると思っていたが、やはり本場は違う。

結局、最後まで技の原理が掴めなかった。

予備知識なしに食らってたら、何も出来なかったかもしれない。波紋と刃牙の知識がなければ即死だった……。

しみじみと、怖い相手だと思いましたよ。

原作でも最強クラスのキャラだしね、緊張感半端無い。

まあ、原作キャラ相手の戦闘なんてどれ一つとして気は抜けないが。

その後で、なんかちよつと深刻な話をされたけど——それは今はいんだ。重要なことじゃない。

死ぬことを軽く捉えているわけではないが、私としては今更な話だ。

これでも一度あの世見えますし、伊達に見てねーぜ！　って感じで。

現役時代とか、戦いではもちろん修行でも命懸けだったしね。

野垂れ死にくらいは覚悟していた、若かりしあの頃。

それに比べれば、最愛の娘に最後の教えを残してこの世を去れるというのは、本当に素晴らしいくらい意味のある終わり方だと思うのだ。

その日が来るまで、あの子が目指すに相応しい背中を持った親として生き抜ければいいと思う。

永遠亭を出た私は、人里に帰るまでの道すがら、知り合いの居場所を通りながらひたすら走っていた。

リハビリのつもりだったが、途中から完全に楽しくなってきたね。半年以上ぶりの全力疾走ですよ。

そこには、元気に走り回る先代巫女の姿が――！

『もう、一度と鬼と戦ったりしないよ』

……本当にしないよ？

しなくていいよね？

な、なんかフラグっぽいので、この辺はあまり深く考えないようにしよう。

とにかく、色々と遠回りしながら帰った。

霖之助には会えたが、太陽の畑には幽香はいなかった。うーん、絶対お礼言おうと思ってたんだけどな。

会えないものは仕方ないので、その後妖怪の山と紅魔館に寄ってから、ようやく人里の家に帰り着いた。

そうそう、妖怪の山で思わぬ出来事に遭った。

私が妖怪の山に登ったのは、もう何十年も前である。

しかも、当時デカイ事件を起こしている。

歓迎はされないだろうし、そもそも覚えているかも分からなかったが――それでも、私は自分の無事を権に知らせておきたかったのだ。

もちろん、文にも知らせたかったが、こっちは結局会えなかった。

まあ、紅魔館で文々。新聞見せてもらって、私の復帰を知っていると分かったから、良しとしよう。

なんとなくギクシヤクシヤしながら権と会ったが、ここで思わぬ事態になった。

――なんと、権が私にお見舞いの品をくれたのだ！

お見舞いどころかお礼参りされる可能性の方が高いだけに、意外であり感動でもあった。

ありがとうございます。大事に食べます。

本当に嬉しかった。

思い切って会いにいつてよかったなあ。

なんだろう？ 自分でも不思議なのだが、権や文には知らない内に特別な思い入れが出来ているようだ。

別にそこまで深い付き合いでもないはずなんだが――。

そして、突然すぎて戸惑ってしまったが、なんとあの姫海棠はたて

にも退院のお祝いをもらってしまった。

なんなの？ 今日は何日なの？

何か勘違いがあったらしく、ついまともな礼が言えなかったが、今度会うことがあったら改めて言っとこう。

——でも、私っては何でとは初対面で間違いないよね？

原作知識がある分、初対面の相手に間違つて馴れ馴れしくしてしまわないように、この辺の記憶はちゃんと整理しているはずなんだが。

あと、やっぱりはたてに対しても、なんか不思議な懐かしさを感じるんだよねー。

うーむ、何故か好感触だったし、また今度訪ねてみようかな。改めて、文にも会いたいし。

そして今、私は我が家である診療所の前に立っている。家を空けた期間は長くない。

しかし、この家に両足で帰ってきたのは本当に久しぶりだ。

深呼吸を一つ挟んで、私は戸を開けた。

「おっ！ おかえり、師匠。夕飯の用意は出来てるよ」

「おかえりなさい、先代。今夜はお祝いしましょう」

妹紅と慧音が笑顔で迎え入れてくれる。

慧音から事前に待っていると話は聞いていたが、いや、なんつーか……嬉しいなあ。

永遠亭から始まって、今日一日色々な所に顔を出したが、最後に『帰ってきた』と実感する。

そういえば、自分の家でこう言うのは初めてかもしれない。少し気恥ずかしく感じながらも、私は笑顔で二人に応えた。

「——ただいま」

萃夢想編

其の二十六「宴」

「……この先代巫女つて奴、ヤバすぎる」

部屋で一人、そう呟いたのは火焰猫燐であった。

燐の手の中には、新聞があった。

射命丸文が発行する『文々。新聞』である。

本来ならば、地上にしか発行されていないそれを、この地底は地霊殿のペットである燐が持っている理由は、主人である古明地さとりであった。

およそ三月ほど前に、この地霊殿へ射命丸文当人が地上から訪れたことがあった。

その時、地霊殿と地上からの来訪者の間で何があったか、何か話し合われたのか、燐は知らない。

ただ、その日以来、定期的にこの新聞が地底世界への入り口前に届くようになり、燐はさとの命令でそれを取りに行くのが仕事の一つとなっていた。

さとりは、この新聞を愛読してる。

娯楽を感じているのか、それとも地上の動向を探る為の必要性から読んでいるのかは分からないが、とにかく主人の日課となっていることを燐は知っていた。

そして、読み終わった新聞を処分するのも燐の新しい仕事である。この時、燐もまた気まぐれに処分する前の新聞を読むようになった。

良い意味と悪い意味、両方の意味を持つ興味からである。

地上には少なくとも『三匹』の化け物がいることを、燐は知っていた。

出来れば、二度とお目にかかりたくないが、その内の一人である『八雲紫』は自分の主人とも関係のある妖怪である。

しかも、最近になってその関係は徐々に深まりつつある。

恐ろしい、おぞましい妖怪だ。

しかし、八雲紫自身と彼女が管理する地上の情報は、少しでも知っておかなければならない。

主人のことを想つての、健気な行動だった。

「こいつが五体満足に戻ったって話だけでも不安だったのに、まさかこんな……」

燐は、最初に地底と地上が関わり始めた日から、ここ最近までの出来事、人妖の動き、その関係をおおまかに把握していた。

——先代巫女。

本名すら定かではない、ただ一人の人間。

こいつが全ての中心だった。

この巫女が地底を訪れ、そこから全てが動き始めた。

人間の身でありながら、鬼の星熊勇儀を下した本物の化け物。

ただそれだけでも恐ろしい相手なのに、そこへ八雲紫と風見幽香という大妖怪が関わってくる。

地底の方でも、勝負に負けた勇儀はもちろん、地霊殿に招いた際に親友のお空が——そして、最も重要なこととして主人であるさとりが、この人間と友好関係を持ってしまったのだ。

非常に厄介な関係だった。

少なくとも、燐はさとりと先代の繋がりを、そう捉えていた。

「地上にも、こいつを抑えられる妖怪はいないのか」

燐が今、苦い顔をして眼を通して新聞は最新の物である。

その前の新聞の内容が『地上でのある異変を経て、先代が勇儀によつて負わされた足の傷を完治させた』というものだった。

それを知った勇儀は、宴会でも開かんばかりに喜んでた。

主人であるさとりが表情に出さず、内心では喜んでいたことも、ペットである燐にはよく分かった。

事実、めでたい話である。

しかし、燐は主人の喜びに共感する気にはなれなかった。

その気持ちは、今回の新聞を読み終えていますます強まっている。

新聞には、復活した先代巫女の過去の偉業について編集された内容

が載っていた。

最も代表的な『地底の鬼退治』を筆頭として、現役時代の妖怪退治の数々。何処から仕入れたのか、風見幽香との関係。先代の持つ力や技の解説――。

読み終えてみれば、新聞全てが先代巫女の記事である。

捏造や誇張でない証として、当時の写真や他の文献の引用まで、事細かで分かりやすい編集だった。

そう、分かりやすいからこそ、先代巫女という人間の全貌が燐には嫌というほど理解出来たのだ。

あの巫女は、主人にとって――いや、地底そのものにとって厄種である。

人間にしては強すぎる。

他の人妖との繋がりが広すぎる。

挙句、引退したはずの博麗の巫女の後継者として治まっているのが当人の娘である。

地上にも地底にも、また様々な意味で影響力の強すぎる存在だった。

「……駄目だよ、さとり様。こいつ、関わるにや危険すぎるよー！」

燐は心配せずにはいられなかった。

重すぎる。この人間は、気軽に友好関係を結ぶには、あまりにも重すぎる力と立場を持っているのだ。

今のところ、特に問題は起きていないが、今後何が起こるか分からない。

その結果、どんな大事に地底が、果てはその管理者であるさとりが巻き込まれるのか、不安で仕方がないのだった。

自分の主人は、周りの評価に反して純朴で穏やかな妖怪である。

荒事に向いた性格ではないし、力だつて強くない。

地底の管理者などと持ち上げられて、実際は良いように顎で使われていることを、燐はずっと気にしていた。

そんな愛する主人を、これ以上厄介事に関わらせたくなどなかった。

問題の先代巫女が、度々さとりを訪ねて地底にやって来ていることは知っている。

本来ならば地上からの行き来は様々な取り決めがあるが、先代はほとんど特例としてそれを素通りしていた。

その陰に、地上の管理者である八雲紫の計らいがあることは間違いない。

この時点で、ヤバい。

権力に融通の利く人間である。

これまで先代がさとりを訪れる理由は、いずれも大したことの無いものばかりだった。

互いの立場を軽く見すぎているという点を除けば、本当に気安い友人同士の微笑ましい交流だった。

——しかし、大変失礼ながら、さとり様には今後あんな奴との付き合いは自重していただきたい！

燐は新聞を仕舞うと、さとりの部屋へと向かった。

如何なる偶然か。今日、問題の先代が地霊殿を訪れていた。

今は、さとりの部屋で二人だけで会っているはずである。

毎回先代巫女を送り届ける八雲紫は、地底に同行することなく、地上に残っている。

時折先代に同行してくる変な妖精も、今日についてはきていない。

だから、どうする？

厄介な奴を、この場で暗殺でもして闇に葬るか？

そんなことをしても取り返しつかない事態になるだけだし、何より自分の実力で可能な方法とは思えない。

しかし、このまま大人しく先代を地上に帰し、再び訪れるのを繰り返すことも看過できない。

考えが纏まらないまま、燐はさとりの部屋に辿り着いていた。

ドア一枚越しである。きつと、さとりは自分の接近に気付いているだろう。

それでも、迂闊に中へ入る気にもなれず、燐は恐る恐るドアを開けて中の様子を伺った。

(二人で何をしているのか——に、やっ!!?)

覗き込んだ先の光景に、燐は驚愕した。

思わず声すら出ないほどの衝撃だったのは、逆に幸いである。文字通りの絶句だった。

さとりと先代。

二人は向かい合って座っていた。

ただし、さとりが椅子に足を組んで腰掛けているのに対して、先代は床に直に座っている。しかも、正座である。

頭を、深々と下げていた。

先代は、さとりに対して土下座をしていたのだ。

「——貴女には失望しました」

さとりが囁く程度の小さな声で言った。

それは足元にいる先代へ向けた言葉だったのだろう。

しかし、燐はまるで自分が言われたかのようなショックを受けていた。

普段は優しい主人から想像も出来ない程、恐ろしく冷たい声だった。

「こんな——。」

「こんな冷たい声が、さとり様の口から出てくるなんて——。」

「……すまない」

「謝るだけなら馬鹿でも出来ますよ」

吐き捨てるように罵るさとりに対して、先代は頭を下げたままである。

あの星熊勇儀を退治した恐るべき人間が、何一つ反論することなく這い蹲っている様を見て、燐は驚きを通り越して戦慄すら感じていた。

さとりは、組んでいた足を解くと、そのまま爪先で先代の顎を引っ掛け、無理矢理顔を上げさせた。

「謝罪には、もっと誠意を込めてください」

「……すみませんでした」

「それだけですか？」

「許して下さる」

「ふん」

眼を疑うような光景だった。

あまりに呆然としすぎて、燐は自分が一体何の為にこの場へやって来たのか、半ば忘れてしまった。

足蹴にされながら懇願する先代と、それを冷たく見下ろすさとり。蔑む者と蔑まされる者。

絶対的な上下の関係が、二人の間には存在している。

どちらの、どの姿も、燐にとっては想像もしていなかったものだ。

(ど……どうなってんの？ 二人は、少なくともこれまで普通の友人同士だったはずなのに……それとも、これはあたいが今まで知らなかった本当の姿だっていうのかい!?)

燐の胸に、急に不安と恐怖が湧き上がってきていた。

それはこの部屋を訪れる前に感じていたものとは、また別の意味を持った感情だった。

燐は、今初めて敬愛する主人であるさとりを——恐ろしい、と。そう感じていた。

そして、混乱する燐は今自分が居る状況を失念してしまっていた。

「——お燐！ 貴女、見ているわねッ！」

「ひっ!」

僅かに開いたドアの隙間越しに、覗き見ていた燐の瞳を、さとりの鋭い眼光が射抜いた。

先代を見下していたはずのさとりは、いつの間にか隠れている燐の方を睨みつけていたのだ。

考えてみれば、当たり前のことだった。

さとの能力ならば、ドア越しに燐の心を読んで近くに居ることを容易く看破出来る。燐自身も、分かっていたはずのことだった。

燐はガタガタと震えながら、ドアを完全に開けようとした。

本当は、ドアを閉じて逃げ出したかった。

大好きな主人を前にして、そんな気分になるのは初めてのことだった。

「ドアは開けなくて結構」

燐の心を読み、さとりが先手を取って制した。

「そのままドアを閉めて、ここから去りなさい。今、大切な話をしていのよ」

「は、はい。分かりました……っ」

「——お燐」

さどりの視線に耐え切れずに下を向いていた燐は、呼ばれて思わず顔を上げた。

そして、それを後悔した。

「勘違いしないで頂戴ね。私と彼女の関係は、良好よ。ねえ、先代？」
「はい」

何処か不自然に感じるさとりの作られた微笑と、力無く従順な先代の返事。

燐は湧き上がる恐怖を抑えきれず、慌てて頭を下げると、すぐにドアを閉めた。

これ以上、見ていたくなかった。

（あたいは、ひよっとしてとんでもない思い違いをしていたんじゃないか……？）

逃げるようにさとりの部屋から走り去りながら、何故か溢れてくる涙を必死で堪える。

不安だった。

怖かった。

それらの感情を、あろうことか敬愛するさとりへと向けている自身自身が信じられなかった。

（あたいが知らなかっただけで、さとり様の本当の姿は、まさか——）
あの部屋で見た光景を、しばらくは忘れられそうにはなかった。

まるで悪夢のように。

◇

おりんりんが慌ててドアを閉めると、すぐに遠ざかっていく足音が

聞こえた。

さとりは取り繕った笑顔を浮かべたまま、閉ざされたドアを見続けている。

……え、えーと。

とりあえず、さとりん。

D I O様の物真似、結構似てたZ E！

「床じゃなくて焼けた鉄板に正座したいなら、そう言ってくださいよ。すぐに用意させますから」

サムズアップした私を養豚場の豚を見るような視線で見下ろして、さとりは恐ろしいことをサラツと言いつ捨てた。

——すんませんでしたっ!!

再びその場で土下座する私。

恥も外聞もない。ついでに言うなら、今の状況に不満も反発もない。

私が土下座するのは当然。私の自業自得だからだ。

私はさとりが許してくれるまで、喜んでコメツキバツタになるぜ！

「……顔を上げてください。今のは、別に貴女が悪かったわけじゃありません」

そうなの？

「ええ。お隣の心を読んで、誤解されたことが分かったから、少し憂鬱になっただけです」

ふーむ、誤解ね。

……確かに、今の私とさとりの状態を顧みてみれば、他人の眼にどう映るのか簡単に想像出来る。

あれだね、テーマを付けるとするなら『女王様と私』って感じ？

「そうですね、まさにそんな感じの印象をお隣に与えてしまったんですよ。」

誤解を解こうと思ったら、全然信用してなかったし。このままでは、お隣の私を見る眼が変わってしまいそうです」

ははっ、まあ仕方ないよね。

あの時のさとりんってば、私も怖かったもん。

「そーですねー、私怒ってましたもんねー？」

あ・な・た・の、せいなんですよ分かっているんですか反省してるんですか、本当に！」

珍しく声を荒げながら、さとりは引き攣った笑顔を近づけてきた。両手で私の頭を挟み込み、ギリギリと力を込めながら、これでもかという怒りを燃やして睨みつけてくる。

さとりの力が弱いので全然痛くないのだが、怒りの形相はかなり迫力があつた。

「すまない」

「さつきからそればかりですね。実は事の深刻さを理解していないんじゃないですか？」

苦勞するのは私なんですよ。貴女がある事ない事勝手に吹きまくって、辻褃合せやフォローを私に丸投げして……挙句、それをしなきゃいけない相手が全員一筋縄ではいかない大物ばかり！」

私の頭蓋骨の頑強さに諦めたさとりは、今度は頬を挟み込んでタコの口にしようにしてきた。

さ、さすがにそれはやめて！ ブサイクになっちゃおう！

「しゅまごやん」

「謝るくらいなら、最初からやらないで下さいよ。」

ちよつと考えれば、フォローのしようがないことくらい分かるでしょ？ 妖怪の賢者も知らなかった情報を、どうやって私が入れられるっていうんですか」

さとりが怒っている理由——それは、私が永遠亭で永琳に問い詰められた際に暴露してしまった情報と、そこから捏造してしまった情報の発信源についてだった。

幻想郷の中で、紫にすら察知されずに隠れ住んでいた永琳達。

原作知識を元にその所在を探し出した私は、そこで永琳にどうやって自分達を見つけ出したのか疑問と不審を抱かれた。

そこから更に失敗を重ね、永琳が医者であるという思い込み、その根拠、最も隠し通したかった輝夜の存在など——事情を知らない永琳からすれば不可解としか言えない情報の数々を持っていることを、知

られてしまったのだ。

それらの情報を何処で手に入れたのか？

当然『原作ゲームの設定から知りました』なんて答えられるはずもない。

追い詰められた私がある場しのぎの為に出した切り札こそ——『それは全部、古明地さとりにて奴の仕業なんだ』って感じの返答だったのだ！

「そうですね。死んで下さい」

「すみませんでした。許して下さい」

私は今一度、先程と同じ謝罪を繰り返して、頭を床に擦りつけた。ねっ、自業自得でしょ？

……。

……………。

いや、あの……茶化してる場合じゃないってのは、理解してます

……。ホント、すみませんでした。

割と本気でさとりに合わせる顔がない私。

「……まあ、貴女の謝罪が本気であることは十分に分かっています。考えるより先に、土下座した時は何事かと思いましたが」

今回、地霊殿を訪れた理由の一つはこれである。

永琳に言い終えた時点で、既に無茶振りだと自覚はしてたからね。

さとりに土下座すべき、と考えていたのだ。

冗談で誤魔化したりはしない。土下座が必要だと思ったら、私は躊躇なくやるよ。

「その誠意を汲んであげたいところなんですけど……正直、問題が大きすぎて、素直に許せません。足蹴にしたことも、謝りませんよ」

さとりは恨みがましく言った。

わ、分かっています……。

でも、本当になんとかならんもんかね？

過ぎたことはしょうがない、なんて私に言えた義理じゃないが、それでも言ってしまった手前、さとりには何とかしてもらいたい。

「簡単に言いますねえ」

さとりは心底疲れたようなため息を吐いた。

怒りが収まったというより、ただ単に疲れて萎えてしまった様子である。

私が恐る恐る顔を上げると、さとりは複雑そうな表情を浮かべながらも、無言で空いた席を勧めてきた。

好意に甘えて、私もさとりと向かい合うように座る。

「そもそも私だって貴女と事情は同じなんですよ。」

面識すらない八意永琳という人物に関して私が知っているのは、貴女から『原作』を聞いたからです。結局、情報の大元はそこから出ているわけですから、私に話を振られようが説明する内容に変わりはありません」

「無理か？」

「違うことを語れというのなら、つまりそれは嘘を吐くことと同じです」

まあ……そうなるんだよねえ。

私はさとりを誤魔化せ、と——つまり、騙してくれと言っているのだ。

しかも、紫や永琳を相手に。

……やべ、冷静になって考え直すと、なんかスゲー無茶振りしてる自覚が出てきた。

「八意永琳の実際の人となりは知りませんが、八雲紫と同レベルなどと言われたら、嫌というほど危険性が分かります。どうやって誤魔化せって言うんですか？」

立場的には『地底の管理者』であるさとりは紫と同等なんだからさ、強気に言い切ってみせれば、なんとか通じないかね。

私の想定ではこんな感じだったんだが——。

紫に問い詰められたさとりは、一変して不敵な笑みを浮かべた。

そこには、絶対的な強者としての自信があった。

『私が本気になった場合、心を読む範囲がどれくらい延びるか分かりますか？』

仕方ありません。よく分かるように、貴女達の長さで教えてあげましょう。

——13 kmや』

ドン！

このような感じで凄んでみせれば、紫や永琳でもさすがにビビって……。

「いや、無理でしょ」

一瞬でダメ出しされた。

そんな、私の脳内ではこの後に紫が戦慄の表情で『なん……だと……っ』と呻く姿が浮かんでいたのに。

「さすがにそれはハッターが過ぎるというか、一発で見破られると思います」

「しかし……」

「しかし何も、実際にそんな範囲まで心を読めないんですから、すぐにボロが出ますよ」

ええー、無理なの？

地霊殿に居ながらにして、地上の全ての人妖の心を読み解き、あらゆる情報は思うが俣——とか、旧地獄の支配者に相応しい能力じゃね？

「いやいや、勝手に人の能力を拡大解釈しないで下さい。

そもそも『旧地獄の支配者』なんて肩書き自体が、今でも明らかに不相応というか、ハッキリ言って誤解みたいなものです」

ああ、確かにそんなことをたまに愚痴ってたね。

「そうです。旧都を仕切っているのも、実質勇儀さんの力ですからね。私が地底の支配者のように見えるのは、この地霊殿という場所と、立場と、あとは与えられた仕事によって、印象付けられたからでしょう」

「紫はそのことを……」

「多分、理解しているでしょう。私なんて地底世界に干渉する為に利用される立場ですよ。」

貴女が初めて地底を訪れた時だって、八雲紫が私に『スペルカード・ルールの施行』という仕事を押し付けてきたんですからね」

確かに、紫ならさとりの実力くらい見抜いているかもしれない。

紫の深遠なる頭脳は、私なんかには計り知れないものだろうからね。

ぐぬぬっ、ハツタリで誤魔化そうなんて浅はかな話だったか。

しかし、だとすると一体どうしたものか――。

「……いえ、お茶を濁すという意味でなら、そのハツタリも混ぜた対処法は有効かもしれませんね」

えっ、どういうこと？

「考えてみれば、八雲紫や八意永琳のような駆け引きに長じる人物が、馬鹿正直に今回のことを尋ねてくる可能性は低いはずです。

まさか敵対心を煽ろうともしないでしょうし、事を荒げないよう、遠回しに探りを入れてくるのが普通だと考えられます。それに対して、明確にはなく、有耶無耶に答えてしまえば、案外誤魔化せるかもしれません」

「有耶無耶に？」

「ええ。結局、向こうが探ってくるということは、得体の知れない情報源に関して警戒しているという意味ですからね。

逆に『如何にも何か隠してますよ』といった態度を見せて、具体的な内容を避けた意味ありげな受け答えをしてみせれば、どちらも警戒を強めて、そうそう深く踏み込もうとはしない――はず」

な……なるほど！

序盤に顔見せするボスキャラにありがちな『伏線らしきものを呟いて、相手の疑心と警戒を煽る』という手法で行くのか！

いいぞ、さとりん。紫達が情報の出所を絶対に知らないという点を逆手に取った、素晴らしい攻略法だ。

「ただし、これには問題が一つ」

さとりは神妙な顔で呟いた。

「どう考えても、こんな対応をする私は二人に好かれないどころか逆に更なる警戒をされるだろうということです。」

私に被せられた不相応な評価が、ますます深まってしまうということですね」

……すみません、さとりさん。
本当、すんません。

「まあ、いい加減嫌味も言い飽きたので、もういいですけどね」

三度、土下座を敢行しようとした私を、さとりが苦笑しながら止めた。

いいのか、さとり？

それを、やってくれるのか？

「今回の問題に対して、この辺が最適な落とし所だと思えますしね。

……いいですよ、やります。貴女と口裏を合わせましょう。

八雲紫に対して多少ハツタリを効かせておくというのも、案外私にとつて利になることかもしれません」

——それに何より、この方法がそこまで通じるとは思ってません。

さとりは、肩を竦めてそう付け足した。

確かに、紫がさとりの実力を正確に見抜いているというのなら、どれだけ意味深な態度と会話をしてみせようが、それを鵜呑みにするはずがない。

せいぜい、二の足を踏む程度の警戒か。

さとりに対して『万が一』『ひよつとしたら』といった一握りの不安や脅威でも感じてくれれば、それで十分話は誤魔化せるだろう。

「そうですね、それくらいが妥当でしょう」

オーケイ、分かった。

本当に苦労を掛けることになってしまったが、どうかよろしく頼む。

「仕方ありませんね。引き受けました」

ありがとう、心の友よ！

マジでさとりには頭が上がりなくなってしまうたな。

いや、本当にね。私に出来ることなら何でも協力しますんで、必要なら言っして下さい。

口裏合わせが必要になったら、話を振ってもらえれば全面的にさと

りに合わせるからね。

私にも多少は立場や肩書きがあるし、その影響が何かしら役に立つかもしれない。

「八雲紫が相手の場合、貴女が関わればある程度融通が効くかもしれない。頼りにしてますよ」

うむつ。紫に嘘を吐くのは本当に心苦しいが、致し方ない。

私の失敗の尻拭いの為に、さとりには無理をさせているんだ。私だって、多少の無理は通さなければいけないだろう。

勘弁してね、ゆかりん。

「——さて。それで、この話はこれで纏まったわけですが」

土下座から始まった一つの話し合いを終え、密かに安堵した私の前で、さとりがパンツと手を合わせた。

それが意識を切り替える合図であったかのように、話題も変わる。

「まだ用件があるんですよね？」

「分かるか」

「話を切り出す前に少し考えたのを読み取りましたからね。

謝る為だけに、わざわざ八雲紫に依頼してまで地底へ来たわけではないんでしよう？」

「ああ」

「それで、貴女は『宴会がどうの』とか考えていたみたいですが」

「そうだ」

そうなんだ、さとり。

私は、気付いてしまったんだよ。

メタな話になるが『紅霧異変』『春雪異変』『永夜異変』と、原作の主だった異変がこれまで起こってきた。

さすがに番外編的な作品まで含めた細かい時系列は分からないので、完全に原作通りどうかは分からないが、いずれも異変未解決なんて問題が起こることもなく、しっかり順当に解決されているワケだ。

「個人的には複雑な心境ですね」

え、なんで？

異変解決すると困るの？

『原作通り』という点が、です。このまま行けば、お空が地霊殿で異変を起こすことも確定するワケですから」

うう……っ、すまん。不謹慎だったかな？

「いえ、ちよつと思っただけです。今の段階で先を憂いても仕方ありません。未来は変えられるかもしれませんがね。」

とにかく、今話す内容ではありませんでした。すみません。どうぞ、話を続けて下さい。順当に異変が解決されていって、その何処に貴女は引っ掛かっているんですか？」

うん。まあ、地霊殿の異変に関しては、その時になったら私も友人として可能な限り協力するからね。

それで、異変が解決するのはいいんだ。

問題は、その後なんだ。

——実は、これまで異変解決の後で一度も宴会をしていないんだ。

「……それが何か問題ですか？」

問題だよ、大問題だよ！

異変解決の後は、その異変の首謀者も含めて皆で宴会をする——ここまでがテンプレでしょうが！ 帰るまでが遠足です！

この宴会によって、異変の中で互いに争った者同士が酒を酌み交わし、新たな仲間として迎えられるのだ。

これを抜かして、真の異変解決とは言えない！

「それはこの世界を『東方Project』というフィクションの視点で捉えた、貴女だけの思い込みじゃないですか？」

いや、違う。

実際に、宴会をやっていないことで現実にも弊害が出てる。

「どんな？」

うん、前々から気になってたんだけどね——霊夢を中心にした人妖関係、悪くね？

「結局は娘のことですか」

いや、だってさあ！ 本当にこれ、心配なんだって！

比較するのもおかしいかもしれないが、私の知る原作と比べて、霊夢の周りの人間や妖怪の関係が疎遠だったり、酷ければ険悪だったり

するのだ。

まず、友達の魔理沙の場合。これまで安定した仲の良さだったのだが、永夜異変以降ちよつとギクシヤクしているように見える。

その異変でパートナーとなり、正式に親交を持ったはずの紫とは全然仲が進展していない。

進展していないというのは、つまり霊夢が紫を嫌ったままということだ。今回、地霊殿へ紫に連れて行ってもらうことを説明したら、露骨に嫌そうな顔してたし。

対する紫も、そんな霊夢の態度を全く気にしない様子だったので、どっちにも仲良くしようとする意思がないと取れる。

それ以外にも、紅霧異変を切欠に神社を訪れるようになるはずのレミリアは来ないわ、妖夢のことを尋ねたら『誰だっけそれ?』とか言うわ、永遠亭の関係者に至っては関心すら抱いてねえ!

これは、由々しき事態である。

博麗神社といえ、参拝客より、特に理由もないのに人外が集まる賑やかな場所のはずだ。

幻想郷で宴会といったら、まず此処! っていうくらい印象がある。

それなのに、私の頃と大して変わらないというのは、どう考えてもおかしい。

「友好関係なんて、個人の自由だと思えますけど」

いいや、それもこれも宴会をしてないせいだね。断言出来る。

交流の場や切欠がないから、霊夢も周囲に興味を持たないし、誰もうちの霊夢の良さが分からないのだ。

でなければ、私の娘がこんなにボツチなはずがない!

「……うん、まあ本気でそう思ってるみたいなんで、もう何も言いません。

それで、貴女はそれを解消する為に、これまでの異変に関わった者を全て集めて宴会をしたい、と。誰もやらないから、自ら主催しようというワケですね」

その通り!

「でも、半分くらい自分が楽しみたいからなんですネ」

……そ、そうです。

私も皆で楽しく宴会してみたいです。

「正直で宜しい。まあ、私に隠し事が出来ないだけですけど」

元々、隠すつもりもなかったけどね。

霊夢のことを想つての考えなのは確かだし、私自身が宴会をやりた
いという気持ちも間違いない。

他にもね、私が親しくなった人達が、その人達同士で仲良くなって、
そういった友好の輪が更に広がればいいな、と考えたりもしている。

この宴会について、まだ呼び掛けもしていないからどれだけの人や
妖怪が集まるのか分からないけど、少しでも多く参加してくれたら嬉
しい。

ちなみに、宴会を開催する理由として『先代巫女の足の完治を祝う
為』という、一応れっきとしたものを考えている。

ただ、この理由だと必然的に私個人の祝い事になるから、どれだけ
人数が集まるかちよつと不安なんだけどね。

「貴女の人望なら、きつとたくさん集まりますよ」

嬉しいこと言ってくれるじゃないの。

それじゃあ、早速その人望を使わせてもらおうかな。

というワケで、さとり。

一緒に宴会——やらないか。

「え、嫌ですけど」

即答!?

「普通に宴会なんか参加したくないですし、何より私の立場では参加
出来ません。地上でやるんですよね?」

一応、博麗神社でやる予定。

まだ霊夢にも相談してないけど。

「じゃあ、無理です。地底と地上の取り決めを忘れたワケじゃないで
しょう。貴女は、あくまで例外なんですよ」

それに関しては問題ない……と、思う。

取り決めとは言うけど、地上と地底が絶対に不可侵という掟ではな

いはずだ。

それぞれの管理者から許可が得られれば、どちらの住人も行き来が出来るって話だし、正確には私だけが本当の例外ってワケじゃない。でしょ？

「……まあ、それは確かに。私も一度、お燐を地上へ使いに出してますからね」

そもそも原作でも、この辺の取り決めって形骸化している雰囲気があっただよね。

地底の異変の始まりは、火焰猫燐が地上に怨霊を送り込んだからだし、この行動も独断でやったものだ。

異変解決後はなし崩しに地底との交流も始まっていくくらいだから、原作と時期が違うだけで、地底の妖怪が地上を訪れること自体はそれほど問題ではないはずだ。

もちろん、無断でなんてやらない。ちゃんと紫にお願いするよ。

その上で、許可をもらえる見込みは十分にあると思ってる。

「最悪、許可が出るまで拝み倒す……ですか。強引ですね」

にひひっ、それだけさとりと宴会したいと思っちょーだい。

別に地上と地底の關係に干渉したいとか大それた考えがあるわけじゃない。

ただ、友達を宴会に誘うのに、ちよつとだけ融通してもらいたいと思ってるだけなのだ。

「でも、私は嫌だって言ってますよね。そこは、どうするつもりですか？」

そう尋ねるさとの表情は、何処か面白そうに笑っていた。

能力を使って、私の考えていることなんて何もかも見抜いているだろう。

でも、私はあえて言葉にして伝える。

駆け引きとか、そんなものは通用しないし、やる意味もない。

私にあるのは、ただ真っ直ぐな気持ちだけだ。

「紫と同じだ。頼み込むしかない」

「へえ。我侭なことですね」

「そうだな、私の我侭だ」

「それを聞くということは、私が無理をするということですよ。迷惑を被ります。それでも、貴女は我侭を通しますか?」

「……それでも、私はさとりと一緒に宴会がしたい」

「どうしても?」

「どうしても。お願いします」

私は頭を下げて、頼み込んだ。

そのまま顔を上げない。さとりから色よい返事が来るまで、頼み込むつもりだった。

自分でも、本当に我侭だって自覚はある。

こんなに関心事のことを顧みずに、自分の欲求を押し通すなんて初めてのことだ。

さとりの表情は分からないが、そんな私の必死な様子を見下ろして、やっぱり面白そうに笑っているんだろうか?

「頼む」

黙ったままのさとりへ、私は更に続けた。

心の底からお願ひする。

「一生のお願いだ」

「……ぷっ」

子供みたいな台詞を言ってしまった私に対して、さとりは堪えきれずに吹き出していた。

押し殺したような笑い声が聞こえて、恐る恐る顔を上げてみれば、さとりが口を押さえて肩を震わせていた。

「分かった、分かりました。宴会に参加する。貴女には負けたわよ」

さとりは目元を拭いながら、そう答えてくれた。

さとりん……ッ、優しいさとりん……ッ! 感謝! 圧倒的、感謝……ッ!

嬉しさのあまりカイジばりにボロボロと涙を零す私。内心で、ただど。

それでも、感じている気持ちは本物だ。

さとりが宴会に参加したくない理由は、大体分かっている。

そもそも、彼女は他者との接触を嫌って地底へと移り住んだのだ。それを再び地上へ招き、あろうことか多数の人妖が集う宴会に参加させようなど、迷惑以外の何物でもないだろう。

私は分かっていた。

分かっている、無理を言ったのだ。

さとりには、もう『ありがとう』しか言えない。

謝るのは違うと思う。

だから、無理を聞いてくれて、ありがとう！

「これも友情、ということにしておきましょうか。貴女にとって、初めての我俣だったみたいですしね」

まあね。ここまで凶々しい真似して、我ながら驚きだわ。

しかし、今はそれ以上に喜びが勝る。

やったぞ。私は、最初にして最大の賭けに勝ったのだ！

これで宴会は、もう成功したようなもんさ！

他の宴会に必要な準備と段取りまで、やる気がムンムン湧いてくるじゃねえか、オイ？

「私が参加して、宴会がつまらなくなっても知りませんよ。なにせ、私は怨霊にも嫌われる妖怪ですから」

私が嫌ってないからいいの！

これが友情ってもんだ。

フフフツ。そして、さとり。私はスルーなどしないぞ。

さつき、ようやく私に対してタメ口を利いてくれたことをな！

さあ、さとり。これを切欠にもう敬語はやめて、よりフレンドリーにいこうぜ。

宴会では、他の皆にも私の『親友』であることをアピールして、友好的な妖怪である印象を抱いてもらう作戦だ。

「ああ、それに関しては完全に却下で。絶対に駄目です」

完全に揺るぎようのない拒否の姿勢を取るさとり。

ええー、どうしてそれは駄目なの？

「貴女と必要以上に仲良く見えると、周りに不審に思われるからです。厄介事は御免ですよ」

友情は何処行ったのさ!?

「友情にも重さがあります。私の平穩よりは軽いので、あしからずさとりはニヤリといった感じの、意地の悪い笑みで答えた。

ひ、酷い……!」

厄介事とか絶対考えすぎだと思っただけなあ。

私が誰と仲良くしようが、別に誰も気にしないと思っただけ。

博麗の巫女は引退したんだし、立場から来る影響なんて、そんなに無いよ。

「少なくとも、八雲紫には貴女との関係を快く思われていないと感じますけどね」

紫が?

何、私とさとの仲が良いから嫉妬してるとか?

挙句、それを理由にさとりを嫌うなんて……想像出来んな。そこまで短絡的じゃないって。

「短絡的じゃないから、怖いんですけど……」

まあ、これは私の勝手な不安ですから、気にしないで下さい。どうせ、彼女の心は読めませんからね」

ふむ……まあ、さとの考えまではどうこう言わんよ。

紫とは仲良くして欲しいけど、それこそ友好関係は個人の自由だしね。

宴会でのふれあい、何かの切欠になってくれれば良しとしよう。

タメ口に関しては、今後私達の友情パワーが更に高まっていけば、自然と解決するはずだしね。

だって、わざわざアピールしなくても私とさとりは既に『親友』だし。

大切なことなので、二回強調しました。

「そう思うんならそうなんでしょうね。貴女の中では」

……私の持つ前世の知識と触れ合っているせい、最近返し方にも鋭さが出てきたね。

私がネタを振る度に翻弄されていた当初のさとりとは全然違う。

「貴女とは適当に付き合うくらいが丁度いいですよ。疲れますし」

まあ、そんな冷やややかな対応もさとりなららご褒美なんですけどね。

「馬鹿。それで、用件はこれで終わりですか？」

ん、そうだね。宴会の日時とかの具体的な内容は決まり次第、また改めて知らせるよ。

帰りに勇儀にも宴会のことは誘おうと思ってる。

紫がどこまで許可してくれるのかは分からないけど、さとりも一緒に連れて行きたい友達とかいたら、一緒に頼み込んでみるよ？

「いえ、地霊殿からは私だけが行くつもりです。

お空はまだ地上へ連れて行くには実力も分別も未熟ですし、お燐は地上を怖がっているみたいなんですよね」

お燐、一体何があっただんだ……？

「あまり目立ちたくないですしね。もし、勇儀さんが参加するならば、どうあっても目立つと思いますけど」

考えてみれば、地上を去った鬼だしね。

しかも、その種族の中でさえ有名と来た。

これで、鬼の存在が事前に知られてなかったら、流石に大騒ぎになるだろうから勇儀は誘えなかっただろうなあ。

「ああ、そういえば地底での戦いを新聞に載せたんですけどね。勇儀さん個人に焦点を当てて、鬼という種族の現状に関してはおぼかしていた、上手い編集具合だったと思いますよ」

おつ、さとりも文々。新聞読んでるんだね。

そうそう、文が本当に上手いことまとめてくれてね。鬼について、地上でも知ってる人や妖怪が増えたんだよ。

もちろん、霊夢を始めとして、今回の宴会に誘う予定の皆が鬼については事前に知っているはずだ。

これによって、初対面での摩擦は少なくなるだろう。

「天狗が作った新聞だけあって、鬼の強さ、恐ろしさについても、しっかり書かれてましたね」

そういえば、地底なのに地上の新聞なんて読めるの？

「以前、射命丸さんを連れて地霊殿に来たでしょう？ あの時から、新聞を届けてもらえるようになりました。しかも、無料で」

なんとという太っ腹。

文とそこまで親しかったっけ？

「いえ。勇儀さんも読みたかったらしくて、本人に『お願い』したんですよ。」

勇儀さん自身は、気軽に頼んでみた程度だったんですけど、頼まれた当人は……まあ、心境はお察しということでは」

射命丸エ……。

天狗って、本当に鬼には頭が上がらんのね。

……宴会には文とかも誘おうと思っただけ、勇儀が参加するのならやめといった方がいいかな。

「それで、もう勇儀さんの所へ行きますか？」

いや、さつきも言ったけど帰りに寄るつもり。

紫が迎えに来るのは明日なんだよね。

「じゃあ、うちに泊まっていきますか？」

ウイ。お世話になります。

「いきなりでしたから、ご飯とか簡単な物しか用意出来ませんよ」

いや、さとりと一緒に食べれるなら何でも美味しいから十分だよ。

ついでに、お風呂なんかもただけちやつたり？

「贅沢な客ですねえ」

えへへ、この前入れてもらった温泉が凄く気持ちよかったからね。

気に入ってしまったんだよ。

「今回は足も動くんですから、勝手に入ってください」

背中流しっこしようぜ！

「嫌ですよ。いやらしい」

なんでよ!?



『博麗神社にて、百鬼夜行の大宴会開催予定！』

数日後、文々。新聞にはそんな見出しが大々的に載っていた。

記事を兼ねた、参加者募集の広告でもあった。

先代が文に頼んで、今回に限り購読者以外にもこの新聞を配らせたのだ。

宴会の目的は『先代巫女の復帰祝い』である。

共に祝いたい者、興味を持った者は随時参加を受け付けているという旨が書かれていたが、もちろん一般的な人間や妖怪がそれに参加しようなど思うはずがない。

既に参加の決定している者の名前も合わせて載っていたが、いずれも大妖怪ばかりだ。

——文々。新聞の購読数を一気に増やした鬼退治の記事で話題となった『星熊勇儀』

——その地底の管理者である謎多き大妖『古明地さとり』

——対する地上の管理者であり、妖怪の賢者『八雲紫』

——宴会の為に敷地を提供し、また同時に当日の監視も兼ねる博麗の巫女『博麗霊夢』

——そして、今回の宴会の発案者にして主役である復活した最強の博麗『先代巫女』

他にも、先代巫女が主催ということもあり、参加が予想される人妖は大物ばかりである。

これらが当日、博麗神社で一堂に会し、宴会を開くというのだ。

まさに人外魔境。『百鬼夜行』の比喩に偽りなし。

宴会の裏側で、何らかの巨大な陰謀が渦巻いていると勘繰る者が出てくるのも、仕方のないことだった。

普通の人間や妖怪は恐れ戦き、参加はもちろん、当日神社へ近づこうとする者すらいないだろう。

始まる前から大事である。

記事のネタとしては上等すぎる内容に、文は先代の依頼を喜んで引き受け、大々的に告知したのだった。

ちなみに、当人もまた宴会に誘われたが、丁重に——吐きそうな顔で猛烈に首を横に振って——参加を断っている。

当日、取材を出来ないからこそ、今回の記事には気合いが入っているのだ。

宴会に向けて日々が過ぎていく中、参加者は続々と増えていった。

——紅魔館より。

「お姉様！ 宴会、宴会だよ!!」

「はいはい、落ち着きなさいな」

興奮するフランドールを、レミリアが件の新聞を片手に諫めた。

しかし、表情は微笑まじげに、はしゃぐ妹を見つめている。

「あら、時間帯は夜なのね」

「これはお嬢様達への配慮ではないでしょうか？」

「そうですね、これは紅魔館に是非とも参加して欲しいという先代の厚意に違いありません。これは断れませんかよ。先代様の復帰を、一番に祝うべきは私達ということですよ。ねっ」

普段通り落ち着いた物腰の咲夜と、対照的に興奮を隠し切れない美鈴。

美鈴は具体的な言葉を使わなかったが、フランドールと並んで見れば、二人が全く同じことを考えていることは簡単に分かった。

レミリアは思わず吹き出しそうになるのを堪えながら、外見は考え込むようなポーズを見せた。

「ふーむ。夜なのはいいんだけど、奇しくもこの日は満月ね。私達、吸血鬼の力が増すと同時に気も昂ぶる時間帯だわ。

さて、どうしたものか。参加したいのは山々だけれど、果たして今のフランに自制が効くかしら？ 万が一、暴れたり、物を壊したりして、宴会を台無しにしてしまうワケにはいかないしねえ……」

「わ、私、頑張るよ！」

「あら、大丈夫とは言ってくれないのかしら？」

「うっ……ん。やっぱり、絶対に大丈夫なんて言えない。その時になつてみないと分からないけど、もし我慢出来なくなったら、迷惑になる前に帰るよ。だから、お願い！ お姉様っ！」

フランドールの健気であると同時に、冷静で理知的な答えを聞いて満足したレミリアは、今度こそ満面の笑みを浮かべた。

「よく言ったわ、フラン。一緒に宴会へ参加しましょう」

「やったーっ!」

「よかったですね、妹様! なに、当日は私もいますから、いざとなったらお任せ下さい!」

「えっ、なんで美鈴まで行くって話になってるのかしら? あんた門番でしょ?」

「おおおじよおうさまあああゝゝっ!!」

「じよ、冗談よ! コラ、鼻水垂らすな!!」

縋りつく美鈴を、レミリアは慌てて引き剥がした。

そんな慌しい様子の傍らで、澄まして立っている咲夜は、誰が口を挟むまでもなく同行が決定している。

参加者は宴会の為の酒や料理を持ち寄ることになっていた。そういった点で、咲夜は紅魔館の参加メンバーの要であった。

ちなみに、パチュリーは宴会へ参加しないことになった。

「私は遠慮しておくわ。外出は苦手だし、喘息じゃお酒の席にも付き合えそうにないしね」

パチュリーは、レミリアの誘いにそう返答した。

「当日は、美鈴の代わりに紅魔館の留守番でもしてるわよ。

満月の夜は他の妖怪も騒ぐ。かつてない人外の宴が繰り広げられる魔性の夜ともなれば、何が起ころるか分からないしね」

「すみません、私も遠慮しておきます」

「いや、誰もあんたは誘ってないわよ。小悪魔」

「マジですか? 酷いですね、妹様に泣きついてみましようか」

「やめなさい」

なんだかんだ言いながら、小悪魔もパチュリーに付き合っつて紅魔館に残ることとなった。

——紅魔館の主にして、気高い吸血鬼『レミリア・スカーレット』

——その当主の妹にして、紅魔館秘蔵の幼き吸血鬼『フランドール・スカーレット』

——人間でありながら吸血鬼に仕える悪魔のメイド『十六夜咲夜』

——逆に妖怪でありながら先代巫女を信奉する紅魔館の古参『紅美

鈴』

以上が参加者となった。

——人里より。

「なんだかすごいことになってるわねえ」

「まったくだな、かつてない異変だぞ」

妹紅と慧音は二人で新聞を読んでいた。

仕事の合間の休憩である。

薪割りの代行という、妹紅の鍛錬を兼ねた仕事だった。

今の妹紅は、この仕事も『ちよつとした小遣い稼ぎ』程度の認識でやり遂げてしまえるようになっていいる。

「慧音はこれに参加するの？」

「いや、当日は満月らしいしな。やめておくよ」

この理由を、妹紅は『人里に残って妖怪の起こすトラブルを警戒する為』と解釈した。

実際に、それもあつたが——慧音は複雑な心境を、上手く表情の下に隠していた。

「妹紅はどうするんだ？」

自然な形で話題を逸らす。

妹紅は少しだけ考えてから、答えた。

「私もやめておくわ。第一、師匠の復帰祝いは私達だけで一度やったしね」

「ああ、私もそう考えていた」

「じゃあ、当日は慧音の家にも泊まって、一緒に人里の警邏でもしようかしら」

「いや、それは……拙い」

「拙い？」

「うむ。その、満月の夜は……拙いのだ」

言葉を濁す慧音を、妹紅は不思議そうに見つめていた。

もちろん、この二人を含めて人里から宴会へ参加しようなどと考え
る剛の者は出てこなかった。

——香霖堂より。

「いや、行かないよ」

霖之助は、新聞を片手にやって来た魔理沙へそう答えた。

予想通りなようでいて、意外とも取れる返答に、魔理沙は複雑そうな表情を浮かべた。

「香霖って、霊夢のおふくろさんと親しいんだろ？」

「ああ、古い付き合いだね」

「怪我した時も見舞いに行ったら楽しいじゃないか」

「怪我を負ったのなら大事だ。だけど、怪我が治ったのなら、めでたい話ではあっても大事じゃない」

「なんだよー、それ」

薄情とも取れる物言いに、魔理沙は口を尖らせた。

しかし、実のところ魔理沙も霖之助の人となりというものをよく分かっている。

この淡泊さが単なる性格や性分であり、先代に対する冷たさでないことは察しているのだ。

魔理沙が不満を感じているのは、別のことだった。

「悪いけど、付き添いはまた別の人に頼んでくれ」

「な、なんのことだぜ？」

「実は、先代が魔理沙より先にここへ来ていたんだ。もちろん、彼女にも断っておいたけどね。」

今回の宴会に関しては色々と考えてたみたいで、悪いとも思っただよ。なんでも、宴会を開いた理由の一つは霊夢の為らしい」

「……霊夢の、為？」

「これを切欠に、色々な人や妖怪と知り合って欲しいそうさ。あと、そうだな……魔理沙とも仲直りして欲しいってさ」

言われて、魔理沙の顔が赤くなった。

「べ、別に霊夢と喧嘩なんてしてないぜ！」

「そうなのかい？ 僕は詳しい話を聞いてないからね。そうか、先代の考え違いか」

わざとらしく惚ける霖之助の横顔を、魔理沙は唸りながら睨みつけ

ていた。

もちろん、当人は涼しい顔で無視している。

やがて、魔理沙は持っていた新聞を霖之助に投げつけると、踵を返した。

その背中へ、無遠慮極まりない調子で霖之助が声を掛ける。

「それで結局、魔理沙は宴会に参加するのかい？」

「知らない！」

——迷いの竹林より。

「姫様は参加しないってさ。つつか、参加するって言っても師匠が止めただろうけどね。参加者ヤバすぎ。」

「それで、当の師匠は何やら暗躍中。あの異変以来、八雲紫と胡散臭い繋がりが出来たみたいだし、何か考えてるだろうと思うけど何考えてるかは不明ね」

「なんで考えるの？ 宴会は楽しむだけでしょ」

「うん、そうね。真理だわ。あんた、やっぱり頭いいわね」

「やっぱり？ あたいつて天才？」

「うん、天才。天才つまり最強。あんた最強」

「マジでか!? あたい、サイキョーか！」

「そうそう、最強。あ、筍焼けた」

「食べる！」

「熱いよ」

「あつちい!？」

「だから言っただじゃん」

てるとチルノである。

妖怪兔と氷の妖精。迷いの竹林で、最近よく見られるようになった奇妙なコンビは、焚き火を囲んで賑やかに騒いでいた。

竹林の中といっても、場所は妹紅の住処となっている家屋の前である。家主は今はいない。

あの異変以来、毎日ではないにしろ、この場所へは当時の仲間が自然と集まる溜まり場となっていた。

「ほら、水」

「ありがと……でも、なんであたいまで宴会に行っちゃいけないの？」

「あんたは宴会に呼ばれてないでしょ」

「でも、新聞には参加自由って書いてあったよ」

「あちゃー、あんたとうとう漢字読めるようになっちゃったのか。先生も余計なことしてくれるなあ」

「なんでよ!? 褒めてよー!」

「分かった。ほら、頭出して」

てるは同じくらいの体格のチルノを『いい子いい子』した。

「えへへっ」

「偉いんだけどさ、真面目に説明するとあんたには分かり辛いかと思ってるね」

「どういうこと?」

「うーん、つまりね。宴会は危険かもしれないって話なのよ」

「危険なの?」

「参加する奴らが大物ばかりだしね。」

まず、主催する先代巫女の意図が不明。普通、復帰祝いなんて本人じゃなくて周りがやるものでしょ。だから、この理由は単なる建前に思える。

そんな謎の先代の呼び掛けに、それでも大勢の人妖が応じて、普通なら在り得ない大物同士が一つの場所で顔を合わせる。当然、和気藹々とはいかんでしよう。

種類の違う火薬を一箇所に集めるようなもんだね。いつ、どんな爆発が起こるか分かったモンじゃないよ」

「……お師匠は、皆で仲良く宴会したいんじゃないの?」

必死に考えて捻り出したチルノの答えを聞き、てるは苦笑しながら『だったらいいねえ』と相槌を打った。

馬鹿にしている様子ではなかった。

本当に、そうならばいいと考えているのだった。

「チルノは知らないだろうけどさ、昔は鬼って言えば誰もが震え上がるくらい恐ろしい妖怪だったのよ。今じゃあ、皆忘れかけてるけど

ね。

鬼が関わる宴つてのは、人間からすれば阿鼻叫喚の地獄と同じさ。そんな鬼が参加する宴会に、人間も一緒に出て楽しもうっていうんだ。本当に、常識じゃ測れない夜になるのは間違いないよ」

「それがなんで危険なの？」

「さあて、案外あんたなら大丈夫かもしれないけど……ね」

てゐは曖昧に言葉を濁した。

それ以上何も言わないてゐを探るようにつめていたチルノは、やがて腕を組んで考え込み、それほど時間を掛けずに腕を解いた。

「つまり、てゐはあたいのことを心配してるのね？」

チルノはシンプルに結論を出した。

それを聞いたてゐは、何も答えず、黙ったまま焚き火を眺めていた。その変わらない表情の奥から何を見つけ出したのか、チルノは一つ大きく頷いた。

「わかった。てゐが行くな、って言うなら行かない」

「そうかい」

そう言つて、てゐは気付かれなくらい小さく安堵の息を吐いた。

「でも、あたい鬼つて知ってるよ」

「えっ、嘘!？」

「お師匠と戦つてるところ見たもん。すっげーつえーの。お師匠の方がサイキョーだったけど」

「……あんた、本当に妖精とは思えん経験してるなあ」

文々。新聞からは省かれた意外な事実を知り、てゐは感嘆すると同時に呆れもするのだった。

——魔法の森より。

魔法の森に住む二人の魔法使いの内、一方の邸宅。

もう一人の魔法使いの家と対照的に、その中は完全に整理整頓されている。

人手が多ければ、日々の掃除もはかどるのだ。

正確には『人形手』だが。

動き回る人形に囲まれて、アリスは新聞を読んでいた。視線の先にある記事は、宴会についてである。

人妖が多く集まる大宴会。開催地は博麗神社。

アリスは、当然のようにその宴会への参加意欲を持っていなかった。

集まる人間も、妖怪も、場所さえもアリスには馴染みの無いものである。

そんな所へ、見知らぬ魔法使いが一人現れたところで歓迎などされるはずがない。

結論は、とうに出ていた。

出ていて、それでも尚考えていた。

——馴染みが無い。

それは、アリスが常に感じている『違和感』だった。

ずっと魔法の森に籠もっていたのだ。

魔理沙と連れ立ち、あの異変の夜に初めて様々な人妖と邂逅した。

だから、馴染みが無くて当然なのだ。

ただ——『私』はいつから、魔法の森に籠もっていた？

最近、当たり前のことについて疑問を持つことが多くなった。

いや、そもそもその『最近』とは何時からであったか？

「……上海」

アリスは唐突に、愛用する人形を呼び寄せた。

「この新聞を読んでみて」

「」

アリスが新聞を差し出すと、上海人形はそれを黙って受け取った。

「感想を聞かせて」

「」

上海人形は、新聞を持って、顔をその誌面に向けたまま、止まったかのように動かない。

新聞を読んでいるはずがなかった。

ましてや、感想を抱く心など存在するわけがなかった。

それを理解していながら、わざわざ人形に命じた自分の行動が分か

らない。

アリスは、上海人形と同じように、そのまま何をし始めることもなく、止まっていた。

まるで、繰り手が手を止めた人形のようなだった。

「——アリス、いるか!？」

勢いよく扉を開け、魔理沙の声が家の中に響く。

騒がしい声だった。

生きている声だった。

「いるわよ。用件は何？」

動き出したアリスは、突然の来訪者を表情に出さずに歓迎した。

——永遠亭より。

三人の従者が、自分以外の二人を睨んでいた。

全員が一言も発さずに座しており、互いに武器も持っていない。

争いはご法度であると、それぞれの主に厳命されているからだ。

しかし、もしも視線が刃であり銃だったのなら、三人は今まさに殺し合いをしていた。

『獣臭いのと、辛気臭いの。永遠亭が穢れるわ』——と、眼で語る鈴仙・優曇華院・イナバ。

『貴女方を理解するつもりはありません。不審な真似をすれば、ただ斬る』——と、返すのは魂魄妖夢。

『我が主が許す限り、私もまた寛大だ。お前達の、今この場での生存を許可しよう』——と、全てを意に介さず八雲藍。

それぞれの従者を背後に控えさせて、彼女の主人達は緊張と殺気が静かに満ちた部屋の中で苦笑し合っていた。

「だから、うちで会いましょうって言ったのに」

「私達三人の内、どちらの住処で話し合っても、残り二人の不利と取られるのよ。どうせ揉めるわ」

「ここには私の弱味があるのだから、それで帳消しにしてもらいたかったのだけどね」

困ったように呟く幽々子に対して紫が答え、永琳が輝夜の存在を暗

に指して肩を竦めた。

人も妖怪も近づかない迷いの竹林の中の永遠亭で、まるで密会の如くこの三人が集まっているのには訳があった。

三人の囲む机の上には、今回の宴会について載った新聞が置いてある。

「それでは此度の宴会、永遠亭からは貴女とその従者が参加するとうことで決定かしら？」

「ええ。てゐるは断るそうよ。不干渉の立場でいたいようね」

永琳は答えた。

従者とはつまり、鈴仙である。

「そして、幽々子は」

「ええ、妖夢と一緒に顔を出させてもらうわ。楽しみねえ」

幽々子もまた宴会への参加を告げる。

しかし、本当に楽しみであるように柔らかく笑う彼女を除き、残りの二人は気を引き締めるように笑みを消していた。

「あら、二人は楽しみじゃないの？」

「幽々子。貴女をこの場に呼んだ意図は、分かっているでしょう」

「うーん、そこが疑問なんだけど。本当にそこまで警戒する必要があるの？」

——古明地さととり、つて。

新聞に載ったその名前を、紫と永琳は凝視した。

無機質なインクの文字の先に、その妖怪の全貌を描こうとしていた。

「今回の宴会、先代の発案にしては少し唐突に感じたわ」

「付き合いの長い貴女が違和感を感じるのなら、何か意図があつてのことだと考えるのが普通ね」

「先代には、そのような策謀はありません。それは保証いたしますわ」
「私情の混じった保証を信じるほど楽観的ではないわね」

静かに、紫と永琳は視線を交わした。

互いの従者のように、露骨に睨み合うような殺気立ったものではない。

しかし、二人の間にある空間がゆっくりと歪んでいくような、水面下の激突が透けて見えていた。

連動するように、藍と鈴仙も何かが昂ぶっていく。

「……こら、やめなさい」

のんびりとした声で、幽々子が横から二人を諫めた。

本当に、何気ない諫め方である。

それを大妖怪と蓬萊人に対して気負うこともなくやってみせたからこそ、効果は抜群だった。

「……幽々子呼んで正解だったわ」

「私と貴女だけなら、そこで話は終わっていたわね。三人でいることには、こんな意味があったのね」

紫と永琳の体から噴き出そうとしていた、何か『恐ろしいもの』が抜けていく。

ニコニコと笑う幽々子に釣られるように、二人も苦笑を浮かべた。

「結局、今回の宴会に何か裏の意図があると思っっているのは二人とも同じで、紫は古明地さとりだけを、永琳はそのさとりに加えて先代も警戒しているということよね」

幽々子の結論を、二人は無言で肯定した。

「そして、永琳が先代を疑うのは仕方のないことだわ。だって、付き合いが浅いんですもの」

「……そうね。それは、個人の事情ね」

紫は納得するように呟いた。

表情には全く表れない紫の心情を探っていた永琳は、やがて小さくため息を吐いた。

「彼女が、何か悪意を持って宴会を発案した可能性は限りなく低い。

そう、思っているわ」

「観念するように告白した。

好きで疑ったわけではない、と釈明しているのだった。

紫の中から、最後の強張りが抜けていくのを、幽々子は見抜いていた。

「それじゃあ、当日一番気をつけるべきなのは、この古明地さとり――」

という話で終わりね」

「幽々子。あまり気楽に構えないで」

「確かに珍しい出来事だけど、宴会一つに二人が考えすぎだと思わね。珍しいのなら、むしろ楽しまなきゃ」

幽々子は朗らかに笑いながら、『それに』と付け加えた。

「私は二人と違って、絶対に守るべき第一線というものがない。古明地さとの真意と正体に踏み込むなら、丁度良いくらい身軽なのよ」
——だから、楽しみましょう。この宴会で、何が起こるのかも含めて。

幽々子の言葉に、それ以上二人が反論を挟むことはなかった。

結局、推測だけで話し合えることは少ないのだ。

宴会の当日。古明地さとりが現れた時、全てが始まる。

そこで何かが起こるのか、あるいは起こらないのか。

さとりについて何かが分かるのか、あるいは何も分からないのか。

まだ始まっていない全てを、知ることは出来ない。

（古明地さとの容姿、能力、立場、私の知り得る情報を幽々子と永琳に教えた。これが今出来る全て——）

ただ一人、さとりと面識のある紫は未だ考えていた。

先代から突然持ち掛けられた宴会の提案。

初めてのことだった。ここまで行動的な先代は、今まで見たことがない。

まるで何かの後押しされるように、迷い無く動いている。

（彼女は、最初の参加者が古明地さとりだと言った）

そこから、ずっと何か引つ掛かり続けている。

またしても、さとりである。

全ての始まりに、彼女が関わっているような気さえする。

本当に、今回の宴会は先代が発案したものなのか？

分からない。二人はどんな会話をしたのだろう。警戒すべきだったか。監視すべきだったか。いや、しかし。もしも最悪の想像通りならば——。

考えが纏まらない。

(私は、恐れているのか)

——何を？

自問する。

答えは出ない。

かつて、古明地さとりは自分にとって利用出来る妖怪だった。全てを把握していた。

しかし、今は違った。

古明地さとりの正体が、どんどん不鮮明に探れなくなっていく。

先程の幽々子の言葉にさえ、不安を感じ始めていた。

(幽々子は、確かにさとりと関わる際のリスクが少ない。結局のところ、さとりの強みは読心による情報の把握だ。幽々子には、それが弱味とならない)

自分には幻想郷の管理に関する様々な機密が、永琳には輝夜が存在が頭の中にある。

しかし、幽々子にはそれが無い。

彼女自身の存在すら揺るがす『亡霊としての出生に関わる記憶』が、肝心の彼女自身の記憶に無いのだ。

亡霊である幽々子は、西行妖の下に眠る死体について知り、自分の死を自覚すれば消滅してしまう。

幽々子の秘密の中で最も重要なそれを、さとりは幽々子の心から読み取れない。

万が一敵対した場合でも、能力同士の相性ならば、幽々子の方が遙かに有利だった。

しかし——と、紫は思う。

思ってしまう。

(もし、さとりが幽々子の秘密について既に知っているとしたら——) 本来ならば、頭の片隅にすら浮かばない不安だった。

理屈として破綻している。根拠も無い。意志の弱さが生んだ、被害妄想だと切り捨てただろう。

(絶対に在り得ないと、否定出来るだろうか?)

しかし、古明地さとりの得体の知れなさが、紫の中に消えない不安

を呼び込んでいた。

(古明地さとりが公の場に出る——これは、チャンスなのかしら？
それとも……)

思考の迷路に入り込んだ紫の、懸念は尽きない。

——異変を境に突然現れた永遠亭の薬師『八意永琳』

——その助手にして異色の妖怪兎『鈴仙・優曇華院・イナバ』

——冥界は白玉楼に住む亡霊の姫『西行寺幽々子』

——白玉楼の庭師を勤める半人半霊の剣士『魂魄妖夢』

多くの人妖が集う大宴会。

ただそれだけで、地獄の釜の如き混沌とした様相。

何も起こらないとは、紫には到底思えなかった。



さとりが先代に話した内容は、全て事実であった。

さとりは、地底世界の支配者ではない。

その能力は、地上はおろか地底の妖怪全てを把握することさえ出来ないのだ。

地霊殿から離れた地底の闇。

そこに、大勢の妖怪が集まっていた。

その数およそ、百。

姿形は様々である。

人を見上げるような大きな体格の者もいれば、腰よりも低い小さな者もいる。

手や足の数が違う。眼や口の数さえ異なる者もいる。

それらの妖怪に共通する点が一つ——全員が『鬼』であることだった。

百の鬼が、さとり知られることなく、地底の片隅に密かに集まっているのだった。

「——よく集まってくれた」

それらの鬼の内、中心となるように一匹の鬼が言った。

一際立派な二本の角を持つ、少女のような鬼である。
伊吹萃香だった。

「わたしはお前達を呼んだが、ここへ『萃める』のに能力は使っちゃいない。お前らは、自分の意思で『集まった』んだ」

鬼達は異口同音に『そうだ』と答えた。

伊吹萃香は、有象無象の鬼達を束ねる頭領のような立場にある。それは地底に潜った現在も変わらない。

しかし、今回鬼達が集まったのは、萃香の命令に従ったからではなかった。

「各々、思うことは違うだろう。わたしの呼び掛けに応えた理由の是非を、この場で問うつもりはない。

わたしのやりたいことと、お前らのやりたいことは、違って当然だ。わたしは『やる』だから、お前らは勝手に乗ってこい。鬼なら、それで十分だ」

集団の頭でありながら、統率を放棄するような萃香の物言いに、しかし誰も不満を抱かなかった。

むしろ、満足している。

ここで萃香が具体的な指示や命令を出そうものなら、その段階で何人が抜けていただろう。

鬼とは、そういうものだった。

鬼が集まって何かをするということは、そういうものだった。

「だが、ここにいる全員。動いた切欠は、同じはずだ。

お前達は、一度地上を去った。わたしがどれだけ命じても、誘っても、これまでのお前らなら動きはしなかっただろう。

でも、またお前らは動いた。動いてくれた。地底にたった一人でやって来た、あの勇儀を拳でぶちのめした人間——直接見た奴も、話に聞いた奴も皆、あいつを思い描いて、今日此処へ集まったはずだ！」

「おう、そうだ！」

鬼の一人が、堪えきれずに叫んだ。

「すげえ女だった！」

「大した女だ、あんな人間がまだ地上にいたとはなあ！」

「いや、待て！ オイラは勇儀の姉さんが人間なんぞに喧嘩で負けたなんて信じてねえぞ！」

「そうだ！ 何かの間違いだ、俺がそれを確かめてやる！」

「馬鹿こけ、ワシはこの眼でしかと見たんだ！」

「ケツ、そもそも人間に負けた星熊が面汚しだって話じゃねえか？」

「おい、誰だ今ぬかした奴！ ぶつとばしてやる!!」

「おう、喧嘩だ喧嘩だ」

「やっちめえ！」

「どうせ喧嘩すんなら、俺アあの巫女がええなあ」

「おおっ、そうじゃそうじゃ！」

「お前もそう思うか！」

一人が口を開けば、それで火が着いたかのように、鬼達は好き勝手に騒ぎ始めた。

元々統率など存在しないとばかりに、喧嘩まで始める始末である。混沌とした様相を眺めながら、それでも萃香は朗らかに笑っていた。

「おうっ、それよそれよ！ どいつもこいつも思うことや感じることは違うだろうよ。」

けどな、お前らの考えてること全部にあの巫女がいるんだよ。そして、そいつは地上にいる。しかも、勇儀との戦いで負った傷を治して、また戦えるようになって、しっかり生きてる！」

いつの間にか、鬼達は静まり返っていた。

考えることはそれぞれ違ったが、その結果に起こす行動が、全員同じだと分かっていたのだ。

「だから、な？ ——いくぞ、地上へ」

『雄々おおおおおおおおおっ!!!』

百の鬼が地底を揺るがさんばかりの咆哮を上げた。

しかし、その音が周囲に広がる前に、萃香の掲げた片手に全ての声が『萃め』られていった。

故に、誰も気付かない。

地底の闇の中でのみ、鬼の狂気が荒れ狂っている。

「……つくうう〜！ いいねえ、お前らの意気はしつかと受け取ったよ！」

握り締めた片手を胸に当てて、萃香は笑った。
凄まじい鬼の笑みだった。

「地上では人間と妖怪の間に新しいルールが出来ている。それを破つた者は本当に退治される。

——だがな、それがどうした!? わたし達、鬼が地上へ戻るのは、そのルールに従って大人しく生きる為か？ 違うねえ、そのルールに喧嘩を売ってやる為さ！

退治されるだって？ おおう、上等だ！ 人が忘れた鬼退治、あの巫女のように見事やってのけてみる！ そんな人間が地上にまだ残っているか？ 少なくとも、一人いるっ!!」

「頭ア、話がなげえ！」

「そうだそうだ！」

「とつとと行こう！ オラ、もう我慢出来ねえ！」

「あの巫女と勝負してえ！」

「妖怪の山じゃ、天狗どもが踏ん返り返ってるんだって？ 誰が大将か思い出させてやんねえとな！」

「俺は前々から、幻想郷とやらも、それを管理する妖怪とやらも気に入らなかつたのよ。全部、ぶっ壊してやる！」

「とりあえず、人間を腹いっぱい食う！ もう地底の冷や飯は嫌だね！」

再び統率を失った鬼達は、口々に悪しき欲望を吐き出した。

それぞれの欲望すら纏まっていけない彼らが唯一共通しているのは、ただひたすら熱く、滾っているということであった。

人間に忘れられ、人間を忘れようとした鬼達の魂に、今、かつての火が燃えていた。

「——うるせえなあ、もうっ！ 分かったよ！」

萃香はガリガリと頭を掻きながら、自分もまた堪えきれないように
凜猛な笑みを絶やしていなかった。

「いくぞ！ 鬼を忘れた地上の者どもに、本物の百鬼夜行が如何なる

ものか教えてやるぞ！」

猛り、動き出す鬼達を覆うように、萃香の体が霧となって広がった。

鬼の姿も、気配も、凶暴なまでの猛りさえ、その霧が覆い隠す。

それ自体が一匹の鬼であるように、巨大な霧の塊が静かに地底を動いていく。

百の鬼が向かう先は、地上。

そして、辿り着くだろう『時』は奇しくも——人妖入り乱れた宴会の夜だった。

其の二十七 「百万鬼夜行」

日の出が陽の力を生み出す時刻ならば、夕暮れはその陽の力を失っていく時刻だ。

フランドールは夕焼けを見つめていた。

赤い光が刺すように両目を焼く。

比喻ではない。眩しさと共に、確かな熱さを吸血鬼である少女は感じていた。

しかし、それを苦痛だとは思わない。

今この時だけ、フランドールにとって太陽の光は自らを滅ぼす恐ろしい光ではない。

「綺麗……」

吸血鬼の少女は、太陽を見て感動していた。

日中ならば、まともに浴びれば致命傷を与える陽光。

圧倒的な光を放つ巨大な火の玉が、山々の陰へ沈んでいく様を見る。

計り知れない力が消滅していく壮大な光景を眺めて、一日という世界の終わりを知る――。

「とつても綺麗ね、お姉様。わたし、初めて見たわ」

「吸血鬼が太陽に心を奪われるんじゃないやありません」

傍らに寄り添って飛ぶレミリアが呆れたように言った。

しかし、その顔が苦笑を浮かべているのは、妹の気持ちも自分にも少しは分かるからだだった。

自らの滅びの象徴である日の光を、恐れながらも強く焦がれる――そんな矛盾した心が、吸血鬼という種族には誰しも備わっているような気がしてならない。

レミリアは、美鈴に促して、フランドールを夕焼けの光から日傘で守らせた。

「むーっ、よく見えないよ。美鈴！」

「申し訳ありません。でも、これ以上は体に毒ですよ」

「文字通りの、ね。フランは初めて見るから実感が無いでしょうけど、

陽光を浴び続けると感じる痛みから連想するよりもずっと大きく、吸血鬼は体力を奪われるのよ」

そう忠告するレミリアは、自分の日傘でしっかりと身を守っていた。

従者である咲夜はもちろん傍に控えているが、こちらには荷持ちを優先させている。

紅魔館から出立した彼女達四人は、宴会の為の食料や酒を持って、博麗神社へ向かっている最中だった。

「さあ、急ぎましょう。第一、一番乗りしたいと言ったのは、フランと美鈴の方でしょ？」

レミリアにたしなめられ、フランドールは夕焼けの光景から眼を離した。

太陽は徐々に姿を隠し、夕闇が一带を包んでいく。
夜が訪れる。

満月の夜である。

今夜、いよいよ幻想郷でも前代未聞の大宴会が開催されるのだ。



「ああ、やっぱり」

「何がやっぱりなのよ？」

博麗神社の境内に降り立った咲夜は、ガツクリと肩を落とした。

その反応を見た霊夢が慥然と尋ねる。

「アナタ、宴会の用意を何もしていないじゃない」

「料理やお酒は各自が持ち寄るって——」

「そうじゃなくて、場所の準備よ」

辺りを見渡す咲夜に倣って、霊夢もグルリと一带を眺めた。

同じようにレミリアとフランドール、そして美鈴も物珍しげに神社という場所を観察している。

見慣れた風景を確認した霊夢は、やはり慥然として言った。

「準備出来てるじゃない。しっかり、掃除もしておいたし」

「確かにゴミは落ちてないわね。ただ、大勢の参加者が集まるというのに敷き物の一つも広げていない。おまけに、宴会の開始時間は夜だというのに明かりの確保も出来ていないわ」

「……地べたに胡坐でも掻けば？ 妖怪なら月明かりだけで十分でしょ」

「OK、分かった。アナタに参加者を歓迎しようって気がないことはね」

「こいつにそんな気遣いは期待するだけ無駄よ」

呆れた様子の咲夜とは別に、レミリアは愉快そうに笑った。

「でもね、霊夢。アナタはそれでよくても、主催者である先代巫女はどうかしら？」

「むっ」

「不備があれば、それは彼女の面目を潰すことになるのではなくて？」

レミリアは霊夢の扱いを心得ていた。

かつての異変の中で、様々な形で互いを知り合った結果である。

母親のことを引き合いに出されて、さすがに霊夢も難しい表情で黙り込んだ。

「……確か、裏の小屋に古いムシロが」

「罪人が並んで座るんじゃないんだから、もうちよつと品の良い物使いなさい。咲夜」

「はい」

分かり辛いが、狼狽しているらしい霊夢の様子を見て満足したレミリアは、咲夜に促した。

肩に下げていたバッグから、次から次へと道具を取り出していく。

高級そうな絨毯、見事な装飾のランタン、テーブル、椅子——西洋風の物に偏ってはいるが、それらは宴会の場所を形作るのに必要な道具の数々だった。

「座布団くらいはあるでしょう」

「あるけど……あんだ、それどっから出したのよ？」

明らかにバッグの容量を超えた物をどんどん取り出して並べていく咲夜に、霊夢は呆れた。

まるで手を入れた先に別の空間が広がっているようだ。

質問に答える代わりに、一通りの道具を出し終えてから、咲夜はバッグから離れた手で口元を覆い隠した。

「——マジックよ」

今度は口の中から、ダバダバと何十枚ものトランプを取り出してみせた。

霊夢はそのシユールな光景をしばらく眺めてから、ようやくこれが先程の質問への小粋なジョークを交えた返答だと理解した。

「わー！ 咲夜、スゴイ！」

「メイドの嗜みですわ」

「いつ見てもお見事です！」

リアクションに困る霊夢を置いてけぼりにして、フランドールと美鈴が純粹にはしゃいでいた。

——なんだ、こいつは。こういう奴なのか？

瀟洒なメイドの意外な一面を、霊夢は見たような気がした。

どうでもよかった。

「食材の方は美鈴に持たせてあるわ。というか、自分が調理するって言い出したのよね」

「そうです。任せてください！」

美鈴はレミリアに胸を張った。

霊夢が疑わしげな視線を向ける。

「あんたが？ ……なんか、中華しか作れないイメージがあるんだけど」

「おっと、それは早計ね。これでもかなり手広く作れるわよ。

咲夜さんがメイド長になるまで、誰が紅魔館のやたらと注文の多い食事事情を解決していたと思っっているの？」

「失敗作も相当食わされたけどね」

「美鈴のご飯は咲夜と同じくらい美味しいよ！」

姉妹が保証するのを受けて、霊夢も納得した。

「じゃあ、あたしも料理の方を手伝おうかしらね」

「そうね。会場の準備は、霊夢には不向きだわ」

「うるさい」

「えつとね、わたしは……」

「フラン、いいのよ。下々の者に任せて、私達は優雅に待っていれば」

「そうね。邪魔だし」

「ふふん」

霊夢の軽口に、レミリアも余裕を持って応えた。

そんな二人の様子を見て、咲夜は密かに安堵していた。

今回の宴会に関して、正直不安を感じていた。

あの永夜異変において、迷いの竹林で霊夢や自分を含めた多くの人妖が入り乱れ、争ったことは記憶に新しい。

『警戒ではなく親愛を』——見知らぬ相手、しかも力を持った相手に、それは酷く難しい。あの時、実感したことだった。

ましてや、紅魔館はかつて博麗の巫女と敵対した関係である。

一応の解決は経たが、その後大した交流もなく、ただ互いの溝が水面下に沈んでいるだけのような印象があった。

歓迎されないかもしれない。

それどころか、敵意を向けられるかもしれない——。

そう、不安に思っていた咲夜にとって、今日の前にある光景は悪いものではなかった。

明るく素直なランドールと、好意的な美鈴に加えて、意外にもレミリアまで霊夢に対して悪感情は抱いていない。

——杞憂か。

咲夜は、心の何処かにあつた霊夢への警戒と不審を、今度こそ完全に消し去った。

宴会のセッティングをしようと、道具に手を掛ける。

その時——。

境内に残った、咲夜、レミリア、ランドールの三人に緊張が走った。

三つの視線が、何も無い空中に走った一本の亀裂に集中する。

「——あら、どうやら私は二番乗りのようですわね」

それは『スキマ』と呼ばれる異次元の裂け目だった。

これ操る能力者は、人妖の中でも一人しかない。

得体の知れない境界操作という力を、単なる便利な交通手段として利用して、八雲紫が式神である八雲藍を伴って境内に降り立った。

「久しぶりね、八雲紫」

「お久しぶりですわ、レミリア・スカーレット」

挨拶を交わすレミリアの顔に、霊夢に対して向けていたような気安さは、もはや微塵もない。

心なしか、フランドールがレミリアの影に隠れるように動いていた。

——ああ。

一変した周囲の空気を感じ取り、咲夜は思わず空を仰ぎそうになった。

紫の背後から自分や主人姉妹を無遠慮に観察する藍の冷たい視線を受けつつ、内心で嘆く。

——やっぱり杞憂じゃなかった。

今宵の宴会の前途は、多難であるらしかった。



日はすっかり沈み、夜も更け始めている。

「いや、いい月夜ねえ。雨も降りそうにないし、宴会には絶好の夜だわ」

土間の窓から月を見上げ、美鈴は明るく笑った。

「そうね」

「そうですね」

冷めた返事を受け、笑う傍から口元が引き攣っていく。

元々、博麗神社の台所はそれほど広くはない。

そこで、美鈴を含めた三人——霊夢と妖夢は並んで調理作業に没頭しているのだった。

「え、えーと……そう！ 妖夢は刃物の扱いが上手いわね」

「恐れ入ります」

美鈴の褒め言葉に、妖夢が短く応える。

それで、会話は終わってしまう。

この気まずい沈黙を、美鈴は先程から延々と味わっていた。

——どうしてこうなった!?

誰に聞いても答えは出ないだろうが、問わずにはいられない。

少なくとも、霊夢と二人で作業をしていた時には、こんな嫌な空気ではなかったはずだ。

和気藹々とはいかないまでも、穏やかなやりとりがあった。

実際に、美鈴も霊夢のことを割りと好ましく思っている。彼女の母親への印象も影響しているのだろうが。

宴会の参加者が続々訪れたらしく、境内で動く者の気配が増え始めた辺りから、何かがおかしくなっていた。

『手伝いに来ました』

幽々子のお供として、食材を持って台所に現れた妖夢はそう申し出た。

それは純粋な善意であったし、事実美鈴はありがたく受け取った。

初対面同士で軽く自己紹介を済ませ、そして妖夢が霊夢に対して声を掛けたのだ。

『……お久しぶりです、霊夢さん』

奇妙な間のある挨拶だった。

それを受けて、霊夢もまた妙な間を空けて応えた。

『あ……つと。ごめん、あんた誰だっけ?』

妖夢の様子が、明らかに変わった。

『冥界で会ったのは覚えてるのよね』

『……魂魄妖夢と申します』

『ああ、そうそう。そうだった、忘れてたわ』

その時、美鈴は空気が軋む音を確かに聞いたような気がした。

そして、空気の質までも変わってしまったのである。

明らかに霊夢に対して何か含むもののある妖夢とは反対に、霊夢自身は全く気にもせず調理を続けている。

それが、間に挟まれた美鈴のフォローも虚しく、辺りの空気を悪く

し続けているのだ。

釣られるように、妖夢の美鈴への態度まで固くなる有様である。

「よ、妖夢はその……白玉楼だっけ？　そこでお姫様のお食事の用意などもしているのかしら？」

「いいえ。専門の幽霊がやっています」

「そうなんだー、それでここまで料理が出来るっていうのもすごいわねー」

「ありがとうございます」

「れ、霊夢は普段は自炊してるのよねー？」

「まあね」

「独りだと、ずぼら飯になりがちだと思うけど、十分な腕前よねー？」

「母さんに仕込まれたし、食事はしっかり摂れって言われてるからね」

「そうかー、さすが先代様ねー」

「まあね」

「霊夢から見てさ、妖夢の料理の腕ってどんな感じ？」

「すごいんじゃない？　美鈴が言うなら」

「ありがとうございます。美鈴さん」

「――」

この有様である。

美鈴は二人の間から逃げ出したかった。

しかし、未調理の食材はまだ残っている。

それに、自分が抜けてこの二人が隣り合う光景も、見るのが怖い。

この場の全てに耐えながら、美鈴は手に馴染んだ自前の中華鍋に意識を集中した。

そこで不意に、誰かが背中に負ぶさる感触を美鈴は感じた。

「本場の中華って、煙すごいよねえ。ああっ、でも匂いも強くて空っぽのお腹に堪えるわあ〜」

「おわっつと!!　危ないですよ、西行寺様」

「やだ、幽々子って呼んで？　めーりん」

「耳元で甘く囁かんで下さい……幽々子さん」

背中に寄り掛かった幽々子へ、美鈴は苦笑しながら言った。

危ない、とは言ったが、迷惑には感じていない。

背中に幽々子の豊満な胸の感触と、亡霊特有の体温の冷たさを感じているが、軽く浮遊している為か重さは感じない。

作業の邪魔にならないよう配慮しているらしい。

加えて、幽々子の本当の気遣いは、何よりもこの場の空気に対するものだ。美鈴は見抜いていた。

主人である幽々子が関わると、妖夢の頑なな態度が少し和らぐのだ。

「幽々子様、はしたないですよ」

「妖夢は堅物で駄目ね。ねえ、美鈴。貴女は邪険にはしないわよね？」

「つまみ食いを御所望ですか、はしたないお姫様？」

美鈴は十分に火の通った肉の一切れを箸で掴んで、肩越しに差し出した。

「熱いですよ」

「やったあ」

子供のように喜んで、幽々子は肉を頬張った。

「ん、美味しいわ」

「宴会開始まで、それでなんとか凌いで下さい」

「分かった、我慢する。妖夢も、楽しみにしているからね」

「……はい」

幽々子の言葉を受けて、ようやく妖夢の顔に笑みが浮かんだ。

美鈴にとって、幽々子はこの宴会を円満に進める為の貴重な協力者である。

『冥界の姫』などと恐ろしげな肩書きを持つ亡霊だが、少なくとも美鈴には心休まる相手だった。

——逆に言えば、心休まらない相手が、この宴会には多すぎるのだが。

「次の料理は出来たかしら？」

良い意味で落ち着きのない幽々子が去り、悪い意味で落ち着きのある人物が入れ替わりで土間を訪れた。

魔理沙に連れられて宴会に参加した、アリスだった。

「あつ、はい。この料理をお願いします」

「別に敬語じゃなくてもいいわよ」

「は……はい」

「別に敬語でもいいけど」

「……そうですか」

今のはアリスなりのフォローのつもりだったのだろうか？

美鈴には、その真意が測れなかった。

面識はなく、ただパチュリーと同格の魔法使いという説明だけを受けている。自然と、敬語を使うようになった。

それは敬意ではなく、距離を感じているからだ。

まるで人形のように淡々としたアリスの言動は、何処かパチュリーと似ていながら致命的な差異を感じさせるものだった。

しかし、とりあえず宴会の準備に協力的ではある。

完成した料理に保温の魔法を掛け、テーブルに並べる作業まで手伝ってくれているのだ。

ただ、参加する人妖が多かれ少なかれ此度の宴会に何かしら感じているだろう中で、彼女だけが何一つ感慨を抱いていないような様子が、美鈴を不安にさせるのだった。

「えっと、重いんで一緒に持ちます」

「そう」

美鈴は料理を盛った大皿に手を添えたが、アリスは言外に必要なと感じている様子だった。

しかし、今更『やつぱりやめます』というのも余計気まずい。

霊夢と妖夢を二人きりにしてしまうという己の失敗を今更悟りながらも、美鈴はアリスと共に境内へ出た。

宴会の準備は粛々と行われている。

そう、粛々——である。

その空間に浮かれた騒がしきはほとんど無く、かといって表立った緊張もない、静かに張り詰めた空気があった。

境内の木々の間を繋ぐように、ランタンと掛行燈が混ざって下が

り、宴会場所を照らしている。

西洋風と和風が入り混じった奇妙な風景は、紅魔館の物ではなく、八雲紫が用意した宴会道具も混ざった為であった。

宴会の主催である先代巫女の頼みを受けて、本来は紫が場所の準備をする予定だったのである。

かといって、別にどちらが準備を遠慮する必要もない。

咲夜と藍が互いに示し合わせたワケでもないのに役割を分担し、効率的に作業は進んでいた。

ただ、そんな二人の的確な動きには、相手を牽制し、ともすれば争うような静かな苛烈さが秘められていることを、美鈴は気配で感じ取っていた。

そんな従者の働きを、それぞれの主人が並んで腰を降ろして眺めている。

ただし、寄り添うようなレミアアとフランドールの隣に、微妙に間を空けて紫が座るといふ配置から、三人の深い溝が感じ取れるのだった。

その光景を見て、美鈴は『うわあ』と思った。

具体的な感想は纏まらず、とにかく『うわあ』であった。

もはや、八雲紫の親友だと聞いた幽々子の存在だけが助けである。

そんな幽々子は、魔理沙と何やら談笑していた。

おい、こそ泥魔法使い。そんな所で貴重な人材相手に油を売るんじゃない。

連れて来た責任を取って、この魔法使いのフォローに回れ！ っていうか、お前は霊夢の友人じゃなかったのか？ あからさまに避けるのが私でも分かるんだよ、馬鹿！

美鈴は、内心でありつただけの悪態を吐いた。

「——紅さん、どうしたのかしら？」

「あ、いえ。何でもないです、料理置いちゃいましょう。

……あと、『ホンさん』って呼ばれると、何か間抜けなんで、美鈴の方でいいですよ」

「そう。ごめんなさい」

「い、いえ！ いいんです、気にしないで下さい！」

そして、このギクシヤクしたコミュニケーションである。

料理を置いた美鈴は、一息つく振りをして、大きくため息を吐いた。

——ああ、先代様。早く、この場へ駆けつけて下さい。

宴会の主催者である先代は、未だこの場に不在である。

そんな美鈴の切実な願いを叶えるかのように、新たな宴会の参加者が二人、境内に降り立った。

「こんばんわ。今夜はお招き頂きありがとうございます。永遠亭を代表して、八意永琳と鈴仙が参りました」

またもや、美鈴にとって面識のない相手だった。

またもや、得体の知れない実力者だった。

人間でも妖怪でもない、底知れぬ不気味な気配を感じる。

そして、やはり例外ではなく、彼女の連れた従者らしい妖怪兎も、明確な警戒と敵意を周囲に振り撒いているのだ。

馴れ合う気など欠片もない、といった決意さえ感じる。

それを見て、美鈴は『うわあ』と思った。

もう、とにかく『うわあ』であった。



四人の女が、並んで座っている。

八雲紫。

八意永琳。

西行寺幽々子。

レミリア・スカーレット。

凄まじい光景だった。

本来ならば、この内の二人が一つの空間で向かい合っているだけで、何かしらの陰謀や裏の意図を感じさせる者達である。

それが四人。しかもたった一枚の敷き物の上に座って、肩を並べているのだ。

ただそれだけで、周りは落ち着かなくなる。

彼女たちのそれぞれの従者ならば、尚のことだった。

藍が掛行燈の光量を調整し、妖夢が最後の料理を並べている。何もしていなかった鈴仙は、師に命じられて渋々テーブルを拭いていた。三人が、以前永遠亭でやっていたように互いの殺気と敵意を交わしている。

そんな視線の交差を、何食わぬ顔をしながら、のらりくらりと咲夜がかわしていた。

「もう、間もなく宴会が始まる時刻ですわね」

紫が誰にもなく言った。

四人が揃って、これが初めての会話である。

「今夜の主役はどうしたのかしら？」

永琳が紫に問う。

「先代ならば、残りの参加者を迎えに行っているわ」

「地底世界の妖怪とやらか」

「主催者自らのお出迎えとは、本当に入れ込んでいるのねえ」

さとりとは面識のない、レミリアと幽々子がそれぞれの思うところを秘めて呟いた。

「そういえば、そのレミリア嬢には古明地さとりのことを警告しなくてよかったの？」

「……何のこと？」

「余計な先入観を持たぬ者の対応というのも見てみたいですね。それに、彼女は警告を素直に聞き入れる性格ではありません」

「……ふむ。アナタ達が何の話をしているのかは分からないけど」

レミリアの眼光が、血のように赤く輝いた。

「お前らが、私を一段下に見ていることは分かった」

満月の夜の吸血鬼が放つ、恐ろしいほどの『鬼気』が二人の賢者の認識を改めさせた。

レミリアの齢は五百歳。

紫や永琳の視点からすれば、若輩者も同然である。

しかし、その資質は既に吸血鬼の王として相応しいものを備えていた。

「謝罪するわ、レミリア嬢」

「私もね。貴女を御父上よりも一枚落ちると値踏みしていたのは、誤りでしたわ」

「いちいち一言多い奴ね。まあいいわ、八雲紫。お前の警告を聞くつもりがない、というのとは間違っていない。」

あの先代巫女が直々に招くという地底の妖怪——直接見て、その実態を測ってやるわ。そして、伝説の『鬼』とやらもね」

少女の容姿に似合わぬ、獰猛な笑みが浮かぶ。

妖怪ではあるが、それは間違いなく若さ故の勇猛さだった。

老練な賢者二人が、そんな自分の行動を当て馬として観察していることは、レミリアも承知している。

その上で、ゆく。

周りの思惑など、踏み潰して、我が道をゆく。

かつて、霊夢との戦いで取り戻した、妖怪としての強烈なプライドと傲慢さだった。

「——来たわよ」

それまで黙っていた幽々子が、不意に呟いた。

まるで他人事のような言い方だったので、最初三人はそれが何のことか分からなかった。

しかし、すぐに悟った。

博麗神社の境内に繋がる階段。

その下から、何かが来る。

力の塊のようなものが、周囲の空気すら重さを与え、それも含めた大きな塊となって、ゆっくりと登ってくる。

そう、誰もが共通した印象を抱いた。

神社の中にいた霊夢と美鈴が外に出て、境内で座っていた全員が立ち上がった、ソレを迎える。

最初に、三つの足音が聞こえた。

その中で、下駄の音が特に高く、ハッキリと聞こえる。

一番最初に視界に入ったのは、赤い角だった。

そこから順番に、頭、肩、胴体——と『鬼』が全貌を現していく。

肩に、大きな酒樽を担いでいた。空いた片手には、巨大な猪の死骸を引き摺っている。

なんとも豪快な姿での登場だった。

地底の妖怪。

鬼の四天王。

——星熊勇儀である。

「おう、総出で出迎えかい？ 嬉しいねえ」

緊張を滲ませた一同を見渡して、勇儀は屈託のない笑みを浮かべた。

剥き出しの犬歯が怖いものを感じさせながら、何処か可愛げのある笑みである。

「待たせたな」

その勇儀と肩を並べて、先代巫女が立っていた。

勇儀に負けないくらいの高身長である。

この二人が並んでいる様を見ると、紫達四人が並ぶ光景とはまた違った、凄まじいものを感じる。

片や、妖怪の中でも最強の種族とされる鬼。

そして、その鬼を素手で殴り倒した人間である。

そんな二人が、今や種族を超えた盟友として肩を並べているのだ。

言い知れぬ迫力が、境内にいる人妖全てを圧倒していた。

「……こんなに階段が続いてるなんて、聞いてませんよ。飛んでくれればよかったですね」

誰もが二人に眼を奪われる中、疲れたような声が上がった。

最初、それが誰の洩らした声なのか、誰も分からなかった。

そして、ふと今更になって気付く。

勇儀と先代。まるで二つの台風が並んでいるような強烈な存在感の間に、小さな妖怪が一匹、紛れていた。

対比となる二人が大柄なこともあり、本当に小さな印象を受ける、少女の妖怪である。

唯一、その胸に宿した奇怪な『第三の眼』が注目を惹いた。

「なんだい、だらしないねえ」

「すまない。途中で負ぶるべきだった」

勇儀と先代が、交互に声を掛ける。

それぞれが彼女を気遣う意図があった。

——こいつが？

様子を伺っていた、事情を知らない者達全員が眼を疑った。

——こいつが、古明地さとり!?

一息吐いたさとりは、おもむろに顔を上げて、境内を見回した。

「……どうも。予想出来ていましたが、歓迎されていないようで嬉しいですね。古明地さとりと申します」

さとりは卑屈な笑みを浮かべて、自分を見つめる幾つもの視線に応えた。

◇

「綺麗ですね」

さとりが、夕日を眺めながら呟いた。

でもね、さとり。その夕日に照らされた君の赤い横顔の方が、私は綺麗だと思うんだ……。

「キモイですね」

ですよねー!

自分でも言ってる『どうなの?』と突っ込んでしまうような台詞だった。

でも、まあ。そんなおかしな台詞がポロッと漏れてしまう私の調子こそがおかしいのだろう。

いよいよ、待ちに待った宴会が始まるのだ。

もう、博麗神社では紫がその準備を始めていることだろう。

紫は急がなくていいと言っていたし、私はこうしてさとりと一緒にゆっくりと歩きながら、地底から地上へと出てきたのだった。

私にとっては当たり前前の地上。

しかし、さとりにとっては、もう何百年振りに見る世界である。

青空ではないが、夕暮れの空や、地底の出入り口がある妖怪の山の

麓から見える木々、川の流れ——地上の風景をしみじみと眺めていた。

「風景もありますが、草木の声にも耳を傾けてみているんですよ」
さとりが手近な花に手を添えながら付け加えた。

「すごいな、さとりってば草や花の心まで読めるの？」

「いえ、試したことはないんですよ。ただ、貴女が教えてくれた創作の中の覚妖怪は、それをやっていたじゃないですか。真似してみたくなって」

「おお、あのさとりがガチ泣きした話ね。」

「うるさいですよ。……でも、駄目ですね。やはり、お話とは違うようですよ」

残念、無理か。

私なんか漫画の中の技や力を再現しまくってるから、さとりにも出来るかと思っただけだな。

「それは、多分貴女が特別なんです。能力に関係してくるんじゃないですか？」

能力？

「……え、それって私の持つ能力ってこと？」

そんなの考えたこともなかったな。私が技を使えるのは、頑張って修行したからだと思ってたし。

「まあ、それも影響があるでしょうが、普通に考えて技や力の再現には何かしらの能力の後押しがあったと見るべきでは？」

そーなのかい。

考えてみれば、思い当たる部分も多い。

そもそも成果に至るまでの理屈が通っている修行ならば、忠実にないざりさえすれば誰でも身に着くはずなのだ。

しかし、漫画の修行には曖昧な部分も多い。

その不明瞭な部分を理解せずに、形から入っていった私が、例え命懸けだったにしろ漫画のような成果を掴んだというのは、確かにおかしい。

でも、ちよつと待てよ。

その場合、妹紅の修行はどうなるんだ？

彼女が私の課した修行によつて、漫画『うしおとら』の中にある『穿心』の心構えを習得した事実は、記憶に新しい。

私に能力があったとして、それが自分自身だけでなく周囲に影響を与えたということなのだろうか？

じゃあ、私の能力って一体――。

さどりの考察を、より深く尋ねようとした私の耳に、不意に物凄い悲鳴が聞こえた。

人や妖怪の悲鳴ではない。

例えるなら――つていうか、まんま『豚みたいな悲鳴』だった。

ついでに、悲鳴とほぼ同時に肉を破壊する音も聞こえた。

私とさどりは思わず顔を見合わせ、そしてすぐに原因を悟った。

「待たせたね！ いや、大漁大漁。こいつなら、酒の良い肴になるだろう」

ガサガサと茂みを掻き分けながら、勇儀が姿を現した。

一緒に地上へ出て来たと思つたら、ついさつき『ちよいと手土産を用意してくる』と言つて、この場を離れていたのである。

手土産と言いながら、肩に馬鹿でかい酒樽を担いでいた。

一体何をして来たのかと思つたが、空いた手に引き摺る、これまた馬鹿でかい猪の死体を見て、私は理解した。

私とさどりが一息入れている間に、狩りを済ませてきよつたよ、この鬼！

「地底の食材なんて屍肉ばかりだし、手土産が酒だけつていうのも味気ない」

肉もさぞかしボリュームたっぷりであろう大猪の脳天は、平たく潰れていた。

拳か平手で、力任せに殴つたみたいね。

ホンマにもー、非常識なんだからー。

「でも、貴女にも出来るんですよ。同じこと」

さどりが私の心を読んで、呆れたように呟く。

うむ。まあ、出来るんじゃない？

子供の頃、熊相手にやったことあるし。

「……行きますよ、この脳筋ども。貴女達のペースに合わせてると、頭が痛くなります」

さとりが頭痛を堪えるような仕草をしながら、先頭に立って進み出していた。

おおっと、待ちなさいって。

案内役は私なんだからさ。

そうして、さとりを気遣いながら私が先導し、大荷物を抱えながらもさすがに歩くペースは欠片も落ちない勇儀が続く。

私達は、ゆつくりと博麗神社へ向かって、幻想郷を歩いていった。観光になるほど、多くの場所を通るわけではない。

それでも、歩く範囲、見える範囲をさとりと勇儀に紹介しながら、私達は和気藹々と歩くことを楽しんでた。

「地上かあ……うん、いいな。やっぱり、先代の誘いに乗って正解だったよ」

「勇儀は、地上を避けてはいないのか？」

「ふふ、鬼と人間の確執のことを言っているのかい？ だったら、そいつは杞憂だよ」

「正確には、先代と戦って以来考えが少し変わった……ですか」

「コラ、さとり。その読んだ心を口に出す癖はやめておけと言っただろう。要らん諍いを招くぞ」

「勇儀さんも、存在自体が騒ぎになる可能性が高いと思いますけどね」

「うむ。まあ、私も気をつけよう」

「どうしようもないなら、どうしようもないけどな……ですか」

「うん、まあ……そういうこともある」

「胸を張られても困るんですけどね」

さとりと勇儀の漫才みたいなのやとりを聞いていると、不安を不安と感じなくなるから不思議だ。

案外、二人も皆とあっさり打ち解けるんじゃないか？

そんな樂觀も浮かんできてる。

「実際に対面すれば、現実がどんなものか理解できますよ」

それは悲観が過ぎるとも思うが……。

とにかく、私達は博麗神社に続く階段まで辿り着き、更にそれを登って、宴会の会場へと到着したのだった。

夜はすっかり更けている。

レミリア達の為に夜を選択したが、幸いなことに今夜は満月。

月明かりも十分明るい、更に神社の境内は人工の明かりで照らされていた。

おおっ、すごい！

宴会場だった。

誰がどう見ても宴会場といった様相だった。

幻想郷の人妖が、博麗神社の境内に集まり、料理や酒を囲んで、私達を待っていた。

思い描いていた、夢の光景が今ここに——！

「待たせたな」

私は、感極まりながらも皆にそう言った。

その後、さとりがちよつと後ろ向きな挨拶をしていたが、皆はそれを気にすることもなく、私達を迎え入れてくれた。

とりあえず、最初はやはり乾杯から始めるべきだろう。

咲夜や藍達、従者組が手際よく酒の入ったグラスや盃を配っている。

ああ、ありがとう藍——って、スルーされたので咲夜から受け取る。

……うん、分かってたし。

私が藍に嫌われてるって知ってるし。

それを解消する為の宴会でも、あるしっ！

内心で涙を呑みながら、全員に酒が行き渡ったのを確認する。

こうして見ると、全体的にグループ分けのような線引きが、自然と出来てしまっているのが分かる。

紅魔館は紅魔館のメンバーで、紫は幽々子と従者を伴って——それぞれ見知った、あるいは気心の知れた者同士だけで集まっているのだ。

霊夢がレミリア達の傍にいるのは意外だった。ただし、魔理沙が霊

夢と距離を取っているのは悪い意味での意外だった。

かく言う私の傍にも、地上が完全なアウエーである勇儀とさとりがいる。他には誰も近づいて来ない。

うーむ……でも、最初だからこれくらいは当たり前か。

宴会が始まれば、それこそ色々と分かってくるだろう。お互いのことが。

「なので、早速宴会を始めよう！」

「今宵は無礼講である！」

私は主催者として、宴会の開始を宣言しようとした。

しかし、丁度そのタイミングで、紫が手を挙げた。

「――提案、なのですけど」

私を含めた全員が、紫の発言に集中する。

「宴会の始まりは、乾杯の挨拶が定番。その定番の挨拶を、古明地さとりに行ってもらいたいですわ」

紫の突然の提案が、僅かなざわめきを呼んだ。

まさかの名指しを受け、さとりが訝しげな表情を浮かべる。

「私、ですか？」

「ええ。その通りです」

「……私は、この場の参加者のほとんどと面識がありません。加えて、余所者です。そんな私が乾杯の音頭など、相応しくないとはいいますが」

「だからこそ、ですわ。此度の宴会の趣旨は『先代巫女の復帰を祝うこと』」

その宴会に向ける貴女の言葉を、私達は聞いておきたい。それが、きつと理解へと繋がるかと判断いたします」

紫の説明を聞いて、さとりは沈黙した。

黙したまま、じつと紫を見つめている。

おそらく、能力を使って紫の真意を読み取ろうとしているのだろう。

しかし、それが不可能であることは事前に分かりきっていることだ。

さとりの力では、紫の境界操作を破れない。

やがて諦めたさとりは、代わりに周囲を見回した。

自分に向けられる視線を、そこに込められた思念を一つ一つ確認するように見て取り、最後に小さくため息を吐いた。

「分かりました。では、僭越ながら」

全員の注目を受けながら、一人離れた位置に歩み出る。

その様子を、傍らの勇儀が面白そうに見守っていた。

地上の人妖に囲まれたさとりが、どんな乾杯の音頭を取るのか興味があるのだろう。

私もあるが、同時に不憫だとも感じる。

紫ってば、無茶振りすぎじゃね？

周り知らない奴らばかりなのに、いきなり最初の挨拶を任せるとか『そこでボケて』と言ってるも同然だろ……。

多分、さとりは事前にスピーチなんて考えてもいないはずだ。

ここは一つ、私がフォローに回らねば。

さとり！ 私の思念、受け取ってくれえーっ！

「――！」

私の心の声を捉えたのか、さとりがこちらを向いた。

さあ、私の心を読んだ。

私に、いい考えがある！

……っていうか『これ』を、折角なんでやって欲しいです！

「えー」

私の考えを読んだらしい。

さとりは露骨に嫌そうな小声を洩らした。



――まさに『百鬼夜行』である。

人妖入り混じった宴会場の様相を眺めて、さとりは密かに戦慄を感じていた。

傍観などと、他人事のように構えることは出来ない。

この場に自分はいるのだ。

地底は荒事の多い危険な場所だと思っていたが、こうして見ると地上も大概である。

人間、妖怪、あるいはそのどちらでもないモノ――。

事前にしていた覚悟を軽く上回るような化け物が、一つの空間に勢ぞろいしている。

さとりにとって幸いなことは、彼女達全員が得体の知れない存在ではなく、ある程度情報を知り得ていることだった。

先代から『原作知識』という形で彼女達を知っていなければ、恐怖と不安が勝って、すぐに逃げ帰っていたかもしれない。

今の状態ならば、それぞれの相手に対してある程度接し方が分かっている。

――まあ、その先代のせいで警戒を抱かれてる相手もいるんですけどね。

だから帳消しだ、と。さとりは感謝の念を取り止めた。

多くの思念が自分に向けられているのを感じる。

自らの『第三の眼』に、これほど多種多様な心が映るのは久しぶりのことだった。

地上の妖怪として主に接してきた紫は、境界操作によって心を読ませなかったが、彼女こそが例外であったのだと今更ながら実感出来る。

別に聞きたくもないのに、多くの心の眩きが聞こえた。

――こいつが？

――こいつが、古明地さとり!?

――本当に、こんな奴が地底の管理者なのか？

――小さい奴。

――弱そう。

――隣の鬼の方が存在感がある。

――いや、これは油断させる為の印象操作かもしれない。

――心を読む能力を持つって？

――じゃあ、この考えも読まれてるのか？

——嫌だな。

——面白い。

概ね、誰もが似たような流れでこのような考えを巡らせている。自分を侮るもの、警戒するもの、嫌悪するもの——そして、意外なことに少し好意的なものも混ざっていた。

先代巫女の人望が影響したもののや、自分に対して無知であるが故の興味によるものばかりだったが、正直これはありがたい。

今回の宴会で関わる分に、安全そうなのはこの好意的な考えの相手ですかね？ と、さとりは打算する。

もちろん、そこから友好関係にまで持つて行こうとは考えていなかった。

彼女達も、会話してみれば分かるだろう。自分が嫌われ者の妖怪である理由が。

ここに至っても、さとりは宴会の参加理由を『先代から頼まれたから』と頑なに変えなかった。

傍らの勇儀や先代とは違う。

宴会を楽しみ、新しい出会いを期待するつもりもない。

適度に食事や会話に付き合い、予想される八雲紫や八意永琳の追及を上手く処理するだけである——。

「宴会の始まりは、乾杯の挨拶が定番。その定番の挨拶を、古明地さとりに行ってもらいたいですわ」

紫からそんな提案が出た時も、身構えていたさとりは『そら来た』と思っただけだった。

「……私は、この場の参加者のほとんどと面識がありません。加えて、余所者です。そんな私が乾杯の音頭など、相応しくないとはいませんが」

本来ならば、先代が行う方が無難であり、最良である。

彼女は主催者であるし、何よりもこの場の全員に人望がある。

誰もが納得し、そして宴会も素直に盛り上がることだろう。

しかし、心の読めない紫の返答を、さとりはある程度予想していた。「だからこそ、ですわ。此度の宴会の趣旨は『先代巫女の復帰を祝うこ

と』

その宴会に向ける貴女の言葉を、私達は聞いておきたい。それが、きつと理解へと繋がるかと判断いたします」

——つまり、試しているのか。

つまらない悪意だけではないだろうが、嫌がらせも含めて紫が自分を観察しようとしているのだと、さとりは予想した。

案の定、紫の提案を聞いて、誰もが自分に興味を向けている。

先代の挨拶を期待していた者は予想を裏切られて少し不快感を感じているが、大抵の者が抱いているのは『この得体の知れない妖怪が、先代をどんな言葉で祝うのか?』といった強い興味だった。

先代と自分が友人関係にあることを知っているようだが、その仲に對して、疑いや不審を抱く者も多い。

それゆえの興味だった。

実に、居心地が悪い。

しかし、もはや上手く断ることも出来ない。

余計に不審や不快を煽り、下手をすれば敵対心も植えつけてしまう。

「分かりました。では、僭越ながら」

どうしようもなくなつて、さとりはため息で応えた。

紫に良い様に行動を操作されている実感があつた。

出だしからして、この有様である。

既に翻弄されながら、本当に彼女の追及を上手くかわせるのか？

と、さとりは不安を大きくさせた。

とりあえず、ノロノロと気の進まない足取りで前に出る。

必然的に、場の全員が視線を集中させる。

向けられる様々な思考が、酷く落ち着かない気持ちにさせる。

早く終わらせてしまおう。

余計なことは言わず、ただ定番の祝辞を口にして『乾杯』で締めれば良い。

多くの者が期待している面白味は無い。きつとウケないだろうし、逆にシラける。しかし、大きく不評を買うこともないはずだ。

さとりは、そんな無難すぎる判断を下した。

——と、その時。

不意に、一際大きな心の声が響いた。

『さとり！ 私の思念、受け取ってくれええーっ！』

聞き慣れた、外見に不釣り合いな騒がしい声である。

先代の方を見たさとりは、彼女の考えるイメージを受け取って、思わず『えー』と声を洩らしてしまっていた。

——やれっつてか？

——『それ』を、やれっつてか!?

うんざりしながら、視線で問い返す。

それに応答する先代の視線と思念は、大きな期待に満ちていた。

他から見れば、前に進み出たまま黙り込んださとりの様子に、不審を抱く思念が増えていく。

早く、何か言わなければならぬ。

この場を凌ぐのに、特に名案もなかったさとりは、半ば自棄になって先代の要求に応えることを決意した。

どうなっても知らん！ という投げやりな考えも、大分あった。

「先代、前に出てください」

さとりの突然の発言に、周囲が戸惑う。

ただ一人、先代だけが当たり前のように、その指示に従った。

示し合わせたようにさとりの横に立ち、宴会の参加者全員と向き合った。

そんな先代を際立たせるように、さとりが一步下がり、大きく息を吸って、叫んだ。

「——復ッ！ 活ッ！」

腹の底から搾り出したような声が、境内に朗々と響き渡った。

さとりへの第一印象を、完全に裏切った力強い叫びに、ほとんどの者が度肝を抜かれた。

呆気にとられた視線を受けて、さとりは続ける。

「先代巫女復活ッ!!」

血を吐くような———というか、本当に何か吐いてしまうような必死

さである。

しかし、意表を突かれたその場の者達は、誰もが勢いに吞まれ、異常なまでの迫力を感じていた。

「先代巫女復活ッッ!!」

もはや乾杯の挨拶もクソもなく、たださとりは全身全霊で繰り返すだけである。

一人、元ネタの台詞を知っていて、自分がそれを浴びているという状況に内心でご満悦な先代だけが微笑を浮かべる。

その様子がまた、さとの突然の奇行に対する印象を周囲に勘違いさせた。

「先代巫女復活ッッ!!」

さとりはもはや無我の境地、別の言い方をするとヤケクソである。

一人だけ楽しんでいる先代への悪態も込めて、ひたすら声を張り上げる。

そして、三度目になって、ようやく呆然としていた周囲の反応が追いつき始めた。

最初に、勇儀が笑みを浮かべた。

さとの予想外の行動を、むしろ称賛するような満面の笑顔である。

そのまま大声で笑い出してしまいそうな愉快さを感じながら、それをグツと堪えて、自らも声を張り上げる。

「先代巫女復活ッッ!!」

さとの声に、勇儀の声が重なった。いや、音量では勇儀のそれが遥かに上回っている。

鬼の叫びは、力を持って他の者達の体と心を奮わせた。

勇儀の行動に、すぐさま共鳴したのは魔理沙だった。次に美鈴、レミリアが――。

戸惑っていた人妖の顔に、堪えきれない笑みが浮かんでいく。

『先代巫女復活ッッ!!』

更に、多くの声が重なった。

もはや、神社の境内を越えて幻想郷中に響きそうな音量である。

当然ながら誰にも、最初に叫びだしたさとりの意図は分からなかった。

しかし、ワケが分からない中に、理屈ではない強引な一体感があつた。

そして、それがやはりワケもなく楽しく、興奮を煽った。

『先代巫女復活ツッ!!』

もはや、その場のほとんどの者が笑って声を張り上げていた。

頃合を見たさとりが、今度は何も言わずに持っていた盃を持ち上げる。

既に、さとり自身さえ予想外な一体感に包まれていた宴会の参加者達は、誰も不思議に思うことなく、さとりの動きに倣って各々の酒を掲げた。

「……乾杯」

無理をして擦れた声で、最後に弱々しく呟くように言う。

最後の最後で締まらない。

しかし、誰もそれを不満に思わなかった。

『乾杯ツ!!』

人妖一体となった声が響いて、宴会の始まりを盛大に告げた。



「——予想『外』といった表情ね。『以上』でも『以下』でもなく」

「まったく、その通りですわ」

隣に座った永琳に、紫は苦笑しながら相槌を打った。

始まる前の奇妙な緊迫感を消し去るように、宴は和やかに、そして賑やかに開催された。

宴に集まった人妖の間にあつた壁を一枚取り払ったのは、いや吹き飛ばしたのは、間違いなく古明地さとりの最初の挨拶である。

あの瞬間の一体感が、多くの者の心を開かせたのだ。

紫自身さえ、あの時は思わずその場の勢いに乗せられそうになってしまった。

実際に、幽々子は完全に興に乗っている。

純粹に宴会を楽しむ姿を眺めて、紫は呆れるような微笑ましいような、妙な気分を味わっていた。

「さとりには、あのような芸当が出来るとは思いませんでしたわ」

紫は、さとりを試した。

それは間違いない。

多少の嫌味はあったが、何よりもあの状況でさとりがどのような行動に出るのか観察し、そこから彼女の実態を掴むつもりだった。

——参加者の心を読んで、話術を駆使し、巧みに心象を操作して信用や敬意を勝ち取るのか。

——もしくは、ただ目立つ真似を避けて無難に済ませるのか。

しかし、紫のどの予想とも、さとりの行動は違っていた。

彼女は理屈ではなく、意味のない勢いで、参加者の心を掌握したのだ。

話術や策謀などとは正反対の位置にある手段だった。

これまで抱いていた古明地さとりの印象を、あつさりと覆す強引なやり方である。

どちらかといえば、傍らの鬼の勇儀がやりそうな方法だ。

それが結果的に、さとりの思惑を警戒していた人妖の心を掴んだのである。

だからこそその『予想外』だった。

古明地さとりが、智謀に長けた妖怪であるという予想はあった。

しかし、その予想の範囲から、全く違った形で彼女は抜け出したのだ。

「怖いわね。彼女から、どんな言動が飛び出すのか予想がつかない」

派手な乾杯の挨拶をぶち上げた後、こここそと隠れるように宴会の片隅で酒を飲むさとりを、永琳はじつと観察していた。

小さな妖怪である。唯一、心を読む能力だけが警戒に値する——そんな印象通りの姿だった。

しかし、その小さな妖怪の中から、あの時人外魔境の宴を束ねる言葉と力が飛び出したのだ。

本当に、予想がつかない。
だからこそ、怖い。

「ええ、怖いわ」

永琳の言葉に同意して、紫も繰り返した。
さとりに対する底知れぬ印象が、ますます強まっていた。
そんな賢者達の憂鬱を尻目に、宴は楽しげに続けられていく。



鬼が座っている。

しかも、三匹。

場所は天狗の集落、天魔の屋敷である。

鬼は、かつて妖怪の山の大将でありながら、そこを去った種族のはずだった。

地に潜り、多くの人間と妖怪の記憶から消え去るほどの年月が過ぎた。

その忘れ去られたはずの鬼が、何故今この時になって妖怪の山に舞い戻り、かつて下僕としていた天狗の前に現れたのか。

——分からない。

鬼を前にして、文は全てに疑問を抱いた。

——っていうか、そもそも何故私がここに居合わせなきやいけないのか分からない。

鬼と向かい合うように、文を含めた数名の天狗が座っている。

文はその中でも、少しでも鬼の視界から外れるよう、隅に陣取っていた。

今の状況に対して不条理を嘆き、青褪めながら、他の仲間の様子を伺う。

天狗を代表して真ん中に座るのは、我らが長の天魔である。

かつての大將を前にして、相も変わらず威風堂々とした姿が実に頼もしい。

その傍らに、大天狗が控えている。

普段ならなるべく関わりたくない、気難しい御方だったが、今は縫りつきたい気持ちだった。

そして、大天狗の隣にいるのが、何故か一介の下っ端天狗にしか過ぎない権である。

この配置が一番ワケが分からなかったが、とりあえず、今の状況で普段と全く変わらない仏頂面を浮かべていられる度胸を、ちよつとだけ尊敬した。

そして、天魔を挟んで大天狗の反対側にいるのが、この場で一番の厄種であるはたてだった。

彼女がここにいる理由は、まだ理解出来る。

格上の相手でも物怖じせず、実力も天狗の中で上位にある存在だからだ。

しかし、正直物怖じしなすぎじゃね？　とも思った。

はたては鬼に対して、なんかもう完全にメンチ切っていた。

——帰してくれ。

文は切実に願った。

鬼と対峙する——それ自体は、初体験ではない。

地底で、あの星熊勇儀と顔を合わせ、会話し、酒まで酌み交わしたのだ。

もう二度と御免だという気持ちはあるが、同時に慣れもあり、再び同じ状況になっても何とか切り抜けられるだろうという気持ちもあつた。

だから、自分がこの場に呼ばれた理由は分かる。

しかし、状況がまた違うのだ。

——お願いだから、おうちに帰して！

天狗の集落を、本当に何の前触れもなく訪れた鬼は三匹。

もちろん、誰も文の顔見知りではない。

そして、勇儀のように穏やかで友好的でもなかった。

文の、あるいは古参の天狗の記憶にあるまま、訪れた三匹の鬼は強烈であり傲慢だった。

本来ならば、同じ天狗であつてもある程度の地位の者しか立ち入れ

ない天魔の屋敷。その謁見の大広間の真ん中に、我が物顔で居座っている。

無遠慮に一番良い酒を要求し、それを惜しげもなく瓶で飲んでいく。

横暴であり、それがまた天狗にはまかり通ってしまふのだ。

実際に、鬼達にはこの広い空間を埋め尽くすような存在感があった。

一匹を中心にして、左右に控えた二匹の鬼は、単純に体格も大きい。上半身の筋肉が膨れ上がったような一つ眼の鬼と、表皮が岩のような眼のない鬼である。

いずれも、同じく巨漢である天魔に匹敵するほどの大きさだった。

しかし、文の印象としては、その二匹よりも中心の一匹——体格自体は少女と見紛うほど小さな鬼が、最も巨大に思えた。

それもそのはずである。

その顔は天狗の中で知れ渡り、名は広く轟き、今もなお色褪せることなく残っていた。

「——伊吹萃香殿」

天魔が、その伝説の鬼の名を口にした。

星熊勇儀と並ぶ『鬼の四天王』その一角である。

「今、何と申されましたか？」

「なんだい、分かって聞き返しているのかい？ 鬼は回りくどい言い方が嫌いなんだ。短く、分かりやすく、言っただけだったからね」

萃香は、見た目通り少女のような可憐な声で言った。

しかし、その何気ない口調が、既に言いようのない凄みを持っている。

「じゃあ、もう一度言うよ。もう、二度は言わないよ。ハッキリと答えなさい」

萃香は拗ねたような顔をして、それから明るく笑って、言った。

「人里を襲う。天狗総出で手伝え」

先程と一語一句違えることなく、そんな凄まじいことを口にしたのである。

傍らで聞いていた文は、既に吐きそうになっていた。自分以外の天狗が全く動揺を表に出さない様子が、唯一の救いだつた。

自分では、もはやこの状況で何も言えない。他に任せるしかない。というか、普段は逆の立場にいるはずのはたてが、今の萃香の一言で顔付きを更に険悪なものへと変えている。

文は『頼むから早まってくれるな』と祈るしかなかった。

「……それは、幻想郷のルールに反しますする」

「それがどうした」

天魔に代わって分かりきったことを告げる大天狗に対し、一つ眼の鬼が分かりきったことを言わせるなどばかりに答えた。

「人里を襲えば、そこを守る人間や妖怪はもちろん、幻想郷の管理者とも敵対することになりますぞ？」

「応、そうよ。戦争よ」

「安心しろい、俺達の側には数もいる。わざわざ出向いてやった俺達他に、仲間の鬼がわんさといるぞ」

「本気で、幻想郷の人妖全てを敵に回すおつもりか？」

「俺達に賛同する妖怪も、少なからず出るだろうよ。いや、例え出ずとも、片っ端から食い潰す」

大天狗の問いに、一つ眼の鬼と眼のない鬼が迷いなく答えた。

何処にも冗談や虚勢は感じられない。

全て言葉のまま、本気である。

そして、鬼にはそれを可能にするだけの力がある。数が揃えば、尚のことだ。

左右の鬼の受け答えを聞き、萃香はただニヤニヤと愉快そうに笑っていた。

「片っ端から、食い潰すって言うのはよう——」

萃香は僅かに身を乗り出した。

その僅かな動きで、見上げるほど巨大な岩が音を立てて動いたような印象を受けた。

「つまり、この話を断った場合の天狗も含めてるんだぜ？」

今度こそ、萃香は凄んでみせた。

鬼の脅しである。

呼吸すら出来なくなるような圧迫感を、ビリビリと肌で感じる。

「もしも、この交渉——というよりも一方的な要求の矢面に立たされていたのが文だったなら、この時点で何もかも受け入れていただろう。」

破滅が待っていることが分かっているとしても、人里を鬼と共に襲っていたかもしれない。

しかし、脅しを受けてガチガチと震えている天狗は、この場では文だけだった。

あの椀さえ、挑むような顔付きで三匹の鬼を見据えている。

「答えを、聞こうか？」

「……八雲紫と博麗の巫女も出てきますぞ？」

大天狗が、最後の確認をするように尋ねた。

伊吹萃香と八雲紫が密かに友好関係を結んでいると、ごく一部の妖怪だけが知っている。

さすがに、この問い掛けには萃香も顔色を変えた。

ただし、満面の愉悦にである。

「おう、紫か！ いいねえ、あいつはわたしと対等だと認めた妖怪さ。あいつと本気の喧嘩を試してみるのも面白いねえ」

躊躇う要素は無いらしい。

もはや、これまで。

最悪の決断の時か——。

「でもなあ」

文は息を吞んで、萃香の言葉に耳を澄ませた。

「なによりもわたしは、博麗の巫女をぶっ殺して、食っちゃいてえ」
「ツシヤラァー！」

凄惨な笑みで、そう言い切った萃香の顔面目掛け、はたてが蹴りを繰り出していた。

旋風のような動きである。

座り込んでいた体勢の萃香には、どうあってもかわしようがなかつ

た。

首から上が吹っ飛び、それに引つ張られるように体も飛んでいく。畳を削りながらゴロゴロ転がって、部屋の一番奥の壁に激突した。この場の全員の意表を突いた出来事だった。

片足を突き出したままのはたての姿を、文は目の玉が飛び出さんばかりの驚愕をもって見つめていた。

「――姫海棠はたて！」

呆気にとられている他の鬼よりも先に、天魔が声を張り上げる。

「代弁ご苦労！　これが天狗の返答よっ!!」

天魔が初めて表情を変えた。

鬼に向ける、獰猛な笑みだった。

「貴様っ!!」

「後悔せいや！」

怒りを漲らせた鬼が二匹、勢いよく立ち上がる。

恐ろしいほどの迫力があつた。

しかし、この場で怯んで動けないのは、敵も味方も含めて文だけである。

「椀、斬れい！」

「はっ！」

大天狗の一喝を受け、椀が斬りかかった。

座った体勢でありながら、居合いに備えた正座を組んでいたのだ。

はたてのような眼にも止まらぬ速さではないが、十分に鋭い踏み込みで眼のない鬼の方に接近し、剣を振り下ろした。

しかし、金属質な音と共に、刃は皮一枚切れずに止まる。

岩のような皮膚だったが、実際はそれ以上。鋼鉄並の強度があるらしい。

「たかが、白狼天狗如きの剣術で！」

動きの止まった椀を、鬼が笑いながら叩き潰そうとする。

その振り上げた腕は、しかし脳天に振り下ろされる寸前で斬り飛ばされていた。

「ぬう!?!」

鋼鉄の腕を切断した剣閃は、いつの間にか音も無く近づいた大天狗のものである。

「たわけ！ 斬れと言うたら、しかと斬れい!!」

裂帛の気合いと共に、大天狗の返す刀が鬼の首を斬り飛ばした。

さすがの鬼も、これでは絶命するしかない。

一瞬で仲間を殺され、残された一つ眼の鬼は怒号を放った。

怒りながら、しかし同時に笑っていた。

「はははっ！ 変わったか、天狗！ いや、変わったのは時代か!？」

「如何にも」

その場に座った不動の体勢のまま、天魔が片手を残った鬼に向けた。

次の瞬間、鬼だけを包むような限定的な竜巻が発生し、それが一直線に上下に伸びて、天井と床をぶち破った。

それほどの竜巻の中心にあった鬼の肉体は、バラバラに引き裂かれて四散する。

一連の出来事を、文は呆然と眺めているだけだった。

鬼を二匹、天狗が殺してしまったのだ。

今更ながら、文には奇妙な納得があった。

並の天狗ならば、鬼を倒すどころか敵対する状況にすら耐えられず、ただ腰を抜かしていただろう。

しかし、この場にいた天狗は全てが例外とも言える思想や信念の持ち主だった。

——この場に集めた天狗側の面子って、実はそういう目的で？

何が『そういう』なのか、文は深く考えることを放棄した。

「権、この未熟者め。力も技もまるで足らぬわ」

「申し訳ありません、大天狗様」

「更なる修練を課す。精進せよ」

「はっ」

「……しかし、躊躇いのない踏み込みだけは見事であった」

「ありがとうございます」

「勘違いするでない。褒めるべき点は、それぐらいしかなかったわ」

「……ツンデレ爺、キシヨツ」

「何ぞ言うたか？ 姫海棠はたて」

「イイエーナンニモー」

「そもそも貴様は天魔様の命令よりも先走りおつて——」

同僚や上司のやりとりを見ながら、文は誰も事態の深刻さを理解していないことに苛立ち始めていた。

何をしたのか、ここで何が起こったのか分かっているのか？

天狗が鬼を殺したのだ。

しかも、はたてに至つてはあの伊吹萃香を問答無用で足蹴にしたのだ。

これで事態が一件落着だというのなら良い。

しかし、鬼の言い分を聞く限り、まだまだ仲間がいて、しかもそれらは幻想郷を総出で襲おうとしているらしい。

早急に対策が必要だった。

いや『対策』などと積極的にならず、巻き添えを食わない最善の判断が必要だった。

文は騒がしい三人を無視して、天魔に指示を仰ごうと詰め寄り——

「いやあ——嬉しいねえっ!!」

爆発のような踏み込みを経て、萃香が天魔に向けて襲い掛かっていた。

はたての刻んだダメージは、しっかりと顔面に残っていたが、鼻血を噴き出しながらも萃香は笑って復活したのだ。

小さな暴風が天狗達の間を駆け抜け、一直線に天魔へ向かう。

握り締められた拳が、成す術も無く天魔の体を捉えようとした瞬間である。

見えない壁が、直前でそれを防いでいた。

「むっ、風の壁か！」

萃香はすぐさまその正体を察知した。

ギリギリのところまで横槍を入れたのは、偶然近くにいた文である。

自慢の拳を完全に受け止めてみせた文へ、萃香は牙を剥いて笑い掛

けた。

「見事！ ならば、次は貴様か!？」

「ひいつ！」

萃香の標的が、文に変わる。

しかし、引こうと思つた拳が動かない。

今一度視線を戻した萃香は、風の壁にメリ込んだ自分の拳が、今度は風の枷によつて完全に固定されていることを知つた。

「うおっ！ すげっ、何だこれ!? 全然動かねえ！」

「あわわわっ、動かないで下さいい！」

文は死に物狂いで能力を行使した。

風を操つて縦横無尽に走らせ、萃香の体を雁字搦めにしてしまう。

狼狽しきつた様子とは裏腹に、相手に抵抗する間も与えない早業だつた。

「——っだあ！ 駄目であゝ、動けないい。こりやあ、参つた。わたしの負けだあ」

やがて抵抗を諦めた萃香は、観念するように笑つた。

図らずも捕縛に成功した萃香を、天魔達が囲む。

ちなみに、功労者である文は萃香に顔を覚えられないよう、椀の陰に隠れるという無駄な行為を行つていた。

「いや、しかし本当に嬉しいねえ。天魔よう、お前いい部下持てるようになったんじゃないかよう」

「恐れ入ります」

「どうしますか？ こいつも、殺しますか？」

「姫海棠！ この方は恐れ多くも、鬼の四天王であつた方だぞ！ 不敬な口は利くな！」

「でも、今はただの敵でしょう？」

「うん、その通り！ いいねえ、本当に気持ち良いくらいハッキリとした女だねえ。姫海棠つていうのかい？」

「はたてです」

「そうかい、はたてつていうのかい」

罪人のように縛られながら、萃香は嬉しそうに談笑していた。

余裕のようなものがある。

しかし、実際に萃香は成す術がなく、自分が敗北したことを認めている。

それは余裕ではなく、鬼という強大な種族が備え持つ貫禄に他ならなかった。

「伊吹萃香殿、質問に答えていただきましょう」

「うん、分かった。負けたのはわたしだしね、何でも答えるよ」

天魔の問いに、萃香は躊躇うことなく答えた。

「他に仲間がいると、仰っていましたな？」

「うん、いるよ。もう地上に出てる」

「今、何処におりますか？」

「そこら中にいるよ」

「……そこら中とは？」

「そこら中って言ったなら——」

萃香はにっこりと笑って、

「そこら中さ。幻想郷中、行きたい所へ、行きたい奴らと連れ立って、散らばった」

そんな恐ろしいことを答えた。

初めて、天狗達の間で戦慄が走る。

「数は？」

「百くらい」

「目的は？」

「さあね、やりたいことは各々違うでしょ。人間食いたかったり、何かぶっ壊したかったり、強い奴と戦ってみたかったり……色々さ」

聞く方が言葉に詰まりそうなほど明け透けに、笑って答える。

言い知れぬ迫力を伴った真実味があった。

そんな萃香の変化に、文がいち早く気付いた。

風の枷によって縛った萃香の体から、どんどん力が抜けているのだ。

「——っ！ に、逃げられます！」

「何!?!」

文が叫んだ時には、もう遅い。

萃香の体が眼に見えて薄くなり、煙のように霧散して、消え去った。『もちろん、わたしもさあ！ やりたいことは違うんだなあ——！』最後にその声だけを残し、萃香は跡形も無く消えてしまった。

荒れ果てた室内に、天狗だけが残される。

自分を取り逃がしたと思った文が、恐縮しながら天魔の顔色を伺った。

「も、申し訳ありません……」

「構わぬ。伊吹萃香殿は『密と疎を操る程度の能力』を持った鬼だ。

霧になって逃げられれば、捕らえるのは容易ではない。おそらく、ここへやって来たのも分身だったのだろう。強さに違和感があった」
「さすがは鬼の四天王、ですか」

自分が相手をしたのが弱体化した姿だと知り、はたては呻いた。
ただし、表情は不満気だった。

何が不満だったのかを、文は知りたくなかった。

「——して、天魔様。この事態、天狗は如何に動きますか？」

大天狗が指示を仰ぐ。

萃香の話の通りならば、既に幻想郷中に鬼が散らばっている。

何をしでかすつもりなのか、それぞれによって違う。

ただそこに共通するのは、暴力による欲望の発露という最悪の手段だ。

今宵、人間も妖怪も飲み込む百鬼夜行が幻想郷を蹂躪しようとしているのである。

「知れたこと。既に、天狗の意思は鬼に伝えた」

二匹の鬼を滅ぼし、伊吹萃香を蹴り飛ばした事実を指して、天魔は言った。

「射命丸、姫海棠、犬走の三名は博麗神社まで向かい、八雲紫と博麗の巫女に事情を伝えよ。そこには先代巫女もいるはずだ。協力を仰げ」

『はっー！』

「は……はひ」

天魔の指示に、はたてと椀が明朗な声で応え、文は露骨に嫌そうな

顔をして応えた。

「大天狗は今すぐ召集を掛けよ」

「古参の天狗どもは、酷く渋りましよう」

「ならば、縄でも掛けて引き摺ればよい。もはや、傍観出来る立場ではないわ」

「では」

「うむ」

天魔は頷いた。

「これより幻想郷で、鬼退治ぞ——！」

其の二十八 「萃夢想」

満月の夜。

今夜、博麗神社で前代未聞の大宴会が行われていることは、幻想郷の人間も妖怪も知っている。

——どんな宴会が繰り広げられているのか？

誰もが固唾を呑んで、そんな想像を思い思いに浮かべていた。

人が人肉を食らい、妖怪が同族の血を啜る、地獄のような光景が生まれているのではないか。

宴会とは名ばかりで、幻想郷でも有数の実力者達が何かしらの密談を交わしているのではないか。

あるいは『鬼』などという伝説の妖怪を交えて、それこそ想像すら及ばない狂宴が行われているのではないか——。

そんな凄惨で陰湿な非参加者達の想像とは裏腹に、博麗神社の宴は至極真つ当に賑わいを見せていた。

酒を飲んでいいる。

料理を味わっている。

誰もがおおむね、この場を楽しんでいた。

「お前さんは、随分と静かに酒を飲むんだな」

霊夢は手酌で飲んでいた。

今は一人だったが、少し前まで周りには常に誰かが居座っていた。

最初はレミリア、次に紫、そしてついさつき空になった皿を下げるついでに咲夜が新しい料理を運んできたのである。

一杯の酒を交え、少しばかり話もした。

その咲夜が去った今、入れ替わるように霊夢へ声を掛けたのは勇儀だった。

「あんたは……」

「勇儀だ。星熊勇儀」

酒瓶と巨大な盃を両手に、この宴会場を練り歩いていた勇儀は、霊夢の隣へどつかりと腰を降ろした。

霊夢はあからさまに嫌そうな表情を浮かべた。

「腰落ち着けてるんじゃないわよ。どつか別の相手を探しなさい」
「ハッキリと物を言うなあ、気に入った」

勇儀は豪快に笑った。

目の前の歳若い人間に、奇妙な魅力を感じている。

先程から時折様子を伺っていたが、一人で飲む姿が不思議と孤独を感じさせない。

厳かな儀式を見ているような、何処か惹き付けられるものが、霊夢の姿にはあった。

本人が特に望んでもいないのに、常に誰かしらが彼女の傍で酒を飲みたがるのは、その独特の雰囲気のせいかもしれない。

勇儀は事前に霊夢に抱いていた興味を、より大きなものへと膨らませた。

「霊夢と呼んでいいかい？ 私のことは勇儀でいい」

「好きにすれば」

「お前さんには、ずっと前から興味があった」

「母さんから聞いたの？」

「その通り」

霊夢の盃が空になったのを見計らって、勇儀は持参した酒を注いだ。

その仕草があまりに気安かったので、霊夢は当たり前のようにそれを受けていた。

「お前さんは、いずれ私を退治する人間らしい」

「……何それ、それも母さんが言ったの？」

「うん。お前の母にぶちのめされた後でな、言われたんだよ」

「理由もなしに、妖怪を退治はしないわ」

「つまり、理由があれば退治をするわけだ」

「それはもちろんよ」

「それが鬼であってもか」

「何であってもよ」

霊夢は勇儀の眼をまっすぐに見返して、断言した。
「良い女だなあ、お前さんは。ますます気に入った」

射抜くような視線から、霊夢の胸中にある如何なる思想や信念を悟ったものか。

勇儀は心底嬉しそうに笑った。

——よく笑う奴ね。

霊夢は初めて見た鬼という存在に対して、そんな感想を抱いていた。

忘れ去られた妖怪である。

地底での鬼退治を取り上げた新聞で初めて知識として知り、あの母と死闘を繰り広げ、重傷を負わせた妖怪として、その強大な力だけは実感していた。

恐れはなかったが、警戒はあった。そして、経緯はどうあれ、母を傷つけた相手への敵意も。

ぼんやりと黒いイメージだけを抱いていた霊夢の前に現れた当の鬼は、しかし思わぬ印象を抱かせる相手だった。

確かに強そうだ。大きく、存在感があり、力強く、野卑とも取れる荒々しさがある。

そして、何よりも陽気であった。

その印象の理由が、勇儀がよく浮かべる楽しげな笑顔にあると気付いたのだ。

鬼とは、こんなによく笑う妖怪なのか——。

「あんたは……変わってるわ」

「そうかい？」

「退治するって言われて、楽しそうにする妖怪なんて初めて見る」

霊夢は率直に言った。

楽しんでいる——というのが、この星熊勇儀という妖怪の一番の特徴であるように感じた。

この人妖の思惑が入り混じった宴会の中にあつて、目の前の鬼は誰よりも楽しみ、誰よりも笑っていると思つた。

「鬼とは、そういう妖怪だ」

勇儀は笑って返すだけだった。

それ以上は何も言わない。意味深げな返答である。

鬼という種族に対して、それ以上追求することを面倒に感じた霊夢は、ため息一つで自分を納得させて、注がれた酒を一口飲み下した。その淡泊な反応を、やはり勇儀は楽しむように眺めていた。

「お前さんは、楽しんでじゃないのかい？」

「つまらなくはないわよ。料理もお酒も、食べたことないくらい美味しいわ」

「だが、酒の飲み方は誰よりも静かだ。見たところ、親しい奴がいないわけでもないだろうに、誰とも騒がず、静かに飲んでいる。誰かが傍に居る時も、必ず言葉を交わし終えてから酒を飲んでいたしね」

「いつから見てたのよ」

「酒は苦手か？」

「いいえ、結構飲める方だと思うわ。美味しいとも感じる」

「なら、酒を飲んで楽しくはならないか？ 愉快になって、気が緩むとか……酔うことを楽しもうとは思わないか？」

「そうね。あたしには、お酒とは『そういう物』じゃないって印象があるのよね」

霊夢はまた一口、静かに酒を飲み下した。

その仕草は、勇儀の言うとおりに楽しむものではなく、厳かにすら感じる儀式のようだった。

「——戦った後は、酒で憎しみを追い出すのさ」

ぽつりと、霊夢が言葉を洩らす。

そのたった一言で、何うような勇儀の瞳が強い興味の光を帯びた。

「ほう？」

「母さんが、お酒を飲む時に言っていた言葉よ」

「先代が、か」

「あたしが初めてお酒という物を知ったのは、母さんが飲んでる姿を見た時だった」

「確かに、先代も酒は飲む。しかし、あまり好んで飲む様子じゃなかったな」

「お酒が好きなのかどうかは、あたしも知らない。でも、母さんは必ずお酒を飲む時があった。それは、いつも妖怪退治に出掛けて、帰って

きた日の夜だったわ」

眩くと共に、幼少の記憶をハッキリと思い浮かべる。

母の姿は、どんなに昔の記憶であっても色褪せることはない。

霊夢の脳裏には、神社に捧げられた酒瓶から一杯だけの酒を注ぎ、それを静かに飲む母の厳かな姿が蘇っていた。

ある日、その飲み物が何であるかを尋ね、そこから更に疑問を口にした時、母は先程の言葉を言ったのだ。

「戦った後に残る濁った憎しみを、酒で血から追い出すんだ……っつね」

「……なるほど」

まるで先代から直接聞いたかのように、勇儀はその言葉にしみじみと感じ入っていた。

「今も昔も、厳しい女だったんだなあ」

「母さんは、酒で酔うようなことはしなかった。

その姿が印象強かったからね、あたしも自然と倣うようになったってわけ。似ても似つかない物真似だけどね」

「いや、そんなことはない。お前さんの酒に対する姿勢が、しっかりと伝わってきたよ」

「どうかしら？ あたしは、母さんほど妖怪を退治することに感慨を抱いていないと思うわ」

「――」

「そういう人間なのかもね」

そんな、他人事のように素っ気無い言い方の中に一抹の寂しさがあれることを、勇儀は敏感に感じていた。

先代と霊夢は血の繋がらない親子である。

その事実を知らない者は、二人が本物の親子であることを疑わない。

容姿や仕草、強さ——二人が親子であると納得の出来る点の方が多いのだ。

しかし、何よりも霊夢自身が義理の母と娘であるという関係に境目を感じているのだと、勇儀は知った。

知って、ますます博麗霊夢という少女に興味を持った。

——なんとも意外な、可愛い一面じゃあないか。

霊夢の内心を察して、気まずさを抱くどころか、むしろ愉快に感じていたのである。

「面白いなあ、お前さんは」

笑いながら言う勇儀に対して、霊夢は呆れたような視線を向けた。

「今の話の何処が面白いのよ」

「いや、なに。私の勝手な感想さ。それよりも、飲もう」

「飲むけど……何よ、別にあたしと飲んでも楽しくないわよ。母さんの所へでも行きなさいよ」

「それは私が決めることだ。安心しな、騒ぎはしないよ。お前さんの傍で飲むなら、静かに飲む。それでいいだろう？ 隣に居させてくれ」

勇儀は、再び空になった霊夢の器に注いだ。

そして、自身にも手酌で酒を満たすと、一人で乾杯をするように盃を掲げた。

もちろん霊夢はそれに付き合わなかった。

「騒がずに酒を楽しむことも出来る。今しばらく、お前さんと静かな酒を飲もう」

気を悪くした風もなく、勇儀の顔には相変わらず陽気な笑顔が浮かんでいる。

何がそこまで楽しいのだろうか？

霊夢は鬼という妖怪を、ますます不思議に感じていた。



さとりは、勇儀と霊夢のやりとりを聞いていた。

会話ではなく『やりとり』である。

この騒がしい宴の中で、二人のささやかな会話を聞き取れるほど耳は良くない。

しかし、第三の眼によって心の声はイメージ付きで嫌でも入ってくる

る。

霊夢の心を読み終えた上で、さとりは思った。

在りし日の博麗の親子。

少女の憧憬が、さとりにはしみじみと見て取れる。

いい台詞だ。

感動的だな。

——つて、『うしおとら』の台詞じゃねーか！

霊夢が語った過去の先代の言葉に対するツツコミだった。

多分、当時の先代は漫画のキャラの行動にあやかってみたくて酒を飲み、娘の純粋な質問に格好をつけてあんな返答をしたのだろう。

外見には出ないのいいことに、内心ドヤ顔で取り繕っている姿が容易に想像できる。

——娘への影響に、本人が無自覚というのがまた救えないわね。

こうして地上の人妖の心を読むことで、先代の言動がどのように捉えられており、またそこにどれほど勘違いが生じているのか、さとりは理解し始めていた。

確かに、他人の言葉や行動の意図を正確に理解することは難しい。何気ない行動が思わぬ意味で受け取られ、他人に大きな影響を与えることは多い。

『親の心子知らず』というが、子が見る親の姿というのも大なり小なり誤解が混じるものなのだろう。

しかし、それにしても先代に関するそれは影響の規模も数も多すぎではないか。

宴会の最中、雑多に流れてくる人妖の心の中にある、先代への印象と自分の知る彼女の実態を比べて、深く思う。

あるいは、これは先代自身の能力に何か関係するものなのか——。そんなことを、さとりは一人で考えていた。

「何を考えているの？」

隣から声が聞こえた。

さとりの隣に座っているのは、アリスである。

「やっ」

「さとりは曖昧に返答した。」

「アリスはそれを追及するような真似はしない。」

「元々興味などなかったかのように『そう』と相槌を打って、それで終わりである。」

「一つの空間にこれだけの数の人妖が入り混じる中で、他人との接触を避けつつ最終的にさとりが選んだ場所が、このアリスの隣だった。静かで、落ち着けそうだったから。」

「それだけの理由である。」

「アリスもまた、さとりが隣に座ることを拒まなかった。」

「そして、不思議なことに、そんな数奇な巡り合わせでありながら、さとりとアリスは二人してお互いにこれといった興味や関心を持っていないのだった。」

「ならば何の為に、酒の席で隣り合っているのか。」

「何の為でもないから——互いに相手に何も要求しない、強制しない、無関心であることが、二人にとって都合が良かったからだだった。」

「アリスさんの隣は落ち着きますね」

「そう？」

「ここは、私には少し騒がしい」

「それは、実際の騒音が？ それとも、心の声が？」

「両方です」

「私は、騒がしくないのかしら？」

「ええ、まるで置物ですね」

「褒められてるのかどうか、複雑ね」

「二人はそれがこの場での義務のように酒の入った器を持ち、部外者であるように宴の喧騒を眺めていた。」

「今回の主役である先代の周りが、殊更騒がしかった。」

「フランドールと美鈴がべったりと傍に居座っている。そこへ、いつの間にかレミリアと咲夜が加わって、ちよっかいを掛けるように魔理沙がやって来ていた。」

「その中心で先代は静かに微笑んでいるが、さとりだけには彼女の内心が誰よりもお祭り騒ぎになっていることが分かっている。」

少し離れた場所に、八雲紫と八意永琳の重鎮二人が座している。酒を楽しむことは片手間に、この宴会を見守る——というよりも観察しているような、静かな様相だった。

そんな二人の元へ、宴会場を一回りして楽しんできた幽々子が笑いながら料理とお酒を持参してやって来る。

彼女達の従者は、それぞれの主を甲斐甲斐しく世話していた。

今は二人で飲んでいる勇儀と霊夢も、いずれ賑やかさの輪の中へ含まれていくだろう。

皆が、真つ当に宴会を楽しんでいる。

心から発せられる、大きな声、小さな声、多くの言葉、少ない言葉——様々に入り混じって、さとりの『第三の眼』に否が応にも入り込んでくる。

この場へ呼んでくれた先代の素直な好意が嬉しくないわけではないが、やはりそれでも、自分には辛い。

地上は、合わない。

さとりはそう感じる自分にも僅かに嫌気が差しながら、そつとため息を吐いた。

「疲れたのかしら？」

「いえ、お構いなく」

さとりの様子の変化を、アリスが目敏く気付く。

何かと細かいところに気付き、それをフォローする為の行動にそつがない。

それでいて、心の中がまるで無機物のように平坦で物静かな部分
が、さとりは気に入っていた。

人形を操る魔法使い『アリス・マーガトロイド』——それが、さとの知る彼女の大まかな情報である。

先代から事前に得た知識や印象からは『常識人で、お節介焼き』といった人物像を描いていたが、実際にこうして会ってみれば、イメージはかなり違う。

人形を操るといって、これではまるでアリス自身が人形である。

彼女は、この宴会に対して何ら想うところはないらしい。

楽しんでいないが、嫌がってもいないし、面倒にも感じていない。先代巫女の復帰への祝いなど、もちろん頭の片隅にもない。ならば、何故自分はここににいるのか？

そう自問して、魔理沙に連れられてここへ来るまでの道中を思い返していたのを、さとりは能力で読み取っていた。

それすらも記憶の整理でしかない。

そして、アリスがそのまま思考を完結させてしまったことに、驚いてもいた。

魔理沙に連れられて、ここにいる。

だから、そのままここに在る。

自分が来たくてここへ来たのではないと自覚しながら、宴会に参加したことに後悔もせず、帰ってしまったおうという発想すら湧かない。

彼女の心には、色が無い——と。さとりは感じていた。

周囲の出来事に、あるいは世界そのものに、彼女は酷く無関心なのだ。

「アリスさんは、疲れていませんか？」

「いいえ」

「しかし、この宴会を楽しんではいけないようだ」

「そうね。アナタには取り繕っても意味はないわけね」

「ええ。貴女の興味を惹くものが、この場には無いようですね」

「そうね。無いわけね」

アリスは何処までも平坦に答えた。

その平坦さが、逆にさとりの好奇心を煽った。

この宴会の場は、心の声が騒がしすぎる。だから、耳を塞ぎたくなる。

しかし、アリスの傍だけはほっかりと空間が空いたように静かで、心の声も小さく、言葉少ない。故に、耳を澄ませたくなる。

さとりは周囲の騒音を遠ざけるように、アリスの心に集中した。

彼女の中には、浮かんでは消えるイメージがある。

人型のイメージだ。

誰かを思い浮かべ、それを思い出そうとして、しかし失敗し、イメー

ジが霧散してしまう。

そんなことを、アリスは繰り返しているのだ。

周りには無関心のまま、時折思い出したように、ただ決して飽きることなく、自己の内側へ思考を埋没させている。

——これか。

——これが、彼女が世界に無関心である理由か。

——彼女は、いつもこのおぼろげなイメージが気に掛かっているのか。

さとりは、アリスの心に浮かんでいるイメージに対して、無意識に集中していた。

そして、驚くべきことに、それはさとりが知っているイメージだった。

「……その人って『神綺』じゃないですか」
意表を突かれて驚いたが故に、さとりは思わず声に出して呟いていた。

アリスは、その声を聞き漏らさなかった。

勢いよく、さとりの方を振り返る。

「今、何て言ったの？」

アリスはさとりを問い詰めた。

顔付きが一変していた。

何か怖いものを感じる、静かな迫力を秘めた声色である。

彼女の心を感じていた色褪せたイメージが、一気に塗り潰されていく。

心を読まずとも、さとりには分かった。

「今、『誰』の名前を言ったの？」

——やべ、地雷踏んだ。

さとりは今更悟った。



——宴が始まり、一刻も過ぎただろうか。

この宴に何時如何なる終わりがああるものか誰も分からなかったが、少なくともまだ半ばも過ぎていないはずだった。

まだ、誰も酔っていない。

酒は入っているが、妖怪はもちろん、一部の人間の参加者達も顔を赤くすらしていない。

空腹に美味しい料理を詰め込み、初対面が大半である周囲の者達を探るように言葉を交わし、その合間に少しの酒を飲む。

今はまだ、そういう平和な段階である。

時間が進めば、宴の様相も変わっていくだろう。

純粹に宴を楽しむだけが目的ではない者達は、少なくともそういった段取りを予定していた。

特に、紫と永琳は古明地さとりの実態を探るといふ一番の目的がある。慎重になっていた。

ゆっくりと状況は変わっていく。

先代との談笑を切り上げたレミリアが『さて、件の覚妖怪とやらを試してみるか』と挑戦的な気分で席を立つ。

勇儀の良い意味での強引さに釣られた霊夢が、賑やかな母の元へ向かおうとする。

それに気付いた魔理沙が、気まずい思いをして、この場をどうやったら自然に去れるのか悩む。

そして、今まさにさとりが自らの失言によってアリスの大いなる興味を惹く。

宴の流れが変わり始めていた。

しかしその時、一番の変化は宴の内からではなく外からもたらされた。

最初にそれに気付いたのは先代だった。

「――新しく、人が来たようだ」

気配を察知出来る先代が、博麗神社に近づく者達に気が付いた。知った気配である。

立ち上がって、それを出迎える。

周りの者達が、釣られるように先代の視線を追う。

夜空の闇に同化するような黒い翼を持った人影が三つ、神社へ向かって飛んできていた。

魔理沙がその正体を見極めようと、眼を凝らして呟く。

「あれは、天狗か？」

「射命丸文、姫海棠はたて、犬走椛だ」

「すごいな、おふくろさん。見えるのか？」

「気配で分かる。眼に頼るな、気を探るんだ」

「……なるほど」

魔理沙には『気』というものがよく分からなかったが、先代の助言の概要を大まかに掴み、感心したように頷いた。

もちろん魔理沙は、その助言自体が漫画の受け売りであることを知らない。

先代は、境内に降り立った天狗達を迎えた。

その顔には、親しい者ならかうじて分かる程度の表情の変化があった。

先代は、文達の突然の来訪を内心で迷惑に思うどころか歓迎していた。

妖怪の山からやって来た三人は、はたてを先頭にして宴会の参加者達と向き合った。

「ちよつと文、なんであたしに先に行かせるのよ？ あんたが一番足が速いのよ」

「いいから、早く用事を済ませて頂戴。目立ちたくないんだから」

「……このクソへたれ」

「なにおう」

「いや、声潜めてて全然凄めてないし、椛の背中に隠れてるし」

「はたてさん」

「何よ？ 椛もちよつとコイツを甘やかしすぎで——」

「周りを待たせています」

椛に指摘されたはたては、ようやく周囲の状況に眼を向けた。

既に、宴会の場にいる全ての人妖が突然現れた天狗達に注目している。

宴会の参加が自由であることは事前に新聞などで告知され、その新聞に関わっているのは天狗である。

この場を訪れる者としてそれほど不自然ではなかったが、それでも各々には奇妙は緊張感があった。

向けられる警戒の視線を、はたては一切怯むことなく真つ直ぐに見返す。

得体の知れぬ者、あるいは逆に名高い者、誰を相手にしても怯んだ態度ではない。

それらの中で唯一、目の前の三人に欠片の警戒も抱いていない先代が無造作に歩み寄った。

「あの――」

「うえあ!？」

先代と面と向かった途端に、はたては奇声を上げて視線を逸らした。

「宴会に、参加しに来てくれたのか？」

「い、い、いや……違うん、だけど」

「そうか」

「いやっ！ 違うけど、それも違うのよ！ お祝いしたい気持ちがないわけじゃないの、誤解しないでね!？」 あっ、復帰おめでとう！」

「ありがとう」

「……フ、フヒッ」

何処かの外れた先代の礼だったが、好意的な笑みを向けられたこと自体をはたては単純に喜んだ。

先程までの威風堂々とした様相が無残に崩れ、形容し難い笑顔と気持ちの悪い笑い声が洩れる。

先代を前にして、単なる挙動不審なだけの役立たずになってしまったはたてを眺めていた文は、諦めたかのように大きなため息を吐いた。

「――どうも、先代巫女様。事態が切迫していますので、社交辞令の祝言は省略させていただきますね」

はたてとは逆に、普段の調子を取り戻した文が慇懃無礼に頭を下げ

た。

「切迫とは、どういうことだ？」

「異変です。しかも、かなり危機的な状況です。博麗の巫女と八雲紫が居られたら、こちらへ」

「詳しい話を聞きましょう」

「面倒臭いわね」

先代と並ぶように、紫と霊夢が文の前に歩み出る。

二人だけでなく、その場の全員に聞こえるように文は朗々とした声で状況を告げた。

「地底より鬼が出現しました。鬼の四天王『伊吹萃香』様を筆頭に、幻想郷全土へ既に散開しております。

数はおよそ百。その目的に統一性は無く、人食いから始まり、里の襲撃、スperlカード・ルールを無視した強者との決闘、果ては幻想郷の管理システムそのものへの謀反まで、多様に含んでいるようです」
先程まで渋っていた様子とは打って変わり、そんなとてつもないことを文は淀みなく説明したのだった。

それを真正面で受けた三人の内、先代の表情に変化は無く、霊夢は僅かに顔を顰め、紫は口元を扇で覆った。

宴会の場に、陽気な賑やかさではない不穏な騒がしさが広がった。

誰もが事態の深刻さを理解したのだ。

鬼が敵に回るといふことの脅威を実感しているからだだった。
当然のことである。

その鬼が、今この場にも居るのだから。

どよめきの後、自然とその場の視線が集中した。

鬼の四天王の一人である星熊勇儀。

「——って、ここに鬼いるんじゃないの!？」

はたてがようやく我に返って驚きの声を上げた。

何を今更、とばかりに文が呆れたような表情を浮かべる。

しかし、はたての言葉は多くの者の内心を代弁していた。

——地底から現れた鬼が、幻想郷を襲っている。

寝耳に水の知らせである。

事態の詳細も、鬼の側の意図も分からない。

ただ、その行動からひしひしと伝わる、幻想郷に住む者全てへの敵意だけはハッキリとしていた。

——ならば、同じ鬼である勇儀はどうなのか？

宴の中で薄れていた、彼女への警戒と疑念が、今や初対面時のそれよりも大きくなってそれぞれの心に湧き上がっている。

多くの視線に晒されながら、勇儀は盃に視線を落としたまま、薄い微笑を浮かべていた。

自然な体勢である。

そこから不穏な気配や、何らかの企みを読み取ることは出来ない。しかし、だからこそ底知れない威容が感じられた。

霊夢が離れた為、勇儀の傍には今誰もいない。

無意識に誰もが近づけなくなっていた。

「あんたは、敵でいいの？」

最初に切り出したのは、はたてだった。

少なからず言葉と盃を交わし、勇儀の人となりに触れた宴の参加者達が慎重に真意を測ろうとする中、部外者である彼女は刃のような鋭さと実直さで尋ねる。

傍らの文は『またか』と内心で思いながら引き攣った笑みを浮かべた。

椀が刀に手を掛ける音を聞いて、更に胃が痛くなる。

「真っ直ぐに訊くんだなあ」

無遠慮なはたての言動に対して、勇儀はむしろ面白がっていた。

「天狗にしては、肝の据わった奴だ」

「鬼は回りくどい言い方が嫌いなんでしょう？ あんたも真っ直ぐに答えなさいよ」

「萃香がそう言ったのかい？」

「言ったわ。あいつは博麗の巫女を殺して食う、と言った」

「『あいつ』か……いいなあ、遠慮がなくて。それで、お前さんはどうした？」

「蹴り飛ばしてやったわ」

勇儀は声を上げて笑った。

「そいつあ豪気だ」

「あんたも同じ鬼の四天王。今回の件に、あんたは繋がっているの？」
「もし、そうだとしたらどうする？」

「はんつ、回りくどい言い方が好きなのね」

鬼を相手に、真つ向から退かずに受け答えるはたてを、誰もが固唾を呑んで見守っていた。

はたては勇儀へ、既に半ば敵意を抱いている。

余計な軋轢を生む、危険な問答である。

しかし、勇儀の真意を探るのにこれほど単刀直入な方法はない。

文が——内心では先代も——戦々恐々とするのを尻目に、はたては勇儀を睨み付けた。

「あんたは、地底の妖怪でありながらここへ呼ばれた。その意味を分かっているんでしょう？」

「ああ」

はたてと勇儀は、同じように一度先代を見た後、再び視線を合わせた。

「もし、あんたが伊吹萃香と結託していたのなら」

「なんだ？」

「あんたはこの子を裏切ったことになる」

「だったら、どうする？」

「ここに居る価値は無いわ。地獄まで吹っ飛ばしてやる」

断言するはたての瞳には、怒りが燃えていた。

まだ勇儀が敵であると決まったわけではない。

先走った感情であった。

しかし、それを向けられる当の勇儀は不愉快などと欠片も思っていない。

ただ、はたての言動から様々な意味を読み取って、より面白いと感じているだけだった。

かつて文から聞いた話の中に『はたて』という天狗がいたことを勇儀は思い出していた。

彼女は先程、先代を『この子』と無意識に呼んでいた。

思い返せば、はたての言った『博麗の巫女』とは当代の霊夢ではなく、先代のことを指していたのだろう。

はたてにとつての博麗の巫女は、未だに彼女なのだ。

断片的だが様々な事実を知り、勇儀は堪えきれずに笑った。

「変わったのかねえ。それとも、私が気付かなかっただけなのかねえ……」

盃を置き、ゆつくりと立ち上がって服装を正す。

「天狗つてのは、こんなに面白い奴らだったんだなあ。なあ、文？」

「……はへ？ な、何がですか、勇儀さん」

「こつちの話だよ」

慌てる文の様子を楽しむように一瞥すると、勇儀はそれまでの飄々とした態度を一変させた。

背筋を伸ばし、同じように真つ直ぐと、自分を見つめる人妖を見回して、最後にはたてを見据えた。

「答えよう。嘘は言わない。」

——私は萃香の意思を知っていた。地底で起こった私と先代との決闘を切欠に、いつか喧嘩をしに、地上へ出ようと言っていたんだ」
全員に緊張感が走った。

それを尻目に続ける。

「いずれ、萃香が具体的な行動を起こすだろうとは分かっていた」

——その上で、誰にも教えなかった。

勇儀は言外にそう言っているのだ。

緊張の中に殺気が混じり始める。

しかし、勇儀はやはりそれらの気配に頓着した様子もなく、むしろ言った後で力の抜けた笑みを浮かべた。

「それだけだ、私の知っていることは」

「……それだけって？」

「萃香の『具体的な行動』ってやつがどんなものなのか、私は知らなかったし、知らされもしなかったってことさ。今回の件は、私も初耳だ。どうやら、先代との決闘を十分楽しんだ私は仲間外れにされち

まったくみたいだね」

「無関係ってこと？」

「萃香の意思を誰にも教えなかったから、共犯とも取れる。まっ、好きに受け止めな」

「ふーん」

勇儀の言葉は、何処か投げやりである。

詳しい説明も、言い訳もない。

本来ならば、拭えない不信感を残す言い方だったが、勇儀が言うとむしろ逆の効果がある。

さっぱりとした答え方だった。

余計な言い繕いをしない勇儀の実直さが、そのまま信用へと繋がってしまふ。

現に、はたては敵意と興味を同時に失ったかのように、気のない相槌を返すだけだった。

勇儀が無害であると、既に認めてしまっているのだ。

それに釣られるように、周りの者達も緊張を戸惑いへと変えていく。

文が——内心では先代も——密かに安堵する中、一段落した会話の隙間に滑り込ませるように、紫が言葉を発した。

「では、古明地さとりは此度の件には、どのように関わっているのでしょうか？」

「……………はい？」

唐突に話を振られたさとりは、間の抜けた声を上げた。

◇

——なんなのだ、これは？ どうすればよいのだ!?

私はいきなり異世界から新宿に飛び出したドラゴンの気持ちで内心叫んでいた。

いきなり『鬼が幻想郷を襲撃した』って、あーた……超展開にも程があるでしょ！

え、ちよつと待つて。

異変つて……この宴会はどうなるの？

いや、分かつてるよ。

本当に緊急事態だつて言うなら、酒なんて飲んでる場合じゃねえつて話だけどさ。

で、でも……。

そんな……。

宴会……楽しみにしてたのに……これから、だつたのに……。

う……ううう……あんまりだあ……つ。

ああアあんまりだアアアア……!!!

——ふう、スツキリしたぜ。

一通りトチ狂つた後、私は精神的動揺から立ち直つていた。

柱の男が落ち着く為にやつてた行動に倣つてみたが、本当にスツキリと意識を切り替えることが出来たぜ。

私の思い込みの効果もあるかもしれないが、やっぱり漫画の先人は偉大だな。

そして、こんな時ばかりは年季の入った鉄面皮が非常に便利だつた。

ここまでの流れを、全て内心に隠して行えたからだ。

まあ、やつぱり残念な気持ちは消えないが、それでも冷静に現状と向き合わなくてはいけない。

周囲の会話の邪魔をせずに落ち着くことが出来た私は、はたてと勇儀のやりとりを聞いて、状況を整理した。

勇儀に共犯の疑いが掛かった時はさすがに緊張したが、早まって口を出さずに見守つたのは正解だったらしい。

無難に、勇儀自身が無関係であると断言してくれた。

もちろん、信じるか信じないかつて話になるだが、私に関してはそんなの愚問だよ。

原作のキャラクター像なんて曖昧なものだけじゃない。実際に死闘を繰り広げた私だけが持つ信頼感があるのだ。

……しっかし、はたてに関しては何色も意味で意外だったなあ。

鬼に対して一步も退かない姿がマジ男前。

まあ、男前を通り越してほぼ喧嘩腰の姿勢はちよつとビビったりもしたが。

でも勝手な思い込みである頼りない印象が、完全に拭い去られてしまった。なんか私つてば自然と『この子』扱いされちゃってるし。

実年齢差を考えたら当然かもしれないけどね。

けど、なんだろう……ちよつと『お母さん』って呼んでみたくなるような。

……つて、何考えてるんだ私は!? 落ち着いたと見せかけてトチ狂ったままか!

落ち着け、私。バカなことを考えている暇は無い。

とりあえず、萃香を首謀者とした今回の異変について、大体理解した。

勇儀ではないが、実のところ私にもこの事態への心当たりがある。

原作で言う『東方萃夢想』の展開だ。

萃香が幻想郷のメンバーと戦うっていう点だけだが、共通している。

原作では宴会をする為という割と平和的な理由だったり、エンディングで他の鬼も呼ぼうとしたけど誰も応じなかったという無難な才子だったりののだが——つまり、これが私が関わることで生じた差異なのか。

なんつーか……悪化しすぎじゃね?

他の鬼、来てるじゃん。

私、もう戦犯なんじゃね?

鬼って東方原作では最強の妖怪だったはずだが、それが百つてお前……。

しかも、目的がそれぞれ違うらしいから、萃香を倒して終了って話でもないみたいだし、メタルクウラも真っ青だわ!

挙句、スペルカード・ルールを無視という話である。

また『異変解決(物理)』か!

……やばいなあ。

何がやばいって、スペルカード・ルールが上手く浸透しなくなるんじゃないかって懸念である。

単純に異変の規模も、その敵戦力も前代未聞の脅威である今回。果たして、どういう対処をしたものか？

頭の悪い私では名案も浮かばず、思わず紫を頼るように視線を向けた時である。

「では、古明地さとりは此度の件には、どのように関わっているのでしょうか？」

紫は、さとりに疑いの眼差しを向けていた。

ああ、そうか。

鬼は地底に居たんだもんね。

さとりはその地底の管理者だもんね。

そのさとりが宴会に出てきた夜に、示し合わせたように鬼が幻想郷を襲ってるんだもんね。

そりゃあ、何かあるって疑っちゃうよね。

——最悪だ!!

「……何か、誤解をされているようですね。私は無関係ですよ」

「そうでしょうか？」

「具体的には、どのような疑いを向けられているんですか？」

「例えば、この宴会に多くの有力者を集め、鬼の動向を隠しやすくした

——とか」

「今回の宴会は、先代の提案したものですよ。私はそれに偶然呼ばれただけです」

「貴女が、そのように先代巫女を誘導したという疑いもあるわね」

思わぬところから紫の推測へ援護が飛んできた。

永琳である。

なんで？

「誤解です。私には、鬼に命令する権力もありません」

「命令ではなく、誘導だとしたら？」

「幻想郷に仇なすつもりはありませんし、意味ありませんよ」

「貴女は鬼に命令が出来ないと言ったわね。ならば、地底で貴女の権

威に従わない鬼が退治されても、貴女には利益のある話じゃないかしら」

さとりの逃げ道を塞ぐように、二人の賢者から次々に繰り出される筋の通った推論。

それを、さとりは表情を変えずに受け止めていた。

しかし、私には分かる。

皆、さとりのことを知らないか、何かとんでもない誤解を交えて見ているみたいだから気付かないんだろうけど、私にはよく分かる。

——あれ、アカン奴や！

——完全に内心でテンパってる顔や！

あと、視線は向けてこないけど、私に対する非難の声が超聞こえる。すんげえ私に悪態吐いてる。絶対に錯覚ではない。

そもそも、紫も永琳も間違っている。

なんか二人に言われたら思わず納得しちゃいそうだけど、その推論は全部見当違いなのだ。

さとりは無実である。今回の件には、真正銘何の関係もない。宴会も、私が言い出して、さとりには無理をして来てもらったのだ。

これは、非常にマズイ流れだ！

「待て、紫」

紫と永琳の影響で不穏になり始めた空気に、私は慌てて割り込んだ。

と、とにかくフォローをするんだ！

他の皆までさとりを疑い出したら、もう收拾がつかなくなる！

「さとりを疑っても、根本的な解決にはならないだろう？」

焦っていたこともあり、上手く紫達を説得してさとりの疑いを晴らす自信のなかった私は、思わず他人の台詞にあやかっていた。

うう……つ、なんか嫌な感じの言い方になっちゃったな。

「……先代？」

案の定、紫も突然口を出してきた私に対して訝しげな表情を浮かべている。

言い方も悪かったかもしれない。

でも、間違ったことは言っていないし……。

「首謀者が伊吹萃香という鬼なのか、それとも目の前にいる古明地さとりなのか、どちらなのかによって異変の全貌は変わってくるわ」

「でも今は、そんなことはどうでもいいんだ。重要なことじゃない」
今度は永琳に、そう反論する。

……あ、あやかると人物間違えたか？

なんか自分で言ってる無駄に反感を覚えるような言い方だった。

永琳はおろか、傍らの霊夢まで変な眼で私を見てくる。

しかし、ここまで来たら、強引にでも押し切るしかない。

さどりの事情を説明し始めると、私の秘密まで明かさなくてはいけないので、余計に話が拗れて長くなってしまふのだ。

とにかく今は、さどりから無駄な疑いを逸らせて、問題への直接的な対処をして欲しかった。

全員の意識が私へと移ったのをチャンスと見て、無理矢理話を進めた。

「鬼の襲撃に対処することが先決だ。紫、私達は如何動けばいい？」

「……ええ、そうね」

紫は顰めていた眉を戻し、普段通りの冷静な口調で応えてくれた。
ありがたい。

……扇で口元隠してるのが気になるけど。

感情を殺してる時の癖なんだよなあ、あれ。隠してるだけで、含むところはあつるわけか。

すまん！ 私のことを不審に思ってもいいから、とにかく今は案をくれ！

「まずは、鬼の動向を探ることが先決でしょう。幻想郷の何処へ、どのような比率で散ったのか、知らなければなりません」

「幻想郷の結界を調べれば、把握出来るかと」

それまで紫の傍らに黙って佇むだけだった藍が、おもむろに進言した。

結界というと、幻想郷全体を覆う二つの大結界のことか。

外界を拒む作用だけでなく、応用することで内部を走査することも

可能らしい。

すごいです、藍しやま。私、元博麗の巫女なのに、そういうの全然知らないです。無能ですいません。

藍に嫌われる理由が、ちよつと分かったような気がした。

「しかし、少々時間が掛かるでしょう」

「それには及びません」

声を上げたのは、意外にも権だった。

「既に、鬼の動向は私が探っております」

「ほう、如何にしてだ？」

「この千里を見通す眼にて」

「千里眼の能力か。良い性能だ。名を名乗れ」

「犬走権」

「では、権。紫様に詳細を告げよ」

「はっ」

初対面のはずの藍と権は、当たり前のように上下関係を築き、それを前提に淀みなく意思疎通していた。

あの藍が、権のことを認めたっぽいのも驚きである。

……いいなあ、権は名前で呼ばれて。

私の本名って藍も知ってるはずなのに、これまで一度も呼ばれたことないっすよ。

「百の鬼の内、半数以上が人里を襲撃しており、ここに数が最も集中しております」

「伊吹萃香の居場所が知りたいわね」

「人里を襲う鬼の中に、姿がありました」

「既に、襲撃の最中なのね？」

「今はまだ、火の手までは上がっていません。里にも対処する者がいるようです。しかし、惨事が広がるまでは時間の問題かと」

「迅速な報告をありがとう。感謝いたします」

権は無言で頭を下げた。

やっぱり、かっこいいわー。ただ無愛想なだけの私とは違うわー。しかし、話を聞く限り、のんきにしていられる余裕はないようだ。

やはり、私の思うとおり早急な判断が必要だったのだ。

つつーか、紫！ 早く人里に行かせてくれ、慧音とか超心配！

「霊夢には、人里へ向かってもらおうわ」

私の訴えるような視線を受けて、それでも紫はまず優先して博麗の巫女である霊夢に指示を出した。

「人里でいいのね？」

「被害の規模が最も大きくなると予想され、また幻想郷においても重要な拠点よ。人間の代表として、そこを『博麗の巫女』が守らなければならぬ」

「分かってるわ」

半数以上が集まっているとはいえ、鬼は他にもいる。そして、その分被害は広がる。

紫は、それらの犠牲よりも、人里のそれを優先したのだ。

博麗の巫女が、人間の為に戦う——それをアピールすることも必要だと含んでいる。

冷静で、冷徹な判断だった。

私はそれに不満を抱かない。

紫を責めるようなことはしない。

正しいからだ。

そして、信じているからだ。

私だって元は博麗の巫女。人間一人に出来ることがどの程度なのか、分かっちゃいるし、自惚れてもいない。

「私も行くわ」

そして、だからこそ私も動く。

先代だからとか言ってられない。

動けるうちは動かなくっちゃ。馬鹿はそれしか知らんのですよ！

「ええ。萃香の目的には貴女との戦いも含まれているようだから、敵の戦力を一箇所に集めることが出来るでしょう」

つまり、餌になれって話である。

紫のアイデアに不満はない。むしろ、満足している。

フフフ……いいねえ。シンプルになってきた。昔を思い出すな、紫

よ。

「ただし、鬼と戦う際にはこれを使って頂戴」

そう言つて、紫は私に陰陽玉を渡してきた。

霊夢の持つている物とはデザインが微妙に違う。白黒模様の黒の部分、濃い紫色になつている。

うーん、結界の効果があるつていうのは何となく分かるんだけど……。

「私には結界は使いこなせないと思うが」

「いいえ、これに仕組んだ結界の術式は防御用の物ではないわ。

使えば、これを中心にした一帯の境界をズラす——簡単に言えば、貴女を含む範囲内の対象を結界内に閉じ込める作用を持つているのよ。そして、その対象に人間だけは無条件で外すよう設定してある」

「つまり？」

「鬼が貴女を狙つて集まつた時に使えば、貴女と鬼だけを閉じ込めた空間が出来る。そこで戦えば、周りに被害は及ばないわ」

なるほど、つまり『ディバイディング・ドライバー』……だな？

私は一瞬で理解した。

こういう時、アニメとかの知識があると理解しやすくていいよねー。

「そして、貴女の戦いが誰かに見られることもない」

納得顔の私とは裏腹に、紫は僅かに表情を曇らせていた。

「これ以上、先代巫女である貴女が現在の幻想郷の異変に関わる姿を知られるわけにはいかないわ。

ましてや、スペルカードを使えない貴女が、かつての力をもって妖怪を退治する様を見られては困るのよ。それでは、前時代の幻想郷に戻つてしまう」

「――」

「貴女の名声が高まるのは良い。でも、伝説は伝説のまま終わらなければならぬ。貴女が、幻想郷の未来を先導してはならない。それは当代の巫女の役割なのだから」

紫の告げる内容は、全く当然のものだった。

私に気を遣っているのか、何処か悲痛さの滲み出る表情だったが、もちろん当人である私が何も気にしてはいないのだ。

……むしろ、私の方が気まずい。

やっぱさあ、拙かったんだよ。永夜異変で月ふっ飛ばしたの。

正直、今この場で紫に面倒掛けた分、土下座したい気持ちだったが、そんなことをしている場合じゃないのも分かっている。

私は平静を装いながら、静かに頷いた。

「私の戦争は終わった」

いつか、紫に言った時のように偉大な老兵の言葉にあやかる。

「だが私にはまだ、やらなければならぬ事が残っている。それを成しにゆくだけだ」

——まあ、さすがに彼みたいに自殺するわけじゃないしね。

陰ながら霊夢を支援しよう。親として、そして先達として。

私の決意を聞いて、紫は『ありがとう』と泣きそうな微笑を浮かべた。

ふつくしい……。

やる気出てきた。

「——霊夢。ならば、貴女のすべきことは分かるわね？」

「相手のやり方に付き合うなってことでしょ。分かっているわ。博麗の巫女である、あたしの仕事よ」

霊夢は懐に仕舞ったスペルカードを見せながら、紫に答えた。

原作の萃夢想では、直接的な物理攻撃を交えながらも、スペルカードの使用自体は徹底して守られていた。

あの変則ルールは、こういうことだったのか。

思わず納得してしまう。

しかし、難しいことには変わりないな。スペルカード宣言って、実戦では結構な隙になると思うし。

どうなるか不安だが——でも、そこは霊夢を信じなきや駄目だよ
ね。

「私は飛んでいくけど、母さんはどうするの？」

「走っているのは、迂回する時間が無駄になる。霊夢に運んでもらって、

私も空を行こうと思うが……」

「はいっ！ だったら、あたし達天狗にお任せ！ っていうか、具体的にはこっちの射命丸文にお任せ！」

「は……はたてエ!? あんたは唐突に何を……っ！」

「緊急事態なのよ？ いつも幻想郷一って自称している速さを、ここで活かさない？」

「……何が狙いななのよ、あんたは？」

「少しはあの子の助けになれつつってんのよ、この駄目親」

「親とか、何おぞましいこと言ってるの……っ」

「うっさい、この根性曲がり」

突然はたてが提案し、その後何やら文と二人して小声で言い合いを始めてしまった。会話の後半が聞き取り辛い。

親？ いや、違うな。オーヤ？ イミフ、何かの暗号か？

よく分からないが、文が運んでくれるなら速くてありがたいなあ。

……それに、文と一緒に飛ぶのって楽しみだし。

随分昔の記憶だが、未だに鮮明に覚えている、私が初めて見た天狗の後ろ姿が思い浮かんだ。

あの姿って憧れなんだよね。

内心で浮かれながら、私はこの場を発つ前にそつとさとりの元へ近づいた。偶然にも、勇儀が傍にいるしね。

「すまん、さとり。そういうことになった」

「……色々言いたいことはありますが、今はいいです。とりあえず、気を付けて」

相変わらずドライそのものなさとりの対応に、何処か安心しながら、今度は勇儀に向き直る。

勇儀も複雑な立場になっちゃったよね。

私が去った後で、また変に揉めなきやいいんだけど。

それから、一応確認しておかなければ――。

「勇儀。私は鬼と戦うことになるだろう」

「ああ、遠慮はしないでくれ。いや、むしろ油断するんじゃない。鬼はな、強いぞ？」

言われるまでもない。

勇儀との勝負の結果を、私の実力勝ちなんて欠片も思っちゃいないよ。

「先代、私に望むことはないか？」

「望むこと？」

「事情を知らされていなかったとはいえ、幻想郷で暴れようとしている奴らは皆私の同胞だ。萃香は、私の親友さ。」

私は何か行動するつもりはなかった。萃香達の加勢も、地上の為に戦う気もなかった。しかし、私に勝ったお前が命じるなら、私は拒まない。百の同胞だって血祭りに上げてやる」

……なにそれこわい。

勇儀はなんか凄い覚悟をしていたみたいだが、私はもちろん最初からそんなつもりなんてなかった。

つつーか、私と勇儀は友達でしょ。

命令するとか、そういうのは無いから。

「本当の友人は、対等なものだ。私が勇儀に命令することなど、何一つない」

「――」

「だが、一つだけ。私の代わりにさとりを守ってくれ。頼む」

「……『頼む』か。任せておきな、この星熊勇儀が引き受けた」

勇儀は力強く請け負ってくれた。

おおう、なんか異様に頼もしいな。オイ。

助かるよ、ありがとう。

――これでいいでしょ、さとり？ だからそんな『私を置いて行くんですか。なんか周りに変な誤解がある不安な状況で私を一人にするんですか。そうか、つまり君はそういう奴だったんだな』って眼で見るのはやめてください。

言いたいことは嫌って程伝わるからさ、これで勘弁して、

逃げるようにさとりから離れると、なんだかんだで話は纏まったらしく、物凄く嫌そうな顔で文が私を待っていた。

「行きますよ、先代様。人里に運んだら、そこまですからね？ 絶対

に一緒に戦うとかしませんからね？ 天狗が人間の為に戦う義理はないんですから」

「分かっている。ありがとう」

「なんですか、その礼は。皮肉ですか」

「いや、違うが……」

「おお、うざいうざい」

「……すまん」

「ふんっ。さっさと行きますよ」

やはり、文には迷惑な話だったらしい。気まずい……。

文は強引に私を抱えると、凄い勢いで急上昇した。

満月の夜空を、私は飛ぶ。

すぐ傍を、霊夢が付き添うように飛ぶ。

向かう先は人里。

鬼との戦いが待つ場所だ。

私は気を引き締めた。

——ところで、些細な疑問が一つ。

なんで、さとのりの近くにアリスが寄り添ってたんだらう？

いつの間に仲良くなったんだ、あの二人。



「頼むわよ。 霊夢、先代——」

八雲紫にとって、祈りとは最も無駄な行為である。

妖怪である自分に祈りを捧げる場所などない。

しかし、祈ることが何の利益も生まず、また同時に何の害にもならないというのなら——祈らずにはいられなかった。

自らの認めた巫女と、認め始めた彼女の娘の為に。

「あの二人だけに全てを任せるつもりではないでしょう？」

感慨にふける暇を許さぬように、永琳が訊いた。

鬼が襲っているのは人里だけではない。

その人里にしても、かの妖怪の強さを知る紫からすれば、規格外と

はいえたった二人の人間に全てを任せるのは危険だと判断していた。二人だけではない。例え、自分自身が戦力として加わったとしても、それでも足りない。

鬼とは、それほどまでに恐ろしい妖怪なのだ。

そして、それが更に数を頼みに襲って来ているのだ。

紫は振り返り、既に宴会の空気など吹き飛んでしまった参加者達の顔を見渡した。

「此度は幻想郷そのものの危機。この異変解決の為、幻想郷の管理者『八雲紫』の名の下に皆様の協力を募りたいと思います」

そう告げ、紫は深々と頭を下げた。

主が頭を下げる姿に、藍もまた倣う。

さすがにこの状況で周りを牽制するような真似はしない。

しかし、完璧に取り繕った表情の下に大きな不服を抱えていることは間違いなかった。

八雲紫が頭を下げる——その意味は、重い。

「その前に一つ、確かめておきたいことがあるわ」

最初に切り出したのは、永琳だった。

ただし、言葉と共に動いた視線の先は紫ではない。

さとりだった。

「今一度、確認するわ。貴女は今回の件に全く関係が無いのね」

「ありません」

「例えば、私がこの場で貴女に土下座をし、靴を舐めてみせれば、永遠亭への襲撃をやめさせることは出来るかしら？」

「師匠!？」

「黙ってなさい、ウドンゲ」

狼狽する鈴仙を視線で黙らせ、永琳は問い詰めた。

彼女の言葉が本気か否か、さとりには能力を使ってよく分かる。

「……本気ですか」

さとりの声色は、呆れよりも畏怖が混ざっていた。

「どうなの?」

「無理です。理由は、先程私が説明したままです。私は、本当に今回の

件とは関係がありません」

「ならば、もう言うことはないわ。行くわよ、ウドンゲ」

「……は、はい!? 行くって、何処へですか!？」

「姫をお守りするのよ」

そう言つて、永琳は本当にこの場から風のように去ってしまった。

先程の紫の頼みなど、歯牙にも掛けていない。

紫の提案を、軽く見ているわけではないのだ。

ただ、永琳にとって輝夜の存在が何よりも重いだけなのだった。

紫はそれを理解していた。

だからこそ、咄嗟に止めようとする藍を抑えた。

永琳と鈴仙は、そのまま博麗神社から飛び去っていった。

——八意永琳の行動に関しては、おおむね予想通り。

紫は何処までも冷静に状況を見据えていた。

——だが、古明地さとの言動はどうか？

そして、冷静だからこそ、この状況で誰もが目先の動きに捉われる中、さとのこれまでの動向に不審を感じていた。

鬼の襲撃を知った時から生まれた、さとりへの疑念。

それは今や、無視出来ぬほど大きなものとなりつつある。

それを後押しするのは、先代の言動だった。

『さとりを疑つても、根本的な解決にはならないだろう?』

『でも今は、そんなことはどうでもいいんだ。重要なことじゃない』

明らかにさとりを庇う意図のある言動。

一見正論ではあるが、普段の先代からは到底考えられない強引な話題の転換だった。

先代の行動が全て、幻想郷やそこに住む者達を想つてのものなのだと分かっている。

その決意は彼女がここを発つ時の言葉からも、痛いほど伝わった。

だからこそ、ただ一点——あの時のさとりに関わった瞬間に抱いた、自分らしからぬ先代の言葉への不信感と反感を、紫は違和感として捉えていた。

先代の尊い信念。

それを巧妙に摩り替えて、自らの利益としている者がいる。それが、あの古明地さとりではないのか？

やはり今夜の宴会。その始まりから、全てさとりが関与していたのではないのか？

もしも、そうであるのならば――。

――許すことは出来ない。決して。

未だ読み切れぬさとりの真意自体は棚上げして、紫はその決意だけを明確に固めていた。

「他の方々の意思は如何なるものでしょうか？」

永琳が去った後、残った者達へ向けて紫は尋ねた。

その言葉に『期待』はない。

ただ、パーセンテージで表された予測があるだけである。

親友である西行寺幽々子の協力は固い。しかし、この危険な異変においては絶対ではない。

残った二人の天狗は協力してくれるだろうが、彼女達が組織ぐるみで何処まで動いてくれるつもりかは、まだ分からない。

さとりと勇儀の二人は、むしろ手を出さない方がありがたい。幸い、先代が勇儀に頼んだおかげで、彼女は守りに入るだろう。

アリスは未知数。先程から、何故かさとりの傍に居る理由が気に掛かる。

紅魔館は当主であるレミリアの気分次第で、どうとでも転ぶだろう。賭けである。

ただの人間である魔理沙は論外だった。何の戦力にもならない。僅かな時間、酒を酌み交わした程度で、人妖の溝が埋まることなどないのだ。

ましてや、この場を中心である先代巫女はいない。全ては、あの永夜異変の時のまま――。

「――無いわよねえ、人間の為に戦う理由なんて」

おもむろに、レミリアが笑った。

誰に対するものとも知れぬ、嘲笑だった。

「少なくとも、このレミリア・スカーレットが戦う義理など無い」

「お嬢様……」

「でも、小母様が……」

レミリアの言葉に、不満を浮かべるのは美鈴とフランドールだけだった。

咲夜は沈黙を貫いている。

二人の継るような視線を無視して、レミリアは更に続けた。

「私が戦うのは、自らの矜持の為だけよ。つまり——『今』『此処』で、だ」

意味深げな言葉だった。

その真意を探る前に、レミリアが唐突に楯の方へ視線を向けた。

「おい、犬走と言ったな。人里に最も多くの鬼が集まっているのは分かった。では、二番目は何処だ？」

「此処です」

楯は淀みなく答えてみせた。

「伊吹萃香様を先頭に、この博麗神社へ、来ます」

レミリアの瞳は、その時間違いなく『未来』を見据えていた。

「来た」

まさに、その時である。

境内に続く階段から、何か大きなものが昇ってくる感覚を、全員が感じた。

覚えのある気配である。

それは星熊勇儀がやって来た時と、ほぼ同じ圧迫感だった。

違う点は、それが凄まじく速く、勢いのあることだった。

強烈な暴風が下から吹き上げるように、博麗神社の境内へ『鬼達』が姿を現した。

人の形をした者。

人の形をしていない者。

手足が人のその倍の数ある者もいれば、手足どころか胴体すらない頭だけの鬼もいた。

大小様々なそれが、地を踏み、また夜空を舞い、幻想郷の人妖の前に鬼としての姿を現したのだ。

「ふむ、数は……二十程度か。多いなア。多い分『忘れ去られた妖怪』とやらのありがたみが薄れるなア。その鬼一匹の方が、よっぽど存在感があるわ」

レミリアの軽口に、勇儀だけが笑って応えた。

レミリア以外の紅魔館の者達がそうであるように、ほとんどの者が、現れた鬼の群れが放つ、まさに『鬼気』と呼べるものを受けて戦慄していた。

これが鬼である。

勇儀とは違う。

敵対する存在となった、これから戦わねばならない相手となった、鬼の脅威である。

「いいねえ、地上にも活きのいい奴らがいるもんだなあ」

満を持して、萃香が現れた。

勇儀と同じように、階段を登って真つちに境内へ足を踏み入れている。

その仕草自体が、既に他の鬼と一線を画しているような迫力があつた。

「お前が伊吹萃香か」

誰もが様子を伺う中、レミリアは無造作に前に進み出していた。

「人里を襲っている鬼の中に居た、と聞いたが？」

「ああ、そっちにも行ってるよ」

「なるほど、分身か何かか」

「吸血鬼のチンケな使い魔と一緒にする無え。我が分け身は、幾つにも散らばり、全ての鬼と同行している。

人を食いたい鬼がいれば共に人を攫い、強者との決闘を望む鬼あらばそれを見届ける——この伊吹萃香は、此度の異変の正真正銘元凶よ！」

萃香は胸を張って、言い放った。

清々しく、だからこそ何処までも恐ろしい言葉だった。

彼女は今まさに、幻想郷そのものへ宣戦布告をしたのだ。

紫は、自分を一瞥する萃香の視線に気付いた。

対等な友だと思っていた相手である。

だからこそ、もはや言葉を交わす必要も無く、紫は悟ったのだ。

伊吹萃香は、今や対等の『敵』となったのだと。

「フン、つまり喧嘩を売りにきたのだな？」

周りを囲む鬼と、それを率いる萃香に場が吞まれそうになる中で、レミリアは最もそれに抗う者だった。

今はまだ、直接の戦いは始まっていない。

佇む萃香に対して、レミリアもまた立っているだけである。

しかし、二人の体から眼に見えない何かがちぎれている。

互いのそれが触れた瞬間、煙のように混ざり合うことなく、逆に押し合っているかのようにだった。

その二つのモノの間に挟まれた空間が、悲鳴を上げるように歪んで見えるのだ。

「舐められたものだ。今日の前に居る貴様も、所詮分身だろう」

「そりゃあ、舐めもするさ。新参の妖怪がよう、血を吸う程度の鬼がよう、本場の鬼に対等な喧嘩出来ると思うんじゃないよ」

「ハハハッ、勘違いも甚だしい。私をお前ら下等妖怪の亜種などと思うな。」

この東方の地における呼び名を当て嵌めただけで、それを本質と誤解する浅はかさ。滑稽すぎて、言葉も無い」

「お前は『鬼』じゃないのかい？　じゃあ、お前は何なんだい？」

「知れたこと——」

レミリアは嘲笑った。

その背中に、蝙蝠のような黒い羽が広がる。

鬼が角を持つように、レミリアだけが持つ漆黒の羽である。

まるで満月の影響を受けたレミリア自身の力を反映するように、普段のそれよりも肥大化した翼が周囲を威圧した。

「私は『赤い悪魔』 私は『不死の女王』 私は『化け物』——近代西洋の闇を支配したスカーレット家の現当主たる私が、古びた妖怪風情に劣る道理無し！」

「ほぎげ、小娘があ!!」

レミリアの強烈な挑発に、堪えきれずに鬼が襲い掛かった。萃香の傍らに立っていた鬼である。

完全な人型で細身の男性的な体格だが、両腕だけが異様に長い。真っ直ぐに伸ばせば、まるで槍である。

鋭利な爪を供えた指を束ねれば、その先端はまさに槍の穂先そのものの。

それを心臓目掛けて突き出した。

レミリアは回避する素振りすら見せず、その一撃に貫かれる。

噴水のような出血が、傷口から噴き出した。

「いいぞ、貴様の『挑戦』を受けよう」

逆流する血を口からも溢しながら、レミリアは愉快そうに笑っていた。

「では、スペルカード宣言だ——」

「馬鹿め！」

悠長とも思えるほどゆったりとした動作は、敵にとって隙だらけだった。

カードを取り出そうとしたレミリアの腕を、鬼の爪が斬り飛ばす。

心臓を貫いた腕を引き抜き、自由になった両腕で、同時に腹を突き刺す。

小柄なレミリアの胴体は、血液ごと内臓を全て押し出されて、その腕に両断された。

凄惨な光景である。

泣き別れになった下半身が地面に力なく落ち、片腕を失った上半身は——そのまま鬼を見下ろすように宙に浮かんでいた。

「小物は勝負を急ぐから品がない」

レミリアは、いつの間にかその口に血塗れのスペルカードを啜っていた。

「何い!？」

「いいか、幻想郷のルールを無知な鬼に教えてやる。宣言は優雅にするんだ——紅符『不夜城レッド』」

レミリアが宣言をした瞬間、自身を中心に十字架を形取った魔力が

吹き上がり、密着していた鬼の全身を飲み込んだ。

炎にも血にも見える真紅の閃光の中へと悲鳴が消え、空高く吹き飛ばされた鬼はきりもみしながら地面に叩きつけられていた。

スペルカードに示された技には違いないが、弾幕ごっこで使用されるような非殺傷のものではない。

圧倒的なまでの破壊力である。

その攻撃を放ったレミリア自身は、倒れた鬼とは対照的に、受けたダメージをその場で完治させてしまっていた。

満月における吸血鬼の不死性は凄まじい。

千切れた下半身を繋ぐなどというレベルではない。一から再構築し、レミリアは何事も無く両足を地に着けていた。

「すごいなあ、言うだけのことはある」

戦いを眺めていた萃香は、のんきに笑っていた。

しかし、その笑顔には怖いものがある。

「でもなあ……舐めてるとしか思えないなあ、スペルカード宣言とかさ。最初から、その技をぶつけていればよかつたんだ。隙だらけだったじゃないか。わざとなのかい？」

笑みに隠して、萃香の苛立った気配を感じ取れた。

結果的に能力の差で押し負けてしまったが、実戦において正しいのは襲った鬼の方のはずなのだ。

わざわざスペルカードを唱えている暇があったら、その間に攻撃をした方が良い。

いや、良い悪いではなく、それが本当の意味での『全力』である。

つまり、レミリアは手を抜いたのだ——と。萃香は捉えていた。

そして、それが許せなかった。

そんな萃香の怒りを尻目に、レミリアは嘲笑と上からの目線を崩さなかった。

「舐めてるのかと言われれば、舐めている。わざとかと言われれば……そうとも、わざとだよ」

「なにい？」

「なあ、鬼。お前ら、喧嘩を売りにきたんだらう？ この幻想郷のルー

ルを無視して、好き勝手に暴れにきたんだろう？ そんなお前達の下等な行為に、私が付き合う道理があると思っていたのか？」

レミリアは心底馬鹿にしたように鼻で笑い飛ばした。

パツクリと割れた三日月のような口から、長い舌を垂らす。

「バアカ、勝手に一人で踊ってる。私は私のルールで、私の守るべき矜持で、お前達の相手をしてやるよ」

「てめえ……っ」

萃香が押し殺したような声を洩らす。

鬼という種族そのものを格下に見るような、一貫したレミリアの言動に腹が立っているはずだった。

しかし、萃香は同時に何処か喜んでもいるのだった。

それは、鬼特有の感覚なのかもしれないなかった。

鬼は、笑うのだ。

「分かりやすいじゃねえか！ その薄っぺらなカードとお前の矜持とやらを、鬼の拳骨で打ち砕いてやる！」

「よかろう、相手をしてやる！ 次のスペルカードはこれだ！」

両手を広げ、レミリアは再び大げさすぎるほどの仕草でカードを掲げた。

何処までも隙だらけの構えであり、何処までも雄大な姿でもある。

虚勢とも取れる、意味のない優雅さ。

しかし、その姿に不思議と惹き付けられるものがあつた。

少なくとも、この場にいる鬼以外の者達——幻想郷の住人達は、レミリアのスペルカードを掲げる姿に惹かれていた。

特にその中で、レミリアを見上げる紫の瞳は尊敬すら含んでいる。

紫は微笑んでいた。

鬼の襲撃を知って以来初めて浮かべた、余裕を感じる笑みだった。

紫は今まさに、レミリア・スカーレットを対等の存在と認めたのだった。

「さあ、このレミリア・スカーレットに挑みたい鬼は前に出ろ！」

レミリアの一喝に、萃香だけではなく他の鬼達にもわかに騒ぎ始めた。

「つかあー！ 何処までもわしらを下に見よる！ これだから南蛮の妖怪は好かんのお！」

「頭ア、俺にやらせてくれ！ あの餓鬼の面ア、歪めたる！」

「さて、俺だ！ 俺が先だ！」

「待てコラア！ まだ俺との勝負は終わってねえぞお!!」

不夜城レッドを受けて再起不能になったかと思つた鬼まで立ち上がっていた。

全身をズタズタに引き裂かれていたが、傷は全て表面だけに留まり、致命傷には至っていない。

先程の攻撃そのものは、全く手加減をせずに放つた全力の一撃である。

それをまともに受けて、それでも立つのだ。

レミリアは鬼という種族が共通して持つ、恐るべき頑強さを実感した。

——こんな奴らが、全部合わせて百か！

しかし、その脅威を表情には決して出さない。

何処までも優雅に、余裕綽々に、強大な敵の群れを手招きしてみせる。

「競うな競うな、見苦しい。私のように誇り高き貴族と、泥臭い土着の民じゃあ格が違いすぎるのよ。

我が力を捻じ伏せ、矜持を打ち砕きたくば、真円を描く今宵の月を越えて、この命に届いてみせよ——！」

放たれるレミリアの魔力が、満月を赤く染める。

鬼が拳を振り上げて咆哮を放ち、スペルカード宣言がそれを迎え撃つように響き渡つた。

其の二十九 「鬼退治」

人里は、奇妙な静寂に包まれていた。

何が奇妙かという点、それは静寂でありながら本当の静寂ではない点だった。

満月の光で普段よりも明るく照らされているとはいえ、夜中である。

特に、満月の夜は妖怪も騒がしくなる。

故に、人は夜の闇を恐れる。

人里の家々の戸は固く閉ざされ、人が出歩くどころか声すら聞こえない。

寝静まっているというよりも、自ら息を殺して、この夜をやり過ごそうとしているような、何処か張り詰めた静寂だった。

しかし、その静けさの中に時折音や声が響いてくる。

最初、それは動物の鳴き声だった。

犬が吠えている。

何処ぞの家に飼われているものか、閉ざされた戸の前で、犬は外に向かつて激しく吠えていた。

何かを警戒し、威嚇しているようだった。

しかし、その犬の前にはただ夜の闇が広がるのみで、他に動物や人が居るようには見えない。

犬は、闇の中に潜む何者かに向かつて威嚇するように、必死で吠え続けていた。

「――ひもじいのう」

闇から声が聞こえた。

「――歯がゆいのう」

声がだんだんと近づいてくる。

犬の吠え方に、怯えが混じるようになっていった。

近づいてくるものが、この世にあらざる恐ろしいものであると気付いたのだ。

月明かりに照らされ、それは闇の中からぬうと姿を現した。

鬼であった。

無数の鬼であった。

人里の往来を、何匹もの鬼が我が物顔で練り歩いているのだ。

「何じゃ」

「犬か」

「なんだ、また犬か」

「先程から見つかるのは畜生ばかり」

「馬や牛は食いでがあるが、物足りん」

「足りぬなあ」

鬼は見上げる程の巨軀だった。

もはや吼えることも出来ず、縮み上がって震えることしか出来なくなつた犬を、一匹の鬼が無造作に掴んで自らの口の中に放り込んだ。

憐れな犬の悲鳴は、肉と骨を咀嚼するおぞましい音と共に鬼の腹の中へと消えていった。

人里を包む奇妙な静寂の原因は、この鬼達にあった。

鬼が練り歩く人里では、家に籠もつた住人が息を潜めて震え、そんな静けさの中を外に閉め出されてしまった憐れな動物達の叫び声や争う音が響くのだ。

「人が食いてえ」

「臭いはその中からするのになあ」

「息遣いまではつきりと聞こえるのになあ」

「きつちりと戸を閉め切つてやがる」

「手馴れとるな。入れん」

鬼達は忌々しげに周囲を睨んでいた。

勢い勇んで人里を襲つたはいいが、思うように暴れ回ることも出来ずに苛立っているのだ。

家の囲いというものは一種の結界である。

加えて、幻想郷を生き抜く人里の住人は、各々自宅に妖怪への備えとして退魔の札などを持っていた。

並の妖怪では、容易く家の中へは入れない。

もちろん、鬼は並の妖怪ではない。実力に上下の差はあっても、拳

一つ振るうだけで戸を打ち破り、中の人間を引きずり出すことも出来る。

「まさか、鬼の備えまであるとは——」

鬼の一匹が、これまでの経験を思い出して、悪態を吐いた。

ぼやいている内に、闇の中から別の鬼の集団が現れ、合流する。

どれ程の数の鬼が、この人里中を徘徊しているのか。

しかし、現れた鬼達も苛立たしげな表情を浮かべていた。

「そっちはどうだ？」

「駄目だ、人っ子一人出歩いちやいねえ」

「何処の家も戸の前に炒った豆をばら撒いてやがる」

「こっちは魚屋らしいが鰯の頭がぶら下げてあったぞ。臭くてかなわん」

「こちらは柊だ。何処から手に入れてきやがるんだ？ 内陸の秘境だから安心してたのに」

「幻想郷の管理をしているという妖怪の仕業だろうよ。なんせ、秘境を丸ごと結界で囲んじまうような化け物だ、流通を弄るくらい訳無からう」

「忌々しいー」

豆。鰯。柊——いずれも、鬼の弱点となる物である。

それらがどの家々にも備えられている為、鬼達は思うように人間を、いや人里そのものを襲うことが出来ないでいるのだった。

「どうなってやがる！ 地上の人間どもは、俺達を忘れたんじやなかったのか!？」

一匹の鬼が吐いた悪態は、その場の全員の心を代弁するものだった。

豆や鰯は食べ物だし、柊はただの植物だ。人間の生活の中にそれらが在るのは、まだいい。

しかし、それらを『鬼に対抗出来るもの』として理解していることが不可解だった。

鬼の力と恐ろしさを忘れ、退治する方法さえ失くしてしまった人間どもの里を襲うなど容易い——そう意気込んで乗り込んだ結果がこ

れである。

好き勝手に暴れ、食らい、壊し、それに追い立てられて逃げ惑うはずだった人間の悲鳴一つ聞こえない。

鬼達の不満は限界に達しようとしていた。

「ぬううっ……かくなる上は！」

「うむ、面倒だ」

「火を放とう！」

「岩を落とそう！」

「地面ごと家を引っくり返してしまえ！」

とんでもないことを言い出した。

しかし、それを成せるだけの力が鬼にはある。

あつという間に同調する声上がり、戦の前の鬨の声であるように人里に響き渡った。

遙か昔に人を恐怖させた、まさに鬼の所業が人里で行われようとしていた。

その瞬間だった。

「——光符『アマテラス』!!」

文字通り、天から差す光が夜の闇を切り裂いた。

一瞬で夜明けが訪れたかのような閃光が辺りを満たす。

赤と青。二色の光の弾幕が上空から降り注ぎ、一塊になっていた鬼の群れを蹂躪した。

精密な狙いのない掃射のような攻撃だったが、地面や家屋などに被害はない。しかし、霊的な威力を秘めている為か、全体に直撃を受けた鬼達は阿鼻叫喚の悲鳴を上げることとなった。

「な、何だあ!？」

弾幕の放たれた先を睨みつけると、上空からゆっくりと舞い降りるものがあつた。

靡く衣服の裾——そして、その尻に生える尻尾。

靡く美しい髪——そして、その頭に生える二本の角。

人と獣の姿を併せ持った美しい女が、殺気立った鬼達を相手に一歩も退くことなく、百鬼夜行の通り道を踏み締めていた。

「何者だ!？」

「人か……?」

「いや、牛ではないか……?」

人間の血と妖獣の血を持った半人半獣——上白沢慧音である。

「——鬼ども」

普段とは違う、獣の眼で慧音は睨んだ。

「如何なる理由かは知らんが、貴様らがこの人里を襲ったのが今夜であることが二つの不幸を招いている」

慧音が、鬼達に向かって一步踏み出した。

巨漢の群れである鬼達に対して、女である慧音は小柄に見える。

しかし、その一步には、地面を踏み抜くような酷く重々しい威圧感が伴っていた。

不意を突かれたこともあり、鬼達は知らず、慧音の気迫に圧されていた。

「二つは、今宵が満月であること——」。

満月の夜には、私の中に流れるハクタクの血が目覚め、妖獣としての力がこの身に備わる。今の私の力は、人間の時の比では無いぞ」

慧音は無造作に鬼へと歩み寄っていく。

その一步ごとに、慧音の肉体から立ち昇る眼に見えないものが増し、物理的な力となって鬼を押し潰そうとしていた。

「ハクタク有能力を使えたおかげで、忘れ去られた鬼の歴史を探れたことは幸運だった。

鬼の生態や弱味を、断片的にだが解析させてもらった。急ぎ人里中へ広めたが、見る限りこれは有効だったようだ。お前達鬼にとつては、不幸だっただろうがな」

慧音は真相を明かした。

鬼達が悔しげに唸る。

しかし、そんな鬼達の様を見ても、慧音は得意になるところか苛立つように表情を険しくさせるだけだった。

「そして、もう一つも今宵が満月であること。ただし、これは私にとつての不幸だ」

慧音は歯を食い縛り、肩を震わせ、額に青筋を浮かべた。そして、腹の底で煮えた怒りを解き放つように叫んだ。

「――今夜一晩しかないので、歴史の編纂作業が全っ然進んでないんだ！ この傍迷惑な阿呆どもがああぁーっ!!」

慧音の咆哮が、そのまま弾幕となって鬼達に襲い掛かった。

まるで鬼のようである。

いや、慧音の今の表情に限っていえば、まさにその通りだった。

初撃のスペルカードの時のように、広範囲に拡散する弾幕を、鬼達は成す術も無く受けることとなった。

しかし、さすがは本物の鬼である。

弾幕ごっこ用のものではない本気の攻撃を浴びて、誰もが傷ついてはいる。ただ、それがダメージに繋がっているかというところと全くそうではない。

体の表面を無数の刃物で浅く切られた程度の、形だけの傷を負っているだけだった。

「こそばゆいわー!」

集団の先頭に立っていた鬼が、全員の代弁をするように吼え、慧音に襲い掛かった。

それを慧音もまた、一切怯まずに迎え撃つ。

真正面から二人はぶつかり合った。

示し合わせたかのように突き出した両腕を、ガツチリと掴み合う。慧音と鬼の体格は、倍近くも違う。まるで大岩が慧音を押し潰そうとしているかのようだ。

慧音の細腕を、鬼の丸太のような腕が捻り折ろうとしていた。

しかし、折れない。

あろうことか、鬼との力比べで拮抗している。

「こ、こやつ……やはり牛かつ!」

鬼が唸った。

「やかましいー!」

慧音は頭突きで返答した。

その鬼にとって不幸だったのは、姿形が人間と似ていたことだっ

た。

突き出された慧音の額が顔面にメリ込み、鼻柱を無残にも押し潰していた。

「誰が、牛のような乳袋かあ！」

理不尽な怒りを込めた雄叫びが再び弾幕を形成する。

密着状態で放たれたそれが、鬼の体を押し流すように後方の仲間の手まで吹き飛ばした。

「鬼との取っ組み合いで勝ったぞ！」

「なんだあ、あいつは!?!」

「分からん！」

「分からん……が！」

「うむ、面白い！」

「面白いなあ！」

——楽しくなってきた！

鬼達の顔に、次々と分かりやすい笑みが浮かび始めた。

人里を襲いに来た自分達を邪魔する慧音の登場を、むしろ歓迎するような喜びようだった。

「よしっ、次は俺の番だ！」

「馬鹿、待て！ 俺はまだ負けとらん！」

「そのみつともない形になった鼻を治してから言え」

「面倒じゃ、一斉に掛かっちゃえ」

「それは卑怯じゃないか？」

「勝負に卑怯も糞もあるか」

「それにあいつは強いぞ」

「おう、自分より強い奴相手に勝ち方をこだわるのは、相手を侮っている証拠よ」

「何じゃ、その結論は！ 気に入らん、わしの方が強いわ！」

「確かめるか？」

「確かめよう！」

鬼達にはわかに活気付き、勝手な言い争いを始めていた。

勝手ではあるが、不意打ちや一時後退などの発想すら出ないところ

が、なんとも鬼らしい。

人を食いたいたいなどとぼやいていた当初の様子など、本人達すらすっかり忘れてしまったかのように、慧音との勝負だけに意識が向いてしまったようだった。

「どうした、臆したか!? くだらん言い合いをしてないで、さつさと掛かって来い! どちらにしろ、貴様ら全員無事に帰すつもりはないわ!」

普段からは想像も出来ない程好戦的に、慧音は挑発した。

獣化した姿も相まって、上白沢慧音という人間ではなく、ワーハクタクという一匹の獣として完全に覚醒したかのように見える。

しかし、その内面はやはり何処までも人であり、里の守護者としての気高い意思を失っていなかった。

鬼達が自分に気を引かれている現状——これは慧音にとっても都合の良いことだった。

少なくとも、その間に他の人間が襲われることはないのだ。

そう『少なくとも』『この範囲』では。

——こいつらだけではあるまい。どれ程の数が、人里に散らばっているのだ?

野性味溢れる勇猛な姿に反して、慧音の内心には全く理性的な焦りがあった。

唐突な妖怪の——しかも、鬼という得体の知れない——襲撃に、慧音自身も、他の人里の住人達も、動揺が無いはずがなかったのだ。

襲撃当初、人々は一時的に混乱した。

鬼への備えも、最初からあったわけではない。敵の正体を看破した慧音が、急いで能力を行使した結果判明し、その後で対処を始めたのだ。

その対処は素晴らしく迅速なものだったが、それでも最初の襲撃での被害は止められなかった。

幾つかの家屋が破壊され、何人かの住人が鬼に攫われている。

何が目的か、子供ばかりが攫われたようだ。

何処へ連れて行かれたのか未だ分からない。残された親達の嘆き

や、子供達の安否を考えると、慧音の胸は不安と恐怖で締め付けられそうだった。

そして、広い人里において、情報の伝達は時間が掛かる。ましてや、鬼が徘徊しているのだ。

この辺り一帯は上手く被害を抑えているが、慧音の把握出来ていない箇所ではどんな事態に陥っているのか、全く分からない。

すぐにでも、そこへ駆けつけたい。

しかし、自分は一人である。

この鬼を放置は出来ない。

駆けつけるべき場所が多すぎる。

——今、やれることをやり抜くしかあるまい！

慧音は己の内の焦燥を必死で押し殺していた。

動揺は隙を生む。鬼と対峙した状態で、それはあまりに危険だった。

鬼の恐ろしさを実感している。

今は圧倒しているように見える状況だが、慧音の猛攻を受けて、敵はまだ一切戦力を減らしていないのだ。

——こいつらを倒し、他の場所へ向かうのにどれだけ掛かる!?

不安材料だけは次々と積み上がっていく。

——いや、それ以前に……私にこいつらを倒せるか!?

しかし、慧音は不安も焦燥も押し殺した。

諦めを捨てていた。

満月によって目覚めたハクタクの力よりも、それこそが今の慧音の持つ最大の武器だった。

人としての信念だった。

「人間を舐めるなよ、鬼ども——！」

絶望的な状況であっても、希望は決して失われていない。

慧音の揺ぎない瞳には、一人の巫女を中心に、共に異変と苦難を乗り越えた愛すべき仲間達の姿がハッキリと映っていた。



「――神槍『スピア・ザ・グングニル』！」

レミリアのスペルカードが発動した。

破壊と死の力が手の中に収束し、一本の槍となって具現化する。

「来いやあー！」

「その意気や良し！」

対する鬼は、自らの槍のような腕を構えて、レミリアの攻撃を迎え撃った。

鬼の腕は、もう一本しかない。左腕は、既にレミリアによつてもぎ取られていた。

放たれた光の槍と、突き出された鬼の爪が、丁度先端同士で激突する。

ぶつかり合った力の拮抗は、一瞬だった。

光の槍に爪を砕かれ、そのまま突き進む穂先によつて、頑強なはずの鬼の腕は柔らかいチーズのように、縦に裂かれていく。

槍は肩まで到達すると、次の瞬間炸裂して、鬼の半身ごと腕を完全に粉碎してしまった。

「見事……っ！」

己の武器である両腕を失い、上半身の半分を抉られるという致命傷を受けた鬼は、最期に壮絶な笑みを刻んで、斃れた。

仲間の死に、他の鬼達はどよめいた。

悠然と佇むレミリアへ向けて怒りを滾らせる者もいれば、逆に称賛する者もいる。

既に、次は自分が戦うことを主張する者もいた。

レミリアは、そんな鬼達の様子を油断無く見据えている。

戦いの前にあれほど挑発し、勝ち誇っていた姿とは一変して、実際に勝利した今になって警戒を表しているのだった。

「――前座は終わったわ。しばし、待て！」

「む……認める！」

「え、認めるんですか？」

レミリアの勝手な提案を、鬼もまたあっさりと受け入れたことに、

美鈴が思わず間の抜けた声を洩らしていた。

勢いに乗せて言ったレミリアの言葉を、やはり勢いに乗せられて受け入れただけのように思える。

鬼のリーダーらしき萃香の方を見ても、楽しそうに笑っているだけで、問答無用に襲い掛かろうとする様子はない。

——どういう奴らなんだ、鬼というのは!?

美鈴だけではなく、その場の多くの人妖の疑問だった。

「最初に言っただけど、私はここに残るわよ。奴らは吸血鬼である私を舐めた」

共に戦う味方を仕切ろうとする紫に対して、レミリアは決定事項であることのように告げた。

既に対等の存在となつたレミリアの意思を、もはや紫は蔑ろにはしない。

「ええ、貴女に任せるわ」

「ほう、『任せる』ときたか」

「貴女を信頼することにしたのよ」

「そうか。気持ち悪いな」

「まあ酷い」

紫とレミリアのじゃれ合いのような軽口を聞いて、幽々子は楽しげに微笑んだ。

「急に仲良くなっちゃって、妬けちゃうわあ。それじゃあ、私もここに残ろうかしらね。協力はしたいけど、私自身はそうそう動き回れる立場じゃないし。代わりに妖夢を派遣するわ」

「幽々子様——」

「これは命令よ。私のことはいいから、異変解決に尽力しなさい」

「……畏まりました」

不満気な妖夢に対して、幽々子は有無を言わず命じた。

元より『身の安全』という点だけならば、妖夢は幽々子を案じてはいない。

単純に幽々子の方が強いからだ。

「為すべきことは分かるわね？ レミリア嬢が戦い方のお手本を見せ

てくれたわ。貴女なりに解釈しなさい」

「はい。では——」

妖夢は主を含めた、その場の者達に一礼だけすると、すぐさま博麗神社を発った。

幽々子の命令の意図は、正確に把握している。

道中で鬼の動向を探り、それを見つけた際にはすぐさま討伐、最終的に人里へ辿り着く——。

妖夢は懐のスペルカードと、何よりも腰に差した二刀を入念に確認し、鬼との戦いへと赴いていった。

「藍、貴女も人里へ向かうのよ。先代のサポートに回りなさい」

「……しかし」

紫の指示に対して、藍はささやかな反抗の意思を見せた。

その反応に取り合わず、紫は穏やかに微笑み返す。

「私は今、とても気分が良いの。状況は切迫しているのに、余裕すら感じているわ」

「はい」

「貴女の式としての能力を『先代を補助する為の行動』に関してのみ解禁します」

「はい」

「その性能を最大に発揮して、尽力しなさい」

「はい。橙の式を行使する権限をお与え下さい」

「許可します」

「ありがとうございます。既に、橙は人里へ向かわせております」

「では、貴女も向かいなさい」

「はい」

最後の返答は、全く淀みなく行われた。

最初の躊躇など無かったことのように、迅速に、藍は行動を開始した。

「咲夜、フラン、美鈴は紅魔館へ戻りなさい」

幽々子と紫に倣うように、今度はレミリアが三人へ指示を出す。

しかし、これに対して忠実なのは、従者である咲夜だけだった。

妹であるフランドールと、従者というよりも従業員という立場である美鈴は、あからさまに不満の色を滲ませていた。

「お姉様だけ置いて行けないよ」

「あら、フランは優しいわねえ。——んで、あんたはどのようなのよ？ 美鈴」

「え……私、ですか？」

「そう。あんたが案じているのは主である私？ それとも、敬愛する先代？」

「……先代様、です」

「まっ、そうよね」

美鈴の返答を聞いても、レミリアは不満とも不敬とも感じなかった。

元より、美鈴とはそのような関係である。

対等とまではいれないが、彼女には彼女なりの矜持があつて生きている。

美鈴の生きる道の傍に、今は紅魔館があるだけなのだ。

そして、そんな彼女に自分達は大いに助けられた。

忠誠心とは違う。『親愛』『信頼』そして『恩義』がレミリアと美鈴の仲にはあるのだった。

その恩義に、レミリアは報いたいと常に考えている。

「——でも、自分の力を弁えて行動しなさい。あんたには、鬼の相手は荷が重過ぎるわ」

美鈴がこの場に残って戦うつもりなのか、先代の元へ駆けつけるつもりなのか、レミリアにはまだ判断出来なかったが、両方を含めて忠告した。

自分が倒した鬼の死体へと視線を移し、美鈴だけではなく、咲夜とフランドールにも見るよう促す。

「奴は単純に強かったわ。力は強く、何よりも頑丈さが並じゃない。それが鬼の持つ特性だとして、他にも各自が持つ特有の能力を含めて考えれば、凄まじい戦闘力となるはずよ。」

咲夜の能力は通じるでしょうけど、人間の膂力では奴らの皮膚は貫

けない。美鈴も、真つ向から戦って勝てると思うほど自惚れちやいないでしよう？」

主人の身を案じる気持ちが何処か残っていた咲夜は、その言葉で自らの考えを戒めた。

レミリアの傍で彼女を守りたいという気持ちはあったが、その行為が結果的に主人の足を引つ張る結果にしかならないと悟ったのだ。

同じような指摘を受けた美鈴も、唇を噛んで俯くことしか出来なかった。

咲夜は能力が尖りすぎて相性が悪かった。

妖怪である美鈴の地力ならば、鬼を倒せる可能性がある。しかし、それは『可能性』以上のものではなく、相性が無い故に大きく勝るものも無いのが現実だった。

「フランに関しては、まだ『敵を討ち倒す戦い』自体に荷が重いわ。大人しく紅魔館に戻って、皆と協力しながら、帰る家を『守る』のよ」破壊に特化したフランドールの能力——それが鬼に対して『通じるかどうか』ではなく『使いこなせるかどうか』とレミリアは指摘しているのだった。

敵との戦いで暴走し、ただ無差別に標的を破壊するだけが目的と摩り替わってしまうようなら、それは第三の敵が現れたのと同じことである。

「でも、お姉様が——」

フランドールは姉の言いたいことを正確に理解し、それでも尚反論しようとした。

「私のことよりも、紅魔館の方を心配しなさい。あの目立つ館が鬼どもの興味を惹かないとでも思っているの?」

「え、それって……」

「犬走。紅魔館周辺はどうなっている?」

「既に鬼の襲撃を受けています」

周囲のやりとりの中で、揺るぎ無く自らの仕事を全うしていた楯は、レミリアの質問にもすぐさま答えた。

それを聞いたフランドールが一気に顔色を変える。

「——小悪魔が危ない！」

「え？」

それまでの躊躇が何だったのかと思えるくらい、フランドールは勢いよく博麗神社から飛び出していた。

呆然とする姉を尻目に、猛スピードで紅魔館の方角へ向けて飛んでいく。

——あれ、なんかおかしくない？ 実の姉とあの胡散臭い悪魔との心配の比率に差がなくなる？

レミリアは得体の知れない敗北感に包まれながら、一瞬現実逃避しそうになった。

咲夜の咳払いが、それを引き止める。

「それでは、私も紅魔館に向かわせていただきますわ」

「えっ……ええ、フランをサポートして頂戴。あと、パチエのこともお願いね」

「畏まりました」

「あと、あの汚物みたいな下等悪魔を鬼がやったように見せかけて始末しておいてくれない？」

「お嬢様、心安らかに」

咲夜はやんわりと受け流すと、すぐさまその場を発たずに、一人取り残されるように状況を眺めるしかなかった魔理沙へ歩み寄った。

実際に、彼女は現状において完全に蚊帳の外だった。

それを、魔理沙自身も自覚しているからこそ、悔しげに周囲を睨みつけることしか出来なかったのだ。

「魔理沙、アナタも来なさい」

自分の手を掴む咲夜を、魔理沙は驚いたように見つめた。

「ここは危険よ」

「……紅魔館に来て、大人しく震えてろってのか？」

「戦う以外にも、出来ることはあるわ」

「異変だろ……解決しなきゃ、駄目だろうが」

「魔理沙」

咲夜は魔理沙の瞳を真っ直ぐに見つめた。

「アナタが心配なの」

咲夜は魔理沙の考えていることを否定しなかった。

ただ、自分の本音を伝えた。

それが嬉しくなかったわけではない。

魔理沙自身にも、自分の考えていることが無謀以外の何ものでもないことは分かっている。

——何が出来るというのだ？

——異変解決の為に、ただの人間に毛が生えた程度の力しかない自分に、一体何が出来るというのだ？

——鬼に勝つどころか、抗うことさえ出来ない弱者の分際で。

——そもそも、お前は本当に異変を解決をしたいのか？

——そんな大層な責務が、凡人に過ぎないお前にはあったか？

もう一人の自分が自問する。

それに反発しながらも、魔理沙は明確に反論することが出来なかった。

——お前は、博麗霊夢とは違う。

魔理沙は歯を食い縛った。

際限のない自らの苦悩と、それを和らげてくれる咲夜の暖かな手の両方を、思い切って振り払った。

「ありがとう。でも、ごめん」

呆気にとられる咲夜に、泣きそうになりながら、精一杯の笑顔で告げる。

「わたしは——霊夢の所へ行くー！」

「魔理沙！」

箒に跨り、飛び去る魔理沙の背中へ咲夜は手を伸ばした。

もちろん、その手は届かない。

追えば、届くかもしれない。

しかし、咲夜は躊躇ってしまった。

追って、どうすればいいのかわからなかった。

レミリアの命令に背いていいのかもわからなかった。

迷いが、咲夜の行動を完全に止めてしまった。

「咲夜、遅い！」

レミリアの叱責が、咲夜を我に返らせた。

「迷い始めたら、時間が幾らあっても足りないわよ！ さっさと決めなさい！ 瀟洒じゃないわよ！」

「――往きます、紅魔館へ！」

迷いを振り切った咲夜は、魔理沙と背を向け合うように、別方向へと飛んでいった。

咲夜の後ろ姿を見送り、その後で魔理沙の飛んでいった方向を眺めたレミリアは、微笑した。

「あの魔法使いも難儀な『運命』を背負ってるわねえ」

言葉とは裏腹に、何処か愉快そうに呟いた。

そして最後に、判断に迷ったまま残された美鈴を見やる。

レミリアが言葉で促すまでもなく、視線に気付いた美鈴が決意を固めた表情で顔を上げた。

「……先代様の元へ向かいます」

「そう。ならば、一つだけ言っておくことがあるわ」

レミリアは美鈴と額をつき合わせて、囁いた。

「鬼を侮るな。奴は私に倒された後、笑って逝ったわ。奴らは、敗北も、その結果の死さえも楽しんでるように見える」

敗北の可能性を受け入れた勝負に勝てるはずなどない、と。レミリアも美鈴も考えている。

しかし、そんな当たり前の考え方から、更に一段ズレた位置に鬼の考え方というものがあるのだと、レミリアは察し始めていた。

鬼は、間違いなく今の状況を楽しんでいる。

傍若無人に振舞いながら、その実、結果の有無や勝敗すらも度外視して、何もかも楽しんでるように思えるのだ。

あるいは、それは同じ妖怪にすら受け入れ難い『狂気』とも取れるのかもしれない。

地上を追われた鬼の真の恐ろしさが、そこにあるような気がした。

「心して掛かりなさい、美鈴」

「……はい」

「それとね」

神妙な表情を浮かべる美鈴に対して、レミリアはそれまで保っていた緊張感を崩して、あっさりと破顔した。

「あんた、自分で思うより結構強いわよ」

「へ？」

「ほら、さっさと行ってこい！」

呆けた顔をする美鈴に軽い頭突きを食らわせると、レミリアは笑いながら背を向けた。

額を擦りながらその背中を見つめ、もはや語ることはないのだと悟ると、美鈴は深く一礼だけして、飛び立っていった。

全ての従者達が飛び去り、博麗神社には三人の主人だけが残される形となる。

美鈴を送り出した後、改めて鬼を相手に威風堂々と立ち会うレミリアと並ぶように、紫と幽々子が歩み寄った。

「——話し合いは終わったかい？」

一連のやりとりを全て見守っていた萃香は、笑いながら尋ねた。

嘲笑の類ではない。

彼女達のやりとりを楽しみ、感動すらしている感極まった笑顔だった。

「うむ、歓待ご苦労」

「いちいち腹の立つお嬢様だねえ。まあ、いいや。こっちも戦う奴の配分が終わったところだ」

「なんだ、一斉に掛かってこないのか？」

「この場所へやって来た奴らにも、もちろんそれぞれ目的がある。

その中でも『博麗の巫女を食ってみたい』って言ったのと『幻想郷をぶっ壊したい』って奴が、あんたらの相手をするよ」

萃香がそう言うて促すと、ここまで連れ立った鬼の過半数が、三人と対峙するように前へ進み出た。

巨軀を持つ者や空を舞う者も含めて、女性的な体格である三人にとっては見上げるような相手ばかりである。

しかし、レミリア、紫、幽々子は、誰も萎縮していなかった。

鬼達から放たれる威圧感を、まるでそよ風のように涼しげな表情で受け流している。

「おう、分かっているとと思うけどさ。こいつら舐めんよ、お前ら」
萃香はレミリア達ではなく、仲間の鬼に向けて忠告した。

「わたしが三人いると思って戦え」

大げさではなく全くの正論として、そんな恐ろしいことを告げる。
しかし、鬼もまた、その事実には萎縮などしない。

雄叫びが上がった。

幻想郷全てを震わせるような、恐ろしい鬼の雄叫びである。

「ふうん、勇ましいことだ」

「野蛮ねえ。やっぱり殴り合いとかしたいのかしら？」

「付き合う義理はないわね」

レミリアが。

幽々子が。

紫が。

襲い掛かってきた鬼の群れを相手に、悠々と各々のスペルカードを取り出す。

「――紅符『スカーレットマイスタ』！　かわしてみろ、意外と病み付きになるぞ！」

「――亡舞『生者必滅の理』よ。難易度は中の上ってところかしら？」

「――魍魎『二重黒死蝶』　幻想郷の流儀、楽しんでいって下さいな」
一丸となって迫り来る鬼の群れを、圧倒的な弾幕が歓迎した。



――ひよつとして、私って拙いことになってるんじゃない？

さとりは場違いに、そんな自問をしていた。

外見だけならば、さとりは周囲の騒然とした状況の中で酷く落ち着き払っているように見える。

片手には、酒がまだ半ばまで残った盃を持って、のんびりと腰を降ろしたまま、宴会の続きを楽しんでいるような姿だった。

——古明地さとり。

——この状況にあつて、あれほど落ち着いているとは。まるで他人事つて面だ。

——相変わらず、嫌味な奴だ。

——しかし、大した胆力よ。

——恐ろしい。

——やはり、侮れん。

そんな鬼達の心の声を、さとりは呆けたように聞いていた。

実際のところ、完全に状況に置いていかれたさとりは、手持ち無沙汰に盃を手放すことさえ出来ないだけなのだった。

そして、周囲の自分に対する認識を聞きながら、先程まで紫や永琳に向けられていた疑念の内容を思い出して、今更になつて考えていた。

——あれ？ 私、ひよつとして何か凄い誤解されてない？

自らの予想よりも遥かに事態が深刻であると、さとりは徐々に気が付き始めていた。

そんな内心の葛藤のせいで、外側の肉体が停止状態にあるさとりを『地底の管理者だけあつて、肝が据わってるんだなあ』と感心していたはたては、椀を連れて勇儀の所へやつて来た。

「星熊勇儀様、私達はこれから妖怪の山へ戻ろうと思います」

「なんだい、急に敬語なんて使うんじゃないよ。別に、私に断りを入れる必要もないしね」

はたては、さすがに苦笑いを浮かべた。

敵でないのならば、不遜な態度を取るつもりもない。

むしろ、さすがにさつきのは無礼すぎたかと反省すらしていた。

尤も、それでも卑屈にならないところが、鬼と相對した天狗にしては十分慇懃無礼な姿ではあるのだが。

「勇儀様は、どうされますか？」

「うん。まだ萃香の奴と話をしたいからな、私はここに残る。

適当な頃合を見て、地底へ退散するさ。余計な騒ぎを残すつもりはない、と。上司には伝えな」

「分かりました。じゃ、また機会があれば会いましょう」

「再会の挨拶とは、嬉しいこと言ってくれるじゃないの」

無礼ではあるが、それは良い意味での気安さでもある。

勇儀は機嫌良く二人を見送った。

そして、そのやりとりを見計らったかのように、残った鬼数匹を引き連れた萃香が、勇儀の前へと歩み出てくる。

「待たせたか、萃香」

「待ってたよ、勇儀」

鬼と鬼が対峙した。

二人だけである。

勇儀の背後にいるさととりも、萃香の背後にいる他の鬼達も、口を挟めない空間がそこに出来上がっていた。

「萃香よう、お前随分と派手に事を起こしたなあ」

「そうかい？ 勝手に派手になっちまったんだよ。鬼が百匹も動くんだ、そうもなるさ」

幻想郷中に騒乱を振り撒いている元凶とは思えないほど気安く、萃香は答えた。

「勝手に、なあ。よお、鬼は嘘が嫌いだろう」

「ああ、嫌いだね。分かりきったこと言うなよ」

「なら、お前も嘘を言うんじゃない。」

——なんで、他の奴らまで扇動した？ 本当に『勝手』なら、お前一人で動けば良かったんだよ。一人で地上に出てきて、先代にでも、この幻想郷にでも、好きなように喧嘩を吹っ掛けりや良かったんだ」
勇儀は一度、萃香と拳を交えての話し合いをしている。

先代と決闘した際の話聞いて、萃香が地上に——延いては先代巫女という、人間に対する興味を蘇らせた時だった。

人間を見限った鬼。

人間に見限られた鬼。

それが、再び人間に興味を持ったのだ。

あまつさえ、その人間と全力で戦いたいと言ったのだ。

先に戦いを経験した身として、勇儀にはその気持ちが良いほど良く

分かった。

しかし、当時は様々な事情があった。

決闘の末に両足が再起不能になった先代巫女。地上で普及したスペルカード・ルール。そのルールが地底にも適用され始めたこと——多くの変化が重なっていた。

今は待て、と。勇儀は萃香を言葉と力で止めたのだ。

——ならば、待とう。

——まずはスペルカード・ルールとやらに倣おう。

——そして、先代自身の意思を確認して、その上で真つ当な喧嘩をしよう。

そういうことになったはずだった。

「地上のルールに従えないってのはいい。その結果、お前が退治されようが、それは勝手だ。

いや、郷に入っても郷に従わねえってのは道理に反するが、最終的にはお前が望んだ戦いが出来るのかもしれない」

勇儀は苦笑して、言い直した。

同じ鬼でありながら、当然のこととして、勇儀は萃香との間に個人の違いがあることを知っていた。

良く言えば誠実で、悪く言えば単純な自分とは違い、萃香の性格には何処かムラがある。

嘘を嫌っているが『少し嘘を言うかもしれない』などと、それ自体が嘘のような正直なような、掴みどころのない言い方をする時もある。

勇儀と交わしたのも『意見』であって『約束』ではない。

だから、結局ルールに従わず、いきなり先代に喧嘩を仕掛けたとしても『嘘じゃあないよ。事情が変わっただけだよ』とケロリとした顔で答えてしまいそうなのだが、萃香にはあるのだ。

伊吹萃香という鬼を一言で表すのなら、少しばかり『ずるい』のだ、というのが勇儀には正しい気がしていた。

「お前は、実に鬼らしく自分勝手だ」

「うん」

「だったら、自分だけで動きや良かったんだ。らしくもなく仲間を率いやがって、戦ごとの真似のつもりか？」

「気になってるのはそこか？」

「ああ、気になるね」

「変わったのさ」

「変わった？ 何が？」

「教えない」

「何故だ？」

「お前に言ってもしようがない」

「しようがないか」

「うん、しようがない。わたしの勝手だ」

——教えられない。

つまり、誤魔化すことや嘘を言うことが出来ないと、萃香は暗に語っているのだった。

鬼らしい正直さである。

鬼らしい頑なさである。

それを聞いた勇儀は、諦めたようにため息を吐いた。

こうなってしまうては、駆け引きも糞もない。

勝手と言われれば、萃香に事情があるように、勇儀にも事情がある。

もはや交わす言葉は無く、あとはただ互いの行動がぶつかり合うだけなのだ。

「そうかい、じゃあ勝手にしな。私も勝手にする」

「おう。詰まるところ、勇儀。お前はわたし達の敵かい？」

「さあて、それはさとり次第さ。なあ？」

「……ふあ？ ああ、はい。どうぞ、ご自由に」

半ば話を聞いていなかったださとりは、自分でもワケの分からない返事をしていった。

そんなのんきな対応を、勇儀は『鬼に狙われてるつてのに大した度胸だ。それとも私を信用してくれてるのかな？』と考えていた。

その心を読んださとりは、直面している事態にようやく気付いた。

萃香と勇儀の会話が終わったのを見計らって、控えていた鬼が明ら

かな敵意を滾らせて、にじり寄ってきたのだ。

「なんだ、お前らの目的は私達だったのか？」

萃香とも、別の場所でレミリア達と戦う者とも違う目的で動いている。

同じ鬼である勇儀に対して、その鬼達は敵意を向けているのだ。た。

「——地底で、俺達鬼の支配者面している古明地さとりを叩き潰すつもりだったがお」

何気なく吐き出された驚愕の事実には、さとりは思考が停止した。

そんな変化に誰も気付くことなく、やりとりは続く。

「星熊の、お前まさかそいつを守るなんて言うんじゃないだろうな」

一匹の鬼が、勇儀と相対した。

長身の勇儀よりも、更に大柄な男の鬼である。

顔立ちも人間に近いが、その腕は左右に三本ずつ、合計六本もあった。しかも、一本一本がはち切れんばかりの筋肉を備えている。

「おう。お前がさとりを襲うってんなら、私はそれを防ぐ為に戦うつもりだよ」

「情けねえ。そのちっぽけな妖怪の狗になり下がったってのか!？」

「はははっ、そいつは私の事情。私の勝手だ」

「あの巫女に頼まれたからか？ あの人間に、無様にも負けちゃって、それで尻尾振ってるってのかよ！」

「ぐちやぐちやうるせえなあ。私をどうしたいのか、ハッキリしろよ」

萃香とのやりとりとは裏腹に、勇儀は早くも会話に飽きたかのようになり、小指で耳をほじっていた。

怒りで紅潮した鬼が、六本の腕の内一本を勢いよく振り上げる。

「てめえは鬼の面汚しだ、星熊勇儀い！ 鬼の四天王は、今日から俺が代わりに入るぜ!!」

腕が振り下ろされた。

人間が脳天に食らえば、潰れた頭が胴体を股下まで一直線に両断するような、凄まじい一撃だった。

その攻撃を、勇儀は片手で受け止めていた。

飛んできた小石を掴むような気軽さで、落ちてくる拳を手のひらで受け止めたのだ。

肉のぶつかり合う音が響いた。

しかし、勇儀は小揺るぎもしなかった。襲い掛かる圧力に、全く堪えた様子もない。

六本腕の鬼は、そこでようやく顔色を変えた。赤から、青へ。

微動だにしない勇儀の片腕に対して、二本目の腕を添え、更に力を込める。

勇儀は一切揺るがない。

代わりに、勇儀自身が自ら動いた。

掴んだ片手に力を込める——それだけである。

それだけで、肉と骨が軋む音が鳴り始めた。

「あ……あ、っ……ああああああ!!」

六本腕の鬼が悲鳴を上げた。

三本目、四本目、と腕を追加していき、ついには六本の腕の力を総動員して、勇儀の片腕に対抗しようとする。

しかし、押し返すどころか抗うことすら出来なかった。

勇儀がゆっくりと腕を傾けるのに合わせて、鬼の体が窮屈な椅子に無理矢理座ろうとするかのように、小さく、地面に向けて沈んでいく。

「た……たすっ」

「ん？」

「助けて……!!」

「あ？ 命乞いか？」

朗らかに笑う勇儀の顔を、苦痛と恐怖で歪めながら鬼が見上げた。「すみませんっ、俺が間違っていました……生意気言いましたあ！」

「ああ。お前、私のこと侮ってただろう？」

「はいっ！ 侮ってました！ すみませんでした、だから許して下さいっ!!」

恥も外聞もなく、鬼は叫び散らした。

その必死の形相を見つめていた勇儀は、笑みの質を変えた。

「——それが侮ってるっていうんだよ、ボケが」

煮え滾る怒りを笑顔で表現するとそうなるような、凄惨な笑みである。

血の詰まった皮袋を地面に叩きつけたような濡れた音が響き渡り、その鬼は文字通り押し潰された。

勇儀によつて平らになるまで地面に『押し込まれた』鬼の胴体は血と内臓を溢れ出させて、五本の腕と二本の足は四方に飛び散っていた。

勇儀の握っていた腕は、完全に握り潰されて跡形もない。

人はおろか、妖怪も、鬼も、戦慄せざるを得ない凄まじい光景が広がっていた。

「この私に喧嘩を売った挙句、謝って許してもらえるなんて、ちよつとも思つちまつてるところが、本当に——」

血塗れの腕を引き上げ、勇儀は残った鬼達に向けてゆっくりを顔を上げた。

「舐めてんだよ、この星熊勇儀を」

低く、重い、凄みのある声でそう言った。

萃香以外の残された鬼達は、いずれも勇儀やさとりに対して含むところのある目的だったのだろう。

しかし今や、目の前で行われた凄惨な出来事に、当初の意志は完全に吞まれていた。

彼らは思い出したのだ。

自分勝手に、暴虐を好み、暴力によつて全てを決定する鬼の中に在つて、仮にも『四天王』などと上下を決める立場が作られたこと。

そこに君臨していた、伝説の鬼の恐ろしさを、今更になつて思い出していた。

力の勇儀——それが、自分達が戦おうと思つていた相手の正体だと、今更になつて思い知つたのだ。

「お……俺あ、そのさとりが気に入らなくて……」

戦意喪失しかけた鬼の一匹が、勇儀の機嫌を伺うように恐る恐る背後のさとりを指差した。

なんとか、勇儀とは戦わずに事を済ませたい——そういつた、鬼に

あるまじき負け犬の考えが透けて見える。

それに対して、更に表情を険悪に変えた勇儀が何事か言おうと口を開きかけた時、声が割り込んだ。

「あくまでも彼女を狙うのなら、私も相手をするわ」

それまで沈黙を貫いていたアリスだった。

一連の出来事を、全く我関せずと眺めていたアリスは、さとりの危機に際して、突然動いたのだ。

「なんだい、お前さん？ 味方してくれるのかい？」

「アナタが全て済ませてくれるに越したことはないけどね。さとりに害が及ぶなら、露払いくらいはするわよ」

アリスが指を動かすと、それに連動して数体の人形が動き出し、さとりを守るように配置された。

小さいながらも、凶悪な武器を携えた人形の兵隊である。

見たこともない術を目の当たりにした勇儀は、面白そうに口笛を吹いた。

「こいつは頼もしい。さとりの友達かい？」

「いいえ。でも、彼女とはもつと話がしたいわ。ここで殺させるわけにはいかない」

「いいね、分かりやすい動機だ。嫌われ者なんて言われてるが、意外とさとりも面白い友人を作るじゃあないか」

愉快そうに笑う勇儀の微妙な誤解を解こうともせず、淡々とした様子でアリスが肩を並べる。

ここに、奇妙な拮抗状態が生まれていた。

それを背後から眺めるのは、さとりである。

自分を守る伝説の鬼と魔法使いの背中を眺めながら、さとりは呆然としていた。

——古明地さとり、か。大して興味はなかったが、なかなか面白い奴じゃあないか。

自分に向けられる萃香の思念を読み取る。

さとりは思った。

——ひよつとして、ちよつと、いや大分、いやかなり、いや実は相

当……私って拙いことになってるんじゃない？
本当に、今更な話だった。



「あく、先代様はくつそ重いですねえ。とても女性とは思えませんねえ。肉付きすぎじゃないっすかねえ〜」

「……すまん」

文は独り言のつもりかもしれないが、抱えられながら空を飛ぶ私は、自然と密着した状態になっている。

その為、彼女の言葉も一語一句洩らさず聞こえていた。

文にそんな風に思われてるなんて……恥ずかしい！ あたし、泣いちやう！

「母さん、やっぱりあたしが代わるわ。だから、とっとと消えていいわよ三流記者」

「なっ!? 誰が、三流ですか！ 他の悪口は受け流しますけどねえ、新聞に関しちやあ譲りませんよ、あたしや！」

「よせ、霊夢。文、貴女の新聞は素晴らしい」

「……ふ、ふんっ。分かっているなら、それでいいんですよ」

「……チツ」

いや、まあさっきの心境は半分以上冗談だったんだけどね。

別に私が女にしてはゴツすぎるのは事実だし、文は何も間違ったことを言っていない。

霊夢もそこまで気にしなくていいのよ？

しっかし、こうして霊夢と一緒に飛ぶのはもちろん初めてだが、そこに文も加わるとなるとは予想だにしなかった。

しかも、こうして三人並んで話してみると、意外と霊夢と文は親しい間柄のように見える。

少なくとも、お互いに知り合っではいるようだ。

私は博麗の巫女を引退して、博麗神社を出てから霊夢とは一月に一回の付き合いだし、その後のこの子の友好関係ってあんまり知らない

のよね。

やっぱり、新しい博麗の巫女として取材した際に知り合っただらうか。

「文と霊夢は友人だったのか？」

「いいえ。たまに周りを嗅ぎ回ってる不審な妖怪よ」

「今のところ、大して興味もないありきたりな取材対象ってところですかねえ。間違っても友好関係なんて結んではいけませんので」

折角、友好的な方向へ傾くような聞き方をしたのに、二人の返答は素っ気無いものだった。

霊夢の態度は、まあ他人相手にはこれが普通なところもあるけど、文の方も本当に霊夢へ大した興味を向けていないようだった。

そういえば、新聞にもあまり霊夢の話題って載らないのよね。

「なんせ、博麗の巫女に就任して以来、大した功績も残していませんからね。霊夢さんは。

スペルカード・ルールの制定と、本格的な異変の解決は春雪異変くらいですか？ 話題性という点では、娘さんよりも母親の貴女の方が遥かに勝りますよ」

「——ッ」

文の——その、なんだ、ちよつと嫌味な言い方を聞いても、霊夢は飛ぶ先を見据えたまま、黙っていた。

しかし、私には分かる。

あれは、傷ついている表情だ。

どうやら、博麗の巫女としての功績が少ないって点を、意外と気にしているらしい。

そんなの、まだまだこれからだと思っただけだ。

「紅霧異変では、最終的に決着をつけたのは先代様と、話を纏めた八雲紫。永夜異変でも、詳細は探れませんでした。やはり先代様が大きく関わった結果の解決だったんでしょう？」

——そう言われて、顧みてみれば、私つてば現役退いた身のくせに出張りすぎだな。

つつか、霊夢の知名度の向上を妨げてるのって、私が原因!?

な……なんてこった。親が子供の足を引つ張るなんて冗談じゃないぞ！

「あれですねー、霊夢さん。未だに親離れが出来てないんじゃないですかねえ？ それでは先代巫女の伝説を超えることなんて、到底不可能ですよ？」

「……うるさいわね、分かってるわよ」

ヘラヘラと笑う文に対して、霊夢は苛立った口調ながらも、大きく反論出来ないでいるようだった。

普段の遠慮のない霊夢からは想像も出来ない。

霊夢は、文の言葉で思った以上に動揺しているらしい。

どうしよ……原因たる私としては、話に割り込むことも出来ない。

「霊夢。私は——」

「はい、お母様は黙ってましようねえ」

とにかく霊夢を慰めたい私は口を開いたが、その途端、文が突然バレルロールをかまして、空中を飛び回り始めた。

いやあー!? もっとアクロバティックな動きをしたことはあるけど、他人にやられると超怖い！ やめて！

「——毒にも薬にもなりやしない親の気遣いなんて、クソの役にも立たないんですよ。貴女は、少々娘に甘すぎる。彼女が母親の背中をどれだけ遠く感じているか、あんた分かってますか？」

風を切る音が響く中で、文の囁く言葉が、私には確かに聞こえた。

「……何、母さんで遊んでんのよ？ あんたは」

「あやや、すみませんね。鬼に襲撃されてる人里まで先代様を運ぶなんて、私には非常に不本意な仕事なもんで」

「あんたのつまらない新聞よりは、立派な仕事でしょ」

「まだ言いますか！」

再び霊夢と並んで、落ち着いた飛行へと戻った文。

その腕の中で、私は先程言われたことを考えていた。

——あれは、間違いなく文の助言だったんだよな。

そういえば、霊夢は私のことどう思ってるんだろう？

あの子を育ててきたし、成長した今も、異変を介して霊夢が私を

想っていることは十分伝わっている。

私のことを、母親として慕ってくれているのは分かるのだ。

でも、それ以外の感情はあるのだろうか？

私は親として、霊夢を愛し、また立派な母親であろうと努力してきたつもりだ。

そんな私の姿を、霊夢はどんな眼で眺めていたんだろう？

『彼女が母親の背中をどれだけ遠く感じているか、あんた分かってますか？』

……分かって、ないのかなあ。

改めて、考えさせられる話だ。

文の言葉に考え込む私だったが、現状はそんなに悠長なものではなかった。

飛行による移動はやはり相当な速さで、視線の先には、もう人里が見え始めたのだ。

満月の月明かりが、人里の全貌をぼんやりと照らしている。

それ以外に明かりはない。

夜中であるから民家に光は無く、また最悪の状況と想定していた火事などの類も確認出来ない。

しかし、確かに鬼の襲撃は始まっている。

そこら中から、鬼の凶悪な気配が感じ取れる。

つまり、今はまだ最悪の一手手前程度ってことか。

そして、何より――。

「な……なんとという光景でしょう」

現地のリポーターよろしく、文が震える声で視線の先に広がる光景の感想を述べた。

人里の入り口にあたる箇所には、鬼が集まっていた。

しかも、三十以上はいる大群だ。

幻想郷を襲っているのが百の鬼で、その半数が人里を襲っているのだから、更にその中の半数以上がここに集まっていることになる。

こ、こいつら……なんだってこんな所に集まってんだ？

手分けして人里を襲えばいいのに……いや、よかないけど、普通そ

うするでしょ！

「——あいつら、きつと母さんが目的ね」

霊夢が言った。

「何か、待っているような気がする。勘だけど」

「それが、先代様ってことですか？」

「多分」

「そうか、勘か……。」

霊夢の勘って、つまり確定事項ってことじゃないっすか！

私のやる仕事、もう決まったんですか!?! あの鬼どもと戦えばいいんですか!?! やったーっ！

でも、それって死ぬってことじゃないっすか！ 最悪、勇儀を三十

以上相手にすると同じことじゃないですか！ やだーっ！

——と、そんな駄々も捏ねていられないのが現状である。

「萃香はいないな」

私は内心の動揺を押さえ込んで、冷静に萃香の気配を探っていた。少なくとも、あの鬼の集団の中にはいない。

うーむ、萃香一人とあの鬼の集団か……どっちの難易度が上かな？

私とはまた別の感性で、霊夢も萃香のことを探っているようだ。

「異変の元凶は、まだ少し先にいると思う」

「分かるのか？」

「こっちも勘だけど、でもさつきよりは確信がある」

「そうか」

霊夢は、迷いなく更に先——人里の中心へ視線を向けていた。

だったら、もうやることは決まったようなものだ。

「あの鬼達は私が相手をする。元凶は、霊夢に任せる」

「え？」

驚いたような顔をする霊夢に対して、私は顔面の筋肉を総動員して、最高に頼もしい（ように見える）笑顔を浮かべた。

「頼んだぞ」

「——分かったわ。先代」

霊夢の表情と口調が切り替わっていた。

我が娘、マジ凜々しい。

そのまま霊夢は速度を上げ、鬼達の上空を通過して、萃香の元へと向かっていく。

頑張れ、霊夢。お前がナンバーワンだ！

そして、残された私の仕事は、そんな霊夢を無事にラスボスの所まで行かせることだ。

鬼どもは、霊夢の接近に気付いた様子だった。

私のことが目的なら、霊夢には手を出さないかもしれないが、迎え撃とうとする可能性もある。

ならば、早々に行動あるのみ！

「文、付き合ってもらおうぞ?」

「運ぶだけですからね! ギリギリまで近づいて、空中で手を離しますからね! あとは勝手に何とかして下さい!」

「十分だ」

「あ、それから後日、今回の異変に関する取材お願いします!」

……ちやつかりしとる。

私は半ば呆れながらも、同時に張り詰めていた気持ちが幾らか解れていた。

さすがに、あれだけの数の鬼と戦うとなると、緊張していたようだ。

つつーか、私は他の皆と違って遠距離攻撃が不得意だから、自然と鬼相手に接近戦とか肉弾戦になるのよね。しかも、今回は多対一か。

また、命の綱渡りが始まるお……。

私一人の力では、この先生きのこることが難しい状況だ。

故に、きのこる先生——じゃねえ! 偉大なる先人達よ、今一度我に力を貸したまええー!

「鬼に気づかれました! 離します!」

文の手が離され、加速した状態で私は空中に投げ出された。

——鳥になってこい! 幸運を祈る!

私の中に宿った先人の力か、早速名台詞が聞こえた。

やべ、テンション上がってきた。



人里の入り口付近に陣取っていた鬼達の目的は一つだった。

——勇儀を倒した先代巫女と戦うこと。

ただそれだけの、純粹で、何よりも強い欲求である。

人里の中は、久方ぶりの獲物である人間達がうようよしていたが、それすらもここで待つ鬼達の興味を変えることはなかった。

有象無象の人間ではない。

ただ一人の人間の登場を、彼らは待ち望んでいたのだ。

「あれは、博麗の巫女か？」

鬼の一匹が、上空を飛んでくる少女の姿に気付いた。

しかし、すぐに隣から否定の声が上がる。

「いや、あれは地底に來た巫女とは違う」

「ああ、そうだ。似てるが別人だ」

「異変が起これば博麗の巫女が解決にやってくると聞いていたんだが」

「ありやあ、多分当代の方だな」

この場の鬼達のほとんどが、先代巫女の姿を知っていた。

地底での決闘を眼に焼き付けた者達が、この場のほとんどを占めているのだ。

あの戦いを見た。

見たからこそ、焦がれずにはいられなかったのだ。

それ以外の人間など、例えば同じ博麗の巫女であっても興味はない。

「暇潰しに、少し遊ぶとするかい？」

しかし、実際にあの戦いを見たことのない一部の者達は、そこまでこだわりを持っていなかった。

強者と戦いたいという欲求自体は共通している。

この際、同じ巫女ならば構うまい、と。そう考えた鬼が、靈夢に標的を定めようとしていた。

その時である。

「——待てー！」

別の鬼が、上空から飛んでくる、もう一人の巫女に気付いた。

「来たぞ」

いや、飛んでいるのではない。

「来やがったぞー！」

物凄い速度で、落ちている。

「来たぞー！ あの巫女が来たぞおっ!!」

「本当だ！」

「ついに来やがった！」

「間違いねえ、あの時の巫女だ！」

「あれが、勇儀の姉さんを倒しやがった人間か!？」

鬼達の間、歓喜の声が上がった。

迫り来る巫女を、溢れる喜びと共に、漲る戦意と共に、歓迎する声だった。

三十を超える鬼達が騒ぎ立てる。

人里の入り口は、鬼の襲撃を受けているその最中よりも更に凶暴な、活気と騒乱に一瞬で満ち溢れた。

その眼前へ、上空から先代巫女が飛来する。

空中で前転した先代は、両足から地面に着地した。

そのまま地面を削って大きく制動を掛け、最後の慣性を殺すように両手を地面に着ける。

丁度、鬼達の眼前で、先代は停止していた。

騒がしい声が、一瞬鳴りを潜める。

それは鬼を倒した人間の登場と、その先にある死闘の始まりに対する鬼達の緊張のように張り詰めていた。

ゆっくりと、先代は俯いていた顔を上げた。

「――待たせたな」

敵の大群を睨み据えて、先代は不敵な台詞を吐いた。

其の三十「六里霧中」

人里を、男が逃げていた。
それを追うのは鬼である。

「ま^までえく、ぐつでや^るる^う」
身の丈が、追われる男の三倍はあろうかという巨大な鬼だった。
まるで子供のような舌足らずな口調と言葉から、知性は感じられない。

腹が減ったから、目の前の人間を食べる——ただその欲求だけに支配された、本能だけの低俗な鬼だった。

しかし、その鬼と知性ある鬼の違いが、襲われる人間にとってどれほどあるだろう。

むしろ、最も分かりやすい妖怪としての原初の恐怖を、この鬼は持っていた。

だらしなく開いた口からは、腐った臭いのする唾液を垂れ流し、恐ろしく長い舌がぶら下がっている。

その鬼の左腕は、半ばから先が無かった。

肉を丸ごと失い、剥き出しの骨が覗いている。その骨さえ、手首から先が碎かれたかのように失われていた。

手負い、ではない。

男が遭遇した時から、この鬼の腕はそのままだった。

これは男が知らない——あるいは知らずにいた方が良い——ことだが。この鬼は、飢える余り自らの腕の肉を何年もの間、少しずつ食んでいたのだった。

「ま^までえくつ」

飢餓という狂気に突き動かされる鬼は、諦めるという理性も、回り込んで追い詰めるという知恵も無く、ただただ同じ言葉を繰り返して男を愚直に追い続けた。

そして、その愚直ゆえに終わることのない行為から、普通の人間が逃げ切れるはずもなかった。

男の体力に限界が訪れた。

足をもつれさせ、転ぶ。

振り返った先には、迫り来る鬼の口があった。

追い詰めた獲物の抵抗を楽しむような、悠長な思考を飢えた鬼が持ち合わせているはずもなかった。

「いだだぎまあず」

上下にびつしりと並んだ歯が、絶望に青褪める男を頭から齧り取るうと迫る。

男の悲鳴がその口の中に消えていく。寸前――。

「氷塊『グレートクラッシュャー!』」

男の眼前で、鬼の口が閉じた。

前髪だけが、ほんの僅かに噛み切られる。文字通りの間一髪だった。

鬼の口を閉ざしたのは、頭上から飛来した凄まじい質量による衝撃だった。

巨大な氷の塊が、飢えた鬼の脳天に落下したのだ。

「いいいでええええ、っ!!」

頭のダメージだけではなく、急に閉ざした口のせいで自らの舌まで噛み切り、鬼は苦悶の声を上げた。

しかし、まともな知能すらない低級の妖怪とはいえ、その種族は鬼である。

その頑強さは並ではなかった。

苦悶の声色がそのまま憤怒に染まり、頭上にある氷塊へ、力任せに拳を振り上げた。

たった一撃で、大岩に等しい重さと硬さを備えた氷が、粉々に砕け散る。

「な、なにい!? あたいの新しい必殺技がつー!」

砕かれた氷の陰から現れたのは、チルノだった。

「なん、だあ……おめ、え、じゃま、すんじゃねえ」

例えば知能が低くとも、種族の格の違いは本能で分かるらしい。

自分を邪魔したのが妖精風情に過ぎないと分かると、鬼は羽虫を払うように腕を振り回した。

当たれば、先程の水塊と同じ末路を辿るだろう攻撃を、チルノは怯むことなく回避してみせる。

能力ではほとんどの面において、目の前の低級の鬼にさえ劣っているチルノだったが、唯一すばしっこさだけは勝っていた。

「へへーん、だ！ 当たらないわよ！」

「んんん、くっ！」

「チルノ、もういいよ！ 離れて！」

じゃれ合いにも見えるが、その本質は命懸けであるチルノの戦いに、指示が飛んだ。

チルノは素直にそれに従い、素早く鬼から離れる。

距離を取ったその位置に居たのは、いつの間にか現れた橙だった。

チルノが結果的に囷となり、その隙に橙が男を抱き上げて、素早くその場を離脱したのだ。

子供のような体格の橙だが、彼女の本性は猫の妖怪であり、加えて今の彼女は八雲藍によって施された『式』の効果が発動することで普段以上の能力を得ていた。

「お、お前達は……？」

突然現れた妖精と妖怪。しかも、見た目は小さな子供である。

未だ視界に映る鬼のおぞましい容姿とのギャップもあって、助けられた男は目を白黒させていた。

「八雲藍様の命により来まし……参った！ 橙です……だ！」

「です、だ？」

「う、うるさいよ、人間！ とにかく、まだ助かってないから、油断しない！」

失態を誤魔化すように、橙は精一杯妖怪らしい『偉そうな口調』を使った。

「フツ、何も問題ないわ。あたいが、あの鬼をやつつける！」

チルノは腕を組んでふんぞり返り、自信満々に断言した。

恨めしげに睨みつける鬼の濁った瞳を、全く恐れることなく睨み返している。

その気概だけは素晴らしかった。

しかし、現実的ではない。

橙はそれを嫌というほど理解していた。

「無理だよ、勝てっこない！ 相手は鬼なんだよ！」

「あたいのお師匠は、その鬼を倒したわ！」

「だから何!?!」

「つまり、その一番弟子であるあたしもまた、鬼を倒せるということよ！」

「何その理論!?! 何処からそのワケの分からない自信が湧いてくるのよ、そのせいでこんな状況になってるのに！」

「なによ、人里の鬼を退治するのがあんたの仕事でもあるんでしょ？」

「違うよ、わたしは偵察とか補助とか……そういう小さな仕事を命じられたの！ わたしなんかの力で、鬼をどうこう出来るわけないよ！」

「情けない奴ね！」

「にゃーっ！ 妖精のくせに、何……」

チルノとの口論に躍起になっていた橙は、ふと我に返った。

「生意気、を……」

視線を戻した時、そこには自分達に向かって飛び掛る鬼の巨体が視界一面に広がっていた。

「まどめて、ぐつでやるぅ〜」

「うわあああっ！」

「にゃああああっ!?!」

「来いっ！」

橙の悲鳴と男の悲鳴が重なり、チルノが勇ましく吼える。

鬼に襲われる者が二人増えただけで、あとは先程と全く同じだった。

そして、奇しくも同じことが繰り返された。

迫り来る鬼を、今度はあらぬ方向から飛来した炎が襲ったのだ。

「——やれやれ、二番煎じになっちゃったな」

鬼の巨体を押し返し、完全に包み込んだ炎は、自然のものでは在り得なかった。

チルノ達の背後から飛来したその炎は、鳳凰の姿を形取っていたのである。

明らかに人為的な、妖術の類によって放たれたそれは、標的に当たった後も消えることなく、悶える鬼の全身を凄まじい火力で燃やし続けている。

片手に、先程放った炎の残滓を纏いながら、ぼんやりと暗闇を照らして足音が近づく。

現れたのは妹紅だった。

更に、傍らにはてゐまで控えている。

「チルノ、先に行くなって言ったでしょ？」

「でも、あたいのおかげでそいつは助かったのよ」

「……まあ、そりゃあ良かったけどさ」

「あ……あの」

「うん、何？ 橙……だっけ」

「はい。あの……助かりました」

「いいって。先走った兄弟子のせいだから」

「兄さん、腰抜かしてない？ もし、そうだったら置いてくけど」

妹紅が橙とチルノ相手に話をしている傍らで、てゐが意地悪く笑いながらも地面にへたり込んだ男に手を差し伸べていた。

その男以外、全員がこの場で偶然出会ったわけではない。

本来ならば同じ場所で夜を過ごすはずのない人妖が、如何なる巡り合わせか、今夜は行動を共にしていたのだった。

「も、妹紅さん……」

「ああ、あんたは自警団の人じゃないか」

顔を合わせた妹紅と男は、互いが顔見知りであることによろやく気付いた。

妹紅は迷いの竹林の案内人として世話になる者も多く、人里でも慧音や先代を訪ねて度々姿を現している。

男は、人里の治安を守る自警団の人間だった。

何度か顔を合わせ、挨拶を交わす程度だったが、知り合いには違いなかった。

「助けに来てくれたんですか？」

人里の現状を踏まえて尋ねる男に対し、妹紅は頷いた。

「かなり厄介なことになってるみたいね」

「はい、そこら中にさつきみたい妖怪が徘徊しています。慧音さんの話では、『鬼』と呼ばれるものだそうで」

「慧音は何処に？」

「寺子屋の近くです。多分、その鬼と戦っているはずですから、すぐに分かるはずです。どうか、加勢に行つてあげてください！」

「分かった。貴方はどうする？」

「慧音さんが、鬼の対抗手段について調べてくれました。私は、それを人里に少しでも広めなきゃいけません。このまま、行きます」

答える男の瞳には、怯えの色と、それを押しつけて強い意志の光が輝いていた。

先程まで命の危機にありながら、感嘆すべき胆力である。

自分達の住む場所の治安を、自分達の力と団結で守ることを目的とした自警団。

かつて、激動の時代にあつた人里に平穏を取り戻したのは、先代巫女一人の活躍だけではない。

それに鼓舞された人間全ての功績だった。

自警団は、その流れを組む者達の結束力によって固められている。

特別な力は無くとも、彼もまた人里の危機において共に戦う仲間であることを、妹紅は悟った。

「……分かった。気を付けて」

「まつ、そこまでビビらなくていいよ。きっと、ここから先で鬼に遭うことはないだろうから」

何故か見知らぬてゐに背中を叩かれて、戸惑いながらも、男は再び駆け出していった。

夜の闇に消える背中を不安げに眺めた後、妹紅は傍らのてゐに尋ねる。

「能力、使ったな？」

「使う使わないっていうか、人間相手だと勝手に付いちやうんだけど」

ね。

まあ、迷いの竹林で迷わず出られる可能性と、鬼に会わずに目的地まで行ける可能性の比率は、同じようなモンじゃない？　ちよつと幸運があれば行けるでしょ」

てゐには『人間を幸運にする程度の能力』が備わっていた。

その力を、先程の男に施したのだ。

もちろん、幸運とは絶対のものではないが、彼に付き添って行動出来ない妹紅にとってはとりあえず安心出来る要素だった。

鬼を見つけた場合、すぐさま駆逐するつもりである自分と共に行動するよりも安全かもしれない。

妹紅は一度だけ安堵のため息を吐くと、表情を引き締めて、男が去った方向とは正反対へ振り返った。

男が逃げてきた方向。

即ち、鬼が追ってきた方向である。

鬼を燃やし続けていた妹紅の炎が、ようやく消え始めていた。

そして、その炎が消え去った後には——無傷の鬼が、変わらぬ怒りを宿して、こちらを睨んでいた。

「ま、たじゃま、がはいっただな、ああ」

「一応、最大火力だったんだけど、表面を撫でたくらいじゃ火傷すら負わないか」

まるで岩そのものである。

蓬萊人とはいえ、炎を操れることを除けば能力は人間の範疇である妹紅にとって、荷の重い相手であった。

少なくとも、この場の誰も、鬼相手に勝る地力を持っていない。

橙は再び顔を青褪めさせていた。

「や、やっぱり鬼って普通の妖怪とは違う……!」

「仕方ないわね。妹紅に代わって、あたいがやってやるか」

「いや、もう何が『仕方ない』のか分かんない!」

自信満々に一步前へ出ようとするチルノを、橙が慌てて羽交い絞めにした。

そんな二人のやりとりを尻目に、妹紅が歩み出る。

「まあ、待ちなつて。チルノ」
無造作な歩みだった。

その剛腕を受ければ、一撃で即死するだろう鬼の攻撃の間合いに對して、さして氣負うこともなく距離を詰めていく。

酷く、リラツクスした仕草だった。

例え攻撃を受けても構わない。

そんな、捨て身にも見える。

実際に、不死身である妹紅にとって死は全く脅威ではない。殺されても、生き返ってしまうのだ。

以前の妹紅ならば、そういった意図でこのような動きをしたかもしれない。

しかし、今の妹紅はかつての——永夜異変の前——とは、確実に違つていた。

この無造作な歩みは、無謀とは全く正反對に位置するものである。

「偉大な兄弟子の新必殺技は見せてもらったよ。次は、私の番だ」
視線は鬼から離さず、口調は氣楽にチルノへと向けていた。

その間も、歩みは止めていない。

鬼の間合いに近づいていく。

あと、三步で攻撃の間合いに入る。

あと、二歩。

あと——。

「じね、えええ、!!」

鬼が動いた。

自ら踏み込み、左腕を突き出す。

剥き出しになった骨は砕けた先端が尖り、丁度良い凶器となつていく。

その攻撃を、妹紅は完全に読んでいた。

正確には、相手の呼吸を測つていたのである。

自分自身が素早く動くだけではなく、相手の動きに合わせた的確さも備える——格闘の玄人の動きだった。

鬼の腕が体に当たる数瞬前から、既に妹紅は動き出していた。

身を屈め、その際に曲げた膝のバネを使って、一気に相手の懐へ潜り込む。

もはや悠長とも言える時間差で、鬼の剛腕が空しく、妹紅のいた場所を空振っていた。

鬼の間合いを飛び越え、逆に自身の攻撃の間合いに目標を捉えている。

先手を取ったのは鬼の方だったが、意表を突いたのは妹紅だった。眼前にある鬼の胴体。

文字通り岩のように強靱な腹筋目掛けて、妹紅は右の突きを繰り出していた。

その拳には、鋭さだけではなく、真つ赤な炎が伴っている。

突き出す拳のあまりの速さに摩擦で点いたのかと錯覚するような炎の正拳突きが、鬼の腹に直撃した。

爆音が鳴り響いた。

比喩ではない。肉が肉を打つ打撃音ではなく、火薬の炸裂するような音と衝撃が、鬼の胴体を突き抜けて、背中から飛び出したのだ。

「……あ、で？」

知性の足りない鬼は、自らの体に起こった出来事を理解出来ず、不思議そうに視線を下に落としたまま固まっていた。

妹紅が、右腕を突き出した格好のまま、そこに留まっている。

改めて殺してやろう、と。

腕を動かそうとして、ようやく気付いた。

自分の腹に大きな穴が空き、そこから焦げ臭い煙がブスブスと立ち昇っていることに。

「あ、……でえ……う？」

鬼は、自分の腹に空いた穴を追って、背中も見てみた。

腹の穴は妹紅の拳と同じような大きさだったが、胴体を貫通した背中の中の穴は、その倍以上に大きく空いている。

妹紅の拳から放たれ、穴を突き抜けて、飛び出していったらしい。鳳凰を象った炎の塊が夜空を優雅に舞い、そして消えていくまでを、鬼は呆然と眺めていた。

「あ……っ」

最期にその一言だけを洩らし、ようやく自分の死を理解したかのように、音を立てて仰向けに倒れた。

鬼が完全に絶命したのを確認して、妹紅は構えを解いた。鮮やかなまでの一撃必殺である。

「……すごい」

橙はありきたりだが、それしか言えなかった。

洗練された身のこなしだった。

何よりも、鬼の肉体を貫いた一撃が凄まじかった。

ただ、炎を纏って殴っただけの単純な威力ではない。

「ぬう、あれは『鳳翼天翔』！」

「えっ、何それ!? 知っているの、てる！」

てるが芝居掛かった口調で呻くのを、チルノが純粹に問い掛けた。

「先代巫女から授けられた『穿心』の精神によつて、己の持つ力を極限まで一点に集中することが出来る。」

この力の流れを、炎の妖術に応用することで、本来なら拡散する熱量を収束し、一方向へ噴射して放つことが可能になるという。更に、これを打撃と組み合わせることで生み出される貫通力と破壊力はこの通りよ。この技の名こそが『鳳翼天翔』よ！」

「よく分かんないけど、すごい！」

「——つて、けーねが言った」

「けーね、すごい！」

妹紅の修行を見ていた慧音の受け売りを堂々と解説するてるに対して、素直に感動するチルノ。

その反応を受けて、まんざらでもない笑みを浮かべて戻ってくる妹紅。

それらを眺めていた橙は、一気に気持ち冷めていった。驚いたし、すごいとも思うのだが——『なんだかなあ』という気持ちである。

「——『鳳翼天翔』つて、同じ名前のスペルカード持ってなかったかしら? 妹紅」

チルノでもてるでも、橙でもない。五人目の声が聞こえた途端、妹紅は笑みを消して、不機嫌そうな表情になった。

先程まで、隠れていた者の声である。

戦いが終わり、脅威の去った場に、暗闇からゆっくりと現れたのは、本来ならば永遠亭にいるはずの輝夜だった。

「高みの見物ね、輝夜」

「あら、私はそっちの子に隠れているよう、言われたのよ」

「そ、そうです！　輝夜様は、重要人物ですから！」

橙は緊張した様子で答えた。

「まあ、何処に鬼が居るか分からない以上、一人で残されるのが安全かは知らないけれどね」

「あつ……す、すみません！」

恐縮して頭を下げる橙を眺める輝夜は、ころころと柔らかく笑っていた。

単なる冗談である。

しかし、真面目な橙は、輝夜のことを自らの主人や更にその主人である八雲紫と同等に捉えているらしかった。

輝夜に対してだけ、異常なまでの緊張感が滲み出ている。

二人の様子を——正確には輝夜の様子を——妹紅は、面白く無さそうに眺めていた。

「どうせ死にはしないんだから、ずっと放っておけばいいのよ。いや、永遠亭から連れ出す必要も無かったわ」

「酷いわね。あのままだと、私は永遠亭を襲った鬼の群れに食われていたかもしれないのよ」

「ああ、そりゃあいい気味だ。長い人生でも貴重な経験でしょうよ」

「別に、貴女に守ってもらいたくて、ついて来たわけじゃないわ」

妹紅と輝夜の仲は、あの異変以来あまり変わっていない。

妹紅が感情的に輝夜を嫌い、輝夜は無感情に妹紅の敵意を無視する

——そんな関係だった。

二人が共に行動している理由は、チルノの為である。

現在の人里と同じように、永琳の不在を狙ったかのように永遠亭へ

鬼が襲来した際、輝夜を助け出したのは妹紅と合流したチルノだった。

慧音に助力する為に人里へ向おうとしていた妹紅に、輝夜の同行を提案したのもチルノである。

そして、二人にその案を了承させたのもまたチルノだった。

妹紅にとつて、チルノは多少の無茶は聞いてやりたい大切な仲間である。

輝夜は異変の後でチルノと知り合っている。誘いを断る理由も特に無く、同行することにした。ついでに言えば、妹紅に対する悪意があつたわけでもない。

その道中で、てると橙にも出会ったのである。

「そうそう、妹紅には荷が重いつてやつよ。あたいが鬼を倒しながら、輝夜も守るわ！」

「嬉しいわ」

チルノの言葉に、輝夜は本心から微笑んだ。

目の前の妖精が、身の丈に合わない願望を口走っているのは分かっている。

しかし、それを嘲るつもりは毛頭ない。

だからこそ『頼もしい』とは言わずに『嬉しい』と答えたのだ。

輝夜が本気で戦おうと思えば、発揮される能力は修行を経た妹紅さえ凌駕するだろう。

不死の肉体まで備えた輝夜を守る存在は、本来ならば必要ないのだ。

そのことを正確に理解しているのは、この場では妹紅とてみだけだった。

「本当に輝夜様を守るつもりなら、もう無謀なことはやめなさいよ。この人に何かあつたら、藍様や紫様にどんなお叱りを受けるか……！」

「橙ってば、文句ばっかりね。逃げ回っても仕方ないわ。今はまさに『ケツに火がついた状態』なのよ」

「うーむ、意味分かって言ってるのか、勢いで言ってるのか……」

橙とチルノのやりとりを、てるが他人事のように眺めていた。

それぞれの容姿もあり、三人が集まるとまるで子供同士のやりとりに見える。

更にそれを眺める位置にいる妹紅と輝夜は、お互いの言い合いが急に馬鹿らしく感じられた。

示し合わせたように、同時に鼻から抜けるような笑みを洩らす。

「……何だっけ?」

「何が?」

「さっきの質問」

「ああ、あなたのスペカに同じ名前の技がなかったかって話」

「多分、偶然なんだろうけどさ。さっきの技を編み出した時、それを見てもらった師匠が技の名前を付けてくれたのよ」

「師匠……先代巫女ね」

「そう。炎の拳を使った有名な技があって、それが『鳳翼天翔』って言うらしいのよ」

「ふうん」

質問の答えに対して、輝夜はさして興味を見せずに、曖昧に頷いた。

返答自体よりも、そこに含まれた『師匠』から連想した『先代巫女』について、気が向いている。

妹紅は、そんな輝夜の横顔を見つめた。

彼女が先代に向ける感情は複雑である。

少なくとも好意的ではない、と妹紅も分かっている。

異変以来、輝夜は先代と会っていない。

つまり、妹紅を中心に先代へ多くの罵倒と否定の言葉をぶつけて争った時のまま、輝夜の心は止まっているはずだった。

「格好つけた名前ね」

「素直に格好良いって言えよ」

内心を誤魔化すように鼻で笑う輝夜に対して、妹紅もまた応じるように口を尖らせてみせた。

「その先代、ここに来ているのかしら」

輝夜の問いかけは、誰に対するものでもない、独白に近かった。

人里の一大事に、博麗の巫女が動かないことは在り得ない。

今夜は博麗神社で、その巫女二人を含めた宴会が行われていることは輝夜も妹紅も知っている。

しかし、人里の陥った事態が知られているのなら、のんきに宴会が続いているはずもなかった。

妹紅が慧音や人里の住人の身を案じながらも、焦りを抱いていない理由がそこにあった。

助けは、必ず来る。

しかも、とびつきり頼りになる助けが――。

そう、改めて妹紅が考えた。

その時である。

「――あー！」

声を上げたのは、橙だった。

しかし、その時彼女だけでなく、全員が異変を察知していた。

音が聞こえたのである。

いや、『音』というのが最も適切な表現だっただけであつて、本当は音など鳴っていないかつたのかもしれない。

人里の遠く離れた場所――方向で言えば、人里の入り口付近から、何かの軋むような音が、あるいはもつと曖昧な表現をするなら『違和感』が全員の感性に走つたのだった。

その感覚を、最も正確に把握していたのが橙だった。

「結界ですー！」

橙は、妹紅達に起こつた出来事を説明するように告げた。

「これ、多分紫様の結界です！ 紫様の結界が、あつちの方で展開されたみたいですよ！」

橙が指差す先は、違和感の感じられた人里の入り口の方向だった。

全員が、顔を見合わせる。

橙は八雲紫の結界だと説明したが、不思議と全員の結論はまた違った内容で一致していた。

「――お師匠だ！」

「ま、そーだろーねー！」

断言するチルノを、てるが苦笑するように肯定した。

そのまま視線で頭上を見るように促す。

全員が釣られるように見上げてみれば、夜空を飛んでいく霊夢の姿が見えた。

博麗の巫女が、人里の異変を解決するべくやって来たのだ。

ならば、先程の出来事に誰が関わっているのか——もはや疑いようもなかった。

「慧音の所へ、行くぞう」

元よりそのつもりだったが、更なる決意を固めた表情を浮かべて、妹紅は言った。

——人里を襲った鬼との戦い。

——今夜、決着をつける。

そう決意した瞬間だった。

チルノ、てると順番に顔を見つめ、意思が同じであることを確認する。

戸惑った表情の橙を説得するように一際強く見据え、次に視線を移したところで——輝夜がいなくなっていることに気付いた。

「……あれ？ あれーっ、輝夜様あ!」

重要人物を見失ったことで、橙が錯乱気味に声を上げた。

ほんの少し、眼を離れた間の出来事である。

周囲を見回してみても、輝夜の姿はおろか、誰かが立ち去る音や気配さえ感じ取れない。

誰にも気付かれることなく、一瞬で、後を追うことも出来ない程遠くまで離れていってしまったのだ。

信じられないことである。

しかし、妹紅とてゐは、輝夜がそれを可能にする能力を持っていることを知っていた。

彼女が能力を使った場合、例え目の前に居たとしても見失ってしまうだろう。

——問題は、輝夜が何処へ向かったのかということである。

「どいどいどうしよう!?! か、輝夜様を探さなきゃいけないのかな!?!」

で、でもあの人と会ったのは偶然だったし、わたしの本来の仕事じゃないけど、でも……!」

妹紅とてゐるが一步先んじた考察をしている横で、橙は直面した問題を処理しかねていた。

何を優先すべきか。

次に、何をすればいいのか。

未熟な彼女には分からないのだった。

「ああつ、藍様の命令が無いと何していいか分からないよお!」

右往左往する橙を落ち着かせるように、力強く肩を叩く手があった。

チルノだった。

「分からなかったら人に聞く!」

「そ、そうか! チルノは、どうすればいいと思う!?!」

迷った末に、橙は何故かチルノに尋ねていた。

勢いと自信だけは満ち溢れているチルノの雰囲気、思わず吞まれたのだ。

「あたについてこい!」

「分かった!」

「よし、今からあんたはあたいの子分よ!」

「分かった!」

橙は半分混乱したまま、駆け出したチルノを追っていった。

自分の言動をよく理解出来ていないらしい。

一通り突っ走った後で、冷静になってからまた一騒動あるだろうことは容易に想像出来る。

二人の後ろ姿を眺めながら、てゐは小さくため息を吐いた。

「……とりあえず、あれを追おうか。妹紅」

「そうね」

「お姫様は放っておいても大丈夫だと思うよ。ただの気まぐれって可能性も十分あるし」

「別に、あいつの心配はしてないわ。あいつの行動が心配なのよ」
「まあね」

妹紅の懸念に同意するように、てゐは眩いた。



——場所を人里の入り口に移し、時は少し遡る。

先代と鬼達は、正面から睨み合っていた。

互いに動こうとはしない。

様子を伺っているようにも、自らの放つ気迫が相手の隙を作るまで根競べをしているようにも見える。

戦いにおいて、こういった機微は当たり前のように存在する。

ただ一つ、この場で異常だったのは、人間一人が三十を超える鬼の群れと拮抗している点だった。

どういった構えを取ることもなく、仁王立ちする先代相手に、鬼達はどう攻めるべきか二の足を踏んでいたのである。

「お……おい、どうする?」

「どうするって……何が?」

集団の最前列に立つ鬼達は、皆一様に口を開かない。

そういった行動の隙を見せた途端に、目の前の相手が凄まじい勢いで攻め込んでくるのではないか、といった緊張が消えないのだ。

その後列の者達が、可能な限り意識を先代に向けたまま、囁き合っていた。

「あいつと戦うんだろうが」

「何、当たり前前のことを言ってるやがる」

「じゃあ、何で誰も掛からねえんだ?」

「馬鹿こけ、不用意に近づけるか!」

「そうだ、あいつが勇儀と戦ったところを見てねえのか?」

鬼達の大半は、地底で行われた先代と勇儀の死闘を見て、そこから『自分も全力である人間と戦いたい』と思った者達である。

そういった強い欲求がある。

そして、だからこそ目の前の人間が持つ恐るべき力をよく理解していた。

「勇儀の姉さんが食らった最初の一撃。あれを受けたら、俺じゃあ耐える自信がねえぞっ」

捉えることの出来ない、初撃にして必殺の一撃である。

鬼の中でも際立った頑強さを持つ勇儀の顔を吹き飛ばし、血を吐かせたあの攻撃は、見た者全ての眼に焼き付いている。

無造作に佇む先代の姿が、既にあの攻撃の為の構えにしか見えないのだ。

鬼達は、敗北も死も恐れていない。

しかし、何一つ行動を起こせぬまま封殺されるのは嫌だった。

そんな蹴飛ばされる路傍の石のような終わり方は、納得出来なかった。

だからこそ、誰も先代に襲い掛かる最初の一人になりたがらなかったのである。

「どうする、同時に何人かで掛かるか？」

「人間相手に、それは卑怯じゃないか？」

「お前、まだそんな自惚れたこと言ってるのか！」

「どつちにしろ、最初の奴らが貧乏くじなのは変わりねえだろ。俺は嫌だぞ」

「俺だって嫌だ。あいつと全力で戦って、徹底的にやられてから負けるならいい」

「そんなの、俺だってそうだ！」

「いい加減にしろ、話が進まねえだろ！」

「お前こそ、いい加減にしろっ！」

拳句の果てに、口論にまで及ぶ始末である。

背後の騒ぎを、前列の鬼達は緊張を維持しながらも、同時に呆れていた。

「——では、わしが行こう」

それまで黙っていた鬼の一匹が、集団の中から一步步出てきた。その場の鬼達の中でも古参で、老練な鬼である。

浅慮とも取れる判断に、周囲の鬼達は訝しげな表情を浮かべた。

「……いいのかい？」

「そうだぞ。折角の特上の喧嘩が、一発で終わっちゃうぞ」

老練な鬼は、ニヤリと笑った。

「確かに、一発で終わるかもしれない。しかし、その一発はあの星熊勇儀を吹き飛ばした拳ぞ？」

その言葉に、周囲の鬼達は『むう』と呻いた。

言わんとしていることが、何となく分かったのである。

「鬼の四天王を殴り飛ばし、一度は勝負の決着をつけてしまった拳じゃ。様子見の攻撃などでは断じてない。まさに一撃必殺を体現した技よ。」

最初の一步を、決死の覚悟で踏み出すに相応しい。堪らぬ。わしはもう、ここで命を捨てるぞ。あの一撃、耐え切れれば儲けものよ。いや、同じく耐えた勇儀と同等であると、死に際まで誇ってやるわ！」
謳うように語るその鬼の自論に、周りの者達はいつの間にか息を呑んで聞き入ってた。

誰とも無く、お互いの様子を眼で探る。

それは先程までのような押し付け合いではなく、伺うような視線だった。

「では、ゆくか」

老練な鬼は、前列の者達を押しつけて、一步前に出た。

今、先代と一番近い位置へ踏み込んだのである。

それが切欠となった。

「――一番槍、頂きー」

「ぬあ、貴様!?!」

飛び越えるように、背後から別の鬼が飛び出していた。

「待て、俺が先だ!」

「何い!?!」

「うおおおおおっ! 最初の相手は俺だあ、先代巫女!」

「先代! 俺だ、俺を狙え!」

「いや、俺だ!」

「お、おい! 貴様ら、ずるいぞ! わしが先に言ったんじゃ!!」
堰を切るように、鬼達が次々と動き出した。

二の足を踏んでいたのが嘘のように、前列の者も加わって一斉に、雪崩のように先代へと襲い掛かる。

当然のように先代は迎撃した。

当然のように鬼が吹き飛んでいた。

眼に見えない。

拳が風を切る音も聞こえない。

あえて言うのならば、それらは全て攻撃が当たった後についてくる。

そういつた一撃だった。

拳大とはとても思えないような巨大な衝撃波を食らって、先頭を走っていた鬼の一匹が背後の仲間を巻き添えにしながら吹っ飛んでいた。

「来たあ！」

「死んだか!？」

「二発目は直ぐにばうぐえッ!!？」

攻撃の間隙を狙おうとした者が、次の瞬間吹き飛ばされていた。

同じように何人かを巻き添えにして後方へ消えていく。

——連続で、ここまで速く打てるのか!？」

——片手で一発。左右で二発まで連発出来るのか!？」

——あるいは、また別の技か!？」

鬼達は各々が様々に推測し、そして同じ結論に達した。

——無意味だ。

——何も考えず、ぶつかれ!

鬼達は、一瞬も躊躇わずにそれを実行した。

「けええええっ!」

奇声を上げて、最初の鬼が先代に攻撃を放った。

何の捻りもない、拳による打撃である。

しかし、それは人間にとって一撃必殺の領域にあった。

無防備であっても、万全の防御であっても、受けることは即死を意味する。

先代はステップして、それをかわした。

息を継ぐ間もなく、二匹目の鬼が横合いから襲い掛かる。こちらは爪を使った攻撃だった。

大した違いはない。受ければ、結果は同じだ。

先代は身を屈めて、それをかわした。

体格差が、ここにきて先代の有利に働いていた。

小さな標的に対して、鬼の巨躯は集団で戦う際に邪魔になる。

二匹の鬼の体の隙間を通すように、三匹目の鬼が突きを繰り出した。

自然と制限される軌道を読み切っていた先代は、その一撃を撫でるように手で受け流した。

——激流を制するは静水。

かつて、勇儀との戦いでも基本となった、強大な攻撃力への対抗策である。

先代の動きは、あの時よりも更に洗練されていた。

「当たらん！」

「やかましい、どけ！」

「お前こそ——！」

チームワークなどというものは発想の時点で鬼達には存在せず、悠長に言い争おうとした瞬間に、先代の反撃が三匹を吹き飛ばしていた。

またも、他の鬼を巻き添えにして盛大に倒れ込む。

ここに来て、ようやく鬼は自分達の無計画な雪崩攻撃の失敗を悟った。

多対一の状況を、完全に利用されている。

「おい、一旦距離を取れ！」

「うるせえ、指図すんな！」

「次は俺だあ!!」

自制するなどという行為は、血気盛んな鬼には土台無理な話だった。

全く反省を活かさず、更に別の鬼が先代へ襲い掛かる。その時であった。

先代自身が迎え撃つまでもなく、あらぬ方向からの攻撃がその鬼を襲っていた。

「――光符『華光玉』！」
弾幕である。

正確には、収束した弾幕が光弾となつて、当たった瞬間に炸裂し、周囲の鬼を一掃していた。

「美鈴か！」

戦闘が始まって以来、初めて先代は動揺から口走っていた。

彼女を含む、誰も予想していなかった横槍である。

攻撃から遅れて、上空から飛来した美鈴が先代の壁になるように、前に降り立った。

「紅魔館の門番、紅美鈴！ 助太刀に参上した！」

美鈴は拳法の構えを取つて、堂々と宣言した。

それを受け、苛立ちと共に立ち上がったのは、先程美鈴の弾幕を受けた鬼の一匹である。

直撃を受けた箇所から煙を上げているが、ダメージは全く受けた様子がない。

「てめえ……」

「卑怯とは言つまい」

「邪魔だと言つとるんじゃない！ この雑魚があ!!」

鬼は頭から突進した。

頭頂部から伸びる一本角が、突進によつて巨大な槍のように美鈴へ襲い掛かる。

美鈴は尖つた角を避け、両手で頭を押さえ込むようにして、その突進を受け止めた。

一瞬も止まることはなかった。

受け止めた美鈴の体ごと、鬼は前へと突き進んだのである。

「ぐあ……っ!!」

圧倒的なパワーに、美鈴は呻いた。

力勝負では全く対抗出来ない。

しかし、この密着した状態では、もはや技の介入できる隙も無い。

美鈴は己の失策を悟った。

必死で足を踏ん張りながら、背後にいる先代のことを思い出す。

「せ、先代様、避けてくださいー！」

「はっはあ、何が助太刀じゃあー！ そのまま盾になって死ねい!!」

美鈴の体は、鬼を隠すように覆い被さってしまっている。

先代が迎撃の為に攻撃すれば、それはまず美鈴に当たることになるのだ。

美鈴は、自らの失敗に軋むほど歯を食い縛った。

自分ごと、この鬼を倒してしまってくれ——そう心の底から思った。

先代は、その突進を横にかわした。

かわす動作の中で、流れるように右足を振り上げていた。

天を突くような角度である。

「かああっー！」

そして、目の前を美鈴が通り過ぎ、次に鬼の体を通る瞬間、裂帛の気合いと共に右足を振り下ろしていた。

渾身の力を込めた踵落としだった。

瞬発的な筋力と足の先端に集中させた霊力が合わさり、絶妙なタイミングで狙った先は、突進の体勢のせいで曝け出された鬼の延髄である。

斧のような一撃が、標的へ正確無比に振り下ろされる。

次の瞬間、鬼の首は『切断』されていた。

頭を抱えていた美鈴がバランスを崩して地面に転がり、その頭を失った体の方は、幾らか迷走した後でようやく力尽きて倒れた。

「ぬう……っっ」

何匹かの鬼が、同じような呻き声を洩らした。

仲間を屠った鮮烈な一撃を見て、ようやく頭を冷やしたらしい。

誰が指示するわけでもなく、先代と距離を取って、再び様子を伺う体勢に入っている。

しかし、再びその拮抗が破られるのは時間の問題だった。

戦いは、既に始まってしまったのだ。

「……先代様」

絶命した鬼の頭を持ったまま、美鈴は沈んだ声で呟いた。助太刀などと銘打っておきながら、結果はこの有様である。足手まとい以外の何者でもなかった。

——やはり。

ここに来る前から、薄々と感じていたものが明確な形を持って、美鈴の心に押し掛かってくる。

——やはり、自分は『そう』なのか。

美鈴は、自らの心から眼を逸らすように、あえてその想いを曖昧に捉えていた。

どんな言葉で表現しても、結局意味するところは一緒だ。

つまり、先代にとって自分は——。

「何故来た？」

先代は訊いた。

ただ純粹に疑問に思ったことである。

しかし、美鈴にとってそれは自分の無力を責めるものにはか聞こえなかった。

「助けが……必要だと、思いました」

「何故必要だと思った？」

——思いついたか。

そんな言葉が聞こえたのは、確実に錯覚だと分かっていた。

分かっている、美鈴は締め付けられるような胸の苦しみを感じていた。

助けとは何だ？

それは、助けとなれるだけの力があって、初めて成立するものだ。

それが無い者を『足手まとい』と言うのだ。

今の自分が、まさにそうではないか。

「……いえ、違います。私の助けなど必要ないと、分かっていました。貴女の助けになどなれるはずがない、と」

美鈴は血を吐くように答えた。

自らの無力を告白することは、耐え難い程辛かった。

それはプライドや意地などというものではない。

ただ、無念だった。

先代にとって自らが一角の存在になれない現実の厳しさが、辛かったのだ。

「だけど、せめて——貴女を見ていたかった」

美鈴は震えながら、泣いた。

「誰も見ることもない貴女の戦いを、私だけは絶対に見逃したくなかった」

先代は鬼達から眼を離し、美鈴を見下ろした。

「貴女と対等でいたい、などと。不相応な、おこがましい話であることは分かっています。」

「だけど、せめてそう思い続けることだけは、止めたくなかった。貴女と同じものを、同じ視点で見たいと、いつも思っていました」

「かつて、先代と対峙した時に、美鈴は喜びを感じていた。その偉大な背を見ているよりも、正面から向き合うことを望んでいた。」

先代巫女が自分よりも格上の存在であると分かっている。

それを自覚し、だからこそ敬うのも当然である。

しかし、そこに甘んじ続けることだけは、常に拒否してきたのだ。「貴女と同じ場所に居たかった、其処を目指し続けていたかった……だから、私はここへ来ましたっ」

美鈴の告白は、同時に嘆きでもあった。

「意志に力が見合わなければ、どれ程強く望んでも叶えられないことはない。」

それを思い知ったのだ。

ここに自分が居ることは、先代にとってマイナスにしかない——

「——美鈴」

「項垂れる美鈴から視線を外し、それを再び鬼達に向けながら、先代は言った。」

「立て」

「……え？」

呆けたような表情で顔を上げた美鈴は、先代の横顔を見つめた。普段と何も変わらない、常在戦場の精神を体現したような引き締まった表情が、そこにあつた。

「これから結界を展開する。説明は聞いていただろうが、これを展開すれば鬼と共に空間へ閉じ込められることになる。逃げ場は無いぞ」

先代は紫から受け取った陰陽玉を取り出して、手の上に浮き上がり、淡い光を放ち始める。

その光に紛れ込むように、玉の輪郭がおぼろ気に見え始めていた。結界が発動する前兆だった。

「この場を去るか、残るか。今、ここで決めろ」

「……いいんですか？」

問われるならば、もう既に答えは決まっている。

しかし、美鈴は何うように見上げた。

「私が貴女と一緒に戦っても、構わないんですか？」

「構わない。が——」

先代は再び振り返った。

「——ついてこれるか？」

その顔には、美鈴がこれまで見たことのない、挑発的な笑みが浮かんでいた。

向けられた偉大な背中が、何よりも雄弁に語りかけている。

その笑みと言葉が自分への鼓舞であると理解した時、美鈴の体の震えは意味を変えていた。

情けなく歪んでいた口元を釣り上げ、涙を拭い去る。

美鈴は立ち上がった。

それまでの弱りきった様子を吹き飛ばすような力強さが、両足に宿っていた。

「ついていきますっ！」

美鈴は震えていた。

それは武者震いだった。

美鈴は笑っていた。

それは歓喜から来るものだった。全身には漲るほどの力と、闘志が蘇っていた。

「——と、いうことになった。二人掛かりで行かせてもらう」

黙って様子を伺っていた鬼達に向けて、先代は挑戦的な笑みを貼り付けたまま、不敵に告げた。

手を離れた陰陽玉が、頭上高く昇っていく。

立ち上がった美鈴は、気合いを入れ直すように、右の拳で左の手のひらを叩いた。

「まさか、卑怯とは言えないね?」

美鈴の台詞を真似るように、先代が言った。

次の瞬間、頭上の陰陽玉が粉々に砕け散って、そこを基点に展開された結界が全員を異空間へと隔離していた。

◇

——美鈴、お前が自分を信じられないのなら！ 私を信じろ！ お前を信じる私を信じろッ！

こっちの台詞の方が良いかなーと思ったけど、キャラじゃないので別の偉大な先人をあやかることにした。

元々、饒舌に誰かを励ませるほど口は回らないしね。

背中で語ることにしたのだ。

……それが美鈴にちゃんと通じてるかは分からんけど。

某弓兵さんは物凄い雄弁な背中だったんだけどね。

しかし、美鈴は自分を過小評価してるみたいだったけど、正直援軍は非常に助かる気分だ。

まあ、最初の交戦では私一人で上手く捌けたし、逆に美鈴を助ける結果になったが、これが長期戦となると後半どうなるか分からない。なんつーか、改めて思ったけど敵多すぎ。

あと、タフすぎ。

現段階での状況だが、敵の撃破数がたったの一体なのである。

最初にかました百式観音を受けた鬼は、全員生きていた。巻き添えを食らった奴らはともかく、直撃を受けた奴まで立ち上がってるってどういうことなの。

地底で勇儀にかました奴と同じ——いや、あれから修行を更に重ねたことを想定すれば、多少は威力も上がっているはずの攻撃を、しっかりと耐え抜いている。

もちろん、無傷ではない。

二本の角の内的一本が折れてたり、頭がひしゃげて片目が潰れてたりしている。

しかし、それでも立ち上がり、しかも戦闘を続ける気満々だった。

防御力と耐久力が半端無い上に、数の上でも圧倒的で、しかも全員がもれなく気力MAXと来ている。

……どー捌きやいいんだ、この集団。

とりあえず、先ほどは『同時に掛かれる相手はせいぜい四人。四対一を何回も繰り返せば、百人と喧嘩しても勝てる』という刃牙的な理論を応用して、上手く数の不利を逆手に取ることが出来た。

しかし、どう理屈を捻ったって、数の多い方が有利なのは揺るがない。

こっちは一撃で即死か、もしくは重傷。重傷の場合は、もれなく他の奴らから畳み掛けられてやっぱり即死。あと、長引いた場合は体力が尽きて、やっぱり死ぬ。

私だって人間の範疇の体力しかない上に、鬼に通じる攻撃となるとそれこそ力を振り絞らなければならぬのだ。

なんや、この無理ゲー！

能力の劣る人間の方がハンデ背負わされるって、どういうことやねん！

思わず、ツツコミたくなる。

誰に——って、言われると、誰にも何処にも文句言えないんだけどね。

この追い詰められた状況で、助っ人は正直嬉しい。

「まさか、卑怯とは言えないね？」

私は笑いながら言った。もちろん、虚勢である。

あと、本当に『卑怯』とか言われても聞く耳持たんし。逆にこつちが言いたいわ。

そうして結界が展開され、私と美鈴は鬼どもと一緒に異空間へと閉じ込められた。

その空間だが、一見すると周囲には何の変化もない。

人里の建物はそのままだ。何も無い空間に放り出されるとか、アニメとかの演出っぽく周囲の色が変わるとか予想してたが、本当に何の変化もなかった。

ただ、私の感じていた人の気配だけが全て消えていた。

確かに、この結界の性質は『私以外の人間を弾き、妖怪と閉じ込める』ものらしい。

多分、ここで周りの建物を壊しても、結界の外には何の影響もない、とかそんなのだろう。

へへっ……これで思う存分、暴れられるぜ！

なーんて、闘争心が湧き上がるなんてことはもちろんない。

私の場合、戦いはいつも余裕も油断も挟めない真剣なものなのだ。

「何だ、この結界は!?!」

「ふうむ。急に、周りの人間の臭いが消えおつたのう」

「なるほど。つまり、この空間はその為のものか」

「いいなあ。とことんやろうってことだな!」

「思う存分、暴れられるぜ!」

むしろ、鬼の方が喜んでいた。

……すまねえ、紫。この結界の効果は私の為に用意してくれたものなのに、一瞬だけ後悔しちまったよ。

いや、確かに周囲を巻き込まないっていうのは私としてもありがたいんだけどね。でも、この戦闘狂どもと一緒に閉じ込められて、戦いが終わるまで解放されないって悪夢だわ。泣きそう。

しかも、たった今気付いたのだが、泣ける要素が更に一つ。

——この空間では『黄金の回転』が使えないっぽい。

よく考えたら、この結界の中には『黄金長方形』を秘めた生命って

無いんだよね。周りは美鈴も含めて全員妖怪だし。

あと、この空間に存在する物は自然の物とは違うのか、やっぱり『黄金長方形』を見つけれない。

つまり、回転を使ったチートブーストは厳禁ということ。先代巫女です。

まあ、未だにあの暴走染みた力は使いこなせる自信が無いのだが……切り札が一つ減ってしまった。

ごめん、美鈴。本当にお世辞抜きで頼りにさせてください。

「さあ、喧嘩の続きをやるうぜえ!!」

「あの赤毛の妖怪にも気をつける!」

「折角の決闘に無粋な奴だ、蹴散らしてやるわ!」

「鬼の戦いに、何処までついてこれるかのう?」

「くそっ……頭が半分潰れちまった! 上手く立てねえ……っ!」

「おう、怪我人は下がとけや」

「馬鹿言うな、俺はもう決めたんだ! ここで死んだるわ!」

「逝つとけ、逝つとけ! すぐに後を追ってやらあ!」

マジで寒気のする、鬼どもの会話だった。

あれだけ強くてしぶとい癖に、奴らは既に捨て身の覚悟まで固めてしまっているらしい。

決死の覚悟の強さは、実践している私が一番よく知っている。

本当に、こりやあ……酷い戦いになりますよ。

私は内心で顔を引き攣らせていた。

それが実際の顔面に反映されないのが、良いことなのか悪いことなのか、毎度のことながら悩んでしまう。

とりあえず、私は構えた。

ちなみにこの構え——実は特に意味はない。

記憶にある格闘漫画の先人に倣って取っているだけである。カッコいと思う奴をその時の気分でやっているのだ。戦意向上効果は抜群だからね。

あと、お前は仁王立ちが百式観音の構えみたいに思っているようだが、別に祈る動作が出来ればどんな体勢からでも繰り出せる!

「美鈴、背水の陣だ！」

ウオオオーッ！ 私は一回殴られただけで死ぬぞー！

「はいっ！……ここで命を捨てます！」

肩を並べた美鈴が、覚悟をもって応えてくれた。

頼もしいな。

頼もしい、が。そこは『私達二人で「陣」なのか？』って言って欲しかった。元ネタ的に。



空を飛んでいる。

霊夢にとつて、それは当たり前だった。

何か特別な技術や意識を持って行う動作ではない。

地面を踏み締めて歩くように、空中に体を預けて行きたい所へ行けるのだ。

踏み出した足が地面の感触を疑わないように、霊夢にとつて空を飛ぶことは疑いようのない当たり前のことだった。

自分が空から落ちる不安なんて、万が一にも考えない。

——ただ、全く逆の不安ならば時折感じる。

霊夢は上空から人里を見下ろした。

母のように気配を感じることは出来ないが、それでも家々の間に満ちた夜の闇の中に鬼が潜んでいることは分かった。

そして、その鬼と戦う者達の存在も。

皆、この下で戦っている。

その中には、母もいるのだ。

霊夢はそれを空から見下ろしていた。

——不安。それを感じるの、まさに『今』のような時だった。

人里の各所で起こっている争いを感知しながら、それでも霊夢は自身の為すべき事を見失わなかった。

霊夢は夜空を飛び続け、やがて人里の中央まで辿り着いた。

そこは大きな広場になっている。

幻想郷を守護する龍神の石像が置かれ、特に目立った施設は無い開けた場所だが、日中は多くの人が行き交うのだ。

そこが、今は炎によって暗闇から照らし出されていた。

四方にばら撒かれた炎は、薪や油で燃えているものではない。ただの『炎の塊』としか表現出来ないものである。

それは鬼火だった。

鬼が二匹、そこに居座っていた。

「――あんたが、本物の伊吹萃香ね」

地上に降り立った霊夢は、開口一番に断言した。

龍神の石像の上に腰掛けた萃香は、片足を組んでそこに頬杖を突いている。

その真下にまた別の鬼と、龍神の石像に縋るようにして寄り添った数人の子供の姿があった。

人里が襲われた当初に攫われた子供達である。

霊夢は怯える子供達を一瞥だけして、すぐさま視線を萃香へ戻した。

予想外の事態へ対面した際の動揺など、今の霊夢には無縁だった。

「本物、っていうのもおかしな話だ。お前さんが会ったのは、全部本物のわたしさ」

萃香は答えた。

「別に私を倒せば、他の分身が消えるってモンでもない」

「でも、少なくとも統括しているのはあんたっぽいわよ」

「へえ、分かるのかい？」

「勘でね」

「すごいね。でも、その勘で分からないかなあ？ わたしを倒しただけじゃ、事態は収まらんよ」

「だけど、一番大きく事態を動かすことが出来る」

霊夢は両手を広げた。

その左右の袖から、陰陽玉がふわりと飛び出してくる。

手自体にも、退魔の針と札が握られていた。

「後のことは、あんたを退治してから考えるわ」

「ほう、鬼退治と来たかい」

萃香はまるで芝居を見ているかのようになり、愉快そうに笑っていた。戦闘態勢になった霊夢を前にして、全く緊張感を抱いていなかった。

今にも、肴にして酒を飲み始めそうな緩んだ雰囲気である。

しかし、実際に酒は飲まない。

正確には、今夜の萃香の体には一滴の酒も入っていないかった。

普段から持ち歩いている瓢箪が、手元にはない。

今回の異変を、萃香は僅かな酩酊すら交えずに決行したのだった。

それが如何なる決意を表すものか——もちろん、霊夢は知る由もなかった。

「わたしに手を出すなら、こつちも人質を使っちゃうぞ……なんて言ったらどうする？」

萃香がおどけたように言うと、足元の鬼が応えるように、子供達に手を向けた。

その指先には青白い炎が宿っている。

文字通りの鬼火だった。

子供達が、それを見て押し殺した悲鳴を上げた。

「どうにかするつもりだけど、その方法をあんたに教える必要はないわね」

霊夢は淡々と答えた。

「卑怯だぞ、とかって感想はないのかね？」

「別に」

「あ、勘違いさせちゃったかな？ 鬼つてのはね、正々堂々が大好きなんだよ。回りくどいのは嫌いなんだ」

「知ってる。勇儀はまさにそういうタイプだったわ」

「おおつ、勇儀と話したのかい？ いやあ、あいつは気持ちの良い奴だよ。まさに鬼の中の鬼だよ」

「だから、あんたが普通の鬼と違うことは最初から分かっているわ」

霊夢の視線に力が籠り、それを受けた萃香が笑みの種類を変えた。

お互いに様子見として見せていた、取り繕った姿の中に一瞬本音が

混じる——そんな変化だった。

「あなたのやり口は、まさに回りくどいからね」

「ああ、だから嫌いなんだ。嫌だねえって、内心では何度も愚痴ってる」

「それなのに、それをやってる」

「そうなんだ。やらなきゃいけないからね」

「そこが、あなたと勇儀の一番の違いよ」

「分かってるよ。でも、やらなきゃいけないんだよ。それが、わたしの目的だから」

萃香は困ったように笑っていた。

本当に『仕方ない』といった諦めの感情を、よく表した顔だった。

「そういうわけで、お前さんとの決闘も楽しそうだけど、もうちよつとだけ回りくどいやり方に付き合ってもらおうよ」

萃香が言うと同時に、子供達を狙っていた鬼が向きを変え、霊夢に對して一歩踏み出していた。

無言である。

しかし、何よりも有言に語っていた。

相手は自分だ——と。

「前座として、手下をぶつけようっての？」

「手下じゃないよ。わたしに手下なんていない。地上に連れ立った鬼は、皆それぞれやりたいことがあって集まった仲間さ」

その鬼は、萃香と同じ少女の容姿をしていた。

身長は霊夢と同じくらいあるが、とても鬼とは思えないような華奢な体格である。

異様に長い白髪が、腰を越えて踵まで届いている。

首から下だけを見れば、見目麗しい少女としか言いようのない可憐な姿だった。

ただ、その顔にはまるでお面ののように、恐ろしい鬼の顔が貼り付いていた。

いや、顔と半ば一体化している点を除けば『鬼のお面を被った少女』としか表現出来ない姿である。

「そいつのやりたいことは、意外にも『弾幕とやらで決闘をしてみた』って話だ」

鬼の少女は無言のまま、ゆっくりと両手を持ち上げた。

まるで霊夢を抱擁するように広げられた両手の間に、幾つもの小さな鬼火が発生する。

それを弾幕に見立てるつもりのようなだった。

しかし、その炎に込められた妖力はとても弾幕ごっこ用とは思えない。

強力すぎる。

当たれば、並の人間を火達磨にして灰にするまで消えない威力があることを、霊夢は見抜いていた。

「まあ、こっちの流儀に合わせようって努力は買うけど」

命懸けの決闘を前にして、全く気負った様子も見せずに霊夢はため息を吐いた。

宙に浮かびながら、鬼の少女に対して顎でついてくるように促す。

鬼の少女は鬼火を纏ったまま、それに従った。

「こいつを倒したら、次はあんたよ」

「待ってるよ」

決闘の場を夜空に移した二人の姿を、萃香は見上げていた。

「見せておくれよ、わたしに」

萃香の眩きは夜空に溶けて消え、足元で震える子供達の耳には入らなかった。

「見せておくれよう、博麗霊夢——」



——運が良いのか悪いのか。

魔理沙は内心で毒づいていた。

目の前には、敵がいる。

鬼である。

人里に向かった霊夢を追って、自らも人里の方向へ飛んでいた魔理

沙は、その道中で偶然にも鬼と遭遇したのだった。

その鬼は、集団で幻想郷の各所を襲っている他の者達とは違い、単独行動をしていた。

それだけ腕に自信があるのか、あるいは団体行動の出来ない性格なのか――。

魔理沙には分からなかったが、とにかく敵が一体だけというのは不幸中の幸いだった。

魔理沙は目の前の鬼と戦うつもりだった。

最初からそのつもりで飛び出したのだ。

そのつもりで――しかし、同時に鬼と戦うことの無謀さを嫌というほど分かってもいる。

博麗神社で行われた人外の戦闘は、眼に焼きついて新しい。

あんな戦い方が、人間である自分に出来るはずがない。

だからこそ、運が良いのか悪いのか分からないのだった。

「……いいや、運がいいぜっ！」

魔理沙はあえて自らを鼓舞するように、不敵に笑った。

しかし、額に滲んだ汗はもはや隠し切れない量だ。

その様を見て、鬼もまたにんまりと微笑した。

魔理沙の遭遇した鬼は、境内で見た有象無象の鬼とは何処か雰囲気が違うていた。

巨体の印象がある鬼にしては、小柄である。

もちろん、魔理沙よりは十分大きいのが、細身でひよろりとしている。

錆びた銅のような赤黒い肌と二本の角は間違いなく鬼のものだが、

顔には深い皺が何本も刻まれ、長い白髭が胸元まで伸びていた。

まるで老人である。

鬼に老いや若さがあるかは知らないが、言うなれば『老いた鬼』だった。

「こりゃあ、元気の良い童に会ったのう」

見た目に反さず、好々爺とした口調で鬼は言った。

「爺さんの目的は何なんだぜ？」

「さあて……強いて言うならば、変わった時代を見るといったところ

か」

要領を得ない返答に、魔理沙は訝しげな表情を浮かべた。博麗神社を襲った鬼達には漲っていた、凶暴なまでの欲望を、目の前の鬼からは感じられないのだ。

本当に、目の前の鬼は老人同然で、そこまで強い欲求など持っていない穏便な性格なのではないか——そんな考えが浮かんだ。

「なんで、まあ。とりあえず腹ごなしに——ワシに食われてくれや、娘さん」

鬼は笑いながら、背筋の凍るようなことを口にした。

魔理沙は恐怖と共に、自らの考え違いを思い知った。

何が穏便な性格だ。

目の前のこいつは、人ではない。妖怪でもない。

鬼なのだ。

人が『こわいもの』を喩える時にも使われる言葉が、形を持った存在なのだ。

確かに強い欲求などないかもしれない。

しかし、目の前の何でもない人間を片手間に掴まんで食ってしまったおと、気楽に考えるほど格の違う相手なのだ。

魔理沙はより一層量の増した額の汗を、もはや隠すこともなく拭いた。

「そいつは、お断りだぜ」

何とか、言い淀むことなく答えることが出来た。

声の震えまでは隠せなかったが。

「別にお前さんの都合は聞いておらんのを」

魔理沙の内心を全て見抜き、それを楽しんでいるかのように、鬼は愉快そうに続けた。

「さて、何処から食ろうてやろうか。その小さな手が、慎ましい胸か、柔らかかそうな髪も良いのう」

「へっ！ わたしを易々と食えると思うなよ！」

「ほお、ワシと戦うつもりか？」

「無抵抗に食われるつもりとでも思ったのか？」

「ふふふ、多少妖術を齧った程度では、ワシの敵では無いのう」

鬼は、魔理沙が魔法使いであることさえ知らない様子だったが、それでも絶対の自信を持っていた。

そして、それは事実なのだろう。

この老いた鬼が、鬼の中でも特別弱くて、しかも力が衰えているような奴だったら——そんな楽観は、もちろん魔理沙の中には欠片も無かった。

後ろ手に、ミニ八卦炉を持っておく。

今のところ、自分の持つ最大の火力だ。

これを当てるのが出来れば、あるいは——。

「効くと良いのう。ワシも鬼の端くれ、頑丈さには自信がある。それに、ちよつとした能力も持っておるしな」

魔理沙は、喉の奥でぐうつと唸った。

心まで見透かされている気分だった。

能力はもちろん、役者も違いすぎる。

まともに戦っては、勝てない。

——何か、勝てる要素が必要だ。

魔理沙は必死で思索した。

「……おい、爺さん！」

脳が焼け付くほど考え抜いた末に、魔理沙は意を決して八卦炉を持った方とは反対の手を突き出した。

その手には、一枚のスペルカードが握られていた。

「わたしと勝負しろ！」

「ほっ」

「勝負だよ、勝負！ 弾幕ごっこで、わたしと勝負だ！ わたしが負けたら、食うなり殺すなり好きにしろっ！」

「……ほほっ」

突きつけられた魔理沙の挑戦状に、しばしの間呆けていた鬼は、やがて意味を理解して笑った。

「面白いの」

それが癖であるように、長い髭を撫でる。

魔理沙は固唾を呑んで、返答を待った。

「面白い……が」

鬼はゆっくりと髭から手を離した。

口元は笑っていたが、声からは凍えるような殺気が滲み出ていた。「断る。お前さんを直接食う方が早いからな」

絶望的な返答だった。

小便をちびりそうだった。

恐怖から来る全身の震えを、必死で抑えていた。

既に見抜かれている内心の動揺を隠す為の笑みは、ただ単に口元が引き攣っているだけのような有様になっている。

——しかし、それでも。

魔理沙は目の前の敵から眼を逸らさず、挑むことをやめていなかった。

其の三十一 「鬼神」

幻想郷全てを巻き込むような異変。

今、その戦いの中で最も規模の大きなものが、隔離された異空間の中で展開されていた。

先代巫女と紅美鈴のたった二人が、三十を超える鬼の集団と真正面から戦いを始めたのである。

始まりは、繰り返しからだった。

先代巫女の放つ不可視の一撃。

それを回避できる者はいない。

鬼の群れの一角が、成す術も無く吹き飛んだ。

「糞っ、威力がさつきよりも上がつとらんか!？」

なんとか直撃を免れた鬼の一匹が悪態を吐いた。

吹き飛ばされた鬼の中には、攻撃を受け止めた腕を異様な角度に捻じ曲げられた者もいる。

鋼に等しい鬼の腕や足を容易くへし折る威力だ。

もし、頭にも無防備に受ければ、首から上が吹き飛ばされてもおかしくはない。

その恐るべき事実を悟り、鬼達は面白そうに笑っていた。

——なんとということだ！ 鬼が、人間を相手に、命の危機を感じることになるとはっ!!

鬼達は、一斉に襲い掛かった。

その顔には一様にして、恐れや怯みといった感情は無く、痛快さすら感じているかのような笑みが刻まれていた。

二人を包み込むようにして進撃する鬼の群れに、今度は美鈴が弾幕を放った。

スペルカードに沿った内容でこそあるものの、その弾は殺傷力を極限まで高めた実戦的なものである。

人間や並の妖怪相手ならば、対集団戦において効果的な威力と手数だった。

しかし、相手は鬼である。

飛来する無数の弾丸を、全身に受けながら、意にも介さず突き進む。色鮮やかな弾幕は、鬼の鋼の肉体に弾かれ、光の残滓を残して消え、外れた物は地面を抉って空しく土煙を上げるだけだった。

「ヌルいなあー。この程度、目晦ましにしか……っ！」

言いかけた鬼の嘲笑が、そこで凍りついた。

——目晦まし!?

頭の回る鬼の何匹かが美鈴の真意に気付いた時、既に周囲は舞い上がった土煙に囲まれ、チカチカと瞬く弾幕の残滓によって大幅に視界を遮られていた。

「拙いー」

悪態を吐いた。

次の瞬間、その声の主である鬼の横面に、拳がメリ込んでいた。

目晦ましに紛れ、音も無く接近した先代巫女である。

気の遠くなるような鍛錬の果てに刻まれた、古傷塗れの手。それを握り込み、最大の靈力を集中させて放たれた拳打が、鬼の顔を押し潰した。

血が噴き出し、牙がへし折れ、潰れた目玉が飛び出す。

本来ならば、即死である。

しかし、鬼は尚も動いた。

先代に向けて、我武者羅に腕を振り回す。

もはや眼は見えていないにも関わらず、鬼の闘争本能が、敵を察知して肉体を反撃の為に動かしていた。

その時既に、先代は鬼の懐まで踏み込んでいた。

頭上を掠めていく剛腕を無視して、冷徹なまでにどとめの一撃を放った。

「シヨットガンー」

聞いたこともない技の名前を、鬼は最期の瞬間に聞いた。

鬼の顔を打ち抜いたものとは反対の拳に集中させていた靈力を、今度は込めたままではなく、叩き込んだ瞬間に解き放つ。

鳩尾に打ち込まれた拳は、直撃の瞬間に散弾のような無数の靈力の弾丸を一斉に放ち、密着状態の為それを全て受けた鬼の胴体を二つに

両断した。

さすがの鬼も、これでは絶命するしかなかった。

下半身が先に倒れ、遅れて上半身が地面に落ちる。

それより早く、先代は次の標的に向けて移動を開始していた。

先代の声を聞いて、すぐさま駆けつけた別の鬼の攻撃が、空しく空振りする。

一方の美鈴も、先代の動きに倣うかのように、自らの作り出した煙幕の中で、鬼へ接近戦を仕掛けようとしていた。

美鈴は『気』を操る能力を持っている。

視覚に頼らず、気配を察知することも可能であり、その精度は先代に勝るとも劣らないものだった。

完全に鬼の動きを把握していた美鈴は、標的に定めた相手の背後から接近し、奇襲を仕掛けた。

渾身の力を込めた蹴りが、鬼の首を刈り取るように叩き込まれる。

鬼の体が揺らいだ。

美鈴は蹴り足を戻しながら、自らの感じた手応えに戦慄していた。

まるで岩——いや、もつと言えば地面である。

地面を蹴ったところで、手応えもクソもない。

地面は不動だからだ。

——効いていない！

美鈴の確信を裏付けるように、鬼が何事も無かったかのように振り

返っていた。

予測される反撃に、思わず身構える。

しかし、鬼は拳を振るうことも蹴りを繰り出すこともなく、ただ大きく息を吸い込んで、

「■■■■■■——ッ!!!」

叫んだ。

もはやそれは声というレベルではなく、音による衝撃波に等しかった。

鬼は上げる雄叫び一つにすら破壊の力を宿らせる。

咆哮が全方位に放たれ、凄まじい音と衝撃と妖力の放射が周囲一帯を吹き飛ばした。

身構えて踏ん張っていた美鈴の体を、大きく後退りさせた鬼の咆哮は、当然のように周囲の目晦ましも根こそぎ吹き散らしてしまった。美鈴と先代の姿が鬼達の前にあらわになり、おまけに咆哮の影響によつて一瞬の硬直状態へ陥ってしまった。

逆に、周囲の鬼達は仲間の雄叫びに動じた様子すらなかった。

「見つけたあー！」

偶然、先代の背後に位置していた鬼が、嬉々として襲い掛かる。

それを見た美鈴が咄嗟に警告を発しようとして、自らもまた目の前の鬼に狙われていることを思い出した。

美鈴の警告を受けるまでも無く、攻撃を察知した先代は、振り返りに放った掌底によつて攻撃の軌道を巧みに逸らす。

美鈴は、咄嗟に手を重ねて、鬼の拳を受け止めていた。

しかし、元より力では勝負にならないことは分かりきっている。

両手足のバネを使って可能な限り衝撃を吸収したが、美鈴の体は後方に吹き飛んで地面に叩きつけられていた。

重い痛みが、両手を貫通して内臓にまで届いている。

血を吐いた。

防御を通して、このダメージである。

——駄目か!?

追撃の為に突進してくる鬼を睨みながらも、美鈴は絶望を感じていた。

——やはり、私の力では勝負にすらならないのか!?

戦う前の覚悟が、揺るがしような無い現実を前にして、早くも崩れかけていた。

その時、鋭い叱責が聞こえた。

「競うな！」

美鈴は、自分を射抜くように見つめる先代に気付いた。

「持ち味を活かせッ!!」

自らも複数の鬼の攻撃に晒されながら、先代は叫んでいた。

何よりも美鈴の為に、彼女自身も切迫した状況で言葉と想いを尽くしてくれたのだ。

美鈴の中に燻っていた全ての不安が、その言葉で消し飛んだ。受けたダメージや痛みさえ消えていた。

「——はいっ、『師父』！」

美鈴は咄嗟に、そう答えていた。

向き直り、眼前に迫った鬼に対して、凄まじいまでの闘志と力が漲っている。

もはや自らの弱さ、勝負の結果は二の次だった。ただ、立ち向かう意志だけが残っていた。

しかし、ここでただ勢いのまま動き出しているのは、先程と何も変わらない。

強力な妖怪としての地力——それは、自分の『持ち味』ではない。学ばなければならない。

言葉少ないあの人の、貴重な助言から十も百も学び取らなければならない。

鬼が、再び拳を繰り出してきた。

芸の無い攻撃である。

いや、芸など必要無いのだ。鬼の手足は、それだけで必殺なのである。

突進の勢いを乗せている為か、先ほどよりも更に鋭く、重い剛拳を、美鈴は正面から迎え撃った。

——あの人に届かないのなら、せめて見逃さないと決心したはずだ！

戦いの中で、美鈴は先代の動きを眼に焼き付けていた。

如何に鍛え抜かれた肉体とはいえ、脆弱な人間という器で、強大な鬼を相手に『技』をもって渡り合っていた。

あの戦いの理を、自分ならば実践出来る。

他のどんな妖怪でも出来ない。

しかし、あの人に認められた『技』を磨き続けてきた自分ならば、出来る。

——こう、か。

飛来する、砲弾に等しい鬼の拳を、力で受け止めるのではなく、身に着けた拳法の理によって受け流す。

咄嗟に考えて出来ることではない。

身に刻んだ技があつてこそ、初めて実現する。

——こうかつ！

風を切る轟音が、美鈴の耳元を過ぎていった。

鬼の拳が、標的を捉えることも出来ずに空振つたのである。

美鈴は鬼の攻撃を受け流していた。

その剛拳に触れた両掌は、皮が剥がれ、血が滴っている。

完全な技ではなかった。

しかし、受ければ致命傷となる一撃を、確かに捌いてみせたのだ。

「こうですね、師父！」

先代が返答出来るほど悠長な状況ではないと分かっているながら、美鈴は歓喜を言葉にせずにはいられなかった。

得体の知れない原理によって攻撃をかわされた鬼は、苛立たしげに唸りながら、もう片方の腕を振り抜いた。

それを再び受け流す。

しかし、すぐさま次の攻撃が迫る。

なんとか、それも受け流す。

攻撃に触れている両手が削り取られ、鮮血が飛び散った。

なんとという不恰好で、稚拙な技だ。到底あの人には及ばない。

しかし——。

しかし、悪くない。

この痛みは悪くない。

この傷も悪くない。

ズタズタになつていく両手が、妙に頼もしい。

必殺の一撃が、『一撃』どころか次から次へと迫つて来る。

その鈍重そうな巨体に反して、恐ろしく速く、間断のない連続攻撃だった。しかも、体力が無尽蔵であるかのように手を休めない。

眼で見ながら反応しているのは、到底捌き切れない。

——考えるな、感じるんだ。

美鈴は、かつての先代の教えを反芻していた。

一瞬の判断ミスが命取りとなる窮地において、絶大な信頼を持つて、その言葉に従う。

相手の動きを予測することを放棄し、自らの感性だけに全ての意識を傾けた。

眼で見えないものを気配で感じ取る。

そして、その感覚を一瞬も疑わない。

全てを委ねる。

鬼の放つ嵐のような連打の最中で、美鈴は手を動かし、足の位置を小刻みに変えて、眼と耳で捉え、肌で感じて、勘で判断した。

一撃で美鈴の肉体を砕くはずの攻撃が、全てその寸前で捌かれていく。

あらゆる角度から放たれた拳が、あらゆる角度から逸らされていく。

幾重にも重ねられる攻防。

——もっと速く逸らせ。

——もっと巧くいなせ。

——もっと。

——もっと。

受け流され、空振りした攻撃は次の攻撃までの間に僅かな遅れを生み、それが幾度も繰り返された結果、ついに美鈴の動きが鬼の速さを超えた。

一つの攻撃を捌き終えた後、一手、美鈴の動きが先んじた。

連撃の隙間を縫うように放たれた左の掌底が、鬼の下腹を強かに叩く。

頑強な肉体を貫くような威力は無い。

しかし、当たった箇所から衝撃が拡散し、鬼の肉体を硬直させた。動きが止まる。

それによって、攻守が入れ替わる。

しかし——そうはさせない。

そう言わんばかりに、鬼は動かない四肢に代わって、大きく口を開いた。

「再び、あの咆哮を放とうというのだ。

放たれれば、再び攻守は逆転する。」

美鈴は、その行動を読んでいた。

「いや、待ち構えていた。」

右手が貫手の構えを、既に取っている。

その手を、開いた鬼の口内へ鋭く突き込んだ。

ズラリと並んだ牙が皮膚に触れて、幾筋もの傷をつけた。

しかし、そんなものは文字通り歯牙にも掛けない。

渾身の力を込めた貫手は、鬼の喉奥にまで突き刺さった。

如何に鋼の肉体を持つとはいえ、内部はその限りではなかった。

両目を見開いた鬼が、血と共にくぐもった悲鳴を吐き出す。

「華符『破山砲』！」

突き刺した手の中で、弾幕が炸裂した。

口内で起こった爆発には、さすがに鬼も耐え切れず、上顎ごと頭部を内側から粉碎された。

美鈴が血塗れの手を引き抜くと同時に、力尽きた鬼が倒れ込む。

その手の血は、鬼の物だけではない。

狭い空間で爆発に巻き込まれた手首から先が、無残にも傷だらけになっていた。何本かの指が、奇妙な形に折れ曲がってしまったもいる。

しかし、美鈴はその傷に頓着しなかった。

折れた指を捻じ曲げ、無理矢理拳を作って中へ握りこむ。

人間ならば、深刻なダメージだ。

しかし、妖怪ならば、指の一本や二本、惜しむような傷ではない。

「持ち味、活かします」

美鈴は、先代の教えに対して、不敵に笑いながら応えていた。

自分は妖怪である。

中途半端な強さしか持たない、中途半端な妖怪である。

しかし、その半端な妖怪としての特性が少しでも利になるというの

ならば、使わない手は無い。

自分に使える全ての力と技を駆使する。

死力を尽くす。

全ては、そこから始まる。

その先に、あの人がいる――。

「師父！」

一匹だけとはいえ『鬼を倒す』という快拳を成し遂げた美鈴は、それを実感する間も無く、次の行動を起こしていた。

先代に群がる鬼の集団に向けて、駆け出す。

やはり、周囲の鬼達は先代だけを脅威の対象として見ており、美鈴にはさして注意を払っていない。

それを不満に思うほど、美鈴は自惚れてはいなかった。

そんな悠長な余裕が持てる状況だと樂觀もしていなかった。

力と数で圧倒的に劣る自分達が勝る数少ない要素は、まず『連携』である。

跳躍した美鈴は、先代の背後に迫った鬼の脳天に目掛けて蹴りを振り下ろした。

――『降華蹴』

弧を描いた蹴りの軌跡が、虹色の残滓を放つ技である。

真上からの衝撃を受けたその鬼は、無様にも地面にへばり付く形となった。

もちろん、それが致命傷になったとは思わない。

美鈴の呼びかけに反応し、振り返った先代と視線が一瞬絡み合う。

以心伝心出来るなどという思い上がりは抱いていない。

ただ、先代巫女の強さを疑っていないだけだった。

美鈴は、そのまま叩き伏せた鬼を無視して、先代が対峙していた正面の鬼に向かっていった。

そして、入れ替わるように、振り返った先代がそのまま倒れた鬼へ追撃を加える。

うつ伏せに倒れた鬼は、あまりに無防備だった。

先代が祈る瞬間を、誰も見極めることは出来なかった。

渾身の『百式観音』が、後頭部の一点に寸分の狂いも無く打ち下ろされ、鬼の頭を微塵に粉碎する。

叩き込まれた衝撃が、地面を抉り、激震させた。

一方の美鈴は、背を向ける形になった先代の間隙を守るように弾幕を放っていた。

ダメージを受けるほどの威力は無くとも、手数は圧倒的である。

光の波に押し戻されるように、迫っていた鬼達は後方へ下がらざるを得なかった。

その隙に、先代が素早く次の敵に備えて体勢を立て直す。

美鈴の背中に、先代の背中が触れ合った。

「美鈴、助かった」

先代が言葉少なに礼を言った。

それを聞き、美鈴は全身に痺れるような感覚を味わっていた。

震えるほどの歓喜だった。

「いえ……」

「苦しい戦いになりそうだ」

「いえ、苦しくなんかありません」

美鈴は嘘偽りの無い本音を答えていた。

震えが止まらなかった。

頬は紅潮し、指先に至るまで、ぶるぶると震えている。

疲れではなかった。

恐怖でもなかった。

美鈴には、その震えの正体はつきりと分かっていた。

——これは歓喜の震えだ。

——私の肉体が、腹の底から、手足の指先や毛先の一本に至るまで、喜びに打ち震えている！

——この人に出会ってからの十数年間、鍛え続けてきた力と技が、ようやく目覚めの時を迎えて歓喜しているのだ！

——私は、今、この人と肩を並べて戦い、背中を守って立っているっ
!!

美鈴は傷だらけの拳を握り締めた。

その傷は、自身の技が未熟であることの証だ。

しかし、それを恥だとは思わなかった。

あの人の手と似ている。似てきている。

その事実が嬉しくすら感じた。

無限に湧いてくる力が、今やそこに宿っていた。

美鈴は、口元を釣り上げて笑った。

◇

驚くべきことに、鬼との集団戦は、とりあえず順調な滑り出しを見せていた。

開戦の合図となる『百式観音』

更に威力を振り絞るつもりで集中してみたが、これでも倒せた鬼はいない。

まあ、とりあえずこれは予想済み。もう、こいつらの耐久力と防御力を常識で測るのは止めた。

真正面から警戒された状態で放つても、十分に通じない。

もちろん、防御は間に合っていないし、そういう技なのだが、精神的な面で『覚悟』みたいなものを固めていると耐えられてしまうようだ。

これはただの精神論ではない。

腕などの防御方法こそ間に合っていないが、攻撃に対して備えると肉体が硬直する。

これは鬼に限ったことではない。人間も持つ当たり前の反射行動。腹筋を固めて、ボディブローを受けるのと同じ原理だ。

そして、素の状態で並外れた頑強さ持つ鬼の場合、その肉体の反応がそのまま防御手段として成り立ってしまうのだった。

簡単に言うと、肉体の強度が鋼に変わる。

……何、そのチート性能。

身体能力が根本からして違う。

こっちは両腕に全霊力を集めて防御しても耐え切れる自信なんて

無いのに……。

詰まるところ、鬼の防御力を抜くには、力を抜いている箇所を狙うか、意識外から不意を突くしかない。

しかも、生半可な攻撃では駄目だ。一発に全身の力を乗せるくらいの勢いじゃないと。

攻撃が全く効かないというよりは遥かにマシだが、それでも苦しい条件下での戦いが始まった。

案の定、数を武器にして襲い掛かってくる鬼ども。

百式観音の力を拡散させて、複数の標的を狙うことは出来るが、その場合のデメリットは勇儀との戦いで判明している。

中途半端な迎撃では体力の無駄使いになるだけだ。

威力を保持する為に、少しでも力を収束しておきたい私としては、相性最悪の戦法だった。

さて、どうしたものか——と何処かのんきに悩んでいると、美鈴がナイスな援護をしてくれた。

弾幕による目晦まし。

そ、その発想は無かった……っ！ 弾幕使えないから当たり前だけど。

私ってばマジ『真っ直ぐ行つてぶつとばす』だけの脳筋ね。

煙幕に乗じて、気配と足音を消しながら適当な標的に近づく。

ふふふ、気を読んで動きを掴むZ戦士達の戦い方を参考にする私には、煙幕など無意味！

狙い通り、渾身の拳を不意を突く形で叩き込むことに成功した。

物凄い手応え。思わず『やったか!?'と叫んでしまいそうになる。

しかし、やはり鬼は普通ではなかった。

どう見ても頭が半分以上潰れた状態で、反撃してきたのだ。

くそっ、防御力は勇儀以下のようなのだが、このしぶとさはそれでも十分厄介すぎる。しかも、同じようなのがまだまだたくさんいるときたもんだ。

事前に覚悟していなかったら、一瞬戦意が萎えていたかもしれない。

しかし、私はこの結果をある程度予想していた。
トドメの後に、更に駄目押しのとドメを用意でもしておかないと、
安心出来ない。

私は攻撃をかわしながら、打ち込んだ拳とは逆の拳を繰り出した。
最初の一撃も限界まで霊力を集中させていたが、こつちの拳はそこ
へ更に時間を掛けて力を集約させ続けていたものだ。

そいつを、一気に解き放つ。

うおおおつ、食らえ！ 正式名称は『靈光弾』だけど横文字カツコ
いいからこつちを叫ぶぜ！

「ショットガン！」

文字通り、至近距離で撃ったショットガンの如く、霊力の散弾を全
て受けて、敵の胴体が二つにぶつ千切れた。

やつと一匹撃破！

つまり、合計二匹撃破！

あと敵の残りは……いっぱい！ よしっ、解散！

思わず家に帰りたくなる。

しかし、戦況はそんなボケる余裕すら与えてくれなかった。

美鈴の戦っている方向から、物凄い雄叫びが響いたかと思うと、声
と一緒に衝撃波が周囲一帯を駆け抜けたのだ。

全身がビリビリ震える——なんて生易しいものではない。反射的
に踏ん張らなければ、吹き飛ばされていたかもしれない。

当然のように、辺りにたち込めていた土煙などは一瞬で吹き払われ
てしまった。

……雄叫び一つで弾幕を放てる勇儀に比べれば可愛いものだと思
ってしまった私は、大分常識がズレてきているようだ。

それでも、拙い状況なのは変わりない。

「見つけたあー！」

丸見えになった私に向けて、鬼が一斉に襲い掛かってくる。

例の刃牙理論によって、三体以上に囲まれることはないが、それ
も三対一というのは不利すぎる状況だ。

動きの速さでは私の方が勝っているようだが、なんせ手数が違う。

二本の腕を持った敵が三体。一呼吸で六発の拳が飛んでくる。
……あ、こいつ腕が四本ある。

まぐれ当たりの一発だつて通せない緊張感。

私は防戦一方だつた。

むむつ、自惚れるわけではないが、私でさえこんなキツイ状況なんだから美鈴はもつとヤバイかもしれない。

案の定、チラツと視線を逸らしてみれば攻撃を受け止めて吹き飛ばす美鈴がっつうお危ね掠った!? ……わ、私も余計なことに気をやる余裕はなさそうだ。

手助けは出来ない。

かといつて、美鈴を見捨てるなんて論外。

焦った私は、毎度の如く『困った時の偉大な先人頼み』を使って、美鈴に声を飛ばした。

「競うな！ 持ち味を活かせッ!!」

切羽詰った状況で、咄嗟の助言とするには、あまりに無責任な精神論だつた。

ごめん……でも、正直これくらいの台詞しか思い浮かばなかったから。

悠長に技を教えるとか出来ないし、それを言葉にして説明出来るほど頭も良くない。

漫画に出てくる師匠役のように、何か深遠な意味を持つ一言で、相手に『そうか、そういうことか!』みたいな覚醒を促す展開になど出来ないのだつた。

……こうして改めて考えてみると、私つて何か教えるのに向いてないな。妹紅の時も薄々感じてたけど。

とにかく、想いだけはありつたけ込めて美鈴にエールを送った。

「こうですね、師父!」

——そしたら、美鈴が本当に覚醒した件について。

えっ……何、その烈海王ばりの鉄壁防御。

中国拳法らしい手捌きで、鬼の連続攻撃を尽くいなしたかと思うと、再び咆哮を放とうとした瞬間を逆に好機に変えて、貫手をぶつ刺

した。

そして、駄目押しの弾幕である。

人間の私では躊躇してしまうような、ダメージと引き換えの攻撃を、美鈴は迷うことなく決行したのだ。

頭の半分を吹き飛ばされた鬼が、倒れる。

これで三匹。

予想外の戦果だったのは敵も同じだったらしく、私が美鈴に気を取られて隙を見せたにも関わらず、鬼達も同じように美鈴に意識を奪われていた。

この場の主導権を握った美鈴が、更に間髪入れず動く。

私の方へ駆けつけてくる。

背後から襲おうとしていた鬼の脳天に蹴りを食らわせて地面に這い蹲らせると、一瞬視線を交差させて、そのまま私の横をすり抜けるように走った。

この時——私には、美鈴の意思がしっかりと伝わっていた！

……嘘。

ごめん、さとりと違って心とか読めんし。

でも、美鈴の行動とその意図は読めていた。

美鈴と入れ替わるように、互いの標的をスイッチして振り返る。

私が狙うべきは、美鈴が隙を作ってくれた、背後の鬼だ。

代わりに私は、これまで対峙していた敵に無防備な背中を晒すことになるが、躊躇はしない。

渾身の『百式観音』を打ち下ろす！

当然、効かないわけがない。鬼の頭はペシャンコになった。

これで、四匹！

背後で文字通りの弾幕を張って牽制してくれた美鈴と、自然と背中合わせになる。

「美鈴、助かった」

「いえ……」

ふっ、まさかこうも上手く連携が取れるとは思わなかった。

それもこれも、私自身密かにチームワークの練習をしていた成果だ

な。

——現実ではなく、脳内で！

もっと細かく言うのと、知ってる漫画とかアニメのそういうワンシーンを自分に置き換えて、イメージトレーニングしていたのだ。

だって、憧れだったし……。

まあ、今日に至るまで現実で行えたためしが無いから、完全に妄想の域だったんですけどね。

誰もやる相手いないんだもの。

現役時代の紫がそれっぽい立ち位置にいたが、正直二人掛かりで戦う機会なんてほとんどなかったもんね。

当時はヴァツシユとウルフウツドみたいに、二人で背中合わせの戦いをしたいと日々妄想していたものだ。

その妄想が今！ 美鈴のおかげで現実になっている！

「苦しい戦いになりそうだ」

いや、大したことないか。今夜は私とお前で——と、言ってみたくも思っていた私は、肩越しに美鈴の表情を見た。

美鈴は笑っていた。

しかも、なんか『ニイイツ』って感じの、笑い方だった。

……美鈴、覚醒しすぎじゃね？

それ、美女が浮かべる表情じゃなくね？

ちよつと怖いんですけど。

い、いや……それは同時に頼もしいって意味でもあるんだけどね。

私は、ひよつとしてとんでもないことを言ってしまったのではないかと不安になりながらも、そこから目を逸らして戦いに意識を向けた。

鬼の群れと向かい合っていた最初とは違い、今は周囲を囲まれている状況だった。

目の前の威圧感は減ったが、陣形的には更に追い込まれた形になっているだろう。

先程の一連の出来事で、美鈴にも注意を払うようになっていたみだし、四匹倒したとはいえ、相変わらず数は圧倒的に不利だ。

予想外のフォローもあって、まだまだ体力に余裕はあるが、油断は到底出来ない。

上手く立ち回らないと、一気に押し潰されてしまう。

とりあえず、生——といった感じに軽い判断で、私はお決まりの『百式観音』をぶつ放した。

開幕ぶっぱオイシイです。

でも、敵の一角を切り崩すのに実際有効だし。

私の攻撃と同時に、背後の美鈴も動き出す。

攻撃する前に、軽く手のひらに触れて、合図を送っていたのだ。

美鈴は、その意図を正確に読み取ったらしい。『分かれ』って方が無理があるのに、察してくれる美鈴マジ私の嫁。

私の背中を守るように美鈴が立ち回り、私の一撃で正面の人垣ならぬ鬼垣が崩れ——ない!?

「何?!」

私は思わず驚愕の声を洩らしていた。

この一撃で倒せないにせよ、反応の追いつかないこの攻撃を防ぎ切れることも出来ない、と半ば確信していた。

というか、この戦いで既に二度実践出来ている。

鬼の巨体であっても、不意打ちの衝撃波には吹き飛ばされるしかないはずだ。

しかし、直撃を受けた鬼達は僅かに後退ったあとで、すぐさま私目掛けて突進を開始したのだ。

馬鹿な……効いてないのか!?

いや、そんなはずはない。

現に、向かってくる鬼達は一様に眼で見て分かるほどのダメージを刻んでいる。

中には、気絶しているのか、頭がガクガクと揺れている鬼もいる。そんな状態なのに、敵は勢い良く私に押し寄せてくる。

——そこで、私はようやく気付いた。

なんて奴らだ……。

攻撃を受けた鬼自身が踏み堪えたわけではない。

そして、そいつら自身が今私に向かって突進してきているのではない。

全て、別の奴がやっている。

背後に控えた仲間の鬼が前列の奴を支えて、吹き飛びそうな体を押しさえ込み、そのまま前進を始めたのだ。

丁度、仲間の体を盾にする形で――！

「いいぞお、突っ込め！」

「一発ぐらい耐えてみせるわ！」

「もう形振り構うな！ 俺達ごとあの巫女をグチャグチャにしろっ！！」

恐ろしい雄叫びを上げながら、鬼の群れが突っ込んでくる。

しかも、それを叫んでいるのは盾にされている奴らだ。

仲間の為に犠牲になる尊い精神とか、そういう生温い考えでやっているんじゃない。人間の私には理解出来ない、もっと恐ろしい何かがあるを突き動かしている！

もはや戦いの為の理屈もクソもなかった。

突っ込んできた鬼達は、私の眼前で盾にしていた仲間の体を物のように投げつけ、自らもまた体そのものを武器にするように飛び掛っていた。

こんなの、もう技じゃない。

自分そのものを使った、肉弾特攻だ！

降り注ぐ巨岩の如き無数の鬼を見上げて、私は猛烈な死の予感を感じていた。

やばい！ 死ぬ死ぬ死ぬ死ぬっ!!?

迎撃不能。

防御不能。

回避不能。

となると……残された手段は一つ！ っていうか、選んでる暇もねえっ！

——『界王拳』！ ……さ、三倍だアアア——ッ!!!



「師父……っ!？」

突然起こった地響きに視線を走らせれば、そこには先程まで感じていた先代の気配と姿は無く、鬼の巨体が幾つも不恰好に積み重なっている。

どういふ戦法でもない。

どういふ技でもない。

ただ、その巨大な肉体が秘めた圧倒的な頑丈さと重量によって、先代を押し潰したのだった。

人間である先代に対して、最悪の攻め方である。

「師父!!」

「余所見をする余裕が……あるんかい!」

美鈴には、下敷きになった先代を助け出すどころか、案じる余裕すら与えられなかった。

意識を逸らした瞬間に、対峙していた鬼が両腕を振り下ろしてきた。

咄嗟に横に跳び、かろうじて回避する。

叩きつけられたハンマーのような一撃が、地面を大きく抉り、激震させた。

地面を転がって距離を取った先に、しかし別の鬼が待ち構えている。

踏み潰さんと迫る巨大な足の下を、転がる勢いを殺さずに、曲芸染みた動きですり抜ける。

すぐさま立ち上がり、構えを取ったが、美鈴の集中力は半ば掻き乱されていた。

——あの人が死ぬはずがない!

——しかし……あの状況はっ。

積み重なって一塊となった鬼達は、まるで巨大な岩石に見えた。

もはや『攻撃を受け流す』といったレベルの話ではなく、技でどうこう出来る質量ではない。

例え、先程の落下で押し潰されていなかったとしても、人間の肉体が耐え切れるか――。

そして、生きていたとして、脱出の手段はあるのか――。

「返事を……」

美鈴は声を絞り出した。

「返事をして下さい、師父!!」

祈りであり、嘆きでもある、必死の呼び掛けだった。

それに答える声はない。

当たり前だ。

周りの鬼達は、そう思っていた。

美鈴さえ、薄々とそう感じていた。

あれは、助からない。

あの瞬間逃げられなかったのだから、この状態からも逃げられない。

あとはもう、生きていたとしても、動けなくなった先代を嬲り殺しにして終わりだ――。

「……む?」

最初に異変に気付いたのは、周りの様子を伺う余裕のあった鬼の一匹だった。

次に気付いたのは、美鈴だった。

今の彼女に視線を逸らす余裕などないが、気配を感じ取ることので、異変を察知したのだ。

――積み重なった鬼の山が、揺れている。

小刻みな震えが、あつという間に大きくなり、まるで噴火する寸前の火山のように下の方から蠢き始めた。

肉体と肉体がみつちりと重なった巨塊が揺れ、動き、亀裂のような隙間が所々に出来上がる。

積み重なった鬼達を、動かすものがある。

「……う」

積み重なった塊の一番下から、それを浮かび上がらせる得体の知れない力がある。

「……おお」

隙間から、唸り声にも似た人の声が洩れ始めた。

「……お、おお雄々おおおああ嗚呼あああああああつ!!!」

次の瞬間、山が噴火した。

真下で爆発した『力』としか表現出来ないものによって、積み重なっていた鬼達の体は空高く吹き飛ばされていた。

そこに立っているのは、人である。

鬼の如き人である。

下敷きになったはずの先代巫女が、圧倒的な力の放出によって巨大な質量を押し返し、立ち上がっていた。

「し、師父……い」

美鈴は、喜び以上に、驚愕と畏怖を同時に感じていた。

先代の姿は一変していた。

筋肉に火でも点ったのかと思うほどに全身が紅潮し、活性化した血流を表すかのように鼻血を噴き出している。

細かい傷が所々に出来ているが、そこから流れる血が皮膚に触れた途端蒸発して、赤い煙となって立ち昇っていた。

先代の体が、異常なまでの熱量を放っている。

そして、熱はそのまま力に繋がっていた。

美鈴が感じている『気』や『霊力』といった、とにかく『力』に部類するもの全てが、先程までの先代の比では無い。

鬼達を吹き飛ばしたのは、筋力だけでなく、溢れんばかりに放出されたその『力』そのものだった。

「こやつ……本当に人か!？」

美鈴の内心を代弁するように、鬼の一匹が戦慄と共に口走った。

それが、その鬼の命運を決めた。

雄叫びを上げ、天を仰いでいた先代が、声に反応して、唐突に顔を向けた。

深く腰を落とした前傾姿勢になる。

既に、その血走った眼は標的を睨んでいた。

空高く舞い上げられた鬼達が、思い出したかのように地面に落ちて

くる。

「……っ！」

次の瞬間、先代は駆け出ししていた。弾丸のような加速である。

地面を蹴り碎くほど勢いをつけた初動を、誰も捉えることが出来ない。

気がついた時には、先程声を上げた鬼の顔面を、先代の飛び蹴りが打ち抜いていた。

鬼の巨体が、軽々と後方へ吹き飛ぶ。

それを追って、更に先代が跳ぶ。

背後で、ようやく落下した鬼達の達の体が音を立てて地面を転がる。

——全ての存在と事象が、先代の動きに追いついていない。

自らが蹴り飛ばした鬼に追いつくと、先代はだらりと力無く伸びきった足を掴み取った。

抵抗は無い。

いや、既に命が無い。

蹴りの直撃を受けた鬼の顔面は、グチャグチャに潰れ、大きく陥没していた。

即死だった。

足を掴んだまま、踏ん張って制動を掛けた。

先代が止まった場所は、丁度鬼の群れのど真ん中。

文字通りの敵中である。

その場で先代は、自分自身を中心にして掴んだ鬼の死体を全力で振り回した。

独楽のように回転する。

ジャイアントスイング——いや、その出鱈目に加速した回転は台風か竜巻に等しかった。

圧倒的な力によって周囲の鬼を薙ぎ払い、吹き飛ばしていく。

吹き飛んだ鬼が、更に周囲の建物に突っ込み、崩落させる。

「……出たぞ」

「出おつたぞ！ あの人間の『鬼』が表に出おつたぞお!!」

「あの時と同じだ！ 勇儀を倒した、あの時と——！」

仲間の死体に殴り飛ばされ、宙を舞う鬼。

それを呆然と眺める鬼。

全ての鬼が、笑うことさえ忘れて震えていた。

——これが、あの星熊勇儀を打ち倒した人間の本当の力かつ！

「うう……ううおおおおっ!!」

成す術も無く仲間が薙ぎ倒される光景を目にしていた一匹が、雄叫びを上げて突っ込んだ。

その時、その鬼は勇ましく叫ぶのではなく、あろうことか萎縮する自らを奮い立たせる為に必死で声を振り絞っていたのだった。

周囲を薙ぎ払う回転に対して、唯一接近出来る頭上から襲い掛かろうと、大きく跳び上がる。

それを察知した先代は、振り回していた鬼の死体を、回転の勢いをつけて投げつけた。

信じ難い程の力で振り回され、周囲に散々叩きつけられたその鬼の上半身は、首と両腕が折れ、無茶苦茶な角度に捻じ曲がってしまったている。

もはや死体というよりも肉塊と化したそれは、先代の両手から離れた途端砲弾のように加速して、上空から襲い掛かる鬼に激突した。

ただそれだけで、頑丈なはずの鬼の肉体に凄まじい衝撃が走る。

一瞬動きを封じられた鬼は顔を顰め、そして次の瞬間眼を見開いた。

跳び上がった先代が、更に頭上を取っていた。

右足が限界まで振り被られている。

逃れる術は無かった。

「がああああっ!!」

先代の、獣のような雄叫び。

しかし、その踵は冷徹な程理に適った動きと軌道で振り下ろされ、鬼の脳天を叩き潰した。

体重を乗せたまま落下し、着地と同時に踏み潰す。

一片の容赦も無い。

そして、一呼吸分の停滞も無い。

地面に降りた瞬間に、先代は次の標的に向けて駆け出していた。全身を砲弾にしたような正拳突きが放たれる。それを防ごうとした鬼の両腕が二本ともあっさりとはひしゃげ、衝撃が背骨をへし折った。

その拳が、鬼の胴体を貫く。

その蹴りが、鬼の首を刈り取る。

その掌底が、鬼の顎を吹き飛ばす。

その手刀が、鬼の体を両断する。

それは、破壊と死の風だった。

敵の間を吹き抜けた瞬間、その命をもぎ取っている、暴虐の嵐だった。

鬼の群れは、疾走する先代によって、完全に掻き回されている。

その最中で、美鈴もまた休むことなく戦っていた。

敵は混乱の極みにいる。

動揺の間隙を突くように接近し、一つの標的に全力で畳み掛け、一気に討ち倒す。

美鈴の一つ一つ確実な戦果は、圧倒的なまでの先代の戦い方に隠れ、だからこそ敵に止められることなく続いていた。

戦いながら、美鈴は先代の壮絶な戦闘を見る。

——あれは、技を伴った暴力だ。

——極限まで高めた力を、無差別に爆発させるのではなく、技によつて指向性を持たせ、収束させてぶつけている。

——力を押さえ込むのではない。逆に威力を更に増幅させているのだ。

それが、向けられる者にとってどれほど恐ろしいものとなるか。

美鈴は、改めて先代巫女に対する戦慄と畏怖を抱かずにはいられなかった。

これまで見てきた、先代の力の一片ではない。

あれこそが、おそらく彼女の切り札だ。

「凄まじい……だがっ！」

美鈴には焦りがあつた。

確かに、凄まじい力である。

鬼を完全に圧倒している。

あの星熊勇儀を倒したのも領けるほどの勢いだ。

——しかし、その勇儀との戦いの後、彼女はどうなったか？

あの力は、異常なのだ。

人の身で振るっていい範疇の力ではない。

必ず、何処かで無理が出てくる。

現に、先代はここまで一度も攻撃を受けていないにも関わらず、血塗れになっていた。

鼻から噴き出していた血が、今度は口から、眼から、そして切れた血管からも出始めている。

肉体から立ち昇る蒸気から察するに、もはや体温は人間のそれではない。

限界は近い。

そして、それを超えた時——おそらく彼女は死ぬ。

現在、戦況は一方的だ。

美鈴の目の前で、また鬼が一匹、先代に叩き潰された。

これで、瞬く間に十を超える鬼を葬ったことになる。

しかし、敵の総数はようやく半分まで減ったところだった。

◇

——『我に返る』という表現が一番近いのかもしれないが、正確ではない。

ぜひゅっ、ぜひゅっ、という非現実的な呼吸音が聞こえる。

私の呼吸する音だ。

まるで他人事のように聞こえる。

それくらいイカれた音だった。

私が切り札としてリミッター解除を行った次の瞬間、何か色々な噴

き出す感覚が走り抜けていた。

そりゃあ、あの技は血が出る。鼻とか眼とか、本来出ちゃいけない穴から出まくるヤバイ技なのだ。

しかし、それだけではない。

アドレナリンとかドツパドツパ出まくったと思う。

多分、視覚化出来るなら、私の脳みそは全部脳内麻薬に浸かっているだろう。

液体だけではない。腹の底からマグマが湧いて出てきたのではないかとと思うような熱が、体中の筋肉に宿っていた。

その噴き出す『何か』に突き動かされるまま、私は戦った。

戦いまくった。

意識が無かったわけではないが、その意識が半ば飛んでるような状態で滅茶苦茶に動き回った。

自分よりもデカイ相手を蹴り飛ばし、両足抱えてジャイアントスイングし、それで更に周りの敵まで薙ぎ払って——まさに、無双状態である。

正直、この成果は私にとっても予想外だった。

この技は何度か使ったことあるし、勇儀との戦いでの使用は記憶にも新しいが、ここまで劇的な戦闘力のアップは経験したことがない。

何故、こんな現象が起こったのか——。

『や、三倍だアアア——っ!!!!』

……え、まさかあれなの？

咄嗟にノリで叫んでただけで、本当に三倍界王拳みたいなアップ効果使っちゃったの？

あの時は、本当に追い詰められていたから、案外普段は無意識に抑えている限界を更に超えてしまったのかもしれない。

いずれにせよ、私のリミッターは予想よりも数段多く外れた。

その結果が、我ながら鬼神の如き戦いぶりである。

そして、その末路が——今の私の有様である。

発揮された力は三倍。そして、消耗も三倍だった。

何処で燃料が切れたのか分からないが、私は今、足を止めていた。

いや、それどころか動くことすら出来ない。
全身が、鉛のように重い。

しかも、赤くなるまで熱せられた鉛だ。
筋肉の中にそんな鉛が潜り込んだかのように、熱く、だるい。

戦っている最中には肉体を突き動かしていた熱が、今はただ痛みと重みとしか感じられなかった。

こ……こいつが、三倍の弊害か……っ！

自分の体内で起こっている、得体の知れない現象に戦慄する。

疲れたとか、体力の限界とか、そういうもんじゃない。

動けない。

体が、まるで泥のようだ。

呼吸するだけの泥だ。

さつきから聞こえる奇妙な呼吸音は、一向に治らない。

どれだけ酸素を取り込んでも、体力が回復しない。

もう駄目だ。

どれだけ戦っていたのか分からないが、私はもう、全部出し尽くした。

力を絞り尽くした。

既にかすみ始めている視界で、周囲を見回す。

鬼の屍が、死屍累々と転がっている。

周りの建物も、幾つかが半壊したり、完全に崩壊してしまった物もあつた。

三十はいた鬼が、半分以上倒れ、今はもう立っている奴の方が少ない。

私が暴れた結果だ。

もちろん、美鈴も頑張ってくれた結果だ。

いいぞ。

終わりは近い。

近い……がっ。

——残ってる奴、思ったより多くね？

私はもう、鬼でなくとも、妖怪にちよつと小突かれただけで死にそ

うである。

しかし、その鬼はまだ少なくとも十匹は残っていた。



嵐は、唐突に止んだ。

漲るほどの力と、鋭すぎる技によって、強大な鬼をまるで紙屑のように千切り捨てていた先代は、何匹目かの鬼の頭を消し飛ばした時点で、動きを止めた。

力尽きて倒れた鬼の死体を前に、その場で佇むだけである。

肩で大きく息をしていた。

汗と血の混じったものを全身から噴き出している。

冷静に観察すれば、手足が小刻みに震えているが分かった。

高揚した精神に肉体が反応して震えているのではない。ごく単純な筋肉の酷使による痙攣だ。

——限界だ！

美鈴は悟った。

無意識なのか、先代自身の判断なのかは分からないが、彼女の肉体は限界を感じて止まったのだ。

あのまま限界を超えて、死ぬまで戦い続けるのではないかという不安に駆られていた美鈴にとっては、良いタイミングである。

しかし、戦況を顧みれば、最悪に近い事態に陥っていた。

半分以上の鬼が、二人によって倒されている。

だが、逆に言えば、まだ鬼は全滅していないのだ。

先代や美鈴との交戦によって、大なり小なり傷を負った者達ばかりだが、まだまだ戦える鬼が十匹は残っている。

対する先代は限界から更に一步踏み出すまでに力を使い尽くし、余力を残した美鈴もまた負傷と消耗をしていた。

いや、そもそも地力で劣る美鈴が真正面から鬼の集団に対抗出来るはずがないのだ。

これまで渡り合ってこれたのは、巧みな立ち回りによって、自らの

能力を最大限に発揮出来たからに過ぎない。

——しかし、やらなければ。

先代は、もうまともに戦えない。
ならば、自分がやるしかない。

美鈴は最初から、覚悟を決めていた。

最初から『命を捨てる』と、言っていたのだ。

「と……止まったか」

「……くそお！ 足が竦んだ結果、命を捨てるなんてよ！ 鬼の名が泣くぜ！」

「まだまだ！ 油断するな……」

「そうだ。戦いの最中に悔しがるなんざ、無意識に勝ったと思ってる証拠だぜ」

「ああ、まだ何をしでかすかわからねえ」

「あの赤毛の妖怪も、もう油断ならんぞ」

先代が消耗し切っていることは、美鈴でなくとも一目瞭然である。
数の上でも、未だに有利だ。

しかし、生き残った鬼達は僅かな油断さえしていなかった。

むしろ、それを戒める謙虚さを芽生えさせていた。

戦い始めの時のような、喜んで捨て身になるような気楽さが無い。

先代と美鈴に対して、これまで以上の警戒を払ってるのだった。

——息の根を止める瞬間まで、毛ほどの隙も見せない。

そんな意気込みが、気迫となって放たれている。

鬼の気迫が、更に洗練されて鉄のように重い塊となって、周囲を圧迫するのだ。

それを受けただけで、弱った先代は倒れそうになっていた。
もはや足元も定かではない。

フラフラと、力の抜けた歩みで動く。

——前へ。

「師父!? もう無理ですー」

美鈴が眼を見開いて、制止の声を掛けた。

しかし、遅かった。

ノロノロとした先代の動きに対する鬼達の反応は、凄まじいものだった。

動いたのは三体。同時に襲い掛かれる最大の数で、各々の動くタイミングまで巧みにずらし、先代に襲い掛かる。

掠るだけで死んでしまうだろう、そんな凶悪な一撃を、狙い澄まして放った。

迫り来る死を、先代は焦点の定まっていない瞳で見つめ、

——ぜひゆ。

呼吸一つで、かわした。

正常な呼吸ではない。

足元もふらついたままだ。

かろうじて構えらしきものは取っているが、腕が上がりきらず、拳にも力が全く籠もっていない。

しかし、かわした。

掠らせもせず、先代は鬼の攻撃を紙一重でかわしていた。

「な——」

絶句したのは美鈴だけだった。

鬼は、動揺すらない。

二匹目が、薙ぎ払うように爪を振るう。

かわし辛い軌道だった。

当たる。

——ぜひゆ。

またも、呼吸一つ分の動きでかわした。

空中に舞う紙を捉えることが出来ないように、力の抜けた肉体が、唸るような剛腕をふわりと避けてしまう。

——ぜひゆ。

そして、三つ目の攻撃もまた、不思議な空振りに終わった。

絶望的な三連撃を、これで凌ぎきったことになる。

攻撃のあとの、一瞬の硬直。

本来ならば、反撃をするチャンスだ。

しかし、もはや先代は先程の動きだけで奇跡。

持ち上げるだけで億劫そうなあの両手で、鬼を倒すことなどとても出来そうには見えない。

鋼の肉体の、芯まで届くどころか皮膚さえ傷つけることが出来ないのではないか。

未だに焦点の定まらない、ぼんやりとした視線で先代は手近な鬼の顔を見上げ、のそりと右手を伸ばし、

——ぜひゆ。

その鬼の首から上が、千切れ飛んでいた。

◇

漫画のシチュエーションって奴は万能だ。

どんな状況でも。

どんな状態でも。

必ず、それを経験して、乗り越えた先駆者がいる。

だから、私はそんな偉大な先人達を尊敬する。

だから、私はそんな先人の経験を糧にする。

今だってそうだ。

私は、追い詰められている。

三十以上の強敵相手に、十分善戦したと思うが、まだまだこんな状況でも諦めない。

何故なら、この程度のピンチなら私の知る多くの先人が経験しているからだ。

そうだな……こんな時『あの人達』ならどうするか？

ベルセルクのガッツは、何も考えず、心臓の鼓動だけになるまで剣を振って切り抜けた。

バガボンドの武蔵は、一つの所に留まらず、川の流れに身を任せるように動き続けると言っていた。

いや、この場合自分自身が流れるように動く、だっけ？

武蔵が使ってたのは『攻めの消力』だったっけ？ ガッツは錆びた刀で竹を斬って明鏡止水の修行を……いや、違う。なんか混じって

る。

意識が朦朧としてきて、よく思い出せない。

へへっ、なんだ。私もとうとう化けの皮が剥がれてきたな。

だけど、意図せずして私は彼らと同じような境地に立っているのかもしれない。

なるほど。

つまり、余分なものを取り払った先に真理はあるのかもしれない。

—— 明鏡止水。

—— 水の心。

—— そうそう、妹紅に教えた『穿心』も忘れちゃ駄目だな。

弟子の妹紅が出来るようになったのに、私が出来ないなんて話にならない。

今こそ、これらの真理を結集して、窮地を脱するのだ。

ああ。

……でも。

疲れた。

体力を使い果たしたどころか、実際に肉を削って戦ったような気分だ。

体中が痛い。

そして、動かない。

本当に肉を削って戦ったのなら、それは当たり前だ。

いや、これはただの比喩だ。

肉はある。

手があり、足がある。

眼もまだ見える。

肺で呼吸も出来る。

心臓だって動いてるぞ。

まだだ。

まだ、私は動ける。

この程度の窮地は、漫画の中のヒーロー達にとってありふれたものだ。

そうだ——漫画。アニメ。私の中にある、多くのフィクションの存在達。

東方という世界に生きる私にとっては、同時にノンフィクションでもある存在達。

現実にいるのか、無いのか。

それはどうでもいい。

ただ、思えば……私は、いつも彼らや彼女達に『肖って』生きてきた。

どうしようもなくなった時、先人達の教えや言葉に頼った。

今も。

今もか？

どうなんだろう。

今回は、これまでと少し違う気がする。

何故なら、今の私は限界以上に限界だからだ。

もう、本当に、これっぽっちも余力の無い状態だからだ。

こんな時に、誰かの物真似に割く力や意識が残っているものだろうか？

勇儀と戦った時に似ているが、微妙に違う。

あの時は余裕は無かったが、余力はまだあった。

だから、最後の賭けに出ることが出来た。

これまで経験した戦い全てがそうだ。

生きるか死ぬかの瀬戸際は何度も味わったが、決定的な瞬間には行動を起こせるだけの力があつた。

しかし、今は違う。

初めての体験だ。

一人の強敵を相手に全てを賭けて挑むのではなく、多くの敵に持ち得る全てを出し尽くした。

身を削って戦った。

リミッターを外した、あの短くも長い濃密な時間の中で、何度も、何度も。限界を超えた動きや攻撃をする度に、私という存在を覆う皮が剥かれてきた。

そして、限界の一手手前から半歩進んだような現在の状態。
まだ、終わっていない。

まだ、戦わなくてはならない。

今の私には、皮が残されているか。

今の私には、何が残っているのか。

やはり、最後の最後に残るものも、誰かに肖ったものなのか。

どうなんだ？

もうちよつと、進んだら見えそうな気がする。

何が見えるかは分からない。

でも、見てみたい。

本当の私がどういうものなのかを見てみたい。

もう限界だけど、それでももうちよつとだけ踏み込んでみたくなる。

ほら。

もう半歩。

いや、三分の一步でいい。

霞んだ視界の先に、見えてきた。

あれ？ なんだ、こいつは鬼じゃないか。

鬼が、私を殺そうと腕を振り上げているじゃないか。

駄目だな。それは駄目だ。死にたくない。死ぬわけにはいかない。

こういう時は……何だっけ？ 忘れた。

死にたくない、じゃなくて、死ぬことを決意しなきゃ駄目なんじゃないか。

なかつたっけ？

でも、私は死にたくない。

何故だ？

昔はそんなこと無かつたのに。

崖からだつて飛び降りたのに。

実際のところ、どうなんだ？

私の本当の本心の本音は何処にある。

いや、待て。考えるな。死ぬだの死なないだの、予想したり、思い浮かべたり……そういうのが無駄なんだ。多分。

何でもいい。考えるのは力の無駄遣いだ。

肉体に任せればいい。

魂に従えばいい。

脳みそではなく、これまで続けてきた修行の中で体の芯まで刻み込んだものだけが、最後の最後に残っているはずだ。

そうだ。

修行の日々——発端はどうあれ、その積み上げてきたものだけでは全て私だけの本物だ。

憧れから始めた修行も、続けた日々は紛れもない現実なのだ。

そうだ。

最初の気持ちってやつを、思い出してきた。

誰かに勝つ為に、誰かより強くなる為に——いや、もつと言えば誰かの為に修行していたわけじゃない。

私が身に着けた極意が『明鏡止水』なのか『水の心』なのか『穿心』なのかあるいは全く何も身に着けていないのか。

この土壇場で分かる。

現れる。

そうだ。

真理。鬼の拳。眼前まで迫る。明鏡止水。体が重い。風圧が肌に触れる距離。水の心。揺れるように動く。集中しないと見えない攻撃が今の霞んだ眼で見えないしかし意識を紙の如く細く更に二つ目の攻撃も横にかわして川の流れのように体を一つに留めず三つ目のこれが終わったら攻撃後の隙が一瞬出来るからここで私は水滴が板を穿つが如く無駄な力はいらないほら右の拳を——。

よし、倒した。

止まるな。

次だ。



「消耗し切っていたことは確か……なのに」

美鈴は目に映る光景を信じる事が出来なかった。

「明らかに、さつきより強くなっている……！」

先代が、鬼を倒していた。

まるで幽鬼のようにフラフラと歩き、火に誘われる蛾のように生き残った鬼の所へ近づいていく。

押すどころか、息を吹きかければ倒れそうな弱々しさなのに、鬼は思わず後退りする。

踏み堪え、意を決して先代を攻撃した次の瞬間――。

死んでいるのは、鬼の方なのだ。

美鈴は、当たり前のように繰り返される一連の攻防をかうじて捉えていた。

先代の動きは、当初と比べて明らかに鈍っているし、精彩も欠いている。

それなのに、どれだけ集中しても捉えることの出来る動きは『かうじて』なのだ。

唸り上げる鬼の猛攻を、ふわりとかわす。

その動きは緩やかだ。

反撃の為に、拳を握り込もうとする指の一本一本の動きまで見える。

しかし、次の瞬間。

完全に握っていない拳が消えたかと思うと、破裂するような音と共に鬼の肉体の何処かが消し飛んでいるのだ。

頭ならば頭が無くなり、胸ならば心臓のある位置が丸ごと無くなる。

そこで、初めて美鈴は先代が何処を狙って攻撃したのか理解し、鬼は絶命する。

そんなことが、もう何度も繰り返されていた。

偶然ではない。

奇跡でもない。

れっきとした、先代の防御と攻撃による結果である。

「何が起こっているの？」

一体、疲れ果てた体の何処にあんな力が残っているのか。力でなければ、技か。

ならば、絞り尽くされた水滴程度しか残っていない力で鬼を討つ技とは、一体どんなものなのか。

美鈴は、もはや傍観することしか出来ない。

助けなど、必要無いのだ。

残った鬼を倒しきるのは、もう彼女一人でいい。

それほど、圧倒的な光景だった。

圧倒的なのに、先代の姿は未だ変わらず半死人のような有様である。

——何かが起こっていた。

——いや、何かが現れていた。

——疲労し、意識も朦朧としているだろう先代の内側から、何か恐ろしいものが顔を出して、それが鬼を圧倒しているのだ。

美鈴は理屈ではなく、直感的にそう考えていた。

もはや、先代に対する驚きはない。

今の先代の動きは、美鈴がこれまで見てきた彼女の動きのどれとも似通っており、同時にどれとも似ていない。

あるいは、これまでの全てを集めた集大成——そう思えるような動きだった。

ハッキリとしていることが、一つある。

普段から底の見えない実力と、深遠な心を持つ先代巫女。

そんな人間の、本当の底に在る何かが、今まさに表に出ようとしている——。

「誰も見たことのない、本当の貴女が……」

美鈴は、傍観するしかなかった。

先代巫女の姿を、ただ食い入るように見ていた。

気がつけば、残っていた鬼のほとんどが斃れ、最後の一体だけが取り残されるように佇んでいる。

そして、先代もまた最後の標的の前に辿り着いていた。

対峙する二人は、いずれも満身創痍である。

最後まで戦い抜いて残った鬼は、既に深刻なダメージを負っていた。

右腕は折れて外側に曲がっている。片目は潰れ、角も折れていた。かろうじて立っているのは、鬼も先代も同じである。

しかし、表情を作る力さえも失ったかのような先代に対して、鬼はあの笑みを再び取り戻していた。

己の死を前にして浮かべる笑みである。

「見事じゃ、巫女よ」

鬼は、老人のような喋り方で言った。

奇しくも、最後に残ったこの鬼は、戦いの始めに先代巫女へ一番に襲いかかろうと覚悟を決めていた、あの老練な鬼だった。

何の因果か、最も先に捨て身を決意した彼の鬼が、最後の一体となるまで生き残ったのだ。

「この場の鬼もわしで最後。皮肉なもんじゃと、笑ってくれ」

「笑えぬか。もはや、そのような余力も無いか。なのに、お前は今の前に立っておる」

鬼が、残った腕を眼前に持ち上げた。

握り締めた拳に力が収束する。

「勇儀の言った通りじゃのう」

異常なまでの力だった。

この鬼だけのものではない。

周囲の死んでいった鬼達の死骸から、まるで吸い出されるように妖力が立ち昇って、拳に集まっていく。

それは残留していた妖力か、あるいは死んでいった鬼の魂なのか。いずれにせよ、それは集まった掌の中で一つの大きな『力』となっていた。

「——天晴れ、見事っ！　我が全身全霊を懸けて、最後の一撃に挑むなり!!」

鬼の拳が、唸りを上げて発光した。

恐ろしい威力を秘めた光である。

戦いが始まり、様々な鬼が様々な攻撃を繰り出してきたが、それらの中で最も強力な攻撃が、今放たれようとしている。

「我が能力は『密』を操る！ 我ら鬼の御大将に準ずるこの力、捌けるものならば捌いてみせい！」

それに対して、先代は静かに祈ろうとしていた。

祈りの動作から繰り出される、あの不可避にして強力無比な一撃が、今は見る影も無い。

ノロノロとした動きで、億劫そうに両手を上げ、合掌する。

「いざっ！」

鬼の拳が放たれた。

そして――。

その拳が伸び切る前に、先代の拳が鬼の体を二つに分断していた。

◇

……疲れた。死ぬ。

◆

最後の一撃は、もう影すら見極められなかった。

鬼が倒れ、遅れて先代が膝から崩れ落ちたのを見て、我に返る。

美鈴は慌てて、先代の元へ駆け寄っていた。

か細い呼吸を繰り返すだけの先代を抱え上げ、手近な壁に背を凭れさせる。

気がつけば、いつの間にか異空間を形成する結界は解除されていた。

鬼の全滅が切欠となったのか、また別の判断基準があったのかは分からないが、とにかくそれが戦闘終了の合図となった。

異空間で破壊された建物は、現実の世界では何事も無かったかのようにつまみ、周囲に転がる鬼の死体だけは戦いがあったことを物語っている。

「……勝ったのか」

——あるいは、生き残った。

美鈴は、噛み締めるように呟いていた。

「終わりましたよ、師父」

美鈴は労わるように、優しく声を掛けた。

それに対する反応は、曖昧なものだった。

仕方がない。

本来ならば、気絶しているのが普通の状態なのだ。

戦いが終わって緊張の糸が切れ、今まさに先代は意識を失う寸前にまで来ている様子だった。

戦いの終盤で見せていた、彼女の中に眠る『何か』も、もはや完全に鳴りを潜めている。

——本当の先代の姿。

それを見ることが出来なかったことが、残念でもあり、同じくらい安心もしてしまう。

得体の知れないものを知ることが、恐怖でもあった。

美鈴は複雑な気分を隠して、先代の介抱に努めた。

「……美鈴」

「師父!？」

意外なほど力強い声に呼ばれ、美鈴は驚いた。

「私の、ことは……いい。人里には、まだ、鬼が残っている……」

「それは——分かっていきます。しかし、貴女を置いていけません」

「私のことより、も……人里の為に……」

「私は、妖怪です。貴女の為に戦う理由はあっても、人間の為に戦う理由は、ありません」

美鈴はハッキリと答えた。

人間に対する冷たさではない。

ただ、先代に対する感情が、人よりも、妖怪よりも、誰よりも優先されるだけなのだ。

戦いの中で心を通わせたことで、美鈴は自身の行動理念をこれまでよりも更に明確に自覚していた。

しかし、先代は弱々しくも首を振って応えた。

「……なら、私の為に人里を守ってくれ」

見えているのかどうかも分からない眼で、美鈴の瞳を真っ直ぐに見据え、告げる。

美鈴は沈黙した。

やがて、小さくため息を吐くように笑みを洩らした。

「——分かりました。貴女が、それを望むのなら」

支えていた先代の体を壁に預け、立ち上がる。

周囲の気配を十分に探り、他に敵がないことを確かめると、座り込んだままの先代を見下ろした。

「行ってきます。もう、戦う必要はありません。十分に休んでいて下

さい」

「ああ……」

返答の声が思ったよりもハッキリと聞こえることに僅かな安堵を感じ、美鈴はその場を離れた。

人里の奥へと進み、夜の暗闇の中に消えていく。

残された先代は、その後ろ姿を見送る気力も無く、ぼんやりと虚空を眺めていた。

いや、もはやその眼には何も見えていない。

瞳から意識の光が消え、全身に僅かに残留していた力が、今度こそ全て抜けていく。

寄り掛かっていた壁から、ズルズルと背中が滑って傾き、地面に横倒しになる。

そこで、先代の意識は完全に途切れた。

周囲に転がる鬼の死体に混じって、人間の死体が一つ出来上がったようにも見える。

かろうじて繰り返される呼吸だけが、先代の生存を知らせていた。と——。

静寂の満ちた場所に、新たに踏み入る者があった。

夜空から、ふわりと舞うように降り立つのは、金色の尾を九本も持った美しい妖怪である。

八雲藍だった。

藍は一言も発することなく、音すら立てずに先代へと近づいていった。

倒れた先代に顔を近づけると、耳で呼吸の音を聞き、鼻で流した血の匂いを嗅ぐ。

先代が死に掛けていることは分かった。

そしてまた同時に、このまま放置しても、決して死ぬことだけはないだろうという予測も立てた。

藍は、気絶した先代の顔を見下ろしていた。

冷たい瞳だった。

どれほどの時間、そうやって見下ろしていただろうか。

やがて、藍はゆっくりと先代に向けて手を伸ばした。

白く細い指が、二本。

そつと先代の首筋に触れる。

その指に力を込めようとして、思うように動かせないことを悟る。

藍の身に課せられた『式神』としての制約による影響だった。

主人である紫の命令に反する行動には、式神である藍はほとんど力を発揮することが出来ないのだ。

だから例えば——『先代巫女を殺そうとする行為』には、思うように力を振るうことが出来ない。

——だが、目の前の人間はもう既に死にかけだ。

別に力なんて必要ない。

抵抗すら、満足に出来ないだろう。

だから、ほら。

こうして二本の指で、そつと首の急所を押さえ続けるだけでいい。数を数えている間に終わる。

文字通り、眠るように。

ほら。

一つ。

二つ——。



幽香は積み重なった小山の上に座っていた。

片足を立て、もう片方の足は無造作に投げ出している。

立てた足の膝に、右腕を乗せている。

持っているのは愛用の日傘だった。それを肩に軽く乗せて、持っているのだ。

その傘はボロボロだった。

布は無残に破れ、骨組みは歪に曲がってしまっている。

拳句、夥しい血液が付着していた。

血の雨でも受けたのかというほどの量だ。

そして、幽香自身も全く同じ状態だった。

激しい戦いを繰り広げた後のような、ダメージを負ったボロボロの衣服。全身に浴びるように付着した血は、敵と、自分自身の物でもある。

つい先程まで、幽香は戦っていた。

死闘と言える、凄まじい戦いである。

幽香の座る小山——それは、鬼の屍を積み重ねたものだった。

「——十を超える鬼を皆殺しか。大したもんだ」

他人事のように称賛を口にするのは、仲間の死骸を尻に敷かれている伊吹萃香である。

幽香を見上げる顔は、相変わらず笑っている。

仲間の鬼の戦いと、その結果の死を、悼んではいるが恨んではないな
い。

萃香を見下ろし、幽香は微笑した。

「雑魚どもよ」

「言うねえ」

「事実よ。こいつらの実力は、地底で見たあの鬼には到底及ばない。
先代なら瞬く間に皆殺しに出来る」

「ふふん。実際に勝った奴が言うんだ、腹も立ちやしない」

「だけど、いい練習相手にはなったわ」

「練習と来たかい」

「ええ。しぶとさと力の強さだけは認めるわ」

幽香は自らのダメージをいささかも感じさせない笑みを浮かべていた。

外見から分かる負傷が全て見せ掛けなのではないかと、本当に騙されてしまうような余裕の仕草だった。

鬼の一匹に食い千切られた左腕の痕が無ければ、萃香もそう感じていたかもしれない。

萃香は、積み重なった小山の一番下に倒れている鬼の屍が、幽香の千切れた左腕を啜えているのに気づくと、おもむろにそれを引っ張り出した。

「離れて戦えば、もっと安全に勝てた」

その腕を、幽香に放り渡す。

「言ったでしょ？ 『練習』の為よ」

器用に傘を肩に引っ掛けたまま、幽香は右手で自分の左腕を受け取った。

『修行』って言った方が分かりやすいね」

「どっかの馬鹿を思い出すから嫌よ」

「強くなる為に努力する妖怪なんて、珍しいもんだ。特に、お前さんのように古い妖怪が」

「私はお前達とは違うのよ」

受け取った腕を、片手で遊びながら、幽香は言った。

顔に浮かぶのは、明らかに萃香への——あるいは鬼全てへの嘲笑だった。

「滅びゆく古い種族。それを甘受して笑う者達」

「……分かっていたか」

萃香は気まずそうな笑みで、頭を掻いた。

「気に入らないわ」

幽香は『何が』とは付け加えなかった。

萃香達、鬼の行動原理が自分の行動原理と合わないのか。

単純に、この太陽の畑へやって来て『喧嘩』と称し、戦いを仕掛けてきたことが不愉快なのか。

あるいは、ただ気分なのか。

何も言わず、幽香は右手に力を込めた。

手の中にある肉が、音を立てて軋む。

千切れているとはいえ、自分の左腕を骨ごと握り潰さんばかりの力だった。

いや、実際に幽香はそのまま自分の左腕を握り潰していた。

不可解な行動に、一瞬萃香が眼を見開く。

「先代に退治されるまでもない」

萃香が驚いたのは、幽香が自分の腕を握り潰したからではない。

握り潰され、飛び散るはずの肉片と血が、空中で光の粒子となって拡散したからだだった。

幽香の千切れた左腕が淡く輝き、そのまま光の中で分解されて、無数の粒となっていく。

「ここで死になさう」

幽香の左腕は、跡形も無く消えていた。

しかし、消滅したわけではない。

物質ではなく、霊的な粒子へと無数に分解されて、幽香の右掌の上で燻っていた。

「……おいおい、『疎』を操るのはわたしの領分なんだがねえ」

幽香がやってのけた内容を理解した萃香は、本当の驚愕を感じていた。

「てめえの左腕一本分を分解して、妖力に変えやがったな!？」

幽香の右手に集まっている粒子は、眼に見えるほど濃密な力の塊だった。

体の内側から力を引き出すのとは次元が違う。

自らの体を構成する要素全てを、力に変換したのだ。

肉体を燃料にして火を燃やしているに等しい。

「対『先代』用のとっておきよ。欠点は、使った部位を一から再生するのに時間が掛かること」

作り出したその力を幽香がどう使うつもりなのか、察した萃香は咄嗟に両手を胸の前で重ねて防御姿勢を取った。

「威力の方は、『練習』の為に前前で試してやるわ！」
特別な技などではない。

幽香は、ただ右手に集めた力を、無造作に前に向けて解き放った。巨大な光線が、その進路上にあるもの全てを焼き払った。

身構えていた萃香という存在さえ、例外ではない。

防御という考えが虚しく思えるほどあっさり、萃香の肉体は塵一つ残さず、消し飛んでいた。

光が消えた後、本当の静寂が訪れた。

残されたのは、鬼の屍だけである。

屍すら残らない、死だけである。

「——ただ自殺しに来た、というわけでもなさそうね」

今は焼け焦げた跡以外何も残っていない、萃香の立っていた場所を見つめていた幽香はおもむろに呟いた。

先程の一撃——。

単なる感覚だが、手応えが不十分だった。

萃香を殺した、という実感が無い。

確かに消し飛ぶのを見たが、未だに生きているような直感もある。

奇妙だ。

だが——。

「どうでもいいわ」

幽香は鬼という存在に対する思索そのものを放棄した。

興味など無かった。

あるとすれば、何やら騒がしいことになっている今宵の幻想郷で、

先代巫女がどのように動いているのかということだけだった。

「……本当、どうでもいいのよ。私は」

頬杖をつきながら、ぼんやりと夜空を眺めていた幽香は、唐突に立ち上がった。

言葉とは裏腹に、無意識に体は宙に浮いて、一つの方向へと飛んでいく。

隻腕となった幽香は、人里へと進路を向けて進んでいた。
まるで、何かに導かれるように――。

其の三十二「彗星」

—— 火符 『アグニシャイン』

「うぐおおおおっ!?!」

渦巻きのような軌道を描いて放たれた炎の弾を、弾幕に不慣れな鬼達がかわせるはずもなかった。

魔力の炎に巻かれ、悲鳴と怒号が飛び交う。

頑強な肉体を持つ鬼であつたが、その種族に属する者全てが比類なき防御力を持つわけではない。

実力に上下の差があるように、肉体の強度にも差がある。

弾幕を受けた鬼の何匹かの悲鳴は、苦悶が滲むものだった。

「おっ、おのれい! この程度で……!」

—— 水符 『プリンセスウンディネ』

「今度は水かあ!?!」

立て続けに、次のスペルカードが発動する。

火の弾幕の次は水の弾幕。

鬼に致命傷を与えるほど強力ではないものの、異なる属性の攻撃が圧倒的な手数で矢継ぎ早に襲い掛かり、確実に鬼達を消耗させていった。

何よりも、彼らはこれらの弾幕を思うように避けることが出来ないのだ。

鬼達は、忌々しげに対峙する敵を睨み上げた。

複数の鬼を相手に一方的な戦いを展開しているのは、たった一人の魔法使いである。

「—— 水気もそこそこ効くようね。じゃあ、次は金気で行ってみましょうか」

魔道書を片手に持ち、周囲には何十枚ものスペルカードを浮遊させたパチュリーが、その中から手ごろなカードを引き抜いて、言った。

複数の敵と対峙しているとは思えない、ゆつたりとした手つきである。

鬼達は、それを睨みつけるしかない。

パチュリーとの距離が開いているというのが理由の一つだった。

魔法によつて空中に浮遊し、移動砲台の如く眼下の敵を思う存分に撃ち下ろすパチュリーへ、逆に鬼達は思うように攻撃出来ないのだ。もちろん、彼らの中には遠距離攻撃が可能な特技を持つ者もいる。しかし、弾幕ごつこに慣れたパチュリーにとつて、如何に殺傷力や破壊力に優れていようが、単純に飛来するだけの攻撃など容易に回避出来るものだった。

そして、そんなパチュリーが完全に地の利を得ていることも、この一方的な戦況に影響している。

戦場は、紅魔館の内部。パチュリーの根城である地下図書館だった。

敵が、ここまで攻め入ってきたわけではない。

わざと招き入れたのだ。

当初、鬼達は単純な興味から紅魔館を襲撃しようとしていた。

日本で生まれ、日本で暴れた、日本の妖怪達である。

西洋文化からこの幻想郷へ迷い込んだような——その経歴を顧みればあながち間違いでもない——紅魔館は、彼らにとつて異世界も同然だった。

強い興味と、敵意が、彼らをこの場所へ誘き寄せた。

馴染みの無い建物が、しかしその威風だけは堂々と建っているのがある。

——気に入らん。

——まっ平らにしてやろう。

鬼達は、紅魔館の威容を自分達への挑戦状だと、勝手に受け取ったのだ。

勢い勇んで、今は番人の不在な門まで辿り着き、手を掛けたところで——視界が暗転した。

気がついた時には、彼らは全員建物の中へと入っていた。

「な……何が起こったんだ？」

鬼の一匹が困惑の声を上げた。

誰もが似たような心境で、周囲を見回して、自分達の置かれた状況

を把握しようとしている。

しかし、すぐには飲み込めなかった。

彼らにとつて、全く馴染みのない空間が広がっていた為である。本棚が並んでいる。

しかも、尋常ではない数の本を納めた棚が、やはり尋常ではない数だけ整然と並んで立っているのだ。

本棚で仕切りを作った無数の部屋のようにも見える。

彼らには『図書館』という発想自体が無かった。

自分達の居る広大な空間が、得体の知れない場所にしか思えなかったのである。

「外に居たのに、引き込まれたのか？」

「何なんだ、このワケの分からん空間は……」

当初の威勢など、すっかり失っている。

喧嘩を仕掛けに行った先で、奇妙な空間に迷い込み、その場には戦うべき相手もない——鬼達は、手持ち無沙汰に佇むことしか出来なかった。

そこへ何処からともなく現れたのが、パチュリーだった。

「迷い込んだ有象無象の妖怪なら、適当に処分させるんだけど……ア
ナタ達は『鬼』ね。本で見たことがあるわ」

パチュリーは空中に腰掛けるような姿勢で鬼達を見下ろし、片手に持っていた湯呑みの中身を飲み干した。

美鈴お手製の、涙が出そうなほど苦い薬茶だったが、パチュリーは平然としていた。

つい先程まで、お茶でも飲んでくつろいでいたような——そして、今も気分はそのままであるかのような、緊張感の無い仕草だった。

「実物を見るのは初めてね。なんだか、伝承で言われているよりも随分弱そうだけど——」

空になった湯呑みを手放すと、それは落下することなく、その場に固定される。

パチュリーが、軽く手を払うような仕草に合わせて、湯呑みは自分で元の場所へ戻るように飛んでいった。

反対の手を差し出せば、やはり傍らで浮いていた本が勝手に手の中に納まる。

「お前は……何じゃ!？」

上から見下ろす視線と、その不敵な態度に苛立ちを募らせた鬼の一匹が、声を荒げて尋ねる。

「まあ、数もいるしね。私はずから退治してあげるわ。一応、美鈴の代わりに留守番してる身だし」

パチュリーは相手との問答を無視した。

敵だということは、もう分かっている。

何処までもマイペースに、彼女は眼下の敵の排除を決定したのだ。

「今の私は体調もすこぶる良いしね。ティータイムの後は、一番調子が良いのよ。タイミングが悪かったわね」

酷薄な微笑を浮かべたパチュリーの手の中で、魔力の光と共に魔道書が勝手にページを開いていた。

そうして、戦闘という名の一方的な射撃戦が始まったのである。

パチュリーの言葉は、全て本当だった。

普段の喘息は鳴りを潜め、文字通り唸るような魔力を絶え間ない呪文の詠唱によつて攻撃魔法に代え、嵐のように掃射する。

身体能力では、病弱なパチュリーと頑強な鬼では歴然とした差がある。

故に、鬼達としては、なんとかしてこの弾幕を突破し、接近したい。しかし、出来ない。

圧倒的な密度の攻撃に押されているというのもあるが、間隙を突こうとしたタイミングを見計らったかのように来る別の攻撃が、効果的に彼らの行動を妨害していた。

「——ええいつ、死なば諸共!」

覚悟を決めた鬼の一匹が、弾幕の発射と同時に踏み出す。

死中に活路を見出すという考えを、体現したかのような決死の行動だった。

しかし、その果敢な決断は第一歩目から頓挫する。

踏み出した足の周囲に魔法陣が発生し、その陣に取り込まれた足が

固定されたかのように動かなくなったのだ。

ギョツとして足元を睨み付けた鬼は、次の悪態を吐くことすら許されなかった。

動けなくなつた鬼に弾幕が容赦なく降り注ぐ。

既に何度かの被弾によつて負傷していた体を、更に異なる属性の魔力弾が打ち据えた。

——金符『メタルファティグ』

金属で構成された弾幕である。

それは丁度、亀裂の入つた岩に鉄の杭を打ち込むように、鬼の肉体に刻まれた無数の傷から体内へ潜り込んだ。

弾丸は内部で炸裂し、鬼の体を内側から完全に破壊した。

全身から血を噴き出し、その鬼は倒れ伏した。

このような調子で既に数体、仲間が倒されている。

残つた鬼達は、悔しげに歯噛みした。

完全にペースを握られている。

未知の技と未知の戦法によつて、鬼の本領を封じられたまま、不利な状況へと追い込まれ続けた。

彼らにとつて、パチュリー・ノーレッジという敵は、これまで会つたことのないタイプの強者だった。

自らを有利な位置に置きながら、相手を不利な状況へ追い込む、搦め手を使ってくる。

拳句、単純に強くもあつた。

悪態は、山ほど湧いてくる。

卑怯じゃないか、と喚きたくなる。

しかし、それを実際に口にすることはない。

彼らは、パチュリーの看破した通り、鬼の中でも決して強い部類の者達ではない。

だからこそ、紅魔館を短絡的な理由で襲い、こうして成す術も無く倒されていつているのだ。

しかし——その胸に抱く矜持だけは、違えようも無い『鬼』であつた。

彼らは未だに何の打開策も無いまま、ただひたすら目の前の『勝負』に挑み続けていた。



「ハハハ、無策ですか。アホですね、こいつら」

安全な場所から図書館の状況を伺っていた小悪魔は、嘲笑を浮かべずにはいらなかった。

いい加減、敵が目の前のパチュリー一人だけではないと気付いているだろうに、打開策も無く、そんな状況に陥っても退くことを考えていない。

見る者によっては『勇ましい猛者』といった賞賛が湧くかもしれない。

しかし、鬼という種族を知らない小悪魔にとっては、正体不明の彼らを『単細胞の妖怪ゴリラ』と一括りにする程度の感慨しか抱けなかった。

敵の戦闘力は、確かに高い。

パチュリーの魔法使いとしての力量は小悪魔自身が何よりも知っているし、その猛攻を単純な防御力だけで耐え抜いてしまう敵の力は強大だ。

「でも、脳筋ですなぁ」

小悪魔が指先を僅かに動かすと、それに反応するように足元の魔法陣が淡い光を放った。

弾幕を避けようとした鬼の背後にある本棚から、魔力で形成された矢が何本も飛び出して直撃する。

不意を突いたとはいえ、それだけで鬼の硬い表皮を傷つけることは出来ない。

しかし、鬼を動揺させ、動きを止めることは可能だった。

意識を逸らした途端、飛来した弾幕が包み込むように、鬼の全身に炸裂した。

一連の出来事を、小悪魔は見ていた。

それは彼女の視界内で起こっている出来事ではない。

小悪魔は現在、地下図書館の一角にある隠し部屋から館内の様子を『モニター』しているのだった。

広大な図書館とはいえ、それが全て一つの部屋で構成されているわけではない。

閲覧するには危険な魔道書を封印する為の書庫や、パチュリーの魔法の実験などに使われる多目的な部屋が幾つも存在する。

小悪魔が居るのは、それらの内の一つだった。

言うなれば『管理室』である。

その小部屋には、本は無かった。

ただ、天井と床一面に、文字とも記号とも知れない複雑怪奇な紋様で構成された巨大な魔法陣が描かれているだけだった。

この魔法陣は、図書館内に施された無数の『対侵入者用の罫』の操作盤として機能していた。

十数年前、この図書館を本格的に自らの根城としたパチュリーにより、少しずつ趣味と実益を兼ねて増やされた魔法の罫である。

当時の紅魔館の置かれていた立場や、門番の美鈴の存在もあって、単なる飾りとなっていたそれらが、今回その本領を發揮したのだった。

「ここへ誘き出された時点で、逃げの一手も打っておくものだと思いますけど。ああ、理解出来ない」

紅魔館の門に近づいた鬼達を、強制的に図書館内へ瞬間移動させたのは、パチュリーの考えである。

何も、今夜鬼が攻めて来ると知っていたわけではない。

ただ、どんな相手にせよ、紅魔館に侵入してくる敵を最も迎撃しやすいのが図書館内だったというだけである。

——こうして、罫を含めた地の利を得て、何よりわざわざ外へ出向く手間も省ける。

パチュリーはどちらかというと後者の方に比重を置いて、門に細工を施したのだった。

図書館には貴重な本が多い為、罫と同じように防護の魔法も施され

ている。それも戦場に選んだ理由だった。

皮肉なことに、紅魔館の中で、一番物が壊れにくい場所なのである。そして、実際の敵襲に対して事態は想定通りに進んでいた。

罨は効果的に発動し、本棚はもはや強固な障害物だ。

敵襲を感知したパチュリーに命令されるより早く、スタコラサツサとこの部屋へ逃げ込んだ小悪魔は、最初に抱いていた僅かな緊張感を今や完全に失っていた。

「もはや、これは遊戯である。」

パチュリーが負ける要素など、欠片もない。

自分は、必死になっっている敵を茶化すように、ここから罨を操作するだけで良い。

それだけで、視界に投影された敵の無様なやられっぷりを楽しむことが出来る。

正直、援護も必要無いような気がしないでもないが——まあ、いい。何故なら楽しいから。

自分よりも強者であるはずの敵が、一方的にやられていくのだ。

それでも怯まない鬼達の勇猛さが、小悪魔にはより滑稽に見えて、面白かった。

「まったく、こいつは最高の喜劇ですわ」

小悪魔は、鬼達を嘲笑い続けた。

「——楽しんでもらえて何よりだ。今度は、てめえが舞台上に上がってみな」

突然、声が聞こえた。

近い。

近すぎる。

真後ろである。

もし、これが体術に心得のある者や、そうでなくても実力のある者ならば、不用意に振り返らなかつただろう。

まず、その場を離れることを第一に考えるはずだ。

しかし、小悪魔は悠長にも振り返っていた。

振り返った瞬間、捻った首を待ち構えていたかのように、拳が顔に

叩き込まれていた。

成す術も無く小悪魔の体は吹き飛び、床を転がって、壁に激突した。転がる時に勢いを殺すことも出来ず、壁にはモロに後頭部から突っ込んでいる。

「はっ！ 安全な場所でコソコソしてるだけあつて貧弱だな。思いつきり手加減したのに、殺しちゃったと思つたよ」

口からダラダラと血を流し、頭を押さええて悶絶する小悪魔を、その襲撃者は逆に嘲った。

その正体は鬼である。

いつの間にか部屋に侵入し、小悪魔を襲つたのは、伊吹萃香だった。「ひ……酷いつ、歯が折れましたよ……！」

口元を手で覆い、涙を流しながら、小悪魔は睨んだ。

そんな気弱な視線など露程も気にせず、萃香が大股で近づいてくる。

むしろ、萃香の方がより大きな苛立ちを顔に表していた。

「そいつぁいい気味だ。戦い方をどうこう言うつもりは無いがね、お前さんの戦いへの姿勢が気に入らないんだよ」

「そ……そんなあ、私は戦うなんて大嫌いなんですよ。弱いんですから、当たり前です。それなのに、こんなに殴るなんて……」

俯き、肩を震わせる小悪魔を真上から見下ろす位置まで近づいた萃香は、そのまま無言で拳を握り締めた。

いきなり、小悪魔が顔を上げた。

次の瞬間、萃香の視界が真っ赤に染まって見えなくなった。

小悪魔が口の中に溜めた血を、萃香の顔目掛けて勢い良く吹き出したのだ。

典型的な目潰しだった。

折れた歯も、その中に混じっている。

咄嗟に眼を瞑って避けるにせよ、まともに受けるにせよ、視界は一時的にゼロになる。

その隙に、逃走する。

反撃はしない。

——少なくとも、小悪魔はそのように想定して行動したはずだった。

「……ひひっ」

小悪魔は引き攣ったような笑い声を洩らすことしか出来なかった。

萃香は、顔も、眼球まで血で真っ赤になりながら、瞬き一つせず小悪魔を見下ろしていたのである。

「か……顔は、もうやめてくださいね？」

「じゃあ、蹴る」

菌茎が見えるほど口元を吊り上げて、萃香は右足を振り抜いた。

下腹に衝撃を受けた小悪魔の体がくの字に折れ曲がり、再び床と壁に激突して転がった。

今度は、もうピクリとも動かない。

「よお、実はまだ意識があったりするんだろう？」

萃香の問い掛けに、倒れたままの小悪魔は答えなかった。

しかし、萃香は関係ないとばかりに続ける。

「分かるんだ、わたしには。だって、お前は嘘つきだからね。分かるんだ、鬼には。お前はさ、卑怯な奴だ」

萃香は無造作に近づいていった。

「だから、嫌いなんだ」

一步一步ゆっくりとした進み方だが、迷いが無い。

小悪魔の所まで近づいた瞬間、同じような調子で拳を振り上げ、何の躊躇も無くそれを振り下ろすだろう。

もう、そこまでの行動を決めてしまっている。

そんな迷いの無さだった。

近づいてくる死の足音に、やはり小悪魔は反応しない。

「有象無象のように死んじまえ」

近づき、そして萃香が拳を振り上げる。

そこに至って、本当に気絶しているのかどうかも分からない小悪魔が、反応をするか否か——。

その瀬戸際で、横槍が入った。

新たな侵入者が、部屋に踏み込んできたのだ。

萃香のように、入り口のドアを開けず、気づかれずに入り込んだのではない。

入り口そのものを吹き飛ばして、小さな人影が飛び込んできた。

尋常な速さではなかった。

不意を突かれた萃香は、それを影としか捉えられず、そのまま突進してきたそれに吹き飛ばされていた。

速さも凄いが、鬼である萃香を吹き飛ばす程に力も凄い。

「新手か!？」

その影の正体が、未だに図書館の鬼達と戦闘を続けているパチュリーでないことは確かだった。

予想外の手応えを持つ乱入者の存在に、萃香は笑みを浮かべながら身構えた。

小悪魔に対する怒りや苛立ちは、もうすっかり忘れてしまっている。

「——お前は、神社にいたもう一人の吸血鬼だな」

正体を探るまでもなく、萃香は対峙した相手を知っていた。

博麗神社を飛び出して、たった今紅魔館に辿り着いたフランドールだった。

倒れた小悪魔を庇うような位置に立ち、萃香を睨んでいる。

無言ながら、全身から萃香に対する敵意と殺意が滲み出ている。

「となると、あのメイドも来るか」

「……お前は、あの神社にいた奴とは」

「ああ、別さ。だけど、同じ一つの『わたし』でもある。早い話が、あつちで見たものはこっちでも分かるんだよ」

「……そうなんだ」

フランドールは気の無い返事を返した。

「どうでもいいや」

背後の小悪魔を一瞥する。

倒れたまま、ピクリとも動かない。

フランドールの瞳に、危険な光が点った。

「よくも、小悪魔を……」

「ふふっ、面白いな」

「何が!？」

「お前みたいに真っ直ぐにわたしを睨むような奴が、そこに転がってる嘘つきの小物を大切に想ってる……そんな不似合いな関係がさ」

「ご……っ!？」

「ご?」

フランドールは言い掛け、喉元で詰まったそれを思い切って吐き出すように叫んだ。

「殺してやる!!」

「いいねえ、掛かってきな!」

萃香とフランドールの間にある空間が、悲鳴を上げて歪んだ。

萃香が放つものは闘気とも呼ばれる熱く重いものだった。

フランドールが放つものは殺気や狂気といった冷え冷えとした鋭いものだった。

互いに種類は違うが、肉体から放つ巨大な気迫のようなものが、二人の間でぶつかり合っているのだった。

この拮抗崩れた時、あるいは自ら崩す為に、二人は戦いを始める。凄惨な殺し合いが予想されるような、凄まじい雰囲気は二人は纏っていた。

そんな激突の片隅で、横たわる小悪魔はひっそりと冷や汗を流していた。

萃香の言うとおり、彼女は気絶したふりをしていただけである。

(むう、いけませんね。これは、拙いですね。妹様をその気にさせる為にやられたふりを続けてましたが、せめて意識を取り戻した演技くらいは挟むべきでしたね。妹様ってば完全にヒートアップしちゃってますよ。最近鳴りを潜めてた狂気が完全復活って感じです。相手も強敵ですし、消極的になられるのは困りますが度が過ぎて積極的になられるのはもっと困りますね。ご自身の能力を使うことはかなり自重されていますし、もし使うような事態になった場合、相手は瞬殺出来るでしょうが、そこまで追い詰められた時の精神状態ではそのまま

暴走する危険性が大きいですね。守るべきものを自ら壊してしまう少女の悲劇とか、面白そうですね。守るべきものが一人が私になるとは冗談じゃないですよ。内容としても定番過ぎです。っていうか、気絶したふりのままだと確実に巻き添え食うから適当なところで『はっ……いい、妹様!』とか台詞入れて眼を覚ますアクションを起こしとかなないとヤバイですね。しかし、妹様があんなに怒るとは、私ってば予想以上に慕われているようで嬉し恥ずかしくです。逆にあの角付き幼女はなんとかして惨めに殺してやりたいですね。さて、どうしましょうか——?)

この間、僅か一秒に満たない思考であった。



月明かりに照らされた夜の空で、魔理沙と鬼は対峙していた。

二人の距離は縮まっていなかったが、それは互いに拮抗した状況だからではない。

むしろ、状況は一方的だった。

「さて、特に異存が無ければ、このままお前を食ろうとやろうと思うが？」

老いた鬼は、言葉に詰まった魔理沙に言った。

わざとらしく、舌なめずりまでして『これから襲い掛かるぞ』といったポーズを見せている。

——こいつ、わたしを試してやがるな!

魔理沙は相手の真意をすぐさま見抜いた。

目の前の鬼は、スペルカード・ルールなど完全に無視している。

この時点で、魔理沙には敵を倒すどころか生き残る可能性すら残っていないかった。

魔法を使えるとはいえ、その身は未だに普通の人間でしかない魔理沙には、実戦で到底勝ち目のある敵ではない。

戦いにすらならない。

食われて、お終いだ。

それは魔理沙自身も、相手の鬼も良く分かっている。

しかし、鬼はわざわざ魔理沙にこんな前置きをしたのだ。

何らかの意図が含まれていることを、魔理沙は気付いた。

どういうつもりなのかは分からないが――。

「……確かに、このままだとわたしは成す術なく食われるしかないな」

――こいつは、チャンスだ！

「だけど、それでいいのか？ そんな、当たり前のことでさ」

「ほう？」

不敵な笑みを取り戻して、挑むように問い掛ける魔理沙の言葉へ、鬼は面白そうに耳を傾けた。

「どういうことかのう？」

「鬼っていうのは、強い妖怪なんだろう」

「うむ。お前さんも、よく分かっているじやろう」

「ああ、この眼で見たからな。半人前の魔法使いであるわたしなんか、敵にもならないのは当たり前ってワケだ」

「そうじゃのう」

「それでいいのか？」

「何？」

「その『当たり前』をさ、当たり前前やって満足かって訊いてるんだよ」

「――」

「わたしの挑んだ勝負を蹴って、あっさりとわたしを食い殺した後、あんたはどうするんだ？ 『どうだ、やったぞ』って勝ち誇るのか？」

『勝って当たり前前の人間の小娘に勝ってやったぞ』って仲間に自慢するの？」

「――」

「なあ、もう一度言うぜ。言葉が足りなかったみたいだから、もう少し付け加えてな――」

魔理沙はやれやれといった感じに、これ見よがしに肩を竦めてみせた。

改めて、スペルカードを持った手を鬼に突きつける。

一度は拒否された勝負だった。

しかし、魔理沙は自分が追い詰められている状況などまるで存在していないかのように、堂々とした態度で告げた。

「わたしと勝負しろ。あんたが、人間に負けることを恐れる、鬼の中でも特別の腰抜けじゃないならな！」

それは、明らかな挑発だった。

しかも、安っぽい。

魔理沙は自分で口にしておきながら、そんなことを感じていた。もっと上手い言い方はなかったものか。

後悔するが、それが今の自分の限界なのだと悟る。

これは、最後の賭けだった。

この挑発に乗らなければ、自分の悪あがきは終わる。

殺されて、お終いだ。

相手が再び断った瞬間に、ケツをまくって逃げるしかない。

いや、ひよつとしたら今の挑発で苛立つて、そのまま襲ってくるかもしれない。

くそ。どうする？

こっちは小便をちびりそうなくらいビビってるんだ。

待たせるなよ。

早く答えろ――。

「……くくく」

満を持して口を開いた鬼から出たのは、言葉ではなく押し殺したような笑い声だった。

怒りまで押し殺したような声色ではない。

堪えていた愉悦が洩れてしまったかのような笑い方だった。

「小娘、条件は？」

鬼は、その皺だらけの顔に浮かぶ鋭い眼光を魔理沙に向けた。

老いた外見に反する、若々しく、瑞々しい瞳が魔理沙を真っ直ぐに捉える。

「な、何？」

「勝負の条件じゃよ。ワシは『スぺるかーど』などという物は持っておらんし、内容も知らん。特別に今だけの勝敗を決める条件を作るしか

あるまい」

「……わたしと、勝負するんだな？」

「うむ。受けよう、その勝負」

あつさりとした返答に、魔理沙は逆に戸惑った。

自分から挑発しておきながら、この判断は一体どういうつもりなのか、相手の考えが分からない。

気まぐれか。

あるいは、自分を食う前の座興のつもりなのか。

分からなかったが、魔理沙にとって選択肢は無いに等しかった。

例え、これが鬼の遊び心から出た結果だとしても、まずは目の前の勝負に勝たなければ道は開けない。

その勝利の道も、結局同じ結末に繋がっているのかもしれないが——いや、考えるな。

魔理沙は目の前の勝負に集中した。

「スペルカード・ルールの説明は省くぜ。どうせ、あんたは弾幕を使えないだろうからな。使えたとしても、あんたの弾幕なら一発当たった時点でわたしは死ぬだろう」

「うむ。遠くに弾を撃ち出す程度の技は使えるが、人間なら何処に当たっても死ぬじやろうな」

「だったら、そいつを使ってもいいぜ。直接殴ってきてもいいが——ほう？」

「ただし、わたしの方に勝利条件を加えさせてもらう。わたしの弾幕に、あんたが一発でも当たったら、それでわたしの勝ちだ」

「ふむ。つまり、ワシは普通に殺すつもりで戦えば良い。お前さんは、ワシに一発当てることだけ考えて立ち回れば良い——という内容じゃな」

「わたしに有利すぎて不満か？」

「そんな挑発なんかせんでも、不満なんぞ無いわ。それで良い」

最後の一言は、あつかりと流されてしまった。

実際に、魔理沙はこの条件を自分に有利だと思っていた。

結局目の前の鬼とは命懸けの戦いをすることに変わりないが、そこ

に『弾幕を当てる』という勝利条件が加わるだけで内容は一変する。実戦では、魔理沙の弾幕は何の脅威にもならないが、当てること自体に意味があるのなら、その圧倒的な手数は大きなアドバンテージとなるのだ。

加えて『避けること』が肝である弾幕ごっこに慣れているというのも、有利な点だ。

如何に鬼が強力な妖怪とはいえ、この条件下ではその力の大半が意味を失う。

他に単純な体格差などの有利も逆転する。

目の前の老練そうな鬼も、それらは理解しているはずであった。

理解していて勝負を受けるのは、鬼という種族の持つ自信と自負か、あるいは――。

「ワシが負けたら、潔くこの首をくれてやろう」

「いいぜ。その言葉、忘れるなよ」

魔理沙は笑って言いながらも、内心では強い不信感を消すことが出来なかった。

元々、対等の立場ではないのだ。

勝負がどのような結果になろうと、その前提を目の前の相手は簡単に覆してしまえる。

油断は出来なかった。

そんな魔理沙の不安を見抜いたかのように、鬼は髭を撫でながら苦笑を浮かべた。

「信じておらんか？　鬼は、嘘を吐かんよ。それよりも、一つ気に入らんのだが――」

笑みが消え、その顔が文字通り鬼の形相へと変貌した。

「鬼相手の勝負に、まさか勝ち目があると思っておらんか。小娘」

鬼の放った凄みのある声色と眼光に、魔理沙が一瞬怯む。

そこで、いきなり勝負が始まっていた。

鬼が、唐突に妖力で出来た弾丸を放ったのだ。

何の前動作も無い。攻撃の為の、僅かな『溜め』さえ存在しない。洗練された技だった。

事前に『遠くに弾を撃ち出す程度の技は使える』などと言っていたが、その表現が悪意のある謙遜だったのだと魔理沙は気付いた。

放たれた弾は僅かに数発分。弹幕と呼べるような弾数ではないが、恐ろしく速く、そして強力な弾丸が正確に魔理沙を狙った。

それを慌てて避ける。

飛行速度に優れた魔理沙でなければ、この不意打ちに近い攻撃をか
わすことは出来なかっただろう。

大きく鬼と距離を取って旋回しながら、魔理沙は抗議するように睨
んだ。

「まさか、始まりの合図まで用意してくれなんて、甘えたことは言わ
わなあ？」

鬼は嘲笑って応えた。

「上等だぜ！」

挑発と分かっているながら、魔理沙は心を昂ぶらせていた。

こういった駆け引きにおいて、魔理沙はまだ圧倒的に青い。

命懸けの戦いに対する緊張感も、精神の高揚を手伝っていた。

魔理沙は、鬼の動きを警戒しながら弹幕を準備した。

相手の遠距離攻撃は脅威だ。

速く、強力である。

しかし、弹幕の真価はそんな単純なものではない。

銃口から真っ直ぐに弾を放つ——そんなものは、弹幕として初歩以
下なのだ。

「こいつが、弹幕だ！」

魔理沙はスペルカードを一枚掲げた。

放たれた弹幕は、魔理沙を中心にして放たれるものだけではなかつ
た。

いつの間にか、鬼の背後や横合い、更には上下から、囲い込むよう
に無数の弾が迫ってきていた。

弾の軌道を見無視するような発生位置である。

——弹幕とは、幻想郷特有の現象。

——弹幕ごっこにおける強さとは、幻想郷という世界に漂う様々な

要素をいかに上手く運用するかにかかっている。

魔理沙は、かつてパチュリーから与えられた教えを片時も忘れたことはなかった。

幻想郷に喧嘩を売りに来た鬼には、この幻想郷に満ちた力を利用するという発想自体が無いのだ。

弾幕に囲まれた鬼だったが、これで終わるとは思えない。

しかし、避けられるか――？

魔理沙は、その場から一步も動こうとしない鬼をじつと睨み付けた。

「――『疎』」

ぼつりと、鬼が呟いた。

魔理沙の耳には聞こえなかったが、口元がそういう風に動いたように見えた。

弾幕が当たる直前にした動作は、たったそれだけである。

それだけで、鬼の周りの弾幕は消滅した。

魔理沙は眼を見開いた。

鬼に殺到した弾幕が、次々と当たる寸前で消滅していく。

正確には弾を構成する魔力が無数の粒になるまで分解されて、空中に掻き消えていくのだ。

放たれた弾幕全てが鬼を狙うわけではないが、その鬼の周囲に近づいた弾幕が一発残らず消え去っていった。

まるで、鬼の周囲だけが弾の当たらない安全地帯であるかのようになり、弾幕が近づくことすら出来ないのだ。

やがて、スペルカードに示された弾幕が全て撃ち尽くされると、果然とする魔理沙に鬼がニヤリと笑い掛けた。

「ワシは『疎』を操る能力を持つておる」

髭を悠々と撫でながら、説明する。

『疎』とは即ち力や物を『うとめる』ことである。物の密度を下げれば霧となり、力を散らせば無力となる」

「き……汚ないぞー！」

「おおう、吼えろ吼えろ。耳心地良いわ」

ここに至るまでの、鬼の態度や言葉に秘められた真意を理解して、魔理沙は歯噛みした。

自信の正体は、これだったのだ。

この能力があれば、弾幕は当たる寸前で全て分解出来てしまう。

勝利の条件は『一発でも弾幕を当てる』ことだ。

当たりさえしなければ、その手段が回避であっても、能力を使った弾幕の無効化であっても変わりはない。

自分が弾幕ごっこにおいてボムを使うのと同じことだ。

少なくとも、その点に関して条件など決めていなかった。

油断した魔理沙の落ち度だった。

「一度始まった勝負じゃ。条件を違えるなよ。ワシも違えんからな」

鬼が、今度は自ら接近して攻撃を仕掛けてくる。

魔理沙は慌てて移動を開始した。

飛行速度は、どうやら魔理沙の方に分があるらしい。

しかし——どうやって勝てばいいのか？

魔理沙は焦っていた。



——三つ。

時計の秒針のような精密さで数え終えた藍は、そっと手を離れた。

先代の息を嗅げるほど顔を近づけて、その呼吸の調子を正確に測る。

元々健康的な状態の時とは程遠い、恐ろしいほど浅く、遅い呼吸だった。

虫の息とはまさにこのことだ。

先代の体力の消耗具合を、今にも途切れそうなこの呼吸が良く表している。

それを、故意に三秒間止めた。

再開した呼吸は乱れるはずである。

しかし、そんな当然の反応さえ、先代の肉体は起こさなかった。

全く同じ調子で呼吸を繰り返している。
表情も全く変わらない。

死体が呼吸をしたら、こんな具合ではないか——そんな、生気を感じない息の仕方だった。

「……この奇妙な呼吸法の効果か」

やがて、藍は顔を離して、自らの分析を呟いた。

力尽きて気絶した先代を見て『このまま眠るように死ぬのではないか』と考えていた藍は、自分の予想が全く間違っていなかったことを実感していた。

これほどの体力の消耗、肉体の衰弱——並の人間なら、確かにこのまま緩やかに息を引き取っている。

放っておけば、そのまま止まってしまいう呼吸を続けさせているものは、先代が習得していた『波紋』という呼吸法の力だと藍は理解した。得体の知れない技術だ。

少なくとも、藍にとってはそうだった。

どういう原理でどういう作用が働いているのかは分からないが、とにかく奇妙な呼吸だということは分かる。

ただ、酸素を取り込むだけではない。

恐ろしく浅い呼吸なのに、それを繰り返すだけで少しずつ体力を回復し、今にも消えそうな生命を維持している。

普段、人間が行っている呼吸も、体力が限界まで落ちるなどの弊害が肉体に起これば、正常に機能しなくなる。

今の先代は、そういう状態のはずだ。

しかし、呼吸している。

普通の呼吸よりも、この奇妙な呼吸の方が優先して機能しているのだ。

肉体が、生来備わった機能ではなく、後付けの機能を選んで動いている。

まるで、この『波紋』という技術がひとりで先代を生かそうとしているかのようだった。

藍の持つ常識の範疇を超えた人間だった。

「しぶとい奴だ」

藍は内心の驚愕を一言で済ませた。

見下ろす瞳は相変わらず冷たいままだったが、言葉自体は吐き捨てるようなものではなく、むしろ納得するようなものだった。

「だが、まだ紫様の為に働けるといっわけだな」

藍は横倒しになった先代の姿勢を、呼吸しやすいように改めた。

もつとも、この程度のことは気休めにしかならない。

先代は瀕死と言ってもいいほどに疲れ果てている。

先程の、自分の命の危険が迫る状況でも何の反応も出来ないほどだ。

敵に襲われれば、相手が誰でもあつても成す術も無く殺されるだろう。

何もしなければ、眼を覚ますまでかなりの時間が掛かるだろう。

回復させなければならなかった。

「負傷はともかく、問題は体力か——」

「ゆっくり休ませてあげるのが一番なんだけどね」

唐突に、誰もいなかったはずの空間から声が聞こえた。

藍のすぐ背後である。

何の誇張も無い。突然、そこに人の気配が現れたのだ。

もしも、これが敵襲ならば、完全に不意を突かれ、背後まで取られ

た藍に勝ち目は無い。

しかし、藍は背後の存在に対して無頓着とも思えるほど、ゆっくり

と立ち上がった。

「そのような悠長な時間はありませんので」

一片の動揺すら見えない微笑を浮かべて、藍は振り返った。

「御機嫌麗しゅう。輝夜様」

「作り笑い、上手よ」

藍が自分に向ける隙の無い敬意を皮肉って、輝夜は微笑み返した。

二人は顔見知りではあったが、それ以上の関係ではない。

藍にとって、輝夜は自身の主人と対等の立場にいる者。

輝夜にとって、藍は自身の従者と同じ役割にいる者。

互いに、ただそれだけの認識で終わっていた。

「お一人ですか？」

「ええ。何故？」

「八意永琳氏が、輝夜様の御身を御守りする為に博麗神社を発っております。永遠亭へ戻られたようですが、道中では会われなかったように」

「なるほどね。なら、大丈夫よ。永琳が私の居場所を見誤るはずがないわ。すぐに合流出来るでしょう」

断言する輝夜に対して、藍はそれ以上何かを追求しなかった。

他人の主従関係とその信頼の度合いに、興味など無い。

自分が輝夜の護衛をする必要が無いという点にだけ、藍は安堵した。

「そういえば、途中までは貴女の式と一緒にだったわ。橙という、可愛い妖怪さんよ」

「お恥ずかしい限り。未熟ゆえ、貴女様を満足に護衛も出来ませんでした」

「いいのよ、私から離れたんだし。……貴女、離れていてもあの子の行動を把握しているのね」

「私の式ですので。あれの全ては把握し、掌握しております」

ふうん、と。輝夜は面白そうに笑った。

「貴女が、八雲紫の式であるように？」

輝夜は、何処か辛辣な声色で言った。

言外の意味が含まれている。

藍の式である橙の全てを、藍自身が把握しているというのなら——紫の式である藍の全てを、紫自身も把握しているのではないか。

例えば、つい先程の行動も含めて——。

藍が、結果や意図はどうあれ、瀕死の先代巫女に手を掛けようとしたことを、輝夜は暗に指摘しているのだった。

——あの光景を、見ていたのか？

——何時から、見ていたのか？

——何故、止めなかったのか？

藍はどの疑問も口にしなかった。

ただ、誇らしげな笑顔を浮かべて、輝夜を真っ直ぐに見つめ返した。「その通りです。私の全てを、あの御方は把握し、掌握しておられます」

「紫様の慧眼と思惑から、私程度の者が逃れようなど、おこがましいこと」

「あの方が私を処罰するのに、力も言葉も必要ありません」

藍が浮かべているのは、透き通るような、美しい笑みであった。美しいが、怖いものが潜んでいる笑みだった。

逆に、輝夜は形の良い笑みを歪めて、拗ねたように口を尖らせる。「つまらないわね。取り繕っているようにも思えないし、何もかも承知でしていたってこと?」

「私の行動が本当に禁忌であるのなら、今頃私は死んでおります」
「そうでない、ということは。八雲紫が貴女の行動を問題と感じなかったということね」

「はい。少なくともあの方にとっての私の価値は、その許容内にあつたということですよ」

「嬉しそうに言うのね」

「はい。嬉しいですよ」

「だけど、八雲藍——」

輝夜は、再び微笑を取り戻した。

「貴女自身の真意を、これまでにまだ語っていないわ」

「——と、言いますと?」

張り付いたような微笑を保ったまま、藍は問い返した。

「貴方はさつき、本気で先代を殺そうとしていたのか? それとも、最初から殺すつもりはなかったのか?」

「いずれにせよ、結果は変わりません」

「貴女の意味を聞きたいのよ」

「さあて」

それまでの輝夜に対する誠実な態度とは一変して、からかうような口調で惚ける。

輝夜の方もそれを無礼とも感じず、むしろ楽しんでいた。

「答える前に、私から輝夜様にお尋ねしても？」

「どうぞ」

「私の真意がいずれにせよ、『それ』が行われようとしている時点で、貴女様は止めようとしなかったのですか？」

「あら、私は貴女が『それ』を止めた時にやって来たのよ？ それ以前の状況なんて分からないし、止めようもないわ」

「それは、嘘でございますね」

「嘘かしら？」

「本当は、私が先代の首に手を掛けた時点で、既に様子を伺っていたのでしょっ？」

「さあて」

輝夜は藍の口調を真似て答えた。

その後で、堪えきれないようにクスクスと笑い声が洩れ、慌てて袖で口元を隠した。

しかし、隠れていない目元は笑ったままである。

「藍、貴女は本気で先代を殺そうとしたんでしょ？」

「輝夜様、貴女はそれと止めようとしませんでしたね？」

「さあて」

「さあて」

言葉を交わした後で、二人は同時に鼻から抜けるような笑みを浮かべ合った。

それまで繕っていた表面が外れたような、素直な顔付きで藍と輝夜は向かい合っていた。

自然と、輝夜が藍の方へ歩み寄った。

「お互い、先代巫女に抱く感情は複雑なようね」

「私は単純ですよ」

「そう？ ならば、そういうことにおきましようか」

もはや藍の言葉には深く取り合わず、輝夜は横たわった先代の傍に

屈みこんだ。

服の裾が地面に触れて汚れるが、気にも留めない。

自身の白い手が汚れることも構わず、血だらけの先代の顔を撫でるように触っていく。

「……なあんて、永琳の真似事してみたけど全然分らないわ」

神妙にその様子を見つめていた藍をからかうように、輝夜は笑った。

結局、先代に具体的な処置を施すこともせず、ただ血塗れの顔を袖で綺麗に拭って立ち上がる。

「お召し物が……」

「いいのよ。それよりも、先代を目覚めさせるには体力を回復させればいいのよね？」

「はい。外傷の方は見た目ほど深刻ではありません」

「ならば、丁度いいわ。傷の方はどうしようもないけど、体力に関してはアテがあるの」

輝夜は袖の下から小さな巾着袋を取り出した。

口を開き、中身を手のひらに転がす。

それは、数個の小さな玉だった。

複数の薬品を固めて作った丸薬である。

「永琳の調合した物よ。万が一の時の為に、いつもこれを持たされているの」

「どのような効果が？」

「非常食のような物、と永琳は言っていたわね。一粒口にすれば、十日は何も食べなくていいそうよ」

「体力回復の作用を持った霊薬のようですね」

「多分ね、今の先代の状態にも効くんじやないかしら。生憎と、私は死なないから傷薬の類は持たされていないわ」

「いえ、十分でしょう。体力さえ取り戻せば、負傷はある程度自身で治せるはずですよ」

「そうなの？ 凄いわね、先代巫女。それじゃあ——」

輝夜が無造作に丸薬を乗せた手を差し出し、藍は反射的にそこへ手

を伸ばしていた。

「貴女に任せるわ」

藍の手のひらに丸薬を落として、輝夜は試すように言った。

「私は、先代をこのまま寝かせておいてもいいと思っている」

「――」

「でも、貴女は仕事なのよね？」

輝夜は愉悦を交えて笑った。

藍に課せられた『先代巫女の補助をする』という使命を、彼女は知らない。

しかし、それを見透かすような言い草だった。

藍は、しばし手の中の丸薬に視線を落とし、

「ええ」

僅かに籠もった力で、手を握り締めた。

「先代巫女の『補助』を命じられました。『休ませよ』とは仰せつかっておりますぬ。彼女にはまだまだ働いてもらわなければ」

藍は輝夜から背を向け、再び先代の傍に屈みこんだ。

どうするのか、輝夜は興味深げに動向を見守っている。

渡した薬を、先代に与えればいいだけの話ではある。

しかし、まともな呼吸さえ出来ない程疲弊しきった今の先代には、小さいとはいえ固形物である薬を飲み込むことさえ困難なはずだった。

藍が、どうするつもりなのか――。

輝夜は大方の予想をつけながら、それを試すように笑って観察していた。

藍は、先代の口を僅かに開かせて、その中に指を差し込んだ。

口の中が若干乾いている。十分な唾が出ていない。

これでは、普通に薬を飲もうとしても、喉につかえるだろう。

都合良く飲み水も持ってなどいない。

藍は『作業』を躊躇わなかった。

手のひらの丸薬を、自らの口に含む。

そして、そのまま唇を先代の唇と重ね合わせた。

舌を先代の口内へ差し込んで、そこから唾と一緒に丸薬を流し込む。

飲み込む力も失っている為、藍が舌で補助する形で、ゆっくりと口移しで薬を飲ませた。

長い接吻の間、輝夜は潔い藍の行動に感嘆半分愉悦半分の笑みを浮かべていた。

やがて、先代の喉が小さく動き、やっこのことで薬を飲み下す。

藍が唇を離す。

銀色の橋が二人の口から伸び、すぐに途切れた。

「御見事」

輝夜は、藍の手際の良さを指して言った。

「少しくらい躊躇うと思ったわ」

「唇を重ねる程度、気を迷わせる必要はありません。命令とあれば、泥水さえ口に出れます」

「あらら、酷い言い草ね。先代との口づけは泥水に口をつけることと同等ってわけかしら？」

「いいえ」

「そう？」

「それ以上です」

真面目な顔で言い切る藍を見て、輝夜は堪えきれずに吹き出した。笑っている内に、早くも薬の効果が出始めたのか、先代に変化が表れた。

大きく咳き込み始める。

苦しげな表情だったが、死んだように動かなかった先程に比べれば、力強い咳の仕方だった。

呼吸も音がはつきりと聞こえるほど、十分に息を吸い込んで、吐いている。

唐突に回復した心肺機能に、体の方が驚いてむせたのだった。

「大丈夫かしら？」

言葉とは裏腹に、大して心配した様子もなく、輝夜は呟いた。

「回復したのは体力だけです。肉体の負傷は治っていませんから、調

子が掴めないのでしょうか」

「外傷は大したことない、と言っていないなかったかしら？」

『外側』は、そうです。全身の筋肉や関節に過度の負担が掛かり、炎症や断裂が見られます。しばらくは、思うように動けないでしょう」

藍は何食わぬ顔で説明した。

咳き込んでいた先代が、ようやく呼吸の調子を取り戻して、眼を開ける。

しかし、その瞳は未だにハッキリと焦点が合っていない。

並んで自身を見下ろす藍と輝夜の二人を、どちらか見ているのか、あるいはどちらも見えていないのか、ぼんやりと視線だけ向けていた。

何か言おうとして、声が出ずに、パクパクと口だけが動く。

藍は、そんな先代の様子を無視して、抱え上げるように体を起こし、壁に背を預けて座らせた。

そのまま無遠慮に顔や体を触って、状態を手早く点検する。

「意識はハッキリしているか？ まあいい。どちらにせよ、しばらくは動くな。回復した体力と、消耗した肉体のバランスが未だに取れていないのだ。今しばし、体を休めろ」

藍は事務的に告げると、立ち上がった。

「しかし、時間はあまり無い。未だに人里には相当数の鬼とその首魁が残存している。私は、人里以外に点在する鬼の駆逐に向かわねばならない」

「それらの場所は、分かっているの？」

「はい。既に、全て把握しました」

横から尋ねる輝夜に、藍はさも当然のように答えた。

ここに至るまでの間に、藍が自力で探し出したものだ。

それに費やした労力を、藍は全く表に出さなかった。

「貴女一人で向かうつもり？」

「そのつもりです」

「人里以外といっても、幻想郷は広いわよ。全部纏めれば数も多い」
「はい」

「一人で、それらの鬼を全て駆逐するつもり？」

「はい」

藍は涼しげに言った。

「そのつもりです」

無理をしているわけでも、自信を持っているわけでもない。

ただ、当たり前前のことを口に出している。

そんな気負いの無い答え方だった。

輝夜は、もう何も尋ねず、ただ小さく苦笑を浮かべた。

未だ呆けた様子の子の先代に顔を向け、

「では、私に行く」

藍は言った。

「お前も、さっさと立ち上がれ。自らの成すべきことを成せ。その為の場所へ行け」

激励のようでもある。

叱咤のようでもある。

しかし、罵倒のようでもあった。

「そして、出来れば、そこで死んでくれ」

藍は、肩越しに微笑んで、そう言った。

初めて先代に向ける笑顔だった。

「お前が人として死にたいと言うのなら、どうせ十年程度の誤差だ。死んだ後で残される者の時間を顧みれば、その誤差すら無いも同然だ」

完全に背を向け、ふわりと浮き上がる。

「お前が紫様と共に生きることを選んでさえいけば、少なくとも私は――」

藍は、夜空の闇へと溶けるように消えていった。

遠ざかる背中を見送る先代の瞳には、やはり意識が戻っているのかどうか曖昧だった。

去り際の言葉も最後まで聞こえていたのか分からず、そこに秘められた真意も伝わっているのかどうか分からない。

ただ一人、輝夜は藍と先代の間に関わされた言葉以外のやりとりを

眺めて、面白そうに笑っていた。

藍が去り、先代と二人だけになると、輝夜もまたこの場を去る為に踵を返す。

そして、藍と同じように、肩越しに一度振り返った。

「私も、貴女のこと嫌いよ」

言葉とは裏腹に、輝夜は穏やかに笑っていた。

「貴女の人間として生きる決心には、信念やしがらみや責任があったのでしよう。」

でも、貴女は本当は、永遠の時間を生きることが、人間以外のものになることが、怖かっただけなんじゃないの？」

輝夜は言った。

「……なんてね、意地の悪い訊き方だったでしょ。いい気味」

美貌のせいで、嫌味よりも可愛げのある言い方だった。

「その是非を証明する為に『蓬萊人になれ』なんて言わない。

軽い気持ちで——いえ、例えどんな信念を持って決断をしたとしても、それでも『永遠』というのは重過ぎる。退き帰しの効かない道なの。」

私自身が、痛いほど分かっている。だから、『証明してみせろ』なんて言えないことも分かっている。だから、私はずっと貴女が嫌いなままなの。きつと、これから好きになることはないでしょう。貴女が生きている間はもちろん、寿命を全うした後も」

先代からの返答はもちろん、反応も返ってはこない。

輝夜自身もそれを期待していないかのように、捲くし立てるように喋り続けた。

「もし、貴女がこれまでの人生の中で掲げ続けてきた信念を、無理矢理にでも捻じ曲げる決意をしたなら。」

その結果、周りの人や妖怪、そして何よりも娘を裏切って、全てのしがらみを捨ててくれたのなら——私は、貴女を好きになれる。永遠に、貴女を好きになってあげる」

最後の言葉は、意味の無い仮定だった。

先代が『人間』だからこそ、輝夜自身や妹紅、またそれ以外の者達

が、今在るべき場所に収まっている。

それでいいのだ。

もう、結果は出たのだ。

この結果だからこそ、自分達の関係が決まり、そこに絡む心情も今のようにならなかつたのだ。

しかし、輝夜は戯れでそのような仮定を口にしたわけではなかつた。

では、先代に今言った通りのことを本気で望んでいるかということ、そうでもない。

本気でなく、冗談ならば望んだということか――。

分からなかつた。

輝夜自身も、こんなことを語った自分の真意が分からなかつた。

分からないながらも、言わずにいられなかつた。

彼女を非難したかつたのだろうか？

それとも、逆に何かを期待していたのだろうか？

何を？

――多分、ここからさつきと立ち去ってしまった八雲藍に引き摺られたのだろう、と輝夜は思った。

彼女は、自分がボロを出す前に去つたのだ。

そして、自分はボロを出してしまつたのだ。

「……やっぱり、複雑」

自覚した途端、急に恥ずかしくなつて、輝夜は片手で顔を覆い、夜空を仰いだ。

手の隙間から、隠しきれない皮肉の笑みが見えている。

意識の朦朧とした先代が、一連の語りをしっかり聞き取っていないことを、輝夜は祈つた。

「行くわ。永遠亭に居る鬼は、こつちで責任を持って片付けておくから、心配しないでね」

言つて、逃げるように歩き出し、そこで唐突にもう一度輝夜は立ち止まつた。

「――そこに隠れてる天狗さん。さつきからずつと見守つてたんだか

ら、あと少しだけ先代の御守をお願いね？」

誰も居ない建物の陰に向かってそう言うと、輝夜は今度こそその場を立ち去った。

その背中が小さくなり、暗闇に消えていく途中で、夜空から二つの人影が降り立って、輝夜の元に合流した。

永琳と鈴仙である。

「ほ……本当に姫様がいた」

「あら、二人とも。宴会は楽しんできた？」

「中止になったわ。無事で何よりよ」

驚く鈴仙を尻目に、輝夜と永琳は当然のこのように言葉を交わした。

「永遠亭も鬼に襲われたのよ。大丈夫、一度も死んでないわ。さつきまで、妹紅達に守ってもらってたの」

「合流した方がいいかしら？」

「ううん、なんだか疲れちゃった。帰ってゆっくりしましょう」

「ゆっくりして……永遠亭に、まだ鬼が残ってるんじや……」

「それを駆除してから、ね。放っておいても八雲の使いが片付けてくれそうだけど」

「……分かったわ。『今回の異変の解決に貢献した』と、八雲紫への義理を果たす意味も大きいでしょう」

「や、やるんですね……」

「奮闘を期待するわ、鈴仙君」

二人は輝夜の傍に寄り添い、振り返ることなくそのまま消えていった。

再び、先代一人が静寂と共に残される。

輝夜達が完全に立ち去ったのを見計らって、先程声を掛けられた者——射命丸文——は、建物の陰からひよつこりと顔を出した。

それでも用心深く、キョロキョロと周囲を見渡し、恐る恐る先代の元へ近づいた。

幾分呼吸の落ち着いた先代の目の前で、軽く手を振って反応を確かめる。

視線は手の動きを追っているが、意識は向けられていないように思えた。

とりあえず、あらゆる角度から数枚の写真を撮って、それでも何の反応も返ってこないことを確認すると、文は形容し難い表情を浮かべた。

まるで肩透かしを受けたような表情である。

輝夜に言われたことを、無意識に反芻する。

この場を立ち去ることも、逆に先代に触れることも出来ない、中途半端な状態で文は佇むしかなかった。



突然、右の耳に熱さを感じて、魔理沙は声を上げた。

それが悲鳴なのか、怒号なのか、魔理沙自身にも分からなかった。分からないが、声を上げた。

それは誤魔化す為だ。

意識が現実を認識する前に、誤魔化す為だ。

しかし、誤魔化しきれない。走る痛みが、舞う鮮血が、飛び散る肉片が、現実を叩きつけた。

——頭の半分が吹っ飛んだか!?

魔理沙は、一瞬そんなことを本気で考えた。

冷静になってみれば、頭を半分失ってそんな風にも考えられるはずがない。

鬼の放つ弾が掠り、吹き飛んだのはせいぜい右耳の上半分程度だった。

聴覚を失ってもいない。

でも……ああ、なんてことだ。

魔理沙は出血を抑えるために、右耳に手をやって、その感触に恐怖を覚えた。

——本当だ。本当に、耳が欠けちゃってる！
泣き出したくなった。

それを、ぐつと堪える。
何を馬鹿な。

まだ折れていない精神の根っこの部分が、自分自身を叱咤する。
こんなものは負傷にも入らない。

腕をもぎ取られたわけでも、神経を引き裂かれたわけでもないのだ。

例えば、パチユリーなんかに頼れば、後から十分治せる程度の傷だ。
でも、耳が欠けた。体の一部が、ほんのちよつとはいえ無くなつてしまつたんだぞ。

分かつてるのか、自分。
分かつてるさ、わたし。

動揺する魔理沙を、当然のように敵はそつとしておいてくれなかつた。

矢継ぎ早に強力な弾丸が飛来する。

弾幕とは比較にならないほど密度の薄い射撃だが、とにかく弾速と威力がある。

それでも、魔理沙は回避した。

回避は出来る。

それなのに、何故さつきは掠つたのか。

魔理沙の動きを鈍らせるものがあつた。

それは体力的な問題ではなく、精神的な問題だつた。

そして、その問題は今も魔理沙の動きを鈍らせ続けている。

——ああ、クソ。耳が。耳が。

魔理沙はネチネチと些細な負傷を気にする自分に苛立っていた。
自分の心の問題なのに、自分で止められない。

「くくつ、怯えるか。竦むか——！」

鬼が、全てを見透かすように言った。

その言葉が、更に魔理沙の心を激しく揺さぶる。

魔理沙は恐れていた。

不安を消すことが出来なかつた。

それらの感情が、考えても意味の無いことを考えさせるのだ。

このまま、自分は殺されてしまうのではないか。

もし、この勝負に勝ったとしても、相手は何の関係もなしに襲い掛かり、当初の予定通り私を食い殺すつもりなのではないか。

例え、最初に条件を決めていたとしても、相手は一方的にそれを破れるではないか。

逆に、自分はそれを守らせる力を持っていないではないか。

ならば、この勝負に挑むこと自体に何の意味がある。

それに……ああ、クソ。見ろ、耳から血が止まらない。

考えるのを止めようとしても、理性とは別の本能というもう一人の自分が、そんなことを飽きることなく語りかけてくる。

魔理沙は泣きそうになるのを堪えながら、必死で反撃した。

畜生、何を悠長にスペルカード宣言なんてやっているのか。

これは実戦だぞ？ 遊びじゃない。

ほら、見ろ。また弾幕を散らされた。

当たるところか、体に届く気すらしない。

いや、当たったところで、どうせ相手は無傷なんだ。

こんな戦い方に、何の意味がある。

このままでは。

このままでは——死んでしまう。

——いや。

違う。

違うぞ。

それは違う。

この勝負に勝てなければ、死ぬよりも先にまず味わうものがある。勝負の後に、まず真っ先に起こることがある。

それは『負ける』ことだ。

死ぬよりも先に、自分は負けるのだ。

だから、なんだ？

負けても、その時点ではまだ生きている。

その後で、殺されるんじゃないか。

怖い。

嫌だ。

——どっちが？

どっちが怖いんだ。

どっちが嫌なんだ。

負けることが怖いのか？

死ぬことが嫌なのか？

分からない。

分からない——が。

とりあえず、順番だけは分かっている。

これは『勝負』なのだ。

まず最初に、自分が勝負を始めたのだ。

だったら、最初に決まるのは勝敗だ。

次に決まるのが生死だ。

これは、重要だぜ。

分かっているのか、わたし？

お前は今、余計なことを考えている。

だから、あんな弾もかわし損ねる。

耳の傷なんて、どうでもいい。

その負傷の延長にある自分の死さえ、今考えるのは余分な内容だ。

いつからお前は、先のことを見越して勝負に挑めるほど強くなったんだ。

なあ、本当に分かっているのか、自分？

この勝負に勝てなかったら——まず、お前は負けるんだぜ。

「……冗談じゃないぜ」

魔理沙の顔付きが変わった。

口から吐き出したのは、悲鳴や泣き言ではなく、気合いだった。

回避一方だった動きが反転し、進路を鬼の真正面に向ける。

鬼は老練な笑みを浮かべて、魔理沙の考えを見抜いた。

突っ込むつもりなのだ。

「無策か。蛮勇か——？」

「いや、勝負だ！」

「ならば良しっ！ 来いやあ!!」

鬼は笑って、魔理沙を受け止めめる構えを見せた。

近づく前に迎撃することも可能だったが、意識を全て己の能力に集中している。

油断でも、甘さでもない。

自らの力に絶対の自信を持つが故の判断だった。

一方の魔理沙も、ただ我武者羅に突進を選択したわけではない。

その頭脳は回転していた。

冷静ではなく、火花が出そうなほど熱く思考が巡っていた。

——『疎』を操る程度の能力。

全ての弾幕を無効化する絶対の防御に見えるが、鬼自身が説明した能力の作用と、これまで確認した実際の効果から、魔理沙はその詳細を考察していた。

鬼が自分で説明した通り、あの能力は干渉した弾幕を消滅させているのではなく、分解することで無効化している。

例えば弾幕のパワーが『10』あるとして、それを『0』にしてしまうのではなく、十個の『1』に分解することで、霧散させているのだ。

魔理沙は、その違いが大きな意味を持つことを正確に理解していた。

あの能力には、効果範囲と容量の限界があるはずだ。

これまでの弾幕を無効化するのに、タイムラグが発生しているようには見えない。

——しかし、ならば『10』ではなく『100』のパワーはどうか？

これは、賭けだった。

今までの弾幕も全力で撃つたものである。

それ以上の力を込めるならば、全身全霊を込めなければならない。命懸けでなければならない。

そこまで考えて、魔理沙は口元を吊り上げた。

命の心配？

ついさつき、それは頭の中から捨てたばかりではないか。

「宣言するぜ、こいつが最後の一枚だ！」

力む余り、手の中でくしゃくしゃになったスペルカードが、過剰な魔力の放出で燃え尽きた。

最後の抛り所としてとっておいたミニ八卦炉を、跨っている筈の後ろにセツトする。

鬼に向けて放つのではない。

最後のスペルカードを使う為の推進力として放つのだ。

八卦炉から放たれるマスタースパークをジェット噴射のように利用して、魔理沙は爆発的に加速した。

——彗星『ブレイジングスター』

眩いばかりの光を纏い、魔理沙は文字通りの彗星と化して鬼に突撃した。

魔法の障壁を先端に展開しているとはいえ、あれほど避けていた鬼に自ら肉薄しようとは、まるで特攻である。

だからこそ、その覚悟が生み出したパワーは、鬼の度肝を抜いた。

「くかかあああつー！」

狂ったように声を上げる。

これまで悠然としていた鬼の老練な顔付きが、初めて歪んでいた。

鬼の能力と、魔理沙のスペルが激突する。

鬼は、無意識の内に両手を前に掲げて、迫り来る魔理沙を受け止めようとしていた。

この正面对決は、ぶつかってくる力を能力によってどれだけ散らせるかに掛かっている。

触れた時点で、当たったことと同じなのだ。

突き出した手に、意味は無い。

鬼はそれだけ必死だった。

能力の効果範囲内に入ったスペルカードの魔力が、片っ端から分解され、霧散していく。

しかし、彗星の輝きは溢れんばかりの光を放ち続けている。

鬼も、魔理沙も、互いに歯を食い縛って己の力を搾り出していた。

拮抗は長くは続かなかつた。

「弾幕はあ——」

鬼と人間の持久力の差を十分に理解している魔理沙が、自分の中にある全てを一気に燃焼させる。

燃やせるものなら、何でもよかつた。

魔力や精神力だけではない。

心も燃やす。

生への執着。

勝利への渴望。

味わつた挫折。

苦しみの中の反骨心。

これまでの人生で、自分が呑み込んでいった全てを——！

「パワーだつぜい！」

その一瞬、魔理沙の放つ力が鬼の能力の許容範囲を超えた。

散らしきれない力と勢いが、見えない壁を突破する。

鬼は、咄嗟に身を捻っていた。

砲弾のように通り過ぎる魔理沙の姿を見送り、危ういところで回避

が成功したことを悟る。

ギリギリのところ、掠つてもいない。

しかし、鬼は呆然としていた。

必死な形相は消え去り、呆けた表情を浮かべている。

離れていく魔理沙の無防備な背中に、攻撃を加えることも可能だつ

たはずだが、何もしない。

何もしないまま、『ブレイジングスター』の余波を利用した星型の弾

幕が当たつた。

魔理沙が通り過ぎた後に、遊びのように残る見栄え重視の弾幕であ

る。

何の威力もないそれに、鬼は無防備にも当たっていた。

「……やつた？」

突進がかわされた瞬間、絶望していた魔理沙は、振り返って目に入った光景を思わず疑つた。

しかし、確かに弾幕は当たっている。

本来の予定とは違うが、最後のスペルカードに鬼は確かに被弾したのだ。

勝負は、魔理沙の勝ちである。

「やったぜ！ わたしの勝ちだ！」

汗だくになり、息を荒げながらも、魔理沙は歓喜の声を上げた。文字通り、諸手を上げて喜ぶ。

しかし、弾幕を受けた鬼の体から立ち昇る僅かな煙が消えていく間に、徐々に冷静になっていった。

忘れていた不安が、ぶり返してくる。

鬼は、何の変わりもなくそこに浮かんでいた。

傷一つ負ってはいない。

片手で顔を覆い、何かに堪えるように肩を震わせ、唸っている。

怒りを堪えているようにも見えた。

屈辱に震え、次の瞬間腹いせに襲い掛かってくるつもりなのかもしれないなかった。

魔理沙は、流れる汗を冷や汗に変えて、静かに身構えた。

そして、鬼が手をどかして、隠れていた表情をあらわにした。

「……ま、負けじゃ」

目元と口元をへの字に下げた、情けない表情で鬼は搾り出すように言った。

「な……何だって？」

「ええいつ、負けだと言うとるんじゃ！ くそっ！ ああ、そうじゃ！

ワシの負けじゃ、負けじゃあい!!」

恐る恐る尋ねる魔理沙に、鬼はやけくそになって答えていた。

一度言ってしまうば楽になったのか、大きくため息を吐いて、苦々しい笑いを浮かべる。

「……わたしの、勝ちでいいのか？」

「いいも何もあるかい。見ての通り、ワシはお前さんの弾幕に当たったんじゃ。最初に決めたとおおり、ワシの負けじゃろうが」

「――」

「なんじゃ、その面は。自分で自分の勝ちが信じられんのか？」

ワシなんか、認めたくないのに認めるしかないんじゃないぞ——と、鬼は本当に悔しそうに言った。

それを聞いて、ますます魔理沙は複雑な気分になっていった。

「認めたくないなら……」

「うん？」

「認めたくないなら、そうすればいいじゃないか。あんたは、まだ無傷だ。今戦えば、わたしに勝ち目は無い」

——生き残れる目もない。

消耗した体力を自覚しつつ、言外にそう告げる。

それを聞いて、鬼は笑いながら首を振った。

「それは違う。最初に決めた条件を、違えることなど出来ん。ワシ自身と言ったことじゃ」

「……それは、あんたが勝手に決めたことだ」

「ワシが高見から、優位な立場でお前さんに配慮していることだと言いたいのかね？」

「違うのか？」

「違う」

返答は迷い無く返ってきた。

「例え無傷でも、ワシが勝負に負けたのは間違いない。お前さんの突進を避けた時、ワシは折れたんじゃないよ。受け止めきれんと思ひ、咄嗟に逃げたんじゃ。」

あの時、もう嫌でも負けを自覚してしまった。一度そうなったら、もうそれでお終いじゃ。負け犬じゃ。鬼ですらない。鬼ですらないワシが、人を襲うことなど出来ん」

「出来るさ。言葉ではどうとでも言えるだけだ」

「言葉じゃない。もう、心が負けを認めておる」

「嘘だ」

「鬼が嘘なんか言うかい。おい、いつまでワシに自分の傷を抉らせる気じゃ？　ワシ、これでも結構惨めな気分なんじゃが」

それでも、納得のいかない表情の魔理沙を見て、鬼はやれやれと

いった感じに肩を竦めた。

仕方なく言葉を続ける。

「幾らでも言い訳したくなる」

拗ねた孫をあやす祖父のように、優しげな声色で語り掛ける。

「一度負けた事実を否定するとな、止まらんのじゃよ。どんな些細なことでも負けた理由になるんじや。『条件が平等じゃなかった』とか『本気じゃなかった』とか——際限が無い。屈辱と惨めさを誤魔化す為に、何でもしたくなる」

何でも——その中に、勝った相手を殺してしまうことも含めていると、魔理沙は気付いた。

「しかしな、そういうことをして周りを誤魔化すことは出来ても、やはり自分だけは誤魔化すことが出来ん。

強い奴ほど、自分で決めてしまえるんじやよ。そして、鬼は、特にそういう妖怪なんじや。生来の力と立場を自負するが故に、自分を誤魔化せん。自分に嘘がつけんのじや。勝負に負ければ、そこで認めて、終わってしまう」

「終わって……しまう?」

「お前さんが引つ掛かっているのは、そこじやろう。」

人間は違う。負けを認めながら、同時にそれを否定しようとする。そこに矛盾が生まれ、苦しむ。だが、その苦しみが人を強くする。ワシは、それをこの眼で何百年も見てきた」

鬼の瞳が、一瞬遠い過去を眺めるような憧憬に染まった。

しかし、すぐに魔理沙を見据える。

先程まで恐怖を感じていた相手とは思えない、穏やかな視線だった。

それは何よりも、鬼の失った戦意を表していた。

この鬼は、もう本当に戦うつもりが無いのだ——と、魔理沙は唐突に理解した。

「悩むな。お前さんが勝敗を決める必要は無い。勝敗は、相手が勝手に決めてくれる。さあ、名を——」

「え?」

「名前じゃよ。『小娘』では、様にならん」

「……魔理沙。霧雨魔理沙だ」

「では、魔理沙よ」

鬼に名前を呼ばれた魔理沙は、それをすんなりと受け入れていた。

「この勝負、お前の勝ちじゃ」

鬼が言った。

静かだが、ハッキリとした言葉だった。

「……そうか」

それはやはり同じ『言葉』にしか過ぎなかったが、魔理沙はようやく実感した。

「わたしは、勝ったのか」

実感を言葉にして、やっと魔理沙はこれまでの緊張感から解放された。

眼の前に未だに鬼がいるというのに、もう不安も恐怖も感じない。

鬼もまた、安堵する魔理沙を笑って眺めるだけだった。

「うむ。天晴れ見事じゃ！」

「ありがとよ……あんたに言われると色々複雑だぜ」

「複雑になることはない。単純なままでおれ、あの勝負を決した瞬間のようにな」

「……分かるのか？」

「分かる。あの全てのしがらみを捨てて発揮した力が、本当のお前さんの力よ。」

囚われるな。囚われないという考えに囚われるな。ただ、純粹に勝負に集中し、そして楽しむ。そうすれば、お前さんはきつと誰にも負けんよ」

「楽しむ、ねえ……」

魔理沙は苦笑しつつ、鬼らしい無茶な助言を受け止めた。

不思議と、すんなり心に浸透する言葉だった。

必死で、いっぱいいっぱいだった自分の心の何処に、こんなものが入る余裕があったのか、驚いていた。

勝負は決し、会話も一段落する。

さて、これからどう動くか――。

そんな先のことを考え始めた魔理沙に、鬼が言った。

「よしっ！ では、最後の仕上げじゃ！ ワシの首を持っていくがよいー！」

「……いや、要らないよ！ そんなもん！」

「なぬっ!? そんなもん、とか言うでない！ 鬼の首じゃぞ？ 人間にとっては最高の手柄じゃろうが！」

「何時の時代の話だよ!? 爺さんの生首とか回収したって、魔法薬の材料にすらならないぜ！」

「な、なんと……これも時代の変化か……っ」

鬼は嘆くように言った。

心なしか、体の方も萎れてしまったかのように小さく見える。

しかし、魔理沙にとっては本当に対応に困る提案だった。

首を獲ること自体もそうだが、この鬼を殺す気には、どうしてもなれなかった。

勝負は決し、鬼は敗者となったのだ。

ならば、それでいいではないか。

そこから先を、望む必要も無い。

鬼の言葉を借りるなら、それ以上は『楽しく』ない――。
少なくとも、そう考えていた。

「ならば、仕方ないのう……」

そんな魔理沙の内心を尻目に、肩を落としたまま、鬼は渋々呟いた。

「魔理沙が拘らんと言うのなら、横取りにもならんじやろう。納得い
かんが、ワシの首は『貴様』が好きにせい」

「……爺さん？」

訝しげな表情の魔理沙に、鬼は曇りの無い笑顔を向けた。

「それでは、達者でな。霧雨魔理沙――」

魔理沙は眼を見開いた。

視界に映る、鬼の満面の笑み。

その頭上に迫る、黒い影。

影の中に光る一筋の輝き。

「最期に、いい勝負じゃった！」

そう、言い終えた。

その次の瞬間に、鬼の首は胴体から離れていた。

真上から落ちてきた高速の剣閃に、笑みを浮かべたまま鬼の首は斬り飛ばされたのだ。

魔理沙は叫んでいた。

何故かは分からないが、眼の前の光景に対して、言葉にならない声が溢れていた。

声の限り絶叫することで、その光景が否定されると思い込んでいるかのようにだった。

しかし、見開いた魔理沙の眼の前で、首を失った鬼の胴体がゆっくりと落下していった。

夜の闇で見えない地上へと、消えていく。

首の方は、空中に留まっていた。

その首を切断した刀が、耳から頭を貫き、固定していた為だった。

魔理沙は、その刀の持ち手を睨み付けた。

「妖夢——！」

その視線と声には無意識の敵意が込められていた。

魂魄妖夢は、それを表情一つ変えずに受け流した。

其の三十三「萃鬼」

——お前は『博麗霊夢』だ。

そう、覚えている。

私が、最初に霊夢に話しかけた時の言葉が、これだった。

本当に、最初の最初。

赤ん坊だったあの子を、拾い上げた時に言ったんだ。

何処だったっけ？

確か、小さな集落で妖怪退治をした帰り道だったと思う。

吸血鬼異変の後、病み上がりだった体でこなした仕事だった。

別に、キツイ仕事だったわけじゃない。

妖怪は、はつきり言つて雑魚だった。

その帰り道だった。

道端のお地藏様の傍に、赤ん坊だった霊夢は捨てられていた。

集落から、幾らも進まない内に見つけたのだ。

私は、その赤ん坊と歩いてきた道を何度も交互に見て、迷った。

捨てられていた赤ん坊と、すぐ近くにある集落——その関連性を、

幾通りも推測しようとした。

そうしている間、赤ん坊は私の腕の中でじつと黙っていた。

眠つてはいなかった。

親でもない得体の知れない女の、傷だらけの腕に抱かれて、あの子

はただじつと私を見上げていたのだ。

私は、意味の無い推測をやめた。

この子を捨てた親について、その心境と行動について、考えること

をやめた。

そして、私はその赤ん坊に、そう名付けたのだ。

果たして、あの子は『博麗霊夢』だった。

私の判断に間違いはなかった。

しかし、今でも疑問に思うことはある。

何故、あの時。私はあの赤ん坊が『博麗霊夢』だと思つたのか？

いや、違う。

霊夢だと分かっていたから、あの赤ん坊を拾ったわけじゃない。あの子を霊夢として育てようと思ったから、そう名付けたのだ。多分。

分からない。

今思い返すと、自信が無い。

どっちが先だったのだろう。

あるいは、あの時何か運命の力のようなものが作用して、霊夢は『博麗の巫女』という立場に収まったのではないか。

そんな風にも考える。

運命。

素敵な言葉だ。

時が過ぎた、今だから出来る表現なのかもしれない。

あの子の母親としてやってこれた経験があるから、言えるのかもしれない。

成長した霊夢を今見ているから、昔を語れるのかもしれない。

だけど――。

だけど、絶対に忘れちゃいけないことがある。

――私は最初、母親でも何でもなかったのだ。

――私は最初、霊夢を自分の子供だと思って育てようとしたわけじゃなかったのだ。

私が母となり、霊夢が娘となったのは結果だ。

今の私なら絶対の自信を持って答えられることを、きつとかつての

私は即答出来ないだろう。

霊夢は、本当に手の掛からない子供だった。

赤ん坊なのに、泣き喚くことはほとんどなかった。

だけど、間違いなく脆弱な赤子だった。

そんな当たり前のことも、当時の自分は分かっていたいなかったのだ。ほら、見ろ。

眼を背きたい過去の醜態が、映っている。

熱を出した子供を抱えて、どうすればいいのかも分からず、うろたえるだけの愚図が居る。

小さな子供を育てるということを、軽く見ていた馬鹿野郎だ。

育成ゲームとは違う、一つの命が自分に委ねられているという責任と現実の重さを理解していなかった阿呆だ。

自分が『母親』だと自覚していなかった無知の罪人だ。

「紫、助けてくれ」

結局、あの時私は他人に泣きついたので。

咄嗟の判断ですらなく、闇雲に神社の中で叫んだ助けを呼ぶ声に、偶然紫が気付いてくれたのだ。

霊夢は助かった。

親を自称する者の曖昧な愛情などではなく、紫の持つ医学的知識によつて助かった。

容態の落ち着いた霊夢の寝顔を見て、私は泣いた。

多分、初めての経験だったと思う。

少なくとも、この世界で初めて私は泣いた。

鉄のように固まった表情を動かさず、ただ一筋だけ、それでも私は涙を流した。

安心したのかもしれない。

悔しかったのかもしれない。

情けなかったのかもしれない。

全部ひつくるめて、泣いたのかもしれない。

ただ、あの時。

私は思い知った。

——これまでの自分では駄目だということ。

物心ついた頃に過ごした妖怪の山での生活が、私にこの世界で生きる実感を与えた一つ目の節目だとしたら、霊夢と共に生きた日々は二つ目の節目だった。

それまで自分の為に生きていた。

いつ死んでもよかったし、気の済むまで生きればよかった。

だけど、他人の為に生きる道もあることを知った。

霊夢の母親になろうと努力した。

あの子を愛している。

あの子の為になることをしたい。

あの子の為に生きたい。

それが母親として、本当に正しい姿勢なのかは分からない。

誰も教えてくれない。

私だって知らない。

だって、私は『母親』という存在を知らないから。

その存在が、どんな姿をしているのか、どんな考え方をしているか、どんなことを子供にしてくれるのか——私は知らないから。

何もかも手探りの中で、不恰好に、悪戦苦闘していく以外になかった。

食事を与え、教義を与え、技術を与え、そして愛情を与え——自分の持つありつたけのものを、霊夢に与えることしか思いつかなかった。

『お前が紫様と共に生きることを選んでさえいれば、少なくとも私は

——』

ああ、そうだな。

無理だ。

無理だよ。

霊夢に会う前の私なら、それが出来たかもしれない。

でも、今の私には、もうそれは出来ない。

『永遠の時間を生きることが、人間以外のものになることが、怖かっただけなんじゃないの？』

怖いさ。

想像だつてしたくない。

私より先に、霊夢が老いて死ぬんだよ。

皺くちやのおばあちゃんになってしまった娘を、母親が看取ることになるんだよ。

『周りの人や妖怪、そして何よりも娘を裏切つて、全てのしがらみを捨ててくれたのなら——』

出来ない。

分かつてる。

分かってて、そう言っているんだよね。

だから、私のことをずっと嫌いなままなんだよね。

そうさ、それで間違いない。

一つの生き方を選ぶことは、他の生き方を選ばないってことなんだ。

その道に関わる人達の期待に応え、逆に別の道に居る人達を見限るってことでもあるんだ。

誰も彼もに好かれることなんて、出来るはずがない。

ゲームじゃないんだ。

ハーレムルートなんて、都合の良いものは存在しない。

だから、いいんだ。

嫌われていい。

でも、私が好きになる分はいいだろう。

私が全員好きでいる分には問題ないはずだ。

文句なんて言うなよ。

なあ、藍。輝夜。

二人だけじゃない。

愛してるんだ、この世界を。

ただ、それでも。この世界の中心でどっちつかずのまま、宙に浮いているわけにはいかないだけなんだ。

しがらみや、立場があつてこそ、人間だから。

そして、私は霊夢の母親だから。

そうありたいから。

そう決めたから。

だから、きつとこの生き方で正しい。

……正しいよね？

教えてよ。

「——お母さん」

「ぶっふおっ!?!」

目が覚めると、一番最初に視界に入ったのは、盛大に吹き出す文の顔だった。

◆
博麗神社で動く鬼は、もはやたった一匹だけしか残っていないなかった。

その鬼も膝を着き、既に虫の息である。

眼前に立つレミリアに殴りかかる両腕も無い。

睨みつける眼さえ、右側しか残っていなかった。

「恐るべき奴よ……！」

まるで無造作にばら撒いたかのように散らばる仲間の屍を一瞥して、血を吐きながら呻く。

腹に受けたレミリアの一撃が致命傷となっているのだ。

トドメを刺すまでもない。

鬼は、己の死を悟った。

「俺も、ここまでか」

「ふうん。懇願するのならば、介錯とやらをくれてやるぞ？　貴様らの価値観では美德なのだろう、こういうものは」

潔い鬼の言動に対して、レミリアの浮かべる表情は何処までも嘲笑である。

鬼は憎しみを滾らせて、レミリアを睨んだ。

「……敗者の俺がどう吠えても、見苦しいだけだろう。だが！　忘れるな、俺達鬼は——」

言い掛ける鬼を遮るように、レミリアが一際大きな哄笑を上げた。

おぞましく、下卑た、悪魔の笑い声である。

「いいや、忘れる」

「何!？」

「負け犬には名前すら不要。貴様を含めた、私に倒された者ども全て、有象無象として死んでゆくのだ」

「き、貴様……っ！」

「不満か。では、何か？　お前ら鬼は、私から称賛の一つでも期待して死んでいったというのか？　その言葉で自分を慰めながら、安らかに

死んでいくのが望みなのか？」

レミリアの浮かべる亀裂のような笑みを睨みながらも、鬼はぐうつと言葉を呑み込むしかなかった。

まるで自分の言葉を恥じるように、何も言えなくなってしまうのだ。

胸を掻き毟りたくなるような憎しみや悔しさを噛み潰して、耐え、やがて鬼は食い縛っていた口元をゆっくりと吊り上げた。

堪えている内に、自然と笑みが浮かんできたのである。

「……確かに、お前の言うとおりだ」

「では、私に何かを望むか？」

「いや、敗者が勝者に望めることなどない」

「そうか。ならば、そのまま死ね」

「おう。死ぬ」

「貴様個人のことなど忘れるが、このレミリア・スカーレットの栄光を示す歴史の一つとして刻んでおいてやろう。『かつて』最強と謳われていた鬼どもを蹴散らした、我が偉大なる戦歴としてな」

「くくっ、何処までも傲慢な……しかし、気持ちの良いくらい豪胆な奴よ」

鬼は、最後の力を振り絞って立ち上がった。

傷口から血が噴き出し、口からも大量に吐血する。

血の海となった足元を、しっかりと踏み締めて、鬼はレミリアと真っ直ぐに向き合った。

「レミリア・スカーレット！ 例えお前が忘れようと、俺達は地獄に落ちてもお前のことを忘れぬぞ——！」

血塗れの凄惨な笑みを浮かべながら、鬼は断末魔のように声を張り上げた。

そして、そのまま絶命したのである。

その宣告は、不思議なことに憎しみよりも誇らしげな響きを持っていた。

立ったまま絶命した鬼の姿を、しばらくの間見つめていたレミリアは、やがて踵を返して、同じように戦闘を終えた紫達の方へと歩み

寄っていった。

その顔には、既に嘲笑は浮かんでいなかった。

一変して、惘然とした表情だった。

「無事で何より。疲れたかしら？」

紫が笑いながら尋ねてくるのを、不機嫌そうに睨み返す。

「疲れた。お前らが全然働かないからだ」

「だって、皆貴女の方に行っちゃうんですもの」

「やっぱり若いとモテるのかしら？ 羨ましいわあ」

飄々とした紫と幽々子の態度に、レミリアはますます不機嫌な表情へと変わっていった。

博麗神社を襲った鬼のほとんどを三人で迎え撃ったが、その戦況には酷く偏りがあった。

多くの鬼達が、何故かレミリアへと戦いを挑んだのだ。

もちろん、紫も幽々子も攻撃の手を休めなかったが、結果的にレミリアが鬼の強大な力を何度も正面から受けることになった。

吸血鬼の不死性によつて、今も完全に無傷の状態だったが、消耗が無いわけではない。

レミリアが理不尽を感じるのも自然のことだった。

加えて、そうした鬼達の行動の理由が分からないことも、不機嫌に輪を掛けている。

何か戦略的な意図を持って、攻撃を集中させていたとは思えない。

——となると、幽々子の口にした『モテる』という戯言も、可能性の一つとして納得出来ないこともないから、レミリアはますます不機嫌になっていくのだった。

詰まるところ、鬼達はただ単に好き好んでレミリアの方に喧嘩を仕掛けたということである。

しかも、二人はそれを分かった上でからかおうとしている。

レミリアは内心の忌々しさを表情に出さないように押し隠すと、紫に向かつて不敵な笑みを浮かべた。

「おい、顔に何かついてるぞ。妖怪の賢者殿」

レミリアは紫の頬を指して言った。

右の頬に、赤い筋が浮かんでいる。

血が流れ出さない程度の浅いものだったが、それは鬼によつて付けられた切り傷だった。

鬼とはいえ、格下の妖怪相手に、これは明らかかな不覚であった。

しかし、紫はその指摘に僅かな動揺すら見せずに微笑む。

「あら？　泥でも跳ねたかしら」

「戦いの最中に気を散らすから、そんな泥も避け損ねる」

レミリアは、先程の戦闘中に紫が一瞬隙を見せたことに気付いていた。

その理由までは分からない。

紫だけが分かる何かの事態を察知し、ほんの僅かに動揺したらしいことまでは推察していた。

もちろん、紫はその理由も動揺の意味も語らなかつた。

「恐縮ですけど、拭っていただけるかしら？」

挑発的に笑い、紫は腰を曲げてレミリアに顔を近づけた。

レミリアもまた、笑みを崩さぬまま、その挑発を受ける。

肩から零れ落ちるように伸びた金髪を掴むと、それを引っ張って、

乱暴に紫の顔を更に引き寄せた。

傷のついた頬に口を寄せると、舌で僅かに滲んだ血を舐め上げた。

舌が這つた後には、傷痕が無くなっていた。

レミリアが治したわけではない。紫自身の治癒である。

ちよつとしたお遊びを終えた二人は、ゆっくりと互いの顔を離れた。

「なんて不味い血だ」

レミリアはこれ見よがしに、口に含んだ紫の血を地面に吐き出した。

紫はそれでも態度を変えず、飄々とした笑みを維持している。

「まあ、酷い」

「熟しすぎたワインみたいに酸っぱかった」

しかし、付け加えられた一言を聞いて、紫の笑みが僅かに引き曇つた。

背後の幽々子が『ぶふっ!?!』と、不意打ちを堪えきれずに嘔き出す。それを聞いて、紫の額に青筋まで浮かんだ。

自らの反撃が成功したことにささやかな満足感を得たレミリアは、今度こそ心からの笑みを浮かべたのだった。

恨めしげに睨みつける紫の視線を誤魔化すように、幽々子は咳払いを一つ挟んで、話題を変えた。

「とにかく、レミリアの活躍でこの辺りの鬼は退治出来たようね」

「私は、貧乏くじを引かされた気分だけどね」

「貴女に倒された鬼達は、貴女に惹かれたのよ。貴女の心意気が、彼らを最期の戦いに挑ませたの」

「分かっているわ」

「やっぱり、若さかしらねえ」

「くだらないことを言うな」

付き纏うようにならかう幽々子を、レミリアは鬱陶しそうに振り払った。

言葉だけを見れば、年長者が若輩者の未熟を揶揄するような内容である。

しかし、それは純粹なじやれ合いによるものだった。

少なくとも、宴会の時まで紫達がレミリアに抱いていた、格下を見るような蔑みの意図は欠片も無い。

今や、紫はレミリアに対して一定の敬意を払っていた。

此度の件を介して、それに値する存在なのだと、認めたのだった。

機嫌を直した紫を含めて、三人の視線は、自然と残された者達へと移っていった。

敵である鬼は、既に全滅している。

その屍の中に、伊吹萃香の物は無い。

逃げたか、あるいは倒された後に姿を消したか――。

少なくとも、レミリアは萃香と戦った記憶は無く、また先程の戦いで彼女が死んだとも思っていないかった。

異変は、まだ終わっていない。

その確信があった。

敵の居なくなった神社の境内において、レミリア達三人を除いて残っているのは、離れた位置に居る他の三人だけである。

アリスと勇儀、そしてさとりだった。いずれも、無傷である。

「御三方とも、ご無事で何よりですわ」

紫はアリスと、そこから少し離れた位置に居る勇儀とさとりに向かって言った。

しかし、その言葉は形だけのものである。

レミリアに向けて同じようなことを言ったが、中身は全く異なっているように響いた。

特に、さとりに向ける視線はあからさまである。

傍で見ているレミリアと幽々子にも分かるほど、紫はさとりに意識を集中していた。

他はほとんど眼中に無い。

ほとんど警戒に近い、深い観察の視線をさとりに向けていた。

「——これは?」

注意深くさとりの反応を伺っていた紫は、すぐさま違和感を察知した。

それは、紫の全く予想していなかった異常だった。

今回の鬼の起こした異変に古明地さとりが関わっているかもしれない、という疑いは、紫が事前に抱いていたものである。

もっと漠然としたさとり自身への不信感も消えてはいない。

むしろ、今回の事を経て、大きくなっている。

だからこそ、さとりが紫の言動に対してどのような反応を見せようが、まず疑って掛かる方向へ無意識に傾いてしまっていたが、そんな心構えを嘲笑うかのように、事態は彼女の予想を超えていた。

眼の前に映る古明地さとりの姿。

それが『本当のさとりのものではない』と、紫は気付いたのだった。

「あら、やだ。その二人本当に生きてる?」

「……いや、待て! これは人形だぞ!」

幽々子とレミリアも、すぐさま勘付いていた。

騒ぎ立てる周囲に対して、当のさとりと勇儀は——正確には二人の姿形をしたモノは——全くの無反応だった。

視線さえ、寄越さない。

見た目こそ、さとりと勇儀そのものにしか見えない精巧な姿だったが、そこに魂や意志といったものが宿っていないことを、紫達は見抜いていた。

三人はそれだけの实力がある。

つい先程まで、その事実気付かなかったのは、鬼との戦いがあつたからだ。

少なくとも、鬼との戦いが始まる前までは存在していた、本物のさとりと勇儀を偽物に摩り替えたのは、この戦いの間以外に在り得ない。

そして、それが可能が立場と技術を持っていた者は、一人しかいなかった。

「人形を用いた魔法か」

レミリアが、アリスを鋭く睨みながら断定した。

魔法使いの友人を持つが故に、その方面の技術には多少の見識がある。

答えるように、アリスは無言で片手を動かした。

指先の動きに合わせて、さとりと勇儀の体が崩れ落ちた。

繋ぎ止めていた見えない糸が切れたかのように、四肢がバラバラに離れ、文字通り地面に崩れて、落ちたのである。

不可思議なことに、地面に積み重なったその残骸は、どう見ても人工的に作られた人形のそれであった。

頭のパーツには精巧な表情はもちろん、髪や目玉さえ備え付けられていない。

それらを、さとりと勇儀の外見に装い、紫達を欺いていたアリスの魔法の技術は、恐るべきものだった。

三人がそれぞれ、大なり小なり内心で戦慄する中、アリスは注目に晒されながらも、淡々と人形の残骸を片付けていった。

「……見事な、技ですこと」

「ありがとう」

紫の呻くような称賛に、アリスは素直に応えた。

片手に人形を仕舞ったトランクを持ち、すっかり仕事を終えた様子である。

感情を表さない人形染みた顔付きからは、その意図が紫にさえ、全く読めなかった。

「古明地さとりと星熊勇儀。二人を、人形と摩り替えて、この場から逃がしましたね」

紫は尋ねなかった。

ただ、断言した。

「そうよ」

アリスは当然のように答えた。

「さとりの命令で？」

「いいえ。私が提案したわ」

「貴女に、さとりを逃がす理由がありますか？」

「アナタがさとりのことを疑っているからよ。ここに残れば、色々ややこしい話をすることになる」

「私は、事を明らかにしておきたいだけですわ」

「アナタが『真実だから善』と判断するタイプではないことくらい分かっているわ。さとりにとって重要なのは、今の状況が有利か不利かだけよ。彼女には身の安全の為、一先ず地底まで帰ってもらうことにしたの」

「ふむ。随分、さとりの肩を持ちますわね。貴女は、彼女の味方なのかしら？」

「ええ、今はね」

「以前から、彼女と密かな交流がありましたか？」

「いいえ」

「貴女は、古明地さとりの部下、もしくは仲間ですか？」

「いいえ」

互いに、淡々とした応答だった。

いつの間にか、紫は話題の中から勇儀の存在を省き、さとりのこと

のみを対象として挙げて話している。

それにアリスも気付いていながら、全く淀みなく受け答えをしている。

紫は、眼の前のアリス・マーガトロイドという魔法使いとの対話に、予想以上の手強さを感じていた。

会話の中に、虚実を交えた駆け引きがあるようには思えない。

だからこそ、アリスの心の内を探り辛い。

アリスという魔法使いの存在も、それをいつの間にか味方につけていたさとの行動も、何もかもが周囲の虚を突いていた。

——これはなんとも、想定外のことばかりね。

古明地さとりに関わる物事は、常にこればかりだ。

厄介極まりない。

紫は、内心でため息を吐かずにはいられなかった。

「何故、さとの味方をするのかしらね？」

「彼女とは、まだ話したいことが多くあるからよ。それには、この場は少し騒がしすぎる」

独り言のような紫のぼやきに、アリスは律儀にも答えていた。

それが嘘か真か。

疑うことが面倒になって、紫は追及を放棄した。

現実として、話題の当人であるさとりは、まんまとこの場から逃げおおせてしまったのだ。

しかも、それが本人が後ろ暗いところがあって逃げ出したのではなく、アリスの判断と提案によつて、促される形で行われたのだから、あまり悪いように捉えるわけにもいかない。

さとの思惑を探っていた所へ、アリスの思惑が絡んで、事態を複雑にしてしまった。

さとりへの不信感と疑念は残ったままだが、何一つ決定的な結論は無く、疑いは疑いのまま残っただけである。

そして、それを長々と考察も追及も出来ない状況に、今は陥っているのだ。

鬼の異変は、まだ終わってはいない。

そちらの方が、今は優先すべき事柄である。

——あるいは、それも計算に入れてのことなのか。古明地さとり。ああ、まったくもう。

紫ほどさとりを深く疑ってはいないレミリアと幽々子が、黙り込んだ紫を不思議そうに見つめる。

結局、紫はさとりに関わる全ての問題を、一時的に棚上げするしかなかった。

「伊吹萃香を、追いましょう」

紫はアリスから視線を外して、レミリアと幽々子に告げた。

旧知の幽々子はともかく、レミリアは二人のやりとりが唐突に切り上げられたことや、その意図が分からず、何かと不満気な表情である。

しかし、紫の提案に乗るように歩み寄るアリスを見て、困ったように頭を掻いた。

これで、アリスが逃げるようにこの場を去るのなら、幾らか反応のしようもあるが、まるで先程のやりとりなど無かったかのように澄ました顔で残っている。

さっきの意味ありげな会話は何だったんだ、と。レミリアは眉を顰めて黙り込むしかなかった。

アリスに改めて何かを尋ねるのも億劫に感じた。

そもそも、その『何か』が具体的に何なのか、レミリア自身にも分かっていない。

「……それで？ 本物の伊吹萃香が何処に居るのか、アンタは分かっているのかしら？」

結局、レミリアは紫に対して、そう尋ねるしかなかった。

「ええ。彼女は、おそらく人里で待っているわ」

「待っている？」

「ええ」

紫は確信を持って答えた。

「彼女は、私達が集まるのを待っている」



魔理沙と妖夢。

対峙する二人の硬直が解けたのは、すぐのことだった。

正確には、妖夢の方が先に動いていた。

魔理沙は動きも視線も固まったまま、妖夢を睨みつけるだけである。

妖夢は長刀と、それよりも僅かに短い刀を両手に持っていた。

鬼の頭を串刺しにしているのは、長刀の方である。

妖夢は、その刀身に這わせるように、短刀を横へ滑らせた。

先端に突き刺さった鬼の頭に刀が当たり、そのまま刀身から引き抜く。

引き抜くだけではなかった。鋭い横薙ぎによって、鬼の頭は真一文字に両断されていた。

刀身から離れ、空中に投げ出された二つの塊を、更に駄目押しとばかりに、縦にも両断する。

四つの塊に割られた鬼の頭は、そのまま胴体を追うように、夜の闇が満ちる地上へと落ちていった。

その一連の動きを、魔理沙は見開いた眼で見っていた。

歯を食い縛り、拳は知らず力を込めて握り締めている。

妖夢の所業に、魔理沙は強い怒りを覚えていた。

——何故か？

鬼は、敵である。

ついさつき、魔理沙も命懸けで戦った相手である。

何を怒る必要があるというのか。

魔理沙は自覚せずに、怒っていた。

「……なんでだ？」

魔理沙は押し殺したような声を洩らした。

「なんで、あの爺さんを斬った？」

「爺さん？ 先程の鬼のことですか」

妖夢が刀を鞘に納めながら問い返す。

「そうだ。なんで斬った!？」

「隙があったからです」

「当たり前だろ！ あの時、もう決着はついてたんだ！」

「決着とは、貴女とあの鬼との勝負のことですか」

「そうだ！」

「確かに勝負は終わっていました。ならば、あれは後始末です」

「なんだと!？」

「別に、あれを自分の手柄などと吹くつもりはありませんから、安心して下さい」

妖夢の見当違いの配慮を振り払うように、魔理沙は殊更大きな声で叫んでいた。

「殺す必要なんてなかった！」

「鬼を生かしておく必要はありません」

「わたしがっ、殺すなって、言ってるんだっ!!」

腹の底から搾り出すような叫びだった。

理屈は無い。

理由も自分で分からない。

あの鬼の死自体を、そこまで深く悲しんでいるわけでもない。

ただ、妖夢の行いと、それを当然だと思っている彼女の態度に、心底怒りと苛立ちを抱いているのは確かだった。

慟哭のような魔理沙の叫びを聞いた妖夢は、しばらく呆けたように見つめた後、ふっと表情を消した。

魔理沙を見る眼が明らかに変わっていた。

完全な蔑みの視線である。

「……そうでしたか」

妖夢の受け答えは、気の抜けた単なる相槌以上の意味を持っていなかった。

目の前の人間を、もはや吠える野良犬程度にしか認識していない。取るに足らないものを見る眼つきだった。

「それは、申し訳ありません。では、私はこれで」
「待てよ」

手っ取り早くこの場を離れようとする妖夢を、魔理沙が呼び止め

た。

「……私は、貴女と違って忙しいのですが」

その態度と口振りから、妖夢が今の自分をどう捉えているのか、魔理沙は察していた。

しかし、冷たい視線を歯牙にも掛けず、自らの要求とスペルカードを共に突きつけた。

「わたしと、勝負しろ」

「私は『忙しい』と言ったんです」

「鬼退治の仕事か？」

「そうです」

「それは、本当にお前がやりたいことなのか？」

「やりたい、やりたくない、ではありません。幽々子様から仰せつかった大切な用事なのです」

「言われるままにやってることだろ？ お前自身、誰かを助けたいとか守りたいとか、その為にさっきの鬼を斬ったわけじゃないはずだ」

「それがどうかしましたか？」

「以前、冥界で初めて会った時は、霊夢とだけ勝負をして、わたしはしてなかったよな。ここで続きをしようぜ」

「……いい加減にしろ」

妖夢の口調と表情が変わった。

苛立ちを、殺気と共に表に出し始めている。

殺気は、魔理沙に対する威圧と警告だった。

「お前が何を考えているのか知らないし、興味も無いが——それで挑発のつもりか？ お前のようなどうでもいい相手と、時間を無駄にしている暇は無いと言っている」

言いながら、刀の鞘に片手を掛けている。

明らかかな脅しだった。

近づいてきた野良犬に、ドンツと地面を踏み鳴らして追い払うのと同じ意味を持つ仕草だった。

少なくとも、妖夢にとって目の前の魔理沙はそれと同等の存在だっ

た。

そんな妖夢の反応に、魔理沙は僅かに汗を滲ませながらも、口元を吊り上げていた。

「私がお前を本気で抜かないと思っっているのか？」

「……………いや」

「私はお前を本気で鬱陶しいと感じている。かといって、殺すのも後が面倒だ。腕一本、足一本斬り落とすのが最も手早く、妥当かと考えている」

妖夢は自らの胸の内を、ありのまま説明するようにゆっくりと語った。

そして、それが事実なのだ、魔理沙は悟っていた。

笑っているのは、強がりではない。

目の前の、まだ刀を抜く体勢にさえ入っていない妖夢が、恐ろしい。恐怖が体にも伝わり、小さく震えている。

妖夢の剣術は、つい先程生き試しによって目の当たりにしたばかりだ。

自分の弾幕で傷一つつけられなかった鬼の肉体を、切断してみせた。

隙があつたとか、相手が既に戦意を喪失していたとか、そういった精神的な要因も無いわけではないが、鋼鉄に等しい鬼の首を一撃で叩き斬った実力は本物だ。

なにより、妖夢には躊躇が無い。

今の段階でも、挑んだ側であるにもかかわらず、殺し合いではない純粋な弾幕ごっこによる勝負を想定している魔理沙に反して、妖夢の方は自らの口にした行動を実行する覚悟を持っている。

あと、数言——会話の進め方を間違えれば、その瞬間妖夢は刀を抜く決断に踏み切るだろう。

魔理沙の手か足を斬り落とすことを躊躇わないだろう。

そして、その時にそれを避けられるという絶対の自信が、魔理沙には無かった。

——殺し合いになった場合、わたしは妖夢に勝てるのか？

勝てるわけがない。

だから、怖い。

それをよく分かっている。

分かっているが、魔理沙は笑っていた。

「さあ、そこをどけ。野良犬、噛み付く相手を間違えるな」

「嫌だね」

魔理沙は舌を出した。

「間違えちゃいないさ。わたしは、たった今、お前とどうしても勝負したくなっただ」

「今がどういう事態なのか、理解出来ないのか？」

「鬼の異変のことか？ だったら、わたしには関係無いね。幻想郷の何処で、誰が暴れようが、知ったことじゃないぜ」

「見下げ果てた奴だな」

「生憎と、わたしは見知らぬ誰かの為に戦えるような器じゃなくてね。お前はどうか？ お前は、幻想郷の平和や人里の平穏を脅かす奴らを許せないって正義感で動いてるのか？ 違うだろ」

「少なくとも、お前よりも正当な目的で動いている」

「正しいとか、間違ってるとか、関係ないんだよ。わたしは、ただ自分に納得のいく勝負がしたいだけだ！」

「——駄犬が。言葉も解さぬか」

妖夢がもう片方の手を、刀に添えた。

魔理沙は勝負を仕掛けた。

弾幕の勝負ではない。

言葉の勝負である。

「お前も同じだろ？ 魂魄妖夢」

「何!？」

「同じ霊夢に負けた犬同士、どっちが上か決めておきたいんだよ。わたしは」

妖夢の眼の色が変わった。

固く結んだ唇の内側で、噛み締めた歯が鳴る音を、魔理沙は聞いたような気がした。

もはや、妖夢が魔理沙に対して抱く感情は明白である。

妖夢の殺意は、怒りと苛立ちによつて高まっていた。

奇しくも、精神的な面において妖夢は魔理沙と同じ位置にまで来てしまったのである。

もう、目の前の存在を無視することなど出来ない。

「貴様……っ！」

魔理沙の言葉は単なる音として聞き流されることなく、致命的な意味を持って妖夢のトラウマに直撃していた。

もはや当初の見下すような視線も、余裕の態度も無い。

冷徹な仮面は、無残にも崩れ落ちている。

燃え滾るようなものが瞳に宿り、その眼で魔理沙を睨み、更にその先に幻視した霊夢を睨んでいた。

「なあ、妖夢。お前が霊夢にコテンパンにやられた時、わたしは他人事だったよ。あいつの横に並んで、お前を見下ろしてた。

でも、違うんだな。わたしはあいつと並んでなんかいなかったんだ。他人事じゃなかったのさ。——今、分かったよ」

妖夢の殺気が届いていないかのように、魔理沙は続けた。

自分にも言い聞かせているような独白に近い呟きだった。

「てっぺんはもう決まってるのさ。そこから下に大した違いはないんだ。だけど、目クソと鼻クソ、どつちがマシなのかくらいは決めとこうぜ、妖夢」

「……取り消せないぞ」

妖夢は引き剥がすように刀から手を離し、代わりにその手で懐からスペルカードを取り出した。

「もう、取り消せないぞ。お前を、無様な負け犬にしてやるっ！ 霧雨魔理沙!!」

自分が、魔理沙の挑発にまんまと乗ってしまったことを、妖夢は自覚していた。

魔理沙を、このまま刀で斬ることは容易い。

腕の一本も失えば、目の前の人間は憐れに許しを乞うかもしれない。

——しかし、それでは意味が無い。

——自分にとって、意味が無い。

——『勝負』で負かさなければ、意味が無い！

妖夢は、そんな自分の行動が魔理沙に誘導されたものだと自覚していた。

その上で、あえて魔理沙との勝負——彼女の望む『弾幕ごっこ』——に臨むことを決意したのだった。

かつて致命的な敗北を喫した霊夢との勝負が、その弾幕ごっこだったからという理由がある。

しかし、妖夢は最も肝心な部分を不明瞭なまま自覚せず、疑うことさえしていなかった。

——何故、意味が無いのか？

——何故、自分が納得できないのか？

自分の把握出来ない内側の部分で、妖夢自身の勝負はとつくに始まっていたのだった。

一方の魔理沙も、自らの行動を把握し切れていない所があった。

妖夢に勝負を挑もうと思ったのは、彼女があゝの鬼を斬ったからではない。

少なくとも、それだけは断言出来る。

あの時の怒りや苛立ちで突つかかるほど、短絡的ではない。

では、何なのか？

分からない。

ただ、ひたすらにあの時は——納得がいかなかった。

それだけは強く感じていた。

感情である。

妖夢と戦う必要性は無い。

そこまで考えて、魔理沙は思考を放棄した。

必要や義務といった部分に考えが及ぶ前に、感情を優先して行動した。

それが正しいとは思わなかった。

それで良いとだけ思った。

妖夢を挑発するついでに語った、霊夢に関わる自身の心境が理由の一部ではある。

しかし、もっと他の部分もあるはずだった。

それが何のなのかは分からない。

分からないまま、勝負が始まろうとしている。

迷いだけは無かった。

あの鬼と対峙していた時のような、恐怖や勝算の有無による躊躇というものが生まれなかった。

一度、命懸けの勝負を経験し、尚且つそれに勝利したおかげかもしれない。

——勝利。『あの鬼』との勝利。

ここに至って、魔理沙は唐突に気付いた。

あの鬼の名前を、自分は知らない。

それを自覚すると、突然別のことにも気付いた。

先程から思い返す度に、あの鬼の顔が漠然としか脳裏に浮かばないのだ。

老いた顔付き、というイメージだけが先行し、詳細が思い出せない。

つい先程のことなのに、もう思い出せない。

そして、その事実が別段ショックでもなんでもないので。

考えてみれば、当然のことだった。

相手は敵だったのだ。

自分を食い殺そうとしていたのだ。

妖夢に殺されたからといって、怒りを抱く義理も無いような相手なのだ。

悲しくだって、ない。

なのに——。

——納得いかないよ。

魔理沙は唇を噛み締めた。

——爺さん。なんで、死ぬ前に名乗ってくれなかったんだよ。

——あんたの名前、訊いてないよ。

——これじゃあ、わたし忘れちゃうよ。

——あんななんかより、凄い奴らがわたしの周りにはゴロゴロいるんだ。特に、同じ人間のクセにとんでもないのが友達にいてさ。

——わたしの記憶の中で、名前も知らない鬼のことなんて、そんな名前のある奴らに呑み込まれちゃうよ。

悲しくは無いのに、魔理沙は泣きそうになるのを堪えていた。

何故、こんな気分になるのか自分でも分からない。

しかし、この心に根付く、正体の掴めない何か、今の自分を突き動かしている。

目の前の、スペルカードを発動する妖夢との勝負に挑み、それに勝利することを強く欲している。

「わたしは、負けないさ」

妖夢の言葉に応えるように、魔理沙は呟いていた。

ただ一つだけ分かっていることがあった。

何を、かは分からない。

誰に、かは分からない。

「勝負だ、妖夢——！」

ただ自分は今、証明する為に戦うのだ。

それは妖夢も同じだった。



——地下図書館に残存していた鬼達は、咲夜がパチュリーの援護に回った瞬間、一掃された。

咲夜が滑り込むように図書館に現れ、手近な鬼目掛けてナイフを二本投げつけた。

狙いは二つの眼球である。

全く遠慮も容赦も無い狙いだった。

そして、その攻撃はそこまで精密な狙いなど必要なかったのではないかと思うほど、あっさりと当たった。

それだけだった。

恐るべきことに、剥き出しの眼球に当たったナイフの刃さえ、鬼を

傷つけることが出来なかったのである。

眼に砂が入った程も気にせず、その鬼は咲夜に向かって反撃した。口から吐き出した火球を、咲夜は舞うような動きで回避し、素早くパチュリーの傍らに控えた。

鬼達は、その人間が敵の援軍なのだ と理解した。

それが何の問題にもならないと、判断した。

その次の瞬間である。

鬼達の目の前に、魔力で形成された巨大な火球が迫っていた。先程吐き出した火球の数倍はあろうかという熱量の塊である。

——日符『ロイヤルフレア』

パチュリーの発動したスペルカードが、鬼達を飲み込む寸前だった。

「な、なんだとお!？」

不可解な叫びを上げる以外に、何の猶予も鬼達には残されていなかった。

これほどの魔法を行使するのに、何の前動作も溜めの時間も存在しなかったのだ。

咲夜に一瞬意識が向いていたとはいえ、眩い程の光と熱を放つ火球を、肌で感じる距離まで気付けなかったのである。

鬼達は、何も分からぬまま、魔の劫火に飲み込まれた。

炸裂した炎は、しかし、鬼達だけを包み込むように、一定の範囲から外へ拡散しない。

事前に、標的を囲むように設置された結界の中に、火球が放り込まれたからだった。

もちろん、その『事前の結界』が何時作られたものなのか、鬼達は分からなかった。

分からないまま、密閉空間で炸裂することで威力の倍加したロイヤルフレアによって、焼き尽くされていた。

文字通りの『一掃』である。

「……スペルカード宣言くらいは、聞かせてもよかつたかもね」

「そこまで律儀になる必要は無いかと」

「それもそうね」

魔法で発生した炎ゆえに、急速に鎮火していく様を見下ろしながら、パチュリーは呟いた。咲夜が素っ気無く相槌を返す。

パチュリー自身も、先程の反則に近い攻撃について、そこまで気にしているわけではない。

パチュリーは、咲夜が停止させた時間の中で、全ての準備を完了させ、不意打ちのような形でスペルカードを発動させたのだった。

咲夜の能力の影響下にいた鬼達には、突然目の前に迫る必殺の魔法しか見えなかっただろう。

結界で囲い込んだのは、魔法の被害を広げない為もあるが、同時に標的と攻撃の威力を一つの空間に閉じ込める為でもある。

故に、逃げることも防ぐことも出来なかった。

パチュリーの火力と咲夜の特殊能力を組み合わせた結果得た、味気も容赦も無い勝利だった。

「お怪我はありませんか？」

「無傷よ。喉の方も、まだまだ調子が良いわ。図書館にも、多分被害は無し」

地面に降り立ったパチュリーに合わせて、何処からともなくテーブルと椅子とティーセットが飛んできた。

戦闘になる前まで使っていた一式である。

あれだけの戦闘がありながら、埃一つついていない。

「汚れているのは、あそこだけね」

椅子に腰掛けながら、先程まで鬼達が居た場所を指差す。

そこには、もう焦げ臭い煙を弱々しく上げる黒い塊が幾つか残っているだけだった。

「後で片付けておきます」

「いえ、小悪魔にやらせるわ。その前に——」

「はい。妹様が、先に到着されたと思うのですが」

「ええ、凄いスピードで図書館に入ってくるのを見たわ。一瞬、視界に捉えたわね。でも、何処に行ったのか……」

図書館の内部にすることだけは間違いなかった。

それを探し出そうと、パチュリーが片手間で探查魔法を発動しようとした。

その時である。

爆音と振動が図書館全体に響き渡った。

近い。

二人は、咄嗟に爆発の起こった方向を見た。

正確には、爆発が起こったのではなかった。

爆発染みた勢いで、図書館の壁が破壊されたのである。

図書館の一角にある部屋の内側から、壁を突き破って二つの人影がパチュリー達の前に転がり出てきたのだ。

探すまでもなかった。その影の一つは、フランドールだった。

もう一つは、萃香だった。

取っ組み合ったまま、二人は地面を転がって移動していた。

「力はなかなか——」

吸血鬼の腕力で胸倉を締め上げられながら、萃香は笑っていた。

その吊り上った口元目掛けて、フランドールが拳を叩きつける。

人間ならば顎が丸ごと削がれんばかりの威力だったが、萃香の口元には僅かな血が滲んだだけだった。

「拳は、握り方からなっっちゃいない！」

萃香は、笑いながら殴り返した。

二人とも密着状態だったが、お互いに体格は小柄である。

小さく畳んだ腕が狭い空間の中で鋭い弧を描き、十分な威力を乗せてフランドールの頬を吹き飛ばした。

首の骨が軋む程の衝撃が伝わる。

体勢が崩れ、萃香がフランドールのマウントを取る形になる。

フランドールに格闘の知識は無かったが、この状態が自身に不利であることは直感的に分かった。

「——うわあああっ!!」

フランドールは、叫びながら飛んだ。

萃香の体を掴んだまま、地面を擦るように飛行する。

その最中で、無理矢理に体勢を入れ替える。

萃香はその足掻きを、むしろ楽しむように受け入れていた。

二人が、凄まじい勢いで本棚に激突する。

施された防護魔法が破壊されかねない程の衝撃だった。

咲夜とパチュリーは、少女の姿をした二匹の怪物の肉弾戦を、睨むように見守ることしか出来なかった。

「パチュリー様、妹様の援護は？」

「無理よ。近すぎるし、速すぎる」

呻くように答える。

密着した二人の内、一方にだけ正確に攻撃を加えることは至難の技だった。

どちらかと言えば、そういった精密動作は咲夜の方が向いている。

しかし、咲夜の方では萃香相手に有効な攻撃を加えられない。

肝心のフランドール当人は、戦いに集中しすぎて、周りに自分の仲間がいることに気付いていないのだった。

「殺すっ！」

「威勢だけは一丁前だな」

激するフランドールに対して、萃香は楽しむ余裕すらあった。

体勢が入れ替わり、上から振り下ろされる形になったフランドールの攻撃を、かわし、受け止め、時にはまともに食らいながら、血を吐きつつ笑みを絶やさない。

萃香は、少なくとも戦闘力の面では全力だった。出し惜しみはない。

しかし、精神的な面では余裕があった。

単純に妖怪としての年季と経験の差である。

爆撃のようなフランドールの拳を耐え抜き、ついに振り抜いた右腕が戻る一瞬の隙を突いて、手首を掴み取った。

「捕まえたぶっ!？」

勝ち誇る間も無く、左の拳が鼻っ面に叩き込まれる。

地面と挟まれ、物凄い音が頭蓋骨を通して外側に響いた。

しかし、そこで左腕の動きも止まった。

ダメージを顧みず、萃香が左手首も掴み取ったのである。

両腕を封じられ、フランドールは僅かに動揺した。
渾身の力を込めて抵抗する。

動かない。

いや、ゆつくりと動かされていく。

萃香の腕力が、フランドールの腕力を僅かに上回っているのだつた。

「鬼相手に力比べってのは——」

顔面にメリ込んでいた左拳がゆつくりと動き、鼻血塗れになった萃香の凄惨な笑みが視界に映った。

「甘えんだよ！」

次の瞬間、萃香は口から炎を吐き出していた。

ただの火ではない。伊吹萃香の鬼火である。

轟と空気が唸るような火炎は、無防備なフランドールの上半身を丸ごと飲み込んだ。

絶叫が上がる。

耳を塞ぎたくなるような、生きたまま焼き殺される少女の甲高い悲鳴だった。

フランドールが、生涯で初めて感じる痛みに上げる声だった。

もはや、抵抗も何も無い。

掴まれていた両腕を振りほどき、それで反撃をすることもなく、焼け焦げた顔を覆う。

戦いの最中で、あまりに無防備だった。

その隙を見逃すほど、萃香は甘くはなかった。

「餓鬼がつー！」

両手ごと、フランドールの顔面を拳で打ち抜いた。

吹き飛ばされ、正反対の位置にある本棚に激突する。

本棚に背を預けたまま、ズルズルと腰から崩れ落ちるフランドールとは対照的に、萃香はゆつくりと立ち上がっていた。

こちらの顔面も血塗れである。

しかし、苦痛を表に出すこともなければ、全く堪えた様子もない。この程度の痛みや傷など、彼女にとっては日常茶飯事であるかのよ

うだった。

「……レミリア・スカレットが凄い奴だったから、同じ吸血鬼つてんで期待してただけだ」

萃香は額の血を手のひらで拭いながら言った。

「やつぱり、あいつが特別だったのかな？」

火傷の痕が即座に回復していく様を眺めながら、それでも中々立ち上がろうとしないフランドールに向けて放つ。

肉体のダメージではない、『苦痛』という精神へのダメージから回復することが出来ない彼女を揶揄する言葉だった。

「お前、痛みつてもんをまともに感じた経験がないのか？」

「う……ああ……っ」

「それとも、そんな必要も無いくらい過保護に守られてきたのかな？」

萃香は意味ありげに、視線を移した。

自分を怒りと殺意に満ちた眼で睨みつける、咲夜とパチュリーにニヤリと笑い掛ける。

「次はお前らか？」

「パチュリー様、奴にスペルカードは必要ありません」

「ええ。問答無用で消し飛ばしてやるわ」

「いいねえ、部下の手厚い保護ってわけかい」

敵意を滾らせる二人をあえて無視するように、萃香は再びフランドールに視線を戻した。

吸血鬼の再生力によって傷を修復したフランドールは、立ち上がった。

立ち上がったということは、精神的なダメージからも回復したということである。

再び、萃香と戦う気力を取り戻したということである。

何故、唐突に――？

フランドールの眼を見た萃香は、その理由を察した。

「……そうか。それがお前の本当の力か」

フランドールの瞳には、先程までは無かった『狂気』が宿っていた。いや、正確には先程まで鳴りを潜めていたものが、痛みによって表

に引き出されたのだった。

吸血鬼の少女は、かつて振るっていた真の力を引き出す為に、狂おうとしていた。

「お前は、狂うことでこれまで痛みを感じてこなかったんだな」

「――す」

「うん、それもいい。そういう強さもある」

「――殺す!」

「うん、来い」

萃香はにつこりと笑って、フランドールの狂気を手招きした。

恐れも、怯みも無い、無造作な仕草だった。

フランドールが両手を掲げる。

その手の中に、パチユリーが魔法で生み出したものよりも、更に高熱で圧縮された炎が発生し、剣の形を取って一直線に伸びた。

炎の剣――『レーヴァテイン』である。

その剣が発生しただけで、図書館内の室温が急激に上昇した。

人間である咲夜が苦しげに呻くのを聞き、慌ててパチユリーが魔法障壁を作り出す。

禁忌にも至る、恐るべき魔の炎だった。

剣先を向けられる側にとっては脅威以外の何ものでもないそれを、

萃香は挑むように睨みつける。

そして、フランドールは――不意に、我に返った。

唐突に狂気の消えた瞳で見ていたものは、敵である萃香ではなく、

苦しげな咲夜の様子だった。

フランドールは思い出した。

かつて、同じようにこの剣で彼女を傷つけたことを。

そして今、全く同じことを繰り返そうとしていることを。

――狂うままにこの力を振るえば、敵だけではなく、周囲を壊し、誰かを傷つけることになる。

フランドールは何か抗うように、歯を食い縛った。

そして、ゆつくりと、手の中から炎の剣を消していった。

「……………どうした?」

訝しげな表情を浮かべる萃香を、改めて睨み返す。

黙ったまま、無手になった両手で拳を握った。

萃香に一度やられる前と同じ、格闘による戦いをする為である。

「なんだ、そりゃ？ それはお前の本当の力じゃないんだろう？」

「――」

「なんだい、戦いを投げる気なのかい？」

「違う。だけど、あの力は使わない」

「力を使うのが、怖いか？」

「……怖い」

「ビビって満足に力も使えないって？」

「使えないんじゃない。使わない」

「同じことさ」

「同じじゃない。わたしは、もう……狂わない！」

「狂わなければ、わたしには勝てないよ。今のお前は未熟さ。戦いの痛みに耐えられない」

「それでも……それでもっ！」

フランドールは、涙ぐみながら拳を構えた。

形だけの構えである。

格闘戦における有用性を何一つ含んでいない構えだった。

今の彼女にあるのは、戦い抜く意思というよりも、己の力を抑え込む決意だった。

そんな幼子が必死になるような様を見て、萃香は気の抜けたように笑った。

「駄目だな。『自分の力が怖い』——そんな心構えじゃあ、駄目さ。わたしの前に立つには、百年早いよ」

「うるっせえんですよ。じゃあ、百年待って出直してきて下さい」
完全な不意打ちだった。

咲夜でもパチュリーでもない声が聞こえた瞬間。萃香が反応する間も無く、その四肢が突然発生した魔法陣によって固定された。

しかも、何重にも重ね掛けされた拘束魔法である。

前動作の無い、一瞬の出来事だった。

「何!？」

「その時は、きつと成長した妹様がお前なんかギタギタにしちやいまずからねえ」

萃香は状況の把握と、そこからの脱出を同時に行った。

しかし、両方とも無駄に終わった。

渾身の力を込めても拘束は破れず、萃香が見たのは突然の事態に呆けた表情を浮かべるフランドールだけだった。

咲夜とパチユリーは、既にその場から動いていた。

「――傷魂『ソウルスカルプチュア』!」

「――火金符『セントエルモピラー』!」

咲夜の切り札が無数の強力な斬撃を飛ばし、抜き撃ちのような速さでパチユリーの火球が叩き込まれる。

身動きの取れない状態で、萃香はその二つの攻撃をともに食らう形になった。

眼や口、耳、あるいは各関節といった急所を何度も重ねて切り刻まれ、その上から灼熱の業火で焼き尽くされる。

並の鬼ならば消し炭すら残らない攻撃を受けて、萃香はボロボロの火達磨になって地面に転がった。

その時には、既に拘束魔法は解除されていた。

パチユリーは、その魔法を素早く解析して、答えを導き出した。

「……仕掛けておいた罫魔法。小悪魔、アナタね!」

「ソフフ――」

低い笑い声を響かせながら、小悪魔はこれ見よがしにゆっくりと登場した。

フランドールのすぐ背後の本棚の陰からだった。

「罫の設定を少し弄りました。ナイスタイミング&フォローだったでしょう?」

「顔、どうしたの?」

「美しくないいで、あまり見ないで下さい」

小悪魔は、丸めたティッシュの突っ込まれた鼻をさりげなく隠した。

「小悪魔……」

「はい、小悪魔です。大丈夫、怪我は大したことありませんよ」
何かを言いたそうにしながら、上手く言葉に出来ないフレンドールを慰めるように、小悪魔は髪を撫でた。

そのまま、優しく抱き締めた。

「ありがとうございます。妹様のおかげで、私は助かりました」

「わたし……し……っ」

「はい、よく頑張りました。本当ですよ。妹様は、一つ成長したんです」

「でも……!」

「あれでいいんです。少なくとも、私は良かったと思います。堪えることも強さです。レミリア様のような戦う為の強さは、あそこから始まるんですよ」

「ぐ……っ、ふうう……っ!」

後はもう、言葉にならなかった。

溢れる涙の理由が、安堵なのか悔しさなのか、分からなかった。

フレンドールは小悪魔の胸に顔を埋め、嗚咽を必死で噛み殺しながら、泣き続けた。

咲夜とパチュリーは複雑な表情を浮かべていたが、少なくとも小悪魔の話の意味を理解し、それが適切なものと納得だけはしていた。

——泣きじやくるフレンドールを抱き締めながら、優しさや母性以外が混じる嫌な愉悅に浸った小悪魔の笑みを見ると、不安以上の怖気を感じるのだが。

二人は、そこから眼を逸らすように、視線を移した。

かろうじて立ち上がった、萃香にである。

「こ、こんなにやろう……まあた、安全な場所から不意打ちか」

「他人の家庭の問題に、無遠慮な口出しするからですよ。容赦はしません」

「てめっ、いつか本気でぶっ飛ばしてやるからな……!」

「明日までなら覚えておきます。ひひっ」

「畜生お……」

悪態を吐きながらも、萃香は苦笑を浮かべていた。

自分の不意を突いた小悪魔を睨み、二人掛かりで攻撃した咲夜とパチュリーを見つめる。

その瞳には、理不尽を訴えるようなものや、責めるといった意思是映っていないかった。

「でも、まあ……鬼がどうこう言えねえかあ」

そう呟いて、萃香は今度こそ力尽きて倒れた。

大の字に仰向けになった萃香の体が、風に浚われる砂のように霧散し、消えていく。

「あれは、分身だったようね」

「やはり」

あれが萃香の死を示すものでないことは、咲夜にも分かった。

萃香は生きている。

ただ単に、この場から去ったのだ。

パチュリーが指先で虚空をなぞると、得体の知れない呪紋が幾つも浮かび上がり、明滅した。

何かの魔法を行使しているようだが、素人の咲夜にはそれが何なのか分からない。

パチュリーの何うような視線と思索するような表情から、何かを探っていることだけは何となく分かる。

しばらくの間見守っていると、唐突にパチュリーは、咲夜を含む三人に顔を向けた。

「行くわよ」

「行くとは、どちらにですか?」

「あの鬼が向かった先」

「奴を追う必要はありますか?」

「咲夜は必要が無いと考えているの?」

「……いいえ。私は追う必要があると思います。ですから、私一人が向かって——」

「そう思わせることが、あの鬼の能力なのだとしたら?」

「——」

「ハッキリとは分からないけれど、そういう作用があるとしたか考えられない。アイツは、私達を何処かに呼び寄せたいようね。いや、集めたいのかしら」

自身の考察を切り上げて、パチュリーは三人に視線を送った。

咲夜はもちろん、フランドールと小悪魔にも意思を問うように瞳を見据える。

「向かう先は——人里よ。私と一緒に行くつもりはあるかしら？」

「お供いたします」

「……わたしも、行く。きつと、小母様もそこに居ると思うから」

咲夜とフランドールは、そう答えた。

「私は嫌ですけど」

小悪魔の返答はもちろん無視した。



——美鈴は、その人物と曲がり角で遭遇した。

女、というよりも少女ぐらいの年頃である。

偶然、同じタイミングで二人の眼が合った。

美鈴はその瞬間まで、周囲の気配を探り、眼で動く影を探りながら駆け足で進んでいた。

奇しくも、相手も同じような状況だったらしい。

逸らしていた視線が、曲がり角で相手を見つけた瞬間、ぶつかったのである。

——敵か!?

美鈴が、その時感じたものは己の迂闊さであった。

たとえ曲がり角で姿が見えなくとも、気配や足音などで十分に接近は察知出来たはずだ。

周囲の気配に意識を割きすぎた。

正確には、未だこの人里を徘徊しているであろう鬼の明確な『敵意』を探ることに集中しすぎたのである。

だからこそ、目の前の少女が纏う『敵意の無い気配』に気付くのが

遅れたのだった。

——いや、敵意が無いのならば、敵ではない。

そう結論を出す前に、少女の方が仕掛けていた。

美鈴から見て、小柄な少女の体格が、突然倍近くにまで膨れ上がったかのように見えた。

その膨れ上がった圧力を右腕に収束させて、少女は突きを放つてきたのである。

「ぬう!?!」

美鈴は瞬時に横へ跳んでいた。

結果、少女の突きをかわしていた。

曲がり角で遭遇して、まさに瞬く間の出来事である。

走ってきたスピードを殺し、いきなり眼の前に現れた人物を判断し、尚且つその攻撃まで避ける。それだけの動作を、見事な身のこなしでやってのけたのだ。

しかし、一方で美鈴もまた少女の攻撃に戦慄していた。

なんとという鋭く、重い突きか。

体の何処でもいい、もし当たっていたら、その箇所のお骨まで砕かれていただろう打撃力が込められている。

それを察すると、もはや反射的に美鈴の体は動いていた。

最初に敵意を感じなかったことが引掛かっているが、最も分かりやすい脅威を感じ取ったことで、美鈴は反撃に移らざるを得なくなったのだった。

——こいつ、『武術』を使える!?

回避と同時に横に回り込んだ美鈴は、後頭部を狙った蹴りを繰り出した。

軸足でドリルのように地面を抉る、強烈な蹴りである。

もし、この少女の正体が鬼であるのならば、これでも牽制程度にしかならない。

防御の反応を誘えば上出来といったところだろう。

しかし、少女はあろうことが、同じような蹴りを放つことでそれを迎え撃った。

互いの威力を相殺し合うように、蹴りの軌道の途中で二本の足がぶつかり合う。

激突した蹴りは、しかし、一方が押し負けて、体勢を崩した。少女の方である。

彼女の蹴りの技術は未熟だった。

崩した体勢を、むしろ動きの一部に取り入れて、少女は美鈴から間合いを取るように移動した。

それを、美鈴は追わなかった。

「——待てっ！ 私は敵じゃない！」

美鈴は、慌てて手のひらを前に突き出した。

「……敵じゃない？」

「そうよ。貴女は鬼じゃないんでしょ？」

「違う。けど、あんたは妖怪だ」

「でも、鬼ではない」

「……本当に？」

美鈴は無言で被っていたチャイナ帽を持ち上げた。

鮮やかな色合いの赤毛が、そこに生えているだけである。

「なるほど。角は無いみたいね」

「紅魔館の門番、紅美鈴よ」

「妹紅。藤原妹紅——」

美鈴と妹紅。

二人は互いに名乗り合い、そこで一瞬言葉に詰まった。

誤解は解けたが、一時的に敵対した立場である。

その直後に、和気藹々と交流することは難しい。

かといって、鬼の襲撃の真っ只中にある人里を徘徊していた相手の事情も知りたい、と——互いに同じような考えを抱いていた。

奇妙な沈黙が二人の間に流れ、そしてそれが途切れる。

声が響いた。

二人の声ではなかった。

「サイキョーのあたい、参上!! けーね、助っ人に来たわよ！」

「——あの馬鹿！」

夜の静寂に高々と上がったその声を聞いた途端、妹紅は舌打ちと共に駆け出していた。

仕方無しに、美鈴もそれを追う。

「提案があるんだけど」

「何!？」

「飛ばない?」

「……あ」

美鈴の言葉に我に返った妹紅は、慌てて空中に飛び上がった。

「あ、あの……走るチルノを同じように追いかけて、途中で見失ったから焦っちゃってさ」

「あそこよー!」

誰にしているのか分からない言い訳を口走る妹紅を遮り、美鈴は人里の一角を指差した。

そう遠くない位置で、弾幕の光が激しく瞬いている。

誰かがそこで交戦している証だった。

そして、この状況ならば敵は鬼以外に在り得ない。

美鈴と妹紅は、その場に急行した。

「慧音!」

「妹紅か!」

「……ってどうか、慧音!」

「おい、何故疑問系だ!」

ワーハクタクへと変身した慧音を見て、妹紅は眼を剥いていた。

慧音が半人半獣であることは知っていたが、二本の角と尻尾を生やしたもう一つの姿は衝撃的だった。

半『獣』である。

妖獣としての正体が一体何なのか、普段から妹紅は疑問と興味を抱いていたが――。

「予想の一つだったけど……やっぱり、牛?」

「もおーこおーっ! 聞こえているぞ、誰が普段から牛並みの乳かつ!」

「いや、そこまで言っていない!」

慧音の震える声を聞き、妹紅は一瞬の混乱から我に返った。声の震えは、怒りによるものだけではない。

妹紅が駆けつけた時、慧音は鬼の一匹と組み合っていた。驚くべきことに、その力は拮抗しているようだったが、慧音には全身に負傷と疲労が見て取れる。激戦を続けてきたことは明白だった。限界は近い。

そして、周囲を複数の鬼が取り囲んでいた。その包囲の中に、チルノと橙も居る。

慧音達からすれば突然の援軍、妹紅と美鈴にとっては事態への遭遇、そして鬼達にとっては敵襲である。

一瞬の交差の中、最も速く行動したのは美鈴だった。地上に向けて急降下し、慧音に組み付いた鬼の背後に着地する。

降下の勢いを殺す為に、両手足で這うような着地体勢で降り立った美鈴は、その姿勢を利用して、鬼の足元を狙い打った。

地面を鋭く滑走する水面蹴り。鬼の足をへし折るまではいかないものの、足元を掬って、転倒させる。

その無防備な体勢に向けて、まるで示し合わせたかのように空中から妹紅が追撃を仕掛けた。

「はああっ!!」

繰り出す最中で火が点いたかのような、炎の正拳突き——『鳳翼天翔』である。

インパクトの瞬間、爆炎が巻き起こり、衝撃と炎が鬼の頭部を跡形も無く消し飛ばした。

その威力に、美鈴は思わず感嘆の声を洩らしていた。自分が受けそうになった突きの完成形があれなのだろう。

素晴らしい一撃だ。正拳突きの型としても、実に理想的である。

「御見事」

「援護、助かった」

美鈴と妹紅は、言葉少なに互いを認め合った。

「妹紅、助かったよ。美鈴、お前まで来てくれたのか」

「慧音の知り合いだったの？」

「私というよりも、先代の知り合いだ。その経由で私も顔を合わせたのだ」

「なんだ、師匠の知人だったのか。どおりで腕が立つと思った」

「……し、師匠!?! 今、師匠って言いましたか!?!」

「ああ、そうだよ。私は、先代巫女に師事してるんだ」

「——なるほど！ では、妹紅さんは我が兄弟子となるわけですね！」

「……は？」

「私、本日より先代様を師父と仰ぐことになりました、紅美鈴と申します！ かの先代巫女の御技を伝授された、偉大なる先達に出会え、光栄の極みでございます!!」

「む、見事な礼だ」

「わわっ、とりあえず頭を上げてよ！ そんなことしてる場合じゃないでしょ!?!」

「妹紅、遅いわよ！ あたいがけーねのピンチに一番乗りしてやったわ！」

「滅茶苦茶に突っ走ってただけでしょ！ ああ、なんでこんな奴に乗せられてたんだろ、わたし!?!」

「橙ってば、文句ばかりで役に立たないわね」

「お前が言うにやー！」

「——あ。ちなみに師匠の一番弟子は、こいつね。チルノ」

「それマジっすか!?!」

その場は、混乱の極みにあった。

戦場であることを忘れたかのように、好き勝手に喚き合う半獣、妖怪、妖精、不死者——それを取り囲む、残存した鬼達も、どういう反応をすれば分からない程である。

有利不利で判断するならば、未だに分からない戦況だった。

美鈴と妹紅という戦力は増えたが、慧音は消耗し、足手纏いも同時に増えている。

鬼達も、まだ数を残している。

戦いが、どう転ぶかはまだ分からない。

そんな危機感を、果たして正確に感じているのか疑問になるくらい、チルノを中心として能天気な会話が展開されていた。

鬼も、戸惑うばかりである。

その戸惑いが隙となった。

「――射よー」

夜空の暗闇から、突然現れるように矢が飛来した。

一本や二本ではない。弾幕のような圧倒的な数である。

矢じりには何らかの呪が施され、放たれた速度も速い。

その強力な破魔の矢が、周囲の鬼だけを標的にして降り注いだのだ。

「ぐう!？」

「今度は、何だ!？」

大抵は鋼のような肉体で弾き返すが、中には運悪く眼を貫かれ、耳から頭を貫かれる者もいた。

鬼達は、一斉に夜空を見上げた。

闇に紛れるように、黒い翼を持った人影が複数、人里の上空を飛んでいる。

「あれは――天狗か!？」

同じように空を見上げていた慧音が、その正体を叫んだ。

「刀を抜けい! 敵は鬼、相手に不足は無しぞつ!」

煌めく白刃を携え、先陣を切って降下してくるのは老練な天狗――大天狗である。

すぐ傍らには、同じく抜刀した棍も控えている。

他の天狗達も、若干の二の足を踏みながらも、その二人に続くように鬼へと襲い掛かっていった。

白狼天狗を中心とした、若い天狗がほとんどである。

彼らや彼女らは、未熟で若輩ながら、それゆえに鬼への恐れを殺すだけの意志を持って突き進んだ。

「天狗う、鬼に逆らう気か!？」

「問答無用! 御命頂戴致す!!」

振り下ろされた大天狗の一刀が、鬼を真っ向から唐竹割りにした。

怒号と悲鳴がにわかに関から上がり、鬼と天狗が入り乱れた戦いを始める。

「……どうなってるんだ？」

突然の事態に、妹紅も混乱していた。

天狗という妖怪とその組織の性質を良く知る慧音の困惑は、それ以上である。

「まさか、天狗が人里の助けになってくれるというのか……？」

呟くような問い掛けに答える余裕のある天狗は、残念なことにはなかった。

ただ、周囲の戦闘だけが激化していく。

数では天狗が勝り、質では鬼が圧倒する。

鬼の腕に、数人の天狗が吹き飛ばされるのを見て、チルノが堪えきれなくなったかのように叫んだ。

「天狗だ！ 天狗の方を助けるんだ!!」

「ちよつと待って！ ひよつとしたら、内輪揉めか何かかもしれないし……」

諫めようとする橙の手を振り払う。

「味方だよ！ だって、天狗の文だって、あたいの友達だもん！」

「——チルノ、せいかい」

のんきな声で、チルノの背後からてゐるがぬうつと顔を出した。

「てゐる！ あんた、何処行つてたの!? 逃げたかと思つたわよ！」

「その一言は余計ね」

妹紅の言葉に傷ついた様子もなく、軽く肩を竦めた。

「今回の件で、天狗は人里の味方だよ」

「本当か？」

「直接、情報を仕入れてきたからね」

訝しげな慧音に、てゐるが答える。

「ここだけじゃない。人里全体に渡つて、天狗が鬼の駆逐に回ってる。かなり大規模な、組織立った動きだね」

「お前、そんな情報何処から……」

「知り合いのリーダーっぽい奴から、直接訊いた。なんか、向こうも鬼

に襲われたっぽいよ。敵の敵は味方ってわけ」

ちなみに、その『リーダーっぽい奴』が天狗の頭領である天魔であるとは口にしなかった。

無駄な話を省き、てみるは慧音と妹紅、そして美鈴と、この場で戦力となりそうな面子を見渡した。

「――で、どうする？」

妹紅が慧音の反応を伺い、互いに難しい表情で美鈴と顔を合わせる。

そして、視線を更に移すと、その先に居るはずのチルノが姿を消していた。

「うおおおっ！ 待つてろ、今あたいが行くぞー！」

「お前は反省って言葉を知らねえのかあああーっ!?!」

「このバカァー！」

走り出したチルノに、まるで率いられるようにして、妹紅が慌てて追いかけて、それに釣られるように橙が駆け出す。

向かう先は、鬼と天狗の戦場である。

どちらに味方するかは、なし崩しに決まっていた。

美鈴が頭を掻きながら、慧音は苦笑しながら、互いに駆け出す。

最後に残されたてゐるは、満足気に頷いた後で反対方向へ踵を返して――しばし、躊躇つてから、大きいため息を吐いて、結局チルノの元へと駆け出していた。

人里の各所で、鬼を相手にした最後の戦いが始まっていた。

その上空を、更なる援軍として妖怪の山からやって来た天狗達が飛び交っていく。

博麗神社から。

紅魔館から。

幻想郷のあらゆる場所から。

人妖入り乱れた者達が、人里の、その更なる一点に向けて、集まってくる。

――幻想郷全土に散った鬼の異変は、今まさに『収束』の時を迎えようとしていた。

其の三十四「勝負」

例えば、目の前に鉄の塊が在るとする。

——斬れるか？

私は自問する。

次に萎縮する。

全力で剣を振り下ろした結果、この手に伝わる感触が鋼鉄を切り裂く爽快な手応えではなく、ただの衝撃と振動、そして骨に響く鈍痛だけしか残らないことを不安に思う

あまつさえ、その結果自分の握る剣が折れてしまうことを恐れる。

この手にある剣は、自分の心に在る剣と繋がっていると、意味の無い発想を浮かべる。

——斬れるか？

この自問に答えようとして、それがただ単に言い聞かせているのだと気付く。

——斬れるか？

最初の疑問に戻る。

疑問と迷いが腕を鈍らせ、結果斬ることが出来ない。

それは本当に避けられない『結果』だっただろうか。

最初の自問を考えすぎたことが、迷いに繋がり、この結果に繋がったのではないか。

これこそが我が身の未熟である。

この未熟を克服したなどと、吐くつもりはない。

ただ、眼が覚める思いはした。

疑問は不純物だ。

迷いは不純物だ。

不安は不純物だ。

恐怖は不純物だ。

何一つとして良い結果に繋がらない。

全ての要素が自分の足を、手を引っ張り、この剣を振るう力を衰えさせる。

ならば、全て捨て去ればいい。
頭の中に残すことは一つだ。

——ただ、斬る。

その剣閃の一瞬に全てを込める。

答えの出ない自問を繰り返すよりも、斬って結果を見れば良い。

斬れば、分かる。

例えば、自分と相手との強弱。

例えば、自分と相手との勝敗。

例えば、自分と相手との生死。

ただ、斬れば良い。

これが剣術の真理などと嘯くつもりはない。

この答えによつて、かつての自分よりも大きく成長したなどと驕る

つもりもない。

しかし——。

しかし、だ。

これで、自分は形振り構わず全力を出せるようになった。

初めての实战で晒した無様な姿よりも、少しはまともなことが出来

るようになった。

だから、な？

分かるだろう。

分かるだろう、博麗霊夢。

勝負だ。

もう一度、勝負だ。

あの時の私の実力が、本当の実力でなかったことを証明してやる。

あの勝敗が、本当の結果でなかったことを教えてやる。

その上で得た結果ならば、きつと受け入れられる。

でも、あれは駄目だ。

あの時の勝敗だけは、認められない。

あれは自分の全力じゃない。

お前が見たあれは、本当の魂魄妖夢の姿じゃない。

だから早合点するな。

私に、失望するなよ。
待っている、博麗霊夢。

未だにお前に勝てる気はしない。
しかし、負けるつもりもない。

私はお前を――。

――斬れるか？

知らない。

考えない。

そんなことは、斬ってみれば分かる。

さあ、勝負だ。

待っている。

私は待っている。

虎視眈々と待っている。

お前が、私を無視しようと、忘れようと。

私は、お前から眼を離さない、記憶に刻み込んでいる。

斬ってやる。

お前を今度こそ、斬ってやる。

だから。

だから――今、目の前に居る、お前は邪魔だ。霧雨魔理沙！



「うわっちー！」

肩を掠めた熱い痛みにも、魔理沙は思わず声を上げた。
油断だった。

妖夢の弾幕を避けきった――寸前で、そう考えてしまった慢心が、
最後の一発を掠らせたのだ。

掠ったとはいえ、痛みは痛みである。

魔理沙は肩を抑えながら、苦笑いを浮かべた。

「どうした？　まだスペルカードは一枚目だぞ」

「へへっ、こいつは『グレイズ』って奴だぜ。よーよーよー」

「『グレイズ』？」

「ギリギリで弾を避けられたらボーナスポイント、ってルールさ」

「そんなルールは聞いたことがないな」

「わたしが考えたんだ。きつと流行るぜ」

魔理沙の軽口を、妖夢は馬鹿にしたような表情で聞き流していた。

勝負が始まって、まだ間もない。

しかし、勝敗は見え始めている。

鬼との戦いで負った傷と、体力の消耗が、魔理沙の動きを鈍らせていた。

小さなものとはいえ、体に走る痛みそのものと、そこから繋がる弾幕への恐怖が、集中力を乱す。

平均的な人間の少女と同程度しかない体力の限界が、集中の持続力を削る。

妖夢は冷静に魔理沙を観察し、判断していた。

「『グレイズ』だろうが何だろうが、当たればお前の負けだ」

「分かってるよ、基本のルールを曲げたりしないって。でもさ、それじゃあつまらないだろ？」

「余裕だな。それが負けた時の言い訳になるか」

「いいや、真剣そのものさ。真剣に楽しみたいんだよ、わたしは」

「楽しむ、だと」

「難しいよな」

魔理沙は他人事のように苦笑した。

「でも、真剣勝負でお前に挑んでも、勝ち目無いからよ」

「弾幕であつても、お前に勝ち目は無い」

「そうかい？ でも、お前のその仏頂面、とても楽しんでるようには見えないぜ」

「勝負を楽しむ必要はない。結果も変わらない」

「どうかかな？」

「分かるさ」

妖夢は二枚目のスペルカードを取り出すと、頭上に放り投げた。

「お前程度、斬らなくても分かる」

眼にも止まらぬ速さで抜刀し、眼前まで落ちてきたスペルカードを切り裂く。

二つに分かれたカードは空中で霧散し、その剣閃から弾幕が発生した。

振り抜いた刀で、文字通り見えない堰を切ったかのように、無数の弾幕が魔理沙目掛けて溢れ出したのだ。

「剣を使った弾幕か、面白い！」

弾幕とは、その人となりを表すものなのだろう。

妖夢の弾幕は色とりどりの華やかさこそないものの、実直な鋭い輝きを持つ刃の嵐のようだった。

不敵な笑みを浮かべ、軽口の一つも叩いてみるが、魔理沙の内心に余裕など無かった。

視界を覆い尽くすような弾幕は、それ自体が巨大な剣の刀身のようにも見える。

通り抜ける隙間など無いかのような密度だ。

迫り来る弾幕を、主観でのみ捉えているから、余計にそう感じるのかもしれない。

人間が持つ、空間認識能力の限界だ。

——吹雪の中で遭難するのと同じだ。まともにあんな弾幕の中に突っ込んだら、自分の飛んでる位置さえ見失うぜ。

魔理沙は意識を集中した。

両眼に力を込める。

ただし、それは『眼を凝らして前を見よう』とするものではない。

——頭上にもう一つ眼がある感じで、全体を見下ろすんだ。

それは永夜異変において、霊夢と弾幕ごっこをした際に、文字通り開眼した能力だった。

アリスの協力を得て身に着けた、魔法使いとしての『魔力の流れを見る為の視界』である。

厳密には、肉眼を用いた認識方法ではない。

魔理沙自身も、理屈を通して視界を操作しているわけではない。

大部分は感覚的なものである。

しかし、これまでの経験の中で確かに学び、身に着けたことでもあった。

『見えるようになることが、まず前提。そこから先は探求と理解』
アリスから受けた、魔法使いとしての教えは、そのままこの戦いにも応用出来る。

目の前の途方もない弾幕を、ただ漠然と認識するだけではなく、把握し、理解するのだ。

『幻想郷に漂う要素を如何に上手く運用するか』

かつて、パチユリーから与えられたこの教義は、つまり周囲の要素を如何に把握するかということである。

忘れたことなどなかった。

ただ、これまで助言を活かすことが出来なかっただけ。

『気配で分かる。眼に頼るな、気を探るんだ』

神社で聞いた、先代の言葉である。

あの人は何気ない説明のつもりだったのかもしれない。
だけど、これも覚えている。

いつだって、強くなる為のヒントを探しているのだ。

例え特別な意図など無くても、霊夢を育てた母親の少ない口数から出た、自分に向けられた言葉を、聞き漏らすはずがない。

初めて自分に期待してくれたのも、あの人だったのだから。

——そして、何よりも。この力を使った時に味わった敗北が、心と記憶にハッキリと刻まれて、色褪せない。

霊夢に負けたことは、悔しかった。

あの途方も無い強さに、心が折れそうになった。

しかし、今はあの強さが救いだと感じている。

あの強さに負けた経験が、眼前に迫る妖夢の強さの体現とも言える弾幕に屈しない根拠をくれる。

「どんなにヤバそうに見えてもなあ——」

魔理沙は意を決して、弾幕の渦中へと突っ込んだ。

「霊夢よりはマシだぜ！」

既に、その瞳は前方を見ているだけではない。

錯覚ではなく、魔理沙にはハッキリと、動く自身を含めた弾幕の動き全体が一つの視界として見えていた。

集中力は、極限まで高まっている。

疲労も、傷の痛みも、頭の中から飛び出している。

残っている思考は、ただ一つ——この弾幕を、如何に避けるかということだけである。

魔理沙は危ういところで体に弾を掠らせながら、それでも弾幕を回避していた。

標的を押し潰すように展開する弾幕の隙間を、高速で擦り抜けていくその姿はまるで彗星である。

それを見ていた妖夢の眼つきが、僅かに険しくなった。

魔理沙に脅威を感じた、わけではない。

脅威など、感じるはずがない。

しかし、自身が今体験している勝負に、勝手の違いを感じているのは確かだ。

これが、実戦ならば——そう考えてしまう。

迫り来る弾幕をかわし、如何に素早く敵との間合いを詰めるかで、勝敗が変わってくる。

それが、この勝負では違うのだ。

魔理沙は一直線に敵を目指さず、弾幕の最中を縦横無尽に動き回りながら、回避し続けている。

そういうルールだからだ。

それが、弾幕ごっこだからだ。

つまり、これは遊びだ。

効率的な戦闘と、非情な決着を排した、遊びの戦いなのだ。

——なるほど、勝手が違うはずだ。

——あいつはこんな勝負に、真剣にならざるを得ないのだな。妖夢は納得して、改めて魔理沙を見据えた。

やはり、脅威は感じない。

斬るまでもなく、分かるのだ。

彼女より、自分の方が強い、と。

確かに、多少はやるようだが、それも問題ではない。
二枚目のスペルカードに示された弾幕が、間も無く終了する。
三枚目も、今の魔理沙ならば健闘出来るかもしれない。
しかし、四枚目はどうか。
あまつさえ、五枚目を突破出来ると思うのか。
「——貴様の言うとおりだな」
妖夢は、先程の魔理沙の言葉を肯定した。
「貴様は、博麗霊夢ではない。ならば、私が負ける道理は無い！」
更なる弾幕が、魔理沙に向けて放たれた。



夜の静寂を無視するように、人里は喧騒で満ち溢れていた。
そこら中で鬨の声が上がっている。
事実、人里では鬼と天狗を交えた戦が起こっていた。
それだけではない。
その戦場の中に、錯綜する複数の想い、駆け抜ける人妖、幻想郷中から集う者達——。
人里の空を飛ぶはたてには、それらの全てを見て取ることは出来ない。
ただ、予感はしていた。
——何か、多くのものが人里の一点に集まっている。
はたては、その収束点を探るべく、視線を走らせていた。
「はたてさんっ！」
不意に名前を呼ばれ、はたては地上の一点を見つめた。
見知った顔が、そこから自分を見上げている。
思わず、緊張に張り詰めていた顔を綻ばせ、はたては人里の一角へと急降下した。
降り立った先は、何度も通ったことのある人里の酒屋である。
その店の前に立っていた男は、目の前に立ったはたてを、満面の笑みで迎えた。

人間と妖怪である。

しかし、その男からははたてへの警戒心など欠片も感じられない。

「無事だったみたいね、良かったわ」

「おかげさまでです。まさか、天狗の方々に助けに来ていただけるとは思いませんでした」

男は、天狗であるはたてと親しかった。

子供の頃、妖怪に山へと攫われた際に起こった博麗の巫女と天狗との諍いの中で、はたてに助けられた恩が切欠で知り合った仲である。

かつての恩義は、時を経て成長した今、純粋な好意となつて彼の心に宿っていた。

はたてと向かい合った男の顔が、心なし赤くなっていることが、彼の心境を表す全てである。

「遅くなつたくらいだけどね。心配してたのよ」

もちろん、はたて自身はそんな男の心に全く気付いていないのだつた

屈託無く笑うはたてを前にして、それでも男は釣られて笑つた。

襲撃の不安も忘れて、満たされた表情である。

はたてとの関係が幼少の頃から大して進歩することなく、またこの歳で嫁も貰おうとしない。その原因は間違いなく男自身にもあるのだつた。

鈍い天狗の方だけを責めるわけにはいかない。

「思ったよりも、被害は少ないみたいね」

「自警団から通達があつて、襲撃に関する情報はすぐに手に入りました。それに、具体的な対策も。慧音先生のおかげです」

「なるほど。本人も、鬼相手に大分暴れてるつて報告があつたわ」

「私達は大丈夫ですから、すぐに手助けを！」

「分かつてる。もう、他の天狗の班が助けに行つてるはずだから」

「よかつた——しかし、さすがははたてさんですね。一人で動いてるんですか?」

「……うん」

周囲に部下や仲間を率いていないはたての姿を、男は完全に好意的

に解釈していた。

——本当は、連れていく部下や仲間がいなかったただけである。更に正確に言うならば、はたては部下に命令出来る性格ではないし、仲間と連れ立つ社交性も無いからである。

文が先代と共に発ち、椀が大天狗に率いられて別行動となった後には、はたてが一人だけ取り残されていたのだった。

自嘲に満ちた暗い笑みを、夜の暗がりですれ魔化して、はたては男の追及をかわす為に話題を変えた。

「そ、それよりも——店の前、どうしちやつたの？」

はたては、男の経営する酒屋の入り口を指して尋ねた。

鬼への対策として、入り口の前に豆や鱈の頭が置いてある家屋を幾つか見てきたが、この店の前に置いてあるのは酒だった。

樽や瓶など、大量の酒を並べてある。

「ああ、これは鬼の注意を惹く餌みたいなものです。酒が好物らしいですから」

「なるほど。飲ませて、時間を稼ごうってことなのね」

「ええ。鬼つてのは、家をひっくり返せるくらい力の強い妖怪なんですよね。」

以前頂いた『文々。新聞』に載っていた地底の記事で、鬼の恐ろしさについて事細かに書かれてましたから。

はたてさんから直接聞いた分もあって、私個人では話に聞いた対策だけでは不安でしたし、それに鬼を集めて時間を稼げれば、他への被害を少しでも抑えられるかもしれないって思ってた……」

勇敢とも無謀とも取れる考えだった。

はたてとの付き合いが長いせいで、妖怪というものに慣れてしまつたせいかもしれない。

少しばかり危ういと感じながら、とりあえず男の思惑が外れて、無事であったことをはたては安堵した。

もう、この酒が鬼を誘き寄せることはないだろう。

人里への襲撃は、徐々に鎮圧されつつある。

「私はこれから、今回の異変の中心に向かおうと思うわ。騒ぎが収ま

るまで、もうしばらく我慢して」

「親しい人間の安否を確認し終えたはたては、再び仕事に戻ろうとした。」

それを、男が思わず呼び止めていた。

「待って下さい！ やっぱり、今回のことは元凶の妖怪がいるんですか？」

「詳しくは分からないけど、人里の中心にある広場で博麗の巫女が戦ってるみたい」

「私も——いえ、私も含めた何人かで、そこへ向かいたいんです」

「何言ってるの、危ないわよ!？」

さすがに、はたても顔色を変えた。

「実は、鬼に襲われて家を壊された者をうちで匿っているんですが、彼らが言うには『子供を攫われた』と——」

「……『攫われた』のね？ 目の前で食われたとか、じゃないのね?」

「はい。話を聞く限り、無傷のはずです。闇雲に外に出るのは危険だと抑えましたが、もしアテがあるのなら」

「確かに、そこにいる可能性は高いけど……」

「お願いします!」

男が頭を下げる姿を困ったように見つめていたはたては、しばらくして大きなため息を吐き出した。

「お願いしますも何も、私には許可を出す権限も止める義務も無いじゃない」

「じゃあ……」

「勝手に行けばいいでしょう——まあ、広場まで護衛くらいはするけど」

「はたてさん!」

「言っておくけど、あそこで何が起こっても責任持てないからね!」

敬愛に満ちた男の視線から逃れるように、はたては慌てて顔を背けた。

偶然にも、顔を向けた先は人里の広場がある方向だった。

その上空で、小さく光が瞬いているのが見える。

夜空に映えるその光は、明らかに弾幕によって生じている閃光だった。

あの空で、博麗の巫女が異変解決の為に戦っている。相手は、この異変の首謀者だろうか。

そして、その下には他に何が待っているのだろうか。

少なくとも、鬼が待っていることは間違いない。

自分と共に行くことになった人間達も含めて、そこへ集い始めている多くのものを、はたては漠然と感じ取っていた。



—— 猛烈な弾雨の中に身を晒し、一体どれだけの時間が過ぎただろう。

大分、時間が経ったような気がする。

まだ一瞬のような気もする。

魔理沙は疲労でドロドロになった思考の中で、自分の居る時間の流れを意識していた。

しかし、それがすぐに無駄だと分かった。

長い時間が経ったから、あるいは少しも時間が経っていないから、一体どうだというのか。

妖夢の弾幕は、無関係に襲ってくる。

それをかわした。

かわし続けた。

何枚のスペルカードが切られたか分からないが、どれも等しく難易度の高い弾幕ばかりだった。

集中力を、一瞬でも途切れさせれば、その瞬間流れに飲み込まれてしまう。

神経は張り詰めっぱなしだ。

もう、辛いとすら感じない。

感じる余裕も無い。

ただ、勿体無いと思う。

意識を集中しすぎて、どの弾幕も同じように見えるのだ。
全部、ただ『難しい』『キツイ』とだけしか感じられない。
勿体無い。

きつと、何の関係も無い立場から眺めれば、弾幕の構成や外観に美しさや面白さを、じっくりと見つけられるだろうに。

それを避けながら楽しめる余裕が、今の自分の力量では持てないのだ。

あの老いた鬼の無責任な助言が、やけに重く押し掛かった。
楽しめ、か――。

難しいぜ、これを楽しめなんて。

だけど――ああ、確かに。これを楽しめないなんて、勿体無い話だな。

弾幕ごっこは、楽しんでやるもんだ。

もちろん、負ければ悔しい。

敗北することが怖くて、勝負の最中に疎んでしまうこともある。
だから、勝つことに強くこだわらざる。

――だけど、それだけが勝負の全てじゃない。

今なら、そう断言出来る。

もし、自分が負けければ、この言葉も説得力の無い敗者の言い訳として聞こえてしまうだろうか。

しかし、少なくとも。

――わたしは、楽しめる。

魔理沙は、妖夢との弾幕ごっこの最中で、霊夢と初めて弾幕ごっこをした時のことを思い出していた。

勝負の最中で、現実逃避にも似た回想は集中を乱す致命的な隙となるはずだったが、魔理沙の頭の中でそれは矛盾無く成立していた。

魔理沙が、弾幕で初めて霊夢と勝負したのは、実は紅霧異変の時である。

永夜異変の時に行ったような、本格的な弾幕ごっこではない。

まるでウォーミングアップのように、二人は出立する前の博麗神社で短い勝負をこなした。

スperlカード・ルールが一般化する前の話である。
ひよつとしたら、幻想郷で初めて弹幕ごっこをしたのは、あの時の自分達だったのかもしれない。

結果は、当たり前のように魔理沙の敗北だった。

まだ敗北の重みを感じられなかった時の話である。

あの時は、まだ自分には『言い訳』があった。

——弹幕ごっこというものを体験する為の勝負だったから。

——異変に挑む前に全力を出すわけにはいかなかったから。

——弹幕の技術に、これから慣れて、磨いていくつもりだったから。

幾つかの要素が、自身の敗北を納得させてくれた。

事前に何の気負いも無い中、魔理沙は霊夢と弹幕を交わし、そして

敗北した。

胸の奥に湧いた僅かな苦い想いを、ただ単純な敗北の悔しさなのだと気にしなかった。

勝者である霊夢に、何も含むことなく、再び笑い掛けることが出来た。

さすがだな、霊夢。

強かったぜ。

今度は、負けないぜ。

確か、そんな風なことを言ったような気がする。

負けた恥ずかしさを誤魔化す意味も少なからずあったから、忘れた内容だし、ハッキリと覚えてもいないが、その後の霊夢の返事を今思い出すことが出来た。

『結構、楽しかったわね』

霊夢は、勝負の後でそう言ったのだ。

何気ない口調だった。

あの時は『勝った奴の余裕かよ』と、自分はぼやいていたのだと思う。

でも、今なら分かる。

霊夢。お前はあの時、初めて弹幕ごっこについて感想を言ったな。
妖夢に圧勝した時も、お前は何も言わなかった。

わたしが負けた二回目の時も、お前は何の感慨も残さなかったように見えた。

何の気負いも無く戦ったあの時に、お前は初めて勝負について考えていたこと、思っていたこと、感じていたことを、ちよつとだけ洩らしたんだ。

わたしは、それを聞いたんだな。

なんて、貴重な言葉だったんだろう。

あの時のわたしは、軽く相槌を返すだけだった。

大して気にもしなかった。

そのまま、異変の為の弾幕ごっこに行ってしまった。

勿体無いことしたな。

今更になつて後悔する。

なあ、霊夢。

わたしは、ようやく自分が何をしたいのか分かってきたぜ。

強くなつて、勝負に勝ちたい——そこまでは同じ手段の範疇なんだ。

目的は、その先にあつたのさ。

霊夢ともう一度勝負したいと思っていた。

そして、勝ちたいとも、当然思っていた。

負けたことが悔しかったし、もう二度と負けたくないって怯える気持ちもあつた。

だけど、霊夢。

もしも、お前に勝てたとして、その先に何を求めているのかが、ずっと曖昧だったんだ。

負けたお前を見下ろしたいわけじゃないし、そこで勝ち誇りたいわけでもない。

お前を憎んでなんかいないし、嫌ってなんかいない。

霊夢。

お前が好きだ。

分かっているぜ。

お前も、わたしが好きなんだろう。

自惚れじゃないぜ。

好きだから、お前に勝ちたいんだ。

お前と対等の存在でいたいって気持ちは、義務なんかじゃない。

だから、お前に勝ちたいと思う一方で、わたしの上に居続ける強さを持つていて欲しいとも期待する。

お前と勝負したい。

もう一度だけ、なんて寂しいことは言わない。

何度だってやり合いたいんだ。

そして、いつか、何かの切欠でわたしが勝ててしまうような時が来たら、こう言いたいだけなんだ。

『霊夢、楽しかったぜ』

それを聞いたお前が、ちよつと悔しそうな反応でも見せてくれたら、もう言うことはない。

わたしはいい気になって、笑いながらお前の肩を叩く。

二人で飯でも食いに行くか、お茶でも飲もう。

それだけだ。

それだけなんだ。

それから、また勝負をしようぜ。

勝つのは嬉しいし、負けるのは悔しい。

だけど、お前との勝負は楽しいんだ。

だから、何度でもお前と遊びたいんだ。

——ん。

待たせたな、妖夢。

ちよつと、頭の中を整理していたぜ。

不思議だな。

今は、もうお前の顔が普通に見える。

ついさつき、お前が爺さんを斬った時は、なんだかモヤモヤしていた。

もつと嫌な眼つきでお前を見ていたと思う。

お前に喧嘩を売った時も、ただ勝負に勝つことだけを考えていた。

それはきつと、霊夢に勝負を挑む時とは違った理由からだ。

多分、間違はなくお前を憎くて、勝負を挑んだんだろう。嫌いなお前を、負かしてやりたいという衝動だけで攻撃したんだろう。

悪かった。

お前がどういふつもりで勝負を受けたのかは知らないが、少なくともわたしにとってこの勝負の動機は不純なものだったよ。

お前を負かしてやりたいとか、痛い目に遭わせてやりたいとか、そんなつもりで勝負しても意味なんて無いんだ。

そういう意味を含んだ勝負をするなら、半端なルールで縛らずに、もっと剣呑な内容で勝負すればいい。

その手に持った剣で、わたしを直接斬るような勝負だ。

そんな勝負が不利だからって、挑発して、スペルカード・ルールの上で戦おうと思うなんて、わたしはセコイよな。

真剣勝負で勝ち目が無いって、自分自身で最初に言ってたことだ。ルールという武器を使って、わたしはお前を負かしてやろうと考えてたんだぜ。

駄目だよな。

そこを曖昧にしたら、きっと本当の勝負なんてつかないぜ。わたしにも、お前にも、勝ち負けの言い訳が出来てしまう。

悪かった。

反省したよ。

もう、余計なことは考えない。

純粹に、お前との勝負を楽しむ。

そうさ、楽しむのさ。

わたしは、相手を殺すことには真剣になれなくても、楽しむことには誰にも負けないくらい真剣になれるぜ。

そして、そうなったわたしは、相当強い——らしいぜ。受け売りだが、鬼の保証付きだ。

ん？

なんだ、弾幕はもう終わりか。

いつの間にか、避け切っていたのか。

ああ、畜生。

どんな弾幕だったのか、ほとんど記憶に無いぜ。
勿体無い。

言葉で幾ら言っても、やっぱり楽しむ余裕を持つのは難しいぜ。
わたしの実力じゃあ、もう精一杯だ。

みつともないくらい必死だぜ。

疲れ果てて、ヘトヘトさ。

だけど、もう少し。

まだ、もう少しやれる。

楽しもうぜ、妖夢。

霊夢とやり合った時のように。

さあ、次はわたしのスペルカードだ――。



妖夢は戦慄した。

五枚目のスペルカードを、魔理沙にクリアされたのだ。

予想していなかった事態だ。

しかし、予感していなかったと言えば嘘になる。

弾幕ごっこが始まり、時間が経つほどに、妖夢は少しずつ焦りを覚えていた。

一番最初のスペルカードを宣言した時に感じていなかったものを、
二枚目のスペルカードの時に感じていた。

少しずつ、霧雨魔理沙という人間への認識について、修正すべき点
が増えていった。

こいつは、弱い。

こいつは、甘い。

こいつは、少しはマシに動けるようだ。

こいつは、思ったよりもやるようだ。

こいつは、少し見縊っていたようだ。

こいつは、次の弾幕くらいならかわしてしまうかもしれない。

こいつは、ひよつとしたら……。こいつは、まさか——。

そして今、魔理沙は妖夢の想定を更に一つ超えた。文字通りの切り札である五枚目のスペルカードを越えた魔理沙は、見た目からして既に限界であることが分かった。

疲労で汗だくなのに、顔は青褪め、動きは精彩を欠いている。

飛行も安定していない。

引き攣った口元は、笑みのつもりか。

彼女の身体能力が、普通の人間の範疇に在ることを踏まえても、あらゆる限界に近いことは明白だった。

しかし、その分析の結果は、五枚目のスペルカード宣言をする前にも同じように出たはずだった。

いや、ずっと前から、魔理沙が限界であると判断していたはずだった。

それなのに——。

「……そんな」

妖夢は無意識に呟いた後で、それが自分の弱音なのだと気付いた。

自分の吐いた言葉が許せないかのように、歯を噛み締める。

何を動揺する必要がある？

何を焦る必要がある？

魔理沙が、自分の予想を超えて手強い相手だからと言って、一体何を脅威に感じる必要があるというのだ。

あれは、奴の『強さ』ではない。

言うなれば、弾幕ごつこの『巧さ』だ。

それは、本当の意味での脅威とは違う。

脅威とは、自分を脅かすものことだ。

魔理沙の力では、自分を脅かすことなど絶対に出来ない。

妖夢は、自らを落ち着かせた。

そういった理屈を、自分に言い聞かせた。

しかし、完全に動揺を消すことは出来なかった。

焦燥が、汗となって額に自然と滲み出ていた。

魔理沙がスペルカードを取り出した時、無意識に警戒して身構えたことを自覚し、恥を感じた。

自分で、自分に言い聞かせたことが納得出来ない。

それが動揺を生み、焦りを生んでいる。

妖夢は、それら自分の心の内に生じている全ての現象を、頑なに認めようとしなかった。

魔理沙が、弾幕を放った。

弾幕というだけあって、膨大な量の弾が、妖夢に襲い掛かる。

しかし、不思議とそこに押し潰されるような圧迫感や迫力は感じられない。

標的を絶対に撃ち落してやろう——と、そこまで思っていないような、適度な密度。

弾の一つ一つは、大した殺傷力や破壊力も無く、代わりに眩く鮮やかな光彩を放っている。

星を象った弾幕は、相手を傷つけるような攻撃というよりも、包み込むシャワーのようだった。

それは、実戦においては何の脅威にもならないものである。

弾幕ごっこという勝負の観点においても、あまり効果的なものではない。

しかし、魔理沙の弾幕を見た妖夢は思った。

——美しい。

そして、すぐに我に返った。

勝負の最中で、雑念を挟んだ自らを恥じた。

いつの間にか、眼前にまで接近を許してしまった弾幕を、慌てて避ける。

いや、慌てる必要など無い。

見た目だけを重視した魔理沙の弾幕は、全く脅威ではないのだ。

キラキラと光る星型の弾が降り注ぐ様は、まるで何かのアトラクションである。

緊張感の欠片も無い。

奴は、真剣ではないのか。

ふざけているのか。

こんなものは、勝負ではない。
遊びだ。

実に、馬鹿馬鹿しい。

真面目にやれ。

真面目に――。

「――くうっ!?!」

弾幕の一発が、危ういところで腕を掠めた。

妖夢の弾幕を魔理沙が避けていた時と同じような光景である。

――同じ?!

――ならば、奴と自分が同じレベルだとも言うのか!?

誰が言った訳でもない。

自らの内に勝手に湧き上がった考えに、妖夢は勝手に怒りを覚えた。

そして、その怒りが更に妖夢の集中を乱していった。

徐々に激しさを増していく弾幕を、妖夢はかろうじて回避していき。

必死である。

いつの間にか、妖夢自身の外にも内にも、余裕などというものは消え失せていた。

そして、そんな既に存在しないものを未だに在ると錯覚して、混乱し続けていた。

一体、これは何なのか。

一体、これはどういうことなのか。

何故。

何故、自分は必死になっているんだ。

落ち着け。

落ち着けば、こんな弾幕なんて、十分にかわせる。

かわせる、はずだ。

くそっ。

今のは、危なかった。

何なんだ？

十分に集中出来ているはずなのに、不意を突かれてしまう。もつと速い攻撃を、もつと危険な攻撃を、私はかわしたこともあるんだ。

こんなぬるい弾幕に、当たるはずがない。

ほら、見える。

ちゃんと見えているし、これをどう回避すればいいかも分かっている。

これを、下に潜って――。

畜生、掠った！

動いた先に、弾幕が迫っていた。

その弾幕だって、十分に見えていたのに。

かわせる速度だったのに。

まるで、こつちが動き辛い状況に合わせているかのように、弾幕が迫ってくる。

あいつは、私の動きを読んでいるとでもいうのか。

馬鹿な。

スペルカードに示された弾幕は、最初から決まっていたものだ。

こちらの動きに合わせて、内容を変えることは出来ない。

それでは、ただの追尾攻撃だ。

では、何か？

こちらの動きが、まんまとあいつの想定通りに操作されているというのか。

そんな――。

ああっ、まただ！

分かった……。

分かった、認めよう。

弾幕において、霧雨魔理沙の技術は私よりも一枚上手かもしれない。

しかし、それがどうしたというのか。

要は、かわせばいいだけの話だ。

あいつが私の弾幕をかわしたように、私もあいつの弾幕をかわしてやればいい。

「それで、勝負は互角だ。」

勝負が長引くのは不本意だが、仕方が無い。

己の未熟を認め、改めて勝てばいい。

だから。

だから、落ち着け。

大丈夫だ、変な動揺さえしなければ、この弾幕は回避出来る。

そもそも、動揺する必要は無いのだ。

弾幕なんて当たっても死なない。

なのに、何故緊張しているのか？

何故避けようと、必死になるのか？

その度を過ぎた緊張感が、却って動きを阻害している。

それは、分かっているのだ。

なあ、分かっているだろう。

分かっているんだろう、自分。

——分かっているのか？

なんで、また掠るんだ!?

しかも、さつきよりも深く掠っているんじゃないのか。

いや、気のせいだ。

気のせいなんだ!

大体、当たったから何だというんだ。

こんな弾、当たっても死なない。

傷一つ付かない。

「そもそも絶対に避けようなどと気負うな。」

必死になって、馬鹿馬鹿しい。

当たってもいい。

問題無い。

無視すればいい。

無視して、真っ直ぐに弾幕を突っ切ってあいつをぶった斬ってしまえばいい。

こんな茶番に付き合うよりも、幽々子様に与えられた使命を果たす方が重要じゃないか。

勝ちだの負けだの、騒ぐのは目の前の人間だけだ。

無視すればいい。

無視すればいい。

目の前に再び弾幕が迫る。

今だ。

無視しろ。

無視して、突っ込め。

何か言わせる間も無く、あいつを切り伏せろ。

勝負がどうこう戯言を吐き出す前に黙らせろ。

やれ。

やれよ、私。

や——畜生つ、また掠った！ 余計なことを考えてたせいだ！

駄目だ、休む間も無く次の弾幕の波が迫っている。

今なら分かる。正確なルートを選んでかわさなければ、いずれ当たってしまう、巧みな弾幕の構成を。

当たったところで、傷も負わない弾幕だ。

ただ、勝負が決するだけ。

だけど、それが怖い。

恐ろしくないはずの弾幕を何故か必死にかわしてしまう。

それは当たると負けるから。

私が負けるから。

負けるのは嫌だ。

また負けるのだけは嫌だ。

私が、あいつより弱いって分かっちゃダメ。

そんなこと分かりたくない。

動け、私の体。

もつと速く動け。

あ、駄目だ。

止まれ。

当たってしまおう。
なんとか、避けて。
やった。

でも、目の前にキラキラ光る綺麗な星が何個も迫ってきて、ここは
右か左か、ああつくそ失敗したこつちに来るなもうかわせな——。



先に落ちていった妖夢を追うように、魔理沙は地上へと降り立つ
た。

偶然にも、そこは開けた場所だった。

周囲は夜の闇が隙間に満ちる木々に囲まれているが、魔理沙と妖夢
の居る地点は、人が往来出来るだけの道としてかろうじて整備されて
いる。

おそらく、人里にまで続いている道だった。

魔理沙はそこから、眼を凝らして周囲を見渡した。

すぐにそれが意味の無い行為だと悟った。

本当は、地面に落ちた、あの老いた鬼の遺体を探すつもりだったの
だ。

しかし、妖夢との弾幕ごっこを経て、最初の位置よりもおそらくか
なりズレてしまっている。

何より、周囲の林に落ちていた場合、この暗闇では視認で見つけ出
すことは不可能に近い。

少し考えれば、分かることだった。

疲れているな——と、魔理沙は改めて一つ深呼吸をした。

疲労は消せないが、勝負の最中に乱れていた呼吸は、もうかなり回
復している。

勝負の緊張感から解放されたことも影響しているはずだった。

弾幕ごっこは終わった。

勝敗は決したのだ。

「わたしの、勝ちだな……」

魔理沙は、地面に膝を着いたまま、顔を俯かせた妖夢の背中にそう言葉を掛けた。

妖夢は、魔理沙の弾幕に当たって、そのまま落下したのである。傷も、ダメージも無いはずだった。

それは、しつかりと着地した妖夢の動きからも明らかだ。

しかし、妖夢は魔理沙の言葉に応えず、無言のままだった。

魔理沙もまた、それ以上語ることなく、黙り込んだ。

「……れるか」

妖夢の押し殺した声が静寂の中に響いた。

「認められるかっ!!」

妖夢が叫ぶのと、立ち上がって刀を抜くのは同時だった。

眼にも止まらぬ速さで抜き放たれた刀身は、閃光のように奔り、魔理沙の首筋で止まっていた。

刃の冷たい感触が、首の皮に触れている。

あとほんの少し止めるのが遅ければ皮を一枚切り裂き、早ければ触れることはなかっただろう。

その絶妙な間隔で、妖夢は刀を止めたのだ。

生半可な技量ではなかった。

「どうだ……?」

妖夢は引き攣ったような笑みを口元に浮かべた。

「どうだ!? 今のがお前に見えたかっ!」

「いや、まるで見えなかったぜ」

魔理沙は真っ直ぐに妖夢を見据えたまま答えた。

依然、刀は首筋に添えられている。

「不意を突かれたから、かわせなかったか!」

「いや、抜く前に声を掛けられてても、かわせなかっただろうぜ」

「当たり前だ! お前なんかには、私の一撃が防げるものか!」

「ああ、わたしは霊夢とは違うからな」

「そうだ、私はお前を殺せる!」

「ああ、お前はわたしを殺せる」

「なのに……!」

妖夢の笑みが崩れた。

口元の歪みは、そのまま何かを食いしぼるような形に歪みを変えていった。

「なのにつ、なんでお前なんだ!？」

妖夢は叫んでいた。

腹の底からの叫びだった。

睨みつける瞳には、しかし敵意や殺意の代わりに涙が浮かんでい

る。
魔理沙は、その混濁した瞳をただ真っ直ぐに見返すだけだった。

「お前は、私よりも強いのか!? 私よりも巧く剣を振るえるのか!？」

「いいや」

「お前は、私よりも長い修行を積んで、過酷な実戦をくぐってきたとでも言うのか!？」

「さあな、比べたことないから知らないぜ」

「お前はっ!」

「――」

「……お前、は」

「――」

「お前の、勝ちだなんて、そんなこと認められるかあ!!」

「じゃあ、このまま斬っちまえばいいだろ」

魔理沙の言葉が、まるで拳のように妖夢の頭を殴りつけていた。

「勝ち負けがどうの言ってるのは、わたしとお前だけだ。お前が認めないなら、認めているわたしを斬って、それでお終いだろ」

「なに……っ?」

「わたしは霊夢とは違うんだ。あいつみたいに、お前を真剣勝負でも負かせる自信なんてないよ。斬られたら、本当にかわせないさ」

妖夢の脳裏に、かつて冥界で霊夢と剣を交えた時のことが思い起こされていった。

弾幕の勝負でも負け、逆上して振るった剣すら、霊夢はあっさりと止めてみせたのだ。

力でも技でも負けた。

決定的な敗北だった。

あの時、心が折れた。

そして今は、あの時とは違う。

相手は博麗霊夢ではない。

弾幕の勝負では負けたが、本当の実力の上での勝負ならば魔理沙が妖夢に劣っていることは自他共に認めている。

だから。

——だから、何だ？

妖夢の中で、もう一人の自分の声が冷たく響いていた。

自分の言い訳の卑しさに気付いている、もう一人の自分がいた。

「……取り消せ」

妖夢は、声を搾り出すように言った。

「何を？」

「さっきの勝負がお前の勝ちだと、その宣言を取り消せ」

「お前の口から、ハッキリとそう言え！」

睨みつける眼と、突きつけた刀身に殺気を纏わせながら叫ぶ妖夢に対し、魔理沙は何も言わなかった。

一言も口を利かなかった。

ただ、声を荒げて脅す妖夢を見つめたままである。

その視線に、蔑みや憐れみの感情を込めることさえしなかった。

返ってくるのは沈黙と視線だけである。

しかし、それだけで妖夢は追い詰められていった。

自分が愚にもつかない言い訳を重ねるほど、それに対して沈黙を返されるほど、死にたくなるような後悔と惨めさが心の中に積もっていった。

やがて、その重みに耐え切れなくなったかのように、足元が震えて、ゆっくりと膝を着いた。

「……言え、霧雨魔理沙」

「――」

「何か、言ってくれ」

「――」

「私に、失望したのならそう言え。見苦しいと、卑しい真似をしていると……」

「死体に鞭打つ趣味はないぜ」

「憐れみか……」

「お前が、分かりやすすぎるからだよ。どうせ何言っただって、納得しないんだろ。勝ち負けは、わたしが決めるんじゃないんだ。お前が、もう決めちまつてるんだ。わたしを斬れば、それがハッキリと分かるだけだ」

魔理沙は、落ち着いた口調で告げた。

その言葉がトドメであったかのように、妖夢の中で、何か折れた。既に魔理沙の首筋から離れていた刀が、ついに妖夢自身の手からも離れて、金属質な音を立てて地面に転がる。

全てを失った両手を地に着け、妖夢は地面に蹲るような姿勢で震えていた。

見下ろす魔理沙の眼には、妖夢の顔は見えない。

見ようとも思わなかった。

しかし、食い縛った歯から洩れる嗚咽だけは、聞き流すことが出来なかった。

「勝負は、わたしの勝ちだ」

魔理沙は言った。

もはや、誤魔化しようもない事実を、分かりきったことを、わざわざ言葉にしたのは魔理沙の優しさだった。

しかし、それが妖夢にとって救いになるとは、もちろん魔理沙も思わなかった。

押し殺していた嗚咽が、少し大きくなった。

「なあ、妖夢。お前との弾幕ごっこ、ちよつと楽しかったぜ」

「……いい……っ」

「また今度、やり合おうぜ。慰めとかじゃない、本当さ」

「ひいい……いいいい……っ」

「お前は、どうだった？」

魔理沙の問い掛けに、妖夢は答えなかった。

答える余裕などなかったのだ。

喉が引き攣ったような声を、齒の隙間から洩らすだけだった。

立ち上がることも出来ず、ただ子供のように泣いて震えることしか出来なかった。

魔理沙は帽子のつばを深く下げ、その妖夢の姿を視界から隠した。

「今度、聞かせてくれ」

踵を返し、箒に跨る。

途切れ途切れの、しかし決して止むことのない妖夢の嗚咽を背に受けながら、魔理沙は夜空に飛び立った。

残されたのは、惨めな敗者の姿だけだった。



「——夢符『封魔陣』」

霊夢の放った弾幕は、無数の札によって形成されたものだった。

それまで放っていた霊力の弾や退魔の針といった攻撃的な物ではない。

浄化の霊力に焼かれ、何本もの針を刺されながら、それでも尚も動き続けていた鬼の少女は、その札の弾幕を避けきれずに、ついに直撃を受けた。

一枚の札が体に貼り付いたのを切欠に、動きが止まった所へ無数の札が殺到する。

鬼の少女は、あつという間に霊力を込めて書かれた札で雁字搦めにされしまった。

「あんたタフだから、墜とすよりも封じさせてもらうわ」

身動きの取れなくなった標的の顔面に、トドメとばかりに光弾を叩き込む。

煙を上げて墜落していく姿を見下ろして、深呼吸を一つ挟んだ後、霊夢もまた地上へと降りていった。

萃香の待つ龍神像の広場へと、再び戻ってくる。

先に落下した鬼の少女は、札に身動きを封じられたまま、仰向けに倒れていた。

自らの術の手応えから、抵抗は無駄だと霊夢は思っていたが、そういった素振りも見せない。

虚空を見上げたまま、鬼の少女は小さく笑い声を漏らした。

「……負けたよ」

弾幕ごっこの中で終始無言だった彼女の、初めて聞く声だった。

その敗北宣言を、霊夢は特に感慨も無く聞いていた。

「楽しかったなあ。なあ、お前もそうだろうか？」

鬼の少女の問い掛けを、しかし霊夢は無視するように無言で返した。

「お前は、楽しくなかったか？」

「面倒臭かったわ。あんた、スペルカード・ルールを正確に理解してないし、弾当たっても耐えればオツケーみたいな勘違いしてたし」

身も蓋もない霊夢の返答を受けて、鬼の少女は再び笑った。

鬼の面を被ったような顔から、表情は何えない。

しかし、何処か愉快そうな響きを持った声だった。

「また、お前と勝負したいなあ」

「もう二度と御免だわ」

「そうかあ、残念だなあ……」

それっきり、鬼の少女は何も言わなくなった。

倒れたまま、ピクリとも動かない。

死んだとは思えない。おそらく、気を失ったのだろう。十分にダメージを与え、体力も消耗させたからだ。

実際に戦っていた霊夢は、そう判断した。

「——じゃあ、次はあんたね」

意識と標的を切り替える。

視線を移した先には、変わらず龍神の石像の上に陣取った萃香が笑って、霊夢を見ていた。

その足元にいる子供達も、脅かされることなく無事でいる。

弾幕ごつこの途中で、霊夢は人里全体で起こっていることを観察する冷静さと余裕さえあった。

人里を襲う鬼は、今や完全に、幻想郷の人間や妖怪達に迎え撃たれていた。

もはや、残された鬼は目の前の伊吹萃香ただ一人だけと言っても過言ではない。

異変を起こした鬼と、博麗の巫女——二人は、全ての事象の中心で、終わりの時を迎えるべく対峙していた。

「そいつの首は獲らないのかい？」

萃香は、仲間であるはずの鬼の少女を指しながら、そんなことを尋ねた。

「鬼の首に興味は無いわ」

「博麗の巫女は、悪さをした妖怪を退治しなきゃいけないんだらう」

「そうよ」

「中途半端はいけないと思うな、わたしは」

「別に、中途半端にやっているわけじゃない。もちろん、情けを掛けたわけでもない」

霊夢は断言した。

「あたしが、そう決めた。博麗の巫女として、これが妖怪の退治の仕方よ」

霊夢の瞳を、萃香は真っ直ぐに見据えた。

一瞬も見逃さなかった二人の決闘の光景が、脳裏に流れている。

——幻想郷に敷かれた、新しいルール。

——スペルカード・ルール。

——弾幕による勝負と、その決着。

萃香は、それらをつぶさに見ていた。

「そうか」

萃香は一つ、頷いた。

霊夢の返答に、納得しているようにも、納得していないようにも取れる。

重い一言だった。

「新しい時代の理を知った」

ふわり、と萃香が地面に降り立った。

「お前の矜持を理解した」

背後で子供達の怯える気配を感じたが、振り向きもしない。

「——しかし、果たしてそれがわたしに通用するかな？」

対峙する霊夢ただ一人を見据えて、萃香は言った。

それまでの穏やかな雰囲気からは一変して、瞳にも、口元にも、全身に至るまで、恐ろしいほどの戦意が形を取って、漲っていた。

放たれる威圧感に、しかし眉すら動かない霊夢が呟く。

「急にやる気になったわね」

「言っただろう？ 『ちよつとだけ回りくどいやり方だ』って。ちよつとだけさ、勝負するまで回り道しただけなんだ」

「じゃあ、とつと始めて、ぱっぱと終わらせましょうか」

霊夢の不敵な物言いに、萃香は苦笑を浮かべた。

「そう、急かすなよ。大丈夫。もう集まってきてるさ」

そうして、意味深げな萃香の言葉に応えるように、二人の周囲に次々と集う者達があった。

終息しつつある人里での戦いを抜けて、天狗達が降り立つ。

慧音達が、大天狗や椀達と共に広場に駆けつける。

博麗神社からやって来た紫やレミリア達が、紅魔館を発った咲夜やパチュリー達と合流して、現れた。

はたてに護衛された人里の住人達がやって来たのは、それらのタイミングとほとんど同じである。

他にも、まだ見えぬ気配が集まってきている。

それらを萃香が眺め、釣られるように霊夢も見ていた。

萃香は笑っている。

多種多様の人妖に囲まれながら、彼女らが共通して自身の敵だと分かっているながら、萃香は満足気に笑ってすらいのだった。

「——揃ったな」

周りを見渡しながら、萃香は集まった者達の中のある一点で視線を

留めた。

釣られて見た霊夢の眼が、僅かに見開かれる。

「待ってたんだ『お前達』を」

そこに居たのは、母だった。

「わたしは、幻想郷に喧嘩を売りにきたんだ」

文に支えられて立つ先代巫女を睨み据えながら、萃香は笑みを浮かべた。

文字通り、鬼気迫る笑みである。

「鬼の四天王、伊吹萃香。地底より一世一代の大勝負に来たぜ——此度の異変を解決したくば、我が身を見事退治してみせよ『博麗の巫女』!!」

この場に居る者達全員に届くほど朗々とした宣戦布告が、萃香の口から発せられた。

それは霊夢と先代、二人に対するもの間違いなかった。



「これじゃあ、まるで夜逃げですよ」

さとりが夜道を歩きながら呟いた。

ほとんどぼやきに近い。

人気の無い夜の街道で、それを聞く者は、少し後ろを歩く勇儀だけだった。

「そうだね」

「そもそも、何故神社から逃げる必要があったんですか？ 余計に八雲紫の疑念を煽るだけでしょ」

「そうかもね」

「聞いているんですか、勇儀さん!?!」

「もちろん」

肩越しに振り返ったさとりの剣幕を、勇儀は穏やかに微笑みながら受け止めた。

実際は、聞いているどころかさとりの内心を察して、気を遣ってさ

えいた。

歩幅に違いがあるのに、さとりに前を譲りながら、ゆつくりと歩いていることからそれが伺える。

しかし、心に映らないほど自然体な勇儀のそんな気遣いに、さとりは気付かないのだった。

「アリスさんの言われるまま、案に乗りましたが、考えてみると問題を先送りした上にややこしくしたただけじゃないですか」

「さとり、あいつに文句を言っちゃいけないよ」

「貴女は私のお母さんですか？ 『彼女の厚意だったことは分かっているだろう』って言われなくても分かっていますし、言いたいことも分かっています」

「そうか。余計なお世話だったな、すまん」

「そうですね。『ややこしい話は、地上の異変が落ち着いた後で、改めて治めにいけば良い』ということも分かっていますね」

「さとりは頭が良いからね」

無遠慮に心を読んで話を進めていくさとりに対しても、勇儀は大らかに相槌を打っていた。

当たり障りのないことを話しながら、内心では悪態を吐く——そういった当然の二面性を持たない勇儀との会話に、さとりの方が徐々に毒気を抜かれてしまう。

当り散らす自分が、急に悪い者のように思えてきて、口をへの字に結ぶ。

さとりが黙り込むと、勇儀もそれ以上何も言わず、二人は無言で夜の道を歩いていった。

アリスの策で、紫達の眼を欺きながら博麗神社を離れて、自然と足の向いた帰路である。

実際に、宴会のあつた神社以外に地上に用事も無ければ、留まる理由も無い。

代わりに、地上を去る理由ならば大いにあるのだ。

勇儀が傍にいるとはいえ、鬼に命を狙われたという体験はさとりにとってショックだった。

さとりが向かうままに、勇儀も後を追い、二人は地底世界へと帰ることになったのだ。

「しかし、先代と別れの挨拶一つも出来なかったのは、ちよいと心残りだねえ」

「異変が終われば、どうせすぐに顔を合わせます」

「……それもそうかな」

何気ないさとりの返答を聞き、勇儀は気づかれないようにこつそりと笑った。

地上と地底。人間と妖怪。本来ならば、深い溝の在るはずの二人の関係があまりに気安いことに、微笑ましさと愉快さを感じていたのだった。

もちろん、さとりは勇儀のその『誤解』を読んでいたが、反論するのも面倒なので捨て置いた。

——誤解。

そう『誤解』こそが、今の自分を追い詰める最も大きな要因である、と。さとりは深刻に考えていた。

何の誤解かというと、それはもう幾つもの事象に対して、幾重にも重なった複雑怪奇な誤解の嵐だった。

さとりの眉間には、もう一生解れることなどないのではないかというほど深い皺が刻まれている。

今夜の宴会を経て、嫌でも理解出来てしまった己の陥っている境遇に、頭を抱えたくなくなった。

今回の鬼の起こした異変に、自分が関わっているのでは無いかと、八雲紫を含む一部の人妖に疑われているという誤解。

そういった疑いに繋がる根拠となってしまう『古明地さとりが実は恐ろしい大妖だ』という誤解。

更に、そこへ至る切欠となつた先代巫女との関係を深読みしている——具体的にどう想像しているのか分からないし分かりたくない——という誤解。

宴会に参加する前にさとりが考慮していたものよりも、何倍も厄介で深刻な状況が、自らを囲い込んでいることに気付いたのだった。

気がついた時には、逃げ場が無い。

そして、問題が收拾されないことはもちろん、保留すら出来ず、更なる悪化を辿っているような気がしてならない。

具体的には、新たに関わってきたアリスの存在である。

やはり、アリスの提案に乗って神社から無断で去ったことは、良くなかったのではないか。

様々なことが一度に起こりすぎて、半ば思考停止していたさとりにとっては救いに思えたが、第三者から見るとこれではアリスがさとりの仲間のようである。

実際には、もちろんそんなことはない。

むしろ、アリスは友好の意思を持って、このような助力をしてくれたのではない。

さとりの失言に興味を持ち、それを探る為という打算で行動した結果なのだ。

アリスは味方ではなく、こちらの出方によっては紫と同じような関係の相手になる危険性が高い。

安心出来る要素など、欠片もない人物だった。

ひよつとして、自分を逃がしたのはアリスの何らかの策か罠だったのではないかとさえ思える。

——別れる前に、もっと深く真意を探っておけばよかった。

さとりは、疑心暗鬼に陥っていた。

そして、晴らしようもない苛立ちと鬱憤は、最も分かりやすい相手に向けられている。

先代巫女である。

全ての元凶である。

あいつが、私を陥れたのである。

少なくとも、さとりにとってそれは決定事項だった。

第三の眼に映った彼女の能天気な内心が、事あるごとに脳裏に浮かぶことも、さとりの怒りを煽っていた。

——地底に会いに来たら、その時にまた土下座させましょう。

——でも、それをまたお隣なんかに見られたら、更に誤解されてし

まうわね。

——なるほど、それが狙いなものね。

——先代の仕業か。許さん。

現状への有効な解決案も浮かばず、さとりの中でただひたすら先代への恨みだけが募っていった。

そんなさとりの内心を読めない勇儀は、ブツブツと何やら呟いていくさとりの横顔を眺めつつ、のんびりと歩いていた。

無頓着とも言える大らかさであった。

「ところで、帰り道はこれで合ってるのかい？」

「……多分。大体の方向は」

「おいおい、日が明けるまでに帰れるのかねえ」

「仕方ないじゃないですか、地上の土地勘なんて無いんだし」

「飛べばいいじゃないか」

「何処にいるか分からない鬼はもちろん、神社に居た者達に方が一も見つかりたくありません」

「私がちゃんと守るよ」

「その後のことを考えてるんですよ。もうっ、黙ってて下さい」

「はいよ、仰せのままに」

あつさりと引き下がる勇儀の素直さが、さとりには居心地が悪かった。

勇儀との関係は良好であり、先代と関わって得られた数少ない利益でもある。

先代との約束があるからだろうが、余計な口を出さず、実直に自分を守り、言葉には従ってくれる点も頼もしい。

しかし、さとりは勇儀の人柄が苦手であった。

素直に向けられる好意は、先代にも似たところがある。

——こうなったら、もうとにかく早く家に帰りたい。

さとりは体力だけではない疲れを感じながら、足早に歩を進めていった。

もう、頭を悩ませるのも億劫である。

これ以上問題が起こらないことを祈りながら、ただひたすら帰路を

急ぐ。

ふと、気付いて顔を上げる。

問題が転がっていた。

「……もう、勘弁して」

さとりは、形容し難い表情に顔を歪めて、小さく悪態を吐いた。

視界の先。かろうじて整備された道の脇に、人影が見えたのだ。

木の幹に腰を降ろし、膝を抱えて蹲っている。

顔は見えないが、特徴的な銀髪と、服装やその色合いから、さとりはそれが誰なのか気付いた。

「誰なのか気付かないまま、あるいは見知らぬ誰かなら良かった、と。」

「……もう、勘弁して」

誰なのか気付かないまま、あるいは見知らぬ誰かなら良かった、と。

「……もう、勘弁して」

鬼の異変が無くとも、妖怪に襲われる危険性がある夜の道に、無防

備に座り込んでいるのは博麗神社の宴会でも見た——魂魄妖夢だった。

「……もう、勘弁して」

背後の勇儀も気付いたらしい。

しかし、自分からは何も言おうとしない。

さとりの判断を待っているようだった。

さとりは、しばらくの間、立ち止まって妖夢の様子を伺っていた。

妖夢は身じろぎ一つしない。

こちらに気付いているのかも分からなかった。

心を読んでも、分からないのだ。

「……もう、勘弁して」

さとりは、最初のものとはまた別の苦い表情を浮かべた。

それは、心を読めるさとりにだけ分かる、妖夢の状態を知った為

「……もう、勘弁して」

心を読む——それが具体的に、どういった感覚で第三の眼に映って

「……もう、勘弁して」

いるのか、説明することは難しい。

「……もう、勘弁して」

心の中をイメージとして見ているとも、声を聞いているとも、どちらとも表現出来るし、どちらとも微妙に違うとも言える。

今、さとりが捉えている妖夢の心を表現するには、そういった曖昧

な表し方でしか出来ないからだった。

言うなれば、見えているのは乾いた荒野であり、聞こえるのは静寂である。

今の妖夢の心からは、何も見えない。何も聞こえない。

先代が、かつてやってみせたような無我の境地にも似ているが、それとは違う。

これは、心が読めないわけではないのだ。

さとりも、それなりに長く生きた妖怪である。

人間や妖怪、時には神さえ、多くの心を第三の眼で読み取ってきた。

このような何も無い心を——奇妙な表現だが——見て、聞いた、経験があった。

しばらく観察して、妖夢が明らかに普通の状態ではないことを察した勇儀が、堪らず問い掛けた。

「……さとり。この娘は、気をどうにかしちまったのかい？」

「言うなれば、心という器から全て溢れ出てしまったのでしよう」

「何？」

「諦念。挫折。無気力——言葉で表すと、それら全部を混ぜたような状態でしょうか」

「——」

「誰にも知られず、暗がりですり死んでいくような者がしている心の状態ですよ」

さとりの曖昧な説明に、それでも勇儀は何かを察したかのように黙り込んだ。

長く生きた中で見てきた様々なものの中に、今の妖夢のような姿をした者がいたことを、思い出したのだった。

あるいは、思い出すほど昔の話ではないのかもしれない。

旧都の路地裏に時折転がっていて、偶然視界の端に捉えた後、すぐに忘れ去ってしまう存在——そういった漠然とした印象が、目の前の妖夢の姿に重なっていた。

「そうか……この短い時間でどんな経験をしたのか知らんが、こいつは心が折れちまったんだなあ」

勇儀は、さとりととはまた別の表現で納得した。

そんな二人のやりとりの間も、妖夢は何の反応も示さなかった。動かないのは体だけではなく、心も同様である。

何も感じず、何も考えていない。

それらを放棄していると言っても良い。

自分に何を訴えかけるわけでもない空虚な心をしばらくの間眺めていたさとりは、やがて歩みを再開した。

妖夢の前を横切り、そのまま歩き去っていく。

勇儀は、そんなさとりの判断に対して、何も言わなかった。

心の中でさえ、余分なことを考えなかった。

ただ、さとりの後について行くことだけを考え、行っていた。

さとりにとって、ありがたいことである。

変な仏心や興味を持たれては敵わない。

あの妖夢が、面倒事そのものであることは明らかだ。

どんな事情や問題を抱えているか分からないし、彼女の居る立場も厄介である。確か、あの西行寺幽々子の従者だか庭師だったかではなかったか。

関われば、こちらが要らぬ問題を抱えることになる。

ただでさえ複雑な周囲との関係が、ますます拗れる。

なので、スルーである。

これが正解だ。

そもそも、ほとんど赤の他人である自分に関わる義理も義務も無い。

放っておいても、その内彼女の仲間や幽々子自身が発見し、回収するだろう。

彼女の抱える問題も、親身になってくれる者達同士で頑張つて解決すれば宜しい。

——あのような状態になってしまった心を、治せる者が居るとは到底思えないが。

いや、待て。

私は何を考えているんだ？

さとりは、余計なことを思考する自分自身に慌てて言い聞かせた。しかし何故か、妖夢のことが頭から離れない。

それはもちろん、ああいった状態の心は何度見ても慣れることが出来ないからだ。

見ていて、哀れを誘う。

つまり、これは単なる同情とかそういういった余分な感情による気の迷いだ。

そう自分に言い聞かせながらも、意思とは反対に重くなる足取りを感じて、さとりは焦った。

努力しなければ、妖夢の存在を無視出来ないことに気付いて、嫌な予感を感じた。

——根拠は経験だけだが、ああいった状態にまで堕ちてしまった者は、ただ親身に接するだけでは立ち直れないのだ。

頭の片隅から、勝手にそんな考えが浮かんでくる。

それが無駄だと言いつ聞かせる。

それが無意味だと言いつ聞かせる。

何故なら、自分はこのまま彼女を無視して立ち去るからだ。

関わることのない相手について、どうこう考えようと意味は無いのだ。

——親しい者の優しさや気遣いを受ければ、多少は癒されるだろう。

——しかし、正気に戻った彼女が出来ることは、もう『取り繕う』ことと『装う』ことだけなのだ。

——自分で、自分の心の傷を直視など出来ないだろう。

——それが、まだ出来るだけの余裕がある者は、あんな心にはならない。

——周りの者は、装う彼女の心の底を見抜くことも出来ないだろう。

——親しい仲であるほど、相手の心に踏み込むことに臆病になるものだからだ。

——当人にも分からない今の魂魄妖夢の心を、正確に、冷静に、理

解してやれる者が居るとは思えない。

——心でも、読めない限りは。

そこまで考えて、さとりは我に返った。いつの間にか足が止まっている。

勇儀もやはり同じように立ち止まり、静かにさとりの様子を伺っている。

さとりの背中は小さく震えていた。

内心では、様々な思考や感情がグチャグチャに混ざり合って、もうワケが分からない状態になっている。

何故、こんな状態になっているのか。

悩んでいるからである。

悩む必要など無いと分かっているのに、勝手に悩んでいるせいである。

それは誰のせいなのか。

多分、先代のせいである。

いや、間違いなく先代のせいである。

よし、今度会ったら殴ろう。

「——ああ、っ、もう！ 本当に目障りね！」

誰に向けたものか分からない悪態を、さとりは夜空に向かって叫んだ。

抱えていた葛藤の中から全く関係の無い結論を出したさとりは、唐突に物凄い勢いで振り返ると、歩いてきた道をなぞるように戻った。

進む内にどんどん早足になり、地面を踏む力も渾身のものへと変わっていく。

さとりは、妖夢の前までやってくると、有無を言わせぬ口調で告げた。

「貴女を地霊殿まで連れて行きます。嫌なら抵抗しなさい」

抵抗してくれれば、万事解決なんですけどね——と、さとりは淡い期待を抱いていた。

妖夢が、呆けた表情で顔を上げた。

「はい！ 分かってますよ、抵抗する意思なんて欠片もありません

ね。っていうか、気力も無いですね。残念ですねー、私には丸分かりですから！」

ヤケクソ気味に捲くし立てながら、妖夢の腕を掴んで立ち上がらせる。

言葉の通り、妖夢は抵抗どころか助けを借りて立ち上がるのが精一杯の状態だった。

掴んだ腕を肩に掛けて、さとりに背負い上げられても、妖夢は反応らしい反応を見せなかった。

ただ、ぼんやりとさとりの横顔を眺めているだけである。

さとりも、そんな妖夢の反応や心境には頓着せず、轟然とした足取りで歩き出した。

小柄で、体力もそれほど無いさとりには、背負った妖夢の重みが辛かったが、もはや半ば意地になっていた。

そもそもが、理性的な判断で行ったわけではない一連の行動である。

何処か投げやりな足取りで、さとりは妖夢を背負ってズンズンと地底への帰路を進んでいった。

そこまで眺めていた勇儀が苦笑し、近くに転がっていた妖夢の刀二本を持ってついていく。

すぐに、さとりに追い着いた。

「うるさいんですよっ！」

「なんだい、何も言っていないだろう？」

心が読まれていることを分かっているながら、勇儀は楽しげに惚けた。

「はあ？ おめでたいですね、私が仏心でこの娘を助けたと思っっているんですか。そもそも、これが彼女にとって『助け』になるかどうかなんて分かりやしませんしね！」

「でも、お前が——」

『そいつに手を差し伸べようと思ったことは間違いない。面白い奴だな、古明地さとり』ですね、分かります！ 心、読めますからっ！「うん」

「この先どうするのか全然考えてないですけどね！ どうしましよ
ねっ、この厄種!？」

「いや、知らん。けど、言ってくれりゃ手助けするよ」

「じゃあ、まずこの娘を代わりに背負ってもらえませんか!? 『私が
背負った方が楽なんじゃないか』って気付いたんなら、すぐに!」

「ああ、確かにそう考えたけど、駄目だ。お前さんが、勝手にそいつを
連れて行こうと思ったんだろ。じゃあ、お前さんが背負わなきゃ」

ニコニコと笑いながら正論を口にする勇儀を、さとりは血走った眼
で睨み付けた。

そこから火の点いたようにヒステリックに喚くさとりを、のらりく
らりとかわしながら勇儀が歩く。

結局、さとりが妖夢を背負ったまま、地底への帰路を進んでいく。

何処か遠くのもののように聞こえる二人の喧騒を聞きながら、妖夢
は自分よりも小さな背中に顔を預け、そっと眼を閉じた。

自分の向かっている場所が何処なのか分からなかったが、それを気
にする余裕も無い程疲れ果てていた。

脳裏に一瞬だけ幽々子の顔が浮かび、消えた。

やがて慈悲深い眠りが訪れ、妖夢の打ちのめされた心に一時の安ら
ぎを与えていった。

其の三十五「幻想之月」

あの子が死にかけていた時、何をしてやれただろう。何もしていない。

ただ、傍に居ただけだ。

あの子を助けたのは、私じゃない。

私はただ、独りだったあの子を一番最初に見つけただけだ。

私はただ、独りだったあの子の一番近くに居ただけだ。

血だつて繋がっていない。

最初に自分から名乗ったわけじゃない。

そんな奴が、母親として扱われていいのだろうか――。



眠り続ける先代の前で、文は迷っていた。

――残るべきか。

――去るべきか。

藍と輝夜がこの場を去って、もう既に大分経っている。

その間、文はこの二つの選択の間でずっと迷っているのだった。

つまり、結局この場に残り続けていることになっているのだが、文は気付いていなかった。

延々と、先代を前にして、特に何か行動を起こすこともなく、唸っているだけである。

本当はさっさとこの場を去る方が良いのだ。

この場所。

人里が鬼の襲撃を受けている真つ最中なのは分かっている。

鬼の群れが個々に目的を持っているとはいえ、先代巫女が彼らの標的の一つであることは間違いない。

現に、先代は鬼の襲撃を受けて、激しい戦闘を繰り広げた。

偶然――そう偶然、結界の展開に巻き込まれた文は、その中で誰にも知られずに行われる人と鬼の死闘を目の当たりにしたのである。

恐ろしい戦いだった。

途中で美鈴の参戦があつたとはいえ、人間である先代巫女は、圧倒的な力で鬼の群れを蹴散らしたのだ。

特に、後半の戦いぶりは、それこそ『鬼神』と表現しても良い。

やはり、この人間はとんでもない。

化け物だ。

今、無防備に眠っている先代が、人ではなく傷ついた獅子のように見える。

この場に残った結果、またあんな戦いに巻き込まれるなど御免だった。

それに、先程から空が騒がしい。

ついに、天狗の部隊が鬼の討伐の為に動き出したのだ。

もちろん、文にとつては同族で味方でもあるが、彼らに見つかるのも遠慮しなかった。

鬼の討伐に、自分まで駆り出される可能性が高いからだ。

だから、そういった様々な意味で、さつさとこの場から逃げた方が得策なのである。

予想外に、良い写真も撮れた。

これを持ち帰って、現像し、新聞にする作業を始めよう。出来上がる頃には夜も明けている。思わぬ特ダネだ、時間がもったいない。

仮に残っているにしても、目の前の傷ついた先代に対して、何か出来るものでもない。

現にこれまで、眠り続ける彼女の顔を阿呆のように眺めていることしかやっていないのだ。

こういった多くの判断材料からして、自分はこの場を去るべきである――。

文は、そこまで答えを導き出していた。

そして、未だにこうして残っているのである。

ワケが分からない。

文は、頭を抱えて、また唸った。

「う……っ」

「え？」

不意に、自分の声と重なるように、目の前の先代から小さな声が洩れるのを聞いた。

眼を覚ましたか!? と、慌てて顔を見れば、しかし瞼は閉ざされたままである。

代わりに、苦しげな表情を浮かべていた。

呼吸に乱れはない。容態が悪化した様子ではなかった。

しかし、僅かに歯を食い縛り、震えている。

夢見でも悪いのか。

文は、恐る恐る先代に近づいた。

それでも、先代は眼を開けない。

未だ眠ったままなのは確かである。

それなのに、文が近づくと気配を感じたかのように、彼女の手が動いていた。

震える手が、ゆっくりと文の前に差し出された。

文は、その手を凝視した。

傷だらけの手である。

骨折を何度も経験したせいで歪み、硬い拳ダコで岩のようなゴツゴツとした節くれ立った形に成り果ている。

女のものとは思えない、醜い手だった。

生まれつき、こうなっていたわけではない。

自ら望み、努力して、積み重ねた結果に得た手なのだ。

文は、それを知っていた。

この手が、これまで何を成してきたか。

痛いほど知っていた。

「……し」

濡れたものが喘ぐように差し出したその手を、文は咄嗟に握っていた。

ずっと昔に、まだ幼かった彼女の手を、こうして握ってやった覚えがある。

あの時周りには、自分以外にもはたてと権がいた。

苦しむ少女を助ける為に働く二人がいた。
でも、今は自分しかない。
何も出来ない自分しかない。

「しっかり——」

消え入りそうな声で、呟く。

代わりに、握り締める手には力が籠もる。

先代の表情が不意に和らぎ、かすかに口が動いた。

「——お母さん」

「ぶっぶおっ!？」

その一言で我に返り、文は盛大に吹き出した。

◇

——夢を。夢を見ていたんです。とても荒々しく、雄雄しい夢を。
……なんて、ファイリングで適当に言ってみたが、本当は自分がどんな夢を見ていたかなんて、私は覚えていないのだった。

夢を見ていたのは確かだし、それがなんとなく切ないような悲しいような感覚は残っているのだが、具体的な内容がさっぱり思い出せない。
い。

眼を覚ました途端、それまで見ていたものが一気に曖昧になってしまったような感じだ。

まあ、夢ってというのはそんなもんなだろうけどね。

おぼろげに、霊夢が出てきたような気がするのだが——うーん、駄目だ。ハッキリしない。

ハッキリしないといえば、記憶の方も若干混乱気味だった。

鬼との死闘をなんとか制して、美鈴を送り出した後で、私は多分気絶したのだと思う。

そして、今眼を覚めたのだ。

しかし、その割にはなんか記憶の中に藍と輝夜の姿がぼんやりと浮かぶのだが……なんで、この二人なんだろう？

えー？ 鬼と戦ってる時に、この二人いたっけ？

結果を張っていたはずだから、美鈴以外誰もいなかったはずなんだけれどな。

でも、二人と何か会話をしたような、一方的に話を聞いたような、そんな気もする。

何より、冷静に現在の自分の状態を確かめてみると、おかしなことに気付く。

鬼と戦った直後と比べて、体調が非常に楽になっているのだ。

体の節々が酷く痛むが、それらもすぐに和らげられるほど波紋の呼吸は順調だし、体力的には余裕すら感じている。

どう考えても、自然回復では在り得ない。

私が気絶した後で『何か』があったのだろう。

ただ、やはりその『何か』が思い出せないのだった。

うーむ、残念だ。

具体的には、藍と輝夜の二人との会話という貴重な体験を覚えていないことが非常にもつたいない。

私つてば立場や経緯からして、この二人とは疎遠な関係だからね。

折角の友好度を稼ぐ貴重なイベントがスルーとか、嘆く以外ありませんよ。

状況的に、二人の内のどちらかが助けにくれた可能性が高いが——私つて、あの二人には特に嫌われてると思ってただけだ。

実際、そこんどこどうなの？

超気になる！

——そして、もう一つ気になるのが、目の前で盛大にむせている文の姿だった。

「……大丈夫か？」

「だ、誰のせいだと……っ！」

「私のせいなのか？」

「へ……!?! あ、いや……その！」

文は、まるでたった今私と話していることに気付いたかのように、驚いていた。

「……違います」

何故か、消え入りそうな声でそう答える。

私から眼を逸らすように俯き加減で、らしくもなく消極的な反応だった。

あれ、文ってばこんな性格だったっけ？

というか、そもそも何故文が傍にいるのかが分からない。

彼女とは、人里に運んでもらってそれっきりのはずだ。

いつの間に合流したんだろ？

ひよっとしたら、私の曖昧な記憶の部分を、彼女は知っているのだろうか。

「私が眠っている間に、何か事態に変化があったか？」

「……そう長く眠っていたわけではありませんよ。まだ、夜も明けてませんしね。」

蓬萊山輝夜と八雲藍が、薬を使つて貴女を回復させました。といっても、傷の治療ではなく、体力を回復させただけですけどね」

やっぱり、輝夜と藍が居たのは確からしい。

なるほどね。体の調子がおかしなことになってるのは、そのせいなのか。

筋肉痛に関節痛と、節々が痛むのに重苦しい疲労感だけが全く無い。

今すぐにも立ち上がりたいのに、手足が思うように動かないのだ。

今しばらく、波紋の呼吸に集中して回復に努めなければ、まともに歩くことも出来ないだろう。

「鬼は、今どうなっている？」

「少なくとも、人里に関しては事態は終息し始めていますよ。」

天狗が組織立って動き始めました。天魔様を筆頭に、集団で鬼の駆逐に回っています」

「それは……すごいな」

「言っておきますけど、これは例外的なことなんですよ」

「分かっている」

「どうだか……また、人里以外の鬼に関しても、先程の八雲藍が対処す

るようです。実際に、どうなっているかまでは分かりませんが」
ふむ。鬼の力も脅威だが、藍しやまもまた並の妖怪ではない。
楽観は出来ないが、十分に対処してくれると信頼も出来る相手だった。

——詰まるところ、私が気絶している間に、今回の異変は確実に解決に向かっていくということだった。

一時は、この消耗した状態から更なる戦闘を覚悟していたが、やれやれ一安心といったところか。

しかし、未だに全てが終わったわけではない。

「異変の首謀者はどうなった？」

私は、萃香のことを尋ねた。

異変の中心である彼女の元には、霊夢が向かっているはずだった。

文は、何故か一瞬言い淀んでから、答えた。

「まだ、分かりません」

「まだ倒されていないんだな？」

「さあ、分かりませんよ。なんせ、私はさつきまで貴女の面倒を見ていたわけですからね」

文が皮肉るように笑う。

うっ……ごめん。私のせいで手間が掛かったってことだよね。

でも、もう大丈夫だ。

とりあえず、なんとか歩ける程度には回復したと思う。

いや、回復というよりも体のバランスが取れてきたと言った方がいいか。

全快した体力と、落ちた身体能力のズレを合わせられるようになってきた。

未だに少しチグハグな感じがするが、とりあえず動く分には問題ない。

そして、動けるのならば、やることは決まっている。

「ちよっと、何してるんですか？」

立ち上がるうとする私を見て、何故か文が慌てていた。

いや、何って……文に世話掛けるのもアレだから、さつきと行動し

ようとしてるんですけど。

そう答えようとして、ふと気付く。

——ん？ この手の感触は何？

立ち上がろうと地面に手を着いて、もう片方の手が動かなかった。思わず視線をそこに向けると、同じタイミングで文も同じ場所を見ていた。

文の手が、私の手をしっかりと握り締めていた。

……え、えーと。

「——うわっ!？」

きゃっ!?

ぐ……ごめんなさい、あたしったら!

お互いに、今更気付いたかのように慌てて手を離した。

なんとという乙女ちつくな反応。っていうか、キモイな私。

「すまない」

思わず謝ってしまう。

「へっ？ な、何がですか……?？」

「手を——」

「え、ええ。はい」

「多分、気絶している時に無意識に掴んでしまったのだと思う」

「あ……」

「だから、ここから離れられなかったんだらう？ 本当に、すまない。

ありがとう」

私は精一杯言葉を尽くして、文に感謝した。

何故、文がわざわざ気絶した私の傍についていてくれたのか。これで判明したな。

なんてことはない、私は自分で迷惑を掛けてたんじゃないか。

さっさと手を振り払って、ここから離れればいいのに残ってくれた文ちゃんマジ天使。

普段の悪ぶった言動の裏に隠された熱い人情味に、泣けるで!

「……そ、そうです。その通りです! い、いやあ、本当に面倒な話でしたよ!」

文は大きく何度も頷きながら答えた。

いいんだけど、そんなにふんぞり返ったら、首痛くね？

「そうだな。すまない」

「ま、まあー別にいいんですけどね！　せいぜい恩に着てくださいいっ！」

「ああ、貸しにしておいてくれ。いずれ返す」

「……貸し。貸し、ね。そうですね……」

文は何故か難しい表情で黙り込んでしまった。

え、何？　貸し一つじゃ足りない？　二つ分くらいの方がよかったかしら。

とりあえず、今回のことの礼については後で話し合うとして、両手が自由になった私はその場からゆっくりと立ち上がった。

ぐっ……むう、なんて有様だ。

ただ立ち上がるだけのことが、異常に難しい。

辛い、というわけではないが、動くはずの箇所が動かないという不具合が体の各所で起こっている。

これは、慣れるまでまともに歩くことも難しそうだ。

かろうじて立ち上がった私は、おぼつかない足取りで前に進んでみた。

まるで生まれたてのトムソングゼルのように不安定な足元だ。いや、トムソングゼルとか知らんけど。

数歩進んで、バランスを崩す。

平坦な地面で足を踏み外すというどうしようもないミスを犯した私の体は、しかし倒れる最中で留まった。

慌てて支えてくれたのは、文だった。

「な、何やってんですか!？」

「上手く歩けない」

「当たり前でしょう！　あんた、自分がどんな戦い方をしたのか覚えてないんですか!？」

「体力は回復した」

「体中から血を噴き出しながら暴れ回ってたんですよ！　しかも、一

呼吸も休まずに、長々とつ！ あの二人が来なかつたら、そのまま死ぬかと思つてたんですから！」

「……心配掛けた」

「心配なんかしてませんよ！」

そ、そうか……勘違いしてすまん。

なんだかよく分からない怒り方をする文に、私は戸惑っていた。つまり、どうということだつてばよ？

お母さんに叱られてるような気まずさを感じるのだが、そんな文の言動に対して、どういう反応をすればいいのか分からない。

えーと、とりあえず抱えている手を離してもらえないかね？

私には、まだ行くべき所があるのだよ。

「——伊吹萃香の所へ向かうつもりですか？」

私の瞳をじつと覗き込み、内心を察するように文が言った。

私は小さく頷いて答える。

「まさか、その体で萃香さんと戦うつもりじゃないですよね？」

「それは霊夢の仕事だ」

「だったら、ここで大人しくしておいた方が良いのでは？」

「見届けたい」

「それは貴女の義務ですか？」

「いや、そうしたいだけだ」

文は、再び怒つたような表情で黙り込んだ。

何やら、私の行動には反対の様子。

これってやっぱり心配してくれてるんじゃないかね。

私の都合の良い解釈でしかないが、もしそうだと思つとちよつと嬉しくなる。

しかし、痛む体をおしてでも霊夢の所には行きたいのだ。

私は、こんな時でもしつかりと体を支えてくれている文に、一つ提案を試みることにした。

「手を貸してくれないか？」

あつかましいと自覚しているが、それでもお願いしてみる。

少しでも速く、現場に着きたい。その為には手助けが必要だ。

文は無言で私を見つめ返した。

……う、うーん。やっぱり個人的なお願いだけじゃ苦しいかしら？
思い返してみれば昔、妖怪の山でも同じように助けを乞うたことがあるんだよね。

当然のように断られたけど、やはり今回も事情は同じなんだろう。
赤の他人のお願いなんて、応える義務も義理も無い。
ちよつと迷っているように見えるのは、きつと文自身の善良さから
来るものなんだろうな。

私の手伝いなんて、本当は面倒だつて思ってるはずだしね。

ここは一つ、文にもメリットがあることを伝えておこう。

「きつと、いい取材のネタにもなると思う」

そう告げた途端、一気に文の表情が不機嫌になった。

何故だ……。

「——いいでしょう。連れて行ってあげますよ」

「ありが——」

「そして、勝手に死ねば宜しい」

礼の言葉を遮って、文は勢いよく空に飛び上がった。

吹っ飛ぶような急加速だ。思わず舌を噛みそうになった。

最後の一言は吐き捨てるような調子であり、私を抱えたまま飛び
立った後は前を見据えたまま、一度もこちらを見ようとしない。

どうやら、完全に機嫌を損ねてしまったらしい。

なんで？

いや、本当に分からん。

文ちゃんてば難しいお年頃なのね。



「鬼の四天王、伊吹萃香。地底より一世一代の大勝負に来たぜ——此
度の異変を解決したくば、我が身を見事退治してみせよ『博麗の巫女』
!!」

今宵の異変の終結。

百鬼夜行の終着点である人里の中心部に、萃香の朗々とした宣戦布告が響き渡った。

龍神像の広場の周囲に、まるで異変の元凶を囲むように佇む多くの人妖達が、それに聞き入る。

鬼と戦える者も、戦えない者も、一様に息を呑んだ。

それら全ての者達を蚊帳の外にして、萃香は霊夢と、丁度その背後に立つ形になっている先代巫女を見据えている。

先代を支えている文が、鬼の視線に巻き込まれる形になって、顔を青褪めさせていた。

萃香の宣告に、しばらくの間誰も応えなかった。

霊夢は無言で睨み返し、先代は意表を突かれたかのように僅かに眼を見開いている。

その時、最初に動く者があつた。

「——バカか、貴様」

レミリア・スカーレット。

「そりゃ、馬鹿正直の馬鹿って意味？」

「浅はかで愚かしいという意味よ」

「この野郎……」

嘲笑を浮かべるレミリアを、萃香が憎らしげに睨む。

「少し考えれば分かることだろう——お前、ここまで来て自分の都合の良いように話が進むと思っているのか？」

「ふうん。あんたはわたしが博麗の巫女と決闘するのを邪魔するつもりってわけかい」

「幻想郷のルールを無視して、好き勝手暴れたんだ。今更決闘のルールなど持ち出すな」

「無法には無法で応えるってことか。道理だ」

「いや、道理じゃない。ただ単に、私が気に入らないだけだ」

「なるほど、分かりやすい」

「貴様が博麗の巫女と決闘したいのならば、好きにすればいい。スペルカードでも、殺し合いでも、勝手に仕掛ける。私は、その横合いから全力で殴りかかろうと思う」

そう言う傍から、レミリアは一步を踏み出していた。言葉による探り合いや、意思の譲り合いなどもはや無い、と言わんばかりである。

真つ直ぐに萃香に向けて、静かな殺意を漲らせながら歩いていく。無造作な歩みである。

しかし、この小さな吸血鬼の偉大な前進を止めることがどれ程困難なことか、萃香は知っていた。

未だ夜空に浮かぶ満月は、圧倒的な不死の力を目の前の吸血鬼に送り続けているのだ。

二人が互いの手の届く範囲に踏み入った瞬間、戦闘が始まる。

そして、萃香にとってはその戦闘の始まり自体が、思惑を潰される敗北と同義だった。

真正面からの潰し合いで、レミリアを制する絶対の自信など無い。ましてや、その戦いを避けて博麗の巫女と尋常の勝負する余裕など全く無い。

一歩一歩近づいてくるレミリアを、萃香は思案するようにつめていた。

「困ったな」

しかし、その表情からは面白がるような微笑が浮かんでいた。

「お前さんと喧嘩するのも楽しそうだ、なんて思っちゃってるよ」

「そうか。貴様を楽しませるのも気に入らん」

「大丈夫よ。『尋常の勝負』なんてさせてあげないから」

第三者の声が、萃香の背後から聞こえた。

萃香が肩越しに振り返り、レミリアが僅かに視線を動かして、声の主を見やる。

「おっと、こいつは拙いことになった」

萃香は笑いながら頬を掻いた。

風見幽香。

いつの間にか、人里に降り立った隻腕の彼女が、ゆっくりと萃香に向かって歩み寄っているとところだった。

「当代の巫女に興味はないけれど、先代の方には先約があるのよ。お

前如きに後からお手つきされたんじゃ堪らないわ。滅びゆく者は、大人しくここで滅びなさい」

幽香は、萃香から視線を外して、初対面であるレミリアを見た。

「下がってなさい、おチビちゃん。そいつに引導をわたすのは私よ」

「貴様こそ下がっている、ババア。怪我人が無理をするな」

「分かったわ、二対一ね」

「私が貴様ら二人をまとめて殺せばいいんだな」

「訂正するよ。こいつは楽しいことになってきやがった」

幽香とレミリア、そして萃香が互いに全く同じ種類の笑みを浮かべた。

周囲の傍観者の中で、ただの人間に過ぎない者達が等しく恐怖を感じる笑みである。

おぞましい妖怪の笑い方だった。

三つ巴の凄惨な殺し合いが今まさに始まろうとしている。

幽香とレミリアの足は、一瞬も止まってははいない。

一歩進むごとに、身に纏う重圧が増していつているように、足が重々しく地面を踏み抜いている。

二人の間に立つ萃香を中心に、互いの距離が縮まっていった。

三匹の怪物の間合いが触れ合う。

それぞれが纏う帯電した空気のようなものが互いの間で触れ合い、そこに火花が散るのを周囲の者達は見たような気がした。

その火花が合図だった。

同時に、動いた。

レミリアが右腕で。

幽香が残っている片腕で。

全力で殴り掛かった。

間に挟んだ萃香を通して、その先にいる相手まで一緒くたに殴り飛ばそうとするような勢いだった。

二つの拳圧に挟まれた萃香の笑みが、歯を剥くほど深まる。

鋭い音がした。

「ぬ——っ!？」

呻くような声が、三人の内の誰か、あるいは三人ともから洩れた。拳が肉体に当たるような音ではない。

幽香とレミリアの拳が、眼前に展開された結界によって遮られていた。

「ここは人里よ」

霊夢だった。

「妖怪が殺し合いをする場所じゃない」

単純な殴り合いとはいえ、強力な妖怪の全力の攻撃を受け止めるほどの結界である。

それほどの術を行使した霊夢の実力が如何なるものか、萃香達三人はもちろん、周囲の人妖全てが理解出来た。

霊夢と一度戦ったことのあるレミリアを除き、幽香と萃香は人間に對するものの中で最大級の警戒を向ける。

その鋭い視線とそこに伴う圧迫感を、まるで感じていないかのよう
に霊夢は平然としていた。

「妖怪が妖怪に潰されても、それは異変の解決にはならない。人間が妖怪を退治しないと、話が終わらないわ」

「それは、貴女の持論かしら?」

幽香が小馬鹿にしたように訊いた。

「博麗の巫女として告げる、幻想郷の理よ」

霊夢は迷い無く答えていた。

「そんなもん知ったこっちゃあない——と、言ったら?」

「あんたを退治する」

幽香の殺気混じりの視線を静かに見返し、

「そして、あんたも退治して、この異変を解決する」

萃香に視線を移して、断言した。

萃香は楽しそうに笑った。

更に次に視線を向けられたレミリアは、肩を竦めて気の抜けるような笑みを浮かべた。

「私は、もう一度退治されてるわ。二度は御免よ」

「じゃあ、さっさと下がってなさい」

「はいはい。ここは、アナタに預けるわ。霊夢」
レミリアはあっさり引き下がった。

既に、戦いの緊張感が彼女からは抜け落ちている。残された、異変の首謀者である萃香は満足気に状況を見守り、一方の幽香は憮然とした表情のまま霊夢を睨み続けている。

自らの放つ威圧が全く効果を発揮しないことを悟ると、幽香は霊夢から視線を外して、今度は先代の方を見た。

「あんたは、どうなの？」

唐突に話を振られた先代が、幽香を見た。

「やる気なの？」

——最初の萃香の挑戦を受けるのか？

そう尋ねているのだった。

結局、萃香の思うように話が進んでしまうことは、もちろん幽香の本意ではない。

霊夢に得体の知れない手強さを感じてはいるが、それらを意に介さず、全力で妨害してやることも考えている。

しかし、あるいはこの質問に対する先代の返答によっては——。

そこまで考えて、幽香は小さく舌打ちした。

憎むべき相手である先代の答えを予想し、それに妥協してしまう自分に苛立ったのだった。

「……ああ」

そして、先代は忌々しいことに予想通りの答えを返していた。

「先代博麗の巫女として、私は異変を解決する」

「ああ、そう。好きにきなさい」

大きくため息を吐くと共に、幽香の体にあつた強張りが抜けていった。

諦めたと言ってもよかった。

こうなってしまうては、もう先代が戦うことを止められないと分かっているのだ。

——私とはとことん渋るクセに、どうして他の奴らとは簡単に戦うのよ。

先代の好みの話ではないと分かつてはいるが、幽香は内心で悪態を吐かずにはいられなかった。

「負けたら殺すわよ」

幽香は苦し紛れにそう言つて、萃香から離れた。

◇

薄々と予感はしてたんだが——いつの間にか、ボロボロの状態で伊吹萃香とガチンコすることになったでござるの巻。

これ、デジャビュじゃね？

地底でも似たようなことあったんじゃね？

なんつーか、あれね。鬼つて、私にとつて文字通りの鬼門ね。

「お師匠！」

「師匠、本当にやる気なの？」

おおっ！ 二人とも無事だったか！

私が幽香の問いに答え、萃香との戦いが決まった頃合を見計らつたかのように、チルノと妹紅が近づいてきた。

いやあ、今回は異変の規模も被害も凄いことになってそうだから、気がかりも多かつたんだ。

その内の一つである知り合いの安否が、これでハッキリした。

見れば、二人以外にもてみると慧音、そして何故か美鈴と橙が傍にいらる。

……妹紅達四人の組み合わせはともかく、そこに美鈴が加わるって珍しいな。橙に至つては、私だつて現役時代にちよこつと顔見せした程度の関係だぞ。

まあ、友好関係が広がっているという点からすれば、良いことなんじゃないだろうか。

改めて周囲を見回してみれば、彼女達以外にも紫や椀など、知り合いの無事な姿がチラホラ見える。

さどりの姿が見えないことがちよつと気になるが、別にここに居なくても問題は無いか。

むしろ、ここはこれから戦闘が始まるわけだから、安全な場所とは
言えない。

さとりのことだから、厄介事に巻き込まれる前に上手く地底へ帰っ
たのかもしれない。

博麗神社にいたはずの魔理沙が、レミリア達と一緒にいないのも
ちよつと気になる。

でも、彼女の場合は他の鬼を退治に行っても不思議ではない。
アリスもいないし、案外コンビで頑張っているのかもしれない。

とにかく、今は私自身が直面している問題が第一である。
さて——いよいよ、この異変のラスボス戦か。

「師父。体の調子は、どうですか？」

美鈴が真剣な表情で訊いてきた。

共に鬼と戦い抜いた彼女は、その後私がどんな状態になったか知っ
ている。

もしも、あの時の消耗したままの状態だったら、萃香相手に万が一
にも勝ち目は無い。

さすがにそんな無謀な行為は許さないつもりだろうし、私だってや
るつもりはない。

美鈴は有無を言わせぬ真っ直ぐな視線で私を見ていた。

「大丈夫だ。体力は回復している」

細かい経緯を省いて、私は単刀直入に事実だけを答えた。

未だに文に支えられたままだから、説得力はあまり無いかもしれん
けど。

「霊夢一人に任せるワケにはいきませんか？」

「霊夢の実力を疑っているわけじゃない」

今度は慧音の問い掛けに答える。

「だが、萃香が望んだことだ」

「あの吸血鬼のお嬢様の言葉じゃないけどさ、付き合う道理は無いよ。
無視すればいいじゃん」

「そうだよ！ あたいが代わりにやっつけるよ！」

「チルノ、お願いだから黙ってて！」

てゐるの言葉に、私はもつともだと頷いて返す。

あと、チルノつてばマジ天使。

地底での戦いでもそうだけど、その思いやりだけで私は冗談抜きに戦う力が蘇ってくるのだよ。

……それにしても、橙といつの間にも仲良くなったの。

まるでツーカーの仲間やね。

「博麗の巫女としての責務を、まだ感じている」

「でも、あんたはもう引退した身だ」

「それだけじゃない。萃香が異変を起こしてまで望んだことに、出来るだけ応えたい」

「相手は初対面で、異変を起こした敵で、恐ろしい鬼だったのにかい？」

てゐるは、何処までも道理を語っていた。

確かに、その通りだ。

私は、今回の異変で初めて伊吹萃香という鬼と出会った。

周囲はそう捉えているし、実は私に『ゲームの知識として萃香を知っている』という前提があるとしても、それと実際に出会うことはまた違う。

伊吹萃香というキャラクターに関する情報を持っていることが、目の前の伊吹萃香という鬼を理解していることに繋がらないことは、長年この世界で生きてきた私がよく分かっているのだ。

彼女が、何を思っただけで今回の異変を起こしたのか。

彼女が、何を思っただけで最後の戦いに私と霊夢を指名したのか。

分からない。

分かるわけがない。

そんな分からない相手の気持ちに伝えたいなんて、あまりに曖昧な理由かもしれない。

今の私の気持ちは、幻想の中の萃香に抱くものじゃないかと疑っている部分もある。

もし、私が何の予備知識も無くこの状況に置かれたら、わざわざ萃香と戦おうなんて思わないんじゃないかと考えてもいる。

——だけど、それでも。好きなんだから、しょうがないじゃないか。
——この幻想郷で生きる人や妖怪が、好きなんだから仕方ないじゃないか。

きつと、幻想郷の誰にも私の今の気持ちは分からない。
さとりだつて、ハッキリと察してはくれないだろう。

この世界に転生し、物心ついた時から私の中には前世の知識があつて、そこから来る先入観があつた。

初めて出会う人や妖怪に、最初から魅力や好意を感じていた。

実際に付き合うことで、それらの感覚は修正され、それで深まることはあつても、消えることだけはなかった。

そこから、今の私の友好関係が出来上がったのだ。

今更『もし、その先入観が無かつたら初対面の相手にここまで友好的になれなかつたんじゃないか』つて考えても仕方の無いことだ。

これまで会つた者達、そしてこれから会う者達に、私はゲームの中で見た姿を投影して接していくだろう。

記憶でも消さない限り、それを変えることは出来ない。

そんなことまでする必要は無い、と。私も思う。

考え始めると、ややこしくて堪らない。

だから、私はいつだつてシンプルに結論を締める。

「だけど、彼女も同じ幻想郷に住む者だ」

萃香と霊夢が待っている。

体を支えてくれていた文の手から離れて、私は自分の足で歩き出した。

「ならば、私は全てを受け入れる。この幻想郷と同じように——」

紫の言っていた幻想郷を表す言葉に倣つて、私は背後のてみると、他の皆に告げた。

全てを受け入れるなんて、カツコつけてみたけど、楽じゃないね。

その結果待っているのは、生涯二度目の鬼との戦いつつてわけだ。

紫の言うとおり——それはそれは残酷なことだな、まったく。

……あ、ちなみに私だつて人の子なので、憎まれたり嫌われたりするのが平氣つてわけじゃないからね。

だから、幽香との殺し合いは全力で逃げるよ。信念を持って逃げ切るよ。

もうちよつとデレてくれたら、考えないでもないけどね！



『ならば、私は全てを受け入れる。この幻想郷と同じように——』

そう言つて、先代の体が手から離れていった。

ゆつくりと遠ざかっていく先代の背中を、文は呆然と見ていた。

彼女の告白が、衝撃的だった。

あの言葉が彼女の本心なのだと、理屈抜きで分かる。

何故か分かつてしまうのだ。

疑うことすらしなかった。

そして、その一言が文に大きな衝撃を与えていた。

先代の言葉は偉大だった。

いや、もつと大雑把に『包み込むように大きな』言葉だと、文は感じていた。

この幻想郷でひしめく、人間も妖怪も、強い奴も弱い奴も、友好的な奴も敵対している奴も、数多くいるというのに、それら全てをまとめて受け入れようとしているのだ。

何が彼女の懐をそこまで大きくしているのか、文には分からない。

何が彼女の器をここまで育てたのか、文は知らない。

自分がこれまで、彼女に対して慇懃無礼な態度を取ってきたことは自覚している。

お世辞にも、好意を抱かれるような接し方をしてはいない。

それには奇妙なほど自信がある。

それなのに、彼女は何故か自分に親身に接し続けていて、それが理解出来ず、いつも苛立ちとそれ以外の落ち着かない気分が抜けなかった。

今も、そうだった。

衝撃から我に返った文は、自分が今何を考えているかも分からない

まま、無意識に手を伸ばしていた。

萃香の元へ行こうとする先代の背中に向かって、引き止めようとする――。

「やめなさい」

その手を、横合いから掴んで止められた。

いつの間にか傍までやって来ていた、八雲紫だった。

「気に入らなくても、駄目よ」

文は、自分を止めた紫を見る眼が思わず睨む形になっていることに気付いた。

「彼女を行かせまい、という貴女の気持ちは親心なのかしら？　今更ね」

「はあ？　何を、言ってる――」

「無自覚ですか。その中途半端さが、ずっと気に入りませんでしたわ。彼女は無意識の中でも、貴女の実在を感じ続けていたのに」

「……離してもらえますか」

文には最初、紫が何を言っているのか理解出来なかった。

ただ、奇妙な既視感を覚えていた。

しかし、ハッキリとしない。

ハッキリとしない分、紫に対する苛立ちだけは明確に感じる。

文は掴まれた腕に力を込めたが、紫は手を離さなかった。

「何なんですか!？」

「子はいずれ、親から離れていくものですわ」

紫は冷ややかに告げた。

眼を見開き、改めて紫の顔を見つめる。

その一言を切欠に、文は全てを理解した。

覚えのある感覚の正体も分かった。

紫の言っていることは、常日頃からはたてが自分に言っていることと同じ意味なのだ。

彼女は、はたてのそれを何倍も悪意を込めて文に言っているのである。

その悪意を表に映す代わりに、抱いている感情を徹底して排した氷

の瞳が、文を刺すように見返していた。

「……あの時」

文の脳裏には、数十年前の光景が鮮明に蘇っていた。

あの突然訪れた別れの光景を。

『あの子』を博麗の巫女として迎えに来た、あの時——貴女は、全て知っていたんですね」

紫は『何を?』と尋ね返さず、肯定もせず、反応すら見せなかった。ただ冷たく視線を向けるだけだった。

文はそれだけで察した。

こいつは、分かっていたのだ。

あの時、全て分かっている、私の目の前から『あの子』を攫っていたのだ——!

「お前——」

文の視線と声に、無意識に殺気が滲んでいた。

もしも紫と二人だけの状況だったならば、そのまま本当に殺しに掛かっていたかもしれない。

しかし、文の内側で滾り始めた殺意は、周囲のどよめきに気付いた瞬間急速に消えていった。

慌てて、視線を戻す。

霊夢と並ぶような位置に辿り着き、萃香と相對する先代の姿が見えた。

手を伸ばそうとしていた先代の背中では、もう届かない所まで遠ざかってしまっていた。

——ああ、なんて。

先代博麗の巫女として、彼女が多くの事件を解決してきたことを新聞の記事にしてきた。

当時の出来事を、全部知っている。

だけど、思い返してみればただ一つ、至らない所があった。

自分は、彼女が実際にどんな風に戦い、妖怪を退治して、人を救っていたのか——その姿を直接見たことがないのだ。

——あの小さな子供が、なんて偉大になったのだろうか。

——いつの間にも、あんな大きな背中になったのだろう。

かつて、妖怪の山で見つけた奇妙な子供は、今や伝説の鬼と対峙するほどになったのだ。

伝聞で知った勇儀の時とは違う。

目の前の光景として、その後ろ姿を眼に焼き付けた文は、言葉を失っていた。

「貴女のことは嫌いだけれど、一つだけ感謝いたしますわ。射命丸文」
力の抜けた文の手を離して、紫は呟いた。

「始まりがどんなものだったのか、そこに愛情があったのかは知りません。でも、貴女は確かに彼女を育てた」

気が抜けたように佇む文と肩を並べながら、紫は今回の異変における最後の戦いを見据えていた。

「そして、その彼女もまた親となり、霊夢を育てた。巫女としての役割は終わり、親としての役割もあと少しを残すのみ——」

「今夜、そこにまた一つの区切りがつかますわ。最後まで見届けなさい」

紫の言葉に応えず、文はただ目の前の光景を見続けていた。



人里を騒がせた悪しき鬼が、二人の巫女と対峙している。

御伽噺的一幕にもありそうな光景である。

自然と隣り合う位置に立った霊夢は、傍らの母——今は先達である博麗の巫女として——に、視線を送った。

「先代」

「ああ、気をつける。萃香の力が増してきている」

霊夢は勘で。そして、先代はより明確な気配を察知する能力について、目の前の萃香に起こっている変化を感じ取っていた。

萃香が幾つもの分身を作って、幻想郷の各所で行動していたことは知っている。

それらの分身の内の幾つかは直面した戦いの終了と共に場を去り、手傷を負い、あるいは完膚なきまでに抹殺された。

目の前の萃香は、それらの分身の本体であると同時に、文字通り自らの身を複数に分けることで弱体化した状態だったのだ。

その半減した力が今、徐々に戻ってきている。

「言ったらう、もう『集まってきている』のさ」

不敵に告げた萃香の言葉に応えるように、一際大きな力の波が押し寄せてきた。

眼に見えないそれは突風となり、唸りを上げながら萃香の周囲で渦を巻きながら一点に集中していく。

周囲の傍観者達の中から、幾つかの悲鳴が上がった。

いずれも人里の住人が上げたものである。

鬼が放つ本来の力——それは人を恐怖させるには十分な迫力を持っていた。

しかし、霊夢と先代は荒れ狂う鬼の力を前にしても、揃って眉一つ動かさない。

集まった力が萃香の肉体に吸収されていく様を、心乱されることなく、静かに見据えていた。

やがて、力の収束が止まった。

分身に分けていた力が、完全に萃香一人の元に戻ってきたのだ。

荒れ狂う力の風が止んだ後に残された萃香の姿を認めて、霊夢は思わず呟いていた。

「……あんた、それ何の真似？」

訝しげな視線を、変化した萃香の姿に向ける。

力を取り戻した萃香の外見には変化があった。

先程と比べ物にならない程、鬼の力が漲っていることは感覚で分かる。

しかし、同時にその姿は傷だらけの汚れたものへと成り果てていたのだ。

萃香は、鼻から血を流しながら、痣だらけの顔でにっこりと笑った。「この鼻血は、その天狗にやられた時のもの。いやあ、いい蹴りだった

た」

萃香ははたてを指して言った。

「顔の痣は、その吸血鬼にしこたまぶん殴られた時のもん。いつか続きをやりたいね」

今度はフランドールを指して言う。

「手足の切り傷はそのメイド。いや、人間のクセにやるもんだ。そっちの魔法使いには全身を焼かれてさ、しかも花畑でそっちの妖怪に分身を消し炭にされたことと重なって結構痛いんだ。それから――」

咲夜、パチユリー、幽香――と、それぞれを指しながら、萃香は楽しそうに説明していった。

それを聞いて、全ての者が察した。

彼女は分けていた力を取り戻し、それと同時に分身が受けたダメージもまた同じように一つの肉体へ纏めてしまったのだ。

それがわざと行ったことなのか、それともそういう能力の性質や限界なのか――そこまでは分からなかった。

しかし、少なくとも萃香は自らが既に負っている傷に対して、何ら問題を感じていない様子だった。

むしろ、説明をする声には誇らしげな色すら混じっている。

博麗の巫女二人を相手にして、余裕のつもりなのか。

それとも――。

「これも、言っただろう。『わたしの分身を、吸血鬼のチンケな使い魔と一緒にするな』ってね」

多くの者が訝しげな表情を浮かべる中、萃香はレミリアを見て、言った。

「百の鬼が幻想郷を襲い、そいつらにはそれぞれ好き勝手な目的があった。我が分け身は、その全てに同行した。奴らと共にこの地を襲い、この地の全てに喧嘩を売った！ もう一度言うぞ！ この伊吹萃香は、此度の異変の真正銘元凶よ!!」

萃香は、博麗神社で口にした言葉を、そっくりそのままこの場でも朗々と言い放った。

人里の隅にまで届くほどの声だった。

その声そのものに力が宿り、周囲を揺るがして、漆黒の夜空に雷鳴の如く轟く。

例え妖怪であっても圧倒されるような迫力だった。

少女のように小柄な体格で、そこに無数の傷をつけた痛々しい姿でありながら、まるで巨大な岩石が意思を持って動いているような威容を放っている。

「あんたは、結局何がしたいの？」

何も語らない隣の先代に代わるように、霊夢は短く尋ねた。

「その仲間の鬼も、もうほとんどが退治された。異変は終わりつつある。最後にあんたが望む博麗の巫女に二人掛かりで退治されて、それでめでたしめでたしで終わらせようってわけ？」

「いいね、それ。分かりやすい疑問だ」

萃香を含む多くの鬼が少なからず決意を持って起こした此度の異変に対して、霊夢の反応はあまりに淡泊に見える。

しかし、萃香はむしろそんな霊夢の揺るぎ無い態度を楽しむように笑っていた。

「だけど、わたしの答えはそんな分かりやすいものじゃない」

そう呟いた時、萃香が常に浮かべていた笑みが消えた。

「わたしにも、ハッキリと分からないんだ」

自らの内側から答えを探るように、萃香は言い淀んでいた。

それは、笑みの中に隠されていて、今ようやく垣間見えた萃香の本心だった。

「分からないから、多分ここに立っている」

「そんなに曖昧な状態なら、やめればいいじゃない」

「曖昧ってほどじゃない。答えはもう出ている、ただそれが二つあるんだ。そのどちらにも納得がいかないだけなんだ」

「それって答えと言えるかしら」

「わたしは、上手く説明できない」

「それじゃあ、あたしも上手く理解出来ないわ」

「うん、そうなんだ。わたしにも、理解出来ないんだ」

困ったように笑う萃香に対して、霊夢は呆れたようにため息を吐いた。

「多分、言葉だけじゃ——理屈だけじゃ、どうにも呑み込めないんだと思う」

上手い言葉を手探りで見つけようとするかのように、喋り続ける萃香の体に変化が訪れた。

萃香の全身から、霧のようなものが立ち昇り始めている。

「霊夢。お前さんの言ったことは、答えの一つだよ。」

わたしは、人間に退治されに、地上へやって来たのかもしれない。もう、鬼の生きる時代が終わったんだって、頭では分かっちゃいるんだ。最期に盛大な祭りをやりに来たって——そう、思っていた」

その霧は、周囲に散ることなく、一旦萃香の体を離れた後でそのすぐ隣に集まっていった。

霧が集まって塊となり、それがまた形を整えて人型へと変わっていく。

「だけどね、頭の中の別のところで同じくらい強く思うことがあるんだ。」

冗談じゃない、ってよ。ふぎけんなよ、ってよう。誇り高き鬼の末路が、人間如きに忘れ去られて惨めに潰えていくしかないなんて——てめえ、鬼を舐めてんじゃねえぞ。くそつたれ！——ってよう、叫ぶのさ。わたしの中の鬼がよう」

もはや、それは霧ではなかった。

形を取り、色を得て、力の宿ったそれは、もう一人の伊吹萃香の姿だった。

萃香は、自らの肉体と力を二つに分けたのだ。

同じような体格で、同じような傷を負い、そして同じだけの強大な力を宿した二人の萃香である。

元の力を半分に割ったとはいえ、元より圧倒的なその力が二つ並ぶ様は、全く衰えない迫力を放っていた。

二人の萃香の唯一の違いは、本来は両手にそれぞれ付けていた飾りの内、片方が右手に赤色の三角錐の分銅を付け、もう片方は左手に黄

色の球体の分銅を付けていることだけである。

「博麗の巫女——勇儀を倒した偉大な人間と、その役割を引き継いだ娘になら、退治されてもいいって思った。

「だけど同じくらい、地上の守護者であるお前達二人を返り討ちにして、引き裂いて、食らって、そして人間どもにもう一度鬼の恐怖を思い出させてやるって望んでいるんだ」

二人に分かれた萃香の内、もはやどちらが話しているのか分からない。

同じように口が動き、声も一つに聞こえる。

しかし、少なくとも語られる意思は間違いなく一つである。

誰もが、萃香の言葉に聞き入っていた。

「どっちがわたしの本心なのか、わたしにも分からない。きつと、頭の中で考えてたんじや永遠に答えの出ないことだと悟った」

「今なら、それが出るっていうの?」

「ああ、出るさ。これまでとは違う。きつと、この勝負の結果が答えだ」

「どうしてそう思うのよ?」

「これまで過ぎた時間が、薄っぺらで、ただ長いだけだったからさ。ぬるま湯以下の時間だ。」

地底に潜ったわたし達鬼は、生きていなかった。屍同然だった。酒飲んで、遊んで暮らして、少しずつ腐っていくだけの動く死体だったんだ。

——だけど、今は違う!

お前達二人との戦いは、きつとギリギリの勝負だ。鬼の全力を出して、わたしの中にある全部をひっくり返しても、勝てるかどうか分からない勝負だ!

それは、きつとこれまで過ぎた時間を縮めても足りないくらい、濃い時間だ。何百年間もうじうじ悩んでも出せなかった答えを、その濃密な数分間が出してくれる! お前達との戦いの一瞬に比べたら、地底で燻っていた時間なんて糞みたいなもんだ!!」

喚くように続けた言葉の最後は、もはや絶叫になっていた。

感情を剥き出しにした二人の萃香が、それぞれ霊夢と先代を燃え滾るような眼で睨んでいる。

瞳に宿っているのは、憎悪や殺意といった濁った感情ではない。

しかし、これから始まる戦いがどんな形式のものであれ、命を賭けたものになることを予感するような、強烈な意志の宿った瞳だった。

「さあ、最後の勝負だ！ 博麗の巫女っ！」

戦いの始まりを意味する宣戦布告が上がった。

二人の萃香の内、黄色い球体の飾りを付けた方の萃香が、夜空へと舞い上がる。

それを追うように、霊夢が陰陽玉を携えて飛び上がった。

「わたしを見事退治してみせろ！」

「言われるまでもないわ」

地上に残った赤い三角錐の飾りを付けた萃香が、先代に対して構えを取る。

「てめえをぶっ殺して、娘と一緒に骨まで食らってやる！」

「その言葉、宣戦布告と判断する！ 当方に迎撃の用意あり！」

先代もまた、裂帛の気合いと共に拳を構える。

空と地。戦場を二つに移し、鬼と博麗の巫女の最後の決戦が始まった。



「霊夢と先代を相手に、半分の力で挑もうとは随分と余裕なことね」

上空の弾幕ごっこを眺めながら、レミリアは不愉快そうに呟いた。

二人の巫女の実力は、いずれも十分過ぎるほど知っている。

この眼に焼き付け、またはこの身に刻んだものだ。

確かに、鬼とは強力な妖怪である。

その首魁である伊吹萃香がまた別格であることは分かっている。

しかし、それでもレミリアは不満だった。

「奴と同格の鬼である星熊勇儀は、先代との一対一の戦いで敗れたと聞く。今の奴が、霊夢にも先代にも勝てるとは到底思えないわ」

「それはどうかしらね？」

レミリアの眩きに応えたのは、パチュリーだった。妹紅達に同行している美鈴以外の紅魔館のメンバーが、周囲には揃っている。

フランドールと小悪魔以外の者が、上空の弾幕ごっこを見上げていた。

「あの鬼は、どうやら単純にパワーを二つに分けた訳じゃなさそうだが」

パチュリーの視線は何気なく上に向けられているが、その視界ではレミリアとはまた違ったものが分析されているらしい。

訝しげなレミリアの視線に代わって、傍らの咲夜が尋ねた。

「どういうことでしよう？」

「測って見たけれど、単純な妖力の容量は、空で戦っている伊吹萃香の方が圧倒的に多いわ。というよりも、大部分はこっちが持っていたみたいね。」

地上の伊吹萃香の方には、ほとんど妖力が残されていない。おそらく、彼女は空を飛ばないのではなく、飛べない状態になっているのよ」「それじゃあ、下の奴の方がかなり弱体化してるってことじゃないの」レミリアは、思わず地上の萃香を見つめた。

パチュリーほど力の分析が出来るわけではない。

しかし、納得がいかなかった。

少なくともレミリアが強者としての感性で感じる彼女の力は、凄まじい圧迫感となって肌に伝わるのだ。

「あの伊吹萃香が、そこまで弱くなっているとは思えないわ」

レミリアは正直な感想を言った。

「おそらく、その感覚は正しいわ。私が分析したのは、妖力の度合いに過ぎない」

「じゃあ、下の奴にはどんな力が残っているっていうのよ？」

「鬼というのは、頑強な肉体と剛力を持つ妖怪よ。そういった鬼の特性もまた、強さの一部ではないかしら？」

「……つまり、先代が相手にしている地上の奴は、そういった鬼として

の純粋な力のみを残した状態だということ?」

「そう。そして、おそらく弾幕に繋がる術や能力を行使する為の力を割いたものが、上空で戦う伊吹萃香よ」

パチュリー考察に答えを示すように、上空で一際巨大な閃光が瞬いた。

それはまるで光の爆発だった。

伊吹萃香を中心に、膨大な量の弾幕が溢れ出している。

それは彼女の持つ『密と疎を操る程度の能力』の内、拡散を意味する『疎』の力を発現したかのような弾幕だった。

「——なるほど。それぞれの分野で全力を発揮出来る状態ということね」

「それに、先代様はどうやら既に消耗しておられるようです」

レミリアの言葉に、咲夜が補足を入れた。

弾幕の光に照らされ、先代の全身に刻まれた真新しい負傷の跡と、動きの違和感に、ようやく気付いた。

「確かに、これは『勝負』ね。先代でも確実に勝てるとは限らない」

「それも覚悟の上でしょう。彼女も、あの鬼の力は見抜いているはずだわ」

「既に決死の覚悟か——」

その不穏な姉の呟きに、フランドールは肩を震わせた。

「小母様……」

「いやあ、手に汗握りますねえ。こんな見世物、なかなかお目にかかれませんかよ。飲み物買ってきませうか?」

同じように先代を見守りながら、フランドールと小悪魔は全く正反対の様子だった。

レミリアは、とりあえず楽しそうな小悪魔を無視して、フランドールを見つめた。

「フラン。気になるのは分かるけれど、アナタは上の戦いを見るべきだわ」

「で、でも——!」

「これからのアナタに必要なのは、霊夢のような力の使い方よ」

レミリアはあえて厳しく、有無を言わせぬ口調で告げた。

その言葉に、フランドール自身も思うところがあつたのか、僅かに躊躇した後、真剣な顔付きで上空の戦いに視線を向けた。

「大丈夫。先代は勝つわ」

レミリアは断言した。

無責任なフォロワーだとは思っていない。

彼女の本心だった。

それが分かるからこそ、フランドールも一度だけ大きく頷いて、意識を上に集中させたのだった。

「レミリア様、ネタバレはいけませんよ」

——ひよっとしたら先代様が負けちゃって、死んじゃうバツドエンドかもしれないじゃないですか。もし、そうなったらどうやって魂をこつそり回収しましょうかね？

小悪魔は自分が無視されていると分かっていたが、さすがに言葉の後半は口にしなかった。

とりあえず、自分好みの凄惨な展開になるだろう地上の戦いを楽しむことにした。



——この状況は、何処までが偶然で、何処までが意図されたものなのだろうか？

——誰かが裏で操ったのか、あるいは誰一人として予想し得なかったものなのだろうか？

目の前の光景は、少なくとも紫にとって完全に自身の手から離れた出来事だった。

二つの戦場で、二つの戦いが始まっていた。

夜空に舞い上がった萃香と霊夢が、その広大な戦場を埋め尽くすほどの弾幕ごっこを展開しようとしている。

盛大な花火のような色とりどりの輝きが、地上の傍観者達の視線を釘付けにした。

まるで、月がもう一つ生まれたかのように幻想的な光景だった。その光の下で、もう片方の萃香と先代が身構えている。

激しくも美しい空の戦いが『動』ならば、地上のそれは『静』の戦いだっただ。

お互いの間合いに入るか入らないかの微妙な均衡を保ったまま、二人は動かない。

まるで、そこだけ周囲から切取られてしまったかのような別世界だった。

鬼と博麗の巫女のやりとりを見ていた周囲の者達は、人も妖怪も含めて、そのほとんどが上空の戦いに注意を引かれている。

つい先程まで鬼に囚われていた子供達まで、恐るべき敵と対峙して神々しい光を放つ霊夢の勇姿に眼を奪われている。

その幼い瞳には、強い憧れが宿っていた。彼の子らは、これから博麗の巫女に尊崇の念を絶えず抱きながら、大人になっていくだろう。

先代の戦いを見る者は、ごく僅かだった。

一部の関係者達と、彼女と同じ時代に生きた人里の老いた住人達だけが、祈るように見守っている。

紫は、その結果に満足していた。

もしかや、この結果まで見越して萃香が二つの戦いを始めたのか、と信じ難い気持ちさえ抱いていた。

——これから始まる新しい時代。幻想郷の理となるのは、霊夢のよきな戦い方である。

——先代の古い戦い方は、ただ伝説として残り、後に受け継がれるべきではない。

紫は予ねてよりそう考え、その為に先代にあの陰陽玉を渡したのだ。

萃香が先代との戦いを望んだ時、その気持ちを酌みたいと思いがながら、同時に危惧もしていた。

先代が、その拳で萃香を退治してしまうような結末は困るのだ。

しかも、人里を舞台にして、衆目に晒された中である。

これでは結局、かつての時代と同じ理に戻ってしまう。

博麗の巫女としての期待と責務を、先代である彼女に再び担わせてしまう。

新たな時代を担う霊夢が、新しいやり方によって異変を解決する——それが紫の理想だった。

しかし、そうする為に紫が姦計を巡らせる必要はなくなった。

目の前の二つの戦いは、まるで新しい時代と古い時代の縮図である。

霊夢の戦いはこれから幻想郷に広まって発展していくものであり、先代の戦いは逆に収束して終わっていくものだ。

人里の住人達が、集まった多くの天狗や他の妖怪達が、上空で展開される最高レベルの弾幕ごっこを眼に焼き付けている。

霊夢と萃香の戦いを見届けた者達は、かつての紅霧異変でも十分に浸透していなかったスペルカード・ルールを今度こそ完全に理解するだろう。

——この戦いは、幻想郷の運命が導き出したものだとでも言うのか。

紫は、そんな自分らしからぬ考えに苦笑した。

今宵起こった大異変。

その終着がこんな形になるなど、予想もしていなかった。

萃香がそこまで考えて動いていたとは思えない。

しかし、完全に否定も出来ない。

鬼は偉大な種族だ。

あるいは、彼女の本能がこのスキマ妖怪の小賢しい思惑をあつさり超越した結果なのかもしれない。

それとも、全く違う別の誰かが謀った結果なのか。

さとりか。

それとも、先代か——。

どうなのだろう。

もう自分が推察出来る域を越えている。

いや、自分はもうそういった思考が無粋だとさえ考えているのだ。

いずれにせよ、これが最後の戦いである。
今回の異変解決の為の。

そして――。

――幻想郷は変わった。一つの時代が終わり、私達の戦争は終わった。

――世の中には語り伝えられないものがある。

――伝えてはいけないことがある。

――紡いではいけない命がある。

「先代。貴女の戦いは、かつて貴女自身が言ったとおりだったわね」
誰もが眼を奪われる光に満ちた幻想の戦いの陰で、静かに行われる
先代巫女の戦いを、紫は最後まで見届けようと決意した。

◇

全ては私のシナリオ通り。残るは異変の幕引きだ……。

――じゃないっ!!

『シナリオ通り』とか全くの嘘である。

そもそもシナリオの一行目すら書いてないっちゅーねん。

ここに至るまで、私つてば完全に行き当たりばったりです。いつも
のことだけどね!

しかし、思わずそんなハツタリをかましてしまうくらい、今の状況
は私にとって都合が良かった。

もちろん、鬼と死闘を繰り広げる寸前の状況が都合がいいというわけ
ではないが、少なくとも今の私には『萃香に如何にして勝つか』と
いうこと以外頭を悩ませることがない。

少し前まで、私には大きな懸念があった。

それは、共同戦線とはいえ、またしても霊夢のお株を奪う形で異変
解決に介入してしまったという点だ。

萃香のリクエストがあつて、ついそれに乗ってしまったが、戦いの
場に立った瞬間に間違いだと気付いた。

先代巫女である私が、霊夢の功績を奪ってどうすんだって話なの

だ。

最初、何の為に人目を忍んで鬼どもと死闘を繰り広げたのか、すっかり失念していた。

折角の紫の配慮が、これでは完全に無駄になってしまうのだ。

おまけに、事前に文からも霊夢について忠告をもらっておきながら、この様である。

——もしや私のやってること、霊夢にとって完全にお邪魔虫？

そんな不安が脳裏を過ぎった矢先のことだった。

萃香が二人に分裂し、自然と空を飛んだ方と霊夢が、地上に残った方と私が戦うことになった。

上空で、これまで見たこともないような規模の弾幕ごっこが始まった途端、周りのギャラリーの注意のほとんどが上に向いた。

そこで、私は自らの幸運を自覚したのである。

やった！ 私の方の地味な戦いなんて誰も見てないっ！

色鮮やかな弾幕を放つわけでもなく、縦横無尽に空を飛び回るわけでもない。

まだ戦闘は始まっていないが、多分なんかねちっこい肉弾戦がメインになるのだろう。毎度の如く。

そんな私の戦いは、まさに日陰の戦いの如く、霊夢の弾幕ごっこに隠れて注目などされないはずだ。

私にとって理想的な展開だった。

あとは、霊夢の派手な戦いが終わる前に、こっちの決着を静かにつけてしまえばいい。

時間に余裕があったら、霊夢の素晴らしい晴れ姿を皆と一緒に観戦するのもいいかもしれない。

私の中の懸念が解消された瞬間だった。

まあ、例えば相手が萃香でもうちの霊夢が勝つのはもはや確定ですし？

私は、自分の戦いにだけ集中してればよくなったというわけだ。

いや、しかし行き当たりばったりとはいえ、こんなに都合よく物事が運ぶなんて、マジで運がいいね。

案外、紫あたりが人知れず姦計を巡らした結果なのかもしれない。紫のことだから、それこそ幽々子あたりと『これもシナリオ通りかしら?』『問題ないわ』とか冷笑を浮かべながら話しているのかもしれない。

マジ、パネエな！ 妖怪の賢者！

——予想外のことがあるとしたら、目の前の萃香についてだけだ。萃香が二人に分かれた時は『よっしや、パワー半減した！ これなら勝ち目あるかも!?!』と内心でガッツポーズを取ったもんだが——なんか、全然弱くなってなくね？

最初の威圧感がほとんど衰えてないんですけど。

相変わらず鬼の圧倒的なパワーを強大な『気』として、ピンピン感じている。

いや、おかしいよ。

天さんの『四身の拳』だって、戦闘力が四分の一になる仕様じゃん。技の法則守れよ！

うーん、おつかしーなー……これ私、勝てんの？

俄然、不安になってきた。

体調も未だ完全に戻っていないし、これは結構ヤバいかも分からんね。

まあ、周囲の視線が霊夢に集まっているこの状況は、やはりありがたい。

——人目が無いから、本当に万が一の時は、逃げるか降伏するっていう選択肢も取れるしね！

……いや、本当にね。ギリギリの状態になったらどうなるか分からないよって意味で。

萃香の気持ちを酌みたいという思いはあるが、さすがに負けたら潔く命も捨ててやろうなんて所までは行っていない。

私だって命は惜しい。

っていうか、勇儀の時もそうだったけど、基本的に生き残る為に命懸けで戦うわけだしね。

地底の時のように、負けることが死に繋がるわけではない以上、寸

前で降伏することも視野に入れていた。

ああ、でも負けたら殺すつて幽香言つてたし、チルノ達も見ているんだから、なるべくそういう姿は見せたくない。

勝った者として、師としての責任もあるのだ。

結局、勝てるとは限らないがなんとかして勝てつて話になるのだつた。

最初に鬼の群れと戦った時に出てきた、何かよく分からん覚醒イベントっぽいものがまた起こらないかなあ。

なんかこう……ね。『どれ、お前に本当の力の使い方を教えてやろう』とか内なる声が響いて謎のパワーが発揮される展開を所望する。

ないか？

ないよね……。

ええいつ、くそ！　ここまで来て、今更ごちやごちや考えてられるか！

こちらら、いつだつて行き当たりばつたりの対処方法よ！

とにかく、目の前の萃香に勝てば万事解決なのだ！

かかって来い、萃香。

我が身は既に——覚　悟　完　了　！

其の三十六「碎月」

「……なんて光景だ」

アテもなく夜空を飛んでいた魔理沙は、人里の方向から放たれた光を辿って、その光景に行き着いた。

未だ、人里までの距離は遠い。

しかし、この位置にいてもその光景がハッキリと見えるのだ。

人里の上空で弾幕ごっこが繰り広げられていた。

まるで人里全てに降り注ぎそうな量の、弾幕という名の光の雨だ。

幻想郷の何処にいても視界に入るような、未だかつてない規模と物量の弾幕ごっこだった。

「霊夢、なのか」

魔理沙は自然とその名前を口にしていた。

もちろん、この距離からでは弾幕の光は見えても、その中で誰が決闘をしているのかまでは見えない。

しかし、魔理沙には奇妙なほど確信があった。

あそこで、霊夢は博麗の巫女として異変の元凶と戦っているのだ。

魔理沙は、引き寄せられるように進路を人里へ向け——それを思い留まった。

理由はハッキリと分からない。

鬼と戦い、その後で妖夢とも戦い、そのいずれとも勝利した魔理沙が次に向かおうと思った場所は、何処でもなかった。

元より、神社を飛び出したのも衝動的なものである。

その得体の知れない衝動も、二つの勝負を終えた後から不思議となくなり、魔理沙は夜の空を彷徨っていた。

次に、何をすればいいのか。

いや、次に何をしたいのか、漠然とも思い浮かばない。

そうして飛ぶ内に、魔理沙は霊夢が戦っているのを知り、そして思い直したのである。

もう別に、霊夢と顔を合わせることが気ままずいわけじゃない。

つまるところ、これはチンケな意地なのだろう。

少し前までの情けない自分の面影を引き摺ったまま、霊夢に会いたくないという思いがあるのだ。

霊夢は、そんなことなど気にしないだろう。

そもそも、自分の様子がおかしかったことなど気付いていなかったかもしれない。

それはそれで腹立つな、と。魔理沙の思考は無意識に脱線しそうになった。

そうして、自分でもよく分からないこだわりから、素直に人里へ向かえずに迷う内、魔理沙は近づいてくる人影に気付いた。

正確には、人型に近い影——九本の尾を持つ人型の影である。

月明かりでも、見間違えようもない相手だった。

「藍!？」

「気安く呼ぶな、人間め」

相も変らぬ、虫を見るような眼で藍は魔理沙と相対した。

その片手には、一抱えほどもある巨大な鬼の首を無造作に持っている。

「——主人の命令で、火消しに回ってるのか？」

「猿にしては察しがいいな。その通りだ」

藍は、さして執着も見せずに、持っていた鬼の首を放り捨てた。

地上の暗闇へと消えていくその様を見て、魔理沙の脳裏には、あの老いた鬼の最期が過ぎった。

自然と気分が悪くなる。

やっぱり、こいつは嫌な奴だな、と。藍に対する敵対心を改めて確信すると、挑むように睨み返した。

「何か用かよ?」

「用? 路傍の石に用などない」

「……相変わらず嫌味な奴だぜ」

「そういう貴様は迷子か? 神社で大人しくしていれば良いものを、勢い勇んで鬼退治にでも乗り出したのではないだろうな?」

「だったら、どうだっていうんだ?」

「邪魔だ。貴様如きでは、下級の鬼相手でも餌にしかならん。貴様が

死ぬのはどうでもいいが、鬼が人の血を得て盛りでもしたら困るのだ。余計な手間が増える」

これが言葉の裏に何らかの意図を隠してのものならば可愛げもあるのだが、藍は全くの本心しか口にしていなかった。

そんな見下した態度に、しかし今の魔理沙は不思議と激することはなかった。

呆れたようにため息を吐くだけに留める。

「お前の手を煩わせるなんて、そりゃあ心苦しくて仕方ないな。安心しろよ、鬼は自力でなんとかした」

「……なんだと?」

魔理沙の返答を聞き、藍の眼の色が変わった。

僅かだが、それは間違いなく、魔理沙に対して初めて見せる動揺の色だった。

「まさか、鬼を倒したというのか?」

「ああ、そうだけ」

「嘘を吐け」

「嘘じゃないぜ」

魔理沙は憮然として答えたが、事の詳細を語るようなことはしなかった。

目の前の大嫌いな妖怪狐に、あの老いた鬼との決死の戦いを語る気にはなれなかったのだ。

あの戦いは、誇るものとはまた違う、しかし汚されたくない大切な記憶だ。

話すくらいなら、嘘だと決め付けられる方がよほどマシだった。

「そうか——」

しかし、藍はその返答を疑う素振りすら見せず、信じ難いものを見るような眼で魔理沙を見つめた。

これまでの視線が、虫を見るような冷たいものだとするれば、今の藍の視線には少なからず熱が感じられる。

それはそれで、魔理沙にとって居心地の悪いものだった。

藍は、無表情に魔理沙の全身を観察し続けた。

「……なんだよ!? 用事がないんなら、さっさとどっか行けよ! それとも、わたしと勝負でもするか!」

スペルカードまで取り出す魔理沙の反応を見て、ようやく藍は表情を変えた。

「結果の見た勝負を今更してどうする。私はそんなに暇じゃない」

鼻で笑って答える。

魔理沙が何か反論する前に、藍は続けた。

「しかしな、見直したぞ。ほんの少しな」

「な、なんだよ急に……気持ち悪いな」

「お前はなかなか使える人間かもしれん、ということだ」

「使える?」

「そうだ。よって、私が使つてやろう。ついてこい」

「は? 嫌だよ、なに命令してんだ」

「鬼退治の手伝いだ。名誉なことだぞ」

「お前の手伝いだろ! 嫌なこった!」

「鬼は人間との勝負事を重んじる傾向にある。貴様は非力だが、やりようによつては鬼の討伐に貢献出来るかもしれん」

「話聞けよ!」

「いいから、ついてこい。それとも、他に何かアテがあるのか?」

藍に問われ、魔理沙は思わず反論がつかえてしまった。

つい先程まで、実際にアテもなく、霊夢に会いに行くことも渋ってしまった心境を見抜かれたような動揺が走ったのだ。

いや、藍が向ける微笑を見ていると、まさに見透かされているのではないかとも思えてしまう。

魔理沙の迷いを察して、藍は更に笑みを深くした。

「ないようだな」

「う、うるさいぜ!」

「さっさと行くぞ。夜明けまでには仕事を済ませたい」

もう答えは分かっていると云わんばかりに、藍は無造作に背を向けた。

そのまま飛んで、遠ざかっていく。

魔理沙はその背中を悔しげに睨みつけていた。
嫌な奴だ。

本当に、嫌な奴だ。

どっかに行っちゃえ！

——そう内心で恨み言を吐きながら、結局魔理沙は藍の後についていくことにしたのだった。

「待てよ、藍！」

「騒ぐな。黙ってついてこい——霧雨魔理沙」

藍が初めて名前を呼んだことに、苛立った魔理沙は気付かなかつた。



——どうした？

先代と対峙した萃香は僅かに戸惑っていた。

——来ないのか!?

萃香の脳裏に描いていた戦いの始まりと、実際の立ち合いは僅かに違っていたのだ。

目の前で、先代は構えを取っている。

一部の隙もない、完全な戦闘態勢だ。

彼女が、本気で自分と戦いに来ていることは間違いない。

しかし——ならば何故、あの『見えない攻撃』を使つてこないのか!?

萃香は『百式観音』を、その眼で見ていた。

先制にして必殺の一撃である。

かわせる自信も、耐える自信もない。

もし、あの攻撃が来たら、その時はもう単純に『勝負だ』としか考えていなかった。

その覚悟が、いきなり空振りした。

これは至極真つ当な勝負だ。

しかし、これは真つ当に過ぎるのではないか。

——それでいいのか？

——お前、それでこの伊吹萃香に勝てると思っっているのか？

——いや、違う。これは慢心じゃない。

——油断するな。相手は並の人間じゃないんだ。

——でも……どうなんだ？

——もしかして、使わないんじゃないんじやなくて使えないんじゃないんじや……。

——そんな思考の流れの中に出て来た刹那の隙——。

先代が攻撃を仕掛けていた。

前に踏み出していた萃香の左足を狙って、右の蹴りを繰り出したのだ。

構えていた両腕はもちろん、上半身が全く動いていない。

真つ直ぐに先代の動きを見すぎていた萃香は、体の下で起こった戦闘に反応出来なかった。

横に薙ぐような蹴りではなく、膝の皿目掛けて杭打ち機のように真つ直ぐ突き出された蹴りである。

凄まじい打撃音が周囲に響き渡り、肉と骨が盛大に軋む音が衝撃と共に萃香にだけ伝わった。

「ぐぎ……っ……っ……」

萃香は眼を見開き、苦悶の声を噛み殺した。

人間ならば、膝が反対側に折れ曲がって、骨が肉を突き破り、二度と立てなくなるだろう強烈な威力だった。

鬼の肉体だからこそ、耐えられたのだ。

——馬鹿か、わたしはっ!?

走り抜ける激痛よりも、自分自身に対して悪態が湧き上がった。完全に自らの油断が招いた結果だった。

この期に及んで、戦いの最中に雑念を挟んでしまった。

相手は弱っている、と。

自分は有利だ、と。

公平な戦いじゃない、と。

その驕りと隙を、見事に突かれたのだ。

左膝の激痛で我に返った萃香は、ハツとなって改めて敵を見た。

つい先程まで、ギリギリの間合いで静止していた先代が、この瞬間激流に変貌して怒涛の如く襲い掛かっていた。

左膝を蹴り抜いた右足が、次の瞬間には萃香の顎を狙って一気に跳ね上がった。

ローキックで相手の体勢を崩し、当たりにくい大技を急所に当てる。

打撃戦のセオリーとも言えるコンビネーションだ。

萃香はもちろん、そういった格闘の技術や知識を持っていない。

持つ必要がないからだ。

膝のダメージを耐え抜き、体勢もかろうじて保った萃香は、驚異的な動体視力で繰り出されたハイキックをかわした。

全て人間と鬼の根本的な身体能力の差が生んだ結果だった。

退いた顎先を、唸りを上げて蹴りが掠めていく。

もし当たっていたら、下顎か、あるいは頭を丸ごと吹き飛ばされていたかもしれない——鬼にさえ、そう戦慄させる程の威力があった。

しかし、かわした。

先代の蹴りは、天を突かんばかりに伸びた蹴りである。

同時にそれは、蹴り足が伸びきっていることを示している。

この足を戻すまでは、先代にとって致命的な隙だ。

——反撃開始だ！

萃香は気合いを入れ直した。

勝負はこれから。

もう、油断も慢心もしない。

雑念は捨てろ。

ただ全力で目の前の人間を叩き潰す！

決意を両眼に込め、先代の顔を睨み据えた。

しかし——。

この時、萃香が見るべきは先代の顔ではなかった。

残された先代の左足。

それが、右の蹴りがかわされると同時に地を離れていた。

まるで右の蹴りの軌跡を辿るように、左足もまた萃香の顎目掛けて

矢のように飛んだのだ。

「お……」

萃香は、下から奇襲してくる左足に気付いた。

視界に入らないその蹴りを、どうやって察知したのかは本人にも分からない。

野生的な、鬼の勘としか言いのようのない直感が働いたのかもしれない。

慌てて、横へ首を振って、その二つ目の下からの攻撃を避けようとした。

しかし、その逃げようとする頭部を追って、真上から落下してくるものがあった。

かわしたと思った右足が、今度は踵を下にして、脳天目掛けて落ちてきたのだ。

既に、避けるも何もなかった。

萃香は、今まさに閉じようとしている虎の口の中に頭を突っ込んでいた。

上と下。脳天と顎。右足と左足。

二つの打撃が萃香の頭部を襲い、衝撃が意識を噛み千切った。



「コオウだ……」

地面に崩れ落ちる萃香を見たチルノが反射的に言った。

地上の戦いを見る者は少ない。

その少ない者の中でも、攻防とすら言えない先程の一瞬の交戦を見極めた者は更に少ないだろう。

チルノも完全に見えたわけではなかった。

しかし、半ば確信を持ってその技を口にしていた。

「あれが『虎王』!？」

実物を初めて見る美鈴が、思わず興奮気味に尋ねた。

妹紅と慧音も視線をチルノに向けている。

「でも、おかしいぞ、チルノ。地底で使った奴と、技の形が違うんじゃないか？」

妹紅の疑問に、美鈴と慧音も同意を示した。

三人は『虎王』と呼ばれる技の存在を知っていた。

それは地底での戦いの流れが、当時の文々。新聞で解説されているのを読んだ為である。

特に妹紅は、弟子として共に過ごしていた時間に先代本人から話を聞いている。

その内容と、目の前で繰り出された実際の技には相違がある。

チルノの実力や知能が低いこともあり、見間違えではないかと疑う気持ちがあった。

「間違いないよ！ あたいは、お師匠の戦つてるところを見たんだもん！ あたいには分かるんだ！」

しかし、チルノは断言した。

必死さすら感じる形相に、妹紅達も思わず言い淀んでしまう。

所詮、自分達は伝聞で知っただけだ。

当時、先代の戦いを実際に眼で見ていたのはこの場ではチルノだけなのだ。

「……なるほどね。そういう技か」

おもむろに、てるが呟いた。

「分かるのか、てる!？」

「うん。つまり、『虎王』というのは、そもそも、名前の通り自分の両足を虎の顎になぞらえた技なんだ。

地底の戦いでは、鬼の片腕を折った技つて説明されてたから勘違いしてたけど、あれは関節技じゃない。どういう形で入るにせよ、両足を使って、相手の頭を挟む形で打撃を与える技が『虎王』なんだよ」

「ならば、やはりあれも——」

『虎王』で間違いない」

「ほらね、言ったとおりでしょー」

我が意を得た、とばかりにチルノは胸を張った。

ため息を吐く妹紅とは反対に、美鈴は素直に感心する。

「さすが師父の一番弟子ですね」

「ふふん、あんたもショージンしなさい」

「調子に乗るなっつの……けど、これで決着かな?」

妹紅は倒れたまま動かない萃香を見つめた。

あの技が『虎王』と分かった以上、鬼に致命傷を与えた実績のある大技が決まったのだということになる。

もし、このまま決着がついたのならば、異変の首謀者としては随分あつけない最後だ。

しかし、実戦には盛り上がりもクソもない。

戦闘開始直後の隙を突いて大技を当てるのは効果的な攻撃なのだ。

果たして、立ち上がれるのか――。

「いや、立つよ。鬼つてのは、こんなもんじゃない」

疑問に答えるように、てゐが言った。

「長年の意地もあるだろうしね」

言葉の通り、萃香は立ち上がっていた。



あれ!?

なんだこれ!?

いつの間に、自分はこんなに小さくなったんだ?

能力を使った覚えはない。

それとも、先代が大きくなったのか?

なんだ、これ。あいつの頭がずっと上にあるじゃないか――。

眼を覚ました萃香は、そんなことをしばらく本気で疑問に思っていた。

自分が、地面にへばりついていることさえ理解出来ていなかった。胸と頬に当たる地面の感触が意識を現実を引き戻し、ようやく正気に戻ったのである。

萃香は慌てて立ち上がった。

足元がふらついた。

最初、その理由が分からなかった。

受けたダメージさえも、その時になってようやく肉体が思い出したかのように自覚したのである。

蹴りを受けた顎が熱かった。

脳天から伝わった衝撃が頭を中心にまで届き、そこで尚も反響して、視界をグラグラと揺らしていた。

歯を食い縛っていないければ、意識を保つことさえ難しい。拙い。

これは、とても拙い。

萃香は両拳を顔の左右に置くように構えた。

格闘術を基にした構えではない。

見様見真似。これ以上、急所を叩かれない為の構えだった。

なんと、鬼であるわたしは人間相手に守りに入っているというわけだ。

萃香は自嘲の笑みを浮かべようとして、堪えた。

勝負の序盤でありながら、自分が早くも追い込まれていることを知っているからだ。

まだ、視界がハッキリとしない。

そもそも、自分がどんな攻撃を受けて倒れたのか、未だによく分からない。

同じことをされたら、今の状態では再び避けることなど出来ないではないか。

そして、今度は立てないのでは――。

萃香は己の不安と疑念を振り払った。

しかし、振り払ったのに、すぐに再び湧き上がってしまう。

考えても仕方のないことを考えてしまう。

落ち着け。

大丈夫だ。

既に大分、回復してきた。

このまま、相手が攻めてこなければ、すぐに反撃出来るくらいにまで回復する。

……このまま？

そうだ、何故先代はここで攻めてこない？

そんなに詰めの甘い相手だとは思えない。

隙を伺っているのか？

まさか、わたしが回復するまで待っているというのか？

馬鹿な。

敵が弱みを見せたら、そこを全力で突け。

わたしは鬼だ。

お前は人間だ。

種族の差がある。

わたしに対して『卑怯な方法』なんてもんはないぞ。

さあ、さつさとかかって来い！

「さあ、さつさとかかって——」

不敵に笑って、挑発しようとした萃香の口が、飛来した岩のような拳によって押し潰されていた。

隙間だらけの構えをすり抜けるように、最短距離で飛来した先代の打撃だった。

下顎が歪む感触を衝撃と共に感じながら、萃香は今度こそ己の愚かさを思い知った。

なにが『かかって来い』だ。

歯を食い縛った状態では、頭を打つても耐えられてしまう。

だから、こうして目の前の馬鹿が口を開いた瞬間を狙って、拳を叩き込んできたのだ。

先代は、その隙を冷静に探っていただけなのだ。

そして、その馬鹿はわたしだ。

——間抜けの大バカヤロウだ！

萃香は、再び吹き飛ばされそうになる意識を、自身への怒りで繋ぎ止めた。

口内からの出血を噛み締め、無理矢理顔の向きを正面に戻す。

既に、二発目の拳が眼前にまで迫っていた。

それをかわさず、あえて顔面で受ける。

やはり、人間のものとは思えない凄まじい威力だった。単純な力はもちろん、込められた霊力が鬼の肉体にダメージを刻み込んでくる。

しかし、今度のそれは耐えることが出来た。

攻撃に対して、意識を集中させる——ただそれだけで、鬼の肉体は硬度を増し、防御したことと同じ効果を得るのだ。

守りを捨てて拳をあえて受けた萃香は、その一呼吸分の動きを反撃に使った。

「自らもまた、拳を繰り出す。

先代のようにコンビネーションなど考えていない。

ただ頭を狙って、全力で振り抜く。

当たれば、顔面を陥没させて、衝撃で首の骨をへし折るだろう。

伊吹萃香の小柄な体格と細い腕には、そんな理不尽な威力が隠されている。

しかし、当然のようにかわされた。

振り抜いた拳を引き戻す間に、二発殴られた。

打撃音が一発に聞こえる、高速の連撃だ。

萃香は、反対側の拳で殴り返した。

今度は避けにくい胴体を狙う。

心臓ごとぶち抜くつもりだった。

しかし、僅かに半身になるだけでかわされた。

拳圧が、巫女服の胸元部分を破いただけだった。その下の皮膚すら

傷ついていない。

紙一重で見切られている。

その隙に、今度は三発叩き込まれた。

頭への攻撃を警戒しすぎたせいで無防備だったみぞおちに抉り込むような一発が打ち込まれ、体をくの字に折ったところで、頬を右左と殴り飛ばされたのだ。

ただ、やみくもに攻撃する萃香とは対照的に、先代の攻撃は恐ろしいほど合理的で効果的だった。

殴り返す。

殴り返される。

空を切り裂く轟音。

肉を破壊する打撃音。

飛び散る鮮血。

呻き。

軋み。

二人の間で、拳と共に多くのものが交わされていく。

お互いにほとんど密着しているような狭い空間の中で、嵐よりも激しく死と破壊がやりとりされている。

どちらが有利で、どちらが押しているのか分からなかった。

攻撃を多く受けているのは萃香の方だ。

いや、全ての攻撃をかわす先代に対して、萃香は一方的に叩きのめされている。

どれ一つ例外なく、最良のタイミングで最良の角度から襲い掛かる先代の攻撃を、萃香は全て肉体で受けていた。

しかし、それらが致命傷を生んでいるかという点、そうではない。

萃香は全ての攻撃を肉体で受け、そして止めていた。

殴られれば、殴り返す。

蹴られれば、蹴り返す。

結果的に、反撃の全ては空振りに終わっているが、一つの攻撃に対して必ずやり返している。

そして、一度も止まらない。

ダメージと体力の消耗が両方とも存在しないかのように、全力で動き続ける。

休まない。

ひたすら耐え抜く萃香とひたすらかわす先代。

両者の動きに翳りが見えない以上、果たしてどちらが相手を追い詰めているのか、外野の者達には判断がつかないのだった。

それは当事者である二人でさえも同じことだった。

いずれも、決定打を得られない。

理由は違えど、互いに相手を十分に攻めきれない。

手をつけかねている内に、闘争という現象は勝手に加速していった。

眼前の敵を一瞬でも上回る為に、より強く、より速く――。

上空で繰り広げられるもう一人の萃香と霊夢の盛大な弾幕ごっこに隠されるように、見る者の少ない二人の死闘は、半ば以上無意味なまま、力と技の極地へと達しようとしていた。



「まるで、このままずっと続くみたい」

手に汗握る――はたては、まさにそんな言葉を体现していた。

自分が戦っているような緊張感と共に拳を握り締め、眼を剥いて先代と萃香の戦いをずっと見守っている。

その傍らには、同じように戦いを見据える権がいた。

他にも、天魔と大天狗を始め、仲間である天狗が周りに集まっているが、彼らが見ているのは上空の戦いである。

天狗の中で、地上の戦いを見ている者ははたと権の二人だけだった。

上司である天魔は、どちらの戦いを見ろと指定してはいない。命令もない。

ならば、好きな方を見ればいい。

そう判断して、権はじつと先代の戦いを見続けているのだった。

「戦況は動きます」

不安げなはたての言葉に、権は端的に答えた。

「か、勝てるよね？」

はたてが、どちらのことを言っているのかは確かめるまでもない。

そして、勝利よりも生還を願う思いの方が強いことも、権には分かっていた。

分かっていたからこそ、普段通りのむっつりとした顔のまま、事実だけを正直に告げた。

「拮抗したままなら、時間が経つほど先代巫女様が不利になります」

「でも、一方的にボコボコにしてるし……!」

「既に人間が全力で動ける時間の限界を越えています」

椀の言うとおりだった。

戦い続ける先代の動きに、未だに鈍りや陰りはない。

しかし、その顔は体温の上昇による紅潮を過ぎて、酸素不足による青白い色へと変貌しつつあった。

先代と萃香の攻防が始まって、既に数分が過ぎている。

人間が、肉体の全てをフル稼働して休まず動き続けられる限界は、とうに越えていた。

◇

——やってみただけど、無呼吸連打ってマジ辛え! スペックさん、マジパネエ!

く、苦しい!

呼吸がしたい。もう、私の負けでいいから、こんなアホな戦いなんてとつとやめて、思いつきり深呼吸したい。

その後で、キンツキンツに冷えた水で一杯やりたい。

思わず、そんな現実逃避をしてしまう状況だった。

事前に覚悟してたからどうなるってもんでもなかった。

以前も言ったような気がするけど、鬼が本気で強い。

勇儀と萃香。

どちらが強いか、なんて比べるのも眩暈がするけど、今やっている肉弾戦に限って言えば勇儀の方が強かっただろう。

当たれば致命傷って理不尽な攻撃力は共通しているが、それでも萃香の力は、勇儀と比べると幾らか劣っている。

当たったら消し飛ぶビジョンが付き纏っていた勇儀とは違い、萃香ならば骨砕けて肉が潰れる程度に納まるだろう。

……あんま変わんねーや。

とにかく、これが地力の違いなのか、二つに分かれた影響なのか分からないが、萃香は勇儀と比べて幾分良心的な攻撃力だった。

何より、リーチが違う。

私よりも更に長身だった勇儀とは攻撃の間合いがほぼ重なっていたが、小柄な萃香相手だと単純にリーチの長さで私が有利だった。相手の拳が届かない距離でも、私の拳は届く。

だから、こうして面白いくらいに攻撃が当たりまくるのだ。

——以上が、私が有利な点である。終了。

続いて、私が不利な点がズラツと続く。

まず、やっぱり鬼の耐久力が半端ねえ。

勇儀の時もそうだったけど、どれだけ攻撃を叩き込んでも、ダメー
ジになるだけで決定打にはならない。

萃香が勇儀以上にタフなわけではなく、単純に私の攻撃力が落ちて
いるせいもあった。

既に酷使していたせいで、身体能力が落ちている。

それに合わせて、リミッター解除による地力の底上げも出来なくな
っているのだ。

技自体は使えるが、もし使ったら今度こそ私は確実に死ぬだろう。

その為、どの攻撃にも渾身の力を込めているのに、芯を打ち抜くよ
うな威力が得られないのだ。

仕方がないので、手数で押しまくろうと思っていたが、それも限界
が近い。

最初に言ったとおり、間断なく動き続けたせいで、いよいよ体が悲
鳴を上げ始めていた。

限界が早すぎると思うかもしれないが、鬼の群れと戦った時とはま
た違う。

本当に一呼吸の間も置かずに出し続けているせいである。

おかげで今の私は、島袋戦の一步のような有様。

疲労で動きが衰える前に、窒息死しそうだ。

死ぬ気で攻撃しなければならぬが、本当に死んでは意味がない。

結局、私の意思とは無関係に、肉体が遂に限界を迎えた。

ほんの一呼吸——それが我慢できず、私の動きは止まり、肺が空気を吸い込んだ。

——空気、うめえええええ！

——そして、ここぞとばかりに攻めてくる萃香の攻撃やべえええっ!?

手が止まった瞬間に反撃が始まった。

元々、防御も何もなく、ただ私の攻撃を耐えて反撃していた萃香は、自らの行動を抑制するものがなくなった瞬間、怒涛の如く攻め込んできた。

最初に拳が飛んできた。

何度もかわした攻撃だ。再びかわす。

これまでは、その隙に私も攻撃していたが、まだ酸素が足りない。貴重な時間を使って、もう一度呼吸をしてしまう。

そして、萃香の連撃を許してしまう。

今度は蹴りだ。

しかも、なんと飛び蹴りで私の首を狙ってきた。

首の骨を折るどころか、引き千切ってしまうような威力だ。

体捌きだけではかわしきれず、腕を使ってなんとか受け流した。

本当なら受け止めたいところだが、防御した腕ごと骨を折られると分かっている。

かといって、この受け流しも十分に成功はしなかった。

蹴りの掠った部分が痣となって、腕に走っていた。

今の攻撃が特別鋭かったわけじゃない。

これが、私が手数を重視した、もう一つの理由だ。

勇儀の時とは違い、今の私には萃香の攻撃を巧く受け流す自信がない。

相変わらず回復した体力と消耗した肉体のバランスは、微妙にズレたままだ。

今のは呼吸一つ分、動きが遅れた。

こんなチグハグの状態では、精妙な力加減が必要な技を思うように使えないのだった。

——受け方を間違えたら腕ごともぎ取られてしまう防御。

——単純な速さではなく、空気に溶け込むような繊細な動作が必要

になる『百式観音』

——勇儀に使ったカウンタータイプの正式な『虎王』

いずれも、今の私の状態では使えない。

正確には使える自信がない。

最初にいきなり『虎王』で攻めたのも、カウンター版はリスクがかすぎると判断してのことなのだ。

萃香に対して有効な技が、ことごとく使用不可能な状態である。体力が全快している点だけが強みだ。

だから、私には闇雲に攻めまくるしか勝機は残されていないかった。しかし、その勝機すら徐々に薄れていく。

いつの間にか、萃香の攻撃は、手をつけられない程に激しさを増していた。

「シイイッ!!」

獣染みた呼気を発して、萃香が殴り掛ってくる。

技も何もない無茶苦茶な殴り方だ。

しかし、その速さも重さも同じように無茶苦茶だった。

まるでマシンガンのように連続で拳が飛んでくる。

しかも、全く休まない。

間断がない。

止まらない。

かわしきれず、防御に回り、そのせいで萃香を止める為の反撃が出来ずに、更に攻撃の勢いが増していく。

防戦一方とはまさにこのこと。

勝負は詰みかかっていた。

やべえよ、こいつ。

人間じゃねえよ。

っていうか、鬼だよ。

こんな奴を真正面に据えて、私は何をやっているんだよ。

不十分な受け流しによって、両腕があつという間に傷だらけになっていく。

なんとか反撃しなくちゃいけない。

でも、出来ない。

攻撃出来ていないのに、今度は防御によつて力を消耗していく。いずれ、限界が来る。

また深呼吸したくなる。

出来ない。

今度は自分の意思で休めない。

萃香は私を休ませない。

疲れていく。

追い詰められていく。

似たような状況があつたことを思い出す。

あの時は、どうしたか？

どうやって切り抜けたか？

得体の知れないパワーに覚醒したか？

今度もまた、あんな力が発揮出来るか？

分からない。

でも、他に縋るものはない。

ならば、いつそ自分を委ねて――。

あ。

思い出した。

私の上で、霊夢が戦つてるじゃん。

「かあっ!!」

「いぎっ!」

肺に残されていた酸素を全て吐き出して、その力で私は反撃した。

突き出された拳を紙一重でかわして踏み込み、肘を思い切り萃香の

鼻っ面へ叩き込んでいた。

鼻骨を折る感触が伝わり、押し潰された萃香の声が聞こえる。

この一撃は、戦闘を寸断するだけの力があつたらしい。

噴水のような鼻血を残して、萃香が数歩後退した。

鬼の猛攻は止まり、私もそれ以上追撃することはしなかった。

踏み込みの分、回避が十分ではなかったらしい。

脇腹を掠った拳の威力で、肋骨にヒビが入つたようだ。

痛い。

でも、もうそれは我慢出来る。

既に吹っ切れた。

自分以外の何かに戦いを委ねるのは、やめだ。

「……そうだ。霊夢がいるからな」

「何？」

大量の鼻血と涙を流しながら、萃香は何が何だか分からないって顔を
をしている。

分からないだろうな。

でも、私には分かる。

私は今、霊夢の存在を感じている。

錯覚じゃない。

いや、錯覚でもいい。

見ているか、霊夢？

いや、見なくていい。

自分のやるべきことを優先して。

ただ、感じてくれ。

そっちの相手はどうだ？

強いかな？

こっちは相当キツイ戦いだ。

勝てる見込みはない。

そっちは？

ははっ、そうか。いつも通りやっているか。

じゃあ、私もそれに倣うとしよう。

ありがとう。

頑張るよ。

ああ、私も愛してるよ。

それじゃあ、行こうか――。



霊夢はいつもの浮遊感の中で、重力を感じていた。

この夜空は、まるで黒い海だ。

津波が押し寄せてくる。

伊吹萃香の放つ膨大な弾幕という形を取った津波だ。

一見すると、ただ飲み込まれるしかない壁に見えるが、必ず抜ける隙間はある。

最初はなくとも、弾の動きに合わせて隙間が出来る。

その間をすり抜ける。

抜けた瞬間に、背後で隙間が再び閉じる。

もし、一瞬でも判断が遅れていたら、開かれた活路は眼前で再び閉ざされていただろう。

霊夢がその判断を誤ることも、躊躇することもない。

——だけど、今回はちよつと苦しいかな。

動きを止めずに、霊夢は独り言ちた。

さすがは鬼の大将だ。

弾幕の難易度も凄まじい。

気を抜けば、撃墜されてしまうだろう。

余分な思考は挟めない。

まるで空気のようにならなければ、この濃密な弾幕の中を飛ぶことは出来ない。

世界さえ切り離すように『空を飛ぶ』のだ。

何ものにも囚われない。

完全なる自由——。

霊夢は『だからどうした』と思った。

『思う』ということ自体が心を縛る雑念だと理解しながら、霊夢は思った。

霊夢は自分を縛る重力を感じていた。

自分が飛んでいる真下の地上から伸びる、一筋の繋がりを感じていた。

唯一自分が囚われるもの。

自ら望んで囚われるもの。

自分は今、母親の存在を感じている。
錯覚ではない。

いや、錯覚でもかまわない。

——母さん、そっちはどう？

目の前に迫る弾幕を見据えながら、霊夢は声を掛けた。

——ええ、見えてるわ。

——大丈夫、心配しないで。

——あたしは、自分のやるべきことを必ずやり遂げる。

霊夢は言葉を使わずに、母と対話していた。

——うん。母さんのことが分かるわ。

あの人の存在をすぐ傍に感じる。

——この萃香つて奴、なかなか歯ごたえのある相手ね。

共に過ごした過去が二人を繋げ、託された未来が意志を伝える。

——あたしは大丈夫よ。いつも通りやるだけ。

二人の目の前に立ちはだかる敵は強大。

しかし、焦りはない。

——頑張つてね。こっちも頑張る。

不安はない。

——じゃ、またね。母さん。

絶対の信頼だけがある。

——大好きよ。

飲み込まれそうなほど広大な空。

何処までも続く漆黒の中を、独り飛ぶことに、もはや恐れはない。

自分は繋がっている。

生まれた時にへその緒で繋がっていた母はいなくとも、もっと深い

ところで繋がった母がいる。

恐れはない。

——それじゃあ、行きましようか。



——こいつ、生き返りやがった!?

萃香は先代の変化に気付いた。

動きの質が明らかに変わってきている。

生き返った、とは言ったがそれは正確ではない。

相手の体力は確実に消耗されている。

発汗と呼吸、顔色を冷静に観察すれば分かることだ。

手数も落ちた。

しかし——。

更に攻撃の威力が上がった。

更にこちらの攻撃をいなすようになった。

萃香も長い年月を生きた妖怪である。

自然と多くのことを学び、経験した。

格闘技の知識はないが、肉体を使った戦いにおいて『力を込める』こ

とよりも『力を抜く』ことの方が重要であることはなんとなく分かる。

必要な脱力。筋肉の緩急が瞬発的な力を発揮するのだ。

それを、目の前の先代は見事に実現していた。

萃香の繰り出した拳を柔らかく逸らし、反撃の拳はバネのように伸

びてくる。

つい先程までと動きが違っていた。

力任せの荒々しさが無い。

さつきまでの攻撃が巨大な槌だとするなら、今は鋭利な刃のよう

だ。

一撃がより深く肉体に食い込んでくる。

何故、急に変わったのか？

萃香には分からなかった。

——確かに、さつき間合いを離れた時に何呼吸分か休ませてしまっ

たかもしれない。

——しかし、たったそれだけで生き返るワケがない。

先代の事情を知る者は『皮肉にも疲労したおかげで同じく消耗した

肉体に感覚が合ってきた』と分析するだろう。

——こいつは人間だ。わたしとは違う。

人間にはない無尽蔵の体力が萃香の動きを更に加速させる。

——人間と妖怪は違う。

限界のない熱の上昇が萃香の筋肉を更に膨張させる。

——そうだ。こいつは人間なんだ。

雄叫びを上げて激する萃香の肉体に、冷たい鋼のような拳が突き刺さった。

血を吐きながら、先代を睨みつける。

揺ぎない意志を宿した瞳が、自分を睨み返している。

——当たり前のことだった。

——人間と妖怪は違う。

かつて人間と向き合っていた長い年月の中で見たこと、経験したことを今更になって思い出し、萃香は思わず苦笑を浮かべた。

強大な力を支柱にして独り立つ鬼とは違い、力の弱い人間はいつも群れていた。

——人間は独りじゃない。

一人に見えても、見えない誰かが常に寄り添っている。

それは家族であったり、恋人であったり、友であったりした。

——つたく、これだから人間ってやつはあ。

変化は当然だ。

進化は必然だ。

人は鬼が瞬きをする間に変わっていく。

目の前の人間がそうであるように。

「それを蹴散らして進むのが鬼なんだよ。へへっ……」

萃香は口元を拭いながら、強がるように笑った。



先代と萃香が戦い始めて、どれだけの時間が経っただろうか。

渦中にいる当人達はもちろん、息を呑む傍観者達も忘れている。

その戦いはもはや上空の弾幕ごっこと遜色ないほど激しくなっていた。

燃える火球が二つ、ぶつかり合っている。

放たれる拳も蹴りも、空気に焦げ目を残しそうなほど激しい。

何の術も能力も用いない純粋な肉弾戦でありながら、無数に炸裂する見えない火花が眼に焼き付くような戦いだっただ。

戦いの最中にいる萃香は、薄々と感じていた。

——押されている。

攻撃を一ついなされる度、攻撃を一つ受ける度、徐々に募っていく不安だった。

——鬼のわたしが、人間のこいつに戦いで押されている！

一見、拮抗しているように見える勝負の優劣に、周囲の者達の中でも徐々に気付くものが現れているだろう。

萃香は場違いにも、そんなことが気になって仕方なかった。

気付かれたくなかった。

自分が、目の前の人間に負けているなどと、思われなくなかった。

それは恥ずかしいことだ。

鬼として情けないことだ。

戦う前にさんざん啖呵を切り、覚悟を決めたと思っていた自分が現実を前にして晒した地金。

鬼としての見栄と意地が、自分の本性だった。

それでも勝ちたい。

負けたくない。

もし、この勝負で負けたら、その時自分は一切の言い訳が出来なくなる。

健闘した人間相手に鬼が『勝負を譲ってやった』と笑って認めることも出来ないのだ。

酒の飲み比べだとか、術比べだとか、そういった分野の違う勝負を遊びでやっているわけではない。

純粋な力比べだ。

何も複雑なことなどない、生死を賭けた喧嘩だ。

鬼の矜持を懸けて、本領である場で戦っている。

もし、この勝負で負けるのならば、それは鬼という自分が全身全霊

で負けたことと同義である。

その敗北に何一つとして言い訳など挟めない。

——もし、本来の力が出せたら。

——もし、『疎』を操る能力まで完全に使える状態だったら。

無意識にそんな仮定を思い浮かべて、萃香は笑った。

自分への嘲笑だった。

目の前に自分がいたら、そいつに向かって唾を吐き、蔑んでいただろう。

なんて卑しい奴なんだ、わたしは。

鬼のくせに自分を騙そうとしている。

全て、納得づくで始めたはずの勝負だ。

二人の巫女を相手に戦うと最初から決めていたはずだ。

それを今更『公平ではない』と思おうとしていた自分の女々しさが、心底嫌になった。

ならば、相手の方はどうなのか？

仲間の鬼をけしかけ、消耗させた。

逆に相手には援軍を認めず、一対一の決闘を申し込んだ。

そもそも、鬼と人間の生まれの差はどうする。

そういった互いの事情を全て呑み込んで、自分達は殴り合い、撃ち合っている。

何一つ嘘や騙しの入り込む余地はない。

突きつけられる現実こそが全てだ。

その現実が今、萃香を追い詰めていた。

強者として生きてきた伊吹萃香にとって、生涯初めての経験をもたらしていた。

——勝ちたい。

——吐き気がするほど勝ちたい

——いや、なんとしても勝つ。

——『全力で戦う』なんて生温いことは言ってられない。

——持ち得る全てを駆使して勝つ!!

盃を片手に粹と風情で勝負事を楽しむ鬼としての見栄を捨てた萃

香は、浅ましいまでの勝利への欲求を剥き出しにして叫んだ。
渾身の蹴りを放つ。

先代がそれを受け流し、反撃の拳打を放つところまでは予想通りだ。

萃香はその反撃を、初めて回避した。

大きく後ろに跳んだのだ。

もちろん、これは攻撃を避けるのが目的ではない。

距離を取る為のものである。

自分の拳も、先代の拳も届かない間合いで、萃香は大きく息を吸い込んだ。

「かああああーっ!!」

萃香は口から火炎を吐き出した。

空気を焼いて『ごう』と唸るような音ではなく、『ごんっ』と低く爆発するような勢いで放たれた凄まじい炎だった。

それが一直線に先代に襲い掛かった。

拳や蹴りとは違う、形を持たない炎である。

口から吐き出されると同時に放射線状に広がった炎は、この距離ではかわしようも、守りようもない。

萃香の奥の手だった。

使うつもりはなかった奥の手だった。

先代と本気で戦いながら、心の何処かで『対等に肉体だけで勝負してやろう』という思いがあったのだ。

正真正銘の奥の手を、萃香は使わざるを得なかった。

——勝った!?

かわせないし、守れない。

この炎が当たれば、人間など一瞬で火達磨だ。

もちろん、これだけで倒せるほど甘くみてはいない。

形がない故に炎を避けられないが、同時にこの攻撃には打撃力というものがない。

炎に対して恐れず踏み込めば、一瞬で間合いは詰まる。

この炎を吐く為に大口を開けた無防備な顔に拳を叩き込むのに、遮

るものは何もない。

だから、この炎は一瞬だけ吐いて、すぐに歯を食い縛る。

しかし、それで十分だ。

消し炭にすることは出来なくとも、超高温超高密度の鬼火は皮膚を焦がし、肺を焼き、もし瞼を閉じるのが遅ければ眼球が溶けるか弾ける。

人間には致命的なダメージだ。

それから改めてトドメを刺す――。

そこまで考えた。

生まれて初めて、萃香は、決着する前に勝負の結果を夢想した。

その次の瞬間だった。

先代を焼くはずだった炎が、直前で霧散した。

眼に見えない結界が遮ったわけではない。

むしろ、萃香の見開いた眼にはハッキリと見えていた。

先代が、素手で迫り来る炎を散らしたのだ。

広げた両手のひらがぼんやり纏っているのは霊力の光である。

それで鬼の炎を払った。

受け止めたのではない。

両手が円を描くように動き、その手のひらに絡め取られるように炎が分散され、先代の体に触れることなく掻き消えたのだ。

最初に予定していた通り、吐き出す炎はもう止めていた。

しかし、萃香は呆けたように口を開いたままだった。

先代の起こした得体の知れない現象を『防御』とすら判断出来ず、驚愕に固まることしか出来なかったのだ。

その致命的な隙を、先代が全力で突いていた。

萃香が離れた間合いを、今度は先代が踏み込みの助走距離に使って、渾身の力を込めた正拳突きを腹に叩き込んだのである。

「おっ！おっ！！」

自分の吐き出した高い呻き声を聞いて、萃香は我に返った。

腹から潜り込んだ衝撃と激痛が、胃液と共に口から溢れた。

体をくの字に折った萃香に、先代は全く容赦なく畳み掛けてきた。

掬い上げるような蹴りが、俯いた萃香の顎に突き刺さる。

跳ね上がった頭が降りてくる前に、タツクルを仕掛け、共に地面に倒れ込んだ時には先代が萃香の上に跨ったマウントポジションとなっていた。

かつて勇儀相手にも取った、圧倒的に優位な体勢である。

先代は当時を再現するように、そこから萃香の顔面を滅多打ちにした。

萃香は両腕で庇うように頭を守り、必死で耐えるしかなかった。

反撃などする余裕もない。

何より混乱している。

未だに先代が何をして、自分が何をされたのかよく理解出来ない。

どうやって、あの炎を防いだんだ？

あれは本当に奥の手だったんだ。

卑怯じゃないか、とさえ考えていたんだ。

そんなわたしの葛藤が、馬鹿に思えるくらいあっさりと防ぎやがった。

拳句、この有様だ。

なんだよ。

こいつ、強すぎるよ。

人間じゃねえよ。

戦いの権化だ。

鬼みてえな奴だよ。

勇儀よう。

こんな奴の両足を、どうやって潰したんだよ。

駄目だ。

勝てない。

このまま負ける。

嫌だ……。

嫌だ、負けたくない。

畜生。

潔く敗北なんて受け入れられるか。

負けた後で『天晴れ見事』なんて笑って言えるか。
そんなもんは糞食らえだ。

わたしはこの勝負に全てを懸けたんだ。

言い訳なんて出来ないんだ。

崖っぷちなんだ。

どんな物にだってしがみ付くしかない。

例え無様に足掻いてでも勝ちたい。

負けるくらいなら泥水を啜った方がマシだ。

畜生。

負けたくない。

負けたくない——！



振り下ろされる拳の下で、萃香は叫んでいた。

言葉にならない奇声だった。

鬼が、発狂した子供のよう滅茶苦茶に喚いたのだ。

萃香は喚きながら防御を解いた。

敵の変貌に動揺することもなく、先代は冷徹なまでにそこへトドメの拳を叩き込もうとした。

その時、萃香の片手は地面の砂を握っていた。

自分のしていることを理解してやったわけではない。

ただ本能的に『負けたくない』という浅ましくも激しい思いが、体を突き動かしていた。

萃香は握った砂を先代の顔に投げつけた。

思わぬ反撃に、先代は呻きながら眼を手で覆った。

致命的な隙が出来る。

その隙に、萃香は全力で攻撃していた。

全く躊躇しなかった。

横殴りの拳が受けた先代の肘を押し潰し、その防御越しに肋骨をへし折って、体を吹き飛ばした。

自由になり、地面を転がる先代を見て——萃香は自らがしたことを理解した。



倒れ込んだ先代を見た萃香は、次に土に汚れた自分の手を見て、それから慌てて周囲に視線を走らせた。

自分のしてしまったことを誰かに見られただろうかと思い、躍起になつて見回した。

多くの傍観者達は相変わらず上空の戦いに眼を奪われていたが、先代の戦いを見る者が少なからずいた。

そんな者達と、萃香の眼が合った。

誰もが、信じられないといった表情で呆然と自分を見ている。

それまで間断なく続いていた戦いが、思わぬ形で止まったのだ。

戦いの流れを決めたのは、萃香の秘術でも、先代の奥義でもない。

鬼が人間に追い詰められて、あろうことか砂の目潰しを食らわせたのである。

進退窮まり、どうしようもなくなった子供の喧嘩のように、滅茶苦茶に喚いて、その辺の砂を引つつかんで投げたのだ。

気高い鬼が。

あの伊吹萃香が——。

「へ……へっ、へへ……！」

萃香は倒れた先代に視線を戻した。

彼女はすぐにも立ち上がろうとしていた。

「はっ、へへへ……！」

萃香の口元が引き攣るように持ち上がる。

彼女に似つかわしくない、卑屈な笑い方だった。

「どうだ、思い知ったかい？」

笑う端から、亀裂が走ってポロポロと崩れ落ちていきそうな表情だった。

「卑怯だつて罵るかい？」

笑いながら、実際にそう罵られることを心底恐れていた。
先代が立ち上がった。

しかし、その左腕はだらりと力なくぶら下がっている。
萃香には腕が折れていることが分かっていった。

攻撃を受け止めた肘の骨を靱帯ごと押し潰してやった。
その腕越しに、肋骨を三本は折った手応えもしつかりと確かめている。
る。

内臓も痛めたはずだった。

先代が、どす黒い血を吐いている。

追い詰められていた勝負は、たった一撃で逆転した。

これこそが鬼の剛力だ。

如何に理不尽とはいえ、種族としての本領を恥じることはない。

萃香は自分と相手を誇りながら、全力で攻撃を続けていただろう。
その逆転の切欠が、あまりにも浅ましい行動でさえなければ――。

「勝てばいいんだ……」

萃香は震える声で呟いた。

「砂かけようが、石を挿んで殴ろうが、後ろから襲おうが、いいんだ。
なにやったって、勝てばいいんだよっ！」

悲鳴のように叫んでいた。

取り返しのつかない言葉を、自分を含めた全員に言い聞かせるように叫んでいた。

萃香はもう、周りを見ることが出来なかった。

自分のやったことと言ったこと、それらに対する反応を想像するだけで恐ろしくて震えていた。

――失望の視線。

――嘲りの笑み。

――蔑む眩き。

それらの一つでも知覚してしまったら、心が折れてしまうと分かっていた。

鬼として生きて長い年月積み重ねてきたもの全てが、そこで崩れる。

これまで語ってきた自らの矜持を、全て嘘にしてしまう。無駄にしてしまう。

伊吹萃香という誇り高い鬼が、単なる畜生に墮ちる時だ。眼を逸らしたかった。

自分のしてしまったことを無かったことにしたかった。

しかし、現実はどこまでも覆せない。

土壇場で形振り構わず勝利にしがみ付いた、これが自分の本性。

そして、自分はまだ勝負の最中にいるのだ。

もう何も見たくなくなかったし、何も聞きたくなかったが——萃香は先代を見た。

彼女の反応を待った。

このまま戦えば、萃香が圧倒的に有利である。

しかし、追い詰められたのは萃香だった。

先代が、ただ一言口にするだけで終わる。

具体的な言葉は何でもいい。

その一言の意味を、誰よりも萃香自身が理解するからだ。

ただ一言、蔑み、嘲り、あるいは哀れむだけで、伊吹萃香という鬼は殺せるのだ。

「どうした？ 何とか言えよ。先代、腕はどんな具合だ？」

あえて、先代の怒りを誘うように挑発する。

自分を殺す言葉を誘う。

萃香は既に戦う気力を失っていた。

「——さあな。確かめてみたらどうだ？」

先代が浮かべたのは、不敵な笑みだった。

「片腕をやられた。お前でも勝てる」

残された右手で拳を作り、先代は構えていた。

耐え難い激痛が走っているはずだったが、笑みを崩さない。

その瞳には気力が充実している。

この状況でも尚、先代は勝負に勝つつもりなのだどハッキリと分かる姿だった。

「来いよ、萃香。能力なんか捨てて、かかってこい！」

萃香は表情を取り繕うのも忘れて、眼を見開いた。

先代の視線や言葉に、先程の萃香の行為を非難する意図や蔑む感情は欠片もない。

戦いを始めた時と同じ、あるいはそれ以上の戦意を漲らせて、真っ直ぐに睨みつけている。

予想もしていなかった反応に、萃香の体は別の意味で震え始めている。

「楽に殺しちやつまらんだろう？ 真正面から拳を叩き込み、苦しみに悶える私を食い殺すことが望みだったんだろう？ ——そうじゃないのか、萃香」

先代が何を言っているのか、最初は分からなかった。

その意図と真意を図りかねていた。

しかし、言葉の意味を呑み込んで、ゆっくりと理解する内に、萃香の中で徐々に何かが湧き上がってきた。

「さあ、その拳でもう一度かかってこい。一対一だ。楽しみをふいにしたくないだろう？」

手放しかけた己の矜持を再び握り、殴りかかってこいと先代が言っているようだった。

完全に萎えていた戦意が、先代の言葉と仕草に煽られるように燃え始める。

「来いよ、萃香」

言って、

「——怖いのか？」

先代がニヤリと笑った。

萃香はもちろん、普段の彼女を知る者も初めて見る種類の笑みだった。

どんな戦いの時でも求道者のような寡黙さを纏う先代巫女は、圧倒的に不利な状況で、あろうことか敵を挑発しているのだ。

それに気付いた瞬間、萃香の中で燻っていたもの、濁っていたものが全て爆発して消し飛んだような気がした。

頭の中が真っ白になった。

これまで感じていたことが消えてなくなり、これから考えることが
どうでもよくなった。

残ったのは痛快さだけだった。

なんて奴だ。

なんて——！

「は……はははっ……てめえ」

込み上げる笑い声を必死で堪えた。

もう卑屈な笑い方ではない。

しかし、今は笑う力さえもつたいない。

全ての力をこれから始める戦いにとっておきたい。

理解した。

目の前の強大な敵に『あれをして良い』とか『これはしてはいけな
い』とか考えることが、単なる余分でしかないことを理解した。

そんなことでこいつは揺るがない。

その程度で揺らぐなら苦労はしない。

あらゆる手を尽くしても勝てる気がしない。

だけど——勝ちたい。

ただその一念だけが萃香の心に残った。

先代、お前に感謝する。

お前が相手だからこそ、わたしはまだ戦える。

お前が相手だからこそ、わたしはまだ勝ちたいと思える。

「ぶっ殺してやらあああああっ!!」

もう形振りなど構わない。

策などない。

後戻りすら捨てて、己の身一つで特攻する。

心の底から吐き出すように、雄叫びを上げて萃香は最後の戦いを仕
掛けていった。

◇

腕が折れた。

肋骨も折れた。

何本かは分からないが、一本じゃない。

……格闘漫画とかのキャラって折れた肋骨の数とか正確に分かるよね。あれ、地味に凄くね？ 現実でも分かるもんなの？

そんな現実逃避染みた疑問が浮かび上がるどころ、私も焦っているようだ。

痛みはいい。慣れている。

左腕が使えなくなったことも、この際まだマシと考えられるだろう。

問題は、追い詰められているのが私だけではなく、萃香も同じだということだ。

まさか、あの萃香が砂の目潰しをしてくるとは思わなかった。

ああいう種類の攻撃は嫌ってると思っていた。

鬼の誇りとかにこだわってたからね。

つまり、それだけ私が萃香を追い詰めていたということなのだ。

確かにあの瞬間までは私も『勝てる』と考えていた。

萃香の鬼火を、咄嗟の『廻し受け』で防ぎきった時は思わず内心でガッツポーズしたもんだ。

自分でやっつといてなんだけど、この技マジで『矢でも鉄砲でも火炎放射器でも持ってこいや』って感じだな。

初めて試してみたが『黄金の回転』と組み合わせたのが正解だったのかもしれない。

原作でも水中で一瞬防御してたから、上手くいく予感があったが。ここに至って——護身開眼！

しかし、そんな新しい防御技の発見も、今の片腕を潰された状態では無意味だ。

今度は私の方が一気に追い詰められてしまった。非常に拙い。

——いや、目潰しは別にいいんだ。私は、一向に構わんツツ!! 卑怯とか言うつもりはない。

この戦いがルールなどない野試合だと事前にちゃんと分かってた

からね。

実戦ならば、相手が砂や石の目潰ししてきたり、土下座して奇襲したり、ピザを顔面に叩きつけられてもおかしくないのだ。

根拠は餓狼伝。

あえて言うなら、目潰しを食らった私が悪い。

そんなことより、もつと重要なことがある。

萃香を形振り構わないところまで追い詰めた結果、能力を全開で使われる方が圧倒的に拙い！

今まで何故か使われていないが、『疎』を操る能力が使われたら、目潰しとかどうでもよくなるくらいヤバイことになる。

霧に変化して攻撃が当たらなくなる、つて程度ならまだ可愛いものだ。

具体的に『ミツシングパワー』とか使われたら、完全に勝ち目なくね？

ベジータ戦の悟空みたいにされてしまうぞ。

他には公式でやってなかったけど『霧』になった状態で相手の体内に入り込んで破壊』とか出来そうじゃね？　つまり萃香は東方最強説。

はい、論破。

私ってば実は、そういう妖術に類する搦め手が弱点なのよ。

とにかく、想像も含めて萃香に能力を使われるのは非常に拙いだ。

立ち上がった私は、まず萃香の様子を伺った。

問答無用で巨大化されたら、もう一目散に逃げるしかない。

さて、どう出るか——？

「どうした？　何とか言えよ。先代、腕はどんな具合だ？」

挑発的な台詞——それを聞いた瞬間、私の脳裏に秘策が生まれた。ぐ、偶然とはいえ、まさか萃香がそのネタを振ってくるとは！

そうだ……このやり方ならいける！

萃香に能力を使わず、このまま素手で戦わせるのだ！

私はイチかバチかの勝負を仕掛けた。

舌戦での駆け引きなんて初めての経験だが、やってみるしかない。

「——さあな。確かめてみたらどうだ？」

筋肉式☆洗脳術、開始！

「来いよ、萃香。能力なんか捨てて、かかってこい！」
説明しよう！

筋肉洗脳に掛かると、理性的な判断が出来なくなり、人質の娘もハジキも捨てて、格闘戦で決着をつけることしか考えられなくなるのだ！

「さあ、その拳でもう一度かかってこい。一対一だ。楽しみをふいにしたくないだろう？」

さりげなく『その拳で』と強調して、能力から意識を逸らさせる。生来口ベタなので、挑発なんてほとんどやったことはなかったが、今回ばかりは理想的なお手本がいるので完璧にやれる。

私の切り札は漫画の知識だけではない。映画もあるのだ。

私は、筋肉モリモリマツチヨマンが乗り移ったかのように、滑らかに萃香を挑発し続けた。

「来いよ、萃香——怖いのか？」

仕上げに、顔面の筋肉を総動員して笑みを形作る。

——決まった！

これで頭に血が昇らない奴はいねえ！

「ぶっ殺してやらあああああつ!!」

案の定、理性的な判断を失った萃香はすごい勢いで私に殴りかかってきた。

さつきまで落ち着いた雰囲気だったのだが、なんか一気に戦意が蘇り、闘志も漲っている。

攻撃も、より激しさを増した。

だけど、能力を使われるよりは、どんなに激しくても単純な格闘戦の方がまだ勝ち目があるだけマシだった。

フフフツ、まんまと私の策に嵌ったな萃香。

先を見越した上での駆け引き！

やべえな、私ってば意外と策士じゃね？

しかし、勝ち誇るにはまだ早い。

片腕が使えず、重傷も負って、不利なことには変わりない。だが、決着もまた近い。いくぜ、萃香。こいつがラストスパートだ——！



拳を出しながら、萃香は決着が近いことを予感していた。蹴りを出しながら、萃香はこの攻撃では決着はつかないと確信していた。

しかし、一発たりとも手加減はしない。

全力で攻撃している。

決着は近い。

その為の決定打を用意してあるわけではない。

しかし、決着の瞬間は近づいている。

理屈はない。

ただ、その予感を確信する。

もう常識的な判断や予測など、萃香はしていない。

全力で動いている。

目の前の人間も同じはずだ。

鬼を相手に、片腕で、渡り合っている。

相変わらず攻撃をかわし、受け流し続けている。

潰れた左腕はもちろん、無事な右腕も使わず、なんと足だけで戦っている。

飛んでくる拳や蹴りを、足を使ってかわし、受け流しているのだ。

しかも、反撃まで足だ。

横合いから鞭のようにしなる蹴りが襲ったかと思えば、槍のような前蹴りがみぞおちを狙う。

蹴りだけではない。

顔面を狙った拳打まで来る。

こいつは、足の指を握って拳を作っているのだ。

なんとという肉体だ。つま先まで鍛え上げられている。

攻撃の軌道が絞られた代わりに、強靱な脚力によって攻撃力の増した先代の猛攻を、萃香はかろうじて耐えていた。

攻撃を受ける度、肉体が軋み、血を噴き出す。

萃香の攻撃も、先代を掠めて削り取っていく。

疲労が出血で塗り潰され、その上に更に疲労が上書きされていく。

両者とも血塗れだ。

二人とも瀬戸際で戦っている。

——決着は近い。

萃香は、先代の意図を読んでいた。

分かっている。

先程から、先代は右手を攻撃にも防御にも使っていない。

それが真正正銘の奥の手だからだ。

構えたまま動かない拳は、奇妙な握り方をしていた。

完全に握っていない。

特に親指と人差し指と小指の三本を僅かに開いている。

拳というよりも、菩薩像の手のような形だった。

あの先代巫女が、ただの疲労で拳を握れないはずがなかった。

何らかの深遠な意味が、あの握り方に込められているのだろう。

そして、それを放つ時がこの戦いの最後の勝負所だ。

奥の手か——。

それは自分にもある。

ただし、それは成功するかどうか分からない賭けだ。

萃香は、その賭けに躊躇無く乗った。

ふうっ、

と、萃香が、その時腹に溜めていた息を吐き出し、拳を下げた。

苛烈な戦闘の最中で、あまりに唐突な脱力だった。

隙が出来た。

拮抗していた勢いが怒濤の如く片方へ流れ込む、大きな隙が。

「——コオッ!!」

その瞬間、先代の呼吸が変わった。

このわざと生み出した隙に、先代が勝負を仕掛けに来たのだと萃香

には分かった。

駆け引きに勝ったのか、それとも見抜いた先代が更に裏を狙ってきたのかまでは分からない。

しかし、もうそれは関係ない。

先代が何かを始める。

それを見極めて、こちらの奥の手を成功させる為に、最大限集中する。

来るか!?

その右の拳が——!

「ゴオオオオツ!!」

「な——がつ!?!」

来た。

左の拳だった。

骨が折れて動かないはずの左腕が、急に動き出して、萃香の顔面を打っていた。

例え激痛は我慢出来るにせよ、腕を支える骨が折れているのに、何故動かせるのか。

ワケが分からなかった。

分からなかったが、しかし現実には動いたのだ。

萃香はその無駄な思考を、混乱と一緒に切り捨てた。

意表は突かれたが、これは決着の一撃ではない。

やはり、本命は右の拳だ。

その根拠のない確信のおかげで、意識が朦朧としながらも、先代の右手に集中し続けることが出来た。

右の拳が、動いた。

——来た!

萃香の待ち構えていた瞬間だった。

あの菩薩の手のような形の拳が、心臓目掛けて繰り出される。速い。

今の状態ではかわせない。

防御も危険だ。

どんな威力が込められているのか分からない。
ならば——賭けだ。

萃香は全ての動作を放棄して、ただ一つ念じた。
狙われている心臓部分を、『疎』を操って霧に変える。

出来るかどうかは分からない。

能力の内『疎』を操る部分は、ほとんど上の自分に移してしまった。
この肉体は霧に変えることは出来ないし、巨大化も出来ない。

しかし、『密』と『疎』を操る能力は伊吹萃香が生来持つ力である。
能力自体が失われたわけではない。

一瞬ならば——。

それが、体のごく一部ならば——。

萃香は賭けに出た。

そして、

「勝ったぞー！」

拳が届く前に、半身を霧へと変えることに成功した萃香は、勝利を
確信した。

如何に威力があるとはいえ、物理攻撃に類する先代の拳は、これで
無効化される。

最大の攻撃は最大の間でもある。

あの拳が霧になった体をすり抜けた瞬間に、硬直の間を突いて一撃
で決める。

萃香は拳を握った。

拳が当たった。

——先代の菩薩の拳が。

萃香の体が、遙か後方へと吹き飛んでいた。

地面に叩きつけられ、糸の切れた人形のように転がって、ようやく
停止する。

仰向けに倒れた萃香の胸には、致命傷が刻まれていた。

先代の拳は、霧となっていたはずの心臓を抉り、貫き、大穴を空け
ていた。

萃香はぴくりとも動かない。

「な……ぜ、だ……？」

気がついた時には見上げていた夜空を信じられない気持ちで眺めながら、萃香は純粋な疑問を呟いた。

あの時動いたのが嘘だったかののように、再び力なくぶら下がった左腕を抱えながら、先代が萃香に歩み寄る。

「――己の心を細くせよ」

先代が小さく呟いた。

「川は板を破壊できぬ。水滴のみが板に穴を穿つ」

「……ははっ、何だい？ そりゃあ……」

先代はそれ以上答えなかった。

萃香には、先代の語ったことがどういう意味を持つのか分からない。
い。

しかし、先程の自分の疑問に対する答えなのだろう。

その理屈で、霧になった萃香を殴ったのだ。

やはり意味が分からない。

分からないが、この人間が自分の予想を超えたことだけは分かる。

戦いを始めて以来、何度となく繰り返されたことだ。

結局、先代巫女が伊吹萃香の上を歩き続けた。

それゆえの決着なのだ。

「……わたしの首を獲れ」

終わりを悟った萃香は、ただ一言告げた。

先代に『お前の勝ちだ』と告げることだけは出来なかった。

勇儀とは違う。

自分は、そんなに潔い性格ではない。

今でも、負けたくないと思っている。

しかし、もう抗うだけの力は残っていない。

自分が認めたくなくても、現実が容赦なく決着を突きつけてくる。

ならば、口を閉ざしたまま死ぬ。

自分から受け入れるようなことは絶対にしない。

それが、例えどれだけ見苦しくても。

「断る」

しばらくの間を置いて返された、予想通りの言葉に萃香は苦笑した。

分かっている。

勝利に榮譽など感じない性格の人間だということとは。

これも、彼女の美德の一つなのだろう。

勇儀は、それに生かされた。

しかし――。

「そうかい。だけど、わたしは勇儀とは違うよ?」

呟くやいなや、萃香は最後の力を振り絞って起き上がった。

上半身を起こしながら、手刀で自らの首を切り飛ばす。

切り離された首は、起き上がる勢いに乗って、先代の喉元目掛けて飛んだ。

牙を剥き出しにして襲い掛かる頭だけの萃香に意表を突かれながらも、咄嗟に首を捻ってかわそうとする。

かろうじて、喉元に食い付かれることだけは避けた。

しかし、掠めた牙が左の頬の肉を削り、横になびく長い黒髪を半ばから食い千切っていた。

萃香の頭は、そのまま地面に落ちて転がった。

今度こそ、完全に力を使い果たしたらしい。

地面に転がったまま動かない萃香の頭を、先代は呆然と見下ろしていた。

牙の掠めた左の頬は、肉を抉られるほど深い傷ではなかったものの、出血量からして決して浅い傷でもない。

例え治癒しても、大きく傷痕が残ることになるだろう。

「ちえっ……最期の一矢も報いず、か……」

「何故……」

「言つたらう? わたしは、勇儀とは違うのさ」

徐々に光を失いつつある瞳で先代を見上げながら、萃香は力なく笑った。

「こういう見苦しい奴もいるのさ……」

それでも満足そうな口調で、萃香は眼を閉ざした。

それきり、動かなくなった。

先代は、しばらくの間、呆けたように佇んでいた。やがて、倒れた萃香の胴体と首がゆっくりと霧散して消えていった。

分身の時のように、本体へ戻ったわけではない。

二つに分かれたとはいえ、先代と戦った萃香も本体には違いなかった。

言わば半身だ。

それが消滅した。

半身とはいえ、それは間違いなく伊吹萃香という鬼の『死』だった。

先代だけではなく、息を潜めるように見守っていた周囲の人妖達も、それが理解出来た。

先代は天を仰いだ。

上空では、未だ霊夢と萃香が戦いを続けている。

しかし、地上での戦いはたった今、終わった。

決着というよりも、萃香の死という結果によって――。

不意に、先代が膝を着いた。

崩れるように、体が倒れていく。

それを支える為に、誰よりも速く駆けつけたのは射命丸文だった。

文の腕に抱えられるながらも、先代は齒を食い縛って上空の戦いを見上げていた。

其の三十七「決着」

「かあさん、だいじょうぶ？」

妖怪退治の仕事から帰り、自分で傷の治療をしていると、障子をそつと開けて幼い霊夢が私を見ていた。

ふっ、問題ないさ。

霊夢の優しさによって、たった今完治したからね！

心配してくれる嬉しさから、そんな親バカ丸出しのテンションになった私だったが、相変わらずそれが顔面と声色に反映されることはない。

私はニコリともせずに、霊夢を見つめた。

「夜も遅い。寝ていなさい、霊夢」

「うん……ごめんなさい」

いや、ち……違うのよ？

私は霊夢が心配なのよ？

まだまだ子供である霊夢の健全な成長が阻害されないように、睡眠は十分にとって欲しいという親心——しかし、悲しいかな、そんな想いは欠片も口調に表れず、なんかちよつと叱るような言い方になってしまったのだった。

く……くそつ、この万年機能不全を起こした口め！ 霊夢が落ち込んじゃったじゃないか！

毎度のことだが、上手いかない親子のコミュニケーションにうんざりしてしまう。

きっと『厳しい母親』って、霊夢の眼には映ってるんだろうなあ。

内心で沈みながら、私はせめてものフォローとして、立ち竦む霊夢を手招いた。

「こっちにきなさい」

私の言葉に、霊夢は小さく笑顔を浮かべて、すぐ隣に座った。

やだ、何この天使。

一体、誰のお子さんなのかしら？

私のだよ！ ふひひっ。

「つよい妖怪だったの？」

「いや……」

最近、妙に私の仕事に興味を持ち始めた霊夢の質問を、言葉少なに返す。

これは意図して無愛想に返答したのだ。

今回の負傷は、完全に自業自得だったからね。

博麗の巫女の仕事として、妖怪退治を長年続けてきて経験も多く積んだ。

今更、雑魚相手に万が一にも不覚なんて取らないし、今回の敵も例に洩れずその雑魚だったが――。

――珍しく人型で、人間サイズの妖怪だったから『虎王』と各種関節技の訓練も兼ねて戦っちゃったよ。

自業自得っていうか、油断と慢心だね。格下とはいえ妖怪の素の攻撃力舐めてたわ。

カウンターに失敗して、受けなくてもいいダメージを何度か受けてしまった。

まあ、それもこれも自分を殺す気の相手に未完成の技を何度も掛けようとした私が悪いんだが……。

しかし、おかげで概要を頭で把握しているだけだった技を、実地で鍛え上げることが出来た。

こつちも手痛い反撃は食らったが、敵の四肢を捻じ曲げて、最後は顎ごと頭を蹴り潰してやった。

ふふふつ、この『虎王』さえあれば、例え相手が鬼であつても負ける気がしない！

……実際に鬼と戦うなんて絶対御免だけどね。

包帯を巻き終えた私は、あらかじめ卓の上に置いておいた酒瓶とコップを手に取った。

一杯分だけ注ぐ。

霊夢を拾う以前からずっと続けてきた、妖怪退治の後の儀式みたいなものだ。

「……かあさん、仕事から帰ってくるといつもそれ飲んでるよね」

霊夢が不思議そうに呟いた。

この子の前でお酒を飲んだのは、まだ更に幼い頃に数回程度だったが、それらを全て覚えていたらしい。

やだ、何この天才。

一体、誰のお子さんなのかしら？

私のだよ！ うへへっ。

「お水？」

「いや、これは酒という物だ」

「おいしいの？」

「旨いという人もいるだろう」

「かあさんは？」

「あまり旨いとは思わない」

これは私の本音だった。

飲めないほど嫌いってわけでもないが、酒の旨さがよく分からないのだ。

あんまり強くないし、波紋の呼吸も乱れやすくなるしね。

なので、この酒瓶も自前で買ってきたものではない。

この博麗神社に奉納された物品の一つである。

東方原作では参拝者のいない神社とされていたこの場所だが、誰も訪れないというわけでもなかった。

少なくとも、私が博麗の巫女に就任してからしばらくして、時折こういったお供え物を持って、人がやって来るようになったのだ。

人里から離れてるし、道中も妖怪などで危険だから、やはり頻度は少ないがそれでも十分凄いことである。

妖怪退治しまくって私自身が妖怪から恐れられるようになり、神社には危険な奴らは近づかなくなったから昔よりは安全度も上がっている。

あと、最近霊夢に修行をつけ始めてるんだが、その一環として神社の付近とか道中の石段に練習用の結界を張りまくっているのだ。

おかげで、この辺一帯が霊夢の結界でガチガチ。まだ未熟な術とはいえ、木っ端妖怪では近づくことも出来ない要塞と化しつつある。

まあ、そんなこと参拝する人は知らないだろうから、勇気のある行動であることは変わりないけど。

それと、凄いのはまだ子供なのに才能の片鱗を見せ始めてる霊夢自身とこの子を密かに教えている紫であって、私はあまり関係ない。

……母親なのに。

一応、博麗の巫女なのに。

「おいしくないのに、飲むの?」

勝手に内心で沈んでいる私を尻目に、霊夢は子供らしい純粋な疑問を口にしていた。

私自身も、旨さ以前に負傷時の飲酒があまり体に良くないということとは知っている。

それでも、私は昔から妖怪退治の後で一杯のお酒を欠かさなかった。

「――戦った後に残る濁った憎しみを、酒で追い出すのさ」

私は霊夢に答えた。

この言葉は、とある漫画で復讐に駆られた男が口にした台詞である。

でも、漫画の受け売りだからって、霊夢の疑問に茶化して返答したわけじゃない。

この言葉にあやかるのは、私なりに真剣な理由があつてのことだった。

「さけで追い出す?」

「そうだ」

「にくしみを残したらいけないの?」

「ああ、いけない」

この世界はゲームの中に存在するわけじゃないし、私が妖怪を退治するのはスコアを稼ぐ為じゃない。

そこに犠牲があつたからだ。

妖怪は、悪さをしたから退治される。

今回もそうだった。

私が退治した妖怪は、人里から離れた集落で、幻想郷のルールを無

視して無差別に人を殺した。

食べる為じゃない、楽しむ為に人を虐殺したのだ。

姿形が人に似ていたせいかな、あるいは邪悪だから人に似たのか——どっちでもいいが、本能ではなく理性で動く分、残忍で悪辣な妖怪だった。

子供一人を残して、一家皆殺し。

残された子供は村に保護されたが、あの子の将来を考えると痛ましくて堪らない。

そして、それを起こした妖怪への憎しみも——。

私は技の実験台にしたと言ったが、そこには敵を痛めつけてぶっ殺してやろうというドス黒い感情も含まれていたのだ。

だからといって、妖怪を殺すことに何の抵抗がないわけでもない。相手が人間じゃないからといって、言葉を話し、感情も表す妖怪を殺して平気なわけじゃない。

この世界に名無しのモブキャラなんて存在しないのだ。

私の目の前で起こる出来事を、モニター越しのように眺めて、平静でなんていられない。

もうずっと昔に体感し、今日まで繰り返してきたことだ。

命が奪われ、命を奪う日常。

好きな修行に明け暮れ、日々を能天気にごしながらも、ふとした時に直面する避けられない現実の厳しさを前にした時、私を正しく導いてくれたのが前世の知識だった。

「憎しみは、何も実らせないからな」

この言葉も、同じ漫画の中の台詞である。

しかし、私の人生をずっと支えてくれた偉大な言葉だ。

前世の私は、何を想ってこの言葉を捉えていただろう。

リアリティの無いフィクションの言葉か？

だけど、非現実的な現実の世界に生きる私にとっては、この上なく心に響く言葉だ。

私は、これらの言葉をお手本にして、今日も真っ直ぐに生きていくのだ——。

「なにも実らせない……」

「そうだ。覚えておけ、霊夢」

「うん。……はいっ」

霊夢は珍しく真剣な表情を浮かべ、ハッキリとした声で応えてくれた。

子供の教育にもバツチリ使える名言！ さすがやで！

……惜しむらくは、全部受け売りだったことか。

いや、偉人の言葉から学ぶというのは教育の基本だけど、母親として複雑っつーか……私も自分の言葉でビシッと霊夢に教育出来れば一番いいんだけどね。なんせ、口が上手く回らんから。

結局、自分の言葉で表現出来ない私は、行動や背中で語るしかないのだった。

それすらも伝わってるかどうか微妙だけど……。

「かあさん」

「なんだ？」

「あたしも、お酒飲んでみたい」

「駄目」

おもむろに伸ばしてきた霊夢の手から離すように、私はコップを持ち上げた。

「ケチ」

「ケチで結構」

不満そうに頬を膨らます霊夢に内心で悶えながら、鋼鉄の意志と顔で答える。

さすがに、今の霊夢にお酒は早いだろう。

でも、原作だとまだ明らかに未成年って年頃でお酒飲んでるのよね。皆で宴会とか頻繁に開いちやってるし。

将来のことを思うと、そういった流れに霊夢だけ乗り遅れないように、お酒の味に慣れさせることも必要だろうか。

そもそも幻想郷に外の世界の法律とか関係ないから、成人の境目なんて年齢で決められてないからね。

二十歳という年齢にこだわるのは、幻想郷じゃ私くらいか……。

「もし、お前が大人に……いや、一人前の博麗の巫女になったら」
言い直して、私は見上げる霊夢に微笑みかけた。

「一緒にお酒が飲みたいな」

私がそう言うと、霊夢は不満そうな表情を一変して笑顔になった。

「うんー！」

霊夢はまだ子供だ。

しかし、その日が来るのはきつと遠くないだろう。

それが待ち遠しくもあり、寂しくもあるんだなあ。

霊夢を膝の上に乗せながら、私はもう一口酒を飲んだ。



——相手に弾を当てれば勝ち。

弹幕ごっこにおける決着とは、詰まるところこれ一つのみである。

もちろん、美しさや優雅さが弹幕の優劣に関わる以上、その結果に至るまでの経過こそに重きを置かれているが、この決着だけは絶対唯一のルールとして弹幕ごっこの根幹に存在しているのだ。

このシンプルな決着に至るまでに、勝負内容を多様に彩っているのは、弹幕を介した攻め手の自由度の高さである。

弹幕ごっこには大きく分けて二通りの攻め方がある。

——一つは、その名の通りあらかじめ用意したスペルカードに示された弹幕を放ち、数撃ち当てる方法。

——もう一つが、その弹幕を避けながら標的を狙い撃つ方法である。

観点は違えど、美しさや優雅さが評価される点は共通している。

二つの方法の大きな違いは、その攻め手の特性であった。

後者の方は、説明するまでもない。

避けることを主体に置いたこの戦型は、文字通り避け損ねて当たった時点で決着である。

特に、弹幕ごっこにおいて故意の殺傷は禁止されているが、放たれた弾の威力と受けた者の耐久性によつては、直撃が死に繋がる場合も

ある。

そういった意味でも、被弾することは勝負の決着を意味していた。動いて避ける以外の緊急回避手段として『ボム』という弾幕を無効化する特殊な攻撃方法も認められていたが、これは単にスペルカードの使用を対弾幕用に変えただけのものに過ぎない。

避けながら撃ち、時として『ボム』を使う——手段の内容に違いはあれど、行動自体はこのパターンにまとめられる。

一方、本来のスペルカードを用いた方法は、使う者の能力を弾幕に活かすことで多種多様な特徴を生み出す。

弾幕の構成、物量、速度、外観——似通うものはあれど、どれ一つとして同じものは存在しない。

その者だけの弾幕となるのだ。

そして、この場合でも弾幕を放つ側に『弾を当てれば勝ち』という原則は変わらない。

弾幕に力と意識を割く分、回避にだけ集中することが出来ず、後者の方法よりも被弾する確率は遥かに高い。

弾幕ごつこの勝敗が一発の被弾で決定する以上、如何に派手な弾幕を用いようとも、自身が単なる標的となっていては意味がないのだ。

それによる勝負内容の陳腐化と戦型の明確な優劣を避ける為、この弾幕による攻め方にも『弾幕を無効化することで避ける』ことは認められていた。

具体的にはスペルカードを使用している間、弾幕と同様、そこに設定された各々の方法で相手の弾幕を防ぐことを認めているのである。

魔法障壁でも、結界でも、何らかの力を身に纏う方法でも、弾が直当たりさえしなければ良い。

これもまた変則的な『ボム』と言えるかもしれない。

しかし、当然ながら勝負の停滞を防ぐ為に、この方法には制限時間や耐久力の限度が必ず設定されている。

制限時間はほとんどの場合スペルカードに示された弾幕の終了と同じに設定されており、耐久力に関しては定められた数だけ被弾した場合に障壁や結界が解除されて防ぐことが出来なくなつて、決着とな

るのだ。

弾幕ごっこで勝負をする者同士の間に明確な地力の差があったとして、その差が勝負の結果を絶対的に決めてしまわないようにする為の配慮であった。

——弾幕を用いて、手数で圧倒する。

——それを避けて、狙い撃つ。

いずれの方法も一長一短が存在する。

どちらを選ぶのも自由であるし、状況に合わせて戦型を変えても良い。

これまでの異変の首謀者がそうであるように、強大な地力を持つ人外の者達は自らの力を誇示することも踏まえて、前者を選ぶ傾向があった。

逆に地力で劣る人間は、弾幕ごっこで人外を相手にする際、後者を選んだ方が幾らか有利な要素が付く。

そしてまた、これらの定例に例外も多く存在するのだ。

紅霧異変以降、幻想郷に定着しつつある弾幕ごっこには、こういった原則と実状が絡み、様々な方向へ発展しているのだった。

——重要なことが一つある。

弾幕ごっこにおける、この二通りの攻め方。

どちらを選んでも良い。

そして、両方を選ぶこともまた禁止されてはいないのだった。



霊夢と萃香の空中戦は段階的に激化していった。

勝負の序盤は、互いにスペルカードを掲げ、弾幕を放った方を、もう片方が避けながら狙い撃つ。

萃香の凄まじい弾幕の物量と密度に、初見の霊夢は回避に専念せざるを得なくなり、思うように弾幕ごっこ用の攻撃——『ショット』と総称される——を当てることが出来なかった。

しかし、逆の場合も同じだった。

鬼の暴力の具現とも言える萃香の弾幕に対し、霊夢の高度な弾幕の構成は不慣れな萃香を回避一方に追い込んだ。

伊吹萃香を知る者は、彼女の弾幕を避けた上で一方的に攻め立てる博麗霊夢という人間に驚愕し――。

博麗霊夢を知る者は、彼女に反撃の暇すら与えず圧倒する伊吹萃香という妖怪に畏怖する――。

いずれも、目の前の相手を最大級の敵と認識するのに十分な初戦だった。

様子見が終わり、萃香と霊夢は互いに自らの隠した手札を晒し始めた。

二種類の弾幕が交互に夜空を埋め尽くし、その光の中を二人が貫くように飛び回る。

戦いのレベルを上げていきながら、どちらも並外れた能力とセンスでそれに追従していく。

地上から二人の戦いを眺める者達は、展開される光景にただ圧倒される他なかつた。

勝負は拮抗し続けた。

しかし、当然のこととして、戦況は徐々に一方へ傾き始めていた。「ちっ……反則でしょ、こいつは」

萃香の弾幕に囲まれながら、霊夢は珍しくぼやいた。

周囲は膨大な量の光弾がうねるように飛び回り、まるで閉鎖空間に閉じ込められているような錯覚さえ抱かせる。

しかし、霊夢をして悪態を吐かせたのは、この弾幕の単純な難易度だけではなかつた。

上も下も分からなくなるような弾幕の迷宮の中で、何かを探るように周囲に視線を走らせていた霊夢は、唐突に脳を直接引っ張られるような感覚に襲われた。

それは何度も経験した、自身の勘が危険を訴えかける時の感覚だった。

霊夢は咄嗟にその場を離れるように飛んだ。

しかし、飛んだ先を遮るように弾幕が流れ込む。

それすらも回避してみせる霊夢の判断力は既に人外のそれだったが、回避行動に一瞬の鈍りが出ることもまでは避けられなかった。

つい先程までいた場所を、あらゆる方向から飛来した高速の『ショット』が撃ち抜き、霊夢の回避行動に追従するようにその火線が動いて、危ういところで霊夢の体を掠った。

巫女服の袖が焼け千切れる。

霊夢が普段、余力を持って紙一重の回避を行う場合とは違う。

直撃しなかったとはいえ、明らかに不覚だった。

「ルールに反しちゃいけないと思うがねえ！」

霊夢が火線を辿って視線を走らせた先には、弾幕の影から飛び出す萃香の姿があった。

「使ってるスペルカードも一枚きりだ！ スペルカードを複数同時に使うことは禁止されてるが、弾幕の最中に自分が動き回っちゃいけないなんてルールはなかっただろ!？」

「それが出来るあんたの能力が反則だって言ってるのよ」

「そりゃ、褒め言葉として受け取っておこうか！」

萃香は嬉々として霊夢を狙い撃った。

スペルカードに示された弾幕を放ちながら、自らもまた高速で縦横無尽に飛行しつつ、予期せぬ角度から霊夢を『ショット』で狙っているのである。

確かに、これら二つの手段の合わせ技を禁止するルールは存在しない。

しかし、本来ならば『出来ない』というのが現実だった。

三次元的な範囲の広さと、構成の綿密さ、それを実現する精密さなど、弾幕に求められる力と技術は多大なものである。

弾幕を放つ者は能力の大半をそこに割かれてしまう。

いや、割かざるを得ないのだ。

中途半端な能力の使用は、弾幕の構成や密度を甘くし、結局相手に攻略する隙を増やしてしまうからだ。

弾幕を放つならば、相手を確実に追い詰める為の物量と構成を――

回避に徹するのならば、弾幕を全て見切る為の極限に至る集中力を。どちらか一方に徹し、高めることが勝敗を決める。それが弾幕ごっこの現実だった。

萃香は、その現実を完全に無視していた。

何処からか無限に汲み取っているのではないかと思える程膨大な力で弾幕を維持しながら『ショット』を撃ち続け、精密な弾幕の動きの中で自らも自在に飛び回っている。

何処にもつけ入る隙が見当たらない。

少なくとも、霊夢ほどのレベルであつても見切れなかった。

——何故、こんなことが可能なのか？

分からない。

敵が伊吹萃香だから、としか言いようがない。

彼女の持つ『疎』を自在に操る能力が、弾幕ごっこのルール上において、定石を覆す程に恐るべき効果を発揮しているのだった。

ただ単純に強い。

霊夢にとつて、かつてない強敵であることは間違いなかった。

「反則と言やあ、お前さんもだなあ！ 後ろに眼でもついてんのかい！？」

背後からの射撃を振り返りもせず回避してみせた霊夢に、萃香もまた笑いながら言った。

二通りの攻め方を同時に行う萃香に反して、ただ一つ回避にのみ特化する霊夢もまた突き抜けていた。

常人ならば自分の位置さえ見失う弾幕の最中を、萃香の動きさえ意識しながら、高速で飛び回っている。

加速は危険だが、減速も出来ない。

動きを止めれば狙い撃たれてしまうが、弾幕の中を高速で飛び回れば一瞬の判断の遅れが自滅に繋がる。

ギリギリの一線を、霊夢はここまで一度も誤ることなく飛び続けているのだった。

しかし、当然のように限界は訪れる。

再び萃香の放つ火線を避けた先に、弾幕が現れた。僅かな隙間しかない、壁のような弾幕である。

範囲も広く、今の位置から軌道を変更しては避けきれない。

霊夢は咄嗟に札を取り出した。

——霊符『夢想封印』

霊夢を中心として複数の霊力の弾が渦巻くように発生し、それらが周囲の弾幕を呑み込みながら萃香目掛けて襲い掛かった。

攻防の逆転した状態から成す術もなく、萃香は全弾直撃を受ける。

しかし、萃香の体に触れた物は一発としてなかった。

発動中であるスペルカードによって防がれている。

正確には『疎』を操る能力によつて、全て分解されて無効化されていた。

やはり自身が高度な動きを行いながらも、並行してスペルカードの行使も完璧に維持している。

つまり、萃香に勝つためには、弾幕の最中で動き回る彼女を捉えながら、尚且つ設定された耐久力が尽きるまで攻撃を当て続けるしかないのだった。

窮地を脱しながらも、霊夢は様々なものを含んだ舌打ちをした。

「あたしに『ボム』を使わせるとはね……！」

「いい面だなあ、博麗霊夢！」

射撃の手を緩めず、萃香が笑った。

「勝負を始めた時でも——」

挑発を含んだものではない。

心の底から愉快そうな笑みだった。

「その前の勝負でも——」

この異変で初めて顔を合わせ、紛れもない敵である霊夢に対して、萃香は親しみさえ抱いているようだった。

「お前さんは顔色一つ変えなかった！」

「そんなに嬉しい？ この程度で、あたしを追い詰めてると思ってるの？」

「魅力的になってるってことだよ！ その面ア、もっと歪めてやる！」

「やってみなさいー!」

霊夢は知らず、声を荒げて応えていた。

これまでの霊夢は、敵を歯牙にも掛けなかった。

それが今は出来ない。

萃香の挑発を無視出来ない。

自分が、おそらく初めてであろう困難にぶつかっていることは分かる。

しかし、その顔に焦りはない。

ただ、これまでの生涯で初めて浮かべる、強大な敵への挑戦的な笑みがあった。



「鬼って凄いのねえ……」

他の傍観者達と同じように、上空で展開されるハイレベルな弾幕ごっこを見上げていた幽々子は呟いた。

素直な感嘆の声だった。

伊吹萃香という妖怪については知らないが、博麗霊夢の実力に関しては身をもって知っている。

春雪異変の時、相対した霊夢に幽々子は完封された。

弾幕ごっこにおいて、霊夢の実力は比類なきものだと思っていた。

その霊夢を相手に、追い詰めているとまでは行かなくとも、萃香は優勢に戦っているのだ。

幽々子が抱いていた印象と、今の激する霊夢の姿は大きく異なっている。

それだけ、彼女が余裕のない戦況へ追い込まれている証拠だった。

「苦しそうね、霊夢」

今度の呟きは、隣の友人に問い掛けるようなものだった。

幽々子と並ぶように、いつの間にか紫が空を見上げている。

つい先程まで、文の近くで先代の戦いを見ていたはずだが、彼女の戦いが終わった後ここへ戻ってきたらしい。

——何故、傷ついた先代巫女の元へ行かないのか？

幽々子は紫の心境を察して、そのことは何も訊かなかった。

「そうね。あんな顔の霊夢は初めて見るわ」

「楽しそうね？」

紫の顔に浮かんだ微笑を、幽々子がそれこそ楽しむように指摘した。

「あの娘の仏頂面って、いい加減見飽きてるんだもの」

「それは紫が霊夢に嫌われてるからじゃないの？」

「私もあの娘のこと嫌ってるから問題ないわ。萃香との勝負を通して、もっと色々表に出すようになるといいのよ」

「でも、異変を解決する博麗の巫女として見るならば、彼女の揺れない心は強みになっていると思うわよ」

「見ていて不愉快なのよ」

言葉とは裏腹に、紫は澄ました笑みを浮かべたままだった。

「何故なら、あの仏頂面は憧れる母親の物真似だから。そこに可愛げを感じれる程、私はあの娘のこと好きじゃないの」

紫の返答に、幽々子は思わず吹き出していた。

確かに、紫が霊夢を嫌っていることは察していたが、この反応は予想よりもずっと『可愛げ』のあるものだった。

紫が本当に嫌悪し、敵対する相手に向ける冷徹さを知っている幽々子には、二人の仲がまた違った複雑なものに見えるのだ。

「それに、霊夢は霊夢の強さのまままで問題ないわ。誰が鍛えたと思っているの？」

——さて、それは貴女と先代のどっちかしら？

幽々子はあえて言葉に出さず、その問い掛けを心の中だけで楽しんだ。



空中で激しく互いの位置を入れ替え、距離を離し、時にすれ違いがら霊夢と萃香は撃ち合っていた。

一対一の射撃戦ならば、明らかに霊夢の技量と経験が勝っている。しかし、周囲で不規則に動く弾幕は全て霊夢にとって障害だった。状況を味方につけた萃香が、霊夢の動きを徐々に捉え始めた。

「そこか！」

「ちいっ！」

萃香の『シヨット』が霊夢の傍らを掠めた。

結果的に体には当たらなかったが、回避に成功したわけではない。

霊夢の左右に浮遊していた陰陽玉の内一個が、被弾していた。

霊夢の『シヨット』や『ボム』の補助を行う為のエネルギーを蓄えていた陰陽玉は、撃ち抜かれると同時に大爆発を起こした。

飛行機の燃料タンクが誘爆したに等しい。

至近距離の爆風に弾き飛ばされた霊夢は、きりもみしながら空中を舞った。

大きく姿勢を崩しながらも、周囲の弾幕を避けつつ、バランスを立て直そうとするセンスは非凡の一言に尽きる。

しかし、ミスはミスだった。

萃香の火線が、間髪入れず体勢の不安定な霊夢を追撃する。

反対側からは弾幕。

火線避けるように動けば、弾幕に自ら突っ込むことになる。

霊夢は瞬時に判断を迫られた。

「——獲った！」

弾幕に突っ込む形で動いた霊夢を見て、萃香は思わず叫んでいた。

僅かな隙間を抜けようというのだろうが、その弾幕は今にも間隔を狭めて閉じようとしている。

自滅だ。

しかし、その瞬間——。

霊夢の体が弾幕に触れる一瞬前に、萃香のスペルが制限時間に達していた。

ギリギリのところまで弾幕が消失し、結果開けた空間に体を滑り込ませ、霊夢は萃香の攻撃を回避することに成功していた。

「くそ……っ、まさか(´▽`)まで計算尽くか!？」

「ふんっ」

齒噛みする萃香を、霊夢が鼻で笑い飛ばす。

確かに、先程の判断は偶然ではなく狙ったものだった。

しかし、余裕があったわけではない。

普段は淡々と弾幕ごっこをこなす霊夢の顔に浮かんだ、小さな笑みと僅かな汗が彼女の心境を正確に表していた。

「かなりいい線いってると思うんだけど、ことごとくかわされちゃうねえ」

「あなたのスペルカードを全部かわすっていう戦法も有りかもね」

萃香に気づかれないように、自然な仕草で汗を拭いながら霊夢は言った。

例外として、相手のスペルカードを全て攻略することも決着の一つである。

戦う手段が尽きれば、そもそも勝負自体が成立しないからだ。

延長戦の末に判定に持ち込むような華のない勝ち方だが、異変を終息させることが目的である霊夢にとって勝利には変わりない。

スペルカード・ルールで戦っている以上、萃香もそのことは承知しているはずだった。

「わたしがお前さんを追い詰めるのが先か、お前さんがわたしから逃げ切るのが先か——」

萃香は、更に別のスペルカードを取り出した。

もちろん、無限にカードを用意出来るわけではない。

勝負の終わりは着実に近づきつつあった。

「だけどな、鬼はハッキリとした分かりやすい決着が好きなのさ！」

突如、萃香の笑みが、獰猛な獣のそれに豹変した。

取り出したスペルカードを、これ見よがしに握り潰す。

次の弾幕に備えて身構えていた霊夢は、変化した萃香の雰囲気とその仕草から、鋭く彼女の意図を読み取った。

「長々と我慢比べなんて面倒くせえ真似はしねえ！　ここで一丁、大博打といこうじゃないか!？」

「スペルカードじゃない!？」

萃香を中心に展開され始めた弾幕を見て、霊夢は思わず叫んでいた。

形こそ弾幕であるものの、その本質が別物であることが一目で分かった。

弾幕の威力が人間など消し飛ばせる程に高められている点はまだ良いとして、問題はその構成である。

圧倒的な——ただただ圧倒的な物量が、霊夢を含めた周囲の空間そのものを埋め尽くそうとしていた。

『一見して避ける隙間などないように見える弾幕』というのは、これまでに経験した萃香のスペルカードの特色である。

しかし、この弾幕は完全に『遊び』の領域を超えた弾丸の嵐だった。何より最も重要な点として、萃香はスペルカードを用いていない。

それ自体は何の力も持たない札に過ぎないが、事前にスペルカードを示さなかったということは、この弾幕に規模や時間などの制限が設定されているかどうか分からないということである。

これでは単なる無差別な制圧射撃だ。

しかも、特別に凶悪な。

——ここに来て、ルールを捨てたか！

霊夢は内心で悪態を吐いたが、現状でその行為に意味がないことも分かっていった。

元々、仲間の鬼を率いて幻想郷を直接襲撃してきた敵である。

自然と弾幕ごっこによる勝負を始めたが、極端な話、こちらの理に従うつもりがないのなら勝負の結果など何の意味もないのだ。

『いやあ、負けたよ。じゃあ、次は殺し合おう』

そんなことを平然と言ってくる相手かもしれないなかったのである。

萃香は、勝負のやり方を切り替えた。

それだけのことだった。

そして、そんな幻想郷の理に従わない者も相手取り、理の下に退治

する——それが博麗の巫女の役割だと、霊夢はよく理解していた。そう教わったからだ。

忘れはしない。

忘れるわけがない。

「……ふんっ、まあ丁度いいわ」

僅かな動揺を一呼吸の間に落ち着けた霊夢は、迫り来る圧倒的な弾幕を見据えた。

逃げるつもりはない。

この戦いは多くの人や妖怪に見られているのだ。

そして、何よりあの人が——。

「博麗の巫女の前で、ルールを破ることがどういう意味を持つのか——あなたには見せしめになってもらう！」

——『夢想天生』

萃香の弾幕を迎え撃つように、霊夢もまた弾幕を展開した。

広大な人里の上空を覆う、文字通り弾丸の幕である。

ぶつかり合った光弾が対消滅し、夜空を無数の閃光と炸裂音で埋め尽くしていく。

互いに回避を捨て、ただひたすら相手を圧倒する為だけに放たれたそれは、もはや弾幕というよりも光の津波だった。

二つの巨大な津波がぶつかり合い、互いを押し合って、相手の領域を飲み込もうとしているのだ。

夜の闇を完全に消し去り、地上から見上げる者達の眼を晦ますほどの激突が上空で繰り広げられていた。

弾幕に対して弾幕で応戦してはならないというルールはない。

しかし、本来ならばそういった勝負の形は自然と避けられるものだった。

何故ならば、二つの弾幕がぶつかり合った場合、単純に物量に勝る方が相手を討ち取るからである。

そして、その単純な物量においては萃香の弾幕が霊夢の弾幕を上

回っていた。

互いの弾幕が激突し、対消滅していく最中を幾つかの弾が突っ切つていった。

撃ち漏らした萃香の弾幕である。

それらが弾幕の中心で動けない霊夢本体を狙う。

例え結界を纏っていても関係ない。

萃香はスペルカードになぞった弾幕を撃っているわけではないのだ。

威力と手数で圧倒し、結界が破壊されるまで撃ち続けるつもりだった。

しかし――。

「なんだと!?!」

萃香は眼を疑った。

信じ難い現象が起こっていた。

霊夢に直撃するはずだった弾が、かわされるわけでも、防がれるわけでもなく――肉体を『すり抜けた』のだ。

「そいつが……奥の手か!」

力を振り絞り、萃香は更なる弾幕を放った。

もはや物量では萃香が大きく上回っている。

霊夢の弾幕は萃香に届かないが、萃香の弾幕は霊夢に届くのだ。

しかし、やはり見間違いではない。

まるでそこに在る霊夢の肉体が幻影か何かであるように、飛来する光弾は標的を通り抜けて、そのまま背後のあらぬ方向へと消えていった。

――無敵か!?

萃香は内心で『まさか』と思いながらも、冷静にその技の正体を見極めようとした。

しかし、見れば見るほど偽りのない現実しか見えてこない。

弾は霊夢の体をすり抜けていく。

ただ、それだけだ。

如何なる原理も見えてこない。

揺るがしようなのない現実だけが存在する。

——おい、冗談だろ……。本当に無敵なのかつ!?

萃香は絶望を通り越して、呆れたような乾いた笑みしか浮かべるこ
とが出来なかった。

鬼の力に任せて圧倒しようとした自分を棚に上げて文句を言っ
ても足りないと思えた。

理不尽ここに極まれり、だ。

ルールに沿ったまともな勝負を捨てた自分も大概だが、勝負そのも
のをまともにやらせようとしなない相手の徹底ぶりには頭が下がる。

当の霊夢は弾幕の中心で、全てを委ねるように眼を瞑って両手を広
げ、何ものにも干渉出来ない存在となっていた。

放つ弾幕さえも自らの意思ではなく、周囲が勝手にそうしているか
のように、霊夢は全ての事象から切り離されていた。

「これが『博麗の巫女』の力か……。っ！」

もはや、萃香に残された道は二つだけである。

敗北するか——。

大地を押し返すような覚悟で、最後まで足掻き続けるか——。

「くそつたれえ、結局我慢比べかい！」

萃香はやけくそ気味に叫びながら、力を振り絞った。

霊夢が人間である以上、能力の行使には限界がある——はずだ。

その在るかも分からない可能性に賭けて、ただ自身の力を吐き出し
続けるしかなかった。

互いの命が尽きるまで続くかもしれない拮抗——。

しかし、事態はあっさりと動いた。

突然、霊夢が眼を開いた。

それが全ての切欠であったかのように、動いていた。

何もかもが。

「なにっ……」

霊夢が眼を開いた瞬間、彼女の放っていた弾幕は止まり、代わりに
霊夢自身が動いていた。

何故このタイミングで動いたのか、萃香には分からない。

実はこの短い時間が、あの無敵の能力の使用限界だったのか。あるいは、何か勝機を見つけたのか。

それを察知したのか。

どんな方法で？

勘か。

偶然か。

いずれにせよ、萃香にそれらを判断する時間はなかった。

霊夢は『夢想天生』を解除して、萃香の『百万鬼夜行』に自ら飛び込んでいった。

神掛かった回避運動を行いながら高速で飛行し、弾幕の範囲から抜け出そうとする。

しかし、圧倒的な物量が逃げ道さえ物理的に塞いでいた。

萃香が何かをするまでもなく、視線の先で霊夢の体が弾幕に呑み込まれていく。

——油断するな。

萃香は、自分に言い聞かせた。

敵の実力は、ここまで戦った自分がよく知っている。

霊夢を呑み込んだ弾幕が、その場を過ぎ去っていく。

案の定、未だ目の眩む光の中から霊夢が反撃と共に飛び出してきた。

驚きは少なかった。

飛来する光弾を避けながら、やはり無事な霊夢の姿を確認して——目を見開いた。

今度は、その『技』を見抜くことが出来た。

「違う、幻影か！」

応えるように霊夢の姿が掻き消え、本当にそこに残っていたのは半壊した陰陽玉だけだった。

萃香の意識を割く為の罠だったのだ。

霊夢が無事であることは予想してたが、陰陽玉からの反撃を受け、一瞬とはいえ霊夢本人だと錯覚してしまった。

戦いの集中力を、敵以外のあらゆる方向に逸らしてしまった。

それはごく僅かだが、間違いないつけ入れる隙だった。

「――『博麗幻影』」

博麗の秘技の名を小さく呟いた時、霊夢は萃香の遙か頭上を取っていた。

構えた手には、タタミ針ほども長さのある封魔の針が握られている。

それを自らが見極めた軌道――この位置から萃香に至るまでの、僅かに薄くなつた弾幕の隙間目掛けて、放った。

放たれた一閃は、それこそ針の穴に糸を通すような隙間を高速で突き進み、死角から萃香に迫る。

しかし、鬼である。

何の前触れもなく、萃香はこの奇襲を察知した。

振り仰ぐ暇もあらばこそ、『疎』を操る能力を瞬時に発動する。

目先数センチの距離まで迫っていた金属製の針は、文字通り萃香の眼前で粉々に分解された。

ここに至つて、二人は戦いの定石や理屈を完全に超越していた。

霊夢を見上げ、萃香は『まだまだこれからだ』と不敵な笑みを浮かべて――二本目の針が眼前にまで迫っていた。

一本目の針の後ろに、ぴったりと重なっていた物だった。

「……畜生」

笑みを引き攣らせた萃香の額に、針が直撃した。



萃香が龍神像の傍に盛大に落下した後で、霊夢はゆっくりと舞い降りた。

既に、捕らえられていた子供達は助け出され、各々の家族の元へ戻っている。

広場に残っていたのは、霊夢に封じられたままの鬼の少女だけだった。

その少女もいつの間にか眼を覚まし、身動きの取れないまま、倒れ

た萃香を見つめていた。

彼女だけではなく、ここまでの戦いを見届けていた周囲の者達全てが察していた。

——鬼との決闘は、博麗の巫女の勝利によって終わったのだ。

上と下の二つの戦いが終わってもなお、誰も騒ぐような真似はしなかった。

まだ此度の異変そのものが解決したわけではないと、分かっていたのだ。

再び地面に足をついた霊夢は、倒れたまま動かない萃香を確認した後、周囲を見回した。

いつの間にか、随分数が増えている。

人里内で行われていた鬼の討伐がほぼ完了し、状況が伝わると共に、住人の多くがこの広場に集まり始めた為だった。

それらを含めた人妖誰もが、霊夢の動向を見守っている。

博麗の巫女が、この異変を終結させる為に如何なる決着をつけるのか——。

霊夢は、周囲の輪から外れた位置にいる母親の姿を見つけた。

地上での激戦を経て、傷だらけになりながらも、文に支えられてじつとこちらを見つめている。

霊夢は視線を萃香に戻した。

「——立ち上がらないなら、決着って受け取るけど?」

霊夢は油断なく様子を伺いながらも、気軽に尋ねた。

「体が、動かねえ……っ」

かろうじて萃香が返事をする。

大の字に倒れたまま、萃香は指一本動かせない。霧に変化することも出来なかった。

急所に突き刺さった封魔の針が、全身の自由を封じているのだ。た。

「まあ、そういう針だしね。それにしても、鬼にしては随分呆気ないじゃない?」

「言うなよ。力の半分は、もう一人のわたしに移しちまったんだ。

こっちのわたしの体は、ちよつと力が強くて頑丈な程度なのさ」

諦めたような苦笑を浮かべながら、萃香は視線だけを動かした。傷だらけの先代だけが見える。

満身創痍だが、彼女は確かに生き残っていた。

つまり、地上の勝負の結果はそういうことなのだろう。

「もう一人のわたしは、負けちまったみたいだな」

萃香はこの時に至って、ようやく己の半身の『死』を知った。

「神社の時みたい、記憶を共有出来るんじゃないの？」

「いいや。あれはさ、単純な分身なんかじゃなかったんだ。本当に『もう一人のわたし』だったんだよ。」

お前ら二人を舐めてたとか、遊びだったとかじゃなくて……『わたし』は全力を出して『博麗の巫女』と戦ったんだ。そして、わたしの魂の半分は負けて、死んだんだ」

萃香は噛み締めるように言った。

その声には無念があり、同時に納得があった。

霊夢は黙って、言葉の続きを待った。

一方の萃香の勝負は、死によって決着した。

そして今、もう一方の勝負の決着も明確にしなくてはいけない。

「……なあ、霊夢」

萃香は長年の親友のように、霊夢の名を気安く呼んだ。

「何よ？」

「最後のあの技……なんで途中で止めたんだい？」

「勝負を終わらせる為」

「でも、あのままやってても勝てたはずだ。あの時のお前は無敵だった」

「どういう風に見えたか知らないけど、あれは細かい調節の効く技じゃないのよ。」

スペルカードとして事前に設定しておくならともかく、本気で使ったら最後まで一定して発動し続ける。全力とか手加減するって雑念にも干渉されないのが、あの技の特性だからね」

「それでいいじゃないか」

つまり、あの時霊夢は萃香を殺すことを良しとしなかったのだ。

あのまま技を使い続けることで、確実に訪れたであろう相手の死を回避しようと思って、別の手段に移ったのだ。

詰まるところ、それは――。

「なあ、霊夢。お前は、わたしとの決闘で……」

「何?」

「手加減、したか?」

萃香は躊躇い、そして意を決して尋ねた。

「それがあんたを殺さない為に気を使ったか? という意味なら――その通りよ」

霊夢は、萃香の緊張した声色を全く無視するように、あっさりと答えていた。

「不本意かしら?」

「ああ、惨めな気分だね。全力の決闘で、手心を加えられたってんだから」

「は? 負け犬が何自惚れてんの? 別にあんたが死ぬ分には勝手だから、あとで自殺でもすれば?」

「……お前、鬼か?」

「やかましい」

バツサリと切り捨てるように、霊夢は言った。

「決闘に全てを賭けて、全てを失う覚悟を持った奴が人間の中にどれだけいると思ってるの?」

普通の人間は、平穩の中で失う為ではなく、生み出す為に必死に生きていくのよ。勝負に賭ける為に積み上げてきたものじゃない。そんなことは、死ぬことを決めたあんた達だけでやればいい」

萃香を含めた鬼全体に対して、痛いほど容赦のない理論だった。

あるいは、人が鬼と離別したこの新しい時代に生きる者の代弁でもあったのかもしれない。

少なくとも萃香にはそう聞こえ、そして何一つ反論の出来ないものだった。

これまでのように強者の傲慢で返すことは出来る。

しかし、それをするには遅すぎた。

自分は、既に敗者なのだ。

未だ言葉にはしていなかったが、萃香はそれを理解していた。

「私の仕事は妖怪を滅ぼすことじゃない。

この幻想郷の理に従わない者を、幻想郷の理に従って『退治』することよ」

霊夢は、萃香だけではなく周囲の者達全てに聞かせるように、確固たる意志で断言した。

「……なるほど。だけど、実際の問題として、わたしをどうする？ 幻想郷そのものを壊そうとまでしたわたし達——鬼を生かしたまま、この異変が落着くと思ってるのかい？」

萃香の問い掛けは、全く現実的な問題を示していた。

未だに周囲の者達は、静かに二人のやりとりを見守っている。

しかし、人妖様々な者達の心境が如何なるものかは分からない。

鬼の襲撃に傷ついた者もいれば、家族を危険に晒された者もいる。眼に映らない所で、もつと直接的な被害も出ているかもしれない。

例えば実質的な被害が最小限に抑えられたとしても、鬼の恐ろしさは今回の出来事で広く伝わり、天狗などのあらかじめ知る者達はその恐怖を思い出した。

ケジメというものがある。

博麗の巫女としての権限を振りかざした命令や指示だけではなく、周囲を納得させるだけの何らかの行動が必要だった。

「——紫、他の鬼ってどうなったの？」

霊夢は、おもむろに尋ねた。

それまでずっと、微笑みながら状況を見定めていた紫は、突然向けられた質問にも動じることなく、黙って片手を持ち上げた。

それに応じるように、空中に複数のスキマが開いた。

異空間の中から落ちてきたのは、鬼達である。

近くにいた人々は思わず悲鳴を上げかけたが、当の鬼達は退魔の札で両手を枷のように封じられ、無力化されていた。

思うように身動きが出来ず、尻から地面に落下して呻く鬼の傍に、

今度は八雲藍がふわりと着地する。

それを追うように、最後にスキマから現れたのは魔理沙だった。

「おおつ、すげえ。本当に人里だ。お前もスキマが使えるんだな」

「式神として能力使用を許可されている時のみ、限定的に使えるものだ。光栄に思うがいい。本来ならば、人間程度には紫様の能力を拝むことすら許されないのだからな」

藍と魔理沙の二人を見て、紫は楽しそうに笑った。

自身の式が命令を完遂したことは知っていたが、その過程でこんな意外な組み合わせが出来上がっているとは思わなかった。

お世辞にも好意的とは言えないが、二人の間には対等な会話が成立している。

「あら、面白い組み合わせね」

「申し訳ありません、紫様。鬼の討伐に有効に活用出来ると判断し、この人間の同行を許可しました」

「いいのよ。私の意表を突くなんて、楽しいじゃない。

生真面目な藍に仕事を任せただのに、鬼の生き残りが出るなんて不思議だったけど、これで理由が分かったわ。貴女のおかげね、魔理沙」
「あ……ああ、こいつに任せてたら問答無用で殺そうとするからな。わたしが勝負で負かして、大人しくさせたよ」

「鬼相手に大したものだね。見直したわ」

紫からの素直な称賛に、魔理沙は気恥ずかしそうに帽子のツバを下げた。

傍らの藍は表情には出さず、紫にだけ分かる不満の意を表していたが、当然のように文句を口には出さない。

一方の鬼達は、倒れた萃香の姿を見て、状況を理解していた。

——自分達は、負けたのだ。

最後に残っていた反抗の意思が、それで消えていった。

「紫、そいつらを自由にしてやって」

眼に見えて戦意喪失した鬼達は、もはや脅威にはならない。

それでも霊夢の判断は危険なものだった。

しかし、当人は何処吹く風で萃香に歩み寄り、あっさりと額に刺

さった封魔の針を抜いてしまった。

萃香が起き上がると同時に周囲から上がるどよめきの中、紫は軽く肩を竦めて、やはりあっさりど鬼達の封印を解除した。

自由になった鬼達は、それでも今更暴れることなどなく、弱々しい足取りで萃香の元へ集まっていくな。

「よお、お前ら。生きてたか」

「か……頭ア。でも、他の奴ら……皆死んじましたよ」

「岩蔵も、力王も、あの翁まで……皆、先に逝っちまいました……っ」

百いた鬼の生き残りは、萃香を含めても十人以下だった。

そして、残された者達も一世代の大勝負に負けた惨めな敗者である。

仲間の死と敗北の無念さに涙を流す鬼達を、萃香は優しく抱き締めてやった。

「……それで、どうするよ？」

此度の異変の首謀者と生き残り。

それらを囲む幻想郷の住人達。

目の前に佇む博麗の巫女。

周りを見回し、観念したかのように萃香は胡座をかいた。

どんな処罰も受け入れるつもりだった。

「紫、宴会場は無事だった？」

息を呑むほど緊迫した状況を無視するかのようにな、霊夢は気楽に尋ねた。

「鬼が派手に暴れたから、滅茶苦茶に荒れてるわ」

「料理の類は全滅でしょうけど、お酒なら無事な瓶もあるでしょ？」

「あるわね。それがどうしたの？」

「全部取り寄せて」

「ふーん……何をやる気かしら？」

「お酒を集めたら、やることは決まってるでしょ」

霊夢は、この場に居る者達全員に聞こえるように告げた。

「宴会よ」

霊夢のこの発言に、理解を示す者は少なかった。

誰もが呆気に取られたかのような表情を浮かべ、耳を疑っている。萃香でさえも例外ではない。

言葉を交わした紫が楽しそうな笑みを浮かべ、それに倣うように幽々子がクスクスと笑い声を洩らした。

そして、文は腕の中で先代が小さく微笑んでいることに気付いた。

「ど……どういふつもりなんだい？」

さすがに動揺を隠しきれずに、萃香は尋ねていた。

霊夢は自らの決断に対して、敵かでも固い意志を見せるわけでもなく、あつけらかなと笑って答えた。

「戦った後に残る濁った憎しみを、酒で追い出すのよ」

「な、何……？」

「言つたでしょう。私の仕事は、幻想郷の理に従わせること。」

異変が解決した後で、憎しみを引き摺ることも、断ち切ることも、あつてはならない。それが、幻想郷の新しい時代の理——」

「——」

「憎しみは、何も実らせないからね」

静まり返った周囲を、霊夢はぐるりと見回した。

「これが、博麗の巫女であるあたしの決定よ」

自らの答えの是非を問い掛けることなく、ただ断言した。

誰にも——周囲の者達や先代巫女の意見にも委ねることのない、博麗霊夢の下した決断だった。

反対の声は上がらなかった。

もちろん、各々の内心では肯定と反発が複雑に入り乱れ、葛藤していることは想像に難くない。

この場の空気が、反論を許さない方向へ流れていることも影響しているだろう。

しかし——。

「あの——！」

少なくとも、沈黙を破って上がった声は、霊夢の決定に反発するものではなかった。

声の主である一人の人間に、周囲の視線が集中した。

「……酒に関してなら、すぐに提供できますよ」

はたてと共にここへやって来た酒屋の主人である男は、緊張した面持ちで、それでもぎこちなく笑いながら提案した。

それを切欠に、他の者達もざわつき始める。

多くの者が、多くの意見を交わしていく。

しかし、とりあえずは——この場の状況を肯定する空気が漂い始めていた。

霊夢は、微笑みながら頷く紫を見て、嫌そうな顔をした。

霊夢は、微笑みながら頷く先代を見て、自らも頷き返した。

最後に、霊夢は萃香を見下ろした。

「胡散臭い幻想郷の管理者曰く『幻想郷は、全てを受け入れる』——らしいわよ」

「……そいつは、残酷な話だな」

「その残酷な話を、あんたは受け入れる気ある？」

霊夢の問い掛けに、萃香は苦笑した。

針を抜かれるまで全く動かせなかった自分の手を見つめ、敗北した周囲の仲間を見回す。

辺りは人妖達の騒ぎ声で満ちている。

自分達、鬼に向ける警戒や疑念は未だに感じる。

しかし、もう誰も恐れ戦いてはいない。

鬼に対する恐れは、既に過ぎ去ったのだ。

もはや、戦いの空気ではない。

萃香は勝負の決着を悟った。

「——『お前達』の、勝ちだ」

萃香は観念して、その言葉を口にした。



「大変！ 酷い怪我じゃないの!?!」

霊夢が周りに集まった紫やレミリア、それに萃香達と話している姿を遠い光景のように見つめていると、思わぬ声が聞こえた。

はたてだった。

何故か権と一緒に、私の所へ駆け寄ってくる。

あー……あ、そうか。

私、結構な重傷なんだった。

気をどつかにやっていたせいか、今の今ままで完全に忘れていた。

そして、思い出した途端急激に痛みがぶり返してきた。

……っというか、痛いし！

腕ッ、折れてるしッ!?

「文、あんた何アホみたいに支えてるだけなの!?!」

「いや、知らないわよ！ こいつが何も言わないからでしょ!」

口論を始めるはたてと文を尻目に、権が無言で私の傍までやって来た。

手馴れた様子で私の傷の具合を確かめていく。

「ここは痛むか?」

「ああ……っ」

「死にはしない」

権は冷静に断言してくれた。

それから有無を言わず、手当てを施してくれる。

やべえ、超頼もしい。

何故か口調も以前のような敬語ではなく、私に対して親身なものになってるし、男前が大幅アップですわ。

私はもう、されるがまま、権に身を任せることにした。

——っというか、治療されてようやく気付いたけど、もしかしながらも私の身を案じて駆け寄ってくれたのかな。

いつの間にかはたてと文も口論をやめて、私の方を伺っている。

はたては分かりやすく心配そうな表情を浮かべてくれてるが、文の不機嫌そうな顔もひよつとしてそれに近いものなのかな?

いいや。都合のいいように受け取っちゃおう。

過去の確執から、天狗には全体的に嫌われてると思っていたが、案外そうでもないのかもしれない。

少なくとも、以前快気祝いもくれたこの三人からは、それなりに気

を掛けてもらっているようだ。

それが何故か、たまらなく嬉しかった。

「あ、あのー……棍？ 傷、大丈夫だよね？」

「別に腕の神経まで破壊されたわけではありません」

不安そうなのはたての問いに、棍は暗に『足の時よりはマシな傷』と答えた。

「それに、例えば片腕が使えなくなっても——まあ、それだけだ。大したことじゃない。手が一本あれば剣も拳も握れる」

言葉の後半は、私に向けたものだった。

牙を見せるように口の端を吊り上げた笑みは、凶暴さと力強さが伝わってくるようだった。

私を見つめる瞳が『少なくとも、自分だったらそうする』と語っていた。

なんなんスカ、棍さん……。

マジ、かけえツス！

言われたとおり、腕の傷なんて全然大したことじゃないようにさえ思えてしまう。

気を取られている内に、治療も完了していた。

折れた腕を布で体に縛りつけるようにして固定した、応急処置以上のものではなかったが、痛みは随分と和らいている。

満足に治療道具もないのに、ここまで完璧な処置をするとは、さすが棍だ。

「早急に、ちゃんとした治療を受けた方がいい」

「ああ。だが、少しここに残りたい」

「まさか、宴会に参加するつもりですか？」

私の考えを鋭く察して、文がため息混じりに呟いた。

完全に呆れられてるね。

でも、ごめん。

心配してくれてすごく嬉しいんだけど、このわがままだけは大目に見て欲しいんだ。

周囲を見回すと、傍観していた人達の輪が徐々に縮まり、酒が運び

込まれて、宴会の準備が進み始めている。

「……酒を一杯だけ、飲みたいんだ」

「死にますよ」

「大丈夫」

私が笑って答えると、文は肩を竦めて、それ以上何も言わなくなつた。

……さすがに、愛想尽かされたかな？

「あ……あのねっ！」

それまで黙り込んでいたはたてが急に大声を上げたので、私は驚いてそつちを見た。

「そのっ、用事……済んだら！ ちゃんとお医者さん行かなきゃ駄目よ!?! だ、駄目だかんね！ 絶対ッ！」

「ああ」

「酷い怪我なんだから！ か、顔に……傷とか、残っちゃったら、どう……っ！ ううっ……」

な、泣いてしまった……。

何やら感極まってしまったらしく、嗚咽を洩らし始めたはたてをどうすればいいかわからず、文と椀に視線を送る。

あっ、嗚咽が嘔吐くような声に変わった。

今度はゲロを漏らしそうになってはたての背中を、椀が無言で撫でて、文はそれを見て呆れていた。

「…………ごめん」

「いや……」

やがて、落ち着いたはたてが改めて私の顔を見上げた。

「髪も、長くて綺麗だったのに」

萃香に半ばから食い千切られた私の髪のことだ。

以前は腰まで届く長さがあったのだが、今はもう肩の辺りまでしかない。

中途半端に残った部分のせいで、バランスも滅茶苦茶だ。

いずれ、切り揃えないといけないだろう。

私は、別に髪型なんて気にしないんだけどね。

何か思い入れがあつて伸ばしてたわけでもないし。

指摘されて、なんとなく髪を触っていると、おもむろにはたてが自分の髪を結ぶリボンの一つを解いた。

「後ろ向いて」

「え？」

「宴会に残るんなら、少しでも格好を整えなきゃね」

言われるままに後ろを向くと、髪を触られている感触がした。

バラバラだった髪を、さっきのリボンで一束に纏めてくれてるのか。

「そのリボン、あげるわ」

振り返ると、はたてが笑顔でそう言った。

「ありがとう」

精一杯の気持ちを含めて告げる。

リボンをくれたはたてだけじゃない、治療をしてくれた椀にも向けた感謝だ。

ホンマに、天狗の優しさは五臓六腑に染み渡るで！

心の中で感涙した私は、はたてと椀から視線を離して、自然と文の方を向いていた。

「……なんですか？」

いや、別に文にも何かして欲しいとか言つて欲しいとかじゃないのよ？

催促の視線つてわけじゃない。

ただ、なんとなくね。

……ホント、何でだろ？

「まあ、しかし——実際、大したものですね。あの伊吹萃香に勝つなんて」

「『勝ち』か……」

文の称賛に、私は言葉を濁した。

既に死体は消えてしまったが、萃香の倒れていた場所を見つめる。

あれは『勝ち』だったのだろうか？

少なくとも、私は萃香の死を望んでいたわけじゃない。

もちろん、手加減なんて出来るはずのないギリギリの真剣勝負だったのは確かだ。

最後の一撃は、無心で放った。

その後、萃香が生きていたのは単なる偶然以外の何ものでもない。あの時点で、私が萃香を殺していても不思議ではなかった。

だから、萃香が自ら命を絶ったとしても、結果に大した違いはなかっただろう。

しかし、結局萃香が死に、私が生き残った今、感じるのは虚しさだけだ。

何も勝ち誇れやしない。

勇儀の時とは違う。

私の手には、何も残らなかった。

これが本当に私の『勝ち』だったのか――。

「勝ちですよ。貴女の勝ちです、誰が何と言おうと」

まるで私の苦悩を見透かしたかのような文の発言に驚く。

「御見事です。本当に、強くなりましたね」

初めて見るような穏やかな笑みを浮かべて、文はそう言ってくれた。

私は、この言葉を覚えている。

ずっと昔にも、同じように言ってくれた。

あの時感じた喜びが、今、胸の内に蘇っていた。

そうか。

文は、認めてくれるのか。

文は勝ったことを褒めてくれるのか。

じゃあ、いいかあ――。

「そろそろ、宴会の準備が整うようです」

今更になつて勝利の実感を噛み締めていた私は、椀に促されて、騒ぎの中心に眼を向けた。

広場の中央に、多くの人妖が集まっている。

人間と妖怪が――。

果ては、つい先ほどまで争っていた敵と味方が、皆一様に酒を注ぎ

合い、一つの場所に集まっているのだ。

もちろん、彼らや彼女達の心の中には、穏やかではないものも多く残っているだろう。

いきなり和気藹々とはいかない。

それは博麗神社でやっていた宴会と同じだ。

だけど、あの時よりもずっと大きくて、ずっと多くのものが、この場所には在る。

ここに、集まっている。

「凄い光景だな……」

私は、誰にともなく眩いていた。

その光景の中心にいるのは、霊夢だった。

傍には勝負をしたはずの萃香がいる。

私の傍にはいない萃香が、霊夢の傍には残っている。

そのどちらが正しいと言うつもりはない。

だけど、あの子は私に出来なかったことをやったんだな。そうか。

この光景は、あの子が作ったのか。

へへっ、霊夢が言ったあの台詞。

実は受け売りだって知ったら、どんな顔するかな？

呆れたような顔をするかな？

だけど、いい言葉だろう。

私は、その言葉のおかげで真っ直ぐに生きてこれたんだ。

だから、自分の子供にも教えたんだ。

私の教えたことを、ちゃんと覚えていってくれたんだな。

それを糧に、ちゃんと成長してくれてたんだな。

親らしいこと、何にもしてやれてないって思ってたのに。

子供ってのは、大きくなっていくもんなんだなあ。

人里に来る前に文に言われたことが、何故か急に思い出された。

……なんだか妙に、視界がぼやけてきた。

変だな、眼と鼻の奥が熱い。

折れた腕が痛みで疼くのは、また違った熱さだ。

胸が苦しいな。

これも、怪我のせいじゃない。

体の痛みなんて、これに比べたら全然感じない。

この気持ちはなんなんだろう？

感動か。

寂しさか。

上手く言えない。

上手く言えないけど、一つだけ……。

——霊夢。お前は、私の誇りだ。



「凄い光景だな……」

「そうですね」

相槌を打ちながら、文はそつと先代の顔を見上げた。

声から感じた僅かな震えの通り、彼女は涙を流していた。

まるで自分でも泣いていることに気付いていないかのように、静かに涙を流していたのだ。

初めて見る先代巫女の涙に、しかし文は特別驚くこともなかった。新聞記者としての本分を忘れて、好奇の視線を向けることもなかった。

黙って文は視線を先代と同じ方向へ戻した。

集まった者達に、酒が行き渡つたらしい。

宴会が始まろうとしている。

その中心にいるのは、博麗霊夢だ。

「お前は、私の誇りだ……」

先代は、文にだけ聞こえるような小さな声で呟いた。

誰に向けたものでもなかった。

視線は変わらず、ぼんやりと騒ぎの中心を見つめている。

あるいは、声に出して言ったものだと言わなかったかもしれない。

しかし、文にはその視線の先に誰を見ているのか分かっていった。

「その言葉は、本人に直接言つてあげるといいでしょう」

文は言った。

「親に褒められて、嬉しくない子供なんていませんよ」

そうして、背中をそつと押してやった。



周りでは、いつの間にか集まった大勢の人や妖怪が、互いの盃に酒を注ぎ合っている。

気心の知れた者同士もいれば、ぎこちなく様子を伺いながら酒瓶を傾ける者もいる。

一際目立つ巨体の天魔が、代表して鬼達に盃を渡していった。

鬼達は、戸惑いながらもそれを受け取っている。

未だに、この状況への混乱が残っている様子だった。

しかし、それは大なり小なり誰もが同じである。

自分達が、何故こうして一同に会して酒の席を囲んでいるのか、冷静に考えれば疑問に思うことばかりだ。

多くの者が、促されるままに酒を受け取っているに過ぎない。

その疑問を笑つて無視する者達もいた。

不遜な笑みを浮かべたレミアアが、萃香と面と向かつて何かを話している。

とても友好的とは思えない態度だったが、同時に気心の知れた者同士がじゃれ合っているような気安さも感じられる光景だった。

チルノが物怖じせず、大柄な鬼に対して何かを喚き、それを慧音達が諫めていた。

そんな喧騒を、離れた位置で眺める者もいる。

恐る恐る差し出されたコップを、幽香は片腕で受け取っていた。

その視線が誰を見て、何を思っているのかは分からない。

とりあえず、不機嫌そうな表情ではなかった。

——人里の中心で、唐突に始まった宴会。

——その最中で、事の張本人である霊夢は一人、辺りを見回していた。

何処からか渡された一杯の酒と、更に空いた手にもう一杯の酒を持ってている。

まだ、誰も酒に口をつけていない。

誰かが宴会の挨拶や、乾杯の音頭をとるわけでもないだろうに、示し合わせたかの如く、何かを待っているのだ。

ゆっくりと探るように視線を動かしていた霊夢は、自分に歩み寄ってくる人物に眼を留めた。

眼が合った。

服は破れて汚れていて、顔には酷い傷痕が刻まれていて、髪までロボロボで短くなった姿だったが、霊夢は一目で誰なのか分かった。

「母さん——」

母親の体を案じるよりも、喜びの方が勝っていた。

無理をさせているのは分かっている。

だけど、目の前の母も嬉しそうに笑っているから。

母は、無事な方の手を差し出した。

「酒を」

「うん」

「戦った後は、憎しみを追い出さないと」

「一口だけよ。傷に障るわ」

「無粋なこと言うな」

「無粋で結構」

かつて子供だった頃を真似るように、霊夢は伸ばされた手から、持っていたコップを遠ざけた。

「一口だけよ」

「……分かった。一口でお終いだ」

「よろしい」

霊夢は改めて酒を手渡した。

それで、宴会の最後の準備が完了した。

既に、周りの参加者達は全員が酒を片手に持っている。

靈夢は母と共に、確かめるように辺りを一度見回した。
それから、二人で向き合った。

「一緒に酒を飲むのは初めてだな」

「ずっと、楽しみにしてたわ」

わざわざ、昔のことを言葉にして説明する必要はなかった。

靈夢は酒も入っていないのに赤い顔で、照れたように小さく笑う母の次の言葉を待った。

「——一人前になったな、靈夢」

につこりと笑った靈夢は、盃を掲げて、この宴会で最初の酒を母と飲み交わした。



宴は始まった。

おそらく夜明けまでの、束の間の短い時間。

料理もなく、ただ盃だけを片手に。

集った者達は、戦いで傷つき、服装も汚れてボロボロで、人里の住人など深夜のせいか寝巻きの者もいる。

騒ぎに誘われて新たにこの場へやって来た者もいれば、去った者もいる。

人間も妖怪も入り混じって、各々が思うところを抱え、複雑な気持ちで——。

しかし、集まっている。

この月の下、一つの場所に集っている。

宴は、始まった。

其の三十八 「幻想郷」

『萃まる夢、幻、そして百鬼夜行』

先代巫女が禁じられた地底世界で成し遂げた『鬼退治』に関しては、記憶にも新しい。

その先代巫女が向かった地底から、今度は鬼が地上の方へとやって来た。（鬼の恐ろしさは本紙のバックナンバーを参照して欲しい）

しかも、その目的は現在幻想郷で適応されている『スペルカード・ルール』を完全に無視した、直接的侵攻だったのだ。

百の鬼が集団となって襲い掛かる緊急事態に、博麗の巫女だけではなく、現役を退いた先代巫女、更には幻想郷の管理者である八雲紫本人を含んだ多くの妖怪が総出で迎え撃つこととなった。

この前代未聞の大異変を解決するべく動き出した先代巫女に、本紙も取材の為、勇気を持って危険な現場へと同行した。

そこで待っていたのは、鬼の首魁である『伊吹萃香』と博麗の巫女との壮絶な決闘であった。

凄まじい戦いの末に勝利を収めたのは博麗の巫女。（詳細は後述の記事を参照のこと）

その後、見事伊吹萃香を弾幕ごっこによって降した当代博麗の巫女である『博麗霊夢』によって、生き残った鬼と地上との間に和解案が提示された。

鬼と人妖を交えた大宴会が、人里にて開催されたのである。

たった一晚の夢のような宴は、様々な様相を見せながら夜明けまで続けられた。

今回の本紙の記事は全て、それら当時の様子を詳細に記したものである――。

◆ — 『文々。新聞』より一部抜粋。

魔理沙は深呼吸を一つして、覚悟を決めた。
周りは多くの喧騒に満ちている。

知っている者もいれば、知らない者もいる。

しかし、今の魔理沙の眼に留まっているのは一人だけだった。

霊夢がいる。

この宴会を始めた張本人は、喧騒から一人外れるように、龍神像に背をもたれて飲んでいた。

人間と妖怪が集う幻想郷の縮図のような光景を見守っている、と。そう考えるのは、さすがに持ち上げすぎだろうか？

今から、その霊夢の目の前まで歩み寄って、何気ない風を装って『よっ』とでも声を掛ける――。

それだけのことが、なんだか妙に緊張してしまっていた。

――そうだ、緊張することなんてないし、気まずく思う必要もない。

――何故なら、わたしは鬼だって倒した女だからだ。

――これは、その辺の人間にはちよつと出来ないことだぜ。

――だから、胸を張って会えばいい。

何故『だから』なのか、魔理沙の思考は繋がっていないが、疑問に思うことはなかった。

霊夢に近づくにつれて、逸る気持ちだけが心を占めていく。

不思議だった。

あれだけ躊躇っていたのに、早く霊夢と話がしたくて仕方がなくなっていた。

「よっ」

魔理沙は酒の入ったコップを片手に、気軽な気持ちで霊夢に声を掛けた。

「派手にやったみたいだな」

「あんたもね、魔理沙。まさか、鬼と勝負して勝つなんて思わなかったわ」

「ふふん、見直したか？」

「うん、かなり」

「わたしを、弱っちい奴だと思っていたな？」

「思ってた」

「だけど、今は見直したな？」

「見直したわ」

「いいぜ、許してやる」

「いや、何をよ？」

　霊夢の問いには答えず、魔理沙は自分の中だけで完結した満足感を味わっていた。

「お前も、凄いことをやったじゃないか」

「それが仕事だからね」

「仕事か……じゃあ、楽しくなかったか？」

「楽しい？」

「弾幕ごっこがさ。仕事なのに楽しむなんて不謹慎、なんて考えるほど真面目じゃないだろ？」

「何が言いたいのか？」

「だから、あの伊吹萃香って鬼との弾幕ごっこは、楽しかったのかって話だよ」

　霊夢は、何故魔理沙がそんなことを気にするのか分からなかった。分からなかったが、霊夢は素直に答えた。

「まあ、緊張感があったわ。ちよっと、楽しかったわね」

「……そうか。『ちよっと』か」

「なんで嬉しそうなの？」

「うん。いやな、『ちよっと』よりも『結構』の方が楽しさは上だよなあって思ってた」

「？」

「わたしの勝ちだぜ」

「何がよ？」

「ごつちの話さ」

　意味が理解出来ず、訝しげな霊夢の肩を気安く叩いて、魔理沙は笑顔で去っていった。

　何かに満足したのは分かったが、何をしに来たのかが分からない。

　魔理沙はそのまま、意気揚々とした足取りでレミリア達の所へと

行ってしまった。

初めて他人のペースに巻き込まれた戸惑いを感じながら、霊夢はその背中を見つめていた。



「あつれえ、魔理沙じゃない！ 飲んでるう〜!?」

「……出来上がってるなあ、おい」

盃を片手に、陽気に笑い掛ける美鈴を見て、魔理沙は苦笑を浮かべた。

普段から明るい性格だとは思っていたが、この浮かれ具合はハッキリ言って異常だ。

酔いが人格を破壊する典型的な例を見た魔理沙は、同じように苦笑を浮かべて美鈴を見守る咲夜達に歩み寄った。

「あいつって、お酒弱かったのか？」

「いいえ。ただ単に飲みすぎただけよ」

「節度を持った、真面目な門番だと思ってたんだけどな。自制も効かないくらい飲む理由あったか？ まさか、お嬢様が無理矢理飲ませたんじゃないよな？」

「人聞きの悪いこと言うんじゃないわよ」

咲夜に代わって、レミリアが答えた。

周りが日本酒を飲む中、一人、博麗神社から取り寄せたワインをグラス片手に飲んでいる。

優雅に立ち飲む姿が、まるで貴族のパーティーにでも出席した令嬢のように様になっていたが、この場ではただ単に浮いているだけだった。

「何か良いことがあったみたいだね。お酒が入る前から妙に浮かれっぱなしだったわ」

「大方、先代絡みでしょうけどね」

咲夜とレミリアの説明に、魔理沙は改めて美鈴を見た。

今度はパチユリーに笑顔で絡んでいる。

当のパチュリーは、一応の付き合いとして酒の入ったグラスを持っているが、やはりそれほど飲んではいない。

ほとんど素面の状態で、美鈴の酒臭い息に顔を顰めていた。

上手く標的から外れた小悪魔が、ニヤニヤと二人のやりとりを眺めている。

「両手とか、傷だらけだったんですけどね」

「自分でも納得がいくくらい健闘出来たんでしょ」

心配そうな咲夜に、レミリアは気楽に言った。

確かに、よく見れば美鈴は体の至る所に擦り傷や痣を作り、特に両手は指先まで包帯が巻かれていた。

咲夜が施したものだろう。

包帯には血が滲み、指の形が歪んでいるのか盃の持ち方も何処かぎこちない。

咲夜が心配するほどの傷だったのだ。

しかし、当の本人は傷の痛みなど、どうでもいいことのように陽気に笑っている。

「……分かるぜ」

魔理沙は微笑みながら、自身の右の耳に触れた。

布が当てられ、包帯で固定されている。

こちらは藍が施してくれた治療だった。

優しさなど欠片もない手つきだったが、正確で早かった。

「負傷したの、魔理沙？」

「ああ、名誉の負傷さ」

案じる咲夜に、魔理沙は笑顔で答えた。

「多分、美鈴と同じだよ」

「……そう。なら、良かったわね」

「ああ」

「今度、お茶でも飲みながら、話を聞かせてね」

「もちろんさ。遊びにいくぜ」

「ええ、待ってるわ」

「咲夜」

「何？」

「ありがとう」

「どういたしまして」

魔理沙と咲夜は顔を合わせ、自然と笑い合った。

神社で振り切るように別れた時のぎこちなさは、もう無い。

今回の異変では、たくさんの痛い目を見てきたが、代わりに心に抱えていた多くの問題が解決した。

その点に関しては、むしろ感謝すらしている。

魔理沙には、異変解決後の宴会で一際浮かれる美鈴の気持ちが良く分かるのだった。

「……なんか、妙に蚊帳の外ね」

友情を確かめ合う二人を眺めながら、レミリアは慥然とした表情で呟くしかなかった。

視線を移せば、パチュリーにキスをしようとした美鈴が、その赤い顔を何処からともなく取り出した分厚い魔道書の角で殴られている。

呆れながらも自然と笑顔が浮かび、レミリアは再び視線を移した。

紅魔館のメンバーの中で、唯一フレンドールだけが、この場を離れている。

彼女の向かった先は、もちろん分かっていた。



「うー、変な味……」

「あんたにお酒は百年早いわ！ これでも飲んでるのね！」

「わたしだってワインなら飲めるもん！ ……これオイシイ！」

チルノから渡されたジュースを飲んだフレンドールは、一変して顔を輝かせた。

ジュースと言っても、りんごを摩り卸しただけの果汁である。

しかし、お子様二人の舌には合ったらしい。

子供らしい笑顔のフレンドールと、何故か自信満々なチルノの二人を微笑ましげに眺めながら、妹紅がそっと飲みかけの盃を受け取っ

た。

先代が一口だけ飲んだ物をフランドールが片付けようとして、結局飲めなかった物である。

「やはり、私が飲もう」

「駄目だよ、師匠。本当なら、水じゃなくて薬を飲んでもらいたいくらいだ」

妹紅は目の前の先代に言った。

包帯や傷痕が痛々しいが、それに関する心配は妹紅を含めて一通りの知人がしている。

本音を言えば、すぐにでも永遠亭辺りに駆け込んで欲しかったが、本人の希望を叶えているのだ。

もちろん、この場に先代が居て、嬉しくないわけでは決してない。

容態が比較的軽いこともあり、とりあえず心配を棚に上げて、妹紅は素直に宴会を楽しんでいた。

「その水を飲み終えたら、もういい加減に医者に行つてよ？ あんなに激しい戦いだっただんだから」

「見ていたのか？」

「もちろん。私は、弟子だからね」

妹紅とその周りに集まった者達は、先代と萃香の死闘を最後まで見届けた数少ない目撃者の一部だった。

他にもつい先ほどまで、戦った先代の身を案じ、また同時に博麗の巫女としての務めを果たしてくれたことに感謝をする為に、人里の住人が何人か会いにやって来ていた。

いずれも、現役時代から先代を知る、今は年老いた者達だった。激動の時代を先代巫女と共に生きた住人達。

彼らは、老体を労わる家族に連れられて、今は宴会の席から退出している。

一角の人間として家庭を築き、今日まで生きてこれたことを彼らは先代に感謝していた。

先代の博麗の巫女に対する信奉は、彼らの代で途絶えるだろう。代わりに、博麗霊夢が新たな博麗の巫女として、今夜認められたの

だ。

めでたいことである。

しかし、妹紅はそれを祝う気持ちと同じくらい、今夜の先代の戦いを忘れまいとする気持ちを抱いていた。

古い時代と共に去る者の感謝と、これから来る新しい時代と共に生きる者の感謝——両立出来るのは、きっと素晴らしいことだ。

妹紅は、自分が蓬萊人であったことに初めて感謝した。

「特に最後の一撃、凄かったよね。霧になった鬼の体を打ち抜いてた」
「妹紅も、いずれ出来るようになるさ」

「本当?」

「極めれば、ね。あれって『穿心』でしょ?」

横合いから口を出しながら、てるが妹紅の持っていた盃をひよいと奪い取った。

一口飲んで、ぷはーつと酒臭い息を吐く。

見た目は少女そのものだが、妙に貫禄のある仕草だった。

「分かるのか、てる!」

「うむ。あの時、先代が使った技は——」

「いや、解説はいい」

「ええっ、詳しく説明してやろうと思ったのに」

「お前、たまにでたらめ言うだろ。今のも、適当な嘘で解説しようとしたな?」

「うん。嘘ウサ」

てるは悪びれもせず、笑顔で舌を出した。

「てるは、ここに残っていていいの?」

宴会に参加していない永遠亭の者達を指して、妹紅が訊いた。

「いいんじゃない? 別に身内ってわけじゃないし。実は出身地からして繋がらないんだよね」

「冷たい奴だな。輝夜達の仲間じゃないのか?」

「仲間意識がないわけじゃないんだけどね。それは妹紅達も同じだし
や」

「へえ、じゃあお前は輝夜達よりも私達と一緒に居ることを選んだわ

「けだ？」

「うん。お前ら好きだしね」

「顔が赤くなってるねえ」

「なつてない。嘘を言うな」

「あれっ、妹紅まさか……泣いてる!？」

「な、泣いてない! からかうな!」

「ごめんね、あたしや嘔吐けない性格だからさ」

「嘔吐け!」

妹紅とてゐのやりとりを笑顔で眺めていた先代は、チラリと視線を移した。

先ほどから、視界の片隅にずっと気になっている物が映っている。

背中を向けて蹲った慧音だった。

両手で必死に頭を隠しているが、指の間からはみ出た角と、何よりも尻から伸びる尻尾が全く隠せていない。

しかし、本人が真剣であることは痛いほど伝わってきたので、声を掛けられないのだった。

「……先生さあ」

「よせ、私に話しかけるな!」

「本気で隠れるつもりなら、歴史を食べるくらいししようや」

妹紅をからかうのを止めたてゐが、いい加減呆れたような口調で告げた。

「何故、隠れる必要があるんだ?」

先代が尋ねたが、慧音は背中を向けたまま答えなかった。

代わりに、ジュースを飲み終えたチルノとフランドールが抱きつくように寄ってくる。

「けーねはね、お師匠に今の格好を見られたくないんだって!」

「そういうえば、けーね先生、前に見た時と姿が違うね。どうして?」

「けーねは、満月になると変身して強くなるのよ!」

「スゴイ! わたし達、吸血鬼みたい!」

「それにカツコいいしね!」

「うんっ！ その角、カッコいい！」

「何で隠すの？」

「そうだよ、隠さなくていいよー！」

二人の純粹無垢な言葉と視線が突き刺さり、慧音は肩を震わせた。

「——だつてさ」

「本当に気にしなくていいと思うよ、慧音」

「……しかし、なあ」

てると妹紅にも促され、慧音が肩越しに恐る恐る振り返る。

自分を見下ろす先代と眼が合い、顔を真っ赤にして再び俯いてしまった。

「何故、眼を逸らすんだ？ 慧音」

「は、恥ずかしいからです！ 貴女には、この異形の姿を見せたくなかった……」

「半人半獣であることも、満月の日に変身することも、慧音自身から話してもらっている」

「語るごとと、見せることは違うのです。こんな、醜い……」

「そんなことはないさ」

徐々に意気消沈して、声の小さくなっていく慧音の肩を掴み、先代は少し強引に振り向かせた。

「慧音は、今も美しい」

先代は真剣な表情で断言した。

振り返った先に、尊敬する人物の凜とした顔付きと真っ直ぐな視線があり、その上で囁くように告げられた言葉である。

言われた内容を理解するのに、しばらくの時間を要したが、やがて慧音は止まっていた思考の再開と同時に顔を真っ赤に紅潮させた。

口をパクパクとさせて、声にならぬ声を出そうと必死になっている。

単純な喜びでも、羞恥でもない。

感極まった表情だった。

「あ……ありがとうございます」

やがて慧音は、かろうじてそう応えた。

表情も落ち着いている。

だらしなく緩みきった笑顔である。

「……妹紅殿」

「何じゃ、てる殿」

「お主の友人。あれは真性にござるか？」

「分からぬ。常日頃から、師匠に対する尊敬の念は並々ならぬものと伺っておったが」

「同性愛は非生産的でござる。寺子屋の教師としても、道徳的に如何なるものかと」

「……お前んとこの薬師に頼んで、性転換する薬とか調合してもらえないかな？」

「男性器生やす薬は見たことあるけど」

「マジで？　じゃあ、問題解決じゃない」

「いや、新たな問題としてどっちが飲むか——」

「コラ、そこお!!」

慧音はてると妹紅の胸倉を掴み上げると、強烈な頭突きを一発ずつ叩き込んだ。

ハクタク化した身体能力は伊達ではなく、凄まじい音が二人の頭蓋骨から鳴り響いた。

「子供もいるんだぞ、冗談にしても自重しろ！」

慧音は叱りつけたが、既にてると妹紅は気絶していた。

冗談と言いながらも、顔は赤いままである。

加えて、二人の囁くような話し声が聞こえたのは、変身によって五感の鋭敏化した慧音だけであり、チルノとフランドールは不思議そうな表情で一連の出来事を眺めているだけだった。

ぐったりとしたてると妹紅を放り捨てると、慧音は咳払い一つを挟んで、改めて先代と向かい合った。

当然、彼女も二人のやりとりは聞こえていない。

もし、聞こえていた上でそんな反応を見せれば、自分は自殺していただろう、と慧音は密かに安堵していた。

「とにかく、ありがとうございます。私はもう二度と、この姿を恥じる

「ことはしません」

「ああ」

「それよりも、先代。そろそろ、体を休めた方が良いでしょう」

「分かっている。後で、紫に永遠亭まで送ってもらおうつもりだ」

「まだ何か用事が？」

「ああ、一つだけ」

答えて、先代は視線を移した。

その先を辿った慧音が、驚いたような表情を浮かべる。

「では、行ってくる。また明日、人里で会おう」

「——お気をつけて」

立ち去る先代を、慧音は案じるように見送った。

先代の向かった先には、風見幽香がいた。



幽香は、空になったグラスを片手で玩んでいた。

酒は飲み終えた。

周りの喧騒に馴染むつもりはないし、人間とも妖怪とも馴れ合う気はない。

——なのに、何故自分はここに残っているのか？

答えの出ない自問をしながら、しかし一つだけ断言した。

それは決して——たった今自分の所へノコノコと歩み寄ってくる間抜けを待っていたわけではない、ということだ。

空のグラスに視線を落としながら、その表面に屈折して映る先代の姿を、幽香は見て見ぬ振りをしていた。

「幽香」

先代の呼びかけに、さも今気付いたといった調子で幽香が顔を上げる。

「腕は大丈夫か？」

「お前に言われたくないわね」

幽香は鼻で笑った。

奇しくも、お互いに片腕を負傷している。

——もしも、ここで戦うなら条件は五分か。

ふと思い浮かんだそんな考えに、幽香は内心で呆れたように笑った。

別段、笑うほど悪い思いつきではない。

自分の最も優先すべき目的は、先代と戦って勝つことだからだ。

これまで散々はぐらかされてきたのだから、戦うチャンスがあるのなら、どんなタイミングでも歓迎する。

しかし、今はなんだか酷く未練がましい考えのように思えて仕方がなかった。

「勝ったわね」

幽香は自分で話題を逸らせるように、伊吹萃香との戦いについて話した。

「見ていたのか」

「ええ。その後で、暇だったから娘の方の戦いも見たわ」

「どうだった？」

「別に、どうもしないわ。あの娘に興味は無いわね」

「そうか」

「何？ 自分の娘と私を争わせたいの？」

「いや……幽香は、今でも私と戦いたいと思っているのか？」

「当たり前よ」

今更何を言っているのか、と。幽香は無然とした表情で返した。

その決意は、今日に至るまで一度も萎えたことはない。

今でこそ、気分が乗らない状態だが、もしもそれが許される状況になったのなら喜んで受け入れるだろう。

スペルカード・ルールなど知ったことではない。

霊夢が覚悟と行動によって示した幻想郷の理は、唯一この花の妖怪にだけは通用しなかったのだ。

返答を受けて黙り込む先代の意図が分からず、幽香は訝しげな視線を向けたまま、次の言葉を待った。

「——分かった。なら、戦おう」

先代の口から飛び出した予想外の言葉に、幽香は眼を見開いた。

「……なんですって？」

一瞬、耳を疑った。

あれだけ自分の挑発をかわし、逃げ続けていた先代が『戦おう』と言ったのだ。

冗談——と疑うほど、幽香は目の前の人間を侮ってはいない。

何よりも、自分を見据える瞳にはよく知る光が宿っている。

揺ぎ無い意志の光だ。

「弾幕ごっこで、かしら？」

「違う。真剣勝負だ」

「伊吹萃香とやったような？」

「そうだ。萃香とやったような戦いだ」

「——」

「そういう戦いが望みだったんだらう？」

幽香は小さく唾を飲んだ。

「そうよ」

先代が本気であることを理解し、それがゆっくりと全身に行き渡った。

気付かぬ内に震える声で繰り返す。

「その通りよ」

何かが腹の奥から湧き上がってくる。

それが全身を細かく震わせている。

幽香は必死で堪えようとした。

しかし、押さえきれない衝動が口元に笑みとして表れ、持っていたグラスを粉々に握り潰していた。

「今、ごっこで？」

「さすがにそれは無理だ」

「でしょうね。ええ、それくらい分かっているわ」

口ではそう言いながら、自分が僅かな落胆を感じていることに気付いた幽香は、内心で恥じた。

先代に気づかれぬように、ゆっくりと浅く長い深呼吸を一つ挟

む。

なんとか心を落ち着けた幽香は、改めて先代を見据えた。

「心境が変わった切欠は、やはり娘のことかしら？」

半ば以上確信した予測を口にした。

「ああ。あの子は、もう一人前だ。今日、それを改めて実感した」

「だから、もう思い残すことなく死ぬるといわけかしらね」

「少し違う。今日、決めたことだが、私は霊夢が二十歳になったら波紋を止めようと思っている」

「何故、二十歳なの？」

「私自身の勝手なこだわりだ。あまり気にするな」

「ふうん……まあいいわ」

幽香は言われたとおり、全く気にしなかった。

そんなことは、本当はどうでもよかったのだ。

「つまり、その日に私と戦うということでもいいのね？」

「そうだ」

「波紋を止めた日から、貴女は徐々に老い衰えていく」

「そうだ」

「だから、その日こそが貴女にとって最盛期となる」

「そうだ」

幽香は、最後に確かめるように尋ねた。

「生涯で最高の力を振るえる日を、私との殺し合いに使うということね？」

「そうだ」

先代は一瞬の躊躇いもなく答えた。

幽香は『ふうん』と相槌を打った。

何かを考える振りをしながら、更に『そう』と相槌を打った。

その実、何も考えていなかった。

頭の中は真っ白だった。

ただ一つ、歓喜の色のみに染まっていた。

それを絶対に表に出さないように力を尽くしていた為、しばらくの間意味のない相槌と仕草を繰り返すだけだった。

やがて、幽香は先代の左の頬に彷徨わせていた視線を留めた。萃香に刻まれた深い傷が赤々と残っている。

僅かな思案の後、幽香はおもむろに能力を発動した。

「先代」

「なんだ？」

「傷に薬を塗ってあげるわ」

何も無い手のひらに薬草を生み出し、その葉を指で磨り潰す。

「絶対に動いちゃ駄目よ？」

「分かった」

先代の返答に満足そうに笑って、幽香は腕を伸ばした。

ゆっくりと抉り込むような手つきだった。

薬を塗るといふよりも、傷口に捻じ込むといった方が正しいような力の込めようである。

しかも、何度も指を捻るといった念の入りようだ。

幽香はそれを涼しげな微笑を浮かべたままやっていた。

当然、やられた方は拷問にも等しい激痛が走る。

しかし、先代は言われたとおりの表情すら動かさずに耐えていた。

傷口が開き、新しい血が流れ始めたところで幽香はその行為をやめた。

血のついた指を懐のハンカチで拭い、ついでとばかりに先代の頬の血も拭う。

「よく効く薬よ」

「ありがとう」

血で汚れたハンカチを仕舞う幽香に、先代は礼を言った。

「その日を――」

誰にも邪魔されない、先代との殺し合いが約束された日。

「楽しみに待っているわ」

「ああ」

「約束を破ったら殺すわよ？」

「破らない」

「その日までに、誰かに負けたらやっぱり殺すわ」

「私は、もう戦わない」

「何、寝惚けたこと言っているの？」

至極真面目な先代の返答に対して、幽香は可笑しそうに笑った。

「お前が戦わずに済むはずがないでしょう。」

予言してあげる。例え、娘が一人前になろうが、博麗の巫女を本格的に引退しようが——お前は戦い続けるわ。望まなくても、勝手にそういう機会がやって来る。そういう星の下に生まれたのよ、お前は」
冗談とも本気ともつかない口調で、幽香は言った。

「でも、もういいわ。お前が何処の有象無象と殺し合おうが、私はもう気にしない。」

ただ、そいつらを相手に勝ち続け、そして、一番最後に私の前に立っていいばい——」

幽香はそう言つて、先代の前から立ち去った。

去り際に残していったものは、眩暈がするほど美しい笑顔だった。



「あらっ？」

幽々子がそれに気付いたのは、なかなか進まない酒を三分の一ほども飲んだ時だった。

酒だけではなんとなく口が寂しい、と。辺りに視線を彷徨わせていた時である。

宴会の賑やかさの中で、先代巫女と風見幽香が向かい合って何やら話しているところを見かけた。

そこから逆に辿るように、傍らの紫へと視線を戻す。

案の定、紫はそんな二人を——正確には先代を——じっと見つめていた。

紫が、ずっと先代のことを気に掛けていたことは知っている。

それこそ、伊吹萃香との戦いが始まる前から彼女を見ていた。

戦いに勝利した後も、倒れそうになった先代を一番に支えたかったに違いない。

しかし、紫はそうしなかった。

あの時、幽々子は紫の心境を察して何も言わなかった。代わりに、全てが終わった今、幽々子は思い煩う親友に声を掛けることにした。

「――先代、ね」

「何？」

ポツリと呟いた言葉にすぐさま反応する紫を見て、幽々子は苦笑した。

「あの話が終わったら、お医者さんに連れて行った方がいいわ」

「ええ、分かってるわ」

「間違つて冥界に連れて行っちゃ駄目よ？」

「幽々子」

「冗談よ、睨まないで」

「あの時のことは、先代にも謝ったわ」

「じゃあ、また別のわだかまりがあるのかしら？」

「……ええ」

頷く紫の声は、何処か力がなかった。

「ずっと昔のね」

「そう」

「今更、思い出したわ」

「だったら、そのことについても話してきなさい」

「――」

「ゆっくり、ね。夜が明ければ、宴会の方は多分勝手にお開きになるわ」

「そうこう話す内に、二人の視界の先で先代の前から幽香が立ち去った。

残された先代は、それ以上誰かと話すこともなく、佇んでいる。

幽々子は視線で紫を促した。

「それじゃあ、先代を永遠亭に連れていくわ」

「頑張つてね」

意味ありげに笑って手を振る幽々子を、恨めしげに一睨みした後、

紫は先代の元へ近づいていった。

それを見送った後、一人残った幽々子は改めて辺りを見回した。

騒がしい夜だった。

そして、同じくらい愉快的な夜だった。

生の先に死はあつても、死の先には何も無いように、変化の無い冥界とは違つて現世は色んなことが起こる。

亡霊である自分にとって、様々な出来事が新鮮で楽しい。

不謹慎かもしれないが、親友である紫の悩みも、幽々子にとっては微笑ましく映るのだった。

異変も宴会も、一通り楽しんだ幽々子は、そろそろ帰ることを考え始め――。

「そういえば、妖夢っては何処にいるのかしら？」

ぼんやりと感じていた疑問を、今更になつて呟いた。



伊吹萃香を中心とした鬼達は、一塊となつて酒を飲んでいた。

やはり、そう簡単に周囲に馴染むことは出来ない。

幻想郷の住人達は、ほとんどの者達が鬼に対して遺恨を残している。

この宴会に感じる戸惑いという点では、異変の張本人である鬼達が最も大きかった。

自分達の命が繋がったことは分かる。

しかし、元より負けた後の保身を踏まえて、この異変を起こしたわけではない。

自分達が許されたことは分かる。

しかし、まだ受け入れられたわけではないのだ。

そもそも、自分自身が未だに受け入れられない。

酷く複雑な心境が、鬼達の顔にも表れていた。

淡々と盃を空けているのは、萃香と彼女の傍で酌をする鬼の面の少女だけである。

「——これで、良かったんですかね？ 頭」

注がれた酒をじっと見つめていた鬼の一人が、おもむろに呟いた。困むように座り込んだ鬼達は、いずれも大柄な者達だったが、肩を落としたその姿は萃香よりも小さく見える。

「何が？」

萃香は、あえて素っ気無く問い返した。

「いや、だって……俺達、酒飲んじまってるし」

「酒は飲むもんだろ」

「そうじゃねえっすよ、その……」

「ハッキリ言え、馬鹿」

「だって……その、仲間ア皆死んじまって……」

「納得づくで始めた喧嘩だろ？ 誰も後悔しちやいねえよ」

「……後悔してんのは、俺達じゃないですか。俺達、生き残っちゃまって……宴会で、酒まで飲んで」

「——」

「本当に、良かったんすか？ こんな終わり方で……」

いつの間にか、その鬼の言葉に、萃香を含めた仲間の誰もが耳を傾けていた。

今の状況を心の底から否定するわけでも、かといって肯定するわけでもない。

酷く戸惑いを含んだ、拙い話し方だった。

しかし、その様子も含めて、この場の全員の心境を代弁しているかのように響いていた。

——誰も後悔しない。

地底で異変を起こす算段を立てた時、鬼の誰もがそう思っていた。

幻想郷という新しい時代の舞台そのものを相手した、一世一代の大勝負には違いなかったが、その先に待つ勝利にも敗北にも決して後悔しないという決意があった。

勝てば、言うまでもない。

そして、負けたとしても、潔く死んでいこう。

古い時代からやって来た傍迷惑な鬼達は、見事退治されて御伽噺は

お終い。めでたし。

そのはずだった。

だから、こんな結果になった時にどうすればいいのか考えていなかった。

負けた時に死ぬ覚悟はあったのだ。

だけど、負けた時に生きる覚悟なんてしてこなかった。

「生き残っちまったもんは、しょうがねえだろ」

萃香は諦めたような笑みを浮かべた。

自分も、全力で戦った結果負けた。

己の半身は死に、その力も魂も、もう戻ってはこない。

そして、自分達を生かした霊夢の判断が、善意や好意によるものではないということも分かっていた。

彼女の判断に、感謝することなんて出来ない。

いっそ、全ての鬼の首を見せしめとして切り落としてくれた方が、誰もが一番収まりが良かったはずだ。

その結果、正当な報復は成され、鬼の討伐は完了する――。

少なくとも、生き残った自分達以外は、そうして鬼としての生を全うした。

「だけど……」

――何故、自分達だけが？

残された者は、そう思わずにはいられないのだった。

「じゃあ、ここにやっちなまえよ」

「やる、って……」

「その手に持つてるもんひっくり返して、トチ狂ったように喚きまくって、適当な人間でもぶつ殺すのさ。それで何も考えずに暴れまくれば、今度こそ博麗の巫女は容赦しない。きつちり『退治』してくれるよ」

萃香の言葉に、鬼は手に持った盃に視線を落とした。

間を置くほど、悩む必要はなかった。

「――無理っすよ。そんなこと、出来るわけないっす」

「ぶっつてっ」

「だって、もう決着はついちまつてるじゃないですか。

これがまだ決着のついてない勝負なら、どこまでも足掻きたい。見苦しくつたって、最期まで地面をのた打ち回ってやりますよ。

「だけど、俺アもう負けちまったから。金髪のね、若い小娘なんですよ。細っこい体して、すげえ肝の据わった奴で。力勝負じゃなかったけど、俺アあいつとの勝負で、もう心の底から『負けた』って思っちゃまったんですよ」

「そこできつちり首の一つでも獲ってくれりやよかつたのにな」

「そうなんすよ。俺の首なんて興味もねえって言って、生き恥晒さすなんて、本当ひでえや。

「……けど、だからこそ。もう、あの娘にこれ以上みつともない姿見せられないじゃないっすか。勝ち負けでは足掻いても、引き際だけは潔くいききたいじゃないっすか」

話している内に感極まったのか、声は震え、その無骨な顔には涙が流れていた。

悲しいからであり、悔しいからでもある。無念の涙だった。

他の鬼達も、涙こそ流していないが、皆一様に同じやるせない気持ちだった。

誰もが手に持った盃の中に視線を落とすまま、黙り込んでいた。

「だったら、呑み込むしかねえだろ」

萃香が言った。

堅い眼をしていた。

「自害も出来ねえってんなら、生きるしかねえ。地上に残っても、地底に帰ってもいい。いつか自分を退治する奴が現れるか、時間が磨り潰しに来るまで、待つしかねえよ」

「……気の遠くなる話っすね」

「しよおがねえよ、負けたんだからっ！」

ややくそのように笑って、萃香は景気よく盃を一気に煽った。

口元を拭い、空になった盃を見つめたまま、呟く。

「わたしは、地上に残るつもりだ」

全員が萃香を見つめた。

しかし、何も訊こうとはしなかった。

「お前らも、好きにしろ」

「……はい」

「……はい」

ぽつりと答えた。

そうして、鬼達の間にもまた沈黙があった。

空になった萃香の盃に、鬼の少女が黙って新しい酒を注ぐ。

今の心境でどう感じるかはともかく、旨い酒だった。

人里の酒屋が作ったらしい。

大切な商売道具だろうに、この唐突な宴会に惜しげもなく提供した。

萃香は頭の中と心の中に様々なものを浮かべながら、何も考えずにその酒を見つめていた。

「少なくとも、死んでいった奴らは、この酒を飲めない」

「……確かに旨い酒つすけど、慰めになるほどの理由じゃないっすね」
疲れたように相槌を返しながら、それでも鬼は小さく笑って酒を飲み干した。



——以上が、鬼の襲撃からその解決に至るまでの一連の出来事である。

この後の生き残った鬼達の動向は二通りに分かれる。

大部分は地底へと戻り、今後地上へと出ることを八雲紫本人から固く禁じられた。

しかし、僅かに生き残った鬼の中で更にごく一部の者達は地上に残ることを希望し、スペルカード・ルールの遵守を条件にそれを許されている。

扱いとしては他の妖怪と同等であり、また更に一部の鬼は他者の管理下にあるので安心して欲しい。もつとも、人間の皆さんは妖怪を警

戒して然るべきだが。

最後に、地上に残った鬼の所在地などを可能な限り詳細に明記しておく。

まず、伊吹萃香は博麗神社での滞在を希望し、博麗霊夢が監視を兼ね――。



初めて先代が訪れた時と比べれば、永遠亭の内装は随分と様変わりしていた。

外界との関わりを持ち始めた故にである。

医者が患者を診察する為の『診察室』としての形を整えた部屋で、先代と永琳は向かい合って座っていた。

「治療はこれで完了よ」

カルテを書き込みながら、永琳は告げた。

その言葉を受けた先代は、包帯まみれで真っ白な姿である。

しかし、真新しい包帯が負傷した箇所到的確に巻かれた姿は、確かに治療が完璧であることを示していた。

最も重傷であった左腕も、ギプスで嚴重に固定されている。

全ての処置が神掛かったほどに正確で早かった。

「頬の傷は相当深かったようだけど、事前の治療が良かったのね。既に治り始めているわ」

「そうか」

「でも、傷痕はどうしても残るわね。消せないこともないわよ?」

「今更だ」

「他の古傷と比べても、おそらくかなり目立つ形になるわ。それに、位置が顔よ」

永琳は女として案じるように忠告した。

しかし、先代は当てられた布越しに軽く傷を撫でて、小さく笑った。

「いや、このままでいい」

「……………そう」

永琳はそれ以上言及しなかった。
その傷に対して、何か思うところがあるのだろう。
それは当人の勝手だ。

——そんな記憶が、彼女の古傷の一つ一つには宿っているのだろうか？

永琳は他愛もないことを考えた。

「次にその左腕に関してだけでも、改めて確認するわね？」
気を取り直して、尋ねた。

おおまかな負傷の経緯は、治療の最中に聞き及んでいる。

「伊吹萃香との戦闘で、攻撃を受け止める形で左腕を肘の部分から骨折。その後、戦闘の最中で『波紋』を使い、傷の痛みを和らげると同時に骨折箇所を一時的に接合。伊吹萃香を全力で殴った結果、反動で再度骨折——合ってるかしら？」

「その通りだ」

頷く先代を、永琳はじつと見つめた。

「馬鹿じゃないの」

淡々と罵った。

「ただの複雑骨折じゃなくて、一度折れた箇所がまた折れているんじゃないの」

「……すまない」

「私に謝っても仕方がないわ。」

今日中にここへやって来たのは正解だったわね。下手に放置して、自力で治癒していたら、おそらく正常な形に骨が繋がらなかったでしょう」

「助かったよ、永琳」

「こっちは頭が痛いわ」

永琳は頭痛を堪えるような仕草をした。

先代の謝礼は皮肉や言葉だけのものではなく、純粹で素直な感謝の気持ちなのだと分かっていたが、だからこそ余計に頭痛の種となった。

蓬萊人でもないくせに、目の前の人間には身の危険に対する深刻さ

というものが足りない。

永琳は、責めるような眼つきで先代を軽く睨んだ。

「以前、私が話したことは覚えているわね？」

「ああ」

「もう少し、自愛しなさい」

「努力する」

「……努力が必要なのね」

「すまない。いつも、気がつくところになっているんだ」

冗談なのかと疑うほど真顔で、先代は淡々と応えた。

その返答がどういいう意図を含ませたものなのか測りかね、思索の無駄を悟って、ため息を吐く。

「当分は、左腕を使わないでおきなさい」

「当分とは？」

「知らないわ。貴女の回復力を計算するなんて馬鹿らしいもの」

「永琳……」

「冗談よ。一週間後に、もう一度診せにきなさい」

先代が困ったような声を出すと、永琳は苦笑を浮かべた。

ようやく、ほんの僅かだが眼に見えて分かる程度に先代が表情を崩したことに溜飲を下げたのだった。

治療を終え、帰ろうとする先代を見送る為に永琳は共に立ち上がった。

永遠亭の門までの、短い距離を歩く。

未だに夜は明けていない。

人里では賑やかな宴会が続いているはずだが、遠く離れた迷いの竹林の中にある永遠亭には、その喧騒も無縁のものだ。

しかし、周囲はまた別の意味で騒がしく、慌しかった。

因幡てゐに似た人型を取れる妖怪兎達が、走り回っている。

それを指揮するのは鈴仙だった。

「……」も、鬼に襲撃されたと聞いたが——」

所々破壊された屋内を眺めながら、先代は呟いた。

まるで何かが暴れたような跡がある。

そして、今夜に限ってその暴れた『何か』の正体はハッキリしていた。

永遠亭の中には、強い血の臭いも漂っている。

「ええ、イナバが何匹か食われたわ」

「そうか……」

「貴女も兔肉は食べるでしょう」

淡泊な言葉を返しながら、永琳は『駆除』された鬼の死体が積み上がる中庭の縁側を通り過ぎた。

「何か、手伝えることはあるか？」

「何も無いわ。怪我を治すことだけ考えていなさい」

「治療の礼だ」

「それは、もう八雲紫に貰っているわ。鬼の死体の処理よ。家屋の修理はともかく、あれの処分は難しいからね」

「そうか」

「気持ちだけ受け取っておくわ」

先代の善意を、打算の返答でやんわりと受け流す。

永琳にとって、先代巫女は接し方の難しい相手だった。

単純に『興味のある人間』『好意のある友人』と捉えるには、立場も知り合った経緯も複雑すぎる。

何より、彼女に自分は一度弱味を見せてしまっている。

あまりこちらに関わって欲しくないのだ。

永遠亭全体と自分個人の平穏を考えるならば、それが一番だろう。

——この人間に、深入りするの危険だ。

そんな警戒とも不安ともつかない考えを内心へ完璧に隠しながら、永琳は先代を見送った。

彼女をここへ連れてきた紫と共に、夜の闇の中、ゆつくりと永遠亭から遠ざかっていく。

やがて二人の背中が完全に見えなくなると、永琳はその場を動かさないまま、背後の気配に向かって口を開いた。

「行ったわよ、輝夜」

門の影から、輝夜がひよつこりと顔を出した。

端正な顔が、形容し難い表情で歪んでいる。

「……迂闊だったわ。先代が、ここへ来るなんて」

「彼女と何かあったの？」

「いや、何もないけど……」

「だったら、別に隠れる必要もないでしょう。堂々としていればよかったですのに」

「それじゃあ、先代と顔を合わせるかもしれないでしょ！」

矛盾した輝夜の八つ当たりにも、永琳は呆れたようにため息を吐いた。

どう見ても、輝夜は先代と会うことを気まずく感じている。

つまり、何かあったのだ。

永遠亭が鬼の襲撃を受けた時、偶然妹紅達に連れ出されて人里まで向かったことは輝夜本人から聞いていたが、そこで何かあったかまでは説明されていない。

おそらく、そこで先代に何らかの形で関わったのだろう。

そして、その出来事が輝夜に対する複雑な心境を、更に捻って歪めてもつれさせてしまったのだ。

奇しくも、主従二人揃って、似たような印象をあの人間に対して抱いたことになる。

まるで、偶然まで味方しているようだ。

——やはり、深入りするには危険な相手ね。

改めて先代に対する懸念を抱きながらも、永琳の表情は警戒というよりも困ったような苦笑を浮かべていた。

「私情だけなら好きになれそうな相手なんだけどね」

「嫌い。あんな奴なんて、死んでも好きにならないんだから」

「貴女、死なないでしょ」

◇

——永琳の治療を受け、永遠亭を出た私は今日という日を振り返って見た。

楽しみにしていた宴会が突然の鬼の襲撃によって潰され、その鬼の退治を巡って人里で大立ち回りを演じ、拳句の果てにあの伊吹萃香と命懸けの死闘を繰り広げたが何とか勝利を収め、こうして生き残ったし宴会も出来た。

——信じられるか？ たった一晩の出来事なんだから、これ……。
激動の一日と言う他無い。

それでも最終的には、地底での戦いに比べて随分と軽傷で済んだし、この騒動で得たものも多かった。

結果オーライってのは、まさにこのことなのかもしれない。

特に、霊夢の成長をこの眼でしっかりと見届けられたことは、大きな話ではなく私の人生にとって大きな意味を持つものだった。

春雪異変でも、冥界で霊夢の活躍を見たことがある。

あの時感じた霊夢の成長が一時的な感動ならば、今回のそれは私の認識を改める一つの節目だった。

霊夢はまだ大人じゃない。

だけど、もう子供でもない。

本当の意味で、一人前の博麗の巫女として立派にやっつけていけると。

そう確信する体験だった。

その納得が、親として少し寂しい。

しかし、それ以上に満たされる。

霊夢には、もう私の助けなど必要ないだろう。

母親として、一つの仕事を終えた気分だった。

だから、なのかもしれない。

——幽香との殺し合いの約束しちやっつたのは。

あー、やっっちゃったなー。

私、やっっちゃったナー。

今更になつて、若干の後悔を感じる。

去り際のね、ゆうかりんのふつくしい笑顔を見たらああ勇氣を出して言ってみてよかったなあって思うかバカ！ あの時の私のバカ!!

確かに綺麗な笑顔だったけど、かつてない程の寒気を感じたわ！

ヤバイよ、あれ。殺気とかそういうの完全に超越してたよ……。

あと、機嫌が良くなったのか薬を塗ってくれたけど、あれは何なの？ 新手の拷問なの？

もうちよつとで悲鳴上げながらのた打ち回るところだったわ。単なる悪意ではなく、本当によく効く薬だったのがまた分かんない。まさか、あれってゆうかりんりのデレだったんじゃないだろうな。

とりあえず、その日までの安息は約束されたが、同時に逃げられない決戦の日まで決まってしまった。

霊夢が二十歳になったその日、私は寿命よりも先に命を懸けて戦いに挑まなければならぬ――！

今更ゆうかりんに『お前とは最後に戦うと言ったな？ あれは嘘だ』とか言おうものなら、私の方が崖から逆さまに落とされかねない。

その日に備えて、覚悟を決めるしかないのだった。

うーむ、波紋を止める日を具体的に決めた勢いで、心残りも清算しておこうって思ったのが悪かったかなあ？

まあ、幽香との関係については、いずれハッキリさせとかないといけないって前々から思ってたから、来るべくして来たことなのかもしれない。

それは、私が波紋を止める日についても同じだった。

これまで、漠然と『霊夢が大人になったら、残りの人生は自然のままに委ねよう』と考えていた。

霊夢が大人になる――それをどういった節目で判断するのか、ずっと決めていなかったのだ。

そして、今回の異変が起こった。

私は霊夢が一人前になったことを悟り、本格的に一線を退く決意をしたのだった。

決意した上で、更に『二十歳まで』という期間を作ったのは、私の中の前世の記憶から、やはり『大人』としての具体的な年齢が二十歳だからだろう。

深い意味はない。

正直、今の私に心残りってあんまりないのよね。

でも別に、私はさつきと死にたいわけじゃない。

ただ人の踏み込める領域から外れた力や技術を使って、ましてや人以外の存在に変わってまで、生き永らえようと思う理由がないだけだ。

普通に生きて、その結果長生き出来るならそれに越したことはない。

もつとも、それに関しては永琳先生から早死にするってお墨付き貰ってるけどね。

けど、そういった無茶のツケも、承知の上で生きた私の人生の一部だから。

そんな私の新しい人生の方針を決めた上でも、今夜は重要な一日だった――。

「先代」

隣の紫に声を掛けられて、私は束の間の回想から戻ってきた。

スキマで永遠亭まで直行してくれた紫は、私に付き添うように一緒に歩いている。

「傷の具合はどうだったの？」

「軽傷だ」

「とても、そうは見えないけれど」

「以前の怪我に比べたら、遥かにマシだ」

ちよつと責めるような眼つきだったので茶化して答えると、紫は苦笑を浮かべた。

でも、マジでごめん。

毎度、心配掛けてばかりだね。

「心配させてすまない」

「まったくよ。でも、いいわ。もう慣れました」

「付き合っても長いからな」

「そうね」

その時、紫は何故か一瞬物憂げな表情を浮かべたように見えた。

「……この竹林を歩いて抜けるのは面倒ね。スキマで人里まで送るわ」

ここに至るまでずっと歩いてきたが、言葉の調子から『ここでお別れ』といった雰囲気を感じた私は、思わずそれを制していた。

確かに、案内人もなしに迷いの竹林を歩いて抜けるのは面倒だ。つていうか、私は帰り道知らん。

でも――。

「もう少し、歩かないか？」

私の提案に、紫は驚いたように眼を丸くした。

やだ、もう。ゆかりんつたら、不意打ちでそんな無防備な顔を見せるなんて、それこそ私が驚くわ。

昔から変わらず、紫は超絶美人さんである。

もう、どんな表情してても様になる。

普段の妖艶な微笑も好きだが、この表情もレアだぜ！ 脳内にセーブ！

そんな風に私がはしゃいでいる間に、紫は余裕の笑みを取り戻していた。

「帰り道は分かるのかしら？」

もちろん、分かりません。

紫がスキマを生み出そうとしていた手のひらを返すと、そこに一匹の蝶が現れた。

幽々子の弾幕に似ているが、こちらは電灯のように強い光を纏っている。

その蝶がふわりと紫の手から離れ、先導する道案内よろしく飛びながら、自らの光によって行く先を照らしていった。

「あれを目印に進めばいいわ」

「分かった」

私と紫は、再び連れ立って夜の竹林を歩き始めた。

何処を見ても同じような、単調な光景が続く。

蝶の光と、頭上の月だけが暗闇を照らしていた。

辺りは静かだ。

迷いの竹林には、妖精や妖獣も棲んでいると聞いたが、動く者の気配すら感じない。

ま、私の隣には恐れ多い大妖怪がいるんだから、どんな奴だって息を潜めるしかなくなるだろう。

しばらくの間、私と紫は無言で歩き続けた。

ふーむ、こうして静かに歩くのもいいが、折角の二人きりだし紫と何か話したいな。

定番だと『いい天気だね』とか当たり障りのない話題で始められるが、生憎の夜だ。

代わりに月が綺麗なので、とりあえずそれを話の切欠にでもしようかしら？

「——霊夢が二十歳になったら、普通に生きると言っていたのは本当かしら？」

しかし、私より先に紫が口を開いていた。

「幽香との話を聞いていたのか？」

「ええ。なんだか、とんでもない約束をしていたようだけどね」

「そうだな」

「別に貴女が殺されるとは思っていないわ。そちらはどうでもいいの」

当然といった調子で断言する紫は、私の勝利を微塵も疑っていないらしい。

ありがとう、紫。

でも、幽香ってかなりシャレにならん相手だからね？

私の実力を信頼してるのか、幽香を侮ってるのかは分からんけど。

あと、言外に『幽香が死ぬのはどうでもいい』って言ってるような気がするけど気のせい？

「貴女が、そう決めたのは霊夢の成長を見届けたからかしら？」

「ああ。今夜、ハッキリと見せてもらった」

「そうね。私も見届けたわ」

「あの子は、もう立派な博麗の巫女だ。私の役割は、本当に終わった」
私はしみじみと呟いた。

これで、もうバトル三昧な日々とはおさらばすることになるだろう。

そう考えると、ちよつと名残惜しい気もするね。

……幽香の予言染みた忠告は、あえて無視する方向で。

来るなよ!?! トラブル、絶対に来るなよ!?!

「——そうね。感慨深いわ」

紫はまた、あの物憂げな表情を浮かべていた。

「私と貴女が出会って、もう何年経つかしら?」

「長いな。四十年は経つ」

「妖怪の山で初めて貴女を見つけた時は、まだ幼さの残る女の子だったわね」

「ああ。正確な年齢までは分からないが」

「今の霊夢よりも子供だったことは確かよ。ふふつ、貴女は突然目の前に現れた私を全く恐れていなかった」

当時の過酷な環境と修行によつて鉄面皮が形成されつつあったことを紫は知らない。

あと、八雲紫だと理解した途端、驚きや不安なんぞ消し飛ばすテンションにもなつてたな。

今思えば、あれは私と紫の運命の出会いだったのかもしれない——なんつって!!

「あの時、私は貴女が修行している光景をしばらく見ていたのよ」

「そうだったのか?」

「ええ。そして確信した。貴女の力と素質があれば、当時の幻想郷を大きく変えられると」

「だから、博麗の巫女に任命したのか」

「そうよ。そして、貴女は私の期待に十二分に応えてくれたわ。」

当時の博麗の巫女が死に、妖怪が人間を襲う頻度が増して、その影響で人間同士の間にも不信や不和が大きくなりつつあった——そんな不安定な時代を、貴女が力で変えたのよ」

ただ単にレベルを上げて物理で殴り続けただけでも言えるけどね。

どちらかというところ、そんな私の行動を紫が上手く利用した結果が平穏に繋がったんだと思う。

しかし、微笑む紫に無粋な口を挟む気にもならず、私は素直に称賛

を受け止めることにした。

紫の期待に応えられたんなら、幸いです。

「……でもね、先代。私が貴女に期待したのは、その力だけだったのよ」

不意に、紫が呟いた。

「自分の見出した貴女の力に、期待もしたし信頼もしていた。

でも、それだけだったの。それ以外の何も、私は貴女に望まなかった。気に掛けることもしなかった。無駄だと思ったから」

「――」

「私、貴女に博麗の術についてあまり教えなかったでしょう？ 貴女には『向いてない』と説明したわ。もちろん、それも間違いない。

だけど、それ以上に私は、貴女に今の霊夢のような結界を管理する博麗の巫女としての役割を期待していなかったのよ。私はただ、貴女が武力を行使してくれればよかった」

黙って聞く私に、紫は喋り続けた。

「初めて、貴女が新しい博麗の巫女だと人里に発表した時のことを覚えてるかしら？ 最初の内は評価も最低だったわね」

「ああ。だが、仕方がない」

「ふふっ、そうね。まだ幼い子供で、出来ることと言ったら妖怪を殴って殺すことくらい。

人里にさえ妖怪が襲撃に来るような状況だというのに、結界はもちろん、護身用の御札さえ作れない貴女に、住人は揃って失望したわ。今では信じられないことだけど、当時は誰も貴女に期待しなかったし、協力もしなかったわね」

「ああ」

「だって、私もそんなこと貴女に期待しなかったもの。だから、協力もしなかったのよ」

いつの間にか、紫は足を止めていた。

私も立ち止まり、黙って向き合う。

「私が貴女に期待したのは、単なる刃となることよ。壊死し始めた幻想郷にメスを入れる為の刃物。それを利用して、私は幻想郷を立て直

すつもりだった」

「……そうか」

「私の期待に応えてくれる貴女に、満足していたわ。

その力を振るって妖怪を退治する度に、人々の失望が畏怖へと変わって、貴女を忌避するようになった時も、私は何の憂いもなく満足していた」

「――」

「畏怖はやがて信頼へと変わり、貴女は人々の信奉を得るようになってけれど――それは、私が意図したものではない。貴女が自力で手にしたものよ。

私は、そんなこと期待していなかったし、その為の協力もしなかった。貴女の人間関係がどうなるうが気にしなかった。仲間も、友人も、家族も、貴女が作れるように私は配慮しなかった。何一つ、気にも掛けなかった――」

紫は胸の内から全てを吐き出すように言った。

「貴女が死んだり動けなくなったりしたら、本来の役割に適した博麗の巫女を探そうと考えてたのよ」

話し終えた紫は、にっこりと笑った。

今にも泣き出しそうな笑顔だった。

私と紫は、しばらくの間無言のまま見つめ合った。

紫の数十年越しの告白に、私も様々なことを感じている。

そして、紫がそんな私の返答を受け入れようと待っていることも分かっていた。

私は頭の中を整理して、何やら悲壮な様子の紫に、このポンコツな言語機能でも誤解なく正確に意思が伝わるよう言葉を選び、口を開いた。

「でも、今の私には家族がいる」

「え?」

「さっきも話しただろう。霊夢は自慢の娘だし、私は親として立派に育てられたと思う」

「え、ええ。そうね」

「最高の家族が出来た。それに、今は仲間もたくさんいる。友人だつて、目の前にいる」

「……私が？」

「違うのか？」

「いいえ、そんなことはないわ。でも、私は……」

「紫が昔、どう考えていたかは分かった。だが、今はどうだ？」

「――」

「手に入らないと予想していた仲間も、友人も、家族も、私は手に入れたわけだが」

「……ええ」

「見直しただろ？」

私はニヤリと笑って、言ってやった。

最初は私の言葉にポカンと呆けたような表情を浮かべていた紫だったが、やがてゆっくりと本当の意味での笑顔を取り戻していった。

「――ええ、見直したわ」

文字通り花の咲くような笑みを見て、私も微笑み返した。

でも涼しげなのは顔だけです。内心、お祭り騒ぎ。

ゆかりんが可愛すぎて生きるのが辛い……！

嘘。過去の紫がどうだったか知らんし、私が苦労したのも事実だが、超楽しい。

決めた。結婚しよ。っていうか既に私の嫁だけど。

「なら、許してやる」

「ふふっ、許されたわ」

ゆかりんマジ少女なスマイルを浮かべた紫を伴って、私達は再び歩き始めた。

心なしか、先程よりも足取りが軽い。

紫と二人で並んで歩くだけのことが、懐かしいような、逆に新鮮なような気もする。

話が終わって、私達のどちらも喋ることはなかったが、沈黙など全く気まぜくは感じなかった。

それでも、内心浮かれた私は、夜空を仰いで思わず紫に掛ける言葉を口にしていた。

「紫、見ろ」

「何かしら?」

「月が綺麗だ」

私がそう言った途端、紫は歩みを止めていた。

何事かと振り返ると、眼を丸くするという、さつきも見たレアな表情を浮かべたまま紫が固まっていた。

「……先代、その言葉の意味分かってる?」

え、何が?

何故か咎めるような口調で言われて、私は改めて月を見上げた。

「いや、月が綺麗だろう? 違うのか?」

答える代わりに、紫は大きくため息を吐いた。

「ばか」

諦めたように呟いた紫の頬は、ほんの少し赤かった。



「——出来た」

アリスは完成した人形を作業用テーブルの上に置いた。

手のひらサイズの人形とはいえ、僅か数時間の作業で作った物である。完成度も高い。

人里での戦いを見届けた後、宴会には参加せずに人知れず帰宅し、その足で作業に向かった結果だ。

もともと、他の人形とは違って魔法を施すことを前提としていない完全なインテリアであり、ある程度形が出来上がっていたというのもあった。

作りかけだった作品を、未だ夜が明けないこの一晩の間に完成させ

ただ。

アリスはその人形をじつと見つめた。造形の善し悪しはともかく、欠けていたパーツが埋め合わされたような完成度を自画自賛ながら感じる。

——いや、違う。

自画自賛ではない。

これは自分がデザインした形ではないのだ。

記憶の中のイメージに従い、本来在るべき姿になったと表現した方が正しい。

「神綺」

アリスは呟いた。

その一言だけで、目の前の人形の完成度が更に上がったような気がした。

「そうよ。アナタは神綺よ」

更に、噛み締めるように呟いた。

人形を使う魔法使いとして、多くの人形を作ってきたが、完成に際してこれほどの衝撃と感動は味わったことがなかった。

その人形——赤い衣服に身を包み、長い銀髪を持った美しい女性。しかし、その背中には悪魔のような黒い羽が六枚も生えている。

人間をモデルにした物ではない。

かといって、アリスの知る限りこのような姿の妖怪は幻想郷にはいない。

ずっと探していたのだから、まず間違いない。

これまで、アリスはこの女性を自分の想像の産物だと思っていた。作り始めた時は、全体像が頭の中に思い浮かばず、作業半ばで止まっていたのだ。

——この人形のデザインは単なるイメージで、インスピレーションが止まった為に未完成のままとなっている。

ずっと、そう思い込んでいた。

思い込もうとしていた。

しかし、今夜の宴会で得た経験が、どうしても見つけ出せなかった

パーツを唐突に脳内へ送り込んでくれたのだ。

全ての切欠は『名前』だった。

この実在しないはずの女性の名前だった。

「神綺……魔界の神」

アリスは脳を介さずに、直接口から滑り出た単語を忘れずに記憶した。

奇妙な話だった。

記憶にないものが、自分の口から言葉として飛び出してくる。

——魔界。

——神。

——神綺。

頭の中で何度も反芻しながら、アリスは立ち上がっていた。

完成したばかりの『神綺』の人形を手に取り、自宅の隠し部屋へと移動する。

何度も家に招いた魔理沙も含めて、誰にも知られていない秘密の場所だ。

魔法による隠蔽すら施されたそこは、アリスの心の中も同然の部屋だった。

中に入り、灯りを点ける。

小さな部屋だった。

家具もなく、部屋の中央に置いてあるのは大きな台のみ。

壁には無数のデッサン画が、乱雑に貼り付けられていた。

整理整頓されたアリスの家の中で、この部屋だけが明らかに異質な、雑多な様相を呈している。

描かれた絵は、幻想郷の何処でもない場所、幻想郷に住む誰でもない人物——。

台の上には、未完成の人形が数体置かれていた。

しかし、未完成にしては奇妙な部分が目立った。

骨組みだけであったり、衣服が完成していなかったりするといった本来の作業過程をなぞった上での未完成ではない。

顔の部分だけが作りこまれていないもの——。

衣服の上着の部分が出来ていないもの——。
左腕と右足だけが作られていないもの——。

作っている最中なのではなく、肝心のパーツが存在しないような状態だった。

それは、今夜完成した『神綺』の人形の以前と状態と同じだった。そう、同じなのだ。

これら未成品のパーツが、アリスの頭の中には存在しない。

「そうよ、アナタはここよ」

アリスは、それら未成品の人形の中央に『神綺』の人形を置いた。全ての中心。

この人形こそが、これらの存在の要——あるいは『神』——であると感じた為だった。

アリスは目の前に並ぶ人形達をじっと見つめた。

何度も——。

何度も、こうして見つめている。

この命も持たず、動くことすらしない人形達から、何かとても尊いものを感じて、それが何なのか見極める為に見つめている。

何日もそれを繰り返している。

何年もそれを繰り返している。

——一体いつから？

そんな自問に答えることも出来ない程、昔から。

いや、それは本当か？

いつからなのか思い出せないのは、遠い過去だからではなく、存在しない過去だからではないのか。

この幻想郷で暮らしていたアリス・マーガトロイドという魔法使いは、元々存在していなかったのではないか。

いや、そもそもこの世界そのものが単なる舞台上、生きる者達は役割を演じる人形で——そして、目の前に並ぶ未成品の人形達こそが自分の知る生きた存在であり世界ではないのか。

この世は一つの劇場に過ぎぬ——。

そんなことを考えるようになっていた。

——一体いつから？

答えることも、出来ない。

この世界は、常に奇妙な既視感に包まれている。

「まだ、他にも名前があるはず……」

アリスは、未完成の人形一つ一つを睨むように見つめながら、確信を持った声で呟いた。

その瞳には、普段の冷めきった感情の色ではなく、強烈な意志が宿っていた。

「この人形、全てに名前と形があるはず。それを知らなければ——」

アリスの脳裏に浮かぶのは、一人の妖怪だった。

これまでずっと止まっていた作業を、たった一言で再開させ、人形の完成へと導いた。

きっと、いや間違いなく、彼女は自分自身でも分からないアリス・マーガトロイドの秘密を知っている。

「古明地さとり」

今一度、会わなければならない。

何があっても。

どんな手段を使っても。

「暴いてやる。この世界の秘密を——！」

幻想郷で一人、アリス・マーガトロイドは異形の決意を固めていた。

幕間 「萃夢先代録」

【地上に残った鬼の一例】

—— どうして、こんなことになっちまったんだ？

その鬼は嘆いていた。

あの夜からずっと『こんなはずじゃなかった』という後悔が、頭の中を渦巻いている。

こんなはずじゃなかった——。

自分は、若くて力も弱い鬼である。

地底にいた頃は、同じ鬼の仲間からも格下の青二才扱いで、旧都を練り歩いては自分よりも弱い妖怪を脅して、痛めつけて、酒にありつく日々を過ごしていた。

鬱屈としていたが、そこまで不満のない面白おかしい生活だった。ケチの付け始めは、地上から一人の人間がやって来た時だ。

妖精を連れたその人間に、娯楽半分の気分でちよっかいを掛けた。そしたら、ワケの分からない内に緑髪の妖怪に黒焦げにされて、吹っ飛ばされていた。

怪我が治るまで随分と掛かった。

それ以来、あの時遭遇した一人の人間と一匹の妖精と、あの緑髪の妖怪を忘れたことはなかった。

憎い。

許さねえ。

仕返ししてやりたいっ！

……でも、敵うわけない。

後で聞いたところ、あの人間は星熊勇儀と戦って、勝ったという。そんな奴と喧嘩して勝てるわけがない。

実際にぶつ飛ばされたあの妖怪相手ならば、言うまでもない。

あのクソ生意気な妖精だったら、なんとかなるかもしれないが——

。そんなことを考えながら、悶々とした日々を過ごしていた。

そして、あの夜の出来事だ。

星熊勇儀に並ぶ鬼の中の鬼である伊吹萃香が、仲間を率いて地上に侵攻しようとしたのだ。

自分は、その案に乗った。

目的は、もちろんあの人間や妖怪への復讐——ではなく、戦いの後に残るおこぼれをあずかる為である。

なにせ、伊吹萃香を筆頭に鬼の中でも腕の立つ者を含めて百の軍勢で襲い掛かろうと言うのだ。

鬼の存在を忘れた地上の者達に対抗する術はない。

これは勝てる戦なのだ。

そう確信していた。

伊吹萃香は戦う上で『好きにしろ』と言ってくれた。

もちろんだ。

好きにするつもりだった。

とりあえず人間を襲い、新鮮な女子供から好き勝手に食らって、地上の旨い酒を浴びるように飲む。

妖怪の山で我が物顔をしているらしい天狗どもを、こき使つてやるのも楽しみだ。

地上にはあの強い人間や妖怪がいて分かっていたが、逆に他の鬼が奴らの内の誰かを打ち倒すところを見れるかもしれないという期待さえ抱いていた。

あの緑髪の妖怪は確かに強いが、今回同伴する仲間の中には勝てそうな奴が何人かいる。

例えば星熊勇儀を倒した人間だろうと、あの伊吹萃香ならば勝てる可能性は十分にある。

そうだ。連れていた妖精に関しては、探し出して自らの手で痛めつけてやるのもいい。

いいぞ、実に楽しみだ。

そんなことを考えながら、意気揚々と他の鬼について地上へと乗り込んでいった。

そして。

そして――。

「どうして、こんなことになっちゃったんだ……?」

「ん、何か言った?」

「なんでもねえよ」

「こらっ、敬語!」

「……なんでもありやせんよ、お嬢」

「ご主人様!」

「ごっ……ごしゅうじい、ん……っ!」

「ん! まあ、よろしい」

鬼は、自分の腰ほどしかない体格の化け猫の小娘が大仰に頷くのを
見て、強い苛立ちを感じた。

というよりも、実際に頭に血が昇って殴りかかろうとしていた。

その次の瞬間、鬼の全身を凄まじい激痛が襲った。

「ぐぎやあああああっ!!」

体中の肉という肉を捻って、血を絞り出そうとした時に感じるよう
な痛みだった。

突然、悲鳴を上げて倒れた鬼を見て、化け猫の娘——その鬼の主と
なった橙——は、叱るように言った。

「あー、また反抗的なこと考えたのね? 反省しなさい!」

「すみません! すみません! 俺が悪かったです、助けて下さい御
主人んっ!!」

「もうっ、これからは逆らっちゃ駄目だよ!」

地面をのた打ち回る鬼に対して、橙が片手を掲げて短い呪を呟く
と、激痛は嘘のように消えていった。

「痛い目に遭いたくなかったら馬鹿なこと考えちゃ駄目! 藍様の施
した『式』は完璧なんだから、すぐに反応しちゃうよ?」

「す、すみません……か、か、感謝します、御主人」

「ほら、大人しくついてきなさい」

ぺこぺこと頭を下げつつ、先に行く橙の後に今度こそ大人しくつい
ていく。

痛みから解放された鬼は、しかし表面上は恐縮した態度を取りなが
ら、内心では忌々しげに唸っていた。

自分の身に施された『式』という術は、目の前の取るに足りない化け猫を主人と定めているらしく、彼女への過度な反逆心や敵意を感知すると先程のように激痛を走らせるのだ。

実質、自分を縛る鎖も同然である。

そして、己の実力では、この鎖を破るどころか緩めることすら出来ないのだった。

おまけに、この施された『式』とやらの影響なのか、体にも変化が起こっている。

まず、体の色が赤くなった。

いわゆる『赤鬼』となったのだが、ただ単に色が変わって、それでお終いだ。意図が分からない。

自分以外に『青鬼』という、こちらは擬似的に紙で鬼を模した式神を元から従えているらしいが、まさかそれとの対比のつもりか。

だとしたら、これ以上くだらない理由はない。

鬼は、深く考えないようにした。

他には、施された術式の効果で以前の自分より遥かに力が増した。

それ自体は良いこととしても、その力を振るえるのは主である化け猫の許可がある時のみ。それが無い時はむしろ弱体化し、その辺の木っ端妖怪にも劣る程度の力しか出せないのだ。

こんな状態では、逃げようにも逃げられないではないか。

つまり、今の自分は目の前の小娘に顎で使われる手下も同じである。

本当に、どうして――。

「どうして、こんなことになっちゃったんだ……」

その鬼は、あの夜――成す術もなく狐の化け物に殺されかけて、文字通り命だけは助かった時以来ずっと繰り返している自問を再び呟いていた。

ただし、今度は橙に聞こえない程度にしつかりと音量を抑えている。

そんな風に我が身可愛さに弁えてしまう自分が情けないやら惨めやらで、鬼はますます肩を落とした。

「あ、チルノー！」

やがて、橙は霧の立ち込める湖の畔へと辿り着いた。

見た目に相応な子供らしい明るい声を上げ、見つけた相手に大きく手を振る。

付き添う形になる鬼は、思わずその先に視線を走らせた。

「——げっ!？」

忘れるはずもない、見覚えのある妖精の姿があった。

「あれ、橙じゃない。どうしたの？」

「どうしたの、じゃないよ。あんたが住んでる所知らなかったから、探したんだからね」

橙は笑顔でチルノの元へと駆け寄った。

当然、それについて行くしかない。

「そいつ、鬼じゃない？」

見上げるような体格の鬼を、全く恐れなかった様子もなくチルノはじっと見つめた。

見られている鬼の方は、内心で冷や汗ものである。

自分が、かつて地底で喧嘩を仕掛けてきた鬼だとバレれば、何を言われるか分かったものではない。

今の状態では、目の前の妖精を痛めつけるどころか、逆に何をされても抵抗さえロクに出来ないのだ。

そんな鬼の事情など知らない橙は、チルノの質問に胸を張って答えた。

「そう！ この鬼はね、わたしの式神になったのよ！」

「しきがみ？」

「ふふん、チルノには難しくて分からないかな？ 要するに、わたしの部下ってこと。つまり、わたしはこの鬼を従えているってことなのよ！」

そのまま後ろにひっくり返ってしまいそうな胸の張りようである。

式神となった鬼は、何故橙が自分を伴って出掛けたのか、ようやくその理由を理解した。

ただ単に、チルノに自慢したくて仕方がなかったのだ。

——自分が従っているのは、この小娘の上司らしい狐の妖怪が施した術に屈したわけであって、決して矮小な化け猫程度に屈したわけではない！

そんな自尊心と反発心が当然のように燃え上がったが、それに式が反応するより先に『くだらねえ』という呆れの気持ちが勝って、怒りはあつさりと萎えた。

「……あんた、どっかで会った？」

橙への反応もそこそこに、尋ねる。

妖精とは思えない記憶力を発揮するチルノの問い掛けに、鬼は必死で首を横に振った。

「ねえ、橙。こいつ、どこから連れてきたの？」

「うーん、知らない。この前の異変で、藍様が捕まえた一匹だつて言つてた」

「……なんだ、つまりこれってあんたの主人にもらったものなんじゃない！」

「う……っ！　そ、そうだけど……でも、今はわたしの式神だもん！」
「あたい、知ってるわ。そういうのを、虎の威を借る狐っていうのよ！」

「う、うるさい！　狐なのは藍様で、わたしは猫だい！」

あつさりと話題の移った二人のやりとりを見て、鬼はこっそりと安堵のため息を吐いていた。

しかし、話の中でごく自然に物扱いされたことを思い出して、再び落ち込んだ。

自他共に認める、落ちぶれた鬼の姿である。

「ところでさー」

チルノが再び鬼を何気なく見上げた。

「つまり、こいつは橙の子分つてことよね」

「そうとも言うね」

「つまり、あたいの子分つてことよね」

「なんでそうなるの!？」

「なんでそうなるんだ!？」

唐突な物言いに、初めて主従の意思が一致した。
詰め寄る橙と鬼に対して、チルノが平然と言いつつ放つ。

「だって、あの異変で橙もあたいの子分になったじゃない」
鬼は責めるように橙を睨み付けた。

その視線から、橙は冷や汗を流して顔を背けた。

「そ……そんなこと言った覚えはないな」

「えー、あんなちよつと前のことも覚えてないなんて、あんたバカね
！」

「馬鹿じゃない！ 覚えてるもん、確かに言った！」

「やっぱりね！」

「……あ」

「つまり、あたいはあんたの親分。その鬼はあんたの子分。あたいは、
その鬼の親分の親分って計算よ！」

「そんな!? そ、そんな……」

「いや、反論してくれよ！ 御主人!？」

鬼は思わず訴えかけるように叫んでいたが、一応の筋が通った理論
に橙は唸ることしか出来なかった。

少なくとも、強く反論するほど必死な気持ちにはなれなかった。

「うーん……そっかあ。それもそうね」

「納得すんなよ！」

「じゃあ、たまにチルノに貸してあげようか？」

「貸すなよ！」

「いらない。あたいは、修行で忙しいし」

「興味無さそうにすんなよ！」

「今から修行？」

「うん。弾幕ごっこ、橙もやる？」

「やるやる！」

「よーし、勝負だ！」

「話、聞けよお!!」

二人は楽しげに笑い合いながら、霧の湖の上空へと弾幕ごっこをす
る為に飛び上がった。いった。

その様子は、修行というよりも遊びのようである。

喚き散らす自分のことなど、既に眼中に無い二人に対して鬼が抱いたものは苛立ちや怒りではなかった。

ただひたすら、飽きることなく繰り返した自問だけである。

「ほらほら、あんたを組み込んだ新しいスペルカードも作ったんだから、早くついてきなさいよー」

「へえ、面白い！ 鬼が相手だろうと、あたいは負けないわ！」

「わたしだって、負けないよー！」

鬼は、齒を食い縛って二人を睨み上げた。

しかし、悲しいかな。従わなかった結果どうなるか十分に理解している己の理性が、体を動かす。

橙に呼ばれるまま、鬼は飛んだ。

「ち、畜生っ！ どうして、こんなことになっちゃったんだあー！?!」

鬼の嘆きは、幻想郷の空の彼方に空しく消えていった。



【今日の先代】

地霊殿へとやって来た私は今、勇儀と二人だけで向かい合って座っていた。

この部屋には他に誰もいない。

「——そうかあ。あの後で、そんなことがあったのか」

あの夜の出来事を話し終えた私は、目の前の勇儀が感慨深げにそう呟くのを聞いた。

あの夜の出来事というのは、萃香との決闘と、その果てに残った二つの決着についても含めて全てである。

私の目の前で、萃香の半身が死んだことも話した。

「萃香は……」

「うん？」

「自分の力と魂の半分が死んで、もう戻ってこないと言っていた。具

体的には、どういう意味なんだ？」

私はずっと気になっていたことを、勇儀に尋ねた。

萃香の旧知であり、能力の詳細も知っているであろう勇儀ならば、本当のところが分かると思っただのだ。

「さて、さすがに初めてのことだから今の萃香がどんな状態なのか、ハッキリとは分からないよ。

ただ、おそらく以前よりも弱くはなっていると思う。力を失ったっていうのは、先代が戦った鬼としての剛力や頑丈さを失ったことだろう。魂に関しては……分らん。寿命でも縮まったかな」

「――」

「先代、お前さんが気に病む必要は全くないよ」

「ああ」

私は素直に頷いた。

勇儀が私への遠慮や気遣いではなく、本心で言ってくれたのだとよく分かっていく。

幾度かの付き合いで、鬼というものがどういう種族なのか理解したつもりだ。……ほとんど『殺し合い』という名の触れ合いだったけど。

まあ、実際に私がトドメを刺したのではなく、萃香が自分で自分の首を斬り落としたんだしね。

俺は悪くぬえー！ と、責任を全面否定するつもりはないが、あの勝負の決着は私の敗北による死以外では避けられないものだったのだと納得もしていた。

しかし、その一方で萃香に対して気が引けるといいうのも確かである。

勇儀の言う弱体化の度合いがよく分からないんだが、実際どれくらい弱くなっちゃったんだろ？

二つに分かれた神様と大魔王くらいか？

だとしたらやべえな、私の罪は相当重い。なんせ、後半の戦闘力インフレについていけない！

「むしろ、人間のお前さんからしたら災難なことばかりだろう。鬼に関わって、碌な目に遭ってない」

勇儀が苦笑しながら言った。

かつての勇儀自身との出会いも含めて、鬼と戦って負った傷や命の危険に晒されたことを指しているのだろう。

ちなみに、あの戦いからまだ一週間経っていないから、腕はギプスで固定されたままである。

でも、頬の傷はほとんど治りました。もうガーゼすら貼ってません。

ゆうかりんの薬草すげえ。

「いや、萃香との戦いで得たものもあつた」

「そうかい？ 私も同じ鬼だ。文句なら代わりに幾らでも聞くよ」

「お前に言う文句なんてない。勇儀との出会いは、私にとって感謝すべきことさ」

私の言葉に、勇儀はちよつと驚いたような顔をして、すぐに満面の笑みを浮かべた。

ふっ、ちよいとカッコつけた言い方だったかな？

でも、勇儀の笑顔が男前すぎて、私の台詞なんか霞んで消し飛んでる。

「私も、お前との出会いは生涯の宝だ」

そして、返す言葉まで男前である。

やだ、もうっ。勇儀さん、抱いて！

「傷の具合はどうだい？」

「順調に回復している」

「左腕はどうだ？ まさか、動かせないなんてことは……」

「医者の話では、問題なく治るとのことだ」

「そうか。それはよかった」

「ただ、頬の傷は見ての通り痕が残った。これ以上は小さくならない」

「ああ、かなり目立つね」

「見苦しいか？」

「まさか！ お前さんほどの女ならば、その傷はむしろ美しさを増す要素になるよ。新しい髪形も似合ってる」

勇儀の指が自然な動きで、左頬の傷痕を撫で、そのまま短くなった

髪を梳いた。

萃香に食い千切られた髪は、今は切り揃えて、はたてから貰ったりボンで一つに束ねてある。

友人知人は皆揃って『似合う』とか褒めてくれてたけど、嘘を言わないことに定評のある勇儀に断言されると、また別の安心感があるね。

……つつか、勇儀さんよ。その自然な仕草一つとっても男前なところはなんとかしてくれ。

ときめいてまうやろーっ！

キヤツキヤツウフフって感じの雰囲気だが、傍から見たら大柄な女二人が男臭く笑い合ってる光景になっていてという不思議。

「今日は、他に何か用事があるのかい？」

「いや。紫がさとりに話があるそうだから、ついでに同伴させてもらっただけだ」

「じゃあ、これから特に予定はないわけだ。飯でも食いに行かないか？」

「ああ。酒も少しは飲める」

「そいつは嬉しいね。思い返してみれば、あの時の宴会ではお前さんと一緒に飲めなかった」

「そういえばそうだ」

「早速、行こうか」

「ああ、行こう」

そういうことになった。

勇儀に背を押されるまま、私達は相も変わらず賑やかな旧都へと繰り出すことにしたのだった。

他に誰も伴っていないが、別にいいだろう。

紫やさとりは何やら難しい話し合いをしているみたいだから、誘っても無駄だろうしね。

今回地底へと共にやって来たのは、私と紫の他にもう一人いる。

なんと、幽々子だ。

私も数日前に初めて知ったのだが、あの鬼の異変でどういう巡り合

わせがあつたのか、妖夢がさとりに連れられて地霊殿に居るらしい。なんつーか、全く予想出来ない人選である。

さとりと妖夢って一体どういう組み合わせなの？

詳細はよく分からないが、とにかくその妖夢を冥界へ連れて帰る為に、幽々子と共に地霊殿へとやって来たのだ。

もちろん、その件に私は無関係である。

むしろ、事情も知らんのに顔突っ込んだら邪魔にしかならないだろう。

たつた今も、さとりと紫と幽々子の三人が別室で話し合いをしている。そこに妖夢もいるかもしれない。

——まあ、だからどうしたって話なんだけどね。

人質の引渡ししてワケじゃあるまいし、幽々子自身がいるのなら『帰りましょう』と言って、妖夢の『はい』という返事で終わるだけのことだ。

さとりがどうやって妖夢と関わり、地霊殿に連れて来るに至ったのかだけが謎だが、その辺の詳しい話は後でさとり本人からでも聞けばいい。

地上へ帰る前に一度顔を合わせるつもりだしね。

さとりのことだから『話し合いで疲れたからさっさと帰って』くらいは言いそうだけど、それならそれで大人しく帰ろう。

でも、今はそんなことどうでもいいんだ。重要なことじゃない。

勇儀と肩を並べて旧地獄街道を歩きながら、私の意識は友人との楽しい食事の方にすっかり向いてしまっているのだった。



【静かなる悪意】

八雲紫は傍らに友人の幽々子を置き、テーブルを挟んでさとりと向かい合って座っていた。

さとりの傍らには妖夢が座っている。

そこまで広くはない部屋だが、四人ならば窮屈に感じることもない

空間だった。

この部屋には、紫自身の手で事前に結界を張ってあるので、この場にいる者以外の誰にも盗み聞かれることはないし、見られることもない。

まさに密談の為の空間が出来上がっていた。

さとりの能力を防ぐ為に、自身と幽々子にも境界操作を施してある。

事前に出来る準備の全てを万全にこなして、紫はさとりとの会談に臨んだのである。

一方で、幽々子にはさとりに対して楽観があると感じていた。

自らの従者——あの夜から行方の知れなかった妖夢——を、迎えに行く、ちよつとした遠出くらいは気持ちしか抱いていないようだった。

だからといって、それをあまり強く戒める気にもならなかった。

警戒することと、疑心暗鬼になることは全く違う。

紫には、自身がさとりに抱くものがそのどちらなのか判断がつかなかった。

不穏な予感と緊張を胸の内に隠しながら、紫はさとりと妖夢の待つ地霊殿へと訪れたのだ。

妖夢がさとりの元にいるという情報は、そのさとり自身が紫に報せたことである。

何故、妖夢がさとりの元にいるのか、理由は分からない。

妖夢が自ら望んでさとりの元にいるのなら、その理由は何か。

さとりの方が妖夢を自らの元へ導いたのなら、その理由は何か。後者ならば、妖夢がその誘いに乗った理由は何か。

この話し合いは、何らかの交渉事なのか。

それとも、ただ単に主人が従者を迎えにいくというだけのことなのか。

何も分からない。

何も分からないまま、四人の話し合いは始まった。

「古明地さとりさん。まず、お礼を言わせていただきます。この度は、

私の従者を何日も預かっていただいて、ありがとうございます」
密かな警戒を抱く紫とは違い、幽々子は穏やかに頭を下げた。
少しばかり率直に過ぎるような気がしたが、この打算のない言動は
むしろ正解だと紫は判断した。

自分では、どうしても警戒が混じる。

ここは黙って見守る方がいいだろう。

「本日は、その妖夢を迎えに参りました」

「そうですか。では、どうぞ。連れて行ってください」

さとの返答は、拍子抜けするほど簡単なものだった。
含むものなど何もない。

それ以上は何も言わずに『後は当人同士でどうぞ』と言わんばかり
に、口を閉ざしてしまった。

妖夢のことを厄介払いでもするかのようなのである。

そんなさとの態度に幽々子は気を悪くした風もなく、もう一度

『お世話になりました』と頭を下げて、妖夢に向き直った。

「さつ、妖夢。帰りましょう」

幽々子が笑顔で促した。

それを妖夢が断る理由などない。

いや、そもそも幽々子の命令を妖夢が拒むはずがないのだ。

しかし――。

「……妖夢？」

妖夢は応えなかった。

顔を俯かせたまま、頑なに幽々子と眼を合わせようとすらとしな
かった。

気まずい沈黙の中、やがて妖夢が傍らに立て掛けていた物を手に
取った。

鞘に納められた二振りの刀――楼観剣と白楼剣である。

それを黙って、テーブルの上に置いた。

「これを、お返しします」

「え？」

「白玉楼には、この二振りのみをお持ち帰り下さい。私は……魂魄妖

夢は、しばらくの間お暇をいただきます」

魂魄家の家宝である二本の刀だけを差し出して、妖夢はそう告げたのである。

そうして欲しいという要求ではなかった。

断言であった。

全く予想外の衝撃を受けた幽々子は、言葉を失っていた。

驚いているようにも、傷ついているようにも見える。

長い付き合いの紫でさえ初めて見るような表情を浮かべていた。

「よ、妖夢……う？」

「申し訳ありません」

「どうして？ 理由を話してくれないかしら？」

「話せません」

「私の眼を見て……」

「合わせる顔がありません」

「――」

「御引き取り下さい。お願いします」

「でも……」

「お願いします」

妖夢の最後の言葉は、懇願にすら聞こえた。

ただ頑なに顔を俯かせたまま、幽々子を拒絶していた。

口を挟むことも出来ず、ただ見守るしかない紫にも、幽々子が困惑し、何よりもショックを受けていることがよく分かった。

幽々子は、妖夢のことを従者であると同時に家族のように見ている。

あの死者の世界でたった二人、長い時間を共に過ごしていたのである。

いつも妖夢を見守ってきた。

日々の修練も、霊夢との勝負に敗北して壁にぶつかったことも、そこから立ち直ったことも知っている。

妖夢のことなら何でも分かるのだ。

多くの経験が、妖夢の為になると信じていた。

これからも、その成長を見守るつもりだった。

しかし、ここに至って直視した現実には、幽々子がこれまで見守ってきたものを虚像に、分かっていただけを錯覚に変えてしまった。

もはや、ここを訪れる前にあつた楽観や余裕は完全に消え失せている。

幽々子は助けを求めるように視線を彷徨わせ、やがてさとりに向けた。

「あの……っ」

「何ですか？」

「妖夢を、返して——」

まるで許しを乞うような声だった。

紫も、自然と責めるような視線を向ける。

しかし、一体何を責めろというのか。

少なくとも、ここまでのやりとりにさとりは一切口を挟んでいない。

彼女が妖夢を引き止めたわけでもなければ、何からの交渉を仕掛けたわけではないのだ。

何も言えずにただ見つめる紫と幽々子の視線を受けて、さとりはため息を吐いた。

「妖夢さん、帰ってもらえませんか？」

さとりは端的に告げた。

その口調も仕草も、やはり何の意図も感じない。面倒臭そうですらある。

裏でさとりが妖夢をかどわかしていたのではないかと疑っていた紫は、逆に困惑した。

「正直、貴女がここに居ると面倒事になるのです。だから、帰って下さい」

「――」

「ええ、まあ貴女の心は読めますから、何を望んでいるかは分かるんですけどね。」

じゃあ、言い方を変えましょう。』お願いします。どうか、ここから

出て行ってください』——これでどうですか?」

厳しく冷たい、全く遠慮のない言い方だった。

しかし、むしろ紫にとってはありがたいとすら感じる言葉だった。

ここまでハッキリと突き放されても、妖夢が帰らない理由があるだろうか。

妖夢が幽々子の元へ戻りたくないと思う何らかの理由があるのは確かだが、ここまで明確に拒絶されれば、その理由を棚上げして少なくともここから出ようとは思はずだ。

妖夢の性格からして、他人に疎まれて迷惑を掛けることを承知で我を通すとは思えない。

そう考えていた紫は、妖夢の取った行動に眼を見開いた。

「……お願いします、さとりさん」

妖夢はその場で膝を着き、頭を下げていた。

床に額を擦り付けて、土下座したのである。

「ここに置いて下さい」

「本気ですか?」

「お願いします」

「本気ですね」

妖夢の心を読んだのか、さとりは諦めたように呟いた。

紫もまた、何も言うことが出来なくなっていた。

そこまでの——そこまでの、決意である。

もはや、どうあつても妖夢を連れて帰ることなど出来ないと悟ってしまった。

一連のやりとりを見た幽々子は放心していた。

彼女の楽観的な予想は、最悪の形で裏切られたのだ。

「どうします?」

妖夢の懇願と茫然自失となった幽々子を見て、さとりは誰にともなく尋ねた。

答えは分かりきっている。

しかし、この結果に対するさとりの策謀を疑う紫の思考とは裏腹に、当人の様子は何処までも面倒臭そうだった。

上手く隠しているのか、それとも本心なのか――。
いずれにせよ、答えは一つしかない。

返事をする余裕すらない幽々子に代わって、紫はさとりに答えた。
「彼女のことを、今しばらくお願いできますでしょうか？」

「力尽くで連れて行くという案は駄目ですか？」

――分かって言ってるのか？

さとりの提案に悪意を感じた紫は、僅かに睨み付けた。

それを返答と受け取り、さとりは如何にも不承不承といった様子で肩を竦めた。

「分かりました。彼女は今しばらく預かりますよ。その刀だけ持って帰って下さい」

さとりが押し退けるように、楼観剣と白楼剣を幽々子の前に差し出した。

それを見て我に返った幽々子の体が、怯えるように震えた。

弱々しい視線がさとりから紫へと流れ、そして最後に妖夢の横顔を見つめる。

再び座り直した妖夢は、やはり幽々子と眼を合わせようとしなかった。

幽々子は泣きそうな表情を浮かべながら、震える手で二本の刀を受け取った。

それが精一杯だった。

もうこれ以上、話すことさえ出来ないだろう。

普段の落ち着いた物腰など見る影もない。

しかし、それを責めることなど出来ない。

こんな結果は、紫でさえ欠片も予想していなかったのだから。

――こいつは、一体何が目的なの？

紫はさとりをじっと睨み付けた。

もちろん、幾ら見通そうとしてもその心を読むことなど出来ない。

しかし、紫が今最も必要としているものは目の前の妖怪の心を読み

取る能力だった。

皮肉な話だった。

——何処までが謀られたことで、何処までが偶然なの？

古明地さとの策謀を疑う要素は幾らでもあるのに、断定する材料は一つとして無い。

思い返せば、鬼達が起こした異変に関してもそうだ。

あの襲撃は、公の場で伊吹萃香自身が自らの意思だと宣言していた。

しかし、異変が解決して、結局一番得をしたのは誰か？

古明地さとりだ。

旧都の鬼の多くが地上で死に、必然的に彼女の脅威や障害となる存在が減ったのだ。

他にも、先代巫女との関係を始めとして、不鮮明で疑わしい案件が幾つも残っている。

そこに加えて、今回の妖夢の問題と、その予想外の決着だ。

もはや断定の必要もなく、疑いのままで構わないから、とにかく目の前の妖怪をたった今この場で消し去ってしまいたい衝動に紫は駆られた。

短絡的だが、それで全てが解決するかもしれない。

もう、ここで全ての懸念を切り捨ててしまいたい。

しかし——もはや、それも出来ない。

知らず、強張っていた頬を解すように、紫は小さくため息を吐いた。

ここでさとりを消せば、妖夢がどうなるか分からない。

彼女の抱える問題を解決するどころか、幽々子を更に追い詰めることになるかもしれない。

実質、妖夢の存在を人質に取られたも同然だった。

それに、先代のこともある。

ここに至るまでの全てが後手に回り、もはや手の出せない状態に陥ったのだと思い知った。

紫は得体の知れない敗北感に包まれていた。

「古明地さとり」

「はい、何でしょう？」

さとの呆けたような表情から何も探れず、内心で苛立ちながら紫

は口を開いた。

「貴女は、一体何が目的なの？」

そう問い掛けて、具体性を欠いた質問の仕方に紫は虚しさすら感じた。

この質問で、一体何が得られるというのか。

どうしても誤魔化せる質問だった。

あっさりとはぐらかされ、揚げ足を取ることも出来る訊き方だ。

自分を間抜けだとすら感じる。

思案するように黙り込んださとりを見て、紫は既に諦めたような気持ちになり――。

「私はね、ただ静かに暮らしたいんですよ……」

次の瞬間、一変したさとりの雰囲気には紫は呑み込まれた。



【古明地さとりは静かに暮らしたい】

さとりは、既に投げやりな気持ちになっていた。

――帰って欲しい。ホント、もう帰って欲しい。

この部屋にいる自分以外の三人に対して、思うことはそれ一つである。

嫌な予感があった。

妖夢を地霊殿に連れてきた時から、この先に面倒事が待っている、と、ある程度覚悟はしていた。

連れてきた当初、妖夢は半ば廃人も同然であり、自主的に動くこうとしない彼女の世話をお隣やお空にほとんど投げっぱなしにしていた。

とりあえず、風呂に入らせ、ご飯を食べさせ、ぐっすり眠らせて、人心地つかせるとある程度受け答えも出来るようになった。

しかし、さとりは極力妖夢に関わろうとしなかった。

言葉を交わさずとも能力によって考えが読めるというのもあるが、それ以上に関わりたくないという消極的な気持ちは大きかった為である。

時間が経ち、冷静になつて考え直したのだが、やはりこの魂魄妖夢を連れてきたことは間違いだと悟つたのだ。

さとりは、妖夢が地霊殿にいることをすぐに紫に報せると、後は余計なことをせずじつと待つことにした。

そして、今日。待望の迎えがやつて来たのである。

八雲紫はもちろん、冥界の姫である西行寺幽々子も含めて、全く歓迎したくない面子ではあったが、とりあえずそれは棚上げにして、さつさと問題を解決してもらおうと迎え入れた。

幽々子が妖夢を連れ帰つて、それで終了である。

心の問題については、彼女達の絆だとか信頼だとかで何とかしてもらおう。

もう、それでいい。

いいことにする。

同伴する八雲紫から、また何やら疑いと警戒の視線を向けられ、以前の異変での問答の続きをやらされるかもしれないが、とにかく今は目の前の問題を片付けるのが先決である。

迎えに来た幽々子へ、完全に厄介払いのつもりで妖夢を促し――。

「……お願いします、さとりさん。ここに置いて下さい」

――ようやく積極的に喋つたかと思つたら、それかい！

悪態を口に出して吐かなかつたのは、ちよつとした奇跡だった。

心を読めば分かつてしまうことだが、それでも僅かな期待に賭け、せつかく友好的な幽々子にも嫌われるのを覚悟の上で厳しくハツキリと出て行くように、妖夢へ告げた。

そしたら、今度は土下座までする始末である。

「本気ですか？」

「お願いします」

「本気ですね」

心を読めば、嫌でも分かることだった。

さとりは思考を放棄した。

周りへの配慮も放棄した。

完全な投げやりである。

「分かりました。彼女は今しばらく預かりますよ」

紫に言われるまま、妖夢が地霊殿に残ることを認めたのである。もう、どうでもよかった。

案の定、自分を観察するように凝視する紫が内心でどんなことを考えているのか分からなかったが、どうせ碌なことではない。

肝心な相手に対してだけ、自分の能力が通じないのだ。

どうしろというのか。

どうしようもない。

どうにでもなれ。

——とりあえず、先代は殴ろう。そうしよう。

たった一つだけ、固く決意したのだった。

幽々子が黙り込み、妖夢ももはや何も話さず、奇妙な拮抗状態に陥ってしまった空間の中で、さて今度はどんな風に話が展開するのかと、さとりは他人事のようにぼんやりと考えていた。

「古明地さとり」

「はい、何でしょう?」

半ば思考放棄して呆けていたさとりは、感情の抜けた声で紫に応えた。

「貴女は、一体何が目的なの?」

——あんたらをさつさと追い出して、静かに過ごしたいのよ。

もう何もかもぶちまけてやろうかという自暴自棄な考えが、一瞬頭を過ぎった。

そこで、不意に我に返った。

本音を全て吐き出す——それは、存外悪くない方法ではないのか。

そもそも、自分にとって最も深刻な問題は八雲紫を始めとした多くの有力者に勘違い——正確には無駄な警戒——をされていることである。

妖夢が厄種となるのも、彼女を預かることで幽々子とその友人の紫から要らぬ疑いや敵意を向けられるからだ。

何故、そんなものを向けられるのか?

それは、自分が何かを企んでいると勘違いされているからである。

誤解。

何もかも誤解だ。

自分は何も企んでいないし、大それた野望や悪意を抱くような器ではない。

その一点さえ明確にすれば、この複雑な状況も改善されるのではないか――！

紫の質問は、全ての勘違いを正す唯一無二のチャンスだった。

この質問、正直に答えよう。

自分が望むもの――それは、ただ相応な立場で余計なトラブルに巻き込まれず、穏やかに、静かに過ごすことだけである。

ちよつと前まで、実現出来ていたことである。

具体的には、先代と関わる前までの生活である。

そう答えればいい。

一切の嘘偽りのない返答だ。

疑う余地などない。

それさえ信じてもらえれば――信じて、もらえるだろうか？

さとりの中に無視出来ない不安が過ぎった。

これまで繰り返し返してきたように、その段階でまた妙な勘違いや意思のすれ違いが起こるような気がしてならないのだ。

そもそも、紫は最初から自分を疑って掛かっている。

これまで抱いた印象と比較して、自分の平凡な答えを嘘や建前などと考えるのではないか。

――あ、ヤバイ。なんか、スゴイ未来見える。

さとりは、自分の能力で見れないはずのものをハッキリと見たような気がした。

ただ答えるだけでは駄目だ。

この答えに説得力を持たせなければ、きつと信じてもらえない。

しかし、ただの本音にこれ以上説得力を持たせるなんて、一体どうすれば――。

そして、さとりは閃いた。

自分よりも格上の相手を、言葉で動かす方法。

話術では翻弄出来ない妖怪の賢者の心を奮わせることを、既に実現している者を知っている。

さとりは紫に気づかれぬよう、ひっそりと能力を発動した。大丈夫なはずだ。

今からすることは、相手に仕掛けるものではない。

自分自身に施すもの。

あの先代から読み取った記憶——その中に眠る、この幻想郷の誰も知らない『トラウマ』をこの身に降ろして、再現する。

——『想起』

そして、さとりは変貌した。

「私はね、ただ静かに暮らしたいんですよ……」

さとりはゆつくりと、落ち着いた口調を装って言った。

不思議と装うだけでなく、本当に心が落ち着いていくような気がした。

これも記憶の人物を再現している影響なのか分からないが、好都合である。

逆に紫は眼に見えて、さとりの一変した雰囲気には圧されていた。

「激しい『喜び』はいらない……そのかわり深い『絶望』もない……『植物の心』のような人生を……そんな『平穏な生活』こそ、私の目標なんですよ」

他人の台詞に肖りながら、そこに自身の本音を込めてさとりは紫にハッキリと告げた。

本当に、一片の曇りも偽りも迷いもない、切実な思いである。

それでいて、相手に懇願するような弱さではなく、強い決意を感じる言い方である。

さとりは、自らの意志が紫に通じる手応えを感じた。

さとりが想起したものは、先代の記憶にあつた漫画のキャラクターそのものである。

初めてその人物の話在先代から聞き、第三の眼を通じて映像として

見た時、何よりも共感したのを覚えている。

その人物は、いわゆる殺人鬼であった。

狂気と残酷さを秘め、それでいて冷静で理性的であり、行動力と決断力に優れる。架空の存在でありながら先代の中でトラウマとなるほどの悪役だった。

しかし、自分と同じ『穏やかな生活』を渴望し、その為に前向きに努力する姿にさとりは密かに感銘を受けていたのだ。

『彼』の持つ強い意志は、目の前の大妖怪を納得させるだけの力がある。

さとりは、その力を借りたのだった。

「それが……貴女の、本当の望みなのか？ 古明地さとり……」

案の定、紫はさとりの答えに食い付くように問い返していた。

ただ平穩に暮らしたい——その何の変哲もない望みに、これ以上ない本気を感じ取ったのだ。

さとりは、自然と笑みを浮かべていた。

『闘争』は、私が目指す『平穩な人生』とは相反しているから嫌いです。

一つの『闘い』に勝利する事は簡単です。しかし、次の『闘い』のためにストレスがたまる……愚かな行為です。他人と争うのは、キリがなく虚しい行為なんですよ」

想起した人物の心境に合わせるまま、饒舌に語ってしまう。

しかし、これも間違いではない。

紫に自分は争い事を好まない、無害な存在だとアピール出来るからだ。

この人物は、なんて素晴らしい考え方を持っているのだろう。尊敬に値する。

もはや、さとりの中に不安や動揺は一片もない。

溢れるような自信と前向きな気持ち湧いてきていた。

能力を使った『想起』による記憶の再現は、過去何度も行っているが、こんなに良い気分になるのは初めてだった。

「私の望み、理解していただけましたか？」

「……ええ。理解致しましたわ」

「ありがとうございます。これで今夜も、安心して熟睡出来ます」

神妙に答える紫の様子から、自分の言葉が本当に理解されたのだと確信を得て、さとりは心の底から穏やかな笑みを浮かべた。

——勝った。

——私は、この苦境に打ち勝ったのだ！

さとりは、内心で激しくガッツポーズを決めた。

そんな心境も知らず、紫は神妙な表情のまま言葉を続けた。

「貴女は、自らの平穩の為にどんなことでもやる覚悟があるのね」

——ん？

「その強固な意志、確かに理解致しましたわ。貴女はもはや、一片も悔ることが許されない存在。私と『対等の存在』であると、認めましょう」

表立った敵意はなく、かといって好意など欠片もない、厳かな口調で紫は真つ直ぐに告げたのだった。

その宣告を聞き届けたさとりは、ようやく違和感を感じ始めた。

違和感の正体を掴もうとして、紫の口にした台詞を一から確認し直している間に、二人は部屋から退室していった。

残されたさとりは、同じく残った傍らの妖夢を一瞥し、それからしばらく頭に手を当てて考え、そして思った。

——あれ？　なんかおかしくない？



【半人半霊の半人前】

妖夢が我に返った時、そこは既に地霊殿の一室だった。

僅かに記憶の混乱があったが、何故自分がここに居るのかすぐに思いつくことが出来た。

必然的にあの勝負の決着も——。

そして、妖夢は心を閉ざした。

もちろん『心を閉ざす』とは、単なる表現だ。

生きている以上、本当に何も感じず、何も考えないでいられることなど出来ない。

それは思考を放棄するのではなく、鍛えることで至れる境地なのでから。

ただ、妖夢は周囲からの干渉全てを拒絶した。

幸いなことに、さとりと妖夢の思惑は一致していた。

さとりは妖夢に話し掛けようと思わず、妖夢もまた誰とも話したくはなかったのだ。

——誰とも話したくない。

——誰にも、何も、事情を訊いて欲しくない。

そうして怯える妖夢の心を、さとりは能力によって直に読み取っていた。

何も言わずとも自分を理解してくれるさとりの存在は、妖夢にとって心底ありがたかった。

結果は同じにせよ、そこに至るまでに自分の言葉で相手に伝えなければいけないという耐え難い苦痛を避けることが出来たからだ。

さとりを除けば、この地霊殿にいるのはペットのみである。

人の心の機微を知らず、頓着もしない動物達は、妖怪化したお隣やお空も含めて、妖夢に対して明け透けに接した。

妖夢が拒めば、それ以上踏み込まない。

単純に納得だけをする。

それもまたありがたかった。

単調で、しかし静かな日々がしばらく続いた。

魔理沙との勝負で打ちのめされた妖夢にとっては、穏やかで休まる時間だった。

自分が今、後ろ向きな考えに陥っていることは自覚している。

これは、単なる逃げだ。

現実から眼を背け、心配してくれる大切な人を突き放す行為なのだと分かっていた。

分かっていたが——。

『話せません』

——貴女に知られるのが怖い。

『合わせる顔がありません』

——貴女の気遣いが辛い。

『御引き取り下さい。お願いします』

——そんな風に感じてしまふ、今の自分が死ぬ程嫌い。

妖夢は、地霊殿に残ることになった。

必死だった。

必死に眼を閉じて、耳を塞いで、この逃げ場にしがみ付いていた。

去り際に一瞬見えた、幽々子の苦しげで悲しげな表情が、眼に焼きついて離れなかった。

「あの、さとりさん……様」

『さん』でいいですよ。別に私の従者になったわけじゃありませんし」

紫と幽々子が去った後、思わず声を掛けた妖夢に対して、さとりは他人行儀な敬語のまま言った。

心が読めなくとも不機嫌さが伝わってくる、懽然とした表情である。

自分のことを疎ましく思っているのだと、今の妖夢にもよく分かった。

「さとりさん……あの」

「ええ、迷惑ですよ。何故、わざわざ確認するんですか？ 迷惑だから出て行ってくれと言ったら、貴女は素直に出て行くんですか？」

「それは……」

「はいはい、分かっています。行く所ないんですね。イチイチ言葉にしないで結構。もう黙ってなさい」

「……はい」

妖夢は恐縮して、言われるままに黙り込むしかなかった。

心の中には、さとりに対する申し訳ないという気持ちと、それ以上の感謝がある。

理由はどうあれ、こうして自分を置いてくれるのだ。

「さて、ここで暮らす以上は貴女にも何かしら働いてもらいますから

ね。無駄飯を食わせる余裕はありません。何より気に入りませんし」
さとの遠慮のない言い方は、むしろ妖夢には心地良かった。
今の自分は役立たずだ。

唯一の取り柄である刀を自ら手放し、心も腑抜けきっている。

雑用でも何でもいい。

必要とされることが嬉しかった。

「はあ、そうですか。それじゃあ、お望みのまま、コキ使わせていただきましょう」

「はい」

「別に、貴女の剣術とか期待してないですしね。というか、ここでは必要ないです。むしろ、やらないで下さい。余計なトラブルになるので」

「……はい」

本当に、妖夢には何も期待していない。

そして、それ故に失望もしない。

それは妖夢にとって安心出来ることだった。

妖夢がぶつかっている問題を、心を読んで具体的に把握しているはずなのに、その為の助言も激励もしようとしなかった。

結果的に、それが疲れ果てた妖夢の心を落ち着かせてくれるのだ。

——これは、単なる逃避だ。

妖夢は自分に言い聞かせた。

今の状態が、正しいものだと思っではない。

思っではないけない。

しかし、間違っているからといって、すぐに立ち上がることなど出来なかった。

これからどうすればいいのか。

こんなことを、いつまで続けられるのか。

分からなかった。

自分の心は、未だにあの墜ちた場所で蹲りながら震えているのだ。

あそこから、自分はまた立ち上がれるのか。

自分は、前に進めるのか。

分からなかった。

分からなかったが——少なくとも、誰にも急かされることなく、駆り立てられることなく、留まれる場所がここにある。

「あの、さとりさん……」

「イチイチ言葉にしなくていい、と言ったはずですけど」

「はい。でも、どうしても言っておきたくて」

「――」

「ありがとうございます。これから、よろしくお願いします」

「ええ、よろしく。短い間になることを祈りますよ」

相も変らぬつつけんどんな態度に、妖夢は小さく苦笑した。

あの夜以来、初めて浮かべる笑みだった。



【博麗神社には鬼が棲む】

「コラッ、あんた何やってんの!」

霊夢の怒鳴り声が聞こえて、神社の屋根の上で昼寝をしていた萃香は眼を覚ました。

自分が怒られているのかと思ったが、どうやら違うらしい。

声は境内から聞こえる。

寝起きに一度背伸びをして、萃香はふわりとその場に降り立った。

「ありや、お前かい」

賽銭箱を挟んで霊夢と対峙する見慣れた相手に、萃香は思わず声を掛けていた。

萃香の呼び掛けに振り返ったのは、踵まで届く長い白髪を揺らした華奢な少女。

しかし、その顔は半ば皮膚と一体化した恐ろしげな鬼の面で覆われている。

以前の異変で霊夢とも戦ったことのある鬼の少女だった。

少女は、萃香を見つけると粛々としたお辞儀を返した。

「萃香、あんたの差し金なの?」

「何が？」

「これよ！」

怒りの矛先を萃香に向けた霊夢が、賽銭箱を指差した。

お賽銭——ではなく、猪の死体が箱の上に置かれている。

当然、賽銭箱には入らない。

血ぐらいいは中に滴っているかもしれないが。

「おおっ、立派な猪だ。獲ってきてくれたのかい？」

萃香の問い掛けに、鬼の少女は頷いて返した。

無視される形になった霊夢の額に青筋が浮く。

「神社の賽銭箱に動物の死体を置くのは、鬼流の呪いの儀式なの？」

「いや、誤解だよ。そいつは、きつと奉納のつもりだったんだ」

「鬼の贈り物は、猪って決まってるわけ？」

「鍋にすると美味いんだよ。皆で囲んで食べるし、酒も進む。わたしも昔から好物なんだ」

萃香が笑って答えると、表情を変えようもない鬼面の少女も、何処か嬉しげな気配を漂わせた。

これはつまり、神社への供物ではなく萃香個人への贈り物だったのではないかと。自宅前に死体を置かれた霊夢はますます不機嫌になった。

「怒んなよう、霊夢。今夜はごちそうになったじゃない」

「誰が捌くと思ってんのよ……血抜きとか手間が掛かるし、臭うから神社の中でやれないし、加えてあんたは食うだけで手伝いしないし」

「えへへ、臭いを散らすくらいはやるからさ」

ぶつぶつと文句を呟く霊夢をなだめながら、萃香は改めて鬼の少女に向き直った。

「ありがとうよ、美味しくいただきだかせてもらう。けどよう、これからはあんまり義理立てしなくていいよ？」

少女は小さく首を横に振った。

「そっかあ。まあ、好きにすればいいさ。ただ、次からはもうちよつと大人しめな物で頼む」

「っていうか、この素敵なお賽銭箱に入れる物として正しい物を持つ

てきなさい」

暗に賽銭を入れていけと催促する霊夢。

それが聞こえているのかいないのか。言葉による返答を返さずに、鬼の少女は今一度深いお辞儀をして、そのまま空を飛んで境内を去った。

遠くなつていく姿を、萃香が笑いながら、霊夢が忌々しげに見送った。

「何処からあんな猪を獲ってきたのかしら？」

「霊夢は、地上に残ったあいつが何処に住んでるか知らなかったっけ？」

「知らないわよ。人里じゃないことだけは確かでしょ」

「妖怪の山だよ。人を襲わずに、獣を狩って暮らしてるんだってさ」

「天狗と揉め事を起こしたりしてないでしょうね？」

「幸い、天狗のテリトリーからは外れた所に都合よく住処を見つけたらしいよ。川の近くで見つけた洞穴で、大分昔に人が住んでた形跡もあったから、結構住みやすいらしい」

「離れているとはいえ、同じ山の中に鬼が居るなんて天狗どもも居心地悪そうだけど」

「別に、そこまで過剰に反応はしないんじゃないかな。あいつってさ、実は純粋な鬼じゃないんだよね」

「そうなの？」

「うん。昔ねー、なんかどっかに祭られてた鬼のお面を誤って着けちゃって、それで呪われて外れなくなったらしいよ。」

それで、家からも追い出されて、泣きながら彷徨ってたところをわたしが拾ったんだ。適当に育ててやったら、お面の力なのかそれとも周りに鬼しかいない環境だったからなのか知らないけど、人間から鬼へ本格的に変化して、あとなんか慕われるようになった」

霊夢は説明を聞いて、あの少女が萃香に向ける感情が何なのか理解した。

恩義と、そしておそらく親子の情だ。

彼女は助けてくれた萃香に親の姿を重ね見ていたのかもしれない。

しかし、当の萃香は、その軽い調子の口ぶりからしてあの少女にそれほど深い愛情や絆を抱いていないらしい。

もちろん、それは不自然なことではない。

何故なら伊吹萃香は妖怪で、生粋の鬼だからだ。

「未だに義理立てして、色々尽くしてくれるんだけどねえ」
「嫌なの？」

「うーん、っていうかもっと好きにすればいいのにつて思う。助けた恩義にしたって何百年前の話だよ、いい加減期限切れだろ。わたしのことは放っておいていいんだよ、わたしも放つとくから」

萃香の返答が混じりっ気のない本心であると理解した霊夢は、妖怪と人間の違いを改めて認識した。

あの娘に対する萃香のストイックな考え方を、別段責めるつもりはない。

しかし、血の繋がらない二人の関係に対し、自分を照らし合わせて思うところはあるのだった。

霊夢は急に、得体の知れない寂しさを覚えた。

自分の母親との関係に対する寂しさである。

あの宴の夜、母と交わした会話は二人の絆が一步進んだことを実感させた。

一人前と認められ、ただ誇らしさがあつた。

しかし、今になって僅かな寂しさも覚えている。

立場の違いや理由はどうあれ、かつて育てた子供が自分の元から離れていくことを是とする親の姿を見たからかもしれない。

自分の母も、同じように子が離れることを望むだろうか？

もちろん、子供から大人になる上で、親から自立していくことが自然の流れであると理屈では理解している。

時を経て、親と子の距離が離れることは、決して絆が断たれることと同義ではない。

しかし――。

――もう、一月ごとにあの人はここへ来ないかもしれない。

――そして、自分はそれをずっと一人で待つことになるのかもしれない。

ない。

そんなことが気になって、どうしようもなく不安で仕方がないのだった。

「霊夢、どうした?」

黙り込んだ霊夢の顔を、萃香が不思議そうに見上げていた。

「何が?」

「なんか、寂しそうに見えたよ」

「気のせいよ」

「おっと、鬼に嘘は通じないよ」

「大丈夫よ。誤魔化してるだけだから」

「そう来たか」

苦笑する萃香を、霊夢はじつと見つめた。

「萃香、あんたは何の為に地上に残ったの?」

不意に、霊夢は尋ねていた。

あの鬼の少女が、萃香の為に地上に残ったのは間違いない。

では、その萃香は?

「何の為って——」

「地上の、しかもこの博麗神社に住む目的よ。どうして?」

霊夢の問いに、萃香はしばらく黙っていた。

答えを返せないわけではなかった。

どういった言葉を使うべきか、悩んでいるようだった。

「正確にはさ、霊夢の傍にいる為に地上に残って、ここに住むことにしたんだよ」

萃香は真つ直ぐに霊夢を見返して答えた。

「あたしの傍に?」

「うん」

「また、勝負でもしようっての?」

「違うよ。逆だ、もう霊夢とは勝負出来ないって悟ったからね。遊びでやるならともかく真剣なら、やる前からわたしの気持ちは負けちゃってるのさ」

「だから?」

「うん。だから、わたしに勝った霊夢の行く先を見届けたいと思ってね」

いや違うな、と。萃香は自分で語った内容を、自分で修正した。

「鬼に勝ったこの新しい時代を、最期まで見届けたいと思ったのさ」

萃香は、まるで自分にも言い聞かせるように語った。

あの決闘の夜、霊夢と戦う中で自身の答えを手に入れようとした時のように、たった今問われたことで自分がここに居る意味を見つけ出したかのようだった。

鬼というのは、まず理屈で考えるのではなく、直感で動いてから考えるような行き当たりばったりなところがある。

「それって、あたしが死ぬまで付き纏うってこと？」

霊夢は意地悪く言った。

「そうだね。霊夢の生き様を見届けたら、次はその子供の人生を見届けようかな。それが終わったら次の人生を。そして、次を——わたしの命が許す限り、見ていたい」

「気の長い話ね」

「妖怪なんだから、仕方がないさ。長い間腹に溜めていたものはこの前の戦いで全部スツキリ吐き出しちゃったから、今のところ他にやりたいこともないしね」

「同じ負けたにしても、母さんに負けた勇儀とは随分違うわね」

「あいつはさ、多分先代が死んだら、残りの時間をその墓守でもして過ごす気なんじゃないかな。生涯を懸けて義を尽くす相手を見つけたんだ」

「——」

「あいつはたった一人を。わたしは霊夢から始まる多くの命の連なりを。違うとすれば、そこなんだと思うよ」

「そう——」

霊夢は曖昧に頷いた。

萃香が当たり前のように口にした『自分の子供の人生』に思いを馳せていた。

この自分が、母親になる。自分の母親のように——。

想像はしていた。

しかし、その将来を具体的に考えたことも、現実の可能性として捉えたこともなかった。

自分にとつての家族は、当たり前のようにあの人で、そこで全てが完結していた。

それ以外の誰かが加わるなど、思いもしていなかった。

多分、それは自分がまだ子供だったからだ。

生きている現在を当たり前として、先に待つ未来を思い描いていなかったからだ。

その未来を、萃香は見届けたいと言っている。

更に、その先まで。

霊夢は眼の覚める思いだった。

——もう、子供ではない。

胸に巢食っていた寂しさは、いつの間にか消えていた。

もちろん、ふとした時にその感情を思い出すことはあるだろう。

しかし、もう自分は子供ではない。

母親に一人前と認められた、一角の人間なのだ。

「じゃあ、長い付き合いになりそうね」

霊夢の胸の内に、晴れやかな気持ちが広がっていった。

その変化を察知したのか、萃香もまた楽しげな笑みを浮かべた。

「それは霊夢次第だけだね」

「子供が出来るかどうかってこと？」

「まず嫁の貰い手がいるかどうかってことじゃない？」

「鬼が憑いてる巫女とか、確かに貰い手はいなさそうね」

「いやいや、一番の問題は霊夢の性格だよ」

「うるさい。……母さんみたいに、子供拾おうかしら」

「鬼に憑かれる宿命を背負った不幸な子供だねえ」

「自分で言うな」

「あと、霊夢自身も出来るだけ長生きしてね」

「さあね。そんなの分からないわよ」

「長生きしないと、死んだ後でわたしが死体を食っちゃうからね」

「じゃあ、長生きするわ。食べる所もない皺くちやの骨と皮だけのおばあちゃんになって、重い病気に掛かってから死ぬことにする」

「うへえ、不味そう」

「いい気味よ」

霊夢と萃香は笑い合った。

その夜は、牡丹鍋を囲んで、二人で酒を飲んだ。

これから日常となる、巫女と鬼が住む博麗神社の新しい生活風景だった。

花映塚編

其の三十九 「花映塚」

この世の理を知っている。

死んだ人間は肉体を捨てて魂だけの存在となり、三途の河へと導かれる。

その河から死神によつて彼岸へと渡され、閻魔の前で生前の行いを裁かれる。

裁かれた死者の行く先は幾つかあるが、その道中の長さと内容に違いはあれど、いずれ一本の道へ戻ってくる。

転生し、再び現世へと生れ落ちるのだ。

少なくとも、これが幻想郷に生きる者の理である。

自分は、この理を知っている。

しかし、物の道理すら知らないほど幼い子供の頃、母からまた別の話を聞かされたことがあった。

——人は死ぬと、花になるんだよ。

そう教えた母の理屈が、幼い子供に死という概念を柔らかく伝える為に噛み砕いた作り話であることは分かっている。

自分事ながら非常に可愛げのない子供だったと思うが、その話を信じていたのは一年にも満たなかった。

母が改めて教えるまでもなく、自分は現実の摂理を知っていた。

だけど、母のしてくれた話を疎かに捉えたり馬鹿にしたことは、成長した今でも一度としてない。

この世を彷徨う幽霊の宿った植物が花を咲かせるといふ現象は、実際に存在もするのだ。その事実を知って、母の博識さに感心したことさえある。

……やはり、自分はある人にとって可愛げのない子供のようだ。

それでも——あの時母が教えてくれたことを、単なる子供の頃の出来事として色褪せるままにしておくことはなかった。

時折、他愛もなく疑問に思うのだ。

人は死ぬと花になる、という。
でも、人も花も種類は一つじゃない。

——もし、本当に人が死んで花になるのなら、一体どんな花になるんだろう？



眼を開ければ、そこは川辺だった。

長い河が視界を横切っている。

対岸は遠く、見えない。

何故、自分がこんな所に立っているのか、最初は分からなかった。

しかし、足元を見て、すぐに理解した。

足がない。

立っているのではなく、浮いているのだ。

そして、ようやく理解した。

——自分は死んで、御霊となったのだ。

理解した瞬間、ここが何処なのかも分かった。

ここは死んだ者がやって来る場所——『三途の河』なのだ。

「おおい、こつちだよー」

自分を呼ぶ声が聞こえて、幽霊は視線を移した。

もはや肉体を失い、眼も耳もなくなっていたが、とにかく『聞こえた』から声の主を『見た』のである。

不思議な感覚だったが、とにかくそう感じるのだから仕方がない。

三途の河の川辺に小船を寄せて、その上に一人の女性が立っていた。

人懐っこい笑みを浮かべた、美しい女性である。

自然とその女性に手招きされるまま、近づいていった。

「やあ、どうも。あんたは、自分が今どんな状態か理解しているかい？」

女性の質問に、死者は頷いた。

当然、頭も首もない状態だったが、とにかく頷いた。

生前の形を失い、魂だけの存在となった者のその仕草が、しかし目の前の女性には分かるらしい。

「そうか、そりゃあよかった。無事に往生できたようだね」
そう言つて、満足そうに笑つた。

「あたいの名前は小野塚小町。あんたを彼岸に送る舟渡し役の死神だよ」

小町と名乗つた女性の説明を聞き、その幽霊は驚いた。
しかし、言われてみれば『なるほど』と納得出来るものである。

小町は肩に大きな鎌を担いでいた。

これが噂に聞く『死神の鎌』なのだ、と。納得と共に感動もしていった。

そんな死者の魂の反応に、小町は気づかれずに苦笑した。

実は、この鎌がこんな風に迎える死者を納得させる為のサービスの一環でしかないことは企業秘密なのである。

「さあ、納得してもらつたところで舟に乗っておくれ。この三途の河を渡つて、閻魔様の所へ送ろう」

小町に促されるまま、死者の魂は舟に乗つた。

ここに至るまで、声による会話は成されていない。

しかし、死神である小町とこの魂との間にはしつかりとした意志の疎通が成立していた。

「ああ、そうだ。舟の渡し賃をいただくよ」

小町が促すまでもなく、死者が生前の『徳』を表す、あの世の銭を渡した。

渡したというよりも、勝手にそうなつた。

小町の手のひらには、いつの間にか銭が握られていた。

生前に犯した罪の多さによつて三途の河の対岸は長くなり、それを縮める為に渡し守の死神へ銭を渡して距離を縮めてもらうのだ。

そして、その銭の数は、生前の善行に左右される。

徳のない悪人は、当然銭など持っていない。

彼岸までの長い距離を縮めてもらうことも出来ず、いつまでも三途の河を渡りきることが出来ないのだ。

逆に、善人はあつという間に彼岸に辿り着ける。

そして、今回小町が受け取った銭の数は十分なものだった。

「あいよ、確かにいただいた。あんた、一角の人間としてすっかり生きたようだね」

小町はにつこりと笑って、舟を漕ぎ出した。

死者の魂を乗せ、死神の舟が三途の河を渡っていく。

「あんたなら、この河を渡りきるのも、そう長い時間掛からないだろうよ」

河を渡りながら、小町は饒舌に話しかける。

「あたいは結構話好きでね。こうして、河を渡っている間に話をして暇を潰すのが好きなんだ。煩わしかったら、御免よ。」

——ん、そんなことはないかい？　ははっ、そうか。あんたも暇か。じゃあ、なんか生きてた頃の話でもしておくれよ。あたいは、話をするの、聞くのも好きだからね」

この人懐っこい死神は、どうやら聞き上手でもあるらしかった。

見た目も美しく、可愛げのある女性である。

話を振られて、不快に感じる人間などそうはいない。

その死者の魂は、楽しげに小町に話し始めた。

生前に経験した出来事を。

愛する仲間や家族と築いた一角の人間としての生活を。

己の人生の中で、最も苦難に溢れ、そして輝かしかった時代の話を。

「——なるほど。あんたも、同じ時代を生きた人間だったんだねえ」

話を聞く内に、小町は感慨深く呟いていた。

「いやね、似たような話をこの前送った魂も話していたなあって思ってたね。世代交代ってやつか。多分、あんたの同輩だったんだろうね」
病気や事故に遭うこともなく、人間としての天寿を全うしたのならば、ある程度死期も重なってくる。

小町は、ここのとこ何度かそういった同じ年代の死者の魂を送った経験があったのだった。

皆、いずれも一角の人生を真っ当に生きた人間達だった。

多くの人間が、多くの生き方を経て、多くの死に方に辿り着く。善人も多ければ、悪人も当然に多い。

幸福な者もいれば、不幸に塗れた者もいるのだ。

小町はそうして、多くの死者を彼岸へ送ってきた。

そして、小町はここ最近送った者達の話の中から一つの共通点を見つけたのである。

「他の人間もね、同じようにある人物を持ち上げるんだ。聞く限り、大した人物みたいだねえ——その『先代巫女』ってのは」



——幻想郷が蘇生した。

冬の白色は春の日差しに彩られ、幻想郷は完全に生の色を取り戻していた。

冬の間眠っていた色の力が目覚め、幻想郷を覆う。

花と同時に妖精達も騒がしくなる。

その異常な美しさの自然は、幻想郷に住む者全てを驚かせた。

桜、向日葵、野菊、桔梗——まだ春だというのに、一年中全ての花が同時に咲き出していたのだ。

多くの人間と全ての妖精は、自然からのプレゼントと受け取って暫くその光景に浮かれていた。

しかし、どんなにのんきな者でもいずれ事態の重大さに気付く。

これは、幻想郷全体に及ぶほどの異常現象——『異変』である、と。



「——まあ、ネタ晴らしすると、異変じゃないんだけどね」

霊夢は気の抜けた声で、魔理沙に告げた。

縁側に腰掛け、のんきにお茶を飲んでいる。

神社の外に広がる色とりどりに咲き乱れる花の数々を眺めて、楽しんですらいるようだった。

その視界を遮るように真正面で仁王立ちしていた魔理沙は、予想外の答えに眼を丸くしていた。

「いや、異変だろ！ 見ろよ、この光景！」

花の咲く植物ならば全て片っ端から咲いている、といった状況を指して、魔理沙が声を荒げる。

「花だけじゃない。ここに来るまでに妖精の群れに何度も喧嘩を売られたんだ。どう見ても普通じゃないぜ」

「その喧嘩を、律儀に全部買ってたわね」

博麗神社に来るまでに合流した咲夜が言った。

こちらは、霊夢の告げた内容にも憎らしいほど動揺を見せていない。

普段通りの瀟洒な佇まいのまま、手元で何かを弄っている。

「当たり前だぜ。妖精なんかには舐められたくないからな」

「それに、弹幕ごっこのいい練習にもなるしね」

咲夜にあっさりと本心を言い当てられ、魔理沙は僅かに頬を赤くした。

常日頃の地道な努力を他人に知られることを恥と考えている魔理沙にとって、そういった事実は明かされたくないものなのだ。

「さ、咲夜も何か言えよ！ これが異変じゃないなんて、どう考えてもおかしいだろ!?!」

「魔理沙」

「何だよ!?!」

「はい、プレゼント」

咲夜は微笑みながらトレードマークである黒いトンガリ帽子を取って、魔理沙の頭に花の冠を載せた。

先程から、手ごころな野草の花を使って作っていたらしい。

「あら、可愛い」

魔理沙の呆けた顔を、咲夜と霊夢は微笑ましげに見つめた。

完全にからかわれていると察した魔理沙が、慌てて帽子を奪い返して、頭の上の花冠を隠すように被る。

「なんだよ!?! わたしは真面目な話をしてるんだぞ!」

「ごつちも真面目に答えてるのよ。これは異変じゃない」

お茶を乾して、空になった湯飲みを傍らに置きながら、霊夢が言った。

「六十年に一度の間隔で、外の世界で発生する幽霊が増加するのよ。そして、今日が丁度その日なの」

「それは……まさに異変じゃないのか？」

「違うわ。これは自然に起こってしまうことであって、人為的に起こされていることじゃないもの。」

三途の河の案内人である死神の仕事の許容量を超える数の幽霊が、幻想郷に溢れかえってしまった状況なのよ」

「花が咲き乱れているのは？」

「その溢れた幽霊が花に憑依して、季節に関係なく咲いてしまっているってわけね。妖精が興奮しているのは、不自然な花に釣られているだけなの。」

つまり、今回の出来事に関しては傍観が正解ってわけ。放置しておいても死神がちゃんと仕事していれば、次第に咲いている花も減って、いずれは解決するわよ」

「なるほど」

納得の言葉を呟いたのは咲夜だけだった。

霊夢の明瞭な説明に対して、魔理沙だけは何処か不満気な表情を浮かべている。

この説明について、信用していないわけではない。

むしろ、逆だった。

異変解決の為に意気込んでいたところに、あっさり真相を明かされて、気持ちの整理がつかないのだ。

今回の出来事が異変だと感じて、真つ先に博麗神社へと向かったのは、霊夢に会う為である。

どちらが先に異変を解決出来るのか、勝負する為に来たのだ。

しかし、実際にやって来てみれば、告げられたのは事の真相。

落ち着き払って事態を把握していた霊夢に対して、気持ちも行動も空回っていただけだった自分が酷く恥ずかしく感じた。

何か反論したいが、何も言えない。

黙り込んでしまった魔理沙の内心を見抜いた咲夜は、小さく微笑んだ。

「事態は把握したわ。さして問題がないのならば、折角だから楽しみましよう?」

「楽しむって……」

俯いていた顔を上げた魔理沙に、咲夜は周囲を見るように促す。

「四季折々の花が一度に楽しめるのよ。これらが消えてしまうまでに、楽しんでおかなければ損でしょう?」

「あんたも大概のんきね」

霊夢が呆れたように呟くのを、ウインク一つで返す。

咲夜は湯飲みと一緒に置かれた急須を手にとって、縁側から神社に上がった。

「お茶、新しく入れるわね。あと二つくらい湯呑みはあるでしょう」

「勝手に探して頂戴。あと、棚にあるお煎餅取ってきて」

「分かったわ」

「魔理沙。あんたもそんな所で突っ立ってないで、座りなさいよ」

「……うん」

霊夢の座る隣をぽんぽんと叩かれ、魔理沙は戸惑いながらも腰を降ろした。

咲夜が部屋の奥へと去っていく。

残された二人は、外の彩られた風景をぼんやりと眺めていた。

「お前さ」

「うん」

「ちよつと性格変わったんじゃないか?」

「そうかしら」

「元々マイペースなやつだったけど、のんきになったな」

「……それって何か違いある?」

「あ、いや……難しいんだけど、なんていうか柔らかくなったっていうか」

「ふーん」

「霊夢は気のない返事をする。

その横顔を眺めながら、魔理沙は呟いた。

「うん、そうだな。前よりものんびりしているように見えるな」

「じゃあ、前のあたしって焦ってたり緊張してるように見えてたわけ？」

「……ああ。そうかもしれない」

「そう」

魔理沙の根拠のない言葉に、しかし霊夢は何処か納得したように小さく頷いた。

本当に、自分が変わったかどうかなんて分からない。

しかし、何時、何処で、どんな切っ掛けがあったかは心当たりがある。

今の霊夢の中にある落ち着きは、一つの達成感から生まれているものだと本人も自覚していた。

「そうかもしれないわね」

「でも、いざ異変って時にのんきになり過ぎないか不安だぜ」

「本当の異変だったら、ちゃんと本気出すわよ」

「妖しいもんだ。しかし、霊夢は何でも知ってるよな」

「何でもは知らないわよ」

「でも、今回のことだって見抜いてたんだろ。わたしはもちろん、咲夜だって知らなかったんだ。六十年に一度の出来事なんて、長生きの年寄りか妖怪ぐらいしか知らないと思うぜ」

「あたしだって、母さんに教えてもらわなきゃ知らなかったわよ。きつと」

「今回のこと、おふくろさんに教えてもらったのか？」

「そうよ、子供の頃にね」

「それでか……」

「事前に知ってなければ、あたしも異変だと勘違いしたかもね」

「……フォローはいらないぜ」

「別にそういうわけじゃないけど……」

自然と、二人は黙り込んだ。

再び風景を眺める。

「そういえば、霊夢のおふくろさんってああ見えて長生きなんだよな」
「そうね」

「六十年前に、同じような出来事があったから知ってたのかな？」

「さあ……」

そもそも、自分は母親の正確な年齢すら知らないのだ。

霊夢はふと、そんなことを思いついていた。

他愛もない疑問である。

心に留めておくほどの内容でもない。

この母娘にとつて、何の問題にもならない謎だからだ。

博麗の巫女にそんなささやかな思いつきだけを残して、この幻想郷を覆う奇妙な現象は『異変』と認定されることなく見送られたのである。



「これは異変に間違いないわ！」

「なんですって、それは本当ですか!?! チルノさん!」

胸を張って断言するチルノに、文は殊更驚いてみせた。

「周りを見てみれば分かるわ。あそこで咲いてる花なんて、本当は秋にしか咲かないのよ!」

「なんと。チルノさんは博識ですねえ」

「えへへ……ハクシキって何?」

「物知りってことです」

「うん! けーねの所でいっぱい勉強したからね!」

チルノの満面の笑顔を、文はすかさず写真に収めた。

続いて、チルノが促した周囲の風景も撮っていく。

二人のいる霧の湖の周辺は、花をつける種類の植物は全て、その辺の雑草に至るまで花を咲かせていた。

実際のところ、リアクションに反して文はこれらの異常現象に対して驚きはない。

チルノを尋ねてここへ来るまでに、妖怪の山や道中で嫌というほど見てきたからだ。

本来ならば今の時期に咲かない花が、チルノの指した秋の花以外にも多種多様に咲いているという事実も最初から知っている。

その原因についても幾らか心当たりがあり、少なくともチルノよりは多くの物事を察していた。

それでも感心してみせたのは、チルノをおだてて、乗せる為である。

「しかし、異変だと言うのなら解決しなければいけませんね」

「だったら、あたいが解決してみせるわ！」

チルノのシンプルな返答は、話題を誘導しようとしていた文にとって嬉しい誤算だった。

「しかし、異変を解決するのは博麗の巫女の仕事では？」

浮かびそうになる笑みを殺して、何食わぬ顔で問い掛ける。

「そんなの早いもの勝ちよ！ あたいが霊夢より先に異変を解決してみせる！」

「おお、凄い自信ですね。さすがは、先代巫女様の一番弟子のチルノさんです！」

「へへっ、当然よ！ この前の異変みたいに、今度はあたいが異変を解決してお師匠に一人前って認めてもらうんだ！」

ほう、と。文は今度は本当に驚いていた。

思慮の浅い妖精から、あまりに真つ当でひたむきな目的意識が感じられたからだ。

チルノの言う『前の異変』とは、幻想郷中を揺るがした鬼の異変である。

あの異変の解決によって、霊夢が正当な博麗の巫女として先代巫女を含めた周囲の者達に認められたことは間違いない。

文自身もその場に立会い、新聞として記録に残した。

長年続けてきた文々。新聞の中でも、一二を争う大反響を呼んだ記事だった。

あれから冬を越え、事件の衝撃も人々の記憶となって薄れ始めている。

その後、文々。新聞は何度か発行しているが、当然のこととして当時のインパクトを超えるような記事は作れていない。

今回の花の騒動についても、ネタ探しを兼ねて妖怪の山から出てきたのである。

——妖精達も興奮しているみたいだし、力の強いチルノなら何か普通より大きなことをしてくれろと踏んだんだけどね。

この異常現象に疑問を感じていたとは意外だった。

単純なチルノが誰かに喧嘩を売って、弾幕ごっこをしている光景を幾つか撮れば十分だと思っていた。

しかし、良い意味で予想外の事態に発展しようとしている。

更にその理由が、妖精らしからぬ理性的なものであることに、文は少しばかり感心したのだった。

「いやはや、やっぱりチルノさんはそこらの妖精とは違いますね。楽しませてくれます」

「あたいは、サイキョーだからね」
「まさにその通り」

文は愛想笑いを浮かべながらチルノに合わせた。

内心では、妖精如きの自負など鼻にも掛けていない。

しかし、以前よりも僅かに、チルノに対する評価は上がっていた。チルノがもはやただの妖精などというカテゴリーに収まっていな

いことは、これまでの付き合いで分かっていることである。

真相はどうあれ、肩書きはあの先代巫女の『一番弟子』である。

何処まで本気か分からないが、それは先代当人も認めている。

思えば、文がチルノに対する印象を変えたのは、先代巫女との関わりを知ってからだだった。

——あやや、何か妙な既視感を感じると思ったら。

不意に気付いた文は、内心で苦笑した。

以前の春雪異変を記事にした後も、こうして次のネタを探してチルノの元へやって来て、そして地底で先代の起こした騒動を知ったのだ。

あの時と状況がよく似ている。

地底で起こした鬼との戦いに驚き、それを制した先代に戦慄し、勇儀と酒を飲み交わすという緊張を味わった。

当時のことを思い出して、また妙な期待と不安を抱いてしまう。これから先に待つものに、尻込みすると同時に好奇心も湧いてくる。

「チルノさんの異変解決に、私もお供しますよ。では、まず何処へ行きましょう?」

「実は、この異変の犯人についてももう分かっているのよ。花の異変……つまり、犯人は幽香で間違いないわ!」

「なるほど! 素晴らしい推理です!」

「ふふん。さあ、幽香を退治しにいくわよ!」

想定する限り最も面白い相手と戦うことを選んだチルノを、内心で称賛しながら文は後をついていく。

奇しくも相手は、先代巫女と因縁の深い相手だ。

チルノと向かう先に何が待っているのか、実に興味深い。

やはり先代の——あの娘の関わる何かの騒動やその種が待っているのだろうか。

あの娘を妖怪の山で初めて見つけて以来、いつも驚かされてきた。

彼女の行動には、いつも期待と不安を感じている。

言葉では言い表せない、妙な心境になってしまう。

——また、貴女について予想外な事実が明らかになっちゃったりするのかしら?」

脳裏に浮かべた先代の姿に向けて、文は呟いた。

◇

——私は、目の前の男に間違いなく負ける。そして殺される。

私の前に現れた敵は、そういう男だった。

私の生涯で最大最強の敵だと断言出来る。

実際に死闘を繰り広げた幻想郷の妖怪達を差し置いてでも、そう断言出来る。

こうして現実に対峙するのは初めてだが、この男の力を私自身がよく知っているからだった。

身長は、長身の私が軽く見上げるほど。

服装は黒のカンフー服で、その下には『鍛え抜かれた』という形容詞そのものといった肉体が収まっている。

髪はまるでライオンのたてがみ、顔は悪魔か鬼の風貌だ。

そこに刻まれた表情は、戦闘態勢を取った私を前にして全く揺るがない笑みの形。

私の知る姿そのままに、その男は目の前に現れたのだ。

この男を一言で表現するのなら――『地上最強の生物』

比喩でも何でもなく、例えばこの幻想郷の妖怪や神を含めても、私はそう考えている。

いや、奇妙な話だが、そう『信じている』と言ってもよかった。

私の知る誰よりも強い。

誰にも負けない。

そんな信仰にすら近い想いを抱く相手と、しかし私は今まさに戦おうとしているのだった。

本当に奇妙な話だ。

私は、自分で絶対に勝てないと信じているような相手に、勝負を挑もうとしている。

なんて矛盾だ。

しかも、私から望んでこうなったのだ。

勇儀や萃香と戦う状況になった時も、全て成り行きであり、望んだものではなかった。

なのに、それ以上の強敵と、敗北と死さえ覚悟しながら戦いたがっている。

それどころか、喜びさえ感じているのだ。

自分のことなのに信じられない。

敗北はともかく、死という結果がどういものなのか私は想像出来ていないのか？

つまり、目の前にある巨大な力を内包した肉体が、私の肉体を破壊

しに来るといふことなんだぞ。

手羽先を食う時みたいに関節を捻り折られたり、目玉を抉り取られたり、生きたまま顔の皮を剥がされたりするんだ。

私は、その光景を自分に置き換えてリアルに想像できる。

何故なら、全て目の前の男がやったことだからだ。

私はそれを知っている。

全部、見ている。

それなのに……。

——嬉しい。

——興奮が恐怖を凌駕している。

——絶対に実現しないと思っていた、目の前の男へ挑戦するという行為が、もう嬉しくて仕方がない！

構える私に対して、目の前の敵は無造作にポケットに手をつっ込んだまま。

それなのに、もうどう攻めればいいのか全く分からなくなっていた私は、覚悟を決めて勝負を仕掛けた。

作戦など何も考えていない。

ただ、初撃から全身全霊を込めて繰り出す。

「じゃっ!!」

狙いは顔面だ。

足元を狙うとか、フェイントを掛けるだとか、そんな小手先の技は使わない。

というか、絶対に通じない。

ただ私の信じる最高の一撃を、急所に向けて振り抜くしかない。

これまでの人生で鍛え続けてきた己の集大成とも言える拳の一撃が、男の顔面目掛けて飛んだ。

一万回の正拳突きで得た、この一撃。

反応出来るか——!?

「くっ」

男が上げたのは小さな呻き声だけだった。

苦しげな呻き声ではない。

笑いを堪えようとして、つい洩れてしまったような小さな小さな呻き声だ。

次の瞬間、私の胴体のだ真ん中に男の拳が叩き込まれていた。私の攻撃より速い。

そして、私の攻撃より重い。

胸骨は完全に砕かれた。

内臓は潰れた。

押し潰された分の体積が血反吐となって口からポンプのような勢いで吹き出した。

致命傷だ。

私は、朦朧とした意識でぼんやりと男を見上げる。

男は変わらぬ笑いのまま、片足を振り被っていた。

信じられないほど柔軟で、力強い開脚だ。

踵が天を突いている。

ああ、あれが振り下ろされるのか。

あの踵が脳天に当たれば、頭蓋骨なんて粉々だろうな。

私はきつと即死する。

つまり、たった二発で勝負は決ってしまったわけだ。

ついさつき繰り出そうとした渾身の一撃の行方なんて、もう何処に行ったのか分からない。

攻撃を仕掛けたのは私の方なのに、一瞬で私の方が殺されようとしている。

理不尽——とは、全く思わなかった。

こうなると思っていた。

いや、信じていた。

やっぱり——。

やっぱり、強いや——。

私が恐れたままの。

私が憧れたままの、圧倒的な強さだ。

男の踵が、振り下ろされる。すげえ。

怖え。

感動だ。

「これが『範馬勇次郎』の攻撃かあ……」

私は、恍惚とした気持ちで頭を砕かれた。

こりやあ、やつぱり即死やね。

私は——死んだ。



幻想郷中に様々な花が咲き乱れ、その彩りはいささか混沌とも感じ
る。

そんな異常現象の中に在って『太陽の畑』だけは普段通りの光景を
保っていた。

向日葵の色だけが、まるで統率されているかのように、一帯を支配
している。

いや、比喻ではなく、この場所を一つの意志の下に統率して支配し
ているのは風見幽香という妖怪に他ならなかった。

その幽香と、空中で対峙しているのはチルノである。

「あたいの——勝ちだよ！」

幽香の瞳を真っ直ぐに見据えて、チルノは宣言した。

対する幽香は、つい先程撃ち切ったばかりのスペルカードを手元で
遊びながら微笑を浮かべる。

「……そうね。貴女の勝ちよ」

「やったっ!!」

チルノは満面の笑みを浮かべて、両腕を天に突き上げた。

喜びを全身で表すかのように空中を飛び回るチルノを尻目に、幽香
はゆっくりと地上へ降り立った。

下から見上げれば、チルノはまだはしゃぎ回っている。

ここへやって来た当初の目的など、すっかり忘れてしまっているよ
うだ。

幽香は苦笑を浮かべた。

「いやはや、意外とお優しい方だったんですね」

何かを含むような言い方で、幽香に近づいてきたのは文である。

幽香とチルノの弾幕ごっこを、離れた位置で見守っていたのだ。もちろん、随所で写真も撮っている。

「優しい？」

幽香は笑みの形を変えぬまま、文を見つめた。

それはつまり、チルノと文に対する認識に違いがないことを意味している。

幽香にとって、妖精も天狗も相手にする上で差はないのだ。

不満と不快を感じたが、その内心を隠して、文は言葉が続けた。

「弾幕ごっこの勝敗ですよ。勝ちを譲ったんでしょう？」

「いいえ」

「ほう？ とすると、フラワーマスターとも呼ばれる大妖怪が、まさか妖精に勝負で負けたと？」

「そうですね」

「なんと、それは大事件ですねえ。いい記事になりそうです」

「あら、そう」

幽香の受け答えは、何処までも無感動なものだった。

逆に、文の方が一瞬言葉に詰まってしまふ。

「……チルノさんと親しいから、手心を加えたんでしょう？」

「貴女は、どうあっても先程の勝負に何かを含ませたいようね？」

「正直言って、意外な展開ですからね。貴女がチルノさんの弾幕ごっこに応じたことも、それに負けたことも——」

「仮に将棋をして、負けたとするわね」

「はい？」

「負けた後で、テーブルごと将棋盤を素手で叩き割って『私はこんなに力が強い』と言う。滑稽だと思わない？」

「――」

「弾幕ごっこはチルノの勝ちよ。新聞にはどうとでも書きなさい」

幽香の笑みは、全く崩れることはなかった。

強者の揺るがぬ自負が支える、余裕の笑みである。

風見幽香という妖怪に対して抱いていた危険な印象とは打って変わって、落ち着きと貫禄を目の前の実物から文は感じていた。

「幽香さんって、意外とやり辛い方なんですわねえ」

「敵意や殺気を向けた方が分かりやすかったかしら？」

「最初は、そういうのを予想してました」

「以前の私なら、そうして手っ取り早く追い払おうとしていたでしょうね」

「何かいいことでもありました？」

「秘密よ」

「うーん、なんとも可愛らしいお返事で」

「話のネタなら代わりのを上げるから、さつさとチルノを連れてここから出て行きなさい」

「やっぱり、今回の異変の元凶は幽香さんではないのですわね」

あらかじめ予想していた文の言葉に、幽香もまた頷いて返した。

幽香には花を操る能力があるが、今回の出来事にこの能力は全くの無関係である。

そのことは、文も何となく予想していた。

「外的に何らかの存在が宿ることで花が咲いている。ただ、その数が膨大なだけ——その程度のことには、貴女も分かっているでしょう？」「ええ」

「宿っているものは外の世界から来た幽霊よ」

「ほほう。『外の世界の幽霊』というのは予想してませんでしたね」

「原因を探るなら『再思の道』を通って『無縁塚』へ行きなさい」

「そこに、此度の出来事の真相が待っているのですわね？」

「貴女が欲しているのは真相よりもネタでしょう」

「まあ、どっちも同じようなものです」

「さつさと行きなさい」

もはや語ることはない、とばかりに幽香は文から背を向けた。

文も、これ以上食い下がることはない。

記者としての経験も長く、引き際は十分に心得ているからだ。

上空のチルノを呼ぶ文の声を背中で聞きながら、幽香は足元に咲く

小さな花を見下ろしていた。

見た目では分からないだろうが、この太陽の畑にある向日葵は今回の異常現象の影響を受けていない。

ただ普段通りのまま、ここで咲いている。

しかし、この足元の花は違う。

自然に咲いたものではない。

自然の力が咲かせたものではなく、別のモノが咲かせた花なのだ。

幽香は能力によって、それを知っていた。

「先代、例えば貴女が死んだら——」

幽香は虚空に呟いた。

「どんな花を咲かせるのかしら？」



新聞のネタを探していた文にとって、チルノとの道中は退屈しないものだった。

正直、此度の異常現象の原因究明や解決などどうでもよかった。

過去に似たような現象を見た記憶があり、概要も大まかにだが把握出来ている。

それ以上は、特に追求する意欲もない。

文は記者として——悪く言えば単なる野次馬として——邁進するチルノの後について、シャッターを切り続けた。

結局のところ、チルノの行動はシンプルなものである。

倒すべき敵を探し、弾幕ごっこでそれに勝利しながら、黒幕を探して進み続ける。

風見幽香との勝負を予想外の勝利で収めた後、異変に興奮した妖精達の群れや、途中で遭遇した妖怪などを、チルノは破竹の勢いで蹴散らしていた。

スペルカード・ルール上の戦いとはいえ、勝ち続けるチルノの実力は文をして驚嘆すべきものである。

先代巫女に師事したからなどという建前で納得出来る範疇の話で

はない。

チルノの力は、妖精という枠組みから完全に逸脱している。

一体、何者なのか——？

文は疑問を感じた。

疑問を感じて、すぐに『いや、どうでもいいか』と放り捨てた。

——妖怪を打ち破り、異変を解決する妖精。

それが良い新聞のネタになると喜んだだけだった。

ひたむきに進み続けるチルノと、その姿を撮ることが目的である文の二人が、元凶のいない異変を解決する為に奔走する。

様々な種類の花が二人の道中を彩り、やがてその色は赤一色へと変わっていく。

それは秋に咲くはずの彼岸花だった。

彼岸花に埋め尽くされた道である。

二人は幽香に示された『再思の道』を通って、ついに『無縁塚』へと辿り着いたのだ。

「一面に彼岸花。チルノさん、決戦の時は近いですよ」

「桜も咲いてる。ここが『むえんづか』なの？」

「その通りです。幻想郷には無縁の者が眠る墓場ってね。はてさて、ここに一体何が待ち構えているのか——？」

妖しげな紫の桜が散ると共に、周囲には多くの幽霊が彷徨っている。

文はそれらを羽虫のように払い除けた。

分かりやすい黒幕は存在しないだろうが、今回の件に関する何かしらの原因がここにはあるはずである。

それを写真に収めるべく、文は周囲を見回した。

「ここで待つものは罪です。これまで貴女が犯してきた」
声が聞こえた。

「紫の桜は罪を集め、花を咲かす。誰にも言えない罪も、本人が自覚していない罪でも、桜の前では関係ない」

文の視線が声の主を捉えた。

「紫の桜は、全ての罪を見てきているのです」

「……あのー、どちら様でしょうか？」

文は戸惑いながら尋ねた。

二人の前に現れたのは、一人の女性だった。
人間ではない。

しかし、妖怪でもない。

かといって、神や霊の類かといえば、そういう気配でもない。

これまで感じたことのない静かな圧力を放つ、荘厳な雰囲気纏う女性だった。

美しいが、恐ろしい。

長い年月を生きた文をして無意識に畏怖を抱いてしまう、得体の知れない大物だった。

——まさか、本当に黒幕がいた？

文は知らず、唾を飲み込んだ。

「四季映姫と言います。私は霊の罪の重さを量る者——そう、閻魔です」

映姫と名乗った女の言葉に、文は眼を剥いた。

「え、閻魔様ですって!?! 何でこの様な片田舎に？」

「閻魔……」

分かりやすく狼狽する文に対して、静かに呟くチルノの方へ、映姫は視線を移した。

死という概念を持たない妖精にとって、死後の存在である閻魔は最も疎遠な存在である。

その役割さえ知らないことが普通なのだ。

しかし、じつと見つめるチルノの瞳には理解の色があった。

「あたい、知ってるわ。閻魔は、人間が死んだ後に会う存在だって」

「よく知っていますね」

「勉強したからね!」

胸を張って答えるチルノを、映姫が推し量るように見つめる。

「ねえ、閻魔。あんたが、異変を起こしたの？」

「いいえ、違います。幻想郷中の花が咲いたことなら、これの原因は大量発生した幽霊にあります。」

地震、噴火、津波、戦争——原因が何かは判らないけど、外の世界の死者はたまに大幅に増える時があります。大体六十年に一度くらいの周期で増えるのです。丁度、今年がその時期なのですよ」「そうなんですか……そういえば季節外れの花が咲いたことって、過去に何度もあつた気もしますね。でも、六十年周期じゃ、昔過ぎて忘れても仕方がないわね」

何処か言い訳染みた文の独り言だった。

文自身がそんな風に自覚してしまっている。

無知を装う自分を、映姫の澄んだ瞳は全て見透かしているように思えるのだ。

いや、実際に閻魔には全てお見通しなのだろう。

しかし、文は取り繕った面の皮を一切動かさなかった。

文の背中には、小さな汗がふつふつと浮き始めている。

映姫と対面して以来、原因の分からない緊張に全身が支配されていた。

目の前の存在に、畏怖を感じる。

強さに対する恐れではない。

立場と権力に対する畏れとも違う。

言うなれば『自分の罪』に対する恐怖だった。

映姫に見つめられるだけで、胸の中に罪悪感が巣食い、眼を合わせている時間の分だけそれが際限なく大きくなっていくのである。

天狗として長い年月を生きただ中でこれまで犯した大きな禁忌や、さやかな嘘も、全て含めて罪状として目の前に並べ立てられているような気分になるのだ。

——嘘、か。

意図せず脳裏に幼い先代巫女の姿が浮かび上がり、文は慌ててそれを振り払った。

その一瞬のイメージさえ、映姫に読み取られるような気がしたのだ。

それは酷く拙い、弱味になるような気がした。

何故、自分があの娘を思い浮かべたのか、疑問を抱く余裕はなかつ

た。

「じゃあさ、結局異変を起こした奴はいないってことなの？」

今まさに裁判に立たされているような文と映姫の緊迫した対峙の時間は、不意に終わった。

長かったのか短かったのかも分からない時間が経って、痺れを切らしたチルノが割って入ったのである。

「その通りです。いずれ幽霊の数も減り、それに合わせて幻想郷も正常な状態になります。あとは、死神の仕事ですよ」

「なあんだ……じゃあ、ここに来た意味ないじゃない！」

チルノは空中で地団太を踏んだ。

空振りに終わった落胆から、虚しく肩を落とす。

「墓場になんかいたくないし、あたいうち帰る……」

「待ちなさい」

ここに至るまでの勢いをすっかり無くして、引き返そうとするチルノを、映姫が呼び止めていた。

視線が外れたのを幸いとばかりに、文がこっそり距離を取る。

しかし、両手は抜け目なくカメラを構えていた。

この場の雰囲気吞まれていないチルノが、どういったやりとりを展開するのか興味があった。

「別件で此岸まで訪れただけです——ここに、罪深い妖精を見かけたから放ってはおけません」

「えっ、あたいうって何か悪いことしたの!？」

「ほう。妖精である貴女に善悪の区別がつかますか？」

「バカにしないでよ！ 善いことと悪いことの区別くらいつくわ！」

「……そうですか。それは、とても素晴らしいことです。貴女には、良い教えを授けてくれる人がいるようですね」

注意深く見れば分かる程度の小さなものだったが、映姫はそこで初めて表情を変えて、口元に笑みを浮かべた。

「うん！ サイキョーのお師匠と、友達がいるからねっ！」

多くの人の顔を思い浮かべて、チルノは誇らしげに胸を張った。

思い浮かべた人物の中に自分がいることなど露も知らず、文は傍ら

でこつそりとその姿を写真に撮っていた。

「善行を積極的に行い、悪行を理性的に制するのは意志の力が要ることです。これを成すことは人間でも難しい。チルノ、貴女は他の妖精が持つていない力と知識を持ち得ています」

「つまり、あたいつてばサイキョー……！」

「しかし、それは自分のテリトリーを大きく外れていることを意味しています」

映姫が笑みを消して、言った。

「妖精は、時として残酷な仕打ちをする。しかし、そこに悪意はありません。」

自然が、生きる者を時に傷つけることと同じです。自然の具現である妖精の行動は全て邪気のないものであり、その行動の過程や結果を善悪で判断するのは他者の価値観によるものです。そこに罪は存在しない」

「え、えーと……」

「チルノ。忘れてはいけません、貴女は妖精なのです。本来は罪を持たない、自然（じねん）のものなのです」

「そのままでは、貴方は自然の力で元に戻れないダメージを負うかもしれない」

「すなわちそれは死、という意味です。貴女が死ねば、きっと私達が貴女を裁く。その時は、天界に行くか、地獄に行くか——まだそこまでは判らないけどね」

「……あたいは」

「そう、貴女は少し力を持ちすぎている」

映姫の話を、チルノはじつと聞いていた。

話の全てを理解しているわけではない。

顔には困惑の色も幾分浮かんでいる。

しかし、何とか内容を飲み込もうと苦心している様子が傍から見てもよく分かった。

他の妖精にはない聡明さと真面目さを、先程の映姫の話とも照らし合わせて、文は複雑な気分で見つめていた。

「……そうか」

やがて、チルノがゆっくりと顔を上げた。

「このままだと、あたいは妖精じゃなくなつて、死ぬようになるのか」
「その通りです」

自分なりに理解出来たことを呟くチルノに対して、映姫は頷いた。
厳かな肯定の仕草だった。

「じゃあ——」

チルノは映姫を真つ直ぐに見つめ返し、

「お師匠と、おんなじだ」

嬉しそうに笑った。

「あたいは、お師匠と同じ所に行けるかもしれないんだね」

「——」

「あたいは、一度悪いことをしているんだ。それが間違つたことだつて分かつた時は、すごく悲しくて、悔しかった。

だけど、間違つたことを反省して正しいことをすると、お師匠や他の人達は許してくれたり、褒めてくれたりする。それが、すごく嬉しかった。だから、あたいはもつと善いことをしたいし、知りたいんだ」
「——」

「あたいが死んだら、あたいのやってきたことがよかつたのか悪かつたのか、あんたがちゃんと教えてくれるんだね」

「……罪深い、ことですな」

映姫の口から誰に向けたものか分からない呟きが漏れた。

その小さな呟きがチルノに届くことはなかった。

「えーきつて言つたよね？」

「はい」

「あんたは、あたいのことを心配してくれてるんだよね？」

「ええ、そうですな」

「えへへっ、ありがとう！」

「そう思うのなら、妖精としての領分を守りなさい。矛盾しています

が、賢い貴女なら分かることです。これ以上妖精の枠組みから外れるのは間違ったこと——悪いこと、なのですよ」

「うん、分かるよ」

「ならば、やめなさい。もし死ねば、貴女はまずその罪を裁かれることになるでしょう」

「でも、あたいは今の自分をやめられないよ。だって、嬉しいからね」
「嬉しい?」

「そうやって、えーきに心配してもらったり、叱ってもらったりするの
がね」

映姫は眼を丸くした。

僅かだが、この厳格な閻魔は意表を突かれて驚いたのである。

文はその貴重な一面を写真に収めることに成功していた。

「あたいがフツの妖精のままだったら、えーきはきつとそんなことを
をしないんでしょう」

「……ええ」

「だって、その辺の木や石を叱ったりなんてしないもんね」

「そうですね」

「あたいは今よりも強くなりたいし、賢くなりたい。あの時みたいに、
もう間違ったことはしたくないんだ。あの時のあたいは、本当にバカ
だった。バカのままなんて嫌だ。それが妖精じゃなくなるっていう
ことなら、あたいはそれでいい。死んだ後で、あんたにうんと叱って
もらうよ」

「——」

「とりあえず……」

呆気にとられる映姫に対して、すっかり普段の調子を取り戻したチ
ルノは、片腕を突きつけた。

その手には、スペルカードが一枚握られていた。

「あんたと友達になりたくなかったわ! あたいと遊ぼう、えーきつ!」

チルノは堂々と宣戦布告した。



「いやはや、『無知は罪』とも言いますが――」

笑いながら文は映姫へと近づいていった。

卑しい笑みである。

もちろん、そういう風にあえて装ったものだった。

映姫に対して抱いていた畏怖は消え、すっかり普段の調子に戻っている。

『怖いもの知らず』を勇ましさで見ること出来ませぬ」

映姫の視線が文に向けられる。

相変わらず鋼が突き刺さるような視線だったが、文はもう怯まなかった。

ニヤニヤと笑いながら、視線を下に移す。

映姫の腕の中には、気絶したチルノが抱えられていた。

弾幕ごっこに負けて、地面に落下しそうになったところを映姫が救ったのである。

文の挑発染みた言葉に取り合わず、映姫は静かに地面へと降り立った。

手頃な桜の木の下へ、チルノの体を寄り掛からせるようにして降ろす。

まるで母親が子供にするような、優しさと慈しみに溢れた仕草だった。

「チルノさんは手強かったですか？」

「勝敗が意味を持つ戦いではありませんでしたよ」

映姫は無難な答えを返した。

「しかし、弾幕ごっこというものを初めて経験しましたが、なかなか悪くありませんでした。八雲紫も、たまには良いことを考えませぬ」

小さく呟きながら、口元にあるかないかの微笑が浮かぶ。

生涯で二度目に見た閻魔の笑顔を、文はすかさず写真に収めた。

それを咎めることもなく、無視しながら映姫が立ち上がる。

「チルノに伝えておいて下さい。楽しかった、と」

「もう行かれますか？」

「ええ、これから仕事が急がしくなりそうですしね」

「チルノさんが眼を覚ますまで待つて、ご自身で直接伝えられてはどうでしょう？・きつと、チルノさんも喜びますよ」

「そして、貴女はその様子を記事にするというわけですね」

「あややや……」

「貴女は少し好奇心が旺盛すぎる」

何気ない説教が、重く腹の中に残る。

文は乾いた唇を軽く舐めた。

大人しく引き下がることは簡単だ。

しかし、今まきに見抜かれたとおり、湧き上がる好奇心を抑えることが出来なかった。

「閻魔様。幻想郷の人間は、誰しも死ねば貴女に裁かれる。そこに例外はない。そうですね？」

立ち去る映姫の背中に、文は声を掛けていた。

振り返らず、足も止めず、答えた。

「そうです」

「仮に『先代巫女』であつたとしても」

足が止まった。

「博麗の巫女であつた頃から現在に至るまで、彼女が幻想郷で数多くの功績を残したことはご存知のほすです。

彼女は多くの人命を守り、救ってきましたが、同時に無数の妖怪の命を絶ち、人間の領分を越えるほどの力を身に着けました。

これらの所業が善か悪か——私にはとても判じることなど出来ません。そこで、閻魔様にお尋ねしたいのです。現在までの先代巫女の所業は、果たして『白』でしょうか？ それとも『黒』でしょうか？」
そう尋ねた時の文の心境は、本当に好奇心以外の何物でもなかった。

映姫とチルノのやりとりを聞いていた時に、不意に思いついた疑問である。

先代が残した数多くの偉業が閻魔の前ではどのように評価されるのか、気になったのだ。

人里の百人に訊けば、百人が彼女を讃えるだろう。しかし、英雄の所業には常に二面性がある。

先代は人間という同じ種族を守る為に、妖怪という異種族を殺してきたと見ることも出来る。

圧倒的な力を身に着ける代わりに、何十年生きてても若い肉体を保つという摂理に反した生き方をしていると見ることも出来る。

閻魔の裁判とは、そういった一つの所業の陰にあるもう一つの面も含めて、行われるのだ。

鬼の異変を経て、先代は本格的に引退した。

この一つの節目に、彼女がこれまで行ってきた偉業に閻魔がどんな審判を下すのか、文は純粹に興味を抱いたのだった。

——他の人間や妖怪のように、彼女の所業を褒め称えるのか。

——全く反対に、彼女のこれまでの行いを非難し、悔い改めるよう説教をするのか。

——真面目に『閻魔の裁判は生前に行うものではありません』とか言つて、はぐらかされるのが一番ありそうだな。

好き勝手に予想を巡らせながら、文は逸る気持ちで映姫の返事を待った。

しばしの沈黙の後に、映姫は口を開いた。

『『白』も『黒』もあります。彼女を私が裁くことはないのですから』全く予想外の答えだった。

え？ と、思わず口から洩れた呟きは、声にならずに消えた。

「彼女が死んでも、その生前の行いを閻魔が裁くことはありません」
上手く内容を呑み込めない文に、わざわざ噛み砕くように映姫は説

明した。

「ど……どういうことですか？」

「どう、とは？」

「その、つまり……先代の所業は裁くことが出来ないほど悪いものだと？」

「いいえ、裁けないのです」

「彼女は、死なないのですか？ 例えば、実はもう仙人や天人と同じよ

うな存在になっただけ——」

「違います。死んだ後に、裁かれることがないということですよ」

「何故ですか!？」

「知らず、文は声を荒げていた。」

「胸が酷く騒いでいた。」

「彼女は彼岸へ辿り着けないからです」

映姫は言った。

「もつと正確に言いますと、死後に彼女の魂が三途の河を渡って彼岸へ送られることは、おそらくありません。何故なら、彼女は幻想郷の人間ではないからです」

「……馬鹿な」

「私は幻想郷の閻魔です。また、私の所属する是非曲直も幻想郷の組織です。管轄から外れている者を裁くことは出来ません」

「そんな馬鹿な！ 先代は——あの子は幻想郷の人間ですよ！」

「いいえ、違います。少なくとも、幻想郷で生まれ、生きる人間ではありません」

「生きていないじゃないですか、今でも！」

「ええ、知っています。しかし、幻想郷の人間として生きてはいないのです。故に彼女の生前の行いは存在せず、それが裁かれることもまたありません」

「な——」

「分かるのです。閻魔である、私には」

有無を言わせぬ口調で、映姫は断言した。

だからこそ、文にとつては混乱を呼び込む言葉でしかなかった。どう反論すべきかも分からず、片手で顔を覆う。

寒気を感じるのに、じつとりとした汗が全身から滲み出していた。

「……何十年前前に、妖怪の山であの子を見つけました」
自らの記憶を確認するように、文は呟いた。

「それから、ずっとあの子を見てきました。崖から落ちて大怪我をしたこともあれば、病気で死に掛けたこともあります」

「——」

「あの子は、生きています」

「生きていますよっ！ 幻想郷で、息をしているんです！ 色々な事件に巻き込まれたり、解決したり、幻想郷の人間なら誰だって知っているですよ！ 私がすっかりと新聞の記事にできたんです！ 私がっ、訊いているのはっ、それらの所業がどのように裁かれるのかってことだけなんですっ!!」

鬼気迫る形相で、文は詰め寄った。

映姫は表情を変えない。

その不動の様子が、彼女の告げた内容に強い真実味を持たせていた。

文は、それを必死で無視した。

「先代が地獄行きなら、ハッキリとそう言っして下さい！」

「彼女は地獄には行きません。いえ、死後の魂が何処へ行くのかさえ、私にも分からないのです」

映姫は言った。

—— 転生は出来ず。

—— 天界や冥界、果ては地獄にすら行けず。

—— 魂が幻想郷を彷徨うことすらない。

先代が死ねば、その魂は、彼岸はおろか花にさえ辿り着けないかもしれないのだ。

新たな事実を、文の顔を青褪めさせるのに十分な衝撃を持っていた。

映姫は続ける。

「始まりは、おそらく六十年前です」

「……え？」

「貴女達が『先代巫女』と呼ぶ人間の存在を、私達が正式に確認出来た時期は現世でのそれとそう変わりありません。

私達が知った当時の彼女の年齢から逆算して、六十年前の、丁度今と同じ出来事が起こった時期が全ての始まりでしょう。

外の世界で大量の死者が発生し、今回のように幽霊が幻想郷へと雪

崩れ込みました。彼岸が死者の魂で溢れ返る混沌の中、紛れ込むように彼女は幻想郷に現れた——と、私達は考えています」

「じゃあ……い」

「しかし、外の世界の人間でもありません。貴女は彼女が、生まれる瞬間かあるいはこちらへ現れる瞬間に立ち会いましたか？」

「……いえ」

「私達の方でも、彼女の生まれは把握出来ていませんでした。おそらく幻想郷に現れた彼女の姿を最初に現実のものとして捉えたのは貴女です」

文はかつての記憶を必死に掘り起こした。

妖怪の山で、子供だった先代を見つけたのが最初の出会いである。

そう、子供だった。

生れ落ちたばかりの赤子ではない。

周りに両親もいない。

かつても感じたが、今考えても不自然なことばかりだ。

彼女が有名になるに連れて、自然と出自を探り、親も捜そうとしたが、結局見つからなかった。

自分は、彼女が『何処』で『誰』から生まれたのか知らない。

誰が生んだのか？

誰が育てたのか？

誰がああ場所まで連れてきたのか？

何故——？

「どんな悪人でも、地獄で生前の罪を償えば、転生して新たな命として再び幻想郷に生まれます」

俯き、黙り込んだ文から、映姫はゆっくりと離れ始めた。

文はそれを止めることが出来なかった。

「しかし、彼女がどうなるかは、私には分かりません。彼女の存在は、私のヤマザナドウ——『幻想郷の閻魔』としての領分を越えています。死後に介入する私では、どうすることも出来ません」

映姫の声が遠くなっていく。

文が顔を上げると、いつの間にか映姫の姿は遙か遠くにあった。

歩いているのに、まるで距離そのものが伸びているかのように、どんどん遠ざかっていく。

それなのに、声だけはハッキリと聞こえる。

「だから、貴女の質問に答えました。私が出来るのはここまでです。どうするかは、貴女次第」

既に遠くにありながら、肩越しに振り返る映姫の横顔を文は見たような気がした。

「偶然の出会いと、気まぐれの行動とはいえ、自ら選んだことです。途中で放棄した責任を、今こそ最後まで果たしなさい」

生涯三度目に見る、閻魔の微笑だった。

「出来なければ、それこそ貴女の方が地獄行き。仮にも母親であるのなら、それが貴女の積める善行よ——」

その言葉を最後に、映姫の声と姿が消えた。

後に残されたのは文と眠り続けるチルノだけである。

紫の桜の花びらが風に乗って舞うのに合わせて、辺り一面の彼岸花がゆらゆらと揺れていた。

◇

——私は死んだ。スイーツ（笑）

「随分と……余裕じゃあないですか」

仰向けに倒れた私を見下ろして、さとりが呟いた。

視線には冷たいものが混じっている。

「ごめん。心配させといて、さすがに不謹慎でした。」

「別に心配なんてしてませんけどね」

「ツンデレ乙」

起き上がろうとする私の顔を、さとりが無言で踏みつける。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！ 冗談だから、やめて！ 変な性癖に目覚めちゃうっ！」

慌てて起き上がった私は、すぐ傍にある椅子へ向かい合って腰掛け

間のテーブルには、すっかり冷めた紅茶が二つ、載っている。気がつけば、大分時間が経っていたらしい。

ここは地霊殿にあるさどりの私室である。

私ときとり以外、他には誰もいない。

つい先程まで私が向かい合っていたはずの男の姿はもちろん、私が体験したはずの死闘の形跡は何一つ存在しなかった。

「それで、どうでしたか？」

冷めた紅茶を飲みながら、さどりが尋ねてくる。

「貴女の持つ漫画の知識から引き出した『強敵』との戦いは——」

「完敗だった。一発で打ち殺された」

いや、本当にね。瞬殺でしたよ。

あの人に勝つイメージなんて欠片も浮かばなかったが、善戦する程度のイメージならあった。

しかし、実際には拳の一発も当てることなく、こっちが殺される始末だ。

自分のイメージなのに、思い通りにいかずに負けちゃうんだぜ。

これが無意識ってやつなのか。

今でも胴体と脳天に受けた衝撃と痛みが鮮明に思い出せるぜ……。

「ああ、もう。楽しそうに思い返さないで下さい。私にもイメージが視えちゃうんですから」

「すまない」

「脳天を叩き割られて、嬉しいんですか？」

「ああ」

だって、あの『範馬勇次郎』の踵落としを食らったんだよ！ かめはめ波で太陽まで吹き飛ばされるのと同じくらいの感動だね！

プロレスで悪役レスラーのファンが、そのレスラーから殴られて喜ぶ心理が今なら理解出来る。

「いや、比べられてもどっちも感動の度合いとか分かりませんがね」

ぬう……この感動が分からないか。もったいない。

漫画の中の修行に憧れて、それを現実に行ってしまった私からすれば、一人でこなす修行ではなく『漫画の中のキャラを相手に戦う』と

いう状況は最高の興奮と感動を与えてくれる体験なんだけどな。

そんな夢のような体験——現実ではなく脳内での出来事だったので、あながち間違いいではないが——を実現したのが、さとりの協力によつて可能となった修行方法の一つ。

——シャドーボクシングの究極形『リアルシャドー』だった。

私が、紫の許可と協力を得て地霊殿を訪れたのは数時間前である。以前訪れたのは鬼の異変が解決した後日だった。

あれから冬を越えて、既に何度目かの地霊殿への来訪である。

地上との不可侵条約とは何だったのか、と言いたくなるような気安さだが、実際に私自身ももう完全に開き直つて、友達の家に遊びに行くくらいの軽い気持ちでやって来ている。

顔を合わせる度にさとりが嫌味を言ってくるが、それだつて慣れたものだ。

だつて、紫がいいつて言うんだもん！ 私、悪くないもん！

……いや、本当に紫に頼んだら了承してくれてるだけで、内心でどう思つてるか分からないから何氣に不安ではあるんだけどね。

話に聞いたただけだが、あの妖夢に関する一件は意外にも地霊殿に滞在するという結論で終わったらしい。

つまり、地霊殿には現在妖夢が居る。

そして反対に白玉楼には幽々子一人だけしかいない。

これつてヤバくね？

つて感じに、さとりに訊いたら『ヤバイ』つて言われた。

そうか、ヤバイのか……どうすんの？

私を地底に送り届けた後、紫はさとりとも妖夢とも言葉を交わすこともなく地底を去っている。

なんつーか、無言の中に様々な含むものがあるような気がして、私の方から話題を振ることも出来なかつたのだった。

うむ、そのことに関しては……分らん。

さとりも不安は感じているが、どう判断すればいいのかよく分からないらしい。

正直、今すぐどうにか出来るようなものじゃないと思う。

そんな結論を、さとりととの雑談の中で下したのだった。

まあ、ここまでは余談だ。

本題は別にある。

切っ掛けは、そういった会話の中での思いっきの一つだった。

妖夢の一件で、さとりが紫と幽々子を相手に『想起』を使った時の話である。

なんと、さとりは私の記憶の中にある『トラウマになる程の漫画の悪役』を能力によって、想起したというのだ！

想起——原作で言うと、他のキャラの弾幕を再現する技のことである。

でも、これって弾幕という媒介がない場合にどういう効果を発揮する技なのか、イマイチ分からないのよね。

二次創作の作品によっては、相手の技や能力まで再現する一種のコピー技として使われる場合もあった。

もし、そうならスゲー強力な能力だ。

バトル物の漫画で必ず出るタイプの技だな。

「まあ、実際は気配や雰囲気や真似て、相手に伝える程度なんですけどね」

——と、本物はそれが限界らしい。

原作通り弾幕に利用も出来るが、スペルカードを再現することと能力を再現することは言うまでもなく難易度が全く違う。

つまり、さとりが現実に来るのは『凄い似ている物真似』って感じか。

まあ、考えてみれば心を読む能力自体、精神攻撃を前提とした力だしね。

覚という妖怪だって、鬼みたいに力が強いから恐れられたわけじゃない。相手の心に訴える怖さなのだ。

そして、何より教えてもらった『想起』の効果から、私は今回の『リアルシャドー』への利用を思いつくことが出来たのだ。

即ち——さとりに、私の記憶にある漫画のキャラを再現してもらって、それと相對することで『リアルシャドー』に足りない己のイメー

ジ不足を補う！ ということである。

この目論見は、見事成功。

私は、イメージとはいえ伝説のオーガと戦うことが出来たのだった。

ありがとう、さとりのおかげだ！

「いえ、本当に凄いのは貴女ですよ。本当にイメージだけで再現出来るとは——」

さとりは私の額を見つめていた。

そこに何かがあるかは、見えない私にも感じる鈍痛が教えてくれる。打撲によるものと思われる痣が浮かんでいるはずだった。

もちろん、最初からついていたものではないし、倒れた時についたものでもない。

そこは、イメージの中で踵落としを受けた箇所だった。

あの時受けたダメージが、現実の傷となって肉体に刻まれたのだ。

同じように胸からも痛みを感じる。

「本物は、こんなものじゃない」

「でしようね」

実際に血が出るからね。

つていうか、肉体にダメージが反映されるだけじゃなく、第三者にも相手の姿が見えちやったりする。

拳句の果てには、巨大なカマキリとさえ戦えたりするのだ。

「だが、コツは掴めたような気がする」

「そうですね。じゃあ、あとは勝手にやって下さい」

ああ！ 目指す目標は『エア味噌汁』だぜっ!!

完成したら、まずさとりにごちそうするよ。

私が胸に掲げた志を読み取ったのか、さとりは心底うんざりしたような表情を浮かべた。

フフフ、ギャグみたいだろ？

超真面目なんだぜ。

そうだ、私は久しぶりに本気なのだ。

イメージとはいえ、漫画のキャラと戦えるんだよ。こんなに凄い修

行方法はない！ 必ずものにしてみせるぜ！！

修行方法を習得する為に修行するというワケの分からない意欲がモリモリ湧いてくる。

長いこと感じていなかった情熱だった。

霊夢を拾ってからは、修行だけに熱中するってことがずっとなかったからね。

「あの鬼の異変を切っ掛けに、少し変わったんじゃないですかね？」

「そう思うか？」

「ええ、頭がおかしいのは変わってませんが」

「……酷い」

「ただ、前よりも考え方が気楽になりましたね」

そうかもしれない。

自分ではよく分からないが、心を読むさとりが分析するなら、それで正しいんだろう。

実際に、今の私は何か肩の荷が降りたような気分だった。

現在、地上では四季の花が一斉に咲き乱れるという異変——ぶっちゃけると原作で言う『東方花映塚』の時期になっている。

もちろん、その真相について私は知っているし、その知識を事前に霊夢へそれとなく伝えておいた。

その後、霊夢がどう判断して、どう行動するかまでは分からないが、それに関する心配や不安といったものは全く抱いていない。

以前の私ならば、知識として知りながらも、異変のこと——主にそれに関わる娘のこと——を常に心配してただろう。

しかし、今回はそれが無い。

いや、きつと今回に限らず、もう私は不要な心配をすることは無いはずだ。

あの鬼の異変が解決した夜に、私は霊夢に全てを託したからだ。

霊夢を一人前だと認めたのだ。

私は安心して、全て任せることが出来る。

だから、こうして地底で友人とダベりながら、馬鹿みたいなことをやっつけていられるのだ。

今更ながら初心に返って、好きな修行に熱が入り始めた理由はその辺りにあるのだろう。

「まあ……つまり、年甲斐もなく自重しなくなったってことですよね」
さとりがオチをつけるように言った。

否定出来ない……。

でも、実際に一つの節目を経て、心境の変化があったのは確かだ。
妖怪の山から始まったサバイバルな子供時代を生き延びて、博麗の巫女となってからは激動の時代を生きた。

霊夢という娘を得て、初めての子育てや教育に悪戦苦闘の日々だった。

現役を引退したはずなのに、何故かやたらとトラブルに巻き込まれ続けて——そして、今ようやく一息つけた感じだ。

どれくらいの年月が過ぎただろう？

数十年……数十……具体的に何年だ？ やべっ、自分の年齢分からん！

と、とにかく！ 私も、もういい歳だ。

あとどれくらい生きられるか分からない。

すぐに死ぬつもりはないが、これといって心残りもない。

だったら、残りの人生を初志を極めるのに費やすのも悪くないだろう。

元は、漫画の中でしか出来ない無茶苦茶な修行に憧れて始めたんだ。

私の全てはここから始まったのだから。

さあ、まずは自力でリアルシャドーが出来るように頑張ろう。

私の修行はこれからだ！

「……最終回じゃないぞよ。もうちっとだけ続くんじゃないよ……で、いいですか？」

合いの手ありがとう、さとりん！

風神録編

其の四十「世界」

休日の日中だけあって、街には多くの人と車が行き交っていた。

巨大な街頭テレビから流れる音楽が、街の雑音に混じって無秩序な喧騒を生み出す。

広々とした青空とは対照的に、それが発達した文明の中で新たに生まれた自らの習性であるように、人々は限られた空間に狭苦しくひしめき合っていた。

そんな群衆の中を、女が歩いている。

妙に目を引く女だった。

別段派手な服装をしているわけではなく、目立つ歩き方をしていないわけではない。

地味な色のジーンズを履き、シャツの上から革のジャンパーを羽織っている。

そのジャンパーのポケットに両手を入れ、右腕に持ち手を通して小さなコンビニ袋をぶら下げていた。

すれ違う行人の邪魔にならない程度に、歩道の端を歩いていた。歩く速さが周りの人間よりも少しばかり速いのは、彼女が急いでいるからではなく、ただ単に足が長い分歩幅があるせいだった。

大声で携帯電話と話しているわけでもなく、無言で静かに歩いている。

それでも、前から歩いてくる人間がその女に気付くと、ギョツとした顔で見上げ、すれ違った後で必ず振り返って確認するような目立ち方だった。

女にしては身体が大きい。

身長は日本人の平均身長を明らかに上回っており、群衆の中で頭一つ分飛び出ている。

ジャンパーに隠れて分かり辛いが見る者が見れば、鍛えられた筋肉肉によって一回り膨れた体格が分かる。珍しい女性のアスリートか、

プロレスラーかと思うかもしれない。

しかし、その女が人目を引くのはもっと別の理由からだった。

肩よりも少し長い黒髪を、紫色のリボンで結んで一つに束ね、それが一歩進む度に背中で揺れている。

頭には、ベースボールキャップを被っている。

正面から見れば鏢で目元が隠れてしまうような深い被り方だったが、もちろん顔の全てを隠せるわけではない。

何より、身長差から大抵の人間は彼女を見上げる形になり、顔が見えてしまうのだ。

人目を引くのは、その顔だった。

目に残るほど醜い顔なのではない。

むしろ、切れ長の瞳や形の良い鼻などが美人の部類に入る女性だ。もっと柔らかな体つきならば、背の高さもあつてモデルにも見えたかもしれない。

問題は、その美しい顔に刻まれているものだった。

無数の小さな傷痕があり、中でも一際目を引くのが、左頬の目元まで届く裂傷だった。

既に治った古傷である。

しかし、一体どんな物に傷つけられればこんな風になってしまうのか。平和な日本に住む人間には見慣れない、異様に目立つ傷だった。その傷が、整った顔に言い知れない『凄み』を持たせてしまっている。

口元を結んだ引き締まった表情に、使い込まれた刀のような鋭さと冷たさを印象付けるのだ。

その女の外見や印象からして争い事が原因のようにも思えるが、一般的なナイフなどの刃物でつけられるような傷ではない。

——何かの事故に遭ったのだろうか。

——それとも、やはり喧嘩か。

——まさか、獣か何かにでも襲われたのか。

すれ違う通行人達は、勝手な想像を働かせながら、心なしか忌避するようにその女から遠ざかっていった。

そして、当の本人は向けられる好奇の視線に気付いているのかいな
いのか、無言で歩を進めていくのである。

やがて女が辿り着いたのは、広い公園だった。

設備が整っており、真ん中の大きな池には遊具としてボートまで備
えている。

やや傾いた午後の陽光が注ぎ、地面に、木の間から洩れた光の斑模
様が出来ている。

入り口から中に足を踏み入れれば、それを境に街の喧騒から抜け、
公園の外側とは違った時間が流れているような、ゆったりとした空気
が満ちていた。

人の数が減り、居るのは老人や子連れの子親子ばかりである。

穏やかな空間の中で、女に向けられる好奇の視線はずっと少なく
なっていた。

公園に入って池の方へ向かうと、丁度木陰になるような場所にベン
チが幾つも設置されている。

その内の一つに座っている人物の元へ、女は歩いていった。

座っているのは、まだ幼さの残る少女だった。

男っぽい服装をしている女と比べて、如何にも女らしいワンピース
とカーディガンの組み合わせを着ている。

少女の細い体つきと端正な顔立ちも相まって、歳相応に可愛らし
い。

涼しげな表情で両手で持った本に意識を集中しており、近づいてき
た女には気を留めていない。

その少女の隣に、女は無言で腰を降ろした。

一つのベンチに二人が座るのは、奇妙な組み合わせに感じられる光
景だった。

外見から推測する年齢からして、親子か歳の離れた姉妹のようにも
見える。

しかし、体格はもちろん、顔立ちも全く似ていない。

このチグハグな二人の関係を不審に思う人間は、幸運なことに周り
にはいなかった。

「ああ、どうも。ご苦勞様」

女が何かを言う前に、少女は視線を本に落としたまま相槌を返した。

唐突な反応を、こちらにも気にした風もなく、女が袋の中身を取り出す為にポケットから手を抜いた。

異様な手だった。

手の甲も平も傷だらけである。

指に至っては一度切断してから、また繋ぎ直したかのような有様だった。

骨折を何度も経験したのか、形も歪んでいる。

しかし、その見た目が痛ましい印象を与えるかというところではない。

無数の傷の下にあるのは、丸みを帯びた岩のような拳だった。

折れて、治ることを繰り返した結果太くなった骨を、引き締まった肉で包み、その上から分厚いゴムのような皮膚で覆った拳。

その表面を最後の仕上げとばかりに、まるで彩るように古傷が走っているのである。

一体どういう過程でこんな傷がついたのか、常人にはもはや想像すら出来ない領域にある手だった。

もしも、この両手をポケットに隠して歩いていなければ、顔の傷以上に入目を引いただろう。

どんな仕事をすれば、こんな手になるのか。

この手は、どんなことをする為に作られた手なのか。

見る者に強い好奇心と畏怖を抱かせるようなその手は、何のことはないコンビニの袋を開いた。

袋の中を検めながら女は口を開きかけ、

「オレンジジュースの方を下さい」

少女が先を制するように答えた。

女はまだ一言も喋っていない。

果たして、袋から出て来た物はオレンジの缶ジュースだった。

しおりを挟んでページを一旦閉じた少女は、それを受け取った。

受け取ってから、睨むようにじっと見つめる。

観察するように、何の変哲もない缶ジュースを様々な角度から見つめた。

やがて、少女は呟いた。

「……どうやって開けるんですか？」

神妙な表情で尋ねる少女に対して、様子を伺っていた女の仏頂面が僅かに綻んだ。

その微笑ましげな反応に不快そうに眉を顰めながらも、少女が無言で缶を差し出し、女がそれを受け取る。

タブを引っ張って口を開けてやると、缶を再び少女に返した。

「どうも……」

少女は恥ずかしそうに、缶に口をつけて中身を啜った。

それを確認して、女の方も袋から自分の分の飲み物を取り出した。

こちらは瓶に入った炭酸飲料である。飲み口も捻って開けるキャップ式の物だ。

女は、その瓶を何故か逆さまに持った。

そして、空いた手で瓶の底を握り、捻ったのである。

本来、そうして開けるべきキャップの部分は下の方にある。

しかし、ビキツというガラスが罅割れる音を立てて、瓶は開いてしまった。

握っていた瓶底の部分が、元々そういう構造になっていたかのよう
に、綺麗に外れてしまっていた。

底の無くなった瓶の中身を、女は喉に流し込み、一息で飲み込んだ。

その一連の流れを、傍らの少女は驚いた風もなく、むしろ何処か呆れたように眺めていた。

「……炭酸一気飲みして喉が痛いって、アホですか」

「――」

「ノリで漫画の真似なんかするからです」

少女は呟いて、オレンジジュースを一口飲んだ。

女が大きくゲップをして、涙目になりながら痛む鼻を押さえているのを横目で見ながら、もう一口飲んだ。

缶を片手に、ぼんやりと目の前に広がる光景を眺める。
公園の池で釣りをする老人や、ボートに乗って遊ぶ親子連れが見えた。

空は青く澄み渡り、飛行機雲が一筋伸びている。
遠く聞こえる街の喧騒。

車の音。

多くの人の声。

——全て少女にとって馴染みのないものだった。

見たことのない風景。

聞いたことのない音。

そして、初めて経験する世界。

空の広さだけは何処までも変わらないのに、この公園でも感じる息苦しさ。狭苦しさ。

その少女——古明地さとりにとって、何もかもが不可解で理不尽に感じられた。

疲れたようにため息を吐く。

「……何故、こんなことになってしまったんでしょうね？」

「分からん」

さとのりの呟きに答えたのは、傍らで同じように懽然と目の前の光景を眺めていた先代だった。



「霊夢よう——」

博麗神社への階段を登りながら、萃香はぼやいていた。

その声を向ける相手は、実際には目の前にいない。

今、向かっている先で待っている霊夢に対して独り言として呟いたのだ。

「鬼に使い走りさせるなんて、お前さんくらいのもんだよ」

萃香は大きな風呂敷包みを背負っていた。

見た目は子供程度の体格しかない萃香と同じくらいの大きさの荷

物である。

しかし、見た目ほど重い物でもない。

風呂敷の中身は二組の布団だった。

「おおい、れいむー」

階段を登りきった萃香は、境内を通って、縁側の方へと辿り着いた。

丁度、床の拭き掃除を終えた霊夢が顔を上げる。

「ただいま」

「おかえり」

返事をしてくれる霊夢に、少しだけ機嫌が良くなる。

いつでも神社に帰ってきた時に必ず交わすこのやりとりが、萃香は好きだった。

「布団は手に入った？」

「うん。でも、これ売れ残りの古い品物だつて言つてたよ」

「タダでくれるつて言うんだからいいじゃない」

萃香の背負っていた布団は、人里の布団屋から貰ってきた物だった。

事前に霊夢が交渉し、今日それを萃香が取りに行ってきたのだ。

「霊夢つてば、どういう交渉をしたんだか？」

「商売じゃなくて、あの店の人の厚意よ。博麗の巫女だからね」

「そういうえば、この神社つて金つ気が全然ないけど生活に不自由してる様子ないよね。巫女つて、そういう特権があるの？」

「権力じゃないわ。さっきも言つたけど、里の人達の厚意よ。買い物でおまけしてもらつたり、余分に採れた野菜やお肉をくれたりね。まあ、特別な妖怪退治の時なんかは報酬をお金で貰つたりもするから、金銭に無縁の生活をしてるわけじゃないけど」

風呂敷を広げると、霊夢は早速その布団を干し始めた。

物干し竿には、既に二組の布団が掛けられている。

持ってきた物を含めると、四人分の布団が並ぶ形になった。

博麗神社に住んでいるのは、霊夢と居候という形の萃香の二人だけである。

その萃香にしても、何の前触れもなくフラリと出掛けて夜にいない

ことが多く、いたとしても屋根の下で眠ることはほとんどない。

実質、布団を使っているのは霊夢だけだった。

「それにしてもさあ、何で四つも布団が必要なんだい？」

日の光に晒される布団を眺めながら、萃香が疑問を呟いた。

「今日は先代が泊まりに来る日だって言うのは知ってるよ」

月に一度、霊夢の元へ母である先代巫女が訪れる習慣は、今も続いてきた。

それを萃香も事前に聞いている。

「それでも元からあった二組の布団で間に合うだろう？」

「もう一つはあんたのよ。感謝しなさい」

「ええっ!? いや、ありがたいけど……でも、普段は二つ目の布団を使わせてくれなかったじゃん」

「あれは母さん専用のだから駄目」

「霊夢は優しいのかケチなのか分からんね」

「優しさに決まってるでしょ」

平然と言い切る霊夢を見て、萃香は無言で肩を竦めた。

磨かれたばかりの縁側に腰を降ろして、仰向けに寝転がる。

水の乾き始めた床が冷たく、気持ちよかった。

「じゃあ、最後の四つ目は？」

「母さんが連れてくる客も含めて、四人分よ」

「なるほどー」

答えながら、霊夢も縁側に腰を降ろした。

小さな柱を挟んだ、萃香のすぐ隣である。

いつの間にか、二人にとってこの近い距離が当たり前になる程度に親しくなっていた。

「霊夢はさあ」

「うん？」

「お邪魔虫が二人もいて、煩わしくないの？」

「邪魔虫って？」

「だからさあ、折角の親子水入らずなんだから、わたしとその客っていうのはいない方がいいんじゃないかってね」

「気を遣いすぎよ」

霊夢は苦笑した。

共に生活していて気付いたことだが、この鬼は意外と細かい気遣いをしてくる。

「あたしは、もう子供じゃないんだからさ」

霊夢は答えた。

無理はしていない。

自然と口から出てきた答えだ。

そんな霊夢の横顔を寝転がりながら眺めていた萃香は、やがて間にある柱の方へ視線と興味を移した。

「気になってただけどき、この柱の傷って何？」

縁側の屋根を支える柱には、小さな横一文字の傷が何本も刻まれていた。

博麗神社は、何代もの巫女が住み続けた古い建物である。

柱に留まらず、建物の傷自体は珍しいものではない。

しかし、縁側に立つ何本かの柱の内、萃香の見る柱にだけ、この小さな傷が何本も集中して付いているのだった。

老朽化などの自然に出来たものには見えない。

誰かが刃物で故意に何度も傷つけたような跡だ。

しかも、丁度目盛りのように、縦に一定の幅を取って刻まれている。

その不自然さが、萃香の目に留まったのだ。

「ああ、それね」

萃香と同じものを見た霊夢は、口元を綻ばせた。

「それは昔、母さんがつけた傷よ」

「先代が？」

「そう。あたしがまだ小さな子供の頃にね、柱を使って背の高さを記録してたの」

「記録って……何の為に？」

「母さんは『成長の記録だ』って言ってたわ」

「背の高さを測るだけなら、わざわざ家の柱を傷つける必要ないんじゃない？」

「あたしもそう思った。でも、母さんがこだわってたのよね」

「そりやまた何で？」

「さあ、分からないけど——」

霊夢は立ち上がった、柱と向かい合った。

柱の傷は、霊夢の身長と比べると腰の辺りに集中している。

「ここが十年前のあたし。ここが九年前のあたし」

その傷を下から一つ一つ指で順番に確かめる。

「こうして、昔の自分の背の高さを確かめると、なんか嬉しくなるのよね」

霊夢の顔には、綻ぶような小さな微笑が浮かんでいた。

わざわざ柱に傷をつけて背の高さを測る必要性と、それにこだわった母の真意は、今でも分からない。

しかし、かつて抱いていたその疑問は、今はもうほとんど薄れている。

今更、母に尋ねようとも思わない。

そういうものだと思う。

これはこれで、悪くないと思う。

必要があつたのかは分からないが、意味はあつたのだと霊夢は一人で納得していた。

成長し、柱の傷を見るたびに、それを実感するのだ。

「……そっか」

霊夢の言葉で説明出来ない心境を、浮かべる表情を見るだけで、萃香もなんとなく察した。

成長する人間とは違い、妖怪である萃香に霊夢と共感することは出来ない。

しかし、別のことならば分かる。

「霊夢にとつての財産っていうのは、金でも物でもなく、この家そのものなんだなあ」

萃香は納得するように頷いた。

そして、にんまりとした笑みを浮かべた。

「霊夢ってば世捨て人みたいな雰囲気があつたけど、ちゃんとそう

いった人間らしい執着や愛着が残ってたんだねえ」

「それって褒めてんの？」

「もちろん！ なんだい、可愛いところあるんじゃないか」

「……なんか腹立つわ」

「怒るな怒るな。茶化したように聞こえたなら、許しておくれよ。」

わたしはね、妖怪退治をする時は情け容赦ない鬼みたいな霊夢の、母親が関わった時に見せるそういう普通の人間みたいな一面が好きなんだよ」

「あつそ」

ニコニコと笑う萃香の告白を、ただ単にからかわれていると判断した霊夢は、素っ気無く切り捨てた。

執着や愛着といったものは、自分自身ではよく分からない感覚である。

萃香の言う通りかもしれないし、勘違いかもしれない。

確かなことは、自分がこの神社を好きだということだけだった。

少し畳の荒れた居間を見れば、母から様々なことを学びながら過ごした日々が思い出せて好きだった。

葉の落ちた境内を見れば、母が箒で掃除をしている後ろ姿が思い出せて好きだった。

使い込まれたちやぶ台を見れば、母と一緒にした食事の味を思い出せて好きだった。

自分の靴だけが置かれた玄関を見れば、母が出て行った時の寂しさを思い出せて好きだった。

この場所には、自分の大切なものが詰まっている。

そして、いずれ新しい自分の家族と過ごすかもしれない未来もここにあるのだ。

——霊夢にとっての財産っていうのは、この家そのものなんだなあ。

財産というものについて、よく分からなかった。

人生の中で積み重ね、大切に守って、最期には誰かに託すもの。人によって、それは金だったり、物だったりする。

そのいずれにも執着しない霊夢にとって、財産という概念は理解し辛いものだった。

しかし、萃香の言葉が、今はすんなりと納得出来る。

確かに、この神社は自分にとって掛け替えのない財産なのかもしれない。

母から受け継ぎ、大切に守っていくものなのだ。

「萃香」

「なに？」

「ありがとう」

「うん？ まあ、どういたしまして」

よく分かっている萃香の適当な相槌を聞いて、霊夢は一人苦笑した。

家族と言えば、この奇妙な居候も今は家族なのかもしれない。

萃香とはこれまで互いに気の合った時だけ共に食事をする程度だったが、今度からはこちらからちよつと誘ってみてもいいかもしれない——と、霊夢は考えていた。

他愛もない時間だった。

掃除を終え、布団も干し終えて、準備を済ませた後は母と客人の来訪をただ待つだけである。

「そういえばさあ」

二人して縁側でぼんやりとしている中、再び萃香が口を開いた。

「先代が連れてくる四人目って誰？」

霊夢は答えた。

「古明地さとり」



「ふうむ」

さとりは書斎で一枚の紙を睨んでいた。

この部屋では、普段は地底管理の為の事務を一人で行っている。書類を書いたり、逆に届いた書類を検分したりする為の部屋だ。

しかし、今さとりの手元にある紙に書かれているものは文字ではなかった。

人物の全身像を描いた絵である。

さとりがインクとペン一本で描いたラフ画だった。

「上手い……のかな？」

自信がなさそうに、さとりは呟いた。

そもそも『上手い』と『下手』の境界もよく分からないのだ。

この幻想郷においては見慣れない性質の絵だった。

絵の描き方には様々な種類があるが、さとりの描いた絵のタッチは描いた本人すら見たことがない。

言うなれば——『漫画的』なイラストと称すべきものである。

さとりは手元の絵以外に、机の上に置いた他数枚の紙を順に見つめた。

いずれも描かれている内容は人物画であり、それぞれモデルも違う。

しかし、同じ漫画的なタッチで描かれたイラストという点は全て共通している。

さとり自身が手慰みとして始めて、ここ一時間ほどで描き上げた作品達だった。

一通り完成した絵ではあるが、それらを見ても自画自賛はもちろん、完成度への納得も不満も感じない。

よく分からない、というのが本音である。

さとりがこういった絵を最初に描き始めたのは全て他人——具体的には先代——の影響によるものだった。

発端は、以前先代が地霊殿を訪れた時の話だ。

リアルシャドールとかいう、ワケの分からないとんでも修行を見せてもらった後、部屋でなんかグダグダしていた時の話である。

『うめえ！ さとりん、絵めっちゃうめえ！ 漫画家になれるんじゃない?!』

思い出すことすら出来ないほどどうでもいい切っ掛けで初めて描いた絵を、先代は大げさなくらい褒めまくったのである。

もちろん、心の声で。だからこそ、本心で褒められすぎて恥ずかしいくらいだったのだが。

今のところ、絵の評価は先代からしか聞いていないので、客観的な評価として本当に上手いのかどうか自信はないが、描いた題材が先代には特にウケたらしい。

具体的には、先代の記憶から見た漫画のイメージをそのまま紙に描き移したのだ。

それまで脳内で思い浮かべるしかなかった漫画が、実際に描かれた紙を見て興奮したらしい。

イメージだろうが実際の紙だろうが内容は同じだろうとさとりは思ったが、先代にとっては大いに違うようだった。

とにかく、凄いはしゃぎっぷりだったのだけは覚えている。

それをウザイと思いつつも、手放しで褒められれば悪い気もしない。

さとりは先代にさせられるまま、何枚も絵を描き——そして、現在に至る。

当時の妙なノリは冷めたが、暇が出来た時、気がつくとも手元で絵を描いていることが多くなった。

別段、絵を描くのが好きになつたわけではないし、趣味にするつもりもない。

言うなれば、何かを確かめる為に描いている。

何を確かめるつもりなのかは、自分でもよく分からない。

本当に自分の絵が上手いのかどうか、気にはなる。

さとり自身はただイメージを紙に投影して、忠実にインクで線をなぞっている程度の感覚なので、あまり馴染みのないタッチの絵を改めず珍しく感じるというのもある。

しかし、また別の考えも最近浮かぶようになってきていた。

「これが、先代の記憶にある『私達』なのよね……」

漫画的な。

アニメ的な。

あるいは——ゲーム的な。

さとりは先代の記憶にある『東方Project』と呼称されて、世にゲームとして広まっている世界観に思いを馳せた。

世とはいっても、今自分が住むこの幻想郷ではない。

そして、おそらくこの幻想郷を一部とする外の世界そのものでもない。

言うなれば、異世界だ。

だが、しかし——『こことは異なる世界』とは、一体どういうものなのか？

ある町とある別の町ではなく、地上と地底でもなく、天国と地獄と違うでもない。

真に『異なる世界』だ。

先代の言葉を借りるならば『二次元』と『三次元』だ。

先代の心から初めて読み取った時、分析や考察を放棄した疑問が、こうして絵を見ていると自然と大きくなってくるのである。

——妖怪は人間の幻想から生まれる存在だと、自分は先代に説明した。

——幻想を現実的に考察することが、無駄だと切り捨てた。

——それで自分は納得していたし、今でも疑問はない。

——しかし、こうして見ていると考えてしまう。

——先代が『この世界』に来るまで、彼女にとって私達の存在は『この絵』と同じだったのだ。

紙に描かれた絵を見ていると、思考の渦に囚われていく。

こうして、自分が何気なく描いた人物の絵は、ただ紙とインクで構成された存在である。

その表現だけで完結する存在だ。

絵であり、モデルとなった人物そのものではない。

この絵の人物に個性があり、意思があり、ましてや生きる世界があるなどと普通は考えない。

しかし、自分は生きている。

自分以外の者も生きている。

生きる世界は、幻想郷として確かに存在している。

ならば――。

「世界とは、一体何なのかしら？」

さどりの独白は、誰もいない部屋の空気に溶けて消えた。

コンコン、とドアを叩く音が聞こえる。

ノックの音を聞いて、さどりは我に返った。

別段見られて困る物ではないが、慌てて手元の物と机に並べた絵を纏めながら、返事をした。

「誰ですか？」

「妖夢です。そろそろお出掛けになる時間になりましたので、お知らせに参りました」

扉越しに応えたのは、ここ数ヶ月間地霊殿に住んで、すっかりさどりの世話が身についた妖夢だった。

ドアを開けなかったのは、さどりが入室許可を出さなかった為である。

許可を出さなかった理由は特になく、単にさどりがうっかりしていただけだったが、妖夢は勝手に開けるような真似はしなかった。

元々、白玉楼で幽々子の世話をしていた為か、主人に対する礼節を十分過ぎるほど弁えている。

彼女が地霊殿で働くようになって、役に立ったことはあれど、問題を起こしたことは一度もない。

「あ、ああ……はい。今行きます。ありがとうございます」

「いえ。荷物は、既に玄関へ移動させておきました」

「……どうも」

静かにドアの前から妖夢の気配が立ち去るのを感じて、さどりはため息を吐いた。

妖夢の働きに問題があるとすれば、さどり自身がいつまで経っても慣れないことだった。

なんというか、真面目すぎるし、仕事も出来すぎるのだ。

ペットの世話をすることはあっても、誰かに世話をされることのないか、さどりに、妖夢は手に余る存在だった。

お隣などはペットの中で一番自分の役に立ってくれているが、本格

的な従者などこれまで傍に置いていた経験がない。

最初に妖夢を拾った時は、厄介事になると予感した。

予感は、すぐに現実になった。

事がひとまず過ぎた後で、自分の行動を深く後悔した。

妖夢の存在を煩わしくも思った。

そして、それから更に時が経って、現在は――。

「このままじゃ拙いっていうのは分かっているんだけど……複雑な気分ね」

さとりは、ぼやくように呟いた。

纏めた絵を手に持ったまま、椅子から立ち上がる。

今日は、妖夢の言ったとおり出掛ける予定があった。

地上へ、しかも一泊してから帰る予定なのだ。

今更ながら、非常に気は進まないが、もう決まってしまうことなのだから仕方がない。

さとりはもう一度、面倒そうにため息を吐いた。

部屋を出る前に、手元の紙をクシャクシャに握り潰すと、ゴミ箱に放り投げた。

絵を眺めていた時に浮かんでいた様々な考えは、その時にはスツキリと頭の中から消えていた。



「失礼しまーす」

誰もいないと分かっているながら、つつい口に出してドアを開けてしまう。

主のいなくなったさとりの部屋へ、お隣は足を踏み入れた。

さとり当人が地霊殿を発つてから、数時間後のことである。

部屋に入ると、台車に載せてきた籠に、ゴミ箱の中身を放り込んだ。

定期的に地霊殿のゴミを収集して、処分するのはお隣の仕事だった。

部屋自体の掃除は、几帳面なさとりが小まめに行っている。

今日もまたいつものように、お燐はゴミを回収して、さっさと次の部屋へ行こうとした。

さとりの書斎のゴミは、仕事に関係する重要な書類も多い。

廃棄する書類を見てはいけけないとは言われていないが、お燐は興味本位で余計なことをしない分別と主人への敬意をしっかりと持っていた。

故に、それは偶然だったのだ。

台車を押そうと、ふと視線を落とした時に、乱雑に混ざったゴミの中でその絵を見つけてしまったことは。

普段は、自分の頭ではよく理解出来ない文字の塊である書類のゴミばかりだったせい、その絵は妙にお燐の目を引いた。

「これって……あたいかい？」

クシャクシャになった紙を広げてみれば、そこに描かれているのを見たこともないタッチで描かれた人物の絵だった。

しかも、特徴からして自分をモデルにしたものだとお燐は察した。

「ええつ、さとり様って絵を描くの!? うわあ、意外……」

思わず、じつと見入ってしまう。

「しかも上手い。もったいないにやあ、さとり様っては何で捨てちゃったんだろう？」

初めて見るタイプの絵だったが、お燐は一目で気に入ってしまった。

お世辞ではなく、本音で上手いと感じる。

自分をモデルに描いてくれたという点も嬉しい。

一纏めにして丸められていた紙を解して、他の絵も見てみると、いずれもお燐の知っている人物が同じように描かれていた。

勇儀はともかく、ほとんど親交のない橋姫や土蜘蛛の絵が描かれているのは不思議だったが、どの絵も上手く、お燐は仕事も忘れてその場で見入ってしまった。

さとりの意外な特技に感心しながら、同時に全く別の理由でも嬉しさを感じていた。

安堵にも近い嬉しさである。

先代巫女と関わって以来、主人に漠然と抱いていた不安が心の中から消えていった。

「へへっ、今度さとり様に頼んで、あたいの絵を新しく描いてもらおうかな？」

さすがに、さとりの捨てた物を勝手に貰おうとは思わなかった。

もったいないが、この絵はこのまま処分しよう。

後で、さとり本人に訊けばいい。

そんな風に考えながら、最後の絵を見た時だった。

「え——」

お燐の思考は凍りついた。

「これって……お空？」

お燐の呟きは、不確かな疑いを含んだものだった。

ここまでの絵は、全てお燐とさとりが知る共通の人物ばかりだった。それが一目で分かるほどに、上手く描けていたし、よく似ていた。

今、見ている絵も、人物の特徴からしてお空のものでまず間違いない。しかし、その絵は『似ている』『似ていない』といった判断基準を別にして、お燐の知るお空の姿とは異なる点が複数存在したのだ。

お空の背格好が、今よりも大きく成長したものだというのは、まだいい。しかし、右腕の肘から伸びる巨大な棒は一体何なのか？

右足が溶けた鉄の塊のように変質しているのは何故なのか？

左足を覆う、得体の知れない物体は？

そして、胸の中央で開かれた不気味な一つ眼が意味するものは——

「えっ、何……これ？」

お燐は震える手で口元を覆った。

異形に描かれたお空の姿。

自分の親友が、主人の目にはこのように映っているというのか。消えかけていた不安と恐怖が、再び蘇っていた。

敬愛する主に対する、抱いてはならないはずの畏れである。

「さとり様……う？」

お隣の継るような言葉に、応える者は当然いない。

さとりが何を思っただけを描いたのか、知るのが不安だった。

さとりがお空に対して何を考えているのか、知るのが怖かった。

しかし、もはや無視することは出来なかった。

主人がその胸の内に一体何を思い描いて日々を過ごしているのか、全く分からない。

この時期に突然地上へ向かったさとりの真意が、お隣は急に気になり始めていた。

「さとり様は、一体何をするつもりなの——」

◇

「具体的に何をするかという点、一言で表すならば『女子会』だ」

「……はあ。まあ、呼び方なんてどうでもいいんですけど」

もしくは『パジャマパーティー』でも可！

要するに、神社に泊まって皆でキャツキャツウフフってしましように話なわけよ。

一晩経てば、あら不思議！ 地霊殿と博麗神社は、もうご近所さんも同然って寸法さ。

「そんな理想的な展開になりますかね？」

……さとり。そんな消極的じゃ、上手くいくものもいかないよ。

人との関わりは、大抵自分の気の持ち方次第なんだ。

「でもねえ、私って色々誤解されていますし。誤解抜きにしても、嫌われ者ですし……」

言い訳してるんじゃないですか？

出来ないこと、無理だって、諦めてるんじゃないですか？

駄目だ駄目だ！ 諦めちゃ駄目だ！

出来る！ 出来る！ 絶対に出来るんだから！

もつと熱くなれよ……!!

熱い血燃やしてけよ……!!

人間熱くなつたときが、ホントの自分に出会えるんだッ!

だからッ、ネバーギブアップッ!!

「いや、人間じゃないですし……っというか熱っ!? え、何これ本当に熱く感じる!? ちよつと、一人で盛り上がるの止めてください!」

おつと、さとりを前向きにする為に炎の妖精にあやかっていたら、興奮しすぎてしまったようだ。

落ち着く為に深呼吸をして、私は隣を歩くさとりから心なし距離を取った。

しかし、今回の件に関しては何よりもさとりのやる気がなければ始まらないのも事実なのだ。

提案したのは私だし、お膳立てもするけど、結局霊夢と上手く親交を深められるかどうかはさとり自身に掛かっているんだからね。

「分かっていますよ。わざわざ地上まで来たんです、折角の機会を無駄にしては帰れません」

さとりの返答に、私は頷いた。

——私とさとりが一緒に向かっている場所は、博麗神社である。

目的は『神社に一泊する』というだけの、地底に住むさとりにすれば一泊二日の地上旅行みたいなものである。

ぶつちやけ、それ以外に何かすることは無い。

私も月一の訪問に合わせて霊夢の様子を見る為同行するので、博麗神社に私とさとりと霊夢と、もし居るのなら萃香も合わせて四人が一緒に一日過ごすことになるだろう。

そのことに一体何の意味があるかというところ——それはさつきも言ったとおり、さとり次第となるのだ。

そもその始まりは、さとりから相談されたというか愚痴をこぼされたというか、とにかく彼女の抱える問題を聞いたことからだ。

さとりは私に『一部の権力者からの嫌われ具合と誤解のされ具合がヤバイ』といった悩みを話してきたのだ。

『先代のせいで』が抜けてます。もしくは『先代の仕業で』が

……それ、重要?

「すごく重要です」

いや……でも、私が原因かどうかなんてハッキリとは……。

「貴女と縁を切ったら、私の抱えている問題が半分以上解決しそうな気がするんですが、そっち試してみたいいいですか？」

私のせいで！ さとりんが紫や永琳とかから凄い誤解されちゃったから、それをなんとかしたいって相談されましたッ！

そして、私の出した解決案が『じゃあ、まずは他の権力者と仲良くなつて誤解を解いてもらえばいいんじゃない？』といったものです！

——ま、要するに地上での友好関係を広めようという話だ。

その方法の第一歩として挙がったのが、さとりに対して偏見のない霊夢だったのである。

「博麗霊夢が候補として適切なのは認めます。

立場的に博麗の巫女というのは文句なしですし、彼女の性質ならば私に対する噂や先入観などに囚われることもないでしょう。貴女を慕ってますから、初対面やその後の交流でフオーも入れやすいですしね」

そういえば、何気にさとりってば霊夢とは以前の宴会でちゃんと会話もしてなかったんだっただか。

「実際に言葉を交わす機会はありませんでしたね」

だったら、霊夢と知り合うという意味だけでも、今回のお泊りは有意義なものだと思うよ。

なんせ、さとりと霊夢は将来起こるだろう地底の異変で戦うことが決定している。

この時に同じ敵対関係であっても、初対面か顔見知りかっただけで大分状況が違ってくるだろう。

具体的に言うくと、うちの霊夢は知り合いが敵になっても容赦しないが、知らない奴が敵だったらもっと容赦しないと思う。

「確かに、親しくなっておいて損はしない相手ですね……」

上手くいけば、敵対そのものがなくなるかもしれない。

まあ、私としては、そんな損得勘定なんて抜いて純粹に霊夢とさとりには仲良くなつてもらいたいなあって思うけどね。

結果的に、それがさとりという人物を理解して、誤解を解くことに繋がるのだ。

「私としては、その打算の方を重視したいんですけどね。警戒されないように、わざわざ一人でやって来たんですから」

その『警戒されないように』って心構え自体が良くないんじゃないかな。

自然体でいいと思うよ。

さとりが私と付き合っている時のような普段通りの態度で、霊夢と接すれば、自然と分かり合えるはずだ。

「貴女には分かりませんよ。一方的に相手の心が見える会話というのが、どういったものなのか——」

さとりは、暗い笑みを浮かべながら俯いてしまった。

確かに私には分からない視点だ。

さとりが地底に潜り、その地底でも嫌われているのには、それなりの理由があるということなのだろう。

でも、だからといって後ろ向きに考えても仕方がない。

ここまで来たのだ。私も出来るだけ協力するから、さとりもこれまでの自分を変えるつもりで頑張ってみてくれい。

大丈夫！ だって、霊夢は私の娘なんだよ！

私はさとの肩にそつと手を置いた。

「……ええ、分かってます。貴女の善意と、娘さんへの信頼は痛いほど感じますよ」

そう言つて私を見上げたさとの顔には、先程とは違う笑顔が浮かんでいた。

うんうん、その調子だ。

難しく考える必要なんてない。

さつきも言つたように、これはつまり『お泊り会』であり『パジャマパーティー』であり『女子会』だ。

地上の管理者と地底の管理者が会議とかするわけじゃない。

一緒に食事して、お風呂入って、布団の中でなんか好きな子を教え合うようなお喋りをして夜更かししようぜって程度の話なのだ。

何も重要なことなんてない。

気楽にいこうよ。

霊夢と仲良くなってくれると私は嬉しいが、殊更それを意識する必要はない。

私だって、お膳立てだけじゃなく、さとりを加えた家族と一緒に過ごすっていうのは純粹に楽しみなんだからね。

かつて暮らしていたあの神社で、さとりに話してやりたい思い出話がたくさんあるんだ。

例えばね、霊夢がまだ小さな子供の頃の話んだけど、背の高さを

「はいはい、それは今夜ゆっくり聞かせてもらいます。

しかし、気楽なのはいいんですが……八雲紫に話を通さなかったのは、今更ながら良かったんでしょかね？」

うーん、さとりなら権力使って一人で地底から地上へ出られるしね。

立場的には紫と同等なんだから、許可云々って点なら問題ないと思うけど。

「また何か良からぬ企みか、と警戒されそうなんですが」

それって今更じゃね？

「……悲しくなってきましたね」

変な横槍とか妨害とかされたら、それこそ霊夢との交流に支障が出るかもしれない。

さとり自身や私が何を言っても紫の誤解を解けないっていうのなら、とりあえず霊夢と仲良くなつてから、第三者を挟んで改めて話し合った方がいいと思うのよ。

「それが一番ですか——見えてきましたね」

さとりに言われて視線を移すと、いつの間にか博麗神社の境内が見え始めていた。



「おおつ、本当に来た。霊夢の勘は凄いなあ」

何の前触れもなく神社の境内へ移動した霊夢を追ってきた萃香は、階段から見える来訪者二人を見つけて、感心するように頷いた。

石段をゆつくり登ってくる二人の内、最初に見えたのは背の高い先代である。

次に、遅れてさとりの小柄な姿を確認する。

珍しいものを見た萃香は、楽しそうに口笛を吹いた。

「古明地さとりが先代巫女と密通してるって話は本当だったんだねえ」

「なんか不穏な表現ね」

「周りはそう思ってるってだけだよ。二人とも偉い立場にいる者同士なんだし、何か勘繰りたくなるのも当たり前でしょ」

「母さんは、もう引退した身よ」

「十分過ぎるほど分かってるよ」

「あんたも現場の中心にいたんだしね。……母さんに喧嘩吹っ掛けるんじゃないわよ?」

「あの決着に後悔も未練もないし、禍根だつて残しちゃいないさ。遊びの決闘くらいならやってみたって気持ちはあるがね」

かつて死闘を演じた末に敗北した先代を前にしても、萃香はスッキリとした顔で断言してみせた。

正確には、先代と戦ったのはこの場にいる伊吹萃香ではない。

彼女の力と肉体を分けたもう一人の萃香である。

その半身の敗北と死によって、萃香の力と魂の半分は失われてしまった。

それが萃香自身に、具体的にどういった変化をもたらしたのかは常人以外誰にも分からない。

萃香がああ戦いを語る時、しみじみとした実感を見せることもあれば、他人事のように当時の心境を語ることもある。

少なくとも、現在の萃香が先代に対して良くも悪くも強い感情や執着を抱いていないことは確かなようだった。

霊夢は萃香の横顔をしばらく見つめると、やがて何かに納得したか

のように視線を母の方へ戻した。

二人は階段を登りきり、境内に足を踏み入れたところだった。そこから石畳の短い参道が、霊夢と萃香の待つ賽銭箱の前まで続いている。

「しっかし、今回のこと紫は知ってるのかい？」

先代が、霊夢達に向かって軽く手を振った。

「母さんがさとりを連れてくるっていうこと？」

さとりもそれに合わせるように手を振っている。

単なる挨拶のつもりなのか、愛想はない。

「そう。紫の奴、さとりに対して随分警戒してたみたいだからね」

霊夢は主に母に向けて、笑顔を浮かべながら手を振り返した。

「母さんは『親友だ』って言ってたわよ」

今度は言葉で挨拶が交わせそうな距離まで、ゆっくりと歩み寄ってくる。

「実際のところ、どういう奴なのか知るにはいい機会よね」

母が近づいてきたので、霊夢は萃香との話を切り上げた。

口を開く。

いつものように『いらっしやい、母さん』と言って、歓迎する。

そうしようとした。

その瞬間である。

「——母さんっ！」

霊夢の勘が、異変を察知した。

感じ取った絶対的な危機感を、霊夢は警告として叫んでいた。

現実に、それが起こったのは一瞬後のことだった。

地面が激震した。

地鳴りと共に、博麗神社に在るもの全てが揺れ動いた。

踏み締めていた大地が、唐突に崩壊でも始めたかのような凄まじい揺れである。

霊夢やさとりはもちろん、先代や萃香でさえ足元のおぼつかなくなるほど強大で、何より全く前触れのない突然の地震だった。

「な、何だこりゃ!?! くそっ、誰が揺らしてんだ!?!」

転倒を堪えながら、萃香が悪態を吐く。

霊夢は、それを間拔けな言葉だとは思わなかった。

むしろ、的を射ている。

一瞬の判断で空中に浮遊して地震の影響から逃れた霊夢は、冷静に状況を把握していた。

この地震は自然に発生したものは異なり、全く前兆がなかった上に、周囲の様子を見る限り博麗神社を中心とした一定の範囲のみを局所的に襲っているのだ。

萃香の言うとおり、明らかに人為的に起こされたもので間違いないかった。

何が目的なのかまでは分からない。

しかし、今も続くこの地震を止めるには、これを起こしている元凶をどうにかするのが一番手っ取り早い。

地震に襲われてからのほんの僅かな時間で霊夢の思考は素早く廻り、最適な判断を下していた。

更に状況を分析する為に視線を走らせる。

萃香も、霊夢を見て気付いたのか空中に逃げようとしている。

母を見れば、揺れに耐え切れず、地面に手をつけているが、少なくとも身の危険はない。

さとりが尻から転んでいるのは、まあどうでもいい。

見える範囲に敵の姿はない。

霊夢は更に視線を動かし——動揺に目を見開いた。

「神社が……っ！」

視界に映るのは、激しく揺れる博麗神社である。

まるで神社そのものを故意に狙っているかのような局所的な震動に、木造の家屋が嫌な音を立てて軋んでいる。

屋根の瓦が剥がれ、注連縄が千切れて落ちた。

その様は、博麗神社が苦痛に身を悶え、悲鳴を上げているかのようだった。

何もしなければ、すぐにでも神社は崩壊を始めるだろう。

「畜生！」

霊夢の口から、珍しい悪態が衝いて出た。

すぐさま持つている限りの札を放出し、神社全体に結界を張り巡らせる。

結界の完成度と、術を完成させるまでの速さは、その道の達人をして称賛するほどのものだった。

地震が建物に与える影響を、驚くほど相殺している。

しかし、それでも限界だった。

老朽化の進んだ木造建築物であり、何より建物は地面に根付いている。どれだけ周りを結界で固めようと、地震の衝撃は直に伝わってしまうのだ。

「萃香、あんたも手伝いなさいっ！」

霊夢は必死に叫んだ。

「何をしているの、霊夢！」

応えたのは、萃香ではなかった。

突如、空中からスキマを使って現れた紫だった。

異常を察知して、何処からか急いで駆けつけてきたらしい。

こちらも珍しい動揺と焦燥を顔に浮かべて、霊夢を鋭く睨んでいる。

神社を守ろうとする霊夢の行動と判断を、責めるような視線だった。

「紫！ 力を貸して！」

「この地震は何らかの霊的な干渉によって起こされているわ。実際の揺れよりも、博麗大結界への影響の方が重大なのよ」

「だから、こうして抑えてるんでしようが！」

「神社の方は諦めなさい。それよりも結界の方を——！」

「諦めるなんて、ふざけ——！」

紫と霊夢の意思はすれ違っていた。

博麗神社は、幻想郷と外の世界を隔てる博麗大結界の境目に建っている。

博麗の巫女が住む理由でもあり、重要な拠点であることに間違いはない。

しかし、この建物自体は結界の維持に必要な機能の一部ではないのだ。

神社の崩壊が、結界の破壊に直接繋がるわけではない。

故に、紫は結界を重視し、神社自体は軽視した。

その判断に対して、霊夢の認識は逆だったのだ。

しかし、口論は長くは続かなかった。

二人は同時に、更なる異変を察知した。

霊夢は紫の警告したとおり、博麗大結界に綻びが生じるのを感じた。

紫の扱うスキマとは違う、博麗の巫女にだけ分かる目に見えない『亀裂』のようなものが周囲の空間に走り始めている。

まだ深刻な段階ではない。

そして、おそらくこの地震の力で博麗大結界が破壊されることはない。

——その判断が、別に油断を生んだわけではなかった。

——しかし、ここに至っても尚、霊夢は神社を守ることに執着した。

結界の亀裂がほんの僅かに大きくなったのを目で追って、視線を移した時である。

未だに、その場から動けない母の姿が見えた。

丁度、その周囲の結界が小さく綻び始めているのも。

「——ッ！ 母さん、離れて!!」

霊夢は悲鳴のように叫んでいた。

自らの勘が、かつてない程の警告を発していた。

咄嗟に、結界の維持が中断するのも構わず、手を伸ばした。

しかし、近いと思っていた距離が、この一瞬ではあまりに遠すぎる。手は届かない。

代わりに、すぐ傍にいたさとりが先代の手を掴んでいた。

霊夢の心の叫びを聞いて、体が突き動かされたのか。

それとも、彼女自身も何らかの勘が働いたのか。

いずれにせよ、その行動は無意味な結果に終わった。

——靈夢の目の前で、先代とさよりの姿が何かに呑み込まれるように消失した。

靈夢は叫んだ。

今度こそ、紛れもない悲鳴だった。

靈夢の視線を追って、二人の姿が消える瞬間を目撃していた紫と萃香も驚愕に目を見開いていた。

何が起こったのか、その場の誰にも分からなかった。

しかし、目の前の現象に対して思考することはもちろん、反応さえする間もなく、最後に一際大きな地震の波が周囲一帯を襲った。

術の行使が中断された不完全な結界では、その最後の揺れを抑えることは出来なかった。

悲痛な音を立てて、博麗神社が崩壊する。

自分の住んでいた家が、そこに宿った思い出と共に崩れ去る音を背後で聞きながら、靈夢は呆然と見つめていた。

つい先程まで、母が居たはずの場所を。

今はもう、跡形もなく何処かへ消えてしまった母の姿を。



これでも山あり谷ありの長い人生、結構波乱万丈に過ごしてきたんだ。

物心つく頃には、妖怪の棲む山で放置プレイ。

普通の人生では触れることさええない、非現実的な鍛錬を実際にこなした。

いつの間にやら、岩を素手で砕けるようになったり、手から何か光るパワーを撃てる様になったり。

それを使って色んな妖怪とも戦った。

死に掛けたことも、一度や二度じゃない。

何よりも、『現実の世界からゲームの世界に転生した』という一番ぶっ飛んだ経験が、私の根幹には存在する。

ここに至って、私を心底驚かせるものなんて早々ないだろう。

——そんな風に考えていた時期が、私にもありました。

「う……っ、一体何が起こって……？」

背後でさとりの声が聞こえた。

私と同じように、少しの間気絶していたらしい。

私も目が覚めたのは、つい先程のことだ。

あの神社を突然襲った地震から現在。

私の気絶する寸前の記憶は途切れている。

地震が起こった。

そして、その後で何かが起こった。

何が起こったのかは分からないが、私はその影響で気絶していたらしい。

覚醒した私がまず感じたのは、頬に当たる硬い地面の感触だった。

そこで私はいつの間にか自分が気絶して、倒れていたことを知ったのだ。

最初は、当然のように混乱していた。

いや、今も混乱している。

状況を把握する為に周囲を見回すまでもなく、上半身を起こした私はその時点で異常を感じ取ったのだ。

つい先程まで激しく揺れていた地震が、今はすっかり止まっていることはまだ良いとして、問題は——。

「……なんですか、この地面は？」

さとりも、まず自分の足元に違和感を感じたらしい。

硬い感触は、土や砂で出来たものではない。

かといって、博麗神社の境内である石畳でもない。

多分、さとりにはソレが何なのかさえ分からないだろう。

私が教えてやりたいが、正直私も混乱気味で普段回らない口がますます上手く動かせない。

だから、さとり。

もし、出来るなら私の心を読んで察してくれ。

これはな——『コンクリート』っていうんだ。

「……何処なんですか、ここは？」

周囲を見回したさとりは、自分の居る場所が全く分からずに混乱しているようだった。

場所を判別する為の目印がないのだから、仕方がない。

ここには博麗神社の周りにあつた木が一本もない。

人もいない。

家屋もない。

そもそも今立っている場所以外に地面もない。

ここは高所に位置するのだ。見えるのは、頭上に広がる青空だけである。

その空を、一筋の不自然な雲が伸びている。

あれは『飛行機雲』だ。

「先代、何か言ってくれませんか」

「……聞こえないのか？」

歩み寄ってくるさとりに、私は尋ねた。

声が聞こえないほど距離が離れていたわけではない。

肩越しに振り返れば、徐々に不穏な状況を察してきたらしい、さとりは顔を強張らせていた。

「ええ、貴女の『心の声』が聞こえません」

その返答に、私は何も言葉を返すことが出来なかった。

逃げるように視線を前に、いや眼下に戻す。

私は今、コンクリートの地面が途切れた位置に立っていた。

私達の居る高所の境目だ。

落下を防ぐ為の鉄製の『フェンス』が、ぐるりと周りを囲んでいる。

見たこともない形の柵に恐る恐る触れながら、さとりは網目の隙間から私と同じように眼下を見下ろした。

「……何処なんですか、ここは？」

呆然と呟くさとりの二度目の問い掛けに、やはり私は答えることが出来なかった。

視界に映る光景が、理解出来ないわけじゃない。

ただ、言葉に出来ない。

そもそも信じられない。

さとり、落ち着いて聞いてくれ。

心が読めないって言ってたけど、とりあえず私自身が落ち着く為に聞いてくれ。

私達が今いるのは『ビルの屋上』だ。

そして、下に広がっているのは『市街地』だ。

「アスファルトの道路を走っているのは『車』と『バイク』で、石の柱は『電柱』で、川もないのに伸びている橋みたいなのは『ハイウェイ』だ。」

「何処なんですか、ここは……」

さとりが三度、力なく問いを繰り返していた。

混乱気味の私の頭でも、なんとなく、薄々、大まかに状況を把握し始めているが——でも、あえて言うぞ。さとり。

私にも、分かん。

っていうか……。

——なんじゃあ、こりやああああああああつ!!?

「やかましい」

あ、近づくと心が読めるのね。

其の四十一 「邪」

かつて博麗神社のあった場所は瓦礫の山となっていた。折れて積み重なった木材の上に、傾いた屋根が覆い被さっている。それが、以前は博麗神社と呼ばれていた物の全てだ。

倒壊した神社の前に、霊夢は立っていた。そのすぐ後ろでは、萃香と紫が向かい合って立っている。

「——なるほど。そういう経緯だったのね」

萃香から事情を聞いた紫は、静かに呟いた。

萃香と霊夢の二人が共通して知り得る、これまでの全ての事情である。

「先代の方からさとりとの同行を求めたというのは、間違いないのね？」
「少なくともわたし達は、先代から『当日さとりも連れて行きたい』っていう提案を聞いたよ」

「そう」

紫は短く相槌を打って、しばし沈黙した。

博麗神社を襲った異常事態に対して、紫が『古明地さとり』というキーワードに何かしら思うところ、含むものがあることは明白だった。

萃香としては、その疑念に何か口を挟むつもりはない。

その真意や本性を理解する前に、さとりは自分達の前から消えてしまった。

今回の出来事は、あのさとり自身にとつても予想外に降り掛かった災難のように思える。

いずれにせよ、何者かの手によって博麗神社は破壊され、先代とさとの二人が何処かへ消えてしまったのだ。

萃香は霊夢の方を一瞥した。

先程から倒壊した神社の方を向いたまま動かない霊夢は、丁度背中を向ける形になっている為、表情が見えない。

何を考え、何を思っているのかは分からなかった。

必死の抵抗も空しく、目の前でこれまで住んでいた家が壊され、母

親が消えてしまったのだ。

普通の人間ならば、ショックで茫然自失となつてもおかしくない。しかし、彼女は博麗霊夢である。

萃香は意味のない慰めの言葉を呑み込んで、再び紫に向き直った。「あの地震は明らかに普通じゃなかった。人間はもちろん、その辺の妖怪にだって出来る芸当じゃないよ」

「ええ、分かっています」

「ただ神社を壊すんじゃないくて『神社の真下に地震を起こした』っていうのが曲者だ。あんな芸当は、わたしにだって出来ない。多分、紫にもね」

「そして、その地震自体も単なる地面の震えではない」

「地震が起こった時にも言っていたけど、わたしには分からなかったことが紫には見えていたんだらう？ 結界が如何こうっていう話は、一体どういう意味があったんだい？」

萃香の問い掛けに、紫は少しの間沈黙した。

博麗神社を襲った事態に直面したのは紫自身を含む三人だけだ。

他の誰も、この異常事態を知らない。

——今のところは。

博麗神社の倒壊はもちろん、地底の管理者である古明地さとりと生きながら伝説とまでなった先代巫女の失踪という事件は、早ければ今日中にでも周知のものとなるだろう。

そこから派生する様々な影響を、紫は懸念していた。

古明地さとりには立場がある。

先代巫女には人望がある。

彼女達の周囲の者が少なからず混乱を起こすだろう。

事態への対処と同時に、情報も規制しなければならぬ。

紫は、萃香に対して何処まで情報を明け渡すか悩んでいるのだ。た。

「——あの地震は、幻想郷を覆う博麗大結界にも干渉していたわ」

悩んだ時間は僅かだった。

萃香を信頼出来る協力者として、紫は分かっている情報全てを教え

ることにした。

「神社と結界、どちらが本命の狙いだったのかは分からない。しかし、いずれにせよ犯人は最初から破壊目的である地震を起こしたのでしょうかね」

「それで、神社は見ての通りだけど、結界まで壊されちゃったのかい？」

「一部に綻びが生じた程度の損傷を受けたわ。もちろん、これに関しては修復が可能よ」

「そいつは良かった」

「良くはないわ。決して無視出来ない範疇の被害よ」

萃香は結界に関して門外漢である。

顎に手を当てて、小さく唸った。

「つまり結界っていうのは外の世界と幻想郷を隔てる壁で、今回生じた綻びってのはその壁の亀裂みたいなもんなんだろう」

「そう考えてくれて、構わないわ」

「うん。じゃあ、先代とさとりが消えちゃったのは、その亀裂から外の世界にでも飛び出しちゃったんじゃないのかい？」

萃香は深く考えず、自分の感じたままの意見を口にした。

二人の存在が消失した現象を『死』や『消滅』と捉えなかったのは単なる感覚による判断だったが、紫はそれを否定しなかった。

「二人が何処かへ飛ばされたという考えは、合っているわ」

紫は言葉を濁して答えた。

「紫にも何処へ飛ばされたのか分からないんだな」

「……今回の出来事は、不可解な点が多すぎる」

「そりゃもちろん、犯人の正体も目的もさっぱりなんだからね」

「それもあるけれど、起こった現象についてもよ。本来ならば、二人が何処か——可能性として一番高い外の世界としておきましょう——に、飛ばされるはずはなかった」

「……どういふこと？」

「結界の機能から考えて、異常が起こったからといって近くにある存在を外の世界へ弾き飛ばすような現象は起きないということよ。な

により、あの時生じた綻びはそこまで周囲に影響を与えるほど大きくはなかった」

紫は珍しく内心の困惑と動揺を表情として表していた。気心の知れた相手にだけ見せる油断である。

それが分かるだけに、萃香も紫が本当に状況を把握出来ていないのだと分かった。

事態は、予想よりもずっと深刻なようだ。

「じゃあ、それも地震を起こした犯人が先代達を狙って何かしたってことのなのかな？」

「いえ、むしろ原因は先代の方にあるような——」
「え？」

「——いえ。何でもないわ」

紫は途中まで口にした憶測を、自らの判断で遮った。

萃香に現段階で分かっていること全てを話す気持ちは変わらない。

つまり、これは分かっていることではないのだ。

知識のある自分にも分からないことを、知識のない萃香に話して、無駄に混乱を招くことを防ぐ為だ。

目の前で起こった現象とその分析を、紫自身も疑っていた。

——あの時、先代の近くに生じた結界の綻び。

——本来ならば、人体には何の影響も与えない程度の小さな亀裂。

——それが先代と重なった時『何か』が起こった。

——先代達が消えた時、小さかった亀裂は確かに周囲に影響を与えるほどに大きくなっていった。

——しかし、順番が違う。

——『亀裂が大きくなって先代を呑み込んだ』のではない。『先代が呑み込まれたせいで亀裂が大きくなった』のだ。

まるで博麗大結界が先代の存在を異物として吐き出したように見えた。

少なくとも、紫の眼にはそう映った。

だからこそ、在り得ない現象を見て、眼を疑った。

その通り間違いだった、と判断することは簡単である。

しかし、無視は出来なかった。

この地震は何者かが故意に起こしたものである。

そこは間違いない。相手の悪意すら感じる。

ただ、先代とさとりが消えてしまったのは、先代自身が原因となっているのかもしれない。

紫は拭いきれない疑念を、一先ず胸の奥に仕舞い込んだ。

「今は、とにかく問題の解決を急ぎましょう」

紫は指を二本立てた。

「現状の課題は三つ。結界を修復し、消えた二人を搜索し、今回の首謀者を退治する」

「じゃ、どれを優先する？」

「全部よ」

即答する紫に、萃香は満足気に頷いた。

私情を交えて、先代達の搜索を第一に考える甘さはない。

かといって、私情を殺して機械的に判断する冷たさもない。

萃香の一番好む解答だった。

しかし、一つ抜けている——と。

萃香は視線を霊夢と神社の跡地に向けて、表情を曇らせた。

「それと、代わりの神社を建ててやんなきゃ。今夜、霊夢の寝る場所がなくなっちまうよ」

言いながら、本当は代わりなどないのだと分かっていた。

霊夢から神社にまつわる思い出話を聞いたのは、家が壊されるほんの少し前だったのだ。

彼女は、目の前で大切な宝物を失ってしまった。

未だ無言のまま佇み続ける霊夢の後ろ姿が、痛ましくてならなかった。

「それは後回しよ」

しかし、紫は冷たく告げた。

抗議するような萃香の視線を無視して、霊夢の方に話を向ける。

「霊夢、貴女は今夜から私の家に住みなさい。結界の修復を手伝ってもらわ」

「二人掛かりなら、三日もあれば作業は完了するでしょう。それが終われば、貴女の好きにすればいい」

残る二つの問題——『首謀者を退治する』『先代ときとりを捜す』のいずれかを解決する為に動けばいい。

どちらを優先するのか、紫は暗に選択を迫っているのだった。

博麗神社の崩壊と結界の破損。

これは、もはや『異変』である。

その為に必要な行動は何か。

選択に義務はない。

しかし、紫は霊夢の判断を試していた。

萃香は何かを言いかけ、やめた。

冷たく感じる二人の關係に、口を挟む権利が自分にあるのか分からなかった。

紫と霊夢。

本来は間に先代を挟むことで穏便に成り立っている二人の關係が本当はどういったものなのか、知る者はいない。

「修復作業の為の準備をしておくわ。昼になったら迎えに来るから、それまでに貴女も準備を済ませておきなさい」

一方的に告げると、紫は返事も待たずにスキマの中へと消えていった。

後には、萃香と霊夢だけが残された。

萃香は困ったように頭を搔いた。

紫から何も言われていないが、長い付き合いの友人が自分に望んでいる役割は分かっている。

結界の修復について自分は全く手を出せないし、異変を解決するのは博麗の巫女の仕事だ。

そして、紫の霊夢に対する一方的な物言いに隠された真意も分かっていた。

紫は言葉のまま、霊夢に『準備』をする時間をくれたのだ。

「あのな、霊夢。紫は——」

「分かってるわよ」

それまで沈黙を続けていた霊夢は、あっさりと言葉を返した。

「話も全部聞いてた。萃香は自分のやるべきことをやって」

眺めているだけだった瓦礫の山に歩み寄っていく。

剥がれ落ちた瓦や折れた木材を踏み締めて、かつて居間があった場所へ辿り着くと、足元を掘り始めた。

無事な物を探し出す為だ。

陰陽玉などの異変解決に必要な道具と、そして出来れば私物を。

瓦礫をどけるのに手間は掛かるが、探すこと自体に大した問題は無い。

何処に何があるのか、手に取るように分かる。

例え潰れてしまっても、長年住み続けてきた家なのだから。

萃香は思わず手を伸ばしかけ、

「霊夢……」

すぐに自分に手伝えることなどないのだと悟って、手を下ろした

「わたしは、犯人を捜しにいくよ」

「頼んだわ」

「多分、すぐに見つかると思う。今回のやり口に、ちよつと心当たりがあるんだ」

「そう」

霊夢は相槌を返しながら、作業を続けていた。

一貫して背を向けた状態の為、表情は見えない。

萃香は霊夢の背中をじつと見つめた。

母親が目の前で消える瞬間に上げた悲鳴以来、胸の奥に隠したまま一度も見せようとしないう今の感情を押し量ろうとした。

何も感じないはずがない。

冷静であろうとしているだけだ。

一体、どれ程の精神力を浪費してそれを行っているのか計り知れない。

「霊夢は、前に『憎しみは何も実らせない』って言ったよね」
ぼそりと言った。

霊夢の動きが止まった。

「でも『酒で憎しみを追い出すんだ』とも言った。つまり、あの先代巫女でさえ憎しみを殺すことは出来なかったんだ。理不尽なことをされて、敵を憎く思ったり、悪態を吐きたくなるのは当たり前のことなんだよ」

「何が言いたいのか？」

「目の前で大切なもんぶつ壊されて、黙ってる必要なんてないってことさ」

「――」

「こんなことを仕出かした奴を、わたしは絶対に見つけてやるよ。もししたら、霊夢――」

「……何？」

「そいつを、どうする？」

萃香は尋ねた。

実際に、霊夢が犯人を前にした時どんな行動を取るかは分からない。

煽るつもりで、こんなことを言っているわけでもない。

ただ今は、胸の奥へ無理に押し込んだ悪態の一つでも吐き出して、それを聞いてやりたかった。

黙って待つ萃香に対して、霊夢は小さくため息を吐いた。

「難しいもんね」

依然、背は向けたまま小さく呟く声が聞こえる。

「憎しみが如何こうって悟ったように言っておきながら、自分が経験すればこの有様なんだから……」

「霊夢」

萃香は遮った。

自分自身を責めて欲しいわけじゃない。

「どうする？」

もう一度、尋ね直した。

霊夢が肩越しに振り返った。

初めて、その顔が露わになる。

霊夢の瞳を見た萃香の背筋に、冷たいものが走り抜けた。

「――殺すに決まってるでしょ」

鬼の萃香をして寒気を感じる程底冷えする声で、霊夢はそう答えた。

◇

広い空が頭上に広がっている。

青い空だった。

穏やかな雰囲気漂っている。

すぐ下にある街の様々な騒音が、ここでは遠く聞こえるのだ。

そうか……都会のぐしゃぐしゃから逃げたければ、ここに来ればいいんだ。

ここでは青空がおかずだ。

「現実逃避から戻ってきてください、ゴローちゃん」

……がーんだな、出鼻を挫かれた。

でも、さどりの言うとおりに現実へ戻ろう。

視線を上から前に戻すと、丁度さどりが私の差し出したおにぎりを食べ終えたところだった。

「ぐちそうさまでした」

「お粗末さまでした」

水筒を手渡して、代わりに空になったおにぎりの包みを受け取る。

空の包みを閉じて、すぐにもう一度開いてみた。

ある意味当然のことだが、開いた包みの中身は空のままである。

しかし、私は小さくため息を吐いた。

予想してたけど、この鬼からもらった素敵アイテム『減らないおにぎり』も機能を停止してしまっているらしい。

「仕組みは分かりませんが、神秘の力を源にしていることは間違いないですからね。『ここ』では機能しないでしょう」

うーむ、偶然手放さなかった手荷物の中にこいつがあった時は最低限の食糧問題は解決したかと思っただが、さすがに楽観が過ぎた

か。

私は包みを畳んで仕舞った。

もちろん捨てることなんてしない。こいつは博麗家の家宝だし、幻想郷に戻れば機能も回復するはずだからだ。

——さて、一息つけたところで改めて状況を整理しよう。

私とさとりが現在居る場所は、とある街のとあるビルの屋上である。

博麗神社で地震に襲われて、気がついた時にはここへ転移していた。

そして、周囲には明らかに幻想郷ではない近代都市の風景。

そう、私達はいわゆる『現代入り』をしたらしいのだ。

現代入り——それは幻想郷から外の世界へと転移することの通称である。

当初の動揺から立ち直ってこの結論を導き出すまで、さして時間や手間が掛からなかったのはひとえに当事者が私とさとの二人だったからだろう。

これが霊夢や魔理沙など、生粋の幻想郷の住人だったら状況把握までの混乱と迷走は避けられない。

私達だったから、ここまでスムーズに状況を理解出来たのだ。

生前は現代社会で生活していた（と思う）記憶を持つ私と、そんな私の心を読み続けて学習したさとりだからこそ——。

「とはいえ、だからこそ状況の拙さも嫌というほど実感するんですけどね」

水筒を私に返しながら、さとりは言った。

その表情はお世辞にも明るいものではない。

今後のことを考えて、その前途多難ぶりに頭を悩ませているのがよく分かった。

それは私も同じである。

「私達が『ここ』へ来てしまった理由や原因は、この際置いておきましよう」

「そうだな。もっと重要なことがある」

私は異を唱えることなく頷いた。

まあ、原因について心当たりがないわけじゃないんだけどね。それはさとりも心を読んで分かっているだろう。

この事態の発端が『地震』という点がミソだ。

原作の時系列的に考えて、まだ起こっていない異変の中で当て嵌まるものが一つある。

てんこちゃんマジトラブルメーカー。

しかし、少なくとも私の持つ原作知識ではこんな現象は起こっていないし、さどりの言うとおりの原因を分析したところで現状が打開されるわけではない。

これは、ひとまず棚上げしておく問題だろう。

「現在最優先で解決すべき問題は、『どうやって幻想郷に戻るか?』です。すね」

そして、一番大きな問題でもあるのよね……。

とりあえず、ここに至るまでに判明したものや整理した情報を挙げていくとしようか。

「そうですね。とにかく、分かっている情報を一つずつ確認していきましょう。何か新しいことや方針が見つかるかもしれません」

まずは、一番基本的な『ここが何処なのか?』という疑問だ。

幻想郷内じゃないことは、言うまでもない。

眼下の街の様子からして、少なくとも九十年代以降の——まあ、簡単に言うとも現代の日本の何処かの街って感じである。

私の前世の知識と照らし合わせて、それは間違いない。

ただ、ここで答えが二つに分かれるのだ。

——果たして、ここは『幻想郷の外の世界』なのか、それとも『東方Projectの外の世界』なのか?

この二つの世界が似ているようで決定的に違うものだということは、私もさとりも分かっている。

前者は、即ち幻想郷とは地続きの世界である。

博麗大結界によって遮られた、一つの世界にある二つの場所だ。

これだと話がシンプルになる。私達は何らかの拍子で結界から外

に出てしまった状態なのだろう。

しかし、もしも後者だった場合は、もはや完全な異世界である。

幻想郷という場所が『東方Project』というシューティングゲームの中に存在する二次元の世界なのだ。

これがややこしい。私達は言うなれば、画面の中から飛び出してきたゲームのキャラクターってことになる。

私が『現実から東方の世界へ転生してきた人間』という前例を持っている以上、この可能性も決して否定出来ないのだ。

今の段階では、ここが二つの世界の内どちらなのか判断がつかない。

そして、どちらであるかで解決すべき問題の内容が大きく変わってくる。

「それを確かめることが、まず一つ目のやるべきことですね」

さとりが冷静に結論を述べてくれた。

正直、その冷静さが私にはありがたい。

いや、ホント。さとりが一緒に居なかつたら、私もここまで冷静に物事を考えられなかつたと思う。

ここが現実の世界かもしれない、というのは最悪の可能性の一つだが、その可能性を考慮する余裕すら作れなかつただろう。

あの地震の時、気を失う一瞬前にさとりが私の手を掴んでくれたことだけはハッキリと覚えている。

多分、私達が幻想郷からここへ飛ばされたのはあの瞬間だ。

つまり、さとりは私に巻き込まれる形になってしまったのだろう。

厄介事に巻き込んでしまったと申し訳なく思う反面、不可抗力とはいえさとりが一緒に来てくれて本当にありがたいと思うよ。

「今回ばかりは貴女が元凶というワケでもないでしょう。貴女を責めなくても意味はありませんよ」

ごめんね。

ありがとう。

必ず、さとりを幻想郷に帰してみせるからね！

「はいはい、意気込むのはいいですから話を進めましょう。勢いだけ

で動いても事態は好転しませんよ」

さとりんマジクール。

でも、確かにまずは情報の整理を続けよう。

さて、もしここが『外の世界』であった場合は、幻想郷への帰還方法には幾つか心当たりがある。

地震の現場にいた紫が、全ての事態を察知して私達の場所を見つけ出し、迎えに来てくれるのを待つという消極的かつ楽観的な考えは捨てる。

座して待つ以外の方法の一つが『外の世界の博麗神社から帰る』という方法だ。

私の持つ原作知識によると、博麗神社は外の世界にも実在する建物である。

そいつを見つけ出して、なんとかかして辿り着けば『現代入り』とは逆に、幻想郷へと転移する『幻想入り』という形で戻れる……かもしれない。

でも、実際一番現実的な方法だ。

紫のような世界の境界を操る力なんて持たない私達が幻想郷との接点を得られる場所として非常に有力なのは間違いない。

ただし、ここで新しく問題になるのは『外の世界の博麗神社』をどうやって見つけるかってことなのよね。

当たり前前だけど、私は『外の世界の博麗神社』なんて知らないし、原作でも幻想郷の神社と違って『人目につかない所にあつて、荒れ放題の場所』って設定だったしね。

そもそも、もしもここが『現実の世界』だった場合、この方法は意味を成さなくなる。

ほとんどお手上げだ。私達自身が出来ることがもちろん、紫が無敵のスキマパワーで何とかしてくれるという他力本願すら難しいだろう。

あと、更に現実的な問題として現在地が何処なのか分からん。

街中なのは分かるけど、どの県のどの都市なのか細かい情報が分からないのだ。

よって、ここまで情報を整理した結果、まず必要なのは『現在地の把握』と出た。

色んな意味で、ここが何処なのか知る必要がある。

まず第一歩として、そこからだな。

「異論はありません」

私の結論に、さとりも頷いてくれた。

うん。まずは方法が現実的なものから、一つずつ片付けていこう。

例えば『ここが現実の世界だった場合の帰還方法』など、全く目処の立てられない場合もあるが、それも現段階では可能性の問題だ。と
りあえず、後回しにしておこうと思う。

そして、次は状態の確認だ。

さとり、ぶっちゃけ体調の方はどう？

隠す意味なんてないと思うけど、正直に話してくれ。頼む。

「心配してくれて、ありがとうございます。でも、大丈夫ですよ。特に体調が悪いということはありません。幻想郷にいる時と同じような状態です」

さとのりの答えを聞いて、私は安堵のため息を吐いた。

正直、これが一番気がかりだった。

幻想郷と外の世界の違いが具体的にはどういったものなのか、実のところ解釈は様々だ。

原作の設定としては『幻想郷とは外の世界で否定された妖怪や、物が流れ込む世界である』とされている。

これがさとのりのような妖怪にとって、実際にどんな意味を持つのか私には分からなかった。

人間である私はいい。文化は違えど、同じ人間の生きる場所ならば私もまた生きていける。

しかし、妖怪の場合は事情が異なってくる。

最悪の想定として、外の世界とは妖怪が存在出来ない世界——言うなれば、空気や水が存在しないような文字通り妖怪の生きていけない環境なのではないかとも考えていたのだ。

ここへ来た時点で判明した、さとのりの能力の低下もその不安を煽る

原因だった。

——ここに留まることは、さとりの命を削ることになるのではないか？

そんな不安があった。

しかし、とりあえず今すぐに悪影響を受けるような危機的状況ではないらしい。

その事実には大きく安堵したのだった。

「それで、能力の方は？」

「この距離が限界ですね。これ以上離れると、貴女の心が読めません」
「範囲は三メートルほどか……」

現在、私とさとりは声で会話をするのに自然な距離で向かい合っている。

さとりを中心に約三メートルの範囲——それが今のさとりの『心を読む程度の能力』の限界だった。

地霊殿に居た時は、部屋の奥から外の廊下まで集中しなくても心が読めてしまうと saying していた。

随分、弱体化してしまったものだと思う。

おまけに能力だけじゃない。

これまでに色々試してみたが、空を飛んだり、弾幕を放つたりといった幻想郷的な力は全て使えなくなっているようなのだ。

つまり、今のさとりは見た目相応な少女の力しか持っていないことになる。

試すつもりもないが、人間と同じように傷ついて、死んでしまう状態にまで弱くなっているんじゃないだろうか。

……なんか急に不安になってきた。

原因は分からんけど、やっぱり絶対この世界はさとりの身体に悪いって！

重力が十倍に感じるとか、空気に触れた皮膚が溶け始めてるとか、そういうの本当じゃない!?

「なにそれこわい……」。

いや、本当に大丈夫です。周囲の心の声が聞こえないせいで、妙な

違和感はありますけど、別に体が重いとかそういうのもないですよ」
「そ、そうか……。」

「それで、貴女の方はどうなんですか？ 何か支障は出ていませんか？」

「うむ、そのことなんだけどね——。」

私は巫女服の袖から野球ボール程の玉を取り出した。
博麗ご用達の陰陽玉だ。

ちなみに、霖之助が新しく作ってくれた物である。反対側の袖にも
う一つ入っている。

おにぎりの入った手荷物と共に、運良くこちらの世界へ一緒に飛ば
されてきたものだった。

その玉が、仰向けに差し出した私の手のひらの上で回転を始めた。

「この通りだ」

「ふむ。回転の技は問題なく使えるようですね」

「陰陽玉を浮かすことも出来る。そもそも、波紋の呼吸の効果が切れ
ていない」

「つまり、貴女的能力に関しては何ら変化は起こっていないと」

多分筋力とかも落ちてないんじゃないかな。さすがにその辺の壁
を殴って試すわけにもいかんけど。

さとりだけが弱体化して、私の能力が何の影響も受けていない理由
は分からない。

でも、逆に考えると私が弱体化する理由もないのよね。

何故なら私の持つ力は全て鍛錬によって身に着けた能力（物理）だ
から！

「……本当に、そんな単純な話なのでしょうか？」

さとりは何処か納得のいかない表情で思案している様子だった。

まあ、確かに純粋な身体能力はともかく、波紋や霊力なんてさとり
の能力と同じカテゴリーに属する幻想の力だしね。

それが私だけ使えるというのは、確かにおかしい。

しかし、実際に私の力や技が使えるという事実は変わらない。

そして、それは私達にとって大きなプラスとなる要素なのだ。

この世界では戸籍も住む家も金さえもない完全に孤立無援の状態
で、シンプルな『力』ってヤツは役に立つ。

言うなれば『腕力家』だ。

「税関も素通り出来る武器ですか。漫画みたいに総理大臣官邸でも襲撃してみます？」

い……いや、さすがに地上最強の生物みたいな生活するつもりはないけど。

「っつーか、役に立つとは言ったけど、この力を使った強盗とかの犯罪行為は出来るだけ避けたいね。」

『法律って何それ食えんの？』って感じの幻想郷で暮らしていた時には全く気にしていなかったが、こうして現代社会に身を置くと、私の中の前世の記憶が現代人としての常識や感性と共に蘇ってくるようだった。

「最終手段とはいえ、最後の一线を守れるという保証があるのは安心しますよ。こんな何処とも知れない土地で野垂れ死ぬなんて御免ですからね」

波紋が使えることが判明した為、私に関しては食事も睡眠も心配は要らない。

しかし、さとりは違うのだ。

幻想郷に帰ることはもちろん必要だが、その目的を完遂するまでの間生き残ることも必要である。

人間としての戸籍や権利がないどころか存在の否定された妖怪であるさとりが、この世界で生きる為の環境を手に入れなければならぬ。

先程、さとりに私の持っていたおにぎりを優先して食べさせたのもその為だ。

ここに留まっているだけでは、事態が改善するどころかジリ貧である。

いつの間にか、頭上の空は赤く染まり始めていた。

どれだけこの屋上にいたのかは分からないが、そろそろ日が沈もうとしている。

もうすぐで夜になる。

そしたら、行動を開始するでしょう。

馬鹿正直にビルから出ることは出来ないが、波紋を使ってビルの壁を伝いながら降りれば、誰にも見つからないはずだ。

なるべく目立たないように、暗くなつてからここを出る。

そして、当面の目標として現在地を把握する。

それから——どうするかは、まだ考えていない。

どうやって博麗神社を探すのか？

見つけたとして、どうやってそこへ行くのか？

あるいは、他に何か帰る方法はないのか？

正直、今後の見通しはあまり良くない。

幻想郷で数多くの苦難を越えてきた私だが、今回のそれは全く未踏の領域だ。

果たして、無事幻想郷に帰り着けるのか不安だが——。

「まあ、大丈夫でしょう。少なくとも、ここは地獄よりはマシな場所です」

さとりはそう言つて、私の背中を軽く叩いた。

比較するもののスケールが凄すぎる上に、実際に旧地獄の管理者だから説得力もすげえ。

不安を感じる点が大分ズレてると思うが、さとりの言葉に私は無駄に安心してしまうのだった。



街は夜になつても明るかった。

一定間隔で設置された街灯や周囲を囲む建物、道路を歩き過ぎる車のヘッドライトが光を放っているからである。

そんな街中を歩く人の数も、日中と比べて減った様子は見えない。

もちろん、夜に出歩く人間は昼間よりも限られているが、どちらかというとなりの種類が昼から夜へとシフトしただけで、全体の数自体はそう変わらないように見えるのだ。

昼には昼の。

夜には夜の、街の顔がある。

この街に住む人間には見慣れた顔だった。

しかし、そんな街を今夜は見慣れない奇妙な人間が歩いていた。

目立つ二人組だった。

一人は、こんな夜の時間帯に外を出歩くのは少々拙いのではないかと思うほど小柄で幼い少女だ。

それだけならば、未成年の夜遊びと多少悪目立ちする程度の光景だったが、すぐ傍を歩くもう一人が問題だった。

傍らの少女とは性別以外の全てが反比例するような大柄な女だった。

ただ体が大きいだけではない。顔や剥き出しの肩は大小無数の傷痕が走っている。

その傷痕の下には、女性とは思えないほど鍛え込まれた筋肉が備わっているのだ。

少女が少し後ろを歩き、女がそれを先導するように、言い知れぬ静かな迫力を纏って歩道を進んでいく。

同じ道を歩く通行人達は、自然とその二人組に道を譲る形になっていた。

言うまでもないが、その二人組とは先代とさとりである。

——先代の言うとおり、夜に行動を始めて正解でしたね。

さとりは周囲の心を読むまでもなく、自分達が異様なまでに目立っていることを自覚していた。

暗くなった今でもここまで目立つのだ。

日のある内に街へ出ていたら、どれだけ人目を引いたか分からない。

——しかし、それでも気休めですか。

周囲の人工的な光源を眺めて、さとりは些かうんざりとしたため息を吐いた。

先代の心を見るようになって以来、全く知らなかった外の世界について幾らか知識を得ることが出来た。

年中日の昇らない地底や幻想郷の人里とも違う、高度な文明によって造られた都市の光景を、彼女の心から見て取ったこともある。

しかし、実際にこうしてその中に身を置いてみると元居た場所との環境の違いに驚くばかりだった。

幻想郷の地上を覆う雅な闇や地底に籠もる陰鬱な暗がりには、ここには存在しない。

明るすぎる。

うるさすぎる。

そして、人が多すぎる。

この世界に来て以来、聞き慣れた他者の心の声は聞こえなくなったが、それとはまた違った周囲を満たす聞き慣れない騒がしさが不快で仕方なかった。

何故、この人間達はこの止むことのない騒音に耐えられるのだろうか？

そして何故、こんな狭苦しい空間に好んで集まって暮らすのだろうか？

幻想郷では在り得ないほど人口密度の高い道を進みながら、自分に向けられる好奇の視線と感情を無視しようと努力する。

随分狭くなっただけは、その能力の範囲内に踏み込んで足早に立ち去っていく人々の一瞬の心を読み取り、さとりは何故自分達がこうまで目立つのか理解し始めていた。

まず何より最初に注意を引くのは先代である。

大柄で体中に傷があり、何よりもその雰囲気や迫力が恐ろしいらしい。

そんな先代の傍を幼い少女に見える自分が付き添うように歩くのが、更に奇妙に映るようだ。

加えて、二人とも格好自体が周囲から浮いている。

さどりの何処か一般的なファッションからズレた服装はともかく、先代に関しては巫女服である。

これに関しては、自分よりも先代の方が自覚しているらしい。

——そんなにおかしな格好ですかね？

さとりは少し前を行く、大きな背中を見上げた。

周囲の反応など眼もくれず、堂々とした態度で歩みを続けている彼女だが、その内心が全く以ってテンパリまくっていることをさとりだけが知っている。

——ヤバイ、超見られてる。凄い写メ撮られてる。

——筋肉モリモリマツチョウーマンがコスプレして歩いてたら、そりや目立つわ！

——恥ずかしいを飛び越えて怖い。どうか職務質問されませんように！

——つつーか、さとりんを連れて歩いている時点で少女誘拐とか誤解されるかもしれん！ 親子で誤魔化せ……無理だツ!!

とか内心で半ば混乱している思考が見えていた。

他にも『やつぱり便所スリッパ』とか『園児服』とか、服装に関して何やら単語が錯綜していたが、さとりには意味が分からなかった。しかし、とりあえず不快だった。

奇抜な格好なのに注目を集めるだけで、誰もが声を掛けるのを躊躇うのは先代のあまりに堂々とした歩み方のおかげだったが、その実態は立ち止まるのが怖くて恥ずかしいだけである。

天下無敵の先代巫女が恐れる『シヨクムシツモン』というものが何なのか、さとりは一人不思議に思いながら、後をついて行った。

もちろん、先代も視線から逃れる為だけに闇雲に歩いているわけではない。

目立つことを覚悟の上で街中に踏み入った以上、具体的な目的地はあらかじめ定めてある。

——確か『こんにびに』という店ですか。こういった街には、必ずあるらしいですけどね。

先代の話では、街の各所に点在し、その店が取り扱う商品はかなり幅広いらしい。

雑貨屋と呼ぶにしても扱う品種が多すぎる、幻想郷では見かけないタイプの店だ。

さとりにとって全く馴染みのない未知の存在だったが、先代が言う

にはそこで現在地を含めた様々なことを調べられるとの話だった。

新聞や地図、エリア情報誌と呼ばれる地域を紹介する書物も置いてある。しかも、その場で読めばお金も掛からない。

街中には必ず存在し、しかも数が多い為すぐに探せるといのがこの店を最初の目的地に選んだ理由だった。

街の表立った通りに出て、まだ数分程度。

たった数分で、既に酷い目立ちようだったが、しかし先代の言葉もまた事実だった。

「見つけた——」

言葉にして呟いた先代の声を、さとりは聞いた。

心の中では歓声を上げている。よほど安心したらしい。

先代の視線を辿ってみれば、道路を挟んで向かいの歩道沿いに『こんびに』とやらが見えた。

正直、さとりにはその『こんびに』も周囲の建物も全く見分けることが出来なかったが、とにかく目的地で間違いはないらしい。

先代と違い、さとりはそれを見つけても安堵など感じなかった。

あの店に入ることも、このまま道を歩くことも、何処も同じように思える。

見慣れない物ばかりの光景や、途切れることのない喧騒が耳障りだった。

視界を常に横切り、遮り続ける人間の数に強いストレスを感じていた。

目と耳を塞いで、蹲りたくなる。

方向転換をした先代を見失わないように、必死で歩を進めた。

濁った水の中を進んでいるような不自由さを感じる。

足取りが重かった。

酷く気分が悪い。

普段聞こえている心の声が聞こえない代わりに、普段聞かない声や音が嫌でも耳に入ってくるのだ。

——世界が違うとは、こういうことですか。

今更になって実感した。

ここは、自分の住む世界とは違うのだと。

自分の周りに存在するもの。

周囲を構成するもの。

環境そのものが違う。

まるで、夢か幻の中を歩いているような気分だった。

足が地面を踏み締めている感覚はあるのに、自分が何処を歩いているのか分からない。

いや、それはある意味正解なのかもしれない。

ここは、自分が本来存在してはいけない世界なのだから――。

「――さとりっ!!」

先代が呼ぶ声を聞いて、さとりは我に返った。

いつの間にか距離を離され、一足先に向かいの歩道へ辿り着いた先代が、振り返って自分を見ているのに気付いた。

珍しく焦ったような表情で、自分に向かって叫んでいる。

さとりは、彼女が何故焦っているのか分からなかった。

心が読めない――それに気付いて、今更ながら自分の能力が弱体化していることを思い出した。

そうか。

だから、聞こえないのか。

周りの妙な静けさは、そのせいか。

何故『妙な静けさ』なのかというと、それは同時にうるさくもあるからだった。

心の声は聞こえない。

だけど、騒音はしっかりと聞こえる。

聞いたこともない轟々と唸るような音が、どんどん大きくなってくる。

いや。

近づいてくる。

さとりは思わず、音のする方向へ視線を走らせていた。

自分が、何処を歩いているのか分かっていなかった。

さとりは横断歩道の真ん中に立っていた。

歩行者用信号はいつの間にか赤になっている。さとりは緑から赤への変化に気付かなかった。いや、そもそもその変化が持つ意味に思い当たらなかった。危機感もなく、呆然と佇む。

そのさとり目掛けて、心を持たずに動く巨大な無機物——大型トラック——が、迫っていた。

耳をつんざくようなブレーキとクラクションの音が響き渡り、さとりは眼を見開いた。



交通事故の現場はいつものように野次馬でごった返していた。横断歩道の前に、事故の原因である大型トラックが停車している。幸いなことに道路は広い四車線であり、交通整理の人員が到着する前でも他の車両が立ち往生するような事態にはなっていなかった。

しかし、一番最初に現場に到着した制服姿の巡査二人は、目の当たりにした状況に戸惑っていた。

新人ではない。何度かこういった交通事故の現場も経験したベテランである。

横断歩道で起こった、歩行者の信号無視による人身事故のはずだった。

しかも、轢いたのが大型トラックだ。

パトロール中に報告を受けて、駆けつける間に凄惨な光景を予想していた。

確かに、大型トラックは停まっていた。

ブレーキを掛けたタイヤの跡も残っている。

間違いなく、通報を受けた事故現場である。

しかし、肝心の被害者の姿が何処にもなかった。

「本当なんですよ、信じてくださいいっ—」

今、巡査の一人の前で半ば悲鳴のように叫んでいるのは、事故の当事者であるトラックの運転手だ。

首の後ろを手で押さえながら、戸惑いと混乱をあらわにして、それでも必死に何かを伝えようと捲くし立てている。

しかし、当の巡査には支離滅裂な話にしか思えなかった。

目の前の運転手が、人を轢いたはずである。

証言からして、小学生くらいの女の子らしい。

成人男性なら生き残れるわけでもないだろうが、子供が大型トラックに轢かれたのなら、まず助からないはずだ。

自分が子供を殺してしまった事実には、錯乱しているのかとも思った。

「分かりましたから、落ち着いてください」

「分かかってない！ あんた、何も分かかってないんだ！ 本当なんだ！」

運転手は必死の形相で叫び続けた。

それを抑えながら、巡査は改めて事故現場を見渡した。

集まった野次馬が遠巻きに見つめる中、横断歩道には子供の死体はおろか血痕一つさえ残っていない。

代わりに、トラックの方を見れば、事故の痕跡が残っていた。

車体前部のバンパーが見事にひしゃげていた。

人間を轢いた時につくような小さなへこみではない。

まるで同じ大きさのトラックと正面衝突したかのような在り得ない破損具合だ。

しかし、もちろん他に車両など存在しない。

間違いなく、これは人間とトラックがぶつかり合った人身事故のはずなのだ。

なおも喋り続ける運転手の男を片手間にあしらって、巡査はトラックの破損箇所を目を凝らした。

車体前部を押し潰し、フロントガラスが割れるほど広がった衝撃は、元は小さな一点から始まったものようだった。

破壊されたバンパーの中心が、一際大きく陥没している。

しかも、その跡は――。

「手の跡……か？」

「だから言っただろう！」

運転手は、ほとんど悲鳴のように言った。

「子供を轢いてしまおうと思った！ 慌ててブレーキを踏んだんだ！
だけど、間に合わないって分かった！」

そしたら……そしたら、突然女が車の前に飛び出してきて、素手でトラックを止めたんだよッ!!」

何度聞いても信じられないことを、真に迫る勢いで運転手は繰り返した。

ロクに減速も出来なかった大型トラックの突進を掌底で止め、その衝撃で逆に車体を半壊させたという話だ。

運転手が痛めた首は、激突の衝撃によるむち打ちである。

大型トラックの交通事故で、唯一の怪我人がそのトラックを運転していた人間だったというわけだ。

当然、そんな与太話を警官が信じるはずがない。

警官以前に、常識のある人間ならば、まず信じない。

しかし、不可解な現場と——何よりも無数の目撃者がここには存在していた。

「おい、どうだった？」

周囲の聞き込みから戻ってきた同僚の巡査に尋ねた。

互いに戸惑った表情を浮かべたままである。

「何人かに聞いてみたが、皆同じだ。巫女服を来た大柄な女が、トラックを殴って止めた後、女の子を抱えて逃げたって」

「……信じられん」

「子供の方も変わった格好をしていたそうだ。ここから少し離れた路地から、二人で並んで歩いている姿を確認している。気になったから追いかけて、事故現場を見たっていう人もいたよ」

「そりやそうだろう。そんな格好をしてたら目立つさ」

「携帯で撮ったっていう写真もある。頼んで借りてきた」

「おい、それは……」

「いいから、見ろって！」

有無を言わせぬほど強く促されて、運転手の話を聞いていた方の巡査は、差し出された携帯の画面に視線を落とす。

そこに映っているものを見て、驚愕に目を見開いた。

ここに至つても尚、その巡査は全てを信じられなかった。

画面に映るものが、あまりに非現実的すぎたからだつた。

「女はトラックを止めた後、その場から信号機の上までジャンプして、次はビルの壁へ……屋上の辺りで見失つたそうだ」

画面には、小学生くらいの女の子を脇に抱えたまま、垂直の壁を駆け上がる巫女服姿の女の背中が映っていた。

◇

——逃げるんだよオオオオーツツ!!

私はかつてないほど全力で逃げていた。

通行人の頭上を駆け抜け、建物から建物へと跳び移っていく。

どっかの映画のエージェントじゃあるまいし、こんな滅茶苦茶なルートを警察が追ってくるはずがないと分かっていたが、駆り立てられるように私は逃げ続けた。

やがて現場から十分に離れたことを実感すると、ビルとビルが隣接した狭い隙間に身を投げ出した。

波紋を使うまでもない。両手はさとりを胸の前で抱えたまま、両足を広げて左右の壁に押し付ける。

その摩擦で落下の速度を調整しながら、路地の奥へと無事に着地した。

人気の全くない、ビルとビルの谷間の狭い空間である。

賑やかな大通りから離れた為か、路地の外からも人の気配はしない。

それを確認して、私はようやく一息つくことが出来たのだつた。

「先代、降ろしてください」

ああ、そうだった。

私は慌ててさとりを地面に降ろした。

咄嗟に抱きかかえて、あの場合から逃げ出してしまった。

その判断が間違っていたとは思わない。

あれだけの騒ぎが起こったのだから、すぐに警察がやって来るだろうし、さとりや私があの場合に残る意味もない。

……それでも、やっちゃまったという後悔が湧いてくる。やべえよ。

周りから見たら、どう考えても私つてば幼女誘拐犯だよ。

つつーか、幼女抱えてビルまで跳んで逃げるとか、もう怪人だよ。いや、それ以前に素手でトラックを殴って止めてるんだから巫女のコスプレしたキングゴングか何かか。

目撃者多数いるだろうし、完全に都市伝説と化すだろう。

「……すみません。私のせいですね」

混乱気味の私の思考を読んだのか、さとりが沈んだ様子で呟いた。

そんなことはない——とは、言えないんだよね。さすがに。

私が咄嗟にトラックの前に飛び出したのは、さとりが轢かれそうだったから。

これが運転手の不注意とかだったなら、まだ擁護出来る。

しかし、事の原因はどう考えてもさとりにあつた。

さとりは信号が赤になつているのに、のんきなほどゆっくりと横断歩道を歩いていた。

さとりが信号について知っていると思い込んでいた私も悪いんだろうが、それにしてもあの時の彼女はあまりに注意力散漫だったような気がする。

周囲の状況に対して、無頓着にすら見えた。

同じように歩いている人がいないとか、近づいてくるトラックの音とか、周りの異常や危険に気付けなかつたものだろうか？

平和ボケした日本人じゃあるまいし、幻想郷の地底で生きてきたさとりがそこまで危機に対して鈍いつても考えづらいんだが——。

「いえ、確かに鈍っていたようです。言い訳も出来ません。完全に私の注意力の欠如が原因ですよ」

あー、いや。そこまで自分を責めなくてもいいんだけど……。

「違うんです。本当に、今の私は鈍っているみたいなんですよ。」

第三の眼を失い、本来の目と耳だけになった自分がここまで周囲を

把握出来なくなるとは思いませんでした」

——そうか。

考えてみれば、今のさとりは目が見えなくなったり、耳が聞こえなくなったりするのと同じ、本来在る一つの感覚が失われている状態なんだ。

さどりの『心を読む程度の能力』は、ON・OFFを切り替えられるものではなく、常時発動している。

嫌でも周囲の心を読めてしまうのであり、逆に言うときとりにとって『心を読む』というのは『見る』『聞く』などと同じ自分の周囲の物事を読み取る為の自然な状態のことなのだ。

例えば、誰かが近づいてくるのを、五感で察知するよりも先に第三の眼で捉えるのが普段のさとりなのである。

ここでは、それがほぼ失われている。

加えて、車自体は心のない無機物であり、高速で走る物体だ。

運転手の心を読む距離にまで近づいたら、その段階で既に手遅れ。とつくに轢かれている。

クソッ、迂闊だった……！

今のさとりにとって、街中は予想以上に危険な場所だったのだ。

「貴女が迂闊なわけじゃありません。さつきも言いましたが、これは完全に私自身が原因です。本当に、すみません」

私に対して頭を下げるさとりは、ひよつとしたら初めて見るかもしれない、しおらしい様子だった。

い、いや！ こればっかりはしょうがないって！

ホラ、昔話でも焚き火や竹の籠が原因で退治されたり、覚妖怪って心を読めない物や状況が弱点みたいなイメージあるからさ。

「それが理由であつても、私が貴女の足を引っ張ったことは間違いありません。実際、これからどうします？」

沈んだ表情のまま尋ねるさどりに、私は思わず返答に詰まっていた。

うーむ……さとりを責めたくはないのだが、非常に拙い状況に陥ってしまったことは誤魔化せない。

さとりを助ける為とはいえ、あれだけの衆目の中で派手なことをやりすぎた。

大型トラックを素手で止める女とか、目撃者が少数なら誰も信じないホラ話だが、見た人多かったからなあ。

それに幻想郷と違って、お手軽に写真を撮れる文明の利器もある。下手したら、音声付の動画まで撮られているかもしれない。

どうかな、警察ってそういうの見て信じるのかな……？

いずれにせよ、もう表立って街中を歩けないのは間違いない。

今度は『コスプレした大女と幼女の奇妙な二人組』なんて生易しい目立ち方ではない。

危険人物として、確実に通報される。

まさか指名手配まではされないとと思うが、顔を覚えるまでもなく格好が特徴的すぎるしね。まず見違えられることはないだろう。

事故現場付近はもちろん、この街も——いや、この市内一帯は表立って出歩けないかもしれない。

かなり行動が制限されることになってしまったのだ。

「すみません……」

「さとり、もう済んだことだ」

まだ謝ろうとするさとりを、私は遮った。

前向きに考えようよ。

私があの時飛び出して得たものは『さとりを助けることが出来た』という最良の結果だ。

その結果から、ちよつぱり悪い状況に繋がってしまった。

それだけのことなんだ。

さとりが無事なことが大前提。

それ以外の問題は、これから対処していけばいいんだよ。二人で力を合わせてね！

「……そうですね。分かりました、私も頑張ります」

そう言っつて、さとりはようやく笑ってくれた。

さとりんマジ天使。

「キモいですね」

はい、笑顔で冷たいツツコミいただきました！
ふう……何を焦っていたんだろうな、私は。

別に国家権力とか今の私には怖くも何ともないし。

さとりのおかげで、私自身も落ち着きを取り戻していた。別名、賢者タイム。

「しかし、動き辛くなったというのは間違いないですよ。貴女の言う『コンビニ』とやらにも、迂闊に入れなくなったみたいですが」

まあ、元々この格好のせいでもうせ堂々と行動は出来なかったのだ。

コンビニの客や店員に『変な人』ってスルーされるか、通報されるかは実際賭けだったしな。

更に夜が更けるまで待つて、本格的に人気がなくなったところで適当な建物にでも忍び込むか？

地図のある書店とか、あるいはネット環境がある場所。店なら個人経営だと侵入も楽そうだ。

あるいは、思い切つてこの街を離れてみてもいい。

ここ結構都会っぽいし、真っ直ぐに進んでいけば、また別の市街地に突き当たる可能性も高いだろう。

騒ぎの及んでいないそこで改めて行動してもいいね。

さて——つと！

「誰だ？」

私は咄嗟にさとりを庇うように振り返っていた。

近づいてくる人の気配を感じたのだ。

表通りから、この狭い路地に入ってくる入り口の辺りに、その気配がある。

姿が見えないということとは、隠れているのだ。

私の呼び掛けにも反応しない。

一気に不穏な空気を感じた。

「出てこい、いるのは分かっている」

脅すように言いながら、ふと我に返った。

警戒しているのは私の方だが、相手だつて同じかもしれないじゃない

いか。

たまたま覗いた夜の路地裏に、幼女と向き合ったマツチヨ巫女がいたら、犯罪現場に直面したかとビビるのも当然だ。

……やべつ。また逃げるか!?

「あら、分かるんですか。凄いですね」

一転してテンパる私を尻目に、気配の主はあっさり姿を現していた。

若い女性だった。

髪の一部を頭頂部で結えている。

落ち着いた青を基調とした服装の、穏やかな雰囲気としっとりとした色気を纏う美人さんだった。

むっ、なんとなく優しそうな人だ。

少なくとも、いきなり警察に通報するような人ではないらしい。

あと、多分人妻だ。

いや、特に根拠はないけど、なんつーか特有の色気がね。

「夜中にこんな路地裏で、一体どうしたんですか？ そちらの女の子は、貴女のお子さんかしら？」

その女性は、物腰も口調も穏やかにゆっくりと問い掛けてきた。

この状況、この構図で、さとりと私を親子連れと勘違いしてくれるなんて、発想が善良すぎだろ。

これは、ひよっとしたら思わぬ助けが来たのかもしれない。

「何か事情があるのでしよう。よろしかったら、私の家へ来ませんか？ お話をするにしても、こんな所ではなんですから」

さて、どうやって話を切り出そうかと悩んでいた私より先に、そんな素敵過ぎる提案まで出してくれた。

おいおい、なんだこの女性。

天使の助けか何かですか!?

「この場合、天使よりも悪魔と疑うべきだと思いますけどね」

意味深げな言葉と共に私達の会話へ割り込んできたのはさとりだった。

おもむろに私の背後から姿を現し、目の前の女性へと歩み寄ってい

く。

無造作に見える行動だった。

しかし、我に返った私はさとりの狙いを察した。

さとりは、あの女性の心を読むつもりなのだ。

「なるほど」

一定の距離を開けて立ち止まり、さとりは頷いた。

「あら、何かしら？」

「貴女は、どうやって路地裏にいる私達に気付いたのでしょう？」

「ええ、話し声が聞こえて……」

「事故現場から跡をつけてきた——と、考えましたね」

そこで初めて、女性の優しい顔付きが変わった。

自然に浮かんでいた柔和な微笑みが、不自然に強張る。

「あの現場に居合わせたこと自体は、偶然ですか」

「――」

「大型トラックを素手で止めた人間の力に興味を持ち、接触する機会を伺っていたというわけですね」

「――」

「私が何者か、ですか。それよりも、まず貴女の正体を教えてください。ああ、言いたくないなら結構。もう『考えた』ようですからね」

私の目の前で、相手の言葉を必要としない一方的な会話が成立していた。

こうして見ると、さとりの能力ってば凶悪だねー。

あと、あの女性の代わりに私は能力の範囲から出たから、この際失礼なこと考えちゃうけど——さとり、それは誰からも嫌われるわ。

計算してのことなのか、それともただ単に素なのかは分からないが、一方的に話すさとりの顔には嫌らしい笑みが浮かんでいた。

さとりの話を横から聞く限り、どうもこの女性は見た目通りに素直な優しい人とはいかないようだが、それでもさとりのの方が悪いように見えてしまう意地の悪さを感じる。

完全に悪役の顔付きと雰囲気やで、さとりん。

紫達に誤解されるのも、さもありなん。

「先代」

「なんだ」

唐突に名前を呼ばれて、内心でビビりながら私は応えた。
さ、さつき考えたこと聞こえてなかったよね？

「問題が一つ解決しました。ここは『外の世界』で間違いありません」
「……どういうことだ？」

私の疑問に対して、

「この女性は人間ではありません。仙人です。そうですね——霍青娥
(かくせいが)さん」

そんな全く予想外の答えが返ってきた。

思わず、女性——青娥の方を凝視する。

知識にある霍青娥というキャラクターの姿とは違う。

でも、それも当たり前か。

私達がそうであるように、現代社会で生きるのならゲームのような
格好は目立つだけだ。

じゃあ、本当に？

この人が未来の異変である『東方神霊廟』で登場する霍青娥？

今は現代社会に溶け込んで生活している、幻想郷に来る前の彼女だ
というのか？

「……そう、心が読めるのね」

さすがに、青娥の方もさとりをやったことを理解したらしい。

納得するように小さく一つ頷く。

その仕草の中で一体どんな心を読んだのか、さとりは不機嫌そうに
眉をしかめた。

逆に、青娥の方は頬を赤らめて微笑み、

「二人とも、ス・テ・キ」

熱い吐息のような言葉を吐き出した。

浮かべる笑みは、先程までの優しいげな微笑ではない。

しかし、これまでの笑顔が単に装う為だけの仮面であったのだと分
かるほど——本心から嬉しそうで、楽しそうな表情だった。

其の四十二「幻想入り」

「これで、全部か……」

霊夢は額の汗を拭った。

類稀なる術の才能があつたとしても、身体能力的にはやはり人間の範疇である。

少女の細腕で瓦礫を撤去しながら、その下に埋まった物を取り出すのは大変な労働だった。

既に一刻近くが過ぎていた。

ようやく使えそうな物をあらかた掘り出せたが、それは居間のあつた場所に限つてのことである。

土間に仕舞つてあつた食器や食料など、押し潰されて駄目になつて
いる可能性の高い物は後回しにしておいた。

霊夢の目の前には、仕事道具一式と無事だった私物が幾つか並んで
いる。

萃香との決闘で破壊された物の代わりに霖之助が新しく用意して
くれた陰陽玉が、二つ。

常日頃から備え置いてある御札や針。

これらは一見壊れやすそうに見えるが、霊夢の力が込められている
為全て無傷だった。

他にも、戦闘や弾幕ごっこに耐え得る博麗の巫女の装備は全て問題
なく回収出来た。

だが私物に関しては、無事な物は驚くほど少なかった。

服の仕舞つてあつた筆筒は、落ちてきた屋根の重みで潰れていた。
中身は何着か無事だったが、逆に言えば何着かは破れて駄目になつ
てしまっている。

清潔さ以外で衣服に頓着しない霊夢は、普段から巫女服を着てい
た。

それ以外の私服といえば、寝巻きくらいだ。

別段、それらに執着はない。

使い物にならなくなったのならば、新しく買えばいい。

しかし、箆笥の奥に仕舞っておいた昔の母の服が無残に破れているのを見つけた時、霊夢はしばらく動くことが出来なかった。

折れた柱の内から、何本もの古傷が付いている物を見つけた時も同じだった。

「――」
ほとんど家具が、無事ではすまなかった。

木材の下敷きになって割れてしまった古い裁縫箱を手に取り、中身を確認する。

案の定、滅茶苦茶になっていた。

折れて使い物にならなくなっていた針と無事な針を、一本一本選り分けていく。

この裁縫道具一式は、かつて母が使っていた物を譲り受けたものだ。

成長する自分に合わせて服を縫い直す母の姿を思い出しながら、自分も繕いモノをしていた。

裁縫の技術は『いつか一人で生活する時の為に』と、母から習った。母は決して裁縫の上手い人ではなくて、あつという間に霊夢の方が

上達してしまっただが、習うことがなくなっても二人並んで作業をするのが好きだった。

物思いに耽っていた霊夢は、指先に走った小さな痛みで我に戻った。

折れた針で、指を刺してしまっただけ。

指の上で、血の玉がゆっくりと膨らんでいく。

それをぼんやりと見つめていた霊夢の視界が、不意に滲んだ。

熱いものが眼の奥から湧いてくるのを感じた。

指の痛みが理由ではない。

胸に穴が空いたような痛み。

初めて感じる苦しさ。

壊され、失った物が二度と戻らないと理解した時の絶望。

「……あ」

それは、耐えられないほどの喪失感だった。

「ああ……く……っ」

喘ぐように口を開き、震えながら歯を食い縛って閉じる。変わり果てた我が家の上でうずくまり、霊夢は必死で溢れ出そうになる声を噛み殺した。

しばらくの間、そうして耐えることしか出来なかった。

「——おやおや、これはどうしたことじゃ？」

不意に聞こえた知らない声に、霊夢は硬直した。境内に続く階段の方からだ。

丁度、背を向ける形になってしまっている。

ゆっくりと近づいてくる足音の主が妖怪の気配を放っていることに気付くと、霊夢は内心で舌打ちした。

声が聞こえるまで、全く気付けなかった。

普段の霊夢からは想像も出来ない迂闊さだった。

「なーんか厄介なことになってきたのう」

のんきにぼやく声を背中で聞きながら、そこに妖怪特有の博麗の巫女に対する敵意がないことを感じ取ると、霊夢はゆっくりと立ち上がった。

背は向けたままである。

敵意がないとはいえ、こちらの動揺をわざわざ相手に教えるつもりもなかった。

さりげなく目元を袖で拭い、両目に籠もった熱が引くまでの時間を稼ぐ為に、霊夢は背を向けたまま口を開いた。

「妖怪が参拜にでも来たのかしら？」

「うむ。それもやぶさかではないと思っておったんじゃが……ここは博麗神社で間違いないんかのう？」

「そうよ。ここは博麗神社よ」

「神社……なくなつとるんじゃが？」

「正確には、『元』博麗神社よ。今朝、こうなったばかりのね」

「それは、なんとも……」愁傷様」

気まづげな相手の応答に、霊夢はため息を吐いた。体に残っていた最後の強張りが抜けていく。

どうやら相手は博麗神社を知らない。

そして、神社がこうなった原因も、もちろん知らない。

今回の件の部外者であり、余所者の妖怪らしい。

見知らぬ妖怪であるというだけで最低限の警戒は解いていないが、冷静になった霊夢は眼の違和感が消えたのを確認して、ゆつくりと振り返った。

「あー、それでおぬしは博麗神社に住む……住んでおった博麗の巫女でよろしいかね？」

「そうよ。あたしは博麗霊夢よ」

「ご丁寧に。儂（わし）は——」

「妖怪でしょ。分かるわ」

「う、うむ。身も蓋もないのう……」

霊夢は、改めてその妖怪を観察した。

声色と気配で分かっていたことだが、初対面の妖怪である。

外見は、霊夢よりも年上の大人の女性に見える。

年上とはいっても、年寄りめいた口調とは裏腹に十分若く美しい。

顔立ちには『美貌』というよりも『可愛げ』と表現した方がいいよ

うな愛想の良さがあった。

鼻の頭に乗った丸眼鏡が、柔らかな雰囲気を手伝っている。

しかし、彼女が人外の存在であることは一目で分かった。

頭と尻に、獣の耳と尻尾が生えていたのだ。

「狸の妖怪？」

尻尾の形状から、霊夢は判断した。

「うむ、化け狸じゃ」

「見たところ、結構な力を持っているようね」

「おおつ、分かるか。ふふふ、儂の凄さが分かるとは若いのに見所あるのう。さすがは博麗の巫女じゃ！」

胸を張って、妙な感心の仕方をする相手の様子に、霊夢は少し脱力した。

敵ではないとしても、ここまで毒気を抜かれる妖怪も珍しい。

幻想郷の妖怪は皆、多かれ少なかれ人間を見下している節がある。

それは『人が妖怪を恐れる』という摂理を保つこの世界で当然のことだ。

そういった点で、目の前の妖怪は妙に人間に馴れ馴れしく、また幻想郷では異質な存在だった。

「……あんだ、ひよつとして外来の妖怪?」

その指摘に、目の前の妖怪は我が意を得たりとばかりに破顔した。

「鋭いのう! 如何にも、儂は外の世界から来た妖怪じゃ!」

……といっても、ここが幻想郷と呼ばれる秘境であることは、迷い込んだ後で話に聞いてから理解したんじゃないの

「つまり、幻想郷に移り住む目的とかでやって来たわけじゃないのね」「うむ。簡単に説明すると、何らかの事件に巻き込まれて来たクチじゃ」

「何らかの事件って?」

「それが分からんのよ。ここは何やら特殊な結界で隔離された場所らしいが、その結界をどうやって越えたのか、儂自身にもとんと分からんんじゃない。気が付いたら、ここにいたと言うしかない」

「ふーん」

霊夢は適当に相槌を打った。

相手が嘘を吐いているわけではない、というのは何となく勘で分かる。

そして、それを証拠付ける情報も手元にあった。

原因は、おそらくあの地震だ。

「実はな、儂は幻想郷へ来る直前に外の世界のある場所を訪れておつたんじゃよ。ちよつとした観光目的でな」

「ある場所って?」

「それは博麗神社という、もはや訪れる者もない寂れた神社じゃ」

——『外の世界』の博麗神社か。

霊夢はその言葉で確信した。

彼女のいた場所が、現在いる場所と同じ幻想郷の境目である可能性は高い。

丁度、ここが幻想郷の内側で、向こうが外側なのだ。

そこから、地震を切っ掛けにして結界を飛び越えた。

あの時、目の前から母が消えてしまったように。

地震によって発生した結界の綻びに、幻想郷で呑み込まれたのが母であり、外の世界で呑み込まれたのがこの妖怪なのだ。

そこまで考えが至り、霊夢の胸は高鳴った。

結界の亀裂から幻想郷へ迷い込んだであろう目の前の妖怪がこうして無事ならば、同じ状況の母もまた外の世界で無事なはずである。

「ここに飛ばされた時、あんたは何処にいたの？」

思わぬ情報を手に入れて逸る気持ちを隠しながら、霊夢は尋ねた。

「気が付いたら目の前に大きな湖があつてのう。神社があつたのは山の中じゃったし、周りの空気は明らかに違うので戸惑っておったが、偶然そこで会った妖精に人里へ案内してもらつて——」

「ああ、そこから先はいいわ」

「いやいや！ 外の世界では全く見なくなった妖精との遭遇もそうじゃが、ここからまた聞くも涙語るも涙の長い道中が——」

「長いんでしょ？」

「うむ」

「じゃあいいわ」

「そ、そうか」

シオンボリと獣耳を垂らす姿を無視して、霊夢は思考に没頭した。境界を挟んだ外の世界の博麗神社とここが地理的に一致しているのかは分からない。

しかし、全く関係のない霧の湖に現れたことから考えて、完全にランダムな場所への転移が行われたことは間違いない。

そうになると、やはり母も同じ状況に陥っている可能性が高いのだ。無事なのは分かった。

しかし、母が戻ってくる為には、単純にここから外の世界へ道を開くだけでは駄目だとも分かってしまった。

外の世界の何処に飛ばされたかも分からない一人の人間と一匹の妖怪を捜す必要が出てきたのだ。

希望と共に新たな問題が現れ、眉を顰める。

「……何やら、そちらも複雑な問題を抱えておるようじゃの」

黙り込む霊夢に、その妖怪は言った。

相手を気遣うような優しい声色だった。

「まっ、見れば分かるかの」

嫌でも視界に入る、瓦礫の山と化した博麗神社と呼ばれた物を見回して、苦笑した。

不思議と嫌味を感じない笑い方だった。

「そういえば、あんたが博麗神社へ来たのって……」

「うむ、その人里でまた色々聞いてな。外の世界に帰るには博麗の巫女に相談せよと教えられたんじゃよ」

「外に帰りたいの？」

「ここも魅力的じゃし、置いてきた家族がいるわけでもない。しかし、移り住むにも急すぎる話じゃしなあ」

腕を組みながら、難しげな表情でその妖怪は唸った。

「どうやら帰る意思はあっても、そこまで必要に迫られた状況ではないらしい。」

現状では都合のいい話だった。

幻想郷に迷い込んだ外の人間を、再び外の世界に帰すことも霊夢の仕事である。

人間一人程度ならば、霊夢個人の判断で結界に干渉して外の世界までの道を開くことが可能だ。

しかし、それはあくまで平時の話である。

「……言いたいことは分かる。どうやら、すぐに帰してもらおうわけにはいかんようじゃの」

事情を聞くまでもなく、事態を把握したようにため息を吐いた。

「運が悪かったわね」

「そちらも、災難だったのう」

「別にあんたに同情される謂れはないわ」

「住んどった家が潰れたんじゃろ。そりや泣きたくもなるわ」

「別に泣いてないんだけど」

「そうか。まあ、上手く隠せとるよ」

あしらうように言葉を返されて、霊夢は不機嫌そうに眉を顰めた。無意識に目元に触れる。

自分では違和感を感じないが、実際にどんな顔をしているのかは鏡でもない限り分からない。

些細な変化を、目の前の妖怪は見抜いたのかもしれない。

狸の妖怪らしい、侮れない相手だ。

睨むように視線を送った当の相手は、腰に手を当てて空を見上げていた。

「さて、これからどうするかろう——」

何気ない呟きを聞き流しながら、霊夢もまた頭上を見上げた。

釣られて見たわけではない。

今度は、上空からこちらへ近づいてくる存在をしっかりと察知していたのだ。

空に小さな人影が浮かんでいる。

それがゆっくりとこの場へ向かって、飛んできているのが分かった。

霊夢は、グルリと周囲を見渡した。

何度見ても現実是不変ではない。

そこにあるのは瓦礫の山だけだ。

変わり果てた博麗神社の跡地である。

億劫そうに小さくため息を吐いて、霊夢は視線を上に戻した。「よう」

境内に降り立ちながら、その人影は霊夢へ気軽に挨拶をした。

「魔理沙。何か用？」

霊夢は、やって来た魔理沙に素っ気無く返した。

「何だよ、今日はエラく機嫌悪いな」

「そう見える？」

「分かりやすいぜ。逆だと思ってたよ。だって、今日はおふくろさんが来る日なんだろう？」

「母さんは、来れなくなっちゃわ」

「ははあん、それで不機嫌なのか」

魔理沙は心得たとばかりに意地悪く笑った。

「そうかもね」

霊夢は適当に相槌を返して、勘違いされるままにしておいた。

「だから、そうやって居間でずっと不貞腐れてるんだな」

指摘されて、霊夢は視線だけを足元に落とした。

相変わらず何も変わらない、かつて居間だった場所に積み重なった残骸だけがある。

視線を上げると、やはり魔理沙も変わらずからかうような笑顔を浮かべていた。

「……あんたも上がってく？」

「いいや、遠慮しておくぜ。わたしも愚痴くらい聞いてやりたいんだけどな。やることがあるんだ」

「じゃあ、本当に何の用でここに来たのよ？」

「おふくろさんが居たら、お前を茶化しながらお茶の一杯も飲んでいく予定だったんだけどな。本題は別にあるぜ」

「本題？」

「ああ。実はな、霊夢——どうやら異変が起こっているようだぜ」

そう告げる魔理沙の神妙な顔を見つめて、霊夢は軽く頬を掻いた。今一度、視線を動かしてみる。

崩壊した博麗神社。

その残骸の上に立つ自分。

そして、目の前には得意そうな魔理沙。

やがて霊夢は全てを納得したように小さく頷いた。

「それは驚いたわ」

「へへっ、誤魔化さなくていいぜ。どうせ、お前のことだから何か感づいてたんだろ」

「そうね」

「実は、わたしもまだ確証はないんだ。

朝起きたら、家の外で雨が降っていた。だけど魔法の森から出てみると、その森から外には雨が降っていなかったんだぜ。それだけじゃない、紅魔館の周りにだけ霧が立ち込めていたし、雪まで降っている

場所を見つけたんだ」

「異常気象ってことね」

「まだまだ他にも起こってる場所があるはずだぜ。そして、わたしはこれを何者かの仕業と睨んだわけだ」

「なるほど」

「おっと、何も言うなよ！ 霊夢、お前だったら勘でその辺りのことが大体分かっているのかもしれない。だけど、わたしにはわたしのやり方がある」

魔理沙は箒に跨りながら言った。

「今回の件を、わたしはもう少し調べてみようと思ってるんだ。博麗神社でも何か異常が起こってないか寄ってみたんだが――」

「見ての通りよ」

「ああ、今のところ特に何もなさそうだな。楽しみだった予定が崩れて、お前が不機嫌になってたこと以外は」

魔理沙は悪戯っぽく笑った。

悪意を持って言っているわけではないことくらい、付き合いの長い霊夢には分かる。

彼女なりに、落ち込んでいると思った友人を元気付けようとしているのだ。

「やる気が出ないんだったら、そこでずっとお茶でも飲んでればいいぜ。今回の異変は、わたしが解決してやるからなあ！」

最後に発破をかけるように言うと、魔理沙は空高く飛び上がった。背中があつという間に遠くなっていく。

来た時と同じ、唐突な去り方だった。

「……風のような娘じやのう」

それまでずっと黙っていた妖怪が、苦笑しながら口を開いた。

霊夢は、その人の良さそうな笑顔をじつと見つめた。

「やっぱり、あんたの仕業よね」

「あの娘の目を欺いたことかの」

「そうよ。悪意のない幻術だったから黙ってたのよ」

「やはり、おぬしには通じておらなんだか」

そう言つて、顎を軽く擦った。

霊夢の指摘に対する、言外の肯定だった。

先程、訪れた魔理沙が潰れた博麗神社の上に立つ霊夢と不自然な会話をしたのも。

すぐ傍に佇む見たこともない狸の妖怪に、何の反応も示さなかったのも。

全て、その妖怪当人の仕業だったという事実の肯定だった。

「狸ゆえに人を化かしてみた」

「魔理沙が家に上がろうとしてたら、どうしたの？」

「あの娘の言うとおりに、お茶一杯程度なら何とでも誤魔化せるわい。湯飲みの中身は水になつとつたじゃろうがの」

「小便や糞じゃないだけ良心的だわ」

「おいおい、化け狸をそこまで性悪な妖怪に捉えんでくれ。ひよつとして、余計なお節介じやつたか？」

「いいえ、助かったわ。魔理沙には、この状況を説明したくなかつたし」

「友達だったんじゃない」

「うん」

「気を遣わせたくなかつたか」

「無駄に心配して、本人よりも怒る性格なのよ、あいつ。話すにしても、全部が終わつて落ち着いてからにしたかつたの」

「そうか。儂のやつたことが助けになつたのなら何よりじゃ」

「あんたつて、妖怪のクセに変わつてるわ」

「時と場合によるよ。儂だつて、人間を悪意で化かすこともある。しかし、今はそんなことをしても意味がない。子供が一人、傷つくだけじゃ」

「あたしは子供じゃないわよ」

僅かに頬を膨らませて反論する霊夢に、妖怪は笑いながら頷くだけだった。

霊夢はやり辛さを感じた。

これまでのやりとりで、目の前の妖怪が敵ではなく、むしろ友好的

であることは十分に分かった。

分かったからこそ、余計にやり辛いのだった。

普段の調子ならば、こんな印象は抱かない。

やはり、今の自分は調子がおかしいのだ。

一人で瓦礫を掻き分けていた時に抱いていた陰鬱な気分がいつの間にか軽くなっていることに、感謝すらしてしまふのだから。

霊夢はそっぽを向くように、相手から視線を逸らした。

瓦礫の下から無事な物を回収する作業は、まだ途中だった。

居間のあつた場所から、また別の場所へ移動して作業を再開しようとしていた霊夢は、おもむろに振り返った。

「何で、あんたまでやろうとしているのよ？」

手伝おうとする妖怪を睨みながら、霊夢は尋ねた。

「儂の目的は教えたじやろ。外の世界に帰してもらいたいんじや」

「今日のところは無理よ。さっさとここから出て行って、今夜の宿でも探しなさい」

「別に宿無しでも困らんよ。それよりも、おぬしの用事を手伝って少しでも早く帰してもらえようにした方が良く考えたんじや」

そう答えられて、霊夢は言葉に詰まった。

今更この妖怪に何らかの企みがあるとは思わなかったが、単なる親切だと素直に受け取ることも出来なかった。

しかし、お節介や同情なのかと問い返すのは、自分から不憫で惨めだと言っているようで嫌だ。

そんな霊夢の心境まで察して、相手は理屈を通した返答をしたのかもしれない。

そう考えると、やはり釈然としない気分になる。

結局のところ、何処までも自分の方が気遣われているのだと霊夢は悟った。

何だか悔しい気持ちになりながら、黙ってしやがみ込み、両手で瓦礫をどけ始める。

もう二本の手が、やはり無言でそれを手伝った。

「……あんた」

「ん？」

霊夢は相手の顔を見ずに言った。

「まだ、名前聞いてないわ」

「おおっ、そういえばそうじゃった」

大げさに驚く声の主を、改めて見つめた。

「儂の名前は『二ツ岩マミゾウ』じゃ。気さくにマミゾウさんとも呼んどくれ」

マミゾウはそう言って、愛嬌のある笑顔を浮かべた。



小さな店だった。

一見すると、ただの民家のようにも見える。

入り口の上に掛けられた看板には読めないほど複雑で難しい漢字が書かれており、商売内容をアピールするようなショーウィンドウもない。

常用漢字ではない看板の文字から、かろうじて中国系の古い店だと分かるくらいだった。

特に、現在は夜の閉業後である。

営業中ならば、もつと他にも看板やノボリが出ているのかもしれないが、今はそれもない。

先代とさとりは、青娥に連れられてそんな建物の中へと招かれていた。

「鍼灸師として、細々と店を営んでおります。他には漢方薬を処方などしたりもしますね」

店頭を介さず、裏口から生活空間となっている室内へ二人は通された。

鍵が掛けられていたことや、電気が消されていたことからして、ここには一人で住んでいるらしい。

女が一人暮らしの自宅へ、夜間に初対面の人間を二人も招き入れるのは、常識的に考えればかなり不用心な行為だったが、青娥の正体を

知る先代とさとりからすれば何の問題もなかった。

彼女は、現代社会の中で生き残っている神秘の具現。

人を越えた『仙人』である。

少なくとも、青娥には建物を跳び越えて逃げる先代を気づかれずに追跡出来るだけの力があるのだ。

「漢方薬というと、『仙丹』などに通じる技術を活かして生活しているわけですか」

青娥の説明に、さとりが自身の知識を示した。

仙丹とは、仙人になる為の薬のことである。

医学的に薬効の解析された薬ではない。

実在するかも分からない材料を使用する上に、作る時の分量や手順もはつきりと分らない。

現実的ではない霊薬だった。

しかし、遠い昔には仙人の薬は病や怪我にも神秘的な効果を発揮していた。

そこから派生して、時代の進歩に合わせた技術を青娥は生業として使っているのだろう。

さとりはそこまで推察していた。

ちなみに、傍らの先代は普段通りの仏頂面の内側で、普段通り話の内容を何も分かっていない。

鍼灸師がどういう職業なのかを、必死に思い出そうとしているくらいである。

「鍼は『はり治療』で灸は『お灸』ですね。この世界では、もう古い医療方法になつていいると思いましたが」

心を読んださとりが、話の延長を装ってさりげなくフォローした。家の中へ先導していた青娥が、微笑みながら振り返る。

「お詳しいのですね、現代社会のこと」

友好的な笑みで隠した探るような言葉である。

しかし、それが全く無意味なことであると青娥はすぐに気付いた。その『気付き』を、更にさとりは読んでいる。

さとりの能力の前では、腹の探り合いなど全く無意味なのだ。

一方的に情報が知られることのやり辛さに苦笑しながら、青娥は二人をリビングへと案内した。

古めかしい店の外観とは裏腹に、綺麗で広く、真新しい内装の部屋だった。

青娥自身の語る『細々とした営み』には、少し見えない。

昼間のような光を放つ蛍光灯は、幻想郷に住んでいた二人とって目に慣れないものである。

リビングの一角にあるシステムキッチンなど、さとりには何の設備なのか一目では分からない物だった。

「今、お茶をご用意します」

青娥が用意をしている間、中央のテーブルに座った二人——特にさとりの方は室内を珍しそうに見渡していた。

先代の記憶や聞いた話から、ある程度の知識は持っている。

しかし、外を出歩いた時と同じように、実際の環境に身を置くとまた勝手が違うものだった。

それ故に、隣に座る先代と自分の違いが改めて実感出来た。

最初の内こそ、長年生きてきた幻想郷との違いに戸惑ってはいたものの、今はすっかり適応して、落ち着いている。

頭の中の知識だけではない。

彼女には、幻想郷とは違う世界で生活した記憶が魂に根付いているのだ。

先代は幻想郷の人間ではなく、また同時に外の世界の人間でもない。

異世界に前世を持つ人間。

何処までも特異な存在だった。

「お待たせしました」

思考に没頭しそうになる前に、青娥が二人の前に日本茶の入ったマグカップを置いた。

さとりは目敏く、先代の前に置かれたカップが自分の物より大きな男物であることに気付いた。

現在座っているテーブルも、一人で暮らしているとは思えない大き

な物である。

何より、椅子が複数ある。

だからどうした、という話ではあるが、さとりは些細な情報も逃さないよう集中した。

場合によつては、これから交渉事になる。

テーブルを挟んで向かいに、青娥が腰を降ろす。

本題となる会話が始まろうとしていた。

「さて、どう話を切り出しましょうか」

そう言う青娥の顔には、楽しむような笑みが浮かんでいた。

表情のまま偽りなく、心を読まれながらの会話を楽しんでいるのだ。

さとりは先代に視線を送った。

まるで示し合わせたかのように目が合う。

自身の思念を先代に伝える能力など持っていないが、二人はごく自然にアイコンタクトによる意思疎通を成功させていた。

——話はさとりが進めるってことでいいんだな？

先代の心を読んで、さとりは眼の動きで頷いた。

——貴女は役に立たないから、とりあえず黙ってて下さい。

聞こえないはずの返答を受けた先代は、内心でシヨンボリしていた。

それを無視して視線を青娥に戻すと、さとりは口を開いた。

「それでは、まずは私達の自己紹介から始めましょう——」



さとりは、青娥が自分達を家に招いた理由を分かっていた。

そして、理由がどうあれ、その行動が孤立無援のこの場所でこの上ない自分達の助けになるということも。

幻想郷に帰還する為には、青娥の協力が必要不可欠だ。

多少の不都合には眼を瞑るつもりだった。

「なるほど。幻想郷——」

さよりの簡潔な説明を聞いた青娥は、感慨深く呟いた。

説明は本当に簡潔だった。

自己紹介の内容は、それぞれの名前と種族程度。幻想郷での立場や役職さえ話していない。

幻想郷という場所と、そこからこの場所に至るまでの経緯こそ詳しく説明したが、それらも必要と判断した範囲だけだ。

与えられた情報から、当然のように不鮮明な部分への疑問は派生する。

青娥は、その疑問をあえて口にしなかった。

穴だらけの話を、まるで子供のように楽しそうに聞いていた。

「私も仙人の端くれです。現代社会から消えゆく妖怪や神が生き残る隠れ里について、噂程度に聞いたことはあります」

「言葉を飾らなくて結構。千年以上を生きる仙人である貴女は、結界で隔離される以前から幻想郷の存在について、より直接的に知り得ていたのでしょうか。実際に訪れたことがないというのは本当のようですがね」

「あら、そうでした。貴女には駆け引きは無駄でしたね」

さよりの指摘に、青娥は気を悪くした風もなく微笑んだ。

「もつとも、こちらから何か交渉を仕掛けるつもりもありませんでしたが。当然、これも信用していただけですわね？」

「私達の目的に協力してくれるということですか」

「ええ、貴女がたが幻想郷へ戻る為の手助けをさせてください」

「見返りは何もありませんが」

「それもお見通しでしょうか？」

「……難儀な性格のようですね。いえ、性癖と言うべきでしょうか」

「仕方ありません」

言葉とは裏腹に、青娥の表情は満足気ですらあった。

心を読めるさよりには、より具体的に彼女の考えが分かる。

うんざりした。

何故、自分の周りには変人が集まるのか。

「私、強い人が大好きですから」

青娥は二人に——特に先代に熱い視線を送りながら囁くように告白した。

先代は表情に出さずに動揺し、さとりは小さくため息を吐いた。

「そういつた意味で、お二人は非常に魅力的だわ。お力になりたいんです。私、尽くす女ですよ」

「先代はともかく私ですか？」

「心を支配することは、力の極地の一つです」

「そんなご大層なものでもないんですがね」

「いいんです。私が好きにやろうとしているだけですから」

「飽きるまで、ですね」

「ふふふつ、そういうところが素敵」

さとりには、それらの言葉が何処までも本音であることが分かる。

苦手なタイプだった。

八雲紫がもし自分に好意的だったら、こんな印象を抱くのもかもしれない。

敵対したくはないが、味方でもいたくない人物である。

しかし、都合がいいことに変わりはない。

最初に決意した通り、幻想郷に無事帰る為に我慢しなければいけないこともあるのだ。

「——それでは、幻想郷への帰還に協力していただけるということで間違いありませんね？」

「ええ、お助けいたします」

その時、不意にそれまで黙っていた先代が口を開いた。

「青娥は、それでいいのか？」

ぽつりと言った。

本名を呼ばれて、青娥は頬を赤らめた。

「私達に、何か望むものはないのか？」

「見返りを求めないのかということでしょうか？」

「そうだ」

「優しいんですね。私、優しい人好きですよ」

「当然の権利だ」

「あんつ、そういう素っ気無いところも素敵」

『もう何でもいいんじゃないか』というツツコミを抑えて、さとりはお茶を一口飲んだ。

青娥が見返りを求めず——悪い言い方をすれば好き勝手に、自分達を助けようとしているのは間違いなく本人の意思だ。

先を見越した何らかの打算すらない。

ただ純粹に、己の欲求と欲望のままに行動している。

それが結果的に自分達の助けになるにすぎない。

しかし、先代はそれに納得せず、純粹にお礼をしたいと考えているらしい。

原作知識を持つが故の、既知のキャラクターに対する好意的な解釈は、同時に初対面の相手に対する警戒心の薄さに繋がっている。

そこが先代の危ういところである。

——この仙人、考える以上に厄介な人物だと思えますけどね。

さとりは空気を読んで、あえて警告を口にしなかった。

勘違いさせておいた方が、結果的に良い方向に転ぶのかもしれないとも考えていた。

「私達に出来ることなら、何でもしよう」

「ふふつ、貴女ほどの人が簡単に『何でも』なんて口にしてはいけませんわ。でも、そこまで言われるのなら——」

青娥は僅かに身を乗り出した。

「私も、貴女達と一緒に幻想郷へ連れて行ってください」

その要求は、先代にとっても、さとりにとっても意外なものではなかった。

さとりは事前に心を読んで、知っていた。

先代からすれば、青娥が幻想郷へ来ることは将来的に決まっていたことである。

互いの意見を合わせるまでもなかった。

「いいだろう。共に行こう」

先代は答えた。

青娥は花が咲いたような笑顔を浮かべた。

「嬉しい！ 貴女と一緒に、幻想郷の土を踏めるんですね」

「外の世界では青娥に助けられることになった。代わりに、幻想郷に帰ったら私が貴女の助けになろう」

「はい。お世話になります」

さとりは横目で、呆れたように先代を見つめた。

何か助言や忠告をしようかと口を開きかけ、しかし全てを投げ出すように再びお茶を飲む。

口を挟むのも面倒臭かった。

何より自分には関係ない。

さとりは、先代と青娥のやりとりの中にある微妙な認識の違いを無視することに決めた。

鈍い先代が悪いのだ。

勝手に修羅場突つ込めばよろしい。

代わりに、別のことで口を挟むことにした。

「幻想郷に来るのはいいですが、そんなに簡単にここでの生活を捨ててもいいのですか？」

さとりは率直に尋ねた。

「見たところ、家族が居られるようですが」

「いいえ、家族はいません」

「少なくとも男性と同居しているようですが？」

「確かに結婚はしていました。でも、夫は数年前に亡くなり、子供もいません」

『未亡人 k t k r !』と何故かテンション上げている先代の心の叫びを無視して、さとりは続く青娥の話に耳を傾けた。

「それに、この世界に未練はありません」

ぼつりと言った。

口元の笑みは消えていた。

冷たい本心の言葉だった。

「これから先の未来に、何も期待していない。失望したと言ってもいいかもしれません」

「ここでの生活に飽きたということですか？」

「そうですね。そうとも言えます」

「もつたいない。不自由のなさそうな生活なのに……」

まるで代わってくれと言わんばかりの物欲しそうな表情を浮かべるさとりを見て、青娥は僅かに苦笑した。

しかし、その笑みもすぐに虚しいものへと変わった。

「確かに、今の生活は昔とは比べものにならないくらい便利になりました。

昔というのは、私が仙人になった千年以上前の話ではありません。ほんの数十年前と比較しても、技術の進歩と社会の発展は目ざましいものです。

人の力は、かつて曖昧だった暗闇の中を暴き、そこで息を潜めていた幻想を追いやった。怪我や病は妖怪の仕業ではなく、嵐や津波は神の怒りではないと知った。

かつて翻弄されるだけだった様々な災いを、人間は自らの編み出した技術や学問で克服し、今や住む環境すら自分達で作り出すようになった。安全なだけではない。より便利に、より快適に、世界を創造する。そして、更にその先へ」

「――」

「時代と共に発展する世界の姿に、私も一度は魅せられました。個人の力ではなく、人間全体が持つ力の可能性。それが切り開いた新しい世界――」

「宇宙、ですか」

さとりが青娥の心に描かれたものを読み取って、言葉にした。

仙人である青娥から『宇宙』という言葉が出たことに、先代は表情に出さずに驚いていた。

元とはいえ、陰陽道らしき術を使う博麗の巫女としてそれはどうなんだとさとりは内心で呆れる。

豊富に見える知識や優れた感性が、根幹の部分で現代人のものなのだ。

こういったところが、先代巫女に対する周囲の認識と現実のギャップだった。

宇宙という言葉は、科学的な専門用語ではなく、はるか昔から概念として宗教などにも存在している。

青娥の驚きと興味は、人間が自らの力でそこへ物理的に辿り着けた事実と快挙に向けるものだろう。

「月面着陸が報道されたのは、もう四十年前でしょうか。あの時は、柄にもなく感動しました。

人の手では決して届かない天に輝く幻想の存在を、あの日人類は単なる巨大な石だと断じてしまった。そして、そこから大地も天空をも越えた無限の世界を発見した。

長い間、ただ強い力を持つ者に惹かれて彷徨うだけだった私でさえ、途方もない世界の広がりを知って、人が進歩した未来という漠然とした可能性に夢を見ました」

青娥は饒舌に喋り続けた。

心を偽ること出来ないさとの能力を前にして、言わなくてもいいことまで告白してしまっているようだった。

「だけど、あれから四十年。それだけ経つというのに、人間は未だ火星にすら辿り着けないのです。

二十一世紀は宇宙の世紀だなんて言われていたんですけどね。今では、環境を守れだとか、景気対策がどうだとか、内側に眼を向けるばかり。自らの広げた生存圏を管理し、維持することしか出来なくなっている」

穏やかに吐き捨てるような口調だった。

「誰も彼も、何の為に生まれてきたのか考えられない人ばかり。周囲を人工物で覆った結果、あらゆるものは規格統一化され、人の価値観も平等であるところこそが美德となってしまうた。

突出した力や人格は否定され、声高に何かを訴える者は異常と判じられて、揶揄されるような世界になってしまった。

ここにはもはや管理された普遍的な物しか存在しない。私が一時の夢を見た無限の可能性も無ければ、私の愛する力を持った存在もない。

テレビや新聞が持ち上げる有名スポーツ選手のような『超人』の正

体は、同じ人間の常識や想像の範疇で認められた規格品ではない」「……言いたいことは分かります。しかし、貴女の求めているのは、千人の人間を殺して英雄と呼ばれるような存在のことですよ」「素晴らしいですね。それだけ殺してでも自分の意志を貫こうとする心とそれを可能にする力——そんな人がいたら、きつととても好きになるでしょう」

「——」
「周囲の優れた環境が育んだ力などではない。劣悪な環境の中で、襲い掛かるそれらを打ち払うほど強い力こそ、私が愛して止まないものです。」

今の人間は確かに優れた技術を力として持ちましたが、それは何の価値もない人間にさえ手に出来る普遍的な力。自らが作り出した精巧な張子の虎の威を借る鼠の群れにしか見えません。

——本当に優れた力というのは、個人が持つものだと私は思うのですよ。

集団の中から突出しているもの。周りを巻き込む中心にあるもの。常識に収まらないもの。異常であるもの——この築かれた社会の枠組みを、容易く壊してしまえるものこそ本当の『力』です」

いつの間にか、青娥の視線と声色には熱いものが戻っていた。

自らの住む世界を——現代の社会を語る時の、何処までも冷めた感情とは違う。

青娥は、先代を見つめていた。

その瞳の奥に、炎があった。

眼を通じて、肉体の中にある炎がちろちろと内側から肉を焙っているかのようだった。

先程、彼女自身が語ったように、これまでの生活の中で見出せなかったその熱を、先代を見ることで取り戻したのだ。

「改めまして、先代巫女様。私は、貴女が街中で起こした行動を一部始終眼に致しました」

青娥は熱く、囁くように言った。

「人が積み上げた技術と群衆が取り繕った常識さえ、容易く破壊して

しまえる力。それを目の当たりにした凡庸な観衆は、貴女の一拳一動に怯え、否定しようとするでしょう。

しかし、貴女は意に介さない。介する必要も理由もない。だって、貴女は強いから。常識になど囚われないから。

貴女が道を歩くだけで不安になり、その意図を勘違いする臆病な鼠達など気にも留めなくていいのです。

私は、そうして貴女が行きたい道を歩いていく様をただ見続けていたいだけ。貴女がその力を振るう姿を、どうかお傍で見させてください」

◇

一日の疲れを癒すのには風呂が一番。

風呂は命の洗濯よん、とかサービスの人(叔父さんではない)が言っていたのは覚えているが、幻想郷ではなく彼女が生きる世界と似た現代社会でこの言葉をしみじみと感ずることになるとは妙な皮肉だった。

現在、私はさとりと共に青娥さん宅のバスルームにお邪魔している。

なんやかんやあって、青娥が私達を手助けしてくれることになった。

この『手助け』というのは、幻想郷に帰る為に協力するだけではなく、帰る前の衣食住まで提供してくれるという内容だ。

風呂だけではない、寝る場所も用意してくれている。

明日の朝食は『腕を振るう』とはりきっていたし、現代に合わせた私達の服も買ってくれるらしい。

もちろん、費用は全部青娥持ち。

非常にありがたく思うと同時に、物凄く恐縮してしまうような申し出だった。

これで当人が特に見返りや代償を求めてないっていうんだから、少なくともこの世界にいる間はずっと彼女に頭が上がらないだろう。

三人での話を終えて、夜も遅いからという理由で、幻想郷に帰る為

の具体的な話し合いや行動は明日にすることになった。

そして、青娥に勧められるまま、風呂に入らせてもらうことになったのである。

『疲れと汚れを落として、今夜はゆっくり休んでください』と、労わるような笑顔で言ってくれた。

——もうね、何なのこの至れり尽くせり。

外の世界に放り出されて孤立無援かと思ってたたら、一気に事態は好転ですよ。

最初に出会った時はさとりの警告もあつてちよつと戸惑ったけど、青娥はマジ天使だったね！

「彼女なりの下心があつてのことですよ。そもそも、貴女に向けられた態度や言動に違和感を感じなかつたんですか？」

私の目の前で、向かい合うように湯船に浸かっているさとりが言った。

二人で入るには十分広い浴槽だと思うけど、やっぱり私の体が大きすぎるんだな。

小柄なさとりの体格を差し引いても、足や手がたまに触れてしまうくらいには狭い。

「彼女には好かれてるらしい」

「そんな単純な話じゃありませんよ」

さとりが手でお湯を飛ばしてきた。

顔に浴びたそれを拭う。

うーん、確かに人柄に好意を抱いたとかかつて話じやないのは分かってるけど……つまり青娥は強い人が好きってことなんだろう。

そして、トラックを素手でぶっ壊す程度には強い私のことを気に入っている。

それで完結する、結構単純な話だと思っただけだな。

多少過激な思想が混じってる気がしないでもないが、そんなの幻想郷の妖怪とかに比べたら可愛いもんですよ。

具休例としては幽香。

ヤンデレとツンデレから『アレ』を抜いたような相手に比べれば、私

達は無償で協力してくれる分、青娥は十分善良で友好的な人物だと言えた。

「言葉では上手く表現出来ません。とにかく、彼女にはあまり心を許しすぎないように」

「分かった」

納得はいかないが、さとりの真剣な忠告なので、私は真摯に受け止めることにした。

どちらにしろ、幻想郷に帰るまでは青娥の厚意に甘え続けることになる。

その分の感謝は物や行動にして示したい。

彼女との付き合い方を改めて考えるのは、幻想郷に帰った後でいいだろう。

「まあ、貴女がそれでいいのならいいですけどね。具体的に、幻想郷へ彼女を連れ込んだ後の生活などをどうするのかね」

ああ、そういう問題もあるか。

幻想郷に行ったら、今度は青娥が住む家もない状態になるのだ。

当然、それを助けるのは恩を受けた私の役目だろう。

数時間前までは帰る目処を立てることさえ困難な状況だったが、いつの間にかその後のことを考える余裕が出来てしまっている。

本当に今日は怒涛の一日だったなあ……。

——家、か。

お湯の熱に浮かされたのか、私の頭には取り留めのない考えが浮かんでいった。

想うのは、霊夢と博麗神社のことだ。

私が目の前で消えてしまったことで、あの子に心配をさせてしまっているのが心苦しい。

そして、それ以上に霊夢が陥っているであろう状況を案じている。

原作では、天子の起こした地震で神社が潰れてるんだよね。

幻想郷から飛ばされる直前の状況からして、多分無事では済まなかっただろう。

つていうか、霊夢も必死で抵抗していたみたいだが、あれだけの地

震なら普通の建物は間違いなくぺしゃんこになっている。

霊夢、大丈夫かな？

ちやんと今夜眠れる場所を見つけたかな？

何よりも、あの神社は霊夢が育った思い出の家なのだ。

それが潰れてしまったら、シヨックを受けないわけがない。

紫や魔理沙辺りがフォローをしてくれたりいいのだが――。

「八雲紫には期待するだけ無駄だと思いますけど」

言うなよ……。

あれで、結構霊夢のこと気に掛けてるんだから。

妙に厳しいけどね。

「今の私達と違って、博麗霊夢には助けしてくれる人や妖怪が周りにた

くさんいますよ」

まあね。

私の娘が皆に愛されないわけがない！

「羨ましい限りです」

大丈夫、さとりには私がいるからさ。

そんな友達ビームを眼から発射すると、さとりは嫌そうな顔をしな

がら湯船から立ち上がった。

ふふふつ、これは照れてますわ。私には分かる。

私も一緒にお湯から体を起こす。

体を洗う為だ。

「しかし、たかが風呂場一つでここまで勝手が違うとは思いませんで

したね」

私とさとりが一緒に入浴しているのは、何も裸の付き合いが出来る

ほどの親友同士だからというだけではない。

地霊殿の温泉しか入ったことのないさとりには、このシステムバス

はちよいと荷が重かった。

リビングでも思ったけど、青娥つてば『細々とした生活』なんて言

うわりに豪華な家に住んでるのよね。

このバスルームだって、入ると言った後からワンタッチであつとい

う間に湯船を沸かしてたし、シャワーとカーンもボタン式で、室内は

暖房機能付きと来た。

そもそも私が教えないと、さとりにはシャンプーとボディソープの違いすら分からないだろう。

だから、こうして背中を流してあげる必要があるんだよね。

仕方ないね。

「いや、教えてくれるだけでいいですから。後は自分で洗います」

そんなこと言わず！

背中流しっこしよう！

頭洗いっこしよう！

シャワーでやった方が効率的なのは分かるけど、桶に入れたお湯を『それじゃあ流すよ』と言いながら泡に包まれた頭に掛けるというホームドラマのようなやりとりをやってみたいんです!!

「知りませんよ。一人で洗いますから、貴女は茹で上がるまで湯船に浸かってなさい」

まだ出ていなかった私を、さとりの容赦のない蹴りが湯船に押し戻した。

ううっ、酷い！

私はただ良かれと思ったただけなのに……!!

「——あら、賑やかですな」

カラカラと引き戸を開けて、艶やかな声が私達の会話に入ってくる。

私ときとり以外に、この家で風呂に入ってくる人物など一人しかない。

しかし、何故このタイミングで入ってくるのか？

突然の乱入に、混乱して内心シエーな私は、風呂場の入り口を見つめたまま硬直していた。

裸の未亡人がそこにいた。

「せ……青娥」

「ふっつ、私もお邪魔しますね」

返事も待たずに、青娥が風呂場に足を踏み入れる。

いや、返事もクソもここは青娥の家なんだから『出てっつてくれ』な

んて言えるわけないんだけどね。

……でも、これ何処のエロゲーやねん！

前をタオルで隠しているが、彼女の見事な肢体が薄い湯気越しにしつかりと見える。

く、空調さん。もう少し換気を怠けてもいいのよ？

同じ女ではあるのだが、私の根幹にある前世の記憶と混ざり合った『どちらともつかない性別』の部分が、妙な緊張を生み出していた。

なんつーか、本当に醸し出す色気が凄いね。

同じ裸でもさどりの時は全く感じなかった何かを、青娥からは感じる。

うむ、目の前の光景に対して明確なコメントは控えるが……とりあえず『にゃんぱい』と、一言だけ言っておこう。

青娥はさどりをスルーして、私のいる湯船の方へ入ってきた。

小柄なさどりでも少々手狭だった空間なので、ほとんど密着するように向かい合って座る形になる。

あ、これはいけないね。

お湯がこぼれたらもつたいないし、丁度さどりが体を洗うから手伝う為に私も出て——って、近い近い近いっ！

「先代様、湯冷めしてしまいますよ」

青娥はしな垂れるように、体を使って私を湯船に押し留めてきた。

抵抗出来ないほど力が強いわけではない。

しかし、なんつーか……いや抵抗とか無理だって！ 当たってるんだって！ 柔らかいんだって！

やつべ、何この状況!?

生涯で初めて陥るピンチなんですけど！

「傷だらけですね」

青娥は私の体に指を這わせながら、熱っぽく呟いた。
うん、まあ控えめに言っても女の体じゃないと思う。

目の前のお手本のような美女の体と比べれば尚更だ。

「あまり人に見せるものじゃない」

「では、貴女はこの傷を恥じていますか？」

「いや……」

「そうでしょう。恥じる必要なんてありませんもの。この傷は貴女の強さの証、硬い体は己の力を磨き上げた結果——」

「自分で好きにやった結果だ。言うほど立派なものじゃない」

「いいえ、そこが肝心。この平等が美德とされる世界で、痛みを伴いながら自らの形を歪に、自らの意志で変えていく人間は今まで見たことがありません」

何が楽しいのか。動けない私の体を丹念に観察していた青娥は、顔を上げて私の眼を見つめた。

頬を紅潮させた顔に浮かんでいたのは、妖艶な微笑だった。

「やっぱり、貴女って素敵」

「見ていて楽しいものでもあるまい」

「いいえ、とても楽しいです。この肉体に刻まれた記憶を想像するだけで、火照ってしまいそう」

「——」

「私が見てきた、どんな人間よりも魅力的な肉体ですよ。先代様」

吐息と共に耳元で囁かれた。

なにこれエロイ。

つつか、顔近くね？

つつか、この感触、耳舐められてね？

私ってば、もう完全に抱きつかれてる体勢なんですけど。

どう対処していいのか、全く分からなかった。

これまで出会ったことのないタイプの女性。

そして、これまで経験したことのないスキンシップだった。

長年の付き合いでたまに悪ノリする紫でさえ、ここまで積極的なことはしないぞ。

ど……どうしよ？

青娥と密着した体の方は、指一本自分の意思で動かさない。

私は助けを求めるように視線だけをさとりの方へ動かした。

しかし、当のさとりはそんな私の心を読めているはずなのに、完全に無視して頭を洗っていた。

先程の忠告を軽く扱った報いなのか。
なるほど、さとりの言うとおりだった。

認識を改めなければならぬ。

霍青娥——色んな意味でヤバイ相手だった！

反省するから、助けてさとりん！！

「どうぞ、ごゆっくり」

さとりは他人事のように言った。

くっ……見捨てるというのか、さとり。

いいだろう。だったら、最後に一つだけ教えてやる。

——それはシャンプーじゃなくて、ボディソープだ！



さとりが目を覚ましたのは、まだ日が昇る前だった。

傍らに眠る青娥を起こさないように、そっとベッドから抜け出した。

何故、彼女と同衾することになったのか。

それは単なる消去法だった。

この家にはダブルベッドが一つしかなかったのだ。

考えてみれば、ある意味当然である。

子供はおらず、この家に住んでいたのは青娥と彼女の夫である男だけだった。

夫婦なのだから、ベッドは一つで事足りる。

最初、青娥は先代とさとりの二人でこのベッドを使うように提案した。

自分はリビングのソファで眠るから、と。

この提案は、先代の方が真つ先に拒否した。

口にした言葉は少なかったが、さとりには彼女が家主である青娥への遠慮と単純に体を気遣う気持ちを大きく持っていることが分かった。

それに対して『では、私と一緒に寝ましようか？』と返すのが、霍

青娥という女の厄介なところである。

あれこれと押し問答を繰り返して、結局先代がソファで眠り、さとりが青娥と共にベッドで眠ることになったのである。

さとりが相手だと、青娥は大人しかった。

ベッドに入り、それぞれの生活についての話を当たり障りなく交わして、自然と二人は眠りに就いていた。

そして、夜中。

不意にさとりは目を覚ましたのである。

さとの軽い体重を、絨毯が音もなく吸い込む。

さとりは、青娥の寝巻きを借りていた。

可愛らしい柄のパジャマである。青娥が着る物にしては、デザインが雰囲気と釣り合わない。

実際、青娥自身の寝巻きは肌が透けて見えるような色気のあるネグリジェだった。

このパジャマは、結婚した時に夫とお揃いで買った物らしい。

自分の体格には少し大きすぎる寝巻きの裾を捲り直して、さとりはゆつくりと窓に歩み寄った。

カーテンを開けると、まだ暗い外の風景が見える。

窓の外を照らすのは、月の光だけではない。

遠くには、ポツポツと幾つもの光の点が見えた。

それが街で輝く、人工の光であることがさとりにも分かった。

夜の静寂も絶対的なものではなく、耳を澄ませば遠くから聞き慣れない音が響いて、届く。車の走る音だった。

外の世界の人間は眠らないらしい。

ここでは、住んでいる人間全員が眠りに就いて、誰も動かなくなるという時間帯が存在しないのだろう。

それなのに、心の声が全く聞こえないというのもさとりにとって奇妙な感覚だった。

——ここは異世界だ。

——私の住めない世界だ。

漠然と、そう感じた。

「どうされましたか……？」

いつの間にか、背後で青娥が目を覚ましていた。

さとりが驚くことはなかった。

彼女はまた第三の目の力の範囲内にいる。

「寝たふりをして様子を観察しようと思いましたが、やめました」

「イチイチ言い訳をしなくていいですよ。別に貴女の一举一動を見張っているわけではありません」

さとりは振り返らずに、素っ気無く言った。

背中越しに、青娥が微笑する気配が感じ取れる。

「ですが、私に心を許してはくれないのでしょうか？」

「色々と視えてしまいますからね」

「なるべく嘘偽りなく話したつもりですわ」

「嘘は言っていないでしょう。幾つか、していない話があるだけで」

さとりは、青娥とのこれまでの会話の中で、言葉として表に出されていない内容も、全て思考の中から読み取っていた。

例えば、亡くなったという彼女の夫のことである。

何時、どのように、何故亡くなったのか彼女は話していない。

先代は無遠慮に尋ねることをしないし、気にもしていない。

しかし、さとりは知っている。

青娥が夫の遺した財産を受け継いだことを知っている。

その金を使って、不自由なく生活していることを知っている。

知っている、だけである。

「まあ、別にそれがどうしたというわけでもないですがね」

「先代様には話さないのですか？」

「話してどうなるものでもないですしね」

「私という存在を警告出来ませぬ」

「しなくていいです。する必要もないです」

「自分で言うのも何ですが、私は善良ではありませんよ。昔から、多くの者達からは『墮落した』『邪な』と評されてきました」

「しかし、貴女自身に自らが悪であるという自覚はない。まさに『自分が悪だと気付いていない真の邪悪』ですね」

「あら、面白い表現ですね。——貴女は、どう思われますか？」
「そうですね……」

さとりはどうでもいいことのように、気の抜けた声で呟き、
「まあ、私がこれまで見てきた心の中では——『そこそこ』ってところ
です」

肩越しに振り返りながら、そう答えた。

気軽な返答に、青娥は意表を突かれたような、あるいは肩透かしの
ような呆けた表情を浮かべていた。

そして、すぐに笑い声を押し殺して、肩を震わせ始めた。

よほど面白い答えだったらしい。

クスクスと笑い続ける青娥を、さとりは不本意な気持ちで睨んでい
た。

「……やっぱり、貴女の方も素敵ですね」

ひとしきり笑った後、青娥は目元の涙を拭いながら言った。

「先代様とは、また違った力強さがある。強かさと言ったほうがいい
でしょうか」

「慣れているだけですよ。嫌なものや汚いものだけは、たくさん見て
きましたから」

「自分の魅力は、他人にしか分からないものですわ」

「——『だからこそ、助けたい。失うのは惜しい』ですか」

さとりは表情を真剣なものへと変えた。

青娥を問い質すためである。

彼女が自分達に協力することを話していた中で読み取った、思考の
断片がずつと気になっていたのだ。

「貴女が、私達を本心から手助けしたいと考えていることは疑いませ
ん」

「はい」

さとりの確かめるような言葉に、青娥は素直に返答した。

「自分自身が幻想郷へ行く目的もありますが、それはやはり二の次で
す。私達が幻想郷へ帰ることを優先している」

「はい」

「先代の力が、本来在るべき世界で振るわれる様を見たいからです」
「はい」

「この世界でも彼女の力は注目を集めますが、決して認められることだけはない。それは惜しい。だから、助けたい」

「はい」

「そして、私のことも同じくらい助けたいと考えている」

「はい」

「その理由は——」

楽しみながら言葉を返す青娥とは逆に、さとりは疲れたように大きく息を吐いた。

気分の沈んだ、暗いため息だった。

「このままでは、私は死ぬからです」

「その通りです」

青娥はあっさりと肯定した。

「正確には存在が消滅します」

黙り込むさとりに代わって、今度は青娥の方が話を始めた。

「かつて存在した『幻想』は、今やこの世界から失われてしまいました。代わりに、この世界には『幻想を否定する力』が満ちています。

あらゆる物事や事象を理論と数式で解釈するようになって、世間一般では幻想的で曖昧なものは認められなくなってきたからです。妖怪や神を信じる人間よりも、信じない人間の方が多くなったからです」

「——」

「例えば、貴女が自分を妖怪だと名乗ったとしましょう——誰も信じません」

「——」

「何故なら、妖怪など存在しないからです。

心を読む能力など存在しないからです。

第三の目を持つ生物など存在しないからです。

不思議な力なんてありません。

人間は仙人になんかなれません。

人間は空なんて飛べません。

もし、これらが現実には『在った』としても、一切信じません——」
捲くし立てるように喋った後、青娥は一呼吸置いた。

「私のような幻想の力を宿す者は、これらの否定に対して抗い続けなければ、その力を失ってしまいます」

「そして、純粋な妖怪である私は、力だけではなく命すら失ってしまうというわけですか……」

「妖怪も、神も、この世界ではほとんど見なくなりました。何処かへ行ってしまったのか、消えてしまったのか……それさえ分かりません」

「このままでは、私も同じ末路を辿ってしまうというわけですね」

「ええ。ですから、私は貴女も助けたいのです」

青娥は全く深刻ではない様子で、優しく微笑みながら告げた。

もちろん、さとりはそんな青娥の善良な笑顔に感動など欠片も抱かなかった。

ただ、もう一度ため息を吐いた。

自分を待つ未来に対する悲壮感よりも、億劫さを感じているような仕草だった。

「だいたいの見立てで構わないのですが、私はどれくらいもちそうですか？」

さとりは参考までに尋ねた。

黙っていることも、慰めに嘘を言うことも、彼女の能力の前には意味はない。

しかし、そうであったとしても——。

「多分、あと三日くらいでしょう」

あっさりと真実を告げた青娥の口調は、あまりにも残酷なものだった。

其の四十三「境界」

八雲紫の家は、博麗神社とはまた別の幻想郷の境目にある。

博麗神社とは違い、その場所はほとんどの者が知らなかった。現世には存在しないのではないかとさえ言われている。

ごく一部の例外を除いて、人も妖怪も誰もその屋敷に足を踏み入れることを許された者はいない。

今日、そこに二つの例外が増えたのである。

「美味い飯じゃのう」

味噌汁の入ったお碗から口を離して、マミゾウがしみじみと呟いた。

お世辞ではなく、本心からだった。

味噌汁だけではなく、目の前に並べられた料理の数々。薄っすらと湯気を上げる白米や焼き魚などはどれも絶品だった。他にも添えられた漬物や生卵は外の世界のスーパーなどに一山幾らで並べられている物とは味わいがまるで違う。

純和風の食事というのも、マミゾウにとっては珍しいものだった。外の世界では、専門の料亭にでも行かなければ味わえない。

食事をする場所も素晴らしい。

家主にとっては何の変哲もない自宅の居間でしかないかもしれないが、マミゾウが縁側を通して眺める中庭は絶景である。

外からは、人の声や車の音などの騒音は聞こえない。都会にはない静寂がある。

その中に時折響く、ししおどしの小気味よい音を聞きながら、美しい中庭を眺めつつ、料理に舌鼓を打つ。

外の世界では高い金を支払って得られる食事と風景を、ここでは日常の一部として何気なく味わえるのだ。

マミゾウは、幻想郷へ迷い込んだことを感謝すらしていた。

しかし、である。

「いや、本当に美味い飯じゃの？」

マミゾウはにこやかに笑いながら、同じ食卓を囲む三人に水を向け

た。

誰も答えなかった。

傍らの霊夢が、一瞥しただけである。

沈黙と食器の触れ合う小さな音だけが返ってくる中、とうとう隠しきれなくなつた汗が一筋、マミゾウの額に流れた。

気まずい空気が漂う。

その『まずさ』を味わっているのは、マミゾウただ一人であった。食事を始めてから、ずっとこの調子である。

いや、正確には霊夢とマミゾウがこの八雲紫の屋敷に招かれてからずっと、であった。

二人が——特にマミゾウが『招かれざる客』であることを、無言で訴えられているのが痛いほどよく分かった。

俯き加減で食事を続けながら、マミゾウは様子を伺つた。

この中で特に問題なのは、こここの家主である妖怪とその従者だ。

八雲紫と八雲藍。

友好的な意味合いなど欠片もない自己紹介を最初に受けて、名前と簡単な立場だけは知ることが出来た。

しかし、それ以降はろくに会話も交わしていない。

あとは、マミゾウ自身が推察するしかなかった。

説明されるまでもなく、八雲紫がとんでもない大妖怪であることは嫌というほど分かる。

この屋敷に通される際に、一度だけ『スキマ』と呼ばれる力を見たが、恐ろしく不気味な能力だった。全く得体が知れない。

従者の八雲藍も強力な妖怪だ。何よりも、狐の妖怪である。自分とは行使する力の種類が近い。実力の高さは肌で分かった。

幻想郷で、相応の実力と立場にあるであろうと予想出来る二匹の大妖怪なのだ。

そんな者達が、外の世界から偶然迷い込んだ余所者の自分を歓迎する道理はない。

それをマミゾウは理解していた。

だから、この場の空気も仕方がない。

——と、そう物分りよく納得しないのもマミゾウなりの性分であった。

「のう、おぬしら」

それまで黙って飯を口の中にかっ込んでいたマミゾウは、おもむろに茶碗と箸を置いた。

きつちり中身は平らげている。

「湿気た空気の中で食べる飯は美味いか？」

「食事中はお静かに願います。二ツ岩様」

藍が目も合わせずに答えた。

「だああつ、ええ加減にせんかい！」

マミゾウが机を叩いて、声を荒げた。

さすがに暴れだすような真似はしないが、肩を怒らせて藍を睨みつける。

「おぬしのう、儂に言いたいことがあるんならハッキリ言わんか！」

「……何か、御客人に無礼をいたしましたでしょうか？」

「それじゃ、それっ！ 表面だけ丁寧に取り繕って、腹に黒いもん溜め込んでるのが丸分りなんじゃ！ 文句や不満があるなら辛気臭い真似はせずに、きつちり口と態度に出せい！」

「不満など。紫様のお招きした御客人に対してであろうはずがありません」

「主人の招いた客じゃから不承不承って気持ち透けて見えとるわい！ なによりなあ——」

マミゾウは霊夢の方を一瞥した後、氷のように表情を変えない藍の顔を改めて鋭く睨みつけた。

「儂はともかく、霊夢にまでその態度を向けるとはどういうつもりじゃ!？」

霊夢は目を丸くした。

二つのことに驚いていた。

マミゾウが本気で怒っていること。そして、それが自分の為に藍に對して怒っているということに。

「おぬしが儂を警戒するのは分かる。会ったばかりで、得体も知れん

余所者じゃ。普段は誰も訪れんという主人の住処に、そんな奴を招き入れて、あまつさえ飯や寝床の世話までするのはそりゃあ気に入らんじやろう。

特に、おぬしは狐の妖怪じゃ。妖怪としての力も格も相当なもんじやというのは分かつとる。狸の妖怪である儂とは相性が悪いゆえ、特に理由もなく儂を嫌つても仕方がない。っていうか、儂もおぬしを特に理由もなく嫌いじゃから安心せい」

ワケの分からない棚の上げ方をしながら、マミゾウは続けた。

「しかしなあ、霊夢はおぬしらの身内じやろうが！ それがおぬしの向ける目つきときたら、儂と同じ完全な余所者を見る冷たい目じゃ！ 災難で家を失ったこの娘を、歓迎は無理でもせめて暖かく迎え入れてやるくらいはせんかつ！」

「……マミゾウ、あたしのことはいいいから」

「いいや、よくない！」

冷静な霊夢とは逆に、マミゾウの方は喋っている内に激してきたらしい。

霊夢のことが不憫でならなかった。

今、この場には完全な余所者である自分がいる。厄介者扱いされるのも、まだ理解出来る。

しかし、マミゾウがこの屋敷に招かれたのは偶然だった。

あの時神社を訪れなければ。あるいは、神社に残って霊夢の手伝いをしていなければ、本来ここにいたのは霊夢一人だけだったかもしれないのだ。

もしそうだった場合、彼女は特に不平や不満を言うこともなく、置物のように扱われ、暖かみのない食事を黙って口にしていただろう。

それが許せなかった。

マミゾウが本当に怒っているのは、自分の扱いではなく霊夢の扱いなのだった。

「大体の、これは八雲紫殿にも責任があるのではないか？」

「——」
「主人である貴女の態度が、従者の態度にも反映されておるのではな

いかと思うんじやがの」

マミゾウに水を向けられながらも、紫は沈黙を貫いていた。

視界に入ってすらいなにかのように食事を続けている。

主人に矛先が向けられたことで、藍はそれまで隠していた剣呑な光を瞳に宿らせて、マミゾウを見据えていた。

下手な真似をすれば、すぐにでも襲い掛かってきそうな雰囲気である。

しばらくの間、紫をじつと睨んでいたマミゾウは、やがて小さな舌打ちと共に乗り出していた身を引いた。

紫や藍に気圧されたわけではない。

自分の怒りに対する反応さえ期待出来ないと悟った為だった。

まるで暖簾に腕押しである。

所詮、自分は今日出会ったばかりの余所者なのだ。その物言いになど全く取り合おうとしていないのが分かった。

口をへの字に曲げたまま、怒りを治めようと湯飲みに手を掛けたマミゾウはふと気付いた。

何かを思いついたのか、ニヤリとした笑みを浮かべる。

「……おい、狐よ。湯飲みが空じゃ。客人にお茶を注いでおくれ」

藍はその慙懃無礼な口ぶりを、安い挑発だと受け取った。

黙って急須を手に取り、中身のお茶を注ぐ。

「——むい？」

異変を察知して、藍が声を上げた。

茶を注ぎ始めた途端、湯飲みから中身が溢れ出したのである。

傾けた急須から出ている茶の量と、湯飲みから零れ出している茶の量は明らかに釣り合っていない。

湯飲みの淵から零れる程度だった量がすぐに何倍にも増え、机を水浸しにしたかと思えば、食器や料理を押しつけて、あつという間に部屋全体へ広がっていった。

部屋に溢れた茶が、階から庭へ流れ落ちていく。

湯飲みから零れるにしても明らかに異常な量だったが、溢れる勢いは全く収まる気配がない。

茶というよりも緑色の海に下半身を浸らせながら、しかし四人はその場に座したまま動かなかった。

「おっとっと」

マミゾウは藍をじっと見据えたまま、おどけるように微笑した。

藍の方は、既に動揺を消し去っている。

急須を傾けたままお茶を注ぎ続け、頃合を見計らってそれを止めた。

途端に、湯飲みから溢れ出ていた茶の勢いが止まった。

それどころか、部屋の畳はもちろん、机の上にも茶など零れていない。料理はそのまま卓に並び、水浸しになっていたはずの四人の服は何処も濡れてなどいなかった。

「ふむ、零さなかつたようじゃの」

新しく注がれた湯飲みの中身を見下ろしながら、マミゾウは悪戯っぽく笑った。

それを藍が小さく鼻を鳴らして返す。

先程の現象は、全てマミゾウが術で生み出した幻だったのだ。

藍はそれを見抜き、本物のお茶を溢れさせるという失態を犯すことなく作業を終えた。

当然のように、霊夢と紫の二人も状況を見切っており、全く動揺していない。

「ふふん」

それでも、マミゾウとしては最初の藍の動揺を引き出せただけでも『一本取った』と思える手応えだった。

少しだけ胸の空く思いをしながら、得意げな笑みで湯飲みを口に運んだ。

「——つぶへえ!!? 何じゃこりや、苦っ!!」

茶を飲んだ途端、盛大に咳き込んで、マミゾウは涙目になった。

「おや、口に合いませんでしたか。茶葉を入れすぎたようで」

今度は藍が笑みを浮かべて言った。

マミゾウの仕掛けに対して、彼女も気づかれないようにそのような小細工を施していたらしい。

「き、貴様あゝっ」

マミゾウが恨めしげに、その顔を睨みつける。

今にも掴みかかりそうな雰囲気だったが、最初に自分の方から術を掛けた以上、ここで直接手を出しては負けを認めたと同然である。少なくとも、マミゾウにとってはそういう認識だった。

「良い度胸じゃ、表に出んかい！」

「申し訳ありません。くだらぬ戯れに付き合う暇はございませぬゆえ」

「はっ！ 慇懃無礼な本性が見えてきたのう」

「其方様も、田舎狸の品性と力の底は見えました」

「よっしや、喧嘩売つとるな。買ひ叩いてやるわい！」

マミゾウと藍は互いに身を乗り出し、獣が牙を剥くように笑いながら額を突き合わせた。

一触即発の状況に対して、紫は変わらず無視に近い不干渉を貫いている。

そこに割り込んだのは、霊夢だった。

「マミゾウ、やめて」

頼むよりも命じるような厳しい口調だった。

「食事中よ」

「し、しかしのう……」

「どんな理由であっても、食卓を乱すのは許さない。礼儀がなくなっていわ」

霊夢の叱責に、マミゾウはシヨンボリと肩を落としたりした。

更に、霊夢は藍の方にも冷たい視線を向けた。

「藍、あんたもよ」

「何を——」

「八雲の式っていうのは、食事の場での礼儀作法にも欠くの？」

その指摘には、藍も口を噤むしかなかった。

主人の前で恥を搔かされたという思いが不満となってありありと表れているが、霊夢に反論するという行為が更にその恥を上塗りすることだと理解もしている。

羞恥と怒りで僅かに頬を赤らめながら、藍は黙って身を引いた。元凶であるマミゾウの様子を睨むように伺う。顔を俯かせたマミゾウは、その口元に小さな笑みを浮かべていた。そこで、藍はようやく彼女の本当の意図を察した。最初から、霊夢に藍を叱らせることがマミゾウの目的だったのだ。霊夢を冷遇する藍への意趣返しは、見事に成功していた。それに気付いた藍は小さく呻き、胸中に渦巻く敗北感を味わっていた。

「——霊夢」

互いに正反対の心境で黙り込んだ二人の様子を眺めながら、それまで沈黙を守っていた紫がおもむろに口を開いた。

「マミゾウと藍のやりとり。そこに隠されていた駆け引きや含まれていた真意も、全て見抜いている。」

その上で、紫は面白そうに小さく笑っていた。

「貴女、なかなか面白い妖怪を連れてきたわね」

「食事を始めて以来、紫は初めて霊夢に視線を送った。」

「霊夢はそれを無然とした表情で受け止めた。」

「紫」

「何？」

「あたしも、お茶」

「はいはい」

差し出された空の湯飲みに、紫は笑いながら新しいお茶を注いだ。



寝巻きに着替えた霊夢は、縁側でマミゾウを見つけた。

夜の帳が落ちた中庭に向かって腰を降ろしている。

手元で何かを裁縫しているらしい。赤い布と針が見えた。

「ん、風呂上りか？」

歩み寄る霊夢に気付いて、マミゾウが顔を上げた。

「しつかり髪を乾かすんじゃぞ。湯冷めしてしまう」

「分かってるわよ」

まるで母親のようなことを口にする。

もつとも、霊夢の母は無口だった為、何かを言うよりも先に黙って行動に移すことの方が多かった。

——何故、この狸の妖怪は自分にこうまでお節介を焼くのだろうか？

霊夢はずっと不思議に思っていた。

知らずマミゾウのやっていることに興味を持ち、隣に腰を降ろした。

「何やってるの?」

「ちよい待ち。もうちよつとで完成じや」

マミゾウは最後にぐいっと針を引っ張ると、糸を噛み切った。

「ほれ」

放り渡された物を、霊夢は慌てて両手で受け止めた。

横長い布だった。帯のようにも見えるが、両端には白いフリルが付いている。よく見れば、赤い布地に白い糸で美しい模様も刺繍されていた。

「これって、リボン?」

霊夢の問い掛けに、マミゾウは裁縫道具を片付けながら頷いた。

「潰れた神社から回収した着物があつたじやろ。あの布地で作つたんじや」

「えっ、あれってボロボロに破れてたから紫に頼んで処分したはずじや……」

「服としては使い物にならんかつたが、無事な部分も多かつたの。もつたいないじやろ? リサイクルじや、リサイクル」

『『りさいくる』って何?』

マミゾウは笑いながら言った。

「それにもつたいないといつても、雑巾にして再利用するのは嫌じやろう。大切な母親の服なんじやから」

「……知ってたの?」

「おぬしが着るのは大きすぎるからの。八雲紫殿からも少々話を聞いた」

話を聞いた——というよりも、こちらから訊ねたこと以上の内容を紫の方から勝手に話していた。

ひよっとして、自分がこういつた行動に出ることを予想していたのだろうか。だとすれば、何とも恐ろしい。いや、捻くれていると言わべきか。

いずれにせよ、いい気はしないが不満でもない。

マミゾウは複雑な心境を霊夢から隠しながら、苦笑を噛み殺した。

「余計なお世話じゃったかのう?」

「……ううん」

「そうか、それはよかった」

「あ、ありがとう」

「いやいや、喜んでもらえたならなによりじゃ」

霊夢はリボンを胸に掻き抱くように、しばらくの間握り締めていた。

「……ねえ、マミゾウ」

「何じゃ?」

「どうして、あんたはあたしにこんなに親切にするの?」

「どうしてって……親切にしたらいかんかの?」

「だって、あたし達今日会ったばかりじゃない。それに人間と妖怪よ」「そうじゃのう、他人である理由が多いが、親身になる理由はないってことかの」

「そうよ」

「うむ。理由、か——」

呟きながら、マミゾウは懐から細長い巾着袋を取り出した。

その袋の中から更に出てきたのは煙管だった。

吸い口と雁首の部分に金細工が施されている、価値と年季のある代物である。

「——理由がないと、いかんか?」

煙管を手元でクルクルと回しながら、呟く。

「理由がないとおかしいじゃない」

「別におかしくはないじゃろう。何も身銭を切っておぬしを助けたと

か、そういった大それたことをしたつもりはない。ちよつとした手間や気持ちで出来る親切じゃよ」

「でも、納得いかないわ」

「理屈が通らないことには、つい疑って掛かってしまうということかな？」

「それは……そうかも」

「いかななあ、理由を明確にせねば他人の善意を素直に受け取れんというのは捻くれ者の証拠じゃぞ。その考え方は、あの八雲殿の影響かろう？」

「何で、そこで紫が出てくるのよ？」

「なあに、儂なりにおぬしらを見ていて勝手に感じたことじゃよ。あの食事の場でもそうじゃったがの」

喋りながら、マミゾウは煙管を弄ぶのを止めた。

同じ巾着袋の中に入っていた、紙に包んだ刻みたばこを取り出す。それを火皿の上に、丸めて詰め込んだ。

「最初は勝手に憤って物申してしまっただが、八雲殿は八雲殿で、案外おぬしのことを考えて行動しているのかもしれないと思っただけ」

「……なにそれ。気色悪いこと言わないでよ」

霊夢が顔を顰めながら言った。

紫に氣遣われているということが、不本意で仕方ないらしい。

マミゾウの中で霊夢にとつての八雲紫とは、話にだけ聞く義母とはまた違った親代わりのような立場の者ではないか、という認識があった。

しかし、霊夢の反応を見て、それを直接的な言葉にして口には出さないでおこうと思った。

実際のところどうなのかは分からないが、少なくともそれを聞いた霊夢は確実に機嫌を損ねるだろう。

「優しく扱うことだけが愛情ではない」

マミゾウは煙管に火を点けた。

「厳しく接することも、また愛じゃ」

親の、と心の中で付け加える。

「霊夢。おぬし、母親にぶたれたことはあるか？ あ、もちろん叱る為にじゃよ」

「あるわよ」

霊夢は答えた。

「何回？」

今度はすぐに答えることが出来なかった。

目の前の妖怪は、まるでこちらの心を見抜いているかのように的確な部分を突いてくる。

「……一回だけ」

「ほほう、そりゃあ凄い。よほど聞き分けの良い子供だったんじゃない？」
「母さんに厳しくされてないから、愛されてないって言いたいわけ？」
「いやいや、そんなことはない。きつと優しい母親で、おぬしも頭の良
い子供だったということじゃろう。」

しかし、痛い目を見んと覚えられんことが多いのは人間も妖怪も同じじゃ。おぬしがぶたれたという、その一回。きつと大切なことを学んだんじゃないのかね？」

霊夢は、言葉もない。

マミゾウの言うとおりだった。

間違ったことだと分かっている、それでも心の中に溜まっていた黒い想いを吐き出した時。

そこで母に叩かれた時。

あの時の痛みは今でもはつきりと思い出せる。思い出して、悲しくも苦しくもなる。

しかし、同時に決して記憶から色褪せない大切なものとして残っていた。

「なあ、霊夢。母親のことが好きじゃろう」

「……うん、好き」

「反抗期——は、分からんか。まあ、要するにたまたま母親を煩わしく思ったりすることはなかったかの？」

「ないわ。一度も」

「そうか。しかし、親というのは子供から疎まれることも一つの役割

じやと思う。何事も、善いことを学んだら、悪いことも知らねばならんと儂は思うんじやよ。冷たさから暖かさを知り、間違いから正しさを学ぶ」

「それが、紫だっっていうの?」

「さあて、のう」

意味深げな笑みを湛えながら、マミゾウは煙管を吸った。

霊夢は、口から吐き出される白い煙をじつと見つめていた。

「……ねえ、思ったんだけど」

「何じや?」

「最初の質問から話逸れてない?」

「ありや、そうじゃったか?」

マミゾウは惚けたように笑った。

上手くはぐらかされた、と霊夢は思った。

そう『上手く』だ。いつの間にか、彼女に親切にされたことを素直に受け入れ、こうして親身に話してくれる状況を心地良く感じてしまっているのだ。

霊夢は隣の妖怪に気を許し始めている自分に気付いていた。

「ねえ、マミゾウ。ちよっと聞いてくれる」

「何じや?」

吐き出す煙と共に応える。

「神社を潰した犯人がいるらしいの」

「そうか。酷いことをする輩もいたもんじや」

「あたし、そいつが憎いのよ」

「そうか。そりやあ正当な怒りじやよ」

「……殺してやりたいくらい、憎いのよ」

秘めていた心の闇を打ち明ける。

実際に言葉にすると、自分でも驚くほどどす黒い殺意が滲んでいた。

「そうか」

マミゾウはただ一言だけ呟いて、それを静かに受け止めた。

それだけのことが、霊夢にはありがたかった。

「ねえ」

「何じゃ？」

「殺すって、悪いことなのよ。そんなことしていいの？」

「そうじゃな、好きにせい」

中庭に視線を向けたまま、マミゾウは言った。

霊夢はその横顔を見つめた。

「おぬしも迷っておるんじゃない？」

「……うん」

「復讐して、相手を殺すことが本当に正しいとはおぬしも思っておらん」

「そうよ。でも、我慢出来ない。だって、酷いじゃない。あたしの大切な物、壊されて……畜生」

「うん。ならばな、好きにせい。理不尽な仕打ちを受けたんじゃないや、復讐して何が悪い」

「でも……っ」

苦しげに言い続ける霊夢の目には、僅かだが涙が滲んでいた。悔し涙だった。

マミゾウは霊夢の肩を抱き寄せた。

子供にそうするように、優しく囁きかける。

「どちらが正しいかなんて、儂には答えられんよ。だから、敵を前にして本当に決断せねばならん土壇場になった時、あとは心のままに決めればよい」

「――」

「そこで踏み止まるも、過ちと知って犯すも、おぬしにとっては同じじゃ。きつと、どちらを選んでも心にわだかまるものはあるじやろう」

「――」

「その後で、自分がしたことを全て母に話せばいい。きつと、母はおぬしを叱ったり、許したりしてくれるじやろう」

「……………うん」

霊夢はしばらくの間、マミゾウに身を寄せたままじっとしていた。

どれくらいそうしていただろう。
おもむろに、霊夢は体を離した。

煙管から煙を吹かすマミゾウを、少し恨めしげに睨みつけた。

「あんた、臭いわよ」

「ふむ、煙草の臭いかの?」

「知っているわ。そのタバコっていうの、体に悪いのよ。母さんが言ってた。『酒を飲むのはいいけど、タバコだけはやるな』って」

「ふおっふおっふおっ、そりゃあ素晴らしい教育じゃのう。その通り、こんなもん百害あつて一利なしじゃ」

「じゃあ、なんであんたはそれを好き好んで吸ってるのよ」

「さあて、何でかのう。悪いと分かっているのにやめられん。いや、こりや難儀なもんじゃ。困った困った」

そう言つて、マミゾウは声を上げて笑った。



平日の本屋は暇である。

特に、お昼時になると食事の為に客も減る。夕方以降に学生の客が増えるまでは、仕事も忙しくはない。

「——あの、すいません」

その女性店員は、レジカウンターで声を掛けられた。

笑顔と共に声の方向へ向き直り、すぐに視線をやや下方へと修正する。

「はい、何か御用でしょうか?」

「本を探していただきたいんですが」

小柄で可愛らしい少女だった。

ショートカットの髪にワンピースとカーディガン。端正な容姿と相まって、無条件に微笑みかけたくなるほど愛らしい。

店員の営業スマイルが、自然な素の笑顔へと変わっていった。

「どういった本をお探しでしょうか?」

「漫画で『ジョジョの奇妙な冒険』という本です」

聞いたことのないタイトルだった。

パソコンで検索してみたが、店の在庫はもちろん、タイトル自体が該当しない。

「申し訳ありませんが、そちらの本は存在しないようです。タイトルにお間違えはないでしょうか？」

「いえ、いいんです。もう一冊、『東方求聞史紀』という本はありますか？」

「——申し訳ありません。そういったタイトルの本もないようです」「そうでしたか、ありがとうございます。これ、ください」

少女は残念がる様子もなく、数冊の文庫本をカウンターに置いた。落ち着いた子だなあ、と店員は感心した。

外見からして小学生くらいの女の子だ。大人の店員に対して物怖じせずに関心を探ねるということ自体が珍しい。大人びた少女だと思っただ。

そこで、ふと気付いた。

目の前の少女が学生相当の年齢であることに間違いはない。

本来ならば、この時間帯は学校にいるはずである。

サボりか？ いや、そんな不良には見えない。華奢な体つきは何処か病弱そうだし、ひよつとして入院していて学校には通っていないのだろうか——。

「私は病弱だから、入院しているんです。学校に行けないので、代わりにこういった本を読んでいるんです」

やはり、そうだったのか——と、店員は若干気まずい気持ちを抱えながらも納得した。

おそらく買い物には慣れていないのだろう。戸惑った様子でお金を取り出す少女に、先程のお詫びも兼ねて丁寧に接客しながら会計を済ませた。

「ありがとうございます」

店員が言う前に、少女の方が頭を下げて、そう言った。

今時珍しい、礼儀正しい女の子である。

自然と見送りにも熱が入る。

「いいえ。宜しければ、またお越しくださいませ」

「はい——機会があれば」

退店する少女の背中を、店員は笑顔で見送った。

接客業には、悪意のある客など色々な相手に対応することが多い。そんな中での少女の来店は爽やかな風のように感じられた。

本当にまた来てくれるかは分からないが、自然と心に残る時間だった。

カウンターに戻った店員は、未だに暇な時間を利用して、自分のスマートフォンで少女の訊ねた本のタイトルをネット検索してみた。

「……うーん、やっぱりあの子が何か勘違いしてるのね」

少女の探していたタイトルの本はもちろん、キーワードが一致することさえなかった。



——バタフライ・エフェクト。

ブラジルでの蝶の羽ばたきがテキサスでトルネードを引き起こす。

目に留まらない程度の極めて小さな差が、いずれ無視出来ない程大きな差を生む現象を指す言葉だった。

「つまり『風が吹けば桶屋が儲かる』というやつですね」

手元の文庫本に視線を落としながら、さとりは独り言を呟いた。

大体の理屈は理解出来ている。

つまり、物事は互いに影響し合い、一つの歯車が失われることで様々な変化が現れるということだ。

現在、自分がこうして外の世界に在ること地霊殿の主が不在となり、地底の業務に不具合が発生しているだろうということと同じように。

自分で例えておきながら、さとりは頭を抱えなくなった。

無事に幻想郷へ帰れたとしても、きつと問題が山積みだ。まったく頭が痛くなってくる。

憂鬱な気分になりながらも、思考を元に戻した。

「本物を読むの、ちょっと楽しみにしてたんですけどね」

先程訪れた本屋での出来事である。

あらかじめ予想していたことだが、先代の知識にあった漫画は、彼女の前世となる異世界にのみ存在する本であり、この外の世界には存在しなかった。

考えてみれば、当然のことだ。実在する本ならば、外の世界を歩き来出来る八雲紫が知っているはずである。

少なくとも先代の認識では、どれも世界的にかなり有名な作品ばかりだった。

そして、先代はその漫画の中の台詞を何度か引用している。

先代自身がよく力説しているように『名台詞』として知名度の高いそれらを、八雲紫は知らなかったのだ。

ならば、大本となる漫画自体が存在しないのだろうか——と、さとりは以前から予想をしていた。

それでも半分は期待していたのである。

実際に判明して、残念なのは間違いなかった。

しかし、さとりが最も気になってるのは別のことだった。

例えば、先程挙げた『名台詞』——先代がそうしたように、こういった言葉は引用して使われることも多いものである。偉人の言葉がそうであるように。

また『パロディ』というジャンルも存在する。有名な作品を、二次的に模倣したり、もじったりした作品のことだ。

さとりは、原作の有名なコミックを知ると同時に、そのパロディについても先代の知識から知っていた。

この世界に、先代の知る数々の有名な本は存在しない。

ならば——それらを原作とするパロディや、言葉を引用した文章まで存在しないというのだろうか？

些細な疑問も、そこから視野を広げて眺めてみれば、物事全体の歪みに気付く。

風が吹かなければ、桶屋の利益は何処に行ったのだろうか。

羽ばたく蝶がいなくなれば、竜巻は消えるというのか。

「確認、するべきなのでしょうか……?」

それが何らかの禁忌に触れる、酷く恐ろしいことのような気がする。

いつの間にか、読書を止めてさとりは考え込んでいた。

外の世界に来る前、地霊殿で考えていたことを思い出す。

先代の知識の中では『東方Project』という作品として一つに収まっていた、この世界。

目に映るもの全てが、大雑把な修正や削除を加えられた歪な風景に見えてならない。その痕跡が、微細な矛盾としてそこらかしこに残っている。

自分の住む世界が、地球という巨大な球体であることくらいはさとりも知っていた。

——しかし、本当にそうか？

——この世界に限っては、実は地平線や水平線の先には何もなくて、海の水がざあざあ流れ落ちている光景が広がっているのではないか。

そんな考えまで、真剣に浮かんでしまうのだ。

「それこそ、幻想の世界ですね」

日本神話では、最初に神が人間を生み出し、その人間が住む国も生んだとされている。

現実には疑問点や歪みを追求していった結果、外の世界では否定されているその幻想の起源に行き着くことから、何とも皮肉な話だと苦笑した。

不毛なことを悩んでいると自覚して、さとりは考えるのをやめた。

視線を上げて、一度自分のいる場所を確認してみる。

公園の一角。さとりはベンチに腰を降ろしていた。

公園の池で釣りをする老人や、ボートに乗って遊ぶ親子連れが見えた。

見たことのない風景。

聞いたことのない音

平日の静かな公園でも感じる息苦しさ、狭苦しさ。

それらから目を逸らす為に、さとりは再び手元の本に集中した。しばらくして、先代がやって来るのに気付いた。

さとりが公園のすぐ傍の本屋を訪れたのに対して、彼女は少し離れたコンビニに買い物へ行っていたのだ。

先代の大柄な体が、すぐ隣に腰を降ろし、木製のベンチが軋んだ音を立てた。

見慣れた巫女服とは違う現代風のファッションが、妙に似合っている。

買ってきたオレンジジュースを受け取り、ちよつとしたやりとりを交わした後、さとりは改めて自分達の境遇を思った。

「何故、こんなことになってしまったんでしようね？」

外の世界に来て、知らなくてもいいことを知り、それに頭を悩まされている。

「分からん」

先代の返答が、さとりには何処か投げやりに聞こえた。

——彼女は、私があと二日でこの世界から消滅することを知らない。



さとりんの現代ファッション、似合いすぎワロタ。

脳内カメラのシャッターを切って『東方現代化』というタグと共に保存しておくことにしよう！

服を選んだ青娥にはグツジョブと言わざるを得ない。

青娥の家で一夜を明かし、朝の内に私とさとりの身体のサイズを測ってから、近場の衣料量販店で服だけを買ってきてもらったのだ。

本当は私達も同行して、服屋で試着とかしながらちゃんとした物を選んで買った方がよかったのだろうが、何せそこへ行くまでの服がない。

それに、市街地では昨夜大騒ぎを起こしたばかりだ。

ちなみに、あの件に関しては少なくとも朝のニュースにはなっていない。

なかった。

正確にはトラック事故のニュースは流れたが『警察も現在調査中』とか出て詳しくは語られていなかった。

まあ、マッチョ巫女がトラック殴って止めたとか放送したら苦情殺到で番組の信用ガタ落ちになるだろう、常識的に考えて。警察側から正式な見解が出るまで迂闊に詳細を語れないってことなんだろうけど。

だからといって、昨日の今日で現場近くにノコノコと顔は出せない。私もさとりも目立つ姿をしているから、尚更だ。

結局、自由に動ける青娥だけで行ってもらうしかなかった。

支払いも完全に彼女持ちだし、本当頭が上がりません。っつーか、まるでヒモやね私。

しかし、おかげで服装だけは目立たない物に変えることが出来るようになった。

……変装だけじゃ、周りに溶け込めない身体的特徴持つてるけど。私の方は何せ身体がデカイので、外国製の男物の服しかなく、デザインも限られていた為手に入ったのは一着きりだったが、さとりには可愛いデザインのを何着か見繕ってきてくれた。

しかも、これがどれも似合うんだ。

青娥つてばセンスいいのよね。さすが、現代に生きる女性。

文字通り時代遅れで、素の美的センスも乏しい私とは違う。

幻想郷でも日常生活は巫女服だけで通してたし、前世の知識を総動員しても服のセンスとかよく分からん。私の着る服なんて、肩の部分を破った道着とかでもよかつたくらい。

それに、これは現代入りした際の弊害なのだが、幻想郷住まいの私達と現代社会に生きる青娥との間には感覚の違いが生まれているのだった。

青娥が買ってきた服を、家でさとりに着せていた時の話である。

私は、何気になく呟いた。

地味な色合いの服が多いんじゃないか——と。

『先代様、考えてもみてください。ピンク色の地毛を持つ日本人など

いるでしょうか？』

青娥は私に言った。

『仮に染めていたとしても、それは酷く周囲から浮いて人目につくものでしょう。服についても同じことです』

青娥の指摘を受けて、私は改めて違和感に気付いたのだ。

私はともかく、さどりの容姿は日本人離れしたものである。いや、外国人と言っても怪しい。

服装だつてそうだ。こんな明るい色合いの服なんて、漫画やアニメならともかく現実では目に痛い。まるでコスプレである。いや、東方キャラのコスプレって言ったらその通りでもあるんだけど。

それに何より、さどりの持つ『第三の目』はどうなってるんだ？

幼女の身体に目玉が巻きついてるなんて、珍しい通り越してホラーである。

夜の街を歩いた時、私達は確かに注目こそされていたが、そういった奇怪な部分に対して不審な目は向けられていなかったような気がする。

不思議に思う私に、青娥は説明してくれた。

『それが、この世界に満ちる幻想を否定する力なのです。』

私の髪の色が、先代様達には青く見えるでしょう。これが地毛なのです。しかし、やはりこんな髪の間人はいません。その認識が根付いた人間の視点では、私の髪は都合の良いものに見えるのですよ』

他人の視点など分からないので、イマイチ具体的に理解は出来ないが、つまり普通の人間には納得出来る形に見えるらしい。

日本人として珍しくない黒髪に見えるのか、あるいは他人の顔をイチイチ詳細に覚えていないようにぼんやりと捉えているのか。

いずれにせよ、人が実在する幽霊を柳の葉だと誤魔化すように、さどりの姿を常識に溶け込ませて捉えるらしいのだ。

当然、第三の目なんて生物に存在しない器官も、普通の人間には見えない。

幻想郷にいた私には、ありのままのさどりや青娥の姿が認識出来る。ピンクや青い色の髪に対して、一般的な服装が地味な色合いに映

るのはそのせいだった。

幻想郷と外の世界の違いって、結構大きいんだなあとしみじみ感じる出来事だった。

だから、というわけでもないのだが早いところ幻想郷に帰りたい。私自身もそうだが、何よりもさとりを早く帰してやりたい。

何だか嫌な予感がするのだ。

さとりは外の世界にきた影響はないと最初に言っていたが、青娥から受ける説明はどれも環境の違いを感じさせるものばかりだ。これらがさとりにいい影響を与えるところとも思えない。

……つていうか、気のせいならいいんだけど、さとりが昨日よりも元氣ないように見えるんだよね。

今も同じベンチの隣に座って、ぼうつと公園の池を眺めている。

地霊殿に残してきたお空達のことにも気に掛かっているのかもしれない。

そういえば、さとりつて地底の偉い人なのよね。行方不明になって大丈夫なの？ いや、大丈夫なわけないか。やべ、更に問題が増えた。やはり、早急に行動に移す必要があるな。

幻想郷への帰還——『現代入り』とは対を成す『幻想入り』の実行を！

「どうやら、目的地が決まったようですね」

私の心を読んだらしい。さとりが言った。

普段ならば私の計画を事前に見抜いていただろうが、能力が弱体化した都合上把握してない部分も多いだろう。

なので、私が昨夜から考えていた内容を、改めてさとりにも説明しよう。

「真面目に考えたようですね。聞かせてもらいましょう」

……それって、普段は真面目に考えてないように聞こえるんですが。

ま、まあいいや。とにかく説明する。

当初、想定していた帰還方法は『外の世界の博麗神社を経由して幻想郷に戻る』というものだった。

この『外の世界の博麗神社』だが、青娥に訊いて見たところ、近場にそれらしい物はないらしい。

「まあ、そこまで都合よく話は進みませんよね」

その通り。さすがにこれは運の良さに期待しすぎてことだろう。そして、そもそもが『外の世界の博麗神社』がある場所そのものさえ見当がつかないという話である。

少なくとも、青娥は知らないと言っていた。

「嘘を吐いてはいませんでしたね」

さとりが言うなら間違いないだろう。

でも、青娥が嘘を吐くって想定して構えるのは、ちよつとどうかなーって思うんだけど。

さとりつてば青娥のこと本当に信用してないのね。

「信頼関係なんて人それぞれですよ。八雲紫のようにね」

まあ、紫も周りから妙に胡散臭がられてるしね。私は誰よりも信頼しているんだけど。

分かった。さとりと青娥の仲については、今は私が口出すことじゃない。

とにかく、外の世界と幻想郷の両方に精通していそうな青娥でも博麗神社については知らない。

なんか漫画とかでよくある『裏の住人は裏の世界に詳しい』みたいな、漠然とした情報網を青娥に期待していたのだが、それもまた勝手な期待だった。

神社を探すにしても、これで取っ掛かりがなくなってしまったことになる。

しらみつぶしに探すというのも、ちよつと現実的な案ではない。

具体的な方法もないしね。日本の端から端まで歩いて探すとしても言うのか？ 青娥なら、意外とノリノリで付き合ってくれそうだけども。

「まあ、まだ八雲紫がこちらを探し当ててるのを待っている方が現実的ですね」

そうなんだよね。

そこで、だ。

私は別の案を考えた。

いや、実のところ昨夜の内に思いついてはいたんだ。

そして今のところ、この案を実行するのに現実的な判断材料が揃ってきている。

これは青娥のおかげでもあった。

彼女がこの世界に存在することを知ってから、この案を思いついたのだ。

彼女の存在が、この世界を幻想郷との地続きであると証明してくれた。そして、外の世界にもまだ妖怪や神が残っていると教えてくれたのだ。

昨夜の内に青娥から訊いておいた現在地とその地名。それを、私の知識にある日本の地理と照らし合わせる。

私はついさつきコンビニで買ってきた地図を袋から取り出した。

考えていた内容を、実際の地図で確認する。

……うん、問題ない。

続いて取り出したのは、近場の駅の時刻表。

これも……オーケーだ。

電車の切符さえ買えば、明日の朝に出て、昼過ぎには目的地に着出来る。

「……なるほど。青娥さんが別行動をしているのは、明日の為でしたか」

うん。博麗神社が近場にならない以上、幻想郷へ帰る為に遠出するのは最初から決まっていたことなんだ。

そのことを伝えたら、青娥は『じゃあ、旅行の準備をしないとダメですね』と楽しそうに笑っていた。

多分、その為の買い物に出掛けたんだろう。

夕方までには帰ってくる。

そしたら、出掛ける準備は完了だ。

「明日、ですか。上手くいけますかね？」

さとりが訊ねてくる。

私の考えが読めるのだから、この案が現実ではないことくらい分かっているだろう。

幻想郷に帰れる可能性は高いと思っているが、時間的な面では私も全く予想出来ない。

タイミングが良ければ、私達はある出来事に便乗してすぐにも幻想郷に帰れる。今は『そういう時期』なのだ。

もし、その思惑が外れたら、帰れるにしても長い時間が掛かることになるかもしれない。

しかし、さどりの顔には不安な色など欠片も浮かんでいなかった。どちらかというところ、私の方が不安なくらいだ。

だけど考え抜いた結果、今のところ一番可能性が高い手段はこれなんだよな。

とりあえず、全ては明日。目的地に着いてから、更に考えよう。少なくとも、あるのかどうかも分からない博麗神社を探すよりは、

しっかりと地図にも表記されていて交通手段まである場所を目指す方が確実だ。

行こう、明日。

——長野の諏訪大社へ。

そこに居るはずの『八坂神奈子』と『洩矢諏訪子』の二柱の神に力を貸してもらい、私達は幻想郷へと帰還する！

其の四十四 「東風谷早苗」

『空を飛びたい』と言うと、『飛べるわけない』と他人は言う。

高い所によじ登ってそこからジャンプしようとする、周りの人達はそれを止めようとする。

崖から身を投げ出す行為は自殺と同じだと、彼らの中では決まっている。

だから、彼らは高い所から飛ぼうとしない。

自分が飛べないから、他人も飛べないと決め付けている。

そこから飛んだ人間が月まで行けるかもしれないなんて、彼らは在り得ないと考えている。

彼らにとつて、自分の足の下に地面があることは当たり前のことなのだ。

『常識』という不動の大地の安定感。

揺るぎ無い地盤のもたらす安心感がないと彼らは落ち着いて生きていけない。

そこを離れようとする人を見ると、彼らは落ち着かなくなる。

もし、本当に月まで飛んで行ける人間が現れたら、それを認められない彼らは撃ち落そうとでもするのだろうか。

常識の満ちる世界が、私の行為そのものを抑止しようとする。

思い切り飛べる世界に行きたい。

高い所から飛ぼうとしても誰も止めない世界。

そんな行為が許される世界。

——私は、空を飛ぶ人間になりたい。



「俺、東風谷さんのことが好きなんだ。その、よかつたら付き合ってくれないかな？」

私が、人のいなくなった放課後の教室で帰り支度をしていると、彼はいきなりそう言った。

私は振り返った体勢のまま、しばらく返事をする事が出来なかった。

目の前の男子生徒は同じクラスメイトで、遠山君といったはずだ。下の名前は知らない。つまり、それくらいの付き合いだということだ。

彼は真つ直ぐに私を見ていて、顔つきは真剣そのものだった。

これがいわゆる告白であり、決して冗談や悪ふざけを交えたものではないことは痛いほど理解出来た。

しかし、私の中で感動は少なかった。

一番胸の内を占めていたのは納得だった。

ああ、そうか。ろくに話もしたことのない彼が今日に限って、普段から教室に残って簡単な掃除をしてから帰る私を手伝ってくれたのはこの為か——と。

そんな納得だった。

ちよつとした疑問の解消した私は、返答を待つ彼に訊ねた。

「どうして私なんですか？」

自分でも些かどうかと思うほど、普段通りの口調だった。

口調が他人行儀なのもいつも通り。逆に、顔を赤くするほど緊張した面持ちの遠山君には大変申し訳ないと思う。

「え、つと……その、東風谷さんは可愛いし」

遠山君は面接で最適な返答をしようとする時みたいな必死さで答えた。

彼は俗に言う『イケメン』だ。クラスメイトの私も、彼が勉強もスポーツも出来て、サッカー部に所属している『カッコいい男の子』だということくらいは分かっている。

そんな男の子から『可愛い』と言われたら、普通の女の子ならときめいてしまうのではないだろうか。

告白される理由としては、十分に納得してしまうのかもしれない。

私も悪い気はしない。

——でも、別にいい気もしない。

なんて言えればいいんだろう？

ハッキリ言って、告白の理由として私が納得出来るものではない。可愛い女の子くらい、私以外にもいくらでもいる。

とりあえず『ありがとう』とでも言っておけばいいのだろうか？

でも、それを了承の返事と誤解されても面倒だ。

だからといって『見た目が良ければ何でもいいの？』なんて、揚げ足取りみたいな返事をするほど私は捻くれていない。

結局、私は言葉の続きを促すように、黙って彼を見つめ返した。

私の視線をどういう意味で受け取ったのか、彼は慌てて言葉を続けた。

「そ、それに凄く優しく、素敵な女の子だと思うんだ。こうして、いつも放課後に残って皆の使う教室の掃除をしてくれたりするし。先生に言われたわけでもないのに」

「ええ。別に私がしようと思ってることですから」

「そこが凄いなだよ。それに俺、この間の日曜日に東風谷さんがおばあちゃん達と一緒に公園の掃除をしているのを見たんだ」

「ボランティア活動に参加しただけですよ」

「お、俺それを見てさ、暑い日差しの中で頑張ってる東風谷さんが……凄く綺麗に見えたんだよ！」

遠山君は感極まったような笑顔で、そう言った。

本心で私を褒めてくれていることは分かる。

私も、やっぱり悪い気はしない。

彼は多分、今時珍しい真っ直ぐで素直な男の子なのだ。

でも、だからといってそこに何か心動かされるものがあるわけではなかった。

何故、彼はただのボランティア活動をそこまで美化して受け取るのだろうか。

あの時、彼自身が言ったように私以外にも年配の人達が何人も参加して、彼の言う暑い日差しの中で頑張っていたのだ。

あの人達と私が、彼にはどういった理由で違って見えたのだろうか？

私には、それが分からない。

「そうですか」

私は相槌を返すことしか出来なかった。

彼の返答は、私の中では納得のいく理由ではなかった。

何故、彼が私なんかを好きになったのか未だに分からない。

しかし、彼自身はもう全てを語り終えたのだろう。

じつと私の返事を待っている。

何て言えばいいのだろう。

彼の言葉から感じた疑問を、そのままそっくり言葉にして彼に投げ掛けるのが一番単純な方法だと思う。

だけど、それが遠山君を不必要に傷つけたり、意図せずとも責めたりすることになるくらいは私にも分かっていた。

彼はただ、他人の——私の善行に美德を感じ、それを異性の魅力として純粹に捉えただけなのだ。

同年代の学生にとつてはやらないことが当たり前のことを私がやっていたから、目立って、たまたま彼の目に留まっただけのことなのだ。

だけど、私にとつて当たり前のことを魅力のように語られても、やはり同調など出来ない。

「……ごめんなさい。貴方とお付き合いすることは出来ません」

結局、私はただ単純にそう答える方法しか思いつかなかった。

期待と不安が緋い交ぜになっていた彼の顔つきが、落胆によって崩れた。

「そ、そうか……ははっ、ハッキリ言ってくれてありがとう……」

必死に笑顔を取り繕いながら、そう返してくれる彼が優しい心の持ち主であることは疑いようもなかった。

男の子に告白されたことは、何度か経験がある。

断られた相手は、大抵の場合私に理由を訊こうとする。それを上手く説明出来ないだけで、何故か一度断った告白を再び迫ってくる人も多かった。

そんな人達とは違って、遠山君は私を気遣ってくれているのだ。

「ごめんなさい」

私は心から申し訳ないと思って、もう一度そう言った。

これ以上、ここにいても気まずいだけだ。
私は自分の鞆を持つと、佇む遠山君を置いて、教室から出ようとした。

「……あの」

教室の扉をくぐろうとした所で、私は振り返った。

「遠山君。私の髪、どんな風に見えますか？」

何故、そんなことを訊ねたのか自分でも分からなかった。

彼の告白は、ハッキリと断ったはずだ。

彼が何と答えようと、私の中で決めたことは変わらない。

だけど、彼はとてもいい人だから——何の理由にもなっていないが、私は漠然と期待してしまったのかもしれない。

私の唐突な問い掛けに、彼は少し呆然とした後、慌てて笑みを浮かべながら答えた。

「あ……ああ、凄く綺麗な『黒髪』だよ！」

私は勝手な人間だった。

彼の本心から出た誠実な答えに、私はその時勝手に落胆したのだ。

私は彼の答えに『そう』と曖昧に応えた。

笑おうとしたが、ちゃんと笑っているか自分では分からなかった。

私は自分の髪を軽く手で撫でた。

「ありがとう」

そう言って、私は今度こそ教室から出た。

彼はいい人だと思う。

だけど、明日からはもうなるべく彼に近づかないようにしよう。

彼を傷つけたからだけじゃない。私が彼に負い目を感じてしまうからだ。

勝手に期待して、勝手に落胆した。

そして、勝手に彼との間に壁を作ってしまった。

彼もやっぱり周りの人達と同じ『私とは違う人間』なのだ。

——私の、この『緑色の髪』を見ることが出来る人は、今のところ一人も現れていない。



私の『東風谷早苗』という名前はちよっと珍しい。

子供の頃は『ごちや』という苗字が読めずに『とうふうや』と間違われ、『早苗の家は豆腐屋さん』なんてからかわれたこともあった。

だけど、それ以外は世間一般的な範疇の高校生だ。

父と母、そして私の三人家族で普通の一軒家に住んでいる。

生活は特別裕福ではないが、貧しくもない。家族の間で不和もなく、不自由のない十分に恵まれた暮らしだと思う。

この土地の代名詞である『洩矢』に関係した血縁であるが、それが私の人生や実生活に何か多大な影響を及ぼしているわけではない。普通の人よりも神事に詳しくて、年中行事に主立って参加するくらいだ。

私は朝起きると、朝食を食べて学校に行く。

クラスメイトと挨拶のちよっとした延長程度の会話を交わして、授業を真面目に受け、それが終わると日課のように教室を軽く掃除してから帰宅する。

夕食の時には母や父と談笑もするし、好きな番組がある日だったらテレビも見たりする。

宿題や予習をして、私は眠りに就く。

そうして私の問題のない人間としての一日が終わり、また次の日から始まるのだ。

問題というのは、つまりこれは私の幼稚園時代の記憶なのだが、周りの人間には見えないものを認識してそれに話しかけるといいう行動を繰り返した結果、両親を含んだ周囲の大人達に心配されるということである。

——この世界には、私にしか見えないものが存在する。

私はその事実を悟り、それを隠しながら生きていくという方針を固めたのが一体いつ頃の話なのか、もうハッキリとは思いつけない。

世間の常識というものを知ること、私は自分自身の異常さを理解していった。

最初の頃、私は自身の内包する異常と周囲の常識に上手く折り合いをつけて生きていけていた。

小学生くらいの頃までは、私の考えや行動は夢見がちな子供らしきとして周囲にはある程度許容されていたのだ。

中学生に入ると、私は周囲から少し目立つようになった。それは良い意味でも悪い意味でもある。

既に十分に分別がつく年齢になっていた私は、自分だけにしか見えないう存在や自分しか持っていない髪の色、歳を経るごとにどんどん大きくなっていく自分の内に眠る異様な『力』が、世間では異質極まりないことを弁えていた。それを隠す必要性も受け入れていた。

しかし、そんな異質な部分とは全く関係のないところで、私は世間で好まれる価値観から少しズレているようだった。

住んでいる地域のボランティアに参加することや、日常の中で見かけた老人や子供などの困っている人達を手助けすることは、私にとって別段誇るべきこともでもない当たり前のことだった。

家や門前通りの掃除をするなんて、意識してやるほどの行動ではない。

家柄の関係から神社の掃除などを子供の頃から日常的にやっていたのも理由の一つかもしれないが、やはり私から言わせれば、こんな行動にイチイチ理由を求めること自体が理解出来ない話だった。

だけど、世間一般の常識では違うらしい。

学生の私が休みの日に朝早くから掃除をしていることは、周囲の大人にとっては称賛に値する行動らしかった。

そして、逆に同級生にとっては、いわゆる『今時の若者』の常識から逸脱した奇異な行為に見えるらしい。

ボランティアに参加した次の日、遠山君のように私の行動を褒め称える声もあれば、優等生の点数稼ぎと陰口を叩かれるのを聞いたこともあった。

直接、私にそう言ってきた人もいた。一時期は、いわゆる『いじめ』のようなものに発展したこともあったし、高校生になった現在も一部の人達から向けられる意識には似たような傾向が続いている。

しかし、それも深刻に悩むほどの事態には陥っていない。

一番事態が深刻だったいじめを受けていた時期に私が遭遇した事件から、私への周囲の認識が少し変わったのだ。

当時、担任だった男性教師が、私が陥っているいじめの状況を知って化学準備室に私を呼び出した。

何故、職員室ではなく、人気のない準備室だったのかはすぐに判明した。

彼は、私の相談に乗る風を装いながら、私の身体を触ってきたのだ。私へのセクハラが目的なのはすぐに理解出来た。

ああいった場合、どの程度の抵抗が妥当だったのだろう。今でも悩む時があるし、当時を思い返して少し後悔もしている。

普通の女子生徒だったら、身体に触られた程度では思い切った行動にまでは出られないのではないだろうか。強姦される可能性にまで至らない限り、大声を出したり、暴れる程の決断にまではなかなか踏み切れないのではないかと思う。

世間体というものが理解出来るだけの年頃だ。次の日から周囲の自分を見る目が変わってしまうことを想像して、竦んでしまうのではないだろうか。気の弱い女の子だったら、なおさらだ。

あの時の担任が、それらを何処まで想定していたかは分からない。いじめを受けている私を、気の弱い女生徒だと思っていたのかもしれない。実際、当時の私は深刻とまではいかなくても、多少気が滅入っていた。

制服の下に手を入れて胸をまさぐられた段階で、私は抵抗をした。拘束のつもりなのか、私の肩を抑えていたもう片方の手を冷静に両手で掴み、小指を折った。そして、動揺と激痛から後退った担任の頭を座っていた椅子で殴りつけ、大きな声で人を呼んだ。

担任の男性教師は警察に逮捕され、被害者である私は社会からの庇護と周囲からの同情を正當に受けた。

同時に、私は一部の同級生達から『冷静にそういうことが出来る人間』として忌避され、いじめは自然と消滅していった。代わりに、友人と呼べるようなクラスメイトは完全にいなくなり、他の同級生から

も敬遠されるようになった。

問題は解決したといえれば解決した。

高校生になった私は、良くも悪くも級友とは関わりの少ない学生として、問題のない日々を過ごしている。

——問題のない日々。

それがこんなにも重苦しいものを纏って生きていくことだなんて、子供の頃の私は知らなかった。

まるで沼の中に頭まで浸かっているような圧迫感。

私を捕らえて不自由にするのは『常識』という重み。

例え息苦しくなっても、私はそこから顔を出さないように我慢して、じつと沼の中に潜って過ごしている。

もしも、私がそこからちよつとでも頭を出そうものなら、周囲の人々はまるで怪物が出てきたかのように驚いて騒ぎ立てるから——そんなイメージが、私を戒めているのだ。

——いや。

このイメージは間違いなんかじゃない。

私は沼に深く潜んで、息を殺して生きている怪物なんだ。

だから、私の日常には感動がない。

周りの人達と同じものを見ることが出来ないし、それに一喜一憂したりもしない。

つまらない世界。つまらない日常。学生である私がそんな悩みを口にしたら、周囲もこの時ばかりはありきたりな若者の愚痴だと気にもせず受け流してくれるだろう。

だけど、本当になんて——何一つ心動かされることのない、退屈でつまらない日々なんだろう。

時を経る毎に、それをより深く理解していく。小学、中学、高校と、私の生活の中からどんどん感動がなくなっていくのはそのせいかもしれない。

私の人生はまだまだ先が長いはずなのに、どんどん一日を過ごすのが億劫になっていく。

大人になったら結婚したり、家庭を築いたり、子供を授かったり、た

くさんの特別なことが待っているはずなのに、今の私には想像さえ出
来ない。

これから先も、私には特別なことも、人も、きつと訪れない。

今の世の中に、信じられないことなんて起こらない。

子供の頃から大好きだったアニメのロボットが、テレビの中から飛
び出してくることなんて絶対にない空想の存在なんだと私はもう分
かっている。

周りがそう言っていたから。

だけど。

何故。

世間の誰もが知らないのだろうか。

目に見えないものが存在していることを。

目に見えない力が存在していることを。

そして、それらを認識出来る人間だって存在していることを。

それが、私であることを。

何故、誰も聞いてくれないのだろう。

何故、誰も信じてくれないのだろう。

「――神様だって、本当にいるのに」

そう呟いたのは、学校から帰って自分の部屋に居た時だった。

だから、誰にも聞かれることもなかったし、変な顔をされることも
なかった。

それに安心することさえ、最近はなくなってしまった。



最近、物思いに耽ることが増えた。

この日の帰宅途中の道でもそうだった。

私が彼女達に路地裏へあつさりど追い詰められてしまったのは、そ
のせいだったのかもしれない。

いつものように教室を掃除してから学校を出た私は、何が切っ掛け
でそんな思考を始めたのか分からないけれど、とにかく未来に希望な

んでないというワケの分からない被害妄想を廻らせていた。

二十一世紀は宇宙の世紀だなんて言われていたのに、今じゃ、環境を守れだとか、景気対策がどうだとか、馬鹿みたい。きつと、私が生きていく間に人類が火星で暮らすことはないんだろうな。じゃあ、大人になっても移住の為に金を貯める必要なんてないんだ――。

そんなネガティブな感じのことを考えていた。

ネガティブ……？ どうなんだろう、これって『ネガティブ』の範疇に入る一般的な発想？

誰にでもアンニュイな気分になる日はあると思う。特に私は自他共に認める思春期の不安定な年頃なのだ。

こんな時に愚痴を言い合ったり、気分転換に遊びに行ける友達が、私にはいない。

一人、悶々としながら歩き慣れた帰路を辿っていると、商店街を通り抜ける途中で行く先を遮る集団に気付いた。

男子学生二人と女子学生三人の組み合わせ。私と同じ学校の制服を着ているが、私は彼女達のことを知らない。

同級生と思わしき五人の内の女生徒一人が、近づいた私の姿を目敏く見つけ、嫌な感じのする笑いを浮かべて他の四人に何か話しかけた。一斉に笑いが湧き起こり、五人が私に向かって歩き出した。

明らかに揉め事の前兆であることを感じ取った私は、相手に動揺を見せないよう足を止めず、咄嗟にすぐ傍の脇道へ方向転換して入り込んだ。

それが完全な失敗だったと気付いたのは、どんどん細くなる路地の袋小路に辿り着いた時だった。

あの時、慌てて踵を返して逃げ出した方がマシだったのではないかというほど最悪の状況だった。同じくらい自分が間抜けだとも思った。

私は自分から逃げ場のない状況へ足を踏み込んでしまったのだ。

諦めと開き直りの中間のような気持ちで振り返ると、狭い路地を塞ぐように五人は横に並んで私に歩み寄ってきた。

男子生徒二人を先頭に、女生徒三人が後ろに控えるというよりも男

二人を指揮しているような様子で、五人は私の前で立ち止まった。

「あんた、東風谷早苗でしょ」

質問ではない。確認の為の断定的な口調だった。

私に直接的な用があるのは三人の女生徒の方らしい。

誰が誰なのかはどうでもよかった。とにかく、彼女達の言い分はこうだった。

——私が気に入らないらしい。

色々喋っていたが、詰まるところその一点に収束した。

私に対して以前から色々と思うところがあつたらしいが、一番の切っ掛けは先日の告白のことだった。

何でも、彼女達の内の一人在の遠山君を慕っていたらしい。

別に恋人でもなんでもない。だけど、彼は私に告白して、私はそれを断った。

それは許されなくらい悪いことのだという。

制裁を受けるべきなのだという。

友達である他の二人も、その結論にはまったく同意するのだという。

「話は分かりました」

少女マンガみたいだな、と私は思った。

「でも、何故私が責められる必要があるんでしょうか？」

男子生徒の一人が突然言葉の形を成していない奇声を発した。

どうやら威嚇的な意味を含んだ行動だったらしい。

追い詰められた状況で存外に冷静な相手を怯えさせる為に行つたのだろうが、私には大の男が突然高音の声を絞り出した滑稽な行為にしか思えなかった。

自分達が圧倒的優位な状況にいながら、怯えはおろか動揺さえ一向に見せない相手に攻めあぐねいたのか、三人の女生徒は現状とは何の関係もない内容で私を罵り始めた。

曰く、周りから可愛いともてはやされて調子に乗っているだとか、
——まあ、私の容姿や行動をことごとく悪意を通して捉えた罵声だっ

た。

そして、三人の内の一人が言った。

「だいたいアンタ、神様は本当にいるとか言ってた危ない宗教女でしょ！」

私はその言葉に少しだけ動揺した。

そう言った彼女の顔に全く覚えはないのだが、どうやら彼女は中学か小学時代で同じ学校の生徒だったらしい。

昔の私のことを知っているのだ。

「え、何？ この女、そんな危ない奴だったの？」

「そうよ。冗談とかシャレじゃなくてさあ、他の同級生にマジな顔で神様はいるとか信仰は大切だとか話してるの聞いたのよね。それにさ、誰もいない所に向かつて話しかけてるのを見た奴もいたって」

「何それ、本気でヤバイんじゃない？」

「気持ちわるーい！ こういう奴が社会に出て犯罪を起こすんじゃない？」

攻撃の糸口を見つけたらしい三人は笑いながらそこを攻め立ててきた。そこへ男子二人が合わせてくる。

彼女達にとって、身近な人間が宗教に関わっていることはそれだけで侮蔑や忌避の対象であるらしい。

全ての宗教が、怪しげな方法で信者を集めてお金を巻き上げたり、組織的な犯罪に手を染めていると考えているのだ。

その認識を改めさせることが全くの徒労であると悟っていた私は、ただ黙って彼女達の言い分を聞き流していた。

「ねえ、アンタさあ。今でも本当に神様がいるなんて言ってるの？」

女生徒の一人は、私にそう訊ねてきた。

それに対する私の返答がどんなものであれ、自身の理屈と数の暴力によって完全に否定し、精神的に屈服させてやろうと考えていることは容易に察することが出来た。

大抵の人々にとって、神が存在しないことは事実なのだ。

「何とか言いなよ」

すぐに返答しない私を見て何を誤解したのか、彼女は既に勝ち誇っ

た笑みを浮かべていた。

「……そうですよ」

私は静かに答えた。

「神様はいますよ。少なくとも、この土地には二柱の神がおわします」

彼女達は笑った。

彼らも笑った。

五人ともが私の返答を聞いて、嘲っていた。

「えーっ、マジ!? こいつ、本気で言ってるの?」

「だから言ったでしょ、こいつヤバイって!」

「なんだよ、優等生かと思ったらこんな頭に可哀想な女だったのお。俺、ちよつと幻滅」

その反応に失望はない。苛立ちもない。

私はただ黙って、話を続けることが出来るまで待っていた。

「それでえ?」

一人が更に訊いてくる。

「その神様って何してくれんの? 信じる人を救ったりするわけ? アンタをさ、今のこの状況から助けてくれるって信じたりしてんの?」

五人に囲まれて、内二人は私よりも身体の大きな男で。誰も助けくれないし、逃げられもしない——と、そう脅しているような言い方だった。

そうして、私が反論も出来ず、悔しげに口を噤む惨めな姿を期待している目だった。

私は、それに対して、最初から決めていた言葉で答えた。

「神様は、私の為に何かをしてくれることはありませんよ。貴女達のような八つ当たりをしたい人間の不満や愚痴を聞いてくれるんです」

「……は?」

目の前の女生徒の顔付きが変わり、それが他の四人にも伝播した。「気に入っていた男の人が他の女の人に現をぬかして、それが面白くないとか。勉強やスポーツ、あるいは単純な人気とか自分より優れている奴がいて、それが気に入らないとか——」

私は五人の顔を一つ一つ見ながら話した。

「学校の成績が下がったとか、帰りに雨に降られたとか、転んだとか、事故に遭ったとか、怪我したとか——」

「誰かが小さく唾を飲む音が聞こえた。」

「そんな時、罵っていいのが神様なんです」

「何……言つて」

「誰にも責任がない理不尽な出来事の責任を取ってくれるのが、神様なんですよ」

「——」

「理由を説明出来ない苛立ちや不満を抱えた時は、神様のせいにしていいんです。それって、救われることじゃないですか？」

私は話を終えた。

言いたいことは全部言った。理解してもらおうとは思わないし、きつと理解しようとはしないだろう。そんなことは分かっている。

だけど、私に『神様に関して語れ』と言うのなら、私はこう語るのだ。

神様はいる。そして、私は今の世の中にも神様は必要だと思う。だから、信仰すべきだと思う。

私は、そう考える。

ただ、そう言いたかったただけだ。

「……こ、こいつ何言つてんの？」

私を見る五人の眼つきは、いつの間にか変わっていた。

異質な、異常な物を見る、僅かな怯えの色を瞳の奥に宿していた。だからといって、この状況が覆ることはないだろう。

言いたいことを言い終えて、最後の情熱を使い果たした私は、冷め切った頭で『さて、どうするか』と他人事のように思案していた。

さつきまでの勢いはなくなっているが、彼女達にこのまま『帰りたいんで、どいてください』と正直に言っても上手くはいかないだろう。

却って、再び火を点ける形になってしまいかもしれない。

どうしよう。

話をしたのは失敗だったかもしれない。

いつそのこと、あのまま黙ってされるがままに無抵抗で受け入れていけばよかつたのでは、と思ひ始めていた。

路地裏とはいえ、街中でそこまで派手なことを仕出かすとは思えない。裸に剥かれて写真を撮られるくらいだったかもしれない。地べたに土下座でもすれば、彼女達は満足しただろう。

もちろん、そんなことを好んで受け入れるつもりはないが——なんだからもう、色々なことが面倒で億劫だった。

今日何が起ころうと、明日起ころうことは変わらない。

私には、何も特別なことも、人も、訪れない。

世の中には、信じられないことなんて起ころない。

それはいつだって同じ。

これからだって——。

「お取り込み中にすみません」

同じ——。

「東風谷早苗さんですね？」

咄嗟に五人が振り返り、私は彼女達越しに、声の主を見つけた。

そこにいたのは、小学生くらいの小柄な女の子だった。

薄暗い路地裏で高校生が何人も集まっている場面へ、臆しもせず踏み込んできたのだ。

不思議で、不可解で——そして何より不気味な少女だった。

その少女の姿を見た私は目を見開いた。

私は、今日一番の動揺をしていた。

少女の髪の色は日本人はおろか人間には在り得ない『桃色』で、胸の前には全身から何本もの管が繋がった『目玉のような器官』を備えていたのだ。

「遠いですね、ちよつと分かりません」

不思議な少女は言うことも不思議だった。

遠い？

どういう意味だろうか、彼女は十分近すぎる距離にいる。

自分よりも身体の大きな高校生五人と、三メートルも離れていない距離まで歩み寄っているのだ。

それなのに、全く臆した様子を見せない。

私は思わず少女の身を案じていた。

まさか彼女達が子供に暴力を振るうほど非常識だとは思えないが、危険だとは感じた。

「でも、間違いないでしょう。その『髪の色』——」

私の心臓が、大きく高鳴った。

しかし、少女は不意に言葉を区切り、私から視線を外した。

少女が見たのは、最も近くにいた女生徒の一人だった。

「何だ、この変なガキは——と、考えましたね」

自分より目上から降り注ぐ剣呑な五人分の視線を、その少女は薄笑いすら浮かべながら受け流していた。

「気持ち悪い。面倒臭い。高志、さっさとこのガキを脅して追い払ってよ——と、思いましたね」

少女の言葉に、視線を向けられた少女と別の男子生徒の一人がギョツとした表情を浮かべた。

高志——人の名前？

もしかして、今反応した彼の名前なのだろうか。

まさか、と私は思った。

私の頭に浮かんだのは突飛な発想だった。

冗談みたいな考えだ。少女の言動が奇妙だからといって、真つ先にこんな可能性が思い浮かぶ私はやはり普通の人とは違うのだろうか。

でも——本当に、まさか彼女は？

「な、何なのよこのガキ！」

女生徒の一人が声を荒げた。

しかし、その声色は明らかに怯えを含んだものだった。

「不気味。何で、高志の名前を知っているのよ。さっきから、一体何——」

喋りながら、ふわりと少女が後ろに跳んだ。

唐突な行動だった。

「この……っ」

ワンテンポ遅れて、女生徒の平手が空振りした。

衝動的に少女を殴りつけようとしたらしいが、客観的に眺めていた私の目には滑稽にすら映る行為だった。

彼女が暴力を振るう為に動く前に、既に少女はかわしていたのだ。誰もいなくなつた空間に攻撃したようにしか見えない。

私以外の五人も、不可解な状況に目を白黒させている。

やはり、あの少女は――。

「まさか、心を読むのか――と、疑いましたね」

それは私の心か、それとも他の誰かか、あるいはこの場の全員か。

もはや得体の知れないものとしか見れなくなつた微笑を浮かべて、

少女は言い当ててみせた。

「道は空けておきます」

少女は路地裏の隅に移動しながら言った。

「逃げても追いませんよ」

またしても不可解な言動。

私には彼女が何者なのか、何をしようとしているのか、理解出来ない。い。

不気味だし、怖くも感じる。

だけど、目が離せない。

私は、彼女に『期待』している――。

「想起」

少女は自身の胸にある『第三の目』としか表現出来ない物体に両手を添えた。

その眼球が発光した。

いや、本当に光を放つたのかは分からないけれど、少なくとも私にはそう捉えられた。きっと他の五人も同じだ。

光は一瞬だった。

眩んだ視界が元に戻つた後、私が見たものは先程とほとんど変わらない光景。

相変わらず少女と対峙する形で五人の背中が見える。場所も路地裏のままだ。

何の影響もなかった？

いや、そんなはずはない。

私には分かる。あれは、何かの『力』か『術』だった。直接の影響がないのなら、多分幻覚か精神操作の類だ。

酷くオカルト染みた表現だが、私にはそれを鼻で笑えるような感性はない。

注意深く少女の様子を観察した。

やはり、何も変わらない様子で佇んでいる。

様子が変わったのは、五人の方だった。

私は、ここでようやく五人の身体が震えていることに気付いた。

過呼吸に陥っている人もいるらしく、私の耳に聞こえるほど乱れた呼吸音も聞こえる。異臭を嗅いで何人かの足元を見ると、失禁しているのが分かった。

明らかに尋常な様子ではない。五人には、私には分からないものが見えているのかもしれない。

そして、それはどう考えても恐ろしくておぞましいものに違いなかった。

『すごいよね、人間って』

私の背筋に冷たいものが走った。

今のは、あの少女が言ったもの？

確かに声は彼女の口から出ている。

しかし、物凄い違和感がある。少女の声であって、少女の声でないような。低い男の声のようにも聞こえる。そんなはずはないのに。

だけど確かに、先程まで聞いていた少女の声とは思えない冷たさを宿した声だった。

『普段使っていない筋力まで動員すれば、なんでもできるよ』

この声の主は、きつと恐ろしいほど残酷だと確信してしまうような声だった。

「——貴女達も五人で『そこ』に入ってみますか？」

少女がそう言った瞬間、五人は悲鳴を上げながら一斉に駆け出した。

抜けた腰で無理矢理走ろうとしているような奇妙な動きだったが、

必死さだけは極まっているのが私にも分かる。

あらかじめ少女の空けておいた隣を走り抜け、五人はそのまま脇目も振らず路地裏から逃げていった。

残されたのは、私とその少女の二人だけだった。

「さすが、彼女屈指のトラウマシーンね。これは今後も使えそう」

どうでもいいことのように呟いた少女は、改めて私に視線を向けた。

やはり、目的はあくまで私のようなのだ。

ゆつくりと歩み寄ってくる。

近づいてくる少女に対して、しかし私は身構えることすら出来なかった。

半ば呆けた状態だった。

未だに状況はよく分からない。

目の前の少女を警戒すべきだと頭では理解しているのに、心は全く違うことを感じている。

胸がドキドキして、息苦しかった。顔が熱くなっている。

物凄く緊張しているのだ。

どうして？

この、どう見ても人間ではない不気味な少女が敵だからか？

私に襲い掛かるかもしれないと、不安だからか？

怖いからか——？

「さて、改めまして。貴女は東風谷早苗で間違いありませんね」

「……私を捜していたんですか？」

私は自分の声が僅かに震えていることに気付いた。

「捜していましたよ」

「何の用ですか？ 私は、ただの学生です……」

「違いますね。貴女は『特別な人間』です」

そう言われて、私の胸は一際高鳴った。

「誤魔化しても無駄ですよ、その『緑色の髪』を隠しきれっていません」

少女は誤解していた。

私は別に、この髪を隠してなどいない。

ただ誰も、私と同じように『本来は在り得ない存在』を見ることが出来なかつただけだ。

彼女の方が、それを見ることが出来たというだけなのだ。

同じように。

私と、同じように。

「それに、貴女が特別な力を持っていることも知っていますよ。言い逃れは無駄です。貴女は二柱の神を祭る『風祝』であり、『現人神』となる素質を秘めた人間ですね」

——ああ。

——そうです。その通りです。

私は、そう答えるのを必死で抑えた。

この溢れる感情を抑えつけなければ、きっと私は涙を流しながら、彼女の言葉に頷いていただろう。

疑うべきこと、不審に思うべきことはたくさんある。

何故、初対面の彼女がそこまで私という個人の情報を知っているのか。

それを知って、私をどうしようというのか。

先程見せた得体の知れない力を顧みても、目の前の少女は警戒すべき相手だ。

心を許すなんてもつてのほかだ。

だけ。

だけど、私はどうしようもなかった。

だって、私は——嬉しかったから。

私の過ごす問題のない日常を突然打ち破って、私の前に現れた——現れてくれた——少女の存在に感動さえしていたから。

「東風谷早苗、貴女に害するつもりはありません。ただ、話があつてきたのですよ。ちよつとした交渉事です……」

「わ……分かりました！」

気がつくくと、少女の手をしっかりと握っていた。

感極まつての、無意識な行動だった。

「家に来てください！ お茶も、お菓子も出します！」

今の世の中に、信じられないことなんて起こらない。

これから先も、私には特別なことも、人も、きつと訪れない。

そう思っていた。

そう考えながら、毎日を過ごしてきた。

「だから、お話ししましょうっ!!」

「……はぐっ。」

——だけど、特別で信じられないことが私の前にやってきた!



守矢資料館——。

周りに民家と自然が多い為か、一見するとそれは資料館には思えない。

広い敷地内には、観光か参拝と思われる外来客が数人歩いていたが、資料館の内部には女性客が一人居るだけだった。

やはり地元の間人ではない。めかし込んだ服装と片手で引いているキャリーケースから、観光目的でここへ訪れたのだろうと推測出来る。

しかし、大きな鞆だった。

外国へ何日も泊りがけで出掛けるような荷物が入る大きさだ。そんな巨大な物を、宿泊先などに置いていかず、資料館の中を窮屈そうに引いていく姿が他人の目には少しだけ奇妙に映る女だった。

ライトアップされた展示物を、一つ一つ眺めつつ、歩いていく。展示されているのは、動物の剥製だった。

洩矢神は狩猟の神でもあった。その神にお供え物をする祭りの資料として展示されている物である。

狩りに使われた道具はともかく、串刺しにされた兎や、七十五頭の鹿の首が並べられている光景は、なかなか刺激が強い。

剥製とはいえ、死体の生々しい印象が肌に纏わりつくようであった。

館内は僅かに薄暗く、古風な建物特有の湿り気がある。入り込んだ外気も影響しているのかもしれない。女は、資料館に入る前に見た、曇り空を思い出した。

事前に調べた天気予報では、ここ数日は晴天が続くはずだった。普通の人間ならば、宛てにならない予報に愚痴の一つも零したかもしれない。

しかし、その女は何処かおかしそうにクスリと笑った。何に対しておかしさを感じたのか、見るものには分からない笑みだった。

「――何か、おかしな物でもあったかい？」
誰かが訊いた。

誰もいないはずの空間に、女以外の誰かの声が響いたのである。女は視線を移した。

まるで、最初からそこに声の主がいることを分かっていたかのように迷いのない動きだった。

「よお」
子供が、そう言って女に向かって軽く手を挙げていた。少女である。

奇妙な帽子を被っていた。
帽子の頭頂部に二つの球体が並んでくっついている。

それは剥き出しの眼球だった。
不気味な飾りのようにも見えるが、違うとすぐに分かった。

その目玉は、表面がぬらぬらとした水気を纏い、何よりもギョロリと動いて女の方へ焦点を合わせたのだ。

少女自身の目は、広い帽子のツバに隠れて見えない為、まるでその眼球で少女が物を見ているように映る。

常人ならば思わず息の止まってしまうようなものを目にしながら、しかし、女は口元の笑みを変えなかった。

「ええ、とても興味深い資料です」

女は自分よりもずっと小柄な少女に、殊更丁寧な口調で答えた。
「別に、珍しい物でもないだろう」

「そうでしょうか？」

「少なくとも、あなたにはね」

「ここへ来たのは初めてです」

「そうじゃないよ。さっきまであなたが見ていたような物は、別にあなたにとって珍しくないんじゃないかって話だ」

「というと？」

「死体だよ」

少女は顔を上げた。

「剥製なんかより、もつと生々しいものを、それこそ腐るほど見てきたんだろう」

少女は、女と同じように笑っていた。

「今更、こんな物を眺めて何を感じるっていうんだい？」

「神への畏怖……とか」

女の返答に、少女は束の間笑い声を上げた。

蛙の鳴くような声だった。

「面白い冗談だ」

「冗談に聞こえますか？」

「特別に性質の悪い、ね。あなた、本当にここへ何しに来たの？」

「観光ですわ」

「初対面だからって、様子見はそろそろやめようや」

少女の口調は何処か剣呑だったが、表情には喜悦が浮かんでいた。女とのやりとりが面白いらしい。

薄い唇がぱっくりと割れ、そこからピンク色の長い舌が滑り出てきた。

下唇を越え、顎を越え、胸元まで届くほどの長さだった。

人の持つ舌ではない。

「臭いんだ」

少女は、女の持つ鞆を、その長い舌で指した。

『『そんなもん』引き摺って、『わたしの領域』に何しに来やがった——』視線で刺し殺すような眼つきだった。

しかし、口元は相変わらず何かを楽しむように吊り上っている。

目の前の相手を、警戒しているのか歓迎しているのか分からない。少女の目には狂気染みたものが宿っていた。対する女の方も、最初から全く変わっていない笑みを浮かべたままだった。

涼しげな表情で口を開いた。

「私は霍青娥と申します。かしこみかしこみ——」

青娥は言った。

「お願いがあつて、貴女を御捜ししておりました。『洩矢諏訪子』様と呼ばれるはずのない名前を呼ばれ、諏訪子の口元から笑みが消えた。



先代巫女は、風の中を歩いていった。

ごつい体軀を革ジャンパーの中に閉じ込め、ベースボールキャップを深めに被っている。

ここは彼女が騒ぎを起こした街からは遠く離れた場所だったが、顔の傷がやはり目立つ。先代はそれを嫌ったのだ。しかし、当然ながら無駄な努力だった。

風が吹く中、後ろに結んだ髪をなびかせながら歩く先代の姿は、ただそれだけで見る者に凄みを感じさせる妙な迫力があつた。

先代が足を向ける先は、訪れたこの地でも代表的な場所である『諏訪大社』である。

諏訪大社には上社と下社の二つが存在する。

先代巫女が訪れたのは、上社の方だった。こちらを選んだ理由は距離的に近かつたから以外にない。

鳥居を潜る前に、空を見上げた。

先程までは抜けるような青空だったというのに、いつの間にか黒い雲が出始めている。風も、ついさつきから強く吹き始めていた。

ただの天候だと言えば、それまでである。

しかし、先代は無言の中で何かしらの予兆めいたものを感じてい

た。

鳥居を潜り、自然に囲まれた神社の敷地内へと足を踏み入れる。不思議なことに、人がいなかった。

平日の日中である。参拝客で賑わうような、何か特別な日や時間帯ではない。

それでも有名な神社に人っ子一人いないというのも奇妙な話だった。

これも偶然の一言で済ませられるのかもしれない。

しかし、やはり――。

先代は一瞬だけ足を止め、しかしすぐに神社の奥へと歩を進めていった。

上社本宮の前に辿り着いた。

古く、威容のある建物を前にして足を止めた。

先代の視線が、軽く上を向く。

視線の先にあるものを見極めようとするような、真剣な眼つきだった。

無機物を見るような視線ではない。

神社の中に潜む何者かを捉えるような確信に満ちた視線だった。

「――『八坂神奈子』」

小さな声で口にしたそれは名前だった。

『我を呼ぶのは何処の人ぞ』

誰もいないはずの神社で、先代の言葉に応える声があった。

先代の視線が、更に上へ向けられる。

神社の屋根よりも上から、それはゆっくりと降りてきていた。

宙に浮いた女だった。

空中で胡坐をかき、膝の上に片腕の肘を乗せて、軽く頬杖をついた姿勢で、その女は先代の前へ降りてきたのである。

背中には後光の如く輪を描いた注連縄を背負い、胸には丸い鏡を装飾品として身に着けている。

一般的な感性で見れば奇抜な格好だが、彼女の姿が滑稽に見えるかというところではない。

一般的な感性とは、つまり人間の感性なのだ。

目の前の女は、明らかにそれを超越した存在だった。

人間ではない存在の姿として見れば、全く奇抜ではないし、おかしくもない。そんな理屈に出来ない納得をしてしまう。

神の如き威容と威厳を備えた女だった。

「その名前を、人に呼ばれるのは実に久しぶりだ」

先代が少し見上げる程度の位置に浮いたまま、女は——神奈子——は言った。

口元は笑っているが、視線は油断なく先代を観察している。

「何者だ、名を名乗れ」

「先代巫女と呼ばれている」

「名を、名乗れと言っている」

先代の答えに、神奈子は表情を消して返した。

「……神の名を口にしておきながら、自らの名は口に出来ないか？」

先代の沈黙を、神奈子は返答として受け取った。

口元が吊り上り、再び笑みが戻ってくる。

しかし、神奈子の顔に浮かんだそれは先程までのものとは違う意味合いの笑みだった。

「まあいい。どうせ、何者かも語るまい」

重い、刃物の笑みが、神奈子の唇にへばりついていく。

「お前の得体が知れないことだけはハッキリしている」

「……敵ではない」

「ようやく答えたと思ったら、なんとも下らんことを言うな。もう少し、気の利いた駆け引きは出来んのか」

「信じて欲しい」

「お前、私を甘く見すぎじゃないのか。私を誰だと思っている」

「知っている、貴女は神だ。無礼を働くつもりはない」

「ああ、私も『知っている』——」

突いていた頬杖を、神奈子はゆっくりと解いた。

足は未だに胡坐をかいたままである。

しかし、明らかに様子が一変していた。

恐ろしく剣呑な空気が、神奈子の全身から放たれ始めている。周囲の木々がざわめいた。

ただの風によるもののはずだが、神奈子を前にした先代には彼女の力がそうさせているようにしか思えなかった。

空の雲が、いよいよ色濃く集まり始めている。

この天候の変化さえも、目の前の超常的な存在が起こしているように感じられた。

「何よりも私自身が感じられるんだ。お前から私に向けられる『信仰』がひしひしと感じられる。」

ああ——お前は、なんという人間なのだ。お前が私の名を『建御名方神（タケミナカタノカミ）』でも『八坂刀売神（ヤサカトメノカミ）』でもなく、『八坂神奈子』と呼んだことすら些細に感じる。

お前は、何故そうまで私を信じる？ 何故、そうまで私の神としての形を完璧に思い描ける？ この時代に神の存在を見抜けるほどの並ならぬ力を持ちながら、何故お前は私の力をそこまで尊崇出来るのだ——」

鉄のような先代の表情に、僅かな動揺が走った。

互いに視線を交わす神奈子の瞳には、僅かだが涙が浮かんでいたのである。

神である彼女が、人間を前にして感極まった涙を見せたのだ。

涙を見せたことを恥じるように、すぐにそれは神奈子自身の手で拭われた。

「——だからこそ」

涙の拭われた神奈子の瞳は、鋭く先代を睨み据えていた。

「お前が理解出来ない。神である私の目をもつてしても、得体が知れない存在だ」

「どうすれば、敵ではないと信じてもらえる？」

「お前が敵ならば、まだよかった。私は敵を恐れないからだ。」

だが『信じる』ということが最も難しい。お前の何もかもが信じられないからだ。よりによって人々から神への信仰が失われつつあるこの時代に、何故お前のような人間が私の前に現れた。お前という存

在そのものが、私には信じられない」

突然、神奈子から放たれる圧力が増した。

それは明確に先代一人に向けて放たれたもの。

間違いのない敵意だった。

「敵対する理由はないはずだ！」

思わず身構える先代に対して、神奈子は全く圧力を緩めずに答えた。

「それを判断する為だ」

「貴女と戦う気はない」

「一つ、教えてやる。お前のその自然体にまで昇華された呼吸法、見事だ。しかしな、お前の呼吸が生み出す無意識の力が、この場所では酷く目立つ。ここは神の住む領域だからだ。お前の力が、まるで波紋のように私の領域を侵すのだよ」

神奈子は言った。

いつの間にか、口元にはまた笑みが浮かんでいた。

蛇を思わせるような、ぬらりとした薄笑いだった。

「とりあえず、その理由で得体の知れないお前を敵として見てみることにするよ」

対峙する二人の耳に、頭上の黒雲から雷鳴が聞こえた。

◇

——神奈子様に『お前が息するだけで不愉快なんだよ』って言われました。死にたい。

いやあ、まあね。幻想郷では色々な人や妖怪と交流しましたよ。

そりゃあ、初対面で良好な関係を築くのは難しいよ。私も苦勞した覚えがある。

だからね、この諏訪市を訪れて、さとりや青娥と手分けして守矢の関係者を捜している最中に覚悟はしておいた。

相手からすれば、私達は何故か自分達のことを知っている謎の訪問者だ。疑われたり、警戒されるのも当然だと思う。

今回は場所が場所だけに、永遠亭の時のような誤魔化しは出来ない。

神様への信仰が薄れたこのご時勢に、その神様を頼ってやって来た私達は客観的に見ても胡散臭いことこの上ないだろう。

それでも、まずは会わなければ話が始まらないってんで、こうして私は生前の知識を活用して守矢神社の元ネタである諏訪大社へと訪れたのだが……。

へ、へへへ……さすがに、出会い頭でこんな敵対の仕方をするのは初めての経験ですよ。

……折れそう。心が。

なんなの!? 本当にさ、私は本心から神奈子様に敵対する意思とか欠片も抱いてなかったよ!

むしろ、出会う前から敬意を抱いてたよ!

だってさ、相手は本物の神様だよ。敬うしかないじゃない。

知識にある原作からでも偉大さを感じるのに、現実として対面出来る神様相手に尊崇の念を抱かずに何を抱くというのか。

敵意? まさかである。そんなもん、抱くことすらおこがましい!

っていうか、私の中で神奈子様と諏訪子様はもう『様』付けがデフォですから。

本物を前にしたら、無条件でひれ伏してもいいくらいの気持ちだった。

紫や魔理沙といった東方の人妖キャラがアイドルならば、神奈子様達は天皇陛下とかのイメージなのだ。

もちろん、早苗にも会いたい。しかも、幻想入り前ってことは現在

JKの可能性大!

セーラー服姿の早苗さんか……胸が熱くなるな。

とにかく、彼女達の内の誰かと会える可能性の高い諏訪大社の前まで来た時、私の期待と緊張も最高潮にまで高まっていた。

なんかもう、空が曇ってる様子すら『あー、これは神奈子様の力によるものですね。もしくは諏訪子様の威光。間違いない』とか思えちゃうくらいだった。

神社に足を踏み入れ、普通の観光も楽しみながら奥へ進み、そしてついに私は出会った。

生で見た本宮に感動して、思わず呟いた私の言葉に応えて、神奈子様が降臨なされたのだ！

冷静に考えて神様が神社で人間みたいに生活しているはずがないのだが、『ここが神奈子様と諏訪子様がルームシェアしてる家かー』とか自然と考えて、超ガン見していた。その前に、神奈子様が現れたのである。

その時の感動は、とても言葉では言い表せない。

感極まっていた。

どれくらい極まっていたかというところ、思わず『あなたが神か！』と叫びそうになったくらいだった。

つつーか、威厳やべえよ神奈子様。

例のあの胡坐かいたポーズとか、マジで神々しすぎてヤバイんですけど。生で見ちゃったよヒヤッホウ。

信仰不足で幻想郷に来たというのが原作での設定だが、本当なの？この姿を見て畏怖や畏敬を抱かない人間なんていないデシヨ。

少なくとも、私は神としての威厳を滅茶苦茶感じた。

私、神奈子様信仰します！ いや、最初から信仰してたけど、ますます信仰します！

博麗の巫女？ いや、私もう引退したから。あと、あの神社って神様は祭ってねーからノーカンで！

ここを訪れた当初の目的さえ忘れて、私はそんなことを考えていたのだ。

ああ、神様と話すなんて、さすがの私も初めての体験だ。

なんて切り出せばいいんだろう？

こんな格好で失礼じゃないかしら？

やだ、あたししたら。鼻毛とか出てないかしら？

あつ、ひよつとして手土産持参するのが作法だったか？ 陰陽玉し

か持ってねえ！

こんな感じに、私になり真剣に悩んでいたら――。

冒頭に戻る。

何故こんなことになってしまったんだ……!?

——オー・マイ・ゴツドツ!

いや、全然シャレになってねえ。

其の四十五「守矢」

さとりが早苗に連れられるままに訪れた彼女の家は、何の変哲もない一軒家だった。

現代建築について馴染みのないさとりだったが、これまで見てきた民家とさして違った印象を受けなかった。それが少し意外だったのだ。

さとりが知り得る『東風谷早苗』の情報は、全て先代が持つ記憶やイメージから来たものである。

いずれ二柱の神と共に幻想郷を訪れる彼女は、幾多の実力者が蔓延るあの地でも一角の存在として認められるほどになる。

特別な人間——いや、神であり人でもある『現人神』なのだ。

先代の視点で表現するならば『物語の主演』となる人間なのである。しかし、さとりが見る限り、早苗は多少変わった部分は目に付いても、外の世界に適應して生活している現代人にしか思えなかった。

同じように、仙人でありながら社会に適應していた青娥とは、また違う。

青娥は何処までも幻想の存在だった。現実と自身をすり合わせることは出来ても、決して相容れない。

彼女は、この世界で生を全うすることはないだろう。自分達が現れなくても、いずれこの世界を去るか、その機会が来るまで人として死ぬことなく生き続けていた。

そんな根拠のない確信が持てた。

だが、目の前の少女は——。

「まあまあ、いらっしやい」

帰宅した早苗を迎えた彼女の母親は、さとりの方を見てにつこりと笑った。

礼儀正しく頭を下げるさとりに、母親は好感を覚えたようだった。

玄関で向かい合う彼女との距離はさとりの能力の範囲内だったが、心を読むまでもなく、この女性が普通の人間なのだと分かった。

年齢は三十代後半から四十代前半で、外見も相應に歳を取って見え

る。髪の色は当然のように黒い。日本人なのだから当たり前だ。

エプロンをつけた姿は、家庭的な普通の主婦だった。

特別な力や雰囲気はもちろん感じず、第一印象だけ見るならば洩矢神の血筋や神事に関わる人間とも思えない。

目の前で交わされる母娘の会話を聞き流しながら、さとりは本当にこの二人の血が繋がっているのかと驚きを感じていた。

「へえ、さとりちゃんっていうのね」

とりあえず早苗は、小学生にしか見えないさとりについて母親に簡単な説明をしたらしい。

そこに伴う当然の疑問をさとりは既に読み取っていた。

「でも、こんな時間にどうしてうちに連れてきたの？」

彼女はさとりの訪問を迷惑に感じているのではなく、純粹に案じているのだと分かった。

平日の高校が終わって、帰宅する時間帯である。

既に夕方近かった。

子供が出歩けないほど遅い時間ではないが、ここから更に帰宅することを考えると家に招くような時間でもない。

その不自然さに、早苗もようやく気付いたらしかった。

「あ、え……と」

「早苗さんとは、ボランティアの時に友達になったんです」

言葉に詰まる早苗をフォローする為に、さとりは口を挟んだ。

目の前の女性が抱く『可愛げのある子供のイメージ』に沿うように、努力して笑顔を浮かべる。

「あら、そうだったの」

「今日は帰り道で偶然会って、お話するのが楽しかったから、ついお家までお邪魔してしまいました。また、今度遊びに来る時の為に道をお教えてもらったんです」

「ああ、そういうことだったのね」

「はい。遅くなる前においとまさせていただくつもりです。ご迷惑をお掛けして申し訳ありません」

「ご迷惑だなんて、そんなことないのよ。すっかりしたお子さんねえ、

「これなら安心かしら」

呆氣にとられる早苗を尻目に、さとりは心を読みながら淀みない的確な返答で相手の疑念や不安を晴らし、信頼を獲得していった。

母親はどう見ても小学生である少女と高校生の娘との関係についても納得し、一時間程度ならば暗くなる前に帰せるかといった算段を立てている。場合によっては、相手の親御さんに連絡をしてもいい。その思考を読み取ったさとりは、まあ十分かと妥協した。

早苗との話は一時間もあれば終わるだろうし、万が一親に連絡する事態になったら事前に教えられていた青娥の携帯に掛ければいいのだ。彼女ならば口裏を合わせてくれるだろう。

ごく自然な流れで、さとりは家の中へあがることになった。

「さ、さとりさん凄いですね」

自分で招いておきながら、早苗の方が戸惑っていた。

「そんなことよりも、貴女のお母さんの所へ行ってください。お茶とお菓子を用意しているようです」

二階にある早苗の部屋の前に着いた段階で、さとりが言った。

「部屋まで持ってくるつもりみたいですよ。これからする会話は、普通の人には聞かれたくない内容ですからね」

「えっ！ あ……な、なるほど。分かりました、私が持ってきます！」
さとりの言いたいことを察した早苗が、慌てて階段を降りていく。それを見送ったさとりは、早苗の部屋のドアを開けた。

子供だからと『どうぶつビスケット』なんて茶菓子を用意する母との数分間の格闘を経て、高級そうな和菓子と渋茶をお盆に乗せた早苗が部屋に入ってきた時、さとりは丁度棚の上に飾られていた物を手に取っていた。

「ああ、それは……っ！」

「すみません、触れてはいけないものでしたか？」

「いえ、そんなことは……ないんですけど」

部屋の真ん中にある小さなテーブルにお茶などを並べながら、早苗は口ごもった。

さとりを招待することに興奮して、自分の部屋のことなどすっかり

忘れていた。

別に散らかっているわけではない。普段から整理整頓を習慣付けていたのは正解だったと、しみじみ思った。

しかし、問題は自分が年頃の女子高生にはちよつと見られない変わった趣味を持っていることにある。

「ロボット、というんでしたっけね。こういうの」

さとりは丁寧な手つきで、棚にロボットの玩具を戻した。

同じような物が幾つか並んでいる。

女の子らしい内装の部屋の中で、それらは酷く浮いたインテリアだった。

「す、すみません。変ですよ、女子高生が子供の玩具なんか持つて……」

早苗は赤くなった顔を俯かせた。

「別に悪くはないんじゃないでしょうか？」

「えっ!？」

「悪いんですか？」

「いや、どうか……」

「好きな物を飾って眺めるのは、悪いことじゃないと思いますよ。貴女らしいと思いますし」

平然とした顔で答えながら、さとりは早苗を向かい合うように腰を降ろした。

さとりにしてみれば、早苗の趣味など大して気にならないことだった。

早苗が『ロボットを好き』だという情報は先代の知識から事前に得ている上に、幻想郷では全く馴染みのないロボットについてさとり自身が思うことなど大してないのだ。

玩具の造りを見て、こんな精巧な人形が子供の玩具として手軽に買えるんだなあと感じる程度である。

逆に、早苗は自分の趣味に理解を示してくれたさとりに対して更なる好感を抱いていた。

先程の羞恥心とはまた違う感情で頬を紅潮させたまま、恐る恐るお

茶とお菓子を勧める。

「ど、どうぞ。粗茶ですが」

「気を遣わせてしまいましたね」

「いえ、そんな」

「私としては、そのどうぶつビスケットというのにも興味があるんですが——」

「えっ、あっちの方が良かったですか？」

「食べたことのない物ですからね、好奇心の方が勝ちますよ。あと、私動物が好きなんです。しかし、こちらもありがたくいただきます」

さとりは和菓子とお茶を、一口ずつ口にした。

どちらの味も悪くない。しかし、それを楽しむつもりはない。あくまで礼儀として口にしたに過ぎないのだ。

早苗が本心からもてなそうとしていることは分かっていたが、談笑する為に彼女の誘いを受けたわけではない。

「さて」

緊張した面持ちで相手の挙動を見守る早苗に、さとりは改めて顔を向けた。

「残念ですが、ここでくつろぎながらお喋りをするつもりはありません。私は貴女と交渉をする為に、誘いを受けたのです」

「——はい」

「とはいえ、私の方から一方的に話をして納得はいかないでしょう。私は東風谷早苗という人間を一方的に知っていますが、貴女は私のことを全く知らないのですから」

「——」

「貴女の疑問に思っていることは、分かりますよ」

「分かるというのは、やはり……」

「そうです。私は、人の心を読むことが出来ます」

「では……」

興奮した早苗が、思わず身を乗り出した。

「やはり、貴女は神ですねっ!!」

「……いや、違いますけど」

沈黙が流れた。

互いに別の意味で肩透かしを食らった二人は、しばらくの間気まづげに黙っていた。

「え、えーと……それじゃあ貴女は一体何者なんでしょう？ 人間じゃないというのは、何となく分かるんですけど」

気を取り直して、早苗が訊ねた。

未だに、彼女の目にはさとりの持つ『第三の目』が映っている。

早苗の母が、さとりの存在に驚きはしても奇異の視線を向けなかったことから、その部位が人に目には見えない非実体であることは理解出来た。

身近にそういう存在がいるからだ。

更に、そうして連想した早苗の思考から、さとりは二柱の神の姿を捉えていた。

——とりあえず、二柱の实在は確認出来た。ここまでは順調ね。

内心で納得しつつ、早苗の質問に答える。

「私は妖怪ですよ。『覚』という心を読む妖怪です」

現在進行形で早苗の心を読みながら会話の道筋を決めていることなど、おくびにも出さない。

既に駆け引きは始まっているのだ。

「妖怪！」

「そうです。初めて見ましたか？」

「はい。神様なら知っているんですけど」

「そうですか」

「……信じてくれるんですか？ 神様と知り合いだなんて」

「私は心が読めると言ったはずですが」

「あつ、そ……そうでした」

「それに、貴女が関わっている二柱の神についても知っています。八坂神奈子と洩矢諏訪子ですね」

「なっ!? 何故、それを知っているんですか!？」

「さあ、何故でしょうね。いずれ分かりますよ。いずれ、ね——」

「……なるほど。今は知るべき時ではない、ということですね」

ごくりと生唾を呑み、早苗は神妙な顔で頷いた。

あ、この娘扱いやすいな——と、さとりは思った。

実は、先代にあやかっと思って思わせぶりな台詞で適当に誤魔化しただけだった。

それを早苗が勝手に勘違いしてくれたのである。

「さて、妖怪と言っても、私は現代社会で隠れて生きていたわけではありません。私は幻想郷からやって来たのです」

「ゲンソウキョウ……ですか?」

早苗は聞き慣れない単語に首を傾げた。

その仕草に不自然なところはない。

そもそも、早苗が知っていて惚けているならば、能力で見抜けるのだ。

「ええ、幻想郷です。聞いたことはありませんか?」

「はい。それは、どういった所なんでしょう?」

早苗が発した問い掛けに対して、さとりは僅かな間沈黙した。

——嘘は言っていない。惚けてもいない。

早苗は本当に幻想郷のことを知らないのだ。

これは、さとりにとって少々予想外の事態だった。

「……巨大な結界に囲まれた秘境です。その結界の中では、人間と妖怪、果ては神までが古い時代そうであったように共存しているのです。現代で否定された幻想が残っている場所なのですよ」

「そ、そんな場所があるんですか!」

「ええ。私は、とある事故によって幻想郷から、この結界の外の世界へと迷い込んでしまったんですよ」

早苗が心の底から驚いているのを確認して、さとりは探りを入れた。

「貴女は、二柱の神様から幻想郷について教えられていないのですか?」

さとりの質問に、早苗は首を横に振った。

「そもそも、お言葉を交わすのも恐れ多い方々ですから。お話をすることも、あまりありません」

そう答える早苗の表情には陰があった。

——子供の頃はよく話をしたのに、高校に入ってから、神奈子様と、特に諏訪子様は私の声に応えてくれなくなった。

言葉にしなかった早苗の内心を、返答の補足としてさとりは読み取っていた。

早苗が幻想郷について知らないのは、単なる偶然ではなく、二柱と意思疎通そのものが滞っている為らしい。

関係が疎遠になっているのだ。

これもまた、さとりの当初の予定を覆す新たな事実だった。

まずは事情を知る早苗を通して、二柱の神と交渉する——その前提が崩れたのだ。

更にしばらく思索した後、さとりは再び口を開いた。

「実のところ、私が本当に用があるのは早苗さん本人ではなく、貴女を通じた二柱の神なんです」

「神奈子様と諏訪子様には、ですか？ それは、一体どういった用件なんでしょう？」

「この際、単刀直入に言いましょう。貴女は知らないでしょうが、二柱の神は幻想郷への移住を予定しているはずですよ。私は、幻想郷に戻る為、それに便乗をさせてもらいたいですよ」

「……え？」

度を越えた驚愕は、人から反応さえ奪う。

何の表情も浮かべられずに、早苗はただ呆けた声を上げることしか出来なかった。

幻想郷について。

二柱の神の移住について。

何もかもが、早苗にとって初耳の話だった。



さとり達三人が泊まっているのは、諏訪湖を一望出来るホテルの上階だった。

かなり大きなホテルで、サービスも設備も充実している。部屋に備え付けられた浴室の他に温泉まであった。

当然、宿泊費も相応な値段だったが、三人分の料金を青娥はあっさり笑顔で支払った。

『どうせ泊まるなら、いいホテルを』と、ここを選んだのも青娥自身である。

その青娥が、さとりを迎えにいつて戻ってきたのは、もうすっかり日が沈んだ時間帯だった。

「ただいま戻りました——って、何してるんですか？」

「鍛錬だ」

広々とした部屋を見渡したさとりは、先代の姿を見てため息を吐いた。

並んだ二つのベッドの間で、先代は両足を広げて、股割り開脚の状態で身体を宙に浮かせていた。左右のベッド端に踵の部分に乗せ、股関節とその筋肉だけで体重を支えているのだ。

十分な柔軟さと筋力がなければ出来ない芸当である。

鍛錬と言われれば、確かにそうなのだろう。

傍らの青娥は、先代のしなやかな肢体を見てうっとりとした表情を浮かべている。

しかし、さとりには先代の本心がよく分かっていた。

——範馬勇次郎ごっこ、超楽しい。

能力の範囲内まで近づいたさとりは、予想通りの先代の内心を読み取って脱力した。

まあ、こういった能天気な部分だが、本来ならば苦痛と忍耐を伴う過酷な修行を乗り越えさせてきたのだから、一概に馬鹿にも出来ない。そこだけはちよつと尊敬出来る。馬鹿だけど。

さとりは疲れたような仕草で、窓際の椅子に腰を降ろした。

大きな窓からは、諏訪湖の綺麗な夜景が見えた。

「何か問題があったのか？」

さとりの様子に気付いた先代が、鍛錬をやめて問い掛けた。

青娥が甲斐甲斐しくタオルを渡す。

「いえ、問題はありませんでしたよ。無事に東風谷早苗と接触出来ました。少々、予想外のことがありましたかね」

「予想外とは？」

「どうやら、彼女は守矢の二柱とは最近疎遠になっていくようです。幻想郷のことも、移住の計画のことも全く知りませんでした」

「……本当か？」

「ええ。彼女を通して二柱と交渉するというのは、少し無理がありそうだと判断したので、こちらの事情を簡単に説明だけして退散してきました。」

彼女がこれからどうするつもりかは、私にも分かりませんね。去りに際に心を読んだ限りでは、本人もかなり混乱しているようでした」

「そうか」

「案外、貴女の考える通りに物事は進まないかもしれませんよ」

さとりは先代にだけ分かる意味を含んで言った。

二人の想定する『物事』とは、二柱の神の力を借りて幻想郷へ帰還することではなく、原作通りに早苗を含めた守矢神社が幻想郷へやって来ることだった。

先代の持つ知識は、あくまでゲームのシナリオであって、この世界の未来を定めるものではない。

何か気付かない部分で誤差が生じて、原作とは違う結末に至る可能性も十分にあるのだ。

さとりの言葉はそれを指しているのだった。

同じくこの場にいる青娥には分からない、隠された意味だ。

しかし、彼女が二人の間だけで密通している事柄に勘付きながら、あえてその部分に触れようとしていないことにさとりは気付いていた。

守矢の二柱や、幻想郷への帰還方法——何処が出所なのか分からない幾多の重要な情報に対して、青娥は深く追求する素振りすら見せず、ただ惜しめない助力をしてくれる。

そして、それは何らかの意図を隠し持った行為ではなく、本心から楽しんで行っている。

心が読めるさとりからすれば、青娥の無償の奉仕は、ありがたさよりも不気味さが感じられるものだった。

今も、ニコニコと微笑みながら二人のやりとりを傍目で見守っている青娥を一瞥して、さとりはため息を吐いた。

酷く疲れていた。

「まあ、要するにこちらは空振りに近かったといことです。そちらはどうでしたか？」

さとりは、先代ではなくあえて青娥に訊ねた。

交渉事という点に関しては、先代ほど期待の出来ないものはない。何処に行っても揉め事にだけは確実に好かれる人間なのだ。期待出来る部分と云ったら、彼女自身が交渉のダシになることくらいである。

逆に青娥については、限りなく胡散臭くは感じているものの、それ故に交渉力については信頼していた。

「無事、二柱の協力を得ることに成功しました」

果たして青娥は、呆気ないほど軽い口調で最良の報告をしてくれた。

難しいと予想された神との交渉の場で、一体何が起こったのか。

さとりは先代の方へ視線を移した。

わざわざ訊くまでもない。説明は、彼女が勝手にやってくれる。

——話をしよう。あれは今から三十六万……いや、一万四千年前だったか。

予想通り、先代は無駄に鮮明な回想を始めたのだった。

◇

——本当に、こんな所で、こんな時に、あの八坂神奈子と戦うのか!?

戦いたくはない。

戦ってる場合じゃない。

大体、場所と時間が問題だ。

ここは諏訪大社でも一般公開されている敷地内。人気が完全になくなるような時間帯でもない。

いつ、誰が来るのか分からないのだ。

こんな状況で、神奈子と戦うというのか。

しかし、私の頭の中では理性的な部分とは別に、長年の戦闘経験によつて培ってきた部分が既に動いていた。

目の前の神奈子が、一体どんな戦い方をするのか考え始めてしまっている。

向かい合う私と彼女との距離は十分に開いている。拳や蹴りの間合いではない。

神奈子自身の体勢も最初の時のまま、空中で胡坐をかいた状態だった。

少なくとも、格闘戦に持ち込んだ場合私の方が有利な状況だ。

しかし、相手は神である。

これまで相手にしてきた、どの敵ともタイプが違う。

人間でも妖怪でもない。

幽香とも勇儀とも違う。

あの神奈子が拳を握つて私に殴りかかってくるとは、とても想像出来なかった。

じゃあ、どんな風に襲い掛かってくるのか。

武器か？ 弾幕か？

……クソツ、駄目だ。全くイメージ出来ない。

ただ漠然とした強大さだけが肌に伝わってくる。

相手は神だ。

あの八坂神奈子だ。

ただの人間である私など、及びもつかない偉大な存在だ。

そもそも、私は『敵』だと言ったが、正確には間違いだ。

仮に戦うことになってとしても、私は敵意や怒りといったものばかりと抱かないだろう。

ただ強大な力に襲われ、それに抗うという意志だけがある。

人間である私が、神である彼女と戦う時に抱くものがあるとすれ

ば、それだけだ。

妙な話だが、私はこんな状況でも八坂神奈子という存在への畏怖と信仰を消し去ることが出来なかった。

やられるつもりはない。

だが、彼女は途方もない存在だ。

自分がどんな風に攻撃をされるのか分からないのに、緊迫感だけは増していく。

来るぞ。

神奈子は戦う気だ。今にも襲い掛かってくる。

どう来る？

どう——!?

「どうやって戦うつもりなのさ、この馬鹿」

今にも何らかの攻撃を交えそうな私達の間、声が割り込んだ。

僅かに舌足らずな、幼い声だった。

「諏訪子!？」

えっ、諏訪子様!?

声に出す出さないの違いこそあったものの、私と神奈子の驚愕は全く同じだった。

横合いから、洩矢諏訪子と守矢資料館に行っているはずの青娥が、姿を現したのである。

私は諏訪子様とは初対面だが、あの特徴的な帽子や格好は知識にあるとおりだ。

間違いない。二柱の神様が、この場を集ったのだ。

「何しに来た?」

神奈子様が、すぐに視線を私に戻して、諏訪子様の方を見ずに訊ねる。

しかし、この時既に私は大きく後ろに下がって更に間合いを離していた。

思わぬ乱入だったが、おかげで頭が冷えた。

神奈子様と戦うとか、全身全霊を懸けて避けるべき事態じゃないか。

逃がしてくれなかったら、土下座だつてしよう。

何、神様相手ならば土下座だつて正当な作法だ。恥じるどころなど全くない！

先程とは全く別の覚悟を決めた私は、無意識に身構えていた体勢を解いた。

「どうした、何故警戒を解く!?!」

「だから、何であんたはそんなにやる気なんだつて」

私の代わりに、諏訪子様が言ってくれた。

へへへっ、そうですよ。神様に刃向かおうなんて、大それたことあつしはこれっぽちも考えていませんや。

内心で揉み手すり手しながら、神奈子様の様子を伺いつつ、静かに二人の方へ移動する。

う……っ、だからそんなに睨まないでよ。

私つてば、そんなに神奈子様の気に障るようなことしたかしら？

「先代様、ご無事で何よりです」

諏訪子のすぐ隣に立つ青娥が言った。

この立ち位置。少なくとも、青娥の方は諏訪子様と上手く話し合ひまで持つていけたようだ。

色んな意味で助かった。

「ああ、助かった」

「でも、惜しかったですね」

「何?」

「先代様が『神殺し』という偉業を成し遂げる機を、邪魔してしまいました」

……なにそれこわい。

いや、私はそんなことやるつもり全くなかったから。

笑顔の青娥が本気で言っているのか、私には分からなかった。

「あんたが先代巫女つて呼ばれてる人間? 知っていると思うけど、わたしは洩矢諏訪子だよ」

「はい」

「お仲間の仙人から、幾らか話は聞いたよ。話の通り、寡黙な人間だ

ね」

「無礼をお許し下さい」

「それは別にいいんだけどね。神様から一つ忠告」

「はい」

「付き合う相手は選びなよ」

諏訪子様が青娥の方を睨みながら、そう言った。

うん、この二人がどんな関係を形成したのか何となく分かった。

「……どういうつもりだ、諏訪子？」

並ぶ形になった私達三人を睨みながら、神奈子様が言った。

私に向けていた敵意が、青娥と諏訪子様さえ含んだ範囲にまで広がっている。

「それはこつちの質問だよ。何をするつもりだったのさ？」

「名前も名乗らない無礼な人間を罰しようとしたんだよ」

「罰する？ どうやって？ 雷でも落として黒焦げにするのか、風を吹かせて山の彼方へでも吹き飛ばすのか」

冷ややかな口調だった。

「今の私達じゃあ、もうそういった曖昧な方法でしか世界に干渉出来ない。自分の手で、直接人間を罰するなんて出来やしないんだよ」

「私は、まだ力を失ってはいない」

「なけなしの信仰を使って、人間一人に何をしようって訊いてるんだよ。八つ当たりかい？ 頭冷やしな、馬鹿」

「……そいつらは、一体何なんだ？」

「大切な客人だよ。幻想郷へ行く為に、私達と交渉したいんだってさ」
ゆつくりと神奈子様の様子が変わっていった。

相変わらず剣呑な表情なのだが、幾らか雰囲気緩和されたのだ。

私もまたこれまで維持していた緊張感を、ようやく少しだけ緩めることが出来た。

なんとか話し合いをする段階までは持っていけそうだ。

しかも、こちらの目的まで知っているのなら、話は早い。

話を円滑に進める為の下準備は万全ってわけだ。さすが青娥娘々、マジにやんにやん。

「じゃあ、そいつらは……」

「うん。わたし達の計画を知っているみたいだね」

「お前ら、本当に何者だ？」

「それは——」

答えようとした私を、青娥が制した。表情は相変わらず笑顔のまま。

友好的と言えばそうかもしれないが、この笑顔が相手に自分の考えを悟らせない為の仮面であると私は今更気付いた。

う……っ、やつぱり事前にさとりに指示された通りにおいておいた方がいいんだろうか。

——私達が、本来知り得ない様々な情報を持っている理由については、明かさない方がいい。

三手に分かれる前に、さとりはそう言った。

こういった秘密が、交渉事ではこちらのアドバンテージとなるらしい。

その辺の駆け引きについては、私は全く分からない。個人的には、協力してもらおうのだから、正直に話せることは話すのが誠意だと思う。隠し事をしてちゃ、相手に悪い印象を与えちゃうしね。

しかし、さとりはそんな私の考えを『甘い』と戒めた。

ただ素直さだけを全面に出して、相手の善意に期待するだけの行為は交渉とは言わない——と。

そうなのかもしれない。失敗例として、永遠亭の時のことを持ち出されたら、私としては何も言えない。実際に、あれでさとりに迷惑を掛けてしまったのだから。

私達が持つ情報は絶対に出所が分からない。追求されれば答えることの出来ないこの後ろ暗さは、見方を変えれば利点になるとさとりは考えているらしい。

どれだけ探ろうとしても、相手にはこちらの正体が見切れない。情報源が、この世界には存在しないからだ。

それは交渉において非常に有効なアドバンテージであり、武器だ。その武器を、相手に向けて交渉しろ、とさとりは言ったのである。

正直、気は進まない。

このやり方では、友好的に話を進めるなんて出来ないだろう。話が上手く纏まってても、少なからず警戒され、それは今後の関係にも後を引くことになる。

でも、相手に嫌われたくないようにやり方を選んでいる余裕だつてないのだ。

私達は、出来るだけ早く幻想郷へ帰らなければならぬのだから。さどりの言うとおり、私は考えが甘いのだろう。

こんなことじゃ駄目だ。気を引き締めなきや。

「青娥、任せる」

「はい。お任せ下さい」

私はわざと大仰に、傍らの青娥へ話を振った。

これで私が今回の件を指示している有力者なのだと相手に認識されれば儲けものだ。

交渉は、上手い青娥に任せればいい。私の役割は、相手へのプレッシャーとなつて牽制することだ。

意識を切り替えた私は、真つ直ぐに神奈子様の瞳を見据えた。

……こええ。なんとという神の眼光。

「——さて、じゃあ仙人。神奈子とも合流したことだし、交渉の続きと
いこうか?」

私達から離れ、神奈子様の傍に位置を変えた諏訪子様が言った。

「神奈子、説明が要る?」

「……簡単にまとめろ」

「あの仙人が突然わたしの所に現れて、言った。幻想郷に行きたいから、わたし達が幻想郷へ移住する方法に便乗させてくれ。

もちろん、その時わたしはこっちの事情も情報も一つも口にしてない。でも、あいつはいきなりそう言うてきた。だから、なんかもう色々無駄だと思つて、ここへ連れてきたんだよ」

「ああ、なるほど。無駄だ」

「そう、無駄」

「勝手に話をしろ」

「分かった」

なんだか酷く投げやりな二人のやりとりだった。

うーむ、会話の内容からして、交渉の余地がないってわけではなさそうだ。

むしろ、こちらの話を受け入れるような流れになってきている。

何故、こんなに簡単に話が進むんだろう？

まさか、本当にさとりと言われた通りに話を運んだからか？

「それで、交渉って言うからには、そっちにも何か取引する材料みたいなもんがあるんでしょ？」

諏訪子様の問い掛けに、青娥が答える。

「こちらの先代巫女様ともう一人の古明地さとり様という妖怪は、幻想郷でも高い地位に就いています」

「なんだ、元々幻想郷の住人だったのかい。何を間違って、現代社会に迷い込んだのやら」

「それは、今は関係ありませんわ」

「ああ、いいよいよ。興味ないし。それで、あんたらを助けたら幻想郷でコネが出来るってわけ？」

「貴女方の目的が『移住』である以上、移り住む地の有力者に貸しを作っておくことは決して損にはならないと思いますが——」

「ふんっ、小賢しい駆け引きなんてやめるんだね。相手の提示する条件だけに目が行ってるようじゃあ、交渉とは言わないだよ。利点は、こっちで勝手に探らせてもらうさ」

「あら、左様でございますか」

鼻で笑う祟り神様に対して、いつもニコニコ這い寄る邪仙。

二人の間に、何か黒いものが渦巻いているような気がしてならなかった。

ヤバイ、おなかいたい。

なんか分かりやすい敵意を向けてくる神奈子様が、むしろ癒しに見えるてきた……。

「——いいよ」

諏訪子様が思案していた時間は、一分にも満たなかった。

「わたしは、いいよ。わたし達の船に便乗したいっていうんなら、あんなら勝手にすればいい」

「そちらの神様は、よろしいのですか？」

神奈子様は答えなかった。

ただ、黙って眼を伏せたただけだった。

「いいってさ」

「分かりました。ご協力ありがとうございます」

私は複雑な気持ちで話が終わるのを眺めていた。

あつけない。

これで、本当に終わりなのか？

あの二人は、これでいいのか？

分からない。

幻想郷への移住というのは、自分達や早苗の将来を賭けた、もつと重要な計画じゃないのか。

こんなに簡単にイレギュラーを抱えて、実行してもいいような内容なのか。

重大な決断が、あまりにもあつさりとしすぎているように私は感じた。

神奈子様と諏訪子様は、一体何を考えているんだろう。

私のような、ちつぽけな人間では到底至らない考えを、頭の中で巡らせているのだろうか。

その偉大な意志が、この結論を出させたのだろうか。

分からない――。

「おい」

不意に神奈子様に呼ばれ、私は視線を向けた。

「私を見るな」

まるで吐き捨てるように言つて、神奈子様は文字通り姿を消した。呼んでおいて『見るな』とか、ちよつと理不尽すぎでしょ。

でも、神奈子様に完全に嫌われたことだけは理解出来た。

理由は全然理解できないけど。

割と本気で死にたい……。

「何があつたか知らないけど、神奈子はあんたがよほど気になるみたいだね」

諏訪子様、それ皮肉ですか。

「ひよつとしたら、その仙人よりもあんたの方が厄介な種かもね。あんたのこと嫌いだな」

そして、諏訪子様にまで嫌われた件について。

どうしよう。今すぐにでも、さとり泣きつきたいんですけど。

「じゃあ、具体的な話をしようか。」

——と言つても、幻想郷へ行く手段なんか事細かに説明しても、興味ないよね?」

「時間があれば、是非詳しく聞いておきたいところです」

「その時間がないんだなあ。幻想郷への移住は、明日の夜にする予定だったからね」

「……早いな」

私は思わず声に出して呟いていた。

いや、リアクションこそ小さかったが、内心ではかなり意表を突かれて、驚いている。

そりゃあ、期限も含めて、諏訪子様達がどういった幻想郷移住計画を立てているのかまでは分からなかった。

最悪、交渉が上手くいっても、長い時間待つことになるかもしれないと思っていた。それによっては、また別の手段を探そうとも。しかし、まさか明日なんて急な話になるとは思わなかった。

つまり、行動を起こすのが一日遅れていたら、私達は幻想郷へ帰る貴重な手段を一つ失っていたのである。

やべー……まさにタッチの差つてやつか。危なかった。

しかし、驚きはしたが、これは都合だ。

幻想郷から外の世界へやって来て、今日で二日目過ぎたことになる。

向こうでも、もう大分騒ぎになってしまっているかもしれない。

現場を見ていた霊夢や紫が上手くフォローしてくれているとは思うが、限界だつてある。

それに、当初さとりは博麗神社に一泊二日で過ごす予定だった。つまり、本来ならば今頃は地霊殿に帰っているはずなのだ。

それが帰ってこないとなれば、明日にでも異常事態であることが地霊殿の関係者には知れ渡ることだろう。

幻想郷へ帰還するのに、早いに越したことはない。

「明日の夜、この辺一帯でかなりでかい嵐が起こる」

諏訪子様は断言した。

「天気予報では、ここ数日は快晴が続くそうですが」

「その予報が見事に外れて、風と雨が荒れ狂うのさ。そして、朝には嘘のように治まる。」

たまにね、そういうことが起こるんだよ。科学とか、そういった人間の技術と認識では予想も出来ないことを自然が起こす。そいつに、わたし達は便乗する予定なのさ」

「嵐に便乗する、ということですか?」

「正確には『人間が理解出来ない現象』に便乗するんだよ。理屈で説明出来ない事態を前にした時、人間は妖怪や神の仕様だと思うんだ。今じゃあ、そういうった考えも随分少なくなっただけど、疑うくらいはするんだよ。常識じゃ測れない事態を『まさか』って考えるんだ。その瞬間に、乗っかるのさ」

『幻想を否定する力』が薄れる瞬間を狙う、ということですね」

「その通り。まあ、人間よりも仙人の方が分かりやすいか」

イマイチ上手く話を呑み込めない私を見て、諏訪子様は笑った。

「とにかく、明日だ。明日の夜、嵐の中でわたし達は計画を執行する。そいつに便乗したけりや、好きにしな。別に人数が増えても、負担は変わらないしね。場所は同じ、この場所だ」

最後に確かめるように言って、諏訪子様は私達に背を向けた。

踵を返す間に、その姿が消えて、見えなくなってしまう。

気配も感じない。

二人とも、この場から去ったのだ。

私は、大きいため息を吐いた。

交渉はビツクリするぐらい上手くいったが、色々と疑問や不安の残

る終わり方だった。

神奈子様が、私に何を感じていたのか分からないままだった。

何故、急に私を敵と見なしたのか。

そして、何処か真剣味の抜けていているように感じた交渉の最中、裏では何を考え、算段していたのか――。

私は、ふと頭上を見上げた。

今にも雨が降りそうだった空は、いつの間にか雲一つない夕焼け空へと変わっていた。

降水確率ゼロ%の天気予報通りだった。



「神奈子様！」

その日の夜、早苗は家からこっそりと抜け出した。

「諏訪子様！」

難しいことではなかった。

ここしばらくはご無沙汰だったが、子供の頃はこうして何度も自室の窓から外へ文字通り飛び出していたのだ。

家の二階から地面までの高さは、全く問題にはならなかった。

窓から家の塀の外までの短い距離を飛ぶ程度ならば、小学生の頃から出来たのだ。

早苗は自転車に乗って、人気がない夜の帳へと漕ぎ出していった。

年頃の娘が夜間外出など、両親が知れば卒倒しそうなものだが、早苗に不安はなかった。

いや、正確にはこの時は忘れていた。

自らの激情に急ぎ立てられるように、早苗は諏訪大社へと走った。

「私の声にお応え下さい！　お願いします！！」

子供の頃。

まだ、二柱の神が自分と笑いながら言葉を交わしてくれていた頃、諏訪子達に訊ねた。

――かみさまは、いつもどこにいますか？　おはなししたいと

きは、どこをおたずねすればよいですか？

神奈子と諏訪子は笑いながら答えてくれた。

——神社さ。何も心配することはないよ。私達は、お前の呼び掛けにいつでも応えるからね。

——わたし達神様の居場所は、もう神社と近場の駄菓子屋くらいしかないよ。隠居した婆さんと同じさ。

そんな二柱の神が、呼び掛けに応えず、偶然見かけてもこちらに気付くとすぐに姿を消してしまうようになったのは、いつ頃からだったか。

迷惑なのかもしれないと考え、心の何処かでは嫌われたのではないかと不安を抱え、自ら訪ねることもなくなったのはいつ頃からだったか。

早苗は、諏訪大社の上社に来ていた。

家から近かったこともあるが、根拠もなく、今夜はここに二柱が留まっていると感じていた。

深夜である。

既に完全に人気のなくなつた境内に、早苗の声だけがしばらくの間空しく響いていた。

早苗は根気強く呼び掛け続けた。

声は聞こえているはずだ。

ただ、応えてくれないだけなのだ。

早苗は、かつて自分に答えてくれた神の言葉を今でも信じていた。

「諏訪子様あ!!」

「——いい加減にしないと、警察を呼ばれちゃうよ」

早苗の瞳に涙が溜まり始めた時、神の声が応えていた。

いつの間にか、本宮まで来ていたらしい。

潜った鳥居の上から聞こえた声を辿ると、そこには諏訪子がしゃがんだ状態で早苗を見下ろしていた。

「諏訪子様!」

「警察のお世話になって、両親呼ばれて……次の日、学校で『深夜に神社で徘徊するオカルト女学生』って噂が立つんだよ。中学時代の奇行

とか掘り返されてさ」

「お話があります」

「さつきと家に帰って寝な。明日も学校でしょ」

「神奈子様と共に、幻想郷という所に移住するというのは本当ですか!?!」

皮肉るように吊り上っていた諏訪子の口元が落ちた。

早苗の眼つきが真剣そのものであることを確認して、大きくため息を吐いた。

「そうだよ。大分前から、神奈子と話し合ってたんだ。明日の夜、わたし達は幻想郷へ行く」

「どうして、教えてくれなかったんですか!?!」

「どうしてって、ねえ」

「もし、相談してくれたら——」

早苗は自らの決意を最後まで言い切ることが出来なかった。

鳥居の上にいる諏訪子が、音もなく目の前に舞い降りた。

見た目は小さな女の子の姿をした諏訪子が、顔を近づけて早苗の瞳を覗き込む。

諏訪子の瞳は、人のそれとはかけ離れた濁った眼球だった。

「相談してくれたら——なに?」

早苗は息を呑み、しかし意を決してハッキリと答えた。

「ご一緒に、幻想郷へ往きます」

早苗の決意を、諏訪子は冷笑した。

「早苗よ。お前が子供の時分は、わたしも神奈子も領分を弁えずに色々は無駄なことを教え与えてきた。風祝の技や、知識や、力について。将来、何の役にも立たないことを長々とさ」

「……はい。様々なありがたい教えをいただきました」

「戯れだよ。今じゃ後悔してる。とにかく、そんなお前なら多少は分かるだろう。」

幻想郷に移住する——これは、言葉通りの意味だけじゃないよ。向こうに行けば、戻って来れないのは当たり前だ。そもそもわたし達は戻る気もないしね」

「覚悟の上です」

「外の世界での居場所もなくなる。失踪扱いとか行方不明になるって話じゃないんだ。

いいかい？ わたし達は『幻想』になるんだ。具体的にはね、こつちの世界で生きてきた痕跡とかそういういったものが全部なくなる。記録も記憶も消えるんだよ」

「分かっています、覚悟はしているんです！」

「分かかってねえよ、馬鹿！ もっと想像しろっ！」

幼い見た目からは想像も出来ない、烈火のような怒りで諏訪子は怒鳴りつけた。

早苗にとつて、これほど感情をあらわにした諏訪子を見たのは初めてだった。

「自分の決意一つ、みたいな顔すんな。親はどうするんだい？」
「え……」

「親だよ。お前を生んで、今日まで育ててくれた両親だ。

早苗が幻想郷へ行けば、親はお前の記憶を失う。早苗の両親って今何歳だ？ 四十くらいか。そんな歳で、自分も知らぬ間に子供を失った孤独な夫婦が現代に残されるわけだ」

「――」

「お前が、今の生活の中で孤立していることは知っているよ。でもね、自分がいなくなっても悲しむ人なんかいないとか、ガキの甘ったれなんだよ！ それでも早苗は、神様なんてあやふやなもんには付き合っ
て、この世から姿を消そうっていうのかい!？」

早苗は、顔を青褪めさせた状態で黙り込んでしまった。
軽い気持ちで決意したのではない。

しかし、諏訪子の叱責を受けて、ここに来るまで自分を突き動かしていた激情が消えてしまったことは間違いないかった。

両親のことなど、言われるまで考えもしていなかった。

父も、母も、愛している。

自分を育ててくれて、感謝もしている。

同時に、朝目が覚めて母が朝食を作ってくれることや、父が仕事に

出掛ける姿を、当たり前のように捉えていた。

今夜、家から抜け出す時も、同じ屋根の下で両親が眠っているから、起こさないようにと気をつけた。

諏訪子達と共に幻想郷へ行けば、その当たり前前の生活が次の日から失われるのだと、今更のように気付かされたのだ。

「早苗。もしも、お前が巫女として自分の祭る神を助けようという意志で幻想郷へ行こうとしているなら——やめた方がいい。いや、やめろ」

「……何故ですか？ 私は、諏訪子様と神奈子様を信仰する風祝です。それを誇りに思っています」

「神に自分の人生を捧げるな。もう、そんな時代じゃないんだよ」

「仮にわたしや神奈子が消えた時、それでも幻想郷で生きる意味を失わないだけの意志がなければ、お前はわたし達と共に来るべきじゃない」

「私は……私は、諏訪子様達にとって不要な存在ですか？」

「誰もお前を選んじやいないよ」

その言葉が、トドメとなった。

早苗は嗚咽を噛み殺し、涙を流しながら走り去っていった。

何度も足がもつれそうになった。

何度も振り返りたくなった。

しかし、結局一度も振り返ることは出来なかった。

早苗の後ろ姿が見えなくなるまで、諏訪子はじつとその場に佇んでいた。



「よろしかったのですか？ 先代様に話さなくて——」

深夜。

窓際の椅子に座って夜景を眺めていたさとりは、突然青娥に話を振られても驚かなかった。

先日の夜と同じである。

さとりは心を読むことで青娥に気付き、青娥も気付かれていることに気付いているのだ。

青娥が何を言いたいかも分かっていた。

「上手く事が運んだとしても、幻想郷の帰還は明日の夜。貴女のタイムリミットは明日。どう転ぶか、分かりませんか？」

さとりが消滅するまで後三日——青娥が立てた予測に、明日追いつくのだ。

予測ゆえに、確定ではない。

しかし、幻想郷へ帰ることが出来たとしても時間は深夜であり、厳密には設けられた期限を越えることになる。

果たして間に合うのか、間に合わないのか——。

「文字通り、神のみぞ知るといったところですかね」

さとりは自身の危機について不安や恐怖を何も感じていないかのような、冗談めかした口調で呟いた。

「これまで黙っていたことも不思議でしたが、やはり先代様に教えておくべきでは？」

「もしも完全に間に合わないと分かった時には、諦めてそうしてしましたよ」

「どうなるか分からないからこそ、伝えておくべきではないでしょうか。事情を知っておけば、先代様もまた取るべき行動が変わるかもしれません」

「切羽詰った事態を知って、本気を出すとも言えますか？ 何の為の本気を？」

さとりは苦笑した。

「出来るだけのこととはしました。あとは、神様の力を信じて待つ以外にありません。それにね、彼女はこれまで十分に本気でしたよ」

青娥から、自分に残された猶予について詳しい説明を受けた時のことを思い出していた。

存在の維持が二日しかもたない危険な状態でありながら、能力は完全に失われていなかった。

また、幻想郷と外の世界との環境の違いから、体が訴えるはずの不調も、最初の内は全く感じていなかったのだ。

何かがさとのりを受ける負担を緩和しているのだ——と、青娥は分析した。

外の世界に来て、何らかの処置を施さなかったか。

その疑問の答えに、さとりは思い当たっていた。

——あの時口にしたおにぎりだ。

それ以外、考えられない。

幻想の力を宿した食物を口にしたことで、ほんの少しだけだが自分に猶予が出来た。

その結論に至った時、さとりは思わず笑い出しそうになった。

もちろん、偶然だ。

あのおにぎりがそんな効果を発揮するなんてこと事前には知り得なかったし、先代も分かっていたに自分に食べさせたわけではない。

全て結果論。

しかし、あの時先代は間違いなく自分を案じておにぎりを勧めてくれた。

まさかの結果を予想は出来なくとも、その行為に至る動機はきつと同じだっただろう。

自分を案じてくれた。

そして、その後も案じ続けてくれた。

出来るだけ早く、幻想郷へ帰そうと尽力してくれた。

確かに、命が懸かっていると知れば、彼女はもつと必死になってくれたかもしれない。

だが、これまでの行動で必死になっていなかったかという点、全くそんなことはないのだ。

「これ以上は、ただ焦りを生むだけです」

そして、彼女を意味もなく追い詰めるだけだ。

「私が助かるかどうかは、明日嫌でも分かれますよ」

——仮に間に合わなかったとしても。

さとりは思考を途中で振り払うように、軽く首を振った。

樂觀をしているわけではない。

しかし、最悪の事態を想定して準備をしておくというのも、何だか諦めを許容しているようで嫌だった。

二つの考えの間で悩み、やがてさとりは『まあいいか』という投げやりな気持ちになった。

考えても仕方がない。それは、さつきも自分で言ったことだ。

打開策まではこぎ着けた。あとは、神様と運次第。

全ては、明日分かるのだ。

万事上手く事が運ぶのか。

失敗して、最悪の結果になるのか。

あるいは、何か別の事態が起こるのか。

何処からともなく第三の選択肢が出てきてしまう点が、先代巫女と関わって以来常に自分を悩ませてくれる。

さとりは諦めたように苦笑を浮かべた。

——全ては、明日。

其の四十六 「開始」

人を食らうのは獣や妖怪ばかりではない。

神もまた人を食らうのだ。

古代、人命は飢饉や災害で容易く失われるものであった。

生命は、気まぐれな自然が与えるもので潤い、自然から奪われることで干上がった。

かつて、自然が起こす災害は神の力によるものだったのだ。

まだ人の力が弱かった時代。彼らを育み、守ったのは神の力であり——また同時に襲い、脅かしたのも神の力だった。

絶対的な力に対して、人間は食物を、動物の命を、時には自らの命さえも捧げ祭った。

生贄に選ばれた人間達は、ある者は理不尽に選ばれた犠牲として、またある者は尊崇する神への奉仕として、自らの命を捧げられた。

かつて、人は神を心から敬い、それ以上に畏れていた。

人は神に抗うことは出来ない。

だからこそ、人は神を畏れる。

何の前触れもなく襲い来る自然の猛威の陰に神の力を見て、その理不尽に嘆き、怒り、そして畏れる。

何故なら、神は気紛れだからだ。

奪うも与えるも、神の意思一つ。

ささやかな奉仕に多大な見返りを与えることもあれば、どれ程深い嘆きと献身があっても無慈悲に奪われる時もある。

しかし、人が神に逆らうことなど出来ない。

それは天上に弓を引くに等しい。

人の放つ矢など神には届かぬ。

人の上げる声など神には届かぬ。

ああ、神とはなんと残酷で理不尽な存在なのか——。
しかし。

そうでなくてはならない。

神とは、残酷で理不尽でなくてはならない。

自らを健気に敬う人々の命を気紛れに奪う理不尽な存在でなければならぬ。

祈る者には必ず正当な報いを与えるような道理の通った存在であってはならない。

何時如何なる場合であっても、神の行動を決めるのは神の意思一つでなければならぬのだ。

誰の心にも左右されることなく、誰の責任にもしてはならない。

神の意思は、人にとって唯一絶対。

そうではなくてはならない。

だからこそ、人は神を敬うのだ。

だからこそ、人は神を畏れるのだ。

同族の命まで捧げて、届くかどうかも分からない祈りや願いを一心に続けてきたのだ。

——今は昔、古い時代の話である。



神社の屋根の上に、神奈子は腰を降ろしていた。

左足を投げ出し、右足を曲げて立てた膝の上に右腕を軽く乗せている。

視線は、ただ漠然と前を見据えていた。

高所から一望出来る町の夜景を眺めているようにも、虚空へ自分の記憶にある別の光景を浮かばせているようにも見える。

神奈子の背後に、諏訪子が姿を現した。

文字通り、何も無い空間から滲み出すように実体が現れ、屋根の上にふわりと降り立ったのである。

「ここまで声が聞こえていたぞ」

振り返らずに、神奈子は言った。

「早苗は、帰ったよ——」

諏訪子は背中合わせになるように、神奈子の背後へ腰を降ろした。

並んで座ると、お互いの表情が分かってしまう。それが今の諏訪子には嫌だった。

しかし、背中が触れ合うことで、互いの存在感はしっかりと伝わってくる。

この体勢は、わたし達の関係に似ているな。と、諏訪子は思った。

「明日、早苗は来るかな？」

諏訪子は独り言のように呟いた。

「来るな、と言ったのはお前だろうが」

「うん、まあ来ない方がいいんだけどね」

「諏訪子。最初に言っておくが——」

「何？」

「私は、早苗に幻想郷のことは教えてないぞ」

「分かってるよ。……半分くらいは疑ってたけど」

「早苗への対応については、お前の意見を尊重してやってるだろう」

「早苗の力を利用しようとしてたくせに」

「利用じゃなくて協力だ。それに、あの子に強制するつもりもない。

早苗の力を借りることが出来れば、時期や状況を選ばなくとも幻想郷

への移住が可能なんだ。考えるくらいは当然だろうが」

「あの子の力をアテにしてる考えがそもそも気に入らないんだよ。こ

れ以上『こちら側』に深入りさせてどうすんのさ」

「おい、あの子は『風祝』だぞ。私達を祭る巫女だ」

「いいや、違うね。あの子は高校生で、卒業したら大学生になって、結

婚したらお嫁さんになって、いずれ母親になって死ぬのさ」

反論する諏訪子の口調は、怒りを含んだ強いものだった。

「早苗の持つ力は、超能力だとか肉体の延長にある力じゃない。神掛

かった力——神になる為の『素質』なんだ。

身体なら鍛えればいいし、才能なら磨けばいいさ。それは他人に誇

れることだし、生きがいになって出来る。だけど、あの力は違う。あ

んなものを気軽に使っちゃいけない」

「あの子が持って生まれた力だぞ。目を背けさせてどうする」

「早苗に関して一つだけあんたと考えが合わない点があるとするとするな

ら、それは神奈子があの方の力をまるで奇跡のように扱うことだよ」

「そうだ、奇跡だ。長い年月を経て、薄れつつある『神の血筋』の中で早苗のような力を持つ娘が生まれたのは奇跡としか思えないだろう」

「奇跡じゃないよ。古い血が生んだ呪いさ」

「早苗はお前の子孫だろうが。諏訪子」

神奈子は叱りつけるように言った。

しかし、諏訪子は自虐的に笑うだけだった。

早苗に自分の血が少しでも流れていることを責めているような顔だった。

「哀れな子だよ」

諏訪子は言った。

「こんな時代に、なんてもんを抱えて生まれ落ちちまったんだ」

「早苗が生まれた時、お前は嬉しくなかったのか」

「——嬉しかったさ。神への信仰が薄れて人の目に映らなくなったわたし達の姿を、赤ん坊だったあの子が見つけて、小さな手を伸ばした時、震えるほど嬉しかった」

「私もだよ」

「早苗の誕生を心から祝福したし、感謝もした。神様はわたしの方だったのにな」

「ああ」

「だからさ」

「——」

「だから、長々とあの子の足を引っ張っちゃったんだ。わたし達の未練が、早苗自身の人生を邪魔し続けたんだ」

「だからか」

「ああ、だからさ。だから、明日に決めたんだよ。これまで計画をずっと先延ばしにしてきたけど、ようやく決めることが出来たんだ。わたし達は、ようやく早苗の歩む道の上から退くことが出来る」

自らの決心を言葉にし終えた諏訪子は、いつの間にか強張っていた身体のを抜きながら、大きく息を吐いた。

安堵にも落胆にも聞こえる響きを持った、ため息だった。

「そーいや、謝ってなかったね。ごめんよ、神奈子。あの時、勝手に計画の決行日を決めちゃって」

「あの場には私もいたんだ。だが、何も言わなかっただろう。文句なんてなかったさ」

「ありがとう」

「いいさ。タイミングもよかった。確かに、明日の嵐なら、早苗の力がなくても私達の方だけで幻想郷へ行けるだろう」

「本当は、早苗が何も知らない間に消えられればよかつたんだけどね。やっぱ、早苗に余計なこと教えたのってあいつらの仲間かな。あの二人以外に、もう一匹妖怪の仲間がいるみたいだったし」

「ぼやきながらも、その声には悪態と呼べるほどの感情は含まれていない。」

諏訪子の口元に浮かぶのは、苦笑に近いものだった。

「でも、わたしが決断する切っ掛けを持ってきてくれたのもあいつらなんだよなあ。今回のことがなかったら、またグダグダと決断を先送りして、いずれ早苗の情に絆されちゃってたかもしれない」

諏訪子の独り言に、神奈子は応えなかった。

「あいつら、本当に何者なんだろう？ わたし達のことだけならともかくさ、計画まで知ってたなんて解せないよね。いくら幻想郷の住人だからってさ」

「でも、まあ……どうでもいっつか。あいつらが隠してることになんて興味ないしね。神奈子もそうでしょ」

「移住する現地にコネが出来るってのは地味にありがたいかな。幻想郷って、実際にどんな所なのか見たことはないし。住み心地が良ければいいんだけど」

「幻想郷、行ったら何しよつかなく？ わたし達二柱とも神格が無駄にデカイし、細々と生きてくのは無理かな。向こうも、多分迷惑なんだろうなあ。ああ、どうしよ。行き当たりばったりすぎて、やりたい

こと考えてなかったや」

「っていうか、いざ決まると自分でもびっくりするくらい投げやりだな。何でだろ？ 神奈子は、何かしたいことある？」

まるで他人事のように諏訪子は訊ねた。

その質問さえ、放り投げるような適当さだった。

神奈子は答えなかった。

先程から、ずっと黙り込んだままである。

「……神奈子は、あいつらが何者か気になるの？ 特に、あの『先代巫女』って名乗った人間」

諏訪子は肩越しに振り返った。

神奈子の方は全く姿勢を変えない為、顔を見ることは出来ない。

しかし、その目はきつと何かを睨んでいるのだろう。

それが諏訪子には分かる。

背中越しに肌から肌へと、神奈子の内側で生じているものが伝わるのだ。

それは、何か押し殺されたものであった。

ハッキリとは分からない。

震えのようにも、熱のようにも感じる。

あるいは、両方なのかもしれない。

神奈子の身体の内側で、空気を震わせるほどに激しく燃え滾っているものがあるようだ、諏訪子は漠然と感じていた。

そして、その火を点けたのが、神奈子がずっと気にしているあの先代巫女という人間であることだけは確信していた。

諏訪子は、それ以上何も言わずに口を閉ざした。

お互いに長い付き合いである。言葉にしなくても、相手の言いたいことが伝わる時があるのだ。

沈黙が、まるで無言の催促であるかのように神奈子へ向けられていた。

「——あいつの」

神奈子は躊躇うように一度口を閉ざし、

「私を見る目が堪らない」

苦痛を吐き出すように言った。

「お前にも、あの人間の異常さは分かっただろう」

「うん。あいつ、わたし達を『信仰』してたね」

神にとって人の信仰とは力の源である。多いほど神としての力を強大化させ、少なければ存在の維持すら困難になっていく。

物質的には見えず、エネルギーとしても感知出来ないものだが、神にとっては自分を形作る血肉そのものである。

人が食物を胃や舌で感じ取れるように、神もまた独自の感覚で自身に向けられる信仰を認識出来るのだ。

信仰には、大きさや強弱といった概念は存在しない。

基準を設けるならば、それは数だ。

多くの人が信仰すれば力となり、逆に少数の人間が深く神を信じたとしても大した力にはならない。

先代巫女から向けられたものは信仰に間違いなかったが、やはりそれも一人の人間の信仰に変わりはなかった。

「確かに、不思議ではあるよ。事前にわたし達のような神がいることを知っていて、既に信仰心まで持っていたってことだからね。

何を思っただけで信仰心なんか持ったのかは分からないし、何処でわたし達を知ったのか分からなくて不気味だけど、『信仰は個人の自由』って言えばそこまでなんじゃないかな。信心深い性分ってだけなのかもしれないじゃない」

諏訪子の見解に、しかし神奈子は同意を示さなかった。

「諏訪子。お前は、知らないんだ」

まるで非難するように、神奈子は言葉を返した。

「一対一で対峙した時、あいつが私に向けた視線を知らないんだ」

「眼つきが気に入らないってのは、さすがに難癖つけすぎでしょ」

神奈子は軽口には応じなかった。

「一片の曇りもない、真っ直ぐな視線だった。あいつの目は、完全に神を見る目だった。僅かな疑いもない信仰だったんだ」

それは、喜ぶべきことである。

自らの神社がある地元でさえ、文明化の波を受けて、目に見えない存在への信心が薄れて久しい中、心の底から神を信じて崇める存在と出会ったのだ。

しかし、神奈子の吐き出す声に喜びや興奮はなかった。

あるいはあつたかもしれないそれらの感情を押し殺して余りある苦痛が、声色と表情に滲んでいっただった。

「私が目の前に姿を現した時も、あいつの信仰は揺るがなかった。いや、むしろより確かなものとして強固になっていた。

なあ、諏訪子。神が実体を見せるといふことの意味が、お前には分かるだろう。かつて、神の権威が溢れていた時代ならばいざ知らず、人が神の存在と力を疑い始め、更にそこから時を経た現代だ。

人は、自分の目には現実しか映らないと信じている。明確な姿形を持った者が神を自称して現れたら、人はそれを神と信じない。神とは畏怖するに足る絶対的な存在なのだから、人の想像の及ばない姿でなければならぬ。人の『知』や『力』が増大した現代では、その認識を遙かに超えたものでなければ神の力は信じられない時代になってしまったんだ」

「……ああ」

諏訪子は小さく頷いた。

「言いたいことは、分かるよ。もう『現実』と『幻想』が曖昧に共存していた時代じゃない」

「だけど、あいつは私の姿を見ても疑わなかったんだ。私を、神だと信じ抜いていた。いや、あいつにとって『私が神である』ことは当たり前だった」

「そうか。神奈子には、それが分かったのか」

「分かったからこそ、分からないんだよ――」。

何故、あいつはあんなことが出来るんだ？　ただ私の存在を知っていただけでは、あの信仰は説明がつかない。初対面だぞ。出会ったことのない相手に、何故あそこまで確固たる認識が持てる？」

「神奈子が、あいつと敵対しようとしたのって、それが理由？」

「ああ。だが、敵意を向けても、あいつの認識は変わらなかった――い

や」

神奈子は言い直す為に、首を振った。

「違う。私は、あいつに失望してもらいたかった。あの疑いのない目が、曇ればいいと思っていた」

「……なんだって?」

「理由も根拠も、どうでもいい。あいつは、私を信仰している。その事実だけが、私には何よりも重い」

諏訪子は、神奈子の声の変化に気付いて、眉を顰めた。

神奈子の声が震えていた。

痛みか、あるいは激情を堪えるような震えだと感じた。

「堪らないんだ。あいつの目に、私の姿がどう映っているのか知るのが怖い。あの揺るぎ無い信仰には、間違いなく私への敬意と畏怖があった。あいつの思い描く私は、完璧な神様なんだ」

神奈子は歯を食い縛って、自分の胸を強く握り締めた。

胸の奥で、酷く冷たい痛みが疼くようだった。

「あいつの、今の私の姿を見る目が堪らない——」



次の日の朝、早苗はいつものように目覚ましが鳴る前に起床した。

いつものように母の作った朝食を食べ、父が仕事に出掛けるのを見送ってから、少し遅れて学校へ向かった。

いつも通りの朝だった。

一つだけ違うのは、今夜自分の信仰する神がこの世界から永遠に去ってしまうのを知った朝だったことだ。

早苗は一時間目の授業を何とかこなしたが、ほとんどが上の空で教師の話など全く覚えていなかった。

二時間目の最初に不調を訴えて、早退した。もちろん嘘だった。

家にいるだろう母には連絡せず、そのまま帰ろうともしなかった。かといって、何処へ行けるというわけでもない。

制服姿のまままで町へ行けば補導されるだろうし、知人と鉢合わせするだけでも厄介だ。

早苗は人目を避けることだけに集中して、あとはただぼんやりと彷徨い歩いていた。

歩きながら、自分は何をしているのだろうと思った。

——何処か行きたい所があるのか。

——あるいは、誰か会いたい人がいるのか。妙な話だと自覚はしていた。

どんな場所で、どんな人物なのか自分でも分からないのに、自分はそのを求めて彷徨っている。

こんな曖昧な望みが叶うとしたら、それは奇跡以外の何物でもないだろう。

それを分かっているながら、早苗は歩みを止めることが出来なかった。

時間だけが、ただ無為に過ぎていく。

信じる二柱の神——いや、自分にとって『大切な人達』との別れが、ただ無慈悲に近づいてくる。

選択の時は近いが、答えはまだ出ていない。と——。

曖昧になった感覚の中で、早苗は気付いた。前から歩いてくる人物に。

「——早苗さんじゃないですか」

早苗は、信じられない気持ちで自分の名を呼ぶ相手を見下ろしていた。

自分が何を求めているのか、その瞬間あっさりと理解出来たような気がした。

まさに奇跡だと思った。

「どうしたんですか？」

呆然と佇む早苗の顔を、さとりが覗き込んでいた。

「さ、さとりさん……」

「はい、昨日ぶりですね」

「あの……」

「はい」

「え……と、そちらのお二人は？」

若干混乱しながらも、早苗はまず気になっていることを訊ねた。

さとりのは、見覚えのない二人の女性がいた。

片方は、美人だがそれ以上に同性でも感じる色気が目立つ青い髪の女性である。

さとりと同じ人外の存在なのだとすぐに分かった。姿以外では、巨大なキャリーケースを引いている点が目に付く。

もう一人も美しい女性だったが、こちらは何よりも単純な身体の大きさがすぐに目に付いた。

見上げるような背丈に、傷だらけの身体を包む男物の服装と、こちらの特徴的な姿である。

そんな二人が、小学生のように小柄なさとりと並んで歩いているのだ。

さとりが妖怪であることを知っている早苗からすれば、納得がいくような全くだらないような奇抜すぎる組み合わせの三人だった。

「私以外に、幻想郷に行く仲間がいることは話しましたっけ？」

「はい、昨日教えてもらいました」

「この二人がその仲間です。そうですね、少し移動しましょうか」
さとりが提案した。

「落ち着いて話をする場所が必要なようですからね」

呆気にとられる早苗を尻目に、さとりが先頭となって移動を始めた。

なし崩しに、早苗も連れられる形になっていた。

歩きながら、面識のない二人と簡単な紹介をし合った。

仙人の霍青娥は穏やかに微笑みながらも、何故か妙に熱い視線を送ってくる。

寡黙な先代巫女という女性の本名が少し気になったが、気になるだけで訊ねようという勇氣は湧かなかった。

初対面の相手との会話に悩む必要もなく、四人は落ち着いて話が出

来そうな場所である人気のない小さな公園へと辿り着いていた。何か意味があつて選んだ場所ではなく、適当に探した結果なのだろう。

さとりは軽く見渡した後、公園内の一角に設置された屋根とテーブルと椅子だけの簡易的な休憩場所に腰を落ち着けることにした。

さとりに促されるまま、早苗は三人と向かい合う形で座った。

人数の偏った配置を見て、早苗は今更ながらに気付いた。

さとりは、本当に自分と話をしてくれるつもりなのだ。

「あの、さとりさん——！」

「分かってますよ、相談したいことがあるんですね」

勢い身を乗り出す早苗を眺めながら、さとりは若干呆れた口調で言った。

さとりの心を読む能力を思い出して、早苗は僅かに赤面した。

自分でも分からない悩みさえ、彼女はお見通しだったのだ。

「……相談したいことが、あるんです」

早苗は改めて言葉という形にして、自分の中で燻っているものを吐き出した。

「さとりさんには、その内容も分かっているんですよ？」

「まあ、心が読めますからね」

「じゃあ、きつと答えも分かっているはずですよ」

「そうでしょうか？」

「だって、私の心が読めるんでしょう？ 私が本心では『どちら』を選

んでいるのか、さとりさんには分かっているはずですよ！」

「自分の心ならば、自分が誰よりも理解しているのでは？」

「自分が分からないから、訊いているんです！」

掴みかからんばかりの勢いで、早苗は叫んでいた。

周りに人がいれば、思わず目を向けてしまうような悲痛な声だった。

しかし、さとりはそんな早苗の激情にも顔色一つ変えずに言った。

「仮に私がそれを答え、それに貴女が従って行動したとしても、後悔をしないかどうかまでは分かりませんよ？」

早苗は、思わず沈黙した。

「私は、貴女の選択の責任を負うつもりはありません」

「そ、そんなことは……」

「私よりも、こちらの二人に相談した方が為になると思いますしね」
意表を突かれたかのように、早苗は視線を移した。

「青娥さんは、早苗さんに強い興味を持ったみたいですし」

青娥が好奇心に瞳を輝かせながら見つめていた。

「先代なら、きつと私よりもずっと真摯に貴女の悩みを受け止めてくれるでしょう」

先代は一生変化がないのではないかと思うほど硬い仏頂面で真っ直ぐに見ていた。

いずれも、早苗と真剣に向き合っていることだけは共通していた。

早苗は一瞬さとの方に視線を戻し、もう一度二人の顔を交互に見て、強張った身体から力を抜くように大きく息を吐いた。

そして、ぽつりぽつりと話し始めた。

昨日の夜、諏訪子に言われたこと。

結果、自分が悩んでいること。

自分が今抱えているものを、上手く言葉で表現して相談することは難しい。

しかし、自分が今夜の期限まで取るべき行動は二つの選択肢として既に出来上がっていた。

つまり。

——幻想郷へ二柱と共に行くのか、行かないのか。

ただそれだけの、分けることは容易く、決断することは困難極まらない選択肢である。

「——月並みな言葉かもしれないが」

早苗の話聞き終え、まず先代が口を開いた。

「周りのことは気にせず、自分の望む道を選ぶのが一番だと思う」

厳格な外見や口調とは裏腹に、優しい言葉だった。

正しい大人が子供に示すような寛容さがあった。

それを意外に思いながらも、早苗は首を振った。

「家族を蔑ろにしたくありません。これだって、私の望みです」

「しかし、まずは君の人生を第一に考えるべきだ」

「両親だって私の人生の一部です。家族の為に自分の望みを曲げることは、人間として正しいことじゃないですか？」

早苗の問い掛けに、先代は黙り込んだ。

自らを顧みて、その言葉に頷ける部分があると気付いたのだ。

迷う先代の代わりに、今度は青娥が口を開いた。

「この際、どちらが正しくて間違ってるのかなんてくだらないことを考えるのはやめましょう」

全く遠慮のない言い方だった。

「東風谷早苗さん、貴女にはなんだか凄く親近感が湧きます。あつ、話し方崩していいかしら？ 失礼？」

「い、いえ、構いません。私の方が年下だと思えますし」

「ありがとうございます。うふふ、ごめんなさいね。私ったら嬉しくて、ここ数日間で魅力的な人達に出会い続けてるんだもの」

「魅力的……ですか？ 私が？」

「そうです、貴女。早苗さんって、凄い才能を秘めているのよ」

「は、はあ」

「そう、秘めているの。貴女が自覚している力はまだほんの一端に過ぎない。残りはたつぷりと貴女自身の中に眠っているのよ。既に完成されている先代様とは違うのね。私、貴女を見ていてとてもワクワクするわ」

「ワクワク、ですか？」

「そうよ。これは期待なの」

「期待……」

「ねえ、早苗さん」

「はい」

「一緒に幻想郷へ行きましょうよ」

「はい!？」

「ねっ、行きましょう。そこでなら貴女の力を十分に引き出せるし、評価だってされるわ。貴女は幻想郷へ行った方がいい、間違いないわ

！」

青娥は身を乗り出して、早苗の両手を強く握り締めていた。瞳は爛々と輝いている。

早苗自身の意思を尊重してくれた先代とは正反対だった。

強引に選ぶべき道押し付けてくる。

しかし、早苗にとってそれは不快なことではなかった。

確かに強引だが、そこに悪意はない。

かといって善意も感じないが、そういった煩わしいもの全てを押しける私の強さがあつた。

青娥には一切の迷いが無い。自分の欲望のままに物事を決定し、行動をしているのだ。

その強さは、今の早苗にとって尊敬と羨望にさえ値するものだった。

「でも、家族が……」

「確かに家族と別れて幻想郷で過ごす日々の中、いずれ後悔する時があるでしょう」

青娥は透き通るような笑みを浮かべた。

「だけど、この世界に残ったら死ぬまで後悔し続けるわ」

青娥は断言した。

背筋の凍るような宣告だった。

「私には、貴女の気持ち分かる。貴女はこの世界に退屈している。いえ、失望している」

「そんなこと……」

「このまま生活を続けても、人並みの幸せを手に入れることは出来ても、満たされることは決してないでしょう。だって、貴女の器は他人よりもずっと大きいのだから」

「――」

「周りと同じ幸福で自分を誤魔化せるかしら。貴女の手だけが届き得る、貴女だけの高みを目指したいとは思わない？」

「私、だけの」

「誰よりも高く飛ぶのよ。そして、他人は貴女を見上げるの」

早苗は青娥の目を見つめた。

呑み込まれそうなほど深い瞳だった。

「自らの望みの為に家族を捨ててもいいのよ。他の誰が許さなくても、私が許すわ。かつて、家族を騙して去った私が」

網膜を通して、彼女の中でチロチロと燃えている黒い炎が見えるようだった。

彼女は常にその熱に突き動かされているのだと、早苗は理解した。だから、青娥は迷わない。

自身の欲望の熱に焦がされるまま、彼女は動き続ける。

今の自分から完全に消えているものを、早苗は青娥から感じ取っていた。

このまま言葉を聞き、瞳を覗き込んでいけば、自分にもこの火が乗り移るだろう。

熱に浮かされ、言われるままに道を選んでしまいそうだった。

しかし、不意に――。

青娥の口元が緩んだ。

鬼にも仏にも見えそうな強烈な笑みが、ただの淑女が浮かべる柔らかな笑みへと質を変えていた。

「――とはいえ、決めるのは貴女」

青娥はそつと手を離れた。

「貴女が決めるからこそ価値がある。私は力を操るよりも見る方が好きだから」

「は、はあ……ありがとうございます。色々と参考になりました」

「もし、幻想郷に移住することになったら、改めてお付き合いしましょう。色々と教えてあげるわ。誰も教えてくれない、ちよつとイケナイこともね」

早苗は引き攣ったような笑みを浮かべて、曖昧に頷くしかなかった。

ここまでの会話だけで、青娥に対する苦手意識がすっかり根付いてしまっている。

しかし、同時に強く惹かれてもいた。

早苗がこれまで会ったことのない女性だった。

当たり前前の倫理観を口にするだけの大人とは違う。彼女の言動には危険だが自由も感じた。

悪いことだと分かっているのに、つつい興味を持ってしまう。酒やタバコに対するそれに似ていた。

青娥の人となりを知って、ますます三人の組み合わせを意外に思う。

外見も性格も、何もかも反対に見える先代の方へと自然と視線が移った。

「……先程の話だが」

それまで黙っていた先代が、不意に口を開いた。

「やはり、君は自分の望む道に行くべきだ」

今までずっとそのことを考え続けていてくれたのか、と早苗は驚いた。

「私にも娘がいる」

「——えっ、お子さんがいるんですか!?!」

「ああ。血は繋がっていないが、大切な娘だ」

呆気にとられながらも、早苗は続く先代の話をなんとか聞いていた。

「私には君が本当に何を望んでいるかは分からないし、君の両親の気持ちを代弁するなんて無責任なことも出来ない」

何処までも真摯に、先代は早苗と向かい合っていた。

「だから、私の母親としての考えを言わせてもらおう」

「……はい」

「子供に氣遣われることは、純粹に嬉しい。老後の世話をしてもらって、死ぬまで子供と一緒に暮らせるのは幸せなことだと思う」

先代は頭の中で思い浮かべた光景に小さく微笑み、

「だけど、私は何よりも子供が幸福になることを願う」

言った。

「その幸福が家族と一緒に暮らすことなら、こんなに嬉しいことはない。だが、それが何かに挑戦することであっても、その為に遠くへ旅

立つことであつても、私なら子供の望むままにしてやりたい」

「……でも、親を悲しませたくないんです」

「子供が自立して親元を離れることは、自然の摂理なんだ。ただ、そこに色々な形があるだけさ。確かに別れは悲しくあるが、それ以上の喜びもあるんだ。どんな親だつて同じさ。多分」

しみじみと実感を噛み締めるような言葉だつた。

もちろん、早苗には先代の感じている親としての実感を理解することとは出来ない。

しかし、理解出来ないからこそ、まるで自分の親に言われているような説得力があつた。

その感覚さえ、自分にとって都合のいい錯覚なのではないかと疑つてしまう部分もある。

それでも――。

「……あの、さとりさん」

二人と話をしている間、ずっと黙り通しだつたさとりの方を向く。

頬杖をついて、暇そうにしていた。

無関心だなんて意外と酷い人なんだなあと思ひながらも、早苗の口元には苦笑が浮かんでいた。

「ありがとうございます」

「別に私は何もしてませんよ。お礼は二人にして下さい」

もちろん、早苗は先代と青娥にも深く頭を下げた。

見上げた空は、いつの間にか赤く染まり始めている。

学校を出て、彷徨つていた時間が長かつたのか、あるいは話し込みすぎてしまったのか。

家族は早退のことを知らないだろうが、そろそろ帰宅した方がいい時間帯ではある。

家に帰れば、すぐに夜が来る。

全てを決める夜が。

未だに迷いは抱えていた。

まだハッキリとどうするべきかは決めていない。

今の気持ちは、両親と顔を合わせれば、また変わってしまうかもし

れない。

「今夜、発たれるんですよね」

「ええ、予定通りならね」

「また会えるかどうかは分かりませんが——」

早苗は、それ以上を言うのを躊躇った。

ここで『また』と言うのも『さよなら』と言うのも、自分の選択を決めてしまう気がしたのだ。

結局、それ以上何も言わずに早苗は立ち上がった。

もう一度深く頭を下げて、家路へと向かう。

公園から出る前に振り返ると、無言で自分を見送る先代と『待つてますよ』と手を振る青娥の姿が見えた。

◇

——現代入りして三日目。いよいよ今夜、私達は幻想郷へ帰還する！

私達は、朝早くに泊まっていたホテルをチェックアウトした。

思えば短いようで長い三日間だった。

日数にしてみるとちよつとした旅行感覚な現代生活だったが、何の目処も立っていないかった当初は本当に途方に暮れたものだもんなあ。

しかし、様々な幸運と努力が重なって、こうして私達は無事に幻想郷へ帰れることになったのだ。

やれやれ、これで一安心といったところか。

まだ気が早い話だと分かってはいるのだが、これまで無意識に張り詰めていたものが緩んだような気分だった。

具体的には、さどりのことがやはり最初からずっと気に掛かっていたのだ。

私一人なら、本当にコンクリートジャングルでのサバイバル生活とかでもこなす自信はあったんだけどね。

むしろ、エアマスターとかストーリートファイターみたいな路上格闘生活をエンジョイしていたかもしれない。

そんなのんきな気持ちになれなかったのは、さとりがいたからだつた。

なんつーか、こう自分の行動に対する責任感みたいなものを感じるのよね。

なんせ、さとりは私の親友だから。

親友、だから！（強調）

とにかく、その責任がようやく少し軽くなったような気がした。

まだ今夜、最大の山場が残ってはいるが、これに関してはもう私が頑張つてどうにかなる話ではない。

神奈子様と諏訪子様の御力次第だ。せめて、私の信仰が少しでも助力となるよう祈ろう。

早苗がどうなるのかだけが少し気になるが——それもやっぱり、私が下手に口を出す問題ではないか。

「これからどうしましょうか？」

ホテルを出たところで、青娥が訊いてきた。

それはいいんだけど、腕組むのやめてくんない？

密着して柔らかい身体や胸が当たるのはまだいいとして、周りからかなり好奇の目を向けられるのよ。一応、私も女として認識可能な姿をしておりますので。

しかし、無言の抗議は当然のように伝わらなかった。

無視されたのかもしれないけど。

「特に考えはない」

「だったら、夜までホテルで過ごしていればよかったのに」

すぐ隣を歩くさとりがぼやくように呟いた。

ちなみに、初日の事故以来私が手を引いて歩くことにしている。

確実に能力の範囲内に居れるという利点もあるしね。

まあ、一番の理由は私達が『心友』だからなのだが。

「正確な時間が分からない以上、常に早めの行動をしておきたい」

ホテルを出た理由を、私は答えた。

さとりの考えも尤もなのだが、私としては万が一に備えて今日一日はいつでも自由に動ける状態になっておきたかったのだ。

万が一って言っても具体的な事態なんて想定していないが、ホテルから出る時には多少の手間が掛かる。その手間を済ませておきたかった。

無断でホテルから出てくとか、従業員さん達に迷惑が掛かると思うしね。

立つ鳥跡を濁さずってやつだ。

……朝、今更ながらに放置された青娥の家について思い出したことが理由でもあった。

本人は全然気にしてないけど、あれの扱って今後どうなるんだ？
そもそも青娥の戸籍とかは？

考え始めるとキリがない。ああ、役所の皆さんごめんなさい——。
そんなこんなで、半ば現実逃避するように外へ出たのだった。

とりあえず、夜までの時間を潰す為にブラブラ歩いていた。
腹が減ったら、その辺の店に寄ればいい。

本当に旅行でもしているような気楽さである。
カメラ持ったら記念に撮ってたかもしれないな。

青娥に頼めば買ってもらえるかもしれないけど、さすがに unnecessary
出費は……帰った時に霊夢とか紫に楽しんできたこと怒られそうだし。

そうこう過ごしている内に、何の巡り合わせなのか、私達は偶然出会ったのである。

東風谷早苗——。

セーラー服姿の彼女が、私達の前にふらりと現れたのだ。

実際に早苗と対面するのは初めてである私だったが、この時の驚き
や感動は意外なほど少なかった。

事前にさとりが彼女と会ったことや、その時話した内容を聞いていたからだろう。

早苗について、出会いを感動するよりも、彼女の身の振り方が気に掛かっていたのだ。

案の定、早苗から持ちかけられた相談は、今夜のことに關してだった。

——幻想郷へ、行くべきかなのかどうか。

悩みを打ち明けた早苗の深刻そうな表情を見ながら、私はどう答えるべきか迷っていた。

情けない話だが、私には月並みな言葉しか思いつかなかった。

私なりの考えはある。

東風谷早苗に向ける期待もある。

しかし、自分自身に目を向けた時、それがあまりにも自分勝手に傲慢なものに思えて仕方がないのだ。

この感覚は、これまでの人生で何度なく感じていた。

そんな時、私は常に思う。

——私の持つ『前世の知識』という奴は存在しない方がいい。自分を含めた誰の為にもならない知識だ。

もちろん、この知識を便利に感じることはあるし、命が助かるほどの感謝をした時もある。

だけど、この世界に関する知識——『東方Project』という世界の情報——に限っては、苦悩の原因になることの方が多い。

今回もそうだ。

東方のキャラに出会う時、私には常に原作知識という前提が付き纏っている。

どんなに自分に言い聞かせても、心の何処かで彼女達の人生や人格を知った気になっている。

自分が、相手の未来を見透かしたり、行動を運命付けて考えているような気がして、堪らない気分になるのだ。

原作では、早苗は神奈子様達と共に幻想郷へやって来る。

しかし、その道に至るまでの間に苦悩して、選択しているのだ。

目の前の彼女のように。

そんな彼女に私が一体何を言えるだろうか。

幻想郷へ行けと言えば、定められた運命をなぞるべきだと語っているように聞こえる。

幻想郷へ行くなと言えば、ただ前世の知識を否定したいだけの安っぽい反発心のように感じる。

自分の助言が、何を言っても無責任なものに感じてしまうのだ。
「考えすぎですよ」

囁くような声が聞こえた。

私の隣で、さとりが呟いたものだど気付いた。

早苗と青娥が話している中で、私にだけ聞こえるような小さな声を発したのだ。

「出会いが平等かどうかなんて価値を比べて何の意味があるんですか。『知らなくてもいいことを知ってから』相手と接しなければいけないのは、何も貴女に限った話じゃありません」

頬杖をついたまま、視線だけを動かして私を見上げる。

「貴女がこの世界とこの世界に住む者全てに、いつだって真剣に向き合おうとしていることは知っています」

さとりは苦笑を浮かべた。

「私に言える確かなことは、それだけです」

「さとり——」

やがて、青娥の話が終わった。

結局、私が早苗に言ってやれたことは、私自身の親としての気持ちくらいだった。

私が霊夢に向ける想いを、ただ言葉にして教えてあげたに過ぎない。

早苗は私達に礼を言っていたが、あまり役に立てた気がしない。

彼女が今夜、少しでも悔いのない選択をしてくれるよう祈るばかりだ。

早苗が立ち去った後、空を見上げると、もうそこは赤みが差し始めていた。

日が暮れ始めている。

もうじき、夜だ。

雲ひとつない空だが、もうすぐ嵐が来るはずだった。

「これからどうしましょうか？」

青娥が、聞いたことのある質問をしてきた。

どうするか。

もう、神社の方へ向かってもいいかもしれない。
いつ頃から雨が降り始めるのかは分からないが、嵐が来てから移動を始めたのではきつと濡れてしまうだろう。

人気が残っているなら、こっそり忍び込めばいいのだ。

そして、あとは時間まで待つていれればいい。

それに考えてみたら私達の中でさとりだけが神様達と面識がない。早めに行つて、紹介を済ませておいた方がいいかもしれないしな。さとりの意見を訊こう。

私は先程からずっと黙つたままのさとりを見た。

「さとり?」

椅子に座つたまま、動かない。

私は肩に手を掛けた。

さとりが、ゆつくりと顔を上げた。

「――先代」

どうしたんだ?

「これは」

どうして、そんなに弱々しい笑みを浮かべているんだ?

どうして、そんな諦めたような笑い方をするんだ?

「間に合わないかも、しれませんが」

――さとり!?

「さとり!」

椅子から崩れ落ちたさとりの身体を、私は地面にぶつかる前に何とか掴むことに成功した。

しかし、抱き上げたさとりの身体からはあらゆる力が抜けて、ぐつたりとしていた。

顔を見れば、苦しげな表情が浮かんでいる。

その表情すらも弱々しい。

痛みを感じているのではなく、何かを堪えているような様子だった。

「どうしたんだ!?!」

さとりの身に何が起こっているのか、全く分からなかった。

何故、急に不調を訴えたんだ。

何の前兆もなかったはずだ。

そのはずだ。

——違うのか？

「これは、ちよつといけませんね」

「青娥、何か分かるのか!？」

ささりの様子を覗き込む青娥に、私は咄嗟に問い掛けた。

困ったように笑いながら、青娥は答えた。

「さとり様は幻想郷から外の世界へ出た影響を受けて、消滅しかかっているのです」

「……なんだと?」

「すみません。実は口止めをされておりました」

私は、一瞬言葉の意味を理解出来なかった。

消滅?

それは、死ぬってことじゃないのか？

何故、黙っていたんだ。

いや、違う——なんで気付かなかったんだ、私は!!

「どうすればいい!？」

「一刻も早く、幻想郷へ戻るしかありません」

「……諏訪大社へ行くぞ」

「まだ時間ではありませんが」

「いいから、行くぞー!」

もう一言も喋らないさとりを背負うと、私は駆け出した。

青娥の言うとおり、まだ約束の時間にはなっていない。

神社に辿り着いたとしても、幻想郷へ帰る手段は神任せだ。

しかし、今の私にはもうこれくらいしかやれることが思いつかなかった。

他には何も思いつかない。

走るしかない。

この役立たず。

この無能。

畜生。

畜生。

糞。

糞。

糞。

空っぽの頭の中に、自分自身を罵る言葉だけは尽きることなく生まれていた。

夕焼けの空には、未だに雲ひとつ流れていなかった。



——幻想郷の地底深く。

古明地さがとりが地上へ出掛けた為、主が不在となって三日目の地霊殿である。

元々、さがとりが不在となることは見越していた為、業務上の問題は今のところ起こっていない。

しかし、今日。地霊殿の一角でちょっとした騒動が発生していた。

「さがとり様に何かあったんだよー!」

「まだ、そうと決まったわけじゃないだろ!?!」

言い争っているのは、火焰猫燐と霊鳥路空だった。

元より、地霊殿には人語を解する妖怪や獣はほとんどいない。人の姿になれる者に限っては、二人だけだった。

子供の癩癩のように喚く空を、燐がなだめているのである。

「だって、さがとり様は本当は昨日帰ってくるはずだったんだよ? それが今日になっても帰ってこないなんておかしいよ!」

空の反論は至極真つ当なものだった。

何よりも燐自身が、その点については一番不可解に感じている。

地上での用事は一泊二日の予定だと聞いていた。

早ければ昨日の朝、遅くとも夜には地霊殿に戻っていたはずである。

それが帰ってこない。

三日目の朝を待つて、昼を過ぎても音沙汰一つないのだ。
もうじき、夜になる。

もし、今日も帰ってこなかったら——。

不安を感じているのは、燐も同じだった。

「やっぱり、さとり様に何かあったんだ……わたし、地上へ行ってくるよ！」

しかし、空のこの考えには絶対に賛同出来なかった。

「行けるわけないだろ！」

「行けるよ、さとり様はくれない神社つて所に行つたのは知つてるもん！」

「具体的な場所を知らないだろつて話！ 大体、あんた地上の地理だつて……」

「じゃあ、知っている奴にきく！」

「地底から来た妖怪だつて分かつたら、揉めるに決まつてるだろ！」

「つていうか、どうやって地上への結界を抜けるつもりなのさ!？」

「さとり様から、これ借りるもん！」

空が自信満々に取り出した細長い紙を見て、燐は目の玉が飛び出るほど驚いた。

地上への通行許可証として機能する符である。

本来ならば、必要に応じて管理者から発行される物であり、手軽にはもちろん、金やコネなど不正な手段で手に入れられるような代物ではない。

「ちよ、おまつ……それ何処にあつた!？」

「さとり様の机の中」

「アホかああーっ!!」

許可証を奪い返そうと燐が掴みかかった。

空は小柄な体格を活かした予想外に素早い動きでこれを回避する。少し前まで、覚えたばかりの人型の姿で動くのがやっとなつた空の身のこなしに、燐は意表を突かれた。

「へへんだ！ わたしだつて、さとり様を守れるように強くなつてるんだもんね！」

「く……っ！ だからって、地上へ行くのは無茶だよ！」

「どうして、お燐はそんなに反対するのさ!？」

「どうしてって……」

——地上が危険だからだ。

そう、正直に答えることが出来なかった。

燐には、かつて地上へ出た時に遭遇した恐怖が、未だに印象強く残っている。

もしも、あの時の妖怪に空が出会ったら——。

考えだけで、燐は背筋が凍るような思いだった。

もし空が自分と同じような目に遭ったらと想像すると、あの時以上の恐怖を感じるのだ。

空の身を案じている。

その理由を話して、説得してやりたい。

しかし、それをすれば空がますます地上へ出る決意を固めることが、燐には分かっていた。

「お燐も一緒に来ればいいでしょ！ さとり様が心配じゃないの!？」

燐は今度こそ、完全に言葉に詰まった。

危険だと考えている地上へ、さとりは行ってしまったのだ。

しかも、燐はさとりが向かった博麗神社がどんな所なのかも知っている。

博麗の巫女——先代巫女がかって住んでいた場所で、八雲紫にも関わりのある場所だ。

危険なんてもんじゃない。

厄介事を中心。何が起るか予測不能な混沌の渦中だ。

自分なら、絶対に関わりたくない恐ろしい場所だ。

実のところ、さとりが出掛ける前からあの神社へ行くことには反対していた。

いや、そもそも先代巫女との縁そのものを切って欲しかった。

しかし、敬愛する主は行ってしまった。

さとりを心配する気持ちは、既にその時から生まれている。

空の言うとおりだ。

本当は、さとりの為に地上へ行きたい。
しかし――。

「さ、さとり様には……さとり様のお考えがあるんだよ……」
空から目を逸らして、かろうじて絞り出すような声で言った。

三日前、さとりの部屋で見つけたあの絵が。

ずっと前に、先代巫女と密会していた時に見た主人の姿が。

忘れられない記憶が、不安と共に脳裏に蘇っていた。

それが燐に行動を躊躇わせるのだ。

「……もういいよ、わたし一人で行く！ 地上には、お燐なんかよりも頼りになる友達だっているんだもんねっ！」

燐が我に返った時にはもう遅かった。

空は部屋から、文字通り飛び出していた。

「馬鹿、お空！」

止める暇はなかった。

翼を広げて、窓から直接地霊殿の外へ飛び出して行ってしまった。

手には、しっかりと通行許可用の符を握っている。

それを見て、燐は舌打ちした。

地獄鳥の妖怪である空に、飛行ではさすがに追いつけない。

それでも追うべきだと思っただが、先に地上へ出られる可能性の方が高かった。

当然、許可証を持っていない燐には結界を通り抜ける手段がないのだ。

結界を出る前に追いつけなかった場合、手詰まりになってしまう。

燐の逡巡は一瞬だった。

知能ならば、空以上に優れた妖怪である。すぐさま判断して、駆け出した。

「お姉さん！」

地底の妖怪では、結界を抜けることは出来ない。

しかし、この地霊殿には現在一人だけ、地上へ出ることの出来る例外がいる。

「魂魄のお姉さん！」

「——お隣さん。どうかしましたか？」
夕食の準備をしていた魂魄妖夢は、駆け込んできた隣を不思議そうに見つめた。



かつて、博麗神社があつた場所は更地となつていた。
更地と言っても荒れているわけではない。

そこに新しい神社を建てる為に、倒壊した建物の残骸を片付けて整地した場所となつているのだ。

残骸を解体した結果出た一部の木材や瓦など、再利用出来そうな材料は纏めて置いてある。

やろうと思えば、すぐにそこへ神社の再築が出来そうな状態になつていた。

たった三日の間に、ここまでのことをやってくれたのは萃香である。

正確には、異変の犯人を捜しに出掛けている萃香の分身達だった。

頼めば、同じように彼女達が神社を建て直す作業を始めてくれるだろう。

鬼の優れた建築技術ならば、新しく神社が建つまでそう時間は掛からない。

しかし、霊夢はまだそれを頼まなかった。

「——行くか？ 霊夢」

地震が神社を襲つてから三日目。

母が目の前から消えてから三日目。

そして、博麗大結界に綻びが生じて三日目である。

その結界の綻びを修復した霊夢は今、かつて博麗神社のあつた場所に再び立っていた。

「ええ、行ってくるわ。マミゾウ」

霊夢は振り返って、自分を見送ろうとするマミゾウの方を向いた。
傍らには紫と萃香も立っている。

霊夢は二人を順番に見つめた。

「紫、母さんの搜索は頼んだわよ」

「ええ、貴女は異変の解決に集中しなさい」

紫は微笑みながら言った。

「萃香、犯人が『天界』にいるっていうのは間違いないのね？」

「ああ、移動もしてないよ。もう一人の私が、すぐ傍で見張っているからね」

「動く気配はなしってわけか」

「待ってるんだよ、自分を退治しに来る奴を」

「それは、異変を起こした動機と関係あるわけ？」

「わたしからは何とも言えない。霊夢自身が当人から確かめた方がいいな」

「なるほど。怒りは溜めとけ、ってことね」

「忠告するまでもないと思うけど、『正義は我にあり』なんて油断すんなよ。今回の敵は相当曲者だからね」

「分かってるわよ」

「それと、霊夢より先に紅魔館のメイドと白黒の魔法使いが着くみたいだ」

「魔理沙はなんとなく分かるけど、咲夜まで？ 何で？」

「わたしが知るわけないだろ」

「それもそうか。まあ、あつちに着いたら本人に訊くわ」

萃香の情報を確認して、霊夢は頷いた。

博麗神社を襲った地震——ひいては、現在幻想郷の各所で起こっている異常気象の原因が、萃香の報告によって天界に住む天人の仕業だと分かったのは、つい先程のことだった。

萃香の力ならば、もっと早くに情報を得ていたはずだが、それをすぐに伝えなかったのは結界の修復に集中する霊夢の気を逸らさない為だったのだろう。

怒りに任せて職務を放棄し、敵に殴り込みをかける——などといった愚行を霊夢がするとは思えなかったが、彼女の動揺する姿を見た萃香としては一抹の不安を覚えていた。

しかし、実際に霊夢と顔を合わせて、予想以上に落ち着いていることに驚いていた。

紫が何かしらのフォローをしたのかと思ったが、それはないなとすぐに思い直した。

友人でもある紫との付き合いは長い。どんな性格なのかは十分に分かってている。

となると、要因となるのは、いつの間にか霊夢の傍に現れていた、見慣れないこの妖怪である。

萃香は、マミゾウをこつそりと見上げた。

『天界』という場所について、分かっておるのか？』

改めて向かい合った霊夢に、マミゾウが訊ねた。

外の世界については博識な彼女だったが、幻想郷のことについてはさすがに専門外である。

「話には聞いたことがあるわ。雲の上にある、天人の住む場所らしいわね。妖怪の山から空に昇っていけば辿り着けるって」

「ふむ、行き方が分かっておるのなら問題ないじゃろう。しかし、天人というのが儂の知るものと同じならば、かなり厄介な相手じゃな。単純に仙人よりも格上の存在じゃぞ」

「それも知ってる」

「準備は万端にな」

「大丈夫よ」

「場合によっては一時撤退も出来るように、冷静に」

「分かってる……っていうか、恥ずかしいからやめてよ」

手櫛で髪を整えた後、襟元を直そうとするマミゾウの手を霊夢は押しつけた。

「いやあ、すまんすまん。どうやら、おぬしよりも儂の方が緊張しとるみたいじゃの」

恥ずかしそうに笑うマミゾウに釣られて、霊夢の口元にも小さな笑みが生かんだ。

ちよつとした気分転換をした霊夢は、空を見上げた。

日が暮れて、夜が訪れつつある。

雲の上にある天界も例外ではないだろう。
闇夜の中の戦いになる。

明日になるのを待って、日中に行動した方が有利なのかもしれないが――。

「じゃあ、行ってくるわ」

霊夢はふわりと宙に浮かび上がった。

「霊夢」

マミゾウに呼ばれて、振り返る。

「何が起こつても構わん。必ず戻って来て、儂に話してくれ」

「分かった」

力強く頷き、霊夢は妖怪の山に向かって飛び立った。

小さくなつていく霊夢の姿を、マミゾウと紫達は並んで見送つていた。

やがて、完全に姿が見えなくなると、紫は視線だけを隣へ動かした。
マミゾウは、まだ空を見上げていた。

「――三日間、共に過ごしましたけれど、貴女という妖怪がよく分かりませんわ」

独り言のように紫は呟いた。

「特に、霊夢にそこまで親身になる理由が分かりません」

「それはおぬしが人間との付き合い方を知らんからじゃよ」

空を見上げまま、マミゾウは答えた。

「妖怪としての知識や経験ならば、きつと儂よりもずっと上なのじゃろうな。しかし、人間と関わった長さはきつと儂の方が上じゃよ。おぬしよりずっと近くで人と接してきた。何故なら狸が化かす相手というのは、大抵人間じゃからな」

「確かに、古今東西人間を化かした妖怪の逸話は多く存在します。そして、その結果退治された結末も」

「それも確かに。人間に殺された仲間の話は何度も聞くと、それで人間を見切る奴も多い。しかし、逆の奴もおるんじゃよ」

「それが、貴女であるか?」

マミゾウはニツカリと愛嬌のある笑顔を浮かべながら、紫を見返し

た。

「儂もな、そりゃあ化かした人間に痛い目に遭わされたもんよ。聞くも涙語るも涙、もしくは酒の肴の笑い話になるような経験じゃ」

言葉とは裏腹に、誇るように胸を張っていた。

「ああ、そうじゃ。笑って話せるんじゃよ、儂が人間について語る時はな。

人と関わって恥と失敗と重ねたが、その人と共に生きて成長した。男との惚れた腫れたも経験したし、何の間違いか人の子を育てたこともあつたなあ」

遠い過去を眺めるように、マミゾウは再び空を見上げた。

その横顔は、八雲紫をして老練な気配を感じさせた。

単純な年月の積み重ねならば、紫の方が上である。

人の寿命などせいぜい数十年だ。そんな人間との付き合いなど、刹那の時間に等しい。

しかし、その刹那の間にどれほど多くの意味が込められているのか。昔の自分ならば、一笑に付したかもしれない。

だが、今なら分かる。

マミゾウの言う『人間との付き合い方』を本当の意味で知り始めている今ならば。

「霊夢は良い子じゃなあ。つい世話を焼きたくなる。なあ、紫殿よ」

「……ええ、そうね」

紫はそつと目を伏せた。

夕焼けに照らされながら、心地良い沈黙があたりに流れていた。

やがて、辺りが薄暗くなり始めると、紫とマミゾウは屋敷へ戻る為にスキマを潜った。

萃香の分身は役割を終えて、いつの間にか姿を消していた。

「——おい、貴様」

屋敷に戻った二人を出迎えたのは、青筋を立てた藍だった。

紫を丁寧に迎えた後、一変してマミゾウを敵意に満ちた瞳で睨みつける。

この三日間で、別段珍しくもなくなった光景だった。

「ああ？ なんじゃ、駄狐？」

「またやってくれたな」

「何の話じゃ？」

「これだ」

藍がマミゾウの眼前に突きつけたのは、小さな瓶だった。

中には緑色の粉末が入っている。

「調味料の棚に混ざっていた。何の真似だこれは？」

「何って、儂のお手製のふりかけじゃよ」

「炒めた茶殻と塩を混ぜただけだろうが！ ふりかけなんぞ新しく買ってくればいい、貧乏臭い真似をするな！」

「貧乏臭いとはなんじゃ、エコと言えエコと！ 大体、おぬしは無駄が多すぎるんじゃない！」

「貴様の嗜好なんぞ知らんがな、私の管理下にある屋敷で余計な真似はするな！ 恐れ多くも紫様のお住まいだぞ、お前の行動は屋敷の品格を下げる！ いや、お前の存在そのものが下げる!!」

「はっ、言われんでもおぬしの管理なんぞ受けたくないわい！ 儂がそれを作ったのだって霊夢に食わせてやる為じゃ、誰がおぬしに食わすかい！」

「誰がこんなもの食うか！ それと貴様、台所で勝手に漬物なんぞ作り出しおって——」

言い争う二人を、傍から眺めながら紫は微笑んでいた。

「三日間、退屈はしなかったわね」



天人の少女は、世界を見下ろしていた。

どんな山よりも高く、雲よりも更に高みにある場所。

そこが少女の住む地だった。

様々なものを見下ろせる天空の大地である。

少女にとって、目に映る生きとし生けるもの全ては『地を這うもの』

でしかなかった。

地を揺るがすものはあつても、天を揺るがすものはない。

まさに磐石の世界。

だからこそ——退屈である。

「退屈である」

少女は想いを吐き出した。

やってみて、それは存外虚しい行為なのだと理解した。

「退屈」

重い息を吐き出しながらも、しかし少女はその場を動かなかった。

注連縄が巻かれた尖った岩が地面に突き刺さり、その岩の上に腰を降ろしている。

開いた両足の間に剣を突き立て、その柄に両手を重ねるように置いた姿勢だった。

剣の刀身は、金属の反射光とは違う不思議な微光を自ら放っている。

少女は、じつと動かなかった。

じつと、何かを待っているようであった。

待ち人——いや、獲物を待ち伏せる獣のような剣呑さを瞳の奥に隠し、ただひたすら待っているようだった。

「——は」

やがて、少女の瞳が近づいてくる影を捉えた。

日が暮れ、雲の上の空には月と星がハッキリと瞬いている。

不思議なことに、それらの光だけでは説明がつかないほど周囲は暗闇が晴れていた。

闇夜には違いないが、少女の姿も、足元の地面も、草も、木も、ハッキリと見えるのだ。

まるで空に浮かぶこの幻想の大地そのものが、自らの存在を主張しているようであった。

「は」

少女の口からは、断続的に笑い声が洩れていた。

「は」

事実、少女は喜んでいた。

待ちに待った瞬間が近づいているのだ。

「は」

人影は、その姿を確認出来るほど近づいていた。

向こうも、こちらを認識したらしい。真っ直ぐに向かってくる。

二人。

メイド服を着た人間と、魔法使いらしい格好をした人間だ。

いずれも、本命として待っていた相手とは違うが、少女は一向に構わなかった。

「さあ——」

少女は、満を持して立ち上がった。

「待ちに待った、刺激的な時間の始まりよ」

其の四十七「神祭」

あの後——早苗は家に帰ると、いつものように先にお風呂に入つて、夕食を家族で囲んで、部屋に戻った。

毎日、当たり前のように過ごしていた日常。うんざりするほど繰り返していた習慣。しかし、その抗い難さに驚いていた。

今日一日であんなにも衝撃的な出会いや経験、苦悩の果てに人生の岐路に立っているという確固たる自覚も抱いたのに、自分は明日の授業に備えて予習なんかしてしまっている。今日、早退した分の遅れを取り戻そうとしている。

馬鹿げていると思った。

ペンを持つている手に、力が籠もった。

時計を見ると、既に深夜近い。

窓に視線を移せば、いつの間にか雨が降り出している。

これがすぐに嵐に変わるのだと、早苗には分かっていた。

今日という『選択の日』は、もう二度と来ない。

この嵐が過ぎれば、次の日の朝は天気予報どおりの快晴が広がり、昨日までと同じ日常が始まっていく。

——ずっと変化を望んでいた日常。

——だけど、平穏で安定した日々。

踏み出す足が、しっかりと地面を踏み締めることが出来る安心感を、早苗は今更になって理解していた。

一步進むごとに足元が崩れ去るかもしれない、なんて不安はない。自分の進むべき道を、十分に舗装して標識まで付けてくれるこの世界の優しさをこれまで知らなかった。

今夜、選択することは、そんな優しい世界から永遠に離れるということなのだ。

見知らぬ世界で、自分だけの価値観に従いながら、常に自分で選びながら歩んでいかななくてはならない。

安全は保証されていない。

将来も保証されていない。

正しさや、満足さえ――。

――『空を飛ぶ』とは、そういうこと。

上も下も分からない無限に自由な空で、自分が行くべき道を自分で示し、辿り着いた場所に価値を見出すことさえ自分がやらなくてはならないのだ。

途方もない話だった。

早苗は、見慣れた自分の部屋を見回した。

瞼を閉じ、耳を澄ませて自宅の音を聞こうとする。

静寂だけが聞こえた。

両親は、もう眠っているはずだった。

閉じきった窓の外、徐々に強くなる雨音と風音だけが聞こえる。

目を開けると、机のすぐ傍にある自分のベッドが視界に入った。

勉強を終わらせて、ベッドに入って布団を被れば、それで全てが解決する。

次に目を覚ますのは、明日の朝だ。

いつものように両親に挨拶をして、用意された朝食を食べて、定められた一般教育を受ける為に行くべき場所へ行く。

うんざりするけれど、迷いのない安定した日常が始まる。

この世界には、生きる為に必要なものが全て揃っている。

安全も。

平和も。

家族も。

学校も。

将来も。

早苗は、もう一度窓の方を見た。

雨はあつという間に嵐へと変わりつつあった。

嵐はもう、轟々と唸るような勢いにまで強まっていた。

この嵐の中へ、窓を開けて飛び出していくなんて、まったく常識外れな話だ。下手をしたら、途中で事故に遭ってしまうかもしれない。危険だ。

しばらく外を眺めていた早苗は、やがて手元に視線を戻した。

そして、ペンを握り直した。



「——退屈なのよね、この世界は。揺らぐことのない不動の大地。だから、変化と刺激が欲しいのよ」

仰向けになったまま、天人の少女は呟いた。

乱れた息を整えながら、魔理沙はその独白を聞いていた。

一人は倒れ、一人は立っている。

敗者と勝者の姿である。

しかし、勝者であるはずの魔理沙の顔には達成感や喜びなど欠片も見えず、険しい眼つきで相手を睨んでいた。

背後で二人の決闘を見守っていた咲夜もまた、魔理沙の勝利を確認しながらも油断なく敵を警戒していた。

「別に、私だって幻想郷に大地震を起こしたいわけじゃないの。天人の生活は退屈でねえ。私だって地上のみんなみたいに遊びたいのよ。だから、こうやって地震の予兆を見せていけば、誰かが私を止めに来ると思うってね。そこでやってきたのが貴女達——」

少女が起き上がった。

手足を使わずに、ふわりと浮き上がって着地したのだ。

まるで自分が敗北して倒れていた事実など存在しないかのような優雅で余裕のある仕草だった。

「最初は、どうにもこうにも頼りない人間だと思ったけれど、なかなかどうして……満足させてくれたじゃない？」

そう言って、笑顔を浮かべた。

喜色満面といった風で、少女特有のあどけなさまで含んだ屈託のない笑い方だった。

しかし、その言動を顧みれば、好感など全く抱けない笑顔だった。魔理沙の眼つきはより一層険しくなり、歯を軋むほど噛み締めた。

「それだけのことで——」

その声は怒りで震えていた。

「たったそれだけのことで、お前は霊夢の家をぶっ壊しやがったのか!？」

——魔理沙が博麗神社の倒壊を知ったのは、つい先日のことだった。

天狗の新聞で、全てを知った。

三日前に神社が謎の倒壊を起こしたこと。原因は不明。これと関連して、住人である博麗霊夢も所在不明。更に、これは関係があるのか不明だが、人里でも先代巫女が所在不明となっているという。

短期間で驚くほど掻き集められたと分かる新聞に記載された情報と、自分だけが知る情報を統合して、魔理沙は様々な事実に行き着いていた。

あの日、博麗神社には霊夢の母親が来る予定だった。

そして当日、魔理沙は実際に神社を訪れている、

あの時——霊夢の元を訪れた時、既に事は起こっていたのだ。

原因は分からないが、神社が倒壊し、おそらく現場にいたであろう霊夢の前で母親が行方不明になった。

それを霊夢は自分に隠していたのだ。

事実を知った魔理沙は、慌てて博麗神社へ向かったが、そこに残っていたのは自分が見たのが幻だったのかと思えるほど無残に変わり果てた神社の跡だった。

霊夢には会えなかった。

事情を聞くことが出来なかった。

しかし、一つだけ確信した。

——誰かが、何かをやった。

——そして、それが霊夢の、自分の親友の、大切な場所を壊したのだ。

魔理沙の中で、かつてない怒りが燃え上がった。

自分に何も言わなかった霊夢の水臭さへの怒りはもちろんあったが、それを遥かに凌駕するほどのドス黒い感情の炎が、ぶつけるべき先を探して荒れ狂っていた。

その熱を力にして、魔理沙は幻想郷中を飛び回った。

幻想郷で起こっている異常気象が何か関係があるとあたりをつけて、その軌跡を辿るように様々な場所を訪れて、休みなく飛び続けた結果ついにこの天界へと至ったのだ。

この経過の途中で、咲夜が同行してきた理由は分からなかったが、すぐに気にならなくなった。

異変の元凶である天人を前にした時、自分のやるべきことが決定した。

——こいつをぶちのめす！

戦いを挑む魔理沙を、その少女は喜びすら浮かべて迎え撃った。

敵は強かった。

一度目は、手も足も出ずに負けた。

敗北した魔理沙の代わりに、咲夜が勝負を挑み、彼女さえも負けてしまったのだ。

しかし、天人の少女は敗北した魔理沙達に追撃をすることも、何かを要求することもなかった。

ただ、失望したような冷めた目で見下ろしていた。

魔理沙はすぐに立ち上がった。

敗北によって意気が挫かれることもなく、悔しさと怒りに突き動かされるまま再び戦いを挑んだ。

そして——。

「ふざけるなよ！ お前には、霊夢に謝ってもらうぞ!!」

魔理沙は勝った。

少なくとも、決闘のルール上で勝利を収めたのは明らかに魔理沙だった。

怒りを力にしながら、敗北から学び取る冷静さと一步も退かない意志の強さが、魔理沙に勝利をもたらした。

「貴女には、もう満足したわ。さあ、次は後ろに控えている貴女よ。貴女はその白黒のように、劇的な逆転を魅せてくれるかしら？ 私を、どんな形で刺激してくれるの？」

天人の少女は、魔理沙を無視して咲夜にそう言った。

自分に勝った者を認める仕草や、敗北したことへの悔しさが滲む表

情など、そういった勝負が決した後に見せる反応を一切出していない。

感情を隠しているわけではなかった。

ましてや、堪えているわけでもない。

本当に、何も感じていないのだった。

彼女が見せているものは『自分が劇的に倒されたことへの満足感』

——ただ、それだけしかなかった。

「バカヤロオオオーッ!!!」

腹の底から絞り出すような怒号と共に、魔理沙は渾身のマスタースパークを放っていた。

極大の魔力光が天人の少女を飲み込んだ。

先程の勝負で決着をつけたのも、この技だった。

破壊力という点においては、決闘のルールに配慮していた先程のものより遥かに上回っている。

もはや、魔理沙に勝敗といった考えはなかった。

ただ、目の前の存在を叩きのめしたいという怒りしかなかった。

八卦炉から放出されていた魔力が尽き、光が治まっていく。

光が消えた後には、天人の少女が立っていた。

最初に立っていた場所から一歩も動かず、動かされず、姿勢さえ僅かにも変えずに平然と佇んでいた。

「——ねえ」

少女が魔理沙の方を見た。

興味を失ったものをもう一度見なければならなくなったような、酷く億劫そうな仕草だった。

「貴女、ひよっとして私との勝負に勝ったから、自分が私より強いって勘違いしちやっただの？」

「なんだと!?!」

「本当に強い者は、勝つことも負けることも自由に選べるのよ」

天人の少女は笑った。

完全な嘲笑だった。

「しかし、弱い者は負け方しか選べない」

渾身の一撃がダメージはおろか、服を汚すことすら出来なかった事実に、魔理沙は齒軋りした。

先程の勝負が、相手にとって単なる遊びでしかなかったことは薄っすらと理解していた。

悔しくはある。

屈辱もある。

歴然とした力の差が目の前に立ち塞がっている。

「だから、なんだ……っ！」

魔法薬の入った瓶を数本取り出す。

「お前を許せないことに、変わりがあるか!!」

魔法といっても、効果はほとんど爆薬みたいなものだ。当然、殺傷力も高い。

弾幕ごっこやその亜種である決闘ルールの中では、普段は決して使わない護身用のそれを使う決意と覚悟を、魔理沙は固めていた。

かつて、妖夢との勝負の最中で起こった感情の変化。

濁った敵意を純粹な勝負への意欲に変えることが出来た、あの時とは全く逆の方向へ魔理沙は突き進もうとしていた。

勝ち負けなど、もはやどうでもいい。

ただ無性に、目の前の敵をぶちのめしたい。

「く——！」

『くたばれ』とでも言うつもり？」

振り下ろした魔理沙の手は空振りしていた。

その手に握っていたはずの瓶が、いつの間にかなくなっている。

慌てて背後を振り返れば、咲夜が魔法薬の瓶を持って佇んでいた。

いつの間、と口にしようにとしてそれが間抜けな問い掛けだと魔理沙は気付いた。時間を止めたに決まっているのだ。

「貴女には似合わないわよ、魔理沙」

「返せよ！」

「大人しくこれを仕舞って、下がっているのなら返すわ」

「わたしが何しようが咲夜には関係ないだろ!？」

「あるわよ」

咲夜は鼻が触れ合うほど顔を近づけて、魔理沙の瞳を見つめた。
「大いにあるわ」

「……勝ち目がないことくらい分かってる。だけどー！」

「分かってないわよ。貴女には、こんな戦い方はして欲しくない」

「危ないから遊びだけで済ませとけつてののか？ わたしだってなあ、はらわたが煮えくり返ることがあるんだよ！」

「だから、私がついてきたのよ。私が、代わりにやる為に——」

瓶を押し付けると、そのまま咲夜は魔理沙よりも前に歩み出た。

天人の少女と対峙する形になる。

「得意な奴がやった方がいいでしょう。こういうことは」

咲夜の両手にはいつの間にかナイフが握られていた。

鋭利な刃が、鈍い光を放っている。

自身の弾幕にも咲夜はナイフを使う。最初の勝負の時にも使っていた。

しかし、これはその勝負とは全く意味が違っている——と。魔理沙は直感した。

咲夜は冷徹な殺意を持って、戦おうとしているのだ。

「へえ、貴女は『そういう戦い』をするつもりなのね」

天人の少女は咲夜の変化を察した上で、余裕を保ったまま笑っていた。

「それもまた一興。せいぜい、私を楽しませて頂戴」

「先程の勝負で、貴女の身体にはナイフも齒が立たないことは分かっていたわ。鬼みたいな頑強さね」

「時間を操るだなんて人間には不相応な力よね。その非力さでは、天人である私の時を止めることは出来ても、生命を止めることは決して出来ないのだから」

「でも、まだ試していない箇所は多いわ。目や耳、口の中にも刺さらないのかしら？」

「うーん、それは確かに試したことはないわね。興味深いわ」

「なら、試してみましよう。得意なのよ、私そういうの」

軽口の応酬を楽しむ天人に対して、咲夜の表情はもはや一ミリも動

かなくなっていた。

それが、魔理沙には咲夜の本気なのだと感じ取ることが出来た。咲夜は敵を殺すつもりで戦う気なのだ。

——やめろ。

相手への怒りや憎しみは全く衰えていない。

許せない、何処までもふざけた奴だと思う。

どんなに言葉を飾って誤魔化しても、先程までの自分が相手を叩きのめして這い蹲らせてやりたいと考えていたのは間違いないのだ。

しかし、魔理沙は咄嗟に咲夜を止めようとしていた。

口を開いて、声を出し掛け——。

「やめなさい、咲夜。少なくとも、あたしの前ではね」

頭上から聞こえた耳慣れた声に、魔理沙は思わず息を呑んで視線を走らせた。

雲の上に広がる天界。そこに無数に浮遊する大地から目的の場所を選び出し、いつの間にか辿り着いていた。

博麗の巫女が、そこにいた。

「霊夢——」

すぐ傍に降り立った霊夢を、魔理沙は見つめた。

霊夢もまた魔理沙を一瞥した。

言いたいことは山ほどあった。

——心配したんだぜ。

——なんで、あの時わたしに隠したんだ。

——おふくろさんは大丈夫なのか。

——お前は、大丈夫なのか。

あれだけ敵に対して抱いていた怒りや執着は、霊夢を目にした瞬間何もかもどうでもいいことのように消えていた。

今、気がかりなのは霊夢のことだけだった。

しかし、魔理沙は口を噤んだ。

魔理沙から視線を外した霊夢が次に見据えたものが、今回の異変の犯人だったからだ。

最も正当な怒りが、向けられるべき相手に向けられたのだ。

「魔理沙、ごめん。後で色々話すわ」

「……ああ、そうしてくれ。後は、お前に何もかも任せるぜ」

そう答えて、魔理沙は大きく息を吐いた。

肩から荷が降りるように、強張っていた全身から力が抜けていった。

もう、自分がすべきことはない。

霊夢の代わりに、敵を倒す必要も、怒る必要もないのだ。

ただ、これから始まる戦いを最後まで見守るだけなのだとは決めた。

霊夢が咲夜の所へ歩み寄る。

「代わるわ」

咲夜は肩を竦めて、その場所を霊夢に譲った。

霊夢と天人。

二人が対峙する。

互いが互いを敵同士であると認識しながら、二人は一切表情を変えずに相手の顔を見据えていた。

「あんたが地震を起こしたり、天候をおかしくした犯人ね？」

「異変解決の専門家ね。待ってたわ」

天人の少女は笑いながら肯定した。

相手が魔理沙であった時も、咲夜であった時も、そして今も。彼女は一貫して笑顔である。

それが自分自身に抱く絶対の自信によって裏付けされた余裕であることは間違いなかった。

「何が待ってた、よ。まるで解決して欲しいかのようじゃない」

「異変解決ごっこは、何も妖怪相手じゃなくても良いでしょ？」

怒りが再燃して、魔理沙は身を乗り出した。それを咲夜が無言で押さえ込む。

神社を破壊された当人である霊夢を前にして、あまつさえ自らの所業を『異変解決ごっこ』などと称して笑っている。

明確な目的も、信念もない。

強者の行動であることを全ての根拠にして、遊んでいるのだ。

第三者でありながら怒りをあらわにする魔理沙に反して、霊夢自身は一切の感情を表に出さないまま憎むべき敵を見据えていた。

「私は天界に住む比那名居の人。名前は天子よ」

比那名居天子は謳うように名乗った。

「毎日、歌、歌、酒、踊り、歌の繰り返し。天界の生活はホント、のんびりしていてねえ。退屈していた時に、貴女が地上で色々な妖怪相手に遊んでいるのを見たわ」

「遊んでいたワケじゃないけどね」

「特に、鬼が異変を起こした時が一番面白かったわ！」

嬉々として発せられたその言葉に、霊夢の眉がほんの少しだけ動いた。

「あの日は一晩中退屈しなかったわ。幻想郷の何処を見ても楽しかった。最後の決闘の盛り上がりなんて最高よ！ あの後宴会には、私も思わず参加したくなっちゃったわね」

「――」

「それを見て思ったの。私も異変解決ごっこがしたいって。だから起こしちゃった、異変」

「……そう」

「ねえ、そう言えば」

「何？」

「貴女以外にもいるんでしょ？ 異変を解決する巫女。貴女が負けたら、そいつも呼んできてくれない？」

そう言つて、天子はにっこりと笑った。

一見すると、嫌味のない明け透けな笑顔だった。

しかし、彼女のこれまでの言動を顧みれば、それが自らの寛容さを自負した態度なのだと理解出来た。

自分は、周りにいる誰よりも高みにいて、見下ろしている。

足元で何を言われても自分は許すし、だからこそ自らの行動も許される。

——そういった、揺るぎ無い自信と確信に裏付けされた態度だった。

「そうね。あたしに、勝てたらね」

天子の素の言葉を、挑発とも受け取らずに霊夢は応じていた。

淡々と、これから始まる決闘に備えて陰陽玉を周囲に浮遊させ、お払い棒を構える。

表情にも行動にも、怒りや苛立ちは表れていなかった。

少なくとも魔理沙には、霊夢が不思議なほどいつも通りの自然体に見えた。

「相手が天人だろうが変人だろうが、あたしの仕事は一つ。異変を起こす奴を退治することのみよ」

「うふふ。そうそう、その意気込みが欲しかったのよ！」

天子もまた構えた。

魔理沙の渾身のマスタースパークを受けた時も、咲夜と戦う寸前にまで行った時も、大地に突き刺したまま抜かなかった剣——緋想の剣——を構える。

霊夢の実力を見誤るようなうぬぼれは持っていない。

しかし、同時に自らが格上である確信もまた抱いていた。

「だけど、意気込みに態度が伴っていないのはいただけじゃないわね。私を本当に退治するつもりなら、もつと必死になりなさい。感情を押し殺すことは、無我の境地とは言わないわ」

「別に、そんな境地を気取っているつもりはないわよ」

「貴女は真っ直ぐすぎるね。曲全、つまり曲がっているからこそ人生を全うできると心得よ——」

そう告げる天子の姿は、天界から地上に降りて忠言を下す天人に相応しい威厳を放っていた。

魔理沙と咲夜には、その言葉がこれまで自分のしてきたことを棚に上げた傲慢極まりない言い様だとしか感じられなかった。

対して霊夢は、

「——安心しなさい。あんたのおかげで、あたしは曲がったわ」

淡々と言った。

「はらわたが捻じ切れるほどにね」

まずは決闘のルールに則って、二人は戦いを始めた。



さどりの身体は冷たい床の上に横たえられていた。

下に敷く布団のような物はなかった。代わりに、先代の脱いだジャケットを敷いている。

眠っているのか起きているのか分からない、浅い呼吸を短い間隔で繰り返すさどりを、先代と青娥、そして諏訪子の三人が囲んでいた。

「神社なのに、まるで駆け込み寺だなこりゃ」

四人がいるのは諏訪大社の内部だった。

薄暗い室内を、蝋燭の火だけがぼんやりと照らしている。

もちろん、無断で火を点けた物である。重要文化財に指定もされている建物の中に勝手に入り込み、火種まで持ち込んだと分かれば、すぐにでも警察がやって来るだろう。

しかし、神社の内部の様子が外に伝わる心配はなかった。

その外では、台風が直撃でもしたかのような風雨が荒れ狂っているからである。

出歩くことに身の危険を覚えるほど激しい暴風雨だ。

雨が激しく屋根と雨戸を叩き、風が木造の建物全体を軋ませている。

屋内にいても恐怖を覚えるほどの勢いだったが、この場の者達にとってこの嵐はむしろ待ち望んだものであった。

「しかも、運び込まれたのが人じゃなくて妖怪なんだもんなあ。まあ、仲間が妖怪って聞いた時点で怪しいとは思ってたよ。可哀想に、すっかり弱っちゃってまあ——」

「助かりますか、諏訪子様？」

——『諏訪子様』と来たかい。

真剣な表情で訊ねてくる先代を一瞥して、諏訪子は内心で居心地の悪さを感じていた。

初めて対面した時には気付かなかったが、こうして改めて向かい合ってみると、この人間の異質な部分も嫌でも感じ取れる。

諏訪子を見る目が一片の曇りもない敬意に満ち、偉大な存在への畏怖が矛盾なく心の中で両立している。

それは即ち、神への信仰であった。

——神奈子の言いたかったことが、今更になってよく分かるなあ。

諏訪子は、先代の真つ直ぐな視線を見返すことが出来なかった。

気まずさと後ろめたさを混ぜたような気分になる。

卑屈な言い方をすれば、彼女の視線は自分を酷く惨めな気分にするのだ。

神としての力と威光を失って久しく、またそれを十分に自覚する諏訪子にとって、先代の向ける純粋な信仰は、かつての神代の栄華を思い出させると同時に落ちぶれた神の姿を嫌でも想起させるのだった。

自分でもそうなのだ、神奈子は尚更だろう。

「ああ、うむ。まあ、そうだね」

諏訪子は咳払いをして、なんとか神様らしい偉そうな口調で答えようとした。

「もうじき、幻想郷へ転移する準備が整う。安心するとよい」

実際に出たのは、自分でも些かどうかと思える程滑稽な喋り方だった。

「ありがとうございます」

「うむ」

深く頭を下げる先代に対して、半ばヤケになりながら大仰に頷いてみせる。

こちらの心情を察しているのか、傍らでニヤニヤと笑う青娥がむかついた。

「嵐も大分激しくなってきたしね。ここにいても、町の住人の戸惑いや恐れが伝わるよ。転移の為の術式とかは全部事前に済ませてるんだ。あとは『機』を見るだけだね」

諏訪子の説明を、理解しているのかかしていないのか分からない仏頂面のまま先代は聞いていた。

早苗以外の人間と話をするのは、実に久しぶりである。しかも、捉え方はどうあれ、相手が純粋な信仰を向ける人間であることに違いは

ない。

少なくとも、神奈子ほどの拒否感は抱かなかった。

自分の言葉に真剣に耳を傾ける先代を見て、諏訪子は少しだけいい気になっていた。

いつの間にか気配はすれども姿が見えなくなっている神奈子や、その『機』が熟するまでいまだ少しの時間が要することもあり、諏訪子は饒舌に語り続けた。

「あと必要な手順は、術式を起動する為のエネルギーを流し込んで、スイッチを入れるだけなんだ。ほら、映画であつたよね。雷を使ってタイムマシンを動かすってヤツ。あ、幻想郷の住人だから知らないか」

「知ってます」

「え、マジで？」

「さすが先代様ですわ」

「もしかして、あんたも？」

「パート3まで全部観ましたわ」

「面白いよね！ 続編がある映画つて大抵二作目からこけるんだけどさあ——」

嬉々として語ろうとした諏訪子は我に返った。

「あ、いや。そんなことはどうでもよろしい。つまり、そういうことだから」

「どういうことでしょうか？」

「うっせー、ツツコむな！ とにかく、その術式がこの神社を基点にして発動するんだよ。発動すれば、時間は掛からない。一瞬で幻想郷さ。だから、この覚妖怪もこのままの調子なら十分に間に合うよ」

具体的な説明を受けて安堵する先代の傍らで、青娥が更に質問した。

「幻想郷には結界があるようですが、そちらは大丈夫なのでしょう？」

「うん、結界の性質についても事前に調べてあるよ。現と幻の境を隔てる結界だ。こういった類の結界は、昔は結構メジャーだったんだよね。抜け方は分かってる。幻想と一緒に渡ればいいんだよ」

「なるほど」

「――」

「先代はよく分かってないみたいだね。あんた、本当に巫女？」

「申し訳ありません」

「いや、そこまで恐縮しなくていいから。――わたし達は、この神社を含めた一帯の土地ごと幻想郷に転移するんだ。といっても、物理的に移動するわけじゃない。この諏訪大社が建てられる遙か昔から、洩矢神自体は存在し、人々の信仰も存在していた。人の歴史には残っていないが、神の時代でわたし達を祀る為に建てられた最古の神社が、この土地には記憶されている。今の世では幻想の存在となった場所として、結界を通り抜けるんだよ」

「幻想入り――」

「へえ、そう呼ぶのかい。ま、つまり大昔に失われて忘れられた建物や土地と一緒に『幻想入り』すんのさ。昔は、神社も湖ももつと小さかったからね。場所取りの意味でも、あまり迷惑にはならないと思うよ」

一通り喋り終えた諏訪子は、大きく息を吐いた。

名残惜しげな表情が浮かんでいる。

二人との会話が終わったことを惜んでいるわけではない。

話を終えること自体を惜しんでいた。

話している内に気付いていたのだ。

機は既に熟している。

時間だ。

この世界から去る時間が、とうとうやって来たのだ。

「――じゃあ、そろそろ行こうか」

顔を上げて、諏訪子は言った。

潔い決断だった。

迷いはない。しかし、何処か寂しげな笑みが口元に浮かんでいた。

諏訪子は『よっこいしよ』と立ち上がった。

そして、何かに気付いたかのように視線が動いた。

先代の視線が同じ方向へ向けられたのは、ほとんど同時だった。

近づいてくる気配を感じたのだ。

雨音が激しく、常人には足音など聞こえなかったが、神と巫女の二人には捉えることが出来ていた。

足音が部屋の前まで近づき、次の瞬間勢いよく雨戸が開かれた。

「早苗!」

ずぶ濡れで佇んでいる来訪者の顔を見て、諏訪子は驚愕の声を上げた。

「ど……どうしたの、その格好?」

自分はなんて問抜けな質問をしているんだ、と諏訪子は思った。もつと他に訊くことはあるはずだった。

早苗の服装は部屋にいた時の寝巻き姿から着替えてはいたものの、何故かセーラー服姿だった。

雨具を身に着けていない理由くらいならば分かる。流石に私室に雨合羽を常備はしていないからだ。両親に気づかれず家から出る為に、玄関を通るわけにはいかない。

おそらく嵐の中を走り通しだったのだろう、早苗は息を荒げながら恥ずかしげに笑った。

「あの、雨……凄しい。ずぶ濡れになることは分かってましたから、汚れてもいいような服を選んでたら自然とこれに……ははっ、馬鹿ですよね? もう着ることもないのに、お気に入りの服とか惜しんじゃって……」

諏訪子は自分が問うまでもないことを察した。

早苗がここにいる以上、全ての答えは出ているのだ。

それでも、確かめる為に動揺を抑えながら口を開いた。

「……早苗、あんた自分が何をしているか分かってるの?」

「はい。私は、幻想郷へ行きます」

「落ちぶれた神様と一緒に、この世界から消えるってんだね? 家族も何もかも放って」

「違います」

「違う?」

「諏訪子様達と一緒に行くんじゃないやありません。私が、幻想郷に行く為

の船に乗るんです」

「両親はどうする？」

「手紙を残してきました」

「手紙って……そんなもんで後悔しないのかい？」

「しますよ。きつと後悔します」

「だったら——！」

「どっちを選んでも後悔します！　だったら、私の意思で選んだ道を行きます!!」

早苗は震える声で叫んだ。

頬を流れるものが濡れた髪から滴る雨水なのか、涙なのか、諏訪子には分からなかった。

しかし、その揺れる瞳に確固たる意志が宿っていることだけは理解出来た。

諏訪子の顔が一瞬だけ歪んだ。

それこそ、今にも泣き出しそうな表情だった。

「幻想郷へ、行こうと決めた理由を訊いてもいいかい？」

「教えません」

「ケチだね」

「だって、私の勝手じゃないですか。諏訪子様達の為じゃなくて、自分の為に幻想郷へ行くんだから、何故行きたいかなんて私の勝手です。

諏訪子様には教えません」

「やれやれ、神様を敬わない風祝だこと」

二人はぎこちなく笑っていた。

お互いに苦悩と迷いを抱えている。

この選択が正しいかどうかなど、今は分からない。

そもそも、相手に受け入れられているのか——。

しかし、二人は笑い合っていた。

かつて、早苗がまだ子供だった頃に浮かべていた、懐かしい笑顔だった。

「仕方ない」

言葉とは裏腹に、諏訪子は嬉しそうに笑いながら早苗に歩み寄っ

た。

「幻想郷行きの際に駆け込み一人追加だね。危ない真似をするもんだ」

「ギリギリまで悩みましたから。それでも、これが私の答えです」

諏訪子は、自分よりも背の高い早苗を母親のような包容力で抱き締めめた。

身体が濡れてしまったが、そんなことはどうでもよかった。

数秒間、早苗の鼓動と冷えてしまった体温を感じ取って、身体を離れた。

「——よしっ！ 早苗の力があれば機を計る必要なんてないけど、タイミングも丁度いい。早速、術式を起動するよ。早苗も手伝って。分かるよね？」

「はい、もちろんです。昔、教わりましたら」

「英才教育はしとくもんだ」

諏訪子の軽口に、早苗は苦笑した。

室内に足を踏み入れ、この段階でようやく先代達の存在に意識を向けた。

横たわるさとりを見て、さすがの早苗も驚いていた。

「さとりさん!? ど、どうしたんですか!？」

「わたし達と同じような理由で弱ってるんだよ。症状としては、こっちの方が深刻だけどね。でも、それもすぐに解決する」

諏訪子が簡単に状況を説明した。

それでも早苗は心配そうにしていたが、さとりを救う為にも急いで幻想郷へ行く必要があることは理解したようだった。

動揺を抑えて、諏訪子を見つめる。

「分かりました、急ぎましょう。それで、神奈子様の御姿が見えませんが——」

「そういえば、あいつ何してるんだ？ 早苗が来たことにだって気付いてるはずだけど」

室内を見回した諏訪子は、早苗の開けた雨戸から外へ視線を投げた。

夜の暗闇に雨が降りしきって、かなり視界を悪くしている。その中にぼんやりと人影が浮かんでいた。

「――神奈子？」

諏訪子の言葉を聞いて、早苗もようやく気付いた。

どしや降りの中で、神奈子は無造作に佇んでいた。

風邪をひいてしまいますよ、と言おうとして早苗は口を噤んだ。

自分が間抜けなことを言おうとしていることに気付いたからではない。

激しい風雨の中にながら、神奈子の服は濡れているようにも煽られているようにも見えなかった。

それがハッキリと分からないほど視界が悪いという理由もあるかもしれない。

しかし、まるで神奈子がこの嵐の影響を全く受けていないかのよう――あるいは、溶け込んで同化しているかのように見えた。

「話はまとまったようだね」

神奈子が呟いた。

嵐のせいで酷く聞き取り辛かったが、確かに聞こえた。

「神奈子様……？」

「早苗、よくぞ決心した。諏訪子は色々と言っただろうが、ここまで来れば腹を括るだろう。そいつはな、お前の面倒を見る責任を負いきれなかっただけなのさ」

「……神奈子、何してんのよ？」

「今更、早苗の好きに生きろなんて無責任なこととは言わないよ。お前の力と信仰は、間違いなく神の助けとなる。自らの思うまま、使命を全うするがいい。お前の献身に神は感謝し、報いるだろう」

「何を仰っているんですか……神奈子様、こちらへお越し下さい」

「そうだよ。術式を起動するのに、あなたの協力が必要なんだ。ぐだぐだやってないで、さっさと手伝いなよ」

「早苗が来た。私の力は必要ない」

神奈子の返答に、諏訪子と早苗は顔色を青褪めさせた。

傍でやりとりを見守っていた先代まで、不穏を察知して眉を顰めて

いた。

神奈子が何を言わんとしているのか、ぼんやりと理解し始めたからだった。

「私は、幻想郷へは行かない」

場に渦巻いていた不穏な気配を、明確な形にして神奈子は答えた。

「……ふざけないでよ」

諏訪子が押し殺した声を洩らした。

「今更、何言ってるのよ！ 早苗が来てくれたんだよ！ それなのに、今更になつて……っ！」

今更——。

本当にそうか？

心の何処かで、神奈子のこの選択を予想していたのではないか。

今感じている理不尽さの陰に、妙な納得を抱いているのではないか。

神奈子がそう考えるのも仕方がない——と、理解出来てしまう自分がいる。

「何故ですか、神奈子様!？」

早苗の悲痛な問い掛けに、神奈子は笑った。

笑っているのが分かった。

いつの間にか、神奈子の姿がハッキリと見えるのだ。

嵐は止んではいけない。しかし、神奈子の周囲だけに雨も風も届いていなかった。

何かが風雨を遮っている様子ではない。

まるで、雨が神奈子を避けているかのように、非自然的な軌道を描いて地面に落ちている。

「……少し前の私なら、きっと領けただろう」

神奈子の笑い方は空虚で自虐的なものだった。

「幻想郷に行くことに疑問はなかった。いや、行くことを拒む理由がなかった」

「まるで最初から乗り気ではなかったって聞こえるね」

「ああ、その通りだよ」

「自分勝手な奴だ。ただ流されるだけで、土壇場になって文句を言うなんて情けないんだよ」

「ああ、その通りだ。情けないんだよ」

ほとんど睨み合うように、二人は視線を交わした。

「自分がな、情けなくって、惨めで……そんな自分からずっと目を逸らしてきたんだよ」

「今更弱音なんて——」

「お前は弱音を吐く気力さえ捨てちまったんだろう。そうなんだろうが、諏訪子！」

責めるように叫ぶ神奈子の反応に、諏訪子は一瞬たじろいだ。

神奈子の言動に対して、心の何処かで理解を示す自分がいる。

そのもう一人の自分が、神奈子の糾弾を受け入れていた。

「諦めたんだ、お前は。それで楽になったんだろう？ 自分は潔く引き際を弁えたと考えながら、足掻く私を見苦しいと蔑んでいたんだろう？」

「——」

「お前の私を見る目には、そういう色があつたよ」

「……不快に感じていたなら、謝るよ。だけど、認めるべきだろう。もう、この世界は神なんて必要としていない」

「だから、ワケの分からん田舎に閉じ籠って静かに過ごそうというのか。老い先短い人間のよう」

「それが不満なのかい？」

「お前はどうかなんだ？ 幻想郷へ行つて、何をやる？ 何かを成そうという意欲はあるか？ いや、この世界にいた時とは違う、新しい目標は持っているのか？」

「それは——」

「同じじゃないか。場所が違うだけだ。お前の方がよほど流されてい
るだろうが。幻想郷に行けなくても、お前は一向に構わなかったはず
だ。投げやりだった。だから、早苗の力を借りようと思わなかった
し、突き放そうとしていた。お前はここで消えるつもりだったんだ
！」

早苗は思わず諏訪子の方を見つめた。

諏訪子は唇を噛み締めて、震えていた。

神奈子の決め付けに対して、否定の言葉が出てこなかった。

凶星だったのだ。

「幻想郷へ移り住んで、そこでなけなしの信仰を集めながら細々と生き永らえるだけなんて、私は耐えられない。確かに今更かもしれない。だけど、私はようやく決めたよ。諏訪子、お前と無気力な余生を共にするなんて御免だ。心中と一緒なんだよ」

「早苗が……いるでしょう」

諏訪子は必死に声を絞り出した。

「わたし達と共に来てくれるこの子の為に、この子の神で在り続けることは出来ないの?」

「人の親のようにか?」

神奈子は嘲笑で返した。

「お前には早苗との血の繋がりがあがる。情が生きる理由にもなるだろう」

「あんたは違うっていうの?」

「私は、神だ」

「だからなんだ? 風祝である早苗を、家族とは思えないって言うのか!」

「人の親のようには振舞えん。私が早苗に見せることが出来るのは、神としての姿だけだ」

ふと、早苗は気付いた。

嵐が弱まっている。

あれだけ激しかった風雨が、いつの間にか静まりつつあるのだ。

しかし、奇妙な感覚だった。

ただ単純に嵐が治まり始めたといった様子ではない。

依然、空には月を完全に覆い隠すほど分厚い黒雲が満ちている。時折、稲光すら見えるのだ。

そこから降り注ぐはずの雨や風——凶暴な自然の力だけが、地上ではなく別の場所へ消えている。

ならば、一体何処へ――。

「――待て、神奈子」

諏訪子も同じく異変に気がついたらしい。

戦慄に震えながら、唾を飲み込んだ。

「お前、何する気だ？」

「私は最期まで、何かを成して死ぬ」

答える神奈子の顔には、壮絶な覚悟が刻まれていた。

「人が神を忘れ去るといふのなら――」

一瞬、音が完全に消えた。

「――思い出させてやる」

爆音。

そして、衝撃。

文字通り、嵐の前の静けさだった。

押さえ込まれていた静寂は、まるで風船が破裂するように凄まじい音を立てて破られた。

突然発生した衝撃波にも近い突風を受けて、諏訪子達は建物の中へと吹き飛ばされた。

治まりかけていた嵐が、神奈子を中心にして再開したかのようにだった。

上空の雲から降り注ぐものではない。何処から吹いているのかも分からない風と雨が荒れ狂い、すぐ傍で稲妻が轟く。

狂乱は、しかしすぐに治まった。

「神奈子！」

諏訪子が吹き飛んだ雨戸から再び外を見た時、既に神奈子の姿は消えていた。



まるで嵐が去った後のようだった。

いや、事実嵐が去ったのだ。

嘘のように雨と風の止んだ外を眺めながら、諏訪子は呆然と佇んで

いた。

水浸しの地面だけが嵐の余韻を残している。

小雨すら降っておらず、風は未だに吹いているが先程と比べればそよ風も同然だった。

諏訪子は、神奈子が立っていた場所を呆然と見つめていた。

突然、何かに気付いたかのように頭上を振り仰いだ。

夜空を覆う黒雲が、異常な動きを示していた。

「……お前の」

諏訪子は振り返った。

先程の突風からさとりを守っていた先代を、激しく睨みつける。

「お前の——」

言いかけ、しかし堪えるように必死で口を噤んだ。

——お前のせいだ。

その言葉を口にする前に、我に返ったのだ。

途中で止めたのは、理不尽な言い掛かりだと思ったからではない。

神が人に責任を転嫁するなど、あつてはならないことだからだ。

しかし、思うことは止められなかった。

——何故。

——何故お前は今更、神奈子の前に現れたんだ。

——何故、もつと早くではなく、もつと遅くでもなく、今になって

現れたんだ。

——お前が、神奈子に過去を思い出させてしまった。

——お前の信仰が、神奈子に神としての自覚を蘇らせてしまった。

——何故、もつと早く現れて神奈子を支えてくれなかった。

——何故、全てが終わった後の新たな出会いとして現れてくれな

かった。

諏訪子自身にも整理のつかない、混沌とした胸の内が瞳に表れていた。

突然の怒りを向けられて、先代は理由も分からず呆然としていた。

所詮、八つ当たりなのだ。

神が理不尽を人のせいにする。

笑い話にもならない。

顔を背け、震える拳を握り締めた。

「諏訪子様、神奈子様は一体何処へ……？」

早苗の問い掛けに、諏訪子は苦渋の表情で答えた。

「人だ」

「え？」

「とにかく人の多い場所だ。町中……いや、あの様子だともっと大きな都心まで行くつもりか」

「この嵐が治まったことと、何か関係があるんですか？」

「治まったんじゃない。神奈子は『乾』——天を創造し、風雨を操る力を持った神だ。あいつは、あの嵐と同化してここから移動したんだ」

早苗と、傍で聞いていた先代も絶句した。

天を動かす——想像を絶する神の力だった。

現世で信仰と共に力を失いつつあるという話が、嘘のように思える。

「だけど、嵐なんてずっと続くもんじゃない」

諏訪子は言った。

「元々、夜明けまでに治まるはずだったんだ。嵐が止めば、神奈子も力尽きる」

「それは、どういう——」

「死ぬ気なんだよ、あいつは」

再び、絶句。

嫌な沈黙が流れた。

嵐も止み、先程までの騒音とは打って変わって神社は静寂に包まれている。不気味ですらあった。

早苗も先代も、言葉を発することが出来なかった。青娥は最初から会話に加わる気はないらしい。

神奈子の取った行動は分かった。

では、どうするのか？

どうすればいいのか？

二人はじつと諏訪子の言葉を待った。

「——ごめんよ、早苗」

俯いて考え込んでいた諏訪子が、おもむろに顔を上げた。

「こんなことになったのは、わたしが中途半端だったせいだ。お前の家族にも、お前の神様にも、なれそうにないよ」

悲壮な決意が浮かんでいた。

「諏訪子様、何を……?」

「わたしは、神奈子を止めに行く」

「止める?」

「あいつは、残った力を全て使い切るまで暴れるつもりだ。狂える神は災害と同じさ。放っておけば、きつと大勢の人間が死ぬ」

「そんな、どうして……」

「いいかい? 早苗はこのまま術式を起動して、そこの巫女達と一緒に幻想郷へ行くんだ。準備はしてある。早苗一人でも十分やれるはずだ」

「……無理です」

「わたしは一緒にいてやれない。神様としての責任があるからね、それを果たさなくちゃ」

「無理です! 私一人なんて——!」

「やるんだ、一人で! お前は、わたし達がいなくても幻想郷で生きていくだけの意義を見出したんだろう!?!」

早苗は泣き出しそうな表情で、それでも歯を食い縛った。

突然の別れだった。

全て、上手くいくと思っていた。

それは諏訪子も同じだった。

しかし、事態は変わってしまった。

早苗も覚悟していなかったわけではない。

事前に諏訪子から言われた通りだ。自らの意思で、幻想郷へ行く決意を固めた。

——しかし。

あんまりではないか。

こんな突然の別れだなんて、理不尽すぎるじゃないか——。

「……本当に、ごめん」

嘆きたいのは諏訪子も同じだった。

それを堪えるように、帽子のツバを深く下げた。
踵を返す。

外に向かつて歩き始めた。

行けば、二度と帰ってこない。

それを直感的に理解しながら、早苗はその場から手を伸ばすことしか出来なかった。

しがみ付いてでも、諏訪子を止めることが出来なかった。

空中で彷徨う手が、小刻みに震えていた。

その手の先で、諏訪子の背中がどんどん遠ざかっていく。

「お待ち下さい」

そんな早苗の葛藤を察したのか、先代が代わりに諏訪子を呼び止めた。

「私も一緒に行きます」

「何故？」

諏訪子は端的に訊ねた。

「神奈子様を止める為の力になります」

「だから何故？」

「――」

「なんで、あんたがそこまでするのさ？」

「それは……神奈子様を無事に連れ戻すことが出来れば、皆が助かるからです」

「つまり、あんたは神奈子やわたしや早苗が全員で幻想郷へ行けるように助けようとしてくれているワケだ」

「はい」

「それは、何故？」

「私が、そうしたいからです」

「わたしと一緒に来れば、間に合わなくなるよ。その覚妖怪がね」

「――さとりが!？」

「幾ら猶予があるといっても、さすがに夜明けまではもたないだろう

よ。悠長にしている暇はないと思うけどね。少しでも早く元の場所へ戻してやらなくちゃ、本当に死んじまうよ」

「そいつの命を懸けてまで、わたし達を助ける理由があんたにはあるかね？」

先代は答えることが出来なかった。

固く動かない表情の下に、見て取れるほどの葛藤が渦巻いている。

しかし、結局先代はそれ以上何も言えず、行動することが出来なかった。

早苗と同じように、口を噤み、その場に佇むだけになってしまった。

諏訪子はその様子を見ても責めることはなく、逆に何処か安心したような笑顔を浮かべた。

「幻想郷に着いたら、早苗のこと世話してやってね。わたし達への貸しはそれで帳消しってことでいいよ。ありがとう」

努めて明るく言うと、諏訪子は外へ跳び出した。

文字通り、破られた雨戸から外へ跳んだのだ。

水で多少ぬかるんでいるとはいえ、着地する場所は固い地面のはずである。

しかし、諏訪子の両足は地面を踏み締めることなく、まるで水面に沈むように飲み込まれていった。

あっという間に全身が地面に潜り込み、諏訪子は姿を消した。

彼女もまた行ってしまったのだ。

残された早苗と先代は、ただ呆然と神のいなくなった神社で佇んでいた。

◇

神奈子様を追い詰めたのは——私か。

諏訪子様の言いたいことは分かっていた。

神奈子様との会話や、私に向けた目付きで理解出来たのだ。

具体的に何がどう作用したのかまでは分からない。だが、私の向け

る何かが神奈子様の心を揺り動かした。とても悪い方向に。態度か、視線か、それとも喋り方が悪かったのか。

——いや。

きつと、この知識のせいだ。

私の中にある、この世界とそこで生きる住人への先入観が何かを起こしたのだ。

この世界の誰を前にしても、私の視線はまず偶像への印象を通して相手を見てしまう。

「——東風谷早苗」

諏訪子様がいなくなった後、しばらくして私は沈黙を破った。

我に返った早苗が、私を見つめる。

「大変申し訳ないが、時間が押している。術式の起動を頼む」

横たわるさとりの傍に歩み寄りながら、私は感情を殺して言った。

後ろめたさのせいで、早苗の顔を見ることが出来なかった。

「わ、分かりました……」

諏訪子様を追うことは出来なかった。

言われたとおりだ。

彼女を助けることを選べば、さとりが危なくなる。

さとりの命を天秤に掛けるなんて、私にはそんなこと——出来ない。い。

「よろしいのですか？」

私の葛藤を見透かしたかのように、青娥が訊いてきた。

先程までのやりとりの中でも、まるで興味がないとばかりに傍観に徹していた彼女が、何故今になって私に問い掛けてくるのかは分からない。

この事態を唯一深刻に捉えていない彼女は、微笑みながら言った。

「神様を説得することは難しいかもしれませんが、力づくでならなんとか出来るかもしれません。要は、幻想郷へ連れ込んでしまえばよいのです。早苗さんが術を行使出来るというのなら、無理矢理にでもこの場へ連れ戻し、術式を起動してしまえばよいでしょう」

「……私の力を過大評価しすぎだ。神の力に勝てるとは思えない」

「そうでしょうか？ やってみなければ分かりませんわ」

「賭けに出ることなんて出来ない」

「さとり様が心配だからですね？」

「そうだ」

「しかし、全て上手くいく可能性はある」

「無理は出来ない。さとりの命が懸かっている」

「確かに困難な状況です。しかし、先代様。安全策を取って、諦めてしまってもよいのですか？ 貴女が他人よりも優れた力を持っているのは、他人には出来ないことを成す為だとは思いませんか？」

青娥の囁きは、まるで悪魔の誘惑だった。

いや、それとも迷う私を正しい答えに導いてくれるのか。

本音を言えば、諏訪子様も神奈子様も助けたい。言葉ではどう言っても、早苗の傍には二柱の神がいた方がいいのだ。

— だけど、それはさとりの命を天秤に掛けるほど価値のある理由か—
—？—

「それほどの理由なんですよ」

自問に対して答えたのは、私自身ではなくさとりだった。

「さとり！ 気がついたのか!？」

「さあ？ 意識があったりなかったり曖昧ですけど……とりあえず、色々とは話は聞こえていました」

ほとんど囁くような、掠れた小さい声だった。

鼻先が触れ合うくらい顔を近づけて、口元で耳を澄ませば、ようやく私にだけ聞こえるくらいだ。

しかし、受け答え自体はしっかりしている。

思わず手を胸に抱くように握り締めた私を、仰向けになったままさとりは見上げていた。

「私は大丈夫です。さあ、悩んでないでさっさと行きなさい」

「……馬鹿なことを言うな」

「貴女の行動に巻き込まれることには慣れましたよ。仕方のない人ですね。あとで殴らせてもらいますからね」

「さとり、真剣な話をしているんだ！」

「じゃあ、これまでは真剣じゃなかったんですか？」

私は思わず言葉に詰まった。

「違うでしょう。貴女は何時だって真剣だった。遊び半分に他人と関わろうとしなかった」

さとりは弱々しく笑った。

「私は心を読む妖怪ですよ。本心を隠したって無駄です」

——分からないんだ。

私にも、時々自分がよく分からない。

いや、自分のことだからこそ分からない。

そもそも、この世の中に自分のことを分かっている人間なんているのか。

分からないからこそ、これまで精一杯やってきたはずだった。

だけど、今回はそれが裏目に出ってしまった。

私のせいだ。

私の頭の中に『東方Project』のキャラクター・八坂神奈子』という知識がなかったら、こんなことにはならなかったかもしれない。私が私でなければ、余計な問題なんて起こらなかったかもしれないんだ。

「それは、何を基準とした『余計』なんですかね。それこそ、ゲームの話ですよ」

だけど、この世界にとって私は——。

「私なりにこの世界のことを色々と考察していました。貴女には、どうせ難しいから理解出来ないでしょうけどね。」

その上で、一つだけ結論が出せました。仮に、この世界がゲームの中の世界だとしても——私達が平面に描かれた創造物だったとしても——私にはどうでもいい、ということですよ」

さとりは断言した。

「何故なら、貴女がいるからです。貴女があまりにも好き勝手に私の周りを引っ掻き回すから、地底で止まっていた私の周りの物事を動かし続けるから、こんな破天荒な話が定められた物語だなんてとても思えないからです」

……さとり。

「自分の前世の記憶が、現実を見る時にはフィルターになってしまう。その苦悩は分かります。」

でも、だからこそ貴女は目の前の相手を現実として捉える為に、積極的に触れ合おうとしてきた。貴女は確かにこの世界で生きている。だから、思うままに行動し、縁を紡げばいいのですよ。私とそうして出会ったように」

私の、思うままに……か。

「……まあ、浅慮なのはいただけませんがね。貴女が馬鹿なのは、もう諦めてます」

そう、小馬鹿にしたような目付きで私を皮肉るさとりは、弱っていてもいつも通りの姿に見えた。

私の手を、さとりが握り返してくる感触が分かる。

不安になるくらい弱々しいけれど、確かに分かる。

まるで私を励ましているみたいだった。

「励ましているんですよ。本当、情けない人ですね。普通、こういう葛藤は自分で答えを出すものなんじゃないですか、小説の主人公みたい。覺妖怪に心を読んでもらって答えを出すなんて、チートですよ。ズルです」

ははっ、まったくだ。

「……でも、貴女がこれまで頑張ってきたのは知ってますからね。手助けしたくなりました」

さとりは少し恥ずかしそうに笑って、

「友達ですからね」

そう、言ってくれた。

——ありがとう。

そして——決めたよ、さとり。

「さとり」

「はい」

「行ってくる」

「どうぞ。適当に頑張ってきてください」

「ここで待っていてくれ。必ず戻る」

「この世界が壊れたって、貴女の近くにいますよ」

体力を消耗したのか、さとりは瞼を閉じた。

まだ意識が残っているのかどうかも分からない。

さとのりの青褪めた顔色を見ると、不安がぶり返してくる。

いや……これは、恐怖か。

私はさとりを喪うことが死ぬほど怖いんだ。

自分一人だった時は、こんなに怖い思いをしたことはなかった。

どんな危険な目に遭っても、その終わりは自分自身の死で完結させることが出来た。

だけど、今は違う。

私の行動とその結果で、さとりが死ぬかもしれない。

それがたまらなく怖い。

何よりも重い。

だけど――。

「諏訪子様を追う」

私は迷いを完全に振り切るように、自分の決意を言葉として口にした。

「神奈子様を止める」

早苗が驚いた表情で私を見つめた。

青娥が満足そうに笑っている。

だけど今は誰かの為でも望みでもなく、何よりも私自身の意思で――

――

「私は、往く」

後悔は、結果が出てからすればいい。

私は握り続けていたさとりの手を、そつと解いた。

最後まで触れ合っていた人差し指が名残惜しげに離れた。

「早苗」

「は、はい」

「私が二人を連れ戻すまで、術の準備をして待っていてくれ」

「……はい！ 御二人を、よろしくお願いします！」

私は頷いた。

さて、決意はあれども問題は山積みだ。

まず、どうやって諏訪子様達に追いつくか——？

「先代様。さすがの貴女でも、足で追っては間に合いませんわ」

「青娥？」

「嵐と同化したという八坂神奈子の移動速度と距離。あれでは台風を追うようなものです」

「そうか……」

「なので、私が力を御貸ししましょう」

「……いいのか？」

私は思わず訊ねていた。

彼女の考えだけは、未だによく分からない。

目の前の事態に対して傍観を選ぶのは、私達とは違って幻想郷へ行くことにそこまで執着してないからかもしれないが、だったら本当の目的が何処にあるのか、私には見当もつかなかった。

私の行動を促したのは、決して神奈子様達を助ける為じゃないことくらいは分かるが——。

「最初に申しましたわ。私、貴女が何を成すのか見たいのです。その為の助力は惜しみません」

子供みたいに楽しそうに笑う青娥。

……まあ、いいか。

彼女の協力が凄く助かるのは間違いないわけだし。

「さあさあ、私に命じてください。大丈夫、御期待は裏切りません」

「分かった。考えはあるのか？」

「もちろんです」

「なら助けてくれ、青娥」

「あんつ、先代様にお問い合わせされちゃった！ ……ちよつと快・感」

……ごめん、今回はギャグ挟んでる余裕ないの。

真面目にお願いしますよ、青娥さんっ!!

「あの嵐の向かっている先は予測がつかまずわ。大丈夫、十分に追いつけます。なので『出陣』の前に——こちらを」

そう言つて、青娥は一着の服を取り出した。

見慣れた紅白の色合い。

「やはり、貴女の戦いには相応しい装束でなければ」

それは、この世界に来て以来袖を通していなかった私の巫女服だった。



朦朧とした意識の中で、さとりは思った。

——この世界は何処か曖昧だ。

この世界が『東方Project』というゲームを基盤にして成り立っているという考えも、決して否定出来ない。

外の世界に来て、幻想郷でならば知るはずのないことを知るほどに思う。

現実立っている世界なのに、酷くチグハグな箇所が多い。

逆に、先代の記憶にあるだけの世界の方が、何処までも綿密な理屈の上に成り立っているのだ。

現実の世界を突き詰めれば、どんどん曖昧な幻想となり。

幻想の世界を突き詰めれば、どんどん強固な現実となる。

この世界の曖昧さは、まるで物語の焦点が当たらない部分が行だけの簡潔な文章で表現されている書き物のようだと思った。

——ならば、物語の主役として最も運命を背負わされているのは、きつと。

自分が生きるだけならば、この世界の真実などどうでもよかった。

仮に定められた運命があつたとしても、大して不満は感じない。

帰る家があり、友人が傍にいる今の生活に十分満足している。

わざわざ運命に反逆するほどの理由はない。

だけ。

——この世が一つの劇場に過ぎず、彼女が物語を進める為の舞台装置や道化の役だというならば。

「せめて……貴女には、悔いのない自由な選択を……」

切実な想いを秘めた言葉は、しかしあまりにも弱々しく、誰にも聞こえずに消えた。



——その夜、諏訪市に住む者達の一部が異常に気が付いた。

深夜まで起きていた者。

あるいは、途中で目を覚ました者。

彼らは、突然始まった嵐が、同じように突然止んだことに気付いて、思わず外の様子をうかがった。

最初、視界に映るものは普段から見慣れたものばかりだった。

激しい雨に濡れ、強い風に荒らされてはいたものの、いつも見る町の風景、いつも見る山々や諏訪湖の様子に違いなかった。

やがて、誰かが気付いた。

それは空の異常だった。

「なんだあ、ありゃあ……」

誰かが、あるいは誰もが、呆然と呟いた。

嘘のように唐突に止んだ雨が、先程まで確かに降っていたことを証明するように、夜空には濃厚な雨雲が広がっていた。

しかし、その雲の形が、動きが、明らかにおかしい。

諏訪市の上空全体を覆うほど巨大な黒雲。

それが面積はそのままに、細長く伸びていた。

見上げる住人の誰もが理解し難い。例えるならば『黒い飛行機雲』と表現するのが一番分かりやすいかもしれない。

——何かが、雨雲を率いて飛んでいる。

その『何か』が飛ぶ先に雲が引つ張られ、細く、長く伸びていくのだ。

真っ直ぐではなく、うねるような不規則な軌道は、空を這う巨大な蛇を連想させた。

黒い雲で形作られた蛇だ。

その体のあちこちでは、雷鳴と共に無数の稲妻が走っている。

蛇の頭は、山の向こう、地平の彼方へ行こうとしていた。

——これは異常気象なのか。

——まさか、神の仕業なのか。

人々の恐怖と不安は錯綜した。

その混乱の最中を、今度は地中から何かが通り抜けた。

「こ、今度は何だ!？」

「地震かあ!？」

空の異常の後に起こったのは、地の異常だった。

突然、地面が揺れたのだ。

しかし、それもまた、ただの地震と見るには不可解な部分が多かった。

揺れたのは、ほんの一瞬だけである。それこそ、まるで通り過ぎるように地震は短時間で治まった。

いや——文字通り『通り過ぎた』のだ。

個人では把握出来ない全容。機械による計測結果を見た者だけが、その非科学的な現象をとりあえずは把握出来ただろう。

地震の震源は、諏訪市を横断するように移動していた。

そして、『それ』が向かう先は、空の『何か』が向かう先と同じ方向だった。

空を飛ぶモノと、地中を通ってそれを追うモノ。

いずれも、凄まじい速さだった。

人智を超えた現象であり、存在だった。

それらが向かう場所は、諏訪市を囲む山々を越えた先——より多くの人々が住み、より高度な文明化が進んだ都会。

その中心だった。

其の四十八「戦場」

「撃ち方、やめー!」

夜の湖に号令が響き渡った。

幼さのある声色は、勇ましいというよりも元気がいい。

張り上げられたチルノの声に従って、橙とフランドールは放つていた弾幕を止めた。

そして、チルノの待つ湖の畔へと降り立つ。

「うん! 二人ともなかなかスジがいいわねっ!!」

「本当、チルノ!」

「……いや、割と真剣に本当? あんなので何が分かったの?」

片やフランドールは素直に喜びながら、片や橙は胡散臭げに、チルノの称賛に対して反応した。

先程していたことと言えば、空中で何の変哲もない弾幕を発射してただけである。標的を設定しているわけでもない為、射撃訓練にすらなっていない。

橙に分かったことと言えば、フランドールの弾幕の量や密度が自身のそれよりも勝っているといった程度のものである。それさえ、地力の違いを顧みれば単純明快な話だった。

「あたいはあんたらを指導する立場なんだから、当然でしょ!」

チルノは自信と確信に満ちた態度で答えた。

自分では見えなかったものがチルノには見えているらしい。こいつは何時もうさだ、と橙は感心して呆れた。

「でも、あんなスペルカードでさええない弾幕なんか見たって……」

「何言ってるの、何事も基本が一番大切なのよ。お師匠が言ってたわ」「そりゃあ、あの巫女は格闘系だから、動きを見ただけで技の錬度が分かっていたりするかもしれないけどさ。何、さっきの弾幕ってそういうつもりだったの?」

「フツ、橙にも分かったようね。あの弾幕で、あたいはあんたらの今の實力を見切ったわ」

「……いや、アンタそれ絶対ただの受け売りだよ! 分かってないの

に真似してるだけでしょ!?!」

「ち、違うわよ! あたい、ちゃんと分かってるもん!」

「そもそも、その『基本』ってヤツを見て何の意味があるのよ? どうせ、これからやる修行には何の関係もないんでしょ」

「あるよ!」

「じゃあ、この後どんな修行するつもりなのよ?」

「あたいと弾幕ごっこで勝負だ!」

「——やっぱ関係ないじゃないか! それ、いつもやってることと変わらないじゃん!」

「うっ……うるさいうるさい! せっかく、あたいが修行をつけてやってるのに文句言うな!」

「偉そうに師匠ぶるなら、もつと普段と違うことやってみせろ!」

チルノと橙は、互いの額を突き合わせて相手を睨んだ。

二人にとって、この程度のいがみ合いは珍しいものではない。文字通り、子供の喧嘩のようなものなのだ。

しかし、そんな事情を知らないフランドールは慌てて睨み合う二人の間に割って入った。

「け、ケンカはダメだよ!」

フランドールに向かって『邪魔するな』とばかりにチルノが睨みつける。

対して、橙は黙り込んだ。

「……喧嘩やめます」

「負けを認めたようね!」

勝ち誇るチルノの後頭部を、橙が叩いた。

猫の俊敏性を活かした眼にも留まらぬ一撃である。

死角から飛んできたそれが橙の仕業だと気付かず、チルノは頭を抑えながら眼を白黒させて周囲を見回していた。

「ありがとう、橙」

「いえ、まあ……フランドール様の命令ですし」

「命令じゃなくて、お願いだったんだけどな。そんなに堅苦しくしないでいいよ」

「立場上、そういうわけには……」

「偉いのはわたしのお姉様の方なんだし、わたしのことは気遣わなくても大丈夫だって。チルノみたいに気軽に接してくれたら嬉しいな」
フランドールは愛らしい笑顔を浮かべて、それこそ気軽に言った。本心からの言葉だった。

しかし、それを真正面から受ける橙の方からすれば、無茶振りであり、ありがた迷惑な配慮以外のなものでもないのだった。

——姉のレミリア・スカーレットって言ったら、紫様も認める幻想郷の有力者の一角じゃん。その妹様に無礼な真似なんて出来るわけないって！

今回、チルノを介して初めてフランドール本人と実際に対面した橙は、内心が気ではなかった。

『八雲の式の式』という立場上、幻想郷内における各勢力の情報は自然と耳に入ってくる。

また、橙自身もそれらの情報を把握しようと、日頃から意識してきた。

自らに課せられた役割への責任感と立場への自負から来る自主的な行動である。

スペルカード・ルールを広める切っ掛けとなった異変を境に台頭し始めた紅魔館という勢力と、その主要メンバーについても事前に情報を収集してある。

当主レミリア・スカーレットの妹、フランドール・スカーレットについても当然。

そのあまりに危険な能力と、不安定な人格によって、当主の実妹でありながら地下室に封印されていた吸血鬼である。

八雲紫自身によって、その情報が意図的に隠蔽されている為、詳しい部分までは分からなかったが、警戒すべき恐ろしい妖怪であることだけは橙も理解していた。

同時に、自分の主人や更にその上の主人が関わる存在であり、格下の自分にはまず縁のない相手だろうとも考えていた。

橙には自分が下っ端であるという自覚がある。

下働きのような仕事や、日々の精進として妖精と弾幕ごっこをすることが日常の小物なのだ。

自分などが幻想郷の勢力図について思案することは、星の動きに頭を悩ませるようなものだと思っていた。

それが一体何を間違ったのか、今宵、この場の、この有様である。橙は普段から、夜でも昼でも特に時間帯を気にせず、チルノに会いにきていた。

会って遊んだり、修行をしたりする。どちらでも、やることは大体一緒だ。

それが今夜、霧の湖にはチルノと一緒にフランドールが居た。

「わたしもチルノに弾幕ごっこを鍛えてもらおう立場なんだからさ。

『橙と同じ』で！」

「は……ははっ、そっすね」

橙はフランドールに力の無い愛想笑いを浮かべた。

フランドールの要求する『気軽さ』を意識する余り、自分でもよく分からない口調になってしまっていた。

狂える悪魔の妹を前にして、調子は狂いっぱなしである。

これが事前の情報通りの人物だったのなら話は単純だった。

少なくとも、格上の相手に小物らしく服従していればいい。表す感情も『恐怖』の一言だけで事足りた。

しかし、こうして面と向かって話をする相手は、情報通りの凄まじい力を内包した存在感の中に、素直さと純真さを同居させた見た目通りの可憐な少女にしか見えなかった。

狂っている？

封印されていた？

目の前の朗らかな笑顔を見て、そんな過去を連想することなどとても出来ない。

——噂と全然違うんじゃないかなあ。

結果、フランドールに対するスタンスを橙は未だに決めかねているのだった。

「えーと、とりあえず慣れるまでは敬語で許して下さい。やっぱり、わ

たしからすれば偉い人の妹様ですから」

彼女が自分よりもずっと偉くて、重要な立場に居ることは間違いない。

愛想が半分、残り半分は自分でもよく分からない笑みを橙は浮かべた。

「うん、分かった！　いつでも、気楽に話しかけてくれていいからね！」

「光栄です」

「だって、わたし達トモダチだもん！」

「……光栄です。いや、ホント」

胃が痛くなった。

「子分同士、仲良くなったようね」

二人を見て、チルノが満足気に頷いた。

「……わたしはともかく、フランドール様はあんたの子分じゃないでしょーが」

「子分じゃなければ、弟子でもいいわ。まっ、あたいが弾幕を教えるあげるんだから、立場としてあたいが上なのは間違いないわね！」

「フランドール様、反論してくれていいんですよ？」

「うーん、でも実際にチルノに弾幕の修行を頼んだのはわたしの方だし、間違つてはいないよ」

意外にも、フランドールはチルノの物言いに対して賛同していた。

明らかに実力が格上にあるにも関わらず、彼女は真剣にチルノに師事しようとしている。

橙には、その理由が分からなかった。

もちろん、分からないと言えば妖精と吸血鬼の接点そのものが全く分からないのだが。

「からかうにしても、あいつは単純だから、ある程度は釘を刺しておかないと調子に乗りまくりですよ」

「別にからかつてなんかいないよ。チルノが親分になりたいんなら、わたしは子分の立場でいいと思う」

「……本気で妖精の方が偉いと思ってるんですか？」

「妖精かどうかは関係ないし、偉いっていうのも少し違うかな。チルノが特別なんだよ。上手く言えないけど……チルノは、わたしを引張ってくれるんだ」

「引張る？」

「どうすればいいか分からない時に、やるべきことを決めて、教えてくれるんだ。橙もチルノの子分になったんなら、そういう心当たりない？」

「それは……あります」

「でしよう？ それに実際、弾幕ごっこについてはわたしよりもチルノの方が経験も技術もあると思う。ずっと修行してたって話してたし」

「確かに、それも間違いありません。なんだかんだで、あいつはわたしよりも弾幕ごっこ強いですしね」

「それにチルノって小母様の——先代巫女様の一番弟子なんだって！

凄いやねっ！」

フランドールは尊敬の眼差しをチルノに向けた。

彼女が師事する一番の理由は、そこなのかもしれない。

なんやかんや騒ぎながらも、こうしてチルノを中心に行動を共にしている自分も同類なのかもしれない、と。橙は納得がいったような、いかないような複雑な気分だった。

「——さあ、無駄話の時間は終わりよ！ いよいよ、修行の第二段階に入るわ!!」

スペルカードの準備を終えたチルノが、気合の入った声で言った。

大げさな表現をしているが、先程も橙が言った通り弾幕ごっこをするだけである。

この分では、何か特別なルールややり方を用いるワケでもないだろう。

橙はため息を吐いた。

逆に、フランドールはチルノと弾幕ごっこをするのは初めての経験だった。

そもそも弾幕ごっこ自体あまりやった経験がない。

チルノの言葉に従うように、フランドールは嬉々として、橙は渋々と、それぞれのスペルカードを準備した。

その時だった。

真夜中に弾幕ごっこをやるうなどという変わり者しかいない湖の畔に向かつて、夜空の彼方から騒がしく飛んでくるものがあつた。

「チルノオー!!」

それはチルノの名を呼んで、真っ直ぐにやって来た。

「チルノ！ やつと見つけたあ!!」

「お空?」

突っ込むように目の前に着地した空の姿を見て、チルノは驚きの声を上げた。

「どうしたの？ あんた、何で泣いてんの?」

地底に住んでいるはずの友達が地上にやって来たことよりもチルノが気になったのは、その瞳から溢れ続ける涙だった。

顔をクシャクシャに歪めた空は、答えようとして言葉にならない嗚咽を洩らした。

チルノは戸惑いながらも、震える背中を擦ってやった。

一方、空のことを知らない橙とフランドールの戸惑いはチルノ以上である。

突然の事態に、呆気にとられて二人の様子を眺めていることしか出来ない。

しばらくの間、空のしゃっくり上げる声だけが続いた。

「落ち着いた?」

「……うん」

やがて、チルノが気遣うように囁いた。

空が泣き腫らした顔を上げる。

「それで、どうしたのよ? 地底で何かあつたの?」

真剣な表情でチルノが訊ねた。

一方で、『地底』という単語に反応して橙が顔を青褪めさせた。

「さとり様が、帰ってこないの」

「何、あのチビが!」

「さとり様をバカにすんな！」

空がチルノの顔面に頭突きを叩き込んだ。

「痛あ!! ——なによ、さとりが帰ってこないからどうしたってのよ!?!」

「さとり様を呼び捨てにするな! さとり様が地上に出掛けてから、もう三日も帰ってこないのよ! 本当は一日で帰ってくるはずなのに……っ! わたし心配になって……でも、どうすればいいのかわからなくて……」

最初は怒りに任せていた叫びも、不安を思い出したのか徐々に涙声になっていく。

「それで、何であたいの所に来たの?」

チルノは頭突きを受けた額を擦る手を降ろした。

不安に揺れる空の瞳を真っ直ぐに見据えて、訊ねる。

空は震えながら口を開いた。

「た……」

躊躇うように言葉が喉元で詰まる。

唾を飲み、

「助けて、チルノ!」

空は叫んだ。

傍らの橙とフランドールの心にも刺さるような、悲痛な叫びだった。

二人は思わず、チルノを見つめた。

「分かった! あたいに任せなさい!!」

一秒も躊躇うことなく、チルノは答えた。

清々しいほどの即断即決ぶりだった。

あまりのチルノらしさにフランドールが思わず笑顔を浮かべ、橙が頭を抑えた。

即答を受けて呆けた様子だった空も、徐々に安堵の笑顔へと変わっていく。

「ありがとう、チルノ……!」

「気にすんな!」

「うん！　じゃあ、これからどうしよう？」

「さとりを探そう！」

「分かった。何処を探せばいい？」

「そんなこと、あたいが知るか！」

「駄目じゃん！」

流れるように空は突っ込みを入れた。

チルノが初めて困ったように口ごもった。

「そんなこと言われても、あたかもさとりが何処にいるかなんて分からないよ」

「わたしだって、地上のことは何処に何があるかも知らないもん。だから、チルノが詳しいと思つて頼つたのに……」

「うむむつ、困つた……」

最初の勢いは何処へやら、二人は揃つて唸ることしか出来なくなつた。

幾ら頭を捻つても、良い案が出てこない。

早くも状況が行き詰る中、傍らで酷く緊張しながら様子を伺つていた橙が、諦めたように肩を落としてため息を吐いた。

「……分からなかつたら人にきく」

「お？」

視線が橙に集中する。

「チルノ。その妖怪を助けるのは、もうあんなの中で決定なのね？」

「当たり前よ！」

「じゃあ、地上と地底の間に結ばれた不可侵条約は知ってる？」

「えーと……勝手に地底に行つちや駄目だし、勝手に地上に来てても駄目つてやつ？」

「まあ、あんたは地底に行ったことあるから、その辺の取り決めは知ってるよね。そして、そのウツホつて奴は勝手に地底から出てきたワケだ」

「……橙！　親分からの命令よ、見逃しなさい！」

「別にいいけどさあ……そいつが約束破つた妖怪っていうのは変わらないんだよね。わたしじゃなくても、藍様や紫様が罰すると思うん

だ。そんな奴を、まだ助けるつもりなの？」

「までも何も、最初から迷っちゃいけないわ！ あたいは、お空を助ける！」

本当に迷いのない答えだった。

「でも、どうやって助けるかまでは考えてないんだよね？」

「うん、全然何も思い浮かばない！」

「じゃあ、助けるのは無理なんじゃない？」

「分かんないけど、とにかく助ける！」

「そこはもう揺らがないのね……」

橙は頭を掻いて、もう一度ため息を吐いた。

「——わたしが知っている限り、さとりって言えば、地霊殿の主で地底の管理者でもある大妖だね。最近、紫様からもよくその名前を聞くんだ。そして、この妖怪は地上の先代巫女と深い関わりがあるらしいって聞いたことがある」

橙が自身の持つ情報を並べて整理するように口にしていくと、何かに気付いた空が不意に声を上げた。

「あつ、そうだ！ あの巫女だ！ さとり様、あの先代巫女って人間と博麗神社に行くって言ってたんだ！」

「お師匠も関係あるの!?!」

橙は言葉を続けた。

「その博麗神社だけどね、今朝の新聞に『倒壊した』って載ってたよ」「どういうこと？」

「原因は不明だつてさ。そして、神社に住んでいる博麗霊夢と何故か先代巫女の二人が行方不明になってるって」

「霊夢とお師匠がいなくなっちゃったの!?!」

「ただし、霊夢の方は実は紫様の所に居るんだよね。これ、新聞にも載ってない秘密の情報だからね」

「お師匠は!?!」

「さとり様は!?!」

「その二人に関しては、わたしにも分からない。下っ端のわたしには教えてもらえないのか、それとも紫様達も分かかっていないのか——」

そこで橙は一呼吸の間を置き、意を決するように改めて口を開いた。

「そこで、古明地さとりと先代巫女の安否を確認する為の、わたしからの提案なんだけど——妖怪の山に行くのが良いと思う」

チルノは唐突に出てきた場所に、空はそもそも知らない名前に、揃って首を傾げた。

二人にも分かるよう、順序立てて橙が説明する。

「さっきも言ったでしょ、今朝の新聞に博麗神社のことが載ってた。紫様を除いて、その新聞が幻想郷でも一番早く神社で起こった異変に気付いて、情報を調べ上げたんだよ。」

神社で起こった事件に古明地さとりと先代巫女が関わっている可能性が高い以上、その記事を書いた本人が二人の所在について一番情報を持っていると思う。だから、訪ねるんだよ。あの新聞を書いた妖怪を——」

「妖怪？」

「そう、妖怪の山に住む天狗。今朝の『文々。新聞』を書いた、鴉天狗の射命丸文をね」

橙の話を理解して、チルノと空の表情が明るくなった。

文字通り、希望の光が差したような輝きだった。

行動の方針と決意を固めても具体的な案がなかった状況に、行くべき道筋が出来上がったのだ。

元々、考えることは苦手な代わりに行動力だけは人並みはずれている二人は、俄然やる気を湧き立てられた。

チルノにとつて、射命丸文は友達である。会って話を聞くことに何の気負いもない。

そして、そんなチルノを信頼する空にも不安などなかった。

「よしっ、妖怪の山に行つて文に会えばいいのね！」

「行くうー！」

「ちよつと待ったー！」

すぐさま行動を開始しようとする二人を、橙が慌てて止める。

「行くにしても、色々と問題があるのよ」

「なんで？ 妖怪の山の場所くらい、あたかも知ってるわよ」

「うん、山自体に辿り着くのは簡単だと思う。問題は、その先よ」

「先？」

「射命丸文に会うまでの間よ。天狗の住む集落は、山の奥にある。天狗は排他的な集団だからね、余所者はそう簡単に入れてもらえないのよ」

「余所者じゃないわよ。あたゐ、文とは友達だもん」

「どうかなあ？ 向こうはそう思っていないんじゃない。天狗が妖精相手に、真剣に取り合うとは思えないし」

「そんなことないもん！」

「わ、分かった。ごめん、泣かないですよ。射命丸文とチルノは友達なんだね」

「そうよ、頼めばきつと助けてくれるわ！」

「そうだとっても、会えるまでにまず他の天狗に門前払いを食らうと思う。集落周辺では、いつも哨戒の天狗が見張ってるって話だし、いきなり行っても事情すら聞いてもらえずに追い払われるだけだよ」

橙の話は、全く現実的な内容だった。

力を持つとはいえチルノは妖精。

橙は八雲紫に関わる者とはいえ、実際の立場は部下の更に部下といった下つ端の身分だ。

空に至っては、不可侵条約を破って地上に勝手にやって来た違反者である。

三人が徒党を組んで乗り込んだところで、門前払いされるのがオチだった。話すら聞いてもらえないだろう。

甚だ疑わしいが、チルノが本当に射命丸文と友好を結んでいることを前提として、その文と運よく他の天狗よりも先に出会えるという幸運に期待してもいいが――。

「仕方ない、強行突破ね！ 邪魔する奴がいるなら、力づくで通るっ！」

「うにゅー！ 戦うなら、わたしも頑張る！」

「人があれこれ案を考えてる横で気楽に暴走すんな、脳筋！」

再び行動を開始しようとする二人を、今度は素早い足払いで転がして止めた。

並んで倒れた二人の背中に片足ずつ乗せて、仁王立ちの姿勢で体重を掛ける。

足元でじたばたと暴れるのを無視して、橙は腕を組みながら、これからどうするか頭を悩ませた。

「——ねえ、橙。わたしなら、役に立てるんじゃないかな？」

それまでずっと、やりとりを見守っていたフランドールがおもむろに提案した。

「……フランドール様の力、ですか」

「橙なら多分思いついてたよね。わたしの立場と力なら、さすがに相手も無視出来ないと思うの」

「正直、考えてはいました。鬼の異変以降、紅魔館はもう幻想郷の一勢力として広く認められてますし、悪魔の妹の存在は一部の妖怪の中では有名です」

「あははっ、やっぱりわたしって恐れられてるんだ。噂って凄いなあ」

「でも、フランドール様はそれでいいんですか？　つまり、紅魔館の権威と自身の力で天狗を牽制するってことですよ」

「いいよ」

「……軽いですね」

「今夜は、夜明けまで自由にしていってお姉様からお墨付きを貰ってるもん。だから、わたしの好きなようにする」

「さすがに、お姉様も天狗に喧嘩を売るとは想定してないと思いますけど」

「ええ〜？　普段から『運命が見える』とかしたり顔で言っちゃってるんだから、当然こんなのお見通しに決まってるよお〜」

「ひよつとして、お姉様のことお嫌い？」

「ううん、大好き！」

「そっすか」

橙は理解することを放棄して、諦めたように息を吐いた。

さつきから、似たようなため息を繰り返してばかりだ。

自分が、これから何をしようとしているのか分かっている。
分かっている、と思う。

馬鹿なこと、拙いこと、気の進まないこと——なのに、やろうとしている自分がある。

奇しくも、方針が決まり、具体的な案が浮かび、それを実行する為の駒も揃ってしまった。

自分の小賢しい頭で、これから目的達成の為の采配をしなければならぬと思うと、橙は肩が重くて仕方がなかった。

しかし、やるしかない。

何故なら、やると決めてしまったバカな奴がいるからだ。

そのバカと自分が無関係だと割り切ってこの場から立ち去ることが出来るなら、最初から悩んじゃいない。

「チルノ」

橙は足をどけながら、言った。

「一応、作戦は決まったわ」

「おおっ！ さすがね、橙！ あたいはサイキョーだけど、あんたはサイコーだわ！」

立ち上がりながら、チルノが笑う。

その瞳に、曇りも迷いもない。

向けられる視線が、自分への信頼なのか、単なる考えなしなのか、判断がつかなかった。

橙は、またため息を吐く。

「それで、結局あたいたちはこれからどうすればいい？」

「全員で妖怪の山へ行く。天狗に会ったら、そこでまずわたしが交渉をする。絶対に先に手を出しちゃう駄目だからね」

「分かった！ お空も分かったわね？」

「うん！ よろしくお願いします！」

空が、橙とフランドールに向けて深く頭を下げた。

そして、今度こそ二人は行動を開始した。

チルノを先頭にして、妖怪の山へ向けて真っ直ぐに飛び出していく。

少し出遅れて、フランドールと橙がそれを追った。

「……フランはチルノが『引つ張ってくれる』って言ったけど」

敬語を使うのも面倒になるくらい疲れた橙は、ぼやくように独りごちた。

「わたしは違うと思うな。あいつがあまりにも考えなしだから、仕方なくついていってやってるんだ」

「そうかな？」

「そうだよ、あいつは考えなしだよ。普通、何か考えて、何をするか決めて、それから何か行動するでしょ。あいつはバカだから、『考え』の部分がごっそり抜けてるもん。だから、その結果が上手くいくわけないんだ」

「でも、今回は橙が代わりに考えてくれたんだから、きつと上手くいくよ」

「そう、そこがわたしにも分からない。なんで、わたしがあいつの代わりに頭を捻って考えなきやいけないの？　なんで、わたしはあいつの無茶がこんなになるんだろう？」

真剣に自問する橙の様子を見て、フランドールはクスクスと笑った。

「チルノの師匠がそういう人だからじゃないかな」

屈託のないフランドールの意見に、橙は思わず納得してしまった。



「——どうしよう。なんだか、大事になってきちゃった」

チルノ達四人のやりとりを、妖夢は離れた場所で聞いていた。

湖面の上に常に漂っている霧の中へ身を隠し、距離を取って、気配も殺している。

本来ならば、互いの姿はもちろん声さえ聞こえない位置にしながら会話を盗み聞き出来たのは、妖夢だけが持つ半霊のおかげだった。

文字通り自らの半身であるそれを飛ばし、共有する感覚で四人のやりとりを逐一捉えていたのだった。

先んじて地底から地上へ飛び出した空を捕捉できたのも、この能力に因るところが大きい。

燐の願いを受けて急ぎ空を追った妖夢だったが、地獄鳥である空の方が飛行能力は上だった。

地底に居る間に追いつくことは出来ず、地上でようやく発見した時には既に空はチルノ達と接触してしまっていた。

会話の途中で乱入して無理矢理連れ戻すことも考えたが、妖夢はそれを思い直した。

もしも、チルノだけだったならばそうしたかもしれない。妖精など歯牙に掛ける存在ではないからだ。

しかし、そこには八雲紫の配下である橙と、レミリア・スカーレットの妹であるフランドールがいた。

荒事にしていい相手ではない。
何よりも、空に対して力づくで事に及ぶことを避けたかった。

頼まれた燐に対してもそうだが、今の妖夢はさとりを中心とした地霊殿の住人全てに敬意を持っている。

正確に言えば、無理を言って居候させてもらっている自分を、地霊殿のヒエラルキーにおける一番下だという、蔑みにも近い認識を抱いていた。

『なんとしても空を無事に連れ帰らなければいけない』という決意と共に『空に無理強いは出来ない』という躊躇いも抱えている。

結局、妖夢は何も出来ないまま、四人の会話を聞き続けることしか出来なかった。

「妖怪の山、か」

チルノを先頭にして、四人が湖から飛び立っていく。

向かう先とそこでしようとしていることは分かっていたが、妖夢は追うことを躊躇っていた。

もちろん、自分がやるべきことの為に、ここで四人の行動を見過ごすという選択肢がないことは分かっている。

しかし、即決は出来なかった。

妖怪の山に——そこに住む天狗に関わることがどういいうことなの

か、よく分かっていたからだった。

あるいは橙以上に、四人の行動に対して危機感を覚えている。

全ての事が上手く運べば、あの四人は情報を得て、何の諍いもなく妖怪の山から帰ってこれるかもしれない。そのタイミングで合流し、空に地底へ戻ることを提案すれば、彼女がそれに反対する理由は何もないだろう。

当然ながら、妖夢にそのような楽観はなかった。

想定する最悪の事態としては、妖怪の山でやはり何らかの問題が起こり、その被害が空に及ぶことだった。

それはなんとしても防がなくてはならない。

空の為に。

燐の為に。

さとの為に。

場合によっては、天狗と戦わなくてはならない。

自分が――。

戦い――。

「う……く……っ」

右手が、無意識の内に震えていた。

妖夢は右手を左手で咄嗟に押さえた。

しかし、身体の異常は手だけではなく、呼吸が上手く出来なくなつて、軽い眩暈まで起こっていた。

――無理だ。戦うなんて。

戦いの内容が『弾幕ごっこ』だったとしても、変わりはない。

生命のやりとりではない、遊びのようなルール。安全で、ぬるい決闘。

かつて、そうして軽視していた弾幕ごっこを想定しても、妖夢の震えは止まらなかった。

戦いという形式そのもの――誰かを前にして、敵対する――それ自体に、躊躇いと恐怖を覚えて、竦んでしまうのだった。

――そもそも、私は今、刀を持っていない。だから、戦うなんて無理なんだ。

妖夢は、自分の判断にそう理由を付けた。

それがあまりに虚しい言い訳であると、何よりも本人が嫌と言うほど理解していた。

結局、自分は戦うのが怖いだけなのだ。

もう、誰であろうと目の前に敵として立たれるのが嫌なのだ。

その敵と勝負して、勝たねばならないという状況に、もう耐えられなくなってしまうのだ。

「……とにかく、追わなきや」

覚悟など出来ていない。

しかし、黙って見過ごすことも自分には許されていない。

空を助けなければならぬ——半ば強迫観念にも近い理由の後押しを受けて、妖夢は四人を追うべく飛び立った。

何もしなければ、自分は居るべき場所を失ってしまう。

さとり達に失望されて、最後に逃げる場所さえ無くなってしまう。

それが怖かった。

怖いから、やらなければいけないかった。

それこそ、自分が誰かに助けて欲しかった。

しかし、自分が助けを求められる者など誰もいないことくらい分かっていた。

それが出来る数少ない内の一人である幽々子を自分から拒絶して、逃げてしまったのだから。

相手に気付かれない位置と距離を取りながら、妖夢は四人を見失わないようにじつと見つめた。

四人を見つけた当初、空自身が言っていたらしい『頼りになる友達』が本当に居たことに驚いていた。

そして、彼女達はその信頼を違えることなく、突然やってきた地底の妖怪の為に無茶な行動をしようとしている。

空の助けを求める声に、無条件で、躊躇いもなく、応えたのだ。

あの四人は、本当に友達なのだ。

不意に、かつて迷いの竹林で幽々子に言われたことが脳裏に蘇った。

——妖夢、貴女も友達を作りなさい。

あの時は、単なる戯れだと思って真剣に取り合わなかった。

しかし、あの時友達を助ける為に駆けつけたチルノが、今もまた別の友達を助ける為に奔走している。

それらの事実が、妙に心に残った。

「いいなあ……」

妖夢は無意識に呟いていた。

◇

——アレだ。ドラクエで言うところの『旅の扉』だな。

私は青娥の使った移動手段をそんな風に理解していた。

前世の知識つついか、先駆者のアイデアってマジ万能。具体的な例があると、理屈が分かってない事柄でも把握しやすくていいね！

「本当に一瞬で着いたのか」

「感覚的だけでなく、実際の時間も掛かっておりません。言ったでしょう？ 御期待は裏切りませんわ」

諏訪大社から移動した先にあった室内を、私は感心しながら見回した。

一緒に移動してきた青娥が傍らで微笑む。

相変わらず美人さんな笑顔だけど、それがドヤ顔に見えるのは間違いじゃないはずだ。

青娥って自分の力を誇っているというか、褒めてもらいたい願望みたいなものがある気がするんだよね。

なので、とりあえず『さすがだな』と相槌を打っておいた。

実際に、さすがの一言である。

守矢神社で青娥の用意した巫女服にすぐさま着替え終えたが、神奈子様達の移動スピードを考える限り、どう考えても普通に移動したのでは追いつけない差がついてしまっていた。

神奈子様が事を起こすまでに間に合うのか——？

具体的にはあの世から駆けつける悟空のような心境だった私。

オラが行くまで持ちこたえてくれ、諏訪子様……！

しかし、青娥が選んだ手段は私の小賢しい発想を超えるものだった。

そう、あれは言うならば——何だろう？

多分、具体的な仙人の術として確立したものなのだろうが、なんちやって巫女である私には術の名前すら分からなかった。

ただ目の前で青娥がやっていた行動とその結果を理解するだけである。

まず、青娥が準備したのは自前のキャリーケースの中から取り出した水筒と、神社の中にあつた大きな器だった。

後者に関しては、どう見ても重要文化財っぽい大皿だった。っていうか、展示物だった。当然、青娥はそんなこと気にしない。私も全力で無視。

とにかく、用意した器に水筒の中身を注いだ。

一見すると、それはただの水だった。

いや、本当に何の変哲もない水だったのかもしれない。

重要なのは、その後で青娥がやってみせた術だ。

ケースの中から更に取り出したのは、先端に装飾の付いた細長い棒——私の前世の知識にあつた、原作で青娥がかんざし代わりに髪に差していた『どんなに硬い壁にも穴を開けられる鑿(のみ)』——だった。

それを、器に張られた水の表面に向けた。

青娥は低い声で何かを唱えながら、先端を水面につけ、こちらも何らかの模様か言葉のようなものを書き始める。

不思議なことに、青娥が幾ら書いても、いったん水の表面に書かれた文字は、そのまま水の上に浮かんで、消えなかった。

水の中で淡い光を放つ不思議な文字が、器の中を少しずつ埋め尽くしていく。

その様子を同じく傍で見ていた早苗は何か理解しているかのようには頷いていたが、一方の私は『うわー、すごく術っぽい』と呆けたように見ているだけの馬鹿だった。

そんなだから、青娥が手を止めて『出来ました』と言うまで、術が

完成したことすら分からなかった。

——さあ、これで『道』は繋がりました。今、入り口を開けます。行きましよう。

最後に青娥は鑿を水の中心に差し込み、促されるままに私はそこへ飛び込んだ。

そして、気が付いた時にはここに到着していたのである。

術の効果だけ見れば、テレポートの一種だと理解出来るが——うむ、ここは『仙術』とか『神仙術』とか呼んだ方が、らしいしカッコいいな。

しかし、移動したのは分かったが……なんで見覚えのある風呂場なんだ？

「ここは、青娥の家か？」

「はい、そうです」

「何故、風呂場なんだ？」

「あの水筒に入っていた物は、ここの湯船に張っておいたものと同じ水なのですよ」

言われて振り返ってみれば、確かに。私達は背後には、水の満たされたバスタブがあった。

理屈は分からないが、私達は諏訪大社で術を施した水に飛び込んで、この風呂場の水から出てきたということなのだろう。

「元々、こうして戻る為の準備をしていたのか？」

私が訊ねると、青娥は微笑んだ。

「ここは私の拠点ですから、色々と細工が出来るのですよ。もう戻らつもりはありませんでしたが、万が一の時の為に備えておりました。役に立って何よりです」

本当にね、超助かりました。

さすが青娥にやん、『こんなこともあろうかと！』を素でやってしまうんだな。もしくは『それはどうかな？』と言えるデュエル。

「しかし、これで本当に神奈子様達の先回りが出来たのか？」

風呂場から出ながら、私は青娥に訊いた。

確かに一瞬で移動が出来たので、開いていた距離や時間の差は無く

なり、むしろ先んじて目的地に辿り着けたことになる。

ただし、それは神奈子様達の向かっていた場所がここだったらの話だ。

これで見当違いな場所にやって来てしまっていたら、眼も当てられない。

それに対して、青娥は落ち着き払って答えた。

「ええ。あの二柱が向かった方向、そして『人の多い、都心を目指している』という言葉からして、まず間違いありませんわ」

確かに、諏訪子様がそう言っていた。

私はそれが県内の市街地かと思っていたのだが、青娥の家までやって来たということは違うんだな。もっと別の場所だったか。

「はい。『都心』と言うのなら、より相応しい場所があります」

青娥の言葉を聞きながら、私は家の玄関を開けた。

途端、凄まじい風が吹き込み、顔を顰めた。

叩きつけるような強風と雨が全身を襲う。

外は嵐になっていた。

諏訪の街を襲っていたものと同程度、同じ種類の嵐だ。

「……なるほど、これは間違いないな」

この嵐は、神奈子様が近づいてきている証拠だ。

しかし、気配の方は感じない。

未だ、移動中というところか？

「いえ、正確な目的地はここではありません。私達も少し移動する必要があるでしょう」

「何処へ向かえばいい？」

「先代様、私達が初めて出会った場所を覚えていますか？」

えっ、あそこなの!?

——なるほど。

私は思わず納得してしまった。

確かに、あそこはビルの林立する人口密集地だ。

青娥の言うとおり『都心』として上げるならば、『あそこ』ほど相応しい場所はない。

最初に幻想郷から『あそこ』に降り立った時には、情報も不足して具体的な地名が分かっていたいなかった。

そんなことを気にしている余裕はなかったし、漠然とした『近代的な街』という認識しかしていなかったのだ。

神奈子様達に会いに行く為に色々と周辺地域を調べる過程で、自分の居る場所の名前を知った時は本当に驚いたものだ。

日本でも代表的な『都会』だった。

青娥の家は中心部から離れた住宅街の一角にあるが、それでもここを含めた一帯が神奈子様達の目指す『人の多い都心』の一部には違いない。

そして、私とさとりが幻想入りした場所——まさか、その始まりの場所へ、終わりの時になって戻ることになるとは。

感慨深いっつーか、なんっつーか……。

「私の予想ですと、あそこから更に移動した方が良いと思います。神様も、きつと分かりやすい目印を目指して移動しているでしょうしね」

「『分かりやすい目印』だと？」

「ええ」

青娥は言った。

「東京都庁です」



——最初、人々はそれを単なる異常気象だと思っていた。

人と文明の結集する眠らない街。常に人工の光が満ちるその場所に、真の闇が訪れることはない。

黒雲が僅かな月明かりさえ遮る深夜に、水を直接ぶちまけたかのような豪雨が降り注ぐ。

夜の帳の上に、更にもう一枚の分厚い布を被せたような、一寸先の視界さえ確保出来ない嵐が街を襲っていた。

それは突然の襲来だった。

あらゆる情報機関が、このあまりに急激な天候の変化を予測することが出来なかった。

あつという間に交通機関の一部が麻痺し、一部の地域には避難勧告が発令される。

しかし、それでも街の住人達の危機感は薄かった。

唐突な状況の変化に認識が追いついていないというのもあるかもしれない。

深夜というのにも影響している。大抵の人間が活発に出歩くような時間帯ではない。交通量は少なく、ほとんどの人間が屋内に居た。

外で荒れ狂う激しい嵐に、一部の人間が睡眠を妨げられ、夜を活動時間とする一般的でない人間が仕事の中断を余儀なくされる。

既に天候が悪化した状況の最中、ようやく様々なネットワークで送信され始めた情報を睨み、対応の遅さに悪態を吐く。

心配性な人間や用心深い人間などの一部の者達が、危機感を抱き始める。

しかし、その危機感すら現状ではズレたものでしかなかった。

文明の利器に守られ、これまで平穏な日々を過ごしてきた都市の人々は、状況を正確に理解し、認識することが出来なかった。

明日も『平穏』の範疇にある日常が来るのが当たり前だと思っていた。

この自分の日常を襲う直接的な被害は、帰宅や出勤時間の遅れぐらいだと思っていた。

仮に大きな事故が起こったとしても、それはパソコンやスマートフォン画面越しに伝わる単なる災害情報に過ぎないと思っていた。

実際に、その通りだった。

街は広く、被害の範囲があまりに局所的だったので、多くの人々はそれを知ることさえなかった。

しかし、確かに。

その場に居合わせた不幸な人々は。

見た。

聞いた。

感じた。

思い出した。

——人間が圧倒的な力によって無造作に蹴散らされる恐怖を。

最初に、風と雨が止んだ。

何の前触れもない、突然としか言いようのない変化だった。

アスファルトを抉るような雨の重い音と、コンクリート製の建物さえ震動させるような風の音が、同時に止んだ。

訪れたのは完全な静寂だった。

雨は一滴も落ちなくなり、大気は完全な無風となった。

自然な現象とはとても思えない異常な事態を、しかし人々は常識的な思考で理解しようとした。

台風の日と呼ばれるような天候の空洞に入ったことで、このような状況が起こったのではないかと考えた。

それ以上の考察はなされなかった。

状況は更に、そして矢継ぎ早に変化していった。

時間が停止したかのような空白の中で、今度は地面が揺れた。

地震か——と、身構えることはおろか、不安を感じる間もなかった。

ビル群の間を伸びる道路の一部が盛り上がり、水泡のように膨れたそれは次の瞬間破裂した。

砕けたアスファルトが周囲に飛び散り、ビルにぶつかって窓ガラスを割る。

地殻変動による地面の隆起現象だと考える方が自然だが、実際の見ただ目では単純に地下で何かが発火して衝撃が飛び出したようにしか見えない。いずれにしても常識では考えられない事態だった。

しかし、現場に居た人間の大半は、突然の事態にただパニックになるだけで、そのような冷静な考察をする余裕などあるわけがなかった。

そして、事態は更に続いた。

地上で異常が起こったのとほぼ同時に、完全に風の沈静化していた上空から突風が吹き降ろしてきたのだ。

いや、『風』ではなかった。

それはもはや衝撃波だった。

嵐によつて発生したものだとしても明らかに異常な空気の塊が、丁度隆起の起こったビル群の間で炸裂し、周囲一帯を吹き飛ばした。

ビルの窓は全て割れ、道路に沿つて設置されていた街灯と街路樹が一本残らずへし折れた。路肩に駐車されていた乗用車が吹き飛ばされ、大型トラックが横転する。

そこへ堰き止めていたダムが決壊したかのように、再び雨が濁流の如く降り注いだ。

吹き荒れる風は、強さこそ先程と変わらないものの、何処から吹いてきているのか分からないほど滅茶苦茶だった。北か南か、東か西か。果ては真上から吹いてさえいる。

それは『東京』と呼ばれる巨大な都市からすれば、ごく一部で起こつた事態だった。

しかし、それは確かに、居合わせた多くの人間を恐怖させた。

唐突な。

理不尽な。

圧倒的な。

人々はそれを恐るべき『災害』だと実感した。

——しかし、それが『神の怒り』であると理解する者はいなかった。



東京都庁——それは東京という街の政（まつりごと）の中心となる場所である。

密集するビル群の中でも一際巨大なその建物の真上で、神奈子は眼下を睥睨していた。

嵐を率いて山を越え、稲妻と共に空を走つて、ここまでやってきたのだ。

渦巻く黒雲を背に、神奈子は空中に佇んでいた。

周囲では風が唸り、稲光が瞬き、叩きつけるような雨が降り注いでいるが、神奈子の体は濡れもしなければ揺らぎもしない。

彼女こそが、この嵐の中心だからだ。

嵐は閉鎖空間のように、眼下の街だけを覆っていた。

突然発生した超自然的な脅威に対して、街の住人がどのように反応しているのか、神奈子の眼には映っていた。

驚き、戸惑い、不安になり、恐怖や危機感を感じている者がいる。

しかし、それは思った以上に少なく、薄い反応だった。

人々の心は、現在の状況に対してあまり動いていなかった。

自分達の陥っている状況を、理屈で説明出来るものだと思っているからだ。

自然の脅威を、自分達の力で防ぐことが出来ると信じているからだ。

——人はもはや神の力を恐れない。

——人はもはや神の力を信じはしない。

神奈子は、瞼を閉じた。

その静かな仕草に反応するように、周囲で荒れ狂っていた嵐が不意に止んだ。

神の怒りが収まったかのようにだった。

「……もはや、この国は神の住む国にあらず」

神奈子が右手をゆっくりと頭上に掲げた。

「人が作り、人が支配し、人が動かす国。眼に見えるものしか存在せず、触れられるものしか認められない国」

開いた右手の上に『力』が収束する。

「此処が、その国の中心となる場所ならば」

力——そうとしか表現出来ないものだった。

風と雨と雷が、形と色を変えて、純粋な無形無色の力となり、神奈子の右手に集まっていく。

力の塊は、巨大な風船の如く膨張していった。

「今、此処で起こること——全て」

閉ざしていた眼が開かれた。

「人よ！ お前達が認めた現実に相違ないなあ!!」

叫び、神奈子は右手を振り下ろした。

巨大な力の塊——人ならざる眼には白色の光の球体に見えるもの——が、眼下の街に向けて放たれた。

街全体を覆うほどの嵐が一点に収束された塊である。炸裂すれば、どれ程の破壊をもたらすか容易に想像出来た。

それが隕石の如く上空から地上の街の一角に飛来する。

しかし、それが地面に到達することはなかった。

着弾地点となる道路のアスファルトが砕け、その中から巨大な『手』が突き出てきたのだ。

文字通り『手』としか言いようのない物体だった。

ちよつとしたビルほどの長さ太さを持ち、五本の指も備えた『手』が、平手の形で地面から斜め上に突き出ていた。

その『手』を形成する物は土くれだった。

地上から突き出された『手』は、上空から飛来する力の塊を、掌で受け止めた。

瞬間、眼に見えない大爆発が起こった。

空中で炸裂した力が周囲に拡散し、ビルの窓は全て割れ、道路に沿って設置されていた街灯と街路樹が一本残らずへし折れた。路肩に駐車されていた乗用車が吹き飛ばされ、大型トラックが横転する。辺りの被害は甚大だった。

しかし、それでも地上で炸裂することでもたらされる破壊に比べれば、幾分マシな被害だった。

神奈子は目の前で起こった出来事を睨んだ。

神の起こそうとした理不尽な破壊を、同じく理不尽に防いだもの——。

「——諏訪子」

元々が土で形成されていた為か、破壊の力を受け止めたことでポロポロになった『手』の指先から、諏訪子が姿を現した。

見上げる形で、上空の神奈子を睨みつける。

「邪魔をするな」

「嫌だね。わたしは邪魔をしに来たんだ」

「今更、神が人を守って何の意味がある？ 人は理不尽に降りかかる

災厄に対して、もう神に嘆きもしなければ、助けを乞うてもいない」「神が人を理不尽に殺して、それこそ今更何の意味があるってんだ！」
諏訪子は叫んだ。

「神奈子、あんたは言ったね。『人に神を思い出させてやる』と——。でも、本気じゃないんだろう？　本気で、そんなことが出来るなんて思っちゃいないんだろう？」

神奈子は答えない。

「分かっているはずなんだ、嫌ってほど！　あんたが自分で言ったじゃないか！　もう、人は『神に嘆きもしなければ、乞いもしない』って！

昔は、こういった理不尽な災害は神や妖怪の仕業だった。彼らは、わたし達に恨み言をぶつけた。そうやって恨まれることもまた神の役割だった。

だけど、今はもう違う！　周りを見なよ！　理屈では説明出来ない異常気象が街を破壊して、起こるはずのない地震が起こって地面を割った挙句に、大勢の人が何の意味もなく死ぬ——この被害はなんて世の中に伝えられると思う？

神の仕業か？　神様が怒って人間に理不尽な罰を下しましたって、朝のニュースで報道されるのか？

——そんなワケがないだろう!!　どれだけ多くの物が壊されて、大勢が死んだとしても、人は自分達の理屈だけで納得するんだ！　そこに『神の仕業』なんて言葉は欠片も挟まれない！　もう、人は神を恨んだりなんてしないんだよ！　理不尽への嘆きは、科学的根拠を持った推論や他の偉い人間の責任にして処理されていくんだ!!」

嵐にも掻き消されないほどの勢いで捲くし立てる諏訪子の言葉を、神奈子は黙って聞いていた。

遠くから幾つものサイレンの音が近づいてくる。
損壊した建物や車両の中から、人々の苦悶や助けを呼ぶ声が聞こえる。

二柱の神には、それらが全て聞こえていた。

「神奈子、お前のやっていることは無意味だ」

現実を理解させるように、諏訪子は断言した。

それに応えるように、神奈子がゆつくりと口を開いた。

「いつまで続けられるんだ？」

「え？」

唐突な問い掛けに、諏訪子は呆けた声を上げた。

「全ての災厄が人の因果によって生まれるわけじゃない。むしろ、人の関わらない理によって起こるものの方が多いんだ。そんな誰の責任でもない不幸に対して、誰かが責任を取り続け、人の理の中に納め続ける——そんなこと、いつまで続けられると思うんだ？」

「神奈子……」

「そして、それが破綻した時——その時は一体『誰』が責任を取ればいいんだ？」

そう言つて、神奈子は小さく微笑んだ。

哀しみと、何よりも諦めを含んだ空虚な笑みだった。

その笑みに秘められた神奈子の真意が一体どんなものなのか、諏訪子には分からなかった。

しかし、ただ何も理解せずに錯乱している者の笑い方には思えなかった。

「なあ、諏訪子」

「——」

「私達に出来ることは、本当に何も無いのか？ この世界に、本当に神は不要か？」

神奈子は笑みを隠すように片手で顔を覆い、

「私を止めなければ——」

その手を降ろした時、神奈子の顔付きは元に戻っていた。

街に破壊をもたらそうとした時の、無残なまでの覚悟の表情に。

「それを納得させてみせろ！」

神奈子は諏訪子に向けて、収束した風の弾丸を撃ち放った。

既に先の攻撃を受け止めたことで半壊していた土の手が、風弾を受けて粉々に砕け散る。

飛び散った土くれは空中で消滅し、周囲の人々にはただ何かが爆発

する音だけが聞こえていた。彼らは自分達のすぐ傍で神同士が争っているなど知りもしなかった。

着弾の寸前で、諏訪子はその場から飛び上がり、攻撃を避けていた。彼女もまた幻想の力を用いて空を飛び、神奈子に襲い掛かった。

何も持たない両手には、鉄輪が生み出される。

諏訪子は叫んでいた。

しかし、悪態と思われるそれは何処にも届かず、嵐の中に掻き消されていった。

神奈子に対するものか。

自分に対するものか。

あるいは、別の誰へのものか。

神が同じ神以外の誰に悪態を吐けるのか、分かりはしなかったが。

「神奈子——！」

「諏訪子——！」

二つの叫びが空中で激突した。

激しい嵐の最中、二柱の神格が付いては離れ、離れては行く。

人の眼では嵐と区別がつかないことは、神の戦いだった。

いや、果たしてそれを『戦い』と表現していいものか。

人の道理で表せるものではなかった。

拳を交えるわけでも、刃を打ち合うわけでもない。

ただ力がぶつかり合い、それを無限に繰り返す。

仮にそれを戦いの形で表すならば、神奈子と諏訪子の力は互角のは

ずだった。

互いに信仰の薄れた現代で生き残ってきた神である。

自らに残された力に差はほとんど無く、それを身を削るよう引き出しながら戦っている点は同じだ。

しかし、同じ条件の二人の間には有利と不利が生まれ始めていた。

「雲よー！」

神奈子の呼びかけに応えるように、掲げた手の上に雷雲が集まり、そこから稲妻が諏訪子に向けて放たれた。

咄嗟にそれを受け止めた鉄輪が、真つ黒に朽ちて、ボロボロと手か

ら崩れ落ちる。

「くそっ、やっぱり駄目か！」

「お前では私には勝てんぞ！」

無防備になった諏訪子へ、神奈子がぶつかると同時に急接近する。

伸ばした右手が、細い首を掴んだ。

そのまま勢いを殺さず、近くの高層ビルに諏訪子の体を叩きつける。

強化ガラスの窓が大きくへこみ、無数の亀裂が走った。

「お前は一度、私に負けている。神話を塗り替えるほどの信仰が、今の自分にあると思っているのか」

神奈子が獰猛に笑って、言った。

かつて神代の頃に、諏訪子の国は神奈子によって攻め落とされ、支配されていた。

その事實は、幻想の歴史として現代にも伝わっている。それが人々の信仰にも影響しているのだ。

——人々は、八坂神奈子が洩矢諏訪子に勝った神話を信じている。

故に、この先何度戦っても諏訪子は神奈子には勝てない。そういう筋の通った道理なのだった。

神自身の意思や力で、それを覆すことは出来ない。

神話をなぞるまま、諏訪子の武器である鉄輪は、神奈子の力によって朽ち果ててしまった。時間と回数を重ねても、その結果は不変のままである。

人の信仰に存在と力が左右される神にとって、逃れられない因果だった。

「お前のやろうとしていることこそ無意味だったな、諏訪子」

「神奈子……！」

「馬鹿な奴だ、早苗と一緒に行けばよかつたものを。もう間に合わん。お前もここで、私と共に消える」

「はっ！ わたしと心中する気はないんだろう？」

「ああ、だから先に逝け」

神奈子が首を掴む手に力を込めた。

絞り出された空気と共に、諏訪子の口から苦悶の声が吐き出される。

人間のように窒息するわけではない。

しかし、神による『殺す』という行為が、同じ神を死に至らしめるのだ。

「私がこれから殺す人間の怨嗟が、あるいは崇り神であるお前を生かすかもしれない。もつとも——」

空いたもう片方の腕を振り上げる。

「神を恨んでくれるといいがな！」

神奈子の手には、地上に向けて放ったものと同じ種類の力が、今度は直接込められていた。

神すらも殺し得る一撃が、諏訪子に向けて振り下ろされる。

その一撃を、諏訪子は見開いた眼で睨んでいた。

反撃のチャンスは——ない。

心に諦めが浮かび、早苗の顔が脳裏に過ぎった。

その瞬間。

背後の窓が、ビルの内側から破られた。

丁度、諏訪子の頭を挟む左右の位置から、二本の腕が飛び出してきたのだ。

開いた掌には霊的な力が宿り、向かい合う神奈子に突きつけられる。

『波ああーっ!!』

両手から光の波動が放射され、神奈子の体は成す術も無く吹き飛ばされた。

それでも体勢を立て直し、空中で停止する。

突然にして強烈な不意打ちを食らい、神奈子は険しい目付きで再び前を見据えた。

放たれた力の余波によって、両手の突き出していた窓はもちろん、その隣に並ぶ窓や枠が根こそぎ内側から破壊されていた。

一階層分の窓が軒並み破壊され、横長の穴がぼっかりと空いたビルの中には、一人の人間が佇んでいた。

その両手には、開放された諏訪子を横抱きに抱えている。

「お前は……っ」

予想外の横槍に、神奈子は驚愕していた。

吹き荒れる風に、白い袖と赤い袴が揺れる。

先程一撃を放った両手は、鍛錬の跡が無数の傷として刻まれた異形の物だ。

その者の傍らには、陰陽の凶を模した玉が一個浮いている。

自身に向けられる視線と、その鋭さとは裏腹に秘められた信仰を感じ取って、神奈子は目の前に佇む現実を受け入れざるを得なくなつた。

「先代巫女——！」

嵐の中、神と巫女は対峙した。

其の四十九「乾」

清く正しい射命丸文らしからぬ一日だった。

朝から晩まで自宅に籠もったまま、机と向かい合っていたのだ。

特ダネは自分の足で稼ぐもの——そういつたモットーを持つ文にとって、調子が良からうが悪からうが、とにかく外を飛び回って新しい出来事を探すのが日常である。

長年、鴉天狗としての仕事をこなす上で、それだけは欠かしたことがない。必要性だけでなく、趣味でもあるからだ。

それが出来なかった。

やる気が起きなかった。

文は机の前で悶々としていた。

「くそっ……それもこれも、あの先代巫女のせいだわ……」

苛立ちは、自然と向くべき場所へ向けられた。

理不尽な言い掛かりだとは思わなかった。

少なくとも、文自身は今の自分が普段と違う調子である理由を先代巫女に見出している。

彼女のことを考えると、モヤモヤとした形容し難い気分になるからだ。

三日前に事件が起きた。

博麗神社が突如、倒壊したのだ。

事が起こった翌日、文はいつものように幻想郷を飛び回っていた。

潰れた博麗神社を偶然発見して、その日の内に情報を掻き集め、倒壊の原因が極めて不自然なものであること、当時神社に居たはずの博麗霊夢が姿を消したことを、そして——先代巫女がその日神社を訪れる予定になっていたことを知った。

その時、得体の知れない不安が文の胸の内に小さな染みのように湧いた。

作業をする傍ら、気のせいだと思い込んでいたその染みは徐々に大きくなっていった。

何とか記事にはしたものの、新聞を配り終えてやるべきことがひと

段落ついた途端、抑えていたものが溢れ出したかのように体中を縛り、そして動けなくなつた。

発行した文々。新聞の出来は、決して満足のいくものではなかつた。記事に話題性こそあつたものの、肝心の情報が不足していた。次の新聞の為に、調べるべき事柄、追求すべき疑問は幾らでもある。

神社が倒壊した本当の理由は何なのか？

博麗霊夢は何処へ行ったのか？

八雲紫はこの事を何処まで把握しているのか？

そして——巻き込まれた先代巫女はどうなつたのか？

しかし、結局丸一日家から出られずに過ごした。

考えれば考えるほど、腰が重くなつた。

知ることが、怖くなつた。

——あの子のことを、より深く知ることが。

「どうして、今更……」

先代巫女の過去について、自分ほど深く知る者はそうはいない。何せ、幼少時代から知っているのだ。

あの八雲紫よりも先に、妖怪の山で幼かつた彼女を見つけた。

その成長に、不本意ながら関わりもした。

何度も新聞の記事にした。

仮に百歩譲つて、今の自分が先代巫女の安否について案じているとしよう。

しかし、彼女の無茶や無謀、その結果の負傷などは今に始まつたことではない。昔から、幾度となくあつた話だ。

あの頃と現在の違いは何なのか。

何時、変わり始めた。

現役時代に妖怪の山で再会した時？

引退後に地底でのスクープを知った時？

鬼の異変で初めて彼女が命懸けで戦う姿を見た時？

それとも、やはり——四季映姫に彼女の死後の秘密を聞いた時なのか？

文には分からなかつた。

天狗としての長年の経験をもってしても解けない、初めての苦悩を
持て余していた。

「——ああつ、イライラする！　こんな私じゃないわ！」
意を決するように、重い腰を座りっぱなしだった椅子から持ち上げ
る。

気分転換とはとてもいれないが、このまま無為に時間を過ごしても
不毛であることくらいは分かっている。

既に時間は深夜過ぎだった。

机から立ち上がった文は振り返って、部屋に視線を移した。

そこには、床に座り込んだ姿勢のまま眼を瞑って集中するはたての
姿があった。

「……あんだ、まだやってたの？」

「うるさい！　話し掛けないで、もう少しなのよ……っ！」

「丸一日そうやってたクセに何言ってるのよ。あんたも大概だわ」

文々。新聞を読んだはたてが、先代の安否を確かめる為に文の所へ
飛び込んできたのは今朝方のことだった。

文字通り、窓を破って飛び込んできた。

抗議する間もなく文は詰め寄られ、鬼気迫る勢いに洗いざらいの情
報を教えたが、結局それらがはたての疑問と不安を解消することはな
かった。

文が知らないものを、はたてが知るはずもない。

先代巫女の所在と安否を探る手段は、手詰まりとなった。

しかし、はたては諦めていなかった。

「先代の居場所を念写する、って……やっぱり無理なのよ」

「まだまだ！　あたしの集中力が足りないだけなのよ！」

胡座をかき、両手で握ったカメラを、射抜くかのような目付きで睨
んでいる。

これが果たして何らかの成果を生んでいるのか、傍から見ている文
には分からなかったが、丸一日この状態を続けていられる集中力につ
いては感嘆すべきものがあった。

そして、僅かに期待してしまう部分もある。

はたてが持つ念写の能力は『キーワードを思い浮かべることに関連する対象を写真に収める』というものである。

かつて他人の視界を映す程度の曖昧な能力だったものを、カメラという媒体を通すことで具体的な形に完成させていた。

はたての念写には未知数の部分が多い。写真に出来るのは、別段他人の視界や他のカメラが撮った画像に限らず、肉眼で確認出来ないものの実態でも撮影することが可能なのだ。

仮に先代巫女が幻想郷以外の場所に居たとしても、はたての念写ならば捉えることが出来るのではないか——そんな淡い期待があった。

——はたてに期待する、か。やっぱり私らしくない。

一心不乱に集中するはたての背中を見てみると、心にモヤモヤとした形容し難い苛立ちにも似た感情が湧き出てくる。

普段は驚くほど頼りにならないはたてに頼ろうとしている自分への苛立ち、だけではない。

何のしがらみも躊躇いもなく、先代の安否を純粹に案じて、迷い無く助けようとするはたてへの苛立ちがあった。

文自身は自覚していなかったが、それは嫉妬に近い感情だった。

「ふんぐががががっ！ 見えろ視えろみえろミエロオオ！ 覚醒しろ、あたしの力！ あの子の姿を映したまへえええっ！」

「――」

傍から見れば滑稽にしか思えないような奇声と奇怪な動きで、それでも全力でやり遂げようとするはたてに対し、文は気付かれないようにため息を吐いた。

なんかムカつくから蹴ってやろうと思っていた足を引つ込める。

「まあいいか、これで先代巫女が見つかったら儲けものですね」

自分に言い訳するように呟いた。

その時、玄関の扉を叩く音が聞こえた。

文は窓の外を一瞥し、今が真夜中であることを改めて確認した。

一般的な訪問と考えるには、おかしなタイミングである。

次にはたての方に視線を移し、相変わらずの奇行を確認すると、肩を竦めて玄関に向かった。

「夜分、恐れ入ります」

玄関を開けた先に立っていたのは、権だった。

思わず不機嫌さが表情に出てしまう。

「……本当に恐れ入る厚かましきね。今、何時なのか分かっているのかしら？」

「申し訳ありません」

とりあえずの嫌味を言って落ち着く為の間を空け、文は改めて問い掛けた。

「それで、何か用？」

「面会を望む者がありましたので、内密に対応を伺いに参りました」

「は？ 面会？ 私に？」

「はい」

「こんな夜中に？」

「はい」

「偉い人？」

「判断しかねます」

「――」

文は話の内容を吟味した。

相も変わらず権の口調は愛想が無い。しかし、同時に嘘や無駄が無いことも知っている。

普段からやたらと自分に払われる謎の敬意から考えて、何の変哲も無い面会者を時間帯も弁えずに通すとは思えなかった。

となると、権が特別な配慮をするほどの『何か』がその訪問者にはあるのだ。

「……その訪問者は？」

「集落の外で待たせてあります」

「ということは、私に話を持ってきたのはあんたの独断ってことね」

「はい。処罰は後で如何様にも――」

「いや、しないから。相変わらず行動の一つ一つが重いわね、あんた」

「申し訳ありま――」

「人ん家の前で土下座しようとするな！ ああ、もうっ。分かったわ

よ、今行くわ」

文は一旦、家の中へと引き返した。

出掛けるとなると、部屋に陣取っているはたてにも声を掛ける必要がある。

本来ならば家から追い出すところだが、状況的にそれは出来なかった。成果が出るにせよ出ないにせよ、はたて自身が満足するまでここから動こうとはしないだろう。

そして、文も出来れば何らかの結果を出して欲しいと望んでいる。

「はたて、私はちよつと出掛けてくるからあんたは——」

パキツ、と。割れるような乾いた音が聞こえた。

部屋を覗き込んだ文の視界に、無言で肩を震わせるはたての背中が入った。

「はたて……?」

勢い良くはたてが振り返った。

その顔には歡喜の色が満面に浮かんでいた。

あと、涙と鼻水と涎も出ていた。

「——いやった! やったわ、文! ついに念写出来たわよ!!」

そう叫んで、はたては握っていたカメラを文の眼前に突きつけた。

同じカメラであっても、文の持つ物とは大分形状や機能が異なる機械である。かなりの小型でボタンも多く、何より撮った写真をその場で備え付けの画面に映すことが可能なのだ。

その画面を文は見た。

はたての集中しすぎた力によって負荷を受けたのか、画面には斜めに大きな罅が走っている。

画像自体もぼやけていて、イマイチはつきりと輪郭を掴めない。

しかし、それでも大体の内容を把握することは出来た。

その上で、文は訝しげな表情を浮かべた。

「これって、妖怪の山よね。でも……」

写真には見慣れた妖怪の山が映っていた。

それが具体的に何処に当たるのかも、長年住み続けている文には分かる。

しかし、それはあくまで背景に過ぎなかった。

「この湖と神社は何なの？」

写真には、山中にも関わらず広がる湖とその傍に建つ大きな神社が映っていた。

◇

——嵐の決戦。

言葉にするとカッコいいが、現場に立たされている身としてはシャレにならないくらい緊張感が背筋に走っている。

嵐という状況は、それだけで不利だ。

まず吹き込んでくる雨が眼に入って痛い。

っていうか、勢いが強すぎて顔とか、もう全身痛い。何コレ、鉛玉でも降ってんの？ ってくらい雨粒が重い。

まあ、目の前の大穴は自分で開けたんだけど。

私は雨に負けないように足元を踏み締めながら、ゆつくりと抱き上げていた諏訪子様を床に降ろした。

もちろん、神奈子様から視線は外さない。一瞬の油断が命取りだ。

ビルの中に居ても感じる凄まじい風雨の中、神奈子様は空中で微動だにせずに仁王立ちしていた。

先程私が放った、ビルに大穴を空ける程度の威力の博麗波を受けたはずだが、少なくとも外見からはダメージは微塵も感じさせなかった。

分かってたけど、ラスボスの風格やべえな。

「……どうして来たの？」

傍らの諏訪子様が言った。

忠告を無視してこの場へ駆けつけた私に向ける問い掛けだが、視線自体は私と同じように神奈子様から外していない。

今、何を一番に警戒すべきか分かっているのだ。

「神奈子様を止め、諏訪子様と共に東風谷早苗の元へ連れ戻す為にやって来ました」

「あの妖怪のことは諦めたってわけ？」

「夜が明けるまでに事を収めれば間に合います」

「大した自信だね」

「自信はありません。これは賭けです」

「あなたの大切なものを賭ける価値はあると思う？」

「思います」

諏訪子様の方を見ずに、私は即答した。

「……そっか」

唸る風の音の中、諏訪子様の呟きがかろうじて聞こえた。

ほっと息を吐くような、気のせいでなければ嬉しそうに感じる声色だった。

「分かった。なら、あんたに協力するよ。そして、あんたもあの妖怪も絶対に幻想郷へ帰してやる」

「そして、諏訪子様と神奈子様も」

「巫女が神様を気遣うなんて百年早いんだよ、バーカ」

諏訪子様が小さく笑いながら言った。

「それで、多少の勝算はあつてのことだよね？」

「はい。青娥が準備をしています」

これは本当のことだった。

あの家で、私は青娥と一旦別れている。

彼女が言うには『神奈子様をここから諏訪大社へ移動させる為の仕込みを行う』という話だ。

詳細は聞けなかったが、彼女の実績を考えれば任せても問題ないだろう。

「あの邪仙がねえ……気は進まないけど、腕は信用してもいいかな」

諏訪子様も同じような見解らしい。

「何にせよ、やっぱり前提として神奈子を大人しくさせる必要があるか」

「はい」

つまり、ボス戦は不可避である。

先程から一瞬たりとも意識は逸らさなかったが、改めて神奈子様と

の対峙に集中する。

意外なことに、私と諏訪子様とのやりとりを見逃すように、神奈子様は不敵な笑みを浮かべながら黙ってこちらを眺めていた。

「――打ち合わせは終わったようだな」

何気ない台詞に纏わり付く威圧感。パネエ。

しかし、気圧されるわけにはいかない。

絶対に負けるわけにはいかないんだ。これまで楽な戦いをしてきたわけじゃないが、今はより一層そう思う。

何せ、この戦いの行方にさとの命が懸かっているのだから！

「覚悟も決まっている様子。ならば言葉は不要だ、先代巫女」

ありがとうございます、神奈子様。

では、御言葉に甘えまして――。

「来い！」

定番の開幕ぶっぱ、させていただきます!!



神奈子の言葉と共に、先代が奇妙な構えに入るのを、諏訪子は見た。

片足を一分下げた半身となり、両手を腰の位置で向かい合わせるように持つていく。

「は」

その構えに入った途端、両手の間に出来た空間に凄まじい勢いで力が集まり始めた。

「く」

諏訪子は驚愕した。

球状に形成され、圧縮されていく力は目の前の人間の体から生み出されたものである。

「れ」

しかし、その量は桁違いだった。

球体は光を放ち、肉眼でも確認出来るほどの密度で具現化している。

幻想が否定される世界において、これほどの純粹な靈的エネルギーを人の身から生み出すことは、常識はもちろん法則すら無視していた。

「い」

その異常の力が、外の嵐にも負けぬほどに手の中で荒れ狂っている。

先代はそれを完全に制御し、真っ直ぐに標的を見据えていた。

「先代、あんたは——」

言いかけ、諏訪子は我に返った。

周囲の異変にようやく気付く。

嵐が止んでいた。

唐突に静止した時間に覚えのある前兆を感じ取り、慌てて神奈子の方へ視線を走らせる。

神奈子の掲げた手の上には、眼下の街に大惨事を引き起こした破壊の巨弾が形成されていた。

構えた先代に対応して、神奈子もまた全力の一撃で迎え撃つべく用意していたのだ。

互いが集めた力の解放は、ほぼ同時だった。

「受けよ！」

「波ああああーっ!!」

神奈子が巨大な光の球を解き放ち、先代が裂帛の気合いと共に光の波動を撃ち出す。

計り知れない力は空中で激突した。

そして、拮抗した。

光の球はその形を崩すことなく波を押しつけ、光の波動は途切れることのない奔流となってそれを押し返す。

激しい発光を伴った二つの力は、夜の闇を蹂躪しながら押し合いを続けた。

「——っ!? 危ない！」

どちらが押し勝つのか見守っていた諏訪子は、いち早く危険に気付いた。

全力で神奈子の攻撃に抵抗する先代の体を横から攫うように抱いて、跳んだ。

ビルの奥へと逃げ込んだ瞬間、先程まで先代の居た場所を四本の柱が貫いていた。

飛来した柱の正体を見て、先代が眼を見開く。

「電柱?」

「オンバシラ代わりのつもりか、くそつたれ!」

力の激突が発する光に紛れ、死角から飛び込んできた攻撃だった。すぐさま視線を外に戻す。

しかし、既に神奈子の姿はそこには無かった。

二つの力の激突も途絶え、残滓は空中に掻き消えている。互いに力が途切れるタイミングは同じであり、対消滅し合う形で収まっていた。

これが神奈子の意図した状況であることは間違いなかった。最初から狙っていたのだ。

再び外は風と雨が渦巻いていた。

先代と諏訪子の居るビルの階層は、全ての電灯が消えて暗闇に満ちている。

人はもちろん、動く者の気配はない。

ビルに空いた穴から風雨と共に音が入り込んでくるが、室内からは一切の音がしない、奇妙な形の静寂がそこにはあった。

二人は寄り添うような立ち位置で周囲を警戒した。

暗闇で視界は遮られ、嵐の音で聴覚も役に立たない為、本来ならば神奈子の動きを捉えるのは困難な状況だった。

「――上か!」

しかし、まず先に先代が感付いた。

振り仰ぐ暇もあらばこそ、今度は先代が諏訪子の体を抱いてその場を離れる。

次の瞬間、天井を突き破って拳大の風弾が、二人の居た場所を抉った。

今度の攻撃はそれで終わらなかった。間髪入れず、二人の移動した

先へ更なる風弾が天井から降り注ぐ。

姿の見えない神奈子の攻撃は、逃げ続ける二人を正確無比に追いかけた。

「天井越しにこっちが分かるのか!」

「神なんだから気配くらい読めるさ! あんたも神奈子の位置は分かるんでしょ、さっさと反撃して!」

「申し訳ありません。小技はちよつと……」

「何その意外な弱点!? しょうがないなあ、もうっ!」

遠距離攻撃の手段に乏しい先代に代わって、諏訪子が抱えられながらも頭上に向けて反撃した。

手のひらから放つ光弾が天井を貫く。

上の階層にいる神奈子を狙っているはずだった。

しかし、降り注ぐ攻撃の勢いは一向に衰えを見せない。それどころか諏訪子の反撃は断続的で、手数では負けていた。

「もしかして、諏訪子様も——」

「変な仲間意識持たないでよ!? 力をそのまま撃ち出すっていうやり方は効率が悪いんだ。幻想を否定する作用が働くこの世界ではね」

「しかし、神奈子様の方は影響を受けているように見えません」

「現実の物質を介して力を使っているんだよ。さっきから撃ってるのは風を一点に集めた弾丸だ。雨粒でも同じことが出来るし、雷なら直接ぶつけてくるだろう。あいつには天に関わる要素を操る力がある。

逆にわたしは地に関わる要素を操る。街中は相性として最悪さ、媒介に出来る大地がほとんど無い。高層ビルの中ってことはつまり人工物に囲まれた高所。厳密には空中と同じだからね」

「ならば、一度地上に降りますか?」

「いいや、わたしのことは構うな! さっさと離して、あんたは自分のことに集中するんだよっ!」

諏訪子が先代の体を突き飛ばした。

先代が離れた瞬間、天井から降り注いだ攻撃が諏訪子に直撃した。

小さな体が何度も床を跳ねる。

その光景を、先代は見開いた眼で見ていた。

何かを叫ぼうと開きかけた口を堪えるように噛み締め、頭上を睨みつける。

天井に遮られた視界の先に神奈子の姿を幻視し、それ目掛けて跳んだ。

力を収束させた右拳を振り上げる。

足元から拳まで全身の勢いを使った必殺の一撃が、天井を貫いて、その上に立つ神奈子の体を危うい所で掠めた。

直撃こそしなかったものの、神奈子は同じ階層に降り立った先代を警戒するように間合いを取った。

「昇る竜が如き一撃——天に、即ち神仏に向ける拳の技か。無礼な」不敵な笑みを浮かべながらも、神奈子の額には冷たい汗が流れていた。

胸を掠めた拳の軌道を撫でる。

錯覚だと分かっていたが、裂傷を刻まれたような感覚がそこに残っていた。

「武道家ではないが、巫女とも思えぬ技と力だ。つくづく奇妙な奴だな。お前は一体何者だ？」

「私は武道家でも巫女でもない。私は貴女を倒す者だ！」

先代巫女は拳を構えた。

神奈子は高揚するように笑った。



「昇る竜が如き一撃——」

ささ、ささすが神奈子様。技を一度見ただけでその本質を正確に見抜くとは！

いや、これは技自体が名前を見事に体現しているからなのか。やっぱり偉大な技は違うな。

——そう、即ちこの技の名を『昇竜拳』と言う！

技の構造自体はシンプルだが、その実態には単なるアッパーカットとは違う必殺の威力が秘められているのだ。

当たれば、神と言えどもただでは済まない！

……当たらんかったけど。

で、でもそれは使った私が未熟だったただけだし！

本当なら神奈子様の胸に抉るような傷を刻んだはずだし！

むしろ、外れてよかったかもしれない。神奈子様を連れ戻す必要があるのに、必殺の技を直撃させてどうするんだという話だ。

とはいえ、ならば手加減して神奈子様を倒せるかというところと全くそんな気にはなれない。

最初に放った博麗波も、全力にも関わらず押し留められ、しかもその拮抗さえ相手の狙った隙だったのだ。

戦いの読みにおいては、神奈子様に一手先んじられていると言わざるを得ない。

加えて、遠距離攻撃をメインに据えた戦法は、私の戦闘スタイルと相性が悪かった。

拳の届かない距離から攻撃する敵と戦った経験はある。しかし、そいつらは神奈子様レベルの実力者ではなかった。

逆に神奈子様レベルの強敵に勝った経験はあるが、いずれも辛勝。しかも、勇儀と萃香は二人とも私の土俵で戦ってくれた。

詰まるところ、私はこれまで経験したことのない戦いに挑まなくてはならないのだ。

へへっ、不謹慎かもしれないねえけどよ。オラ、ワクワク……しねえ！ さとりの命が懸かっている時に、そんな余裕は持ってられない。

楽に勝てるなんて思っていないが、負けはもちろん苦戦して長引くことも避けなければならぬ。

同じ床に立ち、距離を詰めることが出来た現状——ここで一気に叩く！

「武道家ではないが、巫女とも思えぬ技と力だ。つくづく奇妙な奴だな。お前は一体何者だ？」

「私は武道家でも巫女でもない。私は貴女を倒す者だ！」

そう言っつて見事敵を瞬殺してみせたフュージョン戦士にあやかって叫ぶ。

ここは回避出来ない渾身の一撃で決めるぜ。
つていうわけで、鉄板の――。

百・式・観・音！

次の瞬間、私の拳は神奈子様の顔面に突き刺さっていた。
置き去りにされた音が、一瞬遅れて私の背後でパンツと空気が破裂
したように鳴り響く。

――やったか!?

あ、やべ。

フラグ言っちゃった。

「……見事だ。今のはかわさなかったのではなく、かわせなかった」
神奈子様は平然と喋った。

額で受けたとか、ギリギリでスウエーしてたとかではなく、急所の
『人中』に拳を受けながらも口元を小さく吊り上げている。

素直な称賛の笑みだった。

それがまた確実にノーダメージであることを物語っていた。

おかしい……何だ、この手応えは!?

「しかし、ただの拳では神は倒せないぞ」

じゃあ、ありったけの霊力を拳に込めてやる！

攻撃は通じなかったが、得意の間合いである接近戦に持ち込んだ私
は、決るようなりバーブローを打ち込んだ。

聖闘士（セイント）のように光り輝く拳が炸裂する。

あばら三本は頂いたあ！

……ダメージはおろか、体が揺るぎもしない。

「霊力も無駄だ」

――いやいやいや、いくらラスボスクラスだからってこんな絶対
おかしいよ！

ダメージが全く無いのは、ボス戦ではよくある理不尽なので、この
際良しとしよう。

しかし、打撃の影響さえ受けていないというのは明らかに変だ。

最低でも衝撃は伝わっているはずなのに、体勢が崩れるどころか皮
膚や髪さえ震えないって在り得るのか!?

結界などの見えない障壁で受けているのではなく、拳は間違いなく神奈子様の体に触れている。

ただ、手応えが全く無かった。

私の手に返ってくるはずの反動さえ感じられないのだ。

拳の衝撃は、何らかの防御に遮られることも跳ね返されることもなく、完全に神奈子様の体に通っている。

だが、まるでそのまま通り抜けてしまっているかのような――。

「実体を持たない今の私を、拳で捉えることは出来ない。忘れたか？」

「ここは神の存在を否定する世界だぞ」

「――」

「そして、霊力は妖物を調伏する為の力だ。神霊に対して干渉は出来ても、脅かす力とはならない」

「なん……だと……？」

私の得意とする『レベルを上げて物理で殴ればいい』が通じない……だと……？

思わず死神顔になって戦慄してしまう私。

いや、ちよつと待て！ それこそ屁理屈でしょ！

それじゃあ、実体を持たない神奈子様の方だって私を倒す手段が無―― あったわ!!

動揺から正気に戻った私は、神奈子様の繰り出した貫き手を慌てて回避した。

受け止めようともし、受け流そうとも考えなかった。

半身になってかわし、手首から先には触れないように脇で挟んで、腕を押さえ込む。

「見抜いたか!」

「似たような技を知っておりますので……!」

神奈子様は手首から先に何らかの力を集中させていた。

眼には見えないが、おそらく風を纏っているのだ。多分、漫画の『螺旋丸』や『旋風拳』みたいに回転する奴を!

諏訪子様に事前に教えられていなければ、気付けなかった。

相手は物質を介してこつちに攻撃を加えられる。

逆にこつちは相手の本体にダメージを与える手段が無い。

……おい、どうすんだコレ!? 鬼とはまた別の意味で詰んでんぞ!
内心でテンパリながらも、私は神奈子様の腕を必死で押さえ込み続けた。

鬼のような剛力を持つていないことだけは幸いだった。

とにかく距離を取られたらヤバイ!

「本当に奇妙な奴だ! 神や霊力の性質を知らぬ無知さがありながら、受けもしない技の本質を見抜く! お前のようなチグハグな人間は見たことがない!」

額を突き合わせて、神奈子様が瞳を覗き込んでくる。

そのまま私の心の奥まで射抜こうとするような鋭い視線だった。

「先程の天を打つ技にしてもそうだ、技自体は恐ろしいほどに洗練されている! しかし、狙いは甘く、実戦に組み込む経験が不足しているように見えた! 違うか!」

おつ……仰るとおりです。

昇竜拳は、幻想郷で空を飛ぶ妖怪相手に使う対空技として習得したもののだが、雑魚相手だと一撃で片付いてしまうので、そこから別の技へ繋げる修練を十分に積んでいない。

神奈子様の言うとおり、私自身が欠点を見つけてアレンジするまでもなく、技自体の威力や完成度が高いから出てしまった弊害だった。

ちなみに公式で『昇竜拳』に組み合わせる技である『竜巻旋風脚』については習得すら出来ていない。

短時間とはいえ空を飛ぶような技を出来るわけがないからだ。

「そして、敵である私に対していまだに向けられる『神への信仰』だ!

何故、敵である私を憎まない!? 何故、敵の存在を疎まない!」

「貴女は、敵ではない」

「いいや、敵だ! お前を害する敵だ!」

「貴女の本意ではないはずだ!」

「仮にそうだとしても、私は止まるつもりはない! お前を殺し――

そして、取り残されたあの覚妖怪も死ぬ!」

「さとり……っ!」

「そうだ、お前はあの妖怪を助けたいんだろう？ 私は、それを妨げる敵だ！」

「……ならばこそ、貴女を止める！」

「いい加減にしろー！」

膠着していた状態から、突如私の体は横殴りに吹き飛ばされた。

空いていた片腕も、足の動きも警戒していた。

私を襲った衝撃は、押さえ込んでいたはずの腕から発生したものだ。だった。

そうか……手に纏っていた風の力を解放して、それが爆風のように私を吹き飛ばしたのか！

「敵でなければ味方か!? 神か、鬼か、友か、仇か——!？」

体勢を崩した私に、神奈子様自身が襲い掛かってくることはなかった。

追撃は、足元から来た。

床を突き破って、折れた電柱が飛び出してきたのだ。

これは、最初に下の階層に飛んで来た四本の内の一本か！

「答えろ、半端者めっ！」

鋭い斜角で迫り来るそれは、城門を破る破城槌も同然だった。

かわすことが出来ない悟って、咄嗟に両手のひらで受け止める。

踏ん張ることまではしなかった。衝撃を逃がさなければ、例え受け

止めることが出来ても体の何処かが壊れてしまう。

しかし、代わりに私の体は勢いに押し出されるまま、後方へと吹き

飛んでいた。

ビルの窓を突き破り、外へと放り出された。

「お前にとって、私は一体何なんだ!？」

空中に身を投げ出しながら、追ってくる神奈子様の姿を視界に捉える。

ここは高層ビルの上階だ。

地上は遠く、落下すれば即死する高さだ。

しかし、落ちていく状況に係なく私は追い詰められていた。

いや、とにかく今は落下を止めないと……! !

でも、その後はどうする？

これまでの戦いのセオリーが通じない相手だ。

勝たなきゃいけないのは分かっている。

負けるわけにはいかない。

死ぬわけにはいかない。

さどりの命が懸かっているんだ！

だけど……っ！

——分からない！ どうやって戦えばいいんだ!?



ビルの中で激しい戦いを繰り広げる先代と神奈子の様子を、青娥は空中で見ている。

嵐の中、ビルと同じ高さの位置で自前のキャリアケースに腰掛けて、軽く頬杖をついている。

ケースが特別な道具であるわけではない。ただ単に、自身と共にケースも術によって浮遊させているだけである。

風が髪を弄り、雨が服を濡らしているが気にも留めていない。

口元には薄い笑みが浮かび、明らかに楽しんでいるように見える。『見守る』というよりも『観戦している』といった表現の方が相応しい姿だった。

「こちらの『準備』は済んだけれど——」

髪型を変えて、それを留めるかんざし代わりに差した鑿を触りながら、青娥は呟いた。

「ん、どうしようかしら？ 多分、このまま見ても問題ないわよねえ」

青娥には先代が苦戦していることが分かっていた。

しかし、それに対する危機感や不安は全く抱いていない。

先代の実力に対する『信頼』——とは少し違っている。過剰な思い込みにも近い『期待』から来るものだった。

——先代ならば、きつと逆境の中でそれを覆す力を発揮するだろう

う。あるいは、新たに目覚めるだろう。

青娥はそう考えていた。

根拠は単なる勘や自身の感性のみだったが、それは驚くほど強固な根拠となっていた。

初めて先代を見た時に感じたモノを、確信として抱いているのだ。

——先代は神に勝つ。

——だから、それを見たい。

青娥が現在考えていることは、ただそれだけのシンプルなものである。

「でも、先代様に期待されちゃったしい」

嬉しそうに微笑みながら、青娥は濡れた指先をケースのボタンに伸ばした。

「あの人に褒められるのって結構好きかも——というわけで、いつてらっしゃい。芳香ちゃん♪」

ロックを外す。

ケースが勢い良く開き、その中に『折り畳まれて』詰め込まれていた物体が、嵐の中へと投下された。



上の階で激しい戦いを繰り広げる先代と神奈子の様子を、諏訪子は感じ取っていた。

痛む体に鞭を打ち、立ち上がる。

「死を感じる痛みってというのは、こういうもんなのか……っ」

脂汗を滲ませながら、諏訪子は引き攣ったような笑みを浮かべた。

神として生まれ、長い年月を生きてきた中で『命の危険』というものはあまり感じたことがなかった。

神が殺されることは、早々無い。信仰を失って徐々に消滅していく恐怖心はあっても、他者の殺意や敵意によって存在を脅かされるような状況は現代ではなかった。

それこそ神奈子と争った時のような、神代の頃の話だ。

「こりゃあ、気を抜いたらあつという間にぽっくり逝っちゃうよ」
神奈子の攻撃を、まともに受けた。

しかし、それにしても威力に対して負ったダメージが大きすぎると感じた。

原因は何か――。

簡単だ。薄れた信仰によって実体化すらままならない神の肉体は、驚くほど脆くなっているのだ。

そして、この状態は神奈子も同じはずだった。

「寝ている場合じゃない……っ、先代に力を貸さないと！」

諏訪子は二つの事を懸念していた。

一つは、先代にとって戦いが不利になることだ。

半ば実体を失った神を相手に、生身の人間では有効打を持ち得ない。巫女としての神通力も、神霊である神奈子にはほとんど通じないだろう。

先代は色々謎の多い巫女だが、もしも彼女にこれまで見せた物以上の隠し技が無ければ、神奈子との勝負に勝ち目は無い。

しかし、もしも彼女に神にも通じる技や力があつた場合――それは神奈子にとって敗北よりも深刻な結末を引き起こすかもしれない。

諏訪子の脳裏に、先代の放つた巨大な光の波動が過ぎつた。

おそらく霊力とはまた違う、底知れぬ力が彼女の中には眠っている。

果たして、先代巫女に神を殺し得るほどの力はあるのか――？

「神奈子は最初から捨て身だ。何があつても、戦い抜くつもりだろう」
先代が死んでも、神奈子が死んでも、自分達にとって勝利ではない。

――この場の全員で幻想郷へ辿り着いてみせる。

諏訪子は決意を秘めた瞳で、穴の空いた天井を見上げた。

その時、足元に何かがぶつかった。

「……これは、先代が持っていた玉？」

いつの間にか、陰陽玉がそこに転がっていた。

当初は傍に従うように浮遊していた先代の道具だが、それも彼女自身の意思と力が作用してのものだ。

全身全霊の博麗波を打ち出し、反撃を咄嗟に避けた時に意識が逸れて力を失った物だった。

諏訪子は知らないことだが、元々先代の戦闘スタイルに陰陽玉の使用はあまり組み込まれていない。

神奈子との接戦に集中するあまり、忘れられた道具だった。

それが諏訪子の足元まで転がってきたのである。

偶然そうなったように見えるが、別に床が傾いでいるわけではない。

自然ではなく、何らかの意図的なものを感じる。

諏訪子は思わずそれを手に取った。

《――洩矢諏訪子様ですね》

陰陽玉から声が聞こえた。

「やっぱり、そういう道具か」

諏訪子は驚くこともなく対応した。

「この玉を使って遠くから声を届けているんだね」

《はい。そちらの様子も分かるようになっていきます》

陰陽玉の声が答えた。

諏訪子が聞いた覚えのある声だった。

「お前は――諏訪大社に居る古明地さとりだな？」

《そうです》

さとりは答えた。

死に掛けているとは思えない、ハッキリとした声だった。

《こちらにある、もう一つの陰陽玉と通じています》

「なるほど。それで、わざわざ連絡なんかしてきて一体何の用？」

《お願いがあります》

「いくら神様でも、お願い聞いて上げられるほど楽な状況じゃありませんけどね。こっちは」

《分かっています。その状況を覆す為のお願いです》

「へえ？」

さとりは静かな声で言った。

《先代と話をする必要があります。諏訪子様には、その為の隙を作っ

て欲しいのです》

◇

落下していく最中、私はビルの壁面に手を伸ばした。

しかし、綺麗な平面で構成されたそこは取っ掛かりもなければ、流れる雨水によって非常に滑りやすくなっている。とても掴まることなんて出来ない。

だが……しかしッ！ 『波紋』！

波紋を指先に集中して、壁にくっつけるッ！

水鉄砲の出口が小さいほど水の勢いは強くなる理論によって、吸着力も倍増ッ！

そして、私は落下の勢いを利用して、逆に三メートルもゲイン——出来ねえ!?

壁にくっついて落下を止めることが出来たと思った瞬間、全身に降り注ぐ雨粒が鉛玉のように重くなった。今度は比喻じゃない。本当に重い。

急激に増加した重量のせいで、波紋でも支えきれずに再び落下していく。

「そのまま落ちろ」

いつの間にか現れた神奈子様が、右手を私の方に向けていた。そういえば雨も操ることが出来るって言ってたっけ。

っていうか、神奈子様……ビルの壁面にフツーに立ってる!?

地面から垂直に立つビルに対して、更に垂直に立っているのだ。

空飛ぶ人妖を散々見ておいて何だが、重力とか関係ないなオイ！

いや、とにかく今は落下を何とかしないと……!!

全身を鉛玉と化した雨粒が文字通り叩く。

軽い痣が出来る程度の威力に収まっているが、ガードしないと眼や口に入ったらヤバイ。痛ててっ、耳が千切れる！

フツーか、重い！ 落下を止められない！

必死で打開策を考える最中、不意に空を搔いていた両足が硬い物を

踏みつけた。

……落下が止まった？

このビルに足場になるような出っ張りなんてあったのか？

私は思わず足元に視線を落とし、そして驚きに眼を見開いた。

足場となっていたのは『人間の体』だった。

神奈子様と同じように、ビルの壁面に対して垂直に立った人の体の上に私は乗っかっていたのだ。

一つ違う点は、神奈子様が地面と同じように自然と立っているのに対して、こいつは壁に足首までメリ込ませることで無理矢理垂直に立っている。

こっちはこっちでデタラメな体勢だ。

しかも、それは私も知っている人物だった。

「宮古芳香か！」

「おお、その通りだー。……あれえ、何でお前がわたしを知っているのだ？」

中華風の衣装と額に札。両手を前に突き出した、濁った瞳に青褪めた肌を持つ少女は、青娥が使役しているはずのキョンシーだった。

もちろん、名前を含めたこれらの本来持ち得ない情報は前世の知識によるものである。

「青娥が助けに寄越してくれたのか？」

「それも分かるのかー、お前はすごいなー」

「そうだ。凄い」

「そうかー。じゃあ、助けるぞ」

「頼む」

私の失言もスルーしてくれる芳香ちゃんよしよし。

動く死体のせいとか、頭の回転も鈍いらしい。

なににせよ、この状況で助つ人はありがたい限りだ。青娥にはまた借りが出来てしまったな。

助けになるというお言葉に甘えて、芳香を足場にしたまま私は頭上を見上げた。

神奈子様がビルの壁をゆっくりと歩きながら近づいてくる。

「ふん、あの邪仙か——」

不愉快そうに吐き捨てる、右手を振った。

それと同時に遠くの空で稲妻が走る。

偶然ではない。間違はなく、神奈子様が操った雷だろう。

落雷はここから離れた場所で起こったようだが、その意図は何なのだろうか？

訝しげな私の表情に答えるように、神奈子様が笑った。

「観客気取りの不愉快な輩に、神の怒りを落としてやっただけだ」

「何……？」

「気にしている余裕があるのか？ 次はお前に落とすかもしれないぞ」

そう言いながら、もう一度右手を振り上げた。

く……っ、本当に雷なんて落とされたら、どうやって防御すればいいのか分からんぞ。

流星に、あれを回し受けて受けるとかは無茶だよな!?

窮地に次ぐ窮地。

しかし、神奈子様が手を振り下ろすよりも早く、ビルの窓を破って今度は諏訪子様が飛び出してきた。

「先代、これを使え！」

投げ渡されたのは——陰陽玉！

黒雲に稲光が瞬くと同時に、投げられた陰陽玉が私の元に辿り着く。

私は反射的に霊力を流しながら『黄金長方形の軌道』で陰陽玉を回転させた。

光の速さで襲い掛かる稲妻が、回転に飲み込まれて消滅する。

か、間一髪……!!

諏訪子様、マジ神様。

「手長足長！」

諏訪子様が胸の前でパンツと両手を合わせた。

次の瞬間、体から四本の半透明な腕——手のようにも足のようにも見える——が、神奈子様に向けて伸びた。

それが神奈子様の四肢を拘束する。

動きを封じたか！

だったら、私は――！

「先代、わたしが時間を稼ぐからあんたはさとりと話をするんだ！」
「さとり!?」

《ええ、私です。貴女の置いていった陰陽玉を使って語りかけています》

「さとり、大丈夫なのか!?!」

《時間がありません。落ち着いて話が出来る状況を作ってください》

陰陽玉から聞こえるのは、確かにさとりの声だった。

抑揚はないが、同時にしっかりと安定している。

最後に見た時の状態を顧みれば、安心していいのか訝しんだ方がいいのか分からない。

衰弱してロクに話も出来なかったはずだ。

しかし、とにかくさとり本人に間違いはなく、彼女が話せる状況を必要としていることは分かった。

さとりが考えもなしにそんなことを言うはずがない。

必要だと言うなら、それに従うまでだ！

「諏訪子様、お願いします!」

「おう!。そっちの死人も、命令を受けてるんなら手伝え!」

「おー、邪魔をさせなければいいんだな。いいだろう。こつちにちーかよーるなー!」

「ええい、邪魔をするな!」

この場を諏訪子様と宮古に任せて、私はすぐ傍の窓を破ってビルの中へと逃げ込んだ。

ここもやはり無人で暗い。

なるべく距離を取る為に、奥の方へと走りながら、私は陰陽玉越しにさとりへ問い掛けた。

「それで、話とは何だ?」

《八坂神奈子に力が通じず、貴女が焦っていることは分かっています》
話が早い――のはいいけど、まるで心が読めているみたいに言うなあ。

でも、陰陽玉越しで能力が届くはずはないし……。

《詳しい話をしている暇はありません。とにかく、分かるんです》

う……うん、まあその辺を追求してる時間がないのは同意。

それで、何だ？

状況を把握してくれているのは、説明が省けてありがたい。

ひよっとして現状の打開策とかあったりするの？

神奈子様に勝つ作戦とか、こっちの戦力をアップする手段とか――
ー。

《あります》

ほ、本当か!?

教えてくれ、さとり!

私はどうすればいい？

どうすれば、神奈子様に勝てるんだ!?

《単刀直入に言います。貴女が自分の持つ力を使いこなせばいいんです》

……え、使いこなす？

すまん。

言ってる意味がよく分からない。

《例を挙げるならば、貴女が『百式観音』と呼ぶ技は、貴女がイメージするものと実際にやっているものとで見た目と効果が大分違いますね?》

う……むう、まあ言いたいことは分かった。

確かに、私の百式観音は『もどき』が付く技だ。本来ならば、千手観音像が具現化して攻撃する技だからね。特性だけを何とか真似しているに過ぎない。

それを『使いこなしていない』と言うなら、確かにそうなのだろう。

でも、それは仕方のないことなんだ。

あの技を構成する力や法則は、あの漫画の世界にしか存在しない物だからだ。

だから、それらが存在しないこの世界で完全に再現することは出来ない。

結局、私ができることは『物真似』の領域を出ないのだろう。

他の技にしても、確かに現状で十分使いこなせてるとは言えないかもしれないが、それでも今日までの修行の積み重ねによって限界まで鍛えてきたんだ。

今後もしも鍛え続けられれば、伸びしろはあるかもしれない。

しかし、この土壇場でいきなりどうこう出来るとは思えない。

《いいえ、出来ます。問題が精神的な部分にあるからです。貴女は今、自分の技を『物真似』と言いましたが、それは自分自身で作った限界に過ぎません》

何故か断言するさとり。

いや、心が読めるさとりだからこそ断言出来るのだろうか？

《私は、貴女が他の漫画やアニメの技を再現出来るのは、貴女自身の能力が関係していると常々考察していました》

私の能力？

《能力自体についての細かい考察は、今はやめましょう。とにかく、貴女の技の習得は能力に因っている所が大きい。特定の修行をした結果、特定の技を身に着ける——という、間の理屈を無視した過程がその証拠です》

まあ、確かに元々は修行自体をやりたくて始めた行為だ。

技の習得は、その結果に過ぎない。

何故この修行をすれば、この技が出来るようになるのか？ ——なんて深く考えたことはなかった。

《その間で、貴女の能力が何らかの作用をしているはずですよ。そして、私は能力が作用する切っ掛けが『思い込み』にあると考えました》

思い込み!?

《地霊殿で貴女の『リアルシャドウ』に協力した時に、私はこの結論に思い至りました。あれも理屈は一種の強烈な思い込みだからです。

漫画の技が出来ると思い込むこと——言葉を変えるならば、漫画のキャラやその行動に『肖る』ことで、貴女の能力が発動し、技や力の再現を行っているのではないかと、私は考えます》

……おいおい、まさか。

さどりの言う『力を使いこなせ』っていうのは、深く思い込むことで、より完全に技を再現したり、出来なかった技を使えるようになってみせろって言うこと!?

《その通りです》

無理無理無理!

絶対に無理っ!!

っつーか、そもそもその考察は間違ってると思うよ!

思い込み一つで漫画の技が出来るなら、全国のかめはめ波練習した子供や大きな子供は挫折を味わってないって!

大体、さどりの理論が正しければ、私は思い込みだけで空を飛ぶことだって出来るようになってしまう。

空を飛ぶ——これについては、私もかなり真剣に修行した。

ドラゴンボールの武空術という例があるから、それを参考にイメージだってバッチリだったはずだ。

しかし、結局出来なかった。

あれだけの修行を経て不可能だったことが、単なる思い込み一つで出来るとはちよつと考えられない。

《それが既に『人が空を飛べるわけがない』と貴女が思い込んでいるからだったとしたら、どうですか?》

え……?!

《心には、意識して出来る思い込みと、無意識に根付いている思い込みの二種類があります。貴女の前世の記憶の中にある、人間としての常識が無意識に幾つかの限界の壁を作っているのではないでしょう?》

——仮に、その推測が当たっていたとしても、だ。

やっぱり、その限界を単なる思い込みで突破するなんて不可能だ。体を動かして、問題を解決するのは勝手が違う。

心をどうやって動かせばいいっていうんだ?

出来るという思い込みが必要なのに、その為の根拠が無い。

《確かに、段階を踏まずに、いきなり成功をイメージすることは出来ない。しかし、貴女には根拠があります——長年の修行によって下積み

を続けてきた紛れもない現実がある。その揺ぎ無い現実が根柢になるはずです。いえ、実際に貴女はそうして現在の力と技を身に着けてきた》

そ、そうかもしれないけど……っ。

いや……でも、なあ？

《……仕方ありませんね。分かりました。私が段階を踏んで、導いてあげましょう》

えっ、そんなことが出来るのか!?

おいおい、そんなことが出来るなら最初から言ってよ!

思い込みとか、自力でどうにかなる分野じゃないもんね。正直、私一人だったら、もう『最強の自分をイメージしろ!』っていうネタやるくらいしか思いつかなかったよ。

さとりがやってくれるなら安心だ。

さあ、早速やってくれ!

《勘違いしているようですが、これからすることは私の能力を使うものではありません。会話によつて貴女の心を誘導する、マインドコントロールのようなものです》

えっ!?

そ……それだけなの？

そんなことで、私の『思い込み』を変えることが出来るの？

《大丈夫、私は他人の心と付き合ひの長い妖怪です。それに、貴女は自分が思っているよりずっと単純な人間ですよ》

さらっと酷いことを言いながら、さとりはタイミングを計るようにな少しの間沈黙を置いた。

《――まず最初に言っておきます、先代。貴女はこれから『できるわけがない』という台詞を……四回だけ言ったいい》

ちよwおまw w wそれはw w w w w



「うおのれー！ やーらーれーたー」

気の抜けるような悲鳴とは裏腹に、芳香の受けた攻撃は凄惨とさえ言えるものだった。

左右から高速で回転しながら飛来した電柱に挟み込まれ、肉と骨が碎ける音が響く。

生身の人間ならばそれだけでも致命傷だが、身動きが取れなくなつたところへ三本目の電柱がミサイルのように飛来して顔面を打ち抜いた。

歯が碎け、首の骨が折れる。

両腕と首を力なく揺らしながら、芳香は落下した。

「使えないなあ！ 何の為にやって来たのさ!？」

地面に激突する寸前で、滑り込むように飛んできた諏訪子が救出した。

ガクガクと不安定に揺れる頭で、芳香は答えた。

「どうにもこうにも力が出ない。霊がないから、傷も治せないのだ」
「げっ、そういう仕組みなの？ 死体を動かしてるんだから何らかの施術がされてるとは思ったけど、霊を吸収して力に変えるのか」

「その通りだー」

「だああっ、本気で使えねー！ 現世でなんて燃費の悪いモン使役してんだ！ お前の主人は何を考えて、ここへ寄越したんだよ!？」

悪態を吐きながらも、諏訪子は芳香を抱えた手を離さなかった。

青娥の小賢しさだけは認めている。

戦闘での補助以外に、何か別の役割を持っていると考えたのだ。

「お前らの手伝いをしろと言われたぞー」

「それ以外には？」

「そうだなー、他には手足や頭を潰されても治してあげるから、お腹だけは守りなさいって言われた」

「腹？ 腹か——」

諏訪子は芳香の腹に視線を落とし、

「——神奈子！」

近づいてきた気配に、顔を上げた。

神奈子が空中に佇んでいた。

未だ衰えることなく続く嵐の中に在るその姿を見て、諏訪子は息を呑んだ。

大木から切り出した『御柱』と、太く編んだ『注連縄』は神奈子の神としての象徴とも言える物である。

昔から神奈子は御柱を従え、輪を描く注連縄を背負って、神としての威光を示していた。

しかし、今、諏訪子の眼に映る神奈子は違った。

コンクリートで出来た四本の電柱を周囲に浮かせ、それらから伸びる千切れたケーブルが何本もグチャグチャに絡み合つて黒い輪を作っている。

神の威容の再現——そう言うにはあまりに歪で醜い、グロテスクにすら見える様相だった。

「ひでえ格好だね」

諏訪子は皮肉を口にして笑い、神奈子もまた同じ意味の笑みを浮かべた。

「排気ガスで汚れた大気は扱いにくいな。風すら淀んでいる」

神奈子は言った。

「アスファルトで蓋をされた大地もそうだろう、諏訪子？　ここではお前の力も十全に扱えまい」

「……ああ、そうだね」

「周りは何処も彼処も人の造った物で覆われている」

「——」

「まるで化け物の腹の中にいるようだ」

遠くを見る神奈子の瞳が、一瞬死期に在る病人のそれになった。

死に対する諦念と絶望。

ふと気を抜けばあつという間に心を支配するそれらを、神奈子は苛烈な感情で押し殺しているのだ。

諏訪子はそれを悟った。

「時代は変わった」

諏訪子は呟くように言った。

「神も変わるべきだと思わないか？」

「……思わないな」

神奈子は答えた。

もう瞳は戻っていた。

激しく燃える黒い火を宿した瞳に。

「神が変わってどうする。妥協してどうする。ならば、かつて私達に捧げられた多くの命は——畏敬し、信奉して捧げられた者達は何の為に死んだのか!? 死して神に捧げた者らの御霊に、顔向けできるのかっ!？」

神奈子の周囲に浮いた四本の柱が動き、矢じりのように先端を同じ方向へ向けた。

狙いは先代の居るビルだった。

「待て、神奈子!」

諏訪子の制止も空しく、攻撃が放たれた。

横一列に並んだ柱が同時に射出され、先代の居る階層を鼠潰しに貫こうと迫る。

その時だった。

攻撃が到達するより先に、ビルの方から飛び出してくる人影があった。

飛来する巨大な柱に対して、まるで迎え撃つように真っ直ぐと、飛ぶ。

そして、空中で回し蹴りを繰り出した。

——真空

いや、それは『回し蹴り』などというレベルではなかった。

——竜巻旋風脚!

体を捻った半回転ではなく、体そのものを無限に回転させる。

自分自身の体を軸に、高速で回転する竜巻のような蹴りだった。

回転は比喻ではなく周囲に本物の竜巻を生み出した。

それに飲み込まれた四本の電柱は、先端から削り取られて、粉々に破壊された。

「なんだと!？」

神奈子は初めて戦慄した。

竜巻が収まり、蹴りによってそれを起こした張本人が佇んでいる。神奈子達と同じように『空中に浮いている』のだ。

「……おいおい、とうとう空飛んじやったよ。現代社会で何てことやらかしてんだ、あの人間」

諏訪子の眩きは、驚きを通り越して呆れるに至ったものだった。

神が人に向ける畏怖の視線――。

その先に立つ者――。

先代巫女は、再び神奈子と対峙した。

「貴様……変わったな」

神奈子は直感的に先代の変化を感じ取った。

先程までとは違う。

何よりも『強さ』が違う。

戦の神としても祭られる神奈子の勘が、そう告げるのだ。

「一体、何が起こった？」

先代は不敵な笑みを浮かべて答えた。

「――LESSON 4だ。『敬意を払え』」

其の五十「御神渡り」

「——もうじき夜が明けるわ」

咲夜が銀細工の施された懐中時計の蓋を閉めると、金属質な音が小さく響いた。

既に戦いの緊張感は消え、力を抜いた楽な姿勢で佇んでいる。

傍らの魔理沙など、立ち続けることに疲れ、足を崩して座り込んでいた。

天界は朝日が昇れば、いの一に日に日が差すはずの場所だが、周囲はいまだに夜闇が広がっている。

しかし、時間の上では確かに、夜を越えて徐々に朝が近づいていた。魔理沙達が天界へやって来て、そして霊夢と天子が戦いを始めて、長い時間が経とうとしている。

一時間や二時間ではない。

日を跨ぐほどに長い時間。

長い。

長い。

そして、戦いはいまだに終わってはいなかった。

「二人ともタフね」

咲夜の呟きは、長時間続く戦いに『飽きた』というよりも『呆れた』という意味合いの方が強かった。

それに対して相槌も打たず、じつと食い入るように見つめる魔理沙の視線の先では、博麗の巫女と天人の激しい戦いが一時も衰えることなく続いていた。

最初はスペルカード・ルールに則った戦いだった。

それがやがて実戦的な攻撃を加えた戦い方に変わり、舞台を空中へ移動させ、再び地上へ戻り、離れて撃ち合い、密着して打ち合う。斬り合う。かわし。守り。逃げ。攻める——。

あらゆる戦いの定石とそれを覆す奇手とその戦いにはあった。

長い時間の中、流れは常に変化し、単調さは一切ない。

それは二人ともが計り知れない実力を宿し、尚且つそれが拮抗して

いるからだった。

どんな攻撃にも対応し、逆転する。

それを何度も繰り返す。

真の強者が繰り返り広げる別次元の戦い。

少なくとも、魔理沙の目には二人の戦いがそう映っていた。

どれだけ見ているも、驚きが絶えない。自分では想像もつかないような展開が繰り返される。

弾幕ごっこの上でならば、参考に出来そうな部分が幾つも見つかった。

しかし、長い。

感動や驚愕を抱く感性を麻痺させるほどに、二人の戦いは延々と長く続きすぎている。

戦いの終わりが、全く見えないのだ。

「あの天人が負けを認めるか、飽きでもしない限り、終わらないだろうぜ」

魔理沙の意見に咲夜も同意した。

悔しいが、比那名居天子の力は本物だった。

スペルカード・ルールにおける勝敗を無視している点はともかく、半ば実力勝負に陥っている現状でも、戦う力と意思を失っていない。

霊夢の攻撃をその身に受けながら、しっかりと耐え抜いている。

ダメージも疲れも蓄積されているはずであった。

それでも尚、動きに精彩さを欠いていない。

——比那名居天子は強い。

最初は感情的になっっていた魔理沙さえも認めざるを得ない強固な現実がそこにあった。

咲夜は更にその先も見ていた。

「あるいは、霊夢が付き合いきれなくなるかもしれないわ」

咲夜が見る限り、戦いは霊夢の優勢で進んでいた。

何しろ、戦い始めて以来彼女は一度も直撃を受けていないのだ。

人間の肉体で天人の強力な攻撃を一度でも受けることは致命傷に繋がるのだから、ある意味当然の話である。

しかし、現実でその致命的な一瞬を避け続けていられるのは、霊夢の非凡な実力があればこそだった。

時に避け、時に結界で守り、霊夢は天子の猛攻を凌ぎ切っている。そして、自らは的確に有効打を与えている。

伝説の鬼さえ戦いで下してみせた博麗霊夢の力を改めて認識させられる、理想的な戦いの姿がそこにあつた。

——だが、それでも。霊夢は人間の器を越えてはいない。

どれほど効率的に戦ったとしても避け得ない、一夜通しで戦い続けたことによつて蓄積される疲労が、霊夢を蝕み始めていた。

冷静に観察する咲夜にも、魔理沙にさえ、今の霊夢の状態がハッキリと分かる。

額から滝のように汗が流れ、引き結んだ口元と吊り上った目元は疲れを表に出すまいとする我慢の表情なのだ。

呼吸も乱れているはずだった。それは間近で対峙する天子の方がより正確に見抜いているだろう。

もはや隠し切れないのだ。それほどに疲労が溜まっている。

対して天子は、ダメージはともかく体力面ではいまだ余裕さえ感じられる様子だった。

「このまま戦いが続けば、どうなるか分からないわね」

「霊夢は負けないさ」

魔理沙の即答に、咲夜は肩を竦めた。

「それは否定しないけれど……でも、アナタも分かっているでしょう？」

「——」

「私は『霊夢が付き合いきれなくなるかも』って言ったのよ」

「ああ……」

「もう、霊夢を止めた方がいいんじゃないかしら？ これ以上は彼女の為にならないと思うんだけど」

「わたしも、そう思ってたんだ」

当初、魔理沙の中で霊夢の戦いぶりを見ながら抱えていた興奮は、もはや冷め切っていた。

あの時は霊夢が勝つと信じていた。

天子の攻撃を上手く捌く度、反撃があの気に入らない天人を捉える度、内心でスカツとしていた。

——ざまあみろ。

——反省しろ。

——霊夢の怒りを思い知れ。

自分の怒りは、霊夢の怒りの代弁なのだと思っていた。

この戦いは、正当な報いを果たすものなのだと言義を見出ししていた。

しかし、長く続く戦いの中、魔理沙は徐々に昂ぶっていた心が鎮まっていくのを感じた。

怒りの代わりに湧いてきた感情は、それまでとは全く正反対のものだった。

今の霊夢を見ると、余計にそう感じる。

「あの天人は、きつと霊夢の変化に気付かないわ。だって、随分と満足そうに笑っているもの」

天子は霊夢との死闘を楽しんでいた。

ボロボロになるまで痛めつけられていたが、それさえも心地良い刺激として受け止めている。

この戦いに意義を見出し、味わっている。

故に、戦いはもはや単なる勝敗では終わらない。

完全に動けなくなるまで叩きのめされるか、自分が満足するまで、天子はいつまでも戦いを続けるつもりなのだ。

「止めた方がいいわ」

「ああ」

魔理沙は苦しげに頷いた。

「もう霊夢には意味のない戦いだ」

天子は笑っている。

しかし、霊夢は笑っていない。



博麗靈夢が強いことは分かっていた。

地上の異変をずっと見てきたのだ。彼女が鬼の伊吹萃香と渡り合ったことも、具体的なその戦いぶりも見ている。

分かっていた。

この程度強いことは。

だから——もつと先が見たい！

「効かないわー！」

掬い上げるような蹴りに体ごと顎を打ち上げられながらも、天子は強気に笑い返した。

実際には意識が一瞬飛んでいる。

受けた衝撃を逃がしながら頭上高くに飛び上がり、足元に要石を出現させた。

「効かない——けど、さすがにここまで良い様にやられるとムカつくわね！」

真下にいる靈夢を、石で押し潰すように急降下した。

攻撃の直後の隙を突いた攻撃である。

しかし、落下の最中で天子は思い出した。

この攻撃は、先程一度見せたことがある。

「げっ」

その攻撃が来ることをあらかじめ予想していたかのように、靈夢は後ろへ跳んでいた。

標的の居なくなった地面を、攻撃が激しく、そして空しく抉る。

今度は靈夢が攻撃の隙を突く番だった。

一旦後方へ跳躍し、反動をつけて地を蹴る。

重く鋭い飛び蹴りが天子の顔面を打ち抜いた。

要石の上から吹き飛ばされ、仰向けに地面へ倒れ込む。受けた蹴りはそのまま、天子の頭を靴底と地面で挟み潰す形となった。

もちろん、これまでの戦いで靈夢の猛攻に耐え抜いてきた天人の肉体の頑強さは頭部も例外ではない。天子は痛みこそ感じたものの、意識を刈り取られるまでには至らなかった。

しかし、だからこそ次に何が起こるか理解し、戦慄していた。

蹴りを受ける直前、靴底に貼られた霊符を視界に捉えていたのだ。

霊力の光と共に札が指向性を持った爆発を起こし、天子の意識は文字通り粉々に吹き飛んだ。

一方の霊夢は、足元で起こった爆発の反動を利用して大きく跳び上がり、天子から適切な距離を取った位置に着地した。

顔からブスブスと黒い煙を上げて、仰向けに倒れたまま動かない天子を見据える。

霊夢は油断無く、乱れた呼吸を整えることに努めた。

呼吸は回復出来ても、体力までは回復出来ない。戦いの合間で可能な僅かな休息では誤魔化すことさえ出来ない程の疲労が、霊夢を確実に蝕んでいた。

むしろ実力の拮抗した接戦で体力と精神力をすり減らしながら夜通し戦い続け、そして今も尚戦えるだけの体勢にまで立て直せる方が異常なのだ。

鋭さが一瞬も鈍ることのない視線の先で、天子がゆつくりと立ち上がった。

「……あなたに一度見せた攻撃が通じないこと、分かってたんだけど」さすがに先程の攻撃には大きなダメージを負ったのか、余裕のある立ち方ではなかった。

緋想の剣を支えにして、折れそうな膝を叱責しつつ、かろうじて立ち上がる。

片手で覆った顔は、俯いた状態であることもあって霊夢からは見えないが、悲惨な状態になっていることは確かだった。指の隙間から血が零れ落ちている。

「疲れてるからって油断してたわ」

当然、天子自身にも自分の顔の状態など分からない。

痛みと熱が、顔中に満遍なく張り付いているようだった。

顔面を踏まれた状態で爆発を受けたのだ。並の人間や妖怪ならば、頭部は原形を留めていないだろう。

「なるほど、こういう上げつない戦い方も出来るのね」

霊夢と戦いを始めて以来、新鮮な驚きが尽きることはない。弾幕ごつこの強さはもちろん、鬼をルール上ではなく物理的に倒してみせた攻撃力、戦術の巧みさ、そして容赦の無さ。

天子をして『華麗だ』と思わせる戦い方を突如一変させて見せた、この血生臭い一撃——。

「強い」

天子は認めた。

「あんたは強いわ、博麗霊夢」

他者の強さを驚くほど素直に、傲岸不遜な天人は認めたのである。

天子は不敵な笑みを浮かべようとした。

しかし、上手く笑顔を作れない。口の中に硬く小さい物が幾つもあつて、それが動きを邪魔している。

気持ち悪くなった天子は、それを手の中に吐き出した。

血と一緒に吐き出したものは、白く小さな破片——無数の折れた歯だった。

「ははっ、折れたわ。私の歯が」

天子は霊夢へ見せ付けるように、手のひらを差し出した。

「鼻血も出てるし」

折れた歯を投げ捨て、赤く濡れた鼻を拭う。

出血が止まらず、気休めにしかならなかった。

「天人がさ、歯を折られて、口と鼻からみつともなく血を垂れ流してるのよ?」

血塗れの顔で天子は愉快そうに笑っていた。

凄まじい表情だった。

「天人は不老長寿で、空を飛ぶなどの神通力が使え、快樂に満ち、苦しみを感じず、日々を優雅に遊んで暮らしているのよ。地上の人間とは生き方の格が違う。健全な天人の肉体は汗をかかず、垢も出ず、臭いもしないってさあ——でも出てるじゃない、血。痛いじゃない、凄く」

天子は堪えきれずに吹き出した。

「これが笑わずにいられるかってのよ! あっははははははは!!」

天子は狂ったように笑った。

奮も少しずつ冷めていった。

「はは……」

表情は笑みの形に保ちながらも、そこから力が抜けていく。既に天子が霊夢を見る目は訝しげなものへと変わっていた。

「は………何、その顔？」

霊夢は眉間に皺を寄せて眉を顰め、口元をへの字にひき結んで、じっと天子を睨んでいた。

強張った頬は、何かを堪えている様子だった。

先程からずっと霊夢はこの表情のまま、一言も喋らなかつた。

天子は最初の内、これを『内にある怒りを必死で堪えるもの』として見ていた。

戦いの為に必死で理性を保ち、感情を押し殺している表情なのだろう、と。

しかし、霊夢が押し殺しているものは、天子の考えているものと違っていた。

天子はこの時まで気付かなかつた。

一体、何時から霊夢の様子が変わったのか。

戦いの最中、霊夢が言葉を発さなくなつたのは何時頃からなのか。疲労や痛み以外の何かに耐えるような顔になつたのは何時からなのか。

天子は気付いていなかった。

自分とは違い、この戦いの意味が霊夢にとって失われつつあることに――。

霊夢は何かに耐えていた。

霊夢は何かを堪えていた。

言い表しようのない感情が、形容し難い表情に表れていた。

もはや天子の言葉など、耳にも、心にも届いていない。

霊夢に聞こえているのは、ただ己の内に鳴る風の音だけである。

空洞になつた自分の肉体で、空回る風の音だけが、ただ延々と聞こえる。

それを止めることが出来ないと悟つた。

長く続く戦いの中で、いつしか霊夢はそう悟ってしまった。戦う前は、敵を憎むことでこの音が聞こえなくなると思っていた。戦いを始めた時は、敵を倒すことでこの風が止むと思っていた。あるいは、散々に痛めつけることで、完膚なきまでに敗北させることで、最後の一線を踏み切つて殺してしまうことで——この空洞を埋めることが出来ると思っていた。

しかし、戦いの中で気付いてしまった。どれだけ敵を憎んでも、叩きのめしても、言葉にして怒りを吐き出しても、この風の音を止めることは出来ない。体に空いたこの穴を抜ける風の音を止めることは。失われたものを取り戻すことは。霊夢の歪んだ顔に浮かぶもの——それは虚しさだった。



彼女が自身の知る漫画やアニメなど創作の世界に抱いていたものは一種の『信仰』だった。

一つの例を挙げよう。漫画やアニメに登場する修行を重ね、その結果得られる技を幾つも身に着けながら、彼女は『空を飛ぶ』ということだけは実現出来なかった。

何度も挑戦はした。

空を飛べるキャラクター達の姿を完璧に思い描いた。

自分の周りに、実際に空を飛べる人妖も多く存在した。

しかし、そのイメージを自身に反映することだけはどうしても出来なかった。

前世の記憶にある『現実の人間として生きてきた経験』が、彼女自身と創作のキャラクター達の間は無意識に壁を作っていたのだ。

彼女の娘である博麗霊夢は人間でありながら、空を飛べる。

しかし、それは『空を飛ぶ程度の能力』があるからだ。

霧雨魔理沙は魔法使いだし、十六夜咲夜も人間離れした異能を生ま

れつき持っている。

知己の人間は皆『理由』や『根拠』を持っているのだ。

人外の存在については言うまでもない。その存在自体が空を飛ぶ幻想そのものである。初めて人の形をした者が空を飛ぶ様を見た、あの時の『天狗』のように。

そして何より、彼女達は——ゲームの中で飛んでいた。

だから、飛べることは何も不思議ではない。

逆に、自分はゲームの中にいたキャラクターではない。

だから、飛べないことは仕方がない。

漫画やゲームの世界に生きる人物に対する『敬意』や『信仰』があるからこそ、彼女はそれに値しない自分を例外だと無意識に決め付けてしまっていた。

何十年もの間、自覚することなく——。

しかし、それを見抜いた古明地さとりは言った。

——貴女はこれから『できるわけがない』という台詞を……四回だけ言っている。

漫画の中の台詞だった。

これを言われたキャラクターは『できるわけがない』と四回言った後で『出来るようになる』という展開だった。

——ならば。

——自分も四回『できるわけがない』と言った結果。

——出来るようになる。

疑いの余地はない。

そういうものだからだ。

それが彼女の信じる理だからだ。

そして、彼女の『信仰』は何の矛盾も無くその理論を成立させた。



——そこで起こっているのは、超常の戦いだった。

激しい雨と風を裂いて、ビルの谷間を飛び抜ける二つの影があっ

た。

人の形をした影だった。

先を行く一方の影は、まるで見えない翼を持っているかのように、荒れ狂う風を乗りこなして、鳥のように飛んでいた。

もう一方の影は、嵐という壁を強引に貫いて、弾丸のように直線の軌道を描きながら飛んでいた。

先を飛ぶのは神奈子、それを追うのは先代である。

飛行する進路の先に、聳え立つビルが迫る。

急速なカーブを描いて方向転換を行う神奈子に対して、高速で直進する先代はビルの壁を蹴って強引に軌道を変えた。蹴り跡が壁に刻まれる。

跳ね返って飛び続ける、まさに弾丸である。

「飛び方に緩急がついていないな。空はまだ不慣れか、人間」

背後を確認して口元を吊り上げると、神奈子は急降下を開始した。眼下にある道路。その路肩に停まる大型トラック目掛けて、ぶつかるとような勢いで加速した。

自らの体で巧みに先代の視界を遮り、トラックの存在を隠している。吹きつける風雨も、人間の視力を低下させるのに十分な効果を持っていくはずだった。

トラックの荷台に激突する寸前で、神奈子は軌道を捻じ曲げて急上昇した。

それに追従しようとした先代は、しかしトラックの車高分、予想していた地面との距離感に誤差が生じてしまう。

トラックとの激突は免れない。

先代の反応は驚異的に早かった。

いや、それはもはや反射の領域に達していた。

咄嗟に体勢を変えて、頭から荷台に激突するのを避け、足から着地する。金属製の大型コンテナがひしゃげ、大きくへこんだ。

踏み潰した車体をまるでトランポリンのように踏み台にして、先代はすぐさま神奈子を追うべく飛翔した。

激突によるダメージはおろか、ほとんど距離さえ離せなかったこと

を確認した神奈子は小さく舌打ちした。

確かに先代は飛行が不慣れだ。しかし、代わりに加速状態における瞬時の判断力が恐ろしく優れている。判断が間に合わないはずの突発的な障害に対して、反応を超えた反射のレベルで対応してしまうのだ。

神奈子は知らないことだが、その対応力は長年の戦闘経験によって培われたものだった。

必殺の一撃が至近距離で飛び交う戦いを制してきた経験が、先代の肉体と精神には染み付いていた。

「奴にとっては空を飛んでいる感覚ではないのか。空中を普段踏んでいる地面の延長として捉えている——」

飛距離が無限に延びた跳躍——先代の飛行能力を、神奈子はそう認識した。

下手に空を飛ぶことを意識するよりも厄介な話だった。ある意味、新しい力を使いこなしている。

「ならば、これはかわせるか!?!」

高速で飛行を続けながら、神奈子は唐突に背後を振り返った。

空中での姿勢制御においては、純粹に飛行能力を使いこなしている神奈子の方が先代よりも遥かに優れている。

後方から追い縋る先代に向けて、神奈子は手のひらから風弾を撃ち出した。しかも単発ではない、機関銃のように激しい連発である。

威力に関しては機関銃どころか大砲並である風弾が、直進しか出来ない先代に迫る。

「波動——」

先代の両手に光が収束した。

「拳——」

先代もまた、手のひらから拳大の光弾を連続で撃ち出し、これを迎撃した。

空中で力の塊がぶつかり合い、小規模な爆発を無数に起こしながら、対消滅していく。

「なんだと!?!」

神奈子は驚愕した。

自らの放った風弾が全て撃ち落されたことに、ではない。先代の放った光弾の正体が全く掴めなかったからだだった。

風弾は文字通り風を一点に集中して放った、言い換えれば空気の塊である。だからこそ、物理的な破壊力を持っている。

しかし、先代の放った弾は、ただ単に光を伴っただけの『力』としか言いようのない塊だった。

そして、その『力』が一体どんなものなのか、神の目でさえ見抜けないのだ。

「霊力ではない。私の知るどの力でも——！」

戦慄が走った。

神奈子は、初めて危機感を抱いた。

——天地万物、おそらくこの世の何物にも属さない力だ。あの『力』は、この肉体に届くかもしれない。

そう悟り、しかし次に顔に浮かんだ表情は恐怖や緊張によるものではなく、不敵な笑みだった。

「面白い！ その拳、この身に届き得るか!？」

神奈子は一気に高度を上げた。

高層ビルさえも届かない領域にまで到達すると、その空間に入り込んだ瞬間を狙い撃つように先代を攻撃した。

周囲に軌道を変える足場とする為の建物は存在しない。

しかし、あろうことか先代は何もない空間を蹴って、飛来する風弾を回避した。

足場を用いず、瞬発力のみで反動を生み出したのだ。

「なんという……っ！」

反撃とばかりに発射される光弾を避けながら、神奈子は再び地上へ向けて飛んだ。

「なんという人間だ、お前は！」

呻くような声には、戦慄と共に賞賛が滲んでいた。

初めて会って以来、心を乱され続けてきた先代巫女に対する苛立ちや怒りといった負の感情は、完全に消え失せていた。

もしも、先代が普遍的な人間の一人であったのなら、こうはならなかった。

取るに足らない人の存在に、自らの抱く矜持を揺るがされた己の惨めさを許せなかっただろう。いや、そもそも心乱されること自体なかったかもしれない。

しかし、これほどの――あらゆる常識を超えた、神の価値感でさえ測れないほどの存在ならば。

仕方がない。

お前ほどの巫女ならば、神の心を乱しても仕方がない。

この身を脅かしても、仕方がない。

お前は人間『風情』ではなかった。

お前は神に届き得る人間だった。

その事実には救われた。

お前がお前であったから、私の神としての自負と矜持は守られたのだ。

それほどの存在、それほどの力であったことに、私は感謝しよう。

そして、認めよう。

お前は特別だ。

神が認める特別な人間だ――！

「これは、形振り構っていられんな！」

言葉とは裏腹に、嬉々としながら神奈子は目的の場所に向けて全速力で飛んだ。

最初に戦った高層ビルである。

所々に戦闘による破壊の跡がありながら、それでも荘厳な全貌は些かも揺らいでいない。

上空から飛来した神奈子は、その巨大な建物の裏側に素早く回りこんだ。

丁度、追ってくる先代とビルを挟んで対峙する位置取りになる。

ビルが大きな障害物となって、互いの姿は見えず、回り込まなければ近づくことも出来ない。

しかし、二人は視界に頼らず、気配によって相手の位置を正確に捉

えていた。

「かあああああああつ!!」

「はあああああああつ!!」

ビルを挟んで、神奈子と先代は互いを撃ち合った。

唸る風の弾丸が窓を突き破って無人のフロアを抜け、その先にいる先代へと飛来する。

それを回避し、反撃の光弾が入れ替わるように同じ階層を貫いて、反対側の神奈子を狙った。

無数の弾痕をビルに刻みながら、激しい銃撃戦のような攻防が急速に下へと移動していく。

神奈子の目的地はビルではなかった。

その下にあつた。

「――諏訪子お!!」

「な……っ!?!」

最後に一際強烈な攻撃を放って先代を牽制すると、地上にいる諏訪子目掛けて、神奈子は急降下した。

戦闘不能になった芳香を抱えて、空中戦を行う二人を見守っていたのだ。

青娥が何かを仕込んでいるらしい芳香を守る為の戦線離脱だった。何よりも、自分では神奈子に勝てないと自覚してのことだ。

諏訪子は油断していた。

故に、神奈子の狙いに気付けなかった。

反応の遅れた諏訪子に肉薄した瞬間、神奈子の手がその小さな肉体に突き刺さっていた。

諏訪子の腹に、右腕が手首まで潜り込んでいる。

しかし、血は出ていない。傷そのものを負っていない。

まるで水面に手を差し込んだかのように、神奈子の手が諏訪子の肉体に沈み込んでいた。

「悪いが、力を貰うぞ!」

神奈子は素早く手を引き抜いた。

その手には『剣の柄』が握られていた。

明らかに諏訪子の体に収まるはずのない、長い刀身が姿を現す。遅れて駆けつけ、その光景を目の当たりにした先代は、驚愕に目を見開いた。

「諏訪子様！」

「案じている余裕があるか!？」

諏訪子の腹から『剣』を引き抜いた神奈子は、振り返り様それを振るった。

先代が慌てて避けた斬撃は、近くにあった鉄製の街灯をあつさりとは斬り倒してみせた。

「先代、気をつけて！ それは単なる鉄の剣じゃない！ わたしの力を形取った『神剣』だ、まともに受けちゃ駄目！」

腹を押さえて、苦しい表情を浮かべながらも諏訪子は必死で叫んだ。

やはり外傷はなかったが、体を支える力が抜けてしまったかのように、その場で膝を着いている。

「説明ご苦労！ そういうことだ、先代。せいぜい注意を払え！」

「他神（ひと）の力奪っておいて何勝ち誇ってんだ死ぬバカ！」

「どうせ先は長くない！」

新たに武器を手にした神奈子は、一転して先代に接近戦を仕掛けた。

逆に、今度は先代が逃げる番だった。

無手と剣である。

条件だけならば、全く勝負にならない。

先代は素早く跳んで、窓を打ち破り、ビルの中へ逃げ込んだ。室内ならば障害物も多い。長物の取り回しを少しでも阻害する為の判断だった。

神奈子が追ってくる僅かな時間に、袖から何枚にも連なった札を取り出す。

霊力を込められた札は、先代の両腕に巻きついて、グローブのように指先から肘までを覆った。

かつて同じ剣を使う権との戦いで使用した、霊符の籠手である。

「結界か——だが！」

ほぼ同時にビルの中へ足を踏み入れた神奈子は、躊躇無く先代に斬りかかった。

振り下ろされる剣を、先代は手のひらで受け流そうとした。

腕を盾にして正面から受け止めようとしなかったのは、諏訪子の忠告から『神剣』の威力を警戒した為の判断である。

それが先代を救った。

斬撃は結界を容易く切り裂き、その下にある皮と肉にまで届いた。

「づあ……っ!？」

手のひらを一直線に走った熱い痛みにも、先代が呻く。

『神剣』を受けた結界はたった一撃で効力を失い、腕に貼り付いていた札がバラバラに解けて、床に落ちる。

結界が無ければ、あるいはまともに受け止めていけば、手首から先を切り落されていただろう。

剣の切れ味とそれを振るう技が高いレベルで噛み合った、恐ろしく鋭い斬撃だった。

「その程度の結界では無いも同じだな！」

返す刀で、もう片方の手の結界も切り裂かれる。

すぐさま繰り出された第三の太刀筋は、あろうことか進路上にある大きな柱を豆腐のように斬り抜けて迫ってきた。

先代は咄嗟に、すぐ傍を浮遊していた陰陽玉を回転させながら軌道上に割り込ませた。

黄金長方形の軌道が生み出す回転の力が、一瞬の絶対防御を発生させて、ようやく『神剣』の太刀筋を阻んだ。

弾き返された斬撃に舌打ちしながらも、神奈子は攻撃の手を休めない。

回転による防御は範囲が狭く、持続力も極端に低いことを見抜いていた。

陰陽玉による防御は、咄嗟の時の緊急回避にしか使えない。

もはや、先代には逃げるしか成す術がなかった。

狭い室内から天井を破って上に逃げれば、剣で文字通り道を切り開

いて神奈子が追い続ける。

巧みに繰り返し出される太刀筋をころうじて回避して、時折苦し紛れの反撃を交えながら、先代は上へ上へと逃げていく。

先程はビルの外、そして今度はビルの内で、通った道筋を巻き戻すように二人は凄まじい攻防を繰り返し広げながら、屋上へと登り詰めていった。

◇

——『できるわけがない』と四回言ったなら『できる』！
そういう理屈なのだ。

他の誰にも納得の出来ない理屈かもしれないが、唯一私にだけは通る理屈だ。

何故なら、私はこれら漫画の理屈が絶対であると『信仰』しているからだ！

そして実際に、私はこのやりとりを経ることで新たな力に覚醒した。

もはや『崇拜』しかない……この場所に『神殿』を建てよう。

……って、いかんいかん。頭の中がジヨジヨ一色になるところだった。

しかし、さとりも意外なところから攻めてくれるものだ。

私はこれまで漫画やアニメの修行を思いつく限り色々こなしてきたが、ほとんどが一人でやっていたものだった。

例えば『虎王』のように、技の中には相手を必要とするものも多いのだ。

元々修行自体が目的だったから、その辺は全然気にしていなかったのだが、今回のように他者との『掛け合い』によって技や力を習得するパターンもあるんだな。

まあ、こういうのは修行とはちょっと違うから、私も好んでやるつもりはないが——今回ばかりは助かった。さとりん、グツジヨブと言わざるを得ない。

あと純粹に楽しかった。むしろ、こっちの方が重要。

とにかく、さどりの考察が正しいかどうかはまだハッキリと分からないが、認識の変化によって、私は新しい力に目覚めることに成功したのである。

ついに……ついに、私は空を飛ぶことに成功した！

ビルの谷間を飛び回る神奈子様に対して、私はしっかりと追い続けることが出来ている。

飛べる……俺は、この空を飛べる！

この台詞は某特撮映画の飛行シーンで出たものだが、本当にウルトラマンとか空飛ぶヒーローの動きがイメージの手助けになるな。

正直、飛行能力を得たといっても、空中というのは私にとって未知の領域だ。迂闊に飛び回るわけにはいかない。

というか、実のところ空中戦は出来るだけ避けたいと思っている。

格闘をやっていると嫌でも分かるのだが、人体に対して真上と真下は死角になるのだ。

その死角が、空中では両方とも剥き出しになる。

私としては『空中で自在に戦えるようになった』のではなく『動ける範囲が広がった』程度の認識に抑えておくつもりだった。そうであれば、きつと文字通り足元を掬われてしまうだろう。

この辺も思い込み一つで動きや物の見方が変わるのかもしれないが……ま、それは追々慣れてからうちゅーことで。

それにドラゴンボールとかだと普通に空中で殴る蹴るやってるけど、自分でああいう風に動けるイメージがし辛いんだよねえ。リアル志向のバトル漫画にも結構影響受けるから体重移動とかどうしても考えちゃう。

これも自分の中で折り合いつけないと、上手く力として使いこなせないんだろなあ……。

「——これはかわせるか!？」

飛行をちよつと距離の長いジャンプだと思って、ビルを方向転換の為の足場に使いつつ神奈子様を追い続けていたら、覚えのある攻撃が放たれた。

風を媒介にした弾幕攻撃だ。

幻想郷の弾幕とは密度が比べるべくもないが、基本空中では直進しか出来ない私ではかわしようもない。

かつての私ならば、被害を最小限に食い止めつつ突っ込むか、一旦足を止めて博麗波で弾幕を掻き消すか——取れる手段は多くなかったが、今は違う！

『昇竜拳』『竜巻旋風脚』と来たら、次はこいつだ——！

「波動拳！」

両手から連続で放つ波動の光が、神奈子様の風弾を次々と撃ち落ちていった。

ふふふ、博麗波のように『かめはめ波』を真似た半オリジナル技ではない。

これぞ真正正銘の『波動拳』だ！

私の中で『かめはめ波』には、この技を構成する上で絶対に外せない要素があった。特有の『溜め』『構え』『威力』がそれである。どれを外しても、私の中で『かめはめ波』のイメージは崩れる。それが博麗波を、小回りの利かない大技のカテゴリーに固定してしまっていたのだ。

しかし、この波動拳は違う。こうして連射も出来るし、片手でも撃てるぜえー！

……えっ、ゲームと違うって？

漫画版に決まってるでしょ。

それはそれ！ これはこれ！ 同じ技でも自分の中でハッキリと割り切れるなら、使い分けも可能なのだ。

漫画版の波動拳なら極めれば山だって吹き飛ばせるし、竜巻旋風脚で空も飛べるのだ。

加えて、どうやらこの波動拳は霊力による攻撃と違って神奈子様にも効くらしい。

すっかり迎撃している様子からして、間違いないようだ。

霊力じゃなくて、気の攻撃だもんね。二つの力の具体的な違いが分からんが、とにかく違うのは確かなので問題ない。

よく分からんが、波動拳なら仕方ない！ 納得！ はい、次行こう！
空中を飛び回りながら、私と神奈子様は戦闘機さながらのドッグ
ファイトを繰り広げた。

いいぞ、神を相手に渡り合えている。

この調子でいくぜ！

そして調子に乗りすぎて、神奈子様との撃ち合いでビルを蜂の巣にする私。

「――諏訪子お!!」

住人の皆さんごめんなさい、と謝っている暇はなかった。

急降下していった神奈子様は、ビルの下にいた諏訪子様に近づくと、いきなり右手を突き刺したのだ。

「諏訪子様！」

その光景に青褪めて、駆けつけた私は、更に信じ難いものを見てしまった。

なんと、神奈子様の突き刺した手が、諏訪子様の体内から剣を引きずり出してきたのだ。

博物館に飾つていそうな古いデザインの剣である。

「先代、気をつけて！ それは単なる鉄の剣じゃない！」

諏訪子様が忠告してくれたが、さすがに説明がなくなつてあれが物凄い剣なんだつてことは分かる。

デザインといい、神様の体から取り出された過程といい、どう考えたつて伝説の武器クラスですよ、あれは！

案の定、その剣はデカイ街灯を一太刀で両断してしまった。

こいつは……っ！

ちよ……ちよつとだけ安心してしまった。背後のビルが真つ二つに斬られるとか最悪の展開も想像してたもんで。

しかし、それでも切れ味が半端無いことには間違いない。

私の作った結界は文字通り紙切れのように切り裂かれ、黄金の回転の力を使ってなんとか防御出来たくらいだ。

当然、球体である陰陽玉では、剣に対する盾としては不向きである。

回転だつてずっと回しておけるものではない。この技には神経を使うのだ。回転に意識を集中するあまり、肝心の太刀筋を見誤つてはどうしようもない。

室内に逃げ込んだのは失敗だったか。私の動きの方が阻害される。背を向けて逃げれば、そこをバツサリと斬られるだろう。意識を前に向けつつ、場所を移動しなければ……！

時折放つ波動拳も牽制にしかならず、私はどんどん追い詰められていく。

上へ、上へ――。

だけど、神奈子様。

私が逃げるだけだと思ふなよ。

ちゃんと策は考えてあるぜ。

私にとつての勝利は神奈子様を殺すことではなく、無力化することだ。そいつを忘れちゃいけない。

そして、それを成す為の道筋も見えている！

――最後の天井をぶち破り、私と神奈子様は風雨が吹き荒ぶ屋上へと同時に躍り出た。



嵐の中の幾度目かの対峙。

神奈子は剣を、先代は拳を構えていた。

先代にはもはや逃げ場はない。

正確には、逃げるだけの猶予がない。さとの命という時間制限があるのは、神奈子ではなく先代の方なのだ。

――腹を括ったようだな。

先代の瞳を見て、神奈子は相手の覚悟を感じ取った。相変わらず、真つ直ぐに自分を見据えている。

曇りの無い純粹な視線だった。

その瞳を覗き込むことを避け、自らの内に湧き上がろうとする雑念を無視する。

神奈子はただ先代の挙動にだけ注目し、自らの刃を確実に当てるところだけに集中しようとした。

先代が『神剣』の斬撃を掻い潜って神奈子に反撃を与えるには、避けるのではなく受け止める必要があった。

回避によって体勢を崩した状態では、一撃で神奈子を行動不能にするだけの攻撃は放てない。そして、一撃で勝負を決められなかった場合、返す刀が今度こそ必殺となって無防備な先代を襲うのだ。

——防御は一度だけ成功すればいい。ならば、手段は限られてくる。

神奈子は先代の動きを先読みしていた。

彼女のすぐ傍に浮遊する陰陽玉である。

あれが第三の手となつて、こちらの一撃を遮ってくる。どうあつても、その防御を抜くことは出来ない。

ならば——。

先に動いたのは神奈子だった。

流れるような踏み込みで、一気に剣の間合いまで詰め寄る。

素早い動きだったが、それに反応出来ない先代ではない。彼女もまた恐れずに間合いへと自ら踏み込んでくる。

剣と拳の間合いは違うからだ。先代は更に前へ踏み込まなければならぬのだ。

この時点で、先代に回避という選択肢は無くなっていた。

後は、やるかやられるかの刹那の勝負である。

「シィッ!!」

鋭い呼吸と共に、神奈子が袈裟斬りに剣を振り下ろした。

常人ならば『気がついたら斬られていた』としか言いようのない速さに対して、しかし先代は動く。

太刀筋に対して、それを遮るように回転する陰陽玉が割り込んでいた。

——分かっていた。

神奈子は事前の予定通り、

——反応を超えた反射で動くことが出来るお前ならば、必ずこれに

対応出来ると！

陰陽玉に触れる寸前で剣を止めた。

斬撃を『相手に止められる』ことと『自らの意思で止める』ことは大きな違いがある。

神奈子はここからすぐさま切り返せる状態にあった。

盾となる陰陽玉を避ける軌道で、改めて先代目掛けて剣を振り下ろせばいいだけである。

もう守れない。

もうかわせない。

神奈子は剣を握る腕を僅かに下へ沈め、

「——何っ!？」

その腕が、濡れた布によって絡め取られていた。

正確には先代の着ている巫女装束の袖の部分が、神奈子の剣を握るほうの腕を包むように巻き付けられていたのだ。

風雨の中で戦い続けたことで芯まで濡れていた袖は重く、しっかりと貼り付いて、神奈子の腕と先代の腕を完全に固定してしまっていた。

丁度、長い袖で互いの腕を縛ったような状態である。

——動かん！

自身の片腕と剣を封じられた神奈子は、すぐさま我に返って視線を先代の方へ戻した。

先代はほぼ密着するような間合いで、既に拳を構えていた。

お互いに、言葉はもちろん思考を挟む余裕すらなかった。

先代が腰と腕の捻りを加えて、最大限にまで力を込めた拳打を繰り出す。

それに対して、神奈子が自由な方の腕を素早く伸ばす。

結果は。

先代の方が速かった。

挟り込むようなボディブローが、神奈子の肉体を芯まで打ち抜いていた。

「が………ふっ」

神奈子の口から、空気と共に苦悶の声が吐き出された。
今度の攻撃は効いていた。

ただの拳ではない、靈力を纏ったものではない、得体の知れない力が宿った拳は確かに神の肉体を破壊し得たのだ。

「ま……まだだ！ まだ終わってない……っ！」

力と意志を失っていない瞳が、先代を睨んだ。

神奈子の伸ばした腕は防御には間に合わなかった。

しかし、先代の拳が腹にメリ込んだ瞬間、その腕を掴んでいたのだ。拳を引き戻すことが出来ず、結果的に先代の攻撃は単発に終わった。

もしも、連撃を受けていれば、今度こそ耐え切れなかっただろう。だが、一撃ならば――。

その決断と覚悟が、神奈子に致命的な一撃を耐え抜かせた。

これでお互いの両腕が封じられた形になった。

完全に密着した状態で、身動きもままならない。

この膠着、どう破るか――!?

「……神奈子様」

頬を寄せ合った状態で、先代は囁くように言った。

「いってきます。お気を確かに――」

神奈子は気付いた。

打ち込まれた拳に宿る力が、爆発的に膨れ上がるのを。

「波動……拳――」

密着状態で放たれた光弾が、神奈子の体を貫いた。

◇

拳が当たった瞬間に敵の体内で波動拳を放ち、炸裂させる――!

これを無数の拳撃の最中で瞬時に行う最終奥義が存在するが、今の私にはこれが精一杯だった。

波動拳を受けた箇所から白煙を上げて、神奈子様はゆっくりと倒れ込んだ。

長く続く雨のせいで屋上全体が水浸しになっている。そこへ仰向けに沈み込んだまま、神奈子様は起き上がる気配を見せなかった。

——倒した。

間違いない。

今度はフラグなんかじゃない。確かな手応えに基づく確信だ。

新しい力に覚醒した私は、これまで漠然と『気配』として感じ取っていたものを、具体的な『気』として察知出来るようになっていた。

つまり、ドラゴンボールのように『気』を探ることで、対象の存在はもちろん、体力や生命力の残量を測ることも可能になったのだ。

『畜生、○○の気がどんどん小さくなっていく……っ！』みたいなことも可。って、さすがにそれは縁起でもねえな。

とにかく、私は神奈子様が死ぬことはなく、かといって再び動けるほどでもない状態だと分かるのだ。

まさしく——『勝負』の一瞬だった。

神奈子様の手から離れ、床に投げ出された剣に視線を落とす。

あれを攻略するだけなら幾つか手段があった。

例えば『百式観音』なんかは、攻撃の先手が取れた。特に、今の私ならばより原作に近い技が出せただろう。

しかし、それでは駄目なのだ。

力不足では問題外だが、威力が高すぎてもいけない。神奈子様にどんなダメージが行くか分からないからだ。

だから、危険を冒してでも密着状態に持ち込む必要があった。

あの状態なら確実に攻撃が当たり、尚且つ『手加減』が出来るからだ。

神奈子様の余力を計算して、ギリギリの威力の波動拳を撃ち込んだ。

そして私は、勝負に勝った。

勝因となった、この状態に持ち込むまでの様々な要素——戦闘の流れの組み立てや実行に必要な技——を与えてくれた多くの漫画に感謝だ。

偉大な先人の知恵と技術が、私に勝利を掴ませてくれた。

ありがとうございます——。

「先代、大丈夫!？」

諏訪子様が芳香を抱えて、飛んできた。

倒れた神奈子様を見て、改めて私に視線を戻し、安堵の笑みを浮かべる。

「……やったんだね」

「はい」

「ありがとう」

「一緒に、幻想郷へ来てくれますね？」

「うん……うんっ。本当にありがとう」

ふっ、諏訪子様の目元が濡れているのは、雨のせいだとしてもしておこうか——なんつって。

しかし、本当に長いこと続く嵐だ。

まあ、この嵐が神奈子様達に力を与えているっていうんだから、止まないに越したことはないんだろうけど。

とにかく戦いは終わったが、悠長にはしてられない。

戦闘の緊張感から開放された私は、途端にさとりが心配でたまらなくなっていた。

すぐにでも諏訪大社に戻って、幻想郷へ行かなければならないのだ。

私はまず、神奈子様に歩み寄った。

気絶しているようだから、私が抱えなければならぬ。

諏訪子様が、まだ自力で動けるのはちよつとした救いだな。芳香も担いでもらわなければならぬ。

そういえば、青娥は何処に居るんだろう？

彼女がいないと、諏訪大社に戻る方法がないんだが——。

屈み込んで神奈子様の肩に手を掛けた時、腹に何か潜り込んだ。最初、それは熱だった。

熱はすぐに痛みに変わった。

太いネジが五本、腹に刺さったかのような、激痛が体内に抉り込んでくる感触だ。

震えながらも視線を落とすと、実際に刺さっていたのは五本の指だった。

神奈子様の右手だった。

その指が、私の腹の肉を握り潰そうとしている。

いや、その奥のはらわたまで引きずり出そうと更に深く刺し込まれている。

「がっ……は、はぁ……あ、っ!？」

耐え難い激痛に、私は喘ぐことしか出来なかった。

息と共に血を吐き出し、それが私を見上げる神奈子様の顔に掛かった。

血反吐を雨がすぐに洗い流していく中、神奈子様の目がじっと私の目を射抜いている。

「言っただろう、先代……まだ終わってない」

「先代!？」

異変に気付いた諏訪子様の悲痛な呼び声が背後から聞こえる。

私は神奈子様の手から逃げるように後退った。

意外にも、手はあっさりと離された。

腹には五つの穴が空き、そこから血が滲み出している。

単純な握力とは思えない。手に風を纏って攻撃してきたことがあったが、あれを更に指先に絞って刺してきたか。だからネジのような感覚があったんだ。でも、それを理解したところで今更どうなる？

後退りながら、私は足をもつれさせて転んだ。

なんとか立ち上がる。

しかし、それ以上のことが出来ない。

腹に穴が五つも空いてる。手で押さえた程度では間に合わないくらい出血が酷いし、何より痛みが酷い。上手く言葉も発せない。

霞み始めた視界で、神奈子様が立ち上がるのが見えた。

こちらも余裕はなさそうだが、少なくとも私よりは足元がしっかりしている。

床に転がっていた剣が宙に浮き、ひとりでに神奈子様の手に収まった。

——分からない。

手応えは確かだったはずだ。何処にそんな余力があつたんだ？

「どうして、神奈子……？ もう動けないはずだ！」

私の疑問を諏訪子様が代弁してくれた。

「ああ、私ももう動けないと思つたよ。それほどの一撃だった」

神奈子様は答えた。

「だけど、何故かまた立ち上がれたよ。何故かな？ 何故だと思つう？」

おかしそうに小さく笑つて、私を見た。

「お前のおかげだよ、先代。お前の信仰が私に力を与えてくれたんだ」

「……そんな」

「そんなはずがない！」

諏訪子様が声を張り上げて否定する。

「人間一人の信仰なんかタカが知れてるんだ。それで力を得られるなら、わたし達だって存在の消滅なんかに悩んじやないよ！」

「そうだよ。その通りだ、諏訪子。けどな、そいつの信仰は違うんだ。私も、ついさつき気付いたんだよ。力を失い、崩れそうになる肉体を、そいつから送られる力が補強してくれたんだ」

「……なんだつて？」

「これを単なる信仰と呼んでいいのかは分からない。先代から向けられる信仰には、常に私に対する確固たるイメージが伴っていた。そのイメージがあまりに強烈すぎて、霧散しそうになる神の力をまるで器のように受け止め、私自身が維持しなくても勝手に肉体を形作る手伝いをしてくれるらしい」

「――」

「先代の中では、それほど強烈に私達の姿が思い描かれている。例え力が伴わなくとも、自らの抱くイメージだけで幻を生み出せるだろうよ」

「そ、そこまで……」

「なあ、本当に何なんだお前は？ これはお前の持つ能力なのか？」

皮肉るような笑みを浮かべながら、神奈子様が問い掛ける。

私は答えることが出来なかった。

しかし、言っていることに心当たりはある。

——地霊殿でさとのりの協力の下習得した『リアルシャドー』だ。
強烈な思い込みで、イメージトレーニングの相手を他人にまで見えるほど実体化させる技だ。

こいつが、神奈子様に向ける信仰に影響して、先程言われたような効果を生み出したのか。

正直、私は神奈子様ほどその辺の理屈を理解出来ていない。

しかし、私の持つ思い込みやイメージの強さが神奈子様に力を与えてしまっているというのなら、それは——。

「まあ、いいさ。とにかく、私はまだ戦える」

神奈子様が私に剣先を向けた。

それに対して私は——動けない。

傷の痛みも、出血も、一向に治まる気配がないのだ。

「先代、お前の渾身の一撃は私を倒すに至らなかった。首の皮一枚繋いで、私を救った——お前自身が！」

口元を吊り上げながら、同時にその瞳には怒りが宿っていた。

神奈子様の言葉は、まるで私への叱責のように怒りを伴ってぶつけられていた。

「だから言っただろう、お前は半端者だと。敵である私に信仰を向けるといふ矛盾を続けた結果がこれだ。お前の自業自得だろう！」

「——」
「なのに、何故いまだにお前は私に向ける信仰を絶やさない!？」

それは——。

「いい加減目を覚ませ！ お前の前に立つ者は何だ!? お前の腹を抉った者は何だ!? 今もこうして、お前に剣を突きつける者は何だ!?!」

それは——。

「私は、お前の、敵だっ!! 私を憎み、恨みを吐き出せ! 間違ったこととはない、筋の通った道理だ! 理不尽な仕打ちへの恨みは、神にぶつける!」

それは——。

「人よ……私を憐れむなっ！」

——貴女は確かにこの世界で生きている。だから、思うままに行動し、縁を紡げばいいのですよ。私とそうして出会ったように。

神奈子様の血を吐くような問い掛けに、私は答えた。

「私は……ただ貴女を含めた皆と一緒に、幻想郷へ帰りたいただけです。本当に、ただそれだけなんです」



「先代……」

激痛を堪え、震える声で吐き出された先代巫女の切実な願いは、諏訪子の胸を打った。

理由は分からない。

何故、三日前に初めて出会った神を、その家族を、ここまで想ってくれるのかは分からない。

しかし、諏訪子はその純粹な想いを確かに受け取っていた。

——それでも。

「……そうか」

先代の言葉は、神奈子の混沌とした胸の内を更に掻き乱すことしか出来なかった。

「どうあっても、お前は私への信仰を失わないつもりか」

「はい」

「そうか」

「——」

「……分かった」

「では——」

「今、何時だ？」

唐突な問い掛けに、先代は痛みも忘れて呆けたような表情を浮かべた。

「え？」

「何時だと思う？ 大分、長いこと経ったと思うが——」

神奈子は引き攣ったような笑みを浮かべた。

「嵐のせいで、空の様子が分からないか？ 戦いに集中して、時間感覚が狂っているんじゃないか？」

「何を……」

「あの雨雲の先にある空は、どうなっていると思う？ ——もう、日が昇り始めていると思わないか？」

その言葉に、先代は凍りついた。

神奈子の言いたいことを理解した諏訪子も顔色を変える。

確かに、長い時間が経っていた。

嵐はまだ止む気配を見せないが、諏訪大社から発ち、市街地へ辿り着き、神奈子との戦いを始めて、長い時間が——。

「……さとり」

先代は傍らに浮遊する陰陽玉へ呼び掛けた。

反応は返ってこない。

「さとり、返事をしてくれ！」

反応は返ってこない。

「さとり！ さつきはお前の方から私に呼び掛けてくれたんだろう!? どうした、私の声が聞こえないのか!？」

怪我の痛みも忘れて、先代は必死に声を張り上げた。

しかし、やはり反応は返ってこない。

陰陽玉は、沈黙したままそこに浮き続けるだけである。

それでも先代は更に呼び掛けを繰り返そうとする。

その無意味な行動を咎めるように、神奈子が剣を振り被って襲い掛かった。

傷を庇いながら水浸しの床を転がり、攻撃をかるうじてかわす。

「——っ、やめてください！ さとりが……!」

しかし、神奈子は戦い続ける意思を見せ付けるように、休みなく剣を振るった。

それを先代が無様に転がり回って避ける。

既にほとんどの余力を失っている二人の戦いは、先程と比べて見る影もない。

もはや先代は、この戦いに勝機も意義さえも見出してはいなかった。ただひたすらに追い詰められていく。

肉体も、精神も。

「そうだな。あの妖怪は、もう間に合わないだろう」

「神奈子様……!」

「もしもそうなったら、お前は誰を責めるんだ？ 誰を憎むんだ？」

「やめてください!」

「時間までに私を倒せなかったお前自身の責任か？ 自業自得か？」

「やめてください……っ」

「そして後悔し続けるのか？ あの時、選んでいればよかった、と。私への信仰を切り捨てて——」

「やめ……」

「それとも——切り捨てるのはあの覚妖怪の方か!？」

その言葉が、先代の追い詰められた心にトドメを刺した。

次の瞬間、神奈子に向けられたのは射抜くような黒い視線と、

「——やめろおおおおお!!」

明確な殺意。



さとりが死ぬ。

さとりが死ぬ。

さとりが死ぬ。

さとりが死ぬ。

さとりが死ぬ。

さとりが死ぬ。

さとりが死ぬ。

さとりが死ぬ。

絶対に駄目だ。
絶対に駄目だ。
絶対に駄目だ。
絶対に駄目だ。
絶対に駄目だ。
絶対に駄目だ。
絶対に駄目だ。
絶対に駄目だ。
絶対に駄目だ。

煩い。
煩い。

黙れ。

黙れ。

やめろ。

やめろ。

やめろ。

やめろおおおおおおお——！

——だったら今すぐに、お前を殺す！ 『神奈子』！！



「うおっ!？」

神奈子の体は突然の衝撃に吹き飛ばされていた。

雨で床の上を滑り、かろうじて踏み止まる。

何らかの攻撃による衝撃ではないことは分かっていた。

これは単なる、先代巫女から放たれる力の余波に過ぎないのだ。

「……分かるぞ」

神奈子は口元を引き攣らせるように笑った。

「お前の殺意が伝わる、先代巫女！」

その言葉にはようやく自身の心が一つの方向に定まった満足感が
滲み、同時に向ける視線には僅かな怯えが含まれていた。

先代巫女は変貌していた。

もはや傷を庇うことなく、二本の足で地を踏み締め、揺るぎ無く佇んでいる。

いや、傷は一瞬で癒えたのだ。ただ血の跡が服に残るだけである。神奈子の目には、先代の姿が黒く映っていた。

全身に纏う力の質が変化し、黒い炎となつて体中で燃え滾っているように見えるのだ。

まるで殺意を形にしたかのような力だった。

そして、最も変わり果てていたのは、顔だった。

神奈子を睨み据える、一片の曇りもない瞳。

殺意——ただそれ一色に染まった眼光。

それはまさに鬼の形相だった。

——信仰は消えた。あるのはただひたすら神を殺す意思と力のみ。

最後の戦いが始まる。

少なくとも、神奈子の方はそう覚悟していた。

しかし、先代は違った。

始まったのは戦いですらなかった。

「——滅——」

先代の姿が掻き消えた。

なんとということはない、彼女はただ神奈子に向けて攻撃を仕掛けるべく、前へ踏み込んだのだ。

その動きがあまりに速く、あまりに捉え辛かった為、神奈子は迎え撃つどころか反応すら出来なかった。

視界にかろうじて映ったのは、走る先代の残像と、水浸しの床に小さな波紋一つ起こさない無音の軌道のみ。

先代は一瞬にして、神奈子の懐まで入り込んでいた。

「——殺——」

殺意と力を極限まで凝縮した拳が、下から上へ弧を描いて繰り出される。

一度見た、天に向かって昇るが如き拳の技。

しかし、そこに秘められた威力と禍々しさは桁違いだった。

神奈子の体を突き動かしたのは、戦いの意思ではなく、死への予感

だった。

拳の軌道上に、咄嗟に差し出した『神剣』の刀身があっさりと砕かれる。

暗黒の拳は、神奈子の肉体を縦に抉りながら空へと昇り、強烈な上昇気流のように吹き上げる力の余波が、天にまで届いて頭上の黒雲に大穴を空けた。

空高く跳び上がった先代が、再び屋上へ降り立つ。

文字通り、嵐を引き裂いた拳がゆつくりと降ろされた。

その時、既に神奈子は倒れていた。

胸を斜めに横断する、巨大な爪痕のような傷から大量の血と力を垂れ流して、四肢を床に投げ出している。

今度こそ、本当に立ち上がることは出来ない。

いまだに神奈子が息をしているのは、単なる偶然に過ぎなかった。

あの時、『神剣』を盾にしていなければ、神奈子の体は両断されていただろう。

先代の一撃は必殺となって最後の信仰を断ち切り、神の命にまで届いたのだ。

「……見事だ」

喉の奥から溢れる血を零しながら、神奈子は言った。

先代は、そんな神奈子の姿を見下ろしていた。

その瞳から殺意の炎は消えていない。

「これで満足か？」

先程までと同一人物とは思えない、恐ろしい声色だった。

「自分が何者か分からぬまま生き永らえるより、何者か知って消えた方がずっとマシだ」

「ならば死ね。敵は殺す」

先代は断言した。

再び拳を構える。

言葉にも動きにも、もはや一切の迷いがなかった。

先代は完膚なきまでに神奈子を殺そうとしている。

目の前で繰り広げられる光景に呆然としていた諏訪子が、強烈な殺

意を感じて我に返った。

「ま、待って……！」

神奈子を庇うように、先代の前に立ち塞がる。

しかし、諏訪子を前にしても構えは解かない。

躊躇いさえ生まれなかった。

先代は、そのまま拳を繰り出していた。

庇う諏訪子ごと貫いて、神奈子を打ち殺さんばかりの凄まじい一撃が迫る。

諏訪子は目を見開き、そして固く閉じた。

その場を動こうとはしなかった。

ただ黙って死を受け入れようとしていた神奈子は、その光景を見て、初めて動揺した。

何かを叫びかけ。

拳が空を切り。

そして――。

《■■■■、目を覚ましなさい！》

何処からともなく、声が響いた。

聞き覚えのあるその声は神奈子の耳に、諏訪子の耳に――そして、先代の心に届いていた。

二柱の神の命を奪うはずの拳が、止まった。

そこに握り締めた力も、殺意も消え失せ、ゆっくりと指が解かれていく。

諏訪子はそつと目を開けて、頭上を見上げた。

そこには正気を取り戻した先代の顔があった。

「先代……」

「諏訪子……様……」

静寂の中、二人は互いを確かめるように見つめ合った。

諏訪子は先代が元に戻ったことを確かめる為に。

先代は諏訪子がまだ存在していることを確かめる為に。

そして、次に視線を移して倒れたままの神奈子を見つめた。

複雑な感情を絡めた視線が、先代を見つめ返していた。

死にかけていた肉体に、僅かな力が戻るのを神奈子は感じていた。信仰は、再び蘇ったのだ。

「それがお前の答えか、先代——」

神奈子の眩きが静寂に溶けて消える。

戦いは、ようやく終わった。

街に本来の平穏と静けさが戻ったのだ。

——静けさ。

「——拙い！」

先代が慌てて頭上を振り仰ぎ、それを見て諏訪子が一瞬訝しげな顔をした後で、すぐさま気付いた。

静かなのだ。

戦いの音が止んだのはともかく、いつの間にか雨も風も止んでいく。

原因はすぐに思い至った。

天を突き、雨雲を打ち抜いて、嵐を引き裂いた先代自身の一撃だ。

諏訪子もまた頭上を仰いで、そこに広がる光景に目を見開いた。

雲は完全に晴れていた。

先代が空けた穴を中心に、雲が凄まじい勢いで霧散し、消えていく。

後に広がるのは夜空だけだった。

僅かに白み始めている空が。

「夜明けだ！」

諏訪子が悲鳴のように叫んだ。

もはや一刻の猶予もなかった。

安否を疑う必要もなく、さどりの命が消える確実な刻限が迫っている。

諏訪子が芳香を、先代が神奈子を担ぎ上げた。

この状況で縋れるのは一人しかいなかった。

先代はあらん限りの声で叫んだ。

「青娥あああ——!!」

その叫びに、果たして応える者はいた。

「——呼んで下さいましたね、先代様！」

ビルの下から急上昇してきた青娥が、屋上に躍り出た。

その姿は、何故か半ば以上黒く焼け焦げていた。

服はボロボロに炭化し、顔や腕に引き彎ったような火傷の痕が刻まれている。

しかし、青娥はそんな傷など露ほども気にしてないように笑っていた。

言葉を交わしている暇はない。

青娥は持っていた鑿を、諏訪子の支えている芳香の体目掛けて投げつけた。

「開！」

鑿の先端が芳香の腹に刺さった瞬間、青娥が短い呪を唱えた。

その瞬間、刺さった鑿を中心にして芳香の腹が大きく開いた。

まるで刃物で切り開かれたかのように、腹部がパツクリと左右に開かれていたが、その先にあつたのは内臓の類ではない。揺らめく水面のようなものだった。

いや、それが置かれた状況さえ異常でなければ、器に水を張った水面そのものには見えないものだった。

「諏訪大社に繋がる水の道です。芳香に飲ませておきました。さあ、皆さん。一気に神社まで移動します、飛び込んでください！」

青娥の簡潔な説明を受けて、躊躇う素振りも見せずに飛び込んだのは先代だった。同様に、担いでいた神奈子も飛び込む形になる。

不思議なことに、体格的に通れるはずのない先代と神奈子の体は吸い込まれるように水面へと消えていった。

それに続いて、意を決した諏訪子が飛び込む。

次に、青娥が。

そして、最後に芳香自身が自分の腹に押し込むように首を曲げ、頭を水面へ突っ込んだ。

首に続いて肩、腕、胴体に足——と、自分で自分の体に吸い込まれるという奇怪な光景を繰り広げながら、やがて芳香自身も姿を消した。

後に残ったのは、誰もいない半壊した屋上だけだった。

遠くで幾つものサイレンの音が響いていた。



永遠にも感じる長い時間を、早苗はただひたすらに耐えていた。祈ることはしなかった。

自らが祈りを捧げるべき神は、二柱とも遠くで戦っているのだ。彼女達にも戦う理由があり、早苗には無事に戻って来て欲しいという願いがある。

故に、早苗は祈らなかった。ただひたすらに信じていた。

自分の中に幻想郷へ行く為の力が眠っているというのなら、己の内側に意識を向け、その力を一点に集めていた。

すぐにでも力を解放出来るように。

一時間か。

二時間か。

長い時間が流れた。

開け放たれた雨戸から見える空は、ほんの僅かだが白み始めている。日が昇ろうとしているのだ。

早苗は幾度も見たさとの顔に、再び視線を落とした。

すぐ傍で横たわるさとりはピクリとも動かず、気を失ってから『一度も』意識を取り戻していない。

何処を見ても、不安を煽るものしか視界に入らない。

固く瞼を閉じる。

早苗の精神は限界に近づいていた。

——もし。

——もしもこのまま、全てが。

「……神様」

ついに早苗は祈った。

神に奇跡を祈った。

次の瞬間、光が瞼を射した。

目を開けば、青娥が用意した大皿に満たした水が眩しい光を放っている。

早苗には、その現象の意味が分かっていた。

一際大きな発光と共に、水面から幾つもの人影が飛び出してきた。

先代。

神奈子。

諏訪子。

青娥。

そして、早苗にとっては初対面である芳香。

全員が、無事に諏訪大社へと帰還したのだった。

「神奈子様！ 諏訪子様！」

早苗は歓喜と共に彼女達を迎えた。

神奈子がバツの悪そうに視線を逸らし、諏訪子が照れ臭そうに笑う。

しかし、再会を喜んでいる余裕はなかった。

先代がさどりの名前を叫びながら、傍に駆け寄る。

すぐさま我に返った諏訪子が、早苗に向かって叫んだ。

「術式に力を流し込め！ 急いで！」

「はいっ！」

早苗もまた間髪入れず、それに応えた。

事前の準備は万全である。

施された術式を理解し、発動する為の力を十分に蓄えていた。

最悪の場合、一人で行わなければいけない作業も、今や全員が傍に揃っている最高の状況である。

躊躇う要素も、不安に思う要素もない。

「いきまっすー！」

気合と共に、早苗は術を発動させた。

早苗を中心に、何本もの光のラインが床を走り、それらは途中で更に何本にも分岐して、壁を伝い、天井にまでまるで根のように無数に張り巡らされていく。

早苗達の居る室内だけに、それは留まらなかった。

諏訪大社全体を包み込むように光が走り、更には建物を越えて周辺一帯の土地にまで伸びていく。

術の行使は順調だった。

既に千を越えた光の筋が力強く走っていく。

発光は更に強まり——そして、更に強まる。

「……あ、やばいかも」

諏訪子が冷や汗を流しながら呟いた。

先代が思わず視線を向ける。

「どういうことですか、諏訪子様？」

「力が強すぎる……」

「え？」

「早苗の力が強すぎる！ 術式が暴走しかかってる！」

「——す、諏訪子様あ!？」

切羽詰った早苗の声が割り込んだ。

床にかざした手のひらの下が、術式の中心となっている部分である。

その部分が、一際激しく発光し、その光は物理的な洪水のように溢れ出そうとしていた。

早苗が、それを両手で必死に押さえ込んでいるような状態である。

慌てて諏訪子が駆けつけた。

早苗の手に重なるように自分の両手を置き、協力して力を抑えようとする。

しかし、光はどんどん強くなり、まるで風船のように膨らみ始めていた。

「だ……駄目だ、早苗の力が予想以上だった！ このままじゃ神社ごと幻想郷に飛ぶどころじゃないぞ！ 土地ごと宇宙まで行っちゃうよー！」

「そ、そんなあ!？」

「情けない声上げるんじゃないよ、それでもわたし達の風祝かい!？」

「なんですか、都合のいい時ばかり身内扱いして！ 私のこと選ん

でないって言ったの誰ですか!？」

「あれはお前自身が選ぶものだっていう意味で……って、そんなこと言ってる場合じゃねー!」

力の膨張は収まらない。

既に室内は壁も天井も満遍なく光り輝き、転移の為の術式が最終段階に入ったことを暗に示していた。

光の中、先代は眠ったままのさとりを庇うように覆い被さり、青娥は笑いながら状況を眺めて、芳香は身動きが出来ずにぼんやりしていた。

決定的瞬間が差し迫る中、諏訪子は咄嗟に神奈子へ視線を走らせた。

「――神奈子、力を貸して!」

「はあ?」

先代との激しい戦いと、その衝撃的な決着を経て、半ば放心状態にあった神奈子は、諏訪子の言葉を受けて完全に我に返った。

思わず正気かと諏訪子を見つめれば、真っ直ぐな視線が二つ返ってくる。

諏訪子と早苗の視線。

それも昔を思い出させるような、親しい者へ向ける純粋な視線だった。

「お前ら、今更私に……!」

「神奈子!」

「神奈子様!」

諏訪子と早苗の切羽詰った叫びが、神奈子の言葉を遮った。全てがピークに達しようとしていた。

光が。

術式が。

あらゆる状況が。

「――ええいつ、くそ!」

限界が迫る中、咄嗟に神奈子は手を伸ばしていた。

三人の手が一つに重なり、そして――。

その日、諏訪大社から巨大な光の柱が天に昇った。

しかし、それは丁度顔を出した朝日に混じり、ほとんどの人間が目にすることはなかった。

それを見た人間も、単なる幻か錯覚と思い、その日の内に全てを忘れた。

諏訪大社はその日も変わらずそこに在り、諏訪湖が干上がるようなこともなく、何事もなく一日は過ぎていった。

この世界に住んでいた一人の少女と、二柱の神、一人の仙人、一体の死体——そして幻想の世界から迷い込んだ巫女と妖怪が姿を消した。

起こったのはただそれだけ。

世の中に何の影響もない出来事だけである。



諏訪市の住人に、例外なく朝はやって来た。

『東風谷』と表札に書かれた一軒家の夫婦も同様に、朝目を覚まし、食卓についていた。

向かい合うようにテーブルに座り、テレビから流れるニュースの声だけが聞こえている。

別段、夫婦仲が冷めているわけではない。結婚して二十年以上が経てば、自然と会話も落ち着いたものへと変わっていくのだ。

もはや慣れた空気だが、この日は少しだけ普段よりも寂しさが感じられた。

子供でもいれば違っていたのかもしれないが——。

二人には、子供がいなかった。

「そういうえば、昨日の夜は台風だったのか」

ニュースでは遠く離れた都会を直撃したという台風と、その甚大な被害について矢継ぎ早に情報が流れている。

その台風と同じものが、ここ諏訪市も通過したとニュースでは語ら

れていた。

規模に反して信じ難い速度と軌道で、台風は一夜にして大きく移動し、そして夜明けと共に消えたらしい。

「なんだか、おかしなニュースねえ」

「多分、情報が錯綜してるんだろうな。被災地は大変だ」

台風のニュースについて、二人の感想はそれだけで終わってしまった。

所詮は対岸の火事なのだ。

離れた場所で何が起ころうと、大した興味は抱かない。実感など、当然のようにない。

多くの人々にとつて、昨夜の出来事はその程度の認識なのだった。

「そういえば、あなたは今日は休みよね？」

早くも話題を変えた妻が、夫に問い掛けた。

「ああ、そうだが。どうかしたのか？」

「ちよつと家の模様替えをしようと思つてね。手伝つてくれる？」

「そりや構わんが、どうするんだ？」

「ほら、二階の空き部屋あるじゃない」

「そういえば、あつたかな」

「そうなのよ。あそこ、何も無い部屋だから、物置にでもしようと思つてね」

「何も無いのか。なんで、何も置いてなかったんだらうな？」

「さあ？ この家建ててから、確か一度も使つてないと思うけど」

「そうだったか……勿体無いな」

「ええ。だからせめて、ね」

「分かった、手伝うよ」

「ありがとう」

会話を終え、食事を再開する。

「——そういえば」

ふと、思い出したかのように妻が言った。

「さつき、その部屋を見てただけけど、こんな手紙があつたのよ」
妻が夫に白い封筒を差し出した。

「手紙って……封筒には何も書いてないじゃないか」

「あなた、心当たりない？」

「ないなあ」

封を開け、中身を取り出す。

折り畳まれた紙に軽く目を通して、夫は言った。

「中身も何も書かれてないじゃないか」

「何なのかしら？」

白紙の手紙は、勿体無いから再利用しようと適当な棚に仕舞われ、そして何時しか忘れられた。



お母さん。

お父さん。

二人に黙っていてごめんなさい。

二人に嘘をついてごめんなさい。

二人を信じてあげられなくてごめんなさい。

ずっと。

ずっと話したかった。

私が抱えているもの、悩んでいること、全てを二人に打ち明けたかった。

具体的にどんなことなのか分からなくても、私が密かに悩んでいるのを二人は知っていたと思います。

だから時々、それを聞き出そうと優しく話し掛けてくれたことを、私は知っています。

そんな時、何も言えずにごめんなさい。

たまにそれが煩わしくて、怒鳴って返してしまっただごめんなさい。

そして結局、最後には適当な嘘で誤魔化してしまっただごめんなさい。

心の何処かで私は、二人が自分とは違う人間なのだと思っただごめんなさい。

本当の私を理解してくれるはずがないと、決め付けていたのだと思います。

そのことを、こうして旅立つ時になって深く後悔しています。

お母さんに話しておけばよかった。

お父さんに相談しておけばよかった。

例え信じてもらえなくても、最初の一步を踏み出して、少しでも二人に歩み寄ろうとしておけばよかったと思っています。

もし、ちゃんと私が話せていたら。

別れの場に立ち会えなくてもいい。

別れの挨拶が交わせなくてもいい。

別れた後、私のことを忘れてもいい。

それでも、私が何故この世界を離れるのか、私が何をやる為に二人から離れるのか、話す機会を作れたでしょう。

理解してもらわなくてもいい。

ただ、伝えたかった。

私をきちんと育ててくれてありがとうと伝えたかった。

二人の教えてくれたことが今の私を形作ったのだと伝えたかった。

二人のおかげで、行くべき道を選べる自分になれたのだと伝えたかった。

お母さん、ありがとう。

お父さん、ありがとう。

伝えたくて。

でも、もう伝えることは出来なくて。

こうして筆を執るしかない私を許して下さい。

私は行きます。

私の信じる方々と共に生きる為、この地を離れます。

そこで私は後悔するかもしれない。

苦しい目に遭うかもしれない。

新しい生き方を見つけるかもしれない。

新しい幸福を見つけるかもしれない。

だけど、どんなことがあっても一つだけ変わらないことは。

私がこの地で生まれたこと。

私がこの家で育ったこと。

私が二人に愛されていたこと。

私が二人を愛していたこと。

それだけは変わりません。

例え二人が忘れてしまっても、私の中には変わることなく残り続けます。

お母さん。

お父さん。

本当にありがとう。

——いつてきます。

其の五十一 「奇跡」

あの時見せた空虚な表情は一体何だったのか——？
そう疑問を感じる程の猛攻を、天子は受けていた。

戦いが始まって長い時間が経ち、体力も精神力さえも磨り減り続けているはずだ。加えて、どれだけ優れた才覚を持っていても身体能力は人間の範疇である。天人とは限界の値が違う。

——しかし。

しかし、霊夢の攻撃は衰えるどころか、ここへ来て一気に苛烈さを増していた。

残りの体力を考慮して無駄な消耗を極限まで削いだ攻撃は、結果として恐るべき鋭さを生み出していた。

一撃一撃が、回避を無視して的確に目標を捉え、防御をすり抜け、意識の空白を突いて無防備な箇所深く刺さる。

理想的な攻撃だった。相手を確実に殺す為の。

殺意や敵意といった感情さえ排した、ただひたすらに正確無比な攻撃が天子を追い詰めていく。

もはや余裕はない。初めて生命の危機を感じる。

「何よ……！」

しかし、天子がまず何よりも抱いている感情は戸惑いだった。

自分を攻撃する霊夢の顔を睨みつける。

「何なのよ、その面は……!?!」

そこに浮かぶ表情は、依然として変わらないものだった。

冷静にして圧倒的な攻撃を放ちながら、霊夢の顔に滲むように浮かんでいるのは何かを堪えるような苦悶の表情だった。

まるで攻撃をする度に、追い詰められているのが自分自身であるかのように、口元を強く引き結び、その下で歯を食い縛っているのだ。

霊夢の右足が鞭のようにしなり、胴体を両断するような鋭さで天子の横腹に叩き込まれる。

天子の口から洩れる苦悶の声を聞いた。

——その時、脳裏に浮かんだのは母が神社の居間で裁縫をしている

姿だった。

緋想の剣が横薙ぎに振り抜かれようとするよりも早く反応し、手首を掴んで動きを止め、その肘に対して自らの肘を叩き込んだ。

骨が軋む。天人の肉体でなければ、確実に腕を折っていただろう。

天子の顔が苦痛に歪むのを見た。

——その時、脳裏に浮かんだのは母が神社の柱に刻まれた傷を見て、背が高くなったことを褒めてくれる姿だった。

取り落としたと見せかけ、無事な方の手で緋想の剣を掴んだ天子は、そのまま刀身を地面に突き立てた。

自分に刃が向けられたわけではなかった為、霊夢も反応が一瞬遅れる。

次の瞬間、剣の突き刺さった一点で地面が爆発し、自爆覚悟で発生した爆風が霊夢と天子を同時に襲った。

霊夢は最小限の結界で爆発の衝撃を抑え、無数の破片が全身を傷つけることも構わず、強引に前へ踏み込んだ。

無謀な判断の根拠には、天子への殺意があった。

——その時、脳裏に浮かんだのは夜中に寝返りを打てばすぐに見ることが出来た、そして傍に居ると分かって安心することが出来た母の眠る姿だった。

傷だらけになりながらも躊躇無く前進してくる霊夢に逆に意表を突かれ、隙だらけの天子の全身へ余すところなく繰り出される連撃。

爆発を防いだ結果とは別に持っていた攻撃用の霊符を喉元に打ち込み、肋骨の隙間から内臓へ貫き手を突き刺し、頭突きで鼻柱をへし折る。

背筋が凍るほどの確で鋭利な攻撃が、次から次へと天子の肉体を襲った。

長時間の戦いによって消耗していたのは霊夢だけではない。

天人五衰。限界を超えたダメージを受けて血を流し、痛みを感じるようになった今の状態の天子はほとんど人間と変わらない。鋼のような硬度を誇る肉体の加護は、一時的にだが失われている。

それを見抜いているかのように、霊夢はここぞとばかりに天子を攻

め立てた。

怒涛の攻撃だった。

追い詰めている。

自分の大切な物を壊した憎むべき敵を、今まさに死の一步手前まで追い詰めている。

この敵を倒すことが出来れば。

こいつを殺すことが出来れば。

何を――。

得られるのだろうか？

何が――。

戻ってくるのだろうか？

何も――。

――その時、霊夢の脳裏に浮かんだのは神社の前で微笑みながら自分を待つ母の姿だった。

何も。

何一つ。

失われたものは。

失ったものは――戻らない。

呪うべき相手は目の前にいる。

しかし、返してくれる相手はいないのだ。

霊夢の中で、堪えに堪えていた何か千切れる音がした。

「うわああああああああああああっ!!!」

霊夢は絶叫を上げながら、天子に渾身の霊撃を叩き込んだ。

吹き飛ばされた天子は地面を転がり、やがて止まった。

それ以上の追撃はなかった。

霊夢は肩で息をしながら、倒れた天子を睨みつけるだけである。

その視線の先で、天子が再び立ち上がろうとしていた。

しかし、さすがに人外の耐久力も、とうに尽きている。

力の入らない両足は震え、かろうじて立っているだけの状態だった。

もはや精神力だけが天子を支えていた。

「……何なのよ、さつきから」

潰れかけた喉で掠れた声を絞り出し、血塗れの顔で霊夢を睨む。

そこに死闘の中で傷つきながらも全てを楽しんでいた笑みはない。

天子は苛立っていた。

「ボロボロにやられてるのは私の方だったのに、何であんたの方が辛そうな顔してんのよ!？」

霊夢は今にも泣きそうな表情で、天子を見つめていた。

その眼つきには、もはや『睨む』というほどの力強さはなかった。

「……気分なんか良くならない」

霊夢は声を絞り出すように答えた。

「あんたを、幾ら痛めつけたって……スッキリしない。きつと、この戦いに勝ったって、何一つ得られるものなんてない。意味なんてない。くだらない……!」

「散々、容赦なく人をぶちのめしておいて、今更臍抜けたこと言ってくるわね。何？ あんた、もう私が憎くないっていうの?」

「憎いわよ。あんたは、あたしの大切な物をぶち壊した」

「じゃあ、やることがあるでしょうが。腹の中に、煮え滾るものがあるでしょうが。それを——」

「あたしが勝ったら、あんたはあたしに何もかも返してくれるって言うの!？ 全部元通りにしてくれるの!!？」

霊夢は絶叫した。

あまりの迫力に天子は思わず目を見開いて、口をつぐんだ。

悪態とも恨み言とも、少し違う。

霊夢が吐き出したものは、感情という名の血だった。

痛みを伴う叫びだった。

「あんたをどれだけ痛めつけても、例えば土下座させても……殺したとしても……何も、何も戻ってこないのよ……っ」

震える声でぶつけられる叱責に対して、天子は何も応えることが出来なかった。

本来ならば、何とでも言い返せたはずである。

霊夢の必死な訴えに対して、鼻で笑つてもいいし、逆にこれまでの

ように挑発で返してもいい。

それを受けて、彼女はまた戦意を漲らせるかもしれない。

しかし、天子にはそれが出来なかった。

今更、恨まれることに怯んだわけではない。

ただ——無視をするには、霊夢の叫びは悲痛すぎた。

もはや天子個人に向ける恨み辛みの感情を越えて、霊夢は現実を悟ってしまっていた。

敵を恨むことの虚しさ。

戦いで自身の激情を晴らそうとすることへの虚しさ。

どんな結果になっても変わらない虚しさ。

全てが空虚に思えた。

天子は霊夢の言動から様々なことを感じ取り、そして自らもまた悟った。

——こいつは、もう自分との戦いに何の意味も見出していない。

そう悟った時、天子の胸の内に走ったのは紛れもない痛みだった。

初めて感じる心の痛みだった。

「な……何よ？」

天子は必死に強がろうと口を開いたが、出てきた言葉は動揺で震えていた。

「今更、弱音なんて吐いてんじゃないわよ。ねえ、続きをやりましょうよ？」

「この戦い、今ならあんたが勝てそうじゃない？」

「くだらないわ……」

「何がくだらないのよ!?! あんた、私が憎いんでしょう!」

「憎いわよ……」

「だったら——!」

「うるさい。あんたなんか、大嫌いよ。顔を見るのも嫌よ。死ね。あんたなんか……っ」

冷徹にして苛烈な姿は、もはや見る影もない。

天子に向けられる罵倒さえ、言葉を紡ぐ途中で力を失っていく。

「……返してよ、あたしの……」

言葉は続かない。

既に、霊夢の戦意は完全に萎えていた。

死闘を続けていた天子を前にして、もはや完全に戦闘態勢を解き、俯いた顔を手で隠して、弱々しく罵倒を吐き続けるだけである。

その姿に、天子はただ呆然と佇むことしか出来なかった。

無防備な霊夢に攻撃を仕掛けようなどという発想は何処にもない。

殴られ、蹴られ、弾幕を叩き込まれて、死を感じる程の攻撃を受けても天子の心を昂ぶらせるだけだった。

しかし、命を懸けた死闘を『くだらない』と放棄した霊夢の姿は、天子からも戦いへの意義と熱意を奪ってしまったのだ。

力なくぶつけられた『大嫌い』という言葉が、どんな攻撃よりも深く胸に刺さり、重く腹に残った。

何の感情も籠もらない、もはや視線すら自分に向けようとしなない霊夢の態度に、経験したことのない息苦しさを感じていた。

「霊夢」

奇妙な空気が流れる中、霊夢の震える体を後ろから抱き締めたのは魔理沙だった。

「悪い、霊夢。わたしが間違ってたぜ。お前に任せておけば、全部解決すると思ってたんだ」

「魔理沙……っ」

「お前があいつを叩きのめして、報いを受けて、それで解決だと思ってた。間違ってたよ、ごめん。止めるべきだった。こんなこと、何もお前の為にならなかつたんだ」

「――」

「もう、帰ろうぜ。こんな奴と戦う意味なんてない」

「……うん」

肩を抱いて促す魔理沙に、霊夢は抵抗しなかった。

本当に、この場から去ろうとする二人を、天子が慌てて呼び止める。

「ちよ、ちよっと！ 何処へ行くのよ、私はまだ戦えるわよ！」

「一人で戦ってるよ」

「異変解決はどうするのよ!? 私を退治しないのなら、また異変を――」

「お前がやったことは『異変』じゃねえ」

魔理沙は何処までも冷たく返した。振り返りもしない。

霊夢に至っては反応すら見せなかった。

もはや天子の存在など無いものかのようには扱って、未練も躊躇もなく離れていく。

その後ろ姿を呆然と見送っている間に、二人は天子の視界からあつという間に消えてしまった。

天子は動くことが出来なかった。

戦いに勝つことも負けることもなく、敵意さえ向けられず、遂にはただ『無視された』という決着に、どう対処すればいいのか分からなかった。

残っている咲夜の存在に気付いていないかのように、立ち竦むだけである。

霊夢と魔理沙が天界から去っていくのを見送った咲夜は、天子の方へと視線を移した。

途方に暮れる姿に、ほんの僅かだが憐憫を覚えた。

博麗神社を襲った出来事の元凶が、比那名居天子であることは言うまでもない。自らの仕出かしたことに對して、どんな応報を受けようがそれは完全な自業自得だ。

彼女は自らの享樂の為に霊夢の心を深く傷つけた。

そんな天子に對して、咲夜も好意的な感情は何一つ抱いていない。

しかし——きっと『事情』はあったのだろう。

咲夜は天子と邂逅して以来見てきたもの、察したものを統合して、そう結論を出した。

霊夢との長く、激しい戦いの最中、咲夜は気付いていたのだ。

ここには当然ながら天子以外にも天人が住んでいる。

天界の一角で盛大な戦いを繰り広げ、更にそれを夜通し続けながら、他の天人に気付かれないはずがない。

案の定、二人の戦闘を遠巻きに眺める天人の姿を咲夜は何人か見掛けている。

戦いを止めにくるのか。邪魔をしに来るのか。最悪天子の味方と

して加勢に来るかもしれないと密かに身構えていた咲夜は、しかし肩透かしを受けることになった。

天人達は、本当に少しの間だけ天子達の戦いを眺めると、僅かに顔を顰め、すぐに立ち去ってしまったのだ。

誰もが同じ見て見ぬ対応で、そそくさと去っていった。

戦闘の影響を恐れた様子ではなかった。

天界への侵入者である自分達はもちろん、天子自身も含めた戦いに関わる者全てを、まるで汚らわしいものであるかのように遠巻きに一瞥して、足早に離れていったのだ。

咲夜は、それで察した。

——そうか。天人とは、本来『こういうもの』なのか。

争いはなく、いがみ合いもない、天人達がただ遊んで暮らす世界。

それが天界なのである。

それが天人達の住む楽園なのである。

誰も競わず、争わず、こういった騒動には関わることなく、ただ愚かなものを見るように遠ざかっていく。

平穏を乱すものには向き合わず、声高く訴える者には取り合わず、緩やかに無視をして通り過ぎてゆく。

——天子は、ずっと『こんな場所』で暮らしてきたのか。

そう察して、咲夜は目の前の敵にほんの僅かだけが憐れみを抱いたのだった。

「……まあ、あれね」

とはいえ、敵である天子に対してそれ以上の感情を抱くこともなかったのだが。

「アナタも苦労してるわね」

他人事のように素っ気無い言葉だけを残して、咲夜もまた二人の後を追うように天界を去っていった。

天子は移り行く状況から取り残されたかのように、独り佇んでいた。

「……何よ」

ようやく湧き上がってきた悪態が、口からポツリと零れ出た。

握っていた緋想の剣を、苛立ちに任せるまま足元に投げつける。
それは思いの他、弱々しく地面を転がった。

「一体、何なのよ……!」

天子は下唇を噛み締めて、腹の底に残った奇妙に重みのあるものに耐えた。

その複雑な感情の正体は何なのか、自分にも分からなかったし、教えてくれる人もいなかった。



「ねー、何で空を飛ばないのよ? あたい、もう何処をどう歩いたか分からなくなっちゃったわ」

「チルノ、声が大きいわ。天狗のテリトリーにいる間は、わたし達は侵入者扱いなんだからさ、見つからない為なの」

「地理については、射命丸さん達がちゃんとか分かってるから問題ないよ。だから、もう少し頑張って歩いてね」

「チルノってば、もう疲れたの? だらしないわね」

「違う! あたいってば、まだまだ元気一杯よ!」

愚痴を零すチルノに対して、橙が分かりやすく説明をする。そのフォローにフランドールも加わり、鼻で笑う空にチルノが食って掛かる。

しっかりと音量を抑えながらも賑やかな四人のやりとりを背後で聞き、集団を先導する天狗組の一人であるはたては感心したように頷いていた。

「なんだか滅茶苦茶な組み合わせだと思ったけど、案外上手くバランスが取れてるのね」

「そうね」

並んで歩く文が相槌を返した。

「微笑ましいよね」

「面白いとは思わね。紅魔館の吸血鬼が妖精と仲が良いとか、下っ端とはいえ八雲に連なる妖怪と親交を持つとか、拳句に地底から来た

妖怪。事実と推測を混ぜて、デカイ記事が三つは作れるわね」

「あんたって、何でそう……」

嫌らしい笑みが浮かぶ文の横顔を見て、はたては大きいため息を吐いた。

そんな二人やチルノ達のやりとりに関わらず、ただ黙々と権が先頭を歩いている。

山中を進むこの奇妙な集団を先導する役割を負っているのが、彼女だった。

当然ながら、これは哨戒天狗としての仕事ではない。むしろ、その職務を放棄した勝手な行動である。

しかし、権は不満を言葉にも表情にも出さずにこなしていた。

「――間もなく、目的地です」

唐突に、権が言った。

その仕事柄、妖怪の山の地形については完璧に把握している。

権の言う『目的地』とは、はたてが念写した『湖と神社が映る妖怪の山の一角』である。

「ふむ、やっぱり神社なんてないわよね」

足を止め、周囲を見回しながら文が呟いた。

山の中なので当然だが、何処を見ても木々が生い茂る風景である。

「はい。この先に、それらしい建造物や水源は確認出来ません」

権がそこに付け加えた。

千里眼の能力を持つ彼女が断言するのならば、それは間違いのないことである。

二人の言葉を聞いて、はたては焦ったような声を上げた。

「い、いや！ でも、あたしの念写に間違いはないし！ ……ハズだし」

先代巫女と古明地さとの情報を求めてやってきたチルノ達を連れて、こんな場所までやって来たそもその理由ははたての念写にあった。

同じく先代巫女を探す為に能力を行使し、その結果得られたこの一枚の写真を手がかりとして、ここまでやって来たのだ。

チルノ達の期待や、同じ天狗の仲間達の目を掻い潜ってきた苦労を

思えば、何の成果も得られない事態だけは避けたい。

「でも……その……間違ってたら、ごめんなさい」

別段責めるような意図は込められていないのだが、周囲の視線に晒されて、はたては顔を青褪めさせながら俯いてしまった。

落ちた肩が小刻みに震えている。

緊張から来る嘔吐の前兆だった。

「気にすんな、誰にでも失敗はある！」

「チルノちゃん……」

「そうだよ。はたてさんが真剣に探そうとしてくれてることは、ちゃんと分かってるから」

「フランちゃん……ありがとう！」

「でも、さとり様はまだ見つからないんだよね……」

「ごめんねごめんねあたしが不甲斐ないからそんな目で見ないうおぼええええええ！」

「みぎやーっ!? 吐いた! っていうか、服にちよつと掛かったあー」

「コラ、お空! はたてをイジメんな!」

見た目は子供のような四人に慰められる同僚の姿を見て、文はこめかみを押さえた。

すぐさま権が介護に回る。

見慣れた光景を眺めながら『何をやっているんだか』とため息を吐いた。

「……とりあえず、上空からもう一度周囲を確認してみましようか」

騒ぎが収まるのを待って、文は提案した。

「この周辺はもう天狗のテリトリーじゃないから、飛んでも大丈夫。はたての念写に映った以上、ここにはきつと何か意味があるはずよ」

普段、どれだけ憎まれ口を叩いていても、能力評価という点において文は公平であり的確だった。

はたての能力には想像もつかないような未知数な部分が多いが、常に一定の成果を挙げている。長年の付き合いである文は、それを認めていた。

この場所が念写に映ったということは、何かがあるのだ。

あるいは、何かが起こる場所なのだ。

あの写真は、その『何か』が起こった結果を映したものののではないか――。

すっかり自信を喪失したはたてとは反対に、半ば確信を抱いている文は、すぐさま上空へと飛び上がった。

朝日が顔を出し始めていた。

見慣れた妖怪の山の風景が、光に照らされて、鮮明に映し出されていく。

「朝だ」

「いつの間にか、夜が明けてたんだね」

「フラン、大丈夫？」

「正直、ちよつとキツイかも」

気遣う橙に、フランドールが顔を顰めながら答えた。

朝日は夜の闇を払う光である。並の吸血鬼ならば、浴びた途端に灰になってしまう神聖な力があるのだ。

吸血鬼として高い潜在能力を持つフランドールであっても、激痛と共に大きく体力を削がれ、無防備に浴び続けば死さえ在り得る光だった。

「フラン、わたしの翼の影に入って」

「ありがとう、お空」

「気にしないで。だって、わたし達友達じゃん」

「……うん」

全身を酷い脱力感と苦痛に蝕まれながらも、フランは嬉しそうに微笑んだ。

釣られるように、チルノと橙も笑う。

それを見ていたはたてが『種族を越えた友情よねえ』と感涙していた。

先程から吐いたり泣いたり、情緒不安定にも見える。いや、それはいつものことか。

文は納得して、改めて周囲を見渡した。

上空から眼下を見下ろすと、より一層の確信が持てた。

この一帯は、はたての念写で映っていた場所に間違いない。あの写真と異なる点は、湖と神社が存在しないことくらいだ。あとは全て一致している。

そう、全てだ。

木々の配置から、光の加減まで、全て視界にある光景をそのまま切り抜いたかのように、あの写真と同じだった。

朝日が昇り、日が差すこのタイミングさえも、あの念写された場所の中のそれと一致するのではないか。

つまり、この時間帯、ここで。

——『何か』が起こる。

「おや」

慎重に周囲を観察していた文は、近づいてくるものに気付いた。

「これは、レミリアさん。ご機嫌麗しゅう」

朝日の中を日傘を差して飛んできた場違いな吸血鬼の姿を見つけ、文は殊更丁寧に会釈をした。

「こんな所で何をしているのかしら？」

腰の低さに隠された文の不遜な本心を見抜き、レミリアは憮然としながら訊ねた。

「それはこちらの台詞ですな。少なくとも、早朝に妖怪の山へやって来た吸血鬼よりは場違いではないと自負しております」

「ふんっ、どうやってか知らないけれど、お前も事態を嗅ぎ付けたよね」

「……やはり、ここに何かがあるんですね？」

「そうよ。これから起こるわ」

レミリアは断言した。

「あー！ お姉様、どうしてここに!?!」

「どうしてって、決まってるでしょ」

日傘を差す方とは反対の腕に持っていたもう一本の傘を、フランドールに投げ渡す。

『運命』が見えたからよ」

呆氣にとられるフランドールに対して、レミリアは自信たっぷり

答えた。

「――さすがは、レミリア・スカーレットですわ」

「あやや、これはいよいよ大事になってきましたね」

更に、この場にはいないはずの者の声が響いた。

声のした方向にいる人物を認めて、最も大きく動揺を表したのは橙だった。

そこにいたのは八雲紫だった。

移動に使用したであろうスキマの淵に腰掛けて、いつも通りの胡散臭い笑みを浮かべていた。

「妖怪の賢者様までお出ましとなれば、これはもう確定ですか？」

レミリアと紫が、この時間、この場所で邂逅したこと。

そして、はたての念写が映した光景。

全てが偶然であるわけがなかった。

ここで何かが起こりつつある。

この示し合わせたような集まりは、その発端なのだ。

文は紫に負けじと不敵に笑ってみせた。

「それはこちらの台詞ね。私も、貴女を見て確信したわ」

「へえ、それは一体何の話でしょう？　生憎と、私は運命も理の隙間も

見る力など持つてはいませんが」

「だけど、貴女には縁がある。先代巫女に関する深い『縁』が」

紫の口から出てきた思わぬ意味深げな言葉に、文は眉を顰めた

元より、文の八雲紫に抱く感情は良いものではない。

あの鬼の異変以降、拭えない不信任が根付いてしまっている。

文は表情と口調に不快さを滲ませつつも、慎重に口を開いた。

「……何故、そこであの子の名前が？」

「レミリアの言葉を借りるならば『運命』とやらに、貴女は導かれたのかもしれないわね。貴女の同僚が未来を念写したのも、橙達が貴女の所を訪ねたのも、全てが貴女と先代を繋ぐ運命――」

「分かりやすく言ってもらえませんか？」

「私がここへ来たのは、消えた先代を探した結果辿り着いたのよ。彼女が外の世界へ飛ばされた可能性が高いことは分かっていた。そし

て、先代の軌跡を追っている間に、私は外の世界で起こっている異変に気付いたのよ」

先代巫女達の行方はもちろん、全ての原因である出来事についてすら何も知らなかった文達にとって、無造作に告げられたその情報は寝耳に水だった。

訊いた文本人はもちろん、突然現れた八雲紫を畏れて様子を伺うことしか出来なかった者達は、黙って説明に聞き入るしかない。

ある者は先代巫女の、またある者は古明地さとりの、それぞれの安否を第一に思うが故に平静ではいられないのだ。

自らの能力である程度事情を見抜いているレミリアと、逆に多くのことを分かつてはいないが一番重要な部分だけは理解しているチルノだけが、紫の雰囲気には吞まれない。

ちなみに、紫の登場に一度肝を抜かれているのは橙だった。自分がここにいる理由とこれまでの行動を顧みて、青褪めている。

しかし、紫はそんな橙の様子や事情に頓着していないかのように悠然と微笑んでいた。

「もうすぐ、何者かが外の世界からここへ転移してくる」

紫が視線で指した先を、全員が釣られるように見つめた。

はたての念写に映っていた湖と神社のある地点。

その上空だった。

そこに、いつの間にか黒い霧のようなものが発生し、漂っている。

「レミリア、丁度貴女達がかつてこの幻想郷へやって来た時と同じものよ」

「分かっているわ。私は、その新参者の顔を見にきたのよ」

レミリアが鼻を鳴らして応じた。

黒い霧は、濃度を上げながら空に広がっていく。

もはや、それは霧ではなく重厚な雨雲だった。

雷鳴轟く黒雲が、妖怪の山の上空に不自然な程の早さで形成されていくのだ。明らかに自然の現象ではない。

「外の世界の異変を察知した時は、この忙しい時にまた別の厄介事が起こるのかと少し辟易したけれど——」

何を思い浮かべたのか、紫は苦笑した。

「彼女を探した先で厄介事に突き当たるなんて、考えてみれば当然のことよね。だって、彼女を中心に厄介事が集まるんだから」

妖怪の山の一角だけを覆う奇妙な黒雲は、今にも嵐を起こしそうな力のうねりを伴って、完全に具現化していた。

と、その時、地を揺るがせるかのような凄まじい雷が轟き渡り、巨大な一筋の稲妻が山へと降り注いだ。

いや、果たしてそれは本当に稲光だったのか。刹那の瞬きにしては、あまりに圧倒的な濁流の如き光の量だった。

閃光と轟音が、一瞬全ての感覚を麻痺させる。

周囲の状況を隔絶した空白の時間。

それが過ぎた後、徐々に戻る視界に映ったものは――。

「これは……」

文は呆然と呟いた。

視界に映る光景は、つい先程までとは一変していた。

上空にあつたはずの黒雲は、あの稲光一つで全ての力を使い果たしたかのように消え去っている。

再び晴れ渡った青空の下、見慣れた妖怪の山で、見慣れない――しかし、記憶には新しい見覚えのある光景が広がっていた。

まるで先程の轟雷が空に穴を空け、そこから落ちてきたかのように。

それは突然、地上に出現していた。

そこに在ったものは、はたてが念写したものと同じ湖と神社だった。



閉じた瞼越しに強い日差しが射すのを感じて、早苗は小さく呻き声を上げた。

束の間、意識を失っていたらしい。

いや、果たして本当に束の間だったのか？

本当は、気の遠くなるような時間が過ぎていくのではないか。あるいは、自分は実は死んでいて、この世にはいないのではないか。そんな突拍子もない考えが浮かんだのは、目覚めた早苗の心に恐れが生まれていたからだだった。

目を開けるのが怖い。

開いた目で、自分の居る世界を見るのが怖かった。

しかし、早苗は目を開けた。

「」

新しい世界が、広がっていた。

爽やかな朝日と風が、早苗を出迎えた。

山の上から見渡された自然は何処までも広く、頭上の空は底抜けに青く澄み渡っている。

ビルや背の高い建物はもちろん、人の手が入った人工物は一つも見受けられない。木々や川が何もかも自然のままそこにあり、遮られる物のない視界は何処までも遠くを見通すことが出来そうだった。

雄大な景色に息をするのを忘れるほど心を奪われ、思い出したように大きく息を吸い込めば、澄んだ空気が全身を満たした。

町の空気とは明らかに違う。これがこの世界の空気ならば、自分は今まで煙でも吸って呼吸をしていたとでも言うのか。

ただ呼吸をするだけで、自分の体に霊的な力が漲るのを感じた。

それをハッキリと認識出来る。

これが幻想の存在が住む秘境——幻想郷。

神や妖怪が当たり前のように存在する——存在が許容される——世界だというのも領ける。

まさに神秘の世界だと、早苗は実感した。

だから。

だからこそ。

同時に理解したのだった。

「……そうか」

ポツリと呟いた早苗の声には、新たな世界への感動よりも、かつての世界に向ける悲しみが滲んでいた。

「私はこれで、もう、本当に——」

——住んでいた世界から、永遠に離れてしまったのか。

早苗は胸元を押さえて、蹲った。

理解していた。

覚悟していた。

何もかも承知の上で決断したはずだった。

しかし、この時早苗を襲った胸の痛みは、到底耐えられるものではなかった。

声にならない声が自然と喉から溢れ、両目が熱くなつて涙が零れそうになる。強張った肩が震えて、足には力が入らなかった。

生まれた町で過ごした十数年間の記憶が頭の中で幾つも渦巻き、早苗の心を掻き乱した。

残っているのは、この思い出だけだ。

これまで持っていたものは、皆あつちに置いてきてしまった。

抱いてはいけない疑問。

感じてはいけない後悔。

囚われてはいけない望郷。

押し潰そうとしてくるそれらを跳ね除けて、立たねばならなかった。

そうでなければ、本当に全てが無意味になってしまう。

嘆いてる暇はない。

これからは、この新しい世界で生きていかなければならないのだ。

立ち上がらなければ——。

「とりあえず、幻想郷へようこそ」

不意に頭上から降りかかった声に、早苗は思わず顔を上げた。

「あ——」

人が、空を飛んでいた。

自分と同じくらい歳の年齢に見える黒髪の少女が、軽く見上げる程度の高さに浮いていたのである。

朝日を後光のように背負ったその姿は、纏った巫女装束と何よりも少女自身の雰囲気相まって、神秘的な美しさに満ちていた。

早苗は己の内に抱えていた苦悩を全て忘れ去って、ただそれに見惚れていた。

「あたしは博麗霊夢。博麗の巫女よ」

「あ……あつ!? す、すみません！ 私は東風谷早苗と言います！」
「早苗、ね。変わった格好をしているけど、あんたがこの神社の巫女なわけ？」

霊夢が早苗の目の前に降り立って、訊ねた。

地面に足をつけた途端、目の前の少女が神秘的な存在から自分と同じ人間へと変わったような気がした。

「巫女というか、私は神奈子様と諏訪子様を祭る風祝でして」

慌てて立ち上がった早苗は、周囲を見渡して状況の把握に努めた。

「ええと、この神社は……何だろう？」

今更ながら、早苗は自分が神社の境内に居ることに気づいた。

幻想郷への転移の瞬間まで、社内に居たはずである。

しかし、気がつけば屋外。一緒にいたはずの神奈子達の姿も見えない。

そして、目に映っている神社は明らかに諏訪大社ではなかった。

所々に諏訪大社の面影を感じさせる外観を持つてはいるが、建物の作りが酷く真新しい。

まるで、つい先程建てられたばかりのような新品の神社である。

「……そうか。土地の記憶と共に幻想入りするっていうのは、こういうことなんだ」

この神社は、正確には外の世界に在った神社ではない。

かつてあの土地に存在した神社の記憶を元にして、この幻想郷の要素で再構築された建物なのだ。

過去と現在が合わさって新生された『守矢神社』だった。

「それで、つまりこの神社は何なの？」

霊夢に再び問い掛けられ、考えに耽っていた早苗は我に返った。

「えっと、つまりこの神社は……守矢神社です。八坂神奈子様と洩矢諏訪子様、二柱の神様が住まわれる神社です」

「ふーん。外の世界からやって来たのは、その神様とあんた、そしてこ

の神社で終わりなのね？ 他にいないの？」

「外の世界って、分かるんですか？」

「外来人が迷い込むっていうのは、たまにあるしね。それと似た感覚がしたから。さすがに住んでる場所ごとやって来るっていうのは珍しいけど」

「す、すみません」

「いいわよ、前例がないわけじゃないし。それで、あんた達は何の目的で幻想郷に来たの？ 侵略？」

「いやいや！ なんで一番にそんな物騒な考えが浮かぶんですか!？」

「前例がそうだったから。ちなみに、その侵略者は当時の博麗の巫女にぶっ飛ばされたから。あんたも覚悟して答えなさい」

そう言った途端、発せられた霊夢の気迫に圧されて、早苗は息を呑んだ。

身構えたわけではなく、表情すら変わっていなかったが、明確に纏う雰囲気の変化していた。

外の世界の平穏な日常に慣れた早苗では、相対するだけで身動きすら取れなくなるような『戦いの気配』である。

よく観察してみれば、霊夢の体はつい先程こさえてきたかのような生傷だらけだった。服も破れ、血が滲んでいる。

その姿が痛々しさよりも先に、日常の中で当たり前のように戦いがあるという壮絶な事実を伝えていた。

そして、その事実の中で揺るぎ無く立つ人間の力強さも。

早苗は一瞬、霊夢の姿を恐れると同時に憧れた。

「し……侵略なんかじゃ、ないです。目的は、移住です」

「移住ねえ。なんか商売敵になりそうだから、あたしにとっては侵略と同じような気がしないでもないけど」

「巫女は商売じゃないと思うんですけど……博麗の巫女って、違うんですか？ 役職としては幻想郷の管理者だって聞いてましたけど」

「へえ、幻想郷のこと少しは分かっているんじゃない。誰に聞いたの？」
警戒を解いた霊夢が訊ねた。

圧迫感から開放され、落ち着いた早苗も思い出す。見知らぬ土地で

自分の身元を保障するコネがあることを。

「はい。古明地さとりさんと、貴女の先任である元博麗の巫女の先代さんが——あれ？ どうしました？」

ポカンと口を開けて、呆然とした表情のまま固まる霊夢に、早苗が不安そうに訊ねた。

しかし、何の反応も返ってこない。

一体、自分の何が霊夢をそこまで驚かせてしまったのか。

呆気にとられたまま動かない霊夢と、それに対してオロオロとうろたえることしか出来ない早苗。

そんな二人に向かって、偶然にも同時に別々の声が掛かった。

「おーい、霊夢ー！ 急に先に行くなんてずるいぜー！」

「おーい、早苗ー！ そんな所にいたのか、探したよー！」

上空から霊夢を追ってやってきた魔理沙と咲夜。

そして、神社の裏手から早苗を見つけて駆け寄ってくる諏訪子だった。



「あやや、これは驚きました。何がやって来たかと思ったたら神ですか」

守矢神社を一望しながら、文は神妙な顔付きで呟いた。

ただの神ならば、幻想郷ではさほど珍しい存在ではない。

元々、八百万は居ると言われる神々だ。それこそ、道端の小さな社にさえ神が宿っていることもある。

しかし、眼下から感じられる『神気』は、妖怪の文でさえハッキリと分かるほど大物のものだった。

「一瞬で神社が出現したことくらいでは驚きませんが、土地を無理矢理切り開いた感じはしませんね。むしろ、自然です。元から山の一部であったかのように神社が建っている」

守矢神社は博麗神社と比べて幾分か大きい建物だった。それに比べると境内も広く、敷地を取られている。

何よりも、その神社のすぐ傍には大きな湖が存在するのだ。

土地として、この神社と湖が一つのセットになっているのだろう。それだけの面積が突如、山の中へ割り込むように現れ、しかし違和感なく馴染んでしまっている。

地形が明らかに変化していたが、それが元々の山の形であったかのように自然なのだ。

「地を操る程の力ともなれば、これは並の神ではありませんよ」

独り言のように呟かれた言葉は、実質紫に向けられたものだった。外の世界から追いやられた神や妖怪が、幻想郷を訪れるのは珍しいことではない。

しかし、今回の件は、それら有象無象と一緒にたにするには大仰すぎる出来事だった。

幻想郷が成立して以来、これほど大きな力を持つ神を迎え入れた経験はない。

しかし、紫は涼しげな横顔を見せたまま、神社を見下ろしていた。

「——ねえ、文。探りを入れるのはいいんだけどさ、どっちかというところって私の方が深刻なんじゃない？ だって、ここ妖怪の山よ？」

はたての入れた横槍に、文はほんの少しだけ顔を引き曇らせた。

目を逸らしていた事実だからだった。

天狗の集落から離れているとはいえ、同じ妖怪の山に強大な勢力が突然出現したのだ。

相手の意図がどうあれ、その存在そのものが天狗という種族にとってプレッシャーとなる。

もつとハツキリ言えば、これほどの力を持つ神が同じ山に住むことは『脅威』だった。

新たに現れたこの勢力と、一体どういう関係を築いていくのか――

穏便に済む可能性も険悪な方向へ進んでいく可能性も十分に考えられるだけに、一介の鴉天狗として頭が痛くなる思いだった。

「さて？ では、彼女達がどういった目的でやって来たのか。それもついでに確認しておきましょう」

文の動揺を見抜いているのかいないのか。紫は意趣返しとも取れる眩きを洩らした。

その瞳は、既に守矢神社とその周辺の様子を把握し終えている。タイミング良く、天界から戻ってきた霊夢達が神社の近くにいる少女の下へ降り立つのが見えた。

そこに駆け寄るもう一つの人影は、おそらくこの神社に住む神の石柱である。

そして、位置的には境内から少し離れ、湖の畔付近。

そこにまた別の気配があつた。

もう一柱の神の気配。

そして――。

「お師匠!?! あれ、お師匠だ!」

「えっ、小母様!?! どこどこ!?!」

「さとり様だ!・ さとり様もいるうー!」

「わっ、ちよつと待って! 少し様子も見なきや駄目だつてば、何が起こつてるのか分からないんだから!」

チルノに釣られて同じ方向を見たフランドールと空が逸つて飛び出そうとするのを、橙が慌てて引き止める。

未熟だと思っていた式神の冷静な判断に、紫は評価を改めた。

苦労を被つて成長するタイプね。と、内心でほくそ笑む。

しかし、すぐに意識を眼下に戻した。

――二柱の神と先代の間にどんな出会いや経緯があつて、共にこの幻想郷へやって来たのか?

その詳細までは、さすがの紫にも分からない。

しかし、とにかく先代の無事な姿を再び見ることが出来た。

紫は密かに安堵していた。

そのほんの僅かな気の緩みせいで、紫は気づけなかった。他にも安堵を隠していた者が何人かいたことを。

「とりあえず、様子を見るにしてもこのままでは埒が明きませんわ。私は幻想郷の代表としてあちらに伺うつもりですけど、もし宜しければ皆さんもご一緒に――」

紫は慎重な文達と意気込むチルノ達の両方へ、無難な行動を提案した。



早苗が辿り着いた世界を認識したように、そうして幻想郷へやって来た者の存在を文達が認識したように、神奈子もまた目を覚ました。いつの間にか、地面の上で大の字に寝転がっていた。

直前まで居たはずの諏訪大社は建物自体が外の世界に置き去りにされたのだとあらかじめ分かっていたから、屋外に居ることに疑問は湧かなかった。

一緒に居たはずの早苗と諏訪子の姿に近くに見えないことも、転移の場所がズレた結果だと考えれば納得出来る。

暴走を起こすほど凄まじい力が、あの瞬間炸裂したのだ。

目的地へ無事に辿り着けるかどうかさえ、定かではなかった。

力の中心にいた、あの場の全員が散り散りに飛ばされても不思議ではなかった。

この程度の誤差で済んだのは、ちよつとした奇跡だ。

神奈子は仰向けに倒れたまま、しばらくの間青く澄み渡った空を見上げていた。

足元が妙に冷たい。水に浸かっている感触がある。

ゆっくりと体を起こした。

自分は大きな湖の畔で寝ていたらしい。

そこは諏訪湖に間違いなかった。

大きいと言っても本来のそれと比べれば随分と小さくなり、山の地形に合わせて形も変わっていたが、それらの理屈を無視して神奈子には直感出来た。

時代が進むと共に汚染され、澱みが目立つようになった湖面は、しかし今は底抜けに青く輝き渡っている。

加えて、湖には何本もの柱が立っていた。

外の世界の諏訪湖には存在しなかった、木を丸ごと一本削り出して

注連縄を巻いた『御柱』である。

それはかつて、遠い遠い昔——神々の時代に存在した、まだ『諏訪』という名が付く前の湖の姿だった。

片膝を立て、そこに腕を置いて、神奈子は広がる光景をじっと眺めていた。

体が軽く、呼吸が楽だった。

傷つき、疲れ切ったはずの肉体に、ただ呼吸を繰り返すだけで力が少しずつ満ちていくのを感じる。

奇しくも早苗と同じように、神奈子もまた自らが新たな世界へ辿り着いたことを実感していた。

ただ一つ違うのは、神奈子が感傷を抱いてはいないことだった。

自らを否定する世界から離れ、滅びの運命からも逃れ得たことへの達成感はない。

あるいはあったのかもしれないそれを、胸に走る疼くような痛みが掻き消す。

この胸に、先代巫女が刻んだ傷が——。

ほんのついさっきまで繰り返していた、死闘と敗北の記憶が——。

「先代——」

神奈子は自分に向けられる複数の視線に気付いていた。

上空から近づいてきた、紫や文達の視線である。

加えて、こちらに気付いたらしい、神社の方から近づいてくる早苗と諏訪子、そして見知らぬ三つの気配にも気付いている。

青娥の所在だけは掴めなかったが、同じく転移してきた以上、近くに居ることは間違いない。

新たな土地で考えるべきこと、対応すべきことは幾らでもあった。

しかし、神奈子は何よりもまず先代巫女の姿を探した。

視線を動かした先。

歩いて近づける程度の、そう遠くない位置に先代とさとの姿を見つけることが出来た。

転移の際、神奈子と同じように諏訪大社の中から湖の近くへと位置がズレたらしい。

湖の畔よりも更に少し入り込んだ、半身が水に浸かる程の浅瀬で二人は身を寄せ合っていた。

神奈子から見て、先代の方は背を向ける形になっている為、表情や様子を伺うことは出来ない。

しかし、さとりの方は確認出来た。

彼女は先代の腕に抱え上げられ、腰から下を水の中に浸していた。濡れた髪が額に張り付き、瞼は閉ざされている。

力なく垂れ下がった片腕が、やはり半ばまで水に浸かっていた。

冷たい水の中で、先代も、さとりも、身動き一つしようとしな

「……そうか」

神奈子は全てを察したかのように、小さく呟いた。

「間に合わなかったか」

◇

私は目を覚ました。

辺りを見回すと、外だった。

神社の中に居たはずだが、目に映るのは土と木、青い空、青い水面——湖、何処までも自然だけだった。

たった数日離れていただけなのに、凄く懐かしく感じる。

幻想郷だ。

私は、幻想郷にちゃんと帰ってきたんだ。

「……さとり」

地面に野ざらしで一人放り出されて、最初に気になったのはまずさとの安否だった。

他の皆のことも、もちろん気になる。

だけど、一番はさとりだった。

光が溢れ、転移が始まる瞬間抱き締めた彼女の体が何処にもない。気配を探るのも忘れて、私は手当たり次第に辺りを見渡した。

そして、見つけた。

少し離れた湖の畔に、さとの体が横たわっている。

かろうじて顔だけが水面から浮かぶ程度にまで水に沈み、四肢が力なく揺れていた。

私は慌てて駆け寄り、さとりを水の中から抱き上げた。

「さとり」

私の声に、さとりは応えない。

「さとり」

瞼を開けないのは、呼び掛けが弱いからだ。

「さとり！」

体が冷たいのは、ずっと水に浸かっていたからだ。

「さとり、目を開けろ！」

すぐに探せなかったのは、私が気配を探るのを忘れていたからだ。

「お願いだ、目を開けてくれ！」

決して。

「頼む。頼む。頼むから……！」

決して、何も感じ取れなかったからじゃない。

生命の気配を、さとりの体から感じ取れなかったからじゃない。

こうして抱き上げた今も、彼女の息遣いや鼓動が聞こえないのは――

「そうか」

背後で呟かれた、神奈子様の小さな呟きが、

「間に合わなかったか」

静まり返った空間の中で、妙に鮮明に聞こえた。



事情を知る者。

事情を知らぬ者。

しかし、集まった誰もが、その光景の意味だけは正しく理解していた。

境内から駆けつけ、先代の悲痛な叫びを聞いて足を止めた早苗や霊夢達。

さとりを抱きかかえた先代の様子を遠巻きに見つめていた文や紫達。

そして、険しい目付きで現実を見据える神奈子。

誰も、何も、言葉を発せず、手も出せず——ただその光景を眺めることしか出来なかつた。

「さとり様——！」

空が、さとりの下へ飛び出していく。

今度は橙も止めることが出来なかつた。止めようとも思えなかつた。

「さとり様！ さとり様、起きてよ！」

空がさとりの体にしがみ付いて、何度も揺さぶつた。何度も呼び掛けた。

しかし、さとりは目を開かない。

空は助けを求めるように、先代の顔を見上げた。

チルノの顔を見、フランドールの顔を、橙の顔を——自分の知っている顔も知らない顔も、その場に居合わせた全員の顔に縋るような視線を向けた。

さとりを助けてくれるのならば、誰でも構わない。

妖怪でも、神でも、人間でも。

しかし、誰一人としてその願いに応えてくれる者はいなかつた。

「さとりさまが、しんじやつた……」

空が泣きながら叫んだ。

「さとり様が死んじやつたよお！ うわああああああん!!」

聞く者全ての心に痛みを感じさせるような嘆きが、辺り一帯に響き渡つた。

橙が苦悩に歪んだ表情を隠すように手で顔を覆い、フランドールが唇を噛み、チルノは拳を握り締めていた。

幼子の悲痛な泣き声に応えるものは、何もなかつた。

「——お前は嘆かないのか、先代」

さとりに胸に顔を埋めて泣き伏せる空とは対照的に、身じろぎ一つしない先代の背中へ、おもむろに神奈子が問い掛けた。

空と先代以外の視線が、神奈子に集中する。

「憎まないのか、私を」

早苗と諏訪子は、その言葉の意味を理解していた。

それ以外の事情を知らない者も、おぼろげながら理解した。

さどりの死の遠因は、神奈子にある。

神奈子との戦いが幻想郷への帰還を先延ばしにし、結果さどりの抱えていた生命のタイムリミットを過ぎてしまったのだ。

『お前のせいだ』と、私を責めないのか——」

神奈子は、そう言つて小さく笑つた。

嘲るような響きを含んだ声色だった。

先代がゆつくりと立ち上がる。

振り返つて、静かに神奈子の方を見た。

何うことの出来なかつた先代の顔が瞳に映り、神奈子の眉が僅かに跳ね上がった。

状況を見守つていた者達は、先代の横顔に浮かぶ感情を見て、息を呑んだ。

そこには何も浮かんでいなかった。

怒りにも嘆きにも顔は歪まず、神奈子に向けられた瞳の中には何も映つていない。

感情はおろか意思さえ感じさせない能面のような顔には、ただ一筋、頬を伝う涙だけがあった。

血の涙だった。

何も感じていないわけではない。

言葉に出来ない程多くの感情に心を食い荒らされながら、それを一切外へ出そうせず、全て己の内に向けているのだ。

まるで、自分への罰であるかのように。

責めるべきは他人ではなく、自分であるかのように。

押さえきれない激情のほんの一部が、目から溢れた。

ただそれだけの——虚無という感情を形にした顔だった。

「」

神奈子は言葉を失つた。

先代は、誰を責めるわけでも、何を嘆くわけでもなく、全てを自らの内に抱え込んで自壊しようとしている。

先代と親しい者の中には、彼女の心境を鋭く察することが出来る者がいた。

霊夢は、母を止めようとした。

紫は、親友を抑えようとした。

チルノは、師を支えようとした。

今まさに心が死のうとしている彼女を助ける為、咄嗟に行動しようとした。

しかし、彼女達の中で誰よりも早く、動く者がいた。

先代の傍に駆けつけようと、はたてが身を乗り出した時、既に文はその場から風のように飛び出していた。

「このっ、馬鹿！」

一瞬で先代の下に辿り着くと、横面を思い切り殴りつけた。

無防備に拳を受け、水飛沫を盛大に上げて倒れる。

「何をしているの……!?!」

先代が立ち上がるよりも早く、胸倉を掴んで水の中から引き上げた。

「さっさと泣きなさい！」

呆然とする先代の顔を睨みつけて、文は怒鳴った。

「泣き叫んで、吐き出すのよ！ あんたが感じた納得のいかないこと、理不尽に思ったこと、押さえ込まずに出しなさい！ 人にでも物にでも当たり散らせばいい！ 少しでも理由があるのなら、誰かを罵ればいい！ 自分の中だけで完結させるな!!」

目の前で捲くし立てる文と、彼女が抱く怒りの理由が分からず、何も映っていなかった先代の瞳に『困惑』という色が浮かび上がった。

震える唇が、かろうじて言葉を紡ぎ出す。

「……そんなの、何の……意味も……ない」

「ええ、そうね。何の意味もないわ」

「さとりは……もう……」

「どれだけ嘆いても、現実は変えられない」

「だったら——」

「嘆いても変わらないんなら、嘆いたっていいでしょうが！」

叩きつけるように、文は叫んだ。

「どんなに泣いても、どんなに願っても、誰かを責めても、何も変わらないのよ！ ただ虚しいだけ、失ったものは戻らない！」

——だからこそ、叫ばなきゃいけないでしょう！ 何、口を閉ざして抱え込んでんのよ!? 自分一人で全部抱え込めるなんて、甘ったれたガキの考えなのよ！ ふざけるな！」

「……ふ、ふざけてるのは、どっちだ……」

先代の戸惑うような表情が、徐々に険しくなっていく。

腹の底から沸々と怒りが込み上げてきていた。

「いきなり……怒鳴って、何の意味もないって分かっていることを……」

「ボソボソと喋るな！ 聞こえないのよ！」

「勝手な……勝手なことを言——！」

苛立ちのまま文に向けて叫ぼうとした先代は、そこで我に返った。

ただ自責の念だけに囚われ、胸の奥に封じたまま何処にも向けるつもりがなかった激情が、喉元まで出掛かっていることに気付いたのだった。

誰のせいでもないと思っていた。

自分のせいだと責めていた。

先代は、改めて文を見つめた。

真摯な眼差しが、じつとこちらを見つめ返していた。

「——泣けばいい。後のことは、何も考えなくていいから」

子供に言い聞かせるようにゆっくりと優しく、文が告げた。

胸倉を掴んでいた手が解かれる。

自由になった先代は、戸惑うように彷徨う視線を、やがて静かにさとりの方へ落とした。

物言わぬ彼女の傍に再び腰を降ろし、力の入らない手をそつと握り締める。

さとりがその手を握り返すことはなかった。

当たり前前のことだった。

そうする前から、理解していたことだった。
しかし――。

「さとり」

先代は呼び掛けた。

無駄だと分かっていたいながら、何度も名前を呼んだ。

「逝かないでくれ……」

さとりの頭を掻き抱いて、額に頬を寄せながら何度も繰り返す。

「頼む。誰か。誰か、助けてくれ。さとりを助けてくれ。お願いだ。

助けてくれ。誰か」

あの雄々しく、凛々しい先代巫女が。

これほどまでに切に願う姿を、誰も見たことはなかった。

「誰か」

これほどまでに絶える声を、聞いたことはなかった。

「誰か」

誰一人として、その願いに応えることは出来なかった。

無力感に苛まれながら、佇むことしか出来なかった。

「――神様、お願いだ」

消え入りそうな声で呟かれた言葉を聞き取り、神奈子は目を見開いた。

疼いていた傷の痛みを忘れるほどの衝撃が、新たに胸を貫く。

得体の知れない衝動が体を突き動かし、神奈子は先代に向かって無意識に手を伸ばそうとしていた。

彼女が助けを求めて差し出した手を取ろうとした。

しかし、伸ばした自らの手はあまりにも弱々しかった。

その弱さに絶望すら覚え、神奈子は苦々しげに歯噛みしながら、何も掴むことの出来なかった手を虚空で握り締めた。

先代は嗚咽の混じり始めた声で、何度も言葉を繰り返していた。

思いつく限りの願いや嘆きを吐き出すことで、その内の一つにでも何か応じるものがあるのではないかと試しているかのようだった。

目を開けてくれ。

誰か助けてくれ。

お願いだ。

頼む。

神様。

どうして。

こんな。

何故。

畜生。

誰が。

何が。

何を。

どうして。

どうして。

どうして。

どう——。

「あ……嗚呼あああああああああああ——あ——あ——
——ッ!!」

ついに言葉としての形すら保てなくなった声が、涙と共に先代の中から溢れ出した。

獣が吠えるような慟哭が、辺りに響き渡る。

そこには誰も知る先代巫女の姿はなかった。

無力でちっぽけな人間がいるだけだった。

文だけが、子供のように泣き叫ぶ先代の姿を真っ直ぐに見つめていた。

幾つもの死闘を制し、幾つもの困難を乗り越えてきた先代巫女が、初めて吐き出した心の底からの嘆きは、しかし目の前の現実を揺るがせることはない。

やがて声が枯れ、涙を出し尽くした時、そこに残るのは諦めと虚しさだけである。

——そのはずだった。

「五月蠅いですね」

「……え？」

その場違いな程に間の抜けた声は、誰が洩らしたものだっただのか。誰もが呆けたように顔を上げて、聞こえるはずのない声の主を見つめた。

「目覚ましにしても、酷すぎね。なんて声出すんですか。本当に、もう」

先代が見下ろす先で、開くはずのない目が開いていた。

瞼は半分しか上がっておらず、今にも再び閉ざされそうなほど重い仕草だったが、それでも目を開いて、先代を見たのだ。

「……さとり？」

泣き腫らした先代の顔を見上げて、さとりは可笑しそうに微笑んだ。

「寝起きにそんな顔を見せるなんて、ホント貴女って、やること成すこと全部最悪——」

信じられないことが、目の前で起こっている。

しかし、現実には揺るがない。

握り返されるはずのない手が、弱々しくも確かに握り返されているのを感じた。

混乱した頭の中に、理解がゆっくりと染み渡り、やがてそれを受け入れた。

すぐ傍で、空が先程までとは意味を全く逆にして、再び大声で泣き始めたが、それは先代の耳には入ってこなかった。

ただ体を突き動かす衝動のままに、さとりの体を抱き締めた。

思考は纏まらず、声は言葉にならない。視界は涙でグシャグシャだ。

抱き締める力が強すぎて、さとりが抗議の声を上げている。

しかし、構うことはなかった。

◆
湖に立った幾本もの御柱の内一つの陰に、青娥は身を隠していた。気配も完全に絶っている。優れた察知能力を持つ霊夢や紫にさえ、その存在を悟らせていない。

先代達の方に意識が向いていることも理由としてあるが、それを差し引いても見事な『陰形』であった。

幻想郷への転移を確認した時点で、青娥は人知れず姿を隠す為の行動に出ていたのだ。

未踏の地とそこに住む者達を警戒しての判断だった。

幻想郷の有力者である先代達と友好関係にあったとしても——否、あるからこそ——密かに様子を探る必要があつた。

そして、案の定。青娥の価値観で『お近づきになりたくない相手』を何人か見つけた。

八雲紫などは、その最たるものだった。

観察した結果得られた情報だけではない。直感的にも、あの妖怪とはソリが合わないと断言出来る。

それは、先代に向ける目付きを見て、一層の確信となった。

——ああ、なんとという強大な力。恐ろしい気配。不気味な存在感。

——これほどの脅威を感じる相手は、自分の記憶にも思い当たらない。

——まさに大妖怪。

——反吐が出る。

——求めもせず、望みもせず、ただ生まれつき与えられた台座の高さから見下ろすことしか出来ない不毛な存在のクセに。

——身の程も弁えず、なんて物欲しげな顔で先代様を見るのかしら。

しかし、そんな嫌悪感が縋い交ぜになった警戒心も、すぐにどうでもよくなった。

先代の慟哭が響き渡る。

さよりの亡骸を抱き、子供のように泣き叫んでいる。

その声を聞いた時。

その姿を見た時。

青娥の体の芯に、電流のような感覚が走り抜けた。

熱い、痛みさえ伴う情動だった。

「ああ、先代様——！」

思わず洩れた声が辺りに響かぬよう、青娥は自らの指を噛み締めた。

しかし、胸の奥で疼く感情までは抑え切れない。

ああ、先代様。

なんとという声で泣くの。

なんとという顔で嘆くの。

貴女のそんな姿は、想像も出来なかった。

戦神と互角以上に渡り合った、あの雄々しい姿からはとても連想出来ない。

寒気がする程の殺意と力を奮った、あの禍々しい姿からはまるで考えられない。

貴女が。

強い貴女が。

最強の貴女が。

こんなにも弱い一面を持っていただなんて。

こんなにも脆い側面を持っていただなんて。

安心して下さい。

その姿を見て、私が失望するなどということはありません。

むしろ、その逆。

貴女が、より一層愛しい。

貴女が誰よりも強いことは、これまで私自身の目で見てきたことです。

そして今、私は貴女が弱いことも知った。

貴女は決して無敵の存在ではない。

どうしようもないくらい人間です。

だからこそ、素晴らしい。

だからこそ、美しい。
貴女はきつと不滅ではないのでしょうか。
いずれ死んでゆく人間なのでしょう。
だからこそ。

だからこそ、貴女は滅びる最期の瞬間まで不敗でなければならない

「素敵ですわ、先代様。本当に素敵」

「せいがい、嬉しそーだなー」

小脇に抱えた芳香に、青娥は満面の笑みを向けた。

「芳香、幻想郷では忙しくなりそうよ」

先代様の強さを、私が支えなければ。

先代様の弱さを、私が守らなければ。

「これからは私が、先代様の御力にならなければいけないわ♪」



「……よかった」

隠れていた木に背を預け、妖夢はホッと胸を撫で下ろした。

さとりが死んだ、と。空が泣き叫んだ時は、心臓が凍りつく思い
だった。

恐怖や後悔——様々な感情が胸に去来した。

さとりを救う為に何か行動を起こさなければいけない——焦燥感
に駆られながらも、頭は回らず、体は震えて、その場から一步も動く
ことが出来なかったのだ。

結局、妖夢に出来たのは事の成り行きを凝視し続けることだけだっ
た。

そして、妖夢が関与しないところで事態は無事に収束した。

理由は分からないが、さとりが生き返ったのだ。

この際、そこにどんな力や理が作用したのかはどうでもよかった。
とにかく、さとりは助かった。

妖夢は、その事実だけに安堵した。

「だけど……私は、一体何をしていたんだ」

次に湧き上がったのは、自分への失望とどうしようもない無力感だった。

本当に、何も出来なかった。

いや、何もしようときえしなかった。

「何の為に、ここまでやってきたんだ……」

空の無茶な行動を防ぐ為、連れ戻す為にやって来たはずだった。

それが『慎重』という言葉を建前にして、自分の姿を現すことさえ出来ず、挙句恩人であるさとの窮地にただ突っ立っていただけ。

何も出来なかったかもしれない。

だけど、何か出来たかもしれない。

ただ、何もしなかっただけ。

これでは、例え我武者羅でも主の為に地上へ飛び出すという行動に思い切った空の方が、ずっと上等ではないか。

自分の情けなさに、涙が出そうだった。

「これからどうしよう？」

一体、どの面を下げて彼女達の前に出ていけばいいのだろう。

そして、この期に及んでも、紫を始めとする自分の知己と顔を合わせるのが辛いと感じている。逃げたいと思っている。

——本当に、なんてどうしようもない奴なんだ。私は。

妖夢はその場に座り込んで、膝に顔を埋めた。

「ごめんなさい、さとりさん……」

「あー、いけないなあ。そんなネガティブな考え方やあ、落ちるところまで落ちちゃうよ？ 気楽に行こうよ」

「無理です。さとりさんとお空さんに顔向けできない」

「いいじゃん、お姉ちゃんも無事だったんだし。結果オーライだよ」

「無事だったのは、私がおかしたわけじゃありません」

「それを言うなら、あの時誰も、何も出来なかったよ。お姉ちゃんは助かるべくして助かった。そう納得すればいいんじゃないかなあ」

「そんなの、納得出来ません。じゃあ、あの時何が起こったって言うんですか？」

「うーん、奇跡？　もしくは、デウス・エクス・マキナかしら？　悲劇を喜劇で終わらせる為に力を貸してくれたの。物語の流れに補正は付き物よ」

「何ですか、それ……ワケが分かりません」

「分からなくていいわ。でも、分かってもいいわ。っていうか、どうでもいいわ。重要なのは、アナタがお姉ちゃんのことを本当に心配してくれたってことよ」

「想うことしか出来ない私に、何の意味があるっていうんですか？」

「十分じゃない。想いつて大切よ？　特に、わたし達のような心を読む妖怪にはね。誰からも好かれない妖怪だもの、心の底から想われて悪い気はしないわ。お姉ちゃんも、口では素直に言えないけれど、きつと心では喜んでる。あの先代巫女さんのことだって、傍に居ることがずつと救いになってるはずなんだから。自覚はないんだろうけどね、自分の心は読めないし」

「……そういうものでしょうか？」

「そうよ、ツンデレって奴よ。やだもう、お姉ちゃんったら可愛くない。そこがいいんだけどね！」

「はあ……」

曖昧な返事を返したところで、ふと妖夢は我に返った。

顔を上げて、周囲を見回す。

誰もいない。

当たり前だった。誰かに見つかつては困るのだ。

いや、そもそも何故『見つかつて困る』などという発想に行き着くのか。

——別に誰かと話していたわけでもないのに。

其の五十二「風神録」

——妖怪の山で様々な物事が交差し、邂逅した日から数日が経過していた。

博麗神社を襲った地震を始めとした異常現象は、博麗の巫女が天界から帰還したその日を境に起こらなくなっていた。

表向きは霊夢が異変の犯人を退治した為とされている。

しかし、比那名居天子が何を思っただけで活動を止めたのかは、異変解決に関わった当事者達にも分からない。

外の世界からやって来た守矢神社については、新たな異変として認識される程の問題とはならなかった。

少なくとも妖怪の山における勢力争いについては、博麗の巫女が考慮すべき問題ではない。

博麗の巫女としての仕事は完遂——そう言っただけならば、霊夢はおむね平穏な日常生活を取り戻していた。

「博麗の巫女としての仕事……か」

縁側に腰掛けた霊夢は、晴れ渡った空を見上げながらポツリと呟いた。

霊夢が居る場所は、小さな庵である。

今座っている縁側から振り返れば、四畳半の一部屋があるだけの簡素な小屋だった。食事も風呂も外で済ませる、間に合わせの住居である。

しかし、作りはしっかりとしており、霊夢もここに住み始めてまだ二日だが、十分快適に感じていた。

気だるげな仕草で視線を動かせば、僅か二日間であつたの姿を取り戻しつつある博麗神社が見えた。

神社の再建作業を行っているのは、伊吹萃香である。

鬼の建築技術と複数の分身を生み出す能力を使って手際良く——期間を考えれば猛烈と表現してもいいほどの作業速度で——博麗神社を建て直していく。

この調子ならば、あと一日もあれば確実に作業は完了するだろう。

ただ建て直すだけではない。建築材には、倒壊した博麗神社を解体した際に回収出来た資材を再利用している。

霊夢の仮住まいとしての庵を建てたのも萃香であり、彼女の建築技術についてはもはや疑いもない。

幻想郷の象徴たる博麗神社は再び以前の姿を取り戻す――。

しかし、当然のこととして、失われた霊夢の家が元通り返ってくるわけではないのだ。

その事実を今更悲しむほど霊夢も未練がましくはなかったが、再び神社に住めることを素直に喜べるほど前向きにもなれない気分だった。

天界から戻って来て以来、自分は何処か気が抜けている。

霊夢はそのことを自覚していた。

自覚していたが、どうすることも出来ない。

天子と戦うまで腹の中で燻ってきた何かが、今はもう燃え尽きてしまっているのを感じる。

あの時感じていた熱は、心を焦がし、視界を濁らせるほどに黒く淀んだ何かではあったが、自分を動かす熱量でもあった。

それが、今はないのだ。

「紫が知ったら、嫌味が説教の十や二十は貰いそうね」

その様を想像して、一人嫌そうな表情を浮かべる。

今の自分の腑抜けた姿と、天界で晒した己の失態については、霊夢も反省していた。

それを知ってか知らずか、今のところ紫は何も言っただけではない。

天子を退治した、という霊夢の簡潔な報告に頷いただけである。それ以上の追求はなかった。

少なくとも事情は知っているはずの萃香も、霊夢を気遣ってか殊更何か言っただけではない。

あるいは、この問題を解決するのは自分の仕事ではないと弁えているのだろうか。

それが、ほっとするような、また逆に肩透かしでもあるような――どっちつかずの割り切れない気持ちにさせるのだった。

そうして心が曖昧なまま、二日が過ぎているのである。
そして、今日もまた――。

霊夢は湯呑みに落としていた視線を、おもむろに上へ向けた。
来客だった。

しかも、見知った顔が二人分。

「よお、霊夢。相変わらずの腑抜け面だぜ」

「鬼に働かせておいて、自分は休憩とはいいい身分ね」

魔理沙と咲夜が笑いながら憎まれ口を叩くと、霊夢は呆れたように
ため息を吐いた。

「あんたら、暇なの？」

「何言ってるんだ、幻想郷でわたしほど勤勉な奴はいないぜ」

「じゃあ、何で連日あたしの所に来て駄弁ってるのよ？　咲夜、あんた
メイドの仕事は？」

「一秒で済ませてきたわ」

「時間を止めてれば、そりゃ一秒でしょうよ。レミリアの傍にいな
くていいの？」

「主人のプライベートな時間を尊重することも従者の仕事よ。それよ
りも、今日はアップルパイを焼いてきたわ」

「わたしは紅茶を持ってきたぜ」

「紅魔館から、ね」

「荷持ちだぜ」

断りもなく持参した荷物を広げる二人を眺めて、霊夢はもう一度た
め息を吐いた。

ここ二日、同じようなやりとりを繰り返している。

異変以来、魔理沙と咲夜は示し合わせたかのように霊夢の下へ訪れ
ていた。

何か特別な用事があったって来ているわけではない。

今回のように適当な物を手土産に、適当な話題で適当に時間を過ご
し、そして帰っていく。

最初の内は、二人の行動に戸惑って、いぶかしんでいた霊夢もやが
て薄っすらと察することが出来た。

詰まるところ、これは二人のお節介なのだ。

それに気付いた時、霊夢が一番強く感じたものは、嬉しさや感謝よりも『納得のいかない悔しさ』だった。

「二人にはさあ」

切り分けられたパイを素直に受け取りながらも、霊夢は憮然と呟いた。

「あたしって、そんなに参っているように見える？」

「お前がそんなタマかよ！——って、普段なら笑い飛ばしてやるだけだなあ」

魔理沙がニヤニヤしながら答えた。

「天子との戦いを見てたわたしとしてはな、やっぱり霊夢自身が気付いてないだけで相当堪えてると思うぜ」

「確かに、あの時はみつともない姿を見せちやっただけど……」

「ほら、そうやって思い返すくらい気にしてる時点でもう駄目だ。普段の霊夢なら『そんなことあったっけ？』で済ませてるはずだぜ」

魔理沙の指摘に、霊夢は思わず口を噤んだ。

言い返せなかったのだ。

「それに、やはり気が抜けているわ。仕草から分かるもの。動きの一つ一つに隙が多いのよね」

咲夜が苦笑しながら、別の観点から指摘する。

「……そうだとしても、あたしを構う理由なんてないでしょうが」

霊夢は悔しくなって、言い返した。

しかし、魔理沙と咲夜は揃って笑うだけで、具体的には何も答えなかった。

妙に恥ずかしい気分を味わい、それを誤魔化す為にパイに齧り付く。

咲夜の手作りのパイは美味しかった。

すぐ隣に魔理沙がいることが、何故か暖かく感じた。

今、この空間を心地良く感じる。

しかし、その理由から霊夢は無意識に目を逸らそうとしていた。

二人が自分の所へ来てくれる理由についても同じだ。

ぼんやりと理解はしながらも、具体的な言葉にして伝えられるのを
霊夢自身が避けている為だった。

恥ずかしいわけでも、気まずいわけでもない。

あるいは、その二つが混ざって、よく分からない気分になっている
のかもしれない。

辛い時、苦しい時に支え合える関係がある。

仲間や友達と呼ぶもの。

霊夢はこれまで、そういった関係について考えた時、羨ましいとも
欲しいとも感じたことはなかった。

それよりも、もつと大きくて暖かいもの——母の存在——が、生ま
れた時から自分の傍にはずっと在ったからだ。

これまで霊夢が辛くて苦しい時に支えてくれたのは母だった。

しかし、傷つき、疲れた体で天界から帰ってきた時に目にしたのは、
その母が慟哭する姿だった。

打ちのめされ、嘆き、誰かに助けを求める姿だった。

あの母でさえ、傷ついて、立ち上がれなくなる時がある。

同じ人間なのだ。

自分にとっての母のような存在が、同じように必要な人間なのだ。

あの時、母と再会する前に、自分が何を求めているのか今なら冷静
に理解出来る。

子供のように泣きつきたかったのだ。

昔のように慰めてもらいたかったのだ。

母に一人前だと認めてもらいながら、結局自分は何一つ親離れ出来
ていない甘ったれなのだと言感した出来事だった。

母に申し訳ないと思う。

魔理沙と咲夜の厚意に対しても——。

「いやあ……新鮮だな」

「新鮮ね」

悶々とする霊夢に気付かれないよう、魔理沙と咲夜は小声でやりと
りをしていた。

「こいつ、こんなに可愛い奴だったのか」

「魔理沙が親友をやりたがる理由が分かったわ」

「譲らんぜ」

「結構よ。一步退いて見守る方が好きだから」

二人は霊夢の反応を楽しんでいた。

強いて理由を挙げるならば、それが霊夢を構う理由である。

もちろん、それをわざわざ霊夢に伝えはしないが。



——空を飛んでいる！

早苗は今の自分の状況を言葉にしてみても、そのあまりの突飛さに笑いそうになった。

空を飛ぶ——なんとという非現実的な表現だろうか。

外の世界でそんな言い方をしたら、何らかの比喩表現か、テレビや本の中の話だと思うだろう。常識的に考えて。

しかし、幻想郷ではそうならない。

自分は文字通り空を飛んでいる。

本当に飛んでしまっている。

ウルトラマンみたいに空を飛んじやってるのだっ！

「シユワッチ！……なんちゃって」

早苗は空中で拳を突き出す構えをして遊びながら、一人クスクスと笑っていた。

空を飛ぶことにも大分慣れ、コツも掴めてきたが、未だに興奮は冷めない。

元々、自分の力は自覚していたし、それを扱う術も二柱の神に手ずから伝授されていた。

しかし、単なる知識や理屈による理解と、その身で実践することでは、実感の大きさが圧倒的に違う。

文字通り『肌で感じ取れる』という奴だ。

普通の人間ならば、一生知ることはないだろう。

——空を飛ぶ時に肌に受ける風の感覚を。

——地上を見下ろす鳥のような視点を。

——川も木も、山も建物も、行く手を遮る物など一つとしてない空間を進む爽快感を。

——力の続く限り何処までも飛んで行けそうな希望を。

——どれ一つとして常識では計り知れないことだ。

幻想郷に辿り着いてからの数日間は、早苗にとって新鮮な体験の絶えない日々だった。

この地の風土に馴染む為、また力を使いこなす修行の為、新生された守矢神社を拠点として籠りながら過ごしていた。

そして、ついに今日、早苗はそこを発ったのだった。

早苗自身も外に興味があったが、何よりも神奈子と諏訪子の指示を受けての行動である。

早苗は明確な目的地に向かって飛んでいた。

「博麗神社——あの博麗霊夢さんが住んでいる場所ですね」

視界に守矢神社よりも一回り小さな神社とその境内を捉えて、笑みを深くする。

純粋な喜び以外にも、何処か好戦的な意味合いにも取れる不敵さを含んだ笑い方である。

早苗は逸る気持ちのまま、無意識に飛行速度を上げていた。

あの日初めて目にした、空を飛ぶ人間への憧れに追いつこうとするように——。

「——って、神社が壊されてる!?!」

博麗神社の上空に辿り着いた早苗は、眼下の光景に驚愕した。

遠くから見えた神社の輪郭は、近づいてみれば骨組みだけを残して半壊しており、そこに何匹もの角を生やした鬼らしき妖怪が取り付いているのだ。

「霊夢さん、無事ですか!?!」

素早く境内に降り立った早苗は、鬼を警戒しながら周囲に呼び掛けた。

突然やって来た人間に鬼は——伊吹萃香はポカンとした表情を浮

かべている。

早苗はすぐに、庵の縁側に座る霊夢の姿を見つけた。

「霊夢さん！」

「何よ？ 騒々しいわね」

「何のんきになっているんですか!? 妖怪ですよ！ 鬼がいます！」

「へえ、鬼なんてよく知ってるわね」

「そりゃあ外の世界でも有名な妖怪ですから！」

「そうなんだ。幻想郷で忘れられるから、外の世界では忘れられないって理屈になるのかしら？」

「とにかく無事なら何よりです！ さあ、立つてください！ 力を合わせて、鬼を退治しましょう！」

「えっ、なんで？」

「なんでって……！」

意気込む早苗と、それに対して戸惑う霊夢。

噛み合わない二人のやりとりを眺めていた萃香が、面白そうに笑いながら近づいてきた。

「おうおう、鬼退治たあ穩やかじゃないね。お前、妖怪の山にやって来たっていう新参者だな？ この伊吹萃香に喧嘩を売ろうたあ、随分と跳ねっ返りモンじゃあないかい」

そう言いながらも、萃香の顔にはニヤニヤとした余裕の笑みが浮かんでいる。

既に早苗の勘違いを察していたが、分かった上でからかっているのだ。

咲夜と魔理沙も、自分達が早苗の視野の外に居ることを理解した上で、のんびりと観戦する側に回っている。

「確かに、私は妖怪との戦いは初めてです。しかし、戦神を祭る風祝が敵に背を向けるなどあつてはなりません！ 人の世の正義の為、鬼を討ちます！」

「おお、若いくせに随分と古風な考え方をするなあ。力があって、青臭く、威勢も良い。うん、気に入った！」

「ふっ、漫画でよくある大物っぽい余裕ですね。しかし、それもここま

です！ さあ、霊夢さん！ ダブル巫女パワーです！」

早苗が持っていた御祓い棒を構えた。

構えといってもその形はデタラメで、彼女が戦闘に関して素人であることが一目で伺える拙いものである。

しかし、そこから伝わる意気込みだけは一流のそれだった。

何よりも伴う力は『本物』である。

人の身でありながら神性を感じさせる力が、全身に漲るほどに宿っている。

萃香の表情から、一瞬遊びが消えた。

「いいから、落ち着きなさいって」

萃香の僅かな変化を敏感に感じ取った霊夢は、後ろから早苗の頭を御祓い棒で軽く殴った。

早苗と萃香の両方を止める為である。

「な、何するんですか霊夢さん!？」

「あんた、何か誤解してるわ。萃香は敵じゃないわよ」

「でも、妖怪ですよ!？」

「いや、そーなんだけどさあ……」

「うわっ、いいなあ。こいつ、本当に分かりやすい考え方すんなあ」

何故か萃香は喜んでいた。

その反応を挑発と受け取った早苗が再び激して、外野の二人はそれを止める様子もなく——霊夢は疲れたようなため息を吐いた。

こういうのは自分の役割じゃないような気がする、と内心で愚痴りながらも仲裁に回る。

萃香自身や博麗神社がこのような状態になった事情の説明は、話してみれば意外とあっさり聞き入れられた。

元々、早苗の抱く敵意も無知から来るものだった。

別に妖怪を悪だと断じ、心の底から憎んでいるわけではない。

結論を出せるほど、早苗は妖怪について知らないのだ。

妖怪は人を襲う——幻想郷においての真理を漠然と理解した結果、安直に戦うべき相手だと判断しただけのことである。

外の世界で暮らしてきた早苗にとって、人間と妖怪が共存すること

で生じる複雑怪奇な因果と関係は、まだまだ理解しきれるものではない。

萃香が博麗神社を壊していたのではなく逆に直していたこと。

そして、その神社で普段は一緒に暮らしていること。

吸血鬼に仕えている咲夜の自己紹介。

人の道を外れた魔法使いを目指す魔理沙の名乗り。

早苗は一つの納得を得て考えを改めた後に、また別の新たな衝撃を受けることとなった。

そうして、その場の全員と一通り言葉を交わした後、

「——お騒がせして申し訳ありませんでした」

早苗は恥ずかしそうに頭を下げた。

未だ若干混乱はしていたが、早合点の先走りだったのは間違いないと理解出来たのだ。

「いやいや、構わないよ。さっきも言ったけど、むしろわたしは気に入ったくらいだね」

敵意を向けられた萃香を含めた全員は、早苗の暴走を笑って許した。

「まあ、面白そうな奴ではあるな」

「外の世界から来た人間にしては珍しい性格ね」

魔理沙と咲夜も、早苗のことを好意的に受け止めていた。

早苗自身は、失敗のこととは別の理由で恥ずかしさを感じていた。

外の世界では浮いた存在であった為、友達はもちろん同年代で親しい相手も長いこと居なかつたのだ。

初対面でこうまで好意的に接してくれる相手に、慣れていないのだった。

自分の本性は、外の世界では控えめに言っても非常識なものである。

しかし、この幻想郷では忌避も敬遠もされることなく普通に受け入れてもらえる。

——やっぱり、ここに来てよかった。

外の世界を去って以来、様々な考えや思いが交錯した胸の内に、希

望が湧いてくるのを早苗は感じていた。

いつの間にか早苗も含めて小さな縁側で全員が詰めるように腰を降ろしている。

すっかり和気藹々となった空気の中、おもむろに霊夢が口を開いた。

「それでき、早苗って言ったっけ？」

「はい。……ってというか、幻想郷に来た時に名乗ったはずなんですけど」

「そうなの？ 覚えてなかったわ」

「そ、そうですか……」

「気にすんな、こういう奴だ」

「こういう巫女よ」

「……フオローありがとうございます。魔理沙さん、咲夜さん」

「続けていい？」

「あ、はい」

「うん、それでね——あんた、元々は何しにここへ来たの？」

その言葉に、早苗は我に返った。

当初の目的を思い出したのだ。

縁側から立ち上がり、霊夢と少し距離を空けて向かい合う位置にまで移動する。

緩んだ気分を切り替える為に一つ咳払いを一つ挟み、早苗は言った。

「私がここへ来たのは、貴女と勝負をする為です。博麗の巫女、博麗霊夢さん」

「……ふうん。まあ、そんなことだろうと思ったわ」

早苗の宣戦布告を、霊夢はさして動揺することもなく受け入れた。持っていた空の湯飲みをお盆の上に置き、代わりに御祓い棒を手を取って立ち上がる。

早苗と距離を取ったまま、ゆっくりと境内の広い空間へと移動した。

魔理沙と咲夜、そして萃香は二人の行動に対して口出しも手出しも

することなく、無言でその場に留まっている。

霊夢と早苗の勝負を邪魔するつもりはない。

今度こそ、本当の意味で外野に回ることにしたのだ。

「予想済みでしたか」

「幻想郷に辿り着いた新参者の行動には、パターンつてもものがあつてね。格の高そうな神様が二柱もいるんだし、ひっそりと静かに暮らすことが目的ってわけじゃないんでしょ？」

「はい。この幻想郷で新たな信仰を得て、神としての力を取り戻すことが目的です」

「つまり、名を売りたいのね」

「身も蓋もない言い方ですね」

「でも、真理でしょ。間違っちゃいないわよ、神の力っていうのはそうやって増すものだから。信仰を得るには、まず知名度を高めないかね。新参の神なんて、何もしなければ誰も拝もうなんて思わないわ。神様はここじゃ別に珍しくもなんともないんだから」

「そうです。だから、既に幻想郷で一角の存在として有名な博麗の巫女と勝負をしに来ました」

「素直に『倒しに来た』って言えばいいわよ。ただ挨拶に来たってだけにしては、随分と気合いの入っている格好みたいだしね」

「……分かりますか？」

「もちろん」

頭からつま先までを冷静に観察して、霊夢は言った。

霊夢の物とは若干形状の違う御破い棒を始めとして、一見すると風変わりな装飾品に思える物から強い力を感じる。

特に、早苗が髪に付けている二種類の飾りがそうだった。

蛙と蛇を模した髪飾りである。

「その髪飾りは神様からもらったの？」

「凄いですね。当たり前です」

「それがあんた自身の力の制御を助けているみたいね」

「また当たりです。さすがですね」

「あんたの力は強いけど、技は未熟そうだからね」

「それはハズレです。私を侮らない方がいいですよ」
「別に侮っちゃいないけど——」

対峙する霊夢と早苗の様子は対照的だった。
戦いを前にして静水のように力と心を鎮めていく霊夢に反して、早苗は炎のように熱く自身を昂ぶらせていく。

霊夢は爛々と輝く早苗の瞳の中に過剰なまでの自信を見て取った。
それを未熟ゆえの『過信』や『自惚れ』だと判断しなかったのは、霊夢がまた別の印象を今の早苗から感じた為である。

己への自負を力に変える妖怪や神のような心の在り様を、早苗から感じたのだった。

早苗は間違いなく人間である。しかし、その心の在り方や振るう力の質は神や妖怪のそれに偏っている。

二つの存在の間で揺れているようだった。

「……まあ、別にいいけど」

「なんですか?」

「こつちの話よ。それよりも、気になるのはあんたの服装なのよね」

「えっ、何かおかしいですか?」

「おかしいっていうか——」

霊夢は複雑そうに顔を顰めた。

「何であたしとお揃いみたいになってんのよ?」

早苗は初対面の時とは違い、霊夢とよく似た巫女服を着ていた。

青と白を基調とした色合いや細部のデザインなど違いこそハッキリしているが、『脇の部分が空いている』という特徴的な部分が共通しているせいで酷く印象が似通って見えるのだ。

他人が見れば、どちらかがどちらかの服装を真似ているように見えるだろう。

霊夢の指摘に対して、しかし早苗は不思議そうに首を傾げた。

「この服装って、幻想郷での正式な巫女装束なんじゃないんですか?」

「どうしてそうなのよ?」

「だって、博麗の巫女は代々この格好をしているんでしょう? 霊夢さんもそうですし、先代巫女さんも同じような格好してましたよ。郷

に入れば郷に従えと言いますしね、私も肖らせていただきました！」
「ああ、いやそれは……」

霊夢は口籠った。

少なくとも、自分の服が母親を真似していることは間違いないからだ。

そのことが妙に恥ずかしくなり、霊夢は誤魔化すように頭を振った。

「分かった。分かったわよ、もうそれでいいわ。とにかく、勝負するならさっさと始めましょう！」

「——？ はい、分かりました！」

早苗は不思議そうにしながらも、改めて身構えた。

「スペルカード・ルールは理解しているわよね？」

「はい、もちろんです！ 実践するのは初めてですけど！」

「差し詰め、あたしは初戦の練習相手ってわけね」

「ここに来たのは神奈子様達の指示によるものでしたが、初めて弾幕ごっこをするなら霊夢さんがいいと思っていました」

「それは光栄ね。だけど、あんたこそちよつと侮りすぎじゃないかしら？ 初心者（ルーキー）が熟練者（ベテラン）に勝てると思ってるの？」

「何言ってるんですか？ 負けるにしても、敗北を経験する壁は大きいほどいいんですよ！ それに——」

二人は同時に空中へと飛び上がった。

「勝つ自信も結構ありますしね！」

弾幕ごっこは、天子と戦った時以来だった。

あの死闘からまだ数日しか経っていない。傷や疲れはほとんど癒えていたが、苦い想いと記憶は頭の中に残ったままだ。

しかし、これから始まる弾幕ごっこから連想してそれらが脳裏に蘇ることは、不思議となかった。

「あんた、面白い奴ね」

霊夢は自分でも気付かない内に笑っていた。



「凄いね、これが天狗の集落か」

窓からの景色を見下ろしながら、諏訪子は呟いた。

その声には感嘆の他に憧憬の色も混じっている。幾らかは呆れてもいるようだった。

眼下にある光景は外の世界では決して見ることの出来ない、しかし古い神である諏訪子にとって何処か懐かしさを見出せるものだった。

「外の世界じゃあ確実に違法建築だな、こりゃ」

天狗の集落は、同じ妖怪の山でも守矢神社とは反対側に位置する場所に存在した。

山全体から見れば地形は傾斜が急で、切り立った崖も多い。

建物を建てるには不向きな場所である。

しかし、そんな山の一角にある溪谷に天狗の住処は建てられていた。

妖怪の山を遠目の外観から捉えただけでは見つけることの出来ない隠れ里である。

床下を長い柱と貫によって支える『懸造り』と呼ばれる方法によって建てられた家屋が密集し、その領域は横にではなく上へと広がっていた。

人間ならば、在り得ない集落の形である。まず何よりも高所による交通の不便が出るからだ。

しかし、それは空を自在に飛ぶ天狗にとっては何の問題にもならないことだった。

場所によっては崖にも等しい斜面を登る必要もなく、家に入るのならばただ単に飛んでいけばいいのだ。

「建物の位置がそのまま上下関係も表してるってわけか。分かりやすいっていうか、露骨っていうか——」

現在いる位置からは集落の様子が一望出来る。

それは諏訪子の居る場所が、天狗の集落で最も高い位置に在る最も大きな建造物——天魔の屋敷——だからだった。

身分の高い天狗が上に住み、身分の低い天狗は下に住む。誰を見下ろして誰を見上げるのか、生活の中に自然と染み付いてしまうのだ。

ちなみに、溪谷の下流には河童の集落が存在する。天狗という種族の下に、河童という種族を置いてみると暗に示しているわけだ。

ここまで徹底していると、いっそ清々しいほどであった。

「効果的ではある」

「ま、そりゃそうだけじゃ」

神奈子の相槌に、諏訪子は肩を竦めて返した。

幻想郷へ移り住んでまだ数日だったが、少なくとも妖怪の山の中の勢力図については把握していた。

それだけ分かりやすいのだ。

個の力にも優れる天狗が組織として統率されることで強大な勢力となり、山のヒエラルキーの頂点に立っている。

「格付けで物事を測るのが好きな奴らみたいだねえ」

守矢神社に天狗の使いがやって来たのは三日前だった。

丁度、諏訪子が早苗に修行をつけている最中であり、対応したのは神奈子だった。

おかげで、早苗にこの場のことを知られなかったのはちよつとした幸運だった。

天狗の使いは、長である天魔を代表とする組織上層部からの文を携えていた。

その内容を要約すれば『妖怪の山における今後のお互いの関係の為に一度話し合いをしないか』というものである。

長つたらしい文章には、神奈子と諏訪子が偉大な神だと敬っていることや二柱を歓迎するなどといった美辞麗句が並べ立てられていたが、それを真に受けるほど愚かではない。

天狗側がこちらの存在を警戒しているのだと、神奈子にも諏訪子にも分かっていた。

もちろん、幻想郷では何の下地もない新参者である自分達がこの誘いを断ることなど出来ないが、ただ親睦を深めるだけの会合で終わる

とも思つてはいない。

まさかいきなり荒事になるとは流石に考え辛いが、招かれる先は敵地も同然である。

天狗側が考える『お互いの関係』とは、良くて同盟、悪くすればこちらの与える神徳を目当てにした子飼いのような扱いにされかねない。

行けば、守矢神社の今後を左右する駆け引きが待っているのだ。

「早苗を連れてこなくて正解かな」

諏訪子が言った。

広い室内には、今のところ諏訪子と神奈子以外に座っていない。

外の世界ならば観光名所で見れないような荘厳な内装も、さすがに見飽きてしまうだけの時間が過ぎていた。

天魔はもちろん、会合に参加する予定の天狗が一人として現れない。

屋敷に通され、ここで歓迎の為の宴を開くと告げられて、それきり待たされたままである。

訊けば準備の最中だという答えが丁寧な侘びと共に返ってくるが、相手側の真意は分かっていた。

呼び出されて、待たされる——天狗の都合が優先されるということである。暗に立場を分からせようとしているのだ。

この程度の駆け引きなど老練な二人は問題にもしていなかったが、察しが良くて若い早苗ならばそうもいかなかっただろう。

「いずれ知るさ。妖怪の山を拠点にしていれば、余所者である私達がどういう目で見られているか、な」

「それでも、最初に出会ったのが腹に一物含んだ相手なんて嫌じゃないか。早苗には、そういうしがらみとか無しに、新しい土地での出会いを純粋に楽しんでもらいたいな」

「相変わらず甘い奴だ。いや、外の世界を離れてもつと酷くなったな」
「ここに同伴させないことに賛成したあんたが言うかねえ？ わざわざ『博麗の巫女と戦ってこい』なんてそれっぽい指示与えてさ」

「スペルカード・ルールの施行者らしいから、相手として適役だと思っ

ただけだ。私達の巫女として働く以上、早苗にも幻想郷で力を示して貰わねばならん」

「加えて、自分の認めた先代巫女の娘だから信も置けるって？」

「……ヤケに絡むわね」

「幻想郷に来てから、あんた話しやすくなったからね」

諏訪子が楽しそうに笑った。

気まずそうに視線を逸らしながらも、神奈子の口元には小さく苦笑が浮かんでいる。

外の世界で、暴走に繋がるほど張り詰めていた気配が、今の神奈子にはない。

代わりに角の取れた柔らかな物腰があった。

しかし、諏訪子もその事実を素直に喜べるほど良い方向に捉えているわけではなかった。

柔らかな物腰は、ともすれば気弱とも取れるものである。

今の神奈子には気概や気迫といった強い意志まで感じ取ることが出来なかった。

その原因が、先代巫女との死闘とその敗北にあることは考えるまでもない。

悪く言えば、今の神奈子は腑抜けている。

それは、この先に待つ天狗との会合において弱味となるのではないか。

幻想郷でのこれからの立場を決めようという会合を前にして、ただ流れに身を任せているような意志の弱さや諦念が、今の神奈子を蝕んでいるような気がしてならなかった。

そして、それは以前神奈子に同じことを指摘された自分もまた――

「別に、腑抜けたつもりはないんだがな」

苦笑と共に洩れた神奈子の独り言に、諏訪子は一瞬ギクリとした。「色々と考えることがあってな……」

諏訪子の懸念について、何よりも神奈子自身が自覚しているのかもしれない。

「考えること、か」

それは先代巫女のことだろう。

諏訪子の脳裏にも、自然と蘇る光景があった。

神奈子と共に同じものを見たのだ。

——古明地さとりへの亡骸を抱えて、慟哭する先代巫女の姿。

幻想郷で生きてきた先代の姿を、二人は知らない。

しかし、彼女が戦う姿やそこで奮った強大な力、宿した強烈な意志、

垣間見せた闇を知っている。

そして、崩れ落ちる彼女の弱さを見た。

心の底からの嘆きを聞いた。

神にさえ助けを乞おうとする声が耳に届いた。

あの時、あの場に居た『神』は、自分と神奈子だけだったのだ。

確かに考える。

考えてしまう。

あの時、自分に何が出来たのかを。

「——わたしも、ちよつと考えたんだけどさ」

少しの間を置いて、諏訪子は呟くように言った。

「なんだ？」

「あんたが、へそ曲げてた時のこと」

「誰が、何時、へそを曲げた？」

「外の世界で大暴れした時のことだよ」

睨み付けてくる神奈子の視線を、諏訪子は無視した。

「あの時のあんたの気持ちだね、落ち着いて考えてみるとなんか分かるなあって」

「……ふん、言ってみろ」

「あんたはさ、先代の期待に応えなかったんじゃないかな、ってね」

「期待？」

「神様としてのさ」

神奈子は何か言い返そうとして、口籠った。

その反応は肯定も同然だった。

「さとりが死んだと思った時にさ、あんた挑発みたいなこと言ってた

じゃない。あれって、先代に抱えている恨み辛みをぶつけて欲しかったんじゃないかな」

「知った風なことを言うな」

「もちろん知らないよ。でも、少なくともわたしならそう考える」

「――」

「外の世界で神奈子自身が言っていたことじゃないか。理不尽な仕打ちへの恨みは神にぶつければいい。大切な人を喪って生まれる行き場のない悲しみの責任なんて、一体誰が取れるんだ」

「……原因が、私にあったのは間違いないだろう」

「どうかな？ 恨もうと思えば何だって恨めるでしょ。他人、出来事、時間、あるいは世界そのもの――」

「私は……」

「あの時さ、神奈子は悔しかったんでしょ？」

神奈子は思わず、諏訪子の方を見た。

「わたしは、悔しかったよ」

諏訪子も、神奈子の方を見ていた。

「あの時、先代は自分以外の誰かに助けを乞うた。これまで一人で戦ってきた人間が『神様、お願いだ』って言ったんだ」

「……ああ」

「別にさ、あの時の『神様』がわたしやあんたのことを明確に指していたわけじゃないよ。だけど――神様は、わたし達じゃあないか。

あの先代が助けを求めて伸ばした手を、結局取れなかった。届いた祈りに、応えられるだけの力さえ残っていなかった。それが悔しくつて、情けなくつて、本当に堪らなかつたんだ」

神奈子は自分の手に視線を落とした。

無力な手だと感じた。

開いていた手のひらを力の限り握り締めても、虚しさしか残らない。

――たった一人の人間に勝つことが出来ず。

――たった一人の人間を救うことすら出来ない。

それが今の自分なのだと、嫌でも理解出来る手だった。

そのことが、ずっと心に疑問を纏わりつかせている。

この手に、一体何が掴めるといえるのか。

この無力な神に、一体何が成せるといえるのか。

「初めて先代を前にした時から、あんたが感じているそれは、たぶん『負い目』なんだよ。力を示すことも出来ず、恨み辛みをぶつける相手にさえなれないのに、無条件で神様だと認める先代があんたには堪らなかつたんだ」

そう告げる諏訪子の横顔も、苦渋に歪んでいる。

神である以上、彼女もまた同じ想いを抱いていた。

「そうかもな」

神奈子は俯いていた顔を上げた。

「いや——そうだ」

押し殺したような声だった。

「諏訪子」

神奈子は目を合わせずに言った。

「なんだい？」

互いに虚空を睨むように見据えたまま、言葉だけを静かに交わす。

「私のことを腑抜けたかと心配しているようだが、お前はどんなんだ？」

「何が言いたいのか？」

「お前に、まだ何かを成そうというだけの気概は残っているか？」

『何か』っていうのは、外の世界であんたがやらかした馬鹿みたいなことかい？」

「そうだ。最後の賭けをする覚悟だ」

「わたしとあんただけならいい。でも、早苗を巻き込むのは気が進まないね」

「その早苗の為だ」

「あんたの口から『早苗の為に』って言葉が聞けるたあね」

「茶化すな。私だってあの子が可愛いのは違いない。あの子を幻想郷に連れてきたのは、権力者の顔色を伺わせる為じゃないはずだ」

「それは」

「あの子の信仰は尊いものだ。他人の食い物にされる為にあるわけじゃない。何も成し遂げず、ただ無為に若い時間を過ごさせるつもりか？」

「わたし達が大人しく天狗の下に就けば、早苗も同格に扱われる……か」

複数の足音が聞こえた。

天狗達である。

いよいよ会合の時が迫ろうとしていた。

「時間がないぞ。今すぐに答えろ、諏訪子」

問い掛ける神奈子は、胸に刻まれた傷痕が熱く疼くのを感じた。

未だ、この傷は癒えてはいない。

「お前に、もう一度神としての見栄を張る覚悟はあるか？」

しかし、その熱い痛みが空虚だった自分の内側を満たすのを同時に感じていた。



贅を尽くした料理や秘蔵の酒が次々と部屋に運び込まれていく。

豪勢な宴になりそうだった。

しかし、その裏に秘められた意図や策謀を知らない者は、この場には一人もいない。

それは歓待を受ける二柱の神も例外ではないはずだった。

ただ純粹に楽しめる宴ではない。

それを理解しているからこそ、射命丸文は渋い顔をして宴の準備が進むのを眺めていたのだった。

「なあーんと、もったいない」

ずっと前から目を付けていた銘酒が運ばれていくのを、物欲しげに見送る。

「あれ、上役に優先して回されるんでしょうね。なんとか一舐めくらい、ご相伴にあずかれないかしら？」

「意地汚いわよ」

同じように傍らで様子を伺っていたはたてが言った。

しかし、その口調は嗜めるにしても少々険がある。

まるで威嚇するように、周囲に刺々しい雰囲気振り撒いていた。

「それに、こんな辛気臭い場じゃお酒の味も分かんないわ」

二人以外にも、周囲には宴の準備が終わるのを待つ天狗が何人もいた。

しかも、誰もがこの天魔の屋敷に招かれるに相応しい品格を持った者達である。

本来ならば、このような場ではたての無礼な言動を諫めるのは文の役割であるはずだった。

しかし、その文でさえはたての言葉には同意してしまう気持ちが強い。

はたての無礼を止めるまでもなく、既に自分を含めて周囲から歓迎されていない気配を強く感じるのだ。

——何故、この場に一介の鴉天狗如きが二人も招かれておるのだ？

——不相応ではないか。

——よりによって、射命丸文と姫海棠はたてとはな。

——厚顔無恥とはまさにこのこと。この屋敷で働いた無礼を忘れたとは言わさぬぞ。

——聞けば、以前の鬼の異変にも深く関わりがあるとか。

——厄介者どもめが。

自分達に向けられる不躰な視線や露骨な陰口を、不快に感じているのは文も同じである。

それを上手く受け流す腹芸に、はたてよりも長けているだけなのだ。

——あのような者達を呼ぶとは、天魔様も一体何を考えておられるのか。

「同感」

耳に入った陰口の一つに対して、文は誰にも聞こえないほど小声で同意を示した。

妖怪の山に住み着いた二柱の神と天魔を代表とする組織の上位陣

の会合という重要な場に、文とはたてを呼びつけたのは、他でもないその長自身だった。

しかも、直々の命令である。

天魔の意図は文も全く分からなかったが、逆らえる命令でないことは嫌と言うほど分かる。

渋りに渋るはたてを無理矢理引っ張って、なんとかこの場に参上したのだった。

「文も嫌なら無理に参加しなけりやいいのに」

「天魔様の命令を無視するとか、その発想が出てくるあんたの方が疑問だわ。本当に天狗？」

周りに上司しかいない状況で相変わらずの絶好調であるはたてを睨みつける。

普段のオドオドとした態度は不遜さを通り越した喧嘩腰に変わり、吐き気ならぬ覇気が満ちていた。

お互いに、今の服装は正装である天狗装束に着替えているが、当初は私服で参加する気満々であった。

「あたしには、こんなことしている暇なんてないのに……っ」

「暇なんて幾らでも持て余して居るでしょうが、このひきこもり」

「何よ、文。あんたにだって関係あることよ」

「……ひよつとして、先代巫女のこと？」

「そうよ。あんたも見たでしょ、あの子が泣くところ」

はたての指摘を受けて、自然と文の脳裏には守矢神社での出来事が思い浮かんだ。

「文は、あの子が心配じゃないの？」

「心配するのはいいけど、具体的にはたてはどうしたいの？」

文はやんわりと返答を避けた。

「どう……っ。傷ついているはずだから、慰めるとか……慰めるとか」

「具体的な案、一つもなしかい」

「う、うるさいわね！ とにかく、何かしてあげたいのよ！」

「守矢神社との関係を調べる為の取材とか、こじつけでもいいから出向く理由見つけければいいのに……」

「そ……それよ！ それ、いいアイデアだわ！ とにかく話が切り出せば、そこから色々と思ひとか聞いてあげられるし……こうしちやいられないわ！」

興奮するままに屋敷から飛び出そうとするはたてに気付いて、文は目を剥いた。

「どうやら、余計なことを言ってしまったらしい。」

今のはたてに自分の立場を考慮するような自制心は存在しない。

突如大声を上げたはたてを、周囲の天狗達がますます険悪な目で眺め、文が慌てて引き止めようとして、

「——喝ッ!!」

低く、重い声が、場の全てを制した。

「騒々しいぞ。鎮まらぬか、馬鹿者ども」

現れたのは、傍らに杖を伴った大天狗だった。

刃のような眼光ではたてを睨み——そして、周囲の天狗達をも牽制した。

『騒々しい』という言葉が、はたてと文だけでなく彼らの陰口も含めてのものだと暗に示しているのだ。

「だ、大天狗殿……」

天狗の一人が、恐る恐るといった様子で口を開いた。

立場という点でならば、天魔の側近である大天狗はこの場の誰よりも上にある。

もちろん、その地位が必ずしも相手の敬意を引き出してくれるわけではないが。

大天狗に向けられる視線には、不服の色も多く滲んでいる。

「失礼ですが、その……後ろの者は？」

「犬走杖。 儂の供じや」

「しかし、そやつは白狼天狗ですぞ」

「相応の格好はさせた。見てくれは悪くなからう」

「身分の話をしておるのです。まさか、会合の場に出すつもりではありませんすまいな？」

「儂の傍に付かせるつもりじや」

「何を馬鹿な！ そのような下等な身分の者を同伴させれば、天狗が侮られまする！ 此度の会合、どのような意味を持つかお分かりでしょうか!?」

椀を対象にした叱責に、まず何よりもはたてが食って掛かろうとするのを、陰で文が必死に押さえつけていた。

「分かっておる」

異議を唱えた者の瞳を、大天狗は射抜くように見返した。

ただそれだけで、相手は口を噤んで震え上がる。

「よく分かっておるわ」

「な、ならば……」

「侮っておるのは、貴様じゃ」

「なんですと……?」

「此度の相手となる二柱の神を、侮っておる。先代巫女と戦い、敗れ、そして落ち延びた、手負いの弱者であるとな」

「ぬ……っ」

それが凶星であることを示すように、迫られている者以外の天狗達も一様に黙り込んでしまった。

八坂神奈子と洩矢諏訪子について、天狗側は事前に情報を得ていた。

守矢神社が、どのような経緯で妖怪の山に現れるに至ったのか。そこに宿る二柱の神の正体と力、そして目的――。

それらの詳細な情報が、今回の会合を行う決定の一押しとなったのである。

当初は警戒に値する存在と思っていたが、その実態は外の世界で信仰を得られずに弱り果て、ついには人間にさえ倒されて、幻想郷へ逃げ込んだ、廃れた神だ。

自身らの本拠地で万が一にも遅れを取る不安は無く、懐柔も容易い。

会合に参加するほとんどの天狗達の間には、楽観の空気が漂っていた。

大天狗は、それに気付いたのである。

「あの先代巫女と戦い抜いたからこそ——侮れぬぞ。故に、儂は権を連れておる」

「そ、それは答えになっておりませぬが……」

「腑抜けた貴様らよりも、よほど頼りになるということよ」

絶句して動かなくなつた相手を、もはや完全に捨て置き、大天狗は次に文とはたてへ視線を移した。

しかし、目付きの険しさは治まっていなない。

「貴様らもな。儂にも到底理解出来ぬが、天魔様が貴様らに信を置いておることは確かじゃ。くれぐれも御期待に背くような真似をするでないぞ」

「………光栄です」

「へーイワカリマシター」

「姫海棠はたて。態度を改める気はないか？」

「サーセンツシター」

「………権」

「はたてさん、どうかご勘弁下さい」

「——ツ!? ジ、ジジイ！ 権に言わせるなんて汚いわよ!!」

「喧しいわー!」

好き勝手に言い争いを始める二人を見つめながら、文は頭痛を堪えていた。



やがて、宴の準備は整つた。

最後に天魔の巨躯が上座に収まり、各々が持つ盃へ酒が注がれる。席のほとんどを占めるのは、当然ながら天狗である。

対して、ズラリと天狗の並んだ長机の端に座るのは、神奈子と諏訪子の二人だけだ。

あからさまな不穏さや陰悪なものが場に漂っているわけではないが、有利不利で状況を測るならば、如何に神であろうと一方的であった。

しかし、盃で酒を受ける神奈子と諏訪子の態度は、堂々としたものである。

神代より生き続ける神としての揺ぎ無い風格が、そこにはあった。有象無象の天狗の中に紛れながら、文は二人の様子を観察していた。

——だけど、天魔様や萃香さんに比べたら、やはり一枚劣るわね。以前、同じような状況に遭遇した経験を思い出す。

あの時は、伊吹萃香を筆頭とするたつた三匹の鬼を相手に、ほとんどの天狗が気圧されていた。

確かに八坂神奈子も洩矢諏訪子も、高い神格を持つ神かもしれない。実力も、威厳も、相応に感じる。

しかし、もつと純粹な、魂に訴えかけるような脅威が、彼女達からは感じ取れないのだ。

危機感と言い換えてもいい。彼女達を前にしても、それを感じない。

外の世界で信仰を失って幻想郷へ逃げ込んできたという情報と、それを裏付けるように神格と比べて明らかに弱まった力が理由だった。

故に、この場には樂觀的な緩んだ空気が漂っているのだ。事前に大天狗が言った通り、当人達を前にして誰もが気を引き締めるどころか一層に緩めている。

もはや、お互いの格付けは済んだと言わんばかりだった。

——二柱の顔を立てて、表向きは同等な協力関係を築くって辺りが落とし所かな？

文もまた周囲と同じように、早々に見切りはつけた。残されたのは、茶番だけだろう。

文の目的は、如何にして話し合いに関わらず、酒と料理を楽しめるかに切り替わっていた。

「それでは、まずは乾杯と参りましょうか」

上座に最も近い位置にいる天狗の一人が、おもむろに立ち上がった。

文には見覚えのある顔だったが、名前までは覚えていない。とにかく

く偉い天狗だという認識だけはあった。

耳触りの良い賛辞を長々と並べ立てた後、景気よく盃を掲げた。

「偉大なる神の来訪を祝して——乾杯！」

既に格下だと侮っている相手にも丁寧なおべっかだ、と内心で皮肉りながら文は酒を飲み干した。

やはり、旨い酒だった。

それだけは満足である。

こんな厄介な場に呼ばれた元くらいは取っておきたい。

周囲に渦巻く策謀など知ったこつちやないとばかりに、文は嬉々として箸を手に取った。

「如何ですか？ 我ら天狗の秘蔵の酒でございます。外の世界では、もはや味わえぬ美酒でございますよう？」

視界の端には、形ばかりとはいえ主賓の二柱に擦り寄る数人の天狗が見えた。

しかし、その言動の端々には、相手に媚びる気配よりも侮る意図が感じ取れる。

当人達は、相手にプレッシャーを与えているつもりなのだろうか。

全く、ご苦労なことだ。と、文は刺身を一切れ口に含んだ。

「これが、天狗の秘蔵か」

酒を飲み干した神奈子が呟いた。

空になった盃に注ごうとする手を、無言で押し留める。

「なるほど」

訝しげな表情を浮かべる天狗を、そして周囲をゆっくりと見回して、神奈子は口の端を吊り上げた。

その瞬間、文は口に含んでいたものを吹き出すほどの悪寒を感じた。

「——こんな不味い酒をありがたがるとは、天狗の底も見えたな」

賑やかな宴の中で、神奈子の吐き出した言葉は朗々と響き渡った。

一気に、場は静まり返った。

突然の暴言に、誰もが言葉を失くしている。

様々な感情を含んだ視線が集中する先で、神奈子は片膝を立てた姿

勢のまま、堂々と座っていた。

神奈子の浮かべる表情が、文の目に焼き付いた。笑っている。

あの鬼のように、笑っているのだ。

「……な、何と申されましたか？」

すぐ傍の天狗が絞り出した声を、神奈子は無視した。

「天狗の長よ、話し合いは中止だ。我らの今後の関係について、私達の『決定』を伝える」

他の天狗とは違い、全く動揺を見せない天魔に対して、宣告した。ざわめきが巻き起こる。

天魔は無言で神奈子を睨み返している。

大天狗と椀が揃って刀に手を掛けた。

心ここに在らずだったはたての目付きに鋭さが戻った。

神奈子に意識が集中する中、傍らの諏訪子が静かに両手を持ち上げた。

「崇め奉れ、さすれば神徳を授けよう。我らに降れ、天狗どもよ——
!!」

神奈子が叫ぶと同時に、諏訪子が胸の前で両手を叩きつけるように合わせた。

その動作に呼応するように出現した巨大な二本の手が、天魔の屋敷を押し潰した。



八雲紫は、自身の屋敷でそれを見ていた。

二柱の神が天魔を始めとする天狗という種族そのものを相手にして、暴れ出す瞬間を——。

遠い妖怪の山での出来事を、リアルタイムの映像として確認出来るのはスキマの能力によるものである。

目の前の空間を切り開くようにして広げた先が、天狗の集落の上空に繋がっているのだ。

スキマの先に広がる文字通りの修羅場を、机に頬杖をついたゆったりとした姿勢で紫は眺めていた。

「予想通り、と言ったところですか？」

傍らで同じ映像を見ていた藍が、主を伺うように呟いた。

「期待通り、と言ったところね」

紫は微笑みながら答えた。

「守矢神社が天狗の集落と敵対関係になることを期待しておられたのですか？」

「敵対、というところ少し違うわね。天狗の下に就くことを良しとしないであろうと期待していたわ」

「しかし、あの二柱を懐柔するよう天狗に仕向けたのは紫様でしょう？」

天狗が手に入れた神奈子達の情報——それらを密かに提供したのは、実は紫だった。

信仰の不足によって弱まった力や、外の世界を追われたこと、更には先代によつて一度敗れていることまで、ほとんどが天狗にとって有利となる情報を無条件に渡したのである。

紫がその見返りを要求することはなかった。

情報を得た天狗が、自身の支配する妖怪の山に突然現れた厄介な勢力に対してどのような行動に出るのか、一歩退いて見守るのみ。何も干渉はしない。

もちろん、その後の展開を半ば以上確信してのことだった。

「天狗の存在が目障りになりつつあるというのなら、ただ私に命じて下されば宜しいのです」

「やだわ、藍ったら血気盛んね。勘違いしちゃう駄目。私が何か思うところがあるとするれば、それは天狗の側ではなく、あの神様達よ」

スキマの先では、激しい戦闘が始まっている。

神奈子と諏訪子の戦いぶりは、凄まじかった。

しかし、外の世界で既にほとんどの力を使い果たしている上に、敵地であることも含めて、二人には到底勝ち目などない。

「二柱の自滅をお望み——では、ありませんね。幻想郷にとって害と

なるのであれば、もっと早くに直接手を下されていたはずです」

「かつての紅魔館のようね」

「……そうですね」

「あら、藍ってばあの時連れて行かなかったこと、まだ根に持つてるのね」

「お戯れを」

「まあ、あの時とは状況が違うわね。あの二柱は幻想郷に害を成す者ではないわ。神とは信仰によって生きるもの。彼女達にとっての支配とは、先住民の心を掌握することよ。幻想郷に変革をもたらすことはしても、破壊は決して望まない。ならば、幻想郷はただ受け入れるだけですわ」

「それでは、何故試すような真似をするのです？」

「さて——」

意味深げに微笑んだまま沈黙する紫の横顔を、藍はじっと見つめた。

普段ならば、誤魔化そうとする主人に対して必要以上の追求はしない。

しかし、今の藍は紫の真意をおぼろげながら見抜こうとしていた。偉大な主の心を動かすものがあるとするならば、それはたった一人の巫女の存在に他ならないからだ。

そして、神と戦ってまであの二柱を幻想郷へ連れ戻ってきたのは、件の巫女だった。

「紫様は、試すのではなく肩入れしているのですね」

藍は静かに言った。

「あのままでは、守矢神社は天狗どもの傘下となっていたでしょう。弱体化した神では、妖怪の山の頂点に立つことは出来ません。そして、天狗の下に就いた神に向けられる信仰では、上下関係を覆す程の力は決して得られないでしょう」

「ええ、そうね。一度決まってしまったそういう関係を変えることは、とても難しいことだわ」

「抗うならば、今この時しかありません。己が相手よりも上であると

「いう証明を示すならば」

「そう、今しかない」

「だからこそ、ですか」

「そう、ちよつと発破をかけさせてもらったのよ」

紫は、藍の指摘を否定することもなく、素直に認めた。

「先代が、あそこまで力を尽くして救おうとした相手なのよ。相應の価値がある、と証明してもらわなければ」

呟く紫は相変わらずの笑顔だったが、その声には有無を言わさぬ凄みが秘められていた。

脳裏にあるのは、守矢神社と天狗の行く末——そのどちらでもない。

どちらへの義理も思い入れも存在しない。

それが存在するのは、先代巫女唯一人だった。

あの日、幻想郷へ帰ってきた先代が、さとりの亡骸を抱えて泣き叫ぶ悲痛な姿が忘れられないのだ。

紫はあの時まで知らなかった。

本当に大切なものを失った時、彼女はあそこまで深く悲しむのか。あそこまで深く嘆くのか。

そして、古明地さとりとは、彼女にとってそこまでの存在だったのか——と。

それを知って、紫は悲しみを感じた。

悔しさを感じた。

妬みを感じた。

あらゆる感情が胸を過ぎていった。

未だに心はざわついている。

先代とさとりに対する複雑な想いは、一時的に棚上げしているだけの状態だ。

これからどうするのか。

これからどうなっていくのか。

分からない。

分からない、が。

一つだけ確かなことがある。

それは先代には、幻想郷にも紫本人にも大きな貸しがあるということ。

自分を何度も助けてくれた。

自分の夢を何度も助けてくれた。

だから、先代が何かを望むのならば、それを可能な限り叶えてあげたい。

一人の友人としても、そう思う。

一先ずのところは、あの二柱の神だ。

「見事、あの修羅場を制してみせたのならば、妖怪の山における守矢神社の地位は大きく向上するでしょう。それを元手に、あの神様達がどう動くのかも中々興味深い」

「しかし、それは賭けですね」

しかも、かなり分の悪い。

「そうよ、当然でしょう？」

紫は突き放すように言った。

「命懸けの努力くらいはしてもらわなければ、先代がああ神の為にやってくれた必死の行動に釣り合わないわ」

断言する紫の微笑は、藍でさえ寒気を感じるほどに冷たいものだった。

それきり、二人は口を開くことなく、ただ静かに妖怪の山の戦いを見ていた。

「おーい、紫殿」

——と、そこで不意に場違いなほどのんきな声が割り込んできた。

「こちらの準備は出来たから、そろそろ博麗神社への道を開いておくれ」

台所から顔を出したのは、マミゾウである。

結界の修復の為に一時的に住み込んでいた霊夢は、博麗神社の建て直しが始まったその日の内に、紫の屋敷から出て行ってしまった。

霊夢と関わったことでなし崩しに屋敷に住み着いていたマミゾウ

は、やはりなし崩しに今もそのまま住み続けているのだった。
もちろん、そのことについて一番疑問と不服を抱いているのは藍である。

主との真剣なやりとりに水を差されて、青筋を立てながらマミゾウを睨みつける。

「貴様、いい加減にしろ！　紫様の御力を足に使うとは、何処まで自惚れているのだ!?!」

「なんじゃ、別に顎で使つとるわけじゃなかろう。ちゃんとお願いしとるじやろうが」

「そういう問題ではない！　というか、そもそも何時までここに居付く気だ!?!　さっさと外の世界にでも、その辺の野にでも還れ狸ババア！」

「あら、ぼたもちを作ったのね。美味しそうだわ」

「おお、霊夢とその友達に食べさせてやろうと思つてのう。紫殿も一個如何じゃな?」

「頂くわ。でも、博麗神社には魔理沙と咲夜他にもう一人、訪れてみるみたいよ」

「何!?!　そりゃあ、いかな。数が足りん。すまぬ、もう少し作り足していくから待つていておくれ」

「構わないわよ。ぼたもちを食べながら待つているから」

「紫様、そのような物を口にはいけません!」

「何よ、藍も欲しいの?」

「何じゃ、そうなら素直に言わんか」

「要らんわ!　食つたら馬糞だった、などというオチになりかねんからな!」

「食いモンを粗末にするわけなからうが、儂を侮るな!」

「らーん、熱いお茶を入れて頂戴」

賑やかな喧騒の最中、紫は顛末を見届けることなくそつとスキマを閉じた。



鮮やかな弾幕が美しかった。

「こりゃあ、凄いなあ」

目に自然と涙が溢れていた。

「東風谷早苗って、弾幕ごっこは初心者なのよね？」

この美しい光の幕を潜り抜ければ、

「だとしたら霊夢に負けなくらいの天才だぜ」

手が届く。

「まさか、ここまでやれるなんてね」

——その、はずなのに。

「初めての实战で、霊夢とこれだけ渡り合えるなら十分だぜ」

「評価を改める必要があるわね」

「いや、大したもんだ。ただの新参者じゃあないね」

地面に膝を着いた早苗に対して、魔理沙と咲夜、そして萃香までもが抱いたものは偽りない称賛だった。

滝のような汗を流し、肩で息をする早苗の前に、呼吸一つ乱れていない霊夢がふわりと着地した。

勝負の結果は、わざわざ口にするまでもない。

「スペルカード・ブレイク、ね」

霊夢の勝利だった。

「そ……そんなんっ」

早苗の完敗だった。

「あんた、結構強いわね」

俯いたままの早苗を見下ろして、霊夢は言った。

それは嫌味でも慰めでもなく、正直な感想だった。

霊夢は早苗の繰り出すスペルカードを全て打ち破っていたが、早苗もまた霊夢のスペルカードを数枚クリアしてみせている。

弾幕ごっこにおいて無類の強さと勝利の実績を持つ霊夢に対して、その成果は紛れも無く称賛されるだけのものだった。

霊夢自身も、早苗の持つ力と秘めた才能を肌で感じている。

傍で見ていた魔理沙は、そんな霊夢の反応に驚いていた。

付き合いが長いからこそ、それがどれ程珍しいことなのかよく分かっていたのであった。

しかし、霊夢の言葉にも早苗は顔を上げなかった。

「……どうして」

俯いた顔から、絞り出すように声が洩れる。

「どうして……!?!」

早苗の肩が震えているのは、疲労のせいではなかった。

勢いよく顔を上げて、霊夢を見上げる。

「どうして貴女が勝つんですか!?! 一体、どうして貴女の方が強いんですか!?!」

早苗は涙を流しながら、霊夢を睨んでいた。

それが理不尽な叱責であることは、感情を向けられる霊夢はもちろん、傍で見ている者達にも分かっている。

霊夢が勝ったのは、霊夢の方が強いからだ。

霊夢が強いのは、霊夢の方が強くなる要素を持っているからだ。

優れた才能を持ち、それを驕らず磨き、その為の環境に恵まれ、当人の意志も強い。

霊夢自身が掴んだ正当な強さなのだ。

しかし、その理屈が今の早苗に通じないことも、誰もが分かっていた。

魔理沙も、萃香も、霊夢のその強さの前に敗北した経験がある。

咲夜は、それを客観的に知っている。

だからこそ、敗北を素直に受け入れられない早苗の気持ち痛いほど分かる。

「どうして……霊夢さんの方が、恵まれているんですか!?!」

叩きつけるような叫びを、霊夢は黙って受け止めていた。

霊夢もまた、自分自身の強さが、どういう影響や結果を生み出すのかを弁えている。

単なる敵ならば、負け惜しみや逆恨みなど歯牙にも掛けない。

しかし、早苗のことは少なからず好意的に捉えていた。

勝負を始める前の、自信に満ちていた瞳から輝きが失われてしまっ

ていることに、僅かながら後ろめたさを感じてもいた。

あの前向きな明るさを早苗から奪ったのは、間違いなく自分なのだ。

そんな風に、らしくもない苦悩を持って余していたからだろうか。

「霊夢さんは……っ！」

霊夢は、立ち上がって掴みかかる早苗の行動に対して、反応が遅れてしまった。

両手で肩を強く掴まれる。

一瞬、警戒に体が強張った。

しかし、早苗はそれ以上のことはしなかった。

「霊夢さんは、ずるいー！」

「……え？」

全く予想していなかった言葉を聞いて、霊夢は呆気にとられた。

「私は、大切なものを全部置いてきたのに……私より強い貴女が、どうして全部持っているんですかっ!？」

早苗の訴えは、まるではらわたから絞り出して、血と共に吐き出しているかのようなだった。

顔は、妬みとも悔しさともつかない複雑な感情で歪み、その上を涙が止まることなく流れている。

これほどまでに激しい感情をぶつけられることは、霊夢にとって初めてだった。

そして、その訴えかける内容もまた初めてのものだった。

「確かに、私は素人ですよ。たった数日間の修行で十分だなんて思いつがっていないし、自分の才能に自惚れてもいません。神奈子様や諏訪子様力を借りて、やっと戦えている甘ったれですよ、私は。それに対して、霊夢さんはこれまでずっと戦ってきた。私よりずっと修行して、ずっと痛い目にあつて、だから私より強いのは当たり前で——」
喋る内容を整理出来ていないし、呼吸さえ上手く整えられない。

しかし、それでも早苗は泣きながら叫び続けた。

「だけど、貴女にはお母さんが居るじゃないですか！」

その言葉に、霊夢は目を見開いた。

「この幻想郷で生きる為に、私は……お母さんも、お父さんも、住んでいた家も……思い出さえ、全部外の世界に置いてきてしまった！もう話すことは出来ないし、会うことさえ出来ない！この世界で新しく手に入れることが出来たのは、この力だけなんです！」

「――」

「それなのに……どうして、私よりも力のある貴女が、私の失くした大切なものを全部持っているんですか!？」

責める早苗を、霊夢は黙って受け止めた。

魔理沙達も、口を出そうとは思わなかった。

「……貴女はずるい」

早苗は言った。

「貴女は恵まれてる」

早苗は言った。

「貴女が羨ましいー！」

早苗は言った。

「貴女が……っ！」

早苗は言い続けた。

それが愚かなことだと分かっているながら。

「……どうしてえ」

やがて精魂全てを吐き尽くしてしまったかのように、霊夢の肩を掴んでいた手から力が抜けて、早苗はその場に崩れ落ちた。

両手はそれでも縋りつくように霊夢の体を掴んだまま、膝を着く。

再び顔を俯かせ、早苗はすすり泣き続けた。

その泣き声を聞きながら、霊夢はじつと虚空を見据えていた。

「――そうね」

不意に、霊夢が小さく呟いた。

「早苗の言うとおりだわ」

早苗が泣き腫らした顔を上げた。

「あたしは恵まれてる」

霊夢は早苗の瞳を真つ直ぐに見据えて、ハッキリと言った。

「母さんがあたしを育ててくれた。あの人が守ってくれたおかげであ

たしは生きてこれたし、あの人が目標になつてくれたから努力も出来た。子供じやなくなつた今でもあたしを愛してくれて、それでもまだ傍に居てくれる。すぐに話せる、触れ合える場所に居る」

早苗に対する皮肉などではなく、自分の言葉を一つ一つ確かめるように口にしていく。

「確かに、あたしは大切なものを全部持つてる。何一つ失くしてはいない」

霊夢は微笑んだ。

早苗が涙を流すのさえ忘れて呆けてしまうような、素直な笑顔だった。

「あたしはこれまで自分の境遇を顧みることなんてなかった。ただ、当たり前のように享受していた。だから分かつてなかったのね、自分がどれだけ恵まれているか。『羨ましい』なんて、誰かに言われたのは初めてだったわ」

「でも、そのとおりね。あたしは恵まれてた」

「ごめんなさい、早苗。あたしは、ずるいわ」

微笑みながら、それでも少し申し訳無さそうな顔をする霊夢を、早苗は呆然と見上げていた。

胸の奥で渦巻いていた混沌とした感情は、既に消え去ってしまった。いる。

素直すぎる霊夢の態度が、何故だか妙に可笑しかった。

「なんですか……それ。もう、ばかみたい……」

霊夢とは違って、素直に笑うことは出来ない。

心の隅には、どうしても複雑な想いが残ってしまったている。

それが早苗の笑顔を歪ませていた。

しかし、それでも自然と泣き笑いのような表情が浮かび、早苗は立ち上がった。

一度、霊夢から背を向けて、服装を整える。

目元の涙を拭って、数回大きく深呼吸した。

「……よし！」

腫れぼったい顔を引き締めるように両手で叩き、早苗は勢いよく振り返った。

「霊夢さん！」

「何？」

「今回の勝負は、私の負けです！」

「そうね」

「しかし、次は負けません！ 何故なら、私は絶賛修行中の身だからです！」

私は風祝の早苗。外の世界では絶え果てた現人神の末裔。いずれ、現人神として覚醒した私の真の力をお見せしましょう！ そして、その時こそ霊夢さんに勝ちます!!」

早苗は胸を張って、言い放った。

まだ少し充血している両目には、爛々とした輝きが戻っていた。

霊夢は一瞬呆気にとられ、次の瞬間声を上げて笑った。

魔理沙でも初めて見るような、心の底から愉快そうな笑い声だった。



天狗の権威を象徴する屋敷は、今や半壊状態だった。

屋根と壁が半分以上崩落し、内部が剥き出しになってしまっている。

贅を尽くした料理や酒の数々は無残にも撒き散らされ、食器や木材の破片と混ざって、ただのゴミと成り果てていた。

もはや部屋として機能してない場所で神奈子と諏訪子は——天狗達によって拘束されていた。

「これまでのようすな」

畳の上に打ち伏された神奈子の首に刀を添えて、大天狗が言った。

他にも二人、手練の天狗が左右に付いて自由を奪っている。

それは体を押さえつけるような生易しいものではなく、薙刀で神奈

子の両手を畳に縫い留めるといふ容赦の無い対応だった。

諏訪子の方はまだ身動き自体は出来る状態だったが、数人の天狗に武器を突きつけられて、部屋の隅にまで追い込まれている。

「もはや余力もありますまい」

大天狗の言葉は事実だった。

外の世界に比べれば遥かに負担の少ない環境とはいえ、住み着いたばかりの幻想郷には二人の力となる信仰などあるはずがない。

元々少なかつた力を更に消費し、特に神奈子は存在の維持すら困難な状態にまで陥っていた。

もはや戦いになるような状況ではなかった。

戦況を見守っていた他の天狗達から、安堵のため息が洩れる。

それはいずれも会合に参加していた上役の天狗だった。

彼らの内のほとんどは神奈子達を取り押さえる戦いに加わっていない。はたてや椀など一部の例外と、駆けつけた天狗の兵士が戦うのを遠巻きに見ていただけである。

彼らは無力になった神奈子と諏訪子を侮蔑するように見て、口々に吐き捨てた。

「ま、まさかこのような暴挙に出るとはもう……」

「乱心なきつたか、それとも我ら天狗を本気で支配出来ると驕ったか」

「全く外来の者は何を考えているのか分からぬ」

「然り然り。形だけでも押んでやろうという我らの温情を踏み躪りおって——」

——安全になった途端、現金なんだから。

文は内心で呟いた。

もちろん、文も戦闘には関わらずに彼らの中に紛れていたクチである。大声で批判出来る立場ではない。

「……なるほどな」

罵倒を受けながらも、神奈子は不敵に笑っていた。

それこそ、彼女の方が臆病な天狗達を嘲るように周囲を睨め付ける。

「何処の組織も上は腐りやすいものだ。お前達天狗の弱みが、これで

分かった」

傷だらけの体を地に伏し、両手を貫かれ、動きを封じられながらも、神奈子の瞳からギラギラとした光は全く失われていなかった。

文字通りの死に体であることは間違いないはずである。

しかし、衰えることのない戦意と気迫に圧されて、罵倒していた天狗達は怯えるように口を閉ざした。

「――顔を上げさせろ」

天魔が厳かに命じた。

髪を掴まれ、強引に頭を持ち上げられる。

当然、両手は畳に縫い付けられている為、腕が引つ張られ、首と背が反るような無理な体勢になる。

神奈子の口から洩れた苦悶の声を、天魔は無視した。

「まだ続けるつもりか？」

神奈子の瞳を射抜くように見据えながら、天魔が訊ねた。

天狗を束ねる長に相応しい威厳が、重圧となって押し掛かる。

視線を向けられていない周囲の天狗達まで、息苦しさを感じるほどの威圧感だった。

「逆に訊こう。これで終わったつもりか？」

しかし、神奈子は平然と笑っていた。

天魔は無言で胸倉を掴み、そして服を引き千切った。

破れた部分から半身が明らかになる。

たわわな乳房が片方零れ落ちたが、美しい肢体に目を奪われる前に『それ』を見た全員が息を呑んだ。

――神奈子の胸には、斜めに走る巨大な傷痕が刻まれていた。

それが単なる傷ではないことは、人ならざる者の目には明らかだった。

肉を抉るだけではない。霊体にまで達するほどに深く、おぞましい傷である。

何故、高い神格を持つ神がここまで弱体化したのか――何よりも明確で具体的な理由が、その傷だった。

「……これは、先代巫女が？」

「その通りだ。奴の拳が刻んだ」

神奈子は笑いながら答えた。

この状況で何故笑えるのか——その理由が分かった。
疑問を抱くべき部分が違うのだ。

この傷で、何故笑っていられるのか——と思うべきだったのだ。

「天狗どもよ」

神奈子は立ち上がろうとしていた。

縫い付けられた腕が軋み、傷口から血が噴き出ても構わず、ゆっくりと体を持ち上げていく。

「私に、この傷を上塗りするほどの痛みを刻むことが出来るか？」

天魔はようやく確信した。

——こいつは、命ある限り決して屈することはない！

「首を刎ねろ！」

もはや一瞬の躊躇いもなかった。

天魔の命令に、大天狗が素早く反応して刀を振り上げる。

その瞬間、神奈子の意図に合わせて諏訪子も同時に動いていた。

「ミシヤグジさま！」

諏訪子の口の中から、数本の縄のような物が飛び出して、囲んでいた天狗達の首に巻きついた。

それは小さな白蛇だった。

それが襲い掛かって、首に牙を突き立てた。

微々たる傷である。

しかし、噛まれた天狗達は痙攣と共に全身が硬直して、動けなくなった。

毒ではない。微弱ながらも祟りの力だった。

「諏訪子、『剣』を超越せ！」

振り下ろされようとする刀に向けて、諏訪子が鉄の輪を投げつける。

刃が神奈子の首に到達する寸前で、飛来した鉄の輪が刀身をへし折った。

そのまま鉄の輪は、空中で『輪』から『剣』へと形状を変化させた。

かつて、諏訪子の支配する国の象徴でもあった神の鉄である。その力はこれまで国を治める為に使われてきた。輪とは即ち、和である。

そして今、国を治める『和』は国を奪う『武』へと——『剣』へと変化したのだ。

「大天狗様！」

「権、下がれ！」

武器を失った大天狗に代わって、背後に控えていた権が斬りかかろうとする。

しかし、その時既に神奈子は立ち上がっていた。

己の両腕を引き千切ることで束縛から解き放たれた神奈子は、空中の『神剣』を口で啜えると、権に向かって剣先を突き出した。

咄嗟に庇った大天狗の胸を貫き、権の肩を切り裂く。

神奈子を抑えていた二人の天狗が慌てて武器を切り替えるのを一瞥し、素早く『神剣』を引き抜いた。

振り返り様、二人をほぼ同時に斬り捨てる。

口に啜えて振るっているとは到底思えない太刀筋だった。

身のこなしもまた尋常ではない。蛇のように二人の間をすり抜け様、斬りつけたのだ。

「ぬう！」

瞬く間の出来事に、天魔も驚愕した。

周囲の天狗達も、ほとんどが反応出来ない。

はたては負傷した権に気を取られ、予想外の事態に文は呆然とするしかなかった。

そして、最初から戦いが終わったと思わず、諦めず、全てに備えていた神奈子が、その一瞬の機を制した。

地を這うような低い姿勢で天魔の懐に踏み込み、一気に『神剣』で斬り上げる。

「舐めるな！」

しかし、天魔もまた一族の長としての底力を発揮した。

両腕を盾にして、振り上げられた刃を受け止める。

右腕を半ばまで断たれながらも、強靱な筋肉と骨が『神剣』の斬撃を停止させた。

傷は深いが、致命傷にまでは至っていない。

剣を止められた神奈子と、剣を止めた天魔。

一瞬の膠着状態が生まれる。

それは奇しくも神奈子が先代と戦った時の状況に似ていた。

そう――。

神奈子は、この状況を経験している。

「天魔よ。お前が天狗という種族の要となる柱だ」

突如、畳を突き破って、床下から巨大な柱が四本出現した。

神奈子と天魔の二人を、丁度取り囲むように配置されている。

それは神奈子の最後の力が具現化した『御柱』だった。

「その柱が折れるか、我が柱が折れるか――勝負といこうか！」

四本の御柱の先端に光が点る。

神奈子が自分諸共に残された力の全てを叩き込もうとしていることを察すると、天魔もまた凶悪なまでの笑みを浮かべた。

「面白い！ 死にかけてその体で、生き残る自信はあるか!？」

「知らん！ だが、この身に受けた先代の拳ほどに死を感じたものはなかったぞっ!!」

「ははははっ、それは俺もよく知っておるわ!!」

御柱が破壊の光を放ち、二人の哄笑は爆光の中へと消えていった。



天狗の集落は騒然としていた。

最初に天魔の屋敷が半壊した段階で、既に集落の天狗達は異常事態であることを察していた。

続いて鳴り響く戦闘の音に、混乱は加速した。

やがてその音が止んだ時には、事態が収束したものと安堵した。

そして、今――。

「な、何だあ!？」

静寂が嵐の前の静けさであったかのよう、妖怪の山全体を揺るがすような爆音が鳴り響いて、天魔の屋敷が今度こそ粉々に吹き飛んだのだ。

見上げた先の惨状と、降り注ぐ破片に天狗達は悲痛な声を上げた。爆発の煙が立ち込め、破壊された屋敷で一体何が起こったのか、未だに知ることは出来ない。

不安と混乱が辺りを支配する中、天狗達は皆一様に息を呑んで、頭上を見上げ続けた。

煙の中に黒く巨大な影が浮かび上がった。

それがゆつくりと鎌首をもたげ、姿を現す。

天狗達の中から幾つかの悲鳴が上がった。

姿を現したそれは、巨大な白蛇だった。

諏訪子が放った白蛇を数十倍にまで大きくしたもの——いや、あの『ミシヤグジさま』が何らかの力を得て巨大化した姿に間違いなかった。

それが四匹。いずれも、かつてそこにあつた天魔の屋敷を押し潰せそうなほどの巨体である。

巨大なだけではない。その身に纏う黒い靄は、禍々しい祟りの力だった。

四匹の内、一匹の頭頂部には諏訪子が佇んでいた。

他の二匹の口には、それぞれ数人の天狗が啞えられている。

噛み殺されてはいないようだが、その気になれば容易に可能であることを理解しているのか、天狗達は皆一様に怯えていた。

ミシヤグジさまを使役する諏訪子に向かって何かを乞い、必死に拝み続けている。

彼らは、つい先程まで諏訪子と神奈子を罵倒していた上役の天狗だった。

他の天狗達は瓦礫の上や、あるいはミシヤグジさまの体の上で倒れている。

そして、四匹の内最後の二匹が、長い胴体を伸ばして、頭を一際高い位置へと持ち上げた。

天魔の屋敷よりも更に高く、集落を一望し、逆に集落の何処からでも視界に入れることが出来るほどの高さである。

その頭の上には、神奈子と天魔の姿があった。

腕のない神奈子が両足でしっかりと佇み、天魔は血塗れの四肢を投げ出して空中に浮かんでいた。

いや、浮かんでいるのではない。

天魔の首を掴んで支えているものが、薄っすらと見える。

それは、失われたはずの神奈子の腕だった。

——まさか。

それを見上げる天狗達は自分の目を疑った。

——まさか、そんなはずはない。

心の中で強く否定しながらも、見上げた先にある現実が、そこに陰りを生む。

陰りは不安を、そして畏怖を生んだ。

——まさか、天魔様が負けたというのか。

それらの感情は、否が応でも神奈子達の方へと向けられた。

——我らの長が、あの神に討ち取られたのか！

神奈子の姿を畏れば畏れるほど、薄れて見えた両腕がよりハッキリと見えるようになり、やがて完全な形となって復活した。

それは間違いなく『信仰』の力だった。

信仰を失い、力尽きかけていた神奈子は、残された力の全てを賭けて勝負を挑み——そして、勝った。

勝ち取った結果が神への畏怖を呼び起こし、信仰となって神奈子の力になっていく。

増大する力が更なる畏怖を呼び。

畏怖が信仰を。

信仰が力を——。

「……………くくくっ」

堪えきれない笑いが、神奈子の口から洩れ出た。

「はははははははははははははははは——っ!!」

高らかな笑い声が、集落全体に降り注ぐ。

天狗達は、それを見上げることしか出来ない。

誰が見下ろし、誰が見上げるのか。

分かりやすいほどに、ハッキリとしていた。

「我が名は八坂神奈子！　これよりお前達は、この名を崇めよ！」
神奈子の朗々とした言葉が響き渡った。

「この名を奉れ！」

眼下の天狗達に。

「我を呼ぶのは何処の人ぞ!?　我を、呼ぶのは——」

そして、妖怪の山全てに。

——その日、幻想郷は一つの変革を迎えた。

守矢神社という新たな勢力の誕生である。

表向きは、守矢神社と天狗の集落は平等な協力関係を築いたとある。

しかし、如何に体裁を取り繕おうとも、どちらが上であるかは明白だった。

幕間「風神先代録」

【幻想少女達の青春】

「掃除よし、お茶よし、お菓子よし——」

早苗は準備を一つ一つ確認していった。

幻想郷に移り住んでから、家人以外を守矢神社に招くなど初めてのことである。

更に言えば、外の世界でも『友達』が家に来るのは本当に久しぶりのことだった。

——友達。

そう言つてよければ。

いいと思う。

……いいんじゃないかな？

「と、とにかく！ 準備オツケーです！」

早苗は境内で仁王立ちをして、その時を待ち構えた。

やがて、待ち人はやって来た。

「来たわよ、早苗」

「よう、お邪魔するぜ！」

「いらっしやい！ 霊夢さん。魔理沙さん」

早苗は満面の笑顔で二人を迎えた。

「早苗。はい、これ」

「えっ、何ですか？」

「手土産よ。適当に食べて頂戴」

「わあ。わざわざありがとうございます」

「へえ、霊夢にしては気が利いてるじゃないか。……って、干し芋かよ

！ ギヤハハッ、ババくせえ！」

「う、うっさいわね！」

「い、いや！ 私、食べたことないですから、嬉しいですよ！」

「言つとくけど、あたしが用意したんじゃないからね！ マミゾウが手ぶらじゃ失礼だつて言つて、無理矢理持たせたんだからね！」

「だよなー、普段のお前なら手ぶらだもんなー」

「ホント、気持ちだけでも嬉しいですから！」

笑う魔理沙に対して、頬を膨らませる霊夢。それをフォローする早苗。

三人は文字通り姦しく会話をしながら、神社の中へと入っていった。

「そういう魔理沙は何を持ってきたのよ？」

「ふふん、わたしのはちよつと凄いぜ」

「どうせ茸でしょ？」

「そうだけどな、きつと早苗は驚くと思うぜ」

魔理沙の言葉通り、受け取った籠の中を覗き込んだ早苗は思わず声を上げた。

「こ、これって松茸じゃないですか！ 凄いですよ！」

「……つまり、茸でしょ？」

「無知だな、霊夢。外の世界だと松茸ってのは高級品なんだぜ？」

「こんなにたくさん貰っていいんですか、魔理沙さん？」

「別にいいぜ。食用の茸なんて珍しくもないからな」

「さすがは幻想郷、常識に囚われていませんね」

霊夢と魔理沙を居間に案内した早苗は、受け取った土産を置くついでに台所から事前に用意しておいたお茶とお菓子をお盆に載せて持ってきた。

その間、居間のテーブルに腰を降ろした二人は、物珍しそうに室内を見回していた。

部屋の作りは畳と障子張りの和室である。

しかし、所々に見たこともない物が設置されている。

「なあ、早苗。天井からぶら下がってる奴って何なんだ？」

好奇心旺盛な魔理沙が早速質問した。

「あれは蛍光灯です。簡単に言うと、火のない光源ですね」

「なるほど、『電気』ってやつか。初めて見るな」

「あ、やっぱり幻想郷って電気は普及してないんですね」

「わたしも名前だけで、具体的にどんなものなのかはよく知らないぜ。

便利なエネルギーって言うのは聞いたことあるけどな」

「ふふっ、タイムスリップ物の映画みたいな気分ですね」

「それって外の世界の用語？」

早苗が口にした不可解な単語に、霊夢が難しい表情を浮かべる。

失礼だとは思いつつも、早苗は二人の反応が面白かった。

二人にとって当たり前のことが自分にとって新鮮なように、自分にとって当たり前のことが二人には珍しいのだ。

幻想郷に来て驚くようなことばかりだが、逆にこちらが驚かせることも出来る。

それが妙に楽しかった。

「外観は普通の神社みたいだけど、やっぱりここは外の世界の建物なのかしら？」

「私も諏訪子様達から聞いた話なんですけど、この守矢神社は古いものと新しいものが混ざって生まれた神社らしいんですよ」

早苗が二人に説明した。

「神社自体は外の世界にあつた土地の記憶を元にして幻想郷で新しく作られたんですが、その記憶にも神代の古いものから現代に近い新しいものまであつて、それらが合わさった結果、内装の一部が現代風になつてしまつたようなんです。その辺は、転移の際に術を行使した私の力や意識が影響したんじゃないかと言われてます」

「ふーん。まあ、生活する分には問題ないんでしょ？」

「むしろ、私にとっては生活しやすいですね。水道も使えますし」

「スイドウって何？」

「えーと、簡単に水を出せる装置です」

「何それ、地味に便利なんだけど」

「でも、それも外の世界みたいにそういう設備があるわけじゃなくて、諏訪子様のお力を創造する力によつて水を引いているみたいです。この蛍光灯も電気で光ってるわけじゃなくて、別の力が働いているみたいですね。あくまで、この神社が外の世界を再現しているだけなんですよ」

「便利なら仕組みとかどうでもいいじゃない。羨ましいわねえ、神社

もうちより大きいし……」

霊夢の恨めしげな目付きに、早苗は苦笑するしかなかった。

『隣の庭の芝生は青い』——という言葉が、外の世界にはある。

今回、二人を守矢神社に誘った時も含めて、早苗は博麗神社に何度か訪れていたが、あれはあれで素晴らしい『家』だと思っていた。

神社としての神聖な空気他に、誰かが帰ってくるのを迎えるような温かな空気をあの空間から感じるのだ。

霊夢は、子供の頃からずっとあの神社で生活しているという。

現在は博麗の巫女を引退して別居している母と、共に過ごしていたという話も聞いた。

きつと、子供の霊夢が帰ってきた時、あの神社で母が出迎えてくれたのだろう。

家族が待つていてくれたのだろう。

ずっと昔から、変わらず存在する、帰るべき場所。

それはとても羨ましかった。

「霊夢さんの神社も、素敵だと思いますけどね。『おかえりなさい』って言ってくれる人がいるなら、きつと何処でも素敵な家ですよ」

「……そうだな」

早苗の言葉に同調するように頷いたのは、魔理沙だった。

魔理沙は、魔法の森で一人で暮らしている。

自ら選んで、親元を離れた。

それが二人にささやかな共感をもたらしたのだった。

「そういえばさ、霊夢。結局、あの狸の妖怪って博麗神社に居着いたのか?」

話題を変えるように、魔理沙がマミゾウのことを挙げた。

萃香に続き、博麗神社でよく見かけるようになった、外の世界から迷い込んだという狸の妖怪。

先日初めて顔を合わせた際、彼女が博麗神社の倒壊を誤魔化す為に自分に幻術を仕掛けたという話も、魔理沙は聞いている。

早苗もまた、神社を訪れた際にマミゾウと顔合わせを済ませていた。

しかし、冷静に考えてみれば、二人にとっては顔と名前以外よく知らない相手である。

「……考えてみれば、いつの間にか神社に居たあいつは何なんだ？ なんつーか、完全に家人面してあそこに居たんだが」

「えっ、あの人って霊夢さんの家族じゃないんですか？」

「違うだろ。だって、妖怪だぜ。おふくろさん以外に家族がいるなんて聞いたことないし」

「そうですけど、なんか『おばあちゃん』って感じがしたから」

「それは……言ってる」

博麗神社の光景に違和感なく馴染んでいた妖怪の姿を思い浮かべて、二人は混乱した。

「別に、萃香と同じただの居候よ」

霊夢は簡潔に答えた。

しかし、そう言いながら、当人が何よりも納得していないような複雑な表情を浮かべていた。

「外の世界でも着の身着のまままで暮らしてたらしいわ。特に帰る理由もなく、幻想郷に興味も湧いたからここで生活するって」

「早苗と違って、随分と事情が軽いな」

「でも、どちらの世界でも問題なく暮らせるっていうのは凄いですよ。実は、物凄い大妖怪なんじゃないですか？」

早苗の言葉に、霊夢は賛同しかねた。

確かに、マミゾウのこれまでの言動を顧みれば、その辺の木っ端妖怪とは明らかに違うことが分かる。

八雲藍と張り合った妖怪としての實力を始め、八雲紫の屋敷でも自然体を崩さなかった胆力、そして住処を博麗神社に移した先で鬼の萃香と問題なく共同生活を続けられるという現状。

幻想郷でもトップクラスの妖怪達と渡り合えるほどの『格』を備えているとも言えるのだ。

しかし、霊夢はまた別の見方を持っていた。

フラフラと神社にやって来たので話を聞いてみれば、藍に屋敷から追い出されたのだと言う。

宿無しになった身で『適当にその辺で寝泊りする』と気楽に野宿宣言などするものだから、つい招き入れてしまったのが、同居を始めた真相である。

他人の家で凶々しく生活を続けられる面の皮の厚さと、年中飲んだくれの鬼と意気投合出来る大雑把さ。

まだ短い期間だが、共に生活していて気付く、気配りの細かさというか世話の焼きたがりというか――。

只者でないことには同意するが、凄い奴とはとても思えない。ハッキリ言うと、言動に伴う威厳がない。

霊夢は早苗の『大物』という評価を否定も肯定も出来ない気分だった。

「また妙な居候が増えたな」

「ええ、まったくね」

悩む横から聞こえた魔理沙の的確な表現に、霊夢は思わず同意を示してしまった。

一人前の博麗の巫女として認められた日から幾月か――別れ、出会い、失って、得た――博麗霊夢の若い人生は激動の日々を続けていた。

それから三人は、お茶とお菓子を挟みながら雑談を楽しんだ。

文字通り、住んでいた世界が違う者同士である。話題には事欠かない。

外の世界の話に、大げさに驚く魔理沙と静かに聞き入る霊夢がバランスよく会話のリズムを保っている。

早苗は早苗で、幻想郷の話に新鮮な驚きを感じながら『ああ、友達とお喋りなんかして、今の私ってば物凄く青春してる』といった別種の感動も味わっていた。

三人にとつて、平穏で有意義な時間だった。

やがて、日が高くなつた頃。

「もし――」

不意に三人は声を掛けられた。

声が聞こえたのは、玄関からではなく、縁側からである。

早苗は、今居る部屋の障子を開けた。

「こちらに、博麗の巫女が居ると聞いて、伺わせていただきました」
外には、女が一人立っていた。

階段から石畳で繋がっている玄関ではなく、いきなり境内に現れたところを見ると、空を飛んできたらしい。

宙に浮く羽衣を纏った、明らかに人間ではない美女だった。

「妖怪ですか？」

早苗が訊ねた。

いきなり身構えるような短絡さは、流石にもうない。

「失礼致しました。私は永江衣玖と申します。妖怪ではありませんが、貴女方に敵意はありません」

衣玖は簡潔に答えた。

丁寧な物腰だが、同時に親しみも感じない事務的な言い方だった。確かに自分達に敵意はないらしい。興味もないようだが。

「あたしならここに居るけど」

突然の訪問者に対応するどころか立ち上がろうともせず、茶菓子を口に運びながら霊夢が言った。

「誰に聞いたの？」

「最初は博麗神社に伺ったのですが、不在でしたので、そこに居ました二ツ岩マミゾウさんという方に所在をお聞きしました」

「マミゾウなら、今朝釣りに行くとか言ってたはずよ」

霊夢が気になったのは、自分を訊ねてきた衣玖の目的などではなく、そんなどうでもいい疑問だった。

興味のないものに対する淡泊さでならば、霊夢に並ぶ者はいない。

敵ではないと分かった途端、衣玖への関心を失っていた。

「私が行った時には、捌いた魚を干す作業の最中でした」

「あのバカ……臭くなるから境内で干物作るなって、前に言ったのに」
「なんていうか、すっかり生活に馴染んでるなあ」

「やっぱり、おばあちゃんですよ！」

「あの、話を続けて宜しいでしょうか……？」

話題が逸れ始めたことに慌てて衣玖が口を挟んだ。

「ああ、それで？ あたしに一体何の用なの？」

「私は本来、龍神様の御言葉を伝える仕事に就いておりますが、立場上天人は私の上司のようなものに当たります」

天人——その言葉から何かを察した霊夢と魔理沙の表情が変わった。

霊夢の瞳に剣呑な色が浮かび、そんな霊夢の変化を気遣うように魔理沙が視線を向ける。

唯一、事情を知らない早苗が二人の様子に戸惑っていた。

「……比那名居天子に関わる内容なのね？」

「はい、その通りです」

「そう。それで、話は何？」

「話を聞いていただけなのですわね」

「聞く耳持たないとも思ってたの？」

「門前払いか、最悪諍いになるかもと思っていました」

「そこまで覚悟してたってことは、あたしとあの天人の間で何があつたかは聞いているようね」

「天界であれほど長く、激しい争いが起こつたのは初めてですからね」
衣玖は視界を遮るように周囲を漂っていた羽衣の陰から、小さな籠を取り出した。

「私は名前を呼ぶことを許されておりません。総領娘様とお呼びしております。その方の遣いとして、今日はやって参りました」

そう言つて、籠を差し出した。

「これをお納め下さい」

さすがに、この申し出を無視することは出来ない。

霊夢は渋々立ち上がると、衣玖から籠を受け取った。

籠の中には数個の桃が入っていた。

色も形も美しい、絵に描いたような桃だった。自然でも、人の手によつてでも、これほどの物を育てることは出来ないだろう。

「何、これ？」

「天界の桃でございます」

「そんなの見れば分かるわよ、妙な力を感じるし。あたしは何のつもりかって訊いてるの」

霊夢が嫌悪感をあらわに訊ねる。

その理由が、早苗には分からなかった。

「総領様からの贈り物です」

衣玖は淡々と答えた。

しかし、その額には小さな汗が一つ浮かんでいる。

表情にこそ出していないが、内心には気まずさや後ろめたさがあったのだ。

彼女には、霊夢が不機嫌な理由がよく分かっていた。

「贈り物、ね。物だけなの？」

「はい」

「手紙や伝言さえないわけ？」

「ありません。ただ……」

「何？」

「その……霊夢さんからの返事を、持ち帰るようにと言われております。あるいは、天界に直接来るのなら歓迎するとも」

そう告げる衣玖の言葉が、実際の言葉をかなりオブラートに包んだものなのだと、比那名居天子を知る二人には察することが出来た。

詰まるところ、この桃は霊夢に対する詫びなのである。

衣玖に持ち帰るよう命じたものは、霊夢からの許しの言葉なのだろう。

何処まで自覚しているのかは分からないが、少なくとも天子は霊夢に行った仕打ちに罪悪感を覚え、謝罪をしようとしている。

その意図は分かる。

しかし。

しかし、である。

「――」

霊夢はしばらくの間、沈黙していた。

その顔からは感情というものが完全に抜け落ちていた。

霊夢と付き合いの浅い早苗は本能的な恐怖を覚え、付き合いの長い魔理沙は霊夢の深く静かな怒りを感じ取っていた。

衣玖も気まずそうに視線を逸らしている。

天子のやっていることは、結局他人任せの謝罪なのだ。しかも、直接頭を下げるどころか言葉にして謝ることさえしていない。

高価な物を送りつけて、間に他人を立たせた上に、相手の返答だけ貰おうとしているのである。

誠意と呼ばれるものなど伝わるどころか、実際に爪の先ほどもなく、被害を被った霊夢からすれば馬鹿にされているとしか思えない行いであった。

「……早苗」

「は、はい!？」

「ちよつと筆と墨を貸してくれる?」

霊夢に言われるまま、早苗は書く物を用意した。

半ば無視されている衣玖は、黙って霊夢の行動を見守っている。

天子が霊夢に行つた仕打ちと現状やっていることを顧みれば、桃をぶつけられて追い返される展開くらいは覚悟していた。

それを回避出来て、とりあえずは安堵している。

衣玖の内心を尻目に、霊夢はさらさらと紙に筆を走らせてゆく。

早苗と魔理沙が興味深げに、それを眺めている。

「わつ、霊夢さんって字綺麗ですねえ」

「そう? 普通でしょ」

「そんなことないですよ。外の世界だったらコンクールで優勝出来ますよ」

「外の世界って字が綺麗なだけで褒められるの?」

会話をしながらも、霊夢の筆は止まることがない。

一方、字ではなく、書かれている文章に注目していた魔理沙は徐々に顔を引き攣らせていた。

「出来たわ」

霊夢は筆を置いた。

文の書かれた紙を折り畳み、衣玖に差し出す。

「これを比那名居天子に届けて頂戴」

「中身を検めてもよろしいでしょうか?」

「好きにすれば」

衣玖は恐る恐る手紙を開いた。

文章を読み進める内に、魔理沙と同じように顔を引き攣らせ、全てを読み終えると、まるで封印するように固く折り畳み直した。

「……分かりました。これを総領娘様にお届けします。他に何か、伝えることはありますか？」

「何も。言いたいことは、全部書いたわ」

「そうですか」

「桃はありがたく頂くわ。食べ物に罪はないしね」

「それはつまり——」

「何の意図もないわよ。手に入った食べ物を食べる、それだけのことよ」

言外に『桃を受け取ったことは許すことと全く関係ない』と言っているのだった。

既に背を向けた霊夢をしばらく見つめていた衣玖は、やがて諦めたように手紙を懐に仕舞うと、一礼して去っていった。

表面上は平然としている霊夢と、そんな様子に若干不安を覚える魔理沙と早苗。

再び三人だけになっていた。

「桃、三人で食べましょ。切ってくるから、台所借りるわよ」

霊夢が部屋から出ていく。

奇妙な緊張感から開放された魔理沙と早苗は、同時にため息を吐いた。

「……魔理沙さん、その天子さんっていう人のことなんですけど」

「ああ、お察しの通り、霊夢との仲は最悪だぜ。色々あつてな」

「話、聞かない方がいいんじゃないかな」

「博麗神社を建て直すハメになった元凶って言えば分かるだろ？ 多分、霊夢が幻想郷で一番嫌ってる相手だぜ」

「ちよつと意外でした。霊夢さんって、妖怪と同居しても平然として、何でも受け入れるような懐の広さみたいものを感じてたんですけど。それでも相容れない人っているんですね」

「いやあ、それはどうかな？」

魔理沙は苦笑を返した。

「案外、あの天子のことも受け入れられるかもしれないぜ？ 少なくとも、今回のことで可能性があるって分かったよ。ちよつと二人の關係の見方が変わった」

「そ、そうですか？ 私から見ても、その天子さんが今回やった謝罪つて、最悪の方法だったと思いますけど。実際、靈夢さん滅茶苦茶機嫌悪かったし」

「うん、確かに大失敗だったな。あれだけ露骨に他人を嫌う靈夢は、わたしも見たことがない」

「じゃあ、駄目じゃないですか」

「それが、そうでもないんだな。靈夢は興味のない相手にはとことん淡泊な奴なんだ」

不思議そうな顔をする早苗に、魔理沙は意味深げに笑って答えた。「言っただろ、『あれだけ他人を嫌う靈夢は見たことがない』つて。出合いは最悪だったけど、そこから關係がどう変わるのか予想出来ないぜ。まあ、変わるにしても先は長いだろうけどな」



【非想非非想天の馬鹿娘】

「遅いわ」

「申し訳ありません」

屋敷の前で、腕を組んで仁王立ちしていた天子の叱責に、衣玖は反論することもなく頭を下げた。

今朝、この場で用事を仰せつかって、自分が発ってから一步も動いていないように見える。

だとすれば、それは何とも——可愛げよりも度し難い頑固さを感じた。

「それで、あいつがいないみたいだけど？」

天子の中では、靈夢が来ることは既に決定済みだったらしい。

不本意そのものといった表情で衣玖を責めるように睨んだ。

「同行はしていただけませんでした。代わりに、手紙を預かっています」

「ふんっ。まあ、許してあげるわ」

それは誰を、何に對して許すのか？

衣玖は空気を呼んで、余計なことを口にせず、手紙を差し出した。「まったく、あいつは立場つてものが分かってないわね。天上から地上へ贈られる物は尽く尊い恵み。容易く枯れ果て荒む大地を潤す雨のように、どれほどありがたいものなのか身に染みて理解すべきね。それをわざわざ贈つてやった私の誠意に応えないなんて、さすがは下賤な地の民。礼というものを知らないわ。まっ、許してあげるけど」

天子の口からだだ漏れる文句を、衣玖は素知らぬ顔で聞き流した。戒めようとも思わない。天子と靈夢、どちらに對してもそこまでの義理はないのだ。

言葉とは裏腹に、天子は嬉々として封書を開いた。

しかし、そこに書かれた文章を目で追う内に、にやけていた口元はへの字に歪み、目元は吊り上つていった。

衣玖はこれから起こることを予想して、その場から数歩下がった。

「——な、なんなのよこれはア!!？」

天子の爆発した怒りは、天界の平穩を乱すかのように大きく響き渡った。

手紙には簡潔な表現で贈られた桃を受け取ったこと、それはあらゆる意味で好意に基づくものではないこと、筋を通さぬ相手に与える許しはないこと、今回の行為を含めて天子が勘違いした馬鹿娘であること、そしてそんな馬鹿は出来れば速やかにくたばって欲しいことが、つらつらと書かれていた。

書かれている内容にさえ目を瞑れば、格式高い天人でさえ賛嘆のため息を吐くような美しく整った文だった。靈夢の教養の高さが伺える。

痛烈な文章を形作る綺麗な筆跡が、また尚のこと天子の癩に障った。

「なんなのよ、あいつはア!!?」

天子は怒りに任せて、手紙を足元に叩きつけた。

衣玖は、そんな天子の自制心に内心で拍手をした。
てつきり破り捨てるかと思っただのだ。

「どういうことなのよ、これはア!!?」

「さあ、私に言われなくても」

案の定、鬼気迫る勢いで詰め寄ってくる天子に、衣玖は柔らかく応じた。

こうした癩癩の受け流し方に長けているのも、天子の相手をさせられる理由である。

「ちゃんと桃は渡したんでしようね!」

「はい、渡しました」

「じゃあ、何でこんなふざけた返事が来るのよ!」

「それは総領娘様を未だに許していないからではないでしょうか」

「何で許さないのよ!」

「それは具体的な謝罪がなかったからではないでしょうか」

「私が人間如きに頭を下げるっていうの!」

「さあ? どういった形の謝罪を望んでいるのかは私には分かりません。また、それで許して頂けるかどうか分かりません。そもそも謝罪自体望んでいるのかどうかも」

「謝っても駄目ならどうしろっていうのよ! あ、謝るつもりなんてないけどね!」

「一生許さないってことじゃないですかね?」

「じゃあ……じゃあ、どうすればいいのよ!!?」

「さあ……?」

要領を得ない返答ばかりが繰り返されて、天子は黙り込んだ。

血の昇った頭が熱くなり、視界が僅かに歪んで見えた。

そうだ。これは怒りのせいだ。涙なんかじゃない。

足元の手紙を、恨めしげに睨みつける。

「……何よ、こんなもん!」

苛立ちのまま、片足を振り上げる。

そのまま踏み躪ろうとした。

衣玖は口出しをせず、じつと見守っていた。

片足を上げた体勢で止まったまま、天子は自分を罵倒叱責する文章が書かれた紙面を睨み続け、

「——ふんっ！」

勢いよく元の位置に足を踏み降ろした。

そして、素早く手紙を拾い上げる。

「衣玖！」

「はい、何でしょう？」

返事をした後で『あんた』や『お前』ではなく、初めて天子から名前を呼ばれたことに気が付いた。

「あなたには、もう一度地上へ行ってもらおうわ」

「はあ、また桃を持っていけばいいんでしょうか？」

「違うわよ。このふざけた手紙の返事を書くから、それを霊夢の奴に叩きつけてやるのよ！」

今度は初めて霊夢の名前を呼んだな、と衣玖は思った。

「私の仕事は龍神様の言葉を伝えることであって、天人様のお遣いではないんですけどね。あまり頻繁に地上へ行っても、余計な混乱を招きますよ」

「私が地上へ行くよりかはマシでしょ。もっと余計な混乱が起きるわよ？」

「おおよよ？ 案外、総領娘様も自覚というものがあるようで」

「あんたが私のお目付け役やってることくらい知ってるわ。面倒を起こしたくないなら、私の命令に従いなさい！」

天子の横暴さに、衣玖は奇妙な面白味を感じていた。

わがままで、頑なで、教養はあっても礼に欠く、傍迷惑な人物だ。しかし、見ている分には面白い。

博麗霊夢という人間に関わってから、断然そう感じるようになった。

「仕方ありませんね」

この二人の交流に興味が湧いたのだ。

「博麗靈夢との橋渡し役、やらせて頂きましょう」

「最初からそう言えればいいのよ。さっ、行くわよ」

「さて、どちらに?」

「私の家よ」

「私などが上がったても宜しいのですか?」

「特別に許可するわ」

「しかし、私が傍にいて、何をすれば宜しいのでしょうか?」

「この低俗で下品な手紙に対して的確な仕返しをする為に、私の書いた手紙をあんたが校閲するのよ。私が受けた不愉快な思いを、万倍にして返してやるわ」

「この場合、相手を怒らせても仕方ないと思いますが……」

「うるさいわね! とにかく、手を貸しなさい!」

「はいはい、なんとか出来る限りフォローさせてもらいますよ」

「この気取った字の書き方も気に入らないわ。天人の教養はまさに格が違うということを教えてやるんだから。まずは最高級の紙と墨を用意して——」



【疾風に勁草を知る】

文が玄関を潜ると、広く長い廊下が目に入った。

相も変わらず荘厳な屋敷である。

そう変わらず、天魔の屋敷はそこに在った。

八坂神奈子によって破壊された屋敷は、他ならぬその神の力によって完璧に復元されたのだ。

建て直しても新築でもない。文字通りの復元である。

あの日——。

長を含めたあらゆる天狗を薙ぎ倒した荒ぶる神は、畏れる天狗達の信仰を力に変えて、最初の奇跡を示して見せた。

神奈子は乾——つまりは天——を、諏訪子は坤——つまりは地——

を、創造する力を持った神である。

その二つの力を用いて、あつという間に破壊された屋敷を元に戻してしまったのだ。

天狗の集落の象徴とも言える屋敷を、破壊したのも、元通りに直したのも、あの二柱の神である。

その行為は、天狗全体への何よりの示威行為となった。

——お前達など、神の意思一つでどうとでも出来る。

あの日以来、天狗の集落では水面下で混乱が続いている。

下位の天狗達は守矢神社を畏れ、上位の天狗達はなんとかして取り入ろうと勝手に行動しようとする。

その混乱を抑える役割を持つ天魔が、神奈子との戦いに敗れて傷を負い、臥せているのだ。

天狗の長ともなれば、代役など早々見つからない。

先程も上げたように上層部の天狗は軒並み保身に走っている。彼らの中から代役を選び出すことは出来ないだろう。

では、現状はどうかになっているのか——？

「射命丸か。来い」

「はあ」

文を迎えたのは大天狗だった。

傍らには、以前と同じように権が控えている。

今回は大天狗の補佐をする役目だった。

あの戦いで負傷したのは大天狗も同じである。本来ならば、彼もまた床に伏せていても不思議ではない深手だったはずだ。

文は、大天狗が剣で右胸を貫かれたのを見ていた。

「それで、私に何の御用でしょうか？」

先を歩く大天狗の足運びが平常時と全く変わらないことを確認して、内心で戦慄しながら文は訊ねた。

本当は社交辞令も兼ねて傷の具合を伺いたかったが、きつと訊けば大天狗は不機嫌になるだろう。そういう性格である。

「お前を呼んだのは天魔様じゃ」

「天魔というと——」

「もちろん、あの『代役』ではない」

大天狗が答えた瞬間、廊下の先で襖を破って、一人の天狗が飛び出してきた。

というよりも、吹っ飛んで壁に激突した。

続いて、破れた襖の奥からこれでもかという程の罵倒と悪態が響いてくる。

それは文のよく知る声だった。

「……やはり間違いだったのでは？ はたてに長の代役をやらせるなんて」

「老害どもの意見に押し潰されぬ胆力だけは認めてやっても良い」

大天狗が気絶した天狗の体を跨ぎながら、淡々と歩を進めていく。

それについて行きながら、倒れている天狗が以前の会合でも見たかなりのお偉いさんである事実を、文は頭の隅に追いやった。

普通の天狗は上司の顔面に蹴りを入れたりしない。

「今の天狗に必要なものは、確固たる意志じゃ。長が降れば、天狗全てがああに屈することになる」

「まあ、確かにはたてはあの一件以来、二柱の神に対して完全に喧嘩腰になっちゃってますが」

「あやつは組織を率いるような器ではない。しかし、天魔様が復帰するまでの代役としては申し分ない。地位に執着がなく、判断に遠慮がないからな」

「周囲が格上ばかりという状況限定ですけどね」

幹部天狗の嫌味混じりの具申を一蹴し、下っ端の入れたお茶を恐縮して受け取るはたての姿が容易に想像出来て、文は笑いを堪えた。

辞めろと言われればさっさと今の立場から退散するだろうし、続けるつもりがないから上役達からの反感も気にしない。

なるほど、意外と適役だ。

納得しながら、文は屋敷の奥にある一室の前で足を止めた。

「ここで天魔様が臥せておられる。世話係の者は下がらせた。入るのはおぬしだけじゃ。くれぐれも粗相のないようにな」

「分かっています」

文は頷いた。

「そういえば、大天狗様」

少し躊躇ってから、思い切って言うてみることにした。

「これは要らぬお節介かもしれませんが」

「何じゃ？」

「左腕を動かささないよう、注意された方が宜しいと思います。動かない右腕が目立ちますので」

言った後で、文は少し後悔した。

やはり不機嫌にさせてしまったかもしれない。

しかし、そんな不安とは裏腹に、大天狗は終始変えなかつたしかめ面を、初めてほんの少しだけ和らげた。

「ふんっ。その忠告、聞いておいてやろう」

「お役に立てたなら幸いです」

「おべっかは要らぬ。さっさと入れ、天魔様がお待ちじゃ」

心なしか柔らかくなつたような気がする大天狗の言葉に押されて、文は部屋に足を踏み入れた。

襖が閉じられる。

廊下に居るのが自分達だけになると、大天狗はそれまで堪え続けていた痛みに、遂に屈するように震える左手で右胸を押さえた。

右手は麻痺してほとんど動かない。

膝が折れそうになるのを、すぐさま椀が支えた。

「ふっ、見抜かれたのが射命丸だけならば上々か……っ」

「大天狗様、やはりまだ横になつていた方が宜しいのでは？」

「要らぬ。死ぬのは当分先じゃ」

「しかし——」

「儂を案じるならば、まずはその無礼な口を閉じんか」

「……申し訳ありません」

大天狗は鋼のような意志で苦痛を無視し、笑みを浮かべた。

「年寄りの意地じゃ。許せ」

「意地、ですか？」

「儂もまた老いて役に立たなくなつた天狗よ。速やかに去るべきなん

じやろうが、長年の性根がそうさせてくれん」

「大天狗様は、必要な存在です」

「刀一本でこの地位まで上り詰めた。しかし、もはやこの体ではその刀が握れぬ」

「――」

「椀よ」

「はい」

「儂の跡を継がんか？」

椀は大天狗の瞳を真つ直ぐに見つめた。

口から零れ出たような軽い言い方だったが、偽りや冗談の類ではないことは、一目見れば明らかだった。

犬走椀は迷うことを知らない性格である。

自らの信念や決意の下ならば、命すら迷いなく捨てる事が出来る。

しかし、その瞬間椀は鉄のような表情の下で僅かに苦悩した。

「……私には、それほどの才も器もありません」

絞り出すように、椀は言った。

苦渋の滲む答えに、大天狗が向けたものは穏やかな笑みだった。

「儂もそうじゃよ」

――襖越しに、大天狗と椀の足音が遠ざかっていく。

それを聞きながら、文は横たわる天魔の枕元に正座した。

緊張した文が何か声を掛けるまでもなく、天魔が瞼を開いた。

「射命丸か。よく来た」

「いえ、お招きいただいて光栄です」

「すまんが、横になったままで話させてもらおうぞ」

「お気になさらず。御身を労わって下さい」

文は丁寧に戻した。

さすがに、この時ばかりは内心にも不遜な考えなど隠していない。

天魔に対して抱く敬意は本物である。ただ、無駄な緊張感や面倒事は遠慮したい性分だけなのだ。

それに今回は『命を救ってもらった相手』でもある。

「お前の方は、息災か？」

「はい。それもこれも、天魔様のおかげです」

「こんな時まで世辞はよい」

「いえ、本当です。あの時、あの場にいた者は全員天魔様に守っていた
できました」

神奈子が屋敷全体を巻き込むほどの攻撃した時である。

あの瞬間、神奈子の狙いは間違いなく天魔一人だった。

しかし、放たれた力はあまりにも強大すぎた。

自分も含めて、同じ室内に居た者、既に戦いで気絶していた者など、
余波に巻き込まれればただでは済まなかっただろう。

それを天魔は自身の力によって守った。

だが、その結果、天魔自身は攻撃を防ぎきれずに深手を負うことにな
ってしまったのだ。

「私やはたて、杖がほとんど無傷でいられたのも、天魔様のおかげで
す」

「世辞はよいと言った——お前の助力がなければ、全員を守ることは
叶わなかっただろう」

天魔は、あの時文もまた周囲の者を守ろうと密かに力を行使してい
たことに気付いていた。

文は気まづげに視線を逸らして、頬を掻いた。

「あの……それで、お話というのは？」

「凶星を突かれると弱いのは相変わらさずか」

天魔は束の間、小さく声を上げて笑った。

「話というのは、他でもない」

天魔は笑ったまま、文を見上げた。

「お前、俺の代わりに天狗の長の任に就いてみんか？」

「……………はあ!？」

文は聞き取った言葉を、衝撃で半ば停止した頭で吟味してから、よ
うやく声を上げた。

「な、な、な……何を仰るんデスか？ ご乱心ですか？」

「俺は正気だ」

「だとしたら狂気ですよ！」

「俺は本気だぞ？ 正式な後継として、すぐにでも手続きや宣言をし
ても良い」

文は混乱した。

決して冗談で口にして良い提案ではない。

それでは、これは冗談ではなく本気だということのか。

それはそれで非常に拙い。

慌てて周囲を見回し、耳を澄ませて、他に誰もいないことを確認す
る。

「人払いをした。この場にいるのは俺とお前だけだ。返答も、お前の
気持ち一つでいい。気楽に答えろ」

「気楽に答えろって……」

「断るのならば、それだけだ。この場で言ったことは全て忘れよう」

「じゃ、じゃあ……っ」

「だが、出来れば受けてもらいたいと考えている」

天魔は真つ直ぐに文の瞳を見つめながら言った。

強制するような意志や、何か含むような意図など存在しない、何処
までも真摯な視線だった。

だからこそ、本気の意志が伺えた。

「守矢神社の存在は、この山に吹いた新たな風だ」

天魔は言った。

「長年不変であった我ら天狗の宿り木を薙ぎ倒さんばかりに吹き荒ん
だ凶風よ。しかし、風が吹かねば空気は淀むものだ。これもまた、良
い機会なのだろう」

「……だから、長を辞めようと言うのですか？」

「新たな風を御すには、我らもまた新たな風を吹かせた方が良い。そ
う考えたのだ」

「だからって、私は器じゃありませんよ」

「そうかな？」

「ええ、そうです。私が長になったら、好き勝手やりますよ。他人なん
て面倒見切れません。組織を私物化して、やりたい放題やって、やが

て空中分解するでしょう」

「そうなれば、天狗は個として野に放たれることになるか……それも良いかもしれんな」

「……本気ですか？」

「存外、それで上手く回るかもしれん。古びた抜け殻が落ち、新たな形として生まれ変わるかもしれん。未来は常に新しいものよ。誰にも先は分からぬ」

文は神妙な表情で、一番気になっていることを訊ねた。

「何故、私にそこまで期待されるんですか？」

「お前が自由に吹く風だからよ」

そう言って、天魔は笑った。

文は黙り込むことしか出来なかった。

答えは、もう決まっている。

そして、その答えを天魔もまた察しているような気がしていた。

彼は自分を『自由に吹く風』だと言った。

風は一箇所に留まらないものだ。

文は無言で天魔の瞳を見つめ返した。

それが返答の代わりだった。

やがて、天魔の方から視線を外した。

「——今更だが」

再び瞼を閉じながら、天魔は告げた。

「かの先代巫女を育てた一件——よくやった。あやつこそ幻想郷に吹いた新しい風。その役目も終えた今、後はお前の好きにせよ。俺が長である限り、周りには何も言わせぬ」

そして眠りに就いた天魔に深く頭を下げて、文は静かに退室した。



【火焰猫燐の決意】

惨めな野良猫だった頃は、その黒い体が不吉だと忌み嫌われた。

妖怪になった後も、死体を漁る姿がおぞましいと忌み嫌われた。恐れではなく、穢れから忌み嫌われた。

何処でも。

何時でも。

石を投げられ、抗うことも出来ず、ただ追い払われるだけの存在だった。

——そんなあたいが最後に辿り着いた場所が、貴女の傍なんです。

「さとり様、御加減はいかがですか？」

燐は食事の載った台車を押しながら、静かにさとりの部屋に入っ

た。

ベッドに横になったさとりが、片目を開けている。

「退屈であること以外は、おおむね良好ね」

「そりやよかった。お食事の時間ですよ」

「やれやれ、食べる時が唯一の楽しみになるわね」

そう言って、さとりが苦笑した。

相槌を打つように、燐も笑って応える。

しかし、それは繕った表情以外の何ものでもなかった。

「体、起こしますね」

「ええ」

ベッドと背中の中に腕を通して、さとりの体を持ち上げる。

枕の位置を調整して、そこへ寄りかかるように座る体勢へ動かした。

ここまで、さとり自身の力はほとんど使っていない。

「スプーン、持てますか？」

さとりの右手が、僅かに震えた。

しかし、それだけだった。

腕が持ち上がるどころか、指さえ曲げられない。

「……無理ね。昨日よりは動くようだけど」

「そうですね。まだまだ回復には時間が掛かりそうですね。じや

あ、今日もあたいが食べさせてあげますよ！」

燐は殊更明るく言った。

もちろん、分かっている。

さとりには表面だけ明るく取り繕っても意味がないことくらい。後悔に苛まれる内心が、さとりには筒抜けなことくらい。

「悪いわね」

さとりはそう言つて、笑った。

元々快活に笑うような性格の人ではなかったが、今にも壊れてしまいうような儂さを感じさせる笑みだった。

一人で食事さえ出来なくなってしまった愛する主の世話をしながら、燐はこんなことになってしまった元凶とかつての自分を呪った。

——あの日。

行方不明になっていたさとりは地霊殿に帰ってきた。

泣きじやくる空と消沈する妖夢に連れられて、起き上がることも出来ないほど衰弱した姿で。

外の世界に長く居過ぎた影響で、さとりは文字通り生命を削られ、あれから一週間以上経った今でもベッドから出ることが出来ていない。

最初の二日間は長い睡眠と短い覚醒を繰り返し、ようやく意識がハッキリとしてきたら、自力で身動きが取れないことが判明した。

四肢はもちろん、首より下が全身麻痺したかのように動かないのだ。

幸い回復自体は進んでおり、そのまま衰弱して死んでしまうなどという最悪の事態だけは避けられた。

このまま安静にして、時間さえ掛ければ、またかつてのように動けるまで回復するかもしれない。

しかし、それは燐にとって何の慰めにもならなかった。

燐以外の地霊殿の住人にとつても同じだった。

ペット達は人語を話すことこそ出来ないが、発する雰囲気から暗いものを感じる。さとりには、彼らの深く案じる気持ちが読み取れるだろう。

空は悲嘆に暮れることこそしなくなったが、日々何処か上の空で、与えられた仕事をこなすことさえ難しい。寝たきりのさとりの為に

出来ることだからと割り切って、なんとか動いているのが現状だ。

代わりに妖夢が以前にも増して働いてくれているが、燐の目から見ても、それが可能な限り仕事以外のことを考えないようにしているのだと分かった。時折交わす視線には罪悪感や後ろめたさが滲んでいる。

——さとりが、こんな目に遭ったのは誰のせいなのか？

さとりを事件に巻き込んだ先代巫女か。

さとりを連れ戻せなかった空や妖夢か。

考えればキリがなく、考えても意味のないことだと分かっている。それでも止められない。

逆恨みだと分かっているとしても、燐は行き場のない怒りをぶつける先を探して、これまで様々なものを呪った。

そして、その果てに落着いた先は、

——自分だ。

——この火焰猫燐だ。

——誰かが愛する主に害を成し、誰かが愛する主を救えなかった。

——あの時、誰が何をどうするべきだったのかは分からない。

——だけど、一つだけハッキリしていることは。

——自分は、何もしなかった。

——お空のようにさとりの為に地上へ行かなかった。

——妖夢のようにそれを追わなかった。

——何もしなかった。

——最愛の主人が命の危険に晒されている時に、この恩知らずな畜生は何もしなかったんだ！

燐は後悔していた。

そして、憎悪していた。

何よりも、かつての自分を。

さとりに対して不信を、不安を抱き、恐れてしまったあの時の自分を。

あの時の躊躇いが、愛する主をこんな目に遭わせてしまったのだ。燐はそう信じていた。

「うちそうさま」

さとりが食事を終えた。

咀嚼し、飲み込む作業にも疲れを感じるらしく、今はまだスープのような簡単な物しか食べられない。

そう言えば、さとり様は仕事の休憩に紅茶を飲むのが好きだったな——と、燐は思った。

固形物であるお茶請けのクッキーなどは、しばらく食べられないだろう。

しばらくとは、どれくらいなのだろうか？

さとり様の好きな物なのに——。

ほんの些細なことが目に付き、新たな後悔に繋がる。

「さとり様、何か欲しいものやして欲しいことはありますか？」

食器を片付けながら、燐は訊いた。

今の状態では出来ることなど限られているが、それでも訊かずにはいられない。

「本が読みたいわね」

「分かりました。じゃあ、枕元であたいが読んであげますね」

「別に声に出す必要はないわ。貴女が読んでくれれば、それを私が読み取るから」

「なるほど！　じゃあ、早速本を持ってきます」

「簡単な本にしておきなさい。お燐に読めない本じゃ、意味がないしね」

「あつ、あたいを馬鹿にしていますね？　本くらいちゃんと読めますよ！」

「読む時はしっかり本に集中してね。雑念が混じると、私の方も読み取りにくくなるんだから」

「任せてくださいー！」

燐は胸を叩いて請け負ったが、内心ではさとりへの感謝が溢れていた。

長い間、共に過ごしてきたのだ。心が読めなくてもさとりの真意は分かる。

本を読むことだけに集中していれば、雑念は——ずっと繰り返して
いる後悔の念は、幾らか薄らぐ。

こんな時にも、さとりは自分の身を案じてくれているのだ。

……何故。

何故、こんなに優しい主を自分は恐れてしまったのか。

不可解な行動があったからといって、その真意が分からないからと
いって、疑っていい相手ではなかった。

——あたいは、もう迷わない。

さとの部屋の退室しながら、燐は一つの決意を固めていた。
もう二度と、さとりを恐れるような真似などしない。

その真意がどうあれ、主人が望むままに仕事をこなそう。

その身を支えよう。

守ろう。

働こう。

愛そう。

尽くそう。

この命を懸けて。

かつては、その黒い体が不吉だと忌み嫌われた。

死体を漁る姿がおぞましいと忌み嫌われた。

恐れではなく、穢れから忌み嫌われた。

何処でも。

何時でも。

石を投げられ、抗うことも出来ず、ただ追い払われるだけの存在
だった。

貴女の傍が、最後に辿り着いた場所。

此処以外に行く場所はない。

行くつもりもない。

自分は、ここで死ぬ。

貴女の傍で死ぬ。

貴女の為に死ぬ。

——邪魔する者は、何人たりとも許さない。

◆
【ある人里の群像】

慧音は先代巫女の診療所へと向かっていった。

途中で買った団子の包みを持っているが、もちろんそれは先代の下を訪れる為の口実の一つである。

訪問の目的は、先代の様子を伺うことだった。

三日間行方不明だった先代巫女が、人里に戻ってきてきて既に幾日か経っている。

高名な人物の突然の失踪と帰還。その混乱と動揺から、住人達もようやく落ち着きを取り戻していた。

かくいう慧音も、先代が不在の間は随分と気を揉んでいた。

彼女が何かと騒動に巻き込まれやすいことは、長年の付き合いから重々承知している。

しかし、だからといってそれに慣れたり、彼女が受難に遭うことを諦めたり出来るわけではない。

今回もまた随分と大事に巻き込まれたようだ。

慧音を含むごく一部の者にだけ、事の真相は伝えられていた。

外の世界と、そこで行われた騒動。そして戦い。

何食わぬ顔で帰ってきた先代には、これといって怪我や不調は見られなかったが、それでも心配ではある。

周囲も落ち着いた今、慧音は私情として、改めて先代に会いに来たのだった。

見慣れた診療所の前に着くと、慧音は呼びかけの為に口を開いた。

「――では、行ってくる。むっ、慧音か」

「先代！」

丁度そのタイミングで先代が戸を開き、二人は鉢合わせする形になった。

「ひよっとして、今からお出掛けでしたか？」

「ああ。もしかして、慧音は私に用事があったのか？」

「いえ、用事というほどではありません。先代の様子が気になったので、少し顔を出そうと思っただけです」

「そうか」

「ご迷惑でなければいいんですが」

「いや、嬉しいよ。いつもありがとう、慧音」

滅多に見せない微笑を浮かべる先代に釣られて、慧音も少女のように笑った。

頬が少し赤くなっている。

ようやく先代が帰ってきたのだという実感が湧いていた。

「しかし、外出されるとなると今日の診療所は休みですか？」

「いや、応対や簡単な診療は青娥に任せようと思う」

慧音の笑みが、ほんの僅かに強張った。

「……せいが？」

聞いたことのない名前だった。

眉を顰める慧音の反応に、先代が口を開きかけ、

「先代様、荷物をお忘れですよ」

背後から現れたのは、霍青娥その人だった。

先代の背後——つまり、診療所の中から出てきたのである。

青娥と慧音の目が合った。

同じく初対面の相手を前にしながら、その反応は違っていた。

きよとんとした表情の後すぐに柔らかな微笑を浮かべる青娥に対して、硬直した慧音は口元を引き攣ったように吊り上げた笑みとは言えないものを浮かべていた。

「あら、はじめまして。仙人の霍青娥と申します」

仙人と名乗った通り、人の体臭とは違う甘い芳香が僅かに鼻をくすぐる女だった。

ただ挨拶をするだけの仕草が、妙に色っぽい。

「は、はじめまして。私は上白沢慧音。人里で、寺子屋を営んでおります」

「先代様からお話は何度か聞いております。人里の代表者であり、こ

ここに住むのならば話を通しておくべき相手だと。ご挨拶が遅れて、申し訳ありません」

「いえ、私はそのような大層な立場では……」

言葉を交わしながらも、慧音が気にしている全く別のことだった。

——何度か聞いたとは、つまり何度か先代と会話をしたということか？

——何処で？

——何時？

——いや、何時から？

——一体、先代とはどういう関係なのか？

内心に渦巻く疑念を抑えながら、先代を一瞥する。

その視線の意味を半分理解し、半分誤解した先代は答えた。

「青娥は外の世界で随分と世話になった恩人だ」

「私も先代様と共に幻想郷へやって来たのですが、考えてみればこちらには住む家もなく、頼れる知人も居りません。なので、先日から先代様の下に身を寄せさせてもらっているのです」

「そ、それはつまり……同居、と？」

「はい。お世話になるのは、非常に心苦しいのですが」

「いや、青娥には本当に世話になった。これくらいいさせてくれ」

そう言つて、先代は青娥に微笑んだ。

滅多に見せないはずの表情だった。

「せめて、先代様の身の回りのお手伝いはさせていただきます」

青娥の物腰は、丁寧で礼儀正しいものである。

好感は抱いても、反感を持つような態度ではない。

しかし、慧音は何か良くないことが起こっていると、本能的に感じていた。

何故か全身が緊張して、脂汗が流れ出す。

「ところで先代様、お荷物を」

「ああ、すまない。着替えか？」

「はい。お泊りになるとのことなので、寝巻きの方も入れておきました」

「ありがとう」

仲睦まじい——ように見える——やりとりを眺めながら、慧音は我に返った。

「そ……そういえば、先代は何処へ出掛けられるのですか？」

「地底だ」

その返答は、青娥の存在よりも予想外なものではなかった。

地底——正確には友人と公言する古明地さとの所へ、先代が出掛けることは以前も時折あったことだからだ。

やはり一部の者しか知らない話だが、さとりもまた先代と共に外の世界へ飛ばされ、一時期行方不明だったという。

このタイミングで地底へ向かうのも、おそらくその件に絡んでのことだろう。

慧音は納得した。

ちなみに青娥の存在に関しては全く納得していない。

「では、人里の外まで見送ります」

「慧音も忙しいんじゃないか？」

「友人を見送る時間くらいはありますよ」

「そうか。なら、一緒に行こう」

「はい。……あと、これは手土産に持ってきた団子なのですが」

「ありがとう。帰ったら食べるよ。——青娥、いつもの場所に仕舞っておいてくれ」

「はい」

「では、行ってくる」

「お気をつけて、いってらっしゃいませ」

「留守を頼んだ」

「はい」

二人のやりとりには、お互いへの気遣いはもちろん信頼も感じられた。

外の世界で何があったのか、具体的なことを慧音は何も知らない。何かがあったのだ。

先代が『恩人』と呼ぶほど助けられ、同居生活を断らないほど親し

くなり、家族のように心を通わせるようになった『何か』が――。

慧音は先代の隣を歩きながら、内心で悶々としていた。

「先代……」

どう話を切り出すべきかも分からずに、ただ焦りのまま口を開いていた。

「その……色々と、あつたようですね？ 外の世界で……」

「ああ」

その相槌に、付き合いの長い慧音だけが分かるような含みを感じた。

「色々あつたよ。本当に」

「先代……どうしました？」

「慧音」

「はい」

「君にだけは話しておこうと思う」

真面目な話だと理解はしていたが、『君にだけ』というフレーズに慧音は内心で歓喜した。

現金である。

「霊夢が二十歳になったら、本格的に隠居するという話はしたな」

「はい。あの宴会の夜に、決意されたんですね」

「隠居をしたら、人里の診療所を続けながら残りの人生を過ごそうと思っていた」

「ええ、それも聞きました。……違うのですか？」

「まだ先の話だが、診療所はいずれ閉じようと思う」

「……そうですか」

「すまない」

「先代、貴女は人里の為にもう十分働きました。何も気に病む必要はありません。誰に憚ることもなく、貴女の自由に生きればいいのです」

「――」

「いずれにせよ診療所も、これから先ずっと続けられるものではありません。最近では永遠亭の薬屋など、人里の医療に関しては昔よりも充

実しています。実質的に問題もありません」

「ありがとう。そう言ってくれると、気が楽になる」

「私は、貴女が満足出来る余生を送れるのならそれでいい。そのお手伝いをしたいんです」

「ありがとう、慧音」

慧音はにっこりと笑った。

色々と思うこともあったが、先代が自分にだけ打ち明けた悩みに対して、何一つ偽ることなく想いを伝えることが出来たのだ。

そうだ。

先代自身が言うとおり、きっと自分が知らない所で色々なことがあったのだろう。

一本の道だけが人生ではない。

生き方を変えることもある。

それでも再びここへ戻って来てくれた。

先程語ったことが、自分の全てだ。

ただ彼女の傍に寄り添い、見守り、手伝っていききたい。

慧音の心は迷いなく、晴れやかだった。

「実は、地底に移り住もうかと考えているんだ」

笑顔が引き攣った。

「……………え、？」



【今日の先代】

「さとり」

「何でしょう、先代？」

「実は今、ギャグを考えた」

「――」

「オリジナルギャグだ。考えたんだ」

「――」

「でもいいか……たった一度しかやらないからよく見ている。一度つきりだ。指を見ていろよ。今、指何本に見える？」

「……四本」

「そこちよつと、失礼し・トウ・れいイイイイイゝゝゝ」

「――」

「つーギャグ……どよ？」

「んん、なかなか面白かったです。かなり大爆笑」

「だろ？ あとでもつとジワつと来んだよ。気に入ったからつて、パクんなよ」

――フウウゝツ、ジョジョごっこ超楽しいイイイゝ。

さどりの場合、私のやりたいことを読んで乗ってくれるから、自然に一連の流れを始められるんだよな。

事前の打ち合わせをしなくていいから、本当に漫画の中のキャラに成りきってるみたいなのが楽しくさ倍増だ！

よしっ！ それじゃあ、次は『チーズの歌』のくだりをやってみようか!?

「いや、もうやめましようよ」

え、嫌だった？

違うシーンの方がいい？

「嫌じゃないですけど、わざわざ地霊殿まで来て何をしてるんだって気分になりませんか？」

そう、私は現在地霊殿はさどりの私室に居る。

高い枕に背を預けて座っているさどりの足元で、私は楽な体勢で寝そべっていた。

んん、そうだな。

じゃあ、このシチュエーションからして第六部の会話ごっこやろうか？

『スタローンとジャン・クロード・バンダムはどっちが強い？』とか。

「ジョジョごっこから離れませんか？」

でも、さどりんつてばずつと寝たきりで暇なんですよ？

こんな遊び、私達でしか出来ないんだし、結構楽しいと思うけど。

「確かに楽しいですけど……もつと建設的な話をしませんか？ 貴女もここへ遊びに来たわけじゃないでしょう」

確かに、さとりの言うとおりだった。

私が地霊殿を訪れたのは、遊ぶ為じゃない。

……それも半分くらいあるが、さとりの今後のことを話し合う為にやって来たのだ。

「そう、それです。そこで気になってたんですが、地底に移住するつもりって本気ですか？」

ああ、本気だ。

もちろん、何もすぐに移住しようって話じゃない。

だけど、将来的に引越すことも視野に入れている。

「引越し先は、この地霊殿。ここに住み込みながら、私の世話をするつもり——ですか」

そうだ。

さとり、今のお前には助けが必要だ。

私も以前、下半身不随になった経験があるから、よく分かる。

体が動かないっていうのは、ただ生活するだけでも大変な問題なんだ。

そして、さとりの場合は更に立場がある。

地底の管理者という偉い立場にある以上、平常時でも何かと危険が付き纏うだろう。鬼の異変でさとりに不満を持つ奴らが狙ってきたという話を聞いたのは、記憶に新しい。

身の回りの世話なら、地霊殿の他の住人達もやってくれる。

お空やお隣ではさとりを守れないと疑っているわけじゃない。

でも、今はさとりを助ける為に少しでも力が必要だと思ったんだ。

「先代。それは——」

分かっている。皆まで言うな。

さとりに隠し事が無意味なことはよく知ってるよ。

だから、建前の次は本心を言う。

——さとりが、こんなことになったのは私のせいだ。
事実がどうかは関係ない。

私がそう考えている。

責任を感じている。

だから、さとり。

お前を助けたい。

友達を助けたい。

心配なんだ。

本当に、どうしようもないくらい心配なんだ。

さとりの為にすぐに駆けつけられる状態だったら、その心配が少しは薄れるんだ。

だから、私はさとりの傍にいたい。

「……そうですか」

私のぶちまけた本音に、さとりは一つだけ頷いた。

ごめんよ、さとり。

自分でも強引だって分かってる。

普段ならば、さとりは迷惑だったり嫌だったりしたらハッキリと私にそう言うだろう。

私も、それを受けて素直に引き下がるだろう。

だけど、今は違う。

私はどうあっても自分の意見を曲げるつもりはないし、さとりも無駄だと分かっているからあえて断ろうとしないのかもしれない。

「いえ、そんなことはないですよ。貴女の気持ちは、素直に嬉しいです」

本当？

「私だって、今の自分の状態が平気なわけじゃないんです。信頼出来る人が傍にいることは、安心出来るんですよ」

さとり……。

「もちろん、色々と思うところや悩むところはありますけどね。しかし、とりあえずは貴女の考えに異を唱えるつもりはありません。貴女自身が言うように、予定であり、先の話ですからね。ひよっとしたら、状況がまた変わるかもしれません。私の体が急に回復して、貴女の懸念がなくなるかもしれない」

……うん、そうだね！

そうなったならそうなったで、最高の展開だ。さとりが元気になるのが一番だからね。

それにさとりのことを抜きにしても『地底に移住する』という選択は、新鮮で、悪くないもののように思える。

知人のいる地上からは離れることになるが、別に完全に隔絶するって話じゃない。それに、知人ならさとりも含めて地底にだっているんだしね。

大体、引越したなんて、普通の人生でも何度かある出来事だろう。地上のことは一人前になった霊夢に任せ、隠居後の新たな生活として、新天地で過ごすというのも面白いと思うんだよな。

——っていうか、そもそも時期的に地霊殿の異変が近い。

異変が起こった後は、地上と地底の行き来だって自由になるんじゃないか。

「ああ、そういえばそんな時期でしたね。原因となる守矢神社が幻想郷にやって来たんですから」

さとりが憂鬱そうな表情を浮かべた。

手が動けば、額を押さええていることだろう。

「貴女から初めて話を聞いた時は、半信半疑だったり、遠い先のことだと思ってきましたが——なるほど、成るように成るものですね。運命というものが実感出来ます」

何かに納得するように、さとりは呟いた。

どういうことだ？

言葉から察するに、原作通りの異変に繋がる予兆や発端みたいなものを見つけたのか？

「心を読んでいると分かるんですよ、お空の心境の変化が。少し前までは、あの子が異変の中心になるなんて想像も出来ませんでした、確かに今なら八坂神奈子に取り入れられる理由があります」

……ああ、なんとなく分かる。

っていうか、気持ち分かる。

「ええ。私の為です」

地底で起こる異変。

その原因は『守矢神社の神からもたらされた八咫鳥やたがらすの力を宿したお空が暴走する』というものだ。

これまでのお空を見る限り、この力を得る経緯が在り得ないとまでは言わないが少し苦しいと私達は考えていた。

何故なら、異変の中心になるお空自身が、それを実行するような大それた野望を持っていないと分かっていたからだ。

あの子の幼さと、何よりもさとりと共に生活する現状に満足している事実が、その根拠になっている。

お空には八咫鳥の力を欲する理由がない。

かといって異変が起こらないという楽観はなく、お空が望まなくても無理矢理力を与えられる展開もあるのかと幾つか予想していたのだが——ここに至って、お空の心境に変化が起こってしまった。

言うまでもなく、さとりが死に掛けたことである。

あの日、さとりが死んだと誰もが思った時に泣き叫んだお空の悲痛な姿を、私も見ていた。

本当に、お空の気持ちは痛いほど分かる。

あの日のことを思い出す度に私が覚えるのは、大切な人を喪う恐怖と、もう二度とあんな想いをしたくないという後悔だ。

今、お空が何を望んでいるのか？

——さとりを守ること。

——そして、その為に力を得ること。

きつと、今のお空は与えられる力を拒まないだろう。

「そういうことです」

確かに、これは運命というものの存在を考えてしまう。

さとりが死にそうになったのは外の世界に行ってしまったからだ
が、その原因は原作通りの異変であり、そこに割り込んだ私というイレギュラーの存在でもあるのだ。

そんなイレギュラーの起こした展開が、原作通りに事を運ぶ為の原
因となっている。

複雑に分岐しているようで、実は一本の道として繋がっているよう

だ。

まったく、これはゲームや物語じゃなくて現実なんだぞ。

「……そうですね」

ん、どつたのさとりん？

「いえ、なんでも。とにかく、土台は勝手に整いつつあるということですよ。異変を回避することは、おそらく不可能でしょう」

やっぱり原因が分かっているといっても、出来ることはないのかな？

さとりがお空を説得してみるとか――。

「無理ですね。私に原因があるのに、私が説得しても通じません」
だよね。

私もさとりには『気にするな』って言われたって気にしちゃうし、現状がまさにその状態なんでもんね。

「お隣の方も、私の身を酷く案じているんですが、何を言っても解消出来ないんですね。自己完結しちゃってます」

ああ、お隣もかあ。

お空とはまた別のベクトルでさとりん慕ってるもんね。忠誠心高そう。

「つていうか、最近ちよつと思ひ詰めすぎってます。ヤンデレつてやつです」

なにそれこわい。

「こんな用語、知りたくありませんでした。ホント、怖いです。心読めちやいますから」

目の前で爆発予定の爆弾が着々と作られていく様を見る恐怖は如何ばかりか。心中お察します。

しかし、まあ少しは安心してくれていい。

仮に原作通りに物事が進んでいくのなら、それは異変であり、いずれ解決する事案だ。

さとりが危険に晒されることはないし、何よりも私がさせない。

原作とは違う、様々な要素がある。

この時の為にさとりはずっと早い段階で地上と関わりを持ち出し

ただし、人脈も増やした。

勇儀はさとの味方だし、本来ならば地霊殿にいないはずの妖夢がさとの為に働いている。

お隣やお空だって、結局はさとの為に何かをしたいと思って動いているのだ。

決して、悪いことにはならないさ。

何より——私がいる。

「ふふっ、期待していますよ」

ああ、任せてくれ。

もう二度と、さとりをあんな目には遭わせない。

もう二度と、あんな想いはしたくない。

嫌というほど理解した。

失った後に垂れ流す、嘆きと涙。

その無意味さ。

その虚しさ。

二度と。

もう二度と。

例え誰が相手であっても。

——何があっても、さとりは私が守る。



【今日のさとりん】

『何があっても、さとりは私が守る』

さとりは第三の目に飛び込んできた、そのイメージの強烈さに嫌な予感を感じた。

これまで聞いたこともないほど静かで、重く響く声でもある。先代の真剣さを感じる。

しかし、不思議なことに安心感は湧いてこない。

むしろ不安を煽られる。

さとりは思った。

——あれ？

——本人自覚してないけど、先代の方も結構ヤンデレ気味じゃね？

——これちよつとヤバくね？

ヤバかった。

真・地霊殿編

其の五十三「力」

諏訪子は早朝の時間帯が好きだった。それは外の世界に居た時、この幻想郷へやって来た後も変わらない。

特に妖怪の山の朝は気に入っていた。

余計な雑音がないのがいい。何処も自然の音だけが聞こえる。

目覚め、動き始める動物の音。

虫の音。

木々の音。

水の音。

雑多な音の重なりの中には、どれ一つとして耳障りなものがない。それが自然の一部だと思えば、耳を通して心に溶け込んでくるようだった。

音を立てて、膨大な水が切り立った崖の上から下へと流れ落ちていく。

見事な滝であった。

水の流れ落ちた先にある滝壺は、ちよつとした湖と表現してもいい程に広い。

崖の高さ、そこから落ちる水の量、そしてその勢いの強さはいずれも凄まじく、巻き上がる無数の水の粒が濃密な霧のようになって周辺を満たしていた。

時折流れに運ばれた流木が落下し、滝壺の中で粉々に砕かれていく。

もしも、あの中に人間が落ちればどうなるかは見るまでもない。

溺れ死ぬよりも先に、全身の骨を砕かれて絶命するだろう。

その恐ろしくも壮大な景観のすぐ傍に、諏訪子は居た。

崖の淵ギリギリで無造作にしゃがみ込み、じつと眼下を見つめている。

膨大な湯気が立ち込めているかのように白く染まった滝壺の底に、

眼には映らない力と気配を感じ取っていた。

その力が、突如膨れ上がった。

「——おお!」

諏訪子は思わず感嘆の声を上げていた。

滝壺の中心から人の形をした影が勢い良く飛び出して来る。

それは振り上げた拳によって、落下する膨大な水を掻き分け、岩壁を削りながら、滝を真つ二つに切り裂いて、一瞬で遙か上空にまで到達していた。

まさに竜が滝を昇り、天にまで届こうとするかの如き『昇竜』の姿。諏訪子にも見覚えのあるそれは、先代巫女が繰り出した技だった。

つま先から拳までを繋ぐ線が弧を描いた姿は、抜き放たれた刀身を連想させる。拳の勢いが消えて僅かな時間滞空する様は、まさに技の後の残心か。

落下を始めるより先に、先代巫女は外の世界で習得した飛行能力を發揮して、諏訪子の傍に降り立った。

「いやあ、お見事! 凄まじいものを見せてもらったよ!」

称賛というよりも、子供が無邪気に面白がるように拍手をしながら諏訪子は言った。

水浸しになった先代が、一礼して応える。

「おーい、タオル掛け。ちやつちやつと来い」

「わたしの名前は芳香だ!」

乾いたタオルが水気に触れないよう、離れた位置に居た芳香がやって来る。

実際に諏訪子の言うとおり、生ける屍である芳香の肉体は関節が固まって曲がらず、前に伸ばした腕にタオルが引っ掛かっているだけの状態だった。

手渡すことも出来ない芳香は、その腕を先代の前に差し出した。

「ありがとう」

律儀に礼を言う先代に、芳香は満更でもなさそうな笑顔を浮かべた。

「しかし、先代はいつもあんなことやってるの?」

「あんなこと、とは？」

「拳で滝を割るなんて漫画みたいな修行」

今回、諏訪子が先代の修行風景に立ち会えたのは全くの偶然だった。

たまたま諏訪子が朝の散歩で、ここまで来ていたからに過ぎない。

外の世界で神奈子と渡り合った戦いぶりから、先代巫女が只者ではないことは分かっていたが、人の身にここまで非常識な鍛錬を課していたとは予想外だった。

「先代はさ、生まれつき特別な力があつたとか、何か特殊な血筋だったりとかした？」

「いえ、平凡な子供でした」

「へ、平凡かあ……」

到底信じられない話だった。

「最初からこんなことが出来たわけではありません。長年の修行の成果です」

「じゃあ、最初はやっぱり普通に体を鍛えてたりしたんだ」

「今でも普通に鍛えてますが」

「普通に鍛えただけで滝を割ったりできねーよ」

「あれはそういう技ですから」

「いや『技だから出来る』とかその理屈はおかしい」

神様が人間にツツコミを入れるとか逆じゃね？ と諏訪子は思った。

「そもそも平凡な子供だったんなら、何で修行しようなんて思い立ったのかね？」

「一つは、生き残る為でしたが——」

「……どうということ？」

「私は、物心つく頃にはこの妖怪の山に捨てられていました」

「あ、ごめん」

「いえ。当時の記憶が曖昧なので、詳しくお話は出来ませんが」

「いや、それはいいんだけどね。……そっか、強くならなくちゃいけなかったのか」

「必要だったからだけではありません。何よりも、好きでやっていたことです」

「好き!? 修行が!？」

「はい」

「……死にそんな修行が?」

「はい」

「そうか」

「はい」

「一種の変態だね」

「――」

「冗談だよ」

「はい……」

声色が心なしか落ち込んでいるように聞こえる先代を見上げて、諏訪子は楽しげに笑った。

鉄のように動かない表情と鍛え抜かれた肉体が厳格な印象を与えるが、こうして実際に触れ合ってみると中々に可愛げのある内面を持つているような気がする。

寡黙だが、実のところ口が回らないだけで、結構快活な性格をしているのではないだろうか。

先代巫女の持つギャップが、諏訪子は好きになり始めていた。

「修行が好きって言っても、別に自分の体を痛めつけるのが好きなわけじゃないんだろう?」

「はい」

「生き残る為ってというのが理由の一つに過ぎないなら、修行して得られる『強さ』が一番の目的でもないわけだ」

「そうです」

「となると、何かへの『憧れ』かな?」

「その通りです」

「そっかそっか」

諏訪子は楽しそうに笑いながら、頷いた。

ある程度の納得は得られたが、肝心の『何に対する憧れ』かは分かつ

ていない。

修行によつて近づける憧れとは、何なのか？

——訊かないでおこう。

——その方が、楽しそうだ。

先代巫女の強さの秘密を追及することは、諏訪子にとつてさして意味があることではない。

修行に向ける彼女のひたむきさと、その元になっている感情が予想していたよりもずっと純朴であった事実には、既に好奇心は十分満足していた。

「本当に、あんたは知れば知るほど面白い人間だねえ」

諏訪子が先代を好ましく思うのは、何も強さや人柄だけではない。

先代には、自分や早苗、そして神奈子を救ってもらった恩がある。

先代がいなければ、こうして三人で幻想郷での新しい生活を始めることもなかっただろう。

外の世界に絶望していた神奈子に、形はどうあれ新たな目的と活力を与えた。

早苗は苦悩を乗り越えて新しい道を歩き出し、最近聞いた話では幻想郷で初めて出来た友人が先代の娘だという。

これまで抱えていた様々な憂いを解消し、こうして自分が飄々とした神を気取つていられるのは、目の前の人間のおかげなのだ。

なんとも奇妙な話だが、神が人間に恩義を感じているというわけだ。

この恩は重い。

だからこそ——。

「先代」

「何でしよう？」

「何か困ったことがあったら、わたしが力になるよ。なんてつたつて、神様だからね」

「突然、どうしました？」

「なんでもないよ。ただ覚えておいて欲しいんだ」

「……分かりました」

諏訪子は、先代の抱える危うさに気付いていた。

自分以外に気付いている者は、ごく少数しかいないだろう。

少なくとも、先代が長年過ごしてきたこの幻想郷での知人達の中に、彼女の秘密を知る者はほとんどいないはずだ。唯一の例外は、さとりだけだろう。

外の世界で先代と関わった者——正確には外の世界で先代が戦う姿を見ていた者——だけが、彼女の秘めた恐るべき力に気付いている。

その脅威に身を晒し、死を覚悟したことは諏訪子自身の記憶にも新しい。

——神奈子との死闘の最中で垣間見せた黒い力。

——殺意が形になったかのような力。

神奈子と自分を殺しかけたあの力が、先代の元々持っていた力だとは思えなかった。

あれは、明らかに人の身に余る力だ。

先程の修行風景を見て、諏訪子はその予想により一層確信を得ていた。

滝を割ったあの技は、神奈子に致命傷を負わせた技と同種のものとして間違いない。

しかし、決して同一のものではなかった。

確かに凄まじい威力だったが、それでも外の世界で見たものには及ばない。

あの時の一撃には、単なる殺傷力や破壊力の値では測れない『おぞましさ』や『禍々しさ』が強く感じられた。

錯覚ではない。それは『崇り』という負の力を操る諏訪子だからこそ分かる感覚である。

技自体は同じかもしれない。しかし、そこに伴う力は全く別物だった。

あの力は——。

「差し当たって、先代に一つ訊いておきたいことがあるんだ」

「何でしよう?」

危険だ。

何よりも、先代自身にとって。

あんな得体の知れないものを、人の身に宿して安全なわけがない。

諏訪子は、先代が自分自身はもちろん大切な者の生死を懸けてまで戦ってくれた意志の尊さを、よく理解していた。

だからこそ、それまで決して目的を見失わなかった先代が、神奈子や自分を躊躇いなく殺そうとした際の豹変ぶりに強い違和感を感じていた。

あの時、神奈子が先代を心身共に追い詰めていたことは間違いない。

あれが切っ掛けではあったのだろう。

しかし、先代の意志を殺意によって飲み込んだのは、もつと別の、濁流の如き圧倒的な何かだ。

それが、あの黒い力ではないのか。

あの力は、先代自身が望んで身に宿したものではなく、ましてや制御し得るものではない。宿主さえ脅かす危険な代物ではないのか――

「この幻想郷で先代が最も信頼する人物を、わたしに教えて欲しい」
もしも、あの時と同じことが繰り返されるのなら――止めなければならぬ。

他の誰でもない、先代自身の為に。

諏訪子は密かに決意を固めていた。

「そいつに協力することが、結果的に先代を助けることに繋がるんなら、わたしも会っておいた方が何かと通りがいいだろうしね」

内心を欠片も表に出さず、無邪気に訊ねる諏訪子に対して、先代は僅かに悩み、

「信頼出来る友人は多くいますが、一番となると……やはり紫ですね」

「ゆかり？ ……あー、ひよつとして八雲紫のこと？」

「はい。面識はありますか？」

「あるある。幻想入りした当日に、幻想郷の管理者だっつって顔見せに来たよ」

友人だと言う先代の手前、露骨に態度には出せなかったが、それでも諏訪子は顔を顰めずにはいられなかった。

「そうか、友人……友人かあ。よりによつて、あいつがかあ……」
ハッキリ言つて『死ぬほど胡散臭い妖怪』というのが、諏訪子の抱いた第一印象だった。

実力は底知れず、使用する能力も不鮮明で、雰囲気は不気味——と、負の三拍子が揃っている。

天狗との一件にあの妖怪が裏から関わっていたらうことは、状況を顧みて諏訪子も薄っすらと気付いていた。

警戒に値する要素は幾らでもあるが、友好に値する要素は限りなく少ない。

先代という接点がなければ、好んで近づきたくない相手だ。

しかし、実力や立場、先代との関係を考慮すれば、相談する相手としては申し分ないのかもしれない。

そういった理屈とは別に『こんな胡散臭い奴に先代の命運を任せられるか』という気持ちも湧いてきたりする。

諏訪子がかつてない程苦悩した。

「うーん、そうか……よし！ 分かったよ、先代。とりあえず、八雲紫と話してみるよ」

「よく分かりませんが、友人と仲良くしていただけるのなら幸いです」
「仲良くか……うん。何と言うか、うん、あれだ。ど、努力はするっ！」
曖昧な笑顔を浮かべて、そう答えるのが精一杯だった。



——名付けて『肖る程度の能力』！

私の精神状態によつて発動が左右されるこの能力は、即ち漫画やアニメの技の再現度を高める為に、どれだけ強くイメージ出来るかが肝になる。

つまり、『出来る』という思い込みだ！

出来る！ 出来る！ 絶対に出来るんだから！ 諦めんなよ！

「つてこれじゃあ別の、人、肖っちゃうよ！ 違う！ えーと……いーとしーさとー、せーつなーさとー、こーこーろづよさとーおおおおおとおおおお！」

昇 竜 拳 ！ ！

気合一閃。

水流が荒れ狂う滝壺の中で溜めていた力を解放し、私は拳を天に向けて突き出した。

イメージが導くままに、文字通り竜の如く水面を打ち破り、巨大な滝を叩き割って、上空へと飛び出す。

高速で上昇する中、私を見守る諏訪子様の姿が視界を掠めるように映った。

よしっ、見えた！

諏訪子様、そんな短いスカートでしやがみ座りなんて無防備な格好しちや駄目えええ!!

……ふう。

残心もとい賢者タイム。

昇竜拳と共に滾るリビドーも虚空へ盛大に放出した後、私は諏訪子様の傍に着地した。

「いやあ、お見事！ 凄まじいものを見せてもらったよ！」

ありがとうございます。

最終的には『真・昇竜拳』にまで昇華させて空中移動要塞を撃墜したいです。

「おーい、タオル掛け。ちやつちやつと来い」

「わたしの名前は芳香だー」

芳香からタオルを受け取って、私は礼を言った。芳香ちゃんよしよし。

芳香が私の修行に同行するのは今回が初めてではない。

幻想郷に戻って以来、同居するようになった青娥が普段から色々世話を焼いてくれるのだが、その一環として人里から出る時にはお供として芳香を連れていくように勧められたのだ。

人里の外限定なのは、芳香の性質ゆえにである。

まあ、ぶつちやけ動く死体だしね。衛生面から見ても、妖怪以上に人里内では忌避される存在だろう。

同じ理由で診療所内に居る時は、人前に出さないように青娥も気を遣ってくれている。

自分の置かれている窮屈な環境に、芳香自身は特に不満はないらしい。

外の世界ではトランクに人形よろしく折り畳まれて詰め込まれてたらしいから、それに比べればまだマシなのだが、それでも私は不憫に感じていた。

なので、自分の手伝いをさせるといよりは、芳香に少しでも自由に行動してもらいたくて、青娥の勧めを受け入れたのだった。

正直、人里の外に出る機会ってほとんど修行の時だしね。芳香に手伝ってもらうことはあまりない。

護衛とか必要ないし、ちよつとした荷持ちくらいだ。

……青娥は『頑丈ですし、修理も利きますから、修行の相手にしても構いません』とか言ってたけど。

確かに、関節技の練習とかに相手がいたら便利なんだけど、芳香の場合関節が固い上に痛覚がないから、イマイチ練習にならないのよね。本気でやったら昆虫みたいに関節がもげそうだし。

かといって、単なる攻撃の的にするのはさすがに気が引けるしなあ。

それを青娥に言ったら『可愛がつてあげてください』とか妖しい笑顔で答えられたんだが……それは稽古的な意味での『かわいがり』だよね？ 本当の意味での『可愛がり』じゃないのよね？ 後者の場合、意味深すぎる。

とにかく、芳香を文字通りのサンドバックにするなんて非道な真似はしない。

従者というよりは、道中の暇潰しに付き合ってくれる話し相手として、外出の際には芳香を伴うようになったのだった。

そして、今回は修行の場所で偶然にも諏訪子様と会ったのだ。

「修行が好きって言っても、別に自分の体を痛めつけるのが好きなわ

「けじゃないんだらう？」

「はい」

「生き残る為ってというのが理由の一つに過ぎないなら、修行して得られる『強さ』が一番の目的でもないわけだ」

「そうです」

「となると、何かへの『憧れ』かな？」

さすが諏訪子様、察しがいい。

こうして思い返してみると、修行する理由ってあまり他人に訊かれた記憶がないなあ。

普通、修行ってものは何らかの目標を持ってやるわけだ。例えば『俺より強い奴に会いに行く！』とか。

しかし、私の場合は違う。修行そのものをやりたいから始めた。

漫画やアニメに登場する様々な人物に憧れ、彼らのやっていたことを自分もやってみたいと感じて、始めたことなのである。

彼らのようになりたくて始めたわけでも、彼らの持つ力を身に着けたくて始めたわけでもない。

言うなれば、行動そのものへの憧れだ。

リアルシャドーなどが最たる例だろう。

私は現実では不可能な修行を出来るようにする為に修行を重ねていたのだ！

……こうして言葉にしてみると、控え目に言っても、その、なんだ、昔の私は相当な馬鹿だな。うん。

「本当に、あんたは知れば知るほど面白い人間だねえ」

好意的に解釈してくれる諏訪子様マジ神様。

他の皆が一目置いてくれていてくれる私の力は、結果的に得たものであって、目指して手に入れたものじゃないのよねえ。

しかし、今は違う。

事情が変わった。

最近の私は、修行を楽しむなんて無駄なこととはせず、真面目な目標を定めている。

シンプルな目標だ。

——もつと力を。

英語で言うなら『I need more power』だ。某鬼いちゃんみたいな発音で。

理由はもちろん、さとりを守る為である。

神奈子様との戦いで痛感したが、私の敗北が最悪の結果を招く可能性もあるのだと分かった。

これまでのように自己責任で全てが納まるなんて楽観はしていない。

さとりは近い将来、大きな騒動に巻き込まれる。いや、その中心となってしまう。

今更言うまでもない、地底で起こる異変だ。

実際に事を起こすのはお空だが、その飼い主であり、地霊殿の責任者であるさとりに何の害も及ばないはずがないのだ。

私が知識として知るゲームのストーリーの裏側で、具体的にどのように事態が動くのか、皆目検討もつかない。

風神録では、外の世界で神奈子様と死闘を繰り広げるハメになった。

あれは戦闘に至る経緯で私自身にも原因があったが、今回はどうだ？

私が何もしなければ、穏便に話は始まり、そして終わるのだろうか？

しかし、この異変はある意味神奈様が元凶だ。

神奈子様がお空と接触する時、あるいはその後、原作にはない争いが起こり、それにさとりが巻き込まれる可能性もあるんじゃないのか。

分からない。

楽観なんて到底出来ない。

備えるしかない。最悪の場合、もう一度神奈子様と戦う事態も想定して。

そして、その最悪の事態を制する為には——力が必要だ。

外の世界でかろうじて拾った勝利ではなく、確実に勝つ為の力が。

私がしているのは、その為の修行だった。

これまでの修行には、余分な遊びがありすぎた。

もっと効率的に、使える技を選び、習得しなくてはいけない。

自分の能力を有効に活用するんだ。

あの時、瀕死だったはずの私が何故神奈子様を圧倒出来たのか？

私には、その理由が分かっている。

いや、漫画とかなら突然の力の覚醒なんて覚えてなくて『俺は一体どうしたんだ……？』って悩む展開なんだろうけど、普通に記憶あるし、あの力が何だったのか前世の記憶で知っている。味気もクソもないネタバレやね。

——あれは『殺意の波動』だ。

私が使った『波動拳』『昇竜拳』『竜巻旋風脚』を用いる拳法に伝わる、暗黒の力である。

何故、それが突然使えるようになったのか？

その理由も分かる。

私の能力の影響だ。

私が使った波動拳などの拳法は、本来は鍛錬によって内に眠る殺意の波動を鎮める為のものだった。

しかし皮肉なことに、その拳法を再現することで、設定的に繋がりのある殺意の波動まで私の能力はこの身に宿ってしまったのだ。

私の能力とはいえ、殺意の波動は簡単に制御出来る代物じゃない。制御出来ないからこそ、私はあの時圧倒的な力を振るえた。

使えば暴走する力を正確に再現したからこそ、あれだけの力を使えたと言える。

ややこしい上に、なんて難しい話なんだ。

現状、殺意の波動は私にとって害にしかない。

下手に使えば、原作の豪鬼のように、ただ戦うだけの修羅と化してしまうだろう。

あの時、自制が効かずに神奈子様や諏訪子様を殺しかけたことも、私はちゃんと覚えている。

自分の力なのに、自分の意思ではどうにも出来なかった。

本当ならば、殺意の波動はもちろん、それを刺激しない為に関連する技全てを封印した方がいいのだろう。

だが。

しかし。

私には力が必要だ。

波動拳も昇竜拳も竜巻旋風脚も、極めれば私はもっと強くなれる。

そして——殺意の波動も。

危険な力だ。危険、だが……決して制御出来ない力じゃない。少なくとも、原作では克服した先駆者がいる。

だったら、私にも出来るんじゃない？

「先代、いつまでもそのままじゃ風邪ひいちやうよ」

諏訪子様に言われて、私は我に返った。

おっと、いつの間にか考え込んでいたらしい。

確かに、体を拭いたとはいえ、濡れた服まではどうしようもない。

まあ、だからって風邪ひくほど柔な鍛え方はしてないんですけどね。

しかし、そんな『服の下には筋肉を着ている』と表現してもいいよ
うなマッチョ巫女を繊細な女扱いしてくれる諏訪子様はやはり神か。

「ねえ、折角だからウチに寄ってかない？」

「守矢神社にですか？」

「そう。体も冷えてるだろうから、お風呂入ってよ。その間に服も出来るだけ乾かすからさ」

なんとというご厚意。

いや、確かに早朝の時間帯だし、まだ診療所開けるには時間あるけどさ。

しかし、さすがに人の家にあがって朝風呂までいただくなんて、甘えすぎだろう。

この水の冷たさも修行の一環である。

修行場に滝を選んだのは、己の肉体と精神を引き締める為だったのだ。

修行とは自分に厳しくあるもの。

特に、昔とは違って楽しむのではなく、強くなる為に鍛えるのならば、尚のこと気の緩みは捨てなくてはならない。

絶対に、自分を甘やかしたりなんかしない！（キリッ

「さすがにそこまでしていただくわけには……」

「ねえ、いいでしょお？ わたしなら全然迷惑じゃないからさあ、先代に遊びに来て欲しいな？」

私の腕に両手を絡ませ、体を摺り寄せながら、上目遣いで甘えるような声を洩らす諏訪子様。エロい。

「お世話になります」

「やった！」

ロリ神様には、勝てなかったよ……。

私の方がお邪魔するのに何故か諏訪子様のおねだり攻撃に耐えられず、守矢神社に行くことになってしまった。

いや、嬉しいのは間違いないんだけどさ、何で諏訪子様こんなに親切なの？

いつの間にはここまで好感度を上げたんだ。隠しイベントか!?

「さっ、早く行こう！ 歓迎するよ！ おい、荷持ち。お前もさっさと来い」

「わたしの名前は芳香だー」

崇り神なのに無邪気な笑顔。やはり天使、いや神か。

外の世界での出来事からこっち、新たな出会いと共に、私の周囲の環境がまた一つ大きく変化したのを感じる。

原作の時系列考えれば当たり前前なんだけど、私の人生、後半から密度高すぎワロタ。



「早苗、ちょっと訊きたいんだけど」

「何でしょう？」

居間に戻ってきた早苗に、霊夢が開口一番に訊ねた。

『『ケーワイ』って外の世界の用語よね？』

「ああ、アルファベットのKとYですね。KYは『空気が読めてない』もしくは『読めてない人』という意味で、相手を戒めたり、けなしたりする意味も持つ日本の俗語ですね」
「なるほどね」

「……天子さんへの手紙ですか?」

「うん。あいつKYよね」

「さ、さあ? それに通じないんじゃないですか?」

「あいつの性格からして絶対に調べるわよ」

学んだ表現を早速文面に活かす霊夢を見て、早苗は引き攣った笑みを浮かべた。

また壮絶な内容の手紙になりそうだ。

早苗は慌てて話題を切り替えた。

「そ、それより霊夢さん! さっきの弾幕ごっこ、見ていてくれましたか!?!」

ここは博麗神社である。

早苗は障子戸を開けた居間から一望出来る境内の真上で、先程まで弾幕ごっこを練り広げていたのだった。

「いや、見てなかったわ」

霊夢は顔も上げずに素っ気無く答えた。

早苗がガツクリと肩を落とす。

「私の新しいスペルカード見てなかったんですかあ? 折角、勝負にも勝ったのに!」

「おめでとう」

「全然、心が籠もってません!」

「いやあ、負けた負けた」

弾幕ごっこの相手をしていたマミゾウが、頭を掻きながらやって来る。

「お疲れ、マミゾウ」

「いや、まったくじゃ。骨が折れたわ。それにしても、おぬし強いのもう」

「そうでしょそうでしょ」

マミゾウの素直な称賛に、早苗は大げさに胸を張った。

実際のところ、その行為に負けたマミゾウを貶める意図はなく、興味なさげな霊夢に対するアピールのつもりだった。

しかし、当人は天子への手紙を書くのに集中している。

早苗は面白くなさそうに頬を膨らませた。

「霊夢さんは私と天子さん、どっちが大切なんですか!？」

「それ、どういう質問？」

「友達である私よりも、嫌いな相手への手紙の方に興味を向けるとはどういう見かど訊いているのです!？」

「……なんか誤解してない？ あたしはあいつへの嫌がらせに手を抜きたくないだけよ」

「つまり執着してるってことですよ。私の新しいスペルカードには興味ないくせに……」

「そりゃ興味ないけどさ」

「ほらあ、またそんなこと言う!？」

「どうしろつてのよ……」

霊夢は珍しく途方に暮れたような表情を浮かべた。

早苗はこれまで付き合ったことのないタイプの人間だった。

それでいて他人のように無視も出来ない。気を遣ってしまう。

早苗の言うとおり、友達だからだ。

言動では分かり辛い霊夢の心境を目敏く察したマミゾウは、二人のやりとりを傍らで楽しんでいた。

「いや、しかし本当に見事な弾幕じゃった。どうかな？ 霊夢が手紙を書き終えたら、二人で勝負をしてみるといのは？」

マミゾウのフォローに、早苗は眼を輝かせ、霊夢は面倒臭そうに眼を細めた。

「いいですね。霊夢さん、勝負です。今度こそは、私が勝ちますよ!？」

「分かったわよ、ちよつと待ってなさい」

「はい、待ちます!？」

「ああ、もう。面倒臭い」

「そんなこと言つて、どうせ今日は用事なんてないんでしょ?？」

「あるわよ。境内の掃除とか、家事とか——」

「ああ、全部儂がやつとくわい。今日は一日、友達と遊んできなさい」「マミゾウ、あんたはまた余計なことを——」

「霊夢さん！ 弾幕ごっこが終わったら、一緒にお出掛けしましょう！ 人里を案内して欲しいです！」

「……ああ、もう」

霊夢はため息を吐いた。

ここ一月ほどの間に、自分を取り巻く環境が劇的に変化したのを実感する。

ある日、突然自分の住む家を失った。

これまでの人生で一度も経験したことのない出来事や出会いがあった。

気がつけば、母や魔理沙以外に訪れる者などほとんどいなかった博麗神社には、いつの間にか居候が増え、来訪者も増えて、自分の周囲は賑やかになっていた。

これまで自分は先を見据えることの出来る冷静な人間だと思っていたが、それは子供ゆえの未熟な思い上がりだったのだろうか。

明日起こることさえ予想出来ない。

そして、そんな一日の始まりを想って、明日は何が起こるのか少し楽しみだと考えながら、眠りに就く最近の自分がある。

母に認められ、本当の意味で独立した人生を歩み始めた若き博麗の巫女、博麗霊夢。

人生の内で最も豊かな青春の日々を、彼女は無自覚に謳歌していた。

「人里は、まだ数えるくらいしか行ったことがないから楽しみです」

そして、東風谷早苗。幻想郷で新たな人生を歩み始めた、若き風祝である彼女もまた——。

「土地勘もないですし、やっぱり余所者ですから気が引けちゃって」

「博麗の巫女のとりなしがあれば、人里にも早く馴染めるし、信仰を集める活動もやりやすいだろうって？」

「霊夢さん、そんな捻くれた考え方しちやあいけませんよ」

「そういう打算は全然ないわけ？」

「……ちよびっと」

「だと思っただわ」

「で、でも誤解しないでください！ 霊夢さんと一緒に人里を回りた
いっていうのも本当なんです！」

「別に焦る必要はないでしょ。そもそも、あんた一番最初にこの神社
へ来た時、何て言っただか忘れたの？」

「いや、確かに信仰を集める使命も大切ですが、霊夢さんとも仲良くし
たいんです！」

「これから勝負する相手なの？」

「ライバルにもなりたいたいです！」

矛盾するような内容を、早苗は爽やかな笑顔で言い切った。

天狗の新聞などにより、虚実入り混じってはいるが、守矢神社の存
在は急速に人里で認知されつつある。

既に十分な実績によって幻想郷に権威が根付いた博麗神社と、突如
妖怪の山に現れた新進気鋭たる守矢神社。

しかしてその実態は、ただ『敵対』の一言では片付けられない、複
雑な関係が築かれつつあった。

「分らないわね。あんたも、守矢神社も」

「ライバルって、漫画みたいで燃えるじゃないですか。先代巫女様――
霊夢さんのお母さんと、神奈子様だって、そんな関係なんだし」

「母さんが？」

霊夢が眼つきを変えた。

「そういえば話に聞いたけど、あんたの所の神様と母さんは外の世界
で戦ったらしいわね」

「はい。私も直接見てはいないですけど、激戦だったらしいですよ。
しかも、神奈子様の方が負けてしまったとか」

「仕える神が負けて、早苗は不満じゃないの？」

「あの時は色々と事情が複雑でしたから。結果的に、先代様が勝った
おかげで私達は幻想郷に来ることが出来ました。それに、先代様は本
当に凄い人ですからね」

そう言う早苗の顔には、先代巫女への素直な尊敬の色が浮かんでいた。

早苗にとって、先代は憎むべき敵でも打倒すべき仇でもなく、純粋な恩人だった。

同じく尊敬する神の敗北という事実に対する無念は、先代の娘である霊夢を超えるという健全な向上心へと昇華されていた。

「神奈子様だって、負けたことを恨んでなんかいませんよ、きつと」
肝心の神奈子自身が、先代巫女との勝負の結果を引き摺っていないことも、早苗の心を明るくしていた。

幻想郷へ移り住んでからも、神奈子と諏訪子を含めた三人の間で外の世界での出来事は自然と話題に挙がる。

話の内容が先代に移った時、神奈子の顔はむしろ嬉しそうにも誇らしそうにも見えた。

「外の世界にいた時よりも、なんだか元気になったように思えます。先代様というライバルと競う為に頑張っているからですね、私のように！」

早苗の見解は、本人もそうと知らずに意外なほど真実を捉えていた。

「頑張る、ねえ……妖怪の山では天狗相手に大立ち回りしたそうじゃない？」

「まだまだこれからですよ。今日だって、守矢神社の更なる発展の為に、わざわざ神奈子様自身が出向かれていますから——」

神奈子が心の内に秘めた、静かに燻る火種を除いて。



そこは地獄であった。

正確にはかつて地獄であった場所だ。

旧地獄街道——地上を追いやられた妖怪達が集まり、地底の地獄跡に自然と出来上がった『旧い都』の一部である。

地上の光も音も届かない地底深くで、無数に連なる行灯が辺りを照

らし、行き交う妖怪達の喧騒が辺りを満たしている。まるで年中祭りをしているかのような賑やかさだった。活気と呼ぶには、些か物騒な空気や音が含まれた賑やかさである。しかし、その物騒さも長年地底に住む妖怪達には慣れ親しんだものとなっていた。

毎日吸う、空気のようなものだ。

もしも、その空気に異物が混ざったら。

この場所に場違いな者がひよつこりと迷い込んだなら。

それはすぐに分かる。

誰もが、肌や舌でそれを感じ取ることが出来る。

そういうものなのだ。

かつて、妖精を伴った一人の人間がここへ足を踏み入れた時も同じだった。

——そして今、あの時と同じことが起こっていた。

街道の入り口から、その違和感はゆっくりと伝播していった。

街の外からやって来た者がいる。

そいつは、余所者でありながら、我が物顔で道の真ん中を歩いていった。

この旧都で、そういった歩き方をする者は少ない。

喧嘩が日常茶飯事となっている場所である。自分の行く道を遮る者がいれば、それは喧嘩を始める十分な理由になる。

それゆえに、地獄の往来の真ん中を歩くのは、強者にだけ許された権利だった。

そいつは、それを、していた。

地獄の空気を肩で切り、真っ直ぐに前を見据え、口元には僅かな笑みさえ浮かんでいる。

自然と道が開いた。

暴力を日常手段とする旧都の妖怪達は、自分達の前を通り過ぎていく者の圧倒的な存在感と、その内に秘められた濃密な強者の気配を正確に感じ取ったのだ。

異質な存在感だった。どう見ても、そいつは妖怪ではない。

街道も半ばまで来た頃、変化が起こった。

そいつが向かう先の方で、同じように道をひしめいていた妖怪達が左右に分かれ始めたのである。

——自分と同じように、道の真ん中を歩いてくる者がいる。

——地獄の住人達が道を譲るような強者が。

そいつの笑みが、より一層深くなった。

牙を剥く、獣の笑みだった。

歩みは止まらない。

前から向かってくる気配に対して、挑むように堂々と歩を進めていく。

そして、丁度道の半ばで、その二人は鉢合わせた。

「鬼か」

「鬼だよ」

星熊勇儀は答えた。

「そういうあんたは、神か」

「如何にも、神だ」

地上からやって来た神——八坂神奈子は答えた。

「鬼よ、名を名乗れ」

「地獄に迷い込んだって風でもなさそうだ。その豪気な性格、神の中でもあんたは戦に携わる神かね」

「名を、名乗れと言った」

胸の前で腕を組みながら言い放つ神奈子の態度に、周囲の妖怪達が殺気立った。

勇儀は旧都でも一番の実力者であり、顔役でもある存在だ。

その勇儀を、明らかに格下扱いしている神奈子の態度が、旧都の住人達の敵意を煽らないわけがなかった。

しかし、そんな敵地同然の状況でも、神奈子は涼しげな笑みを保っている。

それを見て、勇儀も不快感など微塵も含んでいないような清々しい笑みで応えた。

「私は星熊勇儀つてもんだよ。あんたの名前も聞かせてもらえるかい

？」

「八坂神奈子」

「知らないね」

「鬼に神の肩書きや立場など、通じるとは思っていない」

「そりゃあそうだ。私も興味があるのは、あんたが何者かではなく、何をしにここへ来たってことだけだよ」

「地底世界というものがどういうものなのか、色々と見ておきたくてな」

「それだけかい？」

「そして、その地底を支配する妖怪に会いにきた」

その言葉に、周囲が一瞬ざわめいた。

地底で一番強い妖怪が誰かと訊かれれば、それは目の前にいる星熊勇儀だと全員が断言する。

しかし、地底を支配する妖怪が誰かと訊かれれば――。

「古明地さとり」

神奈子の口にした名前を聞いて、勇儀の片方の眉がほんの僅かに跳ねた。

「そうか。話に聞いたとおり、本当に奴なのか――」

神奈子が面白そうに笑った。

「この地底で一番強いのはどう見てもお前なのに、支配しているのは奴というわけだ」

「あんたは、さとりを知っているのかい？」

「知っているとも。奴が今、どういう状態にいるかもな」

「だったら、さつさと地上へ帰ることだ。あいつは今、余所者と会える状態じゃないよ」

「庇うのか？」

「何？」

「天下に名を馳せる妖怪たる鬼が、ちっぽけな覚妖怪の味方をしてい
るわけだ」

「そうだよ。あいつは、私の友達だからね」

「友……あの妖怪が、友か。面白いな。これは面白い」

「何が面白いんだい？」

「お前と同じことを言う人間がいたんだよ」

その言葉に、今度は勇儀の顔付きが変わった。

周囲の者達には伝わらない意味を、勇儀だけが察したのである。

短い会話の中で、その人間のことを表す情報や具体的な名前など少しも出てきていないのに、神奈子が思い浮かべていた人物と同じ姿が勇儀の脳裏にも自然と浮かんだのだ。

勇儀と神奈子。

種族も立場も全く違う二人の間に生まれた奇妙な共感だった。

二人を繋いだのは、一人の人間の存在だった。

「――へえ」

それまで神奈子の言動に一切動じず、穏やかに切り返していた勇儀の雰囲気が一瞬に変わった。

巨大な山が、晴天から嵐へと急に天候を変えたかのような変化である。

「そういうことか。なんとなくね、あんたが他人じゃないような気がしていたんだ。ようやく合点がいったよ」

「私もだ。お前とは、話を通じやすいと感じたよ」

「確かにね、余計な理屈はいらないだろう。あんたの気持ちが、よく分かるからね」

「そうか。ならば、手っ取り早く話を進めよう」

「いいとも」

周囲の妖怪達は、二人のやりとりを見守ることしか出来なかった。神奈子に向ける敵意はあれど、余計な手出しをしようと思う者は、もういない。

二人の会話は、それほどの緊迫感と、他者を寄せ付けられない独特の雰囲気を感じていたからだ。

「私の道を邪魔しているぞ。そこを通してもらおうか」

「断る。通りたければ、力づくで通れ」

互いに己の言い分を言い終えた。

途端、始まってしまった。

戦いが。

殺し合いが。

その門が、開いてしまった。

神奈子が組んでいた両腕を解いた瞬間、傍らに巨大な柱が一本突如出現した。

何も無い虚空から丸太のような柱が現れ、地響きを立てて神奈子のすぐ傍に突き立ったのだ。

表面を平たく削って多角形になるように加工し、注連縄を巻いた『御柱』である。

槍のように長い、同時に太い。手で掴むことは出来ず、腕で抱えるのがやっとの柱だ。棍棒として使うにしても巨大すぎる。

しかし、勇儀を含めた妖怪達は、それが神奈子の——神の武器なのだと直感した。

対する勇儀も、普段のように片手に盃など持たず、代わりに両手の拳を固く握り締めている。

それがもう、鬼にとつての武器も同然だ。

二人は、既に臨戦態勢に入ってしまったのだ。

——やるのか!?

周囲の者達は動揺した。

星熊勇儀が盃を持たず、本気で戦うのは、かつて地底に初めて先代巫女が現れた時以来である。

あの時と違うのは、相手の神奈子の実力を誰もが見誤っていない点である。

いけ好かない相手だが、強大な力を持つ神だということも理解している。

そんな二人が、本気で戦おうとしている。

——いいのか、本当に？

——あの勇儀が負けるはずがない。

——だが。

——とんでもないことになるぞ！

旧都では、暴れる者には暴れて迎えるのが礼儀だ。

暴力による問題と解決が日常に浸透している旧都の住人だからこそ、物事の度合いが正確に分かっているのだ。

そんな彼らが躊躇していた。

目の前で始まろうとしている戦いは、それほどの大事なのだ。

「一つ、提案があるんだがね」

勇儀が言った。

「聞こうか」

意外にも、神奈子は素直に応えた。

「このまま私とあんたが本気で戦えば、色々は無事ではすまないだろう。私達自身も、周りもね」

「そうだな」

「スペルカード・ルールって奴が、この地底でもようやく浸透してきたんだ。知ってるかい？ 弾幕ごっこ」

「ああ、八雲紫とやらに釘を刺されたよ。上手い方法だとも思う。私も何枚かスペルカードを作ったしね」

「私も、やってみるとこれがなかなか面白いもんだと思うようになったのさ」

「だが、ここの性分には合わなさそうだ」

「直接殴り合う方が好きな奴らが多いからね。極狭い身内の間では、未だに揉め事の解決にそういう方法を取っちゃいるよ」

「ふうん」

「だからね、ここで私が本気の決闘なんか見せちゃうと、折角広めたルールに重みがなくなっちゃうのさ。それじゃあ、地底の管理者であるさとりには、私の面子が立たない」

「言いたいことは、分かる」

「だがしかし、遊びのある勝負の仕方じゃあ収まらないだろう。お互いにね。それだけのこだわりがあるはずだ」

「あるな」

「そこでだ——お互いに本気で、一発だけ交換し合うって勝負はどうかね？」

そう言って、勇儀は自分の右拳を胸の前まで持ち上げた。

握り締められたそれは石、あるいは鋼が凝り固まったような、大きな塊だった。

勇儀の潔い提案に、神奈子は微笑した。

「いいだろう」

神奈子はあっさりと賛同した。

勝負の方法は決まった。

周囲が固唾を呑む中、今度こそ本当に二人が、一撃に全てを懸けた戦闘態勢に入る。

神と鬼。

果たして、どちらが上なのか。

もはや二人の内どちらが敵か味方かなど重要ではなく、ただその勝負の行方だけに、誰もが強く興味を引かれていた。

興味を持っていないのは、戦う当人達だけだった。

「不思議な気分だな」

一触即発の状況の中、お互いに緊張感が高まった状態にいるにも関わらず、勇儀は喋っていた。

口にした通り、自分でも不思議だった。

目の前の神が、かつてないほど強大な敵であることは確かなのに、何故自分で自分の集中を乱すような真似をしているのか。

「喧嘩の前だってのに、こんなに落ち着いちゃってる。気が昂ぶらない」

「気持ちは分かる」

神奈子もまたそれに応じた。

勝負の最中で、気が抜けているとも取れるような笑みが浮かんでいく。

「この勝負の結果に、意味などない」

「そうだね。所詮、私達はお互い、同じ人間に敗れた身だ。どちらが上か決めたところで、テッペンはまだ決まっちゃってるのさ」

「だが、それでもこだわることはある」

「そうとも。私の上は、あいつ一人でいい」

「なるほど。お前の立ち位置は、もう固まっているようだな」

「あんたは違うのかい？」

「今一度、あの人間と戦い、かつての勝敗を覆したい——とは、少し違
うかもしれない」

「へえ？」

「私が神だから、そう思うのかもしれないが」

「いずれにせよ、そこが私とあんたとの一番の違いってことだ」

会話を続けながらも、二人の纏う雰囲気は、帯電した空気が徐々に
膨らんでいくように、緊迫感を高めていく。

それが破裂する瞬間が、確実に近づいてきている。

それに気付きながら、二人は平然と言葉をやりとりしていた。

「星熊勇儀、お前にとって先代巫女とは何だ？」

「我が生涯の友。この身が滅ぶまで、私はいつの魂と共に在る」

「ならば、今ここで滅ぶがいい。■■■の魂は、我が下に仕える」

「……何？」

神奈子が最後に口にした言葉に、勇儀は一瞬気を取られた。

たった二文字の言葉である。

何らかの用語というよりは、誰かの名前のような響きがあった。

名前。

誰の名前なのか？

まさか、彼女のことを指しているのか——？

「おい、そいつはもしかして■■■のことか？」

「ほう、そうか。あいつはお前には、そう名乗ったのか」

「何だと!？」

「面白いなあ……本当に、お前という人間は面白いぞ！ 先代巫女—

—!!」

その瞬間、神奈子が仕掛けていた。

ほんの僅かに出遅れた勇儀が、対応する形になった。

お互い、渾身の力を込めた一撃が交差し合う。

同時の攻撃。

回避はない。

防御はしない。

目の前の存在を消すことだけを考えて繰り出した一撃が、互いの標的を捉える。

そして、爆発した。

比喩ではなく、二人の攻撃が交わった一点で、二つの力に圧迫された空気が弾けて、爆発を起こしたのだった。



「姉御！」

最初に勇儀に駆け寄ってきたのは、同じ鬼の仲間だった。

かつて萃香が起こした異変に参加し、生きて地底に戻ってきた数少ない鬼の一人だ。額に三本の角が生えている。

三本角は、瓦礫に埋まった勇儀を掘り起こそうとした。

勇儀の体が突っ込んだ家屋は完全に崩壊していたが、鬼の剛力に物を言わせて、邪魔な物をどかしていく。

遅れてやってきた他の妖怪達が、それを手伝った。

ここは、勇儀と神奈子が文字通り激突した地点から、遠く離れた旧都の端に位置する場所だった。

あの時の激突で、勇儀はここまで吹き飛ばされてきたのだ。

神奈子の方は、どうなったか分からない。

二つの力がぶつかり合った際に生じた閃光と衝撃に、周囲の眼が眩んだ一瞬で起こった出来事だった。

あの瞬間、二人は互いの攻撃を同時に受けた。

そして、二人の姿は同時に消し飛んでいた。

勇儀と同じように、神奈子もまた反対側へと遠く吹き飛ばされたのかもしれない。

しかし、それを確かめるよりも、勇儀を救う方が優先された。

「——待ちな」

瓦礫の中に突き刺さった巨大な御柱をどかそうと伸ばした手を、勇儀が掴んで止めた。

「そいつに触るな。火傷するぞ」

「姉御！ 大丈夫つすか!？」

「いや、すっげえ効いた」

自ら瓦礫を押しつけて体を起こした勇儀は、苦笑しながらも答えた。

勇儀の全身が見えるようになった途端、周囲の者達は息を呑んだ。

瓦礫の山に刺さっていたと思われた御柱は、その実、勇儀の腹を貫通して、彼女の体を壁に縫い付けていたのである。

勇儀の体格が大きいとはいえ、柱もまた巨大である。下腹に突き刺さったそれは、内臓のほとんどを押し潰していた。

妖怪であっても致命傷である。

鬼の中でも別格である勇儀だからこそ生きていられるような状態だった。

「この柱、強い神気を帯びているようだね。こいつ一本でデカイ結界の基点に出来るくらいの力が込められてやがる。お前ら、触るなよ」
勇儀は自力で柱を抜こうとしたが、ビクともしなかった。

それどころか、触れた手のひらが熱した鉄を触ったかのように、音を立てて焼け爛れた。

腹の傷口からも煙が上がっている。

「姉御、やばいっすよ！ 俺も手伝いますから、早く抜いちまわないと！」

「だから、やめろって。死ぬぞ」

「姉御の方が死んじまいますよー!」

「私は、この程度じゃ死なねえよ。この柱も、宿した力を失えば自然と消えるさ」

口元の血を拭って、大きなため息を吐く。

腹を貫かれたままで肩から力を抜くその仕草は、確かに余裕を感じさせた。

周囲の者達も、それでようやく安堵する。

「しかし、困ったな。私の力で、この柱の力を打ち消し続けたとしても、完全に消えるまで二日か三日は掛かるだろう。それまで身動きが取れないねえ」

勇儀は困ったように笑った。

「あの神様も大したもんだ。おい、お前ら。分かっているとと思うが、あいつを追うなよ。敵う相手じゃない」

「姉御は、どうなんすか？ あの勝負、勝ったと思いますか？」

「どうかね。負けたとは思わないが……まっ、痛み分けてことにしとくか」

答えながら、勇儀は腹から伸びる柱を軽く叩いた。

傷口を焼く熱と痛みは凄まじかったが、それを表情には欠片も出さない。

やせ我慢ではなかった。

少なくとも、勇儀自身はそう信じきっていた。

この程度の傷では、自分を揺るがすに値しない。

「八坂神奈子。あいつは強いが——」

下腹を貫く傷よりも上にある、胸の古傷に触れながら、勇儀は不敵に笑った。

「先代には及ばない」

——奴の力では、かつて先代が刻んだこの胸の傷を上塗りすることは出来ない。

それが勇儀にとって、絶対の根拠だった。

「姉御。俺達に、他に何か出来ることはありませんか？」

「じゃあ、酒をじゃんじゃん持ってこい」

「酒っすか？」

「おう、酒だ。どうせ、ここからはしばらく動けないんだ。酒を飲みながら暇を潰すのさ」

「なるほど、分かりました。——おい、てめえら！ 姉御が酒を御所望だ！……ここで宴会をやるぞ！」

「おお！」

「酒だ！ ありったけの酒を持ってこい！」

「食い物もだ！」

「さっきの喧嘩は、いい着になるぞお！」

そういうことになった。

にわかに周囲が騒ぎ立つのを眺めながら、勇儀は吹き飛ばした神奈子の行方を僅かに案じていた。

その身を案じていたのではない。

おそらく、自分と同じように生きているであろう彼女のその後の動向を案じたのだ。

最初、神奈子が進んでいた方向は真っ直ぐに——地霊殿の方向だった。

それを、来た道を引き返すように殴り飛ばした。

現在の神奈子は、地霊殿とは正反対の方向にいるはずである。

——これで、あの神がさとり達と接触しなくなればいいが。

しかし、今の状態では、これ以上どうすることも出来なかった。



勇儀の一撃を受けた神奈子は、旧都の外まで吹き飛ばされ、地底の岩壁に叩きつけられていた。

拳を受けた箇所は、奇しくも勇儀と同じ下腹である。

打撃というよりも、腹で何かが爆発したかのように服と肉が抉られていた。

「実体を保てるというの、考えものだな……っ」

神奈子は血と共に悪態を吐き出した。

外の世界とは違い、幻想郷では神としての姿形を自然な状態として維持出来る。

しかし、肉体を持つということは同時に傷や痛みを抱えることと同義なのだ。

勇儀の攻撃は、神奈子に対して大きなダメージを与えていた。

「先んじていなければ、胴体を両断されていた……」

勇儀の拳は、神奈子の肉体に直接触れてはいなかった。

神奈子の御柱が先に突き刺さり、拳に収束していた力もほんの僅かだが緩んだ。

派手に吹き飛ばされはしたが、それは威力の分散を意味していた。

それでも強力な一撃であったことに間違いはない。

半ば崩れた壁にもたれ掛かったまま、神奈子は未だに立ち上がるこ
とが出来ないのだった。

「星熊勇儀。確かにお前は強い——」

神奈子は血塗れの口元を、無理矢理笑みの形に歪めた。

「だが、先代には劣る」

——お前の力では、先代が刻んだこの胸の痛みを上塗りすることは
出来ない。

だから、私はお前には敗北しない。

それが神奈子の抱く、絶対の根拠だった。

しかし、気力は萎えずとも、体がそれについてはいかない。

神奈子は少しでもダメージを回復する為に、力を抜いて、壁に背を
預けた。

しばらく動くことは出来そうにないが、考えることは幾らでもあ
る。

「そうか。先代は、あれに勝ったのか」

思い浮かべるのは、やはり先代巫女のことだった。

先程の勝負、先代ならばどう戦っただろうか？

渾身の一撃をぶつけ合う——それは人外存在に許された、死を恐
れぬ、ある意味傲慢な戦い方だ。

人間である先代巫女ならば、きっと違う戦い方をする。

あんな力任せの攻撃など、容易く受け流して、己の一撃のみを确实
に当ててくるに違いない。

妖怪が生来持つ力ではなく、信仰に大きく左右される神の力でもな
い、己の半生を懸けて磨き上げた技をぶつけてくるのだ。

なるほど。

負けない。

そんな先代が、あの鬼に負けるはずがない。

神奈子は疑いようもなく納得していた。

「さすがだ、先代。それでこそ、私を倒した人間に相応しい——」

思わず洩れた呟きは、誇らしげですらあった。

「しかし、■■■■か……■■■■ではなく」

神奈子は二つの名前を反芻した。

一つは、つい先程勇儀から聞き取ったもの。

そして、もう一つは外の世界で偶然聞き取ったものである。

いずれも、同じ一人の人間——先代巫女——を指す名前のはずだった。

どちらが正しいのか。

あるいは、どちらも正しいのか。

「まだまだ秘めたものがありそうだな、先代」

外の世界で聞いた名前。

それは先代に殺される寸前のことだった。

あの時、先代が正気に戻る切っ掛けとなったのが、陰陽玉から聞こえた古明地さとの呼び掛けだった。

そこで、あの■■■■という名前が出たのだ。

「鍵を握るのは、やはりさとりか……」

先代の行動原理には、常にさとの存在があった。

先代が幻想郷へ戻ろうと奔走していたのは、さとりを救う為。

先代が自分と戦うことに迷っていたのも、さとりを案じた為。

そして、先代が正気を失い、同時に正気を取り戻した切っ掛けにもさとの存在が関わっていた。

——先代巫女と古明地さとりには、特別な繋がりがある。

神奈子は、地底を訪れる前から抱いていた自身の考えが正しいことに、確かな手応えを感じた。

全ては古明地さとりという妖怪の存在から始まる。

先代巫女という人間の全てを曝け出す為に。

彼女の抱える秘密、外の世界で見せた力の正体、それらを含めた全てを暴き、そしてその全てを手に入れる。

「必ず、お前を私の物にしてみせるぞ。先代イ——！」

神奈子の胸に刻まれた傷痕の奥で、あの日先代の点けた小さな火種が、絶えることなく燻り続けていた。



霊鳥路空は地底を彷徨っていた。

住処である地霊殿からも、仕事場である灼熱地獄跡からも遠ざかり、旧都すら通り過ぎて、薄暗い地底の空間を行く先も定めずにフラフラと飛んでいたのである。

一体、何時からこんなことをしているのか、もう自分でも分からな
い。

何時まで続けるつもりなのかも。

心ここに在らずの状態で、空は彷徨っていた。

自分が、何をすべきなのか分からなかった。

もちろん、課せられた仕事はある。

それをやるべきなのだと分かっている。

それが結果的にさとの役に立つのだと分かっている。

しかし、その仕事はずっと昔から変わらず自分が続けてきたこと
だ。

それを繰り返しているだけでは、何も変わらない。

さとりが危険な目に遭った時、何も出来なかった自分と。

これまでの自分を変えたかった。

これまでの弱い自分を変えなければいけないと思った。

しかし、それが具体的にどういう方法なのか、どういう道なのか、ま
るで思いつかない。

頭の悪い自分が、心底嫌になった。

嫌気が差して、気がつけば飛び出していた。

そして、辿り着いたのだ——無意識に、その場所へ。

「——何の用だ？」

不意の呼び掛けに、空は我に返った。

「私を追ってきた、旧都の妖怪か？」

「うにゅ!？」

そこにいたのは、空がこれまで見たこともない存在だった。

妖怪ではない。しかし、人間でもない。

深く傷ついているが、それでも圧倒的な力と気配は少しも揺るがない存在である。

「……なんだ、違うのか。ならば消えろ」

その存在は、興味を失ったかのように空から視線を逸らした。

「あ、あなたは……誰？」

「私はただの神だよ」

「神様!？」

「そうだ。お前は何だ？ 名を名乗れ」

「わたしは、地獄鳥の霊鳥路空……です」

「ふん。自称だとすれば、身の丈に似合わぬ大層な名前だな」

「ち、違うよ！ さとり様につけてもらった、立派な名前だもん！」

神の存在感に気圧されながらも、空は必死で言い返す。

その言葉に、神は目付きを変えた。

何かに気付いたような表情だった。

気にも留めていなかった些事が、重要な核心に関わっていた。

「——そうか。貴様、あの時古明地さとの傍にいた妖怪だな？」

口元に笑みが浮かぶ。

蛇のような笑みだった。

「おい、貴様。何か悩みがあるな？」

「えっ!? わ、分かるの……?」

「分かるさ、私は神だからね。悩む者、迷う者の願いを聞くのが仕事だ」

「願いを……?」

苦悩に蝕まれていた空の心に、光明が差した。

「……本当に、お願いを聞いてくれるの?」

「もちろんだとも」

迷い子を導くように、神は言った。

「お前の願いを言ってみなさい——詳しくな」



——風見幽香は夢を見る。

その夢を何時から見るようになったのかは覚えていない。一年前か、十年前か、あるいは百年以上前からずっと繰り返している夢なのかもしれない。

それとも、つい昨日見た夢なのか。

現実とは違い、不鮮明で不安定な夢の輪郭を掴むことは出来ない。それが幽香を僅かに苛立たせる。

——風見幽香は夢を見る。

その夢の中で、幽香は見知らぬ館に住んでいた。

現実では見たこともない、記憶にない館のはずなのに、その全貌が夢の中で見れるのである。

その館には住人が、三人いた。

いずれも人間ではない。

一人は、幼い容姿をした金髪の少女。

一人は、白い帽子を被った同じく金髪の少女。

一人は、館の主人である緑髪の女。

驚いたことに、三人目の女は自分と同じ顔をしていた。

そうだ。信じ難いことに、その女は自分だったのだ。

風見幽香。

いや、違う。

ただの幽香。

風見幽香は、夢の中で自分ではない自分を見ていた。

——風見幽香は夢を見る。

夢の中の自分は、現実の自分とかけ離れていた。

強者としての気迫はなく、のんびりとしており、何を考えているのか分からない間の抜けた表情を浮かべている。

それが許せないわけではない。

髪は長く伸ばし、服装もだらしない寝巻き姿でいることが多い。

それが許せないわけではない。

名前も知らない他の住人二人と、当たり前のように共に暮らしている。

分からなくなる。

目に見えるもの全てが曖昧になっていく感覚に襲われる時がある。夢の中の自分が本物なのだとしたら、今在る自分は一体何だというのか。

そういった疑問が、常に苛立ちとなつて胸の奥で燻っていた。

自分に関わるもの全てが煩わしく感じる時があった。

踏み締める大地さえも、不動とは思えない。

世界そのものが、酷く不安定で、脆く、無価値に思えてしまう時がある。

だから、幽香はいつも一人だった。

一人で、花を育てて生きてきた。

自分を見る者には、唯一不変である己の強さを見せ付けた。

花の中でも、特に向日葵が好きだった。

何時でも真っ直ぐに、太陽に顔を向けて生き続ける花。

どんな時でも日は昇り、沈み、そしてまた昇る。

それは日々変わらず繰り返される、世界の安定した姿だ。

だから、幽香は向日葵が好きだった。

向日葵に囲まれて過ごせば、安心して夢から覚めることが出来た。

——風見幽香は夢を見続ける。

そして、ある日。

一人の人間と出会った。

——風見幽香は夢を見ていた。

◆ 「アナタが風見幽香ね」

それは問い掛けというよりも、確認に近かった。

目の前の魔法使いは、自分のことを知っている。しかも、十分に風見幽香という妖怪を調べ上げている。

この太陽の畑にやって来たことから、それは明らかだ。

自分の領域に足を踏み入れることがどういいう意味を持つのか、全て

理解した上でやっていることなのだろう。

「ええ、そうよ。そういう貴女は？」

幽香は微笑みながら訊ねた。

「アリスよ。アリス＝マーガトロイド」

「名前くらいならば、人里で聞いたことがあるわ。人形劇をやっているらしいわね」

「何処かで会ったことはないかしら？」

「……それって普通は私の方がするような質問じゃない？」

アリスの不思議な質問に、幽香は意図が読めず、訝しげな表情を浮かべた。

相手は、自分のことを事前に調べているはずである。

出会ったことがあるかどうかなど、その段階で気付くはずだ。

アリスの質問は、まるで自分の方に心当たりがないか期待しているかのようなだった。

「まあ、会ったことはないわね。これが初対面よ」

「そう……残念だわ」

「妙な会話をする奴ね。貴女は、一体何が目的でやって来たのかしら？」

幽香とアリス。

二人は太陽の畑の前で対峙していた。

天気良かったので、のんびりと歩きながら向日葵を眺めていた幽香の所へ、突然アリスが現れたのである。

先程も言ったとおり、アリスとはこれが初対面だった。

そもそも、この場所には誰かが迷い込むことはあれど、意図して入り込むことはほとんどない。

風見幽香の住処として、恐れられているからだ。

つまり、アリスは確固たる目的を持って、幽香に会いに来たということになる。

「そこが少しだけ気になるわ」

幽香は改めて、目の前の人物を観察した。

右手に大きなトランクを一つぶら下げているが、それ以外に武装の

可能性がある荷物は持っていないし、自分に対する敵意はもちろん警戒さえ感じられない。

かといって、友好的な雰囲気でもなかった。人形めいた気配の希薄さの中で、明確な意志を宿した瞳だけが輝いている。

何を考えているのか、分からない。

それが幽香の判断を慎重なものにしていた。

「私が興味を持っている内に話した方がいいわよ？」

しかし、それも幽香にとっては気まぐれの範疇にある慎重さである。

話が進まないのならば、無視するか、殺してもいい。

その程度に考えていた。

「では、話させてもらおうわ」

「ええ、どうぞ。飽きるまでは聞いてあげる」

アリスは幽香をじつと見据えながら、話を切り出した。

「私はアナタを知る以前から、風見幽香という名前に——正確には『幽香』という名前に覚えがあったわ」

「へえ、だからあんな質問をしたのね」

「そうよ」

「でも、私が貴女とはもちろん、貴女も私と出会ったことはなかった。おかしい話ね」

「おかしいといえば、この世界そのものがおかしいわ」

「話が急に大きくなったわね」

「アナタはないのかしら？」

「なんですって？」

「この世界そのものに、違和感を感じたことが」

言葉に詰まった。

その時、幽香は間違いなく動揺していた。

自分が見る夢について、誰にも話したことはない。

しかし、それをアリスは知っているような気がしたのだ。

「私は、ある」

アリスは続けた。

「私は時折夢を見るわ。私ではない私が、この世界ではない場所で生きている夢よ。そこには私が会ったことのないはずの人がいて、私の名を呼び、話しかけていたわ」

「見覚えのある人物もいた。『靈夢』や『魔理沙』と呼ばれる少女よ。私は幻想郷で生きる彼女達と接触し、観察したけれど、やはり似通っているだけで同一人物ではなかった」

「考えれば考えるほど、思い出そうとすればするほど、私の記憶は輪郭と境界を失っていく。正しいのは夢の方なのか、それとも現実の方なのか……」

「私は、それを確かめようと思っているわ」

アリスの話を、幽香は黙って聞いていた。

「……それで、具体的にはどうしたいの？」

幽香は抑揚のない声で訊ねた。

いつの間にか口元の笑みは消え、無表情になっている。

「アナタには、私に協力してもらいたいと考えているわ」

「協力？」

「分かっているわ。アナタも、夢を見るんでしょう？」

「……ええ、そうね。貴女の言い分にも、心当たりがあるわ」

「ならば、夢から覚めた時の不安も分かるはず。アナタの場合は、苛立ちの方が強いかもしれないけど」

「この世界が何なのか？ 私達が本当に生きべき世界はどちらなのか？ ——アナタも知りたいのではないかしら？」

幽香はしばらくの間、口を開かなかった。

アリスの話し方は、声に感情こそ込められていなかったものの、何処か自分の心を煽っているように感じられた。

実際に、そういった意図があるのだろう。

それが真実への興味にせよ、苛立ちにせよ、幽香をこの場から動かすことが出来ればアリスの目論見は成功である。

アリスの問いに、幽香はまだ答えない。

長い時間、黙り込んだまま前を見据えていた。

何時間も経ったわけではないが、ただ返答を待つだけの状態では酷く長く感じる時間が経った。

アリスは焦れず、じつと答えを待った。

「——驚いたわ」

おもむろに、幽香が口を開いた。

言葉の通り、本当に驚いたような表情になっていた。

「アリス。貴女の指摘したことは全て正しいわ。私がずっと気になっていた疑問を全部言い当てている」

「そう」

「だからね、少し真剣に考えてみたのよ。貴女の提案に乗って、協力をしようかどうか。この世界の真実がどうなっているのか。——そしてたらね、ふふつ、本当にビックリよ」

幽香は笑いを堪えるように俯き、小さく肩を震わせた後、改めてゆっくりと顔を上げた。

「全然興味がないのよ、私」

その顔には、初めてアリスと対峙した時と同じ、そして普段通りの笑みが浮かんでいた。

まさに風見幽香の微笑だった。

「いつの間にか、自分でも驚くくらいどうでもよくなっていたわ。この世界が夢か現実かなんて、微塵も確かめる気が湧かない」

アリスはじつと幽香の目を見据え、その言葉が嘘やブラフではないか見極めようとした。

しかし、それは無駄に終わった。

幽香は本気で言っている。

「世界の真実は、貴女一人で暴きなさい。さようなら、アリスⅡマーガトロイド」

「この世界は一つの劇場なのかもしれない。そして、私達は舞台を演

じる人形なのかもしれない。それでもアナタは何も疑問を感じず、不満も抱かないというの?」

「さっきも言ったでしょう? 私はね、そんなことはどうでもいいのよ」

幽香の声に迷いはなかった。

「この世界が夢だろうが、劇場だろうが、私にとっては大した違いはない。私はここに立っている。そして——」

幽香の笑みが、一瞬牙を剥く獣のそれに変わった。

「同じ大地に、先代巫女が立っている」

「——」

「今の私にとってはね、それでもう十分に意味のあることなのよ。私の視線が、声が、手が、届く場所に奴がいる。だったら、私はこの世界でいい。私が生きる世界は『此処』でいい」

「……だけど、先代巫女はいずれ死ぬでしょう?」

「その通りよ、私が必ず殺すわ。でも、絶対に勝てる保証なんてないことくらい分かってる。そして、その時は死によつて私の世界が終わるだけよ」

「その考え方は矛盾しているわ」

「貴女にとってはそうかもね。私にとってはそうではない」

「——」

「確かなことは、いずれ私と先代が戦う日が来るということ。その日まで、私の世界は続く。それだけでいい。それ以外の真実に、私は興味はないわ」

それで全てを言い終えたかのように、幽香は小さく息を吐いた。

アリスを見る瞳には、もはや一切の感情が浮かんでいない。

本当に、完全に興味を失くしていた。

幽香は踵を返し、自身の家に戻ろうとした。

「なるほど。アナタの回答は把握したわ」

小さく呟いたアリスの右手の中で、ひとりでにトランクが開いた。

「しかし、理解は出来ないし、了承も出来ない。アナタには、私に協力してもらおう」

「——力づくというわけね。分かりやすくいいわ」
幽香は楽しげに微笑んだ。

アリスのトランクから出てきた物は、複数の人形のパーツだった。バラバラだったそれらが、アリスの左手から伸びる魔力の糸によって繋がれ、人の形を成していく。

幽香には、アリスの意図が未だに読めない。

目の前で形成されていく人形が単純な戦闘の為の物なのか、あるいはまた別の思惑があるのか。

「私も分かりやすく対応出来る」

しかし、幽香はそれらに頓着しなかった。

普段通りの優雅な足取りで、ゆつくりとアリスとの間合いを詰めていく。

「私の手が届く範囲まで近づいたら、その瞬間殺すわ。それまでに逃げるのなら、見逃してあげる」

幽香は言った通りのことを偽りなく実行する為に、歩を進めていった。

「まずは一人目——」

アリスの眩ぎに応えるように、幽香の目の前で一体の人形が完成した。

小柄な体格の人形だった。

金色の髪に白いリボンを結んだ、幼い少女の容姿。

背中には羽が生えている。

その少女は、幽香に向けて屈託のない笑顔を浮かべると、抱擁を求めるように両手を広げて駆け寄ってきた。

幽香の脳裏に、鮮烈な記憶が蘇った。

——くるみ。

それが目の前の少女の名前なのだ、何の根拠もなく確信した。
夢で見た、一緒に館に住んでいた少女の名前が、今ようやく思い出せたのだ。

駆け寄るくるみに、幽香もまた手を伸ばした。

「さようなら、くるみ」

そして、無造作に人形の頭を握り潰した。

血肉の感触はなく、ただ破片だけがパラパラと指の隙間から落ちていく。

幽香は歩みを一瞬も止めることなく進んだ。

「では、二人目——」

再び、幽香の前で一体の人形が立ち塞がった。

くるみよりも長身で、同じ金髪だがこちらは巻き毛のショートカットである。

白い帽子を被り、肩には巨大な鎌を担いでいる。

しかし、その刃を幽香に向けることはなく、代わりに優しい笑顔を浮かべていた。

夢で見た、二人目の少女である。

——エリー。

幽香の脳裏に、再び蘇る記憶があった。

ああ、そうだ。

先程のくるみと、目の前のエリーと、そして自分の三人で暮らしていた。

館の名前は『夢幻館』

ここではない何処かにあった館だ。

そこで自分達は暮らしていた。

その世界で自分は生きていた。

全てを思い出した幽香は、エリーに優しく微笑み返した。

「お別れよ、エリー」

手刀の一閃で、首を斬り飛ばした。

地面に転がった頭には、顔はもちろん髪すらなく、ただの人形のパーツに戻っていた。

幽香はそのまま進み続けた。

「三人目——」

既に当初の半分以下にまで距離の縮まった幽香とアリスの間に、再度人形が立ち塞がる。

もはや言うまでもない。

三体目の人形は、幽香自身だった。

同じ顔。

同じ体。

唯一違う、長い緑髪。

かつて別の世界で生きていた自分の姿。

記憶にある、もう一人の自分。

躊躇いはなかった。

「お前は私じゃない」

幽香は目の前の存在を、文字通り消し飛ばした。

歩みは止まらない。

幽香は進み続ける。

躊躇いなく。

迷いもなく。

アリスに告げた言葉のまま、幽香は自身の記憶にさえ囚われず、ただ一つの目的の為に突き進んでいるのだった。

「もう、誰も私を止めることは出来ないわ」

あと三歩。

アリスに近づくにつれて、幽香の纏う空気が鋭利な刃のようなもの
に変わっていく。

あと二歩。

その笑みも種類を変え、瞳には殺気が宿る。

あと一歩。

そして、幽香はアリスの命を筆り取るべく手を伸ばし――。

「本命の四人目よ――」

手が、止まった。

足もまた止まった。

間合いギリギリで出現した最後の人形を前にして、遂に幽香の歩み
は止まったのだった。

幽香は完全に意表を突かれた表情で、その人形を見つめていた。

「先代……」

それは本物と見紛うばかりに精巧に再現された先代巫女の人形

だった。

そうだ。

目の前のこれは、人形だ。

生きた気配はしない、ただ見た目だけを似せた贗物だ。

先程のように、目の前の人形を破壊し、そして背後に隠れたふざけた人形師を八つ裂きにしてやればいい。

幽香は、そう考えた。

そして——考えるだけで、実行に移すことは出来なかった。

「やはり、アナタにこの人形を破壊することは出来ないようね」
アリスは言った。

最初の時と同じ、感情の籠もらない平坦な声だった。

幽香は諦めたように肩の力を抜いた。

「……どうやら、最初から全て見切られていたようね」

「これが切り札だったわ」

「つまり、予想の範囲内だったということでしょう」

くるみにも、エリーにも、そして自分自身にも幽香を止めることは出来ない、アリスは読んでいた。

そして、先代の人形を最初から切り札として用意していたのだ。

確かに、自分にはこの人形を壊すことは出来ない。

もし、それをすれば、自分は少なからず満足してしまうだろう。

例えそういった意識がなくとも、これまで打ち勝つことだけを生きがいにしてきた相手の姿似を壊すことで、長年抱き続けてきた渴望をほんの僅かとはいえ癒してしまう。

それは絶対に許されることではなかった。

人形で自らを慰めるといふ、度し難い愚かさだけではない。

この渇きや飢えこそが、先代と戦う時には力となる。己の生涯で最大の敵を打倒する為に、自らが持ち得る全ての力を、ほんの僅かでも無駄に消費するわけにはいかなかった。

それすらも惜しんでこそ、全身全霊である。

それでも勝てるとは限らない。

だからこそ、手は出せない。

アリスが、それを何処まで見抜いていたかは分からない。
しかし、確かに、

——一本取られた。

幽香は素直にそれを認めた。

「風見幽香。先程の続きよ」

失意の間隙を突くように、アリスは話を滑り込ませた。

「アナタがこの世界に意義を見出したとしても、私は違う。私はこの世界の真実を暴きたい。その為の具体的な方針と計画は、もう定めている」

「そう。それで？」

「鍵を握るのは——古明地さとり。私は、まず彼女に会う必要があると考えているわ」

「……さとり、ですって？」

「そうよ。御執心な先代巫女と深い関わりがある、謎多き地底の管理者よ」

ようやく興味を僅かに取り戻した幽香の瞳を見返しながら、アリスは言った。

「アナタにとっても興味深い真実が明らかになるかもね。どう？」

人形のように変化のなかった表情を、初めて不敵な笑みに変えて。

「私と一緒に地底潜入と洒落込んでみない——？」

其の五十四 「地獄鴉」

「ねえ、チルノ。強くなって、何の意味があるのかな？」

咲夜特製のアイスパフェと格闘しているチルノをぼんやりと眺めながら、フランドールは唐突に口を開いた。

同じように口を開き、スプーンいっぱいクリームを舌に乗せようとしていたチルノは、少し葛藤してから口を閉じた。

フランドールの質問は何の脈絡もないものだったが、その目付きだけは真剣だった。

二人と同じテーブルを囲む橙が、質問の意図を測りかねて、眉を顰ひそめた。

「それって、チルノとの修行がいい加減嫌になったってこと？」

「どういう意味よ!？」

橙の言葉に、チルノの方が噛み付いた。

フランドールが慌てて首を横に振る。

「そんなことないよ。こうやって皆で集まって、一緒に遊んだり、修行したりするのはすごく楽しいよ」

「実益があるかどうかは分からないけどね。相変わらず修行って言っても、普通に弾幕ごっこするだけだし、それどころかこうやってオヤツをたかる形になっちゃってるし」

「あはは、気にしないでよ。わたしなんて、咲夜にお願いしただけなんだからさ」

「このパフェってやつ、ンマイわねえ〜！ あたい、気に入った！」

「そう言ってくれれば、咲夜も喜ぶよ」

「遠慮ってものも、少しは知ってほしいけどね」

チルノの遠慮のない言動を、フランドールが素直に楽しみ、橙が常識的な観点からフォローに回る。

三人はすっかり気心の知れた仲間となっていた。

「別に修行が不満なわけじゃないの。ただね、そうして強くなった後で、何の意味があるのかなって思っちゃって……」

察しの良い橙は、フランドールの言いたいことを理解した。

彼女の心に引つ掛かっているのは、この場にはいない空うつほを含めて自分達四人が遭遇した、妖怪の山での出来事である。

先代巫女と空の嘆く声が、橙の記憶にもまだ鮮明に残っていた。

「わたしが最初に強くなるうって思ったのは、自分の力をコントロールする為だったの。暴走すれば周りを傷つけて、だけど肝心な時に敵と戦えない、そんな弱い自分を変えたかった」

フランドールは、まだ一度も手をつけていない自分のパフェをじつと見つめた。

アイスの部分が溶けかかっている。

「自分の能力や精神が、まだまだ危ういものだって分かってる。わたしにきっかけを与えてくれた小母様やお姉様、他の皆の為にも、わたしは強くなるなくっちゃいけない。それは……分かってる」
でも、と唇を噛み締める。

「あの時、わたしは何も出来なかった。わたしの力は役立たずだった」
あらゆるものを破壊出来る——それが一体どれほど凄惨せいせんであろう。

凄惨せいせんというのには、意味があるということだ。

この力に意味なんてない。

親しい人達の涙を止めることも、悲しみを消すことも出来なかった。

全くの無力な存在だった。

先代と空の涙と声が、心に焼き付いて離れなかった。

二人が救われたのは、誰の力でもない。

偶然や奇跡と呼ばれる結果だった。

「もう二度とあんな光景を見たくないのに、どうすればいいのか分からない。もし、またあんなことが目の前で起こった時、わたしはどうすればいいのか……」

フランドールは震える声で呟いた。

「わたしが強くなれば、あんな出来事は止められる？」

その切実な問い掛けに、橙は答えることが出来なかった。

フランドールが理屈を求めているのではないと分かっていた。頭

のいい彼女は、もうそれくらい理解している。

自分では、納得のいく言葉を返してやることができない。

橙は助けを求めるように、チルノの方を見た。

普段は散々考え無しの言動を馬鹿にしているが、本当に芯のある言葉を持つているのはチルノだと認めていた。

フランドールが話している間、じっと考え込んでいたチルノはおもむろに閉じていた目を開いた。

「ごめん、フラン。あたいにも分かんない」

「……そつか。チルノにも分かんないか」

「あたいには、強いと便利だつてことくらいしか分かんない」

落胆の声を聞き流しながら、チルノは続けた。

「便利？」

「うん。強いつてことは、便利なことだ」

「それは、敵を倒せるから？」

「それもあるけど、それだけじゃないよ。例えば、地底の妖怪にお師匠がバカにされた時、あたいがもつと強かったら、お師匠の代わりにもつと怒つてあげることが出来た。霊夢との勝負だつて勝てたかもしれない。まあ、あれはあたいが間違つてたんだけどね。他にも、てると一緒に戦つた時とかもつと上手くやれたかもしれないわ」

思いつくままに例を挙げていくチルノの話を、フランドールと橙は半分以上理解出来なかった。

おそらく実体験に基づく話なのだろう。しかし、主観で語るその内容は説明不足で拙く、十分に伝わらない。

それでも、不思議と聞き入ってしまう内容だった。

地底での話。

霊夢との話。

てるとの話。

どれも、橙とフランドールは知らない。

チルノだけが経験した話。

長年地下に閉じ籠つて外の世界を知らなかったフランドールと、妖怪として若輩である橙が、自らの浅い経験と詰め込んだ知識だけで判

断して空回りする苦悩に、重く実感が響く話だった。

知識や理屈の話ではない。

これは貴重な経験談なのだ。

この三人の中で、最も力や知恵で劣りながら、最も多くの経験を積んでいるのはチルノだった。

「だから、あたいがサイキョーを目指すのは、これまで出来なかったことや失敗したことを、これからはちゃんと上手くやるためで……それから、ええつと、だからあたいはもっと強くなって、あの時のお師匠やお空のことも——」

だんだんと自分の言いたいことが整理出来なくなったのか、チルノの声は小さくなっていった。

「ご、ごめん。なんだかこんがらがってきたわ。やっぱり強くなるだけじゃダメなの……かな？ あたいはバカだから、うまく話せない。強くなるよりも、もっと賢くなった方がいいのかもしれない」

「ううん。そんなことないよ」

フランドールは力強く首を振った。

「チルノの話、すつごく為になった！」

「そう？ でも、ごめん。あたい、今度はちゃんと答えられるように勉強してくるわ」

「うん、そうだね。分からなかったら、勉強すればいいんだもんね」

「そうそう、けーねに教えてもらうんだ！」

フランドールの顔にはもはや苦悩はなく、晴れ晴れとしていた。

釣られるようにチルノも笑う。

二人の笑顔を横から眺める橙は、小さくため息を吐いた。その口元には、やはり苦笑が浮かんでいた。

「分からなかったら人にきく、だもんね」

「そのとおり！」



「レミリアおせうさま。あたくし、傷心ですの」

細長いストローを啜えて、小悪魔はじつとレミリアを見つめていた。

「私は今の状況が意味不明だわ」

レミリアもまた同じようにストローを啜えて、睨むように目の前を睨みつけている。

小悪魔から眼を背けないのは、負けたような気がするのと、距離が近すぎて視線の置き場が他にないからだだった。

二本のストローが、一個のグラスに挿されている。

鮮やかな青色の液体が満たされている。

咲夜に作らせた『ブルーハワイ』と呼ばれる外の世界のカクテルだった。

色合いから『ブルー』の意味は分かる。しかし『ハワイ』とは何なのか？ レミリアは疑問と興味を持った。

そして、実物を前にした今も意味は分からない。

テーブルを挟んで、こうして小悪魔と顔をつき合わせている状況も。

「お嬢様がブルーハワイというものを知りたいと仰ったんじゃないですか」

「それで、何であんたが私の飲み物にストローを突っ込んで、横取りしてんのよ？」

「横取りじゃありませんよ。仲睦まじく分け合ってるんです。これが正しい飲み方なんですよ」

「嘘つけ。私のだ、飲むな」

示し合わせたように、二人は同時にストローを吸った。

「……それで、何が傷心なの？」

「あらん、聞いてくれるのダーリン？」

「はっ倒すぞ」

「ごめんなさい。でも、お嬢様なら私の気持ちも分かってくれと思
います」

「一ミリも分からない」

「分かりますよ。なにせ、愛する妹様のことですから」

「お前の妹じゃない」

レミリアは口を尖らせて、小悪魔は楽しそうに笑って、また同時にストローを吸った。

「……ありや、一体何してるんだ？」

離れた別のテーブルで、二人のやりとりを眺めていた魔理沙が呆れたように呟いた。

同席しているパチュリーが手元の魔道書から視線を外して一瞥し、

「さあ？ 遊んでるんじゃない」

適当に答えた。

「あれで、あの二人って結構仲いいから」

「とてもそうは見えないけどなあ……」

四人がいる場所は、紅魔館の地下図書館の一角だった。

魔理沙はたまたま今日訪れた来客だったが、普段からレミリアも暇な時はよくここで屯している。

その場合、暇潰しの相手であり、話し相手となるのはパチュリーだったが、何故か現在このような状況になっているのだった。

小悪魔の方も、普段のような悪ふざけだけが目的といった様子ではない。

それを察して、レミリアも会話に応じているのだ。

「子供の成長に一番気付きにくいのは、案外肉親かもしれないね」

小悪魔は潤いのある唇を曲げて、ニタリと笑った。

誘惑と悪意が混同した、文字通り小悪魔的な笑みだった。

「何が言いたいのか？」

「妹様が、今日二人の友達を連れてきたことですよ。いつの間で作ったんでしょうね。お嬢様、知ってました？」

「まあね。どっちも顔を見たことはあるわ。湖に住んでる氷の妖精と八雲の式神ね」

先日、妖怪の山で見た時には、更にもう一人、地底の妖怪が傍にいた。あれもまた同じような関係なのだろう。

しかし、その内の二人を妹が館に招くほど親しくなっていたのは、レミリアにも予想外だった。

「今も、地下の私室でこっそり仲良くやってるんでしょうね」

「あんたが言うと、妙に卑猥に聞こえるわね」

「酷いですね、今回は結構真面目な話をしているんですよ？ 閉じた世界から突然解放されて右も左も分からない子供だった妹様が。私を実の姉のように慕い、頼ってくれた妹様が。いつの間にか私以外に心を許せる友達を作って、自分の悩みを打ち明けているのです。疎外感感じちゃいますねえ」

「フランドールの抱える悩み——レミリアも漠然と察してはいた。

その原因だけはハッキリと分かる。

レミリア自身も現場に立ち会った、妖怪の山に守矢神社が初めて現れた時の出来事だ。

あの日以来、フランドールの様子がおかしかった。

何か思うところがあつたのだろう。

具体的にどう考え、思い、そして悩んでいるのかまでは分からない。その悩みを姉である自分に相談して欲しいと思っていた。

しかし、フランドールが悩みを解決する為を選んだのは、友人と自分自身の力だったのだ。

自分で考え、誰かに頼ることも覚えた。

妹の成長に、姉として喜びを感じると同時に、一抹の寂しさも味わっていた。

なるほど。確かにこれは——傷心だ。

「言いたいことは、分かる」

レミリアは不承不承といった様子で、小悪魔の言を認めた。

「でも、それはフランの為を思うなら喜ぶべきことだわ」

「もちろん、私も喜んでますよ」

「どうかしらね？」

「あらら、心外ですね。私は私なりに、妹様のことを愛しています」
「分かってる。あんたが本当のことを言う時は、本当であることを強調しないからね。自然と零すように口にするのよ」

「嬉しいこと言ってくれるじゃないですか。それじゃあ、もうちよつと踏み込んで話しちゃいましょう。私は妹様に心を許せる友人が出

来たことに、悪い意味でも喜んじやってます」

小悪魔は頬杖をついて、挑発的な目付きでレミリアを見つめた。

「成長という名の階段を登る時、人は常に踏み外すリスクを負うものですよ」

「……あの子に友人が出来て、悪いと思う面とは何？」

「赤の他人から別の関係へと変わるといのは、面倒事の始まりですよ。特にその相手が、他人との関わり方も距離感も知らない無知で無垢で孤独だった女の子ならば、尚更ね」

「ネガティブな視点で見すぎね。それこそ誰かと接しなければ、友人との付き合い方なんて分からないわ。あの二人との関係も良好なものだし、いい経験になるでしょう」

「ええ、初めての経験でしょうね。妹様にとって、現在ぶつかっている問題も、それを誰かに相談する行為も、何もかも初めての経験なわけです。だから、その後の経過も結果も、やっぱり初めての『いい経験』になるかもしれない」

言葉を弄ぶ小悪魔は楽しそうだった。

レミリアは顔を顰めた。

「あんたはそうやって最悪の事態を想像して悦に浸ってるだけで――」

「いいえ、いいえ。私は全く可能性の話をしているだけで、悪い方向へ転ばそうとか、不安を煽ろうとかなんて思っちゃいないですよ」

「愛情や友情というものは、これでなかなか一筋縄ではいかないものでしてね。人生を善い方向へ導くこともあれば、狂わせることも間々あるものです。そんな話は過去、枚挙に暇がありません」

「……情を深めすぎるのは危険だと？」

「どうなんでしょうね？ 私如き小物が何だかんだ言ったって、本物の絆って奴の前には一蹴されるだけです。友情ストーリーのお約束ってやつで。」

しかし、情というものは『強い』と書いて『こわい』とも読みますから。いや、心とは実に複雑怪奇。そこに家族や友人や恋人などが関

われば、絡み合って、縄一筋とはいきません。怖い怖い。だから、面白いんですけど。妹様の場合は、一体どうなるんでしょうね？」

確かに、フランドールの境遇は特殊だった。

健全な方向へ成長し始めてるとはいえ、未だにその心の奥にはかつて味わった悪夢が消えずに残っている。

「優れた資質や力を持つ者ほど孤独を抱えているものです。誰にも触れられなかった心のある面が全く未熟なまま残ってしまった。初めて出来た理解者に入れ込みすぎて、それまでの自分を見失うというのは、まあよくある話ですね——」

俯いて黙り込んだレミリアの反応を笑って眺めながら、小悪魔はストローに口をつけた。

取り繕った無表情の下で渦巻く苦悩を、楽しんでいた。

ただ家族として純粋に妹を愛して信じるには、多すぎる負い目をレミリアは抱えている。それが原因で、今一步踏み込めない自分への歯痒さもあった。

いつかは、この壁もなくなるかもしれない。

しかし、それは今すぐではない。

急ぎすぎてはいけない。

本当か？

本当は、ただ単に自分が臆病なだけではないのか？

どちらが正しい？

——そうして、自問し、迷っている心の動きが、透けて見えた。

それを眺めているだけで、小悪魔は退屈しなかった。

グラスに残った中身を、ゆつくりと飲み干す。

その間、レミリアは一言も発さなかった。

十分に堪能し、ストローから口を離れた小悪魔は、深みにはまっっていくレミリアをフォローすることにした。

「ところで、お嬢様。話は変わるんですが、最近私と若干キャラ被ってる女が先代様に付き纏ってるという噂を聞いて悩んでるんです。どうしましょう？」

「知るか」

目論見どおり、レミリアは苛立ちをぶつけるように睨んできた。
小悪魔は満足気に微笑んだ。

◇

その日、私は青娥と慧音を伴って迷いの竹林にある妹紅の住処へとやって来ていた。

この中で、当然青娥は妹紅と初対面である。

「貴女が先代様のお弟子さんの藤原妹紅さんですね？」

「そうだけど……あんたは？」

「失礼いたしました。私、先代様の所でお世話になっております。仙人の霍青娥と申します。以後お見知りおきを」

「そ、そうか。よろしく」

体を前に乗り出すような青娥の挨拶に対して、若干仰け反りながら妹紅が返した。

最初の伺うような視線が一変して、好意というものを全面に表した笑顔になったことに戸惑っているのだろう。

そりゃ初対面の相手にいきなり好感度MAXなんだから、警戒もするわな。

しかし、あれは演技ではなく、本物の好意と敬意を満たした目付きだ。

何が判断基準なのかは分からないが、青娥は妹紅を一目で気に入ってしまったらしい。

「あの、握手よろしいでしょうか？」

「へっ？ あ、ああ、握手ね。うん」

幻想郷で握手とは、あまり一般的な挨拶の形式ではない。

おずおずと差し出した妹紅の左手を、青娥が両手で握った。

いや、握るといふよりも、文字通り包み込むような優しい手つきだった。妹紅の手を、まるで貴重な芸術品を慈しむかのように触れている。

「ああ、なんて素敵な手……」

青娥はうつとりとした表情で呟いた。

握った手をそのまま頬ずりしかねないような、恍惚とした笑顔だった。

妹紅はというと、そんな青娥の反応に顔を引き攣らせていた。

「な、何がそんなに気に入ったのかな？ 控え目に言っても、あまり綺麗な手じゃないと思うんだけど」

慌てて手を引きながら、妹紅が訊いた。

その言葉通り、妹紅の手は左だけに限らず右も含めてボロボロの状態だった。

指先から手首まで包帯がきつく巻かれ、その下にある無数の傷から血が滲んでいる。

蓬萊人である妹紅の肉体は傷の治りが早い。表面上の傷ならば、数日で完治する。

その特性の上で生傷が残っているということは、傷自体が深いか、治る端から再び傷を負っているということである。

そして、妹紅の傷は後者で間違いなかった。

あの両手の傷は、私にとって酷く懐かしさを覚えるものだ。

あれは拳を鍛える為の修行で負った傷なのである。

「この手は、先代様と同じものを目指している手なのでしよう？」

青娥も、それを見抜いたらしかなかった。

妹紅が腰の後ろに隠した両手に、名残惜しそうな視線を送りながら、断言する。

「私も仙人となる為に修行をした身。武術に関する知識は持っております。それは鍛えている手ですわ」

「……まだまだ途中だけどね」

「どのような修行を？」

「師匠もやったっていう貫手の修行を。竹を束ねて、それを何度も突くのや」

「痛いのでしょうかね」

「これでも経験豊富でね、痛みには慣れてる。それに、師匠と違って傷の治りは人並み以上に早い」

「存じております。何でも、不老不死の身であるとか」

妹紅が私に問うような視線を向けた。

蓬莱人の秘密に関しては、迂闊に他人に教えられるものではない。しかし、私は青娥に、妹紅のことについて事前に話していた。

青娥自身も方法は違えど既に不老不死を体現しているし、何よりも彼女のことは他人ではなく信頼出来る仲間だと思っっているからだ。

伺うような妹紅の視線に対して、私が頷いて返すと、それで納得してくれたようだった。

「まあ、死なない人間が体を鍛えるなんて滑稽に思えるかもしれないけど……」

「とんでもない!」

青娥は力強く首を振った。

「だからこそです。不死でありながら、そこで停滞せず、己を鍛えて高みを目指すその姿勢こそ、素晴らしい。私、尊敬いたします!」

「そ、そうかな?」

「さすがは先代様のお弟子さん。お師匠様に似て、魅力的ですこと。実に、私好みですわ」

「あははっ、なんか照れるわね……好み?」

「ああ、本来ならば貴女に私の仙術をお教えしてさしあげたいのですが、先代様の指導があるのならば、そのままの方がより強くなれるでしょう。なので、宜しければ私が貴女のお世話やお手伝いを——」

「あー、青娥殿」

何度か見た覚えのある青娥の暴走を横合いから止めたのは、それまで黙っていた慧音だった。

こほん、と咳払いを挟む。

「ここへ来たのは、元々先代の用事があったからだ。勝手に付き添ってきた我々が、あまり出しゃばるのはどうかと思うが?」

「あら、それもそうですわね」

いやあ、ありがとう慧音。

正直、私もどの辺で口を挟もうか、完全に迷っちゃったよ。

青娥ってば、テンションが上がった状態だと妙な勢いがあるって、

こつちを自然と自分のペースに巻き込んでくるんだよね。

押しが強いというか欲望に忠実というか、私の周りにいないタイプだった。

悪意はないっつーかむしろ善意や好意だけなので苦手ではないだが、だからこそ抗い辛い。

慧音がいなかったら、妹紅も含めて師弟共々青娥の手玉に取られていたことだろう。

そう、忘れてはいけない。

私は用事があって、妹紅の所へ来たのだ。

「突然押しかけて、すまない」

「いや、師匠が来てくれたのは嬉しいよ。それで、用事って何？

ひよつとして私の案内が要ることかな？」

永遠亭までの案内人をしていることを指して、妹紅が訊ねてくる。

まあ、わざわざ迷いの竹林まで来たってことは、目的は永遠亭だと思っようね。

妹紅自身は度々人里に来て顔を合わせているから、彼女に会う為だけにここへやって来たわけではない。

かといって、永遠亭に用事があるわけでもなかった。

「修行をする場所が欲しくてな」

私の目的は、この場所そのものだった。

迷いの竹林は人が近づかず、棲んでいるのは危険な妖獣ばかりだ。建造物といったら、妹紅の住処以外には永遠亭が一軒奥地に存在するのみ。

周囲への影響を気にすることなく修行に専念出来るのである。

「つまり、結構派手な修行をするってことだよな？」

「ああ。外の世界で身に着けた技の鍛錬をしたい。まだ扱い慣れない力だ、狭い場所や人のいる所ではやれない」

言うまでもなく『波動拳』『昇竜拳』『竜巻旋風脚』の技である。

妖怪の山でも修行させてもらったが、あそこは私を嫌ってる天狗のテリトリーもあるし、今はなんかゴタゴタしてるらしいからねえ。

そういったややこしいことも気にしなくていいという点で見れば、

この場所の方が更にやりやすかった。

ついでに、妹紅の修行を見ることも出来るしね。

いきなり『穿心』の奥義を授けたから、今の所基礎的な修行しかつ
けられないんだが、一応師匠だからね。あれつきりで放り出すことは
出来ない。

……でも、それ言ったらチルノと美鈴もなんだよなあ。

考えてみれば、全然師匠らしいこと出来てなくね？

い、いずれ時間を作ってそれっぽいことをしなければ。

でも、今はとりあえず自分の修行を完了させることを優先する。

「そういうことなら、ここを自由に使つてよ。私も一緒に修行させて
もらうからさ」

私の頼みを、妹紅は快諾してくれた。

迷いの竹林にはその名の通り、何処であつても竹しかないが、それ
が生えている密度はやはり場所によって違う。

妹紅の住処の周辺は生活空間でもあるので、障害物のない拓けた敷
地になっているのだ。

妹紅の家にだけ気をつければ、修行をするのに十分な広さだ。

ここなら波動拳をぶつ放してもいいし、昇竜拳で空高く跳んでもい
い。竜巻旋風脚だつてやれる。実にありがたい。

妹紅が基礎鍛錬に入る傍らで、私も早速修行を開始した。

よーし、まずはさっさとこの三つの技を自分のものにするぞ！

自分の持つ能力を理解した今、それは難しいことではないだろう。

これらの技は基本的なものでしかない。ここから発展した更に強
力な技、そしていずれは『殺意の波動』を自分の力とする為に、やる
ことは山積みだ。

地底での異変が何時起こるか分からない以上、無駄な時間は過ごせ
ない。効率的に修行をこなさねば

うおおおっ！ 待ってる、さとり！

あの世で修行した悟空の如く、ピンチに駆けつける為に私は頑張る
ぞ——！



二人の人間の修行を、慧音は眺めていた。すぐ隣では、青娥も同じように見ている。

その横顔は楽しげだった。

実際、楽しいのだろう。

慧音は霍青娥という仙人の——女の、性格や人間性といったものが、ここしばらくの付き合いの間で何となく分かるようになっていた。

彼女は先代巫女を尊崇している。

正確には、その力を尊崇している。

力というのは、先代が培ってきた単純な力や技、人望、立場、妖怪や神さえも一目置いている高名さなど、全てを含めたものである。

しかし、ただ単純に『強い者が好き』なのではなく、青娥なりの拘りを持っているらしい。

妹紅との対面を見て、慧音はそれを確信した。

青娥は『強くなるうとする者』が好きなのだ。

自分を高めようとする者。そして、その上で更に優れた素質や才能がある者を敬い、取り入ることに喜びを見出す性質らしい。

先代と妹紅。優れた人材が、その才能を鍛える光景を眺めるのは、青娥にとって娯楽のようなものだろう。

慧音もまた二人の修行風景を、尊いものだと感じている。

妹紅が両手を血塗れにしながら、束ねた青竹の間に突きを繰り返している。

硬い竹が何本もみっちり詰まった隙間に、揃えた指を強引に捻じ込むのである。

当然、摩擦によつて両手の皮膚は剥けて、ぶつけた指先は爪が割れる。それを繰り返せば、いずれ指の骨までいかれてしまう。

その苦痛を耐えて、更に突く。

何度も繰り返す。

何日も繰り返す。

そういつた修行である。

常人が見れば、氣狂いの所業に等しい鍛錬だった。

何の目的意識も無しに、ただ漠然と行つて、続けられることではない。
い。

しかし、慧音は、これを何十年も繰り返し続けている人間を知っていた。
いた。

この修行の意味を、そして修行の果てに辿り着ける境地を知っていた。
た。

傷で埋め尽くされるまで鍛え続けられた、先代巫女の両手。

その両手が掴んだ勝利や栄光、守り抜いた尊厳、掬い上げた生命、そして宿した信念を、慧音はずっと傍で見してきたのだ。

妹紅は、先代巫女という師を目指して、苦痛に耐えながら修行を続けていたのである。

その姿に在りし日の先代を重ね、慧音は懐かしさを覚えていた。

そんな光景から少し離れた場所に、先代巫女当人が立っている。

地道ながら当人にとっては地獄のような鍛錬を繰り返す妹紅と離れた位置で、先代が初めて見る修行を行っていた。

両の手のひらを胸の前で向かい合わせている。

合掌の形に似ているが、両手の間には、拳一つ分程の空間を開けていた。

その両手の間に、青白く発光する球体が形成されている。

ハッキリとした輪郭を持たないそれは、物質ではなく、力の塊なのだ
だと慧音は見抜いた。

しかし、それが何の力なのか分からない。

霊力でも、魔力でもない。

かつて、この竹林で起こった異変で先代が放つのをすぐ傍で見た、
強大な光線にも似ているが、それでも同一の物だとは思えなかった。

新たな力――。

自分の知らない、先代が外の世界で身に着けたものだと推測するし
かなかつた。

たった三日で得た、更なる力。

驚くことはあれど、不思議に思うことはない。

この幻想郷でも、先代巫女の偉業は今も尚積み重ね続けられている。

それも必然だ。

彼女が人生の大半を費やし、そして今も続けている飽くなき修行の日々が、結果を残さなはずがない。

先代は強くなり続けている。

凄い人だ。

慧音は素直に、そう思った。

——しかし。

先代の修行風景を眺める内に、慧音の中で違和感が生まれた。

この修行、何かが違う。

初めて見る修行に対して、漠然とそう感じた。

そもそも慧音自身は武術に関して素人同然と言っている。

長年、先代と付き合う内に彼女の修行を幾度となく目にしてきた。

しかし、だからといって鍛錬の中に織り込まれた理論や理屈を理解していたわけではない。

そういった専門的な内容は、慧音には分からない。

しかし、違う——と。

今の先代を見ていると思うのだ。

これは違う。

この修行は、これまでの修行とは違う。

これまで先代がこなしてきた様々な修行と、今回の修行。

何故、今回に限って違和感を抱くのか。

先代が手を抜いているわけではない。

いつもと同じ、修行に対する姿勢は真摯だ。

むしろ、戦いに臨むかのような厳しい表情からは普段以上の集中力を感じる。

でも。

いや。

そうか。

分かった。

——貴女は、今、全然楽しそうじゃない。

慧音は自分がおかしなことを考えていると自覚していた。

しかし、同時に納得のいく答えだと思った。

先代、貴女は。

修行をしている時、いつも何処か楽しそうだった。

私生活をふと垣間見た時、いつも修行ばかりしていた。

最初の内は、求道者の如く常日頃から己に厳しい姿勢を、ただ漠然と尊敬するだけだった。

やがて、何故そこまで己を鍛えることに執着するのか分からなくなかった。

修行の果てに、仙人や天人といった人間を越えた領域へ辿り着くことを目的としていたわけではない。

強くなり、より多くの人命や里の平和を守ってきたが、それもただ自然と結果が伴っただけだった。

憎い仇がいるわけでもなく、倒したい敵がいたわけでもない。

もつと突き詰めれば、強くなることさえ、目的としていないように感じられた。

修行そのものが目的であるかのように、雨の日も、風の日も、雪の日も——。

両足に傷を負い、立ち上がることが出来なくなった時さえ、新しい修行を見つけて、それを続けた。

そんな姿を見ていると、ふと感じるのだ。

普段から寡黙な、あまり動かない表情の内側で、貴女が何処か楽しげに笑っている気配を。

苦痛と忍耐を伴う修行を延々と続けることが出来たのは、きつとその楽しさがあったからではないか。

誰も聞いたことがないような、本にも載っていないような修行方法を先代が始めた時、慧音は何時も疑問に思っていた。

これらの修行を全て、先代自身が自力で考え出したとは思えない。本来、修行にはそれを成した先人が居り、それが師となり手本とな

るものだ。

先代に、そんな相手が居たとは、見たことも聞いたこともない。しかし、それは多分自分が知らないだけなのだ。

過酷な修行の最中、先代はきつと心の中に師を、目標を、指針を――目指すべき『誰か』を浮かべているのではないか。

それがあるからこそ、先代は苦痛を苦痛と思わず、耐えることから逃げようとも思わない。

先代にとって、修行とは目指すべき場所に繋がる道筋であり、そこを歩くことは喜びなのだ。

慧音は、いつしかそんな風に考えるようになっていた。

妹紅が弟子となり、共に修行をする光景を眺めるようになってから、より明確にそう思う。

妹紅もまた修行をしている時、何処か楽しげだった。

やり遂げた後、必ず誇らしげに笑っていた。

自分が目指す目標に近づいた手応えを感じられるからだ。

弟子として、師が教えてくれたことを身に着けるのが楽しいのだ。

妹紅にとって、目指すべき誰かとは先代だった。

だから楽しい。

だから続けたい。

きっと先代も、その心の中にいる師に対して同じような気持ちだったのだろう。

――だが。

――そんな貴女が、今はちつとも楽しそうじゃない。

――修行を楽しんでいない。

――ただ必要だから、必死になって強くなろうとしている。

――ただ『強さ』を、目標にしている。

――それが間違っているわけではない。

――正当な努力の仕方だと分かっている。

――現に、慧音以外の誰も違和感を感じてはいない。

――だけど。

――それでも。

「……貴女らしくないですよ、先代」



空が地霊殿に運び込まれたのは、神奈子が旧都を訪れた次の日だった。

運んできたのは、神奈子との戦いで負傷した勇儀を世話していた、三本角の鬼である。

勇儀に頼まれ、神奈子の行方を捜して旧都の入り口まで出向いた彼が、そこで倒れていた空を見つけたのだという。

神奈子の姿は見つからなかった。

代わりに見つけた、気絶していた空をわざわざ地霊殿のさとりの元まで連れてきてくれたのだ。

「てめえのことは気に食わん」

出迎えたさとりに対して、鬼はハッキリと告げた。

さとりの乗った車椅子を押す燐が、静かに殺気を滲ませた。

「だが、姉御はてめえのことを案じているようだ。だから、運んでやった。それだけだ」

「そうですか。それは、どうもありがとうございます」

鬼の言葉に対して、眉さえ動かさずにさとりは返した。

わざわざ言葉にされるまでもなく、目の前の鬼が自分を嫌っていることは分かっている。

それについて特に何か思うところはない。

さとりにとって、初対面の相手に嫌われるのは自然とも言える出来事だった。

逆に、淡々と返した礼は、嫌味ではなく本心である。

来るべき異変の中心となる空の身について日頃から案じていたさとりは、自分を気に掛けてくれている勇儀や、空を運んでくれた鬼に、素直に感謝していた。

「貴方が見つけた時、既にお空はこのような状態になっていたのですか？」

「ああ、そうだ。あの神が何かやりやがったのは間違いないだろうよ」
空の姿は変わり果てていた。

気絶したまま一向に目を覚まさないことや、服がボロボロになっていることよりも、もっと深刻な状態に関しての話だ。

空の体格は、一回り大きくなっていた。

皮膚や筋肉が腫れているとか、そういった外傷などによる歪な肉体的変化ではない。

幼い少女のように小柄だった容姿が、たった一晩で成長したかのようだった。手足が伸び、乳房が膨れ、骨格が大きくなっているのだ。服が破れている理由は、そういった体格の変化による部分もある。変化は外側だけではない。

空の肉体の内でも、何かが起こっているようだった。

空が現在、室内のベッドなどではなく、地霊殿の庭に横たえられているのにも理由がある。

「信じられねえくらい体が熱くなってやがる。鬼の俺でも手のひらが焼けると感じるくらいだ。体の中で、血の変わりに溶岩でも廻り始めたんじゃねえかって思ったぜ」

仰向けに寝かされた空の下にある地面が黒く焦げ、雑草が焼けて細かい煙が幾筋も上がっていた。破れた服も、端から徐々に焦げて黒ずみ始めている。

発火にまで至っていないが、ほぼそれに等しい温度が空の肉体の表面で発生しているのだ。

まるで焚き火を囲んでいるかのように、さとりにも空の肉体を中心にして発せられる熱気が肌で感じられた。

それほどの熱量を、眠ったままの空は無意識に放っているのだ。

「このガキは、元々チンケな地獄鳥だったはずだ」

「ええ、そうです」

「これだけの熱を放つ力は持っていなかった」

「それで間違いありません」

「……なら、やっぱりあの地上からやって来た神が何かしらしやがったってことだ」

三人の視線は、自然と一箇所に集まっていた。変わり果てた空の肉体で、これまでの彼女には存在しなかった最も異質な部位。

胸の中心――。

まるで後から植えつけられたかのように、空の頭ほどもある巨大な眼球が、無理矢理そこに収まっていた。

瞳の奥で地獄の業火が燃え滾っているように、赤い脈動を繰り返す一個の眼球である。

その場の誰もが、推測するまでもなかった。

この目玉が、空が変貌した全ての原因である。

いや、更に正確に言うならば、現在進行形で空の肉体を作り変え続けている得体の知れない力の源である。

空は、ただ気絶している状態ではなかった。

時折、手足を痙攣させ、一瞬だけ開く瞼の下にある瞳孔は極端な収縮と拡大を繰り返し、口の端からは溶けた鉄のような涎を垂れ流していた。

彼女の肉体では、まだ何かが起こっている。

いつまでこの状態が続くのか。

このまま苦しみ抜いた末に死ぬのか。

それとも、変わり果てた姿で眼を覚ますのか。

誰にも――おそらく本人にも――分からなかった。

ただ一人、全てを知る古明地さとりだけを除いて。

「俺は、もう行くぜ」

役割は果たした、と言わんばかりに鬼が背を向けた。

「そいつがどうなるうが、俺の知ったこっちゃねえ」

「はい。ありがとうございます」

「姉御はしばらく動けねえ。手助けを期待するなよ」

「知っています」

旧都で起こった出来事について鬼は説明しなかったが、既にさとりは能力によってあらかじめ心を読み終えている。

――やはり、いけすかねえ奴だ。

主人を守る為に殺気立つ傍らの猫の方が、よほど分かりやすい。
この最後の悪態もしっかりと相手に届いていることを分かった上で、鬼は不機嫌そうに鼻を鳴らして、地霊殿から去っていった。
——地上を見限って以来、長い間何も起こらなかったのに。
——今更になつて、次から次へと妙なことが地上から舞い込んできやがる。

——次は何がやって来る？ 人間か？

——畜生。今更、俺にどうしろってんだ？

——もう、俺の喧嘩は終わっちゃまったんだぞ。

——俺はもう、あの人間の小娘に負けちゃまったんだ。

胸の内に渦巻く苦悩までさどりの第三の眼に届いていたことには、
気付いていなかった。



さどりの世話を妖夢に任せた後、燐は外に放置されたままの空の元へ戻ってきていた。

とはいえ、現在の空にしてやれることは何もない。

室内に運んだところで、寝かせたベッドや床が焼けて使い物にならなくなるだけだ。

外に逃げない熱気が籠もって、逆に危険なだけである。

看病も出来ない。

そもそも、これが病気なのかどうかも分からない。

肉体と同じ質量の鉄の塊が真っ赤に焼けているかのように、強烈な熱を放つ空の傍にしゃがみ込み、じつと顔を見下ろす。

「お空……」

熱に当てられて吹き出した汗が、幾筋も顔を伝って、顎から落ちていく。

「本当に、起こっちゃったね」

空の身に降りかかった出来事に対して、燐は心の何処かで『ああ、やっぱりか』と納得していた。

倒れた空を見て、最初に連想したのは、かつてさとりの私室で見た絵であった。

——右腕の肘から伸びる巨大な棒。

——溶けた鉄の塊のように変質してた右足。

——左足を覆う、二重の輪のような得体の知れない物体。

——そして、胸の中央で開かれた不気味な一つ眼。

一体、どういった発想で生まれたのか分からない、変わり果てた空の姿を描いた絵だった。

それが今、現実になろうとしている。

空の肉体は変化を続けている。

その果てに、あの姿になるのだ。

燐はもはや確信していた。

「さとり様は、こうなることを知っていた」

燐にとって、空はよき友人である。

その親友が苦しんでいるのに、心が痛まないはずがない。

しかし、だからといってさとりを恨むような気持ちは欠片も湧かなかった。

さとりが自分の主人だからではない。

ある面で、さとり以上に空が今のような状態になった原因を理解しているからだ。

「お空——」

燐はそつと空の右手を取った。

凄まじい熱と痛みが、手のひらを焼いた。

歯を食い縛らなければ耐えられない程の激痛だったが、決して手は離さなかった。

「お前、自分で、やったな？」

状況からして、地上からやって来たという神が、空にこの赤い眼球を植えたのは間違いない。

そして、さとりがその所業を事前に知っていたことも間違いない。

では、誰が元凶なのかというと、誰が悪いわけでもない燐は理解していた。

これは空自身が望んだことなのだ。

神が無理矢理行ったことではなく、さとりが謀ったことでもない。空はただ目の前に差し出されたものを受け取った。

得体の知れない強大な力を、空自身が望んで自らの肉体に受け入れたのだ――。

「分かるよ、馬鹿。頭の悪いお前が考えることなんて、あたいには全部分かっているんだ」

焼けた鉄のように熱い空の手を、燐は更に強く握り締めた。

「馬鹿」

燐は涙を流していた。

「お前の気持ちなんて、痛いくらい分かっているんだ」

愛する主人の危機に何も出来なかったことを、死にたくなるくらい後悔したのが自分ならば、現実と己の無力さを突きつけられたのが空なのだ。

後から知った燐とは違い、空はさとりが一度息絶えた状況に直面した。

そして、何も出来なかった。

どれだけ泣いても、言葉を吐き出しても、願い、祈っても、現実は揺るがなかった。

その時、空が呪ったのは何よりも自分自身だったはずだ。

「そうさ。何も出来ないなら、死んだ方がマシだ」

自分もそうなのだから。

「分かったよ、お空」

弱くて愚かだった自分を殺す為に。

「お前、死ね」

これから、地底ではきつと何かが起こる。

地上からやって来た神は、その先舟に過ぎない。

そして、自分達の主人はそのことを予見している。

「さとり様の為に、お前ここで死ね」

あたいも一緒に死んでやる。



——と、そんなことを考えているわけですね。あの子達は。

燐の決意と覚悟を読み取ったさとりは、小さくため息を吐いた。

——ペットの忠誠心が高すぎて生きるのが辛い。

二人の自分に向けてくれる好意が嫌なわけでも、迷惑なわけでもない。

ただ少し——重い。

主人として上にある立場とはいえ、彼女達に望んでいるのは従者としての役割ではなく単なるペットなのだから、そういう命懸けの感情ってちよつと重いんじゃないかなと思うさとりであった。

「お空さんは大丈夫でしょうか？」

さとりを椅子に座らせた妖夢が心配そうに言った。

空が運び込まれた時には仕事をしていた為になかったが、さとりを屋敷内に戻す際に一度空の状態を見ている。

妖夢にも空の身に何が起こっているのかは分からなかった。

それどころか、神奈子が関わっていることをさとりはあえて伏せていた。

教えたところで話がややこしくなるだけだと思った。

「さてね」

妖夢が地底にやって来て、短くない時間が過ぎた。

空と燐を含めた地霊殿の住人達とは、今やすっかり打ち解けている。

空の身を案じているのは本心からだ。

さとりに対しても、より一層よく仕えてくれるようになっていた。

「貴女が気にすることではありませんよ」

仮に、妖夢に対して『これから起こる異変の早期解決の為に自分の手足となって働いてくれ』とでも言えば、献身的に協力してくれるだろう。

妖夢が自分に向ける負い目の感情を、さとりは正確に理解している。

しかし、だからこそさとりは地底での異変に妖夢を関わらせる気はなかった。

打算的な理由が幾つかある。

遂に起こってしまった、地霊殿を巻き込む異変の発端。

この異変の解決の為に最も大きなアドバンテージとなるのは、自分が持つ原作知識だ。

妖夢が加わることで強化される自分側の戦力という利点よりも、本来参入しないイレギュラーが加わることで先の展開予測が狂う方が問題だと判断した。

何より、単純に戦力強化したところで問題が解決するどころか、逆に増える可能性がある。たださえ妖夢の存在は、西行寺幽々子に対する厄種だというのに。

妖夢は異変には関わらせず、むしろこれを切っ掛けにさつさと地上へ返そうと考えていた。

「妖夢さん」

「はい」

「紙と便箋を持ってきてください。手紙を二通書きます」

「分かりました。すぐに持ってきます」

「それと、仕事がひと段落したら、もう一度ここへ来てください。少し話があります」

「はい」

妖夢が退室し、残されたさとりは机と向かい合いながら、これからの行動を頭の中で軽く整理した。

空に関しては、今のところ出来ることはない。

原作通り与えられた八咫鳥の力が、今の空を苦しめている原因だろう。

それが定着するなりして、本来の姿になるまでは、さとりとしても手の出しようがない。

そして、空が目覚めた後にどうなるかも予想しづらかった。

案外、自分が望めば空は何も余計な行動を起こすことなく大人しくしているのかもしれないが、暴走する可能性も大いにある。

そうならば、知識にある通り異変の始まりだ。

しかし、原作通り事が起こったからといって、後はただ状況に流されるままでいるつもりはない。

そこまでさとりは楽観的でもなければ、異変の中心となる空や燐に情がないわけではなかった。

弾幕ごっこによる決闘とはいえ、こちらは退治される側である。不慮の事故が起こらないとも限らない。

これから起こることは、運命でもゲームでもないのだ。出来れば、可能な限り速やかに、穏便に終わらせたい。

「その為にも、今の内にやれることはやっておかないとね」
—— 薮蛇にならなければいいんだけど。

ふと、そんな不安が首をもたげたが、慌てて振り払う。

これまでの実績からして、完全に払拭することは出来なかったが。

「やして——」

差し当たっては、自分の状態だった。

日々確実に回復へと向かつてはいるが、相変わらず全身の麻痺は続いている。

寝たきりの状態から姿勢を保って椅子に座り続けるくらいは出来るようになったが、それ以上のことは現状では無理だった。

妖夢に頼んだ手紙も、自力で書くことが出来ない。

かといって、このままではあまりに大きなハンデを背負ったまま異変に巻き込まれることになる。

何とかする必要があった。

そして、具体的な案が一つ、さとりにはあった。

一度死から生還した結果自分に起こった変化が、肉体の衰弱以外にもあったことに、数日前から気付いたのだ。

先程も部屋の中にながら地霊殿の外にいる燐の心を読み取ることが出来たが、これは以前までのさとりの能力では不可能なことだった。

対象を絞って集中することで、第三の眼の範囲外に在る心も読めるようになったのだ。人が耳を澄ますことで、遠い物音や声を聞き取る

ように。

低下した運動能力に反比例して、感覚が鋭敏化したのだろうか？

それとも、何処かの漫画脳の発想ではないが、死に瀕したことでパワーアップして蘇った？

色々考えてみたが、明確な理由は分からなかった。

重要なのは、自分の能力が強化されていることだった。

「気は進みませんが、試してみますか」

呟いた言葉とは裏腹に、さとりは妙な確信めいたものを抱いていた。

これから試すことは、おそらく成功する。

根拠はない。

しかし、そう思う。

そう思うことで成功する。

思い込みが可能にする。

あの先代のように。

「――想起」

第三の眼が、一つのトラウマを再現した。

――想起 『レガート・ブルーサマーズ』

見えない糸に無理矢理引っ張られたかのように、動かないはずの筋肉を無視して、さとりの片腕が持ち上がった。



「……ねえ、チルノ。本当に行くつもりなの？」

傍らに身を寄せながらも、橙は全く乗り気ではない様子で、今一度訊ねた。

しかし、返ってくる答えは分かりきっている。

そして、自分には彼女を止められない。

「あつたりまえでしょ！ 今更、何産気づいてんのよ!?!」

「怖気づいて、ね」

チルノの決意の固さを再確認して、橙は諦めたようにため息を吐いた。

フランドールと別れ、紅魔館を発った二人は、妖怪の山の麓までやって来ていた。

全ては、道中でチルノが思いついたことが原因である。

「でも、上手くいくなあ。結界を通って地底に行くなんて」

地霊殿にいる空に会いに行く——チルノは突然そう言い出した。

妖怪の山での出来事にショックを受けたのはフランドールだけではない。空もそうだ。彼女の場合は、十分に相談に乗れないまま地底に帰らなければならなかった。

——落ち込んでいる友達が二人いる。

——どちらも放っておくことは出来ない。

——だったら、二人とも一緒に元気付けよう！ あたいたら天才ね！

チルノはそう考えたようだった。

正確には空に会いにいくだけではなく、『地霊殿に行つて、空を連れ出し、一緒にフランの所へ遊びにいく』といったところまで断言したので。

断言とは即ち、チルノの中でこれらの行動は既に決定事項だということである。

この無茶な思いつきに対する理路整然とした反対意見が、何の効果も及ぼさないことを、付き合いの長い橙は最初から悟ってしまっていた。

かといって、チルノを放置して離れることも出来ない。

橙は以前フランドールが言っていたことを思い出していた。

——チルノは、わたしを引っ張ってくれるんだ。
なるほど。

痛いほど実感する。

——引っ張るっていうか、引き摺られてるんだけど。

橙はもう一度ため息を吐いた。

最近、すっかり癖のようになってしまった気がする。

「……まあ、フランの為に何かしたいってのはわたしも一緒だけど」
落ち込んでいる友達の為に何かしてやろうと行動するチルノの気持ちは、分からないわけではない。

むしろ、よく分かる。

そういった意味では、行動を躊躇う自分の代わりにチルノが先導してくれているような気さえした。

もちろん、突飛な思いつきの結果自分に巡ってくる無茶振りのせいで、全然感謝する気にはなれないのだが。

今もそうだった。

地底への入り口がある場所は、一度そこを通ったチルノが覚えていた。

現在、二人が前にしている大穴がそれである。

妖精にしては驚くべき記憶力だったが、地底へ行く為には、更に入りに張られた強力な結界を通り抜けなければならない。

地底と地上を妖怪が行き来しない為の結界は、妖精であるチルノに対する効果は怪しいが、橙に対しては明確に働く。

何よりも、空を地上に連れていくのならば、やはり結界を潜り抜けなければならない。

結界そのものを解除することは絶対に不可能。むしろ、万が一そんな真似をしようものならば、結界の管理者から死という名の処罰を下されるだろう。

残された手段は、正攻法によって通り抜けることだけだった。

チルノが先代巫女と共にそうしたように。

空が無断でそうしたように。

八雲紫と古明地さとりだけが発行出来る結界の通行許可証を持って、通り抜けることである。

「それで、橙。準備は出来た？」

「多分、これで行けると思うけど……」

橙は自信無さげに、自らが作った二枚の符を取り出した。

それ自体には何の力も宿っていない符である。

ただ、これを持つている者が通行を許可された存在だと結界が認識するよう仕組まれただけの符だった。

「つていうか、これ仮に上手くいったとしても偽造……藍様に殴られるだけで済めばいいけど……」

「そんな時はあたいても一緒に謝るわよ！ 心配すんな！」

そう言つて笑うチルノの顔を見て、橙は諦めたように肩を落とした。

全く割に合わない貧乏くじだ。

しかし、諦めは決断でもあつた。

気を取り直して顔を上げた時、橙の瞳にもはや迷いはなかった。

「じゃあ、覚悟きめて行きますか」

「行くうー！」

二人は同時に足を踏み出した。

地底に向けて――。

其の五十五 「八咫鳥」

早苗の前を、黒猫が横切った。

丁度、神社から境内へ出たタイミングで、である。僅かに見開いた早苗の眼と、早苗に気付いて顔を向けた黒猫の眼が、合った。

しかし、それも一瞬のことで、黒猫はあっという間に早苗の視界から消えていった。

「……不吉？」

先程の黒猫、猫には違いないが普通の猫ではなかった。

尾が二本あったのだ。

加えて、幻想郷に来て以来鋭さを増した早苗の感覚が、あの猫から妖怪の気配と力をハッキリと感じ取っていた。

「黒猫に加えて妖怪となると、更に不吉なことなんでしょうか？」
眩きながらも、その口調はどうでもいいことのように軽いものだった。

外の世界の迷信や慣習など、妖怪や神様が人間と一緒に生活するこの世界では重みなどないに等しい。

ここは妖怪の山にある守矢神社で、自分は妖怪から信仰を集める神に仕える者なのだ。

視界を横切っただけの妖怪などすぐに頭の中から消え、早苗は境内から湖の方へと飛び立った。

「神奈子様、お昼の用意が出来ました」

早苗は、二柱の神と文字通り生活を共にしていた。

神奈子と諏訪子が、食卓を囲み、風呂に入り、布団で眠る——人間とほとんど変わらない生活だ。

食事の用意を始めとして、家事を勤めるのは早苗である。

本来ならば、神である二柱には食事や睡眠も必要ない。彼女達の肉体を形作るのは信仰である。

しかし、早苗自身が神奈子と諏訪子に同じように生活することを望み、それを喜んだのだ。

「神奈子様——」

何本もの御柱が並び立つ湖。

その柱の内の一本の頂点に、神奈子は早苗から背を向けるように座っていた。

右膝を立てて片胡座をかき、左足は柱の淵から投げ出している。

片手に一枚の紙を持ち、そこに書かれている内容をじつと読み込んでいるようだった。

「あの、神奈子様」

呼びかけも聞こえないほど集中している神奈子の様子を伺うように、早苗はおずおずと近づいた。

「早苗かい」

神奈子が肩越しに振り返った。

その際、さりげなく持っていた紙を早苗の視界から隠していた。

「昼時か」

「はい、もう用意は出来ていますよ」

「すぐに行く」

「それと、諏訪子様が何処にいるか知りませんか？ 一応、三人分用意してはあるんですけど」

「さあね。その辺を適当にフラフラしてるんだろう。腹が減ったら帰ってくるさ。案外、虫でも捕まえて食ってるかもしれないな」

神奈子の軽口に、早苗は苦笑いを浮かべた。

気心の知れた者同士だからこそ許される口の悪さだと、早苗も分かっている。

しかし、どちらも敬い仕える神である為、反応に困るのも確かだった。

「ところで、早苗」

背を向けたまま、神奈子が言った。

「はいっ」

「お前、古明地さとりについてどう思う？」

それは、早苗にとって全く予想していなかった質問だった。

「ここまでの会話で、何の脈絡もない。」

それ以前に、神奈子の口からさとりの名前が出てきたことが意外だった。

神奈子はさとりと僅かな面識はあれど、実際に言葉を交わした経験がない。

地底に行った時は勇儀に邪魔され、直接対面することなく戻ってくるようになった。

神奈子が地底に行ったことさえ知らされていない早苗にとっては、自分が時折話して聞かせていただけの人物の話題を突然振られたようなものだった。

「さとりさんは、えつと……凄くいい人だと思います」

戸惑いながらも、早苗は素直に思っていることを応えた。

「あいつは妖怪だぞ?」

「言葉の綾ですよ。外の世界ではさとりさんに色々とアドバイスを頂いて、随分と助けてもらったんです」

「それについては、何度か話してくれたね」

「はい。さとりさんには本当にお世話になりました。いつか、恩返しがしたいと思ってます」

「そうか」

「はい!」

「早苗」

「はい?」

「あまり、古明地さとりに好意を持つな」

会話の中で、突然差し込まれた冷たい言葉に、早苗は凍りついた。「……え?」

恩人であるさと리를思い浮かべて、何処か浮ついていた気分は、その一言で消え失せてしまった。

早苗は、密かにさとりのことを尊敬していた。

幻想郷では多くの出会いに恵まれ、友人も出来た。

しかし、本当に孤独だった外の世界で、初めて出来た理解者はさとりだったのだ。

息を潜めて過ごさねばならないような日常を突然ぶち壊し、颯爽と

現れた時の衝撃と感動を、早苗は決して忘れない。

大げさな言い方をすれば、あれは運命の出会いだったとすら思っていた。

「奴には、お前が抱く好意が読める」

神奈子は言った。

「確かに、さとりは助言者として最適だろう。奴にはお前が掛けて欲しい言葉が分かるんだ。しかし、お前には奴の真意が分からない」
違う。

あの人は、自分で答えを見つけさせようとした。

そうさせてくれた――。

早苗は反論しようとした。

しかし、御柱に腰掛けた姿勢のまま淡々と告げる神奈子の背中が、有無を言わせぬ圧力を滲ませていた。

早苗には、それこそ神奈子の真意が分からなかった。

何故、急にこんなことを言うのか？

これは警告なのか？

古明地さとりは危険だと、そう忠告しようとしているのか――？

「……その手紙、さとりさんからなんですか？」

早苗は探るように訊ねた。

神奈子は、その質問に答えなかった。

ただ背を向け続けるだけだった。

その顔がどんな表情を浮かべているのか見えず。

その眼が何を見ているのかも分からない。

早苗は、幻想郷に来て以来初めて自分の過ごす日常に疑惑を感じた。

新たな地で、新たな人生を歩む、充実した日々。

しかし、これまで眼を向けていなかった物事に、突然気付き始めた。神奈子がこれまで何処へ、何を目的として出掛けていたのか？

諏訪子がここにいないのは、本当にただ散歩に出ているだけなのか？

何をしようとしているのか？

何が起ころうとしているのか？

——自分は何も知らないのだ。



神奈子が信仰獲得の一環として考え付いたのは『幻想郷エネルギー革命計画』だった。

地霊殿が管理する旧灼熱地獄を原子炉、八咫鳥の力を与えた霊鳥路空を制御装置として核融合を実用化し、それを御利益として新たな信仰を集める。

そういった内容の計画である。

——その計画を、詳細に、正確に、断定する形で書き起こされた文章が、地底から届いた手紙には載っていた。

差出人は、古明地さとおり。

早苗は何も知らず、諏訪子にすら匂わせる程度にしか話してない計画を、会話はおろか対面すらしてない彼女は見抜いていたということである。

手紙の内容は、ただ計画を暴露するだけでは終わらなかった。

その計画を、地霊殿側が受け入れるという譲歩。

代わりに、空の状態が安定するまでは、こちらへの干渉を止めて欲しいという要求。

そういった内容がちらちらと書かれていた。

不気味な内容だった。

こちらの真意を完全に見抜いておきながら、何故ここまで受身なのか。

正直、肩透かしを食らった気分だが、そう油断させることこそが相手の狙いなのかもしれない。

直接の面識がない神奈子には、古明地さとりの人物像が掴めなかった。

意表を突かれ、脅威も感じたが、恐れはない。

しかし、実態の掴めない不気味さをひたすら感じる。

——こいつは、一体何を考えている？

相手の考えていることが分からない。

だが、逆に相手はこちらの考えを読めるのだ。

その疑心が、思わず言葉となつて早苗に向けて零れてしまったのである。

早苗が場を去つた後で、神奈子は自身の失態を反省した。

幾らか心を落ち着けた瞳には、本来の力強さが戻っている。

さどりの考えていることは分からない。

さとりには、他の誰にも見えていないものが見えているのかもしれない。

しかし。

しかし、だからどうだというのか。

自分のやることは変わらない。

神の御技は絶対不変。

曲がることなどないのだ。

目的は変わらない。

力を。

力を得る。

神としての絶対の力を——。

「侮つていたことは認めよう、古明地さとり」

虚空の先に、いまだ言葉も交わしたことのない地底の支配者を幻視して、神奈子は不敵に笑った。

先代巫女と古明地さどりの間には特別な繋がりがある。

それはもはや間違いがない。

それを友情と呼ぶのか、あるいはもつと別の呼び方があるのかは当人達でもない限り分からないが、神奈子はこれまでその繋がりだけを重視していた。

先代を特別視するあまり、彼女の周囲を軽視していた。

古明地さどりの存在は、先代巫女に近づく為の踏み台であり、核心であり、あるいは弱点となるかもしれないと考えていた。

しかし、それは侮つた見方だった。

さとりの方が特別だったからこそ、先代との繋がりも特別なものになつたのではないか。

少なくとも、さとりが先んじて打った一手は、神奈子の思惑を潰してみせたのだ。

「だが、これで事態は私の手を離れた」

さとりが指摘したとおり、神奈子には計画があつた。

それは力を手に入れた空の心身についても、彼女の行動が地霊殿や地底世界に及ぼす影響も考慮した、一通りの計画だつた。

さとりや地霊殿について、悪いようにするつもりはなかった。

別にさとりが憎いわけではない。

そんな私情を交えるような相手でもない。

先代に対しても同じだ。彼女に敬意こそあれど、憎む理由などない。

単純に先代ともう一度戦いたいのであれば、他者を巻き込んで敵意を煽るような真似をせず、一対一で堂々と勝負を挑めばいいだけの話だ。

意味もなく禍根を残すやり方は、ただ浅慮なだけだ。

守矢神社の繁栄も踏まえ、実益も兼ねた生産的な計画を練つたつもりだつた。

しかし、その計画は瓦解した。

さとりが神奈子の予想を超えた存在だつた故に。

「いいだろう、古明地さとり。お前の手に委ねてみよう」

神奈子は楽しげに呟いた。

「神が仕組んだ賽の目を、わざわざ自ら振り直したんだ。どんな目が出るのか、もう私にも分からんぞ」



「妖夢さん。貴女に暇を与えます」

「……………え？」

妖夢は言われたことの意味を、一瞬理解出来なかつた。

「いえ、回りくどい言い方はやめましょう。妖夢さん、貴女はクビです。荷物を纏めて、地霊殿から出て行って下さい」

車椅子に座ったさとりは、妖夢が言葉の意味をわざと誤って解釈しようとするのを許さずに、更に明確に告げた。

「あの……私は、何か拙いことをしたでしょうか？」

妖夢は震える声で訊ねた。

「至らない部分があったなら、その、教えていただければ……っ」

言いながら、自分は何て間の抜けたことを口に行っているのだろうと思っただ。

訊くまでもないからだ。

自分がどうしようもない役立たずであることくらい、とつくに自覚している。

いつか、こうしてさとりに見放されるだろうと、今日まで怯えていた。

拙いことをした？

何か大きな失敗をした？

——違う。何もしなかっただろう、お前は。

さとの窮地に何も出来なかったことへの強い負い目が、妖夢をずっと責め立てていたのだった。

「……いえ、すみません」

結局、妖夢はさとの返答を聞くよりも先に、恥じるように言い直した。

さとの決定に対して、反論も、疑問を持つ資格もない。

あるいは、さとの口から直に伝えられることが怖かったのかもしれない。

「——むしろ、よく働いてくれたと思ってますけどね」

小さく呟いたさとの言葉は、自責の念に沈んだ妖夢には届かなかった。

元々、さとりもフォローの為に言ったのではない。つい本音が漏れてしまっただけだ。

自分は厄介払いをされた——と、妖夢は考えている。

そのネガティブな発想を、当然さとりは読み取っていたが、あえて訂正しないでおくことにした。

さとりとしては、これから地底で起こるであろう異変の渦中に妖夢がない方が都合がいい。

だから、あえて詳しい事情を説明しなかった。

もしも、これから起こる異変のことを明かせば、それが妖夢がここに残る理由になってしまう。

彼女は、純粹に自分や地霊殿の未来を案じ、力となる為に残ろうとするだろう。

彼女の本質が善性であり、義理堅くて真面目な人物であることは知っている。

しかし、本来ならば間違いなく称賛すべき妖夢の長所が、今のさとりには歓迎出来ない。

「……すぐに、荷物を纏めて出ていきます」

妖夢は苦しげに、やっと言葉を吐き出した。

何時かは、ここから出ていかなくはならないと分かっていた。分かっていただけで、それに備えることなど出来なかった。

地霊殿を出た後に行くアテナなどない。

白玉楼には決して戻れない。

今更——今でも——幽々子に合わせる顔などない。

魔理沙や霊夢のいる地上へ戻ることにすら恐ろしかった。

昔の自分を知る者のいない地底に、ずっと潜っていたかった。

旧都に余所者を働かせてくれる所などあるかは分からないが、最悪物乞いでもしてひっそりと住み着くか——。

途方に暮れた妖夢は、半ば本気でそんなことを考えていた。

「私は、もういい加減本来の場所へ戻るべきだと思いますけどね」
心を読んださとりが言った。

「それだけ貴女の抱える問題の根が深いのかもしれませんが、ずっとこんなことを続けていくわけにもいかないでしょう？　問題には、何らかの答えを出さなければならぬはずですよ」

「それは、分かっています」

「妖夢さん、貴女には帰りを待つ人が……」

さとりは言いかけ、その途中で残りの言葉を息に変えてゆつくりと吐き出した。

用件は伝えた。妖夢はそれを了承した。彼女はすぐにここから出ていく。

それで話は終わりだ。

私達は他人同士に戻る。その後を注意深く暮らしていれば、互いの人生が再び交わることもないだろう。

これ以上余計なことは言わず、話を切り上げよう――。

「私には妹が一人いましたね。名前はこいしといいます」

噤んだはずの口は、意思に反するかのように勝手に喋っていた。

しかも、親しい相手にも普段なら決して出さない話題だ。

何故、ここで妹のことを話すのか。

何故、相手が妖夢なのか。

自分でも分からなかった。

「難儀な子でね。同じ種族で、しっかりと血の繋がった姉妹ですが、一緒に生活しているわけではありません。普段は地霊殿に寄り付かず、いつも何処かフラフラと出歩いています」

「私も、会ったことはないと思います」

「私とは違った特殊な能力を持っていて、あの子に会った相手はそのことを覚えていない場合が多い。でも、少なくとも地霊殿には、ここ数年顔を出していないでしょう。多分」

「数年も、ですか？」

信じられないといった妖夢の表情から眼を逸らし、さとりは誤魔化すように苦笑を浮かべた。

「二応、この地霊殿を帰るべき家だと認識はしてくれているみたいですがね。数日間だけ空けて戻ってくることもあれば、しばらく滞在することもある。逆に、もっと長い時間帰ってこなかったこともありました。それこそ、もう二度と帰ってこないんじゃないかと思うくらいにね」

なるべく冗談っぽく聞こえるように、茶化した軽い口調で喋るよう

に努めたが、妖夢の様子を見る限り、その努力が成功したとは思えなかった。

「時々、酷く不安になる。先程少し説明したこいしの能力は、私には通じない。私だけは、あの子の存在を覚えている。でも、そこに確固たる根拠はないんです。私自身の能力とか、血が繋がっているからとか、それらしい理由はあるけれど、誰かが明確に説明してくれたわけじゃない。ひよつとしたら、それこそ私が覚えていないだけで、こいしは昔のように私の傍にいるんじゃないかと疑うことが何度もあります。家族と会えなくて寂しく思っているのは私じゃない、あの子の方なのでは？」と

「それは、さとりさんの考えすぎです」

咄嗟に口走った後で、妖夢は気付いた。

この浅慮で無責任なフォローも、さとり相手では見抜かれてしまうのだ。

「こういう時、自分の能力が煩わしく思えますね。でも、ありがとうございます。さとりは滅多に見せない穏やかな微笑を浮かべながら言った。

素直な感謝の気持ちだった。

「私が言いたいのは……帰りを待つ側は、本当にささやかなことしか願っていないということですよ」

もう認めよう。

自分は、何とか妖夢を説得して、彼女の家と主の元へ帰してやりたいと思っている。

「問題が何も解決せず、何かの失敗や負い目を抱えたままでもいい。先の見通しがなくても構わない。とにかく、ただ帰ってきて欲しい」
最初に妖夢を見た時『彼女の家族や親しい者は、きつと彼女を立ち直らせることは出来ないだろう』と分析した。

それは同時に『自分ならば彼女を救える』という考えに他ならなかったはずだ。

しかし、現実目の前にある通りだった。

妖夢を急に厄介者扱いしなくなったのは、状況を顧みて面倒になったからではない。

自分の助言者としての無能さに驚いて途方に暮れたからなのだ、今更になって気付いた。

かつて血の繋がった相手に対して出来なかったことが、赤の他人相手なら出来ると、どうして思えたのだろうか。

「それからどうなるかは分からない。でも、まずはそこから一緒に始めたい。一人で過ごす間、ずっとそう考えているんです」

「でもっ……でも、幽々子様にどんな顔をして会えばいいのかわからないんです」

妖夢が震える声で言った。

「昔のように、何も知らなかった頃と同じ顔で、あの人もう一度生活するなんて怖くて出来ない。どうすればいいのかわかりません。本当に。あの人の傍で何をしていけばいいのか、何を喋ればいいのか……昔はそんなこと考えたこともなかったのに」

「傍にいただけでいいんです」

さとりは精一杯の気持ちで、真実を伝えようとした。

しかし、出た言葉は驚くほど虚しく、俯いた妖夢の顔を上げさせる力すら持っていなかった。

「……きつと、そのはずです」

それ以上何も言えなかった。

自分の力で出来たことといえば、早々に見切りをつけて、諦めることだけだ。

文字通り、手に取るように分かる妖夢の心理が、自分の努力が無駄であることだけを確固たる根拠と共に示していた。

さとりは黙りこんだ。

もはや、自分に来ることは妖夢がここから立ち去るのを待つただだと判断して。

かつて、妹に対して最後にそうしたように。



妖夢が部屋から出ていった後も、さとりはじつと息を潜めるように

動かなかった。

両眼を瞑り、意識を集中している。

眼を凝らすように、耳を澄ませるように、地霊殿内にいる妖夢の心を第三の眼で捉え続けた。

やがて、全ての後始末と準備を終えた妖夢が地霊殿を立ち去った後で、さとりはようやく集中を解いたのだった。

空は未だに昏睡状態のまま目覚めない。

燐は用事を与えて地上へ行かせた。

そして、妖夢はたった今地霊殿から去った。

後に残っているのは自分を除いて、力の弱い、もしくは全くないペット達だけである。

さとりは、おもむろに車椅子から立ち上がった。

多少ぎこちないが、しつかりと自らの足で歩き、部屋の鍵を掛けて、そのままベッドにまで移動する。

横になり、シーツを身体に被せて——そして、ようやく本当の意味で力を抜いた。

「痛たた……っ」

途端、筋肉痛にも似た痛みが全身に走る。

我慢出来ないほどではないが、思わず蹲りたくなる程度の痛みではある。

しかし、今度は先程とは違って手足がピクリとも動かなかった。

痛みに対する反射的な動きすら起きない。

これが本来の状態なのだ。

「糸を使って筋肉を直接動かすのって、意外と痛いよね」

食い縛った歯から、自然と悪態が漏れた。

「普通に歩いただけでこの痛みとか……漫画の中とはいえ、この状態で戦ったりしてるんだから、本当にとんでもないわ」

——ナノ単位の鋼糸によって、他人や自身の肉体を意のままに操る技。

先程までさとりが使っていたものが、それだった。

当然、さとり自身が本来持っている能力ではない。

漫画の中で使われていた技——正確にはそれを使うキャラクター——を、本来の能力によって再現したのである。

「しかも、設定的には人間なのよね。それはトラウマにもなるわ」
先代巫女の記憶トラウマから読み取った、そのキャラクターに関する多くの印象的な場面や言動を脳裏に浮かべて、さとりは身震いした。

架空の存在でよかった、と心底思う。

同じく架空の存在であるはずの妖怪がそう考えるのも妙な話だが、『もしも同じ世界に実在していたら』と想像して、これほど恐怖を感じる人物はそういないだろう。

——まあ、先代の記憶の中には多数いるわけだが。

彼女の前世の記憶にある多くの漫画やアニメ、小説の中でも名作として名高い物——それら物語に登場する人気のキャラクター達の中から、更に選りすぐった恐ろしい悪役や黒幕達を想起させて、再現する。

それがさどりの行った内容だった。

相手のトラウマを攻撃に利用することは、力の弱いさとりにとって常套手段である。

しかし、それはあくまで精神への攻撃だ。

その他に、例えばスペルカードなどの共通の媒体によって真似る程度のことならば出来る。

決してキャラクター自体を再現し、あまつさえその能力まで使用出来るようになるコピー技の類ではない。

しかし、実際にそれが出来てしまった。

想起した記憶自体が原因だとは思えない。

前世のものだろうが、異世界の漫画だろうが、記憶は記憶だ。それ自体には何の力もないはずである。

単なる記憶に力が伴うとすれば、それはさとり自身が持つ能力が何らかの作用をしているとしか考えられなかった。

少なくとも自分は、外の世界にいた時まで、こんな妙な力は持っていないかった。

「今更、力が強くなっても扱いに困るんだけど……」

ようやく痛みが引いてくると、今度は疲労感が押し掛かってきた。重くなり始めた瞼を、抵抗せずに閉じると、さとりは大きくため息を吐いた。

「便利なのか厄介なのか」

方法はどうかあれ、身体を動かせるというのはありがたい。

これから先、地底で起こる異変の為に、最低限弾幕ごっこが出来る程度に動ける必要はあるからだ。

しかし、毎回この痛みに悩まされるのは如何なものか。

能力の使用自体に対するペナルティではないはずだ。

これはあくまで再現した技が、そういう仕様だっただけのこと。

ならば、同じような結果を得られそうな別のトラウマを想起してみようか。

動かない身体を動かす、というのはそこまで難しい条件じゃないはずだ。

でも、トラウマ。

ああ、トラウマか。

今更だが、なんか感じ悪い。

先代のトラウマというと、必然的に誰にとっても記憶に残るようなエグいものばかりだ。

俗に言う『みんなのトラウマ』って奴だ。

そういうのを再現するとか、正直こっちも精神を削られる。

強力なだけに、デメリットや副作用が伴うのか分かっていない点も不安だ。

自分のことだけではない。異変のことも含めて、周り是不確定要素ばかり。

色々と備えてはみたが、これから先何が起こるのか正直分からない多くの不安。

異変。

お空。

妖夢。

二通の手紙。

お燐。

無事に。

届け。

上手く。

原作。

平穏な生活。

昔のように。

こいし——。

徐々に眠りに落ちていく意識の水面で、思考が次々と気泡のように膨らんでは消えていった。

「先代がレベルを上げて物理で解決してくれば楽なのに……」

無責任なことを口走りながら、さとりは眠りに就いた。

身体が動かない為、寝返りを打たない。

ほんの僅かな胸の上下運動だけが、呼吸していることを表している。

死んだように眠るといふ表現が相応しい、あるいは時間が止まっているのではないかと思えるような、深い眠りだった。

静寂が部屋を満たしている。

その中で、音も立てずに扉が開いた。

音だけではない、室内の空気さえ乱れない開き方だった。

視覚で捉えて、ようやく扉が開いたと認識出来るような開き方である。

開いた扉から、足を踏み入れる者があった。

当然の如く、さとりは侵入者にも眼を覚まさない。

ノックすらない。

かといって、意図して気付かれずに入り込もうとするような動き方ではない。

足音はなく、それでいて自然な歩調で、小柄な人影がベッドの近くまで歩み寄った。

「ただいまー、お姉ちゃん」

古明地こいしは、満面の笑顔で眠る姉に挨拶をした。

「ぐっすり眠っちゃってるね。残念、折角帰ってきたのに」

こいしの声量は特別抑えたものではなかったが、さとりが眼を覚ますことはなかった。

それだけ深い眠りなのだ。

「色々疲れることがあったもんねえ。それに、これからもたくさん起こる。本当に、お疲れ様。お姉ちゃん」

慈しむような笑顔で、優しく姉の頭を撫でる。

そのまま頬をなぞり、鼻の下まで来ると、人差し指と中指を差し込んだ。

鼻の穴を塞がれた結果フガフガと苦しげに喘ぐさとりの顔を見て、こいしは爆笑した。

床を転がり回りながらひとしきり笑うと、目元の涙を拭って立ち上がる。

やはり、さとりは起きる気配さえ見せなかった。

「一度死に掛けた上に、わけの分かんない力まで使ってるんだから、疲れて当然だよ。わたしも少し休もうつと」

こいしはさとりの隣へ寄り添うように、ベッドに横になった。

動かない姉の片腕を両手で胸に抱き寄せる。

吐息が届くほど全身が密着しても、さとりは身じろぎ一つしない。

もちろん、こいしにとってはそれでよかった。

起きて、自分の存在に気付かれても困るのだ。

今はまだ。

「お姉ちゃん、頑張ってるね。わたしも、頑張ってるよ。だって、お姉ちゃんの為だもん。見通しの甘い姉のフォローをするのは、しっかり者の妹であるわたしの役目」

さとりの寝顔に向かって囁く。

「ちやあんと、お姉ちゃんを異変の黒幕に相応しいラスボスにしてあげるから」

こいしは言った。

「ただのペットが六面ボスで、その主人であるお姉ちゃんが四面ボスなんて納得出来ないよ。だって、お姉ちゃんは地底の支配者なんだから」

ん。あの八雲紫にも一目置かれる狡猾で人心掌握術に長けた心だけじゃなく未来の異変さえ事前に覚れる大妖怪にして静かなる悪意スーパーサトリ意味はてめえで勝手に想像しろ！ なんだもん」

こいしは無邪気に言った。

「原作通りの予定調和みたいな異変なんてつまんないよ。ましてや、それをもっとつまらなくするなんて間違った努力の方向だよ。ホント、しょうがないにやあ、お姉ちゃんは。でも大丈夫、わたしがいるからね。ちゃんと、わたしが物語を盛り上げてあげるからね。クライマックスで、満を持して登場するのはお姉ちゃん！ オイシイ所を全部攫っちゃうんだっ！ 参加するはずのないイレギュラーをいっぱいいっぱい巻き込んで、ゲームをもっと面白くしよう!!」

こいしは心の底から楽しそうに笑った。

「愛してるよ、お姉ちゃん♪」

こいしは、姉の頬におやすみなさいのキスをした。



買ったばかりの酒瓶をぶら下げて店を出たヤマメは、偶然目の前を通りかかった鬼の姿を見て、僅かに驚いた。

以前の異変に参加して地上へ出ていった鬼のほとんどが退治されたことは、旧都の住人ならば誰でも知っている。

地底に生きて戻ってきた鬼は数えるほどしかない。

星熊勇儀がいるからこそ、鬼という種族の存在感は決して小さくならなかったが、今や旧都に居る鬼は十人にも満たなかった。

そんな数が少ない鬼の中でも、見たことのない顔だったのだ。

「この地底で見かけたことのない鬼ってのも珍しいね」

思わず漏れた独り言に、その鬼は敏感に反応した。

何故か、周囲を警戒しながら歩いていたらしい。

ヤマメと眼が合い、気まずそうな表情を浮かべる。

その反応もまた謎だった。

「ど、ども……黒谷の姐さん」

「うん？ あんた、あたしのことを知ってるの？」

その鬼は、印象に残るような雰囲気や強者たる威圧感を持っていなかったが、全身の皮膚が赤いという特徴的な姿をしていた。

まだ多くの鬼が住んでいた頃と比べても、赤鬼というのは珍しい。目立つことが騒動の元でもあるこの旧都において、記憶に残りやすいはずの存在である。

「いや、例の異変の前にここに住んでいたクチでして、その時に皆さんのことをちよつと見たって程度で……へへっ」

鬼らしからぬ卑屈な笑顔と口調で答えが返ってくる。

見た目以外は、確かに記憶には残らない程度の小物のようだ。

「ふうん。ってことは、地上に残ってたのが戻ってきたってことかい？」

「ええ、ちよいと野暮用でして」

「それって、後ろに連れてる妙な二匹と関係あるの？」

ささやかな興味から、ヤマメは赤鬼の背後にいる妖怪と妖精に視線を向けた。

妖怪の方は、少女の容姿をした化け猫である。感じる力も弱く、ヤマメにとつて大した印象を抱くような相手ではない。

地上の妖精は、少し珍しかった。やはり力は弱く、気に掛けるような存在ではないが、何故か自分に対して睨むような目付きをしているのが気になった。何より、その顔には少しだけ覚えがある。

「そっちの妖精は、なんか何処かで見た覚えがあるような」

「やいっ！ あたいを忘——」

化け猫が瞬時に妖精の口を押さえて羽交い絞めにし、赤鬼が巨体で遮るように間に割り込んだ。

話を中断されたヤマメは、不愉快に感じるよりも、妙に息の合ったコンビネーションだなあと感心した。

「いやあ、こいつらは俺の子分みてえなもんですよ！ 地上で妙に纏わりつかれましてね、迷惑してるんですわ！ ところで、皆さんは見たところキスメの姐さんの所で酒盛りですかい!？」

「ああ、うん。まあね。ってか、あんたよく知ってるね」

「お二人の仲の良さはついつい眼に入っちゃうんでさあ！ さきつ、遅れるといけねえ。縁があつたら、またお会いしましょうや！」

赤鬼が捲くし立てながら、背後の二人を押しつけ、ヤマメに道を譲った。

譲らなければいけないほど狭い場所でもない。当然、これが厄介払いの一種であることは分かっている。どうやら、相手にとっては触れて欲しくない事情があるらしい。

しかし、分かったからといってその事情に執着するほどの理由も、ヤマメにはなかった。

鬼のクセに変に弁の立つ奴だったな、と。その程度の感想を浮かべながら、ヤマメは促されるままにその場を離れたのだった。



「オイ！ あたいがアンタの子分つてなによ！ 逆でしょ、バーカー！」
「うるつせえな！ あの時はああでも言わなきゃしょうがなかったんだよ！」

橙から開放された途端、チルノは赤鬼に噛み付いていた。種族差や体格差などないかのような迫力だった。

鬼と妖精が同じレベルで争う光景は、本来ならば大いに人目を引くものである。

喧嘩が路傍の華である旧地獄街道では尚更のことだ。

しかし、現状二人の諍いに注目するギャラリーは存在しなかった。ヤマメと分かれた後すぐさま人気のない裏道へと逃げ込んだからである。

「まあまあ、チルノ。今回はこいつの方が正論だよ。地霊殿に着くまで、変なイザゴザや喧嘩に巻き込まれるわけにはいかないんだ」

橙は、自分の式神の判断を認めていた。

実際に、地底において彼は意外なほど活躍していた。

地底への侵入を無事に果たした橙とチルノは、案内役として式神であるこの鬼を召喚した。

古巣である地底に関して知識や土地勘があり、この街道から外れた裏道を利用することを思いつけたのも彼のおかげである。

「本当、いい判断だったよ。その場しのぎの為とはいえ、わたしも含めて子分扱いしたことは許してあげるよ。わたしもご主人様として鼻が高い。式神であるあんたを使役する立場であるわたしもね」

「……立場強調すんなよ。あと蹴んなよ」

不必要に大きく胸を張りながら、ふくらはぎにローキックを繰り返す橙を、うんざりしながら見下ろした。

もはや怒りすら湧かない。

湧いたら痛い目に遭うと骨身に染みて理解しているからだ。

生意気な妖精に怒鳴られ、ちっぽけな妖怪に難癖をつけられる、自分の立場に情けなさだけがしみじみと湧いていた。

「いいから、さっさと行くぞ。出来るだけ早く目的地に着きたいって命令したのはお前らだろ」

癩癩を起こす子供を諫めるように、赤鬼は疲れた仕草で行動を促した。

未だに不機嫌な二人を後ろに、先導して歩きながら、つくづく自分とは変わったと思った。

姿形だけの話ではない、内面も含めてだ。

ヤマメが今の自分を見て覚えがないと言うのも、無理はないだろう。

かつての自分は、ただ単に鬼という種族だけが目を引く、地底ではありふれた小物だった。

しかし、現在は——より一層惨めで矮小な負け犬になっていた。

「そーいえばさ、アンタさっきのクモの妖怪と本当に知り合ってたの？」

おもむろにチルノから投げ掛けられた質問に、赤鬼は驚きながら振り返った。

「おいおい、何であの人が土蜘蛛って知ってたんだ？ お前の方こそ、本

当に黒谷の姐さんと顔見知りだったのかよ？」

「お師匠と一緒にここへ来た時、入り口の近くで会ったのよ。お師匠

のこことバカにして、ムカつく奴だったわ！」

「……頼むから、あの人に喧嘩売るような真似をしてくれんなよ？ お前を助ける為に俺が代わりに戦うなんて事態にや死んでもなりたくないぜ」

「それってつまり、鬼のあんたよりあのヤマメって妖怪の方が強いってことよね。前々から思ってたけど、あんた鬼の中じゃかなり弱い部類なんじゃない？」

「う、うるせえな！」

橙の容赦のない指摘は、自覚という急所へ的確に突き刺さった。

「く、黒谷の姐さんはよお、勇儀の姉御や伊吹の頭かしらとタメ張るほど年季の入った大妖怪だぜ!? その怪力は、俺以外でも生半可な鬼じゃあ太刀打ち出来ねえほどだったんだ！ まさに格上の御方よ！」

「その口ぶりからすると、実際に戦ったことがあるみたいに聞こえるけど？」

「……昔、仲間と酔っ払ってた時に絡んで、ボコボコにされたんだ」

「それって、あたい達の時と同じじゃん」

「そうだよ！ あんな感じにぶちのめされたんだよっ！」

「あんたって、進歩ないね」

「あたい、知ってるわ！ あんたみたいなのをチンピラって言うのよ！」

「うるせええっ！ 黙ってついてこねーと、案内やめるぞ！」

しかし、怒鳴りながらも、足は止めていない。

別段律儀なワケではなく、どう抵抗しようが橙の命令に絶対服従の身であることは変わらないと分かっているからだだった。

それでもなければ、そもそも地霊殿までの案内など請け負うはずがない。

住み慣れた古巣を飛び出し、意気揚々と喧嘩に乗り込んだ先で完膚なきまでに叩きのめされて、おめおめと帰ってきたことだけでも面子が立たない状態だというのに、子供のような妖怪と妖精に顎で使われる身分にまで落ちぶれてしまったのだ。

万が一にも知り合いと遭遇しようものなら、生き恥を晒すというレ

ベルではない。

旧都を通る際に人目を避けたいのは、彼自身も同じだった。

出来れば近づきたくもない。

加えて、目的地があので霊殿だ。

地底に住む者ならば、大抵の者が寄り付くことさえ避けたがる場所だった。

かつて、そこに住む古明地さとりは地上を追われた妖怪達の楽園である地底でさえも一番の嫌われ者だった。

それが今は、地底で一番恐れられる嫌われ者だ。

「地底にやって来るってだけでも相当だったのに、あの地霊殿に行きたがるなんざ物好き通り越してるぜ」

伊吹萃香が起こした異変は、実は全て古明地さとの計画だったのではないかと噂されている。

真偽の程は定かではないが、そう噂されるだけの根拠がある妖怪だということだ。

「ご主人よ。あんたも賢いんだから、あそこに近づくことのヤバさは分かっているだろ？」

「確かに、古明地さとりは凄く危険な妖怪だって言われているけど……」

「えー、さとりは別にキケンじゃないわよ。アイツ、すっごい弱っちいもん」

「力が強いことだけが、強さじゃないんだよ。あの妖怪には、藍様も紫様も一目置いてるんだ。チルノの師匠である先代巫女さえ、あいつの言いなりだつて話だよ」

「そりゃそうよ。だつて、お師匠とさとりは親友だもん。お師匠がいっつもさとりを助けてあげてるんだ」

「まあ、妖怪の山で見た感じだと、確かに仲は深そうだけど……でも、きつと何か裏があると思うな。チルノは警戒しなすぎだと思う」

「皆がさとのこと勘違いしてるだけだと思っけど？」

「妖精らしいお気楽さだぜ。それじゃあ、その大したことのない古明地さとりが、お前らの言う友達を地上に連れ出すことを簡単に許可してくれるよう祈るときな」

赤鬼の言葉に、橙は不安そうな表情を、チルノは納得のいかなさそうな表情を浮かべていた。

「——ちっ、また喧嘩を始めてやがる」

街道に繋がる建物の隙間から、喧騒が聞こえた。

ハッキリと何が起こっているのかは分からないが、確実に揉め事の前兆であることは確かだ。

それを避けるように、赤鬼は二人を連れ立って足早に先へと進んでいった。

「変わんねえなあ、こっちは」

どうせ、誰かと誰かが喧嘩でも始めたに違いない、と。妙な懐かしさに知らず笑みが漏れていた。



妖夢は、生まれてこの方喧嘩というものを経験したことがなかった。

戦い自体はもちろん経験したが、それらは全て厳粛で公平な決闘だった。

——いや。

ただ一度、無抵抗の相手に刀を振り下ろしたことがある。

「お前が魂魄妖夢だな？」

鬼が住む旧都の街道で、その住人にこうして敵意を向けられるのは、あの時の罰なのかもしれない。

自分の前に立ち塞がった妖怪の巨体を見上げながら、妖夢はそんな風に考えていた。

「地霊殿で、古明地さよりの小間使いをやってるっていう物好きだろう？」

正確には、ついさつきクビになって地霊殿からも追い出されたのだが、それをわざわざ見知らぬ他人に教える必要もない。

妖夢は警戒するように、相手を睨み付けた。

「……それが何ですか？」

「一度、会いたいと思っていたのさ。あの翁おきなを斬ったという侍にな
「翁？」

「鬼だよ。地上の異変でお前が斬ったと伝えられている、鬼の爺さん
さ」

まさについ先程、偶然にも脳裏に蘇っていた記憶を指摘されて、妖
夢は息を呑んだ。

それに『伝えられている』とは、どういうことなのか？

あの時の状況を、誰が、どうやって、何の目的で伝えたのか――。
動揺する妖夢の様子を見て、目の前の妖怪は楽しげな笑みを浮かべ
た。

「あの爺さん、どうやら本当に耄碌しちまってたようだな。こんな小
娘に斬られて、最期を迎えるとは。それとも、上手く不意でも突いた
のか？」

嘲りを含んだその言葉に反論は出来なかった。

あの鬼を斬った前後の出来事は、妖夢にとって深く刻まれた記憶で
あり傷痕である。

俯いて黙り込む妖夢の反応に、妖怪は更に笑みを深くした。

「まあ、何でもいいさ。とにかく、お前はあの翁を斬ったんだ」

「……だったら、何なんですか？」

「俺と立ち会ってもらいたいのさ。こいつでな」

妖怪は、右手をこれ見よがしに自分の腰に伸ばした。

そこに帯びていたのは、一本の刀だった。

「珍しいだろう？ 俺も使うんだよ、刀を」

得意気な宣言に対して、妖夢は何も言えなかった。

妖怪は刃の向きを逆にして腰に差していた。

刀を抜く際の手の位置も、足の位置も、構えと呼べるようなもので
すらない素人のそれだった。

妖夢は相手の顔を見上げた。

改めて見れば、頬が紅潮し、僅かに荒い吐息には強い酒の匂いが混
ざっている。

さとりに見放され、これから行くアテもなく、場末の一角を彷徨つ

ていた果てに、酔ったゴロツキに絡まれる――。

最後の警戒心すら失せて、妖夢は何もかもが億劫になり始めていた。

「あの翁を斬ったお前を、俺が斬る。文字通りの真剣勝負だ。まさか、逃げるなんて言わねえよな？」

既に心が冷めた妖夢にとって、それは安っぽい挑発だった。

しかし、途端に周りがわっと沸いた。

慌てて周囲を見回してみれば、いつの間にか多種多様な妖怪達が、二人から一定の間隔を空けて円を描くように囲んでいた。

「いいぞ、やれ！ 斬り合え！」

「ここじゃ素手の喧嘩ばかりだからな、刀同士の勝負は見物だぜ！」
「本当に鬼を斬ったんなら、その腕前を見せてみる！」

二人の内、どちらに対しても勝手な声援を飛ばしている。

彼らは別段妖夢の敵というわけではなく、単なる観客として集まっているのだ。

突然道端で始まったイベントを楽しむ為に。

それは妖夢が知らない旧都の日常だった。

「さあ、お前もさっさと刀を出せ！」

戸惑う妖夢に、妖怪は促した。

しかし、その顔には余裕の笑みが変わらず浮かんでいる。

妖夢が現在、刀を持っていないことを分かっているかのようだった。

いや、間違いなく分かっているのだった。

着の身着のままさとりに連れられ、今日までの生活もずっと住み込みで働いていた妖夢の荷物は少ない。地霊殿から出る際に持ち出した物は、これまで働いた仕事の代価として渡された路銀程度である。

そして、仮にこの手に刀があつたとしても、今の自分はそれを抜くことは出来ないだろう。

突如、目前に迫った勝負の時を前にして、妖夢が抱いたものは諦めだった。

どうすればいいだろう？

このまま黙って、棒立ちのまま斬られるのが一番簡単だろうか。それとも『勘弁して下さい』と言って土下座をすれば、周囲の熱も冷めるだろうか。

そんな妖夢の考えまで読めたわけではないが、既に戦意が萎えている程度のこととは、対峙する者にも伝わっていた。

だからこそ、目の前の妖怪はいい気になって、更に場を盛り上げる為の演出をしようとした。

「貴様！ まさか刀を持っていないなどと、剣士の恥のようなことを言うつもりでは——」

「うるせえ」

突然、妖怪の方が前のめりに倒れた。

背中で何かが爆発して、吹っ飛んだかのような倒れ方だった。

地面に勢い良く顔面を打ちつけ、悶絶している。

「くだらねえお祭り騒ぎしてんじゃねえ」

熱狂する空気の中へ、唐突に氷のように冷えた声が割り込んだ。

「だ、誰だ!? オレにこんな真似を……って!!?」

痛む顔と背中を擦りながら振り返った妖怪の怒声は、振り返った瞬間に凍りついた。

そこに佇んでいたのは、三本の角を持つ鬼だった。

場の空気が、一変して張り詰めた。

「誰だって? 俺だよ。俺がおめえの背中を蹴るってえ真似をしたんだよ」

未だに尻餅をついたままの相手に対して、三本角の鬼は淡々と答えた。

「……だ、旦那。いくらアンタでも、他人の勝負事に水は差さないで貰いたいな」

かつての異変では見たことのない、妖夢の知らない鬼だったが、ここ旧都においては顔と名を知られた存在であるらしい。

乱入した彼に対して、周囲の者達は先程までの騒ぎを止めて黙り込み、そそくさと立ち去る者もいる。

蹴られた妖怪が上げる抗議の声も、弱々しく震えていた。

「何が勝負事だ。寝言抜かしてねえで、さっさと消えろ」

「オレはこれから真剣勝負を……」

「何処で拾ってきたか知らねえが、使うどころか刀の差し方も分かってねえ馬鹿が、その本物に勝てるわけがねえだろ。木の枝でも持つてチャンバラごっこでもやってろ、酔っ払い」

そこでようやく自身の間違いに気付いた妖怪は、酒で赤い顔を更に赤くした。

「なんだよっ……白けるような真似するなよ！　こんな小娘があのお翁を斬ったなんて与太話がまかり通ってるなんざ、旦那が一番気に入らねえはずだろ!？」

鬼は、もう応えなかった。

無言で拳を振り下ろしていた。

熱い塊のような拳が、その妖怪の頬を掠めて、地面に突き刺さった。

轟音と共に衝撃が足元を揺るがし、粉塵が舞い上がった。

恐るべき鬼の剛力である。

「あひいいい——」

顔のすぐ傍で起こった爆発に、妖怪は情けない悲鳴をあげた。

元より、彼を含めたこの場の誰も、鬼に対して本気の口答えを出来るはずがなかった。

それだけの威厳と地位を、鬼はこの旧都で築き上げている。

「喧嘩は仕舞えだ。全員、とつとと散れや」

誰も逆らえるわけがなかった。

周囲の野次馬達は、波が引くようにその場を離れていった。

妖夢にちよつかいを掛けようとした妖怪も力の抜けかけた足でころうじて立ち上がり、

「その刀は置いてけ。てめえの玩具じゃねえ」

そう言われ、躊躇うこともなく刀を放り出して、逃げ出した。

喧騒と共に、人気もまた周囲から消え失せていた。

街道の一角にも関わらず、いまだ冷めぬ鬼の怒りを恐れるかのように、誰もそこを通ろうとしない。

落ちた刀を拾い上げて無言で佇む三本角の鬼と、呆氣にとられた妖

夢だけが、その場に残されていた。

「……あの」

妖夢は恐る恐る口を開いた。

「ありがとうございます、ごさいました。助けていただいて……」

鬼が振り返った。

妖夢の謝礼を無視するように、無言で見つめていた。

睨むような眼つきに萎縮して、妖夢は顔を逸らした。

「あの馬鹿の言い草じゃねえが、おめえ本当に刀を持ってねえのか？」

鬼がおもむろに訊ねてきた。

「翁を斬った刀だ。得物も腕前も並じゃねえはずだ。そうだろう？」

お前は、本当にあの鬼を斬ってのけたんだろう？」

その質問は、答えを確かめるといふよりも、何故か絶るような響きを含んでいるように感じられた。

何故、異変の混乱の中で起きた出来事がここまで周囲に知れ渡っているのか。

目の前の鬼が、それを確かめてどうするつもりなのか。

妖夢には分からないことばかりだったが、それでも唯一の事実を誤魔化すことだけは出来なかった。

「……はい」

妖夢は答えた。

「貴方の言う翁という鬼は、私が斬りました。斬って、殺しました」

それを聞いて、三本角の鬼は僅かに俯いた。

「そうか」

「はい」

「やはり、お前が退治したんだな」

「はい、そうです」

「そうか……」

眩くと同時に、目の前の鬼の体から強張りが抜けていくのが分かった。

妖夢は意外な気持ちだった。

これまでの反応や様子からして、目の前の鬼は、自分の斬った鬼と

親しい間柄のはずである。

言わば、自分は仇だ。

恨み言をぶつけられる程度で済めば軽い方で、最悪襲い掛かってくるかもしれないと、内心身構えていた。

しかし、彼はただ納得したように一言呟いただけだった。

「……貴方は、その翁という鬼とどういった関係なんですか？」

妖夢は思わず訊ねていた。

「別に、親父みてえなもんさ」

千切つて捨てるような、端的な答えが返ってくる。

しかし、その声色は、本当の父に向けるような親愛だけでなく、師に向ける尊敬や友を懐かしむような感情まで混ざった、複雑な色をしていた。

妖夢は訊ねたことを後悔した。

やはり、掛け替えのない相手であったことに変わりはないのだ。

それを斬ったのは自分だ。

しかも、尋常の勝負の果てに斬ったのではない。

魔理沙との勝負が決着した後で、敵を生かして見逃すという彼女の判断を是とせず、横合いから割り込んだのだ。

あれを他人は何と呼ぶだろう？

介錯か。

少なくとも、今の自分は不意打ちと呼ぶ。

あの時の行動には一切の迷いがなく、鬼を討ったという事実への誇りと、己の実力への自負だけしかなかった。

だが、今は違う。

あの時抱いた誇りは傲岸で、自負は自惚れだったとしか思えなかった。

後悔しかない。

後ろめたさしかない。

「あの鬼を斬ってしまったのは私です」

妖夢は自分の罪であるかのように、改めて自身の行いを肯定した。

「ごめんなさい」

妖夢は頭を下げた。

その謝罪に何の意味もないことくらい分かっていたが、そうしなければ耐えられなかった。

しばらくの間、三本角の鬼に対して頭を下げ続けていたが、無防備な後頭部に拳が振り下ろされることはもちろん、罵倒の一つさえなかった。

妖夢は恐る恐る頭を上げて、相手の表情を伺った。

三本角の鬼は、妖夢に対して怒っているわけでも、蔑んでいるわけでもなかった。

「やめてくれ、謝るんじゃないよ。誇るならまだしも。おめえが獲った首はその価値すらなかったってのか」

これほどまでに深く傷ついた表情を、妖夢はかつて見たことがなかった。



異変に気付いたのは、旧都の喧騒が遠く背中に届かなくなり、更にしばらく進んだ時点のことだった。

地霊殿は旧都の中心に位置する場所に建っている。

しかし、その存在はほぼ孤立していた。

周辺に地霊殿以外の建物はなく、住人はおろか寄り付く者すらいない。

一步踏み込めば活気と騒動が溢れる旧都において、その中心に近づくほどに人気はなくなり、寂れていくのだ。

裏道を抜けて進み続ける三人の視界には、ここしばらくの間、妖怪一匹、動くもの一つ入ってこなかった。

「クソッ……妙だな。一体、どうなつてやがるんだ？ 嫌な予感がするぜえ」

閑散とした周囲を見回して、赤鬼は舌打ちした。

「何で怨霊を一匹も見かけねえんだ？」

疑問を呟きながら、額に浮いた汗を拭った。

同じように顎から垂れそうな汗を拭いて、橙が顔を上げた。

「どういうこと？」

「怨霊だ。ご主人も、地底には大量の怨霊がいることは知ってるだろ？」

「うん、命に関わることだからね。妖怪は、怨霊に取り憑かれると死んじゃうから」

「その怨霊の大半が蔓延ってるのが地霊殿なんだ。主の古明地さとり本人が怨霊と会話が出来る上、飼ってるペットの中には怨霊を操る能力を持つ者や食っちゃまう者もいるらしい。つまり、奴が実質的に地底の怨霊を管理し、支配してやがるってわけだ」

「……改めて聞くと、怖い所だね」

「だから、俺を先頭にしてんだろ？ 怨霊も鬼にはびびって近づかねえからな」

「うん。頼りにしてる」

「うるせえ。——しかし、だ。妙なことに、さっきからその怨霊を全く見かけねえ。もう地霊殿は間近だつてのによ」

橙は周囲を注意深く見回し、耳を澄ませた。

それまで別のことに気を取られて周囲の様子に意識を向けていなかったが、改めてこの静けさが不気味に感じられた。

「おまけに、何でこんなに暑いんだ？」

「そう、だよね」

荒い息を吐きながら、橙は再び汗を拭った。

明らかに周囲の温度が上がっていた。

旧都では特に違和感を感じなかったことから顧みると、地底全体の気温が高いわけではないらしい。

確実に、地霊殿に近づく度に温度が上がっている。

加熱された空気に、息苦しさすら覚えるほどだった。

「この先に何かあるぞ。すげえ熱を発する何かが」

「ねえ、地霊殿は元々灼熱地獄跡の上に建てられたって聞いてるけど？」

「ああ、確かにあの灼熱地獄にやまだかつての火が残ってるが、その管

理も地霊殿の仕事のはずだ」

「だから、その管理に異常事態が起こってるんじゃないかな。怨霊のことも含めて」

「……畜生。帰りてえ」

「駄目」

「分かってるよ、畜生。どうしてこうなった？」

ふと、橙はここまで会話に全く入ってこないチルノに気がついた。内容を理解しているかどうかはともかく、出ずっぱりな彼女が意見の一つも主張しないというのはおかしい。

橙は前を歩く赤鬼の背中から視線を横へずらし、そして更に横へ横へとずらし続けて、結局背後を振り返ることになった。

「——って、チルノ!？」

二人からかなり遅れて、不安定な足取りで歩くチルノがいた。俯き、両手はだらりとぶら下げている。

かろうじて正常に動いているのは下半身のみで、上半身はその機能が停止してしまったかのような体勢だった。

橙が慌てて駆け寄り、今にも倒れそうな体を支えた。

「うっかりしてたよ、チルノは氷の妖精だったね。やっぱり、熱には弱いんだ」

「……ちえん」

「大丈夫、チルノ? 意識ある?」

「へへ……っ、あたいはサイキョーなのよ。この程度、何でもないと……」

「いや、汗の量が尋常じゃないよ!？」

滝のような汗、という表現だけでは足りない。

チルノの全身は、水を被ったかのように濡れていた。

これが全て汗だというならば、脱水症状で命の危険を心配しなければならぬ量だ。妖精に通じる理屈かどうかは分からないが。

「あたいはダイジョーブよ。それに……もう着いたみたいだしね」

鉛のように重い頭を持ち上げて、チルノは無理矢理笑みを形作つた。

その視線の先には、巨大な屋敷が佇んでいた。

西洋風のデザインや広大な土地にただ一つだけ孤高に佇む様が、ひしめくように建ち並んで街の形を成していた旧都の家屋群とは、一線を画した存在感を放っている。

「――あれが地霊殿だ」

赤鬼が、チルノと橙に教えた。

遠目から見ても、その屋敷の周辺には動くものの姿や気配はない。しかし、屋敷の輪郭が歪んで見えるほどの熱が、そこを中心に発生していることも同時に分かった。

何かが起きている。

何か、とてつもなく悪くて、危険な何か――。

その根拠を探るまでもなく、橙はそう直感した。

仮にその勘が間違いだったとしても、あんな場所に近づけばチルノの体調は間違いなく悪化する。

橙の脳裏に『ここから退く』という選択肢が浮かび上がり、

「よっしゃあー！ 待ってなさいよ、お空!!」

口を開く前に、支えていた腕を振り切って、チルノが飛び出していった。

弱り果てていた体の何処にそんな力が残っていたのか、地霊殿に向かって真っ直ぐに飛んでいってしまった。

呆気にとられて見上げる橙の顔に、水滴が降り注いだ。

チルノの体から飛び散ったものだった。

「……汗じゃない?」

それは氷水のように冷たい液体だった。

「待って、チルノ」

また別種の嫌な予感が、橙の脳裏を走り抜けていた。

「待って! 何か……何かが起こってるんだ、あんたの体にも!!」

橙は全速力でチルノを追いかけた。

赤鬼も慌ててついてくる。

結果的に、三人はついに目的地である地霊殿に辿り着いていた。

十階建てを超える巨大な屋敷の前には、広大な土地を利用した庭園

が広がっていた。

それを見て、橙は紅魔館を連想した。

毎日手入れの行き届いた花壇や噴水で装飾された紅魔館の方が豪華さでは勝るが、単純な敷地の広さならば地霊殿の方が勝っている。

その庭園の中心に、佇んでいる者がいた。

見覚えのある黒い髪と翼を力なく垂らし、瞳はぼんやりと虚空を眺めている。

何故だか随分と背丈が大きくなっているが、人相までが変化したわけではない。

一目で誰なのか分かった。

「お空——!!」

橙の代わりに、チルノがその少女の名前を呼んだ。

ようやく会うことの出来た友達の姿に、嬉しそうに笑うチルノ。

しかし、橙は喜ぶことが出来なかった。

先程も、名前を呼ぶことさえ躊躇っていた。

チルノの呼び声に反応して、空の瞳がこちらを向いた。

捉えられた、と思った。

そして——拙い、と。

「……あれえ？ チルノ？」

焦点の合っていないかった瞳がチルノの姿を映し、急速に意識を取り戻す。

何の感情も浮かんでいなかった空の顔に、ゆっくりと笑みが形作られていった。

「チルノだっ！ 橙もいるうー！」

二人の姿を認めて、空は嬉しそうに笑った。

その瞬間、凄まじい熱風がチルノ達を襲った。

肌を焼く程の熱さだった。

橙と赤鬼が思わず顔を背け、チルノが苦悶の声を洩らす。

「……おい、何だあいつ？」

空の無邪気な笑顔を見て、赤鬼は戦慄した。

おそらく同じ心境である橙に、震える声で訊ねる。

「本当に、あれで間違いねえのかよ？　あれが、お前らの探してた『友達』だったのか？　あんな——」

あの熱風を起こしたのは、間違いなく目の前の空だった。状況からして、異常な温度の上昇の原因となっているのも、やはり空だ。

「化け物が」

橙は答えることが出来なかった。

鬼が『熱い』と感じるほどの熱風を、彼女はただ意識を向けるだけで発生させたのだ

「アチチ……ッ！　こらあ、お空！　何すんのよ!？」

「あつ、ごめんごめん」

怒鳴るチルノに対して、頭を掻きながら空が謝る。

二人のやりとりを眺めながら、橙は強烈な違和感を感じていた。

「まだまだ力が不安定で、上手く扱えないのよね」

困ったように笑いながら、空が説明する。

それを、苦悶の表情を浮かべたチルノが睨みつける。

喧嘩するほど仲が良い——橙がこれまで見てきた限り、二人はそんな関係のはずだった。

しかし、視界に映る現在の二人の関係が、酷く歪んで見える。

何故、空は笑っているのだろうか？

一見平気に見えるチルノの態度がただの強がりで、実際は本当に苦しんでいることくらい分かるはずだ。

冗談で済ませていい状況ではない。

それなのに、空の謝罪には真剣さがない。大人が子供の癩癩に対してそうするような、上からの目線であしらうような態度だった。

さとりを助ける為に必死でチルノを頼ってきた、あの時の彼女とはまるで雰囲気が違う。

今の空には、悪い意味での余裕があるように思えた。

橙は改めて変わり果てた空の姿を見つめた。

全身から無意識に発している強烈な熱気は、おそらく彼女の内包する力が溢れ出たものだ。

もちろん、こんなに強大な力は、以前の彼女には備わっていなかった。

チルノや自分と同じくらいだった身長は倍以上に伸び、視線は自然と見下ろす形になっている。

右足には溶けた鉄のような物が纏わりつき、左足には二重の輪が重なって絡み付いていた。

右腕は今まさに変化の最中であるかのように、皮膚が炭化して罅割れ、内側で溶岩に似た赤い光が脈動していた。

しかし、最も眼を引くのは、胸の中心で開いた巨大な一つ眼だ。

両足と右手は、まだ『変化』と呼べるものだった。

だが、この目玉は違う。

元々、彼女に無かった物。

手に入れた物。

与えられた物。

あの目玉こそが彼女の変貌の原因であり、本来持ち得るべきではないこの異常な力の源だと橙は察した。

——あれは、自分達の知っているお空じゃない。

空と真正面から向き合うチルノに、橙は警告しようとした。

「チルノ、離れて……っ」

しかし、絞り出した声は自分でも驚くほど小さかった。

喉が引き攣っている。

全身が、恐怖によって竦んでいるのだ。

「なんか、随分と変わったわね。お空」

「うん。実はね、私、神を喰らったんだ」

空は笑顔で答えた。

「紙？ 紙なんて食べてどーすんのよ？」

見当違いの反応に、空はほんの少し眉を顰めた。

「紙じゃなくて、神様のことだよ。チルノは相変わらず馬鹿だなあ」

遠慮のない空の言葉に、チルノは眉間に皺を寄せた。

「なに……？」

「神様の力をね、貰ったんだよ。黒い太陽、八咫やたがらす鳥様の力。この熱は、

偉大な太陽が放つ力のほんの一端に過ぎない」

「へえ、難しいことは分かんないけど、強くなつたってわけね？」

「あははっ、本当に分かつてないなあ。手に入れたのは強さだけじゃない。多くの知恵と、何よりも高みから事象を見通す精神性を手に入れた。私は、新しい世界を開いたんだ！」

「ふーん。まあ、あんたが元気になつたんなら何でもいいや」

「……本当に、チルノは馬鹿だなあ」

「うがーっ！ さっきから一体何なのよ!? バかつて言う方がバカなのよ、バーカ！」

「違うよ、チルノ」

空の声は、押し殺したように低く、静かだった。

浮かんでいた笑みの形が、少しずつ小さくなっていく。

「チルノは、本物の馬鹿だよ」

憐れむように言った。

「頭が悪いんだ。今の私には良く分かる、チルノの愚かさが。嫌というほど分かる」

「あんた、ケンカ売ってんの!？」

「そういうところが目に付いちやうようになっちゃったんだよ。目に付いて、嫌になるっていうか、苛立つっていうかさ。以前は気にならなかったのに」

「怒ってるのはあたいの方だぞ！」

「ほら。そういう所がさ、馬鹿だから分かつてないんだよ。どうして、そういう態度を取るの？」

「はあ？」

「今の私が、チルノよりもずっと強くて、賢くなつたって分かつてないんでしょ」

空は肩を竦めた。

「これまでと同じ接し方をしないで欲しいんだ。私はもうチルノと同じレベルの存在じゃない」

既に、二人の顔から笑みは消えていた。

睨みつけるチルノに対して、空も眉を顰めながら見下ろしている。

橙にはチルノが怒る気持ちが理解出来た。

傍で聞いていた自分でも、空の言葉の一つ一つが癪に障る。

最初に違和感を感じた時から、彼女の言動の端々には相手を見下した態度が隠れていたのだ。

「喧嘩なんて成立しないよ。急な変化に慣れないのかもしれないけどさ、これからは実力差を弁えるようにして欲しいんだ。大丈夫、立場が変わっても私達は友達だよ。今度は私がチルノを助けてあげるから」

「……分かったわ、お空」

「うん、よかった」

「一つだけ、あんたのことで分かったわ」

「うん？」

「あんたがね、何か知らないけど、調子こいてるって分かった」

「……は？」

「お空、あたいと勝負だ」

チルノがスペルカードを突きつけて、言った。

「フランの所へ連れてく前に、まずはあんたをぶっ飛ばすことにした！」

「……チルノ」

空は、苛立たしげな手つきで髪を掻き上げた。

「あたいと弾幕ごっこで勝負よ！」

「分かってよ、チルノ。今更付き合ってられないんだ。苛々するんだよ、その馬鹿な言動に同調してた昔の自分を思い出すから」

「昔の自分の何がそんなに嫌なのか知らないけど、今のあんたも大して変わっちゃいないわよ」

「私はね、強くなったんだ」

「サイキョーのあたいたいほどじゃないわ」

「……賢くなったんだ」

「勉強すれば、誰だって賢くなれるわよ。けーねが言ってたわ」

「……神と同じ視点を手に入れたんだ」

「それってそんなに凄いことなの？」

その一言で、ついに堪えていたものが噴き出したかのように、空の顔付きが変貌した。

「だから私をイラつかせるのをやめろって言ってるんだよチルノオオオツ!!」

怒号と共に、空を中心に再び熱風が吹き荒れた。

それは、もはや高熱の竜巻だった。

赤鬼の巨体が盾となり、かろうじて橙はその場に踏み止まった。

そして、チルノはスペルカードを片手に竜巻の中心へと飛び込んでいった。

「チルノ！」

橙の悲痛な呼びかけは、吹き荒ぶ風の音に飲み込まれて、消えた。

空中で、空とチルノが対峙する。

「いいよ、やってやるよ！ 弾幕ごっこで勝負だ、チルノ！ そうすれば嫌でも理解するでしょう？ 私がもう昔の私とは違うってことをさあ——！」

もはやかつての幼い面影など欠片も残っていない、凄まじい形相で叫ぶ空に対して、

「あたいが勝ったら、あたいをバカにしたことを謝ってもらうからね！ そんなで、フランの所へ一緒に来てもらうわ！」

チルノはいつものように力強く言い放った。

其の五十六 「熔解」

諏訪子の視界には、広大な庭と、そこに林立する桜の木が映っていた。

蕾は全て花開き、庭全体をその彩で埋め尽くさんばかりである。

しかし、散った花びらが雪のように地面に落ちる前に消えていく様は、淡く、儚さすら感じさせる。

この世のものとは思えない光景だった。

「そりやそうだ。この世のものじゃないんだから」

自分が現在冥界にいることを思い出して、諏訪子は苦笑を浮かべた。

開いた障子戸から外に向けていた視線を、室内に戻す。

この屋敷の主である西行寺幽々子と彼女の親友であり幻想郷の管理者である八雲紫が座っていた。

「いや、なかなか見事な庭だね。外の世界じゃ、ちよつと見れない」

幽々子に微笑みながら、贅辞と冗談を交えて言った。

「なかなか洒落っ気のある神様ね」

幽々子の方も、そういった皮肉を楽しめる性格である。

初対面同士だったが、お互いが抱く第一印象は良好だった。

飄々とした性格が、何処か似ているのだ。

「しかし、少しばかり手入れが行き届いていないようだね？」

そう指摘して諏訪子が視線を向けた先には、一本の桜の木があった。

その枝の一つが、半ばから不自然に切られている。

全体の景観が一つの画のように完成されているだけに、最後の点を欠くようなその一点が嫌でも目に付いてしまう。

剪定しようとして失敗した跡に違いなかった。

諏訪子は再び視線を室内に戻すと、床の間に置かれた花瓶に差された一本の桜の枝を見つめた。

「私が誤って切ってしまったのよ」

今はまだ花を残しているその枝を申し訳無さそうに見ながら、幽々

子は答えた。

「へえ。主人自身が、庭の手入れもしているの？」

「本当は専属の庭師がいるんだけど、今は暇を出しているから。あの子がいない間は、私が代わりに仕事をやってみようと思ったんだけど……」

ほんの一瞬物思いに耽って、寂しげに微笑む。

「駄目ね。あの子のやっていたことをなぞってみれば、何かが理解出来るかもしれないと思ったけれど——結局分かったのは、私は不器用だったってことくらい。自分では、もうちよつと要領よく物事をこなせると思ってたんだけどね」

自嘲気味な幽々子の呟きを聞きながら、諏訪子は困ったように頭を掻いた。

「余計な話題を振っちゃったらしい」

「こちらとしても客人に出せるほど楽しい話ではないわね」

「家庭の問題かな？」

「あら、相談に乗ってくれるのかしら？」

「家族についての悩みなら、個人的に共感出来るしね。時間があれば、色々話も聞いてあげたいんだけど」

「そうね。また今度ね」

二人は程よいところで会話を切り上げた。

「さて、八雲紫よ。本題を始めようか」

ここまですつと無言だった紫に、諏訪子が水を向けるように言った。

元々、諏訪子は紫と話をする為にやってきたのだ。

誰も邪魔の入らない——盗み聞きや第三者の介入の心配のない——二人が密会出来る場所として、白玉楼が提供されたに過ぎない。

本来ならば、幽々子が同席することさえなかったはずである。

しかし、諏訪子が訪れた時、何の説明もなく幽々子は紫の傍に座っていた。

予想外の事態に対して、諏訪子は露骨に動揺を表すことも問い質すこともせず、黙ってその場に腰を降ろした。

先程の穏やかな会話の裏には、ちよつとした牽制の意味合いも隠されていたのである。

「まずは、そちらの話から聞こうか？」

幽々子の存在をもはや無いものとして扱って、諏訪子は紫に言った。

「予定にないことが起こったようだからね」

幽々子がこの場にいる理由を、そう判断した。

諏訪子としては、この場で話し合う内容は、紫でさえ把握しきれていない外の世界での出来事を踏まえた先代巫女のこと以外にない。

事前に、そのことを伝えておいたからこそ、紫も密会に応じたのだ。しかし、実際にこうして顔を合わせる数日の間に何かが起こった。

それが現在の状況を生んだ。

「その手紙、誰からのだい？」

諏訪子は紫の手元にある一枚の手紙に視線を落とした。

「今朝、古明地さとりへの使いから渡されたものです」

紫は偽ることなく答えた。

「さとり……」

幽々子の顔付きが、僅かに強張る。

「それで、内容は？」

諏訪子に促された紫が小さく頷き、

「洩矢諏訪子様。貴女にも——いえ、守矢神社にも関係のある内容ですわ」

そう前置きをして語ったのは、おおよそ次のようなことだった。

守矢神社の八坂神奈子が信仰獲得の一環として立てた計画の内容。

それは地霊殿を巻き込む大規模なものである。

この計画自体に対しては、地霊殿側が守矢神社側の要求を呑むことで摩擦無く収めようと考えている。

しかし、この事態の余波が別の問題に発展する可能性が高い。

具体的には、神の力を与えられた霊鳥路空が暴走する可能性がある。よって、これを異変と予測認定し、すぐさま博麗の巫女を派遣する

よう、地底の管理者古明地さとりは地上の管理者八雲紫に強く要請する――。

「――と、いったことが書かれています」

話の間、一切表情を変えなかった諏訪子に、紫は言った。

「ここに書かれている八坂神奈子様の計画、間違いはないでしょうか？」

丁寧な言葉遣いとは裏腹に、その口調と視線には虚偽を許さない鋭さが隠されていた。

「……ハッキリ言って、あいつの計画って奴はわたしにもよく分からない」

諏訪子は人差し指で軽く頬を搔いた。

「同じ社で祀られる神でありながら、相手の考えは把握出来ていないと？」

「わたしとあいつじゃ、立場というか考え方が違うんだ。そりゃあ、わたしも神社の発展や信仰が増えることが嬉しくないわけじゃないよ。うちには健気な巫女もいるからね。向けられる祈りには、神として積極的に応えていきたいと思う。だけど――」

「何か？」

「あいつは……神奈子は、積極的なんて生易しいもんじゃない。あいつが抱えている物は、野心に近い」

探るような紫の視線を、諏訪子が睨むように見返す。

「その辺のところは、あんたも重々把握しているはずだがね」

それは暗に、天狗の集落での出来事を見ていたことを指しているのだった。

あの事態に八雲紫が密かに介入していたことを、今や諏訪子と神奈子も見抜いている。

「ええ、確かに」

悪びれることもなく紫は頷いた。

諏訪子是不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「その手紙に書かれていた計画については、わたしも初耳だよ。だけど、三日前に何処かへ出掛けたことは知ってる。そして、次の日に手

傷を負って帰ってきたこともね。あの時、既に事を起こしていたというなら、確かに辻褄は合うかもね」

「そのことについて追求はしなかったのですか？」

「隠そうとしてたからね。早苗に余計な心配はさせたくなかったから、わたしとしてもあの場で追求する理由がなかった」

「では、後から追求するつもりではあったのですか？」

「仮にあいつが何か企んでいたとして、それがわたしにとって都合の悪いことかどうかは分からないだろう」

「まあ、それは確かに」

神奈子の計画は、利益を求めた、ある意味純粋なものだ。

幻想郷に無意味な混乱をもたらすようなものでも、悪意を振り撒くようなものでもない。

信仰という名の力を得る——結局のところ、計画の目的はそこに行き着くのだ。

「わたしも、もちろん早苗も、神奈子の計画には関わっていないし、知らされてもない。詳しいことも分からない。だけど——」

諏訪子は真偽を測ろうとする紫の眼を見据え、

「今の神奈子ならやりかねない。あいつは力を欲している。その理由は、先代巫女に拘っているからだ」

断言した。

「とりあえず、これだけは言えるよ」

「なるほど。それはまた……」

「先代も厄介な奴に眼を付けられたもんだよね」

「あら、同じ守矢神社の神である貴女がそう言ってくださるのですか？」

「付き合いがあるからこそ、あいつが面倒臭い奴だったのは嫌って程分かっているんだよ。それに、わたしは先代の味方だからね」

「それは心強いですわ」

「こつちも腹を割ったんだから、あんたも腹に隠しているもん見せてもらおうか？」

「私は別に、貴女達の共謀を疑ってはいませんわ」

「いや、そうじゃない。あんたが疑ってるのは、古明地さとりの方だろう？」

諏訪子が眼を細めて、言った。

紫は微笑を浮かべたまま、無言だった。

「あんたが探ろうとしていたのは、わたしが神奈子と繋がっていることじゃない。神奈子がさとりと繋がっていることだ。違うかい？」

「その通りですわ」

紫はあつさりと頷いた。

「古明地さとりという妖怪に対して、随分と思うところがあるみたいだね」

「貴女の眼には、彼女はどのように映っているのでしょうか？」

「人間との稀有な友情を結んだちよつと変わった妖怪って程度かな。

先代が親友だって言ってたしね」

「ええ。先代は、そう言っています」

「なるほど、そこも疑っているのか。詰まるところ、あんたは古明地さとりに関する何もかもを疑っているわけだ」

「単刀直入に言つて、彼女を危険な存在だと感じています」

「ふうん。あんたほどの妖怪が、そこまで言うのかい」

「立場は対等。能力は未知数。考えは読めません。それに——」

紫は幽々子の方を一瞥し、

「気が付いた時には、懐深くまで踏み込まれていました。そちらにとつても、思い当たる点があると思えますが？」

諏訪子の方にも意味深げな視線を送った。

紫は先代巫女。

幽々子は妖夢。

そして、諏訪子は早苗。

いずれも親しい者が、古明地さとりと接触し、彼女との深い友好関係を結んでいる。

「なるほどね」

諏訪子も幽々子と妖夢の事情までは知らない。

しかし、何故彼女がこの場に同席しているのかだけは察した。

「あなたの意図は、何となく分かったよ」

先代巫女という接点を経て、同じような境遇である諏訪子を、味方として取り込もうとしているのだ。

古明地さとりに対抗する仲間として。

「正直言うと、わたしはあなたがそこまで古明地さを警戒する理由が分からない。外の世界で死に掛けていた、弱々しい印象が強いからね」

「そうですか」

「だけど、まああなたほどの妖怪が警戒するんだ。それなりの根拠があるのは確かなんだろう」

「貴女が先代の味方だと言うならば、いずれ分かると思いますわ」

「うん。結局、あなたは古明地さとりに近い先代の身を案じるからこそ、そこまで警戒を強めるわけだ。そして、それを踏まえた上でわたしの見解を述べさせてもらおうと、だ」

諏訪子は真っ直ぐに紫を見据えた。

「わたしからすれば、あなたも同じだ。先代にとって警戒に値する存在だよ」

向けられる懐疑の視線を、紫は静かに受け止めた。

「あなたはさとりと先代の関係を疑っているようだが、わたしから見ればあなたと先代の関係も同じさ」

「あんたみたいな胡散臭い妖怪と、あの誠実な人間が対等な友人であるなんて、ちよつと信じられない。あんたが先代を利用しているって考える方が、よほどしつくり来る」

「多分、あなたは同じような疑いをさとりに対して抱いてるんだろう。その疑いを弁護してやれるほど、わたしもさを信じちやいないよ。だけど、心しておいて欲しいんだ。わたしはそれ以上にあんたを信じちやいない」

「言い過ぎかもしれないけれど、あなたは『そういう妖怪』だとわたし

は思う。八雲紫。あんたは優れた力と知恵を持っている。だけどそれは、信じることではなく、疑うことに優れた能力だ。目の前にいる相手の表を信じず、裏を知ろうとする思考だ」

「そうですね。その通りですわ」

「先代とはあらゆる面で真逆だよ。あんたが疑う分だけ、周りからも疑われるんだ。あんたのような胡散臭い妖怪と先代の間で友情が成立しているのは、先代の好意に依っている所が大きい」

「ええ、その通りです。全く……全く以ってその通りですわ」

諏訪子の厳しい指摘に対して、紫は否定はおろか不服さや不機嫌さを表に出すことさえしなかった。

それどころか全面的に肯定するようにしみじみと言った。

「先代は、好意を真つ直ぐな言葉にしすぎるのです」

あの夜――。

伊吹萃香の異変が解決し、永遠亭からの帰り道として迷いの竹林を歩いていた、あの時――。

全ては、あそこで決した。

あの時、当人を前にして、自分がこれまで行ってきたこと、そこにある真意を、初めて告白した。

懺悔のつもりはなかった。

だが、ずっと後ろめたさを感じていた。

間違ったことをしてきたとは思っていなかった。

だが、ずっと後悔していた。

だから、あの夜全てを嘘偽りなく話したのだ。

「始め、私は確かに先代を利用してしようとしていました」

本来は、あそこで先代巫女と決別するつもりだった。

これまでが異常だったのだ。

彼女には恩もあるし、借りもある。しかし、それらは友情や絆と同視すべきものではない。

何より、自分にそんな資格は無い。

人間と妖怪の正しい関係に戻すつもりだった。

「しかし、今はもう違います」

紫が離れようとした分の距離を、先代は踏み込んできた。

そこで、更に離れるべきだった。

突き放すべきだった。

それがお互いの為だと考えていた。

——しかし、出来なかった。

幻想郷を安定させる為に彼女と奔走した日々を、偽りと罪を重ねた時間ではなく、掛け替えのない思い出に変えてくれた。

打算で裏付けされた関係を、煩わしい駆け引きなど必要のない、ただ純粋な友情へと変えてくれた。

あの時、自分を許した彼女の言葉があまりにも心地よくて、ついに拒むことが出来なかったのだ。

あれが最後の境界線だった。

あの瞬間、自分は本当に心底彼女に参ってしまったのだ。

「改心した、それとも情に絆されたとも言うつもりかな？」

諏訪子は紫に冷笑を向けた。

「どうとでも受け取っていただいて構いませんわ」

「あなたの先代に向ける情が本物だったとして、だ。それでもわたしがあんたを好きになれない理由は、あんたが先代と対等になろうとしてないからだよ」

「——」
「自分を利用していたあんたを、先代は許したのかもしれない。その上で、友人だと思っているのかもしれない。」

「だけど、それは全て先代の大きな器にあんたが甘えて寄りかかっているだけの形なんだ。表面だけ繕って、本当の意味で心を開いていない。」

「もちろん、あんたには私情だけに走れない立場や責任つてものがあ
るんだろう。でも、それはつまり立場を優先する為に、先代と深い所
で通じ合うのを避けているということなんだ。中途半端なんだよ。
それでいて、古明地さとりに嫉妬までしている」

「嫉妬……ですか？」

「自覚くらいあるんだろ。あんたがさとりを疑うのは、そうあって欲

しいという願望も含んでるからだ。同じ立場なのに、先代と心を通じ合ったさとりが妬ましくて、だから疎ましいんだ」

紫には諏訪子の言葉がまるでメスのように感じられた。痛みもなく心を解剖し、その内側を明らかにしていくのだ。

いや、痛みは――。

「あんたはズルい奴だよ、八雲紫」

諏訪子の持つ人の眼と帽子に付いた人ならざる眼の二対が、じつと睨むように紫を見つめた。

紫の表情は変わっていないように見える。

口元にはあるかないかの薄い微笑が浮かび、眼元は動揺など欠片もないかのように涼しげだ。

しかし、諏訪子の眼力はその口と眼の端に僅かな強張りがあることを見逃さなかった。

紫が右手に持った扇を開こうとして、何を思い直したのか再び閉める音が『パチリ』と、手元で小さく鳴った。

諏訪子が観察する間、紫は虚空に視線を置いたままじつと黙り込んでいた。

「……ちえっ」

やがて諏訪子はつまらなさそうに声を上げた。

「その傷ついた様子が演技だと分かれれば、話は簡単だったのにな」

いつの間にか、紫に対して挑むように前屈みになっていた姿勢を戻して、背伸びをするように両手を上げる。

傍らで見守っていた幽々子の吐く安堵混じりのため息が、妙に大きく聞こえた。

「悪かったよ」

「……何がですか？」

「ちよつと意地の悪いやり方だった。わたしも偉そうなこと言える立場じゃないんだ。わたしもあんたと同じ、相手を疑うタイプだからね。そういう意味じゃ、神奈子の方がよっぽど先代に近いよ。あいつは気難しいけど、信じたものに対しては一途な所があるからね」

「そうですか」

「まつ、ちよつとは八雲紫っていう奴のことが分かったかな」

諏訪子は言つて、笑つた。

「わたしは先代の味方だよ。だけど、決してあんたの味方じゃない」

「ええ、分かっていますわ。そして、それで良いと思います。そのまま味方として、先代を手助けしてください」

「言われるまでもないよ。わたしも、あんたが先代の味方だという点だけは信用しよう。あんたを突き動かすものが、純粋な友情なのか、後ろめたさなのか、それともまた別の感情なのかは知らないけどね。精々、彼女の助けになつてもらおうか」

「言われるまでもありませんわ」

諏訪子と紫は、互いに不敵な笑みを交し合つた。

二人の間に、決して友好的な雰囲気はない。

しかし、奇妙な信頼関係が生まれていた。

少なくとも先代巫女という人間に対して、目の前の相手は敵となる存在ではない。

「——それじゃあ、今度はわたしの用件を話そうか。どうやら、あんたになら相談しても問題なさそうだしね」

そう言つて、諏訪子は外の世界で先代巫女と八坂神奈子が戦つた時の出来事を話し始めた。



妖夢は小さな居酒屋の隅にある席に座っていた。

木製のテーブルを挟んだ向かいには、三本角の鬼が座っている。

二人が向かい合つて座ればそれっきりの狭い席だが、お互いに視線を合わせることなく、じつと手元を見つめていた。

「飲まねえのか？」

おもむろに鬼が訊ねた。

妖夢の手元には、たつぷりと中身の注がれた酒杓が置かれていたが、まだ一口も手をつけていなかった。

「……お酒、飲んだことないです」

妖夢は正直に答えた。

居酒屋自体、初めて足を踏み入れた場所である。

狭い店内に狭い席。そこに信じられないくらい客が密集して、雑多な会話やら食器の甲高い音やらが独特の臭気と一緒にくたに攪拌され、煮詰められている。

生者の存在しない静かな屋敷で、幽々子と二人だけで長年過ごしていた妖夢にとっては未知の空間だった。

「そうか」

気のない相槌を返しながら、鬼は自分の手元にある酒を一気に呷った。

空になった器に、無言で酒を注ぐ。

注文した一升瓶は既に中身が半分まで減っていたが、全て鬼が飲んだものだった。

それでいて無骨な顔には赤み一つ差していない。

「酒も飲んだことのねえ小娘か」

「すみません」

「別に、悪いことじゃねえさ。ただ意外なだけだ」

「意外、ですか？」

「鬼を斬れるほどの猛者には見えねえってことだ。見た目は小娘、酒も飲まねえ、おまけに雰囲気が決定的に合わねえ」

「雰囲気……」

「気配が弱々しいのさ。その辺の野良犬にも負けちまいそうに見えるぜ。だから、あんな酔っ払いの屑にまで絡まれるんだ」

その言葉を、妖夢は否定出来ずに俯いた。

「お前の腕前は疑っちゃいねえ。あの翁おきなを斬ったんだからな」

妖夢の反応に対して、バツの悪そうに鬼は言い繕った。

「伊吹の頭かしらが言ったんだ。だから、間違いねえんだろうさ」

「伊吹……伊吹萃香ですか？」

「そうだ、異変を先導した鬼だよ。あの人はな、地上で死んだ仲間の死に際を全部見届けて、それを生き残った俺達に教えてくれたのさ」

伊吹萃香は、疎を操ることによって、自らの肉体を無数の分身や霧

に変えることが可能である。

実際に、異変の最中では萃香の分身が複数の場所で同時に確認されている。

当時の妖夢は気付いていなかったが、あの場にも萃香の分身は存在し、翁の死に際を見届けていたのだった。

「だから、翁を斬った半人半霊の剣士のことは、鬼だけじゃねえ、旧都の住人全員が知ってる。お前の斬ったジジイは、地獄でもそれだけ名の通った鬼だったのさ」

その話を、妖夢は酷く気まずい思いの中で聞いていた。

あの時トドメを刺したのは確かに自分だが、おそらくそこに至るまでの過程については伝わっていないのだ。

しかし、自分から真実を告白する勇気も持てず、妖夢は唇を噛み締めめた。

「お前が、何で地霊殿を出てこんな所をフラついていたのか知らねえし、これからどうするつもりかも知らねえが、地底で暮らしてくつもりなら、このことは隠さずにいた方が都合がいいだろうぜ」

不意の言葉に、妖夢は思わず顔を上げた。

「ここではな、強え奴が幅を利かせられる。俺達、鬼が一目置かれてるのもその為だ。その鬼を斬ったつて言えば、大抵の奴はびびるさ。金でも食い物でも、好きに巻き上げりゃいい。それだけで生きていくる」

「そんなの、山賊か強盗じゃないですか」

「働いて暮らしてえなら、そこでも役に立つさ。ここでは強えつてことは便利なんだ。鬼を斬ったつて事實は、いい箔になるぜ」

「……信じてもらえれば、ですけど」

「疑う奴には、俺が肯定してやる。俺だけじゃねえ、ここに住んでる鬼は誰もお前がやったことを疑つちやいねえよ。皆、地上で負けて帰ってきたんだ。自分の負けを誤魔化す奴は、鬼の中には一人もいねえ」

強く断言して、鬼は再び酒を呷った。

「貴方は、それでいいんですか？」

妖夢はたまらずに問い掛けた。

「貴方が父親みたいだと言った鬼を、野良犬にも負けそうだと評した私が斬った、と。そう吹聴して回って、好き勝手横暴をする様を見ても何とも思わないんですか？ そんなことが許せるんですか？」

「許せるね」

妖夢が言葉を区切るより早く、被せるように鬼は即答していた。

「斬ったことを謝られるよりも、遥かにマシだ」

「――」

「鬼の首を獲ったつてのは、それだけの偉業なんだよ。俺達鬼は、そう自負してるんだ。どんな形であれ、誇って欲しいんだ。負けた奴が、勝った奴に望めるのはそれくらいなんだよ。あのジジイは強かった。その証明を、横暴だろうが何だろうが、勝ったお前自身にして欲しいんだよ」

最後の部分は、懇願するような響きが含まれていた。

言い終えてから、思わず言うつもりではなかったことを口走ってしまった自分に気付いたかのように、鬼は小さく舌打ちした。

誤魔化すように、三度酒を呷る。

空になった器に酒を注ぐ。

もう一度呷る。

その間、妖夢は何かに耐えるように押し黙ったままだった。

「――勝った奴は、逃げちやいけねえんだ」

不意に、鬼が口走った。

妖夢が顔を上げると、睨むように鬼が見ていた。

「お前が刀を持ってない理由なんて知らねえ。けどな、お前が刀を捨てたのか、刀から逃げたのかで話は変わる」

「――」

「刀を捨てたんなら、俺から言うことは何も無え。お前は勝負を捨てたつてことだ。もう一生戦わないつてことだ。そんな奴に言えることは何も無え。だが逃げただけなら、まだあるぜ」

「逃げたなんて、そんな……私はただ」

「翁を斬った刀を、お前どうしたんだ？ 折ったのか？ それとも誰かに売ったか？ ドブにでも捨てたかよ？」

「……私は、もう刀を抜けないんです」

「抜こうと一度でも思ったんなら、それは捨てちゃいねえんだよ。逃げたって言うんだよ」

妖夢は言葉を失った。

鬼の指摘が、心臓に深く突き刺さるように感じたのだ。

「勝った奴は、勝負から逃げちゃいけねえんだ」

最初の言葉を、今一度噛み締めるように口にする。

「逃げられやしねえんだ。勝った奴の後ろには、負けた奴らがいるんだよ。そいつらが道を塞いでんだ。そいつらを振り切って逃げるなんて、許されねえんだよ」

「違うんです。あの勝負は、本当は——」

「お前の事情なんて知らねえよ。俺は事実しか知らねえ」

「——」

「お前は、鬼を斬ったんだ。斬つてのけたんだ。お前は強えんだよ。だから、逃げちゃいけねえんだ」

「——」

「逃げねえでくれよ。頼む」

「私は——」

そこまで言つて、妖夢は言葉を切った。

次の言葉が出てこなかった。

何を言おうとしたのか、自分でも分からなかった。

鬼が口にした話は、全て手前勝手な理屈である。

こちらの事情も知らず、ただ自身の理屈を強引に押し付けてきたのだ。

しかし、不思議なことに反発する気持ちは欠片も湧いてこなかった。

幾らでも言い返すことが出来たはずだ。

——勝手なことを言うな。

——その理屈の通りなら、私は逃げてもいい。

——何故なら私は負けたからだ。

——あの鬼を本当に倒したのは魔理沙で、自分はそのおこぼれに

与つた負け犬なんだ。

——だから、逃げて何が悪いんだ。

相手の知らない事情を説明して、納得させられる反論が出来たはずだ。

そして、放つておいてくれ、と。関わらないでくれ、と。この場から逃げ去ることも出来たはずである。

だが、やらなかった。

何故だ。

それは——。

それは自分がまだ本当の負け犬ではないからだ。

その屑のような言い訳を許さないだけの意地が、まだ自分の中に残っていたからだ。

確かに、自分は戦いから逃げた。

しかし、まだ捨ててはいないのだ。

妖夢は、ようやくそれに気付いた。

「私は、まだ——」

冷え切っていた心と体の奥が、カツと熱くなったような気がした。

妖夢は俯いていた顔を上げた。

——まだ。

——まだ、間に合うか。

——まだ、ここから進めるか。

——逃げてしまった分の道を、もう一度引き返せるか。

向かい合う鬼には、妖夢の気配が変わったことが感じ取れた。

先程までの彼女は腑抜けだった。

屍が動いていたようなものだ。

しかし、今はもう違う。

少なくとも、今の彼女を動かすものは生きることへの惰性ではなく熱であった。

「……そうかよ」

鬼は納得したように呟いた。

「それなら、それでいいんだ」

これから、妖夢がどうするつもりは分からない。
事情など知らない。

ただ、鬼は少し満足そうに苦笑して、酒を一口啜った。

「おい、一つ教えといてやるよ」

思いついたように、鬼が言った。

「お前が働いていた地霊殿な、ちと厄介事に巻き込まれてるかもしれねえぜ」

「どういうことですか？」

「二日ほど前にな、古明地さとりに用があるって、地上から八坂神奈子とかいう神がやって来てたんだよ。勇儀の姉御が追い返したが、ありやどう見ても何か企みがあったることだろうぜ。それとな、その神と関わったらしい地獄鴉のガキを、この間地霊殿に運び込んだ」

妖夢の脳裏に込み上げてきたのは、変わり果てた姿で見つかった空の姿だった。

彼女に何が起こったのか、さとりは説明してくれなかった。

結局、自分が出て行く時まで、空も目を覚まさなかった。

それらの心配事に後ろ髪を引かれる思いだったが、もう地霊殿の住人ではなくなった自分には関わることの出来ないことなのだ——。

しかし、今の妖夢は、そんな言い訳染みた考えを自身に許さなかった。

世話になったさとり達に、自分はまだ何一つ恩を返していないのだ。

その義理さえ果たさずに、何処へも行けるものか——。

「すみません。やるべきことが出来ました」

妖夢は立ち上がった。

もはや行動に迷いはなかった。

「地霊殿に戻るのか？」

「はい」

「じゃあ、こいつを持ってけ」

すぐ傍の壁に立て掛けていた刀を放り渡した。

妖夢に絡んできた妖怪が持っていた刀だ。

何処で拾ったのかは知らないが、あんな素人の所持物では碌な手入れさえ期待出来ない。ナマクラか、それ以下の代物だろう。

しかし、今の自分には十分だと妖夢は思った。

「刀がないから戦えないなんて言い訳は、もう通用しねえぜ」

意地の悪い笑みを浮かべる鬼に向けて、妖夢も小さく笑い返した。

「とつとと行けよ。負け犬の愚痴に付き合せて悪かったな」

「いいえ。今度会う時は、お酒も飲めるようになっておきますから」

「もう二度と会わねえよ」

鬼は、もう妖夢の方を見てはいなかった。

空になった器に視線を落として、酒を注いでいる。

構わずに、妖夢は鬼に向かって深く頭を下げた。

そして、すぐさま居酒屋から飛び出すと、風のように駆けた。

地霊殿に向けて。



仮に太陽が弾幕を放つとしたらこうなるのではないか——橙はそう思った。

晴天の日、空から降り注ぐ陽光がもしも弾丸の形を取ったら、この圧倒的にして絶望的な光景が生まれるのかもしれない。

その絶望の中を、諦めることなくチルノは飛んでいる。

橙には、ただそれを見守ることしか出来なかった。

「どうしたのさ、チルノ？」

空は黒い太陽、弾幕は破壊の陽光だった。

「最強なんですよ？」

大小様々な火の玉が、無数に周囲を乱舞する。

スペルカード・ルールに則っている以上、何らかの規則性や構成があるはずだが、主観で捉えるその弾幕はただただ視界を埋め尽くさんばかりの暴雨にしか見えなかった。

「さっきまでの大口はどうしたんだよお、チイルウウノオオオオオツ
!!」

空の昂ぶりに連動するように、放たれる弾幕は更にその激しさを増した。

単純な弾数だけではない。

その一つ一つが超高熱の火の玉である。それが埋め尽くす空間の温度は、異常なまでに上昇していた。

熱風が吹き抜ける度に、呼吸すらままならなくなる。

地上から見上げる自分でさえこうなのだ。弾幕ごつこの最中にあ
る上空が一体どんな空間になっているのか、橙には想像も出来なかつ
た。

しかし、頭の中で鳴り響く不吉の鐘の音だけは確かに、途切れるこ
となく聞こえている。

想像を絶する空間の中で、チルノは戦い続けているのだ。

「こんな単純な弾幕で、あたいがやられるか！」

もはや炎の壁と化した空の弾幕を、チルノは僅かな間隙からすり抜
けるように回避した。

傍から見れば危ういところで被弾しそうな、しかし実際には決して
一か八かの賭けではない正確な分析により導き出された軌道だった。

チルノは、空の弾幕の構成を完全に把握していた。

これまで積み重ねてきた弾幕ごつこの経験が、妖精にあるまじき優
れた洞察力と判断力を培ったのである。

「猪口才なんだよ、チルノオ！」

「チヨコなんか持ってないわ！ 溶けるでしよ、バーカ！」

「馬鹿はお前だア！」

空の弾幕を回避しつつ、射線を確認したチルノは『ショット』を放つ
た。

八咫鳥の力を火球の弾幕として放出する空とは対照的に、チルノが
放つのは氷の弾丸である。

正確な射撃が空を確実に捉え——飛来する最中で氷の弾丸がみる
みる溶けて小さくなり、標的に辿り着く前に消滅した。

「んな……っ!?」

驚愕しながらも、チルノは射撃の手を休めなかった。

しかし、撃った弾の全てが、空の体に着弾するより先に蒸発して消えてしまう。

その理由は至極単純だった。

空の放つ熱波を潜る中で、氷の弾が溶けてしまうのだ。

「き、汚いわよ、お空！」

「あつははははは!! 何があ!?! 私は別に何も卑怯なことはしてないよー!」

動揺によって、チルノの動きが乱れた。

そのほんの僅かな隙に雪崩れ込むように大量の弾幕が押し寄せ、慌てて退避する。

決死の覚悟で埋めた彼我の距離が、これでまた開いてしまった。

「チルノの攻撃が届かないのは、簡単な理由だよ——弱いからだ! ただただお前が弱いからだよ!」

「何!?!」

「私がただ無意識に身に纏っているだけの熱さえ、チルノの力じや破れないんだ! あははつ、これつて卑怯かな? 私の方が強すぎるつて理不尽な勝負かなあ? もっと手加減した方がフェアかなあ、チルノ!?!」

「へん! まだまだ勝負はこれからよ!」

「終わりだよ! たかが氷の妖精が、太陽の力を手に入れた私に届くはずがないんだ!」

「いいや、届くね!」

「今の私とチルノには、それだけの差があるんだ!」

「大した差じゃないわ! 待つてろ、今そこに行つてやる!!」

チルノは再び、目前にまで迫る弾幕の突破を試みた。

肺を焼くような灼熱の空気を呼吸し、肌を焦がすような熱風の中を突き進む。

実際のところ、チルノの体力は限界だった。

肉体にも異常が起こっていた。全身から枯れることなく流れ続ける冷たい液体は決して汗などではない。

水分以外の、生命そのものが溶けて流れ出しているかのような酷い

虚脱感が全身を襲い、それは流れる量が増えるごとにどんどん酷くなっていた。

頭を繰り返し殴りつけられているような頭痛が止まない。意識が朦朧とする。

致命的な瞬間が近づいていることを本能的に感じていた。

しかし、それを分かっているにもかかわらず飛ぶことを止めなかった。彼女にとって幸であり不幸であったのは、脆弱な妖精の身でありながら、その身の限界を超える方法を知っていたことだった。

かつて彼女の目の前で同じように窮地に追いやられながらも、己の限界を超えて立ち上がった人間の姿を記憶に焼き付け、それを目標とし続けていたことだった。

いつの間にか、チルノは吠えていた。

唸りを上げて飛来する無数の火球に飲み込まれまいと裂帛の気合を吐き出して、矢のように飛んだ。

絶望的だった距離が縮まる。

空の姿が迫る。

チルノは手を伸ばした。

空はそれを無視した。

そこから放たれる攻撃は決して自分に届きはしない——そう判断したからだった。

代わりに新たなスペルカードを切った。

——核熱『ニュークリアフュージョン』

一際巨大な火の玉が、近づく二人の間を塞ぐように出現した。

限界を超えて感覚の研ぎ澄まされたチルノは、それさえも回避してみせる。

ゆっくりと迫る火球を迂回するように避けて飛び、

「ぎゃああああああっ!!」

耳を覆いたくなるような悲鳴が上がった。

左手で右肩を押さえたチルノが空中で失速し、墜落を始めていた。

本来は肩ではなく、腕を押さえようとしたのだろう。

しかし、その右腕が無くなっていた。

右肩から下。そして、右脚の膝から先が消失していた。溶けたのだ。

火傷という段階を飛び越して、手と足が崩れるように溶けて蒸発した。

橙は、そのおぞましい瞬間を目撃してしまった。

「――『飛翔韋駄天』！」

弾けるように橙は跳んだ。

本来ならば主人である藍の許可無しに使ってはいけない式神としての機能を発動し、強化した身体能力によって、落下するチルノの元へ瞬時に辿り着く。

しかし、そこははまだ空の弾幕の最中であつた。

ぐったりとしたチルノの体を抱えた橙は、殺到する無数の火球を避けられずに被弾した。

痛みと衝撃で、一瞬足の止まった橙に、追い打ちのように弾幕が次々と当たっていく。

「ちえん、逃げて……っ！」

「嫌だ！」

かろうじて意識を保っているチルノの言葉に首を振る。

背中の肉を焼かれながらも、橙はチルノを庇い続けた。

「友達を見捨てるもんか！」

不意に、被弾の衝撃と熱が途絶えた。

橙が振り返ると、そこには盾となつて飛来する弾幕を受け止める赤鬼の巨体があつた。

「うお熱いいいいいいいい!!? 何やってんだ俺はああああ!!?」

赤鬼は錯乱しながらも両手を広げてチルノと橙に届く全ての弾幕を防ぎきつた。

しかし、着弾の衝撃や勢いまでは止めきれず、押し流されて、落ちていく。

足が着いた途端、橙は膝を折ってチルノ共々地面に倒れ込んだ。

「おい、大丈夫か!？」

赤鬼の案じる声に答える余裕はない。背中を焼く痛みにも歯を食い

縛って耐えている。

小さな背中が、見るも無残に焼け爛れていた。
チルノに至っては手足を溶かされているのだ。

赤鬼自身も、弾幕を受けた箇所にはハッキリとした痛みとダメージを感じている。

非殺傷を想定しているはずの——いわば手加減した攻撃である——弾幕で、鬼の頑強な肉体に傷を負わせたのだ。

相手はその気になれば、この場の全員を文字通り消滅させられるだけの力を持っている。

上空で悠然と佇む空を、赤鬼は戦慄を伴う視線で見上げた。

「化け物が……っ！」

「違う！」

大声で否定し、チルノは立ち上がるとした。

しかし、立てるはずがなかった。片足が無くなっているのだ。

バランスを崩して、再び地面に転がる。

「お空は化け物なんかじゃない!!」

残された左腕で体を支えて、必死に叫ぶ。

「今、あたいがそれを証明してやる……!!」

「おい、やめろ！ 馬鹿か、てめえ!?! もう勝負になんかならねえんだよ！」

「まだまだ！ 足がないなら飛べばいいんだ！」

「分からねえのか！ お前の弾はあいつにや届かねえ。避けるどころか防ごうとすらしてねえ。お前の弾が勝手に届かねえだけなんだ！」

おまけに、お前はさっきの弾幕をしっかりと避けてた。掠つてすらいなかった。お前の体は、あいつの攻撃の余波を受けただけで溶けちまったんだよ！ 勝負がどうこうってレベルじゃねえ！ お前とあいつには、もう同じ場所に立つことすら出来ねえほどの違いがあるんだよ!!」

——実力差を超えた、存在や立場そのものの差。

種族の中でも格下として生き続けてきた赤鬼には、二人を隔絶する壁が如何なるものか痛感出来るのだった。

自分も含めて、もはや空に敵う者はいない。

「とつとと逃げんぞー！」

「嫌だー！」

「うるせえ、お前の意見なんか知ったことか！」

赤鬼はチルノと橙をそれぞれ両腕に抱え上げた。

その時、頭上が赤く輝いた。同時に強烈な熱風が吹き降ろしてくる。

恐る恐る視線を持ち上げてみれば、それまで弾幕を止めて沈黙を保ってたはずの空が左手を真上に掲げている。

その指先には、これまでで最大級の火球が形成されていた。

「お……おいおいおいっ！ ちよつと待て、もう弾幕ごっこは終わつただろうが!? お前の勝ちだよ！ 俺達はさっさと退散するから、もうやめろ！ スペルカードじゃねえだろ、そりゃあ!」

叫びながらも、それが意味のない抗議だと分かっていた。

放たれば着弾地点周辺を全て灰に変えるだろう火球が、弾幕ごっこに用いられるものであるはずがないことなど一目で分かる。

先程までチルノに対して激情をあらわにしていた空の顔からは、最初に見つけた時のように表情が抜け落ち、焦点の合わない瞳からは意思というものが消えていた。

代わりに胸の目玉が動き、眼下の三人を捉えた。

赤鬼の背筋に絶望と死が走り抜けた。

無慈悲なまでに淡々と、隕石の如き火の玉が落とされる。

逃げられるはずがなかった。

立ち竦むしかない赤鬼の腕の中で、迫り来る火球を睨みながら、チルノは震える手を伸ばした。その先にいる空に向けて。

灼熱の光が視界を埋め尽くす。

——その最中を、一筋の白光が走り抜けた。

その光が走った直線を境目にして、火球は二つに分断されていた。

二つに分かれた炎の塊は急激に力と熱を失い、地面に落ちる前に空中で霧散した。

一瞬の内に目の前で起こった現象は信じ難いものだった。

あの巨大な熱量の塊を真つ二つに両断した衝撃はもちろん、その余波に至るまで完全に消滅させたのは一体如何なる方法なのか。

嘩然とする赤鬼の前に、一人の少女が降り立った。

遅れて金属質な音が小さく鳴り響く。

刀を鞘に納める際に鳴る鏗の音。

魂魄妖夢は、残心を終えると改めて上空の空を睨み上げた。

「……何故なんですか?」

震える声で問い掛ける。

「何故なんですか、お空さん!?!」

必死の呼び掛けにも空は答えなかった。

未だ何処にも定まっていない焦点のまま、妖夢達に向けて再び火球を放つ。

「貴女達は、友達なんじゃなかったんですか!?!」

苦々しげに叫びながらも、神速の抜刀によって刀を振り抜く。

再び一筋の白光が走り抜け、それが描いた直線を正確になぞるように、飛来する火球が切り裂かれた。

膨大な熱量を、単なる鉄の刀を振るだけで消滅させる——如何なる原理か。

その光景は『斬った』としか表現出来ないものだった。

「貴女は、こんなことをする為に力を求めたんですか!?! お空さん——!」

それでも空は答えない。

再び火球が生み出された。しかも、先程の倍は大きい。

そして数が、四つ。

地霊殿を含む、周囲一帯を焼き払わんばかりの火力だった。

「……お、おい。あれも斬れるよな?」

「分かりません」

赤鬼の問い掛けに、妖夢は険しい表情で答えた。

空の掲げた手が、今まさに振り下ろされんとする。

「——があっ!?!」

その手が、完全に振り抜かれる途中で止まった。

空が自分の意思で止めたのではない。
不自然な止まり方だった。

手首と指が、奇妙な角度に曲がっている。

突然、筋肉が引き攣ったかのように、腕があらぬ方向に捻じ曲がった。

関節が軋みを上げ、あとほんの少し動かせば腕が折れる、といった異常な角度である。

自分の意思で曲げられるような角度ではない。見えない力によって無理矢理捻られているようだった。

実際に、空は腕に走る激痛で正気を取り戻し、苦悶の表情を浮かべている。

ついには耐え切れなくなり、空を飛ぶことも出来ずに落下した。

地面に倒れた後も、腕はあらぬ方向に曲げられたままである。

それどころか捻られた腕に引つ張られて、背筋も反り上がり、まともにも立つことすら出来ない状態になっていた。

「一体、何が……？」

何者かが、空の動きを封じたことは妖夢も察することが出来た。

しかし、誰が、どうやって——？

その疑問に答えるように、地霊殿の扉がゆっくりと開いた。

「さとりさん——！」

僅かに軋んだ車輪の回る音が、静まり返った周囲の空気の中で響き渡る。

押す者のいない車椅子に乗ったさとりが、開いた扉の暗がりから幽鬼のように現れた。

「動けなかった、はずじゃ……」

ひよっとして体調が回復したのか——そんな樂觀は、僅かに浮かんだ瞬間妖夢の頭の中から消え失せた。

妖夢だけではない。

さとりの姿を見た、その場にいる全ての者が、ただ一つの感情に支配されていた。

——恐怖。

体の内から湧き上がる強烈な感情は、肉体すらも支配して動きを縛る。

誰もが凍りついたかのように動けない中、さとりの三つの瞳が一人をゆっくりと見つめていく。

「さ……さとり様、ごめんなさい……」

瞳に意思の光を取り戻し、それ以前に抱いていた激情も忘れて、空は叱られた子供のように震えながら許しを乞うた。

しかし、さとりはそれを完全に無視した。

次に、さとりに見つめられた妖夢は戦慄した。

短い間とはいえさとりの下で働いていた妖夢が一度も見たことのない、冷酷な眼つきだった。

「友愛」

ため息を吐くように、さとりが呟いた。

「信頼」

冷たい声だった。

「絶望」

誰も聞いたことのない、

「憎悪」

妖夢はもちろん空でさえ、

「君達はどこぼこだ。余計なものが多過ぎる」

これまで見てきた姿が偶像だったのではないかと思える程、誰も見たことのない『古明地さとり』がそこにいた。

「道具ですらいられぬのならば、今ここでもろとも先に逝け」

——殺される！

誰もがそう確信した。

これから自分達は殺される。

抵抗の余地なく死ぬ。

限りなく残酷な方法で殺される。

絶対だ。

全ての理屈を抜きにして、そう悟らせるほどの殺気が叩きつけられていた。

「そこまでだよ、お姉ちゃん」

張り詰めた空気の中、酷くあどけない声が響いた。

いつの間にか——そうとしか表現出来ないタイミングで、さとりの傍らに一人の少女が現れていた。

物陰や死角から出てきたわけではない。

その場の全員が注目していたさとりの傍らに、全員が気付かない内に立っていたのだ。

「今ここで殺しちゃったらさあ、きつと後悔すると思うな」

さとりによく似た顔立ちと姿形をした少女だった。

覚妖怪だけが持つ、第三の眼の器官さえ持っている。

しかし、その少女の第三の眼は固く閉ざされていた。

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ……」

さとりに向けるものとは、また別種の怯えを含んだ声色で空が呟いた。

名前を呼ばれた古明地こいしは、にっこりと笑った。

「ちよつとはしやぎすぎちやつたね、お空。お姉ちゃんを助けたいて気持ちはいいんだけどさ、少し勝手にやりすぎたんじやないかなあ？」

「ごめんなさい……」

「お姉ちゃんの言うとおり、余計なものが多すぎる。ただひとつ、お姉ちゃんへの崇敬さえあればいいはずでしょ」

こいしは、先程のさとりを真似るように冷たく囁いた。

聞く者に怖気を走らせるような、狂信的な言葉だった。

妖夢達が息を呑む中、空は『はい』とかるうじて答えて項垂れた。

「貴女達も命拾いしたね」

こいしの笑顔が、妖夢達の方を向いた。

「でも、大した差ではないわ。何も知らず即死していた方が幸せだったかもしれない」

「……どういうことですか？」

「神を喰らったお空の力は見たでしょ？」

妖夢の問い掛けに、こいしは答えた。

「お姉ちゃんはやるわ」

沈黙を続ける姉の言葉を代弁するように、こいしは謳った。

「八咫鳥の力を利用して、地上を火の海に沈めるつもりよ」

「馬鹿な!？」

「馬鹿げたことかどうかは、実際に異変が起こってから思い知ればいいんじゃないかなあ」

「本当なんですか、さとりさん!？」

さとりは答えなかった。

先程の強烈な殺気は嘘のように消え失せ、まるで眠っているかのようになつた。静かだった。

僅かに俯いた顔から、その表情を伺うことは出来ない。

「すぐに分かるよ。地上に新しい灼熱地獄が生まれた時にね」

こいしはさとりの乗った車椅子を押して、ゆつくりと地霊殿の中へと戻っていった。

いつの間にか自由に動けるようになった空も、慌ててその後について行く。

それをチルノが止めることは、もうなかった。

彼女は既に気を失っていた。

「止めたければ止めればいい。異変は解決するものなんでしょ。それが地上のルールならさ。でも——」

これから先に待つものを心の底から楽しむように、こいしは笑った。

「どうせ、お姉ちゃんには誰も勝てない」



——時を少し遡る。

ベッドの上で、さとりはうなされていた。

頬は上気し、皺の刻まれた額には珠のような汗が幾つも浮いている。

呼吸すらままならないかのように、喘ぐような荒い寝息を繰り返す。

ていた。

これほどまでに彼女を苦しめるものは、一体何なのか。彼女が見ているものは、一体如何なる悪夢なのか——？

「——熱っつー！ なにこれ熱っつウイ!!？」

蒸籠せいろうの中で蒸される中華饅頭になる夢を見ていたさとりは、悲鳴を上げて眼を覚ました。

しかし、覚醒しても尚、悪夢から逃れることは出来なかった。

夢の中の話だけではない。部屋の温度が異常なまでに上がっていたのだ。

それこそ寝汗を掻くどころではない、皮膚に痛みすら感じるほど空気が加熱されていた。

「ちよ……っ、死ぬ！ 死んじやう！」

さとりは慌てて部屋から逃げようとしたが、体を起こすことさえ出来なかった。

相も変わらず、麻痺した手足はピクリとも動かない。

空気が煮立つような空間で身動き一つ出来ないのだ。拷問も同然である。

このまま放置された場合の自身の末路を想像して、上気した頬が一気に青褪めた。

「お、お隣！ おりーん！ お空でもいいわ、誰か助けて!？」

唯一動く首から上を駆使して、大声で周囲に呼びかけたが、応える者は誰もいなかった。

それどころか、異常事態がこの部屋だけではなく、地霊殿全体で起こっていることを察知してしまう。

逃げる為の体力すら奪われ、衰弱して動けなくなったペット達の助けを呼ぶ心の声が、屋敷のあちこちから聞こえた。

しかし、助けが必要なのはさとりと同じである。

如何に妖怪とはいえ、身体能力が人間並であるさとりには死に至る状況だった。

助けは来ない。

体は動かない。

選択の余地はなかった。

「ええいつ、想起——！」

文字通り命懸けの状況で、追い詰められたさとりはかつてない集中を以って能力を発動させた。

第三の眼が輝き、その身にトラウマが再現される。

瞬き一つした後、さとりは変貌していた。

暑さと息苦しさに歪んでいた顔は、表情が溶けて流れ落ちたかのよう
に感情を失った。

指一本動かさなかった体が、不自然な体勢と勢いで起き上がる。

もはや、そこに先程までの『古明地さとり』はいなかった。

——想起『レガート・ブルーサマーズ』

ベッドから降りたさとりは、部屋の入り口まで歩み寄ると、無造作
に扉を蹴り飛ばした。

細身からは想像も出来ない威力によって、金具が吹き飛び、真つ二
つに割れた扉が廊下の壁に激突する。

そのまま部屋を出ようとしたさとりは、蹴った方の足を踏み出した
途端、体重を支えきれずに倒れ込んだ。

限界を超えた脚力を発揮したことで、筋肉が痙攣を起こしていた。

相応の痛みも走っているはずだが、今のさとりはそれを気にしては
いなかった。感じてはいたが、それに頓着するような精神状態ではな
くなっていたのだ。

無視して、無理矢理立ち上がるとする。

さとりの身を案じて、それを止める者も、支える者もこの場にはい
ない。

——と、

「危なかったあ。ちよつと油断して寝入っちゃってたわ」

ベッドの下から、ゴロゴロと転がりながらこいしが現れた。

さとりが眼を覚ました瞬間、素早く隠れていたのだ。

「でも、お姉ちゃんがすぐに『想起』を使ってくれて助かったわ。普段
のお姉ちゃんならわたしに気付いちやうけど、今のなりきってるお姉
ちゃんは、また別物だもんね」

こいしは床の上で足掻くさとりになつくと、その体を支えて、車椅子に座らせた。

言葉の通り、一連の行動の間でさとりがこいしの存在に気付いた様子はなかった。

一変したさとりの雰囲気は、近づくだけで命の危険を感じる程恐ろしいものだったが、その意識自体はここに在らずといった様子で、中身を伴わない空虚さを伴っていた。

濁った瞳は虚空を見据えるだけである。

「意思はあるけど意識はない。新しい能力のメリットとデメリットに気付かないと、どんどん深みに嵌っちゃうよ。お姉ちゃん」

こいしは笑いながらさとりの耳元で囁いた。

もちろん、この忠告がさとりに聞こえていないことを理解した上で
の行為である。

こいしは、今の状況を楽しんでいた。

「まあ、でもとりあえずはこの状況をなんとかしないとね。ペットとかどうでもいいけど、話が進まなくなっちゃう」

さとりの乗った車椅子を押して、こいしは部屋を後にした。

向かう先は、地霊殿の外。

空とチルノ達が繰り広げる修羅場だ。

「だけど、想起したキャラクターのチョイスが微妙に合っていないのが残念かなあ。ラスボスはお姉ちゃんの役なのに、その腹心っぽい立ち位置のキャラじゃあ状況に言動が合わないと思うんだよね。その辺は、わたしがフォローするしかないかあ。同じ漫画のトラウマなら同じラスボスの方を想起した方がしっくり来るのに。アレ再現したら『人間友好度・極低』じゃ済まなくなるだろうけど。原作の異変とか吹き飛んで、全員で力を合わせてお姉ちゃんを倒す展開になっちゃう。あはは、ウケる」

自分で言いながら、可笑しそうに笑う。

「今はまだお膳立ての段階だよ。安心してよ、お姉ちゃん。原作通りにしつかり進めておくから」

舞台を回す道化のように、こいしは言った。

「だから、クライマックスには最高のアドリブをお願いね」

客席から巻き起こる爆笑の渦。

悲劇を装った完璧な喜劇。

暗転。

そして、閉幕。

「この世界は全部冗談だけど、オチくらいは予想外のものを見てみたいもん」

エンディング集

Easy End 「風見幽香」

それは、博麗霊夢が二十歳を迎えた日のことだった。

その歳が成人として認められる明確な境であるという規律は、幻想郷には存在しない。

外の世界の、極一部の国の法律で決められていることだ。

しかし、少なくとも母親である先代巫女にとって二十歳を迎えた霊夢は、成人として認められた。

そして、珍しく先代巫女が主催となってその日を祝う為の宴会が開かれることとなった。

二十という歳を特別に感じているのは先代だけであり、当人の霊夢や他の友人達はわずかに戸惑ってすらいいたが、何よりも彼女がそう言うのなら——と。その日の『特別』を受け入れた。

宴会を開くにあたり、先代は知人達に招待状を送った。

元より彼女自身も、この祝い事が個人的な価値観から行うものであると自覚している。

付き合う者は少ないだろう。

当日暇な者達や、懇意にしてくれる身内の者達だけでしめやかに行われれば、それでいい。

そう考えていた。

全く、甘い認識であった。

結局、招待状を送られたほとんどの人妖がその宴会に参加することになった。

先代が現役の頃に付き合いのあった者から、生死を賭けた戦いを繰り広げたかつての敵や、霊夢が解決した異変の首謀者達など、多くの者達がその日宴会の開催地である博麗神社に集った。

地上の妖怪から地底の妖怪、果ては神から天界の天人まで——。

いずれも例外なく幻想郷有数の実力者達が一箇所に集い、前代未聞の大宴会を繰り広げることとなったのだ。

幻想郷の管理者であり大妖怪である八雲紫をして『文字通り幻想郷が傾きかねないパワーバランスね』と、ぼやくほどの異常な集まりだった。

もちろん、彼女もまたそんな宴会の参加者の一人に含まれるわけだが。

人外魔境の大宴会は、丸一日続いた。

先代の呼びかけに応じた者達の思惑は様々だ。

大半が純粹に靈夢への祝福を抱いた者達である他、母親である先代への義理を持つ者や、あるいは何かしら邪な企みを隠した者達もいた。

しかし、ただ一つ。

彼女達に共通することがある。

それは誰もが確かに先代の言うとおり、その日が一つの境目であると感じていたことだ。

博麗靈夢の成長に対する境目ではない。

その成長に伴って、母親である先代巫女に訪れる一つの終わりであつた。

その日、先代は靈夢を一人の大人として認めた。

それは即ち、自分が母親としての責任をついに果たしたのだと認めたとことを意味する――。



それ自体が異変と取られてもおかしくはない人妖入り乱れた大宴会は、次の日の朝を迎える頃には自然と騒ぎを収めていた。

博麗神社には内外を問わず、酔い潰れた者達が思い思いに寝転がり、惰眠を貪っている。

普段ならば相容れることも馴れ合うこともない様々な種族、勢力が雑魚寝しているという混沌とした世界が、小さな神社の境内に作られていた。

鬼でさえ酔い潰れたあの宴会の後に、動く者は少ない。

大量の参加者を収納する為に能力をフル活用して博麗神社の空間を広げ、宴会場所を用意して見せた十六夜咲夜が吸血鬼の姉妹を館へ戻す為に飛び立ち、残されたのは宴会の主役であるはずの霊夢と先代だった。

いずれも、酒を飲んだのは少量である。

既に酒気はすっかり抜けていた。

「下手な異変より疲れたわ……」

「まさか、こんな大騒ぎになるとは思わなかったな」

一日中騒ぎ通しだった昨日のことが嘘のように静まり返った境内を、母と娘は縁側からぼんやりと眺めていた。

「母さん。お米は残ってるから、残り物だけど朝ごはん食べる？」

「貰おう。顔を洗ってくる」

「ん。分かった」

二人は慣れたやりとりを交わし、お互いに立ち上がった。

先代が身支度を整えて居間に戻ると、霊夢が朝食の用意を既に終えている。

手の込んだ物ではない。宴会の料理を、使っていない皿やお椀に盛り付けただけの簡単なものだ。

霊夢が二つの湯飲みにお茶を入れると、二人は向かい合って座った。

「いただきます」

「いただきます」

母と娘は穏やかな朝の食事を始めた。

何度、こうして食卓を囲んだだろうか。

霊夢が子供の頃はそれこそ毎日。

博麗の巫女の座を霊夢に譲り、先代が別居をするようになって、月に一度の来訪時には必ずこうして一緒に朝を迎えた。

子供から少女へ、そして大人になっても何も変わらない生活の一部がこうして残っている。

霊夢はその尊さを、ご飯と共に静かに噛み締めていた。

二人だけの食事の時は、いつも会話が少ない。

お互いに世間話を好む性格ではないし、多弁な方でも無いからだ。だが、この空気を不快に思う気持ちは少しも無かった。むしろ暖かく、とても落ち着く。

周囲には宴会の参加者達がゴロゴロと転がって、いびきや寝息が聞こえていたが、それらは親子の食事を妨げるようなものではなかった。

やがて、二人は短い朝食の時間を終えた。自分の食器を持って、洗い場に向かう。

二人で並んで作業をし、食器を洗い終わると、もう一度居間に戻った。

霊夢が食後のお茶を入れる。

しばらくの間、母と娘は無言で外を眺めていた。

「霊夢」

おもむろに先代が呟く。

「何？」

霊夢は視線を外に向けたまま、尋ねた。

「成人、おめでどう」

「……ありがとう」

短いやりとりの中で、霊夢の心に母親への深い感謝の念が湧き上がる。

「母さん。今日まで育ててくれて、ありがとう」

「……ああ」

感謝と喜びの中に、僅かな寂しさを感じるのは自分だけなのだろうか。と霊夢は思った。

母は、どうなのだろうか？

この日を境に、親の元を完全に離れてしまうなどという事態が起こるわけではない。

しかし、少なくともこれまで続けてきた親子の関係にとって一つの節目だった。

「母さんは、今日どうする予定？」

霊夢の漠然とした問いは、これから先のことを聞く意味合いも含め

ていた。

もう霊夢は子供ではなく大人なのだ。

彼女を守り、育む責務を全うした母がこれからの人生をどのように使うのか——具体的には、自分自身の為にな何を為したいのか、霊夢は尋ねているのだった。

先代はしばしの間黙考し、やがて口を開いた。

「——幽香の所へ行くかと思う」

そう告げた先代の横顔は、決意によって引き締められていた。

◇

『今日まで育ててくれて、ありがとう』

……やべ、超泣きそう。

こんな台詞は霊夢が結婚する時まで聞かないものと思ってたけど、これは不意打ち過ぎでしょう？

普段のポーカーフエイスがこんな時ばかりはありがたい。

じやなきや、きつと私は号泣してただろうしね。

ああ、しかし自分で提案するときながらちよつとだけこの成人式もどきの宴会を開いたことを後悔している。

私の中ではずっと子供のままだった霊夢が大人になったのだと、こういう具体的な形で理解すると、喜びと同じくらい寂しさも感じるのだ。

霊夢は、今や私の手を離れた。

これからは一人の大人として、恋人を作ったり、結婚したり、母親になつたり……。

くつそ、やべえ！　なんか未来に思いを馳せていたら物凄い勢いで、霊夢の子供時代の記憶とか蘇ってきた。

こんなにも悲しいのなら……愛などいらぬっ！

そんなダメママな私。

いや、素直に成長を喜んでけよって話なんだけどね。

霊夢に博麗の巫女の座を譲って、別居し始めた時もこんな感じだった。

たような気がする。

まあ、結局は情けない私の勝手な感傷ですな。

しばらく経てば、また日常に馴染んでいくことだろう。

——さて、問題はそんな私のこれからのことである。

ついさつき、霊夢にも尋ねられてしまったが、親としての責務を果たした私がこれからの人生をどう過ごしていくのか？ という話だ。

日常的には、これまでとそう変わらないだろう。

私には診療所の勤めがあるし、大人になったからもう会っちゃ駄目なんて決まりも無いから霊夢との関係が大きく変わるわけではない。しかし、何もかもこれまでと同じというわけでもない。

具体的な変化としては、ずっと前から決めていたことを実行するのだ。

つまり、霊夢が大人になったから私はもう波紋法を止めるということ。

波紋によって老化を押さえていた私は、これからゆつくりと衰えていくだろう。

まー、霊夢に博麗の巫女を任せたとか言っておきながら、何故か異様な頻度で数々の異変に巻き込まれていった私なのだが、それも今日で本格的にお終いだ。

……考えてみれば、私つてば現役の頃よりもむしろ引退してからの方が大事に関わってるような気がする。

原作の流れ的に仕方ない話なんだけど、ここ数年間で幻想郷規模の異変の連続。鬼や神様と戦ったり、重傷負って下半身不随になったり、色々と深刻な事態にぶつかった回数も多い。

あれ、博麗の巫女辞めた後の時期の方が遭遇した異変の密度高くない？

い、いや……それも本当に今日までだ。無茶をやりたくても出来なくなるワケだしね。

私はこれから普通に歳を取る。

老いて、体も弱り、戦うこともなくなつて、そしていずれ霊夢より先に死ぬだろう。

ずっと決めていた生き方だ。

となると、残りの余生の使い方はそれほど多くは無い。

霊夢を育てる前は没頭していた修行も、もう体力的に続けられなくなるはずだ。

別段悩むことも無く、日々をのんびりと過ごしていくんだらう。

ただ、その前に私にはやり残したことがある。

「――幽香の所へ行こうと思う」

思えば、彼女との因縁は霊夢との出会いよりも古い。

最悪の出会いだった。

それを切欠に、幽香は私との勝負に強くこだわった。

執拗に私の命を狙い、拳句周囲にまで被害が及ぶような行為を働く幽香を疎ましく思った時もある。

それ以上に怖くて苦手だしね。

別段、彼女との勝負は約束したものではないし、それを果たす義理も無いだろう。

ただ、不思議なことに母親としての責務を果たした後の解放感の中で、不意に思い出したのが幽香との関係だったのだ。

幽香と勝負をする必要性は無い。

彼女の望む勝負とは、詰まる所殺し合いによる決着だ。

しかし、今を逃せば私は幽香と戦いたくても戦えない体になっていくだろう。

やるなら今しかない――。

そう考えると、私は自然と幽香の下へ向かう気になっていた。

今日、私は幽香と会う。

会って、そして何が起こるのか漠然と理解し、覚悟している。

不思議と恐怖や躊躇いは無かった。

自分でもよく分からない、奇妙な高揚感だけが胸に宿っていた。

……やだ、なにこのドキドキ!? 初めての経験なんですけど!

幽香の顔を思い浮かべると感じる……ひよっとして、これが恋なのかしら?

えっ、この歳になって!?

今まで感じたことの無い感覚に、私は割とマジになって悩むのだった。



境内の階段を下りて、博麗神社を出て行く先代の背中を紫はそっと見送っていた。

彼女もまた、他の宴会の参加者達と同じように酔い潰れていたはずだが、いつの間にか完全に目を覚ましている。体内に酒気は全く残っていない。

紫は先代が何処へ向かったのか分かっていた。

一言も声を掛けず、ただ黙って彼女を見送る瞳には複雑な感情が宿っている。

「行っちゃまったねえ……」

背後から歩み寄る気配を感じ取り、紫は静かに視線を移した。

同じく目を覚ました勇儀が、こちらは迎え酒と言わんばかりに盃を片手に立っていた。

「最後に選んだのは、結局あの妖怪だったってわけだ」

「……そうね。フラれてしまいましたわ」

決して友好的とは言えないが、紫と勇儀の付き合いも長い。

紫は苦笑しながら軽口を返した。

「貴女も、未練に感じることはあるのかしら？」

「まさか。私とあいつとの決着は、あの時地底で戦った時に完全に付いている。」

心残りや言い訳なんて、何一つ挟む余地のない死力を尽くした戦いだったさ。だから、最後の『相手』に誰を選ぼうが、私はそれを認めるよ」

「……」

「疑うなよ。鬼が嘘を吐くわけないだろう」

「ええ、そうですね。でも、強がりと言うのでしょうか？」

「お前は本当に嫌味な奴だねえ……」

顔を顰めて睨み付ける勇儀の視線を、紫は素知らぬ顔で受け流した。

「どちらが勝つと思いますか?」

「先代だろう。あいつは私と戦った頃よりも強くなってるよ。まさに今の幻想郷で最強だ」

鬼の押した太鼓判に、紫は納得した。

確かにその通りだ。

初めて出会った時から彼女は強くなり続けた。

現役を退いた頃からも変わらず、奇妙な流れの導くまま、様々な異変や事件に関わり続け、その中で直面した多くの窮地を不屈の力と意志で脱していった。

今が彼女の最盛期だ。

霊夢が独り立ちをしたことを切欠に、徐々に衰えていくだろう僅かな期間ではあるが、少なくとも今の彼女に比類する存在は何処にもいないだろう。

——しかし、と。紫は思う。

「私は、まだ勝負がどう転ぶか分からないと思いますわ」

「へえ?」

勇儀が意外そうな声を上げる。

「あいつが向かったのは風見幽香の所で間違いないんだろう?」

「ええ、霊夢との会話を聞いた限りでは」

「なら、やっぱり結果を覆すのは難しいと思うがね。」

あの妖怪は確かに強いが、正直今のあいつに敵うほどの実力かと言うと……なあ」

「確かに、実力ではそうかもしれませんがね」

既に先代の姿は見えない。

その向かう先にいる風見幽香に対して、紫は羨望と嫉妬、そして期待を込めて視線を向けていた。

「でも、彼女は一途よ」



あの日、幽香は一人の人間と出会った。

日傘を差した普段通りの格好で、幽香は太陽の畑の周りを特に目的も無く歩いていった。

散歩と言うほど優雅な気分ではない。

ただ、家の中にいるのも何となく嫌になり、自然と足が外へと向いていた。

幽香は自分が何を求めてこんな行動に出たのか、内心では自覚していたが、それを決して認めてはいなかった。

畑の端から向日葵をぼんやりと眺め、無意識に懐から一枚の手紙を取り出す。

先代巫女から送られた、宴会への招待状だった。

中身は既に読み終えている。

そして、幽香は昨日の宴会には参加しなかった。

——これは未練か？ いや、何を馬鹿な。

苛立ちを感じながら、しかしそれはすぐに虚しさへと変わっていった。

この宴会の趣旨は理解している。

それが意味することを、他の参加者と同じように幽香も察していた。

来るべき時が来たのだ。

先代巫女は、この日を機に本当に戦いの場から退いてしまう。

もう幻想郷の新しいルールや、先代自身の意思さえ関係ない。

人間である彼女は、やがて衰え、弱っていく。

そうなっていく彼女と勝負をしたところで、幽香の望む結果は得られないだろう。

幽香の中にある虚しさは、手紙を受け取った時から胸に巣食う諦念によるものが原因だった。

「……結局、勝ち逃げで終わりね」

普段の風見幽香には全く似合わない、自虐的で弱々しい笑みが浮かぶ。

何だか、これから先を生きていくことが酷く億劫に思えてしまっていた。

何度も握り潰そうと思って、結局何も出来なかった手紙を再び舞おうと懐に手を伸ばす。

足音が聞こえた。

視線を向けた先で、幽香は眼を見開いた。

「お前は……」

呆然とした顔を向ける先。

いつか初めて出会った時と同じように、先代巫女が静かに佇んでいた。

記憶に刻み込まれた彼女の最初の姿と全く変わりない。恐れはもちろん、動揺すら見せず、身構えることもしない。

あの日、最強を自負していた自分を打ち倒した時からずっと、その強さを証明し続けた不動の姿がそこにあった。

幽香は何かを喋ろうとして、胸が詰まって上手く声が出せなくなっていた。

何だ、これは？

胸が苦しい。眼の奥が熱い。

自分が泣きそうになっていることを自覚すると、顔が羞恥でカッと熱くなった。

湧き上がる喜びを押し殺すつもりで歯を噛み締め、半ば意地になって不敵な笑みを浮かべて見せる。

睨み合うように先代と視線を交えながら、幽香はどんな言葉を口にするべきか思考を巡らせた。

「……今更、何をしに来たの？」

ノコノコと現れた先代を嘲笑うような気持ちでそう言ってみたが、実際にはまるで拗ねたような口調になってしまった。

すぐさまそれを自覚して、口にした言葉を後悔するように唇を噛み締める。

「散々、私から逃げ回ってたくせに、どういう風の吹き回しかしら？
いつもの逃げ腰はどうしたの？ 今日『用事』は無いのかしら？」

「ああ。今日、用事があるのは幽香にだ」

「あ、そう。私には無いわね。消えなさい」

「そうもいかない」

苦笑しながら先代が歩み寄る。

「私が最高の力で戦えるのは、今日が最後だ」

「あ……ああ、そう。それで？」

「何故かな。幽香の顔が浮かんだよ」

幽香は笑顔を維持しようとして失敗した。

口元が引き攣る。

今すぐ投げ捨てたい気持ちを抑えながら、震える手で日傘を畳んだ。

「全く、心底、嫌になってくるわ……」

ゆつくりと、自分を落ち着かせるように腕を下ろす。

「そうやって、何度私を振り回せば気が済むのかしら？ あの日から、私が自分の空回りじゃないかと何度も苛立ち続けて、挙句にこんなふざけた招待状まで送られて……」

懐に仕舞い損ねていた手紙を目の前に掲げると、今度こそ力一杯握り潰した。

「諦める寸前になって、いきなり現れたかと思ったらその台詞だっていうんだから。本当に、お前は分かかってやってるのか……っ」

握った手のひらの中で手紙が燃え上がる。

「——待たせすぎなのよ、この馬鹿!!」

もはや堪えきれなかった。

手の中の燃えカスと日傘を投げ捨て、狂喜に満ちた顔を上げて幽香は先代に襲い掛かった。

そして、唐突に。

あるいは当然に。

次の瞬間、凄まじい衝撃を顔面に受けて、幽香の意識は肉体と共に吹き飛んだ。

地面に叩きつけられ、転がる。

何一つ変わりはない。かつてと同じ——いや、更に鍛え上げられ

た圧倒的な威力だった。

「が……ふっ……！」

何をされたのか分からない。

ただ、過去の記憶からこれが先代の攻撃なのだと推測しているだけに過ぎない。

やはり、たった一撃で――。

「……待ち望んだわ、この瞬間をつ」

幽香は倒れなかった。

地面を転がりながらも、その勢いで体を起こし、足を踏ん張って体を整えていた。

ダメージは確実に刻み込まれている。

今、こうして立っていられるのは半ば以上意地と言う支えによるものだ。

しかし、確実にかつての自分とは違う。

それを証明して見せた。

「あの日味わった屈辱と敗北感を、私自身の手で拭い去る！」

幽香は歓喜と共に反撃を開始した。

◇

――この気持ちは恋かと思っただけど、別にそんなことは無かったぜ

！

うん。まー、冷静に考えてドキドキしてたのは普通に戦闘への緊張だったってわけなんだけどね。

しかし、私自身戦闘経験はかなり豊富なはずなんだが、何故に今回に限ってこんなに落ち着かなかったんだろう？

多分、相手が幽香だからだと思うが……。

予想通り、幽香は強かった。

考えてみれば、彼女と真っ当に戦うのはこれが初めてだ。

初対面時の不意打ちや、強引に勝負を仕掛けてきた時の逃走を優先した戦いとは違う。

初撃の百式観音を耐え切った時点で、昔とは違うことがよく分かった。

何度かヒヤッとする攻撃もあったしね。

それでも、何とか私の有利で戦闘は進み、遂に今、幽香は私の拳を受けて地に倒れ伏したのだった。

いやー、やっぱ強いわ。ゆうかりん。

「強かった……」

額の血を拭いながら、私は素直な称賛を幽香に告げた。

私以上にボロボロの姿で大の字になって倒れているが、まだ意識はあるはずだ。

「……そう、ありがとう」

激戦を終えて疲れ果てているのか、幽香の返事は何処か力が無い。

「でも、お前の方が強かったわ」

「そうか」

「ええ、私は全力を出したのよ。それでも届かなかった」

「……そうだな」

私にはそんな気の利かない返事しか返せなかった。

下手なフォローは、きっと幽香も望まないだろう。

「そうやって、私を気遣っていられるのが余裕の表れよ」

「……マジで何も言い返せない。」

ヤバイな。勝負の結果を認めないなんて駄々をこねるような性格じゃないと分かっているが、怒ってはいるかもしれない。

「でも、まあ……それも仕方ないわよね。余裕は強者の特権だわ。私の全力はお前を追い詰めることすら出来なかった。それが全てよ」

淡々と語る幽香の言葉をただ黙って受け入れようと、私は目を伏せる。

「——『だからどうした』って話よね」

唐突に、幽香の声に気迫が戻り始めていた。

私は目を見開き、無意識に身構える。

なんだ？

何故、私は警戒しているんだ？

『死力を尽くしたけれど負けました。御見事、さあもう悔いは無い』
——そうやって素直に納得出来るなら、ここまで苦しみはしないわ。
鬼のような単純な力に及ばず、神のような神性も持たない。八雲紫
のような特殊な能力も無い。私がお前にとって『脅威』にはなっても、
『最大の敵』には成り得ないことくらいとつくに分かってたのよ」

幽香は初めて自らの『弱さ』を認め、言葉にしていた。

私がいとも見てきた傲慢とも言える強さへの自負を持つ幽香には
似つかわしくない暴露だった。

「——だけど、お前に一番こだわっているのは間違いなく私よ!!」

私の攻撃によって刻まれたダメージを全く感じさせない気迫で、幽
香は立ち上がった。

同時に、全身から一気に妖力が噴き出す。

『敵わないから諦める』『全力を出したから満足だ』 そんな潔く、お
前への想いを終わらせられるわけがないでしょう?」

私をこれまで戦ってきた有象無象の相手と一緒にするなつ。そい
つらは皆、お前に負けた。お前と対等の位置にまで達することが出来
なかった。でも、私は違う……っ!」

湯気のように立ち昇る妖力は際限無く増大していった。

もはや幽香自身の限界すら超えている。

それでも止まらない。

幽香の顔に『亀裂』が走った。

比喩や眼の錯覚ではない。文字通り爆発的に高まり続ける妖力が、
器である幽香の肉体すら破壊し始めていた。

『死力を尽くす』なんて生温い方法じゃあ、お前には届かないわ。

だったら、この命だって賭けてもいい。先のことなんて、もうどう
でもいいわ。今日この瞬間まで積み重ねた何百何千年の生を、全部注
ぎ込んで構わない」

私はこれに似た現象を知っている。

私自身が持つ肉体のリミッターを外す技。それと同じような理屈
を、幽香は自身の体で行っているのだ。

肉体の『損傷』ではなく『崩壊』を起こす幽香の行為は、妖怪とい

う存在にとって消滅を意味する。

しかし、彼女は躊躇いを見せず、むしろかつてない狂喜に極まった笑みを向けていた。

そのあらゆる感情と意思を束ねた矛先が向ける先は、この私だ。

「私がこれまで生きた軌跡……これから先の未来……その全てを含めても、お前を超える刹那よりも価値のある時間など存在しないわ！」

そう断言する幽香に、私は圧倒されていた。

いや、正確には違うな。

圧倒といつても、気圧されるとか怯えるという意味じゃない。

うん、もう正直に告白しましょうか。

——やっべ、すっげえドキドキする！

な、なんなのよ……私の捉え方がおかしいのかもしれないが、あの台詞って物凄い意味合いじゃないか？

いや、分かってますよ。

そういう恋愛要素的なものは皆無で、純粹に私の実力を超えたいって意味だよね。

そこに込められているのは好意ではなく、むしろ殺意だったのも十分理解している。

でも、その意気込みがこれまでやこれからの人生全部含めても価値がある、なんて言われちゃったら、お前……。

あっ……やばい、熱っ！ 顔なんか熱っ！

「……なんで、顔赤くしてんの？」

完全に心此処に在らずな状態だった私の様子を、幽香は訝しげに見つめていた。

う……っ、幽香は何か特別なことを言ったような自覚は無いみたいだし、やっぱりこれって私の感性がおかしいのか？

考えてみれば、幽香との戦闘はまだ続行中であり、しかも相手は命を賭けて限界を超えた力を振り絞っているのだ。

緊迫感溢れる状況であり、決して先ほどのようなパニックを起こす場面ではない。

うんっ、これは私の気の迷いだ！

幽香の覚悟に中てられて、なんか変な感じになっちゃっただけなのだ。

私は咳払い一つすると、改めて気を引き締め直した。ここから先の戦闘は、きつとさつきまでとは違う。

「勝負を続けるか？」

「当然よ」

「長引けば、死ぬぞ」

「結構。灰になるまで出し尽くしてやるわ」

そう言つて、幽香は崩壊し始める肉体の痛みをおくびにも出さず、ニヤリと笑つた。

初めて見る表情だ。

こんな顔をする人間も妖怪も、私は見たことが無い。

きつと、これが『覚悟を決めた顔』つて奴なんだな。

なんだよ、もう。ちよつとカッコいいじゃん。

「……なら、私もだ」

幽香の覚悟に応えるように、私も心の中で『界・王・拳！』と叫びつつ、リミッター解除技を発動した。

全身が軋み、血流が荒れ狂う久しぶりの感覚。

正直言つてかなり痛い。辛い。キツイ。

しかし、これを使う時はいつも覚悟を決めた時だ。

これから始める幽香との本当の決闘に意識を向けていた私にとつては、全く些細なことだった。

「今日まで積み重ねた修行の成果、全てここで出し切る」

最高の力で戦えるのは今日までだ。

霊夢は私の手から離れ、博麗の巫女としての責務からは完全に解放された。

今、ここにいるのはただ一人の人間。

何をしてもいい。

だったら、私は今ここで命を含めた全てを賭ける。

そして、幽香の賭けた全てに勝つ！

「受け止めてくれ、幽香」

「はっ、打ち砕いてやるわ」

お互いの力が台風のように荒れ狂い、妖力と霊力が激突して大気と共に攪拌される。

大地が震えているように錯覚する。

いや、錯覚なんかじゃないよな。

今の私と幽香なら、きつと幻想郷だつて動かせるぜ。

私は何故か愉快的な気持ちになって、知らず笑みを浮かべていた。気分が高揚している。

これか？

出かける前に感じていた胸の高鳴りは、この『期待』によるものだったのか？

よく分からない。

戦いに対して笑顔が浮かぶなんて初めての経験だ。

ただ一つ確信する。

この戦いで、きつと私はかつて無い程の力を引き出すことが出来る、と。

「いくぞ」

「いくわ」

言葉の応酬はそこで止まる。

互いの相手を打ち倒し、敗北を刻み、そして自分は勝利を手にする為に、私達は同時に行動を開始した。

幽香とは長い付き合いだ。

その因縁も、きつと今日で終わる。

何らかの形できつと決着が付く。

私の死か。幽香の消滅か。あるいは、もっと別の形か――。

ただ、一つ気になっているのは、私がこれまでずっと幽香に素直な気持ちで何かを伝えることがなかったということだ。

だから今、言ってしまったおうか。

普段は色々と考えてしまうから、少なくともハッキリと断言出来る今だからこそ言おう。

多分、テンション上がってる状態だからこんな台詞が出て来るんだろうけどね。

——愛してるぜ、幽香！



長い幻想郷の歴史の中で、名を上げられる者は数多く存在する。

人間ならば英雄と称えられ、妖怪ならば恐れられる。

神さえ存在するこの世界で、多くの実力者達の間で優劣を決めることは難しい。

しかし、この幻想郷において誰もが『最強』と認める者が一時期存在した。

それは本当に短い期間のことである。

わずか十年も満たない間ではあるが、しかしその時期確かに幻想郷有数の実力者達が例外無く認めていた。

彼女は『最強』である、と。

果たしてその証明がどのように成されたのか、知られてはいない。

その力を、多くの強者を打倒することで証明し続けたのか。

あるいは、当時最も強さを認められていた者との勝負を制したことで証を立てたのか。

何も分かってはいない。

ただ一つ。彼女が『最強』であると、誰もが認めていたことだけは間違いない。

その彼女の名前は——。

[Ending No. 1]

Normal End 「古明地さとり」

先代巫女が亡くなって一月が過ぎた。

季節は少しずつ移り変わり、月は満ち欠け、時は流れる。

空も大地も変わりなく。

川は流れ、風が吹き、日が昇り沈む。

人は日々を生き急ぎ、妖怪は時の流れに緩やかに身を任せる。

まこと、世は全て事も無し。

——未だ、先代巫女の魂は彼岸の向こうでも見つかつてはいない。

いつものように魔理沙が博麗神社の境内に降り立ち、この気だるい朝の時間帯には縁側でダラダラしているだけだろう霊夢の元へ向かうと、やはりそこには予想通りの姿の彼女がいた。

「よお、相変わらずやる気の無い巫女さんだな」

皮肉を言いながら意地悪く笑って、魔理沙は霊夢に歩み寄った。

少し前までは、努めて明るく振舞わなくてはこうして彼女に接することが出来なかった。

霊夢に対しては、初めて出会った時から決して活発な印象は抱かなかったが、母親を亡くしてからは更に物静かになったような気がする。

悲しみに浸り、無気力になっているわけではない。

そんな性格の人間ではないし、霊夢があの日冥界で母親と交わした最期の会話が多くのものを残したのだと、魔理沙は知っている。

落ち着いた——簡単に表現するならばその一言が当て嵌まる。

ただしそれは、少女から大人への成長というより、何かが欠落し、そこに何かを埋めることで『変化』してしまったかのような、少し歪な成長だった。

「遅めの春を満喫してるのよ」

「もう一月過ぎたんだぜ？ そろそろ春も終わるだろ」

「季節の変化は異変じゃないしねえ」

気だるそうな受け答え。

やはり少しだけのんきさを増したような霊夢の性格に魔理沙は苦笑し、そしてそれ以上言葉が続かずに黙り込んでしまった。

縁側から見える物干し竿に掛けられた布団を、さつきから意図的に無視しようとしていた。

布団は『二つ』干されていた。

「あれから一月、ね……」

「……………霊夢」

「勘違いしないで欲しいんだけど、本当にうつかり干しちやったのよ。やっぱり、一月じゃあ意識は切り替えられても、習慣までは切り替えられないみたいだわ」

霊夢は不自然な態度を取るわけでもなく、自分自身に対して本当に呆れたようなため息を一つ吐いた。

一月に一度、この神社を訪れていた母親はもう二度と来ないのだ。

その事実に対して、感傷に浸るわけでもなくぼんやりと布団を眺める霊夢に対して、魔理沙は拭いきれない気まずさを黙って味わっていた。

「さ、最近…………調子はどうか？」

必死に何か言葉を紡ごうとして、結局魔理沙はそんな間の抜けたことを尋ねた。

霊夢はそれに対して何か皮肉ってやろうかと思ったが、友人の不器用な気遣いに配慮して、少し考えた後答えた。

「良いわよ。能力的には冥界に行く前より向上してるんじゃない？」

弾幕ごっこでは、なんか前以上に勘が冴えてるし。ほら、ちよつと前に鬼が腕試しとか言って尋ねてきたじゃない。あんたも見てたでしよ」

「ああ……………すごかったな」

魔理沙はその時のことを思い出して素直に称賛し、言葉の裏にある畏怖の感情を胸の内に隠した。

理由は分からない。しかし、ある日突然『鬼』を名乗る少女が博麗神社を訪れ、勝負を挑んできた。

どんな因縁や因果があつたものか。その鬼は何も語らず、ただ尋常の勝負を迫力のある笑顔で申し込み、霊夢もまた何も聞かずに受けた。

結果は、死闘の末に霊夢の勝利で終わった。

当初は普通の弾幕ごっこから始まったが、後半からは互いに完全な殺意を込めた凄まじい戦闘になっていた。

鬼は尋常ならざる力の持ち主だった。

あれほどの実力の妖怪は魔理沙の記憶にも無い。あのレミリアや藍でさえ、及ばぬかもしれない。

その上で、人間である霊夢は敵を降した。

満身創痍で、死力を振り絞った後でありながら、苦痛や必死さを表に出さない霊夢の横顔に、魔理沙は恐怖を覚えていた。

以前も、霊夢に対してこんな感情を抱いた記憶があつた。

あの時は別の気持ちもあつたが、今は――。

鉄のように固まった霊夢の顔を真正面から見つめ返し、ボロボロになつた鬼の少女はにっこりと笑つた。

――見事な鬼退治だ。さあ、鬼の首を獲つてくれ。

笑いながら、鬼は介錯を頼んだ。

興味無さ気に断る霊夢に対して、鬼は言い募る。

――それで母親を超えたとと言えるかな？ お前の母も、鬼を退治してのけたけれど、最後の仕上げをやり残してしまったぞ。

霊夢が表情を変えずに、瞳の中だけで激情をあらわにした。

母親を亡くして以来、魔理沙が初めて目にする霊夢のハッキリとした感情の発露だった。

――心残りはあつたが、お前との戦いはそれに勝る意味があつた。

さあ、やれ！ 博麗の巫女！

その鬼がどういった経緯で霊夢の母を知り、それに対して何を想い、何を考え、そして何を答えとして得たのか。

何も分からぬまま、聞き出さぬまま、霊夢は厳かに鬼の首を刎ねた。

長い二本の角を持つその鬼の首は、今も博麗神社の奥に封印されている。

魔理沙はその日、確信したのだ。
博麗霊夢は変わった。

母親を失うことで、大きく成長し、更に強大な力を手に入れた。
しかし、もし母親が生きていたのなら、この成長を素直に喜んだ
だろうか？

そんな前提すら成立しない疑問が、魔理沙の中に残り続けるよう
になった。

「あれから、一月か……」

無意識に呟きが漏れる。

何度も思い返さずにはいられない。

全ての切欠となったあの日——冥界の異変を解決し、先代の魂と共
に人里へ戻った時のことを。

その魂を肉体に戻そうとして、原因不明の失敗を起こしたことを。

「人里の様子だけどき、少し落ち着いてきたよ。未だにあの上白沢慧
音って奴は、失踪してから見つかってないけど。経営してた寺子屋
は、店が金を出し合って続けるってさ」

「あ、そう」

誰もがあらゆる手を尽くしたが、結局先代巫女の蘇生は叶わなかつ
た。

彼女はそのまま、誰も抗うことの出来ぬまま亡くなった。

「そういや、この間チルノに会ったぜ。むちやくちや弾幕ごっこが強
くなってやがった。ますます妖精らしくなくなってきたなあ、アイツ
何処まで行くつもりなんだ？」

「へえ」

嘆きはあつた。

悲しみ、悔い、呪い——しかし、そこに瀬戸際の思いがなかったの
は、心の何処かで最後の一線を残していたからだろう。

人間の死は、完全な終わりではない。

少なくとも、世界をこの世とあの世の二つの視点で見ることの出来
る人外の存在達にはそんな慰めがあつたはずだ。

——それもすぐに虚しく消え去つたのだが。

「紅魔館は相変わらずだ。門番は少し元気になったかな。フランもさ、最近少し食事を摂るようになったってパチュリーが言ってたぜ。出来れば一度、霊夢に会って欲しいとよ。いい刺激になるかもな」
「ま、気が向いたらね」

死んだ人間の魂は、三途の川を渡って、閻魔の裁判を受け、天国と地獄に分けられる。そして輪廻転生する。

しかし、先代巫女の魂は何処にも見つからなかった。

やはり原因は分からない。

先代の魂は、冥界にも彼岸の先にも無く、この世の何処かで彷徨つてもいない。

知己であった力ある大妖怪達が総出で、持ち得る限りの能力を駆使して幻想郷中を探し回ったが、誰も見つけることが出来なかった。

やがて、誰もが終わりを悟った。

「……昨日、橙っていう猫の妖怪に会ったぜ」

この件に関わった者、事の詳細を知り得た者が、各々の答えを出し、あるいは未だ出せずに悩み。

「八雲藍の式だそうだ」

ただ一つ確かなのは、全ての者が変化を得たということだ。

「八雲紫は、最近ずっと眠ってばかりいるってさ」

あまりに大きな喪失によって、変わらざるを得なかったのだった。

「……そうなんだ」

近況を話し終えた魔理沙が黙って様子を見守る中、霊夢はため息と共に呟く。

相変わらず気だるい仕草で送られる流し目を見つめ返し、魔理沙は咄嗟に目を背けた。

冷や汗が吹き出し、背筋が凍りつく。

「興味ないわ」

霊夢は淡々と言い切った。

しかし、その瞳に映る唯一偽りの無い感情は——憎悪。



風見幽香は旧地獄街道を歩いていた。

自らの足でここを歩くのは、これで『二度目』だ。

最初にここを訪れた時は、見知らぬ地上の妖怪として当然のように地底の住人達に絡まれた。

静かに殺気立っていた幽香に対して、それでも喧嘩を売れるような、そこそ腕と度胸のある妖怪達だった。

立ち塞がる数匹の妖怪を眺めて、幽香の脳裏に過去の記憶が蘇った。

——そういえば、アイツもこんな風に絡まれていたっけね。

先代巫女が地底を訪れた時の記憶。それを思い出し、無意識に苦笑を浮かべた次の瞬間、更に思い出した。

——アレが、アイツとの最期の会話だった。

理解した瞬間、感じていた懐かしさは消し飛んで、怒りと苛立ちとあらゆる存在に対する破壊衝動が心を一瞬で塗り潰した。

怒号を上げ、唐突に変貌した幽香に対して呆気を取られる目の前の妖怪達を一匹残らず虐殺した。

胸を掻き毟るような苦しみだが、幽香を狂気に掻き立てていた。

そして現在。幽香は再びここへやって来た。

地上を追われる程に恐れられた妖怪達の街を、更なる恐怖によって静まり返らせた幽香の再来に対して、街道は彼女を忌避するように静まり返っていた。

誰もが家の中や屋台の陰、路地裏へと逃げていく。

幽香は道の中央を黙々と進んでいた。

歩きながら、ふと視界の片隅に見覚えのある姿を捉える。

あれは……確か、人里の半人半獣ではないか？

確信を持たなかったのは幽香がその妖怪に対してほとんど興味を抱かなかったこともあるが、道の片隅でボロ布のように汚れ、疲れきった姿で座り込む姿が記憶の中の彼女と全く一致しなかったせいもあった。

もしも、あの乞食のような有様が上白沢慧音本人だというのなら、

あまりにも変わり果てた姿だ。

何故こんな所に？

一体、どんな経緯を経て地底へと堕ちてきたのか――。

しかし、幽香は歩みを止めず、真偽を確認しようともせず、そうして歩き去るままに彼女のことを忘れ去った。

どうでもいい。

先代巫女が唐突にこの世を去ったあの日から、幽香にとってあまりにも多くのものがどうでもよくなっていた。

「――また、来たのか。随分早いな」

旧地獄街道の先。幽香の捜していた目的の妖怪は、待ち構えるように佇んでいた。

星熊勇儀だった。

その手には盃を持っていない。

「また勝負しに来たのかい？」

地底を訪れるのは、これで二度目となる幽香に対して、勇儀は苦笑しながら尋ねた。

「私がお前さんを地上に叩き返してから、まだ三日と経っていない。勝負事は大歓迎だが、少し急ぎすぎじゃないかね？」

その敵意と殺意だけは漲るほどに立ち昇らせた幽香は、無言で勇儀を睨んでいる。

「以前の負傷を、完全に引き摺ったままに見えるがね」

勇儀は笑みを消し、厳しさを含んだ視線で幽香を睨み返した。

指摘するように走らせた視線の先には、勇儀との戦いで失った幽香の右目と左腕がある。

首には血の滲んだ包帯が乱暴に巻かれていた。潰された喉笛がほとんど再生していないので、幽香は思うように言葉が話せないのだ。

咎める意味を持つ勇儀の視線に対して、幽香は変わらぬ戦意を発して返した。

「……退く気はないのか」

言葉ではなく、行動で幽香は答えた。

一步、進む。

「満身創痍の状態で私を倒すことが、先代を超えたことの証になるとでも思っているのか？」

幽香の顔が無残なまでに歪んだ。

勇儀の言葉に対して怒り、苛立ち——そして何処か諦めと絶望を宿しているような、苦悶の表情にも見える顔つきだった。

声を発することが出来るなら、彼女は喚き散らしていたかもしれない。

意味も無く、ただ己の中にある理解出来ない感情全てを吐き出すように。

「私はお前を差し置いて『決着をつけた』立場だ。無碍には出来ん」

幽香は既に駆け出していた。

勇儀の瞳に映る、自分に対する戒めと憐れみが、いずれも見下すものとしか捉えられなかった。

立ち止まれなかった。

立ち止まれば、どうなるか分からなかった。

脳裏に、路地裏で見かけた慧音らしき妖怪の末路が過ぎった。

「その苦しみ、止めてやる」

迎え撃つ勇儀に対して、幽香は潰れた喉を震わせて狂ったように叫んでいた。



言葉として成立していない絶叫のような心の声が聞こえ、さとりは書類から顔を上げた。

この声は聞き覚えがある。遠く旧都から、本来なら届かないはずの地霊殿まで届くような大きな心の叫びだ。

「確か、風見幽香……でしたか」

眩きは僅かな憐れみだけを含み、あとはさして興味も抱かなかった。

あの妖怪もまた、先代巫女の死に心を囚われてもがき苦しんでいるのだ。

先代の死を切欠に、あの巫女と関わっていた何人かの人間や妖怪とさとりは顔を合わせていたが、いずれも心の痛みを抱えていた。

これ以上仕事を進める気にもならず、さとりはペンを置くと几帳面に机の上を整理して、事務に使っている部屋から出た。

廊下を歩きながら、時折感じる振動やペット達の怯えた様子は、旧都で起こっている戦闘の影響か。

強大な妖怪がぶつかり合えばこうなる。そこに悲壮や悲惨といったものが加われれば、影響も強くなるのだろう。

途中で台所に寄ってお茶とお菓子を一人分用意し、その足で自室へと向かった。

中に入ると、念の為鍵を掛ける。

ここから先は、プライベートな憩いの時間だ。誰にも邪魔されたくなかった。

さとりは、つい最近追加した二台目のベッドに歩み寄ると、傍の机にお盆を置いた。

ベッドの傍にはリラックスする為の安楽椅子が配置してある。それに腰掛ける。

お茶を一口のみ、一息吐くと自然と微笑みが浮かんだ。

そのベッドに横たわる人物を見下ろす。

死んだように眠る——いや、『ある意味』本当に死んでいる先代巫女の遺体がそこに横たわっていた。

腐敗はしていない。冬の妖怪の力によって肉体を凍結させている。その処置は、あの異変で行われたまま結局解除されることなく残っていた。

先代巫女はあの日以来目覚めていない。

あの日、彼女は亡くなったのだ。

「——目が覚めましたか？ と、言うのも何だか変な表現ですね」
物言わぬ先代の遺体にさとりは微笑みかけた。

当然のように言葉は返ってこない。

しかし、さとりは狂ってはいない。

彼女にとって、言葉による会話の成立はあまり意味がなかった。

「ええ、おはよう。先代」

成立しない会話の中で、さとりはごく自然に挨拶をした。

その第三の目には、先代の返す目覚めの言葉がしっかりと映っていた。

◇

目が覚めて、さとりの微笑みが最初に映るって……素敵やん？

まあ、さとりの言うとおりの『目が覚める』っていう表現もおかしな感じだけどね。

私ってば、今は死んじやってる状態だし。

「相変わらずのんきな思考ですね。死んで一月も経ったというのに、全然変化が無い」

うおっ、もう一ヶ月も経ってたの!?

いやあ、今の状態の私って何となく感覚がおかしいというか、曖昧な状態のせいか、時間の感覚が明らかに生前より狂ってるわ。

さとりに言われて思い返せば、確かに一ヶ月経っているような気がするし、逆に一時間も経っていないような気もする。

昔のことを思い返すと、数年前のことでも数日前のように錯覚してしまう時があるように、私の認識が何処かズレているように感じるのだ。

はー、この状態になって大分経つけど、相変わらずどういう状態なのか理解不能だな。

「それは私にとっても同じことです。

ここしばらく、貴女と会話をしながら心を読んできましたが、生前のそれと何ら変わりはありませんし、違和感も感じませんでした。

正直、こうして生命活動の停止した貴女の肉体が目の前になければ、死んでいるとは到底思えませんね」

さとりが分からないと言うのなら、正直私もお手上げだな。手を上げられないけど。

今の私の状態を把握出来ているのがさとりしかないんだから、

しようがないんだよね。他の誰にも相談出来ないし。

私は今の状態になって、それこそ暇潰しにするほど整理し尽くした記憶を、今再び蘇らせていた。

そう、あの日——原作で『春雪異変』と呼ばれる異変を霊夢が解決したあの日に、私は死んだ。

……らしい。

正直、あの辺りの記憶は曖昧でハッキリとは覚えていない。

霊夢と冥界で再会して、親子の絆をガツチリ固め合った後に地上に戻って、それから紫と霊夢の保証付きで再び生き返られるのだと言われて、その為の作業が始まり——。

気が付いたら、私はこの状態だった。

意識はあるのに体は動かない。

加えて、その意識も肉体の感覚が死んでいるせいか、妙に曖昧な感じがする。

当初は言葉も発せないし、瞼さえ動かせないから目を閉じているはずなのに周囲の状況が分かり、それでいて誰も私に気付かないというチグハグな状況に半ば焦っていたのだが、さとりに会えたことでようやく現状を正確に理解したのだった。

さとりに説明を受け、私は自分が本格的に死んだことを自覚した。

まあ、そのことにショックは受けたが、正直死んだことに対する様々な感傷は冥界で目を覚ました時に済ませていたので、インパクトは今ひとつだったね。

それよりも気になったのが、さとりでも把握し切れていない様々な謎だ。

まず、紫の能力を用いて行われたはずの蘇生が失敗した原因が不明なのが腑に落ちない。

紫の実力を知る私としては、単純なミスとはとても思えないんだよねあ。

ただ、これに関しては事情を探れるさとりの専門外の話なので、多分この先永遠に分からない謎になるだろう。

あとは、私の今の状態も謎だね。

死んだなら死んだで、幻想郷には冥界も三途の川もあるし、閻魔様だっているんだから、魂とかそういうものがそっちへ行くはずなんだよね。

これは、旧地獄を管理する上で死者の魂に対する知識を持つさとり言わせてもおかしな状態であるらしい。

死んだ後でもなお魂が遺体に留まっている状態のようだ。そして、やっぱり原因は不明。

ちなみに、私がここ地霊殿にいるのは、魂が旧地獄へ向かおうとしたからではなく、ただ単に遺体がここへ物理的に運ばれてきたから。どうやら、私の魂は完全に肉体とセットらしく、体を動かさなければ移動も出来ないようだ。

不便と言えば不便だが、自分に死後の自覚があるせいなのか、不思議と生前とのギャップに苦痛や不満をさほど感じない。

こうして意思疎通が出来るさとの傍へ移されたことで、ある程度不便が解消したのも理由かね。

さとりが心を読んでくれないと意思疎通すら出来ないもんなあ。

流石に誰とも意思を交わせぬまま、遺体に収まった状態で意識だけが取り残されてたら、孤独感で発狂していたかも分らんね。やべ、想像しただけでこええ。

いや、本当にさとり人にはマジ感謝ですよ。

「別に構いませんよ。正直、これくらいしか出来ないことに少々申し訳なさも感じていますしね」

さすが、さとりん。

おお、心の友よお〜！

「うーん……そうですね、今の貴女なら余計なトラブルも起こせませんし、素直に友人と認めましょう」

ひどっ！ つまり生前は友人と名乗るのに躊躇う要素があつたのね……。

「この際正直に言ってしまいますが、貴女自身はともかく友好関係が面倒くさすぎるんですよ。具体的には友人に大物多すぎです。もつと節度を持つてください」

確かに紫とかスゴイ妖怪ばかりだけどね。

でも、大物というならさとりだつて負けてないと思うけどな。気後れする必要なんてないって。

「気軽に言ってくれますね……」

そういえば、友好関係で思い出したけど、他の皆の様子って今はどんな感じ？

自覚無かったけど、もうあれから一ヶ月も経ってるんだよね。

地底からじゃ、地上の情報なんて仕入れにくいかもしれないけど、何か分かったらやつぱり随時教えて欲しいな。気になるわ。

霊夢とかちゃんと体に気を付けて、ご飯とか食べてるかしら？

いや、この考えはもう古いか。あの冥界でのやりとりで、霊夢の成長はしつかりと確認出来たわけだし。

……こうして考えてみると、私ってそれほど生前の心残りないんだよねえ。

「風見幽香のことはどうなんです？ あの妖怪は貴女との決着に随分とこだわってましたが」

どおおおっ!? わ、忘れてたあー！

決着どころか、ろくに別れの挨拶も出来てねえ！

やつべ、幽香に殺される……。

「もう死んでますけどね。」

実は黙ってましたけど、三日ほど前に地底への結界を破って旧都に殴り込みに来てます。星熊勇儀に撃退されましたが、今日リベンジに来ました」

マジですか!?

ええ……ひよつとして、私のこと追ってきてんの？

「さあ、そこまでは分かりません。貴女の遺体が地霊殿にあることは知っているみたいですね。今のところは、勇儀さんと戦うことが目的のようですが」

そ、そうか……私と戦えなかった鬱憤を勇儀で晴らしてるのかな？

ごめんよ、勇儀。動けるもんなら、今からでも土下座に行きたいわい。

とりあえず、幽香が元氣そうで安心したわ。

「あと、娘さんですが、博麗の巫女として絶好調のようですね。風の噂で、地上へ出ていった鬼の伊吹萃香を単独で退治したそうです」

おお、その辺は原作通りかー。

しかし、私自身が鬼を相手に戦ったからこそ分かるが、よく勝てたな霊夢。やっぱり私の娘だからかしら？

ま、さすがに私みたいにガチンコなんてアホな真似で勝負つけたわけじゃないだろうけどね。

となると、今の博麗神社には萃香がいるんだなあ。

「……ええ、そうですね。事の顛末は、そのように聞き及んでいます」
いいなあ、私も一度会ってみたかったなあ。

今更言つてもしょうがないか。

私は傍に居れなくなっただけど、霊夢の回りも順調に騒がしくなっ
ていつているようで結構結構。

あと他に、慧音は今どうしてるかなー。

私の蘇生が失敗した時、すぐに意識自体は戻って周りの様子が確認
出来ただけけど、その中でも慧音はかなり尋常じゃない取り乱し方を
していた。

さとりを引き合わされるまでの期間、自分の周りの様子を見ること
しか出来なかったから断片的にしか見てないんだが、なんだかいつも
必死の形相を浮かべていた気がする。

やっぱり、私の死体発見に加えて、本格的な死亡というショツキン
グな場面を続けて見せてしまったせいかな。

「……彼女に関しては、今は人里を出ているそうです。風見幽香と同
じように、この地底へやって来ているのかもしれないね」

そっかー。会えたら嬉しいな。会話出来んけど。

それじゃあ、一番気になってる――。

「八雲紫に関しては」

それまで何処かワンテンポ会話の遅かったさとりが急に先を制し
たので、私は思わず驚いてしまった。

「私も知りません」

さとりは断言した。



八雲紫は切羽詰っていた。

先代が目を覚まさない。

当然だ、彼女の心臓は未だ鼓動を止め、呼吸も無く、肉体は完全に生命活動を停止している。

死んでいるのだ。

だから、目を覚まさなくて当然なのだ。

——そんな筈はない。

しかし、紫はその現実を強く否定していた。

このまま彼女が死ぬはずがない。

生き返るのだ。

少なくとも、そうなる予定だったのだ。

何故なら、彼女から靈魂を抜き取り、一時的に仮死状態にしたのは自分なのだから。

その靈魂を冥界にまで導き、亡霊として存在させていたのは自分なのだから。

そして、その自分が彼女を元に戻すのだと決めたのだから。

だから、戻るはずなのだ。

彼女の魂は肉体へと戻り、再び息を吹き返し、人間としての生に戻っていくのだ。

——なのに、どうして!?

紫の心の中は疑念と焦燥で満ち溢れていた。

平静を装い続けた顔には限界が来ている。

目は僅かに血走り、頬は強張り、嫌な汗が滲み出す。

どれだけ手を尽くしても、先代は目を覚まさない。

靈魂を肉体に戻すところまでは順調に進んだ。あとは目を覚ますという結果を待っただけなのに、その結果が出てこない。何処かで止まっている。

何処で止まっているのかが分からない。

理由さえ分からない。

紫自身はもちろん、協力を仰いだ他の者達にも、誰にも分からなかった。

先代が目を覚まさぬまま、時間と解決策だけがどんどん潰れていく。

一日が過ぎる度に紫は不安と苛立ちを募らせていった。

先代が死んだままの状態で時間が過ぎれば過ぎるほど、それが『死』として現実に塗り込められ、拭うことが難しくなっていくような気がする。

もはや、一刻の猶予もない。

その『猶予』とは一体どういう意味なのか、自分でも理解出来ない。紫の理性は焦燥によって蝕まれていた。

万策尽き、いよいよ案が浮かばなくなってきたところで、紫はさとりを頼ることに決めた。

自分の境界操作を含めたあらゆる能力で試みたが、先代の魂を認識することが出来なかった。

しかし、さどりの第三の目ならば、自分達では捉えきれない『何か』を見つけることが出来るかもしれない。

妖怪の賢者と称される八雲紫にしてはあまりにも不確定な要素に頼った——それこそ藁にも縋るような考えだった。

先代の遺体を地霊殿に運び込み、さどりに事情を全て話して、あとは彼女の要望のまま、二人きりにさせる。

それほど待たされることはなかった。

さどりは何事もなく部屋から出てきた。

逸る気持ちを表に出さぬよう努めて、紫は問いかけた。

「それで、どうだったのかしら？」

「貴女の予想通りですね。先代の魂は遺体に宿っています。意識もハッキリしていて、さつきまで軽く雑談をしてました」

さどりはあつさり、そう答えた。

期待と不安で胸が張り裂けそうだった紫にとって、その無造作な返

答はあまりに呆気なさすぎた。

喜びも感動もなく、ただ呆然とさとりのこれ以上解釈しようもない単純明快な言葉を何度も反芻する。

「……本当？」

「ええ、普通に心が読めましたよ」

「私には、何も分からなかったわ」

「そうなんですか」

さとりの受け答えは素っ気無かった。

その自然な態度に、紫はわずかな苛立ちすら感じていた。

あらゆる手を尽くしたはずだった。

能力を限界まで使用して、それでも先代の魂を僅かにも感じる事が出来なかったのだ。

彼女が死んだのではなく、魂を見つけられないだけなのだ。その魂は未だ肉体に残っているのだと——その考えにまで至ったのは何らかのヒントがあったわけではなく、半ば以上の希望的観測と縊るような期待があったからなのだ。

だから、信じられなかった。

「本当に、貴女は先代の心を読み取れたの？」

愚かなことだと自覚すら出来ず、紫は同じ質問を繰り返していた。

さとりは今度は答えなかった。

瞼を半ばまで閉じた己の両眼と、第三の目を紫に向け、じっと何かを探っている。

交渉事などで様々な相手と対峙してきた紫だったが、この時初めて緊張を感じた。

「……信じられませんか？」

さとりは静かに問い返した。

「貴女ほどの大妖怪でさえ、先代の魂を捉えることが出来なかった。

今、彼女の魂の在り様を証明出来るのは私の言葉のみ。たった一匹の妖怪の、真偽も定かではない薄っぺらな言葉だけ、ということですね」

「……何が言いたいのかしら？」

「まあ、単刀直入に言いませうか。——貴女、私が何を言っても信じられないのでは？」

目まぐるしく動いていた紫の思考が、凍りつくように停止した。

「さっき先代と交わした会話の内容を包み隠さず話すとですね、ようやく話の通じる相手が現れて良かったという安堵から来る軽口だとか、妙な形だけど久しぶりに私と会えて嬉しかったとか、紫には心配ないって伝えておいてくれとか、もし良かったら私の仲介を挟んで話をしたいとか——まあ、そんな感じのことをのんきに話してましたよ」

「……何を、言っているの？」

「ああ、今ちよつとガードが緩みましたね。動揺してますか？　心が読めますよ。」

ふむふむ、何を馬鹿げたことを、ですか。まあ、そうですね。貴女の中の想定とは、先代の対応がまるでかけ離れてますからね。

当然、責められると思いましたが。本来なら、無事先代が生き返ったあとで処断を受け入れるつもりだったんですね。

加えて、今回のような事態になって自分は取り返しの付かないほどの溝を先代との間に作ってしまったと恐れているわけですか。だから、先代がそんなことを言うはずがなく、私の話も嘘である、と。

しかし、その一方で私の話を信じたいという気持ちもありますね。ああ、そうですね。それは都合の良い方に楽観したいだけだ、と自分で戒めているわけですか。なんだか、思考が堂々巡りをしていますね。

貴女の考えすぎですよ。杞憂です。確かに違和感を感じるかもしれませんが、先代は実際に貴女が思うほど物事を深刻に捉えるような性分ではないのです。意外と軽い性格の人物なんですよ。そう深刻にならないでください」

さとりは軽い口調で言葉を重ねたが、紫にとってはその度に混乱を招くものでしかなかった。

さとりの話す内容が、全て真実であるのなら、彼女自身の言うとおり自分の杞憂で全て片付くのだろう。

しかし、信じることなど出来ない。

そこまで単純になれるわけがない。そうなれるのならば、そもそも杞憂とやらが生まれることもない。

紫は完全な疑心暗鬼に陥っていた。

「……言いなさい」

「はっ？」

「本当のことを言いなさい！」

「……いや、さつきから正直なごとしか言っていないんですけれどね。

私は別に、貴女に信じてもらうよう意気込みはしません、わざわざ疑われるつもりもありませんよ。言ったでしょう『貴女自身が何を言っても信じられないだろう』って」

さとりは何も変わらない自然体のままで語っていたが、対する紫の仮面は無残にも崩れ始めていた。

苦悩に歪んだ表情が浮かび上がる。

その瞳には恐れがあった。

さとの言うとおり、一度疑い始めた紫は、もはや言葉だけでは何も信じる事が出来なくなっていた。

しかし、そのさとの言葉以外に先代に関する物事の真偽を知る術がない。

さとの話が全て本当ならば良かった。だが、とても信じられないし、楽観も出来ない。

さとの話が全て嘘ならば良かった。だが、その結果突きつけられる最悪の現実など、とても受け入れられない。

頭が破裂しそうだった。

無意識に食い縛った歯から呻き声が漏れる。

紫は酷い吐き気を覚え、口元を押さえた。

「——貴女は、自分が先代を殺してしまったのだと考えている」

さとの声には特にこれといった感情は込められていなかった。

初めて見る妖怪の賢者の弱りきった姿に対して、翻弄してやろうという悪意などなく、救ってやろうという慈悲もない。

ただ、他人として僅かな憐れみだけを抱いていた。

「その罪を本人に責められるのが怖いと感じながら、自ら罰を受けなければならぬ」という自責の念も強い。

だから、貴女はどちらの現実も選ぶことが出来ないのですね。それがどれ程厳しいものであっても、突きつけられたのなら受け入れる覚悟はしているが、自ら選べば都合の良い方へ傾いてしまうから、私の話を信じる事が出来ない」

とうとうその場に蹲ってしまった紫を見下ろし、さとりは小さくため息を吐いた。

「私から言えることは変わりませんよ」

紫はそれが許されることではないと強く戒めながらも、継るように見上げていた。

「先代は、貴女を許しています。信じる信じないはご自由に」
紫は逃げ出した。



さとりは紫と最後に交わした会話を思い出し、ほんの少しだけ後味の悪さを感じていた。

ほんの少し、だ。

あの時の会話は本当に悪意も善意もない、事務的なものだった。自分は先代と話したままの内容を聞かせたし、それをどう捉えたかは紫の自由だ。

まあ、先代の外面と内面にギャップがあることは自分くらいしか知らないことだし、その捉え方の差異が今回は要らぬ疑念を生み出してしまった原因なのだろう。

八雲紫は先代巫女の内面を『勘違い』して捉えている。

それを訂正する本人はもはや直接話すことも出来ない。

仮にさとりが仲介することで話をしたとしても、紫が聞くことが出来るものはその『さとりの話』だけだ。

さとりが正直に話したとしても、紫は自分の認識とのギャップからそれを信じることは出来ない。

しかし、さとりが紫のイメージに合わせた先代の言葉を騙つても、それは結局嘘として信じられることはないだろう。

まさに堂々巡りだ。

さとり自身には、紫を貶めようという魂胆など微塵もなかった。

まあ、事態の原因はあの妖怪にあるので、多少の悪意は含んでいたかもしれない。しかし、それも消極的なものだ。

あの追い詰められた八雲紫の怯えた表情を思い出すと気の毒だと感じるが、だからといって相手を説得するほどの情熱や思い入れがないのも事実だった。

時折、お隣を地上に行かせて先代の気に行っている事柄に関する情報をそれとなく探らせているが、さとりはそれらをオブラートに包んで先代に話していた。

八雲紫は人里どころか人前に姿を現すこともなくなり、妖怪達の間でさえ目撃情報が途切れているという話だ。

何処かに引き籠もっているのだろうか？　あるいは何処かへ去ったのか？

さとりには分からないし、分からないことを先代に語っても無駄な心配をさせるだけなので、自分は知らないとだけ答えた。

嘘は言っていない。

退治された伊吹萃香の首だけが博麗神社に在ることも、風見幽香が勇儀とほとんど殺し合いに近い決闘をしていることも、上白沢慧音に該当する妖怪が旧都の路地裏で彷徨っているのを見かけたこと——詳しく語っていないだけで、嘘は伝えていない。

さとりなりの、不自由な友人に対するちよつとした配慮だった。

赤の他人のことなどどうでもいいが、友人ならば少しくらい気を配るものだ。

「貴女の現状について、謎は多いですが……」

さとりは先代が今陥っている状況に対して明確な答えを持っていないが、ある程度の憶測は持っていた。

先代の事情について知らない紫にはそれこそ思いつきもしなかっただろう。

この人間は一度輪廻転生をしているのだ。それも、正常なものではない、異世界からの転生という特異なものを。

おそらく、そこに今回の異常の原因がある。

そんな不確定要素を含んだ先代の魂を引き抜き、更に不安定な状態にしてしまえば、それこそ何が起こってもおかしくはないはずだ。

切り離れた肉体と魂を再び戻した時、何らかの理由で歯車が噛み合わなかった——そんなイメージだけの漠然とした憶測をさとりは導き出していた。

この憶測からどうやって考えを発展させればいいのかまでは分からないが、しかしそこまで答えを急ぐ必要もないだろう。

「まあ、のんびりいきましょ。誰も急かしませんよ」

自分自身と横たわった先代の両方に言い聞かせるように、のんきに呟く。

急ぐ必要性など感じなかった。

先代自身に焦りはなく、自分自身にも焦る理由がない。

「時間はたっぷりあります。現状に何か変化を与えそうな切欠も、これから先どんどん起こりそうじゃないですか？ えーと、次は『東方永夜抄』でしたっけ。……ほほう、この異変にも面白そうな物語が隠されているようですね」

さして気にもならない数々の懸念を頭から追い出し、さとりの興味は今口にした内容に移っていった。

先代の死に嘆き、悲しみ、苦しみ、未だそこから抜け出せない人妖は多く存在するが、それらはさとりにとって他人事以外の何ものでもなかった。

ここは地底の地霊殿。

嫌われ者の覚妖怪が住む屋敷。

好んで近づく者はおらず、これからもきつとそうだろう。

地上とは違う時間の流れが、ここにはある。

「さあ、また話を聞かせてください」

さとりは自分だけが聞くことの出来る声を聞きながら、物言わぬ先代の遺体に微笑みかけた。

【E
n
d
i
n
g
N
o.
2
】

Hard End 「八雲紫」

——紫、見ろ。月が綺麗だ。

そう、先代が夜空を見上げながら囁くのを聞いて、紫の胸は大きく高鳴った。

思わず傍らに立つ長年の友人の横顔を見つめる。

手を伸ばせば、すぐに届く所に彼女はいる。

つい先程まで全く意識していなかった距離の近さが、妙に気恥ずかしく感じた。

「……先代、その言葉の意味分かってる？」

動揺を押し隠しながら尋ねてみれば、不思議そうな表情で自分を返してくる。

その自然な態度に、紫は落胆を感じた。

予想していなかったといえば、嘘になる。

というよりも十中八九、先程の台詞に秘められた意味を先代が理解した上で口にしたのではないだろうと分かっていた。

ただ本当に月が綺麗だと思ったから、彼女は自分にそう言ったのだろう。

「いや、月が綺麗だろう？ 違うのか？」

紫の感情の起伏を敏感に感じ取ったのか、僅かに慌てた様子で先代が問い返してくる。

肝心なところで疎いくせに、妙なところで鋭い。

しかし、これはこれで普段仏頂面で通している彼女の貴重な一面を見れた——紫は、そう自身の落胆を慰めた。

それでも、少しばかり拗ねた気持ちになって『ばか』と返事を返そうとした。

口を開いて、そこでふと思いついた。

魔が差したと言ってもいい。

「……紫？」

結局何も言わずに口を閉ざした紫は、先代の方をじっと見つめたまま黙り込んでいた。

何かを思案するような、あるいは迷うような戸惑いの表情が浮かんでいる。

同じ黙って様子を伺う先代に対して、やがて紫は真っ直ぐに視線を合わせた。

「先代」

「なんだ？」

紫は言った。

「——私、死んでもいいわ」

恥ずかしそうに頬を赤く染めて、それでも紫は少女のように微笑んだ。

突然の言葉に、先代は眼を白黒させている。

単純な意味だけを取れば、前の会話と繋がっていない言葉だ。

混乱するのも無理はない。

自分の告げた言葉が持つ別の側面を、先代はきつと知らないだろうし——紫はそれを理解した上で告げたのだ。

むしろ、知らないからこそ、こんなことが口に出来たのだとも言える。

今更になって恥ずかしくなった紫は、自然な仕草で先代から視線を外した。

顔が熱くて、胸もドキドキしている。少し気まずい。

そして、無自覚に自分を動揺させた先代にやり返せたことが、少し痛快だった。

混乱する先代の様子を楽しみながら、それでも心の何処かに残った僅かな期待と落胆を隠して、紫は微笑み続けた。

二人の頭上で、月は変わらず浮かんでいた。



「それって『愛の告白』だったんじゃないですか？」

「なん……だと……？」

さよりのサラツと告げた衝撃の真実に、私はかつてない驚愕を感じ

て固まった。

あの鬼の異変からしばらく経ち、すっかり春となった時期に改めて地霊殿へとやって来たのである。

以前訪れた時は、勇儀とは話せたけど、さとりとは話す余裕がなかったからね。

余裕っていうか、何故かさとりに拒否された上に、紫に執拗に促されてさっさと地上に戻る事になったからなのだが――。

幽々子は先に地上へ帰ってたし、あの時一体何が起こっていたのか、未だに分からない。

まあ、それについてはとりあえず置いておこう。

地霊殿を訪れるまではそのことも気になっていたが、今のさとりの発言で全部ぶっ飛んでしまった。

ちよ……ちよつと待って下さい、さとりさん。

状況を整理させて！

「整理するも何も、貴女が訊いてきたんでしよう？」

う……うん。

確かに訊いたよ。

あの宴会の夜、紫の言った『死んでもいいわ』って言葉の意味が気になって、さとりに相談してみた。

まさか紫が本当に自殺とか考えてるわけもないし、きつと何か暗喩的な意味が隠してあるんだろうって考えたんだよね。

さとりになら分かって期待があったわけじゃないけど読書家で博識だし、本当に何気なく尋ねてみたのだ。

そしたら、答えがアレですよ。

ねっ、混乱するのも当然でしょ？

いやはや、さとりんってば唐突に性質の悪い冗談を……。

「いや、ですからそれは八雲紫の『愛の告白』だったんじゃないですかって言ってるんですよ」

だからっ、何サラツと爆弾発言してんの、この子おおーっ!!?

おま、紫が私に愛の告白って……お前は何を言っているんだ？

思わずミルコな姿勢を取って凄んでしまう私。

しかし、内面を読み取れるさとりには全く通じなかった。

「当時の状況を説明してもらいましたが、事前に貴女が『月が綺麗だ』と言って、八雲紫が『死んでもいいわ』と返したんでしょう?」

読書片手間の投げやりな態度で、さとりが確認した。

私は頷いて返す。

うん、そうだ。

それで間違いない。

でも、その会話の何処に『愛の告白』なんて要素が隠されているのか、全く分からないので小一時間ばかり説明してほしい。

「二分で済みます。『月が綺麗だ』というのは、外の世界の著名な小説家が『I love you』をそう訳したとされる逸話から来る愛の告白のことですよ」

なん……やて……?」

「また、別の小説家と同じ英語を『死んでもいいわ』と訳していて、この二つをセットにして愛の告白のやりとりを暗喩する表現となっているようですね。以前読んだ、外の世界の本に書いてありました」

嘘……だろ……?」

「少なくとも、幻想郷の外を行き来できる八雲紫ならば、それぞれの言葉のそういった逸話と意味も知っていますでしょう。知った上で、無自覚だった貴女をからかう為にそう返したのか、あるいは本気だったのかまでは分かりませんが——」

な……っ!?」

「驚愕しているのは分かりましたから、その同じ表情で同じような台詞繰り返し返すのやめてもらいませんか?」

うんざりするように告げられて、私はようやくやく我に返った。

しかし、動揺が収まったわけではない。

当時の会話に隠された意味を、今更になって理解してしまったのだ。

しかも、それが『実は紫からの愛の告白だった!』なんて、冷静になれという方が無理である。

だって、あの紫だよ?」

東方キャラ最強の一角で、黒幕で、超絶美人さんで、偉くて、怖くて、可愛くて、長生きで、でも十七歳で——なんていうか、とにかく凄い大妖怪なのだ。

それに——。

それに、私の親友じゃないか。

紫と何年の付き合いだと思ってるんだ。

あいつと一緒に過ごした時間は、霊夢よりも長いんだ。

博麗の巫女として働いていた現役時代、未熟だった私を支えてくれて、苦楽を共にした仲間なんだ。

私が仲間の中で誰が一番信頼しているかって訊かれたら、紫だって答える。

そんな親友から、いきなり愛の告白だなんて……。

「本気かどうかまでは分かりませんがね。あと、ちよつと心の声が大きくなってますよ。興奮しないで下さい」

そ、そうさ！

は……ははっ、なに真剣に悩んでるんだ？

あの時のやりとりが、私の無自覚な言葉から偶然始まったものだということは分かってるんだ。

きつと、紫もワルノリして合いの手を入れたに決まってる。

まったく、紫ってばマジおちやーめさん！

胡散臭さに定評のあるスキマ妖怪だけはあはるねっ！

——って、んなワケあるかーい!!

「ぐっ……だから、声が大き……い！」

長年の付き合いだって言っただろうが！

恥ずかしげもなく『親友だ』なんて言える程度の根拠は、共に過ごした日々で積み重ねているんだ。

本気と冗談の見極めくらい、私には出来るさ。

普段の紫とは様子が違っていた。

その違和感を気のせいだって誤魔化せるくらいなら、最初からこんなに動揺したりはしない。

あの時、紫は本気だった。

決して冗談や洒落じやない気配があつた。

少なくとも、普段の余裕のある仕草なんて欠片も見せなかつた。

何か真剣に私に伝えようとして、それが無理だと分かつてしまつて
いるような、切ない表情を浮かべていたんだ。

あの時、そんな印象を感じながらも読み取ることの出来なかつた彼
女の真意が、言葉の意味を知つた途端に分かつたんだ。

——今更。

そうだ、今更だ。

あれからどれだけ時間が経つた？

何日——何ヶ月前の話だ？

紫の告白を受けて、私はそれを無自覚に、どれだけの時間無視して
きたんだ!?

「ちよ、ちよつと落ち着きなさ……!」

湧き上がる衝動に突き動かされるように、私は勢い良く立ち上がった。

反動で、椅子が吹っ飛んで壁に激突し、粉々に碎け散つたがそんな
こと気にも留めない。

「ああ、椅子が……」

私の何気ない言葉に『愛の告白』という一面があることを知つてい
て、それが無自覚に出たものだど理解した上で、それでも紫はああ答
えた。

紫、お前は私のことを——。

確かめなければならぬ。

遅すぎるのかもしれないが、だからといってこのまま何事もなかつ
たかのように無視するなんて出来ない。

それは、私も紫に対して思うことがあるからだ。

——いや、違う!

そんな曖昧な表現で自分を誤魔化すな!

心の何処かに、これが『自分の勘違いだったら恥ずかしい』なんて
保険を残すな!

紫から愛の告白されたど理解して、自分がどう感じたか!?

妖怪だから嫌悪したか？

同性愛だから気持ち悪くなつたか？

そんなわけないだろっ！

私が！

紫を！

嫌いなわけないだろおおーっ！！

「こゝ、声が聞こえるんですよ！ 先代、心の声が大きすぎ……っ!?」

そうだ！

どうせ聞こえるなら、聞かせてやるさ！

紫！

好きだアー！ 紫！ 愛しているんだ！ 紫いー！

あの言葉は無自覚だったけど、好きだったんだ！

好きななんてもんじゃない！ 紫のことはもつと知りたいんだ！

紫のことはみんな、ゼーんぶ知っておきたい！

紫を抱き締めたいんだあ！ 潰しちゃうくらい抱き締めたい！

心の声は、心の叫びでかき消してやる！

紫ッ！ 好きだ！

紫いーっ！ 愛しているんだよ！

私のこの心の内の叫びを聞いてくれー！ 紫きーん！

博麗の巫女になってから、紫を知ってから、私はお前の虜になってしまったんだ！

愛してるってこと！

好きだってこと！

私に振り向いて！

紫が私に振り向いてくれれば、私はこんなに苦しまなくつてすむんです。

優しい貴女なら、私の心の内を知ってくれて、私に伝えてくれるでしょう。

私はお前を私のものにしたんだ！ その美しい心と美しいすべ

てを！

誰が邪魔をしようとも奪ってみせる！

恋敵がいるなら、今すぐ出てこい！ 相手になってやる！

でも、ゆかりんが私の愛に応えてくれれば戦いません。私は紫を抱き締めるだけです！ 貴女の心の奥底にまでキスをします！

力一杯のキスをどこにもここにもしてみせます！

キスだけじゃない！ 心から貴女に尽くします！ それが私の喜びなんだから！

喜びを分かち合えるのなら、もっと深いキスを、どこまでも、どこまでも、させてもらいます！

紫！ お前が灼熱地獄の中に素っ裸で出ろというのなら、やってもみせる！



心の中で叫びながら、先代はさとりの部屋から飛び出していった。興奮のあまり、周りが見えなくなっていたのだろう。

完全に自らの衝動だけに突き動かされ、無意識に行動を起こしていた。

さとりに別れも告げず、ドアを粉碎して、嵐のように走り去ってしまったのだ。

後に残されたさとりは、テーブルに突っ伏したまま、ピクリとも動かなかった。

心の声は、そこに込められた想いが強いほど大きな音量となる。

先代の心の叫びを聞いたさとりは、その音波兵器の域にまで達する大音量を直に受けて、途中で気絶していた。

地霊殿の床を踏み抜く程の脚力で走り去った先代に気づき、慌てて駆けつけたお燐が、泡を吹いて倒れている主人を見つけたのは、そのすぐ後のことだった。



湧き上がる紫への想いを夢中で叫んでいたら、いつの間にか地霊殿から飛び出していた。

さとりにも何も言わず、立ち去ることになってしまったが、今は何よりも優先すべきことがある。

——紫に会わなくっちゃ！

会って、何を言えればいいのか分からないが、とにかく会わなきゃいけない。

あの夜のことなんて、もう忘れているかもしれないが、重要なのは紫の気持ちを聞き出すことじゃないんだ。

まず、私の気持ちを伝えるんだ。

あの時、私は何も知らずに愛の言葉を口にした。

もう一度、今の気持ちを込めて紫に伝えるんだ。

その後で、例えば私の勘違いで恥をかいたとしても、あるいは想いが玉砕したとしても、それは結果だ。

今は何よりも、行動あるのみ！

……紫が何処にいるのか分からんけど。

でも、とりあえず地底ではないことは確かなので、まずは地上へ帰る。全速力で！

私は脇目も振らず走って、旧地獄街道を駆け抜けようとした。

物凄い勢いと形相で走っているだろう私は、通行人ならぬ妖怪に驚いた顔で見られる。

しかし、当然それらは無視だ。

どけどけ！ 私の行く手を阻む奴は、吹き飛ばすぞ！

凄むまでもなく、勇儀を倒した実績のある私の進路を阻む妖怪はいない。

自然と群集が割れて出来上がる道を、私は一直線に走った。

「——待ちな」

突然、進路上に割り込むものがあった。

私は足を止めた。

そのまま目の前の障害を避けて走り抜けなかったのは、立ち塞がっ

たのが横幅も大きい巨漢だったということ以外に、明らかに好戦的な気配を発していたというのもある。

私の前に立ち塞がったのは、巨人のような妖怪だった。

「貴様、先代巫女だな？」

私は無言で相手を睨み付けた。

獣臭——！

私とその妖怪の間の空間が『グニャアア』と歪んだような気がした。こいつ、強いぞ。

「随分と急いでいるようだなあ」

「……そうだ。そこをどいてくれ」

「嫌だね」

不敵に笑いながら、その妖怪はゆつくりと両腕を持ち上げる。

かつて戦った鬼に勝るとも劣らないくらい迫力のある筋肉が、更に盛り上がって、軋んだような音を立てた。

凄まじい圧迫感を放っている。

「ふふふつ……お前さん、この旧都の星熊勇儀を倒した人間なんてな？」

「それがどうした」

「俺がいずれ倒そうと思ってた鬼を、お前が倒してしまったということさ」

「何!？」

「つまり、俺が最強を証明するにはお前を倒す必要があるわけだ」

それは、明らかに私に対する宣戦布告だった。

地底で有名な勇儀を恐れることもなく、逆に倒すつもりだったとは……こいつ、やはり只者じゃない。

少なくとも、その自信に見合う程度の実力は感じ取れる。

くそつ、こんな時に厄介な相手に絡まれてしまった。

長々と時間を掛けていられないっていうのに——！

「私と戦うつもりか？」

「その通りだ」

「いいだろう、掛かって来い」

「ふつ、勘違いするな。俺がお前に挑むんじゃない、逆だ。まずはお前の立場というものを理解させてやろう」

「いいから、さっさと掛かって来い」

「俺は『他人の能力を喰らう程度の能力』を持つ。俺は、俺がこれまで倒してきた妖怪や人間の能力を全て使えるのだ！ その数、実に百を超える！ 見せてやろう、まずは第一の能力を——！」

……そんな、百個も悠長に見てられるかあああつ！

いいからさっさと掛かって来いって言うてんだろうが、邪魔じゃボケ!!

「ハリケーンボルト!!!」

早く始めようと言っているのに、イチイチ話を長引かせようとするその妖怪目掛けて、私は全力の拳を叩き込んだ。

っていうか、要するに先手必勝の百式観音だ。技名は単なる気分だ。

当然、避けられるはずもない。

ゲエーッ！ とばかりに天高くぶっ飛ばされた名称不明の妖怪は、そのまま頭から地面に落下した。

グシャアツという凄惨な音と、血袋を破裂させたような鮮血を周囲に飛び散らせる。

どう見ても死んでるっぽい描写だが、手足がピクピク痙攣しているので、とりあえず大丈夫（？）そうだ。

立ち上がる様子のないその妖怪を無視して、私は再び駆け出した。結局、あいつが何者なのか分からなかったが、なんていうか今は激しくどうでもいい。

早く地上へ戻らなければ。

待っていてくれ、紫！

◇

「霊夢！ここに紫は来ているか!？」

「……母さん?」

地上へ戻った私がまず向かった場所は、博麗神社だった。

紫の居る場所として、一番可能性があるのは彼女の棲家だが、生憎とその場所は『幻想郷の境目』という曖昧な情報しかなく、どうやって辿り着けばいいかも分からない。

よって、紫が顔を出しそうな場所として博麗神社を選んだのだ。

……でも、正直ここも幾つかの候補の中で一番マシって程度で、可能性自体は低いのよね。

なんせ、ここに住む当代の博麗の巫女である霊夢と紫は結構仲が悪いのだ。

霊夢は会いたいと思っただろうし、当然紫の方も顔を出す理由があんまりない。

案の定、境内に駆け込んだ私の視界に入ったものは、掃除をする霊夢の姿だけで、それ以外は人っ子一人見当たらなかった。

気配を探っても、紫の存在は探知出来ない。

「あのスキマ妖怪なら、来てないけど。何か約束でもしてたの?」

「いや……」

霊夢の答えも聞き、私は僅かに落胆した。

ここじゃなかったか。

じゃあ、何処だっけ話になるが……何処だろう?

そう簡単に次の候補先なんて思いつかないよ。

「霊夢、紫の居る場所に心当たりはないか? 勘でもいいんだ」

私は思わず霊夢に尋ねていた。

霊夢の天性の勘ならば、下手な心当たりよりもずっと可能性がある。

私の問い掛けに、しかし霊夢は黙ったままじっと見返すだけだった。

「どうして、あの妖怪を捜しているの?」

霊夢が持っていた箒を地面に置いた。

「今、あたしの勘はこう言ってるのよ」

代わりに手に取ったのは、数枚のお札だった。

「母さんを、あいつに会わせない方が良いつて——！」

「霊夢!？」

私は思わず後退っていた。

霊夢は私に対して、明らかに戦闘態勢を取っていたのだ。

えっ、なんで!？」

「……何故、邪魔をするんだ？」

「母さんをあの妖怪に会わせたくないからよ」

理由は分からない。

しかし、霊夢の顔付きは真剣そのもので、その瞳には決して譲らない意志が映っていた。

わ……分からない。

紫に会いたいただけなのに、何故霊夢と戦う状況になっているのか。分からない——が。

「私を、行かせないつもりか？」

「あの妖怪に会いに行くなら、あたしを倒してから行って」

霊夢が限りなく本気なのは分かった。

霊夢——。

愛する娘と戦うなんて、もちろん嫌だ。

しかも、霊夢は本気なのだ。

本気になった霊夢の実力は、全く侮れない。

霊夢自身の言うとおり、紫を捜しにいく為に戦って倒さなければならぬというのなら、いくら私でも手加減なんてする余裕はない。

私の娘は、そこまで強くなったのだ。

本気の霊夢と、本気で戦わなければならない。

親子喧嘩なんてレベルじゃないんだ。

よほどの理由がない限り、普段なら私から引き下がる事態だが——。

「……分かった。ならば、お前を倒す。霊夢!」

よほどの理由が、今はあるんだっ!

「そこまでして、あいつに会いたいよね」

「そうだ」

「だったら……本気で止めるわ。母さん！」

私の宣戦布告に対して、霊夢は一瞬だけ悲しげな表情を浮かべ、それをすぐさま決意の表情で塗り潰した。

霊夢。

私は今、お前を悲しませてしまっているようだ。

お前にとって、私が紫と会うことはそこまで気に入らないことなのか。

分かった。

私の気持ちを分かってくれとは言わないが、お前の気持ちは私にはよく分かった。

もはや、言葉は不要。

私は、お前を倒してでも紫に会う。

手加減は一切無しだ。

偉大なる母の全力全開を、見せてやる！

「夢想——！」

「スペシャルローリングサンダー!!!」

先制攻撃を仕掛けようとする霊夢目掛けて、更にその先を取った私は全力の拳を叩き込んだ

ってというか、要するに先手必勝の百式観音だ。技名は単なる気分だ。

当然、避けられるはずもない。

天高くぶっ飛ばされた霊夢は、そのまま頭から地面に落下——する寸前で、その地点に急速に霧が集まって、クッションのように受け止めた。

霧が形を整えて、人型になっていく。

私の事前の予想通り、霊夢を助けたのは萃香だった。

霊夢は、抱えられた腕の中で気絶している。

「ふっ、どうやら母親の方が一枚上手だったみたいだね」

私と同じように霊夢の無事を確認した萃香が、こちらを見ながら小さく笑った。

うむ。手加減は出来なかったが、勝負の結果は私の思い通りになったようだ。

完勝と言えるだろう。

……でも、霊夢ってばいきなり無敵技の『夢想天生』を使おうとしたんだよね。

百式観音のおかげで初動に割り込めたが、もしあの攻撃が成功していたら成す術もなくやられるところだった。

いや、もしほんの少しでも技を躊躇っていたら、百式観音でも間に合わなかったかもしれない。

実は結構ギリギリの勝負だったのである。

先にやったもん勝ちとか、勝負の分かれ目が極端なんだよ！

あー、緊張した……。

「萃香。霊夢を頼む」

「分かってるよ。先代は、紫を捜してるんだろう？」

「ああ。心当たりはあるか？」

「いや、生憎とわたしにもないね。でも、行くならさつきと行った方がいい。霊夢が眼を覚ましたら、また面倒なことになる」

「……分かった」

私は霊夢のことを萃香に任せると、踵を返して神社を後にした。

すまない、霊夢。

今は、母さんを行かせてくれ。

どうしても会わなきゃいけない人がいるんだ。

待っていてくれ、紫！



あつという間に見えなくなった先代の後ろ姿を、萃香は笑いながら見送っていた。

随分と急いでいるらしい。

初めて見た時から今日まで、先代巫女とはそこまで長い付き合いではないが、実に珍しい一面を見た気がした。

彼女は、八雲紫に会う為に必死になっているのだ。理由は分からない。

しかし、その本気の想いだけは十分に伝わってくる。

先程までの親子二人のやりとりを見ていた萃香は、何故霊夢が愛する母親と敵対してまで止めようと思ったのか、何となく分かるような気がした。

「――霊夢」

結局、勝負に負けて、母親を行かせてしまった霊夢を微笑ましげに見下ろす。

「紫のことを『お義母さん』って呼ぶハメになったらどうすぐぶえ!!?」
意地悪く笑いながら尋ねた萃香の顔面に、気絶したままの霊夢が拳を叩き込んでいた。

◇

「慧音、いるか!？」

暴走特急の如きスピードで博麗神社から人里に到着した私は、寺子屋の戸を勢いよく開いた。

予想通り、そこには慧音がいた。

もちろん、授業中だったなんてトラブルもない。

ちゃんと計算した上で、慧音を尋ねたのだ。

「えっ、先代!？」

突然の来訪に驚く慧音の目の前まで一気に詰め寄る。

そのまま、ガシツと両肩を掴んで、鼻が触れ合うほどの距離まで顔を近づけた。

「あっ、い……いけません、先代! こんな日の高いうちから……っ!」

「紫の住んでいる場所を知っているか!？」

「……………へっ?」

何故か顔を赤くして眼を瞑っていた慧音は、私の問い掛けに呆けたような表情を浮かべた。

ああっと、すまない。

理由も言わずに、いきなりこんなこと訊かれても混乱するよな。

「紫に会いたいんだ」

私は端的に説明した。

「……なんですって？」

そしたら、慧音の顔付きが一気に険悪になった件について。

あれ、これってデジャヴじゃね？

「先代」

「なんだ？」

「何故、八雲紫に会いたいのか理由は知りません」

「ああ、それは……」

「しかし、貴女が真剣であることは分かります」

「そうだ。だから……」

「貴女とは長い付き合いです。だから、貴女が本当に心の底から八雲紫と会いたがっているというのがヒシヒシと伝わります」

「話が早くて助かるよ。だから……」

「嫌です」

「え？」

「具体的に何がかは説明出来ませんが、とにかく嫌です」

「いや、何が……」

「全部です。貴女が私に八雲紫の居場所を訊こうとしていることも、八雲紫と会おうとしていることも……全部嫌です」

あの、慧音さん……？

最初の内は私の方が慧音に迫っているような体勢だったが、気がついたら私の方が押される形になっていた。

どんどん凄くなっていく慧音の顔付きと迫力に、後退りをしているうちに寺子屋から外へ出戻ってしまう。

「八雲紫の居場所は、私も知りません」

「そ、そうか……なら、私はこれで」

「行かせません」

何故に!?

「八雲紫に会いに行くのなら、私を倒してから行ってください」
って、おおい！ またこのパターンかい!?

霊夢の時と同じ展開に、私は内心で混乱しまくっていた。

まさか慧音にまで同じ対応をされるとは思わなかった。

二人は、私の行動のどの辺が気に入らないのだろう。

とにかく、慧音からは霊夢の時と同じ本気を感じる。

私と敵対してでも、私の行動を止めようとする気概だ。

というか、いつの間にか距離を取って、既に戦闘態勢を取ってしまっている。

「貴女を、あんな胡散臭い妖怪に連れて行かせるわけにはいかない！」
いや、連れて行かれるんじゃないかと、私が会いに行くだけなんですけど！

しかし、慧音はもう聞く耳持たずといった感じである。

「慧音、邪魔をしないでくれ！」

「貴女の邪魔などしたくない！ しかし、認めるわけにはいかないんだ——！」

慧音は問答無用で私に襲い掛かってきた。

どうしてこんなことに……！

うう……うわあああああつ！！

「ジェットアッパー!!!」

突進してくる慧音目掛けて、咄嗟に私は全力の拳を叩き込んだ

っていうか、要するに先手必勝の百式観音だ。技名は単なる気分だ。

当然、避けられるはずもない。

天高くぶっ飛ばされた慧音は、そのまま頭から地面に落下した。

……といっても、さすがに慧音相手に殺意の波動全開で攻撃なんてするわけないので、気絶させただけである。

殴り飛ばした高度もそこまで高くないので、半獣である慧音の耐久力ならば大した落下ダメージはないだろう。

念の為、倒れた慧音の状態を調べると、深刻な外傷はなく、気絶しているだけだった。

しかし、慧音自身に大事はなくても、周囲の状況は大事になりつつあった。

いきなり人里の中で私と慧音が争い出したのだから、騒ぎになるのも当然だ。

皆の誤解を解きたかつたし、慧音のことも心配だったが、それ以上にここで時間を取られるわけにはいかなかった。

手近な人間に慧音のことを頼み、私は周囲の視線を振り切るように走り出した。

慧音を置いて――。

すまない、慧音。

だけど、私には優先すべきことがある。

私は、そつちを選んだのだ。

慧音を置いてでも、私は行かなければならないのだ。

待っていてくれ、紫！



「慧音！ しっかりしてー！」

「うう……妹紅か……」

妹紅に抱き起こされた慧音は、かろうじて意識を取り戻していた。先代が走り去った後、偶然にも人里を訪れていた妹紅が騒ぎを聞きつけてやって来たのだ。

何故、慧音が倒れているのか。

その理由は目撃者達が説明してくれた。

しかし、妹紅は混乱の極みにあった。

「慧音……師匠にやられたって、本当なの？」

「……ああ」

慧音は苦しげに頷いた。

妹紅の顔が苦悶に歪む。

肯定して欲しくない事実だった。

理由も、切っ掛けも分からない。

単なるちよつとした諍いなのか、それとも深刻な仲違いなのか――

しかし、いずれにせよ現実として、自分の親しい者達が傷つけ合っ
てしまったのだ。

妹紅の悲しみと嘆きは計り知れないものだった。

「どうして……こんなことにつ!」

慧音ではなく、かといってここから去った先代にでもなく、妹紅は
この世の不条理を問うように叫んでいた。

その疑問に対して、慧音が苦笑を浮かべながら口を開く。

「あ……」

「慧音?」

掠れた声で伝えようとする慧音に、妹紅は必死で耳を傾けた。

「愛ゆえに、だ……」

「……誰か、早くお医者さん呼んでーっ!!」

意味不明なことを口走って再び気絶した慧音を抱え、妹紅は泣きな
がら助けを呼んだ。

◇

私は、一体いつの間にこんな遠い所まで来てしまっていたのだろう
……。

霊夢を倒し。

慧音を倒し。

家族を、友人を打ち倒して、次は一体誰を犠牲にするというのか――

しかし、それでも私は行かねばならない。

幾多の屍を踏み越えてでも、私は、紫に会うんだあああつ!

「あら、殺されに来たの？ 先代」

そして、次の犠牲は多分私だ。

「幽香……」

「ふふふつ、なかなか面白い雰囲気を纏っているわね」

太陽の畑までやって来た私は今、幽香と真正面から対峙していた。

その幽香は冷酷な視線と笑みを私に向けている。

今にも殺しに掛かってきそうな気配だ。

うむつ、いつも通り！

……いや、本当に。思えば何故こんな遠くまで来てしまったのでしょ？

紫を捜して幻想郷中を駆けずり回っている過程で、私は死地へ足を踏み入れてしまったのだった。

とはいえ、何も考えずに立ち寄ったわけではない。

「紫の居場所を知らないか？」

「八雲紫のこと？」

「そうだ」

私は思い切って幽香にも尋ねてみた。

人間の世界も妖怪の世界も含めて、世間からは隔絶した姿勢を取っている幽香である。

正直、あんまり事情通には見えない。

しかし、だからこそ、その測り切れない底知れぬ部分に期待も抱くのだ。

紫と同じ大妖怪である幽香なら、ひよつとしたら何か知っているかもしれない。

「あの妖怪に会う為に、そこまで切羽詰った雰囲気を纏っているのかしら？」

幽香は面白そうに笑いながら言った。

切羽詰っているかどうかは自分では分からないが、紫にどうしても会いたいという点は当たっている。

私は真面目に頷いた。

「なら、まずは私を倒してみなさい」

まあわかってた。

話の前後が全く繋がっていないように見えるが、正直幽香に何かを要求した時点でこう返されることは予想していた。

だって、幽香はいつだって私を殺すことに全力な頑張り屋さんな乙女なんだもん！

……とりあえず、無駄と分かっているとしても言葉で交渉してみる。

「幽香との勝負は、もう約束したはずだが」

「分かっているわよ。約束の日を前倒ししようだなんて、子供染みた真似はしないわ。」

今回の件を、ただ利用させてもらっただけよ。現時点でお前との実力差がどれほどあるのか——それを測らせてもらおうわ」

なるほど、そういうことか。

戦うことには変わりないが、幽香にしてはなかなか穏便な提案だ。

殺し合いじゃないっていうなら、適当にお茶を濁して——。

「ちなみに、隙あらば遠慮なく殺させてもらうから、せいぜい全力で掛かってくるのね」

ですよねー！

暗黒闘気としか思えないような禍々しい力を立ち昇らせながら、完全に本気の眼つきで幽香が私を見据えている。

様子見や手加減といった緩い気配は欠片もない。

なんてプレッシャーだ。

幽香が怖いのは昔から分かっていたことだが、一体いつの間にかこれほどの力を身に着けたのか。

スカウターがなくても、かつての幽香よりも戦闘力が増していることが肌で分かる。

む、むう……この脅威、まともに戦ったらどうなるか分からない。

となると、時間もあまり掛けられない以上、対妖怪の鉄則に従って先手必勝の一撃で片をつけるのが一番だ。

でも、そうすると初めて幽香と会った時の焼き直しみたいになるんだよなあ。

「……幽香。最初に言っておくが」

「何も言わなくていい」

「全力よ」

「お前が私から感じた脅威。それを退けられると思うだけの力と技を
使いなさい。後は——」

更に鋭くなった幽香の視線に射抜かれた瞬間、私の背筋に悪寒が走り抜けた。

それも『かつてない』ほどのものだ。

「私、次第よ！」

幽香が動く。

咄嗟に、私も行動を起こしていた。

生半可な攻撃では、今の幽香を倒すことなんて無理だ。

渾身の一撃しかない！

プラス『黄金長方形の回転』！

うおおおおおっ！ 燃え上がれ、私の小宇宙（コスモ）！！

「ギャラクティカマグナム！！」

動き出そうとした幽香目掛けて、咄嗟に私は全力の拳を叩き込んだ
っていうか、要するに先手必勝の百式観音だ。技名は単なる気分
だ。

当然、避けられるはずもない。

天高くぶっ飛ばされた幽香は、血飛沫を撒き散らしながら頭から地
面に落下した。

や、やっちまった……。

手加減なしというか、力と技を尽くした最高の一撃である。

勇儀さえ倒した黄金の回転による無限のパワーまで込めた拳を、叩
き込んだのだ。

ミス・ユーカ……ユーは、もう立てないダロウ。

何故か、ボクシングチャンプ風。

しかし、まあ物凄い手応えだったので、気絶しているのは間違いない。

勝つには勝ったが、幽香から紫の居場所を教えてもらうことは出来なくなったわけだ。

仕方ない、また別の場所を当たろう。

私は倒れた幽香から背を向けた。

奇しくも、初めて出会った頃と同じ光景である。

今回のことも含めて、幽香にはまた更に恨まれることになるのだろうか。

憂鬱な気分だが、今はそれを振り切っても急がなければならない理由がある。

すまない、幽香。

そして、待っていてくれ、紫！

「——待ちなさい、先代」

背後から聞こえた、地を這うような呼び声に、一瞬心臓が止まりそうになった。

聞き間違えようもない、幽香の声だった。



先代が振り返った時、幽香は既に立ち上がっていた。

打撃と落下の衝撃でダメージを受けた首の調子を確かめながら、折れた鼻の角度を指で無理矢理戻す。

鼻の奥に絡んでいたものを、鼻からの息で、外に出した。

片方を押さえた鼻の穴から地面に飛び出したものは、どす黒く、粘着質な、ゼリーのような大量の血の塊だった。

次に口からも同じくらい量の血を吐き出す。その中には折れた歯も混じっていた。

顔面からの出血が、白いシャツの襟元を赤黒く汚している。

元々が美しい顔つきであるだけに、より無残さを際立たせる有様で

ある。

しかし、幽香の瞳には一切衰えることのない意志の炎が燃え続けていた。

「幽香……！」

「なんて顔してんのよ。まさか立てるとは思わなかった、つて？」

驚愕の表情で自分を見つめる先代に対して、愉快そうに笑い掛ける。

「まあ、立っているので精一杯なのは確かよ。勝負は、私の負けでいいわ」

既に幽香から立ち昇る闘志は消えている。

しかし、それはダメージを受けて戦意喪失したからではない。

幽香の中には、敗北を認めた悔しさと同じくらいの満足感があった。

「あの時とは、違うでしょう？」

幽香が満足しているのは、自分を見据える先代の真剣な眼つきだった。

見慣れた鉄のような仏頂面には、内からの緊張感が滲み出ている。

立ち上がった自分を、警戒しているのだ。

未だに敵としての脅威を感じているのだ。

——あの時とは違う。

——歯牙にも掛けられず、伸ばした手も、絞り出した声も届かずに無言で立ち去られたあの時の自分とは違う。

幽香は、その事実で満足していた。

「私を無視したまま、歩き去ることなんて出来ないでしょう？」

「……まだ続けるつもりか、幽香？」

「いいえ、負けを認めたでしょ。二度も言わせないで。屈辱的だわ」

「すまない」

「別に、トドメを刺しにきたいのなら、それでもいいわよ？」

「いや、遠慮しておく」

「残念。ここで死力を尽くすのも悪くないと思っていたのに」

冗談とも本気ともつかないことを口にしながら、幽香はおもむろに

あらぬ方向を指差した。

その先を視線で追いながら、先代が疑問を口にする。

「何だ？」

「私の指した方向へ進みなさい。あとは、行く先の植物が道を示すわ」

「――紫の居場所か!？」

「いい喰いつきね」

幽香は鼻で笑った。

「さっさと行きなさい」

「恩に着る」

深々と頭を下げた先代が顔を上げた時、既に幽香は興味を失ったかのように背を向けていた。

その背に向けて何かを言いかけ、しかし拒絶するような気配を感じ取った先代は、結局それ以上何も告げずに踵を返した。

幽香の指差した方向へ、全速力で走り去っていく。

もう振り返ることはない。

代わりに、先代の足音が十分に遠ざかった時点で、幽香が振り返った。

既に遠くなった先代の背中を見つめる。

「――『行くな』って言ったら、貴女止まる？」

決して届かないように抑えた小さな声で、幽香はその背中に問い掛けた。

もちろん、答えは返ってこない。

幽香の口元には、ほんの僅かに寂しさを感ずる笑みが浮かんでいた。

◇

言われるままに、幽香が指差した方向へ真っ直ぐに進んで行ったら林に突き当たったワケだが、そこで『植物が道を示す』という言葉の意味をようやく理解した。

私が足を踏み入れた途端、何もしてないのに茂みや木の枝が勝手に

私を避けるように動いて、道を作ったのだ。

なにこれすごい。

これって幽香が操作してんの？

それとも、幽香の命令に従って植物が勝手に動いてるとか？

いずれにせよ、能力の効果と範囲半端ねえな。

ゆうかりんマジ植物の女王。

私が一歩進む度に、周囲の植物が新しい道を空けてくれるので、その方向へ進路を取って更に進んでいくだけでよかった。

たまに振り返ってみれば、そこには既に進んできた道などなくなっている。

凄く便利だけど、ちよつと怖いね。

これ植物の道しるべがなくなったら遭難確実じゃない。

当然後戻りも出来ないの、ひたすら前に進み続けていく。

そうすると、やがて開けた場所に出た。

視界に広がるのは、不可思議な空間だった。

いや、そこが異次元だったとかそういう類の不可思議さじゃない。

ここに至るまで野生の木々が生い茂る林だったのに、いきなり平たい土壌になり、そこには池が設けられ、植栽などが施されていたのだ。

明らかに人工の庭園だった。

しかも、私の足元から続く長い石畳の先には巨大な屋敷まで建っている。

思わず振り返れば、やはり背後に道はない。

引き返して林の中に踏み込み、数歩進んでもう一度振り返ったら、今度は屋敷どころか庭園の光景すら見えなくなっているような――

空間の隙間に出来ているかのような場所だった。

幻想郷の境目。

ここが、紫の住む場所。

そして、先に見えるあの屋敷にこそ、紫が居るに違いない。

ついに辿り着いたのだ。

私は喜び勇んで、屋敷の中へ駆け込もうとした。

「――どうやって、此処までやって来た？」

その行く手を遮る者がいた。

これまで、私の家族や友人がそうしてきたように、最後の最後までも障害が現れたのだ。

予想通り、それは藍だった。

「いや、それよりも何の用だ?」

「……紫に、会いにきた」

「紫様に?」

私の返答に、藍は一瞬訝しげな表情を浮かべ、しかし更なる説明を聞く必要もなく、理解を示した。

「そうか」

氷のように冷たい視線が私を射抜く。

「いずれ、このような事態が訪れるだろうと、懸念はしていた」

ああ、畜生。

ある程度覚悟はしていたけど、やっぱりだ。

「紫様は聡明にして理性ある御方だ。自ら過ちを犯すことなど決してない。

しかし、その紫様の御心を乱しに、貴様が此処へ現れる日をずっと

警戒していた」

藍、お前とは分かり合えないんだな。

これまで僅かな希望を持ち続けていたけど、たった今確信した。

お前は、今の私が紫と会って話すことさえ絶対に認めてくれないだろう。

「先代巫女。貴様に二つの選択肢をやる」

「何だ?」

「黙って踵を返し、紫様に会うことなく此処から去れ」

「それは出来ない」

「ならば、我らの同胞となれ。人の身を捨て、妖として生きる道を取れ。そして、紫様ただ一人の為に生きろ。守れ。傍に寄り添え。裏切るな。そして——愛せ」

私の眼を真っ直ぐに見据えて、藍は告げた。

厳しい口調だった。

その視線の冷たさも変わらない。

藍が私のことを嫌っていて、紫にとって害悪にしかない存在だと捉えていることがよく分かる。

しかし、だからこそ何処までも紫の為を想って行動していることも理解出来た。

今の言葉も、藍にとっては私情を排して、可能な限り譲歩した選択肢だったのだ。

門前払いせずにいてくれて、ありがとう。藍。

お前の言うことも尤もだ。

今更、中途半端な気持ちで、ただ紫に会うだけのつもりなんて私もないよ。

腹は括ってきた。

お前の言った内容の、後半部分には全面的に同意する。

でもな——。

「人の身を捨てることだけは出来ない」

「ならば、去れ」

「断る」

「此処から消えろ」

「紫に会わせてもらう」

私は自らの要求だけを、一切譲らずに突きつけた。

「紫様には会わせん」

藍から不穏な気配と妖気が滲み出す。

明らかに私を殺す気だ。

殺気という点で見ると、それは幽香の放つものよりも濃密で巨大な気配だった。

「我が主は、比類なき偉大な御方だ。それが、貴様のようなたかが人間程度に玩ばれるなど——」

——遊ぶ？

私が、遊びでこんなことやってると思うのか。

ふざけんな！

「貴様を取り巻く有象無象どもの一角に紫様を貶めるなど、許されん

ことだ！」

私の周りにいるのは、誰一人として『有象無象』なんてどうでもいい括りで仕舞える存在なんかじゃない。

家族も、友人も、仲間も——皆、掛け替えのない存在なんだ。

そんな大切な人達を、私はここへ来るまでに振り切ってきた。

邪魔する者を打ち倒してきた。

生半可な覚悟でやって来てるんじゃないよ！

さあ、そこをどいてもらうぞ。藍。

お前を倒して、私は紫に会うっ！

「貴様に、紫様に会う資格はない！　ここで死ぬ——！」
るせえええー！ー！ー！ー！ー！っ！！

「ブーメラランテリオス!!!」

攻撃態勢に入った瞬間の藍目掛けて、私は怒りの豪拳を叩き込んだ。つていうか、要するに先手必勝の百式観音だ。技名は単なる気分だ。

当然、避けられるはずもない。

天高くぶっ飛ばされた藍は、血飛沫を撒き散らしながら頭から地面に落下した。

悪は去った!!!

……いや、冷静に考えて主人想いだけの藍が悪なんてことは絶対にないんだけどね。

でも、藍が色々と煽ってくるもんだから、つい気持ちを爆発させちゃいましたよ。

普段なら、相手が藍ということもあって怯んだり、引き下がったりするんだろうが、今の私は違うのだ。

鬼に会っては鬼を斬り、神に会っては神を斬る。

何人たりとも、私の行く手を遮らせん。

倒れ伏した藍の横を、無言で歩き去る。

幽香のように、藍が立ち上がることはなかった。

そして、私が倒れた藍の身を案じて、歩みを躊躇うこともなかった。

—— 霊夢も。

—— 慧音も。

—— 幽香も、倒して。

大切な皆を振り切って、私はここまでやって来たんだ。

屋敷の玄関まで辿り着いた私は、戸を開けた。

屋敷の中は静かだった。

一撃で勝負が決まったとはいえ、玄関先で戦闘を行ったというのに、騒ぎを聞きつけて紫がやって来ることもない。

おそらく、藍の配慮で、外の騒ぎを遮断していたのだろう。

紫に気づかれずに、私を始末するつもりだったのだ。

私は、屋敷の中に踏み込むと、足早に進んでいった。

行くべき場所は、正確に分かっている。

長年傍で感じていた紫の気配を、私が間違えるはずがないのだ。

気がつけば、走っていた。

もうすぐだ。

もうすぐ、紫に会える。

なあ、紫。

お前はあの夜、馬鹿で無知な私の無自覚な言葉に対して、どういうつもりであんな言葉を返したんだ。

さよりの言うとおり、冗談だったのか。

もしそうだったら、別にいいんだ。

お前が私をからかって、後で意味の分かる悪戯を仕掛けただけって言うなら、言うことはない。

私が馬鹿を見て、終わりだ。

だけど、もし本気だったのなら——。

私は、お前を長い時間苦しめていたことになる。

そんなことは許されない。

だから、紫。

これは償いじゃなく、誤魔化しじゃなく——聞いてくれ、私の想いを！

廊下を駆け抜けた私は、最後の襖を思いっきり開いて、心の底から叫んだ。

「紫——！ 私だ——！ 結婚してくれえ——っ!!」

「…………へ？」

座ってお茶を飲んでいた紫は、突然の事態に眼を丸くして私を見つめた。

そして、私の言葉の意味を理解して、顔を真っ赤にした。



——二人がこの後どうなったか。

深く語ることはやめよう。

少なくとも、問題は数多く残った。

二人だけの間にも、性別の壁、種族の溝、寿命の差——多くの障害が待ち構えている。

彼女達を取り巻く環境や人妖の関係も、また複雑に絡んでいく。

母を奪われた娘がどう思うか。

主を奪われた式がどう思うか。

他にも多くの慕う者達が、唐突に告げられた彼女達の新しい関係をどう思うか。

感情が一本の紐ならば、二人の周りには何本もの紐が重なり、絡み、解くことは容易ではない。

あるいは、一生解けぬものも多くあるのかもしれない。

問題は多く残った。

そして、彼女達の行く末にも多くの問題が待ち受けている。

しかし——。

それらは、全て解決し得た。

万能に近い能力と知恵を持つ妖怪の賢者の傍に、彼女にとって唯一の弱味となる巫女が寄り添い、力を貸しているのだ。

新たな絆で結ばれた二人に、解決出来ない問題などなかった。

それは、巫女自身が持つ過去の謎や、世界そのものの謎についても、

例外ではない。

険しいことは数多くあるだろう。

しかし、最も大きな山を乗り越えた二人にとって、それ以外の問題は全て力を合わせて越えられるものだった。

故に、これ以上深くは語るまい。

既に約束された結末について、詳細に語っても面白味はない。

ただ一つ——二人が未永く幸せに暮らして、物語は『めでたしめでたし』と終わるのだから。

【Ending No. 3】

◇

——イイハナシダナー。

って、私と紫の話なんですけどね。

私と紫が出会ってからあった色々なことを、思い出していた。

本当に色々なことがあったなあ。

こうして二人で、縁側から月を見ていると、自然と思い出すのだ。

あの夜を思い出すような、満月の夜だった。

隣には紫が座っている。

静かな、二人だけの夜だった。

「いい夜だな、紫」

「ええ、そうね」

何気ない私の呟きに、紫が優しく相槌を打つ。

ああ、似たような会話を昔したことがあったなあ。

今夜に限らず、紫と一緒にいると最近よく昔のことを思い出す。

その理由は、なんとなく分かっている。

永琳の診立ては正しかったのだ。

元より、私と紫は人間と妖怪。

種族の違いがあつて、寿命の差も大きいことは覚悟していた。

寝たきりのおばあちゃんになった私を、若くて綺麗なままの紫に看取らせてしまう未来を想像して、昔は心苦しく思っていたものだが――

――実際には、そこまでの猶予はなかったんだよね。

歳を取る間もなかったよ。

寿命よりも、長年酷使してきた体にガタが来る方が早かった。

特に心臓がヤバイらしい。

いつ止まるか分からないそうさ。

別に病気や怪我つてワケじゃないから、薬も出せないらしいしね。

あと数日もつかどうか――そう診断されたのが数日前だ。

私の死期は近い。

だから、ふとした時に昔を思い出すのだろう。

ゆっくり見る走馬灯つてところか。

今も、こうして思い出す。

ああ、本当に色々なことがあつたなあ。

……具体的にどんな内容だったっけ？

やべ、肝心の部分がよく思い出せん。

そういえば、脳にも障害が出てるとか言われてたな。

なんてこつた。

折角紫が隣にいるのに、昔話も出来ないとは、残念すぎる。

このまま黙って月を眺めるのもいいが、さつきから一度も会話してないのは実にもつたいたい。

仕方がないので、私は定番の話題で切り出した。

「いい夜だなあ、紫」

「……ええ、そうね」

何気ない私の呟きに、紫が優しく相槌を打つ。

ああ、似たような会話を昔したことがあつたなあ。

今夜に限らず、紫と一緒にいると最近よく昔のことを思い出す。

なんでだろう？

……分らん。

まあ、いいや。

気分は悪くないしね。

むしろ、すごくいい。

だって、隣に紫がいて、思い出すことも紫のことなんだから。

そりゃ、いい気分に決まってる。

まるで夢見心地って奴だ。

見上げる先にある淡い月が、あまりに幻想的だから、尚の事そう思

うのかも知れない。

思い出すなあ。

えーと、何を思い出すんだっけ……。

あつ、そうだそうだ。

あの夜の月を思い出すんだ。

あの夜ってどんな夜だ？

具体的な日時までは思い出せないが、確か、こんな風に紫と二人で

月を見上げていたと思う。

うん、間違いない。

そして、私はこう言ったんだ。

——月が綺麗だ。

あの時の私は、本当に馬鹿だったよね。

意味も知らずに、そんなこと言ったんだもん。

でも、今の私は違うよ。

ちゃんと意味は分かってる。

そうだ。

折角だから、今改めて紫に言おう。

今度は無自覚なんかじゃないよ。

ちゃんと意味を込めて言うからな。

なあ、紫。

「なあ、紫」

見ろ。

「見ろ」

月が綺麗だ――。

◆ 「なあ、紫。見ろ……」

静かに語り掛けていた先代は、その言葉を途中で止めたまま、黙り込んだ。

そのまま沈黙が続く。

紫は先代に促されたまま、月を見上げていた。

不意に、その肩に重みが押し掛かった。

先代の頭だった。

口を閉ざした先代が、紫の肩に寄り掛かるようにして、頭を預けているのだ。

その体からは力が抜けていた。

持っていた盃が、手から零れ落ちて、縁側の下を転がっていった。

まるで、喋っている最中に急な眠気に誘われて、眠ってしまったかのようにだった。

紫の肩に顔を預けたまま、全てを委ねるように動かない。

瞼は完全に閉ざされてはおらず、瞳がぼんやりと虚空を見据えている。

寝息は聞こえず、静かだった。

呼吸も。

心臓の鼓動も。

触れ合う程に近い紫にも聞こえなかった。

しばらくそのまま月を見上げていた紫は、やがてゆっくりと、先代の方へ視線を戻した。

肩に乗った先代の顔には、口元が小さな笑みを形作った、安らかな表情が浮かんでいた。

それを見た紫も小さく微笑んだ。

力を失った先代の体に手を回し、そっと抱き寄せる。

肩に乗ったまま動かない先代の頭に、自らの頬を寄せて、紫は再び月を見上げた。

「――月が綺麗ね」